奏～Kanade～

にっくん♪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
奏～Ｋａｎａｄｅ～

【Ｎコード】
Ｎ３８６７Ｃ

【作者名】
にっくん♪

【あらすじ】
神奈川県七海市の中央にある七海高校。かつては何度も全国大会に出場した吹奏楽部があったが、今は廃部されている。２００５年春、二人の男女がこの高校へ入学したことによって変化が訪れる。
「さぁ、音楽を始めよう♪」

プロローグ

初めは高校時代は部活も何もせず、大人しく過ごそうと思っていた。

別に青春とかそんなのに興味はなかった。ただ、漫然と過ごしたとしても楽しければそれでいい。私は初めはそう思っていた。

でもあの日、彼に会ったことですべては少しずつ変わっていった。

私はあの日、彼に逢えたことにとても感謝している。

ありがとう☆

（２００７年度卒業アルバムより）

主な登場人物（２００５年編）（前書き）

☆注意☆　ここでは現時点での最新の人物データが記述されているため、初めてこの「主な登場人物」を読まれる方はネタバレになる可能性が非常に大きくなっております。すべてのストーリーを読み終えるか、それを了承の上でお読みください。

主な登場人物（２００５年編）

※！！ネタバレ注意！！※

♪　第７８話現在　♪

＜主要人物＞

☆朝倉（あさくら）　陽乃（ひなの）

＞ｉ１９３５０―１５０＜

七海市立七海高等学校１年Ｅ組。目立たず漫然と高校生活を送るつもりでいたが、翔と出会ったことで吹奏楽へと興味を持ち始める。お喋りで明るく活動的な女の子。編み物や料理はうまいようだが、絵だけは恐ろしく下手。トランペット担当。一人称：私　あだ名：朝ちゃん☆陽（よう）ちゃん☆朝倉☆朝倉さん

☆佐野（さの）　翔（かける）

＞ｉ１９３５１―１５０＜

七海市立七海高等学校１年Ｅ組。大阪から引っ越してきたアルトサックス奏者。小学校４年生からやっているのでかなり上手い。吹奏楽サークルを立ち上げており、部の昇格後は吹奏楽部部長である。一人称：オレ　あだ名：佐野☆佐野くん☆翔☆カケぼー（一人だけ）

＜吹奏楽サークル＞

【フルート】

♪大谷（おおたに）　沙希（さき）

＞ｉ１９３４５―１５０＜

１年。陽乃のクラスメイト。お金持ちのようで、フルートとピアノができる。一人称：私　あだ名：沙希ちゃん☆大谷さん☆サキティ

家族構成：父・母・弟・妹

♪宮部由美子（みやべ　ゆみこ）
＞ｉ１９３４２―１５０＜
１年。沙希に憧れてフルートを吹き始める。少々天然ボケなところあり。一人称：あたし　あだ名：由美子☆由美ちゃん☆宮部さん
家族構成：父・母

【クラリネット】
♪橋本（はしもと）　絵美（えみ）
＞ｉ１９３４６―１５０＜
１年。クラリネットを中学から吹きたかったが、出身中学のレベルの高さからできずにいた。高校に入ってようやく吹けることを喜んでいる。一人称：私　あだ名：絵美ちゃん☆エミリン☆橋本さん
家族構成：父・母・兄・姉

【ホルン】
♪永井（ながい）　雪子（ゆきこ）
＞ｉ１９３４３―１５０＜
１年。初対面での印象は堅い子だったが、今では陽乃のいい友達。何に対しても一途な性格。一人称：私　あだ名：雪子☆雪ちゃん☆永井☆永井さん　家族構成：父＝永井（ながい）　融（とおる）　母＝永井（ながい）ひとみ　妹＝永井（ながい）真沙美（まさみ）

【トロンボーン】
♪川崎（かわさき）　慎也（しんや）
＞ｉ１９３４９―１５０＜
１年。スライドが前後するのにハマッてトロンボーンを吹き始める。基本的に無口。一人称：俺　あだ名：慎ボー☆慎ちゃん☆川崎くん
家族構成：父・母・兄・弟

【ユーフォニウム】
♪水谷（みずたに）　春樹（はるき）
＞ｉ１９３４７―１５０＜
１年。陽乃はとっつきづらいと思っていたが、根は優しい子。自宅からユーフォニウムを持ってサークルにやって来た。一人称：俺
あだ名：春やん☆水谷くん☆水っち　家族構成：母・水谷幸恵子（みずたにさえこ）

【チューバ】
♪本堂（ほんどう）　拓真（たくま）
＞ｉ１９３４８―１５０＜
１年。大柄な体格。チューバを見ただけで気に入ってしまう。生真面目な性格で、空気を読める。一人称：俺　あだ名：拓あん☆本堂くん☆本ちゃん　家族構成：父・母

【パーカッション】
♪田中（たなか）　美里（みさと）
＞ｉ１９３４４―１５０＜
１年。大胆なことがやりたいということでパーカッションを希望する。モンキータンバリンで家のベッドで踊ることもあるおもしろい性格。一人称：あたし　あだ名：ミサッチ☆みさりん☆美里ちゃん☆田中さん　家族構成：父・母・姉＝田中美優（たなかみゆ）

＜七海高等学校関係者＞
☆東（あずま）　恭一（きょういち）
＞ｉ２２５９９―１５０＜
陽乃の担任。英語教師。３１歳の独身。身長１８７センチとかなりの長身で、彼の担任になりたがっている女子生徒が多いとの噂。吹

奏楽部の顧問にして七海高等学校吹奏楽部ＯＢ。元・パーカッション。

☆真野（まの）　幸治（こうじ）
＞ｉ１１７２６―１５０＜
七海高等学校校長。温厚で生徒の自主性を尊重する主義を貫いている。

☆村峰（むらみね）　塔子（とうこ）
＞ｉ２２６００―１５０＜
七海高等学校普通学科教頭。文化部に対する扱いはぞんざい。

＜朝倉家＞
☆朝倉（あさくら）　由利（ゆり）
＞ｉ１１７１３―１５０＜
陽乃の母。スーパーでパートをしている。４３歳。おっとりした性格で、娘の生活に関してもあまり口に出さないタイプ。

☆朝倉（あさくら）　祥夫（さちお）
＞ｉ１１７１４―１５０＜
陽乃の父。証券会社に勤務している。４５歳。少し厳しめの性格で、門限などに関しては他の家よりも厳しくしている。

☆朝倉（あさくら）　夏樹（なつき）
＞ｉ２２６０３―１５０＜
陽乃の弟。現在中学２年生（１４歳）。サッカー部所属。かなりの心配性。密かに吹奏楽に興味があるよう。

☆朝倉（あさくら）知恵子（ちえこ）
＞ｉ１１７１５―１５０＜

陽乃の父方祖母。６９歳。

＜佐野家＞

☆佐野友美子（さのゆみこ）

＞ｉ１１７０８―１５０＜

翔の母。４４歳。かなり賑やかなお母さんで、初対面の人でも遠慮なくいろんなことを質問攻めする。

☆佐野（さの）　昭（あきら）

＞ｉ１１７０９―１５０＜

翔の父。４６歳。あまり喋らない照れ屋な性格のよう。

☆佐野（さの）　綾音（あやね）

＞ｉ９６７４―１５０＜

翔の妹。葉島中学校２年生（１４歳）。翔のことを呼び捨てにしている。

☆佐野（さの）　智輝（ともき）

＞ｉ１１７１０―１５０＜

翔の弟。葉島小学校３年生（９歳）。

☆佐野（さの）　冨美枝（ふみえ）

＞ｉ２２６０１―１５０＜

翔の父方祖母。７１歳。かなりの老眼。

＜吹奏楽関係者＞

★三田嶋（みたじま）　樹（いつき）

＞ｉ１１７１８―１５０＜

有名なアルトサックス奏者。七海高等学校吹奏楽部のＯＢでもある。

★神崎（かんざき）しおり
＞ｉ１１７１７―１５０＜
樹のマネージャー。七海高等学校吹奏楽部ＯＢのオーボエ奏者。

★佐野（さの）　修平（しゅうへい）
＞ｉ１１７２０―１５０＜
私立・風見台（かざみだい）高等学校吹奏楽部員。関西弁を喋る。翔とは中学時代の同級生で「ダブル佐野」の愛称（？）で呼ばれていた。

★濱口（はまぐち）　優衣（ゆい）
＞ｉ１１７１９―１５０＜
私立風見台高等学校吹奏楽部員。修平と仲がいい。カワイイオーラ２４時間発信中。

★逢沢（あいざわ）　駿（しゅん）
＞ｉ２２６０４―１５０＜
七海市立・袴田（はかまだ）中学校の吹奏楽部に入っている3年生。バスクラリネットを吹いており、ほか友達数名と七海高校に入って吹奏楽をしたいと言ってくれている。

★岩切（いわきり）　翔平（しょうへい）
＞ｉ１１７２１―１５０＜
淀南中学校時代のアルトサックスの先輩。最近七海市に引っ越してきた。翔と中学時代に「ダブル翔」と呼ばれていたこともある。

主な登場人物（２００５年編）（後書き）

※注※　この小説では神奈川県を舞台としておりますが、筆者の居住地が兵庫県であり、コンクールの日程などが関東地区とは大幅に異なります。小説の中でコンクール等の日程が本来の神奈川県などのものとは異なりますが、兵庫県や関西地区をモデルにコンクール等の日程を設定させていただきます。何とぞご理解ください。

第1話　入学式

２００５年４月４日（月）、神奈川県の北部に位置する人口４５万人の都市・七海（ななみ）市。その七海市の中央に位置する市立七海高等学校では第４０回生入学式が行われていた。

七海市の市役所近くに住んでいる朝倉陽乃（あさくらひなの）はキョロキョロと体育館の中を見回していた。なんと、クラス分けでは陽乃は同じ中学の友達が一人もいないクラスになってしまったのだ。３月まで通っていた葉島（はじま）中学校からこの七海高校へは７０人近くが進学している。８クラスもあるのだから一人くらい同じクラスになってもいいものなのに、なんと一人もいないとは……。

（どうしよ、同じ塾に通ってた子とかいないかな……）

一人でも知り合いがいれば、明日からの動きで困ることはない。しかし、何度名簿を見てもあたりをキョロキョロと見回しても知り合いは見当たらない。

（えぇ～ウソでしょ。ちょっと、ホントに誰もいないの？）

さすがに不安が増してくる。打ち解けることができるだろうか。

キョロキョロとしていると、不意に一人の男子生徒と目が合った。彼も同じようになんだか落ち着かない様子。同じ列に並んでいるということは、同じクラスだ。

（あ、あの子も知り合いいないのかな……。みんな同じような感じなんだな）

そう思うと、ちょっと安心できる。

結局、入学式の間で知り合いを発見できたのは二人だけ。

陽乃のクラスは1年E組。隣のクラスに永井雪子（ながいゆきこ）を見つけた。といっても、何かとテンションの高い陽乃と雪子が関わることは中学時代は少なかった。仮に同じクラスになっても気まずいだけだったかもしれない。

そして、１年Ｂ組に水谷春樹（みずたにはるき）を見つけた。春樹も雪子と属性（？）は似たようなもの。いつもブスッとしていて、なんだかとっつきにくい。あまり期待できない。

「はぁ～……なんかお先真っ暗って感じ？」

陽乃は校長先生の話を聞き流しながらため息をついた。もう少し高校生活っていうものに期待していた。恋をして、友達もいっぱいできて木の下でお弁当食べたり、日が暮れるまで校庭で話し込んだり。同じ中学校から７０人近くが入学したのだから、もう少し知り合いがいるものかと思っていたけれども。

「世の中、うまくいかないもんね」

陽乃はもう一度、ため息を漏らした。

「それでは、第４０回入学式を終了いたします。全員、起立！」

（うわぁっ！）

突然掛かった号令に驚いた陽乃は勢いよく立ちすぎて、椅子を後ろへ倒してしまった。

ガターン！と大きな音がして周囲の視線が陽乃へ注がれる。

「あ、あはは～！　どうも失礼しました～」

陽乃は顔を真っ赤にして慌てて椅子を戻した。

保護者席の方で、母親の由利（ゆり）が陽乃より顔を赤くしている。これは帰ったらさっそくお説教だ、と陽乃は思っていた。

慌てて椅子を戻す陽乃の様子を一人、優しい笑顔で見守っている少年がいた。

さっき陽乃と同じくキョロキョロしていた少年だった。

第1話　入学式（後書き）

さて、陽乃を見つめる少年はいったい誰なのか？　次のお話を見ていただくと少年の正体がわかります！

第2話　自己紹介

さっきはとても恥ずかしい思いをした。

入学式でいきなり目立ってしまった。別に目立つつもりはなかった。むしろ、出鼻を挫かれたからもう高校時代の間は目立たない女の子でいこうと思ったのに、あんなに目立つようなことをしてしまうとは……。

陽乃は猛烈に後悔していた。余計なことを考えるからこうなるのだ。

しかし、陽乃はまた同じことをしている。

「……倉～、おーい」

「っあ、はいっ！」

勢いよく立って、また椅子を倒しかけた。後ろに座っていた男子が驚いて椅子を受け止めようとした。

「あー！　やだ、ホントごめんなさい！」

担任の東（あずま）　恭一（きょういち）が呆れている。

「ハイハイ、落ち着いたか？　朝倉」

「えっと、あ、はい！　なんとか大丈夫かと思われます」

そこで、ドッと笑いが上がった。

「えっ、えっ！？　ここ、笑うとこ？」

陽乃がオロオロしていると、一人の少年が陽乃を指差して大笑いしだした。

「だってさ～、おまえさっきからいろいろおもろすぎるねんも～ん！」

指差されてさらに笑いが盛り上がった。恥ずかしさで真っ赤になる陽乃。

「なっ、なによ！　アンタだってどこの誰か知らないけど関西弁でいきなり失礼ね！」

「入学式で椅子ぶっ倒す人よりマシやと思います～」
もう抑えきれないほどの笑い声が教室中にこだました。
「もー！　なんなのよ、アンタ！　最低っ！」
陽乃は大声で叫んで、椅子に座りなおした。恭一がフゥッとため息をついて続けた。
「はい、それじゃ朝倉」
「へっ？」
「もう一度起立して、自己紹介してくれ」
「えぇっ！？　だって私もう今の十分じゃないですか？」
陽乃はさっきよりオロオロしながらあたりを見渡した。
「ホラ、みんなが待ってるんだぞ」
恭一が促す。さっきの関西弁がニヤニヤしながら言った。
「サッサとせぇよ～」
「うるさいわね！　言われなくてもするわよ」
陽乃はブスッとしながら立ち上がり、サッサと自己紹介を進めた。
「葉島中学校から来ました、朝倉陽乃です！　えっと～私は高校時代はおとなし～く目立たずに過ごそうかな～と思ってるんでどうぞよろしくお願いします！」
すると、さっきの関西弁がブッと吹き出した。
「ちょっと！　なんなのよアンタ本当にさっきから！」
陽乃はさすがに我慢できず、怒り始めた。
「だってさ～あんだけ目立っといておとなし～く目立たずに～ってどんだけー！」
これにはクラスメイトも耐え切れず、爆笑している。
「もう！　私の自己紹介はこれで終わり！　次アンタ、自己紹介しなさいよ！」
陽乃はジッと関西弁を睨みつけた。
「お～怖い怖いっ！　わかったわかった、すればえぇんやろ？」
関西弁は立ち上がり、咳払いをひとつしてから人懐っこい笑顔で自己紹介を始めた。

「えっと、オレの名前は佐野（さの）翔（かける）です！　この春に大阪からこの七海市に引っ越してきました～。実は友達いません！　なんで、オレと友達なってくれたら嬉しいな～☆　あ、特技とかあるんやけど見たらわかると思うんで、後つけるなりして見ちゃってくださいっ！　ヨロシク～！」

陽乃と違って実に爽やかに自己紹介をしてしまった。何人かの女子は翔を見ながら騒いでいる。

「……何よ、あんなヤツ」

陽乃は生理的にコイツとは合わない。そう思っていた。

第2話　自己紹介（後書き）

陽乃と翔が出会いました。出会いは最悪……このあと二人がどのように関わっていくのか見ていただけると嬉しいです♪　よろしくお願いします☆

第3話　友人

悪いことというものは立て続けに起こるものだ。
入学式で椅子をひっくり返して、新しいクラスで恥をかいて。これで今日はもうおなかいっぱいなのに、さらに悪いことは続く。
陽乃は箒で教室を掃きながら考えていた。
さかのぼること、２０分前の出来事。

「それじゃあ、今日はこれですることは終わりだからこの後挨拶をしたら下校してよろしい」
恭一が出席簿と集めた資料をまとめながら言うと、生徒たちは嬉しそうに帰る準備を始めた。
「その前に！」
恭一の大きな声に一瞬でクラスが静かになる。
「今日から教室掃除をさっそく始めてもらう」
生徒たちから一瞬でブーイングが上がった。
「はいはいはい、騒ぐな、騒ぐな。そうだな……まだ班も何も決まっていないし……」
（何か嫌な予感……）
陽乃は入学式で配られた出席簿に目を通した。

１年Ｅ組
1. 相田　雄平
2. 朝倉　陽乃
3. 伊波　冬真
4. 宇多津　唯
5. 江嶋　美咲
6. 大飯　真祐
7. 大内　絵梨那

8．大谷　沙希

・　・　・

「そうだな、今日は人数も少なくていいだろう」
嫌でも陽乃の心臓が高鳴る。
恭一は嬉しそうに微笑みながら言った。
「出席番号の偶数番号の人で前から４人、今日は掃除してもらおう」

最悪だ。

この東とかいう先生、私に何の恨みがあるんだろう。
陽乃はジーッと恨めしそうに恭一を見つめた。そんな視線に恭一は気づくはずもなく、そのままホームルームを終えてしまった。

そして、今に至るわけである。
「ま～ったく、今日の私はきっと厄日だわ」
陽乃が今日何度ついたかわからないため息を吐くと、後ろから声が掛かった。
「あの～……朝倉さん、だよね？」
声のする方を振り向くと、髪の毛を二つにくくった女の子が立っていた。身長は陽乃と同じくらい。かなりオシャレな雰囲気が出ている。
「あ、そうですけど……」
女の子は恥ずかしそうに続けた。
「あの、よかったらお友達になってもらえない……かな」
「へっ？　私と？」
「ダ、ダメ……かな？」
陽乃は箒を放り投げて女の子の手を握り、ブンブンと上下に振り

ながら強烈な握手をした。
「もちろん！　友達になります！　っていうか、私がむしろならせてください！」
女の子は嬉しそうに微笑むと、自分の名前を言いながらお辞儀をした。
「私は大谷沙希（おおたにさき）と言います。よかった～、南葉島中学（みなみはじま）からここに来たのって、私だけだったんです」
沙希はニッコリ微笑みながら言った。沙希も知り合いがいなくて困っていたらしい。
掃除が終わって箒を片付けながら沙希が話を振ってきた。
「朝倉さんって、おもしろいね」
「あれ？　もうおもしろいキャラが定着しちゃってる？」
頭をポリポリ掻きながら陽乃は恥ずかしそうにした。
「うん。それに、佐野くんとのやり取りがとってもおもしろかったしね」
「はい？」
陽乃は呆気に取られた。
「朝倉さん、佐野くんととっても仲良かったじゃない」
陽乃は沙希の肩をガッシリ掴んで慌ててまくし立てた。
「いやいやお嬢さん、ちょっと待ってよ。私とアイツは全然面識ないんだから！　第一、私は葉島中学校でしょ、アイツ大阪から来たって言ってたじゃない。だから、私とアイツは今日初めてあった赤の他人なの！　それに知り合いだったらあんなに嫌味ったらしいこと言ってこないって！」
沙希はしばらくポカンとしていた。
ゼーゼーと息を荒げている陽乃にちょっと困りながらも沙希は言う。
「えっと、じゃあ何にもないんだよね？」
「うん！　何にも！」
「わかった。やっぱり朝倉さんっておもしろいね。これから楽しみ

だな～♪」
　沙希は嬉しそうにスキップしながらカバンを持って帰る準備を始めた。
「朝倉さん、帰ろう」
「あ、うん。いま行く！」
　陽乃もカバンを握り締め、沙希の後を追った。

「じゃあ、また明日ね」
　沙希はニッコリ微笑んで挨拶をした。本当にお上品な子だな、と陽乃は思った。
「うん、またね！」
　陽乃も手を振って家の方向へ歩き出した。
「あ、待って朝倉さん」
　沙希が思い出したように追いかけてきた。
「ん？　どしたの？」
　ポケットから何かをゴソゴソと出してきて、沙希はそのままそのポケットの中身を陽乃に手渡した。
「この間の春休み、ハワイに旅行に行ってきたの」
「ハワイ！？」
「うん、そのときのお土産。おいしいから、食べて」
　小さなチョコレートだった。
「わぁぁぁ～嬉しい！　ありがと、大谷さん！」
「ううん。じゃあ、またね」
　そういうと沙希はさっきより嬉しそうに帰っていった。
「私もいい友達できたな～♪」
　沙希を見送りながら、陽乃も微笑んでいた。

第3話　友人（後書き）

どうやらクラスでの陽乃と翔のやり取りが沙希に誤解を与えた様子。
沙希以外にも誤解している人がいる……？

第４話　つくし野川

沙希からもらったチョコレートの包み紙を開けて、陽乃はそれを口に含んだ。アメリカ特有というか、日本にはないタイプの甘さが口の中に広がる。

「おいひぃ～♪」

陽乃は鼻歌を歌いながら、さっきの沙希の一言を思い出していた。

（えっと、じゃあ何にもないんだよね？）

あれはどういう意味だろう。もしかして、あらぬ誤解を沙希に植え付けてしまったのでは……。

「気にしすぎ……なのかなぁ」

陽乃は少し困った様子で帰り道を歩いていた。

七海高校から陽乃の家までは徒歩で１５分。校門を出た後市役所通りに沿って歩き、市の中央部を流れるつくし野川に架かる津上橋を渡って交差点を右折。商店街の中をくぐった先にある公園の正面。そこに陽乃の家がある。

津上橋の手前で信号に引っかかった。

「う～ん……確かにあれじゃ初対面とは思えないやり取りよね」

陽乃は教室での佐野とのやり取りを思い出していた。いくら初対面とはいえ、あれでは知り合いと思われても仕方がないだろう。

「明日からは無意味に絡まないように気をつけないと」

心に誓うように陽乃は独り言をブツブツ言っていた。

「ん？」

信号待ちをしていると、つくし野川の方から何かの音が聞こえる。

「何だろ……」

聞き覚えのある音色。やわらかく、その音が鳴っている場所から遠くにいる陽乃をも温かく包み込むような音。目を閉じて、すっか

り聞き入ってしまった。
「あっ」
信号がまた赤に変わってしまった。でも、あの音は鳴り止んでいない。
「……土手の方よね」
信号が青に変わってから、陽乃は小走りでつくし野川の土手へと向かっていった。

音は今も鳴り続けている。キョロキョロと入学式のときよりもこまめに顔を動かして、音の鳴っている場所を陽乃は探し続けた。
「いたっ！」
楽器を吹いている人がいた。ちょうど市役所側の土手沿い。大きなイチョウの木があって、その下で楽器を吹いている人がいる。
「ステキ……」
その人が吹いているのはどうやらアルトサックスらしい。とても優しい音色をしていて、伸ばしの部分ではビヴラートも効いている。
こっそりとイチョウの木の近くへと歩いていき、土手に腰掛けた。目を閉じてその人の吹くサックスの音を聴く。楽器の音を聴くのは先月の後輩のリコーダー演奏会以来だ。
気づけば、土手の周りには何人かの人が集まっている。会社帰りのサラリーマンらしいオジサンに、手押し車に腰掛けているおばあさん。買い物帰りの若いお母さんとかわいらしい赤ちゃん。北の方にある一の葉高校の制服を着た男の子もいる。
（スゴい……！　こんなに人を集めるなんてタダモノじゃないわ）
陽乃は何とかその人の顔を見ようと場所を変えたり背伸びをしたりするが、イチョウの木が邪魔になっている上に夕暮れの時間帯になって逆光でますます顔が見えにくくなっている。
「クッ……なんとか見えないかな」
陽乃は何とか見える位置を探そうと必死になっている。そうこうしているうちに彼の演奏が終わって、聴衆は満足げに帰っていく。

「私はまだ満足できない～！　あれが誰なのか気になる～！」
見えやすそうな位置に来たのでもう一度陽乃は背伸びをした。
「やった！　見えっ……！？」
背伸びをすると同時に、ズルッと足元が滑った。
「え、わ、ちょちょ待って！　わぁ～ストップスト……」
バランスを取ろうとがんばったが、次の瞬間には陽乃はゴロゴロと派手に土手を転げ落ちていた。
「や――――――！！」
カバンの中にある新しい教科書やら手紙やらをぶちまけながら、陽乃はサックスを吹いている人のところめがけて転がっていく。
「きゃあああ、ちょっと危ない危ない！　ストップ私～！」
陽乃の願いも空しく、彼女は派手に転げ落ちた挙句その男の子のところへ転がり落ちてようやくそこで止まった。
「ふぃ～痛い～……」
草だらけになっている陽乃の制服に顔、頭。まだ運の悪さが続いているのだろうか。
「あっ！」
その前に、驚かせてしまったこの人に謝らないと。
陽乃は体を起こして謝ろうと思って顔を見て動きを止めてしまった。

「何やってんの、朝倉？」

そこに立っていたのは、佐野　翔だった。

第４話　つくし野川（後書き）

なんと！　アルトサックスを吹いていたのは翔だった！　ひょっとして翔の特技とは楽器演奏なのか……？

第5話　夕暮れの河原で

「さっ、佐野　翔～！」
陽乃は驚きを隠せず、大声を上げた。
なんと、サックスを吹いていたのは関西弁男・佐野　翔だった。
「なんやねん、いきなり転がりながら登場して人のこと呼び捨てにして」
翔は驚きながらもすぐにしゃがんで、陽乃の頭についた草をパッパッと払った。
「あ、ありがと……」
よく見ると、翔の顔ってけっこうイケメン。鼻筋通ってるし、目は二重で大きい。コイツ、まゆ毛剃ってないのになんでこんな凛々しいわけ？
ジーッと陽乃は翔の顔を見つめていた。
「なに？　何かオレの顔についてる？」
「ううん、別に」
陽乃は冷静さを装いながら立ち上がった。
「んで、なんなん？」
翔がＳａｘのマウスピースをいじりながら聞いた。
「別に。帰り道に楽器の音色が聞こえてきたから覗いて見ただけ」
陽乃はスカートについた草を払いながら素っ気なく返した。
「覗きかい。や～らすぃ～」
「なっ……失礼ね！　アンタのこと覗きしたってなんの得もないわよ！」
川の対岸まで聞こえそうな声で陽乃が話すので、翔もかなり驚いていた。
「冗談やんけ！　おまえ、すぐ何でも真に受けるヤツやな」

ニコニコしながら陽乃の方を向いている。何がそんなに楽しいんだか、と陽乃は首をかしげた。

南の方からＪＲ線の列車が走る音が聞こえた。５時にもなると、夕暮れがこのつくし野川からはいつもキレイに見える。

サァァッと涼しい風が陽乃と翔の頬を撫でた。

「ねぇ」

陽乃が沈黙を破った。

「ん？」

「サックス、いつから吹いてるの？」

「小４から」

「小４！？」

どおりで上手いはずだ。

「サックス一筋？」

「浮気はせぇへんのでね」

嬉しそうに楽器を撫でる翔。コイツもこんな一面があるんだと思うと、なんだか陽乃は微笑ましくなった。

「どんな曲、吹けるの？」

「大阪の中学では吹奏楽部入ってたからな。ジャズでもクラシックでもオリジナルでも何でもいける」

「そうなんだ。スゴいね」

「改めてそんなん言われると、恥ずかしいやんけ」

ちょっと翔の顔が赤くなったのは、夕日のせいだったのだろうか。

再び沈黙が続く。

どこからか、カレーライスの匂いが漂ってきた。チリンチリン、と自転車のベルの音。またＪＲの列車が走る音が聞こえる。

「何か曲、吹けるの？」

陽乃は沈黙に耐え切れず、話しかけた。

「まぁな」

翔は努めて素っ気なく返事をする。
「じゃあさ、何か私に聞かせてよ」
「はぁ？　なんでおまえに……」
翔は不服そうに顔をしかめた。
「いいじゃない。だって、アンタ今日の自己紹介で『あ、特技とかあるんやけど見たらわかると思うんで、後つけるなりして見ちゃってくださいっ♪　ヨロシク～☆』とか言ってたじゃない」
陽乃が翔の口調の真似をした。
「似てへんぞ」
苦笑いしながら翔は楽器の調整か何かを始めた。多分、チューニングだ。リコーダー部でもチューニングをよくした。学校の音楽の授業のときのようにピーピー鳴らすだけではどうしようもないのだ。
「何を吹いてほしい？」
「えっ？」
「曲名や、曲名。何か私に聞かせてよって言うからには吹いてほしい曲あんねんやろ？」
「んんん……吹いてほしい曲……？」
陽乃は額に右手を当てて考え込んだ。１分くらい同じ姿勢でウーンとうなっているばかり。
「おまえ、ノリで言うたやろ」
「ん……ゴメン」
翔はフウッとため息を漏らしたが、嫌そうではなかった。
「んじゃ、切ない曲でも吹いたろ」
そう言ったきり、翔は口を開かなかった。
スゥッと息を吸う音がする。
陽乃はこれまでとは違う、翔の真剣な眼差しをジッと見つめていた。
翔の吸った息は、そのまま優しくサックスへと吹き込まれた。
聴いたことのある曲が陽乃を優しく包み込んだ。翔が吹いている曲は、今でもよくテレビで放送される映画『もののけ姫』の中の一

曲――アシタカせっ記だった。

「……。」

翔の吹くサックスから出されるひとつひとつの音色が、陽乃の心に染み込んでいく。夕焼けに照らされて吹く翔の姿が、一瞬遠くなった気がした。

切なくなる。

今まで本を読んだりドラマを見てよく聞いた言葉だが、陽乃にはいまひとつピンと来ない言葉だった。それが今、自分の中で胸を締め付けるように湧き上がっている。

やがて、曲はそのままもののけ姫の主題歌へと変わっていった。夕焼けという時間帯も加わったためか、陽乃の胸がギュッと締め付けられて切なくなる。

翔の姿は今までで一番、輝いて見えた。

そう思うと同時に、陽乃の左目から一筋の涙がこぼれ落ちた。

自分でも驚いた。でも、止められなかった。

「私……泣いてる……？」

第5話　夕暮れの河原で（後書き）

翔が吹いた曲に思わず涙する陽乃。ここから新たな一歩が始まります☆

ここで翔が吹いている曲は、ニュー・サウンズ・イン・ブラス９８に収録されている「もののけ姫」メドレーをイメージしたものです♪

第6話　キッカケ

吹き終わった翔は、満足そうにＳａｘから口を離して陽乃を見てギョッとした。
「な、なんで泣いてんの……？」
陽乃は焦点の合わない視線のまま呟いた。
「わかんない……」
「わ、わかんないって」
翔はしばらくオロオロしていたが、ズボンのポケットからハンカチを取り出した。
「とりあえず、涙拭いて。オレが泣かせたみたいで嫌やん」
「うん……」
５分くらいたって、ようやく落ち着いた陽乃はそっとハンカチを翔に返した。翔は特に言葉もかけず、ハンカチを受け取って元あったポケットに戻した。
「落ち着いた？」
翔が笑いながら聞いた。
「うん。ありがと」
まだちょっとグズッということはあるが、だいぶん落ち着いた。
「なんか、感動した」
陽乃がまだ鼻声のまま、呟いた。
「佐野の音、人の心を惹きつけるみたい」
「んなアホな」
翔は頭を掻きながら恥ずかしそうにしている。
「少なくとも、私は惹きつけられた」
「……ありがとう」
陽乃はチラッと腕時計を見た。もう６時半を差している。
「そろそろ帰ろうか。もう暗くなってきたし」
スカートをパンパンとはたきながら、陽乃は立ち上がった。翔も

立ち上がり、サックスを片付け始めた。
翔が全部楽器を片付け終えたのを確認すると、陽乃は手を振って挨拶をした。
「じゃあ、また明日」
「おう。またな」
手を振って背を向けた瞬間、翔が陽乃を呼び止めた。
「朝倉！」
「ん？」
「あのさ……」
「何よ？　ハッキリ言いなよ」
「うん……」
翔は言いにくそうにしている。
「何？」
しばらく悩んだ後、翔が口にした言葉は陽乃が初めて聞く言葉ではなかった。
「おまえ、吹奏楽に興味ないか？」

第6話　キッカケ（後書き）

陽乃が初めて聞く言葉ではない「吹奏楽」。いよいよ、陽乃が吹奏楽への世界へと踏み出します。

第7話　一方通行

「吹奏楽、吹奏楽……」
夕飯の間、陽乃はずっと同じ言葉を繰り返しながらご飯を食べていた。それを見た弟の夏樹（なつき）が不審そうに見つめている。
「な、何よ夏樹」
「別に。さっきから姉ちゃん同じことブツブツ言ってるから変なのって思っただけ」
「別に。特に意味はないから」
陽乃は食卓の中央に置かれている金時豆に箸を伸ばした。
「あ！　それ俺の分だぞ！」
夏樹が慌てて箸を伸ばした。陽乃は素早く残りひとつの金時豆を箸でつまみあげた。
「へへ～ん！　いただき！」
「あぁ～！」
夏樹が泣きそうな声を上げた。
「う～ん、美味～！」
「もう！　姉ちゃんのバカ！」
弟の夏樹は葉島中学校サッカー部に入っている。もう中2だけど背も伸びないし声変わりもしていない、ツーテンポくらいふつうの子とズレている子だ。
スネてしまった夏樹はテレビの前にあるソファを陣取ってしまった。
「夏樹！　人参またこんなに残して」
母の由利がプリプリしながら陽乃の皿に八宝菜の人参をザザッと流し込んできた。
「ちょっとお母さん！」
「仕方ないでしょ。もったいないじゃない」
出た。お母さんの口癖「もったいない」。なんかどっかでよく聞

いたセリフだな。
陽乃はそんなことを考えながら流し込まれた人参を口に運んだ。

あの後、翔はこんなことも言っていた。
（この七海高校、吹奏楽部ないやろ？　でもオレ、どうしても吹奏楽やりたいねん。外の団体とかじゃなくって、この高校でやりたい。だから、ハッキリ言うと……）
「吹奏楽部を立ち上げたい……か」
そもそも、陽乃はかつて七海高校にあった吹奏楽部がどんなものだったのかをよく知らない。
「ネットで調べれば何かわかるかな」
ベッドから起き上がり、パソコンを立ち上げる。いつものことながら、起動が遅い。
５分くらいかかってやっとまともに動き始めた。インターネットを開いてＧｏｏｇｌｅで「七海高校　吹奏楽部」で検索をかけた。
「うわっ、けっこうヒットするじゃん」
その中でも、有名なサックス奏者が七海高校の出身らしい。名前は三田嶋（みたじま）　樹（いつき）。プロフィールをクリックした。
「キャーッ！　スゴい、イケメン！」
叫んで椅子を後ろにガーッと引いた拍子に床の溝に引っかかって、そのまま椅子ごと陽乃はひっくり返った。
ズデーン！と派手に音を立てて転んだのに加えて本棚にぶつかって本が何冊か落ちてスゴい音がしたので、隣の部屋から夏樹が出てきて陽乃の部屋をノックした。
「なに騒いでんの？　大丈夫？」
「あぁ、大丈夫大丈夫。慣れてるから」
「あっそ。よくわかんないけど」
ひっくり返ったりするのは陽乃の得意技。ケガをすることも少なくないので慣れてしまった。
「で、イケメンはどうでもよくって」

陽乃はパソコンの画面の前に戻り、他に七海高校吹奏楽部の情報がないか探した。その三田嶋さんのホームページでは１９９２年全日本吹奏楽コンクール銅賞とある。

今度は「全日本吹奏楽コンクール」で検索をかけてみた。３件目にＷｉｋｉｐｅｄｉａでの説明文が載っていた。

「へぇ～戦争の前からやってたんだ」

よく調べていくと、歴史が長いものなんだなと思う。

しかし、七海高校吹奏楽部の情報は調べていくうちに１９９２年以降、途絶えていることがわかった。つまり、三田嶋さんが高校１年生だった年以降に関する記述が極端に少ない。

「なんかあったのかな……」

どれだけ調べても、何があったのかを指し示す記述は見当たらなかった。

「でも……全国レベルの部活なのにもったいない」

つい由利の口癖が移ってひとり照れていると、ケータイが鳴った。

「……？　知らない番号なんだけど」

出ようか出まいか迷った挙句、通話ボタンを押した。

「もしもし」

「あ、もしもし～？　オレ！　佐野やけど」

「えっ？　佐野？」

ケータイ番号を教えた覚えなんてない。

「佐野がなんで私のケータイ番号知ってるのよ？」

「Ｃ組の宮部って女の子がオレの連絡先教えて～言うから教えたついでに教えてもらった」

宮部由美子（みやべゆみこ）。私が中学の頃からずっとクラスが一緒だった子だ。

「由美子が……もう、勝手にそんなことして」

「それよりさ、どうする？　吹奏楽」

よっぽどしたいんだな。

陽乃は思った。

自分を泣かせたあの音色が聞けるなら悪くもないか。

でも、吹奏楽部というからには自分も何か楽器をしなければならない。
「う〜ん……いいかな、とか思ったけど」
「思ったけど？」
「私、楽器はリコーダーくらいしかできないし」
「うんうん。ってことは楽譜は読めるんや」
「まぁね。でも楽器もないし……」
「それで？」
「へっ？」
それでって。できないでしょ、と言おうとしたところで翔が遮った。
「楽器の心配はせんでえぇで。おまえに向いてる楽器オレの家にあるから」
「へっ？　楽器あるって、ちょっと……」
「楽譜読めるんなら話は早い！　明日の放課後さ、今日オレが楽器吹いてた川の土手集合な！」
「ちょ、ちょっと待ってよ」
陽乃は慌てて話を繋ごうとしたが「ほなな〜、おやすみ！」と言って電話は切れてしまった。
「なんて一方的なヤツ……」
陽乃は呆れてケータイを机の上に置いた。
「まぁ、あの音色が聞けるなら悪くはないか。ちょっと考えてみよう」
嬉しそうにクスッと笑うと、陽乃はお風呂へ入ろうと下へ降りていった。

第7話　一方通行（後書き）

翔に押されるがまま、吹奏楽部創設の話に乗る陽乃もまんざらではなさそう。翔が陽乃に用意するといった楽器はいったいなんなんでしょうか？

感想やコメントをお待ちしてます♪　お時間ありましたら、ご協力お願いします♪

第8話　誘い

翌朝、陽乃が眠そうに津上橋を渡っていると、後ろからいきなりバシーン！と叩かれた。
「痛った……あ！」
佐野　翔だった。
「おはよっ！」
「おはよう。昨日はビックリしたわよ」
「何が？」
翔は橋の欄干にいつの間にか飛び上がって歩いている。
「ちょっと、危ないじゃない」
「平気、平気！　んで？　何にビックリしたん？」
意外とバランス感覚いいんだな、と陽乃は思った。
「昨日のアンタの電話よ。いきなりかけてくるから誰かと思うじゃない」
「ゴメンゴメン。登録しといてくれた？」
陽乃はチラッと見て笑って返した。
「消去しといたから、着信履歴」
「ウソやろ！？」
翔が慌てて欄干から飛び降りた。
「ウソに決まってるじゃない。登録しといたわよ」
ニコッと笑って返すと、翔は嬉しそうに鼻歌なんか歌っている。
本当に明るいヤツだなと陽乃は思った。

学校に着くと、翔はそそくさと靴を履きかえる。
「アンタ、ホントいつも楽しそうね」
陽乃はスリッパをすのこの上にポンッと置いた。
「ん～？　だって今日、朝倉と楽器吹けるもん」
「ちょ、それ？　楽しみにしてたことって」

翔は嬉しさのあまり、聞こえていないようだった。陽乃の質問に答えずに階段を上がっていった。

「……ま、いっか」

陽乃も上へ上がろうとしたところで、後ろから急に声をボソッと掛けられて思わず小さく悲鳴を上げた。

「あ……ごめんなさい」

「な、永井さん」

1年F組の永井(ながい)　雪子(ゆきこ)だった。

「おはよう。どうしたの？」

「ちょっと聞きたいことがあるの」

「うん。どうしたの？」

それにしても、この子の声、低いな。だからかな、暗く見えるのは。

陽乃はそんなことを考えながら、雪子の返答を待った。

「朝倉さんと佐野くんって、知り合い？」

「えっ……と」

陽乃は短時間で考えを巡らせる。

知り合いといえば知り合いかもしれない。でも、偶然出会ってただ絡んでるだけ。向こうもまだそんなに友達ができていないし……。あれ？　でも電話番号は知ってるし、電話も佐野からかけてきたな。ってことは、けっこう友達？

ちょっと待てよ。よく考えたら佐野の出席番号も知らないし。

「んと～、どういうのかな」

「率直に聞いていい？」

雪子の顔が少し赤くなった。

「う、うん……いいけど？」

スゥッと息を吸った後、雪子は言った。

「朝倉さんと佐野くんが付き合ってるって、ホント！？」

ツキアッテル？

つきあってる？

付きあってる？

付き合ってる！？

「はいいいい！？」

「どうなの？　付き合ってるって、本当なの？」

真剣な表情で詰め寄る雪子のオーラがさっきまでと違う。陽乃は焦ってすのこを踏み外し、よろけそうになった。

「ちょ、ちょーっと待った！」

玄関ホールに響きそうな声で、雪子を制止した。

「落ち着こう、永井さん」

「……うん」

話を聞くと、どうやら既に学年中で噂になっているらしい。1年E組の入学式で椅子をひっくり返した女子と、関西弁の男子が入学早々いい感じだと初めは聞いていたようだ。

それが、帰る頃には付き合ってるという話に発展したらしい。噂のスピードは恐ろしいものだ。

「……なるほど、あのやり取りが全部噂になっちゃったわけか」

陽乃はため息を漏らした。最近、本当にため息が増えた。

「じゃあ、付き合ってないんだね？」

クドいなぁと思いながらも、陽乃は念を押しておいた。

「神に誓って。タダの知り合いよ」

パアッと雪子の顔が明るくなる。

「よかった！　ありがとう、朝倉さん。聞いて安心した！」

これぐらいで安心してもらえるならお安い御用。

しかし、ここまで喰らいついてくるということは……。

「ねぇ、永井さん」
陽乃は今日の放課後の予定を、雪子に伝えた。

第8話　誘い（後書き）

永井雪子に陽乃は放課後の予定を伝えました。放課後、どのような出会いが待っているのか……。

第9話　3人目

「遅いなぁ、朝倉のヤツ……」
放課後。つくし野川の土手。
翔はそこで、なかなか来ない陽乃に少し苛立っていた。こういうときこそ、サックスを吹いて心を落ち着けよう。
おもむろに吹き始めたのは『スカイ・ハイ』。『スカイ・ハイ』はイギリスのロックバンド・ジグソーのヒット曲で映画の主題歌にもなった曲だ。最近だと、トヨタ・ノアのＣＭにも使われていた。これにはサックスとフルートのソロがある。翔のお気に入りの曲のひとつだ。ただ、メロディーがまだ耳コピ（※注）できていないので、ｉＰｏｄで曲を聴きながらそれに合わせてサックスのメロディーを吹いている。

一方、土手近くを歩いていた陽乃と雪子は信号待ちをしていた。
「あっ」
陽乃が突然声を上げたので、雪子は「どうしたの？」と聞いた。
「ホラ、聞こえるよ」
「何が？」
「アイツのサックスの音が」
ちょうど翔がサックスのソロの部分を吹き始めたところだった。
「……やっぱいいわぁ～」
陽乃が隣で感動をあらわにしているのを、雪子はクスクスッと笑った。
「笑ったね～？」
「そ、そんなことないよ」
陽乃は人差し指を立てて雪子に言った。
「笑ってられるのも今のうち！　アイツの音聴いたら、涙が出るよ！」

「そ、そうなの？」
「うん！　期待しててよ～！」
そして陽乃と雪子はつくし野川の土手を駆け上がり、翔のいる所へと姿を現した。
「佐野～っ！」
陽乃が声を掛けると翔はすぐに振り向き、大きく手を振った。
「遅ぇよ」
「ゴメンゴメン！　ちょっと用事できてさ」
と言って後ろを振り向くと、雪子がいない。
「あれ？」
「どした？」
「いや、ちょっと知り合い連れてきたんだけど……」
よく探すと、土手のちょうど翔から見えないところで雪子は恥ずかしそうにしている。
（やっぱそうなのか……）
陽乃は雪子のところへ駆け寄り、声を掛けた。
「ホラッ！　佐野が待ってるから早く行こう！」
雪子の制服を引っ張りながら、翔の所へ連れて行った。
「あのね、私の友達も連れてきたんだけどいいかな？」
「友達！？　ホンマか？」
「うん！　ホラ、永井さん」
陽乃が見てもわかるくらい顔が赤くなっている。
「おぉ～！　女の子やん」
翔はニッコリ笑ってご機嫌そうだ。雪子はガチガチになりながらも自己紹介を始めた。
「いっ、１年Ｇ組のなっ、永井　雪子といいます！　あ、朝倉さんとは中学校が同じで、それでその……」
ギュッと翔が雪子の手を握り締めた。
「オレは１年Ｅ組の佐野　翔！　サックス吹くのが趣味やねん。大阪出身な。ヨロシク！」

「はっ、はい……！」
その様子を見て陽乃は嬉しそうに笑っていた。
「ほんで、永井さんも吹奏楽に興味あるとか？」
「そうそう！　私が佐野の楽器吹いてること伝えたら、見てみたいって」
「マジでかぁ！　嬉しいなぁ！」
ガッツポーズをとって喜びを表現する翔。感受性が豊かとはこういう人のことを言うのだろう。
「ほんならこんな土手よりもっと落ち着ける場所行こうや」
「落ち着ける場所？」
翔はサックスを片付けながら言った。
「うん。オレん家行こう！」

第9話　3人目（後書き）

（※注）耳コピ＝耳でコピーする。この場合、曲をＭＤ等で聴いてそのまま吹くこと。

雪子も加わって吹奏楽の活動を本格化させる方向へ向かう3人。しかし、落ち着く場所とは一体……？

第１０話　銀色　金色

（結局、来てしまった……）

陽乃と雪子は新築の雰囲気が出ている翔の家の門で呆然としていた。

翔は突然「オレん家行こう！」と行って楽器を片付け始め、雪子を自転車の後ろに乗せて走り出した。当然、陽乃もついていかないわけがなく、走ってついていった。

「まぁまぁ、遠慮せんと入れよ！」

翔が二人を手招きする。

「いいの？　本当に」

陽乃が聞きなおした。

「アカンかったら来いなんて言わへんって。ホラ、早く！」

仕方なく二人はお邪魔することにした。

「ただいまー！」

とんでもなく大きい声で翔が玄関のドアを開けると、それ以上に大きな声でリビングから女性の声がした。

「おかえり～！　今日の晩ご飯は翔の大好きな豚カツ……」

お母さんらしい。エプロンをしている。歳はウチのお母さんと同じくらいかな。

陽乃はいろんな考えを巡らせていた。一方の雪子は緊張がさらに増しているようで、汗をかいている。

「あらあらあら！　ちょっとお父さーん！」

「はぁ！？」

翔が驚いた様子を見せた。

（お父さん！？）

陽乃と雪子は顔を見合わせた。

すると2階からバタバタと足音がして、男性が一人出てきた。

「翔ったら、二人も女の子連れてきたわ！」

お母さんがお父さんにそう呼ぶと、お父さんも大慌てで玄関へ駆け寄ってきた。
「なんやと！？」
その慌てた声とは裏腹に、顔はうれしそうにしている。
「兄ちゃんの彼女！？」
「翔に彼女！？」
リビングから小学生くらいの男の子と、葉島中学の制服を着た女の子も飛び出してきた。
「名前なんて言うのかな？」
お父さんが喋る。それを遮るようにお母さんが喋る。
「あらあら～二人ともかわいらしい！」
弟が翔の制服を引っ張って言う。
「フタマタや、フタマタ～！」
翔の妹らしい子もマジマジと陽乃と雪子を見て言った。
「お二人とも美人ですね～！」
ワンテンポずれておばあちゃんまで出てきた。無言でジロジロと二人を見つめる。
陽乃も雪子も家族のテンションの高さに目が点になっている。

「ちょっと待ておまえら～！！」

耐え切れなくなった翔が叫んだ。

5分後。

「あらあら、そうやったの。クラスのお友達ね～」

お母さんが紅茶とクッキーを陽乃たちの前に並べた。
「あ、私は翔の母で友美子と申します～。ほんで、テーブルにおるのが父の昭です～」
お父さんが新聞ごとペコリとお辞儀をする。
「お父さん！　ちゃんと挨拶してくださいな」
「どうも……」
なんだか恥ずかしそうにしているように見えるが……。陽乃は気にしないことにした。とりあえず、自分も自己紹介をしておく。
「佐野くんと同じクラスの朝倉　陽乃と申します。よろしくお願いします」
それに続くように、雪子も自己紹介をしておいた。
「1年G組で、朝倉さんを通して知り合いになりました、永井　雪子と申します」
お母さんは喜んで「ガサツな翔にこんなお上品なお嬢さんたちがお友達になるなんてねぇ」とウキウキしているようだ。
「それで、やっぱり吹奏楽部創部するんですか？」
妹さんらしい女の子が楽しそうに話しかけてきた。
「綾音。先に自己紹介しろ」
翔が綾音ちゃんの後頭部にデコピンを喰らわせた。
「痛いな！　翔のアホ！」
アホ、という言葉がすぐに出るあたり関西人らしい。綾音はコホン、と咳払いをして立ち上がった。
「翔の妹の佐野　綾音です。葉島中学通ってます！　2年生です」
かわいらしいなぁ。中学生は純粋だ。
陽乃はそんなことを思いながらクッキーを一枚ほおばった。
「それより、朝倉と永井さんに向いてる楽器、見せてあげんと」
翔はそういい残して2階に上がっていった。
「なぁなぁ」
友美子が雪子と陽乃の正面に座った。
「ホンマにアナタたちのどっちかと翔が付き合ってたりせぇへんの

？」

またその話か。昨日と今日で何回この単語を聞いただろう。

陽乃は苦笑いしながら「そんなこと……まだ会ったばかりだし」と言った。

「あ、ゴメンなさいね。最近、翔がやたらとアナタのこと話してたから……」

「え？」

陽乃は少しドキッとした。

そこへドタドタと足音を立てて翔が戻ってきた。

「お待たせ～！」

大きめのケースと小さめのケース二つを抱えて降りてきた。

「なに、コレ？」

雪子が紅茶を置いて聞いた。

「まぁ、開けてみ」

翔に促されるまま、二人はケースを開けた。

「うっわぁ……」

陽乃の目に入ってきたのは、銀色に輝くトランペットだった。

「すっごい……」

一方、雪子の目には金色に輝くホルンが映っていた。

「オレが思うに、朝倉はトランペット、永井さんはホルンが向いてると思う」

「えっ！？」

「私たちが？」

二人とも目を丸めるばかり。翔はトランペットのケースから小さい銀色の部品のようなものを取り出した。

「コレな、マウスピースっていうねん。ホルンにも右下に入ってるやろ？」

雪子が取り出したのも、トランペットのそれと似たような形をしている。ホルンの方が少し細いだろうか。

「そんで、コレを口に当ててみ」

言われるがまま、二人ともマウスピースを口に当てた。
「で、口をちょっと尖らせるような感じにして」
「ん？　こう……かな」
よく感覚がつかめないまま、二人ともとりあえずマウスピースを当てるだけ。
「そしたら、唇震わせるような感じで息を入れてみ」
「ふぇ？　む、むずかひぃな……」
息を入れてみるものの、うまく鳴らない。雪子は陽乃の様子をジッと窺っている。
「フーッ、フーッ」
息の音が聞こえるだけ。

プーッ！

突然、雪子の持っているマウスピースから音が鳴った。
「すっげぇ！」
翔もかなり驚いているようだった。
「な……鳴った」
雪子が一番驚いているようだった。その後、気に入ったように雪子は何度も何度もマウスピースを吹いていた。だんだんと音がハッキリしてくる。
「スゴいなぁ……」
一方の陽乃はちっとも音が鳴らない。スースーと息の通る音がするだけ。
「ねぇ、私の唇ってホントにトランペットに向いてるの？」
不安になって翔に聞いてみた。
翔は親指をグッと立てて「オレが保証したる」と言った。
「……うん」

そうはいうものの、やはり心配でたまらない陽乃だった。

第１０話　銀色　金色（後書き）

佐野家にある楽器はトランペットとホルン。翔は雪子がホルン、陽乃がトランペットに向いているという。そのとおり、雪子は一発でマウスピースを鳴らしたが、陽乃は不安で仕方がない様子……。

第11話　申請書

雪子がマウスピースの音を翔の家で鳴らしてから1週間後の4月16日（火）。放課後、翔と陽乃と雪子の3人は校庭の一角で座り込んで話をしていた。

あれからしばらく、翔の家に通い詰めだった二人。雪子の方は木曜日にはだいぶ安定した音をマウスピースで出せるようになっていた。陽乃はというと、土曜日になってようやくマウスピースの音が出るようになった。その頃には雪子は楽器にマウスピースをつけて適当な音を吹くにまでなっていた。

陽乃もはじめは心配していたが、翔と雪子の応援もあって毎日、マウスピースばかりでも練習についていけた。

そんな状態の毎日だったが、いつになく翔が真剣な表情で二人を呼び出した。

「どうしたの？　珍しく真剣じゃん」

陽乃はペットボトルのお茶を飲んだ後、翔に聞いた。

「珍しく、は余計や」

翔はゴソゴソとカバンの中から一枚の紙を取り出した。

「何、それ？」

「ホラ、ここ読んでみ！」

『サークル創設申請書』

「えぇっ！？　創設申請書！？」

陽乃が驚いて大声を上げた。雪子も驚いて紙の字をジーッと読んでいる。

「そう！　今日付けで提出して、吹奏楽サークルを立ち上げます！」

翔は嬉しそうに立ち上がって空を指差した。
「こ、この人数で……？」
雪子がオドオドしながら聞いた。
「そ、それに楽器が全然足りないじゃない！　トランペットにホルンにサックスだけなんて……」
陽乃もさすがに無茶だと思い、引きとめようとした。しかし、翔は嬉しそうに笑うだけ。
「フッフッフッ……心配ご無用。ついてきたまえ」
翔が手招きをするので、二人は困り果てながらもついていった。

「しっつれいしま～す！」
と、やって来たのは職員室。翔の大声に職員室中の視線が３人に注がれる。
「ちょっと！　恥ずかしいじゃないの」
「気にすんなや。大きい声で挨拶をってドアに書いてあったし」
「そうだけど……」
何か違う気がするのは陽乃だけではないはずだ。
「東先生いてはりますか？」
翔はキョロキョロと周囲を見回した。
「おうおう、来たか関西弁」
すると、奥から１年Ｅ組の担任・東（あずま）　恭一（きょういち）が姿を現した。
「先生、約束ですよ。鍵貸してくださいな」
「おうおう。ほれ、これだよ」
手渡されたのは音楽準備室（〇〇楽部　部室）と書いてある鍵。
〇〇の部分は薄くなって読めなくなっているが。
「ありがとございま～す！」
翔はペコッとお辞儀をして恭一に礼を言うと、そそくさと職員室を出て行った。
「あっ……失礼します」
「失礼します」

陽乃と雪子も軽くお辞儀をして職員室を出た。
「ねぇねぇ、佐野」
階段を一段飛ばしで上がる翔を追いかけながら陽乃は聞いた。
「その鍵、何の鍵なの？」
「ついてきたらわかるって！」
「もう！　ちゃんと教えてよ～」
息を切らせながらついて行くと、校舎の４階東側突き当たりにある音楽室に着いた。
「ここ？」
「そう、ここ」
ガチャガチャと鍵を開けスリッパを履きかえる。そして、すぐ右にある小さなドアの南京錠を開けた。
「うわっ、ホコリっぽいなぁ」
確かに。何年か開けていない雰囲気のするホコリっぽさが室内に立ち込めていた。
ガラガラガラッと音を立てて、陽乃は部屋の窓を開けた。サァッと春風が入ってきて、爽やかな感じがする。
「ねぇ、佐野くん。ここって何の部屋？」
雪子がキョロキョロとあたりを見渡しながら聞いた。
「入口に見えにくいけど表札かかってるから見てみ」
二人は入口へ出て、かろうじて見える表札を凝視した。

『吹奏楽部　部室』

「あっ……」
雪子がコクコクとうなずいた。
「なるほど！」
陽乃もポンッと手を重ねた。

「わかったか？」
翔が腰を下ろしながら聞いた。
「ここで練習できるってこと？」
「そう！　この申請書を出したらな！」
翔はとても嬉しそうだ。そして、ポケットから印鑑を取り出すと、ポンッとその紙に押して立ち上がった。
「ほな、今からこの申請書出してくる」
「うん！」
雪子がニコッと笑って返事をした。
「やったね！」
陽乃も手をパチパチと叩く。
「じゃあさ、おまえら二人は適当に部室に何があるかとか、どんな楽器あるか調べといて」
「わかった。楽譜とかもあるかな？」
「多分あると思う。じゃあ行ってくるわ！」
「行ってらっしゃ～い！」
翔の足音が遠のいていく。
「さって……永井さん、どうしよっか？」
「そうだね～。スゴい汚れようだよね」
「ホント。ため息出ちゃうわ」
いつから使っていないのだろう。仮に、あの三田嶋さんの頃から使っていないとしたら、６年間？　そりゃこれだけ汚れるのも当然か。
「とりあえず、どんな楽器があるか調べようか」
「そうね」
黙々と棚に置いてある楽器がどんなものがあるのかを調べ始めた。ホコリこそかぶっているものの、ケース自体は新品同様だ。
水道に並べてあった雑巾でホコリを拭き取ると、高級感溢れる黒色のケースが姿を見せた。楽器はやはり値段が高いのだろう。
「こんなの置いてあるのに、なんで閉め切ってるんだろうね」

雪子が呟いた。
「……そうだね」
なんだかそう考えると、この部室においてある楽器や楽譜、全部の物が寂しそうに見えてくる。部員がいたとき、この部屋はどれだけ明るかったのだろう。
その後、何の会話もないまま黙々と二人はひたすら楽器ケースを磨き続けた。気づけば陽乃の周りにも雪子の周りにもケースが山積み。
「永井さ～ん、ちょっと私、疲れてきちゃった。休憩しない？」
さすがの雪子も疲れているようだ。
「そうだね。お茶でも飲もうよ」
「うん！」
真っ黒になった雑巾を洗って、二人は部室の中でお茶を飲んだ。
「あ」
雪子が声を上げた。
「何々？」
「ほら、こんなＣＤがあるわ」
よく見ると、ＣＤが棚の中にいっぱいある。
「へぇ～！　こんなに……」
顔を同時に二人は見合わせた。
「ちょっと聴いてみよう！」
ＣＤをさっそくデッキにセットする。
「何番にする？」
雪子が楽しそうに陽乃に聞いた。
「ん～……ランダムでいいんじゃない？」
「ヨシッ！　ランダムでＧｏ！」
（永井さんでもこんなテンションになるんだな）
雪子のこんな嬉しそうな様子を中学時代は見たことがなかった。
今の様子だと、さぞかし楽しいんだろう。
（吹奏楽、やってみるのも悪くないか）

ふとそうも思った。

それにしても、なぜかこのデッキだけやたらとホコリをかぶっていない。誰か触っているのだろうか……。

と、ＣＤのトラックが止まって曲が流れ出した。

第１１話　申請書（後書き）

申請書は無事通過するのか？　そしてＣＤから流れ出した曲とは……？

第12話　経験者×2

流れ出した曲。勇ましいリズム。
「ねぇ……どっかで聞いたこと……」
陽乃が呟いた。雪子もコクコクとうなずく。
そしてホルンの勇ましいメロディーが始まった途端、二人は笑いをこらえ切れなくなった。
「ブッ……アハハハハハハ！」
「キャハハハハハ～！　アハ、アハハハ！」
流れ出した曲は有名な時代劇『水戸黄門』のあぃ人生に涙ありだった。
「なっ、何コレ～！　吹奏楽でこんなのも吹くの～!?　ヒーッ、おかしい！」
陽乃は膝をバンバン叩きながら笑う。雪子もおなかを抱えて笑っている。
「当たり前じゃ。吹奏楽は何のジャンルでも吹くの」
「わっ！　ビックリした！」
いつの間にか、翔が戻ってきていた。
「それよりちょうどええぇわ。これな、時代劇の曲がメドレーになってるねん。ホルンめっちゃカッコえぇねんぞ。聴いとけ」
「ヒィ、ヒィ……わ、わかった」
ようやく落ち着いた二人は、翔と一緒にＣＤを聴き始めた。
銭形平次の曲が終わると突然、ホルンのファンファーレのようなものがなり、テンポアップの軽快な曲が始まった。
「うわぁ……」
雪子は曲に聞き惚れていた。
陽乃も驚いた。昨日も雪子がホルンを吹いているのを見たが、ここまでカッコいい楽器とは思っていなかった。はじめて見た時はなんだかカタツムリみたいだと思っていたが、かなりカッコいい。

「スゴいね、このホルン！」
雪子は感動を隠せない。
「やろっ！？　さっ、オレらもこんな風に吹けるように練習、練習！」
バシッといい音がして、翔の手が雪子と陽乃の背中を叩いた。
クスッと二人は顔を見合わせて、立ち上がった。

午後5時。
大谷　沙希が教室を出ると、音楽室の方から何か音が聞こえるのに気づいた。
「こんな時間に誰が……？」
沙希は気になって音楽室の方へと足を進めた。
ぎこちない音が二つ。それに、柔らかい音がひとつ。
「ん～……？」
よく見ると、音楽室の入口からすぐ右のところのドアが開いている。
「何かしら？」
コッソリと沙希はドアの向こう側を覗いた。
「あっ」
その中には、朝倉　陽乃がトランペットを持って立っていた。
「朝倉さん！」
その声にすぐ陽乃も振り向いた。
「大谷さん！」
その声に気づいて、雪子と翔も振り向いた。
「知り合い？」
雪子が聞いた。
「うん。同じクラスの子。こないだ、一緒に掃除してお土産までもらっちゃった」
「大谷さんやっけ？」
翔も同じクラスだ。覚えているらしい。

「うん。佐野くん、だよね？」
「そうそう！　覚えててくれたんや」
ジーッと3人を見つめる沙希。
「大谷さんもなんか楽器吹いてみる？」
翔が唐突に誘った。
「えっ？」
「朝倉と永井さんとオレでな、吹奏楽サークル作る予定やねん」
「まだ決定じゃないでしょ？」
陽乃のツッコミに苦笑いする翔。
「でも、ほとんど決定だよね」
雪子が嬉しそうに陽乃の顔を覗き込んだ。
「まぁね」
陽乃もまんざらでないらしい。
「今な、先生にサークル創設申請書提出してきてん。明日には職員会議されて、通ると思う。どう？　入ってみぃひん？」
沙希はしばらく悩んでいたが、ボソッと呟いた。
「吹奏楽って、フルートあるの？」
「うん。あるで」
「私、フルートなら吹けるんだけど……」
3人はしばらく沈黙したまま。
「あ、やっぱダメ……」
「マジで！？」
沙希が言い終わらないうちに、3人が一斉に沙希に詰め寄った。
「あ、う、うん。あと、ピアノも……」
タジタジと沙希が付け足した。
「すっごぉい！」
雪子がパチパチと拍手する。
「経験者が二人もいたら強いよ！」
陽乃も嬉しそうに拍手する。
「どう？　入ってみぃひん？」

翔が手を差し伸べた。
「……入りたいな」
「やったぁ！！」
こうして、吹奏楽サークルの第一歩が踏み出せる準備が整いつつあった。

第１２話　経験者×２（後書き）

いよいよ経験者が二人になった吹奏楽サークル。最終的に何人が入るのでしょうか？　ここで陽乃と雪子が聴いて笑い転げていた曲は『ニュー・サウンズ・イン・ブラス　第３３集』の５番に収録されている『ジャパニーズ・グラフィティＸ「時代劇絵巻」　ああ人生に涙あり（「水戸黄門」より）～銭形平次～大江戸捜査網のテーマ～大岡越前のテーマ～暴れん坊将軍旧オープニングテーマ』を参考にしています。

第13話　ポスター

大谷　沙希がメンバー入りした2日後、無事に吹奏楽サークル創設申請書は職員会議で承認された。同時に一昨日使用した元・吹奏楽部の部室を吹奏楽サークル部室として使用することも許可された。それから、翔はサークル代表者となった。

「これでよしっ！」

翔が満足そうに部室の入口に立っていた。元々かかっていた表札を使って、「吹奏楽部」の「部」の部分に×印を入れて「吹奏楽サークル」に無理やり直していた。このあたり、翔らしい適当さが現れている。

「朝倉～。部員募集のポスターどうなってる？」

「バッチリよ！　ほら、見て！」

絵の具まみれの手に顔。さらに何が書いてあるのかわからない絵。

「おまえ、それ何の絵？」

翔は頭をかきながら聞いた。

「ん？　これトランペット！」

恐ろしくグニャグニャに描かれたトランペット。しかも、色がピンク色ときたものだ。

「あのなぁ……おまえの絵の才能を疑ってまうわ」

「なんでよ！　失礼ね！」

絵の具まみれの手のまま、陽乃は押しピンケースを持って外へ出て行った。

「お、おい！　どこ行くねん！」

スリッパを履き替え、陽乃は大きな声で返事をした。

「玄関ホールにこれ貼ってくるね！」

「お～い……」

かなり恥ずかしい気もするが、まぁいいだろう。

「インパクトあるし、えぇか……」

音楽室に入ると、さっそく沙希が自宅から持ってきたフルートを吹いていた。自分のフルートを持っている、ハワイに旅行に行く（陽乃情報）、ピアノも弾く。もしかしたら、お嬢様なのかもしれないな、と翔は思っていた。

「大谷さん、フルートいつから吹いてるん？」

翔もサックスを用意しながら聞いた。

「私は中学校の頃から。といっても、南葉島中学の吹奏楽部は下手っぴだから、私もそんなに上手くないけどね」

「でも、ビヴラート効いてるし。そんな下手やないと思うで」

「そうかなぁ……でも、もっと練習して上手くなりたいし」

「向上心がめっちゃあるんやな」

「ハハッ！　そんなこと言われたの、初めてかな」

「まぁ、これから頑張っていこな」

「もちろん！」

それから沙希はメトロノームと見つめあいながらロングトーンを始めた。

翔も幸先がいいな、と思いながらマウスピースを口にくわえた。

玄関ホールで陽乃は自分の作ったポスターを貼る場所を思案していた。

「うーん、ここかな。ここがいいかなぁ」

さっきからだだっ広い玄関ホールを3周ぐらいしている。

「私って優柔不断かなぁ」

苦笑いしつつも、それからもう一周して結局掲示板の一番上にポスターを貼ることにした。

「んんん～……も、もうちょっとなんだけどっ……」

身長１５８センチ。陽乃にはちょっとキツい場所にある。

「……。」

誰も見ていないことを確認すると、陽乃はスリッパを脱いで靴箱

の上に乗りかかった。
「おっ、届く届く」
背伸びをすればなんとか貼りたい位置にまで背が届く。陽乃は精一杯背伸びをして、画鋲でポスターを貼った。
「よっ……し！　完成……キャッ」
背伸びをやめた途端、バランスを崩して靴箱から落ちそうになった。
「やっ、ちょ、あっ、とととっ、うわ、やぁっ！」
けっこう高さがある。これはさすがに痛いだろうな。
目をつぶって受け身の態勢をとっていると、後ろの方から「危ない！」という声がしてきた。

ズン！

衝撃がかなり抑えられた。
「アイタタタタ……」
陽乃が自分の体の下を見ると、男子の制服を着た人が下敷きになっている。
「きゃあっ！　ご、ごめんなさい！」
「いやいや、いいんだけど。それより、怪我ないかい？」
「あ、はい、なんとか……」
自分よりずっと背の高い人。身長は１８０センチくらいあるだろう。けっこう体全体が大きい。
「あのポスター貼ってたの？」
「あ、はい。背が届かないんで靴箱の上に乗ったらバランス崩して……ごめんなさい」
男子生徒はジーッとポスターを見ている。
「あ、絵ですか！？　すいません、個性的な絵なもんでわかりにくくって……」
「あのさ」

男子生徒が陽乃の顔を見つめながら言った。
「はい？」
「吹奏楽、興味あるんだけど」
ニッコリ笑う男子生徒の顔を見つめ、ワンテンポ遅れて陽乃は歓喜の声を上げた。
「ホントですか！？」
男子生徒は爽やかな笑顔で何度もうなずいた。
「部室、今から行ってもいい？」
「もちろんです！　案内します！」
砂で汚れたスカートを払い、陽乃は走り出した。
「こっちです！　どうぞ！」
大柄な体格だが、性格は優しそうだし笑顔がステキだ。
陽乃はそれだけでウキウキしていた。

第13話　ポスター（後書き）

いよいよ翔以外の男子が見学に！　意外とスムーズに部員の確保が進みそう？

第１４話　見学生徒

「佐野、佐野～！」
陽乃が嬉しそうな声を上げて音楽室へ戻ってきたので、すぐに翔もピンときた。
「部員か！？」
「そうなの！　男の子だよ！」
続いて、沙希と雪子が出てきた。
陽乃が手招きする。
「さぁさぁ、入ってきて！」
「失礼します」
入ってきた男子を見て、全員がギョッとした。
とても大柄な男子なのだ。着ている制服がキツそうにも見える。
「本堂くんっていうんだって！　北松中学校出身」
「本堂（ほんどう）　拓真（たくま）といいます。１年Ａ組です」
体の威圧感の割りに優しい声。それに安心した３人はそれぞれ自己紹介を始めた。
「佐野　翔といいます。代表やらせてもらってます」
「大谷　沙希です。フルートやってます」
「永井　雪子です。初心者ですけど、ホルンやってます」
陽乃が３人の前に立ち、自己紹介を始めた。
「そして！　私が朝倉　陽乃といいます！　へたっぴですけど、トランペットです！」
翔がグイッと陽乃を押しのけて続けた。
「部員数少ないけど、ヨロシク！」
「お願いします」
それから、楽器を何にするか選んでもらうことにした。
拓真は物珍しそうにキョロキョロとあちこちを見る。そのうち、大きなケースの中にある楽器をしきりに見入っていた。

「これ、なんていう楽器なんだい？」
陽乃と沙希と雪子も覗き込む。翔はサックスを置いて拓真の傍にしゃがみこんだ。
「あぁ、これ？　これはチューバっていう大型低音楽器。主に伴奏とか担当して、マーチとかわかる？」
「あんまり」
「そらそうやろなぁ。朝倉とか永井さんも大丈夫？」
二人は顔を見合わせた。
「実は……あんまり」
「まぁ、ふつうはそうやろな。葉島中学はしゃあないけど、北松中学と南葉島中学には吹奏楽部あるんやって？」
「え？　なんで大阪出身のアンタが知ってるの？」
陽乃が驚いて聞いた。
「まぁええやんけ。ある人に聞いてん」
うまく話を逸らされた気がする。まぁいい。
「マーチってのはほら、たとえば陸上部とかで入場行進したり、式典で新入生入場とかあるやろ？　ああいうときに歩きやすい速さで吹く曲で、かつチューバと打楽器……あぁ、打楽器はパーカッションていうねんけど。その二つとあとホルンとで前打ちと後打ちをやってる曲のことかな」
「ちょっと待って」
雪子が質問をした。
「はい、何ですか永井さん」
「前打ちと後打ちって何？」
「あぁ～しもた～」
翔はしばらく考えた。そしてドラムセットに腰掛けて3人を呼び寄せた。
「これがドラムセットっていう楽器やねんけど」
足を掛けてベースドラムの方でドンドンドンドンとリズムを取り始めた。同時にそれとすれ違いでスネアドラム、いわゆる小太鼓で

リズムを取り始めた。
「いま足で叩いてるほうが前打ち、手ぇで叩いてるほうが後打ち」
「なるほど～」
４人が声を合わせて同時にうなずいた。
「で、何の話してたっけ？」
翔が急にボケた。
「チューバの話でしょ」
沙希がボソッと突っ込む。
「あぁ、そうそう。ちょっと持ってみる？」
「うん！」
拓真は子どもみたいに目を輝かせて翔の後についていった。
「ねぇねぇ、けっこう幸先いいよね」
沙希が嬉しそうに小さく飛び跳ねた。
「うん！　ホントに楽しみだね」
雪子も嬉しそうに微笑む。
「私たちも練習頑張ってこようか！」
「うん！」
そういって３人は音楽室へと戻っていった。

第１４話　見学生徒（後書き）

拓真も興味津々のよう。部員はこれで５人。陽乃もだんだんやる気が出てきた模様。

第１５話　順調

４月１８日（月）。

吹奏楽サークル創設から４日後。陽乃の描いたポスター（らしきもの）を見た１年生が何名かやってきた。その中には、翔に勝手に番号を教えた陽乃の中学時代の同級生・宮部由美子もいた。

現在のところ、入部意志を表明しているのは次の６人。

・１年Ｅ組　佐野翔　アルトサキソフォン
・１年Ｅ組　朝倉陽乃トランペット
・１年Ｅ組　大谷沙希　フルート
・１年Ｆ組　永井雪子　ホルン
・１年Ａ組　本堂拓真チューバ
・１年Ｃ組　宮部由美子　フルート

そして現在見学中というのが以下の３人。

・１年Ｄ組　橋本絵美　クラリネット希望
・１年Ｇ組　田中美里　パーカッション希望
・１年Ｄ組　川崎慎也トロンボーン希望

翔はそれだけで満足だった。初めは翔と陽乃、沙希、雪子、拓真の５人だけということも覚悟していたが、予想外にもそれから由美子、絵美、美里、慎也とやって来てくれた。一日だけでもいいと思っていたが、４人とも毎日吹きに来てくれている。別に何の楽器を吹いてもいいと言っておいたら、４人とも違う楽器を選んだ。

由美子は沙希の吹く姿に憧れてフルート。絵美はクラリネットをテレビで見て以来吹きたかったが出身中学の袴田中学がレベルが高かったため、諦めていたという。美里は大胆なことができる楽器がいいと言い、パーカッションを選択。慎也は不思議な形をしたトロンボーンに初日から夢中だ。

「意外とみんな楽しそうだね」
プゥプゥとマウスピースの練習をしている陽乃が嬉しそうにしている翔の隣に来て声をかけた。
「うん。だって楽器の『楽』は『楽しい』っていう字を書くやろ」
「そっか。そうだったね」
「んで？　朝倉は音、どうなん？」
「下のドからソの音まで鳴るようにはなったよ」
「やるやんけ」
「まぁね。佐野にいつまでも負けてらんないし」
ペチッと軽くデコピンを翔は陽乃に喰らわした。
「生意気言うなよ？」
「何よ！　たまにはいいじゃん！」
「さぁって、生意気女に抜かれへんようにオレも練習しよか」
「べーだ！」
翔はそのまま部室へと入っていった。
「さぁてと……ん？」
音楽室の入口に誰かいたような気がした。
陽乃が覗き込むと、１年Ｂ組の水谷（みずたに）　春樹（はるき）がいた。
「水谷くん」
「あ、朝倉さん……」
左手に、大きなケースが握られていた。確かこの間ケースを磨いたときに見た覚えがある。
「それ、ユーフォニウムだよね？」
「うん……」
春樹は小さくうなずいた。
「入って！」
「え？」
「だって、持ってきたのに吹かないともったいないじゃん？」
言ってから、最近「もったいない」が口癖になってきていることに気づいた。まぁそれはいいとして。

「でも……」
「恥ずかしがらないで。せっかく楽器あるんだし、みんなで楽器吹いて音楽しようよ」
春樹はちょっと嬉しそうに微笑んだ。
「いいの？」
「もちろん！　今日入部したって構わないよ」
「ホント！？」
「う、うん」
「するする！　やったぁ！」
全身で喜びを表現する春樹。
陽乃は今まで抱いていた春樹のイメージとは違う行動をとったので、少し驚いた。雪子もそうだったが、今までのイメージがずいぶんと変わる。
春樹は重そうにユーフォニウムを抱えて部室へと入っていった。
「けっこう人数揃ったな！」
陽乃はスキップしながら部室へと戻っていった。

第１５話　順調（後書き）

順調に部員が増加している吹奏楽サークル。果たしてこの中でどれだけの人が入部してくれるのでしょうか？

第１６話　曲選び

５月になった。

あれから由美子、慎也、春樹、絵美、美里の５人も入部してくれた。結局、今年の部員は１０人になりそうだと翔は言っていた。

この七海高校から吹奏楽部がなくなってからずいぶん経ったから、生徒たちもちょっと気が引けているのだろう。新しくできたばかりの部活に入るより、安定した長い歴史のある部に入ったほうがいい。その方が苦労もずっと少ないだろうし。でも陽乃としては、苦労も味わいながら楽しむほうがいいかもしれないと思っていた。入学当初と考えていたことは違うけれども。

部活、といってもそれほど大したことはやっていない。毎日部室や音楽室でひたすらロングトーンをしたり、個人レッスンを翔から受けたりしているだけ。ふつうは飽きそうなものだが、案外みんな飽きずに毎日メトロノームとにらめっこしながらロングトーンを繰り返している。

陽乃は最近になって上のソ（吹奏楽ではエフ－Ｆ－の音という）まで出るようになったし、したの音であればラ（ゲー－Ｇ－）の音まで出るようになった。楽譜は元々読めるので苦労しない。なので最近は個人練習も何とかできるようにまでなってきた。

ところで、最近の動きといえば。

部室の中から大量の楽譜が見つかった。それもかなり難しい曲ばかり。翔はそろそろみんながしっかり音も鳴らせるようになってきたので、このあたりで何か全員で曲を吹いてみたいという。まだみんなには言っていないのだが。

「どんな曲がいいかな……」

あまり難しい曲を選んでもない楽器があまりにも多すぎるのでなるべく人数が少なく済む曲を選んだほうがいい。ついでに言うと、みんなが知っている曲の方がなじみやすい。

ひとりで選ぶのも難しいので、雪子か沙希に手伝ってもらおうと思った陽乃は二人の姿を探すが、見当たらない。

外から聞き覚えのある音がしたので窓から覗いてみると、中庭で雪子が一人ロングトーンをしていた。外の方が自分の音が聞こえやすいというから、最近雪子は晴れている日はよく外へ吹きに出ている。

「永井さんはムリか……」

今度は沙希の姿を探すが、こちらも見当たらない。そういえば最近、沙希はずっと由美子に付きっ切りだった。彼女も貴重な経験者だ。初心者である由美子を教えているほうが能率がいいだろう。

「仕方がない。一人で行くか」

部室に入って、１ヶ月前とはずいぶん空気が変わったのを陽乃は感じていた。初めてこの部室に入ったときはホコリっぽくて陰気であまり好きになれなかったが、今はこの１０人で話し合ったりするのによく使うので、お気に入りの場所だ。

「何の曲がいいかな～」

適当にゴソゴソと譜面の入っている棚をあさってみた。よく見ると、きちんと仕分けがしてあって見やすくなっている。

・ニューサウンズ
・Ｍ８ポップス
・Ｍ８演歌
・オリジナル
・課題曲
・ポップス単曲
・ポップスメドレー
・クラシック編曲

Ｍ８が何の省略形なのかわからない。どうやら演歌やらポップスやらが吹けるらしい。

「うーん……どれがいいんだろ。私にはちょっとわかんないなぁ」

悩んでいると、急に目の前が暗くなった。

「ん？」
後ろを振り向くと、拓真が立っていた。
「わぁお！　ビックリした！」
「そ、そんなにビックリしなくても」
拓真も驚いているようだった。
陽乃は手招きして隣に座るように言った。
「あのさ、みんなでそろそろ曲を吹きたいんだって」
「誰が？」
「佐野が」
「誰と？」
「決まってるじゃない。私たちサークル部員よ」
拓真はさぞかし驚いているように見えた。
「なっ、なんでそんな驚くの？」
「だ、だって俺たちまだ楽器持って１ヶ月だよ？」
「ん～、そうだね」
陽乃はあまり気に留めず曲を選び続けた。
「それに俺なんてやっとヘ音記号が読めるようになってきたのにそんな急に楽譜渡されても……」
「でもさ」
拓真の方を振り返って陽乃は少し強い口調で言った。
「このまま毎日ロングトーンするだけじゃ私たち、絶対変わらないよ？」
「……。」
「ちょっとでも曲を吹く練習しないと。みんなに聞かせられないし」
「そっか……」
「それに、自己満足で終わらせたくないじゃない？」
ニコッと笑ってもう一度拓真を見た。
「うん。そう思う」
拓真も笑顔でうなずいた。
「よし！　そうと決まったら本堂くんも楽譜探し手伝ってくれる？」

「ＯＫ」
そして再び二人で大量の楽譜の中から自分たちが吹けそうなものを選び始めた。
それにしても、本当にたくさんの楽譜がある。
・ディズニーメドレー
・Ｔｈｅ　７ｔｈ　Ｎｉｇｈｔ　ｏｆ　Ｊｕｌｙ
・ＰＵＳＺＴＡ
・タイタニックメドレー
・リンゴの唄
・高校三年生
・マーチ　エル・キャピタン
・Ａ列車で行こう
・
・
・
名前を聞いたこともあるのもあれば、全然知らないのもある。どちらかといえば、知らないものばかり。
「……さっぱりわかんないね」
陽乃が苦笑いしながら拓真に言うと、拓真は嬉しそうに一冊の楽譜を手にした。
「これ！　俺は好きなんだけど、この曲どう？」
その手に握られていた楽譜のタイトルは「ＴＲＵＴＨ」と書いてあった。

第１６話　曲選び（後書き）

『ＴＲＵＴＨ』。タイトルで「？」と思った人も、曲を聴けば誰もが知っているあの曲です。　ここでは聴くことができませんが……。

第17話　嫌がる理由

「それじゃあ先生、明日にでもお願いします」
翔は職員室で深々とお辞儀をした。
「了解。考えておくよ」
１年Ｅ組の担任・東　恭一は一枚の紙を右手に翔を見送った。
「思いつきで始めたのかと思ったら、そうでもないようだな……」
恭一は自分の事務机に座ると、しばらく思い出にふけっていた。
「懐かしいなぁ……もう１４、５年前になるのか」
クスッと笑い、もう一度翔のもってきた紙を手にした。

翔が音楽室へ戻ると、なんだか普段より賑やかである。
「スゴい！　いいんじゃない、これ」
由美子の声がする。続いて、春樹の声。
「でも頭からユーフォ難しそうだよ」
「ひゃあ！　どうする？　なんかシロフォンとか書いてあるよ？」
（打楽器の話をしていると言うことは……田中？）
「ねぇねぇ、シンセサイザーって読むのかな？」
沙希の声だ。それに応答するように、拓真の声。
「多分、キーボードでも対応できるよ」
翔はスリッパを履き替えて、音楽室へと入った。中では部員全員が机を囲んでワイワイと話をしている。
「何やってんの？」
「あぁ、佐野」
陽乃が振り返り、一枚の譜面を見せた。
「あのね、そろそろ曲を練習しようとか言ってたじゃん？　だから、本堂くんと私でこれがいいんじゃないかっていう楽譜を取り出してきたの」
「……。」

翔の反応がない。
「どしたの？」
雪子が首をかしげていると、不自然な笑顔で翔は返した。
「あぁ、うん、オレもいいと思う」
「でっしょー！？　はいはい、多数決でやっぱこの曲に……」
「でも！」
翔が大きな声を出したので、周りが一斉に静かになった。
「もっといい曲知ってるから、そっちにせぇへん？」
「いい曲？」
慎也が聞き返した。
「うん」
「どんな？」
引き取るように、沙希が聞いた。
「ディズニーのホール・ニュー・ワールド」
すると由美子が目をキラキラさせて「ホント！？　いいなぁ、私そっちやりたい！」と騒ぎ始めた。ディズニーというのは今も人気がある。
「な、オレ譜面の場所知ってるから探して……」
「怪しい」
陽乃の一言に、翔の動きが止まった。
「なっ、何が……？」
「ねぇ永井さん。おかしいよねぇ？」
陽乃がニヤニヤしながら雪子に同意を求めた。
「うん……。普段の佐野くんなら、すぐにやろうって言うのに」
「べ、別にオレは他にいい曲があるっていっただけで……」
「あれ？　でも私たちが自分たちが納得した上で選んだ曲ならオレはなんでもいいって、私に言ってたよね～？」
陽乃に詰め寄られて壁際に追いやられながらも、翔は「あ、あれぇ？　そうだっけ？」としらばっくれている。
「うん。私は知ってるよ」

「な、何を？」
「アンタがこの『ＴＲＵＴＨ』を嫌がる理由を……」
「へ、へぇ？　な、何？」
「この曲にはね……」
陽乃は封筒の中からアルトサクソフォンのファースト（メロディー中心）を取り出した。
「アルトサックスのソロがあるのよ！」
「えぇ～！？」
全員の声が上がった。そして雪子が嬉しそうに続ける。
「じゃあさ、やっぱりこの曲で決定じゃない？」
「そうだね！　だって経験者がソロを吹けば印象もいいし！」
美里もパチパチと手を叩いている。
「そうだな～。代表なんだし、ここでちょっと株を上げておくのもいいんじゃね？」
慎也もニコニコ笑いながら言っている。
「おいおい、ちょっと……」
翔を遮って、陽乃が大声を上げた。
「はいはいは～い！　じゃあ多数決取ります！！」
「いぃっ！？　ちょっとオレの意見は聞かへんわけ？」
「多数決は民主主義の基本です！　はい、じゃあこの『ＴＲＵＴＨ』やりたい人手ぇあげて～！」
そういうと、雪子、由美子、沙希、拓真、春樹、慎也、美里、絵美の全員が手を上げた。
「えっと８人ね。それに私を加えて９人っと」
陽乃は嬉しそうに微笑みながら「えっとじゃあ多数決の結果……」と言いかけた。
「おいおい！　ちょっと待てや！　やりたくない人のカウントは！？」
「え？　だって１０人中９人がやりたいって言ってるからカウントしなくていいかな～って感じじゃない？」

「でも意見変わるヤツおるかもしれんやん！」
「はいはい。わかったわよ、聞けばいいんでしょ聞けば」
陽乃はボールペンで頭をかきながらやる気のない声で聞いた。
「えっと～、じゃあこの曲したくない人」
「はいっ！！」
翔の右手だけが勢いよく上がった。
「はい。佐野くん一人だけ～。というわけでこの曲の反対案は却下されました～」
「わぁ～い！」
全員から拍手が上がった。翔だけがうなだれている。
「まぁ、頑張りましょうや」
陽乃が嬉しそうに翔の肩を叩いた。
「終わりや……」
フーッと大げさに翔はため息をついた。

第17話　嫌がる理由（後書き）

自分にソロがあった理由から『ＴＲＵＴＨ』を嫌がっている翔……。
しかし、結局民主主義方式でこの曲に決定してしまいました。さぁ、
どうなる七海高校吹奏楽部!?

第18話　トラウマ？

午後6時。すったもんだの挙句、やはり練習する曲は『TRUTH』で決まってしまった。
「お疲れ～！」
陽乃はブンブンと沙希に手を振った。隣で翔がウンザリした顔をしている。
「ホンマおまえ……」
「何よ？」
「オレをハメたやろ？」
「ハメたって……失礼ね。みんなの多数決の票が賛成になって決まったことなんだから仕方ないでしょ？」
ハァッ、と隣で翔が大きくため息を漏らした。
「そんなにため息漏らさなくてもいいじゃない。私はソロなんて吹ける佐野が羨ましいんだよ？」
「でも、ソロってめっちゃプレッシャーやぞ？」
翔はまたため息を漏らした。
「も～、ホントアンタって明るいかと思ったら意外と根性ナシなの？」
「根性ナシって……」
「だって、アンタサークル立ち上げて代表やるんでしょ？」
「そうやけど……」
「ソロくらい吹ける度胸がないとダメだと思うけどな、私は」
ションボリしたまま翔は言葉を返しても来ない。
「そんなにあの曲したくなかったの？」
なんだか申し訳なくなった陽乃はいちおう聞いてみた。それなりの理由があったのかもしれない。
「うん……実はな」
ゴクッと陽乃も思わず唾を飲み込んだ。

「オレが初めてソロを吹いた曲やねん」
「それで？」
「見事玉砕……」
沈黙が続く。2分ほど静かになって、再び翔が口を開いた。
「冒頭の部分でやたらと緊張して、ソロ入っていきなり音が裏返ってそっから頭は真っ白け。先生にはやたら睨まれるし、空しくチューバとドラムの伴奏は続くし……」
「……。」
聞くんじゃなかった。
陽乃はちょっと後悔していた。こんなに落ち込んだ翔を見るのは初めてだったのでどんなふうに声をかけていいのかわからなくなってきた。
「んで、ソロはオレのトラウマになってんの」
「えっと……」
陽乃は頭をかきながら続けた。
「でもさ、今はもう高校生だし！　佐野のあの音聴いてたら私はもう失敗しないと思うな！」
翔は前を向いたまま反応を示さない。
「それにつくし野川で吹いてたとき！　全然失敗してなかったじゃない。大丈夫だよ！」
「……。」
「それにさぁ！　今は私たち初心者ばっかだから失敗してもたいして目立たな……」
キッと翔が陽乃のことを睨んだ。思わず言葉が途切れて、陽乃はますます気まずくなってしまった。
「今の、本気で言うた？」
「……。」
「本気か？」
陽乃の心臓が高鳴る。まずい、この空気はまずすぎる。
「わっ、私はただ佐野を元気付けようと思って……えと、だからそ

の、今のは言葉のアヤっていうかえと、あの、そのあぁ～」
「……プッ」
翔が吹き出した。
「へ？」
「プッ……マジに受けてやんの。おもろっ！」
「ちょ、ちょっと佐野？」
翔は半分涙目になりながら笑っていた。
「冗談や、冗談！　初心者のおまえらがそう思ってたって不思議やないもんな。そんなんでオレは怒らへんで」
「……ホント？」
「当たり前や」
陽乃はホーッと長い安堵のため息をついた。
「良かった。本気で佐野が怒っちゃったかと思った……」
「オレは滅多に怒らん。それだけ言うとく」
「良かった。これから気をつけなきゃね」
「そんな気ぃ遣わんでも大丈夫や」
つくし野川を越えた所で、いつも佐野とは別れる。陽乃は北側、翔は南側。
「じゃあ、また明日」
陽乃は夕日でまぶしくてよく見えない翔の顔を見つめながら挨拶をした。
「おう。明日も頑張ろうな！」
やっぱり、顔がよく見えない。この時間帯はいつものことだけれども。
「もちろん。私、もっと上手くなるよ。頑張る」
「……うん。期待してる」
翔は素直にそう言った。
「な、なんかそう言われるとプレッシャーだな」
陽乃は恥ずかしくなって翔の顔を見ていられなくなった。
「頑張ろうな」

クシャクシャと翔が陽乃の頭を撫でた。意外と身長差があることに陽乃は気づいた。

「ほな、また明日」

「うん。また、明日」

翔は手を振りながら、陽乃から見えなくなるまで手を振り続けていた。

第18話　トラウマ？（後書き）

翔の言ったトラウマは本当なのか、ウソなのか……。翔もどこかで自信がないのかも……？

第１９話　ノゾキ

翌日、もうすぐで部活の時間というときになって翔が担任の東に呼ばれて教室を出て行ってしまった。
何も聞いていない陽乃は何か翔が職員室に呼ばれるようなことがあったか思案をめぐらせた。やはり、吹奏楽サークルのこと以外にはなさそうである。
「ねぇねぇ、大谷さん」
陽乃はサークルへ行く気満々で準備している沙希に声をかけた。
「佐野ってどこ行ったの？」
「あぁ、佐野くん？」
沙希は引き出しの中から教科書やノートを片付けながら言った。
「今日ね、サークルの顧問が決まるらしいから、その話みたいだよ」
「顧問！？」
陽乃が聞いていない話だった。

「しっつれいしま～す！」
いつものテンションで翔が職員室に入ると、やはり先生方が驚いて東と翔の方を振り向いた。さすがの東もこの挨拶には恥ずかしくなる。
「まぁ、ここに座れ」
東が椅子を差し出すと、翔は嬉しそうに座った。
「それでまぁ、昨日もいきさつを話したとおりだが」
「はい！　これからよろしくお願いします」
「言っとくがな、俺はもう１５年ほど楽器にも吹奏楽にも関わっていないんだぞ？」
東は心配そうに顔をしかめた。
「大丈夫ッスよ～！　先生、いつもそんなこと言っておいていろんなことできるじゃないですか」

「おいおい、それは少し誇張入ってるぞ」
東はハンコを取り出すと、このあいだ翔の手渡した書類に押した。
「よし……これでいいのか？」
「はい！　ありがとうございます！」
これでまた一歩進む。そう思うと、翔は嬉しくて仕方がなかった。

「どう？　見えそう？」
「ダメ。もうちょっと……ってとこなんだけど」
職員室の前の廊下。西側の入口にダンボールが山積みになっている。その上に乗っているのは、もちろん陽乃。そしてそれを支えているのは雪子だった。
「だいたいさ、佐野ったらヒドいよね」
陽乃はプリプリしながらも背伸びをまたやってみた。雪子も同じように不服そうだ。
「ホントそれよ！　私たちに何の相談もなく顧問の話なんか勝手に進めちゃって」
グラッとダンボールが不安定になった。中に書類か教科書か、重いものが入ってるとはいえやはり不安定。心配になった雪子が止めに入った。
「ねぇ、さすがにコレはヤバいよ。そろそろやめない？」
「もうちょっとだけ。佐野の前に誰かいるんだけど、それが微妙に見えなくて……よっ！」
張り切って少し飛んでみると、微妙に姿が見えた。そこにいたのは……。
「あっ！？　東せんせ……うわわっ、あわ！　キャ――ッ！」
「きゃあああっ！？」

「それじゃ先生、今日からさっそく……」
翔がお辞儀をしたところで、突然外からものすごい音がした。
「うわお！？」

翔も東も、職員室にいた全員が驚いて外の様子を見た。
「アイタタタタ……」
陽乃がダンボールの下敷きになって、雪子は教科書の中に埋もれていた。
「な、何やってんだおまえらは！」
東が血相を変えてダンボールから陽乃を引っ張り出した。翔も雪子を教科書の山から救い上げた。
「あ、ちょっと事情がありまして……」
陽乃が苦笑いで話を逸らそうとしていると、翔が後ろから呟いた。
「どうせまた、朝倉お得意のノゾキやろ」
ギクッとした様子で陽乃の体が固まった。
「図星か」
フーッと翔が呆れたように息を吐き出した。
「そ、そんなんじゃないわよ！」
「じゃあなんや言うねん」
「だ、だいたいアンタが悪いのよ！　私たちに黙って顧問の話を進めちゃうんだもん」
「それは決まり次第言おうと思ってたことやし」
「だってだって……」
反論を続けようとしたところで、生徒指導の先生の「朝倉さん！」という声でそのまま事態はあやふやになってしまった。

第19話　ノゾキ（後書き）

転げ落ちるまでして陽乃が確認したかったのは、顧問の先生の話でした。どうやら吹奏楽サークルの顧問は東先生になりそうですが、理由はいったい……？

第２０話　先生と吹奏楽

「ホンマしょーもないことばっかしてるから、そういうことになるんやで」
翔が笑いながらアルトサックスをケースの上に置いた。
「だって、アンタがちっとも教えてくれないから悪いんじゃないの」
「そう怒んなって。だってお前らも自分の楽器の練習とかで精一杯やから、そんな話振っても余裕ないかなって思ってん」
陽乃はまだ不機嫌そうに楽器を用意している。
「何をそんなに怒ってるねん。謝ってるやん」
「別に怒ってないわよ……。ただ……」
「ただ？」
陽乃は思いっきり顔を翔に近づけた。
「なんで東先生なの？」
「はっ？」
「な・ん・で！　吹奏楽サークルの顧問が東先生なのって聞いてるの！」
「あぁ、そんなこと気にしとったん？」
「そ、そんなことって……」
「理由は簡単やで」
「簡単って……」
「だって吹奏楽経験者やもん、東先生」
「へ？」
「来てみ！」
翔に言われるがまま、陽乃は部室へ向かった。

「あれぇ……ないなぁ」
翔はホコリっぽい本棚をゴソゴソと何か探し物をしている。陽乃も一緒に探してみることにした。

どうやら、ここには廃部となるまでの吹奏楽部の定期演奏会のパンフレットやコンクールに出たときのプログラム、集合写真などが入っているようだ。

「ん……？　この人……」

「ホラ！　あったあった！」

陽乃が気になる写真の1枚を見てみようとしたところで、翔がその上に写真を重ねてきたので陽乃もその写真の方を見てしまった。

「あ、ホントだ……」

『１９９０年度　全日本吹奏楽コンクール　東関東地区大会　金賞　七海市立七海高等学校吹奏楽部』と書かれた写真。その中央、顧問の先生と思われる人の向かって右横に打楽器のバチを嬉しそうに持ち上げている東が写っていた。

この頃の先生は意外と背が低いんだな。

陽乃がニコニコしていると、翔が不思議そうな顔をして覗き込んだ。

「な、なに？」

「いや、何をそんなに嬉しそうに笑ってんのかなって」

「別に。東先生が幼い写真見て、和んでただけ」

「あっそ」

陽乃はたまに翔がこういう素っ気ない態度をとるのがなんとなく気に入らなかった。

「ねぇ！」

陽乃が翔に大きな声で呼びかけた。

「ん？」

「私たちもさ、これくらいの人数で演奏できるようになるといいね！」

「そやな！」

翔はいつもの人懐っこい笑顔で答えてくれた。

「よし！　練習頑張ろうっと！」

陽乃はニコニコと笑いながら音楽室へと引き返していった。

「……。」

翔は心配そうにポケットの中から一枚の紙を取り出した。

「……思ってる以上にやっぱ心配やな」

手にしている紙には「クラブ・サークル活動監査会」と書かれていた。

第２０話　先生と吹奏楽（後書き）

七海高校吹奏楽部ＯＢだった東先生が顧問になることに、陽乃も納得。しかし、翔はまだ心配事があるようで……。

コラム☆1　翔たちのこと教えて！（前書き）

さて！　吹奏楽サークルに入部した1年生っていったいどんな子たちなのか？　様々なデータをここで一挙に公開♪　☆注意☆　ここでは現在最新のストーリーを中心にデータを公開しておりますので、途中までお読みくださった方にはネタバレになってしまいます。最後までお読みになってからご覧になることをオススメします。

コラム☆1　翔たちのこと教えて！

※！！ネタバレ注意！！※

☆　第７８話現在　☆

♪佐野（さの）　翔（かける）

パート：アルトサクソフォン

生年月日：１９８９年８月１３日　血液型：Ｏ型　身長：１７１．４ｃｍ　体重：６０ｋｇ

好きな食べ物：カレーライス　アップルパイ　好きな飲み物：アップルジュース

苦手な食べ物：キュウリ　なす　苦手な飲み物：アールグレイ

好きな教科：音楽　苦手な教科：数学　化学

好きな俳優：谷村　美月さん　好きなタイプ：明るくて優しい子。積極的ならなおＯＫ♪

♪朝倉（あさくら）　陽乃（ひなの）

パート：トランペット

生年月日：１９８９年６月８日　血液型：Ａ型　身長：１５８ｃｍ　体重：５０ｋｇ

好きな食べ物：バナナ　ハイチュウ（グリーンアップル）　好きな飲み物：ミックスジュース

苦手な食べ物：トマト　キウイフルーツ　苦手な飲み物：緑茶

好きな教科：数学　英語　苦手な教科：国語

好きな俳優：岡田　将生さん　好きなタイプ：人のことを考えてくれる人

♪大谷（おおたに）　沙希（さき）
パート：フルート
生年月日：１９８９年９月２９日　血液型：Ａ型　身長：１６２．３ｃｍ　体重：４９ｋｇ
好きな食べ物：きつねうどん　チョコレートケーキ　好きな飲み物：なっちゃん
苦手な食べ物：煮干し　苦手な飲み物：炭酸飲料
好きな教科：英語　日本史　苦手な教科：世界史
好きな俳優：松川尚瑠輝さん　好きなタイプ：笑顔がステキな人

♪宮部（みやべ）由美子（ゆみこ）
パート：フルート
生年月日：１９８９年１２月１７日　血液型：Ｂ型　身長：１６６．４ｃｍ　体重：５２ｋｇ
好きな食べ物：ハンバーグ　オムレツ　好きな飲み物：小岩井ミルクコーヒー
苦手な食べ物：麻婆豆腐　苦手な飲み物：烏龍茶
好きな教科：数学　化学　苦手な教科：日本史　世界史　古文
好きな俳優：落合　扶樹さん　好きなタイプ：話をしていて楽しい人

♪橋本（はしもと）　絵美（えみ）
パート：ベークラリネット
生年月日：１９８９年４月３日　血液型：ＡＢ型　身長：１６３．２ｃｍ　体重：４８ｋｇ
好きな食べ物：豚カツ　お味噌汁　好きな飲み物：ミルクティー
苦手な食べ物：レモン　苦手な飲み物：レモンティー
好きな教科：英語　苦手な教科：国語
好きな俳優：妻夫木　聡さん　好きなタイプ：明るくて活発な人

♪永井（ながい）　雪子（ゆきこ）
パート：ホルン
生年月日：１９８９年１０月２６日　血液型：Ｏ型　身長：１５６．４ｃｍ　体重：４５ｋｇ
好きな食べ物：グレープフルーツ　好きな飲み物：オレンジジュース
苦手な食べ物：ゴーヤ　苦手な飲み物：グレープジュース
好きな教科：英語　苦手な教科：国語
好きな俳優：石田　卓也さん　好きなタイプ：一緒にいておもしろい人

♪川崎（かわさき）　慎也（しんや）
パート：トロンボーン
生年月日：１９８９年７月２９日　血液型：Ｏ型　身長：１７５．３ｃｍ　体重：６３ｋｇ
好きな食べ物：エビフライ　食パン　好きな飲み物：小岩井アップルジュース
苦手な食べ物：メロン　苦手な飲み物：牛乳
好きな教科：体育　苦手な教科：国語　英語　日本史
好きな俳優：志田　未来さん　好きなタイプ：やわらかい感じの人

♪水谷（みずたに）　春樹（はるき）
パート：ユーフォニウム
生年月日：１９９０年２月１４日　血液型：Ｂ型　身長：１６８．４ｃｍ　体重：５４ｋｇ
好きな食べ物：ショートケーキ　好きな飲み物：アクエリアス
苦手な食べ物：パイナップル　苦手な飲み物：アップルジュース
好きな教科：日本史　苦手な教科：化学
好きな俳優：福田麻由子さん　好きなタイプ：大人しかったらいい

♪本堂（ほんどう）　拓真（たくま）
パート：チューバ
生年月日：１９８９年１１月１１日　血液型：Ａ型　身長：１８４．５ｃｍ　体重：６９ｋｇ
好きな食べ物：ステーキ　焼きもろこし　好きな飲み物：緑茶
苦手な食べ物：無し　苦手な飲み物：ほうじ茶
好きな教科：世界史　苦手な教科：数学
好きな俳優：永井　杏さん　好きなタイプ：控えめな人

♪田中（たなか）　美里（みさと）
パート：パーカッション
生年月日：１９９０年３月３１日　血液型：Ｂ型　身長：１６５．４ｃｍ　体重：５０ｋｇ
好きな食べ物：炊き込みご飯　好きな飲み物：ふるふるゼリー（ぶどう）
苦手な食べ物：レモン　苦手な飲み物：レモンティー
好きな教科：国語　苦手な教科：英語
好きな俳優：北条　隆博さん　好きなタイプ：積極的な人

★この子はあの子のことをどう思っている？（恋愛感情）★
朝倉　陽乃　→　佐野　翔
佐野　翔　→　朝倉　陽乃
永井　雪子　→　佐野　翔
田中　美里　→　川崎　慎也

コラム☆1　翔たちのこと教えて！（後書き）

まだまだ物語が続くにつれていろんなデータが更新されるので、途中で知りたいことがあればここを読んでみてください☆

第２１話　監査会

「突然ですが、今日練習が終わった後に話があるんで残っててください」

翔が真顔で話すので、サークルメンバーは一様に顔を見合わせた。

「あの佐野くんが……」

由美子が驚いた様子で沙希に話しかけた。

「真面目な顔してるよ」

「そりゃあ佐野くんだって真面目な顔くらいするだろーよ」

拓真がハーッと息を吹きかけてチューバを一所懸命磨いている。

拓真がチューバを抱えている姿も堂に入ってきた。

「いつもひょうきんで明るいキャラで通ってるからね。真面目になると違和感覚えるのかも」

春樹も同じ格好でユーフォニウムを磨いている。背格好は大きく違う二人なのに、なんだか兄弟に見えるから面白いものだ。

「それにしても、この時期で真面目な話ってなんなのかなぁ」

絵美が不思議そうに首を傾げる。美里が引き取り「沙希ちゃんとか何か心当たりないの？」と聞いた。

沙希も首を傾げた。

「あるにはあるんだけど……」

「えっ？　あるんだ」

由美子が意外というような顔をした。雪子が近寄り「なになに？」と聞く。

「うん……。ほら、もう５月も後半でしょ？」

沙希が続ける。今日の日付は５月２５日（水）。ちなみに、もうすぐ七海高校の制服が半袖の移行期間になる。ふつうの高校より早いかもしれない。

「吹奏楽コンクールっていうのがあるのよ」

「コンクール！？」

絵美が思わず大声を上げた。拓真もこれには驚いたようで、楽器を置いて沙希に詰め寄った。
「まさか、それに出るつもりでいるんじゃ……」
「ち、ちょっと私たちまだそんなレベルじゃないし」
全員がかなり驚き、うろたえている。
陽乃はトランペットを置いて言った。
「とりあえずさ、佐野が来るまで待とうよ。まだコンクールに出るって決まったワケじゃないし」
「そうだよ。佐野くんの話、聞こう」
絵美も落ち着いたようで、椅子に腰掛けた。それに連鎖して全員が座って翔を待っていた。それでもまだ、緊張しているのが部屋の空気で伝わってきた。
翔が音楽室の引き戸を引いて入ってくると、さらに緊張が増した。
「ん？」
翔もその異様な雰囲気を察知したようで苦笑いした。
「いやいや、そないに緊張せんでも」
そういって職員室でコピーした人数分の紙を配った。
「今日は、この話がメインです」
その紙には「クラブ・サークル監査会」と書かれていた。
「監査会？」
春樹がキョトンとしている。
「クラブ・サークル？」
雪子もいまひとつピンと来ないようだ。
「それって……俺たちも対象になってる……のかな？」
今日初めて慎也が口を開いた。
翔が困りながら「対象です」と一言だけ言った。
「……。」
全員がキョトンとしている。
「質問です」
「はい、橋本さん」

絵美が手を上げた。
「それはいつ行われるんですか？」
「６月６日、月曜日です」
６月６日。月曜日。つまり、１２日後だ。２週間もない。
「はい！」
春樹が手を上げる。
「水谷くん」
「何をすればいいんですか？」
それももっともな質問だ。
翔は淡々と質問に答えていく。
「各クラブ・サークルの活動内容を校長先生、教頭先生２名、各学年主任と各学年のクラスの担任から選抜された先生１名、生徒会会長と副会長の合計１１名が監査して活動内容が適切かどうかを監査するそうです」
それ以降、しばらく沈黙が続いた。
「はい」
「朝倉さん」
「別に‘さん’付けじゃなくていいです」
クスッと翔が笑った。少し空気が和んだように思う。
「じゃ、朝倉」
「私たちはどうするんですか？」
スッと翔は１枚の楽譜を取り出した。
「『ＴＲＵＴＨ』を演奏します」
「へ？」
由美子が思わず声を漏らした。隣で雪子も呆然としている。
「えっと、もう一度言ってくださいますか？」
美里も苦笑いになっている。
翔はコホン、と軽く咳払いをしてもう一度言った。
「みんなが選んだ『ＴＲＵＴＨ』を吹きます！」
「えぇ～！？」

全員が大声を上げた。
「絶対ムリだよ！　私、あんな細かい音吹けない！」
由美子がオロオロして沙希にしがみついた。
「大谷さんが教えてくれるって」
「俺、頭の部分入る自信ないんだけど！」
春樹もかなり嫌がっているようだった。
「なら、オレが1万回でも練習に付き合うたる」
「俺、まだヘ音記号読めないんだけど……」
拓真もやはり不安なようだ。
「3日あれば読める！　オレが保証する」
翔はニヤッと笑って親指を立てた。
他にも美里や雪子、絵美も何やらいろいろと言っているが、その騒々しさを破るように陽乃が声を上げた。
「結局！」
一瞬で音楽室が静まった。
「それに出ないと、サークルは存続できないってことだよね？」
「そういうこと」
そのやり取りで、全員の顔が真剣になった。
「それは困る」
慎也がかなりしかめっ面をしてうなずいた。
「せっかくこれからなのに……」
美里もショボリしている。
「でも……ハードルが高すぎるような」
由美子はまだやはり不安なようだ。
「大丈夫よ。練習、練習！　まだあと12日もあるんだし！」
絵美のその一言に、拓真もウンウンとうなずいた。
「じゃあ、出るってことでええか？」
翔が初めて笑顔になった。
「もちろん！」
陽乃は笑顔で力強く答えた。

「私も！」
「俺も！」
翔が全員の真ん中に立って、手を差し出した。
「気合い入れようや！」
「うん！」
スーッと翔が息を吸い込んだ。
「七海高校吹奏楽サークル……」
全員が手を重ねあわせ終わると同時に、翔はグッと手を押した。
「ファイトーッ！」
「オーッ！」
全員の心がひとつになった瞬間だった。

第２１話　監査会（後書き）

ようやく全員がまとまり始めた吹奏楽サークル。初舞台も兼ねた監査会で、どのような演奏ができるのでしょうか……？

第22話　クダラナイこと？

「よかったね、みんなが頑張るって言ってくれて」
陽乃は嬉しそうに楽器を磨きながら翔に問いかけた。
「おう。まぁ、みんなならやってくれるってオレは信じてたし」
「まぁた、カッコつけたようなこと言っちゃって」
「いやいや、これはマジやから」
「そっか。代表のあんたがみんなを信じないと始まらないしね」
「そうそう」
校門をくぐってから、しばらく二人は黙って歩き続けた。
つくし野川の土手沿いにやってきた。あの日、ここに来なければ今ここでこうして翔と話をしていることさえなかっただろう。
「ここで佐野と会ってなかったら、私はいま何してたんだろう」
陽乃が呟いた。翔は黙って土手に腰掛けた。
「とりあえず、吹奏楽はやってなかったやろな」
「そうかな……」
「オレも」
翔は夕日を見つめたまま続けた。翔は意外とたそがれるようなことが多いと最近、陽乃は思い始めた。
「ひとりでサックス吹いてるだけやったかもしれん」
「……それはそれで空しいね」
「言うなや。寂しくなるやんけ」
翔も思わず苦笑いしてしまった。
「でも」
陽乃も同じように夕日を見つめたまま言った。
「いつかは誰かが佐野の音の良さに気づいて、佐野はどこかでサックスを吹いていたんじゃないかな」
「そうかな」
「うん。きっと、そう」

「やったらえぇねんけどな」
また沈黙が続いた。
翔がケータイを取り出して「おい、もう6時過ぎてる」と少し焦ったように言った。
「へ？　あ、そうなんだ」
「あ、そうなんだ、じゃないやろ。お前ん家、門限早いんちゃうん？」
「え？」
「6時なんやろ？」
翔は慌てて立ち上がり、帰る素振りを見せた。
「ちょっと待って」
陽乃が翔を呼び止めた。
「何や？」
「何で？」
翔はいまひとつピンと来ないようで、ボッとしている。
「何が？」
「何で、アンタが私の家の門限知ってるの？」
それを聞いて、翔は顔をあからさまに困らせた。
「言ったことはない……よね？」
「……えーと、その」
翔はどう言おうか考えた。本当のことを言うと恥ずかしい気がする。
「じ、実は……」
翔が口を開いた瞬間、後ろから「陽乃」という男の人の声がして二人は同時にその方向を見た。
スーツを着た男性が立っていた。
「お父さん……」
陽乃はかなり落ち込んだ声を出した。
「何をやってる。門限はとっくに過ぎてるぞ」
陽乃のお父さんという人は、腕時計を見てかなり怒った口調で呟

いた。
「い、言ったでしょ？　私、部活始めたから遅くなることあるって」
陽乃は極力、父親と目を合わせないように話をしている。翔にも薄闇の中でもそれがわかるくらいだった。
「部活？」
「そう、ほら、先月あたりに言ったじゃない」
「男と暗くなるまで話し込むのが、お前の部活か？」
「そっ、そんなんじゃ……！」
陽乃を押しのけて、陽乃の父親――祥夫（さちお）は翔の前に立った。翔は驚いたが、ここは挨拶をしておいたほうがいいと考え、気をつけをした。
そして一礼して、翔なりの頑張った挨拶をした。
「こんばんは、初めまして。僕、朝倉さんと同じ吹奏楽サークルの佐野か――」
「迷惑なんだよ」
祥夫は一言、言った。
「え……」
翔は唖然としている。祥夫は翔を見下ろしたまま続けた。
「娘はね、今まで良い成績を取ってきて……」
「ちょっと、やめて」
陽乃が遮ろうとするが、構わず祥夫は続けた。
「今年の入学者の中でトップクラスの成績で入学したんだ」
「やめて！　それはいま関係ない……」
祥夫にキツく睨まれて、陽乃も思わず怯んだ。
「娘にはね、将来いい大学に入って、すばらしい生活をしてもらうつもりなんだよ」
「お父さん！」
陽乃は堪えきれず、大声を上げた。しかし、祥夫は無視して続ける。
「だからね、君の言うような吹奏楽のようなサークルをやっている

暇はないんだ」
「……。」
翔は顔色ひとつ変えず、祥夫をジッと見つめていた。陽乃はフルフルと震え、涙目になっている。
「こんなことに誘われて、ウチは迷惑してるんだよ。正直、クラブ活動なんてクダラナイことに目を向けている暇はないんでね」
「おとうさ……！」
「わかりました」
翔は今までにない低いトーンで喋り始めた。思わず陽乃もドキッとして動きを止めてしまった。
「陽乃さんにそんなクダラナイことに無理やり加わらせてたんですね」
初めて翔が下の名前で自分を呼んでくれたのが、こんな苦しい場面だなんて。
陽乃はショックでたまらなかった。
「そう。君の自分本位な行いでね」
祥夫は容赦なくひどい言葉を次々と翔に浴びせる。
「もうやめ――！」
「じゃあ！」
翔は腹の底から声を出した。
「じゃあ、もう陽乃さんに迷惑かけるわけにいかんから」
「どうするのかね？」
「朝倉さん」
翔は優しそうな目で、さっきのミーティングのときとは違う，朝倉さん，という声とともに陽乃を見つめた。
「もう、明日からのこと何にも心配せんでいい」
「そ、ちょっとそんな急に……」
陽乃が走り出して翔の元へ寄ろうとすると、右手を大きく開いて制止した。
「辞めてもらいます」

翔の一言が、陽乃の耳に信じられないほど大きな音で共鳴した。

辞めてもらいます。

やめてもらいます。

ヤメテモライマス。

「手続きは、こっちでしときます」
翔は淡々と言い放った。
「ウソでしょ、ちょっと……」
陽乃は信じられず、その場に座り込んだ。
「じゃあ、また教室で。ありがとう」
翔はそれ以上陽乃を見ようともせず、黙って自宅の方へ歩き出した。
「行くぞ、陽乃」
祥夫も家の方へ歩き出した。
「最後に」
翔が寂しそうな目で振り返り、言った。
「お父さんの言葉の中に、陽乃さんの意思はひとつも入ってないとオレは思います」
祥夫は怒った表情で翔を睨み返し「それなら君も……」と言おうとしたところで、翔がさらに続けた。
「オレも同じことをしてるんです。今の朝倉さんの顔、覚えておいてあげてください」
そのまま、翔は振り返らず走り去っていってしまった。
「行くぞ、陽乃」
「……信じらんない」
陽乃は祥夫をキツく睨みつけ、そのまま走り去っていった。

第２２話　クダラナイこと？（後書き）

祥夫の一言にお互いに傷ついた翔と陽乃。入部して１ヶ月弱。二人の吹奏楽生活はここまでなのか……？

第２３話　二人の葛藤

陽乃は息が切れるまで走り続け、勢いよく玄関のドアを開けた。
「あ、陽乃？　おかえりなさい」
母親の由利が声をかけたが、陽乃は返事もせず２階へと駆け上がった。
「ちょっと、陽乃！？」
由利は慌てて陽乃の後を追いかけた。
「陽乃！？　どうしたの？」
「知らない！」
「知らないって……陽乃！」
バタン！とドアをきつく閉める音がした。由利はわけもわからず、お玉を右手に呆然としていた。
その後、弟の夏樹が部屋を出て２階から降りてきた。
「夏樹、お姉ちゃんどうしたの？」
夏樹はマンガを読みながら、首を傾げた。
「俺も知らない。ただ、なんかワンワン泣いてる」
「そう……どうしたのかしら？」
「さぁ……お父さんとケンカでもしたんじゃない？」
夏樹はそれだけ言うと、リビングへ入った。
「ただいま」
ほどなくして祥夫が帰ってきた。
「あぁ、おかえりなさい」
「陽乃は？」
祥夫は靴を脱ぎながら由利に聞いた。
「帰るなり２階に閉じこもってるわ」
「そうか」
由利は顔色ひとつ変えない祥夫に一言だけ言った。
「またケンカですか？」

「また、とはどういう意味だ」
「別に。私はあなたの教育方針に従うのみですから文句は言いません」
「なら余計なことを言うな」
由利は黙って靴を整え「ご飯はできてます」とだけ言ってリビングに戻った。
祥夫は陽乃の部屋の前に立ち、ドアをノックした。
「陽乃。ご飯だぞ」
しかし、返事がない。
「あと30分ほどで塾へ行く時間だろう。お前、最近行っていないそうじゃないか」
それでも、返事がない。
「早く降りてきなさい」
祥夫が階段を下りる音を聞きながら、陽乃はベッドでヒックヒックしゃっくりをしながら泣いていた。

「……って、言うてしもた」
翔は同じ頃、さっき陽乃と別れたつくし野川の土手に寝そべりながらケータイで話をしていた。サブディスプレイには「春やん」と表示されている。水谷　春樹のことだ。
「マジで？」
「大マジ」
翔はゴロンと寝返りを打った。
「どうなんの？」
春樹は心配そうな声を出した。
「とりあえず、退部ってことかな」
「そんな……」
「しゃーないやん。あんなことになってんから」
「どうせアレだろ？」
「何？」

「お前が勢いで腹立てたから言ったんだろ」
「うっ……」
翔はそのまましばらく黙り込んだ。
「図星？」
「まぁ、あながち当たらずとも遠からず……」
「何だよ、それ」
翔は頭をかきながらため息をついた。
「結局」
春樹が今度は喋り始めた。
「お前は朝倉さんに辞めてほしくはないんだろ？」
「当たり前やん」
「でもって、お前が辞めてもらう言うたことをお前自身が後悔してる」
「……なんでそこまでわかるねん」
「お前、単純だもん」
「そーですか」
翔はフーッとため息をまた漏らした。

陽乃はようやく落ち着いたので、ケータイを取り出して電話をかけた。
ディスプレイには「佐野」と表示されている。
プッ、プッ、プッ。
「あ、もしもし」
しかし、予想に反して聞こえてきたのはプーッ、プーッという不通のときの音だった。
「……なんで出ないのよ」
陽乃はケータイを放り投げ、またベッドに顔を伏せた。

「じゃあ、うまくやれよ」
春樹が明るい声で翔にそう言った。

「うん。ありがとうな」
「いいってことよ。じゃあ、また明日」
電話を切ってすぐ、翔はまた違う人に掛け始めた。ディスプレイには「朝倉」という表示。

ブーッ、ブーッ。
バイブ音がして、陽乃は目を覚ました。
「ん……寝ちゃってた」
陽乃は眠い目を擦りながらケータイを手に取り、そのディスプレイに表示されている「佐野」という名前を見て一気に目を覚ました。
「もしもし!?」
「あ、もしもし。オレ」
優しい、いつもの翔の声だった。
「うん、うん!」
「さっきは、あんなこと言うてゴメン」
少しはにかんでいるのか、声が小さかった。
「ううん。こっちこそお父さんが最低なこと言っちゃってホントにゴメン」
謝りたかった。陽乃の今の気持ちはその気持ちひとつだけだった。
「いいねん。オレは別に。全然気にしてへんから」
「ホントに?」
「うん」
「よかった……」
しばらく、沈黙が続いた。
「朝倉」
下の名前では当然だが、呼んでくれなかった。でも、電話をかけてきてくれただけでもいい。陽乃は鼻声になりながら返事をした。
「なに?」
「提案やねんけど」
翔は小声で陽乃にある提案をした。

第２３話　二人の葛藤（後書き）

少しの入れ違いを解消できた二人。翔が考えていることはいったいなんなんでしょうか？

第２４話　やりたいことを…

火曜日以降、まったく姿を見せなくなった陽乃を心配した雪子をはじめとする吹奏楽サークルのメンバーは木曜日には全員が翔にどうしたのかを問い詰めるにまでなっていた。予想外の出来事に翔も驚いたが、それ以上に全員の連帯感が高まっているのに少し嬉しくなった。

沙希に事情を話すと「まぁ佐野くんらしいよね」とだけ言った。拓真は「それでいけるなら、俺は心配しないよ」とニッコリ笑ってくれたし美里に至っては「アンタ初めて会ったお父さんとケンカするなんてやるじゃん！」とまで言ってくれた。正直に言うと全員が納得し、すぐに練習に励むようになった。

今回監査会でする『ＴＲＵＴＨ』は吹奏楽サークルが初めて演奏する曲だ。監査会とはいえ、自分たちの初舞台。部員たちはかなり張り切っている。それと同時に、レベルも着実にアップしていた。

フルート。元々経験者だった沙希は問題ないが、由美子は最近になってあれだけできないと騒いでいた冒頭部分のフレーズ（※１）を演奏できるようになっていた。

クラリネット。一人という緊張感を逆に上手く利用した絵美は、メロディー部分が多いにもかかわらず毎日懸命に練習し、最近ではリードミス（※２）も減ってきている。

ホルン。雪子は高い音も安定して出せるようになってきた。トロンボーンの慎也は長い手を活かして器用にスライドを操り、様になってきている。ユーフォニウムの春樹は一番進歩して、ビブラート（※３）らしきものまでかけられるようになっていたので翔もこれには驚いた。チューバの拓真は大きな音で全員を支えられるようになってきた。

しかし、意外なことに一番の問題を翔自身が抱えていた。

ソロの音がどうしても出ない。

音自体は出るが、裏返ってキィィッ！と耳を痛くする音が出てしまう。何度練習してもこれは変わらなかった。同時に最近では夢にすら、あの、光景が蘇ってくる。

失敗して伴奏ばかりが鳴り響く演奏。

冷ややかな目で顧問や部員に見られるあの思い。

今度の監査会でソロを失敗すれば部員全員の動揺も招いて大失敗につながりかねない。翔は今迄で一番緊張していた。だからといってそんなことを言うと、部員に心配もかけてしまうだろう。そう思った翔はあえて部員の前でソロの練習もせず、全員が帰った後にこっそりソロの練習をしていた。

今日は5月31日。顧問の恭一は明日明後日の午前中を合奏に充(あ)てると言っていた。否が応でもソロを全員の前で吹かなければならない。そのためにも失敗はできない。

「よっしゃ、もうちょっと頑張りますか」

メンバーが帰って独りきりになった音楽室で、翔はサックスを構えてソロの練習を始めた。

「それでは、今日の授業はここまで」

先生の一言で、生徒たちは次々と片付け始めて教室を出て行った。

陽乃はホーッとため息をついて、しばらくボケッとしていた。

「どうした、朝倉」

塾長の鎌田(かまた)　進二(しんじ)先生が陽乃に声をかけた。塾長とはいえ、まだ45歳という若さでこんな大手進学塾の塾長を任せられるというのだから、そうとうできる人だと以前から噂になっていた。

「いえ、ちょっと憂鬱(ゆううつ)なことがあって」

「ご両親とケンカでもしたのか？」
陽乃は驚いて「どうしてわかるんですか！？」と言いながら進二に駆け寄った。
「いや、朝倉の性格だとよくありそうなことだと思って」
陽乃は苦笑いしながら「ちょっと……いや、かなりお父さんにひごいこと言われて」と呟いた。
「そうか。まぁ難しい時期だとは思うが、あまり悩みすぎるなよ？」
「はぁーい。ありがとうございます」
陽乃はそう言いながらノートや筆箱を片付け始めた。教室を出ようとした進二に一言だけ、陽乃が聞いた。
「先生」
「ん？」
いつになく真剣な目つきで陽乃が見つめるので、進二も少し驚いた。
「自分のやりたいことをやっちゃ、ダメなんですか？」
「んん？」
「高校生は、まだ子供ですか？　自分のやりたいことも自由にできないんですか？」
進二は出席簿や教科書を机に置き、椅子に腰掛けた。
「まぁ座りなさい」
進二に促されるまま、陽乃はまた椅子に座った。
「先生は、自分のことを自由にするのはあらゆる年代に与えられている権利だと思う」
「ですよね！」
「でもな」
進二は真剣な様子で陽乃を見つめなおした。
「責任も伴うぞ、権利には。いわゆる義務と同じようなものだ。自由を訴えるのも自由だが、自由ばかりではいけない」
「そうですよね……」
陽乃はフーッと落ち込んだ様子でため息を漏らした。

「何も難しいことじゃない。朝倉はいま、何をしたいんだ？」
「友達が、吹奏楽をやってるんです。私も誘われて、トランペットを吹き始めて……。それが本当に楽しいんです。もちろん、サークルだから下手っぴばっかりですけど、みんなで演奏することが本当に楽しくて。今までの私の生活だったら考えられない楽しさっていうか」
進二はウンウンとうなずいてずっと話を聞いてくれた。
「でも、お父さんが納得してくれないし、そのリーダー的な子にもひどいこと言って気まずくなっちゃって……」
「なるほどな」
進二は最後に言った。
「吹奏楽はやるといい。親とよく話をして、自分の熱意を伝えて納得してもらう。その代わり、先生と約束してくれ」
「何ですか？」
「塾を二度とサボッたりしないこと！　いいな？」
「はい……すいません」
陽乃は苦笑いしながら、コクコクとうなずいた。

塾を出ると、もう１０時を過ぎていた。５月というのに少し冷え込む日が最近は続いている。
つくし野川の土手もだいぶ歩いている人が少なくなってきた。
「早く帰って『ＴＲＵＴＨ』聴こうっと！」
機嫌がすっかりよくなった陽乃は嬉しそうに自転車をこいでいった。すると、津上橋のたもとで聴きなれた音が聞こえてきた。しかし、暗闇で吹いている人は誰かわからない。それでも、陽乃はためらいなく声をかけた。
「佐野～っ！」
その声でピタッと音が止み、吹いている人物――翔が土手を上がってきた。
「頑張ってるじゃん」

陽乃はニッコリ微笑んで翔の肩を叩いた。
「まぁな。お前も、土日はちゃんと昼から来いよ？」
「当たり前じゃない。ちゃんと友達の家に行くってウソついてあるから」
「悪いヤッチャな」
翔は苦笑いして陽乃を見つめた。
「ちょっとくらい反抗しとかないと」
「お前んとこの親父さん、厳しいな」
「まぁね。もう慣れちゃったけど……」
サァァっと涼しい風が土手を駆け抜けた。
「ほな、ボチボチ帰らなまた怒られるんちゃうか？」
翔が腕時計を見てそう言うので、陽乃も時計を見るともう１０時半を差していた。
「ホントだ。じゃあ、土日はヨロシクね」
「おう。またな！」
「バイバイ」
翔は少し頬を赤らめながら
「バイバイ」
と言った。
陽乃は自転車に跨り、制服姿の翔にもう一度手を振った。津上橋の上から翔の方を見ると、まだ手を振ってくれていた。
陽乃は手をもう一度大きく振り、自宅へと走っていった。

第２４話　やりたいことを…（後書き）

本音を口にした陽乃。改めて吹奏楽が好きなことを自覚し、練習を頑張ろうと誓ったのでした☆

※１：フレーズ……音楽においてフレーズとは、いくつかの音符から成る階層的なまとまりをあらわす単位のひとつです。フレーズは楽譜に明示されないため、どこからどこまでをひとつのフレーズとして演奏するかは演奏者に任されることも多くなります。

※２：リードミス……木管楽器において、吹くために必要なリードという部分が力みすぎなどによって高く不快な音を立てること。少々のことは構わないが、頻繁に起きると問題視されるようになります。

※３：ビブラート……アンブシュア（アムブシュア、アンブッシャ。吹奏するときの口の形）を変える方法が一般的で、音を揺らすように吹くことでより演奏表現の幅が広がります。

第２５話　泣いて本音を

６月５日土曜日。今日は少し気温が上がって暑くなっている。祥夫といさかいがあったのが月曜日のこと。その日のうちに陽乃には電話をしておいたし、翌日には塾帰りの陽乃本人と約束の確認もしておいた。なのに、翔には心配なことがあった。

「どうしよう」

あんなことを言った後だ。いくら電話で話をしたり、川沿いで約束したとはいえ二人きりで会うのはさすがに気まずすぎる気がした。だからといって今さら約束をなかったことにするのもマズい。さらに言うなら、陽乃より自分のソロの方がマズい。いつまでたってもリードミスが減らない。それどころか、ますます状況は悪化しているような感じだった。

午前中、合奏があった。翔のソロ部分を恭一は何度も繰り返し練習させてくれた。しかし「キィィィッ！」というリードミスの音が何度も音楽室にこだまし、そのたびに恭一も心配そうに翔に「間に合うのか？」と聞いた。

翔は努めて明るく「練習頑張るから大丈夫ッス」と言ったが、正直ヤバすぎる。

「あぁぁぁぁ～、オレは一体どないしたらえぇんや～」

音楽室を一人でブツブツ呟きながらウロウロしていると、ガタッとドアの方から音がした。

「ん？」

振り向くと、陽乃が少し怪訝（けげん）な顔をしながら覗き込んでいた。

「な、何やってんの？」

「あぁ、いや、別に！」

「そ、そう……」

妙な沈黙が生まれる。

「そ、そんなとこに立ってんとこっち来いや」

とりあえず翔は沈黙が耐え切れないので何とか空気が止まらないように流れを作ろうとした。陽乃は無言で音楽室に入り、トランペットのケースを机の上に置いた。

「……。」

「……あのさ」

陽乃が不意に呟いた。

「月曜日のことなんだけど……」

「う、うん……」

「お父さんがヒドいこと言って、ゴメン」

気のせいだろうか、陽乃の声が震えている。しかし、顔が見えないので涙目なのか、それとも泣いているのかどうかはわからない。

「いや……オレもお前にヒドいこと言うたし。そんな気にすんなよ」

「うん……ホント、ごめん」

ヒクッ、ヒクッと陽乃の肩が不規則に動いている。こういうときは、見ないほうがいいと翔は思い、後ろを向いた。

「ホラ、早く音出ししようや。時間少ないしな」

「うん……」

陽乃はその後喋ることなく、黙々とトランペットを取り出し、音出しを始めた。翔もＳａｘのソロの練習を始めた。

陽乃が音出しをしている間にも、翔が何度も同じところでリードミスをしていることに気づいた。キィィッ！と耳につく音がして、翔はハァッとため息をついてまた吹き始める。しかし、結局同じところでまたリードミスをして落胆する。同じようなことを繰り返している。

「吹けない……の？」

陽乃がそっと翔に近寄り顔を覗き込んだ。すると、フルフルと肩を震わせて翔は半泣きになっていた。

「えぅっ、ちょ、な、泣いてる……の？」

自分の一言がキッカケで泣かせてしまったと陽乃は思い、かなり焦っていた。

翔はゴシゴシと制服の袖で涙を拭き、「プレッシャーやねん」とだけ言った。
「プレッシャー？」
「そう。ソロがめっちゃプレッシャー」
「『ＴＲＵＴＨ』の？」
「……うん」
しばらく、沈黙が続いた。
「何でか言うたらな」
翔が続けた。涙声ではなくなっている。
「お前ら、初心者がほとんどやん。経験者って言うたら、大谷さんとオレくらい。経験者が引っ張っていくべきやと思うけど、その肝心の経験者がこんなんじゃ皆不安になるやろうし。ソロを失敗したら、皆が動揺して監査会のときに失敗したらって思うと……オレ、おかしくなりそう」
「……。」
翔と初めて出会ったとき、彼は堂々と見知らぬ人がいる前でも一人でサックスを吹いていた。人を魅了する音色を翔は持っている。素人の陽乃でも感じ取れたのに、翔には自分でそれがわからないのだろうか。緊張しすぎるのがよくないのだろうか。
「あのさ」
陽乃は落ち込んでいる翔に声をかけた。落ち込んでいる人に声をかけるのはかなり緊張する。翔が不自然な笑みで陽乃を見つめた。
「その～、本番っぽい練習してみない？」
「へ？」
よく意味が伝わっていないらしい。
「えと、とりあえずさ、こんな二人きりで練習してたって人前で吹くのとは事情が違うでしょ？　だったら、少しでも状況が似ているところでやったほうが違うかな～とか思って……」
翔は黙ったまま、下を向いている。つま先をパタパタさせて、落ち着かないようだ。

「あ、ダメだったらいいんだよ。そうよね、そんなことやっても変わらな……」
翔は突然立ち上がったかと思うと、陽乃の手を強く握り締めていた。
「わわわ！　ち、ちょっと何なのよ!?」
予想外の反応に、陽乃の顔が思わず赤くなる。
「それえぇな！」
翔はニコーッと笑い、手をブンブンと上下させた。
「えぇリハーサルになるわ！　さっそくつくし野川の土手行くぞ！」
翔はサックスを抱えたまま飛び出した。陽乃も慌ててトランペットを右手に音楽室を飛び出した。
「っとと、鍵かけて、それと……」
陽乃は出る前に音楽室の鍵をかけ、部室にあるＣＤデッキとＣＤを一枚持って翔を追いかけた。

第２５話　泣いて本音を（後書き）

思わず半泣き状態になった二人。それでも、何か大切なことに気づけた様子……。

第２６話　一人の男性

翔はとにかく走った。後ろから陽乃が「待ってよ～」と息を切らせながら追いついてくるまで夢中で走っていた。

「あ、悪ぃ」

翔は足を止め、ＣＤデッキとトランペットを抱えた陽乃の元へ戻った。

「ん。デッキ貸して。オレ持つから」

「ありがと」

それからゆっくりと陽乃の歩調に合わせて翔も歩いてくれた。

今日は土曜日。いつもは車の数が多い市役所前どおりもほとんど車が走っておらず、親子連れが公園へ遊びに行くのだろうか楽しそうな声が聞こえてくる。

「あれやな」

翔がサックスをイジりながら呟いた。

「オレは考えすぎなんかな」

「と、いうと？」

突然サックスを構えてすごい速さでＢ♭（ベー）音階を上がってまたすぐに下がってきた。やっぱり経験者は違う。周りを歩いていた人や自転車で通り過ぎた人が振り返って翔を見ていた。

「ちょっと、みんな見てるよ」

「ホラ、それやな」

「はぁ？」

陽乃はよく意味がわからない。

「人に見られてる、見られてるから緊張する」

「そりゃそうでしょ」

「でもさ」

翔はニィッと笑ってサックスをまた構え、さっきと同じ音階をサラッと吹いてみせた。

「やっぱ自分がまずは楽しまないと！」
「自分が……」
「そう！　オレもさぁ、中学のときはコンクールとかに出て結果がどうとかフレーズがどうとかギャイギャイわめきながらいろいろこだわったけど、まずは自分が楽しく演奏できるかどうかが大事やんな」
「自分が楽しむ……」
「自分が楽しまないと、人に楽しんでもらうことなんてできへんやろ！」
「……それもそうね」
なるほど。翔らしい考え方だ。陽乃は元気の戻った翔を見て一安心していた。
「さっそく、自分が楽しく吹ける練習をしよう！」
翔はまた走り出した。
「ホラ、早くつくし野川行くで」
「待ってよ、佐野！」
二人は楽器を落とさないようにしながら、つくし野川目指して走っていった。

「ふえぇぇ……ちょっとそんな全速力じゃなくてもいいじゃない」
いつも10分はかかるつくし野川までの道のりが、今日はわずか4分で着いた。翔は意外でもないが、走るのが速かったので陽乃は付いていくのが大変だった。
さすがの翔も息切れしているが、それでも元気そうだ。
「へへ～。こんなに走ったの、オレも久しぶり」
「私もだよ……」
息を整えなおしてから、翔はサックスを構えた。
「そろそろ、練習する？」
「おう」
翔の顔が一気に真剣になる。普段の翔とのギャップにこういうと

きに驚く。
陽乃は黙ってCDデッキをセッティングした。CDを入れて、スイッチを押そうとしたが――。
「あ……」
陽乃が小さく声を上げたので翔も気づいて近寄ってきた。
「どした？」
陽乃は苦笑いしながら答えた。
「よく考えたら、コンセントないよね」
「あ……」
二人はしばらく見つめあい、同時に吹き出した。
「プッ……アハハ！　オレたちアホやなぁ」
「ホントに。コンセントなかったら聞こえるわけないのにね」
「なんで気づかんかったんやろな」
少し前まであんなにオロオロしていた翔と、今の翔は全然表情が違う。やっぱり、翔は笑顔が似合うな。陽乃はそんなことを考えていた。
「じゃあ私、そこのコンビニで電池買ってくるよ。単1かな？」
「うん、多分な。けっこうデカいしこのデッキ」
「わかった。じゃあ行ってくるからちょっとでも練習しときなよ」
「おう。サンキュ」
陽乃はすぐに小走りでコンビニがある津上橋の南側へと向かっていった。
陽乃がいなくなってから翔はリードを選んでいた。本番には一番言いリードを選んで置いておきたいから、練習のときはなるべく使い古されたリードにしておこうと考えていた。
「これがいいかなぁ……それともこっち……」
「君はサックスを吹くの？」
不意に声を掛けられたので、翔は驚いて周囲をキョロキョロと見回した。それで初めて自分の後ろに男の人が立っているのに気づいた。

このあたりでは見ない人だな。少なくとも、翔は見たことがない。
「あぁ、まぁいちおう」
初対面で全然知らない人だ。いくら翔でもそう易々と打ち解けられない。
「僕もね、サックスを吹いているんだ。ちょっと君の楽器見せてくれないかい？」
どうしようか迷ったが、翔は無言で楽器を手渡した。
「ＹＡＭＡＨＡの楽器なんだね。いい楽器だよ、これは」
男性はマジマジと翔の学期を見つめて言った。褒められて悪い気はしない。
「ありがとうございます」
「君、関西の子？」
言われて驚いた。どこからそんなことがわかったのだろう。
「え、そうですけど……なんでわかったんですか？」
「それ」
と言って男性が指差したのは、譜面入れだった。表紙に「Ｙｏｄｏ－ｍｉｎａｍｉ」という英字が書かれたシールを貼っている。翔の出身中学校だ。
「その淀南（よどみなみ）中学校って、大阪にあるんだよね」
「淀南、知ってはるんですか！？」
翔はかなり驚いた。確かに翔の中学校は吹奏楽コンクールで府大会まで行くことはよくあったが、それほど上手かったわけでもない。目立つ要素が特別ないとも言えた中学校だっただけに、翔は意外で仕方がない。
「まぁね。僕の知り合いがその中学校出身だったから」
「へぇ～！　世の中狭いですね」
翔はニコニコしながらいつのまにかその人に打ち解けていることに気づいた。この男の人、誰にでも分け隔てなく接することができるような、そんな感じがする。
「君、名前なんていうの？」

「佐野　翔って言います。人の名前でよく『翔平』とか『翔太』とかいるでしょ？　あの翔で『かける』って読むんです」
「佐野くん、いつもここで楽器吹いてるの？」
「えぇと、まぁ時々ですけど」
「そしたら、また会えるかもしれないね」
男性は嬉しそうに微笑んだ。
「サックスの吹き方とか教えてもらえます？」
「あぁ、いつでも」
翔はどうしようか迷ったが、ここで聞かないと大変なことになりそうだったので聞いておくことにした。
「そしたらさっそくなんですけど……いいッスか？」
「もちろん。どうしたんだい？」
翔は『ＴＲＵＴＨ』の譜面を取り出し、男性に見せた。

「単１と単２を買っておこうかいちおう……」
陽乃はコンビニで電池を結局２つ買った。単１と単２のどちらかいまひとつ自信が持てなかったからだ。
レジで並んでいると、女子大学生らしい二人組みが店内に入ってきた。このあたりだと浜上（はまがみ）女子大学だろう。
「ねぇねぇ、さっきの男の人たち、カッコよかったね！」
やっぱり高校生も大学生も話す内容はあまり変わりがないように思う。陽乃はサラッと聞き流すつもりだったが、次の言葉は聞き逃すわけにはいかなかった。
「サックス吹けるだけでも充分カッコいいのにね！」
（サックス！？）
このあたりでサックスを街中で吹く人なんて翔くらいしか思い浮かばない。悪いことだとは思ったが、さらに聞き耳を立ててみた。
女子大学生は飲み物売り場あたりで会話を続けた。
「片方はたぶん社会人よね。背ぇ高くてカッコいいし」
「それにイケメン！」

「アンタはまたそれなんだから。確かにカッコよかったけど」
「でも年下キラーのアンタは高校生の方がいいんでしょ？」
「ヤダ！　どっからその情報手に入れたの？」
「真弓からに決まってるじゃない！」
「もう！　勝手に話しちゃうんだから……あの制服って確か」
制服が七海高校のだったら、間違いない。
「七海高校よ！　あの色は間違いないわ」
絶対に翔だ。すると、もうひとりの男性とはいったい誰だろう。
「急ごう」
陽乃はお釣を受け取ると、コンビニから走り出た。

第２６話　一人の男性　（後書き）

翔の出身中学校を知っていたこの男性はいったい誰だったのでしょう……。とりあえず、吹奏楽関係者ではあるようですが、まだ謎に包まれたままです。

第27話　変化

陽乃が息を切らせながら土手に戻ると、やはり翔一人しかいなかった。陽乃が戻ってきたことに気づいた翔は振り向き、少し驚いた顔をしていた。

「な、なんでそんな息切れしてんの？」

「だ、だ、だっていまコンビニでアンタと誰か知らない人がカッコいいとかどーとか聞いちゃって心配になって大慌てで帰ってきたんじゃない」

「は？」

自分でも何を言っているのかわからないうえに早口だ。翔が意味がわからないのも当然だろう。陽乃は息を整え、落ち着いてもう一度聞いた。

「いま誰かと一緒にいたの？」

コレだけで充分伝わるのに、さっきは何を回りくどいことを言っていたのだろう。

「あぁ、うん。サックス吹いてるっていう男の人」

「名前は？　なんて人？」

「あ、聞くの忘れたわ」

「な……肝心な部分を聞いてないなんて」

翔の天然ボケっぷりにもたまらない。ふつう名前ぐらいお互い紹介するものだろう。

「まぁでも聞けや」

翔はスッとサックスを構え、急にソロ部分を吹き始めた。陽乃は思わず電池を両手に呆然と翔の吹くソロを聴いていた。ビブラートが効いていて、堂々と吹けている。それまでの翔の音色とはどこかが違う。どこが違うのか、具体的に言うことはできないが、どこかが違う。

「スゴい……スゴいよ、佐野！」

「へへ！　さっきまでその人に教えてもらってたから」
翔は嬉しそうに微笑んだ。少し頬が赤くなっている。
「これなら本番もバッチリ……だよね？」
陽乃はおそるおそる聞いてみた。
翔はニコッと笑い「当たり前やないか！」と強く返事した。
それを聞いて安心した陽乃もトランペットを構え「じゃあ一緒に音源と合わせてみようよ！」と言って翔の隣に立った。
「いいね！　じゃあ、スイッチ押して」
「うん！」
陽乃はＣＤをデッキに入れ、再生スイッチを押した。ドラムセットとシロフォン、グロッケンの音が響く。続いて、トランペットやチューバのリズムが入る。ユーフォニウムがシロフォンなどに合わせてメロディーを吹き始め、やがてサックスも重なる。次にホルンが対旋律を吹いて、木管楽器が重なる。そして翔のソロが始まった。
陽乃は懸命に、けれど楽しそうに吹く翔をジッと見つめていた。やっぱり音楽は楽しくなくてはいけない。自分が練習で苦しんだりしても、最終的に楽しく吹けたら本望だ。
やがて、トランペットが主旋律を吹くところが来た。精一杯、陽乃なりの吹けるきれいな音色で吹いた。指が回らないところもあったが、それなりに上手く吹けたと思う。
やがて、キーボードらしきソロが始まった。時々トランペットやサックスが合いの手のようなものを打ち込んでいる。やがて、ハーモニカらしいソロまで始まった。
「ねぇ、ちょっと」
「ん？」
「このソロってどうすんの？」
「心配すんな。お前は来てなかったから知らんかもしれんけど、キーボードは大谷さんがやってくれるし、ハーモニカは慎也がやってくれる」
「ホントなの！？」

陽乃は驚いた。沙希はピアノをやっているから弾けても驚かないが、慎也がハーモニカを吹けるとは思っていなかった。
「うん。なんか家でよぉやってたらしいわ。二人とも任せて！やってさ」
「そうなんだ……」
やがて、ＣＤが鳴り止んだ。
陽乃が時計を見ると、すでに４時を差していた。
「ねぇ、そろそろ学校戻ろうか？」
「あ、そっか。土日は門が５時で閉まるもんな」
そういって翔はＣＤをデッキから抜いて片付け始めた。陽乃も開いていた譜面や譜面台を片付け始める。
「もう明後日だね」
「確かに」
「はじめはどうなるかと思ったけど、案外どうにかなるね」
「うん。みんな上手くなるの、めっちゃ早い。ビックリや」
「佐野が教えるの、上手かったんだよ」
「いやいや、みんなの頑張りがあったからやで。ホンマに」
「ま、それもあるかな」
不意に、翔が右手を差し出してきた。
「月曜、がんばろな！」
「……もちろん！　ソロ失敗したら許さないからね？」
「失敗したら１万円払ったる」
少し意地悪そうな顔をして翔は笑った。
「失敗したら後悔するよ～？」
「オレは失敗せん！　余裕じゃ」
陽乃はスッと翔の顔を覗き込んだ。
「なんやねん？」
「誰かな～、今朝『プレッシャーやねん』とか言って半泣きになってたのは？」
「んなっ……！」

翔の顔があっという間に赤くなった。
「それをここで言うか！？」
「へへっ！　まぁお互い頑張ろうね」
「……おう」
「じゃ、戻ろう」
陽乃はトランペットを抱えて先に歩き出した。
「……くれてよかった」
「え？　なんか言った？」
「なんでもないわ！　サッサと行くで！」
「きゃ、ちょっと押さないでよ！」
翔に背中を押されて転びそうになってしまった。体勢を立て直していると、翔が立ち止まって声を上げた。
「あ、上見て！」
「何？」
陽乃が空を見上げると、飛行機雲が伸びていた。
「綺麗やなぁ……」
「ホント……。もうすぐ夏だね」
夏休み。その前に期末テストがある。陽乃はあることを心に決めていた。
「じゃあ、明日は練習せぇへんほうがえぇな」
翔が急にそんなことを言うので陽乃は聞き間違えかと思って聞きなおした。
「なんで？」
「前日に吹き過ぎると次の日バテて、吹けんくなったら大変やん。明日は休もう」
「そう言われればそうかも……」
陽乃もしばらく吹いていなかったので、今日は少し疲れた。
「わかった。譜面だけ持って帰っておくよ」
「お前……ホンマ真面目やな」
「佐野には負けるけどね？」

ニコッと笑う陽乃につられて翔も笑ってしまった。
「ありがとさん」
翔の笑顔を見ると自分もホッとする。陽乃はそんなことを考えながら、学校へと向かった。

第27話　変化（後書き）

先ほどの男性に教わったことで、何かが変わった翔。しかし、突然明日は練習を休むという翔。ただ単に休みたいだけなのでしょうか？

第２８話　父ｖｓ．娘

「ただいまぁ……」
陽乃はコッソリと玄関を開けた。今日は祥夫は土曜出勤だからまだ帰っていないだろうと思ってはいたが、それでも緊張する。
「いないみたい……よかった」
「何がよかったんだ？」
「ゲッ！？」
階段の上を見ると、祥夫がいかにも不機嫌そうな顔で立っている。パタパタと足音を立てて降りてきた。
「別にぃ。今日いいことあったからよかったって」
陽乃は冷静に言葉を返す。ふつうにしていればバレっこない。
「いいこと？」
「そう。私にだってそりゃあいいことくらいあるでしょ？　人間なんだから」
何を小説臭いセリフを吐いているんだろう。不自然じゃないか。
「いいこと、ねぇ」
ちょっと嫌味ったらしい言い方で祥夫が返す。陽乃はあえて気にせず2階へ上がろうとした。しかし、直後に祥夫が口にした言葉に足を止めた。
「男の子と会って、そりゃあ楽しかっただろうに」
沈黙が続く。
「おまえはコソコソとなんでそういうことをするのかなぁ」
陽乃の肩がフルフルと震えている。

「ねぇ、マズいよ」
夏樹がコッソリとキッチンから廊下にいる二人の様子を窺（うかが）っている。その上に由利が乗っかるようにして覗き込む。最近、体が大きくなってきた夏樹とはいえ、まだ由利の体を支えるには辛いようだ。

「母さん、重いから」
「あぁ、ごめんね」
ふと下を見ると、いつのまにか祖母の知恵子までやって来ていた。
「なんだよ、ばあちゃんまで」
「あぁなると祥夫は頑固だからねぇ」
さすが息子の母親だけあり、知恵子はよく祥夫の性格をわかっている。
「昔っから娘、娘って大騒ぎするオバカさんだから困ったものだねぇ」
ハァッと知恵子はため息を漏らした。
「だからって、姉ちゃんがかわいそうだよ。俺よく佐野って人のこと見てきたけど、めっちゃくちゃいい人だと思う」
夏樹もため息を漏らす。
「アンタが原因なのはわかってるの？」
由利もため息を漏らした。
「わかってる。でもまさかこんなことになるとは思わないしね」
夏樹が翔を見かけたのは、午後3時頃のこと。つくし野川の土手でいつものようにサックス（陽乃がいつも佐野がね、サックスがねと騒ぐので夏樹もこの単語を覚えてしまった）を練習しているのを見た、と。その隣にトランペット（同上）が置いてあったので姉ちゃんきっと練習してるんだよ、ということを由利に伝えたら、いつのまにか後ろに立っていた祥夫に夏樹は詰め寄られ、こういうことになったのだ。
「俺、後で怒られるだろうなぁ……」
今回ばかりは怒られても仕方がない。夏樹も覚悟はできていた。と、その直後。陽乃の大声が家中にこだました。
「いい加減にしてよ！」
祥夫もかなり驚いているようだった。何か続けようとした祥夫だったが、陽乃は一気にまくし立てた。

「何なの？　私が佐野と一緒にいるところをどうせ後をつけて見たとか、夏樹とかお母さんが偶然私と佐野がいるところを見て聞き出して詰め寄って追いかけて見てきたとかそんなとこでしょ？」

（うっ……姉ちゃん鋭い）

しかし、陽乃の怒りの対象は夏樹ではないようだ。さらに怒った声で陽乃は続ける。

「だいたい前から思ってたんだけどさぁ、お父さん私を何だと思ってるの？　おもちゃ？　お父さんの操り人形？　小学生の頃からそうよね。勉強しろ、算数の公式はお父さんがやったようにこうして覚えろ、お父さんは水泳をやっていたから陽乃にもやらせよう、字が綺麗だと社会にも受けがいいからやらせよう。私の意見はそっちのけ。お母さんの意見もそっちのけ。私がダンスやりたいって言ってもダメ。バレエをやりたいって言ってもダメ。子ども会の廃品回収にも参加したいって言ったらあんなことをしている暇があったら勉強しろ。好きなものも自由に買えるようになったのは中学生のころから。挙句の果てに高校に入ってからも子どもが男の子と仲良くやりだしたら口出しして、ヒドいこと言ってその人との仲ぶっ壊してさ」

（姉ちゃん、ぶっ壊すはマズい……）

祥夫は汚い言葉遣いを嫌う。まして女の子ならなおさらだ。しかし、今日の陽乃はひるまない。

「それにずっと前から思ってたんだけど、夏樹と私とも扱いが違うよね。夏樹はサッカーもやらせてもらえるし、数学で5点取ったってお父さんは全然叱らないし。私なんか数学70点でも納戸に閉じ込められたことあったわよね。何それ、0点取ったから廊下に立ってなさいとかいうのび太くんのノリ？　要するにアレでしょ、お父さんは娘を大事にしたいしたいとか思って結局娘が自分の言うことを聞いていればそれでじゅ……」

パン！！

一発の乾いた音とともに、陽乃の左頬に激痛が走った。
「……なんだ、その態度は」
祥夫は顔を真っ赤にしている。
（ヤバいよ母さん！　あれ、かなり怒ってる）
夏樹もさすがに焦ってきた。由利もオロオロしている。
（お義母さん、どうしましょ？）
（そうねぇ、今夜は炊き込みご飯を作れば機嫌が直るんじゃないかしら？）
いつもこうして的外れな答えを言うのが知恵子だ。祥夫もこうだったら良かったのに、と由利も思うことがよくある。
「……ほら、いつもそう」
陽乃は涙目にもならず、小さい声で言った。
「自分が言い返せなくなったらすぐに暴力」
「……。」
祥夫は何も答えずに陽乃を見下ろしている。
「最低」
陽乃はそのまま左頬を押さえながらゆっくり2階へ上がった。
「言い忘れてたけど」
祥夫は怒った表情で上を見上げた。
「約束してあげる。今度の期末テストで全教科９０点以上じゃなかったら、部活辞める。お父さんのいうこともぜ～んぶ聞いてあげる」
「本当だな」
「もちろん。それでお父さんが良ければ、ね」
陽乃はクスッと笑って自分の部屋へと入っていった。
「……生意気になりおって」
祥夫は怒りを隠せない様子だった。

「フゥッ……」
陽乃は部屋に入り、すぐにベッドに横になった。

カチッ、カチッと時計の規則的な音だけが聞こえてくる。急に立ち上がり、部屋をドタバタと走り回った。
「ど、ど、どうしよう!?　言っちゃった、言っちゃった!!　あぁぁ～心に決めていたとはいえヤバい～!!　９０点なんて取れるの私～!?」
走り回っていると、ドアをノックする音が聞こえた。
「何?　誰?」
「俺だけど……姉ちゃん、ジュースいらね?」
ドアを開けると、夏樹が申し訳なさそうな顔で立っていた。
「どうしたの、急に。珍しいじゃない」
「うん……さっきのことで」
夏樹は経緯をすべて話した。
「それで?」
「え、だから俺のせいで姉ちゃんぶたれちゃったし……」
「あ、そんなの気にしなくていいよ。夏樹は何にも悪くないんだから」
案外あっさり許してくれたので、夏樹も拍子抜けした。
「怒ってないの?」
「怒ってないってば」
陽乃はリンゴジュースをゴクゴクと飲んだ。
「姉ちゃんってさ」
「ん?」
「佐野さんと会ってから丸くなったよね」
ブボァッ!とジュースを吐き出したので「汚ねぇ!」と夏樹は思わず陽乃から離れた。
「な、なんでそこで急に佐野が出てくるのよ!?」
「え、いやだって今日だって佐野さんと一緒にいる姉ちゃん、スゴく女らしかったっていうか……」
ガシッと夏樹は襟をつかまれ、壁の隅へ追いやられた。
「やっぱりアンタ、私をおちょくりに来たんでしょう?」

「や、マジ違うから……ってか顔怖いよ？」
「失礼ね！　出て行って、ホラ早く！」
陽乃は強引に夏樹を外へ追い出した。こぼしたジュースをティッシュで拭きながら陽乃は夏樹の一言を思い出していた。

（佐野さんと会ってから丸くなったよね）

「……そんなわけないじゃない」
しばらく考えて、やっぱり「そんなわけない」ともう一度だけ呟いた。

第２８話　父ｖｓ．娘（後書き）

思わぬ展開が続く陽乃。父親への挑戦状に夏樹の言葉に戸惑い……
今後どうなるのでしょうか？

第２９話　初めての本番前

６月６日月曜日。
「おはよう、朝ちゃん！　いよいよだね！」
陽乃が津上橋の上を歩いていると、後ろから雪子がやってきた。
「雪子～！　いよいよだね、緊張するね！」
「ホントホント！　私たちの演奏で、教頭とかビックリさせちゃおうよ！」
「もちろん！　ギャフンて言わせてやる！」
「それは死語じゃね？」
後ろから川崎　慎也がやってきた。右手にはハーモニカが握られている。隣には水谷　春樹。１０センチ近く背が違う二人だが、最近は仲がいいようだ。春樹の右手にはユーフォニウムが握られていた。
「いいでしょ別に。ねぇ～雪子」
「そうそう。だいたい、女の子の会話に無断で入ってこないでください」
雪子が少しツンとした表情で言い放つと、慎也も複雑そうな顔をした。
「すんませんでしたね。行こうぜ、春」
慎也が大股で歩き出したので、春樹はユーフォニウム片手に慌ててついていった。
「何なんだろうね、あれ」
雪子が不思議そうに首を傾げた。陽乃もわざわざあれだけの会話のために入ってきた二人の意味がわからない。
「さぁ。今日が本番で情緒不安定なのかもよ？」
陽乃が真剣に言うので、雪子は思わず笑ってしまった。
「アハハ！　意外と繊細じゃん、背がデカいわりに」
「雪子、毒舌だからソレ何気に」

「あ、ゴメンゴメン」
陽乃はそれ以上、今日の本番に関してのことは口にするつもりはなかったが、雪子の方から聞いてきた。
「そういえば、練習したんでしょ？」
「え？」
「ほら、昨日と一昨日。佐野くんと！」
「あぁ、その話？」
陽乃はそんな話をする気はなかったので意外な展開に少し戸惑った。
「で、どんな感じだったの？」
「それが聞いてよ～。ＣＤデッキ使うために私が電池買いに行ってる間に佐野ったら知らない人に吹き方のコツなんて教えてもらっちゃって、バッチリソロが吹けるようになってるの。かわいくないでしょ～？」
「アハハハ、何それ超怪しい～！」
雪子の笑い声に周りが注目しているが、二人は気にせず話を続けた。
「しかも！　日曜の練習はバテるからナシとか言い出すのよ。きっと自分が疲れたからそんなこと言い出したのよ～」
「え？　そうなの？」
雪子が素っ頓狂な声を出したので陽乃はクスッと笑ってしまった。
「うん。ホント。前日に吹き過ぎると疲れるからって……」
「あれ……でも昨日、私は昼過ぎに学校にサックスとなんかわかんない綺麗な袋持って学校に行く佐野くんを見たけど……？」
「え？」
「あ、でも見間違いかもしんな……わぁお！？」
次の瞬間、陽乃は雪子の肩をガッシリ握っていた。
「なんで！？　ホントに佐野なの！？」
「あ、でもハッキリ確かめたわけじゃないし……わかんないよ？」
「そう……」

それからすっかり意気消沈した陽乃はトボトボと校門の方へ歩き出した。
「あ、ちょっと待ってよ朝ちゃん！」
雪子が慌てて後を追った。

「どないしたんやろ、アイツ？」
翔はその５０メートルほど後ろを本堂　拓真と一緒に歩いていた。
「さぁ……ずいぶん落ち込んでるけど」
「なんか知らんけど、叫んだり喜んだり忙しいやっちゃなぁ」
クスッと翔は陽乃を見て笑った。
「それで、お兄さん」
拓真がグッと首に腕を回してきた。
「わ、ちょ！　なんやねん？」
「いいプレゼントは買えましたかな？」
「それに関しては黙秘」
「なんだよそれ～？　それで、あっちはいつ言うの？」
翔は頬を赤くして小さい声で呟いた。
「今日のソロが上手くいったら」
拓真がその言葉にニヤ～っと笑って小さく返した。
「上手くいくといいねぇ～」
「……うるさいなぁ、からかうな！」
赤い顔をしながら翔が走り出した。それを必死になって拓真も追いかける。
「翔ちゃ～ん、詳しく聞かせて～！」
「うるさい！　寄ってくんな！　つーかお前教室ちゃうやろ！？」
「そんな冷たいこと言うなよ～！」
「キモいねん、マジで！　来るな～！」
二人は走りながら校門をくぐって行った。

「なんでだろ～うなんでだろ～う、なんでだなんでだろ～う……」

陽乃は本番前になってもトランペットのマウスピース右手にブツブツ呟いていた。どうやら午前中の雪子の一言が頭の中を堂々巡りしているらしい。

その隣に、軽やかにバチで音を立てながら田中　美里がやってきた。

「どうしたの、朝ちゃん。死んでるけど？　ってか、なんでだろ～うは古すぎ」

「あぁ美里ちゃんハロー。アハハハ……」

「壊れてる……早く音出ししなきゃもうすぐ出番だよ？」

陽乃はため息を漏らした。

「わかってる……けど、佐野の行動が読めなくて……」

美里はバチを置いて陽乃の隣の席に座った。

「それって、永井ちゃんが言ってたこと？」

「そーなの。あれは何だったんだろう」

美里もしばらく考えた。クスッと笑ったので陽乃が不機嫌そうに顔を上げた。

「何がおかしいのよぉ？」

「あ、ゴメン。それはそんなに気にしなくても、陽乃にプラスになって返ってくるよ！」

「はい？」

陽乃はさっぱり意味がわからない。

「とにかく、今は練習頑張って本番クリアする！　ＯＫ！？」

「……わかったわよ」

陽乃はもう一度ため息をついて、マウスピースを手に取った。

やがて、出番の４時半が近づいてきた。

「緊張するなぁ……」

拓真がブルブルと震えている。翔は皆のところを回って一言ずつ何か声をかけている。

由美子の前にやってきた。

「そんな緊張するなよ。大谷さんが抜けても、お前の音はよぉ聞こえてるから」
由美子はコクッと小さくうなずいた。
「橋本さん。がんばろうな！」
「うん！　佐野くんもソロ、頑張ってね！」
翔はグッと親指を力強く立てた。
「大谷さんはいつもどおり、堂々と吹いたり弾いたりしてくれたらえぇからな」
「任せて！　バッチリだから」
沙希はさすが経験者だけあって、堂々としている。
「慎也！　ハーモニカよろしく！」
慎也はサッとポケットからハーモニカを取り出した。準備万端だ。
「永井さん。対旋律ヨロシクな！」
「もちろん！　最近、対旋律ばっかり聴いててファンになっちゃった」
「ハハッ！　いい傾向！　がんばろ！」
「うん！」
次に翔は緊張でガチガチになっているバスパート二人組みに声をかけた。
「……ったく、大の男二人がホンマに～しっかりせぃ！」
春樹の顔が真っ青になっている。極度の緊張が出ているようだ。
「だ、だ、だ、だって俺ゆーふぉお一人だし……」
ゆーふぉおの語尾が震えている。
「緊張しすぎ。リラックス、リラックス！」
翔は二人の肩を揉み解した。
美里に声をかけようとしたが、何やらバチを片手に精神統一をしているようで、声はかけなかった。
最後に、翔は陽乃に近づいた。
「朝倉」
「佐野……」

翔はニコッと笑い、右手を差し出した。
「頑張ろうな」
「……。」
無言で右手を差し出した。少し元気がない様子にすぐに翔も気づいたらしく、続けた。
「どないしてん？　なんかあったんか？」
聞こうかどうしようか迷ったが、陽乃は意を決して聞いた。
「日曜日、なんで一人で練習に行ったの？　休むって言ったじゃん」
「あ、えと……それは……」
陽乃がジッと翔を凝視する。
「じ、実は……」
翔が言い始めたところで、監査会の人が「吹奏楽サークル、入ってください」と呼んできたので中途半端になってしまった。
「ま、また後でな！」
翔は曖昧にしたまま行ってしまった。
「……ダメだ！　気合い入れないと、失敗しちゃう！」
陽乃は頬を軽く叩き、気合を入れなおした。
「ヨシッ！　頑張るぞ！」
吹奏楽サークル部員１０名が体育館の中へと入っていった。

第２９話　初めての本番前（後書き）

さぁ！　吹奏楽サークルの初めての本番がやってきました。演奏はうまくいくのでしょうか！？

第３０話　ＴＲＵＴＨ！

「１５番　吹奏楽サークル　代表・佐野　翔　顧問・東　恭一先生」
放送部の女生徒の声が聞こえた。いよいよ吹奏楽サークルの出番がやってきた。メンバーは全員席に着いている。今回は沙希が移動してキーボードーも弾くので席数は部員より多い。
指揮棒を持って恭一がやってきた。部員よりも緊張しているかもしれない。見た目でも充分緊張度が伝わってくる。
監査会の人たちに向かってお辞儀をする恭一。しかし、拍手も何もない。よく見れば、教頭の２人はアクビなどしている。
そもそも、この七海高校にはなぜ教頭が二人もいるのか。そこから説明に入ろう。
この七海高校には２０００年度に新しく「体育科」が設立された。どこの高校でも最近ではいろんな特色を生かした学科が出てきている。七海高校では優秀な運動選手を養成するという名目で体育科ができ、そのときに普通科の教頭と体育科の教頭が置かれた。
そして当然、体育科には優秀な運動能力を持った生徒が入ってくる。そうすれば自然と運動部の方が盛んになり、それまで同等だった文化部との差が出てくる。そうこうしているうちにいつのまにか教職員は運動部の活性化に力を注ぐようになり、文化部はないがしろにされている。
１年Ｆ組の委員長から聞いた情報だ。
ともすれば、文化部が降格する可能性も高くなるということだ。
それが教頭二人に仕組まれている……？
そういう噂も流れているらしい。それでも、翔には関係なかった。
自分たちの頑張りを教頭以外に訴えればいいのだ。
（いくぞ？）
恭一が指揮台に立ち、全員に目配せをした。
陽乃は心臓が今まで生きてきた中で一番鳴り響いていた。こんな

に自分の心臓の音が聞こえるのは生まれて初めてだ。
やがて、恭一の指揮棒が上がり曲が始まった。
初めのシロフォンやグロッケンの部分は絵美のクラリネットや由美子と沙希のフルートに吹き替えをしたらしい。初めての頃はたどたどしかった由美子と絵美の吹き方がしっかりしている。2ヶ月でここまで変わるとは正直思っていなかった。
美里のドラムセットの叩き方も堂々としている。入りたての頃は適当に音をドンドンやっているだけだったので、その違いに改めて驚かされる。
すぐに金管楽器のリズムが入る。陽乃は音を外さないように全神経を集中させた。無事高い音をクリアする。
その直後に春樹のユーフォニウムの動きが由美子、沙希、絵美に重なり、さらに重なるようにして翔が同じ旋律を吹いた。そしてまた金管楽器のリズム。その後に由美子、沙希、絵美、春樹、翔の動きにホルンの雪子の合いの手が入る。金管のリズムが入り、クラリネットとフルートが細かい音階を上がった後、翔がスッと指揮者の横に立った。いつの間にこういう演出を考えていたのだろう。急なことだったのかも知れず、恭一もすぐ傍にいた絵美も驚いていたが、楽器は口から放さなかった。
それは教頭たちも同じだったのだろう。何が起こるのか思わず翔の方を見つめてしまっていた。その視線にも翔は怯むことなく、堂々とソロを吹き始めた。
今までで一番ビブラートが効いている。リードミスもない。何より、翔本人が自分の世界に入りきっている。それを全員が支えるように吹いているのだ。
拓真の伴奏がしっかりと翔の動きを支え、雪子の伴奏も目立ちすぎずしっかりと吹けている。やがてフルートの席から沙希が立ち上がり、シンセサイザーの方へ向かった。その後、フルートも入るのだがここは由美子一人になる。彼女は最初、それをとても不安がっていたが今では嬉しそうに吹いている。やがて、翔はソロを完璧に

吹ききり、堂々とお辞儀をした。
そのソロが終わった直後、校長先生と1年の学年主任、A組とC組、D組のクラス担任に生徒会長と副会長が拍手をしたのだ。
満足そうに翔は自分の席へと戻った。
すぐにその旋律を沙希のシンセサイザーとクラリネットが引き取った。翔も落ち着いたところで旋律に加わり、厚みが増す。やがて一番陽乃が緊張するトランペットの旋律部分が迫ってきた。ここは沙希が派手にシンセサイザーを弾いてくれるのがキッカケになっているから耳を沙希の方に集中させる。
派手に沙希がシンセサイザーの音階を下ったので、陽乃は楽器を堂々と構えた。ここは急に音が上がるので陽乃も苦しんだが、今はテンションが高くなっているせいかすんなりと音が出た。沙希のシンセサイザーの支えもあるだろう。
やがて雪子の対旋律が入ってきてくれて、一度盛り上がる部分は無事終わった。
すぐにフルートとクラリネットの冒頭部分が再現される。音楽にはよくあるパターンだ。美里のバスドラムがリズムを失わないように冷静に刻んでいる。金管のリズムが入り、すぐに春樹のユーフォニウム、翔のサックスが由美子と絵美に加わる。後ろでパターンを変えて美里がタムタムを叩き、チューバの4分音符打ちを拓真が吹いている。金管のリズムと美里の複雑なタムタムの動きが入るが、美里は堂々と叩ききった。
やがて、沙希のソロが始まった。いつのまにか沙希は上着を脱いでいた。どうやら長袖だと弾きにくいらしい。さすがピアノ奏者だけあり、余裕で弾きこなしている。最初は単純な動きばかりだったが、進むにつれて連符が増えて聴いている側はどんな譜面なのかさっぱりわからない。細かい音符を完全に弾ききった後、慎也のハーモニカが続く。慎也は感情を込めて朗々とハーモニカを吹く。それに応えるように雪子がホルンの合いの手を入れて、陽乃も加わる。ホルンとトランペットが交互に吹いていることにここで初めて陽乃

は気づいた。もっとしっかり合わせておけば良かった。少しだけ後悔した。

やがて沙希のシンセサイザーと絵美が旋律を吹き始めた。再現部だ。やがてそれに翔も加わり、トロンボーンを持ち直した慎也も加わる。ホルンに高い音が合っても雪子は関係ないとばかりに吹きまくる。陽乃の高音域のメロディーの直前、恭一が陽乃に人差し指を上に上げて口をパクパクさせた。

（立・て！）

陽乃もすぐに読み取り、その意味を悟った。おそらく、その高音域のメロディーを立って吹くのだろう。

陽乃はその部分になった途端、立ち上がり楽器のベル部分を持ち上げて高らかに音色を奏でた。にわかに校長や生徒会長から拍手が上がった。さらに雪子の対旋律が加わり、また冒頭の再現部に戻る。美里のバスドラムとフルート、クラリネットだけのはずがテンションが上がった沙希のアドリブソロまで加わる。やがて金管の打ち込みの後に春樹、翔と楽器が加わりそのたびに沙希のソロが加熱していく。そして陽乃と慎也が入ったところでフィニッシュを迎える。美里もテンションがあがり、ド派手にタムタムを強く叩いた。

恭一はビシッと指揮を止めて、余韻が体育館中に響き渡った。

恭一が指揮棒を降ろしてようやく全員が楽器から口や手を離した。静まり返る体育館。やがて生徒会長が「ブラボー！」と声を上げて拍手を始めた。教頭二人を除く全員が拍手を始めた。

恭一も嬉しそうに指揮台から降り、深々とお辞儀をした。

陽乃は初めての舞台、初めての演奏に感極まって涙目になっていた。

第３０話　ＴＲＵＴＨ！（後書き）

教頭以外からは高評価がもらえそう！？　とにもかくにも、吹奏楽サークルの初舞台は大成功を収めました！

第３１話　予想外

監査会は無事終了した。校長と生徒会長にいたっては満点評価の「A」をくれたのだ。Aが最高点、Eが最低点。ちなみに、教頭二人は「D」だったが、サークル部員は全然そんなことは気にしなかった。

吹奏楽サークルの門出は最高のものとなった。恭一も予想外に全員が上手くなっていたのにかなり驚いていたが、それ以上に嬉しそうだった。

ちなみに、各クラブの様子を収めたビデオというものを毎年配布しているらしい。さっそく部員全員でそのビデオを観てみた。恭一がガチガチに緊張しているのに対し、ソロを吹いた翔は堂々としている。由美子は一生懸命だが譜面に噛り付いているわけでもない。沙希は楽しそうにシンセサイザーを弾いている。雪子のホルン姿もすっかり目に慣れ親しんだものになった。ふつうは顔が見えないらしいチューバだが、楽器の角度のせいか拓真の顔がヒョコッと見えている。指を懸命に動かす春樹の姿はなんとなくかわいらしい。美里はあんなに激しい動きをしているのに息切れもしていないようだ。

陽乃は自分の姿を見た。ちょうどソロ（恭一の指示のせいでソロになってしまった）を吹いているシーンが映っていた。

「カッコいいじゃん、朝ちゃん」

横から雪子がニコニコ笑いながら小声で話しかけてきた。

「雪子こそ、見てよ。ちょうど夕焼けの時間帯だから真っ赤になってカッコいいよ～」

「やだ！　そんなクサいこと言わないでよ。照れるから！」

「えへへ～。みんなカッコいいよね！」

「うん。客観的に見ると恥ずかしいけどね……」

まぁそれもある。今までこんな風に自分を見ることなんてなかったのだから。

「今日は楽器吹く？」
陽乃は雪子に聞いた。
「あ、今日は親が用事があるから監査会終わったらすぐに帰るようにって言ってた。それに、東先生の都合で明日と明後日は休みなんだって」
「あれ？　そうなの？」
陽乃は聞いていない。しばらく休んでいたからかもしれない。
「うん。だから木曜日から活動再開だね」
「そっか～……その間、退屈だな～」
「まぁ、休憩もいれなきゃ。あ、もうすぐビデオ終わるよ」
「マジ！？　ちゃんと見ておこう」
前に向き直った拍子に、翔と目が合った。ニコッと笑い返したら、目を逸らされた。
「……？」
何か変なことをした覚えはない。なぜ逸らされたのかよくわからなかった。

「陽乃、帰らないの？」
美里に声を掛けられた。他の部員もとっくに帰ってしまっていたが、陽乃だけは入念に楽器を磨いていた。時刻は１９時半。外もすっかり暗くなっている。
「うん。もう少しだけ楽器磨いて帰るよ」
「あまり遅くなりすぎないように気をつけてね！　じゃあね～」
「お疲れ～。バイバイ！」
美里に手を振って見送ると、音楽室が静まり返った。
「もう少しちゃんと磨いて……」
不意に、パターンとスリッパを床に置く音がした。
「だっ、誰……？」
緊張してしまう。変な人だったらどうしよう。
「……！」

思わず身構えてしまったが、扉から現れたのは翔だった。
「あれ？　佐野じゃん」
「よぉ」
なんとなくよそよそしい感じがまだしてしまうのは気のせいだろうか。
「どうしたの？　帰ったんじゃ……なかったの？」
「あ～うん。ちょっと用事思い出して……」
「ふ～ん。私、もうちょっと楽器磨いてるからゆっくりしなよ」
「うん……」
そう返事をするだけで、ちっとも翔はその後も動こうとしない。
「どしたの？」
「あ、うん……」
陽乃はフーッとため息をついた。
「どしたのよ、ホント。佐野、なんか監査会終わってから変だよ」
「そ、そんなことないって……」
しかし、言葉とは裏腹に落ち着きが無い。明らかに挙動不審だ。
「私、なんかした？」
「え、いや……そんなんじゃないって」
「じゃあなんなのよ。気に入らないんだけど……」
陽乃はフイッと後ろを向いた。

（どうしよ……言わんと状況がマズくなりそう……）

「……！」
翔は意を決して歩き出した。
「んんっ！？」
陽乃の前に、ピンク色の袋が飛び出てきた。
「な、何コレ？」
「たっ、たっ、たっ……！」
これまでにないほど翔の顔が赤くなっている。

「た？」
「たん、たん、たん、たん！」
「何よ？　タムタムの音の物真似？」
「ちゃう！　そ、その！」
「じゃあ何なのよ……」
陽乃はフーッとまたため息をついた。
翔は目をつむって大声で言った。

「誕生日おめでとう！！」

「えっ……」
急な翔の言葉に、動きが止まる。
「知ってる。ホンマは8日やってこと。でも、部活が明日明後日ないから今日渡しとかんと渡しそびれそうで……」
陽乃の顔も思わず赤くなる。
「あ、ありがとう……」
さっきまでの自分の態度は大失敗だったのでは……。
陽乃はふとそう思った。しかし、さらに予想外の事態へと発展する。
「あ、朝倉さぁ」
「うん……」

しばらく沈黙が続く。

プアーン……とＪＲの電車の警笛が聞こえた。

（やだ……！　なに、この沈黙！　早く喋ってよ、佐野……！）

「朝倉さぁ……」

翔は自分の心臓の音が高鳴っているのにさらに緊張してしまった。

（言え！　佐野　翔！　がんばれ！）

自分にダメだしをして、勢いづけて一度に言い切った。

「オレと付き合ってくんね！？」

陽乃の顔があっという間に真っ赤になった。

第３１話　予想外（後書き）

誕生日プレゼントをもらっただけでも予想外だった陽乃にさらに翔からの超・予想外な一言。どうなる二人の関係……！？

第３２話　それぞれの「初」

「えっ……」

陽乃は翔の言ってることが一瞬理解できなかった。

「アカン……？」

翔はジッと陽乃の目を見つめた。

「だ、だめってわけじゃないけど……」

「けど？」

ドクン、ドクンと監査会のときとは違う心臓の音が自分の耳にまで聞こえてきそうだった。

「急にそんなこと言われても、私だって」

「わかってる。今すぐここで急に返事がほしいわけやないねん」

「うん……」

何も音がしなくなった。陽乃は今すぐここから逃げ出したい気分になった。でもそうすると、二度と翔と話ができなくなりそうな気もした。

「明日明後日あるやろ」

「部活、休みだね」

「その間に、返事ちょうだい。約束」

来た。ふつうはそうなるだろう。ある程度覚悟していたとはいえ、２日間で決断を出すには厳しすぎる内容だ。でも、Ｎｏとも言えない。

「わかった」

すると翔の顔の緊張が一気に解けて、いつもの笑顔に戻った。

「それと、その誕生日プレゼントは今のとは別にして、純粋にお祝いの気持ちで贈ったから……受け取って」

陽乃は何も言わずに小さくうなずいた。

「じゃあ、オレ帰るわ」
「気をつけてね」
「おう。またな」
翔はいつもどおりの笑顔で陽乃に手を振った。
一人きりになった音楽室で、陽乃はプレゼントを右手に呆然と立ち尽くしていた。
「どうしよう……どうしよう……」

陽乃が初めて受けた「告白」だった。

そして、翔にとって初めてした「告白」だった。

第３２話　それぞれの「初」（後書き）

返事の猶予期間は２日間。果たして、陽乃は翔にどのような返事をするのでしょうか……？

第３３話　プレゼントと気持ち

「ただいま～」
翔が家に帰ったのは８時半過ぎだった。リビングから弟の智輝が飛び出してきた。
「おかえり～！　遅かったな、兄ちゃん！」
「おう、智輝～。いろいろあってな～」
「おかえり。ご飯は食べるやろ？」
キッチンから友美子の声がする。やっぱり家はホッとする。
「うん。食べる」
「そしたら上で服着替えておいで。そろそろ暑くなってきたから汗もいっぱいかいてるやろ？」
「うん。着替えてくるわ」
翔はすぐにカバンを持って自分の部屋へと上がって行った。
「ねぇお母さん」
妹の綾音がアイスクリームを片手にキッチンへやって来た。
「翔のヤツ、なんかおかしくない？」
友美子はフライパンを片手に「綾音、言葉遣い悪いよ」とだけ返した。
「絶対おかしいって……」
「ハイハイ。部活で疲れてるんやろ。ご飯食べて風呂入ったら治る、治る」
ぞんざいに扱われて少し綾音は不服そうだった。
「絶対なんか隠してるね、翔のヤツ……」
アイスを食べながらこっそり綾音は上へ上がった。

「ふぅ……」
翔はカバンを机の上に置くと、ため息をついた。今日のさっきの出来事が遠い昔のように感じる。

「でも後戻り……できへんよな」

（オレと付き合ってくんね!?）

自分の言葉に赤くなる。

「アカン、アカン。落ち着くために音楽聴こう」

翔はＭＤを取り出し、適当に流し始めた。宇多田ヒカルのソング・セレクションが流れ始めた。

「最初の曲って確か……」

「これって『Ｆｉｒｓｔ　Ｌｏｖｅ』やんね～?」

「!?」

振り向くと、綾音がドアにもたれてアイスクリームを食べていた。

「いつからおってん」

「ついさっき」

「あ、そ」

翔は特に相手にせず、着替え始めた。

「出てくれへんか?」

「なんで?」

「着替えるから」

「別にええやん。兄妹やし、気にせぇへんやろ?」

「……。」

翔はムスッとしたまま、制服のシャツを脱ぎ始めた。

「なんか今日、翔、変」

単語で区切られて言われたからか、ドキッとした。

「変って、何が?」

「様子」

さすが我が妹。侮れない。

しかし、ここで本音を曝すととんでもないことになる。ここは気づかれないように通さなければならない。

「今日は部活で監査会ってのがあってな。それで疲れた。精神的に」

「あ、そうなんや」
アイスを食べる音がする。翔はなるべく綾音と目を合わせないように着替えを終えて下へ降りようとした。
「何があったかウチは知らんけど」
アイスを食べ終えた綾音は一言だけ言った。
「何があってもへこまんように、ね」
翔は階段の途中で足を止め、振り返らずに返した。
「……どういう意味や？」
「それは翔が一番知ってるんちゃう？　ほなね～」
関西人でも使わないような不自然な関西弁を言いながら綾音は自分の部屋に入っていった。
「それぐらい、覚悟の上じゃ……」
翔はボソッと呟いてリビングへと走っていった。

陽乃も家へ帰ってご飯を終え、自分の部屋のベッドで寝転んでいた。翔のバースディプレゼントは未開封のままだった。
「開けたいけど……怖い」
陽乃はさっきから何度も起きたり寝たりを繰り返してプレゼントとベッドの間を行き来している。２０分くらい経ってしまった。

（純粋にお祝いの気持ちで贈ったから……受け取って）

不意に翔の言葉が蘇る。
「日曜日、これを買いに行ってたのかな……」
そうすれば辻褄も合う。ピンク色の袋。わざわざ練習を休みにして、買った後に学校に戻って部室に置いておいた。今日のために。
「開けないといけない気がする」
陽乃は立ち上がり、そっと袋を手にした。心臓が高鳴る。今まで誕生日プレゼントを男の子からもらったことはあったが、告白と同時にもらうなんて生まれて初めてだ。

ドクン！　ドクン！　ドクン！

今日の本番並みに緊張している。緊張の種類は違うけれども、今日は心臓がなりっぱなしだ。

「えぇい！　朝倉陽乃、行きます！」

ババッと一度に袋の封を開けた。

『誕生日おめでとう☆☆　１６歳になった朝倉に乾杯！笑』

小さなメッセージカードと小さな袋に入った何かが見えた。

そういえば、翔の書く字を見るのは初めてだった。意外と綺麗。

小さいけど、字体はシッカリしている。

「何が入ってるんだろ……」

陽乃はさらに袋に入った中身を取り出した。

「あっ……！」

トランペットのマウスピースだった。メッセージカードの裏にまだ何かが書かれているのに気づいて、陽乃はそちらの面を見た。

『自分のマッピ持つとちょっとは気分違うと思うから、プレゼントやけど使って♪』

「……けっこう高いんじゃ」

陽乃はこのあいだ学校から借りてきた楽器の販売に関する本をカバンから取り出した。安くても４０００円程度、高ければ３万円という目の飛び出るような値段もある。

「メーカーは……」

マウスピースの側面に「Ｂｏｂ　Ｒｅｅｖｅｓ」と書かれている。

「うっそ！」

『Ｂｏｂ　Ｒｅｅｖｅｓ　バックボア　６９２ｓ、６９２ｓＬ、６９、６９２シリーズ　定価（税込）￥３１，５００』

信じられない値段だ。こんなもの、ふつう高校生同士の誕生日プレゼントで渡すものの値段ではない。

「あわわ、ちょっとウソ！　電話、電話！」

陽乃は翔に問いただそうとケータイを握り締めた。翔に掛けようとして考えた。

ここでプレゼントを返したらなんだか告白まで断ったような気分に翔はなってしまうのではないだろうか。だからといって母親に相談しても返せとか言われるに決まっている。値段が値段だけに。

「うう……どうしよう。どうしよ～……」

とそのとき、ドアをノックする音が聞こえた。そのまま有無を言わさずに部屋に入ってきた。

「陽ちゃん、お風呂ができてるのにどうしたんだい？　入らないのかい？」

知恵子だった。

「おばあちゃん……あ！」

プレゼントを勉強机の上に置きっぱなしだった。

「おやおや……さっそくプレゼントをもらったんだね」

知恵子はうれしそうに笑いながらマウスピースをマジマジと眺めた。

「ふぅむ、銀色の綺麗なものだねぇ。何に使うんだい？」

「トランペット吹くときに。マウスピースっていうの」

「へぇ～。陽ちゃんがやってるのはこんなので音が鳴るのかい？」

「うん……でもいま値段調べたら、すっごく高くて……友達からもらったんだけど」

友達、と呼べる仲なのかいまは微妙だけれども。

「そうかい。高いものなんだねぇ」

「うん……高すぎるから、受け取りにくくて」

「返しちゃうのかい？」
「そうするかどうしようか迷ってて……」
知恵子は優しく陽乃の頭を撫でた。
「おばあちゃんは、返さないほうがいいと思うよ」
「どうして？」
「プレゼントをくれたこの人はね、値段じゃなくて、陽ちゃんにこれを受け取ってほしいと思ってこれを選んだんだよ。何も、このマウス何とかってのはひとつじゃないんだろう？」
「うん。種類はいっぱいあるよ」
「だろう？　それなのにわざわざ高いのを選ぶなんて、高校生はしないねぇ」
確かに。バイトもしていないのに買えるハズもない。貯金を崩したのか。
「それを返すなんて、お金の問題じゃなくて、気持ちの問題だねぇ。陽ちゃんが心を込めて作ったプレゼントがあって、それを返されたら嫌だろう？」
「うん……やだ」
「だったら、これは受け取っておきなさい。それが一番だ」
知恵子はまた優しく頭を撫でてくれた。もう高校生だが、知恵子に頭を撫でられるのは悪い気がしないのは不思議だ。
「うん。そうする」
「よし。そうしたら、お風呂に入りなさい。後がつかえてるからね」
知恵子はそう言って陽乃の部屋を後にした。
陽乃はマウスピースを勉強机に置いた。
「ありがと、佐野」
電気を消して、陽乃は階段を下りていった。マウスピースが月に照らされて青く輝いていた。

第３３話　プレゼントと気持ち（後書き）

知恵子の一言で改めて翔の気持ちを知ったような気がした陽乃。果たして翔の気持ちは陽乃に伝わるのでしょうか？

第３４話　今の私では

６月９日木曜日。

いよいよ陽乃が決断を下すときが来た。結局、この２日間は勉強も集中できなかった。期末テストが７月はじめからあるからそろそろ勉強のことも考えなければならないのだが、それよりも翔への返事の方が陽乃にとっては最重要課題であった。

この２日間、陽乃は気まずくて翔に声も掛けられなかった。しかし、翔は意外とアッサリしていて、朝会ったときには「おはよ、朝倉！」と爽やかに挨拶をするし、数学の時間の後「オレこの問題わからんねんけど、朝倉わかる？」といつものように質問もしてきた。そのうちに陽乃も気まずさがなくなっていつもどおり接することができた。

しかし、今日が期限だ。

今日を境に二人の関係が変わるかもしれない。

恋人？

それとも、友達？

ＯＫするにしても、断るにしても前者であれば恋人関係。後者であれば友達以上恋人未満というますます複雑な関係になってしまうことは間違いない。

昼休み前まで、陽乃は答えが出せなかった。けれども、明確な答えが突如として出てきた。

「よし！　言うしかない！」

陽乃は昼休みに入ると同時に、翔を呼び出した。

「なに、急に？」

陽乃は少しうつむいて小声で「屋上」とだけ行って教室を出た。

翔も小さくうなずいた。
「おい、翔。どこ行くんだよ」
クラスメイトの伊波（いなみ）　冬真（とうま）が声をかけた。
「悪ぃ、すぐ戻る」
翔はそのまま屋上へと駆け上がった。

屋上へ上がると、陽乃がジッと立っていた。
「朝倉……」
翔は少し息切れしている。緊張もあるのかもしれない。希望と不安が入り乱れたとでもいうような目をしている。若干、不安の方が多そうだ。
「私、決めた」
翔は何も言わず、小さくうなずいた。
「私……」
言葉が出しにくい。でも、出すしかない。陽乃は精一杯の声を振り絞った。

「私、佐野とはまだ付き合えない」

ちゃんと理由も言っておくのが礼儀と思い、陽乃は続けた。
「やっとさ、私わかってきたんだ。音楽の楽しさ。辛いこともあるかもしれないけど、私、今は音楽を続けたい、吹奏楽を続けたいって思ってるの。この吹奏楽サークルをもっと大きくして、演奏会とかも開きたい。まずは、自分の演奏レベルも上げたいし」
「……。」
翔の返事はない。でも、自分の思ったことをハッキリ言うべきだ。

陽乃は続けた。

「私、佐野のことは好き」

心臓が爆発するのではないかというくらい鳴っている。翔はジッと陽乃を見つめている。

「でも、私は佐野に好きになってもらえるほどまだ人間、できてない」

翔は黙って聞いてくれている。

「演奏レベルも佐野に比べたら全然。みんなを引っ張るような力もないから。だから私ね、佐野に追いつけるように頑張る。だから、そのときまで待っ……」

言い終わる前に、翔が急に陽乃を抱いてきた。

「うぇわ、ちょ、さ、佐野!?」

「オレは……」

小さい声で翔は言った。

「オレはお前のそういうとこ、好きになった」

そしてすぐにまた陽乃から体を離した。それからニコッと笑って言った。

「待ってるで！　がんばれや！」

翔はこういうときも、ポジティヴだ。陽乃はホッとした。
「……うん。協力、してね？」
「当たり前じゃ！　ほら、教室戻って昼ごはん食べよ！」
「うん！」
翔はすぐに駆け出した。陽乃は「ゴメン」と言おうとして、やめた。翔なら「悪いことしてへんのに謝るな」と言うに決まっている。
陽乃も、翔の後を追って階段を駆け下りた。

第３４話　今の私では（後書き）

自分の正直な気持ちを伝えると、翔は受け入れてくれました。陽乃はさらに自分を磨くことを心に誓い、翔は自分の気持ちを受け入れてくれる日を待つのでした。

第３５話　ドキドキ？　パート練♪

翔の告白を断った日から1週間が経った。今日は６月１６日木曜日。あれから毎日部活があるが、翔の態度はこれまでと変わらなかった。むしろ、以前よりずっと優しくなったように陽乃は感じていた。

監査会でいい評価をもらったせいもあるのか、部員たちは以前より練習に真面目に取り組むようになった。今日の練習はパート練習。といっても、各パート多くて二人だから個人練習とほとんど変わらないのだけれども。

陽乃の現在の課題は「タンギング」。これができないとトランペット奏者としてはかなりキツい。最近、恭一が配った楽譜もまた難しいものだった。

この間演奏した『ＴＲＵＴＨ』はポップス。今回配られた譜面を読むことはできないが、どうやら本格的な吹奏楽の譜面らしい。

『ＪＥＷＩＳＨ　ＦＯＬＫＳＯＮＧ　ＳＵＩＴＥ』

ユダヤ人の民族音楽だと恭一は言っていた。参考音源を聴くと、トランペットはメロディが多いしクラリネットもメロディを吹いたりトリルをしたりと忙しい。しかも、パーカッションに至ってはスネアを使ったりタンバリンを使ったりと大忙しだ。とりあえず、同じ旋律がある楽器は省略するしかない。チューバとユーフォニウムは辛うじてメロディ部分が少ない。逆に伴奏ばかりだと負担がかかってしまう。合計3楽章あるうちのどれを吹くのかはまだ聴いていないが、陽乃は個人的に3楽章が危ない気がした。トランペットにフルートにクラリネットにユーフォニウムにトロンボーンとメロディは目白押し。木管楽器はトリルの山。もしもこれを練習曲にすると言われたら自分はたまらないので、他の楽章そっちのけでそれば

かり練習していた。
「おまえさっきからその楽章ばっかりやな」
翔が苦笑いで教室に入ってきた。そういえば、今日はサックスとトランペットは同じ部屋だったように思う。
「仕方ないじゃない。私の苦手な細かい吹き方をしなきゃなんない楽章なんだもん。しっかり練習しておかないと先生に怒られちゃう」
「まぁそれはオレも一緒やけどな」
翔はメトロノームと譜面台を置いて今度は楽器を取りに音楽室へ戻った。よく見ればその中にＩ－ｐｏｄも混ざっている。
「佐野って普段はどんな曲聴いてるんだろ……」
そっとイヤホンを耳にはめる。
「やだ……なんで私ドキドキしてるんだろ」
翔が使っているものを触ったりしてドキドキしている自分に恥ずかしくなった。
「ま、いっか。再生」
すると大音量でいきなりドラムの音が聴こえてきた。
「わ！　ビックリした！」
するとすぐにトランペットとタンバリンの音が聴こえてくる。軽快な踊りの曲のようだ。よく聴けば下でサックスかホルンらしい楽器がトランペットのメロディーに合わせて同じ動きをしている。
「すっご～い……」
やがてまた同じドラムの動きの後にサックスらしい音でソロが始まった。そこへ来て急に後ろから「何やってんの？」と翔から声を掛けられて陽乃は思わずＩ－ｐｏｄを付けたまま振り向いてしまった。その衝撃でトランペットにコードが引っかかり、楽器が机から落ちそうになった。
「あっ！　ヤバイ！」
陽乃はかなり無理な姿勢をしてトランペットを押さえようとした。しかし、支えようとした手の反対側――左手がガッ！と音を立てて机にぶつかった。

「何してんねん！」
翔も慌てて陽乃の体を支えた。幸い、楽器も陽乃も大事には至らなかった。
「ご、ごめん。ありがと……」
「えぇけど……奏者のお前が怪我したらみんなに迷惑かかるんやで？」
「えっ……？」
翔は真剣な目つきで陽乃にゆっくり言った。
「あのな、楽器は修理で長くても2、3週間で直るもんやねん。でも人の手ぇとかって骨折とかしたらなかなか治らへんやろ？　自分のメンタルケアは充分注意してくれよ」
「わ、わかった……」
当然だが、やっぱり翔は楽器より自分のことを気遣ってくれた。それだけでも十分陽乃は嬉しかった。
「落ち着いたら、一緒にロングトーンしよう」
「うん！　あのさ、Ｄｅｓ（デス）の音階がどうしても吹けないからまた教えてくんない？」
「お前は♯とか♭が増えたらすぐ吹けんようになるなぁ」
「仕方ないじゃない。苦手なんだもん」
「開きなおんなって！」
翔が軽くデコピンをした。
「痛った！　もう、すぐそうやって暴力振るうんだから」
「へへ～ん、そんなプリプリすんなって」
「別にそんな怒ってないもんね」
「コイツだんだん生意気なってきたな～」
「佐野に似たの！　ほら、サッサと練習しよう！」
「お前に言われんでもします～」
そう言って二人は楽器を手にした。
「どう思います、慎也さん」

美里が二人からバレないようにドアから覗き込んだ。
「さぁねぇ……付き合ってるようにも見えますが」
慎也も反対側から覗き込む。
「でも佐野くんいわく、ダメだったって」
「……そうなんだ」
「似合ってると思うけどねぇ……」
「まぁあれじゃない。音楽に集中したい～とかそういうこと言ってフッたんでしょうに」
「惜しいことするね、朝倉さんも」
「それは人にもよるでしょう。さ、アツいお二人は放っておいて私たちも練習、練習」
慎也はもう少し見ていたそうだったが、美里が襟を引っ張って無理やり音楽室へ連れ戻してしまった。

第35話　ドキドキ？　パート練♪（後書き）

あっちでドキッ☆　こっちでドキッ★　翔と陽乃、この二人のドキドキを知っている人は意外と多い！？

第３６話　さぁ、勉強！

「来た……」

陽乃は一枚の紙を片手に震えていた。

６月２７日月曜日。その日の午前中のホームルームで、一学期期末試験の時間割が発表された。７月１日からいきなりテストだ。時間割りは次のとおり。

（４日・月）　１：化学　　２：英語Ｒ　　３：古文
（５日・火）　１：数学Ａ　２：選択音楽
（６日・水）　１：現代文　２：現代社会　３：数学Ⅰ
（７日・木）　１：英語Ⅰ　２：保健体育　３：家庭科

理数系の科目に関しては陽乃は問題ない。英語も得意だ。現代社会や保健体育はおぼえるだけでいい。問題は、国語系の科目だった。特に古文に関しては陽乃が最も苦手とする部分だった。助動詞がまず覚えられない。「けり」だの「たり」だの「る」だの言われても何がなんだかさっぱりわからない。これで今の日本語と同じように昔の人が使っていたというのだから、驚きだ。それなら現代文はできるのか。そう聞かれると「バッチリよ！」とは言えなかった。

小説なら自信があった。主人公や登場人物の感情を読み取ったりするのが大の得意だから。しかし、評論や随筆となると頭の中はハテナマークだらけになってしまう。

しかし、先月祥夫に全教科９０点以上を取ると言った以上、国語もがんばらなければならない。ヒドい点だったりしたら部活を辞めなければならないのだ。そういうわけにもいかない。

「よしっ！　今日から頑張るか！」

陽乃は気合を入れて音楽室へ向かった。

家で勉強してもいいのだが、気づけば本棚にあるマンガに手を伸

ばしていつのまにか下からミックスジュースとコアラのマーチまで持ってきてカウチポテト状態。試験前に2キロも太ったこともある。こんな悲惨でみっともない失敗を繰り返さないために、陽乃は今回から試験勉強は学校ですると誓った。

「今は4時半……6時半くらいまではできるな」

昔は（といってもつい3ヶ月ほど前だが）門限は6時だったが、由利が祥夫に掛け合ってくれたおかげで門限はようやく厳しくなくなった。それでも8時までには塾の日以外は帰らなければならない。

「ちょっとは楽器も吹きたいし……ちゃっちゃと終わらせよう」

陽乃は現代文のノートを取り出し、範囲のプリントの復習にかかった。

「佐野～、今日はどうすんの？」

廊下で翔は拓真に声を掛けられた。翔は不機嫌そうに現代文の教科書片手に振り向いた。

「うっわ、すっごいブサイクな顔してるよ？」

「うっさいわ。テスト、マジヤバじゃ」

「現代文、苦手なの？」

「その逆。唯一好きやから、これしか勉強する気にならん」

翔はフイッとまた現代文の教科書に目を向けた。

「唯一……か。数学とか全然ダメなん？」

「大ッキライですが何か？」

翔はさっきよりますます不機嫌な顔で拓真に返した。

「な、なにもそこまで怒らなくてもいいんじゃ……」

さすがの拓真もこの怒り様にはドン引きである。

「どこで勉強するの？」

「音楽室。家じゃ集中できへんねん。親がジュースとか持ってきたり妹がチャカしてくるから」

「ふーん……」

翔のキャラから家族がどんな感じなのかを想像するのは難しくな

い。思わず拓真は吹き出しそうになった。
「なに笑ってんねん？」
苦笑いで翔が振り向いた。
「いや、佐野の家って楽しそうだなって思って……プッ」
「……まぁそのうち招待したるから、覚悟しとけ？」
翔はそう言って軽く拓真に肘鉄を喰らわせた。
「へへっ。楽しみにしてるよ。じゃあ勉強がんばれ！　またな」
「おぅ！　またな～」
拓真はすぐに階段を下りて姿を消した。翔はフゥッとため息を漏らした。
「数学、ホンマどないしよ……」
翔はトボトボと音楽室の扉を開けた。防音の扉なので重さがかなりあるが、今日は余計に重く感じられる。
「あーんもー！！　何が２５字以内で抜き出しなさいよ～！　んなとこライン引いとけばいいじゃないの～！」
ドアを開けた途端、女子生徒の叫び声が響いてきた。
「……！？」
翔は驚いてコッソリ音楽室を覗いた。すると、現代文のプリントをぶちまけて陽乃が机に伏せていた。
「朝倉？」
声をかけると、陽乃がガバッと顔を起こし、ぶちまけたプリントを慌てて拾い集めていた。
「何やってんの？」
「いちおう、勉強。見えないかもしんないけど……」
恥ずかしそうに陽乃はうつむいた。翔は隣の席に座り、椅子を陽乃の近くへ寄せてきた。
「現代文？」
「うん……意味不明でさ」
「ふ～ん……」
翔の手にも、現代文の教科書があった。

「佐野も？」
「うん。家じゃ集中できへんからここでしようと思って」
なるほど。考えることは一緒だったというわけか。陽乃は自分と考え方が似ている翔に少し親近感を感じた。
「あのさぁ、現代文やけど」
翔が急に陽乃のシャーペンを横取りし、説明を始めた。
「ここの問いはさ、『これ』が指す内容を２５字以内で抜き出せって言うてるんやろ？」
「うん。それがどこなのかさっぱりわかんない。頭、爆発しそう」
陽乃は頭をかきむしった。
「あのなぁ……まぁええわ。とにかく、『ここ』とか『あれ』とかって全部代名詞やろ？」
「うん」
「代名詞ってのは読んで字のごとく名詞の代わりやから、それまでに出てきた名詞を繰り返しを避けるために使ってるねん」
「あ、そっか」
「そしたら、ここの問いやったら直前の行……あ、こういう問いはだいたい５行くらい前を探し始めたらええんちゃうかな。それでもなかったら全体を見渡すこと。ここの問いやったらホラ、この辺から探し始めて……」
翔はラインをプリントに引っ張った。
「なるほど……あ、そしたらさ、もしかしてここの２５字が正解ってこと？」
陽乃はそのラインの中からさらに答えではないかと思った部分にラインを引いた。
「そうそう。やたら長いけど最後が『思考』っていう名詞で終わってるやろ？　ってことは、これが正解ってわけ」
「へぇ～！　スゴいね、佐野！　私、現代文全然だったけど、一発で理解させちゃうなんて！」
「ん～、まぁ現代文は要領つかめたら簡単やしな。まぁがんばれ。

オレはオレで頑張らんとアカンのあるし……」
そう言って翔はカバンから数学Ⅰの教科書を取り出した。
「数学？」
「そう。全然わからへんからマジヤバい。０点かも……」
「またまた！　そんなこと言っちゃって」
翔に限ってそんなことはないだろうと思ったら、急に目の前に一枚の紙を取り出して陽乃に押し付けた。
「ちょっと、何……？」
「いいから、開いて見てみ」
開くと『七海高等学校　第４０期生　数学Ⅰ　１学期中間試験』とのタイトル。横に『佐野　翔』。そして横に『１８』の数字。
「１８……点」
「そ。１８点。欠点赤点ララララ～」
言葉とは裏腹に、翔の表情が沈みきっている。
「……ねぇ、お願いがあるんだけど」
陽乃は灰色に近い翔の顔を覗き込んだ。
「何？」
「私さ、現代文と古文、サッパリなのよ。その代わり、数学とか英語とか理科系は得意なんだ」
「ホンマか！？」
翔が嬉しそうに身を乗り出した。
「う、うん。それで、佐野は国語系得意そうだから、私に教えてくれたら嬉しいな～なんて思って……逆に、私は佐野に理数系教えるからどうかなって思って……」
ガシッと両手を握り締め、翔は陽乃の手をそのままブンブンと上下させた。
「マジでか！　オレめっちゃ助かる！！　もちろん、オレも協力するから助けたって！」
「わ、わかったわかった！　それじゃあさ、お互い今回苦手科目９０点取るのを目標にしようよ！」

その瞬間、翔の顔が凍りついた。
「ちょっと？　どしたの？」
「お前さぁ……ふつうに考えてよ。前１８点の男がどうやったら９０点取れるんさ」
「頑張れば余裕よ」
ハァ～ッと翔はため息を漏らした。
「お前、楽観主義者？」
「まぁね」
陽乃はサラッと流して現代文のプリントを開いた。
「ホラ、いま5時でしょ？　６時まで現代文教えて。６時から7時まで私が数学教えるから。それで、３０分だけ二人で楽器吹こうよ」
すると翔の目が輝いた。楽器という単語に反応したようだ。
「えぇな、それ！　よっしゃ、ガンバルでぇ！」
単純だけど、そこがいい。陽乃は小さく笑ってシャーペンを握り締めた。

第３６話　さぁ、勉強！（後書き）

予想を超える翔の数学の点数……しかし、二人で部活を続けるためにも勉強を頑張らなければならないので、二人とも熱心に勉強するはず……？

第37話　マッピで試奏

「ん～……！　7時やぁ！」

翔はグーッと伸びをした。翔ははじめの方こそ「わけわからん！」とか「なんやねん、コレ！」と柄の悪い言葉を連発していたが、陽乃が「落ち着いて解けばわかるって」と何度も繰り返したおかげだったのか、公式を理解してすぐに応用できるようになった。そしてそのあとは範囲の問題集を一人でスラスラ解き始めたので、陽乃も自分の現代文のプリントを解き始めた。7時になる頃には二人とも問題集やプリントをほぼ仕上げていた。

「ホント、疲れた～……」

陽乃もグーッと伸びをする。今日ほど勉強したという感じがする日は今までなかったように思う。それもそれでマズイのだが。

「どうする？　楽器吹くか？」

翔は疲れたといった陽乃に気を遣っているようだった。

「大丈夫。勉強と楽器は別だから」

陽乃がニコッと笑って返すと翔も嬉しそうに歯を出して笑った。

部室に入り、二人は楽器を準備し始めた。やっぱり、自分には楽器に触れている時間が一番好きだな、と二人とも思っていた。

トランペットだけを持って陽乃は音楽室に入った。7時10分。片づけやらなんやらしているうちに7時40分くらいになるとすれば、やっぱりあと20分程度しか吹けない。それでも充分と思い、陽乃は誕生日に翔からもらったマウスピースを吹き始めた。

「使ってくれてるんや」

翔が嬉しそうに音楽室に入ってきた。

「うん。すごく吹きやすいから」

陽乃も嬉しそうに返した。本当に吹きやすい。監査会のときにこのマウスピースだったらもっといい演奏ができた気がする。

「プレゼントしたかいがあったわ。大切に使ってや」

「うん。ホントありがとね」
時々、思う。
あのとき、翔の告白にＯＫしていたら今の自分はどうしているだろうと。でも考えても考えても想像ができない。というか、翔と自分が吊り合わない気がしているからだ。いつか吊り合うような関係になればな、と思う。
「おい、聞いてんのか？」
「へっ？」
「やっぱ聞いてなかったな。もう7時半やって。片付けよう」
「うそ……もう？」
時計を見ると、もう7時半を過ぎていた。この学校はどっちにしても8時には警報システムが作動するので出なければならない。陽乃にはちょうどいいシステムかもしれないが。
「ホントだ。出ようか」
「おう」
陽乃はそのまますぐに準備室に入った。しかし、後に続いてきていると思った翔がいない。
「佐野～？　何やってんの？」
「あ、あぁうん、すぐ行く」
しかし、陽乃がトランペットを片付け終わっても一向に来る気配がない。そこで陽乃はトランペットのマウスピースを机の上に置きっぱなしだったことに気づいた。翔にもらったほうではなく、以前使っていた翔の楽器についていたほうのマウスピースだ。
「いけない！　危ないトコだったなぁ」
慌てて陽乃が音楽室に入ると、翔がかなり驚いた様子で振り返った。
「何やってんの？　私、もう楽器片付け終わっちゃったよ？」
「あ、そうなんや。わかった……」
翔は何か言いたげな顔で音楽室を出た。
「……？　変なの」

陽乃は首を傾げながらマウスピースを手に取ろうとして気づいた。
位置が変わっている。
なんとなくだが、左端に置いてあったのに右手前に来ている。
「はは～ん！」
陽乃はピンと来てマウスピースを片手に部室へ向かった。
「佐・野！」
陽乃は嬉しそうに笑いながら翔の首に手を回した。
「うわぁ！　な、なんやねんお前！」
翔は顔を真っ赤にして手を振りほどこうとした。
「あんたさ～、ひょっとしてトランペット吹いてみたいとか思ったの？」
「バッ……そんなんやない！」
翔はすぐに陽乃の手を振りほどいて顔を背けた。
「そーだよね～。いつだかオレは浮気せんからねとか言ってたもんね～」
陽乃はニヤニヤしながらマウスピースをケースに片付けようとした。と急に後ろから襟を引っ張られた。
「ウェッ！　ゲホ！」
思わずあまり発したくない声を出してしまった。むせながらも陽乃は慌てて振り返る。
「アンタね～！　女の子に品のない声、出させないでよ……？」
翔の手が陽乃の前に伸びている。
「……何？」
「吹かせて」
見る見るうちに翔の顔が赤くなる。
「やっぱり吹きたいんじゃん」
「……うん」
陽乃はケースから前のマウスピースを取り出して翔に手渡した。
といっても、元々翔のものなのだが。
「はい、どーぞ」

「ありがと」
翔は嬉しそうにマウスピースを手にして音を吹いた。案外、綺麗に音が鳴った。
「へぇ……なんか悔しいな」
陽乃が苦笑いすると、翔も少し恥ずかしそうに笑った。はにかんだ様子が意外とカワイイな、コイツ。陽乃はそんなことを考えて少し赤くなった。
しかし、最近は翔も陽乃も赤くなりっぱなしだ。全部翔のせいだと陽乃は思う。
「金管も、たまにはえぇな！」
翔は急に声を上げた。
「そうでしょ？　でも私はサックス吹いてみたいなって思うこともあるけどね」
「お前も浮気癖あんのか？」
ニヤニヤしながら翔が聞いた。
「なっ……！　アンタに言われたくないわね、バカ！」
オマヌケなやり取りをしていると、守衛さんに「君たち、もう7時45分だよ！」と言われたので二人は慌てて片付けて部室を飛び出した。

「ひょえ〜怒られた、怒られた！」
翔はニコニコしながら軽く言い飛ばした。あのあと、翔が財布を忘れて学校に戻ってさらに時間を食ってしまい、翔は守衛さんに怒られたらしい。怒られてもぜんぜん気にしないあたり、翔らしい。
「アンタって幸せそうでいいよね〜」
陽乃はため息を漏らしながら上を見上げた。
「なんで？　どないしたん急にオセンチになって」
オセンチ。センチメンタルのことか？　わかりにくい言い回しだ。
それはいいとして。
「だってさぁ、あの人と約束しちゃったから」

最近、陽乃は祥夫のことを『あの人』呼ばわりするようになっていた。まともに口も利いていないし。
「『あの人』言うな。お父さんやろ？」
翔は少し暗い口調で言った。
「だって佐野にもヒドいこと言ったし、私のことちーっともわかってくんないし。佐野の家とは事情が違うの」
「だからって、それはちょっと寂しいと思うな～……」
少し心が痛んだ。そんなことくらいわかっているが、まだ受け入れられるような状態ではない。
「まぁ、約束守れば問題ないし」
「約束？」
「そ。今度のテストで全教科９０点以上取るの約束したの」
「はぁ～……そりゃまたスゴいお約束をしたことで」
「うん。意地でも全部９０点取らないと、部活辞めなきゃなんないからね」
その一言に驚いた翔は思わず転びそうになった。
「おい！　朝倉！」
ガシッと翔は陽乃の肩を両手で掴んだ。
「はやっ！　っていうか何！？」
「お前、これから毎日オレの家来い！」
「はぁ！？　いや、佐野さん？　言ってることが意味不明ですが……」
陽乃はさすがにドン引きしていた。いきなり毎日家に来いと言われても困りものさ。
「オレの母親がオレより国語得意やから、意地でも見てもらえ！」
「い、意地でもですか？」
翔は大きくうなずいた。
「お前に今、サークル辞めてもろたらめっさ困る。な、頼むわ？」
さすがに翔の家に行くのは気が引けるが、部活を辞めることの方が気が引けてしまう。それに、佐野のお母さんなら大丈夫か。

陽乃はそう思い「わかった。明日からお邪魔するね」と返事しておいた。

「よっしゃ！　オカンにはオレから言うとくから、明日からヨロシク」

ビシッと警察官のようなポーズをとって、翔は津上橋の南側へと向かっていった。信号が赤に変わる。

「じゃーな！　また明日！」

翔はいつもと変わらない笑顔で手を振った。陽乃も笑顔を繕って手を振ったが、翔が見えなくなるとため息がすぐに出てしまう。

陽乃は翔の姿が見えなくなると、カバンから一枚のチラシを取り出した。

『三田嶋　樹　Ａｌｔｏ　Ｓａｘｏｐｈｏｎｅ　Ｓｏｌｏ　Ｃｏｎｃｅｒｔ　ｉｎ　Ｙｏｋｏｈａｍａ　Ｃｉｔｙ♪』

「そのうち息抜きしに行こう……」

陽乃は小さく呟き、チラシをカバンにしまいこんだ。

第37話　マッピで試奏（後書き）

単純にＴｒｕｍｐｅｔが吹きたかっただけだったのでしょうか、佐野は……？　そして陽乃はいつどこへ息抜きに？　ちなみに、タイトルの「マッピ」とは「マウスピース」の省略形です♪

第３８話　陽乃はどこへ？

テスト最終日。今日は保健体育に家庭科と副教科ばかりだったので、翔もそんなに緊張せずにテストに取り組めた。陽乃とは９０点目標と言ったが、まぁそこまで行かずとも悪い点でもないように思う。終礼も終わり、陽乃と部活へ行こうと教室を見渡したが、陽乃の姿が見当たらない。

「あれ？」

翔はキョロキョロと教室を何度も見渡すが、やはりいない。廊下に出てみてもいなかった。今日は掃除当番ではないはず。

「おっかしいなぁ……」

翔が頭をかきながら悩んでいると、後ろから小さい声が聞こえてきた。

「誰かお探しで～？」

「！？」

振り向くと、沙希がいた。ニヤニヤと妖しげな笑みを浮かべている。

「べ、別に！　なんとなく外見てみただけ」

「ふぅ～ん……？　ひょっとして、こんな人をお探しだったり？」

沙希はペラッと陽乃と沙希が一緒に写った写真をポケットから取り出した。

「わわわ！　アホ！　出すなや、それ知ってるんお前とオレと朝倉くらいやぞ！？」

「なーんだ、そうなの？」

「そうじゃ！　あんまりおちょくるな！」

翔は頬を赤らめながらうつむいた。最近、何度赤くなったら気が済むのだろうど自分でも思う。そのうち、トマトになっちゃうんではないだろうか。本気で心配だ。

「でもさぁ、残念なお知らせがあるんだよね～」

「なんやねん？」
「みさっちと慎ちゃんも薄々感づいてるよ？」
「なにぃ！？」
みさっちとは美里のこと。慎ちゃんとは慎也のことだ。
「まさかお前が……！」
翔は真剣に怒りながら沙希の肩を掴んだ。
「バカ言わないでよ！　アンタの態度がバレバレなの！　教室で陽乃が昼寝してんのジーッと見たり、わざわざ陽乃のノートだけ一緒にとって渡してあげたり。ワザとらしいのよ。残念ね」
「くぅ～……オレのアホウ！」
翔はポカポカと自分の頭を叩いた。
「それと」
沙希がちょっと呆れながら付け足した。
「もうひとつ残念なお知らせ」
「今度はなんやねん……」
すっかりテンションが下がってしまった翔は聞く気がしないらしい。沙希はこっちのほうが重要と思い、言った。
「陽乃は今日、部活休み」
「え？」
翔は聞いていない。今日も昨日も、そんな話は聞いていなかった。

その頃、陽乃は小田急電鉄七海駅の切符売り場に立っていた。
「えーっと……とりあえず急行か各駅停車で登戸駅まで出て、そこからＪＲ南武線に乗り換えて川崎駅まで出た後に京浜東北線で横浜駅かぁ……けっこう遠いなぁ」
陽乃は交通地図をケータイで検索した。
「なになに……今が七海駅でしょ。小田急電鉄の各駅だと『読売ランド前駅　↓　生田駅　↓　向ヶ丘遊園駅　↓　登戸駅』ね。急行なら一駅か。なるほど。そんでＪＲで登戸駅から……読むのめんどくさいから飛ばして川崎駅で、京浜東北線も読むのめんどくさいか

ら川崎駅から横浜駅かぁ。遠いなぁ……」
今度は腕時計を見た。今は12時50分頃だ。今日のコンサートの開演時間は午後5時から。
「まぁ、時間は余裕だからゆっくり間違えないように行こう」
『まもなく、新宿方面の列車が入ります。危ないですから、白線の内側へお下がりください』
各駅電車が滑り込んできた。陽乃は躊躇なく電車に乗り込んだ。

「朝倉の欠席理由？」
翔は今日の練習内容を恭一に聞きに行ったついでに陽乃の欠席理由を聞いてみた。
「なんでも、法事があるらしい。それで早退ってことになっている」
「そうッスか……わかりました」
翔は少し納得しない感じだった。
「なんだ、お前は欠席理由聞いていないのか？」
「はい。何にも……」
「そうか。今度からちゃんとお前にも連絡するようにさせないとイカンなぁ」
「そうしてもらえたほうが……？」
恭一の顔がニヤついている。
「なんですか？　その顔……」
「いや、お前らホント仲いいな」
「なっ……！」
またかよ！
翔はそんなことを思いながら本日2回目、顔が赤くなっていることにさらに恥ずかしくなった。もうどこまで話が広がっているのかわからない。
「ちゃいます！　別にそんなんじゃないです！」
「またまた～。お前ら、俺らに隠れて付き合ってるんじゃないのか？」

「付き合ってません！」
翔はプイッと顔を恭一から背けた。これじゃ小学生か中学生だ。
といっても、半年前は中学生だったのだけれども。
「照れなくてもいいだろ～」
さすがにガマンの限界に達した翔は、大声で職員室中に響く声で叫んだ。

「こないだ告ったけどフラれましたがなにか！？」

一気に職員室が静まり返った。恭一も唖然としている。
「……失礼しました」
翔は小さくなりながら職員室を後にした。

『登戸、登戸です。ＪＲ南武線ご利用のお客様はお乗換え下さい』
小田急電鉄登戸駅から今度はＪＲ南武線に乗り換えなくてはならない。実は陽乃は七海市内からあまり出たことがない。しかも七海市周辺だと賑やかな地域は登戸と新百合ヶ丘のほうで、新百合ヶ丘の方が自転車で行ける距離でもあるので陽乃はもっぱらそちらへ行くことが多かった。
「人、多いなぁ……」
登戸駅もけっこう賑やかだ。２番ホームから陽乃は下車して改札を一旦出た。登戸駅はＪＲと小田急は隣接しているのだがなぜか行き来する改札がなく、一旦出るしかないのである。ＪＲの登戸についた後も陽乃はかなり慎重だった。
「よし！　３番ホームだね」
陽乃がホームへの階段を駆け上がると同時に『まもなく、３番の

りばに各駅列車が入ります』という放送がかかったので一段飛ばしで階段を駆け上がった。

「あれ？　おっかしいなぁ……」

翔が何か探し物をしているのに気づいた雪子が近寄ってきた。

「どうしたの？　何か探し物？」

「うん……オレの好きなサックス奏者の人のコンサートのチラシがここらへんに置いてあったはずやねんけど」

「チラシ？」

「うん……赤色の背景でな、男の人がサックス構えてる写真が載ってんけど……おっかしいなぁ」

「そういえば……」

雪子が思い出したように呟いた。

「朝ちゃんが昨日か一昨日にそのあたりから1枚、何か抜き出してるのを見たけど……」

「……まさか」

翔は慌ててケータイを取り出した。

「一番後ろの車両はケータイの電源をお切りくださ～い」

陽乃はなんとか間に合った各駅列車の中で携帯電話の電源を切った。関西の私鉄から始まったらしい携帯電話電源ＯＦＦ車両はＪＲにも浸透しつつあった。妙なところで几帳面な陽乃は車内に入るなり電源を切ってしまった。

「楽しみだな～♪　Ｓａｘの生演奏が大きな会場で聴けるなんて」

陽乃はもう一度チラシをカバンから取り出した。

「三田嶋　樹さん！　ネットで見て以来だけど、実物見れるなんて私は幸せ者！」

取り出したチラシをすぐにまたカバンへしまいこみ、陽乃はＭＤを聴き始めた。

『現在おかけになった番号は電源が入っていないか、電波の届かないところに入っております』

「なんやねんアイツ～……どこ行ってんねや？」

翔はさっきから何度も電話をかけなおしているが、一向に繋がらない。

「あのコンサート、来月やっちゅうの」

陽乃が持っているチラシのコンサートは、来月実施のものだった。

第３８話　陽乃はどこへ？（後書き）

陽乃らしい失敗をしています……。そして翔も職員室で思わぬ発言をしてしまい……。陽乃はどうなるのでしょう？

第３９話　トンチンカンの偶然

「着いた～！　とうとう横浜駅に到着！」
しかし、思った以上に横浜駅は広い。さすが神奈川県の県庁所在地。陽乃は少し緊張していた。若干方向音痴の気がある陽乃にとって未知の都市を歩くのはそれだけで緊張してしまう。
「新都市ホール……間違わないようにしなきゃ」
しかし、横浜駅から下車５分だ。間違えようがない。さすがの陽乃も自信を持って歩いていく。
「それにしてもすごいな～。さすが横浜。もっとお金持ってきたら良かったかな……」
いろんなお店がある。コンサートの後に見て回ったら楽しかっただろう。
「今度雪ちゃんさサキティ連れて来ようかな？」
陽乃は嬉しそうにキョロキョロと周囲を見渡す。横浜駅東口からすでに見えているビルが新都市ホールだ。
「うわぁ～……スゴい！　あれが新都市ホールか」
七海市内にある東急デパートと同じくらいの規模だ。駅前にこんなホールがあること自体、陽乃には驚きだった。
「それで……ここの９階っと」
エレベーターで一気に９階へと上がる。
「よし！　ここだ……！？」
しかし、ホールの前に上がっていた看板は――。

『蓮が野池商店街組合　活花展覧会』

「へ！？」

活花？

あの活花？

陽乃は慌ててチラシを取り出して日付を確かめた。

『三田嶋　樹　Ａｌｔｏ　Ｓａｘｏｐｈｏｎｅ　Ｓｏｌｏ　Ｃｏｎｃｅｒｔ　ｉｎ　Ｙｏｋｏｈａｍａ　Ｃｉｔｙ♪』開催場所：新都市ホール（ＪＲ横浜駅東口より徒歩５分、横浜新都市ビル９階）開催日時：２００５年８月４日』

「……。」

コンサートは来月だった。

「私のバカ……」

陽乃はフラフラとロビーにあるソファに座り込んだ。

その頃、翔たちは恭一の指揮で『ＪＥＷＩＳＨ　ＦＯＬＫＳＯＮＧ　ＳＵＩＴＥ』の３楽章を合奏していた。陽乃の予想どおり、３楽章が練習曲となった。しかし、陽乃が抜けているので時々メロディがいなくなる。

「やっぱりトランペットがいないとキツいなぁ」

恭一が苦笑いする。しかし、翔は本当のことをいわずに合奏に参加していた。

（後でもっぺん電話しよ……）

翔は小さくため息を漏らした。
「佐野！　続きやるぞ！　Bから！」
「あっ、ハイ！」
3楽章の前半部分はサックスはあまりメロディがない。どちらかといえば伴奏で伸ばしや打ち込みをしていることが多い。翔は意外とこの伴奏というものが苦手だった。
Bの部分は冒頭の動きとは異なり、メロディが変化する部分。サックスは4分音符で伴奏をしている。美里は器用にタンバリンを叩いている。この曲ではスネアドラムも必要な動きをしていることが多いのだが、どちらかといえばタンバリンの方を重要視してほしいということで、美里はタンバリンに最近熱中していた。
「そこ！　クラリネットとフルート、もっとトリルはっきり吹いて。モゴモゴしてて、何をやってるかわからんからな。それからタンバリンももっと目立っていいぞ」
「はい！」
絵美と由美子、沙希、美里の4人の返事が聞こえる。外ではセミも鳴きはじめている。今年は少し涼しい夏になるそうだ。
しかし、Bの部分はやはりトランペットがいないと物足りない感じがする。翔はチラッと空席になった陽乃のスペースを見た。

（この曲、トランペットしんどいんだよね～）

そんな顔をしている陽乃がふと思い出された。
「はい！　そしたらもう一度Bから吹いて、上手くいけたらCに入るぞ。Cから水谷と川崎、メロディしっかりな」
「はい！」
春樹の少し高い声と、慎也の低い声がハモッた。

プシュッ、といい音を立てて陽乃は『みっくすじゅーちゅ』の栓をを開けた。

「あ〜、おいしい」
陽乃はしばらく悩んでいた。せっかく横浜に来たのに、何もせずに帰るのもバカらしい気がする。
「ちょっとウインドウショッピングでもして帰ろうかな」
陽乃が立ち上がった瞬間、エレベーターのドアが開いた。
「なるほど、来月ここで演奏なんだね」
男の人の声。続いて、女の人。
「そうですよ！　それにしても、横浜でソロコンサートを開けるなんてイツキさんも感動じゃないですか？」
イツキさん！？
陽乃はバッとその方向を見た。
「ウソ――！」
陽乃は思わず声を上げてジュースの缶を落としてしまった。

そこにいたのは、あの三田嶋　樹だった。

第３９話　トンチンカンの偶然（後書き）

陽乃のトンチンカンが引き起こした偶然――有名Ｓａｘ奏者・三田嶋　樹との出会い！　さぁどんな関係に発展するのか！？

第４０話　本物だ！

「……本物だ」

陽乃はエレベーターから降りてきた三田嶋　樹を呆然と見つめていた。樹も陽乃の視線に気づいたようで、ニコッと笑って会釈をした。

「ん？」

樹は陽乃が左手に持っているチラシに気づいて近づいてきた。

「君、ひょっとしてコンサートを聴きに来た？」

「あ、はい！　アハハ、でもこのコンサート来月の４日だったんですよね！　スゴい恥ずかしい……」

陽乃は顔を赤くしながらチラシを無理やりカバンの中に収めた。

「神崎さん」

樹はマネージャーさんらしい神崎という女性に何やら話している。神崎さんもニコッと笑って「それはまったく構いませんよ」と言った。何のことやら陽乃にはさっぱりわからない。

話し終わった樹はまた陽乃のところへ戻ってきた。

「えっと、君、名前はなんていうのかな？」

「あっ、朝倉陽乃です」

「うんうん。朝倉さん。今から僕、リハーサルをそこの部屋でするんだけどせっかくだし、よかったら聴いていかないかい？」

「えっ！？　い、いいんですか？」

「もちろん。こっちへおいで」

樹はＳａｘが入っているらしいケースを片手に、陽乃を手招きした。

「どうぞ。こちらへいらしてください」

神崎もそういうので、陽乃は言われるがまま二人の後を付いていった。

入った部屋は、リハーサル室といってもかなり立派な部屋だった。

防音設備も照明も、ふつうのホールとは何ら変わらない感じがする。といっても、陽乃がそういう部屋に詳しいわけでもなんでもない。今までの経験上、体育館くらいでしかも合唱コンクールでスポットを浴びた程度なので、このリハーサル室の設備がどれだけすぐれているのかはよくわからない。

「そういえば、朝倉さん」

樹が楽器をセッティングしながら唐突に聞いてきた。

「はい。なんでしょう？」

妙にかしこまった返事になってしまう。それだけ緊張しているのだ。

「君って、どこの高校だい？」

そういえば今日は制服を着て来ている。つい3年前に七海高校の制服は変わったので、知らないと思う人がけっこう多いのかもしれない。市内でも言われるまでは気づかない人が多い。それだけデザインが変わったのだ。

「七海市立の七海高校です」

それを言った瞬間、樹の動きが止まった。神崎が紙コップに入れたお茶を陽乃に手渡しながら「それは奇遇ですね。私も樹さんも七海高校の出身なんですよ」と微笑んだ。

樹が七海高校出身だったのはネットで調べて知っていたが、神崎までそうだとは思わなかった。

「ひょっとして朝倉さん、吹奏楽サークルかい？」

どうしてわかったのだろう。言った覚えはない。

「そうです。トランペット吹いてます」

「なるほど……」

神崎からお茶を受け取って樹はしばらく黙り込んだ。

「もうちょっと質問、いいかな？」

「はい、構いませんけど」

陽乃はもう一度お茶を口にした。おいしいお茶だ。夏場にピッタリということは烏龍茶あたりだろうか。色も濃いし。

「吹奏楽サークルの代表って、佐野くんって言ったりする？」
思わず陽乃は紙コップを落としそうになった。
「な、なんでご存知なんですか！？」
「いやね～、ついこないだかな。つくし野川の土手沿いで佐野くんがサックス吹いているのを見て、ちょっとお話してね。『ＴＲＵＴＨ』吹くけどソロが音裏返るからちょっと吹き方のコツとかもいろいろ話をしてね」
とすると、あのときの女子学生の言っていたイケメン二人とは、樹と翔のことだろうか。
「残念ながら朝倉さんはコンビニに買い物に行ってる途中だったみたいで、お話できなかったけど……そうか、偶然だなぁ」
意外なところで意外なつながりができていることに陽乃はただただ驚くばかり。
「そういえば、顧問は誰なんだい？」
さすがにここまでつながりがあったら……と思ったが、よく考えると樹も恭一も吹奏楽部のＯＢだ。知らないほうが珍しいかもしれない。
「東先生です。東　恭一先生」
「へぇ！　東先輩なんだ！」
樹はすごく嬉しそうな声を上げた。
「なるほどね～！　先生になったとは聞いていたけど、七海高校に赴任されてたんだ」
「はい。今は私と佐野くんの担任ですよ」
「そうなのか。うーん、やっぱり彼も吹奏楽とは切っても切れない縁があるんだなぁ」
吹奏楽をやっているといろんなところでいろんな人が繋がっているんだということに、陽乃は感激していた。
「何を隠そう、僕も七海高校吹奏楽部の出身でね。僕らが引退した翌年に事情があって廃部になったんだけど、君たちがまたサークルから出発したって聞いたときは嬉しくてたまらなかったよ」

樹は本当に嬉しそうに喋りながら何やら細長いサックスを取り出した。
「そこの神崎さんも、僕の同期生でね。彼女はオーボエをやっていたんだ」
陽乃がチラッと見ると、神崎は舞台の手前でオーボエの手入れをしていた。
「そうなんですか……スゴイなぁ。いろんなとこでいろんな人が繋がってる」
「これは何も吹奏楽に限ったことではないと思うけどね。特に吹奏楽は個人競技とは違って個人の力が集まって初めてひとつになるからね」
「……？」
陽乃はいまひとつ何を言っているのかわからなかった。
「あぁ、そうか。君はまだ楽器を吹き始めて間もないんだっけ」
「はい。まだ3ヶ月くらいで……」
さっきのサックスがストラップ（※1）もついて樹と一緒になって陽乃の視界に飛び込んできた。銀色の綺麗な楽器だ。サックスの一種だろうか。
「たとえば、これはソプラノサックスって言って、アルトサックスより音域が高い楽器だけど」
そういって樹は軽く音階を流した。木管楽器は素早い動きができるからうらやましい。
「主にメロディを吹くんだけどね。たとえばソプラノが合奏中にむせたりして抜けちゃったとしようよ。もちろん、周りはパーカッションやチューバ、他の楽器の伴奏がずっと鳴っているよね」
それはそうだった。自分たちの監査会の演奏でも拓真と美里がしっかりリズムを取っていたから翔がソロを吹いたり、陽乃が安心してメロディを吹けていた。
「メロディが抜けた途端、音楽としてはまったく意味がわからないものになってしまうんだ」

仮に『ＴＲＵＴＨ』で翔のソロが抜け落ちたらと思うと、もうそれは『ＴＲＵＴＨ』ほど遠い曲になってしまうだろう。
「逆に、パーカッションやチューバが抜けるとバンド全体が崩れてしまう」
美里や拓真が吹奏楽サークルにいなかったら……。『ＴＲＵＴＨ』以外に何が演奏できただろうと考えてみても、伴奏が抜け落ちているのだからどれもできない。
「みんないなくなって初めて気がつくんだよ。あのパートがこんなに重要だったのか、とかこのパートはこんなに大変なんだな、とかね」
「そうですね……うん、そうだ」
陽乃は何度も樹の言葉を反芻した。今の吹奏楽サークルメンバーの誰か一人が欠けてしまうときっとガタガタになってしまうだろう。
「だから、みんなで協力してサークルをどんどん、大きくしていってくれよ？」
樹はニッコリ微笑んで言った。陽乃も笑顔で強くうなずいた。
「よし！　それじゃあちょっと練習しよう。おーい、神崎さん！」
呼ばれると、神崎は嬉しそうに走りよってきた。
「そういえば、二人とも自己紹介がまだじゃないのか？」
樹の一言に、二人とも顔を見合わせた。そういえば、名字しかわからない。
「ほら、やっぱりそうだ。自己紹介、自己紹介」
樹に促されるまま、陽乃は神崎に向かって自己紹介を始めた。
「七海高等学校吹奏楽サークルでトランペットを吹いてます、朝倉陽乃といいます。よろしくお願いします」
すると神崎は今まで陽乃が見た中で一番まぶしい笑顔で返してきた。
「樹さんと同じ吹奏楽部出身で、今はマネージャーをやってます、神崎しおりと申します。よろしくね、朝倉さん」
（はぁ～……美人。この世にはこんな美人がいるのか）

陽乃は思わず見とれてしまった。
「どしたの？」
樹がジーッとしおりを見つめる陽乃に声をかけた。陽乃は呆けたまま「いや、美人だなぁと思って……」と言ってから恥ずかしくなった。
しおりはクスクスと笑って「ありがとう。でも、朝倉さんだってすごくステキよ」と言ってくれた。
「やだ……私、まだそんなんじゃないですよ」
ふと気づいた。
さっきからしおりは樹を下の名前で呼んでいる。
「あの……」
陽乃はおそるおそる二人に聞いた。
「もしかして、お二人はお付き合いされてたり……します？」
しおりと樹は顔を見合わせて同時に「プッ」と笑い出した。
「アハハハ！　おもしろいこと言うね、朝倉さん」
樹は豪快に笑い出した。隣でしおりも声を上げて笑っている。
「それはないわ。ふつうの友達関係よ。ね、樹さん？」
「あぁ、高校時代からずっとそうさ。何も変わってないよ」
「あ、なんだ……神崎さんがずっと三田嶋さんを下の名前で呼んでるから、そう思っちゃいましたよ」
陽乃は苦笑いして下を向いた。
「さぁ、そろそろ練習始めるか」
「そうですね。朝倉さん、ゆっくり聴いていってね」
「はい。ありがとうございます」
やっぱり神崎さんは美人だな、と陽乃は横顔を見て思った。お化粧も上手だし。うらやましい。
いろいろ考えているうちに、二人は舞台に上がって演奏を始めた。どうやら、今日は二人で演奏するらしい。
しかし、思った以上に曲のテンポが速い。少し民族的な雰囲気もする。陽乃はスッと目を閉じて曲に聞き入った。

はじめはしおりのオーボエが細かい旋律を吹いている。後を追うように2回目の同じ旋律に樹のサックスが加わる。音色がさっきのソプラノと違う。いつのまにかアルトサックスに持ち替えていた。素早い動きもプロといったところか。

音がサックスの伸ばしだけになった。どうやら違う楽器がメロディをしているようだ。その後すぐにしおりのオーボエがすごい速さで音階を駆け下りた。そしてまた最初の部分が再現される。やがて音程が変わってその部分が一旦終わったようだった。

「……スゴい！　スゴいです！」

陽乃は感激して何度も拍手をしていた。

「今日は出だしからなかなかだな」

「そうですね。当日もロングトーンする時間、少ないですし」

陽乃はこの二人が羨ましくてたまらない。こんなに自分も上手に楽器が吹けたらなぁと思う。

「そうだ、朝倉さん」

樹がパタパタと舞台から降りて、陽乃に5枚のチケットらしいものを取り出した。

「これ、来月の4日のソロコンサートのチケットだよ。よかったら見に来てくれないかい？　あ、曲は今二人で吹いたのとは違う曲だけどね」

「ほっ、ホントですか！？」

陽乃は5枚のチケットを受け取った。当然ながら、本物だ。

「ありがとうございます！　絶対、行きます！」

「ありがとう。それと、8月の13日に一般の部でコンクールがあるんだ。よかったら、それも聞きに来てね。メルアドとか教えてもらえる？」

樹はケータイをズボンのポケットから取り出した。陽乃は嬉しさのあまりケータイを落としそうになった。

「嬉しい！　私、一度お会いしたかったのに、メルアドまで教えてもらえるなんて！」

「またよかったら、近況とか時々聞かせてね」
樹は優しく笑って言った。
「もちろんです！」
陽乃は夢のような気分で赤外線でメルアドなどを交換した。

第４０話　本物だ！（後書き）

ネット上でしか見たことがなかった三田嶋　樹に出会った陽乃は大興奮！　演奏会のチケットももらってステキな時間を過ごせたのでした。ところで、翔との連絡が取れないのですが……。

第４１話　雪子の想い

部活が終わってからも翔は何度も陽乃の携帯電話に連絡を入れたが、いつまでたっても「電源が入っていない」というメッセージばかりが流れていた。

「あんのアホ……どっかで迷ってんのか？」

翔は苛立ちながらケータイをもう一度開いた。『朝倉』の表示。プッ、プッ、プッと音はするがすぐに「この電話は現在、電源が入っていないか――」というメッセージ。ふつうに考えて電波が入らないような場所に行くとしたら、このあたりでは地下鉄に乗っているとしか思えない。しかし、横浜市営地下鉄を使ってこのコンサートの目的地に行くことはできない。一体どこで何をしているのか。

「どうしたの？　佐野くん」

後ろから雪子が声を掛けてきた。翔はケータイとにらめっこをしたまま雪子に返した。

「朝倉が勘違いして来月のコンサート今日やと思って聴きに行ったんねん。アホやな、アイツほんまな」

「そうなんだ……」

雪子は少し顔を背けながら呟いた。

（なんで……なんでいつも朝ちゃん朝ちゃんなんだろ）

「ックソ！　いつまでたっても電源入ってないってどういうことやねん……？」

不意に、翔の左手に温かい感触が伝わってきた。

「……へ？」

振り向くと、雪子が右手で翔の左手を握り締めていた。

「永井さん？　どしたん？」

「……んで」

「へ？」
「なんで？」
何の話が始まったのか翔はサッパリわからない。
「ちょ、永井さん？」
翔を握る雪子の手が震えてきた。翔はだんだん焦り始める。こんな玄関で手を握られているところを（これでは明らかに手を繋いでいるようにしか見えない）誰かに、特に吹奏楽サークルメンバーに見られたらひとたまりもない。
「なに？　なんなん？　何か言いたいことあんの？」
「放したいって思ってるでしょ。この手」
思っていることを言い当てられてギクッとした。
「こんなとこ見られたら大変。早く放して」
「……。」
「そうでしょ？」
雪子の目がいつのまにか涙で濡れていた。訳のわからない展開に翔はオロオロするばかり。
「なんで？」
「なにが……？」
何が何でなのか。それを言ってもらわないと翔だってわかるはずがない。
「なんで佐野くんはいつもそんなに朝ちゃんのこと、気にかけるの？」
「ん……」
問い詰められて翔は黙り込んでしまった。
「好きなの？」
翔の胸の辺りがチクッと痛んだ。
「好きなんでしょ？　朝ちゃんのこと」
翔は返事ができない。正確に言えば、フラれた。でも今も好きかどうかと聞かれたら、自分の気持ちは――。
「顔に出てる。佐野くん、すぐ顔に出るんだもん」

「……。」
重苦しい空気が二人の間に流れる。玄関ホールにある時計は秒針がないはずなのに、今にも音が聞こえてきそうだ。
「私、佐野くんのこと好きだから」
「えっ……」
それだけ言うと、雪子は駆け出していった。
「永井さん！」
翔が名前を呼ぶと一瞬だけ足を止めて「さん付けで呼ばないで！朝ちゃんは呼び捨てにするくせに……」とだけ言ってすぐにまた走って行ってしまった。
「待って！　永井さん！」
翔もすぐに追いかけた。

「ありがとうございました、ホントにいろいろ」
陽乃は七海高校の前まで樹としおりに送ってきてもらっていた。
「いやいや、全然構わないんだよ。それより、懐かしいなぁ……何年ぶりだろう」
樹としおりも車から降りて、七海高校の校舎を見上げた。
「制服は変わっても、この校舎は変わらないですね」
しおりが呟く。陽乃もこの校舎をそう思う日が来るのだろうか。
「それじゃ、ホントに今日はありがと……わぁお！？」
陽乃がもう一度二人に礼を言おうとすると、後ろから誰かに突き飛ばされて倒れそうになった。思わずしおりに倒れ掛かってしまった。
「大丈夫？」
「あ、はい！　すいませんなんだかそそっかしくって……」
陽乃は突き飛した人がいるほうを見た。

「あれ？　雪子？」
雪子が一瞬、足を止めた。目が濡れているように見えた。
「……！」
雪子は何も声をかけず、すぐに走り去っていった。
「ちょっとー！　雪子～？　どうした……うひゃあ！？」
追いかけようとしたところでまた誰かに突き飛ばされる。
「今度は誰～！？」
足を押さえながら振り向くと、息を切らした翔がいた。
「なんだ、佐野じゃん」
「あっ、朝倉……」
汗をかいている。何も暑くなってくる時期に走ることはないのに雪子も翔もなんでそんなに全力疾走をしていたのだろう。
「あ、あぁ、どないしよ……」
変にオロオロする翔を少し不審に思ったが、陽乃は樹としおりのことを紹介しておこうと思い足を払って立ち上がった。
「ね！　佐野！」
「う、うん？」
翔は取り繕った笑顔で陽乃のほうを向いた。
「あのね、こちらの方が……」
「あ！」
陽乃が紹介するより前に、翔は驚いた顔をした。同時に樹も優しく微笑んで「久しぶりだね、佐野くん」と言った。
「あの時はお世話になりました！　おかげでソロ完璧に吹けましたよ！」
「そうか！　そりゃよかったよ。いや、でも君はもともといい音をしているからね。そのあたりは心配ないと思っていたけれど……」
どんどんと会話を続ける二人の間で、陽乃は呆けていた。
「あ、そうか。あの時朝倉さんはいなかったんだったね」
樹が思い出したように苦笑いで言う。
「あ、そういえばそうやったっけ」

翔も苦笑いで陽乃のほうに向き直った。
「つくし野川で練習した日、覚えてる？」
翔が陽乃に聞いたので、陽乃もコクコクとうなずいた。
「あの時、朝倉がコンビニに電池買いに行ってる間に三田嶋さんに教えてもらってん、いろいろと」
「あ、そしたらやっぱりあのときの……」
「なに？」
イケメン二人って翔と三田嶋さんだったんだ、と言おうとして陽乃は言葉を止めた。
「なんでもない」
「なんやそれ」
しばらく沈黙が続く。樹としおりもその微妙な空気を読み取ったようで、彼らのほうから言葉を続けてくれた。
「それじゃ、今日はもういい時間だし、君たちも帰ったほうがいいよ」
樹の言葉に翔は素直にうなずいた。陽乃も小さくうなずき「今日はありがとうございました」と二人にお礼を言った。
「いえいえ。じゃあ朝倉さんにはまた時々連絡を取らせてもらうね」
「はい！　お待ちしてます！」
「それじゃ」
「またね、朝倉さん」
そう言って、樹の運転する車はやがて交差点のほうへ姿を消した。
しばらく何も音がしなくなった。
「あのさ」
陽乃がボソッと呟いた。
「なに？」
翔の声にも元気がない。
「聞いていい？」
「ええけど」
「雪子、泣いてた。アンタなんかしたの？」

「……。」
翔は陽乃と目を合わせようとしない。
「どうなの？」
「何もしてない、オレは」
「……そう」
生ぬるい風が二人の頬を撫でた。
「帰ろう」
翔が踵を返して玄関ホールに向かって歩き出した。
陽乃も何も言わず、翔の後についていった。

第４１話　雪子の想い（後書き）

さらに関係がこじれてきた翔と陽乃。雪子の告白を受けて、翔はどうするのでしょうか……。

第４２話　納得

翌日。

玄関ホールで陽乃は雪子と偶然会ったので、後ろから声をかけた。

「おはよ！　雪子」

陽乃に声をかけられて一瞬驚いた様子を見せたが、雪子は至って冷静に「おはよう」と返した。やはり少し様子が変だ。

「どうしたの？　雪子……ちょっと変じゃない？」

「そんなことないよ」

雪子は冷静に返すが、やはりどこか変だ。

「あのさぁ……前から思ってたんだけど」

陽乃はあまり雪子と目を合わせずに言葉を続けた。

「佐野のこと、好きでしょ？」

あまりの突然の陽乃の言葉に雪子は驚いて上靴を両方ともに落としてしまった。

「なっ、なっ、何でそんなこと急に……！？」

「シーッ！　私に隠し事したってダメダメ。佐野と初めて会ったときの雪子の顔、私しっかり覚えてるから」

「……。」

雪子は顔を赤くしたまま黙ってうつむいている。

「あのさ、私と佐野って別に付き合ったりしてるわけじゃないから」

「でも！」

雪子は困ったような顔をしながら唐突に喋り続けた。

「私、聞いたの。教室でクラスの子が佐野くんが朝ちゃんに告白したって。もちろんその後、二人が付き合ったとかそういう話は聞いてないけど、でも、私すっごくその話聞いたときショックで、勢い余ってっていうのも変だけど、佐野くんに思わず……」

不意に、陽乃の手が雪子の口に覆いかぶさった。

「ちょ、朝ちゃん？」

「いいの。ソコから先は、内緒」
「へ？」
陽乃は覆っていた手を離し、靴箱から上靴を取り出した。
「私ね、確かに佐野に告られたよ」
「やっぱり……」
「でも、振った」
「えっ……。そ、そうなの？」
「うん」
陽乃は靴を靴箱に直すと、教室へ向かって歩き出した。慌てて雪子も後について行く。
「なんで？」
雪子はそっと陽乃のそばに並び歩いた。
「私が佐野と釣り合ってないから」
陽乃は特に表情を変えることなく、サラッと言ってしまった。
「釣り合ってない……？」
「うん。佐野ってさ、楽器うまいでしょ。それに明るいし、真面目。リーダーシップ取って、雰囲気作るのもうまくて」
「……。」
雪子も思い返してみた。まだ翔と出会って少ししか経っていないが、翔のいいところならいくつでも出てくる。特別な感情をもっているせいもあるのだろうけれど。
「それなのに、私みたいなのと付き合ってるって言うのも変な話じゃない？」
「……そうかも」
雪子は言ってからしまった、と思い口をふさいだ。しかし陽乃はクスッと笑って続けた。
「でしょ？　誰だってそう思うじゃない。だからいま、私は少しでも佐野に近づけるようにいろいろとがんばってるんだ。トランペットも、勉強も」

なるほどな。

雪子はふと思った。

佐野くんが朝ちゃんを好きになった理由、わかった気がする。

「ね？　だから」

陽乃がにっこり笑って手をつないできたので思わずドキッとしてしまった。

「お互い、がんばろうよ」

「……わかった」

雪子は小さくうなずいた。陽乃は雪子の後ろのほうを見てからすぐに「じゃあ、私は先に教室入ってるから」と言ってそそくさと部屋に入ってしまった。

後ろに人の気配がしたので雪子が振り向くと、翔が立っていた。

「あ……」

雪子は思わず顔が赤くなる。

「うっす」

翔は自然な笑顔で雪子に挨拶してくれた。それからしばらく沈黙が続いた。

「あのさ」

翔が昨日のことについて返事をしようとしたところで、雪子が遮った。

「あのね、佐野くん」

「う、うん……？」

「昨日のこと、忘れて！」

雪子は満面の笑みでサラッと言った。

「へ？」

翔は突然の言葉に唖然としている。

「昨日の私、ちょっと変だったの。あれは夢。そういうことでよろ

しく！」
「あ、おい、ちょっと永井さん！？」
雪子は教室のドアを開け、振り向いて「早く入らないと遅刻だよ！」と言った。
「……おう！」
翔も続いて教室へ駆け込んだ。

第４２話　納得（後書き）

雪子も翔の気持ちに気づいた様子。一波乱、二波乱と続く吹奏楽サークルの面々を次に待ち受けるものは……？

第４３話　暑すぎる！

とうとう夏休み！

眩しく輝く太陽！

外では元気いっぱいに蝉が鳴いている！

夏本番！

小学生から高校生までウキウキしながら夏休みを満喫！

なんていうのは理想であった。

「暑～い……」

陽乃はスカートをめくり（中に体育のズボンは履いている）団扇で中を扇いでいた。

「陽ちゃん、女の子らしくないから……」

隣では宮部由美子が同じような格好で団扇を仰いでいた。

「なんやねん、お前ら。だらしない格好しとんの～」

教室の黒板側のドアから翔の声が聞こえたので陽乃と由美子は驚いて起き上がった。しかし、その翔の格好を見て二人もげんなりした。

「なんやねん？」

「アンタの格好もどっこいどっこいですけど？」

制服のズボンを太ももあたりまで捲し上げている。言いたくないが、すね毛が少し見えている。

「気持ち悪いから隠して」

由美子の一言に少しショックを受けつつも、翔はズボンの裾を降ろした。

7月25日月曜日。今年の夏はまた猛暑になっている。

先月の30日の梅雨明けまでたっぷり雨が降ってかなりジメジメしている。その湿気を持ち越したまま夏に突入したので、今年の暑さと来たら例年以上のものであった。おまけに7年に1回程度のペースで訪れる蝉の大量発生によりあちこちでミンミンと強烈な鳴き声がこだましている。

当然、気温も連日30度を越している。土曜日から吹奏楽サークルは練習をしているが、その土曜日から連日、関東地方は気温が35度ないしそれを超す気温になっている。教室での練習も暑さのためにままならない状態だ。

「30（※1）高い……」

春樹のテンションの低い声。続いて拓真もテンションが低い声を出す。

「まだかよ～……」

チューバとユーフォニウムの練習部屋である3年3組の教室では、春樹と拓真が汗だくになってパート練習をしていた。実は夏休みに入ってすぐ、学校の近所にある老人ホームから9月の中頃に演奏をしてほしいという初依頼を受けたので、今年の夏休みはそれをメインに練習をしようということになっていた。

しかし、この夏の暑さというのは楽器にかなり影響を与える。冬にしても影響があるのだが、夏のほうが影響は大きい。

チューニングというものはピアノにもよくあるものだ。チューニングとは簡単に言えば楽器が発する音のピッチを演奏の目的に適うように調整することである。しかし気温が高ければ必然的に楽器も暑くなりピッチは高くなる。逆に気温が低くなれば楽器も冷えるのでピッチは下がる。しかし楽器は冷えても吹いていくことで息の温

度などですぐに楽器は温まるので冬のほうは特に大きな影響をもたらすことは管楽器に限ってはない。

一方で夏の暑さはというと、これはなかなか曲者である。普段よく合っている楽器の音程も悪くなり（暑くなると音程が上がるので高くなる、という）、普段高い音程はますます高くなるのでもう収拾がつかなくなってしまう。

拓真は普段、吹奏楽におけるチューニングの基準となるB♭（ベー）の音はよく合うほうであった。しかし、この夏休みに入ってから連日、音が高くなってしまっている。

「暑すぎて練習にならへ～ん……」

「ホントだね～……」

二人はグッタリと机の上に伏せてしまった。

「しまった……」

その隣の部屋では、絵美がリードとにらめっこをしていた。よく見れば、そのリードは割れてしまっている。

「さっき職員室行った時、入れっぱなしだった……」

職員室には冷房が入っている。一方の教室は35度くらいの気温がある。リードというのは気温差に弱いものであって、特に寒いところから暖かいところへ行くときなどは要注意である。しかしそれをうっかり忘れてしまった絵美は恭一に用事があって会いに行った時、リードをポケットに入れたままだった。そして30分近く話しこんでそのまま教室へ帰ってきた。そしてこの様だ。

「最悪だ……リードって貴重なのに」

絵美はうなだれながら新しいリードを取り出した。

部室では、美里が派手にドラムセットを鳴らしていた。先ほど言ったように、老人ホームで演奏するのだが、そのときの曲目のひとつに「憧れのハワイ航路」がある。美里はよく知らない曲であったが、お年寄りはよく知っているのだというのだから手は抜けない。

だからこそ、美里はさっきから懸命に練習している。ドラムセットは手足を使って演奏するもので、大げさかもしれないがそれこそ全身運動に近いものがある。同じフレーズでも叩き続けていると、次第に汗が出てくる。やがて、その汗が額を通り越して目に伝ってくる。

「うわわわわ！　痛いってば！　しみる、しみる！」

目に入った汗が、美里に激痛をもたらした。バチを持ったまま、美里は部室中をドタバタと走り回っていた。

慎也はあまりの暑さに耐え切れず、カバンに忍ばせていた「冷えピタ」を額に貼っていた。これを夏場に貼るのはずいぶん前から慎也の習慣になっていた。

「これを貼るとやっぱ快適だな～」

そういって2階のパート練習部屋の3年5組の教室へ戻ると、床にバッタリと雪子がぶっ倒れていた。

「うわああー！　ちょっと永井さん！？」

慎也が駆け寄って雪子の体を抱きかかえた。

「あ、川崎くん……」

「どしたの？　暑さで倒れた？」

「うん……ちょっとフラッときて……」

「とりあえず、そこに座って」

慎也は雪子の体を支えながらゆっくりと椅子へ座らせた。

「お茶、飲む？」

「いいよ……川崎くんのなのに悪い……」

「水分不足は夏場の大敵！　飲めよ、ホラ」

慎也は強引にペットボトルのお茶を差し出した。

「ありがとう……」

「それから」

ポケットから水色の薄っぺらい物を取り出した。

「これ、額に貼っときなよ」

冷えピタだった。慎也の額にも同じものが貼られている。
「いいの？」
「これ以上ぶっ倒れられても困るからね」
少し意地悪そうに慎也が笑うので、雪子も思わず笑ってしまった。
「暑いね～お二人さん！」
急に廊下側から声がしたので、二人は同時に振り向いた。沙希が立っている。
「別に。ふつうだろ、人が倒れてたら介抱するのは」
慎也は沙希から少し目をそらして小さい声で言った。
「まぁね。それよりさ、お二人さんにちょっと質問」
「何？」
「涼しい所で楽器吹けるとしたら、嬉しい？」
沙希は左手で団扇を扇ぐ仕草をした。
「んー……まぁな。人が倒れちゃうような環境で練習なんてできっこないし」
慎也が右ポケットからハンカチを取り出して汗を拭き始めた。ジッとしていても汗が出てくるような日がここのところ続いている。運動部も最近、休みか屋内での活動が多い。
「私も……北海道とか涼しいところで練習できたらな～って思うな」
雪子も冷えピタを貼りながら答えた。
「そこでいい情報」
沙希がニッコリ笑って続けた。
「私の別荘に行って、合宿でもしない？」

二人はしばらく間を空けて「別荘！？」と驚いた声を上げた。
「そう。私、北海道の天北ってところに別荘あるの。部員みんなで行かない？　もちろん、引率は東先生とウチのお母さんでするからさ」
「よっしゃあ！　涼しいところで練習、できるぞー！」

「やったぁ！　私、朝ちゃんに言ってくる！」
「俺も翔に言ってくる！」
二人は同時に教室を飛び出した。
「あ、ちょっとー！　まだ先生に許可もらったわけじゃないからねー！……てもう聞こえてるわけないか」
沙希は苦笑いしながら職員室へと歩き出した。

第４３話　暑すぎる！（後書き）

予想外の北海道合宿計画！？　これで部員たちの士気がますます上がること間違いなし？

（※１）「３０高い」とはチューニングの際の音程の高低を示しています。数字が大きいほど音程は合っていません。高ければチューニング管を抜き、低ければ入れます。

第４４話　合宿はここで！？

「失礼します」
沙希はそっと職員室の戸を開けた。やはり職員室は冷房がよく効いている。生徒と先生でこんなに待遇が違うのはなんだか納得がいかない。こっちだってお金を払っているのだからそれくらいの権利があってもいいものなのに。
沙希はいつもそういう現実的なことを考える子だった。しかし、このときばかりは彼女も少し理想を抱いていた。
「東先生」
恭一の机の前に立つと、沙希は少し笑みを浮かべて続けた。
「お願いがあります」
「お願い？」
「はい。とりあえず、これを見てください」
沙希は右ポケットから一枚の紙を取り出した。

『合宿計画書』

「合宿？」
恭一は驚いて椅子ごと沙希のほうへ向き直った。
「はい。合宿です」
「吹奏楽でか？」
「はい。もちろんじゃないですか」
恭一は悩んでいるようであった。
「合宿ですって？」
不意に後ろから女性の声がした。
普通学科の教頭――村峰（むらみね）　塔子（とうこ）だった。
「村峰教頭……」
恭一の声がマズいヤツが来たな、とでも言いたげなトーンになっ

た。しかし、沙希はひるまずに塔子のほうを向いて笑顔（作り笑顔だ、当然）で続ける。

「えぇ、合宿です」

塔子は冷ややかな目で沙希を見つめるが、沙希もひるまない。

「ご存知ですか？　教頭先生。最近の関東地方の気温。連日猛暑日。暑いですよね～。サッカー部も野球部もみーんな暑い中このあいだまで活動してましたけど、熱中症の生徒が続出で『運動部』は活動休止状態。でも私、知ってますよ」

沙希は少し意地悪そうな目をして塔子に言った。

「どこの部も、市内のスポーツセンターやスポーツクラブへ行って『いい環境』でトレーニングしてますね」

「……。」

塔子の目が少しうろたえているというのがわかる。けれども沙希は続けた。

「いいですよね～。そういういい環境で練習って。それに比べて文化部に対する扱いってヒドいですよ、ぶっちゃけた話」

「……。」

「でもま、仕方ないですよね」

沙希は取り出したばかりの合宿計画書を両手で掴んだ。

「結果、出してないですもの」

そう言った後、沙希は両手で思いっきり合宿計画書を破ってしまった。それにはさすがの恭一も塔子も驚いているようだった。

「結果を出さないと、いい待遇しない。そうなんでしょ？」

二人とも答えることができなかった。

「二人とも、黙ってても顔に書いてあります。それじゃ、失礼しました」

沙希は破った計画書の欠片を拾い集めてゴミ箱へ放り込んだ。

「フゥ……」
職員室のドアを出て、沙希はため息を漏らした。
「あーんもー！　私のバカー！　どうすんのよ～！　せっかく皆に大見得張ってあんなこと言っちゃったのにあぁぁぁぁ～！」
「やっぱな。お前やったらやりかねへんと思ってた」
ギョッとして振り返ると、翔がアップルジュース片手にドアにもたれていた。
「うわぁ！　さ、佐野くん！」
「まぁね、沙希ちゃんって意外と気が強いし」
反対側には陽乃がミックスジュース片手に壁にもたれている。
「……アンタたちいつからそこにいたのよ」
「お前が職員室に入った頃から」
「ってことは」
陽乃はニッコリ笑って返した。
「全部聞いちゃった」

3人は玄関ホールの靴箱の上に腰掛けた。もう6時。日も傾いてきている。運動部は活動休止中という名目上の形で学内では活動していないし、吹奏楽をはじめとする文化部もほとんど活動を終えているため、生徒の姿はほとんど見当たらない。
「どうしよ……私の悪いクセなんだ。大人にああいう風に突っかかるの」
沙希はショボリした様子で紙コップの中のアップルジュースを見つめた。さっき翔が手にしていた缶から分けてもらったジュースだ。
「お前、気ぃだけは強いもんな」
「ちょっと！」
陽乃に小突かれて翔は口を塞いだ。
「いいのよ、陽ちゃん。ホントのことだし」
しばらく沈黙が続く。ゴクッと翔がジュースを飲み干す音がした。

「でもまぁ、大谷ちゃんの言うことも事実やんな」
「え？」
翔は飲み干したジュースの缶を靴箱の上に置いた。関係ないが、最近は翔はみんなの呼び方に親しみをこめるようになった。沙希ちゃんだったら大谷ちゃん、男子で行けばシンボー（川崎　慎也）に春やん（水谷　春樹）、拓あん（本堂　拓真）という具合に。
「オレたち、何にも結果出してないもん」
確かにこればかりはどうしようもない事実だ。創部してまだ３ヶ月程度。コンクールに出ていなければ依頼演奏にすら出ていない。
「……それで合宿行かせて！っていうのもムリな話よね」
陽乃は少しガッカリした様子を見せた。沙希は何も言わない。
「だから、今年の合宿は外ですんのは諦め！」
翔はあっさり言い切った。しかし、言い回しが微妙に気になる。
「外では諦める？」
陽乃と沙希が同時に言った。
「おう。中で合宿しようぜ」
「な、中でって……どこでよ！」
「決まってるやんけ、学校の中や！」
「が、学校！？」
沙希も急な展開に唖然としている。
「おうよ。見よ、この紙を！」

『学内宿泊許可書』

よく見れば、既に教頭二人の印鑑と校長の印鑑、顧問の印鑑までバッチリ押してある。
「佐野ったらいつのまにこんなことを……」
やっぱり翔の行動力にはかなわない。陽乃は苦笑いしていた。
「大谷ちゃんががんばってくれて、うまくいかんかったときの保険としてオレがちょちょいっと頑張ってみた」

沙希のほうを見てニッコリ翔が笑いかける。
「あ～あ、私のいい所見せられるハズだったのに、佐野くんに取られちゃった」
沙希はペロッと舌を出して苦笑いしている。
「へへ。そりゃすんませんでしたね～」
「まぁいいや。北海道はまた来年か再来年、がんばることにするよ」
そういって沙希は音楽室へと駆け出した。
「ホラ、行くよ佐野。みんなに事情説明しなきゃ」
陽乃も走り出したので、翔も慌ててついて行った。

しかし、音楽室は予想以上の盛り上がりだった。
「ねぇねぇ！　北海道ってやっぱり雪だよね！」
雪子が嬉しそうにはしゃいでいる。
「バカねぇ雪ちゃん。今は夏よ！　涼しい環境で思いっきりドラムが叩けるわぁ～」
美里の目がキラキラ輝いている。少女マンガみたいな目といえばわかりやすいか。
一方、後ろのほうでは春樹と慎也が嬉しそうに観光雑誌を開いている。
「俺としては、小樽とかに行きたいな～。あっ、ホラ見ろよ。北国の雪アイスだって！　どんな味してんだろ？」
春樹が妄想にふけっている。その相手、慎也はというと同じ雑誌の後ろのほうに載っているグルメマップばかり見回している。
「いやぁ～やっぱりココは札幌に行くしかないでしょ！　時計塔、俺いちど見てみたかったんだよなぁ」
絵美と由美子は既に合宿中に何をするか、具体的に表にまでまとめてしまっている。
「ど、ど、どうすんの？　なんかすごく盛り上がっちゃってる！」
沙希が音楽室のドアの前でオロオロしている。さすがの陽乃も予

想外の状況にうろたえてしまっている。
「ここでさぁ、合宿学校の中！とか行ったらテンション下がるんじゃない？」
しかし、翔は真剣な様子でジッと音楽室を見つめていた。
「しゃあないやんけ。オレは言うぞ」
そういうと、翔はガラッと音楽室の戸を開けた。
「あっ、佐野くん！　どうなった？　合宿の件」
絵美が嬉しそうにスキップをしながら翔に近寄ってきた。翔は笑顔で「今から説明するから座って、座って！」と全員に促した。体を小さくしながら沙希と陽乃もコッソリ音楽室に入っていく。
「えっとー、今年の我が吹奏楽サークルの合宿地は――」
全員の目がワクワクしてます！と言わんばかりに輝いている。ただ一人を除いて――。

「この七海高等学校の中でやります！」

「は？」
全員の目が点になった。
「あの～……」
由美子がそっと手を上げる。
「はい！　なんでしょうか宮部ちゃん」
「北海道は？」
「来年になりました～」
翔は笑顔であっさりサラリと言い切ってしまった。こういうときの淡白さが返って怖くなるのは陽乃だけだろうか。
そう思って沙希を見ると、既に顔面蒼白状態。やっぱり、佐野の根性というか度胸ってスゴいのだろうか。
「来年って……なんで？」
由美子は全然納得がいかない様子だった。翔も理由はもちろん知っているが、それを部員に直接言うとショックを受ける気がしたか

ら怖くて言えなかった。
「まぁ、諸々の事情により……また来年って流れに」
「なんだよ、その諸々の事情って」
春樹が不機嫌そうに質問をぶつけた。
「まぁ、ちょっと言いにくい事情でして……」
「ハッキリ言ってくれなきゃ、俺たちだって納得いかねーぞ！」
慎也が怒ったように立ち上がって翔に怒鳴りつけた。さすがの翔も少し驚いて怯んでしまった。
「あぁ～広い大地でドラムセット思いっきり叩きたかった～」
「ホルンと北海道、マッチすると思ったのになぁ」
部員が口々に行けないことを嘆きだすと、沙希が目をウルウルさせて今にも泣きそうになってしまっていた。しかし、それに陽乃と翔以外は気づいていないようだった。
「あのさ、おま――！」
翔が言おうとした言葉をさえぎって、拓真が先に口を開いた。
「北海道がどうのこうのの前に、俺たちの置かれてる状況考えてモノ言ってる？　みんな」
一瞬で音楽室が静まり返った。拓真は冷静に続ける。
「俺たちってさ、創部間もないからまだ何にも結果出してないじゃん？　コンクールで優勝とかさ。それに依頼演奏だってやっと来たような状態だろ？　それなのに北海道合宿とかいって観光で浮き足立って、そんなんじゃ合宿行ったって、本来の目標である『演奏技術の向上』には繋がらないんじゃないか？」
春樹が恥ずかしそうに観光雑誌を隠した。
「それに、旅費のこと考えてみなよ」
拓真は春樹が隠したばかりの観光雑誌を強引に横取りし、旅費のことが載っているページを開いた。
「見ろよ」

全員がそのページに載っているツアーの料金を見た。一番安いもので2万3000円からかかる。一人2万3000円が10人分で20万円近くになる。

「俺たち、別に部費集めてないだろ？　20万円なんてどこから出す？　俺たちが自分で払う？　バイトもしてないのに」

雪子が財布を覗いている。ため息が漏れた。

「な？　意外と現実って厳しいんだぜ」

拓真の声が少し優しくなった。

「まずは、学校で泊まってがんばってさ、親交も深めて技術力も上げようぜ」

「私も、それに賛成」

美里がそっと手を上げた。

「私、間違ってた。目先のことに捕らわれてて、肝心なこと忘れてた」

「……俺も。怒鳴ったりして悪ぃ、翔」

慎也が立ち上がり、お辞儀をして謝罪してきた。翔はそれにまた驚いて「やめろや、そんなんオレ全然気にしてへんぞ」と首を横に振った。

「じゃあ、あのさ！」

沙希が立ち上がって大声を上げたのでまた室内が静まり返る。しかし、沙希はためらわずに続けた。

「私が、合宿の計画立てていいかな？」

しばらくの沈黙の後に、全員から拍手が上がった。

「がんばれ！　合宿係！」

慎也が声を上げた。

「いつの間にそんな係作ってるのよ！」

由美子が笑いながら突っ込んだ。

「良かったね、沙希ちゃん」

陽乃は微笑みながら沙希の顔を覗き込んだ。

「うん……！」

沙希は頬を赤くしながら、静かにうなずいた。

（良かった～……ここまでうまく行くとは思わんかった）

翔も苦笑いしながら、安堵していた。

第４４話　合宿はここで！？（後書き）

一時猛烈な反発を食らった「学内合宿計画」。しかし、拓真の熱い思いも通じて部員一同、初合宿に胸膨らませるのでした。

第４５話　合宿初日

「それじゃあロングトーンいくぞ。B♭の音階、１６拍吹いて４拍吸って上がって、B♭を２回吹いたら下がってくる。いいか？」
「はい！」
７月２７日水曜日。七海高等学校吹奏楽サークル第１回合宿は、七海高等学校の音楽室でまず行われていた。
日程は２泊３日。練習場所は主に音楽室。寝室にはなんと教室を借りることができた。沙希が組んだ練習予定表の元、今日からみっちり練習する予定だ。
今日の午前中は恭一の指導の下、基礎ロングトーンを目いっぱいする予定になっている。ロングトーンはプロ奏者でも重要なもので、あまりこれをサボッているとだんだんと音程が取れなくなったり、長く伸ばせない、タンギングが下手になってくるなど様々な弊害を起こしやすい。何より、曲を吹くにあたって自分のコンディションを整えるにはロングトーンがもってこいである。
かといって、個人でロングトーンをしていても七海高校のように初心者ぞろいのバンドは客観的に聴いてくれる人がふつうの吹奏楽部よりも重要だったので、沙希はそういうことも意識して初日の午前中はロングトーンだけに集中することになった。
「チューバ！」
恭一から頻繁にいろんな楽器に喝が飛んでくる。
「はい！」
「もっと腹から息を吸え！　お前が太い音をまずは出さないとバンド全体を支えられないぞ」
「はい！」
拓真は肩からタオルをかけている。汗かきだと自認しているだけあり、汗対策には余念が無い。
「それからユーフォニウム」

「はい！」
春樹も合宿前とはまったくやる気が違う。絶対にうまくなると言っているだけの集中力がついていた。滅多にたくさん汗はかかない生活を送ってきたと言っていたが、今年は既に2年分くらいの汗をかいているなんて言っていた。
「お前はまっすぐ音が伸ばせてない。フラフラ揺れた不安定な音程だと、ユーフォニウムは務まらんぞ」
「はい！」
よく見ると、春樹の譜面台の上には小さなメモ帳とシャーペンが置かれていて、恭一から受けた指導を事細かにメモしている。
それに気づいた恭一が指揮を止め、全員に言った。
「水谷を見てみろ」
全員が春樹のほうを見る。少し春樹も照れているように見えたが、暑いから顔が赤くなっているだけなのかどうかはわからない。
「さっきから一所懸命メモを取っているだろ。あれは大事だぞ。昼からの合奏では全員シャーペンを用意して譜面やメモ帳にいろいろと大事だと思ったことを書き込んでおけ」
「はい！」
陽乃も返事をしながら翔の譜面台を見ると、既に翔もシャーペンを持っていた。沙希も持っている。経験者はやはり違うな、と陽乃は感じた。
初心者に近い自分たちの中でも今、意識が高いのは春樹ということになるのか。
負けていられない。
陽乃はさらにロングトーンに集中しようと心を入れ替えた。
「それじゃ、次は同じ音階を8拍4拍でいくぞ」
「はい！」
恭一自身の意識もずいぶんと変わってきていて、実は北海道合宿ができないかと何度か教頭や校長に依頼していたようだった。しかし、翔がそんなことをしなくてもいいと言ったので納得したようだ

った。それをキッカケに以前にもまして練習に対して熱心になった。
その日の午前中はずっと音楽室から10人の音色が聞こえてきていた。

「それじゃ、10時半になったから20分間休憩」
「はい！」
恭一もずいぶんと汗をかいている。職員室は冷房が効いていて帰ればさぞかし涼しいだろう。しかし恭一は職員室には戻ろうとしない。生徒たちと同じ環境で合宿の間は過ごすと決めたらしい。
陽乃はタオルで汗をぬぐい、すぐにカバンからお茶を取り出した。家でしっかりと凍らせてきたお茶だ。暑さでもぬるくなったりしない。
ふたを開けて3分の1くらいを飲み干した。
「おいし……」
フーッと思わず息が漏れた。
「いっぱい練習した後のお茶っておいしいやろ？」
隣に翔がやって来て同じように壁にもたれかかった。
「うん。スゴくおいしい」
「オレ、こういう時間が好き」
「こういう時間？」
陽乃が聞きなおすと、翔はもう一度お茶を飲んでから続けた。
「うん。みんなで練習がんばってちょっと休憩したりするこの瞬間」
「ふ～ん……」
とは言ったものの、陽乃には意味が良くわからない。
「意味わかってへんやろ、お前」
「実はあんまり」
陽乃はペロッと舌を出して申し訳なさそうに手を合わせた。
「……。」
翔がそれを見て少しジッと陽乃を見つめているように見えた。
「どうしたの？」

「別に。それよりさ、みんなの顔見てみ。めっちゃえぇ顔してる」
そう言われて見てみると、確かに全員合宿の話をしていたときとは顔つきが変わってきている。
美里は休憩中なのにずっとバチ片手にメトロノームの音に合わせて基礎練習をしている。Ｆｌｕｔｅパートは音程が合っていないと言われて一緒にチューニングをしている。慎也はやっと息の使い方を掴んだらしく、それが思った以上に疲れたのか呆然と座り込んでいる。けれども満足そうだ。
「朝倉のトコの弟さんもそうちゃうん？」
「えっ？」
急に夏樹のことを言われたので一瞬戸惑ったが、そういえば昨日は兄妹の話で盛り上がったっけ、と思い出した。
翔は続ける。
「サッカーやってるんやろ？」
「うん。私と違って運動神経いいし」
「試合、見に行ったことある？」
「一応ね。ベンチ入りしてるからたまーにだけど試合に出るよ」
「練習風景は見たことない？」
「う～ん……」
陽乃はいろいろと思いをめぐらせて見た。そういえば、夏樹が入学したての頃。２つ離れているのだから、中学校では陽乃が３年生、夏樹が１年生で１年間だけだが同じ中学校に通ったのだった。
初めての部活があると喜んでいたのでサッカー部がどんなことをしているのか、と友達と一緒に見に行ったことがある。そのときは三角コーンがあってそこをターン点にしてボールを蹴って帰ってくる。ただそれだけの練習だった。さらに、同級生がゴール地点でストップウォッチを持っていた。夏樹は他の同級生よりも数段早くボールを蹴ってゴールした。記録が良かったようだが、かなりの距離を走りこんだので息も絶え絶えのように見えたし春先だというのに汗をいっぱいかいていた。

でも、夏樹はあの時、満足そうに笑っていた。
「わかった気がする」
「ホンマか？」
「うん。あの時の夏樹の顔、今の水谷くんの顔にそっくり」
二人で春樹の顔を見た。どうやら４拍だけだがまっすぐ音を伸ばせるようになったらしく、「ヨシ」と小声で嬉しそうにうなずいていた。
「オレらもそういう顔、してるとええな」
翔が陽乃の肩に腕を回してきた。陽乃はそれを素早く払いのけた。
「な、なんやねん？」
翔はあまりの素早さに驚いて目が点になっている。陽乃はため息をつきながら言った。
「あのさー前から言おうと思ってたけど……」
「何？」
翔の顔を見た。別に、やましいことを考えているわけではなさそうだ。
「なんでもない。それより、もうすぐ５０分よ。そろそろ席に戻ろう」
「あぁ……うん」
陽乃が急に素っ気なくなったのに違和感を覚えつつも、翔は自分の席へ戻った。

第４５話　合宿初日（後書き）

部員たちにとって初めて経験する合宿。そして長時間の練習。まだ疲れは出ていないようですが、今後どうなることやら……。

第４６話　トラブル発生

昼からは今度の依頼演奏の合奏だった。
老人ホームということもあり、曲目は懐メロを中心に集めた。
♪青い山脈
♪リンゴの唄
♪憧れのハワイ航路
♪高校３年生
♪学生時代
♪月影のワルツ

とはいっても、翔たちにはこの曲がどのような歌詞なのかとかはまったくわからない。昭和２０年～３０年代にかけて流行した曲だと恭一は言っていたが、いまひとつピンとこない。おまけに何だか暗い雰囲気の曲が多い気もする。やはり戦後ということも影響しているのだろうか。

しかし、この曲の中で陽乃には大問題のものがあった。

『憧れのハワイ航路』がそれだ。曲中にハイトーンと呼ばれるかなり高い音が出てくる。しかも、吹奏楽でよく高い音の代名詞として呼ばれるような感じの「ハイＢ♭（ハイベー）」が出てくる。楽器を持って３ヶ月ちょっとの陽乃は最近やっと上のＧ（ゲー）の音が出るようになってきたくらいだ。初心者にはキツいものがあった。

「それじゃ、まずは憧れのハワイ航路から」

「はい！」

恭一がなんと初っ端の合奏で『憧れのハワイ航路』を要求してきた。間違いなく失敗しそうな予感がする。

曲が始まった。この曲は期末テスト前に配られたのでみんなだいたい演奏できるようになってきている。陽乃もほとんどが完璧に（表現がどうとかは別にした、譜面どおりの吹き方だが）吹けるよう

にはなってきている。1ヶ所を除いては。
（来た！）
陽乃は身構えて懸命に吹き始めた。ここのフレーズが一番の課題だった。トランペットのファンファーレのような部分で、F（エフ）の音から始まって開放（何もピストンを押さない状態）のD（デー）、B♭（ベー）とどんどん音階を上がっていく部分であった。そして最高地点が先ほど言ったハイB♭の音になる。
（今日はいける！）
しかし、陽乃の予想に反して派手に音が外れて「プスーッ！」という音楽室に音が鳴り響いた。
恭一が指揮棒を降ろして指揮台にカンカンカン！と当てて全員を止めた。
「どうだ朝倉。やっぱり難しそうか？」
「やっぱり……ちょっと」
恭一も困った顔をして腕を組んだ。
「朝倉だったらすぐ鳴るんじゃないかと思ったけども……やっぱりハイベーは厳しいかなぁ」
「……そうかもしれないです」
ションボリした様子の陽乃を見て、雪子や慎也も心配そうにしている。
「まぁな、ハイベーが鳴るにはもっと練習が必要だし。そんなに肩を落とす必要はないぞ」
恭一がニッコリ笑って言ってくれることで、陽乃も少し落ち着いた。
「それじゃ、そのあとから全員で」
恭一が再び指揮棒を持ち上げた。全員が「はい！」と言って前に向き直った。

午後5時半。
「よし、それじゃ今日の練習はここまで。夕食の配膳があるから、

全員6時15分前には食堂に集合しろよ」
恭一がそういって職員室へやっと戻っていった。最近では、既に恭一も音楽室に入り浸ってしまっている。部員たちも暇さえあれば部室で吹奏楽曲を聴いたり、譜面を見て「こんな曲もやりたい」などと言って騒いだりしている。音楽室と部室はいつの間にか彼らの憩いの場にもなっていた。
「どうせならさ、音楽室でご飯食べたいよね」
雪子が楽器を椅子に置いて磨きながら言った。
「あー！　それいいかも！　お弁当だってここで食べていいんだし、夕飯みんなで持っていって食べようか」
由美子も嬉しそうに続けた。
「ダーメダメ。宮部はいっつも転んでコーヒー牛乳とかこぼすじゃん？　食堂から運んでくるだけで廊下とかそこらじゅう汚れるって」
拓真が横から茶々を入れてきた。由美子はスネた顔をして「失礼ね。最近は転ばないようになったんだから」と言っているが、どうだか怪しい。
翔がサックスを磨きながらその会話に加わった。
「それじゃあさ、最終日は食堂のおばちゃんに頼んでここで食べれるようにしてもらわへんか？」
「えー？　でもそんなのできるの？」
沙希が苦笑いで聞くと、翔はニコーッと笑って返した。
「食堂にな、大阪出身のおばちゃんがおってオレとバリ仲えぇんやぞ！」
「バリ？」
沙希が首を傾げている。翔は大阪から転向してきたから頻繁に関西弁を使うが、まだ東京でしか生活したことのない陽乃たちには馴染みのない言葉がたまに出てくる。
「めっちゃって意味。めっちゃ仲えぇねん」
「へぇ！　そんな人いたんだ」
美里も会話に加わってきた。

「会ってみたい！」
由美子が手を上げて言った。
「確か今日は当番でいてはるハズやねん。今から行くか？」
「行く行く！　ねぇ、みんなで行こうよ」
沙希の提案で雪子や絵美まで加わっている。
「賛成～！」
全員が楽器を磨き終えると、ケースにしまって音楽室をゾロゾロと出て行った。
「朝倉は行けへんのか？」
翔はまだ楽器を手に譜面を見つめている陽乃に声をかけた。陽乃はできる限りの笑顔で「うん。まだちょっと練習したいし」と言っておいた。
「そうか。ほなまぁ、配膳には間に合うようにな」
「わかった。ありがとね」
「いえいえ。ムリすんなよ」
翔はそういうと小走りで音楽室を出て行った。
「フーッ……」
陽乃は誰もいなくなった音楽室でため息をついた。夕日が音楽室の南のほうに差し込んできて、壁の一部がオレンジ色になっている。どこかでツクツクボウシが鳴いている。
「なんで出ないんだろ……。もっと練習しないと」
陽乃はもう一度『憧れのハワイ航路』を取り出して合奏のときに吹けなかったフレーズを繰り返し練習した。
「まだ5時半。あと10分は練習できるよね」
陽乃は何度も同じフレーズを吹き続けた。今日は朝の9時から12時まで、そして午後の1時から今まで吹き続けていて今までにない長時間の練習だったので少し口が荒れている気もする。痛みも少しあるが、あと少しは大丈夫。
そう思ってもう一度ハイベーまでの音に駆け上がっていった。

パーン！

（やった！　出た！）

かなり圧力がかかったが、間違いなくハイベーが出た。

「やった！　よ、よし……もう一度……？」

マウスピースに唇を当てると、ヌルリと温かい感触が感じられた。

「え？」

陽乃は思わずマウスピースから唇を離した。マウスピースに何か赤いものがベットリ付いている。

「なに……？」

何か鉄のような味がする。

「え？　う、うそ……？」

慌ててカバンから手鏡を取り出した。

下唇の真ん中がパックリ裂けて、そこから血が出ていた。

「やだ！　なんで！？　あ、えっとどうしよ。とりあえず唇洗わないと……」

陽乃は慌てて廊下へ飛び出し、音楽室に備え付けの水道で唇をすすいだ。手のひらにも血がベットリ付く。

「やだ……止まらない。どうしよ、どうしよぉ～」

陽乃はパニック状態になって何度も水道で口をすすいだ。

「朝ちゃん、来ないねぇ」

雪子が配膳の時間になっても姿を見せない陽乃を不審に思っていた。陽乃は時間にはキッチリしているタイプだ。何か自分勝手なことで遅刻したりなんていうことは部活のときにはほとんどなかった。

「ホントだ。珍しいね。練習に夢中になり過ぎてるのかな」

絵美が陽乃の座る場所にお味噌汁を置いた。ちなみに、座席は沙希の作ったくじ引きで毎回変わるようになっている。陽乃の左隣が

雪子、右は絵美。正面が慎也。
慎也もオカズやご飯を取り終えてテーブルにやってきた。
「なんかトラブッたりしてないかな？」
「うーん……そういうとき、朝ちゃんだったらすぐに連絡すると思うけど」
雪子は部員の中では比較的、陽乃と過ごす時間が長いので彼女のことはよくわかっている。
「でももう５５分。あと5分でいただきますだよ？」
雪子の正面にいる由美子が心配そうに時計を見つめた。
「まさか、学校の中で迷子になってたりして」
拓真が笑いながら言った。
「いやいや～、それはないだろ拓あん」
春樹が拓真の前に座って返す。
「でもさぁ、前に朝倉さん来月開催のコンサート間違えて行ったりしたじゃん？　同じような失敗してるかもよ？」
拓真が妙に心配そうに腕を組んで言った。
「ありえるなぁ～。アイツなら」
翔が苦笑いしながら携帯電話を取り出した。
「電話するなら、見てきたほうが早いんじゃない？」
雪子が立ち上がった。翔もかけ始めた電話を切って「そうやな。そうしよか」と言って雪子に同伴した。
「じゃあ、私は先生に言っておくよ」
由美子が恭一のほうへ向かって行ったのを確認して、雪子と翔は食堂を出た。
まだ日が出ているとはいえ、夕暮れ時の学校というのはけっこう不気味だ。翔と雪子の足音が妙に廊下にカツーン、カツーンと響くので雪子も少し不安になった。
「ん？　どないしたん？」
「ちょっと……怖い」
雪子がギュッと翔の制服を握り締めた。

「大丈夫やって。まだこんな時間にお化けなんて出てこぉへんから」
「怖いこと言わないで……？」
雪子の足が止まった。
「な、なに？」
「上から何か聞こえる」
「へ？　ちょ、ちょっとやめようやそういう話……」
「ホントだって！」
雪子がますます強く翔の制服を握り締めた。
「アガガガ！　ちょ、永井ストップストップ！　首が絞まってるって！」
「あ、ゴメン！　でも聞いてよ、ホラ！」
「えぇ～……？」
翔は耳を澄ました。今は1階の第一理科室前にいる。2階は調理室、3階は被服室、そして4階が音楽室だ。
上のほうから微かに水の流れる音がする。そして「……ない、ど……よぉ」と切れ切れに女の子の言葉が聞こえてくる。
「ねっ！？　聞こえるでしょ、ねぇ！」
雪子は恐怖のあまりパニックになりかけている。
「ストップ！　落ち着いていこうや。朝倉かもしれんやん？」
「う、うん……」
二人はゆっくりと東階段を上がって行った。調理室ではない。そして被服室でもなかった。
「残りは……音楽室だけや」
水の音も音楽室から聞こえてくる。これは間違いない。陽乃だと翔は確信していた。しかし、その確信は音楽室前へ来て絶たれてしまった。
「あれ！？」
なんと、人の姿はなく水だけが流れ続けている。
「なんや……水、出しっぱなしにして」
翔はキュッと栓を閉めた。

「朝ちゃんは？」
「おらへん。食堂行ったんとちゃうん？」
「そうなんだ。なぁんだ」
「永井、意外とビビりやな」
翔が意地悪そうに笑いながら雪子を小突いた。
「何よう。佐野くんだってビビッてたじゃない？」
「あれは永井がそういう雰囲気作ったからやん？」
「もう。そうやって私のせいにして」
「まぁまぁ。原因もわかったし、食堂戻ろうや」
「うん」
そういって二人が入り口のほうを振り向くと暗闇に誰かが立っている。
「誰や！？」
翔は雪子を制止して前に立ちはだかった。
口にトイレットペーパーを押し当てた誰かが近づいてくる。不意に、その人物が懐中電灯を当てて顔を照らし出した。
「ぎゃあああああああああ～！」
「きゃあああああああああ～！」
雪子と翔は同時に悲鳴を上げ、そのまま雪子はぶっ倒れてしまった。翔も尻餅を付いてしまった。
「佐野～！　血が、血が止まらないよぉ～！」
陽乃が血まみれになったトイレットペーパーを振り乱して、翔のほうへ走り寄ってきた。
「何やっとんねん！　お前アホか！」
「だって吹いてたら急に唇切れて血だらけになったんだもん！　ビックリしたよ～！」
「こっちかてビックリしたわ！　あ……」

雪子が隣で失神している。
「きゃー！　雪子!?　なんで!?」
「お前のせいや！　ちょー待て。先生にケータイで電話するから、お前はその気持ち悪いトイレットペーパー取っとけ！」
「でも血が止まんないのに……」
「二人とも保健室行きじゃ！　早くしろ！」
「わ、わかった！」
翔はケータイを取り出し、恭一のアドレス帳から電話をかけた。

第４６話　トラブル発生（後書き）

吹き過ぎのために唇が切れた陽乃、血まみれの陽乃に驚いて失神した雪子。やはりトラブルは避けられない七海高校吹奏楽部でした。

第４７話　オファ

「まったく……朝ちゃんにはビックリさせられたよ」
雪子が風呂の脱衣場でプリプリしながらパジャマに着替えた。美里と絵美が笑いながら同じようにパジャマを着ている。
「陽ちゃんらしいじゃないの。あたし、そういうの好きだよ」
美里がまだ風呂場にいる陽乃を見ながら言った。
「私も。朝倉さんもおもしろいけど、失神しちゃう雪ちゃんも好きだな」
「二人ともそういうけど、あれは本当に失神モノだよ。怖すぎた」
雪子はまだプリプリしている。
「まぁそう怒らないで。あたしがジュース、おごってあげるよ失神回復祝いに」
美里が財布から１２０円を取り出した。
「ホント！？」
雪子がその声に目を輝かせている。
「じゃあ、私はアイスクリームおごってあげる」
「きゃー！　もう美里ちゃんも絵美も大好き！」
雪子は二人に抱きついた。
「あーもう！　暑苦しいから！」
美里は抱きつこうとする雪子を必死に払いのけようとした。
風呂から出た陽乃はすぐに鏡に向かい、唇の状態を確かめた。すぐに翔と恭一の保健室での言葉が蘇る。

（明日と明後日はちょっと楽器を吹かないほうがいいな）

（だから健康面は気をつけろって言うたのに。言うことときかんやっちゃ）

でも二人とも笑顔だった。怒っていなかった。それだけでも、陽乃には安心できることだったが、それ以上にその後の翔の言葉が嬉しかった。

（唇切れるまで練習、がんばったんやな）

自分を認めてもらえたようで嬉しかった。とりあえず、明日の合奏は椅子に座っているだけになりそうだが、陽乃はそれでも十分だった。今日はハイベーも出たんだし、先生にも佐野にも褒めてもらえた。それだけでいい夢が見れそうと思っていた。

「ジュース飲んでこようっと！」

陽乃はいそいそとパジャマに着替え始めた。

「失礼します」

春樹が職員室に入ると、すぐに冷房の冷気が春樹の顔に当たった。恭一の姿を探すと、何やら隣の印刷室のほうから声が聞こえる。そこで電話をしているようだった。

「東せんせ……」

声をかけようとしたとき、恭一の声にその足と声を止めた。

「はい。確かに佐野はウチの部員ですが……」

翔の話をしているようだ。

「え？　明後日の……ですか？」

明後日といえば、まだ合宿の最中だ。

「えぇ。予定としては合宿最終日で、市の定期演奏会を鑑賞する予定でしたが……。あ！　三田嶋が出るんですか」

ミタジマ。

春樹は聞いたことのない人の名前が出てきた。

「え？　三田嶋が佐野を？」

肝心な部分の動詞が抜けてワケがわからない。これだから日本語は嫌いなんだ、と春樹は心の中で舌打ちをした。翔が何か悪いこと

をしたのだろうか。
「そうですか……曲は？　ミッション・インポッシブル！　そりゃまたずいぶんカッコいい曲をするんですね。それと？　あぁ、ケルティック・ノッツも。なるほど……。すると、佐野はミッション・インポッシブルのソロで欲しいというわけですね。ケルティックは？　あぁ、アルトサックスが三田嶋ともう一人の二人だけなんですか。なるほど～……あれは木管が相当厚い状態でないとキツいものがありますからね。わかりました。佐野にもこの後話しておきます。えぇ、それではわざわざどうも」
電話を切ると、恭一はすぐに印刷室から出てきたので春樹は鉢合わせになってしまった。
「おっ」
「あ」
しばらく沈黙が続く。
「もしかして今の話、聞いてたのか？」
春樹は小さくうなずいた。
「うーん、お前らには黙っておきたかったんだけどなぁ」
恭一は苦笑いで頭をかいた。
「あの」
春樹は恐る恐る聞いた。
「佐野がなんか悪いこと、したんですか？」
恭一は目を点にして、それからすぐに笑いだした。
「違うよ、違う。ちょっと佐野に外部からオファが来てな。まぁ話を聞いちゃったなら仕方ない。お前も一緒に話を聞いていけ。いま佐野を呼んでくるから」
「あ、はい……」
そういうと、恭一は職員室を出た。
5分もしないうちに、翔と一緒に恭一が帰ってきた。翔はやけにご機嫌だ。

「どうしたの？　佐野。やけにご機嫌じゃん」
「おうよ。だって憧れの三田嶋さんと演奏できるんやもん！　テンションも上がるって！」
翔の言っていることがサッパリわからない春樹。すると、恭一が一枚のチラシを春樹に見せた。
『三田嶋　樹　ソロコンサート』
「あ、これってこないだ朝倉さんが間違えて行ったっていう……」
「そうそう！　そんでな、この人と明後日演奏できるねん！」
「へぇ～……ってえぇ！？　ホントに！？」
春樹は思わず身を乗り出してしまった。翔はちょっと驚いていたが、それ以上に嬉しそうにブイサインを春樹に向けた。
「先生！　俺たち、この演奏会見に行くんですよね！」
「あぁ。午後からな」
「やった！　じゃあみんなに佐野が出るって知らせておいてもいいですか？」
「それなんだけど」
恭一は小声で言った。
「内緒にしておいてくれないか？」
春樹はつまらなさそうに「え～！　何でですか？」と聞き返した。
「急に出たほうがインパクトあるじゃないか？」
恭一がサラリという。それに翔もうなずいている。
「え……。そういう問題でしょうか？」
春樹は苦笑いしながら答えた。二人はウンウンとうなずいた。
「ま、まぁ佐野がそれでいいなら……俺も構わないですけど」
「じゃあ、それでヨロシク！」
翔は嬉しそうな顔で何度も「三田嶋さん♪　三田嶋さん♪」と呟いていた。
「あ～ぁ……俺、黙っとくの苦手なタイプなんだけど」
春樹はフーッとため息を漏らした。
「なんだかなぁ……」

「ん？　どした、水谷」
　恭一が心配そうに顔を覗き込んできた。
「いえ。ただ、なんか佐野っちばっかり先へ行って俺たちが置いてきぼり喰らってるような気がするんスよ」
「うーん……まぁ、佐野は小学校から吹奏楽をやってるわけだしなぁ」
「そうなんですけどね。なんか、俺たちと演奏してホントに楽しいのかなアイツとか思っちゃって……」
「そんなこと、思ってたのか？」
　恭一は春樹の本音を聞いて少し意外だと思った。春樹はおとなしいほうなので、こういう少しトゲのあるような言い方をすることは滅多にない。
「はい。でもアイツ、全然そういう素振り見せないし大丈夫かなとも思うんですけど……やっぱ時々不安になるんですよ」
「心配しなくても」
　恭一は強くうなずきながら言った。
「佐野は、周りがうまい子たちと一緒にやるより、十分上達する可能性のあるお前らのような子たちとやる方がいいって言ってたぞ、このあいだ」
「マジっすか？」
「あぁ。だから変な心配するな」
「良かった。それ聞いて安心しました。ありがとうございます、先生」
「それより、もう１１時だぞ。そろそろ寝ろよ」
「はぁ～い。それじゃまた明日。おやすみなさい」
　春樹はニコニコ笑いながら職員室を後にした。
「そうは言ったものの……俺も佐野に何があったかしってるわけではないしな」
　頭をかきながら、恭一は椅子に腰掛けた。

（オレ、実は中3のコンクール前に一度吹奏楽辞めたんです）

「理由は……まだ聞いてなかったな」

恭一はぬるくなったコーヒーをすすった。遠くから車の走る音が微かに聞こえるだけ。夜の七海市は思ったより静かだった。

第47話　オファ（後書き）

樹からオファが来て喜ぶ翔。しかし、一度吹奏楽から離れた時期があったようです。恭一も把握していないその理由とは……？

第４８話　ライバル出現

合宿最終日。

七海高校吹奏楽サークル一同は、七海市中央ホールへと足を運んでいた。

「うわぁ～……」

ホールに入ると、絵美も美里も拓真も春樹も、陽乃も声を上げてそれっきり呆然と立ち尽くしていた。

「へぇ～……けっこう広いやん？」

楽器をソフトケースに入れて右肩に下げた翔が陽乃のそばに立って同じようにホールのロビーを見上げた。

七海市中央ホールは、その名のとおり市の中央に位置する市内最大のホールだ。２０００人もの人を収容でき、音響効果も抜群。神奈川県の横浜地区大会もたまにこのホールで開かれるらしいと恭一は言っていた。

「スゴいね～……ここで演奏するんだ」

陽乃はホウッと息を漏らした。自分たちと同い年くらいの子たちが楽器を持っている。サックス、トランペット、ホルン、チューバ……。パーカッションのマレットを持っている子もいる。間違いなく、みんな吹奏楽部員なのだろう。

「俺たちもこんなところで演奏できるといいな」

春樹がワクワクした様子でつぶやいた。このホールでは各高校や中学校で開催する定期演奏会もよく催されるらしい。いつか、七海高校でも定期演奏会というものをやってみたい。春樹や陽乃など一部の１年生はそんな想いを抱き始めていた。

「ほらほら、ボーっと突っ立ってたら他の人に迷惑だろう？　さっさと客席に座った、座った」

恭一が後からやって来て、部員全員を奥へ押しやった。

ホールへ入ると、やはり独特の雰囲気とホールの匂いのようなも

のが陽乃の鼻などの感覚器官に全部入ってきた。今はまだ演奏の合間に時々ある休憩時間のようだが、舞台に並べられている椅子を見ると、ワクワクしてくる。

「朝ちゃん、プログラムだって」

雪子が全員分の今日の演奏会のプログラムを片手にやって来た。けっこう立派な冊子だ。

「ありがとー！　どんな曲やってるのかな？」

陽乃はさっそくプログラムを開けてみた。

２３．七海市立北松葉高等学校　課題曲１　ルーマニア民族舞曲
２４．七海市立浜浦高等学校　課題曲２　メリーウィドウセレクション
２５．七海市立東高等学校　課題曲１　風紋
２６．七海市立松葉高等学校　課題曲１　歌劇『トゥーランドット』より

・　・　・

祭の部　ウィンドオーケストラ『奏』　ケルティック・ノッツ
ミッション・インポッシブル

「へぇ～……やっぱりコンクールが近いからみんな課題曲っていうのをするんだね」

陽乃はなんとなく知っているコンクールのことを話し始めた。

「毎年、七海市からもけっこう県大会に出てる吹奏楽部が多いんだって」

美里が横からヒョコッと顔を出した。

「そうなの？」

「うん。この北松葉高校なんか常連らしいよ。一昨年なんか関東大会に出たって」

「スゴいじゃん！　北松でしょ？」
「ホラ、噂をすれば……」
北松葉高校吹奏楽部の面々がやって来た。どうやら制服のほかに吹奏楽部用のユニフォームなんぞがあるようで、真っ白に統一された綺麗なブレザーだった。
「さすがだなぁ……私たちも負けてられないね！」
陽乃がギュッと拳を握り締めた。
「うんうん！　今からいっぱい練習して、部員集めて3年生までにはコンクールに出たいよね！」
隣で沙希もうなずいている。
「そのためにも、他の学校の演奏を聴くのも大事だしな」
拓真も真剣にうなずいた。
「ヨシッ！　そうと決まれば早く中に入ろう」
由美子が颯爽とホール内へ移動しようとした時だ。後ろから声が聞こえてきたのは。

「七海高校じゃね？　あの制服」

男子の声だ。
陽乃が振り返ると、パッと見たところ翔にソックリの男の子が立っていた。周りに楽器を持った女の子二人と男の子がもう一人いる。
「ホントだ。なんでこんなとこいるんだろ」
陽乃以外はその声に気づかずにホール内へ入ってしまったが、陽乃はジッと声のするほうを見つめていた。
「あぁ、そういえば最近聞いたことあるなぁ」
さっきの男子が嫌みったらしい声と顔で言った。

「サークルで吹奏楽が復活したって、七海高校」

それを聞いた周りの生徒が同時に「プッ」と吹き出した。

「やだ！　サークル？　冗談でしょ」
「いやいや、マジでマジで。なんか少人数だけど張り切ってるみたいだぜ～」
「あんなことやっといて、また作るなんて学校側もよく認めたね～」
「まぁ、心配する必要もないけどな」
その後に男子生徒が言った言葉に、陽乃は憤慨した。
「ヘタっぴばっかっしょ、どーせ」
陽乃はツカツカと歩き出し、男子生徒に言い寄った。
「ちょっと何なの、アンタ！？　人の入ってる部活バカにして！　どういうつもり！？」
「あぁ？」
陽乃とその男子生徒は１０センチ以上身長差があるが、陽乃は怯まない。
「ヒドいんじゃないの？　私たちの部活のことよく知りもしないくせに、そんな悪口言うなんて」
「だってホントのことじゃね？」
男子生徒は鼻で笑って続けた。
「お前ら、サークルとか言ってさ毎日ダラダラ楽器吹いてるだけだろ？　俺たちみたいにコンクールとか決まった目標も無いくせに」
「そんなことないわよ！　今度、老人ホームで受けた依頼演奏に行くんだから」
「ホラ、その程度じゃん」
また鼻で笑われた。さらに陽乃の怒りが沸騰する。
「その程度って？　演奏会の内容？」
「演奏会っていうほどのもんかよ」
陽乃の反論する口がグッと詰まった。
「演奏会ってのは、今日みたいな場所で大人数でするようなことを言うんだよ。君が言うみたいな老人ホームでの演奏は、演奏会なん

かとはかけ離れたものなんだ。一緒にしないでくれるかな？」
だんだんと陽乃の顔が曇ってきた。涙目になっている。
「ちょっと、さすがにマズいって！」
隣にいた女子生徒が止めに入ったが、男子生徒はまだ続ける。
「だってさぁ、初めに突っかかってきたのはコイツだぜ？　生意気じゃん」
「でも……」
「演奏でも劣ってるくせに、俺にケンカで勝てるわけな……」
言い終わらないうちに、陽乃と男子生徒の間に翔が割り込んできた。

「やめろや、そういうの」

翔の顔は一瞬しか見えなかったが、陽乃の目にはひどく怖く映った。
「よぉ、久しぶりやんけ、翔」
急に関西弁になった男子生徒がニヤッと笑った。
「別に嬉しくもなんともないけどな、前・部長さんよ」
翔は無表情で続ける。陽乃は二人の関係がわからず、オロオロするばかり。
「やっぱりお前が部長やっててんな」
「そうや」
「まぁ聞いとったけど、案の定ショボいなぁ七海高校の吹奏楽部さんは」
翔の右手がグッと強く握られるのを陽乃は気づいた。
「まぁ今はショボいやろうな」
陽乃はその言葉に一瞬ショックを受けたが、翔の顔を見つめなおして安心した。あの優しい、けれど芯の強い目はいつものままだ。
「でもじきに全員がうまくなって……遅くとも来年のコンクールには出場してお前らを見返したる」

男子生徒は鼻でまた笑い「どーだか。今のお前らのレベルじゃ到底ムリやな」と言った。
「今のレベルじゃね」
翔はそのまま陽乃の手を握り、ホールのほうへ歩き出した。
「来年はどうなってるかな……？」
クスッと翔が微笑みながら言った。どうやら男子生徒には聞こえていなかったようだ。
「……。」
男子生徒は表情を硬くしたまま、翔と陽乃を睨んでいた。
「佐野っち、そろそろ行くよ？」
「あぁ……」
名前を呼ばれた男子生徒――佐野（さの）　修平（しゅうへい）は生徒数人と混ざってリハーサル室へ向かった。
「ねぇ、佐野。さっきの子、誰？」
翔は陽乃に顔は向けず、ぶっきらぼうに「佐野　修平。オレの中学時代の……」と言って途中で切った。
「中学時代の？」
「なんでもない。もうえぇやろ、この話は」
「でも……」
「オレがしたくないねん。頼む、終わってくれ」
「わかった……」
陽乃は少し納得がいかなかったが、それ以上聞きだせる雰囲気でもなかったので諦めた。
「ほな、お前はこっからホールに入れ」
翔はそっとホールへの重い扉を開けた。
「え？　佐野はどうすんの？」
「オレは今からちょっと用事あるねん。すぐ席に戻るから先に行っ

とって」
（その笑顔で言われると断れない……）
陽乃は小さくうなずいて、扉を開いた。振り返ると、翔はまだジッと陽乃を見ている。
「はよ行け」
「うん。じゃあまた後でね？」
「おう」
パタン、と扉が閉まると同時に翔はリハーサル室へと走り出した。

第４８話　ライバル出現（後書き）

佐野の同姓のライバル――佐野　修平の出現。あまり多くは語られなかった翔と修平の関係とはいったい？

第４９話　サプライズ

陽乃がホールの中に入ると、すぐに照明が暗くなった。
（わわっ！）
陽乃は慌てて中腰になってみんなのいる場所を探した。確か中央のほうにいるとか言ってたなと思い出し、そのあたりをキョロキョロと探した。
「朝ちゃん！　こっち、こっち」
雪子の声がしたので中腰のままで隣の空席に座った。
「何やってたの？」
「ちょっといろいろありまして～……」
「何それ。もうすぐプログラム終わりだよ？」
「え？　うそ？」
陽乃がプログラムをパラパラとめくると同時にアナウンスが入った。
「プログラム４７番　七海市立梁間中学校　課題曲３　自由曲『くるみ割り人形』」
「えぇ～……あと３団体しかないの？」
「だって朝ちゃん急にいなくなっちゃうんだもん。外に探しに行きたいけどなかなか行ける気配もないし」
「うん……まぁそうだけど」
自業自得といえば問題ない。けれど、何か納得いかない。あの「佐野」とかいうヤツのせいだと陽乃は内心プンプン怒っていた。翔と同じ苗字だけれども。
結局、陽乃は演奏が始まっても集中して聴くことができないまま４８番、４９番とプログラムは過ぎていく。
「ちょっと朝ちゃん。全然人の話聞いてないでしょ？」
「へっ？」
雪子の声にふと我に返った。

「どうしたの？　今日ちょっと変だよ？」
「うーん……ちょっと佐野と佐野がさぁ……」
「は？　佐野と佐野？」
そうか。雪子はさっきのトラブルを知らない。佐野と佐野、といっても意味不明だ。
「あ、ゴメンゴメン。実は……」
言い出そうとして前を見て、陽乃は目を疑った。

「あーっ！！」

陽乃は思わず大声を出してしまった。その声がホール中に響く。
「ちょ、ちょっとちょっと！　声大きいよ」
雪子が慌てて陽乃の制服を引っ張った。
「あれ！　あれ見て！」
陽乃の声に七海高校の面々は舞台右手に注目した。
「うそっ！？」
雪子が前に乗り出した。
「翔！？」
拓真と慎也も思わず声を上げた。
「わぁお！　何々！？　何のサプライズ！？」
美里と沙希も手を合わせて前を凝視している。
「しーっ！　静かに、静かに！」
由美子に促されて、全員が座りなおした。
翔の演奏している姿を見るのはこれが初めてではない。しかし、客観的に見るのは初めてだ。プログラムを見ると「ウインドオーケストラ『奏』」と書いている。曲目は『ケルティック・ノッツ』と『ミッション・インポッシブル』の2曲。
『奏』の衣装は白のブレザーに紺色のズボンで統一されている。背が陽乃にとっては高いほうに入る翔の姿が今日は一段とかっこよく見える。

『ケルティック・ノッツ』の演奏が始まった。民族舞踊的なリズムが聞こえてくる。ケルティックということは、ケルト民謡か何かをモチーフにしているのだろうか。曲自体をあまりよく知らないこともあるし、ケルトの意味自体もあまりよくわかっていないのでなおさらわかりづらい。

しかし、曲自体はカッコいい。陽乃の好きなタイプの曲かもしれない。トランペットの打ち込みのあとに木管楽器が続く。

フルートの速いパッセージのメロディがあり、全員の打ち込みの後にまたトランペットのメロディ。クラリネットがメロディを引き継ぎ、そこにユーフォニウムが加わる。ティンパニの打ち込みの後にチューバが下の音を打ち込む。木管の優しいメロディが引き取る。

「すげぇ曲……」

拓真がため息を漏らした。

「いつの間にあの曲、練習してたんだろ？」

美里も不思議そうに翔を見つめる。合宿中に練習する時間なんてほとんどなかったはずだ。しかし、春樹だけは翔の練習する姿を見ていた。翔の譜読みする速さは尋常ではなかった。

翔は譜面を見てすぐに、サラッとメロディがわかる程度にまで吹いてみせた。その後、何回か練習をしてすぐに「まぁこれでなんとかなるやろ」と次の『ミッション・インポッシブル』に練習を移した。

隣で見ていた春樹が「すごいなぁ……翔ってやっぱ」とため息混じりに呟くと翔は恥ずかしそうにはにかんでいた。

「春やんもすぐにこんな風になるって」

すぐ、とはいうけどやっぱり2、3年はかかるんじゃないだろうか。

「先は長いなぁ……」

フゥッとまたため息が出てしまった。

「ん？」

陽乃がよく見ると、翔の横に三田嶋さんがいる。

「ってことは……」
案の定、しおりさんもオーボエのあたりにいた。
「二人ともこの楽団に入ってたんだぁ」
陽乃はそんなことは全然知らなかった。それにしてもなぜ翔がその楽団に混じっているのかがわからない。
やがて『ケルティック・ノッツ』の演奏が終わった。拍手が沸き起こる。
「ねぇねぇ、この『奏』っていう団体スゴいみたい」
由美子が前の席から乗り出してきてプログラムの最後のページを開いて見せた。

２０００年度　全日本吹奏楽コンクール　金賞
２００１年度　関東吹奏楽コンクール　金賞
２００２年度　全日本吹奏楽コンクール　金賞
２００３年度　全日本吹奏楽コンクール　金賞
２００４年度　全日本吹奏楽コンクール　金賞

「ふぇぇ～……ホントだ。スゴい」
陽乃も思わず唸ってしまった。ここ5年だけでも4回全国大会で金賞を受賞している。
「でね、この『祭の部』っていうのは全国大会レベルのところが演奏する部門なんだって」
「へぇ……なんでそんなところに佐野が？」
陽乃が聞くと由美子も首をかしげた。
「不思議……としか言いようがないよね」
突然、次の曲が始まったので二人は驚いて前を見つめなおした。
『ミッション・インポッシブル』だった。
パーカッションが結構派手に鳴らしているし、トロンボーンとチューバの打ち込みが特徴的だ。トランペットとサックス族もメロディを吹いている。

曲の中盤に来て気づいたが、アルトサックスが翔と三田嶋さんに女性がもう一人いるだけ。確かにこの人数では厳しいものがあるかもしれない。それで翔を呼んだのだろうか。

「あっ！　佐野が……」

不意に翔が三田嶋と立ち上がると、2本立ったマイクの前に二人とも移動した。自然と拍手が起こる。

「ソロだよ……」

思わず雪子も美里も息を飲む。全員が翔の表情を見つめていた。

「緊張してるな……アイツ」

慎也が苦笑いで呟いた。

（大丈夫。佐野くんならできるって！）

本番前に樹が言ってくれた言葉を胸に、翔はマイクの前に立っていた。ソロを吹くのは監査会のとき以来。しかし、こうした公の場で吹くのはもう1年ぶりのことだ。さらにいえば、ソロを吹くのは2年ぶり近いことだった。

（大丈夫。冷静にいけ、翔……）

ソロが近づいてくる。樹と目配せをした。樹は一回だけ強くうなずいた。

樹から始まったアルトサックスのソロはすぐに翔に引き取られた。息が合っていないとできないソロだ。

キィィッ！

入った瞬間、リードミスの音が翔のサックスから聞こえてきた。七海高校の一面は思わずドキッとして翔の顔に注目してしまった。しかし、翔は気に掛けていないように見える。

陽乃はそこから先をよく覚えていない。ただ、翔の顔がソロの前と後では違うように見えて仕方がなかったのだ。

どこか影があるように見える。

陽乃にはそう見えた。

「なんだあの子、ソロに失敗したじゃん」

修平の横で、風見台高校の制服を着た女子が笑った。

「……まだ引きずってるんかよ」

修平が唇をかみ締めて呟いた。

「えっ？」

修平の声をかき消すように、拍手が再び沸き起こった。

第４９話　サプライズ（後書き）

やはりプレッシャーからか、リードミスをしてしまった翔。それを見た修平が呟いた言葉の意味とは……？

第５０話　佐野ｖ．ｓ佐野

演奏会が終わったのは午後7時すぎのことだった。
誰も翔のソロのことには触れないように「お疲れ！」「全然出てくるのなんて知らなかったよ～！」などと労いの言葉をかけていた。
「ありがとさん！　ホンマは言いたくて言いたくてしょうがなかってんけどな」
翔はニコニコ笑いながらみんなに返事をしていた。
「佐野っ！　お疲れさん！」
陽乃もソロのことには触れないように声をかけた。
「お前なぁ、人が吹く前に大声で『あぁ～！』とか言うなや。ハズいねん」
「だって急にアンタが出てくるんだもん。ビックリするって、ふつう」
「へへっ。まぁ、お前の声で一気に緊張解けたわ」
「えっ……」
陽乃の顔が少し赤くなった。
「ん？」
翔もさっきの一言がちょっと意味深だったことに気づいたようで、妙な沈黙が生まれた。そこへ恭一がやってきた。
「おーい！　集合！」
「あ、はーい！」
陽乃が一番に駆け出し、すぐに女子が後を追った。
「お疲れ様」
春樹が横に立ってニコッと笑いながら言った。
「おう」
「俺ももっとガンバローって思っちゃった、今日の翔の演奏聴いて」
「ホンマに？」
「もちろん！」

「そう言ってもらえると光栄やわ」
二人はニッと笑い合い、女子たちの後を追った。

解散後、翔と陽乃は自転車に乗ってつくし野川の土手沿いを走っていた。特に話をすることもなく、二人は静かに自転車を走らせた。川の流れる音、車の走る音、そして二人の自転車のこぐ音だけが聞こえる。
「なぁ」
急に翔が話しかけてきた。
「何？」
頬を少しぬるい風が撫でた。
「ソロ、また失敗してもーた」
「ん……そうだね」
なんて答えればいいのかわからない。ここでまた頑張ればいいじゃん、とか言ったら軽い感じに聞こえてしまう。
「三田嶋さんはよくできたやん、って言うてくれたけど……情けないなぁ、オレ」
自嘲気味に笑う翔。ここまでくるとどう声をかけていいものかわからなくなる。
「実はな……オレ、中3のコンクール前に部活辞めた」
「えっ？」
陽乃は思わず自転車を止めた。翔も少し前へ行って止める。
「なんで……？」
「俺とモメたんも理由のひとつやろ？」
不意に後ろから声が聞こえた。聞き覚えのある声。
後ろを向くと、佐野　修平が立っていた。
「……。」
翔は何も言わず、ジッと修平を見つめた。
「まだ引きずってんのか？」
「……。」

翔は何も答えない。静かな時間だけが流れていく。
「もうえぇやろ、その話は」
翔が話を逸らそうとして自転車に跨った。
「そうやってずっと逃げる気か？」
ピクッと翔の動きが止まった。二人の間に挟まれた陽乃は緊張した面持ちでピクリとも動かない。
「そうやって逃げとったって何にも変わらへんねんぞ」
「……。」
陽乃にも何の話かようやくつかめてきた。今日の翔のソロの失敗の話だろう。そして以前、翔本人が言っていた‘トラウマ’の話に違いない。
「ハッキリ言わせてもらうけどな」
修平が自転車から降りて陽乃の近くまでやってきた。やっぱり背が高い。翔よりも高いかもしれない。
「お前のなんかトラウマでもなんでもない。お前のは……」
修平も言おうかどうしようか迷っているようだ。しかし、言い切った。
「逃げてるだけ。弱虫なだけや！」
次の瞬間、翔の自転車が倒れると同時に修平に掴みかかっていた。
「お前に何がわかるんや！」
「わかるわ！　お前はあん時のプレッシャーとか悔しさに耐え切れんかったんやろ！？」
襟掴みされながらも修平は反論する。それに逆上した翔は一気にまくし立てた。
「プレッシャーなんかいつもあったわ！　１年のときからファーストばっかり吹かされて、次第に周りが上手くなってきたら途端に手のひら返して人をバカにしてさ！　お前はいっつもそのまんま。上手くもならんし下手にもならん。使いもんにならん！　もっと表現しろとか感情こめろとか！　１年のときにせいだい人を使っておいてなんやそれ！？　正直なぁ、あんな部活やってられんかった！

でもお前がおったからやってこれたのに……そやのに」
そこから先は何も言わずに、翔は修平の襟から手を離した。
「結局、あそこの学校は自分さえ良ければそれでいい。お前もそうやってんな。みんなで上手くなろうとか、そんな感じがまったくなかった。まとまってるように見えて、まとまってない」
「……。」
修平の顔が渋くなった。
「オレはそんな吹奏楽、嫌やった。だから辞めただけ」
「……でも、お前が辞めた後ウチの学校は……」
修平の顔が今度は寂しげになった。
「そんなん、知らん」
翔はスッと自転車に跨り、先にこぎ出してしまった。
「あっ！　待ってよ、佐野！」
陽乃も慌てて自転車に乗ろうとして、修平に手を引かれた。
「ちょっ……！　なに！？」
「朝倉さん！　お願いがあんねん！」
「えっ……？」
修平は慌てて手帳らしいものを取り出すと、ササッとメモを書いて陽乃に手渡した。修平のフルネーム、携帯電話の番号とメールアドレスが走り書きだが書かれていた。
「後で、アイツにこれを渡したってくれん？」
「……わかった」
メモを受け取ると、陽乃はすぐに自転車で翔を追いかけた。

しかしとっくに翔は姿を消していた。ものすごいスピードで行ったのだろう。陽乃がようやく翔の家に着いたときには、自転車はキッチリ門の中に停められていた。もう8時だ。いくらなんでもこんな時間にインターフォンを押して呼び出すのは迷惑だろう。
「明日でもいっか……」
陽乃が諦めて帰ろうとしたとき、後ろから男の子と女性の声がし

た。
「あら？　朝倉さん」
「あっ……こんばんは！」
友美子と智輝が買い物袋片手に立っていた。
「こんばんは。合宿、終わったんやね？」
「あ、はい。演奏会も終わって……大きい荷物は明日持って帰ることになってます」
「あぁ、そうなんや。あ、智くん、先に入っててくれへん？」
「は～い」
まだ声変わりのしていない高い声で返事をして智輝は家の中に先に入っていった。
「それ、翔に渡したいんやろ？」
手にしていた紙をチラッと見て友美子は言った。
「あ、はい。あ、でも全然急ぎじゃないので」
「あたしが渡しとこか？」
「えっ、いやでも悪いんで……」
「そんなん気にせんと！　ホラホラ。多分あの子、今日は機嫌悪いから呼んでも降りてこぉへんし」
「え……なんでわかるんですか？」
「自転車」
そう言われて陽乃は翔が停めた自転車を見た。よく見ると、スタンドも立てずにそのまま壁に立てかけている。
「小さい頃からいっつもそうやねん。友達とケンカしたり鬼ごっことかかくれんぼで負けたらいっつも自転車、壁に立てかけて停めるんよ、あの子」
「……変わったクセですね」
陽乃はクスッと笑って翔の部屋を見上げた。電気は点いている。そんなに落ち込んでもいないのだろうか。大音量で音楽が漏れてきている。
「近所から苦情来るやないの、あんな音量でかけてたら」

友美子は少し怒ったような口調で、けれど優しい顔で上を見て言った。
「それじゃ、これは渡しとくから」
「ありがとうございます。夜遅くにすみません」
「いいえ。じゃあ朝倉さんも気をつけて帰ってね」
「はい。失礼します」
陽乃はすぐに自転車に跨り、ゆっくりこぎ始めた。
「翔〜！　アンタに手紙来てるよー！」
友美子はドアを開けるなり、2階にいる翔を呼んだ。

「あれ？」
陽乃は自転車に乗ってふと気づいた。
「あの人……なんで？」
修平が手紙を渡す前、確かに「朝倉さん！」と名前を呼んだ。しかし、修平の前で名乗った覚えもないし翔も名前を呼んだりすることはなかった。
「なんでだろ……変だな」
陽乃は首を傾げながら家へ向かった。

同じ頃、修平は自宅で風見台高校の吹奏楽部員とメールをしていた。今日、隣で翔がソロを失敗したときに笑っていた女子――濱口（はまぐち）優衣（ゆい）だった。
『どうだった？　あの子に渡せた？』
『なんとか。本人には渡せなかったけど、朝倉さんに渡してもらえる感じ』
『マーチ・ベスト・フレンド』の着信メロディ。修平の着メロは全部吹奏楽曲で統一されている。すぐにボタンを押して内容を確認する。
『良かったね☆　修平くんずいぶん前から朝倉さんのこと気にしてたからね（笑）　メルアドとか聞いたの？』

『まさか。俺にそんな度胸あると思う？』
返信をして携帯を閉じ、ベッドに寝転んだ。
「朝倉さんって、何の楽器やってるんだろ」
自分は陽乃のことをよく知らない。翔のほうがずっとよく知っているだろう。二人の間にはずっと秘密なんてなかったのに、あの日以来、二人には知らないことが増えすぎた。
修平はゆっくり目を閉じ、そのまま眠ってしまった。

第５０話　佐野ｖ．ｓ佐野（後書き）

一時期、どこかで演奏を一緒にしたことがあるらしい翔と修平。二人とも関西弁を話すところから考えると、中学時代の同級生でしょうか？

第５１話　克服のために

翌日、翔は特に昨日のことも引っ張らずに部活へ行こうとした。
家を出てすぐ、門のところにもたれている陽乃を見て少し驚いたようだったが、すぐに声をかけた。
「おはようさん」
陽乃も少し緊張していたようだがすぐに「おはよう」と返した。

つくし野川の土手を歩きながら翔が言う。
「どないしたん。珍しいやん、オレのお迎えなんて」
「まぁね」
昨日の話も気になるが、それ以前に翔とあのもう一人の佐野がいったい誰なのか。第一、なぜ名乗りもしていないのに彼が陽乃の名前を知っているのかが気になって仕方がなかった。昨日はそのおかげでなかなか寝付けなかった（と由利にも言ったらウソばっかりと笑われたが）。
「あのさ、聞いていい？」
「おう。何でも聞いてえぇぞ」
「昨日のもう一人の佐野って、佐野とどういう関係？」
言ってててややこしい。自分でもなんだかよくわからなくなる。
「まぁ、言っちゃえば簡単やけど」
「うんうん」
「中学時代の同級生」
「へ？」
なんだ。それだけなの？
陽乃は心の中でそう思ったが、それ以上の説明を求めようもない。
「一緒に演奏とかしたの？」
「そりゃまぁな。同じ吹奏楽部やってんから」
「そのわりに……」

言おうかどうしようか迷ったが、言った。
「仲、悪いんだ」
「ん……」
ちょっと意地悪っぽい言い方をしたが、珍しく翔は言い返してこなかった。
「昔は仲、良かってんけどな」
翔は懐かしそうに呟いた。川のほうを向いているのでどんな表情をしているのか、陽乃からは見えない。
「まぁえぇねん。アイツはアイツで吹奏楽やってるみたいやし。ちょっとヒネくれたところは相変わらずやけど」
クスッと小さく笑いながら翔は安心したように、しかしどこか寂しげに言った。
「ほら、遅刻すんぞ。走ろ」
翔が走り出したので、陽乃も慌てて津上橋の上を駆けていった。

（結局どういう関係なのか詳しくは教えてくんないんだから……）
陽乃はプゥッとふくれた顔をしながら楽器を準備していた。その様子を見て美里が声をかけてきた。
「どうしたのよ。朝からそんなふてくされた顔をしてるとカワイくならないぞ？」
どうも美里は男っぽい感じが未だに抜け切らない。勝気な性格のせいか、凛々しい（？）顔立ちのせいかはわからないけれど、とにかく男っぽい感じがしてしまう。
陽乃はそう言われてちょっと不自然な笑顔をしつつ、答えた。
「だってさぁ～佐野ったらちーっとも私に心、開いてくんないんだもん」
「なぁにそれ。今さらなに言ってるの」
「なんかさ、中学の頃に仲良かったっぽい友達の話なんだけど、聞いてもちーっとも教えてくれないんだよ？　ヒドいと思わない？」
「うーん、そうかなぁ」

美里はバチで基礎練習をしながら不思議そうに答えた。
「思わないの？　みさっちは」
「あたしは全然、そんな風には思わないよ」
「なんでぇ？　なんでそう思うの？」
「いちいちそんな自分のこと全部、他人になんて話してらんないでしょ？」
「ん～……そうかなぁ」
「そうだよ。たとえば朝ちゃんだってそうでしょ？」
「え？」
「好きな人の話とか、ちっともあたしたちにしてくんないじゃん？」
「！！」
美里がニコニコ笑いながら近づいてきた。
「なんなら、今すぐここでぶっちゃけ大会始めてもいいんだけどな～？」
「あーっ！」
陽乃はわざとらしい大声を上げた。
「早くパート練習に行かないとまぁた佐野に怒られちゃうよ！　それじゃあね、みさっち！」
慌てて駆け出した陽乃を見て美里は「やれやれ……」とため息をつきながら基礎練習を続けた。

「ム～ン……」
翔は3年3組の教室でリードを全部出しながらしかめっ面をしていた。
「やっぱリードのせいでも楽器のせいでもないよなぁ。ほなやっぱ自分の根性が足らんだけかぁ」
はぁ～と脱力しながら翔は呟いた。
「ちょっと自己嫌悪……」
この間の演奏会でもやっぱりソロを失敗してしまった。それを楽器の調子が悪いんじゃないか、リードが悪かったんじゃないかと思

っていま調べてみたが、どれも至って快調だった。つまり、悪いのは自分ってことになる。

「どないしたら根性つくんやろ～。このまんまやったらマジヤバい～」

グーッと背もたれの後ろに伸びをしていくと、陽乃の顔が視界に入った。

「わぁお！」

「そ、そんなにビックリしなくたっていいじゃん？」

「聞いたんか、いまの独り言」

「ゴメン、聞いちゃった」

陽乃はあっけらかんと言ってしまった。

「最悪や……」

ガックリとうなだれる翔。ポン、と陽乃が翔の肩を叩いた。

「ん？」

ニッコリ笑う陽乃。嫌な気配を翔は感じた。

「佐野がソロで失敗しない練習のためのいい方法、あるんだよ」

「なんやねん。言うてみぃ」

陽乃がコソコソ声で翔に言った。

「はぁ！？　ムリやろ、ム・リ！」

「そんなことないよ～。みんな正直だし、優しいからきーっと緊張せずに吹けるって」

「でも、初めての舞台やのに……」

「監査会で見せた根性、見せてよもう一回」

ニコッと陽乃がまた笑った。

「……じゃあ、頑張るわ」

翔はその笑顔に負けて、陽乃の要求を呑んだ。

「本番は来週！　頑張ってね、佐野」

陽乃は笑顔で教室を出た。どうやら譜面台と譜面を取りに行くらしい。

「来週の金曜日か……」

あとちょうど1週間。
翔はサックスのソロ曲集が載った本を開けた。

第５１話　克服のために（後書き）

人前でソロを吹くとどうしても失敗する翔のために陽乃が提案した、次の依頼演奏での翔のソロ。残り１週間でどれほどのレベルのソロを翔は披露するのでしょうか。

第５２話　百恵Ｔｉｍｅ

８月５日（金）。いよいよ初めて受けた依頼演奏の日がやってきた。

場所は七海高校から歩いて１０分のところにある老人ホーム「結縁寮」。「縁結びがあるように」という願いを込めてつけられた名前だと小学校のときに聞いた。

「へぇ～！　キレイな施設やん」

翔は「結縁寮」の建物を見上げて声を上げた。４階建て。３００人のおじいちゃんおばあちゃんを収容できる。何人の看護師さんや介護師さんがいるかは聞いたことがないが、この施設の充実度は県内でも有数だという。

「い、いいのかな？　私たちがこんな所で演奏なんて……」

由美子が建物を見て改めて緊張をあらわにした。

「それはあたしも思う。なんか、あたしたちに場違いって感じ……」

美里もドラムセットのタムタムを抱えながら立ち尽くしている。

その後ろからチューバのケースを重そうに運ぶ拓真がやって来た。

「そんなことねぇよ。俺のばあちゃん、ここに入所してるけどみんな優しい良い人ばっかだぜ」

「へぇ！　拓あんのおばあちゃん、ここに入ってるんだね」

後ろから汗をかきながらユーフォニウムのケースを抱えて春樹がついてくる。なんだか最近、拓真と春樹が見てくれもソックリに見えるのは陽乃だけだろうか。

「それじゃ、なおさら頑張らないとね」

絵美が譜面台が１０本も入ったダンボールを軽々と持ってきて言った。

「お前ら、感動ばっかりしてんとちょっとは手伝えよ」

慎也が不機嫌そうに汗をいっぱいかきながらトロンボーンとフルートを持って現れた。

「ゴメンゴメーン！」
それを見て、全員が恭一の車に走って楽器を降ろし始めた。

大ホールに入ると、予想以上のおじいちゃんおばあちゃんでごった返していた。生演奏が聞けるという話を聞いたみんなが楽しみに集まってきたと職員の人が言っていた。
「ちょ、ちょっとちょっと！　何よあの人数！　聞いてないですよ、先生！」
さすがに驚いた絵美と陽乃が恭一に詰め寄った。
「いや～ちょっといろいろあってな……な、本堂」
ビクッと拓真が体を大げさに反応させた。
「本堂くん？」
絵美がニッコリ笑いながら近寄った。
「そういえばさっき、おばあちゃんが入所してるって言ったけど……まさか？」
「ゴメンなさい！」
拓真が急に土下座をしだしたので美里や絵美、陽乃も驚いて2，3歩引いた。
「俺がおばあちゃんに話したら、なんか友達とかに『孫が出るのよ』『孫が来るのよ』と言いふらしちゃって……なんかこんなことに」
「……。」
全員が改めて大ホールを見直すと、さっきより人数がさらに増えている。もはや満員としか言いようのない状態。
「拓あんフィーバーやな」
翔がクスッと笑いながら言うと、それに雪子や由美子も笑ってしまった。
「ちょうどええぇやんけ」
翔の目の輝きが、監査会のときのようになったのを陽乃は見逃さなかった。
「おじいちゃんおばあちゃんを喜ばせてあげて、ついでに七海高校

吹奏楽サークルの知名度もいっぺんに上げようぜ！」
翔の一声に、全員の気持ちが一気に上がった。
「それでは！　お手を拝借！」
翔が手を差し出すと、雪子、由美子、沙希、美里、絵美、慎也、春樹、拓真、そして陽乃の順で手が重なった。
「七海高校！　吹奏楽サークル！　ファイトーッ！」
「「オーッ！」」
その姿を見て、恭一も嬉しそうにうなずいていた。

「それでは、七海高校吹奏楽サークルの皆さん、よろしくお願いします！」
職員の女性のアナウンスがかかり、1列目は沙希を先頭に、2列目は雪子を先頭に入場した。譜面台の高さや譜面をチェックしながら恭一と目を順番に合わせた。
（OK？）
恭一の口パクに、全員がうなずいた。
それを確認すると、恭一はクルッとお客さんのほうを向いてお辞儀をした。
「それでは、本日の1曲目に参りたいと思います。1曲目は、『リンゴの唄』です」
その声におじいちゃんおばあちゃんから一様に拍手が起こった。
手拍子がすぐに沸き起こり、演奏側もノリやすい。陽乃はお客さんと一体になって演奏することが、こんなにも楽しいのか、こんなにスゴいことなのか――。胸が躍る思いだった。
そのあと、学生時代、月影のワルツ、高校三年生と曲を進めるにつれてどんどんと盛り上がっていく。懐メロの登場におじいちゃんおばあちゃんのテンションが上がっていく。
憧れのハワイ航路の曲がやって来た。
唇を切るほど練習したこの曲。陽乃の思い入れも一入（ひとしお）だ。
（頑張れ！　私！）

陽乃はリラックスしてハイB♭の口を準備した。

（あっ！）

プスッと音が外れた。

（ま、しゃーないしゃーない！）

陽乃は心の中で関西弁を話しながらすぐに曲へと意識を戻した。

音が外れたことで動揺するんじゃないかと恭一も心配していたが、笑顔の陽乃に安心してすぐにスコアに目を戻した。

「いいねぇ、懐かしいよあたしゃ」

絵美のすぐ前にいたおばあちゃんが涙ながらに手拍子をしている。

「もう一度、ハワイに行きたいねぇ」

翔の正面にいるおじいちゃんも同じように言った。

ハワイ航路が終わっただけでも、みんなほとんどが大きな拍手をくれた。恭一は深々とお辞儀をした。

「ここで、少し部長の独奏の時間をいだたきたいと思います」

突然、恭一がそういって翔のほうを向いた。翔も力強くうなずく。

恭一の横に立って軽くお辞儀をしたあと、翔は改めて観客のおじいちゃんおばあちゃんをグルリと見渡した。やはり部屋は満室。見知らぬ人ばっかりだ。

否が応でも心臓の鼓動が高鳴ってくる。

スーッと深呼吸をして、翔はみんなに向けて挨拶をした。

「はじめまして、おじいちゃん、おばあちゃん。僕はこの吹奏楽サークルでアルト・サックスっていう楽器を吹いてる部長の佐野っていいます。気づいてるかもしれんけど、大阪出身です。喋り方でわかるかな？」

すると「ワシも大阪出身やぞ！」という声が中央あたりから聞こえてきた。そのおじいちゃんにニッコリ笑って手を振り返す。

「今日は、山口百恵さんの曲を何曲か演奏したいと思います。よかったら聞いたってください」

拍手が歓声とともに湧き上がる。
翔はリードの位置を立奏のときの位置に変えて、息を吸い1曲目を吹き始めた。
「おぉ～秋桜(コスモス)じゃ」
おばあちゃんの何人かが嬉しそうに声を上げる。陽乃は初めて聴く曲だったが、翔の奏でる音色に聞き入ってしまった。
突然テンポが速くなった。
(あ、これ知ってる)
プレイバックPart2だ。
「ちょっと待って、プレイバック！　プレイバック！」
有名な歌詞の部分だけ知っている。よく考えれば、翔は一週間でこの曲とさっきの秋桜を暗譜したということなのだろうか。
しかし、それだけでなく今度はさっきよりもテンポが上がった曲を吹き始めた。
「おっ、イミテイション・ゴールドじゃな」
翔の顔を見てみた。
ソロだけど、緊張していない。むしろ、嬉しそうだ。監査会のときに似ている。あのときよりお客さんはずっと増えているし、伴奏も全然ない状態で吹いているのに、自信にあふれている。
やがてテンポが落ちて、「いい日旅立ち」に曲が変わった。
(あ……これも知ってる)
ビブラートをかけて色っぽく吹く翔。しかし、よく4曲も暗譜できたものだ。この曲を吹き始めたときには、おじいちゃんおばあちゃんも静かに聞き入っていた。
(あ……)
翔の真正面にいるおばあちゃんが、ハンカチで涙を拭っていた。
何かを思い出したのだろうか、嬉しそうに笑ってはいるが涙が止まらないようだ。
「おい、あの子は昔、一緒に演奏したことある子とちゃうんか？」
先ほどの関西弁のおじいさんが隣にいる少年――佐野　修平に話

しかけた。
「うん、そやで。佐野　翔。じいちゃんも会ったことあるやろ？」
コクンとおじいさんはうなずき、また曲に聞き入ってしまった。
（懐かしいな……。よく考えたら、俺とお前で演奏した曲ばっかり集めやがって……）
修平も懐かしくなって、目を閉じて聞き入ってしまった。
2日前だ。翔から修平の携帯電話にメールが入ったのは。

『オレの生き様を見に来い！笑』

そう書かれた後、演奏場所、日付と時間だけが送られてきた。偶然にも、自分の父方祖父が入所していた老人ホームだった。もし誰も入所していなくても、きっと自分は来ていただろうけれど。
日が傾き始めていたが、翔の音色は大ホール中に響き渡りそこにいる全員の心に染み入っていた。

第５２話　百恵Ｔｉｍｅ（後書き）

吹奏楽サークル全員が、そして翔が奏でたＳａｘの音色で時間が過ぎるのも忘れるほど楽しんでくれたおじいちゃん、おばあちゃんたち。またひとつ、部員の経験値を上げることができた舞台となりました。

ちなみに、翔が今回ソロに選んだ曲の原案はニュー・サウンズ・イン・ブラスの２００４年（第３２集）に収録されている『ジャパニーズ・グラフィティＩＸ　いい日旅立ち』を参考にさせていただきました。

第53話　ナンチュー仲間

依頼演奏が終わった日の夜。

翔は自宅2階のベランダの柵の間から足をブラブラさせてボーッと景色を眺めていた。七海市の中でも少し標高の高い土地に住んでいる翔。その自宅からは東南のほうを見ると東京湾アクアラインが見えるし、東のほうは新宿副都心の夜景が見える。少し贅沢な気分に浸れる場所だ。

今日の演奏では思った以上にお年寄りからの評価が良かった。あんなに拍手をもらえたのは本当に久しぶりだった。感極まって泣いている人もいた。それを見て思わず翔も涙ぐんでしまい、拓真や春樹に茶化されてしまった。

（やっぱり佐野はソロ吹いてるときが一番カッコいいよ）

陽乃が楽器を片付けているときにサラリと言ったこの一言が、耳について離れない。思い返してみれば、今日のソロのときに一回も失敗しなかった。緊張はしていたが、それ以上に人前で堂々と吹くことに快感を覚えていた。

言葉にできない、不思議な感覚。

あの時以来、もうこの感覚を味わうこともないだろうと思っていたのに再び味わうことができた。それ酔いしれているとでも言ったほうがいいのだろうか。いまのこの感覚は。

2階に上がるときに持ってきたココアを口に含んだ。甘い飲み物がやっぱり好きだ。

不意にチリンチリン、と自転車のベルの音がしたのでそちらのほうを見ると、修平が自転車に跨っていた。

「オッス」
翔は微笑みながら「よう」と短く答えた。
修平は自転車から降りて、翔に降りてきてほしそうな顔をした。
「お前が上がってこい」
「えぇんか？」
「そこの木の近くから上がってきたら、楽に来れる」
「わかった」
修平はすぐに塀をよじ登り、新築の翔の家には不釣合いな大きな木に手をかけてすぐに登ってきた。
「ほれ」
翔が手を伸ばす。修平はその手をしっかり握ってそのまま勢いよくベランダに上がりこんできた。
「ありがと」
「どういたしまして。飲むか？」
翔はさっき口にしたココアを修平に手渡した。
「サンキュ」
クイッとおいしそうに飲む修平を横目に「オレの飲み差しやけど」と付け足した。
「最悪やな」
笑いながら修平はもう一度、ココアを口に含んだ。

「今日はお疲れさん」
同じように柵の間から足を出し、修平が労いの言葉を口にした。
「緊張したやろ？」
「まぁな……」
遠くから電車の走る音がする。七海市は夜は静かなベッドタウンになる。ほとんど物音がしない。喋り声、自転車の走る音、それと虫の鳴き声。
「でも、それ以上に楽しかったで」
翔が足をブラブラさせ始めた。

「初めてお前と演奏したときくらいに」
「……そっか」
虫の鳴く声がする。今年の夏は猛暑なのに、せっかちな虫がいるものだ。
「修平」
「ん？」
「もちろん、アルト吹いてるやろ」
「当たり前やん。俺、アルトに一目惚れしてるから」
クスクスと翔が笑った。
「オレも一目惚れ」
「一緒やんけ」
つられて修平も笑ってしまった。
「でも、フラれそう」
急に修平の声が寂しげになった。
「フラれそう？」
「うん」
修平は立ち上がって柵にもたれる姿勢に変えた。どの向きになっても、翔となかなか目を合わせようとしない。
「風見台高校、思った以上に厳しいねん」
「……知ってる」
私立風見台高等学校吹奏楽部。毎年関東地区大会に出場し、3年ほど前までは全国大会への常連校でもあった。しかしここ最近、関東地区大会でダメ金（※1）で終わることが連発するようになった。スランプのようなものだろうか。
「そんで、パート内選出みたいなんが毎年あんねんけど」
よくある話だ。上手い学校ほど部員数も増える。そうなればコンクールにはレベルの高い部員を出したいというのが顧問やレッスンの先生の考えることだ。その結果、部内選考を行って一人でも良い演奏者をコンクールに出す。そういうシステムはどこでも取られている。かつて、翔と修平が入っていた大阪市立淀南中学校吹奏楽部

でも同じシステムが取られていた。そして中3の夏に、二人の運命はキッパリと分かれたわけだが。

「俺、打楽器に回されそう」

「は？」

予想外の言葉に翔は驚いた。

「別にな、打楽器が嫌いとかそういうわけちゃうで。誤解すんなよ？」

「うん……それはわかる」

何年の付き合いだと思ってるんだよ。

翔は苦笑いしながら心の中で呟き、けれども修平と顔を合わせずに夜景を見つめていた。

「でも、サックスと離れられへん。今さら」

翔もそうだ。今さら打楽器に変われと言われても美里には申し訳ないが、変われない（美里がいたら、変われといわれてやって来たと言えば逆に言った人に彼女が文句を言いに行くだろう）。

「そうやな……」

「でも、吹奏楽は好きやし」

「うん……」

「諦めて変わるしか、ないんかな」

「諦めるっていうか……うーん」

翔も言葉に悩んだが、とりあえず続けた。

「諦めるんやなくって、打楽器の中で見つけられることってのもあるんちゃうかな」

「そんなんあるかな」

嫌気が差したかのような顔で修平が笑う。

「たとえばさ、グロッケンとかシロフォンって平均律で音とってるやろ？　あれで音程の感覚掴むことできるやろうし、ベードラ（※2）とかやったらリズム感覚覚えやすいんちゃうかなぁって思うけどなぁ」

「……。」

修平は相変わらず無言で柵にもたれているだけ。
「まぁ、そんな簡単なもんちゃうけど」
すっかり冷めてしまったココアを口にした。冷めても甘さは変わらない。
「翔はどうした？」
「え？」
「ナンチューの吹奏楽部辞めたあと」
ナンチュー。
淀南中学校の短縮形。
「自分で楽器買った」
「え！？」
修平がやっと翔のほうを見た。
「自分でか？」
「自分で３割、親が７割出してくれた。その７割は出世払いで返す」
本当だ。
いま翔が吹いているサックスは６０万円近くした。中３当時の翔にはその３割しか払える貯金がなかったので残りの金額を全部、親から負担してもらった。苦しかったけど、想い出のサックスだ。
「出世払いか。お前らしいなぁ」
このとき初めて話し始めてから修平が笑った。さっきまでの笑顔とは何か違う、心に決めたような笑顔だった。
「俺も自分のサックス買おうかな」
スッと立ち上がり、新宿のほうを見ながらはっきり言った。
「出世払いで」
翔のほうを向いてニッと笑いながらそう言った。
「マネしいやな、お前」
「お前と一緒におったらこうなった」
修平は残ったココアをグイッと飲み干した。
「今日の演奏、マジで良かったで」
「毎度おおきに」

ちょっとワザとらしい関西弁を使ってみた。こんなの、普段使いはしない。
「どういたしまして。ほな、夜遅くにスマンかったな」
「気ぃつけて帰れよ」
「うん」
修平は上がってくるときとは逆の動きで素早く道路へ降りていった。
「修平！」
自転車に跨って走り去ろうとした修平に、最後に言っておいた。
「また、サックス買ったら教えてや」
「わかった！　それとさ、翔」
「なんや？」
「朝倉って子に、こないだはゴメンって謝っといて」
「……ＯＫ」
翔はＯＫサインを指で出した。
「じゃあ、また」
「ん」
そういって修平は自転車をこぎ始めた。翔は手を振りながら修平の姿がだんだんと暗闇に紛れて見えなくなるまで、ずっとその方向を見ていた。

第５３話　ナンチュー仲間（後書き）

大阪の淀南中学校吹奏楽部で一緒に演奏していた翔と修平。お互いの境遇は違えど、互いにＳａｘを吹き続けることを誓った二人でした。

（※１）ダメ金：吹奏楽コンクールで金賞はもらえても次の大会に出場できなかった金賞団体が使う言葉。地域差があるかもしれません。

（※２）ベードラ：バスドラムの短縮形。大太鼓と一般的に呼ばれるもの。

第５４話　稀少種？

季節は秋になった。
１０月１日から七海高校の制服は冬服に替わった。
「おーっす！」
翔がいつものように元気よく部室に顔を出すと、すでに部員のほとんどが部室にそろっていた。
「ん？」
よく見ると、なんだか見たことのない制服が混じっている。
「あ、聞いてよ佐野～」
陽乃が嬉しそうに手招きした。
「どないしてん？　その子の制服、ウチのんちゃうやろ？」
「うん！　今日、何の日か知らないの？」
「うーん？」
翔は何の日か一生懸命思い出そうとした。
沙希の誕生日はこのあいだ大騒ぎして終わった。雪子の誕生日は今月だがもっと先。自分の誕生日はとっくの昔に終わってしまったし。もちろん、演奏会ってわけでもない。
「何の日やっけ？　思い出されへんわ」
翔は首を傾げながらみんなに聞いた。
「今日はね、オープンハイスクールの日なんだよ！」
雪子がワクワクした様子で教えてくれた。そういえば、なんか見慣れない制服の子やそれについて来ている母親の姿をよく見た気もする。
「それで、そのついでっちゃーなんだけど、吹奏楽サークルに見学に来てくれた子がいるのよ」
美里がバチで基礎練習をしながら言う。
「へぇ～……見学ねぇ……ってマジで！？」
翔はカバンを放り投げてその男の子のところへ駆け寄った。

男の子は一瞬驚いた顔をしたが、すぐに笑顔でコクコクとうなずき自己紹介を始めた。
「えっと、袴田中学校の逢沢（あいざわ）　駿（しゅん）っていいます」
「袴田ってことは、吹奏楽部入ってるの？」
絵美が聞いた。
「はい。バスクラ吹いてます」
「バスクラ！　ねぇ、稀少種だよ！」
沙希が嬉しそうに飛び跳ねた。
「稀少種って……絶滅危惧種じゃないんだから」
絵美が苦笑する。そして、駿に聞いた。
「ねぇ、袴田って吹奏楽部けっこう厳しいんでしょ？」
「そうですね～。池上先生、ちょっと偏屈ですし」
駿は笑いながらアッサリ言ってしまった。
「私もね、袴田中出身なの」
「ホントですかぁ！　吹奏楽、してなかったんですか？」
「ホントはしたかったんだけど、レベルが高すぎるから諦めてたの。でも、七海高校で始めたのよ」
「そうなんですかぁ。吹奏楽って、楽しいですよね！」
「うん！　スッゴく楽しい」
絵美が笑顔で駿に答えたのを見て、翔も嬉しそうにしている。
「いつからこの吹奏楽サークルのこと知ってたの？」
美里が不思議そうに聞いた。まだ演奏会らしい演奏会にも出ていないし、それほど知名度が高いわけでもない。
「このあいだの老人ホームの演奏会、実は俺たち外から演奏聞いてたんですよ」
「えーっ！？　あの演奏を！？」
翔がまた大声を出した。
「はい！」
駿はまだ幼さの残る顔でニッコリ笑って続ける。
「あのときＳａｘ吹いてた人って、先輩ですよね？」

「先輩……」
翔は違和感を覚えていた。中学校のときは「佐野さん」という具合にさん付けで呼ばれていたのでかなり違和感がある。しかし、それ以上に嬉しい。
「聞いてんの？　佐野」
陽乃が前で手をブラブラ振った。翔はハッと気づいて駿の質問に答えた。
「あぁ、うん、そう！　オレ！」
「やっぱり！　俺の友達も先輩のこと気にしてましたよ。今日はたまたま都合が会わなかったから来れてない子がいるんですけど、会いたいって言ってましたし」
「他にもウチの吹奏楽気にしてくれてる子がおんの？」
「ハイ！　アルトサックスの子と、オーボエの子。それにボントロの子も」
「ボントロ？」
雪子が聞いたことのない楽器かと思っていたようなので「あぁ、トロンボーンのことですよ」と駿は付け足した。
「その子たちみんながウチの吹奏楽に興味もってくれてるの？」
陽乃がまだ信じられないという感じで聞きなおした。
「はい！　ぜひ一度見学に行きたいって」
全員がポカーンとした様子で駿を見つめた。
「あれ？　どうかしました？」
「いや……実はね」
「ここにおる全員、ほぼ初心者やねんけど……」
「え……」
駿もつられてポカーンとする。
「ホントですか！？」
駿がとても驚いた、しかしどこか嬉しそうな声を上げた。
「え、う、うん」
翔は心配そうにうなずいた。けれども駿はまったくそんなことは

気にしていない。
「すっげぇ！　すごい！　皆さん４月から吹き始めたんですか！？」
「ま、まぁ……。そこの大谷さんとオレを除いては全員初心者やけど……」
「すっげぇ……。感激しましたよ、俺！」
駿は全員の顔を一瞥した。
「あ、そろそろ帰らないと……また来させてもらっていいですか？」
「もちろん。ウチみたいな吹奏楽でよかったら」
翔は優しく微笑んで駿に言った。
「次は楽器体験とかもいいかもね」
由美子がバスクラリネットの棚を見つめながら言った。
「っていうか、吹かないと帰さないかもよ？」
慎也が少し意地悪そうに笑って駿の頭を小突いた。
「えぇ～！　マジっすかぁ」
駿が困ったような顔をすると、絵美が「やめて！　私の後輩に変なことしないで！」と真剣に慎也との間に立ちはだかった。
「橋本さん、落ち着いて、落ち着いて。まだウチの直属の後輩じゃないから」
春樹が苦笑いしながら絵美を止めた。
「プッ……アハハハ！」
駿がおなかを抱えて笑い出した。
「皆さんホントおもしろい先輩方ばっかりですね！　決めました。俺、七海高校受けて吹奏楽入ります」
「早くね？　それ決めるの」
拓真がクスクス笑いながら言ったが、駿は真剣に「俺、今から勉強がんばります！」と張り切っていた。
「それより、ホントにそろそろ帰らないと」
美里が心配そうに時計を見た。
「あ、ホントだ。それじゃあ、先輩方今日はありがとうございました。また、みんなを連れてきますね！」

駿がカバンを抱えて外へ出ようとした。
「待ってるよぉ」
陽乃や雪子がニコニコしながら手を振った。
「オレ玄関まで送ってくるわ」
翔は音楽室用のスリッパから自分のスリッパに履き替えて駿と一緒に廊下へ出た。

「いい子だったね～あの子」
陽乃は嬉しそうにトランペットを出しながら駿のことを思い出した。
「それにイケメンさんじゃん!?　あの子」
美里が押さえられないといった具合に喋り始めた。こうなると美里は止まらない。
「またそれだ。田中のお得意のイケメン探し」
慎也が小ばかにするように笑った。
「いいでしょ別に。あたしの趣味なんだから」
「悪趣味～」
「うるさいわね！　あんたバチで思いっきり叩くわよ!?」
「本来の使用目的以外での使用を禁止しま～す」
ドタバタと走り出した二人を見て雪子と陽乃はため息をついた。
またか、といった雰囲気で。最近、慎也と美里の二人はこんなふうに兄妹げんかみたいなやり取りのあとにいつも部室で走り回っている。
「あぁ～あ、仲のよろしいこと」
「ホントにね」
ふと気づくと、春樹が横で何か考え事をしている。
「どうしたの？　水谷くん」
「いや……あの逢沢って子……誰かに似てるような気がして」
「そう？」
陽乃はもう一度駿の顔を思い出した。あの人懐っこい笑顔。確か

に、誰かに似ているかもしれない。
「そういえば……誰だろ？」
陽乃もどこかで見たことある気がした。
「気のせいじゃないの？」
雪子も考えてみたが、思い出せない。
「気のせいかな」
「そうそう」
すると駿を見送り終わって帰ってきた翔が入るなり「基礎ロングトーンするで～」といいながら音楽室に入っていったので、５人は慌てて音楽室へと駆け込んだ。

第５４話　稀少種？（後書き）

誰かに似ている見学の中学生・逢沢　駿くん。今度の見学の時には何人の同級生を連れてくるのでしょう？

第５５話　吹奏楽連盟

「おーい、座れ～」
ずいぶんと日がくれるのも早くなってきた頃、部活が終わる頃になって恭一が音楽室に姿を現した。
「先生？　まさか今から合奏するんですか？」
今度の本番といえば、１１月３日にある地区秋祭りでの本番くらい。まだそのときに吹くための楽譜は配られたばかりで、合奏できるレベルなんかには程遠い状態だった。
「えー！　あたし全然まだ叩けないんですけど！」
美里が慌てて譜面入れを出してバチを片手にドラムセットのほうへと走り出した。やっぱり慌て者な性格はまだ治っていない。
「こらこら、田中。落ち着け。合奏はしないよ」
恭一がまた始まったといわんばかりの顔で美里を落ち着かせると、咳払いをした。
「えとな、とりあえず座ってもらおうか」
恭一がやけによそよそしいので部員は不審に思ったが、とりあえず言われるがまま全員が座る。
「今日話すことは、お前らにとってとっても重要なことだ」
「……？」
翔ですら何も聞いていないようで、陽乃と顔を見合わせて首を傾げた。
「そうだなぁ……まずはこっちから話そうか」
そう言いながらプリントが配られた。何かのテキストらしいものを印刷したようだ。
「七海市吹奏楽連盟？」
春樹が聞いたことがないものを恐る恐る見るかのようにゆっくり読み上げた。
「そうそう。七海市の教育委員会の中から吹奏楽に携わっておられ

る方々を中心に組織されている、いわば市内のすべての小学校から高等学校まで、あるいは大学や一般企業の吹奏楽団体に対していろんなことをしているような機関のことでな。たいていの市にはこのような吹奏楽連盟があるんだ」

そういえば、淀南中学校があった西大阪市にも市の吹奏楽連盟があったことを翔は思い出した。当時は中学生だったので、あまりそういうことを気にすることもなかった。

「それでな。このあいだ、自主練習の日が二日ほどあっただろ？」

先週の木曜日と金曜日だ。金曜日は合奏の予定だったが、急遽個人練習あるいはパート練習に変わってしまった。翔も「先生は出張やって」としか言っていなかった。本人もあまり詳しく聞いていなかったようだ。

「その日に、当七海高等学校吹奏楽サークルは所属することになりました！」

一瞬、沈黙が落ちる。

「あれ？　お前ら反応薄いな」

恭一が思ったより薄い部員の反応に少し驚いているようだった。

「いや、あんまりその連盟に入ることでなんか変わるんかな～って不思議に思って……」

翔が申し訳なさそうに言うと恭一は「なんだ、佐野ですらよくわかってなかったのか」と困った顔をしていた。

「まぁな。知っているほうが珍しいだろうし」

そういうと、恭一は座りなおしてまた咳払いをすると吹奏楽連盟の説明をし始めた。

七海市の吹奏楽連盟に入ると、毎年3月・7月・12月に行われる市吹奏楽連盟主催の定期演奏会に出演できる、コンクールが開かれた七海市中央ホールで優先的に演奏会ができる、2月に行われるソロ・コンテストにも出場できるなど様々な特典があるという。

「すごーい！　そんなのあったんだぁ」

由美子が喜びのため息を漏らした。

「それとな、もうひとつ説明しておくことがある」
「まだあるんだ」
拓真がワクワクした様子で続きを待っている。
「同時にな、次の日に神奈川県吹奏楽連盟にも所属してきたぞ」
「県の吹奏楽連盟に!?」
これには沙希や翔も驚いた。
「県の吹奏楽連盟って入る条件とか厳しいんじゃ……」
「いや、これに関して所属するのにこれといった規定はないようでな。申請してまもなくといっても今日だったんだが、加盟手続きは既に終わっている」
「はぁ～……いつの間に」
翔は恭一の手際のよさに驚いた。
「それでな、この神奈川県吹奏楽連盟に入ったことで夏の吹奏楽コンクールや秋のマーチングコンテスト、冬のアンサンブルコンテストにも参加できるようになったぞ!」
「コンクールに!」
一気に部員の目の輝きが変わった。
「そのためにも、来年の春はいーっぱい部員入れないとな!」
慎也がニコニコ笑いながら想像にふけっている。
「そうやな! よっしゃ、ほな何人入れるか目標とか決めようぜ!」
「あ、賛成～!」
翔の提案に陽乃や雪子がパチパチと拍手をした。
「その前に!」
恭一が大声を出した。
「一番大事なことを伝えないといかんから、もうちょっと聞いてくれ」
全員がもといた席に座りなおした。
「12月23日の天皇誕生日なんだが」
部活予定表を思い出す。祝日だから、たしか休みになっていた。
金曜日のはずなので3連休になる予定だった。

「この日に、七海市吹奏楽連盟第１３５回定期演奏会に出演することにした」
「え……」
またも静まり返る室内。
「それって、ウチ単独で出演するんですか？」
雪子が不安そうに聞く。それにはさすがの拓真もビックリしたようで反論に出た。
「ちょっと待ってください！　俺たちまだそんな人前で立派な演奏会のときに聞かせられるほどうまくなってませんよ！」
「おい、ちょっと落ち着いて聞いてくれ」
しかし、恭一の言うことは既に耳に入っていない。
「それにさ、いざ出るとなるとやっぱ大曲やらないとダメでしょ？」
絵美が深刻な顔をする。
「え～っ！　Ｍ８（※１）しかやったことないのに無理だよ、そんなの～！」
隣にいた由美子が顔をゆがめた。
「トランペットってハイトーン多いのかな？」
陽乃も心配になってきたようで、しかめっ面をしている。
「コラコラ！　お前ら人の話は最後まで聞くクセつけろ！」
何回大声を出したか恭一もわからなくなってきた。
「何もウチだけで出るとは誰も言ってないだろうが」
それを聞くと、ほぼ全員（沙希と翔を除く）から安堵の息が漏れる音が音楽室に響いた。
「合同演奏として、冬の定期演奏会は出るのがだいたいの決まりというか、雰囲気になっているらしい」
「なんでですか？」
絵美が聞く。
「だいたいどこの学校も１１月くらいに定期演奏会があって、そこで３年生が抜けると演奏レベルが一時的に低下するらしい。その低下した状態を防ぐ意味と、お互いの刺激になればということで合同

演奏をするのがふつうになっているそうだ」
「はぁ～……よく考えてるんだなぁ」
春樹が納得したようにうなずく。
「それで、ウチはどこの高校と演奏を一緒にするんですか？」
沙希はそれが気になるようで、早く聞きたそうにしている。
「えーっと……」
全員の顔がワクワクした様子になる。
「私立風見台高等学校だ」
「え」
翔と陽乃の顔がフリーズしてしまう。しかし、みんなはというと
「お坊ちゃん学校だ！」とか「玉の輿～！」とか言って大騒ぎしている。
「……マジかよ」
翔が苦笑いする。
「まぁ、仲良くやるしかないね」
陽乃も少し驚きつつも、しょうがないという感じがした。
「それと、そのときにする曲を今から聴くぞ」
「なんていう曲ですか？」
絵美がそっちのほうが楽しみという声で恭一に聞いた。
「『アルヴァマー序曲』っていう曲だ」
「へ！？」
それを聞いて翔の顔がさっきより凍りついたようになった。
「先生！」
翔が思わず手を上げる。
「どうした？」
「マジでその曲なんですか？」
「あぁ。向こうの顧問の岩屋先生とも話した結果だ。ウチも向こうもこれくらいならできるだろうってことでな」
「はぁ……そうッスか」
「他に質問ないな？　じゃあ、さっそく音源を聴いてみるぞ」

全員がワクワクした様子の中で、翔は一人心配そうにしている。
ＭＤの再生ボタンが押された。
「えっ……？」
その曲が流れ出した瞬間、陽乃の顔がキョトンとした状態になった。
「速い……」
テンポが思っていた以上に速い。しかも、テンポだけでなく指の動きも速い。
「なにコレ……」
美里も唖然としている。スネアとタンバリンが同じような動きをしている。どちらもかなり難しいはず。美里がやったことのないティンパニやベードラの音も聞こえる。
「うぇっ！？　あんな細かい吹き方できねーよ……」
慎也が顔をゆがめて言った。しかも、ディクレシェンドまでかかっている。
「出だしの音、低くない？」
「うん……」
絵美と雪子がヒソヒソ声で話す。
「フルートはそんなに難しくないのかな……」
由美子と沙希がちょっと安心した感じでそういった直後、トランペットと一緒になんだか細かすぎてわからない伴奏をフルートが吹いているのを耳にして、二人は黙ってしまった。
「チューバ、休みねぇじゃん……」
拓真がげんなりした様子で机に顔を伏せてしまった。
「ユーフォ……音が高い」
春樹は聞こえてくるユーフォニウムの裏メロをずっと追っている。
陽乃が翔のほうを見ると、指が驚くべき速さで動いている。
「佐野！」
陽乃がこっそり声をかけると、翔は指を動かしたまま「ん？」と答えた。

「なにやってんの？」
「オレ、中学校のときにやったことあんねんこの曲」
「ホント！？」
「おう。しんどかったけど、楽しいでマジで」
やがて、曲はスローテンポに変わる。しかし、どの楽器も休みなく吹いている感じがする。全体的に響きのある、壮大な曲。第一印象こそ悪かったけれど、どの楽器も目立つ曲だと陽乃は感じた。
やがてテンポが元へ戻る。相変わらずどの楽器もやっていることは強烈だ。
再現部ともいうようなメロディが流れる。後ろでホルンとユーフォニウムが序盤よりも激しく動き回っている。やがてユーフォニウムがメロディに加わり、それが木管楽器に引き継がれる。全員が加わり、終盤の部分に差し掛かった。
クラリネットとフルートが後ろで細かい音を吹いてずっと動いている上で、メロディーを金管楽器がやわらかく吹いている。そして、チューバもメロディーらしいもの吹いた後、フィナーレで全員がＢ♭（ベー）の音を吹ききって、曲は終わった。
「すっごい……」
思わず陽乃は音源に向かって拍手をしてしまった。
「スゴい曲だろう？　朝倉が思わず拍手をしたようだが、実際に演奏し終えたらお前らも満足できるし、お客さんも満足してくれるハズだぞ」
全員の目が、やるしかないというようになっている。
「参加するか？」
「はい！」
恭一の問いに、全員が力強く「Ｙｅｓ」の答えを出した。

第５５話　吹奏楽連盟（後書き）

七海市吹奏楽連盟と神奈川県吹奏楽連盟に所属したサークルは、合同演奏という形式でとうとう大舞台に立つことに！　しかし、曲の難易度は彼らにとっては難しすぎるもの……。それでも挑む彼らの今後は？

（※１）Ｍ８：吹奏楽で様々なジャンルをカバーする楽譜の出版会社、ミュージックエイトの省略形。「エムハチ（Ｍｕｓｉｃ　８から来ている）」とよく呼ばれる。

第５６話　合同練習

１０月２９日（土）。
七海高等学校から自転車で北へ２０分ほど行ったところにある私立風見台高校の音楽室で、七海高等学校吹奏楽サークルの面々は各パートのところへ混じって自己紹介から始めていた。
「七海高等学校吹奏楽サークルの、朝倉　陽乃と申します。まだ楽器吹き始めて半年くらいしか経ってないですのでとんでもなく下手っぴですけど、皆さんにご迷惑おかけしないように頑張りたいです！　よろしくお願いします」
パチパチと大きな拍手が起こる。
恥ずかしくなって俯きながら座ってしまった。やっぱり、自己紹介って苦手だなと思う。
「えっと、私は朝倉さんと唯一このパートで同い年の濱口　優衣と申します。私も朝倉さんと同じ期間しか楽器吹いていないので、よろしくお願いします」
ニッコリ笑う優衣を見ていると、本当にカワイイ子だと思う。喋らなくても、カワイイオーラ２４時間発信中という感じだ。
「それじゃ、まずはロングトーンから始めましょう」
３年生のパートリーダーの指示のもと、トランペットパートのパート練習が始まった。
同じ頃、すぐ下の部屋のサックスパートでもパート紹介が行われていた。その部屋に、修平の姿はなかった。
翔はわかってはいたものの、気になって聞いてみた。
「あの～……このパートにオレと苗字一緒のヤツっていませんでした？」
「あぁ、修ちゃんのことかな？」
２年生のテナーサックスの島田（しまだ）　美穂（みほ）が反応した。
「あの子ね、ちょっと今年の間だけパーカッションに変わってもら

ったのよ」
やっぱり異動は避けられなかったようだ。
「そう……ですか」
翔はこの演奏会で一緒に演奏できるのを密かに楽しみにしていた。
しかし、その願いはかなわなかった。
「そういえば、君も修ちゃんも関西弁だよね？」
「あ、はい。中学時代、同じ吹奏楽部で活動してたんで」
それを聞いて、バリトンサックスの3年生の男子生徒、谷沢（たにざわ）涼（りょ）二（うじ）が近づいてくる。
「もしかして、ずっと修平が言ってたカケルくんじゃないの？」
「え？」
翔は自分の名前が出てきたことに驚いた。
「やっぱり！　君、佐野　翔くんでしょ？」
「あぁ、はい。そうですけどなんでオレの名前を……」
「いやさぁ、修平がずっとここに入ってから翔と一緒に吹けたらな～とか吹きたい～とか口癖みたいに言ってたもんだから。一度会ってみたかったんだ」
「そ、そんなことアイツ言うてたんですか？」
「うん。本当に仲が良かったんだね、二人とも」
知らなかった。
会えばいつも文句ばっかり言っていた修平がそんなことを口にしていたなんて。
「佐野くん？」
「あ、いえ！　ちょっと懐かしくなって……」
「寂しい？」
「正直。オレも楽しみにしてたんで」
「そっかぁ……ま、でも打楽器のトコ行けばアイツに会えるし。ちょっと落ち込んでるみたいだから声かけてやって」
「はい！　そうします」
「うん。それじゃ、練習始めようか」

練習が終わったら、修平に会おう。翔はリードを調節しながらそう思っていた。

パーカッションは音楽室で練習をだいたいどこの学校でもしているということに美里は気づいた。ふつう、ベードラやチャイム、スネアなど大型楽器が多いのでこういう広いスペースがないとできないものなのだ。

「田中さん。みんなで担当のパート振り分けるから、来てくれるかな？」

パートでさっそくできた友達――遊佐（ゆさ）みゆきに呼ばれて美里はみんなが集まっているところに駆け寄った。

「えーっと……田中さんって普段はどのパート担当してる？」

パート長らしい背の高い男の人が聞いてきた。

「すいません。ウチ、まだまだ小さいんでドラムセットしかやったことなくって……」

「手先は器用なほう？」

不器用ではない。細かい作業も得意だ。

「えぇ、いちおうそう思います」

「なるほど……」

パート長の瀬野（せの）　流矢（りゅうや）はしばらく考えて思いついたように言った。

「それじゃ、田中さんはタンバリンやってもらおうかな！」

「えぇっ！？」

これには美里も驚いた。音源を聞く限りでは、タンバリンはリズムも細かくかなり目立っている。

「ダメ？」

「あたし、まだそんな上手くないのにあんな目立つ楽器やったら緊張して失敗しそうで……とても」

「そうかぁ……」

流矢はしばらくまた考えにふけってしまった。

「あの……」

美里はマズいことでも言ったのかと思い、流矢に声をかけた。
「心配しないで。いつもこうだから」
みゆきが苦笑いしながら言った。
「音楽やってる人ってたまに変わった人、いるのよ」
「そ、そうなの？」
コクンとうなずいた後「私も変わってるけどね」と言ってクスクス笑った。美里もこれにはつられて笑ってしまう。
「よし！　決めた！」
流矢がスッキリしたとでも言わんばかりの表情で叫んだ。
「やっぱり、田中さんはタンバリンをよろしく！」
「えぇぇぇ～！」
美里に今まで出一番のプレッシャーが押しかかってきた瞬間だった。

昼休みの時間になると、七海高校のメンバーはすっかり疲れきった様子をしていた。特に金管楽器は疲れがヒドい様子。
春樹が箸で玉子焼きをつまみながら「あんなロングトーン初めて……」とゲッソリした様子で呟いた。
「俺も……」
隣で拓真がクリームパンを頬張りながらため息ひとつ。ユーフォニウムとチューバが一緒になったバスパートでは、午前中みっちりロングトーンだったという。１６拍吹いて８拍休むというロングトーンをまだ音階もよくわかっていない二人は譜面にかじりつきながら必死に全部の音階を吹ききったという。それだけでなく、音程も何度も注意されているという。
「午前中でサヨーナラーって感じだよ」
「それを言うならあたしもサヨウナラ～よ」
指先を痛そうにさする美里。ずっとタンバリンの基礎練習を流矢の指導のもと、やっていたらしい。おかげで午前中だけで指先は真っ赤だ。

「私も……なんだか唇痛くて」
陽乃が何度も水で唇をすすいでいる。
「でもさ！」
ハンカチで唇を拭いて陽乃はお弁当箱片手に嬉しそうにみんなに言った。
「やっぱり上手い人たちの周りで吹いてると自分も頑張らなきゃ！ってなるよね！」
陽乃のポジティヴな発言にみんながうなずく。
「午後からも頑張るかぁ！」
拓真がグーッと伸びをして言った。
「七海高校吹奏楽、ファイトー！」
珍しく春樹が大声を上げたので、みんなが一斉に笑い出した。

「やっぱあの子がおるとおらんとで雰囲気、ちゃうな」
修平が騒いでいる七海高校の部員を見て笑った。
「ゴメンな、うるさくって」
「いやいや。俺らの部活にはないテンションだからああいう雰囲気を作ってくれたら結構嬉しい」
「そういってもらえると、なんか安心」
翔はウインナーを口に頬張りながら言った。
「それとさ、あのパーカスの田中って子にもビックリさせられた」
「ミサッチのこと？」
ミサッチという言葉を聴いて少し修平が驚いた様子を見せる。
「あだ名で呼び合ってるん？」
「うん。オレらの部活ではふつう」
「後輩とか入ってきてもそうするん？」
「あぁ～どうやろ。でも部則とか決まってるわけでもないし、別に改まって○○先輩！とか言われるよりは親しみのある雰囲気で活動できるほうがええしなオレとしては」
「……そっか」

「そんで？　ミサッチがどうしたん？」
翔はおにぎりを今度は口にして聞いた。
「あぁ、うん。あの子、努力ものっすごいすんねん」
「そやなぁ。普段からマジメすぎるくらいマジメやし。オレもビックリすることあるわ」
美里の努力っぷりは本当にすごい。翔も負けると思うほどだ。
「風見台高校にはおらへん子やと思う」
修平はフーッと息をついた。
「お前らの高校、絶対スゴいと思う」
「……ホンマに？」
「うん。俺は絶対、七海高校のスイソーは盛り上がると思うで」
「サンキュ。お前らも、オレらなんかに負けんなよ？」
へへッ、と修平が笑った。
「ほな、午後からの合奏お互いファイトな！」
「おう！」
翔と修平は手を合わせた。

第５６話　合同練習（後書き）

合同練習が刺激となり、ますます気力を充実させる部員たち。曲のレベルは高いようですが、練習しだいでまだまだなんとでもなるだけの期間があるのでがんばれ、吹奏楽サークル！

第57話　すれ違い

「ただいまぁ」
合同練習が終わったその日、陽乃は午後9時すぎに家に帰った。
「おかえり」
由利が台所から玄関を覗き込むようにして声をかける。
「すぐご飯食べるでしょ？」
「うーん。もうおなかペッコペコだからすぐお願〜い」
陽乃がフラフラになりながら2階に上がると、祥夫とすれ違った。
「おかえり」
祥夫の声に陽乃は「ただいま」と感情をあまり見せずに答えた。
期末テスト前にケンカをして以来、祥夫との関係が何だかギクシャクしていて未だに会話も少ないままだった。かといって、陽乃は自分が悪いことをしたわけでもないと思っている。だから、こちらから謝るのも腑に落ちないと思っている。そしてそのまま夏休みは終わり、季節も変わってしまった。
「ねぇ、姉ちゃん」
夏樹が自分の部屋から少し顔を覗かせた。
「どうしたの？」
「あのさ……」
恐る恐る、夏樹が聞く。
「姉ちゃんってまだ父さんと仲直りしてない……の？」
「まぁね」
陽乃は夏樹と顔を合わせないように答える。この話になるといつもそうだ。
「ホラ、またそんな顔してる」
夏樹の眉がハの字になっている。眉毛が凛々しい分、感情が変わるとその動きまで変わってしまうからおもしろい。今はそんなことを言っている場合ではないが。

「言ったでしょ、アンタのせいじゃないって」
「でも……」
夏樹の額に突然、デコピンが当たった。
「痛って！」
「いつまでも男の子がグズグズ昔のこと引っ張ってんじゃないの！」
そう言って陽乃は自分の部屋に戻った。バタン、とドアを閉めてから言う。
「ご飯できてるって。夏樹も下に降りておいでって」
「わかった……」
元気のない声のまま、夏樹は下へ降りていった。

その頃、由利が夕飯の支度をしながら祥夫に陽乃のことについて話をしていた。
「12月23日にあるらしいのよ。佐野さんの奥さんに聞いたの」
「演奏会なんぞに行っている暇はないぞ」
祥夫は予定も確認せずに即、返事を返した。
「またそんなこと言って……。あの子ね、最近毎日夜遅くまで頑張ってるじゃない。たまには娘の頑張りを見てあげるっていうのも必要だと思いますけどね」
「頑張ってるのかどうかなんて、見てもいないのにわかるはずがないだろう」
夕刊を見ながら祥夫はなおも冷たく返すだけ。
降りてきた夏樹が二人の会話に気づき、足を止めた。
「いっつもあなたってそうですよね！」
珍しく由利が感情を顕にしている。夏樹は母が珍しく大声を出したので少し驚いた。それ以上に祥夫が驚いているようで、思わず夕刊を閉じてしまうほどだった。
「夏樹のことはいっつも気に掛けてあげてるのに、陽乃のことは全然！　夏樹のことにしたって、サッカーのことばっかり。勉強や進路は全部私任せにして。男の子のボール遊びに付き合ってあげるだ

けで父親らしいとか、そんな風に勘違いしてるんじゃないですか？」
「……。」
祥夫は答えない。由利はため息をついてご飯をよそい始めた。
「私は、見に行ってあげてきます」
それでも祥夫は何も言わなかった。

「夏樹？」
陽乃が降りてくると、廊下でしゃがみこんでいる夏樹がいたので変に思い声をかけた。
「ん？　アンタ泣いて……」
話を聞かないうちに夏樹は2階へ駆け上がっていってしまった。
「あ！　ちょっと、夏樹！？　アンタご飯……」
「いらない！」
「いらないって……ねぇ！」
階段を見上げたときにはバタン！と音を立てて夏樹は自分の部屋へと姿を消してしまった。

「12月23日やねんてね～！　もちろん、全員で見に行くからなぁ」
友美子がお盆で翔の頭を小突いた。
「えぇって言うてるやん！　恥ずかしいねん、家族そろってホールに演奏見に来られるとか」
「何を言うてんの。おばあちゃんだって楽しみにしてはんのよ。ねぇ？　お義母さん！」
祖母の冨美枝は何も言わずにお茶を啜りながらうなずく。
「それに、その日は綾音も智輝も祝日でお休みだしね」
綾音のほうを見るとニィーッと智輝と一緒になって歯を出して笑った。
「ったくもう……」
翔は頭をかきながら顔をしかめた。

「ハーッ……」
春樹は自宅でわざわざ重いのに持ち帰ったユーフォニウムを磨いていた。
「春樹？」
母の水谷幸恵子は部屋をノックもせずに中にいきなり入ってきたので春樹は驚いて「ヒョェッ！」と声を上げてしまった。
「あぁ、ゴメンなさい」
「もー、いつも部屋に入るときはノックしてって言ってるじゃん！」
「そうだけど、たまに忘れることだってあるじゃないの」
幸恵子は苦笑いしながら言い訳する。
「恥ずかしいじゃん？　こんなとこ見られたら……」
「わかってるけど、やっぱり恥ずかしい？」
「……うん」
春樹は顔を赤くして静かにうなずいた。
「わかったわかった。じゃあ、夕飯はできてるからすぐいらっしゃいよ」
「ほーい」
幸恵子はすぐに部屋を出た。
「これでヨシッ……と」
春樹はピカピカに磨いたユーフォニウムを見つめた後、タンスの上においてある写真立てにある写真を見つめた。
一人の男性と幸恵子、そして春樹が写っている。
「見て！　キレイに磨けたぜ！」
写真の男性が笑ったように見えた。
「俺さぁ……あんなこと言ってたけど、やっぱ吹奏楽っていいね……」
「もちろん、見に来てもらうからね。父さん」

「ここでこうやって、こんなノリで叩いたほうがいいんじゃね～！？」

美里はベッドの上で踊り狂いながらタンバリンを叩く仕草をしていた。ギシギシとベッドの軋む音がする。

「ちょっとー！　美里、うるさいわよ！」

姉の田中（たなか）美優（みゆ）に隣の部屋から怒鳴られた。

「いいじゃーん！　もうちょっとだけ～！」

さらに磨きをかけたようにベッドの上で激しく美里が踊りだした。

そのうえタンバリンがシャンシャンと鳴り出した。

「そのタンバリンもうるさいの！　それにアンタが今叩いてるのってモンキータンバリンじゃないの？　そんなことして部長さんに怒られるわよ！」

「大丈夫～！　これはその部長さんから練習するように言われたやり方だから～！」

「もー！　手が腫れて叩けなくなったら知らないわよ！」

それっきり美優の部屋から何も聞こえなくなった。

「よーし！　もう一回リピート！」と張り切ったところで、ケータイの着信音が鳴った。

「もう！　気分が乗ってきたのに……！」

美里はイライラしながら電話を取った。

「もしもし！？」

「なんでいきなり逆ギレ気味なわけ？」

着信は、慎也からだった。

「あ、ゴメン……」

急に緊張して何も話せなくなる。心臓がドキドキする。

「あのさ、連絡網いつもみたいに回してくれる？」

「あぁ、うん。ちょっとまって。メモするから」

連絡網は、大したことないこと。でもこの時間が、永遠に続けばと思う。でも、二人の気持ちは交わることはない。

「それじゃ、連絡ヨロシクな」
「うん」
プッ、と音がして電話が切れた。

プーッ、プーッ……。

「またね、くらい言ってほしかった……」
美里はタンバリンを脇に置いてため息を漏らした。

それぞれの気持ちが交差しないまま、すれ違って季節は変わっていく。

第５８話　ドアの向こうに

「はぁ……」

雪子はベッドに寝転びながらため息を漏らした。もう一度寝返りを打ってケータイを見つめなおす。しかし、メールも電話も入ってこない。

「やっぱりなぁ……。今日みんな練習で疲れちゃってるんだろうな」

雪子は枕に顔を埋めて「ウーン！」と唸りながら足をバタバタさせた。

翔、陽乃、沙希、慎也の５人のその日にはきちんとみんなでささやかながらお祝いをした。ジュースを飲んだり、帰り道にマクドナルドでハンバーガーを食べたり。本当にささやかだったが、自分のときにもそれは密かに期待していた。

けれどもタイミングが悪かった。よりによって、雪子のその日が初めての合同練習だった。みんな練習や片付けなどにおおあらわで、それどころではないという感じになってしまうのも無理はなかっただろう。

けれど、やっぱり寂しい。

それだけに、帰宅してから妹や父母が盛大に迎えてくれたのは嬉しかった。やっぱり家族っていいなと改めて思う。

「雪子～？　お風呂に入ってからケーキ食べるんでしょう？」

階下から母のひとみが声をかけてきた。

「うーん！　デザート気分で食べたいもん」

「それじゃ、真沙美（まさみ）がお風呂に上がったらすぐに入りなさい」

「はぁ～い！」

父親の融（とおる）は雪子や妹の真沙美より前に風呂に入ることはない。二人ともそんなことは気にしないのだが、二人ともそういうこと、つまり父親が入った後に入りたくないのではないかというようなことを気にする年頃だろうと思っているようで。雪子も真沙美も融のこ

とは大好きなので全然気になんてしていないのだが。
雪子が下へ降りると、融がビール片手に野球の中継を見ていた。なるほど。これもあるから風呂に入らないのか。
「お父さん、私も先に入るね」
「おぉ。ゆっくり浸かってこい」
融はいつも野球中継があるときはご機嫌だ。
雪子が脱衣場に入ると同時に、電話が鳴った。パタパタとひとみの足音が聞こえてすぐに「はい、永井でございます」という声も聞こえてきた。
「あぁ、はいはい。いつもお世話になってます」
(近所のオバサンか誰かか……)
雪子はタオルと洗面具を持って、浴室に入った。
「フー……」
今日は疲れた。ホルンのパート練習ではハイトーンを何度も吹かされたし、アルヴァマー序曲ではメロディーラインの低い音をずっとキレイに出るように練習をしたおかげで口はバテバテになってしまっている。明日が休みで本当に良かった。
「もうちょっと今日はあるもんね……。もう少し期待しよう」
ブクブクと浴槽に顔を半分つけながら、雪子は呟いた。
「雪子〜。下着とパジャマ、ここに置いとくわね」
「え?」
「だから、下着とパジャマはここに置いとくわよ?」
「あ、そうなの? わかった」
こんなこと、今日が初めてだった。何か事情でもあるのだろうか。もしかして、融がまた何か気を配ってこんなことをしてくれ、って言ったとか。
「あり得るなぁ……お父さんなら」
雪子は苦笑いしながら頭を洗うために浴槽から出た。
いつも雪子は40分近く風呂に入る。風呂から出ると、既に10

時。この時間になるとだいたいみんな落ち着いてくる頃だ。そろそろメールの1件くらい入ってきてもよさそうだな、と雪子は思う。まだ今日は2時間ある。一人くらい、誰か思い出してくれるだろう。

しかし、着替え終わってケータイを見ても誰からもメールも着信もなかった。

「まぁ……別にいいけどね」

雪子が言葉とは裏腹にため息を漏らしながら脱衣場のドアを開けた瞬間だった。

「「Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ　Ｄｅａｒ　雪子ッ！！」」

同時にパンパンパン！とクラッカーが鳴り、雪子の頭にいろんな飾りが降りかかった。

「え？　えぇ？　な、なに？」

雪子が驚いて廊下を見渡すと、そこには翔、陽乃、沙希、絵美、拓真の5人が立っていた。

「お誕生日おめでとう、雪子」

陽乃が小さなプレゼントを手渡した。

「また後で開けてみて」

「うん！　ありがとう！」

「雪ちゃん、おめでとー！」

沙希が手作りのケーキを渡してくれた。かわいいムースケーキだ。上に「Ｈａｐｐｙ　ｂｉｒｔｈｄａｙ」という字が書いてある。

「これからもホルンがんばってよ！」

絵美が雪子のケータイを取って、ストラップを付けてくれた。ホルンのストラップ。

「わぁぁ～！　こんなの、あるんだね！」

「うん。楽器屋さんにいっぱいあったんだ」

「そんで、俺からはコレっ！」

拓真がスッと手を上げると、４人が一斉に楽器を持ち出した。雪

子は全然気づいていなかったのだが、床にそれぞれの楽器を置いているのだった。拓真のチューバは大きすぎるので持って来れなかったらしい。

「3，4！」

拓真の指揮に合わせて『Ｈａｐｐｙ　ｂｉｒｔｈｄａｙ』の歌が流れ始めた。４人がそれぞれメロディを吹いていわゆるアンサンブルをやっている。

雪子は目をつむってその旋律に耳を傾けた。

「永井」

演奏が終わると、翔が近づいてきた。

「おめでとさん！」

翔の手から差し出されたのは、１年生９人から雪子に対して書かれたメッセージカードだった。

「今日合同練習の間にみんなで回して書いてん。隠しとくの、大変やってんぞ」

人懐っこく笑う翔。その後ろで４人が微笑みながら雪子をジッと見つめている。

「ありがとう……みんな」

雪子の目から一粒涙がこぼれだし、それが止まらなくなっていたようだった。

「お姉ちゃん、いいお友達増えたね」

真沙美が廊下から聞こえる笑い声や嬉しそうな声を聞いて言う。

「吹奏楽始めてから明るくなったしね」

ひとみが食器を片付けながら返す。すると、中継を見ているはずの融が寂しそうに言った。

「こうして娘は家族から少しずつ距離を置いていくんだろうなぁ……」

真沙美がギュッと融に抱きついて「お父さんとはずーっと一緒だから！」と言ったので融もギュッと抱き返した。

「本当にありがとう」
「ううん。忘れてるって思われてたんじゃないかと思った」
沙希が苦笑いしながら困ったように言った。
「今日ね、由美子とか春やんとかも来たいっていってたけど、夜遅かったからジャンケンで来る人決めたんだ。だから、みんなちゃーんとお祝いしたいって思ってたんだよ」
陽乃が沙希の後ろからフォローを入れた。
「みんな仲間だもんね」
拓真がまだ指揮棒を片手に笑顔で言う。
「まだまだみんなの誕生日あるから、永井も忘れんなよ？」
翔が雪子を指差して言うと、陽乃が「人を指差さないの。失礼でしょ」とその手をパシッと払った。
「うん。忘れるわけないじゃない」
その返事に、全員がしっかりうなずいた。
「それじゃ、今日はもう遅いから帰ろうか」
沙希が腕時計を見ながら言うので、４人も帰る支度を始めた。
「本当にありがとうね」
「ううん。じゃあ、また月曜に」
「またな～」
拓真が指揮棒を持った手で
「お元気で～」
翔がニーッと笑って手を振った。
雪子は全員が見えなくなるまで手を振り続けた。
「今年はサイコーの誕生日～！」
パジャマ姿ということも忘れて、雪子は鼻歌を歌いながら家へと戻った。

第５８話　ドアの向こうに（後書き）

それぞれを思いやる部員たちの気持ち。これを大切にしながら活動をするのが大切と思える一日でした。

第59話　春へ向かって

１１月４日。陽乃がいつもどおり部活に来ると、翔がひとり部室で頭を悩ませていた。
「どしたの？　佐野」
陽乃の声に気づいて「おぉ、おはよーさん」と挨拶をするがいまひとつ元気がない。
「なに悩んでんの？」
「んー、来年のことやねん」
「来年？」
陽乃は椅子をガタガタと引っ張って翔の隣に座った。
「うん。なんかなーこの高校って新歓祭っていう行事が春にあるらしいねん」
「あぁ～、そういえば私たちが入学したときもあったよね」
４月４日に入学式があって、その週の金曜日だから８日に新歓祭というものが開かれた。各クラスやクラブ活動で新入生を楽しませて七海高校になじんでもらうために行うというこの行事。
「それで、なんでそんなに悩んでるの？」
「うーん……オレらが演奏してそれに出てほしいねんって」
「そうなの！？」
陽乃は嬉しそうな声を上げた。
「う、うん。なんでそんな嬉しそうにすんの？」
「だってさ！　ほら、ここ見てよ！」
陽乃が趣旨説明などをする文章のずっと下、小さい字で何か書いてある。
『この新歓祭に出場する団体は、校長の公認を得た団体のみです』
「えぇっ！？」
翔もこれには驚いた。いつの間に吹奏楽サークルは校長公認なんぞになっているのだろう。

七海高校において校長公認の団体というのは通常、全国大会で金賞や優勝を収めた団体にのみ与えられる特権のようなものだった。これのせいで体育会系の部活が盛り上がり、文化系の部活が衰退してしまったという声が今も多く上がっている。実際、文化系団体でこれに認められているのはジャズ研究会だけである。

「いつの間にこんなエライ団体になったん！？　オレら」

「さぁ？　でもさ、いいことなんでしょ？」

「まぁそうやけど……」

「それより、春からそんなに忙しくなるの？」

「うん。その話が今日ちょっと先生からあるねん」

「そうなんだ。なんかいろいろ大変になりそうだね」

そういう陽乃の顔はなぜか嬉しそうな表情をしている。

「えらいご機嫌さんやん」

「だって、吹奏楽サークルがどんどんみんなに認められてるみたいで嬉しいんだもん。佐野も嬉しいと思わない？」

「……それは嬉しいと思う」

「でしょっ！？　これからもがんばろうっと」

陽乃はスキップをしながらパートごとに分かれている棚のほうへ楽器を取りに行った。翔はその姿を見送った後、楽譜リストのノートを開いて調べ物を始めた。

「入学式やろ。その時に校歌と入場のときのマーチを吹かないとアカンねんなぁ……。それと部活紹介のときの曲やろ～。そんで新歓祭かぁ」

いくらなんでも急に行事が増えすぎている。この人数で演奏するには厳しくなってくる。やはり部員の確保が来年の課題だと翔は悩んでいた。まだそんなに知名度が高くもない七海高校吹奏楽サークルの悩みは、何よりも部員確保であった。

「逢沢くん、どんだけ友達連れてきてくれんのかなぁ」

翔はこのあいだ来た逢沢　駿のことを思い出した。バスクラリネットを吹いていると聞いた。他の友達がどんな楽器を担当している

かは聞いていない。
「楽しみに待っとくかぁ」
「佐野くん、東先生が来たよ」
絵美に呼ばれて翔は途中で作業をやめて音楽室へと入った。

「えっとな、まずみんなにいろいろと説明しないといけないことや話さないといけないことがあるんだが」
恭一はたくさんの資料の中からどれをまず話そうか困っている様子だった。
「そうだなぁ～、とりあえずこの話から盛り上がっていこうか」
恭一が手にしたのは何やら薄っぺらい一枚の紙。
「これを回し読みしていってくれ」
まず、それが由美子の手に渡った。そしてそれを見るなり「見てよ！　ココ、ココ！」と美里にどこかを指差して手渡した。すると美里が「ウッソ！　ホントなの？　コレ！」と言って恭一のほうを見た。恭一は笑顔でうなずくばかり。
「ちょっとミサッチ！　早く回してよ～」
絵美が待ちきれないとばかりに美里の制服の襟を引っ張った。
「わーかったわかった！　ほら、ここ見て！」
それを見た絵美も同じように「わぁ～！　いよいよだね！」と言って嬉しそうに微笑む。拓真、春樹、慎也とみんなの手に渡るが、一様に「やった！」「めっちゃくちゃ嬉しい！」というようないい反応が続く。
「よかったね、佐野！　見てみなよ！」
陽乃が満面の笑みでさっきの紙を翔に手渡した。
翔はドキドキしながらその紙を手にし、深呼吸してから紙の隅から隅までを丁寧に確認する。部活動報告書という紙だった。各クラブの戦績や個人で表彰を受けた生徒の名前が載っている。そして、一番下にそれは書いてあった。

『昇格　吹奏楽サークル　→　吹奏楽部』

「やったぁ！　マジで！」

思わず立ち上がって両手を挙げてしまった。それを見て全員が笑う。恭一も嬉しそうだ。

「この間の会議でな。校長先生がウチの部の頑張りを直接見せてもらったとおっしゃってな。さぞかし感銘を受けたということで、今後の活動にも期待するという意味で昇格を認めてくださったんだ」

「先生！　いつ校長先生が私たちの演奏を聴いてくださったんですか？」

絵美が嬉しそうに手を上げて聞いた。

「ちょっと前になるけれど、夏休み中に老人ホームへ依頼演奏に行っただろ？　あのとき、偶然通りかかって音が聞こえるから覗いてみたらちょうど演奏が始まったばかりだったらしく、わざわざ中に入って聴いていてくださったそうだ。俺も把握していなくて、聞かされたときにはかなり驚いたけどな」

ホォ～……と全員がため息を漏らした。

「どこで誰が聞いてるかわかんないんだぁ」

春樹が呟いた。

「そう。みんなの演奏をどこで誰が聞いているかわからない。練習中でも聴いている人がいるかもしれないからな。気を抜かずにこれからも頑張ろう！」

「はーいっ！」

全員が今までの中で一番大きな声で返事をした。

「それと、これから出る行事も多くなってな。ちょっとみんなメモしておいてくれないか」

ゴソゴソとメモ帳や生徒手帳をカバンや胸ポケットから取り出す。

「まずな、１２月２３日は市の吹奏楽連盟の定期演奏会があるだろ」

これは前から決まっていたことだ。しかし、この後から今までとは比べ物にならないくらい行事が詰まってくる。

「翌日に終業式がある。このときいつも校歌を音楽の妻田先生にピアノ伴奏で演奏してもらっていたけれど、妻田先生直々にウチに演奏してもらいたいっていうお願いが来たから、受けることにした。楽譜は棚にあるから、各自練習しておくように。今度の合奏で初見合奏するからな」

「確か、シャープ系の調だったよね？」

陽乃が後ろからコソコソと話しかけてきた。

「うん。けっこう音程取りにくい」

翔も振り返らずに返す。木管楽器も金管楽器もあまりこのシャープ系の調の曲は苦手だ。

「がんばらないと……」

「みっちりパー練やな」

ニッと翔が笑ったので思わず陽乃も笑ってしまう。やっぱ翔の笑顔ってカワイイと陽乃は一人キュンキュンしていた。

キュンキュンする暇もなく、恭一は次々と行事を挙げていく。

「年が明けた後は、始業式で終業式と同じようなことやってもらうそうだ。それから、２月１１日に建国記念日の式典が市役所であるらしく、その時に何か演奏をしてほしいという依頼が来ている。とりあえず、国歌は演奏するからな」

部員は黙々と予定を書き込んでいく。

「それで、３月２１日に市の定期演奏会がある。このときにはまた風見台高校と演奏する予定にしている。曲目は未定だけどな。それから、４月３日にある入学式では入場のときに行進曲と校歌、退場のときの曲の計３曲を演奏しないといけなくなった。それから、部活紹介が１０日にあって、次の１１日は新歓祭があるからこの二つにも出ないといけない」

こうなるとさすがの部員たちも驚いてくる。拓真がそっと手を上げた。

「先生、全部ホントに出るんですか？」

「あぁ、ホントだぞ。全部、行事執行部や校長から依頼を受けたか

らな。原則、学内での依頼は受けるようにしたいし」
「ふぇ～……練習、間に合うかな」
美里がガタンと机に頭を伏せた。
「大丈夫だ、お前らなら余裕でできるさ。俺が保証する」
恭一が資料をまとめて立ち上がった。
「それでな、演奏するのにいい曲の音源をいくつか持ってきた。聴いてみるか？」
恭一は少し早いという気もしたが、とりあえずＭＤデッキをセットする。
「ぜひ、お願いします」
慎也が力強くうなずいた。
「あたしも、聞いておきたい」
絵美が同意する。
「じゃあ、俺も……」
拓真が前の席へと移動した。つられるようにして春樹も拓真の隣に座る。
「私たちも行こっか」
由美子と沙希、美里も移動した。
「行かずにはおれんやろ」
「だね」
翔と陽乃、雪子の３人も移動した。
「なんだお前ら。一列で仲良しだな」
気づけば、全員が横一列で並んでいる。それを見て思わず全員が笑ってしまった。
「ついでだ、写真撮っとくか」
恭一がどこからかデジカメを取り出した。
「なんか掛け声みたいなのやって、全員で同じポーズ取ってみたらどうだ？」
恭一はカメラ越しに全員に問いかける。
「えー？　どうする？」

「じゃあさ！」
翔が声を上げた。
「七海高校の『7』でこうせぇへん？」
翔が左手のひらを広げ、そこに右手の人差し指と中指を重ねた。
「あ！　それいい！」
「決定！」
全員が同じポーズを取る。
「それじゃあ！」
翔が拍子をとる。

「春に向かって『七海高校吹奏楽部』出発進行～！」
「オーッ！」

同時に、カメラのシャッターが下りた。

第５９話　春へ向かって（後書き）

とうとう部への昇格を果たした吹奏楽サークル。初めて撮った全員の集合写真。この写真も後に想い出となっていくことでしょう。

第６０話　校長先生、現る

「ひょえ～っ！　寒いッ！」
陽乃と春樹、慎也、拓真、雪子の金管５人組はハーッと息で手を温めながらイソイソと金管セクション練習をしている３年３組の教室へと駆け込んだ。１１月も下旬になろうとしている。寒さが身にしみるようになってきた頃でもあった。
教室に入りピッチリ扉を閉めると、全員が揃って椅子を寄せ集め、縮こまった姿勢でマウスピースを吹き始めた。
「あーん！　冷たい！」
この時期になってくると、金管楽器は金属だから冷たくなってくる。楽器を初めて触る時間帯になれば夕方であることが多いため、さらに冷えているときもある。マウスピースは直接口に触れるため、たまったものではない。
「まだいいじゃん。俺なんか全体が冷たい……」
拓真がフーッとため息をつきながらチューバを見つめた。大型楽器のチューバは体に触れる部分が多いので、寒い日にはけっこう辛い楽器かもしれない。
「なんかさ～寒すぎて練習しようにも動けないよね」
雪子がホッカイロ片手にマウスピースを温めながら呟く。
「夏には夏で、暑すぎて練習にならないとか俺ら、言ってたよなぁ」
慎也が手袋をしながら（校則違反だが）ゆっくりケースからトロンボーンを取り出した。
「ってことを考えると、俺たちあんまり進歩がないね」
「……だね」
春樹の一言に、全員が黙ってしまった。
「あー！　こんなんじゃダメだよ！　しっかり練習しないと」
陽乃が急に張り切って立ち上がった。
「もう来月の市吹定演まで１ヶ月切ったんだし、気合い入れないと

！」
「でも、この寒さで？」
慎也がガラッと教室の窓を開けると、冷たい強風が室内になだれ込んできた。
「ぎゃーっ！　なんでわざわざ開けるのよ！　寒いじゃない！」
雪子が怒ったように窓を勢いよく閉めた。
「じゃあさ、こうしたら温かくなるんじゃない？」
陽乃が雪子の体をギューッと抱きしめた。
「あ、それいいじゃん？」
拓真が同じように真似をして春樹の体をギューッと抱きしめた。
「男子同士がやると気持ち悪いね」
雪子が失笑する。その中へ慎也まで加わった。
「でも案外温かいぞ！」
「いいね、コレ！」
5人が揃って抱き合っている姿はけっこう異様である。と、そこへ美里と翔がノックして部屋に入ってきた。
「失礼～。今日のこの後のことなんだけど……」
「あ……」
翔と美里が硬直したように5人を見つめた。
「とと、これは失礼」
「ほな、出直してきます」
二人は見てはいけないものを見たとでも言いたそうな顔をしてそそくさと部屋を出た。
「わぁぁぁ！　違う、誤解！　誤解！　二人とも待って待って！」
「ホンマに～……夕方からセク練の部屋でいちゃついてる場合ちゃうぞ」
翔が呆れた様子で5人を見つめた。
「ゴメンなさい……」
「そういうことは部活時間外にやってください」

翔が珍しく標準語で話した。
「あれ？　今の発言ちょっとヤバくな～い？」
美里がニヤけた顔でツッコミを入れた。
「なっ、何がやねん！　そういうコトにすぐ結びつけるお前のほうが変やっちゅーの！」
「何がよ～？　今の私の言葉のどこがそういうコトなわけ～？」
「んも～！　ええわ、お前はもう！」
翔の顔が真っ赤になった。
「案外ウブだね、アンタ」
「やかまし、黙っとけ」
こういう話が苦手なのだろうか。案外、佐野は本当に純粋な子なのかもしれない。
陽乃はジーッと恥ずかしそうにしている翔の顔を見つめた。不意に、目が合う。
「！」
「……。」
ニッ、と翔がいつものように笑う。佐野はそんなふうにいてほしいと密かに陽乃は思ってしまった。
「はいはいは～い、ときめきあうのはそこまでにして本題に入りましょ～」
美里が翔と陽乃の間に割って入った。翔はブゥッと少し頬を膨らませたが、すぐに話を始めた。
「えっと、寒い人手ぇあげて！」
無言で金管全員が手を上げた。
「ほらね～、あたしの言ったとおり。あたしだけじゃないんだよ？」
美里が真剣に翔に訴えている。
「う～ん……そうは言うてもなぁ。ＬＬ教室はホンマは勉強のために使う部屋やからムリやし」
ＬＬ教室。英語のリスニングを練習するときに使う教室だ。とはいっても、今まで使ったことは2、3回しかないが。お高い機械が

多いので冷房・暖房完備の部屋でもある。
「じゃあせめて暖房をどっかから買ってくるかもらってくるかしないと練習にならないじゃない」
「練習にならんことはないやろ。気合いじゃ」
「21世紀にもなって気合いで練習するなんて古臭いこと言わないでよ」
美里が疲れた様子で椅子に座り込んだ。
「そうは言うてもなぁ……。なかなか練習できるような部屋なんてないし」
翔もウーン……と言ったきり、黙り込んでしまった。
「ねぇ、一度先生に聞きに行ってみようよ」
Ｔｒｕｍｐｅｔを置いて、陽乃が先に立ち上がって職員室へ向かった。
「ひょっとしたら、古いストーブとか使わないのが置いてあるかもしんないよ？」
「……まぁ、行くだけ行ってみるか」
ゾロゾロと陽乃のあとに6人がついていった。

「失礼しまぁ～す……」
そっと職員室に入った。しかし、誰もいない。
「あれ？」
「どした？」
「先生が全然いない……」
「ウソ？」
美里と雪子が覗き込んでみたが、やはりどこにも先生方の姿が見当たらなかった。
「なんでだろ？」
春樹が首を傾げる。
「今日、なんか会議あったっけなぁ……？」
「先生方なら、今日は学年会議をなさってますよ」

急に後ろから声がしたので振り返ると、校長先生が立っていた。
「誰かお探しですか？」
ニッコリ優しい笑みで校長の真野（まの）　幸治（こうじ）が全員を見つめる。
「あ、はい。ちょっと寒すぎるからストーブ余ってたら貸してほしいなぁとか思ってきたんですけど……」
翔があまりにもアッサリ言うので全員が驚いた表情に変わった。
陽乃は慌てて翔の手を引き、コソコソ声で伝えた。
「何やねん！？」
「あのねぇ、よりによって校長先生にそんなお願いする！？　ふつうはこの高校、暖房とか冷房とかナシで部活するのが原則になってるの！」
「何やねん、その変な規則！」
幸治にも十分聞こえる声の音量に誰もが唖然とする。
「声が多きい！　とりあえず、決まってることなの！」
「なんでそんなヤセ我慢して練習なんかせなアカンねん！　えぇ環境で練習したいやんけ！」
それを聞いた幸治は「ハッハッハッ！」と大声で笑い出した。
「君は吹奏楽部の部長の佐野くんだね？」
「あ、はい！　そうです！」
「君のサックスの音色、良かったよ」
「ホンマですか！　あ、夏休みの演奏聴いてくださったそうで。ありがとうございました！」
翔が深々と礼をしたので、つられて全員が礼をするとまた「ハッハッハッ！」と笑い出した。
「どれ、暖房が欲しいそうだね」
「あればメチャ嬉しいんですけどね」
「それなら、ちょっと皆校長室へ来るといい。ついておいで」
幸治はそういうと踵を返して校長室へと歩き出した。翔も後を追う。
「ちょ、ちょっとぉ！」

「いいから、行くだけいってみよ！」
翔が嬉しそうに駆け出したので、全員仕方なくついていくことになってしまった。

第６０話　校長先生、現る（後書き）

校長先生の出没のみならず、校長室へついて来なさいという予想外の展開に戸惑う部員たち。暖房は果たしてもらえるのでしょうか？

第６１話　交換条件

「地球が温暖化してきているとかなんとかいうけど、やっぱり寒いものは寒いからねぇ」

幸治はハーッと息を手にかけながら呟く。そうはいうものの、校長室の暖かさは職員室とは比にならないほどだ。大人ってズルいとこういうときに思ってしまう。

しかし、さすが校長室。なんだか床の材質からして教室とは違うし、赤い絨毯（それこそ、王宮に敷かれているようなもの）がテーブルの近くなどには敷いてある。なんだか上履き用のスリッパで踏んづけてはいけないような気さえしてしまう。

そのせいで、吹奏楽部員は全員入り口付近で凍り付いていた。

「ん？　どうした、入らないのかね？」

幸治が不思議そうに首を傾げる。

「あのっ！」

陽乃が緊張気味に聞いた。

「この絨毯は上履きで立ち入ってもいいんですか？」

それを聞いた幸治はまた「ハッハッハッ！」と豪快に笑い出した。

「いやぁ～東先生に聞いてはいたが、君たちは本当におもしろいね。最近のウチの生徒たちの中にはいないタイプが揃いも揃っている」

７人は一様に顔を見合わせてクスッと笑った。

「ほら、ここに座りなさい」

「はい！」

幸治に促されて、全員が腰掛ける。茶色の皮製のソファがあまりにフワフワするので陽乃も翔もなんだか落ち着かなかった。

「あぁ、そうだ。ストーブだね」

幸治は足元から小さいストーブを取り出した。もう何年も足元を暖めるのに使ってきたものだ。

「おぉ～！」

思わず7人は声を上げた。
「これをね、皆に上げてもいいかなぁと私は思っているんだが。同じものが5つほどあってね。使わないからもったいないなぁと思っていたところだったんだよ」
「すげぇー！　これやったら金管・木管・パーカスで1台ずつ使っても十分やろ！」
翔が嬉しそうにストーブを見つめた。
「私、パーカス一人だから1台で、金管木管で2台ずつにすればいいじゃん？」
「おぉ～！　ホントだ、使える使える！」
春樹が嬉しそうにパチパチと小さく拍手をした。
「これでもっと練習できるな。嬉しいなぁ」
慎也もニコニコしている。たとえそれが小さい暖房でも、あるだけで気分が変わってくる。
「校長先生、本当にこれいただけるんですか？」
翔がもう一度確認するように聞いた。幸治はコクッと小さくうなずいて言った。
「しかし、交換条件があるんだ」
それを聞いて、思わず全員がゴクッと唾を飲んだ。

「お疲れ様でした～」
学年会議を終えた恭一たち1学年教諭数名は1階東にある第3会議室から職員室へと向かう途中だった。職員室はちょうど反対側の2階西にある。
「東先生、吹奏楽のみんなは喜んでましたか？」
1年社会科担当・B組担任の新井田（にいだ）　彩（あや）が恭一に吹奏楽部の様子を聞いていた。この学年の教諭は偶然だろうか、年齢が近いもの同士が集まっていたので気さくに話をしやすい関係である。
「このあいだはもう大騒ぎでしたよ。こんなに早く、部に昇格できるとは彼らも思っていなかったようで」

「それでもね～、監査会のときには驚かされましたよ」
恭一の右側を歩いていた国語科担当・H組担任の亘理（わたり）健太（けんた）が思わず唸る。
「彼ら、本当にほとんどが初心者なんですか？」
「えぇ。フルートの大谷とサックスの佐野以外は全員初心者で」
「はぁ～……。3ヶ月でみんなあんなに演奏できるんですね」
健太はまた唸ってしまった。
「元々、素質があるんじゃないんですか？」
彩が恭一に聞いた。
「それもあるでしょうけど、コツを掴めばすぐ誰にでも楽器は鳴らせますよ。ただ、そこからやっぱり上手くなるには彼らの努力が必要でしたからね。ホント、夏休み中の彼らの集中力には参りましたよ。今年は猛暑だったっていうのに」
「そうですね～。運動部もほとんどやっていなかったのに」
「ホント。若いっていいですなぁ」
健太が年寄り臭いことを言うので思わず全員が笑ってしまった。
恭一たちがちょうど校長室の前にやって来た。
「あ、私ちょっと校長に用事があるんですよ」
彩がそう言って集団から外れて、戸をノックしようとしたときだった。

突然、室内からアルトサックスやトロンボーンなどの楽器の音が鳴り出したのだ。

「おぉっと！？」
彩が驚いて2、3歩引いた。
「これ、吹奏楽のみんなじゃ……」
「おいおい、何をやってんだ」
恭一が勢いよく戸を開けると、それに気づいた幸治が音を立てないようにと人差し指を立てて口の前に当てていた。

「……？」

そして幸治が全員を手招きする。演奏に集中しているのか、吹奏楽部の１０名は恭一や彩が入ってきていることに気づかない。

よく聞いてみると、監査会で演奏した『ＴＲＵＴＨ』を演奏している。ドラムセットからチューバまで持ってきている。

恭一は幸治のそばへ歩み寄って耳打ちした。

「これはいったい……」

「すまないねぇ。暖房５つとの交換条件に、私に直接今までやった曲５曲を演奏してくれないかと頼んで音楽室へ行こうと思ったら、ここで演奏してくれるというものだから頼んでしまってね、つい」

幸治は苦笑いしながらどこか嬉しそうに言った。

「いえ……それなら別に構わないんですけどね」

恭一も思わず笑ってしまった。いつのまにかギャラリーが増えていることに翔たちは気づく様子もない。彩も健太もソファに座ったままジッと演奏に聞き入っている。

「人数が少なくても、音楽というのは人を魅了するものだね」

幸治が呟く。

「そうです。だから音楽はいいんですよね、本当に」

恭一もうなずき、二人も目の前の演奏に聞き入ってしまった。

第６１話　交換条件（後書き）

思わぬ部屋で思い出の曲を演奏した部員たち。１年生の教師も巻き込んでの臨時リサイタルで得た物は暖房以外にもあったようです。

第６２話　曲目しぼり

１１月５日に聴いた音源にあった曲は次のようになっている。

♪ホール・ニュー・ワールド
♪スーパーカリフラジリスティックエクスピアリアドーシャス
♪アフリカン・シンフォニー
♪シング・シング・シング

この中から１曲、新歓祭で吹く曲を選ばないといけない。さらに、部活動紹介のときのための曲も選ばないといけないのだ。合計で２曲。しかし部員数が１０名で各楽器１名ずつ、さらには足りない楽器がいっぱいあるのだから、慎重に検討しないといけなかった。

「どうしよっかぁ……」

雪子がフゥッとため息を漏らした。どれもけっこう賑やかな曲である。

「ねぇ……東先生はどれでもお前らならできるって言ってたけど」

絵美もＣｌａｒｉｎｅｔの譜面４曲を見ながら頭を抱えていた。

「俺が思うに、アフリカン・シンフォニーはダメだと思うな」

「なんで？」

陽乃が不思議そうに首を傾げた。

「朝倉、音源聞いてなかったの？　オーボエいっぱい吹いてたじゃん」

「それに、ティンパニとかタンバリンとかパーカスもいっぱい。あたしが千手観音にでもならないとできないよ、あの曲は」

美里が手をブンブン振った。

「うーん……そっか」

「じゃあ、アフリカン・シンフォニーは却下やな」

翔が黒板に書いてあった「アフリカン・シンフォニー」の字を消

す。
「はぁ～。やりたかったけどな」
陽乃が残念そうに黒板から消えた字の跡を見つめて言った。
「大丈夫。来年、人数いっぱい増やせばできるって」
春樹が自分で言って自分でうなずいている。最近、春樹はこういうことをよくするようになっていた。
慎也が立ち上がってアフリカン・シンフォニーの上にあった曲の隣にバツ印を入れた。
「とりあえずさぁ、このスーパーカリフラワーは却下でしょ」
「カリフラワー？」
全員が首を傾げた。
「スーパーカリフラジリスティックエクスピアリアドーシャスのこと？」
「そう！　それ！　すっげぇな、ハッキリ言えてるじゃん永井」
「めんどくせぇから、カリフラでいいんじゃね？」
拓真が省略形を口にした。
「あ、それでいいじゃん。カリフラ」
翔も矢印を引いて隣に「カリフラ」と書いた。なんてディズニーに失礼な男子たちだろう。まぁそれはいいとして。
「なんで却下なの？」
陽乃が不服そうに言う。陽乃はディズニーファンだったからどうせなら来年の春はディズニー一色でいきたいと思っていた。
「んーと、まぁなんちゅーか」
「ハッキリ言ってくんないとわかんない」
「んー、まぁ率直に申し上げますと……」
「ソロがあるから反対～とか？」
翔がニヤニヤしながら慎也に言った。
「あ、あはは……よくおわかりで」
「それだけじゃなくってさ、なんか途中で妙にジャズっぽくなるし、ベードラがないとちょっと曲として盛り上がりに欠けるところがあ

るからさ、俺たちに向いてないんじゃないかなって気がする」
　拓真が冷静に曲の分析をした。
「意外と研究してんねんな、拓あん」
「うん。暇さえあれば音源ずっと聴いてる」
「はぁ～……私たちも見習わないと」
　陽乃は拓真を尊敬するような目で見つめた。
「でもさ」
　絵美が立ち上がった。
「もう消えちゃったけどアフリカン・シンフォニーとシング・シング・シングって中学校から上がってきた新入生には馴染みがないと私、思うんだけど。それに比べてカリフラとホール・ニュー・ワールドってディズニーでしょ？　みんな一度はどこかで聴いたことがあるはずだから真剣に聴いてくれると思う。それに、ソロがあればいっぱい練習してカッコいいとこ見せて後輩いっぱい入れたほうが絶対いいって」
「でも、ベードラとティンパニとか大事なパーカスはどうする気だよ」
「それは……」
　拓真の鋭い質問に、絵美が黙ってしまった。
「なんかさー」
　陽乃が不満そうに手を上げる。
「私たち、自分の楽器で手一杯って感じがするんだけど協力したりしないといけないと思わない？」
「協力？」
「そ。協力。例えばさ」
　陽乃はそう言って音源のスイッチを入れた。スーパーカリフラジリスティックエクスピアリアドーシャスが流れ始めた。
　ちょうど中盤あたり。ティンパニとベードラが交互に鳴るところだった。
「こことかさ、正直ベードラはみさっちのドラムセットのベードラ

で代用できるじゃん？　だからティンパニをこの後ソロとかがないフルートかサックスの人で叩いてあげればいいんじゃないかな？」

翔、由美子、沙希の3人が目を合わせた。

「それに最後のほうのティンパニとベードラは大事なんでしょ？これも同じやり方で忙しくなさそうな人……そうだな、たとえば私なんかスッゴイ暇人だからここで私がティンパニ叩いておけばいいけるんじゃないの？」

なるほど。確かにトランペットが抜けるのは痛いがサックスなどでカバーできなくもない。

「で、次のベードラは水谷くんとかいけるんじゃないの？　見た感じ、川崎くんとかいるから大丈夫そうなんだけど」

「え？　俺！？」

春樹が驚いた顔をしている。

「無理だよ、俺そんな腕力ないって」

「え？　打楽器って腕力いるの？」

美里がしばらく考え「ううん、別にいらないとあたしは思う」と返した。

「ホラ、それならばっちりできるじゃん」

「でも……自信ないし」

「監査会のときのプレッシャーに比べたらマシやと思うけどな、オレは」

翔の一言で一瞬、室内が静かになった。

「だってさ、春やんもうまいこと監査会で吹いてたやん？　あんとき楽器吹き始めてまだ半年もしてなかったのに、全員吹けたやん」

「……うん」

「まだまだ4月まで時間あるから、もっとがんばって練習すれば絶対いけるって」

「そうだよ！　頑張ってみようよ。どうしてもダメなら曲を変えることだってできるんだし」

「……そうだな。俺らもっとスゴいことやったんだし」

春樹の顔が明るくなった。
「よし！　ほな、最終投票やけどやってええか？」
「はーい！」
全員の声が返ってきたので、投票をすることになった。
「じゃあまず、部活動紹介の曲から。ホール・ニュー・ワールドがええと思う人」
これはゼロだった。
「じゃあ次。カリフラ」
一斉に全員の手が挙がった。
「おっ、満場一致ちゃうん？　よし、ほな部活動紹介の曲はカリフラで決定！」
翔が花丸をつけた。
「ほな、新歓祭の曲な。ホール・ニュー・ワールド」
これも一斉に全員の手が挙がる。
「なんや、みんないろいろ言うてるけどディズニーが好きなんやん」
クスッと翔が笑うと、全員がつられて笑ってしまった。
「オッケ！　じゃあ決まりな。オレ、先生に伝えてくるからみんなはもう楽器出して練習しとって。今日は個人練習やからヨロシク！」
「ハーイ！」
翔が音楽室を出ると同時に、全員が楽器を取りに部室へと動き出した。
「えーと、部活動紹介が４月の１０日やったよな、確か……」
予定を確認しながら音楽室の外に出たときだった。

「あの！」

急に男の子の声がしたので振り向くと、見覚えのない子が立っていた。

第６２話　曲目しぼり（後書き）

新歓祭・部活動紹介に向けての曲目を早くも絞った吹奏楽部。ソロも多いようですが、やる気満々。そして翔の前に現れた見知らぬ男の子とは？

第６３話　お話を聞きに

「えっと……どちらさんでしょか？」
翔は私服で校内に入ってきている子を見て少し怪訝に思った。男の子のほうもかなり戸惑っている。もしかして迷子か？
「ひょっとして迷子とか？」
「あ、いえ！　違うんです。えっと、その……」
翔はジーッとその男の子の顔を見た。どこかで見たことがある。
「あ！　ちゃうかったらゴメンな。ひょっとして朝倉の弟さん！？」
「え……？　俺のこと知ってるんですか？」
夏樹が驚いたように目を丸めた。
「いや、直接会ったことはないけど……顔の雰囲気でなんとなくわかった。目元が朝倉ソックリ」
「え、あ、そうッスか。エヘヘ……」
夏樹は恥ずかしそうにうつむいた。
「で、どないしたん？　あ、姉ちゃんに用事とかか。オッケオッケ、ちょっと呼んでくるわ。おーい、朝……」
「ちっ、違うんです！　俺、ちょっと佐野さんに聞きたいことあったんで。お時間もらえますか？」
夏樹が慌てて翔を止めた。幸い、誰も二人の会話に気づいていない。翔は一呼吸おいて考えた。
「あれ？　オレ、名前言ったっけ？」
「あ……っと、その」
夏樹は言おうかどうしようか迷ったが、いちおう不審に思われないために言っておいた。
「姉ちゃんがよく家で俺に佐野さんの話……してるから覚えちゃって」
「え……」
それを聞いて翔の顔が少し赤くなった。

「それで覚えたんで。ビックリさせてすいません」
「そ、そうやったんや。なんや、ビックリしたわぁ」
翔は冷静さを装って返すが、心臓がドキドキして止まらない。
陽乃が自分のことを家でも話している？
弟にまで？
いったい何の話をしているんだろう。

思い返せば、陽乃に告白したあの日。陽乃の気持ちがどうだったのかわからない答えだったことに気づいた。

（私、佐野のことは好き）

そうは言っていたが、よく考えればあれはどっちの好きだろう。

Ｌｏｖｅ？

Ｌｉｋｅ？

どっちなのかによってまったく翔の意図していたこととは違う答えが返ってきていたことになる。あのときの好きはいったいどっちだった？　話の流れから考えるとＬｏｖｅと取ったほうがいいのだろうけれど、それはあまりにも自分勝手な気がする。

「佐野さん？」
夏樹の声にふと我に返った。
「あぁ、うん。で、聞きたいことって？」
「えっと……その」
夏樹はチラッと音楽室のほうを見た。どうやらここでは落ち着いて話ができないようだ。
「どっか移動しよっか？」

「あ、いいんですか？」
「全然構わんよ。どこ行く？　屋上とかいいかな」
「はい」
翔はコッソリ音楽室に戻り、屋上倉庫への鍵を取ると全員に見つからないように夏樹を連れて上へと上がった。

屋上への戸を開けると冷たい風が一気に階段に吹き込んできた。
「うっわ、寒ッ……」
翔と夏樹は同時に体をギュッと自分の手で抱いた。
「やっぱ寒なってくるなぁ」
翔はハーッと自分の手に息をかけた。夏樹は手袋を取り出した。手編みだ。
「おっ。彼女さんからもらったりとか？」
「やだなぁ、違いますよ」
「なーんや。じゃあ誰から？」
「姉ちゃんが編んでくれたんです」
「朝倉が？」
意外だった。陽乃の恐ろしく下手な絵を見るとそんなに器用とは思えない。
「へぇ～。朝倉の絵がちょっと個性的すぎたから不器用やとてっきり思ってたわ」
翔が苦笑いしながら言うと「あ、姉ちゃん絵だけはめっちゃくちゃ下手で。中学校でも美術が2だとかで大騒ぎしてた。芸術レベル高すぎてついていけないんだよ、とか言ってましたけど」と夏樹が返してきた。
「アハハハ！　おもろいやっちゃな、やっぱ」
二人で笑っていると、時間が経つのを忘れてしまう。
「あ……で、本題からだいぶズレたよな」
「あ、ホントだ」
クスクスと笑い、いよいよ本題に入った。

「あの、佐野さん。聞きたかったんですけど……」
「うん」
「吹奏楽って、中学生とかでもできるもんなんですか？」
夏樹の質問に思わず面食らったが、笑顔で翔は言った。
「年齢制限なんてないよ」
「ほ、ほんとですか？」
「うん。えっと、名前なんて言うんかな？」
「あ、夏樹です。朝倉　夏樹」
「うん、夏樹くん。オレなんかな、吹奏楽は小学校の４年生からやってるねんで」
「４年生!?　スゴいですね！」
夏樹がサッカーを始めたのは中学校に入ってからだった。本当は野球をやりたかったが、あまりにも自分とのレベルの差が開きすぎていたので、とてもついていけないと思いサッカー部に入った。ところが、来る日も来る日も球拾い中心の日々に最近うんざりしていたのだった。
「じゃあ、俺がもし今から吹奏楽やっても十分いけますか？」
「うん。もちろんいけるで。サッカーとかと一緒やと思うけど。始める年齢に制限なんてないからな」
「……スポーツはそうもいかないと思うんですけどね」
急に夏樹の声が低くなった。翔はよくスポーツのことを知らないので何かマズいことを言ったのかと思い、謝った。
「ゴメン、オレ、スポーツのことよく知らんのにこんなこと言うたらアカンかったな」
「あ、いえ！　俺のほうもなんかすいません、急にこんな話……」
「ううん。気にせんといて。それより、夏樹くんも吹奏楽に興味あんの？」
「あ、はい。ちょっと……」
夏樹は恥ずかしそうにうなずいた。
「そっか！　なんか嬉しいな。いま中学何年？」

「2年です」
「ってことはさ、オレが3年なったら高1やろ？　一緒に吹こうと思えば1年間吹けるな」
翔が人懐っこく笑った。初対面なのにここまで落ち着いて話せる人は今までいなかった気がする。
「一度、吹奏楽の演奏会とかの様子とか見てみたいんですけどなかなか予定合わなくて、姉ちゃんの演奏とかも見に行く機会なかったんで……」
「演奏？　聞いてみたいん？」
「はい。一度でいいんで」
「それじゃさ、来月の市の定期演奏会聞きにきたらえぇやん」
「それ、絶対行きますよ！　でもそれより前に一回、聞いておきたいと思って……」
「うーん……。ほなさ、いっぺん今からオレらのショボい演奏で良かったら聞くか？」
「え！？」
翔は「決定！」というと夏樹の手を引いて音楽室へと降りようとした。
「あの、やっぱ姉ちゃんがおるから恥ずかしくって……」
「あ、そっか」
きょうだいで部活に入っていたりすると妙によそよそしくなることが多い。まして入っていないのに行くともなればなおさらだろう。
「じゃあさ、ちょうどえぇもん持ってるからこれ、渡しとこっか」
翔は制服の上着ポケットからＤＶＤを一枚取り出した。
「これな、オレが中2やから夏樹くんと同い年のときのオレの中学校の定期演奏会のＤＶＤやねん。よかったら、見ておいで家で」
「い、いいんですか！？」
翔は笑顔でうなずいた。
「姉ちゃんにバレんように見るんやで？」
「ありがとうございます！」

夏樹は嬉しそうに微笑んだ。笑った顔が陽乃にソックリで、少しドキッとした。

夏樹を全員にバレないように見送り、職員室で恭一にさっきの部活動紹介と新歓祭の報告を済ませてから翔は携帯電話を取り出した。アドレス帳から一人の番号を探し出し、電話をかける。

コール音が3回鳴った後、留守電につながった。

「もしもし、佐野です。ＤＶＤの話なんですけど、友達の弟に貸してたん忘れてて。また返ってきたらお貸しするってことでいいでしょうか？　お返事お願いします」

電話を切った後、翔はため息をついた。

「会いにくいけど、仕方ない……か」

雪子のホルンの音色が聞こえてくる。自分も練習に戻らなければと思い、翔は音楽室へと向かった。

第６３話　お話を聞きに（後書き）

陽乃の弟・夏樹の突然の訪問。どうやら夏樹も吹奏楽に少し関心がある様子。そして翔が電話をかけた相手はＤＶＤを貸す相手ということから、中学時代の知り合いでしょうか？

第６４話　お久しぶりです

１２月１日（木）。家の近くにある公園で翔は人と待ち合わせをしていた。

「うー！　寒い！　早く来てほしいんやけどなぁ」

もう夜の８時だ。このあいだ、夏樹にＤＶＤを貸して返ってきてからすぐに貸すと連絡を入れたがそれ以降まったく電話も何もなかった。そうかと思えば今日の夕食のときに突然電話がかかってきてすこぶるその人は軽く言ってきた。

「今から貸してくれへん？」

ふつうなら断っただろう。けれど、翔も一度会っておきたいと思ったので待ち合わせして会うことにした。会うのは１年半ぶりくらいだろうか。最後は中３のコンクール前だからやはりそれくらいになる。

「おーい、カケぼー」

聞き覚えのある声。そして翔のことを「カケぼー」と呼ぶのはまだ一人しかいなかった。

「ショーさん！　ココです、ココ！」

自転車でサーッと翔の座っているベンチにやってきたのは、中学時代のアルトサックスの先輩・岩切（いわきり）　翔平（しょうへい）だった。

「久しぶりやんけ！　お前もまさか七海市に引っ越して来てるなんて知らんかったぞ！」

翔平が嬉しそうに笑いながら翔を小突いた。

「ショーさんより早くに引っ越してきてましたよ！　先輩が連絡遅いんじゃないっすか？」

「相変わらず生意気な口利くやっちゃなー。まぁええわ。約束のブツを出せ」

「ブツなんて言い方やめてくださいよ。不良っぽいじゃないっすか」
「えぇやんけ。俺らの中学時代のコンビ名もそれっぽかったし」
「へへ。懐かしいですね」
中学時代。翔と翔平は「ダブル翔（しょう）」と呼ばれていた。由来は言うまでもなく、「翔」と翔平の「翔」を取ってダブル翔。おまけにパートも一緒と来たものだから、このあだ名は部内だけでなく先生や生徒たちの間でも定着していた。ついでに言えば、翔はもうひとつダブルのあだ名があった。それが修平とのあだ名「ダブル佐野」だった。安易なネーミングだが、中学生の考えることだったらこの程度だろう。
「サックス、吹いてるんか？」
翔平は買ってきた缶コーヒーを翔にも手渡した。少し冷めてしまっている。
「吹いてますよ」
「でも、ナナコウは吹奏楽部ないって聞いたけど？」
ナナコウ。七海高校のことだ。
「あ、なかったですけど」
「そやろ？　どこでやってるねん」
クイッと翔平がコーヒーを口に含む。
「んーと、オレが吹奏楽部作りました」
それを聞いた途端、翔平がブボッ！とコーヒーを吐き出した。
「うっわ！　先輩汚い！　なにやってるんですか！？」
翔は思わずベンチから立ち上がった。翔平はゲホゲホとむせながらも続ける。
「なにアホなこと言うてんねん。ビックリするやんけ」
口を拭きながら翔平は翔のほうを見た。
「いや、ホンマですよ。春から１０人って少ないけど、頑張ってます」
「……マジで？」
「はい。あ、ちょうどいい写真ありました。これ見てください」

翔はカバンから一枚の写真を取り出した。

「まーったくもぉ。なんで私が切れちゃった緑茶を買いに行かなきゃなんないのよ。お茶漬けなんて夏樹とお母さんしか食べないのに」

陽乃はぶつくさ文句を言いながら家へと急いでいた。ついさっきのことだ。

「あれー！　お母さん、お茶漬けしたいのに緑茶がない！」

お茶碗にご飯をよそってお茶漬けの元をふりかけた後に夏樹がわめいた。

「そんなはずないでしょう？　よく探したの？」

由利が床下収納のあたりを探した。

「あれ？　おかしいわね。この間買い置きしておいたのに」

１０分ぐらい台所からドスン、バタン！と音がしていた。そのうち冬場だというのに汗をかいてきた由利が疲れ切った様子でこう言ったのだ。

「陽乃～、お茶を買ってきてくれない？」

「えー！？　いまちょっといいところなんだけど？」

クイズを見ていた陽乃は動かないという意志を示すためソファに横になった。

「あらま、ダメだわ夏樹。お茶漬けは諦めなさい」

「えぇ～？　ここまで準備したのに」

「その代わり、これでも食べてなさい」

冷蔵庫を開ける音。扉にある棚付近から何かを取り出しているようだ。

（まさか……）

陽乃が振り向くと、このあいだ沙希が行ってきたという銀座の有名なお菓子屋さんのクッキーをなんと４枚も夏樹に手渡していたのだ（ちなみに、すべての袋に陽乃の芸術的な絵がサインペンで描いてある）。

「わーかったわかった！　買いに行くよ。行けばいいんでしょ！」
そして今に至るというわけだ。

「ホントに人使いが荒いんだから……ん？」
公園のそばを通ったとき、微かに聞き覚えのある声がしたので陽乃はUターンして公園の中を覗き込んだ。
翔がベンチに座っている。
「あ！　佐野じゃん！　よーし……おどかしてやろっ！」
陽乃はコッソリコッソリ翔のほうへと近づいた。だんだんと心臓の音が高鳴る。
（うわぁ！　こういう瞬間、たまんねー！）
ところが、別の男子の声が聞こえたので足を止めた。
「へぇ！　けっこうカワイイ女の子多いやんけ！」
（ん？　誰？）
陽乃は声のするほうを覗き込んだ。見たことのない男の人がいる。翔より年上だろうか？
「先輩っていつも女の子のことばっか見てますよね。スケベ」
「はぁ！？　スケベちゃうわ！　こうしてカワイイ子がおらんかチェックしてるだけー」
「それが十分スケベやと思いますけど？」
「お前はいっつも俺をスケベ扱いしやがって。まぁええわ。ぶっちゃけ、聞くで？」
「はいはい。何でもどうぞ」
翔は適当にあしらうようにして答えながらコーヒーを口に含んだ。
「この子」
翔平が指差したのは、陽乃。
「その子がどうしましたか？」
（あ、私じゃん……）
「お前が好きな子ってこの子やろ」
ブーッ！と翔がコーヒーを吐き出した。陽乃も思わず驚いて顔を

上げようとして茂みに頭を埋めてしまった。
「なっ、ゲホゲホ！　先輩に直接名前言うたことはないのになんで知ってるんですか！？」
「へっへーん。お前と俺がどんだけ中学時代一緒におったか覚えてんのか？」
「……2年くらいでしょ。オレが中1から中3の夏までおって、ショーさんとかぶったのは中1から2年間ですもんね」
「お前と恋バナしたこととかもバーッチリ覚えてるねんぞ。お前のタイプとかもバッチリ聞いたやんけ」
「……しょーもないことばっか覚えてるんですね」
翔は恥ずかしそうにうつむきながらコーヒーをすすった。
「で？　その子のために捧げる曲とかどうとか言ってたけど、何の曲吹くんや？」
「……恥ずかしいから言いません」
「オレとカケぼーの仲やんけ」
「それでも言いません」
翔は顔を赤くしてうつむいたままだ。
「相変わらず口の堅いヤツ！　まぁええわ。曲が立派に吹けるようになったら聞かせて」
「そのうち、ね」
翔はプイッとそっぽを向いたまま返した。
「あ、もう9時や」
翔平が時計を見て呟いた。
「そろそろ帰らんとマズいですね」
「そやな。じゃあ、本番見に行かせてもらうわな。そのときDVDも返すわ」
「よろしくお願いしますね。じゃあ、またそのときに」
「おう！　じゃあな」
「失礼します」
二人は挨拶を終えるとそれぞれの家のほうへ歩き出した。

「わっ！　マズい！　なんかこっちに来てる！」
陽乃はかなり慌てた。翔がまっすぐ陽乃の隠れている茂みのほうへやって来ているのだ。
「そ、そうだ！　とりあえず隠れて後ろから追いかければ……」
近くにあった木に隠れて翔をやり過ごし、距離を見計らってから陽乃は翔の後を追いかけた。

（その子のために捧げる曲とかどうとか言ってたけど、何の曲吹くんや？）

翔平の声がよみがえる。あれは陽乃のために、という解釈でいいのだろうか。しばらく悩んだ後、陽乃は「佐野～！」と後ろからいま会いましたというような雰囲気で声をかけて近寄っていった。

第６４話　お久しぶりです（後書き）

翔の中学時代の先輩・岩切　翔平とのひとときで判明した想い人へ捧げる曲の話。陽乃はその曲が自分へ捧げられるようにと密かに思って翔を追いかけたのでしょうか。

第６５話　直前練習

とうとう明日に七海市吹奏楽連盟第１３５回定期演奏会を控えた七海高校吹奏楽部１０名は私立風見台高校に最後の合同練習のために来ていた。

この頃には陽乃もすっかり優衣と仲良くなっていた。携帯のメールアドレスも交換するくらいだ。楽器を吹き始めたタイミングも同じということが影響しているらしい。さらには服の好みや芸能人の好みまで合っていると昼休みには大騒ぎしていた。

翔も昼休み、修平の様子を見に顔を出してみた。意外にもパーカッションを楽しんでいるらしく、なぜかベードラのバチを常に携帯していた。

「おっす。どう？　調子は」

翔が声をかけると、修平は機嫌良さそうにバチを振りながら「久しぶりやんけ！」とにこやかに返してくれた。

「けっこう打楽器気に入ってるんやん」

「まぁな。もう2ヶ月近くパーカスやってるし」

そう言って『アルヴァマー序曲』のベードラの譜面を開いた。

「うおっ！　サックスのときに負けへんくらい譜面が真っ黒や！」

「へへーん。頑張ってる証拠や」

修平は嬉しそうに譜面を翔に見せた。練習中、先生に言われたことや自分で気づいたことをメモしているうちにたいていの譜面は修平のように真っ黒になってしまう。

「そういえばさ、翔」

「ん？」

「お前こないだショーさんに会ってんて？」

「あれ？　誰から聞いたん？」

「朝倉さんから」

そういえばあの日、偶然陽乃に出会った。まさか話を聞かれてい

たんじゃないだろうかという不安はあったが、そこまで考えたらキリがないと思い、翔は何も言わなかった。陽乃も言ってくることはなかったのだからあえて触れる必要もなかっただろう。

「元気そやった？」

「うん。バリバリ」

「そっかー。あの人、サックス化け物並みに上手かったからなぁ」

「ホンマや。今でもオレらの憧れやで、あの人は」

「そうやなぁ……オレらも頑張らないと！」

岩切　翔平。

西大阪では彼の名前を知らない人はいないくらい、アルトサックスが上手かった。市内のソロコンテストで余裕の優秀賞をなんと１年生にしてかっぱらい、その年は関西大会まで行ってしまった人だ。高校に上がってからもその名前は時々聞いていたが、翔がナンチュー吹奏楽部を辞めて以来、一時的だが親交が止まっていた。

しかし意外と近くに引っ越してきたことで親交再開。引越しのときに失くしたＤＶＤを貸してほしいと突然メールが来たからのことだ。翔は緊張はしたが、それ以上に嬉しかった。翔平はずっと翔の憧れだった。ショーさんのようになりたいと、今でも真剣に思っている。

翔平は一人で舞台に立っても全然緊張しない人だった。翔がソロを失敗したときも実はコッソリ聞きに来ていたようで、それには何も触れなかったが黙って缶コーヒーだけを差し出して行ってくれた。責めもせず、褒めもせず。そのときにその人に必要な助言や行動を取る。そんな人だった。

翔平との出会いは翔の目指す人物像が身近にできた瞬間でもあったといっても過言ではないだろう。

「翔！　合奏行こうぜ」

「おう！」
修平に呼ばれて翔は音楽室へと駆け込んだ。
今回の演奏会では風見台高校吹奏楽部顧問・岩屋（いわや）紀昭（のりあき）先生が指揮を振ってくれることになっていた。恭一はしばらく音楽から離れている期間があったので、ずっと指揮をしている岩屋先生に任せたようだ。
「それじゃ、ロングトーンから始めます。B♭の音階を16拍4拍で」
「はい！」
紀昭の一言で全員の意識が一瞬にして変わる。こういうときの集中力というのは本当にスゴい。
5分近くかけて音階が終わる。
「じゃあ次は8拍4拍で」
「はい！」
そうして20分近くロングトーンをした後、各パートでチューニングを合わせた。
「それじゃ、アルヴァマーをまず一回通します」
「はい！」
陽乃は思わず心臓がドキドキしてきた。まだ本番ではないというのにこんなに緊張して本当に大丈夫だろうか。
硬い空気の中、沈黙が続く。先生が指揮を下ろすまでのこの時間が陽乃が最近一番苦手で、でも一番喜びを感じる時間だった。
無言で指揮が振り下ろされると同時に、トランペット、スネア、美里のタンバリン、修平のベードラが打ち込みとメロディを吹き始めた。
クラリネットとホルンのメロディ。雪子と絵美が小さくだが体を揺らして吹いている。前回の七海高校だけでの合奏のときに「感情を込めて」と言われたことを実践しているようだった。美里はというと、顔がかなり強張っているが一生懸命にタンバリンを叩いてい

る。家にまで持って帰って最近は練習をしていた。

気持ちいい。

大人数で演奏するのはこれが初めてではない。今までの合同練習でもやってきたことだ。しかし、今日ほど気持ちよく演奏ができた日が今までにあっただろうかと思うほどだ。

テンポが落ちたところで木管楽器がメインでメロディを吹くようになる。ここは何回も恭一に「ピッチ（※1）が悪い」と言われたところだった。沙希、由美子、絵美、翔の4人は必死でここのセクション練習をしていた。少ない人数でも詰めて詰めて練習をしていた。

雪子も最近、高音がスムーズに出るようになってきていた。

再びテンポが上がる。ここのあたりではいつもバテてきそうになっていたが、今日は違う。テンションが上がっているからか、調子がいい。

いよいよ最後の部分に差し掛かってきた。陽乃がチラッと美里のほうを見ると、強張った顔が笑顔になっている。一瞬だけ修平と顔を合わせ、美里の顔がもっとやわらかくなった。絵美があれだけ嫌がっていたトリルの部分も彼女はサラッと吹いてしまった。

紀昭も力いっぱい指揮を振り終え、曲が引き締まるように終わった。

沈黙が続く。

紀昭が指揮棒を下ろして言った。

「鳥肌が立ったぞ」

その声に全員が笑みをこぼした。

「よし、今日はバテない程度にチョコチョコと修正をして終わっておこうか」

「ハイ！」
「それじゃ、６小節目からやるぞ」
「はい！」
こんなに楽しい合奏があるだろうか。陽乃はひとつひとつの音、１分１分を噛み締めるように楽しんでいた。

「朝倉～」
翔が楽器を磨きながらこちらへやって来た。
「お疲れ！　どしたの？」
「いやな、こないだ会ったって言うてた先輩がおるやろ？」
「うん」
確かイワキリとかいう人。
「その人がなんかプリクラ撮りたいって言うてるねんやん」
「私と？」
「ちゃうちゃう。なんでお前と撮らないとアカンねん、ショーさんが」
（しまった！）
あの場にいたことがバレる内容を喋ってしまったことに気づいて陽乃は思わず口を塞いだ。
「アハハ、そうだよね。会ったこともないのに」
「そやろ？　で、オレと修平と撮りに今から行くんやけど、お前もどうや？」
「え？　だって私のこと知らない人なのに一緒に写ってどうすんの？」
（しまった！）
翔はすっかり陽乃があのとき一緒にいたかのような錯覚を起こしていたのだった。
「あ、ちゃうちゃう！　せっかくやし、オレと修平とお前の３人でプリクラ写してとかん？　記念に」
「うん……別にいいけど」

「じゃあ決まり！　片付け終わったら集合な！」
そう言って翔はすぐにサックスを片付けに走った。
「危ない危ない……バレるとこだった」
陽乃はため息をつきながらトランペットを片付け始めた。
「聞いちゃった、聞いちゃった～」
「……！」
後ろを振り向くと、美里と慎也が立っていた。
「ふ・た・りで放課後プリクラ～！　やるねぇ、陽ちゃん」
美里がスネアのバチでツンツンと陽乃の肩をつついた。
「そういうことを話すならコソコソ声でやらないと」
トロンボーンのスライドで今度は反対側の肩をつつく。
「なんなの、アンタたち二人とも。ケンカ売ってるの？」
「まさかまさか！　私たちはアサクラ親衛隊と申しまして、陽乃サマをお守りするのが仕事なんですよ」
「仕事？」
「そうそう」
慎也もウンウンとうなずく。
「じゃあさ、陽乃サマのお願い事も聞いてくれる？」
「そりゃもちろん！」
美里がドン！と胸を叩いた。
「じゃあ、陽乃サマからの指令を隊員二人に下しま～す」
陽乃がニヤッと笑いながら二人に近づいていった。

第６５話　直前練習（後書き）

直前練習を終えたメンバーたち。記念にプリクラを撮ると翔は言うものの、何かを隠している？　そして美里と慎也の運命やいかに！？

（※１）ピッチ：音程のことをピッチともいいます。

コラム☆2　実際はどうなんだ？

『奏～Ｋａｎａｄｅ～』の登場人物もかなり増えてきました。そこで、登場キャラクターが実際に同姓同名の方がいらっしゃるのか、Ｇｏｏｇｌｅで検索しよう！というくだらない企画をしてみました。それから、性格の設定と姓名判断をしてどのような性格なのか、比較してみました。

お遊び気分でご覧ください♪

＜対象：小説に登場する高校生・中学生＞

佐野　翔　＝発見できず。

性格設定：明るくリーダーシップのある子。ポジティヴ思考で何でも積極的に取り組む。

姓名判断：先見力をもっており、大志を抱く人で、がんばり屋です。強く大胆なので、浮き沈みもはっきりしていますが、地位も名誉も上昇していくでしょう。

（コメント）なるほど……。主人公らしい判断が出ています。大志を抱いて頑張り屋のあたりなんて当たっていませんか？笑

朝倉　陽乃　＝発見できず（この小説が検索で引っかかりました・笑）。

性格設定：お喋りで明るく活動的な女の子。若干（かなり？）おっちょこちょい。

姓名判断：義理を重んじ、人情にあつい男性的な強い性質を持っています。気短で、感情のままに行動するところがある。

（コメント）男性的……（笑）　感情的なところというと第６４話「お久しぶりです」第４話「つくし野川」あたりを見るとわかりますね。

大谷　沙希　＝発見できず。
性格設定：お嬢様なので基本的にお上品。お土産を誰にでもあげたりと気配りのできる子。
姓名判断：おだやかな性格で、まじめにていねいにコツコツと積上げていくタイプ。お金で苦労することがなく、自然と豊かになります。初志貫徹の精神をもっている。
（コメント）お嬢様という設定にしたのですが、お金で苦労しないのあたりで出てきたのでビックリしました（笑）

宮部由美子　＝発見！　一般の方のようです。
性格設定：少々天然ボケなところあるため、時々周囲は彼女の考えていることがわからなくなることがある。温厚篤実。
姓名判断：おだやかで平凡な人です。特に目だった存在ではありません。自分の才能に合わせてユニークな仕事を見つける天才で、順調にいきます。
（コメント）天然ボケと平凡っていうところがあまり一致しませんね～。ユニークな仕事＝吹奏楽部？笑

橋本　絵美　＝発見！　なんと歌手の方がいらっしゃいました。
性格設定：真面目を絵に描いたような子。何でも手を抜くことはなく、意見もハッキリ言うタイプ。
姓名判断：意志が強く、頑固なまでに貫くタイプです。目的成就のために、がんばり続けます。意固地にならないようにすれば、人間関係も良くなるでしょう。
（コメント）真面目が絵になったよう＝頑固なまでに貫くってことでしょうか？　意固地にならないようにね、絵美ちゃん♪

永井　雪子　＝発見できず。ありそうなのに……。
性格設定：見た目はおとなしいが、仲良くなると誰にでも親密にな

る子。想いを内に秘めやすい。
姓名判断：温厚で素直な、温かい性質の持ち主です。人から抜きに出ることを望まないので、目立つことはありませんが、ひとつひとつていねいに進めていくために、着実に成功の基礎を築いていきます。
（コメント）なるほど……。小説でも確かに目立つようで目立たないポジションかも（＾＾；）

川崎　慎也　＝発見！　イラストの作者さんの一人のようです。
性格設定：基本的に無口。好奇心は旺盛なため、何でも関心を持つ。
姓名判断：おとなしくて素直で、全体の和を大切にする人です。コツコツと努力して、一歩一歩前進していくタイプなので、家庭は平安で、社会では信用にあつく安泰です。
（コメント）基本的に無口＝おとなしく？　意外と合ってるものだったのにビックリしてます（笑）

水谷　春樹　＝発見！　一般の方からドラマのキャラクターにまでいました（´▽｀）
性格設定：とっつきづらいように見えるが、根は優しい子。わりとすぐにオドオドする。
姓名判断：他の人から見て、自然にはとけ込みにくいタイプに見られがちです。プライドが高く、実力があって、努力家です。
（コメント）春樹もけっこう合ってる！　ちなみに、作者は姓名判断はせずにキャラクター設定を決めてました。O型の作者はけっこうアバウトです。

本堂　拓真　＝発見できず。さすがに珍しい苗字ですもんね。
性格設定：生真面目な性格で、空気を読める。しっかりした意見を持っていて、発言もする。
姓名判断：頭が良く、直感が鋭くて、分析力に秀でています。しか

し、神経質なところがあり、少しのことでイライラしがちです。人格的な幅があまり広くない面があるので、まわりの人と協調していくのがむずかしい場合があります。頭脳と豊かな感性を生かせる仕事につくと、能力を発揮できるでしょう。

（コメント）拓真よ！　拓真そのものじゃないか！　第４４話「合宿はここで!?」を見てみましょう。吹奏楽は感性を生かせるぞ♪

田中　美里　＝発見！　なんと女優さん!!
性格設定：モンキータンバリンで家のベッドで踊ることもあるおもしろい性格。大胆なことが好き。
姓名判断：明るく、笑顔を絶やさないので、まわりの人から愛されます。情が豊かな上に、頭脳明晰で、仕事もきちっとこなすため、責任ある立場に立って活躍することでしょう。
（コメント）こりゃまた美里の性格によく一致する判断内容で……。ただ、タンバリンを持って踊るまでは結果に出ませんでした（笑）

佐野　修平　＝発見！　ドラマの登場人物。
性格設定：負けず嫌いだが芯は優しい。意外と言いたいことが言えない引っ込み思案なところもある。
姓名判断：引っ込み思案なところがあり、負けず嫌いで、強い信念と決断力をもって前進する人。しかし、権力志向の面があるために、敵もつくりやすいでしょう。
（コメント）今まで出てきた人物で最も判断が合ってると作者は感じましたが……いかがでしょう?笑

岩切　翔平　＝発見できず。ニアミスで「岩切　洋平」はいました。
性格設定：おおらかで楽観的。ちょっとエッチなところもあるが年相応か。吹奏楽のことになると熱くなる。
姓名判断：明朗で、人に親切です。プライドが高く、実力があって、努力家です。めんどうみもよいので、必ず人の上に立って、たより

がいのある人として慕われるでしょう。ただ、人によっては、生意気に見られる場合もありますから、謙虚さを失わないようにすれば、さらに強運な人生となります。

（コメント）人の上に立つ、頼りがいのある人だから翔に慕われているんでしょうね。確かにＳａｘの実力もあります。

☆今後の展開☆

まだ翔たちは高校１年生。吹奏楽部も始まったばかり♪　作者本人が予想していた以上に長編になりそうです。皆様からのコメントが励みになってます（＊＾Ｏ＾＊）　まだまだ続く『奏～Ｋａｎａｄｅ』をよろしくお願いいたします！　２００７年９月２２日　にっくん♪

コラム☆2　実際はどうなんだ？（後書き）

コメント・評価へのご協力をよろしくお願いします♪　また、連載終了済み小説『Ｉｎｖｉｔａｔｉｏｎ』のほうもよろしくお願いいたします☆

第６６話　何かが変わった日（前）

「なんで慎ボーとミサッチがおるねん」
翔が不服そうにブツブツと呟いた。
「えっ？　だって私ひとりだと女子一人じゃない。寂しいもん、そんなの」
「ったく……」
翔は明らかに不機嫌だ。
「いいじゃん。多いほうが楽しいんだから」
「チェッ……」
「どしたの？　なんか変だよ、佐野」
「べっ、別にそんなことないって」
「あっそ。それより、せっかく先輩来てるのにお話しなくていいの？」
そうだ。わざわざ翔平は夜なのに出てきてくれている。このあいだも話をしたことはしたが、もっと長い時間話をしたいとは思っていたのでいい機会だ。
「なんか関西弁ばっかりだとこっちまでうつっちゃいそうだけど」
修平に翔平、翔（よく考えれば名前の響きまで似ている）の３人が揃って西大阪市出身なのだから、関西弁を思いっきり話す。しかも翔平は声が大きいので通り過ぎる人が珍しそうに６人を見つめていった。
「なんだか私たちまで関西人だとか思われてそう」
「間違いなく、思われてるな」
「恥ずかし」
そう言ってクスッと陽乃が笑った。
「……。」
「何？」
「……別に」

「おーい！　カケぼー」
翔平が翔のことを呼んだ。
「ほら、行かなきゃ」
「ん。行ってくる」
翔はフイッとすぐに陽乃たちの列から離れた。
「なんか変なの」
陽乃が翔の背中を見つめながらため息を漏らしていると、後ろから美里が腕を組んできた。
「そういえばさぁ、最近の佐野くん」
さらに隣に慎也。腕は組んでこなかったが、やたらと距離が近い。
「そうそう。一人で部室にこもってなんか曲を練習してるんだよね～」
「そ、そんなことしてんの？」
「そう！　しかもね、この間エミリンが部室にいきなり入ったらめっちゃくちゃ驚いた顔してね」
そういうと美里が翔の顔マネをした。
「やっだ、なんか似てる！」
「ホントホント！　あんな驚いた佐野くんの顔見たことないって言ってたよ」
「それに、昨日なんだけど俺が部室コッソリ入ったら……」
「なんでコッソリ入る必要があんの？」
陽乃が不思議そうに首を傾げた。
「だーってさ、なんかコッソコソ一人で怪しいことしちゃって気に入らないじゃん？」
「怪しいって……曲の練習でしょ」
「それでも、俺たちに秘密なんてなんか変なの……佐野らしくないよ」
プゥッと慎也が頬を膨らませた。
「そうは言ってもねぇ。佐野がそんなに簡単に教えてくれそうな雰囲気でもないでしょ、それ」

「そこが問題なのよ。何考えてるかちょっと聞き出してみてくれない？」
「私が？」
「陽ちゃんだったら絶対に教えてくれるとあたし、思うのよ」
「頼むよ！　朝倉さん！」
「ちょ、今はやめとこうよ。先輩と楽しく話してるみたいだし」
「ん……そうね」
その頃、翔と翔平、修平も恋の話で盛り上がっていた。
「へぇ！　あの曲やってんなぁ、カケぼーが練習してんの」
翔平がニヤニヤ嬉しそうに翔の肩を小突いた。
「クソ～、仲良くやりよって。俺も手伝ってもらいたいくらいやわ」
修平が茶化すように続ける。翔の顔はもう近くで見てみると真っ赤になっている。
「そんで？　告白とかしたん？」
「しましたよ。一回……」
「あ、そのテンションやと」
「そうです。見事にフラれました」
「くっはぁ！　辛いの、お前！」
修平が苦笑いでバシバシと背中を叩いた。
「痛いって！　なんでお前そんな嬉しそうやねん」
「べっつに～？　なぁんもないよ」
「変なヤツ」
翔がまたうつむきながら歩き始めた。美里と慎也も何か陽乃に絡んでいるようだ。さっきから陽乃が少し機嫌の悪そうな声を上げている。
「気になんのか？　朝倉さんが」
「！」
翔平の声にまた赤くなる。
「もう、ウブやねんから。だいたい翔っていっつも奥手やもんな」
修平が両手を組みながらウンウンとうなずいた。さすがコンビを

組んでいただけあって、二人とも鋭い。翔の気持ちを読み取るのが早いのだ。

「うるさいなぁ……。別に奥手でも構わへんやろ。誰に迷惑かけるでもナシに」

「いや？　案外朝倉さんを困らせてるって意味で迷惑かけてるかもね」

「……そんなことないし」

「おや？　もひとつ自信がないようで？」

翔平が茶化すように覗き込んできた。

「そんなことない！」

思わずタメで喋ってしまった。

「あ……すいません」

「いや、俺らのほうこそゴメン……なんか」

妙な沈黙が生まれる。後ろにいる陽乃たちも変に静まっていた。

一方の陽乃たちはというと、前にいる3人の妙な空気になんぞちっとも気づいていなかった。

「やーだって言ってんじゃん！　なんで私が聞かないといけないのよ？」

陽乃の背中をグイグイと押してくる美里を必死に押さえながら陽乃は反論する。

「だって普段から特に陽ちゃんと佐野くん、仲い・い・じゃん！」

最後のほうになると、美里の口調が強くなってきた。

「そんな理由でなんで私が佐野の秘密を聞かないといけないの？意・味・不・明・だって・ば！」

「まぁまぁまぁ！　こうさ、朝倉さんがドーンと軽いノリで聞いてくれればいいわけでっ！」

慎也の力も加わって、陽乃がほとんど抵抗できない状態になった。

「そりゃっ！　行ってこい！」

ほとんど同じ頃、気まずさに耐えれなくなった修平が翔に陽乃たちのところへ行くように促していた。
「な、なんやねんいきなり!?」
「えぇから、ちょっと話しておいでぇや。きっと退屈してるって!」
「そんなんわからへんやろ!?　勝手に決めつけんなや」
「いいじゃん、カケぼー。もうすぐクリスマスだし、そういうノリで行っちゃえ!」
「そういうノリの意味がわかりません!　やめてくださいよ、押さないでください!」
「えぇから!　行ってこい!」
ドンッ!と翔の背中が翔平に押されると同時に、陽乃の背中も慎也に思いっきり突き飛ばされていた。

翔の体が陽乃のほうへ。

陽乃の体が翔のほうへ。

目がカチッと合う。

事故の前とか、その瞬間とかにスローモーションになるということは聞いたことがある。それって、この瞬間――?

だんだん、陽乃のほうへ翔の体が迫ってくる。

止まろうとして、陽乃は上を向いて体を反らせるようにした。翔は翔で、なんとか止まろうとして下を向いている。

（止まれ！　止まれ！　わたしぃぃ～！）

しかし、足が言うことをきかない。

（ぶつかる！）

よく見れば、翔がなんとかぶつからないようにしようと陽乃の体を抱き寄せる体勢をとっている。

翔に抱きしめられるのは初めてではないだろう。でも、公衆の面前では恥ずかしすぎた。

（えっ！？）

陽乃の足が地面にもつれてバランスを崩した。

（うそ！？）

そう思ったときには――。

翔と陽乃の唇が重なって、そのまま倒れこんでしまっていた。

第６６話　何かが変わった日（前）（後書き）

誰もが予想し得なかった突然の展開――。聖なる夜が近づいたこの日、翔と陽乃の関係が一気に変わる瞬間が始まったのでした。

第67話　何かが変わった日（後）

「……。」
慎也は思わず立ちすくんでしまった。
「え……」
美里はそれっきり動かない。
「マ、マジ……？」
修平はただただ唖然とするばかり。翔平に至っては動こうともしない。

「！！」
陽乃は慌てて立ち上がった。翔は顔が真っ赤になって倒れたままピクリとも動かない。陽乃の顔も負けないくらい赤くなっている。
「あ、あの……」
美里が声を掛けようとした瞬間、陽乃は一気に走り出してあっという間に全員の輪から離れた。
「ちょ、ちょっと待って陽ちゃん！」
美里が慌てて後を追いかけた。
「カケぼー！　立て、立つんや！」
翔平もグッと力を入れて翔に立つように促した。よく見ると、顔が赤くなくなっている。
「……んてこと」
「え？」
翔平と修平、慎也の3人は顔を覗き込んだ。
「なんてことしてくれたんスか……」
翔の頬から涙がこぼれ落ちた。

「待って！　待ってってば、陽ちゃん！」
ようやく息を切らした陽乃の走るスピードが落ちたので美里は右

手を思いっきり掴んだ。
ハァハァと息切れの音がする。白い息が二人の口からこぼれる。
「……ゴメン。あたし、調子に乗った」
「……。」
美里が謝罪しても陽乃は顔も向けなかった。
「ずっと前から陽ちゃんが佐野くんのこと好きだったの、知ってたから……応援のつもりで」
それでも振り向いてくれない。自分は大変なことをしたと美里は今になって後悔した。
「ゴメンなさい……」
「私……」
陽乃が小さく言った。
「私……佐野と合ってないもん」
「え？」
「私と佐野なんて釣り合ってない」
冷たい風が静かに音を立てて二人の頬を撫でた。
「そう思ったから断って……諦めようとしてたのに……なんで」
それっきり二人とも喋らなくなったが、しばらくして美里が地面に座り込んだ。
「諦めちゃうんだ？」
「え？」
「佐野くんを好きだったこと」
「ん……」
「釣り合ってるとか釣り合ってないとか、そんなに大事？」
「……。」
陽乃が走り出した方面は少し古びた商店街だったので、ほとんど店は閉まっている。周囲には二人しかおらず、風の吹く音だけがこだましている。
「老人ホームに依頼演奏行った頃だったかな」
美里がハーッと手に息を吹きかけた後、話し始めた。

「確か陽ちゃん、ハイベーが出なくって唇から血ぃ出すまでして練習してたんだよね」
クスクスと美里が笑ったので思わず陽乃は恥ずかしくなった。
「あのとき、まだ楽器吹き始めて時間が経ってないのにあんな難しい音出そうとする陽ちゃんがちょっわかんなかった」
「わかんない？」
陽乃が首を傾げながらようやく話し始めた。
「うん。わかんなかった」
「どこらへんが？」
「陽ちゃん、関西弁がうつってるよ」
「あ……」
クスクスとまた美里が笑う。
「言っちゃ悪いけど、初心者に近い陽ちゃんがとてもあんな高い音出せるとは思ってなかった」
「それは……私もそうだったけど」
「でも、諦めなかったでしょ？」
「うん……」
「それで、唇切る直前に音、出たって言ってたじゃん」
「うん……」
「散々教則本とか読んで研究してたけど、結局は雰囲気だったんじゃないの？」
確かにそうだ。
ハイベーの音を出したい。その一心で練習していたら、すんなり出た。理屈がどうとかそんなことはまったく関係なかった。
「音楽と恋愛を一緒にするのもどうかと思うけど」
美里がニッコリ笑って続けた。
「理屈で行こうと思ったって、どっちも行き詰まっちゃうよ？」
「理屈……」
「人を好きになるのに、理由なんていているかな？」
それは、美里が自分自身に問いかけているものでもあったがそれ

を陽乃は知るはずもない。
「どうかな？」
「理由……なんて」
陽乃が隣に座って美里の肩にもたれかかった。

「気づけば、好きだった。音楽も……佐野も」

しばらくすると、陽乃と美里が修平たちの元へ戻ってきた。
「どこ行ってたん！　心配してんで！」
修平が二人のところへ駆け寄った。美里が「佐野くんは？」と聞いた。それから「翔のほうね」と付け足したが。
「あ……それがその、なんか急に不機嫌になって帰るって……」
翔平が言いにくそうに口にする。陽乃は少し寂しそうにしたが、微笑みながら言った。
「いいんです。私も悪かったし」
「あ、でも……」
「それより、明日は本番ですよ！　私たち、そろそろ帰らないと。もう8時ですし」
あまりにも笑顔なので男子3人はどう返していいかわからない。
「ホラ、行きましょ！」
返事も待たず、陽乃は先に歩き出した。美里が後を追い、男子もついていく。慎也が美里に「大丈夫なのか？　朝倉さん」と聞いた。
「大丈夫よ。陽ちゃんも、佐野くんもそんなにヤワじゃないから」
それだけ言うと、美里はすぐに陽乃の横に立って歩き始めた。
何かが変わる。

でも、それを恐れては前へ進めない。

陽乃の中の気持ちが固まった一日だった。

第６７話　何かが変わった日（後）（後書き）

美里から大切なことを学んだ陽乃。翔との関係を見つめなおすキッカケになったのでしょうか？

第６８話　忘れよう……

１２月２３日（祝）。今日が七海市吹奏楽連盟第１３５回定期演奏会の本番の日だ。翔にとって久しぶりの大舞台での演奏。ワクワクはしていたが、昨日の件もあるので少しクラブに顔を出しづらいとも思っていた。

「おはよ～」

翔が起きてきたのは7時。今日の集合時間は9時に音楽室。時間に余裕は結構ある。しかし、それよりも早く家族がみんな起きていたので翔は思わず目が点になった。

「な、なにやってんの？　みんなして……」

よく見れば友美子はすでにお洒落をしていてネックレスなんか付けている。綾音も鏡台の前に派手に服を広げながらさながらファッションショーのように服選びをしている。冨美枝も綺麗な花柄のセーターを着てご機嫌だ。昭はその正面で新聞を読んでいるが、彼もよく見れば普段着とは思えない服装をしている。

「なにって、今日は翔の久しぶりの演奏やないの。みんなで聴きにいかなアカンやろ？」

「……忘れてるって思ったのに」

翔は少しウンザリしたような顔でテーブルの椅子に腰掛けた。

「ほら、いつまでパジャマでおるつもり？　さっさと顔洗って歯、磨いて着替えてご飯ご飯！」

「わーかったわかった！　やってくるから」

渋々洗面所へ行って顔を洗う。さすがに水では冷たいが、佐野家では冬場でも顔を洗うときは水だ。子供たちは3人揃って朝の目覚めが冬場に限って悪い。目を覚ますために水で洗うというのがなぜか決まりになってしまっている。

「翔～」

歯を磨いていると、友美子がなにやら見慣れないものを持って洗

面所へ入ってきた。
「なにそれ？」
「ワックス」
「はぁ？　ワックス？」
「そう」
パカッとケースを開け、友美子が中に入っている何やら灰色の固体物質を指に付けた。
「ちょ、ちょ！　なに！？」
「今日はせっかくの晴れ舞台でしょうが。ちょっとくらいお洒落していきなさい」
「うわ……ちょ、ありえん！　やめっ……」
抵抗する間もなく、あっという間に翔の髪の毛が友美子の手で変えられていく。5分も経たないうちに、翔の髪の毛は普段の様子とはかけ離れたものになった。
「どうよ！？　お母さん、けっこうやるでしょ？」
「……。」
鏡の前にいる自分が自分に見えない気がする。なんだか気持ち悪い。
「アカンって～。やっぱ普段どおりやないと」
翔が元に戻そうとグシャグシャにしようとすると、友美子が「ワックス付けたのにそんなことしたら余計乱れるで！」と言うので仕方なくそのままにしておいた。
「わぉ！」
翔がリビングに戻るなり、綾音が声を上げた。
「なんやねん」
「なんか翔じゃないみたい！」
ニーッと綾音が笑う。
「そういうお前こそ、普段は男の子みたいなカッコしてるくせに今日はやけに女の子やんけ」
「なにそれ！　あたしが普段男の子みたいな言い方じゃん」

プゥッと頬を膨らませた綾音も最近、胸元がフックラしてきた。
やっぱり女の子だなと思う。
「どこ見てんだよ！　スケベ！」
翔の目に気づいた綾音が胸元を手で隠した。
「誰もお前のん見てへんっちゅーの。自意識過剰ちゃうか？」
「めっちゃ失礼！　今日はもう見にいったれへんからな！」
そういうと綾音は2階へ上がっていった。
しばらくすると朝食が準備されたので翔はテレビを見ながら食べ始めた。7時30分。8時に家を出れば8時半には学校に着く。みんなより早めに行って部室と音楽室を開けるのは翔の仕事のようなものだ。
「ごちそうさま！」
翔は立ち上がり、茶碗や皿を洗い場へ持っていってすぐに制服に着替え始めた。今日はネクタイを普段よりキッチリ締めていこうとさっきまで綾音が散らかしていた鏡台の前に立った。智輝が後ろからチョコパン片手についてくる。
「おいおい、頼むからチョコを付けたりせんといてくれよ」
「うん。大丈夫。そこでジーッとしてるから」
ハムハムとパンを噛みながら智輝は翔の着替えを見るだけ。元々口数の少ない智輝の考えていることが兄の翔でもわからなくなることがたまにある。
ズボンを履き替えてとりあえず制服もバッチリ決まった。そのとき、後ろから智輝が声を上げた。
「朝倉のお姉ちゃんがおる」
翔が慌てて外へ出ると、陽乃が自転車に跨って門の前にいた。
「おはよ」
陽乃はニコッと笑いながら白い息を吐いて挨拶をした。
「お、おはよ……」

昨日のことがあるのでなんだか気まずい。なんで今日に限って陽乃が迎えに来たのかもわからない。そもそも、迎えに来てくれたのかどうかすら定かではない。ただ、智輝曰くジッと翔の部屋の様子を伺っていたそうだ。少し怪しい気もするが。

「佐野」

急に名前を呼ばれて思わずビクッとしてしまった。

「上着、着ないの？」

いつも着ている上着を着忘れている。よく見れば、マフラーも手袋もしていない。

「あ、そうやった。うん、着てくるわ。朝倉先に行っててていいで」

「いいよ。すぐじゃん。待ってる」

「でも、寒いし」

「待ってる」

こうなると陽乃は動かないだろう。翔は「わかった」とだけ言って玄関へ戻った。

それと入れ違いに、綾音が自分の部屋の窓を開けて陽乃に声を掛けた。

「陽乃さーん！」

「あ、おはよう綾音ちゃん！」

「調子、どうですかー？」

陽乃は手全体で丸印を描いた。

「あたしも見に行くんで、がんばってくださいね！」

「ありがとー！　がんばるね」

その後すぐに翔が出てきたので、慌てて綾音が窓を閉めて中に入ってしまった。

「誰と話してたん？」

「綾音ちゃん。でも佐野が出てきたら慌てて窓閉めちゃった」

「フーン……」

翔はそれっきり何も言わず、自転車に跨った。

「行こ」

「うん……」
二人は翔の家を出て大通りを横切り、無言でつくし野川の土手沿いを走る。川の流れる音だけが聞こえてくる。冬の朝。それも祝日だと人の姿はあまり見当たらない。前にもこんなことなかったっけな、と陽乃は思い返していた。確か、佐野と会ったばかりのころ。場所もつくし野川だった。
やはり、今回も沈黙に耐え切れずに陽乃から口を開いた。我慢ができない性格かもしれない。
「佐野……」
「ん？」
返事はするが、振り向いてくれない。それもそうだろう。あんなことがあった後じゃ、顔向けできないだろう。
（ん？）
陽乃はふと気づいた。
（顔向けできないって……ふつう私のほうじゃないの？）
そもそも昨日の原因はいったい誰にあったのだろう。
美里と慎也は陽乃を押しただけ。修平と翔平も翔を押しただけ。陽乃は転んだだけ。翔はそれを避けようとしてさらに転んだだけ。
（あれ？　誰が悪いとかない？　もしかして……でもやっぱ原因は私？　佐野？　ミサッチ？）
そんな考え事をしているうちに陽乃は赤信号に気づかず、交差点へ突っ切っていこうとしてしまった。
「おい！　何してんねん！？」
翔が思わず陽乃の自転車の端を掴んだ。
「キャッ！？」
陽乃はそれに気づいてブレーキを掛けた。ギリギリのところで自転車が止まる。
「大丈夫か？　ボーっとしてたらアカンぞ」
翔が自転車を降りて陽乃の顔を覗き込んだ。
「だ、大丈夫……」

意識して翔の顔を見れなくなってしまった。
翔もため息を漏らしてから続けた。
「昨日は……ゴメン」
「ううん……私もゴメン」
車の走る音と川の流れる音、そして風の吹く音だけが聞こえる。
「ホンマは昨日、謝るべきやったんやろうけど……なんかタイミング逃して」
「……。」
それも陽乃は同じだった。何回携帯電話を手にしてメール作成画面や翔のアドレス帳を開いたかわからないくらいだ。
「でも、謝らずに今日の舞台に立つのは嫌やった」
「うん……」
それは陽乃も同じ。せっかく翔と、みんなと初めて大きな舞台に立つのにギクシャクした、いる場所は同じなのに心の中に距離があるような雰囲気で演奏をするのは嫌で仕方がなかった。
「昨日のことは、忘れよっか」
翔が明るく言った。
「そのほうがいいかな……」
陽乃も静かにうなずく。そうじゃないと、演奏に集中できそうにもない。
「忘れよう」
翔が一言だけ、強く言った。
「うん……」
陽乃は弱々しく返した。
「行こか」
翔はそう言ったきり、振り向かないまま自転車をこぎ続けた。

（忘れよう）

佐野を好きだったことを忘れるというわけでもない。佐野が陽乃

を好きでいる気持ちを忘れるという意味でもないだろう。
でも、忘れるなど陽乃には無理な話だった。

第６８話　忘れよう……（後書き）

本番の日になってもお互いの辛い気持ちを秘めたままの二人。このままで演奏はうまくいくのでしょうか？

第６９話　二人きりのトラブル（前書き）

１ヶ月も更新が進まず、すいませんでした（＞＿＜）　就職活動のために更新頻度が遅くなりますが、月曜・火曜・金曜・日曜のペースでなるべく更新をがんばります！　これからもヨロシクお願いします☆（＊´∀｀）ノ

第69話　二人きりのトラブル

いよいよ本番の時間が近づいてきた。七海高校と風見台高校の出演時間は午後3時45分から。チューニングなどはだいたいその1時間前から始める。

「陽乃ちゃん！　調子はどう？」

優衣が陽乃に明るく声を掛けてきた。

「うん。楽器のほうはバッチリ調子いいよ」

しかし、そう言っている陽乃の顔は元気がなかった。

「あれ？　元気ないね」

「まぁ……いろいろあって」

「そういえば……修くんも元気なかったな」

「……。」

修平も昨日の当事者の一人だ。元気がないのも無理はない。

「何があったか私はわかんないけど、演奏ってする人のテンションとかも影響するから。本番までには元気になってきてね」

そういうと、優衣は風見台高校のメンバーの中に戻って行った。

「ふぅ……」

陽乃はため息をついて壁にもたれた。昨日の出来事が遠い昔のように感じる。あのときの商店街といま自分がいるホールがとても同じ町にあるとは思えない。そんな感覚。

「もうすぐ本番かぁ……」

急に緊張してきた。そうだ。もうすぐ本番だ。

さっきまで陽乃は部員たちと客席で他団体の演奏を聴いていた。どこも上手だし、何よりお客さんの人数が多いことに驚かされた。

「ダメダメ！　こんな状態で楽器なんて吹けないよ」

陽乃は自分の顔をペチペチと叩いた。気合いを入れなおす。しかし、ようやく立ち直れそうになったときに昨日の感覚が蘇ってくる。

あれが夢だったら。

寝る前にも同じことを考えた。けれども、どう考えてもあれは現実だ。

「最低だ……」

心臓がドキドキする。本番前の緊張も重なって心臓の高鳴りは激しくなっていく。

「えっ……」

不意に陽乃の呼吸が激しくなってきた。

「はっ……はぁ、はぁはぁ……な……に!?」

その頃、チューニング室にいない陽乃を探して翔はリハーサル室周辺を探していた。1階の舞台へ繋がる廊下へ上がるとその突き当たりに陽乃が座り込んでいるのを見つけた。

「あんなトコおったんかい。何やってんねん、ホンマ」

翔は頭を掻きながら陽乃に声を掛けようとした。そのときだ。

「え!?」

陽乃はそのまま倒れこみ、縮こまった姿勢で何か震えているように見えた。

「おい!? 朝倉!? 朝倉!」

翔は持っていた譜面をその場に放り投げて陽乃の元に駆け寄った。

「ハァ、ハァ、ハァ、ハァ、ハァ……!」

顔色は悪くない。しかし、胸を押さえて苦しそうにしている。

「朝倉! どっか痛いんか?」

陽乃は言葉を吐かず、胸に手を当てた。

「胸か? 胸が痛いねんな?」

小さくうなずく。しかし、顔色や体全体の色は悪くない。

「もしかして……」

この苦しそうな呼吸。胸の痛さ。間違いない。

翔は周囲を見渡した。恐らく交換されたばかりのアルミ缶専用のゴミ箱。翔はゴミ箱の蓋を取ると、中を確認した。まだ缶は全然入っていない。

「朝倉！　とりあえずこれで顔、覆え！」
翔は震える陽乃の顔にゴミ袋をかぶせた。
「ええか！　ここ動くなよ！？　いま紙袋持ってきて、ほんでから人呼んでくるから！」
陽乃はフルフルと首を横に振った。さらに、何か言いたそうに口を動かしている。
「なんや！？」

（い・か・な・い・で）

「そうは言うても、オレらだけじゃどうにもならん。先生たち呼んでくるから、ジッとしてんねんぞ！」
翔の足音が遠のいていく。陽乃の頭が真っ白になった。不安ばかりが大きくなる。また息が苦しくなってきた。
５分もしないうちに翔と恭一、雪子、美里、慎也、春樹がやってきた。腕章を付けた演奏会の進行役員もいる。
「陽ちゃん！　陽ちゃん？」
雪子が泣きそうな顔をして声をかけた。
「朝倉、いいか？　これに顔を突っ込んでゆーっくり大きく呼吸しなさい」
恭一の指示に従い、陽乃は息をゆっくり吸った。
「よーし、そのまま大きく今度は吐いて」
大きく吐く。だんだん落ち着いてきた。翔が後ろで体を支えてくれている。それを感じると、急に不安感がなくなってきた。
１５分もすると、すっかり息は元通りになってきた。
「大丈夫そうか？」
恭一が確認すると、陽乃は力強くうなずいた。
「一応、救護室でもう一度様子を見ましょう」
進行役員が促すと、陽乃はゆっくりと立ち上がった。まだ足元がおぼつかない。倒れそうになった陽乃を、翔が支えてくれた。

「シッカリせぇよ。オレらの初めての大舞台、全員でちゃんと出たいねんから」

陽乃は恐る恐る、翔の顔を見た。

怒ってもいない。避けるような感じもしていない。ただただ、陽乃を心から心配してくれていることがヒシヒシと伝わってくる、そんな優しい顔だった。

安心すると、急に涙がこぼれてきた。その涙が陽乃の頬を伝い、そのまま翔の制服にこぼれた。

涙がこぼれたのを知っているのは、陽乃と翔の制服だけだった。

第６９話　二人きりのトラブル（後書き）

思わぬトラブルに見舞われた陽乃。しかし、このトラブルでぎこちなくなりかけていた二人の関係が少し修復されたよう。さぁ、どうなる初めての大舞台！

第７０話　舞台へ

「お父さん」
由利が祥夫に声をかけた。朝倉家は朝からバタバタと落ち着きがなかった。それもそのはず、今日は陽乃の初舞台の日だ。陽乃は嫌がっていたけれど、夏樹も知恵子も見に行く気満々でいた。既に準備は整っている。
「本当に行かないの？」
由利は化粧台で口紅を塗りながら訊いた。
「私はそんなに暇じゃないんだからな」
祥夫はもうとっくに読み終えているはずの朝刊の三面記事に顔を埋めている。由利からはその様子があまりよく見えない。
「それじゃ、夕飯までには帰る予定ですけどいちおうカレーライスを用意してあるからおなかが減ったら適当に食べてね」
「ん」
「夏樹～、お義母さ～ん！　そろそろ出ないと間に合わないわ」
「はーい！　いま行く！」
夏樹が元気よく2階から降りてきた。知恵子も和室から出てくる。みんなそれなりに着飾ってはいるが、何より陽乃の晴れ姿を楽しみにしている様子が伺える。
「それじゃ、行ってきます」
「気をつけてな」
しばらく夏樹の賑やかな声が聞こえた後、バタンとドアの閉まる音がした。
本当に最後に夏樹が「姉ちゃんが頑張ってるトコ見るの、楽しみ！」と嬉しそうに言っているのがわざとらしいくらい大きく聞こえたので、祥夫は窓から夏樹の顔を見た。
あんなに楽しみにしている夏樹の顔を見たのは何年ぶりだろうというくらい、笑顔だった。

陽乃が救護室から出てくると、七海高校吹奏楽部の面々や修平、優衣が駆け寄ってきた。
「どう！？　陽ちゃん」
雪子がトランペット片手に心配そうに声をかける。陽乃はニッコリ笑って「大丈夫！　ピンピンしてる！」と返した。
「良かった～！　全員、一緒に出られるんだね」
絵美がホッと胸をなでおろした。
「まーったく！　柄にもなく緊張なんかするからだよ？」
美里がスネアのバチでツンツンと陽乃の肩をつついた。
「とにかく、治ってよかったよかった！」
拓真が両手を頭の後ろに組んでニコニコしている。
「はいはいはーい！　盛り上がってるトコ悪いんだけど、そろそろ最後の音合わせの時間だぞ？」
風見台高校の顧問・岩屋先生が苦笑いしながら翔や陽乃に声をかけた。それを見て大慌てで全員が席に戻ったのを紀昭も笑いながら見ていた。
少し遅れて恭一が入ってきた。
「東先生」
「はい？」
「彼らは本当にいい子ばっかりだね」
「朝倉たちのことですか？」
「そう。一人ひとりが全員を思いやっているのが見ているだけでも伝わってくるよ」
「ここまで仲良くなるとは思ってもみませんでしたけどね」
「これからが楽しみだ。私も初心に帰って楽しませてもらっているよ」
「お互い、同じ気持ちにさせられてたんですね」
そして二人は顔を合わせてうなずき合った。
3時15分。

本番まであと、３０分。

「お母さん！　ばあちゃん！　ココ空いてる！」

小さい声で空席を見つけた夏樹は由利と知恵子に声をかけた。思った以上にすばやい動きで知恵子が空席の一番奥を陣取った。続いて由利が座り、最後に夏樹が座る。

由利はプログラムを開いてみた。見たことも聞いたこともない曲が並んでいる。

「あったわ、これでしょう。陽ちゃんの出ている学校は」

思った以上の速さで知恵子が陽乃たちの学校を発見した。

『プログラム２９番　七海市立七海高等学校吹奏楽部　私立風見台高等学校吹奏楽部　アルヴァマー序曲』

「うに点々が打ってある」

「ヴ」のことを言っているんだろう。夏樹が不思議そうにプログラムを眺める。３人にとって慣れない環境だ。客席でこんな様子なのだから陽乃はもっと緊張しているのではないだろうか。

「すんません、ちょっと静かにしてもらえません？」

そう言って振り向いた女の子を見るなり夏樹が凍ったような顔つきになった。相手の女の子も呆然としている。

「佐野っ！」

「朝倉ッ！」

二人はそれっきり見つめ合うだけで黙り込んでしまった。

「あら？　知り合い？」

振り向いた女性に由利も軽くお辞儀をする。

「ひょっとして……朝倉さんのお母様？」

相手の顔が照明が暗いためにあまりよく見えない。

「えぇ、そうですけど」

「いつも息子がお世話になっております。私、佐野の母親で友美子と申します」

「あら！　佐野くんのお母様？」

友美子と由利は息子や娘が楽しそうに互いの話をしているのは知っていたが、二人が直接会うのはこれが初めてだ。
「こちらこそ娘がいつもお世話になってます、本当に」
そして話が繋がりそうになったところで、演奏開始のブザーが鳴り響いた。１５分の休憩が終わったところだ。時間は3時４５分。
「子供たち、出てきますよ」
友美子が由利に笑顔でささやいた。

「緊張するね」
雪子が翔にコソコソと話しかけた。翔が雪子のほうを見ると、少し手が震えている。
翔はギュッと雪子の手を握った。思わずドキッとしてしまう。
「大丈夫や。いーっぱい、練習してきたやろ？」
「……うん」
「頑張ってかつ落ち着いて行こう」
「わかった」
不思議と、緊張が解けていく。翔は場慣れしているからだろうか、そんなに緊張している様子はない。監査会のときも比較的落ち着いて見えた。それもあるだろうけれども、翔に声をかけられると不思議と落ち着く。声質のせいか、何なのかはよくわからない。
翔は部員全員に声をかけた。さすがの美里も今回は緊張を隠せない様子だった。絵美に至っては何度も手のひらに人の字を書いて飲み込んでいる。
「おーい、七海高校全員集合！」
翔が小さく声をかけた。
「手、重ね合わせて」
翔が促した。まず、拓真の大きな手が差し伸べられた。その上に慎也の手が重なる。春樹が緊張した面持ちでその上に重ね、雪子も続く。絵美が人の字を書いて重ね、美里はバチをポケットに突っ込んだ後に重ねた。由美子と沙希がほぼ同時に手を重ねる。そして陽

乃が重ね、最後に翔が手を重ねた。
「七海高校吹奏楽部〜、ファイト！」
「オーッ！！」
小さい声だったが気合いを入れなおすと、一気に緊張が解けた。
「おーい、そろそろ出る準備しろよ」
恭一が全員に集合をかけた。前の団体が演奏を終えて出て行き始めた。照明が落ちる。
「あら、あなた。もう大丈夫なの？」
さっきの進行役員（名札に「イイダ」と書いてある）が陽乃に声をかけた。
「はい！　おかげさまで、演奏に出れます」
「良かったわね。がんばってよ！」
「はい！」
「それじゃ、どうぞ入場してください」
イイダさんに促されて、陽乃を先頭に七海高校吹奏楽部員が舞台に入場していく。
「あっ！　姉ちゃんだよ！」
夏樹が嬉しそうに由利に言った。由利も思わず笑顔になる。
Ｔｒｕｍｐｅｔ片手に舞台へと上がる陽乃の顔は親バカかもしれないが、今迄で一番輝いて見えた。
「兄ちゃん、男前じゃん！」
綾音と智輝もニコニコしながらサックス片手に舞台にやってきた翔を見て嬉しそうにしている。
「みんな、輝いて見えるねぇ」
知恵子も久しぶりに嬉しそうに笑っている。

陽乃は舞台の中でも少し高い位置に座っていた。トランペットやトロンボーンは比較的この位置に座ることが多い。
陽乃は隣にいる優衣を見た。
（がんばろうね！）

口パクで優衣がそう言ってくれたことで、また少し高まっていた緊張感が解ける。

（うん！）

やがて、岩屋先生が入場しアナウンスがかかった。

「プログラム２９番。七海市立七海高等学校吹奏楽部、私立風見台高等学校吹奏楽部。Ｊ．バーンズ作曲　アルヴァマー序曲。指揮は、岩屋紀昭です」

そして、照明が一気に全員を照らし出した。紀昭が客席のほうを向いてお辞儀をする。なんとなく翔のほうを見てみると、小さく右手親指を立てている。そして、口パクで言った。

（がんばろーぜ！）

思わず陽乃は赤くなったが、大きくうなずいた。

「やだ、あの子、なに一人でうなずいてるのかしら？」

思わず由利は声を上げてしまった。

「どうもウチの子が朝倉さんに何か合図を送ったみたい。ホンマにゴメンなさいね、アホやねんからあの子」

前で友美子がプリプリしている。結構、陽乃と翔は仲がいいのは知っていた。だんだんと年齢が上がるにしたがって、親の知らない子供の一面というのは増えてくるのかもしれない。

紀昭が全員を見渡す。全員の視線が集中しているのを確認すると、紀昭はスコアを開いて指揮棒を上げた。

（がんばれ、みんな！）

陽乃はそう願いをこめて楽器を構えた。

そして、紀昭の指揮棒が降りて「アルヴァマー序曲」が始まった。

第７０話　舞台へ（後書き）

とうとう始まった七海高校と風見台高校の合同演奏「アルヴァマー序曲」。果たして演奏はうまくいくのか！？

第７１話　アルヴァマー序曲

紀昭の指揮棒が降りた瞬間、金管楽器と打楽器が一気にホールの奥まで音を飛ばした。風見台高校のパーカッションパートリーダー・瀬野　流矢の叩くバスドラムが大きく響き、リズムを刻む。同時に遊佐みゆきのシンバルも威勢良く響いていく。美里のタンバリンの音が一瞬だけだがソロのような形で打楽器の中で独立するところがある。そこもあっという間に過ぎていったが、美里にしてみればこの初めの部分が最も緊張する部分であった。

拓真と春樹が音をバチッと決める。管楽器伴奏ではチューバが中心になるので拓真は約２ヶ月の間、懸命に練習をしてきた。ローベー（低いドの音）の音程が悪かった１０月頃に比べればきれいな音が響いている。

慎也があれほど苦手にしていた細かい音符が並んだ伴奏もすんなり通ってしまう。２ヶ月近くかけて作り上げた音楽も本番では５分程度だ。それだけに力んで演奏してしまいそうになるのを全員が抑えている。それが客席から見ている友美子や由利からも伝わってくる。

クラリネットとホルンのメロディが流れる。それがやがてトランペットに引き継がれる。少しぎこちなさが残ったものの、それを美里のタンバリンがカバーする。拓真たちチューバは常に冷静に伴奏を刻む。ホルンとユーフォニウムの裏メロディが入る。再びクラリネット、そしてサックス族のメロディが入り打楽器の音をきっかけにメロディの雰囲気が変わる。そこでは美里が旋律の変化のキッカケを作っている。美里の表情はこれ以上ないというくらい真剣だ。

メロディが主題部分に戻ったところでフルートの軽やかな裏メロディが入る。沙希に刺激されて由美子もけっこう音楽に乗って楽しそうに演奏が出来ている。これは恭一にとっては意外だった。

音楽に感情を込めて吹くということを一番できていなかったのは

由美子だっただけに、恭一は彼女がそうやって吹いていることに少し感動を覚えた。

クラリネッ、サックス、フルートと木管楽器が音を重ね、やがてそれに金管楽器も重なり前半部分の一番盛り上がる部分がやってきた。そしてリタルダンド（※1）をかけてトランペットがベルトーン（※2）を重ねる。それをクラリネットが引継ぎ、前半とはまったく雰囲気が異なるゆっくりした曲調に変わった。

それでも拓真たち伴奏系楽器は休みがない。ホルンがトランペットの旋律を支えるようにやわらかく優しく裏メロディを吹いている。雪子はいつのまにか体を小さく揺らして吹いていた。陽乃もその姿を見て感情を込めて吹く。一瞬だが、雪子が横目でこちらを見た。陽乃は周りにわからないように小さくうなずいた。呼応するように雪子もうなずく。

トランペットのメロディをまたクラリネットが引き継ぐ。それをトランペットがまた受け取る。この曲はそういう繰り返しが多いだけに、陽乃は絵美と頻繁に練習をしてきた。せめて絵美とだけでも心を通わせあいたい。そう思い、毎日最低１０分だけでも一緒にあわせた。

舞台の奥にいる陽乃から絵美を見ても背中しか見えないし、客席に一番近い絵美に至っては陽乃の姿も見えない。しかし、音をよく聞けばピッタリ合うはずだと恭一に言われ耳を常に意識してきた。それをできているかどうかは自分ではわからないが、できていればお客様に届いているはずだ。

中間部分で最も盛り上がる部分になった。サックス、トランペット、クラリネットなど主旋律をよく担当する楽器がほぼ全員でメロディを吹き上げる。翔、陽乃、沙希、由美子、絵美の５人は風見台高校の面々と心を通わせるつもりで心を込めてここを歌い上げた。

やがてそれらが静まり、ホルンとユーフォニウムがメロディを一瞬だけ引き継ぐ。そしてフルートとサックスの優しい音色の後、雄大なチューバのメロディが聞こえた。たった一小節だけのところを、

拓真が何回も練習していたのを翔はよく覚えている。吹ききった拓真の顔が満足そうだったのを見逃さなかった。

やがて美里のタンバリンの音が再びこだまし、クラリネットのトリル（※3）が聞こえ、トランペット、そして全員の音がまた重なっていく。初めの部分がまた聞こえる。再現部という部分だ。今までのメロディや伴奏系の形がすべて織り交ぜられて聞こえ始めた。気づけば全員が感情を込めてしっかり演奏に身を委ねて吹いていた。楽器と自分の体が一体になる。そんな感じだ。

（……！）

陽乃の目から涙が出てきた。胸が締め付けられるような感覚。

今年の春だ。

つくし野川で翔の演奏を聴いたときの感覚と同じ。

そう思ったときには曲も終盤に入っていた。紀昭がトランペットに向かって「歌え！」と口パクで指示をした。その直後、クラリネットの裏メロディにも「軽やかに！」と同じように指示をする。やがてユーフォニウムも旋律に加わる。紀昭が左腕を胸に当てた。

（感情を込めて！）

そう言っているに違いない。陽乃はこみ上げる感覚すべてを楽器に集中させた。隣にいる優衣の音と自分の音がきれいに合った気がする。遠く離れた翔や春樹とも音がきれいに重なる。楽器も違うのに、ここまで同じ感覚になれることがあるのに驚いた。

やがて風見台高校パーカッション2年生の沖見（おきみ）　龍（りゅう）の叩くスネアの音が響き、最後のチューバ、ユーフォニウムのメロディが聞こえ

た。

フィナーレだ。

陽乃、翔、沙希、由美子、絵美、雪子、慎也、春樹、拓真、美里。修平、流矢、優衣。風見台高校の面々も目が紀昭のほうに釘付けになる。それを感じ取った紀昭も全員を一様に見て、一気に指揮棒を振り切った。

しばらく沈黙が続く。

紀昭が満足そうに笑顔を浮かべ、全員に起立の指示を飛ばした。陽乃は思わず転びそうになりながら（もちろん、由利は気づいている）立ち上がった。

紀昭が礼をすると同時に大きな拍手が沸き起こった。たくさんの観客が七海高校と風見台高校の部員たちに拍手を送っている。

やがて照明が落ち、次の演奏団体に舞台を譲るため陽乃たちはすぐに舞台から降りたが陽乃の高ぶった気持ちはしばらく落ち着きそうになかった。

第７１話　アルヴァマー序曲（後書き）

壮大な終わりを見せた陽乃たち七海高校吹奏楽部の初めての大舞台。陽乃たちも満足いく演奏ができた様子。

（※１）リタルダンド：速度変化を表す音楽記号。だんだん遅くという意味

（※２）ベルトーン：管楽器がチャイムを鳴らすように音を重ねていく奏法

（※３）トリル：その音とその２度上の音を速く反復させて音を揺らす（この記号の上に変化記号がある場合は２度上の音を変化させる）奏法

第72話　余韻

「今日は本当にお疲れ様、みんな」
定期演奏会が終わった後のホール前広場で恭一は集まった吹奏楽部のメンバーにそう言葉をかけた。
「2ヶ月という短い間だったけれど、きっと皆は夏休みの頃より上手くなったと先生は思ってる」
翔が嬉しそうに微笑んでいる。
「本堂は、低い音がしっかり皆を支えられるくらいにまでなったしな」
拓真は少しはにかんだ様子で笑った。
「水谷はだいぶユーフォニウムらしい優しい音色が吹けるようになっているし、川崎はスライドの動きをだいぶ操れるようになってきてるしな」
春樹と慎也が顔を見合わせて「やったじゃん」と呟いている。
「一番驚いたのは、宮部が大谷と同じように感情を込めて吹いている様子を見たときだったな。二人で合わせたりしてたのか？」
「まさか！　私たちの気が合ってるんだよね、由美ちゃん！」
「うん！」
沙希の呼びかけにすぐ由美子が反応した。最近、二人はよく一緒にいるのを見かけるのであながち冗談ではないだろう。
「橋本は、部員の中でも客席に一番近かったのに実に堂々と吹けていたな」
「すっごく緊張して、ほとんど本番のときの記憶がないの……」
少しうなだれた様子で絵美が呟くと、笑いが沸き起こった。
「そういう意味では、ミサッチなんかすっごい緊張したんじゃない？」
絵美に急に名前を出されて美里は少し驚いているようだった。
「そんなことないよ！　あたしなんてタンバリン叩いてればいいだ

けだったんだもん」
「でも、お前ソロやったん気づいてた？」
翔のツッコミに「あ、そっか。タンバリンってあたしだけだったんだ」と今さら気づいた美里にまた笑いが起こる。
「雪ちゃんの楽器ってさ、あたし調べたんだけど世界一難しい金管楽器でギネス認定されてるって、ホント？」
美里の質問に一同が「えー！？」と声を上げた。
「ホントなの、雪ちゃん？」
陽乃に聞かれたが雪子も把握していないようで、首を横に振った。
「あぁ、確か２００７年のギネスで認定されたはずだぞ」
恭一が小さくうなずきながら言った。
「すっげー！　永井、そんな楽器をずっと吹いてたんだ……」
慎也が羨望のまなざしとも取れる様子で雪子を見つめた。
「私はまだまだ下手だから！　それより、陽ちゃんのほうが大変だったんだよ？　本番前に倒れちゃったんだから」
それを聞いて陽乃が「きゃーっ！　その話はなかったことにして！」と顔を隠した。
「ホンマ、人騒がせなヤツやもんなぁ」
翔がニヤニヤしながら言うと、陽乃が顔を真っ赤にして大声を上げた。
「何よ！　昨日、アンタがあんなことするから――！」
そこで陽乃は言葉を止めた。
美里、慎也も黙りこくってしまった。
「昨日なんかあったの？」
絵美が不思議そうに聞く。
「な、な、なんでもない！　今のは私の勘違い！　じゃ、部長がここでしめるべきでしょ！」
「はぁ！？　なんやねん、その強引な展開！」
翔はいきなり振られたことで少し焦っていたが「おぉ、それはいいな」と恭一も同意して慎也と春樹がグイグイと前へ押してきたの

でそのまま全員の前に立ってしまった。
全員の目が翔に集中する。
「あー、うー、えーっとぉ……」
言葉が詰まる。なんでこんなに緊張しているのか翔もわからなくなってきた。
「ちょっとー、情けないよ部長さん」
美里が茶化してくる。
「うっさいな！　ちょー黙っとけやタンバリン娘！」
「なっ！　失礼ね、誰のおかげで演奏スムーズに行ったと思ってんのよ！？」
「みんなの協力があっての今日の演奏です～」
翔が舌をペロッと出して美里に言い返した。
「もう！　最低じゃんアンタ」
美里はプリプリした様子で何かをずっとブツブツ呟いていた。
「はい、じゃあえっと、しめます！」
ブーッと拓真が吹き出した。
「笑うな！　真剣やねん！」
翔はオホン、と咳払いをすると続けた。
「えっと、合同練習でも短い時間しか取れない中、今日はいい演奏ができて良かったと思います。みんなも風見台高校の人から学んだこといーっぱいあったと思います。来年から新入生がいっぱい入ってくれるような演奏をオレたちだけでできるように、年明けからもがんばっていきましょう！」
「はいっ！」
全員が元気良く返事をする。
「それでは！」
翔がいよいよ最後の一声をかけようとしたところで美里が飛び出してきた。
「お疲れ様でしたー！」
「お疲れ様でしたー！」

最後のいいところを美里に取られて翔は「おまえー！　空気読めや！」と美里を追い掛け回し始めた。
「おいおーい、もう9時前なんだからいい加減にして帰るぞ～」
恭一や陽乃たちが呆れた様子で二人に声をかけた。

自転車でつくし野川沿いを走り、ようやく陽乃の家に着いたときには１０時前になっていた。
「今日は、ホンマにお疲れさん」
「佐野も、お疲れ様」
それからしばらく沈黙が続く。冷たい風が二人の頬を撫でる。
「明日は終業式だね」
「うん……」
「今年一年、ホントに早かったな～」
「そっかぁ……もう２００５年も終わりやねんな」
「そだね～……」
珍しく、翔があまり喋らない。
「どうしたの？　あんまり喋んないね」
「え？」
「ひょっとして久しぶりの本番で疲れちゃった？」
陽乃が顔を覗き込むと、照れた様子で「うん、まぁ……」とだけ言う。
「佐野らしくないな～！　言いたいことあるんなら、遠慮なく言ってよ？」
「ホンマに？」
急に目つきが真剣になった。その様子に陽乃も思わず言葉が詰まる。
しかし、隠し事はなしにしたい。
「……あるなら、言って」
「わかった……」
ゴクッと唾を飲む音が聞こえそうなほど周りは静かだ。

「もう一度、言います」

妙に翔の声が低くなった。

そして、言葉が続く。

「オレと、付き合ってください」

第７２話　余韻（後書き）

本番の余韻が残る中、翔の二回目の告白を受けた陽乃。果たしてその答えは……？

第73話　粉雪の舞う中で

「オレと、付き合ってください」

サァッと冷たい風が二人の頬を撫でた。

沈黙が続く。

「わ、私……前にも言ったけど……」

「人間できてないって、言うたな」

「う、うん……だから」

いきなりガシッと肩を両手で掴まれた。今までにないほど真剣な顔つきで、今までになかったくらい近い距離で翔の顔が陽乃の前にある。吐くたびに白くなっていく翔の息は陽乃の冷たくなった頬を温かくした。

「それって、大事なん？」

「え……」

「朝倉が、オレと釣り合ってないって感じるから、付き合ってくれへんわけ？」

「ん……」

端的に言うと、そういうことだ。

翔の魅力はいっぱいある。箇条書きにしたらたくさん出てくる。

・楽器はうまい。
・（けっこう）イケメン。
・勉強もわりとできる。
・だからといって運動神経が悪いわけでもない。
・優しい。
・人をひきつける魅力がある。
・リーダーシップがある。

・感情表現が豊か。
・マイナスな感情を表には出さない。
・褒め上手

「……ほら、もう１０個も上がったじゃん。佐野のいいところ」
かなり気温が下がってきた。手が冷たい。
陽乃が手をモジモジさせていると、翔が気づいてその手をしばらく見つめた。
「手袋。使って」
翔が今まではめていた手袋を取って、陽乃に手渡した。
「いいよ。佐野が寒いじゃん」
「いいから。はめて」
強引に手袋をはめられた。
温かい。
「じゃあさ、こんなのはどうですか？」
急に翔が笑顔で問いかけてきた。
「オレが、朝倉さんの人間性を磨いてあげるって形で付き合ってみませんか？」
「……何それ、私のことバカにしてんの？」
陽乃が苦笑いになった。翔はすぐに首を横に振る。
「ホンマのこと、言うわ」
「ホントのこと？」
「オレってさ……」
不意に翔の顔が寂しげになった。こんな顔をするんだ。思わずドキッとしてしまう。
「よく皆にしっかりしてるね、とかハキハキしてていいね、とか言われるけど……」
翔はちょっと離れたところにいって空を見上げた。薄曇りで星空が見えるわけでもない。
「そうでもないねんなぁ……」

ボカした言い方をしたと、自分でも思った。でも、あの時のことはこの七海市の新しく仲間の中では誰も知らない。知っているのは修平と翔平だけ。

「だから」

振り向いた翔は少しはにかんだ様子だった。

「オレは、いま自分を支えてくれる人が必要です」

ギュッと陽乃の手を掴んだ翔の手は冷たかった。

「オレと、付き合ってくれませんか」

心臓が高鳴る。

「わっ、私は……」

自然と、次の言葉が出てきた。

「私、佐野のこと、好きです」

カァッと赤くなる。

翔がクスッと笑った。

「知ってるし」

「……。」

スッと陽乃の手から肩へと翔の手が伸びた。

「……！」

思わず身をすくめてしまった。しかし、予想に反して翔はそのまま陽乃をギュッと抱きしめてきただけだった。

「おおきに」
ベタな関西弁。
「これからよろしく」
陽乃の目からなぜか涙が出てきた。
「よろしくお願いします」

そのまましばらく抱き合っている二人の手に、雪が舞い降りてきた。
「雪や……」
粉雪だ。
「ホワイトクリスマスだね」
二人はずっと降り続く雪を見上げていた。

第７３話　粉雪の舞う中で（後書き）

ようやく想いを遂げた二人。クリスマスも近い粉雪の降る夜、互いの想いを伝え合った二人の今後が良いものになりますように……☆

コラム☆3　吹奏楽基礎知識

「あ、佐野～！」
音楽室で待ち合わせをしていた翔と陽乃。今日は陽乃が翔に聞きたいことがあるという。
「ゴメンね、待たせちゃって」
「あぁ、別に気にしてへんよ。お前、息切れてるやんけ」
「だって、走って来たんだもん」
「お前はいっつも何かセッカチっぽくて落ち着かへんなぁ」
翔がニヤニヤしながら言う。
「……。」
それを見た陽乃が頬を赤くした。
「……なに照れとん」
「いや、なんかこの会話彼氏彼女っぽくない？」
それを聞いた翔の顔も赤くなった。
「アホかお前。それよりなんやねん、聞きたいことって」
「あ、それなんだけど。今日ね、音楽の授業でドイツ音名ってやったんだけどサッパリ意味がわかんないの」
「はぁ？　お前、吹奏楽部で毎日ベーだのツェーだの言うてるやん」
「だけど、なんか私たちが言ってることと先生が言ってることがチグハグなんだもん」
プゥッと陽乃が頬を膨らませた。
「あぁ……そっか。そやな、人によっていろいろ読み方が変わるみたいやねんな」
「そんなの初耳だよ！？」
「だからやん。オレ思うねんけど、この小説の読者の方でもわからん人いーっぱいおるって。いや、わからんのが普通やねんけど」
「なに言ってんの？　小説？」
「あ、気にすんな。独り言」

「うん……それより、なんでこんなチグハグになったのか教えてよ」
「えぇけど、ちょっと難しくなるで？　別に気にせず読みたいって思うんならスルーしてくれはってもえぇんやけど」
「読む？」
「あ、これも独り言。そういうわけなんで、よろしくお願いします」
「はぁ……」
陽乃はポカンとしながら黒板に向かう翔の姿を目で追う。
「えっとな、まずドイツ音名の基本から行きます。左からドイツ音名、読み方、日本で読むドレミファソのどれに当たるか。ちなみにドレミファソはイタリアの読み方ね。ＯＫ？」
「うん」

Ｃ　ツェー　ド
Ｄ　デー　レ
Ｅ　エー　ミ
Ｆ　エフ　ファ
Ｇ　ゲー　ソ
Ａ　アー　ラ
Ｈ　ハー　シ

「ＯＫですか？」
「そのドレミファソって結局、ピアノでいう白い鍵盤の部分でしょ？」
「そう！　そういうこと！」
「それだよ。それと私たちが部活で使ってるドレミファソと違うじゃん。だって私たち、チューニングのベー（Ｂ♭）をドって読んでるじゃん！」
「そこが話をややこしくしてるんですなぁ」

翔は「長くなるで」と付け足して説明を続ける。
「まず……あ、ちょっと待って」
翔がいったん説明を始めようとして手を止め、紙に何かメモをしている。

『読者の方へ
読者の方向けの説明は『』でしようかなって思います。オレ、朝倉に説明すんのに喋りまくりますけどそれやと当然意味不明の可能性が大きいので（笑）　それでは、よろしくお願いします』

「佐野？」
「あぁ、ゴメンゴメン。えっとな、オレらのやってる吹奏楽だけじゃなくって管楽器の大半は、チューニング、音合わせするときの調がベー（B♭）やねん。これは決まってることでして」
「そうなんだ！」
「ほんで、そのベーっていうのは実はピアノで言うとシのフラットに当たるわけなんですわ」
「……。」
陽乃の顔が困った顔つきになっている。
「意味わかんない？」
「うん」
翔はピアノの所へ寄って、陽乃を呼んだ。
「コレ、ピアノの黒鍵部分やんな」
「うん」
「コレが実はトランペットのドの音やねん」
「あ、ホントだ。これはピアノだとシのフラットだよね」
「そうそう。そこまでわかってきたらだいぶマシちゃうかな～と思うから先に進むで？」
「よ、よし」

『管楽器というのは楽器ごとに基本となる調が違います
＜B♭（ベー。ピアノでいうシのフラット）が基準調の楽器＞
クラリネット　ソプラノサキソフォン　テナーサキソフォン　ホルン　トランペット　トロンボーン　ユーフォニウム　チューバ
＜C（ツェー。ピアノでいうド）が基準調の楽器＞
ピッコロ　フルート　オーボエ　バスーン
＜E♭（エス。ピアノでいうミのフラット）が基準調の楽器＞
アルトサキソフォン　バリトンサキソフォン
＜F（エフ。ピアノでいうファ）が基準調の楽器＞
ホルン

このように、基準調が管楽器は違います。その基準調の音をその楽器の担当者は「ド」と扱うことが多いです。なので「ド」の音を吹いてくださいと言っても、ピアノの鍵盤で言えばトランペットはシのフラット、クラリネットはド、アルトサックスはミのフラットと全員吹いていることがむちゃくちゃになってしまうんです。このように、吹奏楽ではB♭を「ド」とする人もいるのでよく混乱を招きます。だから吹奏楽では「ドを吹いて」とは言わずに「B♭吹いて」と言うことがほとんどです。
「奏」の筆者はB♭を「ド」と呼んでいることを頭に入れて読んでいただけたら、幸いです』

「うわぉ！？」
陽乃が翔のメモを覗きこんでいた。
「なに、そのメモ」
「いや、ちょっとオレの頭の整理をしてたんや」
「そんな長い話にされたら私だったら読む気しないよ」

「オレもそう思う。でも筆者の都合やから……」
「筆者？」
翔は思わず口をふさいだ。
「なんでもない。ほら、もうすぐ部活始まるからそろそろ準備するで！」
「あ！　ちょっと待ってよ！」
翔が部室へ走り出したので、陽乃も慌てて後を追った。

『楽器の名前について
なぜか筆者は楽器の名前を英語で書いています。読み方がわからない方がいること必至なのにこんなことをしています。それではいけないので、読み方を記しておきます。ホンマすいません（汗）
また、基本的にカタカナ表記へと変更していますが、まだ訂正しきれていない部分もあるため、早急に点検する次第です。

Ｐｉｃｃｏｌｏ　ピッコロ
Ｆｌｕｔｅ　フルート
Ｏｂｏｅ　オーボエ
Ｂａｓｓｏｎ　バスーン
Ｂ♭　Ｃｌａｒｉｎｅｔ　ベー・クラリネット
Ｅ♭　Ｃｌａｒｉｎｅｔ　エス・クラリネット
Ａｌｔｏ　Ｃｌａｒｉｎｅｔ　アルト・クラリネット
Ｂａｓｓ　Ｃｌａｒｉｎｅｔ　バス・クラリネット
Ｓｏｐｒａｎｏ　Ｓａｘｏｐｈｏｎｅ　ソプラノ・サキソフォン
Ａｌｔｏ　Ｓａｘｏｐｈｏｎｅ　アルト・サキソフォン
Ｔｅｎｏｒ　Ｓａｘｏｐｈｏｎｅ　テナー・サキソフォン
Ｂａｒｉｔｏｎｅ　Ｓａｘｏｐｈｏｎｅ　バリトン・サキソフォン
Ｔｒｕｍｐｅｔ　トランペット
Ｔｒｏｍｂｏｎｅ　トロンボーン
Ｈｏｒｎ　ホルン

Ｅｕｐｈｏｎｉｕｍ　ユーフォニウム
Ｔｕｂａ　チューバ
Ｓｔｒｉｎｇ　Ｂａｓｓ　ストリング・バスｏｒ弦バス
Ｐｅｒｃｕｓｓｉｏｎ　パーカッション

打楽器のタンバリン、トライアングルなどはカタカナ表記にしています。それをひとくくりで『Ｐｅｒｃｕｓｓｉｏｎ』と呼んでいます。
今後、追加の楽器もどんどん出てくるので、そのときはふりがなを振っておきます。
それでは、今後とも『奏～Ｋａｎａｄｅ～』をよろしくお願いいたします。

筆者に代わりまして　佐野　翔　』

コラム☆3　吹奏楽基礎知識（後書き）

読者の方から「よくわからない人がいるかもしれない」との感想をいただきまして、翔くんに説明をお願いしました。筆者としても勉強不足のところが多々あるため、間違いをしている可能性も高いです。今後もより良い小説にしたいと思っておりますので、バンバン感想・指摘等いただけましたら感激です！　よろしくお願いいたします。

第７４話　重ねた練習

１２月２４日土曜日。一昨日の２２日木曜日から学校は冬休みに入っているが、吹奏楽部は年末の大掃除があったので最後のクラブ活動日になっていた。昨日から降り続いた雪は粉雪から本格的な雪となり、関東地方でも東京都心で１０センチの積雪、七海市でも４センチの積雪になるなどかなりの雪となっていた。

陽乃は今日だけいつもの自転車通学をやめて歩いて登校した。アイスバーンになっていてかなり滑りやすくなっている。歩いているだけでも滑りそうになったことが何回もあったので自転車など危険極まりない。

ようやく学校に着いた途端、美里が嬉しそうににじり寄ってきた。

「お・は・よ！」

「お、おはよう。どしたの？」

「どうしたのって……そんな白々しい。昨日はどうなったのよ？」

「別に。なんともないよ。いつもどおり一緒に帰って、ふつうにバイバーイってしただけ」

「……。」

美里がジッと陽乃を見つめる。

「な、なに？」

「いつもどおり一緒に帰って、ふつうにバイバーイ？」

「う、うん」

美里の顔がみるみる曇っていく。

「それだけで十分にうらやましすぎるのに、そんなアッサリ言うなよぉ～」

美里は陽乃の肩を掴んでガクガク揺らし始めた。

「わぁぁぁ、や、やめてよ！」

二人が音楽室前の廊下でそうやって騒いでいると、寒そうに首を引っ込めた翔と慎也が一緒にやって来た。

「なにやっとん？」
翔が相変わらず寒そうな顔をして二人に聞いた。どう見てもケンカにしか見えないだろう。
「どうせアレだろ、田中が朝倉に絡んだんだろ？」
慎也がコバカにしたように言うと、みるみる美里の顔が赤くなって陽乃からすぐに手を離した。
「そ、そんなんじゃないんだよ！　ホントに、ね？」
あわててフォローを入れるが、美里はうつむいたまま。
「……ミサッチ？」
「あ、うんうん。ホントに、なんでもないの」
顔が相変わらず赤いまま。
「ふーん。ま、いいんだけどね。行こうぜ、翔」
慎也は特に反応のないまま。しかし、翔と陽乃はもう気づいている。気づかないほうがおかしい。
翔は美里の横を通るときにコッソリ言った。
「ま、頑張れや。応援してるで」

それを聞いて、美里は小さくうなずいた。それから陽乃に言った。
「今日、放課後残ってて。ちょっと用事あるから」
「あ、う、うん。わかったよ、か、か、か、か」
「か？」
「わかったよ、か、か、か」
「かかし？」
翔も陽乃が何を言いたいのかわからない。陽乃も自分で何を言いたいのかわからない。
「……なんでもない。わかった」
「ほな、また後で」
翔はフゥッとため息をついて笑った。
二人が音楽室に入った途端、同時に陽乃と美里はため息を漏らし

た。
「ねぇ、ちょっと聞いていい？」
美里が言った。
「どうぞ」
少し間を空けて、美里は耳打ちした。
「二人って、付き合ってるの？」
「ふぇっ！？」
美里の突然の発言に、思わず大声を出してしまった。
「な、な、な！？」
「隠そうったってダメ。さっき陽ちゃん、佐野くんのこと下の名前で呼ぼうとしてたでしょ？」
「……。」
「でしょ？」
陽乃は小さくうなずいた。
「そっかそっか！　良かったねぇ、二人とも！」
ギュッと美里は陽乃を抱き寄せる。
「やめてよ～恥ずかしいじゃん！　それより、ミサッチこそ頑張っちゃってよ？」
「ま、ま、ま。私はマイペースでゆっくりゆっくり行くってことでよろしく」
美里はそのまま音楽室のほうへ陽乃を押していく。
「もー！　いつもそうやって自分のことはうまく話を逸らしちゃうんだから」
「まぁまぁ！　いつかゆっくり話してあげるから今は勘弁ね！」
「約束だよ～！」
二人は笑いながら音楽室へ駆け込んだ。

これはずっと前から練習してきたことだ。
翔は心に決めていた。
彼女を本当に「彼女」と呼べる日が来たら、彼女にこの曲を捧げ

る。なんて、ちょっとクサかったかな。
（とにかく！　今日はこれを絶対うまく演奏するぞ！）
翔はほうきを持ったまま右手こぶしを強く握り締めた。
「あれ？　誰よ、こんなところに楽譜置きっぱなしなのは」
絵美の声に驚いて見てみると、教卓の中に隠してあった捧げる曲の譜面を絵美が今にも取り出そうとしている。
とんでもない話だ。
曲をイメージするために書いたことがいっぱいあるのだが、とてもじゃないが他人には見せられない。家族なんてもってのほかだと思っているくらいの内容だ。
「うあー！　ストップ、ストップ！　それはアカンって！」
翔はほうきを放り投げて絵美から強引に譜面を取り上げた。その拍子に、何ヶ月も前から使い古してもろくなっていたその譜面は半分にきれいに破れてしまった。
「あーっ！」
「あぁー！」
絵美と翔は同時に声を上げた。音楽室が静まり返り、春樹と拓真が呆然とした様子で二人を見つめている。
「なんてことすんのよ！　別にそんなに慌てて引っ張ることないじゃない！」
「す、すんません……。でも、見られたら恥ずかしいっていうか」
「はぁ？　意味わかんないわよ、もう……」
絵美は半分ずつになった譜面を裏向けて貼り合わせられるかを確認している。
「頑張りなさいよ」
小さく絵美が言った。
「え？」
「この曲、陽ちゃんに吹いてあげるんでしょ？」
「……バレてました？」
翔は少し顔を赤らめて呟いた。

「バレバレ。いっつも放課後、陽ちゃんがいなくなってから部室で一所懸命練習してたじゃん。部員なら知らないのは陽ちゃんくらいだし」
「そうでっか。そりゃ失敗やな」
翔も思わず苦笑いしてしまう。
几帳面な絵美の作業を見守る翔。すぐに譜面は元通りになった。
「はい。できた」
絵美の手から翔へ譜面が渡る。
「おおきに、どうも」
「どういたしまして。練習いっぱいしたんだし、いい演奏できるよ。頑張って」
「……ありがとう」
翔はもう一度礼を言ってすぐに部室へと駆け戻っていった。絵美はその後姿をしばらく見つめていた。

（翔。かける。カケル）
陽乃は呪文のように何度も翔の名前を連呼していた。昨日の晩、お風呂でも布団に入ってからも翔を下の名前で呼べるように練習した。自分でもちょっとバカバカしいとは思ったが、写真を見て言うだけでも赤くなる。何度も練習が必要だと思って連呼し続けた。
朝にはなんとか名前を呼べるようになったが、いざ本人を前にして言おうとしても緊張して言葉が出ない。そして、さっきのようになってしまった。
「おーい、朝倉？」
翔に急に顔を覗き込まれて驚いてしまった。心の中の声なんて聞こえるハズもないのに。
「な、なに？」
「べっつに。ちょっと顔見たかっただけ」
「な、何よそれ。変な佐野」
「それより、放課後楽しみにしててな」

「あんまり期待せずに待ってるからね」
「ヨロシク！」
翔は平静を装って部室から出たが、その直後に自分のふがいなさにため息が出た。

「下の名前で呼ぶのなんて、簡単やのになぁ……」

二人の距離は縮まったようで縮まらない。そんな状態のまま、翔の成果を果たす時は迫っていた。

第７４話　重ねた練習（後書き）

お互いに下の名前で呼んだりしたい翔と陽乃。近づけるようで近づけないもどかしい感覚のまま、一日が過ぎていきました。どうなる二人のクリスマス・イヴ！？

第75話　これがキッカケ

「寒い……」

陽乃は窓際の机に腰掛けながら手に息を吐きかけた。翔は向こうで楽器の準備をしている。同級生たちはとっくに掃除を終えて帰ってしまった。みんな鋭い子たちばっかりだったようで、沙希や由美子は「いいなぁ～あたしも青春したいよ」とうらやましそうに呟きながら帰っていった。絵美と美里は「また来年ね！　年賀状、出すからね」と言って笑顔で帰った。

男子たちはやたらと翔に絡んでいた。いつ告白したのかとかどういうシチュエーションだったのかとか。やっぱり男子ってそういう話題が好きなんだろうか。女子も好きなんだけど。

陽乃はそんなふうに、とくに意味のないことばかりを考えていた。窓の外は重苦しそうな暗い雲で埋め尽くされた空と雪の積もった校舎や木が見えるだけ。クリスマスイルミネーションがきらびやかな街中の風景と対照的な自然の風景は、今も昔も変わらないのだろうか。

それでも陽乃には世界が変わって見えた。

翔とお付き合いする。

実感が湧かないけれど、翔とは彼氏・彼女の関係なのだ。

「変なの……」

思わず笑ってしまった。同時にガラガラと音楽室のドアを開ける音がする。翔がアルトサックスをストラップ（※1）に吊るし、右手に譜面台を持って陽乃のほうを優しく見つめた。

「お待たせ」

「ホント。寒かったんだから」

「ゴメンって。待たせた分、えぇ演奏聴かせたるから勘弁、勘弁」

「はいはい。期待せずに待ってるわね」
陽乃はてきとうにあしらう素振りを見せた。目が合うとクスッと笑ってしまう。なんだかくすぐったい感じだ。
「では、さっそく」
翔は音楽室の黒板の前にある小さな舞台に立った。妙に緊張してしまう。前にいるのは陽乃だけだが、それが余計に緊張させるのかもしれない。
「曲目。青春の輝き。聴いてください」
翔が大きく息を吸ってサックスを奏で始めた。寒い音楽室で、陽乃を包み込む温かい翔の音色。音楽室の色が青色なら、翔の音色、翔のオーラはオレンジ色。そんな温かみがある。
（あぁ……これだ。これがキッカケで私は吹奏楽を始めようと思ったんだ）
目を閉じてサックスの音色を聴く。心の奥底まで届くような、優しい音色。不意に、初めて翔の音を聴いたあのつくしの川の川原の風景が蘇った気がした。

「……あ」

まただ。涙が出てきた。
翔の得意分野の曲なのかもしれない。バラード系統の曲は特に翔はうまかった。ビヴラートがよくかかっている。それ以上に、感情がこもっている。理屈では説明できない、そんな音色が翔の音色なのだろう。

気づけば、演奏はいつの間にか終わっていた。永遠に続くかと思うような時間だったが、時計を見たらまだ5時15分。やっぱり5分くらいしか経っていない。
「また泣いてる」
舞台から降りてきた翔が笑いながら近づいてきた。

「アンタのせいだからね」
陽乃は少し意地悪そうに言ってみた。
「へいへい。悪かったね。ほれ、ハンカチ」
翔はポケットからしわくちゃになったハンカチを出した。陽乃はちょっと顔をしかめた。
「これ、いつからポケット入ってるの？」
「今朝から」
「……。」
どう見てもそうは見えないハンカチだ。意外とルーズな面があるのかもしれない。
「いつまで泣いてるねん。ホラ、ぼちぼち帰らんともう6時になるわ」
「ん……そうだね」
「ほな、オレ先に楽器片付けてくるわな」
翔が先に部室へ戻ろうとした。どうせなら一緒に行ったっていいじゃないか。
「あ、ちょ……」
思わず次の瞬間に声が出た。

「待ってよ、翔！」

シン、と音楽室が静まり返った。
「え……」
翔も頬を赤らめて振り返った。
「あ、その、わ、私も一緒に片付け手伝う……よ」
そっと翔の横に立った。
「うん……」
翔はソッと陽乃の頭を撫でながら言った。
「ありがとな、陽乃」
さり気なく翔は陽乃を下の名前で呼んだ。

「どういたしまして」

二人はその後、一年にあった話をしながら楽器の片づけをした。

「本当に、一年って早いよね」

陽乃が譜面台をたたみながら言う。

「そやな～。部活結成して、監査会クリアして。老人ホームに学校合宿。秋祭りにも出させてもろたし」

もう今年が終わりなのだ。今年一年、すごく早かった。

「翔」

「ん？」

翔の手をギュッと握り締めて言った。

「来年も、よろしくね」

「……あぁ」

たった一年で、こんなに翔と近くなれるとは思っていなかった。

今、陽乃は嬉しさでいっぱいだ。

吹奏楽に出会えたこと。

美里や沙希、雪子たち同級生と出会えたこと。

そして、翔と出会えたこと。

これからも大変なことはあるだろうけれど、この仲間となら乗り越えていける。また来年、このドアを開けるのが今から楽しみだ。

「なに笑ってんの？」

翔が不思議そうに聞いた。

「別に」

クスクス笑いながら陽乃は外へ出た。

音楽室にもしっかり鍵をかけて、外へ出ると雪はいつの間にかやんでいた。それでも、地面は真っ白だ。

「ホワイトクリスマス～！」

陽乃は積もった雪の上に寝転がった。隣に翔も倒れ込む。

「陽乃！」

「なにー！？」
一呼吸置いて翔が大声で言った。
「メリークリスマス！」
陽乃も一呼吸置いて返す。
「メリークリスマス！」
二人は笑いながらしばらく雪の積もる校庭に寝転がったままでいた。

第７５話　これがキッカケ（後書き）

メリークリスマス！で部活の一年間を終えた翔たち。来年に向かってこれから大変なこともあるけれど、この仲間がいれば頑張れる。頑張れ、七海高校吹奏楽部！

（※１）ストラップ：Ｓａｘｏｐｈｏｎｅを支える、首から吊る形式のもの。

第７６話　夏樹の反抗

「今年は本当にいい一年だったな～」
陽乃は鼻歌を歌いながら家へと歩いていく。帰り際はつくし野川まで翔が見送ってくれた。滑らへんようにして帰れよ、と小バカにしつつも嬉しそうな翔を見ると反抗する気は出てこなかった。
「たっだいまー！」
機嫌よく玄関の戸を開けると飛び込んできた一声は夏樹のものだった。ようやく最近になって声変わりがしてきた夏樹は大声を出すと急に太い声になるので違和感を感じる。今の声などまるで別人だった。
「だから！　いちいち干渉しないでっつってんじゃん！」
「なんだ、親に向かってその態度は！」
（な、なに？）
陽乃は声のするほう（半年ほど前に陽乃と祥夫がケンカした場所に近い）を覗き込んだ。リビングでケンカしているようだ。
「だってさ、姉ちゃんのときもそうだったじゃん！？　普段、俺たちのことなんて気にも留めてないくせに、自分の気に入らないことを始めるとアレするなコレするなばーっかり！　今回だって別に俺の意志でそうしたんだから、いいだろ！？」
見たこともない夏樹の反抗に祥夫も由利も知恵子もオロオロするばかりだ。
（よ、よし。ここは私が！）
陽乃は何も知らないフリをしながらリビングへ突撃した。
「ただいま！　ねぇ、なに騒いでんの……？」
陽乃の目に飛び込んできたのは、どこかで見たことあるもの。
「あ、あれ？　サックスのリード……？」
陽乃がテーブルに置かれたリードの箱を取ろうとした瞬間、ものすごい勢いで夏樹はそれを横取りし、部屋に駆け上がろうとした。

「あ、ちょっと夏樹！　待ちなよ！」
慌てて陽乃も追いかける。しかし、あと少しのところでドアを閉められてしまった。そのうえ勢いあまってドアに激突する有様だ。
「ホゲッ！？」
陽乃はあまり出したくない部類の声を思わず上げてしまった。
「痛った～……。ねぇ、夏樹！　なんでアンタがサックスのリードなんて持ってるの？　教えて」
「やだ」
小さい声で夏樹は答える。その声は普段の高いものに戻っていた。
「誰にも言わないからさ。ね？　ドア開けてよ」
その声にようやく夏樹は応えてくれた。そっとドアを開ける。
「入って」
「……うん」
陽乃が夏樹の部屋に入るのは久しぶりだ。ここのところ、忙しくて一緒に遊んだ覚えすらない。
気のせいだろうか。ちょっとサッカーに関連するモノが減った気がする。
「姉ちゃん」
少しまた声が低くなった気がする。この時期、男の子というのはこういうものなんだろうか。
「俺さ……」
「うん……」
「サッカー、辞めた」

時計の針の音だけが二人の耳に聞こえた。

「……は？」
「サッカー部、辞めた」
「な、なんで？」
夏樹は何か小さな書類のようなものをカバンから取り出した。

「見て。父さんにも母さんにもまだ見せてないけど」
陽乃はその紙を手に取った。印刷されているのは「診断書」という字。その下に、病名が書いてある。

『椎間板ヘルニア』

「へ、ヘルニア……」
「そうだって。成長期も相まってかだかわからないけど、かなり重症」
「……。」
「夏くらいから結構辛かったんだ。でも、夏の試合でみんなが応援してくれてるのを見てたらそんなこと言えなくってさ……」
夏樹の声が震える。泣きたいのを我慢しているようだ。
「でも、もう限界で……。そんなときに俺、実はコッソリ佐野さんに会いにいったんだ」
「へ！？　翔に！？」
思わず名前で呼んでしまい口をふさいだ。
「姉ちゃん隠さなくたっていいじゃん。俺、知ってるよ。二人が付き合ってることくらい」
「え、あ、そうなんだ」
陽乃はとりあえず苦笑いする。たぶん、ずっと前からそうだと夏樹は思っているのだろう。
「それで、いつ会いに行ったの？」
陽乃は夏樹の勉強机に腰掛けた。
「１１月の初めくらい。そのときにこれ、貸してもらった」
「なになに？」
見ると、翔の出身中学である大阪市立淀南中学校吹奏楽部の第１２回定期演奏会のＤＶＤだった。
「これ見て、サッカーダメになっても俺は別の道に行けるんじゃないかって。そう思った」

「……。」
「中途半端な気持ちじゃダメだって思って、今日、サッカーと決別してきた」
「それで、これを？」
「そう」
夏樹はゴシゴシと目元を擦った。それを陽乃は見ないフリをしておいた。
「俺さ、七海高校入学したら絶対吹奏楽部に入る」
「……うん」
「それで、佐野さんを越えるサックス吹きになりたい。ううん、絶対なる」
「なれるよ、夏樹なら」
陽乃はリードの箱を夏樹に手渡した。そして、診断書も手渡す。
「ちゃんと、お父さんとお母さんに説明してきなよ。中途半端は嫌なんでしょ？」
「……わかった」
夏樹は覚悟を決めたように部屋を出る。
いつまでも自分の周りは一緒でないことを陽乃は感じながら、自分の部屋へと戻っていった。

「父さん」
夏樹は不機嫌そうにしている祥夫の後ろから声をかけた。
「これを、見てください」
祥夫は無言で診断書を受け取った。
「……おい、夏樹。これは」
「本当です。だから、サッカーを辞めたんだ」
「病気なんだぞ、これは！　どうしてもっと早く言わなかったんだ！？」
祥夫はガッシリ夏樹の肩を握って言った。
「わかってるよ！　でも、父さんや母さんの期待を裏切りたくなか

ったんだ！　レギュラーで頑張ってるねとか褒められるのが嬉しかったし、期待に応えたかったし。だから我慢してやってたけど……でも……」

遂にこらえきれなくなって、夏樹の目から次々と大粒の涙が零れ落ちた。

「でも……痛くて、辛くっ……クッ……エッ……」

「わかった。わかったから、もう泣くな」

「本当は辞めたくないよ。やめだぐない……サッカー続けだい……」

夏樹はそのうちしゃがみこんで大声で泣き出してしまった。由利も洗い物を中断して二人のところへやってきた。

「病気が治るまで、サッカーができないだけじゃない。ね？　ちょっとの間のお休みだと思って」

由利がエプロンで夏樹の涙を拭くと、ますます大声で泣き始めた。

「うわぁぁあ～……あぁ～……」

結局、１時間近く夏樹は泣き続けた。２階へ上がってきたときにはすっかり目が腫れていた。

「目、こんなに腫れちゃった」

夏樹がペロッと舌を出しながら陽乃の部屋を覗き込んだ。

「そりゃあね。ずっと聞こえてたもん」

クスッと陽乃が笑う。

「……恥ずかしいや」

夏樹はゴシゴシと目をまた擦る。

「いいじゃない。家で泣かないと外でなんてますます泣けないし」

「うん……」

陽乃は座っていた椅子を１８０度回転させて夏樹のほうへ向けた。

「ね！　夏樹」

「ん？」

「明日ね、七海駅前で翔の友達の高校吹奏楽部が演奏するんだけど、気晴らしに一緒に聴きに行かない？」

「え……」
「それからさ、サッカーをまた始められるまでの継ぎ目でもいいから吹奏楽やってみなよ」
「でも……そんな中途半端は」
「中途半端でも何でも、やってみることに意義があるからさ」
「……。」
「ね？」
「わかった」
夏樹はコクッと小さくうなずいた。
「よし！　それでこそ私の弟！」
ガシッと陽乃は夏樹の首に腕を回した。
「ちょ、ちょ！　なにすんだよ～！」
「嬉しいの！　夏樹が吹奏楽やってくれるって言って！」
「やめろって～！　苦しい～！」
夏樹の顔に笑顔が戻ってきた。それだけで今は十分、陽乃にとって嬉しいことだった。

またひとつ、陽乃の周りが変わる。

嬉しいこと、悲しいこと。

でもどれひとつ、無駄なことなどなかった。

第７６話　夏樹の反抗（後書き）

思わぬ障害でサッカーから一時的に離れることになった夏樹。陽乃は少しでも彼の支えになればと思い、吹奏楽へちょっとだけでも来るように誘うのでした。

第７７話　弟と妹

１２月２５日日曜日。今日は翔に誘われたクリスマスコンサートの日だ。

陽乃は朝からずっとソワソワしていた。夏樹は夏樹で午前中は少しボーっとしていたが、昼から翔に借りた演奏会のＤＶＤをうれしそうに見ていた。もちろん、陽乃もそのＤＶＤを一緒に見た。

「夏樹～、そろそろ出ないと間に合わないよ～」

陽乃は自分の部屋の化粧台で少しオシャレをしながら夏樹に声をかけた。

「わかってる～！　もうちょっとで終わるから」

昨日あれだけ泣いていた夏樹も一晩たてばずいぶんと元に戻っていた。ちなみに昨日夏樹の部屋に入ったときにサッカー関連のものが減った気がしたのは気のせいではなった。まだ夏樹が寝ているときに用事があって隣にある納戸を開けてみたら、大切そうに箱に入れてしまってあったと由利が言った。

「それにしても、やっぱり佐野は中学時代でもサックスうまいなぁ……。あれだけ上手なのに次の年には辞めちゃうんだから、もったいないったらありゃしない」

陽乃はもう一度、ＤＶＤに映っていた翔の姿を思い起こした。確かあの曲は「イン・ザ・ムード」のはずだ。テナーサックスの後輩と一緒にソロを吹いている翔は嬉しそうだった。しかし、その後何があったかは未だに聞いたことがない。

「まぁ、そのうちでいっか」

陽乃がネックレスをつけ終えると同時に夏樹がドアをノックして

「姉ちゃん！　行こう！」と声をかけてきた。

外に出るとやはりまだ雪は小降りだが降っている。道にはまた白いじゅうたんが敷かれたように雪が積もっている。

「寒いな～。こんな天気の日に楽器吹いてて寒くないのかな」
夏樹が手袋の上から息を吹きかけた。吐き出された息はすぐに白くなって消えていく。
「金管楽器のマウスピースとかすっごい冷たいけどね。部屋の中でもかなりだから、外はもっと寒いんじゃないかな～」
二人は他愛無い会話をしながら翔を迎えに行く。
「そういえばさ、翔のとこ兄弟いるの知ってるよね？」
思い出したように陽乃は綾音と智輝のことを口にした。それを聞くと少し眉をひそめながら夏樹は返す。
「知ってるも何も……」
「何も？」
「同じクラスだよ」
「えーっ！　そうだったんだ！」
「そ。おまけに一昨日の演奏会で出くわしちゃうし」
「え！？　演奏会で会ったの？」
陽乃は驚きの連続で思わず滑って転びそうになった。寸前のところで夏樹が支えて体勢を直す。
「うん。俺たちの座った席が偶然、佐野たちの席の真後ろでさ。もう母さんとおばさんなんかめっちゃくちゃ仲良くなっちゃうの。あの後お茶を飲みに行くなんて言ってくれちゃうから、俺と佐野なんて気まずいのなんの」
「へぇ～。そんなことあったんだ」
「ホント。偶然って怖いよ」
夏樹はふぅっとため息を漏らした。陽乃の顔を見ると、なんだかニヤけている。
「どしたの？　姉ちゃん」
「いや、ちょっとお知らせがあってね……」
陽乃は夏樹に耳打ちした。
「はぁ！？　マジで言ってんの！？」
「マジマジ、ホントだよ」

それだけ言うと、陽乃は翔の家へ向かって走り出した。
「聞いてないって！　ちょっと待ってよ！」
夏樹も慌てて追いかけ、途中で滑って転んでしまった。

「翔～、アンタまだ用意終わらへんの～？」
翔の部屋の前で綾音が退屈そうにドアをトントンと叩いた。
「もうちょっと待てよ。この服に似合う上着探してるねん」
翔はもう5枚くらい上着を何度も交換しながら鏡の前とたんすの前を行ったり来たりしている。
「もー！　アンタそんな男前ちゃうねんから、どれ着たって一緒やん」
綾音がプゥッと頬を膨らませた。機嫌が悪くなるとすぐこれだ。
そのうち何もしゃべらなくなる。せっかくの演奏会なのに機嫌を悪くされるのもたまらないので、翔は妥協してブルーのダウンジャケットを羽織った。
「翔ー！　朝倉さんたちが来たわよ～！」
友美子が下から声をかけた。
「あ、はーい！　いま降りるわ～。おい、綾音。行くで！」
しかし、今の友美子の声が聞き間違いではないかと綾音は耳を疑った。
「朝倉さんたち？」
「あれ？　言うてへんかったっけ？　あースマンスマン」
翔は頭をかきながら言った。
「ひ……やなくって、朝倉の弟の夏樹くんも演奏会一緒に行くねん」
「は……？」
それだけ言うと、翔は階段を下りていった。
「ちょ、待ってよ翔！　そんなん聞いてないって！」
綾音は慌てて後を追い、階段から転げ落ちそうになった。
「お待たせ」

翔がドアを開けて出てくると、陽乃はしばらくその姿を見つめていた。
「なんやねん。やたら見てくるやんけ」
「いや、なんか私服のか……佐野を見るの久しぶりだなって思って」
翔は陽乃が綾音に気を使って名前で呼ばないようにしているのに気づいた。それに気づいた綾音がグイグイと翔を押しやって言い出した。
「朝倉さ～ん、気にせんとこんなやつ、呼び捨てにしちゃってくださいよ」
「へ？」
「だって、あたしも呼び捨てですもん。ね、翔？」
グイグイと反対側へ綾音を押しやる翔。
「と、とにかく！　行こかそろそろ」
「そうだね！　行こ行こ！」
陽乃と翔はごくごく自然に並んで歩き始めた。その後ろに自然な流れで夏樹と綾音が歩いていく。
「お供なんだ」
夏樹が小さい声で綾音に声をかけた。
「うるさいな～、アンタだって一緒のくせして」
「まぁな」
「……。」
それっきり、夏樹と綾音の会話は途切れてしまった。
「ちょっと」
綾音が前を見るように促した。
「ん？」
「見て」
見れば、陽乃と翔が手をつないでいる。
「……。」
「……。」
ますます沈黙が深まってしまった。

（気まずい……。なんだよ、クラスじゃペラペラ喋ってるくせに）
夏樹は横目でチラチラと綾音を見る。
（何よ……。もしかしてまだサッカー辞めたことでウジウジしてんの？）
耐えられないほどになった沈黙を先に破ったのは綾音だった。
「吹奏楽楽しんで、恋も楽しんで。えぇな、翔は」
「うん……そうだな」
短い返事。
（アンタね～、会話をつなぐってことを知らないの！？）
綾音は会話になっていない、会話のようなやり取りを続ける。
「あのさ、えっと」
「何だよ？」
綾音は聞こうかどうしようか迷っていたことを思い切って聞いてみた。
「アンタのこと、なんて呼んだらいい！？」
「へ？」
夏樹が唖然とする。
「いや！　別に変な意味じゃなくってね！　ただ、なんか兄弟でもないのに下の名前なんて変だし、朝倉って呼び捨てにするのも……まぁ翔は例外として嫌だし」
「……。」
夏樹は顔をポカンとさせたままだ。
「んーやっぱりいい！　今の話はなかったことに……」
「朝倉でいいよ」
夏樹はあっさり言い切った。
「え？　呼び捨て？」
「うん。別に佐野が気に入ったあだ名あるんやったらそれでもいいし」
「う、うん……」
綾音は顔を赤らめてうつむいた。

「どうする？」
夏樹は笑顔で聞いた。
「じ、じゃあ朝倉……で」
「リョーカイ！　よろしくな、佐野」
夏樹の顔が満面の笑みになった。
「おーい！　お前ら遅いで！」
翔に呼ばれて二人は同時に駆け出した。

第７７話　弟と妹（後書き）

クリスマスコンサートに出かける朝倉姉弟と佐野兄妹。それぞれにとって転機となった今年のクリスマスはいよいよクライマックスへ……。

第７８話　目標を見つけた

「えーっ！？　会場ってここ！？」
夏樹と綾音は会場に着いてから声を上げた。
「あれ？　言ってなかったっけ？」
陽乃は首を傾げる。
「聞いてないよ！　姉ちゃんっていつも肝心なこと抜けてるんだから」
夏樹はウンザリした様子でため息をついた。綾音は不機嫌そうに翔に詰め寄る。
「ちょっとー、こんなところで演奏聴けっての？　無茶だよ、翔」
「まぁまぁ、そう言わずに。めーっちゃいい演奏聴かせたるねんから」
翔は３人を手招きして用意されていた椅子に座った。
「いっつもそんなんばっか。まぁ、いいや」
綾音はかなり楽観的な性格のようで、あっさり納得して翔の隣に座った。
「ほら、夏樹も行こうよ」
陽乃に促されて夏樹も渋々座る。
「なになに……。ウインドオーケストラ『奏』クリスマスコンサート……か」
夏樹は満遍なくプログラムを見た。
曲目は『粉雪』、『ラスト・クリスマス』、『クリスマス・イヴ』、『はじめから今まで』、『ディズニーファンティリュージョン！』の５曲。だいたいにおいて知っている曲だった。
「ん？」
夏樹は写真を見て気づいた。
「これってさ、翔の言ってたサックス吹きの人？」

同時に綾音が翔に聞いた。
「あ、そうそう。オレがサックス奏者としては一番尊敬してる人。七海高校のＯＢやねんぞ」
「へぇ～！　スッゴいんじゃん！　翔、知り合いなの？」
綾音はかなり興奮した様子だ。
「まぁ～、話せば長くなるけどオレ、三田嶋さんと一緒に演奏したことあるねん」
「なにそれ！？　いつ！？」
「今年の夏よ。いいやろ～？」
「でも、見事にソロは失敗してたけどな」
後ろからまた関西弁。
振り向くと、修平がニヤニヤしながら立っていた。
「なんやねん、また嫌がらせに来たんか？」
翔はプゥッと頬を膨らませた。修平は空いていた綾音の右側の席に座る。
「綾音ちゃん久しぶり～！　俺のこと、覚えてる？」
「覚えてますよ～！　岩切さんちゃいます？」
「……。」
「……えーと」
翔も修平も黙り込んでしまう。それに気づいた綾音が「あれ！？なんかあたしもしかして空気読めてない！？」とアタフタし始めた。
「綾音ちゃん、そっちの男の子は佐野　修平くん。か……佐野のライバルみたいな人だよ」
まださすがに人前で「翔」と呼ぶには抵抗があるようだ。
「ライバル？　ひょっとして仲悪いとか？」
「いやいや、全然そんなことないで。演奏会、翔に呼ばれて来たんやもん」
修平はカバンから温かそうなコロッケを取り出して食べ始めた。
「食う？」

修平はなんと4個もコロッケを取り出した。
「すっごーい！　なんでそんなに持ってはんの？」
綾音は嬉しそうにコロッケを受け取ると、どんどん隣へと回していった。
「おいおい、お前恥ずかしいやんけ！　もうちょっと遠慮するとかせぇよ」
翔は慌てて綾音を止めようとするが「ほらほら、ボーっとしてないで陽乃さんや朝倉に渡してよ」とグイグイコロッケを押し付けた。
コロッケを夏樹と陽乃に手渡してから翔が綾音に耳打ちした。
「おまえ、いつから朝倉のこと下の名前で呼出してん」
「さっきからに決まってるやん。アンタがさっさとフツーに『陽乃』って呼べるようにハッパかけてんの」
ニィーっと綾音は意地悪そうに笑った。
（コイツ……）
翔は平静を装いながらコロッケを口に運んだ。

いよいよコンサートが始まる。樹がスタンドプレイヤーとして前に立った。照明が暗くなり、マイクの前で樹が喋りだす。
「皆様、こんばんは」
「こんばんは～！」と一人だけ元気よく声を出したのは陽乃だけだった。
「えっ！？　私めっちゃくちゃ恥ずかしい！？」
その声にクスクスと周りから笑い声が聞こえる。夏樹は他人のふりをしているようだった。
「はい、どうも元気な挨拶ありがとう。今晩は雪も積もってまさにホワイト・クリスマスですね。そんな夜にふさわしい曲を何曲か用意してまいりましたので、短い時間ですがお楽しみください」
拍手が起こってから照明がさらに落ちて、ピンスポットで樹に当たる。
ピアノの音が鳴り始め、やがてクラリネット、フルート、チュー

バと伴奏が入っていく。翔たちが小学生の頃にドラマとともにブームになった『粉雪』だ。
樹の優しい音色がメロディーを奏でる。それを聴いた瞬間、夏樹の記憶が走馬灯のように映像が流れ出した。

今からたった2年前。
小学校6年生の冬。あの冬は今年にも劣らないほど寒く、毎日のように関東地方では雪が降り続いた。クリスマスも大雪で、七海市でも積雪20センチを記録した。
夏樹が生まれて初めてできた好きな人。
彼女の誕生日は12月25日だった。
緊張しつつ誕生日プレゼントを渡し、告白した。

そのときの声がリアルに蘇る。

「……ありがとう」
彼女は小さく呟いた。
「ううん」
「でも、ごめんなさい」
「え?」
夏樹はフラれたと思った。しかし、その次に出た言葉は違った。
「私、病気で来年から秋田県に引越しするの」
「え……」
「ごめんさない。だから……嬉しいけど、付き合えない」
不意に粉雪が強く降り始めた。

「……夏樹?」
陽乃が心配そうに覗き込む。
「え……」
我に返った夏樹の目からとめどなく涙が溢れ出していた。

「ど、どないしたん？」
翔も心配そうにしている。綾音がハンカチを取り出した。
「と、とりあえずコレで涙吹きぃや」
「あ、ありがと……」
それから落ち着いた様子を見せた夏樹に安心した様子で皆はまた演奏に耳を傾けた。
粉雪の演奏が終わる。樹のアドリブソロで見事に曲は締めくくられた。
「ブラボー！」
突然、夏樹が立ち上がって叫んだので全員が一斉にその方向を見た。樹も一瞬驚いた様子を見せたが「ありがとうございます！」と嬉しそうに返す。
満足そうに座った夏樹は陽乃にひとこと言った。
「俺、あの人みたいにサックス上手くなりたい」
「……頑張るの？」
夏樹は小さく、しかし真剣にうなずいた。
「お互いに頑張ろうね、こうなったら」
陽乃も嬉しそうに頬を赤くしながら返した。

「それじゃ、今日はホントにありがとね」
陽乃が家の前まで送ってくれた翔に礼を言う。綾音は修平に送ってもらっていた。
「姉ちゃん。俺、先に家入ってるね」
「あ、了解」
「それじゃ、佐野さん。おやすみなさい」
「あぁ、おやすみ～！」
「今日はありがとうございました！」
ペコッとお辞儀をしてすぐに玄関へ入っていった。
「……寒いね。遅くなったし、そろそろ佐野も帰ったほうがいいよ」
「ほら、また」

「あ……」
ついつい苗字で呼んでしまう。慣れていないと難しい。
「ごめん」
「別に謝ることちゃうやん。オレも慣れてへんしな」
雪がまた降り始める。寒い中話していて風邪をひいてもいけないので、そろそろお開きにしようという雰囲気だ。
「それじゃ、また来年だね」
「うん……またな」
陽乃は静かに雪を踏みしめながら玄関へと向かう。まだ、翔がその背中を見守ってくれているのを感じながら。
玄関のドアノブを握ったときだった。

「陽乃！」

翔の声がしたので振り向くと同時に、唇にやわらかいモノが触れた。
目を開けると、翔の唇が自分の唇にそっと重ねられていた。
３０秒くらいしか経っていないが、陽乃には5分近くに感じられた。

「……ゴメン。急に」
翔はそっと唇を離して言った。
「ううん……」
妙な沈黙が落ちるが、嫌な沈黙ではない。
「ほな、また来年」
「うん。また、ね」
翔が小さく手を降りながら門を出た。門の外に出て、陽乃はもう一度大きい声で言った。

「またねー！」

翔の顔は暗くてよく見えないが、嬉しそうに手を振ってくれている。

陽乃にとって一生忘れられない年となった２００５年は、こうして過ぎていった。

第７８話　目標を見つけた（後書き）

夏樹の新たな目標が見つかり、陽乃と翔もますます仲良くなった２００５年がいま、終わろうとしています。まだまだ続く七海高校での生活。来年からも、是非彼らの活躍を見守ってやってください。

＜２００５年　あらすじ＞（前書き）

☆ここでは第７８話までのあらすじを掲載しています。本編をまだお読みでない方はかなりのネタバレになりますので、そちらのほうご留意ください！☆

詳しい物語は第１話～第７８話をどうぞ♪♪

＜２００５年　あらすじ＞

２００５年４月４日、神奈川県七海市立七海高等学校入学式で出会った朝倉陽乃と佐野翔。大阪から越してきたという翔に陽乃はいまひとつ好意を抱けなかった。

しかし、つくし野川で再び遭遇して以来、二人の関係が急激に変わる。アルトサクソフォンを吹いているという翔の姿に陽乃は思わず感動。翔に吹奏楽を勧められたことでトランペットを手にする。

初めはサークルとして出発。後に永井雪子が加わり、その後も大谷沙希、宮部由美子など同級生がどんどん加わり、総勢１０名のサークルとして活動をスタートした。顧問は陽乃たちの担任・東　恭一先生。

各クラブ活動の様子をチェックする監査会も無事に乗り越え、さまざまな活動に乗り出そうとしたときに陽乃は父・祥夫から思わぬ反対を受けるが思いっきり言い負かせてしまう陽乃。わだかまりは解けないまま夏休みに突入。

合宿や老人ホーム訪問を経てどんどんと仲良くなる部員たち。夏の市吹奏楽連盟定期演奏会で有名Ｓａｘプレイヤー・三田嶋　樹と翔が共演したことでさらに部員たちの士気も高まる。しかし、そこで翔と同じ大阪出身の佐野修平が出現。その中で翔は何か負の記憶を背負っていることに陽乃は気づく。

そんな中、季節は冬になり修平たち風見台高校吹奏楽部と合同で市吹奏楽連盟定期演奏会に出演。その中でどんどんと仲間が増えていく。合同練習の帰り、美里たちの企みで翔と陽乃に思わぬ事態が！

演奏会本番、二人はその影響で気まずい空気に。しかし、そんな

トラブルも乗り越えて演奏は無事終了。
その帰り道、翔は陽乃に再度告白する。共に成長していこうという目標を掲げて、二人は付き合い始めた。そうして彼らの２００５年は暮れていった。

主な登場人物（２００６年編）（前書き）

こちらの登場人物紹介はこれ以降に掲載する２００６年、すなわち翔たちが高校２年生に進級する頃の話に登場する人物たちの紹介となります。
第１話から順番にご覧になりたい場合、あるいは途中からここへ飛んできたという読者の方はネタバレあるいは話が繋がらないので、２００５年編の登場人物を参照してください☆彡

主な登場人物（２００６年編）

※！！ネタバレ注意！！※

♪　第１９６話現在　♪

＜※注※＞

［２０］＝年齢を示しています。

＜主要人物＞

☆朝倉（あさくら）　陽乃（ひなの）

＞ｉ２８８６４―１５０＜

七海市立七見高等学校２年Ｃ組。吹奏楽部に所属。トランペット担当。明るく活動的な性格で何でも興味関心を抱く。翔と現在交際中。

一人称：あたし　あだ名：朝ちゃん♪朝倉♪陽ちゃん♪朝倉さん

☆佐野（さの）　翔（かける）

＞ｉ２８８６５―１５０＜

七海市立七見高等学校２年Ｃ組。大阪から高校進学時に引っ越してきた。小学校４年生からアルトサクソフォンを吹いている。現在は吹奏楽部の部長として日々活動に励んでいる。明るく正義感の強い性格。陽乃と交際中。

一人称：オレ　あだ名：佐野♪佐野くん♪翔♪カケぼー（一人だけ）

＜七海市立七海高校吹奏楽部＞
★＝３年生　♪＝２年生　☆＝１年生

【Ｆｌｕｔｅ（フルート）】
♪大谷（おおたに）　沙希（さき）　クラス：２年Ｇ組
＞ｉ９６３２―１５０＜
実はお嬢様。ハワイに旅行に行ったりマイフルートを持っていたりする。おとなしく冷静な性格で分析力に長けている。
一人称：私　あだ名：沙希ちゃん♪大谷さん♪サキティ　家族構成：父＝大谷俊次（おおたにしゅんじ）・母＝大谷智佐子（おおたにちさこ）・弟＝大谷洋輔（おおたにようすけ）・妹＝大谷稚依（おおたにちい）

♪宮部由美子（みやべゆみこ）　クラス：２年Ｅ組
＞ｉ９６３９―１５０＜
沙希に憧れてフルートを吹き始める。純粋な性格で、誰とでもすぐに仲良くなれる。少々天然ボケなところあり。
一人称：あたし　あだ名：由美子♪由美ちゃん♪宮部さん　家族構成：父・母

☆井上（いのうえ）　佳菜（かな）　クラス：１年Ｃ組
＞ｉ２８８６８―１５０＜
葉島中学校出身。中学時代は楽器は市の少年少女吹奏楽団で吹いていた。小柄でおとなしい女の子。ピッコロも兼任。
あだ名：佳菜ちゃん♪かな

【Ｏｂｏｅ（オーボエ）】
☆野村健之佑（のむらけんのすけ）　クラス：１年Ｉ組
＞ｉ９６５７―１５０＜
袴田中学校出身。なで肩が特徴の背が高い男の子。笑うと歯が綺麗。

ビヴラートがとても綺麗にかけられる。
あだ名：ノム♪ノムさん♪ケン

【Ｂａｓｓｏｏｎ（バスーン）】
☆戸口（とぐち）　誠（まこと）　クラス：１年Ａ組
＞ｉ９６５２＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞１５０＜
大＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞おお＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞井戸（いど）中学校出身。坊主刈りでお寺の息子。クラリネットの優輝以上に喋らない子だが、内に秘める熱さは誰にも負けない。
あだ名：まこっちゃん♪とぐ

【Ｅ♭（エス）Ｃｌａｒｉｎｅｔ（クラリネット）】
☆小林（こばやし）　梨子（りこ）　クラス：１年Ｃ組
＞ｉ９６４９―１５０＜
袴田中学校出身。エスクラリネット一筋で中学を過ごしてきた。そのため、ベークラリネットは少し苦手。
あだ名：梨子♪りーちゃん

【Ｂ♭（ベー）Ｃｌａｒｉｎｅｔ（クラリネット）】
♪橋本（はしもと）　絵美（えみ）　クラス：２年Ｂ組
＞ｉ９６３６―１５０＜
クラリネットを中学生から吹きたかったので念願の楽器を吹けて嬉しく思っている。日々練習に励む真面目な女の子。
一人称：私　あだ名：絵美ちゃん♪エミリン♪橋本さん　家族構成：父・母＝橋本清美（はしもときよみ）・兄＝橋本航太郎（はしもとこうたろう）・姉＝橋本真咲（はしもとまさき）

☆伊原（いはら）　光瑠（ひかる）　クラス：１年Ｇ組
＞ｉ９６４３―１５０＜
袴田中学校出身。長髪のキレイな大和撫子のような女の子。雰囲気

が絵美に似ている。
あだ名：ヒカル♪

☆河内（こうち）　みゆき　クラス：1年F組
＞i28859―150＜
南葉島中学校出身。シッカリ者でテキパキと動く頼れる後輩。
あだ名：みゆ♪みゆちゃん

☆瀬戸（せと）　優輝（ゆうき）　クラス：1年E組
＞i19651―150＜
大井戸中学校出身。小学校からクラリネットを吹いている。クールで寡黙な少年。
あだ名：優輝♪瀬戸っち

★豊田（とよた）めぐみ　クラス：3年A組
＞i11707―150＜
途中入部の3年生。高校生活最初で最後のコンクールに出場したく、入部を決めた。
あだ名：めぐ先輩♪めぐ

【Bass（バス）　Clarinet（クラリネット）】
☆逢沢（あいざわ）　駿（しゅん）　クラス：1年C組
＞i28855―150＜
袴田中学校出身。リーダーシップを取るのがうまく、勤勉な典型的日本人タイプ。
あだ名：逢沢くん♪逢沢♪駿

【Alto（アルト）　Saxophone（サキソフォン）】
☆鈴木（すずき）　麻綾（まあや）　クラス：1年B組

＞ｉ９６５０―１５０＜
葉島中学校出身。小学校からサックスを吹いていて、中学は佳菜と同じ市の少年少女吹奏楽団に所属していた。温厚で滅多に怒ったりスネたりしない。
あだ名：まーや♪すず

☆中野（なかの）　さゆり　クラス：１年Ｆ組
＞ｉ９６５４―１５０＜
袴田中学校出身。中学３年になって急激に上手くなった期待のルーキー。何にでも熱くなる性格。
あだ名：さゆ♪サユリン

【Ｔｅｎｏｒ　Ｓａｘｏｐｈｏｎｅ（テナーサキソフォン）】
☆西嶋（にしじま）はるか　クラス：１年Ｇ組
＞ｉ９６５５―１５０＜
袴田中学校出身。家がスナックをやっているので毎日と言っていいほどテナーサックスを吹いている。バスクラリネットの駿とは良いコンビ。
あだ名：はるか♪にっし～♪デカ女（１人だけ）

【Ｔｒｕｍｐｅｔ（トランペット）】
☆久野（くの）　彩香（あやか）　クラス：１年Ｂ組
＞ｉ９６４７―１５０＜
袴田中学校出身。お人形さんのようにかわいらしいと陽乃のお気に入りの後輩。実際、温厚で常に親切心を持って人と接することができる。
あだ名：彩香♪久野ちゃん♪あや

☆松尾（まつお）　勇（いさむ）　クラス：１年Ｆ組

＞ｉ９６６１―１５０＜
南葉島中学校出身の小柄な少年。吹奏楽に対するこだわりが強く、陽乃とも当初は衝突しがちだった。根は良い子。
あだ名：松尾くん♪イサム

★岡崎（おかざき）　安和（あんな）　クラス：３年Ｂ組
＞ｉ１１７０５―１５０＜
途中入部の３年生。初めは陽乃と対立したが、その後和解。現在は陽乃と一緒にトランペットを支える。
あだ名：岡崎先輩♪安和先輩

【Ｈｏｒｎ（ホルン）】
♪永井（ながい）　雪子（ゆきこ）　クラス：２年Ａ組
＞ｉ９６３５―１５０＜
初対面ではなかなか自分を出せないタイプ。しかし、仲良くなるととても親しみやすい子。陽乃とは今では親友。何に対しても一途な性格である。
一人称：私　あだ名：雪子♪雪ちゃん♪永井♪永井さん　家族構成：父＝永井（ながい）　融（とおる）　母＝永井（ながい）ひとみ　妹＝永井（ながい）真沙美（まさみ）

☆右川（うがわ）　順平（じゅんぺい）　クラス：１年Ｇ組
＞ｉ２８８５７―１５０＜
袴田中学校出身。目が細いので怖い印象を与えがちのおっちょこちょい少年。ホルンは小学校４年生から６年生の間も吹いていて音の芯がしっかりしている。
あだ名：ジュンペー♪うーちゃん

【Ｔｒｏｍｂｏｎｅ（トロンボーン）】
♪川崎（かわさき）　慎也（しんや）　クラス：２年Ｃ組

＞ｉ９６３３―１５０＜
スライドが前後するのに心惹かれてトロンボーンを吹き始める。基本的にあまり喋らない子ではあったが、翔と仲良くなってからはずいぶんと口達者になった。現在は美里と交際中。
一人称：俺　あだ名：慎ボー♪慎ちゃん♪川崎くん　家族構成：父・母・兄・弟

☆吉山（よしやま）　亜紀（あき）　クラス：１年Ｉ組
＞ｉ９６６３―１５０＜
南葉島中学校出身。中学時代はチューバ、ユーフォニウム、トロンボーンと楽器を３つも吹いていた。トロンボーン歴は一番短いが、肺活量の多さでは男の子にも負けない。性格は明朗快活。
あだ名：亜紀ちゃん♪ヨッシ～

☆富士原（ふじわら）　徹（とおる）　クラス：１年Ｄ組
＞ｉ２８８７１―１５０＜
南葉島中学校出身。完全な初心者なので亜紀に付きっ切りで教えてもらっている。基本的にのんきなのでマイペースで進行中。
あだ名：富士くん♪徹

【Ｅｕｐｈｏｎｉｕｍ（ユーフォニウム）】
♪水谷（みずたに）　春樹（はるき）　クラス：２年Ｂ組
＞ｉ９６３８―１５０＜
最初は雪子と似たような雰囲気が漂っていたが、実は優しい子。楽器を吹く前から自宅にユーフォニウムは持っていたようで、一所懸命抱えて部室までやってきた。最近、拓真と楽器を持っている姿が似通ってきている。キラースマイル所持者。
一人称：俺　あだ名：春やん♪水谷くん♪水っち　家族構成：母＝水谷幸恵子（みずたにさえこ）

☆加藤（かとう）　愛実（めぐみ）　クラス：１年Ｈ組
＞ｉ１９６４６―１５０＜
葉島中学校出身。中学までは市の少年少女吹奏楽団に所属していて、トロンボーンを吹いていた。春樹とは実は幼なじみで、彼のことが好き。同じパートを吹いていて心底嬉しく思っている。なお、ユーフォニウムは初心者である。
あだ名：めぐみ♪カトちゃん

【Ｔｕｂａ（チューバ）】
♪本堂（ほんどう）　拓真（たくま）　クラス：２年Ｈ組
＞ｉ１９６３７―１５０＜
大柄な体格でチューバと相性ピッタリ。生真面目な性格で空気を読めるので精神年齢はメンバーの中でも上のほう。
一人称：俺　あだ名：拓あん♪本堂くん♪本ちゃん　家族構成：父・母

★三河（みかわ）　岳彦（たけひこ）　クラス：３年Ｇ組
＞ｉ１１７０６―１５０＜
途中入部の３年生。最初で最後のコンクールに、大人数で参加したかったので入部を決めた。
あだ名：三河先輩♪岳ちゃん先輩

【Ｓｔｒｉｎｇ　Ｂａｓｓ】
☆三宅（みやけ）　亮平（りょうへい）　クラス：１年Ａ組
＞ｉ２７７４９―１５０＜
かなりイケメンの少年。ジブリ映画が大好きで、暇さえあれば弦バスで久石譲の曲を弾いている。ピッチカートが一番上手い。
あだ名：みーやん♪

【Ｐｅｒｃｕｓｓｉｏｎ（パーカッション）】

♪田中（たなか）　美里（みさと）　クラス：２年Ａ組

＞ｉ１９６３４―１５０＜

大胆なことが大好きなので動きのあるパーカッションへ。明るく活発な性格で男女の壁なく誰とでも平等に接するタイプ。少々おせっかいなところがある。現在は慎也と交際中。

一人称：あたし　あだ名：ミサッチ♪みさりん♪美里ちゃん♪田中さん　家族構成：父・母・姉＝田中（たなか）　美優（みゆ）

☆冨岡（とみおか）　洋之（ひろゆき）　クラス：１年Ｇ組

＞ｉ１９６５３―１５０＜

袴田中学校出身。端正な顔立ちでクールに見えるが中身は結構おもしろい子。ティンパニが特に得意。

あだ名：トミ♪とみぃ♪ヒロ♪ひろぽん

☆日高（ひだか）　優（ゆたか）　クラス：１年Ａ組

＞ｉ２８８６９―１５０＜

大井戸中学校出身。運動神経も鈍く勉強も中の下という冴えない自分を変えたくて入部した初心者。背が低いので基本的にタンバリンやトライアングルが好き。

あだ名：ひーくん♪優っち♪チビ（１人だけ）

☆秦野（はたの）　恵梨（えり）　クラス：１年Ｅ組

＞ｉ１９６５８―１５０＜

東京から高校進学時に引越し。目立ちたがりなので美里と同じ目立ちそうという理由で打楽器を選んだ初心者。

あだ名：エリリン♪はたっち♪はたやん

☆乃木（のぎ）　あずさ　クラス：１年Ｈ組

＞ｉ１９６５６―１５０＜

栃木から高校進学時に引越し。打楽器は小学校1年生からずっとしているので打楽器は全般的に扱える。
あだ名：のぎぎ♪あず

【Ｃｏｎｄｕｃｔｅｒ（コンダクター）】
♪東（あずま）　恭一（きょういち）　［３２］
＞ｉ２２５９９－１５０＜
七海高等学校吹奏楽部顧問。担当教科は英語で由美子の在籍する２年Ｅ組の担任。身長１８７センチでけっこうイケメンなので彼に担任を持ってほしい女子生徒は多いとの噂。七海高等学校吹奏楽部（初代）のＯＢでもある。そのときのパートはパーカッション。浜崎あゆみの熱狂的ファン。

＜佐野家＞
☆佐野（さの）　昭（あきら）　［４７］
＞ｉ１１７０９－１５０＜
翔の父。食品会社勤務。あまり喋らない照れ屋な性格だが子供たちのことはきちんと把握している。

☆佐野友美子（さのゆみこ）　［４５］
＞ｉ１１７０８－１５０＜
翔の母。かなり賑やかな性格で初対面の人でも遠慮なく質問攻めにしたりしてよく翔や綾音に怒られている。かなりの料理好きなので腕は良い。

☆佐野（さの）　綾音（あやね）　［１５］
＞ｉ９６７４＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞１５０＜
翔の妹。葉＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞は＜／ｒｔ＞

＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞島中学校3年生。翔のことを呼び捨てにしている。

☆佐野　智輝　［１０］
＞ｉ１１７１０―１５０＜
翔の弟。葉島小学校４年生。お兄ちゃんっ子でいつでも翔が帰ってくると大喜びしている。

☆佐野冨美枝　［７２］
＞ｉ２２６０１―１５０＜
翔の父方祖母。夫は４年前に亡くしている。かなりの老眼。

＜朝倉家＞
☆朝倉　祥夫　［４６］
＞ｉ１１７１４―１５０＜
陽乃の父。証券会社勤務。今どき珍しいタイプの父親で子供たちのことに関しては度が過ぎるほど干渉することもあり、今まで陽乃とも夏樹ともケンカをしたことが何度かある。普段は仕事人間。

☆朝倉　由利　［４４］
＞ｉ１１７１３―１５０＜
陽乃の母。スーパーでパートをしている。祥夫とは違い、おっとりして子供たちを優しく見守るタイプ。しかし言うべきときにはしっかりと諭す。

☆朝倉　夏樹　［１５］
＞ｉ９６６５―１５０＜
陽乃の弟。サッカー大好き少年だったが椎間板ヘルニアを発症したことからサッカー部を退部。現在は吹奏楽に興味を持っている様子

だが、サッカーも諦めたわけではない。基本的に人思いで優しいが、心配性なところがある。葉島中学校3年生。

☆朝倉知恵子（あさくらちえこ）　［７０］
＞ｉ１１７１５―１５０＜

陽乃の父方祖母。どんな時でも冷静に何事にも対処できるしっかりした女性。夫は5年前に亡くしている。

＜七見高等学校関係者＞

☆真野（まの）　光治（こうじ）　［５５］
＞ｉ１１７２６―１５０＜

学校長。温厚で生徒の自主性を尊重する主義を貫いている。吹奏楽部の生徒に校長室でのライブ演奏と引き換えにストーブを提供してくれたりもするユニークな男性。

☆村峰（むらみね）　塔子（とうこ）　［５０］
＞ｉ２２６００―１５０＜

普通科教頭。分厚い眼鏡が特徴で文化部に対する扱いはかなりぞんざい。

☆新井田（にいだ）　彩（あや）　［２７］
＞ｉ１１７２８―１５０＜

社会科教師。2年A組担任。小柄で花のように可憐な先生。華道部顧問。

☆亘理（わたり）　健太（けんた）　［３１］
＞ｉ１１７３１―１５０＜

国語科教師。2年C組担任。体育会系の熱血先生で陸上部顧問。

☆真鍋（まなべ）　宗平（そうへい）　［３２］
＞ｉ１１７２９―１５０＜
野球部顧問。理科教師。トラブルが起こるとパニックを起こしやすい。

☆園部（そのべ）麻衣子（まいこ）　［２７］
＞ｉ１１７３０―１５０＜
数学教師。２年Ｂ組担任。

＜吹奏楽関係者＞
★佐野（さの）　修平（しゅうへい）　［１７］
＞ｉ１１７２０＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞１５０＜
私立・風＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞かざ＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜ｒｕｂｙ＞見台（みだい）高等学校吹奏楽部員。翔とは中学時代の同級生かつ吹奏楽部員だった。当時の中学校部員たちの間では「ダブル佐野」の名前で結構知られていた。現在は人数の関係でサックスから離れてパーカッションを担当している。

★濱口（はまぐち）　優衣（ゆい）　［１７］
＞ｉ１１７１９―１５０＜
私立風見台高等学校吹奏楽部員。修平と仲がよく、誰にでも思いやりを持って接するタイプ。陽乃とも合同練習で仲良くなった。トランペット担当。

★岩切（いわきり）　翔平（しょうへい）　［１８］
＞ｉ１１７２１―１５０＜
１０月に大阪から七海市へ引っ越してきた淀南（よどみなみ）中学校時代の翔の先輩。名前が翔とかぶっていたので「ダブル翔」と修平とのカップル名（？）を文字って呼ばれていたことがある。現在、風見台高校へ転入して吹奏楽部に入部。

★三田嶋（みたじま）　樹（いつき）　［３０］
＞ｉ１１７１８―１５０＜
有名なアルトサックス奏者。全国各地の演奏会に客演として招かれたり演奏会を開いたりと精力的に活動している。七海高等学校吹奏楽部（初代）のＯＢでもある。

★神崎（かんざき）しおり　［３０］
＞ｉ１１７１７―１５０＜
樹のマネージャーにして吹奏楽部時代の同級生。オーボエ奏者である。

◎竹林（たけばやし）　泰徳（やすのり）　［１４］
愛媛県　常套（じょうとう）中学校吹奏楽部在籍中。パートはチューバ。翔とは大阪にいた頃、よく遊んだ。オーケストラや吹奏楽のような大編成が苦手というコンプレックスはあるが、翔には「音楽才能抜群！」と言われている。ただし、泰徳本人はなぜか否定している。

◎中井（なかい）　美奈（みな）　［１４］
愛媛県常套中学校吹奏楽部在籍中。パートは弦バス。『ピティナ国際ピアノコンクール』にてパーカッションの秦野恵梨と知り合って以来の仲である。

◎谷（たに）　未来（みき）　［１４］
愛媛県常套中学校吹奏楽部在籍中。パートはユーフォニウム。加藤愛実とは知り合いで、愛実が経営するブログで友達としてメールアドレスを交換したのが始まり。常套中学校のサマーコンサートにて初めて出会った。

◎高橋（たかはし）　美並（みなみ）　［１４］

愛媛県常套中学校吹奏楽部在籍中。泰徳たちの1年先輩。翔たちや金管メンバー数名は２００５年度のアンサンブルコンテストにおいて、彼女と知り合いになっている（翔が半ば強引に彼女たちの会話に加わっただけであるが）。ちなみに、七海高校の中で彼女を好きなメンバーがいる。

◎佐々木（ささき）　香織（かおり）　［１４］

愛媛県常套中学校吹奏楽部在籍中。泰徳、美奈、美並とアンサンブルに出場した。彼女も美並同様、２００５年度のアンサンブルコンテストにおいて半ば強制的に翔たちと知り合いになっている。

主な登場人物（２００６年編）（後書き）

それではいよいよ高校２年生、２００６年編スタートです♪

※注１※　「吹奏楽関係者」のうち◎印の人物に関してはコラボレーション企画のＧＴ．ｓｐｉｒａｌさん著作『みんなのＨａｒｍｏｎｙ　～夢と希望のアンサンブル～』における登場人物です。また、ＧＴ．ｓｐｉｒａｌ氏には許可を事前にいただいております。

※注２※　この小説では神奈川県を舞台としておりますが、筆者の居住地が兵庫県であり、コンクールの日程などが関東地区とは大幅に異なります。小説の中でコンクール等の日程が本来の神奈川県などのものとは異なりますが、兵庫県や関西地区をモデルにコンクール等の日程を設定させていただきます。何とぞご理解ください。

第７９話　今年の目標！

「あっけましておめでとー！」
陽乃はガラガラと音楽室の扉を勢いよく開けた。音楽室には既に春樹、雪子、美里、由美子の４人がいた。
「おっ、おめでとさーん」
美里がニコニコと手を振る。
「今年もよろしくね」
雪子が上品に笑い返す。
「年賀状、ありがとうね」
春樹は小動物みたいな笑顔を振りまく。癒し系だな、春樹は。
「それにしても出席率が悪いねぇ」
由美子がフゥッとため息をついた。確かに、まだ集まっている人数は少ない。５人だから半分くらいしかいないのだ。
「まだあれじゃない？　正月ボケがみんな残ってるんだよ」
美里はいつの間にかバチを取り出して机に粘土を広げて基礎練習を始めた。タタタン、タタタンとリズムがバランスよく刻まれる。
「まさか！　もう１月６日だよ？　正月ボケも治る頃だよ～」
雪子がクスクスと笑う。
「いや～でもどうだろう？　佐野なんか……」
陽乃が言いかけた途端、ジロッと全員の目線が集中した。
「なっ、なに……？」
「陽ちゃんさぁ～」
美里がニヤニヤしながらバチで陽乃の顎をクイッと上げた。
「今さら佐野くんのこと苗字で呼ぶの～？」
「へ？」
雪子が隣でツンツンと陽乃の体を押す。
「そうだよ～。いつまでもそんな他人行儀な」
「い、いや……その、なんていうか」

そう言いかけて陽乃は言葉を止めた。
「私……みんなに佐野と付き合ってること、言ったっけ？」
全員の動きが止まってしまった。
そーっと美里が音楽室から出ようとする。
「み・さ・と・ちゃーん」
陽乃が優しく声をかける。
「は、はーい」
「どういうことかな～？　私、ミサトちゃんを信じて言ったんだけどなぁ？」
「いや～あははは。やっぱさ、部活のみんなに隠し事なんてないほうがいいかなぁって個人的に思って」
「だったらなんで私に言ってくんないのよー！　恥ずかしいじゃん！」
バタバタと音楽室中を二人は走り始めた。それを見た春樹や由美子が大笑いしている。その横で、雪子は一人複雑そうな表情を浮かべていた。
「捕まえた！」
「ふやぁ！？」
陽乃がとうとう美里を追い詰めた。
「さぁ～どんな罰を与えてあげようかな～？」
「ひぃ～お代官様、ご慈悲を～」
そんなふざけあいをしていると急に扉が開いた。
「みんな～明けましておめでとさーん！」
翔だった。そしてそのまま目線を下に移すと、美里に馬乗りになった陽乃が目に入る。
「……えと、これはどういう状況？」
カァッと陽乃の顔が赤くなる。
新年早々、最悪だ。
「ほなまぁ、新年早々田中と陽……朝倉の妙なシーンを目撃しまし

たが。先生も来てはるんでご挨拶してもらいたいと思います」
危うく翔も陽乃とついつい言いそうになったようだ。しかし、残念なことに部員全員が陽乃と翔が付き合っていることを知っている。それを知らないのは、翔だけ。
「ほな、先生どうぞ」
ガラガラと恭一が音楽室に入ってきた。
壇上に上がるとコホン、と小さく咳払いをした。
「皆さん、明けましておめでとう」
「おめでとうございまーす！」
全員が声をそろえて返した。
「いよいよ七海高校吹奏楽部も新しい年を迎えました。今年はより具体的な目標を持ってみんなに頑張ってもらいたいと俺も思っているから、一致団結して頑張ってください」
恭一は淡々と、しかし期待を込めた口調で言った。
「はい！」
「それじゃ佐野。今年の目標、もう決まってるんだよな？」
「ハイ！」
翔は嬉しそうに立ち上がって黒板の前まで行く。
「え？」
陽乃も聞いていない。そもそも年が明けて会うのは今日が初めて。しかし、それまでにメールや電話もして今年の話をチラッとした。
「いつの間に？」
「初耳だわ」
どの部員たちも一緒のようだ。
カツ、カツと白チョークで翔は大きな字を書き始めた。

『２００６年目標　新入部員２０人ゲット♪』

「以上！　今年の吹奏楽部の目標です！」
翔は満足そうに書き切って振り向きざまに言った。

「２０……人？」
絵美が唖然とする。
「えーと、今の部員数が１０人だから……２倍！？」
拓真がかなり驚いた様子を見せる。隣にいた慎也も思わず立ち上がって言った。
「ちょっと待った！　まだそんな人数入れても俺たちが教えられるような立場じゃねぇよ」
「心配すんなって！　何も全員が全員、初心者やってわけじゃないやろ？」
「そ、それはそうかもしれんけど……」
「それじゃあ質問」
「はい、大谷さんどうぞ？」
「具体的にその人数を確保するための活動方針とかがあったら教えて」
「ＯＫ～。まず、入学式に部活紹介、新歓祭。これでオレらの存在はアピールできると思うねんな」
予定を思い出す。４月１０日が部活紹介。翌日が新歓祭。
「でもな、それだけやと時間は短いわけよ」
翔は恭一のほうを見た。
「えっとな。入学式は入退場の曲、国歌、校歌だけ。合計時間にすると１５分だろう。それから部活紹介は各団体１０分。紹介に曲１曲できればいいところだろう。それで新歓祭はもっと短く各団体５分」
「短っ……」
慎也がボソッと呟いた。
「そっ！　意外と短いわけよ」
翔はニッと笑って慎也の呟きに答えた。
「それじゃあ、オレたちはどこでもっと新入生にアピールするべきか？　はい、宮部さんならどうします？」
「えっ？　あたし？」

「そっ。あたし」
「えぇっと……んと」
由美子はかなり真剣に考えたようで、最終的にひとつだけ答えを出した。
「もっと別のトコで曲、演奏するとか……？」
「おぉ～、いいねぇそういうの！」
翔は嬉しそうにうなずいた。
「どう？　オレらだけでコンサートせぇへん？」
「俺らだけで……」
拓真が呆然と呟く。
「そっ！　オレらがオレらだけで作る、新入生のためのコンサート」
「なんかの演説みたい」
クスッと絵美が笑った。
「おもしろそう！　やってみたい！」
そう言って手を挙げたのは他でもない、陽乃だった。
「練習、大変になるぞ？　それでもいいか？」
恭一が心配そうに全員に聞いた。
「そんなの、努力次第ッスよ」
拓真が力強く返した。
「赤点なんか取ってる場合じゃないね」
美里が慎也の体を突いた。
「うるせーよ」
苦笑いしながら慎也が美里の頭をクシャクシャ撫でた。それを見て陽乃も思わず心が温まる気がした。
「ほな、全員オレらのミニコンサート開いて新入部員２０人ゲットの目標に賛同してくれますか！？」
「もっちろーん！！」
ワイワイと盛り上がる部員たちを見つめて、恭一は過去の自分たちに姿を重ねていた。

第７９話　今年の目標！（後書き）

自分たちの倍の人数を確保するという吹奏楽部。目標実現のために奔走する３学期がいよいよ始まろうとしています。

第８０話　カリフラトラブル（前）

「カリフラ難しいなぁ……」

１月１０日。今日から学校も本格的に始まってみっちり６時間授業があった。久しぶりだとやっぱり疲れてしまう。それに加えて年明けからの寒さの厳しいこと。寒いのが苦手な雪子にはちょっと辛かった。その上、このスーパーカリフラジリスティックエクスピアリアドーシャス（略してカリフラ）はなかなかホルンに負担を与えてくれる曲だった。どのパートもそうだけれど、七海高校のメンバーにはキツい曲であることに違いない。

こういうと自慢に聞こえるかもしれないが、雪子の吹いているホルンはギネスブックにも登録されている「世界一難しい金管楽器」なのだ。コンパクトに見えるかもしれないがカタツムリのように巻かれたこの管をすべて伸ばすと、拓真の吹いているチューバよりも長いのだ。５ｍくらいだと雪子も聞いた。息を入れるだけでもけっこう疲れる。

最近になって、金管楽器でもそれぞれ教室に分かれて練習するようになった。とはいえ、二つに分かれるくらいだ。トランペット＆ホルンの組み合わせ、そしてトロンボーン、ユーフォニウム、チューバの組み合わせだ。つまり、高音と低音で分かれている。

正直、陽乃とはあまり一緒になりたくなかった。翔と陽乃が付き合い始めたことを美里から聞いたとき、雪子は泣きそうになってしまった。しかし、何も知らない美里を驚かすわけにもいかないのでその場はこらえた。こらえた分、家での反動はすごかった。夜になっても涙が止まらず、結局あの日は夕飯もろくに口にしなかった。

昨日、翔が一瞬陽乃を下の名前で呼びそうになったのを聞き逃さなかった。部員全員が聞き逃さなかったのだが、雪子には苦痛で仕方がなかった。

付き合っていることに何かやましいことでもあるのだろうか。堂々としていればいい。そんなことができないくらいなら、付き合わないほうがいい。

「雪ちゃーん！　どうしたの？」

急に陽乃に声をかけられて思わず息が詰まりそうになった。何とか平静を装う。

「ううん。ちょっと考え事してただけ」

「そうなの？　あ、カリフラのことかぁ。難しいもんね、その曲」

「うん……」

（違う。カリフラよりも、翔と陽ちゃんのことを考えてるんだよ）

何度も口にしようと思ってしまう自分が嫌で仕方がない。けれども、この気持ちを押さえ込むにも限界が近づいている気がする。

「ねっ！　雪ちゃん、どうせなら一緒に合わせようよ」

「え？」

「私も一人でやってると何でも考え込んじゃうクセがあるんだ。でも、誰かと一緒にするとすっごく進むことが多いの」

「そ、そうなんだ」

「うん。どう？　せっかく一緒の部屋でパー練するんだし」

「そうだね。しよっか」

雪子は何とか笑顔で答えることができた。

（私って……嫌な子じゃないかな）

思わず自虐になって笑ってしまう自分に胸が痛んだ。

「じゃあＡからいくね」

「わかった」

メトロノームに合わせて陽乃が「5、6、7、8」と拍子をとる。一緒になってリズムやメロディーを刻む。一人でやっているときよりもずっと演奏しやすい。なかなかできなかったフレーズもすんなり吹けてしまった。

「ほらね？　ずっと吹きやすいでしょ？」

陽乃が笑顔で雪子に言う。
「うん。ずっと吹きやすかった」
「やっぱり誰かと一緒に作業とかすると進むんだよね～」
陽乃は楽器を置いてハンカチで口を拭いた。
「前にさ、佐野とテスト勉強したことあるんだけど」
「え？」
二人だけで。そりゃそうだろう。付き合っているんだから。
でも、また名前じゃなくて苗字で呼んだ。付き合ってるのに？
「そのときも教えてもらったり教えあったりしてね、すっごく作業進んだの」
（やめて……）
陽乃の声がいつもと違う。すごく嫌味がかって聞こえる。
「それでそのときのテストの点もずいぶん上がったんだ。嬉しかったな～」
（やめて。やめてよ……）
「あ、そうだ。今日この後木管楽器と合わせるんだけど、よかったら雪ちゃんも参加しない？　佐野が前に立っていろいろ教えてくれるらしいよ」
次の瞬間、雪子がすごい勢いで立ち上がった。

その頃、隣の教室では慎也、拓真、春樹の３人がおとなしくロングトーンをしていた。去年の合同練習でやった１６拍ロングトーンをしている。
「やっぱさ、人数多いほうでやったほうが集中できるよね」
春樹がちょっと息切れをしながらも言った。
「確かに。一人だといつの間にか寝ちゃってたり」
「それは慎也が夜更かししてっからじゃねーの？」
「違うよ。俺、刺激がないとなかなか続かないタイプだから」
そう言って慎也はスライドに溜まった唾を捨てた。冬場は温度差からよく唾が溜まる。

「刺激ねぇ。まぁ普通に生活してりゃ刺激なんていっぱいあると思うけどな」
拓真も同じように管から唾を出す。
「俺ん家なんかさ、お母さんとおばあちゃんがよくケンカするから刺激いっぱいだよ」
「マジかよ。そういう刺激は俺、ちょっとゴメンだわ～」
クスクスと笑っていると、突然隣の教室から誰かが転ぶような音がした。
「なんだ？」
拓真が驚いて楽器を置いて壁に耳を当てる。
「あれじゃない？　朝倉が椅子につまずいて転んだとか」
慎也が苦笑いで言う。
「あーありうる。朝倉さんならしそう」
春樹もクスクスと笑った。しかし、その後に続いた声は尋常ではなかった。

「私の前で佐野くんと仲良くしてる話なんかしないでよ！」

ギョッとした様子で3人は目を合わせた。
「ちょ、痛い！　やめて……やめてったら雪ちゃん！」
陽乃の声が続く。
「なんでよ！　なんでアンタたち付き合ってるのに隠したりすんの！？　意味わかんない、意味わかんない！」
雪子は明らかにいつもの冷静さを失っている。
「おい、ヤベェぞ！　隣行くぞ！」
そういう頃には拓真は教室から飛び出していた。慌てて慎也と春樹も後を追う。
「わ、わかった！」

教室の戸を開けると雪子が陽乃に馬乗りになっていた。昨日も見

た光景だが、雰囲気はまったく違う。
「おい！　永井！　やめろって！」
拓真が止めようとした瞬間、雪子の手が陽乃の頬を一回打った。
パシン！と乾いた音が教室中に響く。
「永井！　ストップ、ストップ！　何やってんだよ！？」
慎也も強引に羽交い絞めして雪子を止めた。春樹が打たれて泣いている陽乃を抱きかかえるようにして起こした。
「……楽器！」
陽乃は自分が打たれた頬よりも楽器のことを気にしていた。突き飛ばされた拍子に机からＴｒｕｍｐｅｔを落としてしまったのだ。運のいいことに、楽器は陽乃の上着とマフラーの上に落ちていて損傷はなかった。しかし、マウスピースだけが見当たらない。
「マッピ……。マッピがない」
陽乃は半泣きになりながら辺りを探す。春樹も一緒に床に這いつくばってマッピを探した。
「あ……」
教室の隅のほうでホコリまみれになったマウスピースが落ちていた。先端の部分は少しへこんでいる。
「……。」
嫌な沈黙が落ちる。ひっく、ひっくと雪子のしゃっくり声が響く。
「ちょっとー、どうしたのよ？」
沙希、由美子、絵美の３人も教室に入ってきて唖然とした。散らばった譜面。泣いている雪子。愕然として座り込む陽乃。どうしようもないという表情をした男子たち。
「おーい、どないしてん？」
翔が後を追うように入ってきた。
「な、何やってんの……？」
陽乃は急に立ち上がって教室の後ろから飛び出した。
「あ、ちょっと待ってよ陽ちゃん！」
不意に春樹が陽乃を下の名前で呼んで追いかけた。その後を沙希

も追う。
ただただ状況の読めない翔たちは呆然と教室に立ち尽くしていた。

「待ってって！」
春樹はようやく玄関で陽乃を捕まえた。
「よ、陽……ちゃん。なにがあったか、教えてくれない？」
沙希も息切れしつつ追いつき、陽乃に聞いた。
「わかんない。私、一緒に雪ちゃんと練習してたのに……急に佐野の話しないでとか言ってぶたれて……」
陽乃はペタンと床に座り込んでそれっきり何も言わなくなってしまった。
「あ……」
沙希が陽乃の手から転がったマウスピースを手にした。
「へこんでる……」
途端に陽乃が大声で泣き始めた。
春樹はうつむいたまま、何も言わなかった。

「永井さん。なんでこんなことしたん？」
翔は散らばった譜面を片付けながら優しい声で聞いた。他のメンバーには練習に戻るように頼んだ。きっと、自分が原因だろうと薄々感づいての翔なりの配慮だった。
「私のほうが……」
「え？」
雪子は泣きながら大声で叫んだ。
「私のほうが佐野くんのこと、好きだもん！」

「……。」
翔は顔を赤らめて泣いている雪子をジッと見つめた。
「陽ちゃん、いつまでたっても佐野くんを他人みたいに苗字で呼び

捨てにして。大勢の人前では変に照れちゃって。佐野くんだって佐野くんだよ。変にみんなに遠慮してるみたいに陽ちゃんのこと苗字で呼んだり……」

「永井さん」

「ほら！　私のことはさん付けでしか呼んでくれない！　もう嫌……こんな環境でクラブなんてできない！　私、もうこのクラブ嫌！」

その言葉を言った途端、雪子はしまったと思った。

翔がうつむいている。どんな目をしているのかはわからない。

「……別に、オレが好きとかいう理由だけでクラブ続けてるんなら、辞めてもらってもいい」

そうハッキリ言われて、雪子に衝撃が走った。

「でも」

翔がそっと雪子の肩を両手で優しくつかんだ。

「初めからクラブ作るときにおったん、オレと朝倉と永井だけやん……」

震えていた。雪子の肩をつかむ翔の手は、間違いなく震えていた。

「オレが好きとか嫌いとか、そんなことでケンカせんといてくれ……」

「佐野……くん」

泣いてる？と雪子は聞こうとしたが、聞けない。伝わってくるのは、翔の優しさ。温かさ。

「オレは、陽乃が好きやねん」

「……知ってる」

「今は……まだ朝倉なんて呼び捨てにしてるけど……めっちゃ好き」

「……わかったよ」

雪子はそっと涙を拭いた。

「ねぇ」

翔の目を見つめて雪子は言った。

「最後に、握手して」

「握手？」

「うん。それで、私、納得できるから」
「……キスとかやないんや」
クスッと翔が笑った。
「サイテー」
雪子も笑う。
「ほな……」
翔はギュッと雪子の手を握った。
初めて翔と雪子が逢った日、つくし野川で握ってくれたように。
「陽ちゃんのとこ、謝りに行ってくる」
雪子はスカートをパンパンと払って立ち上がった。
「ちょい待ち。オレも一緒に行く」
翔も後を追った。
「え？」
不意に翔が手を握ってきた。
「教室、出るまでな」
「……うん」
雪子は小さくうなずいた。
翔は教室を出るまで強く、雪子の手を握り締めていた。

第８０話　カリフラトラブル（前）（後書き）

感情のままに自分の思いをぶつけて陽乃を傷つけてしまった雪子。果たして、二人の仲は戻るのでしょうか。そして、部活結成時からいた３人の関係は……。

第81話　カリフラトラブル（後）

「あれ？」
屋上の施錠に来た恭一は屋上と階段を繋ぐ扉が開いていることに気づいた。
「おかしいなぁ。基本的に誰も出入りはできないはずなんだが」
いちおう扉を開けて確認してみる。すると、柵にもたれかかって俯いている陽乃の姿が目に入った。
「おーい、朝倉」
恭一の声に気づいた陽乃が顔を上げる。何度も目を擦ったようで、何か痕が目の下についている。
「どうした？」
恭一はゆっくりと陽乃の隣に座った。
「ん？」
恭一は隣に来て初めて陽乃の手にしているマウスピースに傷がいっていることに気づいた。
「おい、朝倉。そのマウスピース、落としたのか？」
「……。」
フルフルと小さく首を横に振る陽乃。
「じゃあ、なんで？」
陽乃は少しためらったが、呟いた。
「雪ちゃんに……」
そう言い出すとまた泣き始めた。ブワッと溢れるように流れ出す涙にさすがの恭一も驚いてしまう。
「どうしよう……せっかく翔にプレゼントしてもらったのに……こんなに早く傷つけちゃって……」
「それ、佐野からもらったのか？」
「はい……。誕生日に」
「はぁ～、ずいぶん頑張ったんだな、アイツ」

恭一はまた驚かされた。最近の高校生はいったいどこからそんなお金を出してくるのやら。

「で、なんでそのプレゼントを永井に傷つけられなきゃなんないんだ？」

「実は……」

陽乃はついさっきあったことをすべて話した。

雪子と一緒に練習していて、何かをするとき人と一緒にすれば進むと言ったこと。その例として翔と一緒に勉強したときのことを例に出したら急に雪子が怒り出したこと。

「なるほどねぇ。うん、この時期にはよくあるんだろうな、そういうこと」

恭一はウンウンとうなずいた。

「先生の頃もこんなのあったの？」

「俺は当事者になったことはないけどね。よくあったさ」

「私……どこがいけなかったんだろ」

陽乃はクスン、クスンと声を上げながら自問自答している。

「あのさ、朝倉」

「はい？」

「例えばの話だぞ」

「はい」

「お前と佐野、付き合ってるんだよな？」

「……わかります？」

「バレバレ」

陽乃がそれを聞いて苦笑いした。

「例えば、佐野と朝倉が付き合う前に田中が佐野と付き合っちゃったとしよう」

陽乃はその様子を思い浮かべてみた。なんで美里と翔を例に出したのだろう。関西弁少年とタンバリンで踊り狂う少女（部室で一回だけ目撃した。家でもそうらしい）ではどうも釣り合わない。想像しただけで吹き出しそうになる。

「ところが、朝倉も佐野が大好き。そうとも知らず、田中は佐野と仲良くしてる話を毎日毎日、延々聞かす。そうとは知らない田中に悪気はなくても、朝倉には苦痛じゃないか？」

ありえない。

陽乃はそう思ったが、それは今、翔と付き合っているからそう思えるだけのこと。現実でもし、そうだったら――。

「嫌です」

ハッキリと答えが出た。耐えられない。美里と友達もやっていけなくなるだろう。翔にさえ嫉妬してしまうかもしれない。

「ひょっとしたらだけど、永井も佐野のこと好きなんじゃないかな？」

「あ……」

陽乃の目の前に急に去年の春の出来事が蘇った。

（朝倉さんと佐野くんって、知り合い？）

（率直に聞いていい？　朝倉さんと佐野くんが付き合ってるって、ホント！？）

（よかった！　ありがとう、朝倉さん。聞いて安心した！）

あの時、自分は間違いなく雪子は翔に好意を抱いていると感じた。それなのに、なんだろう。さっきの自分は。

「先生……私、もしかしてとっても悪いことした？」

「え？」

「最悪……。私、雪ちゃんのこと傷つけた。サイテーだ……」

「おいおい、朝倉」

陽乃は完全に取り乱してしまって、恭一の言葉も耳に入っていな

いようだ。再び声を上げて泣き始めた。
「陽ちゃん！」
突然、雪子が階段から飛び出してきた。
「ごめんなさい、ごめんなさい！」
突然のことに陽乃も恭一も唖然としている。
「私、私、陽ちゃんの大切なマウスピース傷つけちゃった……思い出のモノなのに！　ごめんなさい、ごめんなさ……い……」
そこから嗚咽に変わって、声にならなかった。
「私も……ごめんなさい」
陽乃がそっと雪子の肩を抱いた。そこから恭一はそっと離れて階段へ向かった。心配そうに春樹と沙希が見つめているのに気づき、鍵を渡しておいた。
「落ち着いたら、職員室に渡しに来てくれるか？」
「わかりました」
春樹は笑顔で小さくうなずく。沙希も続いてうなずいた。

柵にもたれたまま、雪子と陽乃は話を始めた。
「雪ちゃんは、かけ……佐野に会ったときから好きだったの？　佐野のこと」
陽乃はまた下の名前で呼びそうになって言い直したが、雪子が「いいよ、翔って呼びなよ」と言ってくれたことで少しホッとした。
「そうだね。好きだった。今まで」
「へ？　今まで？」
「うん。今まで。だってさ、佐野くん見てたらわかる。私の入る隙なんてちっともないんだもん」
「そ、そうかな……」

（今は……まだ朝倉なんて呼び捨てにしてるけど……めっちゃ好き）

翔の何気ない、でも強い想いが伝わってくる言葉だった。それを

聞いた瞬間、二人に割って入る隙がないな。雪子はそう感じた。
「愛されてるね」
「へっ！？」
突然、聞きなれないことを言われて陽乃は戸惑った。
「あーあ！　私も次に新しく佐野くんみたいな人見つけないと！」
雪子はサッと立ち上がった。そして、陽乃に手を伸ばす。
「みんな下で待ってくれてるみたい。謝りに行こうよ」
「うん……」
陽乃は少し渋った。あれだけ騒ぎを起こしてしまったのでみんなの前に顔を出しづらい。
「ほら、私のせいなんだから。陽ちゃんは気にしないで行けばいいの」
雪子は優しく笑いかけてくれた。
「わかった」
階段のところへ近づくと、沙希と春樹が屋内にいるのに気づいた。
「話は終わった？」
沙希がニコッと笑いながら言う。
「うん。ありがとうね、沙希ちゃん」
雪子が鍵を受け取り、屋上への戸の鍵をかけた。
「朝倉さん。元気出た？」
春樹が心配そうに聞く。
「もちろん！　私、単純にできてるから」
「よかった～」
春樹はホッとした様子で言う。春樹にも聞きたいことがある。
「ねぇ、水谷くん……」
「ん？」
「さっき、私のこと……」
陽ちゃんって呼んだよね？

そう聞こうとした瞬間、階段下から翔たちが駆け上がってきた。
「おっそいねん、お前ら。もう片付けせなアカン時間やねんぞ」
「あぁ、ゴメンゴメン！　いま下に降りるよ」
沙希が慌てて階段を下る。
「みんな、迷惑かけてゴメンね！」
雪子が階段に響き渡るくらいの声で謝罪した。
「えぇってことよ。ケンカくらいないと、刺激ないしな～」
翔は簡単に笑い飛ばした。陽乃はあっけらかんとした翔に呆けてしまった。
「ほら、陽ちゃんも」
雪子が肩を突いて促す。
「み、みんなー！　ごめ……」
謝ろうとしたところで雪子が口を塞いだ。
「ふぇ？」
「……！」
「えぇ～！？」
「早く！」
陽乃は顔を真っ赤にしたが、雪子が強くうなずいたので大声で言った。
「かける～っ！」
ギョッとして全員が陽乃を見上げた。

「スキ――ッ！」

火がついたように翔の顔が真っ赤になった。
「ヒューヒュー！　モテるねぇ、佐野くん！」
沙希が茶化しを入れた。春樹も隣で顔を赤くしながら「やるじゃん翔！」と口笛吹き持って言う。
翔はクルッと振り返って大声で返した。

「知ってるわぁ、アホーッ！」

バカ笑いする春樹、雪子、沙希。

顔を真っ赤にしながら陽乃が階段を降り、教室へと向かった。それに続き、沙希と春樹も行った。

「永井」

雪子も教室へ向かおうとしたところを、翔が呼び止めた。

「ゴメンな？」

雪子は俯き加減で返した。

「恋愛に、ゴメンもなにもないの」

「……うん」

「頑張ってね。応援、してる」

「ありがとう……」

翔の礼を聞き流すフリをしながら、雪子は鼻歌を歌いながら教室へと向かっていった。

第８１話　カリフラトラブル（後）（後書き）

互いの想いを伝えあった３人。仲違いにならず、温和にこれからも過ごせていけそうな雰囲気になりました。これからの関係にも注目です♪

第８２話　デュエット？

「今日は合奏やってさ～！」
翔が部室へ駆け込んでくるなり言った。新学期が始まって間もない１４日。月曜日は成人の日だったので丸一日休みだった。その前の土日もしっかり休みだったのでわりとみんな元気である。
しかし、合奏という言葉を聞いて絵美と春樹の顔が引きつった。
「え？　合奏？」
絵美が思わずリードを落としそうになってしまう。春樹も取ろうとしていた譜面を滑らせて落としてしまっていた。
「うん！　カリフラみっちりやるらしいで」
翔はあっけらかんと言いながらストラップを吊り、楽器を出し始めた。
「ど、どうする？　水谷くん」
絵美がヒソヒソと耳打ちするが、春樹はボーッとしたままでまったく話を聞いていない。
「もしも～し？　水谷くん」
「あぁ、うん。ど、どうしよう……」
実はあのスーパーカリフラジリスティックエクスピアリアドーシャスにはクラリネットとユーフォニウムのソロがあったのだ。
もちろん、その二つだけというわけではない。トロンボーンにもソロはあったが慎也はいとも簡単にそれを吹いてみせた。意外とリズム感と音感があるのか、一週間も練習をしたらずいぶんと上手くなっていたのだ。
しかし、春樹と絵美のソロと慎也のソロには決定的な違いがあった。
慎也は本当に「ソロ」なのだが春樹と絵美はメロディこそ違うが同時にソロを吹くのだ。いわば、デュエットとでも言うことができる。

二人の息がぴったり合っていないとこの掛け合いはなかなか難しいものがあった。しかも当然といえば当然なのだが、ここでは周りはみんな伴奏だけになり、かなり目立ってしまう。それが春樹にとってかなりのプレッシャーのようで、手が震えたりしてそれが楽器にまで伝わり、普段出しているビヴラートとは違った音の震えになって出てきているのだ。

「どうしよう……。俺、絶対今日の合奏で怒られるよ」

最近、恭一の指導が厳しくなっている。年明け初めての合奏のときに厳しくするとは言われたが、だんだんとそれが身にしみてわかるようになってきている。音程を合わせろ、もっと息を吸え、みんなのことも考えて吹け……。

それが春樹にますますプレッシャーになっていた。合奏と聞いただけでドキドキしてしまう。

「怒られる～って思うとさ、自信なくなっちゃわない？」

絵美は譜面台を立てながら呟いた。

「え？」

「私さぁ、英語の時間に教科書読むように当てられたらそりゃもう緊張するってのなんのって。心臓バックンバックンよ？」

「そ、そうなの？」

春樹はまだ信じられない。絵美はいつもサラリと澄ました顔でクラリネットを吹いている。

「いつも冷静な顔してたから、そんなとは思ってなかったよ」

「あー、あれね。だって真剣な顔しとかないと、先生最近怖いんだもん」

「だよなー！　俺もそう思ってたんだよ。いくら気合い入れるっつっても、あれは怖いよなぁ」

「そうそう！　こないだなんか指揮棒吹っ飛ばしたりしたときはもう心臓止まるかと思った。だって目の前に指揮棒飛んでくるんだもーん！」

「あーそっか、橋本さんって一番先生に近い席だから迫力あるっし

ょ？」
「迫力なんてもんじゃないよ～ホント。参っちゃう」
二人はケラケラと笑いながら楽器を抱えた。
「じゃ、ちょっと合わせてみる？」
絵美が笑顔で言ってくれるとなんだか安心する。
「うん。よろしくお願いします」
力強い目線でしっかりとお互いを見つめ合い、同時に息を吸う。
呼吸、目線、体の動き、表情。別にすべてが合わないと二人のタイミングが合わないというわけではない。しかし、絵美と春樹はこの４つだけでも大事にしてソロを吹こうと決めている。
「行くね？」
「うん」
「１、２、３、４」
絵美のカウントと同時に春樹も息を吸って音を奏でる。絵美のほうがかなり譜面は難しいが、サラッと吹きこなしてしまう。一方の春樹は８分音符の羅列に近い譜面だが、それを聴いてビビッて音がすぼんでしまう。
「あぁ～、もう。また音がすぼんでる」
絵美がしょんぼりした顔で演奏を止めた。春樹も同じようにしょんぼりする。
「あれ？　どうしたの、二人とも。そろそろチューニング始まるよ？」
陽乃が廊下から顔を出した。
「うん……。水谷くんのソロがなかなか私と合わなくって……」
「ソロ？　カリフラの？」
「うん……」
「どれどれ？」
陽乃がチラッと春樹の譜面を覗き込んだ。
「なんだ、８分音符ばっかりじゃん！」
陽乃が軽く笑い飛ばしたので春樹はちょっとブスッとした顔をし

た。
「それが一人だから緊張してるっていうのに」
「一人？」
「そう、一人。ソロだよ？　ソ・ロ！」
「うーん……」
陽乃は不思議そうな顔をした。
「あのさぁ、あたしたちってみんなソロじゃない？」
「へ？」
絵美と春樹が陽乃の言葉に唖然となる。
「いやさ、だって、あたしもトランペット一人でしょ。翔もサックス一人で、えみりんも一人。みさっちもパーカッション一人だし、雪子もホルン一人。本堂くんも、慎ボーも一人だし。例外ってフルートの二人だけじゃない？」
それを聞いて絵美が「あ、そういえば」とうなずいた。
「そ、そう言われればそうだけど……でも」
「ほらほら、男の子がそんなことでウジウジ悩んでたって仕方ないじゃん。みんなソロなんだよ！　それがたまたま目立ってるだけ。そう思えば、こんなこと大したことないって！」
そう言いながら陽乃が春樹の譜面台をたたみ始めた。
「お、おい！」
「とにかく、度胸付けから始めないとね、水谷くんの場合」
そしてそのまま音楽室の方へ駆け出した。
「どこ行くんだよ！？」
「みんなの前で一人で吹いてみれば？　そうしたら自信付くかもよ！」
「ばっ、ばか言うなよお前！」
春樹が慌てて手を引いて止めようとする。
「いーじゃん！　自分の成長のため！　ほら、楽器持ってきて。あたしが譜面と譜面台セットしてあげるから」
「ちょ、そういう意味じゃ……おい！」

陽乃は春樹が止めるのも聞かず、あげく音楽室に入って「水谷くんがソロの部分、みんなに聴いてほしいって！」と大声で言ってしまった。

「なに考えてんだよ～、アイツ……」

春樹がペタンと床に座り込んだ。絵美はうなだれた春樹の右手をガシッと掴み、グイッと強引に引っ張った。

「いてて！？」

「ほら、行くよ！　私も一緒に吹いてあげるから！」

「……わかった」

二人は楽器を持って、そっと音楽室へ入って行った。

第８２話　デュエット？（後書き）

お久しぶりの更新となります（＞＿＜）　大変遅くなって申し訳ありません！

絵美と春樹、翔と陽乃、登場人物たちそれぞれに展開が……。クラブの成長と共に、彼らの成長も見守っていただければ光栄です☆☆

第８３話　開花

「……。」

春樹と絵美は、全員の前で楽器を持って立っていた。というのも、翔と陽乃がこれを提案してきたのだ。

「あたしたちをさ、お客さんだと思って演奏してみてよ」

「お客さん……って言われても。毎日会ってるのに？」

春樹は戸惑いながら全員を見渡した。みんなニコニコしながら春樹と絵美を見つめている。

「なんか照れちゃうね」

絵美が照れ笑いしながら春樹に話しかけた。思わずその表情にドキッとしてしまう。

「俺は照れてなんかいらんないんだけど……」

「とりあえずさぁ、オレらの前で平気で演奏できるようにならんとアカンのちゃうか？」

翔が困った顔をしながらアドバイスする。

「そうなんだけど……なんか変に緊張しちゃって」

「うーん……春樹は監査会のときもそうやったなぁ。拓真とガッチガチに緊張してたやん」

「俺はもう平気だよ」

横から拓真がボソッと突っ込みを入れる。

「え？　拓真、もう平気なわけ？」

「うん」

「ど、どうやって？」

「それは……」

拓真が言おうとしてそれを翔が遮り、春樹の鼻をグイッと指差した。

「そこはお前が見つけな、アカンやろ？」

「……そ、そっか」

春樹は一瞬圧倒されそうになったが、人に言われてわかるより自分でわかりたい。
「とりあえずさ、はしもっちゃんと春やん自身の違いをよーく観察してみ？」
「わ、わかった」
絵美と春樹は楽器を構え、由美子が「5、6、7、8」とカウントを入れてくれた。
絵美が気持ち良さそうにソロを奏でる。春樹はその表情をジッと見ながらユーフォニウムに息を吹き込む。

よく見れば、絵美は吹くのに必死なんかじゃない。

めいっぱい、自分のパートを楽しんでいる。たまに息切れしそうになっても大きく息を吸って、精一杯自分のクラリネットに息を吹き込んで、思いのままに音色を奏でている。
「……！」
春樹と絵美のデュエットが終わる寸前、絵美の表情を見て春樹は鳥肌が立ってしまった。
「ん？　どしたの？」
春樹が呆然と絵美を見つめていた。
「わかった？」
翔が春樹に問うと、小さくうなずいてもう一度楽器を構えた。
「俺、わかった。宮部さん、も一回カウントしてくんない？」
「ＯＫ。いくよ？」
「……ん」
「5、6、7、8」
スゥッと息を大きく吸い込み、いつものように楽器に息を吹き込む。

温かい息。

ユーフォニウムに思いやりを持って。

（伝われ……！　俺の音！）

それまで春樹になかったことが、明らかに全員の目に映った。

絵美と、春樹がほぼ同じ動きで演奏をしている。ノリがいい、とかそういうレベルは超えている。二人が一緒になって、演奏をひとつにしている。メロディーも音質も違うのに、そういうものをとっくに超えている。

「わぁ……！」

陽乃も思わず二人の姿に釘付けになった。

「き、きれい……じゃん」

慎也がトロンボーンをギュッと強く握り締めた。

サァッ、と流れるように二人の音色が音楽室中に響き渡った。

「……はぁっ」

春樹が満足そうに吹き終えてマウスピースから口を離した。

「……。」

思わず、陽乃は拍手をしてしまった。それにつられて、由美子と沙希、雪子も拍手を始める。

「え？」

春樹がそれに戸惑っていると、絵美がギュッと握って笑いかけながら言った。

「さっすが、水谷くん」

「春やん！　それでええねん」

翔が親指をグッと立てて春樹にそう言う。

「え？　え？　どういうこと？」

「……自分の感じたことを」

翔が言おうとしたことを絵美が引き取る。
「自分の感じるままに、演奏すればいいんだよ」
そして一呼吸置いて、続けた。
「演奏をどう表現するかは、演奏者に任されてるんだよ」
「……。」
「先生でもない。お客さんでもない。まして、私のものでもない。水谷くんのソロは、水谷くんのもの」
隣で笑顔で翔が笑う。
「それを大切にしながら、春樹くんらしい音を奏でたら、私はいいと思う」
「そ、そっか……」
二人は特に気にしていないようだが、他のメンバーは唖然としていた。
「やっだぁ！　春樹くんだって！」
沙希がバシバシと由美子の背中を叩いた。
「！！」
二人は同時に顔を赤らめた。それから顔を見合わせてクスッと笑った。
「……サンキュ！」
春樹は陽乃に小さくブイサインを向けた。
陽乃も嬉しそうに、小さくブイサインを返した。

第８３話　開花（後書き）

春樹の才能が遂に開花！？
絵美とのデュエットも成功へ導くことができ、また一歩成長した部員たち。春へ向けて、いろんなことが進んでいきます。

第８４話　ご近所の方々

「それじゃ、今日の合奏はこれで終わろうか」
恭一が指揮棒を指揮台の上に置いてため息をついた。時間は午後7時。
「部長、あいさつ」
「あ、はい！　起立！」
全員が翔の声に促されて立ち上がり、礼をする。
「ありがとうございました！」
「ん、お疲れさん」
恭一は頭をかきながらまたため息をついた。
（なんか変だな……？）
陽乃はいつもと少し違う恭一の様子に首を傾げたが、何がおかしいのかまではわからない。
（先生もいろいろ大変なんだろうな）
陽乃は席についてツバを抜き、楽器を磨き始めた。
「佐野、ちょっといいか？」
「はい？」
恭一に呼ばれて翔が後を追い、二人は部室へと入っていった。
それを見送った後、美里がバタバタと陽乃のもとへ駆け寄った。
「ねぇ、先生なんか変じゃない？」
「あ、やっぱりそう思う？　今日だって合奏のとき何度かため息ついてたもんね」
「水谷くんのことは褒めてたけど、なんかそれ以外は張り合いがないっていうか」
「やっぱねぇ……先生、わかりやすいもんね。テンション高いときと低いとき」
「あ～、それあるよね！　単純なんだね、案外」
「恋で悩んでるのかなぁ？」

美里が同情するように呟いた。
陽乃はハーッと息を吹きかけて楽器を磨きながら「まさか。ミサッチじゃあるまいし」と返すと、美里が真っ赤になって「なんでそこであたしがすぐに出てくんの!?」と怒り出した。
「ゴメンゴメン、冗談だって!」
ひとしきり言い合いをし終えてから、二人は部室のほうを見た。
「まだ出てこないね」
「深刻な話なのかなぁ」
陽乃は既に暗くなった空を見上げて呟いた。

「え?　苦情?」
翔は耳を疑った。
「そう。吹奏楽部の音で近所から苦情が来てるって教頭から伝えられたんだ」
「具体的にはどんな感じなんですか?」
「日曜日はだいたい9時くらいから練習してるだろ?　朝が早すぎて眠れないとか」
「9時って……別に普通やん」
「夜は電気の明かりがまぶしいから夜はなるべく早く終われとかな」
「そんな時間に寝るんかよ」
翔は恭一の説明に1回1回反応していく。
「まぁ、俺も教頭から聞いただけで直接聞いたわけじゃないんだけどな」
恭一はフゥッとため息を漏らした。
「先生、ため息ついたら幸せ逃げますよ」
「ハハハッ!　それもそうだな。しかしまぁ、トラブルってのはどこへ行ってもつき物だしなぁ」
しばらく沈黙が続く。
「そしたら先生」
翔がニィッと笑いながら恭一の顔を覗き込んだ。

「……。」
「先生？」
恭一はしばらくボーッとしていたが、首を小さく振ってから「ん、なんだ？」と返した。
「地域の人にもオレたちの演奏、聴いてもらってオレらの活動応援してもらいましょうよ！」
嬉しそうに笑う翔を見て、恭一が懐かしそうな顔をした。
「オレの顔、なんか付いてます？」
「いや、なんでもない。うん、それもいいと思うが……なんせ曲がそうなるといっぱいいるだろう？」
「んー、そっか。入学式と新歓祭でいっぱいいっぱい……かなぁ」
「でもおまえらの知ってる曲だったらとっつきやすいんじゃないのか？」
「とっつきやすい？　例えば？」
「浜崎あゆみだよ！！」
恭一の目の色が突然変わった。
「へ？　あ、あゆっすか？」
「そう！　浜崎あゆみはお前らも知ってるだろう！？」
ズイッと恭一が翔の座っているソファのほうにまで前のめりになってきた。
「あ、は、まぁ、知ってますけど」
「そうかそうか！　まだお前らの世代でも十分有名なんだな！　いや～先生が大学生の頃にはめちゃめちゃ流行ってなぁ。先生の家にもＣＤからアルバムまで何枚あることか。彼女は日本の歌姫だよ、まさに！」
そこで恭一は翔の目が点になっているのに気づき、咳払いをして顔を赤らめながら続けた。
「んん、でだな、もし演奏会とかをするならお前らの世代でも十分わかるような曲を先生が用意するぞ？」
「浜崎あゆみばっかりにしないでくださいよ？」

翔がニヤニヤしながら釘を刺した。
「わかってるわかってる、心配するな」
恭一は苦笑いしながら返した。
「それじゃ、みんなにも言うといていいですか？」
「そうだな……いつ頃にする？　演奏会自体の実施は」
「２月１４日のバレンタインデーとかどうですか？　カップルとか夫婦とか多そうやし、金曜の夜やから人出多そうですよ」
「なるほどなぁ。そうするか。場所はどうする？」
「七海駅前がいいです！」
「よし。じゃあ、ちょっと駅の人とかに交渉してみるからまだみんなには言わなくていいぞ」
「わかりました。お願いします」
「おう。それじゃ、引き止めてすまんかったな。気をつけて帰れよ？」
「はい！　さようなら」
恭一は小走りで職員室へと戻っていった。
「あんなにあゆについて熱く語られるとは思わんかった……」
フゥッとため息をついてから、クスッと笑いが出てしまう。
最近、恭一は厳しい練習をするようになっていたので少し存在が遠くなっているように感じていた。しかし、ああいうかわいらしい面を見せてくれると翔もなんだかホッとするのだった。
「ホンマにあゆばっかになったら失笑モンやけど」
部室の電気を消して、翔も音楽室へと戻っていった。

第８４話　ご近所の方々（後書き）

東先生の意外な（？）好みがわかってしまった翔。笑いをこらえるのが少し大変そう……？
そして住民からの苦情の件は果たして真か偽か……。

第85話　レッツ！　エイベックス！

「おい、佐野！　佐野！」
翌日。校門のあたりを慎也と歩いていると突然恭一が息を切らせて走ってきた。右手には何かがギッシリ入った封筒を5つ近く抱えている。
「えぇ～、なんでそんな朝からテンション高いんスか？」
翔が少し引いた様子で聞くと、よくぞ聞いてくれたといわんばかりに恭一は封筒をグイッと彼に押し付けた。
「これを見てみろ！」
「えーと？」
翔が封筒の一番上のタイトルを見てみると「Ｂｏｙｓ&ａｍｐ;Ｇｉｒｌｓ」の文字。
「え、これってもしかして」
「風見台高校から昨日、借りてきたんだよ！」
「マジッすか……」
翔が口を開けながら封筒を眺めていると、横から慎也が覗き込んで大声を上げた。
「うお――ッ！　あゆだぁ！」
「！？」
その声に驚いて振り向くと慎也が目をキラキラさせていて、さらに翔の手から封筒を横取りした。
「先生！　いつこの曲するんですか！？」
「おっ、なんだなんだ！　川崎も乗り気だな！　実はだな、来月の14日に七海駅前で演奏会を開こうと思っていてだな、そのときにこの曲を演奏できたらと思っているんだよ」
「マァジっすかぁ！　俺テンション上がってきましたよ――！」
「よぉし、さっそく今日から譜面を配るからパート練習しなさい！」
「ラジャーッ！」

二人がそのまま翔を置いてけぼりにして校門のほうへと歩き出した。
「……マァジっすかぁ」
翔が呆然とした様子で二人の後を追っていると、陽乃が息を切らしながらやって来た。
「おはよー！　今日も寒いね～」
「あ、おはよ」
「どしたの？」
陽乃が手に息を吹きかけながら翔の顔を覗き込む。
「いや……慎也と東先生のギャップに驚かされてるねん」
「は？」
「あぁ、まぁ気にすんな。独り言……」
「ふうん。変なカケル」
「！？」
驚いて翔は陽乃のほうを思いっきり見てしまった。
「んふ。ビックリした？」
「んふって……ったく、朝から驚かせんなよ」
ところがツーテンポくらいズレて陽乃の顔が赤くなった。
「うわっ！　なんやねん、お前今ごろ！」
「あぁ～、やっぱダメダメ！　ねぇ、やっぱりしばらく佐野でいい！？」
真剣な目で陽乃が翔を見上げた。
「う……うん。ってか、むしろオレもそれでお願い。脈拍数が上がって大変ですから」
俯きながら翔はそっと返した。
「うん！　わかった！　ね、それじゃ校門まで競争しよーよ」
「はぁ！？　競争！？」
「うん！　行くよ……よーい、ドン！」
掛け声と同時に陽乃が駆け出したので、慌てて翔も後を追った。

「見ろよー！　これ、この譜面！」
　E組の教室に入ると、なぜか慎也（慎也はD組）が教室にいて沙希に譜面の束を見せていた。
「ひゃー！　何なのよ朝からそのワケのわかんないテンションは」
　沙希も異様なテンションの高さの慎也に少し困った様子だ。
「おはよ、沙希ちゃん」
「おはよー。ねぇ、どうしたのよこのテンション」
　沙希が苦笑いしながら二人に聞いた。もちろん、慎也は譜面に夢中でそんな声など聞こえていないが。
「あぁ、朝に東先生が新しい譜面用意してきたっつーてさ。そんときになんか妙に二人、浜崎あゆみのことで意気投合しちゃってこういうことになってんねん」
「へぇ～。川崎くんってあゆのこと好きなんだ」
「おうよ！　俺彼女の大ファンだから！」
「でもさ、あたしとしては多分この曲、厳しいと思う……」
「へ？　なんで？」
　翔と慎也が同時に沙希の顔を見た。
「見てよ、この木管のパッセージ……」
　慎也と翔は沙希が手渡したフルートの譜面を見て言葉を失った。
「なになに？」
　横入りして見た陽乃も言葉を失う。
　信じられないほど木管楽器に１６分音符が並んでいて、譜面が真っ黒になっているのだ。
「あたしでもこんなのムリだよ、ハッキリ言って。佐野くんも途中からあたしたちフルートと同じ動きしてるけど……吹けそう？」
　翔はそれを聞いて慌てて自分の楽譜を封筒から引っ張り出し、見るなり真っ白になってしまった。
「あ、死んでる」
　陽乃が苦笑いしながら翔の肩を揺すったが、一向に返事はなかった。

その頃、職員室では重苦しい雰囲気が流れていた。
1年生の教職員は特にうなだれた様子だ。
「どうなさるつもりですか、真鍋先生！　今まで体育会の生徒でこのような不祥事はなかったのに……！　おたくの部の生徒が体育会に泥を塗ったようなものですよ！」
村峰教頭が怒り心頭といった様子で野球部顧問の真鍋宗平（まなべそうへい）先生に詰め寄っていた。
「申し訳ありません、教頭！　現在、事実確認をするために1時間目から生徒を呼んでいます。そこで詳しく調査をしますので……お待ちいただけますか？」
「まったく！　監督が行き届いていないからこういうことになるんです！　あぁ、教育委員会にどう説明すれば……」
塔子はオロオロしっぱなしで、いつもの雰囲気は完璧に失われていた。

「あれ？　ユーヘイ。どこ行くん？」
翔が声をかけたのは、相田雄平（あいだゆうへい）だった。野球部に入っているけど小柄な男の子。春樹と一緒くらいの身長で、野球部では小柄ですばしっこいのを活かして既に選手として活躍している。
「うん……ちょっとね」
「顔色、良くないよ。風邪？」
陽乃も心配して声をかけるが「ううん。ホント、何でもないから」と行ってそそくさと部屋を出て行ってしまった。
「なんか……変やな」
翔が肘を突きながら雄平の後ろ姿を目で追う。
「うん。納得いかない」
陽乃は今しがた雄平は閉めた教室のドアを見つめていた。
「沙希ちゃんもそう思わない？」
「思わないほうが変だと思うわ」

沙希は1時間目の保健体育の教科書を閉じて陽乃のほうを向いた。
同時に体育委員が教室に入ってきて「1時間目、自習だって～」
と言った途端、教室がワァッと湧きあがった。
「……どうする？」
陽乃がチラッと翔と沙希の様子をうかがった。
「そんなん、いっこしかないやろ」
翔がニィッと笑って返す。
「だよね！」
3人はそっと教室を出て雄平の後を追った。

第８５話　レッツ！　エイベックス！（後書き）

恐ろしいほど真っ黒だった浜崎あゆみさん「Ｂｏｙｓ&Ｇｉｒｌｓ」の譜面。果たして吹奏楽部はこの曲を演奏するのか！？　そして新しく登場した「相田雄平」はいったい何をしたのか……？

第８６話　真偽のほどは

教室からそっと出て雄平の後を追う翔、陽乃、沙希の３人。途中で誰かに出会ったりしないかが心配で陽乃は心臓がドクドク鳴りっぱなしだったが、怒られるなら２人も一緒だからいいかと思う自分がいて少し嫌にもなっていた。

「お？　職員室ちゃうぞ？」

雄平が２階へ着くなり職員室のある右側ではなく左側へ曲がった。

「生徒指導室？」

沙希が行き先に気づいたようで、驚いた声を上げた。

「相田くんが？」

陽乃も信じられない様子だ。一番信じられないという顔をしているのは翔なのだが。

「雄ちゃんが何かしでかすなんて考えられへんなぁ……」

「まぁアンタじゃあるまいし、粗相はなさそうだけど」

「いや～、オレより朝倉のほうが粗相は多いと思うけどな」

「ちょっと、夫婦漫才みたいなやり取りいらないから静かにしてくんない？」

沙希にそう言われて二人は口をつぐんだ。

（お前のせいで大谷さんに怒られたやんけ）

（アンタが先に吹っかけてきたくせに）

「あ、入っていくよ」

沙希の一言に思わず二人は口をつぐんで生徒指導室をジッと見つめた。

「失礼します……」

雄平が小さな声で挨拶をし、部屋の中へ入ると中には野球部顧問の真鍋先生と村峰教頭がソファに座っている。

「座りなさい」

峰子が強い口調で雄平に命令する。
「はい」
雄平も不服そうにソファに腰掛けた。
同じ頃、三人はそっと生徒指導質の戸に耳を当てていた。
(聞こえる?)
沙希が翔と陽乃に聞く。
(なんとか)
(あたしあんまり聞こえない……)
(それじゃ陽ちゃんこっちおいでよ。私、誰か来ないか見張ってるから)
(わかった)
陽乃は沙希と入れ替わり、翔と一緒に戸に耳を当てた。寒い時期なので戸に耳を当てるとちょっと辛い。
「……するつ……なの?」
塔子のねちっこい声が聞こえてきた。
「だ……おれ……ってない!」
雄平の怒った声。宗平がオロオロした声で雄平をなだめているようだ。
(よく聞こえない……)
陽乃が思いっきり耳を戸に当てた途端、ギシッと音がした。
(おい! バレるやんけ!)
(ご、ごめん。でもよく聞こえなくって)

「だから! 俺じゃないって何回言ったらわかってもらえるんですか!?」
何度もこのやり取りの繰り返しに疲れた雄平は半分投げやりになっていた。
「なんですか! 先生に向かってその態度は! だいたい、そんな態度の子が今回の件に関してやっていないなんて言ったって信じられるはずがないでしょう!」

その一言に、愕然とした様子で雄平はソファに座り込んだ。
「……。」
「あ、相田……」
宗平が雄平に話しかけようとした途端、手を払い除けられた。
「もういいです！　わかりましたよ、俺が野球部退部すればそれで全部丸く収まるんでしょ！」
突然怒った口調で雄平が立ち上がりながら吐き捨て、制服のポケットからしわくちゃになった退部届けをテーブルに投げつけた。
「今までどうもお世話になりました！　最後がこんな形になって残念です！」
それきり宗平と峰子のほうに向き直らず、雄平は早歩きで生徒指導室を出ようとした。

「ヤバッ、こっちに誰か来るで！」
翔の声に陽乃と沙希は驚いて生徒指導室のドアから顔を離した。
「か、翔も早く早く！」
「お、おう！」
翔も慌てて陽乃と沙希のところへ駆け寄った。ちょうど生徒指導室からは見えない位置の階段に隠れる。すぐにドアが開いて雄平が出てきた。
「……ック、ヒク、ヒック……」
雄平は唇を噛み締めながらトボトボと階段のほうへ向かって歩き出した。
（ん！？　ヤバっ！）
翔が慌てて身を引っ込めたが、既に遅かった。
「ん？」
「あ……」
「え、と……」
雄平と3人の目が合った。その瞬間、雄平が踵を返して1階へ階段を駆け下りた。

「ま、待ってよ相田くん！」
慌てて沙希が追いかけた。
「翔！　行くよ」
「当たり前じゃ！」
翔と陽乃もすぐ後を追ったが、１階へ降りたときには沙希も雄平も見当たらなかった。
「いない……」
陽乃はキョロキョロと辺りを見渡すが、やはり見当たらない。
「陽乃……そろそろ教室戻ろうや」
「なんで！？　ほっておけないよ、二人……」
「でもさぁ……オレらが行ったところで雄ちゃんに何ができる？」
「……話を聞くくらいは」
「そんなん、さっきまで聞いてて状況わかってるやん」
「そうだけど……」
冷たい風が吹いてきた。
「クシュッ……」
陽乃が小さいクシャミをした。翔がそっと傍により、上着を陽乃に着せた。
「教室入ろうや」
翔が呟くと、陽乃が小さくうなずいて「わかった……」と答えた。

「待ってってば！」
沙希がようやく雄平に追いついたのは体育館の裏手だった。
「なんで追いかけてくんだよ！」
雄平は沙希の顔を見ずに怒った様子できつく言い放った。
「だって……何したか知んないけど、相田くんがやったんじゃないんでしょ？」
「当たり前じゃん……」
「じゃあ何で？」
雄平はハァッとため息を漏らして落ち葉の上に座り込んだ。

「なんでだろなぁ……」
沙希がゆっくり隣へ行って、少し距離を取って座った。
「野球、嫌いになったの？」
「別に……そういうわけじゃないけど」
「部員の皆は？　何か相田くんに意地悪するわけ？」
「ううん。むしろ、俺が今回の事件……財布が部員のヤツらのが何個かなくなってさ。それを最後まで練習していた俺がやったってあの村ババ、決め付けてきてさ。でも皆は俺がやるはずないってカバッてくれてんの。チョー優しい」
「だったら何で……」
「迷惑かけたくないから」
雄平が毅然とした態度で言った。
「大谷ならどうよ？　大谷がやりもしない罪をなすり付けられて、朝倉や佐野がかばってくれて、でも大谷がなすり付けられた罪のせいで部活が休止になったりしたらどうする？」
「えっ……」
「辞める？」
「……わかんないな」
「自分のせいで部活が休止になるんだぜ？」
「でも、相田くんはやってないわけでしょ？」
「え？」
「ドロボー」
ドロボー、という言葉を聞いていくらかショックを受けているようだ。
「やるわけないじゃん」
「だったら、辞めないで頑張ればいいじゃん！」
「でも、迷惑じゃね？」
「辞められるほうが、迷惑だな、私としては」
「そ、そういうもん？」
「私はね」

「そっか……」
始業のチャイムが鳴った。
「遅刻」
クスッと沙希が笑うので、雄平も釣られた。
「やっぱ次の休憩で退部届け、返してもらう」
「うん。頑張ってよ？」
「もちろん。あのさ、頑張るから、もしレギュラーになったら応援に来てくれる？」
「スッゴいね、それ！　吹奏楽部で応援に行くよ！」
「やったね！　俺、頑張るわ」
はにかんだ様子で雄平が笑った。
（笑ってくれた……）

それだけで良かった。

君の笑顔が見れるだけで。

沙希は胸が温かくなるような気がした。

第８６話　真偽のほどは（後書き）

濡れ衣を着せられた雄平。沙希の説得で逃げずに、しっかりと向き合って行くことを誓うと共に、レギュラー入りも目指す雄平の２００６年はいかに……。

第87話　輝く一日（前）

「うーっ……寒いッ！」
陽乃は家を出るなり背中を丸くして呟いた。隣には、帽子をかぶった翔。最近は毎日一緒に学校に行っている。だけれども、今日はなんだか落ち着かない様子だ。
「ねぇ、どうしたの。今日」
「えっ！？」
予想以上に大きな声で返事が来たので陽乃も少し驚いた。
「や、その。なんかソワソワ落ち着かないじゃん？」
「ん……まぁ、なんやろな。どういうか、今日はその……」
モジモジとしている翔。
珍しい。こういうこともあるんだな、と陽乃は思った。
「あ！　そっか、そうだね！」
陽乃は思い出したようにうなずいた。
「そうそう！　やっと思い出した！？」
「今日は本番だもんね！」
「へ！？」
翔はポカンと口をあけた。
「コンサート！　近所の人たちに私たちが何してるかしっかり理解してもらわないと」
「あぁ……うん。そやな」
ちょっと落胆した様子が陽乃の目に映った。
「佐野？　なんかやっぱり変だよ」
「そんなことないって。もうえぇよ。早よ行こう」
「うん……」
やっぱり何か落ち込んでるようだったが、陽乃には何が原因かさっぱりわからないままだった。

「おっはよーさーん！」
陽乃と翔が教室に入るなり、なぜかまた慎也が翔の机の上に腰掛けていた。
「なんやねん、お前。朝からなんでそないテンション高いかなぁ……」
翔はハァッとため息をついてカバンを椅子の上に置いた。
「えー？　なんで佐野はそんなテンション低いのさ」
「別に……」
翔はまたため息をついてからすぐに立ち上がり、教室を出ようとした。
「あ、おーい。どこ行くんだよ？」
「トイレ」
うなだれた様子で翔は教室を出て行った。
「……ケンカ？」
慎也が陽乃に問いかけると、すぐに陽乃はブルブルと首を横に振った。
「なんだか朝から様子変なの。落ち着きがなかったり、落ち込んだり……」
「そっか～。虫の居所悪いのかもな。ん」
「ん？」
慎也が急に陽乃に手を差し出した。
「なに、その手」
「ん！」
「ん！じゃわかんないし。なに？」
「チョコッ！」
「はい？」
陽乃は不愉快そうに顔をしかめた。
「ちょ・こ・れー・と！」
慎也も少しイラつきながら手を何回も揺らす。
「チョコォ？　お菓子は学校に持ってきちゃダメでしょ」

「そうじゃなくって。今日は何の日だよ？」
「え……と」
陽乃はしばらく考え込んで、すぐに顔が青くなった。
「ひょっとして……」
慎也が恐る恐る聞くと、陽乃はコクリとうなずいた。
「普通に……忘れてました、バレンタイン」

「ってわけですよ。どう思います、美里さん」
翔はトイレの帰りに偶然会った美里に相談を持ちかけていた。
「陽ちゃんねぇ……肝心なところ抜けた子だから。悪気はないんだって」
「そうは言っても……ヘコむ」
ハァッと翔が漏らしたため息が白くなって窓の外へ消えた。
「まぁ、アンタも男の子だしね。期待するのも悪くない」
「やろぉ？　それやのに朝倉ったらさぁ」
「はいー、ストップ」
美里がそこで翔の言葉を止めた。
「ひとつだけ、いい？」
「お、オス」
「陽ちゃんは、間違いなく、あなたのことが好きです」
改めて言われると顔が赤くなる。
「な……意味わからんし！」
「わかりなさいよ～。チョコもらえなかったくらいでスネてたらダメじゃん？　チョコもらえなかっただけで冷めるような恋愛、やってんだ」
「ウ……」
「違うでしょ？」
「ちゃう。そんなコトしてへんし」
言っていてますます恥ずかしくなってきた。

「でしょ。だったら、チョコくらいでウジウジしてないで今日の本番がんばろーぜくらいのノリで教室戻りなよ。ホラ、もうチャイム鳴るしね」
「わ、わかった」
「ヨシッ。じゃ、また放課後ね！」
「おう！　またな！」
翔はスキップ気味で教室へと戻っていった。
その背中を見送りながら、美里も気合いを入れなおす。
「よし！　あたしも頑張るか！」
四角い小さな箱片手に、美里も教室へと戻っていった。

第87話　輝く一日（前）（後書き）

うっかりバレンタインチョコを用意し忘れた陽乃。初めてのバレンタインデーは早くも波乱の予感！？

第88話　輝く一日（中）

「おーい！　陽ちゃん！　スネア運んでくれない？」
美里が陽乃に声をかけた。翔は翔で慎也と一緒にチューバを運んでいる。美里の呼びかけを断ることなどできるはずもなく、陽乃はすぐに返事をした。
「わかった、今行く！」
結局、あの後陽乃は翔に声をかけることもできなかった。あれだけうなだれた様子で教室を出て行った翔だったが、なぜか帰ってきたときにはやたらご機嫌だった。
しかし、陽乃は声をかけるタイミングを逸してしまい、そのまま時間は流れて今はもうバレンタインコンサートの時間。バタバタとしている間に各々が席に着く時間になり、陽乃はモヤモヤした感じで打楽器を運んでいた。
陽乃がすぐ横を通ったので声をかけようとしたが、あっという間に通り過ぎてしまった。
「あ、ひな……」
翔も翔で、陽乃に声をかけることを何回か試みていたが、どうもタイミングが合わない。かけたい言葉はただひとつだというのに。

今日、一緒に帰ろうや。

それだけ。

その一言が、なかなか言えない。何か狙ったかのように他の人たちが邪魔するように翔を呼んだり、翔に用事を頼んでくるのだ。普段はそうしたことに快く引き受ける気分になるのだが、今日に限ってはそういう気持ちになれなかった。
「翔！　椅子運ぼうよ」

春樹が翔を呼び止めた。

（間が悪い日っていうのがあるんやなぁ……）

翔はため息をつきながら、春樹のほうへと向かった。

遂に演奏会の時間がやってきてしまった。今日の司会は、よりによって翔だ。

（佐野！　じ・か・ん！）

恭一がパクパクと口を動かして指示を飛ばすが、翔はちょっとボーっとした様子で指示に気づいていなかった。

「あれ……？　なんか、佐野さん、変だね」

夏樹がふと呟いた。

「へ？　そう？」

綾音が隣で改めて翔の顔を見つめた。

「そうかなぁ。普通やない？」

「ううん。絶対変だよ。ボーっとしてる」

夏樹は陽乃のほうを見た。

「姉ちゃんも変だ」

「……なんかあったんかなぁ」

綾音が心配そうに二人を交互に見つめなおした。

「佐野くん！　司会、司会！」

絵美に声をかけられてそこで初めて翔は我に返った。

「え……と」

雑踏と声が翔の耳に入ってきた。

「ホラ、時間過ぎてるよ！」

「お、おう」

翔は軽く咳払いをしてマイクを手にした。

（久しぶりのコンサートや。成功させるで！）

「皆さん、こんばんは！　七海高等学校吹奏楽部です！」
翔の明るい声に、関東では少ないイントネーションに何人かの通行人が足を止めた。
「僕たち吹奏楽部は、現在１０名という少ない人数で活動しています。毎日夕方まで練習していて、音を立てていますので何かとご迷惑をおかけするとは思いますが、精一杯活動してまいりたいと考えています。今日は、地域の皆さんに少しでも吹奏楽の良さを知っていただければと思います。バレンタインデーコンサートと称しまして、少しの時間ですが、僕たちの演奏を聴いてください」
それだけのナレーションで、既に七海高校吹奏楽部の面々の前には人だかりができていた。翔はなぜか、人を引き寄せる魅力があるようだ。
「まずは１曲目、浜崎あゆみの『Ｂｏｙｓ&Ｇｉｒｌｓ』です。お聴きください」
翔が席に戻り、全員と目を合わせると恭一が小さくうなずいた。
恭一の指揮棒が降りると、１０人の息が合わさった演奏が始まる。１年近く一緒にいたメンバーだ。もう意気投合して演奏することにもなれてきた。
クラリネットとフルート、サックスは細かい指使いの多い曲になっているが、セクション練習を重ねてきたかいもあって無事こなすことができた。トランペットも同じメロディを奏でる。ここは、陽乃が苦手なタンギングがあって、よく合奏後も翔と練習に付き合ってもらった。それなのに、なんだか今日で急に距離ができた気がする。グルグルといろんな考えが陽乃の脳裏をよぎる。
と、そのときだった。
プスッ！

不意に陽乃の集中力が切れて、音が外れた。

それに驚いたのは、他でもない翔だった。同じメロディを吹いていて、ずっと一緒に練習をしてきたが音がズレることはこの曲を合奏し始めるようになってから一度もなかった。それなのに、よりによって本番で音を外したのだ。

（落ち着けって。こっち見ろ……見てくれ、頼むから）

今まで、失敗したら必ず陽乃はチラッと心配そうに翔のほうを見てくれた。なのに、一度も陽乃は翔のほうを見ないまま、Ｂｏｙｓ＆Ｇｉｒｌｓが終わってしまった。

「Ｂｏｙｓ＆Ｇｉｒｌｓでした」

まばらだった観客も、いつのまにか翔たちを取り囲むまでになっていた。

「今日はバレンタイン。カップルやご夫婦でチョコレートの交換ってのも多いんじゃないんでしょうか？」

陽乃は翔のその話に胸がチクッと痛むような感覚に見舞われた。

「そんな今日にピッタリあった曲を中心に……いわば恋を歌うような曲を中心に選曲しました。ちなみに、完全に僕の独断と偏見で選んだ曲です。でも……」

少し間が空いた。スゥッと小さく息を吸い込んで翔は続けた。

「僕が大切に思う人に届けたいメッセージを、この音楽たちに乗せて……代わりに届けたいと考えています。なので……その……」

パチパチパチ、と拍手が沸き起こった。

「ありがとうございます。じゃあ、次の曲……聴いてください。柴咲コウの『色恋粉雪』です」

夏樹がふと、俯いた。

「そっか……。アンタ……この手の曲に弱いねんな」

綾音が呟く。

「うん……。なんか、弱いのオレ」
フルートの優しい音色。沙希と由美子の奏でる音色もずいぶんと合うようになってきた。そのまま主旋律を春樹のユーフォと慎也のトロンボーンが引き取る。
「いいわね……」
綾音が目を閉じた。
「切なくなる……」
夏樹は泣きたい気持ちを抑え込んで耳を澄ました。
サビの部分になって、翔がそっと立ち上がり感情を込めてソロを吹き始めた。もう、胸がいっぱいだ。
歌詞の2番にあたる部分は陽乃がソロを吹いた。
「カッコえぇやん。アンタの姉さん」
「お前の兄貴もなかなか、ね」
さらにサビの部分になって陽乃と翔のデュエットが始まった。
「……憎い演出だね」
夏樹がクスッと笑った。
「ホンマにな」

(佐野と……翔と一緒に吹くことができて嬉しいのに……なんでだろ。なんで今日はこんなことになっちゃったんだろ)

陽乃は『色恋粉雪』を吹き終えてさらに胸がいっぱいになっていた。よりによって、こんな日にこんなことになるとは思っていなかった。

自分がキッカケを作ったのに。

翔は何も悪くない。

自分が心底情けない。

「それでは、早いもので、次の曲で最後となります」
翔の司会にハッと陽乃も我に返る。次で最後。選曲を絞りに絞って、うまく演奏できるこの3曲に最終的に絞ったのだ。
「最後は、ＥＬＴの『出逢った頃のように』を演奏します」
「オォー」という声と共に拍手がパチパチと沸き起こる。
「実は……今日、オレは残念ながら大切な人からバレンタインチョコをもらえませんでした！」
突然の翔の告白に、観客からはドッと笑いが沸き起こった。
「ちょっ、なに言うてんのあのアホ！」
綾音が慌てて陽乃のほうを見た。今にも泣きそうな顔になっている。
（おいおい！　なに言ってんだよ、翔！）
隣にいた慎也もかなり慌てていた。ウルウルと涙目になっている陽乃を見て、美里や雪子もオロオロするばかりだった。
「でも、この曲のタイトル見てて思ったんです」
周りがスッと静かになった。

「チョコもらうために、付き合ってたんやなかったなって」

陽乃の顔がバッと上がった。
「その子と……一緒におれるだけで、最初は嬉しかったです」
ヒューと声が上がる。翔はあっという間に赤くなったが、それでも続けた。
「でも、人間ってだんだんワガママになるんですね。あれしてほしい、これしてほしい。初めの嬉しかった気持ちを忘れて。オレも忘れてたんやと思います。でも、オレの大切な人はずっと純粋にオレを好きでおってくれて……」
翔は目の前にいた夫婦がそっと手を繋ぐのを、見逃さなかった。

「世の中の全夫婦とカップルに捧げます。聴いてください。『出逢った頃のように』」

翔はクルッと踵を返して陽乃たちを見つめた。

（グッジョブ！）

慎也がニッと笑った。翔も笑い返し、その後陽乃を見つめた。

（ダ・イ・ス・キ）

口パクを見て、翔は顔をさらに赤らめた。

（オ・レ・モ）

そう口パクを返し、そのままサックスを構えた。

翔のソロから始まる『出逢った頃のように』は優しく、会場にいた観客を包み込んだ。

第８８話　輝く一日（中）（後書き）

ワガママになっていたと言う翔。
翔の本当の気持ちを知った陽乃。
観客を包み込む、メンバーの演奏。
それぞれにとってかけがえのない、バレンタインデーの一日が過ぎていきます。
さぁ……二人の仲はどうなる！？

第89話　輝く一日（後）

「それじゃ、今日はお疲れ様でした！」
「お疲れ様でしたー！」
恭一の一言に続いて、部員全員が返事をする。
「まぁ、途中には例によって二人ののろけもありましたが」
そこでドッと保護者からも部員たちからも笑い声が沸き起こる。
翔と陽乃はただただ真っ赤になるばかりだ。
「今日は、バレンタインデーです。ご家族で残った時間を……まぁゆっくりするもよし。デートするもよし。楽しく過ごして、また来るたくさんの本番に向けて頑張る鋭気を養ってほしいと思います」
部員たちは元気良く「ハーイ！」と返す。気合い充実だ。
「それじゃ、ここで解散とします。連絡はまた部長から行くと思うんで、佐野、よろしくな」
「ウィッス」
「では、解散！」
恭一の声に部員たちはバラバラに散っていった。雪子は絵美、由美子、沙希の3人とケーキバイキングに行くらしい。春樹、慎也、拓真は特に用事もないから帰る様子。
「ミサッチ！　川崎くん、行かないと帰っちゃうよ」
陽乃がグイグイと背中を押した。
「わ、わかってるって！　深呼吸をしてから……」
スゥー、スゥーと美里は大きく2回、息を吸った。
「ではっ！　出陣してまいります！」
敬礼のポーズを取る美里に同じようにポーズを返し「健闘を祈る！」と陽乃は笑った。
「気合い入りすぎやな」
翔がクスッと笑った。
「あれぐらい気合いがないと、告白なんてできないよ」

「告白？　すんの？」
「あ、言ってなかったね。ずいぶん前から、川崎くんのこと好きだったんだって」
「初耳やし」
「見ててわかってたけど……直接聞いたのは私も一昨日が初めて」
「友達言うても、秘密もあるんやな」
シミジミとした様子で言ったのに、陽乃はｉＰｏｄをセッティングするのに一生懸命で聞いちゃいなかった。
「おーい！　人が頑張ってるのに聞けよぉ」
「え？　あぁ、ゴメンゴメン。だって、これ……」
陽乃がイヤホンを片方、翔のほうに差し出した。
「かっ……」
「え？」

「翔と一緒に聴きたかった……から」

「……はい」
翔はそっと陽乃の手からイヤホンを受け取り、左耳にはめた。
さっき演奏したばかりの『色恋粉雪』だった。ちょうど、もうすぐ翔と陽乃のデュエットのところだ。
「これ……誰が？」
「夏樹。録音するつもりで聴きに来たみたい」
春樹と慎也の音が優しく聞こえる。そのまま、翔のサックスがソロを吹き始めた。
「粉雪舞い降る静かな路面～♪」
陽乃が口ずさむ。翔が続ける。
「暗がりを踊り歩いた～」
ちょうど、今の自分たちのように。

「小さな指先そっと引き寄せ」
翔が指先を陽乃の手に寄せてきた。
「紅色に染まる頬」
思わず陽乃の頬が染まる。
「ねぇ、翔」
「ん？」
「今日……チョコ渡せなかったけど」
「別に気にしてへんて」
陽乃がブルブルと首を横に振った。
「私……翔にプレゼントもらっちゃったね」
「オレから？」
「うん」
翔はしばらく考え込んだが、どうも思い浮かばないようだ。
「何やっけ？」
「……わからない？」
「うん」
「じゃあ……」
陽乃は繋いでいた手を離し、１０メートルほど先に駆けて行った後に叫んだ。
「教えてあーげない！」
「なんやそれー！」
翔も笑いながら陽乃の後を追った。

（嬉しかったよ。翔が「その子と……一緒におれるだけで、最初は嬉しかったです」って言ってくれて。それ以上に、私とソロを吹く前に目を合わせようとしてくれたこと。今日は合わせなかったけど……私、バカでした。今度からは、目を逸らさずに何でも頑張るね）

陽乃が急に顔を翔の体にくっつけてきた。
「わっ！　何？」

翔は思わず離れようとしたが、陽乃は放さない。
「こうしてたいの」
「……そーでっか」
翔は諦めた様子で、でもどこか嬉しそうに陽乃の頭を撫でた。
「あ……雪」
「ホワイト・バレンタインやな」
二人はしばらく、空を見上げて流れていく白い息を見つめていた。

第８９話　輝く一日（後）（後書き）

君と一緒に演奏できるだけでいい。
当たり前のことの大切さを認識できたバレンタイン。
それだけで、二人は十分だと思ったのでした。

美里と慎也の関係はいかに！？

第９０話　一人立ちのとき

２月ももう終わりに差し掛かった２月２０日（月）。音楽室では吹奏楽部員が集まってミーティングを開いていた。

「へ？　ちょ、先生……いま、なんて言いました？」

恭一の声に、素っ頓狂な声を上げたのは意外にも拓真だった。

「だから。春の市吹祭には、七海高校単独で出なければならないということになったんだ」

より詳しく言うと、こういうことだ。

１２月に風見台高校と一緒に出たときは、七海高校の吹奏楽部は技術的にも部活の成熟度としても未熟な点があったがために、特別に合同演奏という形式が認められたのだという。しかし、実際には七海市吹奏楽連盟では合同演奏という形式を認めておらず、原則よほどの事情がない限りは認められないという。

「よほどの事情って……具体的にどんなですか？」

翔が心配そうに聞いた。

「そのあたり、俺もよく確認していなかったから聞いてきたんだが、どうやら顧問が不在であったり極端に参加部員数が少ないというようなことにならない限りは団体ごとに出るというのが原則らしいんだ」

「でも、人数が少ないっていうのはその特別扱いにはならないんですか？」

由美子が聞く。

「それがだな。『参加』部員数であって『在籍』部員数ではないんだよ。この意味の違い、わかるか？」

「あんまり……ってのはあたしだけ！？」

美里が慌てた様子で周りを見渡した。

「や、私もあんまりわかってない」

絵美も手を挙げた。
「要は、『参加』部員数はうちは１０名。部員全員だ。もし、これが例えば朝倉と永井だけが参加となったらどうだ？　演奏は成立するか？」
トランペットとホルンだけでいったい何をどうしろというのか、という状態になってしまう。
「しない。無理」
慎也がボソッと言った。
「ウチは『在籍』部員数は少ない。けど、『参加』部員数では演奏としては成立するんじゃないのか？」
陽乃はグルーリと音楽室を見渡した。

大谷沙希　↓　フルート
宮部由美子↓　フルート
橋本絵美　↓　クラリネット
佐野　翔　↓　アルトサキソフォン
朝倉陽乃　↓　トランペット
川崎慎也　↓　トロンボーン
永井雪子　↓　ホルン
水谷春樹　↓　ユーフォニウム
本堂拓真　↓　チューバ
田中美里　↓　パーカッション
東　恭一　↓　指揮者

なるほど。
演奏会も今まで何回か経験している。演奏もマトモにできてきた。
「でも、だからって私たちだけっていうのはホントやめてほしいです」
ハッキリそう言ったのは他でもない、沙希だった。
「なんだ。大谷にしてはずいぶん弱気だな」

恭一が腕を組みながら問いかけた。
「なんで、大谷はムリだと思うんだ」
「あの……正直言いまして」
沙希は戸惑ったようだが、小さい声で言った。
「プレッシャーがスゴいと思います……」
「なるほどね。プレッシャー」
恭一は椅子をグルンと一回転させてからしばらく考えた。
「でも、この間のバレンタインコンサートは大成功だったじゃないか？」
「あれは……特にそんな緊張するような雰囲気じゃなかったし、そういうつもりでやってなかったですし」
「そういうつもり？」
「そこまで緊張してするような演奏でもないかと思って」
「ふぅん。じゃ、聞くけど」
陽乃は見るからに恭一の機嫌が悪くなっていることに気づいた。
でも、沙希や翔たち他の部員たちは気づいている様子はない。
「大谷は外での演奏と中での演奏で意識を切り替えてるってわけか？」
「まぁ……雰囲気もずいぶん違いますし」
次の瞬間、バァン！と恭一の手が机を叩く大きな音が音楽室中に響いた。なんとなくわかっていた陽乃でもやっぱりビックリしてしまった。
春樹と拓真は呆然と恭一のほうを見つめている。翔は険しい表情をしている。絵美と由美子は何がどうなっているのかサッパリわからず、不安そうに目だけが動いていた。
「意識が低い！！」
恭一が合奏時以外に声を荒げたのは、ここが初めてだった。
「お前らは外での演奏と中での演奏に意識の差をつけるほどのレベ

ルだったのか？　外でも中でも、お客さんはお前らの下手な演奏を聴いてくださっていたんだぞ！　特に、外ではこないだのバレンタインコンサートのように環境が悪い中でも一所懸命お前らが演奏しているから聴いてくださっていたんだ！　それなのに、なんだ！？　お前らの態度は！　けしからん！」

沙希がしばらくして、涙をこぼし始めた。雪子も泣いている。

「せっかく、今回は七海高校が演奏会で一人立ちするチャンスだと思って持ちかけた話だったが、こんな意識しかない部員たちと俺は演奏会に出るつもりなんて毛頭ないからな！　おい、部長！」

「はい！」

恭一が「佐野」と名指しではなく「部長」と呼んだのを、陽乃は初めて聞いた気がした。

「もう一度お前らでよく話し合え！　いったいどういうつもりで今まで指導してきたのかサッパリわからん。お前の努力も足りなかったんだろうな」

「……すみません」

翔が一気に声の勢いを失った。

「1時間、時間を与えるから全員で意見をまとめて来い。演奏に対して、どういう意識でいるのか考えろ。もうじき新入生も来るのに、なんだこのタルミ具合は」

恭一は言葉を乱暴にぶつけるようにして、そのまま音楽室を出て行ってしまった。

「っく……えっく……うぅ……わぁぁぁ～……」

沙希が座り込んで大きな声を上げて泣き始めた。翔が傍へ行き、クシャクシャと頭を撫でる。沙希の隣で、美里も涙を机の上に数滴、こぼしていた。

「もっかい、みんなで意識持ち直そっか。話し合い、しよ？」

そう持ちかけた翔の声も、震えて泣きそうになっていた。

七海高校吹奏楽部始まって以来の試練がやって来ようとしている。

第９０話　一人立ちのとき（後書き）

思わぬタイミングで、恭一からの厳しい言葉を受けてボロボロになった部員たち。翔も精神的に崩れかかった様子だが、持ち直すことはできるのか……？

第９１話　妥協と協力

「えっと……どうしようかなぁ」
翔はとりあえずさっきまで恭一が座っていた椅子に座って全員を見渡した。
沙希は相変わらず涙を流しているし、雪子も肩を震わせている。慎也は何か考えている様子で黙りっぱなし。拓真と春樹はブスッとした様子で窓の外を眺めている。
「ねぇ、いい？」
美里が手を挙げた。
「ん。どうぞ」
ガタ、と椅子を軽く引いて美里が続ける。
「あたしは……別にバレンタインデーコンサートと今度の市吹祭みたいな演奏会とを意識に差をつけたことなんて一度もなかったんだけど」
陽乃がチラッと沙希のほうを見た。唇を噛み締めて悔しそうにしている。
「さっき、沙希ちゃんが『意識切り替えてる』って言ったけど、そんなことしてないあたしにしてみたら、さっきの発言は軽はずみだったんじゃないかと思う」
沙希が手を挙げる。
「じゃあ大谷」
「悪いけど、私は外で演奏するときはそんなに固くならず、リラックスしながら演奏したらいいんじゃないかと思ってそう言ったの。それを先生やミサッチは履き違えて意味を取っただけ。だから別に、私は悪いとは思ってないわ」
美里が若干ムキになって引き取る。
「なんなの、その言い方。あたしはそんな風に聞こえなかった。むしろ、先生と同じように聞こえたわ」

「個人の取り方しだいなのに、そんな言い方されても困るし」
沙希の反論にそれっきり、誰も何も言わなくなってしまった。
「ね、ねぇ。いいかな？」
陽乃がそっと手を挙げた。
「どうぞ」
翔の声もすっかり意気消沈している。陽乃はそっと立ち上がり、続けた。
「私は、別にどっちがどうって意識差をつけたことはなかったけど、ミサッチの言い分も沙希ちゃんの言い分もよくわかるよ。でも、そんなこと言って個人差だのなんだのって言い続けてたら、いつまでもまとまらない気がするんだよね」
「個人の意見を尊重しないって言うの？」
沙希がまたムキになって声を上げた。
「そうじゃなくって、個人の意見を戦わせた上で私たち吹奏楽部の意見っていうのをひとつにする必要があると思うの」
今は5時20分。恭一が怒って部屋を出て行ったのは5時5分頃だったから、まだ時間に余裕はある。
「まずはさ、一人ずつどう思ってるか意見を言ってみようよ。それからじゃないと、進まないし」
陽乃がそう言うと、拓真が手を挙げた。
「俺は、どの本番にもちゃんと力を入れるべきだと思うし今まで抜いてきたことなんてなかったよ。チューバは全員を支える大切な役割だっていう意識があったし、上手くなって少しでも翔や大谷たちみたいな経験者と同じくらいのレベルに持って行きたかった。だから、大谷の言い分もわかるけど……ここはどの演奏にも同等の力をまずは注ぐべきだと思う。じゃないと、まだそんな力抜いてとか分けられるほどのレベルでもないし」
春樹が続ける。
「僕も、拓真に賛成。まだまだ聞き苦しい所だってたくさんあるんだから、ちゃんと先生に言われたことしっかり守って毎回の合奏に

意識高く持って参加していくべきだと思う」
翔が沙希のほうを見た。
「大谷は、どう思う？」
沙希はそっと椅子から立ってしばらく動かなかった。
「……メン」
「え？」
「ゴメン。ちょっと一人で考えさせて」
あまりに早い動きで誰も反応できないくらい、沙希は勢いよく走って音楽室から出て行ってしまった。
「ちょ、サキティ！　待ってよ！」
由美子が慌てて後を追った。
「オレも行ってくる。残ってる人らでちょっと話し合い進めてて」
翔も後を追って音楽室を出た。それを見届けた後で、美里がため息と一緒に呟いた。
「こんなので……新入生入ってきてもまとまらないよ」

「私……なにやってんだろ」
沙希は音楽室から遠く離れた西玄関でため息をついて座り込んだ。別にケンカするつもりなんて鼻からなかったのだが、ちょっとムキになってしまうところがあって、自分もそれが嫌で仕方がない。家でもそれが原因で何度かケンカをしたことがある。
まだ2月。夕方5時にもなると寒くなるし、薄暗くなってくる。
「寒っ……」
沙希はハーッと息を手に吹きかけた。5時30分。あと、30分くらいしか時間がない。話がまとまらなかったら、どうなるんだろうか。
急に2階からザワザワと男子の声が複数聞こえてきた。
「あれ？　大谷？」
雄平がその中にいた。
「相田くん……」

「どうしたんだよ？　部活は？」
雄平はユニフォーム姿でニコニコしながら沙希の隣にチョコンと座った。
「相田ー、先に行っとくぜ？」
「オウ！　悪いけど、そうして」
野球部の友達らしい３人の男子は先に行ってしまった。
「ゴメン！　あ、友達と一緒に帰るなら行ってくれていいよ？」
「いいっていいって。この寒いのにこんなとこで何してんのさ」
「なんだろ……。自己分析？」
「なんだそりゃ」
クスッと雄平が笑った。
「あ、そうそう。さっき、真鍋先生に聞いたんだけど、春の高校野球あるじゃん？」
「うん。３月下旬からあるヤツだよね？」
「そうそう。そこの応援に、お前ら吹奏楽部が来てくれるんだろ？」
「え？」
沙希は驚いた様子で雄平のほうを思わず見つめてしまった。雄平は特に気にも留めず続ける。
「あれ？　東先生から何にも聞いてないんだ。３月の２０日から春の高校野球・神奈川県大会があるんだけど、そこで七海高校野球部が出る試合には、吹奏楽部の応援をつけるって東先生と真鍋先生が話しつけたらしいぜ」
そんなこと、初耳だった。
「それで、さっき東先生と真鍋先生がまた話しててさ。俺たちも混ぜてもらったんだけど、恥ずかしい演奏を聞かせられないから今からしっかり全員の意識を高めておくって先生、気合い入ってたぜ～」
「そ、そうなんだ……」
知らなかった。恭一はそんなこと、ちっとも言っていなかった。
「んで？　気合い入れるって言ってたのに大谷はこんなとこで何してんの？」

「えっと……ちょっと考え事」
「よいしょっと」
雄平は改めて姿勢を変えて座り、沙希の顔を覗き込んだ。
「よかったら、話、聞くよ？」
「うん……」
沙希は重い口を開いた。

「あたしはサキティの言い分もわかるわけよ」
美里が円のど真ん中で言う。残った部員7人で話し合いをしているのだ。
「まぁ落ち着けって。大谷にしろ、田中にしろ、すぐに熱くなりすぎ」
慎也が美里をなだめる。
「大谷さんはクールだしね。多分、彼女なりの落ち着く方法だったとか」
春樹がさり気なくフォローを入れる。それに同意したのは、絵美だった。
「私もそう思うわ。沙希ちゃん、しっかりしててメンバーの中では佐野くんの次に落ち着いてるし」
「ただ、今回の市吹祭を俺たち単独で出るってのはキャパシティを超えてると思ったとか？」
拓真が顔をしかめながら呟く。
「あー、確かにサキティ、クールだけどキャパ少なそうよね」
美里がウンウンとうなずいた。
「結局やっぱり、自分たちのキャパとかいつか超えることが出てくるんだから、ここは協力したり妥協したりして七海高校吹奏楽部の目標とかを決めないとマズいってことだよね」
陽乃が落ち着いた様子でまとめる形で言う。６人が驚いた様子で陽乃を見つめた。
「な、何？」

陽乃がオドオドしながら周りを見つめる。美里がため息を漏らして言った。
「や、急に陽ちゃんがしっかりして見えてビックリしたの」
「そ、そうかな？」
思わず顔が赤くなったが、陽乃は新入生が入ってくると聞いて意識が変わってきているだけなのだ。
オホン、と咳払いをしてから陽乃は続けた。
「みんなでまとまって行かないと、ね」

「やっぱり、そうなのかなぁ……」
沙希がハァッとため息をついた。雄平がユニフォームに付いた泥を払いながら続ける。
「個人の主張も大事だけど、部活ってのはやっぱり団体でしょ？みんなで納得できる形に持っていかないと」
「じゃあ、個人の意見はなおざりにされてもいいの？」
「なおざりにはしないさ。よく検討して、納得した上で進めるよ。野球部って運動部じゃん？　いい加減っぽいかもしんないけど、真鍋先生はそこらへん、しっかりしてる」
うんうん、と自分で確認するように雄平はうなずいた。
「こないだ、相田くんは退部しようとしたのに？」
「休部だよ。あれは俺が独断で責任取ろうとして出しただけ。先生は一切認めてなかった。事実確認をハッキリするまで、そんなことさせないってね。個人の意見をこういう意味でもなおざりにはしなかったんだ。俺がどうでもよけりゃ、受理したほうが楽じゃん？」
確かに。ドラマとかならすぐに休部は認められたかもしれない。
「大谷のいる吹奏楽部のみんな、熱いいい子ばっかじゃん。野球バカの俺たち並に熱い」
雄平が笑いながら言った。沙希もつられて笑う。
「謝って来いよ。それで、話進めて、東先生にこういう目標で行くって言えよ」

「……遅くないかな？」
「全然遅くねぇよ。むしろ、これから。前向き、ポジティヴで」
「……うん」
雄平はスッと立ち上がり、そのまま暗がりにいる人物の肩を叩いた。
「じゃ、後はよろしくお二人さん」
そこにいたのは、翔と由美子だった。
「……ゴメン」
沙希が呟く。
「全然。オレたちも無神経やったかもしれんし」
翔がクスッと笑ってくれたことで、なんとなく沙希は安心できた。
「みんなのトコに、行こ？」
由美子が沙希の手をグイッと引っ張った。意外と強引なところがあるのかもしれない。
「わかった」
沙希は一緒に由美子と手を繋いで歩き出した。
パシッと音がする。
「なんで佐野くんまで私の手、握ろうとすんのよ？」
「や、流れとしてはおかしくないかな～と思って」
「陽ちゃんいるクセに。浮気してるって言うよ？」
「わぁっ、それだけは勘弁！」
大声で由美子と沙希が笑い出した。翔も笑う。
音楽室の前に着くと、真剣な表情で話し合う7人の姿が見えた。
「超マジメ」
翔がスリッパを履き替えた。
「行こうや」
沙希はゴクッと唾を飲み込み、スリッパを履き替えて由美子と翔に挟まれて音楽室へと歩き出した。

第９１話　妥協と協力（後書き）

妥協ではなく、協力することの大切さを知った沙希。重い空気の流れる音楽室へと戻り、沙希が決意したこととは……？

第92話　団結して

「さ、さっきはゴメンなさい」
沙希は音楽室に入るなり、大きくお辞儀をして残っていた7人に向かって謝罪した。
「わ、えっと、そんな！　何もサキティ一人が悪かったわけじゃないし……あたしも、熱くなりやすい単純な性格だからさ。その……」
美里は立ち上がって沙希に向かってお辞儀をして言った。
「言い過ぎました。ゴメンなさい！」
美里と沙希が向かい合ってお辞儀をし合っている姿はなんだか不思議な光景だ。
「ちょっと座ってもらってええかな？」
翔が二人を座るように促す。二人が座ったのを見届けてから、翔は切り出した。
「オレも、考え足りんかったように思います。まずは、ゴメンなさい」
翔は立ち上がるなり、お辞儀をした。
「これからは、もっとみんなの意見しっかりまとめられる部長になるようにします」
「……。」
全員が複雑な表情をした。
「え？　な、なにその微妙な顔は」
「あのさ」
春樹が手を挙げた。
「佐野くんは、そうやって全部一人で抱え込んじゃうんですか？」
「え……？」
「佐野くんは、全部自分で責任とかを抱え込もうとするんですか？」
春樹の的を射た質問に翔は思わず答えに窮してしまった。
「いや、だってオレはこの吹奏楽部の部長やし」

ありきたりな答えしか出てこない。
「別に、部長イコール責任や考えを全部負う人じゃないでしょ？」
翔は黙り込んでしまった。
「もっと、俺たちを頼ってほしいと思います」
「……。」
慎也が続けた。
「俺たち、頼んない？」
「いや、むしろ、みんながいてくれることですっごいオレは嬉しい」
「だったらさ」
絵美が笑顔で引き取った。
「みんなで協力して吹奏楽部、作っていこうよ」
「みんなで楽しい時間も辛い時間も共有したいなー、なんて私は思ってます」
陽乃がニッコリ笑って言うと、途端に翔が涙をこぼし始めた。
「えぇ！？」
拓真が驚いて駆け寄る。沙希も慌ててハンカチを取り出して（陽乃にゴメンと目配せは忘れなかった）駆け寄った。
「ゴメン……なんか、嬉しくって」
裏返った声で喋りながら翔が沙希のハンカチを受け取った。
「じゃあ……行く？」
由美子が職員室を指差した。
「行く……か」

ガラガラガラ、と職員室の戸が開く音を聞いて恭一はその方向を見た。
翔たち１０人が強張った表情で並んでいる。恭一と目が合うとさらにその表情が硬くなった。
「あ、あの、先生！　話し合いがまとまったので……」
翔が言い終わる前に、恭一が翔たちのほうへ近づいてきた。
「もういいよ」

「え？」
「もういい。何も言わなくていい」
恭一の一言に全員が愕然とした。それを見て恭一は自分の言葉の意味を全員が穿き違えていると確認し、正確に言い直した。
「お前らの意見はまとまった。だから、全員で来たんだろ？」
「あ、そうです！」
「じゃあ、それをあえて俺に言う必要なんてない。お前らが決めたことをしっかりと守っていってくれたら、俺はそれで十分だから」
「は、はい！」
１０人分の声が職員室中に響いた。
「さぁ、今度吹く『大草原の歌』の初見合奏やってみるか？」
「ハイ！」
恭一の後をゾロゾロと１０人は付いていく。
「おもしろい先生と部員が揃ったもんですな、吹奏楽部は」
校長の光治が彼らの背中を見送りながら笑った。
「ね、村峰先生」
お茶を差し出した村峰教頭に光治は話を振った。
「私は音楽が苦手なので……よくわかりませんが」
「あなたにも音楽の良さがわかる日がすぐに来ますよ」
「そうですかね……」
塔子が監査会のときの翔の真剣な表情を思い出した。
「あの子たちなら、そんな演奏をしてくれる気もしますね」
「先生とも長かったですけど、もう少しだけになっちゃいましたね」
光治が寂しそうに呟いた。
「やだ、先生。同じ市内なんですから、会おうと思えばいつでも会えるじゃないですか」
「そうですね……。先生、それまで教頭としての職、全うしてくださいよ」
「当たり前ですよ、校長」
外から翔たちの笑い声が聞こえる。二人はそれを聞いて笑い合っ

た。

第９２話　団結して（後書き）

意味深な塔子と光治の会話が示すものとは？
そして、翔たちの決めたこととは？　謎を多く残したままで、次話へと続いていきます♪

第９３話　副部長

「ねぇねぇ、佐野くんからメール回ってきた？」
雪子が陽乃に楽器を磨きながら話しかけた。
「メール？　何の？」
「あれ？　回ってきてない？」
「あ、ひょっとして明日の袴田中学校の定期演奏会のこと？」
由美子も沙希も楽器を磨きながら会話に加わった。どうやら彼女たちも知っているようだった。陽乃だけ何のことかサッパリわからない。
「私、そんなメール回ってきてない……」
落ち込んだ様子で陽乃がケータイを取り出してメールを見直し始めた。
「そうなの？」
雪子が横にくっついて一緒にメールを確認し始める。陽乃はずっと受信ボックスをスクロールさせて確認していくが、１００件近く確認してもそれらしきメールは見当たらなかった。
「送ってない……のかなぁ」
雪子が不思議そうに首をかしげて自分のケータイを取り出し、陽乃にそのメールを見せてくれた。

♪演奏会のお知らせ♪
七海市立袴田中学校吹奏楽部　第１２回定期演奏会
日時：２００６年3月１２日（日）　午後1時３０分開場　午後２時開演
場所：七海市立クリエイトホール　大ホール
入場料：無料
曲目：列車で行こう☆ルーマニア民族舞曲☆スカイ・ハイ☆ディズ

ニーメドレー2ほか

☆七海高校に入ってくれる予定の子たちもたくさんおるから、みんなで応援しに行こう～（＾∀＾）ノ　Ｂｙ　佐野　翔

「私ホントにこんなメール来てないよ～」
陽乃はガックリ肩を落とした。
「とりあえずさ、私から転送するから！　ドンマイドンマイ！」
雪子が励ますように言ってくれることで、少しは落ち着きを取り戻せた気もした。
「えっ！？　メール送ってない！？」
同時に翔の声が響いてきた。拓真が手を合わせて謝っている。
「ホントーっにゴメン！　受信はしたけど、回し忘れてた……」
「どおりで返信ないわけや。ったくもー」
翔がため息を漏らした。
「朝倉～、ちょっといい？」
「なに？」
ふてくされた様子で陽乃が返事をしたので、相当怒っているようだと翔は察知した。
「あー、なんていうか……」
「なによ。なんで私にメールし忘れたわけ？」
「朝倉さん！」
拓真がそこへ割って入ってきた。
「ゴメン！　俺が素でメール転送し忘れてたの！」
「へ？　本堂くんが？」
陽乃はわけがわからない。雪子や由美子たちのメールは翔から送られてきていた。
「あ、そういえば」
雪子が思い出したように言った。

「これ、転送されたから送ってきたのは絵美ちゃんだ」
「あー、ホントだ。初歩的な勘違いだね」
沙希もクスクスと笑う。
よく見れば、メールの最後に「佐野　翔」とあるだけで、送信した人は翔ではない。
「なぁんだ……私の取り越し苦労？」
「ホントごめん！」
拓真がそれでも謝ってくるので、逆に申し訳ない。
「いや、別にいいの。それより、なんで私がまた佐野に返信しなきゃなんないの？」
それを聞いて翔が一瞬戸惑った様子を見せたが、すぐに返した。
「んとな……実は東先生が『朝倉には副部長をやってほしい』って言いはって……だから、最後に副責任者が責任者のオレに返信する形にしよっかな～って……」
陽乃はしばらく固まった後、大声を上げた。
「私が副部長～！？」
雪子と沙希、由美子の3人がパチパチと拍手をする。
「俺は賛成～」
拓真がニコニコしながら言う。
「俺も」
春樹がユーフォニウム越しに声を出した。
「同じく」
慎也もトロンボーンのスライドを伸ばしながら答えた。
「後の女子部員は問答無用で陽ちゃんを押してまーす」
美里がマリンバを鳴らしながら返した。
「ってわけなんやけど……どっかな？」
翔がニッと笑いながら陽乃に聞いた。

（副部長？　私が？）
「そ、それって、これから2年間ずっと？」

「もちろん！　だって、オレらより上の人っておらへんもん」
「そ、そうだよね……」
責任が重すぎる気がする。
翔のようにリーダーシップが取れる人ならいいが、自分には向いていない。それに、副部長をやるなんて知ったら祥夫はかなり反対するだろう。
「もうちょっと考えていい？」
「……そやんなぁ。重い話やし。えぇよ」
「いつまでに答え出せばいい？」
「明日」
翔はあっさり答えた。
「明日！？」
「うん。演奏会が終わる頃までに、で。演奏会、行くやろ？」
「行くけど……」
「じゃあそれで。今日一晩、じっくり考えてきてな」
「うん……わかった」
陽乃はそう言ってしまったが、言った後に断れば良かったと思った。

「ちょっと遠回りして帰らない？」
そう言い出したのは絵美だった。
「いいけど、どこ行くの？」
陽乃は絵美が寄り道をして帰るなんて珍しいと少し驚いた。
「袴田中学校」
音楽室の扉を思い切り絵美は開いた。
「こんにちはー！」
絵美が大きな声で挨拶をすると、中にいた中学生たちが「こんにちはー！」とそれ以上に大きな声で挨拶を返してくれた。陽乃はその雰囲気に少し圧倒されてしまう。
「陽ちゃん、こっちこっち！」

絵美は手招きし、陽乃を呼んだ。陽乃が呼ばれた場所へ行くと、指揮台の横に椅子が二つ並んでいる。
「座っていいの？」
「うん！　ついでに、みんなの演奏聴いていこうよ」
「え！　でも、先生に許可もらってないし」
「大丈夫。昨日のうちに行くって大高先生には伝えておいたから」
絵美は言い終わった後、クラリネットの後輩らしい男の子のところへ駆け寄って何か指導を始めた。
なんとなく所在ない感じになった陽乃は中学生たちを見回す。自分と大して身長差のない男の子がチューバを抱えていたり、まだまだ手が長くないのでスライドを伸ばすのに苦労している子もいる。自分たちも1年前は楽器を持ってもどうしていいかサッパリわからず、なんとなく吹いていただけだったのが懐かしい。
そのうちの一人とカチッと目が合った。
その子はサッと立ち上がり、バスクラリネットを置いて陽乃の元へ駆け寄ってきた。
「こんにちは！　お久しぶりです！」
それは逢沢（あいざわ）駿（しゅん）だった。
「逢沢くん！　あ、合格おめでとう！」
「わ、ありがとうございます！　俺、絶対ナナ高の吹奏楽部入りたかったんで、めちゃくちゃ頑張って勉強したんです。来月から先輩と一緒に演奏できるの、楽しみにしてますね！」
「あぁ～、先輩かぁ……うん！　私も楽しみにしてる！」
「それに、先輩、副部長をされてるんですよね？」
「え？」
「はっしゃん先輩から聞きました」
はっしゃん。
橋本。

橋本　絵美。

陽乃はキッと絵美を睨んだ。それを見て絵美は視線を逸らす。
「先輩？」
駿に声をかけられて、陽乃は我に返った。
「副部長、頑張ってくださいね！」
「うん……それなんだけど」
まだするかどうかわからない、と返そうとしたところで大高先生が入ってきたので駿は「演奏会、来てくださいね！」と念を押して自分の席へと戻ってしまった。
陽乃もトボトボと席に戻る。
「ゴメン。言っちゃったんだ、昨日」
絵美がしょんぼりしながら呟いた。
「いいよ。でも……」
「でも？」
「逢沢くんたち、私を期待してるんだなっていうのはわかった」
「それは、確実」
陽乃は手を握り締め、絵美に言った。
「私、副部長、やってみるよ」
「陽ちゃん……がんばれ！」
陽乃はもう一度強くうなずいた。

（みんなとなら、きっとやっていける）

駿たちの力強い演奏を聴きながら、陽乃は確信した。

第９３話　副部長（後書き）

副部長というポストへの重みを感じながらも、それ以上に期待に応えたいという陽乃は副部長に就くことに決めました。来年度に向けて、どんどんと七海高校吹奏楽部は動いていきます☆

第９４話　次世代登場

「あ、朝倉！　永井！　こっちこっち！」
翔に呼ばれて二人は手を繋いで走り始めた。
「ゴメーン！　ちょっと家出るのが遅くなっちゃって……」
雪子が息を切らせながら言う。
「まぁまぁ、時間までまだまだ余裕あるからゆっくりでも良かったのに」
翔がやたらと息切れしてしんどそうな二人に若干引きながら言った。
「だって、ゆっくり七海高校に来る子がどんな子か、プログラムでチェックしたかったんだもん」
陽乃に至っては汗までかいている。確かに最近暖かくなってはきたが、ちょっと汗をかくにはまだ早い季節だ。
「佐野くん。プログラムってどこでもらえるの？」
雪子が必死になってキョロキョロとあちこちを確認する。それを見て思わず翔は噴き出してしまった。
「落ち着けって。開場が１時３０分で、今まだ１５分やんけ。まだまだ時間かかるわ」
「よ、よし。陽ちゃん、お茶飲もう」
「う、うん」
二人は柱にもたれてお茶を飲み始めた。
「あ！　朝倉先輩！　永井先輩！　佐野先輩！」
聞き覚えのあるその声は駿だった。
「おう、駿ちゃん」
翔も嬉しそうに手を振る。
「久しぶり～！　元気してた？」
雪子がそれ以上に元気良く手を振った。
駿の後ろには男の子が二人、女の子が三人ついてきていた。

「その子らは？」
翔が聞いた。駿は全員を手招きして「ちゃんと挨拶して名前とか自己紹介して」と五人に促す。
なで肩の男の子が白いキレイな歯を出して笑いながら挨拶を始めた。
「オーボエで４月から先輩方にお世話になる、野村健之佑（のむらけんのすけ）です！　今日は演奏会に来てくださってありがとうございます！」
「きゃあ！　オーボエなの！」
雪子が飛び上がって喜んだ。雪子は最近、オーボエの音色に夢中になっているのだ。
「はいはい！　次、あたしあたし！」
健之佑を突き飛ばして出てきたのは、少し小柄な女の子。雰囲気が絵美にそっくりだ。
「あたし、クラリネット吹いてます伊原光瑠（いはらひかる）って言います！　よろしくお願いします」
「やっぱりクラリネットだった！」
陽乃がバッチリ当てたとでも言いたそうな顔をした。光瑠が不思議そうに首をかしげて「やっぱり？」と聞き返す。陽乃は笑顔で答えなおした。
「うん、クラリネットで橋本さんって子がいるんだけど、ホント伊原さんと雰囲気そっくりなの」
「わぁ～、そうなんですか！　気が合いそうです」
光瑠はパチパチと拍手をして嬉しそうにしている。
「はーい、次は私だよ」
ハスキーボイスで背の高い子が出てきた。
「テナーサックス吹いてる西嶋（にしじま）はるかって言います。よろしくお願いします、佐野先輩」
「おー！　テナーサックス！　待ってましたよ！」
翔が嬉しそうに笑うと、はるかは恥ずかしそうに笑った。横から駿が茶々を入れた。

「コイツ、実家がスナックなんでとても色っぽい音色吹くんで、期待しててくださいね」
それを聞いた途端、はるかが真っ赤になった。
「ちょっと！　なんでそんなプライバシーいきなりバラすのよ！　先輩たちたっくさんいるのに！」
「いいじゃん。どうせバレることなんだから」
二人のやり取りを見て、思わず雪子も陽乃も翔も笑ってしまった。
「あ……もう！　恥ずかしいだろ」
「アンタがスナックの話なんてするからでしょ」
プィッとはるかも駿も顔を背けてしまった。
「はいはいはーい、そこまでー」
二人の間に割って入ったのは、おだんごの髪型がかわいらしい女の子だった。
「次は、私。久野彩香（くのあやか）って言います。これから2年間、お世話になります。朝倉先輩」
「きゃー！　かっわいい～！　お人形さんみたいー！」
陽乃は思わずギュッと彩香を抱きしめてしまった。
「ちょちょ、先輩！　いきなりはビックリするじゃないですかぁ」
「あぁ、ゴメンゴメン……。つい妹みたいに見えちゃって」
陽乃はすぐに彩香を解放した。
「先輩、おもしろいですね～」
「そ、そうかな？」
翔がツッコミを入れた。
「気をつけや、久野さん。襲われるかもしれんで？」
「へ？」
「ちょっと！　まだ純粋な久野さんに変なこと吹き込まないで！」
陽乃がまた彩香を抱きしめた。
「先輩、先輩！」
「あぁ……ゴメンなさい」
陽乃がまた彩香を解放すると、爆笑が沸き起こった。

「ホーント、4月から楽しみですよ。な、ヒロ」
ヒロと呼ばれた少年が少し驚いた様子でこちらに向き直った。
「ヒロ、自己紹介」
「お、おう」
ヒロは一歩前へ踏み出した。
「パーカッションで主にティンパニ担当することが多い、冨岡洋之(とみおかひろゆき)です……よろしくお願いします」
「パーカッションですって!?」
突然、陽乃と翔の前に現れたのは美里だった。
「うわっ！　ちょ、なんやねんお前！　突然生えてくんなや！」
翔が2、3回美里の頭を軽く叩いた。
「生えるってなによ、失礼ね」
美里は触られたあたりの頭を手ではたき、洋之の手を強く握り締めた。途端に洋之の顔が少し赤くなった。
「パーカッション、あたし一人だったのよ。心強い！　絶対入ってきてね！」
「ハ、ハイ。もちろんッス」
洋之は顔は赤いが、冷静に返した。
「じゃあみんな、そろそろチューニングの時間やし楽屋帰ろっか」
駿に促されて5人はゾロゾロと楽屋へと引き返し始めた。
「ホント騒々しくってすみません」
駿が苦笑いする。翔も陽乃も首を振った。
「いやいや。4月から楽しみやわ。な、みんな」
「ホントだよ。久野さんと早くパート練習したい」
陽乃はキラキラ目を輝かせている。美里もウキウキした様子で「ヒロくんかぁ……イケメンだったなぁ」と違う路線で目を輝かせていた。
「……変な先輩ばっかでゴメンな」
翔が苦笑いしながら駿の肩を軽く叩いた。
「いえいえ。俺も楽しみッス。それじゃ、ヘタな演奏ですけど楽し

んでいってくださいね！」
「うん！　がんばれー！」
全員で駿たちを見送ったと同時に開場。しばらくしてから絵美、慎也、春樹、拓真がやってきた。沙希と由美子はまだ少し時間がかかるということで、先に中に入って待つことにした。
「わぁ～……クリエイトホールもキレイだねぇ」
入るなり、美里がため息を漏らした。
「ホント……中央ホールも大きかったけど、ここも負けてないね」
雪子も天井に吊り下げられたシャンデリアを見て同じようにため息を漏らした。
「雪ちゃん、ミサッチ！　今日のプログラムだよ！」
陽乃が8冊もプログラムを抱えて戻ってきた。順番に一人ずつ渡し、それぞれが夢中になってプログラムを見始めた。

校長、ＰＴＡ会長、保護者会会長、顧問、部長の挨拶が初めに載っていた。
「あっ！　逢沢くん、部長なんだ」
ここへきて知った事実。昨日、様子を見に行った陽乃ですら知らなかった。
「絵美ちゃんは知ってた？」
陽乃が聞くと、絵美はペロッと舌を出して「ゴメン、知らなかった」と笑った。
続いてページをめくると、曲目が出てきた。

☆第1部　クラシックス・ステージ☆
☆列車で行こう　作曲：川村昌樹（かわむらまさき）
☆ルーマニア民族舞曲　作曲：バルトーク・ベーラ・ヴィクトル・ヤーノシュ
☆リバーダンス　作曲：Ｂ．ウィーラン

☆メリーウィドウ・セレクション　　作曲：フランツ・レハール　編曲：鈴木英史

★第2部　ステージ・マーチングショー★
～Ｌｅｔ，ｓ　Ｓｗｉｎｇ♪　グレン・ミラー☆ワールド～

♪第3部　ポップス・ステージ♪
♪スカイ・ハイ
♪ジャパニーズグラフィティー１０～時代劇絵巻～
♪Ｍｙ　Ｗａｙ
♪キャラバンの到着
♪千と千尋の神隠し
♪ディズニーメドレー2

それを見ただけで翔と沙希以外の全員が黙り込んでしまった。
「どした？」
「こ、こんなに演奏するもんなの？　定期演奏会って……」
陽乃は何かの間違いだろうと思って翔に聞いた。しかし、翔はいとも簡単に続けた。
「うん。ふつうやけど？」
「うっそ……」
「あ、カルチャーショック受けてる？」
後ろから聞き覚えのある声がしたので振り返ると、修平と由衣が立っていた。
「オッス！　久しぶり、二人とも」
翔が嬉しそうに挨拶をした。
「久しぶりだね～！　仲良くしてる？　二人とも」
由衣がニコニコしながら翔と陽乃に聞いた。陽乃は由衣に付き合ってることを言った覚えはなかったが、どうやら翔が修平に言って、修平が由衣に言ってしまったようだ。別に構わないが。

「それより、一緒に演奏聴かない？」
雪子が二人を誘った。修平と由衣はしばらく顔を見合わせてから
「じゃあ、よろしく」と同時に返した。
ゾロゾロと１０人連れが揃ってホール内に入る。中央ホールほどではないが、やはり広い。翔は、このホール独特の雰囲気、匂いが好きだ。中学校の頃からいろんなホールへ行ったけれども、どのホールも同じ空気がある。
修平も同じことを考えていた。何十回と同じホールへ行っても演奏前の独特の緊張感、演奏が終わった瞬間の達成感。どこのホールへ行ってもそれは同じだ。
気づけば、修平と翔は隣同士で座っていた。
「えぇんかよ。朝倉さんの隣やなくって」
修平がツンツンと肩を叩いて言った。翔も同じようにして返す。
「お前こそ、濱口さん寂しがってるんちゃうん？」
そう言われた後に、二人は陽乃と由衣のほうを見た。まったく二人のことなど気にせず、彼女たちは彼女たちで盛り上がっているようだ。
「ま、えっか。たまには」
修平が笑うので、翔も笑って「オレらもくつろぎたいし」と言った。
「今の、失言やな」
修平がククッと笑う。
「思った」
翔も笑うと同時に、演奏開始のベルが鳴った。幕が開いて、駿や彩香、洋之、はるかの姿が目に入った。
（そういえば……七海高校に来る子たちってどれだけいるんだろ）
陽乃はプログラムを開いて部員メンバーのところを見て驚きを隠せなかった。

★３年生・進学先★

・逢沢　駿（七海）
・安藤　奈美（風見台）
・伊原　光瑠（七海）
・右川　順平（七海）
・鍛冶屋　恵（横浜西）
・工藤比呂菜（川崎北）
・小林　梨子（七海）
・佐竹　美月（登戸）
・冨岡　洋之（七海）
・中野さゆり（七海）
・西嶋はるか（七海）
・野村健之佑（七海）

12人いる3年生部員のうち、8人が七海高校に進学したのだ。
「マジですか……」
陽乃が愕然としていたとき、1曲目の『列車で行こう』が始まった。

第９４話　次世代登場（後書き）

七海高校進学者の思わぬ数の多さに陽乃が引いているうちに、袴田高校の演奏会が開始！　果たして、中学生たちの実力とはいかに！？

第９５話　実力差

いきなり打楽器から始まった「列車で行こう」。洋之はスネアを叩いている。グロッケンを奏でている女の子の手の早さが尋常ではないように美里や陽乃には映った。

続いてオーボエとフルートの掛け合いが始まる。さっきまであれほど明るく話していたとは思えない真剣な様子で、しかしどこか余裕を持ったようにも見える様子で健之佑は素早く指を動かしてパッセージを吹きこなしていく。フルートの女の子も健之佑とうまく掛け合いを保っている。自分たちならあんな風にできるかどうか考えると、陽乃は少し不安になった。

木管楽器の目にも留まらぬ速さのパッセージが終わったかと思えば、トロンボーン、ユーフォニウム、チューバがメロディを奏でる。翔がふと隣を見ると、拓真と春樹が唖然としていた。短いメロディではあったが、彼らにとっては未知の世界だったのかもしれない。

何度か複雑なパッセージが余りにも多く繰り返されたので、陽乃はとっくに曲がどうなっているのか把握できなくなっていた。翔はというと、雰囲気が変わって流れてきた妖しげなサックスのメロディにすっかり聞き惚れているようで、まったく他に関心が行っていない。

（みんな中学生なのにうまいなぁ……）

陽乃の中で少し不安が出始めていた。

演奏会に全員が夢中になって気づけば４０分近く経っていて、第１部最後の曲「メリーウィドウセレクション」の終盤に差し掛かっていた。

「列車で行こう」の後に演奏された「ルーマニア民族舞曲」では健之佑が何度もソロを吹き、アルトサックスの３年生（確か、中野さゆりと名前があった）もソロを吹いていた。最後の楽章では金管

高音楽器と木管楽器が初めに、引き継ぐように金管低音楽器がメロディを吹いていたが、両方ともかなり迫力のある演奏になっていた。

「リバーダンス」ではソプラノサックスがどこで息継ぎをしているのかわからないくらいのスピードでメロディを奏でた。打楽器の勇壮な音色とトランペットの見事な高音部のメロディは圧巻だった。

そしてこの「メリーウィドウセレクション」。今年の袴田中学校のコンクール自由曲だったという。時間制限があるのである程度カットした部分もあるものの、やわらかい音色と明るい音色、3拍子のワルツなどいろんな曲風があるためかなり難しいだろうと陽乃は感じた。しかし、中学生たちはみんな余裕という表情を浮かべながら演奏している。

遂にメリーウィドウのフィナーレがやってきた。チューバやトロンボーンの力強いメロディが流れ、全員で同じ音を奏でて一気に演奏が終わる。全員の音がホールを包み込むようにして響き渡り、余韻がしばらく残った後にシン、と静かな時間が続いた。

それからすぐに拍手が沸き起こった。陽乃や美里、雪子も思わず無心に拍手をした。ただただ純粋に彼らの演奏に驚かされたのだ。

15分間の休憩時間。

陽乃と雪子は表へ出てロビーで買ってきたジュース片手に話し込んでいた。

「どうよ、雪ちゃん」

「ねぇ……。どうなんでしょう」

雪子がハァッとため息をついた。七海高校へ進学してくるホルンの右川順平（うがわじゅんぺい）。男の子だからという理由もあるのだろうけれど、音の芯の太さが雪子と比べ物にならないほどしっかりしている。それに、楽器歴だけでも既に雪子と2年もの差がある。実力差は明らかだ。

陽乃もそれは同じ。トランペットの3年生、久野彩香（くのあやか）。彼女もおそらくは中学校から楽器を吹き始めたのだろうけれども、とても陽乃が教えるような立場に立てるレベルではないような気さえしてく

る。
「はぁ～……あたしたちがあの子たちを指導できるような立場じゃないよね……」
「ホント。私なんかまだ音外すときあるのに」
沈黙が続く。ズズッと陽乃がお茶をすするようにオレンジジュースを飲んだ。それを聞いた雪子が思わず笑う。
「4月からあたしたち、ちゃんとやってけるのかなぁ？」
「ほーんと、心配……」
すると、入り口からご機嫌な二人組みが出てきた。
「なんでアンタたちはそんなテンションハイなわけ？」
陽乃が頬杖を付きながら聞いた。春樹と拓真だ。
「え？　俺たちのテンション高い理由？」
春樹がアップルジュース片手に陽乃の隣に座った。春樹の隣に拓真。かなり身長差が目立つ。身体的にデコボココンビかもしれない。
「そりゃあひとつしかないだろ、朝倉」
拓真がコーヒーを開けた。さっきのを訂正しよう。中身もデコボココンビかもしれない。ジュースとコーヒー。子供と大人の飲み物のようなイメージがある。
「なんかさ、あの子たちが入ってきたらますますやる気出そう！」
春樹がそう言ったのを聞いて思わず雪子と陽乃は耳を疑った。
「そ、そういうもん？」
「え？　朝倉たちはそうじゃないの？」
拓真が信じられないといった顔で聞き返した。
「う、うん。あたしはむしろ、不安」
「何が？」
また聞き返してくる。
「そ、それは……」
「それは？」
なんだろう。

楽器のレベルが違うから？

それもそうかもしれない。

でも、それだけではない。

若さ？

まさか。ひとつしか年が変わらないのに。

やる気？

やる気がないわけではない。むしろ、これから先輩になるんだからある。

人数？

人数が多すぎるのかも。支えきれない。

でも、やる気があればいける。

自信がない？

いや。ソロだって吹いたことあるんだ。自信がないわけではない。

なんだろう。

なにが不安なんだろう。

やっぱり、楽器のレベル？

練習すればいいだけ……。

「陽ちゃん！　ジュース、こぼれてる、こぼれてる！」

雪子に呼びかけられて陽乃はようやくジュースを缶を握りなおした。しかし、残念ながら大半は地面を濡らしてしまっていた。

「あーあ……もったいない」
春樹が残念そうに呟いた。拓真が陽乃の濡れたスカートをティッシュで拭いた。
「なんだろ。なんか不安。何が不安かよくわかんないけど、なんか不安」
陽乃は呆然としたまま拓真に返した。
「今すぐ解決できそうな不安か？　それ」
陽乃は拓真の問いに小さく首を横に振った。
「だったら、今すぐ解決する必要なんてなくね？」
「そうかな？」
「少なくとも、俺はそう思ってる。そりゃまぁ、俺にだって不安の一つや二つあるけど、そんなの考えてる暇があったら練習して、うまくなったほうがいいかなって思うし」
なるほど。簡単だけど、そのほうがいいのかもしれないと陽乃は思う。
「拓やん、頭単純そうだよね」
春樹の一言でいい雰囲気が一気に吹き飛んだ。
「お前、空気読めよ。せっかく俺がいい雰囲気でいい言葉言ったのに。バーカ」
拓真がゴツンと春樹の頭を叩いた。こうして二人を見ていると兄弟のようだ。
「そんなこと考えてるより、今日の袴田中学のみんなの演奏聴いて自分たちの何か参考になるもの見つけたほうがいいって！」
それもそうかもしれない。まだ来てもいない先のことを考えてもいい時と悪いときがあるだろう。今は悪い方向へ向かっていたから、考えないほうがいいのかもしれない。
陽乃は残っていたジュースを一気飲みした。
「行こっか！」
陽乃は3人に笑いかけた。
「おう！　行くぞ、ハル」

「うん！」
春樹と拓真が前を行く。
「あたしたちが不安になってちゃ、ついて来る子も来なくなっちゃうからね」
陽乃は雪子の手を繋いでそう言った。
「そうかもしれないね」
少し間を空けて、雪子もそう返した。
ホールのいい匂いがまた陽乃の鼻に入ってきた。陽乃もこの匂いが好きになりそうだ。

第９５話　実力差（後書き）

単純だけれども、大事な拓真の一言で不安をかき消せた陽乃と雪子。
不安材料になりかけていた袴田中学の吹奏楽部の子たちの音色をいい意味で盗んで成長できるか、七海高校！？

第９６話　おめでとう！

ふと陽乃は左腕にしている時計を見た。もう４時だ。演奏会は２時間くらいするものだと聞いて、そのときは長いと思ったがこうして聴いていると意外と時間は短く感じるものだ。気づけばディズニーメドレー２が始まっていた。

ディズニーの曲はいつ聴いても夢があるような曲ばかりだ。このディズニーメドレー２にはチムチムチェリーや不思議の国のアリス、ビビディバビディブーなどが入っている。

ジッパ・ディー・ドゥー・ダーから始まった陽気なディズニーメドレー２。スーパーカリフラジリスティックエクスピアリドーシャスに突然切り替わった。こうしたディズニーメドレーをはじめとする曲は「ニュー・サウンズ・イン・ブラス」というＣＤを出しているところがあるとインターネットで調べて陽乃は知った。こうしたＣＤの発売なども吹奏楽が活発になる一因になっているのかもしれない。

ジッパ・ディー・ドゥー・ダーではタンバリンの音色に合わせて手拍子が始まった。七海高校の面々もテンションが上がって手拍子を始める。春樹と拓真なんてとても楽しそうだ。

スーパーカリフラジリスティックエクスピアリドーシャス。ホルンの音色が高らかに鳴る。もっと賑やかになってきたところで、西嶋はるかが前へ出てきた。ソロを吹くようだ。

いつも翔の吹くアルトサックスの音だけ聴き慣れていただけに、テナーサックスの音色はとても新鮮に感じる。実家がスナックというはるか。家でもひょっとしたら吹いているのかもしれない。妙に色っぽい音を出すのだ。

陽乃は鳥肌が立ったのがわかった。

続いて突然短調の曲に変わった。チムチムチェリーだ。そのとき前に出てきたのは久野彩香だった。

「あやちゃーん！」

彩香の友達らしい数名が名前を呼んだ。そういえば、さっきのはるかのときも「はるーっ！」と声援が飛んだ。ソロが終わるたびに名前を呼んでもらっている。ポップスの曲は観客もノリが良くなるようだ。ソロを吹き終えた彩香はブイサインを額のあたりに決めて席へ戻る。続いてユーフォニウムとトロンボーンの女子がソリ（※1）を始めた。春樹と拓真はワクワクした様子でそのソロを聴いている。

続いてビビディバビディブーが始まった。前へ出てきたのは光瑠と小林梨子（こばやしりこ）というエスクラリネットの女の子。二人とも七海高校へ進学する。かわいらしいメロディを奏でてまたまた手拍子を誘う。

やがてビビディバビディブーが転調してゆっくりの曲に変わった。続いて前へ出てきたのはまたしてもはるか。そしてアルトサックスの中野（なかの）さゆりと後輩らしい女の子、バリトンサックスの男の子だ。サックスカルテットといったところか。

それがとても中学生の奏でる音とは思えないほどビヴラートがかかっている。翔だけでなく、陽乃や雪子はもちろん、観客全員がその音に聴き惚れている。

そしていよいよディズニーメドレー2の最後に差し掛かった。最後の曲は「きみも飛べるよ」だ。フルートのあまりに早すぎるパッセージの後に金管楽器のメロディが聞こえる。最後に相応しい、華やかな曲調だ。

大高先生が一気に指揮棒を振り切ると、ホール中に袴田中学校吹奏楽部のメンバーが奏でる音が余韻を残して陽乃たちの耳に響き渡った。

満足そうに大高先生はメンバーたちに立つように指示し、彼らが立ったのを確認してから観客席に向き直って深々とお辞儀をした。

客席からは割れんばかりに拍手が鳴り響く。陽乃たちは経験したことのない雰囲気に少し圧倒されつつも、それが演奏会の雰囲気だというのを知れたことがなんとなく嬉しかった。

大高先生はお辞儀を終えると、舞台袖へと去っていった。ここで演奏会は終わりかなと思った陽乃は荷物を片付け始めた。

「なにしてんの？」

翔が陽乃を呼び止めた。

「え？　だって先生舞台袖に出て行ったから演奏会もう終わりでしょ？」

隣で美里や雪子も同じように片付けの体制に入っている。それを見た春樹や拓真も慌てて片付けようとしていた。

「まぁまぁ、初めてやからしゃーないけど。これからが演奏会の醍醐味味わえるトコやで。もうちょっと待っとき」

翔は笑顔で陽乃や春樹の肩を叩いて座らせた。

しばらくすると、拍手がいつの間にかひとつになって手拍子へと変わっていた。そこへ大高先生がマイクと花が１０本ほど入った入れ物片手に再び出てきた。

深々ともう一度お辞儀をする先生。マイクのスイッチを入れて喋り始めた。

「本日は、七海市立袴田中学校吹奏楽部、第１２回定期演奏会にご来場いただき、誠にありがとうございます」

割れんばかりに鳴り響く拍手。大高先生は続けた。

「今日で、３年生１２名は引退となります。それぞれ進路先も決定し、私としてもホッと一安心です」

また拍手。陽乃はこうした演奏会は初めてだったので、起きる出来事ひとつひとつに驚くばかりだ。

「思えば、彼らは一番大変な学年ではなかったかと思います。私がこの袴田中学校へ赴任してきたのは、昨年の４月でした。彼らが最上級生としてクラブを引っ張っていくときに顧問が変わったというのはとても混乱を招く出来事ではなかったかと思います。それでも、彼らは文句ひとつ言わずにただ私を慕ってついて来てくれました。本当に感謝してもしきれません……」

そこで大高先生は言葉を詰まらせた。涙がこぼれているのだろう

か。陽乃の席からではそれは確認できないが、俯いているところから察するとおそらくそうだろう。すると、客席から「大高先生がんばってー！」と女子生徒の声援が複数飛んできた。

ふと見れば、沙希と由美子がハンカチ片手に思いっきり涙を流していた。

「ぼうダベ（もうだめ）……あたぢ、こういぶ（こういう）の弱いの……」

沙希はすっかり鼻声になっている。

「演奏会って……こんな涙出るとはおぼってながった」

さらに反対側の席では拓真と春樹がティッシュを交換し合いながら鼻水と涙を拭いている。みんな涙腺がゆるみっぱなしだ。

「それでは、3年生を紹介します」

その一言をキッカケに、コブクロの「桜」が流れ始めた。これには陽乃もヤラれてしまい、一筋涙がこぼれ落ちた。

「フルート、安藤奈美！」

「はい！」

大高先生の力強い声にさらに強く答えたのは、安藤という女の子だった。

「クラリネット、伊原光瑠！」

「はいっ！」

光瑠だ。どこか絵美に似た雰囲気を持った彼女は既に涙で顔がグシャグシャになっている。

「エスクラリネット、小林梨子！」

「ハイ！」

小柄な女の子。彼女も4月から七海高校の仲間になる。

しばらく七海高校には来ない子たちが呼ばれ続け、次に来たのはさゆりだった。

「アルトサキソフォン、中野さゆり！」

「……は、……はいっ！」

さゆりは泣きすぎで声が裏返った。「さゆりー！」と先ほどの女

子たちが声援を送ると、さゆりは嬉しそうに手を振った。
「オーボエ、野村健之佑！」
「ウイッス！」
健之佑は笑顔で大高先生の元へ走り、そのまま先生を抱きしめた。
「ヒューッ！」
ホール内から声援が飛ぶ。大柄な健之佑がすると余計に大胆に見える。
「テナーサキソフォン、西嶋はるか！」
「はぁい！」
はるかは努めて笑顔で先生の元へ駆け寄るが、先生の顔を見た途端に泣き始めた。
「ホルン、右川順平！」
「ハイっ！」
順平は既に何回も目を擦ったらしく、顔が真っ赤になっている。
「トランペット、久野彩香！」
「ひゃいっ！」
彩香も泣きすぎて声がまともに出ない。思わず、陽乃は叫んでいた。
「久野さーん！　おつかれーっ！」
その声にすぐに彩香は反応し「朝倉せんぱーい！　ありがとございまーす！」と返してくれた。手も振ってくれた。陽乃の場所を把握していたらしい。
「陽ちゃん、大胆だねぇ！」
美里が泣き笑いの状態で言う。陽乃も同じように泣き笑いになりながら「だって、なんか言いたくなっちゃって」と返した。
「副部長、パーカッション、冨岡洋之！」
「ハイッ！」
洋之は初めて見たときは堅い印象を受けたが、今は満面の笑みだった。
「部長、バスクラリネット、逢沢　駿！」

「ハイ！」
駿は笑顔で大高先生と握手を交わし、舞台中央に立った。先生からマイクを受け取る。
「本日はお忙しい中、七海市立袴田中学校吹奏楽部、第１２回定期演奏会に……たくさんご来場っ……」
駿の言葉が詰まる。男子女子問わず「しゅーん！　がんばー！」という声援が聞こえてくる。
「たくさんご来場いただきまっ……して、ありがとうございます！」
その一言を言い切った瞬間、ワァッと拍手が沸き起こった。
「僕たちが3年生に進級してから顧問が大高先生に変わったとき、僕たちも戸惑ったこともありました。でも、それ以上に先生も大変だったと思います。普段から以前の先生のやり方にこだわったりしていましたが、僕とよく話し合いをして先生らしい教え方でお願いしますと言いました。そうしたら、これまで吹奏楽コンクール地区大会で銀賞がやっとだった僕たちが今年は金賞を受賞し、神奈川県大会でも銀賞をいただけました。初めての経験でしたが、マーチングコンテストの出場、夏合宿や焼肉パーティーなどいろんなことを企画してくれて、普段の活動以外でもとても楽しく過ごさせてくれました」
半泣きで続けるので言葉が早口になっている。それでも一言一句はっきり駿の声は観客に聞こえていた。
「住宅地のど真ん中にある袴田中学校ですので、コンクール前には夜遅くまで練習することもあり、ご近所の方にはご迷惑をかけたと思います。それでも、僕たちが近くの公園でぴちコンサートなどを開いたときには暖かい拍手や声援をいただけて……とても感謝しています」
何度目になるかわからない拍手が起こる。
「それだけでなく、コンクールのときにお手伝いしていただけた保護者の皆さん、指導してくださった先生方や先輩方、そして本日の演奏会に来てくださった皆さんのおかげで、袴田中学校吹奏楽部は

これまでも、そしてこれからも活動していけると感じています。本日は、本当にありがとうございました！」

言い終わった瞬間、ホール内から一番大きな拍手が沸き起こった。やがて、駿たちが舞台から降りて客席のステップを上がっていく。

「久野さん！」

彩香がそばを通ったので、陽乃は思いっきり手を伸ばした。

「先輩！　泣きすぎちゃいました！」

彩香が涙をこすりながら嬉しそうに笑う。

「あたしも！　もらい泣きしすぎた！」

「今日はありがとうございました！」

彩香はどんどん遠ざかっていったが、陽乃は最後に大声で彩香に向かって叫んだ。

「引退おめでとーっ！」

演奏会終了後。

七海高校のメンバー全員が泣きすぎで目の辺りが腫れぼったくなっていた。

「泣きすぎた……」

絵美がまだハンカチ片手に鼻声で呟く。

「あたしも」

ズビーッとすごい音を立てて美里が鼻をすすった。

「えーっと……予想以上に感激しまして、オレもまともにみんなの顔が見れません」

翔が鼻づまりの声で全員に呼びかけた。その瞬間、９人はゲラゲラと大声で笑い出した。

「笑うなや！　めっちゃ感動してんやん！」

翔は恥ずかしそうに目をこすった。

「あんまりこすると目がもっと腫れちゃいまっせ」

下手な関西弁で美里がツッコミを入れる。

「うっさいわ！　へったくそな関西弁使うな！」
翔はもう一度咳払いをして続けた。
「えっと、それじゃ今日はこれでもう終わりなんですがその前に……」
翔は陽乃に目配せした。陽乃は少し緊張した面持ちで立ち上がって全員の前に立った。
「こっ、このたび……」
緊張して頭が回らない。スーッと深呼吸をする。
「サッサとせぇや～」
翔が茶化すように横から口出しした。
「うるさいわね！　いま気持ちの準備してるの！」
デジャヴ。入学したての頃、翔と似たようなやり取りをした気がする。
「このたび、副部長に立候補した朝倉陽乃でっす！　がんばるので、よろしくお願いします！」
しばらく間を空けて全員が拍手を送った。
「頼むよ～、副部長！」
慎也が一番嬉しそうに拍手をしている。
「それじゃ、副部長の挨拶で終わろっか！」
翔がドンッと陽乃の背中を押した。
「気をつけ！」
全員の姿勢が固くなる。
「礼っ！」
「ありがとうございましたー！」
顔を上げてから、陽乃は翔のほうを見た。
「お疲れ！　ほんで、これからよろしく！」
「……うん、頼んないけど、よろしくね」
クスッと二人は向き合って笑った。
陽乃の家へ着いたのは午後5時半。3月中旬でもまだ肌寒く、暗

くなるのも早い。英語で言うと「トワイライト」という時間帯。月と太陽二つの光が入れ混じるから「Ｔｗｉ・Ｌｉｇｈｔ」らしい。どこかで聞いた話だった。

日本語では「黄昏（たそがれ）」の時間。もともと「誰そ彼」という字を書いたらしい。夕闇で誰かがはっきり確認できないから、ということらしい。これは古文の授業で聞いた。

実際、少し前を行く翔の姿は夕闇に紛れてハッキリ確認できない。

「着いた」

気づけばもう陽乃の家の前だった。時間が経つのはとても早い。

「今日はお疲れさん」

「ううん。あたし、なんかやる気出たよ！　袴田中の子たちに負けないように練習がんばらないと」

「オレも部長として４月からもっと気合い入れていくわ」

ニカッと翔が笑った。こんなに屈託なく笑う人、そういないだろう。

「それじゃ、ありがとね」

「おう。またな」

陽乃はしばらく手を振って翔を見送ってから家の中へ入ろうとした。

「陽乃！」

後ろから翔の声。息を荒げながら戻ってきている。

「どしたの？」

「渡したい物あったのに忘れてた」

翔はペロッと舌を出してから制服の左ポケットからそれを取り出した。

「なになに？」

「開けてみ」

陽乃はわくわくしながら袋を開けた。

中に入っていたのはトランペットの携帯ストラップだった。

「わぁ～！　かわいい！」
キラキラ光るデザインのそれは小さいけれど、薄暗い中でもわかるくらい光を反射させて光っていた。
「見て」
翔は自分の携帯電話を右ポケットから取り出した。同じデザインのアルトサックスの携帯ストラップが付いている。
「あっ……」
「オソロイ」
カァッと陽乃の顔が熱くなる。
「なっ、なんか照れるな……」
「オレは嬉しいな」
そんなにかわいい笑い方されると胸が苦しくなる。犯罪でしょ、その顔はと言いたくなるくらいに陽乃の胸は苦しくなっていた。でも、嫌な苦しみではない。
「でも、なんで……？」
「何が？」
「誕生日でもないのに」
「うん……。まぁ、なんつーか。25日でさ、付き合い始めて3ヶ月になるやん。でも、オレ彼氏らしいこと陽乃にしてあげれてなかった気がしたから……その、なんていうか」
赤くなっている。薄暗い闇を照らすように街灯が点(とも)った。
「……！？」
翔は思わず目を見開いた。陽乃のほうから唇を重ねてきたのだ。
「アリガト。じゃあ、また明日ね」

陽乃はゆっくり手を振って家の中へと入っていった。
翔は唇を人差し指でなぞった。まだ感触が残っている。

「急すぎるっちゅーの」
クスッと笑って翔は自転車に跨り、家路へと着いた。

第９６話　おめでとう！（後書き）

初めての定期演奏会鑑賞を終えた七海高校の吹奏楽部員たちは涙でボロボロに。それでも陽乃が副部長をすると言ったときにはきちんと歓迎するあたりは絆の強さの表れでもあるのかもしれません。

第97話　Ｂｌａｃｋ　Ｏｕｔ

３月２１日（祝）。今日は七海市吹奏楽連盟第１３６回定期演奏会だ。ようやく春らしくなってきたとはいえ、まだ少し寒さが残る。

「おーい、こっちこっち！　どこ行くねんお前ら」

ちょっと気を抜くとすぐに部員たちは人ごみに埋もれて見えなくなってしまうので、翔はまったく気を抜くことができない。

「え、あ、みんなー！　こっちこっち！」

陽乃が大声でまったく違う方向へ行こうとする部員たちを呼び止めた。

翔が吹奏楽部の部員たちを先導する。あまりに多すぎる人に埋もれて少しパニックを起こしているのは雪子。背があまり高くないので、すぐに見えなくなってしまう。そして方向音痴と自負してやまない絵美は突拍子もないほうへしょっちゅう歩いていくので、まるで保護者のように拓真が後ろから見張っている。

「ふぃ～、やっと楽器置き場着いた」

「楽器置き場って……ここ？」

陽乃は唖然とした。そこは思いっきりホールのロビー入り口から少し歩いた自販機の目の前だ。

「うん。そうやで？　ほら、もうじき受付の時間やから楽器出して準備せな」

「う、うん……」

陽乃は言われるがまま楽器を準備し始める。なんだかずっと周りに見られている気がして落ち着かない。

「ほら、もう先生が受付済ませてくれてるからぼちぼち音出しする部屋行くで」

「あ、はい！　今行きます！」

陽乃は慌ててトランペットにマウスピースを差し込み、翔の後を追った。

「……。」
音出しする部屋の前で陽乃が顔を強ばらせて立っている。
「どないしてん、陽乃」
翔がそっと話しかける。
「や、だってふつうに緊張しない？」
よく見れば手がガクガク震えている。
「なんやねん、もう。普段からは考えられへん感じやな」
翔がクスッと笑う。いつもならそこで顔を緩めてくれるのだけれど、今日の陽乃は違った。ちっとも表情が変わらない。
「もー……。いつもの演奏会とそんなに変わらへんやろ。ちょっとホールが大きくなっただけやん」
「でもお客さんの人数が全然違うじゃない」
「でも知ってた？　舞台照明が明るいから結構客席って暗くて奥のほうって見えへんねんで」
「でも近くのほうにいる人もいるじゃん。とても視線感じるし、何より前のときより人数が少ないから絶対一人当たりが見られる率とか上がるじゃん」
「でもトランペットは舞台の奥のほうだろ？」
「でもメロディとか多いから絶対目立って見られるほうが多い」
さっきから二人は「でも、でも」の繰り返しだ。これではいつまでたっても埒が明かない。
「でも演奏したくないわけじゃないっしょ？」
「そ、そりゃあ……もちろん」
「じゃあ、ええ方法教えたるわ」
翔がそっと陽乃の耳に口を近づけた。
「ふぇいっ！」
陽乃は思わず耳を遠ざけてしまった。
「な、なんやねんその声」
「やっ、別に！　それでいい方法って何？」

「ほれ、耳貸せ。えぇか……」

続いてやってきたのは合奏室。ここで全体チューニングと合わせておきたい箇所を確認する。七海市内の中学校、高校の吹奏楽部はけっこう人数の多いところがほとんどなので、七海高校のような少人数は七海高校を含めて市内でも3校くらいしかない。

室内に入るとやたらと多い椅子の数に少し違和感を感じた。

「多いね、椅子」

絵美が苦笑いしながら美里に言う。

「どうする？　絵美ちゃんの列とか10個くらい椅子あるんだけど」

「ホーント。でもさ、片付けられないもん。しょうがないね」

「フルートもやたらと椅子があるねぇ」

沙希が参ったという感じで由美子に話しかける。

「うーん……逆に笑いが出ちゃうね」

「4月からはさ！」

春樹がユーフォニウムの席に座って叫んだ。

「ここの列いーっぱいにしたいな！」

「俺もそう思いまーす！」

拓真も楽譜をセッティングしながら叫んだ。

「その意見、賛成～！」

慎也がトロンボーンのスライドを前後させながら引き取る。

「おーい、いつまで喋ってんだ。早く音出ししろ」

恭一が指揮棒片手にやる気マンマンで入ってきた。

「先生、いつになくやる気マンマンだね」

雪子がおもしろそうに笑った。恭一はスコアを譜面台に広げる。

「おいおい、それじゃまるで俺が普段はやる気がないような言い方だな」

「別にそんな意味で言ったわけじゃないですよ。やだなぁ」

「はいはい！　話はそこまで！　続きは終わってからにするか」

恭一が指揮棒を握ると、全員の表情が変わった。

「それじゃ、チューニングのＢ（ベー）からな」
「はい！」
「３、４」
１０人の音がひとつになる。今日は絶好調。キレイに音がひとつになった。
しかし、その直後。
プゥアッ！
「こら！　朝倉！　なんだその気の緩んだ音は！」
「すっ、すいません！　ちょっとジャガイモが……」
陽乃はそう言って続きを言うのをやめた。ちょっと恥ずかしい気がするからだ。
「ジャガイモ？」
恭一の不思議そうな声に「いいえ！　何でもないです。ホントすいません」と陽乃はその場を適当にやり過ごした。
「それじゃ、そこでストップしてください」
役員の先生がストップをかける。七海高校のリハーサルも含めた時間はここまでだ。時間は午前１１時２０分。七海高校の出演時間は午前１１時４５分から。
「ようし。それじゃ、そろそろ移動するぞ。移動は素早くな」
「はい！」
部員たちはいそいそと譜面をたたみ「ありがとうございました！」と元気良く役員の先生にお礼を言って部屋を後にする。
舞台までの通路を通るとき、まさにその通路の真上では各学校の演奏が行われている。その音に耳を傾けつつ通路を通っていると、陽乃の隣に翔が駆け寄ってきた。
「おまえなぁ。チューニングの最中に何もみんなを野菜に例えるこ

とないやろ」
「え？　いや、だって舞台上で急にお客さんを野菜に例えようったって無理があるじゃん。だから、練習しておこうって思って」
　さっき翔が言った「いい方法」。それは観客を何か物に例えておけばあまり意識せずに演奏できるというものだった。翔の場合、果物に例えるらしい。太ったおじさんはスイカ、着飾ったおばさんはメロン、中学生はみんなリンゴといった具合に。物が見ていると思えば緊張もしない。いわゆる暗示だろう。
　陽乃の場合はそれを野菜にしてみた。野菜のほうが数が多いから。それで、練習のために部員を野菜に例えてみた。沙希はスマートなので細いネギ。小柄な雪子はミニトマト。大柄な拓真は大根（決して大根脚という意味ではない）といった具合に。それで、慎也はなんだろうと考えてみた。微妙だ。なかなか例えるものがない。ふと、トロンボーンで高音を吹いているときにたまに顔を赤くしているところから人参に似ていると想像したら笑いがこみ上げてきて、結果、さっきのような情けない音が出たというわけだ。
「それにしても……本番中に笑われたらたまらんなぁ」
　翔は真剣な顔をして悩む素振りを見せた。
「や！　それだったらお客さんの顔が見えなくなればオッケーなわけよ！」
「そんなもん、どないすんねん」
「例えばさ、照明消しちゃうとか！」
「アホか。譜面はどないすんねんな」
「それはみんな暗譜してきたから問題ないでしょ」
「まぁ、そうやけど……でも指揮は？　見えへんかったら曲に入ろうにも入られへんやろ」
「先生がイチ、ニ、サン！とか言えばオッケーでしょ」
「……なんか短絡的やなぁ」
　翔がフッと笑う。少しコバカにしたような、でも優しい笑い方。この笑顔を見ると安心する。

「そっかな？」
陽乃はそういった感情を出さないように冷静に返した。
二人が少しズレたやり取りをしている間に舞台裏へ到着した。ひとつ前の団体が演奏をしている最中だ。
緊張のあまり、その団体の演奏はちっとも耳に入らない。そうこうしている間に照明が落ち、係員らしい同級生くらいの子がサッとカーテンを開けた。
「七海高校吹奏楽部さん、どうぞ」
その声に翔と沙希以外の全員の顔が明らかに強ばった。陽乃の心臓がこれ以上ないというくらいに鳴り響いている。
拓真が先頭を切り、春樹、慎也、陽乃、翔、絵美、沙希、由美子、雪子、美里と入っていく。途中「少ねぇなー、ここ」という少年の声が聞こえたが、そんなことはちっとも気にならない。
（うわっ！　なにやってんの、お母さんたち）
なんと指揮台のど真ん前に由利、夏樹、知恵子の3人が座っている。さらにその隣には友美子、綾音の姿もある。いくらなんでも前すぎる。
「陽乃～、がんばってよ～」
由利が小声で陽乃に話しかけてきた。舞台上にいる人に話しかけるものではない。が、無視するのも悪いので陽乃は小さくブイサインを返しておいた。
「姉ちゃん、めちゃめちゃ緊張してるね」
夏樹が心配そうに舞台上の陽乃を見上げた。
「心配だねぇ……」

やがて、恭一が指揮台の前に立つ。暗転していた舞台照明がパッと明るくなり、恭一が深々と観客席に向かってお辞儀をした。
拍手が大きく鳴る。12月のときの演奏会とは比べ物にならないくらい人がいる。実際にはそれほど人数に差はなかったが、陽乃にはそう映ったのだ。

恭一が指揮台に上がる。
陽乃の心臓が周りに聞こえるのではないかというくらい鳴る。手が震える。音はちゃんと鳴るのだろうか。震えてみっともない音になるのではないだろうか。
（ＯＫ？）
恭一が全員に目配せした。陽乃も、力強く大きくうなずく。
恭一はスッと息を吸い、指揮棒を振り上げた。

その瞬間だった。

バァン！

何か音がした。でも、何かが倒れるような音ではなかった。どちらかといえば、電気が一度に切れたような――。

「うわっ！」
「なに！？」
「なにも見えない！」
観客席がにわかにザワザワとし始める。
陽乃の目の前も真っ暗になり、恭一の指揮棒どころか恭一も、絵美も翔も、傍にいるはずの慎也すら、楽譜でさえ見えなくなっていた。
不意に、舞台袖から係員の大声が聞こえてきた。

「おい！　停電だ！」

ホール内が、停電していたのだ。

第97話　Ｂｌａｃｋ　Ｏｕｔ（後書き）

本番直前に突如襲ったトラブル――停電。観客席も指揮棒も、楽譜すら見えない状態になってしまいました。果たして、七海高校のステージはどうなるのでしょうか？

第９８話　感性豊かに

「やだぁ！　ちょ、怖い……」
陽乃が思わず声を上げた。隣にいた慎也が「静かにしてろって。すぐに点くから」と言ってくれたことで少し安心できたが、真っ暗で足元も見えないのは不安で仕方がない。
「おい！　早く直せ！」
「それが配線が飛んだようでして、少し復旧に時間がかかります！」
「事前に点検しておけとあれだけ言っただろう！　どうするんだ、午前の部はまだ3団体あるんだぞ！」
「それより客席の足元のライトも消えてるわ！　早く直さないと歩くこともできないじゃない！」
スタッフの慌てた声や怒号が響く。陽乃たちはどうすればいいのかさっぱりわからない。
「あのー」
妙に間延びした恭一の声が聞こえてきた。
「はい？」
スタッフの女性だろう、声が女性のものだ。その人に恭一が声をかけた。
「このまま演奏を続けても構わないでしょうか？」
「えっ！？」
「いえ、だから、演奏を続けても構いませんか？」
女性スタッフはしばらく黙り込んで「でも、こんな真っ暗な状態ですよ？」と驚いて聞き返した。
「そうですねぇ……ちょっと待ってください。生徒たちに聞いてみます。あ、マイク貸してもらえます？」
しばらくすると、マイクから恭一の声が聞こえてきた。非常電源でマイクなどは入るようだ。
「えー、七海高校吹奏楽部のみんな、聞こえるか？」

突然聞こえてきた恭一の声に少し驚いたがすぐに全員が「はい！」と返事をした。
「どうもなぁ、停電はしばらく直りそうにないんだ」
「えー……」
絵美が落胆した声を上げた。翔が続ける。
「そしたら、今日の演奏は中止？」
「えぇー！　そんなの困る！」
沙希が舞台上というのも忘れて大声を上げた。ドッと観客席から笑い声が湧く。
「まぁまぁ。それで、お前らに質問だけど」
「なんですか？」
由美子が答える。といっても、恭一からも由美子の姿は見当たらない。
「お前ら、全員楽譜は暗譜してるな？」
「はい。大丈夫です」
また由美子の声。声の位置でなんとなく、いる場所がわかる気がする。
「それじゃ、停電でも問題ないだろう」
「あ、そっか。どうせ見えないなら暗譜してるのと一緒じゃん！」
「あー、そっかそっか。それじゃ電気とかいらないね」
「指揮は？」
拓真が聞いた。
「最初に俺がテンポの変わり目はしっかりと指揮棒で音を立てたり声で指示するようにする。それでどうだ？」
「あぁ～、それならいいッスよ」
拓真はあっさりと納得した。
「あたしも問題ないです」
美里もバチをチンチン鳴らして答えた。
「朝倉はどうだ？」
「あっ、はい！　私も大丈夫です！」

それを確認すると、恭一は最後にもう一度聞いた。
「じゃあ、演奏はこの状態で続けるぞ？　いいな！」
「はい！」
「そういうわけなんで、続けてよろしいですか？」
スタッフたちから困った声が聞こえてきたが、どうやら責任者らしいおじさんの声で「可能であれば、結構です」とだけ返ってきた。
「よぅし、それじゃ、するか！」
恭一は嬉しそうに指揮棒を握った。

「ホントに演奏するのかな？」
夏樹が驚いた声を上げた。隣にいる由利の姿は見えないが「するみたいねぇ……」と呟く。
カシャン、とスネアらしい楽器がセッティングをするような音が聞こえる。
次第に客席のざわめきが静まり、完全に何の音も聞こえなくなった。舞台袖からスタッフの声が聞こえるくらいだ。
司会のアナウンスが入る。
「プログラム２０番。七海市立七海高等学校吹奏楽部。Ｒ．ミッチェル作曲。指揮は、東　恭一です」
暗闇で拍手が響き渡る。しばしの沈黙。
暗闇以上に重い緊張がホール内に圧し掛かったが、吹奏楽部のメンバーはまったく緊張していなかった。
「ワン、トゥー、スリー」
小さな声で、恭一が呟くのが聞こえた。
静かに、チューバ、ユーフォ、ホルンの音色がホール内に響き渡る。美里のサスペンドシンバルがその間に静かに鳴る。
やがて、陽乃のトランペットが入ってきた。綺麗な金管アンサンブルだ。
それを木管楽器が引き取る。感情を込めて、アルトサックスとフルート、クラリネットが荘厳でどこか寂しげな音色を歌い上げる。

曲のタイトルどおり、大草原を風が吹き抜けていくような、そんな音――。

再びトランペットの音が戻ってくる。美里は移動してグロッケンを鳴らしている。それが終わるとすぐに美里はスネアに戻る。観客からその動きは全然見えないが、その間に沙希がクラッシュシンバルへと移動した。そして、前半部の最高潮の部分で全員の息が一緒になるのを誰もが感じ取っていた。

スネアのロールとホルンの遠吠えのような勇壮な音色。それが終わるとすぐに静けさが戻る。やがて、次第にディクレシェンドをしていったん曲が静まった。

そして、その沈黙をそっと破るように、翔の美しいアルトサックスのソロがホール中を包み込んだ。さらに、引き取るように由美子のフルートソロ。最後に、メロディーライン全員が同じメロディーを吹いて前半部はロングトーンして終わるように見せた。

やがて、チリチリという表現でいいのだろうか、何かの打楽器（シンバルを小さくバチで鳴らす美里だったが、誰にも見えない）が細かく、テンポを上げる音が夏樹と由利の耳にも聞こえてきた。スネアの音と共に全員が打ち込みをする。そしてスネアの立派な音色。目が覚めるような音、といえばスネアの音はイメージができるだろうか。鋭い音だ。

そして木管楽器の素早いパッセージ。それを聞き終えるとすぐにトランペットのメロディーが始まった。一人でもしっかりとした、陽乃の音。それを支えるようにすぐに木管楽器が入ってくれる。

そしてそれが終わるとチューバ、ユーフォニウム、トロンボーンのメロディーが始まった。金管楽器でも木管と同じくらい速いパッセージを吹くこともできるのだ。やがてサックスとホルンが加わり、ハモり始めた。

再びトランペットが高音でメロディーを吹く。対旋律（※1）のホルンがこれはまた勇壮な音色を吹き上げる。静かに木管がそのメ

ロディーを引き取る。それから前半部の打ち込みを再現する部分が始まり、サックスのメロディーと共に転調してトランペットとクラリネットの掛け合いのメロディーが始まった。スネアは常に伴奏を支える役割をしている。

沙希がサスペンドシンバルを鳴らすとメロディーラインがユーフォニウムとトロンボーンにしばらく代わり、またトランペットに戻る。

そしていよいよフィナーレだ。

前半部の打ち込みが再び繰り返され、トロンボーン、ユーフォ、チューバのメロディー。サックスが加わる。トランペットが最高に綺麗な音を吹き、ホルンの対旋律がまたホール中を包み込む。

最後が近づいてきた。しかし、冷静にトランペットとクラリネットの掛け合いが続く。そして次第にテンポが落ち、沙希のシンバルを合図にスネアがトリルをはじめ、全員が渾身の力を込めて最後のフィナーレを吹き上げる。

チューバが一番太い音を吹き始めた。ティンパニがない代わりに入れた音だ。これが終わりの合図。

全員の音がひとつになり、綺麗なハーモニーを響かせて一気に演奏が終わった。音がホール中に響き渡ると同時に照明が復旧した。

「まぶしっ……」

陽乃は思わず目をつぶった。それからゆっくり目を開ける。観客席の誰もが呆然と舞台を見つめていた。

それからすぐに大きな拍手が沸き起こった。

「ブラボー！」

「よくやった！」

次々と声援が飛んでくる。

恭一が嬉しそうに全員に立つ指示を出した。

陽乃はいつまでも鳴り止まない拍手の中、それぞれのメンバーを

一瞥した。雪子と目が合う。
（やったね！）
そう言いたげな顔。陽乃がブイサインを作ると雪子もそれに答えて左手でブイサインを返してくれた。
翔と目が合う。
（サイコー！）
ニッと笑う翔の顔にドキッとしながらも、陽乃もニコッと笑い返した。
それからすぐに次の団体が入るので陽乃たちは舞台から降りたが、しばらく興奮は収まりそうにもなかった。

第９８話　感性豊かに（後書き）

停電の中でも演奏する七海高校吹奏楽部！　もはやド根性高校生集団！　果たして今回の演奏がどれほどの影響をもたらしたのでしょうか。

第９９話　ランクアップ

４月５日、水曜日。今日は始業式だ。いつもどおり、つくし野川の河川敷を陽乃と翔は自転車で並んで走っていた。

「ねぇねぇ、今年もあたしたち同じクラスになれるかな？」

陽乃は長く伸びた髪をなびかせながら翔に聞いた。翔は陽乃を横目で見ながら「どうやろなぁ～」と返す。

「欲を言えば、吹奏楽部全員が同じクラスだったりしないかな？」

「それはムリやろ～。いくらなんでも」

翔がクスッと笑った。でも、翔自身もできればそんなふうになればいいと思っている。

「東先生がうまくやってくんないかな」

「先生にそこまで権限ないって」

二人は笑いながら自転車で津上橋を越えて行った。

３月２１日の定期演奏会以来、吹奏楽部の中でもいくつか変化があった。

まず、目だったことといえばそれぞれの２年生（もう、１年生ではないのだ）が役職や係に就いたということ。

部長はもちろん翔。副部長は陽乃だ。

それから、金管楽器と木管楽器を統括するリーダーということで金管セクションリーダーに慎也、木管セクションリーダーに絵美が就いた。コンサートマスターということで、これも絵美が就いている。主な仕事はチューニングや基礎ロングトーンの指示をする。

係もいくつか作った。

楽譜係。あまりにも楽譜が大量にあるのできちんと係を作って整理しようと考えた。几帳面な人がいいだろうということで、沙希と春樹が就いている。

楽器も同じく多くあり、新入生が来ることも考えて楽器係も作っ

た。これには拓真と由美子が就いている。
　さらに、今年から予算がつくことになった。この予算で今年は４０人分の七海高校吹奏楽部オリジナルのユニフォームを作っている最中だ。この衣装を管理する係、ユニフォーム係として雪子が就いている。また、部費も今年から５００円ずつ毎月徴収すると決めたので雪子は会計も兼任している。
　何より、一番大きな変化はあの二人のことだ。

「見て見て！　また二人が並んで歩いてるよ！」
　陽乃が嬉しそうに翔の肩をバシバシ叩いた。
「痛ったいなぁ。オレらだって同じことやってるやんけ」
「あ、そっか」
「まぁ……見てて微笑ましいけど」
　翔と陽乃の前を行くのは、慎也と美里の二人だった。あの二人、実は先月から付き合いだしたのだ。
「部内カップル２組だね」
「新入生、やり辛いやろうけどな」
　翔が苦笑いする。
「そんなの、黙ってたらそのうち暗黙の了解になるって」
「まぁ、あえて言う必要もないしな」
　それを聞いて陽乃は少し不安になった。もし、クラスが違うようになったら翔と自分が付き合っていることを知らない子にも言わないつもりだろうか。
（聞きたいけど……ウザいとか思われたら困るしな）
　陽乃は聞きたい気持ちをグッと抑えて自転車をこぎ続けた。

　始業式が終わった。いよいよクラス発表だ。
　陽乃と翔は並んで名簿の掲示を待っている。担任であろう先生たちが模造紙を持ってやってきた。にわかにざわめきが起こる。
　まず、彩が掲示板に模造紙を貼った。２年Ａ組の今年の担任は書

いてあるとおり「新井田　彩」先生だ。
A組には見慣れた名前が二人。

田中　美里
永井　雪子

「ゆっきー！　あたしたち、同じクラスだよ！」
どこからともなく現れた美里が同じく急に現れた雪子と模造紙の前で抱き合った。
「これから1年間、よろしくねー！」
続いてB組。担任は園部麻衣子（そのべまいこ）先生だ。今年の2年生はなぜか若い先生が多い。
B組にも見慣れた名前。

水谷　春樹
橋本　絵美

「あ……」
絵美がチラッと春樹のほうを見た。
「ウス」
春樹のキラースマイルが絵美を捉えた。思わず絵美も顔が赤くなる。
「青春だねぇ」
陽乃がニコニコしながら呟くと、翔が「ババ臭いこと言うなよ」と呆れた様子で言った。
「だって、あたしたちもうあんなにウブじゃないよね」
「倦怠期って言いたいんか？」
「えっ！　ち、違うよ！　別にそういう意味じゃ……わぁ！？」
クシャクシャと頭を撫でられた。
「冗談でーすよー。本気にすんなって」

「……別に、本気になんてしてないから」
陽乃はブスッと顔を背けた。
C組は健太が担任だ。
「あ！」
陽乃が声を上げた。見ると、見慣れた名前が並んでいる。

朝倉　陽乃
川崎　慎也
佐野　翔

「おー！　やったぁ！　3人も一緒やんけ！」
翔がガッツポーズを取った。美里と慎也が同じクラスでないことに陽乃は少し複雑な気持ちになっていたが、翔とまた同じクラスだったことは素直に嬉しかった。
ちなみに、由美子はE組。沙希はG組で、拓真はH組。由美子が誰とも授業が同じにならないと寂しそうにしていたが、何人か前のクラスメイトがいるようだった。恭一はE組の担任。一番吹奏楽部が集中したのはC組ということになる。
教室へ移動すると、見事に最前列左から陽乃、慎也、翔と並んだ。
「あ」「か」「さ」だとはいえ、恐ろしい偶然だ。
放課後、3人は揃って音楽室へ向かった。すると、見慣れない子たちが七海高校の制服を着て、それも新1年生の学年カラーである赤色のネクタイが見える。
「ねぇ、誰だろ。音楽室前にいるの」
「ん？　どれ」
「目ぇ悪いの？　ほら、あそこ！」
陽乃が指差す方向を見ると、音楽室の扉の前に5人くらいの男女が固まっている。
「なんでやろ。今日は入学式でも何でもないのに」
慎也も同じようにジーッと彼らを見つめる。

「勘違いしたとか？」
「まさか。入学式の日程はちゃんと各家庭へ行くようにしてるでしょ、ふつう」
「じゃあ、誰なんだよアレは」
「調べてみようや。ひょっとしたら……」
そう言い終わらないうちに翔は走り出していた。慎也も後を追う。
「えっ！　やだ、ちょっと待ってよ……きゃああっ！」
慌てて二人の後を追おうとして、陽乃が思いっきり転倒した。
その音に翔と慎也も、そして音楽室の前にいた5人も驚いて振り返った。
「痛ったい……」
「なにしとんねん！　大丈夫か？」
翔が慌てて駆け寄る。
「ホラ、掴まれ」
「う……うん」
「ヒューッ、先輩方、熱いッスね！」
その声に振り向くと、そこにいたのは新しい制服に身を包んだ駿、はるか、洋之、健之佑、光瑠の5人だった。
「わーっ！　どうしたの？　入学式はまだなのに！」
陽乃は翔の手を払い除けて立ち上がり、ワイワイと話を始めた。
「いやぁ、先輩たちこないだの定期演奏会以来、市内でも有名な吹奏楽部になってますよ！」
健之佑がニコニコしながら言った。
「ホント！　まさか東京新聞に載るなんて思ってなかったですよ」
はるかも手を合わせて喜んでいる。
実はこのあいだの東京新聞に七海高校吹奏楽部の記事が載った。
たまたま、あの停電の現場に記者がいたらしい。そのタイトルもこうだ。
『暗闇の中でも敢闘！　新生・七海高校吹奏楽部！』

暗闇と吹奏楽部がなかなか結びつかないらしく、けっこう受けた記事だということだ。それをいちおう、恭一が切り抜いて音楽室のドアに貼ってある。どうやら彼らはさっき、この記事を見ていたようだ。

「おい、突き飛ばしといて無視かい」

翔は盛り上がる陽乃を尻目に寂しそうに立ち上がった。

第９９話　ランクアップ（後書き）

進級・進学。七海高校吹奏楽部の新たなるスタート、第一日目でした！

第１００話　部活紹介

４月１０日（月）。今日はいよいよクラブ活動の紹介を１年生に行う日だ。入学式は火曜日に済んで、まだ入学してから３日目の彼らの前で入部するクラブを決めてもらうための大事な日。吹奏楽部のメンバーもこの日に向けて春休みの間じゅう、ずっと練習を重ねてきた。

もちろん、これは他のクラブにも言えることだが吹奏楽部の強みとしては実戦形式で目の前にいる１年生にクラブのよさを伝えられるところだ。水泳部はプールがないとなかなか魅力が伝わりにくいので、どうしても中学校まで続けてきた子くらいしか来てくれないという。それに対し、コーラス部や吹奏楽部のようなその場で実演できるクラブはお得だ、と水泳部の友人がこぼしていた。

しかし、陽乃自身はそうは思っていない。どんなクラブでも一生懸命伝えることで、きっと初心者でも入ってくれると思っている。そう思っているのは陽乃だけでなく、翔や他の部員たちも一緒だった。

部活紹介は５時間目の始まる１３時２０分から。吹奏楽部の出番は１３時３０分から４０分まで。今日演奏するのは例のカリフラ、「スーパーカリフラディスティックエクスピアルドーシャス」だ。トランペット、チューバなどソロが盛りだくさんでだいたい５分弱の演奏となっている。

吹奏楽部のメンバーは昼休みに集合して５時間目は公認欠席にしてもらっている。

陽乃は４時間目が終わるなりお弁当片手にすぐに走り出し、音楽室へと向かった。既に音楽室は開いていて、部室へ入ると拓真と春樹、美里がいた。

「ウッス！」
拓真がオニギリを頬張りながら挨拶する。
「やっ！」
春樹はデザートのうさぎ型に切ったリンゴを口にしていた。
「ご機嫌いかが？」
美里は既に食べ終わって基礎練習をしている。
「そりゃーもうバッチリよ！　今朝からずっとウズウズしててたまんなかったわ」
「よぉ言うわ。3時間目と4時間目、ぶっ通しで居眠りしてたクセに」
驚いて後ろを振り向くと、翔が立っていた。
「な、なによ！　本番に備えて気力と体力を蓄えてたの！」
「おーおー、そうですか。それ以上強くなられたらこっちはたまわんわ」
翔が苦笑いして部室へ入る。陽乃は思いっきり握りこぶしで翔の頭を叩いた。
「いってー！」
「何よ！　人をバカにして～！」
「ほら！　そんだけパワーあったら誰にも負けへんわ」
「なんですって！？　ちょっと待ちなさいよ！」
とうとう追いかけあいを始める二人を見て、来ていた部員たちはすっかり呆れ顔だ。
「やれやれ、まぁた始まった」
拓真が最後のオニギリを飲み込んでから呟いた。
「これで付き合ってるっていうんだから、不思議だよね」
春樹も笑いながら追いかけあう二人を見ている。
「はいはいはーい！　そこまで、そこまで」
絵美と由美子、沙希が部室へやってきた。絵美が呆れ顔で二人に説教を始める。
「あのねー、部長と副部長がそんなんじゃ、新入生が入ってきても

示しがつかないじゃない」
「はい……」
翔が正座をしながら小さい声で返事をした。
「陽ちゃんも、副部長ならしっかりしてくんなきゃ」
「でも！　翔が悪いんだよ!?」
「どっちが悪いか私は知らないけど、とりあえず後ろ見てみなよ」
二人が後ろを見ると、すっかり制服になじんだ駿、洋之、彩香の3人が立っていた。
「あ、ども」
陽乃が間の抜けた挨拶をすると、絵美はさらにため息をついた。
「ゴメンね、恥ずかしいトコロ見せちゃって……」
「いえいえ！　やっぱ朝倉先輩、おもしろいですね！」
彩香がキャッキャッと喜んで跳ねた。隣では洋之が笑いをこらえている。駿もニコニコ顔だ。
「朝倉先輩が副部長で、佐野先輩が部長！　楽しそうな部活になりますね」
「いろんな意味でね。先が思いやられる」
絵美は頭を抱えた。
「まぁまぁ！　気楽に行こうよ」
陽乃はポンポンと絵美の肩を叩いた。
「そのポジティヴ思考はどこから来るのか教えて……」
苦笑いしながら、絵美は楽器の準備のためにクラリネットパートの棚へと移動した。

「え?」
陽乃は翔の言ったことを聞き返した。時刻は12時半すぎ。昼食を終えていよいよ本番が近づいてきたというときになって翔は話を切り出した。
「だから、11日の新歓祭に出たいって言うてる子らがおんねんって」

「ホントなの？」
「オレもビックリやけど……」
翔は頬杖をつきながらため息を漏らした。
「で、その出るって言ってる子は誰？」
「３人」
「３人も！」
陽乃は驚いて大声を上げてしまった。
「静かにせぇや！　まだ他の子らには言うてへんねんから」
「ご、ごめん」
陽乃は咳払いをして今度はコソコソと翔に耳打ちをした。
「な、な、なんやねん！」
「なんやねんって……大声出すなって言うから」
「もう！　オレが耳弱いの知らんのかい」
「初耳だよ、そんなの」
翔は左耳をかいたあと「普通の声で話せばええやろ」と少し赤くなりながら返した。
「で、誰が出るの？」
「冨岡くん、逢沢くん、西嶋さんや」
「ふーん……」
翔はまたため息をつく。
「ねぇ、なんで出るのがイヤなの？」
「え？」
翔は驚いた顔をして陽乃を見た。
「別に……イヤってわけじゃ」
「ウソ。だって、翔、イヤなときってずっと左手で後ろ髪をイジッてるから」
自分のクセを指摘されて翔は少し恥ずかしかった。
「なんで？」
「……だってさ」
陽乃はジッと翔を見続けた。またため息。

「自分らで作った音を、急に入ってきて崩されるの、イヤやし」
「え？」
グーッと大きく伸びをして翔は椅子からそのまま転ぶようにして床に寝転がった。陽乃は慌てて止めようとしたが、あまりに早すぎて無理だった。
「いってー」
「当たり前だよ。そんなとこから落ちて」
「だってさぁ。冬から１０人でしっかり音が合うようにずーっと練習してきたやろ」
「そだね。先生も厳しかったし」
「その１０人で演奏するの、最後やで？」
「……。」
忘れていた。
新入生が入ることは嬉しい。けれども、それは同時に１０人だけの音というのが消えるということだ。
「それなら、最後に、全員の音を、みんなに、響かせたい」
一言ひと言、翔は区切ってハッキリと言った。
「って思いませんか？」
ニッと笑う翔を見て思わずドキッとしてしまう。いい加減、慣れないと付き合っているのにこれじゃ変だ。
「思います！」
陽乃は元気良く返した。
次の瞬間、翔は思いっきり陽乃の首に手を回してきた。
「きゃっ！」
「それでこそ陽乃やぁ！」

１３時１９分。吹奏楽部の面々は舞台袖に立っていた。
「それでは、続いては吹奏楽部です！　吹奏楽部の皆さん、どうぞ！」
放送部のアナウンスに続いて、翔たちは走りながら舞台へと上が

った。全員が並んだのを確認して、翔はマイクも使わずに大声で叫んだ。

「新入生の皆さーん！　こんにちはー！」

関西弁の挨拶にどよめきが起こる。聞き慣れていないので仕方がないだろう。

「今から、吹奏楽部の部活紹介します！　吹奏楽部は去年、吹奏楽サークルとして発足したまだまだ小さなクラブです。でも、老人ホームの慰問演奏や七海市吹奏楽連盟主催の定期演奏会などに出演するなど、活動の幅を広げています。中学校で楽器を触ったことがある人も、そうでない人も、青春したい人も来てくださいねー！」

そこでドッと笑いが起きた。翔にはトークの才能もあるのかもしれない。

「あ、なんか時間がないからさっさと済ませ的な空気が流れてるんで、さっそく僕らの演奏を聴いていただきたいと思います。１０人で何ができるねん！とか思うかもしれへんけど、１０人でも立派な演奏をしたいと思います！　っていうか、します！」

おぉ～とどよめきが起こる。絵美や由美子が「言っちゃった」という顔をしている。

「それでは聴いてください。曲は『スーパーカリフラディスティックエクスピアルドーシャス』です。曲名を聞いてわからない人も、曲を聴けばすぐにわかります。ソロもたーっくさんあるんで、楽しみにしててください」

翔が自分の立ち位置へ戻ると恭一が同時に舞台へ上がってきた。恭一のイケメン具合にザワザワと女子生徒たちが騒いでいる。

静かにならないうちに恭一が指揮棒を降り始めた。金管楽器の下る音と同時に木管楽器が同じ形式のメロディーを奏でる。それが何度も重なり、前奏があっという間に終わってしまう。

陽乃が立ち上がってメロディを吹き始めた。そこで新入生たちもどんな曲なのか気づいて手拍子が自然と起こった。陽乃のメロディを翔が引き継いで吹く。もちろん今は各パート一人ずつなので、ソ

ロにしてしまっているのだ。翔のサックスの低い部分の音色が体育館に響き渡る。

そして全員でメロディを吹く。ここは何度も何度も練習を重ねたところだ。ちょっとやそっとで失敗することなどない。

やがて、絵美と春樹のソロが近づいてきた。ここでちょっとした小ネタを二人は用意していると言っていたが、それは翔たちにすら内容は知らされていなかった。ソロが近づいてくると沙希と由美子の目の前で絵美が突然頭に何かを被った。同じ頃、拓真と慎也の横で春樹も何かを被っている。

「やーっ、カワイイ～！」

「見ろよ、男子がミニーちゃん被ってるぞ」

新入生から明るい声が響いた。

何と、絵美と春樹はミッキーとミニーの耳帽子を用意して被っていたのだ。もちろんミッキーが絵美、ミニーが春樹だ。

最近、二人のソロ部分はよく合うようになっていたが、もっと気持ちを合わせるにはどうするべきかと考えた結果、こうなったのだ。春樹は初め、恥ずかしいといって拒否していたがソロを吹いていれば被り物のことなど忘れられるから、と絵美に半ば強引に押されて被ることになった。それが今となってはプラスになっているようだ。

いつもソロを吹いているときは強ばっている春樹の顔が今日はずいぶんと明るい。絵美と何回も顔を合わせてリズムを取りながら吹いている。

二人のソロが終わると元気よく慎也がトロンボーンのソロを続けた。背の高い慎也が奏でるトロンボーンの力強い音色が新入生を魅了しているようで、さっきの二人のときとはまた違う雰囲気で曲は進んでいく。

曲はどんどん進んで、やがて一番の問題部分に到達した。部員ほとんどが苦手とするジャズビートの部分があるのだ。

しかし、今日は違った。美里がこれまで一番足を引っ張っていたのにジャズビートをほぼ完璧に習得し、全員を引っ張っていけるま

でになっていたのだ。美里がノリのよいリズムを奏でるので自然と全員も演奏に乗ることができた。

やがて、フィニッシュが近づいてくる。このときには体育館にいる生徒と先生全員が楽しそうに手拍子をしていた。

恭一が思い切り指揮棒を振り切り、演奏が終わると同時に拍手が沸き起こった。

翔が嬉しそうにブイサインを新入生に向けた後、笑顔で言った。

「吹奏楽部は音楽室で、みんなを待ってます！　興味ある人は、ぜひぜひ来てください！」

その後も鳴り続ける拍手を背に、翔たちは舞台を降りていった。

第１００話　部活紹介（後書き）

思った以上の成功を収めた部活紹介！　いよいよ新入生を迎え入れる時期がやってきました。今年は何名、吹奏楽部に入るのでしょうか！？

第１０１話　スタートは好調……？

５月１日（月）。

昨日で新入生部活勧誘期間も終わり、今日からいよいよ正式入部となる。吹奏楽部は部活紹介とその後のミニコンサートを３回開いたことによって、中学校から続けていた子たちが人数の割りに魅力的だった演奏に惹かれてすぐに仮入部を決めてくれた。

それからも順調に人数を増やし、だいたいのパートにおいて人数が増えることとなった。

【２００６年度　吹奏楽部　部員名簿】

＜フルート＆ピッコロ＞
井上（いのうえ）　佳菜（かな）　１年

＜フルート＞
大谷（おおたに）　沙希（さき）　２年
宮部（みやべ）由美子（ゆみこ）　２年

＜オーボエ＞
野村（のむら）健之佑（けんのすけ）１年

＜バスーン＞
戸口（とぐち）　誠（まこと）　１年

＜エスクラリネット＞
小林（こばやし）　梨子（りこ）　１年

＜ベークラリネット＞
橋本（はしもと）　絵美（えみ）　２年

伊原　光瑠　1年
河内みゆき　1年
瀬戸　優輝　1年

＜バスクラリネット＞
逢沢　駿1年

＜ソプラノ&アルトサキソフォン＞
佐野　翔　2年

＜アルトサキソフォン＞
中野さゆり　1年
鈴木　麻綾　1年

＜テナーサキソフォン＞
西嶋はるか　1年

＜トランペット＞
朝倉　陽乃　2年
松尾　勇　1年
久野　彩香　1年

＜トロンボーン＞
川崎　慎也　2年
吉山　亜紀　1年
富士原　徹　1年

＜ホルン＞
永井　雪子　2年
右川　順平　1年

＜ユーフォニウム＞
水谷　春樹　２年
加藤　愛実　１年

＜チューバ＞
本堂　拓真　２年

＜ストリングバス＞
三宅　亮平　１年

＜パーカッション＞
田中　美里　２年
冨岡　洋之　１年
秦野　恵梨　１年
乃木あずさ　１年
日高　優　１年

人数比から考えるとクラリネットは少しバランスが他に比べて悪い以外、どのパートも（特に必要だったオーボエとテナーサックス、ホルン、トランペット、トロンボーン）順調に新入部員を獲得した。

雪子は順平とうまくやっていけるかどうかを心配していたが、順平が思いのほか雪子を尊敬していたらしく、すぐに意気投合してパート練習を仮入部期間中からやっていた。

慎也は人当たりが入部当時に比べてよくなり、すぐに亜紀と徹と兄弟のように仲良くなった。それに対して美里は亜紀に対してライバル心を燃やしていたりする。その美里も洋之、恵梨、あずさと毎日基礎練習からそれこそプライベートな話をしているようだ。一度、翔が用事で部室へ入ったら激しく追い返されたこともある。

ユーフォニウムの愛実は初心者。しかし、春樹と中学時代は仲の

良かった幼なじみだそうで、春樹のことを追いかけてきっと入部したのだろう。初めは遊んでばかりいるのではないかと翔は心配だったが、思いのほか、時に春樹以上に懸命に練習する姿を見ることがある。

クラリネットは急に増えた後輩たちに絵美は少し戸惑い気味だったが、持ち前の要領のよさを活かしてなんとかやっている。フルートも沙希と由美子はしっかり協力し、オーボエやバスーンの指導もしている。

サックスのほうはシッカリ者の後輩ばかりで苦労することはほとんどない。

「しっかしまぁ……問題はあそこやな」

翔はいつものようにその教室のドアをノックして中へと入った。

第１０１話　スタートは好調……？（後書き）

どのパートもスタートは順調です。ただ一パートを除いては！？

第１０２話　断絶教室

「失礼しまーす」
翔がその教室――トランペットのパート練習部屋である3年3組の教室に入ると、窓際に陽乃、廊下側に勇、そしてその間で困った顔をしながらマウスピースを吹いている彩香がいた。
「……。」
またか、といった様子で翔はため息を漏らした。
「トランペットさーん」
翔が落ち込んだ声を出して呼びかけたのに勇も陽乃もかなり驚いたようで、振り向いてすぐに申し訳なさそうな顔をした。
「今日は個人練習やなくって、パート練習なんですけどね。いつまでそうしてるつもり？」
「……。」
二人とも何も答えない。彩香も困った顔をするばかりだ。
「もうさぁ、5月なわけでしょ。それに……知ってるとは思うけど、今年は……」
翔は言い出しそうになって口を止めた。
「今年は？」
陽乃が不思議そうに先を続けてとでもいうように言葉を投げかけた。
「いや……とにかく！　お前らのパートはパートとして成り立ってへんわけよ。今後練習をしていくに当たっても、お前らだけやなくって周りにも迷惑かかるから、なんとかうまくやっていってぇな」
勇が楽器を不機嫌そうに置いて返した。
「だったら、朝倉先輩の練習方針、なんとかしてください」
陽乃がその言葉にあからさまに不機嫌な顔をした。
勇の出身中学である南葉島中学校。沙希の出身中でもあるのだが、去年は関東地区大会で銀賞を収めるなど、優秀な成績を毎年出して

いる吹奏楽部がある。それは厳しい練習だそうで、沙希もその練習に耐えてきたから根性だけはあるといつか言っていた。

陽乃も思い切り楽譜ファイルを机に叩きつけるようにして置いてから、勇をきつく睨んで返す。

「そんなにあたしの練習方針が嫌なら、すぐに辞めて他の団体なり吹奏楽部なり探せばいいじゃない。何も七海高校じゃなきゃいけないってわけじゃないでしょ。そりゃ、あたしはまだ久野ちゃんや松浦くんに比べたら技術的にも知識的にも全然なってないわ。でも、あたしなりにいい練習方法っていうのを考えて、七海高校のトランペットパートらしい音を出そうと頑張ってるの」

勇は陽乃の顔を見ず、自分の楽器を見つめたまま黙っている。

「それが気に入らないんだったら、ここには向いてないってことになるじゃない。だから、松浦くんが辞めるか」

陽乃は少し戸惑った様子を見せたが、それを口にした。

「あたしが辞めるか」

その言葉に彩香はかなり驚いた様子を見せたが、それ以上に愕然としていたのは翔だった。

「……何なん？」

「え？」

振り向くと、翔がサックスをストラップに宙吊りにさせたまま唖然とした様子で陽乃を見つめていた。

「今の、本気？」

「……いや、言葉のあやっていうか」

陽乃もまずいことを言ったのはわかっている。思わず感情に任せた部分も多少あった。

翔は陽乃の顔を見ず、すぐに勇のほうへ向き直った。勇はビクッと体を震わせている。

「松浦くんは、朝倉の何が気に入らんわけ？」

「えっ……と」
「ハッキリ言うてもらわな、納得いかへん」
勇はしばらく黙り込んだ後、携帯電話を取り出した。
「来てください」
翔は携帯電話を手にしている勇の近くへ寄った。ムービーが起動している。
「これが嫌いなんです」
そこに映っていたのは、新歓祭のときの演奏だった。曲目は「ホール・ニュー・ワールド」。このとき、翔と陽乃は掛け合いのソロを吹いた。今でもありありと思い出せる。
「これのどこが気にいらんわけ？」
勇は恥ずかしそうに俯きながら言った。

「なんでこんな見つめ合いながら吹く必要があるんですか！？」

静まり返る教室。
次の瞬間、彩香が爆笑し始めた。
「な、何がおもしろいんだよ！？」
勇は顔を赤くして彩香に聞いた。
「だって……真剣に悩んでるからどんなことかと思ったら……あぁーおもしろい！」
彩香はケラケラと笑いっぱなしだ。陽乃も笑いをこらえているのがやっとという感じであった。
「だって……演奏するときになんでこんなことをする必要があるんですか？」
翔も半笑いになりながら答えた。
「息を合わせる……ため」
「そんなの、指揮棒見てたらいいじゃないですか！」
ゲホゲホとむせながら翔は笑いを抑えた後、勇に一枚の楽譜を手渡した。

「なんですか、これ」
勇は不機嫌そうにその楽譜を受け取った。
「トランペットの『ホール・ニュー・ワールド』の楽譜。朝倉が吹いたファーストの楽譜。これ、吹いて」
「今ですか？」
「そう」
勇は渋々楽譜を譜面台に置いて、楽器を構えた。
「ここはな、オレとの掛け合いのソロや。松浦くんも新歓祭聞いてたんやったら、知ってるやろうけど」
「はい」
「ここな、オレはかなりアドリブ入れて揺らして吹いててん。そやから、譜面ヅラどおりに吹いてたっていっこもタイミング合わへんわけよ。わかる？」
「そんなの、見詰め合わなくたってできるでしょ」
勇は呆れかえったような表情でため息を漏らした。
「ほな、ちょっとやってみるか？」
「お安い御用です」
翔と勇が楽器を構えた。
「朝倉。カウント」
「あ、うん」
陽乃は二人の横で手を叩きながら「5、6、7、8」とカウントをした。まず、勇からソロが入る。その後、翔がすぐにソロに入ったが揺らして吹くのですぐに勇が乗り切れず、見事にバラけてしまった。そのうちピタリと止まってしまった。
「なんでそんな揺らすんですか！」
勇がグイグイと翔の袖を引っ張った。
「だから揺らして吹くっちゅーたやんけ！」
翔は困惑気味に勇の腕を放した。
「だから見つめあってっていうか……そういう風に吹いてたんだけど。ちなみに、水谷くんと橋本さんも同じことしてたんだけど」

「えぇ！？　そうなんですか！？」
勇はショックを隠しきれない様子だった。
「なんなんですか、ここの吹奏楽部は」
「別にふつうやけど。オレらにしたら」
翔は頭をかきながら答える。
「俺はムリです！　そんな考え乗り切れません！」
彩香が何かを言おうとした瞬間、翔がそれを遮るくらい大きな声で叫んだ。

「やったら辞めたらええやんけ！　えぇ加減にしてくれ！　調和を乱されるんは困るねん！」

陽乃も彩香も、勇も呆然としていた。
「……すいません」
勇が今にも泣きそうな声で呟いた。
「……スマン。オレもついカッとして」
「いえ……」
勇はソッと立ち上がって楽器を片手にまた練習を始めた。
気まずい空気が流れる。
陽乃は何かを話そうとして、結局ロクなことが言えそうにないので何も言わずに楽器を手にした。
「とりあえず、オレは戻るわ」
翔が寂しそうに教室を出て行った。
「ね、ねぇ。とりあえず、パート練習しようよ」
陽乃が勇を覗き込むと、泣きながら震えていた。
「え？　え？　ま、松尾くん？」
「朝倉先輩。俺、邪魔ですか？」
「じ、邪魔っていうのとは違うよ」
「でも、明らかに佐野先輩も朝倉先輩もオレを邪険にしてませんか？」

「それは違うよ。あたしは数少ない後輩がトランペットに入ってくれて本当に嬉しいし……。それに、できるならコンクールとかも一緒に参加したいって思ってるよ。だから、こんなわだかまりみたいなのを残していつまでもクラブ、したくないの」

「……。」

勇はゴシゴシと目を擦った後、立ち上がって楽器をケースに片付け始めた。

「松尾くん……」

彩香が心配そうに声をかけた。

「一日……」

勇はドアのほうへ向いてそっと呟いた。

「一日だけ、ゆっくり考えさせてください」

「わかった」

陽乃は小さい声で、しかし力強く返した。それから続けた。

「あたしは、松尾くんがきっとあたしたちと頑張ってくれるって信じてるから」

勇は返事をせず、そっとドアを閉めて帰っていった。

「彩ちゃん。練習、しよっか」

「……はい」

二人は夕暮れの薄明かりの中、再び練習を始めた。

第１０２話　断絶教室（後書き）

意思疎通がうまくいかないトランペットパート。それぞれの思いが交差するが、すれ違いばかり。見事、一致するときが近づいているのか否か……。

第１０３話　君が必要

翌日。
結局、今日も勇とはわだかまりが直せないままクラブが終わりそうな様子だった。今日の練習は午後６時で切り上げ、その後全員で集まってすることがあるという。
「そろそろ、楽器を片付けようか」
陽乃が彩香と勇に話しかけた。彩香はニッコリ笑って「はい！」と元気よく返事をしたが、勇はただ小さくうなずくだけ。
昨日の返事など、特に求めたわけではない。けれど、何かしらの答えを出すと勇は言っていた。まだ言ってくる様子はない。解散まで何もなければ、陽乃から言い出す必要があるかもしれない。
「じゃあ教室はあたしが閉めていくから、二人は先に音楽室に戻ってて」
「はい！」
「はい」
勇と彩香は先に歩き出した。しばらくして陽乃から距離が離れると、彩香が言った。
「ねぇ、どうすんの？」
「何が」
「昨日の話」
「辞めるかどうかって？」
「そう」
しばらく二人の足音だけが廊下にこだまする。
「辞めるわけないじゃん」
彩香はいともあっさりと言ってしまわれたので少し呆気に取られた。
「なに、そのあっけらかんとした言い方」
「だって、辞めないもんは辞めないんだから」

「そうじゃなくって……なんていうか、理由をハッキリ教えてよ」
「理由……ね」
しばらく考え込んでいる様子が彩香にも見て取れる。
「考える必要なんてないんじゃないの？」
「なんで？」
「松浦くん、きっと吹奏楽大好き」
勇はハッと笑って続ける。
「何を証拠に？」
「ｉＰｏｄ」
彩香は勇の制服のポケットに入ったｉＰｏｄを指差した。
「大音量で聴いてるでしょ、いつも。私と校舎内ですれ違っても聴くのに夢中でちーっとも挨拶返してくれないんだから」
「え……そんなことあったっけ？」
「うん！　もう３回くらい」
「ゴ、ゴメン……」
「それはいいとして、聴こえてくるのが吹奏楽の楽器の音ばっかり」
「……。」
勇は恥ずかしそうに俯いた。
「そんなに吹奏楽を好きな人が、簡単に部活、辞められるハズないしね」
「うん……」
「もうさー、変な意地張ってないで、朝倉先輩と仲直りしなよ」
「でもなぁ……俺、あんな意地悪言っちゃったし」
勇はまだ俯いたままだ。
「ねぇ……松浦くんまさか」
ハッとした様子を見せる。同時に顔が赤くなった。
「ちっ、違う！　違うってば！」
「……怪しいわね」
「うん。怪しい」
後ろから急に声がしたので振り返ると、なんと立っていたのは翔

だった。
「せっ……先輩」
ニッと翔が笑った。
「さては、お前、朝倉のこと好きちゃうんか？」
火が点いたように勇の顔が真っ赤になった。
「ち、違います！」
「ふーん。ま、いいけどな。ただなぁ、ここだけの話、アイツを扱うのは大変やぞ～。ものっすごいテンションで毎日おるからそれについて行くのに大変……あいでででで！？」
驚いて勇と彩香が振り返ると、陽乃が翔の耳を思いっきり引っ張っていた。
「あたしとそんな風に思いながら付き合ってたんだね～毎日」
「なんやねん！　ちょっとした言葉のあやで……」
「そんな風には聞こえませんでーしーた！　あたしのカワイイ後輩たちに変なこと吹き込まないでちょうだい」
「わぁーかった、わかったから耳放せってば！」
「まったく。彩香ちゃん、松浦くん。こんなヤツほっといて行こうよ」
「あ、はい！」
「……。」
勇はさっきの言葉を陽乃に聞かれていたのではないかと心配で心配でたまらなかった。

音楽室へ入ると、既にほとんどのパートが集まっていた。来ていないのはトランペットとホルンだけ。
陽乃たちは楽器を持ったまま音楽室のいつも座る席へとパートで固まって座った。他のパートはワイワイと会話があるのに、陽乃たちのパートだけいつも沈黙。なんだかよそよそしい感じがするのを、陽乃は居心地が悪く感じていた。
そのうちホルンが帰ってきて、やがて恭一が音楽室へ入ってきた。

その手にはＭＤデッキと複数のＭＤ。
「みんな、練習毎日ご苦労さん」
恭一が笑顔で話し始めた。
「１年生はだいぶと部活の雰囲気にも慣れてきたと思うし、２年生も先輩としての自覚を持って日々、活動してくれていると思う。それでだな、今日は大事な話があるからこうして皆に残ってもらったんだ」
全員が何を話されるのか楽しみだといった様子で身構えている。
「単刀直入に言おう。今年は、我が校吹奏楽部は吹奏楽コンクール出場を検討……いや、出場する」
一気に音楽室がザワつき始めた。でも、喜んだ様子ばかりの声が聞こえる。
「はーい、静かに静かに。それでだな、出るとすればやはり３２人も部員がいるからには課題曲、自由曲ともに演奏するものを選ばないといけない」
だいたい全員がコンクールのシステムはもう把握しているため、すぐに話は進んでいく。
「それでだな、課題曲のほうは今年、マーチタイプの曲が３曲とそれ以外のジャンルの曲２曲となっている。そのうち１曲は一般・大学・高校のみが選択できる曲で、それがマーチの１曲だ。それは技術的にも人数的にも厳しいものがあるから、今年は４曲のうちのどれかにしようと考えている」
そういうと、恭一は黒板に曲名を書き始めた。

課題曲１　架空の伝説のための前奏曲
課題曲２　吹奏楽のための一章
課題曲３　パルセイション
課題曲４　海へ…吹奏楽の為に
課題曲５　風の密度

「それからな、自由曲のほうも君らのレベルで演奏できそうなものを何曲か選んできているんだ」
そういうと、恭一は課題曲の隣に曲名を書き始めた。

自由曲候補
リバーダンス
吹奏楽の為の序曲
絵のない絵本
沐浴
大地と水と火と空の歌

「以上、課題曲と自由曲5曲ずつだ。これを今日はサッと通して聴いてみて、明日にでも皆がどの曲がいいかを選んでもらいたい」
一気に音楽室が沸きあがった。
「はいはいはーい！　いいか、それじゃ流し始めるぞ。まずは、課題曲から番号順にな」
架空の伝説のための前奏曲。怪しげな雰囲気の直後にトランペットのソロが始まる。もちろん、陽乃の顔は真っ青だ。ホルンが同じような旋律を吹いてしばらくすると、木管楽器が訳のわからない（と絵美は感じた）旋律が通過する。それに、要所要所でバリトンサックスや低音楽器が目立つ部分が多くあった。低音が薄く、バリトンサックスのいない七海高校には少し厳しい曲かもしれない。ソロが要所要所で出てくる。クラリネットもあるようだ。
さすが伝説という言葉をタイトルに持ってくるだけある。最後まで勇ましいままで終わる勢いだ。
「すっごーい……さすが課題曲ね」
その後も、2番と3番の課題曲が流れたが、いまひとつ部員たちにはピンと来ないようで反応が薄かった。ところが、4番目の課題曲『海へ…吹奏楽のために』が流れた途端、全員の目の色が変わった。

「ヤバい！」
慎也が思わず立ち上がった。
「なにこれ！」
雪子も珍しくテンションを上げている。しかし、由美子や沙希、翔の表情は暗い。いきなり二人のパートのソリが繰り広げられているからだ。
「ちょっとちょっと、翔！　カッコいいじゃんこの曲！」
「あ、あぁ。そ、そやな」
しかし、美里の表情も暗い。
「どしたの、ミサッチ？」
「いや……なんなの、あのシロフォン」
「あ……」
何を隠そう、美里はシロフォンが大嫌いなのだ。鍵盤楽器はどうやらかなり苦手なようである。
続いて聞こえてきたのは、実に豊かな音量で吹き上げるユーフォニウムのソロだ。そして再びフルートとアルトサックスのソリ。どうしてみんながいいという曲に限ってこんなことが起きるのか。
次の瞬間、雪子の表情も曇った。ホルンのソロだ。そしてトランペットとユーフォニウム。こうもソロパートの多い曲を演奏するとなれば、２年生の負担は大変なものになる。また、サックスのソロが聞こえる。曲が終盤に差し掛かる頃には、２年生の大半が曇った表情になっていた。
（こりゃあ……大変かもしれないなぁ）
恭一が彼らの様子を見ながら苦笑いをしていた。
「それじゃ、課題曲はいま聞いた１から４の課題曲のどれかにするからな。次の自由曲５曲は有名な部分だけを抜粋して聴くぞ」
といって始まったのはユーフォニウムと木管楽器、トランペットの伴奏。そしてしばらくしてから始まったのはソプラノサックスのソロだった。それを聴いただけで翔は耳を塞いでしまった。やがてピッコロまで加わってきた。そして一段と賑やかになった頃にはほ

とんどの楽器がさっきの複雑なメロディを奏でていた。
「こーれーは……ボツでしょ」
雪子が苦笑いする。
続いて聞こえてきたのはクラリネットのトリルの後に、トランペットとトロンボーンの勇壮なファンファーレ。そして木管楽器の柔らかく、どこか勇ましいメロディ。やがて再現部のように先ほどのメロディが繰り返され、リタルダンドをした上で打楽器が勢いよく突っ切り、一気に曲が終わった。
「なに……？　今の」
春樹が呆然としている。
続いては実に静かな曲。トライアングルの音色が地味に目立っている。やがて、ピアノのハープの音。そしてそれを包み込むように聞こえてきたのはアルトサックスの音色だった。
「まぁたオレかよ……」
翔はウンザリした様子でため息を漏らした。
そして次の曲。これも静かな曲。チューバなどの低音楽器が伸ばす音の上に重なるようにして現れたのは、本日４回目のアルトサックスソロ。
翔はバタリと机の上に倒れた。けれども、陽乃は翔がこのソロを吹いたらカッコいいだろうと妄想を膨らませている。また惚れ直してしまいそうだ。それに、この曲自体がカッコよすぎて陽乃の心を掴んで離さなかった。
そして最後の曲。
ユーフォニウム、チューバのアンサンブル。そして応えるようにして現れたのはホルンの裏メロディ。それを聴いただけで雪子、春樹、拓真の３人は青ざめている。そして高音のトランペットとホルンの妖しげだがどこか魅力溢れるメロディ。打楽器だってその存在感は負けていない。そしてアップテンポになり、クラリネットが延々トリルを続ける。ユーフォニウムとサックス、オーボエがメロディを奏でる。

そこで恭一が音源を止めた。
「自由曲は以上だ。それじゃあ今日のクラブはこれで終わるが、明日までに各自、やってみたい課題曲と自由曲を1曲ずつ考えてくること。投票の上で多かった曲を課題曲は1曲、自由曲は2曲、1週間練習してみて出来具合でコンクールの曲にしたいと思う。これは重要だからな、みんな真剣に考えてきてくれよ」
「はい！」
「それでは、解散」

「松浦くん」
終わりのミーティングも全て済んだ後、陽乃は勇を呼び止めた。
「はい？」
「あの……さ」
「なんですか？」
陽乃は緊張した面持ちで続けた。
「クラブ、辞めないよね？」
勇は陽乃の顔を見ず、ただ俯いていた。
「どうなのかな？」
「俺は……」
勇は苦笑いしながら答えた。
「朝倉先輩のやり方は、まだ納得いかないです」
陽乃はハッキリ言われて少し動揺した。
「でも、そんなことで辞めるなんてもっと納得いかないので。辞めるつもりは……ないです」
「……。」
「文句ありますか？」
勇が意地悪く笑う。
「まさか」
「そっすか」
「あたしね」

陽乃は少し照れながら言った。
「あたしは、松浦くんが必要なの」
「え……」
勇の顔が赤くなる。
「あ、や！　別に変な意味じゃなくてね？　同じパートの子が入ってきてくれて、あたしはスッゴい助かってるの。これからも……よかったらあたしを助けてほしい」
「……。」
「ダメ……かな？」
勇は少し寂しそうな顔をしていたが、すぐに笑って答えた。
「そんなの、余裕で助けますよ」
「……ありがと！」
そこへ翔が「あさくらー！」と呼ぶ声がしたので、陽乃はすぐに音楽室へ戻ろうとした。
「それじゃ、佐野が呼んでるから行くね。呼び止めてゴメンね」
勇はコクリと小さくうなずいた。
陽乃が振り向いて音楽室へ駆け出した直後、「先輩！」と勇が呼んだ。
「なに？」
「……お疲れ様です！」
「お疲れ！　また、明日ね！」
陽乃はニコッと笑うと、音楽室へと入っていった。
勇はその背中をしばらく見送った後、一人ゆっくり、階段を降りていった。

第１０３話　君が必要（後書き）

どこかぎこちなさが残っていたトランペットパートも、ようやくわだかまりが消えた様子。勇の中にある、陽乃への気持ちが見え隠れする中、課題曲と自由曲の選定は始まりました。

第１０４話　コッソリひっそり

「あ～……」
翔はベタリと机に頬をつけてため息を漏らした。今は昼休み。みんなお弁当を食べ終わって楽しそうに話したりしている中、翔は一人だけテンションが低い。
「何？　そのテンションの低さはどこから来るわけ？」
慎也がサンドイッチを頬張りながら不思議そうに聞いた。
「わかってるやろ～お前だって。今日で課題曲と自由曲が決まるんやで。もしさぁ、課題曲は『海へ…』で自由曲が『沐浴』なーんてことになったら……オレは破滅や」
「そうかなぁ」
慎也は頬張っていたサンドイッチを噛みながら答える。
「オレは部長がそういうソロのある曲吹けば、皆の士気っつーか、テンション上がると思うんだけどね」
「でもさぁ……オレのソロの出来具合でコンクールの賞が決まったらどうするわけよ？」
「金賞で代表とか」
「そんな都合よく行くかい」
ハァッとまたため息。
「ため息ばっかりついてると幸せ逃げるよ」
慎也が最後のサンドイッチをおいしそうに食べながら呟く。
「そうは言ってもなぁ……」
翔は腕時計を見た。午後１時１３分。授業は午後１時２０分から。
そっと立ち上がって教室を出ようとした。
「どこ行くんだよ」
慎也が呼び止める。
「トイレ。そんなこといちいち聞くなや」
「あー、そりゃすんませんね」

翔は慎也の目を見ないようにして教室を出た。左ポケットに入っている携帯電話を取り出し、すぐに電源をオフにする。そして右ポケットにちゃんと音楽室と部室の鍵が入っていることを確認した。

教室をそっと出て音楽室のほうへ向かう。別にトイレも音楽室のほうにちゃんとあるので不自然ではないが、なんとなく周りを気にしてしまう。幸い、音楽室のほうへはあまり用事のある生徒はいないので、昼休みの終わりに近い時間にはほとんど生徒の姿は見当たらなかった。

トイレの辺りにも生徒の姿も先生の姿もない。翔は素早くポケットから鍵を取り出し、なるべく音がしないように鍵を開けた。

開ける前にもう一度辺りを見渡す。

「よし……誰もおらへんな」

そっと、なるべくコッソリドアを開ける。音楽室のドアは開けるときに結構音が響くのだ。翔はコッソリ入れたことを確認すると、音楽室にも人の気配がないことを確認してドアを閉めるために廊下のほうへ向き直った。

「ん？」

足が見える。視線を上げると、スカート。

そして、名札。書いてあるのは「朝倉」という字。そして、聞き慣れた声が耳に入った。

「なにやってんの？　翔」

「ひっ、陽乃……！　い、いつの間に？」

翔は一気に全身から汗が出てきた。

「さっき。トイレから帰ろうとしたら怪しすぎる翔がいたから後ろに立ってみたの」

「ビックリするやんけ」

「いや、きっとバレたらマズいことしてるんだろうと思って黙って見てみたの」

「……やらしいヤツ」

「あ、そ。じゃああたし、教室に帰って佐野くんはズル休みですっ

て園部先生に伝えておくね」
陽乃はスカートを翻して教室へ歩き出した。
「お、おい！　ちょっと待てって！」
翔は思いっきり陽乃の腕を引っ張った。
「何？」
「あの～、その～……」
翔はハッキリ言おうとはしない。陽乃はニコッと笑って答えた。
「やだなぁ、冗談だよ。どうせ課題曲と自由曲の練習でもしようって考えてるんでしょ」
「う、うん……」
翔は少し頬を赤くして答えた。
「頑張ってよ。あたし、翔のそういう頑張り屋さんなとこ好きだから」
「えっ……！？」
ますます顔が赤くなる。翔にしては珍しいと陽乃は思った。形勢逆転とでも言おうか。
「だ、大丈夫？」
陽乃はそうは思いながらもいちおう気を使って聞いてみた。
「あぁ……うん。大丈夫」
「そう。ならいいけど。とにかく、頑張ってね」
陽乃が教室へ戻ろうとしたとき、急に腕を引っ張られてそのまま音楽室の廊下へ引き込まれた。
「キャッ！？」
同時に音楽室のドアと鍵が閉まった。翔は少し息を荒げている。
「……どしたの？」
「練習に！」
翔の目が珍しく必死だ。
「付き合ってください」
その目が急に優しくなった。
「……わかった。今日だけ特別だよ？」

「……サンキュ！」
翔は嬉しそうに立ち上がると部室の鍵を開けた。
「ここでする？」
陽乃は部室の窓を少し開けて聞いた。
「うん。音が漏れるとマズいから、楽器吹き始めたら窓も閉めてやるつもり」
「そっか……」
落ち着いて考えてみると、これはサボリだ。もう１時３０分。今さら教室で二人一緒に戻るなんてできない。絶対、茶化されるに決まっている。生まれて初めて、授業をサボる。
（でも翔と一緒ならいいか）
陽乃はクスッと笑ってロッカーの前で嬉しそうに楽器を準備する翔を見つめた。

「あれ……？」
慎也はちょっと変なことに気づいた。両隣、つまり、陽乃と翔が予鈴も鳴り終わったのにまだ帰ってこない。翔はともかく、陽乃が予鈴が鳴っても帰ってこないのは変だった。
１時１９分。さすがにおかしすぎる。
慎也は携帯電話を取り出して翔に発信した。
「現在この電話は電波の入らないところにいるか、電源が入っていません」
慎也は電話を切ってもう一度翔に掛けなおすが、同じ機械的な声しか聞こえてこなかった。
結局、二人は帰ってこなかった。
園部先生が「なぁに？　佐野くんと朝倉さんは揃って欠席？」と首をかしげた。するとクラス中がザワザワする。
「やだー！　どっかで……キャー！」
「やるなぁ、翔のヤツ！」
（くだんねぇ……）

慎也は頬杖をついてため息を漏らした。さっき、自分で翔に「幸せが逃げる」とか言っておいたくせに。

そもそも、二人が戻らなかったからってこんなにソワソワすること自体、無意味だ。慎也は引き出しから教科書を取り出して適当にページを開いた。

不意に、陽乃の椅子を見つめた。

どこか胸が痛むような、そんな感じがするのを慎也は気のせいだとごまかして教科書にすぐ目を戻した。

翔は音出しを終えるとすぐにストラップに楽器を装着し、同時にｉＰｏｄを聴き始めた。まずは『海へ…』からだ。

「いちおうビヴラートとか効かせてみるから、変じゃないか聴いてて」

「オッケィ」

翔の両耳にソロの手前の感傷的な部分が聞こえてきた。もう何十回と繰り返し聴いている。昨日、寝る前もずっと聴いていたくらいだから、もう譜面がなくても（そもそも見たこともない）バッチリ吹ける。音感には自信がある。

（よっしゃ！）

バリサクやバスクラなどの厚い伴奏が支えてくれている中で翔は思い切り息を吸ってサックスに息を吹き込んだ。

（きっと授業中だなんてこと、忘れてる……）

陽乃は翔の大きすぎるサックスの音色を聴きながらそう思っていた。でも、ここは今、二人だけの部屋だ。この翔のサックスの音色は、自分のものだけ。そう思うと嬉しくていたたまれなかった。

ソロの部分を吹き終えると、翔は満足そうに楽器から口を離した。

「どうやった！？」

「……あたしは、すっごい満足したよ。一気に曲の世界に引き込まれた感じ」

「そっかぁ～……良かった。もしこの曲が選ばれたら後は陽乃と一

緒に練習したらええぇな」
「へ？　あたし？」
「トランペットのソロ。陽乃が吹くやろ？」
「うん……多分」
「ほな、またホールニューワールドのときみたいに頑張らないとな」
「そっかぁ……あの時も大変だったんだけどなぁ」
陽乃はハァ～と長いため息をついた。
「おいおい、ため息つくと幸せ逃げるらしいで」
「え！？　そうなの！？　そんなの誰が言ってた？」
「慎也が。さっきオレもため息ついたらそう言ったで」
陽乃はそれを聞くと慌てて深呼吸をして今吐いた息を吸い込もうと頑張った。それを見て翔は大笑いし始めた。
「そんなことするヤツ初めて見たわ」
「……いいじゃん別に」
その時だった。
音楽室の入口が開く音と同時に「誰かいるのか！？」という野太い声。体育の岸田先生だった。
「ヤバ！」
翔は陽乃の口を塞いだ。突然、そんなことをされたので陽乃も赤くなってしまう。
「おい！」
また岸田の声。音楽室への引き戸が開く音がする。やがて部室のほうへ足音が近づいてくる。
「マズい！　こっち来るぞ！　入れ！」
「えぇ！？　で、でも！」
「見つかったらヤバいやろが！　早よせぇ！」

ガラガラッと音がしてドアが開いた。
「んー？」
岸田は大柄な体で部室中を見渡す。

ギシギシと床の軋む音。
（どんだけデブやねん……）
翔は陽乃とおしくらまんじゅう状態のロッカーの中で岸田が早く出て行くことばかりを祈っていた。陽乃はそれどころではない。
（熱が上がって死ぬ～！　心臓爆発する～！）
（黙れって！　もうちょいのガマンや！）
「気のせいか……楽器の音がしたんだが」
岸田はもう一度部室を見回して、やがて出て行った。入口のドアが閉まる音がして、足音が遠のいてから翔はそっとロッカーの扉を開けた。
「やっと行きよった……。陽乃、もう大丈夫やで」
「う、うん……」
陽乃は岸田がどうこうというのが問題ではなかった。翔とあんなに狭い空間に入ったことのほうが大問題だった。それに、翔は意識していなかったけど……胸に右腕と左手が思い切り当たっていた。
「なぁ、6時間目どうする？」
翔がうっすら出た汗を拭いながら陽乃に聞く。
「教室戻って授業受けるか、いちおう」
「そ、そうしようよ。さすがに2時間連続サボる勇気はあたしにはないよ」
陽乃はなんとか冷静に返した。
「オッケ。ほな、楽器片付けるわ。あ、一緒に戻ると変やから、先に陽乃戻っとけや。いまちょうど休憩時間の直前やし」
「う、うん……そうするね！　んじゃ、また！」
「おう。サンキューな、陽乃」
「お安い御用よ！　んじゃ！」
陽乃はそそくさと教室を出て行った。
翔は楽器を片付けた後、左手に残る感触に少し後ろめたさを感じていた。
「やらかかった……な」

そう呟いてから自分の頬を叩いた。
「アホか！　スケベや思われるやんけ……」
しばらく呆然とした後、翔は思い出したように教室へと戻っていった。

第１０４話　コッソリひっそり（後書き）

初めて授業をサボッて二人だけの空間で楽器の楽しさを感じた二人。
課題曲と自由曲が決まるまでに、自分の技術をある程度磨いておきたいという翔の意志の強さに陽乃はさらに彼に惹かれた瞬間であり、物理的ではあるものの二人の距離も縮んだ瞬間でした。

第１０５話　来るべき時

５月８日（火）放課後。
いよいよ課題曲と自由曲の候補が決まる時が来た。来るべき時が来たのだ。
「ねぇねぇ、陽ちゃん」
美里がヒソヒソ声で話し掛けてきた。
「ん？」
「ぶっちゃけた話、どれに投票するの？」
「えー？　言っちゃうの？」
「いいじゃん！　あたしと陽ちゃんの仲でしょ？」
「しょうがないなぁ……あたしはね」
陽乃はコソコソと美里の耳元で囁いた。
「えっ！？　そうなの？　意外～」
美里は自由曲の曲名を聞いてかなり驚いた様子を見せた。
「だってさぁ、勇壮でカッコいいじゃん！　一発で聞き惚れたよ、あたし」
陽乃は惚れ惚れした表情で黒板のほうを見た。
「でもさぁ、あの曲ソロあるでしょ？」
「えぇっ！？」
陽乃の顔が一気に現実に引き戻される。
「やだ、知らないで選んでたの？」
「だって、この間聴いたときにはそんな様子ゼロだったのに」
有名な部分だけを聞くと恭一が言っていたのを思い出した。つまり、陽乃はその有名な部分だけに心惹かれて選んだわけだ。トランペットのソロなんて存在すら知らなかった。
「いや～……参ったな、あたし、あの頭の部分の勢いだけで選んでた」
「あたしは嫌だな、あの曲！　だってさぁ、わけわかんない拍子出

てくるし、パーカッションは人数いるし」
　忘れていた。パーカッションの数が多すぎると人数不足の可能性もあるのだった。そういうことも考慮して選ぶべきなのに、やってみたいだけで曲を選んでしまった。自分が心底情けない気がした。
「どした？」
　美里が心配そうに尋ねる。
「いやぁ～……あたし曲を選ぶときに他のパートのこととかまーったく考えずに選んだからなんかバカみたいと思って」
　陽乃はハァ～と大きくため息を漏らすと机に伏せてしまった。
「あ、ため息つくと幸せ逃げるよ」
　美里が頬を人差し指で突いてきた。
「知ってる。川崎くんから聞いたんでしょ。それ、昼間も翔から言われた」
「やだ、知ってんじゃん。ならため息禁止。ＯＫ？」
「わかってるけど、出るもんは出るんだからしょうがないよ」
「もう……」
　またため息をついて黒板のほうを向いたきり、陽乃は何も言わなくなった。翔は慎也や春樹と楽しそうに話をしている。
「別にいいじゃん。自分が好きだと思った曲を選んだんでしょ？」
「え？」
「自由曲だよ。好きなんでしょ？　好きなものをそう簡単に諦めるんだ？」
「いや……諦めたくはないけど」
「じゃあ佐野くんが好きなんだけど、佐野くんは別のクラスの子が好きです。明らか陽ちゃんよりバカ丸出しでブサイクなの。諦める？」
　美里は真剣な表情で言い寄ってきた。
「ちょ、それは言い過ぎかと……」
「言い過ぎなんかじゃないよ！　ありえない話じゃない。ほら、どうすんの！？」

「そ、そうだね～……と、とりあえず、頑張ってみるかな」
「とりあえずなんかじゃダメ！　押して押して押しまくる！　わかった！？」
美里があまりに寄って来るので椅子から落ちそうになった。
「わーかったわかった！　つまり、諦めずに投票しろってことでしょ！」
「わかってるんならＯＫ！　これで１票だけだったら笑えるけど」
「笑えない！」
陽乃と美里は大声を上げて笑い出した。それを見た翔と春樹が苦笑いする。
「うるっさいヤツらやなぁ」
「まぁあの二人は部内でも１、２を争うおしゃべりだからね。佐野くん、よく毎日行き帰り喋るネタがあるね」
「アイツとおったら刺激いっぱいやからなぁ。なぁ、田中もそやろ？」
慎也のほうを見ると、美里たちのほうを見て呆然としていた。
「川崎くん？」
「おーい？　慎也？」
ハッと気づいたように慎也が翔と春樹のほうを見た。
「どした？」
翔と春樹のほうをしばらく見つめた後、思い出したように慎也は口を開いた。
「やっ、なんでもない……」
「そ？　それならいいんやけど」
翔は少し慎也に不審な感覚を抱きながらもすぐに春樹と話の続きを始めた。

ついに来るべき時がやってきた。恭一が黒板に曲目を書いていく。

・課題曲候補

♪　課題曲１　架空の伝説のための前奏曲
♪　課題曲４　海へ…吹奏楽のために

・自由曲候補
♪　リバーダンス
♪　吹奏楽の為の序曲
♪　絵のない絵本
♪　沐浴
♪　大地と水と火と空の歌

それから小さな紙が配られた。
「それじゃあ、そこにやりたい課題曲の番号ひとつとやりたい自由曲の名前を書くこと。違う番号書いたりわかんない曲名や他の曲名は無効票にするからなー」
順平から陽乃に紙が回された。それを陽乃はピッコロの井上佳菜（いのうえかな）へと回してすぐに課題曲の番号を書いた。
５分もしないうちに紙は回収されて、すぐに開票が始まった。
「それじゃ、まず課題曲のほうからな。佐野、前へ出て結果を書いてくれ」
「はい！」
翔はウキウキした様子で前へ出て行く。
「行くぞ。えー、『海へ…』一票。『海へ…』一票。『海へ…』一票……」
次々とＦｌｙ　Ｈｉｇｈに票が入っていき、あっという間に「正」の字が６つ並んだ。
「最後に『架空』が一票」
そこで笑い声が上がった。
「誰ー？　一票だけなんておもしろい」
絵美が爆笑し出した。つられて由美子と沙希も笑い出す。
「やぁだ！　ちょっとエミリン笑わないでよ！」
「そういうサキティも笑ってんじゃん！」

恭一が「おいおい、静かにしろ」と言いながらも薄笑いしているのに陽乃が気づいた。
「あぁーもぉ！　悪かったな！　入れたのはオレでーすーよ！」
翔が顔を赤くして大声で叫ぶとさらに笑い声の数が増えた。陽乃もこらえ切れず笑い出す。
「もう！　結局朝倉とソロの練習なんかせなアカンのかい。憂鬱でしょうがないわ」
「ちょっとー！　今の一言は聞き捨てならないわね！　あたしだと憂鬱なの？　エミリンや由美子の可能性もあるかもしれないでしょ！？」
「でも言うてしもた手前、もうお先真っ暗ですな」
翔はため息をついて首を横に振った。
「じゃあ彩香ちゃんだったらどうなの？」
「おおー！　ステキですな！　毎日残ってでも練習しますわ」
「じゃあ松浦くんだったら？」
「これを機会にひとつ仲良くなりますか！」
「何よ！　佐野のバカ！」
「はいはい、痴話ゲンカはそこまで。次、自由曲の投票行くぞ」
恭一が呆れた様子で二人のケンカを止めた。
「自由曲は……」
順調に票が入っていく。優勢なのは『吹奏楽の為の序曲』と『沐浴』だ。
（がんばれー！　もっと増えろ～……頼んだわよ～）
陽乃は祈るような気持ちで黒板のほうを見続けた。
「よし、これで決定だな」
そう恭一が言い終えた瞬間、陽乃は「キャーッ！　やったぁ！」と声を上げて飛び跳ねた。
自由曲は一票差で『吹奏楽の為の序曲』が選ばれたのだった。

「それじゃ、お先に失礼します」
逢沢駿（あいざわしゅん）が深々とお辞儀をして
「あ、おつかれさん」
翔はニコッと笑って片手を振りながら部室へと入って行く。
「お待たせ」
しかし、声を掛けても陽乃はプイッとしたままだ。
「まださっきのこと、怒ってるんか？」
「当たり前じゃない。皆の前で……ヒドい」
翔は楽器と譜面などを置いて陽乃の横に立った。
「悪かったって……。つい、声が出て恥ずかしかったから」
「だからって、あんな言い方はないよ」
「うん……ゴメン」
翔が俯いたまま謝ってきた。陽乃だって早く普通に戻りたいけれども、なんだかギクシャク感が抜け切らない。
「もちろんあたしは『海へ…』に投票したよ」
「……なんで？」
「だって……」
陽乃は言おうかどうしようか迷ったが、思い切って言った。
「翔と初めてのコンクールで……翔のソロが聴けるから！」
それを聞いて一気に翔の顔が赤くなった。
「……恥ずかし」
陽乃も言ってから顔をすぐに赤くした。
「そっか……そっかぁ！」
翔は急に笑顔になってサックスを出し始めた。
「今から吹くの？」
「うん！　一緒に、練習しようや」
「『海へ…』を？」
「それ以外に何があるねん！」
「……オッケィ！」
陽乃も片付けたばかりのトランペットを取り出し、マウスピース

をセッティングした。
こうして課題曲と自由曲が決まった七海高校吹奏楽部は、コンクールに向けて走り始めたのだった。

第１０５話　来るべき時（後書き）

課題曲・自由曲共に決まった七海高校。これからコンクールに向けて突っ走るのみ！

第１０６話　古い曲でも

５月２０日（土）に、七海市の西側に位置する大井戸川（おおいど）沿いの大井戸公園で広海（ひろみ）地区（市役所のある地域周辺の名前）祭りが開催される。七海高等学校吹奏楽部も今回、初めて出演依頼の声がかかった。もちろん参加だ。

その時に演奏する曲目は恭一のほうがピックアップしてくれて既に決まっている。今回は４曲披露する。１曲目は吹奏楽の魅力を知ってもらうために少し真剣目の曲を取り入れてみた。それが今年の課題曲『海へ…』だ。

２曲目から４曲目は観客の人たちが知っていそうな曲を選んでいる。２曲目は『君の瞳に恋してる』。明るく行く方向性で全部選んだという。夏っぽい曲調が大好きだと翔は言っていた。でも、陽乃にしてみればハッキリ言って古い曲だ。

３曲目はゴダイゴというグループの曲で『銀河鉄道９９９』という曲。銀河鉄道自体は陽乃たちはもちろん知っているが、どんな物語かと聞かれてもよくわからないし、ましてや曲もよくわからない。そういえば「はねるのトびら」の「短縮鉄道の夜」で流れていたような気もすると沙希がうろ覚えだが言っていた。

そして最期の曲は『Ｊ－ＰＯＰ－ＨＩＴＳ』。これは『硝子の少年』、『ＷＨＩＴＥ　ＢＲＥＡＴＨ』、『ＷＡになっておどろう』という３曲がメドレーになっているニュー・サウンズ・イン・ブラス９８の曲。といっても、３曲ともども陽乃たちがまだ小学生になったばかりの頃、１９９７年の曲だ。どんな歌詞なのかなんて当然わからないし、曲自体をよく知らない。

しかも課題曲もたいがいだが、それ以外の３曲もかなり難しいと来たものだ。あと２週間もないのに果たして仕上がるかどうか怪しいものがある。

「あーあ……。ホントにあとちょっとなのに仕上がるのかなぁ」

陽乃はつくし野川の土手沿いを雪子、絵美、美里の3人で歩きながらため息を漏らした。
「悪くはないと思うんだけどなぁ、私は」
雪子は首を傾げながら陽乃の質問に答える形で返した。
「そりゃー雪ちゃんとこのパートは雪ちゃんと右川くんだけでしょ？　二人とも上手いから余裕で音程とか合わせられるしね」
美里がうらやましそうに呟く。美里のパーカッションは初心者が二人もいるので苦労しているようだ。
「私のパートも問題よ……。ソリ（※1）とソロがあるんだもん。あれを合わせるのはなかなか大変でね～」
みんな問題が山積だ。陽乃は自分だけじゃないと思うと、俄然頑張らないといけない気がしてきた。
「とりあえず、合奏以外の時間はパート練習とセクション練習だね！　木管セクションリーダーさん、よろしく頼んだよ！」
陽乃がバシバシと絵美の背中を叩いた。
「わかった！　バリバリ指導するから覚悟してもらわないとね」
絵美もやる気マンマンだ。
「でもさぁ……曲が古いよね」
美里が苦笑いで言った。
「そうそう。私、あの中で知ってるのって課題曲しかなかったんだけど……」
沙希が残念そうに呟く。けれども、感覚的には雪子も同じようだ。
「お客さんの反応も……微妙だったら困るよね」
陽乃も苦笑いになる。
「お客さんっていえば……お父さんとかお母さんに観に来てもらう？」
美里が思い出したように言った。
「ちなみに、田中家は姉から父母ともども参加です」
「ホント？」
雪子がホッとしたような表情を見せた。

「実はウチも妹から父母が参加するんだよね」
「え？　そうなの？」
陽乃が嬉しそうな顔を浮かべた。
「あっ、ひょっとしてぇ」
「そうなのよ！　美里の予想どおり！」
「おばあちゃんまで全員参加！」
「えぇーっ！？　スゴぉい！」
雪子もパチパチと拍手した。家族総出というのが2年生のほとんどかもしれない。
「沙希ちゃんは？」
雪子が何気なく沙希のほうを振り返って聞くと、一瞬驚いた顔をして見せた。
「沙希ちゃん……？」
「あっ、あぁ！　ウチね！　ウチはなんか親が忙しいみたいで……来れないって」
「そうなの？　せっかく晴れ舞台なのにね……」
美里が自分のことのように落ち込んだので、沙希は戸惑いつつもこう返した。
「いいのいいの！　私は別にどうって思ってないし……ね！　ホントホント！」
「そっかぁ。沙希ちゃん、また別のときにお母さんとかに来てもらえたらいいね！」
雪子がニコッと笑って言った。
「うん……そだね」
嬉しそうに笑う沙希の顔がどこか寂しそうに映ったのは、陽乃だけだったのかもしれない。

「ただいまぁ」
家へ帰ると、既に夏樹も祥夫も帰っていた。トイレから出てきた知恵子が出迎えてくれた。

「おかえり、陽ちゃん。クラブは毎日忙しいんだねぇ」
「うん！　でも、すっごい楽しいからいいの。それよりおばあちゃん！　土曜日はもちろん、聴きに来てくれるよね？」
「当たり前じゃないの。おめかしして行かなきゃねぇ」
知恵子は優しく陽乃の頭を撫でた。この知恵子の撫で方、陽乃は大好きだ。
「それより陽ちゃん。どんな曲を演奏するの？」
「それが聞いてよおばあちゃん！　全然知らない曲なの」
陽乃はカバンを抱えたままリビングへ直行した。
「おかえり、陽乃」
「ただいま！　あ、お母さん聞いてよ！　今度の土曜日演奏する曲なんだけどねー、全然わかんない曲ばっかりなの。先生ったら古い曲しか選んでくれないんだから、ホント困っちゃう」
「あら？　そんな変なのばっかりなの？」
由利が不思議そうに聞き返した。陽乃はテーブルにおいてあった茹でたトウモロコシを手にとって食べながら不満そうに呟く。
「そうなの。『銀河鉄道９９９』とか『君の瞳に恋してる』とか。『君の瞳に恋してる』とか何十年前かの寒～いギャグみたい」
「それって『君の瞳に１００万ボルト』みたいな？」
夏樹が冷蔵庫からプリンを取り出してきて話に加わってきた。
「違うでしょ。『君の瞳は１万ボルト』よ」
由利がよそったご飯を陽乃の前に置いて訂正する。
「さっすがお母さん。その世代を生きてたんだもんねぇ」
夏樹がニヤニヤ笑いながらプリンを頬張った。
「夏樹。明日の夕飯はヌキね」
「えー！？　ヒドいよぉ」
「バーカ。お母さんはそんなオバハンじゃないわよ」
「陽乃。アンタもね」
「えー！？　ヒドいよぉ」
知恵子がクスクス笑いながらも続けた。

「それでも、銀河鉄道なんかはおばあちゃんにもお母さんにも懐かしいけどねぇ。ねぇ、祥夫。あなたもそうだわよね。小さい頃、夢中になって観てたじゃない」

祥夫が恥ずかしそうに横になったソファから小さく「母さんはそんなことばっかり覚えてて……」と返した。

「いいじゃないの。きっとねぇ、みんなのお父さんやお母さんはそういう懐かしい曲を聴いたら喜んで拍手してくれるよ」

「そういうもんなの？」

「えぇ、そうよ」

知恵子は緑茶を飲みながら続ける。

「陽ちゃんも大学行って、会社に入って、結婚して、かわいい子どもができて、その子が吹奏楽でもやったりしたら、きっと同じコトを言うよ。今のホラ……なんだったかね。有名なグループとかいるでしょう」

「ＥＸＩＬＥとか、コブクロとか？」

「そう。そのなんだかおばあちゃんにはわかんない言葉で歌ってるグループも、陽ちゃんたちの子どもたちにはわかんない曲になってるかもしれないよ。それでも、陽ちゃんたちには懐かしい曲だろう。聴きたいと思うけどねぇ」

「……そういうもんなのかなぁ」

由利がおかずの魚の煮付け、豆腐、ほうれん草のおひたしを置いてくれた。

「きっと東先生、親御さんがいっぱい来ると思ってそういう曲を選んだんじゃないかしらね。先生は私たちの世代からはちょっと離れてる、まだ若い先生だろうし」

「そこまで考えてる……かなぁ」

「きっとそうよ。お母さんはそう思うわ」

「うーん……」

「とりあえず、早く食べなさい。冷めちゃうわ」

「はぁい。いただきます」

食べ始めてすぐ、メールが入った。携帯電話を取り出しチェックだけしてみる。するとすぐに「陽乃。食事中」と由利が不機嫌そうにこちらを見た。
「わかってる。誰からか確認するだけ」
見てみると、美里だった。

『ウチの親、曲目聴いたら大興奮→→☆☆　演奏、絶対聴きに行くって張り切りすぎて引いちゃった（笑）　陽乃のトコは？』

陽乃はすぐに『うちもおばあちゃんからお母さんまで張り切ってる♪→→　これは絶対来るよ』と返しておいた。
「沙希ちゃんトコは、ご両親が忙しくって来れないんだって」
「あらそう。しょうがないわね」
「お母さん、沙希ちゃん家って何やってるのかなぁ？」
「さぁねぇ……。お母さん、大谷さんのことはよく知らないし」
「だよね……」
「大谷さんに聞いてみればいいじゃないの」
「そっか。簡単な話だよね」
陽乃は箸で摘んだ魚を口へ移した。
「おいし」
やっぱり由利の料理でないと満足できない。陽乃はそう思いながらご飯を頬張った。

「ただいま」
沙希が玄関を開けると、やっぱり真っ暗だった。沙希は諦めたようにため息を漏らし、玄関の電気を点ける。靴を揃えて脱いで、廊下へ上がる。廊下の電気を点けると、赤いじゅうたんとシャンデリアが見える。きれいに掃除された部屋。それもそのはず、毎日メイドさんが来て（ちなみに、名前は栗原（くりはら）さんという）掃除してくれているのだ。年齢もちょうどお姉さんといえるぐらいの２１歳。アル

バイトだといっていたけれど、几帳面でやさしい人。沙希の家の状況を知って夕食まで作ってくれるなんて言ってくれる、とことん優しい人。

でも、まさかそこまで世話になるわけにはいかないので、お気持ちだけいただいておいた。それに、沙希にはそうしたい理由があった。

「あっ！　お姉ちゃん！　おかえりなさい！」

中学1年生になったばかりの弟・洋輔（ようすけ）と小学校2年生の妹・稚依（ちい）が明るくなった廊下を走って駆け寄ってきた。

「あぁ～、ほら、チイちゃん。またじゅうたんを乱したらお母さんに怒られるでしょう？」

「あ、本当だ。ゴメンなさい」

稚依は慌ててしわになったじゅうたんを丁寧に撫でてしわ伸ばしを始めた。

「あ、ほら。いいからいいから。今度から気をつけるのよ。それより、お姉ちゃん今からご飯の支度を急いでするから、稚依ちゃんは学校の宿題をやってね。それから、洋輔は悪いんだけど、洗い場に残ったままの洗濯物を洗濯機に放り込んでくれる？　後で干しておくから」

「ハイヨッ！　お安い御用」

洋輔はすぐに洗面所へ走って洗濯機をかけてくれた。

「それじゃチイちゃん、お部屋行こうか」

「はーい」

沙希はリビングと廊下を遮る重いドアを開けた。こんな金銀ギラギラのドア、正直いらないと昔から思っている。このドアぐらい、沙希の両親から彼女へ注がれる気持ちや愛情の重さがあればいいのになどとくだらないことを考えることも多かった。最近ではそれも減って、ため息しか出ない。

（ため息すると幸せ逃げるんだって）

（うぇ！？　それホント！？）

今日の部活で陽乃が美里に言ったことが蘇る。それを聞いた途端、美里は必死に深呼吸をしていたので陽乃や雪子、絵美たちは大笑いをしていた。

「お姉ちゃん」

「ん？」

稚依がクイクイと制服のスカートを引くので沙希は我に帰って稚依のほうを見た。

「お鍋、臭い」

「えっ！？　あっ！」

目の前でモウモウと鍋から黒煙が吹き上がっている。

「しまった……熱ッ！」

「姉ちゃん！？　どした！？」

鍋が落ちて焦げた中身が床に飛び散った。

「キャアッ！」

思わず鍋に触れてしまって熱さにひるんだ隙に鍋を落とし、見事、中身はグシャグシャになってしまった。

「チイ！　危ない！　お前こっち来い！　姉ちゃん、火傷したっしょ？　氷で冷やさないと！」

「あ、それより……早く片付けないと」

「姉ちゃん！　火傷の手当てが先！　ほら」

ちょっと力が強くなった洋輔の手に引かれて、沙希は火傷をした右手の親指、人差し指、中指を冷やしに洗面所へ行った。

冷やしながらジッとしていると、母の智佐子（ちさこ）が帰ってきた。ドアの開く音がする。それから台所へ入るなり、怒った声が聞こえてきた。

「なぁに！？　この散らかった台所は！？」

「あ、姉ちゃんがちょっと火傷したときに……」

「火傷！？　稚依にケガとかはなかったんでしょうね！？」

「稚依はなんともなかったし、僕も大丈夫。だけど、姉ちゃんが……」

「これはあの子のミスなんでしょう！？　自業自得よ。ほら、洋輔と稚依ちゃんはお母さんが買ってきたお弁当を食べなさい」

「でも……」

「早くなさい。二人とも、明日も学校でしょう」

「はい……」

それから二人がお弁当を食べる音がし始めた。ようやく落ち着いた沙希はリビングへ入った。

「おかえりなさい」

「おかえりなさい、じゃないでしょ！　なんなの、この台所は。アンタに家事を任せると絶対どこか失敗するんだから。頼まなきゃよかったわ。余計な仕事ばっかり増やして」

「……ごめんなさい」

智佐子は焦げ付いた鍋を洗いながら文句を言い続けた。

「まったく……中学で辞めるかと思ったら、まだ吹奏楽なんか続けて。なんになるのかしらね」

「でもね、お母さん！　今度、土曜日に演奏会がまたあるの。そのときに、ちょっと古いんだけど『銀河鉄道９９９』とか『君の瞳に恋してる』とか演奏するの。お母さんたちもよく知ってる曲をするから……」

「歌もないのにそんな演奏聴いたってしょうがないわ。それに、その日は久しぶりにゆっくりできるの。洋輔と稚依と、都合が合えばお父さんとも出かけてくるわ」

智佐子は鍋をたわしで洗いながら突っぱねるように言い放った。

「……そう。気をつけてね」

「言われなくてもアンタよりどんくさくないから平気」

「……。」

沙希はそっとリビングから出た。

「沙希ー！　アンタ、ご飯はどうするの！？」

答えずに、そっと自分の部屋のドアを開けた。電気をつけると、去年の11月に撮った陽乃たちとの写真が置いてある。これは、沙希の宝物だ。

中央に翔。

その右隣に陽乃。陽乃の後ろに彼女を挟むようにして、美里と雪子。翔の隣には春樹。春樹を挟むように後ろに拓真と慎也。慎也と美里の間に絵美。そして一番後ろに由美子と沙希が写っている。

七海高校の「7」。ラッキーセブン。沙希の「沙」の字は7画。「希」の字も7画。極めつけは大谷の「谷」まで7画。でも、沙希自身はちっともラッキーだとか思ったことはない。家が嫌いで仕方がない。それでも、吹奏楽をしていれば自分らしさが出せるような気がしていた。

沙希は携帯電話を取り出し、電話を掛け始めた。

「もしもし、こんばんは。大谷です……」

沙希の最後の賭けが始まった。

第１０６話　古い曲でも（後書き）

古い曲にブツブツ文句を言う女子部員たち。しかし、沙希だけは家庭環境から観に来てもらえないので元気がない様子。そして、沙希がかけた電話の相手とは？

※１ソリ：パート全員でソロを吹くこと。

第１０７話　誰かが聴いてくれる

５月２０日（土）。いよいよ本番の日がやってきた。
「おーい、全員集合！」
翔たちが音楽室で準備をしていると、ダンボール箱を抱えた恭一が入ってきた。
「先生、何その箱？」
翔が不思議そうに聞く。恭一はニヤッと笑うと翔にダンボールを開けるように言った。周りに部員たちが集まって全員でダンボールを見つめる。
「おぉ～？」
春樹と拓真が声を上げた。目に見えたのは、色とりどりのシャツだった。
「先生！　何これ？」
由美子が嬉しそうに声を上げる。恭一がもっと嬉しそうに笑いながら答えた。
「クラブＴシャツです！」
「クラブＴシャツ！」
真っ先に声を上げたのは他でもない、翔だった。
「マジっすか、先生！」
「そうだぞ。マジだ。君らには内緒でこないだ、制服のシャツのサイズ聞いただろう？　それはこのシャツを作るためだったのです」
「おぉー！」
さっきより大きな声で慎也、拓真、春樹の３人が興味深そうにダンボールを覗き込んだ。
「それじゃあな、まずクラリネットから取りに来い」
恭一が絵美、光瑠、みゆき、優輝の４人に呼びかけた。
「え？　別に誰でもいいから取ったらいいんじゃないですか？」
絵美が驚いて恭一に提案した。

「まぁいいから。クラリネットの後はフルートとオーボエ、バスーン。それからサックス。そんでトランペット、ホルン、トロンボーン、ユーフォニウム、チューバと弦バス、それからパーカッションの順で取りに来い」
「えーっ!?　あたしのパート、最後?」
美里が不満そうに頬を膨らませた。
「コラコラ、ぶつくさ言うな。とにかく、さっさとしろ。ちょっと急がないといけない理由があってな」
とにもかくにも、部員たちは次々とTシャツを取っていく。
「ん?」
バスーンの戸口(とぐち)　誠(まこと)が気づいたようだ。
「先生、ひょっとして……」
「おっ?　もう気づいたのか。早いなぁ。まぁ、見ればわかるようにパートごとに色が違うんだ」
「おぉっ!　すげぇ!」
優輝がはしゃぐ声を上げた。
「あ!」
光瑠が続いて声を上げた。
「見て!　背中!」
すると、背中に大きく背番号のように「7」という数字が書かれている。
「そうそう。それは『七海高校』の『7』だ」
「すっごーい!　ねぇ、サックスはまだなの?」
中野(なかの)さゆりが落ち着かない様子でダンボールのほうを覗き込む。
「わーかったわかった!　ほら、サックスさんどうぞ!」
「やったぁ!　なぁ、どれにする!?」
一番はしゃいでいるのはやっぱり翔であった。
「えー?　やっぱ私はこれかなぁ」
麻綾が嬉しそうに一番上に乗っていたシャツを手にした。
「えっ!?　あたしはそれじゃあ……」

さゆりが慌てて間に入る。
「待てよ！　そこはパート長のオレからやろ！？」
「ちょっとー！　私、背が高めですから大きいの下さいよ！」
「だぁー！　サイズは測ってあるって言ったろう？　制服のサイズのものを取れ！」
恭一が苦笑いしながらパシッと翔の頭を叩いた。

ようやく全員がシャツを取り終えて、合奏の隊形に並んで座った。
なぜかサックスだけ水色のシャツを既に着ているのが恭一は少し気になったが、あえて触れずに話を進めた。
「それでだな、急いだのには理由がある。おい、橋本」
「はい」
絵美は茶色い封筒に入った紙を配っていく。翔のところにも回ってきたそれにはたくさんの音符とタイトルに「瞳をとじて」と書かれていた。
「今日、急遽だがかねてから部員の中から強い希望があって、この曲を付け足すことになった」
ザワザワと部員たちがざわめき出す。
「平井　堅じゃん」
「えぇ～！　今日ってもう本番まで時間そんなにないのに！？」
オーボエの野村健之佑（のむらけんのすけ）がしかめっ面をして叫んだ。
「ちょー！　俺、ソロとかあるじゃん！」
「やだ！　フルートにも書いてある！」
由美子が大慌てで沙希の袖をグイグイ引っ張った。
「はーいはいはい！　静かに。実はな、これは大谷の強い希望で今回、急遽足した曲なんだ」
「サキティが？」
美里がベースドラム（大太鼓。ベードラともいう）の後ろから声を上げたが、姿は見えない。
「そう。今日な、大谷の弟さんと妹さんが来てくれるらしくってな。

彼らも知っているような曲を聴かせてあげたいということで。今回は協力してやってくれないか？」

沙希が立ち上がってお辞儀をしながら「お願いします！」と言った。

「フルートのソロは私が吹くから……お願いします！」

部員たちは一瞬、静まり返ったがすぐに翔が「まぁ……他でもない大谷さんの願いじゃオレは断られへんかな」と笑って返した。

「あのさ、野村っち」

「あ、はい！」

翔が二つ隣にいる健之佑に声をかけた。

「このオーボエのソロ、オーボエおらへんかったらオプション（※1）でアルサク（※2）で吹くって書いてあるんやん。オレにこれ、くれへん？」

「え？　いいんですか？」

「うん。オレ、吹きたい」

「はぁ……まぁ、いいですけど」

「サンキュ！　大谷さん、頑張ろうな」

翔がニッと笑って沙希に手を振った。沙希も嬉しそうに小さく手を振って返す。

「先輩。怒ってます？」

彩香が心配そうに陽乃に聞いた。

「ううん。あたし、サキティのことは大好きだから大丈夫」

陽乃は沙希がようやく笑ってくれたことに、安心感を覚えていた。

「それじゃ、頭からもう一度行くぞ」

恭一が指揮棒を上げるとすぐに全員が楽器を構え「はい！」と返事をする。

『瞳をとじて』ばかりを練習すること1時間。もう11時を過ぎていた。本番は午後2時ジャスト。12時には昼食を食べ始め、1時には学校を出ないといけない。

何度も通す中で、ようやく翔と沙希のソロ部分が安定してきた。みんなが聴いたことのある曲だったので、そんなに苦労せずにすぐ吹けるようになっていた。

「よし！　『瞳をとじて』はこのへんで止めて、他の曲をサッと通すぞ。それじゃ『海へ…』を出して」

「はい！」

『海へ…』、『銀河鉄道９９９』、『君の瞳に恋してる』、『Ｊ－ＰＯＰ－ＨＩＴＳ』を通し終えて、ようやく恭一が指揮棒を置いた。

「大谷」

「はい」

「大丈夫そうか？」

沙希はしばらく間を置いてから「はい。大丈夫です」とうなずいた。

「佐野は聞く必要ないな」

「えー！？　オレにも一応聞いてやってくださいよ！」

「あーはいはい。それじゃ、昼ごはんを食べて１２時半には楽器を積み始めること！　ＯＫ？」

「はい！」

全員が一斉に返事をする。これも最近になってようやく全員が意識してできるようになった。何度も恭一に合奏中、怒られてできた結果だ。

昼食を終えて翔はすぐに打楽器を運ぶのを手伝うために音楽室を出てすぐ横の階段を上がった打楽器倉庫へ向かった。

「おーい、田中」

打楽器倉庫の中へ入っても、人がいる気配はなかった。あずさ、優、恵梨の３人はまだ昼食を食べていたし、洋之は下のグロッケンやシロフォンを準備していた。美里の姿は見当たらなかったので、ここにいると翔は思ってやって来た。

「おらへんのかな」
翔はそっと上へ上がる。実はここがあまり翔は好きでなかった。何かがいそうな気がするからだ。そんなくだらない話はするなと陽乃にプリプリされたこともあった。でも、翔はその手の話が苦手だ。
そっと上を覗く。けれどもやっぱり美里の姿は見当たらない。この打楽器倉庫の階段だけなぜか改装されないままで、昭和時代の、それも戦争の頃のような丸窓が未だに残っている。その窓ガラスも長い時間を経てくすんでいる。そこから漏れる陽の光が薄くなって階段に入ってくる。
カシャーン！と急に音がしたので思わず翔は「わっ！」と小さい悲鳴を上げた。その声が階段中に響いていく。それからまた無音の状態に戻った。
「……サッサと行こう！」
翔は急いでスネアドラムを抱えて降りた。だんだん足早になる。
「あっ！」
思わず階段を踏み外してスネアドラムを落としそうになった。寸前のところで誰かがそのスネアドラムを支えてくれた。
「危ない……」
沙希だった。素晴らしい速さで翔が落としかけたスネアドラムを受け取ってくれた。
「お、大谷さん！　ナイスです」
「ナイスです、じゃないよ。一人で行ったりしないで、誰かを呼んでくれなきゃ」
「ゴ、ゴメン……」
「とりあえず、これは私が持って行くから佐野くんは男の子だし、もっと大きいのお願いね。あ、美里は下にちょっと用事で行ってて、すぐに帰るからって」
「あ、そうなんか。了解」
「じゃあ、先に行ってるね」
そう言って先に降りようとした沙希の顔が微妙に歪んだ。

「大谷さん？　どうしたん？」
「な、なんでもないよ。先に行って……あっ！」
翔が沙希の右腕を掴んで手のひらを見ると、人差し指、中指、薬指と全部火傷をしていた。
「なんなん！？　なんでこんな火傷してんの！？」
「あ……はは！　こ、これさぁ、私ドジで、昨日ご飯作ってるときにお鍋ひっくり返しちゃってバシャーンって！　あははは！　私、ホントドジ……ほんと……」
沙希のそういう声が震えだした。
「お、大谷さん？」
「私……どうしようもな……い」
「……サキティ？」
陽乃がそっと上がってきて沙希と翔のほうを見つめた。
「ど、どしたの？」
陽乃が翔に問いかけるが、翔も事情がよく飲み込めていない。
「わからへん。オレが泣かしたわけやないんやで！」
「そうなの？　サキティ。ひょっとしてとんでもなく意地悪されたとか？」
「違うの。違う！　佐野くんはホント関係ないの。私がドジで……」
「ちょっとちょっと～！　泣かないでよ～。ど、どうしたら……」
フゥッと翔はため息をついた。
「大谷さんは、ドジなん？」
「ちょ、ちょっと！」
陽乃が制したのも聞かず、翔はもう一度聞いた。
「ドジなん？」
「うん。ドジ」
沙希はヒックヒック言いながらも答えた。
「どの辺が？」
「鍋ひっくり返したり……家事なんて全然できないし」
「家事、どんなんできるん？」

「え？」
「家事」
「えっと……とりあえず、私、掃除と洗濯物は大好き！　あと……そうだ！　アイロン！　私、アイロンかけるの得意なの。お父さんのシャツとかお母さんのスーツとか、しわひとつなくかけることできるの！」
「へー！　アイロン！？　すっげぇな！」
陽乃は二人の会話を聞きながら、翔の話術には驚かされていた。さっきまで泣いていた沙希が、今度は笑って嬉しそうに話している。この間、わずか1分ほど。
「お父さんもお母さんも働いてはるん？」
それを聞かれた途端、少し沙希の顔が曇った。
「うん……。それでね、お父さんは仕事だから今日の演奏も聴けないって言われちゃって……。お母さんは、久しぶりにゆっくりできるからって弟と妹連れてどこかに遊びに行くらしくって」
「ふーん。お父さんの会社ってどこにあるん？」
「ぐ、偶然なんだけど……大井戸公園の近くで小さいけど、会社やってて」
「あ！　もしかして株式会社サンドホープっていう食品卸売の会社？」
「え？　なんで知ってるの？」
「知ってるって～。その会社ってさ、ひょっとして１９８９年設立の会社ちゃうん？」
「えぇー！？　スゴい！　なんでそこまで知ってるの！？」
「ふふーん！」
翔がニコニコ嬉しそうに笑うばかり。陽乃も沙希も訳がわからない。
「ほら、大谷さんの『沙希』っていう名前」
翔は胸ポケットに入れていたシャーペンで近くに落ちていた紙に「沙希」という字を書いた。

「『沙希』の『沙』は元々は『砂』っていう字やってんな。『砂』は英語で『サンド』。ほら、みんなの好きなマンガやったっけ？『砂時計』っていうマンガあったやん。それ、英訳したら『サンドクロニクル』っていうたやん」
「それで？」
陽乃が楽しそうに続きを気にし始めた。
「時間もないし、サッと行きますよ、お嬢様方」
「うん！」
沙希もすっかり笑顔だ。
「それで『希』は英訳したら？　はい！　大谷さん」
翔が手にマイクを持ったフリをして意見を求める。
「ホープ？」
「はい！　正解。じゃあさっきの『沙（すな）』と『希』を英訳したんをくっつけて？」
「……サンドホープ」
沙希が呟くなり、翔はクシャクシャと彼女の頭を撫でた。
「そんだけ思い込めた会社やねんから、ちょっと忙しいからってふてくされたらアカンてことよ！」
「……。」
「それに、大井戸公園の近くやん？　一所懸命吹けば、きっと会社にも音、聞こえてくるって」
翔はスネアドラムを持って最後にこう言った。
「音楽は意識せんでも聞こえてくるモンやねん。ほんで、聞こえてきたものが気になって、絶対に誰かが聴きに来てくれる。音楽は、絶対、誰かが聴いてくれる。オレらは……いや、音楽やってる世界中の人たちは、その誰かのために演奏してるんや」
陽乃と沙希はニコッと笑う翔の笑顔を見つめながら、彼の言葉を反芻していた。
「んじゃ、お二人さん。そろそろ楽器運びましょうか！」
「はーい！」

沙希は小物打楽器が入った箱を、陽乃はタムタムを抱えて翔と一緒に階段を降りて行った。

会場に到着したのは予定どおり、午後1時過ぎだった。よく晴れた大井戸公園には12時ちょうどから始まったお祭りのステージを見るために近隣の人たちが集まってきている。

「あ、大谷さん」

翔は譜面台を立てながら沙希を呼んだ。

「見て、向こう」

「向こう？」

沙希が振り返ると、相田雄平がいた。野球部の面々数名と来ていたようだ。

「誘ったん？」

翔が不思議そうに聞いた。

「まさか。親も誘ってないのに」

「やんなぁ……どないしてんやろ？　オレちょっと聞いてくる」

翔はトコトコと歩いて雄平たちの所へ行って、二言三言会話した後すぐに戻ってきた。

「なんか、田中と大谷さんが大声で嬉しそうに話してるのを聞きつけて、友達誘って来たらしいで」

「え！？　そうなの？」

「本人がそう言うてるから間違いないやろ。あ、ほら、そろそろ準備せな間に合わへんなるで」

「う、うん……」

翔の後を追いかける直前、雄平のほうを見ると、雄平が沙希に向かってブイサインをしてくれた。

「……頑張ろうっと」

「え？　何？」

翔は耳がいいようだ。沙希の呟きもバッチリ聞いている。

「な、なんでもない！　早く準備しよう！」

「変なの。まぁ、行こか」
翔はグイグイ沙希に背中を押されつつも、楽器の置いてある所へと走って行った。

午後2時。
いよいよ七海高校吹奏楽部の演奏の時間だ。今日の司会は春樹と拓真のバスパ（バスパートの略）身長でこぼこコンビに任せてある。
「皆さん！　こんにちは！　僕たちは七海高校吹奏楽部です！」
春樹のかん高い声で挨拶が始まった。続いて拓真の低いトーンの声が聞こえる。
「今日は短い時間でつたない演奏ではありますが、新入部員……何名だっけ。忘れちゃったけど」
「２２人、２２人」
春樹がコソコソとフォローするが、全部マイクで筒抜けだ。
「あぁ、２２人で演奏します」
「違う違う、僕らの学年入れないと」
「あぁ、そうだそうだ。１０人足して、３２人で演奏します」
どうやら緊張のしすぎで拓真はかなり取り乱しているらしい。
「すいません、本当は彼、しっかり者なんですよ」
春樹のフォローに早速会場から笑い声が沸き起こる。
「えーと、なんか早速オマヌケな雰囲気出しちゃいましたけど、僕らの演奏はしっかりしてるハズなんで……聴いてください！　まず、1曲目の紹介をこのちっこい水谷くんからしてもらいます」
春樹はギュッと拓真の足を踏んでから続けた。
「はい、デッカい本堂くんから受け継いだちっこい水谷です。よろしくお願いします。それでは、さっそく1曲目の紹介に参りたいと思います。1曲目は今年度の吹奏楽コンクールの課題曲で、七海高校が演奏する予定の『海へ…吹奏楽のために』という曲です。途中、部長でアルトサックスの佐野と副部長でトランペットの朝倉でソロをお届けします。少し硬い感じの曲ですが、お聴きください。それ

では『海へ…吹奏楽のために』です」
そして春樹と拓真が席に戻ったのを確認してから、恭一が指揮棒を持って出てきた。
翔がふと右斜め前を見ると、友美子、綾音、智輝、冨美枝の姿が見えた。その後ろには由利、夏樹、知恵子の姿も。やはりこういう場には父親はあまり顔を出さないのかもしれないと翔は考えていた。
左斜め前には修平と優衣、翔平の姿があった。制服姿であることから判断すると、練習後すぐに来てくれたのかもしれない。
そしてこれは一番驚いたのだが、なんと真野校長と村峰教頭の姿があった。翔はそれを見て少し緊張してしまった。その近くには雄平たち野球部数名の姿。意外と知り合いが多く来てしまったので緊張がさらに高まる。
恭一の指揮棒が上がり、全員の視線がそこへ集中する。そして振り下ろして恭一が真っ先に見つめたのは打楽器のメンバーだった。特に、この曲の第一印象に繋がるチャイムを叩く優に恭一はいつも視線を配る。

「ステキ……」
綾音が思わず兄の翔のソロを聞いて自然と声がこぼれた。本当に素直にそう思ったのだ。
「姉ちゃん……カッコいい！」
夏樹も身を乗り出して演奏を聴いていた。
やがてシロフォンの音と共に打楽器がその音を引き継いで盛り上がっていき、全ての楽器が音を奏でて様々な音を聞かせてくれた。主題はトランペットとホルン、木管楽器。全体を支えるチューバと弦バス。裏メロディ的なトロンボーンとユーフォニウム。そして打楽器の連打と木管のトリルが加わり、ホルンのファンファーレが聞こえる。曲は最高潮のテンションになっていき、全員の音がロングトーンで伸ばされて恵梨のサスペンドシンバルで曲は一気に終わり

を告げた。

会場が静まり返った直後、すぐに拍手が沸いた。

恭一は満足気に指揮台から降りてお辞儀をする。しかし、七海高校の演奏はまだまだこれからが本番だ、と言いたげな翔の顔が陽乃の目には映っていた。

第１０７話　誰かが聴いてくれる（後書き）

いよいよ始まったコンサート。新生七海高校吹奏楽部は果たしてどのような時間を町の人たちに提供してくれるのでしょうか？

第１０８話　熱くなろうや！

春樹と拓真が笑いながらマイクを握って次の曲の紹介を始めた。
「それでは、次の曲の紹介をします！」
拓真も少し慣れてきたようで、表情に余裕が見えている。
「次の曲は、多くの日本人歌手もカバーしている『君の瞳に恋してる』です。最近ですとＴＵＢＥがカバーをしました。夏がこれからやって来ますが、夏を先取りできるような曲に仕上げられていると思います」
「立奏（りっそう）するパートもたくさん！　目が離せないステージがこれから始まります！　うまくいったパートには盛大な拍手をよろしくお願いします！」
拓真の気合いの入った司会に既に拍手が沸いている。
「それでは『君の瞳に恋してる』、お聴きください！」
春樹と拓真が席に戻ったのを確認して、恭一が指揮台へ登る。そしてサッと指揮棒が上がるとすぐに全員が楽器を構えた。
威勢の良いドラムソロを洋之が奏でる。そしてトランペットが主旋律を、ホルン、サックスが副旋律を吹いて調子を合わせる。後ろから恵梨の叩くアゴゴや優のウッドブロックが鳴り響く。トランペットがオクターヴ上がってハイテンションな雰囲気へと一気に上がった。観客も手拍子を始める。
一気に音が駆け下りたと同時にクラリネットとサックスが立奏を始めた。リピートでトランペットのメロディが加わる。そして一度落ち着きを取り戻す曲。静かなメロディを木管が奏で、美里のクラベスがその静けさに少し異なった雰囲気を与えていた。リピートをしてトランペットの裏メロ（※１）が聞こえてくる。
そしてまた一番有名なサビの部分へ差し掛かった。トランペットのテンションも上がりっぱなしだ。
「スッゴいなぁ！　アイツら、俺らの知らない間にめちゃめちゃ上

手くなってるやん！」
翔平が嬉しさを爆発させている。修平も隣で手拍子しながら陽乃と翔をジッと見つめていた。
「あそこまで上手くなってると……コンクールでも要注意かもしれませんよ、ナナコウ」
ナナコウとは七海高校の略だ。
「そうかもね～。これは予想外だよ」
優衣がホッとため息をついた。
「俺らも手ぇ抜かれへんな！」
翔平がグッと拳に力を込めた。

「あら？」
俊次（しゅんじ）の秘書・竹田久栄（たけだひさえ）が公園から聞こえてくる音に耳をそばだてた。
「どうした、竹田くん」
俊次が珍しく嬉しそうな声を上げた久栄に声を掛ける。
「いえ、公園のほうからすごく懐かしい音が……」
「あぁ。これは……トランペットかな」
「えぇ。私、学生時代は吹奏楽部でずっと過ごしてきましたから……とても懐かしいですね」
「そういえば君、面接のときに私に吹奏楽を熱く語ってくれたね」
「あー、そうですね！　あの時はすいません。２０分近く語っちゃって……」
「いやいや、ひとつのことにそれだけ夢中になれるのはすごいことさ」
しばらく沈黙が続く。ずっと聞こえてくる音色。
「この曲は『君の瞳に恋してる』ですね。なかなか懐かしい曲を吹いてくれますねー」
久栄の足がウズウズしている。
「竹田くん。聴きに行きたいんだろう？」

「えっ？」
「わかりやすすぎるよ、君は」
そう言うと俊次は飲んでいたお茶をカバンにしまい、公園のほうへ歩き出した。
「聴きに行ってみるか、たまには」
「いいんですか！？」
「あぁ」
そう言うや否や、久栄はバタバタと走って舞台へまっしぐらだ。
俊次も後を追う。しばらくして、見慣れた制服であることに気づいた。
「七海高校じゃないか……すると」
俊次は舞台のほうを見渡す。いた。
「沙希……」
俊次の長女・大谷沙希がそこでフルートを懸命に吹いていた。

「洋輔？」
ベッタリと窓にくっついたままの洋輔を見て智佐子が声を掛けた。
「どうしたの。何かいいもの見つけた？」
「ううん。それより、俺、外へ出たい」
「外？　珍しいわね。屋上で遊びたい？」
「ううん。公園」
「公園？」
智佐子はかなり驚いた声を上げた。洋輔はもう中学1年生だったので、公園で遊ぶなんてこともすっかり減っていた。
「どうしてよ。久しぶりにデパートへ来たっていうのに」
「うん……なんとなく呼ばれてる気がして」
「誰に？」
「……。」
洋輔は答えない。そのうち、ずっと座ってジュースを飲んでいた稚依までベッタリ窓にくっついて公園のほうを見ている。

智佐子はため息をついて二人に言った。
「じゃあ、公園へ行きましょうか」

いよいよ洋之の見せ場がやってきた。イケメン君の洋之目当ての同級生もいるようで、彼のドラムソロが始まるなり黄色い声が飛んできた。それに洋之は特に反応せず、淡々とソロをこなしていく。横にいた美里が羨ましいとでも言いたそうにそのソロを見守る。

文句なしの洋之のソロが終わると同時に転調して曲はラストスパートに入る。ホルンの副旋律とトランペットの主旋律が盛大に鳴り響き、洋之がそれに負けないくらいの勢いで腕力を精一杯使ってドラムセットを揺らすほど力強い音を発した。

恭一がしばらく余韻を残す感じで指揮棒を止める。そして静かに降ろすと同時に拍手が沸いた。

「さっすが七海高校！」

雄平の声が一際目立って沙希の耳に聞こえてきた。沙希もそちらを見つめてニコッと笑うと、雄平の顔が一気に赤くなった。

「わかりやすいヤツ」

翔がクスッと雄平を見て笑う。

ここで多少の移動があるため、春樹と拓真が一所懸命、司会で時間を引っ張ってくれていた。

すると突然、小さい女の子がトコトコとかわいい花を片手に舞台へ上がってきた。そして翔の真ん前で立ち止まった。

シーンと静まり返る舞台や客席。その子のお母さんらしい人が慌てて「サキちゃん！　何やってんの!?　いらっしゃい！」と観客の間を縫って舞台へ近寄る。

「どうしたんかな?」

翔がニコッと笑って女の子の頭を撫でた。その笑顔を見ただけで陽乃はドキッとしてしまう。隣にいた彩香も「ちょ、やっぱ佐野先輩、男前ですね」とドキドキした様子を見せる。

「お兄ちゃんにあげる！　お兄ちゃん、カッコいいから！」

女の子はそう言うと翔に小さな花を一輪、翔に手渡した。
「おっ！　ありがとー！」
よく見れば、左手にはバスケットを持っている。続いて右川順平（うがわじゅんぺい）のほうへ駆け寄り、同じように花を渡した。その後、優、洋之、慎也、春樹、拓真、亮平、誠、健之佑、優輝、駿、勇、徹と全男子部員に小さな花を一輪ずつ手渡していった。そこでようやくお母さんの元へ戻った女の子はニコニコと嬉しそうにしている。
春樹と拓真はもっと嬉しそうに花を制服に刺して司会を続けた。
「めちゃめちゃかわいいファンの女の子から予想外のプレゼントをいただけたんで、これからの2曲もめちゃめちゃ頑張っていきたいと思います！」
春樹の声がとても弾んでいる。
「次の曲はお父さんには懐かしい1曲になっています。ゴダイゴの『銀河鉄道９９９』です。フルートを中心にソリやソロがあっちこっちにあるんで、楽しんで聴いてください」
拓真のその言葉を合図に全員が無事着席した。二人が席へ戻ったのを確認して、恭一が指揮台へ上がる。
沙希と由美子、佳菜の顔が一気に強ばった。彼女たちにはソロが控えているからだ。
ふと沙希が翔のほうを見ると、口パクで何かを伝えようとしている。

（熱くなろうや！）

確かにそう見えた。

沙希も思い出す。中学校のときのことを。

あの時はずっと吹奏楽に夢中だった。何回熱くなったことがあったか数え切れない。

沙希はポケットからたまたま入っていた赤ペンを取り出すと、思い切り大きな字で「熱くなれ！　大谷沙希！」と譜面に記した。
（あたしにも貸して！）
由美子が強引にペンを沙希から奪い取り「燃えろユミコ！」と書いた。もう譜面の一部が見えないくらいだ。
（先輩！　私も！）
佳菜が続く。佳菜は小柄なのに一番字が大きい。
「完全燃焼☆いのうえかな」
それを見て二人がクスッと笑う。後ろから急に手が伸びてきた。洋之だ。
「俺も入れてくれな」
そう言うと譜面に「Ｆｉｒｅ！　ヒロユキ！」と譜面に書いた。
洋之が書き終わると同時に、恭一の指揮棒が上がった。
フルートとクラリネットの優しいハーモニー。それを包むようにチャイムとグロッケンが鳴り響き、重なるようにしてホルンとトランペットのメロディが聞こえる。そしてテナーサックスとユーフォニウムが続き、ホルンの下降系の音が鳴り終わるとフルートとグロッケンがメロディを奏でた。
そしてしばらくフェルマータ（※2）を恭一が効かせる。
目が覚めるような音と共に美里がリズムを刻む。そして有名なメロディをクラリネットとサックスの綺麗なハーモニーが響き始めた。翔たちと絵美たちが立奏を始める。翔は綾音と目が合った。そしてトランペットが次にメロディを吹き、ホルンが裏メロを吹く。
その次のメロディはテナーサックスにトロンボーン。所々でティンパニが鳴り響く。それを叩く恵梨の表情は完璧に固まっている。もはや機械としか言いようがないようなそんな表情。そしてもう一度同じメロディが繰り返される。トランペットのロングトーンの後に間奏が入り、フルートのソリの部分に入った。
サッと沙希、由美子、佳菜が立ち上がった。立ち上がるタイミングは上々。裏でサックスがリズムを刻んでくれているので安心して

吹ける。
時間にして一瞬だったが、そこで沙希は俊次と目が合った。
（お父さん……！）
沙希の演奏に思わずブレが出たが、由美子がうまくカバーしてくれた。
曲もいよいよフィナーレだ。そしてとうとう緊張の一瞬が沙希に迫る。
スッと立ち上がり、恭一を挟む格好で由美子と観客のほうを向いた。雄平の視線が期待と不安を込めた感じで沙希のほうへ向く。俊次も思わず背伸びをして見ているようだった。
「お母さん！　早く！」
聞き覚えのある声に目だけを動かすと、そこにいたのは走ってきて息を荒げている洋輔、そして稚依を抱いて走る智佐子の姿だった。
（洋輔……チイ……お母さん……！）
沙希は後ろは見なかったが、みんなの視線を感じていた。でも、それは不安のような表情はきっとないだろう。
（サキティ……がんばれ！）
陽乃は祈るような気持ちで背中を見つめる。
（大谷なら、できる！）
慎也もジッと沙希のほうを見つめた。譜面は覚えている。少々の失敗よりも、沙希のほうが今は心配だ。
（大谷さん。ゼッタイ、聴いてくれてる人はおるからな）
翔は周りを見た。
友美子。
綾音。
夏樹。
由利。

知恵子。
校長。
教頭。
雄平。
翔平。
優衣。
修平。
花をくれた女の子とお母さん。

全員が翔たちの舞台に、心から楽しみを感じてくれているのだ。
そう思うと、体が痺れるような感覚に包まれた。

そして遂にその瞬間は来た。今まで鳴っていた金管楽器が一気に静まり返り、美里のドラムセットも鳴り止む。
沙希は思い切り息を吸ってソロを吹き始めた。下でしっかりと支えてくれるのは、亮平のギター。そして、洋之のグロッケン。初めは洋之とのソリだと思っていたが、彼は「ここは、先輩のための先輩によるソロです！　俺は支えるだけ」と言ってくれた。
沙希は初めて、自分でビヴラートをかけた。恭一も驚いて沙希のほうを見て、それからゆっくりと指で「ＯＫ」のサインを出した。

私は、一人じゃない。

沙希は強くそう想い、今までで一番、感情を込めて吹いた。

翔。
陽乃。
慎也。
春樹。
絵美。
美里。

拓真。
雪子。
由美子。
いま、自分を支えてくれている洋之と亮平。
指揮を振ってくれる恭一。
偶然とはいえ立ち寄ってくれた父。母を引っ張ってまで来てくれた弟と妹、そして母。

みんなが、私を支えてくれる！

その強い気持ちが由美子へと伝わった。由美子も意識せず、ビヴラートをかけてソロを吹くことができたのだ。一番驚いているのは、由美子本人だった。

まるで観客と演奏者が一緒になったかのような時間が続く。そして急に現実に戻されたように皆の音が沙希の耳へ戻ってきた。

「サキティ！」

由美子が手を重ね合わせてくれた。パシン！といい音がして手を重ね合い、深々と観客にお辞儀をする。

今日一番大きな拍手が沸いた。その後、曲は見事にフィニッシュへと到達し、一番の盛り上がりを見せた。

「ブラボー！」

夏樹が去年のクリスマスコンサートと同じように声を上げた。拍手が会場を包み込んで、しばらくの間、鳴り止まなかった。

最後の「Ｊ－ＰＯＰ　ＨＩＴＳ」が終わっても予想どおり、拍手がそのままアンコールを求める拍手と声へと変わった。

恭一はそのまま指揮台へ上がり、すぐに指揮棒を構えた。洋之がグロッケン、恵梨がビヴラフォン、優がシロフォンの前へ立った。

綺麗な音が聞こえる。あずさがウインドチャイムを鳴らしたのだ。そして恵梨たちがメロディを吹き始める。

「あ……」
久栄が懐かしそうに呟いた。
「瞳をとじて」
最初はクラリネットの旋律。やわらかい、どこか温かい音色。そして次はトロンボーンとユーフォニウムが勇ましい音を奏でている。そしてサビの直前、急に慎也と洋之が立ち上がった。そして、サビの歌詞を綺麗に歌い始めたのだ。
「……。」
歌詞を聴いた智佐子の表情が急にやわらかくなった。
2番の歌詞のところではサックスのアンサンブルだ。翔、さゆり、麻綾、はるかの4人で最高の音色を聞かせている。それを継ぐようにトランペットのソリが始まる。そして次のサビ部分では春樹と拓真が出てきた。
歌詞のひとつひとつが、観客の心へ響いていく。音楽に乗って、歌詞が全員の心に伝わっていく。
そして、今日、沙希が一番待っていた瞬間がやって来た。
翔と立ち上がり、恭一のすぐ傍へ立つ。
サァッと風が吹くように楽器の数が減って、静かになった。翔のやさしいアルトサックスの音色。それを支えるのは洋之のグロッケンと亮平の弦バス。そして、沙希のたった1時間ほどの練習の集大成が一気に発揮された。
陽乃は鳥肌が立った。沙希のソロのすぐ後にあるメロディをうっかり吹き忘れるほどに、感激してしまった。
すぐに気づいてメロディを吹く。そしてその視線の先にある沙希の顔が、今までで一番晴れやかなものになっているのに、陽乃は気づいた。
そして、遂に『瞳をとじて』も最後のときがやってきた。最後を担うのは、木管楽器のアンサンブル。スッと健之佑、絵美、沙希、翔、誠の5人が立ち上がる。そして、不意に周りの音色が消えて、

洋之のグロッケンと翔のアルトサックスの音色だけが残って曲が締めくくられた。
しばらく静かになる会場。そして、お祭りの運営委員の人が「七海高校吹奏楽部の皆さん！　素晴らしい演奏を、本当にありがとうございました！！」と言って初めて拍手が沸いた。
「翔ー！　サイコー！」
綾音が手を振ったので翔はブイサインをして返した。
「姉ちゃん！」
夏樹が駆け寄ってくる。
「なに？」
「俺も今度、姉ちゃんたちと一緒に吹きたい！」
「翔に頼んでみるね！」
陽乃は軽く夏樹の頭を撫でた。
「沙希」
俊次が近寄ってきた。
「……久しぶりだね」
「……そうだな」
すぐに俊次の手が沙希の頭を撫でた。
「でも、お前の顔、今までで一番綺麗だったぞ」
思わず赤くなってしまう沙希。すぐに洋輔と稚依が寄ってきてくれたので、彼らを相手にすることで恥ずかしさをごまかすことができた。
「沙希」
智佐子が複雑な表情を浮かべて沙希のほうへ寄ってきた。
「お母さん！」
沙希はためらわず、思い切り智佐子に抱きついた。
「ちょっと……こんなところで恥ずかしくないの？」
「うん……」
沙希はしばらく間を開けてから、続けた。
「今日は、ありがとう」

翔はそっと沙希のフルートを手にして楽器置き場へ向かった。
「陽乃」
翔に呼ばれて振り返る。
「なに？」
「大谷さんの譜面と譜面台、悪いけど楽器置き場に持って行ってあげて」
「了解」
陽乃はチラッと沙希のほうを見た。それからすぐに翔のほうへ駆け寄り、ギュッと腕を組んだ。
「うわ！　なんやねん、急に！」
「こうしたいの！　いいでしょ？」
「まぁ……別にえぇけど」
そう言いながらも、翔は顔を赤くしている。
「今日の……翔の言葉、あたし、ずっと大切にするね」
「え？」
陽乃は嬉しそうに言った。
「音楽は意識せんでも聞こえてくるモンやねん。ほんで、聞こえてきたものが気になって、絶対に誰かが聴きに来てくれる。音楽は、絶対、誰かが聴いてくれる。オレらは……いや、音楽やってる世界中の人たちは、その誰かのために演奏してるんや」
「……丸覚え？」
翔が驚いたように聞き返した。
「すっごい、感動した」
陽乃はしっかりと翔を見つめて言う。
「ありがとう、翔」
「な……なんか照れるな」
翔は頬を赤くして前へ向き直った。
「この言葉を大切にして、あたし、これからも吹奏楽、頑張るよ」
「……うん！」
翔は強く陽乃の手を握り締めて、力強く返した。

「コンクール、上、目指そうな」
翔の目が、キラキラ輝いて見えたのは夕陽のせいだったのだろうか。
陽乃は少し背が伸びたように見える翔の隣を歩いて、これからの日々がますます楽しみになってきていた。

第１０８話　熱くなろうや！（後書き）

沙希の家族をも巻き込んで盛り上がったコンサート！　これによってナナコウ吹奏楽部の知名度は一気に上昇。同時に修平たちにライバル心を抱かせることにもなったようです。これから夏を迎えるナナコウ吹奏楽部にこうご期待！

（※１）裏メロ：裏メロディ。副旋律のこと。
（※２）フェルマータ：指定された音を普通よりも長く伸ばす奏法。指揮者によって変化することが多い。

第１０９話　先輩できます！？

あの２０日の本番から半月ほど経ち、６月になった、５日の月曜日。陽乃がいつもどおり授業を終えて音楽室の鍵を職員室に取りに行き、音楽室へ向かうとドアの前に男子生徒１人と女子生徒２人がいることに気づいた。

「あれ？　忘れ物でもしたのかな……。だったら早く開けてあげないと」

近づくにつれて、それが同学年でも後輩でもないことに気づく。陽乃たちの高校には学年カラーなるものが存在し、陽乃たち２年生は青、１年生は黄色、そして３年生は赤だ。ネクタイやスリッパの色にそれが反映されている。

音楽室の前に立っていたのは３人とも３年生だった。

「や、やだなぁ～。ちょっと緊張するじゃん。待って、深呼吸、深呼吸――」

陽乃は美術室の前で立ち止まり、カバンを床に置いて深呼吸を始めた。すると後ろから足音が近づいてくる。誰かと思って振り返ってみると、その３年生たちが陽乃のほうへと向かってきているのだ。

（えっ！？　やだ、あたし何かした？　ひょっとして深呼吸は廊下じゃしちゃダメとか……いやいや、そんな校則聞いたことないしね。じゃあ何なんだろう……ドキドキする）

「あのぅ」

男子生徒が話し掛けてきた。

「はっ、はい！」

「あ、そんなに緊張しないで。それより、吹奏楽部の朝倉さんだよね？」

「はっ、はい！　朝倉陽乃です！」

「あーあ。岳やんが悪いんだよ。朝倉さん、怖がってるじゃない」

後ろから小柄な女子生徒が顔を出した。その隣でその生徒より少

し背の高い、二つくくりのメガネをかけた生徒が笑っている。
「そうよ。だからやっぱりメグに任せたら良かったのに」
「うるせぇなぁ。それより、早く用件言わないと変な3年生じゃんか」
岳やんという人が苦笑いしている。するとメグという小柄な人がグイッと岳やんを押しのけて陽乃の前に立ちふさがった。
「えっと、まず自己紹介させてくださいね。私、3年A組の豊田(とよた)めぐみと言います。それで、メガネが岡崎安和(おかざきあんな)。それから男子が三河岳彦(みかわたけひこ)」
「はぁ……」
陽乃はとりあえず返事をする。この人たちが何者なのか、さっぱり陽乃にはわからなかった。
「それで、私たち3人なんだけど、大谷さんと同じ南葉島中学校出身なのよ」
「え？　サキティのこと知ってるんですか？」
「うん」
サキティの知り合いということは――。
「あ、その様子だと気づいたみたいだね」
岳やんさんがニコッと笑う。笑うと目が細くなる人だ。
「あたしたちね、元・南葉島中学校吹奏楽部員なの」
安和さんがニッコリ笑って言った。この人は笑うとえくぼができる。
「そうなんですか！　わぁ～！　3人とも！」
陽乃は3年生にもやっぱり吹奏楽経験者がいたのだと思うと嬉しくなった。
「それでね……」
めぐみが続ける。
「あ！　ひょっとして楽器を久々に吹きたいとか。だったら大歓迎ですよ！　空いてる楽器いっぱいありますし！」
陽乃は音楽室の鍵を持って走り出した。

「それもあるんだけど……その……」
めぐみがモジモジしながら言おうか言わないか迷っている素振りを見せた。
「どうしたんですか？」
「ちょ、ちょっと待ってね！」
すると3人は円陣を組んでコソコソ話を始めた。
（やっぱり無理よ、コンクールまで1ヶ月半よ）
めぐみが右手を横に軽く振った。
（でも、吹きたい気持ちは山々だろ！？）
岳彦が真剣な表情で同意をめぐみと安和に求める。
（そりゃーそうだけど……楽器吹いてない期間が2年半以上の人たちが先輩振って入るのもウザくない！？）
安和はメガネをクイッと上げて言い返した。
陽乃は聞こえないフリをしていた。しかし。
（残念だけど……全部聞こえてる）
どうやら彼らは吹奏楽部に入りたいらしい。普通なら大歓迎だが、ふたつ問題があった。
ひとつは吹奏楽コンクールまで1ヶ月半だということ。既に基本的な演奏は出来上がってきているので、今から誰かが入るとそのバランスが崩れる可能性がある。
ふたつめは、彼らが3年生だということ。陽乃たちの学年、つまり2年生が最上級生である吹奏楽部に彼らが入ってくれれば、形式上は彼らが最上級生になる。しかし、部長をはじめほとんどの役職は2年生が就いており、係は1年生が混じっているものもあった。彼らが問題ないと仮に言ったとしても、翔や絵美が彼らに指示を出せるだろうか。陽乃だったら少しやりにくいものがあった。
「なにやってんの～？」
後ろから関西弁が飛んできた。驚いて後ろを振り向くと、翔が立っていた。
「かっ、翔……」

陽乃はマズいタイミングで来てくれたものだと思った。
「あれ？　3年生ですか？」
翔は陽乃の横から安和たちを覗き込んだ。一瞬、安和の顔が赤くなった気がしたのは陽乃の気のせいだったのだろうか。
「あ、はい。私は豊田めぐみ。男子が三河岳彦。それから岡崎安和です。それで……部長さん？」
「あぁ、オレですか？　ヘッポコっすけど、部長です」
クスッと安和が笑う。つられてめぐみも笑った。
「おもしろいね、君」
岳彦が最後に笑いながら言った。
「よぉ言われます。関西弁やし、なんか存在自体がオモロいとか言われますけど、オレはそんなつもりないんすよね～」
「いやいや、君はやっぱ関西人だね。おもしろいよ」
安和がもっと嬉しそうに笑いながら翔のほうを見た。陽乃は気が気でならない。
（なんか……この岡崎って人、全力で翔を狙ってそう）
「それで？　本題は？」
急に翔が真剣になったので3人はドキッとした表情になった。
「なんか言いたいことあって来はったんでしょ？」
めぐみも岳彦も口をつぐんでしまう。しかし、安和がハッキリと言った。
「あたしたち、最後の高校生活でもう一度吹奏楽をしたいんです！」
廊下中に響き渡るかと思うような声だった。翔も思わず一歩引いてしまった。
「だから、吹奏楽部に入れてください！　コンクールに出してください！」
安和は一気に言ってから「あれ!?　全部言っちゃった!?」とオロオロし始めた。
「プッ……アハハハッ！」
翔はおなかを抱えて大笑いし出した。

「おもしろいッス、先輩たち！」
「せ、先輩……？」
めぐみは唖然としている。
「だって、吹奏楽部入りたいんでしょ？」
「あ、あぁ。そうだけど……」
「やったら今から東先生に話しに行きましょうよ」
翔はカバンを手にして職員室のほうへと歩き出した。
「ちょっと、佐野くん。そんな簡単でいいの？」
めぐみも慌てて翔の後を追う。安和は嬉しそうに翔の横に立って歩いた。
「そうだよ、翔！　それにもうちょっと話詳しく聞かないと」
陽乃は慌てて後を追うが、翔がカバンを思い切り放り投げて陽乃の胸に投げ込んだ。
「キャッ！？」
「悪い悪い！　すぐに話つけてくるからさ、先に部室とか開けといてくれへん？」
翔はすっかり舞い上がっていつもとは調子が少し違う。
「そんなぁ」
「今日はパート練習やから！　よろしくな、朝倉！」
「……。」
陽乃は返事をせず、ムスッとした様子で部室へ向かった。
ちょっと乱暴にドアを開け、翔のカバンを荷物置き場に思い切り叩きつけるようにして置いた。
「バカケル！」
陽乃はそう叫ぶと普段、合奏のときに敷く毛布の上に倒れこんだ。
この間、干したのでフワフワとやわらかくいい匂いがする。
「なんなのよ、あの岡崎って人も。全力で翔を狙ってるとしか思えないじゃない！」
翔が声をかけたときに顔を赤らめたり、嬉しそうに隣を歩く姿が思い出される。

「クゥ～ッ！　ムカつく！」
陽乃はバシバシと毛布を叩きつけた。
「ちょっとちょっとー、何でそんなに暴れてるの？」
後ろを向くと、雪子が立っていた。
「すっごいホコリ立ってるじゃないの。ほら、窓開けようよ陽ちゃん」
「ゆきぃ～」
陽乃はたまらず雪子に抱きついた。
「うわぁっ！？　ちょっとちょっと！」
「聞いてよ～！　それがさぁ」
「わーかったわかった！　いいからちょっと恥ずかしい！」
「いいじゃん！　二人しかいないし」
「良くない！　ほら、入口見てみなよ」
陽乃が入口を見ると、なんとそこにいたのは弟の夏樹だった。
「お暑いんだね、姉ちゃんっていつも」

結局、恭一のほうもすぐに入部を許可した。というのも、彼らはたまに音楽室を借りては練習をしていたらしい。だから演奏レベルもあまり落ちていないから途中入部で合奏に加わっても支障がないというのが恭一の判断だった。
「ひょっとして、たまに部室で音楽とか聴いてはりました？」
翔が岳彦に聞く。
「おっ！　なんで知ってるん？」
「そこにおる朝倉が、オレらが部室初めて入ったときに誰かが部室使ってそうとか言うてたんでね」
「へぇ～、朝倉さんって観察力あるんだね」
岳彦にそう言われ、思わずドキッとした。他の男子から褒められることなんて少ないだけに、陽乃はそういうことに慣れていない。
「でも佐野くんってホント、楽器上手だよね」
安和がトランペットを磨きながらサラリと翔のことを褒めた。

「ね、朝倉さん」
「そうですね。だって小学校から続けてるんですもん」
「知ってるよ。小学校４年生から」
「なんで知ってるんですか！？」
陽乃は驚いた。今まで、翔と安和の接点なんてなかっただけに驚きは隠せない。
「だってさっき、佐野くんぜーんぶいろんなこと教えてくれたもんね！　誕生日とか血液型とかね」
「はい！」
「……。」
陽乃は悔しかった。
翔は出会ってからしばらくでないと、そういうことは教えてくれなかった。もちろん、そういう雰囲気にならなかったからといえばそうだが、なぜそんなにも簡単に他の、しかも女子生徒に自分のことを言ってしまえるのか不思議で仕方がなかった。
陽乃と付き合っているのに。
「あたし、練習行ってくる」
陽乃はプイッと翔たちに背を向けた。
「おい、ちょっと待てよ。安和先輩も連れていってやって」
「……！」
（下の名前で呼んでる！？）
陽乃には我慢の限界だった。
「部屋くらい、３年生だからわかるでしょ。自分で来てください」
「なんやねんお前、かわいくないなぁ」
「……どうせかわいくないですよ！」
陽乃はドアを叩きつけるようにして思い切り閉めた。バァン！と音がして安和や翔は耳を塞いだ。
「何をアイツ、あんなに怒ってるねん。すいません、来たばっかりの日に気分悪くして」
「いいのいいの。それより、あたしも練習に行ってくるね」

安和は翔の謝罪を止めながら準備を始めた。夏樹と雪子が心配そうに翔と安和を見つめていた。
「夏樹くん。お姉ちゃんの様子、見てきてくれない？」
雪子は夏樹に耳打ちをした。
「うん。行ってきます」
夏樹は安和より先にサックスを手にしてトランペットの練習する部屋――3年G組の部屋へ向かった。
「姉ちゃん……」
そっとG組の教室のドアを開けると、相変わらず不機嫌そうに陽乃は練習の準備をしていた。椅子は3つ――陽乃と、彩香と、勇の分しかなかった。
「怒ってる？」
夏樹はドアから覗き込むようにして陽乃に聞いた。
「怒ってるに決まってるじゃない。あんなヤツとは思ってなかった」
「……。」
「もっといいヤツだと思ってたわ。真面目で正義感があってイケメンだし？　しっかりしててリーダーシップ取れるし、楽器上手いし。それなりに勉強もできて運動神経もいいし」
「でもって、案外料理もできるの知ってた？」
「それは知らなかったけど、お弁当たまに自分で作るとかは聞いてたけど」
「他にも、家で掃除とかを手伝うこともあるそうよ」
「えー！　そうなんですか！　すっごいなぁ、やっぱ。あたしと結婚とかしちゃったらどうしよ～！　あたしのほうが家事できないかも」
「やっぱりねぇ。あなた、そんな感じだもん」
そこで陽乃は初めて入口に安和が立っていることに気づいた。
「何か用ですか？」
「えぇ。練習に来たの」
安和は遠慮なく教室に入り、勇のために用意した譜面台を押しの

けて廊下側に一番近い椅子に座った。
「勝手に用意したもの、どけないでください」
「いいじゃないの、まだ来てないんだから」
安和はそう言ってマウスピースを吹き出した。
「コンクール出る気、あるんですか？」
「あるに決まってるじゃない。佐野くんがいるからね」
「は……？」
陽乃も夏樹も唖然とした。
「高校最後の夏に勉強尽くしで終わるなんてバカらしいじゃない？　それだったら彼氏の一人でも作って青春したいなぁと思って。まぁちょうど佐野くんカッコいいし、吹奏楽経験してたから時間つぶしにはちょうどいいかなっと思ってね。別にコンクール本命じゃないけど、めぐみと岳彦は真剣だったからあたしもちょうど乗っかったってわけ」
「まさか……」
「あなた、佐野くんと付き合ってるんだね」
安和は嫌味っぽくメガネをクイッと上げた。
「そうですけど」
「その割に、彼、あなたのこと名前で呼んだりしないんだ」
「してます！」
「してなかったじゃないの、さっき。呼び捨てだし」
「普段はしてるんです！」
「人前でできないようじゃ、その『普段』っていうのも形だけね」
「……。」
「それにあなただけ普段から呼んでるみたい。一方通行の愛ね」
なんで。
なんで初対面でよく知りもしない人にここまで言われなきゃなんないの。

感情が抑えきれず、気づけば陽乃は安和の頬を叩いていた。メガネが教室の床に落ちて派手に音を立てた。
「……先輩」
彩香と勇、夏樹が呆然と立ち尽くしている。その後ろにはさゆりと麻綾。そして――。
「翔……」
「……何しとん？」
「だって……」
「何しとんって聞いてんねん！」
陽乃はビクッと体を縮み込ませる。
「待って、佐野さん！　これには事情が……」
「夏樹くんは黙ってて」
翔は安和のメガネを拾い「大丈夫ッスか？」と声をかけた。
（なに……なにこれ……。あたし、完全に悪者じゃない）
「朝倉、安和先輩に謝れ」
「嫌」
「朝倉！」
陽乃は手にしていた楽譜を突然放り投げ、床に叩きつけた。夏樹も麻綾もさゆりも驚いて首をすぼめる。彩香と勇は慌てて散らばった楽譜を拾い出した。
次に陽乃は楽器ケースの中に入れていた手入れ道具を全部、窓から外へ放り投げた。
「先輩！　何してるんですか！」
彩香が慌てて止めようとするが、全部花壇に落ちていくのを見送るしかできなかった。
陽乃はトランペットとケースを安和に押し付けた。
「佐野は、あなたにトランペットパートを任せるそうです」

「はぁ？　ちょっと待てや！　そんなこといっこも言うてへんやんけ！」

「言ってなくても態度に出てる！　さっきから岡崎さんに親切にして、心配して、いろんなこと話して！　あたしなんかほったらかし！　佐野はあたしなんかより岡崎さんのほうがいいんだ！」

「あ……」

翔はそこへきて初めて自分がしてきたことが間違っていて、その重みに気づいた。

「待って……ひな」

「気安く呼ばないで！」

陽乃は翔の手を払い除けた。

陽乃は涙を堪えきれず、大粒の涙をこぼして最後に大声で叫んだ。

「アンタなんか、ダイッ嫌い！！」

「先輩！　待ってください！」

勇と彩香が慌てて後を追う。麻綾とさゆりはどうしていいかわからず、呆然と立ち尽くすばかり。

「佐野くん……」

安和は不安そうに翔の顔を覗き込んだ。

「アホや……オレ……」

翔はブツブツそう呟きながら、散らばった楽譜を整理し始めた。

翌日。

陽乃はいつもどおり学校に来た。しかし、慎也に挨拶はしても翔には見向きもしなかった。慎也は「何かあったのか？」と翔に聞いたが翔は翔でうつろな表情で「別に……」と言うだけだったので、慎也も訳がわからなかった。

陽乃も美里や雪子にひとつも事情を伝えず「ちょっとケンカした

だけ」と言っていた。しかし、ただのケンカでないことは彼女たちも容易に理解できた。

部活の時間になった。

「朝倉さん……」

安和がオドオドしながら陽乃に声をかけた。

「今日、練習はどの部屋でするの？」

「知りません」

「え……」

「だってあたし、もうパート長じゃないですから」

「え？」

「今日から岡崎先輩がパート長です。練習、仕切ってくださいね」

「あ……そ、そうだ。昨日は……」

「別にいいです。謝らなくて」

「でも……」

「あたしが全部悪かったんですから。それでいいじゃないですか、それで片付くなら」

後ろにいた恵梨や洋之が居づらそうにしている。そこへ翔が部室に入ってきた。

「部長」

洋之や恵梨には翔の顔が悲しそうに見えた。もう、陽乃は翔のことを「佐野」とすら呼ばない。

「あたし、今から先生に用事あるから出ます」

「……。」

「出ますよ？」

「……うん」

陽乃は表情一つ変えず、部室を後にした。沙希や由美子が心配そうにその背中を見送る。

「じゃあ……パート練習の部屋、振り分けるわ」

翔はそう言って鍵を机に置こうとして、全部を床に落としてぶちまけてしまった。派手に音が部室中に響き渡る。

「あぁ！　大丈夫、佐野くん？」
絵美が近寄って鍵を拾い集めた。
「ゴメン……」
「いいよ、ほら……」
絵美はそこで初めて、翔が泣いていることに気づいた。
「ゴメン……陽乃……」
陽乃はボーッと職員室前の廊下で立ち尽くしていた。職員室までの距離は５０メートルほど。そこから先へ進めない。
陽乃が手にしていたのは「休部届け」。期間は６月４日から翌年２月２７日まで。安和が卒業する時までだった。
「……。」
いろんな顔が浮かんでくる。
２０日の演奏会のときの女の子の顔。雄平の顔。校長の顔。沙希の顔。夏樹の顔。知恵子の顔。
そして、翔。
「……はぁ」
すると、後ろから急に声がした。
「ほらほら、廊下でボッと突っ立ってちゃ危ないでしょう！」
振り向くと、村峰教頭が立っていた。
「あっ……ごめんなさい！」
「あら。どうしたの？　職員室に用事？」
塔子はチラッと紙に書かれた字を見た。
「休部届け？」
「！！」
陽乃は慌ててその紙を隠した。
「休部するの？」
「……はい」
「理由は？」

「……。」
塔子はフゥッとため息をついた。
「ちょっと、こっちへいらっしゃい」
塔子はガラガラとある部屋の扉を開けた。
そこには「資料室」と名前があった。

第１０９話　先輩できます！？（後書き）

あまりにも突然の出来事。先輩の登場、翔と陽乃の危機。吹奏楽部の雰囲気が一気に悪化する中、休部届けを目にした村峰教頭は陽乃を資料室へと連れて行く。その真意とは――？

第１１０話　失ってしまうもの

「入りなさい」
「はい……」
陽乃は塔子に言われるがまま、資料室の中に入った。
「あぁ～、やっぱりホコリっぽいわね。資料室とは言ってもタダの物置同然の状態……。なんとかしないとね」
独り言のように額の上にたまったホコリを払い、閉まっていたカーテンを塔子は開けた。サァッと夏の日差しに近くなった光が入ってくる。
「天気予報じゃもうすぐ梅雨入りとか言うわね。今年はちゃんと降るのかしら」
「……。」
陽乃は塔子の真意がわからないでいた。急にこんな部屋に入れられて二人きりにされても、話が続かない。
「あの～」
陽乃が何のつもりか聞こうとしたら塔子はまた話をし始めた。
「あらっ！　懐かしい～。これは……」
塔子が手にしていたのは陽乃もどこかで目にしたことのある賞状だった。
「あ……それ」
「朝倉さんも知ってるの？」
「はい」
「これねぇ、平成４年度の吹奏楽コンクール全国大会で銅賞をもらったときの賞状よ。ホント懐かしいわ」
陽乃もそのコンクールの盾が置いてあるのを部室で見たことがあった。
「村峰先生」
「なぁに？」

「先生がどうして懐かしいって言うんですか？」
塔子はしばらく唖然としてすぐにクスッと笑った。
「あなたって、ハッキリ物を言う子ね」
「あ……よく言われます」
塔子は賞状を片手にホコリをかぶったままの椅子に座った。
「私、第1期って言ったらいいのかしら。とにかく、前の七海高校吹奏楽部の顧問だったのよ」
「そうなんですか！？」
陽乃は驚きが大きすぎて思わず塔子の隣にあった椅子に座り込んだ。
「えぇ。だから、東くん……あぁ、東先生とかほら、今はけっこう有名になってる三田嶋くんとかは私が面倒を見た世代になるのよ」
「そうなんですか……びっくりした」
「それにしても懐かしいわね～」
陽乃は本当に嬉しそうに微笑む塔子を見て、去年監査会などでとてもD評価をした先生とは違うように見えるので薄気味悪さすら感じていた。
それ以前に気になっていたのが、なぜ第1期（と呼んでいいのかわからなかったが）七海高校吹奏楽部が廃部になってしまったか、という点だ。今から13年前になくなったことになる。
「村峰先生」
陽乃は真剣な表情で塔子に聞いた。
「なに？」
「どうして、前の吹奏楽部は廃部になったんですか？」
「どうしたの急に」
「あれほどいい成績を残していた吹奏楽部がどうして急に廃部になるんでしょう。あたしには、理解できないです」
塔子は俯いたままでしばらく黙り込んだ。
陽乃は時計を見たが、部屋に掛かっていた時計は1時過ぎで止まっていたので正確な時間はわからなかった。

「１４年前ね。吹奏楽部がなくなったのは」
重い口をようやく開いたという雰囲気で塔子は話し始めた。
「当時の……名前は伏せるわね。あ、誤解のないように。東くんや三田嶋くんじゃないのよ」
「はい」
「当時の部長と副部長がね、まぁ、お付き合いをしていたわけよ」
「……。」
ちょうど今の陽乃と翔といったところだ。
「別に個々人のことに口出しをするつもりはなかったの。お付き合いするのが悪いことじゃないしね」
「そうですね」
「現に、あなたと佐野くんだったかな？　お付き合いしてるんでしょう？」
塔子に指摘されて思わず赤くなった。二人の関係は案外バレバレらしい。
「あなたたち、ソックリ」
塔子がまた笑った。案外いい先生なのかもしれない、と陽乃は今さらだが思い始めた。
「本当に仲が良くてね。ところが」
「ところが？」
「二人、ケンカ別れしちゃったのよ」
「え……」
「それもね、コンクールの１週間前。何でも、彼らに聞いたらコンクールに対する意識にズレがあったらしいの。部長だった彼は全国大会へ行きたいってね。音大志望っていうのもあって、かなりこだわりがあったようで」
３年生だったらなおさらだろう。陽乃も納得できる。
「ところが、ちょっとパートの子に厳しすぎる面があったみたいで。当時彼のパートはフルートでね。フルートって割合から言えば女の子の方が多いでしょう？　彼はそんなこと気にせず、いろんなトレ

ーニングや練習を男の子と同等扱いでしてね。さすがに顧問の私もそれは厳しすぎるからよしなさい、と何度も注意したわ。けれど、止める気配はなかった」

塔子が窓の外を見た。どこからか、タイミングよくフルートの音色が聞こえる。沙希か由美子だろう。

「仕方がないから、彼女だったトロンボーンの子に止めてほしいって言ったのよ。彼女、ハキハキした子だったしね。ところが彼は言うことを聞かず、ずっとその練習をし続けて……」

今度はトロンボーンの音が聞こえてきた。この芯のある音は、きっと慎也だろう。どこかで話を聞いているとしか思えないほどだったが、偶然の出来事だった。

「コンクール当日、彼女と部長の子を除いたフルートパートの子全員が欠席したの」

「えっ……！？」

「当然、そんな状態でコンクールに出場するわけなんかいかないでしょう？　だからもちろん棄権。その後、フルートパートの子が来ることもなく、トロンボーンも団結力っていうのかしら、それが一気に崩れてね。トロンボーンも副部長の彼女を除いた全員が直後に退部したの。それから彼女が退部するまでも、時間はかからなかったわ」

「そんな……。部長さんは？」

「彼も責任を感じてはいたけれど、東くんを含めて3年生は半数以上残っていたし、彼の信頼も厚かったわ。だから、定期演奏会までは続けるっていう形を取ったの。そして定期演奏会以降、吹奏楽部は活動停止。別に上から言われたとかそういうのじゃないけど……。定期演奏会自体、フルートやトロンボーンはＯＢに手伝ってもらって成り立ったものだったからね。それに、定期演奏会以降退部するという部員も多かったし……」

「先生は何とかなさろうと思わなかったんですか？」

「精一杯のことはしたわ。でも……ダメだったの」

塔子が遠くを見つめる目をした。何かを思い出しているのだろう。
「それから10年。あなたたちが吹奏楽部を創りたいと言ったときには、心底嬉しかった。それに、当時の部員だった東くんもいたからきっとうまくいく。そう確信してたの」
「それじゃどうして……」
「去年の監査会でしょ？」
「……。」
「でしょ？」
塔子はニコッと笑ってもう一度聞きなおした。
「はい」
陽乃は緊張して思わずスカートを握り締めた。
「あれは本当に悪かったわ。すごく不安もあったの。いつか、自分たちのように創りあげてきたものが壊れちゃうんじゃないかって」
「壊れちゃう……」
「廃部になったとき、私は顧問を務めて5年だったの。ようやく団結してきたし、コンクールの成績も安定したものになってきたし、上昇志向の強い部員が多かったからきっとこのまま続くんだって。明日のことなんて誰にもわからないのに」
明日のことなんて誰にもわからない。
この言葉が陽乃には重く圧し掛かった。まさかここ2日ほどで翔との関係がここまで急激に悪化するとは思っていなかったからだ。
「本来なら、私情を学校の活動などに持ち込むべきではないわ。それはわかってる。でも、一抹の不安が消えなくて……結果的に、私は監査会であなたたちにDをつけてしまった。Eにする勇気なんて微塵もなかったけれどね」
「……。」
ここで陽乃は塔子の気持ちがわかる、と易々（やすやす）とは言えなかった。
「ダメねぇ、私は。教師としても大人としても」
「……あの」

「なに？」
「お話……ありがとうございました」
「いいえ。こんな暗い話、するもんじゃないわね、生徒に。ゴメンなさい」
そう言うと塔子は陽乃に手を差し出した。
「えっ？」
「その休部届け」
陽乃のスカートの左ポケットからはみ出した休部届けをパッと塔子は引っ張り出した。
「あっ！」
「私が預かっておくわ。もう一度、家でゆーっくり考え直していらっしゃい」
「……。」
「辞めるのは簡単よ。でも、それ以上に失うものも多いってこと、覚えておきなさい」
「失う……もの」
「そう。ご家族やクラブの友人、できたばかりの後輩、クラスメイト、先生方。皆が支えてくれて、応援してくれて、それであなたを含めた吹奏楽部の皆は気持ちよく演奏ができる。辞めるということは、それまでの皆の気持ちをないがしろにしたと思われるかもしれないし、朝倉さん自身がそれを失うことになるかもしれないわ」
「……。」
陽乃は自分が辞めようと考えた理由が翔とのことだっただけに、後ろめたさを感じずにはいられなかった。
「もし、理由があるならきちんと皆に納得のいくように話していらっしゃい。その上で辞めると決めたなら、今週中にでもこの休部届け、取りにいらっしゃい」
「はい……」
塔子が突然大きく手を叩いた。
「そんな小さな声を出せって東先生は言ったの？　大きな声で返事

！」
「はい！」
陽乃は反射的に声を大にした。
「よろしい！　それじゃ、この部屋を出ましょうか」

陽乃は資料室を出た後、とりあえず部室へ戻ってみた。戻るや否や、絵美と美里、春樹、拓真の４人がワッと寄ってきた。
「どこ行ってたの！？」
絵美がガクンガクン陽乃の肩を揺らす。
「わ、わ、わ、ち、ちょっと用事で」
「まさか、部活フケようだなんて考えてなかったでしょうね？」
美里がキツく睨んだ。陽乃はブルンブルン首を横に思わず振ってしまった。
「で？　東先生に用事って？」
春樹が痛いところを突いた。
「あ……ちょっとね。いろいろ」
「なんかごまかしてる感じがするけど……まぁヨシとしようぜ」
拓真は陽乃が部室へ帰ってきただけで十分、という様子を見せた。
「カケル！　朝倉さん、帰ってきたぞ」
陽乃が部室の入口を見ると、申し訳なさそうな顔をした翔と安和が立っていた。

「昨日は……ゴメンなさい」
安和がペコリとお辞儀をした。
「いいですよ。あたしも元々短気な性格ですから、あたしのことなんて心配するだけ損っていうか……」
「ウソ！」
安和が大声を出すのでまた陽乃は驚かされた。今日はなんでこんなに驚くことが多いのかと思う。
「ウ、ウソって……ウソの言いようがないんですけど」

「いくら短気だからって、休部しようなんてしないはずよ！」
「！」
「休部！？」
その声を聞いた優、恵梨、洋之、あずさの４人も駆け寄ってきた。
「おい、聞いてねぇぞ休部なんて！」
拓真が今度は必死になって陽乃に詰め寄った。
「わぁ～、ちょ、ちょっと待って！　確かにあたし、休部届け持ってきたけど」
「出しちゃったの！？」
春樹が泣きそうな声を上げた。美里に至っては既に半泣き状態だ。
「ち、ちが……」

「ホンマなん？」

一瞬で周囲が静まり返った。全員が翔のほうを見ると、安和と一緒に座り込んで茫然自失といった状態で座り込んでいた。
「いや……その……」
陽乃に全員の目線が集中する。
「だ、出しました……」
その一言に翔と同じように美里が座り込んだ。
「って言っても、実際のところ、村峰先生に取り上げられたってのが本当だけど」
「は？」
思わず翔、美里、拓真の３人の言葉が重なった。
「もう一度考え直して来いって……言われ」
次の瞬間、陽乃の体が思い切り誰かに締め付けられた。
その誰かとは、言うまでもなく、翔だった。
「キャーッ！」
美里、恵梨、あずさ、安和の４人が黄色い声を上げた。春樹は目を覆いながらも隙間から見ているし、洋之と拓真はしっかり見てい

る。優は顔が真っ赤になったまま立ち尽くした。
「ちょ、ちょっとぉ！」

「ゴメン」

翔は俯いたまま低い声でそう呟いた。
「え？」
「お前をこんなに不安にさせて、悲しませてたって知らんかった。ゴメン」
「……。」
翔はスッと立ち上がって美里たちに向き直った。
「ゴメン。今日、オレたち早引けしてもいい？」
「あ、あぁ……いいけど……」
拓真がなぜか答えてしまった。
「ありがとう」
翔は部室から陽乃と自分のカバンを持ってすぐに陽乃の手を引いて階段を降りていった。陽乃は翔の真意がわからないまま、ただ手を引かれるばかりだった。

第１１０話　失ってしまうもの（後書き）

ギリギリのところで村峰教頭に休部を止められた陽乃。そして翔の謝罪を受けた後、引かれるままに翔の後を追う陽乃に待ち受ける出来事は……？

第１１１話　もう一度ここから

黙ったまま、二人は学校を出て少し距離を開けながら歩いた。陽乃は黙って翔の後を追うが、どこへ行くのか聞こうとはしない。というよりは、翔がどこへ行こうとしているのか陽乃も薄々感づいているから声をかけなかった。

もう６月。午後６時前とはいえ、まだまだ明るかった。きっと翔と出逢った去年の４月だったらけっこう暗くなっているだろうと陽乃は考えていた。

急に翔が立ち止まった。陽乃も立ち止まり、やはりその場所だったことを嬉しく思い、これから翔が何を言おうとしているのかもわかっていた。

「去年さぁ……陽乃がここから転げ落ちてけぇへんかったら、オレら、一緒に楽器吹くことなんてなかったんかな」

翔は陽乃のほうは見ず、前を見つめたまま呟いた。

「……そうだろうね。あたし、好奇心旺盛だから何でも興味あるものとか興味あることには顔出すタイプだったから、あの時たまたまサックスの音が聞こえて、覗いたら翔がいたからね」

「ふぅん。オレに興味持ってくれたんや」

そう言われてから陽乃は自分が言っていることの恥ずかしさに顔が赤くなった。しかし、決してウソではなかったので否定はしなかった。

「オレは陽乃のこと、入学式で知った」

「え？　あたしたち、入学式で顔合わせるようなことあったっけ？」

翔は土手に座り込んで両足を投げ出して座った。陽乃も隣に座る。

「入学式でお前、派手に椅子ひっくり返したやろ？」

「あ……あの時？」

「そう。一際目立ってたからオレもおもろいヤツ、と思って見たらさぁ」

「見たら？」
翔はしばらく口をつぐんでいたが、それでもサラリと言った。
「けっこうオレのタイプの子やった」
「え……」
翔の顔も赤くなる。
「この子、オレのタイプって思った」
「……。」
「一目ぼれってヤツかな。オレの生まれて初めての」
「翔の初めて……」
陽乃は嬉しくて仕方がなかった。翔の「初めて」が自分だったことに。翔がモテないはずがないので、彼女になったとき二人目かそれ以上であるかは覚悟していたし、聞くこともなかった。それでも、翔は陽乃に初めて一目ぼれしたのだ。もうそれだけで陽乃は十分だった。
沈黙が続く。ＪＲ線の走る音が聞こえる。どこかで犬の散歩をしているのだろうか、女の子と犬の鳴き声が聞こえてきた。
「でも」
翔がようやく口を開いた。
「近くにおってくれて、近すぎて、オレは陽乃が傍におるって当たり前に思ってたみたい」
「……。」
「だから、これくらいは平気とか思って、岡崎先輩や豊田先輩が入ってきてくれて嬉しいのも合わさって舞い上がって……陽乃にヒドいことしたよなって思って……」
陽乃にとって、あの時の翔の態度はショック以外の何物でもなかった。
「でもさ、当たり前って、そんなもんひとつもないよな」
その言葉にドキッとした。
「オレがサックス吹いて、陽乃や慎也、拓真、春樹やみんなと楽器吹けて、東先生が教えてくれて、家へ帰ったら家族がおって、ご飯

食べて。多分、どれかひとつでも欠けたら……オレは退屈でしょうがないやろな。いや、ご飯とか欠けたら生きていかれへんわ」

翔はクスクス笑いながらいろんなことを思い出しているように陽乃には見えた。

「昨日、陽乃がおらんかってさ。オレ久しぶりに一人で帰ったわけよ。昨日とかおもろいこといーっぱいあったから、めちゃお前に話したかったんやで。慎也が昼飯に買ったイチゴミルク階段でひっくり返したとか、お前が居眠りしてた5時間目に田中が思いっきりクシャミして、それがウチの教室まで聞こえてたとか」

「プッ……！　ミサッチが？」

「あぁ。ブェーックショイ！って感じやったかな？」

「アハ……アハッ、アハハハハ！」

陽乃はこらえきれずおなかを抱えて笑い出した。しばらく笑い続けてようやく落ち着いたのを見てから、翔はさらに続ける。

「こんな些細なことでも……楽しくやっていきたい。やってきたつもりやったし、これからもやっていきたい」

「……うん」

陽乃は小さくうなずいた。陽乃もその気持ちは同じだからだ。

「陽乃」

翔が急に手を握ってきた。ドキッとして、心臓の鼓動が早くなる。

「改めて言わせて」

「なに？」

「好きです」

面と向かって言われると、逃げ出したくなるくらい恥ずかしい。それでも、逃げ出すわけにはいかない。翔の言葉を全身で受け止めるつもりだ。

「昨日は……調子に乗ってアホなことしてしまったと思ってる。でも……お前を思う気持ちは真剣やねん。それだけは……わかってく

ださい」
陽乃はスッと立ち上がった。翔はダメだったかと思いうなだれる。しかし、陽乃がスゥッと息を吸い込むや否や大声で叫んだのに翔は呆然とすることになった。

「あたしも、翔のことめっちゃ好き――！」

関西弁が混じっていた。

「……プッ」

翔の顔が歪んで、それからすぐに笑い声に変わった。

「アハッ……アハハハハハ！　め、めっちゃおもろい……ヤバイ！」

「なによー！　そんなに笑うことないじゃな……」

フワッと陽乃の体が翔のほうへ倒れた。いや、引き寄せられたのほうが表現としては正しかったのかもしれない。

翔が耳元で「オレも、好きだよ」と東京弁で言った。陽乃は真っ赤になってしまう。

「もう一度、ここからやり直そう」

「ここから……」

「このつくし野川のこの土手は、オレと陽乃……それから吹奏楽部の出発点や」

「……。」

そう。

ここで陽乃が翔と出会わなければ、違った形で吹奏楽部ができていたかもしれないし、吹奏楽部自体なかったかもしれない。すべては偶然だったのか必然だったのかもわからないが、陽乃と翔は引き寄せられるようにここへやって来た。現に今日も、行き先を言わなくても二人はここへ行きたいと自然と足が向いていた。

「もう一度ここから？」
「そうや……。いい……かな？」
陽乃はギュッと翔を全力で抱きしめた。

「もちろんだよ」

土手沿いには誰もいなかった。まるで、陽乃と翔に気を使っているかのように誰も通らなかった。
しばらく抱き合ってから、翔が立ち上がった。
「帰ろうか」
「うん！」
「あ……」
「なに？」
「自転車。学校や」
「あ……忘れてた」
「取りに帰るか？」
「うん！」
翔が先を歩き出し、陽乃が慌てて後をついて行く。
「ん」
翔が手を差し出した。
「なに？」
「手。繋ごう」
「……うん」
二人は手を繋いで、それからゆっくり歩いて学校へ引き返した。

第１１１話　もう一度ここから（後書き）

翔が陽乃への思いを伝え、再出発を誓った二人。コンクールまで１ヶ月弱。果たしてここから二人、そして吹奏楽部はどれだけの力を蓄えて本番へ挑むことができるのでしょうか。

第１１２話　母たちの団結

「ただいまぁ」
翔が陽乃を家へ送ってから帰ると、廊下に置いてある電話の前に椅子を持ってきて友美子が大声で笑いながら電話をしていた。
翔が呆れたというような表情をして隣を過ぎようとしたら、友美子に思い切り右袖を引っ張られて転びそうになった。
（なにすんねん！）
友美子はメモに何かを書いて翔に手渡した。
（ご飯は炊飯器に2杯分。今日は味噌汁とサンマ焼いてるから電子レンジでサンマはチン！して、味噌汁は綾音に温めてもらって）
「はいはい」
翔は面倒そうに返事をしてまずは自分の部屋へ上がった。制服を脱いで私服に着替え、明日の用意をしてからようやく下へ降りた。
リビングに入ると、綾音がポテトチップスを食べながら『百識王』を見ていた。
「なんや、またそれか」
「うん」
「好きやな～雑学系の番組」
「学校の勉強より役立ちそうやもん、将来」
翔もそれは思う。今やっている数学が将来どう役に立つのか教えてほしいと思っている。
「なぁ、母さんは何を長電話してんの？」
「なんかなー、お母さんの会を作ろうとか言うてんの」
「お母さんの会？」
「そー」
翔は不思議に思い、サンマを電子レンジで温める間ずっと考えていた。
（何かサークルに入った？　いや……それやったら絶対オレらには

言うてから入るやろうし。じゃあご近所の何かか……。それにしても母さんだけってのも変な話やし）

チン！とでき上がった時の音が響く。翔の家の電子レンジは古く、平成2年製のものだった。電子レンジは比較的長持ちする電気製品だと友美子が言っていたのを翔は思い出した。

「味噌汁置いとくよ」

「おう。サンキュ」

綾音がお椀をテーブルに置いた。翔は少し熱くなったサンマの皿をテーブルに置いて、ご飯をよそってからようやく食べ始めた。

（そもそも、誰と電話してんやろ）

「綾音」

「なに～？」

「誰と電話してんの？」

「誰やったかなぁ……」

綾音はしばらく考えてから思い出したように言った。

「なんか、川崎って人やったように思う」

「川崎？」

慎也のことしかないだろう。それにしても、慎也の母親と友美子の接点は今まで全然なかったのにどうしてこんなに長電話をしているのだろう。翔自身、慎也の携帯番号は知っていたが家の電話番号は知らなかった。

翔は時々聞こえてくる友美子の会話を聞こうと耳をそばだてるが、綾音の見るテレビの音と彼女の笑い声でちっとも聞こえない。

「綾音、ちょっとテレビの音小さくしてくれへん？」

「なんでよ。いまいいとこやねんから」

「ちょっとだけ！　な？」

「うるさいなー。後で後で」

翔はカチンと来てリモコンでテレビのスイッチを切った。

「あー！」

「静かにしろや！　母さん電話中や」

「いまちょうど知念さんが出てきてんから早くつけてよ！」
「うるさいなぁ！　部屋中知念だらけにしといて今さらそんなん見んでもえぇやん」
「早くつけて！」
「嫌じゃ！」
「早く！」
「うるさい！」
「えぇやん！　廊下まで離れてるんやから！」
「食事中くらい静かにさせ――」
「うるさいなぁ！　アンタら、電話中やねんから静かにしぃ！」
友美子の怒鳴り声に二人は心臓が飛び出しそうなくらい驚いて「ひっ！」と小さく悲鳴をあげた。

「まったく、アンタらは二人ともやかましくってしょうがないわ」
怒鳴り声から２０分後に電話を終えた友美子がプンプンしながら翔にリンゴを剥いていた。
「ゴメンって」
翔は食器を片付けながら謝る。
「それが謝ってる態度かなぁ、ホンマに」
「ゴメンなさい」
翔は食器を片付ける手を止めて軽くお辞儀をしながら謝った。
「よろしい」
友美子はニコッと笑って剥き終えたリンゴを翔に手渡した。
「それより母さん、さっきの電話の相手は誰？」
「あぁ～、川崎くんのお母さんよ」
「慎也の？　いつ電話番号なんか調べたん？」
「そんなんちゃうよ。今日の夕食の買い物行ったスーパーで会ったんやから」
「スーパーって……フレスコ？」
「そうそう。今日オープンしてセールやったからね。そのときに川

崎さんと会って、吹奏楽部同士やからよろしくって」
　慎也の家から新しくできたスーパーまではけっこう距離がある気もしたが、セールとなればそんなことは関係ないのだろうと翔は思った。母親の行動力っていうのはどこでもすごいようだ。
「それでね、私が保護者会の話をしたら、川崎さんと話が合ってねぇ」
「保護者会？　何の？」
　翔はリンゴを一口頬張ってから聞き返した。
「決まってるやないの。大阪のときも吹奏楽部に保護者会あったやろ？」
「あぁ……なんかあった気がする」
　コンクールのときにジュースやパンの差し入れをしてもらった覚えがある。とはいえ、当時友美子はパートをしていたのでほとんど参加できていなかった。
「中学のときはパートでほとんど参加できへんかったけど、今やったらどんどんできるからね、お母さんちょっと頑張ろうと思うんよ」
「何を？」
「保護者会」
「まだ出来もせんうちからそんなこと考えてどうするん」
「創ればいいじゃない？」
「は？」
「保護者会。先生に頼んで創るわよ、それくらい」
「……そんな簡単に行くかな」
「行くんじゃない？　アンタが吹奏楽部創ったときよりはずっと楽やと思うわ」
「まぁ……そうかもしれへんけど」
　翔はきっと友美子に似たのだと思った。考え方がまったく同じだ。翔も吹奏楽部を創るとき、自分の中で何の根拠もないのにきっとうまく行くという自信があった。
「とりあえず、東先生に掛け合ってみぃひんとアカンわね。翔、電

話番号教えて」
「先生の？」
「それ以外に誰のがあんの。早く早く」
「今からかけるん？」
「夜のほうが先生も時間あるやろ。ホラホラ、急いで急いで」
翔はブツブツ言いながら携帯を取り出した。
「ありがと。えーっと、０８０の……」
友美子は廊下へ出てまた受話器をとって、しばらくしてから話し声が聞こえてきた。
「お母さん本気なんかな」
綾音が心配そうに翔に聞いた。
「本気でなかったら、あんなことせぇへんやろ」
「お母さん、やり方がよくわかりもせんのに張り切ってるとこあるしなぁ……」
「……。」
そういわれてみれば、と思い翔も心配になる。
３０分後、ようやく友美子が電話を終えてリビングへ戻ってきた。
「どうやった？」
「先生も大喜びよ！　今、部員みんなの家の電話番号聞いたから、明日にでも電話してみるわ。あれ？　綾音は？」
「風呂。それより母さん、保護者会って……母さんが会長すんの？」
「会長？」
「うん。中学のときは会長、副会長、会計、書記とかいろいろあったみたいやけど」
「……。」
「聞いてる？」
「どないしょ……」
「え？」
「そんなこと全然考えてへんかったわ」
綾音の予想どおりだった。友美子はまったく保護者会の仕組みが

わかっていないのだ。
「どうすんの。このまんまやったら母さんが提案者やから何なりと役職就かんとアカンようになるで」
「どないしよ……」
友美子はそれっきり黙ってしまった。翔はフゥッとため息をつくと携帯電話を取り出した。
「3年生が入ってきたって話、したやろ？」
「うん」
「誰かに経験ないか、聞いてみるわ」

翔はとりあえず、名前の順で当たることにした。名前の順となると、初めは安和だった。
「……やっぱ名前の順の逆からで」
そういうと翔は「三河　岳彦」の名前をクリックした。すぐに電話番号とメールアドレスが出てきたので、迷わず電話番号をクリックする。
発信音が4回して、岳彦が出た。
「あ、こんばんは」
「おう、佐野くん、どしたの？」
「先輩にちょっと聞きたいことがあって……」
それから翔は保護者会ができそうだが、2年生の母親に役職経験者がいないので3年生の親御さんにも協力してもらいたい、ということを伝えた。
「あ～……俺んとこはそういうの、したことがないんだよ。なんせ兄弟が多くて、母親、下の子たちの世話でいっぱいいい……わっ！　コラ！　やめっ……あ」
急に岳彦の声がしなくなったかと思うと「もしもしー！　雪菜（ゆきな）ですー！　誰ですかー!?」という声がした。
「バカか、返せ！」
「いいじゃんたまには貸してくれたって。雪菜だってもう幼稚園だ

もん！」
「大事な話をしてんだよ、兄ちゃんは。ホラ！」
「チェッ！　いけず」
その直後、電話が切れてしまった。
「……なんや今の」
翔が呆然としていると、岳彦から着信がすぐに来た。
「もしもし？　佐野くん？　ゴメンな、妹が勝手に……」
「いえ！　兄弟多いんですか？」
「下に弟が3人と妹が2人いるんだよ」
「……大変そうですね」
「もう毎日が嵐だよ」
岳彦は少し嬉しそうに笑いながら言った。
「そういうわけだから……ちょっとウチは協力できそうにないよ」
次は申し訳なさそうに言う。
「いえいえ！　あの、ついでに聞きたいんですけど、豊田先輩と……その、岡崎先輩はどうですか？」
「あ～……豊田はお母さん忙しすぎてチョコチョコっと手伝いに来てたくらいだよ。岡崎のほうは、お母さんが副会長経験あるよ」
「そうですか……」
安和は陽乃との件があって少し電話がしづらい感じもあった。
「電話できるか？」
岳彦が察したようにヒソヒソ声で翔に聞いた。
「大丈夫です。オレ……大丈夫です」
半分は自分に言い聞かせるように、翔は繰り返した。
「オッケ。じゃあ、多分岡崎いま暇だろうからすぐかけなよ」
「はい！　ありがとうございました」
それからすぐに岳彦との電話は終わった。翔はしばらくして真っ暗になった携帯電話のディスプレイを見つめながら、5分ほどボーッとして、思い出したようにアドレス帳から安和の電話に発信した。
発信音がたった1回鳴っただけで安和がすぐに出た。

「こんばんは。あの……佐野です」
「こんばんは」
安和は至って普通の声だった。
「どうしたの？」
「あの……先輩」
「なに？」
妙な沈黙が続く。すると、安和のほうから切り出した。
「話にくいよね。うん、わかる」
「へ？」
「私だったら、どんな用件あっても電話できないよ」
「……。」
なんだか自分が無神経なのかと翔は劣等感に近いものを感じた。
「あ、ゴメンね。悪い意味じゃないの。佐野くん、あんなことがあった後でも普通に私に接してくれるなっと思って」
「いや……あれはオレに原因があったんで」
「そういうと思った」
安和は受話器の向こうでクスクス笑った。
「それで、あの……」
「あ、用件入る前に聞かせて」
「はい？」
「朝倉さんと……仲直りできたよね？」
「……。」
「ダメ……だった？」
「いえ……仲直り、できました」
しばらく沈黙が続いてから安和が「よかったー！　本当によかった！」と声を上げた。
「ご心配おかけしました」
「いえいえ。むしろ、私が迷惑かけたんだから。本当によかった。それじゃ、用件に入ろうか」
翔はさっきより安心して電話を続けることができた。

「母さん」
安和との電話を終えて翔はすぐに友美子のところへ行った。
「どうやった？」
翔はブイサインを友美子に向けた。
「よかったー！　ホンマ、岡崎さんにまたお礼を言わんとねぇ」
安和の母親は副会長の経験があったので、今回、保護者会設立に当たって会長をしてくれないかと頼んだのだった。安和たちは途中入部だったので初めはお母さんも引いていたようだが、経験を見込んでと安和が説得してくれたらしく、承諾してくれたのだった。
「日曜日にでも集まれるだけ保護者が集まって、説明会を開きたいって。それだけ、先生に伝えといてくれへん？」
「わかった！　じゃあ……今日は遅いから明日にでも連絡するわ」
「うん。よろしく！　じゃあオレ、風呂入ってくるわ」
「そうして！　ありがとうね、翔」
「いえいえ。んじゃー」
翔は嬉しそうに鼻歌を歌う友美子をもう一度見て、風呂場へと向かった。

第１１２話　母たちの団結（後書き）

遂に保護者たちも動き出した七海高校吹奏楽部。保護者会設立に向けて意欲を見せる翔の母・友美子とそれを支える翔。息子と同様に友美子も活躍できる場面があるのでしょうか！？

第１１３話　交わらない和音

６月１１日（日）。

コンクールの日がどんどん近づくに連れて、部員たちの士気も高まっていた。今日の練習メニューは午前中に保護者会設立に関する会議が開かれているために、午前はパート練習、午後は合奏という具合になっていた。

ちょっと様子を見た翔によると、２年生の母親は佐野、朝倉、永井、川崎、本堂、橋本、宮部、田中の８名。１年生はほとんどが出席しているそうだ。３年生は岡崎、豊田、三河の３人全員が出席しているということだった。

「大谷さんはお父さんもお母さんもお仕事なんだって」

陽乃はメトロノームの準備をしながら翔に伝えた。

「相変わらず忙しいんやなぁ」

翔は翔でリードを舐めながら答える。

「水谷くんのところはパート」

「パートかぁ……。みんな忙しいねんなぁ、日曜やのに」

「そうだね～。保護者会ができても、出席できる家とそうじゃない所が出るのは仕方ないけどね」

「でもまぁ、オレらが基本的に頑張ってればそれでＯＫよ」

翔はニッと笑って楽器をストラップに付けた。

「そだね！　今日も頑張りますか！」

陽乃と翔が楽しそうに部室から出て行くのを、拓真が羨ましそうに見送る。

最近、拓真と岳彦のチューバ、春樹と愛実のユーフォニウム、亮平の弦バスのいわゆるバスパートはテンションが低い。というのも、合奏で恭一に叱られるのが一番多いパートは今現在、拓真たちバスパートだったのだ。

その理由は簡単にして難関、音程だった。

吹奏楽経験者である岳彦、愛実、亮平の３人は比較的音程がよく合う。つまり、彼らの音程を乱しているのが他でもない拓真と春樹だったのだ。それも、季節が夏に近づくに連れてどんどん二人の音程は上がっていった。今では基準となる音より１０から２０くらい高く、パート内はおろかバンド内でも音が浮いた存在になっていた。

パート長は拓真。岳彦が入部してきたので、恭一にパート長を彼にしてほしいと頼んだが、３年生はこれからの在籍期間が短いこと、途中入部であることなどから却下されてしまった。内緒で岳彦に指導を頼んだが、それでは拓真にとっても良くないと岳彦に諭され、仕方なくパート長を続けているという感じだった。

音程の乱れはチューニングのときから現れる。ベーの音が濁って全然合わないのだ。

「春樹」

拓真が春樹をピンポイントでチューニングさせる。

「はい」

春樹が緊張した様子でベーを吹く。チューナーの針が高いほうへと振れ、２０くらいの位置で止まる。

「２０高い」

「はい」

春樹はチューニング管を抜いて音程を調節する。

「もう一回」

「はい」

春樹はスゥウッと息をしっかり吸って温かい息で楽器を鳴らす。

「２０高い」

「はい」

いつまでたっても毎日、同じことの繰り返しに拓真の不安も募るばかりだった。

「変わって、加藤さん」

「あ、はい！」

拓真に呼ばれて愛実が拓真と交代する。

「二人で吹こう」
「うん」
音程が合わない二人が合って、初めて意味があると拓真は思って楽器を構える。ところが、拓真が入るとますます音程は悪化して、言葉にすればビヨヨヨヨ～、といったような気味が悪い音になる。
「ハァ……」
拓真は落胆した様子でため息をついた。春樹も楽器を降ろして俯いてしまう。愛実と亮平はどうしていいかわからず、顔を合わせるばかりだ。
「本堂くん、水谷くん」
岳彦が二人の肩を叩いた。
「音程合わなくてもいいからさ、とりあえず加藤さんと三宅くんの音をしっかり聞いて自分なりにこれで絶対合ってる！と思う音に持っていってみなよ」
「そんなことで……合いますかね」
春樹が疑問の声をぶつける。
「ただ吹けばいいってもんじゃないよ。音程を合わせようと思えば、口を調節しなきゃ」
「口……ですか？」
今度は拓真が疑問の声をぶつけた。
「そう。金管楽器は木管楽器と違って、マウスピースに直接口の振動が伝わるイメージだろ？　木管楽器はリードを振動させるけど、金管楽器は唇ね」
「なるほど……そういえばそうかも」
春樹は唇をさすりながらうなずく。
「で、口を調節するっていうのは口の開く大きさって言えばいいかな。それをうまく調節していけば、必ず周りと音程が合う位置があるんだよ」
「へぇ……」
拓真は口を大きく開けた。それを見た愛実がプッと笑った。

「加藤さん！　俺、真剣だから」
「す、すいません」
愛実は後ろを向いて笑いをこらえているようだった。
「それで、三河さん。続きお願いします」
「あぁ。で、その合った音程の口の形を覚えて、常にその口で吹くように心がけること。時間はすごくかかるけど、だんだんそのクセがついてくるようになるよ。そうすれば、音程が安定してくるってことにも繋がるからね」
「難しいな」
春樹がウーンとうなりながら答える。
「毎日意識して吹くこと。まずはそこからだね！　とりあえず、今日から実践してみて」
「はい！」
拓真と春樹は元気良く返事をした。

昼からは合奏なので、部員たちは緊張した面持ちで音楽室に集合した。
「起立！」
翔の掛け声に全員が素早く反応する。恭一はいつもより少しやわらかい表情で指揮台に上がった。普段は温厚な恭一だが、指揮台に上がったときはとても厳しい。１年生も最初はそのギャップに戸惑っていたが、最近はようやく慣れてきたといったところだ。
「えーと、まずチューニングの前に」
チューニング、という単語が出てきた途端、春樹と拓真の顔が強ばった。横から岳彦が二人に「深呼吸、深呼吸」と励ましている。陽乃も彼らを見ていると緊張するし、翔は翔で彼らを睨むもとい見つめる恭一の視線が不安を感じさせていた。
「今朝、みんなの親御さんと協議した結果、保護者会の発足が決まった」
「おぉ〜」どどよめきが起きる。

「まず、会長だが」
恭一はメモ用紙を取り出して続けた。
「会長は経験もあるということで、岡崎のお母さんにお願いすることにした」
パチパチとすぐに拍手が沸き起こる。
「それから、副会長は佐野のお母さん」
同じく拍手が起こる。なんだか恥ずかしくなって翔は俯いてしまった。
それから書記は雪子の母、会計は健之佑の母が担当することになった。それからいくらか係も作るそうだが、それは追々という形になったそうだ。
「報告は以上だ。それじゃ、チューニングだな」
拓真の背中から嫌な汗が流れ出した。
「えーっと、昨日はバスパートからだったから、今日はフルートから行こうか。音程が合ったパートはそのまま吹いていって、重ねて行ってくれ」
「はい！」と沙希、由美子、佳菜の3人が返事をする。このフルートは音程はいつも完璧に整えてくる。フルートは難なく音程を合わせてきた。それからダブルリード。健之佑と誠もスムーズに通過。それからクラリネット。絵美、みゆき、光瑠、優輝の順番。一人ずつの音程が安定しているのがわかる。そして翔、麻綾、さゆり、はるか。彼女たちの後が、バスパートだ。
まずは亮平。弦のしっかりした音が伝わる。音程はバッチリだ。次に岳彦が入る。ブランクを感じさせない、野太い音。
（息をめいっぱい吸って……！）
拓真は岳彦の音を全身全霊集中させて聴きながら続いて入った。一瞬音程がブレたが、すぐに持ち直して安定させた。恭一は特に表情を変化させず、隣にいる愛実に吹くよう指示を出した。愛実も無事通過。その頃、春樹の心境は尋常ではなかった。
汗は拓真以上に出ていて、後ろから見る亜紀や慎也が見てもわか

るくらい、汗がシャツに染み込んでいた。手も震えていて、隣にいた雪子が思わず声を掛けそうになったほどだ。
恭一の指示が出た。春樹は緊張のあまり息がうまく吸えず、入りも不安定になり一人浮いた音を吹いてしまった。
同時に恭一の指揮棒が指揮台を叩きつけた。
「なんだ！　今のヘナチョコな音は！　水谷！」
春樹はすっかり萎縮してしまい、返事もしない。
「水谷！　なんだって聞いてるんだ！」
「……すいません」
「そんな小さい声じゃ音も小さくなる一方だろ！　立て！」
春樹は楽器を抱えたまま立ち上がる。心臓が飛び出しそうになるほど鳴っている。
「いいか！　姿勢をまっすぐにして息をしっかり吸え！」
「はい」
「返事！」
「はい！」
春樹は息を吸おうとするが、うまく吸えないうちに楽器を吹いてしまい、情けない音が出た。
「ったく！　それがコンクール１ヶ月前に出す音か？」
「……すいません」
「本堂！」
「はい！」
「立て」
拓真も楽器を置いて立ち上がった。
「今日、パート練習では何をしてた？」
「音程を中心に合わせていました」
「その結果がこれか？」
「……。」
「これか！？」
恭一が怒鳴ったので真正面にいた光瑠がビクッと体を縮ませた。

「すいません……」
「すいませんじゃないよ、まったくお前らは。2年生なのにいつまでたっても音程が悪いなんて恥ずかしいと思わないのか？」
拓真は唇を噛んで下を向いたままだ。一方、春樹はまともに恭一の声が聞き取れないくらいに体がフラフラになってきていた。
「お、おい？　水谷？」
恭一も異変に気づいて春樹に声をかけた。しかし、その頃には春樹が楽器ごと倒れるときだった。
「危ない！」
雪子が楽器を置いて春樹の楽器を支えた。
「危ねぇ！」
慎也が同時に立ち上がり、春樹の体を支える。
「春やん！」
翔も駆け寄って春樹の名前を呼んだ。
「おい！　川崎、佐野！　水谷を保健室へ連れて行ってやってくれ！」
ザワザワと部員たちが騒ぐ声が、微妙に春樹の耳に届いていた。

「寝不足から来る熱ですね」
保健の飯井橋（いいばし）先生の声が春樹の耳に届いた。目を開けると、心配そうに覗き込む拓真と翔の顔があった。
「翔……拓あん……」
「大丈夫か？」
拓真がソッと手を春樹の額に載せた。大きな手が春樹の熱くなった額に当たる。
「お前なぁ、体調悪いならそう言えよ」
翔がフゥッとため息をついた。
「ゴメン……」
「でもさぁ、何でやねん？」
翔は春樹に聞いた。

「え？」
「練習、そんなキツい日なかったやろ最近は」
「……。」
「午後6時半には合奏も平日は終わってるし、休日も5時過ぎには終わってる」
春樹は言おうか言わまいか迷った末、ウソをついておいた。
「ほら、一昨日雨が降ったでしょ？」
「あー……降ったな」
「その時買い物に出ててさ！　濡れちゃったから……多分風邪引いたんだと思う」
翔はグリグリと春樹の頭で拳を回した。
「いててててて！？」
「えぇか！　これからは絶対、自分の体大切にせぇよ！」
「……うん」
「拓あんも、加藤さんも三宅亮平（みーやん）も心配してんやぞ。もちろん、三河先輩もな」
「うん……ゴメン」
「はいはい！　それまでそれまで！」
拓真が大きな手でパンパンと合図を送る。
「とりあえず、春樹は今日は帰ったほうがいい。でしょ、先生」
「そうだな。体調不良なら早めに言いなさい。いいな、水谷」
「すいません……」
春樹は泣きそうな顔をしながら、小さい声で返事をした。

「それじゃ、失礼します」
「おう。お疲れさん。気をつけて帰れよ」
「はい！　さようなら」
「はい。さようなら」
翔は恭一に一日の報告を済ませて職員室を後にした。
ふと音楽室を見ると、なぜか消したはずの部室の電気が点いてい

る。点いているというより、懐中電灯らしきもので部屋を照らしているといった感じだ。
「なんや……。誰や？」
翔はそっと職員室側の階段を上がる。もう入れる階段がそこしかないのだ。なんとか恭一にバレることもなく出くわすこともなく音楽室前にたどり着くことができた。しかし、そこへ来て翔の緊張が一気に高まる。
「まさか……お化けとか」
翔はこの手の話題が大嫌いだ。もし本物に出くわせば、卒倒しそうなくらいである。
「……。」
翔は耳を澄まして音楽室の中で何か音が聞こえないかドアに耳を当ててみた。すると、中から確かに金管楽器の音がする。
「吹奏楽の誰かか……？」
そっと開けると、重いドアがゆっくり開いた。誰かがいるのは間違いないだろう。部室のドアを開けようと手をかけたが「ガタッ」と音がした。鍵がかかっているのだ。
「鍵……そやんな。オレが掛けたから」
翔は窓のほうへ行って微妙に歪んでいるその窓の隙間から中を覗き込んだ。もし中にこちら側を見つめる目があったらどうしようなどと不毛なことを考えてしまう。
翔は倒れそうなぐらい緊張して窓を覗き込んだが、結局中には誰もいなかった。
「気のせいやったんかな……」
その時「誰かいるのか！？」という声と共に懐中電灯で照らされた翔は驚いて乗っていた本棚から滑り落ちてしまった。
「いってー！」
「佐野！　お前、帰ったんじゃなかったのか？」
なんと見回りに来た恭一だった。
「いやぁ、なんか下からここが明るいなって思ったんで誰かおるん

かと思って」
「は？」
恭一は不思議そうな顔をして、しばらくしてから何か嫌なことを思い出したかのように顔をゆがめた。
「どしたんスか？」
「いや……それより、本当なのか？　明るかったっていうのは」
「はい」
「どれ、一応確認しておくか」
恭一は合鍵で部室の扉を開けた。電気を点けるが、誰かがいた形跡はない。
「気のせいじゃないのか？」
「やっぱりそうなんかなぁ……」
「疲れてるんだろ。梅雨にも入る頃だしな」
「そうかもしれませんね」
翔は苦笑いして頭をかいた。
「ほら、もう遅いからいい加減出るぞ」
「はぁい」
翔はまだ少し納得がいかないようだったが、恭一と一緒に音楽室を出た。
「……。」
「……行った？」
男子生徒の声。高い声。
「みたいだな」
もう一人が答える。低い声。
「よしっ」
パッと懐中電灯を点けたのは春樹だった。
「ったくー、鋭いとは思ってたけど、まさかあそこまで疑ってくるなんて思ってもなかったよ」
拓真が狭い棚の下から顔を出す。続いて春樹が向かいの本棚から出てきた。

「でもこれだけ外に除けた本に気づかないって……先生もカケルも超鈍感だよね」

春樹がクスクス笑う。つられて拓真も笑った。

実は春樹と拓真は毎晩、音楽室に忍び込んではだいたい9時くらいまで練習をしていたのだ。何回か恭一や見回りの先生にバレそうになったこともあったが、今のところバレずに練習を重ねてきている。今日で12回目になる。

鍵の問題も意外と簡単に片付いた。一度、拓真が最後まで残っていた日があった。そのときに翌朝、練習をしたいから合鍵でもいいので貸してほしいと恭一に頼んだのだ。そして恭一は元鍵を貸してくれたので、その日のうちにその鍵から合鍵を作った。拓真も黙ってそんなことをするのに抵抗はあったが、自分たちの練習のためだと自分に言い聞かせている。

「ホントホント。二人らしいけどな」

拓真はチューバを抱えて椅子に座った。春樹がその隣に座る。

「じゃあロングトーンだよね」

「いいけど、ハル。今日は体調悪いんだからあと少しにしようぜ?」

「うん。わかってる」

そうは言っても春樹は意外と頑固な面もあるようで、どうせ1時間くらい居続けるであろうと拓真は予想していた。

案の定、練習を終わろうと春樹が切り出したのは午後9時前だった。校舎内はさすがに不気味だ。二人はそそくさと音楽室を出て、いつも出入りする壊れている1階西階段近くの裏口へ向かった。

「なんかさ、映画みたいでドキドキするよね」

春樹がワクワクした声を上げた。

「なんか、脱獄犯みたいな感じだよな!」

拓真もこういう映画は好きだったので、思わず声を大きくしてしまう。すぐに裏口から出て、校門を乗り越えて一息ついた。二人は本当に悪いことをしている気分だった。実際、いいことでないのもよく理解している。

「それじゃ……今日もお疲れ」
拓真が大きな手で春樹の肩を叩いた。
「お疲れさん！　またね、拓あん」
春樹は笑顔で拓真に手を振ってすぐに自宅のほうへと走って行った。春樹も拓真も徒歩で通える距離だったので、遅くなっても問題ない。
コンクールまであと少し。
拓真は密会のようなこの練習が、意外と好きになってきていることに気づかされて思わず笑いが出てしまった。
「明日からも頑張るか」
拓真はギュッと拳を握り、そう呟いて家路に着いた。

第１１３話　交わらない和音（後書き）

バスパート仲良しペアに降りかかる試練。それを乗り越えるために毎晩、密会もとい密練（？）を行う春樹と拓真。彼らのこの行動は吉と出るか凶と出るか……！？

コラム☆４　七海市ってどんな町？

翔たちが毎日笑って泣いて、楽器を吹いてる七海市という町。この町ってどんな町？　それを少しだけ解剖しちゃいましょう！

名称：神奈川県　七海市（ななみ）

人口：４５万６７１２人　タイプ：近郊住宅タイプ

交通：ＪＲ南武線（七海市内は通っていないため、最寄り線。最寄り駅は登戸（のぼりと）駅）／小田急電鉄小田原線（七海市内には２駅。七海駅及び袴田（はかまだ）駅）

市長：伊藤正臣（いとうまさおみ）（４７歳）

＜小説に出てくる場所☆ミニデータ＞

☆七海市立七海高等学校：説明不要に近い、翔たちの通う高校。生徒数は１２３０名。どちらかといえば体育会系の部活で好成績を残すことが多い。４年前に制服が変わったのでどこの高校か把握できていない市民もいる。怪談のひとつとして昔からある、音楽室から聞こえる「エリーゼのために」は翔たちも経験済み。

☆私立風見台高等学校：修平たちの通う高校。基本的に裕福なお坊ちゃん、お嬢さんが通う神奈川県内でも財力、知力ともにかなり上。

☆つくし野川：七海高校近くを流れる２級河川。長津田（ながつた）あたりから流れてくる。

☆津上橋（つがみ）：七海高校最寄りのつくし野川上にかかる橋。翔はここの欄干に登るのが好き。

☆七海市役所：津上橋から南へ５０メートルほどの位置にある。

☆翔の家：新築。３階建て。七海市でも比較的標高が高い所にある。東南のほうを見ると東京湾アクアラインが見えるし、東のほうは新宿副都心の夜景が見える、贅沢な場所に建っている。翔は２階のベランダから足を出してこの景色を眺めるのが大好き。

☆陽乃の家：築１０年。２階建て。翔の家から北にあり、それほど離れていない。最近目の前に大きなマンションが立って以前は見えていた新宿副都心が見えなくなったため、陽乃や夏樹はかなり不服な様子。

☆老人ホーム「結縁寮（ゆいえんりょう）」：「縁結びがあるように」という願いを込めてつけられた老人ホーム。七海高校は毎年、ここへ慰問演奏に行っている。県内でも有数の設備を誇る。

☆七海市中央ホール：七海市のほぼ中央、市役所の南西に位置する大きなホール。演劇から演奏会、様々な展示会が開かれ、市の文化行事の中心地になっている。

☆小田急七海駅：各駅停車のみが停車する駅。主に学生が利用者の中心である。

☆大井戸（おおいど）川：七海市の西側を流れる１級河川。沿岸には大井戸公園という河川敷公園が広がり、市民の憩いの場のひとつになっている。

☆葉島（はじま）中学校：陽乃、春樹、雪子の出身中学校。吹奏楽部はない。今は夏樹と綾音が通っている。

☆袴田中学校：駿や健之佑の出身中学校。レベルの高い吹奏楽部がある。

☆大井戸中学校：優輝や誠の出身中学校。吹奏楽部あり。

☆南葉島中学校：沙希や河内（こうち）みゆきの出身中学校。指導が厳しい吹奏楽部がある。

☆南大阪市：大阪の西南に位置する人口約１５万人の小さな都市。翔、修平、翔平の出身地でもある。

☆淀南（よどみなみ）中学校：翔、修平の出身中学校。吹奏楽部はあった模様。

第１１４話　犯人がいる！？

「えぇっ！？　ドロボー！？」

突然大声を上げたのは由美子だった。拓真は驚いて楽譜を落としそうになった。続いて興奮した様子で佳菜が様子を話す。

「そうなんですよ！　ゆみちゃん先輩！　これがその証拠写真です！」

佳菜は携帯電話を取り出して写真を見せた。

「これがですね、拓あん先輩のチューバです。それで、これが春やん先輩のユーフォニウムなんですよ」

拓真は嫌な予感がした。

「で、これが今朝撮った写真なんですけど……なんと！　二人の楽器、見事に動いてるんですよ！」

「うわぁ！　ホントだ！」

由美子がさらに興奮した様子で写真を見つめる。拓真は自分たちの楽器を密練の後、いつも適当に置いていたのだがなんと佳菜にその不自然さをチェックされていたのだ。

「チーッス」

翔が上機嫌で部室へ入ってくるなり、由美子と佳菜が迫ってきたので翔は思わず後ろへ倒れそうになった。

「見てください！　部長！」

「な、な、落ち着いてよ、井上さん」

「これを見て落ち着いてられるとでも思う？」

由美子が佳菜の携帯電話の画像を見せて、一通り説明をした。拓真は耳をそばだてて彼らの話を聞く。

「これが昨日、帰る前に私が撮ったんです」

「うんうん」

「それが……今朝、撮ったらなぜか拓あん先輩と春やん先輩の楽器が動いてるんですよ！　これって……ひょっとしたら夜中に誰かが

忍び込んでることになるんじゃないですか！？」
「……。」
翔の顔がみるみる青ざめるのを由美子と佳菜が心配そうに見つめる。
「ど、どうしたの？」
「昨日……帰る前、閉めたはずの誰もいない音楽室から……楽器の音が聞こえたんや」
「え……」
部室にいた、拓真以外の部員が凍ったように動きを止めた。
「そ、それで？」
絵美がつられて話を続けるように翔に促す。
「オレ、調べに行ったんや。そしたら誰もおれへんかって……楽器の音も聞こえへんかったんや」
静まり返る部室。陽乃が絵美の後ろでブルブル震えたまま、翔の話を聞いている。
「音だけですか？　聞いたのは」
駿が恐る恐る聞く。ブルブルと翔は首を振った。
「来る前に……部室を懐中電灯みたいな灯(あ)かりがウロウロするのを見て……それで確かめに来たんやけど」
季節先取り。ようこそ学校の怪談へ。
部室はまさにそんな空気になってしまった。それもこれも、すべて拓真と春樹の仕業だとは誰も知らない。

その時、突然映画『着信アリ』の『死の着信メロディ』がどこからともなく流れ出した。

「キャアアア――ッ！」
陽乃が耐え切れず絶叫する。
「わー、わぁわぁわぁあっ！」
それに驚いた優輝と駿が思わず抱き合ってそのままひっくり返っ

てしまった。
「ご、ごめんなさい……私の着メロです」
亜紀が申し訳なさそうに携帯電話を取り出した。
「なんでよりによってその着メロ？」
翔が苦笑いで聞くと、亜紀は笑顔で言った。
「この不協和音が好きなんです」

合奏終了後。
案の定、拓真と春樹は今日も音程の悪さを恭一にこっぴどく叱られた。もうコンクールまで時間がない、自覚が足りない、練習が足りない。こんな焦りばかりが拓真と春樹を締め付ける。
「はぁ……」
二人は同時にため息をついた。心配そうにした由美子と絵美が近寄ってきて声を掛けた。
「大丈夫？」
絵美が優しく二人に問い掛ける。
「あぁ……まぁね」
春樹が少し眉をひそめて答えた。
「俺たちの練習不足だし、もっと練習しないと」
拓真は楽譜をたたんでパートのロッカーにしまった。
「でも、水谷くんはまだ熱治ってないんでしょ？」
由美子が顔の火照った様子の春樹を心配そうに覗き込む。
「うん。でも、もう微熱だし平気だよ」
いつものキラースマイルにも元気がない。由美子はますます心配になった。
「今日はすぐ帰ったほうがいいよ。私、一緒に帰ろうか？」
すると拓真が焦った様子で「いいよいいよ！　俺が送って帰るから！」と春樹をグイッと引っ張って部室から出て行った。
「……どうしてあんなに焦るんだろう」
由美子が不審に思う。絵美も同じだった。

「何か隠してる？」
「かもね」
二人はひとしきり黙った後、翔と陽乃の所へ行った。
「拓真と春樹が何か隠してる？」
翔は由美子と絵美の知らせに少し驚いた様子を見せた。
「何かって？」
陽乃が聞き返す。
「それがわからないから相談してるんだよ」
絵美がため息をついた。陽乃もウーンと悩む。
「もしかして」
陽乃が何かひらめいたように手をパシン！と叩いた。
「なになに！？」
「禁断の愛で悩んでるとか！」
「はぁ？」
三人は一様に間の抜けた表情をした。
「ほら、拓あん、体格いいしそこそこ男前でしょ？　それに小柄で少しおとなしめな乙女チックでもある春やんが拓あんに恋愛感情を……。でも、それはダメ。禁断の愛なのよ～」
「それにしても、あの焦りようは普通じゃなかったわね」
陽乃をスルーして由美子が続けた。
「ちょっとぉ！　無視しないでよ！」
「あーはいはい。陽乃の妄想なら佐野くんが後で聞いてくれるって」
絵美は適当にあしらって話を続けようとする。
「……でも、これは何かありそうやぞ」
「調べてみる価値がありそうね」
由美子がニヤッと笑って右手の人差し指を立てた。
「調べる？　どうやって」
「決まってるじゃない。部室に今日は篭（こも）るのよ」
「でも、四人も無理でしょ」

「じゃあ……最初はグー！」
由美子の声に咄嗟（とっさ）に絵美、陽乃、翔はインジャンの体勢に入った。
「チッケッピー！」
「……何それ？」
翔が呆然とした。しかし、絵美も陽乃もしっかり手を出している。
「知らないの？　神奈川ではジャンケンをこう言うんだよ」
「知らんわ！　オレの知ってるやり方でもっぺん（※1）やってくれ！」
「何よそれ。私たち大阪のやり方なんて知らないもんねー！」
「ねー！」
陽乃と絵美が同意する。
「おいおい……まさか」
翔が青ざめる。由美子たちはニッと笑って言った。
「決まってるじゃない。佐野くんは不戦敗」
「そんな言い方あるか！」
「あるある！　じゃああと一人決めるよ～！　せぇの！」
翔はペタリと座り込んでブツブツ文句を言っているが、陽乃たちは聞こえないフリをしてジャンケンを続けた。
「チッケッピー！」
絵美はグー、由美子もグー、陽乃だけ――チョキだった。

午後7時。練習が終わってから1時間。部室は中から鍵を掛け、陽乃と翔はわりと広いクラリネットとフルートのロッカーに身を潜めた。ちょうど隣同士だから都合も良い。ちなみに、コッソリというわけにはいかないので恭一にも許可は取っている。
陽乃が「先生もいかがですか？」と聞いたが「絶対行かんぞ！先生はホラーが大嫌いなんだ」と断固拒否されてしまった。
「これは今年の合宿で肝試し、するしかないね」
「……部長権限でそんなもん、認めへんぞ」
「副部長権限で認めさせるから」

「なんで部長より副部長が強いねん。気に入らんで」
「じゃあまたジャンケンで決めるしかないね」
「お前なぁ……！」
翔が言い返そうとして、音楽室のドアが開く音がしたので黙りこんだ。
（来たね！）
（きっと……アイツらやぞ）

「いいぞ、入ろう」
拓真がコッソリ中を確認した。その声を聞いて春樹が続く。
「でもさぁ、今日の井上さんの鋭さには参ったよね」
「あぁ。でもお化けで片付いて良かったよな」
「ホント。僕ら、お化け扱いだけどね」
クスクスと二人は笑って部室の鍵を開けた。
「……？」
ドアを開けて入るなり、春樹が立ち止まった。
「どうした？」
拓真がヒョイッと中を覗き込む。
「……見て」
「あ……」
春樹と拓真の視線の先に、制服のシャツが脱ぎっぱなしで置いてあった。名札が付いたままだから、誰のものかはすぐにわかる。
「カケルのじゃん」
（！）
（！？）
翔はうっかり、入る前に床に脱いで置いたのを忘れていた。もうすぐ衣替えだけれども、長袖のシャツでも暑すぎて我慢できず、脱いで下の柄シャツ1枚でロッカーに入ったのだ。
「何やってんだよ、アイツ。柄シャツで帰ったのか？」
拓真が呆れた様子でシャツを掴むと、まだ温かさが残っていた。

「おい、このシャツ、温かいぞ」
「ウソ？」
春樹が掴んでみると、確かに温かかった。
「……カケル？」
拓真が声をかける。しかし、翔たちが返事をできるはずもない。
「いるの？　カケル？」
春樹も恐る恐る聞く。
「……返事ねぇな」
「ねぇ、まさか本当に泥棒じゃないよね？」
春樹がクイッと拓真の袖を引っ張った。
「まさか！」
陽乃と翔はドキドキして今にもバレてしまいそうで怖くて仕方がなかった。
「それじゃなんでカケルのシャツが部室に放置なの？　それも、脱ぎたてホヤホヤ」
「気持ち悪い言い方すんなよ」
「拓あんは不思議じゃないの？」
「……まぁ」
「それに、カケル、昨日すっごい鋭かったじゃん？　ひょっとしてバレて……」
「ここに隠れて調査とか？」
（鋭いのはお前らのほうや！）
翔はドキドキという音が外に漏れるのではないかというくらい心臓が鳴っていた。
「まぁ……単に忘れてたって可能性もあるし、そもそも調べて何の得になるんだよ」
拓真がフゥッとため息をついた。
「それもそうだね」
春樹も安堵の息をつく。
「それより、練習しようぜ。時間もないし」

「うん」
それを聞いてようやく翔と陽乃も安心して篭ることができた。
しばらくすると、ベーを合わせる音が聞こえてきた。しかし、二人の音はまだ交わらない。
「……なんでだろ。なんで合わないんだろ」
春樹が泣きそうな声を出した。
「しょうがねぇだろ。俺もハルも、まだ楽器始めて1年ちょっとだ」
「でも、1年も経ってるんだよ」
沈黙が続く。
「一所懸命やってるんだけどなぁ……」
「……。」
辛気臭い雰囲気になってきた。翔はこういうジメジメした雰囲気が一番苦手だ。その頃、陽乃はまったく違うことを考えていた。
よく考えれば、ロッカーなんてそう掃除するものではない。つまり、ロッカーの中はホコリでいっぱいだった。さっきから鼻がムズムズしてたまらないのだ。
（ダメダメ……！　か、隠れてる意味がないんにゃから……ファ……）

「ファガ」

「！？」
聞いたことのない音に、春樹と拓真は思わず驚いて回りを見渡した。
「なんだ、今の」
「……柱の木が軋む音かな」
「そっか」
（おい！　なにやってんねん！）
翔がコソコソ声で陽乃に聞くと（しょうがないじゃん！　ホコリで今にもクヒャミが……ファ、ファ――！）

（おい！　こらえろ！　おい！）

「ブェェーックショイ！」

部室中に響き渡る、豪快なクシャミだった。

「！！」

春樹は驚いて譜面台を倒してしまった。

「誰だ！？」

拓真が音のした方向を睨んだ。

「……。」

往生際が悪いが、陽乃と翔はまだロッカーの中に隠れていた。

「おい！」

拓真がフルートのロッカーの前に立った。翔の隠れているロッカーだ。

「おい！」

拓真がロッカーを開けると、ロッカーで丸くなっている翔が姿を現した。

「どっ、どもー！　お元気ですか？」

翔は仕方なく、おどけてみせた。

「何やってんだよ……」

拓真はハァッと安心した表情を見せた。春樹がトコトコと歩いてクラリネットのロッカーを開けると、中から鼻と口を押さえ込んだ陽乃が姿を現した。

「あっ、どもー！　ハロー！」

「ハローじゃないよ！　ビックリしたじゃん」

春樹と拓真が同時に笑い出したので、翔と陽乃も笑ってしまった。

ロッカーを出てから、翔は拓真と春樹に質問をぶつけた。

「昨日オレが帰った後、お前ら練習してた？」

「うん」

陽乃がスカートについたホコリを払ってから質問を続ける。

「いつからやってたの？　こんな練習」

「先月の２０日の本番が終わった2、３日後から」
「そんなに前からか……」
翔も気づいていなかった。
「鍵はどないしてん」
「元鍵を先生に借りたときに、俺が複製してきた」
「そうなんだ……」
沈黙が続く。
「なんで？」
「え？」
翔が寂しそうな目をした。
「なんで黙ってたん？」
「……。」
「……。」
春樹も拓真も黙り込んでしまった。
「相談してや。部長のオレや、副部長の陽乃がおるやん。オレなんか超暇人やから、いつまでも練習付き合うし」
「あたしだって暇だよ！　いつでも付き合う！」
クスクスと春樹がようやくだが笑ってくれた。
「それに、金管セクションリーダーだっておるやん。慎也が」
「……うん」
「もっと皆で協力していこうや」
「迷惑かなと思って……」
拓真が俯いたまま呟いた。
「迷惑なモンかい」
翔がニッと笑って返した。
「ホント？」
「あぁ。大マジや」
「……ありがとう」
拓真はそこでようやく笑顔を見せた。
「とりあえず、今日はもう練習終わろうや。もう8時になるし」

「……うん」
「よっし！　そうと決まれば片付け、片付け！」
陽乃が張り切って譜面台をたたみ始めた。春樹も嬉しそうに片づけを手伝う。
「後は先生に報告だけしよな」
「わかった。本当にありがとう、カケル」
「どういたしまして！」

片づけが終わった後、職員室で恭一に報告をした。
「なんだ。泥棒なんかじゃなく、本堂と水谷だったんだな」
恭一もそれを聞いて安心したようだった。
「すいませんでした」
拓真と春樹が謝罪をすると、恭一がコツン！と軽く二人の頭を叩いた。
「練習するなら、先生にちゃんと許可を取れよ？」
「はい！」
「ようし！　それじゃ、今日は先生も一緒に帰るか！」
「えー！？　平均年齢上がっちゃう！」
陽乃の言葉に恭一がコツン！と陽乃の頭を叩いた。
「いったーい！　暴力反対～！」
「暴言反対～」
恭一が陽乃に言い返す。翔が「早く出ましょうよ～」と言ってようやく二人は言い合いをやめてカバンを手にした。
「明日は朝練とかするのか？」
階段を降りながら恭一が翔に聞いた。
「いえ。とりあえず、皆でしてみるかどうかを話し合いたいと思ってるんで、もうちょっと待ってください」
「そうか。先生は7時半くらいには職員室にいるから、決まったら言いに来なさい」
「はい！　ありがとうございます」

「それじゃ、校門でな」
恭一が職員用の靴箱がある東玄関へ向かう。翔たちは中央玄関へ。
不意に、四人の耳に音楽室のほうからフルートの音色が聞こえてきた。
「……？」
春樹が動きを止めた。
「え……」
陽乃も耳を疑う。
「何？」
拓真が音楽室のほうを覗き込んだ。無論、1階なので見えるはずもない。
「……ウソ」
翔が真っ青になる。流れているのは――エリーゼのために。
しばらく流れた後、ピタリと音楽は止んでしまった。
「……。」
四人はしばらく立ち尽くして、恭一が「帰るぞ～」と呼びに来るまで、ただ呆然としていた。
「気のせい……だよね？」
陽乃が聞く。
「……そういうことに、しとこ」
翔は不自然な笑顔を浮かべて、ぎこちない歩き方で恭一の後を追った。
「真面目な幽霊さんもいるもんだね」
春樹がサラリと笑って言った。
「お前、おもしろすぎ」
拓真が笑って返した。
「幽霊もビックリするくらいの演奏、しようね！」
陽乃がニッコリ笑って拓真と春樹と指切りをした。

第１１４話　犯人がいる！？（後書き）

結局バレてしまった、春樹と拓真の極秘練習。誰にも迷惑を掛けたくないという思いと、仲間だから迷惑でも掛けてほしい願う翔。彼らの思いが一致し、コンクールへ向けてまた一歩、進み始めます。

（※１）もっぺん：関西弁。もう一度を「もういっぺん」と言い、それをさらに省略すると「もっぺん」となります。

第１１５話　ホール練習

６月２５日（日）。今日は七海市クリエイトホールでホール練習がある日だ。

ホール練習とは、市の総合文化会館などにあるホールを借りて本番に近い雰囲気や状態で練習をすることである。この時は楽器の響き、座席の配置、移動の練習など本当に重要な練習をするチャンスになるので、部員も顧問も普段以上に緊張を持って練習に取り組む。

七海高校吹奏楽部も例外ではなかった。普段は午前９時に集合して練習を始めるのだが、今日は楽器を積んだりする作業もあるため、１時間早い午前８時に部室に集合した。

「おはよーッス」

翔がウキウキした様子で部室に入ってきた。１年生が「おはようございまーす！」と元気よく挨拶をしてくれたので、ますます機嫌が良くなる。

「えーっと、これで全員来てるかな？」

「はい！」

パート長である２年生が返事をしたのを確認すると、翔は今日一日の予定を伝え始めた。

「今日は昨日も連絡したとおり、ホール練習です。貴重な時間やけど２時間しかないんで、しっかりと気合い入れて練習に励んでください！」

「はい！」

翔は手にしていた紙をパート長へ配る。

「パートで１枚ずつ配ってるんで、失くさないようにしてください。そんじゃ、今日の一日の流れ説明します」

陽乃が紙をめくると、ビッシリと予定が書かれていた。安和、勇、彩香の３人も興味深そうに見つめる。

「まず、この後８時１５分から４５分まで楽器を積み込みます。ク

リエイトホールはチャリで２０分ほどなんで、基本的にフルート、ピッコロ、オーボエ、クラリネットなどの木管楽器は自分で持って行ってもらう形になります。衝撃はよくないんで、手提げ袋など用意してる思うんでそれに包んでしっかりカバーして持って行ってください。袋ない人は後で言いに来てな」

「先輩！　あたし、バッチリ忘れました！」

小林梨子（こばやしりこ）が自信満々に手を挙げた。

「了解です。ほんじゃ、クラリネットパートは月曜日に罰ゲームの掃除ね」

翔がニヤッと笑うと、みゆきが梨子にゲンコツを喰らわせた。

「はいはい、ほんで続きな。基本的に大きめの楽器は積むけど、トランペットとアルトサックスさんも積めない可能性があります。その時はバスに乗って移動するように指示しますから、多分先に出てもらうことになります。ただ、部長のオレと副部長の朝倉は残らんとマズいから、誰かに楽器お願いするかもしれません。その後の予定はザッと見てください。書いてあるとおりで基本的に流れると思います」

０９：１５　ホール到着（市立大海高校吹奏楽部　ホール練習開始）
１０：００　音出し開始
１０：３０　チューニング
１０：５０　移動
１１：１５　ホール練習開始・ロングトーン１５分
１１：３０　課題曲・自由曲通し
１１：４５　課題曲
１２：１５　自由曲
１３：００　最終通し
１３：１５　終了・撤退

「見てわかると思うけど、時間は2時間。ホンマに限られた時間なんで、行動は素早くお願いします」
「はい！」
「それじゃ、いま8時10分なので楽器の積み込みを開始してください！」
「はい！」
直後に部員たちはそれぞれ動き始めた。男子はチューバと打楽器を持って下へ降りる。幸いにもエレベーターが完備されている七海高校は移動がかなり楽に行える。
「先輩～、俺めちゃめちゃ緊張してるんですよ」
駿が情けない声を出しながら、一緒にティンパニを運ぶ翔に声を掛けてきた。
「緊張？　なんで」
「だって……木管低音、俺と戸口誠（まこっちゃん）だけでしょ。めちゃめちゃプレッシャーですよ」
「よぉ言うわ。定期演奏会であんだけ立派に演奏してるお前らなら、ホール練習くらい屁でもないやろ」
「袴田（ハカチュー）中学校のときも先生は厳しかったけど、東先生の場合、理論的に攻めてくるからもうすっごいプレッシャーが比べ物にならないくらいくるですよ」
「まぁなぁ……。オレも思ってた以上に厳しい人で最初はビビッたけど、それでも普段はえぇ先生やしな」
「まぁそうですけど……」
「それよりな、噂によると……」
翔はコソコソと駿に耳打ちした。
「マジっすか？」
駿が驚いて思わずティンパニを落としそうになった。
「うぉい！　危ないな！」
「すいません！　驚きすぎて」
翔はもう一度ティンパニを持ち直して続けた。

「まぁ、とにかくマジやで。だって、オレの友達が言ってたからな」
「ひょえ〜……オレも一時期進学考えてたんで……ナナコウで良かったかもしれないですね」
「ホンマにな」
翔は笑った後、心の中が少し痛むような気がしていた。

「おい！　いつまでトロトロやってんだ！　さっさとしろ！」
その声に思わず修平と翔平は身を縮めてしまった。
「おい！　佐野！　岩切！　早くしろってのが聞こえないのか！」
「は、はい！」
翔平が急いで走ってその男――風見台高校吹奏楽部顧問・兵藤章義（ひょうどうあき よし）の元へ近寄る。
去年まで風見台高校の顧問をしていた岩屋紀昭（いわやのりあき）先生が3月いっぱいで転任となり、新しく来たのがこの章義だった。
「ったく！　お前らサックスパートはちんたらちんたらしやがって。こんなだからウチの吹奏楽部はいつまでたっても成長しないんだ」
その言葉に修平が唇を噛み締めた。
章義が転任してきてから、風見台高校吹奏楽部では部員が6人も辞めている。コンクールを前に翔平たちのサックスもアルトとテナーそれぞれ一人ずつが欠けてしまった。修平も必死に彼らを止めたのだが、章義が吐く暴言に耐えられないと言って辞めてしまった。
「おい！　さっさと楽器を積まないと時間がないと言っとけ！　移動も素早くするんだ！」
「はい！」
翔平が返事をするが、修平は章義をジッと見つめるばかりだった。
「シュウ、そんな顔してるとまた何言われるかわからへんで？」
翔平が修平をなだめるように言った。
「でも、あんな言い方するから部員がどんどん減って……俺らが創りあげてきたもの、全部壊されてる気が……」
「大丈夫、大丈夫。コンクールが終わって、落ち着いたら俺と部長

で何とかするから」
「……。」
「な？」
「はい……」
修平はうなだれたまま、小さく返事をした。

午前１０時。
七海高校吹奏楽部部員はクリエイトホール地下にある音出し専用の部屋で音出しを始めていた。
陽乃は安和、勇、彩香と椅子を並べてマウスピースを吹いていた。冷房がかかっているため、楽器が冷えているのでマウスピースからよく温めておく必要があった。
「朝ちゃん、ロングトーンはする？」
安和が腕時計を見ながら陽乃に聞く。
「そうですね……。安和先輩の中学のときはしてました？」
「いちおう軽くね。ホール練習ってけっこうガンガン吹くから」
「そうなんですか～。それじゃ、２０分からちょっとだけしようか。それまでは、各自で練習してね」
「はい！」
彩香と勇は笑顔で返事をした。
安和ともトラブルがあったが、なんとかそれを乗り越えて今では仲良く練習ができるぐらいにまでなっている。それ以上に、安和が陽乃にいろいろなアドバイスを親身になってしてくれているので、陽乃の技術も格段に上達した。
ちなみに、安和はまだ翔に好意を抱いているのだが、最近になってその気持ちが揺らぎだしたと他でもない陽乃に相談していた。どうやら彼女がこの間１８歳の誕生日を迎えた日に、クラスメイトに告白されたのだそうだ。その相談に乗るうちに、彼女ともずいぶんと仲良くなった。
そうこうしているうちにチューニングの時間となった。あれから

拓真と春樹の音も以前に比べれば安定するようになってきたが、まだまだ予断は許さない状況だと翔は言っている。もちろん、二人だって気を抜いているわけではない。

なんとかチューニングは終えて、ようやく移動の時間になった。

「はーっ！　なんか部屋の中、寒かったねぇ」

陽乃が手をさすりながら翔に話しかける。翔に至っては鼻が赤くなっている。

「ど、どしたの？　風邪引いたみたいな顔してるよ」

「オレ……エアコンアレルギーみたいやねん。よくこないして風邪っぽくなるんやん」

「えぇ～！　大変だねぇ」

陽乃は他人事のように笑い飛ばすが、翔にとってはこれが大問題だ。

「お前なぁ、のん気そうに笑うけど、これ楽器吹くとき鼻が詰まったら息しにくぅて大変やねんぞ……ハッ、ハックション！」

翔が思い切りクシャミをすると「わぁっ！」と陽乃が喜ぶような声を上げた。

「……なんやねん、人の不幸を～」

「そんなんじゃないよ！　翔が初めてあたしの前でクシャミしてくれて嬉しいの」

「はぁ？」

「だって、なんか心を開いてくれたって感じ？」

「なーんや、それ」

二人が笑いながら階段を上がろうとしていると、突然背後から怒鳴り声が聞こえてきた。

「なにぃ！？　指揮棒を入れ忘れただと！？」

すぐ傍にいた優輝や絵美も肩をビクつかせた。

翔と陽乃が振り返ると、叱られていたのはなんと優衣だった。

「優衣ちゃん……」

章義は問答無用でその右手を振り上げ、優衣の頬にぶつけようと

した。
「キャッ！」
陽乃と絵美が悲鳴を上げて目を覆う。翔が「やめっ……！」と叫んだときには乾いた音がしていた。
「……？」
優衣の頬に痛みはない。
優衣が目を開けると、修平が代わりに頬を叩かれ、その頬を赤く染めていた。
「シュウ……くん」
「すいません。俺の確認ミスです」
修平は俯き加減で呟いた。
「それじゃあお前が今から取りに行ってこい！」
「はい……」
章義に怒鳴られ、修平は優衣の手を引きながらその場を去っていった。バツが悪そうに章義も陽乃たちの前からそそくさと去っていく。
「……なに？　今の」
陽乃が呆然とした表情で呟いた。
「さぁ……ワケわからん」
翔も呆然としながら返した。
先ほど見た光景は幻のような感じすら、陽乃はしていた。しかし、あの音、あの衝撃。あれは間違いなく暴力だった。
同じ吹奏楽をしている仲間がそんな仕打ちを受けている——それも、翔の知り合いが。いや、自分の仲間が。そう考えただけで、陽乃はいても立ってもいられない感覚になってしまう。
「先輩？」
隣から声が聞こえる。でも、なんとなくボーッとしている陽乃に

その声はきちんとは届いていない。
「先輩！」
また。今度は男の子の声だ。
「朝倉さん！」
年上の人っぽい声。
「朝倉ーッ！」
恭一の怒鳴り声がして、そこで陽乃は目を覚ましたように「ハイッ！」と返事をして勢い余って起立をしてしまった。その拍子に譜面台が倒れ、バラバラと健之佑と翔の間へ散っていく。
「何をボーッとしてるんだ！　『海へ…』、勝手に大谷のソロにするな！」
「あ、はい！　すいません！」
「ったく！　せっかくのホール練習だ、時間を無駄にするな？」
「ハイ！」
「それじゃ、ソロの手前から行くぞ！」
「はい！」
全員が指揮棒に注目する。ふと後ろを見ると、風見台高校のメンバーが陽乃たちの練習を見守っていた。
静まり返る舞台。初めてここで演奏をしたときの情景が蘇るかのようだった。
「それじゃ、冨岡のティンパニからな。行くぞ……1、2、3、4！」
洋之は普段から練習に余念がない。特に冒頭は洋之から始まるため、彼も普段より緊張した面持ちで吹いている。
続いて絵美たちがどこか悲しげなハーモニーを奏でる。駿が一人、目立った動きをする。ここはいつも翔が胸を締め付けられるような感覚に見舞われ、テンションが上がってしまう部分だ。やがて、翔のソロが入る。その音を聞いた途端、翔平と修平は鳥肌が立ってしまった。
「アイツ……腕上げたな」

翔平が嬉しそうに笑った。
「ホンマ……俺たちも負けてられへんて感じですね！」
修平もガッツポーズを取る。
「あんな顧問に負けてられるかい！」
「そうっすね！　頑張りましょ、先輩！」
翔を追うように陽乃が入る。今回は特に上手く入れたと陽乃は思っていた。しかし、恭一はどこか不満そうだ。
指揮棒がパンパン！と鳴って曲が止まった。
「佐野。なんで今止めたと思う？」
恭一は表情を変えず、翔に聞いた。
「え……。えっと……音程が合ってなかった……ですか？」
「違うな。野村。なんで止めた？」
健之佑が予想外の振りに驚いた顔をしたが、すぐに「入りがズレていたとかでしょうか」と返す。しかし恭一は首を横に振った。
「朝倉。なんでだ？」
「……。」
陽乃にはわからない。自分なりに一所懸命背理がズレないように吹いたつもりだ。それに、感情も込めた。他に理由が見当たらない。
「音がな、特に朝倉なんだが、音が遠くまで飛んでいないんだ」
「音が……飛ぶ？」
陽乃はキョトンとした様子で恭一を見つめる。
「朝倉の音は確かにしっかりした芯のある音だ。でもな、それが舞台上だけで鳴っていてホール全体に飛んでいない。審査員がいるし、何よりお客さんがいるんだ。それなのに、舞台だけでチマチマ鳴るような音を吹いてて大丈夫だと思うか？」
「いえ……ダメです」
陽乃はハッキリそう答えた。恭一が指揮棒を置いて舞台を降り、ちょうど修平の真横にやって来た。
「ちょっと失礼するよ」
恭一に声を掛けられて思わず「あ、はい！　どうぞ」と返した修

平の声が陽乃たちの所にまで聞こえてきた。
「おーい！　今の彼の声、聞こえたか！？」
恭一が大声で陽乃に聞く。
「はい！」
「まずは、高い音だからって力まずに考えすぎずに吹いてみろ。大らかに、のびのびとな！　それじゃ、もう1回冨岡から！」
「はい！」
「1、2、3、4！」
陽乃は周りの音を聴きながら自分の入るタイミングを見計らって息を吸った。直後、恭一がストップと叫ぶ。
「その息の吸い方が硬いんだぁ！　もっとゆったり吸え！　曲のイメージと呼吸のイメージを重ねろ！　伴奏だからって手を抜いていいもんでもないぞ！」
「はい！」
それから何度この部分を繰り返したかわからない。沙希と翔も10回以上、ソロを吹くことになった。しかし、結局12時15分が近づいてきたのでこの部分は未完成のまま過ぎることになった。
「普段と違う環境ですると、自分の弱みがよくわかるだろう。今日のことを課題に、今後の練習を頑張ってくれ。それじゃ次、自由曲」
「はい！」
自由曲『吹奏楽の為の序曲』。中間部分の緩やかな部分で、今度は雪子と順平（じゅんぺい）が同じことを指摘された。
「お前らも一緒だ！　特に朝倉と違って二人はハーモニーを構成しながらソリを吹いてるんだ。一人がよく聴こえて一人があまり聴こえないなんでことになったら、ハーモニーも何もあったもんじゃないぞ」
「ハイ！」
順平が真剣な表情で楽譜にメモを取る。続いて陽乃のソロ。
「やっぱり朝倉は自分の周辺でしか音が鳴ってないぞ」
「すいません……」

「久野！　代わりに吹いてみろ」
「は、はい！」
恭一に突然指名されて吹き始める彩香。しかし、そのソロは明らかに陽乃とは響きが異なっていた。
「おぉ……」
思わず修平と翔平も声を上げてしまうほどだった。しっかりと芯のある音でホール内へ響き渡るソロの音色。彩香の小柄な体からは考えられない色艶を持った音色だった。
「そうだ。朝倉、わかるか？」
「……なんとなく」
「よく久野や松浦にいろいろ聞いて研究しなさい。先輩として、恥ずかしいぞ」
「……はい」
「よし、それじゃもう一度自由曲を頭から。その後、全部通すぞ！」
「はい！」
陽乃の頭の中に恭一の「先輩として、恥ずかしいぞ」の言葉がグルグルと流れ、落ち着かない気持ちが取れることはないまま、ホール練習は終わってしまった。

第１１５話　ホール練習（後書き）

ホール練習から見えてきた新たなる課題――「音の響き」。自分たちの周りだけで鳴っていると指摘されたトランペット・陽乃とホルン・雪子と順平。コンクールまで時間のない中、これらの課題をいかにして乗り越えるのか。

第116話　大丈夫？

ホール練習が終わった後も陽乃たちは残って他の高校の練習を見学していた。すぐに撤収して入れ替わりで風見台高校が入ってきたので、修平や優衣と言葉を交わす時間すらなかった。

廊下で優衣を叩こうとしていた兵藤は練習中も相変わらず罵声に近い怒鳴り声を何度も上げていた。しかし、部員たちは怯まず何度も威勢の良い返事をしていたのに陽乃は感動すら覚えていた。

「スゴいねぇ……あたしだったら萎えるかキレるかしてそう」

陽乃がホッとため息を漏らしていると隣で翔が笑った。

「何よ」

陽乃は笑い続ける翔を睨んだ。

「お前ならバチ切れして練習が強制終了やな」

翔が楽譜でクックッと笑いをこらえながら言った。

「失礼ね～！　あたしだって最近は忍耐強くなってきたんだから」

陽乃はプイッと顔を背け、すぐに風見台高校の練習に注目した。

風見台高校の課題曲は1番『架空の伝説のための前奏曲』。自由曲は『プスタ』という曲だと優衣から聞いていた。

「プスタ、1楽章から」

「はい！」

章義の指示に生徒たちはすぐに返事をする。やがてどこか暗く物悲しい感じの曲が始まった。

「そういえばさ、修平くんはいつサックスに戻ったの？」

陽乃は修平がサックスに戻っていたことは聞かされていなかった。優衣と連絡を取ることはあったが、トランペットの話や恋話で盛り上がってばかりで修平のことまで気が回らなかったというのが正直なところだ。

「今年の4月には戻れたらしいで。何でも、ただスムーズに戻れたんやなくってオーディションの末なんとか戻れたらしい」

「そうなんだ。オーディションなんかするんだね」
「うん。だから、あの兵藤って先生も怖いし叩いたりするけど、ひょっとしたらものすっごい吹奏楽に熱心なんかもしれんで」
「あたしにはそう見えないけどなぁ」
陽乃は厳しい表情で指揮棒を振る章義をジーッと見つめた。
「コラァ！　タンバリン！」
怒声が飛んできたので陽乃はビックリして楽譜を落としてしまった。慌てて翔と一緒に拾い集める。
「お前、ビックリしすぎ」
「だって……あんな大声、東先生は出さないから慣れてないもん」
陽乃はプゥッと頬を膨らませた。
章義が相変わらず荒れた声で指示を飛ばす。
「そんなヘナチョコなタンバリンでどうする！？　言っただろ何度も。これは民族音楽に近いイメージで演奏しろと！」
「はい！」
打楽器の女の子が返事をし、すぐにメモを楽譜に書き込んだ。
「もう一度、テンポが変わるところから」
「はい！」
サックス、クラリネットがメロディを奏でる傍ら、タンバリンがその大切なリズムを刻む。やがてテンポがどんどん上がる。フルート、ユーフォニウムが加わり、トランペットも加わってテンポが初めとは比べ物にならないほど速くなる。
ピッコロがもの凄い速さのパッセージを吹きこなした。クラリネットもそれに続き、また同じパターンでトランペットが入り込む。
「すっげぇ……」
自分たちとは格段にレベルが違う演奏を聴いて、拓真も春樹も慎也も目を輝かせていた。
しばらく曲がいくと、初めの暗い雰囲気とはまったく異なる明るい雰囲気の部分に差し掛かった。
「あれ。雰囲気がガラリと変わったね」

「これがこの曲のいいところよ」
翔が懐かしそうに笑う。
「翔、演奏したことあるの？」
「うん」
「いつ？」
「……。」
翔は急に黙り込んでしまった。
「翔？」
「中３のとき。結局、出ず終いで終わったあの時の自由曲やった」
「え……」
マズいことを聞いたと陽乃は思った。すぐに何かフォローを入れようにも、気まずい空気と時間が流れていってしまい、タイミングを逃してしまった。
「懐かしいな。やっぱり、修平とこの曲演奏したかったなぁ……」
「……。」
翔の顔をもう一度覗き込んでみた。暗い顔ではなかった。むしろ、笑顔だった。

午後７時。
楽器降ろしも終わり、七海高校吹奏楽部も解散となった。
「翔、帰んないの？」
陽乃が校門でもたれたままメールを打っている翔に声をかけた。
「あー、うん。待ち合わせしてんねん」
「誰と？」
「修平」
「……そっか」
陽乃はそういうと翔の隣に座り込んだ。
「やっぱな」
翔がクスッと笑う。
「何が？」

「陽乃なら待つと思ってん」
「……バレてた？」
「バレバレ」
クスッともう一度、翔は笑った。
6月にしては涼しい日が続いている。昨日は雨だったが、今日は梅雨の合間の晴れになった。けれど、少し蒸し暑い。
「暑っ……」
翔が急に制服のシャツのボタンを二つほど開けた。陽乃は思わずしっかり見てしまい、顔を赤くする。
「やめてよ、ちょっと……」
「何が？」
翔は気にせずボタンを開けたままで陽乃に近づく。
「ボタン！　恥ずかしいの、アンタの胸元見えて……」
「あ……ご、ごめん」
翔は慌ててボタンを閉めた。
「あーあ。今のであたしも暑くなっちゃった」
「……開ければ？」
「何を？」
「ボタン」
パシーン！と乾いた音がした。
「いってぇ！」
翔は引っ叩かれた左頬を押さえて悲鳴を上げた。
「バカ！　アンタにはデリカシーってのがないの！？」
陽乃は続いてポカポカと翔の頭を殴る。
「ストップ、ストップ！　アホになる～！」
「もう十分アホでしょ！　このこのー！」
しばらく叩いた後、陽乃は息を少し荒げながらもクスクス笑い出した。
「あーあ。お前とおるとバカップルにしか見えへんやろな」
翔が少し意地悪っぽい顔をして呟いた。

「あーあ。誰のせいだかねぇ」
陽乃も笑いながら呟く。
「そりゃ、二人のせいでしょ。お互いドッコイドッコイ」
久しぶりに聞く声。陽乃と翔が顔を上げると、優衣、修平、翔平の3人が自転車から降りてくるところだった。
「チッス。久しぶり」
修平が右手を軽く上げた。
「ウス。先輩も、濱口さんも久しぶり」
翔がそれに答える。優衣がペコリとお辞儀をし、翔平は軽くブイサインをした。
しばらくして、優衣と陽乃が楽しそうに笑い声を上げ始めた。翔平は自転車に跨ったまま、ジュースを片手にボーッと前を見ている。
「お前……ほっぺた、大丈夫なんか？」
翔が心配そうに打たれた修平の頬を見つめた。
「え？」
「先生に叩かれてたやろ」
「あぁ……見てたんか」
修平が参ったな、という表情を浮かべた。
「別に平気やで」
「なんであんなことされてまで続けられるんや？」
「どういうこと？」
翔はしばらく黙り込んで、ようやく口を開いた。
「お前んとこの先生……暴力振るうってネットに書き込みされてるらしいねん」
「……。」
翔は続ける。
「お前んとこ、部員が何人か減ったっていうやん？　ひょっとしたら……」
「その子たちかもしれへんな」
修平はフッと笑って、悲しそうに呟いた。

「もし、なんかで問題になったら？」
「問題？」
「ほら、教育委員会とかウンヌンカンヌン、めんどいことになったらコンクールが」
「心配ないって！　兵藤先生、ホンマはめっちゃいい先生やねんから。それは――」
「あたしたちが一番知ってる」
優衣が陽乃に優しく返事をした。
「でも……今日の優衣ちゃんの打たれそうになった瞬間はとてもじゃないけど見てられなかったよ」
「うん……あたしも思わず怯みそうになったけど、今時逆にあそこまで生徒に厳しく接してくれる先生なんて珍しくない？」
「……。」
「あたし、あんなに一所懸命な先生初めて見たよ。だから、どんなに辛くてもあたしたちの学年は先生についていく。そう決めたの、顧問が変わった４月に」
「そっか」
陽乃はそこで気づいた。絶対、辛いことがあっても厳しいことにぶつかっても、風見台の生徒たちは負けないという意志を強く持っている子が多くいることに。だから、今日のホール練習のときのようにあんなにもメリハリのある、インパクトのある演奏ができるのかもしれない。
「辞めちゃった子もいるけど……あたし、最後に翔平先輩がこう言ってくれたのは本当に嬉しかったんだ」
翔平がソッポを向いて聞こえないフリをしているのを、陽乃も翔も気づいていた。修平がニヤニヤ笑う。
「君たちが帰ってきてくれるの、待ってるってね」
「……。」
翔は立ち上がってズボンに付いたゴミを払ってから、修平に聞いた。

「大丈夫やんな？」
「何が」
「お前ら……くじけたりせんよな？」
修平がニッと笑い、翔平もニコッと笑って同時に返した。
「負けてたまるかい」
翔が手を差し出した。
「陽乃、濱口さん。来て」
翔、翔平、修平の順で手が重なる。
「翔」
修平が呟いた。
「俺……ホンマは辞めようって何回も思った」
翔平と優衣が驚いた顔を見せた。
「でも、優衣や先輩、それに風見台のみんな……翔とかも裏切る気がしてさ。それはできんかった」
「当たり前じゃ」
そこでようやく翔平が口を開いた。それから思い切り修平の頬を引っ張った。
「辞めてたら、こんな程度じゃ済んでへんぞ！」
「いててて！　マ、マジすいません！」
優衣や陽乃、翔が大声で笑う。それから落ち着いて、もう一度彼らは手を重ね合わせた。
「それでは！」
翔が大声を出した。
「七海高校、風見台高校のコンクールでの健闘を祈ります！」
グッと強く手を押し合い、それを空へ向けてパッと放した。
「ファイトー！　ナナコウ！　カザミダイ！」
「おーっ！」
その声は七海高校の校舎に反射して、辺りにこだまして行った。

第１１６話　大丈夫？（後書き）

修平や優衣の本音を聞き出し、厳しい顧問の下でも頑張ろうとする彼らの気持ちを知って安心した陽乃と翔。いよいよ7月に入り、コンクールに向けて順調に向かう……！？

第１１７話　欠点赤点

7月3日（月）。期末テストが近づいている七海高校ではクラブ活動の時間が短縮あるいはクラブ自体が休みに入っている部活がほとんどだった。明日からテストに差し掛かるため、吹奏楽部もコンクール前だが学業優先ということで、個人ロングトーンを３０分済ませたら解散ということになっている。

「それじゃ、お疲れ様です」

絵美はこの期間中、一番に来て練習を始め、一番に終えて帰るようになっていた。

「おっ？　もう帰るんや、橋本さん」

翔が部室に来ると同時にぶつかった絵美に声をかけた。

「うん。いろいろと事情があって……」

「事情？」

翔が興味深げに聞いた。

「あ！　ホント個人的なことだから」

「そうなんや」

「それじゃ私、帰るね！」

「あぁ……またね」

絵美は急いで、というよりはマズいことを言わないうちに早く出ようという雰囲気丸出しで部室を後にした。

「最近、エミリンずっとあぁなの」

陽乃がプゥッと頬を膨らませて文句を言い始めた。

「最近って、ずっとか？」

「そうなんだよ」

陽乃はトランペット片手にブツブツ文句を続ける。

「ホール練習前日の土曜日だって、珍しく練習が早く終わったじゃん？」

「あー、そうやなぁ。テスト前でもなかったのに」

「そのときにね、女子全員でサーティーワンのアイス食べに行ったのよ」
「えぇ！？　なんで男子のけ者やねん！」
「女子には女子だけの話ってのがあるの」
陽乃は右手を出して翔の疑問に答えた。翔はそれでも不服そうだ。
「そのときもエミリン、用事があるからって早く帰っちゃって」
「そうなんか」
「何か悩み事かなぁ……」
「仮に悩みがあるとしたら」
翔はサックスをストラップに吊るして陽乃の不安に答えた。
「女子だけの話をしたらえぇんちゃうか？」
「そうだね！　そうしよう！」
陽乃が嬉しそうにスキップをして部室を出ようとしたとき、翔が
「ちょっと待って！」と声をかけた。
「なに？」
「……オレもサーティーワンでアイス食べたい。新しいアイス出たらしいから」
陽乃はクックッと笑いを押し殺すように肩を震わせた。
「なんやねん！」
「翔もカワイイところ、あるんだね」
翔の顔が真っ赤になっていくのを陽乃はさらに笑って見つめていた。
そんな二人を見て、絵美は羨ましそうに少しため息を漏らして靴箱のほうへと歩き出した。

ちょうど３０日の金曜日のことだ。絵美が家へ帰るなり、玄関に母・清美が怖い顔をして立っていたのは。
「ど、どうしたのお母さん」
絵美はしどろもどろで清美に聞く。
「こっちへいらっしゃい」

清美は声も怖い様子で絵美をリビングへと連れて行く。リビングに入るとヨーグルトを食べている姉・真咲（まさき）が口パクで「バ・カ！」と言ったように見えた。

「これは何？」

「え……あっ！」

絵美の視線の先にはテーブルに並んだたくさんの紙。それは紛れもない、絵美の1学期中間テストの解答用紙だった。

「ど、どこからこれを……」

「アンタのベッドの布団の下からよ！　今日は梅雨の合間の晴れだから乾（ほ）そうと思ってめくってみればこのザマ！　なんなの！？　これは！」

絵美の1学期中間テストの点数は散々だった。ちなみに、絵美は文系だ。

数学2：32点
生　物：46点
現代文：21点
古　文：35点
日本史：52点
世界史：18点
英語R：61点
英語W：48点
英　演：59点
音　楽：91点

ちなみに、英語Rがリーディング、英語Wがライティング（文法）、英演とは英語演習といい、長文演習をする教科。平均点を超えたのは音楽、英語Rだけ。しかも欠点あるいは赤点と呼ばれる点数を取ったのは現代文、世界史と2教科あった。

清美は相変わらずプリプリした様子で続けた。

「まったく！　最近クラブ活動ばっかりだと思ったら……肝心の勉強がこんなんじゃお母さん、クラブ活動なんてさせないわよ！」

「そ……そんなぁ。だってやっとクラブとしてまとまってきたし、それに私、木管セクションリーダーに選ばれてるから今からクラブ辞めるなんてできないよ」

絵美はペタンと床に座り込んで清美を上目遣いでチラッと見た。

「そんな目をしたってダメ！　とにかく、お母さんはあなたに今回の期末テストでの点数次第でクラブ活動を続けさせるか辞めさせるか考えますからね！」

そう言って清美は筆で書いたらしい半紙を兄の航太郎（こうたろう）に持ってこさせた。

『５０点未満の科目はプラス３０点！　５０点以上の科目は８０点以上にすること！』

「ええぇぇ！？　ちょ、ちょっと待って……それじゃまさか」

絵美はテストの解答用紙をかき集めて各科目の計算を始めた。

数学２：６２点
生　物：７６点
現代文：５１点
古　文：６５点
日本史：８０点
世界史：４８点
英語Ｒ：８０点
英語Ｗ：７８点
英　演：８０点
音　楽：８０点

「えぇぇぇ……こ、こんなの」

「無理だって言うの？」

清美が呟く。

「じゃあこれにサインを」

そう言って取り出した紙にはどこからもらってきたのか「退部届

け」と書いてあった。
「わぁぁ！　わ、わかりました！　します、しますんで！」
「そう！　それじゃ、頑張るのよ！」

そうして今日に至るわけである。
「はぁ……。もっと吹いて帰りたいんだけどなぁ」
絵美はため息を漏らす。しかし、このまま家へ帰ってもまともに勉強などできないのは目に見えていた。というのも、環境が環境だけに無理なのである。
兄の航太郎（２１）はいま残念ながら大学を中退してフリーターだ。それをいいことに家に引きこもりっぱなしで暇さえあればギターを弾き語りしている。しかも、かなり下手であれは騒音公害としか言いようがない。
姉の真咲（２４）。航太郎が夜、ギターを引くのを止めたかと思うと彼女が現れ、航太郎の部屋で借りてきた映画のＤＶＤを見始めるのだ。ふつうに見るのならいいが、大笑いしたり「いけーっ！　そこだぁ！」などと叫び声を上げるのでとてもじゃないが勉強にならない。
そして絵美。部屋に航太郎と真咲の置くマンガが大量にあるため、それをついつい読んでしまうのだ。そして気づけばほとんど勉強が手付かずで終わってしまう。
「今日は……ミスドにしよっかな」
絵美は市役所から少し南へ降りたところにある市役所前商店街へやって来た。そこにあるミスタードーナツ七海市役所前店で最近は勉強をしている。
店内に入るとすぐに絵美は2階へ上がった。ところが、いつもお気に入りの場所が中学生の男子集団に取られていて座れない。
絵美は渋々他の席を探すが、どこもいっぱいだ。結局、窓際の席しか空いていなかった。
「しょうがない……ここでいっか」

それから絵美はドーナツを注文しにレジへと向かった。

「あれ？　なぁ、あれ橋本先輩じゃない？」

優輝がツンツンとみゆきの肩をつついた。

「え？　どれよ。見える？　ヒカリン」

光瑠が同じようにミスドの店内を覗き込む。

「えぇ～？」

「ほら、レジの前。あっ、移動して窓際の席に座るぞ」

「あっ！　ホントだ」

着席したところで光瑠もみゆきも気づいた。後から付いてきた駿と梨子がその様子を見て不思議に思った。

「変だよね、逢沢くん。だって橋本先輩、急いで家へ帰って勉強するんだって言ってたのに」

「あぁ……なんでミスドでドーナツなんて食ってんだ？」

しばらく沈黙が続き、ようやく優輝がそれを破った。

「見てみよっか？」

その頃、絵美はドーナツを左手に、シャーペンを右手に持って古文の勉強をしていた。

「えっと……き、けり、つ、ぬ、たり……あぁ！　覚えらんない！」

助動詞がいつまでたっても覚えられない。なので、訳せない。なので、点数が悪い。絵美が古文の点数を上げられないのはこれが原因だった。

「過去の助動詞き……完了の助動詞……わぁっ！？」

窓に張り付いている5人を見て絵美は声を思わず上げてしまった。

それから慌てて表へ飛び出した。

「ちょっと！　みんな何やってんの！？」

「それはこっちのセリフですよ」

優輝が不満そうに言う。

「なんで先輩、一人でミスドにいるんですか？」

梨子が率直な疑問を投げつけた。

「あー……えっと、その。家では勉強しづらいからここでしようかと……」
「えぇ!?　こんな騒がしいところで!?」
みゆきが信じられないとでも言いたそうな顔をした。
「……あの、すいません」
光瑠が一枚の紙を手にした。
「何それ」
駿がそれを受け取る。
「わぁぁぁ！　そ、それはダメ！」
駿が手にしたのは紛れもなく、絵美の1学期中間試験の全科目点数と目標点を書いたメモだった。
「先輩……ちょっとこれは」
「……そのザマでしょ。だから、今度の点数が悪かったら部活……辞めさせられちゃうかもしれないの」
「えぇっ!?　困ります！　先輩いないと誰がクラリネット仕切るんですか?」
光瑠が泣きそうな声を上げた。
「1年生だけでクラリネットなんて……無理ですよ」
みゆきも不安げな声を上げる。
「ちょ、ちょっと待てよ！」
駿が制した。
「まだ先輩、辞めるってわけじゃないだろ。それに、テストも頑張り次第ってことだろ?　ねぇ、先輩」
「それはそうだけど……私、要領悪いからきっと今度のテストも……」
「じゃあ俺らが教えるんで、何とか頑張りましょうよ！」
優輝がガッツポーズを取った。
「でも、私たち1年生なのに2年生の勉強なんてわかる?」
梨子がツッコミを入れた。優輝は「あ……」と少し落ち込んだ声を出した。

「いいよいいよ、みんな。ありがとう。私、一人でなんとかするから。みんなも家へ帰って早くテスト勉強を……」
「あーっ！」
突然駿が大声を上げたので、全員の顔が驚いた風になった。
「ちょっと逢沢くん！　ビックリするじゃん！」
光瑠がプンプンしながら駿の肩を思い切り叩いた。
「いましたよ！　橋本（はっしゃん）先輩に勉強教えられる人が！」
そういうと、駿は携帯電話を取り出してその人物に電話をかけ始めた。

「ん？」
翔がアイスクリームのミントストロベリー片手に鼻歌を歌って歩いていると、ちょうど反対側の歩道を見慣れた6人組みが歩いていくのを見た。
「陽乃。クラリネット族が歩いてるで」
「え？」
陽乃がそちらを見ると参考書片手に真剣な顔をした絵美。その隣を歩く駿と光瑠。後ろで数学の教科書とにらめっこをしている梨子。
そしてさっきからドーナツばかり食べている優輝とみゆき。
「何やってんやろ。橋本さんなんかだいぶ前に帰ったのに」
「さぁ……。ねぇ」
陽乃が翔の顔を見つめた。
「同じ意見やな、その顔やと」
「じゃあ！」
翔と陽乃は慌てて信号を渡り、絵美たちの後をついていった。
「でも本当に良かったのかな」
絵美が心配そうに駿に尋ねた。
「大丈夫ッス！　先輩、喜んでっておっしゃってたんで」
「それなら……でも本当に助かるな」
絵美がホッとした表情をようやく見せたので、駿と光瑠も笑顔に

なった。
　１０分ほど歩いて校門へ戻るとその前に駿が電話で呼んだ人物――豊田めぐみが立っていた。
「めぐ先輩！」
　光瑠が大きく手を振ると、めぐみも嬉しそうに手を振る。
「みんなー！　お疲れ！」
　絵美が急いで駆け寄り、まずお辞儀をした。
「本当にすいません！　受験生の先輩にこんなご迷惑を……」
「やだ！　そんなかしこまらないでよ。それに、部活を絵美ちゃんに辞められるほうがあたしも困るからね。ほら、顔上げて」
　そこでようやく絵美は顔を上げた。
「東先生には音楽室を借りたから、そこで勉強しようか」
「はい！　お願いします！」
　優輝とみゆきの真後ろから声がしたので全員が驚いて振り向くと、翔と陽乃がいつのまにかそこにいた。
「佐野くん！　陽ちゃん！」
　陽乃がペロッと舌を出して言った。
「ゴメンね、後をつけてきちゃった」
　それから翔が英語Ｗの問題集を取り出した。
「オレも英語全然ダメなんで、教えてください！」
　めぐみが「よーし！　みんなまとめてかかってこい！」と大笑いしながら答えた。
　音楽室に入るなり、絵美は机に座ってめぐみに古文を教わり始めた。翔は英語Ｗを必死に解いて、たまにわからなくなるとめぐみに聞いている。
　陽乃は比較的今回のテストは余裕があったので、優輝やみゆきに数学Ａを教えている。
「あれ？　帰ったんじゃなかったの？」
　そこに現れたのは慎也だった。
「おう！　慎也」

翔がニッコリ笑って手を振った。めぐみと絵美も手を振る。
「今ね、みんなで勉強会開いてるんだよ」
陽乃が嬉しそうに数学の教科書を持ち上げて慎也を呼んだ。
「川崎くんも一緒にしよ？」
「……おう」
慎也は嬉しそうに頬を赤らめて陽乃の後ろの席に座った。

午後6時半。もうそろそろ恭一と約束した帰らないといけない時間だったので、陽乃たちは片づけを始めた。
「ゴメン。ちょっとあたし、お手洗い行ってくるね」
「うん。行ってらっしゃい」
陽乃は絵美にだけ言って、トイレへ向かった。
手を洗っていると、急に誰かが隣にやって来た。ここのトイレは校舎の影になっていて暗いのでよく見えないが、すぐに慎也だとわかった。
「お疲れさん、川崎くん」
「うん」
慎也は短く答えてただ手を洗うだけ。陽乃は少し様子が変な慎也が心配になり、顔を覗き込んだ。
「ねぇ、どうしたの？」
「……別に」
「ウソ。なんか顔が赤いよ」
「……。」
慎也はただジャブジャブと手を流すばかりで全然答えようとしない。
「熱でもあるのかも。早く帰って寝たほうがいいよ。テスト前だし」
「……。」
また沈黙。陽乃も手を洗い終えたので音楽室へ帰ろうとしたときだった。
「この熱、朝倉のせいって言ったら、どうする？」

「……え？」
次の瞬間、陽乃の唇に慎也の唇が重なっていた。
それからすぐに、慎也の唇が離れる。
「好きです」
「……なに言ってんの？」
陽乃は呆然としながら聞いた。
「好きだから」
「……ミ、ミサッチがいるのになんで」
「オイッスー！　帰るで」
沈黙を破るように翔が出てきたので、二人は同時に睨むようにして翔のほうを見た。
「……ど、どうかされまして？」
翔が驚いて声を掛けなおす。
「ううん！　なんでもない。川崎くん、帰ろ？」
「うん」
陽乃はすぐに走ってカバンを取り、翔のところに駆け寄った。
「おい！　なんやねん！」
優輝や駿がヒューッと口笛を吹いた。
「こうしてたいの！」
「しょーがないなぁ」
そんな二人の様子を見つめながら、慎也はカバンを取りに部室へ戻った。

第１１７話　欠点赤点（後書き）

コンクール前に思わぬ壁が現れた絵美をカバーすべく、クラリネットパート＋αが勉強会を実施。果たして結果は出るのか！？　そして慎也、陽乃、翔の関係はどうなるのか……。

第１１８話　“２つ”の結果

７月１１日（火）。今日からクラブ活動は再開だ。
「みんなーっ！」
絵美が嬉しそうに部室に駆け込んできた。
「先輩！　テストどうだったんですか！？」
真っ先に走り寄ったのは駿と優輝。彼らが一番絵美のことを心配していたのだ。
「見てよ、見て！　みんなのおかげよ！」
数学２：８５点
生　物：８１点
現代文：６９点
古　文：７２点
日本史：９９点
世界史：６６点
英語Ｒ：８４点
英語Ｗ：７０点
英　演：８２点
音　楽：８６点
「すっげぇ！　見ろよ優輝、日本史とか９９点だぜ！」
「スゲェ！　俺、自分の高校入ってからのテストの最高点５０点だぜ！」
「アンタはバカすぎるの」
優輝と駿の呆れた会話にみゆきがツッコミを入れる。梨子と光瑠が嬉しそうに絵美に話し掛けている。
「そりゃあエミリン、本当は頭いいんだもんね。ちょっとクラブに夢中になりすぎただけだったんだってば」
美里が絵美の頭をなでなですると、絵美は恥ずかしそうに笑った。
「ね？　陽ちゃん」

「……。」
美里が話しかけても陽乃はボーッとしたままだ。
「陽ちゃん？」
「へ！？」
「どうしたの？　最近ボーッとしてること多いよ」
「あぁ、ううん！　全然何でもないんだよ、ホント」
ガラガラ――！
部室のドアを開けて入ってきたのは翔と慎也だった。二人ともあからさまに機嫌が悪いのを陽乃は察知した。しかし、部室に入り部員が多くいることに気づいた二人はすぐに笑顔に戻った。
「……翔」
陽乃は心配そうに翔に声をかけた。
「ん？」
「その……」
「心配すんなや。お前はなんも悪くない」
「でも……」
「もうじき解決するから、な？」
翔の笑顔はいつものままだ。これなら大丈夫かと思い、陽乃はすぐ笑顔になった。
「良かった！　それじゃ、今日も練習頑張ろうね」
「うん」
走っていく陽乃を見て、ウソをついたことに翔は罪悪感を抱いた。
先週の木曜日。慎也が翔を呼び出して言ったのだ。
「ゴメン……朝倉さんに――キスをした」
許せなかった。陽乃とキスをしたのも許せなかったが、それ以上に美里という存在を無視したかのような行為に翔は憤慨した。
そして――気づけば殴ってしまった。
それから、二人の関係は急速に冷え切った。クラスでもほとんど口を利かないようになってしまっていた。もちろん、それを知っているのは陽乃と翔、そして慎也だけだ。

今日もクラブが始まるまで二人でずっと話をしていたが、慎也はいつまでたっても陽乃にキスをした理由を言わない。でも、聞く限り美里と慎也の関係が悪くなっていたわけではなさそうだった。

そうなると単純に、慎也が美里よりも陽乃のことのほうが好きになってしまった――。

「考えたくもない……」

翔は唇を噛み締めて音楽室へと向かった。

合奏が始まった。

今日からミッチリ練習が入ることは全員わかっていたため、気合いも十分。しかし、翔と慎也だけはどこかポッカリと穴が開いたような気持ちだった。表面上は普通を装っていたため、二人の様子が変だということには誰も気づかない。

恭一が音楽室に入ってくると全員が立ち上がり「こんにちは！」と挨拶をする。こういった習慣もだいぶ全員身についてきたようだ。

いつものようにチューニングから入る。最近は拓真、春樹もしっかりと音程が合うようになってきた。クラリネット、フルート、オーボエ、バスーンと順番に入る。そしてテナーサックス、アルトサックスと入る。さゆり、麻綾の順で入り、翔が入ったとき。

誰にでもわかるくらい音程が乱れた。

「おいおいおい」

さすがの恭一も驚いて苦笑いでチューニングをストップさせた。

「どうした、珍しいな」

「すいません……」

「よし、もう一度いくぞ」

無事、翔も通過した。そしてチューバ、ユーフォ、トロンボーンと続く。亜紀、徹と入り慎也に来たときだ。またしてもわかるほど、音程が乱れた。

「おいおい、川崎。お前もか」

「すみません」

「テスト疲れか？　今日は早めに終わるから、集中してやれよ。よし、それじゃ『海へ…』から」
「はい！」
冒頭部分の打楽器。洋之が何度も練習してきて、ようやく恭一が言う「静かだが強さのある音」を再現できるようにまでなってきた。それを引き継ぐ沙希のソロ。これが乱れる、特に遅くなってしまえば致命傷だ。
やがて翔が加わる。5月のときと比べると、クラリネットもトランペットもチューバも3年生が入ったことで厚みが増し、ずっと安定感のある演奏となっている。全体で聞いていれば一見、ムラのない演奏に聞こえた。
しかし、トロンボーンだけは違った。プツプツと耳障りな音が聞こえてくる。極めつけは翔だった。キイイィッと耳障りな音。リードミスだ。
パンパン！と音がして恭一が指揮を止めた。
「今日はどうしたんだ……佐野。川崎」
名指しされた二人は表情をゆがめた。
「いつもは音程もバッチリなお前らが今日は調子悪いなぁ」
恭一が不思議そうにしている。それはきっと部員たちも同じだろう。
「お前ら、ケンカでもしたのか？」
その一言に翔と慎也は心臓がビクッと動いたような感覚さえしていた。
「まぁいい。今日は練習これで終わっておくぞ」
「え？　ずいぶん早いですね」
絵美が気合い十分なのに、という様子を見せた。
「テストが調子良かったからご機嫌だな、橋本」
「エヘヘ……」
絵美がニコニコする。
「それでだな、終わったらすぐに片付けて帰ること」

「えぇー！？　なんでですか？」
絵美はとことん不服なようだ。
「仕方ないだろう。台風が近づいてるんだ」
「え？」
「台風１１号。もうすぐ関東も強風圏に入るからな」

「うわっ！　髪の毛乱れるー！」
陽乃と沙希、由美子、絵美、翔の５人が校舎を出ると台風の風が一気に５人を襲い掛かった。
「雲の流れがスッゴい速いね」
由美子が空を見上げると、濃い青とでも言ったほうがいい雲がすごいスピードで東京のほうへ流れていっていた。
「早く帰ろ……あ？」
翔が手を広げると、雨粒が落ちてきた。
「うわわわ！　傘、傘！」
大粒の雨が降り、風も強くなってきた。木がザワザワと音を立てる。
「この調子やと皆を送ってから帰ったほうがえぇなぁ」
翔が傘を広げながら呟く。
「え？　そんなのいいよ！」
「いいって。大谷さんも宮部さんも橋本さんもみんな近いしな」
「ありがとー！　スッゴい助かる！」
由美子がこれ見よがしにと翔に接近すると、陽乃がプンプンしながら「ちょっと！　そんなくっつかないで！」と由美子の頬を引っ張った。
「はいはい！　アホやってんと早く帰るでー」
校門を出て由美子、絵美、沙希の順に送って陽乃の家へ到着した。
「翔……」
陽乃が心配そうに名前を呼ぶ。
「なんや？」

翔は笑って答えた。
「川崎くんと……本当に仲直りした？」
「おう」
またウソをついた。翔の胸が痛む。
「本当に？」
「おう」
「そのわりに……練習中、音程が乱れてたね」
「ま、まぁそういう日もあるって」
翔はなんとか笑ってごまかした。
「それならいいんだけど……」
陽乃はようやく安心したような様子を見せた。それを見ると翔も安心する。
「じゃあ、風も雨も強なってきたから、早く家に入れ」
「うん！　また……明日学校あるかな？」
陽乃は心配そうに空を見上げた。
「こんな時間に来た台風やから、夜の間に過ぎるって」
「そだね！　じゃあ、またね！」
「おう！」
翔も急いで走り出した。いつもは自転車登校なのだが、今日は強風で危ないため学校へ置いてきた。
「うわっ！」
突風で傘が折れた。雨が翔をきつく打ちつける。
「早よ帰ろ！」
自宅へ戻ると、同じようにビショビショになっている綾音と智輝が玄関でタオルを持って体や頭を拭いていた。
「あぁ～！　ちょうどええわ、アンタら。まとめて帰ってきてくれたほうが楽やからね」
友美子がもう一枚タオルを持って翔に投げ渡した。
「ありがとー」
「カバンはそこ置いとき。中身だけ出しときや。アンタ、自転車は

？」
「危ないから学校に置いて帰ってきた」
「そうかぁ。そんならまぁ安心やね」
翔は濡れた制服を乾かすため、上へ上がってすぐにハンガーにかけた。ＭＤで『吹奏楽の為の序曲』をかける。すると、二重で『吹奏楽の為の序曲』が流れ出した。
「あぁ、携帯か」
ディスプレイを見て翔は一瞬、動きを止めた。

川崎　慎也の表示。

「……もしもし」
『もしもし？　翔？』
「おう。どないしたん？」
『ゴメンな……こないだ』
慎也は泣きそうな声になっている。
『俺さ……最近、美里が俺に冷たい気がして。でも、なんか俺が朝倉さんと仲良くしてるの見て嫉妬してたらしいんだ』
「テスト前に、めぐ先輩らと勉強した日のことちゃうか？」
『多分……うだと思……だけど』
慎也の声が途切れ途切れになる。
「慎也？」
『……に？』
翔は耳を澄ませた。ゴオオォォという音と、ザァァァという音。
「お前、いまどこにおんねん？」
『……に……る』
「聞こえへんぞ！　お……い……」
翔は愕然とした。なんと、翔の家の前に慎也がビショビショになって立っていたのだ。
翔は急いで階段を降り、玄関の戸を開けた。まだ着替える前のタ

ンクトップと制服のズボンだったから濡れても構わない。
「何してんねん！」
「カケルに……謝らないと帰れないなと思って……」
「お前そんなんどうでもいいのに……ん！？」
額を触ると、とても熱い。
「お前……熱あんのんちゃうか！？」
「ん……」
「いつから外におってん？」
「３０分……くらい前？」
「アホかお前は……とりあえず家入るぞ」
「いいよ、迷惑だし」
「入らんほうが迷惑や！　行くで！」
翔は慎也を家へ連れ込んだ。
「母さん！　母さん！」
急いで友美子を呼ぶ。
「どうしたの……あらあら！　川崎くん！？」
「服がビショビショで……しかも熱あるっぽいねん！」
「えぇ！？　大変！　とりあえず、お風呂沸かしてるからすぐに体を温めなさい」

なんとか風呂から上がったものの、熱が上がってきた慎也は動くこともできない。翔のベッドに寝かせておいた。
「カ……カケル」
慎也がようやく気づいたようで、翔に声を掛けた。
「どないした？　気分悪いか？」
「う、ううん……」
「おとなしく寝とけ」
「うん……」
「ちょい待ち」
翔が目を閉じかけた慎也の目を無理やり開いた。それから携帯を

渡す。
「何？」
「出てみ」
慎也はしんどさを堪えて電話に出た。
「もしもし……」
『慎ちゃん？』
「み……ミサ」
美里だった。
『体調……大丈夫？』
「うん……なんとかな」
『ゴメンね』
「え？」
『あたし……慎ちゃんに嫉妬とかしてたわけじゃないんだよ』
「じゃあなんで最近……俺を避けてたんだ？」
『……その……』
「なんで？」
美里の声がしばらく止んで、１分ほどしてから大きな声で返事がきた。
『もうすぐ慎ちゃんの誕生日だったから！　あたし、慎ちゃんのためにプレゼント作ってたの！　だけど、何回かあたしの部屋に来たり部室で作ってたときに急に来たもんだから……何回か冷たく対応しちゃって……それで……ゴメンなさい』
慎也の目から涙がこぼれ落ちた。
「ありがと……ミサ」
台風の最中、二人の仲だけは温かさが戻ってきたことに翔は安堵した。
２時間後。台風が少しマシになったところで慎也の母が迎えに来た。
「ご迷惑おかけしましたぁ、本当に」
慎也の母・真樹子が深々と礼をする。

「ありがとうございました」
慎也もそれに続く。
「いえいえ！　ウチの子もお世話になってますから！　また今度は元気なときに来てね、川崎くん」
友美子がニコニコ笑いながら慎也にそう言った。
「んじゃーな、慎也。また明日から頑張ろうな」
「うん！」
慎也は真樹子と一緒に車に乗り込んだ。
「カケル！」
慎也が窓を開けて最後に言った。
「おおきに！」
「どいたま！」
翔は見えなくなるまで、慎也に手を振り続けた。

第118話 “2つ”の結果（後書き）

結果を出せた絵美。ほんのすれ違いからやってはいけないことをした慎也。しかし、翔は彼を責めようとはせず、むしろ熱を出してまで謝りに来てくれた彼を看病する。翔の優しさが垣間見える瞬間かもしれません。

コンクールへ向けて、結束力が高まります。

第１１９話　私は見た

陽乃が日直だった7月１２日（水）。コンクールまであと1週間弱。七海高校吹奏楽部ではテストも終了したため、午後1時から7時くらいまで毎日ミッチリと練習を入れていた。ただ、恭一の方針で学業との両立は絶対と言われていたため、今回の期末テストで点数が悪かった部員は午後1時から2時まで恭一指導の下、補習を受けていた。

日直の仕事を終えて陽乃が多目的教室の横を通ると、優輝、駿、慎也、梨子の４人の姿が見えた。慎也は体調不良が前々から続いていたらしく、テストの結果も芳しくなかったらしい。

３階にあるその部屋を通り過ぎて階段を降り、２階に着くと校長室がある。そしてまた階段を挟んで職員室だ。

「失礼しまーす」

この時期、職員室は空っぽであることが多い。体育会系の部活も大会が近いため、顧問を担当している先生は大半が出払っているのだ。体育科がある七海高校ではなおさらその光景が頻繁に見られる。

その空っぽの職員室の一角が、やたらと散らかっていた。しかも、恭一のすぐ傍の席だ。

日誌を置くときに覗き込むと、なんと村峰教頭が机の引き出しの整理をしていた。

「せ、先生……」

「あら、朝倉さん。どうしたの？」

「いえ、日誌を置きに来たんです。それより、先生のほうこそ何をやってらっしゃるんですか？」

「あぁ……これね。まぁ、どうせ言うことだし、あなたには言っておくわね」

「はぁ」

「私、１学期いっぱいで退職するの」

「え……？」
　塔子はすぐに引き出しの整理を始め、話を続けた。
「主人のお父さんが倒れられてね。元々、主人の故郷が神戸のほうで。あなたたちは知らないかもしれないけれど、神戸の灘って辺りではお酒が有名なの。主人の実家はそれをやってる古くからある名店でね。父の代で費えてしまうのもいかがなものか、と話し合いをした結果、主人が引き継ぐことになったの。現にいま、主人も酒造メーカーで働いているからできなくもないしね。でも、単身でっていうのもねぇ。もう５０を過ぎた夫婦がそれも難しいでしょ。だから、私も行くことにしたの」
　陽乃は一気に、しかし冷静に塔子が話をするのを聴き続けた。
「あら！　やだ。こんなの、生徒のあなたにする話じゃないのにねぇ」
　塔子はクスクスと笑った。引き出しから陽乃が出した「休部届け」が出てきた。
「あなた、これは取りに来なかったのね」
「……。」
　陽乃は小さくうなずいた。
「じゃあ……破っていいわね？」
「はい！」
　すっと塔子が休部届けを陽乃に手渡した。
「あなたが破りなさい」
「……はい！」
　陽乃はそれを受け取ると、思い切り真っ二つに裂いた。塔子もすがすがしい顔をしている。
「これから、もっと吹奏楽部を大きくしていってね」
「はい。先生、本当にありがとうございました」
「やぁね、私は何もできてないわ。お礼なんて……ほんとにね」
　塔子が涙ぐんできたので、思わず陽乃も涙がこぼれる。
「ほら、泣いてちゃダメ。もう戻って練習なさい。コンクール、近

いんだから」
「はい……」
陽乃は涙をこらえて職員室を出た。

「おーい、陽乃」
合奏後の午後7時。翔がミーティングの打ち合わせのために陽乃に声を掛けた。
「……。」
「陽乃さーん？」
「……。」
トントン、と肩を叩かれたので振り向くと翔の右手の人差し指が思い切り陽乃の頬を突いた。目が歪んで思い切り不細工な顔になる。それを見た絵美と由美子、佳菜が爆笑した。
「ちょっと！　人がシンミリしている最中になんてことすんの！」
「アハハハ！　ごめんごめん。いや、終わりのミーティングするから音楽室来てくださいなって言いたかってん」
「もう……わかった。すぐ行く」
何をしても、今日は陽乃にいまひとつ元気がないように翔は感じていた。なんとかして笑わそうとしたりするが、そんなに反応が帰ってこないうちに全部流されてしまう。そんな感じだから翔も感じが狂ってしまう。
「なぁ。何か隠し事でもあんのか？」
急に翔が真剣な表情で聞いてきたので陽乃も思わず言ってしまいそうになる。
「……別に」
「そっか。ほんならええんやけどな」
翔はまだ納得していない様子だ。表情を見ればわかる。けれど、陽乃は塔子に「絶対誰にも言うな」と口止めされていた。
陽乃自身、退職の理由が塔子の個人的な理由であるからそんなに言うべきではないと思っていた。それでも、かつて吹奏楽に関わっ

ていた、しかも七海の一時代を築いた先生が去るのに、吹奏楽部が黙って見送るだけでいいのか。悩ましいところだった。

ミーティングが終わるとすぐに部員たちは帰っていく。連日の練習のため、体調を崩せば一大事だからだ。

陽乃もいつも翔と一緒に帰る。部員たちが全員出たのを見届けてからだが、陽乃にとっては一番楽しいし嬉しい時間でもあった。

しかし、今日は――。

「翔。悪いんだけど、あたし今日ちょっと残って練習したいんだ」

「え？　合奏でもあんだけ吹いたのに？」

翔は心配そうに陽乃に気遣う言葉をかけた。

「うん……まだちょっと練習不足なところあるからさ」

「それやったらオレも付き合うで？」

「ありがと。でも、大丈夫だから。最近は翔も大変だろうし、先に帰っててていいよ」

「……うん」

翔は少し寂しそうにカバンを取りに部室へ戻った。

「翔！　ちょっと待って」

音楽室のドアに隠れるようにして翔を連れて行く。

「どうしたん？」

「ギューッてしよう」

「は？　え、ちょ……」

陽乃は有無を言わさず、翔の体を思い切り抱きしめた。

「一緒に帰れないけど、これでいい？」

「いいも何も……。暑くなってきた」

「良かった！　それじゃ、また明日ね」

「うん。またな」

翔は嬉しそうに手を振りながら階段を降りていった。それから陽乃は部室に戻り、悪いとは思いながらもサックスパートのロッカーを開けて、翔の楽譜入れを取り出した。

「えっと……確か見たんだよ。つ、つ、つ……」

翔の楽譜入れはあいうえお順で綺麗に整理されていたのを知っている陽乃は「つ」のページに入っている楽譜を探し始めた。
「あった！　これだ！」
出てきた楽譜は『追憶のテーマ』。昼間、塔子の引き出しに入っていたCDと同じ曲かどうかはわからない。でも、あまり聞かないタイトルだから恐らくは同じ曲だろう。
「これを練習すれば大丈夫だよね」
陽乃は楽譜を取り出し、さっそく譜面台に載せて楽器を構えてそれを吹こうとする。
「あれ？　これって……ベーかな。いや、ツェーかな？」
サックスとトランペット。もちろん、基準となる調が違うため（トランペットはベー、アルトサックスはエス）に楽譜の書き方も違うのだ。
「……ヤバ。全然わかんない」
ある程度覚悟していたとはいえ、ここまでサッパリだとは予想していなかった。
「ど、どうしよ。翔……はダメだ。バレちゃダメだし。さゆりん……麻綾ちゃん？　ううん、誰にも言っちゃダメって先生が言ってたから……。あぁーどうしたらいいの！？」
突然、部室のドアが開いた。
「いやー、忘れ物してしもて……って、何やってんの？」
翔だった。
「最悪……」
陽乃はうなだれた様子で翔を見つめた。
「え？　村峰先生そんじゃ辞めてまいはんの？」
翔は『午後の紅茶』を飲みながらかなり驚いた様子を見せた。
「うん……。家の事情なんだって」
「ふぅん……」
「それで、今日職員室に行ったら先生が机の整理してて。そのとき

に『虹の彼方に』のCD見つけちゃって。きっと先生、好きだろうなって思ったから、トランペットで演奏したら喜んでくれるって思って……。だから翔の楽譜ちょっと借りて、練習するつもりだったの」

「そっか。お前らしいな。誰かに……世話になった人にお礼をしたいって」

翔がニコッと笑って陽乃の頭を撫でた。

「お前一人だけで演奏ってのも寂しいやん？　まぁコンクール前やから、全員でってのもキツいし、今から新しい曲ってのもみんな大変やしなぁ」

「やっぱそうだよね……」

陽乃は残念そうにハァッとため息を漏らした。

「そこで提案やねんけど！」

翔が嬉しそうに言い出した。

「久しぶりに、１０人で演奏せぇへんか！？」

「……ってことは」

「そう！　２年生で演奏するねん！」

「うわぁ！　それいい！　あたし、賛成です！」

陽乃はパチパチと拍手をして思わず涙ぐんでしまった。

「これで、先生に最高の演奏ができるよ。本当にいいね！　今からでも連絡、取ってみようか？」

陽乃は携帯電話を取り出した。

「おう！　ほんならオレは男子に連絡取るから、お前は女子によろしくな！」

「うん！」

陽乃は電話を持って廊下へ飛び出した。

「待っててくださいね～、先生！」

陽乃は喜ぶ塔子の笑顔を想像するだけで、ワクワクしてきた。

第１１９話　私は見た（後書き）

陽乃が休部を思い留まるキッカケをくれた教頭先生が学校を去ると知り……陽乃たちは動き出します。果たして、村峰教頭を喜ばせることはできるのか。

第１２０話　時間をください

翌日の昼休み。
「え？　終業式で演奏する時間？」
恭一は陽乃と翔の突然の依頼に少し驚いた表情を見せた。やっていた作業の手を止めて、陽乃たちのほうへ向く。
「何を言ってるんだ。あるじゃないか。校歌を吹く時間だろう？」
「いえ！　違うんです」
翔がブンブンと首を横に振る。
「離任式のときに演奏する時間が欲しいんです」
陽乃が手を合わせて恭一に頼み込むポーズを取った。
「離任式……。まさか、知ってるのか？」
「すいません。あたし、村峰先生から直接お聞きしちゃって……」
「まぁ、それは構わないだろう。でもなぁ、実際問題として、離任式でそういう時間を取るのは厳しいかもしれんな」
「そこをなんとか！」
翔も一緒になって手を合わせた。
「うーん……。とりあえず、掛け合ってみるか」
「ホントですか！？」
陽乃の顔がパァッと明るくなる。
「ただし、掛け合っても却下という可能性のほうが高いからな。そのへん、覚悟しておいてくれ」
「はい！」
「先生、できるだけ強めにアピールしてくださいね？」
翔がブイサインを恭一に向けた。恭一もやれやれ、という表情でうなずいた。
職員室を出た後、翔と陽乃は笑顔で部室へ戻っていく。部室へ入ると２年生全員がワクワクした様子で待ち受けていた。
「どうだった！？」

真っ先に声を上げたのはやはり美里。
「東先生、とりあえず掛け合ってくれるらしいわ。結果はそれ次第やな」
「そっかぁ……。うまくいくといいんだけど」
絵美が心配そうにため息を漏らす。
「なぁ、それはそうと曲は『虹の彼方に』の1曲のみでいくわけ？」
慎也が翔に聞いた。翔も心配そうな顔をする。
「1曲くらいしか時間ないやろうし……。かといって、2曲も吹く時間がもらえるかどうかもわからへんやろ。それに、明後日やからもう時間がないからなぁ」
「あ！」
春樹が思い出したように声を上げた。
「そういえば、村峰先生が学校から出るときに会ったことあるんだけど、そのとき車のカーステレオから思いきり『渡る世間は鬼ばかり』の曲が流れてたよ」
「あぁ……。それなら、こないだ譜面を整理してたときにあった気がするんだけど」
沙希が思い出したように譜面棚をゴソゴソと探ると、すぐに譜面が出てきた。
「M8の譜面か。それに3分くらいかな、この長さなら」
翔が嬉しそうに笑って言った。
「ゲッ。でもこれ、初っ端からオーボエのソロがあるで」
「じゃあ野村くんがいないとできないってこと？」
陽乃が残念そうにため息を漏らした。
「しかもティンパニもあるしね」
美里がウンザリした様子を見せた。この譜面から見る限り、ティンパニは欠かせない楽器のようだ。さらにカスタネットもある。雰囲気作りにはどうも欠かせない部分で入っているように思われる。
「あーん……やっぱり1曲しかできないのかな」
由美子が悔しそうに譜面を睨む。話を聞いていた健之佑と誠が近

寄ってきた。
「俺たちが入れば早い話しなんじゃないんですか？」
「うーん……そりゃあま、そうやねんけど。村峰先生ってオレらが創部するときにまぁ、多少なりとも世話になってるわけよ。それのお礼をするって意味で、そのときのメンバーの２年生１０人だけで演奏したいって思っててさぁ」
「へぇ～。先輩たち、みんな優しい人ばっかなんですね！」
誠がウンウンと大きくうなずいた。思わず翔も照れてしまう。
「ま、まぁなんにせよ、練習しとくだけしといたらええんちゃうやろか？」
「そうだね！　よし、じゃあ『虹の彼方に』と『渡る世間は鬼ばかり』で決定でいいかな？」
陽乃が全員に確認すると「はーい！」と９人分の声が返ってきた。それと同時に部室の扉が開く音がしたので振り返ると、恭一が立っていた。
「あ！　先生、どうでした？」
陽乃がワクワクしながら聞くと、恭一は横に首を振った。
「え……。ダ、ダメだったんですか？」
「ハッキリ言うと、そういうことだ」
「そんなん……ちょっとの話やのに」
翔が悔しそうに唇を噛み締めた。
「やっぱり、学校側で時間などが決められていてな。それに、村峰先生だけじゃないからな」
「そりゃそうかもしれへんけど……なんか納得いかへん」
「佐野。世の中、何でもうまくいくわけじゃないんだ」
翔はそう言われてもまだ不服なようだ。意外と頑固なところがあるのかもしれないと陽乃は思った。
「でも、代わりなら用意できるだろう？」
恭一の一言に翔の顔に輝きが戻った。
「なんかいい方法あるんですか！？」

「あぁ！　どうだ？　代わりに村峰先生に指揮を振っていただくっていうのは？」
　全員が「おぉ～！」という声を上げた。
「これなら1年生も3年生も演奏に参加できるし、村峰先生だって黙って聴いているだけじゃなくって、参加できるだろう？」
「すごーい！　それ、大賛成！」
　美里がパチパチと拍手を繰り出した。
「でも先生」
　春樹が素朴な疑問と言って恭一にそれをぶつけた。
「先生はどうするんですか？」
「先生？」
　恭一がキョトンとする。
「先生が参加しなかったら、みんな参加したって言えないんじゃないですか？」
「それもそうだな……」
　美里が突然打楽器の棚の前に帰り、ゴソゴソと何かを引っ張り出してきたかと思うとそれを強引に恭一に持たせた。それは他でもない、スティックだった。
「先生、パーカス出身でしょ？　だったら『渡る世間は鬼ばかり』のドラムセットやってくださいよ！　打楽器、人数不足なんで」
「よし！　そうするか！」
　恭一が嬉しそうにそのスティックを上へ上げた。
「よーし！　じゃあ今から練習するぞー！」
「おーっ！」
　すぐに沙希と春樹が譜面を各パートへと配り始めた。同時に事情を翔と陽乃が説明する。パーカッションではすぐに学期の割り振りが行われた。楽譜をもらった部員たちはすぐに合奏の準備を始める。
「それじゃ、2時から実際に合奏しまーす！　それまで新しい譜面の確認をパート練習でやってください」
　各パートで練習する教室へと散らばっていく。教室へ移動する途

中、彩香と勇、安和の3人が陽乃のほうへ走り寄ってきた。
「先輩！　急にあんな企画出されたからビックリですよ」
彩香が半分怒りながら陽乃の肩をつついた。
「ゴメンゴメン。あたしが言いだしっぺなんだよ。だからトランペットは頑張るからさ、勘弁してほしいな」
「どうせ先輩だと思ってましたよ俺は」
勇がクスクス笑いながら横を走る。
「でも、村峰先生ホントに離任しちゃうのね……。私、入学した頃は副担任としてもお世話になったから寂しいな」
「だったら目いっぱいステキな演奏して、送り出しましょうよ！」
陽乃がガッツポーズで安和に気合いを入れた。
「そうね……うん！　いじけるのはやめて、そうする！」
安和が笑顔になると、陽乃もついつい笑顔になる。彼女の笑顔は癒し系だ。
「じゃ、いま1時だから15分から軽くチューニングしてすぐに曲を合わせます！」
「はい！」
陽乃の指示に3人は元気よく返事をした。もうすぐ村峰先生にお礼ができる。それを考えるだけで陽乃はワクワクしていた。

第１２０話　時間をください（後書き）

当初とは異なる形ではあるものの、塔子とのコラボ演奏が現実味を増してきました。果たして塔子との最初で最後の演奏はどうなるのか！？

第１２１話　また会いましょう！

「村峰先生、お疲れ様でした。神戸へ行っても、旦那さんと頑張ってくださいね！」

終業式が無事終わり、その後に行われた離任式も終え、職員室では先生方が最後のお別れの挨拶を終え、彩が花束を塔子に手渡していた。

「ありがとう。新井田先生が初めて来たときからずっと机が近くだったものねぇ。あの頃に比べたら、先生も随分キリッとしちゃって」

「やだぁ、先生。私なんてまだまだです！　これからもっと精進していきますね」

「そうしてちょうだいよ！」

光治が最後に顔を覗かせた。

「村峰先生、斎藤先生、道上先生。どうもありがとうございました」

斎藤先生は２７歳の女の先生で、結婚を機に退職を決めたという。道上先生は神奈川県内だが出身地の中学校がどうしても教師の人数が足りず、急遽転任が決定したという異例のパターンで転勤となった。

「正直、あなた方のような優秀な人材を失うのは大変なダメージです。なので、我が校はいつでもあなた方を受け入れる体勢は整えていますからね」

全員がドッと笑い出した。塔子や斎藤先生、道上先生も笑っている。

「それでは……これで解散といたしますが、先生方は校内を自由に回ったり皆さんと歓談したりと時間もありますので、どうぞご自由にしてください。それでは、３人の先生方、本当にお疲れ様でした」

「お疲れ様でした！」

塔子が涙を拭いながら机に戻ると、恭一がすぐに声を掛けてきた。

「先生」

「あぁ、東くん……」
「お疲れ様でした、本当に」
「早いものねぇ。高校生だったあなたが今度は高校生を教える立場にあるんですもの。不思議な感覚がするわ」
塔子は感慨深げに恭一の顔を見つめた。
「そういえば……三田嶋くんや神崎さん、それに岡田くんや荒内さんは元気かしら？」
岡田とは、塔子が最後のコンクールに出た年の部長であり、荒内とはトロンボーンで彼女だった人だ。
「三田嶋は相変わらず神崎と一緒に団体に所属して、各地で演奏活動を行っているようですよ。たまに連絡は取るんで、彼らの状況は掴めています。ただ、岡田と荒内のほうは連絡してないんで……どうしてることやら」
「そう……。元気にしてるといいんだけどね」
少ししんみりした雰囲気が流れる。
「そうだ、先生」
恭一が思い出したように言った。
「最後に、音楽室見に行きませんか？」
「えっ？」
「だって、先生の思い出の場所じゃないですか。僕も含めて」
「……。」
「行きましょうよ、先生」
「そうね。行かせてもらうわ」
そう言うと、塔子と恭一は職員室を出て廊下を歩き出した。
「１２００人超もいる高校なんて……この少子化の時代にまずありえないわねぇ」
塔子が改めて驚きのような声を上げた。
「そうですね。なんとかクラス編成は４０人までで抑えてますけど、正直いっぱいいっぱいですよ」
恭一が苦笑いしながら言った。実際、七海高校はどこのクラスも

４０人ぎりぎりいっぱいの生徒がいる。毎年、受験のときの倍率もすごいことになっているのだ。陽乃たちはそれを切り抜けてきたある意味で「精鋭」とも言えるのかもしれない。ちなみに、成績も市内の高校では私立高校に続いて４番目（私立高校は市内に３ヶ所ある）というなかなか良い状態を維持している。

「これから吹奏楽部に入ってくれる子が増えるといいわね」

「僕も佐野たちと頑張っていきますよ」

音楽室の前に着いた。

「楽器の音がしないけど……今日は部活休み？」

「いや……何か話し合いしてるんでしょうかね？」

「相変わらず真面目な子ねぇ」

恭一が突然、後ろへ退いた。

「どうしたの？」

「いえ。最後だから、先生の手で扉を開けてみるのもいいかと思いまして」

塔子は音楽室と書かれた表札を見上げた。

「いちいちそんなことしてたんじゃ……涙が出てきてしょうがないわ」

塔子の声が震える。恭一も思わず涙ぐんでしまう。

「さ、先生」

「えぇ」

恭一に促されて塔子は防音のために重く作られた音楽室の扉を開けた。それから少しだけある廊下を通る。右手にある部室を見つめ、しばらく立ち止まった。

そして、音楽室の扉を開けた瞬間――。

塔子の耳に何十人分もの手拍子が響いてきた。

唖然としているうちにあずさのドラムセットと優のマリンバの音が聴こえてきた。そして木管楽器の優しいメロディ。それにトランペットが加わり、金管がどんどん加わっていく。

クレシェンドを経て、低音の伴奏が勢いを増していく。そしてあずさの叩くドラムセットの音色が変わる。何回もサスペンドシンバルを美里が奏でるたびに演奏の雰囲気の良さが増して行く。

ピアノが聞こえてきた。沙希だ。それからサックスのメロディ。いったん消えたドラムセットの音色が加わり、トランペットがこれでもかと言わんばかりにメロディを吹き上げ、その後ろでホルンが雄叫びのような音を奏でる。やがてチャイムの音が聴こえ、全員の音が止んでチャイムの音だけが音楽室に残って響き渡った。

「これは……」

塔子が唖然としたまま立ち尽くしていた。すると、サックスの座席から明らかに高校生ではない人物――三田嶋　樹が立ち上がった。

「村峰先生、お久しぶりです。そして、長い教師生活、本当にお疲れ様でした」

続いてオーボエの席から神埼しおりが立ち上がる。

「先生が今日、退職されると聞いてお礼がしたいと思い、私たちも新生七海高校吹奏楽部の中に加わって演奏をさせていただくことになりました」

トロンボーンの席から誰かが立った。それは、塔子が最後のコンクールに出たときの副部長、荒内久美子だった。

「お久しぶりです、先生。本当にあのとき……ご迷惑おかけしました。謝って済む問題ではありません。重々承知しております。でも、今日先生が最後ということで……もう楽器なんて押入れに眠っていたんですけど、出してきて、先生のために演奏をしたいと思い……参加させていただきました」

そして、フルートの席から立ち上がったのは、当時の部長であった岡田悠介だった。

「先生……お久しぶりです」

恥ずかしいのか、悠介はそれしか言わなかった。塔子の目から涙が溢れ、頬に伝っていく。

「もう……なんなの、これは……」

翔が立ち上がり、塔子の問いに答える形で話し始めた。
「今日、先生が離任されるということで、初めは離任式で演奏をしたいと朝倉が言ったことがキッカケでした。でも、離任式では時間がなくって。それじゃ演奏をサプライズでしようってことになって。それならってことで、東先生が当時部員だった人たちの中でも、特に村峰先生にお世話になったっていう岡田先輩と荒内先輩、それに現役で今も楽器を吹かれてる三田嶋先輩と神崎先輩に演奏に参加してもらおうってことになって、今日のこの演奏会を開くことになりました」
続いて陽乃が大声で言った。
「その名も！」
それから全員が叫ぶ。
「村峰先生ラストコンサート！」
慎也が先ほどの曲の説明をする。
「先ほどの曲は『シンクロＢＯＭ－ＢＡ－ＹＥ』でした！　これからの季節にピッタリかと思いまして、演奏しました」
由美子が立ち上がり、引き続ける。
「そして、本日は最後ということで、村峰先生に指揮を振っていただこうと思います」
「え！？」
絵美が指揮棒を塔子に手渡した。
「無理よ、そんな急に」
「大丈夫です！　先生の大好きな曲を……っていうか、演奏したことがある曲を選びましたから！」
春樹がニッコリ笑って塔子に言う。
「それから、観客がいないんじゃ寂しいんでお呼びしてるんですよ」
そう言いながら沙希が廊下から手招きをすると、彩、宗平、麻衣子、健太、真野校長が現れた。
「それだけじゃありません！　村峰先生が大好きだからってことで、３年生の先輩方１０名と２年生１４名、１年生１７名が来てくれて

ます！」
　すると美里に呼ばれて部室から彼らが出てきたのだ。
「さらに、音楽室じゃ入りきらないんで……おーい、みんなー！？いるー！？」
　雪子の呼びかけに「オイーッス！」という威勢の良い声。野球部、水泳部、男子バレーボール部、ラグビー部の面々がいた。
「本当はもっとたくさんの部の人に先生の姿を見てもらいたかったんですけど……一番かかわりが深いと校長先生がおっしゃったこの４団体に絞らせていただきました」
　拓真が説明する頃には、塔子の頬は涙の跡が何筋も通っていた。
「で、でも……運動部の子たちは下にいるのに私の指揮する姿なんて見えないじゃない？」
　塔子が涙を拭いながら聞いた。
「その点は大丈夫です！　音楽室の２階下にある視聴覚室のテレビに無線で音楽室から撮影したビデオを生で送信するので」
　駿の一言で塔子が振り返ると、映画研究部の２人がブイサインをして立っていた。
「どうです？　先生」
　恭一に促されてしばらくは黙り込んでいたが、塔子は一回大きくうなずくと、指揮台に立った。
「本当に久しぶりだから……間違えるかもしれないわよ？」
「先生なら大丈夫です」
　しおりが答える。力強く悠介と久美子がうなずいた。
「先生を信じてますから。僕たち」
　樹の一言が塔子を後押しした。
「それじゃ……行きます。曲目は『渡る世間は鬼ばかり』です。お聴きください」
　音楽室と視聴覚室から拍手が聞こえる。塔子にとっては本当に久しぶりの感覚だった。
　緩やかに振られた指揮棒が健之佑のオーボエのほうへ真っ先に向

いた。後ろで恵梨のビヴラフォンが聞こえ、健之佑と同じ旋律を木管楽器が奏でる。そして、クラリネットの絵美のほうへ指揮棒が行く。一瞬だがソロがあるのだ。絵美は勢いよくその旋律を吹き上げる。

指揮棒が鋭くティンパニの洋之へ指示を飛ばすと一気に曲のテンポが上がった。そして音階を下り、印象的なキッカケを全員へ聞かせた。

続いて木管アンサンブルのメロディ。有名な場所だけに、誰もが知っているからこそ乱暴に吹いたりできない。塔子は丁寧に、と表情で全員に目配せする。トランペットがメロディを吹く。この曲は話し合いの末、安和がファーストを吹くことになった。それからそれを引き取るようにフルートのメロディ。

恵梨のカスタネットと恭一久しぶりに叩くスネアドラムの音色が印象的な箇所を経て、トランペットとトロンボーンの優しい音色。それとは正反対で鋭い感じをうかがわせるフルート族のメロディ。

再びメロディへと戻る。ミュートをつけた勇、シロフォンを叩く優、フルートのメロディが続き、同じようなメロディを交互に様々な楽器が奏でていく。要所要所で聴こえるカスタネットを叩く恵梨は本当に嬉しそうだ。

そして最終部分へと来たとき、サックスアンサンブルがまったく今までのイメージとは違う雰囲気を奏で上げた。さゆりと麻綾、はるかの3人はまさか有名な三田嶋　樹と一緒に演奏ができるとは思っていなかったので、かなり顔が強ばっている。

本当に最後の部分がやってきた。トランペットのメロディが再現され、いよいよ最後。木管がメロディを奏で、それにトランペットが加わっていく。最後は優しいロングトーンを吹き伸ばして、曲が止まった。

塔子は満足そうに指揮棒を降ろした。

「本当に……素敵な最後の舞台をありがとう」

ワッと拍手が沸き起こる。すると、すぐにまた曲が流れ出した。

『虹の彼方に』であった。それを聞きつけるとすぐに樹が立ち上がった。
「先生。本当に今までお疲れ様でした」
その手には大きな花束がある。
「これは……本当なら先生に会いたい、という俺たち同期生からの花束です」
「……。」
『虹の彼方に』には弦楽器のソロがあった。しかし、この中で弦楽器を弾けるのは亮平しかいない。彼には責任重大すぎたかもしれないが、むしろ自分のためといって亮平はそのソロをわずか2日で仕上げてきたのだ。低い音ではあるが、弦楽器特有の艶(なまめ)かしい音が聴こえる。亮平は感情を込めて懸命に弾き上げている。
「あの時、本当を言えば吹奏楽部を辞めたくなかったというのが当時の1年生だった俺たちの率直な意見です。でも、バランスを崩した部を維持するのは本当に難しいことだと知り、俺たちは先生に従うことを選びました。でも、後悔はしていません。誰一人、思っていませんよ。当時辞めた部員も、残った部員も」
塔子はもうハンカチで目を押さえっぱなしだ。
「先生……今まで、ありがとうございました！」
樹の声をキッカケに、全員が叫んだ。
「ありがとうございました！」
翔が半泣きの声で続けて声を上げた。
「先生！　ゼッタイ、また会いましょう！」
塔子はそこでようやく笑顔を見せた。
「えぇ……。ゼッタイ、また会いましょう！」
ワァーッと視聴覚室からも声が聞こえ、拍手が沸いた。陽乃も絵美も美里も、春樹も慎也も拓真も涙で顔がグシャグシャだ。
「先生。お疲れ様でした！」
翔が笑顔で叫ぶと、部員全員が叫んだ。
「お疲れ様でしたー！」

こうして、村峰教頭先生の最後の日は、終わっていった。

第１２１話　また会いましょう！（後書き）

七海高校を去っていく村峰教頭に、わずかな時間ではあったものの最高の時間を提供することができた部員たち。少しの寂しさを堪えて、彼らは彼女を見送って次なる舞台を目指します。

第１２２話　自信喪失

７月２２日（土）。今日は七海市吹奏楽連盟第１３７回定期演奏会。とはいえ、この夏の市吹定期演奏会はコンクールのリハーサルといったほうが適切かもしれない。どこの中学校、高校もコンクールで演奏する課題曲と自由曲を演奏する。

七海高校の出番は午後２時３５分からの１２分間。吹奏楽コンクールはそもそも全日本吹奏楽コンクールと呼ばれ、地区大会、県大会、そして北海道や関東、関西と呼ばれる支部大会に出場し、それらを突破してきた学校が全国大会――吹奏楽の甲子園とも呼ばれる東京の普門館で演奏ができるのだ。

神奈川県では地区大会が実施され、横浜、川崎、相模原、県南、県央、西湘、湘南の７つの地区に分けて開催される。七海高校は川崎地区に所属し、今年は２６日（水）に行われる。そして七海高校は２６日の午後１時２０分からが本番となっている。

コンクールの主な規定としては、次の点が挙げられる。

・課題曲・自由曲は同一メンバーによる演奏でなければならない。ただしメンバーが入れ替わらなければ、課題曲のみの演奏もしくは自由曲のみの演奏は可能である。
・楽器の持ち替えは認められている。
・指揮者は、課題曲・自由曲２曲とも同一人物でなければならない。
・課題曲・自由曲は下位大会で審査された曲を演奏する。上位大会からの演奏曲の変更はできない。但し、自由曲でのカット部分の変更に関しては可能とされている。
・演奏時間：課題曲・自由曲合わせて１２分以内。１２分を超過した場合は審査はなされず失格となる。
・人数制限：中学が５０名以内・高校が５５名以内（※１）、大学・職場も５５名以内、一般が８０名以内（いずれも指揮者を含まない）

などなど、いろんな規定があるのだが、中でも「演奏時間は課題曲・自由曲合わせて12分以内」という規定が思いのほか厳しいのである。稀にこれに該当し、審査対象外の末、失格という団体が出てくるのだ。それを防ぐ意味でも、今日の定期演奏会で時間がギリギリの団体は調整を行う。

幸いにして七海高校は課題曲・自由曲あわせて時間が8分弱なので、今回この規定によって失格という可能性はなかった。

しかし、問題はその部員たちの状態だった。

1年生は初心者が徹、優、恵梨の3名。しかも優と恵梨は打楽器で、打楽器とひとくくりすれば簡単だが実際には各楽器はもちろん一人ずつが担当するので、そのプレッシャーというのは案外すごいものである。しかも、静かなシーンでなるトライアングルや場面の転換でよく使われるシンバルなど、失敗すれば致命的ともいえる部分で使われることが打楽器にはことのほか多い。

今回の課題曲で言えば『海へ…』の頭（※2）では洋之がティンパニを鳴らす。これは完全なるソロだった。美里のスネア、優のシンバルもすべてソロ。そんな彼らのプレッシャーは計り知れないものがある。2年生も例外ではなかった。今までたくさんの舞台をこなしてはきたが、演奏が評価ないし批評されるというのは初めての経験。その緊張度合いもすごいものだった。翔、沙希の二人はソロの手前が緊張すると言っているし、春樹もソロの音程が乱れないか未だに不安なようだ。

そして陽乃。音を外さないかずっと心配、心配と呟いている。心配すればするほど不安定になりやすいのが音楽だ。

「大丈夫や。深呼吸して、私はいけるってくらいの気合いで行け」

リハーサル室の前で、翔が陽乃に声を掛けた。

「うん……」

陽乃は小さくうなずいた。翔は「よし！　頑張ろうぜ」と言ってすぐに沙希と春樹の元へ行ってしまった。本当は不安で不安でたま

らない。傍にいてほしいというのが本音だったが、部長として翔は不安がっている部員のそれを取り除かなければならないという使命感に駆られていて、忙しそうにしているから陽乃一人で翔を止めるわけにもいかないと思っていた。

「七海高校の方、お入りください」

係員の指示で部員たちがリハーサル室に入ると、兵藤先生や他の先生たちが腕章をつけてテーブルに座っていた。いつもの定期演奏会の時とそれは何ら変わらないはずなのに、それだけで緊張してしまう。

音出しをしてからしばらくすると、恭一が入ってきた。無言で部員たちを一瞥(いちべつ)してから一言、言った。

「緊張しすぎだなぁ」

その一言に誰もがドキッとした。

「橋本〜。お前らしくないぞ、そんな怖い顔」

恭一がニッコリ笑うが、絵美は緊張したままだ。

「いいかー、今日はコンクールの本番なんかじゃないからな。緊張も必要だけど、変な緊張はいらないぞ。お前らの普段どおりの演奏をすればそれでいいんだ。だから、第一にリラックスすること。いいか?」

「はい!」

陽乃もそう返事はしたものの、実際はそうできるかどうかは心配なところであった。

あっという間にリハーサルは終わってしまった。課題曲も自由曲も、ソロには触れずじまいだった。むしろやってくれたほうが良かったのに、失敗しておきたかったのに、と陽乃は心の中で少し恭一を恨んだ。

舞台までの暗い地下道がホールには少しだけあった。これが余計に陽乃を緊張させる。

「……。」

誰も何も喋らない。しかし、そんな暗闇の中で不意に声がした。

「どした？」
慎也の声だ。
「いや……ちょっとな」
翔の声。陽乃が顔を上げると誰かが立ち止まっている影が見えた。それは間違いなく、翔だろう。
陽乃がそこへ近づくと、翔の左手が陽乃の右手を掴んだ。暗闇だから、他人にはあまり見えない。
「ちょっとだけでも、不安取り除いていけ。な？」
「うん……」
暗い地下道もあと5メートルほど。この時間が永遠に続けばいいのに、と不意にバカらしいことを考えてしまった。
「じゃ、頑張ろうで」
「うん」
翔の手がスッと離れた。また不安になる。
本当にこのままで演奏なんてできるのだろうか。陽乃はやはり不安でたまらなかった。

とうとう舞台へ上がる瞬間がやって来た。前の団体の演奏が終了し、暗転すると同時に係員がせわしく椅子や譜面台、打楽器のセッティングにかかる。それと同時に部員たちは客席から向かって左の花道から入る。一番初めは亮平。そして拓真、岳彦、春樹、愛実の順番に入る。
打楽器のセッティングが終わる。陽乃は不安そうに翔のほうを見たが、暗くてよく見えない。客席にいるはずの由利と夏樹の姿も探そうとするが、もちろん見つからない。まるで一人きりになった気分だ。
「あの子、なにキョロキョロしてるのかしら」
由利が心配そうに声を上げた。由利と夏樹は友美子、綾音、智輝の3人と一緒に客席の右手側に座っていた。そこからだと、陽乃が落ち着きなくキョロキョロとしている姿が見えてしまう。

「なんか変だね、姉ちゃん……」
夏樹も心配そうに呟いた。
「キャッ！？」
悲鳴と同時にガシャーン！と音がした。驚いた由利と夏樹が音のしたほうを見ると、美里が譜面台を亜紀のほうへ倒してしまっていた。倒れた美里の譜面台は亜紀の譜面台も巻き込んで派手に転落する。その譜面台に載っていた譜面が愛実と春樹の間に散らばる。
「ゴメンなさい！　ゴメンなさい！」
美里が慌ててひな壇から降りて譜面を拾い集めようとするが、よく見えない。係員も来て慎也、美里、亜紀と係員の４人でなんとか拾い集めた。
にわかにざわめく客席。綾音の後ろから嫌な声が聞こえた。
「どこ？　この高校」
女子の声だ。
「七海じゃないの？　ほら、去年できたばっかとかいう」
もう一人は男子。
「あー、あの。できたばっかりなのにこんなとこ出てきちゃ、恥かくだけかもね」
綾音は我慢できず思い切りそちらを睨みつけた。二人はすぐに黙り込んでしまう。
ようやく落ち着いたところでスポットライトや照明が点き、恭一が客席のほうへ向いた。その頃、優の緊張のレベルは最高潮に達し、手が震えていた。
恭一がお辞儀を終え、指揮台に上がる。そして洋之のほうを向く。しかし、恭一は洋之が予想以上に緊張していたためしばらく間を空けた。
（いくぞ？）
恭一の口パクの指示に小さくうなずく洋之。そして指揮棒が上がった。しかし、それが降りる寸前に洋之は思い切りティンパニを鳴らしてしまったのだ。

出だしがズレたためにトロンボーンとトランペットの打ち込み、そして沙希のフルートも乱れていく。あっという間に美里のスネアが滑り込むように入ってきた。なんとか管楽器が入ったところでテンポは取り戻せたものの、この乱れで打楽器の面々の顔が少し引きつっているようにすら見えた。

その滑り出しで課題曲のテンポは指定のものよりずいぶん速くなっていた。木管の伴奏群がついていくので精一杯といった具合になっている。メロディはなんとか普段のテンポに戻そうと恭一の指揮を見るが、恭一は木管のトリルの動きにテンポを合わせているために少し誤差が出ていた。

そのショックが大きかったのか、洋之のティンパニの後の木管の動きが乱れた。さらに、絵美がリードミスをして「キィィッ！」と耳障りな音を立てた。失敗は連鎖していき、翔のソロはうまくいったが春樹のソロの出だしが「プスッ！」と外れてしまった。

課題曲の失敗は自由曲にも響いて、いつもは迫力のあるユーフォとトロンボーンの動きもいまいち力強さが感じられなかった。木管楽器の複雑な連符（れんぷ）もただザワザワと聴こえるだけ。高音部では金管が頻繁に音を外し、静かな部分では今までほとんど失敗しなかったホルンのソリが見事に音がかすれてしまったのだ。それも意外なことに、楽器経験は上になる順平が失敗したのだ。そしてそれが雪子へ少し影響し、一瞬ホルンのソリが消えかけた。

陽乃はなんとかソロは吹ききったものの、音が震えていつもの艶（つや）やかさなどまったくなかった。

最後の再現部も勢いがつきすぎて何を主張したかったのかわからず、一番後のトゥッティ（※3）は今までで一番音が乱れてしまった。入りも音程もズレ放題だった。

それでもなんとか、演奏を終えることはできた。

舞台袖に出て行く部員たち。由利はきっと陽乃は泣いていると思った。帰ったらどう声をかけようか。そればかり考えてしまう自分が嫌でたまらなかった。

舞台袖に出るなり、順平が泣きだした。驚いて雪子が「大丈夫だよ。今日はまだコンクールじゃないし、まだまだ練習できるじゃない！」となだめている。絵美が涙をポロポロこぼし、みゆきや光瑠が「泣かないでくださいよ、先輩！」とハンカチを彼女の頬に当てている。美里も同じようにスティックを持ったまま泣いて震えている。美里の頭を慎也が撫でて「あんな失敗、どーってことねぇよ」と言うが、美里は「あたしがみんなを動揺させたんだ」ばかり呟いていた。

今日の演奏会、出なければ良かった。

陽乃はそう思ってしまった。もし出なければ、自分たちはこんなに自信を失くすはずはなかったのだから。

演奏会終了後。七海高校の部員たちの半数は泣き晴らした暗い顔で座っていた。観に来た保護者も多くいたが、なんて声をかければいいのかわからないぐらい、暗かった。

いちおう、演奏した団体には評価と賞状が授与される。それを受け取りに行った翔はまだ帰ってきていない。それに、恭一もそれについていったので部員たちはただ待つしかなかった。

「なんだなんだ、暗いな～」

恭一が帰ってきた。それでもまだ半数が俯いたまま。

「おおーい、終わったことは仕方がないだろう。ほら、上向いて」

それでようやく順平や美里が顔を上げた。二人とも目の下にクマができたようになっている。

「まぁ、今日はお疲れ様。それぞれ、反省すべき点はわかっているだろう」

「……。」

「演奏面より、メンタル面だな。残りの練習でこれをどう克服するべきかを考えていこうじゃないか」

「はい」

翔も黙って話を聞いている。恭一はフゥッとため息をついてから

「起立！」と声を掛けた。思わず全員が反応して勢いよく立ち上がった。

「今日はお疲れ様！　楽器は既に学校に戻してあるから今日はこれで解散！　明日は午後1時に集合して1時間パート練習の後、2時半から合奏をするからそれまでにチューニング。わかったな？」

「はい」

「もっと大きい声で返事！」

「はい！」

「よし！　では、解散！」

恭一だけがやたら元気な終礼が終わった。部員たちがバラバラになったところで、恭一は今日の評価が書かれた5人分の講評用紙をもう一度見通した。

「プレッシャーがあったようだが、それでも心に響くものがあります。B」

「ソロはもうほぼ仕上がり状態。あとはどれだけ安定させるか。これをソリストに徹底させてください。後は、木管のトリルを丁寧に。C」

「今日は乱れたけれど、曲を表現する気持ちは伝わる。もっと大らかに、のびのびと演奏を。C」

「低音部が人数の割りにしっかりしている。後は高音部がどううまく乗りかかるか。キンキンした音はいらない。B」

「今回はメンタル面の弱さが出たよう。よってD。メンタル面が補強されればBにはできそう」

評価は思いのほか良かった。メンタル面は恭一自身の反省点でもあるため、部員には言わなかった。

コンクールまであと1週間を切っている。まずは自分自身のメンタル面の補強が必要だと考えながら、恭一はホールの駐車場へと向かった。

第１２２話　自信喪失（後書き）

失敗の連発ですっかり意気消沈の部員たち。しかし、講評は意外といい評価があったようで、後はメンタル面の補強さえあれば、コンクールで上を目指すことも可能なよう。コンクールまであと１週間もない部員たちに課せられたこの難題はクリアできるのか。

（※１）５５名：２００９年度より規定が変わる予定です。２００８年現在はまだ５０名です。

（※２）頭：曲の冒頭部分をこう呼びます。

（※３）トゥッティ：全員で同じ動きを演奏すること。パート内で分かれて演奏するのをディヴィジョンと呼び、戻ったときにもこう呼びます。

第１２３話　ダメっ子揃い？

「おはようございまーす……」
７月２３日（日）。陽乃は午前８時半に職員室の戸を開けて中に入った。職員室には既に恭一と野球部顧問の真鍋先生が座って何やら話をしていた。
「おぉ、朝倉。どうした、今日は早いな」
「あ、昨日ダメダメだったんで練習をしようかと」
「なんだ。お前は相変わらず真面目だなぁ」
恭一はハハハッと笑った。
「あぁ、鍵か？」
「あ、はい」
「それなら、８時過ぎに田中と日高が来てもう練習してるみたいだぞ」
「えっ！？」
職員室を出て音楽室へ近づくと、優と美里の音だけではない。ティンパニからグロッケン、サスペンドシンバルの音までする。
「おはよ～」
そっと部室の扉を開けると、既にパーカッションのメンバーは揃っていた。
「おっはよ、陽ちゃん」
美里が元気よく挨拶をする。洋之、優、あずさ、恵梨の４人も揃って「おはようございます！」と挨拶をしてくれた。
「おはよ！　みんな、また早くに集合したんだね」
陽乃が驚いて全員の顔を見渡した。
「そりゃあね！　だって昨日の演奏、パーカスは散々だったでしょ？　あたしが譜面台倒して亜紀ちゃんにぶつけるわ、優くんは出だし飛び出すわ、あずさちんは乱れるわ、恵梨リンも滑るわでもうメチャクチャもいいとこだったもん。それでね、唯一冷静だった冨岡（ひろ）（ぽん）

洋之に見てもらおうって話になって、今日から早朝練習ってわけ」
「なるほどねぇ……」
陽乃は洋之を見つめた。少し恥ずかしそうにして「俺が一番初めにミスりましたけど」と笑った。
「陽ちゃんも練習？」
「うん。ペットはあたしだけミスしたから個人練習ってとこ」
「そっかぁ。頑張ろうね！」
「うん。じゃ、また後で」
陽乃はすぐに楽器と譜面台を取り出して音楽室へと向かった。朝早い音楽室には朝日が綺麗に差し込んでいた。
東端に位置する音楽室は夏場は温度が上がって少し暑い。クーラーがあると嬉しいのだが、七海高校はまだそんなにスゴい設備が整っているわけではないので、夏場も冬場も盛りになると環境は厳しいものがあった。
「よーし。とりあえずマウスピースから練習だ」
陽乃が時計を見ると午前８時４５分ちょうどを指していた。集合は午後１時。まだ４時間ほどある。昼食の時間などを考えると３時間弱ではあったが、それだけ練習する時間があれば十分だった。
陽乃の場合、マウスピースの練習はいつもだいたい１０分から１５分程度行っていた。マウスピースが温まり、唇も慣れてきた頃に楽器に付けるようにしている。
午前９時。ちょうどマウスピースも温まったので楽器に付けようとしたとき、なんと翔が音楽室に入ってきたのだ。
「わっ！　な、なんで！？」
陽乃は驚いて思わず机の下に隠れそうになった。
「なんでてお前……。お前ん家に午前中休みやからちょっと息抜きに遊びに誘おうと思ったら、おばさんが学校へ自主練しに行った言うから、様子見に来たんやんけ」
「そ、そうなんだ……」
学校でまさか私服姿の翔を見ることになるとは陽乃も予想してい

なかっただけに、少しドキドキしてしまう。
「どないしたん？」
「や……。私服で学校来て平気なの？」
翔はそこで初めて自分が私服だったことに気づいたようだった。
「あ！　ヤバいなぁ……。めんどくさいけど、着替えて来よか。ゴメン、２０分ほどしたら戻ってくるわ」
陽乃は少し嬉しい気持ちになった。私服で学校に来たことを忘れてしまうくらい、陽乃のことを考えてくれていたと思うと、暖かい気持ちになる。しかし、貴重な休みを自分のために費やしてしまうのはもったいないとも思った。
「い、いいよ！　また昼から教えてほしいところがあったら聞くから、朝はゆっくりしてて！」
「そうか？」
翔が少し残念そうに振り向いて答えた。
「うん！　ホントに大丈夫だから」
「そうか……。んじゃ、また昼からな！」
「うん！　ありがとね！」
翔が音楽室を出るのを見送ってから、陽乃は楽器にマウスピースをつけて譜面台を立て始めた。
翔は音楽室を出る前に美里たちに声をかけ、さらに自主練習に来て教室へ向かう途中のめぐみと絵美も見つけたので遠くからであったが声をかけておいた。
そのとき、突然非常ベルが鳴り響いた。
「えっ！？」
翔が驚いてあたりを見渡すと、音楽室の向かい側の部屋から煙が上がっている。
『火災発生。出火場所は東校舎２階、パソコン室』
それと同時に校内にサイレンが鳴り響き、同じ内容のアナウンスがかかる。
同じ頃、美里も部室で同じ警報を目にしていた。そして耳に入る

アナウンス。
「やだ……やだ、どうしよう!?」
美里はパニックに陥り、ただあずさと恵梨の手を握るばかり。
「先輩！　秦野！　乃木！　すぐに避難しますよ！　とにかく道具とか全部置いてください！」
洋之もその音に気づいてすぐに練習を止めて恵梨、あずさ、美里の3人をすぐに靴箱へと連れて行く。
「おい、田中！」
翔が音楽室を飛び出すと既に洋之が彼女らを靴箱へ連れて行った後だった。優は顔が真っ青だが、洋之と同じように女子を安心させようと頑張っているようだった。
「先輩！　橋本先輩と豊田先輩、それに朝倉先輩が！」
「わかってる！」
翔は慌てて外へ飛び出す。
「橋本ー！」
「大丈夫！　私たち、すぐに中央階段から逃げるから！」
そう言った直後、絵美とめぐみは階段を降りていった。
それを聞いてすぐに翔は音楽室へ駆け込んだ。陽乃がオロオロしながら音楽室の真ん中で右往左往していた。
「陽乃！」
翔は慌てて彼女の傍に駆け寄り、強引に手を引いた。爆発音がした気がする。
「で、でも楽器が……」
「えぇから早(はよ)逃げるで！」
ガシャン！とガラスの割れる音がする。
（かなりヤバイんちゃうん……！）
翔が予想したとおり、煙がモウモウと音楽室に迫ってきた。機械が焦げているからか、かなり臭い。
「キャッ！」
陽乃が思わず悲鳴を上げる。思わずむせ込んでしまい、さらに涙

まで出てきた。
「いいから早くしろ！　楽器は少々のことなら平気や！」
翔が逃げようと出口のほうへ向かうが、陽乃は猛煙の中、何かを探す素振りを見せた。
「何やってんねん！」
「楽器が、楽器が！」
「えぇから、早く出るぞ！」
翔が強引に陽乃を廊下へ押しやって、隙を見て陽乃の楽器を強引に掴みあげた。ガツン！と音がしてベルが少しへこんだ気がした。
「少しぶつけた！　でも吹くには大丈夫やろ。しっかり持って行け！」
「……！」
煙が激しくなる。陽乃と翔は音楽室を出てすぐの階段から降りるのは諦め、絵美たちが逃げた中央階段へ走った。
一方の美里たちは2階で思った以上に煙が巻いていたので、中央玄関へと向かっていた。
「冨岡くん！」
美里が洋之を見失い、彼の名前を呼びながら生徒会室の前をウロウロしていた。
「いいから、先輩たちは早く中央玄関へ！」
恵梨とあずさは泣きながら美里の手を引く。
「トミ！　危ない！」
優が叫んだ。煙で足元が見えない中、滑らせて洋之が階段から落ちたのはすぐ後だった。
絵美とめぐみは出たばかりの中央玄関の前で煙を吹く東校舎を見つめていた。
「まさか自主練でこんな目に遭うとはね」
めぐみが煙で少し汚れた頬を擦った。
「先輩……佐野くんや陽ちゃんは……」
絵美が顔を真っ青にしながらめぐみの手を握った。

「大丈夫、すぐに出てくるから」
めぐみの言ったとおり、すぐに恵梨と美里、あずさが泣きながら出てきた。
「ミサッチ！　恵梨ちゃん！　あず！」
めぐみと絵美がすぐに彼女たちを介抱した。ゲホゲホとむせる3人。思った以上に煙はひどいようだ。
その頃、なんとか煙から逃げて西玄関にたどり着いた翔と陽乃は一息ついていた。さすがにここまで煙は来ない。
「怪我、ないか？」
翔は真っ先に自分のことよりも陽乃のことを気にしていた。
「翔は？」
「オレも大丈夫や」
そう言ってすぐに翔が怒った顔をした。
「せやけど、お前！　すぐ出ろって言うたのに、なんでずっと中におったんや！」
ビクッと陽乃は体を縮ませた。
「だって、楽器が壊れたら……もうすぐコンクールなのに」
「せやけど、それでお前が怪我をして出れんなんてことになったら、どないすんねん！」
翔がギュッと陽乃の体を抱きしめた。
「ゴメンなさい……」
陽乃が泣き出した。
「あたし……ホントダメっ子だ」
「え？」
「あんなに危ない状況なのに、自分のことばっかり考えて、翔にムチャさせて……ゴメンなさい」
「泣くなよ。オレも……サックスがあったら同じことしてたかもしれへんし」
翔は泣いて震える陽乃の頭をそっと撫でた。
美里たちは洋之と優が出てくるとすぐに洋之が打った腕を大丈夫

かどうか確かめていた。
「痛くない？　痛くない？」
あずさが洋之の腕を何回も摩る。
「大丈夫だよ。軽くぶつけたくらいだから」
美里が泣きながら洋之に謝りだした。
「ゴメンね！　ゴメンね。本当なら年齢が上のあたしがみんなに指示しなきゃいけないのに……」
洋之はニコッと笑って答えた。
「こういう場合、男のほうがしっかりしてないとダメなんスから」
絵美は消防車が来たのを確認すると、もう一度東校舎を見た。
「なんか、煙の割に大丈夫そうですね」
絵美の顔色はずいぶんよくなった。
「そうね……」
めぐみも顔を出す。二人はそれからようやく事の重大さに気づいたのか、ペタリと地面に座り込んだ。
「おい！　お前ら、大丈夫か！？」
恭一が絵美とめぐみのところへ駆け寄り、すぐに怪我がないかどうかを確認した。
「私たちは大丈夫です！　でも……朝倉さんと佐野くんが……まだ」
めぐみがすぐに恭一に報告を済ませた。絵美はそれができなかったことに少なからず、情けなさを覚えていた。
「それじゃ、お前たちはすぐに外へ避難しなさい。上履きのままで構わないから」
「はい」
恭一が音楽室のほうへ走り出すと同時に二人も下へ向かって歩き出した。
「先輩……やっぱり先輩ですね」
絵美が呟くのに「え？」とめぐみは不思議そうな声を出した。
「私、自分のことでいっぱいいっぱい……。みんなのことまで気が回らなかった」

「ちょっとちょっと！　今は非常事態だからさ。そんなこと気にしないで。ほら、それより早く校庭に行こ？」
「はい……」
絵美とめぐみは手を繋いで下へ降りていった。

「それでは、今日はクラブ活動は全面休止にします。また、今日いっぱいは消防による確認作業が行われるので、立入禁止となります。明日以降の活動については各部顧問の先生方から部長もしくは主将などへ連絡をしますので。では、十分に気をつけて帰るように」
真鍋先生の指示の元、町内あるいは番地ごとに分かれて帰ることとなった。陽乃と翔の住んでいるところも町名が異なるため、バラバラになってしまう。
「また、明日な」
翔が優しく陽乃の頭を撫でた。
「うん……」
「じゃ」
翔は最後まで優しく笑って、陽乃のことを見続けていてくれた。
（こんな不安な状態で……コンクールなんて迎えて大丈夫かな）
一抹の不安が、陽乃の心から拭いきれずにいた。

第１２４話　遠くにいる仲間

火災発生から約１時間後の１０時１５分。陽乃は園部先生に見送られて無事、家へ到着した。
「ただいま」
陽乃がドアを開けるとすぐに由利と知恵子が駆け寄ってきた。
「陽乃！　アンタ、怪我はなかった！？」
帰ってきたことに気づいた由利と知恵子が慌てて陽乃に駆け寄った。
「うん。翔が安全な場所に連れて行ってくれたから」
「よかったねぇ。随分揺れて、おばあちゃんたち心配したんだよ」
知恵子が陽乃の頭を優しく撫でた。どこか、翔の撫で方と似ている。
「おばあちゃん、くすぐったいよ～。それより、夏樹は？」
「夏樹は楽器屋さんに行ってくるって言って出てるわ。あの子も陽乃のこと気にしてたから、様子見てくるわね」
「わかった。あ、まだ学校の近く通行止めだから、気をつけてね」
「自転車はやめておくわ。歩いて行ってくる」
由利は慌てた様子で家を出て、すぐ夏樹を迎えに行った。
陽乃はようやく落ち着いて話をできるようになった。少しへこんだ楽器の傷。これは翔が身を呈してまで自分の楽器と自分を守ってくれた証。そう陽乃は思っていた。
知恵子はずっとテレビをつけたままだ。ＮＨＫのニュースではずっと、火災のニュースを放送している。
「おばあちゃん……あたしたちの学校の火事のこと？」
「ううん。茨城でも学校で火事があったみたいよ」
「えっ……！？」
「え～、ただいま入った情報です。この火災による死者が確認されました」

陽乃は呆然としたままニュースを見続けるが、聞き慣れた言葉に思わず反応した。

「亡くなったのは茨城県水戸市立　海南（かいなん）商業高等学校に通う3年生で吹奏楽部部長、佐倉洋輔（さくらようすけ）さん、１８歳です」

陽乃と一つしか違わない。問題は、その後のキャスターの声だった。

「佐倉さんは今朝8時半頃から吹奏楽部の早朝練習に参加しており、火災発生時は音楽室でもう一人の部員と共に練習をしていたそうです。火災のにより発生した煙に伴い、一酸化炭素中毒を起こして病院に搬送されましたが、先ほど死亡が確認されました。また、同じ部屋で練習をしていた副部長の菅生（すごう）さくらさん、１８歳が意識不明の重体という情報が入っています」

まったく、翔と陽乃の立場と同じような状況だった。部長と副部長が音楽室で練習中、火災に遭遇し、そのまま部長が亡くなり副部長も重体。きっと、彼らは最後のコンクールに向けて練習をしていたのだろう。

不意に携帯電話が震えた。絵美からのメールだった。

『ＮＨＫのニュース、見た？』

すぐに返信する。

『見た』

またすぐに絵美から返事が来る。

『なんか……陽ちゃんと佐野くんがダブッて見えた』

その本文を見てショックを受けたが、それは陽乃も同じだった。

『あたしも、同じ』

また返信。

『今から、会えない？』

答えは簡単だ。

『会いたい』

１１時半。待ち合わせは陽乃の家の近くにある児童公園にしておいた。ブランコに乗って陽乃は絵美を待った。
「陽ちゃん」
絵美が制服姿のままやって来た。陽乃の乗っていたブランコの横に乗る絵美。
「やほ。制服はどうだった？」
「真っ黒。なんかホコリだか木屑だかわかんないのがベッチャリくっついてて、最低」
「アハハ！　それ、大変だね」
しばらく笑ってから、沈黙が続いた。その沈黙を初めに破ったのは、絵美だった。
「私、さ」
「うん……」
「定期演奏会であれだけ皆が失敗して、正直コンクールなんて出られるのかどうか不安だった」
「それはあたしも同じ……」
キィ、キィとブランコのこぐ音がする。陽乃もつられてこぎ始めた。
「でも、ニュース見て。私たちと同じ目標を持った人がいたんだって知った」
「うん……」
陽乃はただ、返事をすることしかできない。
「もう少しでコンクールだった。茨城県でも、２６日にコンクールを予定してたみたい。茨城県吹奏楽連盟のホームページ見て、ちゃんと書いてあった」
「……そっか」
「でも、亡くなった人が出たから……きっとコンクールどころじゃないよね」
「だろうね」

今日はほったらかしで帰ってきたが、部室や音楽室も少なからず被害があった。直接火災に見舞われた部室や音楽室ではもっとひどいことになっているだろう。

「私たちも……怖かったけど、学校も無事だし、皆も無事。楽器も無事だったし。何より、今はもうすっかり普通の生活に戻ってるよね」

陽乃は絵美の一言で周りを見渡した。公園で遊ぶ親子。道路を駆けていく中学生。すぐ傍の八百屋で大声で話し込むおばさんたち。

「それなのに……ちょっと自分たちが失敗したくらいでコンクールに出ないなんて、ダメだと思う」

「……絵美りん」

「陽ちゃんは、そう思わない？」

自分がこんな経験したのは生まれて初めてだった。今までで災害といえば、宮城県や岩手県、静岡県で地震があったときに少し揺れた程度で、あんなに恐怖を感じる災害はなかった。けれど、もう日常が戻ってきている。来週になれば、コンクールが終わってホッとしている頃かもしれない。

「そう思う」

自然と言葉が出た。

「そうだよね！　だから、あんな失敗くらいでコンクールに不安を抱いてたんじゃ……亡くなったあの吹奏楽部の仲間に失礼だよ。スケールが違いすぎるかもしれないけれど……諦めるんじゃなくって、頑張ることが大切だと思う」

「うん……うん！　そうだね！」

陽乃はパッと笑んだ。

「でも、このことはあえて皆に言う必要はないよ」

絵美が陽乃に念を押すように言った。

「なんで？」

「私たち二人が、そう強く思うだけでも十分。後はそれをちゃんと皆に伝わるように努力すれば、きっと、皆変わってくるよ」

「そっか……うん、そうだ」
絵美がそっと手を差し出した。
「明日からまた、頑張ろうね」
「うん！」
「よし！　じゃあ、帰ろうか」
「うん！」
陽乃は絵美の後を追うように駆け出して、ふと足を止めた。
「……。」
陽乃は茨城県の方向に向かって、手を合わせた。絵美も、何も言わず、同じように手を合わせた。
遠くにいる仲間の冥福を祈り。
遠くにいる無事だった仲間が、コンクールに参加できるように。
ただ、ひたすらに祈り続けた。

第１２４話　遠くにいる仲間（後書き）

自分たちだけが吹奏楽をやっているのではない。続けたくても続けられない仲間がいる。そう思うだけで、陽乃たちの気持ちは大きく変化した様子。コンクール前の様々な試練を乗り越え、本番までラストスパート！

第１２５話　お願い！

７月２４日（月）。いよいよ、コンクールまであと2日となった。
「おはよ～」
陽乃が眠そうにあくびをしている横を、翔が元気なさそうに声をかけた。
「あぁ、おはよ。どしたの？　元気ないね」
「うん……」
「火事が怖かったとか？」
「いや……」
翔は陽乃がいう冗談にも答えず、ただ俯くばかり。
「どうしたのよ。なんか悩み事？」
「うん……」
「言ってみなよ。あたしでよければさ」
「ん……。実はな」
翔は辛そうな顔をして話し始めた。

話は七海市の北部にある風見台地区が開発された頃に戻る。
私立風見台高等学校。その高校の名前のとおり、風見台地区は七海市の北部に位置する小高い丘の上に切り拓（ひら）かれた新興住宅街だ。
２０００年頃に工事が開始され、２００４年に全ての地区の開発が終了。２００４年には七海市立の小学校、中学校と私立風見台高校が建設された。
その小高い丘に住宅街ができる前は、たくさんのため池があった。七海市でも周囲に川がなく、池もない上に丘の上だから、水源地がなかったからだ。しかし、水道設備が整ってきた近年、ため池がなくても十分に丘の上に水を供給できるまでになったのだ。
そんな風見台高校に通う生徒で翔たちの知り合いは、濱口優衣、岩切翔平、佐野修平の３人だ。

あの日。翔たちと同じように少し早めに来て練習をしていたのは翔平たちだった。同じような風景が陽乃の目に浮かぶ。しかし、思いがけないことが起きたのだ。歩いていた彼らのところへスピード違反をした原付が突っ込んできたという。

幸い3人とも素早く避けたのだという。原付ということもあり、最悪の事態は免れた。しかし、修平をかばおうと彼を突き飛ばした翔平は、右腕にかなりの衝撃が加わったために右腕を骨折してしまったという。

「それじゃあ……」

「コンクールの出場……ショーさんはもう9割方無理らしい」

「そんな……」

陽乃は唖然として思わず立ち止まってしまった。

「しゅ、修平くんは？」

「ショーさんが怪我したのは自分のせいやからって……コンクール出えへんって」

「でも、風見台のサックスって主戦力は……」

「ショーさんと修平の二人や」

「そんなの……」

「かなり厳しい状態や。兵藤先生もなんとか修平を説得してるみたいやねん。昨日、濱口さんに話を聞いて様子見に行ったんや。そしたらおばさんが出てきて、全部事情説明してくれはった。修平の部屋の前に兵藤先生が座ってなんか話してはるの見えたけど、修平は何も返事してへんかったな」

「……あたしたちで何かできないのかな」

「無理やろ。あれは、修平とショーさんたちの問題や。オレらがやいやい言うてもしょうがない」

「そっか……」

二人は暗い面持ちで学校へ入っていった。

部室に入ると、部員たちがお互いの無事を確認してホッと安堵しているところだった。

「みんな、おはようございます」
翔が挨拶をすると「おはようございます！」と元気よく返事が返ってきた。それだけで、翔は十分嬉しかった。
「えと……とりあえず午前中はパート練習です。９時なので、９時半からパート練習。１１時から金管、木管、パーカスの３セクションに分かれて３０分ずつ、課題曲と自由曲の練習をしてください。昼からは１時から全体ロングトーンならびにチューニングをして、２時から合奏です」
「はい！」
「あと、先生から詳しく連絡があるとは思いますが、明日から野球部の甲子園出場に向けた試合が始まります。真鍋先生から依頼があって、応援に吹奏楽部も参加してほしいという連絡が来ました」
「おぉ～！」
思わぬ出来事に部員からどよめきが起きる。
「はいはいはい！　ほんで、これについてみんなの意見を募りたいってことなんで、皆さんコンクール前やけど応援に行くかどうするか、考えておいてください」
「はい！」
「それから、今日から入れ替わりで保護者の方や家の人たちがオレらの練習を見にきはることになりました」
「えぇ！？」
驚いた声を上げたのはやはり美里だった。
「観客のプレッシャーをなくすために、いろんな人に見てもらうということを東先生が考えはったようです。ランダムで声を掛けてるそうなんで、今日は誰のお母さんお父さんが来るとかはわかりません。覚悟して待っといてください」
翔がニッと少し意地悪そうに笑うとざわめきが大きくなった。
「それじゃ、練習開始してください！」
翔の声をキッカケに部員たちは各パートのロッカーへ行き、準備を始めた。

「あ、電話だ」
陽乃が携帯電話のバイブに気づいてポケットから取り出すと、ディスプレイには『ゆいちゃん』と表示されていた。濱口優衣だ。
「もしもし？」
「もしもし！？　朝ちゃん！？」
「そうだよ。おはよー」
少し慌てた様子の声。
「ねぇ、佐野くんそこにいる！？」
「いるけど、どうしたの？」
「すぐに替わってほしいの！　お願い！」
「あ、わかった。ちょっと待ってね」
陽乃はサックスのロッカー前に行き「ねぇ、ゆいちゃんから電話」と携帯を手渡した。
「ゆい？」
「濱口さん」
「なんでオレに？」
翔が不思議そうな顔をする。
「さぁ。替わってって言われたから……はい」
「あぁ、ありがと」
翔は電話を受け取り、ディスプレイの横に陽乃とのツーショットのプリクラがあるのに気づいて少し恥ずかしくなりながら答えた。
「もしもし？　佐野です」
「佐野くん！　濱口です！」
「あぁ、どないしたん？」
「岩切先輩が……岩切先輩が病院からいなくなったの！」
翔の思考回路が一瞬、止まりそうになった。

「ん……」
修平が気づくと、時計は午前１０時半を指していた。クラブに行ってないと、時間が経つのが遅い気がすると思っていた。

ゴロンと寝返りを打って、壁を見つめる。あの時、なぜ自分はロッカーが危険なことに気づかなかったのだろう。

「俺のせいで……俺のせいや」

修平は自分が翔平の最後のコンクールに出場する権利を奪ったのだと後悔していた。二度とない高校最後のコンクールに、自分のせいで翔平が出場できなくなったと考えるだけで胸が苦しくて、息が止まりそうだった。そんな自分がコンクールに出るわけにはいかない。

もちろん、章義や優衣が何度も様子を見に来ては説得してくれた。両親や姉も説得してくれているが、修平が出るつもりは毛頭なかった。

ピンポーン……。

「ん？」

下からインターホンの音。誰か来たようだ。

また音が聞こえる。しかし、出るのが面倒だ。

「母さ～ん！」

母親を呼ぶが、返事がない。

「そういえば買い物行くとか言ってたな」

修平は出ようかどうしようか迷って、やっぱり面倒なのでやめておいた。しばらくすると、音も聞こえなくなった。

しかし。

ガチャ、とドアを開ける音が聞こえた。

「え！？」

修平は驚いて門のほうを部屋の窓から見た。しかし、既に入ってきたようで人影はなかった。

「ま、まさか泥棒……！？」

このままだと危ないと身の危険を感じた修平は咄嗟に傍にあった姉がやっていた剣道のときにつける面を付け、押入れから小さい頃によく遊んでいたプラスチックのバッドを取り出した。

ギシ、ギシ。

不規則な音で階段を誰かが上がってくる。なぜ自分の部屋に向かって人が来るのか、まったく理解できなかった。
しかし、すぐに聞き慣れた声が聞こえてきた。
「おっとと！」
それは紛れもなく、翔平の声だった。
「先輩……？」
修平がドアを開けると、包帯がグルグル巻きになっている翔平の姿が見えた。
「おっす！　元気か？」
「元気か？じゃないでしょ！　絶対安静やのに何やってるんですか！？」
言い終わるか終わらないかのうちに翔平の左拳（ひだりぶし）が修平の頭を直撃した。
「痛ってぇ！」
「何やってるはこっちのセリフや。お前、部活どないしてん」
「……。」
「コンクール前やのに行かんでどないすんねん。濱口と先生、それに野崎や南部（なんぶ）も心配してたぞ」
サックスパートの後輩である二人まで心配して翔平のところに連絡を取ってきたそうだ。
「なんで練習行かへんねん」
「だって……その骨折、俺のせいでなったでしょ」
「……。」
修平の答えに翔平は返事ができずにただ、立ち尽くすばかりだった。
「先輩の最後のコンクールやのに、そのせっかくの機会を……俺がどんくさいから奪ってしまって。そんな俺がはい、先輩の代わりに頑張ります！なんて気になれないですよ」
「……まぁ、わからんでもないわ。その気持ち」
しばらく沈黙が続く。

「なぁ……お願いがあんねんけど」
翔平が優しい笑顔で呟いた。
「なんですか？」
「俺抜きでコンクール、出てくれ」
「……！」
修平の顔が引きつったようになった。
「な？　頼むわ」
「嫌です！」
「そんなこと言うなよ。な。頼む」
「嫌や！　嫌！　先輩がおらへんかったら、サックスのファースト俺一人やないですか！」
修平はブンブンと首を横に振り続けた。
「秋風の訴えの最初なんか、先輩おらんかったらゼッタイ無理です！」
「お前やったらいける。大丈夫や」
「プスタも先輩おらんかったらペラペラに薄い音になるし……」
「大丈夫やって」
「先輩は何を根拠にそんなこと言うんですか！？」
修平があまりに怖い顔をして言うので翔平はしばらく言葉に詰まった。
「何も根拠ないんかないよ」
「へ？」
翔平は笑顔で、しかししっかりとこう言った。
「地区大会は出られへんけど、県大会は出たい」
「……。」
「地区大会は、俺抜きでも十分行ける。ほんで、県大会で俺が加わる。そしたらさ、今まで乗り越えられへんかった関東大会への道、拓（ひら）ける思うんや」
「先輩……」
翔平がしっかりと修平の手を握った。

「な？　そやから、しっかり頼む。野崎と南部をしっかり引っ張って、お前らだけでも十分やってけるって証明してくれ」
「……。」
「お願いや。シュウ」
修平はしばらく悩んだ末、こう答えた。
「わかりました」
「よっしゃ！　それでこそ……」
「修平やな」
ドアの向こうから修平と翔平が聞き慣れた声が聞こえた。
「先輩～、病院抜け出したらマズいでしょ」
翔だった。かなり汗をかいていて、その上髪の毛も服も乱れている。
「カケル！　どしたんだよ」
「濱口さんから電話があってん。ショーさんが病院からおらへんなったってな」
翔は手にしていたアクエリアスを一気飲みした。
「どうせここやと思ってましたけど」
翔平が苦笑いする。
「シュウ」
翔は言おうかどうしようか迷った挙句、言った。
「来年には、ショーさんはおらへんなるねん」
「……。」
「いつまでも頼ってるワケには行かへんぞ。だから、これがいい機会や思って……演奏してみたらええやん」
「そうや。俺ももう、来年は華の大学生やぞ」
翔平がニコニコ笑いながら言うので、クスッと修平が笑った。
「な？　頼むわ、シュウ」
「……わかりました。俺、やります！」
「よーし！」
翔が嬉しそうに笑って、それから修平の手を引いた。

「ほんじゃ、ショーさんは病院へ強制連行するわ」
「えぇ!?」
翔平がかなり嫌そうな顔をした。
「当たり前でしょ！　絶対安静やのに病院抜け出て！　表にタクシー呼んでますから行きますよ！」
翔が強引に翔平を押して、連れて行こうとする姿を見ると中学の頃を思い出し、修平は懐かしくなった。
「シュウ！」
翔が去り際に言った。
「お前は早く学校行け！」
「……おう！」
タクシーに大声を上げながら乗っていく翔平たちを見送りつつ、修平は制服へと着替えた。
「よし！　行くで！」
修平は勢いよく部屋を出て、階段を降りていった。

第１２５話　お願い！（後書き）

事故で負傷した翔平に負い目を抱く修平。しかし、翔平の進言もあって、修平はコンクール出場を決意。良きライバルとして、彼らを見ていた翔も気合いが入った様子です。

第１２６話　それぞれの前日

「それじゃ、今日はここまでにしておこう。今日は各自しっかり休んで、明日に備えるように。以上！」

恭一が気持ち良さそうに合奏を終えた。

「起立！」

翔が合図をすると全員が立ち上がり「ありがとうございます！」の掛け声の後に「ありがとうございます！」と全員が繰り返す。この挨拶もしっかり身についている。

「そんじゃ、明日の連絡しまーす。聞いてください！」

楽器を片付けつつ、翔のほうに部員たちは注目する。

「明日の本番は午後１時２０分！　気合い入れて、でも緊張しすぎずに楽しんで演奏しましょう！」

「はい！」

陽乃はいよいよ明日がコンクール本番だと思うと今から緊張してしまう。

「まず、午前９時に集合です。その後、９時半から音出し。それから合奏ですぐに通しをして、それで練習は終わります。後は楽器を積んで移動して、１２時ちょうどに受け付けて続きをします。これは東先生がしてくれはります。それまでは他校の演奏を聴く時間になってるんで、ぜひ客席で演奏を聴いてください。チューニングが１２時１５分から。４５分からリハーサル。これは１時ちょうどまでです。それから移動して、本番になります」

春樹と拓真がウンウンと緊張した面持ちでうなずく。

「以上が明日の動きです。それでは、解散の前にオレから一言、言わせてください」

すると、３年生である安和、めぐみ、岳彦の３人が前に立った。

「３年生の先輩たち３名は、コンクールで引退という形を取るということになっています」

「えっ！？」
絵美がかなり驚いた様子を見せた。彩香や勇、拓真も同じように声を上げた。
「先輩方は大学受験があるため、先生やオレ、朝倉との話し合いの結果、コンクールで引退という形を取られることになってます。現在、この部は明確な引退の時期等が設定されていないため、今年に限ってはコンクールを一つの区切りとすることにしました」
部員たちから何も声が出なくなった。
「前日にこんなこと言うべきではないかもしれんけど……」
翔も恭一もどう言葉を繋いでいいかわからなくなった。すると陽乃が立ち上がり、前に立った。
「はーい！　みんな暗いっ！」
ギョッとした様子で優輝やはるかが陽乃を見つめた。
「コンクールで引退ってことは、地区大会を突破して県大会へ行けば引退は８月初旬、関東大会へ行けば８月下旬、全国大会へ行けば１０月下旬にまで引退は伸びるってことだよ！」
「おぉっ！」と納得した声を駿が上げた。
「そうだよ！　先輩たちの引退時期を伸ばすことなんていくらでもできるじゃん！」
にわかに部員たちが騒ぎ始めた。
「まぁ、嬉しい悩みだね」
そんな後輩たちを見ながら、安和が苦笑した。
「これで士気が上がるなら、いい感じだけどな」
岳彦が笑う。つられてめぐみも笑い「ホント、それで上がるなら安いもんよ」と言った。
「ようし！　それじゃ先輩たちの引退時期を伸ばすため、明日精一杯の演奏をしましょう！」
「はい！」
翔が胸いっぱい息を吸って、大声で言った。
「ナナコウ、ファイト！」

「オーッ！」
全員が笑顔で拳を上げて、音楽室から遠い野球部の部室に聞こえるくらいの大声で叫んだ。

「ただいま」
春樹が家へ帰ると、母の幸恵子（さえこ）が台所で夕食の準備をしていた。
「おかえり。どうだった？　クラブは」
茹（ゆ）でたばかりのとうもろこしを皿に載せてテーブルに置いた。
「うん！　先輩たちがコンクールで引退するってことを聞いたんだけど、それじゃあ逆にどんどん上の大会を目指せばいいって話になって、ますますみんなの士気が上がったよ」
春樹はとうもろこしを頬張りながら制服のカッターシャツを脱いだ。
「いい感じなのね。じゃあ、お父さんにも言っておいでよ」
「うん！」
そう言うと春樹はとうもろこしを置いて、和室へ入った。和室に入って右手。そこに、春樹の父親の写真が仏壇に飾られている。
春樹の父親も、ユーフォニウム奏者だった。七海市の吹奏楽団に所属し、数多くの演奏会に出演し、コンクールにも出場した。しかし、春樹が１０歳のとき、埼玉県で開催された演奏会の帰りに乗っていたバスが交通事故に遭遇。バスが横転し、衝撃で外へ放り投げられてしまった父はそのまま帰らぬ人となった。
下の荷物収納スペースに入れられていたユーフォニウムはケースが少し傷んでいたものの、楽器自体に損傷はなかった。しかし、春樹はそれを見ると父を思い出すからと楽器を押入れの奥深くにしまい、それっきり出してこなかった。
けれども、七海高校に入学してすぐだった。川原で、あの少年を見たのは。
同級生くらいだった。つくし野川の土手沿い。夕焼けに向かって吹いていたのは「情熱大陸」だった。その時、不意に同じ曲をアン

サンブルで吹いていた父の姿がよぎった。
春樹は父が吹くユーフォニウムの音色が大好きだった。その音色が聴けなくなったのは正直、寂しいことこの上なかったが、それなら自分が彼のように楽器を吹けばいいのではないか。このユーフォニウムも眠ったままより、きっと吹いたほうがいいに違いない。父も喜んでくれるだろう。
そして、創部が決まりそうだという話を聞いてあの日、音楽室へ向かった。そこに、あの少年――佐野　翔がいた。
あの日からもう1年以上がたった。春樹が初めて父が演奏する姿を見た、七海市中央ホールで明日、自分は演奏する。
「頑張るよ、父さん」
春樹は仏壇の前でそう呟いた。

「お母さん、お父さん。明日私、8時には家を出るから」
沙希は珍しく家にいる両親に事務的な口調で明日のことを伝えた。
「明日は父さんも母さんも休みだぞ」
俊次が新聞を読みながら言う。智佐子は溜まった洗濯物をたたんでいた。
「そ。じゃあ稚依ちゃんと洋ちゃんとどこか行ってきてあげて。最近私も忙しくって二人のこと、構ってあげられてないから」
「沙希は明日、どういう予定なの？」
珍しく智佐子が沙希の予定を聞いてきた。随分前から何回もコンクールのことは伝えてきたが、やっぱり覚えてくれてはいなかった。特に沙希は期待していたわけでもなかったが、それでもやはりショックだった。
「部活」
そう言っておいた。コンクールといったところで、観に来てなんかはくれない。沙希はそう思っていた。
「そう。じゃあ頑張るのよ」
「うん。おやすみ」

沙希はすぐにリビングを出た。バタン、と響くドアの音が重々しい。

「みんなは観に来てくれるって言ってたな……。お父さんもお母さんも」

初舞台だ。大舞台でもある。そんなわが子を一目見ようと、みんな2年生の親御さんは張り切っているようだった。参観日も体育大会もいつも沙希は一人だった。最初は寂しかったけれど、今はもう慣れっこだ。

「あっしたーはみっんなーでおーでーかーけーだー！」

妙な歌を歌いながら稚依がスキップして廊下をウロウロしている。

「チイちゃーん、明日お父さんとお母さんとどこかいくの？」

沙希は久しぶりに見る稚依の笑顔を見て、思わず聞いた。

「うーん！　あのね、明日はね、ふわぁ！？」

3階からバタバタと降りてきた洋輔が突然、稚依の口を塞いだ。

「おふぃーちゃーん、なにすんもぉ～！」

「ほら、稚依は上へ上がってそろそろアニメの時間だろ！？」

「まらよ～！　放してよぉ」

「ほーら、行こうな～！」

沙希はわけがわからなかったが、あっという間に洋輔は稚依を上へ連れて行ってしまった。その稚依の手から何か、さっき持っていたチケットらしいものを落とした。

「あ、ちょっと。落としたわよ」

「！」

洋輔が大慌てでそのチケットを沙希の手から奪い取った。それからとってつけたような笑顔で言った。

「明日姉ちゃん部活でしょ！　お土産買ってくるから、楽しみにしててね！」

「あ、う、うん」

「それじゃ、おやすみ！」

まだ寝るには早すぎる時間なのに、洋輔はそう言って上へ上がっ

てしまった。しかし、残念ながら沙希はそのチケットを見てしまった。

「まさか、観に来る……のかな」

そのチケットには『吹奏楽コンクール』の字が入っていた。

恭一は車に乗りながら『吹奏楽の為の序曲』を聴いていた。赤信号で停車するたびに指揮を振る練習をする。さすがの恭一もコンクール出場が久しぶりなうえ、指揮を振るなんていうのはコンクールでは初経験となる。それだけに緊張の度合いも高い。ひょっとすると、部員たちよりも緊張しているかもしれないなどと考えてしまっていた。

「ある意味、俺にかかっているかもしれんなぁ」

恭一は青信号になったのにも気づかず、指揮の練習を続けたので後ろから思い切りクラクションを鳴らされて慌ててアクセルを踏んだ。

「……。」

陽乃は真っ暗な部屋で布団に入り、しかし眠れずにいた。

コンコン、とノックの音が聞こえてドアが開いた。夏樹だった。

「ねーちゃん、宿題でわかんないとこあんだけど……って、なんでこんなに暗いの？」

「もう寝るの」

「もう！？」

夏樹は驚いて陽乃の部屋に掛かった時計を見た。まだ午後８時半だ。

「早すぎない？」

「明日寝坊したら大変だから」

「風呂は？」

「入ったに決まってるじゃない。それより、宿題だけど」

「あ、うん！　教えてほしいんだけど」

「明後日にしてほしいな！　明後日にはゼーッタイ教えてあげるから！」
陽乃は布団にもぐったまま、夏樹に両手を合わせて言った。
「ん～……俺は別にいいんだけど。今から寝たら、変な時間に目ぇ覚めない？」
「いいの。早いぐらいが」
「そっか……。じゃ、明日頑張ってね。俺も観に行くからさ」
夏樹は宿題らしい問題集を左手に持ち直し、手を振った。
「ありがと。おやすみ」
「おやすみ～」
夏樹の部屋のドアが閉まる音がした。それから１０分、２０分――。時間ばかりが過ぎるが、陽乃はいっこうに眠りにつけない。
そうこうしているうちに１０時になってしまった。
「寝れない……」
何度寝返りを打ったかわからないほどだ。しかし、いっこうに眠気すら襲ってこない。いつもなら布団に入ってものの２分で眠りに入るというのに。
「意地でも寝てやるんだから」
と、その陽乃の耳元で携帯電話のバイブ音が鳴り響いた。ディスプレイには「かける☆」の表示。
「もしもし～」
思わず不機嫌な声で出てしまった。
「うわっ、なんやねんそのブッサイクな声は」
「失礼ね～、声にブスもカワイイもないでしょ」
「あるでぇお前。今のは最高にブサイクやったな」
「ホンット失礼！」
「そない怒るなよ。お前絶対緊張してると思って電話してんから！」
翔はケラケラ笑いながら言った。
「緊張なんてしてないわよ！　今まであたし、布団に入ってたんだから！」

「布団？」
「そ！　明日に備えて寝ようとしてたの」
「何時から？」
「８時半」
「早すぎへんか！？」
翔がまた大笑いしだした。
「もー！　何がおもしろいの！？」
「だってお前、８時半に寝転がって今まで目、覚めたままやったんやろ」
「ウッ……」
そのとおりだった。緊張してまったく眠れなどしなかった。
「図星やなぁ」
「うるさいなぁ……」
しばらく沈黙が続く。その沈黙を初めに破ったのは、翔だった。
「それじゃ、緊張している陽乃さんに緊張を解くおまじないをやってあげましょう」
「おまじない？」
「そ。じゃあ、準備はＯＫですか？」
「ＯＫです」
そう言った途端、電話が切れた。
「ちょ……」
陽乃は真っ暗になったディスプレイを呆然と見つめていた。するとすぐにメール受信の音。翔の着メロに設定していた『海へ…』だった。
そのメールを開くと、陽乃が写った画像が添付されていた。夕陽で逆光になっているが、間違いなくトランペットを吹いている陽乃だった。
「何よこれ！」
真っ赤になって本文を見た。

陽乃へ☆
今まで陽乃はよく頑張ってきたよ。
それは陽乃以外だったらオレが一番知ってる。
この画像、陽乃が先週の土曜日に練習してた時の画像♪　オレとしては、この陽乃の表情が好き。
明日は確かにコンクールの結果も大事やと思う。でも、それ以上に陽乃らしく、のびのびと楽器を吹いてほしいな♪
オレ、陽乃と生まれて初めて出るコンクールで一緒にソロを吹けて嬉しいです。
陽乃は緊張してるかもしれへんけど、オレと陽乃は一緒です。同じ舞台上におる。そう思うと、安心せぇへん？
明日は、頑張ろうな。
最後に、今日も大好きです（笑）

そのメールは、翔の声も聞こえなければ表情も見えないものだった。けれど、陽乃にとっては翔がまるで隣にいてくれるかのように感じる、温かいメールだった。
「ありがと……翔……」
陽乃はそのメールを見ながら、いつの間にか眠りに落ちていた。
翔は送信完了の文字を見て、すぐに携帯電話を閉じた。返信は来ないだろう。そう思っていた。
携帯を枕元に置き、翔も目を閉じた。
「いよいよ明日か……」
そう呟いたのが自分の耳に小さく響き、翔もすぐに眠りに落ちて

いった。

第１２６話　それぞれの前日（後書き）

いよいよコンクールを迎える七海高校。彼らの緊張度は高まる中、定期演奏会での失敗を乗り越えて上の大会を目指せるのか！？

第１２７話　秒読み態勢へ

７月２６日。いよいよコンクール地区大会の日がやって来た。
「……来たな～」
翔は布団から出ると大きく伸びをした。
「めちゃ天気ええな～！　やる気出るわぁ」
パジャマ姿でもテンションが上がるくらい、今日の天気はいい。
快晴。少し蒸し暑いけれど、朝からセミたちは盛んに鳴いている。
「よーし！　朝ごはん朝ごはん！」
翔はすぐにパジャマを脱いで制服に着替え、下へ降りた。
「おはよう」
友美子が朝食を既に準備して待っていた。
「おはよ！」
「いよいよやねぇ。緊張してる？」
「かなりなぁ。コンクール出るのなんて２年ぶりやし、いっぱいお客さんおる前でホールで吹くのも久しぶりやし」
「そうやろうねぇ。あ、そうそう。今日お母さんもちゃんと観に行くから！　保護者会っていう形で、日曜日やし都合の合うお母さんお父さんも多かったから、けっこうな人数で行くと想うよ」
友美子が嬉しそうに言う。
「ホンマに！？」
「うん。そやから、今日はしっかり頑張ってよ！　昼ごはん、終わってからちゃんとおいしいの、保護者会で用意してるから」
「やったぁ！　めちゃ頑張るわ！」
翔はとびきりの笑顔で友美子にそう言った。
「あ、おはよ～翔」
綾音が眠そうな目をこすって起きてきた。後ろから智輝がひっついて来ている。
「おっ、おはよ！　なぁ、綾音と智輝も今日、観に来てくれんの？」

「嫌やな～。行かへんわけがないやろ？　なぁ、智くん」
綾音が智輝の頭をなでると「ね～」と智輝も返事をした。
「おばあちゃんもお父さんも行くって言うてたから。佐野家はいつでも演奏会には家族総出やん！　今さら変なこと聞かんといて～」
綾音がニヤニヤ笑いながら返したので、思わず翔も「そうでっか！　そりゃどうも」と笑って答えずにはいられなかった。
同じ頃、とっくに目が覚めた陽乃は既に朝食を済ませ、学校へ向かおうとしていた。
「ずいぶん早いけど、学校は開いてるの？」
由利が心配そうに聞く。
「大丈夫。きっと東先生がいるし、それに野球部がもう練習してるから東先生がいなかったら真鍋先生にも頼めるから」
野球部は順調に試合に勝っていっている。ちなみに、吹奏楽部は明日以降の試合で応援に参加する形となった。真鍋先生が吹奏楽部もせっかくの大会に集中してほしいと配慮してくれたおかげだ。
「そう。佐野くんは一緒に行くの？」
「まだ7時半だもん。きっと起きてきた頃だから、あたし一人で行く」
「気をつけるのよ」
「大丈夫よ。もう明るいんだから」
陽乃は笑顔で靴を履き、表へ出た。夏の日差しが玄関に差し込んできて、陽乃は思わず目をつぶった。
「よし！　じゃあ、行ってきます！」
「いってらっしゃい」
玄関を出て自転車に跨ってすぐ、夏樹が自分の部屋から「ねーちゃーん！」と叫んだのに気づいて陽乃は振り返った。
「なにー？」
「今日、俺もお母さんもお父さんもおばあちゃんも観に行くから～！」
「お父さんも！？」

陽乃はかなり驚いた。５月の演奏会にはこなかった祥夫が、わざわざ休みの日にコンクールを見に来るのだ。

「だから、がんばってね！　佐野さんにも伝えといて！　俺、応援してますって！」

「わかった～！　じゃ、またホールでね！」

「行ってらっしゃ～い」

陽乃は夏樹の声を背に、学校へ向かって自転車をこぎ始めた。

つくし野川の土手沿いを走っていると、対岸を女の子が自転車で同じように走っている。陽乃はそれが誰なのかすぐに気づいて声を掛けた。

「ゆいちゃーん！」

優衣だった。優衣もすぐに気づいて「おはよー！　ずいぶん早いね～！」と返してきた。

「昨日８時半に寝たから～！」

「それって早すぎ！」

優衣が大声で笑い出した。

「だって、緊張して寝れないのわかってたから早めに寝たの」

「あたしも一緒だけどねー！」

それを聞いて陽乃も爆笑した。

それから二人は津上橋で合流した。しばらく一緒に走る。

「ナナコウは調子どう？」

「どうだろう……。定期演奏会ではグチャグチャだったけどね」

陽乃はフゥッと心配そうにため息をついた。優衣も同じようにため息をつく。

「カザミもわかんないよ。岩切先輩が怪我しちゃって出れなくなって……。シュウもなんとか復帰してくれたけど、サックスが不安定になっちゃったからなぁ。兵藤先生も心配してそうだよ」

「トラブルはつき物だね」

陽乃が苦笑いする。

「でも、それがあるから刺激的だけどね！」

優衣が笑った。陽乃は少し驚いたが、すぐに「そうだね……。きっとそういうのがあるから、クラブって楽しいんだろうね」と返した。

「今日は、結果は別として自分たちの精一杯の演奏ができるといいね！」

「うん！　ゆいちゃん、頑張ってね」

「陽ちゃんこそ！　それでは、お互いの健闘を祈ります！」

「祈ります！」

優衣と陽乃はそう言って、交差点で別れた。

学校の自転車置き場へ着くと、音楽室から既に打楽器とトロンボーンの音がしたのに陽乃は気づいた。

「ハハァン、きっと……」

陽乃はコソコソと音楽室のほうへ上がっていく。案の定、廊下には慎也と美里の二人が練習をしていた。

「おっはよ！　お二人さん、朝から頑張るね！」

陽乃が突然出てきたので二人は驚いた顔をしたが、すぐに笑って同時に「おはよ！」と返してくれた。

「おはよ」

慎也は少し眠そうだったが、朝はいつもこんな調子だ。

「おはよう！　いよいよ今日だね！」

美里はいつになくテンションが高い。きっと緊張も相まっているのだろう。

「そうだね～。緊張はいい意味でしなきゃね！　東先生もそう言ってたし」

「うん！　ねぇ陽ちゃん！　本番前に、2年生の女子全員で一致団結のためになんかしようね！」

「そっか……いいね、それ！」

「なんか考えとこうね」

「うん！　楽しみだね～」

「そだね！　じゃ、陽ちゃんも練習に来たんでしょ？　引き止めて

ゴメンね」
「いいよ～そんなの。じゃ、また後でね」
陽乃はご機嫌で部室へと入った。少し蒸し暑い。夏場はいつもこの部屋はこうなるのだろう。しかし、そろそろこういった雰囲気も陽乃は好きになってきた。
午前9時が近づくと、部員たちのほとんどが集まってきていた。それぞれが基礎練習をしたり、楽器の調整をしたりしている。その表情は誰もが真剣だ。
陽乃たちトランペットは基礎練習もほどほどにして、譜面の確認をしていた。当日の朝に吹きすぎて本番でバテていては何にもならないからだ。
「課題曲のAから、ベルトーンはくれぐれもズレないようにだけしようね」
安和が自分の譜面の音符を赤ペンでもう一度、印をつける。
「自由曲のメロディは気張り過ぎないようにしてください」
陽乃もしっかりと指示をする。安和がいてくれることで、陽乃の音楽知識もずいぶんと身についた。彼女がいなければ、いろいろ困ることもあっただろう。
全員でロングトーンをする時間になった。その頃には気温もかなり上がってきていたが、この日は特別に冷房の入ったＬＬ教室（英語のリスニングを練習する部屋）を借りていた。これで音程はホールに近い状態で合わせることができる。
「おはよう！」
「おはようございます！」
恭一が部屋に入ると同時に全員が立ってしっかりと挨拶を返した。
「今日は暑いけど、体調を崩さないように全員で最高の演奏をしような！」
「はい！」
「それで、今からの練習だけど、通すのはやっぱりやめておく」
「え……」

部員たちがザワザワと騒ぎ出した。
「理由は、まずバテるのを防ぐため。あとは余計な失敗をして動揺しないためだ。だから、課題曲も自由曲も最初だけ吹いてすぐに終わるぞ。いいな？」
「はい！」
部員たちはすぐに納得して楽器を構えた。
恭一が指揮棒を上げる。打楽器の面々がその恭一をしっかりと見つめる。
指揮棒が降りてすぐに洋之が静かにティンパニを奏でた。それからトロンボーンが慎重に音を奏でていく。沙希が見事なソロをビヴラートをかけて奏でた。
「よーし！　出だしはバッチリだ。出だしがうまくいけば、後は軌道に乗るだろう。よし、自由曲行くぞ！」
「はい！」
指揮棒が今度はクラリネットの面々によってしっかり見つめられた。
クラリネットのトリルとティンパニが印象的な出だしがすぐにトロンボーンとユーフォニウムの勇ましいメロディに移り変わり、それがトランペットとトロンボーンのメロディへと変化した。
そこで恭一が指揮棒を止めた。ピタリと演奏が止まり、沈黙がしばらく続いた。
「よし……この調子で今日は行くぞ！」
満面の笑みを浮かべた恭一を見て、部員たちも思わず笑顔になった。
「はい！」
「それじゃこの後、金管と打楽器はすぐに楽器を積んで木管楽器は出発して楽器下ろしに当たること。移動の際は事故等には気をつけて。以上！」
「起立！」
翔がコンクール前最後の号令をかけた。

「礼！」
「ありがとうございましたー！」
３５人の爽やかな声が、廊下中に響くほど大きく聞こえた。
陽乃が時計を見ると、午前１０時３０分を指していた。コンクール本番まで、約3時間となった。
「いよいよ秒読みかな……」
陽乃は期待に溢れた顔をして、そう呟いた。

第１２７話　秒読み態勢へ（後書き）

コンクール当日。直前の練習で恭一は満面の笑みを浮かべたので、部員たちも安心した様子。
コンクールまでいよいよ秒読みに入った七海高校吹奏楽部。果たして、自分たちの力量を精一杯発揮できるのでしょうか？

第１２８話　『伝説の草原』

楽器を降ろし終え、指定の楽器置き場に楽器をまとめた七海高校の部員は客席に入って他校の演奏を聴き始めた。
「ねぇ、次はどこ？」
陽乃がパンフレットを持っている翔に聞いた。
「えーっと……川崎市立橋詰高校。課題曲３番、自由曲リバーダンス」
「リバーダンスって、あのサックスの息継ぎが全然ないソロがあったやつ？」
「そやそや。そんなんやるくらいやから、レベルも高いかもなぁ」
暗転していた舞台の照明が点いて、橋詰高校の部員たちが陽乃たちにもはっきり見えた。
「３０人くらい……かな」
「そやなぁ。人数的にはオレらと変わらへんな」
「シーッ！　喋っちゃダメ！　もう始まるよ？」
美里が二人の頭をパンフレットで後ろから叩いた。
「ゴメンゴメン」
陽乃が苦笑いで美里に謝る。
「痛いな～お前……。乱暴すんなや」
「それよりホラ！　注目！」
美里に押されるがまま、翔は舞台のほうを見つめた。
顧問の先生らしい人がお辞儀をして、客席から拍手が沸く。しばらくの沈黙の後、先生が指揮棒を降ろした。
課題曲３番『パルセイション』。不協和音の連発するこの曲は、なかなか音量の大小も激しい。
「この曲を選ぶってことは、この高校は和音に自信があるみたいですね」
亮平がソボッと呟く。春樹と拓真もウンウンとうなずく。

「俺らがこの課題曲だったら、もっと先生にしごかれてたかな」
春樹が苦笑いで言った。
「嫌なこと言うなよ」
拓真は本気で嫌がっているようだ。そうこうしているうちに課題曲はフィナーレを迎えて、一気に静寂が戻ってきた。
「すっげぇな……」
慎也が最後のトロンボーンの旋律を聴いて身震いさせていた。
「高校のレベルってここまで高かったの？」
絵美も呆然としている。由美子と沙希に至っては口も開かない。
やがて、自由曲の演奏が始まった。始まったソプラノサックスのソロは、翔はもちろん麻綾、さゆり、はるかの４人も釘付けだ。
「すっげー！」
遠く離れた席では、夏樹も同じようにそのソロに夢中になっていた。サッカーができなくなってから随分経つが、サックスという新しいものに夢中になれていた。
「ちょっと、ちょっと！　見えない！」
後ろから小声でグイッと夏樹の頭を押さえつけたのは、綾音だった。
「佐野！　お前また……」
「ちょっと夏樹！　静かに聴いてなさい！」
由利に叱られて、ようやく夏樹と綾音が落ち着いて演奏を聴き始めた。
「スッゴかったなぁ」
翔がようやく口を開いた。陽乃も橋詰高校の演奏を聴いて思わずため息を漏らす。
「ホント……。あたしたち、こんな所にいていいのかな」
「な、なんや突然？」
「練習とかしたほうがいいような気がしてさぁ」
陽乃はフゥッとため息をまたついた。
「だーかーら、幸せ逃げるってのに」

翔はグッと陽乃の口を塞いだ。陽乃は少し赤くなりながらもその手をのけた。
「そんなこと言ったって……心配なんだもん」
「心配なんていらんやろ」
「でもなぁ……」
「大丈夫や」
翔はニッと笑った。その笑みには、確かに自信が満ち溢れていた。
「オレらはオレらなりに、ずっと練習してきたんや。確かに、他の学校と比べたら練習量は少ないかもしれへんよ。それでも、ずっと頑張ってきたんやから。今日はオレらの頑張りを、オレらなりの演奏で見せるのが目標！　そんで、あわよくば次の大会！」
「……。」
「な？　そう思えば、楽になるやろ？」
また笑顔。その表情に思わず赤くなってしまう。本番前にこの笑顔はある意味で良くないと思った陽乃は下を向いて「うん……そうだね」と小さい声で答えた。
「カケル！　次は風見台だよ！」
「おっ！　遂に来たかぁ！」
春樹に呼ばれて翔はすぐに姿勢を戻した。陽乃もドキドキを抑えつつ、姿勢を戻す。すると、隣に誰かがやって来た。
「隣、いい？」
「あっ……ど、どうぞ」
それは翔平だった。翔たちはまだ気づいていないようだ。
「もう退院ですか？」
「そりゃーね！　腕の骨折くらいでそないに長いこと入院なんてせぇへんよ」
「そうですか……。でも、最後のコンクールなのに……その……」
マズい話題になってしまったかと陽乃も思わず黙り込んでしまう。風見台高校の部員たちが舞台へ入ってきた。弦バス、チューバ、バリサク（※1）、ユーフォ……今となっては見慣れた楽器がどんど

ん入ってくる。そして、陽乃と翔平はサックスの修平の姿を見つけた。

「出られへんなんて、思ってへんよ」

「え？」

「こんな骨折、県大会までに治したる」

翔平は堂々と入場する修平の姿を見て、ハッキリと言った。

「俺を……修平たちはきっと県大会へ連れて行ってくれる。そう、信じて俺はここから修平たちを見守ってる。一緒にコンクールに出てるんや」

（大丈夫……。いつもどおり、演奏すればいい）

修平は舞台上で大きく呼吸した。いつもなら左隣にいてくれるはずの翔平は今日、いない。今まで自分が翔平に頼って課題曲や自由曲を吹いていたのだと改めて感じさせられる。

打楽器のメンバーの準備も終えたようで、舞台も客席も静まり返った。章義がスタッフらしい人に合図をする。

同時に、照明が一気に灯った。まぶしさに一瞬修平は目をつむったが、すぐに慣れてしっかりと章義の目を見つめた。章義もしっかりと全員に目配せし、力強く全員に向かってうなずいてからアナウンスを待った。

「プログラム１２番、私立風見台高等学校吹奏楽部。課題曲１、自由曲、ヤン＝ヴァンデル＝ロースト作曲『プスタ』より第１楽章、第３楽章、第４楽章。指揮は、兵藤章義です」

お辞儀をすると、拍手が沸く。

翔も思わず拳を握り締めた。自分の演奏のときのように、緊張度が高まる。

指揮棒が降りると、静かな木管アンサンブルが始まった。修平はここからいきなりメロディがある。芯のある音がホール内に響き渡った。それを引き継ぐのは、オーボエだ。サスペンドシンバルをきっかけにクラリネット、アルトサックスの音色が蘇り、続いてフル

ート、オーボエ。そしてトランペットが加わると同時に一気に曲が加速し、タムタムの音が聞こえた。トランペットとフルートが主旋律を奏でる。

クラリネットとオーボエからフルート、アルトサックスへ。メロディを奏でる楽器はどんどん入れ替わる。トランペットが再びメロディ。裏でフルートとピッコロ。さらにその裏を継ぐのがホルンだ。チューバや弦バスの複雑な動きも見逃せない。

（いいで、修平……！　サイコーや！）

翔平は感情を込めて吹き続ける修平の姿を見て思わず鳥肌が立った。

そしていったん曲が静かになったかと思いきや、金管の勇ましいメロディとチューバの降下の音が一気に目を覚ますような印象を与えて曲のテンポが落ち着いた。

「すっごい……」

夏樹と綾音はただ、低音と高音のコントラストに驚いていた。そしてトランペット、トロンボーンのファンファーレのような音とサスペンドシンバルをきっかけに曲が再現部へ戻る。

修平の額には汗がうかんでいた。空調が効いているホール内とはいえ、照明の熱さとテンションが加わって、風見台高校の部員たちは汗をかき始めていた。

「……。」

陽乃は思わず拍手をしてしまいそうになった。ここまで演奏に一体感を持たせる学校は、初めてだったのだ。

部員たちがすぐに移動を始める。時間にしてわずか１０秒ほど。この移動にそれほど時間をかけられないのは、やはりコンクール特有の「１２分以内」という制限時間が影響していた。

指揮棒が降りると同時に木管楽器のどこか悲しげなメロディ。そして厚みを増す音色。そのイントロが終わると、タンバリンが印象的な第１楽章が始まった。楽器が加わると同時にテンポアップしていく。ピッコロの鮮やかな演奏がホールへ響き渡る。

「カットしてるなぁ」
翔は自分たちが演奏したときとは曲が違う流れになっているのに気づいた。いきなりホルン、トロンボーン、ユーフォニウムのアンサンブル部分に差し掛かったのだ。コンクールの自由曲では残念なことに、時間を意識するがゆえに作曲者が意図するものとは雰囲気を異なる、少し崩れたカットになることがあるのだ。
幸い、風見台高校の選んだ『プスタ』はそういった可能性が低い曲だった。そして再現部に入り、最後はすごい速さで一気に吹き終えた。
第3楽章。クラリネットのソロがホール内にただ一つ、鳴り響いた。
「ステキ……」
絵美がウットリしているのもつかの間、素早いテンポでメロディが始まった。目を覚まさせるような金管群の鋭い音色。チューバ、ホルンと加わり木管の強烈なトリルと同時にメロディが再現される。雰囲気が一気に変わり、オーボエとピッコロのメロディ。後ろでウッドブロックが鳴っている。ユーフォとサックスのメロディ、それと同じ形をクラリネット類が吹いてテンポがいったん静まる。
再びクラリネットのメロディ。そしてそれをトランペット、トロンボーンが引き継ぎ、木管楽器は一番激しいトリルを吹き始めた。裏でホルンが対旋律を吹く。そしてトゥッティで第3楽章は締めくくられた。
第4楽章。今までに比べるとゆったりしたメロディ。しかし、音量の大小の差が激しく、驚かされるところがある。そして地味にテンポがどんどん上がったり急に落ちたりと油断のならない展開が待っている曲だ。
突然アップテンポになった。うたた寝していた翔の席の前のおじさんが驚いて目を覚ました。それぐらい印象が変わるのだ。
サックスを見てみると、ひたすら同じ音を吹き続ける伴奏なのでかなりしんどそうだった。翔自身、この曲を吹いたときは同じよう

にしんどかった。
　トロンボーンとユーフォニウムの動きも半端なものではない。ふと春樹の指を見ると、なぜか吹いたこともない曲の指を示していた。
「あれ？　春やん……この曲吹いてない……よね？」
「うん。でも、なんとなくこの音かなぁって思っただけ」
「そっか」
　翔は特に気に留めず、フィナーレに差し掛かった『プスタ』を楽しんでいた。ホルンの強烈な音色。ユーフォニウムが下で支え、ホルンの音色をトランペットが引き継ぐ。クラリネットなどのトリルとベードラの大きな音が聴こえ、テンポが落ちていよいよ曲の最後が締めくくられる。
　ティンパニの音とともにテンポはゆったりとなり、全員がロングトーンをして曲が終わった。
　盛大な拍手とともに風見台高校の部員たちが立ち上がり、章義がお辞儀をするとともに舞台は暗転した。
「岩切さん。最高でしたね」
「……ホンマになぁ」
　翔平の目から涙がこぼれ落ちていたように見えたのは、陽乃の気のせいだったのだろうか。

第１２８話　『伝説の草原』（後書き）

（※１）バリサク：バリトンサックスの略称。
タイトルの由来は『秋風の訴え』＋『プスタ（意味はハンガリーを中心に存在する広大な平原の名称）』の合成語です。

第１２９話　『海　序曲』（前書き）

このコンクールにおける座席配置イメージ図を設定しております。
コチラ→ｈｔｔｐ：／／１５０．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ５２４／

第１２９話　『海　序曲』

午後１時。
「はい、そこまででお願いします」
役員の先生が七海高校吹奏楽部のリハーサルが終了したことを告げた。
「よし。それじゃあ本番、頑張っていきましょう！」
恭一が今までで一番大きな声を上げた。
「はい！」
それに応えるように、部員たちも今までで一番大きな返事をする。
それからすぐに部員たちは楽譜を片付けて、先生たちに「ありがとうございました」と礼を言いながらリハーサル室を後にする。
「陽ちゃん先輩！　頑張りましょうね」
彩香がニッコリ笑いながら手を差し伸べた。
「ほら、安和先輩とイサムちゃんも」
「う、うん……」
勇が少し赤くなりながら彩香の手の上に右手を重ねた。
「なんかこういうの、あたし好きだわ」
安和も嬉しそうに手を重ねる。
彩香、勇、安和。そして陽乃の手が重なった。
「七海高校吹奏楽部トランペットパート～、ファイト！」
「オーッ！」
４人の掛け声を聞いて翔と麻綾が笑う。
「私たちもします？」
麻綾が笑いながら言った。
「いや、ええわ。どうせ朝倉のヤツが『真似しないでよ～！』とかイチャモンつけてくるからなぁ」
「やだ、ちょっと似てる」
さゆりがクスクス笑う。

「せやけど、ホンマに頑張ろうな。オレ、1年生のみんなが今年入部してくれて、ホンマに助かった。去年までとは大違いやわ」
翔は黒靴を履きながら麻綾、さゆり、はるかに言った。
「私たちも、先輩と一緒にコンクール、それも初めてのコンクールに出れること嬉しいですよ」
はるかが素直にそう言う。翔は少し赤くなった。
「ホンマに頑張ろうな。上へ行けても行けなくても、笑顔でおろうな」
「あたし……それできるかどうか心配」
さゆりが苦笑いする。はるかがグィッとさゆりの口元を両手で引いて「私が意地でも笑わせてあげるから」と言った。
「コラコラ！　本番前にケガしたらシャレにならんで」
翔がさゆりのスゴい顔を少し笑いながら、はるかの手を放そうとした。
「本番前とは思えませんね、サックスは」
徹が羨ましそうに呟く。
「ゴメンな～……俺がすっかりガチガチになってるがために」
慎也はさっきから何度も冷や汗を拭いている。
「先輩、リラックスのために深呼吸をしましょう」
亜紀が背中を伸ばして深呼吸を始めた。それぞれのパートで最終の打ち合わせやリラックスをしながら、暗い地下道を抜けて舞台裏へと向かう。
「……。」
陽乃が舞台裏へ入ると、まだ前の団体がズラリと並んでその出番を待っている姿が目に入った。
「スッゴい人数……」
５０人ほどいるだろうか。確実に七海高校より人数は多い。
「あたしたちよりずっと人数多いよ、カケル」
陽乃は少し不安になって翔に耳打ちした。
「なんや？　人数なんかで不安なんか」

「うん……だってあれだけいたらきっと音も大きいだろうし、迫力あるだろうなぁと思って」
「うーん、まぁそやろな」
陽乃は否定してくれる答えを待っていたのだが、こうもあっさりと肯定されてしまっては不安がちっとも解消されない。
「んもう。そんな答え待ってたんじゃなかったのに」
「でもな、人数なんて関係ないで」
「そうなの？」
「あぁ」
翔は力強くうなずいた。
「どんだけ人数がおっても、それだけのハーモニーが作られてないとアカンねん。みんなのハーモニーが大切なんや」
「……。」
「どないしたん？」
「いや……みんなのハーモニーって響きがいいなって思って」
「へへ。みんなのハーモニー。これ、ただの受け売りやねんけどな」
「そうなの？」
「カッコえぇやろ。オレもこの響き好きやねん」
そうこうしているうちに、前の団体が舞台へ上がっていく。
「あ……そろそろパート順で並んだほうがいいで」
「そだね。じゃあ……」
翔がギュッと陽乃の手を握った。笑顔がいつもより暗いところなのに、まぶしく見える。
「頑張ろうな」

前の団体の演奏が終わった。入場の時間が近づいてくる。
「……。」
亮平が深呼吸する。彼から順番に入っていくのだ。次に岳彦、拓真、春樹、愛実と続いていく。
「どうぞ」

暗い中、亮平が弦バスを抱えて入場する。岳彦の後を拓真が追い、少し背が低くなって春樹。それから愛実。その後が慎也、亜紀、徹。それから陽乃、安和、彩香、勇。ホルンの雪子と順平が続く。

木管ははるか、翔、麻綾、さゆりからの順番。それから駿、誠、健之佑、佳菜、由美子、沙希。クラリネットが優輝、めぐみ、みゆき、光瑠、梨子、絵美。

打楽器は準備が多いため、別のところから入る。美里、洋之、あずさ、恵梨、優。これで全員が揃った。

「姉ちゃんたち、まだよく見えないね」

家族総出で珍しく来た朝倉家。夏樹が陽乃の姿を探すが、見つからない。

「お母さんもまだ見つけられないのよ。お義母(かあ)さん、どうです？」

「あたしもまだねぇ。こう暗いとどうにもねぇ」

由利も知恵子も見つけられていないようだ。

「人数が少ないのにね、トランペットは。あなたはどう？」

「ひな壇の1段目、左から5人目が陽乃だ。間違いない」

「あら！　スゴいじゃないの、祥夫。アンタが一番とは思わなかったよ」

祥夫だって、陽乃のことは気になっているのだ。見逃すはずなどなかった。

（平常心……平常心……）

翔は心の中で何度もそのセリフを繰り返し呟いていた。コンクールなんて久しぶりだったために、翔も実は緊張していた。

恭一が入場する姿が見えた。いよいよ、そのときがやってきた。

（……よしっ！）

恭一が指揮台の横に立ってからしばらくして、照明が灯った。まもなくしてアナウンスが聞こえる。

「プログラム２０番。七海市立七海高等学校吹奏楽部。課題曲４、自由曲、坂田雅弘作曲『吹奏楽の為の序曲』。指揮は、東　恭一です」

恭一が客席に振り向き、お辞儀をすると拍手が沸いた。陽乃のほぼ正面に、スタンドのライトが5つ灯っているのが見えた。あれがきっと、審査員なのだろう。

恭一が全員のほうを見る。

(平常心)

そう言ったように見えた。すぐに指揮台に上がる恭一の姿を見ていると、陽乃の緊張度も一気に上がった。

しかし、それ以上に緊張していたのは優だった。定期演奏会での雰囲気以上に、お堅い空気が漂っていたので彼が失敗してしまわないかどうか、恭一自身が実は一番不安だった。

恭一が指揮を降ろす。すると、実に緊迫感漂う音でティンパニを洋之が奏でたのだ。最初は下を向いていた審査員も思わず顔を上げた。

トロンボーンの和音が煌(きらび)やかな音を奏で、クレシェンドを効かせたシロフォンを初めとする上昇系の音がホールに響き渡る。

冒頭部分の沙希のソロが静かに響き渡る。夏樹は小さな音が初めて、自分の近くで鳴っているような錯覚を起こした。沙希の音色はそんな不思議な印象を与える。沙希にしてみれば、要所要所ではいるティンパニの音がメリハリをつけてくれるので、メロディも吹きやすかった。

そこへ翔が加わる。アルトサックスの低音というと、小さな音量で吹きにくいものだが翔は手慣れたものだった。沙希が作った音の世界を壊さない、慎重で繊細な音色が聞こえてくる。

曲の雰囲気が変わった。少し厚みの増すこの部分はトロンボーンとトランペットの打ち込み、そして恵梨のシロフォンがモノを言う。やわらかい印象を与えるメロディとは対照的に、堅い音を出す恵梨。そして優のサスペンドシンバルが海際の波のようにザァァッと音を立てる。

再び翔のソロ。そこで音楽の雰囲気が変わり、またしても翔の一瞬だけだがソロが聞こえた。そして、いよいよ春樹のソロがやって

くる。温かい、そして気持ちのこもったソロ。春樹自身も驚くほど、綺麗な音色がユーフォから出て行く。それを引き継ぐ木管族のメロディ。やがて、雪子のホルンが響く。ちょうど、山間から聞こえてくる山彦のように。そしてそれに応えるように陽乃と春樹のソロが始まり、曲がピークを迎えた。

あずさのクラッシュシンバル、優のサスペンドシンバルがその様子を伝える。そして再び翔のソロが聞こえ、その後に洋之のティンパニと美里のスネアが曲の再現部が近づいてきていることを知らせた。クレシェンドとクラッシュシンバルの後に、再現部が始まった。沙希が冒頭と変わらずソロを吹き、翔が加わる。

同じ部分を聞いているはずなのに、綾音は初めて聴くような気がしていた。そう。ほとんどが再現部とだけあり、同じはずなのだが、まったく違う曲に聞こえる。

とうとう課題曲のフィナーレがやってきた。テンポが上がり、最後に低音の勇ましい打ち込みで曲は見事に終わりを告げた。

課題曲が終わるとすぐに部員たちは移動を終えた。１０秒もかからない移動だった。そして、自由曲に入る。

恭一が指揮を振ると、静かにクラリネットがトリルを吹き始めた。そしてあずさのサスペンドシンバルの直後に春樹、愛実、慎也、亜紀、徹のたった5人のメロディが始まった。鋭い音がホールの隅まで響いていく。トランペットが加わってもそれは失われることなく、勢いを保って一気に前奏の主題が終わった。

クラリネットのやさしい旋律。そして時たま入るトランペットトロンボーンの主題。そのコントラストは定期演奏会のときとは比べ物にならないほど鮮やかだった。

やわらかいメロディは安心して聴くことができる。時々聴こえるトライアングルの音。綾音はその音が印象的でいったい誰が鳴らしているのか探してしまった。楽器のイメージにピッタリな小柄な男の子（注※優）だった。トロンボーンの旋律の後、一気に静かな雰囲気に曲が変わった。

それからしばらくは雪子と順平の世界だった。華麗で、それでいて芯のある二人のソリだ。吹いている音は異なるので、それぞれのソロと言っても過言ではないだろう。フルートの降下音の後はアルトサックスも加わる。

トロンボーンの合図と同時にアルトサックスとホルンの掛け合いが始まった。掛け合いとはいわば、楽器同士の語り合いのようなものだ。いつもは音程が乱れがちだったこの部分も、今日は綺麗に聴こえている。

木管の上昇系の音の後は、陽乃のソロだ。

（大丈夫。あたしは、一人じゃない）

陽乃はソロだとは思っていなかった。下ではトロンボーン、ホルンが支えてくれている。恭一が指揮を振ってくれている。絵美も、由美子も沙希も休みだけれども、同じ曲に参加する大切なメンバーだ。

それに、由利、祥夫、知恵子、夏樹という家族が客席で見守ってくれている。みんなで、この演奏空間を創っているのだ。陽乃はその一員に過ぎない。彼女はそう考えていた。

「陽ちゃん……！」

艶やかな演奏に、優衣が一番感激していた。

「あたしでもそんな音……出せるかわかんないよ」

彼女は感激のあまり、涙していた。

そしてサスペンドシンバルをきっかけに木管楽器が陽乃の旋律を引き継ぐ。恭一はそのとき気づいたが、めぐみが涙を流しながら吹いていたのだ。どういう理由かわからない。けれども、彼女は嬉しそうに笑いながらも涙を流すという、実に複雑な状態だった。

ゆっくりな部分もピークを過ぎ、クラリネット、ホルン、フルートのやわらかい音色が静かに響く。とても、静かだった。

そして再び出てきたクラリネットのトリルとトランペット、トロンボーンのメロディ。再現部だ。

クラリネットのメロディ。トランペットとホルンが引き継ぎ、再

びクラリネットとサックス。そしていよいよフィナーレに差し掛かった。

トランペットとトロンボーンのメロディがF（エフ）の音を伸ばし続ける。フルートとピッコロが鋭いトリルを吹き放つ。佳菜がしっかりと恭一の指揮棒を捉えて放さなかった。

クラリネットの豊かな音色。チューバの芯のある音。それらが次第に重なり、リタルダンドしていく。ピッコロ、フルート、トランペット、ホルンの勇壮なメロディ。シンバルでテンポが一気に加速し、美里のスネアがそれをさらに促す。そして打楽器の音と全員のB♭のトゥッティで曲は見事に終わりを迎えた。

恭一が指揮棒を降ろし、指示と同時に全員が立ち上がった。翔の額にも、陽乃の額にも、恭一の額にも汗が流れている。けれども、誰一人疲れた顔はしていなかった。

拍手が沸く。翔にとっても陽乃にとっても、それは今までで最も快感な拍手だった。

第１２９話　『海　序曲』（後書き）

見事にコンクール初舞台を乗り切った七海高校吹奏楽部。果たして、その結果は……！？

タイトルの由来：課題曲『海へ…吹奏楽のために』と自由曲の『序曲』の部分を組み合わせました。
また、翔が口にした「みんなのハーモニー」はいつもコメントくださるＧＴ．ｓｐｉｒａｌさん著作『みんなのＨａｒｍｏｎｙ～夢と希望のアンサンブル～』を参考にさせていただきました！　ありがとうございました。

第１３０話　ドキドキ前のひととき

本番を終え、舞台から降り、地下道を通って楽屋口から外へ出ると一気に夏のきつい日差し、蒸し暑さ、そして道路や雑踏の喧騒が陽乃たちの耳に入ってきた。まるで先ほどの舞台での演奏が夢か幻だったかのようにすら思えてくるほどのギャップだ。

「お疲れ、陽ちゃん」

後ろから声を真っ先に掛けてきたのは、絵美だった。

「お疲れ、エミリン」

「定演とは……比べ物にならないくらい良い演奏できたね！」

絵美が汗ばみながらも笑顔で陽乃に言った。陽乃もそれは同じ気持ち。まったく後悔する部分なんてないのだから。

「ほら、佐野くんにもお疲れって言いに行かなきゃ！」

「うっ、うん……」

緊張した面持ちで陽乃は前を歩く翔の元へ走っていった。

「か、翔……」

「……。」

「翔？」

すると、急に翔が部員たちの集団から離れて壁にもたれかかった。

「ど、どしたの！？」

陽乃が驚いて声を掛けた。

「いや……」

翔がクスッと笑った。

「よく失敗せんと……ソロ吹けたなぁって思ってさ」

その目から、涙が一筋こぼれ落ちた。一気に緊張が解けたようで、手も震えていた。

「最高だったよ。あたしも、ついつい乗せられて柄にもなく体揺らして吹いちゃったもん」

「……そうなん？」

「うん！　きっと客席の人みーんな、翔の音に惚れてたからね！」
「そ、そうかいな！」
翔は顔を真っ赤にして陽乃から目を逸らした。
「カケルー！　朝倉ー！　早く来いよ～」
遠くから岳彦が二人を呼んだ。
「え？　まだ何かあるの？」
流れをよく把握できていない陽乃はポカンとした様子を浮かべた。
「行くで！」
「どこに？」
「ホール前の噴水！」
翔が言う、そのホール前の噴水があるスペースは実に都会とは思えない空間が広がっていた。噴水があるスペースの周りは樹木が植えられていて、そこかしこから木漏れ日が差し込んでいる。丸く周りを囲む樹木があるので、当然噴水のところだけは吹き抜けのような形になる。そこから見える夏の青空が透き通っていて、綺麗だった。
「……綺麗～。中央ホールってこんなスペースあったんだね」
陽乃たちはいつも楽屋入口から出入りしていたので、このスペースのことは知らなかったのだ。
「はーい！　七海高校のみなさーん、集合っ！」
大学生より少し年上くらいだと思われる若いカメラマンが部員たちを呼んだ。
「まず、パート写真を撮ります！　各パートで集まって1分間、ポーズとかを考えて決まったら近くにいるカメラマンを呼んで撮ってもらってください！　その後、全体写真を撮ってから3年生だけで写真を撮ります！　それでは、パートで集まって～！」
その声にバラバラだった部員たちも集まってワイワイとポーズを考え始めた。
「どうします？」
彩香が嬉しそうに陽乃に聞く。

「とりあえず、先輩たちは前でしょ」
勇がグイグイと陽乃と安和をくっつけた。
「なんか、恥ずかしいね」
安和は思わず照れてしまった。
「いいじゃないですか！　イチャイチャしましょうよ！」
陽乃はグイッと顔を安和にくっつけた。
「それで、楽器はあたしと勇ちゃんが右手で持ち上げて、彩香ちゃんと安和先輩は左手で持ち上げる！　ＯＫですか？」
「いいですね、それ！」
彩香がグイッと空に向かって楽器を持ち上げた。
「採用！」
勇も同じポーズを取った。
「すいませーん！　トランペット、写真お願いしま～す」
安和が今までで一番明るい声でカメラマンを呼んだ。
「それじゃフルートさん、行きますよ～、１、２、３！」
佳菜、由美子、沙希のフルート組が写真を撮り終えると次に誠、健之佑のダブルリード組が写真を撮る。
どのパートも個性が出ていていろんな写真ができそうだった。
「クラリネット戦隊、集合っ！」
めぐみが呼びかけると、彼女を中心に絵美、光瑠、優輝、みゆき、梨子、駿の６人が集まった。
「これでお願いしまーす！」
「はぁい！　では、１、２、３！」
「すいませーん！」
雪子がカメラマンを呼ぶ。
「ホルンもお願いします」
そういうと順平と雪子はホルンのベルを帽子のように被った。
「おもしろーい！　雪ちゃんが考えたの？」
美里が笑いながら雪子に聞く。
「ううん！　順ちゃんが考えてくれたの」

「へぇ～？　順ちゃん……ねぇ」
美里がニヤリと笑うと、雪子の顔が赤くなった。
「はいはい、それじゃホルンさんいきまーす！」
「すんませーん！」
聞こえてきたのは、慎也の声。
「ボーンもお願いします」
彼らはスライドを重ね合わせて写真を撮った。もちろん、背の高い慎也が中央だ。
「バスパもお願いします」
岳彦と拓真がユーフォニウムを持って、亮平と愛実が重そうにチューバを抱えていた。どうやら楽器を交換したらしい。背の高い拓真がユーフォを持つとホルンくらいにしか見えない。
「あの～、もう一人いなかったかな？」
カメラマンがもう一人のバスパートメンバー、春樹を探した。
「俺、ここにいます！」
弦バスの後ろに隠れていてどうやら春樹の姿はカメラマンから見えていなかったらしい。
「あぁ、ゴメンね！　もうちょっと楽器低くしてくれるかな……」
「こ、こうですか？」
「そうそう！　それじゃいくよ！　1、2、3！」
美里たちパーカッションは楽器を持って来れないので、悔しそうにしている。
「あ、それじゃこうしましょうよ」
恵梨がヒソヒソと他のメンバーに何やら提案したようだ。
「それいいね！」
優が嬉しそうに笑う。
「いいんじゃね、それ！」
洋之も納得したようだ。
「大賛成！」
大きな声で唯一返事をしたのはあずさ。

「それじゃ、各自好きな楽器を持ってくること！」
美里の一言でパーカスメンバーは部員たちのところへ散っていった。
「しーんや！」
美里はもちろん、慎也の楽器を借りるしかない。
「何だよ」
「素っ気ない返事。楽器貸してくんない？」
「なんで。お前パーカスだろ？」
慎也は嫌そうに楽器を後ろへ隠した。
「ダメだよ！　打楽器はバチしかないの。そんなの寂しすぎるから、みんなから好きな楽器借りることにしたんだよ」
「なんだよ、それ。勝手に……」
「ね、お願い、お願〜い！」
「しょーがねぇなぁ……ほら。マッピ落とすなよ」
慎也は渋々といった様子だったが、トロンボーンを美里へ手渡した。
「ありがと！　恩に着るよ」
美里が大慌てで戻ると、案の定美里が一番遅かった。
「遅いです！」
恵梨がプリプリしている。洋之と優はクスクス笑っていた。どうやら全員、慎也とのやり取りは見ていたようだ。
ちなみに、恵梨は光瑠のクラリネット。優は佳菜のピッコロ。洋之は勇のトランペット。あずさは雪子のホルンを借りてきていた。
「サックスさーん！　ポーズ、決まったかい？」
「あ、はい！　すんません、お待たせして」
翔たちは慌ててカメラマンの元へ駆け寄った。
「それじゃ、ポーズをどうぞ！」
すると、全員が大きく口を開けた。翔が「サ」、麻綾が「ッ」、さゆりが「ク」、はるかが「ス」という形をしている。
「先輩……いま思ったんですけど」

はるかが静かに聞く。
「なに？」
「『サ』と『ッ』、『ク』と『ス』ってそれぞれ響き的に似てるから、なんか同じ口の形になりません？」
「あ……しもた」
どうやら翔は気づいていなかったらしい。それを聞いて麻綾とさゆりが大笑いする。
「あー！　えぇねん、えぇねん！　はい、写真撮るで！」
「いいかい？」
「はい！　お願いします！」
「それじゃいくよ～……1、2、3！」
シャッター音が聞こえた。
「はぁい！　それじゃ、今度は全員で写真を撮ります！　一番上の段にはトランペット、トロンボーン、ホルンさん！　2段目にはサックスさん、クラリネットさん、フルートピッコロさん、オーボエバスーンさん！　で、最後にチューバユーフォーさん、パーカスさんと先生でお願いします！　先生は、中央ね！」
部員たちは指示どおりに並んでいく。3分ほどかかって全員が並んだ。翔の真後ろに陽乃がいる。陽乃はそれだけでなんだか嬉しかった。
「ポーズは好きにしてください。1枚目はマジメに、はい、いきまーす！　1、2、3！」
このメンバーで初めて撮る写真だった。陽乃は絶対、この写真を買おうと思った。
「はい、では次2枚目いきまーす！　はい、1、2、3！」
この2枚目は全員でピースサインを取った。
「ねぇ、最後どうする！？」
めぐみが大声で呼びかけた。全員がザワザワと騒ぐ。
「じゃあ、パーとチョキで7作ろう！」
翔が大声で応えた。

「七海高校の7！」
拓真が続ける。
「それでいいと思う！」
最後に言ったのは、陽乃だった。
「はぁい！　それじゃ決まりですね。いいですか？　いきますよ～！」
「ハーイ！」
「1、2、3！」
全員が笑顔。屈託のない、素直な笑顔で全員が映ることができた。
「はい、それじゃ今から保護者会の方が差し入れのパンを持ってきてくださってるから、各自2個ずつ好きなパンを受け取って食べなさい」
恭一が言う方向を見ると、安和、翔、健之佑の母親が大きな袋を抱えて待っていた。
「おいしそ～！」
美里が真っ先に走り始めた。パーカスメンバーが後を追うように走り出した。
「陽乃、オレらも行こう！」
「うん！」
結果発表までまだまだ時間がある。七海高校のメンバーは演奏の余韻に浸りつつも、その時間が来るまでのひとときを楽しんでいた。

第１３０話　ドキドキ前のひととき（後書き）

演奏を終えた部員たちが結果発表まで過ごす、わずかな安息の時間。
この時間も演奏とは別に、何かをもたらしてくれるのかも……？

第１３１話　信じて

ザワザワとする中央ホール。総勢３２団体の高校の部の演奏が終わり、いよいよ結果発表の時間が近づいてきた。
現在の時刻は午後６時２０分。予定では午後６時半ちょうどから結果発表が行われる予定だ。
「結果発表……もうすぐだね」
由美子がギュッと両手拳を握り締めて呟いた。
「まぁ……多少は遅くなるやろうけどな」
翔が苦笑いでそう言った。
「そうなの？」
陽乃がため息をついた。
「せっかく意気込んで待ってたのに」
「考えてもみぃや。３２団体もあるんやで？　その中から金賞、銀賞、銅賞を決めてさらに金賞の団体から県大会へ進む団体を選ぶんやからな」
「そうだよねぇ……。うまいとこばっかりだったから余計時間もかかるだろうな」
沙希もため息をつく。
「中学のときはどうだった？　サキティ」
雪子が興味深そうに聞いた。
「中学のときなんて、七海市は４０くらい出たもんだからもう長い長い。７時くらいから発表が始まったコトだってあったよ」
「うぇ～！　そんなに待たないとダメなのかよ」
慎也がウンザリした様子で座席にもたれかかった。
「まぁ、そないにブーブー言うなや。少しでも緊張ほぐすために、ちょっとくらい待ち時間があったほうがえぇやん」
「カケルくらい気持ちに余裕があればいいんだけどなぁ」
拓真がうらやましそうに呟く。

「アホ～、オレかて全然緊張してへんわけちゃうで」
「え？　そうなの？」
美里が意外そうな顔をした。
「なんやねん、その『信じられへん！』みたいな顔は」
「だって～、佐野くんこの部で一番肝が据わってるじゃない」
「お前なぁ……。オレを何やと思ってんねん。それを言うなら豊田先輩とか岡崎先輩のほうが度胸あるって、絶対」
その発言を聞いてめぐみと安和が驚いた顔をした。
「ちょっとちょっと、佐野くん！　急にそんな話振られたって困るよ」
めぐみの言葉を聞いてウンウンと安和もうなずく。
「そうそう！　あたしたちだって緊張するんだからね～」
「そうですかね～」
拓真がまだ納得いかなさそうな顔をしている。
「見てみなよ～、１年生を」
見れば、経験者がほとんどの１年生も緊張した面持ちで座席に座ったままである。
「……なるほど」
拓真もさすがにこれにはうなずかざるを得ない。
「まぁ、リラックスして待ちましょうや」
翔が落ち着かない部員たちにそう言葉をかけると、部員たちは相変わらず不安そうな顔をしたまま座り込んだ。
突然、ブーッと開始を知らせるベルが鳴った。その音と同時に「キャーッ！」と女子生徒たちの声がホール内に響いた。
「な、なに？」
陽乃や美里は驚いてキョロキョロとあたりを見渡す。
「来た！」
翔も思わず前のめりになって前に座っていた優の頭を押さえつけた。
「結果発表や！」

同じ頃、隣同士で座っていた修平と翔平もベルの音を聞いて固唾を呑んでその瞬間を待っていた。その修平の手が、震えている。
それに気づいた優衣がそっと修平の手を握った。
「大丈夫だよ」
「……そうかな」
不安が拭いきれない修平は唇を噛み締めた。不安で不安で仕方がないのだ。
「私たち、ずっと頑張ってきたじゃない。きっと、評価してもらえるよ」
「うん……」
役員らしい人が出てきた。そしてすぐに誰かの呼び出しを始めた。
「え～、先ほどから何回かアナウンスをかけたのですが、まだ1校、部長さんが舞台上に上がられていません」
「へ？」
そのアナウンスに七海高校の部員たちの視線が翔に集中した。
「七海高校吹奏楽部の部長さん、いらっしゃいますでしょうか？」
「しまった……オレ、舞台上へ行かなアカンかったんや」
翔が真っ青になっていく。陽乃も隣にいた美里も真っ青だ。
「すいませーん！　ハイ！　ここです！　すぐ行きます！」
大声で答える翔の姿を見たほかの生徒や観客たちがドッと笑う。
その中にはもちろん、修平や翔平もいた。
「やってくれますね、アイツ」
「ホンマになぁ。中学の頃から変わってへんわ」
二人は通路を慌てて駆けていき、舞台へ上がる翔を見て笑い合った。
「何やってんねやろねぇ、あの子は」
同じ翔の姿を見て、友美子はプリプリしている。隣では「アイツ、ホンマあほ！」と綾音もプンプン怒っていた。
「落ち着けって、佐野。シワが増えるぜ」
今回もたまたま近くに座っていた佐野家と朝倉家。夏樹がどうな

だめていいのかわからず、妙な言葉を掛けてしまった。
「ちょっと！　シワって何よ！　そんな歳ちゃうわ！」
「綾音！　やめなさい、ホール中に声が響いてるやろ！？」
そのやり取りを聞いてさらに会場が笑い声で包まれた。
「……なんていうか、佐野くん家って」
由美子が苦笑いする。
「みんなあんな感じなんだろうね。陽ちゃん、ついていけそう？」
「……微妙かも」
陽乃も苦笑いした。
「それでは、部長さんも全員揃いましたので、ただいまより結果発表のほうに移らせていただきます」
拍手がワーッと沸く。陽乃の緊張もますます高まってきた。
「まず、毎年のことではありますが、プログラム順に発表してまいります。金賞、銀賞、銅賞の３種類ですが、金賞と銀賞の響きの違いがわかりにくいかもしれませんので、金賞の後にはゴールド、と付け足しますのでそちらで判断してください」
ドキドキと心臓が演奏を始める直前と同じくらい鳴り響く。
「銀賞で最も優れた演奏をした団体には、支部奨励賞が授与されます。また、金賞受賞団体の中で県大会に進むことのできる団体は、今年度は５団体とさせていただきます」
３２分の５。およそ６校に１校が県大会へ進めることになる。
「それでは、発表いたします」
（……神様！）
陽乃はまだまだ自分の高校がずっと先に発表されるにも関わらず、祈り始めた。
「緊張するわねぇ」
由利が思わず手を握り締める。祥夫も知恵子も夏樹も固唾を呑んで見守っている。
「プログラム１番。川崎市立　戸倉（とくら）高等学校吹奏楽部、銀賞」
拍手が沸く。

「プログラム２番。川崎市立　井藤西（いとうにし）高等学校吹奏楽部、銀賞」
同じような拍手。どんどん近づいてくる七海高校の順番。美里のプログラムを握る手の力も強くなって、プログラムが丸くなっていく。
「プログラム８番、川崎市立橋詰高等学校吹奏楽部、金賞、ゴールド！」
そこで初めて金賞の団体が発表された。あの『リバーダンス』を演奏した高校だった。ワーッという歓喜の声。
「スッゴいねぇ……。嬉しいだろうね、ホント」
雪子が斜め前にいる、その団体の様子を見てため息をついた。その後も淡々と発表が続く。そしていよいよ、翔たちもドキドキしていた風見台高校の発表の瞬間がやって来た。
「プログラム１２番、私立風見台高等学校吹奏楽部」
修平の心臓が高鳴る。翔平も目をつむり、優衣も手を合わせて祈った。
（お願いします……！）
「金賞、ゴールド！」
「……いやったあああああああ！」
修平が真っ先に声を上げて飛び上がった。
「よっしゃあああああ！」
包帯が見えるくらい手を挙げて翔平も飛び上がる。
「キャーッ！　キャーッ！」
優衣が涙を流しながら隣にいる友達と抱き合った。
「スゴい！　スゴい！　ねぇ、風見台金賞だよ！」
陽乃が驚きと喜びを隠せず、美里の服を掴みながらガクンガクンその体を揺らした。
「わぁー！　陽ちゃん、わかった、わかった！　私も嬉しい、嬉しい！　その嬉しさを表現させてぇ～！」
それからも淡々と発表は続く。既に１９団体が発表され、金賞受賞団体は３団体。かなり厳しい状況だ。

「ど、ど、どうする？　つ、つ、次だよ」
春樹がガクガク震えながら慎也と拓真の手を引っ張った。
「わわわ、わかってるよ。わざわざ言うなよ」
拓真も震えている。慎也に至っては何も言わず、ジッと前を見つめている。
「大丈夫。あたしたち頑張ってきたもん！　きっと……いい結果出るよ」
陽乃が力強く言い切った。
「……そうだよ。自分たちのことを信じよう」
雪子が手を合わせて祈った。
「信じる」
翔も同じ頃、舞台上で小さくそう呟いた。
「プログラム２０番」
役員の声が聞こえる。陽乃の脳裏に、この数ヶ月の日々が蘇ってきた。
課題曲を決めた日。
そのソロで、恭一に叱られてもくじけず、翔と遅くまで残って練習した日。
自由曲のソロが上手く吹けず、安和や勇、彩香にずっと付きっ切りで教えてもらった日。
すべては、この日に繋がっていたのだ。
もうすぐ、その結果が出る。
陽乃は信じていた。きっと、良い結果が出ると。
「七海高等学校吹奏楽部」
きっと、出る。
「金賞、ゴールド！」
「……。」
今までの高校と違い、沈黙が一瞬降りた。そして次の瞬間。

「キャ――――――ッ！」
「いやあああったあああああ！」
「わぁぁぁ！」
一気に部員たちから歓声が沸いた。
「先輩、先輩！」
彩香がギュウッと陽乃を抱きしめてきた。
「やりましたよ、やりましたよぉ！」
「うん！　うん！　やったね、やったね！」
陽乃もギュウッと彩香を抱きしめる。そんな彼らの姿を、翔も舞台上から見つめていた。
「やったな……」
翔が小さく呟いた。そして、その左目から一筋の涙がこぼれ落ちて、舞台を濡らしたことは誰も気づいてはいなかった。

第１３１話　信じて（後書き）

とうとう結果を出した七海高校。しかし、県大会に進めるかどうかはまだわからない。より良い結果を得ることができるのか！？

第１３２話　運命の瞬間

「それでは、続きまして県大会へ進出できる高校の発表をさせていただきます」
役員がマイクでそうアナウンスすると、再び緊張感が高まった。
「今年度は、５団体に県大会に出場していただく方針となっております。それでは、発表させていただきます」
「こ、こんなにすぐに発表かよ……！」
慎也が身震いする。拓真も春樹も祈るように目をつむっていた。
絵美も由美子も沙希も、何も言わない。
「まず……」
自分の心臓の音が聞こえてきそうなほどだ。陽乃の手を握る力も強くなる。
「私立風見台高等学校吹奏楽部」
「いよっしゃあああああ！」
修平の声が一際大きく聞こえ、その後優衣たち女子生徒の歓声がホール中を包み込んだ。
「スッゴいなぁ……」
美里が羨ましそうに呟く。
「まだ……まだ４団体の可能性があるよ。もうすぐ発表だよ……！」
「それでは、次の団体を発表いたします」
由美子がギュッと両手を握って「お願いします……！」と呟く。
沙希が絵美と手を握って役員を見つめる。春樹と拓真と慎也が同時に深呼吸をした。めぐみ、安和、岳彦の３人が手を繋いで前を見つめる。
陽乃はしっかりと翔を見つめた。翔も、これほど広いホールの中でしっかりと陽乃を見つめていた。
「七海市立」
冷や汗だろうか緊張から来る汗だろうか、とにかく陽乃の背中は

ビッショリ濡れていた。
「海屋敷高等学校吹奏楽部」
海屋敷高等学校吹奏楽部は、七海高校の次に演奏した団体だ。呼ばれずに海屋敷高校が呼ばれた。つまり、七海高校は県大会出場が叶わなかったということだ。
一瞬、陽乃の耳から何もかも音が消えた。隣にいる美里も呆然としている。その後の役員の人の挨拶も七海高校の部員たちはあまり耳に入っていなかった。特に、2年生は全員がただただ呆然と前を見つめるだけだった。
やがてすべてのプログラムが終了し、舞台の幕が閉じた。学生や観客が退席しはじめても、七海高校の部員たちはあまり動かずにいた。
「……とりあえず、発表は終わったから外に出ようか」
そう声を掛けたのは安和だった。続いて、岳彦も立ち上がって拓真や春樹の肩を叩いて全員に言った。
「もうすぐ先生と佐野っちが来るから、出て待ってようぜ」
「……。」
ようやくそれで1年生が動き始めた。
「ほら、橋本さん。行こう?」
めぐみに促されて絵美がようやく立ち上がった。
「朝倉さん。行こう」
「はい……」
陽乃も安和と一緒に半ば支えられるようにしながら外へ出た。
外へ出てからも部員たちは暗いままだった。同じく外へ出てきた保護者の人たちもどう声を掛けていいのかわからず、黙って様子を見ているだけだった。
「あっ……翔先輩」
声を上げたのは誠だった。すると、スキップをしながら賞状片手に帰ってくる翔の姿が全員の目に映った。
「ヤッホーイ……ってなんか暗いけど、どないしたん? みんな」

翔がオドオドしながら聞くと、美里が俯きながら「県大会に行けなかったから……」と呟いた。
「へ？」
由美子も同じ様子で続けた。
「せっかくあんなに練習してきたのに……悔しい」
「……。」
翔はフゥッとため息をついた。
「ある程度予想はしてたけどなぁ……ここまでとは思ってなかった」
そう言ってから翔は安和、岳彦、めぐみの3人を見つめた。彼らも同じように苦笑いする。
「とりあえずさ！」
翔の突然の大声に部員たちがビクッと肩を振るわせた。翔の顔を見上げると、彼の顔は笑顔だった。
「地区大会初出場で金賞やで！？　これを喜ぼうや！」
翔のあまりの笑顔に自分たちの暗さとのギャップを感じた部員たちは呆然としてしまう。
すると岳彦も同じように前へ出てきた。
「そうそう！　俺たちだって、中学校のときに県大会に進んだのなんて今までで1回しかなかったんだぜ！？」
「そ、そうなんですか？」
健之佑が意外だ、という表情を浮かべて岳彦に聞く。
「うん。それに、こんなこと言っちゃ悪いけど……俺、正直今年は銀賞もらえたら十分かなって思ってたんだ」
その言葉にめぐみと安和も思わず笑ってしまった。陽乃はいまいち岳彦の言っていることがわからなかった。
「できたばかりの部で、今まで部を引っ張ってきてた2年生が大谷さんと佐野っちを除いて初心者で……。正直今年先生がコンクールに出るって言ったとき、無理だろうと思ってた」
続いて、めぐみが言う。
「でもね、この金賞っていう結果。あたしも本当にビックリだし、

嬉しい。初めは途中で入部してきたあたしたち3年生3人が部でみんなに受け入れてもらえるか……それが心配だった。ちょっと安ちゃんと朝倉さんがモメちゃったこともあったけど、すぐに解決したしね。本当に気持ちよく、楽しくクラブ活動させてもらえた」

最後に安和が少し恥ずかしそうに前へ出てきた。

「それでね……確かに、県大会へは出れなかったよ。でも、初めて出て金賞っていう賞をもらえたこと。これは……誇りに思ってほしいな。名誉あることだよ、これは」

ウンウンと翔がうなずく。

「それに、私たち……言ったけど、今日で最後だからさ。みんなには、もっと笑ってほしいな」

「ほーら！　こういう風にニカァッと笑おうや！」

翔がわざとらしく頬を両手で引き伸ばして笑った。しかし、自分のではなく陽乃の頬だった。

「ちょ、ちょっとぉ！　なんであたしのほっぺた引っ張るのよ！」

陽乃は顔を真っ赤にして翔を追い回し始めた。いつもの光景を見て部員たちがドッと笑い出す。

「おーい！　遊んでないで、最後に話するぞぉ」

帰ってきた恭一がそれを見て笑いながら二人を止めた。

「えっと。とりあえず、お疲れ様」

「ありがとうございました！」

ようやく元気を取り戻した部員たちから明るい返事が返ってきた。それを聞いて恭一も安心した様子になる。

「この新生七海高校吹奏楽部で初めてのコンクールでしたが……素晴らしい成績を残せた。先生はそう思っています」

改めて恭一からそういう風に言われると違和感があるように陽乃は思った。慎也や雪子も歯がゆそうにしている。陽乃もなんとなく同じような気持ちだった。

「確かに県大会には行けなかったけれども……また、これを糧にどんどん頑張ってもらえたらなと先生は思います」

その言葉を聞いて保護者から拍手が沸いた。やがて、部員たちも拍手を始めた。恭一が深々と礼をする。

「それでは……今日は楽器も運び終えてますから、ここで解散します。なお！　明日から野球部の応援があります。これは有志で行こうと思うだが……行きたい人！」

「はい！」

真っ先に手を挙げたのは沙希だった。

「サキティ行くならあたしも！」

陽乃が手を挙げる。負けじと美里が手を挙げ、絵美、雪子、由美子、慎也、拓真、春樹と続く。

「じゃあ俺も！」

駿が嬉しそうに手を挙げた。

「あたしだって！」

はるかが手を挙げる。

「ハイッ！　あたしも！」

梨子も手を挙げた。

「えーい！　めんどくせぇ。全員で行かね！？」

そう言ったのは順平。そして全員がそれに応じた。恭一も思わず笑ってしまう。

「それじゃ、明日は第2試合だから9時に学校に集合！　以上、解散！」

「ありがとうございましたー！」

解散後。

「安和先輩！」

陽乃は安和に声を掛けた。

「どうしたの？」

陽乃は夏樹から預かったカメラを取り出し「写真、撮りませんか？」と聞いた。それを聞いて彼女は嬉しそうに「いいよ！　撮ろう撮ろう！」と陽乃のところへ駆け寄ってきた。

「あぁ、違います違います。こっちですよ」
陽乃はグイッと安和の腕を引いてホールの広場から少し外れたベンチのところへ連れて行った。
「あ……」
そこにいたのは翔だった。
「はい！　じゃあ二人並んでください！」
「えぇ！？」
翔も突然安和が来たことにかなり驚いていた。
「おいおい、朝倉！」
「ダメだよ、朝倉さん」
二人とも真っ赤になっている。しかし、陽乃はまったく気にしていないという様子で答える。
「ダメじゃないですよ。最後ですよ？　想い出に……ね？」
陽乃が優しく笑うので、二人もようやく折れた。
「それじゃ……ハイ、チーズ！」
どこかよそよそしい、けれど嬉しそうに微笑む安和と緊張しきった翔の顔がレンズ越しに陽乃に見えた。
こうして、陽乃たちの初めてのコンクールは終わりを告げた。

第１３３話　楽器屋さんへＧｏ！

「それじゃ、今日の試合も無事勝てたので、また明後日に応援に行くぞ！　心づもりしておいてくれよ」
恭一が汗を拭いながら笑顔で言った。部員たちもウイダー・イン・ゼリーを吸いながら「ハイッ！」と答える。
七海高校野球部は夏の高校野球・神奈川県大会で順調に勝ち進んでいた。コンクール二日前から始まったこの試合。まだまだ序盤だが、その時点でこれだけ順調なのだから（今日の結果は7対1で余裕で勝っている）今後も期待できるだろう。
「それじゃ佐野。終わりのミーティングやってくれ」
「はい」
翔が汗で下に着ているシャツの色がにじんでいる姿のまま、前に立った。陽乃はその姿を見て少しドキッとした。
（翔……あんなに胸板あったっけ）
胸の辺りが少し膨らんでいる翔の制服のシャツ。汗で水分を含んでいるからシャツが縮まってそう見えるだけかもしれない。けれど、自宅で筋トレをしているという話も聞いた。ひょっとしたらその成果だろうか。
「では、明日は練習は休みです。ほんで、明後日は第三試合からやから……午後1時開始なんで、男子部員は１２時に学校集合して楽器を積みます。できれば、家が近い女子部員も手伝いに来てくれると助かります」
「はい！」
「他の部員は１２時４５分にこの市民球場前広場に集合してください」
「はい！」
「では、以上で今日の部活は終わりです。起立！」
全員が立ち上がり、翔と恭一のほうを見つめる。

「ありがとうございました！」
「ありがとうございましたー！」
部員たちがザワザワまだ騒いでいる中、翔と陽乃は並んでその集団の中を抜けた。
「お疲れ、陽乃」
「お疲れ様。今日はまた暑かったね～」
陽乃がギラギラと光る太陽を見上げて言う。確かに今日は暑い。現在の気温は３６度を球場前の気温掲示板は示している。
「ホンマになぁ。みんな熱中症とかにならんでホンマ良かったわ」
翔が持っていたハンカチで顔をあおぎ始めた。汗が拭いても拭いてもこぼれ落ちてくる。
「あ、あたしね。今日濡れタオル冷やして持ってきてるの」
「え！　そんなんあんの！」
「うん！　ホラ！」
陽乃は小さなクーラーボックスから濡れタオルを取り出し、それを翔に手渡した。
（うわ……意外と翔、手ぇガッシリしてるな）
暑さのせいからか、さっきから変なことばかり考えてしまう自分が陽乃は少し嫌だった。
「うわぁ！　よぉ冷えてるわ。めちゃんこ気持ちいい」
翔は陽乃がそんなことを考えているとも知らず、タオルを受け取って額に乗せた。熱がスーッと引いていく。
「喜んでもらえたならよかった」
陽乃は嬉しそうに笑った。
「ありがと、陽乃」
翔は少し温(ぬる)くなったタオルを陽乃に返した。それを受け取る陽乃はついつい翔の胸元に目が行ってしまう。なんだか自分がエッチになったようで嫌気が刺す。
「どないしたん？」
「うっ、ううん！　なんでもないの、ホント！」

「ホンマか？」
翔が心配そうに陽乃を見つめ、急に手を陽乃の額に手を当てた。
「ヒャッ！？」
「う～ん……。お前のデコのほうが熱いんとちゃうか？」
「え？」
「うん。間違いない。熱いわ」
そう言うと翔は陽乃が持っていたクーラーボックスを取り、その中から濡れタオルをもう一枚取り出した。
「ほら、これデコに置いとけ」
「う……うん。ありがとう……」
翔が笑顔で陽乃が額にタオルを置くのを見ている。それだけで陽乃はドキドキしてしまう。すると、その二人の耳にグルルル～という音が聞こえた。
「……。」
「ごっ、ゴメンね……。あたし……その……」
翔がクスッと笑う。陽乃は真っ赤になってしまった。
（恥ずかしいなぁ……。嫌な音、聞かれちゃった）
すると翔は踵を返して自分のカバンの方へと歩いていってしまった。さすがに好きな女の子とはいえ、おなかの鳴る音を聞いては幻滅もされてしまうだろう。陽乃はガックリとうなだれて座り込んでしまった。
「ひーなーの」
戻ってきた翔のほうを見ると、その手に大きなオニギリが握られていた。
「へ？」
「おなか空いたんやろ？　ご飯、食べよ」
「……。」
「あ、このオニギリ？　これな、オレが作ってんで。スゴくない？」
「翔が？」
「うん！　ほら、遠慮せんと食べぇや」

翔はポイッとそのオニギリを陽乃に手渡した。大きな大きなオニギリ。少しガタガタしているけど、それはご愛嬌といったところか。
「ありがとう」
「どういたしまして。それじゃ、いただきまーす！」
翔がラップを取ってオニギリを頬張った。
「いただきます」
陽乃もそのオニギリを手にし、口に運んだ。少し塩が効きすぎている気もしたが、おいしい。
「おいしいよ。すっごくおいしい」
「ホンマか？」
「うん！」
「よかった！　頑張ったカイあったわ」
翔はニッコリ笑ってもう一度嬉しそうにオニギリを頬張った。
食べ終わったところでお茶を飲む陽乃に、翔が声をかける。
「なぁ、陽乃は今からヒマ？」
「え……。まぁ、ヒマだけど。夏休みの宿題はしないといけないかな」
「あぁ……親父さん厳しそうやもんな」
翔が苦笑いする。陽乃もつられて笑った。
「あんな、時間あるなら楽器屋さん行けへんか？」
「楽器屋さん？」
「うん。ちょっとリードが切れちゃって……。一緒に来てほしいねんけど」
「うん！　行こう行こう！」
思ったより元気のよい返事が来たので、翔の顔にも満面の笑みが咲いた。

自転車に跨り、小田急七海駅前にある商店街に着いた。
「こっからはちょっと歩かないと行けへんところにあるから、自転車は置いていこう」

「わかった」
陽乃は自転車を置いて翔の傍に立った。翔がごくごく自然に手を繋いでくれた。
「久しぶりやな、一緒に買い物とか」
「そうだね。ゴールデンウィークだっけ？　最後は」
「そうやな。あれからコンクールでバタバタしとったからなぁ」
他愛（たわい）無い会話をしながら商店街を歩いて行くこと１０分。ようやく目的地である楽器屋に到着した。
「瀬戸楽器店？」
「うん。ほら、中入るで」
翔が引き戸を開けると、たくさんの手入れ用品が置いてあるのに陽乃はかなり驚いた。オイル、クロス、マッピブラシ……。見慣れたものから用途がよくわからないものまで、たくさんのものがひしめき合うように並んでいた。
奥では店員さんらしい人がホルンの修理をしていた。
「修理までしてくれるの？」
「うん。なんか困ったことあったら持っておいで。七海高校って言えば特典もあるし」
「特典？」
「あぁ。なんでか言うとな……おーい！」
翔の大声に奥から「はぁーい！　いま行きますよ！」と元気のよい声が返ってきた。そしてその奥から出てきたのはなんと優輝だった。
「せっ、瀬戸くん！？」
「あららら、佐野先輩に朝倉先輩！　いらっしゃいませ！」
「ちょ、翔！　なんで瀬戸くんがここにいるの！？」
「え？　やだなぁ先輩。看板見ました？」
「看板……？　あっ！」
陽乃は表に掛かっていた看板を思い出した。瀬戸楽器店の字。そう、ここは優輝の自宅兼店舗だったのだ。

「知らなかったなぁ……。瀬戸くんの家が楽器屋さんだったなんて」
陽乃はリード選びをしている翔を待っている間、紅茶をご馳走になりながら優輝と話をしていた。
「えへへ。ナナコウでも知ってるのは佐野先輩、まこっちゃん、健ちゃん（健之佑）、慎ちゃん先輩くらいですよ」
「そりゃそうだろうねぇ」
「でも何回か美里先輩とか絵美先輩を接客もしてるんですけど……全然気づいてなかったですよ」
「えぇ～!?　そうなの？」
「全然ですよ！　マジおもしろかったです」
「あぁ～！　でもミサッチならあり得そうだね！」
陽乃は話しながら、優輝がこれほど喋る男の子だとは思っていなかったので少し驚いていた。
そうこうしているうちに翔がリードを買い終えて2階から降りてきた。
「お待たせ～。あ、会計まだ済ませてへんから陽乃、先に出てチャリンコ置き場で待ってて」
「え？　あたしそれくらい待てるよ？」
「いいからいいから。オレもすぐ行くわ」
陽乃は少し不服そうだったが、小さくうなずいた。
「わかった……。なるべく早く来てよ？」
「オウ！」
陽乃は渋々外へ出て自転車置き場へ向かった。その背中を見送り、優輝が翔に言う。
「先輩……もうちょっとうまく言いましょうよ」
「うまくって、どうやってよ」
「なんかあれじゃ朝倉先輩を追い出したみたいじゃないですか」
「じゃあ他にどんな言い方があるねん」
「……。」
優輝も答えない。

「瀬戸くんと二人っきりで話がしたいの～とか言うんか？」
「バカなこと言ってないでさっさと会計済ませてください。あと、これも持ってね」
優輝が包みに入ったものを翔に手渡した。
「ホンマはそれが目当てやったんやけどな。おおきに、ありがとさん」
陽乃は暑さに耐え切れず、商店街入口で翔を待っていた。
「遅いなぁ……。なんでわざわざ外で待たせるんだろう」
蝉の鳴き声が、雑踏が聞こえる。暑さでちょっとボーッとしていると、不意に首筋に冷たいものが当たった。
「ヒャッ！？」
「お待たせ！　これ、飲もう」
ジュースを手にした翔が立っていた。陽乃は不服そうにそのジュースを受け取ってタブを引いた。
「ご、ご機嫌ナナメ？」
「……。」
「陽ちゃーん？」
「なんであたしを先に出しとくのよ。その意味がわかんない」
「……。」
翔は答えようとしない。答えてくれるまで陽乃も喋るつもりはなかった。
「へ？」
陽乃の目の前にトランペットのト音記号のストラップが現れた。
「何、これ？」
「ストラップ」
「……どこで？」
「瀬戸にもらってん。陽乃にプレゼント」
「……。」
「いらん？」
「いるっ！」

陽乃は笑顔でそれを受け取り、すぐに携帯電話に付けた。
「見て！」
翔が自分の携帯電話を取り出した。そして、それには同じストラップが付いていた。
「オレももらっててん。おそろい」
「……。」
翔は恥ずかしそうに頬をかきながら言った。
「陽乃にバレたら嫌やから、先に出てもらって瀬戸にこれもらってん……。怒らせたならゴメ……」
言い終えるより前に、陽乃が翔をしっかりと抱きしめていた。商店街を歩いていた買い物客が顔を赤くしながら歩いていく。
「ちょ……陽乃！　恥ずかしい……」
「ゴメン……。でも、嬉しいから」
「……。」
「ありがとね」
「えぇよ」
翔もそっと陽乃に手を回した。蝉の鳴く中、二人はしばらく抱き合っていた。

第１３４話　拓真の不服

８月２日（水）。七海高校吹奏楽部は５日土曜日にすぐ隣にある市役所公園にある球場内で開催される本庁地区（七海高校周辺は市役所に近いので本庁地区と呼ばれる）夏祭りに出演することになった。

夏祭りというだけあって、恭一が曲目は夏に関する曲を取り揃えてきた。

・夏祭り（Ｗｈｉｔｅｂｅｒｒｙ）
・Ｈａｐｐｙ　Ｄａｙｓ（大塚　愛）
・金魚花火（大塚　愛）

ただ、この３曲はどれも比較的若者受けする曲が多めだったので、お年寄りや陽乃たちの両親世代にも受ける曲を入れようということで、以下のメドレー１曲が加わった。

・ジャパニーズグラフィティ５（北の宿から～北酒場～ルビーの指環～勝手にしやがれ）

今日は午前中にこれらの曲をパート練習し、午後から合奏することになっている。久しぶりにポップスの曲を吹けるので、部員たちは喜んで練習をしている。

そんな中、一際機嫌が悪いパートもとい人物がいた。

「ねぇ……いつまでむくれてるのさぁ」

春樹がため息をついた。さっきから機嫌が悪いのは他でもない、チューバの拓真だった。

「だって……これ見ろよ！」

そう言って広げたチューバの楽譜を春樹と亮平は見てみる。

「これがどうかしたの？」

春樹は呆然としながら拓真に聞く。

「別にふつうの譜面じゃ……？」

亮平もいまひとつ、拓真の言わんとすることがわからない。

「なんか思わないわけ？」
拓真はとても真剣な表情で二人に問うが、反応はいまひとつだ。
「いや……別に？」
「俺の楽譜と変わんないッスよ」
拓真はハァッとため息をついた。
「わかってないなぁ、二人とも！　俺もさ、たまにはメロディ吹きたいわけ！　伴奏ばっかじゃ退屈なんだよ～」
「……。」
「……。」
春樹も亮平も愛実も黙ったままだ。拓真一人でプンプンしている。
「翔や慎也や朝倉に楽譜見せてもらったんだけど、アイツら全員メロディやソロがどっかにあるんだぜ？　なのに俺は地味な伴奏ばっか……。チューバって図体デカいけど顔は隠れるし、しんどいし、メロディないし」
「いいじゃん！　でっかくって存在感あってさ」
春樹は至ってのん気な性格というのか楽観的な感じで常に生活していると拓真は日ごろ感じていたが、今日は特にその雰囲気が伝わる。
「でかいだけじゃなぁ……。せめてさ、みーやんみたいに顔が見えたら少しは違うんだけどな」
拓真が大きなチューバに顔をもたれさせた。同時にため息が漏れて、その息の跡が白くなってチューバに広がっていく。
結局、その後も拓真はブツクサ言い続けるばかりで、あまりパート練習にならなかった。正確に言えば、拓真だけがあまり楽器を吹かなかったのだ。
コンクールのときも雪子と順平はソリを吹いていたし、陽乃と翔もソロを吹いていた。5月のコンサートでは沙希もソロを吹いている。クラリネットは普段からメロディは多い。オーボエの健之佑とピッコロの佳菜もおいしいポジションだ。サックスはもう言うまでもない。

最近発見したCDでは、バスクラリネットがソロを吹いている曲すらあった。バスクラリネットはチューバとお友達だなんて考えていただけに、拓真にとってはショックだった。さらに、部員にはいないけれどもバリトンサックスが「ディープパープルメドレー」という曲で強烈なソロを吹いているのを聞いた日には泣きたくなってしまった。

「なんか空(むな)しいなぁ……」

外で大声で鳴く蝉の鳴き声を聞きながら拓真は本日二度目のため息を漏らした。

「え？　そないに元気ないの、アイツ」

友美子お手製のお弁当を食べながら、春樹から拓真のことを聞いた翔はチラッと拓真のほうを見た。大きな体が幾分縮んで見える。またため息をついた。広い肩が上下する。

「確かに元気ないな。なんでなん？」

「メロディがないからだって」

「メロディ？」

慎也と翔が同時に疑問の声を上げた。

「どういうことやねん」

「ほら、チューバって伴奏多いでしょ？　メロディがないし、楽器が大きい割りに曲では目立たないからってふてくされてるみたい」

「……。」

もう一度拓真のほうを見る。かなり憂鬱そうな雰囲気だ。さっきまで翔たちと一緒に昼食を食べていたが、その時もため息ばかりだった上にクリームパンひとつしか食べていなかった。

「相当重症やな」

「なんとかしてあげたいけど……チューバだからねぇ」

春樹も翔も苦笑いする。慎也は逆に羨ましそうな顔をした。

「俺は羨ましいけどな、アイツが」

「どういうとこが？」

「ほら、チューバって吹奏楽ではバンド全体を支える、えーと、なんつーか大黒柱みたいなモンじゃん？　縁の下の力持ちっつーかさ。俺はコンクールではみーやんと岳先輩と駿、それに拓真がいなかったらかなりバランス崩れたと思うけどなぁ」

　それを聞いて翔がうなずく。

「そうそう。バランス崩れるどころか、演奏が成り立たへんなるんやで。オレらは拓あんとかがおって初めて安心して演奏することができるねん」

「それを拓あん本人がわかってくれてたら苦労しないんだけどねぇ」

　春樹が苦笑いで答えた。それをわかっていればチューバ吹きも楽しくなるのだが、それをわかっていないとなかなか辛いものがあるのかもしれない。これは普段、メロディからソロまで多いサックス、ユーフォ、トロンボーンにはいまひとつ理解しがたいことだけに、安易に気持ちがわかるとも言えなかった。

　拓真は結局、テンションが低いまま午後の合奏に突入した。チューニングも安定してきたが、今日はあまり息が入らない。音を言葉にするとフヨヨヨ～ンとした感じだろうか。なんだか覇気のない音が今日チューニングをしている絵美の耳にも入った。

「どうしたの、拓ちゃん。今日は音に元気がないな」

「うん。まぁ、いろいろありまして」

　当たり障りのない答えをした。絵美は笑顔で「夏休みなんだからさ、もっと元気よく行こうね！」と言ってくれた。それだけでも気持ちが少しは晴れる。

　それからロングトーンをしてもう一度チューニングをした。拓真は吹きながらいろんな楽器を見渡した。

　トランペットとトロンボーンは直管楽器なので存在感があるし、クラリネットは黒が高級感を漂わせている。サックスやオーボエはメロディも多いのでそれだけで十分だろう。パーカッションはいろんな楽器があるのでメロディを担当することもできる。やはりメロディがないのはチューバと弦バスだけだと思うと、なんだか悲しく

なってくる。
「こんにちはー！」
恭一が入ってきたので全員が挨拶をする。拓真もワンテンポ遅れて挨拶をした。
「今日も暑いなぁ。まぁ負けずに元気よく行こうか。はい、それじゃ『夏祭り』から」
返事がしてから恭一が指揮棒を上げる。そして指揮棒が降りると始まったのは翔のサックスのソロだった。
やわらかい音色。こんなソロを吹けたらどれだけカッコいいだろうか。拓真は自分が去年の初めに大きさだけに惹かれて楽器を選んだことを後悔していた。
テンポアップしたところでクラリネットとユーフォニウム、サックスがメロディを吹く。入れ替わりでトランペットがメロディ。再びクラリネットたちが吹く。その間チューバと弦バス、トロンボーンが伴奏でしっかり支えるがサビの部分になるとトロンボーンもちゃっかりメロディに変わってしまった。
やがて間奏部分。パーカッション全般がソリのような部分になった。美里たちも目立っている。結局、夏祭りで目立たないのはチューバと弦バスくらいだろうと拓真は思った。
「ようし、次。金魚花火」
この楽譜に至ってはチューバは休みの部分がかなり目立った。前半部分はほとんど休み。「Ｓｅｃｏｎｄ　ｏｎｌｙ　ｐｌａｙ」、つまり2回目だけ吹くという指示があった。もはや吹かせてもくれないのかと思うと、このまま合奏を抜け出してやろうか。そんな気持ちになってしまう自分も嫌いだった。
フルート、ピッコロ、オーボエ、シロフォンの前奏。それが終わるとクラリネットのメロディ。豊かな音で吹き上げる絵美や優輝が本当に羨ましい。サックスがサビを吹き上げる。それを引き継ぐようにトランペットのメロディ。それが終わってようやくチューバが入るところに差し掛かる。しかし、それでも伸ばしばかりだ。

2回目のメロディはユーフォニウムとトロンボーン。サビはホルンとテナーサックスの見事なソリだった。今日ほど雪子とはるかがカッコよく見えた日はないだろう。

やがて、伴奏が再び途切れる。ソロを吹くのは、由美子と健之佑だ。そして最高に盛り上がる部分ではトランペット、ホルン、トロンボーン、ユーフォニウム全員で綺麗な和音を効かせながらのトゥッティによるメロディだった。

（金管で俺だけ伴奏かよ……）

空しい。

辞めたい。

この場から逃げたい。

金魚花火の合奏が終わった。

「先生」

拓真は無意識に手を挙げた。

「お手洗い行ってきていいですか？」

「なんだ。合奏前に行っておけばいいのに。いいぞ、行ってこい」

「はい」

拓真はすぐに立ち上がり、音楽室を足早に出て行った。

「それじゃ、本堂が帰ってくるまで今の曲でメロディがある人は順番に繋いでいこうか」

「はい！」

その返事と同時に「先生！」という声が音楽室に響いた。

「どうした、佐野？」

「オレもお手洗い行かせてくれません？」

音楽室が静まり返る。それから笑い声が部屋中に響いた。

「やぁだ、もう……」

陽乃がウンザリした様子で呟いた。

「しょうがないな、お前らは。行ってこい」

「アザーッス！」

翔はいそいそと音楽室を出て、スリッパを履き変える。そしてト

イレの前の洗面所を覗き込んだ。
「……！」
拓真の頬に何か一筋の光るものが流れるのを、翔は見つけた。
紛れもなく、それは拓真の涙だった。

第１３５話　君の重み

「拓あん？」
翔が拓真に声をかけると、拓真はすぐに振り向いた。
「どした？」
振り向いた拓真の顔を見ると、涙らしきものは流れていなかった。涙が流れていた跡もない。
「いや……今、お前さ」
「ん？」
気のせいだったのかもしれない。翔はそう思って「今泣いてただろ？」と聞くのはやめておいた。
「オレもトイレ行きたくなって」
「なんだよ、俺の真似なんかしちゃってさ」
拓真がハハハッと笑った。さっきの涙は気のせいだったのだと翔は思い、トイレへ向かった。本当はトイレに用事なんてなかったのだけれど、と思いながら。
拓真は拓真で翔の背中を見送りながら、泣いているところをうまくごまかせて良かったと思っていた。足音が聞こえたのですぐに顔を洗ったのだ。季節的に洗ってもおかしくなかったし、スッキリしたといえばしたので結果オーライというところだろう。もうすぐ１７歳になる男子が同級生に泣いているところを見られたくもない。だからこそ、すぐに涙を拭ったのだ。
結局ほぼ同時に拓真と翔は音楽室に戻った。それからもいつもと変わらない合奏の時間が過ぎていく。相変わらず指摘されやすいのはメロディーラインばかりで、拓真や亮平、駿は暇な時間を過ごすことになった。
そしていよいよ今回の中では大曲のジャパニーズグラフィティ５「日本レコード大賞、栄光の昭和５０年代」の合奏になった。だいたい翔や陽乃たちの両親世代がこの曲に親しんでいた年代だろう。

その中でもテンポが速いのが「北酒場」。珍しくチューバも複雑な動きはするのだが、メロディではないので拓真にしてみればおもしろくもなんともない。それまで何回も譜読みしてきたので特に苦労せずとも合奏では吹けるようにはなっている。

しかし、そんな拓真も唯一気にしていることがあった。それは岳彦が抜けたことである。岳彦が抜けたことで音の厚みが薄くなったのを気にした拓真は精一杯吹いている。精一杯吹くということは、息も結構使うのだ。けれどもチューバに休みというのは静かな曲でないとなかなかあるものではない。先ほどの夏祭りの冒頭部分のように木管のソロがあったり、ゆったりした曲であればかなりの休みも望める。

ジャパニーズグラフィティは全般的にチューバが楽なものなどないと、いつか岳彦がボヤいていたのを拓真は思い出した。岳彦は中学でほとんどのジャパニーズグラフィティを経験したという強者（つわもの）だ。

岳彦の言っていたとおり、この「昭和５０年代」もまったくと言っていいほど休みがない。息継ぎするのでも精一杯なのだ。

（ヤ……ヤバい……）

拓真は息継ぎのタイミングをミスしてばかりいたのでそろそろ息が続かなくなってきていたのだ。

（うぅ……も、ダメ！）

「ゲホッ……ゲホゲホゲホッ！」

拓真は堪（こら）えきれず、むせてしまった。するとそれまで安定して吹いていたユーフォニウムとトロンボーンがバラバラと崩れて、あっという間に曲が乱れてしまった。それに亮平と駿がつられて伴奏が途切れ、もう収集がつかなくなった。

極めつけは指揮をやっている恭一までパニックになって遂には曲が止まってしまった。ようやく咳が止まった拓真はみんなが心配そうに見ているのに気づいた。

「ゲホ……あ、あれ？　曲は？」

「止まっちゃったよ～」

由美子が笑いながら言う。
「へ？　な、なんで？」
拓真は訳がわからず周りを見渡す。
「先輩が悪いんですよー！」
愛実も笑いながら言う。つられて春樹と亮平が笑い、全員が笑い出した。
「本堂～」
恭一も笑いながら言う。
「お前が止まると全員がグチャグチャになっちゃうんだからな。息継ぎする場所はよく考えておけよ？」
「え……。俺一人ぐらいでそんな」
「わかってないなぁ、お前」
慎也が苦笑いしながら言った。
「お前は、このナナコウ吹奏楽の大黒柱なんだぜ？」
「はぁ？　なんで俺が」
「チューバって伴奏ばっかりだからおもんない～とかいうやつおるやろ？」
翔の一言に拓真が思わず口をつぐんだ。他でもない拓真が今その状況だからだ。
「でもな、チューバって大事な楽器やねんで。皆を支えてくれる、めっちゃ大事な楽器。普段はそりゃあま、目立たへんし楽器がデカいから顔隠れたりするかもしれへんけど、今みたいにおらへんなった途端、その存在が目立つんやで。それがチューバっていう楽器」
拓真は無言で抱えているチューバを見つめた。蛍光灯の光が反射して金色がキラキラと光る。
初めてのコンクールも監査会も常にこの楽器と一緒に頑張ってきたことを思い出した。この楽器のおかげで自分も比べ物にならないぐらい成長した。なのに、何を今さらこんなことで悩んでいたのだろうと思う。
「ま、責任は重いかもしれへんけど、そんなん気にせんと楽しく吹

こうや」
「……。」
「な？」
「あぁ……そうだな」
拓真がようやく笑顔になった。春樹と愛実、亮平の３人も顔を合わせて嬉しそうに笑った。

合奏終了後。
ほとんどの部員が帰った部室の窓際で拓真はボーッと外を見つめている。それを見つけた翔が拓真の横に立った。
「お前相変わらず背ぇでっかいヤツやなぁ」
そこで初めて翔に気づいた拓真は「わっ」と小さく声を上げた。
「なんでそんな驚くねん」
「気づかなかった」
「小さいからか？」
「まぁね」
「お前基準で考えたらほとんどのヤツが背ぇ低いことになるわ」
それを聞いて拓真がクスッと笑う。
もう６時過ぎなのにまだ蒸し暑い。ジッとしていても背中を汗が伝っていくのがわかる。蝉もまだ鳴いている。
「見ただろ？」
突然拓真が口を開いた。
「何を？」
「俺が泣いてるトコ」
「……。」
翔は答えられなかった。本当のことを言おうかどうしようか迷う。
しかし、続きは拓真が言ってくれた。
「答えられないってことは、見たんじゃん」
「……まぁ」
「恥ずかしいな。１６にもなって泣くところ見られるなんて」

「そうか？」
「俺……最後に泣いたのなんて小学校1年のときかも」
「え！？　そらまたスゴいな」
翔は本当に驚いているようだった。
「じゃあ翔は最後に泣いたの、いつ？」
「こないだのコンクール」
「へ？　そうなの？　どこで」
「結果発表してる舞台の上で」
「なんで？」
「初めてのコンクールで金賞もらえたから……かな」
正確な理由は覚えていないが、興奮していたからだろうと翔は推測している。
「別に男やから泣いたらアカンとかそんなんないし、えぇんちゃうの、泣くのも」
「……。」
「ま、見られたら恥ずかしいことに変わりはないけどな」
「だろ？」
顔を合わせて二人は笑う。
「なぁ、拓あん」
「なに？」
「音楽って……違う字が当てはまるの、知ってる？」
「違う字？」
「そう」
拓真はしばらく考えたが思いつかなかった。
「どんな字さ」
「『音』に『我』が『苦しむ』と書いて『音我苦（おんがく）』」
「当て字かよ」
フヘッと拓真が笑うと翔がプリプリしながら「真面目な話やねんぞ！」と怒った。
「ゴメンゴメン。それで、どういう意味よ」

「チューバでもサックスでもギターでも……そうやな、ヴァイオリンでもボーカルでも音楽するには必ず悩みや苦しみが付きまとうんや。音程が取れない、リズムが合わない、怒られてばかり、なかなか上手くならない。どんだけプロの人でも、自分が苦しんで悩んでるんや」

拓真は去年の自分を思い出した。音程が合う以前の問題で、音が出ない、安定しない。そんなことで悩んで春樹と一所懸命パート練習をしていた。それが今では音程もコンクールを経ることで安定してきたし、音量も大きくなった。それでワガママになっていたのだろうか。チューバが退屈だなんて思ってしまうとは。

「もちろん、これからも苦しむんだろうな」

「あぁ。もちろんや」

「でも……俺もお前も、みんな吹奏楽が好きだもんな」

「あぁ。当たり前や」

拓真と翔は笑い合った。それ以上、言葉はいらない。

「じゃあオレそろそろ帰るけど、拓あんは？」

「俺はまだ楽器磨いてないから磨いてから帰るよ」

「そうか。ほな、戸締りだけお願いしていい？」

翔はポケットから鍵束を取り出した。拓真の大きな手がそれを受け取る。

「んじゃ、また明日な！」

翔がニッと笑って手を振った。

「うん！　またな」

拓真もようやく自然な笑みを浮かべられるようになった。翔を見送ってから音楽室に戻り、拓真は指紋が付いたチューバを抱えた。

「重て……」

その重みが拓真にはかえって嬉しかった。

夕陽が差し込む中、拓真は黙々とチューバをクロスで磨き続けた。

コラム☆5　楽曲データ集（1）（前書き）

小説中に出てきた２００５年～０６年上半期の楽曲を収録ＣＤを中心に明記しておきます♪　ご興味がありましたらぜひ手にとって聴いてみてください☆☆

コラム☆5　楽曲データ集（1）

こちらでは、これまでに『奏～ｋａｎａｄｅ～』で登場した数々の楽曲のデータを公開します。といいますのも、各楽曲には著作権がありますので、明記しておかなければならないからです。また、吹奏楽経験者でも一般の方でも「この曲はどんな曲だろう？」と思われるものがあるかもしれません。

中には作者が友人から借りてきた音源を参考に描写したため、どのＣＤに収録されているか……というものがわからないものもありますが、できる限りのことを記したいと思います。また、音源は現在比較的手に入りやすいものを基準に記載します。

※省略記号の表記について。
Ｍ８＝ミュージックエイト
ＮＳ＝ニュー・サウンズ・イン・ブラス。数字は年号を示します。
Ｏ＝吹奏楽オリジナル曲
Ｃ＝クラシックアレンジ曲
Ｍ＝マーチ
Ｋ＝吹奏楽コンクール課題曲

☆２００５年編☆
＜第５話＞
♪翔が吹いていた「アシタカせっ記」＝「もののけ姫」メドレー。ＮＳ９８に収録。

＜第９話＞
♪翔が吹いていた「スカイ・ハイ」＝スカイ・ハイ。ＮＳ２００５に収録。

＜第１２話＞

♪ＣＤから流れた『水戸黄門』のあゝ人生に涙あり＝ジャパニーズ・グラフィティＸ「時代劇絵巻」。ＮＳ２００５に収録。

＜第１６話＞

♪ディズニーメドレー＝ベスト吹奏楽１００に収録。元々はＮＳ８１のＡ面収録

♪Ｔｈｅ　７ｔｈ　Ｎｉｇｈｔ　ｏｆ　Ｊｕｌｙ＝Ｏ。アルプスの詩　福岡工業大学附属城東高等学校吹奏楽部　第３５回定期演奏会に収録。Ｇｏｏｇｌｅでも「Ｔｈｅ　７ｔｈ　Ｎｉｇｈｔ　ｏｆ　Ｊｕｌｙ」で検索するとＹｏｕ　Ｔｕｂｅ動画でヒットします。

♪ＰＵＳＺＴＡ＝Ｏ。読みは「プスタ」。２００６年度風見台高校の自由曲でもあります。全４楽章。私が持っている音源の収録ＣＤは不明ですが、多数音源はあります。

♪タイタニックメドレー＝ＮＳ９９。こちらは楽譜のほうで違う形式のものも存在します。

♪リンゴの唄＝Ｍ８。戦後間もない頃の歌です。

♪高校三年生＝Ｍ８。懐（なつ）メロと呼ばれる歌です。

♪マーチ　エル・キャピタン＝Ｍ。スーザ作曲です。１９５６年のコンクール職場の部課題曲でもあります。

♪Ａ列車で行こう＝ベスト吹奏楽１００に収録。元々はＮＳ７９のＡ面に収録。

♪ＴＲＵＴＨ＝トゥルース。ＮＳ８９に収録。

＜第１７話＞

♪ホール・ニュー・ワールド＝ＮＳ９５に収録。またはベスト吹奏楽１００。

＜第３５話＞

♪ＪＥＷＩＳＨ　ＦＯＬＫ　ＳＯＮＧ　ＳＵＩＴＥ＝ＹｏｕＴｕｂｅでこのタイトルをそのまま打ち込んでいただいて検索するとたくさん出てきました♪（情報提供・Ａｓｋｅｒ氏）

＜第４６話＞

♪青い山脈＝Ｍ８。懐メロ

♪憧れのハワイ航路＝Ｍ８。懐メロ

♪学生時代＝Ｍ８。懐メロ

♪月影のワルツ＝Ｍ８。懐メロ

＜第４８話＞

♪ルーマニア民族舞曲＝ピアノ曲。「ＫＡＮＧＡＫＵ　Ｖｏｌ．２」１９９７～１９９９日本管楽合奏コンテスト・セレクションに収録。

♪メリーウィドウセレクション＝ミュージカルアレンジ曲。鈴木英二氏編曲のものが特に吹奏楽では有名。音源も多数あり。

♪風紋＝１９８７年Ｋ。風紋　―　保科洋作品集に収録。

♪歌劇『トゥーランドット』より＝木村吉宏氏編曲。

＜第４９話＞
♪ケルティック・ノッツ＝Ｏ。ニュー・ウィンド・レパートリー２００３に収録。

♪ミッション・インポッシブル＝スパイ大作戦のテーマ。ＮＳ９５に収録。

＜第５０話＞
♪マーチ・ベスト・フレンド＝Ｏ。２００３年度Ｋ。課題曲参考音源以外にも多少の音源あり？

＜第５２話＞
♪翔が演奏した『山口百恵メドレー』＝ＮＳ２００４収録。ジャパニーズ・グラフィティⅨ　いい日旅立ち。

＜第５５話＞
♪アルヴァマー序曲＝Ｏ。Ｊ．バーンズ作曲。東京佼成の序曲集に収録。

＜第６２話＞
♪ホール・ニュー・ワールド＝ベスト吹奏楽１００に収録。
♪スーパーカリフラジリスティックエクスピアリアドーシャス＝ＮＳ９３に収録。
♪アフリカン・シンフォニー＝ベスト吹奏楽１００に収録。
♪シング・シング・シング＝ベスト吹奏楽１００に収録。

＜第７８話＞
♪粉雪＝Ｍ８。

♪ラスト・クリスマス＝恐らくＭ８。
♪クリスマス・イヴ＝山下達郎の曲でＭ８。
♪はじめから今まで＝Ｍ８。
♪ディズニーファンティリュージョン！＝ＮＳ９６に収録。

＜第８８話＞
♪Ｂｏｙｓ＆Ｇｉｒｌｓ＝浜崎あゆみの曲でブラバンエイベックスに収録。
♪色恋粉雪＝柴咲コウの曲。作者の想像で描いたため、楽譜の存在は不明です（すみません！）
♪出逢った頃のように＝ＥＬＴの曲でブラバンエイベックスに収録。

＜第９３話＞
♪列車で行こう＝２００３年度Ｋ。川村昌樹作曲。大阪市音楽団が演奏担当。
♪ディズニーメドレー２＝ＮＳ８９に収録。

＜第９４話＞
♪リバーダンス＝ケルトの叫び（ＣＲＹ　ＯＦ　ＴＨＥ　ＣＥＬＴＳ）に収録。
♪Ｌｅｔ’ｓ　Ｓｗｉｎｇ♪　グレン・ミラー☆ワールド→グレンミラー・メドレー＝ＮＳ９３に収録。
♪ジャパニーズグラフィティー１０～時代劇絵巻～＝ＮＳ２００５に収録。
♪Ｍｙ　Ｗａｙ＝ＮＳ７４に収録。。
♪キャラバンの到着＝ＮＳ２００３に収録。
♪千と千尋の神隠し＝天野正道『Ｇｒ』よりシンフォニックセレクション～明日への希望に収録。
♪桜＝コブクロの曲。Ｍ８。

＜第１０３話＞
♪課題曲１～５：２００５年度Ｋ。
♪吹奏楽の為の序曲＝２０００年度Ｋ。坂田雅弘氏作曲。
♪絵のない絵本＝樽屋雅徳氏作曲。Ｔｏｋｅ　Ｃｉｖｉｃ　Ｗｉｎｄ　Ｏｒｃｈｅｓｔｒａ　Ｖｏｌ．４に収録。
♪沐浴＝原曲はあるもののタイトル・作曲者ともに音源からは不明なため、仮名の曲です。冒頭に長いアルトサックスのソロがあります。
♪大地と水と火と空の歌＝Ｔｏｋｅ　Ｃｉｖｉｃ　Ｗｉｎｄ　Ｏｒｃｈｅｓｔｒａ　Ｖｏｌ．３に収録。冒頭部分は実際の楽譜はユーフォのみのソロです。

＜第１０８話＞
♪君の瞳に恋してる＝交響組曲第７番『ＢＲ』よりに収録。
♪瞳をとじて＝Ｍ８。実際に演奏したことはまだ作者がないため、あくまで想像上の流れとなっています。
♪銀河鉄道９９９＝Ｍ８バージョンなど多数ある模様。この音源はＭ８のものとは異なりますが、詳細不明です。

＜第１２１話＞
♪シンクロＢＯＭ－ＢＡ－ＹＥ＝ＩＮ吹奏楽　テレビドラマ編に収録。
♪渡る世間は鬼ばかり＝ＩＮ吹奏楽　テレビドラマ編に収録。

詳細がわからなかったりしますのでミスがあったりしましたらご指摘のほどお願いします！

第１３６話　夏のサプライズ

４日金曜日。明日に本番を控えている七海高校吹奏楽部は午後４時に練習を切り上げた。本番前日に吹きすぎてバテたりしては何にもならないから、早めに終わるようにしているのだ。

「かっける！」

陽乃はウキウキ気分で楽器を片付けている翔の元へ駆け寄った。

「ん？　なんや、いつになくご機嫌やな」

「うん！　あのさ、今日の帰りちょっとハーゲンダッツ寄って帰らない？」

「ハーゲンダッツ？」

「うん！　夏のサプライズ企画っていうのやってるみたいで、限定のアイスを注文したらもれなくサプライズプレゼントがもらえるんだって」

「へぇ～」

「行ってみない？」

「うん……行きたいんやけど……」

いつものように良い返事が返ってこない。陽乃は翔の都合も考えずに声をかけてしまったと思い、すぐに答えた。

「あ！　忙しいなら全然構わないよ？　期間限定アイスだって今月いっぱいやってるし」

「そうか？　なんかゴメンな」

「いいのいいの！　翔にだって用事あるんだしさ。また……」

「明日はどない？」

「明日？」

陽乃は少し嬉しそうに笑った。

「いいの？」

「本番終わった後に。どう？」

「嬉しい！　絶対行こうね！」

「うん！　ほな、今日はゴメンな」
「いいのいいの！　じゃ、あたし先に帰るね？」
「わかった！　また明日な」
「バイバイ！」
陽乃は機嫌良く音楽室を出た。入口でもう一度振り返ると、翔はまだこっちを見てくれていた。こういうのは案外嬉しいものだ。
陽乃はもう一度軽く手を振った。それから部室の入口を見ると、春樹と絵美が一緒に部室を出るのを見た。
「あれ？　お二人さん、仲良いんだね！」
今気づいたのだが、手を繋いでいる。彼らも今まで繋いでいた手をパッと放して焦った様子で陽乃のほうを見た。
「あれ……。あの……」
「ゴメン！」
春樹が急に大声で謝るや否や、すぐに陽乃の所へ二人で駆け寄ってきた。
「今の、内緒にしといてよ、皆には！」
絵美が両手を合わせて陽乃を見つめる。春樹も同じような体勢だ。
「えっと……うん、わかったよ。ただ、こんだけ人数いる部だし、いつか皆に打ち明けたほうが楽でいいと思う」
すると絵美がクスッとわらって言った。
「わかってる。ありがとね、陽ちゃん。行こ、ハル」
「うん。またね、朝倉さん」
陽乃は微笑ましい二人を見送り、部室へ戻ってカバンを手にした。家へ着いて門の前に自転車を停めると同時に夏樹が玄関から出てきた。そして陽乃の姿を見るや否やすぐに玄関に隠れるように入ってしまった。
「なにやってんだろ？」
陽乃はとりあえず自転車を駐車場へ入れてから玄関を開けた。しかし、夏樹の姿はない。
「なんだ、アイツ」

とりあえず帰宅の挨拶をし、リビングへ入って水筒を洗ってから2階へ上がった。すると部屋から夏樹が出てきた。
「どうしたの夏樹。なんかさっき、変だったよ」
「そんなことないよ。なんでもない、なんでもない」
ようやく声変わりした低い声で夏樹は下へ降りていった。なんとなく不審に思いつつも陽乃は自分の部屋へ入った。
まもなくすると由利が「夕食よ～」と呼んできたので陽乃は下へ降りた。
「陽乃、明日はお父さんお母さんおばあちゃんで夏祭りの演奏会、聴きに行くからね」
「えっ！？　本当！　嬉しいな！」
陽乃はウキウキした声で答えた。コンクールに続いて祥夫が聴きに来てくれるというのだから、嬉しいことこの上ない。しかし、なぜか夏樹だけいない。
「夏樹は？　来れないの？」
すると「ゲホッ！　ゲホゲホッ！」とむせこんだ夏樹が慌ててお茶を飲んでから「うん！　ちょっと用事がね」とあっさり答えてきた。今まで欠かさず聴きにきてくれていただけに、陽乃は少しショックだった。
「そう。まぁ、また演奏する機会はいくらでもあるからね。また来てね」
「うん！　今度は絶対行くよ」
そう答える夏樹の笑顔はどこか不自然なままだった。

翌日の午前中は軽く通しをしただけで特に変更点もなくあっという間に時間は過ぎていった。そして楽器を積み込む時間になったが、どこを見ても翔の姿が見当たらない。いつもなら楽器の積み込みを仕切っているはずであったが、今日は健之佑と優輝が仕切っている。
「ねぇ、のむちゃん。翔知らない？」
「え？　カケ先輩っすか。俺たちに楽器積み込みヨロシクって行っ

てどっか行っちゃいましたけど」
健之佑も「カケ先輩にしては珍しいっすけど」と付け足した。
「何それ。いい加減だなぁ、案外。ありがと」
陽乃は周囲に翔がいないか探してみるが、どこを探しても見当たらなかった。
「……ん。で……やねん。あ、そうそう……に……時半集合でな……」
聞き覚えのある声と関西弁。間違いなく翔だろう。陽乃はそう思い、校舎裏の北駐車場を覗き込んだ。案の定、携帯電話片手に誰かと話をする翔がいた。
陽乃は我慢しきれずそのまま翔のところへ歩き出した。
「ちょっと！　翔！」
「うわわわ！」
翔は慌てて携帯電話を切った。それからすぐに着信履歴を消すのも陽乃は見逃さなかった。
「ちょっと……なんでわざわざ着歴消すのよ？」
「いやぁ……ちょっといろいろ理由がありまして？」
「まさか……まさか浮気!？　許さない！」
陽乃は１０センチほど大きい翔を襟(えり)掴みしてガクガク首を揺らした。
「ワワワワワ！　ちょ、ちゃうちゃう！　ちゃうって、落ち着けって陽乃ぉ！」
「じゃーなんなのよ、さっきの電話！　言ってみなさいよ！」
陽乃の目が釣りあがっているように見える。翔は恐怖すら覚えたが、冷静に答え続ける。
「い、言わんでもわかる時来るからさぁ！　オレを信じてくれぇ！」
翔が悲鳴を上げるように大声を出した。
「ホントだよ？　ウソついてたら許さないからね！」
陽乃はプリプリしながら楽器を積む場所へと帰っていった。
「ゲホッ……ホンマ無茶しよるわ」

翔は乱れた衣服を整えてから楽器積み込みへと戻った。
市役所公園へは徒歩5分。午後2時30分から演奏なので翔たちは午後2時に球場内の控え場へ到着して楽器を準備し始めた。
「あっ、陽乃〜！」
外から陽乃に声をかけたのは中学時代の同級生だった多部未華乃（たべみかの）と志田未咲（しだみさき）だった。
「ミカちゃん、ミサ！　来てくれたの！」
「うん！　頑張ってね！」
「ありがとー！」
陽乃は手を振ってから翔のほうを振り返った。するとキョロキョロと明らかに挙動不審な翔が目に入ってきた。
（もし別に女の子とかいたらとっちめてやる。でも……吹奏楽部の女子とかだったらどうしよう）
不毛な悩みばかりが陽乃の頭を巡る。そうこうしているうちに本番の時間が近づいてきたので移動をして舞台横に控える。そして前の民謡の団体が終わったので陽乃たちは舞台へ上がった。
まず、椅子のセッティングだ。これはいつも絵美と光瑠、はるかが仕切ってくれる。
「木管から行きます！　クラリネットが4、フルートが3、オーボエとバスーンが1。それから、サックスがアルトテナー合計5です」
「え？」
陽乃は一瞬、はるかの声を聞き間違えたかと思ったがすぐに翔が椅子を5つ並べた。
「……えと、翔でしょ。それにはるかちゃん、さゆりん、麻綾ちゃん……どう考えても4人だけど」
陽乃は何回も数えなおすがどう考えても今年、サックスパートは4人しかいない。隣で独り言を聞いていたらしい愛実が言った。
「持ち替えがあるとかじゃないんですか？」
「あ……持ち替えか」
それにしても何に持ち替えるのか。

ソプラノサックス？　いや、そんな曲はなかった。
バリサク？　まさか。
「おーい、そろそろ席に着け」
そうこうしているうちに恭一がそう指示をしてきたので陽乃もあまり考える暇がなく座ってしまった。
「え……！？」
すると、サックスの座席、ちょうどはるかと麻綾の間に見知らぬ男の子が座っているのだ。陽乃は目を擦(こす)ってもう一度確認してみる。何度見ても男の子がいる。間違いない。
（やだ……まさか、お化け！？　あ、あたしにしか見えてないとか……どうしよう！）
すると司会が始まり、七海高校吹奏楽部の紹介をし始めた。しかし、陽乃にはその男の子がいったい誰なのかという考えが巡り巡っていたので司会者の言葉など耳に入ってこない。
「あの子……かなり動揺してるわ」
由利が苦笑いする。
「まぁ、言ってなかったからなぁ」
祥夫がクスクス笑った。
やがて司会が徹と勇の二人に代わった。徹が初めに喋り始めた。
「皆さん、こんにちは！　僕たちは七海高校吹奏楽部です。本日は夏祭りに相応(ふさわ)しい曲を４曲準備してまいりましたので、ゆっくりとお聴きください！」
拍手が沸く。そして勇が喋り始めた。
「まず、１曲目はＷｈｉｔｅｂｅｒｒｙの『夏祭り』です。そして、本日はなんとサプライズゲストをお迎えしています！」
すると、陽乃がてっきりお化けだと思い込んでいた少年が立ち上がった。
「この部の副部長の朝倉陽乃さん」
「へ？　あ、あたし」
しかし、この後の言葉を聞いて陽乃は思わず大声を上げた。

「の弟さんで、中学2年生の朝倉夏樹くんでーす！」
夏樹は「よろしくお願いします！」と低い声で挨拶をした。すると会場内から拍手が沸くより前に陽乃の大声が球場内に響き渡った。
「夏樹～！　あ、あんたそこで何やってんの！？」
ドッと沸く笑い声を背に、夏樹が陽乃に向かってピースをした。

第１３７話　素朴な音色

「ゴメンね～内緒にしてて。姉ちゃんをビックリさせたかったんだ」
夏樹は幼さの残る笑顔でアッサリ言い切った。陽乃は口をパクパクさせたままペタリと座り込んでしまった。
勇が陽乃を見てクスクス笑いつつ、司会を続ける。
「え～、ではゲストの紹介も終わりましたので１曲目、Ｗｈｔｅｂｅｒｒｙの『夏祭り』をお聴きください。冒頭のアルトサックスソロはもちろん、朝倉夏樹くんに吹いてもらいます！」
「え？」
夏樹は緊張した面持ちでマイクのすぐ前に立った。まだそれほど高くない背に合わせてマイクを下げる夏樹を見ながら、陽乃は果たして夏樹がうまく演奏できるのかどうか心配でたまらなかった。
それはもちろん、客席から見る祥夫たちも同じだった。
「ねぇ、あなたは夏樹のサックスの音なんて聴いたことある？」
由利が心配そうな声を出した。祥夫も首を振る。
「私もサックスを吹いているとは聞いていたが、音色は聴いたことないなぁ……」
「あの子ならきっと大丈夫よ。サッカーでもシュート決めたこと何度もあったじゃない」
知恵子が微笑みながら呟く。
同じ頃、未華乃と未咲も客席から夏樹の姿を見つめていた。
「夏樹くん、男っぽくなったねぇ」
未咲がホゥッとため息をついた。
「ホント。私惚れちゃいそうだよ」
「ミカ、彼氏に怒られるよ」
未咲が笑いながら未華乃の肩をつついた。
「立ち直れたならそれでＯＫなんだけどね」
二人はもう一度夏樹を見た。自信に満ち溢れているその表情を見

れば、きっと大丈夫だろうと二人は確信した。
夏樹は恭一を見つめて強くうなずいた。恭一もそれを見届けてからお辞儀をし、指揮台に上がった。
指揮が静かに降りた。夏樹は目いっぱい息を吸ってソロを吹き始めた。
上手な人や耳の肥えた人だと少し荒さのある、翔とは違う艶も煌びやかさもない音色に聞こえるかもしれない。しかし、だからこそこれからに期待できる、素朴な音色が球場内にマイクという機械を通してではあるが、響いて行った。
「キレイ……ですね」
本番中だというのに隣から勇が陽乃に声をかけてきた。
「あたしの弟だけど……うまいわ、アイツ」
「カケル先輩」
同じ頃、麻綾も翔に話し掛けていた。
「彼、いま何年生ですか？」
「中3やで……」
「来年、絶対ウチに来てもらいましょうね」
夏樹のサックスの音色は市役所の中にも微かに聞こえていた。休日出勤している職員の耳にもその音色はもちろん届いていた。
職員は仕事の手を止め、その微かに届く音色に耳を傾ける。
「あなた……すっごい上手いわ、あの子」
由利は驚きを隠せなかったがそれ以上に驚いていたのは祥夫だった。
「もう……言葉に出ないな」
そして夏樹のソロが終わると曲は一気にアップテンポになる。チューバの音色の後に続くのは木管のメロディ。それを引き継ぐ金管楽器。少しでも音程がズレると汚くなってしまうだけに、ここは慎也と絵美が何度もセクション練習を重ねた部分だ。
基本的に夏祭りはこの構成の繰り返しで行ってしまう。そのため曲にメリハリを付けないといけなかった分、部員たちは練習に苦労

した曲だった。
　夏樹はまだ初心者に近い分、もっと苦労しただろうと陽乃は思った。しかし、いったいいつどこでどういう練習をしてきたのかは謎だった。
　夏祭りが終わる。続いては『Ｈａｐｐｙ　Ｄａｙｓ』だ。
　この曲もなかなかの曲者だ。とにかくどの楽器も休む暇がないのだ。特にドラムセットは大変だろう。裏打ちが大変すぎるのだ。当然これは男子で手慣れた洋之が担当する。ちなみに洋之は最近、髪の毛が伸びてきているので若干うっとうしそうである。
　まず初っ端はチューバのロングトーンから入る。そしてどんどん楽器が重なって複雑なハーモニーに変化していく。洋之のシンバルの刻みをきっかけに正規の曲のテンポになり、トロンボーンが前奏を吹き始める。ドラムセットが一際華やかに音を立て、ホルンが雄叫びを上げる。そしてサックスがメロディを吹き始めた。
　音程が少し取りにくいメロディのはずだが、これも夏樹はあっさり吹いてみせた。しかも立奏のはずなのにあまり緊張している様子は見せない。メロディをホルンが引き取る。彼らも立奏だ。二人しかいないのにその音色ははっきり聞こえる。
　そしてサビの部分はペット&ボーンとクラリネット&フルートが交互にメロディを吹く。間奏部分はトランペットとトロンボーンが交互に吹く。ここではそれぞれ吹く所で楽器を上下させるパフォーマンスを入れた。
　そしてすぐにトロンボーン&ユーフォニウムのメロディ。もちろん立奏だ。それを引き継ぐのはクラリネット。とにかくソリの目白押しだ。
　再びサックス。夏樹は決して遅れることなく全員についていく。陽乃にはいつ彼らと夏樹が合わせる日があったのか不思議でたまらなかった。
　そしていよいよフィニッシュだ。
　再び冒頭部分の再現。トロンボーンとホルンの音色に全楽器が加

わって曲は一気に終わりを告げた。
ふと陽乃は夏樹と目が合った。うっすら汗をかいているが、夏樹は嬉しそうに笑う。あんなに嬉しそうに笑う夏樹を見たのは陽乃も久しぶりだったので、嬉しくなってつられて笑ってしまった。
残り1曲。ジャパニーズグラフィティー5だ。若い人向けの曲ばかり聴いているお年寄りたちは少し退屈そうにしていたので、ここで印象を変えるにはピッタリだと思い、陽乃は楽しみで楽しみで仕方なかった。

第１３７話　素朴な音色（後書き）

夏樹の過去については私の別作品『二人きりの座席』にて掲載しておりますので、ご興味のある方はぜひごらんください♪

第１３８話　〇〇な音色

「それでは、本日最後にお聴きいただきます曲を紹介いたします」
勇が笑顔で言った。徹がマイクを受け取る。
「最後の曲は、昭和５０年代の曲をふんだんに詰め込んだ『ジャパニーズグラフィティ５～日本レコード大賞、栄光の昭和５０年代』です！　この曲はたくさんの楽器がソロを吹いたりソリといってパート全員でメロディを吹いたりしますので、パフォーマンスにもご期待ください」
勇が引き継ぐ。
「それでは、初めにソリストを紹介しておきます。まず、アルトサックスは共に２年生中野さゆり、鈴木麻綾です。きっと色っぽ～い音色を聴かせてくれると思います」
テンションが上がってきたのか、二人は止まることなく司会を続ける。
「それからトランペットの朝倉陽乃先輩が年齢の割に渋～いオジサン臭いソロも聴かせてくれるので、ぜひご期待ください」
「後で富士原くんはぶっ飛ばすっと」
陽乃はフルフル震える拳を押さえながら小さく呟いた。
「そして、ホルン、バスーン、オーボエ、フルート、クラリネットのアンサンブルチックなソロも登場します。耳を澄ましてお聴きください。それでは、ジャパニーズグラフィティ５です」
勇と徹がお辞儀をして席へ戻り、恭一がお辞儀をすると大きな拍手が沸き起こった。しばらく間を置いてから恭一が指揮棒を降ろした。
フルート、クラリネットのイントロをきっかけに早速さゆりのソロが始まる。恭一曰く「色っぽい」音色が要求されたので、客観的に聴くためにオーディションまでして選んだソロメンバーだった。結果、意外にも翔が一番票が少なく、さゆり、麻綾の順で票が多か

った。
そしてクラリネットの低い音域でのメロディ。サックスもあり、時たま入るオーボエ、フルート系統の裏メロが魅力をさらに引き立てる。トランペットが加わり、渋い雰囲気に変わる。そして陽乃の渋いソロが短い時間だが、球場内に響く。
それから麻綾のソロ。恭一曰く、ここは「エッチな音色」だとか。麻綾は最初それを聞いてやたら嫌がっていたが、なんとなく雰囲気を掴んだようだった。
アップテンポして、ここからは北酒場だ。明るい音色と陽気なリズム。どこからかオジサンオバサン集団が揃って歌っているのも聞こえてきた。
トロンボーンとユーフォが立奏する。手拍子も加わり、球場内は大賑わいだ。テンションが上がってきて、ドラムセットを叩く美里のパワーもどんどん強くなる。
急にテンポも調も変わって現れた曲は「ルビーの指環」だ。クラリネット、サックスのメロディはとことん「艶っぽい音色」を恭一は要求してきた。16や17の生徒たちに「艶っぽさ」と言われてもさっぱりわからず、気づけばノペーッと薄い演奏になっていたので、ここは特に時間をかけて練習した。
サックスとユーフォ全員が立ち上がる。彼らのソリなのだ。金管と木管がソリをするとどうも音色の差が出てしまうが、春樹と愛実はサックスに音色を合わせるためにここ2、3日、翔たちと何度も何度もセクション練習をした。
「不思議やねぇ」
友美子が呟いた。綾音が不思議そうに聞き返す。
「何が？」
「翔とか、夏樹くんとか。なんかまだ色っぽいなんていう言葉似合わへん年頃のはずやのに、なぁんか色っぽく見えるんやから……」
「……。」
綾音はボーッとした様子で夏樹と翔を見た。汗をかきながらも演

奏する夏樹の姿を見て、少しドキッとしてしまった。
「ね？　そう思うやろ」
「まぁ……そう見えんでもないかな」
綾音は顔が赤くなっているのを友美子にバレないように顔を背けた。
再びルビーの指環の前半メロディが聞こえた。それからまもなく転調して、ますます色っぽい雰囲気を濃くしていく曲調。汗をかきながらも楽しそうに演奏する部員たちに、観客は手拍子を送り続けた。
不意に曲が静まる。そして前へ出てきたのは健之佑、由美子、誠、絵美、雪子の５人だ。
健之佑の合図と同時に由美子以外の４人が音を奏で始める。金管といえど、雪子のホルンは木管アンサンブルにも参加できるほど優しい艶のある音色を出すこともできるのだ。当然、そうなるまでに時間がかなりかかってしまう。
いっぽうのオーボエはどこにいても音が響きやすい楽器だが、音程は一番取りにくい楽器だ。オーケストラではオーボエを基準にチューニングをする。ソロにあまり慣れていない由美子は緊張そのものといった様子だった。無意識なのか緊張なのかはわからないが、ビヴラートがかかっている。
絵美はすっかり慣れた様子で、全員の様子を見ながらノリノリで演奏している。やはり、ソロは経験がモノを言うのだろう。
金管楽器の勢いある音と共にテンポが上がり、一気に曲は雰囲気を変えた。ドラムセットやタンバリンの陽気なリズム、トロンボーンの勢いある伴奏で原曲の雰囲気がますます醸し出される。メロディはしっかり伴奏に乗って、伴奏はメロディを支えて。一人ひとりが楽器の役割をしっかりと理解しているからこそ、できる演奏だ。
曲は一気にフィナーレへと向かう。手拍子が盛大に鳴り、老若男女全員が楽しんでいるのが観客に背を向けている恭一でも感じ取ることができた。

そして遂にフィナーレを迎えた。曲が鳴り止むと同時に拍手が沸く。汗だくになりつつも部員たちは恭一の指示と同時にサッと立ち上がった。

（クラシックやオリジナルもいいけど、やっぱオレはポップスが一番やな）

翔は額からこぼれる汗を拭いながら、そう考えていた。

第１３９話　Ｎｅｗ　Ｔｒｙ！

８月１１日金曜日。お盆休み前最後の部活になった。今日は１時間ほど楽器の手入れや片づけをした後で、話し合いの時間を取る予定だ。

「話し合いって、そんなに多いんですか？」

彩香が陽乃に聞く。陽乃もそれほど詳しく翔から聞いてはいないが、合宿の間にすること、七海祭（学園祭）について、高校総合文化祭についてなど話はたくさんあるという。

「うーん……。まぁあたしも詳しく話を聞いたわけじゃないんだけど、とりあえず合宿の話と七海祭については急がないといけないらしいんだ」

「七海祭ですか～！　私、学園祭ってすっごい楽しみなんですよ。吹奏楽部は去年、何かやったんですか？」

「へ？」

「ほら、演奏とか」

「まさかまさか！」

陽乃はブンブン首を横に振った。去年のあの人数と技術ではとても人に聞かせられるようなレベルではなかったから、学内での行事は基本的に丁重にお断りしていた。

「えー？　してなかったんですか？」

勇が意外そうな雰囲気で声を上げた。

「もちろんじゃん。あんな演奏、聞かせられるハズがない」

「そうですかねぇ。だって、去年末の市吹の演奏会の『草原の歌』。あれ、先輩方１０人で演奏したんですよね」

「あ！　それなら私も聴きに行った！」

亜紀が会話に参加する。

「私、あの演奏聴いて絶対ナナコウ入ったら吹奏楽部に入るって決めましたもん！」

「え!?　そうだったの、亜紀ちゃん?」
陽乃はかなり驚いた。まさかあの演奏会に来ている後輩がいたとは思わなかったからだ。しかし、意外と人数は多かったことがどんどんわかる。
「ちなみに、俺もその一人ですけどね」
勇が言う。
「そんなの初耳だよ!」
陽乃は驚きを隠せず、バシバシと勇の背中を叩きながら笑った。
「痛いッスよ、先輩」
「あ、ゴメンゴメン!　ねぇ、他にもそういう子、いるの?」
勇は指でカウントをしながら名前を挙げ始めた。
「あ、多いっすよ。1年でそういう話になったことあるんスけど、俺でしょ、吉山でしょ、それから洋之(ひろ)に鈴木、駿、乃木、三宅(みーやん)、加藤ですかね」
「そ、そんなに……」
「去年、七海祭出たらよかったんですよ、先輩」
彩香が残念そうに呟く。
「今年は出ましょうね!」
「もっちろん!」
陽乃は満面の笑みで彩香に元気良く返した。
話し合いは午前10時から始まった。翔と陽乃、絵美、慎也の4人が前に立つ。司会は翔。字は絵美が一番キレイなので(書道特待生)書記は絵美に任せた。
議題は5つもあった。
・合宿について
・マーチングコンテストについて
・七海祭について
・高校総合文化祭について
・アンサンブルコンテストについて
「えーっと、ほんじゃ今から話し合い始めます。まず、議題の中で

も急ぎたいのはマーチングと合宿、七海祭です。配ったプリントにだいたいの概要は書いてあります。しばらく目を通してください」

翔はそう言った後、確認のために再度プリントに目を通した。

＜全日本マーチングコンテスト＞

全日本マーチングコンテストは、社団法人全日本吹奏楽連盟と朝日新聞社が主催し、毎年11月に開催されるマーチングのコンテスト。

都道府県大会に参加し、審査の上代表が決められ、上位大会である支部大会（北海道・東北・東関東・西関東・東京・東海・北陸・関西・中国・四国・九州）へと進み、そこで審査の上代表権を得ると全日本マーチングコンテスト本選（便宜上以下「全国大会」と記す）へと進む。全国大会の審査は都道府県大会及び支部大会の方法で行われる。

すると、優から最も純粋な疑問が飛んできた。

「マーチングって、何するんですか？」

隣にいた恵梨もうなずく。

「あ、そっか。二人は初心者やから知らんのも無理ないかぁ。トオルっちもそうやんな。あ！　最悪や。2年も大谷ちゃん以外知らんのんちゃう？」

すると由美子、美里がウンウンとうなずいた。

「私は知ってるよ～」

絵美がいちおう言っておくといった様子で言う。

「袴田中出身の人は吹奏楽部強いからなぁ。えっとな、マーチングっていうのはめっちゃ簡単に言うと動きながら演奏していろんな形でパフォーマンスするっていう感じかな」

「なるほど……わかりました」

優が小さくうなずいた。

「で、それに出るかどうかというのを話し合います」

「え！？」
全員が一様に声を上げた。
「先輩！　それって県大会はいつですか！？」
健之佑が手も挙げずに勢いで質問した。
「え～……実はあまり日がなくて。９月２３日土曜日です。いちおう休みですね」
翔は携帯電話のスケジュール帳片手に質問に答えた。
「ほぇ～！　あと１ヶ月ですか……」
健之佑のため息も、もっともだ。
マーチングというのは隊列を組み、歩き、演奏するのが基本なので歩いてもブレないなどの演奏技術はもちろん、歩き方、隊列の美しさなどが求められる。さらにチューバや打楽器は普段吹いている楽器とは形状が異なってくるために別途ある程度練習が必要である。
ダブルリードと呼ばれるオーボエやバスーンは、あまり激しい動きをするとリードが損傷する可能性もあるので打楽器に加わることもある。弦バスも同様だ。あれほど大きい弦楽器を持って動いて演奏するのは不可能に近い。
「でも、マーチングに出ぇへんかったら次の大きい本番は１０月２２日から２４日まである七海祭になります。それまでに１８日の月曜日、敬老の日に老人ホームに慰問演奏に行く以外、これといって演奏の予定はありません」
「それはちょっとつまんないですね」
誠がホーッとため息をついた。翔自身、１ヶ月以上本番がないのはつまらないと感じていた。
「合宿で七海祭の練習ってのもいいんですけど……なんかダレちゃいそうやし」
「あの」
手を挙げたのは光瑠だった。
「はい、伊原さん」
「マーチングをするとなったら指導者はどうなるんですか？　東先

生がされるんでしょうか」
「あ……指導者のことは決まってから言おうと思ってたんやけど。村峰先生の退職されるときのプチコン覚えてる？」
「あ～……はい」
「あのときオーボエのＯＢで来られた、神崎しおりさんが今所属してはるバンドでマーチングの指導をしてはるんで、神崎さんに指導してもらおうって東先生が言ってはります」
光瑠はどうやらうろ覚えのようだった。健之佑はオーボエの先輩ということに加えて美人だったのでよく覚えているらしく、その名前を聞いただけでニヤニヤしている。
「なんか野村くんがキモいですけど、とりあえず指導者は問題ないんですよね？」
光瑠のトゲのある言葉に健之佑がシュンとした様子になった。翔は苦笑いしながら「まぁ、大丈夫やね」と返す。
「じゃあ、後はオレらのやる気次第ってことですか？」
駿がワクワクした様子で翔に聞く。
「そゆこと」
それを聞いてパァッと駿の表情が明るくなる。
「俺、やりたいっす！　マーチング憧れやったんですよ！」
「でも、練習はキツいよ？　基礎練習がとても必要だし。みんな、それについてこれる？」
絵美が心配そうに言う。絵美も袴田中で吹奏楽にずっと憧れていた分、彼らの練習や演奏会を見たり聴いたりすることも多かったのだ。
「俺はやる気あるんですけど……みんな、どう？」
駿がおそるおそる聞いた。
「あたしは反対です」
真っ先に手を挙げたのは小林梨子（こばやしりこ）だった。
「その理由は？」
翔が聞く。梨子はいざというとき、自分の意見をしっかりという

子だ。

「今から1ヶ月弱です。明日からあたしたち、お盆休みに入るんですよね。それで部活再開が8月21日。合宿へ行くのが22日から25日まで。26日27日の土日は合宿後の休み。そうしたら集中して練習できる夏休みは1週間弱しかないんです。学校が始まったら課題テストやら体育祭もあるのでそれほど練習に集中できるとはあたしは思えません。だからあたしは反対します」

もっともな理由だ。週休二日制となった今、七海高校では月曜日は7時間目まで授業がある。授業が終わって掃除やホームルームをしているので月曜日は実質部活は5時開始。それでもたまに補習などが入るために全員が揃いにくい。

さらに梨子は続ける。

「マーチングは難しいみたいなんで、練習時間が少ししか取れないなら合宿でも七海祭の練習に集中してみんなに自信を持って演奏を聴かせられるようにしたほうがいいと思います」

「なるほど。今の意見に同意の人」

翔が聞くと、1年では麻綾、はるか、優輝、佳菜、徹、愛実、恵梨、洋之が手を挙げた。2年では拓真、絵美、由美子、雪子だ。

「うーん……難しいな。よし、ほんじゃ学年ごとに分かれて話し合いしよ！　1年は音楽室、2年は部室で」

「はい！」

すぐに部員たちは移動して話し合いを始めた。2年で真っ先に口を開いたのは雪子だ。

「私、正直ホルン吹くのでいっぱいいっぱいだからその上、動いてなんて吹けない」

それから拓真が続ける。

「それに、楽譜見れないんだろ？　だったら覚えるしかないんだろうけど、俺には覚えられる自信なんてない」

「なるほど。それはわかる。なぁ、宮部（みやっち）と橋本（はっしゃん）はどうなん？」

由美子が小さい声で「恥ずかしいけど……あたし、体力に自信な

くって」と言った。絵美は「1ヶ月やそこらで練習少ししただけで全国にまで繋がる大会にチョロッと出るなんて、他に一所懸命やってる学校に失礼だと思う」と言った。

　すると賛成派の春樹が間髪入れず反論を始めた。

「何も遊び感覚じゃないよ！　誰もそんなこと言ってないじゃん。練習めいっぱいして、そりゃあ長いことやってる学校にはかなわないかもしんないけど、それでも俺たちなりに頑張りを見せればいいと思う」

　春樹にしては珍しく熱くなっていると翔は思った。慎也が続ける。

「俺も春樹と同じ。遊び半分で出るつもりなら賛成なんてしないさ。出るからには上を目指す。楽譜なんて覚えようと思えば覚えられるだろうし、体力だってつくんじゃないの？」

　すると由美子がかなり怒った様子で言い返した。

「ちょっと！　あたしたち女子は男子と違っていろいろ体調に事情もあるんだからね！」

「そんなこと知ってるよ！　でもそんなこと言ってたんじゃいつまでたっても何もできないじゃん！」

　二人は乗り出して言い合いを始めた。しばらく止まりそうにもない。

「陽乃。ちょっと悪いけど2年、仕切っててくれへん？　オレ、1年見てくるわ」

「わかった」

　翔は部室を静かに出て音楽室に入った。ある程度予想はしていたが、ここもかなりモメているようだった。

　盛大に言い合いをしているのは普段冷静な二人――さゆりと優輝だった。

「だぁから！　1年がこんなにやる気ないんだったら先輩たちだって乗り気じゃなくなるじゃん！」

　そう言って机をバンバン叩いているのはさゆりだった。優輝も負けじと机に身を乗り出してさゆりに反論する。

「部の雰囲気ってのは先輩たちが作るもんだろ？　それなのにさっきの意見聞いたら、４人の先輩がマーチングに出ないって言ってたじゃん！　そんなナァナァな雰囲気で出たくなんかないね、俺は」
　他の１年はオロオロしながらも見事に賛成派と反対派で座っている場所が分かれていた。
（これは……学年別での話し合いは失敗やったな）
　翔は苦笑いしながら静かに音楽室のそばから離れてそっと廊下へ出た。
「だいたいさぁ、木管セクリ（※１）と金管セクリが意見対立してんじゃ話し合いになんないよ」
　春樹がブゥッと頬を膨らませて絵美と慎也を見やった。
「そうそう。仕切る二人がこんなじゃ、あたしたちも意見まとめられない！」
　沙希が半ば怒りながら言う。
「そもそも、陽ちゃんと佐野くんの意見はどうなの！？」
　美里が陽乃といたはずの翔を見つめた。
「あれ？　佐野くんは？」
　美里はキョロキョロと部室内を見渡す。しかし、翔の姿はない。
「えっと……１年生の様子見に」
「呼んできてよ。陽ちゃんと佐野くんの意見聞きたい」
「わかった。ちょっと待ってて」
　陽乃は慌てて部室を出て音楽室を覗き込んだ。けれども中にいるのは今にも取っ組み合いになりそうな雰囲気のさゆりと優輝、それを取り囲む１年生だけだった。
「あれ？　いない……。先生に呼ばれたのかな」
　陽乃は渋々部室へ戻った。
「いた？」
「いなかった」
「はぁ？　なにやってんだよ、アイツ」
　拓真はかなりイライラを募らせているようで、少し言葉が乱暴に

なっている。
「肝心なときにいないなんて、何やってんだろね」
由美子がフゥッとため息を漏らした。
「どーも、肝心なときに抜けてた部長が帰りました」
バッと全員が振り向くと、何かを片手にした翔が息を荒くして入口に立っていた。陽乃は慌てて「どこ行ってたの？　トイレ？」と聞いた。
「そないに何べんもトイレ行くかい！　えぇもん見せたるから、全員音楽室集合！」
「えぇもん……？」
雪子が不思議そうに首を傾げる。翔の後をゾロゾロと2年生全員がついていく。1年生も話し合いを中断して翔の指示に従い、着席した。
「えーと、まぁこのままやと話し合いから戦争へと発展しそうなんでここらでちょっとブレイクしましょ」
翔は有無を言わさず持ってきたＤＶＤを再生し始めた。
ワーッという歓声と同時にどこかのホールの舞台の幕が開いた。
「ワン、トゥー、スリー、フォー！」
女子の声と共に照明が点き、演奏が始まった。
「マーチングだ！」
真っ先に声を上げたのは駿だった。
ゆったりとしたメロディに乗って歩き始める隊列。曲がテンポアップし、華やかなマーチングが始まった。
クラリネットとサックスが膝を曲げながら軽やかなステップを踏む。青と白の衣装がバッチリ似合っている。曲の雰囲気が変わる。普段とは異なるドラム隊が見事なアンサンブルを重ねた後、フルートのソロ。その後ろで静かなステップを踏む隊列。それが見事に合っていて文句なしの状態だ。
するとサックスが出てきて実に複雑なステップをいとも簡単に踏みながら煌びやかな演奏をしている。

「あっ！　よく見たら佐野先輩だ！」
声を上げたのは順平だった。陽乃がよく見ると、まだ背は低いが今とほとんど変わらない髪形の翔がサックスを嬉しそうに吹いている。その隣には修平と翔平がいた。
「やだー！　チョーかわいい！」
陽乃はたまらず声を上げた。翔が真っ赤になりながら「静かに見ろよ！」と叫んだが、しばらくザワザワは収まらなかった。
とても10分近くあるとは思えないスピードであっという間にマーチングは終わった。
「すっげぇな……」
拓真がため息を漏らす。途中、チューバが抜けても支障のないパーカッションのソロでマーチングのときに使用するスーザという楽器を奏者が回しているのを見たのだ。
「ホント……。立っても全然ブレなしで吹けるんだ」
絵美もホゥとため息を漏らす。
「どう？　マーチング」
翔は全員に聞いた。
「確かに、練習は大変かもしれへん。でも、得るものもあると思うよ。オレは出たい。だって、このメンバーでマーチングできるなんて思ってもみぃひんかったから」
翔の素直な意見に全員がうなずいた。
「コンクールだって出て、金賞もらえた団体やで？　不可能はないと思う」
「あたしも、思う。あたしは、みんなとマーチングしたい」
陽乃が強い口調で言い切った。
「どうやろ。合宿で基礎練習を終わりきるぐらいの気力で行けば、可能な時期やとは思うよ。実際、このビデオに写ってるオレらのマーチングもそう変わらへん8月頭から練習始めてん。中学生でできて、高校生でできへんはずがないとオレは思うよ」
「……。」

答えがない。翔は反対派の全員がまだ悩んでいるのを承知していた。
「最後に聞きます。マーチングコンテスト、出場反対の人！」
しばらくの沈黙。２０秒近く続いたが、手が挙がることはなかった。
「……ありがとう！」
翔は満面の笑みで全員に笑いかけた。同時に「頑張りましょうね！」と梨子が声を上げて、拍手が沸いた。

話し合いはマーチングで時間を取ってしまったので、合宿の日程を決めたのとマーチングでの曲目を聞くだけで終わってしまった。
ちなみに、マーチングで演奏するのは『情熱大陸』だ。
陽乃と翔はハーゲンダッツのアイスを食べながら帰路についていた。
「一時はどないなるかと思ったけどなぁ」
翔はミントチョコを食べながら笑った。
「あのＤＶＤの効果は抜群だったね！」
陽乃が言うと翔は改めて顔を赤くし「ホンマ恥ずかしすぎて死ぬかと思った」と呟いた。
「あたしは翔のかわいい時期が見れて幸せだったけどね～」
「なんやねん！　今はかわいくないんかい」
翔はシュンとした様子で肩を落とした。
「かっ、かわいいとか今の翔には似合わないよ」
「そうですかぁ……」
ますます落ち込んでしまったので陽乃は慌てて大声で言った。
「かわいいって言うよりむしろ、カッコいいの！」
「……。」
翔の顔が真っ赤になった。言ってから陽乃も赤くなる。
「えへ……まぁ、なんていうの？　あたしの本音……」
ミントのいい香りの後に、やわらかい感触が陽乃の唇に伝わった。

「ありがと。嬉しい」
翔が優しく微笑み、陽乃の頭を撫でてくれた。
陽乃はボーッとしたままだ。翔が陽乃の左手を引いた。夕陽のせいで逆光になっていて、翔の表情はよくわからない。それでも、嬉しそうに笑っているのは十分わかった。
「うん！　合宿、楽しみだね！」
陽乃はミントの残り香を味わいながら翔の手をしっかりと握った。
「おう！　はじけるで～！」
翔と陽乃は笑いながら夕暮れの通りを駆けていった。

第１３９話　Ｎｅｗ　Ｔｒｙ！（後書き）

（※１）セクリ：セクションリーダー（金管、木管それぞれを仕切るリーダー）の略称です。

第１４０話　ビバ！　伊豆半島！

８月２２日火曜日。七海高校吹奏楽部３２名は初めてとなる学外合宿を伊豆半島で執り行なうためにバスの中で揺れていた。

ご機嫌で盛り上がる春樹、慎也、拓真、勇、徹。前日が塾だったので眠いと言いながらもお菓子を朝から食べまくる美里。ｉＰｏｄでマーチングの曲を聴いている絵美と由美子。持ってきたカメラがないと騒ぐ梨子。

みんながご機嫌でワクワクした様子を浮かべているというのに、一人浮かない人物がいた。

「ウッ……気持ち悪い……」

「ちょっと～……なんで酔い止め飲んで来ないのよぉ」

陽乃が呆れた様子で何度も不快な声を出す翔の背中を摩った。まさか翔が乗り物酔いをするとは陽乃は思ってもなかった。常に元気なイメージしかないだけに、そのギャップに少し戸惑う。

「今から飲んでも遅いし……。このまま前にいたほうがいいでしょ？」

「ううん……後ろ行きたい」

「後ろ？　普通前じゃ……」

「ううん……後ろ」

「わかった。待っててね」

陽乃は立ち上がって後ろに座っている男子軍団に声をかけた。

「ねー！　翔が気持ち悪いって言ってるから、ちょっと席誰かと替わってくれなーい？」

すると「翔が！？」と慎也が大声を出した。

「仮病じゃねぇの？」

クスクスと拓真が笑う。翔が真っ青な顔を座席から出して「お前～……戻したらお前を恨んだる～」と低い声を出した。

「ほら！　くだんないこと行ってないでサッサと後ろ行って休んで

てよ。部長がそんな状態じゃ、向こう着いてから大変なんだから」
陽乃は翔の頭を軽くはたいて後ろへグイグイと押しやった。拓真と代わる形で翔は春樹の横、バスの右端の窓際に座った。
冷房が効いていて心地よい雰囲気だ。バスの後ろのほうだと酔わないのはなぜだろうか。そんなことをいつも酔ってから考えてしまう。そうやっていつも呆然とした状態で前を向いているうちに眠りにつく。
そこで翔は思い出した。自分はいつも部活でのバス移動のとき、修平と翔平、そしてもう一人のアルトサックスメンバーで大騒ぎしていたのを。だから後ろにいれば自然と落ち着いていたのかもしれない。
そのうちスッと周りの音が消えるようにやんで、翔は眠りについた。
「翔、大丈夫かなぁ」
陽乃は心配そうに何度も後ろを振り向く。
「あんまりキョロキョロしてると今度は朝倉が酔うよ？　ジッとしてな」
拓真が制した。それもそうだと思い、陽乃は前を向いた。

「翔。着いたよ」
春樹に起こされて翔が目を覚ますと、合宿を行う旅館『七海荘（なつみ）』の前にバスが止まっていた。恭一が『七海（ななみ）』高校と読み方が違うだけの旅館を見事に探し当てたのだ。
「えっ！　もう!?　マジで。楽器は!?」
「三宅（みーやん）たちが降ろしてくれてる」
「マジかよ！　ホンマごめん、すぐ降りるわ」
「急いでね。中にいるの、翔だけだから」
翔は慌てて荷物をまとめてバスから降りた。
「遅い！」
美里がなぜかプリプリしている。翔は「ゴメンって。マジ」と謝

りながら残っていたドラムを運び始めた。
「先生！　すいません」
ドラムを運び終えてから翔は慌てて恭一のところへ走った。陽乃と慎也、絵美の姿もある。
「お、佐野。体調は大丈夫か？」
「ハイ！　ご心配おかけしました」
「元気になったんならそれでいいさ。ところで、佐野に伝えてほしいことがあるんだ」
「何を、誰にですか？」
「うん。野村になんだが……」
恭一は詳しく翔にいろいろ説明をした。
「わかりました。今から話してきます」
「よろしくな。それで、川崎は三宅に。橋本は戸口によろしくな」
「はい！」
すぐに絵美、慎也、翔の3人はそれぞれの部員のところへと散っていった。
「さて……朝倉、お前が一番厄介だと思うけど……」
「大丈夫です。任せてください！」
「そうか。心強いな。それじゃ、よろしくな」
翔はパタパタと下にある小ホールへと向かっていた。この七海荘はこの辺りでもかなり広い旅館で、大ホール、中ホール、小ホールと3つのホールを所有している。しかも大ホールのほうは防音付きと来たものだから、吹奏楽部にとってはちょうどよい施設だった。
「健ちゃ～ん」
ダブルリードとフルートがパート練習しようとしていたところだったらしく、健之佑はちょうどロングトーンをしていた。
「ファイ？」
「ゴメン、ちょっと来てもらっていい？」
「ファイ。すぐ行きまふ」
リードを咥えながら健之佑は返事をして、すぐに楽器を置いた。

「玄関出て話そっか」
「はい」
外へ出るときつい日差しが健之佑と翔に照りつけた。
「あの……話って？」
健之佑はかなり緊張した面持ちで翔に聞いた。
「うん。マーチングに関してやねんけど」
「はい」
翔も緊張しながら言った。
「健ちゃんにドラムメジャーをやってほしいねん」
「え！？　お、俺がですか！？」
健之佑は聞き間違いかと思い、翔に聞きなおした。
「うん」
「で、でも先輩方でできる人とかいるでしょ？」
「最初それも考えててんけど……どいつもこいつも抜けられへんパートばっかりやん？」
健之佑は2年生のメンバーを思い出してみた。陽乃、絵美、慎也、春樹、拓真、由美子、沙希、美里、雪子、そして翔。どのパートも人数は少ないし、最上級生が二人いるパートはフルートだけだった。
「そうですね……」
「それに、ダブルリードはリードを損傷させる可能性高いやろ？」
「マーチングならあまり激しい動きは……できないです」
「そやろ？　ケガとかしたら大変やし」
「そうです……ね。でも……」
「あ、言いたいこと言うてや！　もちろん健ちゃんの意見も大事やから」
「あ……はい」
しばらく健之佑は黙り込んでしまった。言いづらいのも当然だろう。翔も言い出してくれるのを待つことにした。
「俺……マーチング好きなんです。でも、それ以上にみんなと一緒に吹くのが楽しいから、できたらみんなと一緒に吹きたいって思っ

てて……」
「うん」
また沈黙。蝉の鳴き声がよく聞こえる。うっすら汗もかいてきたが、翔はそれを拭いもせず健之佑が続けるのを待った。
「指揮者は……できたらやりたくないです」
「……そっか」
「すいません……」
翔は立ち上がってズボンについた砂埃を払った。
「まぁ、急がんと。ゆっくり考えて……この合宿帰るときまでに、返事、決めといてくれへん？」
「……。」
「な？」
健之佑は小さくうなずいた後、蝉の声で掻き消えそうな音量で「はい」と言った。
「まこっちゃーん」
絵美は翔が健之佑を連れ去ったすぐ後に現れた。
「はい？」
誠はリードを鳴らしている最中だったが、すぐに振り向いた。
「あの……ちょっと話があるんだけど、いいかな？」
「あ、はい。すぐ行きます」
佳菜が「健之佑くんの次はまこっちゃんですかぁ？」と不満そうな声を上げた。隣で由美子が「いろいろあるのよ。勘弁してちょうだい」と笑いながら言った。
誠と絵美は食堂へ上がった。玄関で話そうと思ったが、沈んだ様子の健之佑と翔が見えたからやめておいた。
「あの……マーチングの話なんだけど」
「はい」
「まこっちゃんは……バスーンで出たい？」
「え？　バスーンじゃないんですか？」
「……うん」

「え～……参ったなぁ」
誠はつむじをかきながらしかめっ面をした。しばらくうなった後、続けた。
「それって、打楽器に移動ですか？」
「ううん。サブドラメ」
「ドラメですか！？」
ドラメ、ドラムメジャーのことだ。マーチングでは指揮者（ドラメ）に背を向けることも多いので、サブドラメがいる学校もある。
「ドラメは……ちょっと」
「言うと思った。先生から私たちに伝えるように言われたんだけど……反応はふつうそうだよね」
「……。」
誠は答えない。先輩の手前、言いづらいこともあるのだろう。
「じゃあ私がやっちゃおうっかな！？」
絵美は突然食堂の椅子の上に立つと、妙な指揮の振りを始めた。
誠はしばらく唖然とした様子で絵美を見つめ、それから大笑いし始めた。
「プッ……アハッ、アハハハハハ！」
「ちょっ！　人が真剣にやってるのになに！？」
絵美は真っ赤になって椅子を降りた。
「かわいすぎます、先輩」
「そんなこと言うなら、まこっちゃんやってみてよ！」
「イイッスよ」
誠は同じように椅子の上に立って指揮を降り始めた。
「……。」
お世辞なんかではなく、本当に上手だった。どこかで経験があるのだろうか。そうでなければ急にこんなに上手く振れるはずがない。
「……うまいし、普通に」
「え！？」
誠はびっくりした様子を浮かべて指揮を止めた。

「うん。本当に、上手だわ」
「またまた……冗談キツいっす」
誠は椅子から降りて恥ずかしそうに頬をかいた。
「ま……もし、よかったら考えてみて。期限は合宿中ね。それまでに私に返事、くれたらいいから」
「わかりました。考えてみます」
誠はニコッと絵美に微笑んでみせた。絵美は「ありがと」と言って食堂を出た。
「……。」
誠もその背をしばらく見送った後、絵美の後についていくように食堂を出た。
「あれ？」
慎也がバスパートの練習している部屋を覗くと、そこには愛実、春樹、拓真の3人の姿しかなかった。
「三宅（みーやん）は？」
「みーやん？　みーやんなら打楽器のとこ行ってるよ」
「なんで」
慎也は驚いて3人に聞いた。
「マーチングのときは打楽器するからって張り切って行っちゃったんですけど……」
愛実が苦笑いしながら言う。すると打楽器が練習している大ホールから「えー！　そんな……あたしには責任重すぎるって。ちょっと考え直してみてよぉ！」と美里の大声が聞こえてきた。
「なんかモメてますね」
愛実が笑う。すぐ後に「ベードラでも何でもします！　任せてください！」と亮平の声。
「モメてそうだな……。俺、見てくるわ。サンキューな」
慎也はバスパートの部屋を後にして、大ホールへ降りた。すると、マーチング用ベードラを肩に掛けた亮平と困った様子の美里がいた。
「あっ、慎也ぁ。助けてよ～、三宅（みーやん）が打楽器するって言って聞かな

いの」
「へ～。そうなんだ。朝倉は？」
「へ～、じゃないってば！　しかも陽ちゃんなんか知らないよ。あぁ～！　あたし、自分でいっぱいいっぱいなのにぃ！」
美里は頭を抱えてせっかく綺麗に伸ばした髪の毛を手でバサバサにしてしまった。洋之がフゥッとため息を漏らして美里に言う。
「先輩。もうちょっと俺たちをアテにしてくださいよ」
「へ？」
恵梨が洋之の後ろから顔を出す。
「そうですよ～。ミサ先輩、いっつも自分で全部決めようとしちゃうんですもん」
「火事のとき、ヒロがケガしたのも自分のせいみたいに思ってましたよね」
優が聞く。美里は「ウッ……」と苦しそうに呟いた。
「極めつけは今日の楽器運搬。ぜーんぶ重い打楽器、ミサ先輩が運んじゃってあたしたちぜーんぶ小物。あれじゃあつまんないです」
あずさが口を尖らせた。
「……だってさ、美里。もうちょっとお前、後輩も頼りにしてやんなよ」
「うん……」
「ってか、お前よりむしろトミとか乃木のほうがしっかりしてるだろ」
「なっ……！　もうわかった！　みーやんとはちゃんと話するから慎也はあっち行って！」
美里は強引に慎也を追い出してホールの扉を閉めてしまった。
「んだよ……。このクソ暑いのに扉まで閉めることねぇだろ」
慎也は階段を上がりながら思い出した。陽乃が結局ホールに来なかったことを。
「何やってんだろな、アイツ」
その慎也のいるすぐ真上の廊下。館内で迷子になった陽乃はオロ

オロしていた。
「あれ!?　ここ……確かに階段上がって左手がホールの入口だったと思ったのに……」
しかし、あったはずの扉がない。そのホールの扉よりもずっと狭い小さな入口しかなかった。
「参ったなぁ……。まさかこんな建物内で迷子になるなんて」
携帯電話が通じない場所ではないから、すぐに翔や美里に連絡を取ってもいいのだがこういうときに限って電話を持っていない。携帯電話の意味をほとんどなしていないと陽乃は思いつつ、練習が始まり聞こえ始めた楽器の音を頼りに戻ることにした。
「ん……？」
すると、間違ったホールの入口ではない扉の奥から聴き慣れた音が聞こえてきた。
「あれは……間違いない」
アルトサックスの音だ。それも、かなり翔の音に近い。
「何やってんだろ、翔。こんなとこ、練習場所に指定されてないのに」
どうも変だと陽乃はしばらく考えてみる。しかし、どう考えてもあの音色は翔のサックスの音だ。
「……聞いたことあるな、この曲。なんだっけ」
切ない、けれどどことなく明るい、そんな曲。
「あっ……思い出した」
それは中島みゆきの『銀の龍の背に乗って』だった。原曲と調が違うため、なかなか原曲のイメージと結びつかなかったのだ。吹奏楽では奏者が吹きやすい調に転調されていることがほとんどなので、こうしたギャップが生まれることがある。
「……。」
陽乃は悪いことだと思いつつ、気になってしまうのでその扉を開いた。予想外にもギィィッ、と鈍く大きな音がしてしまった。すると、さっきまで鳴っていたサックスの音がピタリと止んだ。

（やっぱマズかった……かな）
陽乃も思わず動きを止める。すると、その奥から声が聞こえてきた。
「誰？」
男の子の声だった。

第１４１話　もう一人じゃない

「えっと……」
陽乃は言葉に詰まってしまった。ひょっとしたら、いや、そうでなくともおそらくここの旅館に関係する人の部屋だったのかもしれない。
「ご、ごめんなさい！　あっ、すぐ出ますホント！　ゴメンなさい！」
慌てて出ようとする陽乃を少年は呼び止めた。
「待って。君、ひょっとして今日から合宿に来た高校の子？」
「あ……そうです。それでサックスの音が聞こえたから間違って入っちゃって……ゴメンなさい！」
「いいよいいよ。さっきから僕と同じ楽器の音が聞こえてきてて嬉しかったから」
「……あのぅ」
陽乃はおそるおそる少年に聞いてみた。
「なに？」
少年は笑顔で返してくれる。初対面とかあまりそういうことを気にしないタイプの子なのかもしれなかった。
「どこかの吹奏楽部入っておられるんですか？」
「僕？」
「はい」
「ううん」
少年はアッサリ返す。それにしては随分と音色も綺麗で分厚い音を吹いている。何より技術が翔なみにあるのだ。これは興味本位で吹き始めたにしては上手すぎる。
「じゃあどこかの団体に入ってるとか？」
「ううん」
「じゃあ……」

「一人だよ」
「一人？」
「一人で吹いてる」
「……。」
「そもそも、学校が一人だもん」
「え？」
「僕の通う学校。生徒は僕だけなんだ」
「……。」
伊豆半島はそこまで過疎化が進んでいた地域だっただろうか。いや、陽乃の記憶ではそんなに過疎が目立つ地域ではなかった。
「だから、部活なんてわけじゃないけど……楽器が好きだから、自分で勝手にサックス吹いてるんだ～毎日」
陽乃たちが毎日、騒いだりケンカしたり楽器を吹いたりしている間にも彼は一人で楽器をここで吹いているのだろうか。
「寂しく……ないですか？」
「うーん……」
しばらく沈黙が続く。海が近かったので、波の音が聞こえてきた。潮の香りも部屋の中へ入り込んでくる。
「寂しくないっていったら、ウソだね」
少年は寂しそうな笑顔を浮かべて言ったので、陽乃の胸が締め付けられるような感覚に陥った。
「でも仕方のないことだし」
確かにそうかもしれない。でも、それで終わらせてしまうのが陽乃は嫌だった。次の瞬間には、陽乃はこう言っていた。
「あの、あたしたちとでよければ、合宿の間だけでも一緒に楽器吹きませんか！？」
「というわけで……」
陽乃は少年をサックスパートの部屋へ連れてやってきた。はるかとさゆり、麻綾は呆然としている。

「この旅館の息子で高校2年の若草（わかくさ）　直幸（なおゆき）です！　よろしくお願いします！」

直幸はとても嬉しそうに自己紹介をした。翔も嬉しそうに立ち上がり、手を差し伸べた。

「神奈川県七海市の七海高校吹奏楽部2年の佐野　翔です！　同い年で部長やらせてもらってます。それから、向かって右手のアルサクの女の子が中野さん、左が鈴木さん、それからテナサクの西嶋さん」

「中野です。サユって呼ばれてるんで、気軽に呼んでくださいね」

さゆりが一番に挨拶をする。少し直幸の顔が赤くなったような感じがしたのは、きっと翔だけではないはずだ。

「同じくアルサクの鈴木です。マーヤって呼んでください」

麻綾が挨拶をしても赤くなる。陽乃はコソコソと翔に話しかけた。

「ねぇ……若草くんってさ」

「ん？」

「女の子に免疫ないのかな」

「……。」

翔は呆れた様子で陽乃を見つめた。

「な、なに!?」

「免疫とか……んなこと言うなや」

「悪かったわね！」

陽乃はプイッとふてくされてそのままサックスのパート部屋を出て行ってしまった。

「まぁた何かいらないこと言いましたね？」

はるかが呆れた様子で茶化す。翔は真っ赤になって「えぇやんけ！　どうせ夕食の時間になったらアイツも機嫌直るわ！」と大声で言った。

「なんてこと言ってますが、とりあえずあたしの自己紹介を。テナーの西嶋はるかです。よろしくお願いします」

直幸は笑いながら「よろしくです」とはにかみながら答えた。直

幸が翔とさゆりの間に座ってすぐに、恭一がノックをしてサックスの部屋に入ってきた。
「あ、先生」
「おう。七海祭で演奏したらいいんじゃないかって思う曲が届いたから……」
「こ、こんにちは！」
直幸は緊張した面持ちで恭一に挨拶をした。
「あ、どうも、こんにちは。えーっと……新入部員さんですか？」
「あ、違うんです先生。彼、直幸くんって言うてここの旅館の息子さん」
「そうなのか？　なんでまた佐野たちと」
恭一はマジマジと直幸を見つめる。直幸は居づらそうに俯いた。
「先生。合宿の間だけなんでいいですよね？」
はるかはグイグイと恭一を言いながら部屋の外へ押しやった。恭一は「別に構わんがなんで先生を追い出すんだ!?」と言いながら部屋から出されてしまった。
「いいのかな、僕、いても」
翔はニッと笑い「楽しいならいいじゃん？」と言ったので直幸は今までで一番の笑顔を翔たちに見せてくれた。
恭一を追い出したはるかがたくさんの封筒を片手に戻ってきた。
「佐野先輩に譜面を渡しに来たみたいです、先生」
はるかから封筒を受け取ると、翔は表に書いてある曲名を確認した。

♪銀の龍の背に乗って
♪アニメメドレー（君をのせて・鳥の人・帰らざる日々・風のとおり道）
♪ジャパニーズグラフィティー2～坂本九メモリアル～
♪王様のレストラン
♪桜

♪しるし
♪アメリカン・グラフィティー
♪ユーロビート・ディズニーメドレー
♪創聖のアクエリオン

「また先生、ぎょうさん集めてきたなぁ」
翔は分厚い封筒を見てかなり驚いた様子を見せた。さゆり、麻綾と直幸の3人もその束を覗き込んだ。すぐに直幸が嬉しそうな声を上げた。
「あっ！　しるしだ！」
するとすぐにそれに食いついてきたのは麻綾だった。
「えっ！？　直幸さんひょっとしてミスチルファンですか！？」
「えっ！？　鈴木さんも！？」
直幸がかなり驚いた様子を見せた。
「やだぁ！　こんなとこでファンに会えるなんて！　サイコー！」
キャイキャイとはしゃぐ二人を見て、翔は本当に直幸が今まで一人だったことを感じていた。
「せめて3日間だけでもいい思い出作りたいな……」
翔は直幸の姿を見て、心からそう思った。
いよいよ合奏の時間。まずはマーチングでの曲の合奏だ。いつも以上にウキウキ気分で合奏に参加しているのは拓真だった。
「なんや、えらいご機嫌やん」
「えっへっへ～！　見ろよ、この譜面！」
拓真は翔に譜面を手渡した。すると、冒頭部分と最後のほうになんとチューバにメロディがあったのだ。
「おっ！　やったやん、ソロやん！」
「うん！　マジでやる気出てきたよ俺。それに、意外と伴奏も楽しいのが多くてさ」
拓真はかなり練習に気合いが入っているようだった。翔は拓真の肩を叩いて「頑張ろな！」と励まして自分の席へ戻った。

ふと見ると、せっかく用意した直幸の席に彼が座っていないことに気づいた。
「あれ？　中野さん。直幸くんは？」
「あれ？　一緒に後ろについてきてたと思ったんですけど……」
さゆりも一緒に辺りを見渡すが、どこを探しても直幸は見当たらなかった。
「あっ、直幸さん。なにやってるんですか？」
はるかが直幸に声を掛けたので振り向くと、ホールの入口で入りづらそうにしている直幸がいた。
「なんやぁ。そんなとこおったん？　早く入っておいでぇや」
「でも……なんか、いいのかな？」
「まぁたそんなこと言うて！　ホラ、紹介するから！」
翔は強引に直幸の手を引いて全員の前に立った。
「はーい！　みんな注目～！」
部員全員の視線が直幸と翔に集中する。直幸は真っ赤になってしまったが、俯かずに全員のほうを見た。怪訝な表情を浮かべている部員もいたが、翔は気にせず直幸を紹介した。
「えっと、彼はこの旅館の息子さんでオレと同い年の若草直幸くんです！　アルトサックス吹いてるけど、学校が直幸くん一人やから集団で演奏する機会がなかなかないそうで……。今日からせっかく合宿するねんから、その間だけでも一緒に吹こうって朝倉が誘ってくれました。みんな仲良くしよなー！」
直幸は小さい声だが「よろしくお願いします」と言った。すると全員から拍手が沸いた。直幸は嬉しそうに笑い、翔と一緒に席へ戻った。
恭一が来て合奏が始まる。
「起立！」
翔の指示と同時に全員が立ち上がる。直幸はそれだけで嬉しくて仕方がなかった。
「お願いします！」

「お願いします！」

３日間。長いようで短い、合宿が本格的に始まった。

第１４２話　常識ハズレ

「はいはいはーい！　注目でぇーす！」

夕食の時間帯。食堂の中央に出てきて大声を出したのは恵梨と順平だった。この二人、実は合宿係をやっている。

「やっとこさ部屋割りを決めました！」

順平がニヤニヤ笑っている。翔は思わず「お前、なんか変なこと考えてるんとちゃうやろな？」とツッコミを冗談半分で入れたが、順平はきちんと答えずニヤニヤ笑うばかりだった。その姿を見て、陽乃もなんとなく寒気を覚えた。

「今から部屋割りを書いた紙を各テーブルに渡すので、どうぞごらんください！　なお、部屋はちゃんと東先生の許可を得た上で決めましたのでどうぞご安心を」

恵梨の発言もなかなか意味深だ。翔は慎也、優、亜紀、雪子、みゆきと紙を見た。

１階

１０１号室：宮部／永井／河内／井上／秦野

１０２号室：大谷／乃木／中野／吉山／西嶋

１０３号室：本堂／瀬戸／戸口／野村

１０４号室：逢沢／日高／富士原／冨岡

１０５号室：久野／加藤／小林／鈴木／伊原

１０６号室：若草／右川／三宅／松尾

２階

２０１号室：水谷／川崎／橋本／田中

２０２号室：佐野／朝倉

部屋割りを見て真っ先に声を上げたのは他でもない、翔だ。

「おい！　合宿係！　なんやねん、この部屋割り！」

続いて、慎也。
「冗談じゃねぇぞ！　おい、遊びじゃないんだからな！」
最後に春樹。
「っていうか、なんで知ってるわけ！？」
順平がニヤニヤ笑いながら説明を続ける。その横で恵梨は必死に笑いを堪えていた。
「えーと、まぁ2階の部屋にはパーテーションという区切る扉みたいなんあるんで気にしないでください」
「そういう問題ちゃうやろ！？」
翔はオロオロしながら陽乃のほうを見た。陽乃は同じテーブルに偶然固まっていた美里と絵美と呆然と紙を見つめているだけだ。
「異議ありじゃ、こんな部屋割り！」
翔が紙をテーブルに投げつけた。しかし、恵梨は至って冷静に返す。
「先生にもきちんと許可はいただきましたし、もう夕食後に部屋に分かれてもらうので決めなおす時間、ないんです。なので、3日間この部屋割りでいきまーす」
「……んなアホな」
翔はペタンと椅子に座り込んだ。その後の夕食はせっかく好きな鍋だったにも関わらず、翔は何を食べたのかよく覚えていない。
夕食後、荷物をパート練習の部屋から自分たちの部屋へ移動させる。この後、肝試しの予定だ。現在の時刻は午後7時過ぎ。8時から9時半まで肝試しと怖い話をして、それが終わってから各部屋で午後10時半までに入浴。人数が多い部屋は1階に男女それぞれ大浴場があるので、適宜分かれて入ることになっている。そして11時に就寝予定だ。
「……。」
翔は大荷物を抱えて202号室の前で立ち尽くしていた。既に陽乃が中にいるかもしれない。ノックして入ればいいのだろうけれど、女の子と二人きりの部屋なんて小学6年以来だ。しかも、それは自

分の部屋だったから違和感がなかっただけの話。ここはそんな慣れた場所ではない。

「こんな常識ハズレな部屋割り……ありえへん」

だからといっていつまでも廊下で立ち尽くしている時間もない。

翔は意を決してドアをノックした。しかし、返事がない。

「入るで～……」

翔はそっとドアを開けた。中はまだ真っ暗。どうやら陽乃はいなかったようだ。

「なんや……心配しただけ損やったな」

肝試しは完全にフリーの時間帯。制服でいる必要は基本的に合宿中、ない。なので翔はいつも家にいるときのスタイルに着替え始めた。黄色のタンクトップとカーゴパンツ。今日はこれを着ようと少しウキウキ気分でかけるは着替え始めた。

実は翔はオシャレも吹奏楽と同じくらい好きなのだ。クラスメイトとはよく雑誌を見てこの服が欲しいと盛り上がることも多い。カッターシャツを脱いで綺麗にたたみ、下着のシャツも脱いだ。

「あれ？　タンクトップないなぁ……」

翔はカバンに入れたはずのタンクトップを探し出した。もちろん、上は何も着ていない。と、突然ドアが開いたのだ。

ギョッとして振り返ると、荷物を抱えた陽乃がノックもせずに入ってきたのだ！

「翔～、アンタ食堂に生徒手帳忘れっ……」

呆然と上半身裸で陽乃を見つめる翔。陽乃もしばらくその翔の姿を見つめて、すぐに二人とも我に帰った。

「うわあああああああああ――！」

翔はベッドの間に見えないように座り込んだ。

「キャ――――――ッ！　ごめんなさい、ごめんなさい！　すぐ出ます、すぐ出ます～！」

陽乃も持っていた荷物を全部投げ捨てて廊下へ飛び出して勢いよくドアを閉めた。

「……な、なんなの今のぉ」
陽乃はしばらく息を荒くしてからすぐに1階にいるはずの順平と恵梨のところへ走り出した。そして降りてから順平を見つけたので襟掴みにしてガクンガクン首を揺らしながら大声で叫んだ。
「ちょっとおおおお！　今すぐ部屋変えて、部屋変えて！　部屋割り変更～！」
「わわわわわ、ちょ、ちょ！　先輩、クールに、クールにぃ！」
順平はなんとか陽乃をなだめようとするが、興奮した彼女に言葉は全然耳に入らない。
「クールになんかしてらんない！　あんなのありえない、ありえない！　絶対あたし嫌われた！　もうやだぁ！　さぁ、部屋割り変えて、変えなさい！」
「ストーップ！　もうえぇから……」
着替え終わった翔がタンクトップとカーゴパンツの姿で順平と陽乃の間に割って入った。
「せっかく合宿係が決めてくれた部屋やろ。イチャモンつけるの、やめようや」
「い、いちゃもん？」
陽乃は涙を拭いながら聞き返す。
「言いがかりってこと。な？　そろそろ肝試しの時間やし、部屋帰ってお前も着替えろや、陽乃」
「う……うん。部屋、入っていいの？」
「大丈夫や」
「わかった……。行ってくる」
陽乃はトボトボと2階へ歩いていく。順平と出てきた1年生数名が申し訳なさそうにその背中を見送った。
「先輩……」
順平が青くなりながら翔の背中を叩いた。
「なんか……すいません、俺……」
翔はニカッと笑い、順平の頭をクシャクシャと撫でた。

「えぇんや。合宿中は合宿係にいろんな権限があるねんから」
陽乃が部屋に入りまず目にしたのは、クシャクシャに脱ぎ捨てられた翔のカッターシャツと制服のズボンだった。
「まったく……なんで男子ってこうなんだろ」
陽乃はズボンを手にしてたたみ始めた。それから、クシャクシャになったカッターシャツをたたもうとして、手を止めた。
「……。」
翔の匂いがする。別に翔は香水とかは使っていない。そもそも、七海高校は化粧も香水も厳禁だ。他の高校ももちろんそうだろうけれども。それでも翔はいい香りがする。これはきっと、シャンプーとリンス、そして若干の整髪料の香りだろう。
陽乃は迷った挙句、少しそのシャツを自分の顔へ近づけた。心臓がドキドキする。
「……あたし、変態じゃん」
陽乃はカッターシャツをたたんで翔のカバンにしまった。そのすぐ後にノックの音がして「陽乃、入っていい？」と翔の声が聞こえたので心臓が止まりそうになった。
陽乃は慌ててパーテーションで部屋を区切り「いいよ」と答えた。翔がドアを開けると、パーテーションで区切られた部屋が目に入った。
「わっ！　も、もしかして着替えて……ゴメン、出るわ！」
「いいよ。区切ってたらどうってことないから」
「……ホンマか？」
「うん……」
「じゃあ……失礼します」
翔はそっと部屋に入り、ベッドに座った。隣からガサガサと音が聞こえる。心臓の音が聞こえてしまうのではないかと二人とも気が気ではなかった。
「開けるね」
「うん……」

パーテーションを開けると、ピンク色のシャツに短パン姿の陽乃が出てきた。見たことのない姿だったので、新鮮さがある。
「カワイイ……な」
「やだ。恥ずかしいから」
陽乃はカバンをベッドの反対側に置いて翔と向かい合うように座る。
「あの……さ」
「何？」
翔は恥ずかしそうにしながら言った。
「オレは、同じ部屋で嬉しいねんけど……陽乃は？」
「……。」
陽乃は少し意地悪がしたくなってみたので、嫌そうな顔をしてため息をつきながら言った。
「あたしは今すぐにでも変わりたいかなぁ……ハァ」
「！！」
翔はあからさまに顔を悲しそうにして俯いてしまった。
「そうかい……そうかい」
陽乃はニコッと笑い、翔の頭をコツンと叩いた。
「痛って……」
「ウッソー！」
陽乃は立ち上がり、ドアを開けた。
「そろそろ肝試しだよ。行こう！」
「……よっしゃ！」
翔も嬉しそうに立ち上がり、ドアのそばへ行って陽乃の手を握った。
「……。」
「1階まで、な？」
「うん……」
慎也と美里、春樹と絵美が中ホールに着いた頃には肝試しのペアが発表されていた。

☆肝試しカップル発表（笑）☆

野村☆伊原
逢沢☆西嶋
戸口☆久野
冨岡☆吉山
瀬戸☆中野
富士原☆河内
本堂☆永井
川崎☆田中
水谷☆橋本
松尾☆乃木
三宅☆宮部
日高☆小林
若草☆朝倉☆佐野

「はい！　では、ただいまから肝試しを始めたいと思います。まず、メンバー表を見てもらったらわかると思うのですが、右川、秦野、鈴木、加藤、井上と大谷先輩はメンバーから外しています。これは言うまでもなく～」

恵梨が嬉しそうに笑いながら順平に引き継いだ。

「お化け役になって脅かしてもらいまぁ～す」

よく見れば、既に沙希も愛実も見当たらない。どこかへ隠れているようだ。

「まずは、ここで順平に怖～い話をしてもらいますので……それを聞いてから順平の気分次第で順番に呼んだカップルから出発してもらいまぁ～す。基本的に男子☆女子のカップルで行くので、男子部員はしっかり女子部員を守ってあげてくださぁい」

既に陽乃がギュッと翔の腕を握っているのに翔も気づいていた。

しかし、実は翔も怖い話が大嫌いだったのだ。

「それではぁ、今から怖〜い話を始めまぁす」
順平が懐中電灯の灯かりだけを点けて話を始めた。

第１４３話　夜といえば……

「それじゃあ……さっそく始めますね」
全員が唾を飲む。カップルごとに分かれて話を聞いているので、陽乃の両隣には直幸と翔の二人がいる。しかし、翔も直幸も顔色が悪い。
（まさか……二人とも怖いの苦手？）
「まず……七海高校の怖い話ですけどね。実は……俺たちの部室、出るらしいですよ」
「やだ――――っ！」
美里が大声を出してきたので、全員が飛び上がるほど驚いた。由美子が「ミサッチ！　いきなりビックリさせないで！」とかなり怒っている。
「だって！　なんであたしたちが毎日部活するところの話なんて持ってくるの！　その話、却下！　次っ！」
「えー！　あたし聞いてみたい！」
絵美が文句を言う。意外と肝が据わっているのかもしれない。
「ぜーったい反対！　ねぇ、陽ちゃんもそう思うでしょ！？」
「……。」
「陽ちゃんってば！」
「いや……あの……」
美里がよく見れば、拓真、春樹、翔の３人も苦笑いしている。
「何？」
「あの～……右川くん」
「はい？」
「それって……ひょっとしてエリーゼのために……が関係あるとか？」
「え？　知ってるんですか？」
陽乃の顔が引きつる。あれは６月だ。拓真と春樹がコッソリ練習

していたのを突き止めたあの日。間違いなく４人はあの音色を聴いたのだ。
「ま、まぁ……」
「まさか……先輩」
順平が顔を青くしながら陽乃に聞いた。
「その……まぁ、実体験みたいな？」
「キャ――――ッ、キャー！　やめて、やめようよそういう話ぃ！」
美里が慎也を盾にして陽乃の視界に入らないように隠れてしまった。他の部員たちも手を繋いだり、耳を塞いだりしている。
「ま、まさか実体験の人がいるなんて……」
「ねぇ、右川くん！　それ、どういう話！？」
絵美だけが楽しそうにその話を聞きたがる。順平もかなり嫌がっていたが、話を続けた。
今から１０年ほど前。吹奏楽部に入るのを頑なに拒んで一人、吹奏楽部の練習が終わってから部室でフルートを吹く女子生徒がいた。かなりの技術があったにもかかわらず、入部しない彼女を全員が残念がっていた。
そんなある日。登校してきた部員が見つけたのは既に倒れて亡くなっている女子生徒だったのだ。死因は心臓発作。彼女は心疾患を抱えていたのだ。
それ以来、無念さを晴らしたいがために放課後、彼女は部室で今もフルートを奏でているというのだ。
「以上が……朝倉先輩たちが経験したと思われる話なんですけど……」
拓真も春樹も俯いたままだ。
「佐野先輩、どんな感じです？」
「まるまま……そのまんまです」
全員が沈黙する。まさか順平もここまで本格的に話が進むとは思っていなかったのだ。
「えっと……どうしましょ。まだ話あるんですけど……」

青ざめた顔でみゆきが手を挙げ、言った。
「や……やめときませんか？」
陽乃も手を挙げる。
「賛成です」
「そっ、それじゃあそろそろ出発しましょっか！」
順平の一言でようやく肝試しがスタートした。翔と直幸の顔色もかなり悪い。どんどん部員たちが出発していく。たまに悲鳴が聞こえたり逃げ回る足音も聞こえてくる。そしていよいよ、翔、陽乃、直幸の番になった。
「いってらっしゃ～い」
順平に見送られながら3人はおっかなびっくり、階段を上がる。そこでようやく直幸が口を開いた。
「階段の怪談。なんちゃって」
陽乃と翔は堪えきれずに大声で笑い出した。
「アッハハハハハ！　なに今の、チョー寒いんだけど！」
「直幸くん、ホンマおもろすぎ！　今の、完全オヤジギャグやん！」
「だって……雰囲気変えようと思ったんじゃん！」
3人は大笑いしながら廊下を歩く。と、突然廊下にある黒電話が鳴り出した。
「ヒャッ！？」
陽乃は思わず翔にしがみつく。
「で、電話！？」
「……出てみる？」
翔はそういうと受話器を取った。3人でよってたかって受話器に耳を当てる。
「なに？　このメロディ」
「なんか……聞いたことあるな」
「これって……『着信アリ』じゃん！」
「うわあああああ！」
翔は思い切り受話器を叩きつけるようにして置いた。

「ちょっと！　旅館の、しかも直幸くんの旅館の電話なんだからもっと丁寧に扱いなさいよ！」
「しゃーないやんけ！　暗闇であんな曲聞かされた……ら……」
翔と直幸が青ざめた顔で陽乃の後ろを見つめる。
「な、なに？」
何か冷たいものが当たる感触がした。陽乃がおそるおそる振り向くと、髪の毛が濡れた女が立っていたのだ。
「キャアアアアアアアアアア！」
陽乃はたまらず直幸と翔の手を引っ張って彼らを引きずりながら廊下を全速力で走って、非常口を蹴り飛ばして開けて外に出て行ってしまった。
「……。」
髪の毛を濡らした沙希がそんな3人を呆然と見送りながら、垂れてきた雫を拭った。
「お前……メチャクチャすんなや」
半分脱げそうになったカーゴパンツを履きなおしながら翔は陽乃に文句を言った。
「ゴメン……。でも、翔も直幸くんも顔真っ青だったし」
「まぁ……怖いモンは怖いし」
「プッ……アハッ、アハハハハ！」
陽乃は笑いながら翔の背中を叩いた。直幸もおなかを抱えて笑っている。
「ねぇねぇ、二人とも。想い出に写真撮らない？」
直幸がデジカメを取り出した。そういえば今まで写真を撮っていない。
「いいなぁ！　撮ろう撮ろう！」
「決まりっ！　じゃあ、朝倉さんが真ん中で俺と佐野くんは両端ね！」
「OK！　じゃ、シャッターはオレが押すわ」
3人はポーズを取る。陽乃がピース、翔と直幸が陽乃を人差し指

で指して笑う。
「ハイ、チーズ！」
フラッシュと共に暗闇の中、鮮明に陽乃たちの満面の笑みが写った写真が出来上がった。

合宿初日は夢見るような速さで過ぎていった。中学生までの陽乃では考えられないような生活だ。夏樹もこの間のコンサートに参加して以来、早く高校に進学して吹奏楽部に入りたいと言い出した。
ベッドにもぐって明日からの日程をもう一度、反芻（はんすう）する。午前中は神崎さんが来られてマーチングの基礎練習。午後は合奏をして夕方から前半部分のマーチングの動きと基礎練習をするという。そして夜は七海祭での演奏曲目を決めた後、花火だ。楽しみで仕方がない。
「陽乃……起きてる？」
翔が暗闇の中、声をかけてきた。
「起きてるよ」
「あんな。今日、楽しかったか？」
「そりゃあもう。夢見たい。みんなとご飯食べて、寝て、遊んで、楽器吹いて。ずっと続けばいいのに」
だんだん暗闇にも目が慣れてきた。翔がニッと笑っているのもわかる。
「よかった。陽乃が楽しんでくれてるのが、オレ、一番嬉しい」
「……。」
翔は本当に人想いだ。こんなに優しい人に想われている自分は本当に幸せだと陽乃は心から思う。
「明日からも楽しもうな」
「うん！」
「じゃ……おやすみ」
「おやすみ」
陽乃は翔が眠りに着いたのを見てから、そっと目を閉じた。

こうして合宿1日目は終わりを告げた。

第１４３話　夜といえば……（後書き）

合宿は何も練習ばかりではありません！　こうした楽しみも少しずつ入れて『奏～ｋａｎａｄｅ～』を楽しくしていきたいと思いますので、これからもどうぞよろしくお願いします♪

第１４４話　強烈基礎練習

「……！」

陽乃は足をプルプル震わせながら右脚をなんとか上げてバランスを保っている。

「クッ……来るねぇ」

拓真は苦笑いしながら同じように右脚を上げている。右隣にいる春樹は全身汗だらけだ。

「やっべ……倒れそう……ワッ！？」

パシン！と音がして拓真の左隣にいた慎也の左脚が誰かに叩かれた。

「ほらっ！　もっとしっかり上げて！　男子がそんなんでどうするの！？」

それはオーボエのＯＢである、神崎しおりの声だった。今日から合宿に参加して、部員たちにみっちりマーチングの基礎を叩き込んでいるのだ。

「コラーッ！　経験者もしっかりしなさいよ～！　未経験の人の見本になるようにしなさい！　聞いてるの！？　そこのクラリネット女子二人っ！」

何事か話をしていたみゆきと光瑠に檄（げき）が飛ぶ。二人はビクッと体を震わせてバランスを崩しそうになった体勢をなんとか直した。

「神崎さんってもっと優しそうなイメージあったのに……」

健之佑が残念そうに隣にいる誠に愚痴をこぼした。

「俺も同感。優しそうな顔して実はドＳなんじゃ……痛てッ！？」

「誰がドＳですって～？」

「わーっ！？」

「罰として野村くんと戸口くんは基礎練習１０分追加！　後の人は休憩に入って次はフォワードマーチ（※１）の練習するからね。水分補給はしっかりやっておいてね！　あと、しんどくなった人はす

ぐに言ってよ？　倒れたら大変だから」
　すると笑顔で健之佑と誠が同時に「先生！　俺、しんどいです！」と手を挙げた。
「よしっ、わかった！」
　しおりは笑顔で二人の肩を叩く。
「じゃあ２０分に延長しよっか！？」
「わぁぁ！　冗談です、冗談！」
　二人は慌てて体勢を整えて脚上げを始めた。
「翔はしんどくないの～？」
　陽乃は息を荒くしながら翔に聞いた。
「ん？　オレ？　オレは……ふつう？」
「ウソー！？　信じらんない……」
　陽乃はお茶を飲みながらため息を漏らした。翔が汗をタオルで拭い、同じようにため息を漏らした。しかし、同じため息でも少し翔のほうが充実感のあるため息だった。ため息というより、たまたま笑いが出て息が漏れたという感じだろうか。
「しおりさん、初めて会ったときは優しそうだったんだけどなぁ」
「今は？」
「ちょっと怖い」
「ハッ！　そうかぁ。怖いかぁ」
　翔はおもしろそうに笑ってしおりを見つめる。
「なに？　アンタ、ひょっとしてＭとか」
「アホか」
「じゃあなんで怖いってあたしが言って笑うのよ」
「いやぁ、陽乃が初めて見たときのしおりさんと今のしおりさん、いったいどっちがホンマなんかなぁっと思ってさ」
「う～ん……」
　陽乃は健之佑と誠の脚を叩きながら「もっと上！　じゃないと客席からはキチッと見えないんだからね！」と相変わらず厳しい指導をしている。

「明るくていい人だけど、とても同じ人とは思えない」
「今と、初めて会ったときじゃ状況が違うんとちゃうか？」
「そうかなぁ……」
陽乃は初めてしおりと会ったときのことを思い出そうとした。しかし、そんなときになって「再開するよ！」という声が入ったので陽乃たちは慌てて立ち上がった。
「あっ、ちょっと待って。楽器を持ってきてくれるかな？」
「楽器ですか？」
「そう。構えて歩く練習をするから。パーカスとチューバの人はマーチング用の楽器は準備できてるわね？」
「はい！」
美里と拓真が元気よく答える。しおりは嬉しそうに「今の返事、最高だよ！」と笑った。
楽器を構えると、なぜか背中が痛い。いや、姿勢がよくなったのだろうか。背筋が伸びている気がする。
「いいねぇ、朝倉さん」
しおりがいつのまにか後ろへやってきて背筋や脚を全部触る。
「こそばいですよぉ、神崎さん」
「ちょっと我慢して！　うーん……いい筋してるよ。朝倉さん、マーチングは初めて？」
「はい……」
「そう……。うーん、君は期待できるね。みんな、ちょっと注目！」
すると部員全員の視線が陽乃へ集中した。
「朝倉さんの姿勢見て！　ピシッと背筋は伸びてるけど、力みすぎてもいない、力の配分もベストの姿勢がこれ。みんなのはちょっと背筋が曲がってたり、力みすぎだったりする人が多いのね」
全員が真剣な様子で陽乃の姿勢を見つめる。なんだか陽乃は恥ずかしくなって暑くなってきた。
「この体勢で歩くときに軸がブレなかったらもう基礎は文句なしだから！　みんなもそれを意識して頑張ってね。はい、じゃあ全員同

じ姿勢で！」
　元気よく全員が返事をし、同じような姿勢を取った。しおりは真剣な様子で全員に目を配る。
「宮部さんだっけ？」
「はい」
「楽器を持つと姿勢がなんでか右に傾いているわね～。もっとこうほら、まっすぐに」
「はい」
　沙希、佳菜はスルーされた。どうやら姿勢に問題はないらしい。
「クラリネットは揃いも揃って5人とも、姿勢が前のめりね」
　駿を除くクラリネット全員が姿勢を指摘された。
「ほら、もっとこうしてシャン！と背筋を伸ばすの。ちょうど椅子に深く座った状態を意識して……そう！　ほら、君！　名前は？」
「瀬戸です」
「クラリネットは瀬戸くんの姿勢を意識してちょうだい」
「はい！」
　しおりは続いて駿ピンポイントでジーッと見つめる。駿は美人なしおりに見つめられて目が泳いでいる。
「背が高いね」
「はい」
「何センチ？」
「１７６センチです」
「高１でそれかぁ」
「はい」
「それで姿勢はまっすぐ？」
「はい」
「そう……」
　そういうとしおりはジーッともう一度駿を見つめる。
「もっと背筋を大げさに伸ばしてくれる？」
「え？　もっとですか！？」

駿は言われて姿勢を整えなおした。
「そう！　それくらいかな。背の高い人は動きを大げさにしないといけないからね。姿勢には特に注意してちょうだい」
そうして翔たちサックスパートへ向かう。ここは経験者ばかり。きっと大丈夫だと思って翔もさゆりも余裕の表情を浮かべていた。
しかし。
「ダメね～、ここのパート」
「えー！？　なんでですか！？」
翔は納得がいかないようで、大声を上げた。
「姿勢はいいわよ。文句なし」
「じゃあなんで！？」
「顔が死んでる」
「顔ぉ！？」
はるかが顔を歪めた。
「西嶋さん、その顔はダメよ。好きな男ができて、そんな顔や死んだ顔してたらいくら西嶋さんが好きでも相手が好きになってくんないよ～」
「そ、そうなのか……ヨシッ！」
はるかは飛びっきりの笑顔で基本姿勢を取った。それを見た徹や勇が大爆笑し始めた。
「ちょっとー！　そんなに笑うことないじゃないの！」
はるかは顔を真っ赤にしながら地団駄を踏んだ。
「まぁまぁ。今のはちょっとやりすぎだとして……とにかく緊張で強ばりすぎた顔や無表情はＮＧ」
春樹が手を挙げた。
「遠い客席から顔なんて見えるんですか？」
「見えないわよ」
あっさりしおりは言い返した。
「じゃあ意味ないんじゃ……」
「ダメよ、ダメ。顔が死んでたら全体に影響するの。熱でしんどい

日。笑顔になれっても無理でしょう？　辛そうな顔をしてると、それが周りにも伝播（でんぱ）して雰囲気が暗くなっちゃうの。だから、笑顔で演奏！　これ、東先生も言ったことない？」

「そういえば……笑顔で吹け、笑顔で吹けってやたら言うね」

雪子が思い出したように呟く。

「そう。別にさっきの西嶋さんみたく極端な笑顔じゃなくていいから、せめてにこやかにしてちょうだい」

「はい！」

「はい、じゃあ次は……」

その後、トランペット、ホルン、トロンボーン、ユーフォニウムなど順調に基礎姿勢のチェックが進んでいく。だいたいが楽器を上げようと姿勢が極端に背筋を伸ばしすぎていたり、楽器の重さに負けて姿勢が悪くなっていたりがほとんどだった。

そしていよいよスーザ（※2）の拓真がチェックされるときになった。

「ちょっとちょっと～。あなた、本堂くん？」

「はい！」

「気合い入ってるのはいいけど、スーザのベルの向きがめちゃめちゃじゃないの」

「へ？」

「ホントだ」

美里と洋之がスーザを構えた拓真の前に立つと、スーザのベルが正面よりもずいぶん右（拓真にしてみれば左）を向いていた。

「これじゃあ音が正面へ飛ばす、明後日の方向へ飛んでいくわ」

「すいません……」

「初めてなら仕方ないの。ちゃんと初めは一緒につけてもらって、ベルの向きを確認しなさい」

「はい！」

「はい、じゃあ次はいよいよフォアードマーチよ！　全員一列に並んで」

綺麗に一列に並ぶ部員たち。
「田中さ～ん！　バチでリズムを取ってくれる？」
美里のバチがカチ、カチと規則的な音を立てる。
「はい、じゃあまずステップ踏んで。カウントしたら前へ進んでね。いくわよ！　１、２、３、４！」
やがて３２人全員が前へ歩き出すが、見事に出だしからバラバラになってしまった。なぜか両端が前へ出すぎて、真ん中のほうが遅れているのだ。
「コラコラー！　みんな基本的なこと忘れてる！　さっき、今日は５メートル８歩を基準でするって言ったでしょ！？　そこ！　部長の歩き方じゃ１２歩くらいかかるでしょ！　それに比べて大谷さんのところは大股で歩きすぎ！　もう少し幅を狭めて！」
「はい！」
「じゃあもう一回行くわよ！　全員初めの位置に戻って！」
「はい！」
こうして午前中、延々と基礎練習が続いていった。

第１４４話　強烈基礎練習（後書き）

（※１）フォワードマーチ：前へ進むという意味のマーチングの用語です。

（※２）スーザ：正式名称・スーザフォン。チューバ奏者がマーチングをする際に使用する楽器のひとつ。近年、マーチング用チューバも主流になってきています。近々、楽器に関する説明をコラムで載せますのでご期待ください。

第１４５話　楽譜を食べる！？

「ふぃ～……もう足パンパンだぁ」
昼休みになって、昼食も終えたので陽乃は宿泊している部屋で思い切り寝転んだ。もう足がパンパンで動く気にもなれない。とはいっても、暑さがいちばん厳しい午後の時間帯はパート練習と合奏に充てられたので足が疲弊していても多少は問題ない。
陽乃はゴロンとベッドに寝転んでから、そんなことをしている場合ではないことに気づいてカバンから何かを取り出した。
「翔は元気だね～」
同じ頃、廊下をゆっくりゆっくり歩く春樹と慎也は、横を同じようにゆっくりゆっくり歩く翔に聞いていた。
「まぁ中学からやってたからなぁ。基礎練はたぶん、神崎さんのほうがまだ優しいと思うで」
「えぇ！？　あれでかよぉ。マジ勘弁だわ」
慎也が深いため息を漏らす。どうやら本気でしおりのことが苦手なようだ。
「でも、美人は好きでしょ？」
春樹が聞くと二人とも顔が緩んだ。
「まぁ～……美人は良いに越したことないよね」
「確かに。それに美人やから多少厳しくても許されるっていうか……もうオールオッケーみたいな感じやな」
「あらあら。褒めたって何も出やしないわよ」
その声に驚いて振り向くと、しおりが立っていた。
「いや、別に何にも期待なんかしてへんので」
翔がキッパリと伝えると、しおりは「ハッキリした子ねぇ。まぁ、それくらいじゃないと部長なんか務まらないか」と笑った。
「でもね、あんまりハッキリすぎるのも怖いから気をつけなさい」
「へ？」

しおりの後ろを見ると、恐ろしい形相をした美里が後ろに立っていた。

「痛い痛い……なぁんでオレまでしばかれなアカンねん」

翔は美里に思い切りゲンコツを喰らわされた頭を摩りながら部屋へ戻った。

「入るで～」

ドアをノックしてみたが、応答はない。

「寝とんか？」

ひょっとしたら着替えているのかもしれないという不安がよぎり、ドアに耳を当ててみる。当てた瞬間、亜紀が部屋から出てきて変な顔をされたので翔は真っ赤になってしまった。

「なにやってるんですか？」

「いや……中から陽……朝倉がドアノックしても返事ないから入っていいかどうか不安でさ」

「だからってそんなことしてちゃ、盗み聞きみたいですよ」

「……。」

「いいじゃないですか。彼氏彼女でしょ、先輩たち」

「まぁ……」

改めて他人にそういわれるとなんだか恥ずかしい。

「ほーら！　ウジウジしてないで入ってくださーい！」

亜紀は強引にドアを開けて翔を思い切り部屋へ押し込んですぐにドアを閉めた。

「なんちゅう強引な……」

しかし、陽乃はベッドに寝転んだまま無反応だ。あれほど音を立てたのに気づかないのもおかしいと思い、すぐ後に居眠りでもしているのかと思ってゆっくり立ち上がった。

「陽乃～、何して……」

翔が陽乃の姿をベッドの上で見つけたときには、今にも楽譜を食べてしまいそうな陽乃の何とも不可思議な姿だった。

「うわぁ！　な、何やってんねんお前！」
陽乃は陽乃でその姿を翔に見られると顔を真っ赤にした。
「いや……楽譜が覚えらんないからホラ、テスト前とかに辞書食べたら覚えられるじゃん？　だったら楽譜も同じようにしたらいけるかなぁ……なんて」
「まぁ……わからんでもないけどな」
翔は苦笑いしながら陽乃の隣に座った。
「メロディがほとんどやろ？」
「まぁね。でも、そうはいっても5分近くある曲をいきなり覚えるのも無理と思わない？」
「ん～……ゴメン、オレは慣れてるからあんまりそうが思わへんわ」
「そっかぁ……経験者は違うよね」
「何でも初めてやとは思うけど、それは2年生に関しては大谷以外一緒ちゃうか？」
「それはそうだけど、何か焦っちゃうんだよね」
「まぁ焦らず行こうや。焦りは禁物やで」
「わかった！　頑張るよ、あたし」
「うん！」
翔も陽乃の笑顔を見ると少し落ち着いた。
「ゴメン、オレちょっと話し合いあるから先に大ホール行ってるわな」
「あ、そうなの？」
「うん。ゴメンな」
「いや……いいんだけど」
「じゃ」
そう言って出て行く翔の顔が少し曇っているように見えたが、陽乃は楽譜を覚えることに集中するためすぐに顔を楽譜へと戻した。
大ホールへ降りると深刻な顔をしたはるか、さゆり、麻綾がいた。
「あ……先輩。どうでした？」
はるかが聞く。翔はとりあえず小さくうなずいた。

「この後、合奏あるやろ。それで駿に吹いてもらうからそれ次第らしいねんけど……実際音質は全然違うやろうから今からある程度、決めといたほうがええかもしれへん」
「そうですか……」
麻綾がうつむく。さゆりも同じようにため息を漏らした。
「でも、誰か経験はある人いるの？」
「……。」
誰も答えない。誰も経験がないということを意味していた。
「なんでこんな曲選んだんやろなぁ」
翔は恨めしそうにブツブツ文句を言うが、合奏までそう時間がないため一応決めておかなければならない。
「……どうします？」
「オレ……いこか？」
全員の視線が翔に集中した。それから麻綾が泣きそうな声で叫んだ。
「ダメですよ！　先輩、このパートの要じゃないですか！」
「でも、あれをマーチングで扱おうと思ったらやっぱりオレしか無理じゃない？」
「そ、それは……」
再び沈黙。誰もが自分は無理だと思っていることを翔は確信していたし、何より彼女たちにそういった負担をかけるつもりは毛頭なかった。
「大丈夫やって！　自分らならオレが抜けたって十分な演奏できる！　オレが保証したるわ！」
「本当にすいません……」
さゆりが悲しそうな顔をするが、翔は至って平気だった。
「えぇやん！　オレだって珍しい経験できるしな」
「そうですか？」
はるかが恐々と聞いた。
「うん！」

翔の屈託のない笑みを見ると、はるかたちも安心した表情をようやく浮かべた。

第１４６話　自分の意見

「それじゃ、合奏始めるぞ～」
恭一がジャージ姿で大ホールへ姿を表すと同時に、翔が「起立！」と声をかけた。全員が同時に立ち上がり「お願いします！」の声で合わせて「お願いします！」と続ける。
「よーし、それじゃ情熱大陸」
「はい！」
「はい、どうぞ」
実はこの曲、最初は木管全員がトゥッティでメロディとハーモニーを吹く。後ろでホルンが裏メロを吹き、チューバなど低音が伴奏を吹く。
それから指揮棒の音と同時に全員がいったん吹くのを止める。それから改めて指示で曲を吹き始めるのだ。
まずは打楽器の激しいイントロ。それから木管が再び吹く形なのだが、かなりテンポが速く同じ動きを繰り返す。普段そんな練習をしないので音程はてんでメチャメチャだ。
それから打楽器のタムタム、これは恵梨担当だが彼女が次第に音量を大きくして曲のイメージを変えていく。
すぐにいつもの構成で曲が流れ始めるが、メロディを吹くパートがコロコロ変わるのでもう何がなんだかわからない状態になる。やがて主題部分、一番有名なところに変わるのだが、ここもメロディを吹く楽器がコロコロ変わってしまう。さらにサックスが微妙に音程を揺らして吹かなければならないのだが、どうもそれがうまくいかず揺らす程度を超えて乱れている。
「やっぱ初見に近い楽譜だとみんなてんてこ舞いだな」
「すいません……」
「まぁ、この手の曲も慣れていないっていうのもあるだろう。徐々に慣れていくといい」

「はい！」
「ところで逢沢。どうだ？」
駿はしばらく考えてから答えた。
「やっぱり厳しいです。音が飛ばしにくいんで……それに、息を吹き込みすぎると多分リードミスすると思います。動いて吹くし……」
「だろうな……。うーん、それじゃサックスのほうはどうなってるんだ？」
「はい。もう代わる人は決まってます」
「そうなのか？」
「ねぇ、何の話だろ」
陽乃は隣にいた勇に聞いた。
「さぁ……ただ、サックスパートずっと深刻そうな顔で話し合いしてましたけどね」
「そう……」
翔は一度も陽乃にそんな悩んでいる素振りは見せなかった。パートの悩みを持ち込みたくないとも思ったのだろう。でも、自分を頼ってほしいとも思った。陽乃は今まで翔に何度となく迷惑をかけてきたと思っている。だからこそ、悩みがあれば相談してほしいと思っているのだ。
「それで、誰がなるんだ？」
「えっと、話し合いの結果……」
「待ってください」
手を挙げて話を止めたのは慎也だった。
「俺たち、話が読めません。木管さんは話聞いてるような感じだけど、金管は聞いてないです」
恭一はうっかりしていたという様子になり、すぐに説明を始めた。
「まぁ、簡単な話だが、この曲は低音が目立つ部分が多いんだ。でも、逢沢、本堂だけでは少し低音が薄いからバリサクを入れようって話になっている」
「ユーフォとかボーンはどうなんですか？」

慎也は続けて疑問の声を上げる。
「おいおい川崎。初歩的なこと言うなよ。ボーンとユーフォは中低音楽器だ」
「あ……そっか」
「よし、全員が理解したところでさっきの続きだ。それで佐野、誰がバリサクを吹くんだ？」
「オレです」
ホール中がざわめきだった。
「そうか……じゃあ、譜読みはしっかりしておけよ？」
恭一も少し驚いた顔をしたが、すぐに合奏へと切り替えた。陽乃だけ、悶々とした表情を浮かべて翔を見つめていた。
合奏が終わってからすぐに、陽乃は翔を呼んで旅館横にある駐車場へと連れて行った。
「翔……なんで急にバリサクなんて替わろうって思ったの？」
「え？」
「翔って……アルサク専属とかじゃないの？」
「ん～……パートとしてはアルトやけど」
「だったらなんで急にバリサクへ行くことにしたの？」
「ん～……だってさ、はるかちゃんはテナーやから抜けられへんやろ。さゆりんは体型的にバリサクキツいやろうし、マーヤは音が厚いからアルサク的には抜けてほしくないねんな。そしたら必然的にオレしかないから……」
「なんでよ……」
陽乃が声を震わせた。
「え？　なに？」
翔には聞こえていなかったようで、もう一度聞きなおした。途端に陽乃の顔がきつくなり、一気にまくし立て始めたのだ。
「なんでよ！　翔だって2年生じゃん！　男子だから音に厚みもあるし、さゆりんやマーヤよりもサックス歴長いでしょ！？　だったら翔じゃなくって他の誰かがやればよかったじゃない」

翔は冷静に返す。
「落ち着けや。さっきも言うたけど、みんな無理やってオレが考えたんやん。そしたら必然的にオレがやるしか……」
「いっつもそうだよ。翔、人のことばっかり気にかけて自分の気持ちはいつも隠してるじゃない！」
「あのなぁ……オレさぁ、部長やってるわけよ」
「そんなの知ってるよ」
翔はため息をついた。陽乃にはそれが少し嫌味っぽく感じられる。
「そしたらさぁ、部長の立場的に全員のことを総合的に考えて行動するべきやろ？」
「それはそうかもしれないけど……でも」
「でも？」
「でも、自分の意見を押し殺してまで他の人の役に立ちたいの！？」
「……ッ！」
翔の顔が歪んだ。図星だったのだろうと陽乃は思った。
「ほら……顔が変わった。翔、ホントはアルサクでマーチング出たいんでしょ？」
「……本音言えばそうやけど」
「だったら……」
「でもそんなことやってたらいつまでたっても前へ進まへんやん！」
「だから自分の意見もちゃんと言ってってあたしは思ってて……！」
「陽乃！」
ビクッと陽乃が体を震わせた。翔がこれほど声を荒げるのは初めてだったからだ。
「オレらは部長、副部長やねんで！？　上に立つヤツが自分のワガママ突き通してたらどないすんねん！」
「何よ！　上に立つ人は我慢して苦労を強いられなきゃなんないの！？」
「多少のことはしょうがないやろ！」
「あたしはそんなの納得いかない！」

「なんやねん……なんやねん！　お前、もっと理解してくれると思ってたのに……！　オレのこともっとわかってくれると思ってたのに……！」

そこへきて、陽乃はハッと気づいた。相談に乗りたい、理解したい、そういう思いが選考しすぎて先走ってしまった。翔も本当はギリギリの選択だったのだ。それをわかっていたはずだったのに、陽乃は感情が優ってしまって一気に言いくるめてしまった。

「か……翔……」

陽乃が俯いた翔の右手を握ろうとした途端、振り払われてしまった。少し痛みが手に走る。

「もうええわ！」

翔は踵を返して旅館の中へ戻っていってしまった。

「……。」

まだ痛みの残る手をしばらく見つめてから、陽乃もゆっくり旅館の中へ戻っていった。

第147話　音楽と恋愛

「陽ちゃーん、夕食の席のくじ引きは別に引かなくていいでしょ？」
雪子がご機嫌でクジを陽乃に持ってきた。陽乃はしばらく悩んだ顔をして「ううん、あたしもちゃんと引くよ」と返した。
「え？　だって佐野くんと向かい同士で座るんじゃ？」
「いいの。クジ引く」
「そう？　じゃあどうぞ！」
雪子が差し出した箱からクジを引くと「5」というクジが出てきた。
「5ね！　これで入口寄りの席は全部埋まったから、陽ちゃんも自分の場所確認しておいてね」
「わかった。ありがとう」
「いえいえ！　じゃあ……の前に」
雪子が耳のそばで囁いた。
「なんかあったの？」
「え！？」
雪子は鋭いところがある。何か悟られたのだろうか。
「佐野くんも陽ちゃんも午後の合奏の後から元気ないから……」
「なんでもないよ、なんでもない！　雪ちゃん、ちょっと心配しすぎなところあるからね～」
「そう？」
「うん！」
陽乃はとびきりの笑顔で答えた。雪子もその様子を見て、それ以上何も聞いては来なかった。しかし、ウソをついたことが陽乃の胸を締め付ける。何か後悔に近いものがある。
「カケル」
翔が自分の名前を呼ばれたのでハッとして振り返ると、拓真がいた。

「何？　なんか期待したかのような顔して」
「いや……別に」
「そ？　それよりさ、夕食の座席のクジ引く？　それとも朝倉と座る？」
陽乃のほうをチラッと見たが、目を合わせてくれることはなかった。
「いいわ。クジ引いてみんなと混ざって座る」
「え。そうなの？」
「うん。朝倉ばっかだと飽きるし」
「バカ！　そんなこと言うなよ」
拓真が慌てて陽乃のほうを見たがどうやら聞こえていなかったらしく、特に何の反応も示さずに食堂を出て行った。
「なんなのお前。彼女がいる近くでそんなバカなこと真顔で言うなよ」
「……ゴメン」
拓真はなんとなく様子がおかしい翔が心配ではあったが、食事担当が自分であるためすぐに翔にクジだけ引かせて雪子たちのところへ戻っていった。
翔のクジは２９。陽乃とはとことん離れてしまった。
陽乃は旅館の最上階にある展望ルームで一人、沈みかけた夕陽を見ていた。さっきからため息ばかりが漏れてくる。
「ハァ……なんであたし、あんなこと言ったんだろ」
ため息ばかりついている陽乃の背後で突然、翔の声が聞こえた。
「何やってんの？」
驚いて振り向くと、そこにいたのは翔ではなく直幸だった。
「若草くん……」
直幸も予想外の陽乃の反応にかなり驚いているようだったが、すぐに笑顔になった。
「ビックリするじゃん、そんな勢いよく振り向いたら」
「ごめん。ちょっと声がか……佐野と似てたから」

「気にしないで名前で呼べば？」
「へ？」
直幸はニーッと笑って言った。その顔が少し赤くなっている。
「付き合ってるでしょ、二人！」
「なななな、ななんでそれを……じゃなくって、いや、そう……なのかな……あー！　わかんなぁい！」
「おもしろいよね～、朝倉さんって」
直幸は笑いながら陽乃の横に座った。
「隣、失礼するね」
「う、うん……」
少し緊張する。妙な沈黙が続いた末に、直幸のほうから口を開いた。
「あのさ」
「うん」
「ゴメンな」
「へ？」
急に謝られたのでわけがわからない。特に直幸とトラブルになったことなどないし、そもそも直幸と出会ったのが合宿中だったから謝られることなど何もなかったはずだ。
「何で謝るの？」
「見ちゃった」
「何を？」
「昼間の、佐野くんと朝倉さんのケンカ」
ドキッとした。まさか見られているとは思っていなかったのだ。
「ここの展望ルームの真下、君らがケンカしてた駐車場なんだ。たまたま旅館のタオル干ししてたら声が聞こえてきて、覗いたら君たちだったから」
「……お恥ずかしい」
「いやいや。それより、仲直りはしたの？」
陽乃は小さく首を横に振った。直幸は驚いた顔をして「そうなの

？」と聞き返した。陽乃が辛そうな顔をして続ける。
「オレのこと、何にもわかってくれてない……みたいなこと言われて、手ぇ振り払われて……それっきり今日は口利いてない」
「そっかぁ……でもさ、夕食のとき、二人いつも近くにいたじゃん？」
「今日はあたしも翔も違う場所に座るの」
「なんで」
「気まずい……から」
「ふ～ん」
そう言ってから直幸は何も返してこない。さざ波の音とカモメの鳴き声、蝉の鳴き声だけが聞こえる。潮風特有の匂いが漂ってきた。
やがて、食堂のほうからキャッキャッと女子の声が複数聞こえてきた。ホールからはホルンとピッコロの音がする。今は自由時間だから、各々夕食までしたいことをやっているようだ。
「で、これからどうするの？」
「……どうしよう」
「3泊4日でしょ。今日は2日目。嫌でも佐野くんとは2日間、顔を合わせる」
しかも同じ部屋だ。直幸はそれを知る由もないわけだが。
「で、二人は部長と副部長でしょ。顔を合わせないでいたらなんか不自然じゃん」
「それはそうだけど……なんか合わせにくいし」
「そっか……」
直幸はまたそれっきり喋らなくなってしまった。気まずい沈黙ばかりが続く。
「俺ね」
突然また話が始まった。
「うん」
「実は、一人だけじゃないんだ、学校」
「そうなの？　でも、前は……」

「あれは嘘」
「なんでそんな嘘を……」
直幸はカバンから写真を取り出した。その写真には直幸と知らない女の子（背丈は陽乃と同じくらい）が写っている。彼女はトランペット、直幸はアルトサックス。偶然だろうけれど、陽乃と翔と同じだった。
「付き合ってるの」
「うーん、お似合い！　彼女かわいいし」
「ありがと」
「でもそれが嘘とどう関係があるの？」
「……彼女さ、かわいいからモテるわけ。でも、俺を選んでくれたんだ彼女は」
「いいじゃない！　順風満帆」
「でも、それが何か一部の男子から受けが悪くて……。なんか俺は別に何もしてないのに部内でもクラスでも俺をのけ者にしようみたいな雰囲気ができてて……」
それ以上、陽乃は言わせたくなかった。おそらく、登校拒否をしているのだろう。それがわかったからこそ、言わせたくなかった。
「だから、一人が一番。そう思ったんだよね？」
「……うん」
「無理して人に合わせる必要なんて全然ないんだから、あたしは別にいいと思うよ」
「そう？」
「うん」
それは、翔や自分にも言い聞かせているような感じだった。翔も、陽乃も、お互いに自分を周りに合わせようとしていた。翔はクラブのみんなに。陽乃は翔に。
「音楽とさ、恋愛って似てると思わない？」
「え？」
「音楽……ていうか、楽器はうまくなるのに時間はかかる。だけど、

ものにすればもう当たり前みたいに感じちゃうんだよね。それで、1週間くらい練習サボッてたりしたら、あっという間に下手になっちゃって。でも、こだわりすぎるとホント、全然ダメなように感じるし」

陽乃も今でこそ難なく楽器を吹いているが、1年生の4月頃には考えられなかったことだ。それが今は、マーチングで動きながら吹こうとしている。

「恋愛だってそうかもね。思いを伝えるには時間がかかる。思いを伝えて、ダメでも伝えて。ようやく分かり合えた途端、安心するのかな。言いたい放題やりたい放題……っていう言い方も悪いけど、お互いの事を思いやる、思いやりすぎるからそうなるんだろうね。でも、相手のことを考えずに言い過ぎて。そんなことしてたら、きっと重くなって嫌になると思う。だからといって、言わないままだと楽器が下手になるみたいに、意思疎通が下手になるから、結局ダメになるのかな」

「……。」

きっと、陽乃と翔は近すぎた。お互いがお互いをもっと理解している。それが当たり前だと思っていた。でも、当たり前ではなかった。

「俺は……大切にしようとしたけど、そんなに彼女のことを気にしなかった。練習サボッたみたいに、意思疎通サボッたんだな。みんなにひがまれるのが嫌で」

潮風が吹く。船の汽笛が聞こえた。

「俺は、君たちを見てもう一度、自分をやり直そうって思えたんだ」

直幸は、嬉しそうにそう言った。

「そう……なの？」

「うん。君たち、本当に幸せそうだよ」

「……そうなのかな」

「少なくとも、客観的にはそう見えたよ」

「客観的……か」

それでも嬉しかった。でも、主観的に見ればそうではないかもしれない。
「あたしも……曖昧は嫌だから、ハッキリさせるために考えてみるよ」
「そっか！」
直幸は手を差し伸べた。
「握手！」
「なんで？」
「お互い頑張るための、約束の握手！」
「……わかった」
陽乃は直幸の少し大きな手を握った。
「結果はどうあれ、最善を尽くすね」
「俺も」
夕陽が沈んでいく。下から美里が大きな声で「陽ちゃーん！　ゴハン！」と呼んだ。
「行こうか」
陽乃がクスッと笑って下を指差した。
「うん」
直幸も小さくうなずき、二人は展望ホールを後にした。

第１４８話　近すぎた

夕食後、翔が部屋に戻ると既に陽乃が戻ってベッドに腰掛けていた。

「……。」

午後の件でなんだか距離が開いてしまった気がしていた。あのケンカのときに、翔は思い切り陽乃の手をはたいてしまった。そのときの陽乃の顔が目に焼きついて離れない。今も陽乃は少し寂しそうな顔をしていた。

翔が隣のベッドに腰掛けると同時に、陽乃の中で緊張感が漂った。あんなこと、言いたくなかったのに言葉に出て歯止めが利かなかった。言った直後の翔の悔しそうな表情が頭から離れない。夕食も進まなかった。

「……。」

会話がまったく生まれない。二人とも何か言えば、ネガティヴな言葉しか出てこなさそうなのだ。

クーラーも入れずに二人はただ黙ってベッドに座ったままだった。

「暑いな……」

翔がようやく立ち上がってクーラーを入れた。それから陽乃の隣に腰掛ける。その時も、微妙な距離感を開けて翔は座っていた。

「……。」

また会話が途切れる。陽乃は居心地が悪くなってきて、隣の絵美たちの部屋へ行くと言おうとしたときだった。

「昼間は、ゴメン」

翔のほうから謝ってくれた。本当は自分が余計なことを言ったからなのに、翔から謝ってくれた。陽乃は嬉しくて涙が溢れてきた。

翔がそっとハンカチでその涙を拭いてくれた。その優しさが、陽乃は本当に好きだった。

「ゴメンな。手ぇ……大丈夫か？」

翔は昼間はたいた陽乃の手をそっと握った。
「大丈夫。ありがと」
「そっか！　よかった」
再び会話は途切れて沈黙が降りる。陽乃は自分も謝らなければならないのに、言葉が出てこなかった。
「ねぇ……聞こえる？」
美里が絵美に聞く。
「全然ダメ。佐野くん声案外低いし、陽ちゃんは全然喋らないし。ハルは？」
「俺もダメ。なんか翔がボソボソ喋ってるのは聞こえるけど……。慎也は？」
「まったくだな」
４人は雰囲気が普段と違う2人を心配してこうして成り行きを聞いていたのだ。もはや盗聴のほかなんでもないのだが。
「いつの間に……」
翔が話をし始めた。
「いつの間に、オレらこんなにぎこちなくなったんやろな」
「……わかんない」
グスッと鼻をすすりながら陽乃は答えた。鼻声の自分を翔の前で、できることなら晒したくなかった。しかし、今はそんなことにこだわっている場合ではない。
「今日も……オレなんか陽乃の手ぇ叩いたりして……。女の子叩くなんて最低やな」
「それは！　それはあたしが余計なこと言ったから……」
翔は首を小さく横に振った。
「ちゃうよ」
「違うことない！」
「ちゃうって」
「違うことない！」
陽乃はパニックになって取り乱していた。声が慎也たちにもしっ

かり聞こえてくる。
「落ち着けって。陽乃」
「ゴメンね！　お昼……お昼のことで翔が傷ついたならゴメンなさい……」
陽乃は涙を流しながら謝罪した。翔はそっと陽乃の頭を撫でて、それから抱きしめた。あの時のシャツと同じ香りが漂う。
「陽乃……」
翔が優しい声で呟く。陽乃は嬉しくなって「なに？」と笑顔で答えた。しかし、優しい声とは裏腹に、言葉は陽乃が信じられないほど衝撃的なものだった。

「オレたち、距離置こう」

「……！？」
美里が口を塞いだ。絵美は呆然と春樹のほうを見つめている。
「ちょっ……何言ってんだ、あいつ！？」
慎也は思わず大声で立ち上がって翔の部屋へ向かおうとした。
「静かに！　聞こえちゃうよ！」
春樹が慎也の服を引っ張って行くのを寸前で止めた。
「落ち着いて話聞こう」
「う、うん……」
４人は再び壁に耳を当てた。
「え……？」
陽乃は呆然と翔の顔を見つめる。翔の顔は真剣そのものだ。
「あ……あはは。やだなぁ、冗談キツいよ、翔」
「冗談やない」
陽乃の胸にその言葉が突き刺さるように響いた。
「やだ……やだ！　やだぁ！　なんで……なんで急にそんなこと言うの！？」
「……。」

翔は唇を噛み締めて陽乃から目を逸らした。
「ねぇ！　こっち向いて……答えてよ！」
「オレが……」
翔の目から涙がこぼれ落ちた。それが陽乃の淡い黄色のシャツを濡らして、色を濃く染める。
「オレが陽乃を変えてあげるとか……傲慢やったなって思うねん」
「そんなことない……そんなことないよ！　あたし、翔のおかげでいっぱい変わったよ？　楽器だって吹けるようになったし、リーダーシップだって取れるようになった。友達とも積極的にいろいろできるようになったし、何より何に対しても頑張ろうって思えるようになってきた！　これ、全部翔と一緒にいたからできたことなんだよ？　翔のおかげなの。ねぇ、あたしこれからも翔と一緒にいて成長したい！」
翔は再び、そっと陽乃を抱きしめた。
「オレだけのおかげでできたとか思うなや。慎也や田中、みんながおったから陽乃はここまで成長できてんで？　オレ一人のおかげみたいなこと、言うな」
「だって……だって！」
「ほら……また泣いてる」
今日何度目かわからないが、ハンカチで翔は陽乃の涙を拭いてくれた。
「陽乃は……オレとおったら涙いっぱい流さんとアカンようになるやん」
「そんなことないから……ねぇ、そんなことないから」
陽乃は翔が首を縦に振ってくれると信じて、何度もそう繰り返した。
「陽乃は優しいな。そう思ってくれるんや」
翔がそっと手を放した。手が離れると、翔が離れていく気がして陽乃はそれを拒もうとしたが、あっさり離されてしまった。
「翔……？」

翔はそっとベッドに戻り、荷物を片付け始めた。
「なにしてるの？」
「部屋、出るわ」
「やだ……！　ねぇ、やめて」
「……アカンて」
「やだ！　やめてくれるまで離さな……い……」
声が出ない。翔を引き止めるので精一杯だ。
「なぁ……オレらがさ、こんな状態やったら、部活成り立てへんやん」
「あたし頑張る……翔に迷惑かけないように頑張るから」
翔は振り向くことなく答えた。
「恋愛は……頑張るモンちゃうって」
陽乃は言ってはいけないことばかり口にしてしまう気がして、それ以上何も言えなかった。翔はベッドの布団を綺麗に整え、荷物をどんどん片していく。まるで、ドラマでよく見る離婚する夫婦のような光景。それがいま、自分の目の前で繰り広げられていることにまったく現実感がない。
「なぁ」
翔が荷物を肩に背負ってから優しい顔で陽乃に笑った。
「一生の別れちゃうねんから、元気出せや」
「……でも、距離置くって……別れるってことでしょ？」
「……。」
翔は答えられなかった。正確に言えば、そういうことだからだ。
「ゴメンな」
翔は最後まで謝りっぱなしだった。ズルいと陽乃は心の中で呟いた。
「でも、部長と副部長は頑張ろうな、お互い」
口がパクパク開くばかりで、言葉が出てこない。言いたいことはただ一つ。

行かないで。

それが出てこなかった。そうこうしているうちに、翔は部屋を出てしまった。ドアが閉まり、陽乃だけがポツンと部屋に残された。

「ウソ……だよね」

そう。ウソに違いない。ひょっこり顔を出して「冗談やん」って言ってくれるに違いない。陽乃はそう信じてドアを見つめ続けた。

しかし、5分経とうとも10分経とうとも翔は帰ってこなかった。15分経ったところで、陽乃は声を上げて泣き始めた。

隣にいる美里たちに聞こえても構わない。

今は、泣きたい。

「うわぁぁ……あああ～……」

「……ック……！　ック……ヒック」

翔は旅館の玄関を出て、陽乃と昼間ケンカした場所で声を殺して泣いていた。

陽乃の頭の中に、昼間の直幸の言葉が蘇る。

（練習サボッたみたいに、意思疎通サボッたんだな）

翔がそばにいるのが当たり前だった。何も言わなくても、自分の気持ちは知ってくれている。傲慢だったのは、陽乃だったのかもしれない。

自分は、翔におんぶに抱っこだったのかもしれない。近くにいすぎたのかもしれない。

陽乃は一晩中、翔がいなくなった部屋で泣き続けた。

第149話　決心

「あれ……？」

合宿3日目。基礎練習の休憩の合間、部員たちとは別のところで練習をしているドラムメジャー候補の誠と健之佑は、翔が一人木陰で涼んでいるのに気づいた。昨日までは陽乃と仲良く話をしていたというのに、いったいどうしたのかと思い、二人は翔を驚かそうとそっと近づいていった。

「カーケル先輩！」

誠が木から顔を出すと、涙を流している翔の顔が二人の目に写った。

「なっ……！」

翔は慌てて涙を拭って平静を装った。誠と健之佑は唖然として翔を見つめている。

「ど、どうかしたんですか？」

「ん……ちょっとな」

翔は言葉を濁していたが、その声が鼻声になっている。

「あの……先輩。聞いていいですか？」

「ん？　なんや？」

健之佑は言いづらそうな顔をしながら、小声で言った。

「先輩、昨日朝倉先輩とケンカしませんでしたか？」

翔の顔があからさまに歪んだ。聞いてほしくないことだったのかもしれない。しかし、健之佑は怯まず続けた。

「昨日、俺たちの部屋に朝倉先輩の泣き声がずっと聞こえてたんで。大谷先輩や宮部先輩も心配してましたよ」

「……誰にも言うなよ？」

翔は誠にそっと耳打ちした。

「別れた」

「は？」

誠はいまいち言ってることがわからず、ポカンとするばかり。続いて健之佑に同じ内容を伝える。
「別れた」
「えぇー!?　マ、マジで言うてるんですか!?」
「大声出すなって」
翔は慌てて健之佑の口を塞いだ。
「な、なんでです?」
「意見のすれ違いや」
「そんな簡単なワケないでしょ」
「……ホンマやて」
「あの～……話が読めないッス」
誠は一人ポカンとした様子で二人に聞く。翔がククッと笑って誠に簡単に説明した。
「オレとな、朝倉は付き合っててん」
「あー!　そうなんですか!　それで同じ部屋だったんですね……って、あれ。付き合っててん?」
「だぁから、別れてんって」
翔は投げやりっぽく言って立ち上がった。それを聞いた健之佑があからさまに不満そうな顔をして、翔を止めた。
「待ってください。なんでそんなにアッサリ別れられるんですか?」
「え……」
「ホンマに、後悔してないんですか?」
健之佑の目が、普段の優しさなど感じさせないほど厳しいものになっていたので翔も思わず怯んでしまった。しかし、翔も負けていられない。
「してへんよ」
「じゃあ、なんで泣いてるんです」
「……。」
翔は答えない。妙な雰囲気のところへ来てしまった誠はオロオロするばかりだ。

「好きなんでしょ、まだ」
健之佑はあっけらかんと言ってのけたので、誠はポカンと口をあけている。翔の顔が真っ赤になった。
「ほら、図星ですよ。なのに、なんで別れたとか言うんです？」
「……オレとおったら、絶対陽乃、しんどいもん」
翔は寂しそうに呟いた。健之佑はそっと翔の隣に座って続ける。
「なんでしんどいと思うんです？」
「オレがおったら、陽乃が泣く回数あからさまに増えたもん……」
「それって佐野先輩のせいなんですか？」
誠が間の抜けた声で聞く。
「なんやろなぁ……うーん、よぉわからへんわ」
「わからないうちに別れたんですか？」
健之佑は誠の率直さに少し心配すら感じた。しかし、誠はノホホンとした感じで続ける。
「なんかそっちのほうがわかんない」
「ほな、どんなんやったらよぉわかんねん」
「たとえば、佐野先輩が田中先輩と浮気した～とかいう理由ならわかりますよ。まぁそれじゃあ佐野先輩が泣いてる理由が意味不明ですけど」
「泣いてへんわ！」
翔はプリプリしながらそっぽを向く。
「まぁ泣いてるか泣いていなかったかは別として、そういう正確な理由があったんですか？」
「……うーん。オレとおったら絶対朝倉しんどいし」
「って、朝倉先輩が言いました？」
健之佑も包み隠さずハッキリ言うことにした。こんなウジウジした雰囲気の翔は見ていられないというのが正直なところだ。
「いや……聞いてへんけど」
「え？　じゃあ佐野先輩が一方的にフッたんですか？」
「フッ……」

「たんですよね？」
「……うん」
「う～ん……わかんないですね」
健之佑は首を傾げた。翔が身を乗り出して聞く。
「なんでわからへんねん！？」
「だって、ちゃんと理由聞かないうちに自分で決め付けるのって、よくないと思いません？」
誠が立ち上がって伸びをした後、続けた。
「俺たちね、ドラメとサブドラメ引き受けることにしたんです」
「え！？　そうなん？　あんだけ嫌がってたのに」
「まぁ……盛大に神崎さんとケンカしたんですけどね。楽器で出たいだの指揮なんかできないだの」
「全然そんなん知らんかったわ」
「そりゃそうですよ。そんなとこ、恥ずかしくて見せられませんもん」
それじゃあ昨日のケンカや泣き声を周りに思い切り聞かせた自分たちは、恥ずかしいなんてところではないのだろう。
「神崎さん、何度も『理由を聞いてから断りなさい！』って言ってさ。何度もしつこくってホント参ったんです。でもしつこすぎてたまらなくなったんで、理由聞いたら……」
誠がタイミングのよいところで止めた。翔は気になって仕方がない。
「理由、なんやったん？」
「背が高いから」
「はぁ？　なんやそれ！　めちゃおもろい！」
翔はゲラゲラと大笑いしだした。誠も健之佑も真っ赤だ。確かに二人ともそれなりに背は高い。
「でもさぁ、それやったら慎也とか拓あんでもえぇんちゃうの？」
「拓あん先輩も慎也さんも楽器、大事だから抜けらんないでしょ？」
「でも、誠もケンも大事な楽器ちゃうんか」

「でも、指揮者のほうがもっと大事です」
誠が冷静に返した。翔も言葉に詰まる。
「そう！　エライ！」
突然、しおりが後ろから現れたので三人はそろって「うわぁ！」と声を上げてしまった。
「二人ともあたしの話、ちゃあんとわかってくれたんだね！　そう、指揮者は大事なのよ。バンド全体を導いてくれる、大切～な役なんだから。それをわかったうえでやってくれると、すごく助かるの」
誠と健之佑は恥ずかしそうに笑った。
「でも、まだまだ甘いところがたっくさんあるわ！　さぁ、今からビシビシ練習するわよ！」
「ゲッ」
あからさまに嫌そうな顔になる二人。しおりが「何かご不満でも？」と聞くと慌てて二人は練習していた場所へ走っていってしまった。
「まぁ、何を悩んでるのか知らないけど……自分が何が大事なのか、よく考えなさい」
「それは……楽器のことですか？」
「ん？　さぁね。それは自分が一番知ってることでしょ。自分に聞いてみなさい」
「自分に……」
「さ。そろそろ休憩おしまい！　練習するよ」
しおりが立ち上がって歩き出してすぐに、翔が後ろから「ありがとうございました！」と大声で言った。しおりはよくわからないまま、「えぇ……どういたしまして」と答えておいた。それから部員たちのところへ戻る途中、陽乃が突然旅館の入口から飛び出してきた。
「わぁ！　ビックリするじゃないの」
「すいません！　でも、お礼が言いたくて！」
陽乃も午前中までと打って変わって明るい顔になっている。何か、

決心したかのようにも見える。
「ありがとうございました！」
「え？　あぁ……どういたしまして」
陽乃はすぐに雪子と沙希のところへ戻ってしまった。
「なんなんだ、あの子たち」
しおりは首を傾げながら部員たちのところへ歩いていった。

第１５０話　またね。

３泊４日の日程を終えて、七海高校の面々は帰路についていた。ほとんどの部員が疲れて眠りこけている中、翔と陽乃だけは最前列の席で黙って並んで座っていた。

最初に沈黙を破ったのは翔だった。

「あのさ……」

「なに？」

答える陽乃もどこか緊張した口調になる。バスの走行音と翔たちの話し声しか聞こえない。

「音楽聴けへん？」

翔はｉＰｏｄを取り出した。陽乃はニコッと笑って「いいよ」と自分からイヤホンを左耳にはめた。翔は右耳へはめてから、再生ボタンを押した。

流れ出したのは『海へ…吹奏楽のために』。コンクールでの自分たちが演奏した音源だ。参考音源に比べれば技術も演奏の質もかなり劣るかもしれない。でも、この演奏は世界のどこの団体も奏でることができない、七海高校吹奏楽部だけの音だ。

「なんか……まだ１ヶ月ちょい前の話やねんなぁ」

翔が呟く。陽乃もそうだということに今さら気づいた。それどころか、つい３日ほど前までの二人に、こんな距離感はなかった。

「ホント。大変だったね、コンクール」

「せやけど、得る物も多かったわ」

「そうだね……」

続く沈黙。二人の耳に、翔と陽乃の掛け合いソロが聴こえてきた。二人の気持ちがピッタリ合っていてこそ、できる演奏だ。

今はどうだろうか。それは無理ではないだろうけれど、以前のようにピッタリ息のあった演奏は少し難しい気がしていた。

「あのさ……」

二人が同時に喋りだした。
「あ、ゴメン。翔からどうぞ！」
「いやいや、陽乃からどうぞ！」
「いやいや、翔が」
「陽乃が」
「いやいや」
「いえいえ」
そんなやり取りがしばらく続いたので、二人は思わず笑ってしまった。
「なんやかんや言うて、オレたち息が合うてるんかもしれへんな」
「ホントだね」
またしても沈黙が降りる。しばらくしてから、翔が口を開いた。
「でも……距離開いてしもたな」
陽乃も感じていた、しかし認めたくなかった事実だった。
昨日の晩、陽乃は結局由美子と沙希の部屋へ泊めてもらうことになった。二人はかなり驚いたが、陽乃が何度もお願いしてやっとのことで泊めてくれたのだ（ちなみに、床で眠った）。翔も翔で、拓真たちの部屋へ押しかけて無理やり泊めてもらった。二人が3日間過ごした部屋はきちんと片付けて出てきた。あの部屋にいると、なんだか辛い気がしたからだ。
「そうだね……」
「陽乃は何でやと思う？」
「……あたしは」
言おうと思うと声が震える。声が出ない。すると、翔が遮るように言い出した。
「オレはな、陽乃がおんのが当たり前みたいに考えてたから……それがアカンかったんかなぁと思うねん」
言おうとしたことを先に言われてしまった。言われたというより、きっと翔は陽乃にそれを言わせたくなかったから、自分から言ったのだろう。

「なぁ。考えてんけど」
陽乃は覚悟していた。きっと、予想どおりの言葉が出てくる。覚悟ができているとはいえ、辛い。
「しばらく……距離置こか」
「……。」
言葉が出ない。しかし、このまま黙っていることもできない。陽乃は意を決して言った。
「わかった……」
翔はそう言ってからすぐに、付け足した。
「でも、別れるんとちゃうねん。それだけ、言っとく」
「え？」
「別れるんとちゃうねん。距離を置いて、自分たちがそれぞれお互いの存在のありがたさをわかるべきちゃうかな」
「……。」
「あ……アホっぽい？　やっぱ、こういう中途半端なん無理？」
陽乃は首を横に振るばかりだ。
「ちゃんと答えてくれ」
「無理……じゃない」
陽乃は涙をポロポロこぼしながら答える。バスの揺れでその涙がスカートの上にこぼれ落ちた。
翔はハンカチを取り出し、そっと涙を拭いてくれた。こういう優しいところが陽乃は大好きだ。そして、それに自分は頼って、頼りすぎた部分があったのだろう。
あの発言。きっとあの発言は翔が自分の言うことなら聞いてくれるという、そんな考えが自分の中にあったのだろう。そうでなければ、あんな発言が出てくるはずもない。
「あたし……翔に頼りすぎてたんだなって思うの。だから……一度、距離置いて翔のありがたさを改めて感じたい」
「……うん」
二人はそれっきり、黙ったままだった。

やがてバスが校門の前に到着した。これから楽器を降ろし、解散式を行う。翔はいつもどおり指示を出してくれて、陽乃は翔の手が行き届かないところを指示するようにしている。お互いにいつもこうして支えあってきた。その中で、いつしか自分たちが欠かせない存在になり、やがているのが当たり前と思う存在になってきていたのだ。

ふと目が合う。今はもう、ふつうに目を合わせることができた。

解散式が始まった。これからの行事連絡をし、とりあえず明日明後日は部活が休みだということが連絡された。そして、翔の挨拶が始まる。

「皆さん、3泊4日お疲れ様でした」

「お疲れ様でした！」

「きっとみんな、得る物があったと思います。それに、仲間との絆も深まったんではないでしょうか。先輩、後輩、同級生、先生、OBの方。きっと、オレはそう思います」

まるで自分に言い聞かせるように、翔は一言ずつハッキリ言った。

「それでは、またしあさってお会いしましょう！　お疲れでした！」

「ありがとうございましたー！」

陽乃は解散式の後、音楽室へ戻った。戸締りをするためだ。

部室の戸を開けると、翔がいた。

「あ……」

「おう」

サックスを磨いている。夕陽に反射して部室にサックスの輝きが散りばめられているようだ。

「お疲れ様」

「お疲れ」

陽乃はすぐにトランペットパートの棚へ行き、とりあえず鞄にしまってあった楽譜を棚へ移動させた。

「か……」

カケル、と呼ぼうとしていったん言葉を止め、言い直した。

「佐野」
「ん？」
「まだ、帰んないの？」
「ん。サックスしっかり磨いて帰りたいから」
「……そっか」
「ひ……」
翔はひなの、と呼ぼうとして言葉を止めて、言い直す。
「朝倉は？」
「あたし、そろそろ帰るよ。疲れたしね」
「そうか」
「……。」
「……。」
沈黙が今日はやたらと多い。そして、陽乃のほうから切り出した。
「じゃあ、ね」
「うん」
翔が寂しそうな顔をしているように陽乃には見えた。しかし、逆光で本当にそんな顔をしていたのかどうかはわからないままだった。
「またね」
陽乃は、単なる「また会おう」という意味だけの「またね」ではない意味を含ませて「またね」と言った。
「またな」
翔もそう言ってくれた。その「またね」に、陽乃が期待した意味を含ませてくれていたかは、わからなかった。
ガラガラと戸を閉め、陽乃の足音が遠のいていく。
翔はもう一度、呟いた。
「またな、陽乃」
翔は再び、彼女を「ひなの」と呼べる日が来るよう、努力することを密かに誓った。

第１５１話　プリズン！？

「ヤバ……」

陽乃はふとカレンダーを見て自分が危機的状況にいることに気づいた。今日は８月２８日（月）。そして、今週の金曜日にはいよいよ２学期が始まる。しかし、陽乃の机にはテンコ盛りの恐ろしいモノが積み重なっていた。

そう、夏休みの宿題である。

・現代文：高校生必修漢字ノート／中文演習
・古　文：古文単語暗記ノート／徒然草本文訳
・日本史：演習プリント（１５枚）

課題は得意な数学と英語だけサッサと終わらせて、苦手な国語系の科目はまったく手付かずで放置しっぱなしだった。

夏休みの終わりまで、今日を含めてもあと４日しかない。

「陽乃！」

廊下から由利の声が聞こえた。

「なっ、なに！？」

「アンタ、夏休みの宿題はバッチリ終わってるんでしょうね？」

「そ、そりゃーもちろん！」

その語尾に、「まったく手付かずに決まってるじゃん！」というのを陽乃は付け足したくてたまらなかった。

「この夏休み明けにある課題テスト終わったら、アンタ塾に入ってもらおうと思うのよ」

「じゅ、塾！？」

陽乃は驚いて思わず部屋の外へ出た。すると、由利が恐ろしい形相をして立っていたのだ。

「お母さんね……アンタが合宿に行っている間に現代文、古文、日本史の宿題が真っ白なのを見たの。あれから、ちょっとは進んだかどうか、確認させていただくわね」

由利は容赦なく部屋へ侵入し、机に広げられていた問題集を手に取った。
「あぁ……もうダメ」
陽乃が耳を塞いだ直後、由利の怒鳴り声が隣の家にまで聞こえる音量で響き渡った。

「も、もうダメ……」
由利の怒鳴り声が響いてから2時間後。陽乃はフラフラになりながら部屋を出た。同時に部屋を出てきた夏樹がポテトチップス片手にのん気そうな顔で陽乃を見つめる。
「アンタ……宿題終わった？」
「終わったよ。当然じゃん」
飄々（ひょうひょう）とした様子で夏樹は答える。なぜ同じ姉弟（きょうだい）なのにここまで差があるのだろう。
「姉ちゃん、塾行くの？」
「そうなのよぉ。もう多分、どれだけ反抗してもダメだと思うわ」
「ふぅ～ん。部活と両立大変そだね」
「……！」
陽乃はウッカリしていた。塾と部活の両立を目指さなければならないことを。
「お母さん！」
陽乃はバタバタと慌てて階下へ降りた。
「どうしたの、血相変えて」
「塾の案内書見せて！」
「あら！　陽乃もいよいよやる気になったのね！」
「そんなんじゃないよ」
陽乃は由利がチェックを入れたであろうコースを確認した。

【高校2年生　受験コース】

「受験コース！？」
「当たり前でしょう！　部活でただでさえ勉強がおっつかなくなってるっていうのに」
　由利は半分怒りながら答える。ここで迂闊に妙なことは言えないと思い、言葉に気をつけるよう自分に陽乃は言い聞かせた。

【受験コース概要】
授業日＝月・水・金・土
授業開始時刻＝１９：３０～２２：００
科目＝月：英語　水：現代文　金：古文　土：日本史

「うへぇぇ～……これ、全部行かなきゃダメ？」
「当たり前でしょう」
「あたし……英語はわりと得意だから、月曜日は行かなくてもいいんじゃないかなぁって思うんだけど」
「陽乃。アンタ、吹奏楽もいいけど何のために学校に行ってるの？」
「……勉強」
　陽乃は下を向きながら小声で答えた。
「そうでしょう。学生の本分は勉強！　勉強第一なの。しっかり自分の将来を考えるためにも、今から塾のことを真剣に考えておきなさい！」
　陽乃はまったく反論できず、スゴスゴと自分の部屋へ戻った。
　泣きそうな気持ちで携帯電話を握り、慣れた手つきでアドレス帳を開いて発信してから気づいた。
「あ！」
　発信先が翔になっている。
「マズい！」
　陽乃は慌てて切ったが、ワンコール鳴った気がしてならない。
「ん？」
　翔は一瞬携帯が鳴った気がして振り向いた。ベッドに転がってい

る携帯電話がチカチカと着信ありを知らせていた。
いったんシャーペンを置いて携帯電話を開くと、やはり「不在着信1件」の表示。それを確認すると、表示が「陽乃」になっていた。
「……。」
翔はしばらく考えてから、携帯電話を手にして発信した。
「ひゃっ!?」
聞き覚えのある着信音。それは間違いなく『海へ…吹奏楽のために』で、翔のときのみに鳴る着信音だった。
「……どうしよう」
おそらくはさっきの着信に対する返信のような形で掛かってきているのだろう。ここで取らないのはまずいと思い、陽乃は意を決して電話に出た。
「もしもし」
「オース。どないしてん?」
翔のいつもどおりの声。聞いた途端、陽乃は安心感からボロボロ涙をこぼしてしまった。翔はかなり慌てていたようだが、すぐに陽乃も落ち着きを取り戻して事情を説明した。
「なるほどなぁ……」
「どうしよう……部活がまともにできなくなったら」
「塾ってのは、何時からやねん」
「7時半だって」
「まぁ……部活はふつう、午後6時か7時までやから、間に合わんこともないやろ」
「でも……月、水、金、土が塾なんてあたしとしてはありえない……。刑務所に放り込まれた気分だよ」
翔はプッと笑って「お前、そりゃ大げさやで」と言った。
「あたしには辛すぎる時間なの!」
「わぁーかった、わかった! とりあえず、オレの話聞けや」
「うん」
「陽乃は大学行きたい?」

「大学？」
　考えたこともないことだった。今は吹奏楽や友達といることが楽しくて、そんなに先のことを考えてなどいなかった。
「どうだろ、わかんない」
「働くんか？」
「それはやだなぁ……。大学って楽しいって聞くし」
「せやろ？　でも、勉強せんと行けると思うか？」
「……明らかに無理だね」
「せやろ？　ほな、勉強せなアカンのは目に見えてるやん」
「そうだけど……」
　陽乃にとって、もはや吹奏楽部での活動やその中で過ごす日々は欠かすことができないものになっている。その時間を削ってまで塾で勉強するのが嫌で嫌で仕方がないのだ。
「なぁ」
「何？」
「お父さんとお母さん、陽乃を一所懸命育ててくれてはると思うんやで」
「どうしたの、急に」
「いや……吹奏楽続けるんも、お父さんとかお母さんの手助けあるからこそできてるんやで？」
　陽乃はいろいろ思い返してみた。保護者会では由利がいろいろと動いてくれている。コンクールの時にはわざわざ駆けつけてくれた。
「お母さんは保護者会で顔見るからわからなくもないけど……お父さんは？」
　祥夫の顔が浮かぶ。保護者会に直接関与することなどないので、あまり世話になっている感がない。
「まぁ、わかりにくいやろけど、部費とか払ったりできるんはお父さんが毎日仕事してるからやで」
　陽乃は当たり前のことをすっかり忘れていただけに、衝撃を受けた。

「……そうだったね」
「せやろ？　お父さんもお母さんも、オレらのことを思ってこそ行動して、アドバイスしてくれんねんやと思うで」
「……そうか」
きっと由利も陽乃を思ってこそ、塾を勧めているのだろうと今なら思える。
「部活のことは心配すんな。なんとかしたるから」
「いいの？」
「当たり前や。勉強できへんかったら、前のはっしゃんみたいになったら大変やろ？」
「……うん」
「それだけか？　用事は」
「うん」
「そうか！　ほな、ゆっくりお母さんと話し合いしぃや」
「うん。ありがとね、元気出た」
「それはよかった！　ほな、な」
「またね」
電話を切ろうと思うが、翔が切ってから切ろうと思うので待つことにした。しかし、一向に切れる気配がない。
翔も翔で、陽乃が切るまで待とうと思っていたのだ。
「なんや、切らへんのか？」
「翔こそ」
「……ホンマやな。ほな、いっせーのうでで切るで？」
「わかった」
「ほら、いっせーのーで！」
しかし、陽乃は切らなかった。受話器に耳を当ててみると、やはり翔もまだ切っていない。
「おおい、何やってんねん！」
「翔こそ！　これじゃいつまでたっても切れないじゃん！」
「えぇから、お前から切れ」

「翔から！」
「お前から！」
翔がなかなか折れないので、仕方なく陽乃が電話を切ることにした。
「じゃあ、今度こそ」
「おう」
「またね」
「またな」
通話終了ボタンを押す。見慣れた待ち受け画面が写った。
「……。」
あと４日。それでまた翔に会える。そう思うと少し嬉しくなった。
「あ……うっかり『翔』って呼んじゃった……ま、いっか」
陽乃は笑いながら下へ降りた。きちんと、由利と話をつけるために。

第１５２話　隠し事はＮＧ

「こっんにちは～！」
異様なテンションで部室に入ってきた陽乃を見て雪子と絵美が少し引いた様子を見せた。
「どうしたの？　そのテンションは」
「いやぁ、もう聞いてよ！　塾の話が出たんだけどね……」
陽乃は雪子と絵美の間に無理やり座って事の経緯を話し始めた。
その様子を翔は優しい顔で見守りながら、楽器の準備を始める。
「カケル」
隣からあからさまに不機嫌な声をした慎也が翔を呼んだ。
「どないしたん？」
「最近、春やんを見ないけどアイツどうしてんの？」
そう。それは部員の誰もが感じていたことだった。春樹の部活への出席率が新学期に入ってから極端に悪くなっている。特に今週は１回しか部員たちはその姿を見ていなかった。
「ん……まぁ、家の事情でな」
「ウソ言うなよ」
慎也の一言は明らかに事を知っているかのような言い方だった。
「ウソちゃうで」
「俺、知ってるんだから」
すると慎也が亜紀のほうを向いた。亜紀は少し申し訳なさそうな顔をしている。
「吉ちゃん、言ってやってよ」
「……はい」
亜紀は立ち上がって事情を説明し始めた。翔は手を止めて亜紀の話を一応聞き始めた。他の部員たちも自然と部室に集まる。
「実は……おとといなんですけど、あたしの家の近くにあるコンビニがあるんです。個人経営なんですけど……そこで春やん先輩がバ

イトしてるの見ちゃって……」
「その時間は？」
さゆりが質問をぶつける。
「ちょうど午後5時くらいで……部活の真っ最中の時間帯です」
「吉山はなんでその時間にそこを歩いてたんだよ」
亮平がもっともな疑問の声を上げた。
「吉ちゃんは昨日、歯医者に行ってから部活に来たんだよ」
慎也がすぐに答えた。
「それでカケル。七海高校って、原則アルバイトは禁止だよな」
「あ～……そやなぁ」
「なのに、なんで春やんはバイトなんてしてんだよ。それも、部活サボッてさ」
「知らん」
翔はあっさりそう答えてみせた。
「知らん？　知らんってなんだよ」
「知らんもんは知らんねん。オレ、春やんがバイトしてるって話も初めて聞いたし」
「先生は？」
「さぁな」
「なんだよ……お前も先生も上に立つポジションなのに、春やんのこと何にも知らねぇのか？」
「……。」
「答えろよ！」
雰囲気が嫌な感じになってきて、陽乃はドキドキしながら成り行きを見守っていた。それより何より、いつ自分に話題が振られるかわからない。陽乃は振られたときの答え方を必死に考えていた。
「オレが知るわけないやんけ。知りたかったら、春やんに聞けや！」
「……んだよその言い方！」
次の瞬間、慎也の拳が思い切り翔の左頬にぶつかった。翔は突然の衝撃に転んでしまい、リードが床に散った。

「キャーッ！」
恵梨とはるかが悲鳴を上げた。
「ちょっと、慎也！　何してんのよ！　やめなさいよ！」
美里が慌てて止めようとするが、既に遅かった。翔は鼻から血を流しつつも立ち上がった。
「オレをぶん殴るくらいの勢いあるんやったら、春やんに直接聞けばえぇやろ」
翔は鼻血を拭ってすぐに散らばったリードを拾い始めた。慎也はまだ衝撃がなんとなく残る右手を見つめながら俯いたままだった。

「はーい、そこクラリネットの列！　乱れてるよ～！　左右をよく確認して！」
しおりの声が校庭に響く。「はい！」という気合いのこもった返事が絵美たちのところから聞こえた。
マーチングコンテストまであと2週間になった。今日は9月9日。今日で動き（これをコンテという）のみの練習は終わりで、今日はこの後、楽器を吹きながらの練習となる。当然、楽器なしとありの状態ではまったく異なる。もしも歩くタイミングなどがズレれば楽器と楽器の衝突や人との衝突だって十分にありうるものだ。吹いているときに当たれば怪我をするのは確実である。
だからこそ、慎也は部活にほとんど来ない春樹に対して苛立ちが募っていた。春樹の立ち位置は愛実と慎也の間だった。慎也が春樹の頭上で楽器のスライド部分をターンさせる箇所もあるだけに、春樹がいないとなかなかイメージがしづらいのだ。
途中で春樹たちとはバラバラになるところがある。春樹が前列に出て、慎也は後列にいる。そして前後が入れ替わる箇所があるのだ。スレスレの位置をすれ違うため、本人がいなければなかなか感覚をつかめない。
一度、タムタムを叩く洋之と駿がぶつかりそうになったことがあった。原因はまだ歩き始めないはずの洋之が勘違いして前へ出たた

めで、横へ移動していた駿に危うくぶつかるところだった。寸前のところで優が「ヒロ！」と叫んだから良かったものの、おそらくあのまま行けば駿は腰を打っていただろう。

自分と春樹が次はそんな風になるのではないか。慎也はそう考えると不安で仕方なかった。

「はい！　オッケー。じゃあ各自楽器を持って、１０分後に一度全部通してみるわね」

「はい！」

慎也は一抹の不安を拭いきれないまま、楽器を取りに音楽室へ戻った。

「大丈夫？」

鼻にティッシュを突っ込んだ翔に心配そうな様子で陽乃が聞く。

「大丈夫やって！　そないに痛くなかったし」

「ウソばっかり。頬こんなに真っ赤にして……」

「ん～……まぁ、大丈夫や」

（絶対ウソだな）

慎也は壁にもたれかかって二人の会話を聞き続けた。

「それより、やっぱり皆に本当のこと言うべきなんじゃない？」

「いや……それは春やんに言うな言われてるから、言われへんわ」

「でも、川崎くんだって心配してるし……他の子たちもさ」

「それはわかるけど、アイツの了承も得ぇへんうちからそんなん、勝手に言われへんわ」

（え……？　朝倉も知ってるわけ？　っていうか、翔だって……知ってるんじゃん）

慎也の頭が真っ白になった。翔は知っている。それなのに、なぜ隠す必要があるのか。陽乃も知っている。ということは、恭一が知っていないはずがない。しおりも知っているのだろうか。なぜ隠す必要があるのか。

「拓真も言うべきちゃうか、言うんやけど……春やんは断固拒否やからなぁ」

拓真も知っている。そう知った瞬間、慎也の怒りは頂点に達した。
「なんだよ！　知ってるんじゃないか！」
「し、慎也！？」
慎也は翔を襟掴みにして思い切り持ち上げた。体格差はそれほどないはずだが、軽々と翔は持ち上げられた。これにはさすがの翔も驚いてしまう。
「落ち着けや！　これには事情が……」
「俺たち仲間じゃなかったのかよ！？　隠し事……アイツなんで隠し事なんてすんだよ！　マーチングだって……全員で頑張ろうって言ったのに……！」
慎也の目から涙がこぼれ落ちた。呆然と翔も陽乃も慎也を見つめる。
「……なんかバカらしくなってきた」
慎也はスッと翔を放して、トボトボと歩き出した。二人は声をかけられないまま、休憩が終わってしまった。
健之佑が前へ、誠が後ろへ立つ。ドラムメジャーとして、まだ二人はそれほど日が経っていないにもかかわらず、二人はかなりのレベルにまで上達している。
まず、この曲の特徴である部分は飛ばして練習を始める。
パンッ！と乾いた音がして健之佑が構える指示を飛ばす。全員が勢いよく楽器を構え、次の指示を待つ。
「ワン、トゥ、スリー、フォ！」
緩やかな前奏は木管楽器とホルンが中心になって奏でられる。ここはハーモニーが欠かせない場所だ。やがて、全員が楽器を横に振りながら前進する。すぐにトロンボーンとトランペットは横へ移動し、クラリネットとフルートと交差する。ここで慎也は優輝とすれ違う。楽器の大きさが違うので、あまり春樹のときのことはイメージできない。
陽乃のソロにさしかかる。ここで全員がいったん座る体勢になり、メロディのある楽器だけが立ったままでいる。そしてメロディのと

ころでジャンプして健之佑のほうを向くようになっている。続いて絵美が佳菜の音色に加わり、サックスに変わってホルンが揺れたメロディを吹く。そして翔の代わりとなるユーフォ。ここは春樹が吹くはずだったが、当の本人がいないので歯抜けの演奏になってしまった。

「はいはい、いったんストップ！」

しおりの大きな声が飛んできて全員が動きを止めた。

「あのね～、ちょっと難しい注文するけどみんな聞いてね！」

「はい！」

その直後、しおりから本当にいろんな注文が飛んできた。

「まずねー、直管楽器！」

しかし、返事がない。

「直管！　わかんないの？　アンタたちよ！」

陽乃たちは自分たちであることに初めて気づいた。

「あのねぇ、アンタたちベルが低い！」

しおりはスタスタと亜紀のところへ近づくと構えたままの彼女の楽器を思い切り持ち上げた。

「これぐらい！　直管楽器はベルが低いとみっともなく見えるから、普段吹いてるときよりもめいっぱい上げて元気いっぱい吹いてちょうだい！」

「はい！」

「特に川崎くん！　アンタ背ぇでっかいから、ずば抜けて頑張ってよ！」

「は、はい！」

「それから口笛吹いて働こうのメロディさん！」

「はい！」

「ジャンプしてから吹くのは大変だろうけど、ちょっと音が揺れるの。もっとまっすぐ吹いてちょうだい！」

「はい！」

「それから部長！」

「へ？」
ピンポイントで名指しされた翔は素っ頓狂な声を上げてしまった。
「アンタ、飛び終わった後思い切り足が開いてるの。下品！　もっとお上品に気をつけしてちょうだい！」
「……すいません」
ドッと笑いが起こる。翔は真っ赤になりながら返事をした。そんな中、慎也だけが不機嫌な顔をしたままだった。

第153話　THE☆ストーキング

「フィ～……もう足がパンパンやわ」
翔は玄関で靴を履き、すぐに靴箱にもたれてため息を漏らした。
「ちょっとちょっと～、部長が情けないわね」
陽乃は呆れた様子で翔の肩を叩いた。
「アホ言うなや。アルサクとバリサクやったら、負担がちゃうねん負担が」
「情けないなぁ。それ聞いたら、本堂くんや春やんに怒られちゃうよ」
「へいへい。申し訳ありやせんでーしーた」
「やる気ない返事だなぁ、もう。それより、春やんはまだ一緒なの？」
「そりゃーな。夕飯とかアイツ一人だけとか寂しいやろうし」
翔は軽く伸びをしながら答える。
「たまにはあたしの家でも食べていいって言っといてあげて」
「それはオレが許さん」
「は？」
陽乃は翔の言っている意味がよくわからず、聞き返した。
「……なんでもない」
「そう？」
「うん」
妙な沈黙が続いた。軽く咳払いをして「そろそろ帰ろうや」と翔は少し顔を赤らめて言った。
同じ頃、亜紀が春樹を見たというコンビニで慎也は彼の様子を見ていた。確かにアルバイトをしている。似合わない制服を着て、慣れない手つきでレジを打っている。
（ちょっとくらい言ってくれたっていいのに……）
もどかしい感じがしていた。友達なら、何でも相談してほしい、

頼ってほしいと慎也は思っている。実際、翔や拓真には言っているのになぜか慎也だけには教えてくれていない。なんだか仲間はずれにされた気分になっていた。

「長い……」

待てども待てども、なかなか春樹のアルバイトは終わらない。もう午後7時だ。覗き始めてから2時間近く経っている。慎也もなかなかしんどいのだが、春樹は休憩一つ入れずに商品補充からレジ、掃除などをずっと続けている。

「忙しそうだな……」

クーラーが効いているはずの店内にも関わらず、春樹のシャツには汗がにじんでいた。何が春樹をここまで頑張らせているのか。慎也にはそれがわからなかった。

「お先に失礼します～」

午後7時半。ようやく終えて春樹が出てきた。学校の制服だった。

「バレたらどうすんだよ、アイツ」

慎也は急いで春樹から見えない位置に隠れ、自転車に乗った彼を確認してから自分も自転車に跨り、後を追った。

「あれ？」

津上橋を越えて10分ほど行くと、市営駐車場がある。そこを南側へ曲がると春樹の家はすぐそこなのだが、なぜか春樹はそこへ行かず、右へ曲がった。

「どこ行くんだろ」

春樹はキョロキョロをあたりを見渡している。どうやら道を間違えたらしく、来た道を逆走しだした。

「やべぇ！」

慎也は急いで自動販売機の横に隠れた。路地になっていて気づかれなかったらしく、春樹はすぐに横を通り過ぎた。

「ビビらせんなよ、ったく」

慎也はなおも春樹を追い続ける。

「こっちのほう……は」

春樹が止まった場所。表札には「佐野」の文字。
「翔の家……？」
春樹がいったい、翔の家に何の用事なのか。インターフォンの音が鳴ってすぐに翔の大きな声が聞こえた。
「はいよ！？」
「あ、春樹です」
「おー！　入れ入れ！　準備できてんで」
「お邪魔します」
春樹はまだ少し緊張しながら門を開けた。そしてドアを開けると、翔の弟である智輝が飛びついてきた。
「春兄ちゃ～ん！」
「うおっと！　智輝くん、元気だね相変わらず」
「あ、いらっしゃい、春樹さん」
綾音が出てきた。綾音は初対面の人とも何の抵抗もなく話ができる。こういうあたり、翔と似ているのかもしれない。
「いらっしゃい、春樹くん」
友美子がエプロン姿で出てきた。さすがにお母さんに会うと、春樹も少し緊張する。
「こんばんは！　お世話になってます」
「も～やぁねぇ！　あと少しなんだし、堅いこと言いっこなし！　はい、座って座って」
「はぁい！」
「今日はトンカツよ。いっぱい食べてね！」
「いただきまーす！」
慎也は高い身長を活かして塀の隙間から家の中を覗き込んでいた。これではもう完璧なストーカーである。
「なんで春樹が翔ん家に……。もうちょっと話が聞こえたらいいのに」
そうこうしているうちに夕食は終わり、デザートを食べ始めた。
慎也のおなかも音を立てる。もう9時前だ。

「俺もいい加減帰らないと心配するだろうな」
そう思って自転車に跨ろうとしたとき、突然ドアが開いた。慎也は慌てて塀の横に隠れた。友美子の声がする。
「あんまり遅くまで行ってたらアカンで。最近、物騒やから」
「わかってるって！　男二人で誰に襲われんねん。な、春やん」
春樹はクスクス笑っている。
「じゃ、行ってきます」
「気をつけてね」
翔と春樹は自転車へ跨り、颯爽とどこかへ向かう。慎也はバレないようにこっそり二人の後を付けていった。
（公園……？）
着いたのは市役所横にある公園だった。球場の電気は消え、噴水も止まっている。こんな時間から何をするというのか。
「持ってるか？」
「もちろん！」
二人が何か、紙を取り出した。しかし、暗くてここからでは慎也にはよく見えない。
「えぇか？」
「うん」
すると、どこからともなく聞き覚えのある曲が聞こえてきた。
「情熱じゃん……」
それはマーチングで使用する曲、『情熱大陸』だった。暗闇の中、音楽とカウントをする春樹と翔の声が聞こえてくる。
「あー、ちゃうちゃう！　そこはな、慎也がスライドを上で通過させるから、あんまり楽器を上へ上げすぎたらアカンねん」
「え？　そうなの？」
「うん。普通は楽器しっかり構えてくれたらえぇんやけど、ここはちょっと気ぃつけてな」
「わかった」
その後も延々、曲が流れる中二人きりのマーチングが続いた。

「ちょっと休憩しようか」
「そだね。けっこう夜でも汗かくんだね～」
春樹は噴水のそばに座り込んだ。
「いるか？」
翔がポカリスエットを取り出した。
「あ、ありがと」
春樹はそれを受け取り、グビグビとおいしそうな音を立てて飲む。
「お前～、３分の１くらい飲んだやろ。飲みすぎや」
「いいじゃん。くれるって言ったのは翔だし」
「ったく！　お前らしい答えやわ」
しばらく沈黙が続いた。慎也も息を殺して二人の会話に耳をそばだてる。
「そういえば……お母さん、調子どないや？」
「あぁ、おかげさまで土曜日には退院できそうだよ」
「そうか！　んじゃ、今週いっぱいの我慢やな」
「そうだね。翔やおばさんにはお世話になったし……皆にも心配かけてるだろうなぁ」
春樹がため息を漏らした。慎也には話が読めない。もどかしくなり、思わず飛び出しそうになったが話が続いているので、それを抑えて話を聞き続けた。
「それにしても、お前ホンマ頑張り屋やな」
「そうかな？」
「おばさんソックリっぽいわ。体調だけは崩すなよ？」
「わかってる」
「ほなえぇけどな……あ、もう１０時過ぎたわ」
翔が腕時計を見て少し驚いた声を上げた。
「そろそろ帰ろうか？」
「そやな。そやけど、来週１週間でなんとかなりそうか？」
「大丈夫」
「それと……」

翔は少し言いづらそうな顔をした。
「何？」
「みんなに……言うたらアカンか？」
「このこと……？」
「うん……慎也とか、ごっつい心配してんねん」
春樹はしばらく考えて、首を横に振った。
「ダメ。慎也ならますます心配して、絶対俺の家に来たりするもん」
「確かにな」
「そういうわけだから……ヨロシク」
「わかった」
二人はそれからもしばらく何かを話していたが、やがて自転車に跨って家のほうへ帰っていった。
慎也はあえて二人についていかず、ある場所へ向かった。
春樹が家へ着くと、誰かが家の前にいるのに気づいた。アパートだからわざわざ上がってきたあたり、きっと知り合いだろうと思ったが、時間はもう午後１１時前。いったい誰だというのか。
自転車を止めておそる上がると、見慣れた顔が視界に入った。
「あ……」
慎也だった。
「よう」
「……どしたの？」
「それはこっちのセリフ」
慎也がクスッと笑った。
「……ゴメン」
春樹はいたたまれなくなり、すぐに謝罪の言葉を口にした。
「さっき……翔と公園にいたろ？」
「え？」
「ゴメン。後付けてずっと見てた」
「ストーカーだね」

「言うな」
二人はクスクスと笑う。もう夜遅いから、あまり大声で笑えないのが辛い。
「お前さ……お母さん、大丈夫なの？」
「あ……知ってるんだ」
「さっきの話……よくわかってないけど、雰囲気で掴んでみた。あってた？」
「大正解だよ」
「アルバイトは……お母さんのため？」
「そうだね。母さんが元々パートで入ってたから、抜けるわけにもいかなかったらしくって。俺が退院するまでの間、代わりに」
「そっか……」
それからしばらく、沈黙が降りた。遠くから自動車の音が聞こえる。夜遅いので、もうあまり騒がしい音が聞こえてくることはなかった。
「大丈夫なんだな？」
「……マーチングでしょ」
「そうじゃねぇよ。マーチングが大丈夫なのはさっき、練習頑張ってるの見たから知ってる。俺が聞きたいのは、お母さんのこと」
「平気だよ。過労らしいからね」
「たまには、見舞いに行ってやれよ」
春樹は嬉しそうに笑い、「明日行ってくるよ」と答えた。
「それと、来週からはしっかり練習に来ること。これ、俺との約束な」
慎也はゆびきりをさせた。強引だったけれど、これでいいと思う。
「わかった」
春樹はとびきりの笑顔で答えた。きっと美里や絵美だったら「キラースマイルだ！」と大騒ぎするくらいの笑顔だったと、慎也は思った。

コラム☆6　駿たちのこと教えて！

※！！ネタバレ注意！！※

☆　第１７４話現在　☆

♪逢沢（あいざわ）　駿（しゅん）

パート：バスクラリネット

生年月日：１９９０年６月３０日　血液型：Ｏ型　身長：１７０．０ｃｍ　体重：５４ｋｇ

好きな食べ物：焼きそば　好きな飲み物：リプトン

苦手な食べ物：ヌルヌルしたもの全般　苦手な飲み物：トマトジュース（トマトは可）

好きな教科：音楽　体育　苦手な教科：古文

好きな俳優：山下　リオさん　好きなタイプ：活動的な子

♪井上（いのうえ）　佳菜（かな）

パート：ピッコロ&フルート

生年月日：１９９１年１月１日　血液型：Ａ型　身長：１５４．１ｃｍ　体重：４０ｋｇ

好きな食べ物：苺ショートケーキ　好きな飲み物：トロピカーナシリーズ

苦手な食べ物：ほうれん草　苦手な飲み物：ブラックコーヒー

好きな教科：世界史　日本史　苦手な教科：英語

好きな俳優：泉澤　祐希さん　好きなタイプ：私より背が高い人

♪伊原　光瑠（いはら　ひかる）
パート：ベークラリネット
生年月日：１９９０年７月２３日　血液型：Ａ型　身長：１６８．０ｃｍ　体重：５１ｋｇ
好きな食べ物：筑前煮　好きな飲み物：ボルヴィック
苦手な食べ物：辛いもの全般　苦手な飲み物：紅茶
好きな教科：化学　物理　苦手な教科：文系全般
好きな俳優：村上　一志さん　好きなタイプ：普段から自分を出している人

♪右川　順平（うがわ　じゅんぺい）
パート：ホルン
生年月日：１９９０年１１月１４日　血液型：Ｂ型　身長：１７２．３ｃｍ　体重：６１ｋｇ
好きな食べ物：赤福餅　炒飯　好きな飲み物：ＤＡＫＡＲＡ
苦手な食べ物：納豆　苦手な飲み物：コーヒー
好きな教科：古文　苦手な教科：現代文
好きな俳優：南沢　奈央さん　好きなタイプ：積極的で明るい人

♪加藤　愛実（かとう　めぐみ）
パート：ユーフォニウム
生年月日：１９９１年２月１９日　血液型：Ｏ型　身長：１６５．１ｃｍ　体重：４９ｋｇ
好きな食べ物：お味噌汁　好きな飲み物：ハーブティー
苦手な食べ物：みかん　苦手な飲み物：オレンジジュース
好きな教科：現代文　苦手な教科：英語
好きな俳優：いません　好きなタイプ：水谷先輩♪笑

♪久野　彩香
パート：トランペット
生年月日：１９９０年１２月３１日　血液型：ＡＢ型　身長：１５９．８ｃｍ　体重：４６ｋｇ
好きな食べ物：メロンパン　好きな飲み物：南アルプスの天然水
苦手な食べ物：チョコレート　苦手な飲み物：なし
好きな教科：美術　音楽　苦手な教科：理系全般
好きな俳優：川口　翔平さん　好きなタイプ：しっかりした人

♪河内みゆき
パート：ベークラリネット
生年月日：１９９０年１１月２４日　血液型：Ａ型　身長：１６０．２ｃｍ　体重：４８ｋｇ
好きな食べ物：リンゴ　好きな飲み物：午後の紅茶（ストレートに限る）
苦手な食べ物：ピクルス　苦手な飲み物：野菜ジュース
好きな教科：家庭科　苦手な教科：体育
好きな俳優：佐野　和真さん　好きなタイプ：自分にないものを持っている人

♪小林　梨子
パート：エスクラリネット
生年月日：１９９０年４月１６日　血液型：Ｏ型　身長：１４９．６ｃｍ　体重：４０ｋｇ
好きな食べ物：キウイフルーツ　好きな飲み物：ふるふるぶどう
苦手な食べ物：バナナ　苦手な飲み物：牛乳

好きな教科：英語　苦手な教科：美術
好きな俳優：三浦　春馬さん　好きなタイプ：運動神経のいい人

♪鈴木(すずき)　麻綾(まあや)
パート：アルトサキソフォン
生年月日：１９９１年３月１３日　血液型：Ｂ型　身長：１６９．６ｃｍ　体重：４８ｋｇ
好きな食べ物：とうもろこし　好きな飲み物：コーンスープ
苦手な食べ物：いちご　苦手な飲み物：抹茶
好きな教科：数学　化学　苦手な教科：現代文　古文
好きな俳優：佐藤　健さん　好きなタイプ：冷静な判断ができる人

♪瀬戸(せと)　優輝(ゆうき)
パート：ベークラリネット
生年月日：１９９０年７月７日　血液型：Ｏ型　身長：１７２．９ｃｍ　体重：６１ｋｇ
好きな食べ物：酢豚　好きな飲み物：緑茶
苦手な食べ物：ブロッコリー　苦手な飲み物：ミルクティー
好きな教科：日本史　体育　苦手な教科：世界史
好きな俳優：宮澤　佐江さん　好きなタイプ：家事全般ができる人

♪戸口(とぐち)　誠(まこと)
パート：バスーン
生年月日：１９９０年５月１９日　血液型：Ｂ型　身長：１７０．７ｃｍ　体重：５７ｋｇ
好きな食べ物：若鶏のからあげ　好きな飲み物：レモンティー
苦手な食べ物：ピーマン　苦手な飲み物：ぶどうジュース

好きな教科：物理　苦手な教科：化学
好きな俳優：藤井　美菜さん　好きなタイプ：活発な人

♪富岡（とみおか）　洋之（ひろゆき）
パート：パーカッション
生年月日：１９９０年９月２３日　血液型：Ａ型　身長：１７３．４ｃｍ　体重：５６ｋｇ
好きな食べ物：すいか　好きな飲み物：炭酸飲料
苦手な食べ物：キウイフルーツ　苦手な飲み物：なし
好きな教科：文系全般　苦手な教科：とにかく数学！
好きな俳優：志田　未来さん　好きなタイプ：おしとやかな人

♪中野（なかの）　さゆり
パート：アルトサキソフォン
生年月日：１９９０年４月５日　血液型：Ａ型　身長：１６３．２ｃｍ　体重：５０ｋｇ
好きな食べ物：にゅうめん　好きな飲み物：なっちゃん
苦手な食べ物：グレープフルーツ　苦手な飲み物：カルピス
好きな教科：世界史　英語　苦手な教科：古文　現代文
好きな俳優：柳下　大さん　好きなタイプ：おっちょこちょいな人（笑）

♪西嶋（にしじま）　はるか
パート：テナーサキソフォン
生年月日：１９９０年８月３１日　血液型：ＡＢ型　身長：１７０ｃｍ　体重：５０ｋｇ
好きな食べ物：たぬきそば　好きな飲み物：カルピス

苦手な食べ物：いちご　苦手な飲み物：抹茶
好きな教科：数学　化学　苦手な教科：現代文　古文
好きな俳優：成宮　寛貴さん　好きなタイプ：あたしより背の低い人……。

♪乃木（のぎ）　あずさ
パート：パーカッション
生年月日：１９９０年８月１日　血液型：Ｂ型　身長：１５０．３ｃｍ　体重：４１ｋｇ
好きな食べ物：オムライス　好きな飲み物：カルピスソーダ
苦手な食べ物：ハンバーガー（太るから）　苦手な飲み物：柑橘系の飲み物
好きな教科：数学　化学　苦手な教科：現代文　古文
好きな俳優：菅生　大将さん　好きなタイプ：快活な人

♪野村健之佑（のむらけんのすけ）
パート：オーボエ
生年月日：１９９０年６月９日　血液型：Ｏ型　身長：１７６．２ｃｍ　体重：６３ｋｇ
好きな食べ物：カツカレー　好きな飲み物：アップルティー
苦手な食べ物：ミニトマト　苦手な飲み物：炭酸飲料
好きな教科：現代文　苦手な教科：数学数学数学―！
好きな俳優：徳永　えりさん　好きなタイプ：文系思考の人

♪秦野（はたの）　恵梨（えり）
パート：パーカッション
生年月日：１９９１年３月３１日　血液型：Ａ型　身長：１６

０．０ｃｍ　体重：４９ｋｇ
好きな食べ物：サッポロポテト　好きな飲み物：みっくちゅじゅーちゅ
苦手な食べ物：青魚　苦手な飲み物：特にありません
好きな教科：英語　苦手な教科：日本史
好きな俳優：溝端　淳平さん　好きなタイプ：私を好きになってくれる人♪

♪日高（ひだか）　優（ゆたか）
パート：パーカッション
生年月日：１９９０年５月２７日　血液型：Ｏ型　身長：１６０．１ｃｍ　体重：５２ｋｇ
好きな食べ物：ミニトマト　好きな飲み物：たのしいフルーツ
苦手な食べ物：トマト　苦手な飲み物：アールグレイ
好きな教科：化学　苦手な教科：古文
好きな俳優：岡本　玲さん　好きなタイプ：ムードメーカーの人

♪富士原（ふじわら）　徹（とおる）
パート：トロンボーン
生年月日：１９９０年４月２９日　血液型：ＡＢ型　身長：１６７．８ｃｍ　体重：５６ｋｇ
好きな食べ物：蜂蜜パン（近所のパン屋にあるヤツ限定）　好きな飲み物：はちみつレモン
苦手な食べ物：ジャムパン　苦手な飲み物：色が濃すぎるヤツ（野菜ジュースとか）
好きな教科：音楽　苦手な教科：体育
好きな俳優：鈴木かすみさん　好きなタイプ：落ち着いた雰囲気の人

♪松尾（まつお）　勇（いさむ）
パート：トランペット
生年月日：１９９０年９月３０日　血液型：Ｂ型　身長：１７０．２ｃｍ　体重：５４ｋｇ
好きな食べ物：チョコパン　好きな飲み物：ホットミルク
苦手な食べ物：人参のグラッセ　苦手な飲み物：特にないかな
好きな教科：現代文　苦手な教科：英語
好きな俳優：桜庭ななみさん　好きなタイプ：おもしろい人

♪三宅（みやけ）　亮平（りょうへい）
パート：ストリングベース
生年月日：１９９１年２月１４日　血液型：Ｏ型　身長：１７３．４ｃｍ　体重：６４ｋｇ
好きな食べ物：醤油ラーメン　好きな飲み物：緑茶
苦手な食べ物：チンゲン菜　苦手な飲み物：烏龍茶
好きな教科：英語　苦手な教科：世界史（横文字大嫌いだから）
好きな俳優：岩田さゆりさん　好きなタイプ：性格が温和な人

♪吉山（よしやま）　亜紀（あき）
パート：トロンボーン
生年月日：１９９１年１月１７日　血液型：Ａ型　身長：１６５．６ｃｍ　体重：５０ｋｇ
好きな食べ物：桃♪　好きな飲み物：つぶみマンゴー（´ω`）
苦手な食べ物：なし　苦手な飲み物：青汁
好きな教科：数学（分野による）　苦手な教科：数学（分野による）

好きな俳優：田島　亮さん　　好きなタイプ：怖い話ができる人

★この子はあの子のことをどう思っている？（恋愛感情）★

佐野　翔　☆　朝倉　陽乃
川崎　慎也　☆　田中　美里
水谷　春樹　☆　橋本　絵美
加藤　愛実　↓　水谷　春樹
瀬戸　優輝　↓　吉山　亜紀
吉山　亜紀　↓　瀬戸　優輝
西嶋はるか　↓　日高　　優
中野さゆり　↓　冨岡　洋之
三宅　亮平　↓　宮部由美子

※他の部員はクラスメイトなどである。☆マークは付き合っている仲を示す。

第１５４話　しおりの策略

「え？　そうなんですか？」
しおりは練習を終えて応接室で紅茶を飲みながら、恭一の話を聞いていた。恭一は資料をまとめながら答える。
「そうなんだよ、アイツら。いつのまに付き合い始めて、いつのまに別れたんだか」
「可愛らしいじゃないですか。そうですか～……あの二人がねぇ」
しおりが紅茶をすする。遠くから翔の関西弁が大きい音量で聞こえてくる。あれで別れたというんだから、なかなかわかりにくい。
「それどころか、田中に川崎、橋本に水谷まで付き合ってるっていうから驚きだよ」
「あぁ、それは私も知ってましたよ。４人とも、仲良さそうですし」
恭一が持っていた資料を床にぶちまけた。
「なに！？　神崎は気づいてたのか？」
「やっぱり……東先輩、気づいてないと思ってましたよ」
「……やっぱりとはなんだ」
「だって、東先輩、高校時代からモテるのにぜーんぜん気づかないんですもん！　いつでしたっけ？　小牛田（こごた）先輩が『先輩のこと好きです！』って言っても『冗談キツいよ』の一言で終わりでしたし」
「あれは違う！　あの時は……その……」
恭一が資料を整える手を止めて、反論しようとして手を止めた。
「あの時は？」
「……なんでもない」
「ならいいんですけど」
しおりは紅茶をもう一度すすった。
「なるほどねぇ……あの二人が」
しおりはニコッと笑い、コンテの冊子に手をかけた。

「は〜い！　集合っ！」
翌日。校庭に現れるなり大量の冊子を持ってしおりが全員を呼んだ。
「あ、神崎さん！　こんにちは〜！」
陽乃が人懐っこくしおりに挨拶する。しおりはその顔を見るなりニィッと笑ったので、陽乃は思わず引いてしまった。
「ど、どうしたんですか？」
「あ、あぁ！　ごめんね。なんでもないの」
「そうですか……。それで、その大量の冊子は？」
「あ、これね！　はぁい、みんなちょっと聞いて！」
そういうとしおりは冊子を健之佑、優、洋之に手渡す。
「はい！　配って配って。時間ないから」
洋之が手際よく配り始める。慌てて健之佑、それから優が同じように配り始めた。
「あ」
洋之が手を滑らせて冊子を渡し損ねた。
「あ……」
拾おうとした亜紀が手を止める。
「悪(わり)ぃな」
洋之が砂を払って新しい冊子を手渡した。亜紀の顔が赤くなる。
「ん？　熱でもあんの？」
「ま、まさか！」
「そ。ならいいけど」
洋之は次の人に冊子を渡しに素早く去っていった。
「はーい！　それでは冊子よく見て！　ちょっとね、変更点があるの」
冊子を受け取った翔が変更点をチェックする。部員たちの立ち位置は冊子上に「〇（マル）」で書かれていて、特に名前で位置が指示されたりしているわけではない。しかし、どういうわけかその冊子にはピンポイントで数名の名前が書かれていた。

～情熱大陸中盤・ペットソロ～

↓○（西嶋）↓○（鈴木）↓○（中野）↓○（佐野）
→
→○朝倉↓　↓　↓○↓　↓　↓　○（朝倉）
→　　（立ち止まってソロ）
↑○佐野↑○中野↑○鈴木↑○西嶋

「……ちょ」
陽乃が口をポカンと開ける。
「神崎さん！」
翔が顔を真っ赤にしてしおりに詰め寄った。
「何なんですか、これ！」
「決まってるじゃない。コンテ変更」
「ちょ……！　もう1週間切ってるんですよ！？」
「だーいじょうぶよ！　アンタたちなら余裕で覚えられる！」
「そ、そういう問題やなくって……」
「あれれれー？　ひょっとして恥ずかしいんですかな？」
「たっ、田中！」
美里がグイグイと翔のアゴを突いた。翔の顔がみるみる赤くなる。
「んも～！　最近やたらひっつかなくなったと思ったら、密かに神崎さんにそんなこと頼んじゃって～。仕組んでたね！？」
「え！　そうだったんですか？」
亮平が驚いた顔をする。
「なんか変だと思ってたんですよ～。夏休み、一度カケル先輩ん家行ったとき、やったらめったら仲良かったのに、変だな～と思ってたから」

「そうそう」
拓真が亮平の後ろから顔を出した。明らかに茶化すような笑みになっている。
「カケル～、そろそろ充電切れるよぉ～だっけ？」
陽乃の顔がポストのように赤くなった。
「余計なことすんなや！」
翔が照れているのではない、怒った様子で顔を赤くして怒鳴った。
しおりも思わず言葉をつぐんでしまった。
「……神崎さん、ホンマにコンテ変えるんですか？」
「そ、そのつもりだけど」
「わかりました！　ほな、早く練習しましょ。もう本番まで時間ないし」
「そうね……はい、みんな！　初めの隊形！」
しおりが手を叩いて全員に促す。ハッと気づいたように、全員が楽器を構えて初めの位置に立つ。本番まであと1週間。今さら隊形を変えること、それが陽乃と翔をくっつけるかのような変更というのに、翔は腹を立てていた。
陽乃も陽乃で落ち込んでいた。自分のせいで周りが迷惑をかけているのではないか。そんな風にすら思う。
いよいよペットソロに差し掛かる。ぶっつけ本番状態だったが、サックスパートも陽乃も素早くコンテを暗記していたようで、ミスなく移動することができた。しかし、陽乃にしてみればここが最も緊張する場である。コンテを見てもわかるように、周りにいるのはサックスパートだけだ。
（いつもどおり、いつもどおり）
しかし――。
プゥアァッ！
「コラーッ！　朝倉さん！　なにそのみっともない音！」

ビクッと陽乃が肩をすぼめる。本番まで1週間。今さら出すような音ではない。

「すいません……」

「あと1週間！　そんなチャルメラみたいな音吹いてたら、情熱も気合いもぶっ飛んで消えちゃうわよ！」

「はい……」

「もっとしっかり！　もう一回！」

「はい！」

しかし、何度繰り返しても陽乃のソロは失敗するばかり。

「ちょっとちょっと～……それでも最高学年！？」

「……。」

しおりはハァッとため息をついた。

（やっぱりコンテ変更失敗かなぁ……。感情に突き動かされて変更した私も悪いし）

「しょうがないわね。あと3回やって全部失敗したら、そこのソロは朝倉さんじゃなくって、久野さんか松尾くんに変わってもらうわね」

「えっ！　そ、そんな！」

「しょうがないでしょう。本番どころか練習でそんなミス連発するような人、ソリストなんかにできないわ」

「……。」

それは陽乃自身が一番わかっていた。今回、コンテを変更したことで変に緊張したから失敗ばかりするようになったわけではない。変更する前から10回吹いて1回成功すればよいようなソロだった。

「はい！　あと3回同じところやってみるから全員ペットソロの前に戻って！」

「はい！」

日がだんだん傾いてきた。野球部は片づけを始めている。陸上部も終わったようだ。

「はい！　もう1回！」

案の定、失敗してしまった。だんだんと不安になる。
「ダメ！　次でもう終わりよ！」
手が震える。マイナス思考ばかりが頭を巡る。心配になってきた彩香と勇も成功してほしいという眼差しで陽乃を見つめている。
「戻って！」
もう泣きそうな状態になっていた。直前の隊形に戻るとき、沙希が陽乃の前に立った。
「陽ちゃん」
その眼差しはしっかりと陽乃を捉えて放さない。
「サキティ……」
「佐野くんと、別れたの？」
「……うん」
周りに聞こえないように、陽乃は答えた。
「ウソ」
沙希がクスッと笑った。
「あのね、今度の隊形、陽ちゃんがソロのとき佐野くんが左斜め後ろに来るでしょ？」
「そだね」
「そのとき、二人は別れていないっていう証拠があるから、見てみて」
「え？」
「はーい！　最後にもう1回コンテの確認するわ。どうもねぇ、西嶋さんと鈴木さんが着くタイミングがズレるのよ」
沙希はニコッと笑って元の位置へ帰った。そしてコンテの確認が始まる。
（別れていないっていう証拠があるから、見てみて）
どんな証拠というのか。あえて自分を励ますための、沙希のウソだったのかもしれない。最近の翔は、確かに以前のように接してくれてはいるが、それは恋人としてではなく、友達としての接し方だ。そのようにしか思えない。

陽乃はブツブツ言いながら元の位置へ戻る。
「はい！　じゃあカウントしっかりしてよ。行くわよ～、1、2、3、4！」
1、2、3、4とカウントをしながらペットソロへの隊形へと変わっていく。陽乃はソロを吹く位置へと移動していく。
「……？」
そういえば、さっきから視線を感じていた。それは後ろから。後ろにいるのは向かって左からはるか、麻綾、さゆり、そして翔。間違いない。視線は向かって右、陽乃からすれば左斜め後ろから視線を感じている。
フッと後ろを見た。翔が、陽乃をしっかりと見つめてくれていた。
「はい！　じゃあ今度楽器つけていくよ！」
「はい！」
「……。」
陽乃は笑うタイミングを失って、なんとなく無表情のままで歩いていく。翔が移動する陽乃の隣を通るとき、小さく言った。
「オレが見たってるから、変に緊張すんなや」
「……！」
みるみる陽乃の顔が赤くなった。
「な？」
「だっ、だからかえって緊張してるのかもね！」
陽乃は自分でもかわいくないことを言っているのに気づいた。心臓がドキドキする。
「ま！　そういうわけや。変に肩に力入れんとホドホドにな」
「……ありがと！」
しおりの指示で全員が元の位置へ戻った。
（絶対にやってやる！）
陽乃は心に誓い、楽器を構えた。

第１５４話　しおりの策略（後書き）

☆読者の皆様へ☆

このたび、ＧＴ．ｓｐｉｒａｌさんの作品『みんなのＨａｒｍｏｎｙ』においてコラボレーションを行うことになりました。それに合わせまして、この作品の時代背景を２０１３年始まりという未来視点から現代視点へ移行していく次第です。

これまで読んでこられた読者の皆様には申し訳ありませんが、お互いの作品をより良くしたいという作者間の同意に基づくものです。それに伴い、翔たちが2年生のときに出場したコンクールにおいてもかなりの変更を行います。また、それにより登場人物の生年及び楽曲の一部にも変更が出ますが、ストーリー上は影響がないかと思われます。また、ストーリー上どうしても変更できない曲がありましたが、ご理解いただけたら幸いです。

むしろ、より現実味が増すのではないかと思い、作者も楽しみにしております。

１２月２７日午後5時現在、全話において変更が進んでおります。

よろしくお願いいたします！

なお、この変更によるストーリー自体の変更はありません！

今後とも、どうぞ『奏～ｋａｎａｄｅ～』ならびに『みんなのＨａｒｍｏｎｙ』ともども、よろしくお願いいたします☆☆

第155話　言いたい放題

「……？」

美里はふと視線を感じたので音楽室の入口を見てみた。しかし、人影はない。

「どうしたんですか～？」

あずさがキョロキョロと落ち着かない美里に声をかけた。

「いや……なんか視線を感じてさ」

「あ、先輩もですか？」

「え？　あずちんも？」

あずさは美里の横にチョコンと座って話を始めた。

「最近、あたしもなんか視線を感じるんですよ」

「やっぱり？　あたしの気のせいじゃなかったんだね」

「そうです！　しかも……その……」

「脚のあたり……よね」

「そうなんです～！」

「えぇっ！？　あずちんと先輩もですか！？」

恵梨がバタバタと彼女たちの元へ駆けつける。

「恵梨ちゃんも！？」

「そう！　あたしも脚のほう！　もう！　きっとエッチな男子が見てるのよ～！」

「まさか……吹奏楽部じゃないでしょうね」

美里が洋之と優を一瞥する。まさか話の中心になっているとは思っていない二人はマーチングの練習に励んでいる。ちなみに、優はグロッケンで洋之がベードラである。

「そんな恐ろしいことしませんよ、吹奏楽部の男子は」

「そうよね～……じゃあ一体誰が？」

「そこが謎なんですよ。ホント、不気味っていうか」

美里はもう一度入口を見てみたが誰もいなかった。

「雪ちゃん！」
雪子が声をかけられたので振り向くと、A組の高田玲奈（たかだれいな）が窓から覗きこんでいた。
「あー！　レイちゃん。どうしたの？」
「雪ちゃんの吹いてる楽器がどんなのか見たくって来たの」
「あぁ、そういえば言ってたね。これだよ！　ホルンっていうの」
「へぇ～……」
玲奈はマジマジと楽器を見た後、雪子と順平が一番言ってほしくないことを笑顔であっけらかんと言ってしまった。
「なんか、カタツムリみたい！」
同じ頃、陽乃と勇、彩香はラグビー部の部員たちから聞こえる歌に無性にイライラしていた。
「ソーは青い空～、ラーはラッパのラー」
「ラッパラッパラッパパッパー。パラパッパー！」
「うるさいわねぇ！　これはラッパじゃなくってトランペット！　覚えといて！」
陽乃は我慢しきれず彼らに怒鳴りつけた。当然驚いたラグビー部の男子は走り去ってしまう。
「もう！　ラッパで間違いじゃないけど、あんなふうに言われるとバカにされた気分！」
陽乃が顔を真っ赤にしていると勇がなだめてくれた。
「血圧上がりますよ、先輩」
「わかってるけど……よく見たら同じクラスの湯船がいたわ。許せない！　明日とっちめてやる！」
そう。最近、陽乃たちは自分たちの周り、特に同級生があまりにも吹奏楽というものに誤解が多くあるということを身にしみて感じていた。誤解だけならまだしも、自分たちの楽器を「カタツムリ」と称されたり（説明するにはちょうどいいので雪子も使ってはいたが）、バカにされたような歌を作られたりと、とんでもない状態だった。

今日は9月21日（木）。マーチング本番まであと2日という日だった。翔はそんな日に限って日直に当たったのをブツブツ文句言いながら、黒板掃除をしていた。

「おぉ、どうだ佐野。もうすぐ終わりそうか？」

「あ、先生！　もうすぐです」

「そういえば佐野。今年、吹奏楽部は七海祭に出るんだってな？」

「あ！　そうですよ！　いろんな曲する予定なんで、楽しみにしててくださいね」

「う〜ん……」

いまひとつ、健太の返事がよくない。

「どないしたんですか？」

「いや……前から思ってたんだけど」

「はい？」

翔は黒板消しを組み合わせてパタパタはたきながら質問に答えようと思っていた。しかし、次に出てきた健太の言葉に驚いてしまう。

「吹奏楽って難しい曲ばっかだろ？　運命とかなんだっけ、天国と地獄？　とにかくさ〜、クラシックばっかりじゃ先生、飽きてきそうなんだよなぁ」

「あ！　あぁ〜！」

翔は思わず黒板消しを手から滑らせて落としてしまった。白い煙が花壇の中にボワァァンと上がるのが見えた。

その日の部活では不満不服が部員から噴出していた。亜紀はトロンボーンのスライドが触手のようだと言われ憤慨していた。春樹と拓真は楽器の大きさも性質も違うのに「どっちも似たようなもんだろ」と一まとめにされたことをプンプンしながらお菓子をむさぼり食っていた。由美子は「フルートはお嬢様の楽器なのに由美子が吹けるんだね」と言われかなり落ち込んでおり、沙希に励まされているようだった。健之佑に至っては「チャルメラ？」と言われたそうで、当分ラーメンを食べたくないと言っていた。

「まったく！　みんな吹奏楽に対して誤解とか偏見持ちすぎ！」

「う〜ん……」
翔もこれには困っていた。こうも学内で誤解や偏見を持たれていたのでは、なかなか活動しづらい部分がある。おまけに、生徒だけでなく先生まで誤解しているのだから。しかし、恭一は最近、生徒指導の仕事が入って忙しいようだし、マーチング指導のしおりに相談するのも畑違いのような気がして翔も陽乃も話を出せずにいた。
「このままじゃ、七海祭、吹奏楽部は受けないかも……」
陽乃がズーンと沈んだ表情を浮かべる。
「……しゃあない。オレ、ちょっと相談してみるわ」
「誰に？　先生？」
「まさか。今週死ぬほど忙しい言うてたから、そんな時間ないやろ」
「じゃあ神崎さん？」
「それは畑違いや」
「じゃあ……」
陽乃はこれ以上思い浮かばなかったようで、ウンウンうなるばかりだ。
「まぁ、頼りになる仲間やからな。なんかいい案出してくれるわ」
「そうなの？」
「……アイツ、今の朝倉の反応聴いたらショック受けるわ。おもろいな〜」
「えっ!?　あたし会ったことあるの!?」
「どうやろね〜！」
「ヒドいよ佐野！　教えてってば！」
「嫌や〜！　ほな、また明日な！」
翔は陽乃に何かを隠しているのが楽しそうな様子で手を振りながら、家へと向かっていった。
「……誤解といてくれるのかな」
陽乃は少しワクワクしながら、翔が見えなくなってから家へと向かった。
「ただいまぁ！」

家へ帰ると翔はまず、リビングへ向かう。
「おかえり～。手ぇ洗いなさいよ」
「わかってる～！　その前にいただき！」
今日の夕飯は焼き鳥のようだ。翔は一本つまむとすぐに上へ上がった。後ろから友美子の「かける！」という怒鳴り声が聞こえたが、気にせず部屋へ上がる。
「綾音！　入るで！」
コンコンとノックしてすぐに部屋へ入ると、なぜか翔が中学1年のときの定期演奏会のＤＶＤを見ていた。
「お前、なんでそんなん見てるねん？」
「え？　あぁ！　マーチングがどんなんか、予習」
「興味あんのか？」
「まぁ、ちょっとね～」
「ふぅん。それより、電話借りるで」
「どーぞ」
翔は綾音の部屋にあった電話の子機を取って自分の部屋へ戻った。部屋に入ってからすぐにネクタイを外し、ベルトも取って楽な格好になった。
「えーっと……あ、市外局番押さへんとアカンのか。待てよ？　あそこの市外局番とかわからへん……ネットネット」
翔は急いでパソコンを開き、市外局番検索を始める。
「あ、０８９か。えっと、ほんなら０８９の……」
プッシュボタンを押して、コール音が響く。
「はい、もしもし。幾瀬でございます」
「げっ！？」
翔は思わず声を上げてしまった。
「はい？」
相手も不審に思い、声を上げる。
「すいません！　ゴメンなさい、ホンマすいません！　間違えました！」

見えてもいないのにお辞儀をしながら翔はとにかく謝り続けた。
「あぁ、いいのよ。そういうこともあるから」
「すいません！　じゃあ、失礼します」
翔は電話を切ってからもう一度、かけ直す。
「おっかしいなぁ……今度こそ」
コール音が響くこと5回。ようやく相手が出た。
「はい、もしもし」
聴きなれた声。今度は間違いないようだが、相手は確実に名前を言ってくれるからそれを待つことにした。そしてすぐに翔の期待どおり、相手は名前を言ってくれた。
「竹林です」
「ちーす！」
「……。」
相手は答えてくれない。しかし、不審に思っているのではなく呆れているのだろう。
「ちーす！」
「……ち～す」
あえて疲れた声で相手は返してきた。これがいつもの関係だ。今さら気にしない。
「なんやねん！　相変わらず疲れた声してんな！」
「ちゃうわ。そのテンションについていかれへんの」
「よぉ言うわ！　昔は同じテンションで遊んでたやんけ～。そやろ？　泰徳！」
そう。他でもない、電話の相手は大阪に住んでいたときの幼なじみ、竹林（たけばやし）　泰徳（やすのり）だった。

第156話　やっぱ違うな！

「それで、今日は何の用さ。ひょっとしてまたあの面子（メンツ）でおるん？」
「あの面子？」
翔は誰のことを意味しているのかいまひとつわからなかったので、聞き返した。
「ほら、翔の彼女さんと賑やかな低音男子」
「あぁ！　朝倉と三宅（みーやん）に拓あんやな」
「拓あんって……漬物かよ」
泰徳は呆れた声を上げるばかりだ。泰徳ももう子供じゃないのかも。翔はそう思うと少し寂しい気もしたが、話しているといずれ地が出るはずだ。そう思い、翔は特に気にせず話を進めた。
「まぁまぁ、本人も気に入ってるし。それよりショッキングニュース！」
泰徳は電話口の向こうで耳から少し受話器を離していた。もちろん、翔はそんなことを知る由もない。
「なんやねん」
「あ、関西弁出るやんけ」
「しゃあないやろ。関西弁丸出しの翔と話してたら嫌でもなるわ。っていうか、東京弁が感染（うつ）らへんの？」
「そんなわけあるか！　バリバリ関西弁やで」
「……。」
さすが翔。恐るべし。泰徳は苦笑いした。
「それより、ショッキングニュースってなんやねん」
「おっ！　よくぞ聞いてくれました。実はな、いま話に出た朝倉やねんけど――」
「どうせくだらん話やろ？」
「まぁな！」
翔は笑いながら言い切った。

「否定せぇへんのかい」
「だってしょーもないから。なんで？」
「……別に。それより、何、朝倉さんが」
「お前のことスッポーン忘れてたで」
「え」
これはショックだ。泰徳は陽乃のことも亮平のことも、拓真のことも覚えているのに。まぁ1年前に翔から電話が掛かってきたとき、泰徳自身も翔のことは忘れていたので彼女を責めるわけにもいかないが。
「しょうがないやん。きっとそれは翔がえぇ加減なこと言うたから混乱してんねんやろ」
「あは？　バレた？」
「当たり前や」
泰徳は呆れながら勉強机の椅子に座った。最近背が伸びて、椅子が合わなくなってきている。
「それより、話って何？」
「あー！　そうそう、実はな……」
翔は七海高校で起こっている出来事をすべて話した。
「……それはヒドいな」
「やろ～？　特に泰徳はチューバとユーフォを一緒くちゃにされたん、腹立つやろ？」
「当たり前やんけ！　どっちも魅力的な楽器やのに～」
「拓あんと春樹、それに三宅（みーやん）とメグも怒ってたわ」
泰徳の知らない名前が二人出てきた。
「春樹とメグって？」
「七海のユーフォニウム初心者組み」
「大丈夫なんか？　その二人」
泰徳は真剣に心配になって聞いてみた。パートも関連性があるだけに、どこか放っておけない気がした。
「大丈夫やて。メグ……あぁ、加藤愛実っていうねんけど、メグは

ボーン（※1）吹いてたし、春樹は泰徳ほどちゃうけど、音楽の才能あるし」
「へ～。いっぺん会いたいな」
春樹と自分は近い感じがするのだろうか。会えるなら会いたい。
泰徳は翔の話を聞きながら、会ったこともない春樹のことを少し考えた。
「で、どないしたらええと思う？」
「う～ん……」
泰徳が入学したときから既に、吹奏楽部はあった。翔たちとは違い、知名度も高いし、先輩たちもいるからこんな苦労は少なかった。決してないわけではないが、翔たちの高校に比べればずっとマシだろう。
「それってさ、生徒の前で吹いたことあるんか？」
「いいや。今までないわ。まぁ、教頭先生のお別れのときくらいかなぁ」
「それはアカンわ。だって、部活って学内で活動するのが中心やのに、生徒も先生も演奏聴いたことないって痛すぎるやろ、それは」
「あ～……そんなこと考えてへんかった。いやな、１０月に文化祭あるからそれで間に合うか思っててんけど……」
「それまでにイメージ変えなアカンやろ」
「そうやなぁ。でもどないしょ？」
「う～ん……あ」
泰徳はふと、翔が夏休みに連絡を取ってきたときにマーチングが２３日と言っていたことを思い出した。
「翔」
「ん？」
「あさってマーチングやろ」
「あ、覚えててくれたんや！」
翔は嬉しそうな声を上げた。
「まぁな。それのさ、リハってすんの？」

「うん！　体育館でな」
「それやったら、そのリハを全校生徒に公開したらどう？」
「……。」
翔からの応答がない。よく考えてみれば、一日しかないのにそう言ったことを全校生徒に広めるのも難しい話だ。失敗だったかと泰徳は思い、別の提案をしようとしたときだった。
「それえぇな！」
翔の大声が泰徳の耳を突き抜けそうなくらい、聞こえてきた。
「耳痛いわ！」
「あ！　ゴメンゴメン！　でもさぁ、やっぱ泰徳は違うな！」
「何が」
「考え方が一般ピープルとちゃうわ」
「それって褒めてんの？」
「当たり前や」
きっと、翔はニィッと笑っているに違いない。この声のときは、翔が真剣に褒めているときだ。悪い気がしない。
「ありがとな」
「いやぁ！　こっちがありがと～やわ。さっそく明日実践してみるわ」
「役に立てたんなら良かったわ」
すると、翔の受話器の向こうでドアの開く音がした。間髪入れず「泰徳～！　聞いてよ、また愛（まな）がねぇ～！」という泣き声に近い声が入ってきた。泰徳が「あぁ～もう未来（みき）！　電話中やねん、静かにしてくれ！」と大声を上げた。ところがすぐ後ろで「ちょっとぉ！　深刻な相談しに来たのに！　電話なんて後々！」という声。無理やり電話を切ろうとしているようで、泰徳が困った声で「ストーップストップ！　あ、ちょ！　美奈（みな）、やめろって！」という声が聞こえてきた。
しばらくギャーギャー言い合う声が聞こえた後、泰徳が息を荒くして電話に出た。

「ごっ、ごめん……」
「いや……えぇんやけど、お前んとこも似たようなもんやんけ」
「……そうかもな」
翔はしばらく間を空けてから、泰徳に聞いた。
「泰徳」
「なに？」
「お前、美奈ちゃんと未来ちゃんのどっちが好きやねん？」
「はぁ！？　なにアホなこと言うてんねん！　しょーもないこと言うてんと、明日しっかりしてや！」
泰徳がこういう声を出すと怒っている証拠だ。
「わかった冗談やん！　ゴメンな、ありがと。助かったわ」
「ん～、まぁ冗談ってわかってたけど」
「なんや、冗談通じるようになったな、いい子いい子」
「切るで」
「わー！　ゴメンゴメン！　ほな、ホンマにありがとう。また落ち着いたら、電話するな！」
「了解。ほな」
電話を切ろうとして、美奈が「待って！　一度佐野くんと話してみたかった！」と言うのと「あ、私も私も！」と言っている声が聞こえたが「アホか！　迷惑！」という泰徳の声が聞こえて電話が切れた。
翔はクスッと笑ってから呟いた。
「やっぱ音楽の才能あると考え方もちゃうなぁ」
「かける～！　ごはん！」
「あ、はーい！」
翔はすぐに着替えを済ませて、下へ降りた。

第１５６話　やっぱ違うな！（後書き）

このたび、ＧＴ．ｓｐｉｒａｌさん著作『みんなのＨａｒｍｏｎｙ～夢と希望のアンサンブル～』のコラボレーションを行うことになりました♪

今回、第一弾として主人公である竹林泰徳くん、バスパート代表として中井美奈さん、谷　未来さんに出演いただきました。ありがとうございます☆☆　今後とも、よろしくお願いいたします☆☆

（※１）ボーン＝トロンボーンの省略形。

第157話　Welcome♪

「ん？」
優が職員室の前を通ると、恭一に翔、陽乃、健之佑、誠の４人がなにやら話をしていた。
「どうしたんだろ？」
珍しい面子だ。いつもなら翔、陽乃、慎也、美里の組み合わせあるいは健之佑、誠、佳菜、梨子の組み合わせなのに、今日はその半分ずつが集まっている。しかし、少し距離があるため話が聞き取りづらい。
「……で、今日の……後に、みん……と思うんですよ」
翔の関西弁にはまだ慣れない感じがする。それに加えて聞き取りづらいものだから、翔の話す言葉の半分くらいがよくわからないまま流れてしまう。さらに、スピードも速いときたものだからたまらない。
「なる……。……だ、急すぎ……理かもしれ……」
昼休みだ。生徒や先生の話し声、騒ぐ声で職員室の周りもかなり騒々しい。優も会話に加わればいいだけのことだが、今さら入りにくいと思っていた。しかし、最後の部分だけがはっきり聞こえたのだ。
「よし！　それじゃ今日の放課後、リハーサルも兼ねてやろうか！　マーチング校内披露！」
それを聞いた瞬間、優は血相を変えて走り出した。まず、美里のところだ。２年Ａ組の教室に優は遠慮なく駆け込んだ。
「田中センパーイ！」
お弁当を片手に雪子と談笑していた美里は目を丸くした。
「あれ？　ゆーやん。どうしたの？」
「ヤバイっす！　ヤバイっすよぉ！」
二人のところへ走り寄ってさっきからヤバいしか言わない優を雪

子がとりあえず落ち着かせた。
「何があったの？」
雪子が聞く。優は首をブンブン振りながら「これからあるんです！」と叫んだ。
「とにかく言いなよ」
「きっ、今日の放課後、体育館でマーチングのリハーサル……するじゃないですか！」
「あ～、そんなこと言ってたねぇ」
美里はのん気にデザートのオレンジを剥きながら答える。
「あれ、全校生徒で有志募ってコンサートにするんですって！」
「はぁ！？」
美里が立ち上がって優のシャツを襟掴みした。
「ちょっと！　それ、マジ！？」
「マ、マジです！　ってか、苦しいッス！」
「大変！　一大事よ！　雪ちゃん、そのオレンジあげる！　ゆー、ついてきて！」
オレンジを押し付けられた雪子は少し戸惑いながらも「いただきます」と答えた。教室を飛び出した美里は1年生の教室へと駆け上がる。
「先輩！　どこ行くんスか！？」
「ヒロ、恵梨ちゃん、あずにちゃんと言わなきゃ！　あたしたち、かなりヤバいでしょ！？」
美里がまっさきに駆け込んだのは、H組の教室だ。
「あずぅぅ！　大ピンチよ！」
「へ？」
ポカンとするあずさに美里と優は事情を説明した。
「やだ！　冗談じゃないんですか！？」
「冗談で昼休みにこんなこと言いに来ないわよ！」
「ちょっと先輩！　とりあえず、恵梨ちゃんに言いにいきましょうよ！」

「もちろん！　ゆー、行くよ！」
優は美里に振り回されてすっかりグロッキーだ。
「恵梨ちゃん！」
E組の教室に入ると、机に伏せて昼寝をしている恵梨がいた。
「ちょっと！　コラ！　起きろこの幸せ者！」
「ん～ニャニャ……ダメですよぉ、拓あん先輩……」
拓真の名前が出てきた。
「何の夢見てるんだろ」
「あたしそんなに大福餅食べれませんよぉ」
「なんで本堂先輩が大福餅持ってくるのよ。意味不明……。コラ！　起きろ！」
あずさがデコピンを喰らわせると、恵梨が跳ね上がるように体をビクつかせて起きた。
「わっ！　やだ！　え？　どうしたんですか！？」
「どうしたもこうしたもないの！　いい？　心して聞いてよ」
美里は事情を説明した。
「うえぇっ！？　それ、ホントですか！？」
「そうなのよ！　大ピンチなの！」
「とりあえず、ヒロに言いに行きましょうよ！」
4人は洋之のいるG組の教室へ駆け込んだ。
「あれ？」
ところが、洋之の姿が見当たらない。恵梨は普段洋之が親しくしているクラスメイトに聞いた。
「あー、ヒロ？　ヒロなら音楽室で自主練するって最近、毎日音楽室行ってるよ」
「え……？」
4人は呆然とした。一番上手いはずの洋之が、一番努力しているのだ。それなのに、自分たちはどうなのだろうか。
「……知らなかった」
4人は教室を出て、廊下の窓に並んで外を見つめた。

「ねぇ。昼休み、あと２０分だけよ」
美里がケータイを取り出して全員に聞く。しかし、答えは出ているようなものだ。
「行きましょう、音楽室」
優が走り出した。３人も後を追う。その頃、洋之は部室でマーチング用のタムタムを背負って、情熱大陸の音源をかけながら一人、練習していた。タムタムに慣れてはいたものの、こうもテンポの速い曲だとなかなか苦労する。しかも、冒頭に洋之のソロがあったから、プレッシャーもかなりのものだ。ここで曲のイメージが決まるといっても過言ではない。
鋭い音が部室から響いてくる。だいぶ決まるようになったとはいえ、時々乱れるようだ。その音は４人にしっかりと聞こえていた。
「やっぱり、全員いないとやりづらいよね」
恵梨がションボリした様子で呟いた。
「なんでもっと早く……練習しようって思わなかったんだろ」
あずさも落ち込んでいるようだった。優も黙ってドアの向こうにいるであろう、洋之を見つめていた。
「大丈夫よ！」
美里が３人の肩を順番に叩いた。
「今からでも十分なんだから！　ほら、行くよ！」
「……はい！」
４人は笑顔で部室の戸を開けた。はじめはポカンとした様子で４人を見ていた洋之はすぐに笑顔になった。
「いらっしゃい」
洋之が待っていたと言わんばかりの笑顔で４人を迎える。
「来ちゃいました」
優が恥ずかしそうに舌を出した。
「なんか……今さらだけど」
恵梨が頬をかく。
「でも、何もしないままよりいいかな……と思って」

あずさが恐る恐る、恵梨の後ろから続ける。
「一緒に練習……していい？」
美里が苦笑いして聞く。洋之は間髪いれず「もちろんッス」と答えた。

同じ頃、学校の裏庭では由美子と沙希が密かに練習をしていた。終盤のフルートソロ。最初は沙希が吹き、交代して由美子が吹く。沙希のところでは裏でサックスがメロディを吹いているからまだ安心なのだが、由美子のところは動きが本当に彼女一人だけになるのだ。なかなかソロに慣れない由美子が一番苦労していたのは、緊張をどのように解くかという点であった。
「あー、ダメ！」
由美子がバタンと寝転がった。
「ソロって考えただけで緊張しちゃう！」
「まぁ、慣れないとなかなかねぇ……」
「どうして佐野くんや陽ちゃんは平気な顔して吹けるんだろ」
由美子は翔や陽乃がどうしてあんなにもひょうひょうとソロを吹けるのか、不思議で仕方がなかった。５月のコンサートでもコンクールでもサラリと吹ききってしまったから、彼らの中に緊張など存在するのかどうかさえ、由美子にとっては疑問だった。
「うーん……平気ではないと思うけどなぁ」
「じゃあなんでだろ」
「陽ちゃんは、野菜が並んでるとか思ってるらしいけどね」
「私は想像力が貧困だから、そんなのできない」
「う～ん……困ったねぇ」
しばらく沈黙が続く。出てくる時期が少し遅かったのか、蝉の鳴き声が聞こえる。まだ、夏は完全に過ぎたわけではないようだ。
「ねぇ」
沙希が沈黙を破った。
「由美子は何で吹奏楽、始めたの？」

「……どうしたの、急に」
「あたしはね」
聞かれてもいないのに、沙希は気づけば話をしていた。
「お父さんもお母さんも働いてるから、何かあたしも頑張りたいって思ってさ。なかなか認めてもらえなかったけど……最近、お父さんが特にあたしにいろいろ声を掛けてくれるようになった。フルート、頑張ってるか？とか、まぁ不器用な質問の仕方だけど」
「そうなの？」
「うん。はじめはそんな程度の理由だった。でもね、今はフルート大好き！　それに、ナナコウに入ってよかったと思ってる。２年生に出会えたしね」
「そっかぁ……」
自分はどうなのだろうか。由美子はいろいろと思い返してみた。思い返すうち、入学した当初にまで記憶は戻った。

音楽室。男の子と、女の子複数の声が聞こえる。
――吹奏楽って、フルートあるの？
――うん。あるで
――私、フルートなら吹けるんだけど……
（フルート？　聞いたことはあるけど……）
それが始まりだった。それからしばらくして、フルートを吹く女の子の姿をたまたま見つけた。
「カッコいい！」

自分と何か違うものを持った人。それにすごく心を動かされた。自分も何か……。気づけば、口に出ていた。
「自分に、人とは違う何かを持ちたかったから……かな」
「……なるほどぉ」
沙希が納得する声を出してから、自分が無意識でその言葉を口にしていたと気づいて恥ずかしくなった。

「だったら、こう考えたらどうかな？」
沙希がにこやかに笑って言う。
「ソロは、吹奏楽部の中で自分が他のメンバーとは違う瞬間を過ごせる貴重な時間って感じで考えるの」
「貴重な時間？」
「そう！　いわば、お姫様みたいに輝く時間！」
「お姫様……」
「そう！　あのソロは、由美ちゃんの時間だよ。お客さんに、あたしの音色を聴いてってアピールするの。それで、たくさんのお客さんを感動させることができたら最高じゃない？」
「……。」
ソロなんて、自分が緊張するだけ。自分の緊張した、みっともない音を晒すだけ。そんな風に思っていただけに、予想外の答えが返ってきた。
「そっか……。そういう風に、考えればいいんだね」
「そう！　だから、情熱大陸のあの時間は、あたしと由美ちゃんだけの時間。どんどんアピッていこう！」
「……うん。うん！　私、頑張るよ！」
「その調子！」
すると、予鈴が鳴った。
「あ……そろそろ戻ろうか？」
沙希が慌ててフルートを抱えた。由美子も後を追う。その沙希の背中を見ながら、心の中で由美子は呟いた。
（サキティがいなかったら、今の私はいなかったな。ありがとね、サキティ）
「え？　何か言った？」
沙希が振り返ってそう言うので、由美子はドキッとした。
「ううん！　何も！」
「そう？」
そう言って再び走り出す沙希を見ながら、由美子はなぜ心の声が

聞こえたのか不思議そうな顔をしつつ音楽室へと戻った。

第１５８話　はじめまして！？

「わ……ちょっと、あんなに集まってるよ？」
陽乃は舞台裏で準備する翔に声をかけた。翔はリードを咥えながら「あ～。当たり前やろ。全クラスで先生がオレらのこと連絡してくれはってんから」とあっさり言ってしまった。
「ちょっとこれはあたしとしては予想外なんだけど……」
「そうか？　オレはテンション上がるけどなぁ」
「なんでよ。緊張しない？」
「だって、オレらのカッコええとこ見せれんねんぞ？　こんないい機会ないって」
「……どうすんのよ」
「え？　なんか言うた？」
「なんでもない！」
陽乃は赤くなって翔のそばを離れた。自分だけそんなことを考えているのではないかと思うと、恥ずかしいしバカらしいと思った。
「そんなことないんじゃない？」
後ろを振り向くと、拓真がいた。
「やだ……まさか」
「ゴメン。聞こえてた」
「恥ずかしいなぁ……もう」
陽乃はさらに顔を赤くした。最近、陽乃は事あるごとに拓真に相談を持ちかけていた。翔と一緒にいる時間が部活で長いのは、拓真だったからだ。
「でもさぁ、いいよな翔は。愛されてるっての？」
拓真はスーザのベルについているネジをもう一度確認した。ベルの向きも確認しておかないと、妙な方向を向いてしまっては音が飛ぶ方向も変になるからだ。
「……恥ずかしいからやめて」

「ゴメンゴメン。それよりさ、ソロ頑張れな」
「あ、うん。拓あんも、スーザ慣れないけど頑張ってね」
「ほどほどにね～」
拓真はスーザを軽々と背負うと、舞台のほうへと向かっていった。
「おっ。スゲェな。宣伝効果、抜群？」
拓真が舞台へ出ると、たくさんの生徒が2階や1階のサイドに集まっていた。よく見れば、安和、岳彦、めぐみの3人もいる。
「岳センパーイ！」
拓真の大声にすぐ気づいたようで、3人は手を振った。
「スーザ、慣れたかぁ！？」
「まだちょっと肩が重いッス！」
「そっか！　まぁ、拓あんなら体力あるから大丈夫だろ？」
「まぁ、それなりに～」
「頑張れよ！」
「ウッス！」
その頃、舞台裏では由美子が何度も手のひらに人の字を書いては飲み込む素振りを繰り返していた。
「ちょっと由美ちゃん先輩、大丈夫ですか？」
佳菜が心配そうに覗き込む。
「ままま、まぁね！　今日の昼休みもバッチリ練習したし！」
「あまり大丈夫そうには見えないですけどねぇ……」
「余裕よ！　今日のソロ、絶対聴いててよ！」
由美子はバシバシと佳菜の背中を叩いた。
「わっかりましたから、痛いですって！」
「はーい！　みんな、こんにちは！」
しおりが突然裏口から現れたので、部員は驚いて「ヒャッ！」と声を上げた者もいた。
「はいはいはーい！　注目。なんでも、今日は校内見学も兼ねて、リハするそうね」
「はい！」

全員が大きな声で答える。
「いくら校内とはいえ、みんなお客さんなの。そのお客さんをガッカリさせないような演奏と動きをしてちょうだいね！」
「はい！」
「特にね、パーカスさんとスーザさんはバンドの支えになるのは今までどおりだから……あら？　スーザは？」
拓真の姿が見当たらない。
「そういえば、さっき舞台から下へ降りるの見ましたよ」
「なんですって～？　ったく、のん気なんだから」
しおりが勢いよくドアを開けると、岳彦たちと楽しそうに話している拓真の姿がその目に映った。しおりは目いっぱい息を吸い込んで大声を上げた。
「コラーッ！　のん気に楽しんでるんじゃないの！」
「うわっ！　なに、あの強烈な先生？」
安和が思わず隠れてしまうほどの大声。めぐみや岳彦も唖然としてしまった。
「あ～……すいません、俺戻りますね！　受験勉強頑張ってくださいね！」
「あ、ありがと！　頑張れよ」
拓真はニッと笑うと大きなスーザを余裕で持ち上げて走っていった。
「さすがパワフルだね」
めぐみが笑う。
「これなら安心して聴けるかもな」
岳彦は拓真の背中を見送りながら、安堵の息を漏らした。
拓真が戻るとしおりに少し叱られたが、特に落ち込む様子も見せずに笑顔で慎也の隣に座った。
「はい！　それじゃ、４時半から一回通しますね。生徒の皆に見せるのはその１回きりだから、気を抜かないように！」
「はい！」

「よし！　では、最初の隊形！」
「はい！」
陽乃たちは張り切って最初の隊形の作る。陽乃の位置は、初っ端からど真ん中だ。クラスメイトがいないかどうか、目をキョロキョロさせて探してみる。
（あ、菜緒ちゃんだ）
クラスメイトの矢崎　菜緒がいた。菜緒も陽乃に気づいたようで
「陽ちゃーん！」と声を掛けてくれた。その隣には、同じくクラスメイトの森本　涼平もいる。彼も陽乃に気づいてヒラヒラと手を振った。陽乃もニコッと笑って返す。
（お、矢崎とリョ～やん）
翔も二人に気づいたようで、小さく手を振った。菜緒は大きく手を振り返してきたが、涼平は舌を出してきた。
（ムカツく！　後で覚えてろ！）
翔は口をパクパクさせて涼平に怒る素振りを見せた。
「見ろよ、佐野のヤツ怒ってる」
「森本が悪いんだからね。後で絶対叩きにくるよ」
「まぁまぁ。普段おっちょこちょいな朝倉と佐野がどんなカッコいいとこ見せてくれるか、期待しとこうぜ」
「まぁ、それは楽しみね」
二人は真剣な表情をして楽器を構える。目の前には翔たち以上に緊張した面持ちの健之佑が立っていた。
健之佑の脳裏には、クラスメイトで親友の志賀　慧太の声が蘇る。
（お前は怖い顔なんて似合わないから、笑顔でな）
「……ヨシ！」
健之佑は生徒たちのほうを見た。
「はじめまして！　俺たちは、吹奏楽部です！　どんな活動をしているかというと、学内外での演奏会が中心となります。今日は、吹奏楽がどんなのかを皆さんに知っていただくため、動きながら演奏をするマーチングというのをご覧いただきます！　５分程度ですが、

お付き合いください！」
　ワァァァという声と拍手が響く。健之佑は一度、全員に目配せした。
（いきます！）
　パンッ！と乾いた音がして健之佑の手が上がった。同時に全員がザッと楽器を構える。
「おぉ！」
　その揃い具合に涼平が声を上げた。
「ワン、トゥー、スリー、フォー！」
　いよいよ学内での生徒向けの初演奏が始まった。

第１５９話　お披露目演奏会

緩やかな前奏は木管楽器とホルンが中心になって奏でられる。ここはハーモニーが欠かせない場所だ。マーチングは動きがあるので音程が乱れるようになるなどと誤解をされているが、決してそんなことはない。練習次第では安定した音を出せるようになるものだ。ゆっくりとトランペットを中心とした円が広がっていく。初めの隊形はそのように組まれている。

バリサクを抱えた翔は、まだ少し重そうに楽器を抱えているのがめぐみにはわかった。

「まだちょっと辛そうね」

「でも佐野なら平気だよ」

岳彦が笑って答えた。安和も「そうよ。佐野くんだもん」と返す。ハーモニーが綺麗に響いてすぐ、健之佑がすぐに「ワン、トゥ、スリ、フォ！」とテンポを上げる合図を出した。同時にバッと隊列が分かれて、２列になった。同時に置くにいたパーカッションが前へ出る。管楽器隊は座る姿勢を取った。

優のバスドラムと美里のスネアが響く。洋之のタムタムソロが始まった。少しまだミスはあるが、ずいぶん安定してきている。美里がスネアを一度大きく叩いてから、メロディが始まった。アルトサックス、クラリネット、テナーサックスが中心のメロディだ。座っていた楽器隊は立ち上がり、リアマーチで隊列を交差させる。やがて、フルートやエスクラリネットが上昇音系を吹き始めた。ホルンが加わり、一気に音楽が加熱していく。洋之のタムタムが加わり、誰もが知っているメロディに差し掛かった。

同時に全員で前を向いてベルアップをする。

「おぉ！　すげぇ！」

最前列で見ていた相田　雄平と野球部のメンバーが声を上げた。

一度ステップを止めて、繰り返しのところで隊列が４グループに分

かれる。複雑なステップに見えるが、実はスキップを少し応用させただけのものだ。それを終えるとすぐに元のステップへ戻る。この間、恵梨が小物楽器でラテン系の雰囲気を醸し出すためにいろんなものを奏でている。しおりは特に楽器を指定しなかったので、恵梨の気分次第で毎回音色が変わるというおもしろさがあった。

ドン！と優のベードラが響いて全員の動きがいったん止まる。その後、あずさのシンバルがサスペンド代わりになって鳴り響き、トロンボーンとトランペットが最前列に出てきた。全員で合計１０列の列になって前へ進む。楽器のベルの高さが統一されていてこそ、綺麗に見える瞬間だ。

「へぇ～、ここまで綺麗になるもんなんだぁ」

彩が感動の声を上げた。同じメロディの繰り返し部分では再び隊列が崩れ、陽乃を中心に正方形の形になる。その正方形に入らなかったのはサックス、拓真、駿のみ。

陽乃の音色が体育館中に響き渡る。既に背中や額は汗でびしょぬれだが、陽乃も翔も全然そんなことは気にならなかった。やがて、周りから洋之のタムタムと美里のスネアが聞こえてきた。もうすぐソロも終わりだ。

高い音を吹ききって、陽乃は額で挨拶のポーズを取った。

「ひなのカッコいいー！」

菜緒の声が響いた。陽乃は菜緒をチラッと見た。彼女もそれに気づいたようだ。再びメロディの再現部。ここでは楽器を揺らしながら星型になる。ここが一番難しい。慎也と春樹が一番心配していた交差部分だ。

（春やん！）

慎也がパッと楽器を上げた。小柄な体を活かして春樹がサッと楽器を低くし、交差する。

（やったね！）

春樹がすれ違いざまにそういう目をした。慎也もニコッと笑う。再び優がドン！と合図を鳴らし、星型のまま今度は後退する。洋之

の合図と同時に星が分かれて、隊列の左から由美子と沙希が出てきた。右からはさゆりと麻綾が出てくる。沙希のソロのときに彼女たちはソリを吹いているのだ。

「大谷じゃん、雄平」

「シッ！　静かに！」

雄平は友達の声を遮って沙希のソロに神経を集中させた。

軽やかでかつ響きのある音色が体育館に響き渡った。後ろで聞こえるのはやわらかい音色。女子によるソロとソリが集まると、ここまで繊細になるのかとしおりは改めて鳥肌を立てた。沙希は生徒全員に向かって自分の音色を聴かせ続ける。

（さすがサキティ……。あたしも負けてらんないね）

やがて、由美子のソロに差し掛かった。ここで周りの音が一気に減少するため、本当に由美子の音色のみが響き渡るのだ。

「うわっ……ちょっと、宮部さんってあんなに音大きかったっけ？」

安和が驚きの声を上げた。

「ううん、あたしが聴いたときは……もっと不安定だったけど」

めぐみも呆気に取られている。一番驚いているのは、恭一だった。

「宮部の音……大きくなったなぁ」

隣にいたしおりもうなずくしかなかった。しおりもきっと予想外だったのだろう。しかし、沙希にしてみれば驚きでも何でもなかった。由美子は合奏になるとなぜか萎縮して音が小さくなっていた。

（いいよ、由美子。その調子）

由美子の目の前には、たくさんの生徒がいる。今までなら緊張という言葉しか浮かばなかった。しかし、今は違う、

（あたしの音を、聴いてください）

そう思えたのは、本当に初めてだった。

「ほぉ～……あの宮部が」

E組の担任である深山（みやま）　和宏（かずひろ）が驚きの声を上げていた。クラスでもおとなしく、あまり目立たないだけに、驚きも喜びも大きい。もちろん、それは由美子がクラスで猫をかぶっているだけなのだが。

やがて隊列が元に戻り、全員で前へ進む。打楽器と管楽器全員でユニゾンになって、曲は一気に終わった。
「すごーい！」
菜緒が真っ先に拍手を始めた。
「ねぇ、森本！　スゴくない！？」
「あ、あぁ……吹奏楽ってクラシックばっかのダルそうなヤツかと思ってた……」
「これだから男は……。あのねぇ、クラシックも吹奏楽もジャズも、奥が深いんだよ！」
「うるせぇな！　お前に何がわかるんだよ！？」
陽乃は汗を拭いながら「またやってる」と思っていた。翔と目が合う。
（あいつら、またやってる）
目がそう言っていた。陽乃が笑って「毎回だよね」と答えた。
「由美ちゃん」
沙希が小さい声で呼びかける。
「良かったよ」
ニコッと笑う沙希。由美子も満足感でいっぱいだ。
「ありがと！」
「春やん」
慎也が春樹の肩を軽く叩いた。
「ん？」
「明日も、いまみたいに完璧に行こうぜ」
「うん！」
春樹のキラースマイルが炸裂した。これはモテるわな、と慎也は思わず笑ってしまった。こうして、校内お披露目演奏会は大成功で終わりを告げた。

第１６０話　思いのまま

とうとうマーチングの本番がやってきた。朝から基礎練習をし、ロングトーンもこなした七海高校吹奏楽部の部員たちは落ち着かない様子で昼食を摂っている。出番は午後３時ちょうどから。あまり動きすぎて体力を消耗しないよう、午後からは観覧席に座って他の学校を見ることになっている。

「緊張するね」

陽乃が彩香に言う。実は彩香も勇もマーチングは未経験だったので、かなり不安そうにしているのだ。

「そうですね～……。舞台で吹くのと違って、失敗したらバレバレですもんね」

彩香は不安で仕方がないようだ。勇もさっきからずっと指を確認している。

「どしたの？」

「まだ暗譜しきれてないんです。かなりヤバいですよね、俺……」

「大丈夫だって！」

陽乃はバシン！と勇の背中を叩いた。

「なんでそう思えるんですか？」

「だって、トランペット３人もいるんだよ！　一丸となれば平気！」

「……でも、失敗したら目立ちますし」

「なんやなんや、暗いなぁ！」

翔がバシーン！と勇の頭をはたいた。彩香がケラケラと笑う。

「そんな暗い顔しとったら、暗い演奏しかできへんわ。お化けみたいな顔しとらんと、明る～い顔しとこうや」

「失敗してもですか？」

「アハ！　失敗しちゃった～みたいなノリでええんちゃう？」

「先輩、その顔キモいですよ」

彩香が冷静に突っ込む。翔はその言葉がかなりショックだったよ

うだ。
「え!?　ウソ!」
「ホントですよ〜。あーあ、本番前にやる気そがれちゃった」
「ゴメンって久野さーん」
ワイワイと騒ぐトランペットと翔を見て、春樹が釣られて笑った。
「あのメンバーはいっつも元気だね」
「ホントにな〜。でもまぁ、今日のバスパートはわりと元気じゃね?」
拓真がバスパート（チューバ、ユーフォ、弦バス）を見渡した。
「そうですね〜。いつもテンパッてる加藤も今日は冷静ですし」
亮平がククッと笑って愛実を見た。愛実は真っ赤になって反論する。
「あたしはいつだって冷静だよ!　失礼しちゃう」
「ハイハイ。それより拓先輩、今日は三河先輩来られるんですか?」
「ううん。それが無理らしいんだ」
「えー?　なんで?」
春樹がブゥッと頬を膨らませた。
「しょうがないだろ、今日は先輩、入試なんだから」
「えっ!?　そうなの?」
「なんだよ春やん。同じパートの先輩の入試日くらい知っとけって」
「え?　メグもみーやんも知ってるわけ?」
「はい」
亮平はサラリと返した。
「え?　やだ、先輩知らなかったんですか?」
愛実に至ってはそんなことも知らないのか、という表情をしている。
「あーあ!　練習中にパートの談話に参加しないからそういうことになるんだ」
拓真がニヒヒ、と笑った。春樹はかなり落ち込んでいるようだ。
「これから呼んでやるから、きちんと参加しろよ!」

「はぁ～い」
　一方のトロンボーンは慎也以外は揃っていた。つまり、亜紀と徹だけなのだ。美里がキョロキョロとしているのは、慎也を探しているからだろう。
「ねぇ、富士原くん。慎也知らない？」
「慎ちゃん先輩ッスか？　さっき、ケータイで電話しながら慌てて外へ出て行きましたよ？」
「え？　外に？」
「はい。誰かと待ち合わせしてるっぽかったんですけどね」
「そう。ありがと～」
　美里は引き続き、慎也を探す。誰かと待ち合わせなんていう話は聞いていなかった。家族となら、事前に会場を知らせてあるだろうから問題ないはずだ。なら、いったい誰とだろうか。美里に内緒にするくらいだから、ひょっとすると会わせたくない人だろうか。そんな不毛な想像ばかりが頭を巡る。
「なんかまた変なこと考えてるでしょ？」
「わぁ！？」
　声を掛けてきたのは絵美だった。
「その様子だと……川崎くんだね？」
「ウッ……バレバレ？」
「顔に出てる」
　絵美がフフッと笑う。美里は真っ赤になって「エミリンだって、春やんの話してるときとか探してるとき、顔に出てるよ」と反論した。
「それはお互い様だね！　いいこと教えてあげよっか？」
「なに！？」
「川崎くん、Ｄの１から出て行ったよ」
「あ……ありがとー！　エミリン大好き！」
「ちょっと暑苦しいから！　ほら、早く行きなよ」
「うん！　ありがとねー！」

その頃、慎也は携帯電話で相手の番号に発信していた。
「ただいまお掛けになった番号は電源が入っていないか、電波の届かないところに……」
さっきからこの応答ばかり。きっと初めての場所だから、間違っているに違いない。待ち合わせの相手がちっとも来ないのだ。
「おっかしいなぁ……。そのうち誰かと会っちゃうだろ。内緒なのに」
「オース。川崎くん、誰探してるの？」
その声に振り向くと、修平、翔平、優衣の3人がいた。今日は私服だ。ちなみに、風見台高校はマーチングには出場していない。
「あ！　久しぶり！　いや、実は友達がマーチング見に来ることになってるんだけど……。全然姿が見当たらなくって」
「電話かけた？」
優衣が聞く。慎也は「さっきから通じなくて……」と困惑した様子だ。
「なぁ、それって待ち合わせがDの1だったりする？」
翔平が知っているはずのないことを聞いてきたので驚いたが、間違いない。
「あ、そうです！」
「じゃあさっきの子って、ひょっとしてそうだった？」
「どんな子でしたか!?」
「男の子だよ。ただ、彼、DかBか忘れちゃったって言ったもんだから、その聞かれた場所から近かったBのほう教えちゃって……」
「あ～……やっぱ電話で伝えたのがマズったかなぁ」
慎也はもう一度電話を掛けた。
その頃、Bの入口付近では雪子と順平がお茶を買いに来ていた。
「ま、待って右川くーん！」
背の低い雪子は人混みに紛れてすぐに順平を見失ってしまう。
「せんぱーい！　こっちです、こっち！」
雪子は必死に人混みをかいくぐって、ようやく順平の手を握った。

「ふぃ〜！　ゴメンね、ついつい手を握っちゃって……あれ？」
「あれ？」
見上げると、順平ではない。しかし、見覚えのある顔。彼は――。
「若草くん！？」
「あ！　永井さん！」
なんと、直幸だった。
「どうして！？」
「いやぁ、慎也にマーチング見に来ない？って誘われてはるばる来ちゃった」
「そうなんだ！　ねぇ、右川くーん！」
順平が雪子の好きなオレンジジュース片手に帰ってきた。
「わ！　若草さん！　お久しぶりです！」
「見に来ちゃった。みんな、どこにいる？」
「行きましょ！　Dの2あたりにいるんです」
「こっちこっち！」
雪子と順平は直幸の手を引いて、七海高校の部員たちがいる場所へ連れて行った。
「みんなー！」
諦めた様子の慎也、不機嫌な美里の顔がすぐに見えたが、その顔が一変した。
「あ！」
「慎也！」
「若草くん！」
おぉ〜！と部員から声が上がる。
「久しぶり！」
陽乃が嬉しそうに手を振る。翔もニッと笑って手を振った。
「見に来てくれてんな！　知らんかったから、ビビッたわ」
「あれ？　慎也が伝えておくねって言ったはずだけど」
2年生全員が慎也を見つめた。慎也は慌てて「いや！　サプライズにしたほうがテンション上がると思ってさぁ」と弁解を始めた。

「まぁ、嬉しいのは嬉しいけどね。あたしは焦って損したわ、一人で」
美里がプリプリした様子でプイッと慎也から顔を背けた。
「ゴメンって！　な？　後でジュースおごるから」
「しょーがないわねぇ。とりあえず、ふるふるぶどう見つけてきてね」
「げっ！？　あんな需要の低いヤツ！？」
「しょーがないでしょ！　好きなモンは好きなの！」
ドッと笑い声が起きた。直幸はやっぱり、このメンバーでいると落ち着くな、と感じていた。
「はーい！　盛り上がってるけど本番はもうすぐよ。集合！」
しおりがパンパンと手を叩いて集合をかけた。部員たちはすぐにしおりの周りに集まる。
「え～……」
しおりの言葉がどう続くのか、部員たちは少し緊張しながら待っている。直幸まで釣られて聞き入ってしまった。
「思いのまま！」
突然大声を出すので、みゆきと優輝が同時にビクッと体を震わせた。
「思いのまま、自分たちがやってきた練習を信じて、今日は頑張ってください！　私からは、以上です！」
「はい！」
部員たちはいよいよ本番の会場へ向かって歩き出した。
「みんな！　頑張れ！」
直幸、優衣、翔平、修平が手を振って部員を見送る。翔が全員に手を振って嬉しそうに笑った。
そして入口で待つこと１０分。アナウンスが掛かる。
「続きましてプログラム１８番。七海高等学校吹奏楽部です」
春樹と慎也の顔が少し強ばっている。それを見た誠が声を掛けた。
「練習でうまくいったでしょ？　大丈夫ッス」

「ありがとね」
春樹がニコッと笑う。
「サンキュ」
慎也もそれで自信を少し取り戻したようだった。そして、部員たちは順番に会場へと向かっていった。

第１６１話　３６０度

本番の舞台とはいえ、体育館のような場所だ。マーチングは広いスペースが必要になるので、こうした体育館のような場所で行われることがほとんどである。そして、観客席は会場を囲むように３６０度設置されている。

（うわ……背中も見られてる？）

陽乃は気が抜けないということを改めて実感した。どうやら審査員席は陽乃がソロを吹く正面にあるようだ。けれども、その位置もベルを普通に前へ向けただけでは音が飛ばなさそうな位置にある。

（緊張する……）

手が震える。今度は演奏だけでなく、動きも確実に押さえなければならない。隊列が乱れたりしてはいけないのだ。

（どうしよう……手が震えて……）

ガチガチと手が震える。音が震えるかもしれない。緊張は高まるばかり。しかし、早く定位置につかなければと思うあまり、焦りばかりが募る。

「キャッ！」

陽乃は足元をよく見ていなかったので、つまずいて思わず悲鳴を上げてしまった。もう部員たちのほとんどがスタート位置についてしまったので、もう動いている時間もないといった様子だ。全員が心配そうに見守るが、手助けできない。翔も、バリトンサックスを吹いているので陽乃を助けたりすることは難しい状態だ。

（早く……早く立たなきゃ）

しかし、足も震えて立てない。腰が抜けたような状態になっている。

「あの子、何やってるの？」

由利が落ち着かない様子で立ち上がろうとする。

「よしなさい、母さん。他の方に迷惑だろう」

「でも、ウチの子があんなになって放っておける親なんていないでしょう？」
「それはそうだが、だからといって私たちが手助けするわけにもいかないだろう」
夏樹は黙って手を合わせて状況を見守っているだけだ。目の前の光景が、自分の姉がやっていることとは思えないほど違和感がある。そんな夏樹の耳に、聞き慣れた名前が聞こえた。
「陽乃、大丈夫なの？」
パッとそちらを振り向くと、陽乃の中学時代の友人、多部未華乃と志田未咲がいた。未咲はオロオロとしているようで、手にハンカチを握り締めている。
「大丈夫よ。陽乃、土壇場でスゴい力発揮するから」
未華乃はサラリと言ってみせたが、やはり手にハンカチを握っているのが夏樹にははっきり見えた。
一方の由利にも、娘の名前が聞こえていた。
「陽乃ちゃん……」
由利は初めて見る子だったが、おそらく吹奏楽を通じてできた友人だろう。男子生徒が彼女の名前を呼んだ。
「心配すんなって、優衣。朝倉さんなら大丈夫だから。ねぇ、ショーさん」
「あぁ。彼女ならきっと大丈夫だから」
しかし、陽乃が立ち上がる様子がないまま、３０秒ほど時間が過ぎた。
「あぁ……もう我慢できない！」
立ち上がったのは未咲だった。
「ひぃなのー！　何してんのー！？　頑張りなよぉ！」
「ちょ、ちょっと！　未咲、よしなよ」
未華乃が慌てて止めようとするが、未咲はもう止まらない。
「緊張してるのは陽乃だけじゃないのぉ！　しっかり頑張って、アンタが背中向けてるあたしたちにも、アンタの音、聴かせてよ！」

同時に、未咲の少し左にいる少女が立ち上がった。
「陽乃ちゃーん！　聞こえる!?　私！　濱口！」
陽乃の耳に、未咲に次いで優衣の声がはっきりと聞こえた。しかし、二人ともどこにいるのかはわからない。
「どうせこれだけ人がいたら、一人ずつの顔なんてわかんないんだし、思い切り吹いていいよー！」
翔平と修平が慌てて優衣を座らせようとするが、既に全部言い終えた後だった。
「姉ちゃん！　立って！」
間違いなく、それは夏樹の声だった。
「朝倉さん！　聞こえる!?」
安和の声だった。どこにいるかはわからない。しかし、聞き間違えるはずなどなかった。
「あたしの声聞こえたなら、ペットの音で思い切り吹き返して！」
「朝倉さん！　立とうよ！」
直幸の声が安和の後に続いた。
（期待を……裏切りたくない）
夏樹の顔。未華乃と未咲。優衣、修平、翔平。安和。直幸。
すぐ近くにいる健之佑が呟いた。
「先輩！　ファイトです！」
陽乃は小さくうなずいた。翔も、きっと後ろで立て、という目をしているに違いない。気づけば、手の震えも足の震えも止まっていた。
陽乃が定位置につくと、演奏前にも関わらず拍手が沸いた。そして、それが静まってから誠と健之佑が目を合わせた。
（ＯＫ？）
健之佑の目に、誠が小さくうなずいたのが見えた。健之佑はそれを確認すると審査員席のあるほうを振り向き、お辞儀をした。もう一度、拍手が沸く。
パンッ！

乾いた音が響く。全員がサッと楽器を構えた。
「ワン、トゥ、スリ、フォ！」
緩やかな前奏。前の団体の始まりがインパクトのあるものだっただけに、その差異は際立っていた。トランペットを中心に広がる円。綺麗に大きくなる円は、３６０度取り囲んでいる客席のどの位置からでも、綺麗に見えていた。
「おい、母さん。何人いるんだ、この吹奏楽部は」
祥夫が円を見ながら小さい声で聞いた。
「たしか３２人だったかしら。よく覚えてないわ」
「ほ～……。大人数でここまで揃えることができるんだな」
そしてテンポが変わるところで、再び健之佑の声が響き渡る。
「ワン、トゥ、スリ、フォ！」
同時にバッと隊列が分かれて、２列になった。同時に置くにいたパーカッションが前へ出る。
「わっ！　綺麗～。へぇ～、人でこんなにメリハリつけられるもんなんだ」
未咲がパチパチと手を叩く。
「ちょっと、まだ演奏中」
未華乃が慌てて止めた。未咲は恥ずかしそうに俯くしかなかった。
パーカッションの隊列は、健之佑から向かって右より亮平のシロフォン、恵梨の小物楽器、洋之のタムタム、優のバスドラム、美里のスネア、あずさのシンバルだ。洋之のソロが、最もしおりの心配しているところだった。
（やっぱり……まだ走るわね）
走るとは、テンポが指揮者よりも速くなってしまうことをいう。周りの楽器が少ないことや、テンポが速いこと、心理的に奏者が焦っているときなどに起きるが、原因は様々だ。特に、クラリネットやフルートの細かい旋律、打楽器やパーカッションの速いマーチなどでよく見られる傾向ともいえる。
叩くのに必死になっていて、珍しく洋之が周りを見れない状況に

なっていた。
（マズいわ……）
真っ先に気づいたのは美里だった。そして微妙にリムショット（※1）を加えた。これはしおりが万が一、洋之のソロでテンポが上がりだしたときに、健之佑を見てテンポを訂正するよう洋之に促して、と指示されていたことだった。
突然加わった音に、部員たちは一瞬違和感を感じた。しかし、すぐにテンポが速くなっていることにほとんどか気づき、特に気にする素振りを見せなかった。
「……！」
洋之もそれでようやく自分が走っていることに気づいた。美里の入り方が巧妙だったので、違和感は聴いている側には伝わっていないようだった。
そしてベルアップの場所がやってきた。今まで翔や拓真、駿には少々辛いものがあったこのベルアップ。重い楽器は自然とベルの位置が下がったりしてしまう。拓真のスーザは動きを大げさにしないとわかりにくいため、3人の楽器はしおりにベルアップでは何度も怒られてきたものだった。
（えーい！　ヤケクソだ！）
拓真は首がおかしくなりそうなくらい、ベルを上げた。
「うわ！　見ろよ、拓あんのヤツ。あれ、絶対しんどいはずだぜ」
翔平が声を上げた。
「三河先輩が見たら、ビックリするくらいですね」
修平もその高さには驚いていた。そして、いよいよ陽乃のソロだ。
（大丈夫。自由曲のときみたいに、ホントに素直に吹けばいいんだ）
パァッと透き通った音が、体育館内に響き渡った。
「わぁ～……」
夏樹が思わず声を漏らした。それは由利も祥夫も同じ気分だった。
「あの子……いつのまにあんな音吹くようになったんだか」
「ホントにな……」

それっきり、由利も祥夫も声が出なくなってしまった。
「吹奏楽をやらせて……正解だったねぇ」
知恵子が感慨深く、呟いた。そのとき、客席の合間を慌しく駆け込んでくる一家がいた。
「ちょっと！　始まってるわ、急いで！」
「なに!?　おい、チイ、洋輔、早くしなさい！」
「あ……大谷さんじゃない」
由利の声に智佐子が振り向いた。
「あらー！　朝倉さん」
「今日お仕事お休み?」
「そうなのよ。それなのに、ウチのお父さんったら道を間違えるもんだから、ギリギリになっちゃったわ」
智佐子はバシバシと俊次の背中を叩いた。
「智佐子。静かになさい。それより、沙希が真ん中に出てきたぞ?」
「あら！　これは見ないと!」
その頃、沙希は緊張で頭が真っ白になっていた。
（あれ……?　さ、最初の音ってなんだっけ）
由美子に聞くことなんて、まさかできない。適当な音を吹いても、乱れては意味がない。どうしよう、という単語が頭を巡っていたときだった。
「あらー！　朝倉さん!」
（あ……）
母の声だった。これだけ音が鳴っていても聞こえる大きな声は、間違いなく智佐子の声だろう。
（お母さんもお父さんもお休みだし、聴きに行くからね）
あれは、ウソではなかった。そう思った瞬間、急に緊張が吹き飛んだ。
「うわぁ……」
妹の稚衣が嬉しそうな声を上げる。沙希の煌(きら)びやかな音は、間違いなく大谷家全員に響いていた。

「綺麗……ね」
智佐子が目を閉じて娘の奏でる音に耳をそばだてる。
「ちょっと荒っぽいけどな」
「やだ、あの子怒るわよ？」
やがて、由美子の音色が聴こえてきた。
「この子も……沙希とよく似た音を吹くわね」
「そういえば、仲の良い子がフルートにいるっていってたなぁ」
「あら、あなたが沙希と話なんてするのね」
「失礼なヤツだな。私も娘と話ぐらいするだろう」
「あら、ごめんなさいね」
（お父さん、お母さん、聴こえてるかなぁ）
由美子は初めて演奏会に来る両親のことを思っていた。自分は一人娘だから、いつもワガママを聴いてもらえる。ただ、吹奏楽をしたいと言ったときは母の猛反発を喰らった。今まで、習い事など長続きしたことがない由美子だったので、クラブ活動などとんでもないと言われたのだ。それでも、今回ばかりは本気だ。それを証明するために、今日の本番に二人を招待した。
（これで……あたしのこと、少しはわかってほしいな）
やがて、曲はフィナーレを迎えた。一瞬の隙も与えず、拍手が沸く。全員汗でビショ濡れだ。でも、気持ちいい汗だった。
カン！と美里のリムショットが響く。リズムに合わせて部員たちは退場していった。

第１６１話　３６０度（後書き）

（※１）リムショット：太鼓類の叩き方の一種。スネアであればヘッドというドラムの部分、それとリムというフチの部分を同時に叩くオープンリムショットと、リムのみを叩くクローズリムショットというものがあります。

第162話　It's 賞 Time!

本番を終えてすぐに写真撮影をした後、着替えを済ませて部員たちは観客席に戻った。その後の団体が演奏するたびに、自分たちよりずっとレベルが上であることを改めて感じさせられる。

「……。」

翔はそれを真剣な眼差しで見つめる。陽乃はあまりの集中力に少し声をかけることすらはばかられた。全団体の演奏が終わったのは、午後5時半過ぎのこと。そこでようやく翔が「フーッ」とため息を漏らして椅子にもたれた。

「あのさ……佐野」

「ん？」

「何をそんなに真剣に見てたの？」

「あぁ……まぁちょっといろいろ考えながらな」

「そっか」

何を考えていたかと聞きたいところだが、言ってくれそうにもないので聞くことができなかった。翔は素っ気ない答え方をしたとすぐに気づいた。いるのが当たり前だから、言わなくてもわかってくれるだろう。そんな風に思っていることも多々あったが、今はもう違う。

「なぁ、朝倉は他の団体見て、もっとあんなふうになりたい！とかって思う？」

「え？　あたし？」

「うん」

陽乃はしばらく考えた。今までの演奏を聴けば、正直そう思うところだ。

「まぁね。そう思わなくもないかな」

「そうか……」

翔はフゥッとまたため息を漏らした。

「でもさ、人と比べてたっていつまでたっても上手くならないんじゃない？」
「え？」
陽乃の一言に、翔の目の色が変わった。
「やっぱりさ、努力するのは自分じゃない。どれだけ人の真似をして上手くなったって、あたしは嬉しくないな。やっぱり、自分の音は自分が練習して作らなきゃ」
「ホンマに！？　そう思う？」
珍しく翔が食いついてくる。陽乃は少し戸惑いながらも「う、うん」と答えた。
「そっかー！　良かった。オレと同じ考え方の人おって」
「そうなんだ」
陽乃は会話の意味がいまひとつ読み取れていなかった。翔は隠すことなく話し始める。
「いやさぁ、昔ほら、オレ中学のときに吹奏楽……途中で辞めてもたやん？」
「あ～……そういえば、佐野くんとそんな話ずっと前にしたね。ケンカも」
「それは言うなよ」
翔が苦笑いする。
「あの時はさぁ、言うてもまだまだオレも楽器へったくそやってんやん。でも、自分の音は自分で作りたいって思ってたからさ。でも、修平のヤツはショーさんの音参考にせんと、サックスとして音がまとまれへんって言うてきよって」
（なるほど……佐野くんなら言いそう）
クスッと陽乃は笑った。
「でも、オレは納得いけへんかって、結局サックスパートで大ゲンカ。いつまでたっても溝が埋まらへんなってしもたから、なんとなくおりづらくなって……ほんで……その……」
「もういいよ」

陽乃が遮った。
「え？」
「何もさ、辛いこと話す必要ないじゃん？　それは、佐野が反省したならいいと思うな、あたしは」
「ん……」
「ね？」
「そうやな……うん、ありがとう」
同時に、アナウンスが入った。
「ただいまより、第１７回神奈川県マーチングコンテストの結果発表を行います」
会場がざわめく。各学校の代表者の中に、翔は健之佑の姿を見つけた。
「おっ、ケンちゃん発見」
「背が高いから目立つね～」
ふと陽乃は視線を感じるので辺りを見渡した。
「あ……」
雪子と目が合った。陽乃はニコッと笑うが、雪子はすぐに目を逸らしてしまった。
「どうしたんだろ」
陽乃は違和感を覚えたが、すぐに「始まるで！」という翔の声に会場へと視線を戻した。プログラム１番から順々に発表が進む。部員たちは夏のコンクールの経験を経て、初出場だから上の大会へ進むのは難しいと理解はしていた。それでも、期待は捨てきれずにいる。
「プログラム１８番」
陽乃の心臓が高鳴る。あまり期待するなという自分と、希望を否定するなという自分がいて、心の中で葛藤する。
「七海市立七海高等学校吹奏楽部」
由美子と沙希が目を閉じて祈るような姿勢を取っている。

「銀賞」

「……あ～……」

陽乃は思わずため息をついてしまった。しかし、他の部員たちも覚悟はできていたようで、それほど落胆した様子は見られない。全員が顔を見合わせ、拍手した。

「けーんのすけー！」

突然、健之佑が賞状を受け取るときに翔が身を乗り出して叫んだ。ドッと笑い声が起こる。

「ちょっとどうしたの！？」

陽乃が慌てて立ち上がって翔を押さえ込もうとした。

「えぇやんけ！　健闘を称えるんや！」

ニッと翔が笑った。陽乃はヤレヤレ、と言った様子で笑った。

閉会式終了後、部員たちの元へ健之佑が帰ってきた。部員は拍手で彼を迎える。健之佑は嬉しそうに賞状を広げた。そして、トロフィーを抱え上げた。なんと、あの後七海高校は支部奨励賞という銀賞で最も良い団体に与えられる賞を受賞したのだ。

しおりも嬉しそうに前へやってきた。

「はい！　今日は皆さんお疲れ様！」

「ありがとうございましたー！」

同時に保護者たちから拍手が沸く。

「皆さんの頑張りが評価されて、支部奨励賞をいただけました！　ハイ、拍手ー！」

しおりの声に合わせて再び拍手が沸く。

「結果は銀賞でしたけど、まだまだこれからステップアップが可能という証拠でもあると思います！　来年はこのメンバーにまた新たな部員が加わって、さらにパワーアップした七海高校のマーチングをお届けしたいなと個人的に考えているんですが、皆さんはいかがですか！？」

しおりの問いに真っ先に答えたのは、参加の話し合いで反対して

いた梨子だった。
「お前、反対してたじゃん！」
優輝が笑いながら指摘した。梨子は顔を真っ赤にしながらも「だって、あたしマーチングにハマッたんだもん！」と大声で言う。しおりが嬉しそうな顔をした。
「嬉しいこと言ってくれますね！　よし、来年もまたいいマーチングできるよう、練習を頑張ってほしいと思いますが、皆さんいかがですか！？」
全員が「ハイッ！」と声を上げた。
「よーし！　では、本日はここで解散ってことでいいですか？　東先生」
恭一も笑顔で前へ立つ。
「みんなお疲れ様。それから、保護者の皆様もありがとうございました。初めてのマーチングでしたが、予想以上の結果を残せて、これを機に今後もますます意欲的に活動に取り組んでくれることを期待します」
また拍手が沸く。恭一がお辞儀をして、翔をすぐに呼んだ。
「よし、佐野。最後の挨拶！」
「はい！　起立！」
翔の号令に合わせて全員が立ち上がる。
「ありがとうございました！」
「ありがとうございましたー！」

その後、部員たちは両親と帰ったり友人と話し込んだりしていた。
相田　雄平と沙希が親しげに話していたり、慎也と直幸、美里、春樹、絵美など2年生同士で親しげにしていたり。岳彦は入試終了後すぐに駆けつけたらしく、亮平と拓真、愛実が入試の感想をいろいろと聞いているようだった。
「なぁ……」
「なに？」

翔は由美子を呼ぶ。
「朝倉は？」
「陽ちゃん？　さっき、雪子と自販機のほうへ行くの、見たけど」
「そっか！　ありがとぉ」
「いいえ～」
由美子は翔が走っていってから、すぐに違和感を覚えた。
「なんでまた苗字で呼んでるんだろ」
翔が自販機コーナーへ行くと、すぐに雪子と陽乃の姿を見つけることができた。
「あっ、おったおった。おー……」
「別れたの？」
雪子の声。普段とは様子が違う。翔は足を止めて、状況をうかがった。
「別れてない」
陽乃の寂しそうな声。
「じゃあなんで苗字呼びに変わったの？」
「それは……二人で話し合って、しばらく距離を置くことにしたから」
「何それ……。別れてるのと同じじゃない？」
「違うよ！」
「違わない！」
雪子が珍しく強い口調で言うので、陽乃は圧倒されてしまった。
「私だって……私だってまだ佐野くんのこと好きなの！」
「……。」
翔は驚いて何も言えなかった。
「距離置くとか意味わかんない……。陽ちゃんがそんなだったら、私、佐野くんに自分の想い、伝えるから」
（あっ！）
翔はゴミ箱に足をぶつけてしまい、フタを落としてしまった。ガタン！と音を立てて落ち、すぐに雪子と陽乃が翔のほうを振り向い

た。
「佐野……」
「佐野くん……まさか、今の聞いてた……？」
翔はばつが悪そうに俯きながら「ゴメン……」と返した。すぐに雪子はその場から走り去り、呼び止めることもできないまま、翔は彼女の背中を見送った。
コンテストの余韻が残るざわめきの中、陽乃と翔は呆然とそこに立ち尽くすばかりだった。

第１６３話　想いは率直に（前）

マーチングコンテスト翌日。翔は昨日、陽乃とも雪子とも話をしないまま帰宅するだけだった。陽乃もすぐに「これはあたしと雪ちゃんの問題だから」と明らかに強がりな笑顔を浮かべて、帰ってしまったからだ。

「オレは……どないしたらええんやろ」

ベッドに転がったまま、空を見つめる翔。時間だけが過ぎていく。何度も携帯を開けて雪子と陽乃の番号を交互に表示させては、すぐに閉じる。無意味な行動で時間ばかりが過ぎていった。

突然、ノックが聞こえた。

「はい？」

「俺だよ」

「あぁ……入ってええよ」

「失礼～」

そう言って入ってきたのは、直幸だった。せっかく来たのだから泊まらないか？と翔が呼んだのだ。ちょうど話を聞いてほしかったのもあったので、無理を言って泊まってもらった。

「で？　朝倉さんか永井さんに電話した？」

「ううん……。できへんまま」

「……だよなぁ。俺だってきっとできないよ」

「なぁ……どないしたらええと思う？」

「うーん……」

しばらく沈黙が続く。直幸もどうしていいか、なかなか難しく思っているようだ。

「朝倉は、アイツらの問題やからほっといてって言うんやけど……。オレが発端やねんから、そうはいかへんやろ？」

「そりゃあね。翔も関わってることなんだから」

「でも、オレにはどないしょもない気がすんねん」

再び続く沈黙。
「なぁ」
直幸が口を開いた。
「翔は、朝倉さんをどう思ってるの？」
「え！？」
「距離置いてるんでしょ。距離置いてみて、実際どうだった？」
「オレは……」

「どう思うの？　実際に距離を置いて」
由美子が陽乃に聞いた。陽乃は涙をポロポロこぼしながら、鼻声で言う。ここは七海駅前のハンバーガーショップだ。
「あたしは……佐野のことが大好き」
「佐野なんて無理して呼ばなくていいの」
由美子は陽乃の肩をさすって慰める。
「うん……。あたし、翔のこと、本当に大好き。好きでしょうがないの。距離置こうって言われたとき……ショックだった。でも、翔にあたしが負担をかけすぎたんだって思ったら……ワガママ言えないから」
「うん」
「だから……うんって言ったの」
「そうか。佐野くんの意見を尊重したんだ」
「うん」
「ここで質問」
「なに？」
由美子は質問と言ったにも関わらず、なんと陽乃のハンバーガーを丸ごと持って行って口に含んでしまった。
「キャー！　ちょっとやだ、信じらんない！　それ、あたしのハンバーガー！」
「ほら、それよ」
「え？」

陽乃は動きを止める。それから、自分の声で周りの客の視線が自分に集中しているのに気づき、恥ずかしくなって座りなおした。
「そうやって自分の気持ちに正直になればいいの！　距離置こうとか、どーとかそんなの面倒！」
「……けど」
由美子は突然何も言わず、ボールペンとノートを取り出した。ビリビリとページを破り、それを陽乃に押し付けた。
「ホラ！」
「な、なに？」
「いい？　あたしの言うとおりに書いて」
「何を？」
「いいから！　ほら、早く」
「う、うん……」
陽乃は言われるがまま、字を書き始めた。
「まず、６時１５分」
「うん」
「次、七海市役所横公園」
「うん」
「噴水」
「それから？」
「来てください」
「……。」
陽乃はペンを止めた。
「早く」
「やだ」
「何で？」
「わかってるんだから」
「何が？」
陽乃は一呼吸置いてから、呟いた。
「翔を呼ぶんでしょ」

「……当たり前じゃない」
由美子がそう答えた途端、陽乃は紙を破ろうとしだした。
「ちょっと！　もういい加減にしなよ！？」
「だって、こんなことしたってあたし、どうしたらいいかわかんない！」
「好きなモンは好きなの！　文句ある！？とか言うの！」
「そんなの言えない～！」
「言える！　それよりもっと恥ずかしいこと、アンタ言ったんでしょ！？」
「ウッ……」
陽乃の手が止まった。
「このままじゃ、多分一番苦しいのは佐野くんだよ？」
「え……」
「女子二人の争いに巻き込まれて。あーあ、かわいそうな佐野くん」
由美子のため息交じりの声が、陽乃の頭に繰り返し響く。
「……。」
次の瞬間、陽乃は思い切り紙を破り捨てた。
「ちょ、何すんの！？」
「ゴメン、もう一枚、紙ちょうだい！？」
「え？」
「もっと、ちゃんとした文章書く」
「……ＯＫ」
由美子はノートを取り出し、今度は丁寧に紙をちぎって陽乃に手渡した。

「そっか……」
翔は直幸にすべて吐露した。
「ホンマは好きやねんけど、好きになればなるほど、陽乃がしんどいんちゃうかって……」
「だから距離置こうって？」

「うん……。そしたら、アイツすぐに『わかった』って……。オレの存在って……そんなもんやったんかな。ホンマはな、理由も存在が当たり前になってたからとかちゃうねん。オレはいろいろ言うんやけど、陽乃はあんまりオレに相談とかないねん。いっつも翔、翔でさ。オレが部長やからいろいろ負担抱え込んでるとか、そんなこと思ってるんとちゃうやろか……」

「……翔」

直幸はハンカチを取り出した。

「え？」

「涙」

「あ……」

泣いていることに、翔は気づかなかった。

「じゃあなんで距離置こうなんて言ったんだよ？」

「だって……陽乃がしんどそうやから」

「それ、朝倉さんから直接言われた？」

翔は静かに首を横に振った。

「そんなの、翔の思い込みじゃない？」

「オレの？」

「そう。聞きもしないのに全部自分で決めつけて。それってどうなんだろうな」

「……。」

直幸は翔がテーブルに置いた自分のハンカチをポケットにしまいこんでから、翔の動きをジッと見続けた。

ノックが聞こえる。

「翔」

綾音だった。

「なんや？」

「手紙」

「誰から？」

「見たらわかる」

綾音はそっと手紙を翔に手渡した。
「……！」
翔は時計を見上げる。今は午後５時５５分。
「行けよ」
「え？」
「ほら！　急げって！　あと２０分だろ！？」
直幸は強引に翔の背中を押した。
「な、なんでお前が知ってるんや！？」
「いいから急げって！　ほら、早く！」
「で、でも……」
イライラした綾音が叫んだ。
「兄ちゃんはいっつもそんなんや！」
「兄ちゃん！？」
綾音が翔を兄ちゃんと呼ぶのは５年ぶりくらいだろうか。翔は懐かしくなって笑いそうになった。
「いっつもなんかチンタラしてて、いいチャンス逃すんやから！　ほら、早く……早く！」
綾音も一緒になって翔の背中を押す。
「……わかった！」
翔が走り出した。綾音と直幸は翔の背中を見送った。
「……これで完璧だ！」
「ですね！」
二人は顔を見合わせて笑った。
翔が慌てて自転車を家の外へ出して跨ろうとしたとき、誰かが門の横にいるのに気づいた。
「あ……」
「佐野くん……。話があるの」
それは雪子だった。

第１６４話　想いは率直に（後）

「永井……」
雪子は俯き加減で「あのね……」と何かを言いかけた。しかし、翔はもう答えを出している。
「永井、ゴメンやねんけど……」
雪子は顔を上げようとしない。ここでごまかすことはいくらでもできるだろうけれど、それをしていたのでは意味がないと思い、翔は率直に言った。
「オレ、やっぱり陽乃のことが好きやねん！」
「……。」
雪子はまだ何も言わない。彼女を傷つけるかもしれない。それでも、翔はハッキリと想いを伝えておきたかった。
「いったん距離置こうなんて言うたけど、やっぱりアイツを忘れることはできへん。アイツのおかげで、オレはここまで部活もやってこれたし……それに、もう1回吹奏楽をしようって、続けようって思えてん。アイツの存在……すっごい大きいから、これからも大切にしたいねん」
「……。」
顔を上げようとしない雪子の顔を、翔は強引に上げた。涙がポロポロこぼれている。その表情に翔は一瞬言葉をつぐんだが、すぐに続けた。
「オレもさ……ここまで人に想われたことないから、正直ビックリしてる」
雪子がようやく喋りだした。
「それは……陽ちゃんに？」
「違う」
「じゃあ……私？」
「そうや」

間髪いれず、答えてくれた。雪子の目に涙がブァッと溢れる。
「ウソでも嬉しいな」
「ウソなわけないやろ」
翔はハンカチを取り出して雪子の涙を拭った。
「紳士だね」
「アホ」
翔はクスッと笑った。
「ねぇ……約束の時間、あと15分だよ？」
「え？　なんで知ってるん？」
「さぁ？」
雪子はクスッと笑い返した。
「それは秘密」
「……気になるなぁ」
「とにかくさ、急いだほうがいいよ。私のことはいいから」
「うん……ありがとうな」
「お礼されるようなこと、してないから。ホラ、早く早く」
「うん！　また……部活でな？」
「もちろん」
雪子は精一杯笑った。もう少し。もう少しで翔が見えなくなる。
角を曲がって翔が見えなくなったのを確認してから、雪子はかがんで手で目を覆った。
どうして、あのとき彼に言わなかったんだろう。初めてあの川原で会った日。間違いなく、私は彼に恋をしていた。どうしてもっと早く言わなかったんだろう。いつも自分はこんな風に引っ込み思案で損をするんじゃないか。そんな考えばかりが頭を巡る。
「自分が嫌になりそう……」
雪子はしばらくその場でジッと座って、涙を流し続けるつもりでいた。明日は目が腫れるだろうなぁなどと苦笑いしていたときだった。
「永井」

その声に驚いて顔を上げると、行ったはずの翔が立っていた。
「な、なんで……？」
翔は何も言わず、かがむ。視線の位置が雪子と同じところになる。
「え……」
フワッといい香りが雪子の周りを包み込んだ。そして、やわらかい感触が雪子の頬に伝わった。
「……最後に、お礼」
翔はそう言ってはにかんで、すぐに走り去って行った。
「……。」
雪子はしばらく呆然としていた。よくわからない、一瞬の出来事だったが、想いは伝わったのかもしれない。成就はしなかったが。
「私、頑張るから！」
雪子は走っていく翔の背中に声をぶつけた。翔は曲がり角の直前でピースをして、微笑んでいた。
指定された時間まであと１０分。翔はとにかく走り続けた。元々体育は苦手ではないが、これほど全速力で走るのは本当に久しぶりだ。
「あ！」
信号がタイミング悪く、赤になってしまった。この津上橋交差点はいつも４分近く信号が変わらない。
「クッソ！」
翔は１００メートルほど東にある歩道橋へ向かって走り出した。歩道橋では１段飛ばしで階段を上がる。降りるときも１段飛ばしで降りた。授業に遅刻しそうなときよりも正直言って急いでいた。
「どこやったっけ……」
翔は暗くなり始めた川原を右往左往する。陽乃が待ち合わせに指定したのは、去年の４月に翔がサックスを吹いていた川原。
「確か木があって……そうや、橋の方角に木があったんや。確かオレの左手側……わざわざ歩道橋渡る必要なかったんやんけ！」
翔は急いで端をくぐろうと川原を走り出した。ところが、なんと

橋の補強工事中で下をくぐれなくなっていた。
「なんやねん、もぉ！」
急いでいま来た道を引き返し、歩道橋へ向かう。正直言って体力が限界に近い。しかし、そんなことを言っていられる状況でもない。
「よっしゃ、もうすぐや」
信号が見えてきた。間違いない。あの時吹いていた川原へ行くには、こうした風景を目にした記憶がある。
「よっしゃ、もうちょっとで……うあ――！？」
翔が勢い余って思い切りつまづいた挙句、川原を派手に転げ落ちていった。
「いててて――あー！？」
翔の目の前には大きな木。派手な音を立てて翔は思い切り木に激突した。
「……ホンマに痛い」
顔についた枝や葉を払って周囲を見渡す。
「……おらへんやん」
期待していた姿は見当たらない。しかし、手紙には「思い出の場所で」と書かれていた。翔にとっての思い出の場所は、ここしかない。４月に、陽乃が今の翔と同じように派手に転がり落ちてきた、この場所だけが思い出の場所だ。
翔はかがんで待つことにした。待つぐらい平気だ。何時間でも待とうじゃないか。そんな気持ちでいた。
日が沈む。陽乃の姿はない。けれど、翔と陽乃の思い出の場所はここだ。そう翔は信じている。
「ックシュン！」
走ってきて汗が出た分、シャツもビショビショだ。それが夜になって気温が下がり、冷たくなってきた。
「……ックシュン！」
寒気がする。それでも、陽乃が来てくれると信じて翔は待ち続けた。日は沈み、すっかり暗くなってしまった。

「ここや……なかったんかな」
翔は鼻をすすって寂しそうに呟いた。それからゴロンと寝転がってみた。
「へぇ～意外。七海ってけっこう星が綺麗に見えるんやなぁ」
不意に、周りの喧騒が消えた。
「あ……れ……？」
意識が落ちる。この感覚は何だろうなどと考えているうちに、何も聞こえなくなった。

「ん……」
見覚えのある場所だった。
「ここ、体育館やん」
すると、舞台には真野校長がいた。何か挨拶をしているようだった。しかし、翔には何も聞こえない。
「あ？」
よく見れば、春樹がいる。雪子もいる。それだけでない。拓真、由美子、沙希、美里、絵美、慎也。そして、陽乃。
「なんやろ。なんでオレだけ2階におんねんやろ？」
翔はキョロキョロと辺りを見渡す。舞台の幕に掛かっている看板には「第４０回入学式」の字。
「入学……式？」
突然、今まで音がなかったのに鮮明に音が聞こえた。
ガターン！
驚いてそちらを見ると、陽乃が椅子を派手に倒していた。

――あ、あはは～！　どうも失礼しました～

「あ……」
あの笑顔。あの瞬間、自分はもう陽乃に――恋をしていたんだ。
思い出した。そして、自分がいるはずの場所を見る。

いた。1年半前の、翔だった。嬉しそうに、しかしどこか恥ずかしそうに笑っている。遠く離れているはずの自分の声が、いやに鮮明に聞こえた。

「オレは……」

画像が荒くなる。やがて、白黒になってその映像はフェードアウトしていった。

「ん……」

目を覚ますと、そこは川原だった。街の喧騒。川の流れる音。

「夢か……」

どれくらい寝ていたのかわからない。しかし、夢にしては妙にリアルだった。あの時、1年半前の自分が翔へ言い聞かせた言葉を、口にした。

「オレは……ただ、陽乃が好きなんや」

「それ、本当？」

驚いて振り向くと、右隣に陽乃が寝転がっていた。

「朝……倉……？」

「ゴメンね。すっかり遅くなっちゃった。まぁいろいろあって……」

「……。」

翔の目に涙が溢れた。

「え？　ちょっとやだ、どうした……の」

ガッシリと、しっかり陽乃を抱きしめてくれている。

「佐……野？」

「……やねん」

「え？」

「オレ、陽乃がホンマに好きやねん」

「……。」

「好きで好きでしゃあない。でも、そんなん言うたら陽乃がしんど

いかなとか思うと、もっと好きになってしまう。そんな自分が腹立ってしょうがない」

「……。」

「心にもないこと言うて、傷つけて……」

言い続けようとする翔の口を、陽乃は塞いだ。

「いいじゃん。好きで、嫉妬して、ワガママになって、泣いて」

「え……」

「あたしなんかもっとスゴいよ？　ケンカして、わめいて、笑って、号泣して」

「……プッ」

翔が笑い出した。陽乃も笑う。

「ねぇ……」

「なんや？」

「もう一回、やり直……ううん、楽しい時間、くれない？」

「……。」

「あたしは、翔に楽しい時間、あげたいな」

翔が俯いた。それから、小さくうなずく。

「……よろしく、お願い、します」

「あたしも、お願いします！」

それから二人はもう一度寝転んで空を見上げた。

「あ！」

「流れ星！」

同時に二人は心の中で願いをした。

願いは一つ。

ずっと、一緒に。

第１６５話　苦手なものは苦手

「それじゃ、今日の初見合奏は終わり！　部長！」
「起立！　礼！」
「ありがとうございましたー！」
１０月５日（木）。マーチングが終わってから七海高校吹奏楽部は「七海祭」といういわゆる学園祭に向けての練習に励んでいた。曲目は以下のとおり。

１：王様のレストラン
２：アニメメドレー（君をのせて・鳥の人・帰らざる日々・風のとおり道）
３：ユーロビート・ディズニーメドレー
４：アメリカン・グラフィティー
アンコール：創聖のアクエリオン

今回は日本の曲と海外の曲をそれぞれ用意し、アンコールには去年夜中にアニメでやっていた曲を選んだ。もちろん、全部部員たちで決めたものだ。アニメメドレーとアメリカン・グラフィティーに関してはメドレーなのでソロも多く、吹いている時間が長い。楽譜でも難しいものが多いので、部員たちは毎日合奏が終わっても練習をしている。
「おーい、パーカッション」
恭一が珍しく、パート全員を呼んでいる。
「はい？」
美里がパタパタと恭一のところへ走り寄った。
「田中だけじゃない。１年もだ」
「え？」
優が驚いた顔をした。

「ちょっと部室へ来なさい」
「は、はい……行こう？」
美里が全員を手招きした。恵梨とあずさが不安そうな顔をして美里の後をついていく。洋之と優も顔を見合わせた。
「なんかしたっけ、俺たち」
洋之の問いに優はすぐに首を横へ振った。
「何も。心当たりないもん。ヒロは？」
「俺だってそんなのねぇよ」
「おーい、すまんがちょっと出てくれないか？」
部室にいたはるかや亜紀にそう頼む恭一。どうやら、パーカッションだけにしかしたくない話のようだと美里は推測した。亜紀やはるかが出たのを確認して、恭一は洋之に戸を閉めさせた。
「ま、ちょっと座れ」
全員が椅子に座った恭一の周りに座る。
「ちょっと聞きたいんだけど、ユーロビートはドラムセット、誰がするんだ？」
「はい」
洋之が手を挙げた。
「じゃあ、アメグラ」
「はい」
美里が手を挙げる。
「じゃ、アクエリオン」
「はい」
また美里が手を挙げる。
「じゃ、アニメメドレーのサスペンドシンバルは？」
「はい」
恵梨が手を挙げた。
「アメグラのは？」
「それもあたしです」
「小物楽器は誰だ？」

「アクエリオン以外、俺です」
優が手を挙げた。
「じゃ、乃木は？」
「私は基本的にグロッケンとかをしてます」
「そうか……」
恭一はそれっきり黙りこんで何かを考え始めた。
「あのなぁ、お前ら」
急に真剣な顔をして喋りだした恭一に、パーカスメンバーは顔を引きつらせた。
「まぁ、今のままの編成でもいいよ。ただ、考えてもみろ。田中が引退したらどうする？」
「え？　あたしが？」
美里はそんな先のこと、と笑いそうになったがそれを察知した恭一が続けた。
「そんな先のこと、と思っててもだな。1年半後には田中は卒業するんだ」
「……。」
美里の中に、その言葉がズキッと響いた。当たり前のように5人で毎日練習して、笑い合って、時にはケンカもするこのメンバーといるのは、あと1年半。それどころか、新入生が来れば、間違いなくこの5人の世界というのはなくなってしまうことになる。
「田中がいなくなって、さぁ、ドラムセットは誰がする？」
「俺ですよね」
洋之がハッキリと答えた。
「そうだろうな。じゃあ、冨岡はずっとドラムセット。日高は小物楽器かな。で、乃木はグロッケンやらマリンバ。秦野はシンバルばかり」
「……。」
誰も何も言わない。
「まぁ、俺の話をしてもしょうがないんだろうけど」

恭一は話を続ける。
「俺は初心者で初代って言ったらいいかな、七海高校吹奏楽部に入部したんだ。最初はそれこそタンバリンとか鈴とか、小物楽器ばっかりでつまんないなぁって思ってた。それで、ようやく先輩たちが引退したときにスネアをやらせてもらったんだ。そのときはマーチをやったんだけど、まぁ見事にチューバとズレるんだよな。後打ちしてるホルンやトロンボーンともめちゃくちゃ」
「確かに難しいです。なんで、俺はあまりやりたくない」
優がボソッと呟いた。
「だよな」
恭一がニッと笑う。全員が拍子抜けした。
「でも、先輩がスネアもマリンバもティンパニもベードラも、そう！　タンバリンですらカッコ良く叩く姿、見たときは感激した……」
恭一が懐かしそうに呟く。
「確かに、自分が得意な楽器をするのもいいと思うぞ、先生は。苦手なものは苦手。そりゃあそうだろう。先生だって人間だ。苦手なものはある」
「それはピーマンですか？」
恵梨が真剣な表情で恭一に聞く。恭一は苦笑いして「まぁ、それもそのひとつだが」と答えた。
「まぁ食べ物にしてもなんにしても、苦手だからって避けてたら損することは多いぞ？」
「……。」
全員が俯いてしまった。恭一は後は彼ら次第だと思い、最後に言った。
「編成はお前たちに任せるよ。後悔しない程度に、よく話し合え」
そう言い残し、恭一は出て行った。
「……どうする？」
美里の声に全員がうなってしまった。
「うーん……」

するとそこへ勢い良く戸を開けて入ってきたのは、フルートパートだった。
「だぁから！　最初のソロはやっぱサキティがやらなきゃ！」
必死にそう言っているのは由美子。
「やだなぁ～私はもうソロいーっぱいやらせてもらっちゃったから、由美子に譲るよ」
沙希がニコニコしながら答えるが、その裏には燃える闘志のようなものをパーカスメンバーは感じ取っていた。
「あっはは！　そうだね！　あ、でもさぁ、よく考えたら佳菜ちゃんとこ、七海祭観に来るんだよね!?　じゃあいよいよ佳菜ちゃんもソロデビューしちゃう!?」
由美子が強引に楽譜を佳菜に押し付けた。佳菜もニコニコ笑いながら「先輩方、学園祭デビューですからどうぞどうぞ！」と沙希に楽譜を押し返す。そのうちギャアギャアと大声でもめだした。
「あー！　はいはい！　それじゃ公平に行きましょうよ！」
突然割って入ってきたのは優輝だった。
「公平？」
沙希が納得いかない様子で優輝に聞く。
「そうです！　ずばり、ジャンケンです。恨みっこナシですよ?」
「望むところね！　いい？　２人とも」
由美子がジャンケンする気マンマンで腕まくりをした。沙希も腕まくりをする。
「望むところよ！」
「あたしも！」
佳菜も腕まくりをし、ジャンケンが始まった。
「最初はグー！　ジャンケンホイ！　アイコでしょ！　しょ！　しょ！　しょ！」
「やったー！　あたし一抜け！」
勝ったのは由美子。そこへ沙希がツッコミを入れた。
「ちょっと待ちなさいよ！　勝った人がするのか負けた人がするの

かどっちなの!?」
「そんなの負けた人に決まってるじゃない!」
「聞いてないです!　もう一回やり直し!」
「えー!?」
「問答無用!　はい、最初はグー!　ジャンケンホイ!　アイコでしょ!　アイコでしょ!　しょ!　しょ!　しょ!」
「あー!　やだぁ、あたし一人負けじゃあん!」
結局負けたのは由美子だった。
「なんですか、あれ?」
恵梨が不思議そうに今の流れを美里に聞いた。
「あぁ……フルートパートはいつもソロでもめるのよ。それを今回はジャンケンで決めたみたい」
「へぇ〜」
すると、洋之が紙を手にした。
「じゃあ、俺たちは」
線を引く。
「あみだクジで決めません?」
ニッと笑う洋之。
「おもしろいじゃない……。これも恨みっこなしよ?」
美里がクスクスと笑う。
「何を決めるの?」
あずさはいまひとつ理解できていない。というのも、楽器がたくさんあるからだ。
「まずはドラムセットがどの曲を誰が担当するか。ちょうど5人だから、1人1曲担当できるだろ?　それを選ぶんだ」
「おもしろーい!　そうしよう!」
恵梨がやる気マンマンでシャーペンを手にした。
「あ、ズルい!　あたしも!」
こうしてワイワイと楽しそうにパーカスメンバーは新しく、楽器の割り振りを決めていった。

第１６６話　てんてこまい

「あー！　やっぱり無理です、先輩！」
アメリカングラフィティーの楽譜と睨み合いをしてから１０分。
優は床にゴロンと寝転がった。
「何言ってんのよ～。確かに演奏時間は長いけど、その楽譜わりと簡単なほうなんだからね。しっかりしてよ？」
「そうよ、日高くん。あたしなんてよりによってユーロビートなんだからね！」
あずさがプリプリしながらサスペンドシンバルの楽譜をジッと見つめている。先日あみだくじで楽器を決めたパーカッションパートだが、ドラムセットだけに着目すれば担当は以下のようになった。

・ユーロビート＝乃木あずさ
・アメリカングラフィティー＝秦野　恵梨
・アクエリオン＝田中　美里

ちなみに、アニメメドレーと王様のレストランはドラムセットを使わずに演奏するため、洋之と優は今回ドラムセットはナシになった。その代わり、優はユーロビートでスネアのみのソロを担当する。洋之は洋之で、あまり得意でないタンバリンを担当している。
「あーあぁ。やっぱり俺ってくじ運が悪いのかなぁ」
「また始まった」
恵梨の一言にあずさが呆れた声を出す。
「だってさぁ、こないだの席替えだって、教卓の真ん前だよ？　ありえない」
「でも実際、教卓の前になったんだからありえてるじゃない」
「そういう意味じゃないよ。わかってないなぁ、のぎぎは」
「はいはい、何でもいいから練習しないと上手くならないよ！　頑

張ろうよ」
　美里がやる気のない恵梨を無理やり起こした。
「はぁ～い」
　気持ちはわからなくもない。８分近くずっとドラムセットをするなんて、ドラムセット初挑戦の恵梨にはなかなか酷というものだ。しかし、それは美里も同じ気分だった。美里は美里で、王様のレストランで苦手中の苦手、シロフォンを担当することになってしまった。それも、かなり複雑な旋律を担当するのだ。木管楽器と同じメロディを叩くとは思いもしなかった。なかなか上手く叩けず、とんちんかんな所を叩いて濁った音が聞こえたりする。こんなことでは合奏中、全員に迷惑をかけてしまうだろう。
　創聖のアクエリオンでは、洋之が小物楽器を担当する。冒頭ではクラベスを鳴らすのだが、これが洋之の想像以上に音が響いた。周りで鳴っている楽器が少ないせいだ。それからサビの部分ではカウベルを鳴らすが、これもやたらと音が響く。小物楽器は案外大事な部分で鳴ることが多いだけに、ミスはできない。しかも、カウベルはリズムをずっと刻んでいるため遅れることができないのだ。
　アニメメドレーでは、あずさがクラッシュシンバルに悩んでいる。どの程度の力を入れて鳴らせばいいかがサッパリわからないのだ。どの程度の音量にすればいいのか、にっちもさっちもいかない。しかも、この曲はチャイムやらタンバリンやら楽器がコロコロと変わるため、パーカスメンバーはてんてこまいだ。
　てんてこまいと言えば、セクションリーダーの二人もすっかり参っていた。自分たちで演出を考えることになったのだが、どのパートをどのタイミングで立たせたら良いのかにかなり悩んでいた。ソロは比較的考えやすいのだが、ソリとなると難しい。
「チューバと弦バスが……立つとこがないんだよなぁ」
　慎也が頭を抱えた。チューバと弦バスが目立つような部分というのが今回も残念ながらないのだ。もちろん、ソロはあるのだがソリとなると難しいものがある。

「木管は木管でどこでも立てそうだから、どこで決めたらいいものやら……」
絵美もため息を漏らす。メロディが多ければ多いで大変なこともあるのだ。
「なに悩んでんの？」
ヒョコッと顔を出したのは、今しがた話のネタになっていた拓真と亮平、それに春樹と愛実のバスパートだった。
「いや、ソリでどうしたらいいかと思って」
「ソリ？」
春樹が首をかしげた。
「うん。春やんと加藤さんはソリする場所決まったんだけど……その……」
チューバと弦バスは考えにくい、だなんて言いにくくて言えない。二人は黙り込んでしまった。
「どうせ俺たちのソリで悩んでるんだろ？」
拓真がハハーンと笑いながらあっけらかんと言ったので、二人は少し焦った。拓真は手をポンと二人の肩に置いて続けた。
「別に全員目立たそうなんて考えなくていいじゃん。それに、俺は図体もデカいし楽器もデカいから存在で目立つし、みーやんは常に立ってるし楽器もデカいから余裕だよ。な？」
「俺の分までありがとうございます」
二人はニッと笑った。
「拓あん……変わったなぁ」
慎也がホォッとため息を漏らした。
「今はチューバ大好きなんだぞ？　伴奏バンザイ！って感じかな」
それを聞いて二人は大笑いしてしまった。
「なんだよ、そんなに笑うことかよ～」
「ゴメンゴメン。まぁ、できたらみんなソリしたいからさぁ」
「別に無理しなくていいよ。じゃ、考えられたらでいいから、よろしく」

「わかった」
拓真たちはそう言い残して練習場所へ戻った。
「なんかああ言ってくれると助かるけど、切ないよな」
「そうねぇ……」
「なんとか考えようか」
「そだね！」
二人はもう一度、スコアとにらめっこを開始した。

第167話　やったね！

「えーっと……今日は3年F組とG組に2年A組とC組と……」

10月10日（火）。七海祭まで2週間程度となったこの日はパート練習を一日取っていた。明日はセクション練習、そして木曜日と金曜日は合奏という予定になっている。職員室は入口が東側と西側にあり、鍵は東側にすべて掛かっているので翔はそちら側にいた。すると、西側から生徒が入ってきたようだ。

「先生！　岸田先生！」

体育の岸田に男子生徒が用事で来たようだ。どちらかといえば岸田が苦手な翔はスルーするつもりでいた。

「お、どうした？」

「やりましたよ、俺！」

「お！？　もしかして……」

「合格しましたよー！」

翔は岸田が3年生担任であることを思い出した。今の時期であれば、AO入試か公募推薦だろうか。まだ受験という文字があまり自分に関係ないと思っている翔は特に気にかけてはいなかった。

「それで、もうそこに決めるのか？」

「はい！　ずっとやりたかったことができるんで……嬉しすぎます！」

「ようし、それじゃ進路決定用紙にきちんと大学名、学部、学科などを書くようにな」

「はい！」

翔は1年E組の鍵を探しながらいろいろと考えた。来年の今頃はどうしているのだろうか。中学生のときは途中で退部してしまったが、修平たちは11月の定期演奏会で引退した。七海高校は現在、定期演奏会のようなものは開催していないため、具体的な引退の期日というものがない。

「定期演奏会かぁ……できればオレらの代でやってしまいたいなぁ」
いろいろ考えをめぐらせていると、後ろから聞き覚えのある声が掛かった。
「できるんじゃないの？　今のナナコウ吹奏楽部なら」
振り向くと、岳彦が立っていた。
「うわ！　ビックリするやないですか。どないしたんですか？」
「だってさー、お前さっきからオレずっと後ろで先生と話してたのに、振り向いてくんないんだもん」
岳彦は涙を拭く素振りを見せた。
「へ？」
「あー、まだお前わかってないなぁ。俺だよ、俺」
「ひょっとして……」
「そ！　マーチングの日に受験した大学のＡＯ入試、合格したんだよ！」
「マァジっすか！？　先輩が受けたのって確か……」
「湘南音楽大学だよ」
「スッゲェ！」
翔の声が職員室中に響いた。
「静かに静かに！　とりあえず、今から皆に報告しようかなって思って……うあ！」
翔が強引に岳彦の手を引いた。
「善は急げ！　早く報告しましょ！」
「おま……お前が報告すんじゃないのにおおいおい！　手ぇ痛いって！」
岳彦の悲鳴をよそに、翔は一段飛ばしで階段を駆け上がった。

「何だろ……あの音」
春樹が廊下を覗き込んだ。さっきからドドドドドド、と音が聞こえる。
「誰かが廊下走ってるみたいですね」

亮平が迷惑そうに顔をしかめた。
「風紀委員に怒られちゃうじゃん。まだわかんない1年生とかいるのかなぁ」
愛実がオイルを差しながらブツブツ文句を言う。何を隠そう、愛実も風紀委員だ。
「じゃあ加藤さんが怖い顔して怒れば？」
拓真がニヤニヤしながら言うと、愛実は顔を赤くして「部活じゃそんなことできません！」と呟いた。亮平が愛実の耳元で「部活じゃなくって、水谷先輩の前、だろ」と囁いた。
「ちょっとみーやん！　信じらんない！」
「うわーっと、教室内も走るなよ風紀委員！」
「みーやんなんか大嫌い！」
「はぁいはい！　パー練そろそろ始めていいかな？」
拓真が練習を開始しようとした時、廊下で誰かが転ぶ音がした。同時に何か、金属的なものをばら撒く音が響く。
「あーあぁ！　なにやってんだよ。そそっかしすぎる」
「すいません……だって、ここに一番に教えたかったんで」
「なに？　アイツらここにいんの？」
「そうっす！　どうぞ！」
すると、拓真たちのいる2年H組のドアが開いた。ちなみに、拓真はH組で今日が日直だったので鍵はそのまま持っている。
「あ……！」
「よう！　久しぶり！」
「三河センパーイ！」
バスパート全員が楽器を置いて、岳彦の周りに集まった。
「どうしたんですか？」
亮平が弓に松やにを塗り足しながら聞く。
「今日はいい報告に来たんだ」
「あ！　ひょっとして……？」
愛実がワクワクした目で岳彦を見つめる。

「そう！　加藤さんの予想どおり！　実は……湘南音楽大学に合格しましたー！」
「うおー！　すっげぇ！」
拓真が雄叫びに近い声を上げる。
「ちょっとみーやん、スゴすぎない！？」
「スゲェも何も、あそこ演奏の実技が点数のほとんど占めるんだぜ！？　スゲェっすよ先輩、マジで！」
「おめでとうございます～！」
春樹のキラースマイルに岳彦は「まぶしい！　まぶしすぎるからその笑顔やめろ！」と目を覆った。全員がそれに爆笑する。
「ちょっと部長～！　鍵まだぁ！？」
音楽室から下の階へ降りてきた陽乃が大声で翔を呼んだ。
「なに？　朝倉さん、まだ翔のことあんな他人行儀で呼んでるの？」
「照れ屋なんですよ～最近アイツ。いわゆるツンデレってやつ……うお！？」
いつのまにか走ってきた陽乃がゲンコツで翔の頭を叩いて鍵を奪っていった。
「くだんないこと言ってないでよホント！　あ、三河先輩お久しぶりです～」
「久しぶり、朝倉さん。あのね、実は俺、昨日湘南音楽大学に合格したんだ」
「へ……？　お、音大！？」
「そう！　来年からは音大生なんだ！」
「キャー！　すっごいですね！　おめでとうございます！」
陽乃のキンキンした声が翔の耳をつんざく。
「お前うるさすぎ！」
「いいじゃん！　おめでたいことなんだから、表現は率直にしないと～」
「ったく。とりあえず、鍵持って行きますんで先輩報告しに来てくださいよ」

「あー、そうだな。また後で顔出すよみんな」
岳彦は拓真たちに会釈してから翔たちの後ろについて行った。
「待ってますね～！」
拓真が怪しげな笑みを浮かべて見送る。
「ＯＫしてくれるかなぁ？」
春樹が心配そうに背中を見送った。
「大丈夫ですよ、きっと」
愛実が目をキラキラさせながらうなずく。亮平が松やにをしまいながら「っていうか、むしろ出させろって言うと思います」と笑いながら言った。
「確かに。それじゃ、練習しようか」
「はーい！」
バスパートがロングトーンを始めて２０分後、岳彦が楽器を抱えて部屋に戻ってきた。
「ほぉら、来たでしょ」
亮平の一言に全員が爆笑する。
「ほらとはなんだ！　その様子だとわかってるみたいじゃん？」
「当たり前ですよ。先輩の分、楽譜コピーしてますから」
拓真が七海祭の分の楽譜を手渡した。そう、岳彦も七海祭に出演するのだ。
「サンキューな」
「これでまた低音が充実するね！」
春樹は本当に嬉しそうだ。
「おう！」
「じゃ、ロングトーンの続き始めます！」
「はい！」
バスパートはこの日、ずっと笑い声が絶えなかった。そんな声を横に、受験生の先輩を抱えているトランペットとクラリネットが羨ましい！という声を何度も上げていた。
「岡崎先輩はどこ受けるんですか？」

勇が不思議そうに首をかしげた。あまり進路の話などをパートでしたことがないからだ。
「えーっと……確かＭＡＲＣＨだったかな」
陽乃が不思議な言葉を口にしたので、彩香も首をかしげた。
「行進曲ですか？」
「違う違う」
「じゃあ３月だ」
勇がひらめいたようにうなずきながら言う。
「違う違う」
「じゃあなんですか？」
「明治大学、青山学院大学、立教大学、中央大学、法政大学の頭を取ってＭＡＲＣＨっていうの」
「ふぇ！？　スッゴい大学ばっかりですね～……岡崎先輩って頭良かったんだ」
勇がウーンとうなる。
「なに？　イサムは岡崎先輩がオバカとか思ってたわけ？」
「ちっ、違うよ久野！　絶対岡崎先輩には今の、言うなよ！？」
「はいはい」
勇が顔を真っ赤にしている。陽乃は二人のやり取りを見ながら笑いつつ、自分の進路というものが少し、頭によぎった。

「え？　進路？」
「うん」
帰り道。陽乃は翔に進路をどうするのか聞いた。
「進路なぁ……」
「あたしも塾で現時点の進路を書けって言われたんだけど……まだ全然考えてなくって」
「もう進路調査票提出すんのか？」
「うん。明日塾だし」
「そうかぁ。早いなぁ」

翔は手にしていたアップルジュースをチュ～、と吸いながら考える。
「まぁ……将来的になりたい職業は決まってるけどな」
「何？」
「……ん～」
翔はしばらく考えた後、ペロッと舌を出して「ナイショ！」と言って走り出した。
「ちょっと、ズルい！　何なの！？」
「オレのこともえぇけど、陽乃もしっかり進路考えときや」
「全然決まってないアンタに言われたくない！」
「そない怒るなって。とりあえず、オレにも相談してくれたらいつでも乗るから」
翔は戻ってきて陽乃の頭を撫でた。
「恥ずかしいし」
プイッと陽乃は顔を背けた。
「照れんなって。ほな、今日はここで」
「うん！　また明日」
「バイバイ！」
「バイバイ」
翔の背中を見送りながら、まだ真っ白の進路調査票を見つめた。
「進路……将来……か」
陽乃は重い言葉を背に、家へ向かって歩き出した。

第１６８話　真っ白な紙

「え……これ、書かないとダメですか？」
翔は担任の亘理　健太が手渡してきた紙――進路調査票を手に彼にそう聞いた。
「あぁ。もう2年生も後半に入るだろう。そろそろ、進路というものも意識してもらわないとダメだからな」
そう言うと、健太は他に質問をしているクラスメイトのところへ行ってしまった。
「何？　カケル、進路まだ決めてないの？」
慎也が横から顔を出した。
「当たり前やん。何なん、慎也はもう決まってるん？」
「いちおうな。俺としては、やっぱり岡崎先輩と同じＭＡＲＣＨ狙いたいな」
「いいよなぁ、慎也は。理系で頭いいもん。オレとは根本的に脳みその出来が違う」
翔はそう呟くと机にうつ伏せになった。この間の夏休み明け課題テストは理数系が悲惨だった。数学２は３５点、生物が５６点。いちおう受けている数学Ｂに至っては３０点、物理は２１点だった。だからといって、他の科目が悪いわけではない。英語は９３点、現代文は８９点、古典は９１点。日本史は９９点と惜しい点数まで取っている。
「なんで翔はそこまでして理系科目も取るわけ？　別に文系だけで良くね？」
「……まぁ、それには理由があるんですよ」
「理由って？」
慎也の目が輝いている。興味津々なのだろう。しかし、翔は今の段階ではとても恥ずかしくて言えそうにもないことだったから、言うのがはばかられる。

「そのうち教えるわ」
「そのうちじゃ納得いかないよ。今すぐ教えて」
慎也には意外と図々しいところがあるように翔は思った。けれども、そこまで隠したいと思う相手でもなかった。
「絶対、ナイショにしてくれる？」
「うん！　するから。俺を信じてよ」
「じゃあ……」
翔は慎也に耳打ちした。
「え―!?　翔が!?」
「ちょ、シィッ！」
慎也の大声にクラスメイトの視線が集中する。
「ゴメンゴメン。それで、いつからそう思ってるんだ？」
「まぁ……そのときに憧れてた人がおって。そんで、その人みたいになりたいなぁ～っ思って」
「へぇ～。なかなかお前の今の姿やと想像できへんかな」
「やっぱり……」
翔は再びうつ伏せになって露骨に落ち込んだ。
「それさ、誰かに相談したりした？」
「まさか！　恥ずかしくて家族にも言うてへんわ」
「朝倉さんにも？」
「家族にも言われへんのに、朝倉に言えるはずがないやん……」
翔はその後もモゴモゴ何かを言っていたが、慎也にはよく聞き取れなかった。
「まぁ、夢を持つのはいいと思うよ」
慎也が真剣な表情でそう返した。
「じゃあ、慎也は夢あんの？」
「あるよ。でなかったら、理系なんか進路にしないよ」
「何なん？　夢って」
「絶対に言わないよな？」
「うん！」

今度は慎也が翔に耳打ちした。
「へぇ～！　それ、似合ってると思うで！」
「ホント？」
「うん！　頑張れ！」
「ありがとー！」
話が終わったところで、健太が進路調査票の話を始めたので二人は前を向いて座った。二人から少しはなれたところで座っている陽乃は、自分だけ話に加われないのがなんだか悔しかった。

「うーん……」
翔は部活へ行ってからもしばらく進路のことばかり考えていた。どうも様子がおかしいことに気づいたはるかが声をかける。
「どうしたんですか、先輩。今日は珍しく上の空ですね」
「あ～……まぁ、ちょっと考え事」
「何ですか？　あたしたちでよかったら相談に乗りますよ？」
「ホンマに？」
「えぇ」
「実は……」
「えー？　何々！？」
たまたま入ってきたさゆりと麻綾も加わる。その後ろから、夏樹が入ってきた。
「お、夏樹くん！　久しぶり。どう、最近？」
「こんにちは！　ちょっと落ち着きました。お世話になってます」
2年前、夏樹はどうやら何かあったらしい。当時、翔はまだ七海にいなかったためそのことはよく知らないし、夏樹も陽乃も話してくれない。時期が来ればいつか話してくれると翔は思っている。
今は至って落ち着いているようで、こうして時々部活に来ては一緒に練習している。ひとしきり全員が翔を取り囲むように座ったところで、翔は話を始めた。
「進路をどうしようか……迷ってるねん」

「進路？」
まだ1年生のさゆりたちにはピンと来ないようだ。しかし、中3の夏樹は「わかります～、それ」とうなずいてくれた。
「大学ですよね、佐野先輩だと」
麻綾が冷静に分析する。
「うん」
「文系ですか？　理系ですか？」
「それやねんけど……実は……」
翔はついつい声が小さくなってしまった。
「え？　聞こえないです」
思わずはるかは大声で聞き返してしまった。ますます翔は真っ赤になって声が小さくなる。仕方なく、全員が耳をそばだてる。
「……やねん」
「えーっ！？　意外！」
全員が同じ答えを口にした。翔が真っ赤になってトマトみたいな色になってしまった。
「でも、お似合いだと思います！」
さゆりがニコッと笑って言った。
「ホンマに？」
「そうですよ～。それ、朝倉先輩に相談しました？」
「まだやねん……。なんか、恥ずかしくって」
シュルシュルとしぼむように翔は机に顔を伏せてしまった。
「言えばいいじゃないですか」
麻綾がアッサリ言う。
「恥ずかしくて……とても言えん」
「えー？　彼氏彼女になっといて、今さらなんですか」
バッサリ言い切るはるかの言葉が胸に突き刺さる。
「一番言うべき人ですよ。ねぇ、夏樹くん」
夏樹はニッコリ笑ってうなずくだけだ。きっと、姉の陽乃のことを最も信頼している子だろう。

「そうやな……。相談、してみるわ」
「そうですよ！　じゃあ、決まったところで早速練習しましょ！」
「おう！　じゃ、１０分後にロングトーン開始！」
翔は進路調査票をポケットにしまい、練習を始めた。

練習後、部室へ戻るとほとんどの部員が片づけを終えてミーティングを待っている状態だった。
「あ、遅くなってゴメンな！　急いで連絡だけするわ」
翔はストラップをぶら下げたまま、連絡を一通り始めた。
「えーと、明日でちょうど七海祭まで2週間です。今日でパート練習は最後なんで、明日からは来たらすぐに合奏の用意してください」
「はい！」
「それから、演出係の人は今週中にソロの立ち位置、ソリのタイミング、その他演出を考えておいてください。決まり次第、パート長とオレ、朝倉に連絡お願いします」
「はい！」
ちなみに、演出係は2年生が由美子、雪子。1年生がさゆり、優輝、彩香だ。
「２５日、２６日の出演時間は２５日が午後1時ジャスト、２６日が午前１０時３０分です。連絡はオレからは以上ですが、他に何かありますか？」
「はい。会計です」
会計はみゆきと亜紀が担当している。どうやら演出で多少の費用が必要らしく、本番までに１０００円徴収することになったとのことだった。
「なに企んでるんか知らんけど、楽しみにしてるで。では、解散！」
「ありがとうございましたー！」
解散後、部室にはほとんど部員は残っていなかった。
「翔～！　音楽室閉めちゃうけどいい？」
「あー、頼むわ」

陽乃が出て行ってすぐ後にさゆりとはるかが「頑張ってくださいね！」と笑いながら出て行った。
「あれ？　さゆちゃんとはるちゃんは？」
「帰ったで」
「なんだぁ。みんな今日は早いんだね」
「うん……」
その後、しばらく沈黙が続いた。翔はなんとなく落ち着かないが、陽乃は沈黙が続いても平気なのか、楽器を磨き続けている。言おうかどうしようか迷っているうちに陽乃はいつの間にか楽器を磨き終えてカバンを持って翔の前に座っていた。
「うわ！」
「どうしたの？　今日ボーッとしてる」
「な、なんでもないよ」
翔は慌てて目を逸らした。陽乃は不思議そうに首をかしげながらも「それだったらいいけど」と立ち上がって部室から出ようとした。
「あ……ちゃ、ちゃうねん！　なんでもないことない！」
「え？」
陽乃は混乱した様子の翔のそばへ戻った。
「どうしたの、ホントに」
「あのな……相談あんねん」
「相談？　どうしたの？」
「実はな……進路のことで」
翔は一部始終を話した。実は、翔は高校1年の後半から小学校教師になりたいと考えていたのだ。それも、専任の音楽教師になりたいと考えている。
「それが……なんか恥ずかしいし、オレ理系全然アカンし」
「そうなんだ……」
陽乃はしばらく考えてから「あ！」と声を上げた。
「ど、どないしたん？」
「あのね、あたしと夏樹の知り合いに小学校教師目指してる人いる

んだ。その人に聞いてこようか？」
「ホンマか！？」
「うん！　あたし、翔が頑張るなら何でも応援するよ！」
「……ありがとうな」
「ううん！　任せといて。じゃあ、進路の話もしながら帰ろう」
「せやな……ありがとう。陽乃のおかげで何かもっと頑張ろうって気になったわ！」
翔はパッと走って陽乃の手を握った。
「なに、急に」
「別に！　こうしたいだけ」
翔はニッと笑って陽乃を見つめた。
「あと2週間！　頑張ろうな」
「うん！」
二人は手を繋いだまま音楽室を出た。七海祭まであと2週間。果たしてどのような文化祭になるのだろうか。

第１６９話　指名します！

「ねぇ、さゆちゃんは1年生なら誰がいいと思う？」
翌日。雪子はソファに座ってなにやら考えているさゆりたちに向かって聞いた。
「そうですね～……。私は、瀬戸くんと逢沢、冨岡あたりがいいんじゃないかと思います」
「え！？　俺！？」
突然指名を喰らった優輝は目を丸くしている。
「だって、運動神経いいでしょ実際」
「まぁ……いちおう体育5だけど」
「じゃあ決定じゃない！」
由美子がサッとメモ帳に名前を書いてしまった。
「女子だったらどう？」
「女子ですか？　うーん……ねぇ、彩香はどう思う？」
「え？　女子なら？　そうだな～。はるか、みゆき、愛実あたりかなぁ」
「でも、はるかちゃんはテナサクで一人だから、難しいと思う」
雪子が彩香の提案にストップをかけた。
「でも、ユーロビートなら問題ないと思いますよ」
さゆりの一言に「そうね、ユーフォもいるし」と由美子がすぐに納得した。そこへ、陽乃がご機嫌な様子でスキップしながら輪の中に入ってきた、
「やっほー！　何の話！？」
「あぁ、陽ちゃん。あのね、演出の話なの」
雪子とは一時期微妙な距離感が出たこともあったが、最近はまたいつもどおりに過ごせている。いつまでも根に持つタイプではないようだ。
「へぇ～。ユーロビートの？」

「うん！」
「それで、どんな演出？」
「ダンスするの！」

「はぁ！？　ダンス！？」
雪子と由美子は翔の大声に思わず陽乃の後ろに隠れた。
「ちょっとちょっと！　演出係、しっかりしてよね！」
「だって、珍しく佐野くんが怖い……」
由美子がビクビクしながら翔を見つめる。その翔はというと、かなり顔が強ばっている。
「演出係さん直々にお願いに来たんだよ？　翔ならできるって思ったらしくって」
「そ、そう！　佐野くんならカッコよく踊ってくれそうかな……と思って」
雪子も陽乃の後ろに隠れたまま、そう呟いた。
「別に、ダンス自体が嫌なわけちゃうねん」
「じ、じゃあ何か別に理由あるの？」
「オレが気に入らんのはアレ！」
指差す方向にはみゆき、愛実、優輝、駿、沙希がいた。
「カワイイじゃなーい！　ねぇ、めぐちゃん？」
「そうですよ～佐野先輩！　これ、全部永井先輩が用意してくれたんですよね？　とってもカワイイです～！」
愛実の格好。それは、ミッキーマウスの衣装だった。耳から鼻、足まで忠実に再現されたものだ。隣にいるみゆきはミニーマウス。優輝はドナルド・ダック。沙希はデイジー・ダック。駿がプルートだ。
「そんでなんでオレがグーフィーやねん！　オレ、そんなボーッとしたキャラに見えるんかい！？」
「だってさ、佐野くん男子でも結構身長あるじゃん」
「だったら、慎也のほうが背ぇ高いわ！」

「残念。川崎くんはトロンボーンが抜けるとけっこうダメージ受けるの。ファースト、セカンド、バストロって全部いるでしょ？　だから抜けらんない」
　雪子が手でバッテンを組んで笑いながら言った。
「ほな、拓あんはどうやねん？」
「ダメよ～。彼、身長が１８４センチもあるもん。この衣装の規格外」
　由美子が首を横に振りながら諦めなさい、とでも言いたそうな顔をした。
「じゃあ、春やんは！？」
「愛実ちゃんが抜けるからダメ」
　陽乃が即答する。しかし、翔は諦めない。
「ジュンペーは！？」
「ホルンは人数不足だからダメよ」
　雪子が強く拒否した。その後も翔は思いつくだけの男子の名前を挙げたが、次々と陽乃によってダメな理由が述べられる。
「勇！」
「トランペットもトロンボーンと同じ理由で却下」
「とぐっちは！？」
「いま、足の捻挫で激しいことはできません」
「健之佑！」
「あの衣装、１７５センチまででさ。着てもらったけど微妙にダメでした」
「優は！？」
「スネアドラムするのに無理に決まってるじゃない。ソロがあるの」
「みーやんはどうや？」
「エレベ（※１）だから抜けられません」
「……クソー！」
　誰もいなくなって結局、翔がする羽目になってしまった。
　話し合いの後、翔たちは衣装に着替えるために部室へ入って行っ

た。
「なんとか決まったね」
雪子はホッとため息をついて椅子に座った。相当緊張していたようで、汗をかいている。
「ホーント。かなりご機嫌ナナメだったけど」
「いいよいいよ。あたしが帰りに元に戻しておくから」
「ゴメンね～迷惑かけて」
「いいのいいの。あんな翔、珍しくもないから」
陽乃はクスクスと笑いながら由美子たちの肩を叩いた。あんなに不機嫌な翔、実は今まで何度か見たことがあった。課題テスト直後や夏休みが終わる前にはやたらと不機嫌だったのだ。
「おーい、演出係。着替え終わったで」
「あ、ホント？　じゃあダンスの見本見せに行くからちょっとそこで待ってて！」
由美子が慌てて立って部室のほうへ向かって走っていく。雪子も慌ててついていくので、陽乃もついて行こうとしたが止められた。
「陽ちゃんはダメ」
「なぁんで～？」
「ダンスはリハ中に部員に見せるだけ！　本番までは口外させないためにそうするの。ゴメンね！」
「チェーッ」
陽乃がブツブツ文句を言っていると、後ろから慎也が「セク練するよー！」と声をかけてきたので、陽乃は渋々音楽室へと戻っていった。
「えーと、さっき演出係にソリで立つ場所を聞いたので。今日はアメグラを中心に練習するから、先にアメグラ立つ場所を言います。メモしてください」
「はい！」
陽乃たちはシャーペンで楽譜に立つタイミングをメモしていく。
「まず、恋の片道切符のトランペット、最初立ってください」

「ハイ！」
「それから、ミスター・ベースマンは拓あんと久野さんヨロシク」
「はい」
「それで、ヴァケイションについては演出係から直接指示してもらうのでヨロシク。あ、ただ最初のメロディある人は全員立ってくださいとのことです」
「はい！」
「以上です。じゃあ、チューニングを始めます。チューバから」
「ハイ」
そして5時半から合奏が始まった。ダンスのメンバーは汗をビッショリかいていて、既に限界という表情だった。
「なんだ、佐野たちはいやに疲れてるな」
「へへへ……。まぁ、いろいろありまして」
「演出関連か？」
「はい！　先生、今年はかなり力入れてますよ！」
雪子が嬉しそうに返事をする。なぜあれだけ一緒に踊っていて疲れていないのか、翔は雪子の体力がどうなっているのかはなはだ疑問だった。
「まぁ、疲れて演奏ができないなんてことだけにはなるなよ？」
「はい！」
「じゃあ、ディズニーから」
「ハイ」
早速合奏が始まる。しかし、未だにドラムセットに慣れないあずさはどうも遅れてしまい、周りのテンポまで遅くしていた。
「コラァ！　乃木！　いつまでそんなどんくさいコトやってるんだ！？」
「すいません」
「それからチューバとエレベ！」
「はい！」
「裏打ちに慣れていないだろうけど、重くなって周りを引きずるな。

わかったか？」
「はい！」
「それから金管軍団。打ち込みの頭がどうもインパクトに欠ける。もっと勢いよく、ただし破裂しない音で」
「ハイ」
それからユーロビートだけで各パートに次々と注意や指示が飛ぶ。最近、その内容もかなりレベルが高いものになってきた。来年に向けて、恭一はそれなりの技術と知識でコンクールに挑みたいと考えていたので、より具体的かつ専門的な内容にも踏み込み始めている。
くまのプーさんに差し掛かったところで、由美子と佳菜がソロを吹いている。しかし、普段ピッコロの佳菜とフルートのみの由美子ということに加え、楽器歴は佳菜のほうが長いため、簡単な調にも関わらず耳につくほどの音程の悪さが音楽室中に響いた。これにはさすがの陽乃も驚いてしまう。
「コラコラー！　お前ら二人、周りの音聴いてるのか！？」
「え？」
「え？じゃない！　音程がとにかく悪すぎる！　原因はどっちだ？下のC（ツェー）の音を吹いてみろ」
佳菜が吹いてみるが、翔の目の前にあるチューナーでもピッタリと合っていた。
「次、宮部」
由美子が吹いた瞬間、チューナーの針が一気に３０も高い方向へと跳ね上がった。
「コラァ！　そんな音程でソロを吹くヤツがあるか！」
「す、すいません！」
「明後日、もう一回これをするからその時までに音程が合ってなかったら、大谷にソロを変えるからな。わかったか？」
「はい！」
由美子も以前は恭一に叱られるとかなり落ち込んでいたが、最近ではしっかりとメモを取って答えられるにまでなっていた。

「よし。今日の合奏はここまで。演出で頑張るのもいいけど、8時までには帰宅するように」
「はい！」
「起立！」
翔の号令に合わせて全員が立ち上がり「礼！」の後に「ありがとうございました！」と威勢良く部員たちの声が音楽室に響いた。すると終わるなり、雪子がバタバタと翔のところへ駆け寄る。
「うわ！？」
「佐野くん今日のダンス一番ヘタだったから、居残り練習ね」
「うえぇ！？　ウソやろ！？」
「ウソじゃないよ。ってわけで陽ちゃん、佐野くん借りるね」
陽乃もニヤニヤ笑いながら「自由に使っていいよ～」と手を振った。翔が「裏切り者」とでも言いたそうにジッと見つめていたが、見えないフリをしておいた。

第１６９話　指名します！（後書き）

（※１）エレベ：エレキベースの省略形。弦バス奏者は必要に応じてこの楽器を弾きます。ポップス曲で用いられることが中心となります。

第１７０話　いーじゃん？

１０月２４日（火）。いよいよ七海祭のリハーサルが始まった。
リハーサルは司会、演出、移動、舞台転換などすべてを行うため、午後は授業がない。クラブ活動がない生徒たちにとってはこの日はかなり嬉しい日のようだ。
「ねぇ、陽乃！　吹奏楽部はいつまで練習？」
クラスメイトの矢崎　菜緒が陽乃の席にやってきて聞いた。
「ゴメーン！　今日、５時から６時まで部活のリハなんだ」
「え～？　つまんなぁい」
「ゴメンって！　ね？　あ、七海祭終わった後の土日休みなんだ。だから、そのとき遊ぼうよ」
「ホント？　じゃあさ、ダブルデートしない？」
「は？　ダブルデート？」
「そう！　あたしね、森本と付き合ってるの」
「えぇ！？　そうなの？」
「うん！　それでさ、土曜日にデートするんだけど、良かったら陽乃もどう？」
「えぇ～？　だって、あたしなんか入ったら邪魔じゃない」
陽乃は苦笑しながら机に入った教科書などをカバンへ詰め始めた。
「なんで？」
菜緒は不思議そうに陽乃の机に座りながら聞く。
「だってさー、菜緒ちゃんと森本くん一緒にデートでしょ？　あたしいたら邪魔じゃん」
「……。」
ボーッとした様子でしばらく陽乃を見つめる菜緒。それから「あぁ！」と叫んでニコッと笑った。
「陽乃～、アンタ勘違いしてる」
「へ？」

「ダブルデートよ。ダ・ブ・ル」
「……も、もしかして」
「そう！　佐野くんをアンタは連れてくるの！」
「えぇー！？」
陽乃も予想外の展開だった。ダブルデートなのだから、当然といえば当然なのだが陽乃はそんなことをしたことがあるはずもないので、頭が大混乱だ。
「ちょっと待ってよ！　絶対に翔、ダメっていうに決まってる！」
「わかんないじゃない、聞きもしないうちから。とりあえず今日聞いてみて。メールで連絡とってくれればいいから」
「あ……ちょっと菜緒ぉ～」
断る隙も与えずに菜緒は涼平のところへ走っていってしまった。

「……。」
結局断ることもできず、かといって翔にそれを伝えることもできず、リハーサルを迎えてしまった。悶々とした表情の陽乃に彩香と勇もかなり心配そうだ。
「大丈夫ですか？」
「あぁ……もちろん！　任せてよ」
勇の問い掛けに苦笑いで答える陽乃。その様子に二人はかなり不安だったが、それ以上聞かずにおいた。
（ダブルデート……。あれ？　あたし、翔とデートってしたことあるっけ？　瀬戸くん家の楽器店行ったのはデート……かなぁ。あ、でもこないだつくし野川沿いでピクニックしたっけ。あれ？　あれはデートなのかな。あー！　デートっていったい何！？）
「先輩、先輩！　指揮棒上がってます！」
「うわ！　す、すいません！」
ンン！と恭一が咳払いしたので慌てて陽乃は楽器を構えた。
1曲目はユーロビート・ディズニーメドレーだ。チューバとエレキベースが伸ばしの音をしっかりと吹き伸ばし、すぐに金管群が基

本形となる旋律を吹く。そして、陽乃たちの目の前で初めてとなるダンスが披露された。まず出てきたのは、愛実と優輝だ。二人とも衣装がピッタリな上にダンスにもキビキビとした動きが見られるため、かなりカッコよく見える。亮平のエレキベースがソロをした後、フルートとクラリネットが立ち上がってソリを吹くのだが、そこでダンス側は交替となってみゆきと沙希が、生徒席のほうへ走って出てきた。

実は生徒席は舞台から向かって右が3年生、左が2年生、奥の右が1年生、左と2階が保護者席となっている。手前と奥の間には2メートルほど間隔が開けてあり、みゆきと沙希はそこでダンスをしている。二人ともスタイルが良いので、遠くからでも十分見ごたえがあった。

そして「ジッパ・ディ・ドゥーダ」に曲が変わる。出てきたのは優輝。みゆきが舞台のほうへ走って、舞台袖から出てきた愛実と一緒になって踊る。かなり凝った演出をしている。やがて「くまのプーさん」に曲が変わって佳菜と由美子がソロを吹き始めた。F(エフ)の音程が悪かった由美子だが、あれから必死にロングトーンをしてなんとかまだ許容範囲である音程にまで持っていくことができた。

(そういえば翔ってどこで出てくるんだろ)

そんなことを考えていると、突然黄色の物体が陽乃の目の前を通過した。

(ちょっとぉ！　やだぁ！)

ハチミツの壺らしいものを抱えた翔がグーフィーの着ぐるみを着てプルートの着ぐるみを着た駿に追いかけ回されている。陽乃は堪えきれず吹き出してしまい、破裂音が響き渡った。恭一も半笑いになって曲を止める。

「こらこら朝倉～！　気持ちはわっ……わからんでもないがっ……我慢しなさい！」

何に対して笑っているのか察知した翔は雪子のところへ行って「なぁ！　頼むわぁ。オレだけこんな変な役回り、たまらん！　変え

てくれ！」と懇願した。
「ダーメー！　これは佐野くんのためにあたしが夜鍋して考えたんだから」
「そんなんヒドいわぁ」
「先生！　続きお願いします！」
「おぉ、ほら。佐野！　行った行った！」
翔は渋々舞台裏へと駿と一緒に戻る。クスクス笑いながら彩香が「永井先輩って意外とSですね」と言ったので、陽乃は思わず声を上げて笑ってしまった。
練習が終わったのは午後6時すぎ。それから打楽器やチューバを体育館倉庫に片付け、他の管楽器は音楽室に戻って片づけておいた。いやにテンションの低い翔のミーティングが終わって解散になってから、陽乃は翔のそばへそっと座った。
「かーける」
「……何」
かなり不機嫌なようだ。
「あの……ちょっと話あるんだ」
「何やねん」
かなり機嫌が悪い。口調に出ている。陽乃は言おうかどうしようか迷ったが、耳打ちしながら端的に伝えた。
「デートしよ」
「はぁ！？」
翔が真っ赤になった。大声を聞いて部室にいた全員が翔に視線を集中させる。
「菜緒にね、ダブルデートしよって誘われたの。菜緒、森本くんと付き合ってるっていうから、じゃあ彼氏いる同士ダブルデートしようって」
「何言うてんねんお前は。アホか」
「アホとは何よ！　せっかく人が誘ってるのに」
「そういう意味ちゃう！」

「じゃあどういう意味よ」
翔は真っ赤な顔のまま、呟いた。
「デートはお前とだけやないと、嫌や」
「え……」
予想外に大きい声だったのか、部室にいた全員が赤くなっていた。
「……っ！　か、帰る！」
呆然としている陽乃を置いたまま、翔は音楽室を飛び出した。
「いーじゃん？　いーじゃんいーじゃん」
美里がトントンと陽乃の肩をつついた。
「美里……」
「佐野くん思ったより、純粋じゃーん。それに、陽ちゃん思いだわ、やっぱり」
陽乃は周りが真っ赤になっているのに気づき「ゴメンなさい！　変な空気にしちゃって」と謝った。
「いいよね、別にみんな」
赤くなりながらも、その場にいた優輝、はるか、亜紀、洋之などがうなずいた。
「今さら恥ずかしがるようなコトでもないよ。みんな、あんたたちのことは知ってるしね」
「……わかった」
「ただし！」
美里がグイッと陽乃の額を人差し指で押す。
「今後は人前でイチャつかないこと！　それだけは気をつけてね。じゃないと、演奏にアンタたちも支障が出るよ、こんなことばっかしてたら。ま、あたしが言えた立場じゃないけど」
「わかったよ、美里。ありがと」
「とりあえず、今日はあたしが鍵閉めるからアンタは佐野くん追いかけて」
「ありがと！　じゃ、明日頑張ろうね！」
「もちろん。じゃあ気をつけてね」

「バイバーイ！」
陽乃は音楽室を出てから、心に決めていたことがあった。確かに最近、翔のことや今後のことを考えたりしていて部活が少々おろそかになっていた気がしている。ここはもう一度、気合いを入れなおすところだ。
「よし！　明日から気合い入れて初心に戻るぞ！」
「そうそう。どうも様子が変やと思っててんけど、やっと気づいてくれたみたいやな」
振り向くと、翔が待っていた。
「あ……ゴメンね、急にさっきは変なこと言って」
「えぇよ別に。それに、陽乃の顔見てたらきっともう大丈夫やって思うわ」
翔は軽く陽乃の頭を撫でた。
「じゃあ帰ろう？」
「うん」
しばらく歩いて校門を出てすぐのところで、翔が陽乃の手を引いた。
「なぁ」
「何？」
「七海祭、一緒に回ろう？」
「え？」
「模擬店とかも出るし。どう？」
「……うん！」
「よし、決まり！」
翔が嬉しそうに笑った。陽乃もこんな風に普通に誘えばよかったと思いつつ、翔と手を繋いで家路に着いた。

コラム☆7　楽器紹介（木管編）

「はい、どーも！　楽器係その1の本堂拓真です！」
「同じく楽器係2の、宮部由美子です」
「えーと、今日は楽器の紹介するんだっけ？」
「そうそう。まーったく、いい加減なのよねあの人。だいたい、もう私たち2年生になっちゃったのに今さら楽器紹介ってどういうつもりなんだか。こういうのは、もっと早い段階で……」
「何言ってんの宮部。あの人って誰？」
拓真は不思議そうに首をかしげた。
「あぁ！　なんでもないの、独り言よ独り言！」
「それならいいんだけどさ。それより宮部。まずはお前のパートの楽器から紹介してよ」
「もっちろん！　あ、今日は各パートの代表者も呼んで来てるの」
「へぇ～！　じゃ、その子たちも一緒に呼んできて」
「じゃあまずはフルートパートさんどうぞ！」
呼ばれて入ってきたのは佳菜だった。
「はい、佳菜ちゃん。それじゃ私たちの楽器を紹介してあげて。なるべく、楽器されてない読者の方にもわかるように、簡単にね」
「はい！　お任せください」
「何？　読者って誰？」
拓真は一人、置いてけぼりを喰らったような感じになって寂しそうな声で由美子に聞いた。
「シーッ！　いろいろ事情があるの。後で説明するから。じゃ、佳菜ちゃんお願い」
「はぁい！　まずは、あたしが吹いているピッコロです。ピッコロはフルートの派生楽器で、フルートと同じ指使いでちょうど1オクターブ高い音が出る移高楽器です。なので、フルート吹ける人は苦労せずに吹けると思います。ただ、音程が取りにくいんですよ～。

続いてフルートです。こちらは金属で現在は作られていますが、木管楽器ですよ。主にメロディを担当することが多く、女の子には人気のある楽器ですね。あ、堅い説明はナシでいきますので、あたしたちが普段吹いてる楽器のイメージ掴んでくださいね！　以上です！」

「はーい！　じゃ、次はオーボエとバスーンの説明を。こちらは野村くんお願い」

「了解です。野村健之佑です。よろしくお願いします」

健之佑は几帳面にお辞儀をした。

「誰に向かってお辞儀してんの？」

「だぁから！　その辺は後で説明する！」

健之佑は「いいですか？」と小声で呟いて、由美子が小さくうなずいたので説明を始めた。

「オーボエならびにバスーンはダブルリードといいまして、２枚のリードを振動させる感じで演奏します。俺、この表現は嫌いなんですが一般の方にはチャルメラみたいな音って説明してます。泣く泣くです。実際には、オーケストラなどではオーボエに合わせてチューニングをします。それくらい音程が取りにくい、難しい楽器なんです。また、他にイングリッシュホルンという楽器も吹奏楽などではよく用います。バスーンはどちらかというと低音系の楽器ですかね。低音は響きがあって高音は小さな音が出るっていうおもしろい楽器ですよ。あ、ちなみにファゴットとも呼ばれます。でも、英語圏ではバスーンって呼んでください。ちょっと誤解を招く恐れがありますので」

すると突然横から恵梨が口出しをしてきた。

「あー！　あたしそれ知ってる！　英語圏ではそれ、オカ……ふぐぁ！？　ちょっと、何すんのよぉ、みゆきぃ！」

大声ではしたないことを言うため、みゆきが慌てて口を塞いで強引に恵梨を部室へ引き戻して行った。

「えー、なんかとんでもないことになりましたが、以上でオーボエ

とバスーンの説明を終わります」
　健之佑はまだ音楽室に残ろうとする恵梨を引きずるようにしながら出て行った。
「はい！　では騒々しくなりましたが、気を取り直して次はクラリネットさんの説明に移ります。クラリネットの代表者、瀬戸優輝くんどうぞー！」
　しかし、応答がない。何度か由美子は優輝の名前を呼ぶが、声がするどころか出てくる気配もない。すると部室から声が聞こえてきた。どうやら、あれは梨子のようだ。
「ちょっと、しっかりしてよ瀬戸くん！　呼ばれてる！」
　続いてみゆき。
「ダメだ……全然応答ないよ」
　しばらくして足音が聞こえ、音楽室の入口からみゆきが顔を出した。
「すいませーん宮部先輩。瀬戸くん、なんか待ちきれなくって居眠りしてたら本気で寝ちゃって……起きないんです」
「え？　そうなの？　じゃあ河内さんか小林さん、逢沢くんで説明お願いしていい？」
「ホントですかー！？　キャー！　ちょっと二人呼んできます！　逢沢くーん、梨子ぉ！」
　それから待てど待てど、まったくクラリネットが来る気配はない。5分ほどしてようやく現れたみゆき、駿、梨子の3人はなんと七海高校にあるクラリネット系の楽器をすべて持って来ていた。
「が、頑張るねぇ」
「はい！　ここぞとばかりに！」
「じゃあ説明どうぞ！」
　まず、みゆきが話し始めた。
「えーと、こちらがエスクラリネットです。これは梨子が吹いてるヤツです！　フルートやオーボエと似たような旋律吹くことが多いですね！　それから、これが誰もが見たことのあるベークラリネッ

ト。一番吹く人数も多いクラリネットです。クラリネットは基本的に黒色をしています。人の声に一番近い楽器とも言われます。では、続いて梨子ちゃんどうぞ！」

「はぁい！　こちら、ご覧ください。これはアルトクラリネットといいます。あまり吹奏楽でも見ないかもしれませんが、意外と大事なフレーズを吹いたりするので見逃せません。それから、これが逢沢くんの吹いてるバスクラリネット！　これはバスーンが苦手な弱音を吹いたりする場合や、敏速な動きには欠かせない大事なパートで、あるとないではバンド自体も大きく変わります。では、続いて逢沢くん！」

駿は意外とこういう場が苦手なのか、少し詰まりつつ説明を始めた。

「えっ、えっと！　こ、これがコントラアルト・クラリネットといいます！　お、主にクラリネットアン……んんっ！　クラリネットアンサンブルで使われることが多いです！　それからこれがコントラバス・クラリネットでっす！　こっちらもクラリネットアンザンビュル……アンサンブルで使われることの多い楽器です」

エンストしたかのように、駿が固まってしまった。

「す、すいません！　以上でクラリネットの説明を終わります！」

固まったままの駿をペチペチと数回叩いて目を覚まさせてから、みゆきは楽器を丁寧に梨子と片づけてから部屋を出た。

「ねぇ」

拓真が声をかける。

「これって楽器紹介になってんの？」

「なってるわよ！　それに、作者自体が楽器のことあんまり知ってないから……こうなるんじゃない」

「作者？」

「なんでもない！　こっちの話。それじゃ、続いてサックスさんどうぞー！」

「はぁい！」

そう言って出てきたのははるかと麻綾だった。
「あれ？　話だと、はるちゃんと佐野くんじゃなかった？」
「今日は佐野先輩、朝倉先輩とデートなんで欠席です！」
「……なにぃ？」
由美子の顔が曇った。慌てて拓真がツッコミを入れる。
「宮部さん宮部さん。キャラが崩れてます」
「あ、ゴメンね～！　それじゃ、サックスさん説明をどうぞ！」
「はい！　アルトサックス担当の鈴木麻綾と」
「テナーサックスの西嶋はるかです。今回は吹奏楽で目にする機会の多いサックスのみを紹介させていただきます。まず、コチラ！」
麻綾がまっすぐに伸びるサックスを手に持った。
「これはソプラノサックスといいます。サックス４重奏ではリーダー的存在になります。吹奏楽ではアルトサックス奏者が持ち替えをすることが多いんですが、ジャズではテナーサックス奏者が持ち替えをするのが多いようです。では、次はるちゃん！」
「はぁい！　こちらが誰もが見たことのあるアルトサックスですね！　アルトサックスはメロディ担当が多いですが、伴奏もします。基本的にサックス系は音を出すのが簡単ですが、上手くなるのに時間がかかると言われますね。それから私の楽器、テナーサックス。こちらはユーフォニウムと似たような旋律などを担当することが多いです。アルトサックスはホルンと同じことが多めですかね。じゃあ、まーや、バリトンお願い」
「ちょ、ちょっと待ってね。持ち慣れてないから……」
麻綾はぎこちない様子でバリトンサックスを構えた。
「重い～！」
「しっかりしなよ。ホラ！」
はるかが支えて椅子に座らせてから、麻綾はようやく説明を始めた。
「失礼しました！　これがバリトンサックスです！　主にバスクラリネット、チューバなどと同じ系統の伴奏を担当することがありま

すが、やはりここはサックス。カッコいいソロのある曲だってありますよ！　ちなみに、アルトよりも1オクターヴ低い楽器です。また、バリサクと省略されて呼ばれることも多いです」

「以上です！　ありがとうございました～！」

麻綾とはるかを見送った後、由美子は模造紙を黒板に貼り付けた。

「えーと、各楽器が目立ったり長～いソロを吹く曲を吹奏楽オリジナル曲、ニューサウンズインブラスを中心に挙げてみました。参考にしてください」

拓真が椅子に座って「ちょっと休憩入れない？」と由美子に聞いた。

「え～？　もう。しょうがないな。じゃあ10分休憩して、次は金管だからね！？」

「りょーかい」

「では、木管の目立つ曲、ご覧ください」

ピッコロ　♪　平和への行列（２００１年度全日本吹奏楽コンクール課題曲）／サウス・ランパート・ストリート・パレード（ベスト吹奏楽１００）

フルート　♪　プスタ（吹奏楽オリジナル）／ジブリメドレー（ニューサウンズインブラス９９）

オーボエ　♪　エル・カミーノ・レアル（吹奏楽オリジナル）／情熱大陸（浜松交響楽団演奏バージョン）

イングリッシュ・ホルン　♪　Ｍａｓｑｕｅ（マスク）（吹奏楽オリジナル）

バスーン　♪　ローザのための楽章（吹奏楽オリジナル）

エス・クラリネット　♪　道祖神の詩（２０００年度全日本吹奏楽コンクール課題曲）／ヘンリー・マンシーニの想い出（ニューサウンズインブラス９９）

ベー・クラリネット　♪　シング・シング・シング（ベスト吹奏楽１００）／ど演歌えきすぷれす（オリジナルメドレー）

アルト・クラリネット　♪　ごめんなさい！　調べたけどわかんない……。わかる人教えて～！

バス・クラリネット　♪　ジャパニーズグラフィティー１０～時代劇絵巻～（ニューサウンズインブラス２００５）

ソプラノ・サックス　♪　情熱大陸（浜松交響楽団演奏バージョン）／ど演歌えきすぷれす（オリジナルメドレー）

アルト・サックス　♪　Ｔｈｅ　７ｔｈ　Ｎｉｇｈｔ　ｏｆ　Ｊｕｌｙ（吹奏楽オリジナル）／スカイ・ハイ（ニューサウンズインブラス２００５）

テナー・サックス　♪　ジャパニーズグラフィティ９～いい日旅立ち～（ニューサウンズインブラス２００４）／グレン・ミラー・メドレー（ニューサウンズインブラス９６）

バリトン・サックス　♪　ディープ・パープル・メドレー（ニューサウンズインブラス９６）

コラム☆8　楽器紹介（金管&打楽器編）

「へぇ～。私、リンゴジュースって嫌いだったけど、飲んでみたら案外おいしいじゃない」
　由美子はパックのアップルジュースを片手に拓真と談笑している。
「だろ？　俺も苦手だったけど、翔が飲め飲めってうるっさいから飲んでみたら案外イケたんだよ」
「ホント。今度佐野くんにおいしかったって言ってみよ。あ、そろそろ再開する？」
「そうだな。おーい、トランペットさーん」
「はーい！」
　拓真に呼ばれて出てきたのは彩香だけ。勇の姿が見当たらない。
「あれ？　松尾くんは？」
「へ？　あれ!?　いない！　ちょっと待っててくださいね」
　彩香は慌てて部室へ戻って勇を強引に音楽室へ連れてきた。
「やめろよ……俺、こういうの苦手って言ったじゃん」
「よく言うよ。トランペット奏者は恥ずかしがりはＮＧだよ!?」
「そんな話聞いたことないし……」
　勇はしゃがんでイジイジしたまま呟いた。
「今すぐ覚える！　すいませ～ん、お願いします宮部先輩、本堂先輩！」
「はい！　では、トランペットの紹介です。どうぞ！」
「まずは、一般的によく知られるトランペットはこちら！　吹奏楽部の花形とでもいいましょうか？　とにかく音が目立ってソロも多い楽器です。ただ、その分責任も大きいのであんまりにもプスパス変な音を立てていると、間違いなく東先生から怒られます。それで……ほら、松尾くんの番！」
「あぁ、うん……」
　勇はまだ乗り気でないようだったが、渋々大きめのトランペット

を抱え上げて話を始めた。
「えーと、これはフリューゲルホルンって言います。ホルンっていう名前ですけど、系統的にはトランペットです。少し低めの音域を吹いてます。特にアンサンブルなどでは活躍することが多いです」
「それから、このカワイイの！　これはピッコロトランペットと言ってフリューゲルとは逆に音域が高いものです！　特に指定されることがないこともあるそうですが、その理由としては音域がフルートとピッコロほどかけ離れていないからかと思います。トランペットの紹介は、だいたいこんな感じです！」
「はーい！　ありがとう。それじゃ、次にホルンさーん！」
すると、雪子と順平が長いテープを持って音楽室に入ってきた。
「何やってんだよ、二人して」
拓真があまりに長いテープを持ってくるので素っ頓狂な声を上げた。
「これは、ホルンの管で一番長いパターンをテープで示したものです！」
雪子がニコッと笑ってテープをなびかせた。
「その長さってどのくらい？」
「フフフ～！　実は、４メートルもありまーす！」
「え！？　ホルンってそんなに長かったの？」
由美子がアップルジュース片手に立ち上がった。
「そうなんだよ、由美ちゃん。といっても、これ全部右川くんに教えてもらうまで私も知らなかったけど……。というわけで、次からは右川くんに全部お願いしちゃいます！」
「はい、ホルン１年の右川順平です。よろしくお願いします。まず、これは言っておきたいんですが、実はホルンは世界一難しい金管楽器です。ギネスにも載るそうですよ～。いま、検討中だそうです」
「どっからそんな裏情報入れてくるんだ？」
「まぁ、そこらへんは企業秘密です」
「なぁにそれ」

由美子がクスクス笑う。順平も笑いながら説明を続けた。
「それで、基本的に人数がほしいパートです。まぁ俺たち七海高校は二人という驚異的人数ですけど。実は、２００６年度の課題曲も本当はホルン、人数いるんですよね～。まったく、東先生の強引さにも参ったもんです」
　すると、部室から「ハックション！」という声が聞こえた。どうやら恭一がクシャミをしているようだ。
「あ、先生部室にいたの忘れてた」
「まぁいいじゃないですか。それで、続きなんですが……人数、最低でも４人はほしいですかね。といいますのも、音域が広いホルンですので、高音域担当のファースト、サードと低音域担当のセカンド、フォースと一人ずついることが望ましいんですよね。だから、４人はほしいとこです」
「来年はいっぱい後輩入れたいね」
「そうですね！　あ、すいません。ちょっと話ズレましたけど、以上でホルンの紹介おしまいです。ありがとうございました！」
「はーい！　ありがとう。では、次はトロンボーンさんです」
　慎也が一人だけで現れた。
「あれ？　１年生は？」
「吉山さんはなんか、ホラー映画録画しないといけないから今日は来れないって。徹ちんは塾で模試があるんだって」
「模試かぁ。俺たちもそろそろ考えないとなぁ」
「ちょっとぉ、部活に勉強の話持ち込まないで！」
「あー、ゴメンゴメン。えっと、トロンボーンの紹介でいいんだっけ？」
「うん。お願い」
「はーいよ！」
　慎也はトロンボーンと少しベルの大きなトロンボーンを用意した。
「えーと、これは普通のトロンボーンです。これ、この長～い部分はスライドっていいます。最大６０センチ！　だから、腕の長い人

には向いてる楽器ですね。１８世紀後半にオーケストラに加わるまでは由緒ある楽器だったとか。しかも、１５世紀からほとんど形が変わっていない楽器でもあるんです。そんで、ちょっとベルのでかいこのトロンボーンはバストロンボーン。バストロっていいますけど、これは少し音域が低く、チューバさんと一緒にお仕事したりします」

「ちなみに、バストロ担当はいるのか？」

「今のところ、徹ちんが担当」

「アイツ肺活量大丈夫なのか？」

「ちっこいけど、肺活量けっこうあるよ。５５００くらい？」

「すっげーな。ちっこいのに」

「まぁ拓真も頑張れ！　じゃ、トロンボーンは以上です」

「ありがとうございました～！　それじゃ、次はユーフォニウムさん」

春樹と愛実がオドオドしながら音楽室に入ってきた。

「あの～……実は、昨日楽器持って帰って俺、いま手元に楽器ないんだ」

「え？　もぉ！　昨日楽器紹介するから持って来てよってメールしたじゃない！」

「ゴメン！　その代わり、めぐの楽器使うからいいでしょ？」

春樹が手を合わせて二人にキラースマイルで問いかけた。由美子は思わず顔を赤らめて「しょうがないな～」と許可してしまった。

「あれ？　っていうか、二人名前で呼ぶような仲？」

拓真がふと気づいたように言った。

「しまった！　ゴメン、つい出ちゃった」

「春くんのバカ！　恥ずかしいじゃん」

「実は俺たち」

「付き合ってんの！？」

「ち、違うよ宮部！」

ふと視線を感じるので後ろを振り返ると、ドア越しに絵美がジー

ッと春樹を見つめている。
「俺とめぐは幼なじみなの！　ね、めぐ！」
「そうですよ宮部先輩！　私たち、別にふつうの幼なじみです」
「なぁんだ。そんなにアッサリ否定しちゃって。つまんないの～」
「おいおい、宮部。それより、早く紹介してもらえよ」
「はぁい。では、どうぞ！」
「えっと、これはユーフォニウムといいます。でも、一般的にはユーフォニアムと発音されたり表記されることが多いです。読みはどっちでもＯＫみたいですけどね。はい、次めぐどーぞ」
「はい！　それで、ユーフォニウムは男声に一番近い楽器です。また、メロディ、伴奏、裏メロなんでも担当する万能楽器。ユーフォニウムの親戚的な楽器として、アルトホルン、バリトンっていうのもあります！　チューバと音域は近いですが、やわらかい音色が出るので要注目ですよ！」
「以上です！」
「はーい、ありがとうございました。それでは本堂、チューバの紹介どうぞ」
「はいよ。伴奏楽器です」
「……。」
「以上」
「何よそれ！　もうちょっとわかりやすい説明をしてよ！」
「わかりやすいじゃん。伴奏」
「あー！　もう！　話になんない！　みーやん、なんとかして！」
「え!?　俺ですか？　俺、弦バスの話しか無理なんですけど……」
「じゃあ先にみーやん、弦バスの説明しちゃっていいよ」
「あ、ありがとうございます～。えっと、弦バスって言われてますけど正確にはコントラバスという名前の、吹奏楽では珍しい弦楽器です。主にチューバでは出せない小さい伴奏、弾くようなイメージの……あ、この弦を弾く奏法をピッチカートって言うんですけど、こういう場面で演奏すると味の出る楽器です。なんか目立たないっ

て思われるかもしれませんが、アルトクラやバスクラ、バリサクと一緒で意外と外せない楽器です。また、ポップスではエレキベースに持ち替えすることがあります。こんな感じでいいですか？」

「ありがとう！　それじゃ本堂。今度はマジメに頼むよ？」

「はーい」

拓真は重い腰を上げてチューバを構えた。

「えっと、チューバは実は吹奏楽部の縁の下の力持ちです！　俺、一度練習中にムセたことあったんですが、その時に曲が止まったことあったんです。それくらい、チューバって大事な楽器なんですよ～。最長で9メートル以上にもなるんで、肺活量が必要です。だからといって、女の子にできないとかそういう意味じゃないです。マウスピースが大きい分、他の金管楽器に比べて音はなりやすいですが、やっぱり肺活量がいるので。それから高音域を出そうとしたら唇の周りの筋肉が必要です。吹いていないとすぐに弱って、高音域が不安定になります。金管楽器では音域が一番低く、見た目も十分迫力があります。１９世紀に誕生したんですが、今でも形は統一されておらず……」

「ね、ちょっと！　長すぎる！　その辺でストップ！」

「なんでだよ～。いいじゃん、気合い入ってきたんだから」

「私はいいけど、入口見てみなよ」

拓真が入口を見ると、美里が額に血管を浮き上がらせて足を床に何度もパタパタと打ちつけている。

「うぉ、怖ぇ！　わ、わかった。またの機会に続きは！」

「えー、それではパーカッションさん、どうぞ！」

「待ってましたー！　みんなー入って！」

すると洋之がティンパニとシンバルを、恵梨が小物楽器を、優が鍵盤楽器を、あずさが太鼓類を持って入ってきた。

「やっぱ数が多いね」

「うん！　じゃ、まずヒロくんから」

「ウイース。えっと、ティンパニは打楽器ですがメロディを奏でる

ことも十分可能です。また、インパクトをつけたいときにはスパイス的なイメージでもピッタリの楽器です。それから、シンバルはクラッシュシンバル、サスペンドシンバルなど用途によって使い分けます」

「はい！　続いて恵梨ちゃん！」

「はぁい！　小物打楽器、たっくさん用意しました！　名前だけご紹介になりますが、ウインドチャイム、トライアングル、ウッドブロック、アゴゴベル、カウベル、カスタネット、タンバリン、クラベス、カバサ、鈴が代表的なものです」

「ありがと！　そんで優っち」

「はい！　まず、マリンバという大型の木琴です。それからシロフォン。これらは発祥地と音域がそれぞれ異なります。それからビブラフォン、メタロフォン、グロッケンシュピールというのが鉄琴になります。ビブラフォンはその名のとおり、ビヴラートを効かすことができます。グロッケンシュピールは通常、グロッケンと呼ばれますね。ビブラフンはこのグロッケンから派生した楽器です。その他、チェレスタ、チャイムが鍵盤楽器としては挙げられます」

「では！　最後にあずさちん」

「ハーイ！　太鼓類も豊富ですよ。バスドラム、スネア、トムトムがあります。バスドラムもスネアもマーチング用がありますし、トムトムも大きさが様々で、その大きさによって音色が少しずつ違います」

「っというパーカッションの紹介でした！」

「はーい！　ありがとう！」

「では、以上で楽器紹介はおしまいかな？　ずいぶん長くなったみたいだけど」

「誰のせいなのよ」

「俺！？」

「そーよ！　チューバの説明が長すぎるの。まったく、これも作者の横暴？」

「……まただ。何言ってんの、宮部」
「ま、気にしない気にしない！　じゃあ今日はバカップルがいないから私たちで終礼するよ」
「ほーい」
「先行ってて。私、ちょっと用事あるから」
「あ、そうなの？　んじゃ」
拓真が出て行ったのを見送ってから、由美子は金管楽器と打楽器が目立つ曲を書いた模造紙を黒板に貼って、拓真の後を追った。

＜金管＆打楽器が目立つ曲＞
トランペット　♪　ジャパニーズグラフィティー１１～刑事ドラマ～（ニューサウンズインブラス２００６）

フリューゲルホルン　♪　高貴なるぶどう酒をたたえて（アンサンブル曲）／ハウルの動く城メドレー（ニューサウンズインブラス２００４）

ピッコロトランペット　♪　Ｍａｓｑｕｅ（マスク）（吹奏楽オリジナル）

トロンボーン　♪　「スパイス・ガールズ」のヒット・ナンバーより（ニューサウンズインブラス９８）

ホルン　♪　道祖神の詩（２０００年度全日本吹奏楽コンクール課題曲）「もののけ姫」メドレー（ニューサウンズインブラス９８）

ユーフォニウム　♪　Ｔｈｅ　Ｓｅｖｅｎｔｈ　Ｎｉｇｈｔ　ｏｆ　Ｊｕｌｙ（吹奏楽オリジナル曲）／ディズニーメドレー３（ニューサウンズインブラス９４）

チューバ　♪　ジャパニーズ・グラフィティ　～G．S．コレクション～（ニューサウンズインブラス９４）／チューバ吹きの休日（吹奏楽オリジナル曲）

弦バス　♪　イーストコーストの風景より3．ニューヨーク（吹奏楽オリジナル曲）／グレン・ミラー・メドレー（ニューサウンズインブラス９６）

ティンパニ　♪　エル・カミーノ・レアル（吹奏楽オリジナル曲）／ぐるりよざより3楽章～祭～（吹奏楽オリジナル曲）

スネアドラム　♪　をどり唄（２０００年度全日本吹奏楽コンクール課題曲）／ユーロビート・ディズニーメドレー（ニューサウンズインブラス２００１）

バスドラム　♪　プスタより４楽章（吹奏楽オリジナル曲）

タンバリン　♪　プスタより1楽章、3楽章（吹奏楽オリジナル曲）

グロッケン　♪　Ｔｈｅ　Ｓｅｖｅｎｔｈ　Ｎｉｇｈｔ　ｏｆ　Ｊｕｌｙ（吹奏楽オリジナル曲）

シロフォン　♪　道祖神の詩（２０００年度全日本吹奏楽コンクール課題曲）

チャイム　♪　ローザのための楽章（吹奏楽オリジナル曲）

クラッシュシンバル　♪　マーチ系統の曲全般

コラム☆８　楽器紹介（金管＆打楽器編）（後書き）

※この小説はコラム☆８時点では２００６年扱いです。なので、ホルンは現在世界一難しい金管楽器として実際にギネスブックに載っています（２００７年度認定）。

第１７１話　注目の部

「おっはよ～！」
陽乃が元気良く部室に入ると、既に２年生全員と１年生のほとんどが集まっていた。
「おはよう陽ちゃん！」
絵美と由美子が元気良く手を振ってくる。陽乃は一番に二人のところへ駆け寄った。
「おはよー！　ちょっと寒くなってきたね」
「特に朝夕がね～。あたしとしてはちょっと辛い時期が始まるなぁ」
由美子がため息を漏らした。そういえば去年の１２月頃から今年の２月頃までは由美子の遅刻が頻繁に見られた。どうやら冬場は朝起きるのが苦手なようだ。
「由美ちゃんは低血圧なの？」
「そういうわけじゃないけど、朝はなんかねぇ……」
「ちょっと～！　もうすぐ３年生になるんだから、しっかりしてよね～」
陽乃がバシバシと由美子の背中を叩く。かなり力が入っているようだ。
「痛いから陽ちゃん！」
「ゴメンゴメン！　あ、それよりそろそろ楽器出そうよ」
「あ、ホントだ。もう８時４０分だよ」
「あれ？　でも佐野くんが来てなくない？」
陽乃も部室をキョロキョロと見渡す。しかし、翔の姿がない。
「案外、もう音楽室で練習してるんじゃないの？」
由美子が部室と音楽室を繋いでいるドアを開けて見てみた。しかし、翔の姿はそこにもない。
「あれ？　やっぱりいないよ」
「おかしいな……。でも、あたしが今朝誘いに行ったときにはもう

家にいなかったんだよ」
陽乃と翔は毎朝一緒に来るのがもう習慣になっていた。しかし、今朝は綾音が「もうとっくに行っちゃいましたよ？」と出てきたのだ。そんな話は聞いていなかっただけに、ちょっとショックだった。
「そうだよね。いっつも陽ちゃんと一緒に来るハズなのに、今日は一緒じゃないなぁって思ってた」
「どこ行っちゃったんだろうね……」
「あたし、電話してみる」
陽乃は携帯電話を取り出し、翔に発信してみる。しかし、すぐに留守番電話サービスに接続されてしまった。
「どうだった？」
「ソッコーで留守電」
「ありゃま～。本当にどうしたんだろうね」
由美子が陽乃の頭を撫でながら呟く。陽乃はハァ～とため息を漏らしてから「ま、そのうち来るよ！」と言って楽器を出しにロッカーへ向かって歩き出した。
しかし、結局9時になっても翔は現れなかった。
「来ないね……」
陽乃は心配そうに時計を見上げる。
「寝坊ってわけじゃないんでしょ？」
由美子がロングトーンをいったん止めて同じように時計を見ながら陽乃に聞いた。
「うん。妹さんが出てきたから、家は出てると思う」
「おっかしいよね。部長なのに連絡取れないってのも」
すると、同じくらい心配そうな顔をした順平が陽乃たちのところへやって来た。
「あの、永井先輩が遅刻とか連絡聞いてませんか？」
「え？　雪ちゃん？」
「はい。来てないんですよ。連絡も特に入ってないですし」
由美子と陽乃は顔を見合わせた。

「おかしいなぁ。雪ちゃんも連絡ナシで遅刻だなんて」
「……。」
陽乃には翔と雪子という組み合わせが不安でならなかった。なんとなく事情を知っている由美子はすぐに「大丈夫よ。たまたまだろうから」と声をかけた。
「ありがと」
少し元気がなさそうな陽乃を見つつ、由美子は佐野くんのバカ、と心の中で呟いた。と、そのとき。順平、陽乃、由美子の耳に聞き慣れた声が聞こえてきた。
「違う違〜う！　そこはもっと可愛らしくいかないと！」
由美子がバッとそちらを見る。
「ねぇ、今の雪ちゃんの声よね？」
「間違いないですよ」
そして、一人イントネーションが違う男子の声。
「そんなこと言うたって、もうこの衣装着てたら笑顔とか作る余裕ないねんもん」
「瀬戸くんも河内さんも頑張ってるのに、部長の佐野くんができないはずない！　はい、もう1回！」
恐る恐る音楽室の窓から覗くと、技術室の前で雪子と翔がダンスの練習をしていた。CDデッキからはユーロビート・ディズニーメドレーが流れている。
「やだ、あの二人まだダンスの練習してる」
由美子が翔の格好を見て半笑いになっている。
「っていうか、こんな誰からも見える場所であんなプーさんの衣装着せられて……佐野先輩もかわいそうですね」
順平もまだ見慣れないようで、笑いをこらえているのがわかる。
陽乃は昨日のシーンが蘇りそうで既に座っておなかを抱えている。
すると部室から慎也が「おーい！　そろそろ音出ししないと時間ないぞ〜」と二人を呼んだ。
「あ、そうなの？　やだ！　もう9時過ぎてるじゃん！　佐野くん、

急いで帰ろう！」
雪子が急に走り出したので翔も後を追う。
「うわ、ちょっと待てよ……うわっ！？」
慌てて走り出した翔はつまずいて思い切り転んでしまった。
「きゃー！　ちょっと翔！？」
陽乃も思わず叫んでしまう。
「あー……大丈夫大丈夫。怪我はないから……あぁ――！？」
「どうしたの……あ――！」
戻ってきた雪子も翔を見て悲鳴を上げた。
「どーしたんですかー？」
叫び声を聞いて眠そうな声を出しながらみゆきが窓から顔を覗かせた。
「い、衣装が……」
「破れてしもた」

「うわ～……こりゃまた派手に破ったな」
穴の開いた両膝の部分を見て、拓真が呆然とする。
「ゴメン……。オレの不注意で」
「ううん。あたしも急いで走り出したのが悪かったし」
まるでこの世の終わりが来たかのような顔をしている翔に、部員たちは次々と声をかける。
「それより、早く縫い付けないとマズいですよ」
「じゃあ光瑠、縫ってよ」
はるかがドンドンと光瑠の横腹をつついた。
「私は無理！」
「お前なぁ……ダメなのに縫い付けなきゃとか言うなよ」
優輝が呆れた顔で光瑠を見つめる。
「何よ！　だったら瀬戸くん縫ってよ」
「えぇ！？」
「男の子でも家事ができなきゃダメな２１世紀なのよ！？」

「光瑠。それは自分ができるようになってから言いなよ」
もうこれ以上言うことがないというような顔をして、はるかが呟いた。
「どうする？　まだ午後1時の本番までは時間あるよ」
陽乃がゴソゴソと棚で裁縫針などを探しながら誰に言うでもなく言った。
「でも、10時から開会式だから座らないとダメなんだよ？　もう9時半だし……」
美里は悔しそうに時計を見つめた。
「誰か一人残っておくとか」
「それはダメだろ、春やん。いちおう出席取られるし」
「そっか～……」
「春やんなら小さいしわかんないかもしれないけど」
「拓あん！」
「はいはいはーい！　ちょっといいですか！？」
そう言って部員たちの間に割って入ってきたのはみゆきだった。
「み、みゆちゃん？」
「この裁縫道具、私の担任の岩村先生から借りて来ました！　私に任せてください」
陽乃や翔が呆然とするそばで、みゆきはあっという間に破れた膝の部分を縫い合わせてしまった。
「どうですか？　これでいけそうですか？」
「佐野くん、穿いてみて」
「わかった」
翔は慌てて手洗い場に駆け込み、すぐに穿いて戻ってきた。
「どうですか？」
「バッチリや！」
衣装を着た翔を見るなり、また部員たちは大笑いしだした。
「なんやねん！　やっぱり出るのやめるぞ！？」
「冗談よ、冗談！　かわいいから、翔！」

陽乃の言葉に翔はますます真っ赤になった。
「何言うとんねん！　男がカワイイとか言われても嬉しくない！」
「そんなことねーぞ、翔。春やんなんかしょっちゅうカワイイって言われてる」
「拓あん！」
春樹がいよいよ怒り出した。
「それなら優っちだって負けてないよね～」
「ヒドいですよ、田中先輩」
優が美里のツッコミに泣きそうな声を上げた。
「あ、ヤバい！　もう9時45分やぞ！？」
「うそ！？　みんな急いで！」
部員たちはバタバタと音楽室を出て体育館へ向かった。既に生徒たちはほとんど集まっている。
「お～、吹奏楽部か？」
野球部の真鍋先生が入口で翔たちを見るなり声をかけてきた。
「すんません！　トラブルでちょっと遅なって」
「まだ時間あるからな～落ち着け。それより、今日演奏するんだろ？」
「あ、はい！　明日も10時半から演奏します」
「そうか。楽しみにしてるぞ」
「ありがとうございます！」
体育館で部員たちは自分たちのクラスの席へと散っていく。雪子が2年A組の席に行くと、前に座っている倉橋（くらはし）　圭人（けいと）が雪子に声をかけた。
「おはよ、永井さん！」
「あぁ、おはよう倉橋くん」
「息荒いね」
「遅刻ギリギリだったもーん」
「アハハ！　それよりさ、吹奏楽部1時からでしょ？　僕、絶対聴きに行くからね！」

「本当!?」
「うん！　こないだ、マーチングだっけ？　あれ見てから吹奏楽部のファンになった」
「嬉しい！　絶対来てね？」
「うん！　約束する」
雪子は自分たちの部がだんだん、学内でも認知されてきていると知って少し嬉しくなった。本番まで、あと3時間。

第172話　もっとドキドキ

「ほぇ～……意外。ナナコウって広いんやなぁ」
午後0時30分。七海高校の門の前で立っていたのは佐野修平、岩切翔平、濱口優衣の3人だった。翔平は意外と広かった七海高校の校庭を見てため息を漏らす。
「ホント。公立のわりに綺麗やん」
修平もこれには意外だったようで、翔平と同じようにため息を漏らす。しかし、七海市で生まれ育っている優衣にとってはこれが普通のようだ。
「七海市では公立も私立も同じような感じで校舎も校庭も建ってるよ」
「えぇ!?」
翔平と修平が同時に声を上げた。さらに優衣は続ける。
「それだけじゃないよ。最近、他の高校で工事始まってるでしょ」
「うん」
「バリアフリー化の工事してるてね。公立高校から優先で始めるんだって。基本的に私立は援助のみになるんだけどね」
「へぇー！　七海市って進んでるんやな！」
この神奈川県七海市は、他の市町村と比べてもかなり教育現場が恵まれている。まず、私立と公立で差が生まれないよう、七海市教育委員会では公立高校の改築などを進めてきた。2000年度から始まった改築は、2004年の七海高校で最後だったという。つまり、七海高校は市内で最も新しい高校になる。
「それとね、今日なんで休みなのかわかる？」
そう。風見台高校は今日、平日にもかかわらず休みなのだ。
「そういえば……アレやんな。創立記念日でもないし」
「なんやろ。改築記念日？」
「残念。風見台は改築してません」

「う〜ん……」
「実はね、七海市の高校ではそれぞれ私立も公立も提携して、文化祭とか体育祭とかのときにお互いの高校の見学ができるようになってるの！」
「へぇー！　そんなんできるんか？」
修平が初めて知ったようで、本当に驚いた顔をしている。
「そう！　それで、七海高校と風見台高校が提携してるから、こうして今日堂々と七海祭を見学できるってわけ。あとね、中学も提携してるから……」
「ほら〜、お母さん早く早く！」
「ちょっと待ちなさいよ！　ほら、朝倉さんも早く早く！」
「お母さんが化粧に時間かけすぎなのよ！」
修平たちが振り返ると、綾音、友美子、夏樹、由利の４人がいた。
「こんにちはー！」
修平が笑顔で綾音と友美子に挨拶をすると、彼らもその姿を確認すると挨拶を返す。
「あらー！　修平くんに翔平くん！　今日は来てくれたの？」
「はい！　なんか提携がどーたらこーたらで休みなんです」
翔平が説明をするが、先ほどの優衣の説明は９割ほど活かされていない。優衣がヤレヤレという表情でため息をつくが、どうやら友美子たちもそれほど気にしていないようだ。
「ねぇ、せっかくだから一緒に観ない？」
由利が翔平たちを半ば強引に体育館へ引っ張っていく。有無を言わさないのは少々陽乃もにているかもしれない。翔平たちはそのまま体育館へと入っていってしまった。
「ゲッ！」
舞台裏に待機していた翔が、アルトサックス片手に突然声を上げた。
「どうしたの？」
「オレのオカンが体育館に入ってきた。綾音つきや」

「いいじゃなーい！　息子の勇姿、観に来てくれたんだよ」
「あんなにもみっともない姿、見せられへんわ！」
「でもいずれ見せるんじゃない」
「まぁそうやけど……」
フーッとため息をつく翔。陽乃は様子を見てみようと顔を覗いて見せたが、次の瞬間陽乃も同じような声を上げてしまった。
「うわぁ！」
「何やねん」
「あたしのお母さんと夏樹がいる！」
「うへーい！　オレと一緒やぁ」
翔がフザけた顔になる。陽乃が気に食わないようで、翔に食って掛かった
「なによー！　どっこいどっこいのクセに！」
「なんやねん！　先に言い出したんはお前やろが！」
ここが舞台裏と言うことも忘れて、二人は派手に言い合いを繰り広げる。周りの部員たちは「またいつものケンカが始まった」と苦笑いだ。
「っていうか、あの暗い客席をこんな遠くから見て誰が来たのかわかるんだね」
美里が同じように覗いてみるが、やはり見えない。
「なんか機能がオカシイんじゃないの、あいつら二人とも」
慎也がケラケラとおもしろそうに笑う。
「ホーント……あ、佐野修平くんと岩切さん、それに濱口さんがいるわ！」
「……お前も変わんないじゃん」
慎也が唖然としていると、美里のその言葉を聞いて翔が動きを止めた。
「えぇ！？　田中、いまなんて言うた！？」
「え？　だから修平くんと岩切さん、それに濱口さんが来てる……」
「なにぃ！？」

翔は慌てて客席を見てみた。すると、客席の中央辺りに向かって右から綾音、友美子、夏樹、由利、翔平、修平、優衣の順で綺麗に並んで座っている。

「うわぁ～……もう終わりやぁ」

翔はサックスを抱えたまま座り込んでしまった。

「えーい！　ウジウジしてたってダメよ！　ここは意を決して頑張るの！」

陽乃がペチペチと自分の頬を叩いて気合を入れた。

「次、吹奏楽部さん！　準備お願いします」

七海祭運営委員会の生徒に呼ばれて、吹奏楽部の面々が舞台へ上がる。幕は閉まっているので緊張感はまださほどではない。

「幕、上げま～す」

運営委員会の声。それからすぐに幕が上がり、ざわめきとたくさんの生徒、観客の姿が目に映った。一気に陽乃の緊張度が高まる。さらに、生徒席が今日は前列に来ているため、陽乃の知った顔がたくさんいるのだ。森本涼平、矢崎菜緒、去年クラスが一緒だった伊波冬真、江嶋美咲、宇多津唯などの友人たちが陽乃の顔をしっかりと捉えたようで、ニヤニヤ笑ったり「陽乃～」と小さく声を掛けて手を振るなど様々な反応を見せた。

（し、知ってる人がいるとコンクールより緊張するんだけど……）

陽乃の手が震える。知った顔がいないほうが陽乃にとっては緊張しないのだ。舞台から客席の距離も、コンクールのときとは比べ物にならないほど近い。

恭一が舞台へ上がってきた。パーカッションの面々は陽乃以上に緊張が高まっていた。あずさの顔は真っ青だ。

「ちょっと、あずちゃん。大丈夫？」

恵梨が心配になって声をかけるが、既に意識がどこかへ飛んでいっているようで恵梨の声は届いていない。

「優、優」

洋之に呼ばれてようやく、優が楽譜を上下逆さまに置いてあるこ

とに気づいた。
「あぁ！　このままじゃ演奏できないね」
「お前大丈夫か？」
「だ、大丈夫だよ大丈夫」
しかし、楽譜を戻そうとする手が震えている。
「深呼吸しろ、深呼吸！」
「スー、スー……ゲホッ、ゲホゲホゲホ！」
「……。」
むせ返る優を見て、洋之は不安を隠しきれずにいた。
「それでは、吹奏楽部の演奏をお聴きください」
放送部員の声が掛かると同時に、スポットライトが部員たちにパッと当たった。陽乃の心臓が飛び跳ねそうなほど高鳴りだした。
「あの子……コンクールより顔が引きつってる」
由利が心配そうにハンカチを握り締めた。夏樹は「まぁ、姉ちゃん基本的に雰囲気で乗り越えていくから大丈夫じゃない？」とあっけらかんと言ってしまった。
恭一が全員を見渡す。胸に手を当て「落ち着いて」と言ってくれたのがわかった。
「皆さん、こんにちは。私たちは吹奏楽部です。創部間もない部ですが、本日皆さんの前でこうして演奏できること、嬉しく思います」
司会のみゆきが冷静に司会を進める。できることなら引っ張ってほしいと陽乃は思っていたが、みゆきはアッサリ司会を終えてしまった。みゆきはサッと自分の席に戻り、クラリネットを構える。
恭一の指揮棒が上がった。陽乃は震える手で、楽器を構える。そして、恭一の指揮棒が降りると同時に、体育館に七海高校吹奏楽部の音が響き渡った。

第１７３話　Ｅｎｊｏｙ！　七海祭（１）（前書き）

この七海祭における座席配置図を設定しております。
コチラ↓ｈｔｔｐ：／／１５０．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ５２５／

第173話　Ｅｎｊｏｙ！　七海祭（1）

木管楽器の上昇音系の後に、恵梨の叩くシンバルが響き渡る。『王様のレストラン　テーマ』の始まりだ。クラリネットは普通のバンドに比べて人数は少ないが、音色に自信があるのでその部分をしっかりと活かしていく方針にしている。主題の後に、木管楽器の緩やかかつ荘厳なメロディが続く。時たま、トランペットが鳥の鳴き声のように印象的な音を体育館中に響かせる。再び主題が響く。今度は美里の叩くシロフォンが堅い音を立てて、素早く鋭く飛んでいく。

少し短調の雰囲気を醸し出す部分では、フルートとクラリネットが交互にメロディを奏でる。そして繰り返しの部分ではユーフォとサックスが合いの手を入れる。この曲は木管をどのように聴かせるか、という部分に恭一がこだわった。いわば、ここで吹奏楽部の第一印象が決まるのだ。

少し高い位置に座っている慎也からは、見覚えのある顔が見える。自分が楽器を吹いている姿をこんなに間近でクラスメイトや先生に見られていると思うと、なんだかむずがゆい気分になる。それとは対照的に、拓真はチューバのおかげで顔が隠れていたのでほとんど緊張せず、いつもどおり吹いていた。

シンバルは要所要所で響き渡るのだが、小柄な恵梨には少々大変な楽器だった。しかし、彼女は諦めることなく練習を続けた。というのも、遠くにいる友人が支えになっているからである。

愛媛県　常套中学校吹奏楽部に在籍する中井　美奈とは「ピティナ国際ピアノコンクール」で知り合って以来、親しくしている。恵梨がシンバルの練習で筋肉痛になったとき、半べそをかきながら電話したのはここだけの話である。普段おっちょこちょいで明るい恵梨が珍しく泣きべそをかきながら電話をしてきたので、美奈はかなり驚いた。

「ど、どうしたんです先輩？」
「シ、シンバルが……あたし、全然叩ける自信がなくって……どうじよぉ～」
もはや文法も何もない日本語となっているが、美奈はいつもどおりの勝気な口調で続けた。
「まったく～、先輩っていつもそうですよね！　自分がちょっと物事に詰まるとすぐ人に頼っちゃうんですから。もちろん、頼るのが悪いわけではないですけど、自分で努力してみてます？」
「う……う～ん……どうだろう」
恵梨は固まってしまった。そもそも、叩ける自信がなくなったのは、重いシンバルを支える自信がなくなったから。それだけである。
「答えが返ってこないってことは、先輩にはまだ努力するべきトコがあるってことですね！」
美奈は的を射た答えをズバッと言い放った。これには恵梨も太刀打ちできない。
「……ごめん。弱気だったね、あたし。もう少し頑張ってみる。ありがと、美奈ちゃん」
「いえ！　もし泣きたくなったらまた連絡くださいね！」
美奈は笑いながら言う。恵梨も笑いながら、七海祭でうまくいったら連絡する！と約束して電話を切った。
それから練習を重ねたが、微妙にタイミングがズレるなどしてしょっちゅう恭一に叱られた。しかし、美奈に電話して以来、恵梨は涙一つ見せず日々、シンバルを練習してきた。そして今日。現時点では一度もミスをしていない。いよいよ曲はクライマックス。恵梨は気合いを入れて、最後の部分に向かって進む曲に耳を集中させ、最後のシンバルを見事に叩ききった。その後、洋之のティンパニがチューバと共に音を立てて曲の終わりを告げる。
ワーッと拍手が沸いた。恭一が立つ指示を出し、全員が一度立つ。そして司会はみゆきにはるかを加えてしばらくの間、トークが始まった。

「改めまして、皆さん、こーんにちはー！」
みゆきとは対照的に、実に元気いっぱいのはるか。ドッと全校生徒から笑いが起きる。
「あれれ？　笑うトコじゃないですよ～！　吹奏楽部でーす。今日は皆さんに楽しい午後のひと時を過ごしていただけるよう、いっぱい練習しましたので、ぜひぜひ楽しんで和んでいってください！　それでは、みゆ、次の曲の紹介お願いしま～す！」
みゆきが背の高いはるかに隠れて見えていなかったので、彼女は「ンンン！」とわざとらしく咳払いをして前へ出た。そこでまた１年生あたりから笑い声が沸く。
「それでは、次に皆さんをジブリの世界へご招待いたします。曲名は『アニメメドレー　久石譲作品集』です。『天空の城ラピュタ』より『君をのせて』、『風の谷のナウシカ』より『鳥の人』、『紅の豚』より『帰らざる日々』、『となりのトトロ』より『風のとおり道』の４曲をメドレーにいたしました。きっと耳にしたことのある曲があると思います。また、ソロやソリがたっくさん！　ぜひ、そちらにもご注目ください！」
二人がペコリとお辞儀をすると、再び拍手が沸いた。そして恭一がお辞儀をする。指揮棒がそっと上がる。それは曲の始まりが静かな雰囲気であることを暗示していた。
クラリネット、フルート、グロッケンなどの優しい音色が観客を包み込む。そして金管群の伸ばしがクレシェンドをかけて、いったん曲が停止したかと思うとテンポが上がった。いつのまにか前に立っていた健之佑、誠、沙希の３人がソロをそれぞれ奏でる。そちらに注目している間に、翔、さゆり、はるか、駿の４人が恭一の右手に立っていた。
翔がソプラノサックスを奏でるのは初めてだった。ここはサックスアンサンブルのような形態で演奏が進む。しかし、バリトンサックスがいないため、駿にサポートしてもらってこのような形で行うことになった。

「はぁ～……あの子、あんなまっすぐのサックスも吹くんやね」
友美子がその艶やかな音色を聴いて、思わずため息を漏らした。
「なぁなぁ、あのまっすぐなんもサックス？」
綾音が夏樹に聞いた。
「うん。あれはソプラノサックスっていう、アルトサックスより音が高い楽器。すごいなぁ、さすが佐野さん。ビヴラートがかかってる」
夏樹は翔の音色に惚れ惚れしているようだ。確かに、綾音も自分の兄が出している音とは思えないほどのソプラノサックスの音色に聴き惚れてしまっていた。
そして、洋之のサスペンドシンバルの後は一気にメロディが盛り上がる。ホルンが裏メロディを奏で、木管を支える形になっている。トロンボーン、トランペットの打ち込みの後はフルート系のメロディ。それを引き継ぐホルンとクラリネット。そしてもう一度サスペンドシンバルが体育館を包み込み、トランペットが主旋律を奏でる。サックスも加わり『君をのせて』が終わりを告げる。同時に優のバスドラムの強烈な音が響き、あずさがクラッシュシンバルを思い切り叩く。『鳥の人』の始まりだ。美里はチャイムを始めて叩いた。思いのほか音が飛ぶので、一番驚いているのは美里である。
この後のメロディはフルートは音程が悪く、何度も恭一に怒鳴られた場所であった。そこを無事、何事もなく通過して佳菜と由美子はホゥッと思わずため息を漏らしてしまった。どこか寂しげな印象を与える曲調が突然、木管のトリルとバスドラムの音で一変した。そしてフルートのソリ、雪子と順平のソリが終わって曲がかなり静まり返った。
陽乃がそこでスッと立ち上がる。演劇部員が操作するスポットライトが陽乃をピンポイントで照らした。『帰らざる日々』のソロだ。
「すっごい……カッコいいよ、陽ちゃん」
菜緒は手を合わせて、輝くトランペットを持った陽乃に羨望に近い眼差しを寄せた。ソロが終わった瞬間、拍手が沸く。陽乃は深々

と礼をして着席した。再びフルート系の音色が聞こえる。恭一曰く「夕暮れを想起させる」音色が求められる部分。そこを通過すると、フルートとユーフォニウムのソリが始まる。フルートは佳菜。ユーフォニウムは愛実だ。ここはまったく音域の違う楽器がソロをそれぞれ吹くため、邪魔をしない音色をそれぞれ研究したつもりだ。どこからともなく「めぐー！」、「かなー！」という声が聞こえた。愛実がそっと引いた後は、完全に佳菜ひとりの世界となる。静かに奏で始めたグロッケンの音色の後に、拍手が沸く。そしてチャイムの音色と同時に立ち上がったのは春樹だ。

翔が一度、美奈と同じ常套中学校吹奏楽部に在籍する幼なじみの竹林（たけばやし）　泰徳（やすのり）にコンクールでの七海高校の演奏を聴いてもらったところ、「ユーフォの音色が堅いよね」という指摘があった。その後、何度か春樹の音色を録音したＭＤを泰徳に翔を通じて送ってもらい、何度も音色に対して間接的だが指導をしてもらった。年下だからとか関係ない。明らかに泰徳のほうが自分より知識も技術も上だと春樹は認識している。

風のとおり道。タイトルをよくイメージして。堅い音で吹いたら、風のイメージが台無しになる。

泰徳にもらったアドバイスを反芻し、ようやくイメージをつかめた気がした。その音色を、体育館中に響かせる。そして、春樹のソロが終わると同時に父兄席のどこからか「ブラボー！」と声が聞こえた。

春樹は感極まってしばらく呆然と立っていたが、思い出したように深々とお辞儀をする。すると、拍手が一気に沸いた。ホルンの印象的な音が響く。トロンボーン、そしてフルートに続いていくメロディ。バスドラムは優が代わって叩いている。このバスドラムも欠かせないものだった。それだけに、体の小さな優は苦労したが、全身で音を表現している。

そして、いよいよフィナーレだ。金管全員でロングトーンをし、木管は細かい音を吹く。そしてバスドラムとチューバの打ち込みが

入り、カーン！と美里がチャイムを鳴らす。音量が一気に落ちて、金管楽器のクレシェンドからデクレシェンドが効果的に響き、静かに曲が幕を降ろした。

しばらく何も音が聴こえなくなった。そして、その沈黙を破るように拍手が沸き起こる。『アニメメドレー』は全員のソロが成功するという、初めてのパターンを成し得た曲でもあった。

（泰徳……サンキューな。おかげで、みんな成長してんで）

翔は春樹を初めとする、ほとんど関係のないメンバーにアドバイスをくれた泰徳に心の中で、感謝していた。

第174話　Ｅｎｊｏｙ！　七海祭（2）

「はいっ！　アニメメドレーでした！　いかがでしたでしょうか？」

拍手が返事の代わりに帰ってくる。みゆきとはるかはカワイらしくペコリとお辞儀し、次の曲紹介に入る前に顔を合わせた。それを合図に、照明が落ちて暗くなる。スッとみゆきがうまくはるかの傍を離れ、舞台裏に消える。優輝、愛実、沙希、翔、駿の5人も同時に移動を始める。

「えー、では！　ここで少し皆さんにも楽しんでいただけるよう、クイズを5題も出題しちゃいまーす！」

すると1年生の席から「5問なんて多いぞ、西嶋～！」と男子の声が聞こえた。

「はいそこ、うるさーい！　これはあたしの企画ではなく、企画委員の永井先輩と宮部先輩が考えてくれましたー！」

再び同じ場所から「だよな～！　西嶋がそんなの考えられるハズがない！」という声と共に笑い声が飛んできた。

「うるさいですよー！　後で覚えておきなさい！　えぇ～、では皆さんに立っていただいて、クイズをあたしが出します。そして、選択肢がいくつかありますので、そこから選んでこうだ！と思うものの所で挙手してください。正解者はそのまま立つ、不正解者は座ってください！　では、第一問目いきまーす！」

実はこのクイズの間、ユーロビートの演出のために翔たちが着替えをしているのだ。

「おい！　オレのプーさんどこ行ってん！」

「もう！　だから暗くなる前にしっかり場所確認しといてって言ったじゃない！」

沙希がアチコチをひっくり返す翔に思わず怒鳴ってしまった。その声が思い切り体育館まで響いている。

「プーさんって何だよ、佐野～！」

「ゲッ！　駿、駿！　ドア開けっ放し！　閉めて、閉めて！」
駿が開けっ放しになっていたドアを慌てて閉める。暗い舞台裏ではなかなか動きづらいので、ドアを開けないと着替えがしにくい。
「え～、何やら騒々しいですが、クイズを始めます！　問題はすべて、スタジオジブリの映画に関するクイズです！」
はるかは紙を取り出してさっそくクイズを始めた。
「第１問！　今回演奏したアニメメドレーの中では４曲演奏しましたが、その曲の中に含まれていない映画はどれでしょう！　さっきの司会ちゃあんと聞いていたらわかりますよ～。Ａ：となりのトトロ　Ｂ：もののけ姫　Ｃ：紅の豚　Ｄ：天空の城ラピュタ　Ｅ：風の谷のナウシカ！　さぁ、考えてください！　時間は３０秒！」
夏樹と綾音は司会のセリフを思い出していた。
「ねぇ、もののけ姫はなかったわよね？」
「うん。メドレーの順では名前出てないけど、多分なかったはず」
友美子と由利も一緒になって考えている。しかし、話の路線がだんだんズレてくる。
「懐かしいわねぇ。主人とよくジブリ映画は見るんよ」
友美子が顔を赤くしてため息を漏らす。
「羨ましい！　ウチなんか仕事ばっかりで全然家族サービスもないしね」
由利はハァ～とため息を漏らしたが、どうもニュアンスが違う。
「ねぇお母さん。話がズレてるわよ」
「あぁ、ゴメンね。朝倉さん、私たちはどれにします？」
「デパートのセール品選んでるんじゃないんだから」
「そうねぇ。これはとりあえずＢでしょ」
そして順番に答えのアルファベットがはるかにどんどん読まれる。
夏樹たちはＢのところで立ち上がった。
「これは正解者バッチリ多いですね！　正解はＢです！」
その頃、舞台裏ではなかなか衣装のチャックが閉まらない愛実が小さな悲鳴を上げていた。

「アイタタタ！　せ、先輩！　腕がバグりそうです！」
「つりそうって言いなよ！　バグるとか女の子が言わない」
沙希が慌てて愛実の後ろに立つ。
「チャックが咬んでるじゃない！　慌てて閉めるからこういうことになるの」
沙希は至って冷静だが、慌てる愛実がバタバタ動くのでなかなか元に戻らない。
「ちょっと！　動かないで」
「ねぇ、まだ終わんないの？」
駿が着替えている最中の舞台裏に突然顔を出した。
「キャ――！　信じらんない！　着替え覗くなんてバカじゃないの！？」
みゆきが思い切り体育館シューズを駿に投げつけた。
「アホ！　ちゃんと呼んでくれる言うたやろが！」
翔が慌てて駿を無理やり外に連れ出したので、体育館シューズは当たらずに済んだ。
「……。」
はるかが苦笑いしながら舞台裏に目を向ける。菜緒や涼平も爆笑している。一方の友美子と綾音は自分の息子（兄）が何か変なことをやっているのに気づき、顔を赤くしていた。
「え～、何やら舞台裏がテンパッておりますが、何をやっているのかはお楽しみに。それでは第2問！　スタジオジブリの映画で一番、興行収入がいい映画は次の4つのうちどれでしょう！？」
「おい、えぇか？」
翔がドア越しに沙希に聞いた。
「待って。あとみゆちゃんのチャックが閉まれば……よし！　いいよ、男子入って」
すると頬が赤くなった駿と翔が入ってきた。
「どうしたの、その頬」
愛実が半笑いになって駿に聞いた。

「佐野先輩にツネられた。ノゾキするアホがいるかって」
「ちょっと佐野くん。気をつけてよ」
沙希が耳打ちする。翔は「？」マークを浮かべながら沙希に聞き返す。
「何が？」
「関西弁のアホ？」
沙希はイントネーションがわからないらしく、首を傾げながら今度は翔に聞き返した。
「イントネーションが違う。アホ！や」
「アホ！はね、東京ではあまり聞かないからダメージでかいの。お願いだから、バカにしてちょうだい」
「バカ？」
「違う違う、バカ！」
「バカ！」
「ちょっと！　変なことやってないで早くしなよ！」
美里が「シーッ！」という表情をしながら彼らを呼ぶ。翔と駿は慌てて中に入って着替え始めた。
その頃、綾音は呆然としながら立ち尽くしていた。なぜなら、５００人近くいる観客のうち、５問目まで残っていたのがわずか９人だからだ。そして、そのうちの一人が綾音なのだ。
「ど、ど、どうしよう、あ、あたし、き、緊張し、してる、る、るんだけど」
「落ち着けよ、佐野。深呼吸、深呼吸」
綾音は夏樹の言うとおり、深呼吸をする。
「よ、よし！　ドンと来い！」
「それでは、最後のクイズでーす！　これはとびっきり難しいですよ～？　『天空の城　ラピュタ』でラピュタを狙う空賊（航空海賊）、タイガーモス号の女船長ドーラの子分５人にはそれぞれ国籍もキッチリ当てはめられています。次にあたしが言う５人のうち、実は４人はいない国籍の人です！　では、本当に当てはめられている国

籍の人1人はどれでしょう！？」
「えぇ～！？」
全校生徒からブーイングに近い声が上がる。この問題を考えたのは、何を隠そう、ジブリ大好き三宅　亮平である。亮平はその声に満足そうに笑っていた。
「A：アメリカ人　B：日本人　C：韓国人　D：ベトナム人　E：フランス人！　さぁ、時間は30秒！　さぁ、考えてください！」
「……どうしよう」
綾音が真っ青になった。
「全ッ然わかんない……」
「頑張れ佐野！」
「しっかりね、綾音」
「落ち着いて考えてね、綾音ちゃん」
「落ち着いてって言っても……」
時間ばかりが過ぎる。綾音は考え抜いた挙句「よしっ！」と呟いた。
「それでは、Aだと思う人！」
4人が立ち上がった。
「Bと思う人！」
「はいっ！」
なんと、Bは綾音一人だけだった。
「終わったわね……」
「Cと思う人！」
2人が立ち上がる。
「まともに考えたら、Bはないか……」
綾音がため息をつく。
「Dと思う人！」
1人が立った。Eはもちろん、ゼロだ。
「それでは、正解は……！」
綾音が座る気マンマンでいたが、予想外の言葉がはるかから返っ

てきた。
「そこの彼女！　あなただけでーす！」
綾音にピンスポットが当たった。全員から拍手が沸く。
「え？　え？　あたし！？」
「はい、あたしでーす！　はい、前へどうぞどうぞ！」
綾音は七海祭実行委員に連れられて、はるかのところに案内される。陽乃と目が合った。
（おめでと～！）
（ありがとうございます！）
目配せで二人は会話をする。ニコッと互いに笑い合った。
「それでは！　正解者のあなたにはプレゼントを渡します」
大きなトトロの人形が手渡された。
「きゃー！　カワイイ！」
綾音はギュウッと人形を抱きしめる。
「ここまで喜んでもらえるとは思いませんでした！」
はるかの一言で笑いがドッと起こる。
「はい、では名前をどうぞ！」
「はい！　あたし、この吹奏楽部の部長、佐野翔の妹、佐野綾音でーす！」
「えー！？」
その一言に、陽乃を除く全員から大声が上がった。はるかも驚きのあまり、マイクに大声を通してしまった。キーンという高音が体育館中に響き渡った。
「あたし、いま中3です！　絶対、七海高校に入学して吹奏楽部に入ります！　初心者ですが、朝倉先輩みたいに頑張ります！」
おぉ～、という声が聞こえる。
「何やお前！　なに調子乗ったことやってんねん！」
プーさんの格好をした翔が舞台裏から顔を出したが、姿が見える寸前に慌てて駿が押さえ込んだ。
「えーと、兄が騒々しいですが、頑張りますので！　ありがとうご

ざいました！」
拍手が沸く。陽乃も嬉しそうに笑っていた。
そしてクイズも終わり、いよいよ翔たちの踊りが始まろうとしていた。
「頑張るで！」
「オーッ！」
小声で翔、沙希、愛実、優輝、駿、みゆきが声を上げた。

第１７４話　Ｅｎｊｏｙ！　七海祭（２）（後書き）

クイズの出題に際して、ウィキペディアで「天空の城　ラピュタ」、「スタジオジブリ」を参考にしました。

第175話　Ｅｎｊｏｙ！　七海祭（３）

パッと照明が恭一を照らし出した。そして、大声を上げる。

「Ｉｔ'ｓ　Ｄｉｓｎｅｙ　Ｗｏｒｌｄ！」

同時にエレキベースとチューバ、バスクラリネットの低音が響く。小刻みに聞こえるのはあずさのドラムセットの音だ。金管楽器が旋律を奏でる。それに合わせて優輝と愛実がダンスを披露し始めると、ヒューッ！と声援が上がった。歌詞を歌いながらミッキーマウスマーチを踊る二人に全校生徒と保護者からの視線が注がれる。木管楽器がベースとなるメロディ。翔が抜けたアルトサックスはさゆりと麻綾の息がピッタリ合っているので、抜けても違和感なく聴くことができる。

少し雰囲気が変わったところでトランペットとトロンボーン、ユーフォニウムが立ち上がる。４つずつの下降系の音が並ぶここでベルの上げ下げを入れてみたのだ。３人ずついるトランペット・トロンボーンは前３つの音でベルを上げ、次の小節で下げる。それを４回繰り返すのだ。ユーフォニウムは２拍目と３拍目で同じことをする。そしてもう一度同じ動きを吹くのだが、そこでは音がオクターヴ上がるようになっている。その時にはベルを左右に振りながら中腰になる姿勢を取った。それがずいぶん可愛く見えるようで、１年生あたりから「かわいい！」という声が上がる。

再び主題へと戻る。そして管楽器がなくなってあずさのドラムセットと亮平のエレキベースだけが体育館に響き渡った。亮平は華麗にエレキベースのソロを弾きこなして、きちんと決めポーズまでこなした。

「りょーへー！」

クラスメイトから声が上がったので、亮平はニッと笑ってその方向に向かって手を振った。

『小さな世界』に曲が変わったところで木管楽器が立ち上がる。

ソリに近い感じだったので、演出係が立つように指示をしたのだ。
そしてそれをトランペットが引き継ぐ。もちろん、立奏だ。同時に沙希とみゆきが衣装を着て生徒席に飛び出したので、ますます声が大きくなる。
「いさむー！」
「アヤカー！」
「陽ちゃーん！」
３人の名前が呼ばれたので、陽乃たちトランペットパートは思わず全員が顔を見合わせて笑ってしまった。
次にやって来る曲は『ジッパ・ディ・ドゥーダ』。あずさがタムタムを勢い良く叩く。裏打ちでトライアングルを奏でるのは洋之だ。結構な音量が必要になるだけに、技術のある者がしなければ失敗に終わることもあり得た。しかし、洋之には朝飯前だ。
正直言って、あずさの手がそろそろ限界に来ていた。けれども限界を既に超えているような、ハイな気分になったあずさはノリだけでドラムセットを叩いているようであった。
（き、来た……！）
優は震える手でバチを握った。スネアドラムのソロがすぐそこに迫っているのだ。
（ヤ……ヤバい。手が……手が震えてる）
目の前には自分をいつもからかってくるクラスメイトが、いつものようにからかいの目を向けてくる。そしてはるか遠くには、きっと今日の演奏会を楽しみに初めて観に来た母、祖母、弟、妹がいるだろう。
ガクガクと震える手。それに気づいた美里が優の手を握った。
「大・丈・夫」
一言だけだが、単語ひとつひとつをハッキリと、美里は言ってくれた。一気に緊張がなくなる。
優は深呼吸をしてその瞬間を待った。演出係から聞いている。暗転して、優とあずさにスポットライトが当たると。

パッ！とスポットライトが当たった。
（当たって砕けろ！）
あずさの規則的なバスドラムの音があるので、ノリやすい。あずさがスネアドラムできっかけを作ってくれた。洋之と懸命に練習してきた成果を、優はわずかな時間だが全力で出し切るつもりで、全身全霊、スネアドラムに力を注いだ。
堅く、しかしリズミカルなスネアの音が体育館の隅にまで響いていた。あずさも乗ってきたようで、アドリブでタムタムなどを叩いている。その雰囲気に乗せられて、優も練習の時にはやったことなどないリズムを織り交ぜて演奏をした。これには美里と洋之も驚いて、目を丸くしていた。
（っし！）
叩き終える頃には汗が噴き出ていた。汗を拭き取る暇も与えず、拍手が沸き起こる。
「日高ー！　ヤベェぞ、カッコよすぎ！」
それはいつも優をからかってくるクラスメイトの声だった。優はバチを上げてそれに応える。
由美子と佳菜がソロを吹くところでスポットライトの位置が変わった。かわいらしいプーさんのメロディと共に、なんとも不恰好な二人が現れた。
「なっ、なにあれー！」
綾音と夏樹は我慢できず、爆笑しだした。
「ちょ、ちょっとよしなさい二人とも」
しかし、それを皮切りにあちこちで笑いが起きる。綾音と夏樹はゲラゲラと笑い続けるが、前から聞こえてきた声に一瞬耳を疑った。
「カケルー！　チャーミングだぞ！」
「！？」
綾音と友美子の顔が歪んだ。
「ちょ、いま、翔って……」
「げっ！」

綾音が悲鳴を上げた。紛れもなく、プーさんの衣装を着ているのは兄・翔であった。

「やだぁ！　恥ずかしすぎる！」

綾音は思わず目を覆った。翔は半分やけくそになって踊る。女子生徒から「佐野くんカワイイー！」と黄色い声が飛んでくるし、男子生徒からは「ヨッ！　プーさん！」とからかいの声が飛んでくる。しかし、もう翔には踊るのに必死でそんな声は届いていなかった。

そして再びミッキーマウスに戻る。ここで愛実、沙希、優輝、みゆきの４人も加わって全員で踊る。主題に戻り、エンディングへと続く部分。最後には美里のサスペンドシンバルが鳴り響き、あずさのバスドラムの一発で曲は終わりを告げた。その直後に沸く割れんばかりの拍手。翔は顔を赤くしつつも、何ともいえない満足感に包まれていた。

「はい！　いかがでしたでしょうか？」

はるかが少し出た汗をハンカチで拭いながら観客に聞くと、拍手で答えが返ってきた。

「きっとダンスをしていたメンバーはもっと暑いと思います。でも、痩せそうですね！」

ドッと笑いが起きる。暗転している間に、メンバーは制服のシャツの上に、演出係が作ったTシャツを着ていた。翔たちは衣装を脱いで自分たちの席に戻る。

「さて！　残念かもしれませんが、次で本日の吹奏楽部の演奏は終了となります！」

「えー！」という声が上がった。

「ありがとうございます。でも、皆様次第で1曲増えるかも？　ご期待ください。次は、『アメリガングラフィティー』です。曲順は、お手元の冊子をご参照ください」

菜緒が確認すると、あまり聴いたことのない曲名が並んでいた。

アメリカングラフィティー：悲しき片想い～恋の片道切符～オン

リー・ユー～ミスター・ベースマン～ヴァケイション

「どんな曲だろ。あたしでも知ってるのあんのかな」

菜緒は胸を膨らませて陽乃のほうを見た。陽乃は隣にいる彩香とクスクス笑いながら、恭一の指揮棒が上がるとすぐに真剣な顔になって楽器を構える。

曲の初めは由美子の緩やかなソロから始まった。今では完璧に暗譜までできるようになった由美子は、感情を込めて一つ一つの音を大切に奏でていく。そして恵梨がドラムセットでテンポを上げる。それから始まったのは木管楽器のメロディ。ここはサックスの色っぽさを前面に出すよう、恭一から指示があったので翔、さゆり、麻綾は色っぽい音色には自信のあるはるかから直接何度も指導してもらった。おかげで、ビヴラートの効いた、ちょっとエッチな感じすらするサックスの音色が完成した。

「すっげぇ！　俺、鳥肌立った！」

夏樹がその音色を聴いてゾクゾク震えていた。興奮して落ち着かないのは綾音も同じだった。曲の雰囲気が少しずつ変わる。恋の片道切符に変わったのだ。同時にトランペットが立奏を始めた。優の叩くグロッケン、フルート、サックスの打ち込みがコントラストとなって響く。そして木管のメロディ部分ではトランペットとトロンボーンの打ち込みが印象的だ。再現部を過ぎると、オンリー・ユーが始まる。

はるかの目の前には「色っぽいはるかで全校生徒をと・り・こ☆」と自分で赤ペンで描いた、ちょっと他人には見せられない恥ずかしい楽譜があった。そう。この曲はテナーサックスのソロで進むのだ。

「ほー！　これはスゴい音色だ……」

音楽がよくわからない真野校長も、思わずうなってしまった。それは亘理健太や新井田彩、真鍋宗平も同じような感覚だった。何ともいえないが、ゾクゾクする音色。ひょっとすると、はるかの音色には人を惹きつける何かがあるのかも、と翔は思っていた。

テンポが急に上がって恵梨のソロになる。
「えりー！　カッコいい！」
「イェーイ！」
恵梨は思わず声を上げてしまった。恭一がビックリした顔になるが、恵梨はリズムを崩すことなく保ち続ける。拓真がスッと立ち上がる。そして、隣には彩香。そう、この曲は『ミスター・ベースマン』というだけあり、チューバにソロがあるのだ。
「おっ、チューバの拓真くんやん」
翔平が少しだけ背伸びをして拓真の顔を見た。
「へー！　もっとガチガチな顔してるか思ったら、案外リラックスしてんな」
「もう初心者ちゃいますよ、拓真くんらも」
修平がウンウンとうなずく。優衣はさっきから陽乃に夢中で、彼らの話などちっとも聞いていない。
細かい動きが多いが、拓真は一所懸命練習したタンギングで正確に音を吹きこなす。彩香とのソロもテンポを崩すことなく吹きこなし、最後のF（エフ）の伸ばし。音程は狂うことなく、ブーンと体育館に静かに響いていった。
パン！と彩香と拓真は手を上で合わせて、それから観客に向かってお辞儀をした。拍手が沸く。その間に、恭一が「大丈夫か？」と順平、雪子、春樹、愛実、慎也、亜紀、徹、亮平に目配せする。そして、いよいよ『ヴァケイション』に差し掛かった。あの「Ｖ！Ｉ！Ｃ！Ａ！ＴＩＯＮ！」の旋律が有名な曲である。
一発目の「Ｖ」で順平が後ろを向いて立ち上がった。その背中には「Ｖ」の字が描かれている。そして雪子、春樹、愛実の順で「Ｉ・Ｃ・Ａ」の文字。「ＴＩ」は同時に立つ。これが順番に慎也、亜紀。「ＯＮ」が徹、亮平だ。何度もリハーサルしただけあって、素早くかつ正確に立つことができている。
メロディを吹き終えてサビ2回目は木管楽器。前に一列に並んで「Ｖ・Ａ・Ｃ・Ａ・ＴＩ・ＯＮ」の順に「沙希・由美子・佳菜・梨

子・絵美／光瑠・優輝／みゆき」となっている。そして3回目は「健之佑・誠・駿・はるか・麻綾／さゆり・翔／拓真」の順。後はあまりにも間隔が短くなるのでナシにしたのだが、このパフォーマンスは予想以上に受けて、演奏中なのに拍手が沸いた。

そしていよいよ曲はフィナーレを迎える。最後の「V・A・C・A・TI・ON」の順で「フルートピッコロ・クラリネット・オーボエ／バスーン・サックス・ホルン／トランペット・トロンボーン／ユーフォチューバ弦バス」と固まって立ち上がり、見事に演奏を終えた。

恭一が指揮台から降りてお辞儀をする。拍手がしばらくやまず、やがて一つになってアンコールを待ちわびる拍手へと変化した。すぐに部員たちは『創聖のアクエリオン』の楽譜を取り出し、恭一が指揮台に上がるとすぐに楽器を構えた。

『創聖のアクエリオン』が響き渡る体育館は、観客と部員たちが一同となる舞台となって、七海祭一日目は終わりを告げた。

第１７６話　翔の反逆

「東先生」
七海祭初日が終わって、ミーティングも終えた吹奏楽部の部室から職員室へ帰る途中、恭一は校長の光治に呼び止められた。
「校長。どうしました？」
「うん、実は明日のことで折り入ってお願いがあるのだが」
「はい。なんでしょう？」
光治は咳払いをし、少し申し訳なさそうな顔をしつつ言い始めた。
「明日の吹奏楽部の本番は１０時半だったね？」
「はい。演奏時間は３０分ほどですから、本日と同じくらいの時間をいただいてますが」
「その時にだねぇ、七海市教育委員会委員長の岸辺さんがいらっしゃるんだよ」
「あぁ……」
恭一の脳裏に苦い記憶が蘇る。この岸辺という委員長は「音楽＝クラシック」というようなイメージを持っていて、ジャズや吹奏楽、ブラスバンドのようなものから近年のポップスなどすべてを音楽でないというような古い考え方を持った人物なのだ。昨年、市内の高校吹奏楽部の定期演奏会に招待されたが、わざわざ顧問や生徒の目の前でそのようなことを口にして、招待状を突っぱねて来たのだという。
「多分、１０分程度の視察だと思うんだけれども、その時にクラシックらしい雰囲気を持った曲を演奏はできないだろうか？」
「うーん……できなくもないですが」
「あるのかね？」
「今年のコンクールで演奏した課題曲ないし自由曲を使えば大丈夫とは思います。生徒たちも数ヶ月間練習した曲ですし」
「本当か！　いやぁ、それは助かるねぇ」

光治も一安心という顔をした。恭一も少し不服だったが、この場合は仕方がない。そう思っていた。しかし――。

「先生」

恭一は後ろから聞こえた声に思わず身を震わせた。不機嫌そうで、どこか少し寂しそうな顔をした翔が、両手を握り締めて立っていた。

「さ、佐野……」

「今の、ホンマの話ですか？」

「あ、あぁ。委員長は少し好みが強い人だからなぁ。まぁ、生徒たちにも真面目な曲を聴かせる機会があるわけだし……」

「じゃあ何ですか？　今日やった曲は真面目やないんですか？」

「そ、そういうわけじゃないだろう」

「でも、校長先生の言い方や東先生の考え方やと、コンクールで演奏する曲以外、吹奏楽やないみたいな言い方に聞こえます」

「そ、それはちょっと言い方がマズかったかな」

光治も慌てているのが翔にはわかった。翔の脳裏に、2年前のコンクール頃の記憶が蘇る。言い争うのは、自分と修平。思わず唇を噛み締めてしまった。

「じゃあなんで、わざわざ教育長が来るからって曲目変えるようなことするんですか？　今日のオレらの演奏、そのまま見てもらったらええぇんちゃうんですか？」

「それはだな……」

恭一も光治も言葉に詰まってしまった。

「わかりました。皆に伝えてきます」

「そ、そうか」

しかし、翔は失望に近い目を光治と恭一に向けた。

「その代わり、オレは明日欠席します」

「え？」

光治が思わずそう漏らしてしまった。

「な、なんでだ？」

恭一も慌てて翔を呼び止める。

「そんなオレらをバカにするような人が来る場所で、オレの音色なんか聴かせたくないですから」
「待て！　お前、休むなんて何言ってるかわかってんのか！？」
恭一が翔の制服を引っ張って無理やり振り返らせた。その目には、今にも溢れ出しそうな涙が溜まりに溜まっていた。
「じゃあ先生も何言うてるんか、よく考え直してみてください！」
そういうと翔は走り出した。
「佐野！」
恭一も慌てて追いかける。しかし、１０代の翔に３０手前の恭一が追いつけるはずもなく、翔は目の前で靴に履き替えもせず、校舎を飛び出してしまった。
「佐野……」
恭一は翔の突然の行為にただ、呆然とするしかなかった。

「あれ？」
窓から外を見ていた徹が声を上げた。
「どした？」
つられて順平が外を見る。
「あれ見て。佐野先輩だよね？」
「あ、ホントだ。スリッパのまま外に出て行ってどうしたんだろ」
「どれどれ？」
優が横から加わる。亮平も3人に覆いかぶさるようにして外を覗いた。
「先生に用事あるって行ったのに、なんでスリッパで外に出るんだろ」
亮平の言葉に全員が顔を見合わせる。
「え？　翔、外出たの？」
陽乃が驚いた声を上げて男子の間に割って入って外を覗いてみた。しかし、既に翔の姿はなかった。それから待てども待てども、翔が帰ってくる気配はない。

「おかしいよ、絶対」
雪子が心配そうに時計を見つめた。翔が部室を出てから３０分近く経ち、もう午後６時を過ぎている。翔の楽器はまだ片づけが済んでおらず、少し指紋が残っている。
ドアの開く音がしたので、残っていた部員が一斉にドアのほうを見た。そこには恭一が立っていた。
「残っているのはこれだけか？」
「はい」
陽乃が答えた。この時点で部室にいたのは１年生が優、亮平、順平、徹、みゆき、さゆり、はるか。２年生は陽乃、雪子、美里、拓真。３年生は岳彦とたまたま部室に来ていためぐみだった。
「佐野は？」
「ずいぶん前に先生のトコ行きましたけど、なんか３０分くらい前にダッシュで外に出てから、帰ってないです。どこ行ったんですか？」
陽乃の疑問に恭一が珍しく口を閉ざした。
「先生？」
「実は……」
恭一は事のあらましをすべて、残っていた部員に話した。
「何それ！　何なの、その教育長とかいうオヤジ！」
美里がプリプリしながら地団駄を踏んでいる。
「ちょ、ミサッチ、どぉどぉどぉ」
雪子がなんとか美里を落ち着かせた。
「それで佐野、すっかり怒っちゃって。先生も佐野があんなに怒るの初めて見たから、どう声をかけていいかわからなくて……」
「先生～、しっかりしてくださいよ。もう３０歳でしょ？」
めぐみがまるで母親のように恭一の背中を叩く。
「でも、教育長にさえいい演奏聴かせたら、それでいいわけだよな？」
徹がごくごく簡単な答えを出す。

「なんで佐野先輩はそれが嫌なんだろう？」
最もな疑問であった。別に翔は吹奏楽オリジナルの曲や、クラシックが嫌いというわけではないことを、陽乃たちもよく知っていた。そもそも、嫌いなのであればコンクールなど出るはずもないのだから。
「そういえばそうよね。別に、嫌なオヤジかもしれないけどそれさえ演奏すればいいわけであって」
「うーん……」
全員が黙り込んでしまった。すると、廊下からワイワイと声が聞こえる。声の主は洋之、春樹、愛実、恵梨と翔平、修平、優衣の7人だった。
「ただいまー！」
春樹たち4人は七海高校の案内を風見台の3人にしていたのだった。なので、経緯（いきさつ）をよく知らないでいる。
「あれ？　どうしたの？　なんか暗くない？」
春樹が少しタジタジした様子で陽乃に聞いた。
「実は……」
恭一がすべてを7人に話す。
「それで、カケぼーどこ行っちゃったの？」
翔平が心配そうに外を見る。時刻はもう午後6時40分。すっかり暗くなってしまった。
「全然電話も通じないし、メールも返ってこないんです」
「そうか……」
「先輩。あの時そっくりですね」
「うん……」
「あの時ってなんですか？」
美里が聞き逃さず、修平と翔平の会話を聞いていたようだ。小さすぎて陽乃には聞き取れていなかったので、美里の地獄耳には陽乃も驚いた。
「翔……中3のコンクール前に中学で入ってた吹奏楽部、辞めたん

だ」

「え!?　な、なんで!?」

春樹や美里はかなり驚いた様子である。しかし、陽乃は昨年のコンクールの帰りに修平と翔がケンカをしているところで、なんとなく雰囲気を察知していた。

「俺……のせいでもあったのかも」

修平は悔しそうに唇を噛み締め、当時のことを話し始めた。

今から2年前の２００４年、夏。大阪府南大阪市立　淀南（よどみなみ）中学校。

「カケル！　チューニングしようや」

佐野修平（当時１５歳）が佐野　翔（同１５歳）に声をかけた。

ダブル佐野と呼ばれる彼らの仲が決裂することになる、あの合奏がやって来る３０分前だった。

第１７６話　翔の反逆（後書き）

陽乃が目撃した翔と修平のケンカについては、第５０話『佐野Ｖ．Ｓ佐野』をご覧ください。

第177話　『エアーズ』

２００４年。大阪府南大阪市淀南中学校吹奏楽部は、総勢３０名の小さな吹奏楽部だ。石津川という川が隣町と境目になっている、１５万人ほどの小さな市だが、大阪市にも関西国際空港にも近い便利な土地だ。

「カケル！」

佐野　翔は「ダブル佐野」の愛称で呼ばれる、淀南中学校吹奏楽部サキソフォンパートのパートリーダーだ。そしてもう一人の佐野、佐野修平が翔を呼ぶ。

「チューニングしようや」

「おう！」

夏の日差しが降り注ぐ中、サックスパート全員が揃って南校舎の庇（ひさし）の下でチューニングを始めた。炎天下、サックスパートは音を飛ばすために外で練習をしている。アルトサックスが４名、テナーサックスが２名、バリトンサックスが１名。この年の課題曲は田島勉作曲『エアーズ』を淀南中学は選択していた。自由曲はバルトーク作曲『ルーマニア民俗舞曲』。エアーズは翔と２年生が主旋律を吹く１ｓｔ（ファースト）を担当。もう一人の２年生と修平が２ｎｄ（セカンド）を担当している。こちらはハーモニー的なメロディを吹くことが多い。テナーサックスが２年生と１年生。バリトンサックスが３年生だ。

そして『エアーズ』には中間部にサックスのアンサンブルがあった。翔は課題曲がエアーズに正式に決まる以前から一所懸命、このソロに近い部分を練習してきた。

「よしっ！　チューニング終わりっ！　今日も頑張ろうな」

「おう！」

修平の呼びかけに翔が応じて手を重ね合わせる。いつもこうして、二人は合奏前に手を重ね合わせていた。

「起立！」

合奏が始まる。顧問の先生が指揮台に立つ。チューニングを全パート済ませ、ロングトーンを３０分ほどしてから課題曲に入った。
「サックスのとこから」
「はい！」
指揮棒が振られ、翔を中心にサックスアンサンブルが奏でられる。
しかし、すぐに先生は指揮棒を不機嫌そうに叩いて曲を止めた。
「おい、佐野」
「はい」
修平と翔が同時に返事をする。
「二人おるとややこしいなぁ。翔や、翔」
「はい」
「お前なぁ、もうちょっと指揮棒に合わせられへんのか？」
「でも、レッスンでは感情を込めて吹くようにと言われて……」
「せやけど、コンクールにはお前も知ってるように制限時間があるねん。ウチは自由曲が結構ゆったりしたのが多いから、課題曲には時間あんまりかけたくない」
「……。」
「わかったか？」
「はい」
「じゃあ次、自由曲サッとやってから通しするぞ」
「はい！」
自由曲は何事もなく練習を終えた。いよいよ通しになる。
グロッケンから始まるこの曲は、全体的にやわらかい音色が求められる。それだけに、翔の音色は曲にフィットしたものといえるだろう。しかし――。
「あぁ、もう！」
突然先生が指揮を止めた。部員たちは驚いて目を丸くする。
「全然言うこと聞けてへんやないか！　指揮とズレすぎてる！　佐野！」
「……すいません」

「ホンマにぃ……何べん言わせたら済むんや」
「……。」
「アカン！　おい、修平。お前がソロ吹け」
「そ、そんな……！　待って下さい、先生！」
翔が慌てて立ち上がる。
「アカン！　時間がないのに、お前のノンビリしたソロに合わせる余裕なんかないねん」
「そんな……」
「修平。吹いてみ」
修平と翔の楽譜を入れ替えて吹いてみた。翔と違い、アッサリと吹く修平のソロはスーッと流れていく。
「よし。修平にしよう」
「……そんな……」
翔は呆然としている。修平が少し、複雑な表情をした。
「とやかく言うてるヒマはない。文句あるんなら、アッサリ吹けるようになってから言え」
「……。」
「はい。そしたらもう一回頭から」
「はい！」
翔は涙をこらえながら、通し練習を終えた。

「カケル」
練習後、修平が翔に声をかけた。
「残念やったな」
「……。」
「次はさ、もうちょっと先生に合わせられるように……」
「うるさいな！」
翔が修平の襟首を掴んでロッカーに押し付けた。バァン！ともの凄い音がしたので、廊下にいた後輩や部員が部室内に入ってきた。
「オレはオレなりに考えて吹いてるのに……！　音色がいいから頑

張れって言われたから……頑張ってきたのに……！　時間がないからって、音楽性全部捨てて吹け言うんか！？」
「せ、せやけどコンクールやから仕方が……」
「お前はえぇよな！　ソロもらって！　中学最後のコンクールで輝けて！　オレが必死に練習してきて、音色研究してきて……っ」
「翔！　修平！　やめろや！」
同級生が割り込んできた。
「もうえぇ……もうえぇわ！」
「カケル！」
泣きながら翔は自分の楽器を片づけて、すぐに部室を出て行った。
修平たちはただ、翔の後姿を見送るしかできなかった。

「ほんでな、結局次の日にアイツ、退部届け出しよって……」
「退部！？」
拓真が驚きの声を上げた。
「辞めてたの！？　吹奏楽部」
美里も唖然としている。
「うん……。ほんで、アイツが抜けたショックで後輩がガタガタになって、当日のサックスアンサンブルの部分は大失敗。オレもアイツの代わりに自由曲でソプラノサックス吹いたけど、結局音程とかいろいろミスッて……」
修平が半泣きになりながらなんとかすべての事情を話しきった。
「待って！」
雪子が大声を上げた。
「ってことは、まさか佐野くん……」
「部活辞めちゃうんですか！？」
優が悲鳴に近い声を上げた。
「そんなのヤダ！」
みゆきとはるかが立ち上がった。
「どこ行くの！？」

「探しに行ってきます。佐野先輩、探さなきゃ！」
「待って！　あたしも行く！」
みゆきとはるかを追って陽乃が飛び出した。
「俺たちも行くわ！」
修平と翔平が後を追った。拓真も追おうとするが、順平が止める。
「俺たちは部室で待機しましょう」
「でも……」
「佐野先輩が帰ってくるかもしれません。カバンも楽器も置きっぱなしですから」
「うん……」
陽乃たちは靴に履き替え、外へ飛び出した。
「私たちは学校を探します！」
「じゃあたし、市役所のほう行ってみる！」
陽乃が市役所へ向かって走り出した。
「俺たちは七海駅前行ってみる！」
「お願いします！」
修平と翔平が走り出した。男子は足がやっぱり速いな、とみゆきは心強く感じていた。
「みゆ！　行くよ！」
「うん！」
みゆきとはるかも、体育館のほうへ向かって走り出した。
「翔……」
陽乃は息を切らしながらも、市役所のほうへと必死に走った。

第178話　皆が、君を想う

「あ、待ってよ樹さん！」
「あ、ゴメンゴメンしおり」
先を急ぐ樹を大根や味噌が入った買い物袋を左手に持っているしおりが呼び止める。二人はつくし野川沿いを歩いて自宅へ向かっていた。
「ねぇ、袋貸して」
「ありがとう」
樹がしおりの持つ買い物袋を左手で受け取った。
「ねぇ、今日は何を作るの？」
「な・い・しょ～」
「なんてな。わかってる。大根と味噌が入ってたら大根の味噌汁しかないでしょ」
「なんだ！　わかってるんじゃない。おもしろくないなぁ」
しおりはプイッと顔を背けて先に歩いていく。樹が慌てて後を追う。突然、目の前でしおりが止まるので樹は思わずぶつかった。
「どうしたんだよ」
「何か……声が聞こえない？」
「えぇ！？　やめろよ、俺そういうの苦手だって言っただろ？」
「冗談じゃないの。ほら……」
樹も耳をそばだててみる。すると確かに「ック……クッ……」という声が聞こえてくる。
「こっちの茂みだわ」
「よ、よせよしおり」
しおりが茂みを覗いてみると、男の子が体育座りをしている。
「誰？　どうしたの？」
「っ！」
「あ……なぁんだ、佐野くんじゃない」

それは翔だった。
「三田嶋さん……神崎さん……」
「佐野くんじゃないか。どうしたんだ？　こんな時間に川岸で」
「ちょ、ちょっと事情があって……」
翔は慌てて涙を拭ったが、しおりにも樹にも既に見られていたようだ。
「どうしたの。事情があるんでしょ？　私たちにでも良かったら話してみて」
「いやぁ！　オレらの話ですから、気にせんといてください！」
翔が慌てて帰ろうとしたが、樹が腕を引っ張って止めた。
「ご飯、食べていきなよ」

「……。」
翔は居心地の悪そうな表情をしながら樹としおりの後姿を見つめている。
「ねぇ、塩どこだった？」
「あぁ、前にも言っただろ。赤いケースの上に砂糖と一緒に並べてるって」
「相変わらず几帳面ねぇ。あ、ちょっと焦げるじゃない！」
「うわ！　ヤバいヤバい！」
いったいこの空間はどういう状態なのだろうか。翔はかなり戸惑っていた。表札には『三田嶋　樹／神崎しおり』と二人の名前が並んでいた。
「あ、そうだ佐野くん」
「は、はい！」
「おうちには連絡した？」
「いえ……全然」
「じゃあ電話貸してあげるから今すぐかけなよ」

プルルルル、という着信音と同時に走り出したのは友美子だった。

「はい！　佐野でございます！」
「あ……オレ」
「翔！？　翔なんやね！？　いまアンタどこにおんの！？」
「あ……あの三田嶋さんっていう……サックスの知り合いの家」
「あぁ、あの有名な？」
「うん。ちょっと話あって……夕食、ついでに食べていってって言われて……」
「……そう。ならいいんやけどね」
「……。」
「あのねぇ、別に遅くなることに怒ってるんちゃうんよ。連絡ナシで、家にも帰らんと学校にカバンも置きっぱなしで……どんだけ心配したと思ってんの」
「ゴメン……なさい」
翔は黙り込んでしまった。
「携帯電話は見た？」
「え？　いや……全然」
「そう。じゃあ電話切ったらすぐに見てみなさい。それから、あまりそちらにご迷惑にならへんようにね」
「わかった」
友美子が受話器を置いてリビングに戻ると、綾音と智輝が食べていたポテトチップスを中断して友美子のところに駆け寄ってきた。
「どうしたん！？　アンタら」
「お兄ちゃんは！？」
最近、綾音は翔を呼び捨てにせず、お兄ちゃんと呼ぶようになった。
「なんやの～！　興味なさそうにしてたのに急に」
「しょうがないやん！　全然連絡ないし、心配もするよ！」
「知り合いのね、三田嶋さんっていうサックス奏者の人のところで食事も済ませてくるって」
「なぁんや！　わりと元気なんやん！」

「心配いらんよ。ほら、テレビ途中なんやろ？」
「うん！」
二人はニコッと笑って答えた。
「綾音！　お風呂沸かそうか？」
「お願い！」
友美子はエプロンを外してお風呂のスイッチを入れた。
一方、翔は電話を切ってから携帯電話をようやく開いてみた。すると『不在着信２０件／受信メール４２件』という常識ハズレな表示。
「２０件！？」
翔はとりあえず着信履歴を開いてみた。

１９：３９　ひなの
１９：３８　田中美里
１９：３８　日高　優
１９：３８　三宅亮平
１９：３７　河内みゆき
１９：３７　西嶋はるか
１９：３６　本堂拓真
１９：３６　三河岳彦
１９：３５　ひなの
１９：３４　ひなの
１９：３３　豊田めぐみ
１９：３２　富士原徹
１９：３２　加藤愛実
１９：２９　水谷春樹
１９：２７　右川順平
１９：２５　ひなの
１９：２４　岡崎安和
１９：２２　中野さゆり

１９：２１　西嶋はるか
１９：２０　鈴木麻綾

ほぼ1分おきに電話が入っていた。さらにメールボックスを開けてみた。一番新しい受信メールから順に並んでいる。陽乃、沙希、拓真、春樹、慎也たち2年生メンバー。駿、優、愛実、はるか、麻綾、さゆりたち1年生。めぐみ、安和、岳彦の3年生3人。さらに夏樹、綾音、修平、優衣、翔平。その上、いつのまに連絡が行ったのかクラスメイトや泰徳の名前まで見えた。

翔はひとまず、陽乃に電話をかけた。コール音1回で陽乃は電話に出た。

「もしもし!?　翔!?」
「お、おう……オレ……」
「ホントに!?　いま、どこにいるの!?」
「み、三田嶋さん家……。ちょっと話……あって」
「ホント!?　ホントに!?」
「もしもし?　朝倉さん。三田嶋です」
「三田嶋さん……！　良かった、良かった……」
陽乃が電話の向こうで泣き始めた。
「ゴメンな……。心配かけて」
「いいの。いいの。翔の声聴けただけで……あたし嬉しいから……」
「うん……。ありがとう」
「ううん！　翔……」
「うん?」
陽乃は一呼吸置いて言った。
「明日、あたし、翔のこと部室で待ってるから」
「……うん」
「じゃあ……」
電話が切れた。しばらく翔はツーツーという音を聞いてから、とりあえず４２件のメールすべてに返信した。一番に返ってきたのは

慎也だった。それでも、全員から返信が来るまでに5分しかかからなかった。

「あ……」

翔の目から自然と涙がこぼれる。

「オレ……皆に大事にしてもらってるねんな……」

しおりと樹は震える翔の後姿を黙ってみていた。

「佐野くん。とりあえずご飯、食べなよ」

「はい……っ。も、もう少ししたら行きます」

「わかった」

涙が止まらない。嬉しくて涙が止まらないのだ。翔にはこんな経験が生まれて初めてだった。

「それで？　事情ってどうしたのよ」

夕食時、しおりが単刀直入に聞いた。しかし、翔は首を横に振った。

「あれはオレが勝手に思い込んでただけなんです」

「そうなの？」

「はい」

カチャカチャと食べる音だけが響く。

「明日、部活行くんだろ？」

樹が笑顔で聞く。

「もちろん」

翔も笑顔で答える。迷いはなかった。

翔の胸の中に、答えは既に出ているのだから。

第179話　オレは、皆を想う

「昨日は、ご心配おかけしました！」
部活が始まってすぐの午前9時。翔は部員たちが座る音楽室の舞台の上で深々とお辞儀をした。
「ホントですよ！　いったいどこをほっつき歩いてたんですか」
はるかがプリプリしながら言った。
「何回電話かけたと思ってんだよ」
あからさまに不機嫌なのは、慎也だ。慎也はこういうことが特に嫌いなのは、翔もよく承知している。春樹のときのことが思い出される。少し事情は違うけれども、翔も何の相談もなしに外へ出ていってしまった。
「それに、メールもすぐ返さないし」
絵美が珍しく腹を立てている。翔は冷や汗が出ていた。とても本番当日の雰囲気とは思えない、険悪なものだ。
「ゴメン……。ホンマに……」
「ちょっといい？」
そうハッキリした口調で言って立ち上がったのは美里だった。
「あのさ、なんでメールが部員全員から……それどころか、岩切さんや佐野くん、それと愛媛県のアンタの幼なじみだっけ？　竹林くんまでメールしてくれたんでしょ？」
「うん……」
「それって、なんでだかわかる？」
「え？」
翔は考えてみた。部員や先生ならわかる。メールや電話を入れてくるのも当然だろう。翔がいないと、部活が動きにくくなることも多いだろう。しかし、修平、翔平、優衣は学校すら違うのだからそんな理由でメールをするとは思えない。そうなると、クラスメイトや泰徳がメールを入れてきたのはますます不可解だ。

「わからへん」
「……どうせそんなことだろうとあたし、思ってたけどね」
美里はフゥッとため息をついた。
「あのね！　なんで佐野くんや岩切さん、竹林くんまでメールをくれたかっていうと、アンタのことを皆が大切に想ってるからなの！」
「え……？」
雪子が笑顔で続ける。
「そうだよ？　佐野くんのことがどうでもいいなら、私たち電話もメールもしないよ」
さゆりが引き取る。
「そうですよ？　わかってます？　佐野先輩、部長だし私たちサックスパートのパートリーダーですし！　それ以上に、私たちサックスには欠かせない存在なんですよ。部長とかパーリーとかそういうの抜きで！」
「そうなん？」
美里が続けた。
「やっぱりわかってないわね～！　見なさいよ、陽ちゃんを！」
すると翔や部員全員の視線が陽乃に集中した。
「どうなの！？　あの目の下のクマ！」
「ちょ、ミサッチ！」
「あれはねぇ、アンタを探すときにワァーンって泣きながら走って探し回った跡なの！」
「ちっがーう！」
ドッと音楽室中が笑い声に包まれた。翔も爆笑する。
「じゃあ帰ってから安心して泣いたんだ！？」
「ちがうちがうちがーう！」
「はいはいはーい、ストップしろ」
恭一がズレだした話を元へ戻す。
「えっと……とりあえず、今後は……オレ一人で勝手に決め付けたりしません」

「……。」
翔は優しい笑顔で続けた。
「今まで、演奏の仕方とか、部内で決めることとか皆と決めてきたツモリでおったけど、実は全然……肝心なトコで皆に相談とかできてへんかったんやんね」
春樹と拓真が小さくうなずいた。きっと、彼らにも思い当たる節があるのだろう。翔も知っている。彼らは彼らで悩んで、ああしていたのだろう。今となっては笑い話のような感じだけれども。
「だから……今回のことはホンマにゴメンなさい。でも、オレはこれを機に皆で頑張ろうと思います。オレ……皆のことを想うのは大事なんやなってホンマに思いました」
グズッ、グズッと鼻をすする音が聞こえた。いつの間にか陽乃が泣き出していた。
「ホントだよ……。今度こんなことしたら、許さないからね！」
「……わかった」
しばらく静寂が続いてから、美里がそれを打ち破った。
「はい！　シンミリした空気はここまで！　今日は教育長が来るんでしょ？　気合い入れて演奏するよ！」
「そうですね！　先輩、行きましょ？」
はるかとさゆりが翔の手を引いた。
「ちょっと待って！」
翔が大声を上げた。
「あのさ……曲目、変えへん！？」
「え？」
洋之と優が動きを止めた。
「何言ってるんですか？　今日は……『海へ…吹奏楽のために』を演奏するんじゃないんですか？」
恵梨が引き取った。続いてあずさも心配そうに続ける。
「でも……他に何をするんですか？」
「うん……オレは……」

午前１０時３０分。いよいよ吹奏楽部のステージが始まろうとしていた。岸辺教育長がプログラム片手に前を不機嫌そうに見つめている。曲目には『海へ…吹奏楽のために』のみが書かれている。

「皆さん、おはようございます！」

ハッと教育長が顔を上げた。司会のはるかとみゆきが前に立っているのが映っている。

「本日はプログラムを……少し変更してお送りします」

はるかが緊張した面持ちでそう言った。みゆきが続ける。

「お手元のプログラムには『海へ…吹奏楽のために』とありますが、こちらは都合により演奏をしない形になりました。その代わり、本日は教育長がいらっしゃることを考え、『ジャパニーズグラフィティ５～日本レコード大賞、栄光の昭和５０年代～』をお聴きいただきたいです。急な変更でしたが、頑張って練習してまいりました。ぜひ……お聴きください」

翔や陽乃の視線が教育長に注がれた。教育長がプログラムを閉じたのが目に映る。恭一もドキドキする鼓動をなんとか押さえていた。

「ふむ……おもしろそうだな」

教育長はニッコリ笑って席に座ったままだった。はるかとみゆきが嬉しそうに笑いながら、自分たちの席へ戻る。恭一が指揮台に立って、観客席に向かって言った。

「本日はご来場、ありがとうございます。まず1曲目『王様のレストラン　テーマ』をお聴きください」

拍手が沸く。その中にはもちろん、教育長も含まれていた。

（曲目……変えてでも頑張って良かった）

翔はフッと笑みながら、サックスを構えた。皆が一体となる――そんな舞台にしたい。翔の願いが今、叶った舞台が始まろうとしていた。

こうして七海祭での演奏はすべて無事に終えることができたのだった。

第１８０話　一人ずつの役割

１１月２０日（月）。今日の部活は話し合いのみだという翔の連絡があった。すっかり冷え込む日が増えたので、陽乃も下に私服のシャツを着込むくらいになっている。

「こんにちは～」

部室の戸を開けると、絵美と春樹が仲良さそうに光治にもらったストーブの前で並んで暖まっていた。

「あ、朝倉さんもおいでよ」

「うん！　行く行く～」

陽乃、絵美、春樹の３人が並んで部員が揃うのを待つ。春樹がふと、思い出したように話を始めた。

「そういえばさ、さっき東先生に呼ばれて職員室行ったら、こんなにたくさん楽譜もらったんだ」

ドサッと音を立てて出てきたのは、封筒に入った分厚い楽譜たち。陽乃も絵美も思わず目を丸くした。

「何これ？　『高貴なるぶどう酒を讃えて』？　どれどれ……」

陽乃は適当に楽譜を取り出してみた。出てきたのはチューバの楽譜。すると、冒頭からそれほどしないところに１６分音符の激しそうな降下音が並んでいた。

「チューバにこんなの吹かせる曲なんか初めて見た」

陽乃は口をポカンと開けたまま、その楽譜を見つめている。絵美がその楽譜の束の隣にある封筒を手に取った。

「打楽器アンサンブル……だって。あ、私コレ知ってるよ」

「どれどれ？」

春樹と陽乃が同時に絵美の横に並んだ。その楽譜には『惑星より～木星～』の文字。

「あ、これってさ、あたしたちが中２のときに平原綾香が歌った曲よね」

「あー！　エーブリデー……なんたらで始まる曲？」
「春……微妙に音痴だから」
絵美が春樹の歌唱力に苦笑いする。春樹は少し赤くなりながら「こっちは何だろうね」と特に分厚い封筒を手にした。
「えっと……『タンツィ～3つのロシア舞曲』か。あ、ヤン・ヴァン・デル・ローストって風見台高校が自由曲で演奏した曲の作曲者だよね」
「あー！　なんか民族曲っぽいのが上手な人だよね」
「私、あの人の作る曲好きなんだ～」
「あたしも～。大好きだよぉ」
陽乃と絵美が遠くを見つめる目で物思いにふけっていると、翔がヒョコッと顔を出した。
「何やってんの～？」
「あ、カケル！　今日ね、東先生が新しい楽譜くれたんだ。なんかアンサンブルの楽譜みたいだよ？」
「おー！　そろそろアンコンの時期かぁ。あ……強烈な曲持ってきてんなぁ」
『高貴なるぶどう酒を讃えて』を見るなり、翔が苦笑いした。
「そ……そんなにスゴいの？」
「いや……確かにスゴいけど、演奏できてもスゴいとオレは思うで」
「そっかぁ。難しいんだね？」
「うん。せやけど、頑張ればきっとできるって！」
「何が？」
先ほどの翔と同じように、拓真がヒョコッと顔を出した。
「お、主役登場～。喜べ拓あん。アンサンブルコンテストでお前、チョー目立つで」
「ホントか！？」
「おう！　これ見てみぃ」
翔と拓真は少し離れたテーブルで楽譜を見ながら嬉しそうに話を始めた。陽乃たちも『タンツィ』の楽譜を広げてワイワイと話し始

める。いつのまにか、日が暮れ始めていた。
「おーい、お前ら。全員音楽室に集まってるんだぞ？」
「え？」
恭一の一言に5人が時計を見ると、既に時計は5時を指していた。
「わぁお！　すいません、すぐ行きます！」
翔たちは慌てて音楽室に駆け込んだ。
「えーと、それじゃ今後の行事予定とウチの方針のようなものを説明するぞ」
陽乃はワクワクしながら恭一の話を聞いた。恭一の言うところによると、まず12月末にあるアンサンブルコンテストに出場するという。出場する組み合わせも既に考えてあるそうで、金管8重奏と打楽器6重奏だそうだ。
「先生」
美里が立ち上がった。
「どうした？」
「打楽器、5人しかいないんですけど6重奏ってどういうことですか？」
「あぁ。まず、先生としては打楽器と金管の人たちにもっと自分たち一人ひとりが大切なんだっていう意識をより高く持ってほしいんだ」
「……？」
美里も陽乃も雪子もポカンとした表情を浮かべている。
「木管楽器はトリルやら細かい旋律が多いから、個人練習とかでも自分一人ひとりがしっかりと意識して練習しているのは明らかだ。別に、金管や打楽器がそういうことをしていないという意味ではないけど、打楽器はメロディを出せるのが鍵盤楽器だけだろう？　そうなると、どうしても自分たちがもっと目立ってもいいとかいう風に考えるんじゃないかな」
「まぁ……ティンパニとかはスパイス程度かなって思いますけど」
洋之が苦笑いしながら答える。

「そうだろう？　それがいかん」
「いかんて……先生、オジン臭い」
恵梨がケタケタ笑い出した。それにつられて優やあずさが笑い出す。恭一は少し赤くなりながら「オジンとは何だ！」と憤慨しつつ、話を続けた。
「と、とにかく打楽器はそういう意味でアンサンブルに出てもらう……ん？　話がズレたな」
「で、６人ってあたし、エリリン、あず、優っち、ヒロポンの他に誰が出るんですか？」
「三宅だよ」
「へ？」
白羽の矢が立ったことに一番驚いているのはもちろん、亮平だった。
「俺ですか！？」
「そうだ」
「俺、弦バスですよ！？」
「そんなことはわかってる。でも、お前マーチングのときはなかなか上手に打楽器こなしてたぞ」
「……でも、俺正直他の打楽器できるとは思えませんけど」
「でも、シロフォンができたわけだろう？　田中の苦手な」
「ちょっと先生！　わざわざあたしの話出さないでください！」
美里が真っ赤になって恭一の口を閉ざさせようとしたが、既に遅い。
「どうだ？　やってみないか？」
「……わかりました！　俺、やってみます」
亮平の笑顔に、恭一も笑顔で答えた。
金管アンサンブルはトランペット３本、トロンボーン３本、ホルン１本、チューバ１本と異色のメンバーとなった。ちなみに部員名でいえば陽乃、彩香、勇、慎也、亜紀、徹、雪子、拓真となる。２年生で唯一メンバーに入らなかった春樹はブツブツ不満を呟いてい

るようだ。
「それでだな、アンサンブル以外に12月23日の天皇誕生日……まぁ、ちょうど土曜日に被ってるんだけど、その日に七海市吹奏楽連盟の定期演奏会があるからそれにも出演するぞ」
春樹の頭に先ほどの『タンツィ』の楽譜の束がよぎった。
「先生！　ひょっとして『タンツィ』するんですか！？」
「おぉ、そうだぞ。水谷にはもう楽譜、渡してたな」
「はい！」
「参考音源、聞くか？」
部員全員から「聞きたいです！」という返事が来る。しかし、曲全体で13分程度になる曲なので、冒頭から第1楽章のみ聴くことになった。
序奏にあたる部分では、クラリネットやフルート、イングリッシュホルンなど木管の感傷的な音色が響く。ハープらしき音も聴こえてきた。そして金管中低音の音が加わってすぐに、タンバリンの音とスネア、タムタムの印象的な音。その後にオーボエ、エスクラリネットなどのあまりにも速すぎるパッセージが聞こえる。するとすぐにそこへユーフォニウムが加わった。
「わぉ、大変だね木管」
陽乃が笑いながら曲を聞き流していると、ミュートをつけたトランペットが同じように強烈なパッセージを吹き始めた。
「……。」
ポカンとしているトランペットの3人。いつのまにかそれにシロフォンが加わり、グロッケンも加わり、シンバルやタンバリンが信じられないほどの勢いで入る。オーボエのメロディに加えてユーフォニウムの対旋律が入り、再度メロディを吹き始める。春樹と愛実は苦笑いするしかないようだ。やがてトランペットのミュートをつけたメロディとシロフォン、グロッケン、ティンパニ、シンバルの同じような動きの繰り返し。もはやこの時点でほとんどの部員が真っ白になっていた。

「俺たちはこういうとき、楽だよな」
拓真が亮平と笑う。こういう激しい曲ほど、チューバや弦バスは比較的楽な動きが多いのだ。しかし、そんなのん気なことを言っているそばからチューバ、弦バス、バリサク、バスクラなどの低音軍団がわけのわからない動きをしている部分が出てきた。次いでホルン、ユーフォニウムの混沌（に聞こえる）メロディが響く。その後も楽器が入れ替わり立ち替わりで激しいメロディを吹き続け、曲はヒートアップしていく。第1楽章は信じられないテンションで曲を終えた。
「どうする？　この曲、するか？　しないか？」
「……。」
応答がない。全員が曇った顔をしていた。しかし、すぐに答えたのは優だった。
「先生！　俺、この曲やりたいです！」
「おっ。なんだ、元気だな。で、するなら何をする？」
「シロフォンやりたいです！」
「ほう！　珍しいな。もしこの曲になったら頑張れ」
「はい！」
「他はどうだ？」
「はい」
洋之が手を挙げた。
「冨岡か。冨岡は楽器、どうする？」
「俺はタンバリンやりたいです」
「はい！」
美里が手を挙げる。
「田中は？」
「ティンパニです！」
「そうか！　ぜひ頑張ってくれ」
「オレも……この曲、頑張りたいです」
翔が手を挙げた。

「絶対、この曲吹き上げたいです」
「……ということだが、この曲やりたくない人はいるか？」
部員たちから手が挙がることはなかった。恭一が嬉しそうに笑う。
「よし！　あと1ヶ月少々！　練習頑張るんだぞ？」
「はい！」
部員たちから元気良く、返事が返ってきた。
その日のうちに『タンツィ』、『高貴なるぶどう酒を讃えて』、『木星』の3曲がそれぞれ部員たちに配布された。陽乃と美里は配られた2枚の楽譜を嬉しそうに見つめ、クリアファイルにしまった。
「翔はアンサンブル出たかった？」
帰り道、陽乃は翔と手を繋ぎながら聞いてみた。
「そりゃ出たかったけど……」
「けど？」
「舞台で頑張る陽乃を客席から見るの、初めてやからそっちのほうが嬉しい」
陽乃は恥ずかしげもなくアッサリという翔の言葉に真っ赤になった。なかなか慣れない自分が悔しい。
コツン！と陽乃は翔の頭を叩いた。
「痛って！　何すんねん！」
「あたしを真っ赤にさせたバツ！」
「意味わからん！」
翔は恥ずかしそうに笑いながら叩かれた部分を摩った。
「陽乃」
「なぁに～？」
「……頑張れよ！」
「うん！」
陽乃はスカートを翻しながら、力強く答えた。翔は舞台で懸命に吹く陽乃の姿を思い浮かべると、今から楽しみで仕方がなかった。

第１８１話　ちっともなれない！

「もう一回テンポゆっくりで行くぞ？」
「はい！」
アンサンブルコンテストまでちょうど１ヶ月となった１１月２５日（土）。陽乃、勇、彩香、慎也、亜紀、徹、雪子、拓真の金管８重奏メンバーは午前中で部活が終わったが、他の部員と違ってアンコンの練習をしていた。もちろん美里、洋之、恵梨、優、あずさ、亮平の６人も部室で練習をしている。
金管セクションリーダーの慎也が中心となってアンサンブルの練習を行う。楽譜が配られてまだ５日しか経っていないので『高貴なるぶどう酒を讃えて』をイン・テンポ（テンポどおりの意）では演奏できるものではない。細かい音符がたくさんあるので、タンギングが重要となってくるのである。
拓真はハイツェーというチューバにしてみれば高音の部類に入るこの音から降下系の音を吹かなければならないだけに、高音域の練習に余念がない。それに加えて、メロディーも盛りだくさんなので、しんどい部分が多いにも関わらず拓真は弱音一つ吐かずに練習を続けていた。
「思うように音が出ない……」
楽器に悪戦苦闘しているのは勇。フリューゲルホルンと呼ばれる、トランペットより少し音域の低い楽器をこの曲では使うのだ。逆に言えば、高音域が出にくいわけである。ホルンはチューバと同じメロディーを吹いていたかと思えば伴奏に回ったり、トランペットと同じメロディーを吹いたりと変化に富んでいるため、雪子はメンバーの皆と曲の雰囲気などに関する打ち合わせに余念がない。
「もぉー！　高音が全然出ない！」
一人イライラしているのは陽乃。実はこの曲、本来は１０重奏なのである。それを恭一が８重奏用に編曲してくれているのだ。とい

っても、チューバやホルンに一部足りない譜面を書き足しただけなのであるが、そのおかげであちらこちらに少々無理な音域の楽譜が書かれてしまっているのだ。

「落ち着けって朝倉。お前、1年の頃ハイベーちゃんと出してただろ。あの時みたいにしっかり確実に練習すれば、出るようになるから」

「そうだけど……あと1ヶ月しかないのに大丈夫なのかな」

そう。アンサンブルコンテストの本番は12月25日なのだ。今日でちょうど1ヶ月ということになる。

「1ヶ月もあるんだよ。しかない、じゃないんだ」

慎也がトロンボーンのスライドにスプレーを撒きながら言った。

「どういう意味？」

「言葉次第だよ。時間がない、と思ったら焦っていい仕上がりの曲はできないんじゃないかなと俺は思うんだけどな。時間はまだ1ヶ月ある。1ヶ月毎日練習すれば、きっと今よりいい曲になるって」

「それはそうだけど……でも、参考音源みたいな曲に全然近づけないんだもん。嫌になっちゃう」

「うーん……まぁ、あくまで参考だし、そんな気負いしなくてもいいんじゃないのか？」

「そう割り切れるといいけどなぁ……」

フゥッ、と陽乃はため息を漏らした。

「とにかく！　まずはしっかり確実に音を出せるようになろうぜ！　ほら、もう一回チューバとホルンのソリから」

「はい！」

結局、その日の金管アンサンブルメンバーが練習を終えたのは午後6時半のこと。さすがに明日26日は日曜日なので、休みである。

「失礼します」

副部長の陽乃が音楽室を施錠して、鍵を職員室に返却する。部長の翔は午前中で帰ってしまうので、最後まで残るのは陽乃というわけだ。

「おぉ、えらく遅い時間までやってたんだな」
恭一が腕時計を見て少し驚いた声を上げた。
「はい。でも、なかなか思うように音が出なくて……難しいです」
陽乃は苦笑いで音楽室の鍵を恭一に手渡した。
「選曲、大変だったんだぞ。本当はもっと易しい曲だってあったんだ」
「そうなんですか？」
「3曲ほど選んでたんだけど、朝倉たちならあの曲、きっとできると思ってな。だから後の2曲は黙って出さないことにした。失敗だったか？」
「……いえ。失敗とは思いません」
陽乃はしっかりとした口調で答えた。今は無理でも、1ヶ月もあればきっとできる。根拠なんてなかったけれども、自信を持って陽乃はそう言えた。
「だろう？　お前ら、もっと難しいことをやってのけてるんだから、自信を持て」
「もっと難しいこと？」
「吹奏楽部、たった数ヶ月でサークルから部にしたのは紛れもない、お前たち2年生10人なんだから。なかなかできることじゃないぞ？　10人で部を作って人前で演奏して認められて部になれるなんてな」
「……。」
陽乃はあれから既に2年近くの時間が流れたことを思い出した。
「川崎から聞いたぞ。朝倉、参考音源のイメージに曲を近づけようとしてるんだってな？」
「あ……もう。慎ちゃん、お喋りなんだから」
「朝倉には朝倉の音があるんだから、あんまり気負いせずにリラックスして練習しろよ？」
「慎ちゃんと同じコト言ってますね、先生」
陽乃はクスクスと笑った。

「なんだ？　川崎、先生と同じこと言うのか。えらく老成したヤツだな」
「老成？」
「大人びてるってことかな」
「あぁ。慎ちゃんならそんな感じかも」
クスクスとまた笑う陽乃。恭一もまだ、それほど陽乃が自分を追い込んでいるわけではないと知って、なんとなく安心した。
「じゃあ、遅いから気をつけて帰れ」
「はい。失礼します」
職員室を後にし、陽乃は靴箱で靴を履き替えて外に出た。
「うわ～……寒い。マフラー、マフラー」
カバンの中からゴソゴソとマフラーを出して陽乃は首元にマフラーを巻きつけた。学校沿いの道路を歩き、横断歩道を渡って坂になっている津上橋を越え、市役所横の公園を通ってしばらくすると、陽乃の家がある一角が見える。その直前、サックスの音色が聞こえたので陽乃は足を止めた。
「翔……？」
対岸に、翔と初めて出会った場所とは違うがサックスを吹く人の姿が見える。よく目を凝らしてみるが、既に日が沈んでいるためよく見えない。陽乃はいま来た道を引き返し、その人物がいる場所を茂みの裏からコッソリ覗いてみた。
「あ……」
翔平だった。こんな暗く寒い中、まだ練習をしているのだ。
「岩切さん……ですよね？」
「あ……朝倉さんやん」
翔平はサックスを下ろし、陽乃の近くへ歩み寄った。
「こんな時間にこんな場所で練習ですか？」
「うん。もうちょっとで、定期演奏会やから」
「あ！　そういえば……火曜日ですよね？」
「うん。そう」

１１月２８日午後６時から、七海市中央ホールにて私立風見台高等学校吹奏楽部　第１９回定期演奏会が開催されるのだ。主な曲目として『プスタ』、『ハウルの動く城メドレー』がポスターには記載されていた。どちらも陽乃が知っている曲だが、先ほど翔平が吹いていたのはどちらでもないものだった。

「さっきの曲は、定演でするんですか？」

「そやねん。１部の最後に。ソロもろてるから、しっかり練習せなな」

「もろてる？」

まだ聞きなれない関西弁があるのに、陽乃は少し申し訳なさを感じながら言葉の意味を聞き返した。

「あ、もらってるってことな」

「なるほど」

しばらく沈黙が続いた。そういえば、翔平は陽乃より１歳上である。つまり、今回の演奏会が終われば引退ということになるのだ。

「岩切さんって、演奏会で……その……」

なんとなく聞きづらいものがあった。それに気づいた翔平がハッキリと言った。

「うん。今回で、風見台吹奏楽部からは引退」

「そう……ですか」

「ホンマはな～、ずっと続くと思ってたけどなぁ。修平や優衣ちんと演奏する時間」

翔平は寂しそうに対岸に映る夜景を見ながら呟いた。

「でもな、時間に限りがあるから頑張れるねんな」

「そうですね～」

陽乃も今さらながら、当たり前のことに気づいた。初めは１０人だったサークルがいつしか、勇や彩香が加わり、３０人程度の部に成長した。やがて安和、岳彦、めぐみの３人も加わり、全学年がいちおう七海高校吹奏楽部には揃ったのだ。

「なぁ、朝倉さん」

「はい？」
「朝倉さんトコにも3年生、おったやんな」
「はい」
「彼らには何かしてあげへんの？」
「何かって？」
陽乃は翔からも特に聞かされていないので、質問の意図がよくわからなかった。
「七海市の中学・高校はだいたい１０月下旬から１１月下旬に定期演奏会して、３年が引退するらしいねん。でも、ナナコウは定期演奏会、まだないやろ？」
「そうですね～。来年あたりにできたら嬉しいですけどね！」
「それやったら、３年生の区切りをつけるために、何か演奏会開いてあげたらどうやろ？」
「う～ん……」
陽乃はしばらく考えた。余計なお世話だったりしないだろうか、と少し不安になる。
「それって余計なお世話とか思われませんかね？」
「全然そんなことないやろ～！　むしろ、喜んでくれるって」
「そうですかね？」
「うん！　自分たちの後輩の音色聴いて、ひとまず活動に区切りをつけられると思うから、絶対やってくれたら嬉しいって」
陽乃はしばらく考えた末「翔と相談してみますね！」と返した。
「うん。じゃ、もう遅いから気をつけて帰ってや」
「はい！　あたしたち、絶対演奏会行くんで岩切さん、頑張ってくださいね！」
「ありがとー！　じゃ、またね！」
「さようなら！」
陽乃は手を振って翔平と別れた後、恭一と翔平の言葉を反芻（はんすう）していた。
「あたしたちの音色、か！」

陽乃は思わずスキップをして、家へ向かってしまった。

第１８２話　瀬戸楽器店にて

１１月２７日（月）。練習を終えた修平は待ち合わせの場所へと急いでいた。場所は優輝の家が経営する瀬戸楽器店。店の前に午後８時に待ち合わせをしていたが、案の定練習が長引いて完全に遅刻してしまった。

「やっべー！　アイツ絶対キレてる」

修平は携帯電話片手に急いで自転車を走らせる。少々乱暴に自転車を置いて、商店街を走り抜けていく。徒歩なら駅の北口から１０分程度かかる距離なので、走るにはけっこう体力がいる。

「あ！　おった！　おーい、ゴメン遅くなって！」

声を掛けられた人物は野良猫と戯れていたようで、猫を撫でながら顔を修平のほうへ向けた。

「えぇよ全然。練習、頑張ってたんやろ？」

待ち合わせの人物とは、翔だった。手袋をしながら野良猫を撫でる姿がかわいらしく見え、修平は思わず笑ってしまった。

「なんやねん」

「うぅん。お前が一瞬可愛く見えただけ」

「……男にそんなこと言われてもなぁ」

翔はフゥッとため息をついた。

「じゃあ何？　朝倉さんにでも言ってほしかった？」

「なんで急にアイツが出てくんねん」

「だって、顔に描いてあるもん」

「ア……アホか！」

翔はプイッと顔を背けて楽器店の戸を引いた。ガラガラ、と派手に音を立てて戸が開くと同時に優輝が「いらっしゃいませ～！」と元気よく二人を出迎えた。

「あれ？　吉山さん」

偶然にも亜紀がいた。

「あれ！　ダブル佐野先輩じゃないですか。どうしたんですか？」
「いやぁ、オレらは明日、岩切先輩が引退しはるから、お祝いのプレゼント買いに来たんや」
「そうなんですか～。私は塾の帰りで、いつも閉まってる時間に開いてたんでオイル買いに寄ったんです」
「そっかぁ。もう遅いから、オレらとどうせなら一緒に帰る？」
翔はアッサリと亜紀を誘った。修平と優輝は驚いた顔をする。
「いいんですか？」
「うん！　危ないやろ？　修平もええぇよな？」
「うーん……えぇとは思うけど、家の方向は一緒なん？」
「あ……そういえばオレらの家と吉山さんの家、逆の方向や」
翔が口を手で少し塞いで言った。少し後悔しているようだ。
「あ、ウッカリしてました。じゃあいいですよ。別に私、平気ですから」
亜紀は買ったオイルをカバンにしまって店を出ようとした。
「ちょい待ち！」
翔が亜紀の手を引いて止める。
「オレらすぐに買い終わるからさ、瀬戸っちについて行ってもらったら？」
「え？」
優輝の顔が少し赤くなった。
「でも、店の片付けとかあるんじゃ……」
「大丈夫やろ？　瀬戸っち」
「は、はい！　俺は全然問題ないです！」
「ほな決まり！　オレらプレゼント選ぶから、吉山さんと瀬戸っちはまぁ適当に話でもしとって」
亜紀はもう一度着席して、優輝とタンツィのことや来年のことについていろいろと楽しそうに話をしていた。
「なぁ、ひょっとして瀬戸くん、吉山さんのこと好きなんか？」
修平がコッソリ聞いた。

「なんや。やっぱりわかる？」
「わかりやすすぎやろ、あれは」
「せやからおもろいねん。結構おちょくりがいあるで」
「翔って意外と性格Ｓやな」
「うるさいな～、そんなん今はどうでもえぇやろ。それより、プレゼントどないすんねん」
「そうやな～……ちょっと分かれて見てみようや」
「オッケ」
翔はグルリと店内を一周してみた。サックスのペンダント、トランペットのネクタイピン、楽器イラストの描かれた葉書。本当にいろんな商品が置いてある。修平も翔とは反対側の棚から順番に商品を眺める。チューバのぶら下がったチェーンネックレス、ホルンの形をしたクッションがずいぶん際立って見える。
「うわっ！」
「どわっ！」
棚を見ていくうちに接近した修平と翔は思い切りおしりをぶつけて棚に倒れこんで頭を打った。
「何やってんですか～。棚を破壊しないでくださいよ？」
優輝と亜紀がケラケラと笑う。二人は顔を赤くしながらもう一度商品を選び始めた。
「オレは絶対こっち！」
翔がサックスのネクタイピンを手のひらに載せて修平に主張する。
「いいや！　ショー先輩には絶対こっちが似合う！」
修平は修平で、サックスのチェーンネックレスを翔に差し出した。
「ねぇ、この調子じゃ決まらないよ？」
亜紀が困った様子で優輝の背中から二人を覗きこみながらボソッと呟いた。
「……とりあえず、吉山家に帰りなよ」
「え？　先輩たちどうすんの？」
「お前を家に送ってから、救世主呼びに行ってくる」

「そんな人いるの？」
「うん！　心強い二人がな」
翔と修平は放置されていることにも気づかず、熱戦を繰り広げていた。続けること３０分。ようやく優輝が連れてきた救世主２人が登場した。
「はいはいはーい！　熱くなってるトコ悪いんですが、楽器店の営業時間を既に２時間おーばーしていまーす！」
翔の聞き覚えのある声。振り向くと、陽乃が立っていた。
「熱くなると周りが見えなくなるの、悪いクセだからね？」
「ゲッ！　優衣やん！　何しとん、こんなとこで？」
「ゲッとは何よ！　瀬戸くんが困ってるって陽ちゃんから聞いて、引き取りに来たの！」
優衣がプリプリしながら修平の襟を無理やり掴んだ。
「ちょ、ちょっと待てや！　オレら、もう少しでプレゼント決まりそうやねん」
修平がバタバタと足をバタつかせる。翔も慌てて優衣の手を掴みながら必死に彼女を説得した。
「頼むわ～、濱口さん！　あとちょっとだけ！」
「しょうがないなぁ……。あと５分！」
「わかった。そろそろ折り合いつけようや、修平」
「ようし！　ジャンケン３回勝負や。行くぞ！　最初はグー、じゃんけんほい！」
修平がチョキ、翔がパー。
「アホかお前！　後出しすんなや！」
翔が大声を出して修平の手をはたいた。
「何言うとんねん！　全然後出しちゃうわ！」
「いーや！　後出し！　もう一回やり直しじゃ。今のナシ！」
「アホか～！　はい、次２回目！」
「クッソー！　最初はグー、じゃんけんほい！」
修平がグー。翔がパー。

「よっしゃあ！」
「アホかお前！　後出しすんなや！」
今度は修平が翔の手をはたいた。
「何言うとんねん！　後出しなんかじゃないですー！」
ギャーギャーと言い合いをする二人を、陽乃、優衣、優輝の３人は半ば呆れながら見つめていた。
「類は友を呼ぶって、このことね」
優衣はため息を漏らした。
「ま、そんな二人をあたしたちはそれぞれ彼氏にしてるわけだけど」
陽乃も苦笑いしながらため息をついた。
「ってことは、先輩方もダブル佐野先輩に似てるかもしれないですね」
「あー、瀬戸っち。今のはＮＧワードだわ」
「え！？　マジっすか。申し訳ないです！」
優輝があまりにもオロオロするので、陽乃と優衣はおかしくて笑ってしまう。そんな中、「よっしゃー！」と一際大きな声が上がった。

「ったく～、絶対ネクタイピンのほうがええのに」
「まだ言ってる。いいじゃない、今は直接の後輩は修平くんなんだから」
「不服やわぁ、絶対」
結局、ジャンケンに買ったのは修平で、サックスのチェーンネックレスをプレゼントにした。お金は翔と修平で半分ずつ出し合っている。
「明日の演奏会、楽しみだね！」
「そうやなぁ。なかなか演奏会、聴きに行く時間が取れへんかったからオレも楽しみ」
「ね！　あたしたちもさ、定期演奏会とかやってみたいよね！」
「……ホンマに？」

翔が一瞬、とても嬉しそうな顔をした。
「え？　うん。あたしは少なくとも、やってみたい」
「ホンマかぁ……！　そっか、うん、ヨシ！」
翔は一人、ガッツポーズを取って話を終わらせた。陽乃にはわけがわからない。
「ちょっとぉ！　一人で楽しそうに話解決しないでよ。あたしにも教えて？」
「フフーン。これはさすがにちょっとナ・イ・ショ！」
「えー？　ホントに？」
「うん！　近々、絶対話すからさ。今は勘弁！」
翔はそう言って陽乃の手を引いて走り出した。
（こういうとこ、ズルいっていつも思うけど負けちゃうんだよなぁ……）
陽乃は翔の微笑む姿を見ながら、手を引かれるがままに走っていった。

第１８３話　高まる感情

「ふわぁ～……何度来ても、ホールってスゴいよね」
美里が中央ホールのロビーで声を上げた。隣では雪子も天井を見上げて同じように「ふわぁ～」と言っている。
「ね！　ね！　スゴいよ、このプログラム！」
陽乃がプログラムを開いて美里たちに見せた。
「キャー！　すごぉい！　定期演奏会ってこんなに本格的にしちゃうんだね」
「去年、袴田中学を聴きに行ったけど、やっぱり学校ごとに特色が出てるね」
袴田中学のプログラムはすべて手書きで編集されており、中学生らしい初々しさが出ていた。それに対し、さすが私立の風見台はツルツルの紙に立派な印刷が施されている。
「見てみて！　部員名簿が草書体で書いてある！」
美里がグイグイと雪子の腕を引いた。
「ミサッチ、これ草書体じゃないよ」
書道をやっている雪子が冷静に返す。
「え？　そうなの？」
「全然違う。草書体っていうのは……こう書いてこう書くの」
「キャー！　すごぉい。ね、もっと書いて！」
キャイキャイと盛り上がる二人をよそに、陽乃は翔のところへ歩み寄った。
「ねぇ、岩切さんのトコに行ったりしないの？」
「え？」
「だって、最後の演奏会でしょ。頑張ってくださいとか言いに行かないの？」
「言いたいけど、オレらはいうても部外者なわけで。そう易々と楽屋には入られへんやろ」

「あ……それもそうか」
翔自身、そう言ったにも関わらずどことなく寂しそうだ。プレゼントも買ったとはいえ、渡すのは修平。翔は見ていることしかできないのだ。
「メールはどうなの？」
「ホールは基本電波が入らへんし、楽屋も地下とかにあるから電波悪いと思うねん」
「そっか……」
陽乃は何もできない自分が少しもどかしかった。翔はそんな陽乃に気づいたらしく、クシャクシャと頭をなでた。
「何もお前がそんなヤキモキすることないねんで？」
「うん……」
ブー、とブザーが鳴った。
「開演5分前です。ロビーにおいでのお客様は、客席にお着きください」
「行こうよ、みんな！」
「あ、わかった！　行こ、雪ちゃん」
「はーい」
陽乃たちは七海高校の部員が集まる席に急いで駆け込んだ。今日の出席者は家の事情で来れなかった慎也と塾だという洋之、あずさを除く全員。
陽乃はプログラムのまだ見ていないページをパラパラとめくった。すると、3年生の紹介というページに目が留まった。子供の頃の写真と、いま現在の写真が並んでいる。もちろん、翔平もそのようになっていた。
「ね、ね」
陽乃は翔の腕をつついた。
「なんやねん」
「このさ、岩切さんの隣に写ってるの、アンタでしょ？」
「え？　うわ！　な、ショーさんあの時の写真使ってるんか！？」

翔は驚いて自分のプログラムを見てみた。翔平の写真には、小学生くらいの翔平、修平、翔と女の子が1人写っている。
「ンフフ～！　しかもあたし、知ってるのよ～？」
「な、何をやねん」
「この女の子、雪ちゃんでしょ？」
「ふぇ？」
翔は呆気にとられた顔をした。
「なんだ？　アンタ知らないの？　これ、こないだ雪ちゃフワァ！？」
雪子が慌てて陽乃の口を塞いだ。それから耳打ちする。
「それはナイショでお願い！」
「な、なんれ？」
「恥ずかしくてたまんないから！」
「これ、永井さんなん？　オレ、よぉ覚えてへんねん」
「なんか人違いらしいよ」
陽乃は慌てて訂正しておいた。翔は特に気にする素振りも見せず
「なぁんや、そうなんか」とすぐに納得した。
「もう！　言っちゃ困るよ」
雪子がプンプンしている。陽乃はとりあえず「ゴメンね」と謝ってから、再びプログラムに目を通した。パート紹介。1年間の活動記録も写真付き。顧問紹介。楽曲紹介。とても充実していて、見ているだけで楽しい。陽乃はいつのまにか、それを自分たちの高校に置き換えて想像していた。
トランペットパート。真ん中にあえて男子の勇。勇の頭に、帽子のようにトランペットのベルを被せる陽乃と彩香。そんな写真を撮りたい。可能なら、安和にも入ってもらいたい。安和が入ったら、3人で勇の頭にベルを被せよう。
2年生の集合写真。照れる美里と慎也を中央に、絵美と春樹、陽乃と翔というカップル3組を並べてそれを冷やかす沙希、由美子、雪子、拓真。いつのまにかそんなポジションが決まってしまってい

たので、自然とそういう風に考えてしまった。
顧問紹介。イケメンな恭一のちょっと腑抜けた表情を捉えた写真を載せたいな。楽曲紹介は誰に任せようか。順平が向いているかもしれない。陽乃は自分たちの定期演奏会を開催できたら、どんなに楽しいだろうかと考えた。気づけば、クスクスと笑い声が漏れてしまった。
「なんや？　おもろそうやんけ」
翔がニコニコしながら問い掛ける。
「うん……。あたしたちも定期演奏会、できたらいいなって考えたらおもしろくってさ」
「そっか……！　オレも、実現させたいな」
翔は真剣な眼差しで一回強くうなずき、前を向いた。風見台高校の部員たちが舞台へ入ってくる。いよいよ、定期演奏会が始まるのだ。
章義が出てきた。彼の指示で全員が立ち上がり、照明がついて舞台が一気に明るくなる。同時に、開場が拍手に包まれた。１曲目――『パクスロマーナ』から第１部が幕を開けた。

第１８３話　高まる感情（後書き）

陽乃たちが見ているプログラムのうち、曲目と部員名簿のイメージはこちらです　↓　ｈｔｔｐ：／／１５０．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ５４６／

第１８４話　『風雅　Ｆｕｇａ』

『パクスロマーナ』が始まった。パクスロマーナは「Ｐａｘ　Ｒｏｍａｎａ」というラテン語であり、その意味は「ローマの平和」である。通常、この時代は紀元前２７年ごろから紀元後１８０年までを指すそうだ。

トランペットとトロンボーンのファンファーレから始まるこの曲は、他のマーチと異なりゆったりとしたテンポで荘厳な雰囲気を保ったまま、曲が流れていく。クラリネットのメロディがその雰囲気を作る過程で最も大切である。要所要所でティンパニなど打楽器が入ることで更新をイメージさせる雰囲気は保たれている。

基本的にメロディは楽器が入れ替わることで構成されている。また、後から追いかけるパートも多く、聴いている人を飽きさせない曲となっていた。ドラが派手に鳴り響き、曲の雰囲気が変わった。恐らく、転調したのだろう。

「あ……チャイムだ」

静かになったところで、美里の耳にチャイムの音色が聞こえた。いつのまにか移動していた遊佐みゆきが、そのチャイムを叩いている。

「やっぱいろんな楽器できないとダメよね……」

美里は決意を新たに、ティンパニを練習するようにしようと心の中で誓っていた。

「な、春やん」

拓真が春樹に声をかける。

「なに？」

「低音のメロディ、なくね？」

そう。課題曲のマーチを最近、翔から借りて二人で聴いてみたのだ。だいたいの曲において、マーチのときは曲の冒頭からしばらくすると、トロンボーン、ユーフォニウム、チューバ、バリサク、バ

スクラなどの低音楽器でメロディを担当するところがあるのだ。ところがこの曲、そういった部分がまだ出ていない。

「この曲はないのかも」

春樹たちは２００５年度の課題曲はまだ聴かずに、今日の定期演奏会に来たのだ。こんなことなら聴いておくんだった、と二人は密かに後悔していた。

曲が再び盛り上がりを見せる。そして、低音楽器が降下系の音を吹いた直後、それは来た。

「メッ、メロディだよ拓あん！」

「ホントだ……！」

しかも、ただのメロディではない。チューバとユーフォ、トロンボーン同士などでハーモニーを見せながらメロディを吹いているのだ。同じ音を吹くよりも難しいことをしている。

由美子と沙希も、真剣な眼差しでフルートなどの伴奏を聴いていた。得てして高音の伴奏というのは低音のメロディを意図しなくても邪魔してしまうことが多い。それは楽器の音質上、仕方のないことなのだが、風見台の面々はちっとも邪魔をせずにしっかりと伴奏としての役割を果たしている。

実に華やかな雰囲気を残して、パクスロマーナは終わりを告げた。

（クゥーッ！　やっぱいいな、定演！　オレらもやりたい！）

翔は思わずバタバタしてしまった。

「ちょっと！　佐野先輩、バタバタしないでください！」

麻綾がヒソヒソ声で翔を叱る。

「わわ、ゴメンなさい……」

翔がバタバタしたことで麻綾の席がグラグラ揺れ動いたのだ。こうしたホールでバタバタしたりするのはＮＧである。ちなみに、拓真や春樹のようにヒソヒソ話もあまり好ましくない。彼らも光瑠に注意されたようで、両手で口を覆っていた。

そして、次の曲――伝説のアイルランドが始まる。この曲はロバート・Ｗ・スミスの作曲で、打楽器が活躍する曲である。冒頭から

チェーンやらドラやらが出てくるので、美里、恵梨、優の3人は打楽器のメンバーに釘付けになっている。オーボエのソロから始まり、フルート、バスーンと次第に加わって曲が盛り上がっていく。

突然、部員が足を鳴らし始めた。人の足をも楽器にする。そんなおもしろい曲だって、吹奏楽にはあるのだ。

フルートのソリが始まった。後ろでウインドチャイムが滑らかで煌びやかな音を奏でている。そしてホルンがメロディを受け取ると同時に、人の声が加わった。歌の指示があるのだ。ティンパニの音をキッカケに、メロディがまた盛り上がりを見せる。そして照明が落ち、アルトサックスの翔平にピンスポットが当たった。

翔平の音がトロンボーンやチューバに支えられ、ホール内に響き渡る。緩やかでありながら、厚みのある音。翔は翔平らしい音色に鳥肌を立てていた。伴奏はサックスが受け取り、翔平のソロは最高潮のテンションに上がった。

金管群が奏でるメロディは、翔平のメロディの延長線上だ。こんな風にして、吹奏楽のみならず音楽というのはメロディを引き継ぎあいながら、ひとつの曲を完成させるのである。

『伝説のアイルランド』の興奮も冷めやらぬうちから、西邑由記子作曲『星の船』が始まった。最初の2曲と異なり、実に静かで優しいメロディが流れていく。静かな曲を演奏するというのは、技術がないと難しい。静かな音を吹くには腹筋の支えがないと厳しい。音が揺れたりして不安定になるからだ。また、ピアノからフォルテ、フォルテからピアノへの移行の差も大きいので、表現力も求められる。

そこで、サスペンドシンバルという楽器は非常に重要な役割を持つ。奏者次第で音色が大いに変わる楽器でもある。適当に叩けばそれなりの音が出るといえば出るが、迫力などの面を総合的に見ると、やはりプロと素人では音色ひとつ取っても違うものだ。

「わっ！　ビックリした」

小声で梨子が悲鳴を上げた。突然、クラッシュシンバルが鳴り響

いたのだ。意表をつく、という意味でも打楽器というのは実はおいしいポジションにある。それだけに、技術というのが求められるパートでもあるだろう。

最後の曲、『風雅　Ｆｕｇａ』が始まる。本当に風が吹くような冒頭から、急にテンポが緩やかになり、クラリネット、フルート、オーボエなどの木管楽器が繊細なソロを奏でる。かと思えば、激しい金管と打楽器のお互いが呼応するメロディ。緩急の激しさが、この曲の見せ所だ。そして、ビヴラフォンの音色の後に再び翔平にピンスポットが当たった。

「あ……」

陽乃が河原で聴いた、あのソロだった。

「ここだったのか……！」

練習のかいあってか、ビヴラートの効いた素晴らしいソロだ。サックスはよくわからない陽乃だが、鳥肌が立つほどのソロであったのはすぐにわかった。

曲は最終局面を迎えているのだろう。打楽器と金管が激しさを増す。陽乃は次の展開をワクワクする曲というのはこの曲が初めてだった。そして急速にテンポが落ち、再びサックスのメロディが始まった。再現部の多い曲だ。恐らく、このメロディを基準にしてできている曲なのだろう。

冒頭部分が再び流れる。最近、曲の終わりが近づいているなという部分を、陽乃もなんとなくだが察知できるようになってきた。そして予想どおり、曲は全員のトゥッティで見事な終わりを迎えた。

「第一部から聴かせてくれるねー」

由美子がグーッと伸びをしながら呟いた。

「あんなに吹いてバテないのかな」

絵美が不思議そうに首を傾げる。

「そんだけ、普段から基礎練習とかしてる証拠じゃないかな」

春樹は冷静に絵美の疑問に答えた。

「俺たちも要練習、だな」

「ホントホント」
拓真の一言に全員がうなずく。
「でもえぇやろ？　こういう本番聴いたら、刺激になって」
「それは思う。このままじゃあたしたち、まだまだだよね」
「ヨシ！　明日からも頑張りますか！」
「ミサッチ、まだ二部と三部があるから帰っちゃダメ」
沙希がツッコミを入れた。
「あ、そうだった」
ドッと笑い声が沸く。２年生１０人――今日は慎也が欠席だけれども、この１０人はずっと一緒にいるわけではない。陽乃は笑いながら、来年の今頃自分たちはどうしているのだろうか。ふと、そんなことを考えていた。

第185話　初めて見せた涙

第三部も終えて、アンコール『シング・シング・シング』がとうとう終わってしまった。

「ミサッチ、何それ」

よく見れば、美里のスカートの上にハンカチがセッティングされている。

「決まってるじゃない。今からあたし、泣きまくるからハンカチを準備してるのよ」

「あ、しまった！　私、ハンカチ忘れた！」

隣にいた梨子が悲鳴に近い声を上げる。

「つ、使う？」

誠がそっとハンカチを梨子に差し出した。

「いいの！？　ありがとー！」

梨子は嬉しそうに誠の水色に東京タワーの絵柄が入った、かわいいハンカチを受け取った。そして、照明が暗くなり、緩やかな音楽が流れてきた。

「あ～……もう……」

コブクロの『永遠にともに』だ。とうとう、３年生が引退する瞬間を迎えたのである。

「それでは、今年引退する３年生を……」

顧問の兵藤章義先生。優衣をぶとうとしたので陽乃の中では印象は最悪であった。しかし、今の彼を見ると、それなりの指導の仕方があるのかもしれないと思うようになった。陽乃自身、父親に昔は叩かれることもあった。最近、子供を叱れる人が減ってきていると聞く。それだけに、章義のような人物は貴重と言えるのかもしれない。

「……今年、顧問が変わって一番動揺したのは、３年生だったはずです。無駄に厳しい私の指導に反抗する３年生もいました。学年全

体と私でミーティングを重ねた回数は数え切れません。しかし、コンクールでは見事、関東大会において金賞を受賞することまでできました。近年、県大会突破が困難であっただけに喜びもひとしおだったのではないでしょうか」

既に涙腺がゆるんで美里はハンカチでずっと目を押さえている。

「私は……彼らに何かを与えられたかと聞かれたら、答えはノーです。代わりに、たくさんのことを彼らから学び、得ることができました。４０後半のオジサンが情けない話ではありますが、彼らは私が思っている以上に強く、吹奏楽に対してこだわりがあること……それを感じ取ることができました。私が忘れていた『ひたむきさ』を思い出させてくれた彼らに……いま、ありがとうを言わせていただきたい」

章義は部員たちのほうを向いて深々とお辞儀をした。

「ありがとうございました！」

章義の声が響き渡る。それに続くように、拍手が沸いた。

「それでは……3年生を紹介します。フルート、久枝（ひさえだ）　真実（まみ）」

その後、次々と3年生が呼ばれていく。その中には、初めての合同演奏で一緒になったテナーサックスの島田（しまだ）美穂（みほ）の姿もあった。不意に、トランペットの音が消えた。優衣も、優衣の同級生も1年生の子も泣きすぎて音が出なくなったのだ。すると、トランペットの３年男子――林（はやし）　秀徳（ひでのり）が名前を呼ばれていったん出てきたにもかかわらず、トランペットの席へ戻り、彼女たちのメロディを代わりに吹き始めたのだ。

「ヤダ……ちょっ……ヤバイってこの展開」

沙希がハンカチを取り出して涙を拭き始めた。七海高校の部員で泣いていない者はもう、いなかった。

「部長……岩切　翔平！」

「ハイ！」

翔平だけは泣いていない。章義から花束を受け取り、その花束を置いてなんと章義に思い切り抱きついたのだ。

「先生……ありがとうございました」
「スマンな……辛い思いばっかりさせて」
二人だけの、最後に交わす言葉。次からは、現役生徒と顧問ではなく、ＯＢとかつての指導者という関係に変わる。しかし、思い出はずっとそのままだ。翔平はそう、考えていた。
「本日は、私立風見台高等学校第１９回定期演奏会にお越しいただき、誠にありがとうございました」
拍手が沸く。陽乃の目からは数え切れないほどの涙がこぼれ落ちていた。
「私、部長の岩切　翔平は途中入部でした。このバンドの伝統、厳しさをよく知らず、けれども決して軽い気持ちではありませんでしたが、実力を認めて部長に推薦してくれた、副部長の島田さん。突然できた先輩に嫌な顔一つせず、ついてきてくれたサックスパートの佐野くん、榎本さん、奥田くん、古川くん。そして、こんな頼りない私についてきてくれた部員の皆！　感謝してもしきれません！
それから、学校の先生方、家族、地域の方々、何より、本日この演奏会に来てくださった、皆様のおか……げ……で……」
マイクに嗚咽が入った。翔がたまらず立ち上がって叫んだ。
「がんばれ、センパ――イ！」
ングッという声が聞こえ、すぐに翔平は挨拶を再開した。
「皆様の……おかげです！　ありがとう……ございました！」
今日一番の拍手が鳴り響く。
「本日で……３年生１５名は引退します！　ですが、これからも風見台高校吹奏楽部をよろしくお願いいたします！」
曲が大きくなり、遂にフィナーレを迎えて、とうとう定期演奏会は幕を下ろした。
「泣いたね～……」
雪子と美里が真っ赤になった目をお互いに見合わせて笑い合う。
「でもさぁ、どうすんのアレ」
美里と雪子が見る方向には、ハンカチでは既に押さえきれなくな

った涙と鼻水を流す翔がいた。
「ちょっと、大丈夫？」
「アカン……目が絶対腫れてる……恥ずかしくって顔上げられへん」
「でも……」
「！？」
翔の顔が強引に上げられた。その視界に入ってきたのは、翔平だった。
「ショ、ショーさん」
「よっ、カケボー！」
「……おめでとうございます！」
次の瞬間、翔が翔平に抱きついていた。
「キャ――！」
翔も翔平もそれなりに、イケメン。イケメン同士のまさかの抱擁に、雪子や美里、亜紀、恵梨が悲鳴に近い声を上げた。
「おおきに！」
翔平も強く抱き返した。南大阪市にある淀南中学校では、引退するときに先輩後輩同士で抱き合うのが習慣になっていた。そのクセが二人とも抜けずにいたのだ。

「結局、最後まで泣きっぱなしやった」
翔は陽乃の家の前でグズグズ鼻を鳴らしながら笑った。
「ホント。あたしの前でそんなに泣いたの、ケンカしたとき以来だね」
「ホンマにな……」
しばらく、沈黙が続いた。考えていることはおそらく、同じだろう。
「……また、これからも頑張ろうな」
「うん！　もちろん！」
「ほな……遅いから、オレも帰る」
「気をつけてね」

「じゃーな！」
翔は自転車に跨り、自宅へと向かって走った。
言わない。
のではないのかもしれない。
正確に言えば、言えない。
「……あと1年か」
翔たちと吹奏楽をできるのは、あと1年少しだろう。そう思うと、切なくなる。陽乃は泣きそうになる目をギュッと閉じて、深呼吸をしてから家に入った。

第１８６話　乾燥注意報

「ヤッバいなぁ……」

慎也は音楽室近くの男子トイレの中にある鏡で、自分の唇を映して見せていた。別にナルシストなのではなく、彼の唇の状態に彼自身がすごく、心配しているのだ。

１２月も中旬に差し掛かった、１２月１３日（水）。アンサンブルまで２週間を切った。金管アンサンブルで演奏する『高貴なるぶどう酒を讃えて』では、拓真がもう少しで冒頭のハイツェーと呼ばれる、チューバにしては高音の音から降下する音と、勇のフリューゲルホルン、拓真と雪子のソリが揃えばほぼ完璧という状態にまでなっていた。

一方の打楽器アンサンブルでは、亮平が少し苦戦しているものの、壮大な『木星』らしい雰囲気を出すことができ始めていた。両方ともに調子に乗れているだけに、慎也は自分の状況が不安で仕方がなかった。

１２月以降、神奈川県では連日のように乾燥注意報が出ていた。先日、横浜市では住宅火災が相次いで発生。どうやら乾燥した天気が原因のようで、天気予報では盛んに乾燥に注意するように予報士が喋っている。

今までの慎也ならこのニュースには別段関係がなかったのだが、今年はそうはいかなかった。そう。乾燥により唇が乾燥し、荒れていたのだ。唇が乾燥すると切れやすくなり、結果として楽器を吹くときにも痛みが走ったりしてしまうのだ。

「まっ……あと少しだし、そのうち治るだろ」

慎也はペロッと舌で唇を湿らせ、音楽室へと戻った。

「遅いよ川崎くん～。休憩、とっくに終わってる」

雪子がプリプリしながら帰ってきた慎也を出迎えた。

「悪い悪い。ちょっと野暮用で」

「何それ。金管セクションリーダーなんだから、きちんとしてもらわなきゃ！」
「ゴメンって。じゃ、もう一回チューニングやり直そう。ベーの音、全員で」
「はい！」
この時期、チューニングは重要だ。金属ということもあり、寒さで金管楽器は影響を受けやすい。すぐに楽器が冷えて、音程が下がってしまうのだ。本番前もなるべく、冷やし過ぎないように気をつけなければならない。
全員でベーの音を吹き伸ばす。どうも低音系の楽器は音程がよくない。
「じゃ、トロンボーンとチューバで」
「はい！」
慎也の指示で徹、亜紀、拓真と慎也の４人がベーの音を吹き伸ばす。
「う〜ん……。トロンボーン３人」
「はい」
ビヨヨヨ〜と不気味な気持ち悪い音が響く。
「誰だろ、音程悪いの」
慎也はチューナーを取り出し、一人ずつ吹かせることにした。
「吉山さん」
「はい」
亜紀が芯のある音をしっかりと伸ばす。バッチリ針はゼロを示していた。すなわち、音程はズレていない。
「じゃ、徹っち」
「はい！」
ブスッ、と頭の音が破裂した。
「ちょ、破裂音はナシ」
「はい！」
「もう一回」

今度はパーン！と気持ちのよい音が鳴った。徹もばっちり、針はゼロを示している。
「ってことは俺か……」
慎也があからさまに落ち込んだ。
「ま、ひょっとしたら音色の問題かもしれないじゃん」
陽乃がポンポンと優しく慎也の肩を叩く。
「そうだよな！」
「でも、それはそれで難しいですけどね」
「そうだよなぁ～……」
せっかく元気になりかけた慎也を、あっけない一言で勇が落ち込ませてしまった。
「ちょっと！　困るよ、テンション下がっちゃったじゃない」
陽乃がプリプリしながら勇にコショコショ声で怒りをぶつけた。
「とにかく、川崎くん吹いてみれば？」
雪子の一言に慎也がチューニングをしてみた。
「……。」
チューナーを見た亜紀と徹が顔を青くする。
「どうだった？」
「さ、３０低いです……」
「３０！？」
慎也も誰もがビックリする音程の悪さだった。
「なんで急にそんな風になるのかな」
「わかんねぇ……」
慎也はガックリと肩を落とした。すると、コンコンと音がした。
陽乃たちが入口のほうを見ると、安和がいた。
「安和センパーイ！」
陽乃は楽器を置いて安和にギュッと抱きついた。
「ちょっとぉ！　恥ずかしいじゃない、ストップストップ」
「はぁい」
陽乃が渋々と席へ戻る。雪子が「受験勉強、お忙しいですか？」

と聞いた。
「まぁねぇ～。でも聞いて！　中央大学の合格率、こないだの模試でBって出たの！」
「スゴいじゃないですか！」
彩香が大声を上げた。勇も驚いている。
「いいなぁ。安和先輩、美人で楽器吹けて頭いいんだから」
陽乃がプゥッと頬を膨らませた。
「その安和先輩に嫉妬してたのは誰でしたっけ～？」
翔が入口あたりでニヤニヤしながら立っていた。
「なっ……もう！　それは言いっこなしでしょ！？」
「へいへーい」
安和はクスクス笑いながら、陽乃の楽譜を覗き込んだ。
「わっ、難しい曲するのね～。それに楽譜真っ黒！　頑張ってる証拠ね」
「えへへ……」
安和に褒められて陽乃は少し照れていた。しかし、その隣の慎也がえらく沈んでいるのに気づいた安和は彼に声をかけた。
「どうしたの？　暗いけど」
「音程が悪いんです……。最近、ずっとだったんですけど特に今日はヒドくて……」
「ふぅん……ん？」
安和が慎也の口元をジーッと見つめる。
「ずいぶん唇が乾燥してるんじゃない？」
「え？」
「川崎くん」
陽乃が慎也の唇を見ると、確かに乾燥していた。
「ホントだ。バリバリ」
「ダメなんですか？」
安和が大きくうなずいた。
「ダメに決まってるじゃない！　奏者は口で楽器を吹くのが大前提

でしょ？　その唇がこんなに荒れてるんじゃあ、いい音も出ないわよ」

勇や徹も唇を触ってみた。

「松尾くんと富士原くんもちょっと荒れてる。それじゃダメよ、二人とも」

安和は女子部員も見て回った。

「うん、永井さん、朝倉さん、吉山さん、久野さんはＯＫね。それから本堂くんも大丈夫だわ」

「で、でも荒れないようにするにはどうするんですか？」

「そんなの簡単じゃない」

雪子がリップクリームを取り出した。

「リップクリーム塗ればいいの」

「それだけですか？」

勇が拍子抜けした声を出した。

「それだけっていうけど、これが大事よ。楽器吹くときは気持ち悪いかもしれないから、せめて寝る前に塗っておくこと。そうすれば、乾燥を防ぐことはできるし、唇が荒れても治すこともできるからね」

「そっかぁ……」

慎也は唇に触れた。ザラザラしている。拓真の唇を見ると、ビックリするほどみずみずしかった。

「とにかく、今日にでもコンビニかドラッグストアに寄ってリップクリーム、買って帰ってね」

「はい！」

「それに……」

安和が慎也の耳元で彼だけに何かを囁いた。

「！」

「ね？」

「先輩……」

顔が赤くなる慎也。

「フフ！　じゃ、私そろそろ帰らなきゃ。また来るね！」

安和は小さく手を振りながら、音楽室を後にした。
「安和先輩、なんて言ったの？　最後」
「なんでもねぇよ」
慎也は顔を赤くしながらそっぽを向いた。

帰り道。
「えー？　リップクリームぅ？」
春樹がなんでそんなものを、という顔をした。対する翔は「えぇやん！　買おう買おう！」と言う。慎也は翔の唇を見た。荒れていない。いっぽうの春樹は少し荒れ気味だ。
「しょうがないだろ。荒れて楽器が吹きにくくて、最近音程も悪いんだ」
「え？　それって、唇のせい？」
「全部が全部そうとは限らないけど、ケアするに越したことはないだろ。それに……」
「それに？」
慎也は恥ずかしそうに小声で言った。
「かっ、彼女とキスするときに唇荒れてたら、女の子は幻滅するって……岡崎先輩言ってた」
春樹と翔は足を止め、各々絵美と陽乃の顔を思い浮かべた。慎也は慎也で、美里の顔を思い浮かべる。
「買って帰ろうか？」
春樹が俄然張り切って近くのドラッグストアへ足を向けた。
「うん！」
「これで本番もバッチリやな！」
「どっちの本番だよ」
慎也がニヤニヤしながら翔の肩を叩いた。
「わー！　慎也が変なこと考えてる！」
「そんなことしてねぇよ！　バカケル！」
「あー！　ヒドい！」

3人は下心をなんとか隠しながら、ドラッグストアへと向かった。

第１８７話　枠を越えて

１２月１５日（金）。今週末の土日は珍しく部活が休みになるので、今日は合奏をしておくことになった。もちろん、曲は「タンツィ～３つのロシア舞曲」だ。打楽器はたくさんの楽器が必要なので、準備にてんやわんやしている。もちろん、男子は率先して重い楽器を運ばなければならないので、ほぼ全員で楽器を準備するという形になる。

「ねぇ、陽ちゃん」

美里がベードラを一緒に運んでいる陽乃に話しかけた。

「なぁに～？」

「４月になったらさ、もっと部員増えるかな？」

「どうだろうね～。勧誘頑張らなきゃダメだけど」

「打楽器、正直今回の曲はいっぱいいっぱいなの。あたしはティンパニにへばり付いてるけど、あずとか優っちとか短い時間でもうあちこち行かなきゃなんないから……なんか申し訳ない感じで」

「そうなの？」

「そうなの～。ちょっと余裕があったら見てやってよぉ」

「ゴメン。トランペットも鬼のような旋律があるから無理」

「だよねぇ」

二人は同時にため息をついた。正直なところ、あの曲はこの七海高校の人数ではしんどいところがある。

「じゃ、ありがと」

ベードラを運び終えたところで、美里が少し低い声で礼を言った。

「うん。頑張ろうね」

陽乃も少しトーンの落ちた声で答える。それから急いで楽器の準備をし、音出しを少しだけする。合奏は５時から１時間にしぼってするということだったので、あまり時間はない。今は午後４時３０分ちょうど。ロングトーンやチューニングをするには時間は十分あ

るほうだろう。
「こんにちは！」
恭一がドッサリと何かを抱えながら音楽室にやって来た。
「先生、なんですかそれ？」
翔が手を挙げて質問する。
「これか？　これはクリスマスの日にお前らにやる手土産だよ」
「ゲーッ！　冬休みの課題！？」
チラッとサイドから見えたので、翔がうめき声のようなものを上げた。
「そのとおり！　部活ばっかりで勉強が追いついていないなんて言い訳できないように、吹奏楽部顧問特別プレゼントだ」
「そんなのいらないでーす！」
梨子が必死に手を挙げてアピールしながら叫ぶ。
「心配するな～。期末試験の成績次第で全然ない人もいるからな」
ニッと恭一が笑う。その笑みがなぜ自分に来たのが、陽乃は不安でならなかった。
ロングトーンを終えてから、恭一はすぐに「はい、タンツィ」と言ってスコアを取り出した。
「はい！」
部員たちが返事をする。このタンツィという曲は神戸シンフォニックバンドに委嘱され、高橋（たかはし）　徹（とおる）氏に献呈されたものである。初演は２００６年３月１９日に神戸で行われたそうだ。
恭一から「タンツィ」という指示が飛んだ瞬間、優とあずさの顔が強ばった。美里は心配そうに彼らを見つめる。
一方の健之佑、梨子、佳菜の木管高音組も緊張の色を隠せない。今日からテンポをほぼ参考音源どおりにすると言われたはいたが、いざその瞬間になるとやはりドキドキするものだ。
指揮棒がそっと降りる。木管楽器や低音楽器がスウウッと息を深く吸い、音を伸ばす。ここはイントロのような部分で、慎重さが求められるだけに部員たちの表情も一様に堅い。健之佑がイングリッ

シュホルンを奏でる。その後にフルートやクラリネットなどが音を重ねることで、音の厚みが増していく。そして金管楽器の伸ばしの後にいったん、間が空く。

テンポが速くなる。ここは第一楽章だ。洋之がタンバリンを奏で、優がタムタムをクレシェンドを効かせて強く叩く。そしてオーボエに持ち替えた健之佑、佳菜、梨子の3人がメロディを吹く。とても速い動きだけに、3人は必死だ。そしてユーフォニウムの愛実と春樹が加わる。それに素早く移動した優がグロッケンを奏でる。トランペットの強烈なパッセージ。その裏で洋之が印象的なタンバリンの音を出す。トランペットが少し変化した形でメロディをもう一度吹くのだが、そこで再び移動した優が今度はシロフォンを叩く。そしてオーボエ群の同じメロディの繰り返し。それらを越えると一瞬、調が長調へと変化する。

「ティンパニ遅い！」

指揮を振りつつ、恭一が美里に指示を飛ばす。

「シンバルもっと鳴らして！」

恵梨のシンバルは大事なスパイスだ。メリハリが求められるのだろう。一度目のピークを越えるとチューバ、バスクラリネット、弦バスが非常に細かい動きをするところに差し掛かった。

「モゴモゴしてて何を吹いてるかわからないぞ！」

ユーフォとホルンのメロディ。

「遅い！　もっと強弱差をつけて！」

サックスとオーボエのメロディが重なるところもある。

「ズレてるぞサックス！」

とにかくこの『タンツィ』という曲は一人ひとりの動きが非常に大切になる。第一楽章の再現部になる手前で恭一が指揮を止めた。

「……しんどー！」

翔が楽器を口から放すなり、大声で悲鳴を上げた。ドッと笑い声が沸く。

「はいはいはい、どうだ？　この曲」

「正直しんどすぎまーす！」
真っ先にはるかが手を挙げた。
「なんだサックスパートは。ヘナチョコばっかりか？」
「失礼ですね！　はるかと一緒にしないでください」
麻綾がプリプリしながら首を横に振った。
「いいか？　今回の曲は木管だけ、あるいは金管だけ、パーカッションだけというういわばパート単位でメロディを吹いているだけじゃないんだ。気づいたとは思うが、最初だったらオーボエ、ピッコロ、エスクラに始まりユーフォ、グロッケンが加わる。トランペットであれば、シロフォンが加わるだろう？　それに弦バス、バスクラ、チューバ。ユーフォ、ホルン。一楽章でザッと挙げただけでもこれほどメロディが木管、金管、パーカスと跨っているんだ。今までみたいにパート練習だけでは追いつかない部分がある」
翔は自分のメロディが他のパートと重なっているところに赤ペンでチェックを入れた。
「本番まで2週間切ったことだし、そろそろパート練習というよりもセクション練習を中心にやっていくようにしてくれ。川崎、橋本。頼んだぞ」
「はい！」
二人は気合の入った返事をした。
「それから、田中」
「はい」
「パーカスの並べ方、もうちょっと考えておいてくれ。今回は日高と乃木が頻繁に移動するからな。万が一打楽器の転倒なんかがあったら日高や乃木だけでなく、他の部員もケガをしたりする可能性があるから、そのあたりしっかり頼むぞ」
「はい！」
「よし！　じゃあテンポを落としてもう一度、頭から行くぞ」
「はい！」
日が暮れてからもしばらく、音楽室からは吹奏楽部が奏でるロシ

ア民謡調の曲が聞こえてきていた。

第１８７話　枠を越えて（後書き）

このたび４月１日より就職し、社会人の身となりました。そのため、更新速度が低下し不規則になります（＞＿＜）　基本的に『奏～ｋａｎａｄｅ～』につきましては土曜日・日曜日に更新したいと思います☆

平日にも時間がありましたら、更新していきたいと思いますので何卒、よろしくお願いいたします☆

第１８８話　無力な自分

「翔！　あたし塾だから……ゴメンね？」
陽乃は今日、塾のある日だ。金曜日は古文の日だと言っている。
「おぅ！　頑張れよ～」
「ありがと！　あと……」
陽乃がモジモジした様子で翔のほうをジッと見た。
「わかってる。１時に七海駅の北口でえぇんやろ？」
陽乃の顔がパッと明るくなった。
「うん！」
「了解。ほな、頑張れ！」
「うん！　バイバイ！」
翔は笑いながら手を振って陽乃を見送ってから、再び楽器を磨き始めた。そうこうしているうちに部員たちはどんどん帰っていく。
翔は「お疲れ～！」と全員に声をかけながら、部員たちが全員出て行くのを待っていた。
「よっし……。ほな、オレも帰ろっと」
翔はサックスを右手に持ち、カバンを左肩に下げて鍵を手にした。さすがにこの時期になると冷えてきて、廊下でも白い息が出るほどだった。
「あれ？　なんや……誰かパーカス倉庫の電気つけっぱなしやんけ」
翔はブツブツ言いながら肩に掛けたカバンを下ろし、電気を消した。
「わっ！」
消すなりすぐに声が聞こえた。
「だ、誰かおったんか？　ゴメンゴメン！」
慌ててもう一度電気をつけ、扉を開けるとシロフォンのバチを構えたまま座り込んでいる優の姿があった。それから、はるかも一緒にいた。

「なんや、珍しい組み合わせやな」
「エヘヘ……俺の練習に最近、付き合ってくれてるんです」
「へー。西嶋さんと優っちって仲良かったんや。知らんかった」
「エヘヘ……」
妙な間が空いた。翔はなんだか二人の邪魔をしてしまった気がした。
「ゴメンやねんけど、そろそろ戸締りせなアカンねんやん」
「あ、すいません！　すぐに出る準備しますね」
はるかが慌ててカバンを手にした。
「大丈夫？　片付けできそう？」
「大丈夫だよ。バチしまってすぐに降りるから、西嶋さんは先に佐野さんと下に行ってて」
「わかった。行きましょっか、先輩」
「あぁ、うん……」
はるかは半ば強引に翔の制服を引いて階段を降り始めた。二人の足音だけが響き、沈黙が続く。翔はなんとも居心地の悪い時間をヤキモキしながらただ、流れるのを待つしかなかった。耐え切れずに、翔が喋り出した。
「せやけど、西嶋さんと優っち、仲良いなんて全然知らんかったわぁ！」
「まぁ……仲がイイっていうか……ストレスのはけ口ですね、私は」
「なんで？　そんな感じには見えへんけど」
「いいえ～。私、日高にそう思われてもいいんです」
はるかの顔が少し、柔らかくなった。間違いない。彼女は今きっと、優に恋をしている。翔はなんとなく、微笑むはるかの顔が陽乃と重なった。
「優っち……のストレスのはけ口？」
「……日高には言うなって言われてますけど……やっぱり私、佐野先輩には知っといてほしいんでいいますね」
ドキッとする。何か、とんでもないことを抱えていそうな表情を

したはるか。その表情は真剣だ。ここで冗談など言える雰囲気では、とてもなかった。

「いま……ちょっと日高の家、大変なんです」

「大変？　どういうこと？」

「……日高の家、兄弟多いらしいんですね」

翔もそれはよく知っていた。優が次男だ。上に高校3年生の姉と大学2年生の兄がいる。それから、優の5つ下、小学校5年生の弟もいる。受験を控えた姉、学費がまだまだ必要な兄、まだまだ手のかかる弟。そして、優。

「なんですけど……その……」

「西嶋っ！」

はるかの言葉を遮るように優が息を切らして階段を降りてきた。

二人は目を丸くして優を見つめた。

「……言わないって約束しただろ！」

「でも……でも、この演奏会が終わったら言うんでしょ？」

「先輩には余計な心配かけたくなかったんだ！　だから……言ってほしくなかったのに」

はるかも優も涙目になっていた。翔だけが取り残されたように、呆然と立ち尽くした。しかし、すぐに優のところへ近づき、声をかける。

「どないしてん。オレ、部長やで？」

「……。」

「部長以前に、優っちと毎日一緒にクラブやってる仲間やん」

「……。」

「西嶋さんに言えるんなら、同じ仲間のオレにも……何があったんか教えてぇや」

優の涙腺がそこで一気に緩み、大粒の涙がこぼれ落ちてきた。

「先輩……」

力なく座り込みながらも、優は話を始めた。

「俺の父さん……会社、潰れたんです」
「え……」
優はとつとつと、自分の家の状況を説明した。
「本当についこの間なんですよ。12月の2日に、父さんが帰ってくるなり急に『会社が潰れた』って。本当はずっと前から資金繰りとかいうのが悪化してたのは社員全員が把握していたらしいんですけど、父さんは俺たちに心配させたくないからって黙ってたんです」
「……。」
翔は自分に照らし合わせて考えてみた。もしも昭の働く会社が倒産したら、昭は翔たちにそのことを伝えるだろうか。きっと、ギリギリまで一人で悩むだろう。言われたとき、どうなるだろうか。綾音はまだ中学3年生。高校受験だ。七海高校に行きたい。行って、楽器を吹きたいと言ってくれている。智輝はまだ小学生だ。優の弟とそう年は変わらない。自分は来年、大学受験の身になる。それらの希望がすべて費えるかもしれないのだ。
恐らく昭の再就職は難しいだろう。もし再就職できても、収入はどうなる？　学費は払えるのか？　受験は綾音を優先してやりたい。自分は長男だ。高校卒業後、就職するほうへきっと考えを変えるだろう。クラブは……当面の間、できないかもしれない。
翔は自分自身の考えにゾッとした。同時に、優が同じことを考える可能性が高いのではないかと思い、思い切って聞いてみた。
「今後、どうなりそうなん？」
「わからないです……。ただ、父さんの働く場所とか全然あてがないんで……当分、母さんがパートとかして……貯金も崩していくしかないって」
「……。」
あまりにも普段の生活と現実離れした話に聞こえ、翔はまるでテレビの向こう側にいるような錯覚に陥った。
「俺も……学校続けて来れるか全然わからないんです」
クラブ以前の問題だった。義務教育ではない高校。すなわち、学

費が必要になってくる。それがまかなえなくなるということはつまり、退学を意味していた。

「……そういうわけで、年明け……俺、どうなるかわかんないんです」

はるかがヒックヒックと声を殺しながら泣いた。翔も涙がいつの間にか溢れ、気づけばギュウッと思い切り優とはるかを抱きしめていた。

「ゴメン……オレ、オレ……何にもできへん……」

「やだなぁ！　佐野さんのせい……じゃっ……」

3人はただ、冷え込んできた廊下で震えて泣くしか術がなかった。

「じゃあ……失礼します」

「さようなら、佐野先輩」

「あぁ……また、月曜日な」

翔は肩を落としながら帰るはるかと優の背中を見送ることしかできなかった。

神様――。

この世に神様っていう人がおるんなら。

オレの大切な仲間、助けたってください。

「お願いします……」

翔は自分の無力さを感じながら、雪雲で重い空を見上げてそう呟いた。

第189話　本音を言ってくれ

「ただいま……」
優がそっと玄関のドアを開け、帰宅時の挨拶をすると母の咲江（さえ）がフライパン片手に顔を出した。
「おかえり～。どうしたの、ずいぶん落ち込んで」
「う、ううん。なんでもないよ」
先輩と同級生に家の事情を話しただなんて、とても言えなかった。絶対に話すなと咲江からも父の文博（ふみひろ）からも強く言われていたからだ。しかし、言わなければ自分がおかしくなりそうだったので、遂に言ってしまったのだ。そのせいで、ずいぶんと後ろめたい気持ちが湧き上がってくる。
「お風呂、先に入るでしょ。寒かったし」
「うん。そうする」
優は笑顔を作って2階へ上がった。高校生になって、初めてもらった自分の部屋。けれども、果たしてこの家でずっとこれからも暮らしていけるのかどうか、優は少し不安になった。

「雨か……」
翔はトボトボと歩きながら帰宅する途中だった。津上橋のあたりで大粒の雨が降ってきた。冬にしては珍しく強く降り始めたので急いで帰ろうと思い、小走りになった。
「……。」
しかし、すぐにその足を止めて翔は今来た方向とは逆へと向かって走り出した。
ピンポーン、と軽快な音が響いた。
「穂（みのる）、ちょっと出てくれない？」
「はぁーい！」
咲江に言われて優の弟である穂がインターフォンを取った。

「はぁい？」
「あ……あの……オレ、優くんと同じ吹奏楽部に入ってます、佐野と言います」
「さの？」
穂には接点のない翔だったので、どう説明したものかと思い言葉に詰まった。
「おかーさーん。ユー兄ちゃんのお友達」
「友達？」
インターフォン越しに咲江の声が聞こえる。
「はぁい！　どちら様？」
「あっ、あの、僕、優くんと同じ吹奏楽部の……部長させてもらってます佐野です」
「あら！　部長さん？　ちょっと待ってね」
咲江は慌ててフライパンの火を止め、表へ出た。
「はぁい！　お待たせ……ってアラアラ！　びしょ濡れじゃないの！」
「あの！　そんなことより、お伝えしたいことがあって……」
翔は泣きそうになるのを堪えながら、伝えたいことすべてを咲江に伝えた。

「はー、いいお湯でーした」
優がお風呂から出ると、咲江、姉の美希（みき）、兄の弘明（ひろあき）が座っていた。
「ど、どしたの？」
「座れ、優」
弘明が口調を強めて、彼の正面に座るように指示した。普段は優しい兄の強ばった顔に、思わず優も唾を飲んでしまう。
「どしたの？」
誰も喋らない時間が続く。
「俺、何かした？」
「言ったでしょ」

ドキッとした。美希の一言すべてが、優のしたことを指摘しているようで冷や汗が出る。
「なんで言ったの」
咲江が問うた。優は震えながら考えた。この内容を話したのは、翔とはるかのみ。しかし、はるかはずっと前からその話を知っていたはずだ。そうすると、今日話したばかりの翔が言いに来たとしか思えなかった。
「誰に聞いたの？」
「……部長の、佐野さんよ」
予想どおりであった。しかし、優は怒る気になどなれなかった。優しい翔のことだ、きっと優がクラブを辞めないでほしいというようなことを頼みに来たのだろう。
「そっか……」
「いま……後ろにいらっしゃるの」
「え！？」
優が振り返ると、ショートの髪型がびしょ濡れになって崩れている翔の姿があった。
「さ、佐野さん！」
「ゴメン……やっぱオレ、無理や」
翔は頭に被せていたタオルを手で下ろし、続けた。
「オレさ、やっぱ優っちがおらん部活なんか考えられへん！」
「……。」
「ヒロがおって、優っちがおって、徹、勇、ジュンペー、みーやん、駿。優輝がおって、春やんに拓あんに慎也。まこっちゃんに健之佑。この中の一人でも欠けたら、なんか……なんか……」
それ以上は言葉に詰まって出なかった。
「ゴメンなさい……でも、でも俺……へ！？」
急に優の制服が誰かに引っ張られ、強引に翔のほうからさっきまで座っていたテーブルのほうへと向けられた。それと同時にパン！と乾いた音がした。

「か、母さん……」
咲江が優の頬を叩いたのだ。
「もしかして、家のこと知って、クラブを辞めようなんて思ったんじゃないでしょうね？」
「……。」
「答えなさい！」
「うん……」
優はか弱い声で答えた。次の瞬間、ギュッと優を咲江が抱きしめていた。
「バカ……子供はね、親のことなんか気にしなくていいの」
「でも……」
「お父さんね、毎日ハローワークに通って就職先、探してるのよ。美希も弘明も大学では奨学金をもらいながら、勉強だってできるの。お母さんもパートを少し増やすわ。優が心配すること、何もないの」
「……。」
「だから、クラブを辞めるなんて言わないでちょうだい。私、まだ優が演奏してる姿、見たことないんだから」
「お母さん……！」
優は声を上げて泣き始めた。
「俺ね、本当は辞めたくなんかなかった！　佐野さんも朝倉先輩も田中先輩も、乃木も秦野もヒロポンも好きだし……大好きな人もできたし……！」
そこから後は声にならなかった。翔は震える優の肩を叩いた。
「オレ、そろそろ帰るな」
「え？　で、でも」
「最後に一つだけ約束して？」
翔はニッと笑って優の頭を撫でた。
「また、明日な」
「あー！　もう助動詞なんかサッパリわかんなぁーい！」

「ちょ、陽乃。もう夜遅いから」
陽乃の雄叫びに同じ塾に通う水原（みずはら）　瑛衣（えい）が微妙にツッコミを入れた。
「ねぇ、今度の小テストの前にどれが出そうか教えてよ！」
「やぁよ、私だってヤマはそんなに得意じゃないんだから～」
二人がワイワイと楽しそうに話していると、目の前をずぶ濡れになって歩く人の姿が目に入った。傘を差しているのに、ずぶ濡れというのも妙な雰囲気だ。
「やだ、ちょっと見て。傘差してるのに、ずぶ濡れで……」
瑛衣が陽乃の袖を不安そうにキュッと握る。
「ホントだ……。誰なんだろ、アレ」
「ウチの制服よ？」
「ウソ！？」
瑛衣に言われて初めて陽乃は、七海高校の男子の制服であることに気づいた。
「翔……？」
「え？」
「翔！」
陽乃が相手を呼んだが、まったく動じずに人影は津上橋方面へと消えた。
「佐野くん？　間違いじゃない？」
「……そうよね。こんな時間にいるはずないよね」
陽乃はホッとため息を漏らし、瑛衣と一緒に自転車置き場へと向かった。
その頃、翔はなんとか陽乃に自分であるとバレずに済んだことに安堵を覚えていた。
「アイツかなり鋭いからなぁ……ックシュン！」
翔は身震いし、少し足を速めて歩き出した。
――やっぱり、もうちょっと考えさせてください。

「考えんでも、わかってるんちゃうんか、優っち……」
翔は足元に転がっていた小石を蹴った。
「本音言ってくれや……」
ギュッと傘を握る力が強くなった。アンサンブル本番まであと10日。そして、冬の定期演奏会までジャスト1週間。

第１９０話　どれだけ離れても

次の週の１２月１８日（月）。アンサンブルまでちょうど１週間、冬の定期演奏会までは５日となった。そんな大事な週にも関わらず、優はなかなか姿を現さない翔に不安を覚えていた。

「こんにちはー！」

麻綾とさゆりが元気よく返事をする。サックスパートの彼女たちが挨拶を真っ先にするということは、翔の可能性が高いと思って優は勢いよく音楽室の入口を見た。

「どしたの、日高くん」

陽乃だった。いきなりだったので目を丸くしている。

「いえ……なんでもないです」

「そう？　あ、そうだ。すいませーん、ちょっと聞いてくださ～い」

陽乃が手を叩いて全員に指示を出した。

「実は翔が土曜日から体調崩してて、今日も部活に来れないってことなので、あたしが指示出します！」

「え？」

「それじゃあ５時から１時間程度、合奏の時間を取ります。６時に合奏を終えて、６時１５分からアンサンブルメンバーは７時半までアンサンブルの練習に入ります」

「はい！」

「では、合奏の準備をしてください」

「はい！」

優は翔が熱を出したのは自分のせいではないかと思った。そう思うと、なんだか胸が苦しくて仕方がなかった。

「遅い！」

第１楽章冒頭のタムタムのテンポがずれたので、恭一が怒鳴った。

「すいません」

「……。」
恭一も優の事情はよく知っている。
「ま、気張らずにリラックスして叩けよ」
「はい」
怒鳴ったわりにアッサリと済んだので、洋之や恵梨は首をかしげて不思議そうに目を合わせていた。
「もう一度、テンポの上がったところから」
「はい！」
優はバチを構える前に、ポケットの中に入っているものを確認した。

［　休部届　１年Ａ組　日高　優　］

封筒の表にはハッキリ、そう書かれていた。

合奏が終わって、すぐに片づけに取り掛かる。とはいえ、打楽器アンサンブルではほとんどの楽器を使用するため、特にパーカスメンバーは忙しくなかったので管楽器の椅子を戻したり、毛布（音を吸収するために敷いている）を畳んだりすることにした。
「よいしょっと」
優は小さな体で椅子を一所懸命運んでいる。
「頼んないなぁ、優っちは」
徹がフォローしてくれた。優は笑いながら「俺と身長、ほとんど変わんないクセに～」と言い返す。
「いいやぁ、７センチも違うんだから、断然俺のほうが安心して運べるでしょ！」
「いやいや、俺こう見えても腕力あるか……うわぁっ！？」
「危ない！　ほら、言ってるそばから」
「へへへ～。ありがと」
優は椅子を持ち直して運び始めた。そのときだった。

「優っち、何か落としたよ」
徹が拾ったそれは、休部届けだった。
「そ、それは――！」
「……！」
徹が字を目にしてしまったようで、体が固まった。
「……あぁ」
優は目を覆った。
それからすぐに、全体会議が行われた。今日の練習はおそらく、もうできないだろうなと陽乃は思ったが、そんなことよりもっと問題なのは優の件だ。
「どういうことなの！？」
一番大声を上げているのは、亜紀だった。
「なんでこんな大事な時期に休部なんてするんだよ？」
洋之も寂しそうな表情で優に問い詰める。
「やめてよ！　日高だって、いろいろあるんだよ！」
はるかが優の前に立ちはだかった。
「何？　はるかちゃんは何か知ってるの？」
「そ、それは……」
みゆきの問い詰めに、はるかも黙り込んでしまう。このままではマズいと思った陽乃はすぐに職員室へ走った。
「先生！　東先生！」
失礼しますの挨拶もしないまま、陽乃は恭一のところに駆け寄った。
「こら朝倉！　いま職員会議中だぞ！」
「た、助けてください！」
「どういうことだ？」
陽乃は全身で息をしながらも、ハッキリと言った。
「クラブが、紛糾状態なんです」
結局、あの後すぐに恭一が駆けつけて紛糾状態はなんとか抑えら

れた。けれどもそのまま、部内会議にまでもつれ込んでしまった。
「どういうことなのか、理由が聞きたいの」
梨子が強い口調で言った。
「日高……言ってもいいんじゃないか」
恭一の呼びかけにも、優は涙目で首を振る。
「なんでだ?」
「……。」
優は答えようとしない。
「なんか理由があるんだろ」
慎也が優しい口調で言った。
「そうでなきゃ、優っちがそんなこと突然するなんて思えない」
しかし、一瞬空気を乱す言葉が聞こえた。
「やっぱり、初心者だから続かないんじゃないの?」
「やめろよ、優輝!」
その一言に、健之佑が怒って優輝の胸倉を掴んだ。
「だってそうだろ! こんな大事な時期に、アンサンブルメンバーにもなったヤツが突然辞めるとか正直迷惑なんだよ!」
「だからって今のはヒドい! お前、そんなヤツじゃねぇだろ!」
「やめてくれよ!」
優が叫んだ。優輝と健之佑もその手の動きを止めた。
「……優輝は悪くない」
「でも、お前今の言葉めっちゃくちゃヒドいじゃないか!?」
「違うんだ」
優は大粒の涙をこぼしながら震える声で言った。
「俺の背中……押してくれたんだよな? 同じ中学だから、誰かから聞いてるんだよな?」
「……バカ」
優輝が涙をこぼし始めた。優も震える声で、事情を説明し始める。
「実は……今月の初めに、俺のお父さんの会社が潰れました」
「……。」

同じパートの美里、恵梨、あずさ、洋之は呆然とした表情になった。
「お父さんはいま、就職先をもう一度探してます」
淡々と語る優の表情が、かえって沙希と由美子には辛く映った。
「お母さんはパートを増やして、兄貴はバイトで授業料を、姉貴もバイトで受験料を稼ごうと必死です」
陽乃には想像できない話だった。祥夫の会社が潰れ、由利が働きに出る。夏樹はどうなるだろうか。自分はどうなるだろうか。まったく想像できない。しかし、いまその事実が優には襲い掛かっているのだ。
「俺は……両親に気にしなくていい、吹奏楽部で毎日頑張れって言われました」
優の声を聞いているだけで胸が締め付けられる。愛実は耳を塞ぎたくなった。春樹と拓真、亮平はしっかりと優の顔から目を逸らさず、話を聞いている。
「でも……俺も家族だから、助けたい。支えられるばっかりじゃ嫌なんです」
目の色が少し変わったような気がしたのは、私だけだったのだろうかと雪子は思った。
「支えたい。そう思うんです」
俺が優っちの立場なら、きっとそう思うだろうなと誠は心の中で呟いた。
「でも、吹奏楽部にはいたい」
優が初めて笑った。その笑顔はいつもの優のものだったので、彩香は少し安心した。
「辞めるつもりはないんです。でも、家族をやっぱり支えたい」
かなり葛藤したのだろう。自分だったらそこまで考えられるだろうか。絵美は自問した。
「だから、冬の定期演奏会が終わって、アンサンブルを力いっぱい頑張って、結果が出たら……休部したと……お……もい……」

優の涙からボロボロと涙がこぼれ落ち、言葉が途切れた。急に美里が立ち上がり、ギュウウッと優を抱きしめた。
「田……中……センパ……」
「もういい！　言わなくていい！　お願いだから……」
勇は見ていられなかった。クラブの男子の中でも、一番仲のいい優が、現実離れしたところにいる気がして、とても見てはいられなかった。
「俺……絶対戻りますよ……どんなに離れても……」
優がそっと呟いた。しかし、それは全員の耳にしっかりと届いていた。

帰り道。今日はパーカスメンバー全員で帰ろうと、あずさが提案した。狭い歩道を5人が並んで帰る。なんだか新鮮だった。とはいえ、交差点で美里、恵梨と洋之、あずさと優というふうにバラバラになってしまう。
「じゃ……お疲れ様」
美里が優しく言った。
「また明日ね、日高くん」
恵梨が手を振る。そうだ、まだ休部するには早すぎる。洋之も笑顔で、つとてめ笑顔で優に「じゃあな！　また、明日！」と手を振った。
信号を渡る恵梨と洋之。右折するあずさと優。そして、一人左折する美里。美里はしばらく優の背中を見送り、暗闇に消えてからようやく歩き出した。
家へ帰ると、門の前に誰かが座っていた。
「よぉ」
慎也だった。
「おかえり」
「ただいま。どしたの？」
慎也が寂しそうな表情を浮かべる。

「やだなぁ。慎也にそんな暗い表情似合わ……」
急に慎也が美里を抱き寄せた。
「我慢するなよ」
「……。」
「我慢するなって」
「……ヒック」
「ホントは辛くてたまんねぇんだろ？」
「ッグ……ウッグ……！」
「遠慮なんかいらないから……」
「うわああ～……あああああ……」
初めてできた後輩。初心者だっただけに、一番親近感が湧いた後輩。そんな後輩の窮地に手助けできない自分が一番、もどかしいと美里は思っていた。
いつのまにか降り出した雪の中、慎也は美里をずっと抱きしめてただ、見つめていた。

第１９１話　がんばろう

「……。」

１２月２３日（土）。いよいよ七海市吹奏楽連盟第１３８回定期演奏会の日になった。管楽器群は地下のリハーサル室でチューニング兼最終確認をしに行っている。その間、パーカッションは楽器の移動などはリハーサル室へしている時間が手間になるので、舞台袖で待機するのである。優は一人離れてＭＤで『タンツィ』を聴きながら集中力を保とうとしていた。

「ねぇ、ヒロポン」

美里がツンツンと洋之の肩をつついた。

「はい？」

「あれから、優っちは元気戻ったみたいだった？」

「うーん……運搬のときはそこそこ元気でしたけど……」

「あっ」

優の声が廊下に響いた。カァン！と音がしてバチが床に転げ落ちる。

「大丈夫？」

恵梨がサッとバチを拾って優に差し出した。

「うん。ありがと」

「はい」

恵梨は笑顔で優にバチを渡し、すぐにあずさのところへ戻った。

「やっぱり、どことなく元気がないわね」

「そうですね……」

「でも、これぱっかりはあたしたちじゃどうしようもないし……」

洋之と美里がため息をつく。優はそうとは知らずに、懸命に耳を集中させて、最後のチェックを入念に行うばかりであった。

「ゲホッ……ゲホゲホッ……」

一方のリハーサル室では、管楽器がチューニングを終えて最終確

認に追われていた。なんとか本番までに熱は引いた翔であったが、咳のほうがいつまでも引かず、合奏中もずっとゲホゲホとしんどそうな咳を繰り返していた。

「よし！　そろそろ時間だから、移動の準備始めて」

「はい！」

恭一の一言に全員が動き始める。

「あっ……！」

バサァッと音がして、翔が楽譜をぶちまけた。

「大丈夫ですか？」

麻綾とさゆりが慌てて駆け寄り、楽譜を集める。

「う、うん。ゴメンな」

まだ体調が完全ではないようだ。どこかフラフラとした状態で、明らかに体調不良なのが誰にでも取って見えた。

「大丈夫？　翔」

「おう。ほとんど平熱やねんけど、ちょっとまだ体がダルくってな」

「そう？　ならいいんだけど……」

「ガンバロな、陽乃」

「うん！」

ザワザワとした声が美里の耳に聞こえてきた。

「あ、上がってきた。優っち、エリリン。そろそろ運ぶ準備しよう」

「はい！」

二人はいそいそと打楽器の移動準備を始める。そして、翔が優の隣を通る拍子に優の進路を遮るように立った。それから手を差し出す。

「がんばろうな」

「……。」

「な！」

「……はい」

優は下を向いたまま、翔と手を繋いだ。そして、翔が手を放す直前に何かを優の手のひらに預けた。

「……？」
優が手を開くと、スネアの形をしたキーホルダーが出てきた。鮮やかな青色で作られた、小さいけれど芯の強そうな雰囲気を持ったキーホルダーだ。
――お前にそっくり。
そう言われている気が、優にはした。翔が振り向き、ニコッと笑う。優は胸がいっぱいになる思いになった。
「優」
洋之の声に振り向くと、パーカス全員が手を重ね合わせている。
「ココ」
あずさが右手で指を差す。上から洋之、恵梨、あずさ、美里の手が重なっている。そして、洋之の手の上をあずさが指差している。
「優っちの場所」
「……うん！」
優が手を置いたのを確認してから、美里が息を吸い込んだ。
「それでは～……ナナコウパーカッション、ファイトーッ！」
「お――っ！」
舞台が暗転する。優は洋之と一緒にバスドラムをひな壇の最上部に運ぶ。そのとき、ちょうど舞台から見て右側に翔の母と妹が座っているのが見えた。翔の一家のことだ、おそらく全員が見に来ているのだろう。
（いいな……）
優の家には正直、演奏会を見に来るような余裕がないだろうと感じていた。そう思ってふと左端を見た瞬間だった。ドアが開き、咲江の姿が見えた。後に続く美希、弘明、それから文博の姿まで見えたのだ。
「お父……さん」

目が合った気がした。気のせいだったのかもしれない。しかし、優には十分嬉しいことだった。

暗転した状態で恭一が入場する。そしてパッと明転し、恭一が客席のほうを向いた。

（ＯＫ？）

全員に目配せする。優は力強くうなずき、その瞬間を待った。指揮棒が降りる。そして『タンツィ』が遂に始まった。

第１９２話　圧倒的な迫力

恭一が指揮棒を降ろすと同時に低音楽器の音が重く響き渡る。メロディをクラリネット、サックスの順で吹き、やがてトロンボーンとホルンが綺麗なハーモニーを響かせる。そして、健之佑のイングリッシュホルンが印象的な音色を響かせる。やがて佳菜、由美子、沙希の音が重なり、木管楽器で一つのメロディを形成する。これは序奏部分にあたる。そして、沙希が移動してなんとハープを軽やかに弾いてみせた。

「すごいね、お母さん！　あの人、兄ちゃんと同じ学年の人だよね？」

綾音が興奮気味に友美子に聞く。

「そうよ。大谷さん。ひょっとしたら来年から先輩になるかもしれないから、覚えておきなさいな」

「うん！」

優はバチを握って真剣な表情で恭一を見つめている。

「アイツ、あんな真剣な表情するんだな」

弘明が笑った。

「私もあんな優、初めて見たかも。いつも自信なさそうにしてるのに……」

「あの子は変わったわよ」

咲江が嬉しそうに笑い、我が子を見つめた。

急にテンポが変わり、洋之のタンバリンが鳴り響く。トロンボーンとホルンの動きは序奏と似ているが、テンポが違う分まったく違う曲に聞こえる。

「崩れないで行けると思います？」

修平が心配そうに翔平に聞いた。

「大丈夫や。もうアイツら、初心者ちゃうねんから」

翔平は何ら心配なさそうに舞台を笑顔で見つめていた。

ダンダンダンダン！
タムタムを優は自信タップリに叩いて見せた。そしてそれを合図に佳菜、梨子、健之佑たち木管高音楽器がメロディを吹く。そこへ重なるようにユーフォニウムの素早い旋律。
「ユーフォってあんなに指速く動かせるの！？」
優衣が驚いた顔で春樹と愛実を見つめる。
「あれ？　優のヤツ、どこ行った？」
「あそこよ、鉄琴の前」
優はユーフォのメロディと似た動きをするグロッケンの前にいつのまにか移動していたのだ。
「またどこか行くわ」
それが終わると次はシロフォンの前へ移動する優。トランペットのメロディに合わせて叩く部分だ。トランペットの驚異的な指の速さにも弘明と美希は呆然とするばかりだ。
「うへぇっ！　やるやん、朝倉さん」
修平が感嘆の音を漏らした。ティンパニが激しくなる。美里は笑顔でティンパニの難しい部分をあっさりと叩いてみせた。ユーフォニウムの裏メロディが加わる佳菜たちの再現部。要所要所で洋之のタンバリンがスパイスのように入ってくる。同じメロディを吹いているようで、少しずつ異なるメロディ。シロフォンのメロディはそれでもなお、激しいままだ。
「はい！」
「ありがと！」
聞こえない程度の声で合図を出し、優は持っていたシロフォンのバチを恵梨に手渡す。自分はすぐにグロッケンに移動し、バチを持つ。あずさがシンバルを構え、洋之はベードラの前に移動した。とにかく打楽器は忙しいことこの上ない。
中間の明るい部分が過ぎるとチューバ、弦バス、バスクラリネットの目立つ部分がやって来た。
「おいおい、スゴすぎるやろこれは」

さすがの翔平も驚いてしまった。正直、七海高校がこんな演奏をするとは思っていなかったのだ。それが過ぎるとホルン、ユーフォニウムの複雑かつ素早いメロディ。

「いつのまに……」

修平も優衣も唖然とするしかなかった。音量が一気に落ち、木管のメロディが始まる。オーボエとアルトサックスのメロディ。オーボエとピッコロのメロディ。クラリネットとサックスのメロディ。とにかく音色が統一されていないと大変なことになるメロディが次々と現れる。

「あ、あんなトコにいる！」

いつの間にか移動した優がいたのは、グロッケンの前。目が回りそうな動きで確実にシロフォンを叩く優は、本当に嬉しそうだった。やがて冒頭の再現部が過ぎ、第一楽章はテンポを上げて華やかに終わりを告げた。ここで拍手が入る可能性も恭一は十分に考えていたので、指揮棒を降ろさずにスッと指示だけを出す。部員たちはすぐに移動を終えると、二楽章に入った。二楽章では、優はタンバリンを担当する。

「あの子、あんなにたくさん楽器できるようになってたのね」

咲江は我が子の知らぬ間の成長に感動すら覚えていた。二楽章はいつの間にかゆっくりだったテンポが上がり、それにしたがってどの楽器もテンションが上がっていく。やがてそれはピークに達し、クラリネット、フルート、シロフォンがとても観客から見て普通とは思えないスピードで音を奏でる。

急に音が静まった。それを縫うように現れたのはサックスのアンサンブル。翔、さゆり、麻綾の三重奏に加えて沙希のハープ。優はその間に移動し、またしてもシロフォンで強烈な動きをあっさりと叩いてみせた。

テンポが落ち、雪子のソロが響く。雪子のソロを継ぐように、春樹のソロが始まる。そして次第にテンポも音量も落ちて、二楽章はそっと終わりを告げた。

そして三楽章。ここは優から始まる部分だった。この『タンツィ』は冬をイメージした曲なので、最後はクリスマスを彷彿とさせる鈴の音から始まる。

シャンシャンシャンシャン……。優の音色だけが、ホール内へ響いていった。

「サンタさんだ！」

急に子供の声がホール内に響いた。すぐに声が聞こえなくなったあたり、おそらく親に口を塞がれたのだろう。

しかし、それ以降声が沸くこともなく、静かに加わる美里のティンパニ。そこへ雪子と順平のメロディ。やはりそれを次ぐのは春樹と愛実。急に音量が上がり、金管と木管が入れ替わりで旋律を吹く。それが終わるとホルンとサックスのメロディ。ホルンは頻繁に木管とメロディを共にすることが多い。金管がメロディを継ぐ頃には木管の動きは多忙極まりないものになっていた。

急にテンポが落ちると、朗々としたホルンのメロディが響いた。サックスがそれを継ぐ。その伴奏は優もマリンバでしっかり支えている。そして三楽章の冒頭部分をテンポを落とした形で奏で始める。これは終わりの部分なのだ。

テンポが速くなると同時に、演奏のテンションも上がる。優はシロフォンへ再び移動し、最後の力を振り絞って今までで一番激しい動きを見事に叩いて終えた。

恭一の指示と同時に打楽器、特に恵梨のベードラと美里のティンパニは体全体で音を綺麗に消した。

「ブラボーッ！」

叫んだのは文博だということにすぐ、優は気づいた。横にいた恵梨が「お父さんでしょ？　あれ」と少し笑って声をかけた。

「うん！」

優は笑顔で答えた。

「ほら、行くよ」

美里に呼びかけられ、優は満面の笑みで打楽器の移動を手伝い始

めた。

「じゃあ……少しの間、会わなくなるね」

解散後、恵梨とあずさが寂しそうな顔で優にそう言った。

「やだなぁ、永遠の別れじゃないんだから」

優は笑っているが、恵梨とあずさはとてもそんな顔になれない気分だ。

「学校は一緒じゃんか！　な、ヒロ」

「うん……まぁ……」

洋之も煮え切らない表情になっている。

「なんだよ！　ヒロまで暗いなぁ！」

「当たり前だろ！」

洋之が急に大声を出した。翔と陽乃も驚いてそちらを見る。

「……ゴメン」

優がションボリしながら小さい声を出した。

「いや……俺のほうこそ、急にゴメン」

「やっぱさ、寂しいよねぇ！」

恵梨が声を震わせて言う。

「やだぁ、ぢょっど泣かないでよエリリン……」

あずさも耐え切れず、涙をこぼし始める。

「そうだぞ！　まだアンサンブルあんだからな！」

そういう洋之も涙で声が震えていた。翔は見ていられなくなり、彼らの輪に突っ込んで行った。

「おりゃあ！　暗いんじゃあ！」

「わぁ！」

「もっと元気出せ～！」

「ちょ、こそばいですよ先輩……やめて、やめ！　あはははは！」

優は笑いながらも、涙を流した。

「あ、お前も泣いてるやんけ！」

「先輩がこそばすから笑いすぎて涙が出たんです～！」

「コイツゥ！　かわいくないなぁ！」
「ギャハハハハ！　ヒ、ヒー！　やめて～！」
「ったく、やりすぎよねぇ」
美里と陽乃が笑いながら、彼らの戯れを見つめていた。
「あ！」
「おぉ！」
「雪や……」
チラチラと白い粉雪が、翔の手のひらにこぼれ落ちた。粉雪の舞う中、『タンツィ』を奏でた定期演奏会は終わりを告げた。

第193話　25と39

「ゲホッ……ゲホゲホッ……」
翔は咳き込みながらカレンダーを恨めしそうに見つめていた。O型は大胆な性格とか耳にすることが多いのだが、キッチリ屋の翔はカレンダーにその日が終わると丸印を入れていた。きっちり24日まで丸印が入り、今日は25日。カレンダーには大きく「アンコン！」の文字。そして「クリスマス」。
「ゲホッ！　ゲホゲホッ……」
運悪く、23日の本番が終わったその日に翔は熱をぶり返した。元々平熱が36度台と低めの翔にとって、38度台というのはかなりの高熱であった。
ピピピッ、ピピピッという電子音が聞こえた。体温計が鳴ったようだ。
「38度7分……。なかなか下がらへんねぇ」
友美子がフゥッと心配そうにため息を漏らした。
「どない？　吐き気とかはあんの？」
「それはない……。けど、しんどい……」
「そらそうやろねぇ。滅多に風邪とか引かへんのに……病院、行ったほうがいい？」
「今日は我慢する……」
「我慢するもんでもないでしょうが」
「うん……ゲホッ、ゲホッ……」
「でもお母さん、アンサンブルコンテストのほう見に行かんとアカンから、お父さんに頼んどくわね」
「……わかった」
翔は何か言いたげだったが、友美子はあえて聞かずに部屋を出た。きっと、アンサンブルコンクールを聴きに行きたいのだろう。高校生では最初で最後となるアンサンブルコンクール。さらに、陽乃が

初めて出るその大会。翔が応援したくないはずがない。しかし、したくても体調が許さない状況なのだ。

「それじゃあなた、お願いね」

友美子はヒールを履きながら昭に翔の保険証と診察券を手渡した。

「あぁ。気をつけてな」

「じゃあ、行ってきます」

友美子はいそいそと会場へと出発した。それを見届けてから、昭は翔の部屋へと向かった。

「翔。入るぞ」

「はいよ……」

昭が入るとハァハァと息を苦しそうにしながら布団で縮こまっている翔の姿が目に入った。

「どうだ？」

「寒い……」

ブルブルと震えている。昭は心配になって、もう一度体温を測るように促した。翔は震えながらも体温計を手にし、結果が出るのを待った。

ピピピッ、ピピピッという電子音が再び鳴る。翔はなんとかそれを自力で出した。

「見て……」

見る元気はなかったようで、昭に体温計を手渡した。

「さっ、３９度２分！？」

「と……父さん……」

「何や？」

「戻しそ……う」

「よっしゃ。立てるか？」

「アカン……」

「もうちょっと待てよ！　おい、綾音、綾音～！」

「なにぃ！？」

「洗面器かビニール袋持ってきてくれ！」

「わかったぁ！」
綾音も常に動けるように待機してくれている。綾音は素早くビニール袋を用意し、昭に手渡した。
「ウエッ……ゲホッ、ゲホゲホッ！」
顔色もあまり良くない。昭は翔の背中を摩りながら車の免許証を持っているか確認した。
「大丈夫か？　これが落ち着いたら、病院行こか」
「うん……」
同じ頃、陽乃たちは会場となっている隣の光岡（みつおか）市に来ていた。
「陽ちゃん！　落ち着いて、頑張ってね！」
絵美がギュウッと陽乃の手を握った。
「うん！」
少し由美子が心配そうに陽乃に聞いた。
「佐野くんのこと、心配？」
陽乃たちにも恭一から直接、翔が高熱を出して欠席することは聞かされていた。
「心配じゃないって言ったらウソだけど……翔、絶対そんなこと気にして演奏失敗したら怒るもん。だから、あたし頑張るよ、精一杯」
「そうだね！　金賞取って、代表になって佐野くんおどかしてあげなよ」
沙希が嬉しそうに笑った。
「朝倉さぁ～ん！　チューニングだって」
春樹の少し高い声が聞こえた。
「あ、わかった！　すぐ行く～」
「朝倉先輩！　ファイトっす！」
駿が大きく手を振った。
「ありがと、逢沢くん！」
陽乃たちの姿がチューニング室の中へと消えていった。
「なんだよ、駿」
優輝がニヤニヤ笑いながら駿の肩をつついた。

「何が」
「お前、ひょっとして朝倉先輩のこと狙ってる？」
「バァカ」
駿はピンッと軽く優輝の額にデコピンを喰らわせた。
「佐野先輩の代わりだっつーの」

「ゲホッ……ゲホゲホ……」
七海市救急医療センターにやって来た翔は薬局で順番を待っていた。
「翔」
「なに……？」
「母さんから電話」
翔が電話に出ると、ザワザワとホールの雑踏が聞こえてきた。
「もしもし？　翔？」
「うん……」
「調子はどう？」
「まだちょっとしんどい」
「そっか。まぁ仕方がないわね」
沈黙が続く。
「朝倉はどうだった？」
「あら。名前で呼べばいいじゃない」
「……アホ言わんといてくれ」
クスクスと友美子が笑う。
「やっぱり、ちょっと寂しそうだったわよ」
「え？　不安そうじゃなくって？」
「やっぱり、最初で最後のアンサンブルでしょ。演奏を、アンタにも聴いてほしかったんじゃないかしらね」
「……。」
翔は複雑しょうな表情を浮かべた。すると、友美子が妙なことを言った。

「ま、行けない分そこで聴いてなさい」
「え？」
「いい？　電話、絶対に切っちゃダメよ」
「なに言うてんの？」
「このホール、古いから電波は多少なりと届くはずよ。じゃあね！　切っちゃダメよ！？」
「ちょ……」
しばらくすると、ザワザワと声が聞こえてきた。そして、ブーッと聴き慣れたブザーの音。やがて、ザワザワとした声が静まった。
そして、アナウンスが電話越しに聞こえる。
「ただいまより、高校生の部を開演いたします」
「……ウソ」
翔は思わずそう呟いた。
「プログラム１６番。七海市立七海高等学校吹奏楽部。金管八重奏。リチャーズ作曲『高貴なるぶどう酒を讃えて』」
拍手が沸く。翔は一瞬にして会場にいるような感じに引き込まれた。そして、いつのまにか手を合わせて祈っていた。

「頑張れ……陽乃」

「頑張るから……楽しみに待ってね、翔」
陽乃は舞台から今日は来れない翔に向かってそう、呟いてから楽器を構えた。陽乃の構えを合図に全員が楽器を構え、陽乃の合図で全員が息を吸い、演奏を始めた。
最初で最後の金管アンサンブルが始まった。

第１９４話　電話越しの音色

トランペットの鋭い音色が受話器からハッキリと聴こえた。ホルン、トロンボーン、チューバの音色が重なり、再びトランペットの鋭い音色が聴こえる。

翔は受話器越しに、陽乃たちが演奏している姿を思い浮かべた。いつも音楽室でアンサンブルのグループが練習しているのを、『タンツィ』の練習を終えた翔はチラチラと見ていた。本当なら、自分もアンサンブルに出たいところであるが、サックスアンサンブルは編成上、どうしてもバリトンサックスが欲しいところだと恭一に言われた。いくつか楽譜を調べてみたが、難度の高いものが多かったため、サックスアンサンブルは断念という形になったのだ。

翔も知っている、冒頭部分で最も緊張が走る部分に差し掛かった。チューバがハイツェーと呼ばれる高音から一気に降下する箇所があるのだ。その当人である拓真は大きく息を吸い、見事にハイツェーを奏でたのだ。素早い指使いが、あまり広くない会場にいた観客たちは一瞬、目を丸くした。

そしてしばらくすると、トランペットの高らかなメロディが聞こえてきた。ここは陽乃、勇、彩香の３人が毎日音程をピッタリ合わせる練習を重ねてきたため、余裕で吹きこなすことができた。

（音が飛ぶって気持ちいい……）

陽乃はメロディーを吹き終えた直後、不思議な高揚感に包まれた。

雪子と拓真がそのメロディを引き継ぐ。隣同士で接近しているが、目を合わせて息を合わせる。アンサンブルは指揮者がいない分、こうした奏者同士の息を合わせることが重要なのだ。

そのメロディが終わると、拓真のソロが続く。客席から見る春樹には、拓真の顔が少し赤く見えた。

チューバのソロが終わると、勇がフリューゲルホルンを吹く。チューバが上昇音を吹くと、慎也がソロを吹く。少し怪しげな雰囲気

を醸し出す部分へと差し掛かる。それからすぐにまた長調へと変化する。ここではホルンとトランペットのメロディが重なる。チューバの上昇音がまた聞こえる。チューバにしては高音が多い曲なので、拓真はなかなか苦労しているようだ。

曲調というよりは全体の雰囲気が変わった。三拍子に変化したのだ。メロディの後ろで七連符という複雑な動きを見せている。彩香が吹いているのだが、やはり少々精一杯吹いているという雰囲気が拭えない。

なんとか曲を盛り上げ、三拍子の部分を吹ききることができた。しかし、問題はここから先であった。翔も受話器越しに音色を聴いていたが、その部分に差し掛かったことを感じ取っていた。

ファンファーレとでも言うべき場所なのだ。チューバとトロンボーンのサード、つまり拓真と徹以外のメンバー全員の音がきれいに重なる必要があった。しかし、後でソロが控えている雪子の音程が少し不安定になった。

絵美の5列前に座っている審査員の手が何か、その不安定な音が聴こえると同時に動いたのが見て取れた。しかし、いったん手を動かし始めた審査員は雪子がソロを吹き始めると同時に手を止めた。

「……おぉ」

翔も受話器の向こうで思わずため息を漏らした。一本の音とは思えない厚みを保ちながら、雪子は見事にソロを吹ききったのだ。

トロンボーンのお遊びのような音が聴こえる。トランペットがそれを真似るように吹き、さらにますますおちゃらけた感じのトロンボーンの音色。チューバがまた上昇音を吹く頃にトコトコと勇が舞台の前に出てきた。

「なにしに来たんだろ？」

絵美に話しかけたのは春樹だ。

「知らないよ、私も。っていうか、あの瓶みたいな物体は何？」

「さぁ……」

春樹や絵美、他の部員たちも不思議そうな顔をしている。勇はニ

コニコ笑いながら瓶らしい物体を持ち上げる。
「……？」
次の瞬間、ポンッ！とホール全体に音が響き渡った。これには翔も予想外のことに受話器の向こうで「へ！？」と声を上げていた。客席にもどよめきに似た声が一瞬、沸きあがった。これはワインのコルクを開ける瞬間の音を真似たものだったのだ。
そこからはアップテンポで華やかな曲調で一気に駆け抜け、最後は見事なファンファーレで一気に曲を終えた。
サッと吹き終えると同時に陽乃たちは立ち上がった。ワァァッと拍手が沸き起こる。陽乃は少し恥ずかしそうに笑いつつ、暗転していく照明を少しばかり見つめていた。

「ありがと、母さん」
翔は少し興奮気味な様子でロビーに出た友美子に礼を電話越しだが伝えた。
「いいのよ。それより、陽乃ちゃんもうすぐ来るけど、変わろうか？」
「うーん……」
「せっかくじゃない。ね？」
「……うん」
しばらくすると、ワイワイとテンションをかなり高くした金管アンサンブルメンバーがやって来た。
「陽乃ちゃん！」
「あ、はい！」
友美子は何も言わず、ケータイを手渡した。
「え？　あたしですか？」
「うん！」
陽乃は何の疑いもなく電話を受け取った。
「はい、もしもし～？」
「あ、オレ」

「……へ？」
「翔」
「あぁ、うん……ってえぇ！？」
「とりあえず、これだけ言わせて」
「な、なんで……ちょ、えぇ！？」
「えぇか？」
「よ、よし。ドンと来い」
翔はスゥッと息を吸い、囁いた。
「えぇ演奏やったで。感動した」
「……ありがとう！」
「……ほなな」
「うん！」
翔は半分恥ずかしそうにしながら、電話を切った。
「だからかな～」
「どうしたんですか？　先輩」
彩香がニコニコ笑いながら陽乃に聞いた。
「ううん！　なんでもない！」
陽乃は笑いながら、金管アンサンブルの面々に合流した。

翔がいたような気がしたんだよね～！

元気になってきたら、絶対言ってあげよう。陽乃はそう考えながら、ロビーを出て写真撮影に向かった。

第１９５話　『宇宙旅行』

「吐いて～……吸って～……」
美里の声に合わせて優、恵梨、あずさ、洋之、亮平の５人が呼吸をする。
「では、皆さん頑張っていきましょう！」
「はいっ！」
小声でパーカッションメンバーが気合いを入れなおした。アンサンブルコンテスト、最終団体は七海高校の打楽器６重奏であった。曲目は組曲『惑星』より『木星』。会場で演奏を聴く修平、優衣、翔平の３人は打楽器でどのように木星を演奏するのか不思議で仕方がなかった。
「あ、入ってきた」
優衣が小さく美里に手を振ると、美里は微笑んだ。ティンパニ、シロフォン、マリンバ、シンバル、グロッケン、ビヴラフォン、チャイム、小物打楽器が運ばれてくる。ティンパニの前には洋之。シロフォンには恵梨。マリンバには優。グロッケンには亮平。シンバルにはあずさ。ビヴラフォンには美里が立っている。そして照明が点くと同時にアナウンスが入った。
「プログラム３１番。七海高等学校吹奏楽部　打楽器６重奏。曲目は組曲『惑星』より『木星』です」
スゥッと息を吸って、優がマリンバで木星の印象的なトリルを叩き始めた。やがて美里が加わり、すぐに恵梨が加わる。それからすぐに美里がメロディに切り替わり、洋之が低音の役割を果たすメロディを奏で始めた。あずさがシンバルを一発。亮平はチャイムでメロディを奏でる。見事な動きである。
やはり見た目が荘厳なのはティンパニだ。なんと7つものティンパニを洋之は自由自在に操っているのだから、見た目だけでも十分迫力がある。

三拍子の部分に差し掛かった。美里のビヴラフォンに合わせて、他の鍵盤打楽器が伴奏をする。今度は鍵盤打楽器全員でメロディ。ティンパニが伴奏をする。そして亮平がチャイムでメロディを奏で、素早く持ち替えた恵梨がタンバリンを担当し始めた。それぞれが木星のイメージを崩すことなく上手く音を出すために、それぞれの技術が際立っているように見える。

そして一番有名な、平原綾香もカヴァーしているあの部分がやって来た。ここには楽譜に大きくこう書かれている。

『優っちのソロ！』

優が息を吸い、まるで管楽器を奏でるようにマリンバを叩き始めた。美里、恵梨、あずさがそれぞれビヴラフォン、グロッケン、シロフォンで伴奏を奏で、優を支える。まるで4人とは思えない厚さを持った音がホール中を包み込んだ。審査員も観客もただ、耳を澄ましてこの珍しい木星に聞き入っていた。

鍵盤楽器が全員メロディを奏でる。洋之がティンパニで伴奏をし、それ以外は全員メロディを鍵盤楽器で叩いていた。

そしてピークを迎える。残念ながら5分で演奏を終了しなければならないため、木星全曲というわけにはいかないのだが、木星の聴かせ所すべてを取り入れた編曲になっていたため、終わり方も実にスッキリしたものになっていた。

演奏が終わり、全員がお辞儀をする。拍手が沸くまでに、妙な間があった。そしてすぐに比較的狭い会場内ではあったが、割れんばかりの拍手が沸き起こった。

「なんやねん、今の！」

修平が驚きのあまり、拍手しながら声を上げた。

「こんなアンサンブル、あるんだね～！」

優衣も翔平も興奮が抑えきれないようだった。一方の本人たちは、満足気に舞台を後にしていた。ロビーへ出ると、アンサンブルには

出演しなかった部員も金管アンサンブルメンバーも全員でお出迎えをしてくれていたのだ。
「お疲れ！」
順平がクシャクシャと優の頭をなでた。
「チビ扱いすんなよぉ」
「そうじゃないって！　俺、マジ感激したんだから……。優っち、初心者だったんだよな」
「そうだよ？　今でもそうだと思うけど」
「うわ、謙遜だ！」
徹が笑った。
「どういうことだよ？」
「見ろよ、この顔」
勇がフラッシュなしのデジカメで撮影した優の写真を見せた。
「わ！　ちょ、会場は撮影禁止だろ！？」
優が慌ててカメラを取り上げようとするが、背が高くない優には難しいことであった。
「お疲れさん」
美里の頭を優しく慎也が撫でた。
「慎也も」
「ありがと」
陽乃と雪子が美里を慎也の後ろからニヤニヤ見つめていた。
「ちょ、何よ！」
「別に～？　ねぇ、雪ちゃん」
「ねぇ、陽ちゃん」
「あ、あたしはねぇ！　今日は佐野くんが休みだからアンタたちの代わりにイチャついてあげてんの！」
美里は真っ赤になりながら弁解する。慎也も赤くなっている。
「まぁまぁ、いいじゃないの今日は特別な日なんだから～」
沙希が優しく美里を撫でた。
「特別……か」

陽乃は急に寂しくなった。翔がいない。今日はアンサンブル以外にも、特別な日だというのに。しかし、仕方がないのだ。翔はいま、きっと熱で苦しいのだろうだから。

「おーい、自分たちの席へ戻っとけ～」

恭一が部員たちを呼ぶ。結果発表がしばらくすると始まるのだ。

「あ、はい！　みんな、行こう！」

「はい！」

陽乃は翔のことを少し気にしつつ、七海高校の指定席へと戻っていった。

第１９６話　またあの夢……

「ゲホッ……ゲホゲホッ」
ついつい演奏を聴くのに夢中になり、布団から出ていた間に体が冷えたらしく、再び熱がぶり返してしまった翔は朦朧とする意識の中、体温を測っていた。
ピピピッ、ピピピッ、ピピピッ――。部屋に空しく響く電子音。
「３８度５分……か」
翔はゲホゲホと何度も咳き込みながら体温計を恨めしそうに見つめた。ノックの音がする。
「はぁ……い」
冨美枝が入ってきた。
「どうやのん？　体調は」
「ちょっとまだしんどくて……」
「そうやねぇ……」
冨美枝は優しく手を翔の額に当てた。暖かい手。翔はいつの間にかスゥスゥと寝息を立てていた。
「あら……。ま、しっかり寝たほうがえぇからね」
冨美枝はそっと電気を消し、部屋を出て行った。

「……あれ？」
翔は気がつくと、つくし野川の土手沿いで寝転んでいた。川の流れる音がする。
「なんでこんなトコおんねんやろ」
周囲を見渡すが、人の気配はあまりない。腕時計をしていたので、時刻を見てみると午前８時半ちょうど。
「うわ！　遅刻ちゃうん！？」
翔は慌てて家へ戻ろうとする。なぜ学校のある平日なのに私服で川沿いで寝転んでいるのか。翔には何がどうなっているのかサッパ

リわからなかった。
家へ戻る。この時間だとおそらく、冨美枝と友美子しか家にはいないだろう。そう思って家へ入ってみた。しかし、部屋には誰もいない。
「あれ？」
テレビはつけっぱなしだ。
「なんでやろ……。お母さん？　ばあちゃん？」
洗濯をしているのだろうか。翔は自分の部屋にベランダがあるので部屋に入り、友美子か冨美枝がいないかどうかを確認した。
「おれへんし。どこ行ったんやろ」
ベランダから庭を見渡すが、そこにも友美子、冨美枝ともに姿はなかった。
翔が再び下へ降りると、テレビで何かニュースをやっている。翔は足を止めてそのニュースに目をやった。
「今日午前５時４６分頃、近畿地方で強い地震がありました」
「え……？」
ニュースキャスターの言葉に耳を疑う。
「震源地は淡路島と明石市の間に位置する明石海峡付近、地震の規模を示すマグニチュードは７．２と推定され……」
不意に翔の目の前に『あの光景』が蘇る。自分は経験したはずのないあの光景が。
『佐野』という表札が地面に転がっている。家が潰れ、中から綾音、智輝の声が聞こえる。友美子と冨美枝の姿は見当たらず、昭は関東へ出張中だった。
「助けて！　兄ちゃん！」
助ける手立てがないまま、自分は震えて潰れた家の前にいる――。
「うわあああああああっ！」
翔は飛び上がって起きた。そこにあるのは、いつもどおりの自分の部屋。日付は変わらず、１２月２５日。

「夢……か……」
ビッショリ汗をかいたので着替えようと翔は下へ降りた。玄関の前に立ったと同時に、そのドアが開いた。
「たっだいまぁ！」
綾音だった。後ろから眠そうに目を擦りながら智輝が入ってくる。
「あれ？　兄ちゃん、起きてて大丈夫なん？」
「あ……うん。ちょっといま汗かいたから、着替えに降りて来てん」
「そうなんや！　ちょうどいいわ。お母さんお母さん！　お兄ちゃん降りてきてる」
友美子が顔をヒョコッと出した。
「あ、翔！　調子はどない？」
「ちょっとまた熱が出てきて……」
「そうなんやね。ま、汗かくと熱下がるからもうちょっとで治るでしょ。ゼリー買ってきてんよ。食べる？」
「うん。せやけど、結果はどないなっ……」
「あ、綾音～！　ちょっと荷物持っていってねー」
翔はアンサンブルの結果がどうなったのかわからないまま、リビングにそのまま智輝に押されて連れて行かれた。
「なぁ、お母さん」
「なに？」
「アンコンの結果、どないなったん？」
「あー……どないやったっけ、智輝」
「あ、うん！」
智輝は友美子のカバンから携帯電話を取り出した。
「なんなん？　朝倉に電話で聞けっての？」
「ちゃうよ。データフォルダ開いてみ」
翔は渋々携帯を操作し、データフォルダを開いた。すると、動画で「結果発表！」の文字が一番上に現れた。
「これ……？」
「押してみ」

翔はドキドキしながら動画を再生し始めた。
「ねぇ、撮影するとき合図してね？」
陽乃の声。
「え！　ゴメン、もう録画してるんだけど」
美里の声。
「やだぁ！　あれだけ気をつけてって言ったのに！　ちょ、ストップストップ！」
すぐに動きと音声が止まって、すぐにまた違う人が映った。
「さぁのせんぱーい！」
順平だった。
「風邪とか柄にもないですねぇ！」
ニヤニヤ笑いながら麻綾が茶化す。
「でも、佐野先輩がいないとマーヤは泣いてますよ」
「ちょっとサユ！　勝手なこと言わないでよ」
翔は「なんやこれ」と笑いながらも嬉しそうに動画を見続けた。
「おい、早く先進めろよ」
どうやら動画は亮平が撮っているようだ。そのせいか、上から目線のような感じがする。
「あ、そうだ。ね、逢沢くんお願い」
さゆりに促されて駿が出てきた。
「こんばんは！　佐野先輩。たった今、アンサンブルの結果発表が終わりました。メールや電話、ご家族の人に伝えてもらうって手もあるんですけど、やっぱり俺たちの口で直接伝えたいってことになったんで、こうして今お母さんのケータイを借りて動画でお伝えしてます！」
「逢沢くんは出てないでしょー！」
光瑠の茶化す声。
「ちょ、静かにしろって！　あ、すいません！　それじゃ、早速ですけど、田中先輩たちパーカッションの方々から結果発表、お願いします！」

亮平が後ろへ下がったのか、少し画面が移動する。
「ちょっと三宅くん！　アンタもパーカッションメンバーでしょ」
「あ、今日俺そうだった」
笑いが起きる。
「俺が撮るよ」
徹の声。
「お前が撮ると俺が映んなくなりそう」
「うるさいな！　早く行け！」
また笑いが起きた。翔もクスクス笑ってしまう。
そして画面が少し低くなり、右から洋之、あずさ、恵梨、亮平、優、美里の順に並んだ。
「えー……パーカッション6重奏ですが」
翔も思わず唾を飲む。
「金賞を受賞しました！」
「マジでかぁ！」
翔は嬉しそうに笑った。
「ですが、残念ながら代表にはなれませんでした」
恵梨がはにかみながら言う。翔はそれでも、笑顔だった。
「俺たちはパーカッションアンサンブルで唯一、金賞を受賞しました」
洋之がどこに隠していたのか、自慢げにバチを持ち上げた。
「今日でいったん、優っちは休部になります」
あずさが優の顔を覗き込んだ。
「こんな身長の優ですが、頑張ったんですよ」
亮平がクシャクシャと優の頭をなでる。
「身長は関係ない！」
「ほら、優っち」
「あ……はい。あの、俺、とりあえず休部になっちゃいますけど、きっと新入生が入るまでにお父さんが就職先を見つけると約束してくれたんで……。それまでアルバイトをして、家に少しでも役立て

るようにしたい。俺、そう思ってます」
優の声が詰まった。
「佐野先輩、また終業式でちゃんとご挨拶させてくださいね！」
「以上！　パーカッションでしたぁ！」
そこで動画が終わった。
「あれ？　続きは？」
翔が不思議そうに友美子を見やった。
「あ、翔。終わったんなら玄関にちょっと荷物置きっぱなしなんよ。取って来てくれへん？」
「せやけど、続きは！？」
「いいから早く」
「ったく……」
翔はブツブツ言いながら上着を羽織り、廊下に向かった。ニッと綾音、智輝、友美子が顔を見合わせて笑うのを知らずに。
廊下は真っ暗だ。
「電気電気……」
翔は手探りで電気のスイッチをいれ、白熱灯がパッと灯った。
「……え？」
玄関に、誰かが立っていた。
「……陽乃？」
「た、体調、どう？」
「……え？　ちょ、おま、こんなトコで何しとん？」
「け、結果伝えに来たの……」
「結果って……まさか、ずっとおったんか？」
「うん……」
「寒いやん！　はよ上がり！」
「いいの。結果だけ伝えたらすぐに帰るから」
「……そっか」
陽乃はニコッと笑い、そっと翔に耳打ちした。
「県大会、出れるよ」

翔はバッと顔を上げ、しばらく陽乃の顔を見つめた。
「……ホンマに？」
「うん！」
翔はパクパクとしばらく口を開けて呆然と陽乃を見つめた。それからすぐにギュッと彼女を抱きしめた。
「ちょ……ここ、家の中……！」
一瞬だった。すぐに放して、手を今度は握った。
「おめでとう！」
「……ありがと」
「今度は絶対、演奏聴きに行ける体調にしとくから！」
陽乃は小さくうなずいた。
「あのね」
「なんや？」
陽乃の顔が寂しそうになる。
「今日……クリスマスプレゼント、用意できてないの」
「……それ心配しとったんか？」
小さくうなずく陽乃。
「えぇねん」
「いいの？」
「今日の結果が、オレにとったらクリスマスプレゼントやから」
「……。」
陽乃はボーッと翔を見つめる。
「クサいって？」
「ううん。嬉しい」
二人は見つめあい、クスッと笑い合った。

「ほな、気をつけて」
「ありがとう。翔も、体調早く良くしてね」
「うん！　ほなな！」
陽乃の姿が見えなくなるまで、翔はしっかりと手を振り続けた。

「……。」

あの夢。

たまに、綾音と智輝ではないことがある。

場所も家ではなく、学校。そして、目の前で聞こえるのは陽乃、慎也、雪子、春樹の声。慎也ではなく拓真だったり、雪子ではなく美里だったりするが、陽乃は必ずいる。それが翔の中で少し、不安になることがある。

「この時期だけやねんな……なんでやろ」

翔はフゥッと白い息を少し吐き、すぐに家へと引き返した。

＜２００６年　あらすじ＞

２００６年を迎えた七海高校吹奏楽部。当初は１０名だった部員も新１年生の入部により３２名に一気に増加。陽乃も副部長に就任し、絵美は木管セクションリーダー、慎也は金管セクションリーダーに就任するなど部員一丸となって部活動に励んできた。

さらには翔の母・友美子の奮起もあり保護者会まで結成された。突然の３年生の入部もあったり、その３年生の一人、岡崎　安和と陽乃がトラブルになったりといろんなことを経つつも、七海高校は初めてのコンクール出場を目指す。

次第に周囲への認知度も上がり、市内各地でコンサートを開くことも増えてきた。一部生徒は成績に不安を覚えることもあったが、ともにテスト勉強に励むなどし、何度も来る困難を乗り越えている。

初めてのコンクールでは見事、初出場にして金賞を受賞。県大会進出こそ逃したものの、部員たちの自信増加に繋がったことは間違いなかった。その後もマーチングコンテスト、アンサンブルコンテストに出場し、アンサンブルコンテストでは見事、金管アンサンブルが県大会への出場を決めた。七海祭では演奏会を開いたのだが、思いのほか好評であった。

こうして七海高校吹奏楽部は着実に成長していっていた。しかし、部長の佐野　翔とその家族を巡る関係が、急激に変化しているのも事実であった。

果たしてどのような１年を迎えるのであろうか。

いよいよ、２００７年が始まろうとしている！

主な登場人物（２００７年／新１年生入学前）

※！！ネタバレ注意！！※

♪　第２４９話現在　♪

＜※注※＞

［２０］＝年齢を示しています。

＜主要人物＞

☆朝倉（あさくら）　陽乃（ひなの）

七海市立七見高等学校２年Ｃ組。吹奏楽部に所属。トランペット担当。明るく活動的な性格で何でも興味関心を抱く。翔と現在交際中。翔は彼女の中では欠かせない存在になっており、翔の過去もすべて受け入れた上で、交際をしている。直情的な性格でもあるので、それがプラスにもマイナスにも作用する。

一人称：あたし　あだ名：朝ちゃん♪朝倉♪陽ちゃん♪朝倉さん

☆佐野（さの）　翔（かける）

七海市立七見高等学校２年Ｃ組。大阪から高校進学時に引っ越してきた。小学校４年生からアルトサクソフォンを吹いている。現在は吹奏楽部の部長として日々活動に励んでいる。明るく正義感の強い性格。陽乃と交際中。幼少期、阪神淡路大震災において家族を亡くしている。そのため、佐野家には養子として引き取られた。

一人称：オレ　あだ名：佐野♪佐野くん♪翔♪カケぼー（一人だけ）

＜七海市立七海高校吹奏楽部＞
□＝３年生（卒業）　♪＝２年生（４月から３年生）　☆＝１年生（４月から２年生）

【Ｆｌｕｔｅ（フルート）】
♪大谷（おおたに）　沙希（さき）　クラス：２年Ｇ組
実はお嬢様。ハワイに旅行に行ったりマイフルートを持っていたりする。おとなしく冷静な性格で分析力に長けている。
一人称：私　あだ名：沙希ちゃん♪大谷さん♪サキティ　家族構成：父＝大谷俊次（おおたにしゅんじ）・母＝大谷智佐子（おおたにちさこ）・弟＝大谷洋輔（おおたにようすけ）・妹＝大谷稚依（おおたにちい）

♪宮部由美子（みやべゆみこ）　クラス：２年Ｅ組
沙希に憧れてフルートを吹き始める。純粋な性格で、誰とでもすぐに仲良くなれる。少々天然ボケなところあり。
一人称：あたし　あだ名：由美子♪由美ちゃん♪宮部さん　家族構成：父・母

☆井上（いのうえ）　佳菜（かな）　クラス：１年Ｃ組
葉島中学校出身。中学時代は楽器は市の少年少女吹奏楽団で吹いていた。小柄でおとなしい女の子。ピッコロも兼任。
あだ名：佳菜ちゃん♪かな

【Ｏｂｏｅ（オーボエ）】
☆野村健之佑（のむらけんのすけ）　クラス：１年Ｉ組
袴田中学校出身。なで肩が特徴の背が高い男の子。笑うと歯が綺麗。ビヴラートがとても綺麗にかけられる。

あだ名：ノム♪ノムさん♪ケン

【Ｂａｓｓｏｏｎ（バスーン）】

☆戸口（とぐち）　誠（まこと）　クラス：１年Ａ組

大井戸（おおいど）中学校出身。坊主刈りでお寺の息子。クラリネットの優輝以上に喋らない子だが、内に秘める熱さは誰にも負けない。

あだ名：まこっちゃん♪とぐ

【Ｅ♭（エス）Ｃｌａｒｉｎｅｔ（クラリネット）】

☆小林（こばやし）　梨子（りこ）　クラス：１年Ｃ組

袴田中学校出身。エスクラリネット一筋で中学を過ごしてきた。そのため、ベークラリネットは少し苦手。

あだ名：梨子♪りーちゃん

【Ｂ♭（ベー）Ｃｌａｒｉｎｅｔ（クラリネット）】

♪橋本（はしもと）　絵美（えみ）　クラス：２年Ｂ組

クラリネットを中学生から吹きたかったので念願の楽器を吹けて嬉しく思っている。日々練習に励む真面目な女の子。

一人称：私　あだ名：絵美ちゃん♪エミリン♪橋本さん　家族構成：父・母＝橋本清美（はしもときよみ）・兄＝橋本航太郎（はしもとこうたろう）・姉＝橋本真咲（はしもとまさき）

☆伊原（いはら）　光瑠（ひかる）　クラス：１年Ｇ組

袴田中学校出身。長髪のキレイな大和撫子のような女の子。雰囲気が絵美に似ている。

あだ名：ヒカル♪

☆河内（こうち）　みゆき　クラス：１年Ｆ組

南葉島中学校出身。シッカリ者でテキパキと動く頼れる後輩。

あだ名：みゆ♪みゆちゃん

☆瀬戸（せと）　優輝（ゆうき）　クラス：１年Ｅ組
大井戸中学校出身。小学校からクラリネットを吹いている。クールで寡黙な少年。
あだ名：優輝♪瀬戸っち

□豊田（とよた）めぐみ　クラス：３年Ａ組
途中入部の３年生。高校生活最初で最後のコンクールに出場したく、入部を決めた。青山学院大学に進学が決まっている。
あだ名：めぐ先輩♪めぐ

【Ｂａｓｓ（バス）　Ｃｌａｒｉｎｅｔ（クラリネット）】
☆逢沢（あいざわ）　駿（しゅん）　クラス：１年Ｃ組
袴田中学校出身。リーダーシップを取るのがうまく、勤勉な典型的日本人タイプ。
あだ名：逢沢くん♪逢沢♪駿

【Ａｌｔｏ（アルト）　Ｓａｘｏｐｈｏｎｅ（サキソフォン）】
☆鈴木（すずき）　麻綾（まあや）　クラス：１年Ｂ組
葉島中学校出身。小学校からサックスを吹いていて、中学は佳菜と同じ市の少年少女吹奏楽団に所属していた。温厚で滅多に怒ったりスネたりしない。
あだ名：まーや♪すず

☆中野（なかの）　さゆり　クラス：１年Ｆ組
袴田中学校出身。中学３年になって急激に上手くなった期待のルーキー。何にでも熱くなる性格。
あだ名：さゆ♪サユリン

【Ｔｅｎｏｒ（テナー）　Ｓａｘｏｐｈｏｎｅ（サキソフォン）】

☆西嶋（にしじま）はるか　クラス：1年G組
袴田中学校出身。家がスナックをやっているので毎日と言っていいほどテナーサックスを吹いている。バスクラリネットの駿とは良いコンビ。
あだ名：はるか♪にっし～♪デカ女（1人だけ）

【Trumpet（トランペット）】
☆久野（くの）　彩香（あやか）　クラス：1年B組
袴田中学校出身。お人形さんのようにかわいらしいと陽乃のお気に入りの後輩。実際、温厚で常に親切心を持って人と接することができる。
あだ名：彩香♪久野ちゃん♪あや

☆松尾（まつお）　勇（いさむ）　クラス：1年F組
南葉島中学校出身の小柄な少年。吹奏楽に対するこだわりが強く、陽乃とも当初は衝突しがちだった。根は良い子。
あだ名：松尾くん♪イサム

□岡崎（おかざき）　安和（あんな）　クラス：3年B組
途中入部の3年生。初めは陽乃と対立したが、その後和解。現在は陽乃と一緒にトランペットを支える。立教大学に進学が決まっている。
あだ名：岡崎先輩♪安和先輩

【Horn（ホルン）】
♪永井（ながい）　雪子（ゆきこ）　クラス：2年A組
初対面ではなかなか自分を出せないタイプ。しかし、仲良くなるととても親しみやすい子。陽乃とは今では親友。何に対しても一途な性格である。残念なことに、父親の転勤により大阪府南大阪市への

転校が決まっている。
一人称：私　あだ名：雪子♪雪ちゃん♪永井♪永井さん　家族構成：父＝永井（ながい）　融（とおる）　母＝永井（ながい）ひとみ　妹＝永井（ながい）真沙美（まさみ）

☆右川（うがわ）　順平（じゅんぺい）　クラス：１年Ｇ組
袴田中学校出身。目が細いので怖い印象を与えがちのおっちょこちょい少年。ホルンは小学校４年生から６年生の間も吹いていて音の芯がしっかりしている。
あだ名：ジュンペー♪うーちゃん

【Ｔｒｏｍｂｏｎｅ（トロンボーン）】
♪川崎（かわさき）　慎也（しんや）　クラス：２年Ｃ組
スライドが前後するのに心惹かれてトロンボーンを吹き始める。基本的にあまり喋らない子ではあったが、翔と仲良くなってからはずいぶんと口達者になった。現在は美里と交際中。
一人称：俺　あだ名：慎ボー♪慎ちゃん♪川崎くん　家族構成：父・母・兄・弟

☆吉山（よしやま）　亜紀（あき）　クラス：１年Ｉ組
南葉島中学校出身。中学時代はチューバ、ユーフォニウム、トロンボーンと楽器を３つも吹いていた。トロンボーン歴は一番短いが、肺活量の多さでは男の子にも負けない。性格は明朗快活。
あだ名：亜紀ちゃん♪ヨッシ～

☆富士原（ふじわら）　徹（とおる）　クラス：１年Ｄ組
南葉島中学校出身。完全な初心者なので亜紀に付きっ切りで教えてもらっている。基本的にのんきなのでマイペースで進行中。
あだ名：富士くん♪徹

【Ｅｕｐｈｏｎｉｕｍ（ユーフォニウム）】
♪水谷（みずたに）　春樹（はるき）　クラス：２年Ｂ組
最初は雪子と似たような雰囲気が漂っていたが、実は優しい子。楽器を吹く前から自宅にユーフォニウムは持っていたようで、一所懸命抱えて部室までやってきた。最近、拓真と楽器を持っている姿が似通ってきている。キラースマイル所持者。
一人称：俺　あだ名：春やん♪水谷くん♪水っち　家族構成：母＝水谷幸恵子（みずたにさえこ）

☆加藤（かとう）　愛実（めぐみ）　クラス：１年Ｈ組
葉島中学校出身。中学までは市の少年少女吹奏楽団に所属していて、トロンボーンを吹いていた。春樹とは実は幼なじみで、彼のことが好き。同じパートを吹いていて心底嬉しく思っている。なお、ユーフォニウムは初心者であった。
あだ名：めぐみ♪カトちゃん

【Ｔｕｂａ（チューバ）】
♪本堂（ほんどう）　拓真（たくま）　クラス：２年Ｈ組
大柄な体格でチューバと相性ピッタリ。生真面目な性格で空気を読めるので精神年齢はメンバーの中でも上のほう。
一人称：俺　あだ名：拓あん♪本堂くん♪本ちゃん　家族構成：父・母

□三河（みかわ）　岳彦（たけひこ）　クラス：３年Ｇ組
途中入部の３年生。最初で最後のコンクールに、大人数で参加したかったので入部を決めた。音楽大学に進学が決まっている。
あだ名：三河先輩♪岳ちゃん先輩

☆大岩（おおいわ）　智志（さとし）　クラス：１年Ｈ組
七海高校内でも有名な不良（ワル）。にもかかわらず、拓真の音色や部員の

楽しそうに活動する様子に惹かれて入部を決めたという、実はウブな一面がある少年。
あだ名：現在募集中。

【Ｓｔｒｉｎｇ　Ｂａｓｓ】
☆三宅（みやけ）　亮平（りょうへい）　クラス：１年Ａ組
かなりイケメンの少年。ジブリ映画が大好きで、暇さえあれば弦バスで久石譲の曲を弾いている。ピッチカートが一番上手い。
あだ名：みーやん♪

【Ｐｅｒｃｕｓｓｉｏｎ（パーカッション）】
♪田中（たなか）　美里（みさと）　クラス：２年Ａ組
大胆なことが大好きなので動きのあるパーカッションへ。明るく活発な性格で男女の壁なく誰とでも平等に接するタイプ。少々おせっかいなところがある。現在は慎也と交際中。
一人称：あたし　あだ名：ミサッチ♪みさりん♪美里ちゃん♪田中さん　家族構成：父・母・姉＝田中（たなか）　美優（みゆ）

☆冨岡（とみおか）　洋之（ひろゆき）　クラス：１年Ｇ組
袴田中学校出身。端正な顔立ちでクールに見えるが中身は結構おもしろい子。ティンパニが特に得意。
あだ名：トミ♪とみぃ♪ヒロ♪ひろぽん

☆日高（ひだか）　優（ゆたか）　クラス：１年Ａ組
大井戸中学校出身。運動神経も鈍く勉強も中の下という冴えない自分を変えたくて入部した初心者。背が低いので基本的にタンバリンやトライアングルが好き。一時期休部していた時期もあるが、現在は復帰。
あだ名：ひーくん♪優っち♪チビ（１人だけ）

☆秦野（はたの）　恵梨（えり）　クラス：１年Ｅ組
東京から高校進学時に引越し。目立ちたがりなので美里と同じ目立ちそうという理由で打楽器を選んだ初心者。
あだ名：エリリン♪はたっち♪はたやん

☆乃木（のぎ）　あずさ　クラス：１年Ｈ組
栃木から高校進学時に引越し。打楽器は小学校１年生からずっとしているので打楽器は全般的に扱える。
あだ名：のぎぎ♪あず

【Ｃｏｎｄｕｃｔｅｒ（コンダクター）】
♪東（あずま）　恭一（きょういち）　［３２］
七海高等学校吹奏楽部顧問。担当教科は英語で由美子の在籍する２年Ｅ組の担任。身長１８７センチでけっこうイケメンなので彼に担任を持ってほしい女子生徒は多いとの噂。七海高等学校吹奏楽部（初代）のＯＢでもある。そのときのパートはパーカッション。浜崎あゆみの熱狂的ファン。

＜佐野家＞
☆佐野（さの）　昭（あきら）　［４７］
翔の父。食品会社勤務。あまり喋らない照れ屋な性格だが子供たちのことはきちんと把握している。

☆佐野（さの）友美子（ゆみこ）　［４５］
翔の母。かなり賑やかな性格で初対面の人でも遠慮なく質問攻めにしたりしてよく翔や綾音に怒られている。かなりの料理好きなので腕は良い。

☆佐野（さの）　綾音（あやね）　［１５］
翔の妹。葉島（はじま）中学校３年生。翔のことを呼び捨てにしている。

☆佐野（さの）　智輝（ともき）　［１０］
翔の弟。葉島小学校４年生。お兄ちゃんっ子でいつでも翔が帰ってくると大喜びしている。

☆佐野（さの）冨美枝（ふみえ）　［７２］
翔の父方祖母。夫は５年前に亡くしている。かなりの老眼。

＜朝倉家＞

☆朝倉（あさくら）　祥夫（さちお）　［４６］
陽乃の父。証券会社勤務。今どき珍しいタイプの父親で子供たちのことに関しては度が過ぎるほど干渉することもあり、今まで陽乃とも夏樹ともケンカをしたことが何度かある。普段は仕事人間。

☆朝倉（あさくら）　由利（ゆり）　［４４］
陽乃の母。スーパーでパートをしている。祥夫とは違い、おっとりして子供たちを優しく見守るタイプ。しかし言うべきときにはしっかりと諭す。

☆朝倉（あさくら）　夏樹（なつき）　［１５］
陽乃の弟。サッカー大好き少年だったが椎間板ヘルニアを発症したことからサッカー部を退部。現在は吹奏楽に興味を持っている様子だが、サッカーも諦めたわけではない。基本的に人思いで優しいが、心配性なところがある。葉島中学校３年生。

☆朝倉知恵子（あさくらちえこ）　［７０］

陽乃の父方祖母。どんな時でも冷静に何事にも対処できるしっかりした女性。夫は6年前に亡くしている。

＜七見高等学校関係者＞

☆真野（まの）　光治（こうじ）　［５５］

学校長。温厚で生徒の自主性を尊重する主義を貫いている。吹奏楽部の生徒に校長室でのライブ演奏と引き換えにストーブを提供してくれたりもするユニークな男性。

☆新井田（にいだ）　彩（あや）　［２７］

社会科教師。２年Ａ組担任。小柄で花のように可憐な先生。華道部顧問。

☆亘理（わたり）　健太（けんた）　［３１］

国語科教師。２年Ｃ組担任。体育会系の熱血先生で陸上部顧問。

☆真鍋（まなべ）　宗平（そうへい）　［３２］

野球部顧問。理科教師。トラブルが起こるとパニックを起こしやすい。

☆園部（そのべ）麻衣子（まいこ）　［２７］

数学教師。２年Ｂ組担任。

＜吹奏楽関係者＞

★佐野（さの）　修平（しゅうへい）　［１７］

私立・風見台（かざみだい）高等学校吹奏楽部員。翔とは中学時代の同級生かつ吹奏楽部員だった。当時の中学校部員たちの間では「ダブル佐野」の名前で結構知られていた。現在は人数の関係でサックスから離れてパーカッションを担当している。

★濱口（はまぐち）　優衣（ゆい）　［１７］
私立・風見台高等学校吹奏楽部員。修平と仲がよく、誰にでも思いやりを持って接するタイプ。陽乃とも合同練習で仲良くなった。トランペット担当。

★岩切（いわきり）　翔平（しょうへい）　［１８］
１０月に大阪から七海市へ引っ越してきた淀南（よどみなみ）中学校時代の翔の先輩。名前が翔とかぶっていたので「ダブル翔」と修平とのカップル名（？）を文字って呼ばれていたことがある。現在、風見台高校へ転入して吹奏楽部に入部。

★三田嶋（みたじま）　樹（いつき）　［３０］
有名なアルトサックス奏者。全国各地の演奏会に客演として招かれたり演奏会を開いたりと精力的に活動している。七海高等学校吹奏楽部（初代）のＯＢでもある。

★神崎（かんざき）しおり　［３０］
樹のマネージャーにして吹奏楽部時代の同級生。オーボエ奏者である。

★村峰（むらみね）　塔子（とうこ）　［５０］
前七海高校普通科教頭。分厚い眼鏡が特徴で文化部に対する扱いはかなりぞんざい。家族の事情により、現在は神戸市に転居して教職からは離れている。

◎竹林（たけばやし）　泰徳（やすのり）　［１４］
愛媛県　常套（じょうとう）中学校吹奏楽部在籍中。パートはチューバ。翔とは大阪にいた頃、よく遊んだ。オーケストラや吹奏楽のような大編成が苦手というコンプレックスはあるが、翔には「音楽才能抜群！」と

言われている。ただし、泰徳本人はなぜか否定している。

◎中井（なかい）　美奈（みな）　［１４］

愛媛県常套中学校吹奏楽部在籍中。パートは弦バス。『ピティナ国際ピアノコンクール』にてパーカッションの秦野恵梨と知り合って以来の仲である。

◎谷（たに）　未来（みき）　［１４］

愛媛県常套中学校吹奏楽部在籍中。パートはユーフォニウム。加藤愛実とは知り合いで、愛実が経営するブログで友達としてメールアドレスを交換したのが始まり。常套中学校のサマーコンサトにて初めて出会った。

◎高橋（たかはし）　美並（みなみ）　［１５］

愛媛県常套中学校吹奏楽部在籍中。泰徳たちの１年先輩。翔たちや金管メンバー数名は２００５年度のアンサンブルコンテストにおいて、彼女と知り合いになっている（翔が半ば強引に彼女たちの会話に加わっただけであるが）。ちなみに、七海高校の中で彼女を好きなメンバーがいる。

◎佐々木（ささき）　香織（かおり）　［１４］

愛媛県常套中学校吹奏楽部在籍中。泰徳、美奈、美並とアンサンブルに出場した。彼女も美並同様、２００５年度のアンサンブルコンテストにおいて半ば強制的に翔たちと知り合いになっている。

主な登場人物（２００７年／新１年生入学前）（後書き）

それではいよいよ高校３年生、２００７年編スタートです♪

※注１※　「吹奏楽関係者」のうち◎印の人物に関してはコラボレーション企画のＧＴ．ｓｐｉｒａｌさん著作『ブラス魂♪（旧・みんなのＨａｒｍｏｎｙ　～夢と希望のアンサンブル～）』における登場人物です。また、ＧＴ．ｓｐｉｒａｌ氏には許可を事前にいただいております。

※注２※　この小説では神奈川県を舞台としておりますが、筆者の居住地が兵庫県であり、コンクールの日程などが関東地区とは大幅に異なります。小説の中でコンクール等の日程が本来の神奈川県などのものとは異なりますが、兵庫県や関西地区をモデルにコンクール等の日程を設定させていただきます。何とぞご理解ください。

第１９７話　ロングホームルーム

いよいよ２００７年が明けて、陽乃たちも高校３年生が目前となってきた。陽乃たち金管メンバーは１月６日から練習を開始し、県大会突破に向けて一丸となって練習している。アンサンブル出場メンバーでない部員たちも、２月にいろんな演奏会があるのでそれに向けての練習に励んでいた。ちなみに、今後３月までの行事は次のようになっている。

１月１４日（日）　２００６年度　アンサンブルコンテスト　神奈川県大会
２月１４日（水）　バレンタインデー☆コンサート　小田急七海駅前
２月１８日（土）　第４回六校合同演奏会　七海市クリエイトホール
２月２８日（水）　第３９回生　卒業式　七海高校体育館
３月３日（土）　ひな祭コンサート　つくし野川河川敷
３月２１日（祝）　第１３９回　七海市吹奏楽連盟　定期演奏会　七海市中央ホール

今日の日付は１月１１日（木）。課題テストも終え（陽乃はいろんな意味で終わった）、午後はロングホームルームになっている。恭一が何か分厚い冊子を持って教室に入ってきた。

「おーい、静かにして～。評議委員、これ配ってくれるか？」

ちなみに、評議委員とは中学校などで言う学級委員長のことだ。最近では学級委員を置かない小学校もあるらしいが、それはいいとして七海高校ではこう呼んでいる。評議委員から配られたのは「阪神淡路大震災～１２年目を迎えて～」という資料。

「阪神淡路大震災？」

クラスメイトから疑問に近い声が飛んだ。翔は無理もないな、と心の中で考えていた。ここは神奈川県だ。阪神淡路大震災という単語は大阪府や兵庫県南部ではとりわけ馴染みがある、といったら語弊があるかもしれないが、とにかくよく聞く言葉だ。特にこの時期になると、なおさらである。

「いいか？　みんなが6歳のとき、この阪神淡路大震災、正式には兵庫県南部地震と呼ばれる大地震が兵庫県南部を中心に襲ってな。第二次世界大戦以降の地震被害としては最悪のものとなる地震だったんだ」

「それが私たちとどう関係あるんですか？」

「日本は地震大国と言われている。君たちがこの七海高校に入学した２００５年からだけでも福岡県、宮城県、それに君らも驚いただろうけど伊豆半島など相次いで大きな地震が起きている。関東地方でも大正１２年に関東大震災と呼ばれる大震災が起きて、神奈川県横浜市をはじめ、横須賀市、当時は七海町だったこの七海市も大きな被害を受けて……」

それは突然だった。ガタァン！と音がして恭一のちょうど目の前で男子生徒が倒れたのは。

「かける！」

慎也が真っ先に立ち上がり、翔の元へ駆け寄った。

「翔！」

陽乃も立ち上がり、急いで翔の元へ駆け寄る。

「佐野！」

恭一が翔を抱きかかえ、名前を呼ぶが応答がない。

「おい、保健室へ急いで連れて行くぞ！」

「佐野！」

「翔！」

「カケル！」

クラスメイトや陽乃の呼ぶ声が、翔の耳に遠くから聞こえるように響いていた――。

「はいはいはーい」
電話が鳴ったので、友美子は洗濯カゴ片手に電話を取った。
「はい、佐野でございます」
「私、七海高等学校2年C組で佐野くんの担任をしております、東と申します」
「あら！　東先生！　おはようございます～」
「佐野さんですか？」
「はぁい。いつも翔がお世話になって……え？」
友美子は青い顔で受話器を置いた。
「どうしたの、友美子さん」
「お義母さん……翔がね、学校で倒れたらしいんです」
「えぇ！？　また熱かい？」
「それが……授業で阪神淡路大震災のことを扱おうとした矢先……」
「……そうかい」
冨美枝は複雑そうな表情でお茶をすすった。
「行かへんの？」
「行きたいですけど……その前に、やっぱり翔にあの話をしたほうがいいんかと思って」
「……難しいトコやね」
ずずず……とお茶をすする音が響く。
「でも、あの子、この時期になったら毎年、夢を見る言うてるね」
冨美枝が真剣な表情で呟いた。
「えぇ」
友美子にも毎年、翔は言っていた。あの１９９５年以降、毎年のことだ。初めは友美子に泣きついてきていた。しかし、記憶が明確でないようで、友美子に泣きつくこと自体、ごくごく自然な様子でしていたのだ。
「そろそろ、言うべきなんですかね」
「それは私たちにはなんとも言えん。そやけど、あの子はもう……

子供ちゃうんやから、話はわかるはずやで」
「……そうですね」
友美子は複雑な表情を浮かべ、翔の部屋へと向かった。

「……。」
午後2時。結局、翔は早退という形になった。体調があまり優れていないと保健室の先生にも判断されたからだ。
翔は家の前で立ち尽くしていた。家には連絡が行っている。翔自身、毎年この時期になると体調が崩れることに不信感を抱いていた。しかし、友美子も昭も冨美枝も、何も翔に語ることはなかった。そして、もうひとつ翔には確信していることがあった。
自分が小さい頃の写真、それも6歳以前の写真がほとんどといっていいほどないのだ。あるにはあるのだが、冨美枝や昭、友美子と写っている写真がないのである。年を重ねるにつれて、彼らが何かを隠していることは間違いないと思うようになっていた。
「……もう、隠し事はなしにしてもらおうと思うねん」
翔は隣に立っている陽乃にそう言った。早退は早退でも、また途中で倒れたりしたら不安でたまらないと陽乃は恭一に懇願して、一緒に早退させてもらったのだ。見送りという名目で。
「オレのすべて……受け入れてくれる？」
「もちろん」
陽乃は優しく微笑んだ。
「じゃあ……行くで」
翔と陽乃は一緒にドアを開けた。
「ただいま」
「お邪魔します」
リビングに入る。陽乃がいることに冨美枝と友美子は目を丸くした。
「どしたん？　陽乃ちゃんまで一緒に」
「すべてを……」

翔は真剣な目で二人を見つめた。
「すべてを、受け入れに来た」
「……。」
その言葉の意味を、冨美枝も友美子もしっかりと理解した。
「話してくれるよな？」
「……しょうがないわ」
友美子は優しく、どこか寂しげに笑って二階へ上がった。

「どうぞ」
冨美枝がジュースを陽乃に差し出した。
「いただきます」
「……。」
ジュースを一口飲み、陽乃は心配そうに翔に聞いた。
「大丈夫？」
「うん」
どこか不安そうな翔だが、陽乃に声を掛けられるとすぐに笑顔になる。やがて、友美子が降りてきた。アルバムを抱えている。
「すべてを、話すわ」
「うん……」
「ただ、これだけは言わせて？」
「何？」
「翔は、お父さんとお母さんの子やの。それだけは、わかって？」
「……そんなん、当たり前やん」
翔はニコッと笑ってうなずいた。迷いがないその表情に、友美子はすべてを包み隠さず、話し始めた。

第１９８話　回想～１・１７　発生～

～回想・１９９５・１・１７～

「佐野のおばーちゃーん！」
冨美枝は少年の声に思わず笑顔になり、声のするほうを向いた。
「おはよう、翔ちゃん！」
佐野　翔、当時６歳。
「おはようございます、佐野さん」
「あら、おはようございます……」
けれども、当時の翔の苗字は佐野ではなかったのだ。
冨美枝は笑顔でこう、女性の苗字を呼んだ。
「大中（おおなか）さん」

冨美枝によると、大中家は兵庫県　西宮（にしのみや）市　仁川（にがわ）町に住んでいたという。大中家の主人・康史（こうじ）（当時３５歳）、康史の妻・美佐子（みさこ）（当時３４歳）、長男・一志（かずし）（当時１２歳）、長女・璃緒（りお）（当時１０歳）、そして次男・翔（当時６歳）という家族構成であった。

「今日はどちらかお出かけ？」
冨美枝は美佐子に聞いた。
「えぇ！　一志の誕生日が明日ですの。けど、明日は学校や会社ですから、連休の今日、お祝いの夕食に大阪へ出ようかと」
「あらそぉ！　おめでとう、一志くん」
「えへへ……」
一志は恥ずかしそうにしつつも、かわいい笑顔を見せた。
「それにしても、璃緒ちゃんもずいぶんおめかししちゃって」
「かわいい？」

璃緒はクルッと回って着ている服を冨美枝に見せた。
「そりゃあもう！　仁川一、可愛いわよ」
「嬉しい！　じゃあ、今度は西宮一を目指そうかな！」
「おばーちゃん！　オレは？　オレは？」
「そうねぇ、翔くんは仁川一元気かな！」
「やったぁ！　聞いた？　おかーさん！　オレ、一番！　一番！」
翔は嬉しそうに美佐子の周りをクルクルと走り回った。
「それじゃあ、そろそろ失礼しますね」
美佐子はペコリとお辞儀をして翔の手を繋いだ。
「昭さんと友美子さんにもよろしくお伝えください」
「ご丁寧にどうも！　失礼します」
康史の丁寧な一言に、冨美枝は礼を返した。冨美枝はまさか、その時の姿が元気な大中家を見た最後になるとは、もちろん思わなかった。

翌日1月17日午前5時46分。
突き上げるような揺れとともに、当時冨美枝が住んでいた仁川の一戸建て住宅は激しく揺さぶられた。
「キャーッ！　お父さん、お父さん！」
「布団被っとけ！」
冨美枝の夫・高志（たかし）が被っていた布団をさらに冨美枝へと被せた。
高志は部屋から出て、泊まりに来ていた息子の昭（当時35歳）とその妻・友美子（当時33歳）、かわいい盛りの孫・綾音（当時3歳）の安否をすぐ確認しようと激震の中、廊下を必死に歩いた。
揺れの音と同時に、自宅の裏辺りから何かが崩れ落ちる音がした。家が崩れたのか、窓ガラスの割れる音、火花が散る音が高志の耳にもしっかり聞こえたという。
地震が収まって傾いた家から高志と昭は冨美枝、友美子、綾音の3人を必死で脱出させ、先に近くの大学へと避難するように促した。
そこで、昭と高志は土砂崩れに巻き込まれ、倒壊した数多くの住宅

を目にしてただ、呆然とするしかなかった。
　避難所に指定された小学校へと移動した後、冨美枝と友美子はそこでようやくニュースを目にすることができた。倒壊した阪神高速道路、燃え上がる市街地、崩れ落ちた阪急電鉄の駅舎。見慣れた兵庫の各地が、まるで映画のように崩れ落ちている。呆然とそのニュースを見ていると、「亡くなられた方」というテロップと同時に、多くの人々の名前が流れ始めた。神戸市　東灘区、灘区、中央区、長田区、須磨区、兵庫区――。やがて芦屋市、洲本市などが流れ始める中、冨美枝は目を疑う字を目撃した。

【亡くなられた方】
兵庫県西宮市

大中　康史（３５）
大中美佐子（３４）
大中　一志（１２）
大中　璃緒（１０）

・　・　・

「ウソ……でしょ？」
　冨美枝と友美子はただ、震えるしかなかった。

　その夜、避難所にようやくたどり着いた高志と昭が大中家のことを語り始めた。大中家はあの土砂崩れに巻き込まれ全壊状態。家具すら粉砕されるような状況で、翔を除いて全員がほぼ即死というような状況であったという。そんな中、翔は兄の一志と姉の璃緒に抱かれるようにして、意識不明ではあるものの命に別状はない状態で

発見されたという。意識不明の原因も体温低下による一時的なものであるということであった。

「せやけど……これから、どないしたらえぇの。翔ちゃん……」

冨美枝は友美子と震えながら、ただ泣くしかなかった。

「これが……震災一日目の事実」

友美子が淡々と語った。翔の目の前には、知らない夫婦と男女の小学生。そして、紛れもない、自分が笑顔でピースをしている写真があった。

「ホンマに……？」

「……。」

冨美枝と友美子は同時にうなずいた。

「ほな、オレは父さんと母さんの子やないって……こと？」

「……続きを聞いてくれる？」

友美子は続きを話し始めた。陽乃と翔はいまひとつ現実味を感じられないまま、再び話を聞き始めた。

第１９９話　回想～１・１７　遺品～

阪神淡路大震災発生から１ヶ月後の２月１７日。西宮市内の病院に、冨美枝と友美子、昭の３人が訪れていた。

「……手続き、よぉ済んだねぇ」

「家庭裁判所のほうも、私たちの意志を汲んでくれたんかもしれないですね……」

「……翔ちゃん、混乱せぇへんかしら」

「記憶が……ほとんどないらしいんです。特に家族の記憶はもうないに等しいらしくって……。お父さん、お母さんの顔が思い出されへんって言うらしいんです」

「一志くんや、璃緒ちゃんのことは？」

冨美枝が心配そうに聞いた。友美子は辛そうな顔をしながら、こう言った。

「全然、話しもせぇへんのですよ」

「それって……」

昭がハッとしたように何かを言おうとして止めた。代わりに、友美子が呟いた。

「覚えてへん、のやろうね」

「……。」

医師の話によると、体温低下が長時間続いたため、脳の記憶が一部抜け落ちたのかもしれないということだった。完全な記憶喪失とまではいかなくとも、今後思い出す可能性も低いという。しかし、完全に体温低下と記憶喪失の因果関係を説明できるまでには至らなかった。確実にいえることは、翔は現段階では家族のことも、それまでの家族と過ごした日々の記憶も、家族の顔でさえもハッキリしない状態なのだという。

「どう説明するの？」

「……実はもう、私がお母さんってことを説明してるんです」

「ちょっと！　なんでそんな勝手に……」
冨美枝が友美子を責めるように大声を上げた。
「しょうがないじゃないですか！？　いま、翔ちゃんに『お父さんお母さん、死にはったんよ』なんて言えます！？」
「それは……」
「無理でしょう？　お義母さん……」
昭が冨美枝の肩を抱いた。
「俺たちも、精一杯、カバーするつもりや」
「昭……」
「今日から……翔ちゃんは俺たちの子やねん」
「……。」
「母さんも、翔ちゃんのこと、綾音と同じくらい可愛がってくれるやんな？」
「……そうやね」
翔の病室へ近づくにつれて、冨美枝の心臓が高鳴る。ふと、ひとつ心配になったことがあるので最後に聞いた。
「綾音ちゃんにはどう説明すんの？」
「まだ3歳……。お兄ちゃんが来るんよ～言うたら、すっごい喜んでました」
「ほな……良かったわぁ」
冨美枝はなんだか救われた気持ちになった。
「開けますよ」
「えぇ」
友美子たちはそっとドアを開け、病室に入った。

「その時の写真が、これ」
翔は恐る恐る、写真を手にした。腕を骨折したのか、まだ痛々しい包帯を巻いた自分の周りを、まだ若い感じが残っている昭、友美子、冨美枝の3人がぎこちない笑顔で翔を取り囲んでいる。
「退院したとき……おばあちゃんとおじいちゃん家は潰れてしもた

から、南大阪のウチにみんなで住むことにした3月の写真」
笑う翔。血が繋がっていないにも関わらず、本当の兄のように翔を慕う、綾音。ようやく笑顔が自然になってきた昭、友美子、冨美枝、高志。
「その後は、アンタが佐野　翔っていうのに疑問を抱かんかどうか、不安でしょうがなかった」
友美子がハンカチで涙を拭いながら、続ける。
「そんな時に……アンタ、吹奏楽をするって言うたときはホンマびっくりしてんよ」
「オレが……小4のときやっけ？」
「うん。それもサックス。何の縁なんだかっておばあちゃん、笑ってはってんよ」
「どういうこと？」
「これ、見てみ」
冨美枝は一枚の写真を取り出した。
「瓦礫からなんとか形の残ってる写真を集めた中に、これがあったんよ」
そこには、兄だという一志の姿と姉だという璃緒の姿。そして驚くべきことに、二人とも見慣れた楽器を持っていたのだ。一志がアルトサックス、璃緒はオーボエ。
「小学校に珍しく吹奏楽部があって、二人ともすぐに夢中になってねぇ。私たちも演奏会に何回か招待されたんよ」
「兄ちゃんと姉ちゃんが……」
陽乃は二人が写る写真と、いまの翔を見比べた。確かに、目元が翔にそっくりに見えてくるから不思議だ。
「それでね……アンタがいま吹いてるサックス……」
「……一志兄ちゃんの？」
翔が一志の名前を初めて呼んだ。
「そうやで」
冨美枝がようやく笑った。

翔は誰とも視線が合わない。なんだかフワフワ泳いだ感じで安定がしない。5分近く、沈黙が続いた。陽乃も何も言えず、ただ俯くしかなかった。事態の重さに驚きばかりで、言葉が出ないのだ。

「なぁ」

翔がようやく口を開いた。

「オレ……はさぁ」

「うん？」

「この家、おってもえぇの？」

冨美枝と友美子がポカンとした表情になった。けれども、すぐにその表情が緩む。

「当たり前やろ？」

友美子が翔の頭を撫でた。

「他に行く場所あんの？」

翔が冨美枝の言葉にフルフルと首を横に振って答えた。

「やろ？」

友美子が笑う。

「アンタは確かに、康史さんと美佐子さんの子やの。お父さんとお母さんの、ホンマの子やないよ。でもね、もう今はそんなん関係ないの」

「そうそう」

冨美枝が続けた。

「今までどおり、元気いっぱい一志くんのサックスをそのまま吹き続けて、明るく元気いっぱいでおってくれたら、十分やの」

「……。」

「翔は？」

涙をいっぱい溜めながらも、翔はハッキリ言った。

「そんなん、おりたいに決まってるやん」

「ゴメンな……。なんか、重すぎた」

翔は苦笑いしながら家の外で陽乃にそう言った。

「いいの。なんか、あたしも泣きそうになっちゃって……」
「心配してる？」
「全然」
陽乃はニッコリ笑った。
「翔は、翔だもん」
「……ありがとう」
カラスの鳴き声が響いた。
「なぁ」
「何？」
「1月17日……学校、休めるかな？」
「え？」
陽乃は一瞬、訳がわからなくなった。
「吹奏楽部全員で」
「……どういうこと？」
翔は笑顔でこう答えた。
「兄ちゃんや姉ちゃんや、父さん母さんにオレはいま、こんなにたくさんの仲間と頑張ってるって……伝えに行きたいねん」
「気持ちはわかるけど……なんで吹奏楽部で？」
「演奏を……聴かせてあげたい。みんなに」
「……難しいかもよ？」
陽乃は苦笑いした。翔も苦笑いしつつ、こう返した。
「オレが絶対、校長先生と教頭先生と東先生、部員のみんな、家族を説得するから」
「……わかった。あたしも協力、惜しまないよ？」
「ありがとう……」
翔が腕時計を見ると、もう6時半になっていた。
「送るわ」
「いいよ」
「危ないやろ。自転車出してくるから待ってて」
翔は有無を言わさず、自転車を取りに言った。

「……翔は強いなぁ」
陽乃はあれほどの事態にも関わらず、すべてを受け入れようとしている翔にただ、驚くことしかできなかった。
陽乃を見送った後、翔が帰ると同時に綾音が玄関で立っていた。
「どないしてん？」
「……全部、聞いた」
「早いな。智輝は？」
「智輝には早すぎるからって……お母さんは言わんって。まだ」
「そうやろなぁ」
「……あのな！」
綾音が大声を出したので、翔は目を丸くした。
「何があっても、兄ちゃんは兄ちゃんやで！？」
「……。」
翔の目が丸くなったまましばらく綾音を捉えていたが、すぐにその目が細くなった。翔の、少しゴツゴツした手が綾音の頭に伸びる。そして、優しく彼女の髪の毛が揺れた。
「ありがとう」
「……ううん」
「二人とも～！　ご飯、できたで！　今日はオムレツ！」
「よっしゃあ！　綾音、行こう！」
「うん！」
翔と綾音は手を繋ぎ、小さい頃を思い出すように廊下を一緒に走っていった。

第２００話　一生のお願い！

翌日１月１２日（金）。
「……というわけで、オレは１月１７日に何としてでも兵庫県の西宮に行って、演奏がしたいんです！」
翔の真剣な表情に、吹奏楽部の全員が呆然としていた。それ以上に、翔がすべて話した家庭の事情にほとんどの女子部員が涙を流していた。男子部員もただ、まるで映画の世界のようだというような表情をしていた。
「先輩……」
手を挙げたのは、愛実だった。
「私……もし、皆が反対でも、私だけでもご一緒しますよ？」
「え……！？　ホ、ホンマに！？」
「はい」
愛実は涙を拭きながら力強くうなずいた。
「ちょっと待ってくださいよ～」
不満そうに手を挙げたのは勇だった。
「誰が反対なんて言いました？」
「そうよ、めぐ～！　私たちは誰一人、反対なんて言ってないよ？」
みゆきがニコニコ笑いながら愛実の肩をツンツンとつついた。
「みんな……」
「つーかさ、この雰囲気で反対のヤツとかいるわけ？」
慎也が笑った。
「いませーん！」
全員が揃って声を上げた。と同時に、翔がバッとしゃがみ込んでしまった。
「おい！　また倒れるんじゃねぇだろうな！？」
拓真が驚いて立ち上がった。
「ちゃうわ……！　感激して……泣くのが見られたくないだけ！」

ドッと笑い声が湧いた。
「でもさ、吹奏楽部揃って全員で休めるの？」
「それは問題ないぞ」
恭一が姿を現した。「こんにちはー！」と全員が立ち上がり、元気良く挨拶をする。恭一も「こんにちは！」と挨拶をしてから教卓の前に立った。
「校長と教頭に聞いてみたら、公認欠席と認めてくれるらしい」
「ホントかよ！」
順平が嬉しそうに声を上げた。
「良かったですね、先輩！」
さゆりと麻綾、はるかが嬉しそうに翔に言った。
「ホンマ……めちゃ嬉しい！」
翔は大声を出し、涙を拭いながら立ち上がった。
「でも、曲、どうします？」
健之佑が思い出したように呟いた。
「それ以前に、西宮とかいうとこに行って突然演奏会とかできます？」
「……。」
全員が黙ってしまった。翔もかなり悩んでいるようだ。恭一が一応の説明をしてくれた。
「新幹線やそこまでの在来線の切符は、部費や保護者会費などでまかなえるから心配するな。それからいま、校長が確認してくれていると思うんだが、当日、兵庫県西宮市の……被災当時、佐野が住んでいた地区で慰霊祭が行われるそうだ。そこで演奏をさせていただけないか、校長自らお話していただいてる最中だ」
「じゃあ、演奏会場とか旅費は問題ないんですよね？」
春樹が安心したように言った。
「そういうことだな」
恭一がニコッと笑い、うなずいた。
「じゃあ、先生は校長先生にどうなったか状況を聞きに行ってくる

から、お前たちは曲決めをしておきなさい」
「はぁい！」
恭一は嬉しそうに返事をする翔たちを見やって、それからゆっくりと戸を閉め、職員室へと向かった。
職員室に戻ると、すぐに真野校長が恭一の下へ駆け寄ってきた。
「おぉ、ちょうどよかったですよ、東先生」
「あぁ、校長。いかがでしたか、向こうの自治会長さんは」
「それがだね、驚いたことに自治会長さんは佐野くんのことを覚えていらしてね。ぜひ、お願いしたいということだったんだよ」
「えぇ？　佐野のことを覚えておられる方がいらしたんですね」
恭一はかなり驚いた。もう12年も経っている。兵庫県内も復興が進んでいるため、当時住んでいた人たちも引っ越したりという可能性があるにも関わらず、翔のことを覚えている人がいたのだ。
「おかげで、全部トントン拍子で進んでしまったよ。佐野くんにもこの旨、伝えておいてくれるね？」
「もちろんです！」
恭一もようやく笑みがこぼれた。
「期待してるよ」
「ありがとうございます」
恭一はホッとため息をついて、すぐに音楽室へ戻った。すると、話し合いをしているはずの生徒たちがいる音楽室から楽器の音が聞こえている。
「おーい、どうした？　話し合いは終わったのか？」
「はい！」
翔がすぐに分厚い封筒を持って恭一の下へ駆け寄る。
「この2曲にしようかってことになりました！」
恭一は渡された封筒に書いてある曲のタイトルを見た。

『「GR」より　明日への希望』
『花～すべての人の心に花を～』

「悪くない選曲だな」
「でしょ！？　でね、ＧＲのほうはピアノあるんですけど、大谷さんにやってもらおう思うんです」
沙希が恥ずかしそうに笑う。
「だな。適任だ」
「でも、ピアノとか準備できますかね？」
「向こうの方に問い合わせてみるよ」
「お願いします！」
翔は深々と恭一にお辞儀をすると、すぐにサックスパートのところへ戻りチューニングを始めた。
「……。」
気のせいだろうか。恭一は翔が以前よりも大人っぽくなったように感じたのだ。
「気のせいじゃないのかもしれんな……」
恭一は小さくうなずくと、すぐ指揮台のほうへ向かった。
「よし！　曲としては両方とも難しくないだろう。チューニングが終わり次第、すぐに初見合奏をしてみよう！」
「はい！」
恭一の提案に、部員たちはすぐに良い返事をした。
「……。」
翔は一志の吹いていたというサックスをジッと見つめた。
「どうしたんですか？」
はるかが首を傾げながら翔に聞く。
「なんでもない！　合奏、がんばろな！」
「はい！」
翔はすぐにリードをセッティングし、チューニングを始めた。透き通った音が、音楽室に響き渡った。

コラム☆9　気になる彼ら☆場所

『奏～ｋａｎａｄｅ～』には部員たちやその家族、教師を含めて数多くの人物が登場します。中にはわずかな登場しかない人たちもいるのですが、少しだけというわりには要所要所でその名前が飛び出し、ストーリーに多かれ少なかれ影響を与えています。

このコラムでは、そんなわずかな登場回数でありながら今後もストーリーに関わってくる人たちを紹介しておきます。また＜小説に出てくる場所☆ミニデータ　その２＞も掲載いたします。なお、データ等は第２００話時点です。

【若草（わかくさ）　直幸（なおゆき）（１７）】

伊豆半島で翔たちが合宿をした際に出会った高校生。翔とは同い年になる。楽器はアルトサックス。登校拒否をしていたが、陽乃や翔との出会いを通して自分を見つめなおし、現在は登校するようになっている。初出場のマーチングコンテストも見に来てくれた。ちなみに、彼女がいる。

【相田（あいだ）　雄平（ゆうへい）（１７）】

七海高校野球部。沙希の想い人であるが、彼自身それは自覚していない。沙希には何度もアドバイスをするなど、親身な存在になりつつある。ちなみに、吹奏楽部が野球部の応援に来てくれる日を心待ちにしている。一度話は出たが、春休みの段階では立ち消えになり、夏はコンクールが重なったためまだ叶っていない。

【矢崎（やざき）　菜緒（なお）（１７）】

陽乃のクラスメイト。快活な少女で、陽乃とはよく気が合う。ちなみに、森本　涼平のことが好き。

【森本（もりもと）　涼平（りょうへい）（１７）】
陽乃のクラスメイト。若干間の抜けた感じが拭えない少年。菜緒のことが好きだが、ハッキリ言えない自分にもどかしさを感じている。

【志賀（しが）　慧太（けいた）（１６）】
健之佑のクラスメイト。シッカリ者で、何かと健之佑にアドバイスなどをするよき親友でもある。

【鎌田（かまた）　進二（しんじ）（４６）】
陽乃の通う塾の塾長。２００６年１２月現在、４６歳。何かと的確なアドバイスを陽乃にしてくれるので、陽乃たち生徒からの信頼も厚い。

【大中（おおなか）　康史（こうじ）（享年３５歳）】
翔の実夫。子煩悩な父親であったが、１９９５年１月１７日に発生した阪神淡路大震災により亡くなる。翔は震災時の記憶喪失により康史たちのことは記憶していない。

【大中（おおなか）　美佐子（みさこ）（享年３４歳）】
翔の実母。優しい母親で、翔たち子供３人には愛情を十分注いでいた。しかし、阪神淡路大震災により亡くなる。

【大中（おおなか）　一志（かずし）（享年１２歳）】
翔の実兄。阪神淡路大震災で翔をかばうようにして亡くなる。吹奏楽部でアルトサックスを吹いていた。現在、翔は彼のサックスを吹いている。

【大中（おおなか）　璃緒（りお）（享年１０歳）】
翔の実姉。阪神淡路大震災で翔をかばうようにして亡くなる。吹

奏楽部でオーボエを吹いていた。マイ楽器であったオーボエは佐野家の押入れにしまってあるが、翔はそのことを知らない。

【佐野（さの）　高志（たかし）（享年７０歳）】

翔の義理の祖父。５年前に脳卒中により亡くなっている。厳格な祖父であったが、翔は彼のことが大好きで、日曜日になるといつも梅田へ一緒に出かけていた。

＜小説に出てくる場所☆ミニデータ　その２＞

☆七海市クリエイトホール：民間団体が経営するホール。七海市中央ホールより規模は小さくなるものの、中央ホールが使えないときにはこちらを利用する団体も多い。

☆七海（なつみ）荘：翔たちが合宿を行った伊豆半島の旅館。若草　直幸一家が経営する旅館でもある。

☆光岡（みつおか）市：七海市の西隣に位置する市。人口約２０万人。市内中心部には「みつおかホール」があり、七海市周辺の中学・高校のアンサンブルコンテストが開催されている。

☆七海市救急医療センター：夜間・休日に急病が発生した場合に訪れることができる医療機関。薬局も併設しており、施設は十分整っている。

☆瀬戸楽器店：瀬戸　優輝一家が経営する楽器店。七海高校はこの楽器店と契約しており、消耗品などを割引で買うことができる。ちなみに、翔と陽乃の寄り道スポットにもなりつつある。

☆兵庫県西宮市：かつて大中一家と翔、佐野高志・冨美枝夫妻が住

んでいた兵庫県南東部の町。阪神淡路大震災で死者１０００名を越す被害を出したが、現在は西宮市を含め、ほぼ復興が進んでいる。

第２０１話　ほしい……

「んー、今日も終わった！」
翔はグーッと伸びをした。隣では陽乃が一所懸命楽器を磨いている。
「……。」
「どう？　もう終わりそう？」
「うん……」
「どないしてん」
「翔の楽器ってさ、買ったんだっけ？」
「……と思ってたけど、まぁ実際は兄ちゃんの楽器やったけどな」
「あ、そっか」
陽乃はシュンとした様子になった。
「どないしたん？」
「ちょっと……楽器ほしいなぁと思って」
「そうかぁ。うん、ほしくなる気持ちわかるけどな」
「水谷くんとサキティの楽器、マイ楽器でしょ」
「そうやったなぁ……」
「この楽器も愛着あるけどね！」
陽乃はそう言ってトランペットを抱きしめた。翔は微笑ましい目で陽乃を見つめていた。
「あー！」
陽乃が突然叫ぶので、翔はビクッと体を震わせた。
「なんやねん急に！　ビックリするやんけ」
「抱いた拍子に指紋ついちゃった……。せっか磨いたのに」
「ハハハ！　アーホー」
「どうせアホですよーうだ！」
陽乃はペロッと舌を出しながら顔を赤くした。
楽器を片付け、音楽室を出てから職員室に鍵を戻しに行く最中も

陽乃はずっと楽器の話をしていた。
「翔は、ご両親から楽器を買ってもらったときどんな感じだった？」
「だから、買ってもろたんちゃうって」
「あ、そっか。お兄さんの楽器だっけ。とにかく、楽器をもらったときはどんな感じだった？」
「そうやなぁ……」
翔は記憶を引っ張り出してきた。楽器を手にした瞬間、なんだか現実感がないようなフワフワした感じになったのを覚えている。
「すっごい、嬉しかった。一生、楽器続けたる。そう思った」
「そっか……」
陽乃は嬉しそうに話す翔を羨ましそうに見つめた。
「そんなに楽器ほしいん？」
「うん！　あたしも、翔みたいに一生続けたいって今はそう思ってるから」
「そっか……。大学でバイトして貯めて買うってのは、どうや？」
「そんな先かぁ……」
陽乃はため息を漏らした。
「気持ちはわかるけど、やっぱり楽器ってその人のクセとかがつくもんやねん」
「そうなの？」
「うん。せやからな、あの陽乃が吹いてるトランペットはいま、陽乃のクセがついてると思う。今の陽乃にとってはベストな楽器やねん」
「そっかー！」
「せやから、あの楽器で高校の間は頑張る。どう？」
「そうだね……。うん、そうする！」
陽乃が嬉しそうに笑うと、翔もニッコリ笑い返した。
「ほな、また明日な！」
「うん！　またね～」
陽乃は翔と別れた後、一人であのトランペットと出逢った日のこ

とを思い出していた。
翔の家で見た、銀色に輝くトランペット。翔はあの時、先生の許可をもらって楽器を持ち帰っていたのだという。すべてはいま考えれば、翔の策略か何かだったのだろうかと陽乃は思ったが、あの時、本当にトランペットは綺麗だった。
「新品はどんななんだろ～」
「なんだ、いま帰りか」
突然後ろから声がしたので陽乃は驚いて勢いよく声のしたほうを振り向いた。
「そんなに驚くことはないだろう」
「お父さん……」
祥夫だった。
「お父さんもいま帰り？」
「あぁ。今日は思ったより仕事が早く終わってな」
祥夫は陽乃の横に立ち、並んで歩き始めた。
「……。」
「……。」
会話がない。陽乃は練習や塾で、祥夫は残業ですれ違う日々が最近続いていて、まともに会話もしていないのでお互いに何を話せばいいのかわからなくなっていたのだ。
「楽器が」
急に祥夫が話し掛けてきた。
「ほしいのか？」
「……そうだな～。正確に言えばほしかった、かな」
「もういらないのか？　さっき、佐野くんと話をしてただろう」
「そうだな～。5分前まではほしかったけど、考え変わった」
陽乃は祥夫の数歩前を歩き始めた。スカートを翻し、祥夫のほうを向いて笑顔で言う。
「今はね、あたしを成長させてくれたあのトランペットが好きなんだ！」

「……そんなにか？」
「うん！　だからね、楽器は大学に入ってから自分でアルバイトしてお金貯めて買おうと思うの」
「ずっと続けるつもりか？」
「もちろん！」
陽乃は笑顔で即答した。
「そうか……」
祥夫は思わず笑顔になった。娘がこんなに成長しているとは思っていなかったからだ。確実に成長している。それも、吹奏楽を始めてからその様子は顕著になった。
「陽乃」
「なぁに～？」
振り向いた表情が、凛として見える。親バカかもしれなかったが、祥夫にはそう見えた。
「これからも頑張りなさい」
「それは勉強？」
陽乃が茶化すように言う。
「それもそうだが、吹奏楽もだ」
「……意外。お父さんがそんなこと言うの」
「お父さんが一番嫌いなのは、中途半端だからな」
「そんなのわかってるよ。だって、あたしのお父さんだもん」
陽乃は笑って祥夫の隣に帰って、それから手を繋いだ。
「帰ろう」
「そうだな」
陽乃と祥夫は目を合わせ、最近あったことを話しながら家へと向かっていった。

第２０１話　ほしい……（後書き）

♪お知らせ♪

さてさて……この『奏～ｋａｎａｄｅ～』もとうとう高校３年生編に突入です。そこで、高校３年生編突入を祝って（？）、登場人物人気投票なるものを開始したいと思います！

特にどの人物までというような範囲は設けません。翔や陽乃はもちろん、東先生、修平、綾音、由利など部員や家族、先生からはたまた風見台の生徒、矢崎菜緒たちわずかな登場人物でもＯＫですので、感想や評価と同時に『好きな人物×３名』、『どうも好きになれない（笑）人物×３名』を記名ください♪　あるいは、メッセージでお送りいただいても結構です（、∀、）

なお、唯一の注意点といたしましてはＧＴ．ｓｐｉｒａｌさん著作『ブラス魂♪（旧・みんなのＨａｒｍｏｎｙ　～夢と希望のアンサンブル～）』における登場人物である竹林泰徳くん、中井美奈さん、高橋美並さん、佐々木香織さんに関しましてはコラボ企画で登場していただいておりますので、投票の際には選択しないよう、よろしくお願いいたします！

仮に彼らに得票がありましても、ＧＴ．ｓｐｉｒａｌさんに彼らが投票対象になるとはお伝えしておらず、また同意もいただいておりませんので、無効とさせていただきます。

投票期間は５月８日（金）から７月末日までとさせていただきます♪　皆様の投票、お待ちしております！

以上です☆　よろしくお願いいたします！

第２０２話　現実的に考えて

「えー、それでは……明日のアンサンブルコンテストに同伴していただく保護者の方は、朝倉さん、佐野さん、水谷さん、逢沢さん、秦野さん、河内さん。以上です。よろしくお願いいたします」

恭一は６人の保護者にお辞儀をした。

「それから……次に、新役員の紹介に入りたいと思います。前保護者会長の岡崎さん、よろしくお願いいたします」

安和の母・純子が礼をして前へ立った。

「今回の新役員選出に当たりましては、皆さんご承知のとおり、葉書での推薦を元に選出された方々を、先月の１７日に開催しました保護者会で投票するという形式をとりました。前回、出席されなかった方は申し訳ありませんが、選挙権がないものとさせていただきました。それでは、結果を書いた紙を配布いたします」

そういうと、恭一と一緒に純子は紙を配布し始めた。

＜２００７年度　七海市立七海高等学校吹奏楽部　保護者会　役員表＞

役職名	保護者名	生徒名
会　長	佐野友美子	佐野　翔
副会長	三宅　英子	三宅　亮平
会　計	伊原　理美	伊原　光瑠
広　報	瀬戸　文子	瀬戸　優輝
	本堂　和実	本堂　拓真
事務局	橋本　明子	橋本　絵美
	松尾　八重	松尾　勇

「それでは、まず会長に選出されました、佐野くんのお母様、ご挨

拶のほうをお願いいたします」
友美子は緊張した面持ちで全員の前に立った。
「え～、今年度、七海高校吹奏楽部の会長に選出されました、佐野翔の母で佐野友美子と申します。中学でも保護者会の運営には携わったことがありますが、このように全体を取り仕切る役員は初めてとなります。至らない点もあるとは思いますが、精一杯がんばってまいりますので、皆様どうぞよろしくお願いいたします」
するとすぐに拍手が沸いた。友美子は恥ずかしそうにしながらも、もう一度お辞儀をするとソソクサと自分の席へと戻っていった。
「以上で、今年度の役員紹介を終わります。なお、ただいまより司会進行を事務局役員となりました橋本さん、ならびに松尾さんにお願いします。橋本さん、松尾さん、お願いします」
明子と八重が前へ立ち、司会進行を始める。
「それでは、本日は議題が3点あります。順番に話し合ってまいりますので、よろしくお願いします」
明子がそういうと、八重が黒板の前に立ち議題を3点書き始めた。

・保護者会費について
・支援金について
・定期演奏会について

「まず、保護者会費について話し合いを始めます」
保護者会費の徴収の目的は、部員たちの活動に当たって、アンサンブルコンテストやコンクール、マーチングコンテストのときに同伴する保護者の交通費支給、部員たちへの差し入れなどの購入、またこうした会合を開くにあたって必要になる文具費などをまかなうため、というものであった。
「保護者会費というものは、これまで徴収という形を取っておりませんでしたので、この詳しい内容説明は会計の伊原さんより、説明していただきます。伊原さん、お願いいたします」

同じ頃、音楽室では部員全員が集まって保護者同様、役職の発表が行われていた。ちなみに、選挙は先週の金曜日に行われていた。

「それでは、役職に選出された人の名前を書いた紙を配布します！　これは保護者会でも同じ形式にしてるんで、得票数とかは全然書いてません。僅差であっても、得票数の多い人を選出という形にしています。同数の場合は再選挙という形になりますが、今回は再選挙は不要になっています」

翔はパラパラと紙をめくりながら、順番に人数分を各列の先頭へと回していく。

「はい、全員紙は回りましたか？」

「はい！」

「じゃあ、どうぞ確認してください」

―――――――――――――――――――――――――――

＜２００７年度　七海市立七海高等学校吹奏楽部　役職表＞

役職名	氏　名
部　長	佐野　翔
副部長	朝倉　陽乃
	本堂　拓真
会　計	大谷　沙希
金管長	川崎　慎也
木管長	橋本　絵美

係　名	氏　名
楽　譜	宮部由美子
	瀬戸　優輝
	井上　佳菜
	松尾　勇
	秦野　恵梨

チケット　水谷　春樹
　　加藤　愛実
音　源　田中　美里
　　河内みゆき
ユニフォーム　永井　雪子
　　西嶋はるか
　　右川　順平
美　化　冨岡　洋之
　　中野さゆり
楽　器　小林　梨子
　　鈴木　麻綾
教室管理　久野　彩香
　　吉山　亜紀
運　搬　三宅　亮平
　　富士原　徹
演　出　日高　優
　　乃木あずさ
2年生代表　逢沢　駿
ドラムメジャー　野村健之佑
　　戸口　誠

（※4月からの学年を基準に考えています。）

「2年生以上は役職ないし係についてもらうという東先生の方針に基づき、役職は投票、係は立候補に基づき調整を行い、以上のように決定しました」

翔は淡々と話を進めていく。

「えー、役員および係について質問や異議のある方」
特に部員たちから反応はない。
「それでは、賛同してくれる人は拍手お願いします！」
すると、部員たちから一同に拍手が沸いた。翔は嬉しそうに笑い
「ありがとう！」と言った。
「では、議題に入ります。今回は４点、議題があります。ですが、明日が金管アンサンブルを控えているため、金管アンサンブルメンバーは席を外します。事前に話をしてあるので、投票等が必要なものに関しても既に投票してもろてるんで、気にしやんといてください」
部員たちは急に翔が関西弁を目立たせて話し出したので、少し違和感を覚えていた。
「じゃ、行っていいよ」
「ありがと！　じゃ、みんな行こう！」
陽乃の呼びかけにメンバー８人が抜けていく。全員が出たのを確認してから、翔は一つ目の議題に入った。
「えーっと……まずは、部費の話から行きます」
翔によると、今年から活動の幅を広げたいからということで、部費の値上げを検討しているということであった。現行の部費は月５００円。それを１０００円に引き上げるという。
「引き上げる理由は何ですか？」
梨子が真剣な表情で聞く。
「これは２つ目の議題にも絡んでくるんですが……実は今、２年生と先生の間で話してることがあって……」
翔はウーンと悩んだ素振りを見せる。
「言いにくいことですか？」
誠が不安そうに手を挙げて聞いた。
「いや！　そんなことあらへんけどな」
「あらへん？」
翔の関西弁に、みゆきと光瑠が首をかしげた。

「あ、ないってこと。ゴメンゴメン。急に関西弁丸出しにして」
「しかも濃いですね」
拓真と陽乃が席を外しているので補佐に立った駿が笑う。
「いろいろ事情があんねん。それより、その話してることの内容やんな」
翔は緊張しながらも話し始めた。
「実は、定期演奏会を開催したいと思ってます」
「定期演奏会!?」
洋之が大声を上げた。
「ホントですか!?」
はるかも目を輝かせて翔に聞く。
「うん！　でも、やっぱりホール借りたりしとったらお金いるやん？　せやから、開催するとなると部費も多少なりと上げんとアカンやん。保護者会でも、会費を集めるって話になってて……。でも、保護者会費だけやとアカンから、部費もちょっと上げることになりそうやねんけど……」
翔には心配なことがあった。それは春樹、優の二人のことであった。春樹は心配ないよ、というような表情をしていた。優のほうも了承を既にもらっていて、休部の間は部費の徴収はもちろんだが、行わない。しかし、部員たちの反応が一番、翔の心配しているところであった。「現実的に考えて、今のままの値段やと定期演奏会の開催なんてちょっと苦しいかなと……」
「でも、部費だけでまかなえるとは思えません」
亜紀がもっともな意見を言い出した。
「演奏会となると、ホールを借りるだけで十万単位のお金がいります。私たちだけじゃ、到底まかなえないですよね？」
「そうだよなぁ……」
優輝がため息を漏らした。
「そのあたりは、何か考えてるんですか？」
「それやけど」

翔が即答した。
「支援金を募ろうと思ってます」
保護者会でも同様の話題が進んでいた。
「支援金とはつまり、地域のお店や個人に協賛金を募るってことですよね？」
春樹の母、幸恵子が聞き返す。
「そうなります」
光瑠の母、理美は冷静に答えた。
「でも、このご時勢ちょっと厳しいんじゃ……」
駿の母、幸枝が心配そうに呟いた。
「確かにこのご時勢です。けれども……こんなことを言ったら理想論かもしれませんが、子供たちが一番、定期演奏会の開催を望んでます。保護者会としては、そんな子供たちを精一杯支援してやりたいんです。それは、地域のお店などでも同じことではないでしょうか。今時の若い子はやる気の少ない子が多いとか言われますけど、決してどの子供もそんなことはないと思います。その気持ちを理解していただけたら、きっと協賛金も募れますよ」
理美が笑顔で言う。
「確かにねぇ……。あたしたちの頃もそうだったわね。なんだか外見だけで『今時の子は……』っていう感じで見られてる気がして。そういうのを無くす意味でも、協賛金を募るのはいいことかも」
雪子の母、ひとみが妙に納得しながら自分の若き日を思い出しているようだった。
「子供たちだけじゃないでしょ？　回るのは。私たちも頑張らなきゃ」
彩香の母、美緒子（みおこ）が全員に問うように言った。
「そうですね！　ここはひとつ、頑張ってみますか」
由利が嬉しそうにうなずいた。
「それでは、定期演奏会ならびに支援金のほうも、承認していただ

けますでしょうか？」
友美子がもう一度聞くと、全員の手が挙がった。

音楽室でも部員たちは全員、定期演奏会ならびに支援金のほうを了承していた。４つ目の議題、今回の兵庫県西宮市の遠征に関する話で、特に承認が必要なものはなく、事務的な説明で終わった。
「えっと、ほな、５つ目やねんけど……」
翔は苦笑いしながら廊下を見つめた。
「どうしたんですか？」
さゆりが目を丸くして聞いた。
「いや……実は、尋常ならざる状況にありまして」
「なんですか？」
「……と、とりあえず、どうぞ」
「……？」
翔の呼びかけに応じて入ってきた少年の姿を見て、全員が凍りついたように固まった。

第２０３話　一目惚れ

１週間前の１月６日（土）。ちょうど今日から新年明けてから初めての練習となった。

「じゃあもう５時だし……暗くなってきたからこの辺で練習終わろうか」

慎也が腕時計を見てそう呟いた。

「え？　もう終わるの？」

陽乃が不服そうだ。雪子も「あとちょっとだけ！」と言ったが、慎也はバテると何もならないからといって練習をストップした。

思いのほか早く練習が終わった感じが拭えない拓真は、全員が音楽室に戻って楽器を磨くのを知っていたので「俺はここで磨く」と言って教室に残った。慎也たちが音楽室に戻り、扉を閉めたのを確認してから拓真は楽器を横えなおした。音楽室と廊下を繋ぐ扉は防音対策が施されていて、外から聞こえる少々の音は音楽室内には聞こえない。拓真はそれを知っているので、あまり大きな音ではないが練習を再開した。

ロングトーンをしていると、誰かに見られている気がしたので拓真は吹くのをやめた。すると、視線も感じなくなる。

「……気のせいか？」

しかし、拓真がロングトーンを再開するとなぜか視線を感じる。

「……？」

拓真は楽器を置いてドアを開けて廊下を見渡してみた。特に誰もいないようだ。慎也が怒りに来たのかと思ったが、そういうわけでもなさそうである。

「気にしすぎか」

拓真が振り返ると、後ろのドアがガタッと音を立てた。

「やっぱ誰かいるのか？」

拓真はそっとドアを開けた。すると、１年生の黄色のネクタイ（

七海高校では各学年にカラーがあるネクタイを締めている。ちなみに、拓真の学年は青色）を締めた男子生徒がうずくまっていた。
「だ、大丈夫？」
「あ、はい！」
「こんなとこで何やってんの？」
「あ、あの……」
男子生徒は少し緊張していたようだが、大声でこう言った。
「俺、この楽器やってみたいんです！」
「……チューバを？」
「はい！　文化祭で先輩が吹いてるの見てて、一目惚れしました！」
「チューバに！？」
「はい！」
拓真はしばらく呆然としていたが、すぐに彼の手を引いて椅子に座らせた。
「吹いてみなよ」
「いいんですか！？」
「うん！」
「ありがとうございます！」
男子生徒は嬉しそうに笑って椅子に座り、楽器を構えた。
「構え方知ってるの？」
「先輩のを見て、見よう見まねで……」
彼は恥ずかしそうにそう言った。そこまで好きなのか、と拓真も衝撃を受けた。
「嬉しいなぁ。そこまで夢中になってくれるなんて。なぁ、君の名前は？」
「えっと……1年H組の大岩（おおいわ）　智志（さとし）です」
「大岩くん……」
大岩　智志。彼は1年生のみならず、全学年が知る不良生徒だった。あの天然娘、由美子ですら彼の素行の悪さには怯えるところが

あるという。
「ねぇ、なんであんな子がここにいるの？」
由美子が不安そうに絵美に聞く。
「そんなの私に聞かないでよ。私だってわかんないんだから」
二人の話が耳に入ったのか、智志が鋭い眼光で二人を睨むように見つめた。
「……！」
由美子と絵美が不自然な笑顔になる。
「えーと……1年H組の大岩　智志くん。チューバ志望で入部を前向きに検討してくれています」
翔も雰囲気を察知してか、少し困った様子のトーンで話しているのがわかった。拓真が練習で席を外しているいま、智志にとっては少し居心地の悪い状況になっていた。
「なぁ」
亮平が手を挙げた。
「なんで吹奏楽なわけ？」
「え？」
「なんで、吹奏楽（ウチ）を選んだわけ？」
「えっと……それは……」
智志は自然と俯いたままになっていた。翔がトントン、と智志の肩を叩く。
「素直な気持ちぶつけたらええねんから」
「はい……」
智志は前を向いてポケットから何かを取り出した。
「あ……それ……」
愛実が驚いた声を上げた。無理もない。目の前に銀色に輝く物体――マウスピースが現れたのだから。
「買ったの！？」
彩香が続けて声を上げる。智志は小さくうなずいた。
「みんな……俺のこと不良だって思ってると思う。うん。わかる。

さっき、先輩の顔とか見てたらビビッてたもん。でも、俺、本堂先輩の演奏聴いてて、吹奏楽部のみんなの演奏してるときの楽しそうな顔見て、俺もあの中に入りたい。素直に、そう思ったんだ」

徹や健之佑がまだ不安そうにジッと智志の顔を見ている。

「信用してもらえるとは思ってない」

智志がハッキリと言い切ったので、全員が目を丸くした。智志は語気を強めて続ける。

「俺、そう思って自分に課題を課しました」

目の前で人差し指をかざす。

「1ヶ月」

智志はハッキリと言った。

「1ヶ月。演奏面と運営面で俺が少しでも役に立たなかったら、1ヵ月後に佐野さんに部会を開いてもらって、俺がこの部に相応しいかそうでないかを皆に判断してほしい。そう思ってる」

「……。」

「だから……ひとまず1ヶ月、よろしくお願いします！」

智志が深々とお辞儀をする。

「オレからも、頼むわ」

翔が続くようにお辞儀をした。

「……1ヶ月ね」

沙希がうなずいた。

「わかった。そこまでして吹奏楽にこだわる大岩くんなんだから、みんなとりあえず結果を待つことにしない？」

「先輩……」

佳菜は幾分不安そうであったが、こうなると沙希は譲らないだろうと翔は思った。

「どうやろ？」

翔が全員に聞く。しかし、答えが返ってこない。

「じゃあ、多数決」

翔は真剣な顔でハッキリと言った。

「今すぐ、大岩くんに出て行ってほしい人」
全員の心臓がドキッと脈打ったように見えた。
「……おらん？」
翔は嬉しそうに笑い、質問をさらにぶつけた。
「1ヶ月間、様子を見るの、賛成の人」
すぐに手を挙げたのは、駿だった。それから続くように亮平、愛実、春樹のバスパート。やがて、全員の手が挙がっていった。
「……よし！」
翔は智志に手を差し出した。
「1ヶ月。厳しいかもしれんけど、頑張ってみぃ」
「……はい！」
智志は安心したように笑い、マウスピースを嬉しそうに見つめながら「ありがとうございます！」と笑顔で全員に礼を言った。
果たして、智志は正式に部へと迎え入れられるのだろうか。

第２０４話　やさしさ

「もっとこう、おなかを膨らませる感じで……」
拓真はギュッと智志の腹を抱える。
「こうですか？」
「あ、そうそう。それでそのまま俺の手を跳ね返すつもりで……あ、そうそう！」
「あぁ～、なんとなくわかります！」
拓真と智志は楽しそうに腹式呼吸の練習をしているのだが、智志と同学年の愛実と亮平は不安そうな面持ちが隠せないでいる。春樹はそれが智志に伝わらないようにコッソリと「そんな不安そうな顔してちゃダメじゃん」と呟いた。
「そうは言っても……ねぇ」
愛実が苦笑いする。
「まぁ……大岩くんの場合、根も葉もない噂っていう話もありますけど、やっぱ不安ですよ」
亮平も苦笑いしながら智志のほうを見た。春樹も確かに、パッと見た智志の姿に不安を覚えずにはいられなかった。拓真より少し小さいくらいの体だが、ガッシリしている。拓真に促されて取ったばかりの跡が残っている、耳のピアスの穴。薄めではあるが茶色に染まった髪。あれはメッシュだろうか、前髪の一部がオシャレな金色に近い色に染まっている。
「とにかく、拓あんは真面目だから、きっと大岩くんをなんとかしてくれるよ。練習再開しよう」
「はい」
今はアンサンブルメンバーの練習が休憩中なので、拓真は智志に早速指導を始めていた。亮平、愛実、春樹がロングトーンを始めようとしたとき、急に入口が開いた。
「稲岡（いなおか）……」

それは智志とよくつるんでいたという稲岡（いなおか）　啓二（けいじ）だった。
「何やってんの、お前」
冷めた目で見つめる
「何って……部活」
「はぁ？　お前さぁ」
急に入り込んできた啓二はグイッと智志の胸倉をつかんだ。
「何急にいい子ちゃんぶってんの？」
「そんなんじゃねぇよ」
「じゃあどういうツモリ？」
愛実や春樹は思わず動きを止めた。亮平も嫌な雰囲気を察知したようで、こっそりと部屋を出て翔を呼びに行ったようであった。
「どういうつもりって、部活するんだ俺」
「意味わかんねぇこと言ってんじゃねぇよ！」
どこにキレる内容があったのか拓真たちにはサッパリわからなかったが、見事に智志は体を突き飛ばされていた。
「痛（い）ってぇなぁ！」
急に声を荒げる智志に愛実が驚いて春樹の後ろに隠れる。拓真も慌てて立ち上がって智志と啓二の間に割って入った。
「やめろよ、こんなトコでケンカなんか。何が原因かわかんないけど、とにかく二人とも落ち着いてさ……」
「うるせぇ！　部外者が口出してくんじゃねぇよ！」
次の瞬間、啓二の拳が拓真のアゴを直撃していた。そのまま拓真は尻餅をつく格好で床に崩れ落ちた。
「拓あん！」
「本堂先輩！」
「本堂さん！」
春樹、愛実、智志の3人が慌てて拓真の元へ駆け寄る。拓真は唇を切ったようで、少しではあるが出血していた。
「明日……本番なのに」
愛実が愕然とした様子でティッシュを取り出した。拓真の唇から

出る血を拭き取りながら、愛実が残念そうに呟く。
「どう？　痛む？」
「平気だよこれくらい」
春樹の問いかけに拓真は努めて明るく答えた。しかし、徐々に腫れ上がる唇に智志も事の重大さを知ったようだった。心配そうに拓真の唇を見やって、すぐに智志は啓二を睨みつけた。
「ふざっけんなテメェ！」
「んだよ、やる気かぁ！？　かかってこいよ！」
智志がもう少しで啓二に殴りかかりそうになった瞬間、拓真が止めに入った。
「やめろって！」
「本堂さん……」
「お前さ、頑張るってさっき全員の前で約束したんだろ？　なのに、ソッコーでその約束破る気？」
「……。」
「別に俺はいいよ。破られたって。たださ、ここは部活なんだ。お前らが今までみたいに勝手につるんで勝手にケンカするのはお前らの自由だけど、ここは集団行動が必要な部活なんだ。勝手なこと、されたら困る」
「……。」
智志は何も言い返せなくなってしまったようで、俯いてしまった。
「稲岡くんだっけ？」
拓真の威圧感に少しばかり恐怖を感じたらしい啓二はおそるおそる拓真を見上げた。
「これ以上邪魔する気なら、大岩外連れ出してやってくんない？」
「……チッ！」
啓二は舌打ちをしてそのまま部屋を出て行った。出るとき、思い切り壁を蹴飛ばしたので大きな音がした。愛実と春樹は目をつぶっている。
「大岩くん」

拓真が冷静な声で智志を呼んだ。
「……俺、俺……」
「座ろ」
「え？」
「練習の続き。早くしようぜ」
拓真はニコッと笑って智志をもといた席に座らせた。
「で、でも俺……」
「はいはい。言い分はいくらでも後で聞いてあげるから」
半ば強引に智志を座らせた後、愛実、春樹、亮平、そして亮平に呼ばれた翔に静かに言った。
「今までのやり取りは内緒で。あと、俺の怪我はつまずいて転んだってことにしといて」
「で、でも……お前、ホンマに大丈夫なんか？」
「平気だよこれくらい。一日で治してやる。ほら、大岩くん、練習の続き」
「はい……」
智志は声を震わせながら再び、腹式呼吸の練習を始めた。

「ありがとうございました」
練習を終えた智志は幾分元気になったようで、拓真たちに手を振りながら帰っていった。
「なぁ、拓あん」
翔が拓真に聞く。
「何？」
「なんで、あそこまで優しくできるんだ？」
「……さぁね」
拓真は意味深な笑みを浮かべて翔の前を歩き出した。
「なんやねん、気になるわぁ～」
「そのうち教えるよ。まだ内緒」
「お前、意外と秘密主義やねんな」

「まぁね」
拓真はクックッと笑いながら、音楽室へと向かって翔と並んで歩いていった。

第２０５話　横浜行きに揺られて

「……。」

翌日、七海高等学校吹奏楽部のメンバーはアンサンブルコンテスト県大会に出場あるいは応援のために早朝にもかかわらず、電車に揺られていた。県大会の会場は横浜市にある。部員たちは小田急電鉄を使って移動していた。

「次は、横浜～、横浜です」

ワイワイと朝から楽しそうにする部員たちをよそに、智志は緊張した面持ちで座っていた。智志を挟むようにして右には拓真と亮平、左には愛実と春樹が座っていた。

「本堂さん……」

「何？」

「昨日のケンカ……のせいでした怪我、大丈夫ッスか？」

「あぁ～、平気だよこれくらい。今朝も楽器吹いたけど、全然痛くないから」

「良かった……」

智志はホッとした笑顔を見せた。

「ねぇ、大岩くん……」

愛実が勇気を出しているという雰囲気丸出しの声で智志を呼んだ。

「なに？」

「メッシュと金髪……やめたの？」

「あー、うん。母親が部活するなら今すぐ真っ黒にしろっていうからさ。昨日染めてもらった」

そう言って笑う智志の髪はかえって不自然なほど、真っ黒になっていた。

「なんだか見慣れないから、気持ち悪いだろ？」

「そんなことないよ！」

「アハハ！　加藤って意外とおもしろいんだな」

智志は本当に面白そうに笑う。
「私も意外～」
「何が？」
「大岩くんってもっと怖いイメージあった」
「あー、よく言われるけど。俺、単なる強がりだから」
「でもさ、稲岡と仲良いんじゃなかったっけ？」
亮平がまだ警戒心を持った感じの声で智志に聞いた。智志はそういうことにすぐ気づくようで「三宅、まだ俺のこと信用できない？」と率直に聞いてきた。
「いやっ……んなことねぇけど……うん」
「そっか。なら良かった」
「ねぇねぇ」
今度は春樹が聞く。
「大岩くん、拓あんに負けないくらい体格いいね」
「あ、中学では水泳やってたんで」
「ってことは、肺活量すげぇんじゃないの？」
拓真もこれには驚いたようだ。
「いや！　そうでもないッスよ。普通くらいかな」
「またまた～。そんなこと言うヤツほどとんでもないコト多いからな」
拓真と春樹がケラケラとおかしそうに笑う。愛実と亮平、智志も釣られて笑った。思う存分笑った後、智志が少し寂しそうな顔をして言った。
「あ～……こんなに笑ったの、久しぶりだな」
「そうなの？」
「うん。俺と稲岡って、いっつも二人で釣るんで周りにビビられてさ。自分でもやっちゃいけないってわかってんのに、タバコ吸ったり酒飲んだりして。授業も平気でサボッてたし……」
ワイワイと楽しそうにする部員たちの姿が智志の目に映った。まるで子供のように風景を見て楽しむ佳菜と由美子。網棚の上に乗っ

ていたスポーツ新聞のちょっとエッチな内容に大騒ぎしている順平と徹を叱る雪子。うたた寝をしているはるかと麻綾。
「こんなに楽しい生活、ホント初めてですよ」
智志が言うからだろうか、意味深な発言だった。
「なぁ」
拓真が隣の車両を見ながら智志の肩を叩いた。
「あれ……稲岡ってヤツじゃ？」
「え！？」
智志、亮平、愛実、春樹、拓真の視線が一斉に啓二に注がれた。
「ケイ！」
思わず智志は叫んでしまった。名前を呼ばれたことで驚いた啓二も急に走り始めたのだ。
「おい、待てよケイ！」
智志が走り出した。部員たちは何事かと目を丸くする。呼びかける保護者の声も聞かずにバスパート全員が走り出していた。
「待てよ、啓二！」
「待てるかよ！　今さらどんな顔してお前に会えるってんだ」
「フツーの顔を……」
智志が強引に啓二の襟首をつかんで引き止めた。
「して会えばいいんだよ！」
ゼェゼェと息を荒くして床に座り込む啓二と智志。やがて拓真、亮平、春樹、愛実の順で彼らを追いかけてきたバスパートメンバーが追いついた。
「お前ら走るの速いなぁ……」
拓真が笑いながら肩で息をする。
「ホントだよ。本堂先輩、今から本番なのにこんなに疲れさせちゃって」
亮平も苦笑いしながら息を整えようとする。ゲホゲホとむせ返る愛実の背中を春樹は摩っていた。
「それよりさ、稲岡くんだっけ？　なんでこんなとこにいるわけ？」

「別に……たまたま？」
「そんなわけねぇだろバーカ」
智志が啓二の頬をつねった。
「痛ってーな、バァカ！」
「バカはどっちだよ、バァカ！」
「バーカ！」
「バーカ！」
「……クスッ」
愛実が笑い始めた。
「何がおもしろいんだよ！？」
啓二がすごんだ目で睨みつけるが、愛実の笑いはもう止まらなかった。
「だって……二人とも息ピッタリじゃん」
「え？」
二人は声をそろえて向かい合った。
「確かに。息ピッタリって感じ」
春樹もウンウンとうなずく。
「ホントにな」
亮平も納得した。
「やっぱ、なんだかんだで仲いいんじゃん、二人は」
拓真が嬉しそうに笑った。それから、啓二と智志の手をつかんで二人に握手をさせた。
「はい、仲直りだ」
「……。」
照れ隠しなのかまだ怒っているのか、智志はすぐに手を放し顔を背けた。
「……ゴメン、昨日は」
そう言ったのは啓二だった。
「俺のほうこそ……なんか……」
「……お前がさぁ」

啓二は寂しそうな顔をして話し始めた。横浜駅到着まであと少しだ。
「急に部活するとか言うから、俺、置いてきぼりになるんじゃないかって……不安になっちゃって。それにお前が俺と一緒にいるときより楽しそうにしてるから、なんかイライラして……。ゴメンな」
「……いいよ」
智志が笑う。
「俺も、啓二の気持ち無視して……ゴメン」
「仲直りだね」
愛実が優しく笑った。
「どうする？　稲岡くんもついでだし、アンサンブル聴いていかない？」
春樹が手を叩いてさも名案！とでも言いたそうに5人を見つめた。
「いいかもしれないですね」
智志がすぐに賛成した。
「で、でも俺恥ずかしくて顔出せない！」
「こんだけ出しといて今さら何言ってんの」
亮平が見事なツッコミを入れた。
「あ……それもそっか」
バスパート全員が一斉に笑い出した。
「あの～」
翔の声に驚いて全員が今度は翔と慎也のほうに目を向けた。
「楽しそうにしてるとこ悪いねんけど、横浜着いたで？」
「え……うわぁ！　やべぇ、みんな荷物取りに戻ろう！」
拓真たちが大慌てで走るのを、啓二と智志が追いかける。
「なぁ」
智志が啓二に声を掛けた。
「なんだよ」
「お前も何か頑張れるもの、見つかるといいな！」
「……おう！」

智志と啓二も「おーい！　早くしてぇ！」という陽乃の声に走るスピードを上げた。

本番まで、あと４時間半。

第２０６話　上がったレベル

「さっきから聴いてて思うんだけど」
美里が静かに翔へこう言った。
「レベル、高いよね」
「そりゃあまぁな……県大会やもん」
翔もフゥッとため息を漏らした。今日は地区大会などではなく、立派な県大会なのだ。地区予選とはいえ、それを突破してきた強豪校が揃い始めているのである。美里たちのような吹奏楽経験が２年程度の生徒にすら、そのレベルの高さを感じ取れるほどの演奏が続いていた。
「陽ちゃんとか引いてなかったらいいけど……」
「どうやろなぁ～。アイツ、気ぃ強そうに見えて意外とアカンとこあるしなぁ」
「ねぇ……」
美里と翔は１年生のときに出演した七海市吹奏楽連盟での過呼吸のトラブルを思い返していた。緊張（あの時は緊張だけではなかったのだろうけれども）によって過呼吸を起こし、春樹や美里、慎也、雪子に翔は動揺を隠せなかった。
「そろそろ、出てくる頃ちゃうやろか」
プログラムは２０番目。切りのいい数字で、出番も午後の部３番目であった。
「今のがプログラム１８番だから、次の次ね」
「大丈夫かなぁ……」
「まぁ、皆を信じてあげようよ」
「うん……」
翔はそろそろ移動してきているであろう舞台裏のほうを見つめた。もちろん、陽乃たちの姿など見えるはずもないのだが、自然と目が行ってしまう。

その頃、陽乃たちは思いのほかリラックスした様子であった。
「へぇ〜……このシャンパン、こんな風になってたんだ」
彩香が楽しそうに勇が鳴らす予定のシャンパンを模した瓶を覗き込んだ。
「シャンパン？　シャンペンって言うんじゃないの？」
雪子が不思議そうに聞き返す。
「う〜ん……そういう言い方もありますけど、やっぱり一般的にはシャンパンですよ先輩」
「へぇ〜！　知らなかったなぁ」
まったく持って緊張感が感じられず、偶然ではあるが後ろで控えている風見台高校の数人のメンバーは若干冷めた目で見ていた。
「なんですか、あの人たち。全然緊張感がないじゃないですか！」
不満そうに口を尖らせたのは、バリトンサックスの古川（ふるかわ）　浩一（こういち）であった。
「そうですよ。あの人たち、リハーサル室でもなんかユルユルで緊張感なんてゼロ。嫌になっちゃいます」
同じように1年生の榎本（えのもと）　エリカがブツブツ文句を言っている。
「まぁまぁ。そないにブゥブゥ言わんといたってくれ」
そう言って後ろからなだめてきたのは修平だった。
「先輩！　あんな人たちの肩を持つんですか？」
「しゃあないやん。オレの友達の友達やねんもん」
「え……す、すいません何か」
それを聞いたエリカが申し訳なさそうに口をつぐんだ。
「別にいいよ。それより、あの子たちの演奏、聴いたことある？」
「全然ないんですよ、それが」
浩一が小さく首を振った。
「タイミングが合わなくて」
「そっか。なら、今日うまいこと聴けるやん。まぁいっぺん聴いたって」
「まぁ……先輩がそこまで言うなら」

エリカがそう言うと、修平は嬉しそうに笑った。
「どうぞ、入ってください」
大会役員の指示に従って、陽乃たちはいよいよ舞台へと上がった。
「来た！」
最初に入ってきたのは、拓真。後ろに雪子、徹、亜紀、慎也、勇、彩香、陽乃の順で続く。
「緊張してそう？」
沙希が後ろから翔に聞いた。
「暗くてよくわからへん」
まだ照明が点いていないので、陽乃たちの顔がよく見えないのだ。
「プログラム２０番、川崎地区代表、七海市立七海高等学校　金管８重奏。リチャーズ作曲『高貴なるぶどう酒を讃えて』より」
アナウンスが終わると、照明が点いた。
「点いた……」
翔は拓真のほうから順番にメンバーを見るが、緊張しているようには見えない。陽乃が楽器を構えると同時に全員が同じく楽器を構える。そして、一発目の音が飛び出した。細かい動きではあるが、しっかりと揃っていて安定している。ベルトーンも拓真の音をキッカケに何ら問題なく通過した。
「おぉ～……」
浩一が思わず声を上げたのは、拓真のハイツェーからの降下系の音だった。実に鮮やかに、チューバとは思えないスムーズな動き。
「ロータリーでもあんな動きできるんですね」
「そりゃあな。練習次第やろ」
修平はニッと笑って答える。やがてチューバとホルンのメロディが始まった。そこからしばらくすると、拓真のソロだ。
「は～……アイツ、いつの間にあんなになってん」
翔は拓真の急成長ぶりに驚いていた。余裕でメロディを吹く拓真には、もう初心者という言葉は似合わない。それはもちろん、雪子や陽乃にも言えることであった。勇のフリューゲルホルンを通過し、

いよいよ三拍子のところへ入る。ここでは彩香の7連符が不自然な感じがしてしまい、地区大会の講評でも指摘されていた。7連符など正直翔もうまく吹ける自信がない。

「おっ」

翔が思わず言葉を発してしまうほど、彩香の7連符は流れるような雰囲気で響いたのだ。

「だいぶ練習してんなぁ……」

やがてファンファーレに差し掛かり、いよいよ勇の見せ場がやって来た。

「来た来た」

にわかにざわつく七海高校のメンバーたち。ところが、ここで予想外のことが起きた。勇がコルクを開けた瞬間、紐で繋がっているはずのコルクが吹き飛んでしまったのだ。

勇も陽乃も、雪子も慎也もこれには目を丸くしたが、あれほど緊張で固まっていた客席が笑い声に包まれた。

勇はそのまま回収できるはずもなく、曲はそのまま見事に終わりを告げた。そして、全員が立ち上がると同時に拍手が沸き起こった。

「ブラヴォー！」

どこのオジサンかわからないが、そんな声が聞こえてきたことに陽乃は感動を少し覚えていた。

「お父さん、よしなよ」

ブラヴォーの犯人が実は祥夫であることなど、陽乃は知るヨシもないのだが。陽乃たちは退場し、そのままロビーへと向かった。

第２０７話　乾杯！

「かんぱーい！」

小田急七海駅に到着して解散後、金管アンサンブルメンバーは改札口前の自販機で購入した各々好きな飲み物を口にしていた。

結局、七海高等学校吹奏楽部・金管八重奏は金賞を受賞できたが惜しくも支部大会出場のチャンスは逃してしまった。しかし、これまで出場した大会の中では最高の賞を受賞することができ、陽乃たちには少しも後悔のような感情というものはなかった。

「でもさぁ、まさかコルクが飛んでいくなんて思わなかったよね～」

陽乃がおかしそうに勇のほうを見て笑う。勇は少し顔を赤くしながら「俺、最初なんでみんなが笑ってるのかわかりませんでしたもん」と言い、頬をかいた。

「あれで俺は緊張吹っ飛んだけどな」

拓真も笑う。

「え？　あの時まだ緊張してたの？」

「そうなんだなぁ。俺、意外とそういうの長時間続くタイプなんだ」

「背ぇデカいからそんな風に見えないけどね～」

雪子がクスクス笑うと、拓真は「身長と度胸は関係ないだろ！」と勇より顔を赤くした。

「あれ？　アルコール入ってるの飲んでるんじゃないか？」

慎也のツッコミに勇と拓真が同時に「そんなわけない！」とツッコミ返した。

「これで金管アンサンブル組……解散ですね～」

彩香が切なそうに呟く。

「そんな寂しいこと言わないでよ～！　まだこれからずーっと一緒にいる仲なのに」

陽乃は明るく彩香を励ました。

「そ、そうですよね！　すいません、なんかちょっと寂しげな演出

してみたかったんです」
「なんだそりゃ」
徹が笑い出すと、全員が釣られるように笑い出した。
「さってと。そんじゃもう9時過ぎたし、そろそろ帰るか」
拓真がそう切り出した。誰もが言おうとしてたことだったけれども、なんとなく惜しい感じがして誰もが言い出せないでいた。
「そうだね」
「明日は休みだっけ？」
慎也が珍しくボケてみせた。
「バァカ！　学年末テストの1週間前だろ！」
「わぁお、珍しいな拓あんがツッコミ入れるって」
「うるせぇよ」
慎也と拓真はケラケラと笑いながら、自然な感じで輪を抜け出した。
「じゃ、また明日！」
「気をつけてな～！」
「明日からロングトーンだけだからねぇ！」
陽乃は最後にもう一度二人にそう伝えた。
「おう！　じゃーな」
拓真と慎也は自転車置き場へ向かい、たまに大声で笑いながら帰っていった。
「それじゃ、あたしたちも失礼します」
彩香と亜紀が礼をして、拓真たちとは別の自転車置き場へと向かい始めた。
「うん！　またね、二人とも」
「お疲れ様でした」
「ばいばい」
雪子も二人に小さく手を振る。
「さようなら～！」
二人は元気いっぱい手を振りながら歩き、しばらくしてその姿が

見えなくなった。
「んじゃ、俺たちも」
「そうだな。先輩たちも、気をつけて帰ってくださいね」
「うん！　ありがと。じゃあね」
「お疲れ様ッス」
順平と徹、勇は徒歩で来たらしく、交差点を越えてゆっくりと帰っていく。
「じゃあ、あたしたちも帰ろうか、雪ちゃん」
「うん」
陽乃と雪子は拓真たちが自転車を止めている駐輪場の横を歩きながら、ゆっくりと家へ向かっていく。
「ねぇ」
陽乃が不意に雪子へ聞いた。
「なぁに？」
「雪ちゃん……さぁ」
「うん」
「何か、大事なこと隠してない？」
「……なんでそう思うの？」
「なんでって……」
陽乃は答えに詰まった。雪子は笑いながら「何も隠してないよ」と答えてくれた。しかし、陽乃はまだ納得がいかないようだ。
「ねぇ」
陽乃は雪子の腕をつかんだ。
「どうしたの、陽ちゃん。なんか今日、不思議な感じ」
「……本当に何も隠してない？」
「うん」
即答だった。そう言われると、陽乃もそれ以上の追及はできなかった。
「それじゃ、また明日ね」
「うん！　またね、雪ちゃん」

「ばいばい」
「バイバイ！」
雪子は笑顔で帰路に着く陽乃の背中を見送り、フゥッと小さくため息を漏らした。
「危なかった～……。陽ちゃん、結構鋭いところあるからなぁ」
雪子はようやく安堵の息を漏らし、しばらく陽乃の去ったほうを見つめた。しばらくしてからスカートを翻し、雪子も帰路へと着いた。
「まだ言っちゃいけないって言われたし……。もうちょっと後かな」
雪子はブツブツと独り言を言いながら公園の横を歩き、交差点を右折して家へと向かう。家の前で偶然にも、融が前から歩いてきた。
「お父さん。お帰りなさい」
「いま帰りか」
「うん」
「スマンなぁ、今日はコンクール行けなくて」
「いいの！　結果は金賞もらえたけど、上位の大会は出れなかったよぉ」
雪子は本当に残念そうにため息を漏らした。
「そうかぁ。惜しかったんだな」
「うん」
沈黙が続く。
「それで、言ったのか？」
「ううん。だって、まだ先じゃない」
雪子は首を振った。
「それでも、なるべく早いほうがいいと思う。雪子には本当に申し訳ないが……」
「いいの。きっとみんな理解してくれるって……私は思ってるから」
「そうか……」
再び沈黙。
「家、入ろうか」

「うん！」
雪子は融と手を繋ぎながら、家へと入っていった。

第２０８話　一路、兵庫へ

「本日も新幹線をご利用いただきまして、誠にありがとうございます」

１月１７日（水）。七海高等学校吹奏楽部員は公認欠席を取得して新幹線に乗り、目的地へ向かっていた。目的は、他でもない。慰霊祭だ。

「……。」

翔は楽しそうにしている部員たちとは違って、複雑な表情をしていた。陽乃は隣でただ、翔を横目で見るしかなかった。

「まもなく、新大阪、新大阪です」

車内アナウンスが掛かり、部員たちは各々降りる準備をする。

「やっぱさぁ、ソフトケースって楽だよな」

拓真が嬉しそうに新品のソフトケースに頬を当てた。

「本当に嬉しそうだね～。俺もほしかったよ」

春樹が羨ましそうな声を上げた。新幹線が停車してから、部員たちは双方に散ってホームへ降り立つ。新幹線の改札を抜け、在来線のホームへ降り立った。

「見覚えある？」

陽乃が翔に声をかける。

「うん。そりゃあな。中３まで住んでた大阪やで」

「懐かしい？」

「そりゃもう」

翔の顔がようやく嬉しそうな顔になった。陽乃もホッとしたものの、かつて家族で住んでいた被災地に立ったとき、翔がどのような顔になるのか。それを考えると完全に陽乃の不安は拭いきれなかった。

「本日もＪＲ西日本をご利用いただきまして、ありがとうございます。この列車は、各駅停車、西明石行きです……」

「すっごい新鮮な感じがするね！」
雪子と沙希が物珍しそうに電車を見回す。
「けっこう騒がしいな、大阪の電車の中って」
慎也と駿が少々東京との違った様子に戸惑いを覚えているようであった。
「おーい、大阪駅で降りるぞ」
恭一が声をかけると、また部員たちは楽器を手にした。大阪駅に降り立つと、オレンジ色の電車や三色の帯をした電車が見える。
「新快速？」
由美子が不思議そうな声を上げた。
「あ、新快速って東京のほうにはないんか」
翔がふと気づいたように言った。沙希が小さくうなずく。
「新快速は……東京で言う特別快速みたいな感じかな」
「特急とは違うんだ～。文化の差だねぇ」
「そんな大げさなもんちゃうやろ～」
部員たちはゾロゾロと連れ立って歩いていく。
「阪急電鉄に乗り換えるぞ～」
「うわ、何あれ！？」
絵美が素っ頓狂な声を上げた。
「全部同じ色した電車だ」
「あ～、阪急やもんな」
「おなか空いた」
突然、美里が呟いた。
「なんでやねん」
「あんこ色しておいしそうなんだもん」
「あぁ……ま、まぁな」
「おーい、食い意地張らしてないで早く来いよ！」
恭一に呼ばれて少し遅れ気味だった翔と美里は慌てて車内に駆け込む。
「特急かぁ」

停車駅は十三、西宮北口、そして目的地である夙川駅である。そこから甲陽園線に乗り換え、仁川駅で降りるのだ。

「じゅうさん？　おかしな名前～」

光瑠が優輝とケラケラ笑う。

「ちゃうちゃう。十三」

「え？　難しい読み方するんですね～」

優輝が驚いた声を上げる。

「大阪と東京ってずいぶん違うんですね～」

「まぁな。オレ、やっぱ大阪好きやわぁ」

翔はシミジミとした様子で呟いた。いわば、故郷へ帰るようなものなのだ。十三駅を過ぎ、川を渡っていくつもの駅を通り過ぎ、西宮北口駅に到着した。

「昔なぁ、ここに球場あってんで」

翔が懐かしそうに陽乃にそう言った。

「今はもうないけどなぁ……。６月には３０００人の吹奏楽っていうの、ここでやっててんけど」

「３０００人？　スゴいね！　そんなのあるんだ」

「うん。オレも出たことあるで。中学のとき」

「３０００人かぁ……。あたしも出てみたかったな」

「ホンマにな。オレも、出たかった。お前と」

「……バーカ！」

陽乃がバシッと翔の背中を叩いた。

「痛いやんけ！　この怪力女！」

騒いでいると、絵美が「ちょっと、静かに！」と言ってきた。

「心配すな。大阪の電車はなぁ、少々喋ってても賑やかやからわからへんねん。見てみ」

絵美と陽乃が見渡すと、サラリーマンも大学生もおばさんも皆楽しそうに話をしている。

「な？」

「大阪って、おもしろいね～」

「ここは兵庫やけどな」
そうこうしているうちに、夙川駅に到着した。ここから甲陽園線に乗り換え、仁川駅で降りて歩いていくと、翔がかつて住んでいた家のあったあたりになる。
「け……」
慎也が息を深く吸ってから吐いた。
「けっこうな坂道で……」
「これくらい普通やで～」
翔は妙に明るい。陽乃には何か、翔がわざと明るく振舞っているのではないかと言う不安に駆られていた。
「……ここだな」
恭一がそう呟いた。翔が足を止め、そこを見上げた。
綺麗に植樹された、斜面。その麓には「地すべり資料館」という建物が建っていた。
「……。」
翔は透き通ったような目で、ジッと、その場所を見上げていた。
「お待ちしていました」
後ろから男性の声がしたので、全員がそちらを向いた。

第２０９話　きっと大丈夫

「七海高等学校吹奏楽部の皆さんですね」
全員の視線が初老の男性へと注がれた。
「おはようございます。このたびは、お世話になります」
恭一が深々と礼をすると、部員たちも一様に「おはようございます！」と挨拶をする。
「おはようございます。私、この地区の自治会長を務めさせていただいております、坂本と申します。よろしくお願いいたします」
翔の視線の先には、献花台が設けられていた。既にたくさんの花が供えられており、地域の人だろうか、また花を抱えて献花台の前へやって来た。恭一と坂本は今日の打ち合わせなどをするので、その間に翔たちは控え室のある建物へと移動した。
「あれ？」
慎也が声を上げた。
「どうしたの？」
「カケルの楽器がない」
「うそ！」
陽乃と絵美が慌てて探すが、翔の楽器がケースごとなくなっているのだ。
「ちょっと翔！　アンタの楽器が……あれ？」
陽乃が翔に声を掛けようとしたときには、既に翔本人も控え室から姿を消していた。

その頃、翔は楽器ケース片手にある場所へと向かっていた。控え室のある建物から西へしばらく行き、仁川を越えて川沿いの道をずっと行く。そして、目的地である仁川百合野町地すべり資料館へ到着した。その資料館の西側に、その慰霊碑はあった。
『やすらかに』と記された、ごくごく小さな慰霊碑ではあったが

たくさんの花が供えられている。翔はその前にしゃがみ、そっと手を合わせた。

「ゴメン。花は持ってきてへんねんけど……」

翔はそっと楽器を取り出した。

「今な、部活でずーっとサックス吹いてるねんで。兄ちゃんの、サックス」

金色に輝くサックスを取り出した。

「このサックス、兄ちゃんのサックスって知らんかってんけど、こないだ……お母さんが教えてくれた」

冷たい風が吹きつける。あの日も、こんな風が吹いていたのだろうか。今日はあまり転機が良くない。曇りがちで日が差さない分、冷え込みも厳しいものがある。それでも翔はしばらく、慰霊碑の前から動かずじっとしていた。

「そうや。なんか、曲吹こっか。何がええかな……」

翔はしばらく考え込んだ後、ニコッと笑ってある曲を吹き始めた。

一方、翔がいなくなったことに部員たちは大慌てであった。

「もう！　あんな放浪癖があるとは思わなかった」

美里がプリプリしている。

「まさか、変なことにならないよね？」

「ちょっとやめてよ、雪ちゃん。どうせ佐野くんのことだから、ヒョコッと顔出したりするに決まってるじゃない」

「とかいう橋本が一番慌ててるっぽいけどな」

拓真が苦笑いしながら言う。

「だって……場所と日が日だけに……」

「なぁ、この辺りに翔が行きそうな場所ないのか？」

慎也が陽乃に聞く。

「あたしに聞かれても……あたし、この辺りに住んでたわけじゃないし」

「それもそうだよな……」

沈黙が続く。

「あ、いいのあるじゃん」
春樹が突然立ち上がり、部屋の隅に置いてあったパソコンのスイッチを入れた。
「何すんの？」
「ネットで見てみようと思って。ここ、ネット環境整ってるみたいだし」
「使えんのか？　パスワードとか……」
「一か八かやってみるしかないっしょ」
春樹は慣れた手つきでパソコンを操作する。幸い、パスワードなどを設定せずに入れるパソコンであった。
「無用心だな。こんな簡単に入れるなんて……」
「まぁ、この場合はラッキーって思わなきゃ」
春樹はキーワードを入れて検索エンジンで調べを進めた。
「このすぐ近くに地すべり資料館っていうのがあって、その横に慰霊碑があるよ」
「地すべりで亡くなった方の？」
「うん」
「よし。まずはそこへ行ってみよう」
慎也、拓真、優輝、勇の４人が外へ出ようとした。
「あたしも行く！」
「ダメだ。朝倉は副部長だろ？　部長が不在のときは、お前が部を動かさなきゃ」
慎也が動こうとした陽乃を制止した。
「……。」
「な？」
「わかった。お願いね」
「任せろい！」
江戸っ子風の喋り方で答えてから、慎也たちは外へ出た。
「西のほうみたいだ」
「よし！」

走る音がどんどん遠のいていく。陽乃はしばらく不安そうに見つめていたが、突然声を上げた。
「よしっ！　あたしたちはそろそろ音出ししよう！」
「……。」
答えが返ってこない。
「ほら、今日寒いからしっかり音出しとロングトーンしないと音程合わないよ！　はい、準備！」
「はい！」
部員たちからようやく、返事が来たので陽乃も笑顔で楽器の準備を始めた。

「いた！？」
春樹は拓真とちょうど交差点で出くわしたので、息を荒くしながらも聞いてみた。
「見当たらない……。っていうか、慰霊碑ってどこなんだ？」
「ホントそれだよ……。ここ、意外と道が複雑みたいで」
「けど、早く見つけないと……」
「待って！」
春樹が制止した。
「どした？」
「静かに」
春樹と拓真は耳を澄ます。北風に乗って、聞いたことのある音色が飛んできた。
「サックスの音だ」
「こっちだよ」
春樹と拓真はその音を頼りにゆっくり歩き始めた。この周辺でサックスの音色が聞こえることはまずないと信じながら、二人は足を速める。
「あっ」
次の角で優輝と慎也に会った。

「お前らもあの音、頼りに？」
「うん」
「絶対、アイツの音だよな」
同時に４人は走り出していた。
「あぁ」
それから音を頼りに４人はようやく、その場所へたどり着いた。
「……。」
「この曲……」
翔が吹いているのは、コブクロの『永遠にともに』であった。いつのまにか、翔の周りには周囲の住民たちが出てきて、翔のサックスの音色に耳を澄ませていた。
「……いい音だな」
慎也の横に、小さな女の子とまだ生まれて間もない男の子を抱いた若い女性が立っていた。もちろん、女の子も男の子も震災を知らない世代ということになると慎也は考えていた。何でもそうだ。出来事は風化していく。きっと、阪神淡路大震災も起きた頃よりも風化は進んでいるだろう。無理もない話だろうと慎也は思った。
「お母さん」
女の子が喋った。
「なぁに？」
「あれ、何？」
女の子が指差したのは、慰霊碑だった。
「あれはね……慰霊碑っていうの」
「……よくわかんない」
「そうね。おうちに帰ったら、ゆっくりお話してあげる」
「お兄ちゃんは、どうしてあそこで……あんなことしてるの？」
その言葉に気づいた春樹、優輝、拓真も目を丸くした。女性がどのような説明をするか、気になったのが正直なところだったからだ。
「お兄ちゃんはね……お母さんの想像よ？　きっと、大切な人があそこにいるの」

「サユキには見えないの？」
「サユちゃんにも、見えるわよきっと」
女性は笑って、サユキの頭を撫でた。
「……きっと」
優輝が呟いた。
「きっと、ここなら大丈夫ですよ」
「何が？」
「風化なんて……しないと思います」
「……そうだな」
寒空に、翔の音色が北風に乗って飛んでいく。慎也たちは目をつむりながら、その音にそれぞれの思いを馳せていた。

第２１０話　この音色を、捧ぐ

慰霊祭が始まった。部員たちは初めての経験なので、少し顔が強ばっている。しかし、式は問題なく進み、とうとう翔たちの演奏時間がやってきた。

「それでは、本日の慰霊祭の最後に、特別に来ていただいております、神奈川県七海市にあります七海高等学校吹奏楽部の皆様が、演奏に来てくださっております。代表の方に、まずはご挨拶をいただきたいと思います」

翔が立ち上がった。

「皆さん、こんにちは。私（わたくし）、七海高等学校吹奏楽部の部長を務めさせていただいております、佐野　翔と申します」

翔は深々と礼をした。

「実は、私はこの兵庫県西宮市の出身……それも、この地すべりが発生した地区の出身です。そして、私以外の家族はあの阪神淡路大震災で発生した地すべりにより、全員……亡くなりました」

会場が静まり返る。翔は冷静に続けた。

「当時の記憶は、私にはありません。地震によるショックなのか、単純に当時、小さかったから記憶がないのか。わかりません。それでも、何か、心に残るものがありました」

ふと、翔は前にいたおばあさんと目が合った。

「ひょっとして……翔くん？」

おばあさんは目に涙を溜めながら翔に聞く。

「はい。俺の……旧姓は、大中　翔です」

「あぁ……こないに大きくなったんやねぇ」

「……はい」

翔にも何かこみ上げるものがあるのか、少し言葉に詰まった。

「これ……亡くなった兄の楽器なんやそうです」

綺麗に輝くサックスを翔は自慢げに持ち上げた。

「いま……兄がおったら、俺はサックスを吹いてたのかな。わかりません」

翔の本音であった。それでも、吹奏楽はやっていた気がするように思っていた。根拠はないが、心の奥底で深く、そう思っている。

「兄や姉、両親が亡くなったのは……記憶がないとはいえ、ショックでした」

陽乃の脳裏に祥夫、由利、夏樹の顔が浮かぶ。いま、陽乃は彼らに囲まれて何不自由ない生活を送っている。翔が不幸とは言わないが、もしも同じような事実を突きつけられた場合、陽乃はとても冷静ではいられないだろうと思っている。

いったい翔の冷静さはどこから来るのか。陽乃はそれが気になって仕方がなかった。

「でも、いま、俺はこのサックスのおかげで、たくさんのかけがえのないものを……得ました」

陽乃はその言葉が、自分たちに向けられていることに気づいた。慎也や拓真、春樹がその言葉に少し照れているようだった。

もちろん、陽乃や1年生だけではない。安和や岳彦、めぐみたち3年生。直幸、修平、翔平、優衣たち吹奏楽仲間。泰徳、美並など他県にも仲間がいる。そして、恭一やしおり、樹たち指導者。すべてが、翔にとってかけがえのない人々である。

「震災で父さんや母さん、兄ちゃんに姉ちゃんを亡くしたのはホンマ……言葉のしようがありません。それでも、このかけがえのない人たちに支えられて、オレはいま、元気でやってる。それを今日……家族に伝えたくて、ここへ来ました」

言葉に一瞬、詰まった。

「頑張れ！」

慎也が唐突に叫ぶ。翔は涙を拭い、笑顔で言った。

「拙い演奏ですが……聴いてください。曲目は『ＧＲより～明日への希望～』、そして『花（すべての人の心に花を）』の2曲です」

恭一が前に立つ。そして、ゆっくりと指揮棒を上げる。これまで

にないほど、部員たちが集中しているのを恭一は感じ取ることができた。

沙希のピアノが静かに響く。そして、絵美たちクラリネットが旋律を奏で始めた。優しく、深みのある音色がそっと住民たちを包んだ。亮平の弦バスのピッチカートが、そのメロディを支えてくれる。そしてサックスが加わった。翔はふと、暖かい風が吹き込むのを感じた。高音なので苦しいはずが、全然そんな風に思わなかった。

そして、恵梨のシンバルをきっかけに曲が盛り上がりを見せる。拓真の重厚なチューバの音が響いた。まだ楽器を吹けない智志が、拓真の音に感動したのか涙を見せていた。ホルンは二人しかいないにも関わらず、荘厳な音を奏でた。

そして、健之佑、誠、優輝の男子3人組が最後の繊細なソロを見事に吹ききった。

しばらく間を開けて、拍手が沸く。

「え……！？」

翔は目の前に兄の一志らしい姿が見えた気がして、声を上げた。

「どうかしましたか？」

さゆりが声を掛けた。ハッとすぐに意識が戻り、もう一度見てみるとそれらしき姿はなかった。

「いや……なんでもない」

翔はすぐに譜面の入れ替えを始めた。次の曲は春樹と愛実、沙希と由美子が懸命に練習を重ねた曲である。彼らの見せ場でもあるのだ。

木管楽器の優しい前奏の後に、春樹のソロが始まった。芯のある、それでいてやさしげな音色が会場を包み込む。

「……スゴいな」

一人の男性が思わず声を上げた。翔も拓真も、慎也も陽乃もこの音色には驚いていた。とても高校から始めたとは思わない音色が、春樹の楽器から出ているのだから。

春樹にとっても、翔の経験は他人事ではなかった。父を交通事故

で亡くしているという過去がある春樹にとって、この曲は震災で亡くなった人だけでなく、父へ向けて演奏しているという気持ちもあった。

続いて、愛実がソロを引き取る。春樹に音色が似てきているように翔は感じた。時々、翔たちサックスの伴奏が合いの手で入る。そして、一番の盛り上がりを見せるところで春樹と愛実がパートを分けて演奏し始めた。住民たちの中には目を閉じ、その音色に耳を澄ませる者もいた。

そして、続いて出てきたのが亮平のエレキベースのソロ。エレキベースと聞くと、ギャンギャン音を派手に鳴らして吹くイメージがあるかもしれないが、繊細な音を奏でることも十分に可能なのだ。もちろん、それなりの技術が求められる。亮平には、それが備わっているという証拠が、このソロによって立証される形となった。

亮平は亮平で、この曲を大切な人たちに向けて奏でるつもりで弾いていた。一人はこの部にいる人へ。そして、あと二人はクラスメイトへ。二人は遠く神奈川にいるが、そこまで飛ばすツモリで。

そして、フルートのソロが始まった。由美子と沙希が代わる代わるソロを奏で、最後の部分で春樹たちと同じようにパートを分けて最高のビヴラートを効かせながら、見事にソロを吹ききった。

健之佑のソロが最後を静かに締め、見事に演奏は終わりを告げた。しばらくの静寂が続き、そして拍手が沸いた。

「今日は本当にありがとうございました」

坂本が深々と礼をした。

「こちらこそ、ありがとうございました」

「ありがとうございました！」

恭一の礼に合わせて、全員が深々と礼をする。

「それでは、お気をつけてお帰りください」

「はい。失礼します」

翔たちは温かな気持ちになりながら、その場所を後にした。

「……。」
翔が不意に立ち止まった。
「どうしたの？」
「……ううん。行こか」
「うん！」
翔は陽乃が前を向いたのを確認してから、その場所で手を振った。
かつて、自分の家があった場所であった。なぜか急に、思い出したのだ。それはきっと、ここから見える風景を心の奥底が記憶していたからかもしれない。
「また、来るな。お父さん。お母さん。兄ちゃん。姉ちゃん」
そう呟き、翔は部員たちの集団へと走って戻っていった。

第２１１話　嵐の予感

「……は？」

拓真、春樹、亮平、愛実の４人は目を丸くした。というのも、今の智志の発言が原因なのだ。

「すんません……俺、今までちょっと遊びすぎてて……成績が……その……」

「ヤバいわけね？」

愛実の一言に智志は体を小さくしてしまった。

「しょうがないなぁ……」

拓真が智志の頭に大きな手をポンッと置いた。

「英語はみーやん、現代文はかとちゃん、世界史は俺、日本史は春やんに聞け」

「数学がヤバいんスけど……」

「なぁ、数学なら宮部がいいんだろ？　みーやん」

亮平の顔が真っ赤になった。

「なんで俺に聞くんですか！？」

「そんなの、答えなきゃダメか？」

拓真がニィッと笑うと、ますます亮平は顔を赤くしてしまった。

「え？　三宅って、そうなのか？」

智志の一言に、亮平は小さくうなずいた。

「うえー！　そうなんだ！　やっべぇ、そのへん詳しく聞かせてもらわなきゃ！」

「ストーップ！」

愛実が叫ぶ。

「その前に！　勉強でしょ！？」

「はい……そうでした」

一方、隣ではトロンボーンパートが悪戦苦闘していた。というのも、慎也、亜紀、徹の３人が揃いも揃って文系科目が苦手と言う最

悪の事態に陥っていたのだ。そのため、文系科目全般が得意な洋之のところへ3人寄って押しかけていたのだ。
「なぁ、この漢字ってどう書くんだ？」
「あぁ～！　先輩、それは門構ですよ！　あ！　違います違います！　線が一本余計です」
「ねぇねぇ、ヴィットーリオエマヌエーレ2世って誰？」
横から洋之を呼ぶのは美里。
「先輩……俺、まだ2年じゃないんで世界史なんて聞かないでください」
音楽室では仮死状態の翔が横たわっている。
「もう！　まだ始まったばっかりなのにぶっ倒れないでよ！」
陽乃がものさしで思い切り翔の額をはたいた。
「痛いなぁ！　しょうがないやろ！　数学で珍しく頭使ってオーバーヒートしてんねん！」
「ったく……あ！」
「なんや急に」
「あたしノート提出するの忘れてた！　ちょっと職員室行ってくる」
「そのまま帰ってこんでええで」
「なんでよ！」
「お前小姑みたいでうるさいねんもん！」
「アンタ……帰ったら覚えといてよ！」
陽乃はプリプリしながら職員室へ向かう階段を降りていった。そして不機嫌なまま職員室のドアを開けた瞬間、誰かに激突した。
「キャッ！？」
「あっ！」
陽乃はノートを落としてしまい、相手はプリントを落とした。ノートが相手のほうへ、プリントが陽乃のほうへ飛んでいく。
「ご、ごめんなさい！」
「あたしこそボーッとしてて……あ？」
「なんだ、雪ちゃんじゃない」

「陽ちゃんじゃん……！」
そう言ってから、雪子の顔が一瞬青ざめたように陽乃には見えた。
「どうしたの？」
「……。」
「あ、プリントね！　は……い……」
陽乃はそのプリントを手渡そうとして、動きを止めた。
転校届け。間違いなく、プリントにはそう書いてあったのだ。
「転校……？」
「……。」
雪子は俯いたまま、何も言わない。陽乃が聞いた。
「雪ちゃん……。転校って……？」
雪子が半泣きになりながら、呟いた。
「私……3月末で転校するかもしれないの」
「なんで……？」
「お父さんが転勤で……」
「そ、そうなんだ……」
それ以上、何も言えなかった。陽乃も雪子も廊下にしゃがみ込んだまま、しばらく黙り込んでしまう。
「何しとん？」
突然、翔が姿を現したので二人は「ヒャッ！」と声を上げた。
「あーあぁ。ノートもプリントもぶちまけたまんまで～。ほ……ら……」
そう言って陽乃がいま取り落としたプリントを見て、翔も言葉を失った。
「……転校？」
雪子の顔を見て、翔も言葉を失ってしまった。
「いつ、わかったん？」
「今年の初めだから……1月の仕事始めの日」
「そんな時に辞令やっけ？　出るん？」

「私もよくわかんないけど……」
雪子は再び黙ってしまった。
「ねぇ」
陽乃が言う。
「雪ちゃんだけ、残るとかできないの？」
「……言ったことないからわかんない」
「じゃあ、できるかもしれないよね！？」
「おい、陽乃」
翔がその言葉を遮った。
「何よ」
「ムチャ言うなや」
「何がムチャなのよ」
陽乃も半分ムキになっている。
「永井ちゃんが残れたら、そりゃオレも嬉しいよ？　せやけど、誰の家に行くっちゅーねん？」
「そ……それは……」
陽乃は黙り込んでしまった。
「じゃあ何？　翔は、このまま雪ちゃんをあっさり見送っちゃうの？」
「誰もそんなこと言うてへんやろ！」
「違う！　翔の言い方はそんな風に聞こえる！」
「お前、勝手なこと言うなや！」
「もう！　やめよ！」
雪子が立ち上がった。
「でも……」
「私のことなんかで二人がケンカすることないよ！」
「わ、私のことなんて……そんな……」
雪子が無理に笑うように二人には見えた。
「決まっちゃったものは仕方ないしね！　あと……少しだけど……」
「あたしは認めないよ」

陽乃が涙目で言った。
「こんなの、あたし認めないから！」
「お、おい！　陽乃！」
陽乃は下へ駆け下りて行ってしまった。翔と雪子はその背中を見送ることしかできなかった。
「……。」
「……永井ちゃん」
「何？」
「いつ……皆に言う？」
「もう……部長にも副部長にも知られちゃったしね……。ただ、今はテスト前だし、みんなの気持ちを不安定にしたくない」
「そうやな……」
翔がフゥッとため息をついた。
「音楽室、戻ろうか」
「私、変な顔してない？」
「全然。綺麗な顔やで」
翔がニコッと笑う。
「……よくそんな歯の浮くセリフ言えるねぇ」
雪子はクスクスと笑いながら翔の顔を見た。久しぶりに、ちゃんと翔の顔を見るような気分に雪子はなった。
「……戻ろう」
「うん」
翔と雪子は並んで歩いていった。一緒に並んで歩いたのはいつ頃だったのだろうか、と翔は考えながら、歩く。そのまま何も言えずに、翔はただ歩くしかなかった。

第２１２話　一緒にいたい

「佐野」
雪子の転校を知ってから1週間ほど経った、１月２４日。明日から学年末試験が始まるため、部活は自主練習を３０分した後、帰宅してテスト勉強と言うことになっている。ただ、部長の翔は戸締りなどをするため、部員全員が帰るのを待っていた。そして鍵を掛けて職員室を来たところで、恭一に声を掛けられたのだ。
「はい？」
翔はキョトンとした様子で返事をした。
「どうした。ちょっとボーッとした感じがするぞ」
「あぁ～……大丈夫です」
「それならいいけど。それより、これ」
恭一が手渡したのは一枚のＣＤと分厚い封筒。
「なんですか、これ」
「今年の課題曲の参考音源と、課題曲４曲の原譜（げんぷ）だ」
「えぇ！　ホンマですか～！　やったぁ、もうそんな時期かぁ」
翔は嬉しそうにＣＤを開いてみた。ピッコロマーチ、コンサートマーチ「光と風の通り道」、憧れの街、マーチ「ブルースカイ」。今年はマーチが勢ぞろいの年だ。
「今年はマーチか……」
「試験が終わったらな」
恭一はテストを作っていたのか、薄っぺらいわら半紙を折ってカバンにしまいこんだ。生徒に見られては何もならないからだろうか。とはいえ、翔にはあまり内容に関心はないのが正直なところであるが。
「全員に楽譜を配って、まぁどれかを2月末には絞りたいと思う」
「２月末か……」
「それに、来月１８日の六校合同演奏会の曲もそろそろ練習しない

とイカンし、バレンタインコンサートの曲も合奏を集中的にしないといけないし、やることは満載だぞ」
恭一は嬉しそうに「ウチも忙しくなってきたもんだ」と言った。
「先生」
翔は真剣な面持ちで恭一を呼んだ。
「どうした？」
「あの……」
翔は言いにくい言葉をようやく口にすることができた。
「永井ちゃん……転校するんですか？」
恭一の顔が固まった。
「するんですよね？」
「……誰から聞いた？」
「それはＹｅｓってことですか？」
「……。」
「そうなんですね」
「……あぁ」
翔は隣の園部先生の席に着いた。
「いつ聞いたんですか？」
「つい……この間だ。先週……の金曜だ」
「先生も最近やったんですね」
「あぁ……」
言葉が続かない。恭一は突然立ち上がり、小さな炊事場で何かを入れてきた。
「飲むか？」
湯気が上がっている。
「緑茶だ」
「いただきます」
沈黙が続く。
「まぁ、あれだよな」
恭一がようやく言葉を出した。

「佐野たちにしてみれば……大切な仲間が、突然いなくなるんだもんな」

「……そうですよ」

翔が突然、一気にまくし立てた。

「気に入りませんよ。だって、これからやないですか？　今から課題曲決めて、自由曲決めて、みんなで汗かきながら練習して！　できたらコンクールで上位狙って、マーチングもう一回出て、定期演奏会もしたいし、皆で……」

涙がブワッと溢れ出した。

「皆で卒業もしたい！」

職員室に、翔の大声が響く。その後に、鼻をすする音が聞こえた。

「すいません……。先生に当り散らしたってアカンのに……」

「いや……わかるよ。先生も……俺もそういう経験あるから」

恭一が翔の頭をそっと撫でた。

「でもさ、それを一番思ってるのは永井だと思うぞ」

「……そうですよね」

「でも永井、全然そんな風に見えないだろう？」

「そ……うですね」

「まだ、正式に転校届け出したわけでもないし、皆には言うなよ？」

「朝倉も知っちゃったんで……言わんようにさせます」

「頼むな」

翔は「お茶、ごちそうさまでした」と言ってから立ち上がった。

「気をつけて帰れよ」

「はい」

翔はペコリとお辞儀をして職員室を出ようとして、立ち止まった。

「先生」

「なんだ？」

「やっぱもう1回、音楽室と部室の鍵貸してください」

「雪子～」

母のひとみが雪子を呼んだ。
「なぁに？」
「勉強落ち着いた？」
「うーん」
「じゃあちょっと悪いんだけど、コロッケに使うソースが切れちゃったの。青葉堂で買ってきてくれない？」
「わかった～」
雪子はマフラーと帽子を被って行く準備をした。
「５００円あれば十分だと思うから、好きなお菓子買ってきてもいいわよ」
「ホント！？　ありがと～！」
「気をつけてね」
「行ってきます！」
雪子は靴を履いて自転車に跨った。雪子の家はつくし野川沿いにあるので、いつも雪子は土手沿いを自転車で走ったり通学は徒歩でしたりしている。津上橋へ来たところで、雪子は自転車を急に止めた。
「ちょっとぉ！　危ないわね！」
後ろから走ってきたオバサンにぶつかりそうになった。
「あっ、ごめんなさい」
「まったく……」
雪子はペコペコと謝りつつ、音のする方を探した。あれは間違いない。
不意に、２年近く前の記憶が蘇った。
――いっ、１年Ｇ組のなっ、永井　雪子といいます！　あ、朝倉さんとは中学校が同じで、それでその……
――オレは１年Ｅ組の佐野　翔！　サックス吹くのが趣味やねん。大阪出身な。ヨロシク！

「懐かしい……」
雪子はその音のする場所にようやくたどり着いた。
「やっぱり」
雪子はニッコリ笑って声を掛けた。
「佐野くん」
「……永井ちゃん」
アルトサックスを首にかけ、土手に腰掛ける翔がいた。
「何してんの、こんな寒いのに」
雪子は横に座った。
「永井ちゃんこそ。どないしたん？」
「おつかい。ソースが切れたから」
「そっか……」
雪子は翔の頬を何気なく見つめた。気のせいだろうか、頬の真ん中に何本かの筋の跡がついている。
（泣いた……のかな）
それが雪子のことのせいとは雪子自身、思っていない。
「あのさ」
翔が切り出した。
「転校……ホンマにせな……アカン？」
「え？」
「例えばさ！」
雪子の両肩を翔が両手でガッシリと掴んだ。
「例えば……コンクールまででもいい。コンクールまでだけでも、七海（こっち）おられへんか！？」
「……。」
翔の必死さがわかる。肩にかかる力がとても強いのだ。
「オレん家（ち）と陽乃ん家と……たとえばさ、男の家がアカンかったら大谷さんに宮部さん、はしもっちゃんに田中の家を転々としても大丈夫なように、オレらが頼むから！」

「……。」
「アカン……？」
「まだ……わかんない」
雪子は横に首を振った。翔の顔があっという間に寂しそうなものになった。
「だって、お父さんにもお母さんにも相談してないから」
「え……？　じ、じゃあ……」
雪子は笑って言った。
「相談してみるよ」
「……やっ、やったぁ～！」
翔が立ち上がって嬉しそうに楽器を構えた。
「よっしゃ！　1曲吹こう！」
「やだぁ！　もうこんな時間なのに？」
「まだ7時半や！　まだまだこれから！　何か、吹いて欲しい曲あるか！？」
「じゃあ……いつか王子様が！」
「よっしゃ、任しとけ！」
透き通った1月の夜空に、翔のサックスの音色が響く。その音は、七海の街の澄んだ空気を優しく包んでいった。

第２１３話　指きりげんまん

「さて……と」
テストも今日で無事終了。陽乃はホームルームが終わったので翔と一緒に部活へ行こうと思って彼の姿を探した。しかし、既に翔の姿がなかったのだ。
「あれ？」
教室内を見渡しても、翔の姿はない。
「ねぇ、川崎くん」
掃除当番なのでホウキを片手に教室をウロウロしている慎也に陽乃は声を掛けた。
「ん？　どした？」
「カケル……知らない？」
「そういや……アイツ、終わるなりバタバタカバン抱えて出てったぞ」
「そうなの？　どこ行くとか言ってなかった？」
「それは聞いてないな～」
「そっかぁ。ありがと」
陽乃は廊下へ出て翔の姿を探す。どこかでクラスメイトと話でもしているのではないかと思い、その姿を探すがやはり見当たらない。
「……あ！」
陽乃はようやく思い出した。今日、雪子が両親に相談した結果を陽乃と翔に話してくれるという約束だったのだ。
「もう！　どうせなら二人で行けばいいのに……先に行くなんて」
陽乃は若干怒りながら音楽室へと向かった。ガラガラと勢いよくドアを開けると、洋之と恵梨が目を丸くして陽乃を見つめた。
「こ、こんにちは……。どうしたんですか？」
思いのほか勢いがあったらしく、恵梨が心配そうに聞いた。
「あぁ、うん、ちょっとね」

陽乃は部室をチラッと見て、それから音楽室のほうも覗いた。
「ねぇ、カケルと雪ちゃん、来なかった？」
「え……？　あ～、あたしは見てないですけど？　トミはどう？」
「俺も今日はまだ見てないッス。っていうか、俺ら以外で来たの、朝倉先輩が初めてですよ」
「あ、そうなの？」
確かに、現段階ではまだ雪子の転校の話を知っているのは翔、陽乃、恭一のみだ。ここでは話しづらいものがあるかもしれない。
「二人に用ですか？」
「あぁ、うん。でも、そんなに大したことじゃないの」
「そのうち来ると思いますよ～」
恵梨はいつもどおりの笑顔で答える。ふと、いま彼らが雪子の転校を知ったらどういう反応を示すのだろうかという不安が、陽乃の中で芽生えた。

「ダメだった……」
その頃、雪子と翔は音楽室の傍の階段を上がった屋上近くにいた。
「そ……っか……」
翔は引きつった笑顔でなんとか声を振り絞った。その声ですら、震えている。
「やっぱり……家族全員で行かないと。っていうか……ほら、私の家、まだ私は高校生だし、妹は中学生でしょ？　おばさんの家やおばあちゃんの家もあるから、せめてコンクールまではこっちにいさせてほしいってお願いしたけど……ダメだった」
「……。」
翔はどう答えを返せばいいか、言葉に詰まってしまった。
「それで……転校先は？」
やっと出た言葉がこれだった。なんだか、残酷な響きになっていないかどうか、翔は不安で仕方がなかった。
「うん！　それがね」

雪子の声が少し明るくなった。そして、その先の言葉が出ようとしたときにバサッ、と何かが落ちる音がして翔と雪子は同時にその方を向いた。
「あ……」
「じゅ……順平」
右川　順平が呆然とした表情で、階段の下から雪子と翔を見上げている。
「……転校って？」
「……。」
「……。」
雪子も翔も答えられずにいた。
「佐野先輩ですか？　それとも……」
「……私、なの」
雪子が気まずそうに呟いた。
「いつ……ですか？」
「3月末には……引っ越し終えてるから、中旬くらいかな」
「……。」
順平はフゥッとため息をついた。
「あ、あのね、右川くん」
雪子が何かを言おうとして、それを順平が遮った。
「あの！」
無理に笑顔を作っているのはわかる。その笑顔が痛々しいほどだった。翔も雪子も表情が曇ってしまう。
「あの、お願いです」
順平は努めて笑顔で言う。
「転校先でも……吹奏楽、続けてくれますか？」
その言葉を、ドア越しに陽乃も聞いていた。ちなみに、この階段は屋上に通じるのでいちおうドアが付けられてて通常は出入りできない。
「え？」

雪子が呆気に取られた表情になる。
「先輩が……転校するの、ホントですよね？」
順平は翔に聞いた。
「うん……。残念やけど」
「……仕方ないですもんね」
順平は堪えながらもそう言った。陽乃は自分より年下の順平のほうが大人びた考えをしていることに、少なからず衝撃を受けた。

――あたしは認めないよ。こんなの、あたし認めないから！

自分の無神経な言葉が悔やまれる。一番辛いのは雪子であるにもかかわらず、まるで自分が悲劇のヒロインであるかのような言動を取ってしまったこと。これが実にバカに見えて仕方がなかった。
「でも、お願いですから転校先でも吹奏楽、続けてくださいね！」
「もっ……もちろん！」
「約束ですよ？」
順平が指を差し出した。
「指きりです」
「うん！」
雪子と順平はしっかりと指切りをした。
「なぁ、オレともやって」
「えぇ？　なんか恥ずかしい」
雪子は本気で顔を赤くした。
「えぇやん。なっ！」
「じ、じゃあ……」
翔と雪子も指きりを交わす。その直後、陽乃がドアを開けて飛び込んできたので3人はポカンとした様子で陽乃を見つめた。
「あっ」
顔が真っ赤になる。
「あたしも！」

雪子は涙目で、けれどもしっかりとうなずいた。
「うん！」
指切りを終えてから、雪子はしっかりとした口調で言った。
「皆にも……今日、言っていい？」
「今日？」
「うん」
「永井ちゃんがよければ」
「じゃあ、今日言う」
雪子にはもう、何のためらいもなかった。
「言わなかったら、言うタイミングを逃しそうだから」
「よっしゃ……。ほんなら、部員揃ったら話する場、作るな」
「ありがとう」
４人はゆっくりと階段を降り始めた。
「そういえばさぁ」
翔が思い出したように雪子に聞いた。
「転校先、どこなん？」
「あ、言ってなかった？」
「聞いてへんで。なぁ？」
「うん」
雪子はニコッと笑う。
「なんという偶然！　佐野くんの出身地、大阪府は南大阪市でーす！」
「うっそぉ！？　マジでぇ！」
「そんな偶然ってあるんだ～！」
雪子のサプライズ発言に３人は驚きを隠せず、ワイワイと楽しそうに話をしながら音楽室へと向かっていった。

第２１４話　ホルンのために

１月２６日（金）。音楽室の黒板には５曲もの曲名がチョークで書かれていた。

♪大地と水と火と空の歌

♪エル・カミーノ・レアル

♪リクディム

♪吹奏楽のための抒情詩「秋風の訴え」

♪吹奏楽のための第一組曲

「えーっと……それじゃあな、この５曲の中から来月１８日にある６校合同演奏会で七海（ウチ）が単独で演奏する曲と、３月２１日に市吹連の定期演奏会で演奏する曲を選ぶぞ」

恭一の一言に部員たちはワァッと声を上げた。

「ねぇ、どれも結構大曲よね」

みゆきが嬉しそうに順平に言う。

「そうだな～。エルカミとか、リクディムとか難しいんじゃねぇの？」

「エルカミだったら、ホルン結構目立つじゃん」

沙希が雪子に言う。

「そうなの？　私、エル・カミーノ・レアルっていう曲、よく知らなくて」

「あちゃ～！　それは吹奏楽では有名中の有名な曲よ。知っとかなきゃ」

「第一組曲って、低音目立つよね」
亮平がニコニコしながら呟くと、拓真が食いついてきた。
「え！？　それは聞き捨てならん！」
「ちょ、拓真。落ち着いて」
春樹がなんとかなだめる。
「す、すまん。最近低音って聞くと落ち着かなくて」
「はいはいはい！　とにかく落ち着いて。いいか？　それじゃこの選曲だけど、いつものとおり投票っていう形を取るが、何か異議はあるか？」
「あの」
真っ先に手を挙げたのは、健之佑だった。
「はい、野村」
「俺の個人的な意見で申し訳ないんですけど……曲を推薦っていうか……したい曲があるんです」
「ん？　別の曲か？」
「いえ、この中で……」
「そうなのか。別に言ってもいいぞ」
「えっと……できたら、エル・カミーノ・レアルか大地と水と火と空の歌をやりたいです」
「その理由は？」
「えっと……。あの、昨日永井先輩が転校っていう話、出たじゃないですか」
一瞬で音楽室の空気が変わるのを翔は感じ取った。陽乃が少ししょぼくれた顔をする。
「だったら、永井先輩の思い出に残るような曲、やりたいなぁと思って」
「……なるほど」
恭一もウンウンとうなずく。
「他の者の意見はどうだ？」
順平が手を挙げた。

「いいと思う」
「だろ？」
健之佑が嬉しそうな顔をした。
「だけど」
「だけど？」
逆接の言葉に健之佑があっという間に顔色を悪くする。
「俺からもお願いあります！」
「右川からも？」
「できたら、市吹連で『大地と水と火と空の歌』やらせてください！」
恭一も少し間の抜けたような顔をした。すぐに真剣な顔つきに戻り、その理由を聞く。
「なんでだ？」
「やっぱり、市吹連なら七海市内のほとんどの吹奏楽部がある中学・高校が集まるじゃないですか？」
「そうだな」
「だったら、永井先輩の音色をしっかりと皆に聴いてほしい」
順平が心から自慢げに、そう言った。
「確かに、『エル・カミーノ・レアル』もホルンは目立つ部分いっぱいあります。でも、俺としてはやっぱり『ホルン』が目立つよりも『永井先輩』が目立ってほしいなぁ～なんて思いまして」
順平がニッと笑いながら雪子を見つめると、雪子は顔を真っ赤にして俯いた。
「なので、俺としては市吹連で『大地と水と火と空の歌』、６校合同で『エル・カミーノ・レアル』をやりたいです！」
そう言い切ると、同時に美里が手を挙げた。
「あの……」
言いにくそうな顔をしている。恭一も美里の強ばった表情を汲んでか、優しくすぐに聞き返した。
「どうした？」

「いい曲とは思うんです」
「そうだな。先生も両方とも大好きな曲だ」
「ただ……パーカッション、人数的に厳しくて」
「そうか？」
「はい。『エル・カミーノ・レアル』はまだわからないですけど、さっきの音源を聴く限りでは『大地と水と火と空の歌』は明らかに打楽器の人数がいると思うんです」
「人数か……」
「こんなこと言ってたら何の曲もできないのはわかってるんですけど」
美里がシュンとした様子でそう言い切ると座り込んでしまった。
「あの～……」
手を挙げたのは、智志だった。
「新入りでしかも、試用期間みたいな俺がこんなこと言うのも何なんですけど」
「いいぞ。お前だってもう部員なんだから」
「いえ！　俺、まだ2月6日までは正式な部員じゃないと思ってますんで！」
智志が慌てた素振りで首を振ると、愛実やはるかがブッと噴き出した。
「まぁいいじゃないか。で、大岩の意見は？」
「はい。確か、3年生の先輩……3名いらっしゃいましたよね？」
豊田めぐみ。三河　岳彦。岡崎　安和。岳彦は既に進学が決まっている。安和は2月の上旬に大学受験。めぐみも同様だ。
「チューバの先輩は進路決まってらっしゃるんですよね。それから、あと女子の二人の先輩も受験ありますけど、俺、小耳に挟んだんですけど多分二人とも余裕ですよ。ね？　先生」
恭一は苦笑いしながら「さすが最近までしょっちゅう職員室に呼び出されてただけあるな」と言った。智志も苦笑いしながら「なので、その3人の先輩方をパーカッションのヘルパーに呼ぶっての、

どうですか？」と提案した。
「でも、先輩たちＯＫしてくれるかな……」
「それに多分、そのうち問題なくなると思いますよ」
智志が美里に向かってニッと笑った。
「どういう意味？」
「それは明日、田中先輩が直接その目で確認してください」
智志がウインクをすると、美里の顔が赤くなった。
「おい！　大岩！　美里を誘惑すんな！」
慎也が我慢ならないという様子で立ち上がって智志に抗議した。
「落ち着いてくださいよ～！　俺、川崎先輩と田中先輩がラヴラヴなの、知ってますから～」
慎也も顔を真っ赤にして俯いて座ってしまった。
「えーと、なんだか妙な展開になったけど田中。大岩の提案、どうだ？」
「……そうですね。頼んでみないと始まらないですし！」
美里はようやく笑顔でそう答えた。
「それに、明日、ちょっと楽しみにしとこうかな！」
美里は智志のほうを見てニッコリ笑った。
「期待して損はないと思います」
「了解！」
「それじゃ、最終評決取るぞ。今回の２つの演奏会、６校合同は『エル・カミーノ・レアル』、市吹連は『大地と水と火と空の歌』でいいか？」
「はい！」
全員が満面の笑みで返した。

「かーける！　帰ろ！」
陽乃が笑顔で翔の肩に乗りかかってきた。
「あぁ、おう！　んじゃ、お先でーす」
翔はそんな陽乃を振り払う素振りを見せて、まだ残っている部員

に挨拶した。
「お疲れ様。また明日ね」
楽譜係の由美子、優輝、佳菜、勇、恵梨の5人は残ってエル・カミーノ・レアルと大地と水と火と空の歌の楽譜の仕分けやコピーをするのだそうだ。
「あんまり遅くならへんように。それから瀬戸っちと勇ちゃん、女子のことよろしくなぁ」
「了解です！　お疲れ様で～す」
翔と陽乃は部室を出た。階段を降りる最中、智志の言葉が引っかかったままの陽乃は翔に聴聞いた。
「ねぇ、ちょっと気になってたんだけど」
「ん？」
「明日、見たら何かがわかるみたいなこと、大岩くんが言ってたじゃない」
「あ～……そやな」
「何よ、その笑み」
翔が意味深な笑顔を浮かべているのにすぐ気づいた陽乃は、翔に詰め寄った。
「何か隠してるわね、アンタ」
「なぁんにも！」
そう言うと翔は先を走り出した。
「ちょ、待ちなさいよ！」
「何にも隠してへんからなぁ！」
どんどん先を行く翔。
「ったくもー！　明日を楽しみにしてりゃいいってわけ！？」
「そういうこっちゃ」
陽乃が息を荒くして立ち止まると、翔が戻ってきた。
「楽しみは、待ってたほうがずーっと楽しいねん」
「……わかりきったみたいなこと言っちゃって」
陽乃はクスクスと笑った。

「帰るで」
「うん」
二人は手を繋ぎ、津上橋のほうへと向かって歩き出した。

第２１５話　Ｃｏｍｅ　Ｈｏｍｅ！

「……。」

翌日、土曜日の昼休み。翔は先ほどから落ち着きなく壁に掛けた時計を見ては音楽室の入口を見て、自分の腕時計を見ては、入口を見ての繰り返しをしている。

「どうしたの、翔」

翔はビクッと体を震わせて陽乃のほうを見た。

「落ち着きないね、今日」

「そ、そうかぁ？　そうでもないけどなぁ」

「……ま、いいけどね」

陽乃が不気味な笑みを浮かべた。

「そのうちわかることみたいだし」

「……どうでしょうなぁ」

翔も負けないほど、怪しい笑顔で陽乃に微笑み返した。

「アンタら、気持ち悪い」

美里がバッサリ切るので、二人ともガクンと倒れんばかりに顔を下へ向けた。

「ヒドいよぉ、ミサッチぃ」

「ま、それはいいとして。あたし、今日何かいいことありそうな気がする」

「え？　なんで？」

「なんとなく、ね。それより、大岩くんと本堂くんはもう練習？」

「あぁ、そうだよ」

春樹が多目的室のほうを指差した。

「頑張るよね。もう、そんなに時間ないみたいだし」

絵美が心配そうにカレンダーを見つめた。

「アイツなら大丈夫じゃないの？」

慎也があっさりと言った。

「なんでそう思うんですか？」
徹が不思議そうに聞いた。
「大岩のヤツ、明らかに俺たちが楽器を始めた頃より音もデカいし、安定してる」
「本当ですか！？」
智志は拓真の言葉に目をキラキラ輝かせた。
「あぁ。明らかに俺が初めて楽器吹いたときに比べると、音も安定してるしキレイだぜ」
「うわ～！　嬉しいなぁ。俺、先輩を目標にしてたんで、そういうこと言っていただけるとスッゴい嬉しい！」
智志はニコーッと笑って大切そうに楽器を撫でた。
「先輩！　俺も６校合同、出れますかね？」
「６日に皆からＯＫもらえたら、お前が嫌がっても俺が出させてやるよ」
「マァジっすかぁ！　よーし、俺ちょっと頑張っちゃいますよ」
智志はやる気マンマンで楽器を構えた。
「あ、ホラ！　また肩に力入ってる。もっと楽に構えないと、無駄な力入ったら音、悪くなるぞ」
「はい！」
智志はもう一度楽器を降ろして、初めから構え直した。
「そうそう。あんまり楽器に体を近づけるんじゃなくって、楽器を自分の方へと近づける。ただし、押し付けるような形にしないこと」
「はい！」
「よし。姿勢はそれでいい。じゃ、さっきマウスピースだけで練習したときと同じようにゆーっくり、大きく息を吸って……１、２、３、４……」
智志はスーッと大きく息を吸って吹こうとした直前だった。
「ストーップ！」
「ふぇ！？　なんでですか！？」

「言っただろ。楽器のときは？」
「あ……腹式呼吸か」
「そう。ま、言葉でわかってもいざ行動に移すと何でもやりにくいもんだけどな。俺もそうだった、１年生のとき」
拓真がクスクス笑う。智志も釣られて笑った。
「うぃーす、ちょいと失礼」
翔がノックしてドア越しに二人を呼ぶ。
「入っていいぞ」
「毎度おおきに」
「さすが関西人。それで？　何か用？」
「用なかったらお二人のいい時間邪魔しませんがな」
「バカ言ってないで、さっさと要件言えって」
拓真は笑いながら智志の隣へ座った。智志も楽器を置く。
「昨日、大岩くんが提案した件。早速やけど先輩３人に聞いてみた」
「もうですか？　えらい早いですね！」
「何でも早くが佐野のモットーなので」
翔はニッと笑って答えた。
「まず、岡崎先輩は即承諾。間髪いれず『一度打楽器やってみたかったの～！』って嬉しそうに答えたから。次に、豊田先輩。『大学受かってたらね～』って曖昧な感じだったけど、まぁ豊田先輩なら問題ないと思う」
「確かに。あの人、マジ頭いいからな」
「それから……三河先輩なんだけど……」
翔が頭を掻くときは、何か困ったことがあるときだ。さすがに２年も一緒になると、相手のクセも覚えるようになる。
「打楽器、嫌だってさ」
「えぇ！？　それも即答？」
拓真がかなり驚いた顔をした。
「その代わりと言っちゃ～なんだけど、三河先輩はチューバで参加したいって！」

「へ？　チューバ？」
「そ。あ、ケータイでムービー撮らせてもらったんだ。お前らに、直接言いたいコトあるって」
翔はそういうと、鮮やかなオレンジ色をした携帯電話を取り出し、ムービーを起動させた。
「よー！　拓あん、元気？」
ちょっと髪の毛の伸びた岳彦が映った。
「ブッ。変わないなぁ、先輩」
「翔からお誘い受けたんだけど、俺やっぱりチューバ好きだからチューバで出させてほしいってお願いしました」
確かに、大学でもチューバを専攻するのだから、どうせ出演するのならチューバのほうがいいだろう。ただ、２月１８日に本番ということを考えると、智志もある程度吹けるようにはなっているだろうと考えられる。
「でも、見事に東先生に『人数比がおかしくなるからな～』と困った表情されちゃいました」
拓真の予想したとおりだ。きっと、恭一も智志がその頃にはある程度吹けるようになっていると見越しているのだろう。
「そこで、俺は新たに考えました！」
急に拓真の背筋が寒くなった。隣にいる智志も同じような気配を感じ取ったのだろうか。
「聞くところによると、チューバに新入生が入ったそうで」
拓真と智志は顔を見合わせ、すぐにハァッとため息を漏らした。
「そこで！　俺がレッスンに行ってあげま～す！　ビシバシ、しごくからお楽しみに！」
そしてムービーはそこで再生を終了した。
「えーと……ま、そういうわけですよ」
「……へいへい」
「頑張れ、二人とも」
「多分、俺痩せるだろうなぁ」

拓真は冗談交じりでおなかのあたりを触った。智志は顔を青くしている。
「先輩……三河先輩って、怖いですか？」
「全然！　心配すんなって」
「マジっすかぁ！　良かった～」
翔はホッと胸をなでおろす智志を見て、少し嬉しくなった。毎日ちょっとずつではあるが、智志も部の雰囲気になじんできている。
その時、入口のドアが再びノックの音を立てた。
「お」
翔と智志は同時に顔を見合わせた。
「どした？」
「ううん。来たな、と思って。な？　大岩くん」
「はい！」
翔は嬉しそうにスキップしながら、ドアを開けた。

「先輩！　またちゃあんと、用意しておきました」
恵梨がパーカッションの分の楽譜をコピーして帰ってきた。
「ありがと、エリリン。ちゃんと人数分ある？」
「もちろんです！」
「サンキュ。じゃ、あたしちょっと確認するから練習戻ってて？」
「はぁーい！」
恵梨が音楽室へ行くのを確認してから、美里は部室内にあるソファに座って楽譜を数え始めた。
美里。洋之。恵梨。あずさ。それから賛助で出てくれるめぐみ、安和の分。
「毎回ちゃあんと、用意してあげてるんだからね～。さっさとしなさいよ」
美里はさらにもう一枚の楽譜をテーブルの上に並べた。同時に、部室のドアがノックされた。
「？」

部員ならノックなどすることはそうそうない。そうすると、楽器屋さん（といっても、優輝の父であるが）か保護者、あるいは先生かもしれない。恭一でないことは確実だ。

「はいはい。いま開けますね」

美里はいつもどおり、ドアを開けた。

「……え？」

美里の目の前に、予想も、期待もしなかった人物が立っていた。

「ウソ……！」

美里の声が震える。ニッコリ笑って、彼は言った。

「ウソじゃないですよ、先輩」

優しい笑顔。名は体を表すとは、このことだろうか。美里はそんな風に思った。次々と言いたいことが溢れるのだが、それ以前に堰を切ったように涙が溢れ出てきた。それからようやく、この言葉が出た。

「おかえり……優っち！」

「ただいま帰りました、先輩！」

少し背の伸びた日高　優が、笑顔で部室の前に立っていた。

第２１６話　意識改革

「はい、じゃあエルカミ出して」
「はい！」
１月３０日（火）。七海高校の音楽室に部員たちの元気な声が響く。その中には、今日から合奏にも参加する岳彦の姿もあった。
「まず、初っ端。全員でそろえないとカッコ悪い部分だから、特にタッタカターの形がある人はズレないようにすること」
「はい！」
「それじゃ、頭から」
「はい！」
激しい序奏が始まる。
「ストップ。ティンパニ、冨岡。音がバラけてる。ホルン、もうちょっと雄叫びのような感じの音出せないか。それからクラリネット、ギャーギャーやかましい感じしかしないぞ。もう一度頭から」
「はい！」
もう一度最初から演奏し、今度はホルンとアルトサキソフォンのメロディに差し掛かった。やはりまだ譜面が配られて間もないため、サックスもホルンもメロディに苦戦している。
「メロディは要練習。ところでクラリネットとホルン、サックス系のメロディを繋ぐシロフォン、フルート、ミュートのトランペットか？」
「はい」
「それとメロディの後を追う形になってるクラリネットも」
「はい」
「はっきり言って、お前たちは目立ちすぎたらダメなパートだ。もっと控えめに」
「はい！」
続いてクラリネットがホルンとサックスのメロディを引き継いだ。

「コラァ！　クラリネット、メロディがキャンキャンうるさいだけだろうが！」
「すみません！」
「人数はそんなに多くないんだから、揃えろ！」
「はい！」
やがて、トランペットがメロディを吹くところに来た。
「トランペット」
「はい！」
「全然3人の音が揃ってない」
「すみません」
「水谷と加藤」
「はい！」
「お前らは逆に目立とうとしなさすぎ。トランペットのメロディの裏で、上昇系の音があるだろう？　そこは目立っていい」
「はい！」
「よし、続き。ティンパニはそこから目だっていいぞ。それからホルンもな」
「はい！」
やがてクラッシュシンバルが入る部分に差し掛かった。
「三河〜！　お前、せっかくシンバルするならしっかり叩け！　ペシャ〜ンとみっともない音を出すな！」
「ハイッ！」
「それからそこから先はしばらく木管が細かい動き増えるから、ついつい速度が上がってしまうと思うけど、しっかり先生を見てスピード、合わせてくれよ」
「はい！」
「それじゃ、もう一度頭から」
「はい！」
頭から通すが、やはりまだバラける部分が数多くある。ただ、譜面を配って間もないので恭一もそのあたりは了承済みだ。やがて、

一気にテンポも音量も落ちて健之佑のソロに差し掛かった。恭一はひたすら静かに、静かにと口元に人差し指を当てて指示を送る。この段階で演奏をしているのは健之佑、クラリネット、フルートは沙希のみ。グロッケンで優。完全に健之佑のソロになったところでクラリネット、亮平のピッチカート、誠のバスーンが伴奏の主流になる。

健之佑は緊張のせいか、ビヴラートとは異なる音の震えが出てきた。

「よしよし、野村。緊張するのもわかるが、どうも変に緊張するようだな」

「すみません……」

「緊張するのは当然だけど、緊張するといい息が入らなくなるからな。そういう時は普段以上にしっかりと息を吸うこと。わかったか？」

「はい！」

「よし。それじゃ中盤の部分はしばらく置いておいて。これは各自、しっかりとパート練習で音色を研究しておくこと。各パートで今週末には先生にどんな雰囲気に仕上がってるか、聞かせてもらうぞ？」

ザワザワと騒ぐ部員たち。

「何か嫌な予感がする……」

陽乃は苦笑いした。恭一は陽乃の心配をよそに、合奏の続きを始めた。

「それじゃ、テンポが上がる前のゆっくりな部分……。そうだな、ユーフォのソロから」

「はい！」

すると愛実も春樹も楽器を降ろしてしまった。

「あれ？　先輩。ソロですよ？」

愛実が春樹の肩をトントンと叩いた。

「あれ？」

春樹もキョトンとしている。

「あぁ！　しまった。うっかりしてたよ」
恭一がスマン！と手を合わせて言った。
「なんですか？」
愛実が少し不安そうに恭一に聞く。
「基本的にな、この合同と3月の吹連の定期演奏会でソロがあったら1年生に担当してもらおうと思ってるんだ」
「えぇ～！？」
1年全員から悲鳴とも苦情とも取れる声が上がった。
「だから、ホルンのソロ以外は基本的に1年生で担当すること」
ブーブーと声が上がるが、恭一はお構いナシだ。
「あたしたち、関係ないねぇ」
恵梨と優が顔を合わせていると、パーカッションにも指示が飛んできた。
「秦野」
「は、はい！」
「お前はエルカミの終盤、テンポの上がるところからスネアな」
「えぇ！？　ちょ、先生！　そんな急に……」
「ティンパニは冨岡のまま。ベードラは乃木。シロフォンは日高。シンバルは三河な」
優とあずさもオロオロしているのが目に見えてわかった。
「それから、ソプラノサックスが途中で終盤出てくるけれども、そこは中野が吹くこと」
「えぇぇ！？　わ、私ぃ！？」
「そ、私ぃ」
恭一が珍しく声真似をした。ちょっと似ているので思わず翔は噴き出しそうになった。
「ま、そういうわけだから1年生。今回の合同と定期演奏会はしっかり気ぃ引き締めてな」
「……。」
「返事は！？」

「は、はい！」

「それにしても」

合奏後。部室の窓際に集まっていたのは駿、亮平、愛実、さゆり、はるか、徹の６人。

「なんで急に先生、私たちにソロとか振り分け始めたんだろう」

さゆりがブツブツ文句を言う。

「そりゃあ、来年先輩たち卒業でしょ？　先輩たちが引退後に急にソロ振られてもオロオロしそうだもん。私なら」

愛実がフゥッとため息を漏らした。

「そりゃあそうかもしれないけど……。なんとなく、先輩差し置いてソロなんて気が引けちゃう」

さゆりはハァーッと長いため息をついた。

「そんなこと考えてたら、いつまでたっても上手くなるチャンス逃しちゃうんじゃないか？」

そう言ったのは駿だった。

「俺なんかさ、常に一人だろ？　時々チューバとか休みでもバスクラ吹かなきゃいけないトコあるんだよ。えーっと……俺たちが中２だったっけな。２００４年だから……」

「中２だね」

「あの時、俺の中学は課題曲を『祈りの旅』にしたんだけど。最初のほうでいきなり低音系が俺しかないメロディがあっただろ？」

「あー！　あの曲ね。あたし、苦手だったわぁ」

はるかが苦笑いする。

「はるちゃん、リードミスしまくりだったもんね」

「やぁだサユ！　恥ずかしい過去バラさないでよ！」

はるかが顔を赤くする。

「ま、とにかくさ。確かに先輩後輩っていう関係も大事とは思うけど、そろそろ俺たちも先輩になるんだし、そういう自覚持ったほうがいいと思うな」

「まぁ……そうかもしれないけど」
まだ愛実は複雑そうな表情を浮かべる。
「おいおーい、俺たちの身にもなれよ」
駿が無理やり背の高い亮平の首に手を回した。亮平は少し苦しそうだ。
「俺たち、今でも常に先輩差し置いてソロとか吹くんだぜ？　な、みーやん」
「あぁ……そ、そうだな」
亮平は苦笑いしつつうなずいた。
「な！　だから、これはチャンスだと思って頑張れよ。3人とも」
「うーん……ま、そこまで言われちゃ……ねぇ、はる？」
「そうよね。考えようによっては、自分のためになるのかもねぇ」
「頑張るしかないか！」
愛実が両手を合わせてパシン！と音を立てた。
「そうそう！」
駿も嬉しそうに笑う。
「ゴメン、駿」
「うん？」
「かなり苦しいかも……」
「うわぁ！　ゴメンゴメン！」
駿は顔を赤くしかけた亮平から腕を放した。
「やだぁ！　みーやん、顔が真っ赤！」
はるかが大笑いすると、亮平も含めて全員が笑い始めた。
ドアの前で彼らの話を聴いていた翔は、嬉しそうに笑いながら音楽室に戻った。
「あ」
戻るなり、陽乃が声を上げる。
「どないしてん」
「翔、嬉しいことあったでしょ」
「なんでわかるねん！？」

「翔ね、嬉しいときいつも鼻歌、歌いながら歩いてるもん」
「え！？　そうなんか？」
翔はどうやら自分のクセに気づいていなかったようだ。
「何があったか知らないけど、よかったね～」
「まぁな！」
翔はまた駿たちの会話を思い出していた。それを思い出すと、やっぱり自然と鼻歌が出てくる。
「しかも、鼻歌エルカミだし」
陽乃がクスクス笑った。
「覚えるくらい、吹きまくったからなぁ今日」
「本番、ビシッと揃った演奏になるかな～」
「そのための練習やろ？」
「そうでした～」
陽乃がペロッと舌を出す。
「よし！　オレももうちょっと練習するわ」
「あ、じゃああたしもいい？」
「もちろん」
「よし！　じゃ、一緒に合わせよう」
陽乃は椅子と楽譜、楽器を持って翔の隣に座った。
「あ……」
座るなり、翔が声を上げた。
「どうしたの？」
「雪や……」
翔の視線の先に、白い雪がチラチラと舞っていた。
「クシュ！」
「え？」
突然クシャミをし始めたのは智志だった。
「ックシュン！　ハーックシュン！」
「おおい、大岩ぁ」
翔が苦笑いして茶化そうとすると同時に、智志が膝をガクンと床

につけて苦しそうに息をし始めた。
「おい？　大岩……大岩！」
そのまま顔を真っ赤にして智志は倒れこんでしまった。
「やばい！　やばい、おい、陽乃！　職員室に内線して！」
「わ、わかった！」
陽乃は慌てて部室へ走って行った。
「大岩？　聞こえるか？」
「寒気が……スゴくて」
「ちょっと待っとけ。すぐ保健室連れて行くから」
翔は智志をなんとか背負い、保健室へ向かって歩き出した。

第２１７話　つべこべ言わずに！

翌日。翔、拓真、陽乃は優に連れられて智志の家の前に立っていた。

「……。」

「でっけぇ……」

拓真が門の大きさに唖然としている。

「大岩くんって……お金持ち？」

陽乃は独り言のようにそればかり繰り返している。

「なぁ、優っちは何か知ってんの？」

翔が聞いた。

「大岩くん家、アパレル会社経営してるんだって。ウチの親父も、大岩くんの店に雇ってもらえたんだ～！」

「あ、それでサトのヤツ、優っちが帰ってくること知ってるような素振り見せたのか」

拓真が納得した。

「全部話聞いてたんです。すいません、黙らせるようなことアイツに頼んじゃって」

「全然怒ってないよ。それよか、早くインターフォン押そうぜ」

「そうですね」

しかし、翔も拓真も優もインターフォンを押そうとしない。

「先輩、早く押してくださいよ」

「何言うとんねん。そこは優っちやろ」

「いえいえ！　ここは佐野先輩が部長として」

「いいやぁ……あ、拓あん。お前、同じパートの先輩としてどうや？」

「俺はいいよ！　それより……そうだな、ここはあえて異性代表として朝倉さんに」

「えぇ!?　意味わかんない！　ちょっと、あたしは嫌だよ！」

あーでもないこうでもないと言い合う間に、5分が過ぎた。
「ハーックショォン！」
翔が大きなくしゃみをする。
「こんなことしてる間に俺たちが風邪引きますよ……」
優がズルッと鼻をすすった。
「そうだな……よし、じゃあこうしよう」
で、結局4人で一緒にボタンを押した。
お母さんらしい人が中に入っていいと言ったので、翔たちはおっかなびっくり中に入った。
「なんや……。思ったより中は普通やな」
「そうですね。なんか安心」
家は3階建て。どうやら、門だけが威圧感を放っていたようで、敷地や家の雰囲気などは翔たちの家とそう変わらない。少しだけやはり、大きい感じがするだけだ。
「こちらですよ。どうぞ」
智志の母・智香子（ちかこ）が案内してくれた。
「ありがとうございます」
「また、後でお茶持って行きますから」
「いえ！　お構いなく！」
智香子は微笑んで下へ降りていった。トントン、とドアをノックして返事を待つ。
「はい？」
なぜかだみ声のような智志の声。おそらく、喉をヤラれたのだろう。
「こんちは！　佐野でぇす」
「佐野先輩！？」
ドタドタと走る音がして、すぐにドアが開いた。
「うぉ！　本堂先輩に朝倉先輩……ひーやんまで！」
「ひーやんとか。二人とも、いつの間にそんなに仲良くなったのよ～」

陽乃が羨ましそうに優と智志を交互に見つめると、二人ははにかみながら同時に笑った。
智志の部屋は日当たりの良いところだった。翔はグルッと部屋を見渡して、壁の隅に貼られている写真に気づいた。
「あれ？　大岩くんって小学校のとき、楽器やってたん？」
「あ、あれですか？　あれは小学校で管楽器クラブっていうのがあったんで、少しだけ入ってたんです」
「へぇ～！　あれさぁ、ちょっと小さいけどチューバやろ？」
「さすが先輩。よくわかりますね～」
拓真が立ち上がって興味深そうに見つめる。
「こんな小さなチューバあるんだなぁ」
「小学生向けなんでね。なんか、特注っぽいんですけど」
「はぁ～……。でもさ、なんで中学ではやらなかったの？」
拓真がもっともな質問をぶつけた。
「んー……ま、正直言うと俺、体が小さいんでチューバが合ってなかったみたいで。肺がちょっと調子崩しちゃって、楽器吹いちゃダメだって言われたんです」
「そうだったの……」
ちょうど成長期の頃だ。何か相まって、悪い状況を引き起こしたのかもしれない。智志は俯き加減で続けた。
「だから正直、俺、吹奏楽部入ってまた同じこと繰り返したらどうしよ～って不安なんですよね」
「……。」
４人とも、どうやって返したらいいかがわからなくなった。
「それに、今でこそマシになったけど、見てくれ悪かったしそもそも素行が悪かったし。皆さんに受け入れてもらえるかどうかも謎ですよね～」
自虐気味な笑い。智志は次々と独り言のように喋り続ける。
「どうしよっかな……って感じなんですよ。いま」
「え？」

拓真がようやく声を出した。
「もし……受け入れてもらえなかったらどうしよっかなって……ちょっと、悩んで……」
そこから先は言おうとしなかった。
「あ、あのさ」
「あ！　もうこんな時間じゃないすか」
拓真が時計を見ると、5時を指していた。
「ほら、そろそろ部活戻らないとダメっしょ？」
「あ、あぁ……うん」
「わざわざお見舞いなんかに来てもらってすみません！　明日にはフツーに行けるよう、頑張って治しますから！」
「そやな……。行こっか、そろそろ」
「ん……だね。行こうよ、優っちに本堂くん」
「うん……」
「じゃ、また明日な！」
「はい。ありがとうございました」
智志の部屋を出て、少し長い廊下を歩く。拓真は廊下を歩く間、何度も智志の部屋のほうを振り返っていた。
「拓あん？」
「あ、ねぇ！　ちょっと！」
拓真は気づいたら走り出していた。智志はバン！と突然開いたドアに目を丸くする。
「先輩？　どうしたんですか？」
「あ、あのさ！　コレ！」
拓真はポケットからＭＤを取り出し、智志に向かって放り投げた。
「何ですか？　これ」
「２００７年度課題曲の音源！　お前、コレ全部……あ、5曲目以外全部聴いて、どれ吹きたいか考えて来い！」
「え？」
「明日、聞くから」

「え？　で、でも……」
「わかってると思うけど、ウチの部入った以上は、コンクールメンバーだからな！」
「俺がですか？　まだマトモに音も出ないのに……」
「練習すりゃいいだろ、練習！」
「……。」
智志はしばらく、ＭＤをジッと見つめていた。
「な！」
「……はい」
「んじゃ、また明日。あ、それ絶対返せよ？」
「はい！」
拓真はニッと笑って、部屋を後にした。
「やるやん」
翔たちがニコニコしながら待っていた。
「まぁね」
「オレらも、家帰ったら課題曲聴かないとアカンな」
「そうだぞ。しっかりしろよ、朝倉さん」
「なんであたし！？」
陽乃が急に話を振られたので目を丸くする。
「なんとなく」
「なぁにそれ！」
長い廊下に４人の笑い声が響く。智志は４人の笑い声を聞いた後、デッキに拓真から預かったＭＤを入れた。
「懐かしいなぁ……こういう音聴くの」
智志はクッションに乗っかったまま音源を聴いて、気づいたらそのまま眠り込んでいた。

第２１８話　少し、しんみり

２月３日（土）。バレンタインデーコンサートに向けての練習に加えて、今日から卒業式に向けての曲も練習しなければならない。卒業式では卒業生入場の曲、国歌、校歌、卒業生退場の曲に卒業式が始まるまで、卒業式に相応しい曲を何か演奏してほしいと３年生担任の先生方から依頼があった。

雪子を除く２年生９名は、昼休みを使ってその余興のような感じで演奏する曲目をどうするか話し合っていた。

「卒業式……ねぇ」

翔は温かいお茶を飲みながら呟いた。

「佐野くんは中学のとき、どんな曲吹いたの？」

沙希が聞く。

「そうやなぁ……。今ほどなんつーか、しんみりした系統の曲がなかった気もするねんな」

「そう？」

絵美が首を傾げる。

「うん。今やったら、コブクロの『桜』とかいきものがかりの『ＳＡＫＵＲＡ』とかあるやん？　せやけど、オレが中２とか中３の卒業のときとかやったら、福山　雅治の『桜坂』と森山直太郎の『さくら（独唱）』、河口　恭吾の『桜』くらいやったもんなぁ」

「でも、卒業ソングならいっぱいあるだろ。ユーミンの『卒業写真』とか」

慎也がサンドイッチを頬張りながら次々と卒業ソングを口にした。

「『ｍｙ　ｇｒａｄｕａｔｉｏｎ』、『未来へ』、『旅立ちの日に』、『ｓｅｃｒｅｔ　ｂａｓｅ　～君がくれたもの～』……俺が思い浮かべられるのはこれくらいかなぁ」

「でも、それって若向けばっかりじゃない？」

美里が午後の紅茶片手にツッコミを入れる。

「だって、俺若者だもん」
「そりゃそうかもしんないけどさ。保護者だって来るじゃない。だいたい、保護者の年齢層って４０代以上が多そうな気がするんだけど」
「あ～……それ、問題だよな」
慎也はしばらく考えたが「ダメだ。母親世代の曲なんてわかんねぇ」と頭を抱え込んだ。
「あ、じゃあ身近な人に聞けばいいじゃん」
春樹がポンッと手を叩く。
「身近な人？」
「そ！　校長先生とか」
「おいおいおーい。いくらなんでもそりゃちょっと厳しくない？」
美里が困った顔をする。
「でも、卒業式に出てくださる人なわけだし、悪くはないと思うんだけど」
「ん～……一度聞きに行く価値はあるかもね」
由美子が小さくうなずく。
「でも、誰が行く？」
「校長室なんて、１年生のときにストーブ交換のために演奏しに行ったキリだよね」
陽乃がふと思い出したように言った。
「あ、懐かしいね～！」
「あの時、あんまり上手くないのによくあんなことやったよね～」
沙希がアッサリ言うので全員が目を丸くした。
「ちょっと、それは言わない！」
「あっ、ゴメーン！」
大笑いする２年生たちを１年生が何事かと何名か見に来ていた。
「あ、そうだ。ねぇねぇ１年生」
「はい？」
そこにいたのは駿、あずさ、みゆきの３人。

「卒業式で何か演奏したい曲、ある？」
「卒業式ですか？」
駿が目を輝かせる。
「俺、ありますあります！」
「お、えぇやん。なに？　なに？」
「『Ｂｌｏｓｓｏｍ　Ｔｏｒｉｌｏｇｙ』っていうメドレーやりたいです！」
「メドレーかぁ！　いいんじゃない。一度にたくさんの曲、聴けるわけだし」
陽乃と美里は興味津々だ。
「それで？　何の曲が入ってるん？」
「えーと……コブクロの『桜』、いきものがかりの『ＳＡＫＵＲＡ』、森山直太郎の『さくら（独唱）』、河口　恭吾の『桜』です」
「桜が目白押しだな」
拓真が同じ桜の単語が羅列されたのでどれがどれかわからないというような感じで苦笑いする。
「でも、良さそう」
「よし、ほんなら曲の候補として挙げとこう」
「退場のときはどうする？」
「あぁ～……そうやなぁ。それも考えとかんとアカンか」
「私、やっぱり『卒業写真』が吹きたいです！」
みゆきが元気よく手を挙げた。
「そうね～。やっぱり、お父さんお母さんや先生の知ってそうな曲も入れなきゃね」
絵美が同意すると、みゆきは特に嬉しそうに笑った。
「やったぁ！　一度、吹いてほしかったんだ先輩たちに！」
「と、言うと？」
春樹がみゆきの言葉に引っかかったのか、聞き返した。
「ソロが多いんですよ、この曲！」
「え！？　卒業式って3年生主役なのに、あたしたちがソロってど

うなの」
　陽乃がかなりオロオロした様子で周りの様子をうかがった。
「でもさ、3年生っていえば岡崎先輩、豊田先輩、三河先輩がいるじゃん。その3人の先輩をお送りするって気持ちを込めて演奏するっていうのは、いいんじゃない？」
「なるほど……。ミサッチ、いいこと言うね」
「まぁ、田中　美里ですから～」
「意味わかんないから」
　慎也がボソッとツッコむと、あからさまに美里は落ち込んでしまった。
「ま、ソロはありますけど立奏の必要はないと思います」
「そうやな。そこまで目立たんでもえぇやろ。それで？　ソロって誰々にあるん？」
「えっと、冒頭にユーフォ、ホルン、クラリネットです。それからボーンにサックスですね」
「やった！　あたしないんだ」
　陽乃が微妙に嬉しそうな声を上げた。
「なんで嬉しいねん」
「だって、緊張するのヤだもん」
「お前なぁ……。今さらそんなこと言うててどないすんねん」
「ま、いいじゃないのたまには」
「意味わからん……。あ、他には？」
「それから、オーボエもあります」
「そんだけかぁ。俺、なかなかソロ吹く機会ないなぁ」
　拓真がショボくれながらクリームパンの続きを食べ始めた。チューバはやはり、ソロがそうそうない楽器なのだ。
「んじゃ、それも候補に入れとくな～」
「お願いします！」
　1年生3人はご機嫌な様子で部室を後にした。
「ま、ヘコむなよ拓あん」

「いいよな～！　俺もソロ吹きたい！」
「そんなに吹きたいなら、この曲の練習頑張るか？」
恭一がノックをして部室に入ってきた。
「先生」
「あ……ひょっとして！」
「そう。合同演奏する曲、持ってきたぞ。結構ギリギリまで決まらなくてな」
６校合同演奏会。３年前から七海市内の中学・高校３校ずつが集まって演奏会を開催しているという。今年度は中学が袴田中学校、大井戸中学校、私立風見台中学校。高校は七海高校、私立風見台高校、北松（きたまつ）高校の３校だ。
各校単独で演奏する曲目も既に決まっているが、合同演奏のみが決まっていなかった。中学１・２年生、高校１年生、高校２年生の３つの合同バンドが今回結成されたのだ。そして合同バンドでは吹奏楽オリジナル曲とポップス曲をそれぞれ１曲ずつ演奏する。
「ちなみに、他の学校や他学年の合同バンドの曲目、一応全部書いてコピーしてきたから、全員でまわして読んでおいてくれ」
「はい！」
さっそく翔はその曲目が書かれた紙を手にしてどんな曲が挙がっているのかを見てみた。特に合同バンドは気になって仕方がなかったのだ。
「おぉ！　オレらの学年の合同バンド、まさかの季節はずれの『たなばた』やん！」
「有名なの、それ？」
「これは吹奏楽やってる人なら一回は演奏したことある人多いはず！」
「へぇ～……」
「えぇお知らせやぞ～。この曲なぁ、ソロがいっぱいあるねん」
「え！？　俺は！？　俺はある！？」
拓真がやたらと興奮して春樹の上に乗りかかって翔に聴いた。

「それがなぁ～……あるねんぞ！」
「やったぁ！」
「ソロがあるパートはサックス系、ユーフォ、チューバ、フルート、オーボエ、トロンボーン、トランペット、グロッケンと目白押しやな、まさしく」
「クラリネットはないの？」
「残念やけど、今回はお休み」
「なぁんだぁ」
絵美は少し安心したような、けれどどこか残念そうな表情を浮かべた。
「それじゃ、その曲今日中にちょっと合奏してみるから、各自練習しておいてくれ」
「はい！」
「それから……お別れ会の件だけど」
その言葉を聞いて少し翔たちのテンションが下がった。
「何か1曲、お前らだけで演奏したらどうだ？」
「え？」
「1年生も、主役も観客でな。だから、お前らだけで演奏する曲を何か考えておいてくれ」
「……。」
「よろしく頼んだぞ。じゃ、また合奏でな」
恭一は笑顔で部室を出て行った。取り残された翔たちはしばらく呆然としていた。
「どないする？　曲」
「なんだかなぁ……。考えるだけで切なくなっちゃう」
絵美が小さな声で言った。
「あの……」
「お」
振り向くと、順平が立っている。
「どないしたん？」

「俺、先輩方にお願いがあるんです」
「お願い？」
順平は後ろ手に持っていたそれを取り出し、翔に手渡した。

第２１９話　秘め事

１週間後の２月１０日。雪子は新幹線を新横浜駅で降り、ＪＲ横浜線の快速に揺られて町田駅を目指していた。
雪子は母親にメールを送信する。

――いま、新横浜駅に着いて快速電車に乗ったよ。

すぐに返信が来た。

――すぐに家へ帰る？

ポチポチとキーを素早く打って返信。

――ううん。部活に顔、出してから帰るよ。皆や先生にも報告したいし。

そう送ってから雪子は携帯電話を制服のポケットにしまった。今日の横浜市内は少し暖かい。例年の冬に比べると２度ほど気温が高いらしい。
「そういえば……やっぱりこっちの電車は静かだなぁ」
雪子は車内をふと見渡して呟いた。実は今日、雪子は大阪府は南大阪市にある市立阪南高等学校に編入試験を受けに行ったのだ。３月末には引越しが決まり、今では新居の場所まで決まっている。
家の片づけのほうも徐々に進めている。学校や部活へ行きながら準備をしなければならないので、前もって開始しているのだ。
「次は、町田、町田です。小田急電鉄小田原線はお乗換えです」
町田駅に着くと、休日だからか親子連れがずいぶん目立った。それに私服の女子高生くらいの子たちが楽しそうに会話をしている。

「そうだ！　最後くらいに皆でディズニーランドとかいいかも」
雪子は2年生全員で出かけたりするのもいいな、と胸を膨らませながら学校を目指した。

「失礼しま～す」
職員室に入ると、マグカップにコーヒーを淹れてすすっている恭一がいた。
「あ、先生！」
一瞬、恭一の顔が驚いているように見えた。しかし、すぐに笑顔になって雪子を出迎えてくれる。
「おぉ、永井。今日は編入試験じゃなかったのか？」
「はい。無事終わりましたんで、ちょっとご報告にと思いまして」
「相変わらず几帳面なヤツだなぁ。そんなの、月曜日でも良かったのに」
「いえ、母がこういう報告はすぐにでもしなければダメといつも言ってるので」
「そうか。それで、結果のほうは？」
「まだわからないですよ～」
「それもそうか」
「来週の初めには連絡が来るみたいです」
「まぁ、永井なら大丈夫だろう」
それからしばらく、どんな学校だったか、施設はどうか、周辺の環境はどうかなど雪子は恭一に事細かに話した。恭一も楽しそうに話す雪子を見て、少し安心したようだった。
「あ、そうだ！」
雪子は思い出したように手を叩いた。
「どうした？」
「みんな、音楽室ですか？」
「……あ、あぁ」
少し恭一の答えが詰まったような気もしたが、雪子は気にせず言

った。
「じゃあ、私今からちょっと皆に報告行ってきます」
「な、何もすぐじゃなくていいんじゃないか？」
「いえ！　話したいことといっぱいありますし。それじゃ先生、また月曜日に。失礼しましたー！」
雪子はいそいそしながら戸を閉めると、すぐに階段を駆け上がっていった。

「はいはいはーい」
翔は部室から内線電話が鳴っているのに気づき、慌てて合奏を止めて電話を取った。
「はい、吹奏楽部室です」
「佐野か！？」
「あ、先生。どうされました？」
「永井が試験終えて報告に帰ってきてる。皆にも報告行くって、音楽室に走って職員室をいま出て行ったんだ！」
「マ、マジで！？　わかりました！」
翔は受話器を置いてすぐに音楽室に駆け込んだ。
「ストーップ！」
「ど、どしたの？」
翔の大声に陽乃たちが目を丸くした。
「永井ちゃんが帰ってきて、報告に音楽室来るって！」
「えぇ！？」
沙希と美里が立ち上がり、大慌てで廊下へ駆け出した。
「大変！　雪ちゃん帰ってきて音楽室寄るんだって！」
「え！？　大変！」
美里の大声を聞いた恵梨、みゆき、はるかの3人が散らかしていたハサミや糊を大慌てでかき集めて、とりあえずといわんばかりにはるかのカバンに詰め込んだ。
「とりあえずたなばたの楽譜を2年は出して、ほんで順平はどっか

部室にでも移動してロングトーンのフリしといて！」
「はい！」
そして順平が部室のドアを閉めた瞬間、雪子が顔を出した。
「やっほー！　みんな、どうしてる～？」
「おー！　永井ちゃん！　どないしたーん？」
翔はごくごく自然に雪子を出迎えて見せた。そのあまりの自然な演技に陽乃や由美子は驚かざるを得ない。普通は不自然なところが出るハズなのに、そういう雰囲気を翔は感じさせなかった。
「陽ちゃん……絶対佐野くん、ウソ上手いよ？」
由美子がそっと耳打ちする。
「やっぱりそう思う？　あたしも思ったの……気をつけなきゃ」
陽乃は翔をジーッと見つめながら、雪子とのやり取りを見守っていた。
「おーい！　永井ちゃん、土産買ってきてくれてる！」
「お土産！？」
陽乃はさっきまでの疑いの眼差しをスッカリ忘れ、お土産にすぐ食いついた。
「お土産かぁ！　実はちょっと期待してたり」
春樹が笑う。慎也と拓真もすぐにお土産が何かを確認するために輪の中に加わった。
「2年生にだけだから、大声出さないでね」
そう言って雪子が取り出したのは、たこやき味のプリッツ。
「おぉ！　さすが大阪だね！」
沙希がパチパチと手を叩く。
「それじゃ、早速だけど……」
絵美の声に合わせて全員が小声で「いただきます！」と言った。

「そんじゃ悪いけど、オレら先に帰るな」
「はい！　戸締りちゃんとやっときますから」
順平はニッコリ笑って翔たちを見送った。

「ねぇねぇ、そういえばさぁ」
春樹が翔に大阪のお菓子はあんなに濃い味のものばかりなのか聞いている。その質問に翔はプリプリしながら反論しているようだった。
「あたしたちもさ……」
後ろに立っていたはるかが寂しそうに呟いた。
「先輩たちみたいに仲良くなれるといいね……」
「あぁ……」
順平はそう言うだけで、何も言葉にできないでいた。
「はるかちゃん」
みゆきが聞く。
「話し合いは……今日も？」
「うん」
「瀬戸くんたちの了解は？」
「まだ全然。瀬戸のヤツ、意外と頑固だった。それに、亜紀ちゃんがすっごい心配してるみたいで……。まぁ、気持ちはわからなくもないけどね」
はるかは寂しそうにしたままだ。
「とにかく、先輩たちにわからないようにしないとな……」
「うん……」
恵梨は黙ったまま。みゆきとはるかはフゥッとため息を漏らした。
話は、４日前に戻る。

――それでは、賛成２２、反対１０で大岩　智志くんの入部を許可します！

翔の声がはるかの脳裏をよぎる。この時、はるかは本当に智志の努力が報われて良かったと思ったのを覚えている。しかし、満場一致ではなかった。１年生の１０名が智志の入部に反対したのだ。無記名の投票だったが、はるかはその１０人が誰だったのかをハッキ

リ覚えていた。偶然、部室でその１０人が会話しているのが聞こえたのだ。

その１０人とは――。

野村健之佑、小林梨子、瀬戸優輝、中野さゆり、久野彩香、吉山亜紀、富士原　徹、加藤愛実、冨岡洋之、乃木あずさの１０人だった。

第２２０話　１年生の崩壊（前）

「さってさて～！　今日の練習も終わりっと」
４日前の２月６日。はるかは一人遅くまで残って練習をしていた。
もちろん、部長の翔や恭一には事前に許可を取っておいたので問題なかった。
廊下へ出ると、かなり冷え込んでいるので白い息が出た。
「寒ッ……！　あ～、早く帰ろう。今日は夕食、肉じゃがって言ってたなぁお母さん」
はるかは温かい夕食が待つ家へと帰るために、テキパキと片づけを済ませて廊下へ出て戸締りを済ませる。
部室のドアを開けようとした瞬間だった。
「俺はそもそも、初めから嫌だったんだよ」
洋之の声だった。
（え？　何……？）
続いたのはあずさの声。
「私も……。それに思うんだけど、なんか私たち、うまく騙されてるような気がするの」
（騙されてる……？　誰に？）
「あ、それは俺も思う。アイツ、そんな純情っぽくないもん」
（誰の話だろう……）
はるかは息を潜めてなるべく聞こえるように、ドアに耳を押し当てた。冷たかったけれども、ここは我慢だと堪えつつ。
「でもさぁ、あの感じだと２年生の先輩はみんな賛成した感じでしょ？」
梨子が誰に聞くでもなく呟いた。
「確かに」
優輝が引き取る。
「特に、バスパートなんか全員で推してたっぽいよね、メグ」

亜紀が愛実に聞いた。
「うん、確実にそうだと思う」
「やっぱり？」
徹が聞き返す。
「うん。だって最近、本堂先輩もハル……水谷先輩も、みーやんも何か彼に付きっ切りだったもん」
（大岩くんの話か……）
バスパートで3人が付きっ切りになるのだから、智志しか考えようがなかった。
「でもさ、正直大岩も辛いと思うんだよな」
そう言い出したのは健之佑だった。
「あ、私も思うの」
さゆりが言う。
「どのへんが？」
「わかんないか、乃木。もうすぐ俺たち進級だぜ？　そしたら経験者がいっぱい入ってくるって考えられないか？」
「私たちの下の子よね」
「そう。初心者もいるだろうけど、大半は経験者だろ高校ともなれば。チューバだって戦力になるような人ほしいじゃん？　だったら、大岩が入ってもチューバ経験者がいたら結構肩身狭いんじゃない？」
（何それ……？）
はるかは愕然とした。別に賛成・反対についてとやかく言うつもりはなかった。ただ、こうして集まって陰口のような形で喋っていることにはるかは納得が行かなかった。
極めつけは彩香の一言だった。
「正直、4月からあたしたちと同じ先輩っていう態度取られるの……微妙？」
これにははるかは耐え切れず、部室のドアを思い切り開けた。
「！？」
全員の視線がはるかに集中する。

「は、はる……！」
さゆりがビックリして目を丸くした。開口一番、はるかは叫んだ。
「信じらんない！」
その声の大きさに、洋之と健之佑が肩をすぼめた。
「何！？　あぁ～、そうなんだ！？　そんな風に気に入らないことあったら陰口叩くんだ！？」
「陰口とかじゃ……」
優輝が困った顔でそう答えようとしたが、はるかが遮った。
「皆にはそう感じるかもしれないけど、あたし今外で聞いてたらどう聞いても陰口にしか聞こえなかったよ！？」
「それは捉えようじゃないの？」
反論したのは意外にもあずさだった。
「捉えよう？」
「そうよ。別に私たち、そういうツモリで話してたんじゃないもん」
「だったら、なんでこんなコソコソ隠れるように部活終わってから話し合いするの？」
「それは……」
誰も答えられなくなった。はるかは遠慮せず追及を進める。
「やっぱり。批判なんじゃないの？　皆で平等に投票で決めた結果なのに、そうやって自分たちの意見が通らないからこうやってコソコソ批判するんだ？」
「なんだよ、トゲのある言い方だな」
優輝があからさまに不機嫌な口調になった。
「どっちが！　そんな風にコソコソコソして！」
「そういうお前だって俺たちの話、盗み聞きしてただろ！？」
「何よ！　そんな聞かれたくないような話、するほうもするほうよ！」
「うるさいなぁ！」
怒鳴ったのは愛実だった。
「何よ！　どうせ、自分たちは賛成していいことしたとか思ってる

んでしょ！？」
「何よ……何、その言い方！　別にそんなこと思ってないわよ！」
「正直、私は嫌だった！　皆して大岩くんばっかり構って、ちっともパート練習とかできないもん！　大岩くんばっかり！　なんでそこまでして彼に構ってあげるのか私、正直今もわかんないもん」
愛実の最後の言葉は震え始めていた。そのまま涙がこぼれた。
「……メグ」
彩香がはるかに見えないように彼女を抱いた。
「何よ……わかんないの？　大岩くんだって、頑張ってるじゃない」
「頑張ったって」
健之佑が言った。
「間に合うことと、間に合わないことぐらいわかってもらわないと。先輩にも、他の1年にも」
言い終わる前に、パシッ！と乾いた音が部室に響いた。
「信じらんない！　それ……本気で言ってるの！？」
全員が呆然としていた。はるかの手のひらが、健之佑の頬を引っ叩いたのだ。
「だったらそうね！　今さらコンクールの課題曲決めて自由曲選ぶようなウチの学校、遅いね！　コンクールなんてもう間に合わない！」
「なんでそういう話になるんだよ！？」
徹がキレ気味に叫んだ。
「そうも言い切れないじゃない！」
亜紀が反論する。
「そんな風にも取れるでしょ！」
はるかは一気にまくし立てたが、そこからは何がどうなったのかよく覚えていない。覚えているのは恭一があまりに遅いはるかを心配して見に来て、この騒ぎを止められたことくらいだった。
それから2年生に内緒で今回の件について、1年生だけで話し合いを持つことになった。賛成派代表ははるか。反対派代表は優輝と

いうことになった。それぞれ、正当な意見を集めて戦わせ、納得できるようにと恭一から言われていた。

「……。」

そして今日。はるかは優輝との待ち合わせをしているレストランにやって来た。４日前、健之佑を叩いた手が、風で冷たくなっていた。

「よし……！」

はるかはグッと手を握り締め、店内へ入った。

第221話　1年生の崩壊（中－1）

「よっ」
思ったよりも笑顔の優輝が緊張した面持ちのはるかを出迎えた。
「……うん」
はるかはなんとなくどう返事をしていいかわからず、変な答え方をしてしまった。
「ボーッと突っ立ってないで、座ったら？」
「……うん」
優輝の顔をまっすぐ見れない自分がいた。別に悪いことをしたつもりなどないのだが、なんとなく居心地が悪い。
「注文は？」
「え？」
「せっかく店入ったのに、注文しないんじゃ居辛いじゃん？」
「うん……」
「はい、メニュー」
「うん……」
優輝が怪訝な表情を浮かべた。
「どしたのさ。西嶋らしくない」
「うん……」
フゥッと優輝がため息をついた。
「今回の揉め事、結構ダメージでかかった？」
「……うん」
「そっか……」
優輝も少し声のトーンを落とした。
「それで？」
はるかがようやく話を切り出した。
「反対派の意見はどうまとまった？」
「……。」

「ちなみに、賛成派はやっぱり大岩くんの努力を認めてあげたいっていう話にしかならなかった。それ以上の何物でもないわ」
はるかはそう言ってノートをカバンから取り出し、開いた。優輝の視界に、女の子らしいカバンの中身がチラッと見えた。
「バカ」
「へ？」
「女の子のカバン、勝手に見ないで！　ここはね、いわば女の子の部屋が凝縮されたようなものなの。勝手に男子に見られたくないのよ！」
「ゴメン……」
「そんなことはどうでもいいとして」
「どうでもいいのか？」
「じゃあ言うなって話よね。はい、話戻すよ」
完全にいつもどおりのはるかに戻っていた。話ははるかのペースに乗った感じだ。
「これ、賛成派全員の意見。見て」

逢沢：努力してるから認めてあげるべき。先輩風吹かすとか、そんな考え、大岩にはないと俺は思う。
井上：反対してる人は、一度大井戸公園へ行けば？
伊原：風邪をひいて休んだかもしれない。でも、2月6日という期限を守ってそれなりに上達した彼を認めない理由なんて私にはない。
右川：誰もが初心者から始まるっていうのを俺たち忘れてた気がする。俺たちも日々努力。
河内：人を外見で判断するべきではない。そういう意味で、私たちはまだまだダメ。先輩方はきっと、大岩くんの内面まで見れているんだと思う。
鈴木：純粋に、本堂先輩の支えにきっとなると思うから。
戸口：低音が充実することで、ナナコウはもっと良くなるから。

秦野：素質があると思う。いま拒否するなら、それは彼の可能性を否定するのでは？
日高：大岩くんが入れないなら、俺辞める。元初心者として耐えられない今回の件は。
松尾：反対する意見がない。
三宅：バスパートの練習風景、見たことないの？

正当な意見もあれば、辛辣なものもある。暗にキツいことを言っているメンバーもいる。優輝は黙ってそのノートを見続けた。
「で？　反対派の意見は？」
「うん……。まず、加藤の意見からなんだけど」
優輝は愛実の出来事をとつとつと話し始めた。

「もしもし？」
谷　未来は突然かかってきた電話に目を丸くした。いつもはメールでのやり取りがほとんどの愛実から、電話がかかってきたのだ。
「どうしたん？　珍しいね電話なんて」
「うん……」
未来はなんとなく、何かがあるとすぐに察知した。愛実は声にそのときのテンションがすぐに出てくるのだ。
「何？　言うてみてよ」
「あのね……私たちの学年に途中入部の子が来て。チューバなんだけど、ちょっとまぁ初心者だし、音とかキツい部分があるなぁと思って」
「ふむ……で？」
「佐野先輩たちの学年は全員一致で彼の入部を認めたの。でも、私たちの学年で意見が割れちゃって……」
「まぁ、人数多いとあるよね、そういうこと」
未来はつけていたテレビを消した。話の雰囲気としては、周りの音は消しておいたほうが良いと彼女なりに考えたからだ。ところが、

母親が洗い物をする音が今度は気になって仕方がない。結局、暖房がついていない自分の部屋へ震えながら入った。
　暖房のスイッチを入れたりする間にも愛実は話を続けるので、未来は遮ることなく聞き続けた。
「事情はだいたいわかった」
「未来はどう思う？」
　未来は間髪入れず答えた。
「そりゃダメよ、めぐ」
「え？」
「めぐらしくもない。これくらいもわかんない？」
「なんで！？」
「なんでも何もないわ」
　未来はクッションをギュウッと抱きながら話を続けた。
「めぐ。あなた、去年の４月、入学した頃言ってたじゃない。春樹先輩だっけ？　その人がユーフォ初心者のあなたをとっても優しく教えてくれるって」
「うん……」
「いまめぐ、そんな春樹先輩に頼りきらないといけないほどの初心者？」
「……。」
「知ってるよ～私。今度『エル・カミーノ・レアル』でソロ吹くんでしょ？」
「な、なんで未来がそれ知ってるの！？」
「泰徳から聞いた」
　泰徳。竹林　泰徳は佐野　翔と幼なじみであるという言葉がすぐに愛実の頭を通過していく。つまり、翔から泰徳へ、そして未来へとその話が伝わっているのである。まるで連絡網のような状態だ。
翔に迂闊に秘密話などできないと愛実は思った。
「最初の頃思い出してよ。ユーフォとボーンは根本的な部分から違うでしょ？　楽器が変わってオロオロしてるめぐを、春樹先輩は邪

険にした？」
「ううん……」
春樹の優しい声。失敗しても嫌な顔一つしない顔。ありありと思い出せる。
「だったら、大岩くんをそんな風に邪険にしちゃ、失礼じゃないの？　大岩くんって子が、１ヶ月でＢ♭（ベー）の音階を吹けるほどになったんでしょ。それなりに安定した音で。まぁ、私直接その音聞いたわけじゃないからわかんないけど」
「うん……」
「誰でも最初は初心者だよ？　私だって、泰徳だって、佐野先輩だって、朝倉先輩だって、あなたの好きな春樹先輩だって」
「ちょっとやだぁ！」
未来が電話の向こうでクスクス笑う声が聞こえる。愛実はいつのまにか真っ赤になっていた。
「とにかく、まるで自分たちが初めからいまみたいに上手だったみたいな考え方は捨てて、反対してる人たちで考え直してみたら？」
「……。」
「ま、それで結果がどっちになっても、それはナナコウメンバーの出した結果なんだから、私はどうこう言わない」
「……うん」
沈黙が続いた。
「それじゃ、切るね？」
未来からそう切り出してくれた。
「うん。ありがとう」
「じゃあね」
未来は電話を切ってからため息を漏らした。
「結構重い話だったな……」
少し迷った。この話、泰徳にするべきかどうかで。迷った挙句、今回は言わないでおくことにした。翔に聞かれると事態はますます混乱しそうだったからだ。

「頑張れ、めぐ」

「というわけで、この話を聞いたほとんどがその意見に賛成って形になったんだ」

「あ……そ、そんな簡単に？」

「うん」

意外とその未来という女の子の話が強烈だったのか、反対派の意見はしぼむように少なくなったという。しかし、優輝の言葉が少し引っかかった。

「ほとんど？」

「う、うん……」

優輝は気まずい表情を浮かべた。

「ほとんどってことは、賛成してない子、まだいるんだよね？」

「うん……」

「誰？」

はるかは単刀直入に聞いた。優輝は小さい声で「ヒロ」と答えた。

「そっか……。冷静な顔してまだ自分の意見しっかり持ってるんだ……」

そういうとはるかは急に携帯電話を取り出した。

「え？　西嶋？」

「もしもし！？　あたし。西嶋よ、西嶋！　なんで同じ中学卒業なのにあたしの声も覚えてないのよ！　はぁ！？　登録してない！？　じゃあこの電話終わったら即行でしなさい。わかった！？」

店中の視線がはるかのいるテーブルに集中する。優輝は恥ずかしくなって「もうちょっと静かにしろよぉ」と言うが、はるかの耳にはもちろん入らない。

「いま電話出れるんだから、時間あるよね？　あるよね！？　今すぐ大井戸公園行って。何？　寒い！？　男の子がそんなんでどうすんのよ！　いい？　あたしも今から行くから。来ないと怒るからねホント！」

一気にまくし立ててから、はるかはカバンにノートを押し込んで席を立った。
「ゴメン。あたし今から大井戸公園行く」
「えぇ！？　なんなんだよ、急に」
「これ、ドリンクバー代。じゃあね！」
「ま、待てよ俺も行く！」
優輝は慌てて会計を済まし、はるかの後を追った。

第２２２話　１年生の崩壊（中－２）

「ったく……西嶋のヤツ。こんな時間に寒い場所呼び出してくれちゃって」
洋之は上着を羽織ってマフラーに手袋もしてつくし野川沿いに立っていた。
「ックシュ！」
はるかに呼び出されてからはや２０分。午後８時半を過ぎて川沿いを歩く人の姿もまばらになってきた。はるかが来る気配はない。
その時だった。
ぶぉ～……。
「なんだ？」
蛙の鳴き声のような音が聞こえてきたのだ。洋之はもう一度耳をそばだててみる。
ぶぉ～……。
「蛙……？」
そっと近寄ってみると、茂みの向こうで何かがゴソゴソと動いた。思わず大声を出しそうになったとき、はるかと優輝が後ろからそっと洋之の肩をつついた。
「いつの間に……！」
「それより、見たでしょ？」
「アイツ、ホントに毎晩こんなことやってんの？」
「そうよ」
「初めに見たのは誰だ？」
「佳菜ちゃん」
「……なんでだ？」
洋之が呟いた。
「なんでって、何が？」
「なんでアイツ、こんな場所でマウスピースだけ持って帰って吹い

てるんだ？」
「そりゃ、チューバなんて持って帰って練習できるような場所ないからでしょ」
「それもそうか……」
マウスピースを延々と吹き続ける智志を3人はただジッと見つめる。
「あ」
突然優輝が小さくだが声を上げた。
「何」
「大岩のヤツ、風邪引いて今月初め休んだだろ？　それってもしかして……」
「この練習のせいかもね」
「……。」
ガサゴソと洋之がカバンの中から何かを探し始めた。
「ちょっと。静かにしてよ、見つかるじゃない」
はるかが制したが、洋之は無心で何かを探し続ける。
「あった」
「何？」
優輝が覗き込むとホッカイロが目に入った。
「ホッカイロ？」
「寒いじゃん」
そういうと洋之はブンブンとカイロを振ってから智志のほうへと歩き出した。
「わっ！」
突然智志の頬に暖かい何かが触れたので、思わず智志は声を上げた。振り向くと、洋之がニコニコしながらカイロ片手に立っている。
「冨岡じゃん」
「何、お前。いっつもここで練習してたんだ？」
「ま、まぁ……練習というか……」
「練習以外の何物でもないだろ」

「ん……」
智志は特にハッキリと答えない。洋之は隣にそっと座った。
「で？　この間風邪引いたのは……」
「この練習が原因」
智志は顔を赤くして小さい声で答えた。
「なんだよ……なんかお前一人だけで頑張ってさ」
「だって、俺たぶん1年生に好かれてないし」
洋之と優輝の顔が明らかに驚いたものへ変化した。
「だから、頑張らないとダメかなっと思ってちょっと頑張ったら、一瞬で風邪引いた」
智志が屈託のない笑みで笑う。
「やっぱ複雑だよな。急に俺みたいな不良が入部してきて、しかももうすぐ皆に後輩ができる時期にこんなヤツが舞い込んできてさ。迷惑なのはわかってたけど……みんなの演奏見てたら本当に楽器やりたいって思ったんだ。これ、マジで」
「……。」
優輝とはるかは洋之たちの後ろで黙って話を聞いていた。
「嫌がられてるのは薄々感じてた。加藤とか、きっと俺のこと大嫌いだぜ？」
優輝の胸がドキッと高鳴った。事情を知っているだけに辛い気持ちでいっぱいだ。
「でもさ、俺はこんな程度じゃ諦めないよ？」
「……。」
洋之は特に反応しなかったが、智志は淡々と続ける。
「きっといつか、皆に認めてもらえるように頑張るから」
「……うん」
洋之はどう返していいかわからなくなり、すっかり黙り込んでしまった。
「そんな顔すんなよ～」
智志は暗い顔をしている洋之の肩をつついた。

「俺、頑張るから冨岡も頑張れよ？」
そう言って智志は立ち上がった。
「じゃ、俺そろそろ帰るよ」
「あ……大岩！」
「何？」
「明日……部活来るよな？」
「当たり前だろ！　じゃーな」
「うん！」
洋之、はるか、優輝の3人は走っていく智志の背中を見送りながら、彼の強い意志にそれぞれ頭の中で考えをめぐらせていた。
「……明日」
優輝が言った。
「改めて全員で……アイツを迎えようよ」
「そうだな……」
はるかは洋之と優輝がそう言ってくれたことできっと、大きく何かが動くと確信した。

第２２３話　１年生の崩壊（後）

「はぁ……」
智志が突然ため息を漏らしたので、拓真と春樹が心配そうに顔を覗きこんだ。
「どした？」
「いえ……なんでも」
「ないっていう顔じゃないよ、それ」
春樹が指摘すると、智志の顔が真っ赤になった。
「わかります？」
「大岩くん、顔に出るしな」
拓真が笑うと、智志はますます赤くなった。
「それで？」
拓真は楽器を降ろして真剣な顔つきになる。
「何に悩んでるの？」
「……。」
「言っちゃいなよ。言ったら、楽になるよ？」
「けど……」
「言わなかったら後々、ややこしいことになるかもしれないし」
「先輩たち、経験あるんですか？」
「まぁね。こっそり部室に忍び込んで練習したことあるけど、あの時はちょっとややこしかったかな。まぁ、そんな事件ってほどじゃないけど」
拓真が懐かしそうに笑いながら言った。
「そんなこともあったねぇ」
春樹もクックッと笑う。
「ま、言いづらいこともあるかもしんないけど、ハッキリ言ってくれないとやっぱりわからないことってあるでしょ？　だから、遠慮しないで言ってよ」

「はい……」
智志にとって、言うにはかなり勇気のいる言葉だった。けれども、黙っていると自分の中で何か、抱え切れないものになりそうで怖かった。智志は思い切って、言った。
「俺……1年生の皆に嫌われてるんですかねぇ……」
「何でそう思う？」
「だって……」
智志は言葉を遮って席を外している愛実の椅子を見つめた。愛実は今日、練習に顔を出していない。
「みーやん。めぐ、休みだっけ？」
「あれ？　春樹先輩が知らないんですか？」
「う、うるさいな！　学年違うからわかるわけないだろ！？」
「そうですか。でも俺、今日は加藤と会ってないのでわかんないです」
「そっかぁ……。でもなんでメグが来てないので嫌われてるって思うわけ？」
「いえ。加藤だけじゃないんです。小林と中野が俺の顔を見るなり慌てて隠れたり、富士原と瀬戸が逃げたり……なんか露骨に俺を避けてるっていうか」
ククッと亮平が笑ったので智志が怪訝な顔で見つめる。
「いや、なんでもない。ゴメン」
「うーん……まぁ、大岩の場合先入観みたいなのがあるんだろうな」
「先入観……」
「やっぱその……まぁ前つっぱってた感じがあるからさぁ」
「つっぱってたって……20年前の不良じゃないんだから」
春樹が苦笑いする。
「でもまぁ、ある程度絆ができてきてた1年生の中に急に飛び込んだわけだし、急に皆と仲良くなれたら苦労しないよ！」
春樹がバシッ！と智志の背中を叩くと、智志も少しはにかんだ。

「じゃ、お先！」
「また明日～」
「お疲れ様です！」
春樹と拓真が仲良く帰っていった。最近、智志は恭一が帰るギリギリまで練習させてもらっている。そのことを知っているのは翔（鍵閉めのために残ってくれている）と陽乃（翔を待っている）くらいである。
「おっ。まだやんの？」
「佐野先輩」
「一所懸命なんもえぇけど、寒いんやし体調崩さんようにしぃや」
「はい。でも、俺みんなに比べてずっとヘタだから頑張らないと」
「そっか……。練習しすぎてバテんようにはせなアカンで？　奏者は、自分の体調も含めていろいろ考えんとアカンからな」
「はい！　あ……じゃあちょっと寒いから上着取ってきます」
急に智志がそう言って部室に入ろうとしたので、翔が大慌てで後を追った。
「えぇやんけ！　オレの上着課したるやん！」
「え？　でもすぐそこにあるのに……」
「まぁまぁまぁ！　練習、すんねやろ？　なるべく無駄な時間割かんほうがえぇやん！」
「はぁ……まぁ、そうですね」
「はい！　戻った、戻った！」
その後、翔にいろいろアドバイスをもらいながら智志はロングトーンやスケール練習を繰り返した。
「あ……もう7時半」
音楽室の時計は7時半を過ぎてきた。
「そろそろ帰るか？」
「はい」
「おなか、空いてへん？」
「おごってくれるんですか！？」

「世の中そんな甘くないわ！　帰ったらご飯おいしいから、楽しみにしとき」
「チェーッ。ちょっと期待したのに」
「ハハハ！　んじゃ、ま、後は頑張れ」
「……？」
翔は意味深な言葉を残して音楽室を出て行った。それからガタガタと何回か荷物を取る音やドアを開け閉めする音が聞こえた。智志は特に気にも留めず、片づけを続ける。
急にガラガラと音楽室のドアが開いたので振り返ると、陽乃がヒラヒラと手を振っていた。
「あ……先輩。あ、佐野先輩待ってました？」
智志が申し訳なさそうに聞くと、陽乃は「うぅん。ちょっと所要で残ってただけ」と笑顔で答えた。
「そうなんですか。遅いから、気をつけてくださいね」
「大岩くんもね！　じゃ、また明日！」
陽乃がバタバタと音楽室を出てから、智志は楽器をまだ慣れない様子で持って部室へ向かった。
「行ったか？」
翔が小声で陽乃に聞く。
「いま入った」
「……よし、成功や」
「じゃあお邪魔虫は」
「帰りますか」
陽乃と翔は目を合わせて音楽室最寄りの階段を降りていった。その背後で、クラッカーの音が響く。

「え……」
智志の目の前にクラッカーの音が響き、様々な飾りがブワァッと舞い散った。
「大岩智志くんの～！」

さゆりが叫ぶ。
「入部にあたりましてー！」
優輝が引き取った。そして、駿が叫ぶ。
「1年生の歓迎パーティーを開きまーす！」
「……。」
智志は呆然と立ち尽くしている。
「大岩くん！」
みゆきが歩み寄る。
「はい、これ！」
「これ……」
電子メトロノームだった。
「冨岡くんと富士原くんが選んでくれたんだよ。大岩くんの熱い性格にピッタリな赤色」
「……。」
「それから、これも」
愛実が渡したのは大きなクロスだった。
「チューバは大きいからね。地面にじか置きとかしたら本堂先輩に怒られるよ？　だから、このクロスで地面に……あ、外で吹くときだけどその時に使ってくれたら嬉しいな」
「あ……」
アリガトウ、と言いたいのに言葉が出ない。言葉が出る代わりに、ポロッと涙がこぼれ落ちた。
「なんだよー！　泣くなよ、大岩ぁ！」
駿が智志の首に手を回した。
「泣いてねぇよ！」
「ウソつけ！　ほら、ハンカチ貸してやるよ～」
「いらねぇよ、バカ！」
「はいはいはーい！　じゃあ乾杯しちゃおーもう！」
はるかがアップルジュース片手に大声を上げて音頭を取る。
「はい、かんぱーい！」

「かんぱーい！」
翔と陽乃は玄関でその歓声を聞きながら笑顔で学校を後にした。

第２２４話　突如舞い降りた話

「え？　ソロ……コンテストですか？」

恭一の言葉に陽乃と翔はポカンとした表情を浮かべた。

「そう。全日本中学生・高校生管打楽器ソロコンテスト。全国の社団法人日本吹奏楽指導者協会（ＪＢＡ）９支部の地区代表選考会の結果選ばれた中学生・高校生５６名が、管楽器と打楽器の演奏力を競う大会なんだけど、ウチの高校もチャレンジしようかと思ってな」

「えらいまた急ですね」

「申し訳ないとは思うんだけど、やっぱり今年のコンクールで県大会、支部大会と勝ち進んでいくためには個々人の技能向上っていうのが必要だと先生は思うんだ。そこで、やっぱり一人ひとりの意識を高めるという意味でも、この大会に出場する意義はあると思うんだ」

「……そっか」

陽乃がブツブツと一人で納得している横で、翔はいまひとつ納得が行かないようだった。

「先生。それって、全員が平等に演奏を評価してもらえますか？」

「どういう意味だ？」

「どういう基準で、選考するんですか？　いちおう地区大会、県大会、支部大会とあるわけでしょ？」

「それはもちろんだ」

翔がますます不服そうな顔をした。

「やったら、全員が出れるわけじゃないでしょ？　それやのに、全員がチャレンジするんですか？」

「校内予選をする」

「いつですか？」

「２月２３日の金曜だ」

今日が１２日。あと１０日ほどしかない。

「なんでそんなギリギリに言うんですか？　それに、合同演奏会だってあんのに……」
「先生も急な予定を組んだことは申し訳ないと思ってる。ただ、心配しなくても楽器で選考に差が出るようなことはしない」
「どうするつもりなんですか？」
「校内予選での審査員は5名の予定だ。先生に三田嶋さん、校長先生、佐野のお母さん、それと三河だ」
　翔にはなぜ校長と自分の母親が審査員に選ばれたのかが理解できなかった。
「なんでウチの母と校長先生が審査員なんですか？」
「それは、吹奏楽関係者ばかりだとどうしても楽器の元のイメージとかが付きまとうだろう？　チューバは伴奏楽器だとか、打楽器の特に鍵盤楽器は響きがどうしても堅くなるだとか。そういう偏った知識みたいなのがない人に、純粋に音楽を評価してもらおうという意味で、お二方にお願いしている」
「……。」
「まだ納得いかないか？」
　翔は小さく首を横に振った。
「じゃあ、皆にまた連絡しておいてくれるな？」
「いいですけど、先生。オレからお願いです」
「何だ？」
「先生、何でも急に予定入れること多すぎますよ。もうちょっとオレらのこと、考えてくださいね？」
「あ……あぁ。そうだな。スマン……」
「じゃあ、練習に戻りますね」
　職員室から出る翔と陽乃を見送りながら、恭一は頭をかいた。傍で話を聞いていた野球部顧問の宗平と健太が苦笑いする。
「最近、佐野はキツいですなぁ」
「部長としてシッカリしてきたってことなんでしょうけど、以前よりキツくなってる気が私もするんですよね」

「まぁ、あれぐらいじゃないと部長は務まらないでしょうけど」
恭一は少しぬるくなったコーヒーを啜った。
「そういえば先生」
宗平が思い出したように恭一に聞いた。
「3月末の件は、佐野たちに伝達済みですか？」
「おそらく了承は得られると思いますが、今は本番が近いのでもうちょっとしてから話そうかと……」
「また言うのが遅いって言われないようにしないとダメですよ？」
健太が笑いながら言った。
「ハハハ！　確かに。気をつけないとダメだな」
恭一は笑いながらも、自分ののん気さをいい加減直さないといけないと思っていた。

「ソロコンテストぉ？」
その言葉を聞いて顔を思い切り歪めたのは翔の予想どおり、駿と拓真だった。
「やっぱりお前ら二人は絶対嫌そうな顔すると思った」
「だって……なぁ、逢(あい)ちゃん」
「はい……。ねぇ、先輩」
そう言ったきり、二人は黙り込んでしまう。
「とにかく、先生には今後ギリギリにあまり言わんようにしといてくださいとは言いました。今から曲決めとか正直大変とは思いますが、先生もおっしゃってたように個人の技能向上には大きく繋がると思います。なので、校内予選がある23日に向けて、合同演奏会もあるけど頑張ってください」
「先輩……俺はどしたらいいですか？」
智志が不安そうに手を挙げる。
「大岩くんは例外やって。また来年から頑張り！」
「あ……はい！」
「それじゃ、今日は5時半から合奏です。5時からチューニングと

ロングトーンするので、合奏の準備してください」
「はい！」
拓真は毛布を敷いたり椅子を並べる間にも、部員たちが交わす言葉を意識して聞いていた。
「ねぇねぇ、エミリンは何にする？」
由美子と沙希が絵美にソロコンの曲をどうするか聞いているようだった。
「私？　私は……多分だけど『ホール・ニュー・ワールド』かな」
「ディズニーかぁ。いいね、ステキ！」
「そういう由美ちゃんは？」
「あたしも悩んでるけど……今のところ『エリーゼのために』にしようかなって思ってる。サキティは？」
「私は『風のとおり道』かな」
「わぁー！　ジブリかぁ！　いいな、いいなぁ」
3人の会話が羨ましい。拓真はそう思いながら今度は後ろで話す慎也、春樹、徹の会話に耳を澄ました。
「おぉ～！　『大きな古時計』とか……難しいんじゃねぇの？」
春樹はどうやら大きな古時計を吹くようだった。
「伴奏はどうせ橋本先輩に頼むんでしょ？」
「どうせってなんだよ！」
徹のツッコミに顔を真っ赤にする春樹。
「で？　慎ボーは？」
「俺はヘイ・ジュードがいいかなって」
「なんだかみんな、ゆったりしたテンポの曲が多いね～」
「どうしても聴かせる曲が多くなるよな、自然と」
春樹の言葉が拓真には引っかかった。ゆっくりしたテンポの曲が多い。
「だったら……俺はあまり遅くないのにするか」
「テンポが遅くない曲？」

「うん」
合奏後、楽器を片づける翔に拓真は聞いてみた。
「まぁいっぱいあるけど……えぇんか？」
「何が？」
「拓あんのしたい曲、選ばんでも」
「いい。俺、正直自分が伴奏のポジションにしかいなかったから、ソロコンとか言われてもわかんないし」
「そうか……それもそうやんな」
翔はしばらくしてから「ちょっと待ってな」と言って楽譜入れをゴソゴソと触り始めた。3分程度経ってから数枚、楽譜を取り出した。
「これのどれか、演ってみたら？」
出てきたのはトップ・オブ・ザ・ワールド、君の瞳に恋してる、オブ・ラ・ディ・オブ・ラ・ダ。
「どれもテンポ速め？」
「わりとな」
「そっか……」
拓真はマジマジと3枚の楽譜を見比べた。
「何の話ですか？」
駿が興味深そうに顔を覗かせた。
「ソロコンの。曲、どんなのやったらいいかわかんないから、翔に聞いてみた」
「あ、俺も入れてくださいよ～」
「あ、あぁ。えぇんか？　自分でしたい曲選ばんで」
「それがわかんないから困ってるんですよ」
拓真と似たような返答が来た。普段、メロディを吹くことが多い自分にはわからない悩みが彼らにはあるんだと、なんとなくであるがわかった気がした。
「決めた。俺、これにするよ」
拓真は真ん中の楽譜を手にした。

「俺はこれで」
駿はその隣。
「よっしゃ。あ、でもヘ音記号とバスクラ用に読み替えんとアカンけど、できる？」
「俺は大丈夫っす」
「俺……厳しいかも」
「あ、でも拓あんの場合難しい話抜きにして、そのまま読んでくれたらえぇで。音は高かったら下げたらえぇし」
「それでいいのか？」
「とりあえずな」
拓真は嬉しそうに「ありがとう、翔」とはにかんだ様子で言った。
「どいたしまして。頑張ろうな、ソロコン」
「うん！」
「じゃ、もう遅いし片づけて帰ろ？」
「わかった。片づけてくるよ」
以前なら伴奏ばっかりでメロディがほしいとよくボヤいていた拓真が、今はソロで悩んでいる。翔にはそれがなんだか不思議な感じがしていた。
「やっぱ慣れへんことすると、みんな困るんやなぁ」
翔は楽器を磨き始め、不安と期待が入り混じるソロコンテストが少し楽しみになってきた。何か、予想しないことが起きそうで楽しみだったのだ。
「翔、帰ろうよ～」
陽乃の声が聞こえる。
「わかった～！　なぁ、たまには2年生全員で一緒に帰らん？」
「え？　いいけど……どういう風の吹き回し？」
「なんとなくや！　みんな呼んできて！」
「わかった～」
なんとなく、みんなと帰りたい。翔はそんな気持ちに駆られてしまった。

「あぁ……そうか」
この不安と期待が入り混じる感覚。ちょうど、自分が部活を作ろうと決意し、陽乃に声を掛けたときと似ていたのだ。
「また……なんか大きく変わるとえぇなぁ」
翔は宙を握る素振りを見せた。
「また何かがつかめますように……」
翔はそう願い、宙を握り締めた。

第２２５話　思いもよらず

いよいよ六校合同演奏会が明日に迫った２月１７日（金）。突然、部室に愛実の悲鳴が響き渡った。

「ちょっと信じらんないです！　それ、ホントですか！？」

「う、うん……ウソでこんなこと言わへんよ」

翔は愛実の気迫に押されつつも、なんとか愛実を納得させようとしている。

「ちょっと、どうしたの、あの二人」

部室にやって来た由美子が心配そうに陽乃に声をかける。

「うん……それがね」

陽乃は一部始終を説明した。

「え！？　やだ……ホントに？」

「うん。昨日からちょっと様子おかしかったけど……」

「かなりしんどかったのかも……」

そう。愛実が驚くのも無理はない。春樹が本番直前の今日になって、インフルエンザによる高熱で欠席しているのだ。当然、インフルエンザは出席停止。明日の演奏会になどとても出演できる状況ではなかった。つまり、春樹が吹くはずだったソロはもちろん、すべてのユーフォニウムのフレーズが愛実一人にかかっているという事態に陥ったのだ。

「そ……そんなぁ～。あたし、全然ソロなんか練習してないのに……」

「でも、インフルエンザはどないしょうもないやろ？　な、なんとかわかってくれよ～」

「ウゥ……あたし泣きそう……」

愛実はヨロヨロと部室の床に崩れ落ち、寝転んでしまった。

「ちょ、メグ！　そんなトコで寝てないでよ！」

慌しく部室に駆け込んできたのは佳菜と沙希だった。

「ど、どうしたの二人とも」
由美子が目を丸くする。
「緊急事態よ、緊急事態！」
「何が？」
「ノムさん！」
「ノムさんがどうかしたの？」
「インフルエンザ！」
「はぁ！？　健ちゃんまでぇ！？」
これには翔も参ったという表情を浮かべた。明日の本番でソロを吹くはずの春樹と健之佑が相次いでインフルエンザで欠席が決まっている。しかも、健之佑のパートはオーボエ。オーボエを急に代わりに吹ける人など、いるはずもない。
「大ピンチじゃないの！　どうする！？」
フルートパートも急にワタワタし始めた。まったく予想だにしていなかった事態だけに、状況はかなり深刻だ。
「とりあえず、東先生は！？」
「はいはい、ここだここだ」
部室の入口に恭一が立っていた。
「とりあえず全員、音楽室に集合」
「はい！」
音楽室に全員が集まって初めてわかった事実がある。春樹、健之佑以外に2名、姿が見当たらないのだ。
「ねぇ……かなり嫌な予感が……」
陽乃が翔に耳打ちする。
「言うなや！　オレだってそうやねんから」
翔も姿が見えない後の二人に言い知れぬ不安を覚えていた。
「えぇっと……まず、野村と水谷だが、残念ながらインフルエンザによる出席停止で明日の演奏会も出演は無理ということが決定している」
「……最悪」

愛実が大きくため息を漏らした。
「本人たちは這ってでも出るなんて言っていたけれど、ゆっくり休むように先生から言っておいた。それとは別に」
恭一はトロンボーンとクラリネットに目をやった。
「残念だか、吉山と橋本が今日になって高熱を出して帰宅している。先ほど連絡があって、二人ともインフルエンザということがわかったそうだ」
「もぉ～！　どうなってんのよ、春樹ウイルス！」
愛実は憤慨して大声を上げた。ドッと笑い声が起きる。
「おいおい、加藤。何も水谷が原因というわけではないんだから落ち着きなさい」
「はい……」
顔を赤くして座る愛実。恭一は再び真剣な顔つきになる。
「さて、欠席者が４名出たわけだが。トロンボーン、ユーフォニウム、クラリネットは確かに抜ける人員はあるがカバーできるだろう。問題はオーボエだ。これを誰が代わりにする？」
「……。」
誰も答えない。オーボエを急に吹くことなど不可能に近い。
「無理やないですか？　オーボエはかなり難しいし」
翔が小さい声で言う。
「でも、ダブルリードってことでまこっちゃん、どうよ」
順平が誠に白羽の矢を立てた。
「お、おれぇ！？」
誠はブンブン首を振った。
「やだよ俺！　そんな急にソロとか言われても……」
「でも戸口くん、バスーンいっつも一人だからソロなんて今さらビビるところじゃないでしょ？」
「それとこれとは話別だよ、西嶋ぁ」
「そういうもん？」
「お前だって改まってソロって言われると、緊張しねぇ？」

「そ、それはそうかも……」
再び静まり返る室内。
「あの～……」
沙希が手を挙げた。
「はい、大谷」
「フルートパートの誰かが、代わりにフルートでソロをするっていうのは……ダメですか？」
「えぇ！？」
「先輩！？」
由美子と佳菜が大声を上げた。
「やめてくださいよ！　私、そんな急に無理です！」
「でも、音域とか近い感じしない？　同じパート練習してる仲間だし、動きとか表現とかもなるべく同じようにしてるパートでしょ」
「それはそうかもしれないけど……」
「チューバやトロンボーンにはとてもできないことなんだから、やっぱりここは近い楽器の人が助け合ってしなきゃダメと私は思うんだけど……どうかな？」
誠も含めて由美子、佳菜、沙希の４人はしばらく黙り込んで考えた。そして不意に沈黙を破ったのは由美子だった。
「私、やります」
「本当か？　宮部」
「はい」
恭一は由美子の目をしばらく見つめ「よし。それじゃ宮部に任せよう」と言った。
「今から大至急合奏をする。特に宮部、加藤のソロ周辺を中心にやるぞ」
「はい！」
「すぐに準備！」
「はい！」
部員たちはすぐに散らばり、毛布を敷いたり打楽器を準備したり

とそれぞれ忙しそうに動いている。
「由美ちゃん……ホントに大丈夫なの？」
陽乃が心配そうに由美子に聞いた。
「え？　何が？」
由美子が笑顔で振り返った。陽乃はその笑顔を見ると、急に心配が吹き飛んだ気がした。
「なんでもない！　それより……ソロ、ファイトっ！」
「ありがと！　頑張っちゃうぞ～、私！」
「頑張っちゃえ！」
「うん！」
いつまでもウジウジしない。そういうメンバーが揃っていることを、陽乃は思い出した。陽乃も負けてはいられないと思い、急いで楽器を取りに部室へと走った。

第２２６話　トリ！？

「……聞いてた？」
陽乃が翔に聞く。
「いや……初耳？」
慎也も拓真も呆然としている。配布されたプログラムには思わぬ記述がなされていたのだ。

※本日の演奏会は、近日流行しておりますインフルエンザにより北松高等学校が出演を辞退せざるを得ない状況となりました。誠に申し訳ございませんが、本日は５団体での演奏となります。何卒、ご理解ください。６校合同演奏会実行委員会

「つまり……」
「俺たちがトリだ……」
プログラム順はこうなっていた。

＜第１部＞
１：私立風見台中学校
２：七海市立袴田中学校
３：七海市立大井戸中学校
４：私立風見台高校
５：七海市立七海高校
６：七海市立北松高校

＜第２部＞
１：中学１年生・２年生合同バンド
２：高校１年生合同バンド
３：高校２年生合同バンド

「スッゴい不安なんだけど……」
由美子がハァッとため息を漏らした。
「っていうか、インフルエンザここまで流行ってたんだ……」
美里もまるで感染したかのようなテンションの下がりようだ。
「ビックリだよね……」
雪子もうなだれている。それに対して、1年生はやたらと元気だった。
「ねぇねぇ、聞いた!?　あたしたち、トリなんだってー!」
一番嬉しそうなのは梨子。さっきから小柄な体をピョンピョンさせている。
「ホント!?　やったねぇ、梨子ぉ。夢のトリが遂に叶うね!」
同じく嬉しそうなはるか。その隣では徹が状況をいまひとつ飲み込めていない智志に説明をしている。
「トリってそんなにいいのか?」
「まぁ、例えるなら100メートル走のアンカーみたいなものかな」
「それって英雄(ヒーロー)じゃん!」
智志の顔がパァッと明るくなった。
「テンション上がるよなぁ!」
「なんで……あんなにテンション上がるの?」
陽乃にはサッパリ理解できなかった。どうせなら、最後というのはどうしても避けたかった。昔から陽乃は授業で作文を発表したり、自己紹介をするときもなるべく最後は避けたいタイプだった。後になればなるほどハードルが上がる気がするからだ。
「何?　なんで2年はそんなに暗いんだ?」
恭一がビシッと決めた服装で姿を現した。
「もうすぐ本番なのに、そんな様子じゃ先が思いやられるぞ」
「だって先生……。あたしたち、急にトリとかになっちゃったんですよ?」
「あ〜、北松高校が辞退しちゃったからな〜」

「先生はプレッシャーとかにならないんですか？」
「プレッシャー？」
「最後だから、いい演奏しなきゃ！とか思って力んだりしません？」
「そうだな～……」
恭一は虚空を見つめるような顔をした。
「アホちゃうか」
翔の一言に全員が振り向いた。
「プレッシャー感じへん人なんかおらんっつーの。ね、先生」
「ハハハッ！　佐野はよくわかってるじゃないか」
恭一の言葉に全員が意外だ、という表情を浮かべた。
「そりゃあ先生だって緊張するぞ。人間だからな。指揮失敗して、お前らが乱れたりしないかなぁとか、指揮棒吹っ飛ばしたりしないかなぁとか。でも、やっぱり指揮振ってたらそんなこと考えずに、ただただいい演奏を……聴きに来てくださったお客さんに聴かせたい。純粋にそう思うんだよな」
恭一が2年生を一瞥して言った。
「プレッシャーは必要だろうけれど、それに負けるんじゃなくってそれを糧にしないとな」
「……はい」
「よしっ！　頑張るんだぞ、先輩方！」
恭一はそういうとエル・カミーノ・レアルの最後あたりを歌いながら廊下を歩いていった。
「……良い意味で緊張すればいいってこと？」
沙希が呟いた。
「そういうこっちゃ」
翔がハッキリと返した。
「緊張なんかどーってことない。オレらはオレらの演奏聴かせたら、オールオッケー！」
「そだね！」
陽乃が笑顔でうなずく。

「せんぱーい！　そろそろチューニングでーす！」
さゆりが翔を呼んだ。
「おっ、もうそんな時間かぁ！　おーい、全員楽器持って第一楽屋に移動～」
「はいっ！」
翔も声を掛けつつ楽器を持つ。それから譜面を手にした。
「……？」
その手にした譜面入れに妙な感触を感じたので、翔はそっと譜面入れを開いてみた。
「……っ！？」
青い譜面入れの中には、ただただ綺麗な青色が広がる。
（どういうこっちゃ！？）
勢い良く譜面入れを閉め、思い返してみる。
「あっ！」
翔の声に「どうかしました？」と順平が振り返った。
「い、いぃえぇ！　何でも……ないですよぉ？」
「はぁ……ならいいんですけど」
順平は不審そうな顔をしつつ、少し距離が開いた列をつめるように小走りで駆けていく。
（ど、どないしよ……）
冷や汗がダラダラと流れるのが嫌でもわかった。思い当たる節はある。学校で翔は楽譜を山ほど積んで積み込もうとしていたのだが、思い切りひっくり返してしまった。当然、それを見ていた陽乃が「欲張るからだよ！」とかなり憤慨していたのだが、その時に結構な強さの風が吹いて、譜面が何枚か飛んで行ったのだ。
これがますます陽乃を怒らせるハメになったのだが、その時は全部譜面を回収できたと思っていたのだ。しかし、何という偶然というべきか、翔の楽譜だけがそのまま遠くへ飛んで行ったらしく、紛失していたのだ。
「ヤバい……ヤバい……」

違う意味で心拍数が上がる。しかし、もうチューニングの時間で戻ることなど到底できない。
（ヤバすぎる～！）

「フェックシュン！」
七海高校からそう遠くない住宅街の真ん中に位置する病院に来ていたのは、春樹だった。インフルエンザの治療のためになんとか動けるようになった体を懸命に動かしてやってきた。
「うわ……鼻水出た。最低……ティッシュ、ティッシュ……」
しかし、残念なことにティッシュは切らしていた。
「うぉ……最低だ。どうしよ……わぁぁ！？」
急に吹き付ける強風。枯葉が舞い上がり、同時に春樹の顔面に紙がバサッと覆いかぶさった。そしてさらに残念なことに、その紙に春樹の鼻水がついてしまった。
「ちょうどかみたかったからいい……？」
その紙を見て唖然とした。

『Ａｌｔｏ　Ｓａｘｏｐｈｏｎｅ１ｓｔ　エル・カミーノ・レアル』

そして走り書きの字がビッシリ楽譜に書かれており、右上には「七海高校吹奏楽部」の印鑑が押されていた。さらに、右下に「さの！」の字。
「なんで……カケルの楽譜がこんなとこに……？」
春樹はなんとなく嫌な予感がして、熱があるのも忘れて今日の会場へと急いで自転車を走らせた。

第２２７話　史上最大の危機

（どないしよ……どないしよう……！）

ダラダラと背中に冷や汗が流れるのをハッキリと感じ取れるほどに翔は焦っていた。どんどん本番の時間は迫ってくる。チューニング中も緊張のあまり音がなかなか合わなかった。メンタル面が不安定になるとすぐに音へも直結してくるのが翔の問題点だった。翔自身も自覚はしているが、なかなか改善できずに今へ至っている。

「はい、時間です！　次はリハーサル室への移動、お願いします」

「はい！」

係員に呼ばれ、部員たちはリハーサル室への移動を始めた。翔はぎこちない動きで何も入っていない譜面入れを手に取り、先頭に立って移動を始めた。

「先輩」

急にさゆりに呼ばれ、ギョッとした表情でさゆりのほうに振り向いた。

「どうしたんですか？」

「何が？」

「今日の先輩の音、なんか不安定ですよ？」

「そんなことあらへんよ！」

翔はできる限りの笑顔で答えた。

「そうですか？」

「そうそう！　中野さんの勘違いやって」

「それならいいんですけど……」

さゆりはあまり納得してはいないようだったが、そのまま黒靴を取りに靴箱へ向かった。

「どうしよう……」

大きなため息が出る。ひょっとしたら、楽譜ナシでも覚えている部分は吹けるかもしれない。けれども、今まで楽譜を前に置いた状

態で指揮を見ながら吹いていた。チラチラと楽譜を見ることはあったので、まったく楽譜ナシで吹くことなど今までやったことがなかったのだ。

リハーサル室では、やはり愛実と由美子のソロあたりを中心に簡単にさらっただけであった。この部分はなんとか覚えていたものの、それでも若干音が震えてしまった。

「おぉい、佐野～」

恭一に名前を呼ばれてドキッとする。

「はい！」

「珍しくお前が緊張か？　音が不安定だぞ、なんだか」

「すみません……」

「コンクールとは違う緊張があるかもしれないけど、いつもどおりの演奏で頼むぞ。みんなもな」

「はい！」

「それでは、時間です。移動のほう、お願いします」

とうとう本番の時間がやって来た。ただ単に学校に楽譜を忘れただけならまだしも、完全に紛失してしまったのだ。今さらどうしようもない。

「カケル！」

拓真が声を掛けてきた。

「お、おう？」

「頑張ろうな！　みんなで本格的な吹奏楽曲するの、久しぶりだもんな」

「そうやな……頑張ろう」

不自然な笑顔にならないように気をつけた。全員がこれから始まる本番に期待を抱いている笑顔だった。自分はどうなのだろう。下らない不注意で楽譜を紛失しただなんて、とても誰かに言えるものではなかった。

「情けないなぁ……」

胸がギュッと締め付けられるような感覚が襲ってくる。

「カケル～！」
陽乃に呼ばれてますますその感覚が強くなった。いま楽譜を紛失したことを言えば、さゆりもファーストを吹いているのだから見せてもらえるかもしれない。けれども、何とも言えない恥ずかしさがあった。
「何や？」
結局、翔は何も言えないままリハーサル室を後にするしかなかった。
リハーサル室を出てから舞台裏に行くまでには一旦ロビーを通って外へ出て、楽屋入口から入らなければならない。恭一は「楽器を冷やさんようにな」と全員に注意を促す。慣れない動きを見せる智志。ソロの部分を何度も繰り返し指の動きを復習する由美子。翔は落ち着かないまま、楽屋入口からとうとう舞台裏へと到着してしまった。
（もうアカン……）
何も言い出せなかった自分が一番みっともない。翔はみじめな気持ちで風見台高校の演奏を聴くことしかできなかった。

「ねぇねぇ、次、七海高校の演奏だよ！　楽しみだね～」
外では進行役員補助を務める袴田中学校の前田かのこ飯岡好美が仲良く話をしていた。
「やっぱり、私は七海で演奏したいよ～！」
好美がバタバタと手足を動かす。つい1週間前、七海市立の高等学校入学試験が行われたのだ。結果発表は来週の水曜日に迫っていた。好美とかのこも、七海高校で吹奏楽をしたいがために入学試験を受験した。
「だねぇ……。それに、イケメンな先輩多いし！」
「もう！　かのちゃんってば、そればっかり！」
「アハハハ！　バレちゃったかぁ～」
そのときだった。

「ねぇ！　お願いがあるんだけど！」
二人が振り向くと、二人と身長がさほど変わらない男子が立っていた。
「はっ、はい……」
その愛くるしい雰囲気に二人は顔を赤くする。
「その腕章、ちょっと貸してくれない！？」
「えぇ……？　でもこれ、係員用のなので他の人には貸せないっていうか……」
「お願い！」
「その前に、あなたどの学校の方ですか？」
押され気味のかのこの前に、しっかり者の好美が立ちはだかる。
「俺、七海高校吹奏楽部の水谷って言います！」
「え？　七海高校？　次、本番じゃないですか。なのになんで……」
「事情は全部後で話すよ。温かい飲み物後でオゴるし、お願い！」
「……でも、先生に怒られ」
「いいですよ」
すんなりＯＫを出したのは好美だった。
「よっしぃ！？」
「大丈夫よ。私、水谷さんのこと知ってるし」
「え？　俺のこと……知ってるの？」
「はい」
「なんで……？」
「細かいことはいいじゃないですか」
好美は自分がつけていた腕章を取って、春樹に手渡した。
「急いでるんですよね？　早く行ったほうがいいですよ」
「ありがとう！　絶対後で返すから！」
春樹は笑顔で手を振りながら、走っていった。
「ちょ……今の人、カッコよくない？」
かのこが顔を赤くする。
「そりゃあナナコウの人だもん」

「そうだよよっしぃ！　なんであの人のこと知ってるの!?　向こうも知ってるの!?」
「ううん、私だけ」
「どういうこと!?」
好美は笑顔で答えた。
「行きたい高校のパートの先輩情報くらい、ゲットしとかなきゃ！」

「どこにいるんだろ……今の時間なら」
春樹はハァハァと息を荒くしながらあちらこちらを探し回る。さっきロビーで聴こえていたのは『アルメニアン・ダンス・パート1』だった。
「ってことは確か……風見台だから……次が七海ってことは舞台裏か！」
春樹は急いで地下の楽屋から階段を駆け上がり、再び外へ出る。楽屋入口に駆け込むと、廊下で打楽器の準備をしている美里たちが見えた。しかし、打楽器の搬入もあとシンバルのみという状態だった。
舞台裏を見ると、既に着席している翔、さゆり、麻綾、はるかのサックス族と拓真、智志、亮平の姿が見えた。春樹はたくさんいる中学生の進行補助役員に混じって舞台へ出た。翔のそばへ行くと、真っ青な顔をした翔がいた。
「翔」
聞き慣れた声に翔が振り向くと、見慣れた春樹の顔があったので思わず声を上げそうになった。
「な、なんで……」
「静かに！　偶然楽譜拾った。何やってんだかわかんないけど、翔のだろ?」
「う、うん……」
「なら良かった。演奏、俺の分まで頑張ってくれ」
「ありがと」

「じゃ、俺戻って家で寝るわ」
「うん……」
春樹は出ようとして、コッソリ亮平、拓真、智志の後ろを通過して愛実の後ろに立った。声を掛けようとしたが、動揺してもいけないので肩だけ叩いてすぐに出た。
「……春くん？」
愛実はすぐに後ろを見たが、誰もいなかった。気のせいかもしれないと思いつつ、なんだか緊張感が少し解けた気がしていた。
「プログラム５番、七海市立七海高等学校吹奏楽部。アルフレッド・リード作曲『エル・カミーノ・レアル』。指揮は、東　恭一です」
照明が点く。恭一が指揮台の横に立ち、お辞儀をする。
（ありがと……春やん）
翔はいつの間にかいつもの自信が戻ってきていることに気づいた。
（これなら大丈夫や）
恭一が全員に目配せする。最後に翔を見た。いつもの力強い眼差しが向けられていることに気づき、恭一も安堵した。
指揮棒が降りる。七海高校の『エル・カミーノ・レアル』が始まる瞬間だった。

第２２８話　『エル・カミーノ・レアル』

エル・カミーノ・レアル。

エル・カミーノ・レアルとは、アメリカ合衆国はカリフォルニア州を南北に縦断する、大きな国道の別名である。スペイン語で「カミーノ」は「道」、「レアル」は「王」の意味なので、直訳すると「王の道」となる。アメリカには１７６９年、当時スペインに支配されていた、お隣のメキシコから修道士たちが入り込んできた。修道士たちは、道沿いに修道院を建設しながら、北へ北へと進んでいった。「開拓」と近いものがあったとも言われている。彼らの布教活動は、宗教に名を借りた「征服」で、いえば聞こえはいいが、多くのキリスト教（聖フランシスコ修道会）布教進出と同じく、実態は「侵略」に近いものであった。

この時代以降に「北へ北へ」と伸びて行った道……これが、彼らが「エル・カミーノ・レアル」と名付けた道、つまり「王の道」なのである。

イントロで２小節目に急にフェルマータがかかったり、３小節目から「４拍子」と「３拍子」が交互に登場したりする。中間部のゆったりした部分は、スペイン南部の舞曲「ファンダンゴ」を素材に、かなり変形させている。全体構成は、作曲者アルフレッド・リードお得意の「急・緩急」の動きなので、最後は、再び冒頭部分が登場して、華やかに終わる。

実はこの曲、大変に難しい曲なのだ。音量が激しい分、ドンチャカやっていればそれなりにカッコいいようには聴こえるが、実は単なる荒い演奏になるということが往々にしてあった。

翔たちに恭一は常日頃、このように言っている。

「感情を込めろ」と。しかし、それは感情をむき出しにするような演奏をするのではない。この場面では、いったいどのような演奏を心がければよいのか。情熱的なのか、感傷的なのか、はたまた、

楽観的なイメージなのか。曲にイメージをつけること。恭一は伴奏、メロディ、裏メロディ問わずにその意識を強く持って演奏をすること。これを常に注文していた。

指揮が降りると同時にスネア、シンバルの音が会場内に鳴り響く。その後、フェルマータの音がパーン！と会場の奥まで響いた。

「わっ……！」

夏樹と綾音が同時に小声を上げた。

「スゲッ……！」

その後、ホルンの勇ましいメロディ。後を追うようにシロフォンと木管楽器のメロディが聴こえてくる。その後、クラリネットに主旋律が移り、トランペットがミュートを付けて裏メロを吹いている。

かと思えば、陽乃、勇、綾音がミュートを取ってメロディを吹く。愛実一人だけだが、それでも十分な厚みのあるユーフォの音が響く。洋之が間を埋めるようにティンパニで軽やかだがしっかりと響きのある伴奏を奏でる。恵梨のクラッシュシンバルが鳴り響くと同時にいろんな楽器が下降系の動きを奏でる。どの楽器も聞き逃すことのできない音色を奏でていた。

木管楽器が一気に音を降下させ、金管の伸ばしが終わった途端に静かになった。そして、健之佑がいない代わりに由美子のソロが始まる。

「ここ……オーボエのはずやんな」

気になって舞台袖で聴いていた修平が呟く。

「オーボエの子が急遽欠席したから、宮部さんが吹いてるんだって」

陽乃から話を聞かされていた優衣が答える。

「へぇ……。フルートでも綺麗に聴こえるもんやな」

修平は思わずその音色に耳を澄ませた。由美子の透き通った音色が、静かに会場を包み込む。やがて木管楽器が加わり、メロディに厚みが増していく。そして物悲しい雰囲気の調が、優のタンバリンをきっかけに少しずつ雰囲気を変えていく。音の厚みが増していき、サックスの上昇系から下降系へと音が変化する中で、調が不安定な

ものへ移行し、またすぐに明るい調へと移行した。トランペットのメロディが流れ、それがホルンとサックスへと継がれる。そしてゆったりとした雰囲気で最も盛り上がる部分に差し掛かった。やがて、また雰囲気が変わっていき、愛実のソロが始まった。

愛実は自分で嫌になるほど、音が震えていた。すぐにその気配を察知した恭一が愛実のほうを向く。

（もおっと息を深く吸って～）

恭一がそう言っているように愛実には見えた。スゥゥッと息が入る。

（そう！　その調子で。それから、上のエフの音を最高潮に持っていく……それから伸ばしを綺麗に……そう、そうだ）

気づけば、あんなに緊張していたソロが終わっていた。続いて恭一はホルンに指示を出す。

（静かに。けど、安定した音で……）

雪子と順平はまっすぐ、しっかりした眼差しで恭一を見つめていた。完全に3人の世界。伴奏は邪魔をしないようにジッと与えられた音を吹いているのみだ。そして、恵梨と洋之へと恭一は視線を移した。

軽やかなリズム。恵梨のスネアだ。そこへ洋之の美里とはまた違うリズミックなティンパニが聴こえてくる。クラリネットのメロディ、フルートの上昇系の音。クラリネットのメロディはホルンへ引き継がれ、クラリネットとフルートが対旋律を吹く。チューバが加わり、トランペットが加わる。スネアの音は激しくなり、ティンパニが独立した音を響かせる。そして再現部に差し掛かった。

トランペットとトロンボーンのメロディだ。慎也と徹しかいないトロンボーンだが、亜紀が抜けた分をしっかりフォローできるだけのパワーがやはりあった。初心者同士、切磋琢磨できる部分があったのだろう。

チューバの伴奏も序盤と比べると少しレベルが上がっていた。智志にしてみればなかなかしんどい部分ではあったが、拓真の助けも

あり時々音が抜けるものの、初めての大曲を吹きこなせていた。
　さゆりはこのトランペット・トロンボーンのメロディの間にソプラノサックスへと楽器を交換していた。そして彼らのメロディを引き継いで、さゆりを中心に流れるような木管のメロディが始まった。後ろではホルンが対旋律を吹いている。愛実も途中で加わり、しっかりと支える。ホルンがメロディを引き継ぎ、いろんな楽器が加わって厚みを増していく。スネアとティンパニが盛り上がりを作り、低音楽器を除く全員でトゥッティのメロディを吹く。ここからが打楽器族の気合いの入れる場所であった。
　恵梨も音量を上げ、洋之が規則正しい音を叩く。岳彦のクラッシュシンバルが洋之と同時に響く。シロフォンを叩くあずさの動きも軽やかそのものだ。そしてバスドラムの見せ場。優が全身でその音を叩く。洋之がリズムを乱さぬよう、ティンパニを確実に叩く。トランペットとトロンボーンは細かい音が続くが、陽乃たちはこのために何度も練習を重ねてきた。
　金管楽器全員の伸ばし。木管楽器のトリル。全員の息が合わなければできない業。４名が不在ではあるが、全員の息を合わせて創りあげた『エル・カミーノ・レアル』が遂に幕を下ろした。
　バン！
　一気にホールが静まり返った。
　数秒間、沈黙が続き、次の瞬間には割れんばかりの拍手が起きた。
　恭一が汗を拭い、部員たちに起立の指示を出す。恭一が深々とお辞儀をすると、ますます拍手が大きくなった。
　幕が下りるとすぐに舞台転換。そして第２部へと移行する。
「カケル！」
　舞台袖で陽乃が翔を呼んだ。
「お疲れ！」
「お疲れ！　やっぱ翔の音ってよく響くね～。さゆちゃんのソプラノもすごかったし！」
「へへ……なんか照れます」

さゆりがはにかんだ笑みを見せた。
「次は2部だね。2部もあたし、楽しみにしてるよ」
「お前こそ、えぇ音聴かせてくれよ?」
「まっかしといてー」
二人は嬉しそうに並んで歩いていく。その後ろで、不安そうな顔をしている智志に拓真が声を掛けた。
「サト!」
「はっ、はい!」
明らかに緊張している。
「大丈夫だよ。俺がいなくたって、サトなら十分やってけるからさ」
「はい……」
「頑張れ」
「……はい!」
次の部は学年ごとに演奏をする。中学1・2年生の部、高校1年生の部、高校2年生の部に分かれているため、拓真と智志は必然的に別々になった。智志にしてみれば、初めて拓真のいない本番となる。緊張もひとしおだった。
「よしっ……がんばれ、俺」
智志はそう呟くと、いったん控え室へと戻っていった。

第２２８話　『エル・カミーノ・レアル』（後書き）

エル・カミーノ・レアルの由来などに関しましては下記サイトを参照させていただきました。『吹奏楽マガジン』　ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｂａｎｄｐｏｗｅｒ．ｎｅｔ／ｓｐｅｃｉａｌ／ｔｏｇａｓｈｉ｜ｓｐ／０７｜ｒｅｅｄ／０５．ｈｔｍ

第２２９話　身内の演奏

「……どないや？」
翔がそっと拓真に聞いた。
「顔が強ばりすぎてる。ガッチガチ」
拓真はガチガチに固まった顔をした智志を見てため息をついた。
「まさか一番外に出るとは思ってなかったんだろうな……」
七海高校の吹奏楽部はロータリーチューバという種類のチューバを使っている。智志も初心者とはいえ、そのチューバを吹いていた。ところが、今回出演している他のチューバ奏者はピストンチューバを吹いているのだ。楽器のベルの向きが異なるのだが、ロータリーは客席側にベルが向いているのに対し、ピストンは比較的舞台側へとベルが向いている。そのため、ロータリーチューバ奏者が舞台の中ほどへ座るとベル同士がぶつかる可能性があるのだ。よって、必然的に智志は一番客席側の席へと座らざるを得なくなったのだ。
「あーあぁ……」
拓真は見ていられないとばかりに手で目を覆った。緊張で手が震えた智志は舞台上で思い切り楽譜をぶちまけてしまったのだ。
「俺……楽屋にいるわ」
フラフラと覚束ない足取りで拓真は楽屋のほうへと移動してしまった。翔と慎也は顔を見合わせてため息を漏らした。
「なんていうか……身内の演奏っていうか、知ってる顔の演奏聴くって緊張するよな」
慎也は徹のほうを見た。徹も智志より経験があるとはいえ、初心者であることに変わりはない。徹の顔も緊張でいっぱいだ。亜紀がいないため、余計に緊張が増しているのだろう。
次が２年生の本番であるにもかかわらず、由美子と沙希は客席の最前列で演奏を聴こうとしていた。
「佳菜ちゃんはピッコロ吹くのかな？」

「どうだろ。ピッコロ奏者がもう一人いるって言ってたし……。ピッコロは基本的に一人でいいからなぁ。特にオリジナルとかクラシックの場合」

今回、高校1年生の合同バンドはオリジナル曲はロバート・W・スミス作曲『天空への挑戦』を、ポップスは『スパイスガールズのヒットナンバー』を演奏する予定だ。天空への挑戦では正直、ピッコロが目立つような部分がないため二人でピッコロを演奏するなど考えられなかった。

恭一が入ってきた。沙希と由美子は一瞬恭一のスポットライトに当たる佳菜のほうを見た。

「あれ!?　ピッコロ奏者って佳菜ちゃんしかいないの?」

「バカ!　そんなわけないじゃない!　佳菜ちゃんが吹くんだよ〜!　やったぁ」

沙希は自分の後輩がピッコロを手にしていることに少し感動を覚えていた。

「もうすぐ始まるよ」

一方、舞台の上では普段の倍以上に緊張している部員が3人いた。順平、智志、徹の男子3人だ。順平は冒頭にソロがある。徹は亜紀が欠席のため、智志は先輩のいない舞台に初めて立った方である。そして七海高校以外の部員でも想定外の出来事に冷や汗を流している部員がチラホラいた。

その一人が風見台高校のオーボエ奏者・崎山（さきやま）　利緒（りお）であった。本来なら中盤にあるオーボエのソロは健之佑が吹く予定だったのだが、インフルエンザによる欠席で二人しかいないオーボエは彼女のみとなってしまったのだ。

「崎山さん」

佳菜が小声で彼女を呼ぶと、利緒はチラッと目をやった。

「大丈夫。頑張ってね」

「……ありがと!」

1年生バンドは恭一が指揮をする。徹たちにとってはそれがせめ

てもの救いだった。いつもどおりの指揮を見て演奏できることで安心感はかなり違う。

「プログラム2番。高校1年生合同バンド。曲目はロバート・W・スミス作曲『天空への挑戦』、『スパイスガールズのヒットナンバー』です。指揮は、七海高校吹奏楽部顧問、東　恭一です」

照明が灯る。

（うわ！）

佳菜は真正面に沙希と由美子の顔を見つけて目を丸くした。

（ガ・ン・バ・レ！）

二人は同時に口パクで佳菜にそう言った。佳菜は小さくペコッとお辞儀をした。

ウインドチャイムと同時にホルンの勇ましいソロ。それを受け継ぐトランペット・トロンボーン。優はウインドチャイムとグロッケンの間を行ったり来たりの繰り返し。舞台袖から見ていた美里が「ちょっと楽器の割り振りに無理あるんじゃない？」と文句を言っていた。

「仕方ないじゃない。人数が足りないのよ、きっと」

隣で言うのは絵美。

「サスペンドシンバルがクラッシュシンバルの代わりしてる部分ぎょうさんあるしな」

「うぉ、佐野くん」

美里たちの間から顔を出したのは修平だった。

順平が一番心配していたソロの部分が始まる。雪子は気が気でなかった。ギュッと胸の前で手を握り締めて音を聴く。フルートやオーボエ、クラリネット、バスクラリネットなど木管楽器の中に順平の音が響く。そして突然変わる雰囲気。トランペットのメロディとサックス・ホルン・フルートが掛け合う。テナーサックスの伴奏がフェードアウトし、ビヴラフォンが密かになり続ける。ずっと規則的な流れを演奏するはるかたちテナーサックス奏者はズレが起きないよう、ずっと恭一を見つめている。優も同じように上目遣いにな

っているが、指揮を見つめている。
アルトサックス、クラリネット、オーボエのメロディは恭一が求めるものらしい音に仕上がっていた。クレシェンドと共にトランペットとチューバのメロディライン。智志の楽譜に指番号がいっぱい書かれていたのはこの部分だった。
楽屋ではやはり気になっていた拓真がビデオカメラで映る舞台の様子を見ていた。たまに指が追いつかなくなって絡まるような素振りを見せる智志。それでも、必死に演奏しているのは遠くからでも十分わかった。ティンパニも少々複雑な動きを見せるが、洋之にはそれほどのものでもなかった。
フルート、アルトサックス、テナーサックス、ユーフォニウムがメロディを引き継ぐ。あずさがボンゴを後ろで叩いている。静かだが、音はハッキリと聴こえていたのだ。サックスは低音がつぶれやすいだけに、さゆり、麻綾、はるかの3人はここを頻繁に合わせていたのを翔は思い出した。
再び音が大きくなって、優のウインドチャイムをきっかけに静まり返る。テナーサックス、ユーフォニウムのメロディは流れるように演奏することを求められていた。愛実はいつもこういうソリのような形になると音が震えていたが、今日はなぜか安心して吹けていた。
そして再び音が大きくなる。この『天空への挑戦』は曲の緩急が激しい曲でもあるのだ。ティンパニから洋之が初めて楽器を持ち替えた。ギロだった。ボンゴはスネアを演奏していた後藤梨未に代わる。4分の5拍子という複雑な拍子へと変わる。この曲では5つある音を3つと2つに分けて吹くのが原則となっていた。ギロもそれに合った拍子を刻まないといけない。梨未とは何度もここを合わせてきた。一方、誠と駿たち木管低音楽器もここは何度も叱られていた。フルートやオーボエのソロの雰囲気をぶち壊すような伴奏だと何度も叱られていただけに、緊張の色が隠せない。
利緒のソロが始まる。誠と駿は体を小さくして伴奏を吹き続ける。

駿も誠も「そのまま」と言いたげな恭一と目が合った。一番静かになる部分では駿も抜け、誠だけが伴奏を吹く。伴奏といっても、下降系の音がメロディと一緒に動くので緊張度は増すばかり。そこを乗り越えると恭一が満足そうに笑ったので誠の緊張感が一気に吹き飛んだ。

そして再現部。ここに来るといつのまにか部員たちの顔から緊張の色は消えていた。

「サト……大丈夫そう？」

「なんや。やっぱり心配になったんか？」

急に後ろから声がしたので翔が振り返ると、拓真が覆いかぶさるように立っていた。

「うん。だって……まぁ、後輩だし」

「大丈夫や。アイツ、最初チョロッと失敗したけど、今は楽しそうや」

「うん……！」

フィナーレを迎える。ホルン、トランペットで何度もメロディを吹き、ティンパニが複雑な音を奏でる。チューバが合間合間に勇ましい音を吹く。智志はここを何十回も練習したのだが、いつも失敗していた。しかし、今日は最後まで見事に吹ききったのだ。

頂点に達した部分ではトランペットとトロンボーンのハイトーンが待っていた。徹が最も心配していた部分だが、チューバがそれまでに強烈な印象を与えるメロディを吹いたがために、徹たちのテンションも上がって何の苦もなく高音が出た。

クラッシュシンバルの音が響き渡り、演奏は見事に終わった。と同時に拍手が沸く。

「すっごーい！　1年生の演奏、すっごーい！」

由美子が思わずスタンディングオーベーションを一人でやってしまった。隣で沙希が「恥ずかしいよ！」と止めるが、由美子は聴く耳を持たなかった。

『スパイスガールズのヒットナンバー』が終わり、恭一がお辞儀

をすると同時に照明が暗転し、移動が始まる。由美子と沙希、雪子は慌てて客席から出て舞台袖へと移動する。
「どこ行っとってん！」
翔が少し怒りながら3人を呼ぶ。
「ゴメン！　客席行ってた」
「早く打楽器の入れ替え手伝って！」
拓真たち大型楽器は椅子の位置調整に入る。うまく智志の近くへ行けた拓真が声を掛けた。
「サト」
「先輩……」
「うぉ！　どうしたんだよ！？」
堰を切ったように智志が泣きだしたのだ。
「わかんないです……わかんないけど……なんか……」
「うん……。でも、俺もなんとなくその気持ちわかるかも」
「ホントですか？」
「またさ、バスパートでお疲れ会、しない？」
「いいっすね、それ」
横から亮平が入ってきた。
「私も賛成」
愛実が入ってくる。
「春樹も呼ぶけど？」
「もちろんでしょ」
亮平はニコッと笑って答えた。
「よし。じゃ、移動早くしないとな」
「はい！」
「また後でな！」
「しっかり聴いてますね！」
智志がようやく笑顔でそう言った。
いよいよ、高校2年生の部が始まろうとしていた。

第２３０話　『Ｔｈｅ　７ｔｈ　Ｎｉｇｈｔ　ｏｆ　Ｊｕｌｙ』

「本日最後のプログラムとなりました。最後を飾りますのは、各高等学校２年生が集まって出来ました合同バンドによる演奏です。吹奏楽オリジナル曲『Ｔｈｅ　７ｔｈ　Ｎｉｇｈｔ　ｏｆ　Ｊｕｌｙ』、ポップス曲『アメリカン・グラフティ６』、２曲続けてお聴きください。指揮は七海市立北松高等学校吹奏楽部顧問、塚田（つかだ）　典弘（のりひろ）です」

舞台照明が灯る。

（うわぁ……思ったより広いんだ）

陽乃はクリエイトホールの広さを改めて認識した。何度か訪れたことはあったが、その頃はホールの広さを見て何かを感じるほどの余裕がなかった。それだけ、自分に余裕ができたということなのだと思ってあたりを目だけ動かして見渡した。

夏樹や由利たちがどこにいるのかなど、見当も付かない。ただ、聴きにきてくれていることは確実だったので、すぐに典弘のほうへと視線を戻した。

「朝倉さん」

北松高校のファーストトランペッター、上杉（うえすぎ）　唯佳（ゆか）が小声で話し掛けてきた。

「お互いソロあるけど、頑張ろうね」

「うん！」

典弘の指揮棒が上がる。全員が楽器を構えた。

パァン！

スネアのリムショットの音が響いた。今回、美里はクラッシュシンバルを中心に担当しているので、緊張するスネアを避けれたと最初は喜んでいた。ところが、実はクラッシュシンバルのほうが失敗できない場所が多いため、逆に緊張する場所が多いとぼやいていた。

トランペットにしてみれば苦にならない音域で伸ばしを吹いて、

チューバやトロンボーン、ユーフォニウムといった低音楽器がメロディを吹く。

テンポが早くなり、木管楽器のメロディが流れ始めた。典弘曰く、この部分は七夕の日の夕暮れ時をイメージするように、とのことだった。七夕を控えて少し浮き足立った町のイメージ。陽乃たちにはわかりやすいイメージだった。

「綺麗な曲……」

演奏を聴いていた綾音が目をキラキラ輝かせた。

「確かに……すげぇな」

夏樹も目を丸くしてこの曲を聴いていた。

同じ頃、表で進行補助をしている飯岡　好美ら二人も目を閉じて演奏に耳を澄ませていた。

「そろそろね」

かのこが好美に言う。

「うん」

舞台上では、拓真が譜面とにらめっこをしていた。ほんの一瞬だった。吹奏楽をやっている人でなければ気づかないほどのフレーズだったが、拓真にとってそうそうないソロの瞬間だったのだ。上のエフという、チューバにしてみれば比較的高めの音域だったので練習中、拓真も頻繁に音を外した。しかし、典弘は決して怒鳴ったりせず、力を抜いて最高の音を出す方法を何度も教えてくれた。

ソロが終わる。一瞬の出来事だったが、拓真には二人、この音色に耳を澄ませてくれた人がいるのを確信していた。

「さっすが先輩！　キレすぎる～！」

好美は興奮を抑えきれず、ジタバタしている。かのこが「落ち着け！　後で先輩に会いに行けばオッケーだから」となんとかなだめていた。

「兄貴……スゴいじゃん」

客席では拓真の弟・晃が目を輝かせていた。身長はほとんど拓真と変わらない彼だが、拓真に比べてずっと活動的な彼。なぜおとな

しい上にあまり協調性がないように見えた兄が吹奏楽を始めたのか、最初は全然理解できなかった。しかし、今ならわかる気がするのだ。

「達成感……かな」

唯佳の1回目のソロが終わって、テンポが一気に落ちると曲は一瞬でムードを変えた。陽乃はチラチラと翔のほうを見やる。

温かい息で。

翔の楽譜にはデカデカとその字が書かれていた。ここはこの『The 7th Night of July』の中で序盤の聴かせどころ、サックスアンサンブルとアルトサックス、チューバ、ユーフォニウムのソロがある箇所だった。

翔と修平、北松高校のテナーサックス奏者・司（つかさ）鮎子（あゆこ）、バリトンサックス奏者・持田（もちだ）慎平（しんぺい）によるアンサンブルが始まった。ここは翔たちに手動を握ってほしいという典弘の意向で、指揮は一切振られない。さらに、ピンスポットで翔、修平、鮎子、慎平にライトが当たる。

雰囲気が一気に変わった。

「……。」

それまで落ち着かなかった友美子がジッと我が子を見つめた。

「……お母さん？」

綾音がふと、母の様子がおかしいことに気づいて顔を見上げた。

「どないしたんやろねぇ」

友美子が小声で言った。涙が一筋、流れていたのだ。

「なんか……胸が熱いっていうか……なんとも言いようがない感じがするわぁ」

それはすぐ近くで演奏を聴いていた翔平も同じ感覚になっていた。

「兄ちゃん……泣いてる？」

翔平の弟・岩切（いわきり）裕也（ゆうや）が心配そうにたずねた。

「うん……」

「え……なんで？」

素直にそう答えられたことで裕也は戸惑いを隠せなかった。

「わからへん……何やろう」
「……ハイ」
裕也がそっと翔平にハンカチを手渡した。翔平は無言でそれを受け取り、流れ出した涙をそっと拭き取った。
スポットライトの位置が変わる。翔はそのままで、今度は拓真と風見台高校ユーフォニウム奏者・二俣遼太郎（ふたまたりょうたろう）に変わった。残念なことに今回は全員奏者が男性だが、典弘が言うにはアルトサックスが女性、ユーフォニウムが男性というイメージで吹いてほしいと指示したのだ。つまり、翔が織姫、遼太郎が牽牛ということになる。ところが、今まで男として生きてきた翔には女性の気持ちがいまひとつわからなかった。
そこで翔は最初に七夕に関する本を読み続けた。それから片想いとはどんな感じだったかを恥ずかしながら、絵美、美里、そして陽乃に聞いた。雪子にも聞こうとして美里に「それは無神経」といわれ、やめておいた。
それから自分なりに曲を解釈し、遼太郎と何度も曲のイメージを戦わせ、今回のソロを創りあげたのだ。そしてサックスとユーフォニウムが安定してから、拓真に加わってもらった。拓真のスタンスは「夜空」。牽牛と織姫を包み込むやさしい夜空のイメージで、と拓真には言っておいた。
そのイメージが今、どれだけ観客に伝わっているかはわからない。ただ、翔たち3人はそのイメージどおりに曲を吹き続けた。
それぞれのソロが終わり、スポットライトが通常の照明へと変化していく。
突然だった。拍手が聴こえたのは。
「お、お母さん？」
友美子が拍手をしてしまっていた。演奏中にもかかわらず、つい手が動いていたのだ。そしてそれをキッカケに、一気に場内で拍手が起こった。ほんの数秒だったが、会場から舞台上へのソリストに答えが返ってきたのだ。

（オレたちの伝えたいこと……伝わったんかな）

ゆったりとした曲の中でも、ただダラダラと曲が過ぎていくのではない。そう伝えたかったのか、それとも、本当にこの曲を一つの物語として捉えてほしかったのか。正直なところ、翔たちにもよくわからなかった。むしろ、何かで固定するような感じにはしたくなかったのかもしれない。

やがて、序盤で最大の盛り上がりを見せる部分がやって来た。全員で肺活量を最大に活かし、温かい音色を飛ばす。それだけでいいと、典弘が言ったので部員たちはただ、そうするだけだった。

「……。」

あまりの迫力に、夏樹が呆然としていた。

「……カッコいい～」

綾音は綾音で、自分の兄がなぜか全然別人に見えてしまっていた。翔だけではない。陽乃も雪子も、慎也も全員が見慣れた人のはずなのに、違う人に見えるのだ。

曲は一気に静まり、やがて若干金属質な音が聴こえてきた。美里は自分の心臓の音でその楽器の音色がかき消されてしまうのではないかと気を揉んでいたが、杞憂だった。美里のグロッケンソロは静かに、けれどもホールの端まで音が飛んでいった。

次の瞬間。ティンパニを合図に曲の雰囲気が再びアップテンポになる。そして再現部へ到達した。転調をして、一瞬『アルヴァマー序曲』を思い起こさせるユーフォニウムなどの裏メロディが聴こえ、サックスとユーフォの掛け合いが過ぎ、まるで突如天気が暗転したかのような音とタンバリン、金管の伸ばしとウッドブロックの音。不安感を抱かせておいて、直後に遼太郎のやわらかなソロが始まった。

「……。」

愛実が遼太郎に視線を注いでいた。

「あの人……スゴい」

一瞬だったが、愛実にとって何かが変わった瞬間だった。息つく

間もなく慎也のソロがやって来る。トロンボーンには少しキツい音ばかりで音が響きにくいのだが、慎也にとって苦にはならなかった。今日は欠席している亜紀が何度も音を飛ばす練習を一緒にしてくれたのだ。「ミサッチ先輩のいる場所に向かって吹いてください！」と中庭から音楽室に向かって何度も音を飛ばさせられた。美里には「毎日なんで音楽室に向かって吹いてるの？」と疑問の声が来たが、ナイショと言っておいたのはここだけの話だ。

そして陽乃のソロ。突然響いたトランペットの高音域に誰もが視線を陽乃に注いだ。この瞬間、陽乃は自分がどんな顔をしていたのかも、何を考えていたのかもわからなかった。ただ、必死だった。

そして木管楽器の星が流れるような動きが聴こえ始めた。いよいよフィナーレだ。打楽器が何度も激しい動きを繰り返し、チューバとトロンボーン、ユーフォニウムのメロディが流れ、ホルンの雄叫びのような音。そしてティンパニの複雑な動きが聴こえ、全員で同じ音を吹いて曲は終わりを告げた。

典弘も汗をビッショリかいている。指揮棒を降ろし、満足そうな顔を部員たちに向けて起立の指示を出した。同時に割れんばかりの拍手が聞こえた。

「あ……」

陽乃の目から涙がこぼれる。

「朝倉さん？」

唯佳が心配そうに顔を覗きこんだ。

「……感動しちゃって」

「……そっか！」

そして着席の指示。次はアメリカングラフィティーが控えている。陽乃は涙を拭って、楽譜を入れ替えた。

その後はそれまでと違い、明るい雰囲気で全体が流れてとても吹いていて楽しかったのを翔も覚えている。そして、何名かが欠けてしまって残念ではあったが、合同演奏会は無事に終わることができたのだった。

コラム☆１０　歴史＆人気投票

いよいよ翔たちも高校３年生を目前としています！
ところで、『奏～ｋａｎａｄｅ～』の時代背景は２００５年から２００７年。果たして、その間に実際の日本での出来事と神奈川県七海市立七海高校での出来事を見比べてみました。翔たちの成長と合わせて、振り返ってみたいと思います。

２００５年４月１日　ＺＯＮＥが日本武道館のラストライブにて解散。
４月４日　七海高等学校第４０回生入学式。翔、陽乃たち入学（第１～３話）。
４月１６日　吹奏楽サークル創部申請書提出（第１１話）。
４月２５日　ＪＲ福知山線脱線事故が起こる。
５月　七海高校吹奏楽サークル、初舞台の曲決定（第１６話）。
５月６日　日本プロ野球史上初のセ・パ交流戦が開幕。
５月２５日　吹奏楽サークル、監査会対象になる（第２１話）。
６月６日　監査会開催。同日、翔が陽乃に告白（第３０～３１話）。
６月９日　陽乃、翔からの告白を断る（第３４話）。
６月１０日　山口県光市の県立高校で高校３年生の男子生徒が教室に自製の爆弾を投げ込み、５８人が病院へ運ばれる。
６月１９日　ＪＲ福知山線脱線事故により不通となっていた福知山線（ＪＲ宝塚線）が全線運転再開。
６月２７日　七海高校期末テスト日程発表（第３６話）。

7月23日　千葉県北西部地震発生。首都圏の鉄道はダイヤが大幅に乱れる。

7月25日　七海高校夏休み中。しかし、教室が暑く練習にならない（第43話）。

7月27日　七海高等学校吹奏楽サークル第1回合宿開催（第45話）。

7月29日　佐野修平、登場（第48話）。

8月5日　初めて受けた老人ホームでの依頼演奏（第52話）。

8月24日　首都圏新都市鉄道つくばエクスプレス線（東京・秋葉原駅～茨城・つくば駅間）が開通。

10月29日　風見台高校にて合同練習開催（第56話）。雪子の自宅で翔、陽乃、絵美、沙希、拓真が誕生日を祝う（第58話）。

11月下旬　吹奏楽サークル、校長室ジャック（第61話）。

12月1日　岩切翔平、登場（第64話）。

地上デジタルテレビ放送の受信可能範囲が拡大、新たに東北6県でも放送が開始。

12月16日　日本初のワンセグ対応携帯電話、W33SAがauより発売。

12月22日　偶発事故により、翔と陽乃キス（第67話）。新潟大停電発生。

12月23日　七海市吹奏楽連盟第135回定期演奏会開催（第68話）。翔、改めて陽乃に告白。陽乃、告白を受ける（第73話）。

12月25日　クリスマスコンサートに翔、綾音、陽乃、夏樹の4人で聴きに行く。夏樹、

サクソフォンに惹かれ練習をすることを決意（第７８話）。
１２月３１日　２３時５９分６０秒　（ＵＴＣ）、閏秒の挿入。

２００６年１月６日　七海高校吹奏楽サークル始動（第７９話）。
１月１０日　雪子、陽乃とケンカ（第８０話）。
１月２１日　首都圏平野部で大雪。
２月１４日　バレンタインデー（第８７～８９話）。
２月２０日　恭一に一喝され、部内が一時分裂状態に（第９０～９２話）。
２月２３日　トリノオリンピック女子フィギュアスケートで、荒川静香が金メダル獲得。
３月１日　玩具メーカーのタカラとトミーが合併し、「タカラトミー」が発足。
３月１２日　七海市立袴田中学校吹奏楽部　第１２回定期演奏会開催（第９４～９６話）。
３月２１日　七海市吹奏楽連盟第１３６回定期演奏会開催（第９７話）。
３月２７日　近鉄けいはんな線開業。
４月５日　翔たち、２年生に進級（第９９話）。
４月１０日　部活紹介（第１００話）。
４月２９日　しまなみ海道全通。
５月８日　課題曲・自由曲決定（第１０５話）。
５月１４日　東京都千代田区神田須田町（万世橋）の交通博物館が閉館。
６月５日　豊田、岡崎、三河の３人が入部依頼に来る（第１０９話）。
６月１９日　阪急ホールディングスによる、阪神電鉄株式のＴＯＢ終了。

6月25日　ホール練習（第115話）。
7月4日　期末テスト（第117話）。
7月12日　村峰教頭の退職が判明（第119話）。
7月15日　終業式（第121話）。
7月22日　七海市吹奏楽連盟第137回定期演奏会。七海高校吹奏楽部、失敗の連鎖（第122話）。
九州地方で豪雨。
7月26日　吹奏楽コンクール川崎地区大会。七海高校、金賞受賞も県大会出場ならず（第131〜132話）。
8月14日　首都圏大規模停電。七海市に被害なし。
8月22日　第2回合宿（第140〜150話）。
9月23日　マーチングコンテスト参加。銀賞受賞（第160〜162話）。
10月1日　阪急ホールディングスと阪神電鉄が経営統合、阪急阪神ホールディングスに。
10月5日　七海祭に向けての曲練習開始（第165話）。
10月25日　七海祭（第171〜175話）。
11月11日　プレイステーション3日本先行発売。
11月15日　千島列島付近で、M7．9の大規模な地震が発生。
11月20日　アンサンブルコンテストの曲目決定（第180話）。
12月1日　地上デジタルテレビジョン放送が、47都道府県全てで放送開始。
12月23日　七海市吹奏楽連盟第138回定期演奏会（第191話）。

２００７年１月１３日　大岩智志、入部志願（第２０３話）。
１月１４日　２００６年度アンサンブルコンテスト神奈川県大会（第１９３～１９５話）。
１月１７日　兵庫県西宮市にて、慰霊祭に参加（第２０８～２１０話）。
１月１９日　北見市都市ガス漏れ事故発生。
１月２０日頃、雪子の転校判明（第２１１～２１２話）。
２月６日　智志のことに関して、１年生で揉め事発生（第２１９～２２３話）。
２月１４日　バレンタインデー☆コンサート　小田急七海駅前
２月１８日　第１回東京マラソン開催。
第４回六校合同演奏会。七海市クリエイトホールにて（第２２６～２３０話）。

（以下、予定及び２００７年に起きた出来事のみ）

２月２８日　第３９回生卒業式。七海高校体育館にて。
３月３日　ひな祭コンサート。つくし野川河川敷にて。
３月２１日　第１３９回七海市吹奏楽連盟定期演奏会。七海市中央ホールにて。
３月２５日　能登半島地震発生。
４月１日　新潟市及び浜松市が政令指定都市に。
４月８日　統一地方選挙。
４月１７日　長崎市長射殺事件発生。
４月２４日　小学６年生と中学３年生を対象に、４３年ぶりとなる全国学力調査実施。
４月２９日　みどりの日から、昭和の日へ。
５月４日　国民の休日から、みどりの日へ。
５月５日　エキスポランドでジェットコースター脱線事故。

5月20日　鹿児島市の桜島昭和火口から、噴煙が約1，500mに達する大規模な噴火。
5月26日　音楽グループ・ＺＡＲＤのボーカル、坂井泉水さんが入院中の病院で転落事故にあう。翌27日死去。
7月12日　第21回参議院議員通常選挙が告示。
7月15日　非常に勢力の強い台風4号が日本列島を縦断。
7月16日　新潟県中越沖地震発生。
7月31日　兵庫県豊岡市で野生のコウノトリが日本で46年ぶりに巣立ちをする。
8月22日　第89回全国高等学校野球選手権大会で佐賀県代表の佐賀北高校が初優勝。
9月7日　台風9号が関東地方を直撃。
9月12日　安倍晋三首相（自民党総裁）が突然の辞任表明。
9月20日　新型『プレイステーション・ポータブル（ＰＳＰ－２０００）』発売。
10月1日　郵政民営化に伴い、日本郵政公社が解散。気象庁が緊急地震速報を開始。
12月14日　長崎県佐世保市のスポーツクラブ「ルネサンス佐世保」で銃乱射事件。

2008年1月27日　大阪府知事選挙。弁護士でタレントの橋下徹が初当選。
2月3日　関東地方で大雪。
2月9日　近畿地方、東海地方から関東地方にかけ積雪、公共交通機関に混乱発生。
3月15日　おおさか東線　放出駅～久宝寺駅開業。

それでは、ここで突然ですが、キャラクター人気投票結果を発表！

好きなキャラクターとあまり好きでないキャラクター（！）を読者の方に投票していただきました。果たして、その結果は！？

＜あまり好きでないキャラクター発表！＞

第3位！

兵藤　章義先生！

（本人からのコメント）え……私……ですか。わずかな出番しかなかったのに……。おっかしいなぁ……。まぁ、登場一発目から印象が悪すぎましたし……。これから気をつけたいと思います。修平と翔平、キツく当たってすまんかった。

第2位！！

佐野　修平くん！！

（本人からのコメント）えぇ！？　オレ！？　ちょ、だってオレ主人公の友人……。あぁ、初登場が嫌味すぎたって？　えぇやん……。

だって、今はそこそこいいキャラでしょ？　いい子でしょ！？　あ、自分で言うのがウザい……。ごめんなさい……（笑）

第1位！！！

朝倉　祥夫さん！！！

（本人からのコメント）えーと。お父さんがコメントを拒否したので私、陽乃から。お父さん、確かに私も嫌ってたことあるけど……（笑）、本当はいいお父さんなの。そこらへん、わかってくれると嬉しいな♪

【好きなキャラクターベスト3　発表！】

第3位！（同率）

西嶋はるかさん！

朝倉　陽乃さん！

（はるかからのコメント）え!?　あ、あたし?　あたしが朝倉先輩と……（照）　どなたが投票してくださったかわかりませんが、ありがとうございます☆

（陽乃からのコメント）あたしなんかでよかったのかな……。でも、嬉しいな♪　これをキッカケにあたし、もっと頑張っちゃいます♪♪　本当にありがと～みんな☆☆

第2位!!（こちらも同率）

三宅　亮平くん!!

佐野　翔くん!!

（亮平からのコメント）……。えと……あ、ありがとうございます。俺なんかでよかったのか……?

（翔からのコメント）えー!?　ちょ、1位狙ってたのにぃ～!

残念……。でも部長、頑張ります！　主人公！　頑張りますで～☆
これからも応援ヨロシク☆☆　苦手って思われてなくてよかった
……（笑）

そして！　堂々の第1位は！！！

本堂　拓真くん！！！

（拓真からのコメント）このたびは、俺に投票してくださった皆様、ありがとうございました。図体が楽器ともどもデカく、部員の皆も俺の扱いがなかなか大変かと思いますが、これからもしっかりみん

なを支えていきます。皆様も、クラブ活動に勉強、いろんなことにチャレンジしてください。俺も頑張ります！

投票してくださったみなさーん！

おおきにー！！

佐野　翔でーしたっ☆

第２３１話　強制出場

「は！？」

目を丸くしたのは翔だった。部室に入ってすぐ、異様な光景に気づいたのだ。

「何！？　今日……こんだけしかおらへんの！？」

１年生はほぼ全員揃っているが、それでも健之佑はまだインフルエンザが治っていないようで欠席。さらに、インフルエンザは蔓延してきたようで、同じパートだった誠、佳菜へ伝染。さらに優輝、恵梨、順平、はるかと健之佑周辺にいた子たちがことごとく欠席だった。

「なんかけっこうな感染力のウイルスだったみたいで……。１年生は５人欠席です」

「マジでかぁ……。よりによって校内予選の日に……」

そう、今日２月２３日はソロコンテストの校内予選日なのだ。しかし、インフルエンザは予想以上に猛威を振るっていて、クラスでも欠席が目立っていた。翔のクラスも例外ではなく、菜緒、涼平だけでなく今朝迎えに行くと陽乃も夏樹もインフルエンザ、さらに慎也もインフルエンザになっていて欠席ということがわかったのだ。

それだけではない。絵美はまだ完治していない。健之佑と絵美に挟まれる形で座っていた沙希、由美子も発症。当然ながら健之佑の後ろにいつも座っている雪子も発症。合奏の配置上、ご近所さんになる美里も発症してしまったのだ。

つまり、２年生で元気いっぱいなのは拓真と翔だけなのだ。

「……かける。もしかして」

「言うな！　まだわからへんやーん」

翔はハハハッと苦笑いをしながら部室へと駆け込む。拓真が急いで後を追った。

「変な言い方かもしんないけど……不戦勝？」

「うーん……。まぁ戦いっちゃあ戦いやろうけど……どないなるんやろう」

今回の校内予選では、2年生から2名、1年生から3名の代表を選出する予定になっている。しかし、2年生は残っているのが拓真と翔だけ。必然的に、翔と拓真が出場権を手にすることになる。

「なんか悪い気がする……」

拓真が珍しく落ち込んでいる。

「せやけど、しょうがないやろ？　別にオレらだって好きで元気いっぱいになってるわけちゃうんやから」

「まぁそうかもしれないけど……」

翔には簡単に予想できた。拓真は人のことを考える子だ。きっと、出場できなくなった陽乃たちのことに後ろめたさのようなものをかんじているのだろ

「……お前、優しいもんなぁ。せやけど、ここは逆にオレらの頑張りどころやで？」

「うん……」

「ほんじゃ、オレ今から先生に指示聞きに行ってくるから。会場の準備の指示、1年生に出しといてくれる？」

「わかった」

翔と拓真はそれぞれ音楽室、職員室へ向かった。

指示を聞いた後、翔はプログラムを刷ったわら半紙を持って音楽室へ戻ろうとしていた。プログラムの1枚を手にして、今回のソロコンテストの曲目を確認する。

＜1年生の部＞

1：中野さゆり　旅立ちの日に

2：河内みゆき　ドレミの歌～ひとりぼっちの羊飼い

3：三宅　亮平　ムーン・リバー

4：富士原　徹　虹の彼方に

５：吉山　亜紀　翼をください
６：冨岡　洋之　剣の舞
７：西嶋はるか　イン・ザ・ムード
８：伊原　光瑠　ウエストサイド・ストーリー
９：鈴木　麻綾　もののけ姫～アシタカせっ記
１０：久野　彩香　トランペット吹きの休日
１１：松尾　勇　ボレロ
１２：加藤　愛実　星条旗よ永遠なれ
１３：乃木あずさ　クシコス・ポスト
１４：小林　梨子　小象の行進
１５：日高　優　主よ　人の望みの喜びを
１６：逢沢　駿　木星

＜２年生の部＞
１：本堂　拓真　トップ・オブ・ザ・ワールド
２：佐野　翔　追憶のテーマ

「みんな結構難しい曲するんやなぁ」
翔は１年生が予想以上に難しそうな曲を持ってきていることに少し驚いた。しかし、彼らのレベルから考えれば不思議ではないのかもしれない。
部室に戻ると、さゆり、みゆき、亮平の３人がチューニングなどをしていた。時刻も午後４時すぎ。４時半から予選が始まるので、トップメンバーは準備に余念がない。音楽室に入ると岳彦、光治、樹、友美子の４人が着席していた。
「こんにちは！」
翔は友美子がいたので少し恥ずかしいと思いつつも挨拶をして自分の席へと座る。隣に座っていた拓真が話し掛けてきた。
「この独特の雰囲気……なんか、普段の本番とは違うよな」
「うん。オレも思った」

ソロコンテストだ。確かにピアノ伴奏が付く人もいるが、基本的に自分の楽器の音しか聞こえない。ミスや荒々しいところも丸聞こえということだ。

「緊張するなぁ」

「オレら、また2人だけやしな」

「ミスッたら怖(こえ)ぇ」

「デカい体してんのに、そんな小心者でどないすんねん！」

翔がバシン！と拓真の背中を強く叩いた。

「別にソロになったからって、一人きりなわけちゃうやろ？」

「まぁ……そうだけど」

「シャキッと頑張れ！」

「……うん。あ」

ブーッ、ブーッとバイブ音が聞こえた。メールだ。

「彼女か？」

「バァカ。違うよ」

メールを開くと『高橋美並』の字。

「……。」

翔は拓真が笑顔になるのを見て、これで大丈夫だと確信した。

「おい、始まるで」

翔に呼ばれて、拓真は携帯電話を閉じてポケットにしまいこんだ。

第２３２話　風邪引きたちの応援

「ゲホッ……ゲホゲホッ！　あ～……」
春樹は七海高校裏にあるかかりつけの病院で診察待ちをしていた。
実は音楽室からも見えるくらいの距離にあるこの病院。先ほどから始まったらしいソロコンテストの予選。サックスやクラリネットの音色が聞こえてくる。
「あ～……俺も応援行きたい。っていうか、吹きたい……」
しかし、出席停止の春樹が部活へ顔を出せば大騒ぎになることぐらい百も承知であった。なので、今日はおとなしくしているしか手立てがない。拓真はどうしているだろうか。ソロコンテストの曲の練習をしていても、果たして普段伴奏がメインの自分がうまくメロディを吹けるかどうか心配だとずっとボヤいていた。
「大丈夫かなぁ……。いちおう、メールしとくか」
春樹は携帯電話を取り出し、素早い手つきでメールを拓真に送信した。すると、すぐに返信が来た。

＜０００１＞
２月２３日（金）　１６：４６
送信者：本堂　拓真
Ｓｂ：（ｎｏｎ　ｔｉｔｌｅ）
―――――――――――――
大丈夫♪　翔と二人でみんなの分まで頑張ってくるから☆
春やんはしっかり休んどけよ？
治ってないのに来たら承知しねーぞ（、ω、）

「珍しいなぁ！　拓あんが顔文字使うなんて」

出会った当初ならまず考えられないことであった。最近こそパート内での連絡などが増えたのに、それでも句読点ばかりのメールだった拓真が今日は顔文字と音符（♪）のマークまで使っているのだ。珍しいとしか言いようがない。

「まぁ、いずれにしても頑張ってるみたいだし、邪魔しないようにしなきゃな」

返信をしようと思ったとき、「水谷さ～ん、どうぞ！」と呼ばれたので、春樹はメールを止めて診察室へと入った。

同じ頃、翔の携帯電話にもメールが入っていた。陽乃からだったが、改行も漢字変換もナシの非常に読みにくいメールが来たのだ。

＜０００１＞
２月２３日（金）　１６：５１
送信者：ひなの
Ｓｂ：（ｎｏｎ　ｔｉｔｌｅ）
－－－－－－－－－－－－－－－－
そろこんてすとあたしたちのぶんまでがんばってねおうえんしてるから

「そこまでしてメール打ちたいんかよ、アイツ」

翔はククッと笑った。そして次の亮平が出てくる前に、コッソリ返信しておいた。

＜０００１＞
２月２３日（金）　１６：５２
Ｓｂ：（ｎｏｎ　ｔｉｔｌｅ）
－－－－－－－－－－－－－－－－
了解！　しっかりお前は寝とくこと♪　早く治して学校来い

よ☆☆

翔はクスッともう一度笑い、舞台のほうへ向き直った。既に亮平がスタンバイ済みである。翔はきっと、亮平のことだから強烈な印象を与える演奏をするだろうと予想していた。

同じ頃、友美子はなんだか落ち着かない気分になっていた。というのも、ほとんど演奏のことなどわからない自分が果たして一所懸命頑張っている子供たちに評価を下して良いものなのか、という葛藤が生まれていたからだ。さゆりとみゆきの演奏が終了した時点で、まだ彼女の評価欄は空欄のままであった。今回はAからCまでの3段階評価となっている。まさか全員にAを付けるわけにもいかない。だからといって、全員Bというわけでもないだろう。Cなど付ける勇気もなかった。

「どうかなさいましたか？」

亮平が準備するまでの間を狙って、樹が友美子に話しかけた。

「いえ……評価をしないとアカンでしょう？　でも、どの子も上手やし、私、あんまり音楽のことわからへんから……どないしたもんかなぁと思って」

「ハハァ……。確かにそうですね」

樹も苦笑いする。ひょっとして呆れられたかと一瞬不安になった友美子だが、すぐに樹が笑顔でこう返してくれた。

「何も、あの子たちは良い評価をもらうために演奏しているんじゃないんですよ」

「え？」

「翔くんのことを思い出してやってください。彼、演奏するときに評価なんか気にしていると思います？」

今までの演奏会のことが脳裏をよぎる。

「いえ……」

答えはすぐに出た。

「まずありえないですね」

樹がニコッと笑う。
「そうでしょう？　でしたら、何のために彼らは演奏しているのか」
「……。」
「それを考えていただければ、おのずと答えは出てきますよ」
「……そうですね！」
友美子はペンを握り、二人の演奏を思い返した。そして、すぐに紙にペンを走らせる。その紙にはしっかりと「A」という文字が書かれていた。

「……樹くん」
遠くから声が聞こえるが、それをかき消すくらいにハッキリと弦バスの音が聴こえていた。
「春……」
演奏が終わると同時だった。
「春樹くん！　また熱が高くなるでしょ！？」
目を覚ますと、看護師さんが目の前に立っていた。
「どうせ君のことだから、あのヴァイオリンの音でも聴いて居眠りしちゃったんでしょ？」
ヴァイオリンじゃないよ！とツッコミたかったがそれを抑え「ついつい」と春樹は答えた。
「ほら、早く帰りなさい！」
「は～い」
春樹は面倒そうに答え、病院を出た。
自転車で１０分も走れば自宅だ。春樹は帰宅後すぐにうがい手洗いをし、ベッドに横になった。
「……あれ？」
それほど体がしんどくないのだ。
「熱測って……みよう」
体温計をワキに入れ、待つこと４分。ピピピッという電子音が聞こえ、春樹が体温計を見ると「３７．４℃」の文字。病院に行く前

は３８．７℃もあっただけに、これには驚いた。
「……病院行ってそんなすぐには下がらないだろうし。演奏聴いてリラックスしたのかな」
春樹は思わず笑顔になった。
「早く治して、みんなと一緒に演奏しよう！」
ベッドにもぐりこみ、春樹は翔たちの顔を思い浮かべつつ深い眠りに付いた。

第２３３話　我ながら……

既にプログラムも１年生の８人目まで終了した。今のところ、翔が聴いていてグッと来たのはやはり、亮平のムーンリバーだった。翔自身、客観的に見て亮平のレベルは１年生の中でも群を抜いているように思っている。

「続きましてプログラム９番、アルトサックス、鈴木麻綾。曲目は『もののけ姫～アシタカせっ記』です。ピアノ伴奏は、伊原光瑠です」

光瑠の準備が整ったのを確認して、麻綾はお辞儀をする。拍手が沸いて、しばらくしてから演奏が始まった。

初めに響いたのは、繊細な光瑠のピアノ。それだけで翔は鳥肌が立つ感覚に襲われた。何かを予兆させる荘厳な雰囲気。明るい麻綾の雰囲気とは異なるだけに、違和感が大きい。

そして始まった、麻綾のソロ。アルトサックスで低音域を吹くときは、音が潰れがちだ。ベチャーッとした音が耳障りになるのだが、麻綾の場合、それがまったくない。それどころか、何か心を持ち上げるとでも言うような、独特の雰囲気を持った音が響き渡るのだ。そしてオクターヴ上がり、同じメロディを吹きこなす。これには完璧に心を奪われた部員がいるようで、愛実と優が目をキラキラさせているのが後ろから見ていてもわかった。

実は麻綾は人一倍、負けず嫌いなのだ。入部して以来、彼女が目標とするのは他でもない、佐野　翔であった。翔のような音色を吹きたい。翔を驚かせたい。ただ、それだけだった。

この音色には翔を含めてほぼ全員が心を惹かれていた。しかし、ただ一人だけシックリ来ていない人物がいた。それは、翔の母である友美子であった。

（何やろ……。何かこの子の音……不自然っていうんかしら。しっくり来ぉへんわ）

友美子も自分で何か偉そうなことを言っているような気はしていた。しかし、シックリ来ないものは来ないのだ。麻綾の本来の音を出していないのではないか。友美子にはそんな気がして仕方がなかった。

1年生のプログラムも半分終了したところで、休憩に入った。

「翔」

友美子は翔を小声で呼ぶ。洋之たちと話し込んでいた翔は「ちょっとゴメン！　オカンが呼んでるから」と言ってすぐに友美子の元へ駆けつける。

「どないしたん？」

「あぁ、そんなに大したことやないんやけどね」

「うん」

「あの子……鈴木さんやった？」

「あ～、マーヤのこと？」

「うん。ちょっと直接は言いにくいんやけど……。何か、もうちょっと自分の気持ちを出したほうがえぇよって機会があったら言うてあげてくれへん？」

「へ？　どういうこと？」

翔はいまひとつ事情が飲み込めないようで、キョトンとした様子で友美子の顔を見つめている。友美子はしばらく翔の顔を見つめた後、フゥッとため息をついた。

「やっぱりえぇわ。お母さん、自分で言うてくる」

「へ？　う、うん……」

呆然としたままの翔を背に、友美子は麻綾の音色をよく思い出してみる。あの音色は、どこかで聴き覚えのある音色なのだ。いったい、どこで聴いたのかを思い出さなければならない。

一方、翔は拓真に呼ばれていた。

「カケル！　そろそろオレら音出ししとかねぇ？」

「は？　ちょ、お前早過ぎるやろ」

「いいからいいから！」

翔は半ば強引に拓真に連れ去られる形で部室へ押し込まれた。
「早い言うてんのに……」
「休憩の間に楽器温めるって意味でもさ！」
「お前やたら気合い入っとんなぁ」
翔は拓真の気合いに押されて音出しを始めた。麻綾の姿を探す友美子の耳にも、その音色が入ってきた。
「あ……」
友美子はハッとした。聴き覚えのある麻綾の音色。それは我が子である翔の音色そっくりだったのだ。そのため、聞き慣れているといえば聞き慣れているのである。
「なるほど……。そういうことか」
確信した友美子は、本番を終えて一息ついている麻綾を見つけて声を掛けた。
「あなた、鈴木さん？」
「あ！　佐野先輩のお母さん。どうかなさったんですか？」
「ちょっとね」
「先輩なら部室に……」
「あぁ、違うの違うの！　あなたに用があるのよ」
「私に？」
「うん」
友美子は率直に思ったことを麻綾に伝えた。麻綾の音色は綺麗であることは事実であること。しかし、その音色が仮に翔の音色に近づけようとしているのなら、それはやめてほしいということ。
「なんでですか？」
そう答えるのが当然だろう。泣きそうな顔をしている麻綾を見ると、少し心が痛んだ。けれども、ハッキリと友美子は続ける。
「あなたの吹いてるサックスから、あなたの音色が出てこないって……寂しくない？」
「……？」
「えーと、その、つまり！　ウチの子の音色なんかじゃなくって、

鈴木さんの音を聴きたかったなって思うのよ、おばさんは」
「そっか……」
麻綾の顔に安堵の色が戻った。
「そうですよね。うん……そうだ」
麻綾は今まで、何かあれば翔を目標にしてきた。確かに、翔を目標にすることは間違いではないだろう。しかし、翔を「目標にする」のと「真似する」のはまったく違う次元にあるのだ。どうしてそれに今まで気づかなかったのかと思うと、麻綾は自分が恥ずかしかった。
翔の言葉が蘇った。あれは、入部間もない頃のこと。

「なんかな～……なんやろ」
入りたてで緊張した顔のはるか、麻綾、さゆりの3人を前に翔がしかめ面をしている。
「もうちょっと、自分の色出してもえぇんちゃうの？　特に、鈴木さん」
「自分の色……ですか？」
「そう。オレの幼なじみにな、チューバ吹きで竹林っちゅーのがおんねんけど、まぁフツーに上手いわけでして。変な言い方かもしれへんけど、誰かのレッスン受けてもどんな人に教えてもろても、自分の色を失くさへんねんな。マイペース？　ちゃうかもしれんけど、とにかく泰徳は……あ、ゴメン。泰徳なんか言うてもわからんよな。とにかくソイツ、自分の音を作るために頑張ってるよ」
3人の目には、会ったことのない泰徳の雰囲気が浮かぶ。真面目そうで、ちょっと堅そう。けど、きっと翔とは仲が良い。そんな気がした。
「やから、3人も泰徳と同じ気持ち言うたらおかしいけど、自分の音色頑張って出してよ。受け売りやけど、オレからのお願い」

「わかりました！」

麻綾が突然笑顔になった。
「私……今度、今回の曲を吹くチャンスがあったら、私の色の曲を吹きます！」
とびきりの笑顔を見て友美子も安心した様子になった。
「うん！頑張ってね！」
「はい！」
麻綾がバタバタと部室のほうへ駆けていく。我ながら厚かましいことをしたかと思ったが、やはり言って良かったと友美子は麻綾の背中を見送りながら思った。
部室のドアを開ける。
「どないしたん？」
拓真と翔が目を丸くしている。
「あの！」
「ん？」
「佐野先輩のお知り合いの、竹林さんでしたっけ？」
「あー、うん」
「ありがとうございますって、伝えておいてください！」
「へ？」
「それじゃ！　先輩たちも、頑張ってくださいね！」
「あぁ……うん」
笑顔で去っていく麻綾に唖然としつつ、翔は話の最中だった携帯電話を再び手にする。
「だってさ、泰徳」
「……なんなの、今の」
呆れた感じの声が聞こえる。
「オレの後輩。お前にありがとーって」
「わけわかんね」
泰徳は受話器の向こうでクスリと笑った。翔には見えるはずもないが、その顔は優しく笑っていた。

第２３４話　緊張のソロ

「い、いいのかな……」
拓真が本番を目前にして部室でブルブル震えていた。
「これって、武者震いってやつ？」
拓真はガチガチ震えながら智志に聞く。
「すんません……俺、バカなんでわからないッス」
智志はうなだれた様子で答える。拓真はへへッと笑いながらも、顔は引きつっていてあまり笑っていなかった。翔は緊張のあまりガチガチになっている拓真が心配で、声を掛けてあげたい気持ちはたくさんだったが自分も本番前であるので、チューニングなどをしなければならない。そのため、智志に拓真のことを任せているのだ。
「あぁ～……そもそも俺、伴奏楽器じゃないか。なんでソロコンなんかに～」
元も子もないことを言い出している。拓真の不安は頂点に達しているのかもしれなかった。もう少し２年生の数が多ければ拓真も幾分緊張が解けたのだろうけれど、今日は２人しかいない。それも彼を不安にさせる要素のひとつであった。
「大丈夫っすよ！」
智志が大声を出した。
「逢沢もバッチシ演ってみせたじゃないですか。アイツも伴奏楽器に入るっしょ？　先輩だってできますって」
「そうかなぁ……」
やっぱり不安そうにしている。
「それに三宅だって、伴奏メインでしょ？」
「でも弦楽器だろ。ヴァイオリンとかと同属じゃん」
「そうかもしんないっすけど……」
翔は我慢できなくなり、思い切り拓真の背中をはたいた。
「痛ってえなぁ！　なにすんだよ、カケル！」

「いつまでもウジウジしとったらアカンで、拓真。伴奏楽器なんてな、実はないの！」
「え？」
拓真にはよく意味がわからなかった。
「サックスだってフルートだって、伴奏することあんねんで？　トランペットだってあるし、もちろんボーンもな。たまたま楽器の性能上、チューバが伴奏に向いてただけ。それをチューバ＝伴奏楽器って決め付けるのは、オレはどうかと思うけどなぁ」
「……。」
拓真と智志は小さくうなずいた。
「そう思わん？」
「……うん」
翔はバシッと拓真の背中をもう一度はたいた。
「よし！　ほな、頑張って来い！」
「うん！」
本番の時間がやって来た。いつもなら隣に春樹や愛実、亮平がいてくれるが今日は誰もいない。一人で気持ちを奮い立たせ、頑張るしかないのだ。
ドアを開けると、審査員の姿が見えた。校長、翔の母、恭一、岳彦、樹。特に岳彦の姿が拓真を緊張させた。自分の先輩が審査員として目の前にいるのは気が気でない。
譜面台に譜面を置く。手書きの譜面にはようやく書き慣れてきた音符の姿が並んで見える。まだ四分休符は若干乱れている気もしなくないが、それでも拓真には読めるのだから何ら問題ない。
チューニングの時間が少し与えられている。楽器の大きな拓真は楽器が冷えるのを嫌がっていて、ずっと息を入れてきていた。それでも冬の寒さが抜け切らないこの季節。やはり楽器は冷えてしまっていた。存分に温かい息を楽器に吹き込んであげる。
（頼むぜ、相棒）
拓真はそっと心の中で楽器に語りかけた。あえて息を吹き込むだ

けで、チューニングはしなかった。変に音が乱れて不安になるのはやめておこうと考えたのだ。

司会をしているみゆきと優輝のほうを見つめる。みゆきがうなずき、司会進行を始めた。

「それでは、2年生の部を開始致します。プログラム1番、本堂拓真。曲は『トップ・オブ・ザ・ワールド』です」

実は拓真が持ってきた楽譜は結局、アルトサックスのままにしてあるのだった。験を担ぐとでも言おうか、翔の持っている楽譜であれば何か自分にも大きく影響をしてくれるかもしれない。そんなわけはないと思いつつも、翔に少しでも力を分けてほしい。そんな気持ちでいっぱいだった。

メロディをいっぱい吹ける。それだけで嬉しくもなるし、不安にもなる。けれど、拓真はようやく気づいた。メロディだろうと伴奏だろうと、要は自分の音を聴いている人たちに聴いてほしいのだ。ただ、それに尽きるのである。

1番が終わる。2番目は楽譜の動きを自分で勝手に変えて変化を見せてみた。それまで特に俯いて聴いていた樹と岳彦が顔を上げた。

(やるじゃん)

岳彦がそう言ったように見えた。拓真の中で自信が湧く。拓真の音色が次第に芯を持ち、部員たちの心の奥にまでその低音は、しっかりと響いていった。

「お疲れ」

すべてのプログラムが終了し、翔と拓真は部室でお互いに笑い合った。

「ま、結果は見えてたとおりやけど」

翔が笑う。

「二人しかいねぇもんな」

拓真もフフッと笑った。

「でもさぁ、ちょっとショック」

翔が苦笑いする。そう。評価の総合点で言えば拓真のほうが上だったのだ。しかも、大きく差をつけて。

「エヘヘ。ゴメンな、トップ奪っちゃって」

「えぇよ！　そんだけ、拓真が頑張ったって証拠やもん」

翔がそっと手を差し伸べた。

「おめでとう」

「……ありがと。翔のおかげだよ」

「嫌やなぁ。オレ、何にもしてへんよ！」

翔は恥ずかしそうに笑った。けれども拓真は本当に翔のおかげだと思っていた。翔の手より一回り大きい拓真の手が、翔の手を強く握り締める。

「痛いって！」

翔が笑いながら身をよじらせる。

「いーじゃん！」

グイッと強引に翔を引き寄せ、ギュウッとさらに強く手を握り締めた。温かみがしっかりと翔に伝わり、拓真に伝わっていく。二人の笑い声が部室から響き渡る中、静かにソロコンテストの校内予選は幕を降ろしていった。

第２３５話　さよならの、前に

２月２６日（月）。卒業式を二日前に控えた七海高校では、その準備が進んでいた。

「ふぃ～！　しんどいよぉ。俺、チビだし病み上がりだから無茶させちゃダメだって～」

クラス委員長を務めている春樹は卒業式式場の設営に引っ張り出されていた。同じくクラス委員長の絵美も春樹の横で椅子の出し入れをしている。

「ちょっと～。男なんだから、もうちょっとシャンとしてよ」

「だって俺病み上がりだもん」

「病み上がりを理由にしてないで。ほら、そこの椅子運んでよ」

春樹は渋々倒されたままの椅子を持ち上げ、指定された場所に運んでいく。どことなくぎこちない動きではあるが、それは身長のせいだと春樹は思っている。指定された位置で椅子を広げ、置く。なんとなく、その場所に見覚えがあった。

「あ、そっか」

声が二重になった。驚いて振り返ると、陽乃がいた。陽乃は卒業式実行委員会に抽選で当たってしまったのだ。

「朝倉さん」

「ここってさ、あたしたちの入学式のとき、１年Ｂ組が座ってた場所だよね」

「そうそう」

「ホント、懐かしいよね～。もうすぐあたしたちが３年になって、１年生がまた入ってくるんだもんね」

「ホントにね～」

春樹と陽乃が感傷に浸っていると、いきなり大声が飛んできた。

「おーい！　そこの２年！　ボケーッとしとらんとサッサと準備せぇよぉ！」

体を震わせて春樹と陽乃は思わずホウキを落としてしまった。振り返ってみると、同じく抽選で実行委員になった翔が、舞台の上でマイク片手に陽乃と春樹のほうを見てニヤニヤしている。

「な……ちょ、アンタ」

陽乃は顔を真っ赤にして大声を出そうとするが、恥ずかしさが勝って声が出ない。1年生の入学式初日、教室で恥をかかされたときそっくりだった。直後、翔の大声を上回る恭一の怒鳴り声が飛んできた。

「なんだか賑やかよ、体育館が」

安和がおもしろそうに3年生の教室から体育館を覗き込む。岳彦がクリームパンを頬張りながら「どうせ、翔と朝倉さんだろうに」と笑った。めぐみは懐かしそうに呟いた。

「私たちもあの中にもう一度戻りたいわね～」

「ハハハッ！　でもさぁ、翔たちのおかげで俺たち、ずっと夢だった高校でのコンクール出場が叶ったじゃん」

「ホント。最後の1年間に最高の思い出をくれたんだもんね」

安和が心底嬉しそうに笑う。

「……もう卒業かぁ」

岳彦は思い出す。希望を持って入学した七海高校。しかし、自分の下調べ不足で吹奏楽部が廃部になっていたことを知らなかったのだ。楽器を続けられないのではないか。進路を間違えたかもしれない。そんな風に自分を追い込んでしまう日が続いた。

めぐみは下調べはキッチリしていた。その上で、市の吹奏楽団に入団したのだ。けれど、大人が多いその団体で、めぐみが自分らしさを発揮することはできずにいた。

安和は陽乃の存在が気になって気になって仕方がなかった。ずっと気になっていたのだ。サークルのときから毎日毎日、音が良くなっていく陽乃のことが。自分はなかなか上の音が出なかった。それにもかかわらず、陽乃はいとも簡単にハイベーという難しい音を出して見せたのだ。ある意味、自分とは真逆の成長を遂げる陽乃が羨

ましくて仕方がなかった。
陽乃にヒドいことをしたと思う。けれど、彼女はひるまずにずっと安和と向き合ってくれていた。
「留年しよっかな……」
安和の呟きに、めぐみと岳彦が爆笑し始めた。
「今さら……！　もう卒業決まってるのに！？」
めぐみが机を叩いて大笑いする。
「やだ！　本音出ちゃった」
「まぁその気持ち、わからなくもないけどな」
ギャアギャアと騒ぎが収まらない体育館を横目に見て、岳彦がクスクスと笑う。
「あと2日。七海高校での生活、楽しもうぜ」
「うん……」

「遅くなりました！」
バタバタと駆け込む翔、陽乃、春樹、絵美の４人。それに気づいた恭一が笑顔で声をかける。
「お疲れ。けど、急げ。合奏今日は6時半までだからな」
「はい！」
４人は大慌てで部室に駆け込み、楽器を出す。トランペット・陽乃とユーフォニウム・春樹はマウスピースでアップを行う。サックス・翔とクラリネット・絵美はリード選びの後に楽器を組み立て、すぐに音出しを始めた。
「よし、ザッとロングトーンしよっか」
翔が3人を集める。
「ほな、ベーの音階8拍吹いて４拍休みで上がって、上のベーの音2回吹いて下がってきてな」
「うぃす」
やわらかい音色でロングトーンをする４人。１年生の頃にはチューニングすら合わなかった彼らが、こうしてロングトーンを一緒に

できること自体、当時は予想できないことであった。
「よし！　完璧！　合奏行こか」
「はーい！」
４人は楽譜と楽器を持って、音楽室へ入っていった。それを見届けた岳彦が合図を出す。
「大丈夫だ。もう出てくることないと思うぞ」
それを聞いて出てきたのは、安和とめぐみだった。
「急に来るからビックリしちゃった」
安和がフゥッとため息を漏らす。
「私たち、なんだか泥棒みたいじゃない」
めぐみが苦笑いして頬を掻く。
「ホント。変な緊張感があるわ」
「それより、いつまた誰が来るかわかんないからサッサと置いていこう」
「そうね」
３人はコッソリドアを開け、部室へ入った。幸い、電気はつけたままである。真っ暗ではなかなか部室も楽器やら毛布（音を吸収するために音楽室中に敷いている）が散らばっていて危険なのだ。
岳彦はバスパートのロッカーを開けた。各パートに楽譜、譜面台、メトロノームなどを収納するロッカーが与えられており、やはりその棚も各パートの特色が出ていた。揃いも揃ってキッチリ屋がいるバスパートの棚はまるでインテリアショップ並みの様相を呈していた。おそらく、ここまで整えられているのは拓真のおかげ、それでいて無機質な感じがしない、シールなどでデコレーションされているのは愛実のおかげだろうと岳彦は察しが付いた。
いっぽう、クラリネットの棚はこれもまた綺麗である。きっと絵美の指導によるものだろう。エスクラリネット、ベークラリネット、バスクラリネットとクラリネットの中でもさらにパート分けされており、さらに使用しない楽譜、譜面台なども置くスペースがキッチリと分けられている。そして人数が多いパートにもかかわらず、空

きスペースができて毛布の収納も可能になるほどであった。
　トランペットの棚を開けた安和は、やはり女の子が多いパートだなと思った。唯一の男子である勇のカラーは出ておらず、おそらく彩香が好きなのだろう、のだめカンタービレのイラストがあちこちに貼ってあった。陽乃は陽乃で、想い出を大切にしたいという気持ちの強い子である。安和、勇、彩香、陽乃とで写した昨年のコンクール写真が大切そうに貼ってあった。
　3人は思わず用を忘れてロッカーの前で黙り込んでしまった。
「あれ……」
　ツゥ、と岳彦の頬を涙がこぼれ落ちていく。別に悲しいわけではないのに、涙が止まらなくなる。
「ヤバいなぁ……。俺、ここにいたらホント留年したくなりそう」
「しっかりしなさいよ！」
　バシーン！と思い切りめぐみが岳彦の背中を叩いた。
「痛ってーな、この馬鹿力！」
「なんとでも言いなさい。痛くもかゆくもないわ」
「二人とも、静かに！　バレちゃうでしょ！」
「あ……すまん」
「そろそろ退散するよ」
「あーいよ」
　3人は必要なものをロッカーに入れて、静かに部室から退散した。
　6時半を過ぎ、合奏が終わったので片づけに入り始める部員たち。駿が毛布を抱えて部室へ入ると、どこかで嗅いだことのある香りが鼻を刺激した。
「ん……」
　後ろから続くみゆきと優輝も足を止めた。
「これ……」
「三河先輩のワックスの香りだ！」
　優輝が真っ先に反応した。
「先輩！　いるんですか？」

みゆきは部室を見渡すが、誰もいない。駿と優輝も探してみるが、やはり誰もいる様子はなかった。
「気のせい？」
「……かもな」
フゥッとため息を漏らして駿がロッカーを開けると、彼の、つまりバスクラリネットのスペースにそれは置いてあった。白い包装紙に入っている。
「……うおおおおお――！」
駿の大声に優輝とみゆきが驚いて振り向く。
「何よ急に！　ビックリするじゃない！」
「これ！　これ！」
見ると、クラリネットのリードが入っている。それも、エスクラリネット、今は吹き手のいないアルトクラリネット、ベークラリネット、バスクラリネットまで揃っている。
「うわぁ～！」
みゆきが感動の声を上げた。優輝も嬉しそうにリードをひとつ手にとって音楽室に駆け込んだ。
「橋本先輩！　小林！　伊原！」
驚いて3人が優輝のほうを見る。
「どうしたの？」
「リ、リードが」
「リード？」
「新しいリードが置いてあるんです！　それと……手紙も」
同じ頃、部室で亮平が不思議そうな顔をして突っ立っていた。
「どしたの、みーやん」
愛実が声をかける。
「いや……なんか、こんなの置いてるんだけど、これ加藤のか？」
見ると、ユーフォニウムソロ曲集が置いてある。それも、2冊。
「私じゃないよ。春くん……じゃなくて、水谷先輩のじゃない？」
「えー？　何～？」

春樹が譜面台を持って部室に帰って来る。亮平は「これ、春樹先輩のんッスか？」と聞いてみるが、春樹も「知らないよ。俺のじゃない」と言った。

「見て、手紙」

横から覗き込んでいた智志が丁寧に折られている手紙を見つけたので、拓真も呼んで手紙を開いてみた。

「朝倉先輩」

「んー？」

勇に呼ばれて振り向くと、彩香と二人してキョトンとした表情で立っていた。

「どうしたの？」

「これ」

見ると、綺麗なメトロノーム付きチューナーが３つもあるではないか。

「どうしたの！　これ！　スゴイねぇ。本格的。二人が買ったの？」

「置いてありました。これと一緒に」

手紙だった。差出人は「岡崎　安和」と書かれている。宛名は「朝倉　陽乃様」、「久野　彩香様」、「松尾　勇様」となっている。

「岡崎先輩が……？」

陽乃はそっと手紙を開いてみた。

第２３６話　大好きな場所

同じ頃、クラリネットパートとバスパートも手紙を開いて全員で読んでいた。

クラリネットパート　橋本絵美さま　河内みゆきさま　伊原光瑠さま　瀬戸優輝さま　逢沢駿さま　小林梨子さま

この手紙を読んでいるのは、合奏が終わった後でしょうか。それとも、卒業式の前日でしょうか。いずれにしても、卒業式の前までには読んでくれていることでしょう。

早いもので、私ももう七海高校を卒業する日が来ました。初め、やっぱり入学したときに吹奏楽部がなかったのはショックでした。けど、どうすることもできないと思っていた私は市の吹奏楽団に入り、クラリネットを続けていました。でも、やっぱり何かが違う。そんな風に思っていました。私のレベルが、皆さんのレベルに合っていない。そんな風に思えていたんです。

私が2年生のとき、吹奏楽サークルができたと耳にしました。何度か絵美ちゃんの音色、聴いたことがあったけど初心者っていうこともあって、私やっぱり、みんなの中に入るのは抵抗があった。失礼な話、私のほうが上手いと思っていたし。

驚いたのは、絵美ちゃんたちの学年が停電したホールで「大草原の歌」を演奏しきったという話を聞いたとき。初心者ばかりのサークルだと思っていたのに、あの曲を吹くことができる。私はこのとき、心底あなたたちがスゴいと思った。だって、楽譜を覚えていたってことでしょう？

やっぱり、周りの評価もそれであったみたいで。1年生がいっぱい入った話を聞いて、もっと心を打たれた。絵美ちゃんもスゴいと思う。初心者でまだ1年しか吹いていないのに、自分より経験の多

い子たちを指導する側に立っているんだもの。それから、その絵美ちゃんについて行くことを決めたみゆちゃん、ヒカル、駿くん、優輝くん、リコちゃんもスゴい。私ならきっと、素っ気ない態度を取ってるもの（笑）

君たちの中に入るには勇気がとても必要だった。でも、そんな緊張感とかを一気に吹き飛ばすような明るさと優しさで私を迎え入れてくれたクラリネットパート。今では、私の宝物です。

私はもう卒業しちゃいますが、まるで3年間、クラブで過ごしたかのような気がしています。これはきっと、みんなのおかげ。みんなが優しく迎え入れてくれなければ、いま私はこんな気持ちで卒業はできていなかったと思います。

これから絶対、大変なことがあると思う。でも、みんななら乗り切れる。信じています。頑張ってくださいね！

２００７年２月２６日　豊田めぐみ

大岩　智志様

いきなりですが！　俺と君は面識がほとんどないね（笑）

でも、チューバの後輩がまたできたこと、嬉しく思います。いま思えば、拓あんと君と。初心者二人きりになってしまうのが少し心配。余計なお世話かもしれないけれど。話を聞いたときはビックリしたけど、きっと君の意志は固いはず。拓あんも、俺も追い抜くような立派なチューバ吹きを目指してください。きっと、ＯＢになっていつか俺もお邪魔します。そのとき、俺をビックリさせてくれよ♪　よろしく☆笑

加藤　愛実様

最初はボーン吹きだったらしいね。でも、ユーフォに転身したのはなんで？

なんていうところが気になってるけど、俺、加藤さんはボーンよりユーフォ向きだと思うよ。なんていうか、優しいからユーフォみたいに繊細な音色がいる楽器には加藤さんのような人がピッタリだと思う。４月からはいよいよ先輩になるね！　おっとりした春やんと、ちょっとお堅い感じのする拓あんをしっかり面倒見てやってね（笑）

三宅　亮平様

君はいっつも冷静、沈着、寡黙な感じ……と思ったのは最初だけ（笑）　実は楽器を弾いてるとき、めちゃくちゃ君って表情豊かなんだよな。自分で気づいていないんだと思うけど。でも、吹奏楽に対しては多分パート１熱い男だと思うよ。なんせ、ソロコンのときはマジびっくりしたからさ。

初心者集団だったバスパートに君が入ったことで、スパイスになったと思う。音楽的な知識も技術もたくさんあるんだから、もっと自分を前面に出してパートを引っ張ってください。頑張れ、弦バス王子！笑

水谷　春樹様

いつでもニコニコして頑張る春やん。そんな春やんが俺は好き♪

もちろん、人としてね（笑）

でも、ホント初心者だったとは思えない。拓あんとはいいコンビだしね。俺、今までチューバの同期っていうのがいないんだよな。それどころか、パートの同期すらいない感じ。だから、同期がいるってことはすっごく大きいことなんだ。毎日一緒にいたらうるさいように思うかもしんないけど、仲間を大切に、毎日を頑張ってくだ

さい。

本堂　拓真様

まずは、ソロコンの次の大会出場おめでとう！　俺の……後輩って呼んでいいかな?笑　後輩がソロコンで頑張ってる姿を見れて、本当に嬉しかった。それに、拓あんが俺をずっと「先輩！」と言って親しんでくれたこと、すごく感謝してます。最初は気を使ってくれてたのが丸分かりだった（笑）　けど、それがだんだん君の優しさから出る言動だったり行動だったりっていうのがわかってきて、もっと嬉しかった。吹奏楽をやってて、音楽できる以上に嬉しかったんだからな～☆

最後に。

俺、本当に卒業したくない。留年してもいいくらい。だけど、それじゃダメなんだよな。

新たな一歩を踏み出すために。俺はけじめとしてこの手紙を書きました。

本当に、ありがとう。

２００７年２月２６日　三河　岳彦

久野　彩香サマ

お人形さんみたいなアナタ。けど、吹くときはホント真剣で。そのギャップに私もそんな頃があったなぁ……なんて思いださせてくれちゃうほどの純粋さ。

私が入ってきたことで、トランペットパートを思い切り掻き乱しちゃったこと……。ゴメンなさいね。ホント、松尾くんと久野さん

には迷惑しかかけてなかったんじゃいかな。こんなこと書いたら、きっと久野さんのことだから「そんなことないですよ！　先輩！」なんて言うんだろうな。

実はアンサンブルコンテスト、聴きに行ってました。受験でちょっとしんどかった頃に、みんなの頑張りを見ようと思って。そのとき、久野さんずーっと朝倉さんのほうを見てたよね。信頼関係がスゴいんだと思う。それが、ウチのパートの強み。

これからも久野さんらしさを失わないように、頑張ってね！

松尾　勇サマ

最初、ムスッとしてる君を見てドキドキしました。私、嫌われてる？って（笑）　けど、それって素の君だったよね。飾ることのない君は、私にとって理想のような人です♪　あ、照れた？笑

けど、やっぱり吹奏楽に対する気持ちはすごい熱いよね。見ててわかる。あなた、この寒い中、時々つくし野川沿いとかで練習してるでしょ？　私の塾、土手沿いにあるから時々音色が飛んできてたよ。日に日に澄んだ音色になっていくのには、本当に驚いた。

そんな音色が聴けなくなって、松尾くんとドラマの話とかできなくなるのがスゴく残念。もっと早く、吹奏楽部に入ればよかったかな、とまで思うもの。

今まで本当にありがとう。もしよかったら、ＯＢで来ても相手してやってね☆

朝倉　陽乃サマ

あなたとは何度バトルしたことか（笑）

正直に言うね。私、最初はあなたのこと好きじゃなかった！！笑

でなけりゃ、あんなにケンカなんかしないって。でも、私初めてだった。人に対してあれだけ素になったことなんてなかったもん。

もう今は安心して。佐野くんのことは後輩としてしか見ていないから（笑）　でも、ホントこれは朝倉さんの強みだと思う。不思議

なんだけど、みんなアナタといるとその人の「素」が出るの。佐野くんも、久野さんも松尾くんも、みーんな。なんでかは私にはわからないけど。

それが音にも出てきているの。アナタ、こうやって吹きたい！と思った音色がそのまま楽器を通じて音となって飛んで行ってる。これって、本当にすごい！　私、あなたを今では尊敬してるもの。

これから3年生。受験も重なってくるけど、もっと吹奏楽部を良いバンドにしていってね！　あなたならきっとできると、信じています。

最後に、みんなダーイスキ！！

２００７年２月２６日　岡崎　安和

「もう……こんなの、反則だよね！」

陽乃がクスンクスン言いながら手紙を折りたたんだ。彩香と勇もしきりに涙を拭っている。

「でも……このままで終わらせます？」

勇が顔を真っ赤にして陽乃に聞いた。

「そんなことできないよね」

「じゃあ……」

「今から先輩にできること、考えよう！」

同じことはクラリネットパート、バスパートでも決まっていた。クラリネットでは光瑠が色紙にイラストを書いてくることになり、真ん中にめぐみのイラストを描いて周りに寄せ書きをするという方向で話が進んでいた。バスパートは卒業式後、岳彦を部室に呼んでもらったソロ曲集で一人ずつ、短い演奏を聴かせるという。

「私たち、どうします？」

「うーん……っていうか、パートごとにやってもいいけど、いまよ

く考えたら先輩のお別れ会みたいなの、やるとかいう案出てないよね」

「そういえば……」

「あたし、翔と先生にちょっと掛け合ってみるよ」

「ホントですか？」

「もちろん！　任せといて」

陽乃は笑顔で音楽室のほうへ走っていく。お世話になった先輩たちに何かして、最後にお礼を言いたい。陽乃はその一心で翔のところへと急いでいた。

第２３７話　走れ！

２月２８日（水）。七海高等学校では第３９回生の卒業式が行われていた。結局、式が始まる前に吹奏楽部が演奏したのは『ｍｙ　ｇｒａｄｕａｔｉｏｎ』、『未来へ』、『旅立ちの日に』、『ｓｅｃｒｅｔ　ｂａｓｅ　～君がくれたもの～』の４曲になった。その後、国歌、校歌と演奏し、いったん演奏はここで終わる。式が進んで行き、名前を呼ばれて立ち上がり、礼をする３年生たち。高校になると人数が多いため、一人ずつに卒業証書を渡す形ではなくなるようだ。

式次第は順調に進み、再び吹奏楽部の出番がやって来た。

「それでは、３年生が退場します。皆様、拍手でお送りください」

恭一が立ち上がると同時に、部員たちは楽器を構える。その姿を安和、めぐみ、岳彦の３人も見ていた。ついつい、自分たちのパートへ目が行く。

（相変わらず顔が見えてねぇな）

岳彦は拓真と智志の姿を見てクスッと笑った。

（楽器冷えてないかな。ちゃんと温めてるといいんだけど）

安和は彼女らしく、陽乃たちの心配をしていた。

（いいなぁ。私も卒業式で吹いてみたかった）

めぐみは羨ましそうに部員たちのほうを見る。盛大なオープニングの後に、健之佑のソロが響き、愛実が加わる。そして転調してから始まったのは、雪子のソロ。穏やかな響きを持っている。

「卒業写真だな」

リアルタイムで知らない３年生の男子からも、タイトルが口に出るほどこの曲は有名なのである。そして３年Ａ組が退場を始めると同時に、なんとも憎いタイミングと言えるのか、絵美のソロが始まった。

「……もう」

めぐみは絵美の優しい音色が大好きだった。その絵美の音色が、ちょうどめぐみを送り出すときに響き始めたのだから、彼女にとってはたまったものではなかった。ポロポロと涙がこぼれ、止まらなくなる。

「めぐ先輩、泣いてるよ」

みゆきが気づいて、ちょうど休みだった優輝に向かって囁いた。

「いま泣いてるんだから、アレやったら絶対大泣きだな」

二人は顔を合わせてクスクスと笑う。

やがて、クラリネットが増えて木管楽器全体でのメロディになる。裏メロディはユーフォニウムが担当する。安和にとってはもうそれだけで涙腺が崩壊状態だった。陽乃も彩香もこういう場面には弱く、涙で鼻をクスンクスン言わせながら楽器を吹いていた。

やがて、間奏に入り、アルトサックスのソロが始まるはずだった。

「……！？」

恭一も驚いた顔をし、裏メロディのようなものを吹くフルートの由美子、沙希、佳菜の3人も驚いた表情でその人物のほうを見た。恭一は一瞬怒りそうになったが、状況を察して何も言わなかった。

翔が、ボロボロと涙をこぼして息が上手く吸えなくなったのか、楽譜が見えなくなったのか、いずれにしてもソロをまったく吹けない状況になっていた。陽乃も驚いた。翔がここまで感情を露わにすることはそうそうないので、ただただ部員たちは驚くしかなかった。

それは遠くで見ている岳彦も同様だった。

（翔……）

後輩が自分たちの卒業式で泣いてくれる。岳彦にとって、高校では味わうことがないだろうと思っていたことだけに、思わず涙がこぼれた。

「たけち、泣いてんのかよ！」

隣から友人が茶化してくる。岳彦は「るせーよ、バァカ」と言って涙を拭った。

（吹かなきゃ……吹かんとアカン）

翔はヒッグ、ヒッグと嗚咽を漏らしながら楽器を構えるが、まともに息が吸えない。このままでは伴奏のみで曲が過ぎてしまうという焦りはあったが、体が追いつかない。

不意に、厚い音が響いた。麻綾とさゆりが吹いてくれていたのだ。二人も涙目になっているが、翔ほどではなかったのだろう。

曲は上手く繋ぐことができた。

「ありがと、マーヤ、さゆっち」

小声で、というよりも口パクのみでそう二人に礼を言った。

「いえ！」

さゆりがとびきりの笑顔で返す。

「普段お世話になってますから」

麻綾は妙に真面目臭い返事をした。

慎也のソロも音が震えているのは誰の耳にも明らかだった。それでもなんとか堪えてソロを吹き切ることはできた。曲はピークを迎え、春樹のソロ、健之佑のソロを響かせて静かに終わりを告げていく。曲が終わる頃にはほぼ全員が泣いている状態だったが、終わったからと言って部員たちに安堵できるような時間が来たわけではなかった。

「よし！　急いで移動するぞ！」

３年生が全員出て、音楽を止めても良い状態になったのを恭一が確認してから部員たちは楽器を降ろし、移動を始めた。

「軽い楽器のものは、パーカッションを手伝うこと！　大型楽器はエレベータ使って構わんぞ。とにかく急げ！　３年生の先生方にはあえて遠回りをお願いしてるけど、時間はあまりないからな！」

部員たちは手際よく楽器を分担して運搬する。

「かける！」

陽乃が翔に声を掛けた。

「ハンカチ、いる？」

「……ん」

翔は顔を赤くしてハンカチを受け取った。涙を拭い、ズビーッと

鼻を吸った後にようやく笑った。部員たちはとにかく走った。階段なので転ばないように、それでも3年生に追いつけるようにとにかく走った。

職員室横を駆け抜け、正面玄関へ抜ける。ドアを開けると冷たい風がブワッと吹き付けてきた。

「きゃーっ！　やだぁ」

あまりの強い風に陽乃たち女子のスカートがめくれ上がった。

「おぉ！」

翔、慎也、拓真の3人が声を上げる。

「バカ！　早く並んで！」

後ろから美里が蹴りを入れる。それに気づいたように顔を赤くした3人も並んでいく。もう少しで準備は整うところまで来たときだった。

「うわ！」

翔が悲鳴を上げる。

「どうしました？」

「リード割れた！　最悪や」

「先輩。あたし、予備持ってます。合うかどうかわかりませんけど」

麻綾が素早く翔にリードを手渡す。

「おぉ！　サンキュ！」

翔は嬉しそうに笑ってリードを受け取り、素早く音階を吹きこなした。

「オッケ！　相性バッチリかも、これ」

「良かったです。頑張りましょうね」

「うん！」

その頃、3年生は職員室側とは反対側の入口から退出しようとしていた。めぐみに追いついた安和が声をかける。

「ねぇ、めぐ」

「ん？」

「去年の3年生って、こっち側から出たっけ？」

「どうだったかな……」
「しかも、こんなに遠回りしなかった気がするんだけど」
「そう言われれば……。まぁ、何か事情があったんでしょ」
「そうかなぁ……」
そう言って二人が正面玄関へ出たときだった。聴き慣れた音が、耳に届いたのは。

第２３８話　さよなら、またね

安和たちの耳に聞こえてきたのは、何度聞いたかわからない楽器たちの音だった。盛大なオープニングはすべての楽器が吹いている。寒空の下、後輩たちがいつの間にか体育館から移動してきて、玄関で演奏をしているのだ。

「ウソ……」

めぐみは声を失った。始まったのは、コブクロの『桜』だ。どうやって短時間で移動させたのか不思議で仕方がない、ドラムセットを叩くのはあずさだ。緩やかなメロディの後に始まったのは、翔のソロ。甘く、切ない雰囲気を醸し出す。音が震えているが、それは涙によるものではなく、ビヴラートによるものだとすぐにめぐみは気づいた。やがて、麻綾が加わり綺麗なハーモニーを響かせる。

木管楽器とユーフォニウムの奏でるメロディの裏側で響く、ホルンとフルート、ピッコロの裏メロディ。調が変わってトロンボーンのメロディ。曲は一気に音量を増して、主題へと入っていく。

トランペットの吹くサビと、めぐみが吹奏楽部員の前を歩くタイミングが重なった。めぐみは堪えきれず、大粒の涙をボロボロとこぼす。優輝、みゆき、光瑠の３人が制服の袖でゴシゴシと何度も涙を拭ったせいで、顔は真っ赤になっている。絵美は涙を流しっぱなしで楽器を吹き続けていた。

「……！」

急にめぐみが列を外れてギュウウッと絵美の体を抱きしめた。続いて、光瑠。そして優輝も遠慮なく抱きしめ、みゆきを抱きしめて大声で言った。

「みんな、だーいすき！」

絵美が笑う。

「私も！」

「あたしだって！」

負けじと光瑠が叫ぶと「俺もッス！」と優輝が叫び、「あだじも！」と声にならない声でみゆきが叫んだ。

「ありがと！　みんな……」

クラリネットパートは小さくなっていくめぐみに、しっかりと手を振り続けた。

曲が『さくら（独唱）』へと変わる。始まるのはオーボエのソロ。そのタイミングを見計らうかのように現れたのは、安和だった。

ちょうど休みになっていたトランペットパートは安和の姿をしっかりと確認できた。しかし、安和がこちらを向いてくれないのだ。陽乃たちにはその理由が分かる。何かと強がりな安和は、泣くのが嫌だから顔を背けているのだろう。しかし、陽乃たちはこれで形としては最後になるのだから、こっちを向いてほしい一心だった。

不意に楽器を置いて飛び出したのは勇だった。驚いて健之佑と優輝が道を開ける。

「先輩！」

ガッシリと安和の腕を掴むと、強引に振り向かせた。

「ちょっと……恥ずかしいじゃん！」

「最後なんですよ！？　俺たちに……お礼、言わせてください」

「……。」

彩香と陽乃は顔を見合わせると、楽器を置いて健之佑と優輝が作った道を通って安和のもとへ駆け寄った。ハッキリ言って本番中にやりたい放題のトランペットパートだが、恭一は決して止めたりしない。

「先輩」

彩香が優しく声をかける。

「短い間でしたけど、ありがとうございました」

「……私のほうこそ。みんなのおかげで……コンクール、最後に出れて嬉しかった」

「私もです。先輩の隣で楽器吹けたこと、とっても嬉しいですよ」

「ありがと」

陽乃がそっと手を握った。
「先輩」
「朝倉さん……」
「懐かしいですね」
「え？」
「私と先輩、ケンカなんかしたんですよ？」
陽乃が笑うと、安和もつられて笑った。
「そんなこともあったね」
「……なんかもう、言葉が出てこないです」
「私も……」
後ろではトランペット抜きの状態で進んでいく『さくら』が流れている。
「あ」
突然、陽乃が思い出したように言った。
「どうしたの？」
「いいコト思いついたんです！」
「何？」
「あたしたち……絶対、来年に定期演奏会開いてみせます！」
恭一と翔がギョッとした表情を浮かべた。安和も目が点になっている。しかし、彼女はすぐににこやかに笑った。
「そしたら、先輩もＯＧで出てくださいますよね！？」
「……当たり前でしょ！　出してくれなかったら、またケンカだかんね！」
「はい！　約束ですよ」
「うん……」
後がつかえている。もう、行かなければならないことは誰の目にも明らかだった。
「じゃあ……」
そっと安和が手を差し伸べる。まず、勇に。
「頑張って男の子の後輩、入れてね」

「はい。一人じゃ肩身狭いので、頑張ります」
フフッと笑い、次に彩香に。
「あんまり二人がマイペースすぎないように、気をつけてあげてね」
「はい！　監視員、頑張ります！」
そして最後に、陽乃に。
「ありがとう。あなたのおかげで、最高の1年だったわ」
「あたしも……初めての先輩が、安和先輩で良かったです！」
「……ありがと！」
ギュッと強く抱き合い、そっと離れる陽乃と安和。
「じゃあね」
「はい……！」
安和はそれっきり、陽乃たちの方を振り返らなかった。振り返れば、きっとまた泣いてしまうからだと陽乃は自分に言い聞かせ、スッと部員たちの中へと戻っていった。
河口恭吾の『桜』に演奏が切り替わった瞬間だった。
「きゃっ！？」
強風が吹きつけ、それと同時に翔たちの目の前を花びらのようなものが舞い散ったのだ。
「うわぁ……！」
めぐみは空から舞い落ちるそれに目を奪われた。安和はスカートを押さえ、涙を拭いながら頬に当たるそれの感触を心地よく感じている。そして、最後に出てきた岳彦はそれのせいなのか、自分の涙のせいなのかわからず、頬を濡らしながら外へ出てきた。
まさに男泣き。一度も岳彦の泣き顔など見たことがないバスパートのメンバーは呆気に取られていた。まさか、ここまで岳彦が泣くとは思っていなかった。それだけに、この行動はますます涙を誘うものになるだろうと拓真は少し、申し訳なさも感じていた。
「先輩！」
まず、飛び出したのは愛実。
「ご卒業、おめでとうございます！」

そして手渡したのは、文化祭のときに撮影したバスパートの集合写真だった。
「〜〜っ！」
岳彦はギュウウッと愛実を抱き寄せた。キャーッと黄色い声が上がる。
「ちょ、先輩！　俺もお願いします！」
春樹が幼なじみにそのようなことをされるとは思ってもみなかったようで、半ば強引に二人の中へと入っていく。
「痛てぇよ、バーカ！」
「バカとはなんですか！　もう、これ上げるんでサッサと行ってください！」
春樹が大きな花束を無理やり岳彦に持たせた。
「先輩」
亮平が恥ずかしそうに岳彦の前に立つ。
「これ……バスパからの寄せ書きです」
「……サンキュ」
亮平から寄せ書きを受け取った後、岳彦はガッチリと握手を交わした。
「せんぱーい！　また絶対、俺の指導に来てくださいね？」
「当たり前だろ！　お前にはまだまだ教えなきゃいけないことが腐るほどある」
智志の言葉にようやく岳彦にも笑顔が戻った。そして最後に、拓真が出てきた。
「……はい、先輩」
「これ……」
それは拓真、春樹、愛実、智志、亮平、そして岳彦のマスコット人形のようなものだった。器用に作られたそれは、全員が笑顔。
「先輩に、涙は似合いませんよ？」
拓真としては冗談半分だったが、それを境にますます岳彦の涙が止まらなくなった。

「俺……本気で留年しようかなぁ」
「ダメっすよ、先輩」
口を開いたのは智志だった。
「先輩には、明るい未来あるんでしょ？　音大生でしょ？」
「そうですよ」
愛実が続ける。
「私たちとの毎日を思い出すのは、堪えきれないくらい寂しくなったときだけにしてください」
「……。」
春樹が笑顔で言う。
「先輩、あれですよね？」
「なんだよ」
「将来、東京佼成ウインドオーケストラに入るんですよね？」
「……あぁ」
「俺も目指そうかなとか思うんで、よろしくです」
「お前らしくない強気発言だな」
拓真がやわらかい笑顔で言う。
「先輩……また、会いましょうね」
「……おう」
岳彦が前を向いた。きっと、彼ももう振り向くことはないだろう。
そう察知したバスパートは各々の位置へと戻っていく。
そして、演奏が終わった頃には3人の姿は完全に見えなくなっていた。
「……終わったね」
陽乃が寂しそうに呟く。
「はい……」
彩香がそう返すと同時だった。
「気をつけー！」
「！？」
翔だった。

「礼！」
その言葉に反応したのは、慎也だった。
「3年生の皆さん！　ご卒業、おめでとうございます！」
打ち合わせも何にもない言葉だったが、全員が反応した。
「おめでとう、ございます！」
それと同時だった。ブワァッと風が吹き、まるで桜吹雪かと見間違うほどに美しい粉雪が吹き込んできたのだ。
「……綺麗」
全員の涙が、風にさらわれていくような、そんな気が翔にはしていた。
こうして、卒業式は静かに降る雪の中、終わりを告げた。

第２３９話　段ボールの山

「ただいま～」
３月１７日（土）。永井家の廊下や空き部屋にはたくさんの段ボールが積み重ねられていた。引越しの準備は着々と進んでいる。きっちり屋の雪子も、２１日の本番に支障が出ないよう、２月末からしっかり準備を進めてきた。
「お帰り、雪子。今日も遅かったわねぇ」
母のひとみがご飯の準備をしながら居間に入ってきた雪子に声をかける。
「もう４日前だもの。これからが正念場よ」
「お姉ちゃん、お帰り！」
「ただいま！　ねぇ、真沙美も２１日、聴きに来てくれるの？」
「当たり前じゃない！　友達も誘って行くよ！」
真沙美は笑顔で答える。初めは吹奏楽に興味がないと言っていた真沙美だが、ここ最近はしっかりと本番に足を運んでくれるようになった。
「はい！　今日もお父さん遅いみたいだから、先に食べましょ」
並んだのは、肉じゃが、湯豆腐、ごはん、ホウレンソウのおひたしだ。
「いただきます」
「ねぇねぇ、そういえばお姉ちゃん」
「何？」
「まだ、お姉ちゃんと部屋片付いてないよね？」
「……うん」
まだ、雪子には片づけられない物があった。真沙美もひとみも、それが何なのかはわかっているのであえて片づけよう、などとは言わない。
「あら、そうなの？」

ひとみはあえてとぼけたフリをした。
「うん。急いでしまっちゃえば問題ないものだから平気だよ？」
「あまり前日にバタバタしちゃわないようにね」
「わかってる～」
夕食後、カバンを持って上がって部屋に入るとその殺風景さに改めて驚いた。段ボールばかりの部屋。ガムテープと段ボール特有の匂い。冷たいフローリング。
「……。」
雪子はまだ片付いていない一角に近づいて、その写真を手にした。翔、陽乃、沙希、由美子、絵美、慎也、春樹、拓真、美里。１０人で写っている写真は「七海高校」の「7」を象ったポーズを取っている。まだサークルだった頃に撮った写真だ。
「いろいろあったなぁ。懐かしい」
陽乃とは翔のことでケンカをしたこともあった。けれど、自分が引いてかえって良かったと思っている。正直、陽乃に勝つ自信はなかったわけであるし、転校になってしまったので万が一、翔と付き合っていても彼に辛い思いをさせていただけかもしれない。そう考えると、これで良かったのだと思える。
「早くしまわないとダメなんだけどな……」
雪子はフゥッとため息を漏らしてもう一度、写真を見つめなおした。

その頃、右川家では順平が弟の慎平（中学1年）と陽平（小学５年）を連れ込んで、千羽鶴を折っていた。
「兄ちゃん！　手が折れた……」
慎平が申し訳なさそうにヨレヨレになった鶴を順平に手渡す。
「いいよいいよ！　とにかく、あんまり上手に折るな？」
「上手に折らなくていい鶴とか初めて」
陽平がケラケラ笑いながら鶴を折り続ける。器用な陽平が折る鶴は、順平より慎平よりずっと丁寧だった。これでは誰かに手伝って

もらったのが丸分かりだ。
ピンポーン、とインターフォンが下で鳴った。
「はいはーい！」
順平は待ってましたとばかりに玄関へ駆け下りる。ドアを開けるとそこには優輝、亮平、健之佑の姿があった。
「今日の参加者はこれだけ？」
「おう」
優輝が笑う。
「勇と優は塾。徹は出るところを親に見つかって叱られたからパス。智志はちょっと出かけてるから、後で合流って感じ」
「よし！　いま弟たちに手伝ってもらって、８９２羽までいった」
「あと少しだな。頑張ろうぜ」
「うん！」
順平は雪子の喜ぶ顔が見たい一心で、毎日鶴を折っていた。それを知った同級生たちが、毎晩手伝いに来てくれているのだ。
「お邪魔しま～す」
「こんばんはー！」
慎平と陽平が待ってましたとばかりに声を上げる。
「おー、慎ちゃんに陽ちゃん！　元気かぁ？」
健之佑が突然、父性丸出しにして二人に飛びつく。
「何？　お前、ショタなの？」
優輝のとんでもない発言に健之佑が必死になって弁解する。
「バカ言うな！　俺は弟がいないから、ただ可愛いだけで！」
「冗談だよ！　そんなに真っ赤になって弁解しなくてもいいだろ」
優輝は冗談半分だったが、これは健之佑にとってはたまらない言葉だったようだ。その晩、右川家からは夜１０時頃まで笑い声が響いていた。
「もしもし？」
翔は携帯電話でとある人物と話をしていた。

「……ん？」
「スマン、寝てた？」
「寝てたも何も……お前、いま何時だと思ってんだ」
明らかに不機嫌な声。しかし、まだ9時前だ。
「まだ9時前やんけ。なんでもう寝てるねん」
「明日早いからだよ」
「ゴメンゴメン。ほんで、頼んでた件、いけそう？」
「なんとかな」
「お前は来れそう？」
「行けなくもないけど……」
「できたら、いい演奏聴かせてあげたいんやん」
「しょうがねぇな。他でもない、翔のためだし。ちょうどその頃、関東方面に用事あるし」
「さっすが泰徳！　なぁ、何演奏してくれんの？」
「ナーイショ！」
泰徳が珍しくテンション高めの答えをすると、翔が黙り込んでしまった。
「何で黙んねん！」
「出た、関西弁。焦ると関西弁が出るの、治ってへんな」
「ウッ……バーカ！　行かねぇぞ、当日！」
泰徳があからさまに怒りをあらわにして、耳を近づけなくともキンキン聞こえる音量で怒鳴り散らす。
「ゴーメンごめん！　冗談やって。な、頼むわ」
「バーカ！　じゃーな！」
泰徳は怒って半ば強引に電話を切った。翔はクスクスと笑いつつ、スケジュール帳を開いて「泰徳」の欄に〇を入れた。
「後は……あ、岳先輩にもお願いしとこ。あと……まぁ拓真は七海メンバーはＯＫやし……あ！　ついでに聞いとけば良かった」
翔は慌てて再び泰徳に電話を掛けた。
「なんだよ！」

すぐに出るあたり、もう一度くらいかけてくると予想していたのだろうか。翔は少し自分を見透かされたような気がして、恥ずかしくなっていた。

「すまん！　泰徳だけじゃなくって……」

「わーかってるよ！　谷、高橋先輩、中井、佐々木の４人も初めから連れて行くつもりだったよ」

「おぉー！　さすが我が幼なじみ！」

「お前の考えてるコトくらい、わかるっつの。じゃな。俺、眠いから」

「はいはーい！　おやすみ、泰徳くん」

「……キモいから、マジで」

そう言って電話は切れた。

「よーし！　準備は着々と進んでるで～」

翔は布団に寝転びながら嬉しそうに呟いた。

その頃、泰徳はすっかり目が覚めてしまったので、翔に言われたメンバーに電話を掛けていた。未来、香織、美奈の３人は恵梨、愛実など顔なじみに会えることを心待ちにしているようだった。そして最後に美並に連絡を入れる。

「もしもし？　竹林くん？」

「あ、こんばんは」

「どうしたの？　珍しいね」

「あの……今度の２１日なんですけど、空いてないですか？」

「え？」

「急にすいません！　ただ、あの……神奈川の俺の幼なじみの友達が転校するっていうから、最後にいい演奏聴かせてやってほしいって言われて」

「それで私がどう関係あるの？」

他の３人と同じ返答。

「その子、低音が大好きらしくって、低音アンサンブル聴きたいっ

ていうんで。ほら、俺の幼なじみの佐野って子なんですけど、アイツの学校、低音がいまひとつ充実してないから、手伝って欲しいって」

「……。」

「ダメっすかね？」

「いいよ！　ちょうど暇だし……」

「……ありがとうございます！」

「いえいえ。また詳細は明日、教えてくれる？」

「え？　今でもいいんじゃ……」

「竹林くん、明日はやいでしょ？　そろそろ寝ないと」

「あ、はい……。ありがとうございました！　失礼します」

泰徳は電話を切ってから、ため息を漏らした。

「ビーックリした……。なんか、変にドキドキした」

泰徳はどこで聞いたのか忘れてしまったが、妙なセリフを思い出した。

恋は女性をキレイにする。恋は女性を優しくする。

「本堂って人、すげ～なぁ……」

泰徳は顔がうろ覚えな拓真の名前を呼んで布団に寝転がり、そのまま眠りこけてしまった。雪子の最後の本番まであと数日。水面下でいろんな計画が動き始めていたのだった。

第２４０話　ＪＲ新横浜駅の再会

「わ～！　懐かしい～！」
翔は新横浜駅のホームに降りるなりテンションを一気に上げた。
「ちょっと、どうしたの急に」
陽乃がクスクスとおかしそうに笑う。翔は笑顔で答えた。
「だってさぁ、ここ、初めて神奈川に引っ越してきてから降りた駅やねんぞ！　新大阪から新幹線乗って、東日本の駅で降りたんはここが初めてや！」
「え？　小さい頃、ＴＤＬとか来たことなかったの？」
「全然！」
「うっそー！」
驚きの声を上げたのは美里だった。
「それでも日本人！？」
「大げさやなぁ。だいたい、ディズニーの発祥はアメリカちゃうんかい」
「そうだけど、日本人の子供ならあそこに一度は行くべきよ！　ひょっとして……」
「まだ行ったことないけど？」
「あぁ～！　それはダメだ！」
美里が両手で目を覆った。
「ダメ言うな！」
「じゃあさ！」
絵美が提案する。
「竹林くんたちも来るんでしょう？　彼ら、いつまでこっちにいるの？」
「２５日の日曜日、夜の新幹線で帰るで」
「それじゃあ、２４日はフリーでしょう？　皆で、ＴＤＬ行かない？」

「うわ！　賛成！」
春樹が飛び跳ねるように喜んで声を上げた。しかし、翔はいまひとつ乗り気でないようだ。
「なんでそんなに暗いんだよ？」
慎也が聞く。
「いやぁ……泰徳、妙に大人びたトコあるからさぁ。ＴＤＬなんか言うて喜ぶかな……」
「まぁまぁ。もしＮＧならあたしがどこかもっと、泰徳くん向けのトコ連れて行くよ」
由美子が翔をなだめる。
「竹林くん向けって？」
「アキバとか！」
「……アイツ、萌え～とか言いそうにないキャラやねん。ゴメンな、宮部っち」
「えー……。それじゃあ……」
由美子も翔も答えに詰まる。拓真が落ち着かない様子で「新幹線、何時ので着くんだ？」と聞いたので、ようやく全員が本来の用件を思い出した。
「１６時２２分や」
「え？　もう１６時半だけど」
「ウソやろ！？　ヤバい！」
翔は大慌てで階段を駆け上がった。陽乃たちも後を追う。１番ホームに駆け込むと、見慣れた姿が翔の視界に入ってきた。
「おぉーい！　泰徳ぃ～！」
泰徳は翔を見つけるなり「遅い！」と怒鳴った。翔は「スマン、スマン」とひたすら平謝りするばかりだ。その様子を美里と沙希が不思議そうに見つめている。沙希が陽乃にたずねた。
「ねぇ、陽ちゃん」
「なに？」
「あの子、佐野くんより年下よね」

「そうだけど？」
「ずいぶん、上から目線じゃない？」
「アハハ！　それは勘違いだよ～。竹林くん、きっと翔に会いたくてしょうがなかったから、なかなか来なくてイライラしてただけだと思う」
「何それ！　いま流行のツンデレとか言うやつ！？」
「……まぁ、そんな感じ」
明らかにズレているのはわかったが、いかんせん沙希なので、陽乃はとりあえずそのままにしておくことにした。
「約束の時間に遅れるなんて、サイテーだなお前」
「ちゃうやん！　ついついな、お前と久しぶりに会える思ったら嬉しくて嬉しくて、皆で話しこんでしもたんや」
「キモい」
泰徳の容赦ない辛辣な言葉に、翔はどんどん言葉を発しなくなっていく。
「うう……そんな一蹴せんでもええやないか」
「バカ。男にそんなこと言われたって、嬉しくない」
いつもどおりのやり取りだな、と陽乃は二人の様子を微笑みながら見ていた。そしてふと隣にいる拓真を見ると、こちらはこちらであからさまに真っ赤になっている。そして、その彼の視線の先には同じく真っ赤になっている、高橋　美並がいた。
「お、お久しぶりです……」
「ども……」
思わず全員が沈黙してしまうほどの初々しいやり取り。普段「恋愛なんか興味ない」とバッサリ切り落とす泰徳でも、呆然としてしまうほどのオーラが二人から出ているようだった。そんな空気を一気に換えたのが、美里だ。
「はい！　ではぁ！　今から七海駅まで行って、とりあえず本番の打ち合わせしちゃおう！」
こういうとき、美里の切り替えの上手さが吉と出ることが多い。

翔にとって、これはありがたいことだった。そして今回も、うまくそれが作用する。美里は「行こ！　慎ちゃん！」と慎也とくっついて歩き出したのだ。

「なんだよ慎ちゃんって！　普段、そんなこと言わないクセに！」

「いーじゃん！　ほらぁ、みんな置いていっちゃうよ！？」

「あ、待って！　ほら、絵美」

「うん……」

絵美と春樹も並んで歩き始める。お互い彼氏のいない沙希と由美子が呆れ顔で並んで歩き始めた。残ったのは、翔、陽乃、拓真、泰徳、美並、美奈、未来の7人。

「……ゴホン！」

泰徳は軽く咳払いをすると、先に歩き始めた。

「え？　ちょっと、泰徳？」

美奈と未来が慌てて後を追う。

「先輩置いていくの？」

鈍感すぎる美奈に泰徳は若干イラッとしていた。それから、後ろに聞こえないように耳元で囁いた。

「バカ！　気づけよ」

「どういうこと？」

まだわかっていない美奈に、泰徳は今度こそウンザリという表情を浮かべた。

「もういい！　お前、鈍感すぎ！」

「それにしても、そんな風に見えないのにね～」

未来がニシシッと笑う。

「何が？」

「キミが。意外と、こういう気を利かせたことするんだなぁって」

泰徳の顔が少し赤くなる。

「別に！　先輩立てるの、当然じゃん」

美奈がそこでようやく理解したようで、未来と一緒に笑い合いながらソフトケースに入ったチューバを背負って足早に階段を上がる

泰徳の背中を、見つめていた。
「……。」
陽乃がジーッと翔の左手を見つめている。翔はその視線を無視する形で先に走り始めた。
「あ！　ひどーい！　ちょっと！」
その光景を、取り残された美並と拓真が呆然と見ていた。しばらくして、陽乃が「二人とも～！　置いていかれるよ！」と呼んだので、ようやく二人は微妙な感覚を空けつつ、歩き始めたのだった。

第２４１話　挑戦者、現る

翌日、３月１８日日曜日。校門を自転車で陽乃と雪子が走り抜けようとすると、警備のおじさんに止められた。
「すまないけど、今日は校内は自転車を押して行ってくれないか？」
「え？　何でですか？」
陽乃がすぐに聞き返した。雪子が陽乃の袖を引っ張って前を指差す。
「アレだよ」
「……あぁ！」
そう。今日は七海市の公立高校合格発表の日なのだ。
「ってことはさぁ……」
陽乃は恥ずかしそうに笑った。
「あたしの弟も受けてたのに、忘れてた！」
そう。七海高校を陽乃の弟・夏樹も受験していたのだ。それにもかかわらず、陽乃はサッパリそのことを忘れていたのだ。
仕方なく自転車を降りて押しながら、中学生の横を通っていく。
陽乃と雪子は２年前、自分たちも同じ場所で合格発表を待っていたことを思い出した。
「もう２年も経つんだよね～」
自転車置き場に着いてから、雪子が懐かしそうに言った。
「ホント。早いよね～、時間の流れっていうのは。またあたしたち、受験生だよ」
「またかぁ。嫌な響きだよね」
「今度は落ちたりしたら、大変だよ」
陽乃は大げさにため息を漏らした。
「部活しもって、勉強ってなかなか大変だろうな」
「今までどおりやってたら、とりあえずは平気かな」
「夏ぐらいから本腰入れないとね」

「はぁ～……憂鬱」
自転車置き場から歩き始めて間もなく、「ワァッ！」と言う声が聞こえてきた。どうやら、合格発表が始まったらしい。
「今年は吹奏楽部、どんな子が入ってきてくれるかな？」
「いい子がいっぱいいるといいね。ねぇねぇ、私にもどんな子が入ったか、メールや電話で教えてね！」
「もちろん！　多分、右川くんいっぱい入れようって頑張ると思うよ」
「そうだよ～！　頑張ってもらわなきゃ……あれ？」
雪子が立ち止まって中学生たちのほうを見つめた。
「どうかした？」
「あれ……」
雪子の指差すほうには、見覚えのある顔がある。
「本堂くん？」
そう。拓真に背格好から顔つきまでソックリの少年がいるのだ。しかし、着ている制服は北松中学校の制服。七海高校の制服ではないのだから、拓真であるはずがない。
「そっくりさん？」
「……かなぁ。あ」
確かめる術もないまま、少年は集団に埋もれて見えなくなった。
「よぉ！」
「わぁ！」
後ろから急に声を掛けられたので、驚いて振り返ると翔と拓真、春樹が立っていた。
「どなんしてん。目ぇ丸くして」
「いや……」
陽乃と雪子はジィッと拓真の顔を見つめる。拓真もちょっと驚いて二人の顔を交互に見てから「何？」と聞いた。二人は「何でもない！」と言うと前を向いて歩き始める。
「なんだ、今の」

翔に聞いてみるが、翔もサッパリ意味が分からない。
「気にする必要……ないんちゃう？」
陽乃と雪子が相変わらず不審そうに歩いていると、後ろから「ねーちゃーん！」という声が聞こえてきた。
「あ！　夏樹ぃ！　アンタ、どうだったの？」
夏樹はニコーッと笑い、ブイサインを陽乃に向けた。
「やったぁ！　合格！？」
「うん！」
「キャーッ！　もう、よかったねぇ！」
夏樹と陽乃は周りの目もはばからずに飛び上がって喜び合った。
「姉ちゃん！　あのさ、なんか今から手続きあるらしいんだけど、それ終わったら音楽室遊びに行っちゃだめ？」
「え？　ダメなことないけど？」
「マジ！　じゃあさ、吹奏楽部の練習見てみたい！」
陽乃は翔の顔を見て「っていうわけなんだけど……」と少し心配そうに聞いた。
「いいに決まってるやろ！」
「だってさ、夏樹！」
「やった！　俺、早く手続き済ませてくる」
夏樹はすごい速さで走りながら、手続きをやっている校舎へと駆け込んでいった。陽乃たちは音楽室方面へと向かって歩いていく。
すると、忙しそうに合格者の対応に追われる恭一が翔と陽乃を呼んだ。
「おはようございます」
二人は同時に挨拶をする。恭一はようやく笑顔を見せ、挨拶を返した。
「おはよ！　昼から合奏は行けそうだから、午前中はパート練習にしておいてくれ」
「はい！」
「あー！　それと、これ」

と言って翔が手渡されたのは、走り書きされたメモ用紙。
「何ですか、これ？」
「今日の合格発表と手続き後に、ウチの部を見学したいって子の名前をメモしてある。最低、それだけの子が来る予定になってるから、来たら対応よろしくな」
「はい！」
翔たちが拓真たちのところへ戻ると、彼らも興味深そうにメモを覗きこんだ。

＜男子＞
朝倉　夏樹
本堂（ほんどう）　晃（あきら）
岩切（いわきり）　裕也（ゆうや）

＜女子＞
飯岡（いいおか）　好美（よしみ）
歌川（うたがわ）　まゆ

「男子のほうが多いんだ」
春樹が嬉しそうに言う。
「ねぇ、ちょっと気になったんだけど」
陽乃が小声で言う。
「何や？」
「男子の苗字……どっかで聞き覚えのあるの、ばっかり」
「朝倉はお前の弟やろ」
翔が呆れた様子で答えた。陽乃は「そうじゃなくって、この二人！」とメモを指差す。翔はアッサリとこう答えた。
「本堂は拓真の弟。岩切は、ショー先輩の弟！」
「……えぇ！？」
陽乃と雪子が同時に叫んだ。

「じゃ、さっき北松中学の制服着てたソックリさんは……」
「あー！　それで俺の顔見たの？　あれ、俺の弟だよ！」
「もぉ！　ビックリさせないでよ、本堂くん！」
「俺は別に狙ってたワケじゃ……あ」
拓真の声に全員が振り返る。すると、翔平の弟・裕也が立っていた。
「……おっす」
翔があからさまに敵対心のこもった声で声をかける。
「こんにちは！　先輩、今日の演奏、楽しみにしてますね」
「おう」
陽乃は裕也の見せる笑顔が、少し嫌味がかったように見えた。
「なんだ、あれ。人をバカにしたような顔して」
拓真も少し気に入らなさそうな声を上げる。
「まぁまぁ。新入生に恥じへんような演奏、しような」
「あぁ……」
一方の裕也は、内心吹奏楽部にはあまり期待していなかった。創部2年足らずの部活動の演奏など、兄のいた風見台高校に比べればまだまだだ、という認識でいるのだ。
「ま、どの程度の演奏聴かせてくれるか、楽しみにしとこうかな」
鼻で笑いながら、裕也は手続きをしにエントランスホールのほうへと歩いていった。

第２４２話　挑戦者は、ツンデレ

「なんだかアイツ、俺気に入らねぇ」
突然そう言ったのは、洋之だった。優、あずさ、恵梨、美里の４人が目を丸くして洋之を見つめた。
「どうしたの。ヒロらしくない」
恵梨が驚いて声を掛けた。
「アイツ、絶対ウチの部のことバカにしてる」
「なんでそう言い切れるの？」
あずさがボンゴを運びながら洋之に聞いた。
「そんなの、目を見てればわかるじゃねぇの」
「目？　もー、人を見た目で判断したらダメなんだぞ」
優が苦笑いしながら洋之をなだめようとする。そのときだった。
「あ、ねぇ！　ちょっと危ない！」
はるかが叫んだ。あずさが危うく持ち上げすぎたボンゴを、あまり背が高くない楽器倉庫の入口にぶつけそうになったのだ。
「ギリギリセーフだったね」
「……おい」
洋之が声を掛けた。視線の先には、裕也がいる。
「何？」
洋之は明らかに気に入らなさそうな口調で裕也に声を掛けた。
「別に。ただ、楽器すら大事に扱えないような人たちの演奏、あまり期待しないでおこうと思っただけですよ」
「……！」
一瞬で倉庫内の雰囲気が悪くなった。洋之があからさまに舌打ちをする。
「何！　あれ。感じ悪い……」
滅多に怒らないあずさが、怒りを露わにするほどなのだ。
一方の普通教室１では、バスパートがチューニングに励んでいた。

それを窓越しに見つめる裕也。気にせずチューニングを続けようとするが、あまりの熱視線に耐え切れなくなった拓真が裕也に言った。
「あのさ、何か用事？」
「いえ」
「絶対、何か言いたそうな顔をしてるからさ」
「あ、言わせてくれます？」
「！」
予想外の反応に、全員が顔を見合わせた。
「じゃ、遠慮なく。まず、そちらの小柄な男性」
春樹のことだった。
「楽器、古いんじゃないですか？　ちゃんと手入れしないと、詰まったような音してますよ。あるいは、貴方の吹き方が悪いのかもしれないですけど」
「な……」
「それから彼女」
愛実が次に呼ばれて「へ？」と声を上げる。
「以前、違う楽器吹いてたでしょ。多分、直管楽器」
「う、うん」
「ユーフォニウムっていうのは、繊細な音色が求められる楽器なんですよ。それなのに、直管楽器のノリで音を出されちゃ、聴く側としては耐え難いんですよね。もうちょっと、音色を考えて吹いてください」
愛実は反論できず、呆然としている。
「それから、弦バスの貴方」
「なんだよ」
敵対心むき出しの亮平。しかし、裕也は怯まずに続ける。
「普通、チューニングといえば弦バスならA（アー）の音でするもんでしょ？　ま、周りのペースに合わせるっていうのも大事かもしれないですけど、バンドの根底支える楽器の一人なら、もう少し自己主張してもいいんじゃないですか？　そのままだと、音も同じように飲ま

れちゃいますよ」
最後に拓真に言った。
「もうちょっと、考えて行動したほうがいいと思いますよ、パートリーダーなら」
恐る恐る、智志が声を上げた。
「あの……俺は？」
裕也は鼻で笑い、こう言った。
「ま、せいぜい頑張ってください」
裕也が去った直後だった。愛実がボロボロと涙をこぼし始めたのだ。
「何……なんで入学もしてない子にあんなにボロボロに言われなきゃなんないの……」
春樹が慌てて愛実をなだめる。
「俺……戦力外？」
智志が珍しく、気落ちしている。大事な本番前の練習というのに、一気にバスパートの状態はガタガタなものへと持っていかれた。
「え……ちょ、これどうしたんですか？」
最悪のタイミングでやって来たのは泰徳、美並、美奈、未来の４人。全員楽器を構えてやる気マンマンの様子だが、肝心の部員がこの状態ではどうしようもない。
「ちょっとね……トラブルが」
「？」
泰徳も事情が分からないだけに、オロオロするばかりだ。特に、愛実の泣き顔には驚いた。話を何回か聞いたことはある。陽気で滅多に泣いたりしない彼女。それが、いま泰徳たちの目の前で泣いているのだ。
「とりあえず、落ち着いたらまた呼ぶよ」
「はい……」
泰徳たちはひとまず、扉を閉めて先ほどまでいた教室に戻ることにした。

「内部崩壊？」
美並が心配そうに呟いた。泰徳は「本堂さんたちに限ってそれはないと思う」と答える。
「でも、泣いてたじゃない」
「うん……」
美奈も未来も、予想外の光景に言葉を失った。そして教室に着く直前、その会話が彼らの耳にも届いたのだ。
「あの、佐野先輩」
「なんや？」
こっそり４人は覗いてみた。翔と、新入生だという男の子がいる。
「誰なんですか、あの中学生集団。途中で出くわしたんですけど」
「あー。オレの幼なじみ」
「へぇ。寄ってたかって全員低音楽器なんですね」
「たまたまな」
「たまたまですかねぇ？　この高校の低音パート、さっき見てきましたけど、大したことないじゃないですか」
「……は？」
翔の声色が明らかに怒りを込めたものになっているのに、泰徳は気づいた。だてに長年幼なじみをやってきていない。しかも、これはかなり怒っている。
「あれでしょ？　低音がヘボいから、ヘルプであの人たち呼んだんだ」
「何をアホなこと言うとんねん。そんなんちゃうわ」
「あ、そうですか」
未来がプンスカ怒り出した。
「何！　あの子。存在自体がムカつく！」
「ちょ、静かに！　聞こえちゃう」
慌てて美奈が彼女を制止する。
「でもまぁ、正直に言わせてもらいますね」
それは泰徳も耳を疑う言葉だった。

「しょせんは中学生ですよね。あんな子たち、加えたって何の役にも立たないでしょ」
「ひどい……！」
これには泰徳の、泰徳ばかりでなく美奈、未来、美並のプライドにも一気に傷がついた。それ以上に、翔の怒りが一気に爆発寸前へと持っていかれたのだ。
「わざわざ愛媛から駆けつけてくれたのに……お前、よぉそんなこと言えるな！」
「それほどのレベルには俺、見えませんけど？」
「ふざけんな！」
とうとう怒りが爆発した翔は、拳を握り締めて裕也の襟をつかんで、その腕を振り上げた。
（やべぇよ！　アイツ、けっこうパワーあるのに！）
泰徳が焦って制止しようと飛び出す直前だった。
「あー、もうほら！」
陽乃がタイミングよく出てきたのだ。
「4月から先輩、後輩になるんでしょ？　今からこんな調子でどうすんの～」
「オレはこんなヤツ、絶対ウチの部に入れへんからな！」
「そんなこと言わない！　とにかく、そろそろ合奏始まるから。翔も。さゆちゃんたちが探してたよ。早く音楽室に戻る！」
「わかっとるわ！」
怒りに任せて歩く翔を見つめた後、陽乃は冷ややかな目で裕也を見つめた。
「ねぇ」
「なんですか？」
「ハッキリ言わせてもらうけど」
「どうぞ？」
陽乃はニコッと笑った。
「あたし、知ってるよ？」

「何をですか」
「あなたの正体」
「!?」
裕也の顔が一気に強ばる。
「どういうこと?」
未来が泰徳に聞いた。
「俺が知るかよ」
「何でよ。だって、佐野さんと仲良しなら、朝倉さんとも仲良しでしょ?」
「お前、バカじゃないの。普通、幼なじみの彼女と親密に連絡取るかよ。とにかく聞いてようぜ」
泰徳もこれに興味津々だ。陽乃は笑顔で裕也に話を続け始めた。

第２４３話　兄と、彼女と、親友と

今から2週間ほど前のことだった。
「陽乃～！　お願いがあるの」
陽乃が自宅に帰るなり、由利が両手を合わせて彼女を出迎える。
「どうしたの？　いきなり」
「実は、お醤油切らしちゃってて」
「え～！？　もう、ウチってよく醤油切らすよねぇ」
陽乃は毎度のことなので思わず笑ってしまった。
「夏樹は試験も近いし、頼めないのよ。お父さんはまだ遅くなりそうだし、おばあちゃんに頼むわけにもいかないでしょう？」
陽乃は仕方がないな、という表情を浮かべて右手を差し出した。
由利は嬉しそうに笑って、財布を手渡す。それから、メモも同時に置いたのだ。
「何、これ」
「ついでにね、買ってきてほしいものをメモしておいたから。よろしく！」
メモには醤油、大根、林檎、揚げ出し豆腐、ポテトサラダ、調理前コロッケ、キャベツ、ウスターソースなどたくさんの品物がメモされている。陽乃はヤレヤレ、という表情になったが毎度のことだ。特に気にせず、家を出た。
小田急七海駅前のスーパー「フレックス」。陽乃たちの七海高校生も時たま、お菓子を買いに寄り道するスーパーマーケットだ。もちろん、登下校の買い食いは校則で禁止されている。しかし、運動部の生徒たちは守れるほどおとなしいメンバーは揃っておらず、部活後ほとんどが立ち寄っているという。
吹奏楽部でも、順平や健之佑、はるかの姿を見たことがある。陽乃は特別注意しなかったが、気まずそうな顔をしていた。しかし、別に用事があって来ているのかもしれないという風に考える陽乃は、

注意をするつもりなどさらさらない。
自転車を止めて、店内に入った。
「あれ、相田くん」
野球部のメンバーがいた。
「うぉっ！　朝倉さん……」
「おなか減ったんでしょ？」
「ま、まぁ……」
野球部は特に校則関係に厳しい。過去に買い食いをした主将が部活禁止の処分を顧問直々、受けたこともあるという。
「そろそろ先生たちも帰ってくるかもしれないから、早めに出たほうがいいよ」
「黙っててくれる？」
雄平は他の部員3人と両手を合わせてそう言ってくる。どうも今日はお願いされることが多いな、と思いつつ陽乃は「いいよ。ウチの部だってしてる子いるし」と言っておいた。
雄平たちを見送って、買い物を再開する。すると、今度は珍しい制服を見かけた。
「風見台だ」
私立風見台高校の制服だった。どちらかといえば、品の良いお坊ちゃま、お嬢様の通う高校というイメージがある風見台高校。そこの生徒が、買い食いをしているというのか。
陽乃は気になってどんな子なのかを見てみることにした。
「あ！」
思わず声を上げると、その人物も振り向いた。
「岩切先輩ですよね！」
「あ、朝倉さんやん」
翔平は特に慌てる様子もなく、にこやかに陽乃に挨拶をした。陽乃も普通に翔平の横に立つ。
「珍しいですね、スーパーにいるなんて」
「んー、まぁちょっと事情があって」

「へぇ～……」
陽乃は翔平の持っている買い物カゴを覗き込んだ。豆腐、調理済みコロッケ、マカロニサラダ、ペットボトルのお茶。
「夕食ですか？」
「あぁ、うん。わかりやすい中身やろ？」
「そうですね。今日、おうちの方、お留守なんですか？」
「あー……そういうわけやないねんけど」
陽乃はしまった、と思った。よその家の事情に首を突っ込むなど、失礼な話である。
「ごめんなさい！　あたし、首突っ込んじゃって厚かましい……」
「いやいや！」
翔平も慌ててそんなことはない、と返してくれた。
しばらく無言で並んで歩いた後、翔平のほうから言った。
「実はさ……俺の、弟やねんけど」
「弟さん？　いるんですか？」
「うん。朝倉さんの弟くんと同い年で」
陽乃は全然知らなかった。校区はどうなのだろうかと思い、もう少し詳しく聞いてみることにした。
「中学校は、どこですか？」
「公立やで。葉島中学」
「あ、夏樹と一緒だ」
しかし、夏樹から翔平の弟がいることなど、聞いたこともなかった。陽乃とは学年が2年違うため、葉島中学で一緒になったのはほんの一瞬だった。ちなみに、翔平は翔の少し前に七海市へ引っ越してきている。時期としては、陽乃が卒業するほんの少し前。２００５年の1月のことだ。
「弟くんとは多分、絡みはほとんどないで」
「何でですか？」
「アイツ、ちょっと変わってるからな～」
翔平によると、彼の影響で吹奏楽を始めたのは小学校5年生の頃

だという。大阪にも小学校から吹奏楽部（名称はブラスバンド部が多いという）が存在するところがあるらしく、特に南大阪市は活動が活発だったそうだ。

七海市に引っ越してから、小学校にたまたまではあるが、吹奏楽部はどこにもなかった。彼の弟、岩切　裕也にとってはそれがかなりの不服であったという。仕方なく、市の少年少女音楽団に入って、それからずっと中学の間も在籍しているのだという。

「それで、高校は俺と同じ風見台がいいって言うて……。せやけど……まぁ、その……」

「うん……」

陽乃もその先の言葉が何なのか、すぐに予測できた。裕也は、風見台高校に合格できなかったのだ。

「それでアイツ、いますっごい情緒不安定っていうか……。すぐ怒ったりしよんねんなぁ。参るわ、ホンマ」

翔平はため息を漏らした。冗談っぽい言い回しをしたものの、表情は曇ったまま。

「母親も目ぇ離されへん言うから、最近買い物とかずーっと俺が行ってるねん」

「大変ですね……」

「このまま主夫目指そうか思うくらいやで」

「やだ！　でも、似合いそう！」

クスクスと二人は笑った。

レジを通過し、それぞれ買ったものを袋へ詰める。その最中、翔平が言った。

「でも、浪人ではないんやで」

「そうでしょ？　だって、先輩の弟さんだもん。それで、合格先は？」

「……。」

翔平は言いにくそうにしている。

「どうしたんですか？」

「……み」
「え？」
「七海高校……やねん」
陽乃は目を丸くした。まさか、七海高校に合格していたとは思っていなかったのだ。
「俺は、まぁ、朝倉さんやかけぼーのことよぉ見てきてたし、七海の吹奏楽部もよぉ知ってるから、入部勧めたんやけど……。アイツ、創部間もない部活なんか嫌や言うとってな」
陽乃は複雑そうな表情を浮かべた。
「あっ！　ゴメン！　別にその……」
「大丈夫です！　わかってます。弟さんの気持ち、わかるし……」
沈黙が続く。
「あんな。でも、今はもう……。アイツ、ちょっと反抗的な性格やから、七海高校行く決心はできてるみたいやねん」
「そうなんですか？」
「うん……。なんとなく、わかる」
「……。」
「もし、見学来たりしたら、面倒見たってな」
「はい……」
その後、翔平とはスーパーの近くの交差点で別れた。駅前商店街を抜け、七海高校の横を通り、つくし野川が見えてくると家はもうすぐだった。すると、自宅の方向から見飽きた姿が目に映った。
「夏樹じゃない」
「あ、お帰り、姉ちゃん。今日も部活遅かったんだ？」
陽乃はフーッとため息をついてスーパーの袋を大げさに見せて「買い物袋持って学校に行く女子高生がいると思ってんの？」と聞いてみた。
「あ、そうだよね」
「で？　アンタはどこへ行くの？」
「友達とちょっと約束」

フーッとまたため息。
「お母さんには了承、取った？」
「うん」
「なら、よし。いい？　遅くならないようにね」
「うん！」
夏樹は嬉しそうに笑って自転車に跨った。
「あ、夏樹！」
「何？」
陽乃は巻いていたマフラーを夏樹の首に巻きつけた。
「まだ夜は冷えるんだから。ね？」
「……う、うん」
「じゃ、あたし先に帰るから」
夏樹は少し頬を赤くして、陽乃の背中を見送った。
「何、お前。シスコン？」
後ろから少年の声がする。夏樹は真っ赤になって「違うよ！」とすぐに否定した。
「それで、例の物は持ってきてくれた？」
「持ってきたよ。これ、俺も大事にしてるんだから。早く返してよ」
少年は嬉しそうに笑う。
「ありがとう」
「どいたしまして。じゃあな、裕也」
夏樹に名前を呼ばれて、裕也は少し恥ずかしそうに「じゃあな」と返した。

「どう？　そのとき、ウチの弟から借りたのは……このＭＤだった」
「あ！」
陽乃はニッと笑ってＭＤを取り出した。
「それ……」
「思い切り、朝倉夏樹って書いてるこのＭＤを、なんでキミが持ってるのかな？」

「……。」
陽乃は優しく続けた。
「もうさ、強がるの、やめたら？」
「別に強がってなんかないです……」
「あ……そう。まぁ、あたしとしては部活に入る、入らないは自由だから。別に強制しないよ」
「……。」
裕也が俯く。
「じゃ。また来てくれるの、待ってるね」
「……。」
陽乃はそのまま、音楽室へと走っていった。
「っぐ……ウウッ……ック……」
裕也の嗚咽が廊下に響く。いたたまれなくなった「彼」は、突然部屋を出て走り出した。
「あ……ねぇ、ちょっと！　行ってどうすんの！　ねぇ！」
彼らが制止するのも気にせず、少年は裕也の前に立った。
「あの……」
少年――竹林　泰徳は、裕也の前で立ち尽くした。
「何だよ」
裕也の反抗的な目。泰徳は一瞬たじろいだが、これだけは言いたかったのだ。
「物事を、よく知りもしないで何でも決め付けないほうが……いいと思います」
「……わかったようなこと、言うなよ」
泰徳は気にせず、続ける。
「お……」
俺、と言い掛けて言いなおした。
「僕も、最初、ここの部長の佐野　翔から部活作ったって聞いたときは、どうせ長続きしないって思ってました。でも、翔、頑張ってるんですよね。それは、俺たちが所属してるクラブ活動だったら、

初めは全部、そうだったんじゃないかなって……思うんですよ」
美奈と未来が驚いて顔を見合わせた。泰徳が、まさかそんな形で翔たちのことを評価し始めるとは思っていなかったのだ。何かといえば翔たちのクラブ活動に辛口評価の多い泰徳だけに、彼女たちには泰徳が言っているとは思えないような言葉だったのだ。
「僕にはわからないですけど……。でも、吹奏楽、好きなんですよね？」
「当たり前だろ！」
裕也は即答した。泰徳は目を丸くしたが、すぐに優しく笑った。
「僕も、今は吹奏楽、大好きです」
「今は……？」
裕也がその表現に引っかかったのか、聞きなおす。
「昔は……いっぱいで演奏するの、嫌いだったんですけどね。でも、そんなの、先入観でしかないのかな～とか、思います」
「……。」
「音楽に大切なのは、表現力とコミュニケーションです」
「……！」
「それじゃ、失礼します」
泰徳が笑顔で立ち去っていく。
「あのさ！」
裕也が泰徳を大声で呼ぶ。
「俺でも……ちゃんと言えば、わかってもらえるかなぁ！？」
泰徳は言葉で答える代わりに、ブイサインを送った。
それからすぐに、裕也の走る音が聞こえた。
「珍しいね、泰徳があんな言葉かけるなんて」
美奈はウキウキ気分で泰徳の顔を覗きこんだ。顔が真っ赤になっている泰徳。
「俺らしくないことばっか言っちゃった……恥ずかしい」
美並がポンッ、と優しく泰徳の頭を撫でた。
「そんなことないよ。きっと」

しばらくすると、ワァッという声が音楽室から沸いた。泰徳はその歓声を嬉しそうに聞きながら、チューバを持ち上げてロングトーンを始めた。

第２４４話　決断のとき

翌、月曜日。相変わらず合奏をしている翔たち七海高校吹奏楽部。
「さて、それじゃあ市吹連の曲はそのあたりにしておいて」
恭一が分厚いスコアを取り出した。
「いい加減、課題曲も自由曲もどっちにするか、決めてしまわないとな」
その言葉に、部員たちの表情が一気に固まった。
課題曲と自由曲。来年度、２００７年度全日本吹奏楽コンクールに出場するに当たって、七海高校が演奏しなければならないのが、この2曲ということになる。
実は翔たち、1月から課題曲全曲を練習していたのだ。そして、2月初旬に2曲に絞り、最終的に3月末で課題曲、自由曲共に曲を決定するとしていたのだ。
課題曲で候補に挙がっているのは、課題曲１・田嶋　勉作曲『ピッコロマーチ』と課題曲４・高木　登古作曲『マーチ・ブルースカイ』だ。一方、自由曲はナイジェル・ヘス作曲『イーストコーストの風景』より3楽章『ニューヨーク』か、オットリーノ・レスピーギ作曲『教会のステンドグラス』のどちらかになる予定だ。
「サッと通すだけだ。後は先生が全員の力量、来年度入ってくる１年生の予想、パート編成などを考えて明日には全員に報告できるようにする」
「はい！」
「よし、それじゃあピッコロマーチから」
「はい！」
しばらくすると、音楽室から課題曲が流れてきた。別室で特別に練習させてもらっているのは、夏樹、裕也、好美の3人だ。
「わっ、今年の課題曲だ！」
嬉しそうに反応したのは好美だった。

「私としては、４番やりたいな～。あの曲、個人的に好きだし」
「あ、あの」
夏樹は恐る恐る好美に聞いてみた。
「課題曲って……何ですか？」
好美と裕也が目を丸くした。
「あ、そっか。朝倉くん、中学はサッカー部だって言ってたもんね」
夏樹は申し訳なさそうに俯く。すると、裕也がわかりやすく説明をしてくれた。課題曲は、コンクール出場する団体であれば、大抵のところが演奏する曲である。同時に、自由曲も演奏する団体が多いのだ。七海高校には関係なくなりそうだが、小編成団体もあり、この場合は自由曲のみの演奏ということもあるそうだ。
「わかりやすかった？」
「うん！　すっげぇな、やっぱ。経験ある人は違うよ」
「そんなの、朝倉くんだってすぐに覚えるようになるって」
しばらくすると、曲が変わった。
「今度はブルースカイだ」
裕也もこちらのほうが好きなようで、練習の手を止めて演奏に耳を傾けている。
「俺たち、コンクール出れるかなぁ」
裕也がワクワクした様子で呟く。
「どういうこと？　みんな、出れるんじゃないの？」
「そういうわけでもないの」
今度は好美が説明をしてくれる。
好美によると、再来年度の２００８年度までは人数制限が５０人なのだという。仮に七海高校吹奏楽部が５２名になると、２名は必然的にコンクールに出られなくなるのだ。さらに、これは最大５０名なので、４５名で出る可能性だって大いにある。そうすると、出られない人はもっと出てくることになるのだ。
「そういうもんなんだ……」
「でもさ」

裕也が笑顔になる。
「頑張れば、きっと出られるんだ。サッカーだって、同じだっただろ？　人数は圧倒的に少ないけどな、サッカーのほうが」
「うん……」
「だから、ガンバローね」
好美のガンバローという響きが、夏樹の胸の中にある不安を少し、消してくれた。

「うっへえぇぇぇ……」
合奏が終わるなり、グッタリした声を上げたのは拓真だった。いま、演奏し終えた『教会のステンドグラス』。低音には珍しく、メロディがたくさんあるのだ。
「どないしてん。えらいバテてるやん」
「当たり前だろ～。あんなでっけぇ音、連続で出せるもんじゃねぇもん……」
隣にいる智志は自分がまだそれほど吹けないので、逆に申し訳なさそうにしている。そういう意味では、ユーフォの春樹と愛実、トロンボーンの慎也、亜紀、徹、バスクラの駿も同じような状態なのだ。
一方、『イーストコーストの風景』でめいっぱいトリルなどを吹かされるフルート、ピッコロ、オーボエメンバーも指をしんどそうにほぐしている。慣れているとはいえ、まだまだ練習不足なところが多いのだ。
「どうすんだよ、そんなので～」
岳彦が呆れた様子で拓真に声をかける。拓真は申し訳なさそうに「へへへ」と笑ってみせた。
「笑い事じゃねぇぞ。もうすぐ新入生入ってくるってのに」
プンプンと怒っている岳彦。しばらく何かを考えていたようで、
「そうだ！」と笑顔になった。
「どうせなら、腹式呼吸の復習でもするか！」

「ゲッ！」
拓真があからさまに顔をゆがめる。
「何がゲッ、だ！　４月から最高学年だろ！　ほら、練習練習！」
春樹と愛実がバレないうちに逃げようとするが、残念なことに見つかってしまい、亮平を除くＢＡＳＳパート全員が腹式呼吸練習会に強制参加となってしまった。
後ろでヒィヒィ言いながら腹式呼吸する彼らをよそに、他のパートは順調に片づけを進めていく。
「あ、そうだ、翔」
陽乃が思い出したように翔を呼んだ。
「何や？」
「あたし、お母さんに鍵借りて帰らなくちゃいけないからさ。何だったら、先に帰ってくれててもいいよ」
「あー……いや、待ってる」
「そう？　じゃ、すぐに行ってくるよ」
「おう！」
陽乃は音楽室を出て、その場所へ向かった。
今日は１階の会議室で、吹奏楽部保護者会が開かれているのだ。
陽乃はご機嫌で会議室の前に立ち、咳払いを少しするとノックをするために、なぜか姿勢を整えた。と、そのときだった。
「それでは、全会一致で本年１１月下旬に、七海高等学校吹奏楽部、第１回定期演奏会を開催することを決定いたします！」
翔の母・友美子の声に、陽乃は思わず大声を上げてしまった。
「！？」
驚いた絵美の母・明子が表へ出ると、口を塞いで目を丸くしている陽乃と目が合った。
「あちゃあ……聞いちゃった？」
明子の問いに、陽乃はうなずくしかない。
「朝倉かぁ……。まぁ、副部長なら大丈夫だろう」
恭一が後ろから声を掛ける。

「いいか、朝倉」
「はい」
「まだ、定期演奏会のとこは佐野も知らない。実は、保護者会のほうでは水面下で……わかるか？」
「あまりわかりません」
その答えに由利が顔を赤くしている。
「まぁ、こっそり動いてるってことだ。とりあえず、現役はまだ誰も知らないし、これから決まっていくことも多い」
「はい……」
「だから」
恭一の言葉が、重く圧し掛かった。
「まだ、誰にも言うなよ？」
「誰にも……ですか」
陽乃は言いたくて言いたくて仕方がない。しかし、恭一に「いいな？」と念を押されたので「はい」と答えることしかできなかった。

第２４５話　喉から手が出るほどに

「どないしてん？」
翔があまりに喋らない陽乃を心配して、ツンツンと肩を叩いて聞く。
「あっ……じ、実は」
定期演奏会、正式に決まったんだよ！
言えるものなら言いたくて仕方がなかった。しかし、本番が近い、明日には課題曲・自由曲が決まるなど、大きな動きはまだまだ控えている。その上に、定期演奏会の話が部内に持ち込まれたら、そろそろキャパシティをオーバーしそうなのは、陽乃にも目に見えていた。
「今日の晩ご飯が何なのか、気になって気になって」
「……はぁ？」
翔は心配して損した、という表情を浮かべた。
（ゴメン、やっぱ言えないや……）
陽乃はフーッとため息を漏らして空を見上げた。
「なーんか、やっぱお前変やで」
「やだな～。そんなことないってば！　フツウ、フツウ！」
普通、という言い方もちょっと普通ではないような言い方になってしまった。翔はまだ納得していなさそうではあったが、それ以上突っ込んで聞いてくることはなかった。
その後、並んで帰るのだがいつもはいろんなことを話す陽乃が、ほとんど口を開かず、翔の話に相槌を打つばかりだ。
「……あのさぁ」
我慢できなくなったのか、翔は言った。
「何か、言いたいことあんのちゃうの？」
「え……」
「顔に出とる」

「ん……」
やっぱり、秘密になんてできそうにもない。かと言って、言うことで恭一との約束を破ってしまうことも陽乃にはできずにいた。
「何なん？　オレには言えんようなことか？」
「そ、そうじゃなくって……。言いたいんだけど、言えないっていうか……」
翔はしばらく考え込んだ後「わかった」と言った。
「わ、わかったの？」
「お前が言えるときか、言いたくなったときに言うて」
「いいの？」
「うん。別に、彼氏と彼女やからって、全部言わなアカンってことないとオレは思ってるし」
「うん……」
その後も、翔がほとんど喋って陽乃は相槌を打つばかり。そうこうしているうちに、陽乃が別れる交差点に差し掛かった。
「んじゃ！　また、明日な」
「うん……」
このまま別れていいのかどうか不安げな様子をしている陽乃に気づいたのか、翔は手を振ろうとしていたのを止め、彼女に駆け寄った。
「どしたの？」
「やっぱ、家まで送る」
「あ、ありがと……」
無言で歩く二人。
「あ」
翔がそう呟き、カバンからイヤフォンとｉＰｏｄを取り出した。
「あんな、えぇ曲見つけてん」
「いい曲？」
「うん！　めっちゃカッコいいから。ちょっと川沿いで聴いていかん？」

「いく！」
二人は堤防を駆け上がる。途中、段差につまづいた翔が思い切り転倒した。おかげで制服が枯れ草だらけになってしまう。陽乃はその格好が面白くて、大声で笑ってしまった。
「ここ、座ろっか！」
「うん」
ちょうど堤防が少し広くなって、広場のようになっていた。ベンチに座ると、少し標高が高くなっているので七海高校の校舎も見えている。夕暮れを背に、二人は並んで座った。
「ん！」
翔がイヤフォンを陽乃に差し出す。
「ありがと」
それを受け取り、陽乃は左耳にイヤフォンをはめた。翔は右耳にイヤフォンをはめる。
「再生すんで？」
「うん」
それからすぐに流れ出したのは、ホルンとサックスの旋律だった。それから同じ旋律を、トランペットとトロンボーンが引き取る。
「わー！　すっごい、カッコいいね！」
「やろ！？」
「何ていう曲？」
「Ｍａｓｑｕｅ（マスク）やって。仮面舞踏会、っていう意味があるらしいねん」
「へぇ～……」
曲調としては、暗いとまではいかなくとも、さすが仮面舞踏会というような、妖艶な雰囲気を持った曲だ。全パートに渡って、活躍する部分があるように思える。
途中、ピッコロトランペットがソロを始めた。
「あっ！　ピッコロトランペット！」
「なっ！　ソロ、最高やろ？」

「うん！」
その後、低音楽器のメロディが始まる。陽乃も一瞬でこの曲の虜になってしまった。
曲が終わる頃には、夕陽が沈んでしまっていた。
「すっごいカッコいい！　あたしたちも、吹きたいね～この曲！」
「やろ！？　定演なんかでできたら、いいよな！」
思わずビクッとしてしまう。翔は定期演奏会のことなど、知らないはずなのに、なぜそんな話題を急に振ってきたのだろうと陽乃は焦った。
「どないしてん？」
「うっ、ううん！　何でも！」
知らないフリをしておかなければ。陽乃はそう思い、冷静を装った。
「あ……もしかしてさ、お前」
「何？」
「定演すんの、嫌？」
「へ？」
翔が残念そうに呟いた。
「そっかぁ……嫌かぁ……」
「ちょ、何勝手に一人で盛り下がってんの？」
「だって、陽乃、演奏会したくなさそうやねんもん」
「そんなことないよ！」
「ホンマかぁ？」
「ホント！」
「……やった！」
翔が嬉しそうに笑う。その後、翔の話は止まる様子を見せなかった。定期演奏会は三部構成にしたいこと。一部がクラシック・オリジナル曲を吹きたいこと。その時には、いま聴いた『Ｍａｓｑｕｅ』は入れたいこと。二部はマーチングをやりたい。三部ではポップスステージにして、学年関係なく、ソロを皆に割り当ててほしいこと。

定期演奏会はやはり、お金もかかる。なので、広告などをプログラムに載せてもらえると嬉しいと言っていた。珍しく、翔が時間も気にせず話を続けるので、陽乃もついつい一緒になって「こういうことしてみたい」ということを話し続けていた。話はどんどん発展して、いつの間にか自分たちが引退するときに吹きたい曲まで挙げていた。

そして話はどんどん進んで、いつの間にか脱線して今年の文化祭の話へもつれ込んでいた。できれば、全校生徒の前で吹く舞台と、吹奏楽部の展示として何か、小さなアンサンブルを組んだりしたいというような話まで。話の種はいくらでも出てくる。

「ックシュン！」

しかし、さすがに日が沈むと寒さが身にしみる。陽乃のクシャミで我に帰った翔が時計を見ると、なんと午後8時を指していた。

「うわあああー！　ちょ、ゴメン！　何か話しすぎてた！」

「いいのいいの！　あたしも楽しかった」

「ホンッマごめん！　怒られへん？」

「平気、平気！」

「すぐそこやから、送るわ」

急いでカバンを持って、二人は急ぎ足で陽乃の自宅へ向かった。

そして、陽乃宅の前へ来た時だった。

「あ……こんばんは！」

祥夫が同じくして、帰宅してきたのだ。翔はやはり、祥夫に会うと緊張してしまう。しかも、こんな遅くまで彼女を連れまわしていたのだから、非常識と思われてしまっても仕方がないだろう。

「こんばんは。今日も遅くまで練習だったのかい？」

意外と優しい言葉を掛けてくれた祥夫に、少し翔は拍子抜けしてしまった。

「あ、いえ。ちょっと、話し込んじゃって……」

「何の話してたんだい？」

陽乃が焦って「お父さん、そんなのいいから早く家入ろう！」と

腕を引く。
「なんだ、別にいいじゃないか。男同士で話したいことだってあるんだから」
「意味わかんない！　ほら、早く」
「いいから、陽乃は先に入ってなさい」
「え……お父さ～ん」
「いいから」
陽乃は渋々、自宅へ入っていく。翔は極度の緊張で顔が強ばっていた。
「ハハハ！　そんなに緊張しなくてもいいじゃないか、翔くん」
「あ、えと、はい！」
「しかし……寒いな。翔くん、携帯電話持ってるかい？」
「あ、はい」
「じゃあ、ご自宅へ電話しなさい。今日は、ウチで晩ご飯を食べて行ったらどうだい？」
「へ！？　いや、でも」
「そうしなさい。おーい、母さん！」
祥夫は有無を言わさず由利に翔の分の夕食まで用意するように言ってしまった。翔は仕方なく、自宅へ電話を入れる。
「はい、佐野でございます」
友美子の声だ。
「あ、母さん？」
「翔？　何時やと思ってんの！　早く帰ってきなさいよ～」
予想どおりの言葉。
「あ、それがさ……」
翔は一連の流れを説明した。
「そうなん？　いいやないの～！　ちょうど都合のきくおかずやったし、今日はご馳走になったら？」
「えぇのん？」
「ウチはえぇよ。ただ、朝倉さんたちに失礼のないようにね」

「う、うん」
そう言って電話は切れた。
「了解、取れたかい？」
「はい！」
「じゃ、入りなさい」
「お、お邪魔します！」
緊張で声が震えたが、初めて陽乃の家族と食卓を囲めることが嬉しく、翔の表情は晴れ晴れとしていた。
一方、佐野家では翔が抜けた代わりに、彼が翔の席に座っていた。
「綾音、見すぎ」
友美子が綾音の額を弾いた。
「せやけど、なんていうか、普通の人やのにすっごい楽器上手やから、なんかアタシ的には芸能人っぽい気ぃすんねんもん」
綾音の視線の先には、恥ずかしそうにお箸を握る泰徳の姿。
「あ、綾音さん……恥ずかしいんですけど」
「あ！　ゴメンなさい。じゃ、普通に」
泰徳たち常套中組は、七海高校吹奏楽部員の家にそれぞれ泊めてもらっていた。ちなみに、美奈は恵梨の家。未来は愛実の家。そして、美並は拓真の家……というわけにはいくハズもないので、彼女は恵梨の家へ行っている（ちなみに、拓真の家を提案をしたのは予想外にも春樹であった）。
「なんとなく」
泰徳が呟いた。
「はい？」
「翔が誰にでも優しくできる理由、わかった気がします」
あれだけ裕也に対して憤慨していた翔が、その日のうちに裕也とメールアドレスを交換するほどに打ち解けていた。泰徳の立場なら、まず無理だろうと思っていた。自分はそこまで余裕がないといえばおかしいが、普通、自分の所属するクラブをあそこまでバカにされて、すぐに許せる人なんてそうそういないだろう。

けれど、翔は裕也を受け入れた。なるほど、この家で生活していれば、そういう人物になるのも分かる気がした。
「いいな～、翔。こんな家で生活できて！」
「でもね」
友美子が言った。
「きっと、泰徳くんが家へ帰ったら、お母さんのご飯のほうがやっぱり美味しいって、思うわよ？」
「そういうもんですかね？」
「そうよ。絶対に」
泰徳はそれ以上、言わなかった。翔の「お母さん」は友美子と、もう一人、いることに気づいて。
謝るのもおかしいので、そのまま流して「おかわりください！」と泰徳はお茶碗を差し出した。

第２４６話　勢いに任せて

「どう？　ちょっとは落ち着いたかしら」
由利が心配そうに翔の顔を覗き込む。
「うん。寝たら、マシになったみたい」
「明日には普通になると思うわ。そんなに、量もなかったし」
「うん。けど、ビックリしたな～」
陽乃が和室を見ると、あからさまに落ち込んだ祥夫の姿が目に映った。
「お父さん」
「佐野くんのご両親に、どう説明すればいいんだ……」
それは、今から2時間ほど前のことだった。

「ちょ、翔……もうちょっとゆっくり食べなよ」
「だって！　美味しいねんもん！」
朝倉家の今晩のメニューはハンバーグだった。翔は、ハンバーグとカレーライスには目がない。お菓子なら、アップルパイ。とにかく、この3点には本当に目がないのだ。痩せの大食いと言われるほど、結構量も食べている。
「そんなに美味しそうに食べてもらえると嬉しいわ～」
由利もご機嫌だ。しかし、そのときだった。
「ングッ……！」
変なところに入ったのか、妙な声を上げてゲホゲホとむせ始める翔。
「やだ！　だからゆっくり食べてって言ったのに！　お母さん、お茶！　お茶！」
翔は手を差し出して「大丈夫やから！」とでも言いたそうにしながら、祥夫の前にあったコップに左手を伸ばした。
「あ！　さ、佐野くんそれは！」

勢いに任せて、一気に飲み干す翔。
「あ～……助かった。すいません、あの……コップ」
翔が恐る恐る祥夫にコップを返す。その祥夫は、顔が完全に強ばっていた。
「ど、どうかしましたか？」
「それ……」
「あ、お茶ですか？　ちょっと苦かったですね、オレの飲んでたお茶より」
「お茶じゃなくて……ビールだったんだ」
それから5分もしないうちに、翔の顔が真っ赤になる。それでもって、なぜだかわからないがずっと笑っているのだ。大声で、一人で壁に向かって。
「お父さん……翔が、変」
陽乃は翔の普段とはかけ離れた様子を、少し遠巻きで見ている。
「あの子……あんまりお酒に強くないのかもしれないわね」
由利がため息をつきながら電話を手にした。
「お、おい！　まさか」
「連絡しますよ。謝らないといけないでしょ？」
「あぁあぁぁ……。ま、待て！」
祥夫が立ち上がる。
「私から連絡を入れよう」
「そうよ！　元はといえば、お父さんがいけないんだから」
陽乃がプリプリしながら、電話の子機を祥夫に手渡した。しかし、なんて言えばいいのか、などとブツブツ迷っている間に、2時間経過してしまったのだ。現在、午後１０時３０分。
「お父さん」
由利が声をかける。
「ん？」
「悪いけど、もう電話したわ」
「何！？　なんて言ったんだ！？」

「お茶とビールを間違って翔くんが飲んじゃって、酔ってるので今日はちょっと、ウチで様子見ますって」
「何!?　それで、ご両親はなんて?」
「ウチのアホ息子が迷惑かけてすみません!　すぐに首根っこ掴んで連れて帰りますって言ってたけど、もう遅いでしょう?　このまま、ウチで休んでもらうっていうことを私からも、強く言ったの。偶発事故とはいえ、未成年のよそ様のお子さんを酔わせたんだし。それくらい、当然と思って」
「納得してくださったのか?」
「本当に申し訳なさそうでね。今すぐにでも飛んで来そうだったから、本当に大丈夫って言っておいた」
「そうか……」
祥夫はようやく胸を撫で下ろした。
「今日は、私たちの部屋で寝てもらおうか」
「そうね。じゃ、私たちは居間で寝ましょ」
陽乃が申し訳なさそうに言う。
「ゴメンね、お父さん。お母さん」
「陽乃が謝る必要はないだろう。お父さんが、無理言って佐野くんを連れ込んで挙句に酔わせてしまって。陽乃にも、佐野くんにも申し訳ないことをしたな」
陽乃は静かに首を横に振った。
「あのさ……お父さん」
「うん?」
「あたし、今日、嬉しかった」
「何がだ?」
陽乃は恥ずかしそうに顔を赤くして言う。
「翔を、家へ入れてくれて」
祥夫は驚いたように目を丸くし、それからすぐに優しい顔で言った。
「いい子だな、翔くんは」

「……うん」
「ずっと、仲良くするんだぞ？」
「うん」
「それじゃ、今日はもう遅いから寝なさい」
「はい。おやすみなさい」
陽乃は笑顔で挨拶し、自分の部屋へと戻っていった。
陽乃を見送った後、祥夫はソファでスゥスゥと寝息を立てる翔を抱き上げて同じ1階にある、祥夫たちの寝室へと歩いていく。
不意にだった。ギュッと祥夫の服を、まるで何かに怯える子供のように掴んだのだ。
「……？」
そして、こう呟いた。
「お父さん……お母さん……」
17にもなる高校生が、なぜこんなことを言うのか、一瞬祥夫は不審に思った。しかし、その後すぐに続く言葉ですぐに、祥夫は陽乃から聞いたことを思い出した。
「兄ちゃん……お姉ちゃん……」
――翔、本当は阪神淡路大震災で、お父さんもお母さんも、お兄ちゃんもお姉ちゃんも……亡くなったんだって。

祥夫はそっと、翔の頭を撫でた。すると、安心したように、翔は笑顔になって再び、寝息を立て始めた。
祥夫もホッとして、翔を布団に横たえて寝室を後にした。

「……あれ！？」
翌朝、翔が目を覚ますと制服のままで、見慣れない和室に自分がいることに、動揺を隠せなかった。
「え！？　ちょ、えぇ！？　オレ、何やってんの！？」
「かーける！　おはよ！」

「……。」
陽乃が制服姿で寝室に飛び込んできた。
「おっはよ！　どしたの？」
「……えええええ！？」
「何！？」
「なんで！　なんで、なんでオレ、まだ陽乃の家におんの！？」
「あ～、覚えてない感じ？」
「覚えてない、感じ」
「覚えてなくてもいいからさ！　朝ごはんできてるって。食べよう！」
「えぇんか……？」
「いいの！　さ、行くよ！」
いつもの朝倉家の朝食、に加えて、翔の姿。陽乃にも、夏樹にも、知恵子にも、由利にも、祥夫にも新鮮だった。
「お兄ちゃんがウチにいたら、こんな感じだったのかな？」
夏樹が嬉しそうにパンを頬張りながら由利に聞く。
「そうね～。お姉ちゃんも、ちょっとは違ったかもね」
「どういう風によ」
由利の言葉に陽乃が気に入らなさそうに聞き返す。
「３人兄弟の真ん中は、おとなしくなるそうよ」
「あたしがまるで普段からおとなしくないみたいじゃない！　失礼しちゃう！」
「実際、そうよね～翔くん！」
「ちょっとお母さん！　馴れ馴れしく下の名前で呼ばないでよ！」
翔はあまりにテンポの良い言い合いに、笑いを隠さずにはいられなかった。
「でも、オレ、朝倉さんはすっごい人想いで、親切やと思ってます」
「……。」
「やっぱ、ご家族も皆さん、朝倉さんそっくりです」
全員が顔を赤くする。

「なんだか、恥ずかしいねぇ」
知恵子が真っ赤になっている。
「ね、まさかまだ酔ってないよね？」
「酔ってへんわ！　失礼やな」
翔の即答に、全員が大笑いした。

「おー！？　何ですか、ご夫婦で登校ですか！？」
駿の一言で、部員の視線が集中する。
「アホか！　しばくぞ！」
翔はいきなり駿を追い掛け回す。
「ねぇねぇ、実際、どうだったの？」
美里が陽乃に聞く。
「何が？」
「泰徳くんに聞いたけど、昨日、佐野くん、家に帰らなかったんだって？」
陽乃はしまった、と思った。そうだったのだ。今は常套中のメンバーがいて、翔を陽乃よりもある意味でよく知る泰徳が、翔の家に滞在中なのだ。
「い、いろいろ事情あったの！」
「キャー！　やだぁ！」
沙希と美里、由美子が顔を真っ赤にして叫んだ。陽乃は「みんなのバカ！」と言って楽器を取りにロッカーへと走った。
その後は平静を取り戻し、いつもどおりの部活時間へと変わっていく。しかし、今日は課題曲と自由曲が決定する、大きな節目の日だ。
「ね、ね、彩香ちゃん」
「はい？」
「課題曲、どっちになると思う？」
「えぇ？　私ですか～……私、個人的に課題曲はどっちでもいいんです」

「自由曲は？」
「自由曲は、朝倉先輩のソロ聴きたいので、教会のステンドグラスですね！」
「うーん……ソロかぁ」
どちらにしても大曲であることには変わりない。どちらに決まるのか、陽乃は今からワクワクして仕方がなかった。
愛実、春樹、拓真、智志、亮平たち低音パートは自由曲がどちらになるかでとても不安そうにしていた。
「お願いします～、どうかイーストコーストになってくださいぃぃ～」
まるで祈祷師のように、拓真がずっとお祈りを捧げている。一体、誰に捧げているのかまったくもって怪しいものだが、とりあえず神頼みしたいほどに彼は『教会のステンドグラス』を嫌がっているのだ。
「おはよう」
恭一がご機嫌で音楽室に入ってくると、全員が立って「おはようございます！」と気合いの入った挨拶を返す。
「はい、部長」
「はい！　起立！」
声が裏返った。まだ、酔いが冷め切っていないのだろうか。恭一も目を丸くして、すぐに笑い出した。
「おいおい、なんか二日酔いのオッサンみたいな声出すなよ～」
陽乃はビクッと全身が震えて、冷や汗が出そうになった。
「すいません！」
翔も顔が真っ赤だ。バレやしないかと、緊張しているのかもしれない。
挨拶を済ませ、いよいよ曲が発表される瞬間になった。音楽室に緊張が走る。
「え～、それでは２００７年度のコンクールに向けて、七海高校が演奏する課題曲・自由曲を発表します」

隣にいる麻綾が「心臓バクハツしそう」と呟く。翔の心臓もドキドキ鳴っているのがわかった。
「課題曲は」
陽乃は顔が熱くなるのがわかる。
「『マーチ・ブルースカイ』に決定した」
一瞬の間を開けて、なぜか拍手が沸く。
「続いて、自由曲は」
拓真は声に出そうになるほど「お願いします～！」と何度も心の中で繰り返した。
「『教会のステンドグラス』に決定する！」
「ギャー！」
拓真が悲鳴を上げた。全員の視線が彼に集中する。
「俺……もう終わった」
その一言に、室内がドッと沸いた。
「おいおい、本堂。そんなに悲観的になるな。ある意味、お前らのメロディラインは勢いが必要なんだ」
「そうなんですか？」
「あぁ。今はなんだか、お前ら音質とかを気にしているようだな。それも大事だが、まずは低音とトロンボーンまでで、大きな音を出す練習をするように」
「……。」
「ＯＫ？」
「はい！」
恭一が力強く答えるバスパートメンバーに、笑顔を向けた。
「よし！　それじゃ『大地と火と水と空の歌』出して。通すぞ！」
「はい！」
明日の演奏会に向けて、最後の練習が始まった。

第２４７話　壁をまた、乗り越えて

「忘れ物、せんようにしてや！」
３月２１日（水・祝）。いよいよ、七海市吹奏楽連盟第１３９回定期演奏会の日がやって来た。３月下旬ということもあり、ポカポカ陽気の暖かい日だ。
「おっはよ、雪ちゃん！」
陽乃は後ろから雪子の肩をつついた。
「あ、おはよ、陽ちゃん！」
「ねぇ、見て見て、あっち！」
雪子が陽乃の指差すほうを見ると、裕也、夏樹、好美、晃、まゆの５人がいる。
「今日も見学に来てくれたの？」
「見学っていうより、純粋にあたしたちの演奏を聴きたいんだって！」
「嬉しいこと言ってくれるね～」
雪子と陽乃は顔を見合わせて笑った。
「おーい、そっちの二人！　楽器運搬、手伝ってくれよ」
慎也に呼ばれて二人は慌てて音楽室のほうへと駆け上がった。
「じゃ、これお願い。あー、トミは優っちとタムタム持ってって」
部室へ入ると、美里が手際よく後輩たちにどの楽器を持っていくか指示を出していた。最近、美里のみならず、２年生はこうしてテキパキと指示を的確に出せるようになってきていた。もうすぐ、最高学年だという意識も高まってきている証拠だろう。
「ミサッチ！　あたしは何持って行けばいい？」
雪子も負けじと美里のところへ駆け寄り、何か持って行くものがないかどうか、聞いてみた。
「そうだな～。あ、じゃあこれお願い！」
そう言って手渡されたのはウィンドチャイムだ。雪子はこの楽器

が打楽器の中では一番好きだった。彼女は喜んで楽器を持って外へ出て行く。
「ミサッチ～！　あたしも何か持って行くものプリーズ！」
「えーと……そうだな～」
美里はキョロキョロとあたりを見渡して大量の譜面を一気に陽乃に手渡した。
「えぇ～!?　あたし、譜面だけ!?」
「何言ってんの」
美里はビシッと陽乃を指差して言った。
「いい？　譜面は、だいたい練習して慣れてきても本番でド忘れした場合の保険として、常に持って行くの！　たかが譜面って、バカにしちゃダメなんだからね？」
「……はい」
「そのとおりやな」
後ろから翔が嬉しそうに言った。
「嬉しいな～。そうやって、意識してくれんのって」
「……。」
陽乃は少し、自分が置いてきぼりになったような気がした。
「どうしたんですか？　本番前なのに、元気ないですね」
出発間際。自転車置き場で勇が心配そうに陽乃へ声を掛けた。
「ん～……ちょっとね」
「悩み事ですか？」
「あ、そんな大げさなものでもないからさ！　気にしないで」
陽乃は周りに心配を掛けたくない気持ちで、そう答えた。
「そんじゃ、出発するで～！　オレが最前列、副部長が最後尾な～。必ず信号守って、危ないコトせんといてやぁ」
ワイワイと嬉しそうに自転車で2列に並んで走る七海高校吹奏楽部員。
「あっ」
智志が声を上げた。

「あー……気づいてないや」
ちょうど信号に引っかかって、智志から後ろの列が前列部隊とはぐれてしまったのだ。
「ここの信号、いっつも変わるの早いよね」
ぶつくさ文句を言うのは、はるかとみゆきだ。
「まぁまぁ、事故でもあったら大変なんだしさ。落ち着いてゆっくり行こうよ」
絵美がいつもどおりのやわらかい感じで二人をなだめる。副部長はなるべく、全員が危険なことに遭わないよう、気を配り続けるのが肝要だ。
そのときだった。
「ちょっと」
声を掛けられたので陽乃が振り向くと、初老の男性が陽乃のすぐ後ろに立っていた。

「佐野せんぱーい！」
誠が大声で翔を呼んだ。
翔たちが智志以降の部員がいないことに気づいたのは、信号から１００メートルほどいった、次の交差点だった。
「はいよ？」
「大岩くんたち、さっきの信号で引っかかっちゃったみたいです」
「え？　ホンマに？」
翔がそこでようやく振り返ると、信号の向こう側にワラワラと集団が見えた。
「あっちゃ～……。正直、あんま時間ないねんけどな～」
ギリギリまで通し練習をしてしまったために、移動の時間はあまり残されていなかった。そのため、なるべく早く七海ホールへ着いておきたいというのが、翔の正直な気持ちだった。
「ま、すぐに青になれば追いつくでしょ」
沙希と並んで様子を見ていると、すぐに信号が青へ変わった。し

かし、それでも陽乃たちが動く気配はない。
「何しとんやろ」
見れば、智志、拓真、春樹あたりの男子が陽乃らしい女子部員数名の前に立って何やら話しこんでいるようだ。
「あっち側におるん、誰や？」
「えーと……大岩くん、本堂くん、水谷くん、河内さん、西嶋さん、秦野さん、飯岡さん、それから絵美ちゃんと陽ちゃん」
「何しとんや。早くせな時間が……」
「あたしちょっと様子見てくるよ」
すぐに沙希が走り出した。交差点までそう距離はない。運悪く赤になってしまったが、声を出せば聞こえない距離ではない。
「ちょっとー！　何やって……」
そこでようやく沙希は異変に気づいた。何やら、太めの男性が陽乃たちに食って掛かっているように見えたのだ。
「何？」
見れば、陽乃は半泣き状態。激怒している男性は今にも陽乃に攻撃しそうにすら見えるが、体の大きな拓真、正義感が強い智志、何かと気遣いの上手な春樹の３人が彼女の盾になるように立っている。ようやく、その男性の声が聞こえた。
「こちら側は左車線なんだから、君らの場合は反対側の歩道を走らんといかんだろうが！」
「ちょっと……何なのよ？」
沙希がオロオロしていると、後ろを通りかかった若い母親が呟くように言った。
「またあの人だわ……」
沙希が振り返ったので、驚いた様子で目を逸らした。
「すみません、あの……。あそこで怒られてるの、私の友達なんです。あの人って何なんですか？」
女性は小声で教えてくれた。
「何かと、理不尽なことを近所の人とかに怒鳴りつけてくる……ち

ょっといわゆる『困った人』なのよ。あぁして、高校生、中学生、小学生に怒鳴っては嫌がらせみたいなことをするのよね」

「そんなの……」

陽乃は春樹たちに隠れて見えない。しかし、拓真や智志が必死に男性に向かって反論しているのが見ていてわかる。

「と、とにかく佐野くんに……」

沙希は大急ぎで翔のところへ戻った。

一方、いつ修羅場になるかわからない拓真たちの現場。男性は一方的にまくし立てるばかりで、話し合いにすらならないのだ。

「時間がないから、あの、苦情でしたらいつでも高校のほうへ連絡していただければ……」

拓真の提案にも男性は応じない。

「そういう意味じゃなくて、俺は今すぐ君らにここで謝罪してほしいと言ってるんだ！」

智志の堪忍袋の尾が限界に来ているのか、みゆきの横で「うるせぇんだよ、このジジイ」という小声がさっきから頻繁に聞こえてくる。腕っ節の強い彼のこと。いつ殴りに掛かるかわからないとみゆきはヒヤヒヤしていた。

「だから！」

普段冷静な拓真もさすがに限界が来たようだ。

「俺ら、急いでるって言ってるでしょ！　苦情なら、学校通じて言って下さい！」

そのときだった。

「はいはいはい！　どうされたんですか？」

後ろを振り向くと、なんと、そこに立っていたのは三田嶋　樹だった。

「み……三田嶋さん！」

「どうしたも何もだね、この子たちが……」

男性が今度は標的を樹のほうへと変更した。話を聞き流しつつ、樹が「今のうちに」という意味合いで交差点を指差した。

こっそり拓真が動き出し、自転車へ跨る。「先輩も、早く」と智志が陽乃を自転車へ戻し、先に走らせた。後を追うようにみゆき、はるか、絵美、恵梨、好美、智志、春樹、そして拓真と続く。結局、男性は樹に文句を言うのに必死で、彼らが走り去ったことなど、まったく気づいていない様子だった。

「大丈夫か!?」

無事、全員のところへ合流できると、真っ先に翔が彼らの元へ走り寄る。

「大丈夫」

陽乃は泣きそうな顔でうなずく。

「とにかく、時間がないから急ごう?」

「……うん」

陽乃の強気な言葉に、翔は先を急ぐほうがいいだろうと思い、自転車で先頭に戻った。

会場に着いてからも、陽乃の心臓はドキドキ鳴りっぱなしだった。

「大丈夫なの?」

美里が心配そうに陽乃に声をかける。

「大丈夫。ちょっと、ドキドキしただけ……」

「しんどそうに見えるんだけど……」

「本当に平気だから」

「……オッケ。頑張ろうね!」

「うん!」

美里は打楽器。管楽器メンバーとは別行動となるため、しばらく会えなくなる。

「……ちょっと、お手洗い行ってくるね」

彩香にそう告げて、陽乃はトイレへ向かった。

「……ハァ……ハァ……」

息が苦しい。これはよくない傾向だ。

「ダメ……落ち着かなきゃ……」

しかし、そう思えば思うほど、呼吸がしづらくなってくる。

「ハァ……ハッ……ゲホッ！　ゲホゲホゲホッ……！」
そのまま、陽乃はその場に崩れ落ちた。

「あれ？」
移動の声が掛かったので、彩香たちも移動しようと思ったときだった。陽乃がいないことに気づいたのは。
「ねぇ、松尾くん」
「何？」
「朝倉先輩、帰ってきてない？」
「俺は見てないけど」
「まだトイレかなぁ……」
キョロキョロと周辺を見渡し、いないことを確認すると、彩香はトイレのほうへ向かった。
「いないな～」
1階のトイレにはいなかった。時間はあまりないが、反対側のトイレも見に行こうと走り出したときだった。
「ん？」
誰かがいる気配がし、彩香はふと階段の踊り場を見てみた。普段、ホール関係者が出入りするのにしか使わない階段と聞いているそこで、陽乃がへたり込んでいたのだ。
「先輩！」
彩香は血相を変えて陽乃に駆け寄る。見れば、彼女は大きな袋を握って荒い呼吸を繰り返していた。
「……！」
大丈夫！とでも言いたそうに陽乃は呼吸を繰り返す。彩香は誰かを呼ぼうとしたが、そうこうしているうちに陽乃の呼吸は落ち着いてきた。
「先輩！」
「ご、ごめん……ちょっと、息苦しくってさ……」

「大丈夫なんですか!?　こ、こんな状態で本番なんて無理ですよ？」
陽乃は激しく首を横に振った。
「ダメだよ！　今日……雪ちゃんと演奏……ゲホゲホッ！」
彩香が背中を摩る。
「今日は……雪ちゃんと最後の演奏の日なんだから……出なきゃ……」
彩香もそれ以上、出るなとは言えなかった。そうしているうちに、呼吸も落ち着いてきた。
「先輩……立てますか？」
「平気」
「じゃあ……行きます？」
「もちろん」
陽乃はスッと立ち上がり、まだどこかしんどそうな表情をしつつも、気丈に全員の前へ戻った。
「遅い！」
いつの間に到着したのか、樹が立っていた。
「すみません！」
「大丈夫か？」
すぐに気遣ってくれるあたり、先ほどの件のことだろう。
「今はもう、大丈夫です」
「そう」
陽乃は楽器と楽譜を手にして、待っている部員たちのところへ走っていく。
「良かったの？　見ちゃったんでしょう？」
隣にいたしおりが、心配そうに樹に聞いた。
「あぁ」
「過呼吸って……１０代はよくなるみたいだし」
「そうだな」
「万が一ってことがあったら……」

「大丈夫」
樹は語気を強めて言った。
「何を根拠に？」
「俺の」
樹の目が遠くを見つめる。
「経験」

「それでは、七海高校の方」
チューニングを終え、リハーサルも終えて今は舞台裏で控えている。
「照明が落ちて、暗転してから指示を出します。それから、左花道の方は弦バス、チューバの順番に入ってください。舞台袖控えの管楽器と打楽器の方も同様でお願いします」
「はい」
小声で部員たちが答える。
「先輩」
彩香が最後に聞いた。
「本当に、大丈夫、ですよね？」
陽乃はギュッと彩香の手を握った。
「大丈夫」
前の団体が演奏を終え、舞台が暗転する。
「それでは、どうぞ」
陽乃。雪子。翔。慎也。拓真。春樹。美里。沙希。由美子。絵美。

この七海高校吹奏楽部を創りあげてきた１０人が揃って演奏する最後の演奏会が、いま、幕を開けようとしていた。

第２４８話　『大地と火と水と空の歌』

「プログラム３４番　七海市立七海高等学校吹奏楽部　ロバート・W・スミス作曲　大地と火と水と空の歌。指揮は、東　恭一です」

とうとう始まる、２年生１０人が揃う最後の演奏会。恭一は照明が点灯すると、いつもどおり、深々とお辞儀をした。

部員たちのほうへ向き直ると、口パクで「深呼吸」と言った。そして、まずは春樹のほうを見る。春樹は力強くうなずいた。

恭一が最初に指示を出しただけで、後は春樹一人の時間だ。母の幸恵子は、春樹が冒頭にソロがあることなど聞いていなかったので、息子の音だけが響くホールが、恐ろしく緊張感の溢れる空間へと変化するのを感じていた。

（気持ちいいな……。俺の音しか、聞こえてない……）

やわらかく、どこか力強い春樹の音色がホール内に響く。予想以上の音の深さ、柔らかさに全部員が鳥肌を立たせていた。二度目の部分はピアノへ落として演奏する。それがまた、雰囲気を醸し出していた。

そして、クレシェンドと共にあずさのティンパニ、優のサスペンド・シンバルが勇壮に鳴り響く。それを締めるように、めぐみのクラッシュシンバル。その直後に、トランペットによる主題が奏でられる。裏メロとして、ユーフォやサックスの音色が支え、力強く岳彦、智志、拓真のチューバや慎也たちトロンボーン、駿と誠の木管低音が全体を支える。重々しい雰囲気だけでなく、神々しい雰囲気を出すのが、一時的に移動しているさゆりのグロッケンと美里の鈴であった。

ホルンとサックスの雄叫びのような音色のあと、打楽器をキッカケに一気に曲がテンポアップする。洋之のタムタムが印象的に鳴り響き、ディクレシェンド。

始まったのは、ユーフォ、サックス、オーボエによるメロディだ。

クラリネットの細かい伴奏が怪しげな雰囲気を出し、メロディは勇壮さを出す。間を縫うようにトランペットのメロディが聞こえた。同じメロディが繰り返されるのだが、ユーフォ系統に呼応するようにクラリネット、フルートが加えられる。

木管楽器の旋律が激しく入り乱れ、間に金管楽器の打ち込みが入り、曲は前半部分の最高潮を迎えた。優のサスペンド・シンバルがその雰囲気をさらに盛り上げ、一旦、曲のテンションが下がっていく。しかし、下がりきらないうちに、順平と雪子のソリが始まった。クラリネットの細かい動きの上で、どこか怪しげでかつ幻想的な、ホルンの音が響いていく。2回目は、それに応えるような春樹と愛実のメロディ。最後に、チューバの下の音を拓真、上の音を智志が演奏してフェルマータに突入した。

（俺と先輩の音……めちゃくちゃ聞こえる……）

智志は緊張のあまり、自分の心臓の鼓動音がホールに漏れているのではないかとドキドキした。美里の鈴と、洋之のタムタムも最後のほうまで聴こえるため、気が抜けない。

雰囲気は変わり、緊張感漂う沙希と由美子のソロ。ここの伴奏は拓真、駿、誠の3人と洋之のみに抑えられていた。演奏していないメンバーも、顔が緊張しているように友美子からは見えた。

（キッカケはあたし……！）

念じるように気合いを入れる恵梨。そして、恭一からの指示が入った。

重々しい雰囲気を吹き飛ばす、快活なコンガの音が響いた。恭一が笑顔になる。それに乗るようにして、優のボンゴが響く。小物楽器の安和、鈴の美里が加わり、そこから拓真と智志、岳彦の伴奏。クラリネットの波を思わせるような細かいトリルが加わる。

移動した沙希は、ピアノを弾いていた。翔のイメージ曰く「雪子のソロを予兆させる雰囲気」ということであった。

すべては雪子のソロへ繋げるため。いま、演奏しているメンバーはそれだけにすべてを注いでいたといっても過言ではなかった。

始まった、雪子のソロ。水が流れるような、やわらかな響きがホール中を包み込んだ。これには思わず、修平たちも目を閉じてメロディに聞き入ってしまった。

そしてフルートが加わり、雪子のソロに味付けを行う。健之佑が心底楽しそうに、独立したソロを吹き始めた。

位置的に、全員が見えないハズの健之佑、雪子、沙希、由美子の４人がなぜか、それぞれの気持ち良さそうに演奏する姿が見えた気がした。

殴り書きされたように見える、翔たちサックスの楽譜。その部分に関しては、駿も同じであった。

駿の楽譜には「加藤のソロを予感させる！」。

麻綾の楽譜には「めぐの分身！」。

翔のものには「かとちゃんへ繋ぐ！」。

さゆりのところには「めぐの前兆をかもしだして」。

はるかには「めぐＬＯＶＥ」と若干意味不明な記述。

その文字どおり、それまでの安心感漂うメロディとは異なる雰囲気の音が、サックスたちから奏でられた。バリトンサックスがいない代わりに、駿がその音を奏でる。

雰囲気は再び元に戻り、やがて、沙希のピアノの音と共にその部分は静かに終わりを告げていった。

春樹の冒頭のソロを思わせる、愛実のソロが始まる。しかし、調が異なり、さらにはめぐみのトライアングルがどこか不安定な印象を与えた。

優のコンガが加わる。曲は加速して、洋之のタムタムが不穏な印象を与える。フルートとオーボエが愛実の音色に呼応する。

（音を絶対にズラすな！）

愛実のソロは途中で終わり、春樹が同じメロディに加わるのだ。どれだけ愛実の音がズレていようと、先に吹いていた者の音程に合わせるように、と恭一から指示が来ている。テンポが上がっていく中、春樹にとってこの部分の演奏は緊張度がマックスになる部分で

あった。その初めの音はベー（B♭）の音だ。
（っし！）
音の入りは成功。後はテンポがズレないようにしなければならない。一瞬、テンポが乱れた。心臓が飛び出しそうなほど、春樹はビクついてしまった。しかし、それを上手くリードしたのが洋之とめぐみだった。常に音を出していた彼らが、上手く不安定な感じを掻き消してくれた。
そして、一気に曲は加速する。チューバにとって正念場はここであった。ほとんど休憩ナシで伴奏が続く。岳彦と拓真には慣れてきたものだが、智志にとっては未経験となる激しい伴奏。しかも、調が特殊なものであったので、指が追いつかなくなることもあった。
「頭のベーの音だけでもいいから、しっかり吹けよ」
拓真のアドバイスが智志の頭をよぎる。一瞬、指がもつれて落ちてしまった。しかし、あずさのティンパニの流れだけは覚えていたので、なんとか復帰することができた。
トロンボーンは見せ場の少ないこの曲で、唯一の目立つ部分だった。慎也、亜紀、徹にとっての見せ場。サックスとの呼応部分だった。交互にメロディを奏でるここは、何度も練習を重ねてきた。最高の演奏を！　これが今回のトロンボーンの目標だった。
テンポが早く、一瞬でもスライドを遅らせてしまえば曲は台無しになる。それゆえ、素早いポジション変更が必要だった。何度もメトロノームに合わせて練習してきた彼らに、怖いものはなかった。
オーボエやフルートの上昇系音が加わり、後半部で最も盛り上がる部分がやって来た。全員が音を吹き切ると、一瞬、静寂が訪れる。しかし、それを打ち破ったのが優のコンガだった。後ろでは安和のギロと美里の鈴が絶えず正確な音を刻んでいる。そこへ恵梨のボンゴが加わり、最後に洋之のタムタムが加わって、民族的な音楽へ変化する。
「おぉ……」
裕也は思わず声を上げてしまった。そう。この曲はこの部分で歌

が挿入されるのだ。歌だけでなく、ソロも設けられている。春樹、麻綾。そして本来は小譜なのだが、智志もこの歌のメロディを吹いていた。早く演奏に慣れるため、と恭一が課した試練でもあった。

いつの間に習得したのか、智志がフレーズごとに考えた吹き方をしていたのには恭一も驚かされた。そしてチューバの下降系の音が響き、冒頭の再現部へ戻った。それを過ぎ、さらにホルンソリの再現部へ。この曲の終わりは、フェードアウトするタイプだった。

徐々に音を小さくする。恭一の指揮も自然と小さくなる。雪子、順平、愛実、春樹の音が響き、やがて低音の智志、岳彦、拓真の音が聴こえた。最後が近いのだ。

美里の鈴と洋之のタムタムがテンポを落としていく。重厚なチューバ、バスクラリネット、クラリネット、トロンボーンの響き。そして、何かが終わるようで、まだ終わらない。そんな不思議な音を立てる——鈴が鳴り響いた。美里、安和、めぐみの3人だった。

指揮棒が降り、演奏が終わる。しかし、演奏が終わってもしばらく、静かな状態が続いた。

恭一が満足そうな笑顔で全員を見つめ、指揮台を降りた。

（終わったんだ……）

雪子は不思議な高揚感に包まれていた。全員で、１０人全員で演奏する瞬間が終わった。

舞台が暗転する。すぐに、移動しなければならない。しかし、雪子はすぐに動けずにいた。

「あれ……？」

涙が止まらない。移動による雑踏も聞こえなくなった。すぐにそれに気づいた翔が駆け寄った。

「……佐野くん……」

「うん……」

「終わっちゃった……。終わりたくないのに……」

「うん……」

「終わっちゃって……る……」

「うん……！」

翔も動けずにいた。しばらく二人は、向き合って俯くことしかできずにいた。

第２４８話　『大地と火と水と空の歌』（後書き）

この演奏会の座席位置はコチラ　↓　ｈｔｔｐ：／／１５０．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ４２２８／

第２４９話　思い出めぐり

演奏会終了後、学校へ戻って楽器の片付けなどを終えると午後５時半を過ぎていた。演奏会はもう終わりなので、今から会場へ戻っても仕方がないこともあり、今日はココで解散となる。

恭一はまだ、雪子の転校まで日があるからということで、改まった挨拶は避けておくことにした。部員たちも特にそれには触れようとせず、いつもどおりの様子で片づけをし、終礼を済ませた。

１年生はワイワイと楽しそうに今日の演奏会を振り返りながら、それぞれ帰路へと着く。しかし、２年生はどこか名残惜しそうにしている。無理もないかな、と恭一は笑った。

翔がタタッと恭一の所へ駆け寄る。

「先生」

「うん？」

「もうちょっと、学校おってもいいですか？」

「いいけど……どうしたんだ？」

「２年生で、ちょっといろいろ話したいんで」

「……。」

翔が不安そうに「やっぱあきません？」と聞いてきた。

「いやいや。先生もしばらく、三田嶋さんや神崎さんと話すことがあるから、その話が終わるまでなら構わないぞ」

「ホンマに！　良かった～」

「それじゃ、音楽室の鍵」

「ありがとうございます！」

翔は鍵を受け取ると、大急ぎで２年生の輪の中に戻っていった。

「本当に……転校しちゃうんですね～」

しおりが残念そうに呟いた。

「あぁ。創部からのメンバーだからな……」

「でも、転校くらいじゃ彼らの絆は壊れないでしょうね」

樹がにこやかに彼らの背中を見送った。
音楽室前に着くと、翔が早速思い出話を始めた。
「この音楽室にくっついてある、部室もオレらが来たときは『音楽準備室』扱いやったもんなぁ」
「そういえば、そうだったね」
陽乃が思い出したようにうなずいた。
「あの時からいるメンバーって、雪ちゃん、陽ちゃん、佐野くんの3人なんだよね？」
沙希が確認しなおす。
「そうそう！　オレら、最初っからめちゃめちゃ仲良かったやんな」
「いきなり佐野が二人を家へ連れて行くくらいだろ？」
慎也が茶化すように翔に聞いた。
「もー！　それはちょっとなかったことにしろって！」
ドッと笑い声が起きる。
「あの時はまだ、あたしも雪ちゃんのこと『永井さん』なんて他人行儀な呼び方してたよね！　同じ学校なのに！」
「そうだったね～。それで、何でか佐野くんは陽ちゃんのこと、呼び捨てなの。私のことは『さん』付けなのに」
「あー！　それ私も思った！　私が同じ日に音楽室覗いたとき、私のことも『大谷さん』だったのに、なんでか陽ちゃんのことは呼び捨てなの」
「へぇ～？　なんで？　なんで？」
春樹がニヤニヤ笑いながら翔の顔を覗きこむ。
「うるさいなー。オレはな、朝倉のこと最初、普通に男友達みたいに接しても大丈夫なノリやと判断したからや」
「何よそれ！　失礼しちゃう！」
陽乃がプイッと翔から顔を背けた。
「はいはい。痴話げんかは後ほどね～」
美里が鍵を開けて、電気を点けた。
「それから、拓あんが来たよな？」

「そうそう。陽ちゃんに連れられて」
「懐かしいな……」
拓真が音楽室の天井を見上げた。
「なんで、吹奏楽部に入ろうと思ったの？　今さらだけど」
由美子が拓真に聞く。拓真はこう答えた。
「純粋に、俺も何か夢中になれるものがほしかったんだ。中学のときは、特に部活もせずに過ごしてきたんだけど。高校では、何か夢中になれるものがほしいと思ってさ」
「体大きいから、運動部でも良かったんじゃないの？」
絵美がもっともな疑問をぶつけた。
「なんか、そういうので判断されるの、俺、嫌いでさ」
「あ、なんかわかる！　私もそうなの」
美里が同意した。
「そういうもの？」
「そうよ～エミリン。あたしなんてね、ガァガァ騒がしいから、運動部みたいなのが合いそう！とか言われるの」
「ガァガァって、アヒルかよ！」
慎也がおなかを抱えて笑い出した。美里はバシッと慎也のお尻を叩いてから、続ける。
「同時に見学に来たのが、あたしと由美ちゃんだったよね」
「あ～、そうだったそうだった」
翔が思い出したように続ける。
「そうや！　この子変わってるなぁと思ってん」
「え？　私？」
由美子は予想外の展開に目を丸くした。
「私は別にふつうの見学者のつもりだったんだけど？」
「いやいや～。勝手にオレの電話番号入手してるし、初日からいきなり入部届け持ってくるし」
「え～！　それってかなりの気合いの入りようだね」
これには雪子も驚かされた。

「だぁってぇ！　フルートって人気楽器って聞くし、そもそもサキティの吹く姿が凛々しすぎたんだもん」
「理由がそれ!?　人気っていっても、１０人しかいないから取り合いのなりようがないじゃん！」
　これにはさすがの拓真も大ウケ。全員が大声で笑う。
「それから、それ以上にビックリしたのが水っちだよね」
　陽乃が春樹に視線を移す。
「俺も？」
「うーん。だって、あたしが今日入部する？みたいな感じで聞いたら本気で入部しちゃったじゃん」
　翔も思い出したようで「そうやった！　その日、入部届け２枚、東先生に持っていったわ！」と懐かしそうに笑った。
　それからも、思い出話は止まらない。
　監査会のこと。たった１０人で演奏した『ＴＲＵＴＨ』。音楽室で初めてした合宿。合同練習の前日。美里はベッドでタンバリンの練習をして姉に怒られたと言った。春樹は楽器を持って帰り、話し掛けながら楽器を磨いたそうだ。
　校長室でゲリラライブのようなこともした。ストーブをもらいたいがために。
　ちょうど１年前。停電したホールで吹いた『大草原の歌』。拓真と春樹のコッソリ練習が引き起こした泥棒騒動から幽霊騒動。
「あの時の翔のマネ！『どっ、どもー！　お元気ですか？』」
　拓真の突然の物真似に、全員が爆笑する。
「悔しいけど似てる！」
　翔も大爆笑だ。
「やだぁ！　生で見たかった～！」
　雪子が残念そうに沙希と笑い合う。
　それからも話の種は尽きなかった。気がつけば、時間は午後８時。さすがに、そろそろ帰らなければならないだろう。
「そろそろ、帰ろうか」

翔が重い腰をようやく上げた。
「……そうだね」
思い切ったのは、意外にも雪子だった。
「もうちょっといようよ」
由美子が惜しそうに雪子の服を引っ張る。
「ダメダメ！　今日は演奏会でみんな疲れてるんだから。ほら、帰るよ！」
美里が由美子を無理やり立たせた。全員が音楽室を後にし、電気が点いていない、暗い廊下を歩いていく。誰も、何も話さなかった。１０人の足音だけが、静かに響き渡る。
「失礼しまーす」
春樹が一番に職員室のドアを開けた。
「おっ。やっと来たか」
樹が笑った。しおりが「ずいぶん長かったから、心配したじゃない」と言う。
「たかが3時間じゃないですか」
拓真は苦笑いしながら、音楽室の鍵を恭一に手渡す。
「気をつけて帰れよ。もう、遅いから。まとまった人数で帰るように」
「はい！　失礼します」
１０人は元気良く挨拶をし、職員室を後にした。彼らの姿が見えなくなってから、樹が口を開いた。
「珍しく、朝倉さんと佐野くんが口を一切開きませんでしたね」
ズズッと恭一がコーヒーをすする。
「二人とも、目がうるんでましたね」
しおりが寂しそうに笑った。
「でも」
恭一がようやく言葉を発した。
「離れても、アイツらの絆はそう、簡単に途切れはしないさ」
表からハハハ！という翔の笑い声が聞こえ、澄んだ夜空の空気が、

その声を校庭中に響かせていった。

第２５０話　絆

３月２４日土曜日。今日は吹奏楽部の活動は一応、休みだ。しかし、朝から部員たちは音楽室でワイワイと、とある行事の準備を進めていた。

「はる～、こんな感じでいい？」

麻綾がはるかに貼り付ける看板の位置を聞いている。

「うーん、もうちょっと左……」

「ここ？」

「あー！　そこそこ！」

一方の徹と亜紀は、椅子のセッティング。理系の洋之と順平は、ビデオやテレビのセッティングに余念がない。

お料理大好きな光瑠、みゆき、梨子のクラリネットガールズは作ってきたクッキー、ケーキ、からあげ、サラダ、パンなどを並べている。ジュース担当の優、愛実、優輝の３人は近くの業務スーパーで、普段は高い値段で売られているジュースを安く手に入れてきた。

「ねぇ、写真は揃った？」

美里が沙希に聞く。

「プレゼント用のでしょ。もちろんよ」

「まさか、サキティがカメラ好きでそんなに写真撮ってるとは思わなかった」

美里は嬉しそうに写真を見つめる。

「懐かしいね。こうして改めて見ると」

「うん……」

一方の春樹、拓真の二人は別室にいる泰徳、美並、未来、美奈の様子を伺いに来た。

「失礼しまーす」

拓真は左手にお盆を持ってきた。その上には彼らのジュースとお菓子を載せていた。

「調子、どう？」
春樹が泰徳に人懐っこく聞いている。泰徳には苦手な部類の人になるのだが、春樹の場合、それほど嫌な感じはしない。
「悪くないです。今日、けっこう気温高いから音程も安定してますし」
「そっか！　良かった」
「曲目はこれで大丈夫だっけ？」
拓真がプログラムを開いてみせる。泰徳は「問題なしですね」と笑顔で答えた。
「なんか、突然無理な提案を翔のほうからしちゃってゴメンね」
春樹が両手を合わせて４人に謝る。４人は顔を見合わせて笑った。
「別にそんな……。それに、あたしたちもこっちにいる間、いろいろ楽しい思い出作らせてもらったし」
美奈が心底嬉しそうに答える。その笑顔を見ると、春樹も拓真も安心できた。
「それで？　主役はまだ来ないの？」
美並がワクワクした様子で聞く。拓真は「もうそろそろ、翔と朝倉が連れてくると思う」と返した。
「あの、お手洗いどこですか？」
泰徳が拓真に聞いた。
「あ、ちょっと離れてるトコにあるから、案内するよ。いま、音楽室の傍のところは改修中でさ」
「ありがとうございます」
「俺、案内するから春やん、あとヨロシク」
「了解」
拓真と泰徳は多目的教室を後にした。二人の足音が、音楽室の雑踏に混じって廊下に響いていく。
「あの……」
泰徳が聞いた。
「何？」

「仲間が……いなくなっちゃうって、やっぱり、寂しいんですか？」
「え？」
「その……俺、あんまり絆とかって、信じないっていうか……そういう考えなんですけど」
「……。」
拓真がボンヤリした様子で泰徳を見下ろした（身長差がずいぶんあるので、こういう形になってしまう）。
「すいません、なんか可愛くないヤツで」
「いやぁ、別にそれは竹林くんの考えでしょ？　間違ってるも、合ってるもないんじゃないの」
「そ、そうですか？」
「うん。別に、俺の意見に左右される必要はないと思うな」
「はい……」
「絆ねぇ……」
拓真は遠くを見つめる感じでしばらく何も言わず、ゆっくり廊下を歩いた。
「他人（ひと）の話ばっかりになるけど」
「はい」
「たとえば、さっきの水谷と、その後輩の加藤」
「はい」
加藤といえば、確か、未来と仲の良い子だったはず。
「アイツら、幼なじみなんだよね」
「へぇ」
それは泰徳と美奈の関係のようなものだろう。昔から当たり前のようにいる関係。異性だろうと同性だろうと、たいして接し方が変わったりはしない。
「なんかさ、わかるんだよね」
「なにがですか？」
「アイツら、俺たちの知らない何かがあるんだよ」
「……付き合ってるんですか？」

ドキドキした。付き合っているという単語を出すとき、なぜか泰徳も緊張する。
「いや、水谷が付き合ってるのは、橋本だよ。クラリネットの」
「じゃあ、なんで……」
泰徳が言わずとも、わかる。春樹と愛実は、いやに仲が良い。
「橋本さんは、怒らないんですか？」
「言ってたよ、橋本。春くんと、愛ちゃんの仲は、壊すようなものじゃないって」
「……。」
「私には計り知れないくらいの時間を二人は共有してて、多分、愛ちゃんも春くんもその時間を何よりも大切にしてきた。私と付き合ったからって、その時間をなかったものにしたり、これからの時間を壊したりは、してほしくないんだって」
「……。」
泰徳は思い出した。ほんの、ひとかけらしかない記憶。翔と遊んだ記憶。そこに、修平や翔平のような子もいた気がしなくもない。すべてが薄い色をした記憶だが、ハッキリと翔の笑顔だけは残っている。自分が引っ越すときに、翔は最後まで笑顔だった気がする。
それっきり、翔のことは思い出さない日々が続いていた。愛媛での生活に慣れるのに必死だったり、音楽のことに没頭したりで、だんだんと記憶は薄れていった。事実、翔から電話をもらったときもすっかり、誰だかわからないほどになっていた。
だが、翔は電話口でこう言った。
（あぁ！？　お前酷すぎるぞ、旧友の名前を忘れるなんて！）
そこから一気に記憶が吹き出すように飛び出してきた。遊んでいた頃の記憶。翔が引っ越すとき、わざわざ泰徳にまで引越しのお知らせ葉書を出してくれた記憶。
「絆ってさ、見えないし、本当にあるかどうかも疑問だよね」
「……。」
「この話は内緒にするって、約束してくれる？」

「……？」

拓真は、翔の家の事情を話した。もちろん、翔には了解済みだ。何かの折に、泰徳にも伝えたいと言っていたから。

「そう……なんですか……」

友美子、昭、綾音、智輝　冨美枝。彼らは本当に翔の家族のように見えた。しかし、実際には彼らは翔と血の繋がりはない。アルバムに翔は、それでも幸せそうだった。

「それでも、翔の中で、佐野家とも大中家とも、絆は壊れてないみたいだし」

「はい……」

「それにさ、いま竹林くんがここにいることも、絆の証明になってるんじゃない？」

「え？」

「俺と、翔と、朝倉と、永井ちゃんと、慎也とで君らのアンサンブルを聴きに行ったでしょ」

「はい」

「それっきりじゃん？　俺らって」

「……そういえばそうですね」

「でも、わざわざこうして永井ちゃんの転校のお別れパーティーに、演奏しに来てくれたじゃん」

ハッと気づいた。何の疑いもなく、翔から雪子の転校を知らされ、演奏しに来てほしいと言われたとき、すぐにＹｅｓと答えが出た。同時に、雪子や陽乃の顔が思い浮かんだ。

「絆が、俺たちの中にもあったんだよ」

びっくりするほど、納得の行く例だった。

「着いたよ」

気づくと、お手洗いの前に来ていた。

「ありがとう……ございます」

「いえいえ。こっちこそ、今日はありがとう。帰りは、戻れるよね？」

「はい」
泰徳は小さくうなずいた。
「じゃ、また後で」
拓真は笑顔で小さく手を振り、今来た道を戻っていく。泰徳はすぐにお手洗いには入らず、しばらく呆然と立ち尽くしていた。

「ねぇ。本当にいいの？」
雪子が申し訳なさそうに翔と陽乃に聞いた。
「いいの。暇だし」
「そうそう！」
「でも、デートとかしなくていいの？」
雪子は茶化す感じで二人の顔を交互に見つめた。
「言うようになったなぁ、永井ちゃんも」
「へへっ」
雪子は転校先の高校のことを教えてくれた。
「転校先は、南大阪市立　光来（こうらい）高等学校になったの」
「光来高校？」
翔が驚いたように雪子を見つめた。
「どうかしたの？」
「そこ……俺の中学時代の同級生がおるわ！」
「ホント！？」
陽乃が嬉しそうに笑った。
「ねぇ、翔。今からその子に雪ちゃんのこと、知らせておいてよ」
「おう！」
翔は携帯電話を取り出してメールを打ち始めた。
「い、いいの？　そんなの……」
「えぇってえぇって！　あ、名前教えとくわな」
「うん」
翔はその友人にメールを打った後、赤外線送信で雪子にその友人たちのデータを次々と送ってくれた。男子が４人、女子が３人。

「さすが翔。友達多いね」
陽乃が感心する。雪子のメールには、合計6人の名前が並んでいた。
「えっと……内山　大輔くん、稲元　友也くん、鈴広　勝明くん、福崎　啓一くん。女の子が、川島　海里ちゃん、岡原　怜ちゃん」
「そうそう。もちろん、全員関西弁な。いま、大輔にメールしといたから、絶対絡んでくるで」
「本当？」
雪子が安心した表情を浮かべた。
「楽しみにしとき」
「うん！」
陽乃と翔はニッと笑い合った。
玄関で靴を履き替え、階段を上がる。
「やっぱり、休みでみんないないと静かだね」
雪子が呟く。
「そだね。普段はこの辺から、吹奏楽部の賑やかな声、聞こえるもん」
陽乃が笑う。特に、美里やはるか、順平あたりの声はよく響く。
「たまには静かなんもえぇやろ」
そして、音楽室の前に立つ。
「永井ちゃん、開ける？」
「私が？」
「もう、この扉を開け閉めすることもそうそうないし」
翔が寂しそうに笑う。陽乃も、雪子も少し胸が締め付けられる感じになった。
「うん」
雪子は取っ手に手を掛け、グッと扉を開けた。
その時だった。

「永井先輩、ご登場～！」
順平の声が響いた。

第２５１話　さよならは、メロディに乗せて

「永井先輩、ご登場～！」
順平の陽気な声がこだました後、パンパンパン！とクラッカーが鳴り響いた。雪子は驚いて目を丸くするばかりだ。見れば、１年生から２年生、泰徳たち常套中学バスパート組、修平たち風見台高校生、恭一、しおり、樹までいる。
「なに……これ……！」
雪子は状況を飲み込めず、入口で呆然としている。
「ゴメンな！　永井ちゃん！」
翔が雪子の前に立って両手を合わせた。
「本当は、言いたくて言いたくて仕方がなかったんだけど……」
陽乃も苦笑いする。
「内緒にするの、大変だったよね！　みんな！」
「はーい！」
陽乃の問いかけに全員が返事をする。そこでようやく雪子が笑顔になった。
「えっとですね！」
順平がゴホン！と咳払いをした後に言った。
「開会に当たってまず、先輩に言っておきます！」
雪子の顔が少し緊張したものになる。
「看板を見てください！」
見れば『永井先輩を送る会』となっている。
「見ていただけましたか？」
「送る会……だよね？」
「そうです！　送る会です！　間違えないでほしいのは、『送別会』ではありません！」
順平がブイサインをした。
「つまり！」

光瑠の声が合図だったようで、全員が声を合わせて言った。
「今日でお別れではありません！」
「……みんな……」
翔が前に立った。
「永井ちゃん。確かに、今日で……皆と住んでる場所はずーっと離れたところになってまうけどな」
「うん……」
「でも、オレらは、永井ちゃんがこの部活を離れるとは思われへんねん」
「……。」
「辞めるんちゃうで？　もちろん、お別れなんてもってのほかやから」
「……。」
「ＯＫですか？」
翔が笑顔で問う。
「……はい！」
雪子はとびきりの笑顔で答えた。
「それじゃ、執事。案内して」
「執事？」
「お待ちしておりました、お嬢様」
「やだぁ！　何、その格好！」
なんと、執事の姿をした慎也と拓真が雪子の前に現れたのだ。これにはさすがの雪子も笑いをこらえきれずに吹き出してしまった。慎也は真っ赤になっているが、拓真は意外とこの格好が気に入ったようで（しかも似合っている）ご機嫌だ。
「それでは、ご案内お願いします」
雪子は執事慎也と拓真に案内され、中央の席に座った。
「それでは、まず特別ゲスト。愛媛県から常套中学の竹林くん、中井さん、高橋さん、谷さんの４名によるアンサンブルをお聴きいただきます。曲目は永井先輩一押しの『大きな古時計』です。お願い

します」
　泰徳の合図で、演奏が始まる。雪子は嬉しそうに目を閉じて、演奏を静かに聴いた。春の陽気が感じられる音楽室から、外へと泰徳たちの音が響いていく。
「お……？」
　外で練習していた野球部のメンバーが手を止めた。
「おい。この曲、何て言ったっけ？」
「お前、忘れたのかよ」
　相田　雄平が笑って答えた。
「大きな古時計だよ」
　雪子は演奏を聴きながら、いろんなことを思い出していた。翔と陽乃と出会った日。ホルンを初めて触った日。停電の中、１０人で演奏した大草原の歌。合宿で悲鳴を上げすぎた肝試し。アンサンブルコンテスト。コンクール。マーチングコンテスト。文化祭。体育祭。挙げれば切りのない思い出たちが、雪子の脳裏に次々と蘇る。
　泰徳たちの演奏が終わる頃には、雪子はもちろんのこと、美里、沙希、絵美、由美子、陽乃たち２年生女子がポロポロと大粒の涙をこぼしていた。
　演奏が終わるなり、雪子が立ち上がった。
「ありがとう。私、あなたたちの演奏を一度、しっかりと聴きたかったんだ」
　ギュッと真っ先に、泰徳の手を握る雪子。泰徳が目に見えて真っ赤になった。それから順に未来、美奈、美並に握手をする。
「先輩。また、大阪でも吹奏楽されますか？」
　美並が聞いた。
「もちろん！」
　雪子が即答した。
　それからお菓子や料理を食べて談笑し、思い出話に花を咲かせる部員たち。時間はあっという間に過ぎていく。しばらくするとゲームが始まった。椅子取りゲームやビンゴ、伝言ゲームなど他愛無い

遊びばかりだが、そのどれもが楽しくて楽しくて仕方がなかった。
「それでは、今日の送る会最後のプログラムになります」
順平の声が上ずった。雪子にしか気づけない、彼の泣きたいときに出る声だった。
「2年生の皆さんによる、演奏です」
「え……？」
すると、陽乃、翔、沙希、由美子、美里、絵美、慎也、春樹、拓真が楽器を持って音楽室に入ってきた。
ペコリとお辞儀をする9人。それに加えて、順平がホルン片手にやって来た。合計１０人。創部当時の吹奏楽サークルを彷彿とさせる光景だった。
「本日最後のプログラムはコブクロの『桜』です」
美里が合図を出すと、沙希と由美子のソリが始まった。軽やかだが、どこか憂いを秘めた音。やがて、絵美のクラリネットが響く。そして、翔のソロ。それが由美子たちと綺麗に旋律を作る。次に、陽乃がそのメロディを引き取った。
パッと部屋が薄暗くなった。洋之の動かすスライドを効果的に演出させるために麻綾が電気を消したのだ。１０人の演奏が奏でられる中、雪子と吹奏楽部のメンバーが写った写真が次々と流れていく。
耐え切れなくなった雪子が、目を覆って泣き始めた。連鎖的にその涙が愛実へ、光瑠へ、はるかへ、恵梨へ。どんどん伝染していき、絶対泣かないように見える智志にまで波及した。やがて、拓真へ、春樹へ、慎也へ。涙は連鎖的にどんどん広がっていく。涙を堪えながら吹く2年生と順平の姿が、修平や翔平の涙腺も刺激した。
有名なメロディの部分で、遂に拓真が耐え切れず演奏を中断してしまった。慎也も今すぐにでも演奏をやめてしまいそうだった。
「頑張れ……」
雪子が叫んだ。
「頑張れ！　２年生！」
拓真と慎也がその言葉にハッと顔を上げた。そして、涙を拭い演

奏を再開した。
静かに、桜の演奏が幕を下ろした。そして、拍手が沸く。
翔が立ち上がった。
「永井ちゃん」
「はい……」
「最後に……2年生から、渡したいものがあります。来てください」
緊張した面持ちで雪子は立ち上がった。それから、しっかりと2年生の顔を見る。
沙希。
由美子。
絵美。
翔。
陽乃。
慎也。
春樹。
拓真。
美里。
かけがえのない、9人の仲間たち。雪子はプレゼントを受け取る前に、一人ずつ抱き締めあった。雪子にしては、とても大胆な行動だった。
「これを……受け取ってください」
雪子の目から、大粒の涙がこぼれる。
2年生全員からの、寄せ書きだった。

＞i4709―150＜

「そのホルン吹いてる女の子の絵は、なんと春やんが描きました！」
「スゴい……。綺麗……！」
雪子は涙を止めることができず、嗚咽を漏らす。
「永井ちゃん……」
翔が優しく言った。
「また、絶対に……一緒に、演奏しような」
「……。」
「約束」
「……うん」
翔に雪子がもたれかかるようにして、彼の胸に顔を埋めた。
「いいの？」
美里がこの期に及んで心配する。
「平気。だって、この１０人は、何があったって、絆は壊れないよ」
「……そうね」
夕陽が音楽室を照らす。
雪子との別れは着実に、近づいてきていた。

第２５２話　何とも言えない、この気持ち

「わざわざ、ありがとうな」
翔は改札口の前で泰徳に言った。
「いいよ……っていうか、俺もなんか泣いちゃった」
泰徳も珍しくウルウル来たようで、恥ずかしそうに笑った。
「でもさ！　お前らって、多分、これから何年経っても、ずっと仲良しなんだと、俺思う」
「そうかなぁ？」
泰徳の言葉に、翔が嬉しそうに笑った。
「何があっても、絶対そうだと思うよ」
「へへ……おーきに」
翔は泰徳の髪の毛をクシャクシャと撫でた。
「やめろ、バーカ！」
「うるさい、アーホ！」
遠くから未来が「ほら！　そろそろホーム行かないと新幹線、来ちゃう！」と泰徳を呼んだ。
「んじゃ、俺行くわ」
「おう」
泰徳は改札をくぐり、楽器を背負いながら未来たちの元へ駆け寄る。チューバに隠れて、表情がよく見えない。
「……。」
翔は、急に泰徳が遠くへ行ってしまう気がして、突然不安になった。気づけば、大声で叫んでいた。
「泰徳！」
ビクッとして、泰徳だけでなく美並や未来、美奈までがこっちを見ている。それどころか、改札口にいる周囲の人ほとんどが、翔のほうを見ていた。
「翔……？」

陽乃が驚いて翔の顔を見上げた。涙が溢れて、こぼれそうになっていたのだ。
「泰徳！」
「なに！？」
泰徳も翔の声から察してか、大声で応えてくれた。
「また……また、会えるやんな！？」
「……当たり前だろ！」
翔はそれを聞くと、ニッコリ笑った。翔の中では、何かがモヤモヤしていた。何なのかはわからない。ただ、いつも誰かと離れ離れになるとき、強烈な不安がこみ上げてくる。震災以来、別れというものに過敏になっている可能性もあるのかもしれない。ただ、普通に別れるのは嫌だと翔自身、いつも思っていた。いつ、永遠の別れが訪れるのかわからないから。身を持って経験している翔だからこそ、のことかもしれない。
泰徳たちの姿が見えなくなっても、翔は佇んだままだった。しかし、見送りに来た2年生全員、その翔に「早く行こう」と声をかけたりはしなかった。
「……。」
翔は5分ほど佇んでいた。泰徳たちの乗った新幹線はとっくに発車して、新横浜を出ている。それでもなお、翔は動こうとしなかった。
「翔」
陽乃がようやく、声をかけた。
「うん」
その後、電車で七海駅まで戻った後、翔たちは１０人一緒になって帰っていった。
「いま思えばさぁ」
拓真が言った。
「１０人で帰ったことって、なかったよな」
「そういえば……そうだな」

慎也も思い返してみるが、１０人で帰った記憶というのはそれほどない。
「当たり前じゃない。だって、陽ちゃんもエミリンもミサッチも、みーんなイチャイチャしちゃうんだもん、帰り道」
「なっ！」
由美子の爆弾発言に６人が真っ赤になる。
「あー、それわかるわ」
沙希も納得した。
「私もさぁ、一緒に帰ろうってミサッチとかに声かけようって思うんだけど、あの熱々ぶりを見せられたんじゃあ、声もかけにくいわ」
「アハハ！　私もわかる」
雪子が大笑いする。
「もー！　雪ちゃんまで！」
１０人はいつまでも笑いながら、家路に着いた。
「ただいま～」
陽乃が家へ帰ると、由利が台所から「おかえり～。泰徳くんたち、無事帰った？」とすぐ聞いてきた。
「うーん。新幹線も無事乗れて。多分、今頃静岡入った頃じゃないかな～」
「またちょっと寂しくなるわねぇ」
「……そうだね」
何ともいえない寂しい気持ち。きっと、翔はもっと寂しいんだろうと陽乃は思い、すぐに自室へ駆け上がった。
「あ、陽乃！　ご飯は！？」
「すぐ降りるから！」
バタン！とドアをキツく閉める音を聞いて、由利は「まったく……」とため息をついた。けれども、その顔は笑顔だった。

同じ頃、自宅に着いた翔はなんとなく、フワフワした感じが拭いきれずにいた。

（何ソワソワやってんの。自分の家なのに）
昨日まで、いや、先ほどまでそうやって自分の前で笑っていた泰徳が、もう目の前にいない。なんとなく、寂しい感じがしてしまう。
「にーちゃん？」
その泰徳がいた場所に、智輝が座った。
「なんや？」
「あんさぁ、俺の友達が、兄ちゃんカッコいい言うてた」
「どうしたんや、急に」
「ううん。それ言いたかっただけ」
翔がたちまち笑顔になる。それを見た智輝は嬉しそうに笑い、すぐテレビの前に戻っていった。
「ほら、弟にまで気ぃ使わせて」
友美子がビシッと翔の額にデコピンを喰らわせた。
「痛いなぁ！　何やねん、急に！」
「アンタがそんな暗い顔しとったら、周りまで気ぃ重くなってかなわんわ」
「……。」
「アンタは元気だけが取り得やろ」
「だけとは失礼な」
「とにかく、泰徳くんだってそんな暗い顔されてたんじゃ、チューバも吹けへんから、もうやめなさいよ」
「うん……」
しばらくひっぱりそうやな、と友美子は思った。しかし、次の瞬間翔がパッと笑顔になる。
陽乃から電話が掛かってきたときの着信音が聞こえてきたのだ。
「あっ！」
翔は急いで携帯を持って、廊下へ出た。「もしもし！」という明るい声が聞こえる。
「相変わらず、心配ばっかりさせる人やな～」
綾音が苦笑いする。友美子も大人びた綾音の発言に思わず笑って

しまった。

「泰徳？」

珍しく、電車の中でスゥスゥと泰徳が寝息を立てていた。いつも遠征に行くバスや電車の中では、楽譜とにらめっこしている泰徳が、ｉＰｏｄで音楽を聴きながら眠っていた。

「疲れたんじゃない。そっとしとこう」

「そだね」

スゥスゥと眠る泰徳の聴く音楽は、翔がソロコンテストで吹いた曲だったのを知っているのは、もちろん泰徳だけだった。

第２５３話　荒げる低音、バラける打楽器

翌日、３月２５日日曜日。今日は一日練習の日だ。午前中はパート練習、昼から合奏になる。

トランペットパートでは、陽乃が新しい楽器に胸を躍らせていた。何を隠そう、来年度のコンクールで陽乃はこの楽器を使うのだ。

「可愛い～！　これがピッコロトランペットかぁ。すごく小さいね」

「高音が出やすいと思いますよ。あまり力まず、自然に吹いたらバッチリだと思います。先輩、音は安定してますし」

勇が楽譜を準備しながら陽乃に言った。

「珍しいよね、松尾くんが素直にそんなこと言うの」

ヒョコッと教室に入ってきた彩香が茶化した。

「うるさいなぁ。もう、１年前くらいの朝倉先輩と意地張り合ってた俺じゃないの。もうすぐ１年生入ってくるしさ」

「おーおー、先輩ぶっちゃって」

彩香がクスクス笑う。

「はいはい！　それじゃ、ロングトーン９時半からするからね」

「はい！」

一方のサックスパートでは、既にロングトーンが始まっていた。

「すーさん、ちょっと入りがボケてる。それと中ちゃんは逆に入りがキツすぎ」

翔がアルトサックスの二人に問題点を指摘する。ちなみに、すーさんは麻綾、中ちゃんはさゆりのあだ名だ。翔がようやく最近になってあだ名で呼んでくれるようになったのだが、翔独自のあだ名で呼んでくるので、二人とも違和感があるのはここだけの話。

「はい！」

「それと、ニッシーは音色がエロすぎ」

「エッ、エロ！？」

はるかが真っ赤になった。

「どうせまた、家で演歌とか吹かされてるんやろ」
「ウッ……」
図星なので、はるかは言い返せない。
「ただのロングトーンやのに、ブイブイなんか、こうビヴラートみたいなんが掛かってるみたいに聞こえるねん。気をつけて」
「はい！」
続くロングトーン。ベーの音階を8拍吹いて4拍休み、上がってから再び降りてくる。そして下のベーを吹き終えて一息つく。
「暖かくなってきましたね～。少し暑いや」
さゆりがペットボトルを取り、お茶をグイッと飲んだ。
「やだ、さゆ。飲み方が男前！」
はるかの一言で他の二人も大笑いする。そんなときだった。
「ひゃー！」
麻綾が声を上げるほど大きな音が右隣から響いてきた。
「なんやねん！　今の音」
翔も驚いて思わず立ち上がってしまった。さらに、今度は左隣から耳をつんざかんばかりの低音。
「きゃーもう！　ビックリするじゃない！」
さゆりもたまらない様子で叫んだ。
「なんやねん！　なんであんな無茶吹きしとんや？」
右隣はチューバとユーフォ、弦バスが練習している。左隣では、トロンボーンが練習中だ。まだ朝だというのに、あんなに大音量を吹けばとてもじゃないが昼からの合奏が持ちそうにない。翔は注意しようと急いで廊下へ出た。
「おっと……」
拓真たちのいる教室に入ろうとして、足を止めた。中には拓真、春樹、愛実、智志、亮平以外にもう一人の姿――岳彦の姿があった。
「そうそう。『教会のステンドグラス』はお前らバスパートとトロンボーンパート、それに逢沢や戸口、もしもバリサクが入ってきたらその子たちとで冒頭のメロディの要になるからな。しっかり今か

ら大きな音を出す練習しとかないと」
「はい！」
「まぁ、今のはあくまでそのつもりで、っていう意味だったから朝一からこんな音吹かせたけど。普通は唇が演奏に慣れてきてからすること。ＯＫ？」
「はい！」
拓真、智志たちバスパートはとても真剣だ。
「ということは……」
翔は気になってトロンボーンの部屋を覗いてみた。すると、恭一が室内で慎也たちに指導している。
「よーし。それじゃ、大きい音を出す要領は掴めたな？」
「はい！」
「決して力まず、爆発するみたいに音を出さない。息は温かく、スピードのある息を。ＯＫ？」
「はい！」
「なるほど……。先生たちの指導やったんか」
翔は安心して教室へ戻り、麻綾たちに説明して再びロングトーンを開始した。
１０時になり、翔は休憩を取ることにした。
「フーッ。やっぱ暑いわ」
さゆりの言うように最近は暖かくなってきたので、ブレザーでも暑い感じがする。上着を脱いで翔は音楽室へ戻ろうとした。
「あっ、あの人！」
翔は自分のこととは思わず、キョロキョロと辺りを見渡した。それからすぐに、自分以外にその場にはいないことに気づいた。
「オレか？」
「あのっ！」
二人の女の子が翔に駆け寄ってくる。
「吹奏楽部の、佐野　翔先輩ですよね！？」
「あっ、う、うん。そうやけど……君らは？」

「あたしたち、４月に七海に入るんです！」
「へぇ～！　ホンマかいな！　ほんで、ひょっとして吹奏楽部とか？」
「はい！」
「うわぁ！　嬉しいなぁ！　マジでかぁ」
翔は小さい子供のように飛び跳ねた。
「君ら、名前は？」
ショートカットの子が最初に挨拶をした。
「あたしは江藤（えとう）　沙知（さち）といいます」
「江藤さんね！」
次に、ロングヘアの子が前へ出てきた。
「私は……毛利（もうり）　荌（すずな）といいます……」
「よろしく！　毛利さん！」
荌の顔が少し赤くなった。翔はもちろん、そのことに気づいていない。
「ほんで？　なんでわざわざ今日来たん？」
「あっ……えっと……」
荌が言えずに戸惑っていると、沙知が割り込んできた。
「今日、体操服の販売があって！　それで来たんです！」
「へぇ～……早いんやな」
翔は少々不思議に思ったが、特に深刻に捉えもしなかった。
沙知たちと別れた後、翔は音楽室へ戻った。音楽室では、順平と雪子のホルン組と、美里、洋之、優、恵梨、あずさたちパーカッション組が練習していた。
こちらは課題曲『ブルースカイ』を練習していた。机の上では、メトロノームが規則的な音を立てている。
「……。」
この練習の主役は、スネアドラムの美里、ベースドラムの恵梨、ホルンの順平と雪子になっている。つまり、吹奏楽部でマーチを演奏する際に重要となってくるのは、ベースドラムやチューバ、弦バ

スのような「前打ち組」とスネアドラムやホルンのような「後打ち組」になるのだ。

しかし、逆に言えばパーカッションでも洋之（ティンパニ）、優（クラッシュシンバル）、あずさ（グロッケン）には暇を持て余す結果となってしまった。そのため、3人ともウツラウツラしてしまっている。

（しゃあないなぁ）

練習が煮詰まっていた雰囲気もしたので、翔は「オーッス！　頑張ってるかぁ！」と大声で音楽室に入った。ビクッ！と洋之、優、あずさが飛び跳ねたのに気づいたのは、翔だけだ。

「頑張ってるけど……進まないの」

珍しく美里が落ち込んでいる。

「そうなんです。どうしても裏打ちが合わなくて……」

順平も落ち込んでいる。

「あ～……オレの中学のときにも、同じことで悩んでたな～。先輩とか」

翔が中学2年生のときマーチを演奏したのだが、そのときも前打ちと後打ちが合わずに苦労していた覚えがある。

「そんじゃ、ちょっと気分変えてみよう。はい！　手ぇ出して！」

言われるままに美里、恵梨、雪子、順平は手を出した。

「ほんで、オレと秦やんはメトロノームに合わせて前打ちを、ミサッチと永井ちゃん、じゅんぺーは裏打ちを手拍子で。はい！　行くで！　1、2、3、4！」

翔の掛け声に合わせて手拍子が始まった。ところが、10秒もしないうちに見事に全員がバチバチと同じ前打ちを打ってしまった。

「あ、あれ！？」

美里と雪子、順平が困惑した表情を浮かべる。

「ほらな。体が拍子を覚えてへんねん」

「体が……」

美里が翔の言葉を繰り返した。

「ＯＫ？　ほんじゃ、もう1回な！」
音楽室から、パチパチパチ！と手拍子が繰り返し響く。練習は３０分間にも及んだ。
「ねぇ、佐野ぉ！　もう手が真っ赤！」
美里が音をあげた。
「ゴメン……オレも」
「やだぁ、先輩！」
ドッと笑いが起きる。そこへ、タイミングが良いのか悪いのか、拓真と智志が音楽室へ戻ってきた。
「よっしゃあ！　えぇタイミングやぁ！」
「ゲッ！」
美里が悲鳴をあげる。
「ちょっと、佐野……」
「あと１０分だけ！　な！」
「やあああああぁぁ！」
美里の悲鳴が、音楽室中に響き渡っていく。それを聞いた陽乃が「またミサッチの雄叫びだ」とトランペットメンバーで笑い合っていた。

第２５４話　他人事じゃない

「ただいまー」
陽乃が練習を終えて自宅へ帰ると、既に時刻は午後６時半を過ぎていた。いつもなら由利が声を掛けてくれるのだが、どうしたことか、今日は返事がない。
「またどうせドラマでも見てるんだろうな。撮り貯めしてるって言ってたし」
陽乃が呆れた表情でリビングに入ると、夏樹、祥夫、知恵子の３人がテレビに釘付けになっていた。由利はテレビの隣にある電話を掛けているが、その表情は暗い。
「どうしたの？」
「あ！　姉ちゃん！　大変だよ。地震、地震！」
「地震～？　そんなの、全然揺れなかったじゃない」
陽乃は東京で小さな地震があった程度だと思っていた。しかし、知恵子が「違うのよ、陽ちゃん。北陸よ」と慌てた様子で言った。
「北陸……？」
テレビを見ると「能登半島でマグニチュード６．９の強い地震」の表示。陽乃はそこでハッと気づいた。由利の実家は、石川県　古氷町という、小さな漁村なのだ。
「お伝えしておりますとおり、今日午前９時４１分頃、石川県、富山県を中心とする北陸地方でマグニチュード６．９を観測する、強い地震がありました。各地の震度は震度６強が石川県輪島市、七尾市、穴水町。震度６弱が石川県志賀町、中能登町、能都町……」
由利はさっきから電話を何度も掛けている。陽乃は翔が「地震の後、電話も全然通じへんかって、大変やってんから」と言っていたことを思い出した。
テレビ局から画面が切り替わり、中継という表示が出た。
「こちらは石川県　古氷町内の中学校でたまたま撮影された、地震

発生の瞬間の映像です」
「あっ……トランペットだ」
トランペットを吹く少年が映った。さらにカメラが引いて、全体が映った。アルトサックスの少女、グロッケンを叩く少年。楽器にようやく慣れてきたという感じの、ユーフォニウムの少年。どうやら、この中学校の吹奏楽部に撮影に来ているようだった。
直後、画面が大きく揺れ動く。グロッケンの少年がよろめき、次にアルトサックスの少女が悲鳴をあげた。
「うわ……」
夏樹が目を覆った。ガラスが割れ、ベースドラムを叩いていた少年にガラスが降り注いでいるのが意図せず映っていた。
「きゃっ！」
それを見た陽乃が小さな悲鳴をあげた。何度も画面が大きく揺れる。トランペットの少年が「落ち着け！　騒ぐな！」と大声を上げている。大きな音がした。そのまま、テレビの映像は途切れた。キャスターが言うには、カメラマンの転倒でカメラが破損し、映像が途切れたのだと言う。
「……ここ、お母さんの」
陽乃が呆然とした様子でテレビを見つめた。
「！」
突然電話が鳴った。
「もしもし、朝倉です！」
由利が真っ先に受話器を取る。
「あぁ……ミイ！」
話を聞いていると、由利の高校時代の友人らしき人だった。
「え？　うん……えぇ！　本当！？」
由利がヘナヘナと座り込んだ。
「どうした、由利」
祥夫が傍へ寄り、話を聞く。
「お母さんも、お父さんもたまたま……町内で実施された2泊3日

旅行で大阪にいて、本人たちは何ともなかったんだって……！」
「そうか！」
祥夫が嬉しそうな表情を浮かべた。
「良かったねぇ、ナツ！　陽ちゃん！」
「うん！」
しかし、陽乃は先ほどのテレビの中の少年たちがどうなったのか、気が気ではなかった。

「夢見は最低……」
翌日、陽乃は目の下にクマを作りながら起きてきた。
「うわ！　姉ちゃん、どうしたの！？」
夏樹が驚いて声を上げた。
「昨日……悪夢見てうなされて寝れなかった……」
「あらあら……。まぁ、お母さんもなんだけど」
由利の場合、仕方がないだろう。実家が地震で被災したのだから。
しかし、本当におばあちゃんもおじいちゃんも無事でよかった。陽乃には、それだけでもホッとできた。
「いってきま～す」
眠そうな声を上げながら、陽乃が表へ出ると同じように寝不足気味の翔がいた。
「……寝不足？」
「お前も？」
えへへへ、と二人は苦笑いしながら合流した。
「見た？　昨日の映像」
「ばっちり」
「そっか……」
沈黙が続く。
「あ」
「ミサッチと川崎くん」
予想どおりというべきか。慎也と美里も暗い表情をしていた。

「テレビ、見たの？」
「うん……」
慎也がハァッとため息を漏らした。
「まさか、地震の瞬間って映像で自分たちと同じ吹奏楽部の人が映るなんて思わないじゃん」
美里が心配そうに呟く。
「うん……。でも、あたしたちにできることって……」
「なんもないわなぁ。しかも、関東じゃ北陸のことなんてほとんど皆、関心ないやろうし」
「……うん」
それがいたたまれない気持ちにさせた。
「うん！　でもまぁ、部活は切り替えて行こや」
「そうね」
部室に入る前に、それぞれお手洗いで顔を洗った。
「どう？」
陽乃が美里に表情はどうか、と聞いた。
「バッチリだね！　あたしは？」
「問題なし！」
そして４人は再び合流し、音楽室へ向かった。
「おはよーッス！」
「おはようございます！」
翔の声に、駿たちが返事をする。
「えーと！　ほんなら今日の予定を言います。まず、午前中は昨日同様、パート練習です。各パートで午後から課題曲の合奏をするので、基礎練習と課題曲の練習をしてください。それから、トロンボーンは昨日に引き続き東先生のレッスンが付きます。バスパートは三河先輩」
「あ、ゴメン」
拓真が手を挙げた。
「どないしたん？」

「三河先輩なんだけど。昨日の地震でなんか、おばあちゃんの家が潰れたとかで、ちょっと家が混乱してるから行けそうにないって……」
「あ……そ、そっか」
翔が少し動揺した。ザワザワと他の部員たちが、あまりにタイムリーな話に騒ぎ始める。
「はいちょっと、静かに！」
陽乃が手を叩いてその場を静めた。
「翔、続き」
「あ、うん。えーと、それから木管は各パートでメロディを中心に合わせて、１１時から木管セクション練習します」
「はい！」
「では、練習開始ですので移動してください」
「はい！」
翔はフーッとため息を漏らした。
午前１０時３０分。サックスの部屋に、突然恭一がやって来た。
「あれ？　先生。ボーンのレッスンは？」
「いま休憩中だ。それより佐野、ちょっといいか？」
「え？　あ、はい！　ゴメン、ちょっと個人練習しとって」
さゆりたちに断りを入れ、翔は廊下へ出た。
「さっき、三河から電話があってな」
「先輩ですか？」
「あぁ。今日は急にレッスンキャンセルしてすみませんっていう電話だ」
きちんと先生にまで連絡するとは岳彦らしい。翔はそう思うとなんだか嬉しかった。
「それで、やっぱりアイツのお母さん方のおばあちゃん、おじいちゃんの家が被害を受けたそうだ」
「……そうなんですか」
「それで、これに関連してなんだけど。お前、ひょっとしてニュー

スはずっと見てたか？」
「あ、はい。何でですか？」
恭一は阪神・淡路大震災絡みで翔はそのようなニュースは見ないと思っていたようだ。しかし、翔は逆に地震のニュースなどはしっかりと見ている。地震に限らず、いろんなニュースは毎日新聞でチェックしている。
「ニュースで地震発生の瞬間って映像、あっただろ」
「はい」
「あの中学校、石川県の古氷中学校といって、小さいながらも吹奏楽部があるんだ。部員１５人ほどだけれども、毎年北陸大会にまで出ているそうだ」
「北陸大会！」
全国大会の一歩手前だ。かなりレベルが高そうだ。
「先生、あの映像で気になってな。彼らがどうなったのか、テレビ局に問い合わせた」
さすが恭一は大人なだけあり、行動力が全然違う。翔は思わず感心した。
「一人」
ドキッとした。心臓が飛び跳ねそうになったが「ガラスで顔を切るケガをしただけで、命に関わるようなことはなかったそうだ」と恭一が言ったのでホッと胸を撫で下ろした。
「しかし、確か震度６強だっただろう？　あれほどの揺れで、物が倒れないはずがないんだ」
翔は説明されなくても、十分理解できる。
「チューバ、グロッケン、スネアドラムが転倒して破損。オーボエ、トランペット、アルトサキソフォンが生徒の転倒などの影響を受けて破損しているそうだ」
「……。」
「修理費だけでもかかる。チューバなどの管楽器は修理でいけるそうなんだが、打楽器の二つは大破という状態で、とても演奏できそ

うにないんだと」
「そうなんですか……」
「そこで、ちょっと聞いてきてほしいんだ」
「何をですか？」
「本堂、田中、野村、朝倉、それとお前だ」

第２５５話　３３人のメッセージ

「しっつれーい」
突然翔がドアを開けて現れたので、打楽器メンバーだけでなく、春樹と絵美が顔を真っ赤にして動きを止めた。
「な、なんや？」
「急に開けないでよ！」
絵美がプリプリしている。
「なんでやねん」
「私たち、新入生歓迎会でするユーロビートの振り付け考えてたの！　まだ、恥ずかしいじゃない！」
「あー！　ゴメンゴメン！」
翔は笑いながら美里のほうへ駆け寄った。
「ちょっと調べてほしいことあんねんけど」
「なぁに？」
「グロッケンと、スネア余ってるヤツないか？」
「えーっと……あたし、スネアはまだそんなに使ってないのが１台余ってるの見たけど。グロッケンは……ねぇ、日高くん！　グロッケンって、余りあったぁ？」
優が楽器室（階段の一部をドアにして塞ぎ、そこから上が吹奏楽部の倉庫になっている）から大声で「ホコリかぶってますけど、１台ありますよ～！」と答えた。
「けど、どうするの？　どこかに貸すの？」
「まぁ、それは皆揃ってからまた言うわ」
それから翔は健之佑、陽乃、拓真の３人に楽器の余りがあるかどうかを聞いた。トランペットもオーボエも問題なかったのだが、チューバばかりはどうしようもない。なにせ、４月から好美が入ってくる。いま、拓真と智志が使っているのを除いても、あまりは２台しかない。１台は置いておきたいものだ。

「うーん……チューバはなぁ」
翔は首をかしげた。
「ダメもとで聞いてみるか」
翔はとりあえず、連絡の付く範囲でチューバ奏者を当たってみた。
「あ、もしもし。佐野です」
「え？　何、どしたの。急に。こないだ会ったばっかじゃん」
まずは、竹林　泰徳。翔は事情を説明したが「それはさすがに俺でもどうしようもないな……」という答え。もちろん、無理を言っているのは翔だから「気にせんといて！　ありがとう！」と言って電話を終えた。
次に、佐野　修平。しかし、やはり風見台でも余っているチューバはなく、それは厳しいと言う。
「んあー！　あとチューバだけやのにぃ」
翔が地団駄を踏んでいると、携帯がブルブル震え始めた。
「はいはーい」
「あ、もしもし？　佐野やけど」
「ややこしいな！　オレも佐野や」
「切るぞ」
「ゴメンて！　どないしたん？」
「チューバの件やねんけど。小型のチューバやったら、使ってないのあるんやん。それ、譲れるって先生言うてくれはった」
「ホンマか！？」
「あぁ。自由にしてええって」
「よっしゃあ！」
翔は飛び跳ねて喜んだ。
その日のうちに、恭一が楽器を風見台へ取りに行ってくれたので合奏は少し遅れた。けれども、チューバやバスクラリネット、バスーン、ベードラの前打ちと打楽器やホルンの後打ちの練習、冒頭部分のメロディの練習などはきっちりできた。
それから、恭一のほうから今回の支援に関する話が全部員に伝え

られた。
「ただ、楽器を送るだけじゃつまらんだろう。これを機会に、交流できればと思ってな」
「だから、これですか？」
手紙だった。
「そう。向こうさんの部員数はちょうど中学1、2年生合わせて15人。うちのほぼ半分だ。だけどまぁ、手紙は多くても問題ないだろう。重さなんてそう変わりゃしない。とりあえず、今日は合奏を早く切り上げる。手紙仕上げて、先生のところへ持ってくるように」
「はい！」
翔はまだ顔も見ぬ中学生たちの部員名簿を見た。

＞i4837―150＜

翔はすぐにペンを走らせた。部長でもある、トランペットの石尾（いしお）拓也（たくや）へ。

石川県古氷町立古氷中学校吹奏楽部　部長　石尾　拓也さん
初めまして。神奈川県七海市の七海高等学校吹奏楽部で部長をしています、佐野　翔と申します。このたびは、大きな地震を経験されて、怖かったと思います。また、打楽器の郷田力哉くんがケガをされたと聞いています。ケガの具合、どうでしょうか。
今回の地震で、部室や音楽室も被害を受け、楽器のほうも破損があったとテレビを通じて知りました。偶然、僕たちの学校で使って

いない楽器が見つかり、さらには同じ市内にある風見台高校でも、使用していないチューバを提供していただけました。

突然ですが、これらの楽器をお見舞いではないですが、お送りさせてください。同じ吹奏楽を頑張る仲間として、少しでも支えになれればと思います。

これから、コンクールの練習がまた始まります。地震でまだそれどころではないかもしれませんが、もしも全国大会で会うことができたら、そのときはお互いの演奏をぜひ聴きたいですね！

また、直接会ってみたいです！　そのときはいろんなお話しましょう。

それでは、遠慮せずこの楽器たちを使ってください。倉庫で眠っているより、頑張る君たちに使ってもらえるほうがずっと楽器も幸せです。

２００７年３月２５日

「これでヨシ！」

翔は会心の笑みで手紙を書き上げた。

手紙も全員分をまとめて、翔は恭一に手渡した。

「喜んでくれるとええなぁ！」

「そうだな」

翔は同じ吹奏楽を愛する仲間に元気を出してほしい。それ以上に、被災者として阪神・淡路大震災のときに助けてもらった恩返しを、どこかで別の形になってもしたいと思っていた。それだけに、今回のことはとても嬉しかった。

楽器がトラックに積まれ、一路石川県へと向かう。音楽室から部員たちがその様子を覗き込んでいる。

「石川でもがんばれ～！」

突然陽乃がそう叫んだので、大爆笑が沸き起こった。翔も大笑いしている。吹奏楽部員の笑い声は、春が近くなった空に遠く響いていった

第２５６話　約束

「おはようございます」
陽乃が職員室に顔を出すと、恭一が驚いた顔をした。
「どうした。佐野と一緒じゃないのか？」
「先生……。あたし、佐野と２４時間一緒ってわけじゃないんですよ？」
「あぁ、スマンスマン。そういう意味じゃなくてな」
隣で話を聞いていた新井田　彩や真鍋　宗平が笑っている。
「ところでな、朝倉。お前だけは知ってる話だけど……」
「も、もしかして！」
陽乃だけが知っている話といえば、ひとつだけだ。
「定期演奏会の話ですか！？」
「あぁ」
恭一も嬉しそうにうなずいた。
「保護者会のほうでも、具体的に定期演奏会実施委員会というのを別途作ってな。今のところ、会場の確保やパンフレット作成、広告など多方面でお父さん、お母さん方が動いてくださってる。もうすぐ新１年生も入ることだし、そろそろ全員に知らせておいたほうがいいかと思ってな」
「……。」
陽乃が複雑そうな顔をした。
「どうした？　嬉しい話じゃないのか？」
宗平が意外そうな表情を浮かべて陽乃に聞いた。
「嬉しいのは嬉しいんですけど……雪ちゃん……永井さんが転校してからにしませんか？」
「永井が転校してからこの話をするのか？」
「はい……」
「なんでだ？」

「だって……転校する直前に、あたしたちだけ盛り上がるような話されるのって、嫌じゃないですか？」

「……。」

そう。今日は雪子の引越しする日なのだ。既に両親は午前中に出発の手はずを整えて、新幹線で先に大阪へ向かっている。荷物は昨日出発し、残るは雪子のみ。最後にもう一度、部員たちに会っておきたいと強く言ったので、根負けした両親が夕方の新幹線で来ることを許可してくれた。

いま、雪子は陽乃と一緒に登校し、一足先に音楽室へ向かっている。その雪子の目の前で、定期演奏会の話をするのは陽乃にしては少し複雑な気持ちだった。

「朝倉さん」

彩が言った。

「先生もね、転校したことあるの」

「そうなんですか？」

「うん。横浜から、鎌倉へ。その時、私はもちろん華道部に入ってたんだけど、たまたま私が転校する直前に、市の展覧会に私たちの部が出展できることになったのね」

「……。」

彩が懐かしそうに話すので、陽乃もいつの間にか聞き入ってしまった。

「でもほら、転校直前じゃない？　転校してから私が作品を作りに来れるわけもないから、私には関係ないなぁって思ってたの。でも、顧問の先生も先輩も、なんで作品作らないの？って聞いてくるのね。私、転校するからって言ったら、すごく先輩に怒られた。転校するからって、自分たちの大事な展覧会に参加しないつもり？って。私にしたら目が点になるような言葉だったけど、考え直してみればうなずける話よね。確かに、転校したら私はその部にはもう在籍できないけど、部員であったことには間違いないの。それまで、部を創りあげてきたんだから。たとえ、転校することになっても、何か私

がいた痕跡を残したい。残せるのなら、頑張ろうって。そういう風に思えたの」

そう言ってから、陽乃に聞いた。

「どう？　永井さんは、どう思うかな？」

「雪ちゃんは……」

陽乃の頭に、雪子のいろんな表情が浮かんだ。

「きっと、一日だけでも練習に参加しますね」

彩がニッコリ笑った。

「だったら、今日お話しなきゃ！」

「……。」

「ね？」

「……はい！」

陽乃は満面の笑みで答えた。

「よし！　じゃあ、概要を書いた紙だ。お前に渡しておく」

「はい！」

「それはそうと、佐野は今日どうした？」

「あ、今日はリードを買ってから行くから、少し遅れるって言ってました。でも、先生にも連絡したって言ってましたけど？」

「何？」

恭一が携帯電話を確認すると、確かに3回着信が入っていた。

「学校にも連絡したのか？　アイツ……」

その頃、翔はリードを買い終えて商店街を歩いていた。行きつけの楽器店はもちろん、優輝の家が経営する瀬戸楽器店。相性のいいリードをよく手に入れることができるので、翔お気に入りの店でもある。

「ヤバッ！　さすがに10時までには学校着いとかんと、先生に怒られるわ」

自転車に跨り、普段より少しスピードを上げて走る。つくし野川沿いに出て、土手の上を快調に走っていく。そして曲がり角へ来た

ところでスピードを緩め、うまく曲がる。人通りの少ない道なので、ほとんどスピードを落とさずに済む道だった。しかし、今日は違った。

「うわあああっ！？」

曲がってすぐのところに、女の子が立っていたのだ。

「キャッ！？」

女の子も驚いて小さな悲鳴を上げた。翔はそのままブレーキを掛け、なんとか転ばずに済んだ。

「ゴメン！　大丈夫やった！？」

翔が慌ててその子のところへ駆け寄る。それから、顔を見て「あ」と呟いた。

「君……確か、こないだ体操服の販売に来てた」

「あ……佐野先輩ですか？」

毛利　菘だった。

「毛利さんやんね？」

「はい！」

「あ～……ゴメンなぁ。オレ、ちょっと急いでたから周りよぉ見てへんかったんよ」

「いえ。私もボーッとしてたので……」

菘が立ち上がった拍子に、翔は彼女の膝が擦り剥けているのを見つけた。

「あ！　ケガしてるやん」

「こんなの平気です！　じゃ、私行きますね」

「ちょっと待って！　こっからナナコウ近いからさ、保健室寄って行きぃや」

「で、でも……」

「えぇから、えぇから！」

翔は無理やり菘を自転車の後ろに乗せ、快調にこぎ始めた。

「重くないですか？」

菘は恥ずかしそうに翔に聞いた。

「男子をバカにしたらアカンで～！　余裕、余裕！」
翔は軽々とペダルをこぎながら、七海高校まで走っていった。
（先輩……）
菘は密かに翔の背中に顔をくっ付けていた。整髪料だろうか、甘い香りがする。制服はカッターシャツからだろうか、柔軟剤の香りがする。それより何より、翔は菘が今まで接した男の子の中でも比較的、ガッシリした体つきをしていた。それが、菘の心臓をドキドキさせる。菘のドキドキとともに、翔は七海高校へと自転車を急がせた。
「あ……」
美里が声を上げた。
「どうしたの？」
絵美が外を覗き同じように「あ」と声を上げた。
「なになに～？」
興味津々といった様子で、雪子も後に続く。そして続く言葉は同じく「あ」だった。
「どっしたのー！」
テンションが上がった状態で陽乃が彼女たちのところへ駆け寄ってくる。美里がそれに気づき「あー！　あのね、ちょっと陽ちゃんにだーいじな話があってさぁ！　それ思い出したの！」と陽乃を強引に音楽室へ連れて行く。
機転の利く美里の行動に、雪子と絵美がホッと胸を撫で下ろした。
「何よ、佐野くん！　なんで、陽ちゃん以外の女の子を自転車になんか乗せて……」
雪子がプリプリしている。
「あれ？　雪ちゃん、佐野くん狙いじゃないの？」
絵美がニヤニヤしながら雪子のわき腹をつついた。
「やだ！　そんなの、大昔の話だよ！　それより、どこ行くつもりだろう……」
やがて、翔たちの姿は見えなくなった。

「エミリン、雪ちゃん！　陽ちゃんが大事な話するっていうから、ちょっと音楽室来て～」
「あ、はーい！　いま行く！　行こう、雪ちゃん」
「うん……」
雪子は後ろ髪を引かれる思いが残ったものの、音楽室へと駆け込んだ。
「はい！　このプリントよく読んでね」
入るなり陽乃から渡された紙。そこには「第１回　七海高校吹奏楽部定期演奏会　概要」と書いてある。
「定期演奏会！？」
絵美が悲鳴に近い声を上げた。
「本当なの、陽ちゃん！？」
雪子が続く。にわかにザワつく音楽室内。陽乃は「はーい！　ちょっと静かにしてください！」と言い、説明を始めた。
「えっと、先月あたりから実は保護者会と先生の間で話は進んでいたみたいです。それで、ようやく保護者会内でも役割等が決まって具体化してきたので、あたしたちにも話をできる段階になったということで、今日、このプリントを東先生からいただきました」
うぉ～、と駿や健之佑が嬉しそうな声を上げる。みんな、頬が紅潮していた。
「いいなぁ！　私、転校やめようかな？」
雪子の発言にドッと室内が湧いた。
「はいはい！　静かにしてね～。それで、開催時期とか説明する前に」
陽乃が雪子のほうを向いた。
「雪ちゃん」
「あ、はい」
「雪ちゃんももちろん、出るよね？」
「何に？」
雪子は意味がよくわかっていないようだった。

「決まってるじゃない！　定期演奏会だよ」
「え？　私も？」
雪子は戸惑った表情を見せた。
「でも……私、今日で転校だし」
「あー、そうなんですか？」
突然声を上げたのは順平だった。
「俺、てっきり先輩も出て演奏してくれると思ってたのに……残念です」
「え……？」
「っていうか、先輩」
麻綾が続ける。
「退部届け出すんですか？」
雪子はブルブル首を振った。
「じゃあ、定期演奏会出れるじゃないですか」
「むしろ、出ないと怒りますよ」
みゆきが笑いながら言った。
「どうかな？　皆はこう言ってるんだけど……」
陽乃が雪子に聞きなおす。雪子はしばらく俯いて考えていたようだった。陽乃はその間、心臓がドキドキ鳴って収まらなかった。
「も、もし……迷惑じゃなかったら……お願いします……」
陽乃の顔がパァッと明るくなり、彼女はすぐに雪子のところへ駆け寄って手を握り締めた。
「約束だよ！」
「……うん！」
「よしっ！　じゃあ曲とかまた吹きたいのを、先生に挙げてくださいね。みんな、よろしくー！」
「はーい！」
「じゃ、練習に行ってください！」
「はい！」
午前中はパート練習。陽乃たちトランペットパートは、保健室の

隣にある多目的室1で練習になっていた。勇、彩香、陽乃と並んで多目的室に向かう。
「鍵開けるね～」
陽乃がガチャガチャと鍵を開ける。しかし、この部屋のドアは少し立て付けが悪く、鍵が上手く入らない。
「おっかしいなぁ……」
必死になって鍵をガチャガチャやっていると、突然バサッ！と音がした。
「ん？　あぁ！　ねぇ松尾くん。楽譜入れ落ちたよ？」
「……。」
しかし、勇も彩香も呆然とした表情で陽乃のちょうど後ろ側を見つめたままだ。
「どうしたの？」
「後ろ……」
「後ろ？」
陽乃が彩香に言われるがまま振り向くと、見たことのない女の子がガッシリ、翔に抱きついているシーンが目に入ってきたのだった。

第257話　See You Again

「次は、町田、町田です」
小田急電鉄小田原線に乗って、七海高校吹奏楽部2年生メンバーは雪子の見送りのために新横浜駅へと向かっていた。
「……。」
「……。」
しかし、翔と陽乃は並んで座っていても会話がまったく生まれない。事情を知っている雪子、美里、絵美は必死だ。
「ねぇ、雪ちゃん。たまにはやっぱり、七海(こっち)に帰ってきたりするの？」
美里の話題に、陽乃が食いついてきた。
「あ！　そうだよ。だって、定期演奏会出るんでしょ？」
雪子も陽乃がその話題に食いついてきたことに安堵し、話を始める。
「そうだな～。お父さんとお母さんの了承もいるけど……お父さんのほうのおじいちゃん、おばあちゃんは七海に残ってるから、そこに泊めてもらって直前は練習にずっと参加するっていうのもアリだよね！」
陽乃は定期演奏会の話でずいぶんと気を紛らわせているようだった。翔のほうはというと、なかなかタイミングを見つけることができず、結局先ほどの出来事を説明することはできなかった。それどころか、あの時点で事態は最悪の方向へ向かい始めた。
保健室前でそれは突然起きた。
菘が「先輩……」と服をグッと引っ張ってきたのだ。
「どうしたん？」
「私……」
その先の言葉などナシで、突然菘が翔に抱きついてきたのだ。
「も、毛利さん！？」

翔がアタフタしているところへ、トランペットパートの3人がやって来た。そして彩香と勇が呆然とし、その異様さに気づいた陽乃がそのシーンを目撃してしまったのだ。さらに、止めを撃つように菘が言った。

「私、佐野先輩が好きなんです！　付き合ってください！」

一気にその空間が静まり返った。

「……入ろう」

陽乃は一切翔を問いただそうとせず、冷静に彩香と勇に言った。

「ほら。鍵開いたから」

「は、はい」

彩香と勇は慌てて部屋へ入る。陽乃が最後に翔のほうを見た。

「翔。アンタも早く行かないと、麻綾ちゃんとか待ってるから」

「あ……待ってひな……！」

バタン！とドアは大きく音を立てて閉められた。菘はそれでもなお「先輩……お返事、待ってます」と言ってきたのだ。

翔はすぐに「陽乃と付き合っているから付き合われへん」と言うつもりでいた。しかし、菘は頑なに「すぐ断らないでください。私のことも見てください」という始末だ。断るに断れなかった。

結局、雪子を見送るこの時間になっても翔は一言も説明できずじまいだった。

「あ、乗換駅だぞ」

拓真が立ち上がる。町田駅でＪＲ横浜線に乗り換え、今度は新横浜駅へ向かう。快速電車に乗り、それぞれ楽しそうに話をする中、やはり陽乃はわざとらしく翔を避けていた。翔は悔しそうに、寂しそうに陽乃のほうを見つめるが目を合わせてくれない。

そうこうしている間に、新横浜駅に着いた。翔はなんとか陽乃と話すタイミングをうかがうが、ここから先だけはやめておこうと思い、無言で歩いた。

「ねぇ、陽ちゃん」

心配した雪子が声を掛ける。

「私ね……見たの。佐野くんが知らない女の子と自転車乗ってるの……」
「……わかってる。なんとなく、そんな気がしてた」
「どうして？」
「エミリンとミサッチも見てたでしょ？」
「……わかった？」
「わかるよ。３人とも、ウソが下手だもん」
雪子はフゥッとため息を漏らした。
「ねぇ……あれから話してないみたいだけど……」
雪子が陽乃のほうを見て不安げに聞いた。
「大丈夫。あたしの中ではもう、答え出てるから」
「え？　それって……」
「大丈夫！　雪ちゃんが心配することじゃないでしょ！」
陽乃はバシバシと雪子の背中を叩いた。
「でも！」
「大丈夫！　あたしはあたしで頑張る」
「……。」
「だから、雪ちゃんも大阪で頑張ってね。あたしとの、約束ね」
「……うん」
雪子と陽乃はそっと手を繋いだ。
新横浜駅はそれなりに人が多かった。ちょうど転勤や進学、就職の時期だからだろうか、家族や友人を見送りに来ている人の姿も多く見られた。
「やっぱ人多いな……」
慎也が少し戸惑いながら周囲を見渡す。
「美里」
人混みに飲まれそうになっていた美里を、慎也がリードした。絵美と春樹のほうは既にしっかり手を繋いでいる。
「……。」
翔はそれを複雑そうに見つめていた。陽乃はというと、雪子のほ

うに付きっ切りでこちらへちっとも近づいてこないのだ。
いよいよ改札口へ近づく10人。
「切符忘れてない？」
陽乃が面白半分に雪子に聞いた。
「忘れてたら一大事だよね。笑えない」
「ホーント。どこに忘れてきたのかなって話よ」
沙希がクスクス笑う。10人ともわかっていた。なんとか、寂しさを紛らわせるためにわざとおもしろおかしくしていることに。
「……。」
沈黙が一気に彼らを支配する。
「何時の新幹線？」
由美子が沈黙を破った。
「18時29分……」
「あと10分もないね……」
絵美がギュッと手を握り締めて言った。
「……行って」
陽乃が呟いた。
「雪ちゃん。改札、通って」
「……陽ちゃん」
「お願い！　じゃないと……踏ん切りつかない」
「……！」
雪子が思いきって改札を通ろうとしたとき、沙希が雪子の体を後ろからギュウッと抱き締めた。
「また、すぐ会えるよね？」
「うん……」
「約束だから……ね……」
声が震え始めた。絵美が堪えきれず、グスグスと泣き始める。
ガチャン、と音がして雪子は改札を通過した。
たった1メートルほどの距離が、ずいぶん遠く感じられた。
「……そろそろ、ホームに上がったほうがいいよ」

美里が時計を見て言った。雪子と目を合わすことができない。
「……うん」
「乗り遅れたら大変じゃない。行かないと」
絵美がもう鼻声でそう促した。慎也、拓真、春樹の3人は笑顔で雪子を見送ると決めていた。笑顔で「気をつけてな」、「頑張りすぎるな」、「たまには電話とか学校にしてみてね」と口々に言う。その声はやはり、震えていた。
「それじゃ……」
キャリーバックをゴロゴロと引きながら、雪子はホームへと向かった。
「永井ちゃん！」
翔が叫んだ。
「また……また……またなぁ！」
「佐野くん……またね、またね！」
雪子は雑踏に自分の声が消されないよう、大声で叫んだ。
「サキティ！　大阪のお土産また持って行くから！　由美ちゃん！　あんまり天然ボケすぎて後輩困らせないでね！　エミリン！　木管セクションリーダー、頑張れ！　ミサッチ！　ずっとそのままで、パーカッション引っ張っていってね！　水谷くん！　君の音色、私ずっと好きだった！　本堂くん！　その真面目な性格、みんなにわけてあげて！　川崎くん！　何してもカッコいい人だった！」
最後の二人の名前はもう、声にもならなかった。
「陽……ちゃん……佐野……くん……」
「雪ちゃん！」
陽乃は耐え切れず、自動改札の中にまで入ってしまった。扉が閉じ、エラーを示す音が鳴り響く。
「陽ちゃん！　ダメ！」
美里が慌てて止めるが、もう遅かった。扉に引っ掛かって、陽乃はよろめいた。それでもなお、陽乃は続ける。
「あたし……あたし……雪ちゃんのこと、大好きだから！」

「私も……」
最後に叫んだ。雪子の最後の声が、構内に響く。
「私の高校生活に刺激を与えてくれてありがとう――！」
そのまま、壁に隠れて雪子の姿が見えなくなった。
「雪ちゃん……」
美里に戻されてから、陽乃は座り込んでしばらく泣き続けることしかできなかった。

「じゃ……また、明日な」
拓真が七海駅前で全員に笑顔で手を振った。
「うん。また、明日」
噛み締めるように春樹と絵美が言う。
「んじゃ。俺たちも」
慎也はグスグス泣いている美里の手を引きながら、ゆっくり離れていく。
「じゃあ陽ちゃん、佐野くん。私たちも帰るね」
「うん……」
「またな……」
由美子と沙希が最後に翔たちの元を離れた。電車が発車します、という音声が駅前でしばらく呆然と立ち尽くす陽乃と翔の耳に聞こえてきた。
「……行こか」
翔がそっと陽乃の手を引いた。
「うん」
陽乃はようやく笑顔で答えた。駅前商店街を通り、セブンイレブンの前を右に曲がる。するとそこはもう、つくし野川の土手沿いだ。
ここから、陽乃の家はすぐ。
「あのさ」
突然、陽乃が喋り始めた。
「なんや？」

「今日は、ここまででいいよ」
そう言ったのは、陽乃の家まではまだ５００メートルもある土手の上だった。
「え？　だっていつも家の前まで……」
「いいの。っていうかさ」
陽乃はかなり辛そうな口調だったが、努めて笑顔で言った。
「あたしたち……別れようか」
「え……」
翔が愕然とした表情を浮かべる。
「な、なんでや」
「……。」
「なんでやって聞いてるねん！」
ガシッと陽乃の両肩を強く掴み、翔は必死になって聞いた。
「だってさ。今日だって、あたしたちの揉め事見て、松尾くんとか彩香ちゃんにずいぶん練習中、気を遣わせちゃったんだ」
「それはあるかもしれへんけど……」
「それだけじゃないよ」
陽乃は続ける。
「雪ちゃんとも一時期モメて、岡崎先輩ともモメて……それで今度は新１年生との件でしょ」
「あれは……」
翔が弁解しようとするが、陽乃は隙を与えない。
「ほら！　あたしたちって、翔は部長であたし副部長でしょ？　トップの二人がさ、こうやって付き合ってケンカとかしてて、部の雰囲気濁してたらマズいと思わない？」
「せやけど、そんなこと言うてたら何にもできへんやないか！」
「あたしは嫌なの！」
陽乃が大声で叫んだので、土手の下を歩いていた大学生くらいの

女性が思わず陽乃たちのほうを見た。
「……翔、どうして？」
「何が？」
「あの子が告白してきたとき、あたし、目の前にいたじゃない」
「うん……」
「なんで、彼女がいる前ですぐ『彼女がいるから付き合えない』って断れないの！？」
「……！」
翔は自分の行動の甘さに、自分で腹が立った。
「即答できないくらいの……レベルなんだよ、あたしたちの仲なんて！」
「そ、そんなこと……」
「じゃあなんで返事保留にしたの！？」
「だって！　そんなすぐに振るとかヒドくて……」
「もういい！　もう終わり！」
陽乃が耳を塞いだ。
「もう……こんなの、お互い辛いだけじゃん。今日だって、雪ちゃんとのお別れの日だったのに、最後まで雪ちゃんにあたし、気を遣わせちゃって！　何やってるんだろって何度も思った。それに、雪ちゃんや岡崎先輩とのときもあたし正直、すごく不安だった。それでも今まで翔を信じてきた！　でも……今日のあのシーン見たらもう……自信なくなっちゃった……」
「……。」
陽乃はボロボロとこぼれる涙を拭い、最後に言った。
「じゃあ……もう、お別れしよう」
「……あ」
「ばいばい」
「あ……ひ、陽乃……」
「また、明日ね。佐野」
「……！」

そのまま陽乃は踵を返して一気に土手を降りて行った。
「オレは……オレはこんなん納得いけへん！」
ピタッと動きを止めて陽乃が叫んだ。
「じゃあ今日一日自分がやったこと、思い返してみなよ！」
「……！」
翔は一気に顔をしかめた。
「何よ……反論できないんじゃない！　全部、全部アンタが悪いんだから！　もう、あたしいいの。いいの！」
「……。」
翔はそのまま、陽乃を追いかけることもできずに呆然と土手道で立ち尽くした。

陽乃は家の前で涙を懸命に制服の袖で拭い、家へ入った。
「ただいまー！」
「おかえりなさい！」
由利が笑顔で出迎えてくれる。
「あら～、やっぱり泣いたのね？　目が真っ赤」
「エヘヘ……」
「寂しくなるわね～。永井さんがいなくなると……」
「うん……」
この涙は、どっちの涙なのだろう。
雪子がいなくなった涙なのだろうか。それとも、翔を失ったことによる涙なのだろうか。雪子の喪失感も、翔の喪失感も同じくらいだった。比べようがない。どっちも大事な人だ。けれども、雪子は離れて行ってしまった。翔は自ら、離してしまった。
「……再出発か」
陽乃は玄関でため息を漏らし、靴を脱いでリビングへ向かった。

第２５８話　Ｒｅ：Ｓｔａｒｔ

「えぇ！？　別れたぁ！？」
開口一番、美里が悲鳴のような声を上げた。
「シーッ！　静かにしてよ！　皆にはまだ内緒なんだから！」
「ごっ、ごめん……」
部活が始まる前に、二人は早めに登校していた。陽乃が美里にしておきたい大事な話がある、ということで呼び出したのだ。念のため、美里は周囲に誰もいないことを確認して続けた。
「でも、どうして急に？　やっぱり……昨日の件が原因？」
「うん……」
「そっか……」
美里はフゥッとため息を漏らした。
「でもさぁ、あれは佐野くんだって不可抗力に近いじゃない？」
「でも、彼女がいるのに告白の返事延ばすなんて……」
「うーん……。そこはやっぱり、佐野くんが優しいから、相手に辛い思いをさせたくないっていう気持ちでじゃないかな……」
陽乃は翔のあのときの表情を思い出した。今にも、張り裂けそうな表情をしていた翔。きっと、陽乃には想像できないほど傷ついたに違いないだろう。しかし、陽乃も傷ついていた。互いに、傷つけあってしまったのかもしれないと陽乃は思っていた。
「あ、誰か来た」
ドアの開く音がする。けれども、誰かが入ってくる気配はない。
「誰だろ」
「ちょっと見てくる」
美里は立ち上がって部室を出た。
「あ……」
美里は小さく声を上げた。
「どうしたの？　誰？」

陽乃も立ち上がり、廊下へ出てビクッとした。
昨日、翔に抱き付いていた女の子が立っているではないか。
「あ、陽乃！」
バタン！と陽乃はドアをきつく閉めた。女の子はその音にビクッと体を震わせた。
「……あの……」
「ちょっと今、陽乃は会ってくれないと思うわ」
「……そうですよね」
女の子はシュンとした様子で俯いたままだった。
「あなた、名前は？」
「毛利です……」
「私、田中って言うの。ちょっと、外で話そうか？」

陽乃は窓際でジッと座ったままだった。昨日も、ロクに寝ていない。
「言わなきゃ良かった……あんなこと……」
実は激しく後悔していた。翔が、本当に別れたことを了承したのか確認も取らないままだった。しかし、昨日以後、翔からメールも電話も入っていない。今朝、家を出るとき、ひょっとしたら自転車に跨った翔が待っていてくれるのではないか。そんな風にも思ったが、それは陽乃にとって都合のいい妄想に過ぎなかった。
「あたし……最低だ」
そもそも陽乃から告白したわけではなかった。翔から告白され、ＯＫして付き合った。それでいて、翔が優柔不断なことをするから、陽乃はそれに嫌気がさして別れを切り出した。それにもかかわらず、陽乃の心の中はモヤモヤでいっぱいだった。
「なんでだろ……なんであたし、こんなに辛いんだろ……」
本当の気持ちはどうだったのだろうか。本当に翔と別れたかったのだろうか。一時の感情に流されて言っただけだったのだろうか。
陽乃の中でグルグルグルグル、出口の見えない考えがよぎっていく。

「先輩？」
ビクッと体が震えた。
「あ、おはよ！」
入口に、駿がいた。
「ずいぶん早いね！」
「いえ、先輩こそ……」
駿は陽乃の涙に気づいていないのか、そのまま彼女の前を通ってすぐ近くにカバンを置いた。その後、ゴソゴソとクラリネットパートのロッカーを探り、楽器を出してきた。
「もう練習？」
「はい。前打ちがなかなか、金管っていうか、チューバと合わないんで自主練習です。それに、今度ＯＢで定期演奏会、出るので」
「定期演奏会？」
「あ、中学のほうですよ。袴田中の」
袴田中出身の1年生は多い。駿、さゆり、はるか、彩香、順平、洋之、光瑠、梨子、健之佑。さらに、中学時代には在籍していなかったが、智志も袴田中出身である。
「みんな出るの？」
「そうなんです！　それに、智志も出るんスよ」
「大岩くんが？」
「はい。顧問の先生が、せっかくだから出たらどうだって智志に声掛けてくれて。智志、めちゃくちゃ緊張してましたけど、意外とアイツ譜読み速くて。俺たちも負けてらんないですよ」
駿は活き活きとした表情で言った。
「あたしは……どうなんだろう」
また涙がこぼれてきた。駿がギョッとした様子で慌てて陽乃の傍へ駆け寄る。
「先輩？　どうされたんですか？」
「あたし……全然成長してないよ」
「せ、先輩～！」

駿はオロオロするばかりだ。
「ゴ、ゴメ……。逢沢くんのせいじゃなくて……ホント、ごめん……」
ガラガラッと戸が開いた。驚いて陽乃と駿がそちらへ目をやると、美里と翔に抱き付いていた少女が立っていた。その少女も、目を真っ赤にしている。
「陽ちゃん。この子……毛利さんって言うんだけど、話があるんだって」
「……。」
「聞いてあげてくれる？」
「毛利じゃん」
駿が懐かしそうに駆け寄った。
「あれれ。逢沢くんの知り合い？」
「袴田（うち）の後輩ですよ。俺、同じクラリネットパートだからよく知ってるんです。俺がバスクラで、コイツはアルトクラ。アンサンブルとかで、一緒に練習したんで」
ペコッと菘は駿に挨拶をした後、陽乃の前に立った。
「すみませんでした、先輩……」
「え……？」
「私、朝倉先輩と佐野先輩がお付き合いしてるって、知らずに……告白なんか、しちゃって……」
「……。」
「昨日、先輩、ケンカとかしちゃったんですか！？」
菘が必死になって陽乃に聞いた。
「え……いや……」
美里が後ろで「ゴメン！　言っちゃった……！」と両手を合わせて小声で謝っている。
「ケンカっていうか……あたしが一方的に傷つけて」
「ごめんなさい……。私がいけなかったんです。佐野先輩は全然悪くないんです……」

「……もういいよ。毛利さん」
陽乃はポロポロと涙をこぼす菘の頬を優しくハンカチで拭った。
駿が「どうしたんですか？　何があったんですか？」と聞くが、陽乃は笑顔でこう言った。
「思いのすれ違い。あたし、翔の話をちゃんと聞いてなかっただけだったんだ」
そういうと突然、陽乃は楽器を出し始めた。マウスピースをつけ、軽やかに音階を吹く。
「よし！　快調！」
そう言うと、楽器倉庫の鍵を片手に音楽室を飛び出した。
「ちょ、どこ行くのよ！？」
美里が慌てて追いかける。陽乃は笑顔で言った。
「屋上！」

その頃、呆然とした様子で翔は春樹、拓真と一緒に登校してきていた。二人が翔に「どうしたの？」、「何かあったのか？」と聞かれても「別に……」としか答えないので、二人ともかなり困惑していた。
「ん……？」
突然、翔が校舎の屋上を見上げた。
「この曲……」
春樹が呟いた。
「『旅立ちの日に』だな」
拓真が懐かしそうに呟く。
「あれ？　ねぇ、あそこにいるの、朝倉さんじゃ……」
春樹が気づいて指差したのは、ずいぶん高い場所のようだった。
「え！？」
翔はバッとその音がする方向を見た。
陽乃が、トランペットを構えて屋上に立っている。
「何してんだろ……あ、翔！」

拓真の声も聞こえないほど、翔は勢いよく走り出した。
「ふぅ～……」
「ブラボー、ブラボー」
美里が面白そうに拍手した。後ろには菘と駿もいる。
「陽ちゃんの音も響くようになったね～」
「えへへ……」
ガチャン！とドアが大きな音を立てて開いたのはその直後だった。
「あ……」
向こうから現れたのは、ハァハァと息を荒くしている翔だった。
「おま……こんな……トコで、何やっとん……？」
「えっと……心の整理？」
「……はぁ？」
「あたしさ、もうホント嫌になる」
翔の顔が険しくなる。美里や駿、菘もドキドキして様子を見守っている。
「自分の幼稚っぽさに」
「え？」
翔が拍子抜けだ、というような顔をした。
「なんでだろうね～。なんであたしって、自分のことしか考えないんだろう」
「……。」
「こういうことを言ったら、相手を傷つけるとか。もうちょっと考えて物言えっつーの！」
陽乃は苦笑いして翔のほうを見た。
「昨日は、ゴメンなさい！」
「！」
深々とお辞儀をして謝る陽乃。翔は戸惑いを隠せない。
「あたし、翔の話も聞かずに一方的に別れるとか、聞き分けのないこと言ってゴメンなさい！」
「……陽乃」

「ゴメンね。謝って許される問題じゃないのはわかっ……！」
陽乃の言葉を遮るように、翔が陽乃を思い切り抱き締めた。一瞬で美里、駿、菘の顔が真っ赤になる。
「ちょ……3人がいるだけど……！」
「関係あらへん」
「……。」
陽乃もそっと、翔の背中に手を回す。
「行こうか」
美里が駿と菘の背中を押した。バタン、と静かにドアが閉まった。
「オレ……もう、陽乃に隠し事とかせぇへん。全部、陽乃に伝える。自分勝手なこと、せぇへん。不安にさせること、せぇへん」
「……。」
「信じて、くれるか？」
陽乃はニッコリ笑って言った。
「もちろん」
「おおきに！」
翔はもう一度陽乃をギュウッと抱き締めた後、笑顔で言った。
「そろそろ、みんな部活来るで！　下、降りよう！」
「うん！」
春風が吹く中、翔と陽乃は暖かい日差しを背に受けながら、屋上を後にした。

第２５９話　いろいろ行ってみよう！

「はい、それじゃあ今日はここまでにしておこう」
恭一が指揮棒を降ろした。
「それにしても、ちょっと今日は抜けすぎだな」
恭一は苦笑いする。今日の部活は欠席者が多い。しかし、仕方がない理由なので、恭一も別に機嫌は悪くない。
「それで、今日この後行く人は？」
恭一の言葉に全員が手を挙げる。
「おぉ！　さすがだな」
「だって、いろいろ参考になるかもしれないですから」
絵美がワクワクした様子で早くも楽譜をたたんでいる。
「行く気マンマンというわけか」
今日の部活欠席者は駿、さゆり、はるか、彩香、順平、洋之、光瑠、梨子、健之佑、智志の１０人。今日は他でもない、彼らの出身中学校、七海市立袴田中学校吹奏楽部の第１３回定期演奏会が開催されるのだ。
「それじゃあ、くれぐれも行き帰りに事故だけはないように」
「はい！」
「それじゃ部長、号令」
「起立！　礼！」
「ありがとうございました！」
挨拶の後、部員たちは急いで片づけを済まして出発の準備を整えた。今日の演奏会には早くも入部の意を示している一部の１年生も一緒に行くことになっている。もちろん、陽乃の弟である夏樹もいる。他には裕也、まゆがいる。
「んじゃあ出発しまーす。パートごとにまとまって、邪魔にならんように走って各パート、１７時までにクリエイトホール前に集合してください」

「はい！」
「では、一時解散！」
翔の解散の言葉をキッカケに、各パートが散っていく。バスパートは久しぶりに智志が抜けたことで、彼が入部する前の人数に戻っていた。
「久しぶりですねぇ、この人数」
亮平が感慨深そうに呟いた。
「そだなぁ。いっつもなんだかんだ言って、智志、賑やかだもんな」
愛実がクスッと笑う。
「でも、最初のころに比べたら大岩くん、バスパートにも部活にも馴染んできましたね」
愛実以外も含めて、部員たちが驚いたのは昨日の聡の豹変振りだった。なんと、真っ黒に髪を染めて、しかもショートヘアにしてきていたのだ。これには翔や陽乃も目を丸くして呆然としていた。１年生がもうすぐ入ってくるから、心機一転という意味で染め直したのだそうだ。これによって、智志の評価が一部女子で上がったのは言うまでもない話。
「ここへ来て、定期演奏会の話とかも出てるし、ちょっと部内の雰囲気変わってきたよね、拓あん」
春樹がウキウキした様子で拓真に聞く。
「そうだな。ここで、１年生がたくさん入ってくれたら嬉しいんだけどな、マジで」
「でも、ウチのパートはもう決定してるじゃん」
春樹のいうとおり、バスパートは飯岡　好美の入部がほぼ決定していた。彼女自身、入部しますのでよろしく！とメールアドレスと電話番号をバスパート全員に教えていた。
「お、噂をすれば……」
信号で停まったところにタイミングを見計らったように、好美から全員にメールが入った。
『今日は演奏会に来てくださるということで、ありがとうございま

す！　中学最後の演奏会、頑張りますので私、飯岡好美にご注目ください（笑）』

「飯岡さんらしいですね～」

亮平は笑いをこらえながら携帯電話をカバンにしまった。

「こりゃあ春から楽しみだ」

拓真の目が輝いている。彼にしてみれば、後輩が入るというプレッシャーもあるが、それ以上にもっと自分を高めるチャンスになるという気持ちで溢れていた。

同じ頃、パートの2人が抜けている翔たちサックスパートは定期演奏会の話で持ちきりだ。

「そういやぁ、すーさんのとこは定期演奏会って、どんなんしてたん？」

麻綾の出身中学は葉島中学。吹奏楽部は存在しないため、佳菜と同じ市の少年少女吹奏楽団に在籍していた。

「私たちのところは、特別定期演奏会というのはしてませんでした。市の吹奏楽連盟の定期演奏会とかが、私たちの一番の演奏会って感じでしたね。先輩のところは？」

「あぁ……。オレ、実は中学のとき、途中で退部してんねん」

「えっ？　そうだったんですか？」

麻綾どころか、他の1年生にも話していないことだ。驚くのも無理はない。

「そうだったんですか～。でも、なんでまた七海に来てから吹奏楽部を創部なんてしたんですか？」

「うーん……」

翔はいろんなことを考えたが、やっぱり理由はひとつだけ。

「純粋に、吹奏楽が好きなんやな」

「本当に純粋ですね」

麻綾が笑った。隣にいた夏樹も笑う。

「二人よって笑わんでもえぇやん！」

翔は顔を真っ赤にしている。

「いえいえ！　私たち、こんな先輩がサックスでよかったって思ってるんですから！」
麻綾の嘘偽りない答えに、ますます翔は真っ赤になるばかりだった。
クリエイトホールには１６時５０分過ぎに七海高校の全員が揃った。翔と陽乃は全員分のチケットを配り、いよいよ入る準備を整える。
「そんじゃ、入ります」
「はい！」
翔を先頭に、部員たちがゾロゾロとクリエイトホール内に入る。入るなり、美里が深呼吸をした。
「うーん……！　やっぱりあたし、ホールの匂いって好きだわぁ」
「残念ミサッチ。ここ、ホールじゃなくてロビーだから」
「いちいちうるさいなぁ、エミリンは」
寄ってたかってお喋りが揃っている七海高校吹奏楽部の集団は、毎回どこへ行ってもかなり目立つ。特に美里の声はよく響くので、ホール内に限らずどこへ行っても目立っていた。
「おい、お前声デカすぎ！」
慎也が慌てて後ろから飛び出してきて、美里の頭を軽くつついた。
「いたーい！　もう、慎也のバカ！」
「だからそういう声がデカいっつってんじゃん！」
「はいはいはーい、痴話げんかはその辺にしてくださいな」
「痴話げんかじゃねーよ！」
慎也も負けず劣らず声がデカい。これにはさすがの翔も焦り「ほら！　早くホールの中行こう！」と促した。
「あれ？」
慎也が押されているにも関わらず、後ろを見た。
「どないしたん？」
「いや……知り合いに似た人がいたからさ」
「え？　オレも知ってる人？」

翔も一緒に振り向くが、翔は知らない人物だ。それに、人ごみにまぎれて慎也も果たして本当にその人物であったかどうかは確認できなかった。

「……。」

不意に慎也の胸を、何か懐かしいものがよぎった。周りの雑踏が聞こえなくなり、慎也はホールの入口にしばらく佇んでしまった。

「わっ！」

夏樹が呆然としている慎也にぶつかってしまった。そこでようやく、慎也は我に帰った。

「川崎さん？　どしたんですか？」

夏樹が丸い目をクリクリさせて慎也を見上げた。

「お、あぁ！　なんでもない。ゴメン、ゴメン」

後から来た陽乃も目を丸くしていた。これ以上ボーッとしていたら変に思われると感じた慎也はいそいそとホールの中へ入っていく。さすがに2年間、ほぼ毎日をともにしている友人が少し変な様子を見せるとわかるようになってきた陽乃は、首をかしげた。

袴田中学校吹奏楽部第１３回定期演奏会のプログラムは、以下のようになっている。

＞ｉ５２３７―１５０＜

「うぉー！　リクディムやぁ」

翔がテンションを一気に上げた。リィクディムとは、ヤン・ヴァン・デル・ロースト作曲のもので、４つのイスラエル舞曲という副題が与えられている。最近では吹奏楽版よりも、アンサンブルコンテストにおいてクラリネットアンサンブルの形式を頻繁に耳にすることが多い。いずれにしても有名な曲で、１９８５年と翔たちが生まれる以前に作曲されている。しかし、未だに根強い人気がある曲だ。

「パクス・ロマーナもある！」

誠が嬉しそうにプログラムを見つめた。
「カッコいい曲？」
拓真が聞くと、誠は「ボーン、ユーフォ、チューバ、弦バスがヤバいんスよ！　な、みーやん！」と落ち着かない様子だ。普段は冷静な亮平も、これには興奮しているようで「本堂先輩、絶対気に入りますよ！」と浮かれている。
慎也はジッとプログラムを見つめていた。
「どないしたん？　そんな真剣になって」
翔は気になって、慎也に聞いてみる。
「ううん……。なんか、この『リィクディム』って曲、どっかで聴いた覚えがあってさ」
「え？　でもお前、吹奏楽は高校からやろ？」
「あぁ……」
「あ、そっか。どっかの演奏会聴きに行ったりしたんなら、聴いた可能性あるわな」
「……あぁ、思い出した」
「へぇ？　やっぱ、どっかで聴いたん？」
「うん」
珍しく慎也が嬉しそうにうなずいた。
「友達の？」
「ん～……そんな感じ！」
「へぇ～」
翔は慎也が嬉しそうにしているので、その話を詳しく聞きたくなった。
「な！　またその話、教えてくれへんか？」
「え？」
「お前のその思い出話」
慎也は恥ずかしそうにしたが、「翔にだけなら」と言った。
「よっしゃ！　約束な」
翔はニコニコ笑っている。

「なぁ、翔」
「ん～？」
「いろいろ、演奏会聴きに行かないか？」
「おっ！　いいねぇ、それ」
「俺たちの定演の参考も兼ねてさ。いろいろ行ってみよう」
翔はグッと慎也の手を握り「おう！　約束な！」と先ほどよりも嬉しそうに笑った。慎也の脳裏に、懐かしい記憶が蘇る。
（アイツ……どこに進学したんだろ）
そうこうしているうちに、ブザーが鳴った。いよいよ、演奏会の幕開けだ。

第２６０話　吸い込まれるように……

第一部のクラシック・ステージは翔たち吹奏楽部員には耳なじみのある曲ばかりだったので、全員が夢中になって聴いていた。特に、最後の『ＧＲ』は陽乃や沙希が興奮きわまり、涙してしまうほどの大曲だった。

変わって、第二部ではソロ&アンサンブルステージになっている。そして今、部員たちを惹きつけてやまない曲目がまさに、始まろうとしていた。

『タイタニック幻想曲』。ホルンのアンサンブルで、１９９７年に映画化された『タイタニック』のサウンドが散りばめられた楽曲になっている。ホルンの3年生は、緒方（おがた）賢治（けんじ）ひとりだけ。後は2年生と1年生が各2名ずつとなっている。

（すげぇよなぁ……）

慎也は目を細めて、賢治たちホルンメンバーを見つめていた。1年生は若干、必死さが目に見えている。またそこが、可愛らしいというか何というか。とにかく、1年前までは私服で小学校に通っていた少年少女が、今は制服に身を包み、この大舞台でホルン（金管で一番難しい、それ）を演奏しているのだ。

かつて、慎也たちもそうだった。翔と沙希以外、吹奏楽のことなど右も左も分からないような状態だったのだ。それが今では、こうして演奏会に来てその深みを感じられるまでになっていた。

「Ｍｙ　Ｈｅａｒｔ　Ｗｉｌｌ　Ｇｏ　Ｏｎ」が響き渡る。ホルンの優しい音色。雪子の奏でる音色に、賢治の音色はよく似ているような気がした。雪子がここにいるのではないか、と錯覚してしまいそうなほど、彼の音は優しく、それでいて雄大。

（綺麗……）

目を細める慎也の横で、美里は目を閉じて音色に耳を澄ました。

5人だけの音にも関わらず、倍音が聞こえて１０人くらいの演奏に

聞こえる。
（これは上手い証拠やなぁ……）
和音が合うと、倍音が出てくる。本当は吹いていない音が聴こえるように感じるのだ。いや、実際、そうした音が出ているのだ。ホルンは音程を合わせるのが金管でも特に難しい楽器だ。その楽器を中学生5人が、ほぼ完璧に吹きこなしている。
（ヤベェ……）
転調し、賢治が今までで最高に感情のこもった音を吹いた。テンポが落ち、なおさら賢治の音がクリアかつ深く聴衆の耳に響いていく。
（……。）
慎也はスッと目を閉じた。

――頑張る前に諦めるなんて、僕にはできないんで。

「……ん？」
慎也は聞き覚えのある声が耳元でしたような気がして目を開けた。しかし、周囲にはいつものメンバーしかいない。
（気のせいか……）
慎也は再び、ホルンアンサンブルに耳を澄ませた。

そしていよいよ第四部。フィナーレの舞台が始まった。第三部の楽しいステージとは異なり、一種の緊張感のようなものが観客席も包み込んでいく。
オーボエ、クラリネット、サックスなどの木管楽器の独特のメロディで始まる1楽章。それらを支えるチューバ、ユーフォ、トロンボーンの伴奏。土臭さを醸し出すのは、タンバリンとスネアドラムだ。民族的な印象を与える不思議な曲。聴いたことのない雰囲気を持った曲に、七海高校の部員たちも目に見えて興奮しているのが伝わってきた。

イングリッシュ・ホルンのメロディの後ろで鳴り響く銅鑼の音。とても重々しい雰囲気がするが、一転してハープの伴奏とフルート・オーボエ系のメロディが響く。そしてイングリッシュ・ホルンの響きの後に、冒頭部分の再現だ。

見学に来てくれていた、歌川（うたがわ）　まゆがオーボエ奏者として出ている。飯岡（いいおか）　好美（よしみ）もこのバンドには欠かせない、重要ポジションにいる。

２楽章では緩急の繰り返しだ。独特の重々しい雰囲気から始まったかと思えば、一気にテンポが上がり、長調的な響きへと変化する。そしてブレーキが掛かり、再び重々しい雰囲気に。また雰囲気を変えて、一気にテンポアップ。リクディムはこのように、実におもしろい曲なのだ。

３楽章は全体にかけて、この曲で唯一と言っても良いほどの典型的長調で、ゆったりとした雰囲気で流れていく。木管が主役なので、ここで金管はしばらくお休みだ。翔は、この曲のタイトルこそ知っていたものの、どんな曲なのかは知らなかった。部員のほとんどが、タイトルばかり知っていて、曲の中身を知らないでいた。そのため、次の展開がどうなるのか興奮が抑えきれずにいる。

一方、まったく違う様子でいたのは他でもない、慎也だった。

（この木管のメロディ……いいよなぁ……）

土臭さとは違う。どちらかといえば、やわらかい日差しの中、何をするでもなく佇んでいるような、そんな雰囲気の楽章だ。

（もうすぐ……４楽章……）

慎也はこの曲でも特に、４楽章が大好きだった。あの時、あの場所でこの曲のこの楽章を聴いた瞬間、慎也の中で何かが変わった。きっと、聴いている人全員が３楽章と比較するとあまりの変化に驚いてしまうだろう。それほどにインパクトのある楽章なのだ。

しかし。

（……。）

慎也は３楽章のマジックにかかってしまった。いつの間にか、自

分がどこにいるのか、今が何時で、誰がそばにいるのか。全部が現実なのか夢なのかわからないような感覚に見舞われた。

「ねぇ……ねぇってば」

聞き覚えのある声が、慎也の耳に届いた。

「ん……？　あれ？　俺、寝てた？」

目を覚ました慎也の目の前にいるのは、クラスメイトの吹奏楽部員だった。

今からおよそ3年前。

七海市立　波里（なみさと）中学校3年生。慎也、15歳の春のことだった。

第２６０話　吸い込まれるように……（後書き）

少し短めですが、次話へ繋ぐための部分なのでご容赦ください。

第２６１話　可愛くない年頃

「んだよ～、うるせぇなぁ」
　川崎　慎也、当時１５歳。彼は寝ぼけた目を擦りながら目の前にいる少女――井岡（いおか）　保美（やすみ）を睨みつけた。
「ホラホラ！　今からここで吹奏楽部が練習するんだから、部外者は出た出た！」
「部外者じゃねぇよ。俺はこの３年３組に所属してんだぞ」
「今からここは吹奏楽部の練習部屋になるの。アンタは部外者」
「うるせー女。モテねーだろ」
「ツンツンしてるアンタも似たようなモンでしょう？　それより、後輩がアンタを見たらビビッて教室入ってこなくなって、練習にならないの。早く出てくれない？」
　今でこそ黒髪で真面目な印象を与える慎也だが、中学２年生から３年生の夏頃までは正直言って、荒れていた。茶髪に剃った眉。目も睨みつけるような感じで、シャツはいつも出たまま。おまけに腰パン。
　誰とつるむでもなく、慎也は単独行動をとることが多かった。これで成績が悪かったらどうしようもない不良なのだが、成績は文系が４から５、理系も３から４をキープし、副教科である体育、音楽、美術、家庭科、技術なども３から４をキープし、音楽と体育はたまに５を取ることもあった。
　生活面でも、こうした風紀面だけが乱れており、遅刻も早退も欠席もない。そのため、教師も特別、慎也を厳しく指導するわけにもいかなかった。
「やーだね。お前の後輩、ビビらせるだけビビらせてやる」
　慎也はちょっと意地悪な笑みを浮かべて保美に言った。保美もヤレヤレ、という表情を浮かべて譜面台をセットする。

「そういやさぁ」
慎也は揺り椅子をしながら保美に話しかけた。
「何？」
「お前の後輩で、やったらヘタなヤツいねぇ？」
「……あぁ。永瀬くんのこと？」
「へぇ。永瀬ってんだ、アイツ。なぁ、お前もヘタって思ってんだろ。アイツ、毎朝音楽室で練習してんじゃん？　でも、何にも知らない俺が聞いてもアイツの音……」
「アイツじゃない」
保美が珍しく語気を強めた。
「永瀬くん。永瀬　信二」
「……あ、あぁ。悪ぃ」
ンンッ、と咳払いをした後、慎也は続けた。
「その、永瀬の音って、俺が聞いても明らかに下手だからさぁ。ほら、保美の音はクリアっつーか、響く？　そんな感じの音じゃん。よくまぁ、あんなの吹奏楽部に入れるよな」
へへッと慎也が笑っても、保美は特に反応しなかった。
「何？　無視？」
慎也はへへッと笑った。すると、保美は楽器を出しながら返事をした。
「じゃあ聞くけど、川崎」
「なんだよ」
「アンタ、確か去年の冬までバスケやってたよね？」
「……まーね」
「いつから？」
「小3から」
「その時、アンタ、バリバリにバスケできたの？」
「……いや」
ハッキリ言って、足手まとい以外の何者でもなかった。
「小5や6年の先輩からしたら、邪魔だったんじゃねぇかな」

「それを、6年生は邪険にした？」
「……ううん。そういうヤツはいなかった」
「同じじゃない」
保美が笑う。
「吹奏楽もバスケも同じ。最初は誰でも下手よ。耳も目も当てられないような状態かもしれないわ。でも、だからこそ努力するんじゃない」
「……。」
慎也は腹が立ってきた。わかっていたが、保美に言わずにはいられなかった。
「努力したって……どうしようもねぇことだってあるだろ！」
「！？」
保美が驚いて目を点にした。
「あっ……」
「……。」
嫌な沈黙が流れる。
「帰る」
慎也は顔を赤くして、カバンを思い切り持ち上げて教室を出た。
「わっ！？」
すると、中1の男の子と中2の女の子（スリッパの色でわかる。1年はブルー、2年はレッド。ちなみに、慎也たち3年はイエロー）が驚いて少し後ろへ下がった。
その時、男の子の名札が見えた。永瀬、という字だった。
慎也はチラッと信二を見た後、一目散に教室から離れた。

翌朝。
「あら？　もう出るの？」
母の美土里（みどり）が驚いた声で慎也に聞いた。
「うん」
「ちょっと早すぎない？」

「これくらいに出るのも、いいかなと思って」
「そう……？　じゃ、気をつけてね」
「おう」
慎也は自転車に跨り（本当は自転車通学などしていいはずもないのだが）、颯爽と波里中学へ向かった。
「聞こえる……」
保美の音とは違う、お世辞にも上手いとは言えない音色。慎也はなぜ、あの永瀬という子がそこまで頑張るのか理解できなかった。どうせ、いつか限界を感じて辞めるに決まってる。慎也はハナからそう決め付けていた。
音楽室までの階段を上がる最中にも、幾度となく「ボヘッ」、「ぶぇ」、「ブゥア」と情けない音が聞こえてきた。
ガラガラガラッ……と慎也が重い音楽室の扉を開けると、音がピタッとやんだ。
「……？」
小柄な信二が、ビクビクした様子で慎也のほうを見ている。
（どうせ……続きっこないさ）
慎也は蔑むような目をして、すぐに扉を閉めた。

2週間が経った。
「チェッ！　忘れ物だ……」
慎也は家へ帰ろうとして、よりによって自転車の鍵を忘れたことを思い出した。今まで友達（唯一の、とも言える）の家で遊んできて、さぁ帰ろうと自転車を隠してある場所に行ったところで、自転車の鍵がないことに気づいた。
場所としては、教室くらいしか考えられない。慎也は渋々、学校へ引き返した。時間は午後6時。まだ薄明るいが、じきに暗くなる。ほとんどの教室の電気は消えているが、なぜか慎也の教室だけは煌煌と電気がついていた。
それから、聞こえてくるもはや耳に慣れた音。

「またスイソーガクブかよ」
慎也はチッと舌打ちをしながら、階段を上がった。
ガラガラッと教室の戸を開けると、そこにはあの信二しかいなかった。
「……あ」
「大丈夫。俺は怖くねーし、何もしねーよ」
「……。」
信二は特に何も答えず、ジッと慎也を見つめている。1年生にしてみれば、先輩と言うのはどう言われようと怖いものなのかもしれない。慎也もかつてはそうだったように。
「忘れ物取りに来ただけだ。邪魔して悪かったな」
「いえ……」
まだ声変わりの最中なのか、しゃがれた声で信二がやっと会話になるような言葉を口にした。
「……あのさぁ」
慎也はつい、意識せずに質問が口に出てしまった。
「聞きたいんだけど、お前はなんでそれをそんなに頑張れるわけ？」
「……コレですか？」
信二は長い金属のそれを指差した。
「トロンボーンって言います」
慎也はいくら音楽ができても、まだ楽器の名前はよくわからなかった。
「いや、名前はどうでもいいけどよ。何でお前はその……なんたらぼーんを頑張れるんだ？」
「お……僕……本当はトランペット吹きたかったんです」
俺と言おうとしたのか、少し口ごもった後、信二は僕と言い直してそう呟いた。
「んじゃー、なんでその……トランペット吹けないのに、なんたらボーンやってんだよ」
「本当はトランペット吹きたかったけど、僕、トロンボーンでも何

でもいい。とにかく、吹奏楽をやってみたかったんです……」

「……！」

慎也はかつての自分を見ているような感覚に見舞われた。本当は、小学校のとき、野球クラブに入りたかったが、抽選で漏れてバスケットボールクラブになった。ダダをこねたが、美土里が「何でもやってみないとわからないわよ？」と言うので渋々、参加した。

小学校の間は楽しかったが、中学に入って一変した。バスケ部も野球部もサッカー部も、実力主義ではあった。慎也は小学校高学年から身長が伸び、体力が付いたこともあり、部の中でも特に動きが良く、際立った選手だった。１年では異例のレギュラー入りも果たした。

しかし、その努力も異例のレギュラー入りも全員が認めてくれるわけではなかった。一部のくだらない先輩のおかげで、慎也は一気にやる気を削がれたのだ。

本当は、何でも良かった。自分がイキイキするところを見つけたかった。サッカーでも、野球でも、バスケでも良かった。しかし、自分がイキイキすると周りが妬んでくる。そういう仕組みに気づいた瞬間、慎也は何かに力を注ぐことが一気に無駄に思えたのだ。

間もなくして、慎也は部を辞めた。それからあっという間にクラスメイトや先輩、後輩とも一気に壁を作った。髪を染め、腰パンにシャツを出す風貌へ一気に変わる。あまりの変化にクラスメイトや先輩たちも驚き、慎也と距離を置くようになった。

しかし、美土里たち家族と一部の友人――保美も含めるのだが――たちはいつもどおり、慎也に接した。慎也の状況を理解してくれていたのかもしれないが、それ以降、慎也が素直になることはまったく、なくなっていた。

目の前にいる信二は、かつての自分のように本当に、純粋だった。努力すれば報われる。そう信じてやまない、ピュアな心の持ち主。

慎也は迷った。ここで、彼の心をさらに成長させるも、その成長を摘み取るも自分次第だということに気づいた。

散々迷ったのに、口から出た言葉は自分でも驚くほど優しいものだった。
「そうか。すげぇじゃん、そのやる気」
「……！」
信二が嬉しそうに笑う。
「頑張れよ、１年生」
「はい！」
慎也は小さく手を振ると、鍵を取って教室を出た。
「……ねぇ」
保美がいた。
「なんだよ」
「ありがと」
「へ？」
「あの子……ちょっと最近元気なかったの。なかなか、上手くならないって」
「……そうなんだ」
「でも、第三者のアンタに言われると……違うみたいね」
保美が嬉しそうに笑った。
「アンタも、早く頑張れるもの、見つけなよ」
「……大きなお世話だよ」
慎也は少し顔が赤くなったのを見つからないようにするため、逃げるようにしてその場を去った。保美がもちろん、その慎也の変化に気づくことはなかった。

第２６２話　『リクディム～４つのイスラエル舞曲～』

「暑(あ)っち～……」

２００４年７月２４日（土）。慎也は一人、七海市中央ホール前にある市役所南公園でソフトクリームを舐めていた。天気は快晴。雲ひとつない青空の下、蝉が元気いっぱい鳴いている。慎也は特にすることもなく、お気に入りの自転車で公園へやってきていた。

４月以降、慎也にちょっとした変化が起きていた。あれだけ毎日続けていた自転車通学をやめたのだ。歩いて学校へ通うようになった。それに驚いていたのは、保美だった。

「ねぇ、川崎。チャリ通やめたの？」

「やめた」

「なんで？」

「……なんでででしょう！」

理由は慎也自身もよくわかっていなかった。それから間もなくして、腰パンをやめた。シャツを出してはいるが、腰パンはとにかくやめたのだ。

今日は本当にすることがない。夏休みの課題も、午前中にすると美土里と約束し、きちんとこなしている。なので、問題はない。午後から気分転換に、公園へ出てきたのだ。

「なんだろ……あの高そうな箱」

慎也はホール前にいる高校生や中学生が持つ、高そうな箱がずっと気になっていた。慎也はペトペロとソフトクリームを舐めながら、慎也はホールの前に歩いていった。

「吹奏楽……コンクール？」

吹奏楽、という言葉を聞いてすぐに浮かんだのは、保美と信二の顔だった。

「ひょっとして……いるのかな？」

慎也は興味本位で受付に近づいてみた。チケットは７００円。ちょうど３００円のソフトクリームのお釣りがある。慎也はチケットをためらうことなく購入し、中に入った。

「すげぇ……！」

目に入ってきたのは、とても慎也の日常生活では触れることのできない、荘厳な雰囲気が漂う空間だった。そして、目の前にいる自分たちの年齢の近い学生たちが、高そうな楽器を持っている。慎也はなぜかドキドキと心臓が高鳴っていた。

「すげぇ！　すげぇ……」

慎也はしばらくその空間を楽しんでいた。しばらくしてから、何やらパンフレットのようなものが売られていることに気づいた。

「すいません、１部ください」

「はい！　２００円です。どうぞ！」

高校生くらいの女の子は優しく笑って、それを差し出してくれた。慎也は２００円を颯爽と渡し、パラパラとプログラムと書かれたそれをめくっていった。

「あっ！」

七海市立波里中学校吹奏楽部、の字が１９番目のところに見えた。そして、アナウンスがちょうど、プログラム１８番の演奏が始まることを告げる。

慎也はギリギリのところで、ホール内に入った。

「……。」

慎也と変わらない年齢の女の子が、フルートを吹いている。それに、慎也は当時まだ知らないのだが、グロッケンを叩いている少年もいた。やがて、サックスが混じり、いろんな楽器の音色が交わっていく。綺麗な曲だった。

慎也はパラッとプログラムをめくってみた。

（七海市立袴田中学校……課題曲２、自由曲、海の男たちの歌……）

課題曲２番が何なのか見てみると『エアーズ』という名前の曲らしかった。慎也はよくわからないままだったが、始まったサックス

のソロらしいところで目を閉じた。サックスを吹いているのは、自分と同い年くらいなのに、ずいぶんと大人びて見える少女だった。そして始まるトランペットとトロンボーンのメロディ。本当に綺麗な曲だ。

（すげぇなぁ……）

そして、再度同じメロディが流れて、曲は終わる。素早く移動し始める部員たち。

（これが吹奏楽部か……。保美や、永瀬だったっけ。アイツらも、こんな演奏すんのかな……？）

『エアーズ』から『海の男たちの歌』へと曲が変わる。波のような音を、打楽器だろうか、男の子が立てている。そして、トランペットと唯一、慎也が知っているホルンのソロが始まる。これも、綺麗な曲だという印象を受ける。ところが、一転して勇ましいメロディの後に、テンポが上がり、勇壮な曲へと変化した。

（うわぁ……！）

慎也には驚きの連続だった。曲と言うのは、こうもいろいろ表情が変わるのか。普段からＪ－ＰＯＰしか耳にすることのない慎也にとって、それは本当に衝撃的だった。そこから先、あまり記憶がない。ただ、頭がカァッと熱くなって、よく覚えていないのだ。

「次か……！」

たまたま、慎也の目の前の席が空いた。すかさず慎也はその席に座る。舞台からは遠いが、大丈夫だった。慎也の視力は両目ともに２．１だ。

（保美だ……。アイツもいる……！）

舞台に部員たちが入り、照明が灯ると同時に慎也はトロンボーンを構えた二人の姿を発見した。さっきの曲とは違う、課題曲３。曲名は『祈りの旅』。

木管の繊細なメロディが始まる。そして、金管一発目がなんと、トロンボーンだった。

（……うお）

とても、それはとても繊細な音だった。あれだけ「ブゥア」とか「ぽぁ～」とか間の抜けた音しか吹けないハズだった信二が、すごく、繊細な音を吹いていた。

そして始まる、トロンボーンと似た音域の楽器のソロ。重々しい、独特の音色だった。そして木管と金管が交互にメロディを繰り返し、曲は中盤部分の最高潮を迎える。曲調が長調へ変わり、今度は安心して聴けるような感じになった。徐々にテンポも上がり、いろんな楽器が鳴り始める。

（速っ！）

慎也は曲のテンポが上がったことに目を丸くしていた。そして、信二たちトロンボーンの動きも速くなる。後はもう、目まぐるしい変化にただただ、慎也は呆然とするしかなかった。

トロンボーンがカッコいいメロディを吹いている。あの信二が、あんな大舞台で演奏している。慎也にとって、あれほど身近だった保美と、少し自分を変えてくれた信二が、とても遠くに行ったような気がしてしまった。

やがて、自由曲へと変わる。部員たちが移動していくのを、慎也は緊張した面持ちで見つめていた。曲名は『リクディム～４つのイスラエル舞曲～』だった。

重々しい雰囲気出始まった曲は、慎也にとって生まれて初めて耳にする雰囲気を持った曲だった。こんな雰囲気の曲は、今までの慎也の人生では聴いたことのない、独特の雰囲気だった。

なんだか蛇の出てきそうな音色を奏でる楽器に、中国のシンバルのようなデカい楽器。よくわからない怪しげな雰囲気のまま、曲は流れていく。唯一わかったタンバリンも、ただ叩くだけではない。どう表現すればいいのかわからなかったが、なんだか震わせているように慎也には見えた。

どうやら、楽章というものがあるらしい。怪しげな雰囲気が終わると、ますます不気味な雰囲気に変化する。ところが、音が伸びた後に突然音が大きくなり、曲はテンポアップ。

（うぉ！　ビビッた……）

慎也は思わず体をビクッとさせてしまった。しかし、最後尾の席で左隣には誰もおらず、右隣は通路だったので特に恥ずかしいこともなかった。

そして最初のように怪しい雰囲気の後は、ジャン！と大きな音を立てて曲が終わる。そして、３楽章。

（やべぇ……眠い……）

この３楽章は８分音符の３個分プラス４個分という、つまりは８分の３拍子と８分の４拍子が入り混じった複雑な曲だった。慎也にとっては、ゆっくりで優しい音色が聞こえてくるため、眠気を催すような曲だった。

ところが、突然始まった４楽章で驚きすぎて心臓がバクバク鳴り出した。大音量と共に激しい旋律。木管楽器がこれでもかと言わんばかりに、指を動かしている。金管楽器も音量の大小の差が激しく、技術を求められる部分だった。

信二と保美に目が行く。本当に最後の部分、後打ちをしているトロンボーンが、途中で前打ちに変わる。そしてメロディを担当する。慎也にとって、衝撃以外の何物でもなかった。

３ヶ月前までは、音も性格も引っ込み思案（に見えた）信二が、今では堂々と、立派な一人の奏者になっていた。

慎也にでもわかる、曲の最後の部分がやって来た。慎也は、どんな終わりを見せてくれるか、ワクワクして思わず前のめりになった。

曲がスピードアップする。そして、指揮者の先生の指示が飛ぶと同時だった。

「ホイーッ！」

全員の声が聞こえた。それが、この『リクディム〜４つのイスラエル舞曲〜』の終わりなのだ。

一瞬の沈黙の後、拍手が沸き起こる。慎也は思わず立ち上がりながら拍手をし、暗転する直前、今まで見たことないほどに嬉しそうに笑う保美と、初めて笑った顔をした（慎也にとっての、初めて）

信二の顔が見えた。

「ねぇ……ねぇってば」

気がつくと、美里がユサユサと慎也を揺らしている。

「ん……？　あれ？　俺、寝てた？」

デジャヴのような、感覚がする。

「寝すぎたよ。もう、曲終わったよ？」

「んで？　金賞だった？」

美里と春樹が目を丸くする。

「やだなぁ、寝ぼけてちゃダメじゃん慎也」

春樹が笑う。

「そうよ。袴田中の定演でしょ？」

慎也はポカンとした表情を浮かべ、しばらくしてから「あぁ……うん……」と呟いた。

「あーあ。せっかく滅多にない珍しい曲だったのに」

拓真が残念そうに首を横に振る。

「知ってるよ。俺は」

「じゃー、どんな曲だった？」

沙希がニヤニヤしながら慎也に聞く。

「最後は『ホイ！』だ。どうだ？」

「……正解」

慎也はニッと笑った。

忘れるはずもない。慎也に吹奏楽という素晴らしい目標を与えてくれた曲であるのだ、このリクディムという曲は。

「……会いたいなぁ」

慎也は誰にも聞こえない声で呟いた。会いたい人が、いる。

「どうしてんのかな……」

永瀬　信二。その名前と顔が、いつまでも慎也の脳裏から離れようとしなかった。

第２６３話　夢は教壇

「うーん……」

３月３０日午後。翔は自室で机に向かって一人、悩んでいた。

「どないしょ……」

翔が手に持っているのは、進路調査書。いよいよ高校３年生ということで、３年生最初の課題は、この進路調査書の提出だ。具体的に決めるのは夏休み明けでいいとはいえ、この段階でもいい加減な書き方はできない。

翔には、いちおう目標のようなものがある。しかし、夢のような気も自分でしているため、あまり公にしてはいない。陽乃や一部の３年生が知る程度で、恭一はおろか、友美子や昭たちも知らない。

「でもなぁ……なろうと思ったら、やっぱなぁ……私立かな……。でも、国公立のほうがええやろうしなぁ……」

翔はギィギィと揺り椅子をしながら、シャーペンを鼻の下で挟んで物思いにふけった。

翔の将来の夢。それは、小学校の先生だ。それも、専門科目になる音楽の先生。小学校の段階からなるべく多くの子供たちに、音楽に慣れ親しんでもらいたい。別に、吹奏楽部に入ってほしいからとか、そういう意味でなりたいのではない。歌でも楽器でも何でも良い。少しでも、音楽の良さを多くの子供たちに知ってもらいたい。翔は純粋に、そう思っている。

現在の日常生活でも、音楽ナシで過ごすことはかえって難しいのではないか、と翔は考えている。ＣＭ、ドラマ、ニュース、バラエティ番組。どれを取っても音楽は切っても切り離せない関係だ。さらに、最近では炊飯器や湯沸かし器のような家電でも音楽が鳴るようになっている。そして、ＪＲや私鉄でも、発車ベルや列車到着を知らせるベルが音楽になっているものも多くなっている。

これほど身近に溢れている音楽を、少しでも知ってもらいたい、楽しんでもらいたい。翔はそう思い、小学校の先生を志望した。

音楽の先生になるためには、まずどうすれば良いのか。翔はそこから調べることにした。インターネットが手軽かと思い、パソコンを起動させる。

「お。そういえば最近起動させてなかったっけ……」

翔のパソコンのデスクトップは、恥ずかしながら自分たちサックスパートの面々（翔、さゆり、麻綾、はるか）がコンクールで演奏している際の写真をスキャンし、取り込んだ画像である。雰囲気的に、おそらく自由曲を吹いているときだろう。

「やっぱ、こういう風に楽しそうに音楽、やってほしいよなぁ……」

翔は笑顔でしばらく、デスクトップの画面を見つめた後、インターネットに接続した。Ｙａｈｏｏ！の知恵袋では、音楽の先生になるにはどうすればいいですか？という質問がいくらか見受けられた。それを見てみると、大学の教育学部で小学校１種の免許が必要である、という回答が並んでいた。

「教育学部か……」

しかし、教育学部のある大学は数少ない。国立と私立でいくらか見受けられる程度で、公立にいたってはないのだ。国立はさすがというか、そうそうたる名前が並んでいる。

「東京学芸大学、千葉大学、群馬大学、埼玉大学……」

首都圏で翔が通えそうな範囲内にあるのは、この４つ程度だ。かつての地元・近畿であれば滋賀大学、京都教育大学、大阪教育大学、奈良教育大学。

「あー！　こんなん、オレの頭やったら絶対ムリや、ムーリー！」

翔は躍起になって一人、部屋で喚き散らした。

しばらくして落ち着いてから、私立という選択肢も見てみることにした。

私立であれば、首都圏は東京福祉大学、白鴎大学、玉川大学、創価大学、早稲田大学、文教大学。近畿圏は畿央大学、聖和大学、佛

教大学。

「どないしょ……」

近畿圏を選ぶということであれば、それはすなわち陽乃と遠距離恋愛をすることになる。それ以前に、家族と離れ、一人暮らしを強いられるのだ。

ぶっちゃけた話、翔には家事をする自信などこれっぽっちもない。

「はぁ……ホンマにどないしたらえぇんやろ」

翔は椅子から離れ、ベッドに寝転んで進路調査書を上に掲げ、見つめた。真っ白の紙。それがまるで、翔の将来を予兆するかのように見えてくる。

「ムリとか言うてる場合ちゃうな……」

ふと思い出した。先月受験した、模擬試験の結果があるのだ。既に去年の夏くらいから、小学校の先生になりたいと漠然ではあるが、考えていた。そのため、受験希望の大学にこれらの大学のいくつかを入れていたことを思い出した。

「……。」

開いてみるのは怖いが、結果を直視する必要はあるだろう。翔はそう思い、まだ開けていなかった模擬試験の結果が入った封筒を開いてみた。

「ウッ……！」

予想以上の展開が、紙面上で繰り広げられていた。

早稲田大学　↓　E
創価大学　↓　E
白鴎大学　↓　E
畿央大学　↓　D
佛教大学　↓　E

ちなみに、Eは合格率２０％未満、Dは合格率２０～４０％である。畿央大学以外、合格率は２０％未満という、恐るべき数字を記

録していた。
「マジで言うてんのかよぉ……」
翔は自然と涙が目に溢れ出てきた。悔しいというか、不安というか、何か目に見えない気持ちに押しつぶされそうになった。
そのときだった。
急にノックの音がした。
「は、はい！」
翔は目を擦って慌ててベッドから起き上がる。
「お、あぁ。ばあちゃん」
冨美枝だった。
「どないしたん？」
「何が？」
「なんか、さっきから寂しそうな声ばっかり聞こえてる気ぃがしたから……」
翔はドキッとしたが、すぐに笑顔で答えた。
「そんなことあらへんよ？　あ、ちょっと進路でまぁ、考えることがあったから、そのせいちゃうかな？」
「おやおや。進路かい」
冨美枝は翔のベッドに腰掛けた。
「はぁ～……ヤレヤレ。ばあちゃんが若い頃は、戦争中でねぇ」
「？」
翔は突然の話に、少し戸惑ったが聞き続けた。
「自分のやりたいことなんて、ほとんどできなかった。時代が時代だけに、仕方がないんだろうけれども。恋愛も自由にできなかったんだよ？」
翔は恥ずかしそうに笑った。
「お国のために、富国強兵とか、ほしがりません、勝つまではとかねぇ」
教科書で習った単語が出てきた。時代があまりに違いすぎて、翔には実感が湧かない。

「やっとこさ自由な時代が来た頃には、ばあちゃんはもう青春なんてとっくの昔に終わってたよ」
そう笑う冨美枝は、どこか寂しそうだった。
「翔」
「うん？」
「いっぱい悩むといい。でもね、悩みすぎて怖がりすぎて、前に進まないのはダメだよ？」
「……。」
冨美枝が珍しく、翔の頭を撫でた。小さい頃を思い出したのか、翔は頬を赤くして目を閉じた。
「翔はまだ若いんだ。いっぱい、怖がらずにチャレンジして失敗すればいい。若いっていうだけで、何でも挑戦できるんだよ。それに、翔はまだまだ失敗が許されるんだ。挑戦しないうちから、失敗するからなんて決め付けずに、何でもガムシャラに頑張ってごらん」
「……。」
まだ不安そうな翔に、冨美枝は言った。
「吹奏楽部、アンタが中心になって創ったんだろう？」
「！」
最後の言葉が、翔の糧になった。
「今度は自分の人生を、切り拓いていってごらん」
途端に、翔が笑顔になった。
「……わかった！　ありがとう、ばあちゃん！」
冨美枝はニッコリ笑って、翔の部屋を後にした。
「よっしゃ！　ほな、まずはココに志望校書こう！」
翔は意気揚々とペンを握り、進路調査書に志望校を次々と記入していった。

第２６４話　私たちの未来

「ねぇ」
美里が唐突に言った。
「進路、どうする？」
２年生としての部活も最後の日――、今日は３月３１日だ。
「え？　進路？」
楽器を磨いていた絵美が手を止めた。
「うん」
「どうしたの、急に」
沙希が困った表情で笑う。由美子も少し戸惑っている。
「あたし……昨日、お姉ちゃんと派手にケンカしてさ」
「どんな？」
「部活ばっかりやってるけど、ちゃんと進路考えてるのかって……」
「それは俺も耳にタコができるほど、母親に言われてる」
チューバを抱えながら拓真が苦笑いした。
「やっぱり。この時期、どこでも一緒なのかな。俺ん家もだよ」
慎也がトロンボーンのケースを持ってきて、会話に参加する。
「あたしは、とりあえず大学に行きたいって言ったのね」
美里は立ち上がって、小物楽器を整理しながら続けた。
「でも、大学に行こうと思ったら、メチャクチャ勉強しないと落ちるって。夏くらいからじゃ遅いって言うの。でも、あたしたち吹奏楽部は夏が勝負じゃない？　だから、コンクールには絶対出たいって言ったら、受験をナメてたらダメだって言われてさ……」
「普段から頑張るって言っても、ダメだったの？」
由美子がそもそもな疑問をぶつけた。
「あたしにそんなことはできないって頭ごなしに言うの。失礼な話よね」
確かに、と陽乃は思った。

陽乃の家でも例外ではない。つい先日、ようやく決まった夏樹の進路。ここだけの話だが、夏樹は中学の間も何かと体調面で不安定なところがあったため、勉強が追いついていないところが由利と祥夫の不安だったのだ。しかし、なんとか挽回して結果的に姉弟（きょうだい）で同じ高校にはなったものの、無事合格して進学先は確保できたのだ。

陽乃には、夏樹の時のように心配させてほしくないという親の気持ちが静かだが、伝わってきていた。それとなく、大学のパンフレットを見せたり、家庭教師はどうか、というような話を振ってきたり。

陽乃は通っている塾の行く日を増やすことに決めたのだ。浪人なんていうのはゴメンだと思っている。もう1年、みんなが大学で楽しくしている間、自分は予備校で詰め込みで勉強なんて、考えただけで鳥肌が立ったからだ。

3年生から文系を選択するつもりでいる陽乃は、火曜日と木曜日にそれぞれ英語、国語の授業を受けることにしている。なので、この日は18時30分には部活を早退するつもりでいる。ただ、塾側も部活には寛容に対応してくれるため、夏季休業中に関しては遅刻も認めてくれるということになったのだ。

「進路なんて、頭痛いこと考えないとダメよねぇ」

美里はもうウンザリ、という様子でため息を漏らした。

「ねぇ。そういえば二人はどうするか聞いてないよね？」

由美子が思い出したように翔と春樹に聞いた。絵美、慎也、由美子、美里、陽乃に関しては文系の私立大学、沙希、拓真は理系の私立大学を目指すという話だったが、翔と春樹だけが参加していない。

「佐野くんはどうするの？」

沙希が興味津々と言った様子で聞く。

「な、なんか恥ずかしいな……」

「照れることなんてないじゃない。だって、みんな知った顔なんだから」

絵美がクスクス笑う。それを聞いて、翔が意を決したように言っ

た。
「オレ……しょ、小学校の先生……なりたいねん」
全員がポカンとした様子になる。翔の顔がみるみる赤くなった。
「ほ、ほら！　絶対みんなそういう反応する思ってたから、言いたくなかってん！」
「いや……」
美里が真っ先に言った。
「いいんじゃない？」
「え？　ホ、ホンマに！？」
「うん……。なんていうか、あたし、子供できたら佐野くんみたいな先生いたら……子供、素直に成長しそう」
「あ、俺もそんな気がする」
慎也が同意した。
「ちょ、もう！　おちょくんなや、二人してぇ」
そうは言いつつも、陽乃の目に映る翔は嬉しそうだった。
「なんで小学校の先生？」
由美子が興味津々という様子で聞く。
「吹奏楽とかに限らんと……なんていうか、音楽にもっと、小さい頃から慣れ親しんでほしいなって思ったから……。歌でも楽器演奏でも何でもええねん。スポーツと同じように、もっとこう、小さい頃から親しんでほしいから……」
そう言いながらも翔は相変わらず恥ずかしそうにしている。
「……。」
全員がポカンとした表情を浮かべている。翔が真っ赤になって手を横に激しく振り始めた。
「アッカーン！　アカン、アカーン！　はい！　この話、もう終了！」
翔はそのまま逃げるようにして、部室に駆け込んでしまった。全員が呆気にとられたまま、その後姿を見送っていた。

帰り道。
「ねぇ、翔」
陽乃はいつものように一緒に帰る途中で、翔に聞いた。
「なんで今日、あんなに恥ずかしがってたの？」
「だって！　全員ポカンとした感じでさぁ……なんか、オレだけ一人調子乗ってるみたいでハズいやん……」
「そう？」
陽乃がクスッと笑った。
「いいんじゃない？　だって、そういう大きい志持ってるって、スゴいと思うよ」
「え？　そ、そうかな」
「うん！　皆も絶対刺激になったって。あたしもだけどね！」
翔は思いのほか、陽乃から褒められたので悪い感じがしなくなった。
「あ、ありがと……」
「ううん！　それに、アンタ吹奏楽部始めたときも、そんな風にポジティヴだったじゃない。これからも、その調子でヨロシクね」
「うん……」
翔は相変わらず赤い顔をしたまま、小さくうなずいた。その前で陽乃があまり元気でない顔をしていることに翔は気づいていなかった。

第２６５話　白羽の矢が立つ

翌日、４月１日。朝からパート練習をしている七海高校の部員たち。各部屋からは、入学式で演奏するアルセナール、国歌、校歌、ベスト・フレンドが聞こえてくる。その時だった。突然、校内放送が入ったのだ。

「吹奏楽部、佐野、川崎、水谷、本堂。至急、職員室へ。繰り返します。吹奏楽部、佐野、川崎、水谷、本堂。至急、職員室へ」

「な、なんや？　オレ、なんかしたか？」

あからさまに翔が動揺するので、一緒にいたさゆりと麻綾が笑った。

「やだ、先輩！　そんなにやましいことあるんですかー？」

「アホ！　そんなんあるわけないやろ！　とりあえず、行ってくるわ」

翔は練習で使っていた３年Ｅ組の部屋を出て、職員室へ向かう。途中、トランペットパートのパート練習部屋を通った。

「ね！　翔、またなんか変なことしたの？」

陽乃がクスクス笑いながら聞く。

「アホ！　オレは年中いい子じゃ！」

「自分で言うかなぁ。あ、ねぇ、あたしも一緒に行っていい？　先生に話があるの」

「えぇ～？　しゃーなしやぞ」

陽乃は嬉しそうに翔についていく。職員室の扉を開けると、既に春樹、慎也、拓真が揃っていた。

「なんだ。朝倉は呼んでないぞ？」

「先生に個別に話があったんで、ついでに来ました」

「あぁ、そうか……」

「あたしがいちゃ、しにくい話ですか？」

「いや、そういうわけではないから大丈夫だ」

恭一は苦笑いして言った。
「お前たち、明日の風見台の定期演奏会は……聴きに行くつもりか？」
「はい！」
５人は揃って笑顔で答えた。何せ、濱口　優衣、佐野　修平、岩切　翔平など先輩や友人が出演する演奏会だ。何より、この機会を逃すと参考となる演奏会の開催数がガクンと減るのだ。
「ちょっと、その風見台で予想外のトラブルがあってな」
「トラブル……ですか？」
慎也が心配そうに聞く。
「なに。そんな重大なことじゃない。季節がちょっとズレて、風邪を引いた部員がいてな。それが運悪く、ソロを吹く生徒に集中したんだ」
翔がさらに心配そうに聞いた。
「岩切先輩と、修平は？」
「あぁ、心配するな。二人ならピンピンしてるそうだ。主にパート人数が不足しているのはユーフォ、チューバ、トロンボーン、サックス、というわけだ」
陽乃が首を傾げる。
「あれ？　でも、サックスは岩切さんと修平くんがいるんでしょ。先生、あの二人いれば問題ないんじゃ……？」
「残念なことに、風邪を引いたのがたまたま、第一部でソロをする１年生の女の子だったんだよ」
「そんじゃ、岩切先輩か修平が吹けば済む話ちゃうんですか？」
「考えてもみろ。前日だぞ？　二人は他にも練習する曲があるんだ」
「それで、何で俺たちが呼ばれるんです？」
「うん。まぁ、なんだ。率直な話、お前らに第一部に助っ人で出てほしいそうなんだ」
「……。」
しばらく沈黙が続く。そして、５人が一斉に大声を上げた。

「えええええええ！？」
「静かにしろ！　職員室だぞ！」
「あ、すいません……」
春樹が慌てて続けた。
「ちょっと東先生！　俺たちだって急にそんなの、ムリですよ」
拓真も隣でウンウンとうなずいている。
「第一部だけじゃないか。どうだ？　ムリか？」
「だいたい、誰がそんなこと言うてきたんですか！」
翔がプンプンしながら恭一に聞いた。
「お前を出してって言ったのは他でもない。岩切くんと佐野くんだぞ」
「はぁ！？」
「それじゃ、俺たちは？」
「お前ら3人は、兵藤先生直々、お願いに来られたんだ」
「えぇ！？　あの怖い先生かよ！？」
拓真の顔色が悪くなる。
「ハハハ！　心配するな。お前たちが賛助だから、そんなしごかれないぞ。どうだ？　他の部員も、自分たちの知っている人が出ていれば、何かと刺激になる部分があるだろうし、何より4人が出ることで、舞台裏とかを知ることもできるだろう。七海としても、プラスになる部分は多いと思うぞ？」
「……。」
「どうだ？」
「出ます！」
真っ先に答えたのは、やはり翔だった。
陽乃が目を丸くしたが、すぐに笑った。
（さすが翔だなぁ……。決断が早いや）
「よし！　水谷、川崎、本堂。3人はどうする？」
「……迷惑でなければ」
遠慮がちに慎也が答えた。

「迷惑なわけがないだろう！」
恭一が笑う。
「それじゃ、俺も……」
拓真が続いた。
「水谷は？」
「ふ、２人が出るなら俺も！」
「よし！　決まりだな。それじゃ、時間もないから今からお前たちは風見台に向かってもらう」
「はい！」
４人は嬉しそうに駆け出す。陽乃が一人ポツンと残った。
「さて……朝倉、お前の話ってのは？」
「あ……い、今はちょっと翔たちの件で忙しいですよね？」
「ん？　あぁ……まぁ、そうでもないが」
「またにします！　失礼します！」
陽乃は慌てて職員室を出て行った。恭一はよくわからないな、という表情を浮かべつつも、車を準備しに陽乃が出たのとは反対側の出入り口から駐車場へと向かっていった。
「……。」
陽乃は扉を閉めた後、ため息を漏らした。
「ダメだ……。やっぱり言えないや」
陽乃はトボトボとパート練習の部屋へ帰る。
「あ……先輩！」
勇と彩香が心配そうに駆け寄ってくる。
「やっぱり、言っちゃったんですか？」
「タイミング合わなくて……まだ言ってない」
ホッとした表情を浮かべる二人。
「やっぱり、まだ諦めるのは早いですよ」
勇がニコッと笑って陽乃の肩を叩いた。
「そうですよ！　まだ４月ですよ？」
「でも……新入生が入ってきたときに、最上級生のあたしがあんな

音吹いてたんじゃ……幻滅されそうで」
「大丈夫ですよ！　初めは誰でも、失敗ありきです」
彩香が強く言った。
「そう……かな？」
「これからしっかり練習して、要は本番で成功すれば、問題ないんじゃないですか？　少なくとも、私は去年のコンクールもそんな風に思って、先輩は練習されてるんだと思いましたよ」
「……。」
「東先生も、そう思って先輩にピッコロトランペットっていう白羽の矢を立てたんだと思いますよ」
勇が優しく笑って言った。
「私たちも練習頑張るから、先輩も諦めずに頑張ってください」
「ね！」
「……うん！」
陽乃が笑顔になる。
（あたしも皆に負けていられない！　頑張らないと！）
陽乃はピッコロトランペットを持って、自分の席に着いた。
「よし！　じゃ、ロングトーン続きしようか！」
「はい！」
勇と彩香が気合いの入った返事をして、着席した。
メトロノームが鳴り始め、やがて芯の通ったトランペットの音が響き始めた。

第２６６話　これが七海の強さ

４月１日午後。風見台高校の定期演奏会練習に飛び入り参加した賛助出演者――慎也、春樹、拓真、翔の４人は昼休みを迎えていた。しかし、昼ご飯をおにぎりで軽く済ませた４人は、すぐにリハーサル室に戻っていた。

「やっぱ、恥ずかしくない演奏したいもんな」

慎也がスライドグリスを塗りながら呟いた。

「確かに」

拓真も同意する。

「それにしてもやな。まさか、東先生の練習方法がココへ来て活かされるとは、思わへんかったで」

翔が誇らしげに言った。

恭一の練習方法。そのひとつが、初見合奏に強くなるというものだった。この冬、七海高校吹奏楽部は初見合奏に強くなるため、課題曲と自由曲候補以外の楽曲を毎週１曲ずつ、代わる代わる練習していたのだ。最初はそれほど難しくない、簡単なマーチから。そして次の週には２００４年のコンクール課題曲『マーチ・ベスト・フレンド』を。さらにその次の週はマーチではない楽曲を練習した。それが今回、風見台高校で演奏する『吹奏楽のための第一組曲』であった。

冒頭第１楽章。チューバ、ユーフォニウム、弦バスなどの低音楽器中心で同じ形式の旋律が続くシャコンヌ。中間部分が最も盛り上がるインターメッツォ（間奏曲）。そして第３楽章マーチ。

シャコンヌでは春樹、慎也、拓真が何の戸惑いも見せずにサラリと合奏に参加し、違和感なく吹き終えたことに風見台高校の部員たちも驚きを隠せなかった。さらに風見台高校の部員たちを驚かせたのは、春樹のインターメッツォでのソロだ。あの兵藤先生に「身震いがしたよ」と言わせるほどのソロを春樹は吹いてみせたのだ。

「オレもあのソロにはビビッたで。春やん、いつの間にそんな腕上げたんや？」

翔の言葉に春樹は「エヘヘ……」と頬を掻くだけ。

「その言葉、そのままそっくり翔に返すよ」

慎也が笑いながら言った。

「お前のソロも、化け物並じゃん」

「化け物やと！？　失礼な。天使のような音色と言え」

大笑いが起きるが、それもあながちウソではない表現だと翔以外の3人は思った。

『海の男たちの歌』。この曲には中盤、ゆったりとしたオーボエのソロがある。風見台高校ではより優雅さを出すためにサックスの1年生にソロを吹かせる予定にしたのだ。ところが、その1年生が風邪でダウン。まったく吹いたことのない修平と翔平はどうにもこうにも、音色の出し方も一夜漬けではムリだとブルブル首を横に振った。

そこで翔平が思い出したのは、彼が中学2年生のときの南大阪市立淀南中学校での定期演奏会だった。翔は1年生にして、この『海の男たちの歌』でソロを吹き上げたのだ。当時、オーボエがいなかった淀南中では、このソロをサックスで吹き替えたのだ。

そのような経緯があり、翔は今回呼び出されたというわけだ。

「しっかし、いいのかねぇ。俺たちが厚かましくソロなんて吹いて……」

慎也が心配そうに呟いた。

「ホントそれだよ。だって、風見台高校の人たちの演奏会でしょ？　俺たちの演奏会じゃないし……」

春樹も心配顔だ。それは拓真、翔も同じ気持ちだった。特に、風邪で休まざるを得なくなった部員たちのことを考えると、辛いものがある。

「その点は心配いらへんで～」

そう言って姿を現したのは、部長を務めている翔平だった。

「ショー先輩！　お疲れ様でーす！」
「おー、お疲れ！　ゴメンなぁ、水谷くん、川崎くん、本堂くん。急に無理なお願いしちゃって」
「いえ！　俺たちなんかで本当に良かったんですかね？」
慎也が心配そうに聞く。
「ホントホント。ぶっちゃけ、俺はチューバに関しては俺なんかより、竹林くんのほうが良かったと思うんだけど……」
「あぁ、初めは本堂くんと竹林くん二人に応援頼んでたんやけど。な、翔」
翔はウン、とうなずいてから続けた。
「ほら、泰徳、上手いやろ普通に」
「うん」
「やから、結構あちゃこちゃから引っ張りだこで、予定合わんかってな。今回は残念やけど、パスする言うてたんや」
春樹が食いついてきた。
「ねぇ、前から聞きたかったんだけど、竹林くんってプロなの？」
「セミプロやな。まぁ、半分以上はプロと同等と思っておいていいんちゃうか？」
「ふうーん……！」
翔の答えに春樹の目がキラキラと輝いている。
「まぁ、来年でよかったら彼にも出てもらおうかな」
「絶対ギャラ高いで」
「おいおい、それ聞いたら彼、怒るぞ」
ドッと笑い合う5人。

「フェックシ！」
泰徳が突然クシャミをしたので、隣にいた未来が驚いて小さく悲鳴をあげた。
「ちょっと～。大丈夫なの？　風邪とか引いてない？」
「いや……なんとなく、違う気がする」

泰徳は苦笑いした。このクシャミはなんとなく、神奈川県のあたりで噂をされていそうな気がしたのだ。
「変な話してねぇだろうな……」
「何が？」
「いや！　独り言！」
泰徳はへへッと笑って再び楽器を構えた。

「そういえばさ、泰徳くんトコの演奏会とか、やってないのかな？」
「うーん……？　どないやろ」
「俺たちの定演の話もあるし、参考になりそうじゃないか？　常套中学校も有名みたいだし」
「そやなぁ。また、聞いとくわ」
翔がいい返事をしたので、慎也たちもワクワク感を隠せずにいる。
「あ、そろそろリハ再開やで！　４人とも、昼からもヨロシク！」
「はい！」
翔平が意気揚々と部屋を出る。
「ほんじゃま、オレらも行きますか！」
「オウ！」
４人は楽器と楽譜を準備し、再び舞台へと向かう。通路を通り、階段を上がるとすぐに舞台裏へと到着する。
「やっぱスゲェな……」
拓真はコンクールでも来た場所へ、自分たちの演奏会ではないが、ひとつの学校の吹奏楽部が単独で、このホールを使って演奏会を開催するということに、強い感動を覚えているようだった。
「俺たちもこんな風に演奏会、できるといいな」
慎也がニコニコ笑いながら春樹、拓真、翔に言った。
「できるといいなやなくって、絶対実現やで？」
「……そうだな！」
直後、ホールスタッフから指示が入る。
「それでは、先ほど指示しましたように舞台下手のほうから順番に

入ってもらいます。間接照明は点いていますが、それほど明るいものではありません。皆さん自身の転倒はもちろん、譜面台、椅子等の転倒も危険に繋がりますので、足元には十分注意してください。ないとは思いますが、クラリネットさんは舞台から客席への転落などないように」

「はい！」

入場の練習をいくらか繰り返した後、いよいよ本番どおりのリハーサルが始まった。曲のリハーサルに重きを置くとはいえ、やはり通すのがメインとなる。細部までは練習する時間を取れないのが正直なところだ。

翔、春樹のソロもアッサリと流れていく。けれども、本人たちの気づかないところで密かに風見台の部員たちは衝撃を受けていた。

一度吹いたことがあるので、と言っている春樹だが、いきなりビヴラートを効かせてソロを吹かれたのでは、他の面々が呆気に取られるのも無理はない。

第1部のリハーサル終了後、翔たち七海高校の面々は風見台の生徒たちに囲まれていた。どうすればそんな風になるのか、どんな練習をしているのか、など質問攻めに合っていた。翔は「初見練習を何回もしてるだけですけど……」と戸惑いながら答えている。

その様子を遠巻きに、章義と見ている中年の男性がいた。

「兵藤先生……彼は、風見台の子か？」

「いいえ。今日、急遽客演として来てもらった子ですよ。どうかなさいましたか？」

「いや……」

男性はしばらく翔たちのほうを見て、深くうなずいた。

「ねぇねぇ！　知ってる子が演奏会に出るって、ドキドキするねー！」

美里がテンションを上げて騒いでいる。陽乃と絵美が隣で「シーッ！　目立ちすぎてる！」と慌てている。

「そんなこと言って～……。あたし、知ってるよ？」
美里が陽乃と絵美の間に割って入った。
「な、何がよ」
陽乃が苦笑いして聞き返す。
「んもぅ！　ワザとらしいな。二人とも、彼氏が演奏する姿、お客さんとして見れて嬉しいんでしょー？」
「……。」
絵美と陽乃の顔が真っ赤になる。どうやら、図星だったようだ。
ブーッ、とブザーが鳴る。
「きゃっ！　始まる！　ねーみんなぁ！　始まるよぉ！」
美里の一声で、来ていた部員たちが慌てて入場手続きを済ませた。
今日の演奏会は都合が合わなかった恵梨、優輝、沙希以外の全員が来ている。
（翔の演奏……お客さんとして聴くの、久しぶりだなぁ）
陽乃は胸を躍らせながら、客席へと向かう。
一方の翔たちは、舞台袖で震えていた。緊張と興奮が入り混じって、何とも表現しがたい気持ちが渦巻いている。
「翔」
拓真が声をかけてきた。
「うん？」
「頑張ろうな」
「……おう！」
笑顔で答える翔。その表情には少しの不安と、たくさんの自信が浮かんでいた。

第２６７話　夢と感動を

いよいよ風見台高等学校吹奏楽部の春の定期演奏会が幕を開けた。３年生が卒業してから初めてとなる定期演奏会。今回翔平は特別に参加しているものの、ほとんどのパートは１、２年生のみで構成されている。

第１部幕開けの曲はロバート・Ｗ・スミス作曲の『海の男たちの歌』。勇壮な曲調と、美麗な曲調が入り交ざった、興味深い曲だ。

波を思わせる音が打楽器のほうから響いてくる。

（あんな楽器あるんだ……）

美里が目を丸くしてそちらのほうを見ている。一方の陽乃は、トランペットとホルンのソロに耳を傾けていた。もしも七海高校で演奏すればきっと、雪子と自分が吹くのだろうなと考えると、とても楽しかった。

音量が一気に増して、迫力ある冒頭部分が奏でられる。ティンパニの激しい音と、ホルンの力強いメロディ。金管楽器は全力で音を出しているという感じがヒシヒシと伝わってきた。

テンポがアップする。そして始まったのは、それまでとは雰囲気を画する勇壮なメロディ。吹いているのはサックスやクラリネット、フルートの木管楽器。どちらかといえば舞台に近いところに座っていた七海高校の部員たちには、翔、修平、翔平の３人がとても鮮やかな指の動きをしているのがハッキリと見えていた。

下降系の音が聞こえ、トランペットのメロディ、フルートの細かい動きなどいろんな動きが複雑に混じり、自分たちが吹いたらこんがらがりそうな状態だった。それが収まると、トロンボーンの音がハッキリと聞こえた。

そして再び同じメロディが流れる。ユーフォの春樹と風見台高校の２人がサックスに負けじと軽やかな指の動きを見せる。

（すっげ！）

智志が感激したのは、トランペットや木管楽器と同じ動きをチューバがしているところだった。トゥッティと呼ばれる、全部のパートが同じ動きをしているところである。そして下降系の音が聞こえ、一気に曲の音量が下がる。そして始まるユーフォのソロ。時々鳴り響くクラベスの音。そして冒頭と同じ波の音。やがて、ユーフォのソロを受け継ぐようにして、その音が聞こえてきた。

（うわぁ……！）

陽乃の目がキラキラ輝く。

それは紛れもない、翔の音だった。一瞬、どの楽器の音も聞こえなくなり、翔の音だけが響き渡る。

（ちょ……せ、先輩……カッコよすぎる……！）

はるか、麻綾、さゆりの3人がギュウッと手を握り締め、そのソロに聞き惚れていた。

はじめ、翔はこのソロを吹く時、かなり拒んだ。修平か翔平が吹けばいいと何度も断ったのだが、二人が頑なに翔に吹いてほしいというので、最終的に翔が折れる形になったのだ。

二人は知っていたのだ。翔にこうした、ゆったりと厚みのあるメロディを吹かせれば秀逸であることを。現に、このホールにいた観客全員が翔の音色に、呆然とした感じでその音色が奏でられる方を見て、しかし耳を澄ませていた。これは、鯨の歌と呼ばれる部分で、船乗りたちの疲れを癒すような、そんなイメージで描かれた部分である。

中学生の時、翔はこのメロディを吹くに当たって、真剣に吹き方を研究していた。ビヴラートの利かせ方。あまり嫌らしい雰囲気になっては台無しだが、ノンベンダラリと吹いてはもっと雰囲気が損なわれる。

翔は陽乃にも言ったことがないのだが、曲の一つ一つの部分に物語を作っている。この部分はこのようなイメージで、こんな人物がこんな場所にいて……というような具合に。海の男たちの歌の場合、

自分とそれほど年の変わらない少年が、船の甲板で夜空を見上げ、鯨の歌を聞いてうたた寝をしている……。そんな場面を思い浮かべていた。

この手法を翔は、拓真、慎也、春樹にも実は伝えていた。今回の演奏会でこの手法を実践して、もしも合いそうであれば、七海高校で使う一つの方法にしようと考えているのだ。もちろん、観客にそれがしっかりと伝わるかどうかはわからない。けれども、自分の信念を持って演奏することにより、形は様々であれ、観客に何か伝わることがあるだろう。翔はそう信じて、中学生の頃からこの方法を続けている。

翔のソロにすっかり聞き惚れた陽乃、沙希、由美子の3人はその後の曲の後半部分をあまりハッキリ覚えていない。あまりに翔の音色が自分たちの普段耳にしている音とは思えなかったので、一種衝撃を受けたような状況だった。

「陽ちゃん、シッカリ！　ほら、演奏会の流れとかメモするんでしょ！？」

『海の男たちの歌』が終わった途端、絵美に陽乃は肩を叩かれて思い出した。今日はただ、演奏を聴きに来ただけではなかったのだ。

（そうだった！）

陽乃は慌ててメモを用意する。入場の仕方は、舞台袖から舞台に向かって右に座る、チューバと弦バスから入場。司会なしで、曲にすぐ入る。そして、1曲目の後にその曲の紹介も含めて、司会者が挨拶。その後、2曲目の紹介をする。陽乃は軽くだが一連の流れをメモしていく。

（2曲目ってなんだっけ）

陽乃はプログラムを開いた。

（吹奏楽のための第一組曲？）

曲目紹介を見てみると、吹奏楽経験者なら一度はいつか吹く曲だと紹介されている。

（あたし、まだ吹いたことないや……）

陽乃は少し悔しかった。翔、春樹、慎也、拓真の４人は自分たちよりも先に、吹奏楽経験者なら吹く曲を吹くチャンスに恵まれたのだ。

司会者が曲の紹介をした後、スッと章義が指揮棒を上げた。楽器を構えたのはユーフォ、チューバ、弦バスのみ。

（え？　伴奏だけ？）

失礼ながら、由美子と絵美はそう思ってしまった。チューバと弦バスとくれば、伴奏というイメージしかないのだ。

（ってことは、ユーフォのソロか……）

隣で美里が同じコトを考えていた。しかし、今回いるユーフォ奏者全員が楽器を構えている。

（全員でソロ？　そんな変な話ないよね）

２年生女子全員がハテナマークを頭に浮かばせていた。指揮棒が降りると、やわらかく、しかし幅の広い音がホールを包み込んだ。そう、この曲の第一楽章「シャコンヌ」は低音楽器を基調とする、同じメロディの繰り返しが行われる曲なのだ。

チューバ、弦バス、ユーフォの奏でたメロディがトロンボーンへと引き継がれる。いとも簡単に吹いているように見えるが、息を吸う場所が限られてくることに加えて奏者も限られているので、かなり息を保って吹かなければならないため、案外大変な曲なのだ。そしてバスーンと弦バスが再びメロディを引き継ぎ、再度チューバ、ユーフォがメロディを吹く。木管と金管の打ち込みが入り、曲はどんどん盛り上がっていく。スネアが入った頃にはメロディラインがトロンボーン、チューバ、ユーフォ、弦バス、バリトンサックス、ティンパニなど低音楽器中心となっていた。

八分音符になってもメロディの形は崩れない。その八分音符の部分が終わると、メロディはようやくトランペットへと変わった。しかし、低音楽器はやはり休む暇がない。

（ハイベーだ！）

愛実、智志、亮平の３人の目が明らかに変わった。拓真はサラリ

とハイベーを吹いて見せたのだ。
曲の音量が下がり、クラリネットとホルンのメロディと裏メロディの掛け合いになる。それが終わるとアルトサックス、フルート、オーボエのソロ合戦のような形式になった。修平の音が、翔とは違う温かさを持って響いてく。
（やっぱコイツの音……安心して聞けるなぁ）
翔はやわらかい笑顔で修平の音を聞いていた。久しぶりに聞く、中学時代の同士の音はやはり、高校生になっても変わらないままだった。
転調して短調になっても、シャコンヌの形は崩れない。そして再度長調へ転調し、曲は終局へ向けて音量、迫力共に増して行く。クレシェンドをして、遂に曲が終局へと差し掛かった。チューバなどの低音のメロディ、トランペットや木管の副旋律。どれもがうまく混ざり、荘厳な雰囲気を醸し出す。
トロンボーンのメロディが始まる。慎也は目いっぱい息を吸ってこの部分に全力を尽くした。音がそれだけキツい部分なのだが、なるべくそれを見せないように吹き上げた。
思わず拍手をしそうになったが、この曲は三楽章あることに気づいて陽乃は何とか手を止めた。
二楽章はえらくアッサリと始まった。オーボエとミュートをつけたトランペットのメロディに、クラリネットの刻み伴奏。しかし、陽乃にもシャコンヌでの形式が崩れていないことはわかった。主題はずっと引き継がれている。それがこの「吹奏楽のための第一組曲」の特徴だった。
短調の雰囲気なので、少し重々しい感じがしなくもない。そして、チューバなどの伴奏が始まってクレシェンドがかかるにしたがって、重さも増して行く気がした。
クラッシュシンバルの音と共に、再び音量が落ちる。なんだか不思議な構成の曲に、陽乃たちは新鮮さを感じていた。
（バリサクのメロディだ～！　低音のメロディ最高！）

はるかがウットリしている間に、曲の雰囲気が変わる。
（来たー！）
優輝とみゆき、梨子、光瑠、駿の5人が明らかにソワソワしていた。そう。クラリネットのソロが始まるのだ。
（すげぇ！）
優輝は厚みのある音にひたすら、感動していた。一方の駿は駿で、一瞬だがあるバスクラのソロに胸を躍らせていた。フルートが加わり、ますます曲の切ないような雰囲気が強くなっていく。
（哀しみと愛情を込めたような音）
春樹の楽譜には、そう書かれていた。トランペットとユーフォのソロがあるのだ。
「え……？」
陽乃は思わず声を上げた。
「これ……ホント？」
愛実も呆然としている。
「マジですか……！」
七海高校の部員たちは小声だが、驚きを声にせずにはいられなかった。トランペットは風見台の生徒だが、ユーフォはそう、他でもない春樹が吹いていたのだ。
気持ちのこもった、切なく、それでいて芯のある強い音。毎日といっても良いほど聴いている、春樹の音とは思えない音がホール内を包み込んだ。
春樹は自然と体が揺れていた。感情を込めて吹くと自然と奏者は体が動くことがある。春樹は今までそうした感覚に陥ったことがなかったが、この時ばかりは自然と体が動いていたのだ。
（春やん……ヤバすぎ）
翔は鳥肌を立てていた。まさか、ここまで優美なソロを春樹が吹くとは思っていなかったのだ。それは修平、翔平も。拓真も慎也も。恭一も章義も同じ気持ちだった。七海高校の部員たちも、何か春樹の音色は普段とオーラが違うように感じていた。

（ふぅ……）
ソロを吹き終えた春樹はまさか、周りのほとんどが自分の音色に驚きを覚えていることなど、知る由もなかったのだった。

定演終了後。
翔たちは七海高校のメンバーと合流し、恭一の挨拶を聞き終えて解散となった。
「陽乃～！　帰ろう！」
「うん！」
陽乃と翔は「んじゃ、また明日！」と部員たちに別れを告げ、自転車に跨った。
「今日の翔さぁ」
「うーん？」
陽乃は少し恥ずかしかったが、言った。
「すっごいカッコ良かった」
「……な、なんやねん急に！　照れるやんけぇ！」
「ホ、ホントなんだから！」
「うん！　ありがと～」
翔は嬉しそうに笑った。陽乃もその笑顔を見ているとホッとする。
「どないやった？　演奏会、参考になったか？」
「うん！　すっごい。見てよ！　これ！」
陽乃はノート１０ページ分のメモを見せた。
「スゲェやん！　バリバリやな！」
「うん！　皆で早く、定期演奏会の話を具体的に進めたいね！」
「せやな！」
津上橋を渡ったところで、翔といつものように別れる陽乃。
「ほな、また明日やな！」
「うん……」
「？」
翔は少し俯き加減の陽乃に疑問を覚えた。

「どないしてん？」
「なんか……今日の演奏会で、翔とか慎ちゃんに拓あん、春やん見てるとさ……なんか、あたしたちだけ置いてけぼりになってるっていうか……４人だけ、翼広げてどっか、あたしたちとは遠くに行っちゃったような気がして……」
「……。」
「……ゴメン！　なんか、変な話……」
「わかるよ」
翔は優しく笑って言った。
「でもな、それは舞台に立ってる人はみんな、そう見えるだけ。家帰ったら、夏樹くんにでも聞いてみぃ。きっと、夏樹くんも陽乃のこと、客席から見たら遠い存在に見えるって言うと思うで？」
「そ、そうかな……」
「うん」
翔が優しく陽乃の頭を撫でた。
「……ありがと。なんか、ちょっと安心した」
「良かった」
「それじゃ、また明日」
「うん。おやすみ」
翔は何度も陽乃の方を振り返って大きく手を振ってくれた。
翔が見えなくなってから、陽乃はゆっくり家へ向かって歩き出した。第一部が終わって、章義の指示で立ち上がったときの翔、慎也、春樹、拓真の爽快な表情（かお）が陽乃の目に焼きついて離れない。
「あたしたちも……定期演奏会したら、あんな表情（かお）になるといいな！」
陽乃は自転車をこぎながら、そう思っていた。

第２６８話　笑顔が返り咲く

「おはようございまーす」
４月４日水曜日。５日後に始業式と入学式を控えた七海高校はにわかに慌しい雰囲気を醸し出していた。特に教職員のほうは新しい学年やクラス、授業に対応するためにかなりバタバタしているようだった。
翔たち吹奏楽部も、その忙しさの波に若干飲まれていた。入学式で入場及び退場の時の曲、国歌、校歌を演奏することになっているのだ。入場時にはヤン・ヴァン・デル・ロースト作曲の『アルセナール』を、退場時には松浦伸吾作曲『ベスト・フレンド』を演奏する。
「公の式典で演奏するのって、なかなかないから緊張するよね。ましてや、入学式は私たち、初めてだし」
絵美が楽器を置いて優輝に話しかけた。
「そうですね～。俺も中学では入学式と卒業式で演奏しましたけど、やっぱりなんか、コンクールとは違う重々しい雰囲気があるっていうか……」
「でもある意味、他の部よりも先にあたしたちの部をアピールできますよね！」
光瑠が嬉しそうに話に加わった。
「あ！　そういう考え方もあるのか～。やっぱり、変な演奏できないなぁ」
「だったら」
駿が笑顔で３人の輪に加わる。
「話してる暇あったら練習しましょう！」
「はーい」
３人は照れ笑いをしながら、再び楽器を構えた。

一方のホルンは順平一人だけ。『マーチ・ベスト・フレンド』の後打ち部分をメトロノームに合わせて熱心に練習している。他のパートはそれなりに人数がいるので、後輩たちが来ても十分に対応できるが、自分は一人しかいないためどのようにホルンをアピールすれば良いか、どんな風に対応すれば良いか少し戸惑っていた。

それに、自分の目つきが実は気になっていた。怖いという印象を与えてしまう、損な感じも目つきが自分ではあまり好きではない。中学の時、睨んでもいないのに睨んだと因縁を3年生につけられ、ケンカ沙汰になったこともあった。恐らく、後輩が入ってきても最初はそういう風に思われる可能性のほうが高いと思っていた。

「なーんで先輩、転校しちゃうんだよ」

順平は大阪へ転校した雪子のことを思っていた。初心者だと言っていた雪子だが、順平と同じくらいか少し上くらいの実力を持っているので、3年生に上がって後輩たちを入れる時に、雪子の例は大きな力になると思っていただけに、彼女の転校は順平にとって痛手だった。

「今年、ホルン一人だったらやっべーなぁ……」

「失礼～」

急にドアが開いて人が入ってきたので順平は驚いてそっちのほうを見た。

「あ、ビックリさせちった？　ゴメンゴメン」

「サトじゃん」

智志だった。

「どうしたんだよ。珍しい」

「いや、ちょっと二人で練習しない？」

「何でまた。珍しいな、ホントに」

「いや、拓真先輩と春樹先輩は仮入部期間中のプチコンサートの企画練ってて、加藤はテナーサックスと同じ動きが多いから西嶋と練習してて、みーやんは今日ちょっと遅れて来るって言うから、俺一人なんだよ。だから、前打ちと後打ちで練習しようかなって思って

さ」
「あぁ、そうなんだ」
「いい？」
「ダメっつったらどうする？」
「泣く」
智志が笑いながら言った。
「お前でも泣くことあんのかよ」
「失礼なヤツだなぁ。俺だって泣くよ？」
「へぇ？　どんな時に？」
順平は智志の分の椅子を用意しながら聞いた。智志はチューバを教卓の横に丁寧に置いてからその質問に答える。
「最近だと……なんだろ。あぁ、入部していいって結果が出たとき」
「え？　ウチに？」
「うん」
「そんなに嬉しかったのか？」
智志は楽譜を譜面台に載せてから続けた。
「だって、俺不良じゃん？　なんか、いつからかわかんないけど……あんなになっちゃって。なんか、反抗期だったのかな。今だったらバカじゃねーのコイツって思うけど。なんか、自分を認めてもらいたかったのかも」
「……。」
「それを最初に認めてくれたのが、吹奏楽部だったと思うし。実際、反対喰らったからやっぱりどこでも一緒かって思ったけど。うーちゃんとか含めて……俺のこと、受け入れてくれたのは本当に嬉しかったんだ」
順平はふと、智志のことを過去の自分に重ね合わせていた。昔、自分も目つきが悪いことで睨んでいるなどと因縁をつけられ、その噂が過度に広まってクラスで孤立しかけたことがあった。そんな状態を打ち消してくれた当時のクラスメイトのことを思い出した。受け入れてくれる人がいるというのは、大きい心の支えになる。

「なぁ」
順平は智志に聞いた。
「うん？」
「俺って、怖いと思う？」
「何、突然」
智志はクスッと笑った。
「いや……その、素の表情って俺、怖い？」
「……。」
智志は真顔をしている順平をしばらく見つめた。
「率直に言っていい？」
「う、うん」
「怖い」
ガン！と殴られたような衝撃が順平の全身を駆け抜けた。
「でもさ、真顔って誰でもそういう無愛想な感じに見えるもんだぜ？　ほら、俺だって」
そう言って真顔になる智志。確かにあまり良い印象には見えなかった。
「だから！　俺は最近、笑顔でいること心がけてんだ。そうしたら、まぁ、年下の子でも新しい環境のところへ来たって、安心してその場に馴染めるだろ？」
「……そっか」
「だから、まずは笑顔だな！」
順平は簡単だが大切なことを教えてもらった気がした。
「ありがと。サト」
智志が少し赤くなった。
「面と向かって礼言われると、なんかハズいよな」
二人はアハハッと笑い合ってから、楽器を構えて前打ちと後打ちの練習を始めるのだった。
その頃、職員室に呼ばれた翔と陽乃は手紙を渡されていた。

「先生。なんですか、この手紙」
陽乃が首を傾げながら恭一に聞く。
「まぁ。開けてみろ」
「オレへのラブレターやったりして」
「バッカじゃないの。ほら、早く開けてよ」
「へいへい」
翔が封を切ると、写真が落ちてきた。
「もう！　することがガサツなんだから」
「うるさいやっちゃなぁ。小姑か！」
「なんですって！？」
「いいから。ほら、写真見てみろ」
「ん？　誰、これ？」
陽乃は見覚えのない中学生くらいの子たちが映っているのにまた首をかしげた。
「翔の知り合い？」
「いや……。お前は？」
「あたしでもないよ。中学生に知り合いは今のところいないし」
「あぁ、ムリもないだろう。直接会ってはないんだからな。差出人見てみろ」
翔が封筒を裏返すと、そこには見覚えのある字が書かれていた。

石川県古氷町立古氷中学校　吹奏楽部部長　石尾　拓也。

「うお！　石尾くんや！」
「え？　あの石川の？」
「そう！」
「返事来たんだ！　写真、写真！」
陽乃が写真を見ると、１５人の部員全員が映っていた。
「どれが石尾くんだろう？」
「あ。写真の位置と合う名簿一緒に入れておきますやって」

「どれどれ？」
陽乃と翔は一緒にくっついて、名簿と写真を照らし合わせる。
「お！　この子や！」
爽やかな笑顔を浮かべる少年。学ランがよく似合う。
「ちょっと……中学生にしてこの雰囲気はカッコよすぎじゃない？　この石尾くんって子」
「アカンわ……。オレ、中学の時こんなカッコよくなかった」
「今も別に変わんないけどね」
「なんやと！？」
「はいはい！　いいから、その手紙読んでみろ」
恭一が呆れた声を出して手紙を差し出した。

神奈川県七海市立七海高等学校吹奏楽部　部長　佐野　翔様

初めまして。石川県古氷町立古氷中学校吹奏楽部部長の、石尾拓也といいます。今回は楽器をゆずってもらって、ありがとうございました。ケガをした部員もいましたが、今はもうすっかり元気です。
今回の地震は本当にビックリしたけど、皆さんからいろいろ応援してもらって、石川県もどんどん復こうしています。
僕は今年、部長をすることになりました。佐野さんも部長をされているということで、僕が困った時にまたお手紙送らせてもらうかもしれません。嫌かもしれませんが、お返事くださったら嬉しいです。
何を書いたら良いのか困ってきました。
あ。そうだ。
一度、いつか佐野さんや朝倉さんとお会いしたいです。僕たちはまだ中学生で、神奈川県まで自分たちで行けるとはとても思えないですけど、いつか会いたいです。
本当にありがとうございました。

「綺麗な字だね」
「お前よりしっかりしてそうやん」
「何よ！　バーカ！」
「はいはい。ケンカはそのあたりまでしておいて、皆にも報告してこい。それから、先生夕方４時ごろには落ち着くから、合奏の用意しておけ」
「はい！」
「失礼しました」
陽乃と翔が職員室を出てからも言い合いをしているのが聞こえた。
「相変わらず、元気ですねぇあの子たちは」
新井田がクスクス笑う。
「まったく毎日あの調子ですからね。まぁ、僕らが若いときもきっとあんな風に当時の先生たちには映っていたんでしょうね」
「ずいぶん年寄り臭いこといいますね、東先生」
恭一は新井田にクスクスと笑われて、少し恥ずかしくなった。

コラム11☆楽曲データ（2）

【楽曲データ　２００６年度下期～２００７年度直前】

＜第１３７話＞
♪夏祭り＝Ｍ８。
♪Ｈａｐｐｙ　Ｄａｙｓ＝ブラバンエイベックスに収録。
♪ジャパニーズグラフィティー５＝ＮＳＢ１９９９に収録。

＜第１４６話＞
♪情熱大陸＝演奏団体不明のバージョンです。申し訳ありません。

＜第１６５話＞
♪王様のレストラン＝ＩＮ　吹奏楽　テレビドラマ編に収録。
♪アニメメドレー＝ＮＳＢ１９９９に収録。
♪ユーロビート・ディズニーメドレー＝ＮＳＢ２００１に収録。
♪アメリカン・グラフィティー＝ＮＳＢ１９８９に収録。
♪創聖のアクエリオン＝Ｍ８

＜第１７７話＞
♪エアーズ＝２００４年度全日本吹奏楽コンクール課題曲。

＜第１８０話＞
♪タンツィ～３つのロシア舞曲～＝オリジナル曲。
♪高貴なるぶどう酒を讃えて＝アンサンブル曲。
♪木星＝クラシックアレンジ曲。

＜第１８３話＞
♪パクス・ロマーナ＝２００５年度全日本吹奏楽コンクール課題曲。

＜第１８４話＞
♪伝説のアイルランド＝オリジナル曲。必勝コンクール！収録。
♪星の船＝オリジナル曲。響宴　Ⅵ　２１世紀の吹奏楽収録。
♪風雅　Ｆｕｇａ＝オリジナル曲。必勝コンクール！収録。

＜第１８５話＞
♪シング・シング・シング＝ＮＳＢスペシャルに収録。

＜第２００話＞
♪ＧＲより～明日への希望～＝オリジナル曲。「ＧＲ」よりシンフォニック・セレクション収録。
♪花～すべての人の心に花を～＝「ＧＲ」よりシンフォニック・セレクション収録。

＜第２１２話＞
♪ピッコロマーチ／コンサートマーチ「光と風の通り道」／憧れの街／マーチ「ブルースカイ」＝全４曲、２００７年度全日本吹奏楽コンクール課題曲。

＜第２１４話＞
♪大地と水と火と空の歌＝オリジナル曲。
♪エル・カミーノ・レアル＝オリジナル曲。
♪リクディム～４つのイスラエル舞曲～＝オリジナル曲。
♪吹奏楽のための抒情詩「秋風の訴え」＝オリジナル曲。交響組曲第７番『ＢＲ』よりに収録。
♪吹奏楽のための第一組＝オリジナル曲。

＜第２２９話＞
♪天空への挑戦＝オリジナル曲。

♪スパイス・ガールズのヒットナンバー＝ＮＳＢ１９９８収録。

＜第２３０話＞

♪Ｔｈｅ　７ｔｈ　Ｎｉｇｈｔ　ｏｆ　Ｊｕｌｙ＝オリジナル曲。

♪アメリカン・グラフティ６＝ＮＳＢ１９９４収録。

＜第２３７話＞

♪ｍｙ　ｇｒａｄｕａｔｉｏｎ／未来へ／旅立ちの日に／ｓｅｃｒｅｔ　ｂａｓｅ　～君がくれたもの～』＝「ｍｙ　ｇｒａｄｕａｔｉｏｎ」と「未来へ」はミュージックエイトです。他の2曲はあくまでイメージとして描いたため、実際に楽譜があるかどうかは確認できませんでした。

＜第２４４話＞

♪イーストコーストの風景＝オリジナル曲。

♪教会のステンドグラス＝クラシック・アレンジ曲。

＜第２６０話＞

♪タイタニック幻想曲＝ホルンアンサンブル曲。

＜第２６７話＞

♪海の男たちの歌＝オリジナル曲。Ｔｏｋｅ　Ｃｉｖｉｃ　Ｗｉｎｄ　Ｏｒｃｈｅｓｔｒａ　Ｖｏｌ．３　Ｓｏｎｇｓ　Ｏｆ　Ｓａｉｌｏｒ　Ａｎｄ　Ｓｅａに収録。

主な登場人物（新1年生入学後／吹奏楽部員）

※！！ネタバレ注意！！※

♪　第３７０話現在　♪

＜※注※＞

［２０］＝年齢を示しています。

＜主要人物＞

☆朝倉（あさくら）　陽乃（ひなの）

＞ｉ９６３１―１５０＜

七海市立七海高等学校３年Ｆ組。吹奏楽部に所属。トランペット担当。明るく活動的な性格で何でも興味関心を抱く。翔と現在交際中。翔は彼女の中では欠かせない存在になっており、翔の過去もすべて受け入れた上で、交際をしている。直情的な性格でもあるので、それがプラスにもマイナスにも作用する。

一人称：あたし　あだ名：朝ちゃん♪朝倉♪陽ちゃん♪朝倉さん

進路希望：島根大学法文学部

☆佐野（さの）　翔（かける）

＞ｉ９６３０―１５０＜

七海市立七海高等学校３年Ｈ組。大阪から高校進学時に引っ越してきた。小学校４年生からアルトサクソフォンを吹いている。現在は

吹奏楽部の部長として日々活動に励んでいる。明るく正義感の強い性格。陽乃と交際中。幼少期、阪神淡路大震災において家族を亡くしている。そのため、佐野家には養子として引き取られた。
一人称：オレ　あだ名：佐野♪佐野くん♪翔♪カケぼー（一人だけ）
進路希望：島根大学教育学部（学校教育？一音楽）

＜七海市立七海高校吹奏楽部＞
♪＝３年生　☆＝２年生　★＝１年生

【Ｆｌｕｔｅ（フルート）】
♪大谷（おおたに）　沙希（さき）　クラス：３年Ｆ組
＞ｉ９６３２―１５０＜
実はお嬢様。ハワイに旅行に行ったりマイフルートを持っていたりする。おとなしく冷静な性格で分析力に長けている。英語が得意で、現在留学生のマーガレットをホームステイさせている。野球部の相田　雄平と交際中。
一人称：私　あだ名：沙希ちゃん♪大谷さん♪サキティ　家族構成：父＝大谷俊次（おおたにしゅんじ）・母＝大谷智佐子（おおたにちさこ）・弟＝大谷洋輔（おおたにようすけ）・妹＝大谷稚依（おおたにちい）
進路希望：中央大学商学部

♪宮部由美子（みやべゆみこ）　クラス：３年Ｆ組
＞ｉ９６３９―１５０＜
沙希に憧れてフルートを吹き始める。純粋な性格で、誰とでもすぐに仲良くなれる。少々天然ボケなところあり。現在、亮平と交際中。
一人称：あたし　あだ名：由美子♪由美ちゃん♪宮部さん　家族構成：父・母
進路希望：法政大学文学部心理学科

☆井上（いのうえ）　佳菜（かな）　クラス：２年Ｄ組
＞ｉ９６４２―１５０＜
葉島中学校出身。中学時代は楽器は市の少年少女吹奏楽団で吹いていた。小柄でおとなしい女の子。ピッコロも兼任。
あだ名：佳菜ちゃん♪かな

★安藤（あんどう）　稚沙希（ちさき）　クラス：１年Ｆ組
＞ｉ９６６６―１５０＜
袴田中学校出身。温厚な性格で、テンション高めの３年生にややついていけていない。フルートの技術は高いが、ソロになると緊張して音が震えてしまう。
あだ名：ちーちゃん♪あんち

【Ｏｂｏｅ（オーボエ）】
☆野村健之佑（のむらけんのすけ）　クラス：２年Ｇ組
＞ｉ９６５７―１５０＜
袴田中学校出身。なで肩が特徴の背が高い男の子。笑うと歯が綺麗。ビヴラートがとても綺麗にかけられる。
あだ名：ノム♪ノムさん♪ケン

★歌川（うたがわ）　まゆ　クラス：１年Ｅ組
＞ｉ９６６８―１５０＜
袴田中学校出身。健之佑のことを中学校当時から尊敬しており、七海高校に進学したのはある意味、健之佑を追いかけたと言っても過言ではない。
あだ名：歌ちん♪まゆ

【Ｂａｓｓｏｏｎ（バスーン）】
☆戸口（とぐち）　誠（まこと）　クラス：２年Ｅ組
＞ｉ９６５２＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞１５０＜
大＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞おお＜／ｒｔ＞＜ｒｐ
＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞井戸（いど）中学校出身。坊主刈りでお寺の
息子。クラリネットの優輝以上に喋らない子だが、内に秘める熱さ
は誰にも負けない。
あだ名：まこっちゃん♪とぐ

☆志賀（しが）　慧太（けいた）　クラス：２年Ｇ組
＞ｉ１４８６９―１５０＜
大海中学校出身。バスーンは完全なる初心者だが、以前から吹奏楽
には関心を持っていたようで、翔たちが３年生に進級してから正式
入部。なかなか喋らない誠との関係性に少し戸惑いつつも、日々練
習に励んでいる。

【Ｅ♭（エス）Ｃｌａｒｉｎｅｔ（クラリネット）】
☆小林（こばやし）　梨子（りこ）　クラス：２年Ａ組
＞ｉ９６４９―１５０＜
袴田中学校出身。エスクラリネット一筋で中学を過ごしてきた。そ
のため、ベークラリネットは少し苦手。
あだ名：梨子♪りーちゃん

【Ｂ♭（ベー）Ｃｌａｒｉｎｅｔ（クラリネット）】
♪橋本（はしもと）　絵美（えみ）　クラス：３年Ｅ組

＞ｉ９６３６―１５０＜
クラリネットを中学生から吹きたかったので念願の楽器を吹けて嬉しく思っている。日々練習に励む真面目な女の子。気が強い一面もあり、慎也と口論をすることも。部のお母さん的存在でもある。現在、春樹と交際中。
一人称：私　あだ名：絵美ちゃん♪エミリン♪橋本さん　家族構成：父・母＝橋本清美（はしもときよみ）・兄＝橋本航太郎（はしもとこうたろう）・姉＝橋本真咲（はしもとまさき）
進路希望：昭和女子大学生活科学部管理栄養学科

☆伊原（いはら）　光瑠（ひかる）　クラス：２年Ｂ組
＞ｉ９６４３―１５０＜
袴田中学校出身。長髪のキレイな大和撫子のような女の子。雰囲気が絵美に似ている。現在は拓真のことが好きな様子。
あだ名：ヒカル♪

☆河内（こうち）　みゆき　クラス：２年Ｃ組
＞ｉ９６４８―１５０＜
南葉島中学校出身。シッカリ者でテキパキと動く頼れる後輩。
あだ名：みゆ♪みゆちゃん

☆瀬戸（せと）　優輝（ゆうき）　クラス：２年Ｆ組
＞ｉ９６５１―１５０＜
大井戸中学校出身。小学校からクラリネットを吹いている。クールで寡黙な少年。
あだ名：優輝♪瀬戸っち

★片岡（かたおか）　なぎさ　クラス：１年Ｂ組
＞ｉ１９６７１―１５０＜
葉島中学校出身。中学時代から親交のある夏樹に誘われる形で入部。クラリネットは完全な初心者だが、練習熱心で同じパートでかつ同じ中学出身、さらに同じ初心者である速水騎士と時間があれば練習する。
あだ名：なぎ♪なぎさ

★進藤（しんどう）　雄飛（ゆうひ）　クラス：１年Ｇ組
＞ｉ１９６７５―１５０＜
南葉島中学校出身。経験は中学校から。ジャズの曲が得意で、ジャズの時にソロを吹かせるとプロ並に吹ける（絵美談）。
あだ名：雄飛♪ゆう

★添田（そえだ）　麻衣子（まいこ）　クラス：１年Ａ組
＞ｉ１９６７７―１５０＜
袴田中学校出身。引っ込み思案な女の子で、個性的キャラが多すぎるクラリネットパートである意味、目立つ存在。
あだ名：そえちん♪まいまい

★速水（はやみ）　騎士（ないと）　クラス：１年Ａ組
＞ｉ１９６８２―１５０＜
葉島中学校出身。なぎさと同じく、中学時代から親交のある夏樹に誘われる形で入部。初心者だが、優輝曰く光るものがあるそう。なぎさと時間があれば練習している。
あだ名：ナイト

★堀江（ほりえ）　歩由美（あゆみ）　クラス：１年Ｆ組
＞ｉ１９６８４―１５０＜
南葉島中学校出身。経験は中学校からで、ベークラリネットとエスクラリネットの経験がある。アンサンブルが大好きで、このクラリネットメンバーでアンサンブルをしたいとしきりに言っている。少し言葉のキツいところがあるのが、玉に瑕（きず）。
あだ名：あゆみん

【Ａｌｔｏ（アルト）　Ｃｌａｒｉｎｅｔ（クラリネット）】
★毛利（もうり）　菰（すずな）　クラス：１年Ｄ組
＞ｉ１９６８７―１５０＜
大海中学校出身。翔に一度だけ、好意を抱いたことがある純粋な女の子。それが音色にも反映されるのか、音程の取りにくいアルトクラリネットを軽やかに吹きこなす。アルトクラがない場合、ベークラリネットを吹く。島根県桜田市に知り合いがいる。
あだ名：すず♪小五郎（名探偵コナンの毛利小五郎が由来）

【Ｂａｓｓ（バス）　Ｃｌａｒｉｎｅｔ（クラリネット）】
☆逢沢（あいざわ）　駿（しゅん）　クラス：２年Ｈ組
＞ｉ１９６４１―１５０＜
袴田中学校出身。リーダーシップを取るのがうまく、勤勉な典型的日本人タイプ。
あだ名：逢沢くん♪逢沢♪駿

【Ａｌｔｏ（アルト）　Ｓａｘｏｐｈｏｎｅ（サキソフォン）】
☆鈴木（すずき）　麻綾（まあや）　クラス：２年Ｉ組

＞ｉ９６５０―１５０＜
葉島中学校出身。小学校からサックスを吹いていて、中学は佳菜と同じ市の少年少女吹奏楽団に所属していた。温厚で滅多に怒ったりスネたりしない。
あだ名：まーや♪すず

☆中野（なかの）　さゆり　クラス：２年Ｂ組
＞ｉ９６５４―１５０＜
袴田中学校出身。中学３年になって急激に上手くなった期待のルーキーとして入部。何にでも熱くなる性格。島根県に同じ吹奏楽部に在籍する親戚がいる。
あだ名：さゆ♪サユリン

★朝倉（あさくら）　夏樹（なつき）　クラス：１年Ｄ組
＞ｉ９６６５―１５０＜
葉島中学校出身。陽乃の弟。サッカーをケガで中断し、アルトサックスを始め、今では２年生の二人に追いつきそうなほどにまで成長している。
あだ名：ナツ

【Ｔｅｎｏｒ（テナー）　Ｓａｘｏｐｈｏｎｅ（サキソフォン）】
☆西嶋（にしじま）はるか　クラス：２年Ｃ組
＞ｉ９６５５―１５０＜
袴田中学校出身。家がスナックをやっているので毎日と言っていいほどテナーサックスを吹いている。バスクラリネットの駿とは良いコンビ。虹西高校の浜田　望実とは偶然から知り合いになり、親交がある。

あだ名：はるか♪にっし～♪デカ女（1人だけ）

★工藤（くどう）　茉莉紗（まりさ）　クラス：1年E組
＞i96672―150＜
大海中学校出身。はるかに劣らぬくらい背が高く、一見クールビューティー。しかし、実はお笑い大好き吉本少女である。そのため、関西出身の翔は何かとツボになることが多いらしい。
あだ名：まりさ♪まり

【Baritone（バリトン）　Saxophone（サキソフォン）】
★前田（まえだ）　かのこ　クラス：1年？組
＞i96886―150＜
袴田中学校出身。食べ歩きが趣味の、ちょっと太めの女の子。けれどもサックスのセンスは抜群で、一応サックスはすべての種類が吹ける。ただ、伴奏系が好きなのでバリトン以外ほとんど手にしない。
あだ名：前ちゃん♪かのこ

【Trumpet（トランペット）】
☆久野（くの）　彩香（あやか）　クラス：2年C組
＞i96647―150＜
袴田中学校出身。お人形さんのようにかわいらしいと陽乃のお気に入りの後輩。実際、温厚で常に親切心を持って人と接することができる。
あだ名：彩香♪久野ちゃん♪あや

☆松尾（まつお）　勇（いさむ）　クラス：2年D組

＞ｉ９６６１―１５０＜
南葉島中学校出身の小柄な少年。吹奏楽に対するこだわりが強く、陽乃とも当初は衝突しがちだった。根は良い子。
あだ名：松尾くん♪イサム

★佐野（さの）　綾音（あやね）　クラス：１年Ｆ組
＞ｉ９６７４―１５０＜
葉島中学校出身。翔の弟。完全なる初心者で、経験者である藤咲流に何かと迷惑をかけていないか、心配する日々を過ごしている。
あだ名：綾音ちゃん♪あやねちん

★藤咲（ふじさき）　流（りゅう）　クラス：１年Ｄ組
＞ｉ９６８３―１５０＜
袴田中学校出身。かなり口下手なのだが、端正な顔立ちが災いして冷たい人という第一印象を抱かれることが多い。本当は心優しく、常に気遣いのできる少年。
あだ名：りゅ～♪ふじくん

【Ｈｏｒｎ（ホルン）】
♪永井（ながい）　雪子（ゆきこ）　クラス：（大阪へ転校）
＞ｉ９６３５―１５０＜
初対面ではなかなか自分を出せないタイプ。しかし、仲良くなるととても親しみやすい子。陽乃とは今では親友。何に対しても一途な性格。残念なことに、父親の転勤により大阪府南大阪市への転校。しかし、退部届けは出していないため、現在も吹奏楽部員扱いである。
一人称：私　あだ名：雪子♪雪ちゃん♪永井♪永井さん　家族構成：

父＝永井（ながい）　融（とおる）　母＝永井（ながい）ひとみ　妹＝永井（ながい）真沙美（まさみ）
進路希望：甲南大学文学部英語英文学科

☆右川（うがわ）　順平（じゅんぺい）　クラス：２年Ｂ組
＞ｉ９６４４―１５０＜
袴田中学校出身。目が細いので怖い印象を与えがちのおっちょこちょい少年。ホルンは小学校４年生から６年生の間も吹いていて音の芯がしっかりしている。
あだ名：ジュンペー♪うーちゃん

★緒方（おがた）　賢治（けんじ）　クラス：１年Ｃ組
＞ｉ９６７０―１５０＜
袴田中学校出身。順平の弟分のような存在で、雪子と順平を尊敬していたので七海高校に進学を決めた。雪子の転校に少なからずショックを受けていたが、彼女の代わりに頑張るという目標を見つけた。
あだ名：賢ちゃん♪賢治

★時任（ときとう）　裕子（ゆうこ）　クラス：１年Ｂ組
＞ｉ９６８０―１５０＜
南葉島中学校出身。自宅では今時珍しいボストンタイプのメガネをかけた、クールな少女。何かと賑やかなナナコウ吹奏楽部に戸惑いを覚えている。ちなみに、勉強の時以外はコンタクトをしているのでボストンタイプのメガネを見た人は皆無に等しい。
あだ名：ゆーこりん

★保田（やすだ）　杏（あんず）　クラス：１年？組

＞ｉ９６８８―１５０＜
北松中学校出身。初心者で、特に難しいホルンを選んだ。人数が必要なパートなので、特に期待をされているのだが、本人は至ってマイペース。
あだ名：あんこ♪あんず

【Ｔｒｏｍｂｏｎｅ（トロンボーン）】
♪川崎（かわさき）　慎也（しんや）　クラス：３年Ｅ組
＞ｉ９６３３―１５０＜
スライドが前後するのに心惹かれてトロンボーンを吹き始める。基本的にあまり喋らない子ではあったが、翔と仲良くなってからはずいぶんと口達者になった。向上心が強く、それが時として部員同士の口論の火種になることもしばしばある。しかし、基本的には部の雰囲気をプラスへ持って行くことが多く、３年生になってからはその傾向が特に顕著である。現在は美里と交際中。中国語が非常に堪能で、現在留学生の崔裕時をホームステイさせている。
一人称：俺　あだ名：慎ボー♪慎ちゃん♪川崎くん　家族構成：父・母・兄・弟
進路希望：亜細亜大学国際関係学部国際関係学科

☆吉山（よしやま）　亜紀（あき）　クラス：２年Ｆ組
＞ｉ９６６３―１５０＜
南葉島中学校出身。中学時代はチューバ、ユーフォニウム、トロンボーンと楽器を３つも吹いていた。トロンボーン歴は一番短いが、肺活量の多さでは男の子にも負けない。性格は明朗快活。
あだ名：亜紀ちゃん♪ヨッシ～

☆富士原（ふじわら）　徹（とおる）　クラス：２年Ｉ組
＞ｉ１９６６０―１５０＜
南葉島中学校出身。完全な初心者なので亜紀に付きっ切りで教えてもらっている。基本的にのんきなのでマイペースで進行中。
あだ名：富士くん♪徹

★江藤（えとう）　沙知（さち）　クラス：１年？組
＞ｉ１９６６９―１５０＜
大海中学校出身。中学時代からトロンボーン一筋。同じ出身中学の子が少ないことに加えて人見知りをするため、今のところ話をするのがトロンボーンメンバーと菘、茉莉紗しかいない。
あだ名：さっちー

★佐々木（さき）　雛乃（ひなの）　クラス：１年Ｆ組
＞ｉ１９６７３―１５０＜
袴田中学校出身。線が細いのだが、音は太い。その上音感も良いので、スライドでしっくり来る音をすぐに探すことができる。
あだ名：ひなの

【Ｅｕｐｈｏｎｉｕｍ（ユーフォニウム）】
♪水谷（みずたに）　春樹（はるき）　クラス：３年Ｇ組
＞ｉ１９６３８―１５０＜
最初は雪子と似たような雰囲気が漂っていたが、実は優しい子。楽器を吹く前から自宅にユーフォニウムは持っていたようで、一所懸命抱えて部室までやってきた。最近、拓真と楽器を持っている姿が

似通ってきている。キラースマイル所持者。
一人称：俺　あだ名：春やん♪水谷くん♪水っち　家族構成：母＝水谷幸恵子（みずたにさえこ）
進路希望：鎌倉音楽大学音楽学部吹奏楽学科

☆加藤（かとう）　愛実（めぐみ）　クラス：２年Ｈ組
＞ｉ９６４６―１５０＜
葉島中学校出身。中学までは市の少年少女吹奏楽団に所属していて、トロンボーンを吹いていた。春樹とは実は幼なじみで、彼のことが好き。同じパートを吹いていて心底嬉しく思っている。なお、ユーフォニウムは初心者であった。愛媛県に知り合いがいる。
あだ名：めぐみ♪カトちゃん

【Ｔｕｂａ（チューバ）】
♪本堂（ほんどう）　拓真（たくま）　クラス：３年Ｇ組
＞ｉ９６３７―１５０＜
大柄な体格でチューバと相性ピッタリ。生真面目な性格で空気を読めるので精神年齢はメンバーの中でも上のほう。島根県桜田市に知り合いがいる。
一人称：俺　あだ名：拓あん♪本堂くん♪本ちゃん　家族構成：父・母
進路希望：国士舘大学文学部文学科（日本文学・文化専攻）

☆大岩（おおいわ）　智志（さとし）　クラス：２年Ｇ組
＞ｉ９６４５―１５０＜
七海高校内でも有名な不良（ワル）。にもかかわらず、拓真の音色や部員の楽しそうに活動する様子に惹かれて入部を決めたという、実はウブ

な一面がある少年。文化部在籍だが、運動神経が良いので体育大会等ではヒーロー的存在になる。
あだ名：さとっぺ♪さと

★飯岡（いいおか）　好美（よしみ）　クラス：１年Ａ組
＞ｉ９６６７―１５０＜
袴田中学校出身。ふっくらした感じの女の子で、体型からにじみ出る雰囲気どおり、温和な女の子。真面目な拓真とヤンチャ系の智志にも一目置かれている。
あだ名：よしりん♪好美

【Ｓｔｒｉｎｇ　Ｂａｓｓ】
☆三宅（みやけ）　亮平（りょうへい）　クラス：２年Ｃ組
＞ｉ９６６２―１５０＜
かなりイケメンの少年。ジブリ映画が大好きで、暇さえあれば弦バスで久石譲の曲を弾いている。ピッチカートが一番上手い。実は貴志と従兄弟。
あだ名：みーやん♪

★常盤（ときわ）　貴志（たかし）　クラス：１年Ｃ組
＞ｉ９６９１―１５０＜
亮平に負けないくらいのイケメン少年。亮平とは従兄弟なので、当然といえば当然か。彼の影響をモロに受けているため、好みが似ている。似ていないのは身長くらいで、貴志のほうが１０ｃｍ低い。
あだ名：トキ♪貴ちゃん

【Ｐｅｒｃｕｓｓｉｏｎ（パーカッション）】
♪田中（たなか）　美里（みさと）　クラス：３年Ｇ組
＞ｉ１９６３４―１５０＜
大胆なことが大好きなので動きのあるパーカッションへ。明るく活発な性格で男女の壁なく誰とでも平等に接するタイプ。少々おせっかいなところがある。現在は慎也と交際中。
一人称：あたし　あだ名：ミサッチ♪みさりん♪美里ちゃん♪田中さん　家族構成：父・母・姉＝田中（たなか）　美優（みゆ）
進路希望：青山学院大学経済学部（現代経済デザイン学科―２００８年４月開設予定）

☆冨岡（とみおか）　洋之（ひろゆき）　クラス：２年Ｉ組
＞ｉ１９６５３―１５０＜
袴田中学校出身。端正な顔立ちでクールに見えるが中身は結構おもしろい子。ティンパニが特に得意。
あだ名：トミ♪とみぃ♪ヒロ♪ひろぽん

☆日高（ひだか）　優（ゆたか）　クラス：２年Ｅ組
＞ｉ１９６５９―１５０＜
大井戸中学校出身。運動神経も鈍く勉強も中の下という冴えない自分を変えたくて入部した初心者。背が低いので基本的にタンバリンやトライアングルが好き。一時期休部していた時期もあるが、現在は復帰。
あだ名：ひーくん♪優っち♪チビ（１人だけ）

☆秦野（はたの）　恵梨（えり）　クラス：２年Ｇ組
＞ｉ１９６５８―１５０＜

東京から高校進学時に引越し。目立ちたがりなので美里と同じ目立ちそうという理由で打楽器を選んだ初心者だった。今はバリバリ。
特に小物楽器が好き。
あだ名：エリリン♪はたっち♪はたやん

☆乃木（のぎ）　あずさ　クラス：２年Ａ組
＞ｉ９６５６―１５０＜
栃木から高校進学時に引越し。打楽器は小学校１年生からずっとしているので打楽器は全般的に扱える。
あだ名：のぎぎ♪あず

★岩切（いわきり）　裕也（ゆうや）　クラス：１年Ｆ組
＞ｉ９６９３―１５０＜
葉島中学校出身。翔平の弟で、風見台を受験して落ちた後、七海に来た。素直ではない性格のため、何かとトラブルを起こすことがある。
あだ名：岩切くん

★塚口（つかぐち）　和志（かずし）　クラス：１年Ａ組
＞ｉ９６７９―１５０＜
兵庫から高校進学時に引越し。そのため、ローカルネタの通じる翔や綾音と初めは交流を積極的にしている。
あだ名：塚ちゃん♪和志

★本堂（ほんどう）　晃（あきら）　クラス：１年Ｂ組
＞ｉ９６８５―１５０＜

北松中学校出身。拓真の弟。しかし性格はずいぶん違い、やることが何でも大雑把。そのため、意外と繊細さを求められる打楽器に入ったことを若干後悔している。
あだ名：本ちゃん♪晃

＜パート人数＞
・フルート&ピッコロ：４名
・オーボエ：２名
・バスーン：２名
・エスクラリネット：１名
・ベークラリネット：最大１０名
・アルトクラリネット：１名
・バスクラリネット：１名
・ソプラノサキソフォン：１名
・アルトサキソフォン：４名
・テナーサキソフォン：２名
・バリトンサキソフォン：１名
・トランペット：５名
・トロンボーン：５名
・ホルン：４名（５名）
・ユーフォニウム：２名
・チューバ：３名
・弦バス：２名
・パーカッション：８名

以上、全部員５６名

＜２００７年度　七海市立七海高等学校吹奏楽部　役職表＞

役職名	氏　名
部　長	佐野　翔
副部長	朝倉　陽乃
	本堂　拓真
会　計	大谷　沙希
金管長	川崎　慎也
木管長	橋本　絵美

係　名	氏　名
楽　譜	宮部由美子
	瀬戸　優輝
	井上　佳菜
	松尾　勇
	秦野　恵梨
チケット	水谷　春樹
	加藤　愛実
音　源	田中　美里
	河内みゆき
ユニフォーム	永井　雪子
	西嶋はるか
	右川　順平
美　化	冨岡　洋之
	中野さゆり
楽　器	小林　梨子
	鈴木　麻綾
教室管理	久野　彩香
	吉山　亜紀
運　搬	三宅　亮平
	富士原　徹

演出　志賀　慧太

日高　優

乃木あずさ

2年生代表　逢沢　駿

ドラムメジャー　野村健之佑

戸口　誠

主な登場人物（新1年生入学後／吹奏楽部員）（後書き）

なお、登場人物イメージを掲載しました（２０１０年7月２５日～）。一部を除き（※）、スターダストプロモーションの俳優さん・女優さんの画像を拝借しております。

（※）一部：ドラマ『ハンマーセッション』の生徒一覧／ジュノン・スーパーボーイ・コンテスト公式サイトを指します。

主な登場人物（新1年生入学後／教職員・保護者・友人）

※！！ネタバレ注意！！※

♪　第３７０話現在　♪

＜※注※＞［２０］＝年齢を示しています。

【Ｃｏｎｄｕｔｅｒ（コンダクター）】

♪東　恭一（あずま　きょういち）　［３３］

＞ｉ２２５９９―１５０＜

七海高等学校吹奏楽部顧問。担当教科は英語で翔の在籍する３年Ｈ組の担任。身長１８７センチでけっこうイケメンなので彼に担任を持ってほしい女子生徒は多いとの噂。七海高等学校吹奏楽部（初代）のＯＢでもある。そのときのパートはパーカッション。浜崎あゆみの熱狂的ファン。最近、彼女がいるという噂がにわかに立っているのだが、その真相は……？

【吹奏楽部指導者】

★三田嶋（みたじま）　樹（いつき）　［３１］

＞ｉ１１７１８―１５０＜

有名なアルトサックス奏者。全国各地の演奏会に客演として招かれたり演奏会を開いたりと精力的に活動している。七海高等学校吹奏

楽部（初代）のＯＢでもある。実は、神崎しおりと結婚を前提に付き合っている。

★神崎（かんざき）しおり　［３１］
＞ｉ１１７１７―１５０＜
樹のマネージャーにして吹奏楽部時代の同級生。オーボエ奏者である。樹とは結婚を前提に付き合っている。

★村峰（むらみね）　塔子（とうこ）　［５１］
＞ｉ２２６００―１５０＜
前七海高校普通科教頭。分厚い眼鏡が特徴で文化部に対する扱いはかなりぞんざいだった。家族の事情により、現在は神戸市に転居して教職からは離れているが……？

【七海高校吹奏楽部ＯＢ】
□豊田（とよた）めぐみ　［１９］
＞ｉ１１７０７―１５０＜
途中入部をした生徒で、高校生活最初で最後のコンクールに出場したく、入部を決めた。青山学院大学に進学。
あだ名：めぐ先輩♪めぐ

□岡崎（おかざき）　安和（あんな）　［１９］
＞ｉ１１７０５―１５０＜
途中入部をした生徒。初めは陽乃と対立したが、その後和解して陽乃と一緒にトランペットを支えた。立教大学に進学。
あだ名：岡崎先輩♪安和先輩

□三河（みかわ）　岳彦（たけひこ）　［１９］
＞ｉ１１７０６―１５０＜

途中入部をした生徒。最初で最後のコンクールに、大人数で参加したかったので入部を決めた。音楽大学に進学。
あだ名：三河先輩♪岳ちゃん先輩

【七海高等学校関係者】

☆真野（まの）　光治（こうじ）　［５６］
＞ｉ１１７２６―１５０＜
学校長。温厚で生徒の自主性を尊重する主義を貫いている。吹奏楽部の生徒に校長室でのライブ演奏と引き換えにストーブを提供してくれたりもするユニークな男性。

☆東（あずま）　彩（あや）　［２８］
＞ｉ１１７２８―１５０＜
社会科教師。３年Ｃ組担任。小柄で花のように可憐な先生。華道部顧問。６月に恭一と結婚した。旧姓・新井田。

☆亘理（わたり）　健太（けんた）　［３２］
＞ｉ１１７３１―１５０＜
国語科教師。３年Ｄ組担任。体育会系の熱血先生で陸上部顧問。

☆真鍋（まなべ）　宗平（そうへい）　［３３］
＞ｉ１１７２９―１５０＜
野球部顧問。理科教師。トラブルが起こるとパニックを起こしやすいが、ようやくそれも落ち着いてきて野球部のレベルを上げつつある。

☆園部（そのべ）麻衣子（まいこ）　［２８］
＞ｉ１１７３０―１５０＜

数学教師。３年Ｆ組担任。

【佐野家】

☆佐野（さの）　昭（あきら）　［４８］

＞ｉ１１７０９―１５０＜

翔の父。食品会社勤務。あまり喋らない照れ屋な性格だが子供たちのことはきちんと把握している。

☆佐野（さの）友美子（ゆみこ）　［４６］

＞ｉ１１７０８―１５０＜

翔の母。かなり賑やかな性格で初対面の人でも遠慮なく質問攻めにしたりしてよく翔や綾音に怒られている。かなりの料理好きなので腕は良い。

☆佐野（さの）　智輝（ともき）　［１１］

＞ｉ１１７１０―１５０＜

翔の弟。葉島小学校５年生。最近反抗期なのか、翔や綾音、友美子に口答えをすることが増えてきた。ただ、心の中では全員のことが好きである様子が言葉に表れている。

☆佐野冨美枝（ふみえ）　［７３］

＞ｉ２２６０１―１５０＜

翔の父方祖母。夫は６年前に亡くしている。かなりの老眼。

☆佐野（さの）　高志（たかし）（享年７０歳）

＞ｉ１１７１２―１５０＜

翔の祖父。６年前に脳卒中により亡くなっている。厳格な祖父であったが、翔は彼のことが大好きで、日曜日になるといつも梅田へ一緒に出かけていた。

【朝倉家】

☆朝倉（あさくら）　祥夫（さちお）　［４７］

＞ｉ１１７１４―１５０＜

陽乃の父。証券会社勤務。今どき珍しいタイプの父親で子供たちのことに関しては度が過ぎるほど干渉することもあり、今まで陽乃とも夏樹ともケンカをしたことが何度かある。普段は仕事人間。

☆朝倉（あさくら）　由利（ゆり）　［４５］

＞ｉ１１７１３―１５０＜

陽乃の母。スーパーでパートをしている。祥夫とは違い、おっとりして子供たちを優しく見守るタイプ。しかし言うべきときにはしっかりと諭す。

☆朝倉知恵子（あさくらちえこ）　［７１］

＞ｉ１１７１５―１５０＜

陽乃の父方祖母。どんな時でも冷静に何事にも対処できるしっかりした女性。夫は7年前に亡くしている。

【大中家】

１９９５年の阪神・淡路大震災で翔を除く全員が亡くなっている。

☆大中（おおなか）　康史（こうじ）（享年３５歳）

翔の実父。子煩悩な父親であったが、１９９５年1月17日に発生した阪神淡路大震災により亡くなる。翔は震災時の記憶喪失により康史たちのことは記憶していない。

☆大中（おおなか）　美佐子（みさこ）（享年３４歳）

翔の実母。優しい母親で、翔たち子供3人には愛情を十分注いで

いた。しかし、阪神淡路大震災により亡くなる。

☆大中　一志（享年１２歳）

翔の実兄。阪神淡路大震災で翔をかばうようにして亡くなる。吹奏楽部でアルトサックスを吹いていた。現在、翔は彼のサックスを吹いている。

☆大中　璃緒（享年１０歳）

翔の実姉。阪神淡路大震災で翔をかばうようにして亡くなる。吹奏楽部でオーボエを吹いていた。マイ楽器であったオーボエは佐野家の押入れにしまってあるが、翔はそのことを知らない。

【私立　風見台高等学校吹奏楽部】

★佐野　修平　［１８］

＞ｉ１１７２０＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞１５０＜私立・風＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞かざ＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞見台高等学校吹奏楽部員。翔とは中学時代の同級生かつ吹奏楽部員だった。当時の中学校部員たちの間では「ダブル佐野」の名前で結構知られていた。一時期、人数の関係でパーカッションも経験したが、現在はアルトサックス奏者として活動中。優衣と交際中。

★濱口　優衣　［１８］

＞ｉ１１７１９―１５０＜

私立・風見台高等学校吹奏楽部員。修平と仲がよく、誰にでも思いやりを持って接するタイプ。陽乃とも合同練習で仲良くなった。トランペット担当。修平と交際中。

★岩切　翔平　［１９］

＞ｉ１１７２１―１５０＜
大阪から七海市へ引っ越してきた淀南（よどみなみ）中学校時代の翔の先輩。名前が翔とかぶっていたので「ダブル翔」と修平とのカップル名（？）を文字って呼ばれていたことがある。現在は風見台高校を卒業し、青山学院大学に通っている。

【吹奏楽関係者／クラスメイト／友人】
☆若草（わかくさ）　直幸（なおゆき）　［１７］
＞ｉ１１７００―１５０＜
伊豆半島で翔たちが合宿をした際に出会った高校生。翔とは同い年になる。楽器はアルトサックス。登校拒否をしていたが、陽乃や翔との出会いを通して自分を見つめなおし、現在は登校するようになっている。初出場のマーチングコンテストも見に来てくれた。ちなみに、彼女がいる。

☆相田（あいだ）　雄平（ゆうへい）　［１７］
＞ｉ１１７０３―１５０＜
七海高校野球部。沙希の想い人であるが、彼自身それは自覚していない。沙希には何度もアドバイスをするなど、親身な存在になりつつある。ちなみに、吹奏楽部が野球部の応援に来てくれる日を心待ちにしている。一度話は出たが、春休みの段階では立ち消えになり、夏はコンクールが重なったためまだ叶っていない。３年Ｅ組。

☆矢崎（やざき）　菜緒（なお）　［１７］
＞ｉ１１７０２―１５０＜
陽乃の元クラスメイト。現在は専門学校を目指す３年Ｄ組。快活な少女で、陽乃とはよく気が合う。ちなみに、森本涼平のことが好き。

☆森本（もりもと）　涼平（りょうへい）　［１７］
＞ｉ１１７０１―１５０＜
陽乃の元クラスメイト。現在は就職を目指す３年Ｃ組。若干間の抜けた感じが拭えない少年。菜緒のことが好きだが、ハッキリ言えない自分にもどかしさを感じている。

☆柳原（やなぎはら）　玲菜（れな）　［１６］
美術部所属で、由美子の友人でもある。吹奏楽部の勧誘ポスターの製作を担当。

☆内山（うちやま）　大輔（だいすけ）　［１８］
翔の中学時代の親友。雪子が転校した光来高等学校に通っており、吹奏楽部に在籍中。部長を務めている。

☆稲元（いなもと）　友也（ゆうや）　［１８］
翔の中学時代の親友。光来高等学校に通っており、軽音楽部に在籍。

☆鈴広（すずひろ）　勝明（かつあき）　［１８］
翔の中学時代の親友。光来高等学校に通っており、生徒会執行部に在籍。生徒会長を務めている。

☆福崎（ふくざき）　啓一（けいいち）　［１８］
翔の中学時代の親友。光来高等学校に通っており、空手道部主将を努めている。

☆川島（かわしま）　海里（みり）　［１８］
翔の中学時代の友人。光来高等学校に通っており、吹奏楽部に在籍。

☆岡原（おかはら）　怜（れい）［１８］
　翔の中学時代の友人。光来高等学校に通っており、演劇部に在籍。

☆崔（さい）　裕時（ゆうじ）［１７］
＞ｉ１１７０４―１５０＜
　留学生で吹奏楽部に体験入部中。中国四川省出身。日本語はある程度話すことができる。現在、慎也の家にホームステイ中。楽器経験はありで、パートはクラリネット。

☆マーガレット・メルヴィル［１８］
＞ｉ１１６９８―１５０＜
　留学生で吹奏楽部に体験入部中。アメリカ合衆国ノースカロライナ州出身。日本語は助詞などが飛んでしまうものの、ある程度は話すことができる。現在、沙希の家に留学中。楽器経験ありで、パートはパーカッション。

☆パク・ソンス［１６］
＞ｉ２２６０２―１５０＜
　留学生で吹奏楽部に体験入部中。大韓民国出身。日本語はまだたどたどしい状態。２年生の生徒宅にホームステイ中。パートはユーフォニウムで、楽器経験はなし。容姿が翔に瓜二つである。

【愛媛県　常套（じょうとう）中学校】
◎竹林（たけばやし）　泰徳（やすのり）［１５］
愛媛県　常套（じょうとう）中学校吹奏楽部在籍中。パートはチューバ。翔とは大阪にいた頃、よく遊んだ。オーケストラや吹奏楽のような大編成が苦手というコンプレックスはあるが、翔には「音楽才能抜群！」と言われている。ただし、泰徳本人はなぜか否定している。

◎中井　美奈　［１５］
愛媛県常套中学校吹奏楽部在籍中。パートは弦バス。『ピティナ国際ピアノコンクール』にてパーカッションの秦野恵梨と知り合って以来の仲である。

◎谷　未来　［１５］
愛媛県常套中学校吹奏楽部在籍中。パートはユーフォニウム。加藤愛実とは知り合いで、愛実が運営するブログで友達としてメールアドレスを交換したのが始まり。常套中学校のサマーコンサトにて初めて出会った。

◎高橋　美並　［１６］
泰徳たちの１年先輩。翔たちや金管メンバー数名は２００５年度のアンサンブルコンテストにおいて、彼女と知り合いになっている（翔が半ば強引に彼女たちの会話に加わっただけであるが）。ちなみに、七海高校の中で彼女を好きなメンバーがいる。

◎佐々木　香織　［１５］
愛媛県常套中学校吹奏楽部在籍中。泰徳、美奈、美並とアンサンブルに出場した。彼女も美並同様、２００５年度のアンサンブルコンテストにおいて半ば強制的に翔たちと知り合いになっている。

【横浜市立　虹西高等学校】
◆永瀬　信二　［１６］
慎也の中学時代の後輩。中学時代はトロンボーンを吹いていたが、七海市を引っ越して入学した虹西高等学校では、チューバを現在吹いている。辛うじて控えていた慎也の自宅電話番号を頼りに、彼との親交を再開できた。

◆浜田　望実　［１６］

つり目が特徴的な、明るい女の子。後ろ髪が外にハネている。偶然立ち寄ったはるかの店で、定期演奏会の話で意気投合し、彼女に定期演奏会に来て欲しい旨を伝えたことから交流が始まる。

◆相原（あいはら）　真琴（まこと）　［１６］

虹西高校の弦バス奏者。陽乃とは初めて会った気がしないと感じており、それは陽乃も同じように感じている。果たして過去にどこかで出会っているのか……？

【島根県　桜田（さくらだ）中央高校】

＊西掛（にしかけ）　先斗（さきと）　［１６］

桜田中央高校吹奏楽部のチューバ奏者。真面目な性格で、教室でも楽譜を手にするような男の子。中島唯とは幼なじみである。

＊中島（なかじま）　唯（ゆい）　［１６］

桜田中央高校吹奏楽部部長。おしゃべり大好き、スイーツ大好きで活動的な女の子。西掛　先斗とは幼馴染で、クラスが幼稚園から１２年間一緒である。楽器はアルトサックス。中野さゆりとは親戚関係である。

＊三上（みかみ）　庄吾（しょうご）　［１６］

ハンドルネーム・爆音ペッターとして七海高校の拓真と交流のある桜田中央高校のトランペッター。大柄で食欲旺盛な育ち盛りの少年。

＊東（あずま）　茜（あかね）　［１６］

七海高校の新入生・毛利　菘と親交がある、島根県桜田市の高校１年生。生徒会を中学時代はずっと頑張っていたようである。ベークラリネット奏者。

＊進藤（しんどう）　慶太（けいた）　［１６］
桜田中央高校バリトンサックス奏者。高校から始めた初心者ということになる。ちなみに、七海高校の進藤　雄飛とは親戚関係などではない様子。

＊坂根（さかね）　美香（みか）　［１６］
桜田中央高校フルート奏者。おとなしく、引込み思案である自分を変えたくて吹奏楽部に入部した読書家。

【石川県古氷町立古氷中学校吹奏楽部】
○石尾（いしお）　拓也（たくや）［１５］
＞ｉ１２４３３―１５０＜
石川県古氷町立古氷中学校吹奏楽部部長。能登半島沖地震で被害を受けた際、七海高校から楽器の支援を受けて以来、交流がある。ちなみに、関西弁を話すのは兵庫県神崎市出身のため。

○津嶋（つしま）　ともみ［１５］
＞ｉ１２４３４―１５０＜
石川県古氷町立古氷中学校吹奏楽部副部長。能登半島沖地震で被害を受けた際、七海高校から楽器の支援を受けて以来、交流がある。ちなみに、関西弁を話すのは大阪府大阪市出身のため。

主な登場人物（新1年生入学後／教職員・保護者・友人）（後書き）

??に関しては、ストーリーが進むにしたがって明らかにしますので、お楽しみに☆☆

第２６９話　リフレッシュ！

４月９日月曜日。七海高等学校では、新学期を迎えていた。そして、新学期といえば言わずと知れた、クラス発表が行われる。

「ドキドキするね～」

朝から一緒に登校してきた美里、由美子、陽乃の３人はまだ紙の貼られていない掲示板の前でウズウズしながらその瞬間を待ちわびていた。

遠くから男子のバカでかい声が聞こえてきたので振り向くと、やはり吹奏楽部の男子４人が揃って陽乃たちのほうへ向かってきていた。

「相変わらずバカっぽいよね、あの４人」

美里が呆れた様子で首を横に振る。

「ホント。もうちょっとあたしたちみたいに大人っぽくなればいいのに」

陽乃もフッと鼻で笑った。

「あれあれ？　でもぉお二人さん、実は同じクラスにならないかしらぁ？とか考えてるんでしょ？　やーらしぃ～！」

由美子の的を射た発言に、顔を真っ赤にする二人。

「ま、まぁ……期待してないって言ったらウソになるしねぇ！」

美里がアハハッと笑ってごまかそうとする。陽乃は本当に翔とクラスが一緒になってほしいと思っていたので、心を見透かされたことに少し恥ずかしさを覚えていた。

「ウィース！　おはよう！」

翔の声にビクッと体を震わせる美里と陽乃。

「うん？　どないしてん、体震わせて」

「きゅ、急に声かけてくるから、アンタが！」

陽乃が真っ赤になって翔の体をバシバシ平手打ちした。

「痛い痛い！　なんちゅうコトすんねん！」
翔は必死になって陽乃を止めようとする。しかし、なかなか止められない。
「痛いって！　やめんか！」
翔はようやく陽乃の手を封じ込めた。身長１７５センチ（今頃になって４センチも伸びたそうだ）の翔と、１５８センチの陽乃では２０センチ近くの差がある。ちょうど、陽乃を覗き込むように翔の目がバッチリ陽乃を捉えた。
「！」
「どないや。これで何もでけへんやろ？」
「……。」
陽乃は無言で翔の脛を蹴り飛ばした。
「イイイイイ……ッ！」
「バーカ！」
陽乃は顔を真っ赤にして駆け出した。慌てて美里と由美子が後を追う。
「なんやねん……バーカ！」
翔は翔で、蹴り飛ばされた痛みで顔を赤くしていた。
「どないなっとんねん、アイツら」
「なんか変だったよな」
慎也も首を傾げる。
「虫の居所が悪かったのかな……」
春樹も首を傾げた。すると、後ろから拓真の声が聞こえる。
「あれじゃねぇの。さっきまでのお前らと同じこと考えてた、とか」
たちまち３人の顔が真っ赤になった。
「そ、そうなのかな！？」
春樹があからさまに嬉しそうな声を上げる。
「だからって、蹴り飛ばされたこっちはたまらんわ……」
翔はフゥッとため息をついた。
５分もしないうちに、恭一と彩が出てきた。その手には丸くなっ

た分厚い模造紙がある。
「来た！」
翔はドキドキと心臓が高鳴るのを抑え切れなかった。
３年Ａ組とＢ組は体育科なので翔たちには関係ない。Ｃ組の模造紙が貼付された。
「あ、俺だ！」
いつの間にか隣に来ていた森本　涼平が声を上げた。
「え？　お前、就職クラスなん！？」
翔が驚いて涼平に聞いた。
「うん！　俺、働きたいんだ。天職って思える仕事、探すんだ」
「へぇ……！」
キラキラと輝く顔をする涼平に刺激を受けた翔は、自分も大学でしっかりと、小学校の先生になる勉強をしようと改めて誓った。
「あ、私」
続くＤ組には、矢崎　菜緒がいた。
「ねぇ、矢崎さんは専門学校なの？」
隣にいた沙希が菜緒に聞いた。
「うん。私ね、美容師になりたいの。そのための勉強をするために、専門学校目指そうと思って」
「すごいなぁ……」
沙希は既に目標を定めている菜緒に尊敬に近い感情を抱いた。
「大谷さんは？」
「わ、私まだ全然考えてなくって……。ただ、大学には行くつもり」
「そうなんだ！　いいじゃん、いま決めなくたって」
「そうかなぁ？」
「大学の４年間できっと、したいこと見つかるよ～！」
そう言われると、目標がなくても少し安堵できた。
「うん！　頑張る。矢崎さんも、頑張って！」
「ありがと！」
続く３年Ｅ組。Ｅ組は絵美と慎也、そして野球部の相田　雄平が

いた。
「あぁ～……」
慎也がため息を漏らす。
「そんなぁ……」
春樹もうなだれている。
「まぁまぁ。学年が一緒やし、部活一緒やん」
翔にはまだ陽乃と同じクラスになれる可能性が残されているので、どこか半笑いのような感じでうなだれる二人をなだめている。一方の陽乃は、美里のあまりのテンションのがた落ち具合にドン引きしていた。
３年Ｆ組は沙希、由美子、そして陽乃だった。
「ウソーん!?」
陽乃は離れていても翔の絶叫が聞こえてしまった。
「恥ずかしいじゃない！　バーカ！」
「陽ちゃん……結構普通じゃない。どうして？」
美里が落ち込んだ声で聞いた。
「あたし？　部活で会えるし、それに、クラスが違うかったら部活で会えたとき、もっと嬉しくなるじゃん。一緒の時間を大事にしようって思えるし、ケンカなんてしてらんないって思えるようになりそうだから……」
「へぇ～……」
美里が感嘆の声を漏らした。
「そういう考え方もありかぁ」
「ミサッチには合いそうにない考えだけど」
「まぁね」
二人はクスッと笑い合った。
３年Ｇ組は春樹、美里、拓真だった。そして３年Ｈ組は翔一人だけだ。ちなみに、Ｅ組は私立一般、Ｆ組とＧ組は私立難関、Ｈ組は国公立という具合に目指す大学のランク分けというのが、３年生のクラス分けの実態だった。ちなみに、Ｉ組もあるのだが、理系クラ

スになる。理系がいない吹奏楽部3年生に、在籍者はいない。
恭一はH組の担任になった。
「結局、先生とは3年間、ホームルームも部活も一緒やな」
翔は何かの縁を感じずにはいられなかった。
「それでは各自教室へ移動の上、オリエンテーションを受けてください。午後からは入学式が行われますので、関係生徒は午前11時に体育館へ集合するように」
恭一の指示の後、3年生はワラワラと各自教室へ向かい始めた。
吹奏楽部も入学式に参加するため、10時半にはホームルームを抜けることになる。
「かーけるー！」
陽乃が元気良く走ってきた。
「オース！　元気そうやな」
「まぁね！　サキティと由美ちゃんとクラス、同じだし！　翔は知り合いいるの～？」
「当たり前や！　オレ、友達多いねんぞ！」
「へぇ～？　あたしいなくて寂しくないの？」
冗談半分だったが、思いのほか翔が顔を赤くしてこう答えてきたのには陽乃も驚いた。
「それとこれは、話が別や」
「え？」
「2年も同じやったやろ。部活もクラスも。なんか……離れるの、初めてやし……」
陽乃の顔がみるみる真っ赤になる。
「も、もー！　一生の別れじゃないんだから！　ほら、部長！　クヨクヨするな！」
バシッと陽乃が気合いの平手打ちを食らわせた。
「この怪力女！」
「なんですってー！？」
いつもどおりの二人のやり取りを、恭一が苦笑いしてみていた。

「まったく……。アイツら、入学式の時からそのままだな」
「でも、それがいいとこなのかもしれないですよ。あの子たちは」
彩が隣で笑う。取っ組み合いになりそうな翔と陽乃を二人はクスクス笑いながら、見つめていた。

「やっぱりちょっと大きすぎたかしら……」
由利がフウッと心配そうなため息を漏らす。
翔たちがクラス発表を見ている頃、朝倉家では夏樹が七海高校の制服に身を包んでいた。
「俺の成長期、まだなのかなぁ……」
夏樹の身長は１６０センチ。陽乃と２センチしか変わらない。男子の中でも中学時代から小柄なほうだった夏樹は、高校では制服を大き目のものにしておいた。もしかしたら、身長が急に伸びるかもしれないという期待も込めて、大きくしておいたのだ。
「すごいねぇ、それにしても」
さすがの知恵子もあまりのブカブカ具合に驚いていた。
「でも、ナツも高校生なのねぇ」
知恵子は感慨深そうに呟いた。
「クラブは……どうするんだい？」
「俺？」
「あぁ」
「決まってるじゃん、おばあちゃん」
夏樹は満面の笑みで答えた。
「吹奏楽部！　しかも、絶対佐野先輩のパート！」
「え？　サックスにするの、やっぱり？」
由利が聞いた。
「もちろん！」
「でも、人気のパートでしょう？　オーディションとかあるかもしれないじゃない」
「そんなことくらいで諦めたりしないよ。俺、絶対佐野先輩と中野

先輩と鈴木先輩、西嶋先輩とナナコウで演奏するって決めたから！」
そう答える夏樹の瞳には、何の迷いも見られなかった。
「それじゃあお義母さん、行ってきます」
「あぁ。気をつけてね」
「じゃあね！　行ってきます！」
夏樹と由利が元気良く表へ出ると、偶然にも綾音と友美子が朝倉家の前を歩いていた。
「あらー！　佐野さん！」
「ああ！　朝倉さん！　おはようございます～」
友美子と由利はすぐに合流し、あぁでもない、こうでもないと世間話を始めた。
「おはよ、佐野」
「おはよう！　どしたの、朝倉。その制服」
ブカブカすぎる制服を見て、綾音が目を丸くしながら夏樹に聞いた。
「成長期を見越して、サイズ大きいの買った！」
「何それ、ウケる！」
綾音は堪えきれず、大声で笑い始めた。
「そういう佐野こそ、何そのヘアスタイル」
「こ、高校デビューすんの！　文句ある！？」
「ねぇよ、怖いな！　そんな怒ってたら、デビュー失敗するぞ」
「うるさいな！」
なんら変わらない二人のやり取り。あまりに言い合いに夢中になるので、前をよく見ていなかった夏樹が人とぶつかってしまった。
「うわ！」
「きゃ！」
女の子だった。彼女はぶつかった拍子に携帯電話を落としてしまったようだった。
「す、すいません！」
夏樹は慌てて携帯電話を拾って彼女に差し出す。

「あ、ありがとうございます！」
彼女は夏樹から電話を受け取り、すぐに顔へ当てた。
「もしもし？　ゴメンね茜ちゃん。え？　あ、あたしがドジで人とぶつかっちゃって……」
女の子は慌てて夏樹たちに会釈をした後、七海高校のほうへ向けて走っていった。
「何してんのよ！　アホちゃうん？　前見て歩かな」
「しょうがねーじゃん！　お前が機関銃みたいに喋るから、こっちだって相手するのにやっとなんだから。前見る余裕がないんだよ」
「それにしても、さっきの子も七海の制服やったね。1年生かなぁ？」
「そうかもしれないな……」
綾音と夏樹は小走りで駆けていく彼女の背中を目で追っていた。
その彼女――毛利　菘は携帯電話で遠く離れた島根県の友人に電話していた。
『私はもうすぐ学校に着きま～す』
「え？　もう？　早い～」
菘はクスクスと笑った。電話の向こうの女の子――東（あずま）　茜（あかね）は『気合い入れて早く来すぎて、誰もいないよ～！』と叫んでいる。
「なんていう高校だっけ？」
『桜田中央高校！　新しくできたばっかりだから、校舎がすんごく綺麗！』
「羨ましいな～。私のトコ、昭和時代にできたからちょっとくたびれてる……」
『でも、吹奏楽部はあるんでしょ？』
「まぁね！　まだ創部2年目らしいけど……」
『贅沢言っちゃダメじゃん！　私のところなんて、まだ部活自体ないんだから』
菘は言ってはマズいことを言ったかと内心ドキドキしていた。
「またまた～。どうせ、茜のことだから、生徒会でバリバリでしょ

？」

『どうだろう……』

予想外の答えだった。茜のことだ。部活なんかには興味がなく、生徒会に入ると思っていた萩は拍子抜けした。

『何か、部活をやってみたいかも』

「そうなんだ……。吹奏楽部とか、どう？」

『あればいいかもしれないねぇ』

「アハハ！　でも、正直茜が楽器を握ってる姿とか想像できない！」

『何それ、失礼ねぇ！』

萩はおかしくなって、思わず大笑いしてしまった。

それぞれの新しい世界が広がろうとしている。不安と期待が渦巻く中、新しい季節は少しずつ、進んでいくのだった。

第２７０話　新たな仲間

「よしっ……と」
翔はチューニングを終えて一息ついた。
「どう？　みんな」
翔の声に麻綾、さゆり、はるかが「バッチリです！」と答える。
「ＯＫ。ほんじゃ、全員でチューニングのベー吹こうか」
「はい！」
「３、４」
翔の合図で４人の音が綺麗に交わる。
「うん、バッチリやな」
「新入生の前で初めて演奏する機会ですもんね！　変な音、吹けないです」
いつになく、さゆりが気合いを入れている。もうすぐ後輩ができるという期待が、そうさせているのだろう。
「おいおい、気合い入れるのもいいが、あくまでも主役は新入生ってことを忘れるなよ？」
恭一があまりの気合いの入りように、さゆりに注意を促した。さゆりはしまった、忘れてたというような表情を浮かべる。
「でも、オレも人のこと言われへんけどな」
翔が苦笑いした。
「やっぱ、オレの本音は吹奏楽部の存在を密かにアピールできる場になるって思ってるもん。他の部は、部活紹介で初めてでしょ？　オレらはなんていうか、フライングやないけど……。そもそも、自分たちの部のアピールっていう前に、ナナコウでの生活を期待できるかどうかも、入学式にかかってそうな気がするんですよね」
翔の大人っぽい意見に、サックスパートの３人はホォ～……とため息を漏らした。

「スゴいです、先輩」
はるかが尊敬の意を込めた声を上げた。
「いやいや、そんなでもないって」
翔は照れ笑いをする。
「先輩は、入学式の時どうでした？」
さゆりが聞いた。
「っていうと？」
「どんな印象持ちました？」
「あぁ、入学式の時か……」
翔は懐かしい気持ちになった。もう、2年も前の話だ。
「当たり前やけど、吹奏楽部はなかったな。でも、オレは人数少なくてもええぇから、部を作るつもりではおってん」
「入学式の時にですか？」
麻綾が驚いている。
「うん」
「スゴいですね～」
はるかがますます、目をキラキラ輝かせている。
「いや、もっとスゴいのがおってん」
「え！？　先輩を上回るんですか？」
「おう。ある意味な」
「どんな人ですか？」
「そこでトランペット吹いてるわ」
翔の視線の先には、陽乃がいた。
「そこのトランペッター、入学式で思い切り椅子ひっくり返しよってんで！」
プア！と陽乃が情けない音を吹き出した。それを聞いた勇と彩香が大笑いしている。
「ちょっと！　そんな人の過去、こんな場所で暴露しなくたっていいでしょ！」
「えぇやんけ。もう今となっては笑い話やろ」

陽乃は少し不満そうだったが、ニカッと笑う翔を見ているとあまり怒る気にはなれなかった。
「まぁ、いいけど」
「おっ。珍しい！　おとなしく引いたな」
「あたし、感謝してるから」
「何を？」
陽乃はフイッと前を向いて歩き出す。
「おーい！　隠すなよ！」
「ナイショ！」
とても恥ずかしくて言えなかった。
翔のおかげで、今の自分――吹奏楽と出逢った自分がいるだなんて。

進藤　雄飛は緊張でガチガチしていた。高校生ともなると、みんな背が高く、威圧感があるように見えていた。男子は特にそのように映っていた。
自分はあまり目立つタイプではなかった。南葉島中学出身の雄飛。吹奏楽部もあったのだが、自分の学年で男子は雄飛しかいなかった。南葉島の吹奏楽部もレベルは低くないが、他校に比べると男女比は明らかにバランスが悪かった。おまけに、その吹奏楽部からこの七海高校へ進学したのが、3年間同じ部活に在籍したにもかかわらず、ほとんど会話をした覚えがない時任　裕子と、自分とまったく性格が１８０度異なる堀江　歩由美と来たものだ。これでは、お先真っ暗という言葉以外、何も浮かんでこない。
とりあえず、入学式は午後1時からだ。母親は「もう中学生じゃないんだから、一人で行けるわよね」などと言い、雄飛とは別々に行動すると言ってきた。もちろん、雄飛も母親と一緒に歩くなど、恥ずかしくなる年頃だったので、それに関しては文句を言わなかった。
ただ、知らない場所へ放り出された感じが否めない雄飛は、なん

となく挙動不審な感じを隠せずにいた。
　挙動不審な動きのまま、雄飛はいつの間にか会場の体育館へたどり着いていた。
「つ、着いた」
　それに安堵した雄飛はなんとなく用意されていた椅子に腰掛ける。待合席だろうか、微妙に体育館の端のほうにその椅子たちは配置されていた。
　しばらくすると、今しがた入ってきた入口から男子の声が聞こえてきた。
「重いー！　信じられねぇ。優っち、意外とパワーあるんじゃん！」
「持ち方次第だって。さとっぺの持ち方、重くなるような持ち方してんだもん」
　身長が雄飛と同じくらいの男子と、明らかに２０センチくらい高い男子が入ってきて、カチッと雄飛と目が合った。
「あれ？」
　背の低い男子が目を丸くする。雄飛はオロオロとして視線が泳いでいる。背の高いほうが「あ」と言った。
「１年生？」
「は、はい」
「え？　なんでわかるのさ、さとっぺ」
「スリッパの色。オレら赤。佐野先輩たち黄色っつーか、微妙なクリーム。コイツ青」
「さとっぺ、コイツじゃなくって、この子とか」
　背の低いほうが言葉を正した。
「こ、この子」
　雄飛はどうしていいかわからず、オロオロするばかりだ。
「１年生は、向かいの柔道場で集合だよ」
「そうそう。ここは待合席じゃなくって、吹奏楽部の席だから」
「吹奏楽部……ですか？」
「うん」

背の低いほうが笑顔で答えた。
「あ、もしかして興味ある？」
雄飛は小さくうなずいた。
「おぉ！　絶対、先輩みんな喜ぶなぁ」
背の高いほうが、急に優しい顔になった。見た目はイカツい感じだったが、悪い人ではないんだな、と雄飛は感じていた。
「ま、気が向いたら見学おいでよ」
「は、はい」
「さとっぺ、連れてってあげれば？」
「おうよ。おいで」
背の高いほうが雄飛を案内してくれた。
（吹奏楽部……どうしよう）
雄飛は入部しようかどうしようか、中学卒業時からずっと悩んでいたのだ。
「んじゃ。ま、また会えるの楽しみにしてるな」
「ありがとうございました」
背の高いほう、確か、さとっぺと呼ばれていた先輩は人懐っこい笑顔で雄飛に手を振り、階下へ姿を消した。

飯岡（いいおか）　好美（よしみ）は待ちわびた瞬間を迎えていた。
入学式。彼女はこの日をどれだけ待ちわびたか、わからなくなるほどテンションが上がっていた。
彼女は１年Ａ組。しかも、「いいおか」なので出席番号も前のほう。つまり、入学式ではトップバッターで入場するのだ。彼女にとってこれほどの喜びはなかった。
「只今より、七海市立七海高等学校第４２回入学式を、挙行いたします」
落ち着いた女性のアナウンスの後、透き通った音が響き渡った。
（わぁ～！　アルセナールだ！）
好美は早くもテンションを上げていた。聞こえてきたのは、ヤン・

ヴァン・デル・ロースト作曲のコンサートマーチ『アルセナール』だ。金管楽器の盛大なファンファーレから始まるこの曲は、いろんな式典にもマッチしそうな、荘厳な曲となっている。

クラリネットのやわらかいメロディが聞こえてきた。好美はいけないと思いつつ、ついつい吹奏楽部のほうへ視線が行ってしまった。

（本堂先輩！　大岩先輩！）

好美はなんとなく視線を拓真と智志に向けた。智志は残念ながら顔が隠れていたが、偶然楽器の角度が顔の見えるところになっていた拓真とカチッと目が合った。

ニッと拓真が笑みを浮かべた。

（やーん！　カッコいい！）

好美は思わずキュンとしてしまい、前を見ていなかったのでつまづいて転びそうになったのは、ここだけの話である。

三宅　亮平は、この時ばかりは自分が立って演奏する楽器でよかったと思っていた。亮平は他の部員たちにはバレないように、視線をチラチラと指揮者である恭一からたまに外し、入ってくる1年生の姿を目で追っていた。

（お。いたいた。C組かぁ……）

亮平のいとこがこの七海高校へ入学してきていたのだ。それも、七海高校を目指した理由というのが、亮平と演奏をしたいから、というものであった。

（嬉しいこと言ってくれるんだもんな～）

ついついテンションが上がってしまった亮平は、ピアノで弾くという指示が出ていたにも関わらず、少し音を大きくしてしまったのですぐに恭一から「静かに！」という指示を喰らってしまった。

入学式もとうとう終わりが近づく。最後は新入生の退場だ。ここで、吹奏楽部は退場時の音楽を演奏する。

曲名を言ったりする場はないのだが、それでも恭一のこだわりで

この場面ではこの曲――２００３年度全日本吹奏楽コンクール課題曲であった、松浦真吾作曲『ベスト・フレンド』を選択した。

指定のテンポよりも少し遅くして、１年生が歩きやすいであろうテンポにしている。翔は中学２年生のコンクールでこの曲を演奏した。その時はやはり、吹くのに必死でどの部分がどのようなイメージになっているのか、というようなことはまったく構っていなかった。

今となっては、それぞれの部分がどのようなイメージを持って演奏すればいいか、大体がわかるようになっていた。どちらかといえば、普段の自分たちの生活をそのまま音に映したかのような演奏をしたい。彼はそう考えていた。

友人とのくだらない話から、昼休み中の大騒ぎ。授業中のピリッとした雰囲気。食堂でご飯を食べている時の光景。サックスパートで初めに、各演奏番号（Ａ、Ｂといった具合に指定されている）に沿って、その部分のイメージを追究していった。

その結果が出ているのかどうかは、１年生の反応次第という感じもしていた。しかし、今の１年生は残念なことに、ギリギリこの課題曲を演奏する世代ではなかった（当時、彼らは小学６年生）。つまり、曲を知らない彼ら（誰が吹奏楽経験者かはほとんどわからない彼ら）をどれだけ惹くことができるかが、この曲次第でわかるのである。

まず、いきなり好美がグッとこちらを見たのが翔でもわかった。あまりにあからさまな反応だったので、吹き出しそうになったのを何とかこらえる。続いて、好美と同じクラスの男の子が興味深そうに翔の後ろ――優と美里のほうを見ていた。打楽器に関心があるのだろうか。

拓真の弟、本堂（ほんどう）　晃（あきら）も美里や洋之のほうを見ていた。翔が気づいただけでも、男子４人、女子３人と目が合った気がしていた。

（掴みは悪くないかも……！）

翔は『ベスト・フレンド』を演奏しながら、確かな手ごたえを感

じていた。

第271話　きょうだい

「ただいまぁ～！」
翔はかなりご機嫌な様子で帰宅した。
「おかえりー！　兄ちゃん！」
その翔を上回るテンションの高さで翔を出迎えたのは、綾音だった。
「どないしてん。えらいテンション高いやんけ」
「えへへー！　だってなぁ、あたしもう入学初日から鼻高々やわぁ」
「はぁ？　お前のどこが鼻高いねん。どっちかっていうとお前はダンゴ鼻やろ」
「失礼な！　そういう意味ちゃうわ！」
「ほんじゃ、どういう意味やねん」
翔は運動靴を脱いで揃え、廊下を歩きながら後ろをついてくる綾音に聞いた。
「今日の吹奏楽部の演奏、あったやろ？　あたしの中学時代の友達とか、吹奏楽やってる子が……あ、あたし1年F組やねんけどな」
綾音の話は途中でアチコチ飛ぶので、翔も内容を追いかけるのが大変なときがある。
「その子らが、吹奏楽部スゴいなぁ！とか言うんよ～！　ほんで、吹奏楽やってる子らの間では、兄ちゃん有名人やん！」
「え？　そ、そうなん？」
その言葉に思わず翔も少し頬を赤くした。
「うん！　イケメンやしぃ、部長してるし！　何より、吹奏楽部のなかった七海に吹奏楽部を創ったって時点で、兄ちゃんの株かなり高いで！」
「そ、そうなんか……」
思わぬ自分の評価に、翔はなんだかだんだん恥ずかしくなってきていた。

「そういう意味で、鼻高々やねん、あたし」
「そりゃえぇこっちゃな」
「しかもな！」
綾音の話は止まらない。
「初心者やのに、吹奏楽部入ろうかなぁ言うてる子までおってんで！」
「ホンマか！？」
翔はカバンを置いてテーブルに座った。綾音も向かいに座る。
「うん！　あたしと朝倉と同じ中学出身の片岡さんに、速水くん。二人とも、吹奏楽部に入りたい言うてんねん。あ、初心者やないけどまぁ、朝倉も入ろうかなぁ言うてたわ」
経験者のみならず、初心者の心も掴むことができたのだ。初日から幸先が良いスタートを切ることができた。
「まぁ、初心者でも経験者でもオレらは大歓迎や！　初心者が入ってきたら、いろいろと教えることで自分にもプラスになること多いしな」
翔はそう言ってから、薬缶からお茶をコップに注ぎ、グッグッと飲み始めた。
「せやろ？　そやから、あたしも吹奏楽部に入ろうかなぁと思ってるねん！」
綾音の予想外の発言に翔は今しがた口に含んだばかりのお茶をブッ！と吐き出してしまった。
「やー！　ちょっとぉ、汚いなぁ！　信じられへん！　お茶吐く！？　普通！」
「な、何を言うとねや、お前！」
「何って。吹奏楽部入る言うてんの」
綾音が至って真面目な表情で言うので、翔はガクッと来てしまった。
「お前な～……まぁえぇわ。億が一入ることがあるとして」
「億が一って何よ！？　万が一やろ！」

「億が一や！　億が一、お前がウチに入るとしてや、楽器はどないすんねん」
「パートの話!?　いやぁ、あたしいろいろやってみたいんやけどさぁ、やっぱり憧れはトランペットやな！　朝倉先輩、マジかっこえぇもーん！」
　いつから陽乃を先輩呼ばわりするようになったのか、翔は驚いて目を丸くするばかりだが、兄として大事なことは教えてやろうと思って続けた。
「まぁ、えぇよ。仮にお前が吹奏楽部入れたとしてやな」
「別に制約とかないんやろ？」
　不安そうな表情を浮かべる綾音。翔が「そんなもんはあらへん」と言うと、綾音はすぐに「よかったぁ！」と笑みを浮かべた。
「せやけどな、必ずしもトランペットができるとは限らんで？」
「なんでよ」
「当たり前やろ。お前以外にも、トランペットを吹きたいという子はいっぱいおるかもしれへん。オレが中学の時は、フルート、トランペット、サックス言うたら楽器でも小学校の頃からまぁ、知ってたりするやろ？　そういう意味で、希望者が多くていつも抽選とかになるねん」
「高校でもそんなことありえんの？」
「むしろ、その可能性のほうが高いと思っとけ。ほんでやな、抽選なんかじゃなくって、経験とか可能性とか向き不向き、いろんなこと考慮して先生とかが最終的に本人の希望も聞いて、楽器を決めたりすんねん」
「そうなんや……」
「自分でハイ！　これやりたいです！言うてはい、そうですか、ではどうぞってわけにはいかんねんぞ？」
「兄ちゃんらの学年はどうやったんよ？」
「オレらの代は特別っていうか、まぁ変わっててん。だって先輩も後輩も同期もおらんもん」

「そうなんか……」
綾音がだんだん暗い表情になっていくのを見て、翔はフゥッとため息を漏らし、優しい顔でこう言った。
「本気やねんな」
「え？」
「ビビらせてゴメン。お前がどんだけ本気か、心配やっただけや」
「そうなん？」
綾音の顔が少し安心した表情へ変わる。
「だって、妹やもん。妹がオレの後輩になんねん。中途半端な気持ちで入ってほしくないからな」
ニコッと笑う翔の笑顔に、綾音もニッコリ笑い返す。
「そうや。プチコンサートすんねんけど、お前も出るか？」
「えぇ！？」
「冗談や。聴きに来るか？」
「ちょっとぉ、ビックリさせんといて！　行くに決まってるやん！」
「へへ。楽しみにしとけや」
翔は妹が後輩になるかもしれないという、少しの不安とたくさんの期待を抱きながら着替えに自分の部屋に上がっていった。

「ただいまぁ」
同じ頃、陽乃も自宅へたどり着いていた。靴を脱ぎ、カバンを引きずりながらリビングへと向かう。
「ただいまぁ～。あぁ、今日は緊張したぁ」
由利がご飯をよそいながら「おかえり」と優しく言葉をかけた。
「ねぇねぇ、お母さん」
陽乃はカバンを置いて由利の横に立つ。
「どうだった？　今日の吹奏楽部の演奏」
「そうそう！　お母さん、ビックリしたわよ～。ずいぶん皆、上手くなってたわねぇ」
「本当！？」

「えぇ。去年の七海祭のときよりも音が大きくなっててね。安心して聴けたわよ」
「わー！　良かったぁ」
「夏樹も、そう思ったわよね？」
夏樹がソファからヒョコッと顔を出した。
「うん。俺、ますます吹奏楽部に入りたくなった」
「嬉しいこと言ってくれるじゃないの～」
陽乃はご機嫌でカバンを持って「とりあえず、着替えに上がってくるね」と言ってリビングを出た。
「でも、夏樹」
由利が夏樹を呼ぶ。
「なに？」
「陽乃と同じ部活に入るってことは、アンタたち、部活では先輩と後輩になるのよ？」
「あー、うん。そうだな」
「抵抗ないの？」
「うーん……」
夏樹はしばらくソファに寝転んでいろいろと考えた。
「部活の間だけ、きちんとすればいいんだろうと思うよ。中学の時に、サッカー部で兄弟けっこういたし」
「そんな簡単に割り切れる？」
「俺、サックス目指すし。姉ちゃんトランペットだろ？　問題ないよ」
夏樹はニッと笑った。
「そう。まぁ、ケンカだけはしないようにね」
「お～」
夏樹は軽く返事をした。
陽乃はその会話をドア越しに聞いていて、ハッと気づいたのだ。
夏樹が吹奏楽部に入るということは、すなわち彼が後輩になるということである。

「しまった……そんなこと、すっかり忘れてた」
陽乃の中で、予想していない展開を迎えたので頭の中がグルグルと、何かわからないものが渦巻き始めた。
「うわ！」
夏樹がドアを開けると、陽乃が立っていたのに驚いて声を上げた。すっかり声変わりした、低い声だった。
「何やってんの、姉ちゃん」
「あ、ちょ、ちょっとね」
「お風呂入るよ、俺。通して」
「あ、あたしもすぐ上がるから」
陽乃は何事もなかったかのように自分の部屋に上がった。
「夏樹が後輩かぁ……。部活じゃ、夏樹なんて軽々しく呼べないし……あの子も姉ちゃんなんて言えないわよね」
陽乃は制服をハンガーにかけながらいろいろ考えた。
「じゃあ何て？　あたしは朝倉くんで、夏樹は……朝倉先輩？」
考えただけで違和感がありすぎて、気持ち悪い。
「あたし、別にそんな堅い感じになってほしくないんだけど……」
吹奏楽部に兄弟で入る可能性がある部員は陽乃を含めて４人いた。まず、翔と綾音の佐野兄妹。そして、本堂　拓真と晃の兄弟。そして、兄弟ではなく従兄弟なのだが、三宅　亮平と彼の従兄弟が吹奏楽部に入るかもしれないという話をバスパートの会話から小耳に挟んだ。
「どんな風に接したらいいんだか……」
陽乃は携帯電話を取って、翔に電話をしようとして止めた。なんだか恥ずかしくて聞きづらいのだ。でも、誰かに相談したい。どんな風に接すればいいのかまったくわからなくなるのだ。
結局５分ほど考え、おそらく部員の中でも突出して大人っぽい雰囲気をしている拓真に聞くことにした。
発信音が３回ほど鳴って、拓真が出た。
『もしもし』

「あ、あたし。朝倉です」
「おう！　どうしたんだよ。珍しい。翔に掛け間違えてないか？」
拓真が電話の向こうで笑っているのが聞こえる。
「間違えてないよ！　やだなぁ」
「アハハ！　ゴメンゴメン。それで？　どうしたの急に」
「うん……ちょっと相談が」
陽乃は一連の気持ちを拓真にぶつけた。
「なるほどなぁ」
「それで、本堂くんはどんな風に気持ちの整理するのかなぁって思って」
「難しいよな、確かに」
拓真も少し悩んでいるようだった。
「うちの場合だけど」
「うん」
「うちの晃、元々サバサバしたヤツだから、ものすごい切り替え早いんだよ。だから、アイツから今日こう言ってきたんだ。俺、吹奏楽部入るからって」
「すっごい唐突」
陽乃はプッと思わず笑ってしまった。
「だろ？」
拓真も電話の向こうで笑う。
「そんでもって、アイツこう言うんだ。兄貴と同じ部活入るからには、兄貴も部活中は俺を弟って思わないでほしいって」
「す、すごいね。そんなこと言うの？」
「あぁ。俺から言い出しにくいってわかってたんだろうけどな。あっさりそう言うから、俺も割り切れた感じかな」
「そうなんだ……」
会話が途切れる。
「朝倉もさ、夏樹くんだっけ？　彼ときちんと話したほうがいいんじゃないか？」

「そう思うけどさぁ……」
「なんかぎこちない感じで部活すんの、嫌じゃん？」
「うん……」
「きょうだいなんだし、あんまり堅く考えすぎんなよ？」
「わかった。ありがと」
「いや。そんじゃあな」
電話が切れた。
「なんか……そんなにすぐ切り替えられるかなぁ」
陽乃はフゥッとため息を漏らして着替えをとりあえず済ませた。
着替えを済ませてから、陽乃はうがいと手洗いをするために洗面所に向かった。
お風呂場から、シャワーの音が聞こえる。夏樹が入浴中だったのだ。
「……。」
ドア越しに映る、夏樹の影。もうすぐ夏樹が弟と、後輩になる日が来るのだ。
「変な感じ」
すると、風呂場から「姉ちゃん？」という声が聞こえた。
「な、なに？」
「あ、やっぱ姉ちゃんか」
「そうよ」
「あのさー」
夏樹は体を洗いながら続けた。
「姉ちゃん、部活に俺が入ってきたら俺のこと、どう呼ぶ？」
「何よ～。突然ね」
「だって大事じゃん！　部活で姉ちゃんとか夏樹とか呼ぶと、周りが変に思わない？」
「周り？　アンタはいいの？」
「俺は別にいいけど。姉ちゃんが困るだろ？　俺に呼ばれるときにいちいち姉ちゃんって呼ばれたら、恥ずかしくない？」

夏樹という子は、人のことを第一に考える子だというのを陽乃は思い出した。自分がどう思われているか、あるいはどう思っているか、どうしたいかは二の次三の次。あくまでも他者を優先する、そんな子だ。

「あたしは～……恥ずかしくないけど。でも、それじゃやっぱり周りが困るよね」

「だろ？」

「じゃあ、アンタはあたしのこと、まぁ、無難に朝倉先輩って呼ぶしかないよね」

「うん。じゃあ、姉ちゃんは俺のことを朝倉くんって呼ぶってことで」

「うん……。あれ？　案外普通だね」

陽乃は思わずクスッと笑った。

「だってそれ以外呼び方ねーじゃん！」

「まぁね！」

二人は大声で笑い出した。

何も難しいことではないのに、陽乃はそれを深刻に捉えすぎていたようだ。手を洗い終えると「それじゃ、見学待ってるよ、朝倉くん！」と練習がてらに呼んでみた。違和感はなくなっていた。

「はい！　朝倉先輩！」

夏樹が風呂場から大声で返事する。その呼ばれ方にも、違和感はなかった。

「ちょっと楽しみになったな！」

弟が入部する。陽乃はそれだけでも十分、嬉しい気持ちでいっぱいだった。

1959

第272話　Welcome　Nanami!

翌日、１０日。今日は七海高校全体が歓迎ムード一色になる。というのも、昨日入学してきた1年生を、全校生徒で歓迎する会を開催するのだ。

校長の挨拶から始まり、新入生代表の挨拶。そして、各学年から選抜で出し物をするなど、午前中すべてを使ってちょっとした文化祭のような会が開催されるのだ。とはいうものの、こうした行事をするのは今年が初めて。どのようなことになるかは、行事をやってみないとわからないというワクワク感が、生徒たちを包み込んでいた。

吹奏楽部も、その歓迎会の盛り上げ役として選ばれていた。そして、今は舞台裏で控えている。

（緊張する？）

美里が洋之に聞いた。

（さすがに……。全校生徒の前で演奏するのって、七海祭以来じゃないですか）

（そうだね……。それに今回は、ドラムセット難しいし）

洋之はドラムセットの位置を思い浮かべて、何度もエアドラムを披露していた。このステージでは思いのほか、パーカッションが活躍する。もちろん、美里も例外ではなかった。美里には本当に久しぶりとなる、ソロがあった。

新入生代表の挨拶が終わったようだ。拍手が沸く。そして、放送部員がアナウンスを始めた。

「吹奏楽部の皆さん、入ってください」

生徒副会長の合図で、部員たちは少し暗くなっている舞台の上へと楽器を持って入る。ザワザワとにわかに騒がしくなる体育館内。

「春やん、はしもっちゃん」

翔は舞台へ上がる直前、春樹と絵美に声をかけた。

「とりあえず、可愛らしくな！」
「任せて！　可愛いっていうなら、私と春ならバッチリだから！」
絵美はニッコリ笑ってみせた。その後ろにいるのは、ガチガチに緊張している春樹だった。
「そんな緊張すんなって！」
「う、うん！　人っていう字何回も飲めば平気！」
春樹は若干引きつった笑顔をしていたが、彼が本番に強いことを知っている翔は、あまり気に留めず舞台に上がった。

「あ……来た！」
夏樹は小声で呟く。陽乃らしい姿と、翔らしい姿が見えた。
（皆が知ってるけど、雰囲気が全然違う曲をガツーンと聴かせるから、夏樹も覚悟してなさいよ！）
昨夜、陽乃が自信満々に語っていたことを夏樹は思い出し、ますますワクワクしてしまった。一体どんな曲が始まるのか。夏樹の胸は期待でいっぱいだった。
「お客さんとして見てると、違うように見えるよね」
たまたま、席が近くなった菜緒と涼平がヒソヒソと話をしている。
「うん。アイツらやっぱ、楽器持ってるとなんかカッコいいよな？」
「リョウもそう思う？　あたしも」
「俺らも吹奏楽部入ればよかったかも」
「アハ！　それ言える！」
その時だった。
「ワン！　トゥー！　ワントゥスリーフォ！」
部員全員の声が体育館内に響き渡ったのだ。

チューバ、ユーフォ、エレキベースの伸ばし音の後に、華やかな金管の打ち込みが響き渡る。そして照明が一気に点灯し、吹奏楽部のステージが始まった。
「行くよ！」

「おう！」

春樹と絵美が舞台裏から走り出る。そして、何度も練習したユーロビート・スタイルのダンスを披露する。何度もＹｏｕＴｕｂｅで確認し、自分たちなりのアレンジを加えたダンス。どこからともなく、おそらく野球部の集団かと思われるのだが「オー！」という低い声が複数、春樹と絵美の耳に届いた。

ユーロビート・ディズニーメドレーの始まりだ。

ダンスと同時に始まるのは、クラリネットとサックスによるミッキーマウスのメロディだ。しかし、普通の穏やかなミッキーマウスマーチとは異なり、ドラムセットの激しいリズムと時たま打ち込まれるスネアドラムの乾いた音が活力溢れる印象を与えていた。

洋之のドラムセットは一糸乱れぬ安定した、しかし迫力ある音を館内に響かせていた。優のグロッケンの音がトランペットの下降系の音と共に響いてくる。そして冒頭部分が再現される。ホルンとサックスは伴奏に徹する部分だが、スパイスとしては非常に重要な意味合いを持っているので手を抜くことはできない。

調が変化して、トランペットとトロンボーンのメロディ。ここで両パートが立ち上がり、音が下がるにつれて腰を下げていくという動きを入れてみた。

「カワイイー！」

菜緒あたりから陽乃は声が聞こえた気がした。吹いている側としては、音が乱れないようにかつ動きが中途半端にならないように、と様々なことに気を配っているのだが、そうした中でもこのような声援というのは案外ハッキリ聞こえているものだ。

そしてまたしても冒頭部の再現。金管群のメロディにホルン・サックスの下降系の音が響く。そしてドラムセットの合図をキッカケに、それらの音が一気に引いた。そして亮平がおもむろに生徒たちのほうを向いて、エレキベースのソロを披露する。ほんの数小節だが、生徒たちに強烈な印象を与えた。凛とした表情の亮平に、スラッとしたエレキベース。洋之と亮平の音だけが館内に響き渡る。亮

平もテンションが上がっているようで、若干汗をかきつつも、笑顔でソロを弾き終えた。

まっさきに拍手が上がったのは目の前にいた1年G組の男子たちからだった。そして曲は転調し、小さな世界へと変わる。

クラリネットが立奏を始めた。演劇部が照明に協力しているので、各出演団体に合った照明を施してくれる。普段、耳にすることのない調子で聞きなれた音楽が聞こえるので、生徒だけでなく教職員にも新鮮にその音は響いていた。

再びドラムセットを合図に曲が変わる。洋之が叩くタムタムの音と、あずさのトライアングルが印象的に響き渡る。チューバとエレキベースが連符を吹き、すぐにトランペットとトロンボーン、ユーフォニウムが立奏を始める。めまぐるしく変化する演奏に、1年生は半ば追いつけない状況だった。

観客として聴いていた綾音と夏樹は、予想以上に自分たちが入ろうとしている部の演奏レベルの高さに、驚きを隠せずにいた。

（こんなにお兄ちゃんらって、上手かったっけ？）

綾音は焦っていた。確か、佐野先輩と大谷先輩以外は初心者って聞いてたのに……と焦りを感じずにはいられなかった。

（うわー！　やっぱ俺、今すぐにでも入りたい！）

夏樹は夏樹で、興奮を抑えきれずにいた。

綾音が焦りを感じているすぐ後ろで、翔平の弟――岩切　裕也はもうすぐやって来るスネアドラムのソロに期待を抱いていた。

（やっぱ、田中先輩だよな！）

裕也はその瞬間を待ちわびる。そして、照明が少し落ちてピンスポットライトが美里と洋之に当たった。

「ミサッチー！」

どこからともなく女子の声が聞こえる。

「こら！　静かにしろ！」

体育の先生らしい男性の声が裕也の耳に聞こえた。裕也は思わず負けたくないと思い「田中センパーイ！」と声を上げてみた。隣に

いた綾音が目を丸くしたが、気にならない。
美里が裕也の声に反応し、バチを上げた。
管楽器が鳴り止んで、美里と洋之の音だけが響く。乾いた鋭い音が裕也の全身を駆け抜けていく。
美里はテンションが上がりすぎて、ついついヒートアップしていた。洋之がテンポを一定に保つように、常にシンバルを刻みますから、と言っていたのを思い出し、その音に耳を傾ける。ここでテンポを上げすぎると、次の曲の勢いが良すぎて、終盤までとんでもない速さで突き進む可能性が高いからだ。
洋之のタムタムが加わり、美里はソロを一気に叩き終えた。
ソロが終わると同時に拍手が沸く。そしてすぐにスポットライトが前へ移動する。いつの間にか、由美子と沙希、絵美が恭一の後ろに立っていた。
「あ！　これ……プーさんかなぁ？」
雄飛の隣にいた女子二人が小声で話している。3人のソロが終わると、プーさんらしからぬリズムでトランペットがメロディを吹く。ユーロビートになると、静かな曲でもここまで変わるのかと雄飛は驚かされた。
再び木管楽器がミッキーマウスマーチのメロディを吹く。そして金管楽器が加わり、冒頭部分へ戻った。
1回目のところで木管が立つ。そして、2回目のところで金管が立つのだ。楽器を普段から立って吹くことなどないチューバにとって、瞬間的に素早く立つというのは結構負担がかかる。特に智志のような楽器を手にして一年も満たない者にとっては、難題である。
演奏が終盤に差し掛かる頃には、春樹と絵美は汗だくになっていた。しかし、意外と二人はダンスのセンスがあるようで、常に笑顔で踊り続けていた。
金管が立ち上がると同時に、春樹と絵美が恭一の後ろでポーズを決める。洋之がサスペンドシンバルを盛大に鳴らし、ユーロビート・ディズニーメドレーは華々しく終わりを告げた。

まだ息が荒い春樹がマイクを手に取り、最後のコメントを言った。
「1年生の皆さん、ご入学おめでとうございます！」
ハァハァと荒い息が、マイクを通して響く。
「緊張と不安でいっぱいかもしれませんが、今日はこの歓迎会でそんな気持ちを吹き飛ばしていってください！　まずは私たち、吹奏楽部の演奏でした。拙い演奏でしたが、ありがとうございました！」
コメントを言い終えると同時に、全員から拍手が沸き起こった。
素早く撤収し、音楽室へと戻る部員たち。まだ春になったばかりというのに、全員にうっすら汗が浮かんでいた。
「体育館暑いなぁ！」
翔が開口一番、大声で言った。
「でも、結構受けてたよね？」
沙希が嬉しそうに言う。
「間違いないな！　つかみ、ＯＫちゃうか？」
「絶対大丈夫だよ！」
慎也も自信を見せた。
「とりあえず、お疲れ！　ほんじゃ、各自楽器を片づけて、演目の合間を見て各クラスに戻ってください！」
「はい！」
体育館へ戻る部員たち。陽乃がハンカチで汗を拭きながら翔に駆け寄った。
「ね、ちょっと忘れてるじゃない！」
「何をや」
「冊子の印刷！」
「あ！　しもた！　ちょ、あの部活案内冊子印刷するメンバー！」
翔が声を掛けると、思い出したように由美子、はるか、あずさが足を止めた。
「今からできるだけ印刷してしまいたいから、他の部も集まってる多目的室3へ移動してなぁ！　オレと朝倉も行くから」
「はい！」

3人が他の部員たちとは他の方向へ歩き出すのを見て、翔と陽乃もそちらへと向かい始めた。
「ねぇ、冊子足りなくなるくらい見学来てくれるかなー？」
陽乃がウキウキした様子で翔に聞いた。
「多分、今さっきの演奏で経験者にはそれなりのいい印象を与えたと思うで。後は、オレらの努力次第やろ」
「そだね！　がんばろうね！」
「当たり前や！」
二人は笑い合いながら、多目的室へと小走りで向かっていった。

第２７３話　期待と不安

多目的室に入ると、他の文化系団体――美術部、映画研究部、英語研究部、茶道部、華道部、新聞部、軽音楽部、科学部、生物部、演劇部が既に揃っていた。
「すいません、遅くなって」
「お疲れ～翔！　俺たちのいるここまでお前らの演奏、聞こえてたぜ」
映画研究部の部長、近藤（こんどう）　和磨（かずま）が笑顔で５人を出迎えた。
「ホンマか？　オレらの音もデカなってんなぁ」
「佐野くん、背もデカくなった？」
新聞部の江守（えもり）　更紗（さらさ）が聞く。
「えぇこと聞いてくれるやん！　なんと１７５センチや！」
「またデカくなってるー！」
陽乃はどこへ行っても翔は知り合いがいることに改めて驚かされた。
「はいはいはい！　いつまでも話してないで、サッサと席に着く！」
新井田　彩が手を叩き、入口から教壇のほうへと向かって歩いてきた。
「はい！　それじゃ、文化部の皆さん。今から各部の部活紹介冊子を印刷してもらいます。各部、１００部ずつまずは案内を刷ってもらいます。今年の仮入部期間は４月１６日から５月１０日まで、約１ヶ月間取っていますから、どの部も頑張って新入生を勧誘してより充実した部活動を行えるようにしてくださいね」
「はい！」
「はい！　元気がよろしい！　では、まず印刷する部は美術部と吹奏楽部です。それじゃ、１０人とも行くよ～」
彩の後を美術部員と吹奏楽部員がゾロゾロと印刷室までついて行

く。
「あ……おはようございます、先輩」
「おはよ！　玲菜ちん！」
由美子が美術部の子と話をし始めた。陽乃は気になって由美子に聞く。
「由美ちゃん、その子は？」
「あぁ、陽ちゃん知らないか！　この子、美術部の柳原　玲菜さん。ほら、去年三宅くん、戸口くん、日高くんと同じクラスだったんだよ」
「へぇ～」
陽乃と翔には接点がなかったので、いまいちピンと来ない。
「はるかちゃんとあずさちゃんは知ってる？」
「あたしは知ってますよー！」
はるかが元気いっぱい声を上げる。
「ごめんなさい。あたしは……」
あずさが申し訳なさそうに玲菜に謝ると、玲菜も「私もごめんなさい。あなたのこと知らなくて……」と謝った。
「そこは謝るトコちゃうやろー！」
翔が思わずツッコんだので、笑いがそこで起こった。
印刷室に着くとすぐに、作業が始まった。
「なぁなぁ」
翔が玲菜に話しかける。
「は、はい」
「美術部ってことは、絵、上手いの？」
「そ、それなりに……」
「やだ！　先輩、知らないんですか？」
はるかが会話に加わってきた。
「去年、柳原さんの絵、関東絵画コンクールで入賞したんですよ！？」
「えぇ！？　ホンマか！」

玲菜は恥ずかしそうに小さくうなずいた。
「すっごいなぁ！　何の絵描いたん？」
翔が続きを聞こうとすると「まぁ、そんな話いいじゃない」と由美子が話を遮ろうとした。
「いやいや、オレは気になる。なぁ、西嶋っち！　柳原さん、何の絵、描いたん？」
はるかは指を立てて言った。
「聞いて驚かないでくださいよ？」
「お、おう！」
「なんと！　そこにいる～、宮部由美子先輩です！」
「えぇ～！？」
これには翔だけでなく、陽乃、あずさも驚きの声を上げた。
「もう！　はるかちゃん！」
由美子が真っ赤になる。
「ホンマか、西嶋っち！」
「ホントですよ！　なんなら、印刷作業終えてからその絵、観に行きます？」
「行く行く！」
「も～……」
由美子は恥ずかしそうに、それ以上に玲菜が恥ずかしそうに俯いていた。

印刷を終えてから多目的室に戻る前に、翔たちは美術部員と一緒に玲菜の絵を見に、来賓玄関へと向かった。
「うわぁ……！」
陽乃とあずさが感嘆の声を上げる。
「これは……すごいわ」
翔も普段は絵などサッパリだが、玲菜の絵には驚かされた。
フルートを構えた由美子が、自分たちの見慣れた音楽室で演奏をしている姿。それが描かれていた。

「なんか、由美ちゃんじゃないみたい……」
「私も自分でそう思うんだけどね」
由美子は恥ずかしそうに頬をかきながら笑った。
「こりゃ参った……」
翔も言葉を失う。
「それでですね、佐野先輩」
はるかが翔の前に立つ。
「どないしたん？」
「どうでしょう！　今年の吹奏楽部の勧誘ポスター、未完成ですよね？」
「そうやったな……」
「そこで、今回ポスターは美術部の方に描いてもらう！　いかがですか？」
これには美術部員も驚いていた。
「あ、あたしたちぃ！？」
翔と同級生で美術部員の長瀬（ながせ）　美希（みき）も驚きの声を上げる。
「もちろん、タダってわけではありませんよ？　来る5月のゴールデンウィーク。美術部では、七海市美術部展覧会をここ、ナナコウで実施しますよね？　その時、あたしたち吹奏楽部から受付やその他もろもろのお手伝いをさせていただくってことにしようかなぁなんて考えてるんですよ～」
はるかはそこでハッと気づいた。
「す、すいません！　部長と副部長の意見聞かずに暴走して……」
「いや……」
翔がうなずいた。
「えぇんちゃうか、それ」
「ホ、ホントですか！？」
はるかが驚いて今度は声を上げた。
「おう。朝倉はどうや？」
「あたしも賛成！　だって、あたしたちが下手に絵を描くより、美

術部の人に描いてもらうっていうのはいいと思う。それに、持ちつ持たれつの関係を、部を越えて作りたいし」

実際、部活動というのはあまり他の部と関わることは少ない。しかし、陽乃も翔もそれではあまり楽しくないと考えていたのだ。

「オレもそない思うねん。それに、オレとしては朝倉が描くピカソの出来損ないみたいな絵を出されても困るしな」

「何よ！　バカケル！」

ほら、また始まったと美希が笑う。

「とにかく、美術部の皆さんはいかがですか？」

「そうね……。それ、面白いから引き受けさせてもらおうかな！」

美希が笑顔で親指を立てた。

「よし！　契約成立！」

「それじゃ、早速なんだけどちょっとモデルを選ばせてくれる？」

「モデル？」

翔がポカンとした様子で聞き返す。

「うん。吹奏楽部員の男子2名、女子2名それぞれをポスターのモデルに選ばせてほしいの。男子は私、女子は柳原さんが責任持って描く。どうかしら？」

「そういうことか！　ＯＫ。えぇよ、選んで！」

すると、美希はすぐにモデルの名前を挙げた。

「まず、佐野。アンタ」

「えぇ！？　オレぇ！？」

これには陽乃も度肝を抜かれた。

「うん。ルックス良し、身長良し、何より楽器が絵的に映えるの。そういうわけで、よろしく」

有無を言わせない美希の提案。続いて白羽の矢が立ったのは。

「それと、ほら、なんて言ったっけ……玲菜ちんのクラスメイトで……あぁ！　コントラバス？　弾いてる男の子」

「もしかして、三宅（みーやん）　ですか？」

あずさが聞いた。

「そうそう！　その子。その子にも佐野、アンタから頼んでおいて」
「了解！」
「それから次は女子よね～……。ねぇ、朝倉さん。吹奏楽部の女子って、誰々だったっけ？」
「えっと、あたしと由美ちゃん以外は田中美里、橋本絵美、大谷沙希だけど……」
「え？　思ったより少ないんだ。ビックリ！」
美希はしばらく考えた。
「じゃあ、陽乃で頼もうかな！」
「あ、あたし！？」
「うん！　アンタたち、学年でも公認カップルでしょ？　どうよ。イケメンと美少女のポスター！　けっこう輝くわよ！」
「いいですねぇ！　それ！」
一気に食いついてきたのははるかではなく、意外にもあずさだった。
「よし！　じゃああと一人ね……。あと一人は……玲菜ちゃん。吹奏楽部の1年生女子で気になる子いる？」
「気になる子……ですか……」
玲菜がパッと思い浮かんだのは、あずさの隣でいつも騒いでいる子だった。
「あの……乃木さんですよね？」
「あ、はい」
「乃木さんのお友達というか……同じ楽器の子、なんて言ったっけ？」
「あ、エリリンのことじゃない？」
はるかがあずさに言った。
「秦野のこと？」
「あ、そ、そうです」
「何？　どんな子？」
あずさが思いつく限りの恵梨の特徴を言った。

「単純明快、明朗活発なアクティブ少女ですね～」
「いいわね！　ねぇ、佐野。ぜひその子と三宅くんに、モデルになるように言っておいて！」
「お、おう」
美希は「よーし！　やる気出てきたわ！」と意気込むと、そのまま印刷物を抱えて美術室へと駆けていく。ペコリと玲菜がお辞儀をし「先輩！　まだ多目的室でホッチキス綴じの作業があります！」と大慌てで後を追っていった。
「ねぇ……大丈夫かなぁ」
陽乃が心配そうに翔に聞いた。
「うーん……オレも期待半分、不安半分や……」
「大丈夫よ！　心配しない！」
由美子が笑顔で二人に言った。
「いいじゃない！　部活同士で持ちつ持たれつ。いい関係を作ろうよ！」
「……せやな！」
由美子の前向きな姿勢に、翔が強くうなずいた。
「ほんじゃ、秦やんとみーやんにはオレから説明するわ」
「よし！　決まりですね！」
はるかも嬉しそうにうなずく。
「とりあえず、多目的室に戻ろうか」
「はーい！」
事が進む時は一気に進む。陽乃は先ほどよりも期待のほうが少し、大きくなった気がしていた。

第２７４話　まだまだあった！

１０日午後５時。新入生は基本的に来週月曜日、１６日から仮入部期間になるため、今週いっぱいはまだ部活に参加していない。しかし、既に何名かはどの部も新入生が見学あるいは部活に試しに参加していたりする。

吹奏楽部も例に漏れず、参加している新入生がいた。歌川　まゆ、夏樹、飯岡　好美、岩切　裕也などである。新入生が来ているパートはその指導に当たっている。他のパートも基礎練習などをしているが、今日は全体的にその指導を２年生に任せることにした。翔たち３年生は、今年開催予定の定期演奏会についての話し合いを重ねていた。

「やっぱり、もうちょっと参考になるように演奏会を聴きに行かないと」

絵美が強くうなずいて言う。

「だけど、もう七海市周辺ではほとんど定期演奏会の時期、終わってるじゃん」

春樹が困った口調で絵美に返した。

「そう。それが問題なんだよね」

フゥッと絵美からため息が漏れた。

「ねぇ、何も七海にこだわらなくてもいいんじゃない？」

美里が前で顔を出す。

「と、言うと？」

翔が聞き返した。

「だから、横浜とか近辺の市を探してみるの。もうすぐゴールデンウィークだし、ひょっとしたらそこを狙って演奏会、やってるところがあるかも」

「ゴールデンウィークかぁ……。あるかもしれへんなぁ」

翔がうなずく。

「ねぇ。そういえばこないだ、翔、竹林くんと何か話してなかった？」
陽乃が思い出したように翔の制服の袖を引っ張った。
「あ。そうそう。そういえば演奏会のお誘いみたいなんが、来とってん」
翔はカバンからクリアファイルを出し、そのチラシを全員に見せた。
「スプリングコンサートか……。ちょうど5月だね」
由美子が小さく手を叩いた。
「いいじゃない！　行こうよ」
美里が行く気マンマンで立ち上がる。
「ちょっと待てや。お前、わかってんのか？」
「何が？」
「愛媛やぞ。泰徳がおんの」
「あ……」
「新入生も入ってくるのに、どないして数十人単位を愛媛に連れて行くねん？」
「遠征費とか出ないの？」
沙希が聞く。
「アカンアカン。遠征費言うたら、試合とかコンクールとかやないと、基本的に出されへんらしいからな」
「そっかぁ……」
「それに、コンクールとかの練習も入るやろ？　他の行事もあるし、全員で行くのはちょっと無理やで」
「じゃあ、やっぱり行くのは佐野くんと陽ちゃん？」
陽乃が首を横に振った。
「仕切る人間が二人も欠けるのはマズいと思うけどな」
「あ、それもそうか……」
「でも、行かないと今後なかなかチャンスがないじゃん」
拓真が心配そうな声を上げた。

「それもそうだけど……。やっぱ、定演とかするんだったら、そっちのほうでお金使うだろうし……」
「まぁまぁ、ちょっと待てや」
翔が会話を止めた。
「オレらがお金の心配したって始まらんやろう。それより、演奏会をするのにプラスになるかどうかで、判断しよう」
「演奏会自体はやってるわよ」
由美子が複数のチラシを出した。
「でも、一般バンドだったり大学のバンドだったり。やっぱり、それだと高校生のする演奏会とは雰囲気とか違うから……。参考にはなるけど、あんまり身近じゃないよね」
「ここのバンドとか、１３０人だって！」
絵美が驚いて目を丸くする。
「そういう意味では、まぁ知り合いもおるってことで、泰徳んトコは理想的やんな」
「でも、問題は誰が行くか……よね」
「そうやなぁ……」
ふと気づいたように陽乃が言った。
「ねぇ、後ちょっと気になるんだけど、入場料とかは？」
「あ……。演奏会があるってことだけ聞いて、そこらへんあんまり聞いてなかった」
「じゃあさ、詳しく日程と時間、場所、費用とか聞いておいてよ。それに応じて、行く人数を考えよう」
「せやな。今日の晩にでも連絡するわ」
「そうやなぁ……」
「でも、１校だけじゃ心もとないわよね……」
そこへ、委員会で遅れてやって来た誠とはるかが部室に入ってきた。
「こんにちはー！」
「こんちは！」

「おう！　あ、西嶋っちとまこっちゃん、今日はパート練やから。3年5組でサックスはやってる。フルート、オーボエ、バスーンは多目的室2な」
「はい！」
誠はカバンを下ろすなり、すぐに楽器の準備を始めた。
「先輩。何のお話ですか？」
はるかが興味津々といった様子で覗き込んだ。
「ん～？　定演の参考のために、どっかの演奏会聴きに行きたいって話してんやけど……。なかなか見つからんでなぁ」
「あ！　そうだ。あたし、一昨日母親と横浜へ行ってきたんですよ。ちょうど課題曲を演奏する一般バンドの演奏会があったんで」
「へぇ！」
拓真が興味深そうだった。他の3年生も興味を示す。
「どんな感じだった？」
「なるほど、ここはこういう風に吹くのか……とかいろいろ参考になりました！　あ、参考音源になるように、その時の録音CD買ってきてますから、置いておきますね」
「サンキュ！　助かるわ！」
はるかはテーブルの上にCDケースを置いた。よく見ると、デカデカと「西嶋」という名前が書かれている。このあたり、はるからしいのかもしれない。
「あ、そうだ」
はるかはもうひとつ思い出したようにカバンをゴソゴソと探り始めた。
「定演の参考にするために、演奏会行くんですよね？」
「うん」
「これ、プログラムの間に挟まってたチラシです。ちょっとシワクチャですけど、良かったら参考に見てください」
「おぉ！　助かる！　おおきに！」
「いえ！　それじゃあたし、練習行きますね」

はるかからチラシを受け取った翔は、3年生の目の前にバッとチラシを広げてみる。しかし、あいにくほとんどの演奏会が本番と被っていたり、レッスンの日で抜けることが難しかったりというような日ばかりであった。

その中で、何とか日程が合いそうな演奏会は4団体。そのうち、2団体が一般バンド、1団体が中学校、1団体が高校であった。

「一般バンドはちょっとやっぱり、趣向が違うな」

慎也が苦笑いする。

「レベル高い曲多いしなぁ……」

翔も困り顔だ。

「じゃあ、この中学校か高校ね」

沙希がチラシを2枚、抜き取った。中学校は横浜市立　濱御崎(はまみさき)中学校吹奏楽部。高校は横浜市立　虹西(こうせい)高等学校吹奏楽部。

「この2校のどっちか、聴きに行こうか」

翔が全員に聞いてみた。

「そうね。せっかくだもん。聴きに行こうよ」

「よし！　決まりや」

翔は濱御崎中学と虹西高校のチラシを自分のパートのロッカーに磁石で貼り付けておいた。

「ほんなら、次の話。定演するに当たって今のところ、クリエイトホールを使わせていただこうかと思ってるねん。仮に、2年生並に1年生が入部したら、クリエイトホールがちょうどいいんちゃうかと思ってるんやって、東先生」

「いいんじゃない？」

春樹が同意した。

「あそこ、音がスゴく響くもん」

「あ、それあたしも思った！」

美里が大声で反応する。

「お前うるせぇな。耳元でわめくなよ」

慎也が苦笑いで耳をふさいだ。

「でも、やっぱりホールを借りるにはお金結構かかるんやん」
「そうだろうね……」
「そこで、近所の商店街とか会社とかに、協賛金のお願いにオレらで回らんか？」
「あたしたちで？」
陽乃が目を丸くする。
「別に、保護者会でやってもえぇんやろうけど、やっぱオレらがする演奏会やろ？　オレらでお願いに回ったほうが、えぇんちゃうか？」
「でも……」
絵美が心配そうに質問をした。
「校長先生とか、学校とかからＯＫ出るの？」
「大丈夫。東先生がもう、職員会議で承認取ってくれてる」
「ホント！？　はやーい！」
陽乃が笑顔で拍手をした。
「どない？　緊張はするけど、もっとやり甲斐は出てくると思うで！」
「そうね……」
沙希が手を挙げた。
「私は、賛成」
「あたしも！」
由美子が手を挙げる。
「お、俺も！」
「俺だって！」
春樹が続く。
「なんだよ！　俺も！」
拓真と慎也が続いた。
「え！？　あ、あたし乗り遅れてる！　あたしもあたしも！」
美里が続いた。
「陽乃は？」

「あたしに聞く？」
「……やろうと思った」
翔がニカッと笑う。
「ほな、今日の終礼で2年生にも評決取ってみるわ。ありがと！練習に行こか！」
「はーい！」
3年生は笑顔で返事をすると、それぞれのパート練習部屋へと分かれていった。

第２７５話　ＡＢＣＤＥｌ！？

「ねぇ、陽ちゃん、エミリン」
翌４月１１日（水）。陽乃と絵美が音楽室へ行こうとしていたとき、後ろを歩いていた由美子が二人の制服の袖を引っ張った。
「何？」
「見て。あそこ」
本校舎は吹き抜けがあり、それを囲むようにして教室が配置されている。ちょうど陽乃たちの向かい側、調理室のあたりにその人はいた。
「すごいでしょ？　髪の毛金髪で、超サラサラ」
「ホントだ～！」
絵美が思わず見とれる。
「すっごい……。外人さんよね？」
陽乃も頬を赤くして彼女を見つめた。
「多分。ティーチングアシスタントさんかなぁ？」
通称ＴＡ。七海高校の英語では１年生のときにオーラルの授業があり、そこでＴＡさんと呼ばれる、ネイティヴの外人講師を招いて臨場感ある英語を学ぶ機会があるのだ。
ふと、金髪女性と陽乃たちはバチッと目が合った。すると、彼女は助かったといわんばかりに陽乃たちへと近寄ってきたのだ。
「こ、こっち来るよ！？」
「え！？　ど、どうしよう！」
そして彼女は何の抵抗もなく、話し掛けてきたのだ。
「Ｅｘｃｕｓｅ　ｍｅ，　ｃｏｕｌｄ　ｙｏｕ　ｔｅｌｌ　ｍｅ　ｔｈｅ　ｗａｙ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｇｙｍ？」
「え！？」
陽乃が顔を引きつらせる。

「な、なんて言ったの!?」
「あたしにわかるわけないじゃない!」
由美子が絵美の後ろに隠れる。なおも女性は話し掛けてくる。
「I am lost for the first time though I came to this high school as an international student today. Though I would like you to guide it to the gym if it is good.」
「あ、う、えーおー」
陽乃が口をパクパクさせて困っていると、さらに追い討ちをかけるように別の女性――黒髪の人がやって来たのだ。
「真對不起，不過，體育館為止可以引導?? 成為了迷路的孩子」
「や、やだ! 今度は何語!?」
絵美が真っ青になる。由美子は「多分……中国語」と苦笑いで返した。
陽乃たちが真っ青になっていると、後ろから沙希がやって来た。
「どうしたの?」
「サ、サキティ! が、外人さんが何か言ってる!」
「え? どれどれ」
沙希は金髪女性の前に立つと、サラサラと会話を始めたのだ。
「I am lost for the first time though I came to this high school as an international student today. Though I would like you to guide it to the gym if it is good.」
「I see. It is good though it is oral. First of all, please go down the stairs there up to

the first floor, go out of the entrance, and chuck a leftie. It is immediate when getting out from the flower bed and turning off to the right.」

「……。」

3人が呆然としている中、沙希は「体育館の場所、どこだって聞いてたみたい」と笑顔で返した。

「そ、その人もなんだけど……」

「へ？」

沙希が振り向くと、中国語がビュンビュン飛んで来たのだ。

「わ、私もさすがに中国語は……」

すると、後ろから慎也がやって来た。

「何やってんの？」

「ちゅ、中国の人がなんか話してて」

「中国？　どれどれ」

今度は慎也が黒髪の女性の前に立つ。

「真對不起，不過，體育館為止可以引導？？成為了迷路的孩子」

「體育館1層為止下來那裡的台階，請超過升降口向左面拐彎。如果此後，即使穿過了花壇向右面也拐彎，馬上。」

これにはさすがの沙希もポカンとしている。

「か、川崎くん……中国語、喋れるの？」

「ま、まぁ……」

「な、なんで？」

「小学校3年生から5年生まで、ちょっと親の仕事の都合で中国行ってたことあるから……」

「すっごーい！」

「み、美里には内緒で頼むよ」

「なんで？」

「なんか……ハズかしいからさ……」

「えー？　なんかもったいないなぁ」
陽乃が言うと、ドッと笑いが起こった。
音楽室へ行くなり、陽乃は今さっき起きた出来事を翔に話していた。
「お前アホやなぁ」
「何でよ！」
「英語が喋られへんのがアホなんじゃなくって、今日、オレらが何のために演奏するか、考えてみぃや」
「あ！」
絵美が思い出したようで声を上げる。
「今日、留学生歓迎会じゃん！」
「あ。そうだったな」
慎也も思い出したようにスライドにグリスを塗りながら呟いた。
「ってことは、さっきの人みんな留学生？」
「そうなるんだろうね……」
明らかに陽乃、絵美、由美子の表情が暗くなった。
「どないしてん？」
「ねぇ、留学生ってことは……部活にも参加できるの？」
「え？　それはどうなんやろ……」
そこへ、恭一がやって来た。
「おはようございます！」
全員が立って挨拶をする。
「おう、おはよう」
恭一が笑顔で挨拶を返したかと思うと、すぐに陽乃が駆け寄ってきた。
「先生！」
「どうした。すごい気迫だな」
「留学生って、部活に参加するんですか！？」
「ん？　今日来る留学生か？」
「はい！」

恭一が笑顔で返した。
「基本的に参加は自由だ。だから、ウチの部でももちろん、受け入れるつもりだぞ」
「そ、そんなぁ！」
にわかに音楽室がざわめく。
「あぁ、心配するな。基本的に、ある程度日本語を勉強して来ている人たちばかりだからな」
「で、でもあたしたちさっき、思い切り英語で話しかけられて！」
「咄嗟のときは英語とかが出るんじゃないのか？　心配しなくても、先生たちもいるから」
恭一は英語担当だ。まず、英語は問題ないだろうと陽乃はホッと一息ついた。それに、中国の人であれば慎也がいる。しかし、もしもアフリカやルーマニアの人が来たりしたらどうなるのだろう、などと陽乃は不毛な心配ばかりしていた。
「おっ。そろそろ時間だな。全員、チューニングは大丈夫か？」
「はい！」
「よし。それじゃあ体育館に移動！」
「はい！」
打楽器は基本的にチューバとユーフォ以外の男子が移動させることになっている。陽乃は翔の楽器を預かっていた。
「……。」
翔の楽器を見つめる陽乃。ふと見ると、何やら字が彫ってあった。翔は気づいているのだろうか。
「なんて書いてるんだろう……」
見ると「Ｋａｚｕｓｈｉ」と書かれていた。
「カズシ……？　あ」
震災で亡くなった兄、一志の名前だとそこで気づいたのだ。
「楽器に名前なんて彫れるんだ……」
陽乃も自分の楽器を買った暁には、名前を彫ろうかなどと考えた。
そう思うと、なんだか楽器にも愛着が湧いてきそうである。

「朝倉さん！」
春樹が駆け寄ってきた。
「どうしたの？」
「ゴメン！　ちょっと楽器見ててもらっていい？　俺、音楽室に雑巾忘れてきた！」
雑巾は金管楽器に必須である。唾を出すために、場所によっては雑巾が必ずいるのだ。外で吹くときであれば問題ないが、室内では基本的に床に唾を直接出したりはしない。
「わかった。急がなくていいよ！」
「ありがと！」
春樹は小さな体で階段を2段飛ばししながら音楽室へと駆けていく。
「ん……？」
春樹のユーフォを見ると、翔のものと同じように名前が彫ってあった。
「Ｓｉｇｅｋｉ……？」
春樹という字ではなかった。
「水谷くん……兄弟いたっけ？」
陽乃はそんな話を聞いた覚えはなかった。
「後で聞いてみようか」
そう呟いてすぐに彩香が「先輩！　ちょっと椅子の配置、手伝っていただけますか？」と走ってきたので、陽乃は梨子に春樹の楽器の見張りを頼んで体育館へと向かったので、そんなことはすっかり頭から抜けてしまったのだった。

「留学生の皆さん！　こんにちは！」
恭一が挨拶をすると「こんにちは～」といろんなイントネーションが混ざった日本語で返事が来た。
「今日は、ブラスバンド部が皆さんを歓迎する演奏をします！」
普段、恭一はブラスバンドとは言わないのだが、わかりやすく言

うために今回はこの表現を用いた。
ちょうどその頃、体育館の表では初老の男性が一人来ていた。
「すみませんが、この演奏が一般でも聞けると耳にしたもので……」
入口で受付をしていた新井田が「はい！　どなたでもどうぞ！」と優しく招き入れてくれたので、男性は笑顔で「ありがとう」と答え、中に入っていく。
「今日は昨日入学したばかりの1年生も、皆さんを迎えてくれます。短い時間ですが、楽しんでくださいね」
恭一がお辞儀をすると、拍手が沸く。
（OK？）
全員に目配せをする恭一。
（あれ……？）
夏樹はふと違和感を覚えた。チューバあたりの席を見てみると、亮平、拓真、智志、そして愛実。春樹の姿が見当たらないのだ。
（水谷先輩……休み？）
指揮棒が降りて、恵梨がティンパニを激しく叩く。そしてトランペットのメロディ。そしてホルンの音とクラリネットやフルートのトリルが響く。サックスもメロディに加わる。
ディープ・パープル・メドレーの幕開けだ。
初めの曲は『バーン』。翔、さゆり、麻綾が立ち、メロディを奏でる。そして2回目はホルンの順平。順平はここ最近、音が太くなり一人だけでも周りに負けない音に成長していた。
洋之のドラムの叩き方はやはり、堂々としている。こうしたスピード感が求められる曲では、必ず洋之がドラムセットを担当していた。
曲が変化していく。そして、ハイウェイ・スターへと移り変わった。
トランペットの陽乃、彩香、勇が立つ。トランペットの堅い音が体育館中へ響いていった。それを受け継ぐフルートとあずさのシロフォン。そしていろんな楽器の上昇音や下降音、吹き伸ばしなどが

混ざって行く中、彼が出てきたのだ。
カジュアルな服装に身を包んだ春樹だった。そして、本来はバリトンサックスが吹くソロを、吹き始めたのだ。
Ａ（アー）の音から始まるソロ。ユーフォには厳しくなる高音域だったが、春樹にはあまり関係がなかった。そして細かい音もごまかさずに、春樹は一音一音確実に吹きこなしていく。
「Ｏｈ～！」
留学生から感嘆の声が漏れた。同時に吹奏楽経験がある１年生からチラホラ「すっご！」という声が聞こえてきていた。
そして低音から高音へと一気に駆け上がる。春樹はほぼ完璧にソロを吹きこなし、最後に楽器で円を描くようにして、ソロを吹き終えた。
同時にサックスが立ち上がり、ソリを吹き上げる。春樹は盛大な拍手を受けながら自分の席へと戻っていく。サックスのソリが終わった後には『スモーク・オン・ザ・ウォーター』が始まった。この曲が最も、耳にする機会が一般の人でも多いだろうと思われる曲だった。
トロンボーンの激しく熱いソリが始まる。ネチネチした吹き方を、と恭一が言ったのに慎也はずいぶん悩まされた。そのような吹き方をしたことがないからである。しかし、亜紀が異様にその吹き方が上手かったので、徹と慎也はあっという間にその吹き方を習得した。ちなみに、サックスにも同じメロディがあったのだが、こちらははるかの指導でメキメキとその吹き方の力をつけていっている。
そして再現部。楽器が次第に加わっていき、曲はテンションを上げていき、トランペットの高音とホルンの雄叫び、そしてドラムセットとティンパニを合図に、曲は終わりを告げた。
拍手と同時に、まずは恭一が春樹に起立を促した。ペコリと可愛らしくお辞儀をする春樹と、先ほどのソロの時の春樹ではまるで表情が違っていた。
初老の男性がそっとプログラムを開いた。吹奏楽部の欄には、生

徒の名前が書いてあった。
「水谷……春樹くんか」
男性はもう一度春樹を見た。
「なるほど……。やはり……」
春樹の笑みを見た後、男性はほぼ確信していた。
「しばらく待ってみるか……」
拍手がさらに盛り上がる中、吹奏楽部の留学生歓迎舞台は終了したのだった。

第２７６話　異世界からの誘い

留学生歓迎会も終わった１１日の夕方。吹奏楽部は各自ロングトーンをした後、今日は切り上げる形になっていた。明日から課題曲及び自由曲の練習を本格的に再開する。その合間を縫って、新入生のためにコンサートを開いたり、部活紹介に参加する予定だ。

「そういえば、翔」

陽乃が思い出したように言った。

「泰徳くんトコの演奏会の情報、わかった？」

「あ！　そうそう。結構凝った演奏会でさぁ。どないしょうか思ってんねん」

翔は泰徳から聞いた情報を３年生に伝えた。

【出場校】

○愛媛県松山市立常套中学校

○愛媛県松山市立北佐屋中学校

○愛媛県立斎木高等学校

【入場料・チケット】

○チケット代

・前売り／５００円

・当日券／８００円

○チケット紛失時入場料　１，０００円

※学生証をチケット売り場で見せると、すべて半額になります。（小学生以下無料）

【開催日時】

２００７年５月１日（火）～４日（金）［ＧＷです］

【開催場所】

愛媛県民文化会館　大ホール（オーケストラピッド使用）

【演奏曲目】

～第１部（北佐屋中学校）　５月１日～

?:栄光をたたえて

?:海の男たちの歌（Ｆｕｌｌ　ｖｅｒ．）

?:稲穂の波

?:ＤＥＥＰ　ＰＵＲＰＬＥ　ＭＥＤＬＥＹ

?:宝島

?:Ｃ調の言葉にご用心

?:ポップス描写曲　《メイン・ストリートで》

～第２部（常套中学校）　５月２日～

?:センチュリア

?:レッドライン・タンゴ

?:高度な技術への指標

?:メモリー

?:ディズニー・プリンセス・メドレー

?:野球拳ファンタジー

?:チャルダッシュ（テューバソロステージ）

～第３部（斎木高等学校）　５月３日～

?:架空の伝説のための前奏曲

?:喜歌劇「メリーウィドウ」セレクション

?:トゥルース

?:トランペット吹きの休日（超難関ｖｅｒ．）

?:ルパン３世のテーマ

?:アメリカン・グラフティーメドレー
?:デサ・フィナード

～ファイナルステージ　5月4日～
?:マーチ「ブルースカイ」
?:ダフニスとクロエ　第2組曲より、?『夜明け』　?『全員の踊り』
?:ゴッドスピード!
?:ディスコ・パーティー?
?:シング!シング!シング!
?:THE　Young　Man　－YMCA－
?:エル・カミーノ・レアル
?:第六の幸福をもたらす宿（Full　ver.）

アンコール
○スカイ・ハイ（浜口　愛Saxソロ）
○ラデッキー行進曲
○ディスコ・キッド

「やだ!　思ったより長いじゃない」
美里が困った声を上げた。
「どうすんのよ。お泊りでなんか、とてもじゃないけど行けないわよ。ウチの部、貧乏だもん」
「おい。空しくなるようなこと言うなよ」
慎也が美里の爆弾発言に困惑している。
「だあって……」
「ま、ホンマのことやからしゃあないな」
翔がハハッと笑ったので、なんとなく雰囲気が和らいだ。
「でも、どうすんの?　5月2日……。ちょうど、泰徳くんトコの演奏会と濱御崎中学の演奏会が、被ってるわ」

「うわ。ホンマや……」
翔が困った顔をした。
「参ったな……。どないしよう」
「ねぇ。泰徳くんと翔だけが知り合い……ってわけではないんでしょう？」
実際、そうであった。翔と泰徳以外に、良い雰囲気を醸し出している拓真と美並、ピアノコンクール以来の知り合いである恵梨と美奈、ブログで仲良くなっている愛実と未来。意外と七海高校と常套中学のつながりはあった。
「翔はやっぱり、部の中心だから七海から離れるのはちょっと問題アリかなってあたし、思うんだけど」
「まぁなぁ。新入部員入って間ぁないし」
「その代わりって言ったら何だけど、こういうときのためにあたしや本堂くんがいるんじゃないかな？」
拓真が予想外の展開に少し困惑していた。
「俺がコンサート行くのか？」
「別に本堂くんじゃなくて、あたしでもいいの。いずれにせよ、5月2日はほぼ全員が濱御崎中学へ行くでしょ？　でも、常套中学にだって行く価値は大いにあるわ。遠征費が出ないっていうのがネックなんだけど……」
しばらく3年全員が黙ってしまった。
「俺……行くよ」
拓真が呟いた。
「自費ででも行く」
「え？　じ、自費じゃなくていいんじゃない？」
由美子が珍しく拓真が強気になっているので困惑した様子で返した。
「そうよ。自費かどうかっていうのはまた話が別。とにかく、誰が行くか決めなきゃ」
「だから、俺が行くってば」

「どうしたの？　拓あん……。珍しく強引っていうか」
春樹も心配した様子で聞いた。
「そんなんじゃないけど……。とにかく、俺は翔と朝倉さんは残ったほうがいいと思うからさ」
拓真がニッコリ笑ってそう言ったので、陽乃も「そう言うんなら……」と納得した。
「あー。でもオレが行かれへんって言うたら、泰徳怒りそう」
「まぁ、その気持ちわからなくもねぇな」
慎也が言った。
「俺が幼なじみなら、知ってるヤツには自分の活躍、見てもらいたい」
「そうやろなぁ……」
「じゃあさ！」
沙希が提案した。
「逆にしない？」
「逆って？」
絵美が聞き返す。
「あれでしょ？　要は部長が不在なのが問題なんだ」
「そりゃまぁ、そうやな」
「でも、陽ちゃんと本堂くんだって、もう副部長で最上級生でしょ？　佐野くんの不在を1日くらいはカバーできるわよ」
「つまり、オレが泰徳のほうへ行って、拓あんと陽乃が七海（こっち）に残るんか？」
「そういうこと」
沙希の提案にほぼ全員が「いいかもね」と同意し始めたのだが、ただ一人譲らない人物がいた。拓真だった。
「俺は絶対、常套中に行く」
「えぇ？」
意固地になるのが珍しい拓真だけに、全員が困惑していた。
「なんでそこまで……こだわんねん？」

「別に。ただ、純粋に泰徳くんの演奏を、同じチューバ奏者として聴きたいだけだし！」
拓真は「ここ見ろよ」と指差した。そこには「？チャルダッシュ（テューバソロステージ）」と書かれていた。
「これ、絶対聴きたい」
「……しょうがないなぁ。そこまで言うなら」
「大丈夫なの？　せっかくの演奏会でしょ？」
絵美がもう一度翔に聞いた。
「なんだ！　簡単じゃない」
突然陽乃が手を叩いた。
「何のために2年生代表がいるのよ！」
2年生代表、つまり駿のことであった。
「あたしと逢沢くんで2日の七海は仕切るから、本堂くんと翔、エリリン、メグちゃんっていう風に、常套中と親交の深いメンバーが演奏会に行く。これでどう？」
「せやな！　そうしよか！」
「それなら……まぁ」
拓真もようやく納得したようだった。
「じゃ、これで決まりね。後でエリリン、メグちゃん、逢沢くんに話をしなきゃ」
陽乃が立ち上がり、3人に話をしに行こうとしたときだった。ガラガラと部室のドアが開いたのだ。そして、3年生全員が見知らぬ男性がそこにいたので、一瞬戸惑った表情を見せた。
「失礼するよ」
「は、はい。えっと、どういったご用件でしょうか？」
翔がスッと立ち上がり、応対する。
「水谷くんっていう子は……いるかな？」
「水谷？　あ、そこに……」
春樹も戸惑っている。
「ふむ……。よく似てるなぁ」

「……？」

全員がポカンとしている中、男性は自己紹介を始めた。

「私、鎌倉音楽大学の相馬（そうま）と申します」

「鎌倉音楽大学！？」

全員が唖然とし続ける中、春樹だけがその言葉に素早く反応していた。

第277話　父が愛したもの

鎌倉音楽大学。
春樹がその言葉を忘れたことは、一度もない。
「ただいま……」
春樹は珍しく、元気のない声で家のドアを開けた。
「お帰り」
幸恵子が笑顔で出迎えた。
「どうしたの？」
「……。」
息子の様子がおかしいことに、母親である幸恵子はすぐに気づいた。
「春樹？」
「母さん……。今日さ……部活に、鎌倉音大の人が来た……」
「え？」
幸恵子が目を丸くする。
「……何をしによ」
あからさまに幸恵子の機嫌が悪くなった。
「俺を……鎌倉音大に、推薦したいって」
「……ダメよ」
幸恵子が首を横に振った。
「でも……母さん、俺」
「ダメったらダメ！」
ビクッと春樹が体を震わせた。
「春樹！　わかってるの？　貴方のお父さんはね、鎌倉音大に行っていなかったら……今頃、私たちと楽しく暮らしていたハズなの！」
「……。」
「本当は……貴方が吹奏楽をするのにだって母さん、反対だった」

「そんな……」
「今さらよね……大丈夫よ。高校の間は続けていて構わないから」
「……うん」
春樹は静かに答えた。
「ご飯、冷めないうちに済ませちゃいなさい」
「はい」
春樹の父・茂樹（しげき）は春樹が１０歳の時に交通事故で亡くなった。鎌倉音楽大学の准教授（当時は助教授）として勤務していた。毎晩遅くまで学生の指導に当たっていて、あまり家庭を顧みないタイプの人だったと幸恵子から聞いている。
春樹もよく覚えている。小学校での父親参観のときも、茂樹が来たことは一度もなかった。かといって、幸恵子が来るかといえば、Ｎｏだった。
寂しい思いをした。けれども、来てほしいとは言えなかった。一度だけ、茂樹が指揮を振る演奏会を聴きに行ったことがある。その時の父親の表情はとても活き活きとしていた。そして、自分もいつか父のように楽器を演奏したり、指揮を振りたいと思うようになっていた。
そんな矢先の１０歳の夏休みの時だった。帰宅途中、父親が自損事故で亡くなった。完全なる寝不足から来る、前方不注意。コンクール直前のことだった、と式場での話を春樹は小耳に挟んでいた。はじめはバスの事故で亡くなった、と幸恵子から聞かされていたが、どうやらそれは幸恵子のウソだったとここに来て春樹は気づかされた。おそらく、他人のせいにしなければ、幸恵子は心の整理がつかなかったのだろうと今になれば、思う。
一家の大黒柱がいなくなった家は一気に傾いた。母が仕事をするようになり、母方の祖父母が春樹の面倒を見るようになった。そもそも、父方の祖父母とも上手く行ってなかったらしい幸恵子は、この事故を契機に茂樹方の父母を含む親戚関係と一切交流をしなくなった。それまで春樹と定期的に遊んでいた従兄弟たちとも、全然会

えなくなった。
小学校5年生を前に、春樹は同じ七海市内だったが転校した。冨樫小学校への転校だった。さらに、苗字が変わった。転校前は石川だった姓は、母の旧姓である水谷へ変わった。それから中学は葉島中学校へ。この中学には吹奏楽部がなかったため、春樹は特に部活動にも参加しなかった。
中途半端な時期に転校したこと、父が亡くなったこと、母が極端に家にいる時間を減らしたことなどが相まって、春樹はこの時期ずいぶんと塞ぎこんだ。
いつだったか、陽乃が「水谷くん、もっと暗いと思ってた」と言われるほど、明朗活発だった春樹は塞ぎこむタイプに変貌していた。
「ごちそうさま」
春樹はそんな自分を振り返り、今の自分は徐々に昔の自分へと戻ってきていることを感じていた。
七海高校に進学した時も、吹奏楽部がとっくの昔に廃部になったと聞いてショックを受けた。しかし、すぐに吹奏楽サークルを創ろうとしている子がいると聞き、押入れから勝手に楽器を持ち出し、気づけば音楽室の前にいた。偶然にも、小学校・中学校と同じだった陽乃がいた。
そして、彼女は笑顔でこう言った。
「恥ずかしがらないで。せっかく楽器あるんだし、みんなで楽器吹いて音楽しようよ」
何かが吹っ切れた。笑顔が漏れて、心がスゥッと溶ける気持ちになった。しかし、入部したいと言えば幸恵子に即却下されるだろうと思った春樹は、入部届けを出した後に入部を彼女に報告した。
事後報告となれば、幸恵子もどうにもできないと思ったのか、あっさり入部を認めた。しかし、それ以降保護者会に幸恵子が参加することもほとんどなかった。春樹は家でもなんとなく、肩身の狭い思いをしていた。
そして今日の出来事だ。さすがにあそこまで怒鳴られるとは予想

していなかった。
「春樹」
楽器を撫でていたところに幸恵子が来たので春樹は慌てて楽器を手放した。
「お風呂に入りなさい」
「うん」
服を脱ぎ、風呂に入る前に鏡を見た。
「腹筋割れてる」
おもしろそうに春樹は笑った。いつのまにか、痩せているだけのおなかに腹筋の割れ目がうっすら、できていた。
「……。」
静かにドアを開け、風呂に入る春樹。どうすれば母親を説得できるかと考えるよりも、どうやって推薦を断ろうかを考えるほうが早いかもしれないと思っていた。

「おっはよう！　春やん！」
朝一番、翔に出会った。
「お、おはよう」
「元気ないなぁ！　せっかくいいお誘い来てんから、もっと元気出さんと！」
「そ、それなんだけど……」
春樹は一呼吸置いてから答えた。
「断るかも……」
「え！？」
翔が春樹の肩を掴んだ。
「なんでや？　こんな……大学の教授のほうから推薦なんて、ほっとんどありえへんことやねんで！？」
「わ、わかってるけど……ウチ、父親がいないからさ……いくら推薦って言ったって……学費なんか、４年も音大のを払えるワケないし……」

「そんなん、学費援助とかいろいろあるやん！　方法次第でなんとでもなるやろ？」
「わかってるよ！」
春樹が泣きそうな顔で続けた。
「でも、俺が行きたいとか援助があるとか、どうとかの前に、母親が反対なんだから、しょうがないだろ！？」
「……。」
翔がビックリした様子で目を丸くしている。
「ゴメン……ちょっと、一人にしてくんない？」
「……わかった」
翔はトボトボと歩く春樹を見送ることしかできなかった。すぐに、自分たちはもう高校３年生で、それなりに大人に近づいてきていると思っていたのに、まだ親の庇護下でいろんなことを支えてもらわなければ、自分が食事ひとつ満足に作れないことに気づいたのだった。
「ちょっと」
美里と陽乃が後ろにいた。
「陽乃……田中……」
美里がポンと肩を叩いて言った。
「こればっかりは、あたしたちが口出ししてどうこうできる問題じゃないわ」
「でも……」
「水谷くん次第だよ」
陽乃が続ける。
「でも！」
「佐野くん。あたしたちは、水谷くんの答えを待とう」
美里が珍しく語気を強めた。
「……。」
「春やん次第だからさ。ね？」
陽乃の言葉に翔はうなずくことしかできなかった。

その日の練習。バスパートで春樹の推薦を知っているのは拓真しかいなかった。その拓真も、翔たちから春樹の推薦に関しては一切口にするなと聞いていたため、特に取り合わずにいた。

マーチ・ブルースカイの練習。ユーフォとチューバで同じ部分といえば中間部のメロディがまず挙げられる。そこの練習を重点的にしていた。現時点では、まだ1年生は加わっていない。

「なんかこう、チューバの音の立ち上がりが遅い気がするんですよ」

亮平が指摘する。

「低音はほら、東先生がおっしゃってたように音の立ち上がりが遅い分、どうしても遅れて聞こえますよね？　だから、ちょっと早いくらいでもいいんじゃないかって思います」

亮平のアドバイスに、智志と拓真は真剣にシャーペンでメモを取っている。

「あと、思うんだけど加藤は水谷先輩に比べると、ちょっと音が軽く感じられるかな、そこのメロディは」

「軽い？」

愛実が首を傾げる。

「うん。ボーンもチューバもユーフォも、ここは重みのあるしっかりとした音を吹いたほうがいいと思うんだけど」

そして突然、亮平が春樹に話を振った。

「先輩はどう思います？」

「俺？」

「はい。先輩です」

「う～ん……」

春樹はしばらく考えた後、持論をぶつけた。

「まぁ、ブルースカイだから極端に重すぎるのはどうかと思うけど……確かに、みーやんの言うとおり、軽すぎるのは良くないかな」

亮平が続ける。

「俺としては、水谷先輩くらいの音が理想なんですよ」

「また俺？」
春樹は苦笑いした。
「すいません。ちょっと吹いていただけますか？」
春樹は渋々楽器を構えた。春樹としてはイメージ的に、ブルーというくらいなのだから、透き通った音であってほしい。けれども、ただ軽々としたイメージで吹くのではなく、ここではちょっとした強い風が吹いているような、そんなイメージを持っていた。
「なるほど……」
智志がうなずいた。
「ちょうどあれですね。天気の良い日に校庭で風が思い切り吹いて、女子のスカートが捲れてキャー！みたいな感じですね？」
「やだぁ！」
愛実がクスクスと笑った。
「いいじゃん！　そういう具体的なイメージ、大事だと思うけどな」
亮平も笑っている。
「ちょうど水谷先輩みたいな音が理想ですよ。俺いつも思ってました。先輩って、音一つ一つにもこだわりお持ちですよね」
春樹はまったくそんなつもりなどなかった。
「俺たちも真似させてもらいましょ！」
「はーい！」
亮平の呼びかけに愛実と智志が元気良く答えた。
「じゃ、ちょっと休憩しようか！」
拓真がパンパンと手を叩いて休憩を提案した。
「はーい！」
愛実は待ってましたとばかりに、外へ飛び出した。すぐに携帯電話を取り出すとどこかへ掛け始める。
「もしもし？　ミキティ？　あたし！　うん。今度のコンサートの件なんだけど……」
どうやら常套中の谷　未来に電話を掛けているようだった。いつの間にか未来ちゃんがミキティと呼ぶ仲になっているようだ。

「元気だな～加藤さんは」
拓真が窓際で外を眺める春樹の横に立って、お茶をグイッと飲んだ後に呟いた。外からは野球部の威勢の良い声や、女子ソフト部の元気な声が響いてくる。
「拓あん」
春樹が低い声で拓真の名前を呼んだ。
「うん？」
「拓あんは……進路考えてる？」
「進路？」
「うん……」
「俺は……とりあえず、関東近辺の私立大学を受けるつもり」
「そっかぁ。志望校は？」
「青学か……中央かな」
「そうなんだ」
「春やんは？」
ヒョイッと拓真が春樹の顔を覗きこんだ。身長差があることを感じさせられる。
「俺は……」
「まだ決めてないんだ？」
それは推薦のことだと、すぐにわかった。
「うん……」
「まぁ、親の希望も大事だけどさ」
拓真は外を向いた。春樹とは背中合わせになるような形で話を続ける。
「自分のしたいことを、本当に続けられるんなら、その気持ちも伝えとかないと後悔するぜ？」
「自分のしたいこと……か」
「俺は」
拓真が珍しく饒舌（じょうぜつ）になった。
「吹奏楽部に入ろうって決めたんだ。見学したその日に」

「早い決断じゃん」
「ウチの学年、みんな即決だったよな」
拓真は懐かしそうに笑った。
「後悔してないよ。家族には続くわけないって反対されたけど、最終的に俺が決めた。結果として辞めていたとしても、後悔はしてなかったんじゃないかなって、今なら思う」
「……。」
春樹は父の死後、いつも他人のことを優先して考えてきた。自分のことはいつも後回しだった。
「絶対内緒の話だぜ？」
拓真がニッと笑って春樹に耳打ちした。
「翔のヤツ、島根大学狙ってるんだってさ！」
「島根大！？」
春樹は大声を出しそうになったが、何とか抑えた。
「あぁ。最近、島根県で市町村合併が進んでて、教員が不足してるそうなんだ」
「へぇ……」
「どうせやったら必要とされてるとこで教師したい！だってさ」
翔らしい考えだと春樹は思った。
「朝倉さんは知ってるの？」
「もちろん。だから、後を追うだってさ」
「やっぱり」
春樹はおかしくてつい、笑ってしまった。
「そんで、最近二人ともその進路の話で大喧嘩だって。ご両親と」
「すげぇや」
「自分の将来だし、それくらい意見戦わせてもおもしろいかなぁって俺も思いだした」
自分に言われているのかとドキッとしたが、拓真は自然とそう言ったようだった。
「自分の……か」

「うん？」
「ううん。なんでもない」
春樹は笑顔で答えた。
父はどうだったのだろうか。死の直前まで、自分が愛したものと一緒にいられたのは、幸せだったのだろうか。
自分はいったい、何を愛しているのだろうか。
春樹は自問自答で頭がいっぱいになった。
「練習再開するぞー」
拓真の声で、春樹の思考は一時中断となった。

2006

第２７８話　俺が愛するもの

「ただいま」
その日の夕方。春樹は凛とした表情で帰宅した。昨日までの元気のなさがウソのような表情で帰宅したので、幸恵子も驚いていた。
「母さん。話があるんだ」
「……なに？」
「俺……推薦、受ける」
受けたい、とは言わなかった。受ける、と断定した。
「聞き分けのないことを言ってるのは、わかってる。でも、俺……ユーフォニウムを吹きたいんだ。続けたいんだ」
「……。」
「できることなら、俺、この楽器を吹くことを仕事にしてもいいって、思ってる」
本気だった。この気持ちは、ここ二、三日でできた中途半端な気持ちではなかった。強く思い始めるキッカケとなったのは、翔の幼なじみ・泰徳の姿を見たときだった。雪子のお別れ会の時、泰徳の吹く姿を見て鳥肌が立った。翔曰く、セミプロの話も来ているということだった。実際、来てもおかしくないほどの技量を持っていたが、それ以上に彼は誇らしげにしていた。中学生とは思えない姿だった。
そして、母親が留守の時に何度も盗み見した、父親が指揮を振る演奏会のビデオ。偶然、インターネットのオンラインショップで発見したそれを春樹は、小遣いで購入したのだ。そこで演奏をする奏者の、晴れ晴れとした様子。自分が、奏者であれ指揮者であれ、今後も吹奏楽に強く関わっていきたい。そう思うようになった。
最後の決め手は、今日の翔と陽乃の話だった。
翔は、教師になるため、そして最も必要とされている場所へ行く

と決めたのだ。春樹であれば、絵美のこと、幸恵子のこと、そして自分のことなど複合的に考えて、それが可能かどうかで考えるであろう。遠距離恋愛であったり、母親が一人残されたり、家事をしなければならないことであったり。しかし、翔はダイレクトに自分のしたいことを先頭に持ってきて、それから後のことを付随的に考えているのだ。自分を動かし、それから周りを動かす。翔と春樹の徹底的な違いはそこにあった。

陽乃も同じであった。翔からその話を聞いた途端、彼女は恭一に島根大学を目指すと言い始めたのだ。3年生のクラス分けでは、陽乃は難関私立大学レベルを目指すクラス。国公立対応の勉強はしなくもないが、翔に比べて必然的にレベルは落ちる。

彼女は勉強も頑張り、部活も頑張るという強い意識を抱くようになったそうだ。絶対にテストの点数を下げない。部活をいい加減にしない。それは難しいことだが、彼女はやってみせると恭一に誓ったということであった。

「大丈夫。学費は、援助してもらってそれでも足りなければ、バイトする。バイトは、勉強に支障を来たさない範囲でする。あと、母さんだって仕事で大変なのはわかってるから、自宅から通うようにする。七海から鎌倉までは、電車で1時間くらいだと思う。負担はかけないようにする。仮に、この推薦試験に落ちたら」

春樹の覚悟だった。

「もう、音大は受けずに一般大学に進学する。吹奏楽も、しない」

「……。」

しばらく沈黙が続いた。そして、幸恵子の答えは予想以上にプラスなものだった。

「わかったわ」

「え……?」

「その代わり、すべてきちんとすること。勉強をするからといって、今の部活をないがしろにして、皆さんに迷惑をかけないこと。かといって、部活に夢中になって勉強がオロソカになって、試験に落ち

たりしたら絶対に許しません」
「母さん……」
「しっかりするのよ？」
幸恵子がニッコリ笑ってくれたことで、春樹は一度に肩の荷が下りた気がした。
「わかった！」
春樹は試験の日程を詳しく聞いてきていたのだ。まず、筆記試験が１０月３０日に行われる。そして実技試験が翌日３１日。面接が１１月２日。合格発表が１１月１０日ということであった。しかし、問題は実技試験である。春樹の場合、金管楽器コースを選択することになるが、基本的にピアノは必須試験となっていた。
「ピアノ……」
ピアノという単語で浮かんできたのは、沙希の顔であった。まだ午後９時すぎ。起きていると勝手に決めつけ、春樹は沙希に電話した。
「あれ？」
話中の音が聞こえた。
「誰かと電話中かぁ……」
春樹は仕方なく、携帯電話を置いて床に寝転んだ。
それにしても不思議だったのは、幸恵子の心変わりであった。あれほど昨日は音大受験を厳しく禁じていたのに、今日になって一転、許可したのだからまったく春樹には解せないでいた。
「……。」
いつの間にか目が閉じられ、春樹はスゥスゥと寝息を立てていた。
「あらあら」
幸恵子が笑いながら、春樹に毛布を被せた。１年生のときには１６８センチだった背が、今年の健診で１７２センチまで伸びていたと本人が言っていた。子供の成長というのは早いものだと、幸恵子は驚かされていた。そして、音大を受験すると言った時の表情は、父である茂樹にそっくりであった。本番前になるといつも、茂樹は

春樹と同じ、キラキラとした目をしていた。
家庭を顧みない夫ではあったが、その目の輝きは今でも忘れられない宝物であった。その目を見たとき、きっと自分がどれだけ止めようとしても、この子は止まらない。そう幸恵子は感じていたのだ。
それであれば、逆に見守ってあげたほうがこの子にはプラスになる。そう思い、幸恵子は考えを改めたのだった。
「茂樹さん……。血は争えないわね」
幸恵子は遺影を見ながら、クスッと笑った。

一方の佐野家では、友美子と翔の激しい言い争いが続いていた。
「だから！　なんで島根やないとアカンの!?　別に、神奈川でもいいでしょうが?」
「アカンって！　島根は今、市町村合併で先生が不足しとんねん。せやから、オレは必要とされてるトコで先生やりたい！」
「聞き分けのない子やね！　大体、島根大学やろ?　合格できるかどうかも怪しいわ、アンタの成績じゃ」
「そんなもん、今から勉強すれば上がる！」
「一夜漬けしたらできるような、テストちゃうねんよ!?」
「わかっとるわ、そんなこと！」
「何やの！　その口のきき方！」
珍しく友美子が手を上げた。パシッと乾いた音がして、翔の頬に友美子の平手打ちが直撃した。状況をソファに隠れながら見ていた綾音と智輝は、いつもの言い合いで終わると思っていただけに驚いて体をビクッと震え上がらせた。
「痛ったぁ……！」
翔が頬を押さえて友美子を睨みつけた。ますます状況が悪化するのではないかと綾音はハラハラしていたが、予想外にも翔は冷静だった。
「ほな、今度の模試で島根大学の合格判定がC以下やったら、島根大学の受験はやめる」

「ホンマやね？」
「その代わり、B以上やったら母さん、なんも文句言わんといてや？」
「約束するわ」
翔は頬を押さえながら「よっしゃ～。やったろやないか！」と意気込んで部屋を出て行った。
シン……と静まり返るリビング。綾音と智輝は身じろぎひとつできずに、ソファに座ったままだった。
冨美枝が静まったのを見計らって、和室から出てきた。
「ずいぶん、激しかったね」
「すみません……お見苦しい」
「いいんよ。だいたいそうやわ、異性の親子というのは。親元を離れる時期になると、異性の親というのはずいぶん心配するものなんよ、その子のことを」
「お義母さんも、ありました？」
「そりゃあもう。昭も普段はポーッとしたような子やけど、大学進学時に、なんか大阪出て静岡の大学に通うって言い出してね。経済観念もなんもあらへんあの子に、一人暮らしなんか務まらんと思って、私は大反対。でもお父さんは逆に、そういうのを身に付けさせるためや言うて、あえて賛成したんよ」
「そうなんですか……」
「それで、その大学でこんないいお嫁さん候補を見つけて来てねぇ。私もビックリしたよ」
「ヤダ！　お義母さんったら」
ドッと笑う二人を見て安心したのか、綾音と智輝が静かに部屋を出て行った。
「……あの子、勉強してんのかしら」
静かになったのでふと気になった友美子。帰宅してすぐに言い争いを始めたので、翔は結局夕食を食べずじまいだった。
「ご飯、持って行ってあげたら？」

「そうですね」
友美子は肉じゃがを温めなおし、豆腐とご飯、海苔をお盆に載せてから翔の部屋に向かった。そして部屋の前に着き、ドアをノックしようとした時にドアが開いた。
「……。」
少し寂しそうな表情をしていた。
「どないしたん」
「ゴメン」
翔が謝った。
「なんで謝るの」
「別に、家を出たいわけやないから……」
「えぇ？」
友美子はいまいち意味がわからない。
「オレ、ホンマは迷ってるんやけど……家にもおりたいし。でも、自分のしたいこともあるし……」
翔自身、迷っていたのだとそこで友美子は気づいた。いま、翔には背中を押すことが必要なのだと。
「何を言うてんの」
友美子は笑顔で言った。
「アンタはアンタのことを、まず考えなさい。これからは」
「……。」
「もう、小さい子供やないねんから」
「うん……」
「ほら！　ご飯食べたら勉強しっかりしぃや」
「うん」
「ほんじゃあね」
友美子はゆっくりと部屋の前を後にした。階段を降りながら「親離れか……」と呟き、ちょっとこぼれそうになった涙を拭って、リビングへと戻っていった。

2013

第２７９話　すべてを出し切れ！

４月１３日（金）。昨日から行われている新入生対象の部活動紹介。昨日は体育会系部が紹介する日であった。今日は文化系部が紹介する日である。ちなみに、毎年不公平にならないよう、初日に紹介する順番を入れ替えている。去年の吹奏楽部は人数不足ということもあり、参加しなかった。参加の有無は各部に任されている。

「そんじゃあ、各パートでチューニングを済ませてください。その後、全体でチューニングをします」

「はい！」

金管セクションリーダーである慎也の指示に従い、各パートでチューニングを始める。今日の楽曲は全パートのチューニングがピッタリ合っていないと、かなり大変なことになるので、普段以上にどのパートも真剣だ。

「１０高い」

翔が麻綾のチューニングをしながら、そう言った。

４月になり気温が上昇してきたこともあり、サックスも音程が微妙にズレるようになってきた。木管楽器はまだ音程のズレがましなほうで、金管楽器のほうではチューニング管をある程度抜いていくのが必要となってくる。

「もう１回」

「はい」

Ｂ♭の音を吹く麻綾。

「アカン。まだちょっと高いっていうか音が揺れてる」

音が揺れるとは、音程が上がったり下がったりと定まらない不安定な状態を示す。たいてい、息が均一に入っていないことが原因だ。

「もうちょっと息しっかり吸って、均等に吐かんとアカンわ。次、中野ちゃん」

「はい！」
気合い十分すぎるさゆりは、出だしの音がキツくなりすぎて爆発音に近い出だしになった。
「アカンアカン！　もっと丁寧に。ポップスでもオリジナルでも何でも一緒！」
「はい！」
一方のはるか。彼女の問題は何でもかんでもビヴラートを効かせること。
「ちゃうって、西嶋っち！　ビヴラートはチューニングの時はいらんから」
「すいません……」
「みんなさぁ……1年生に聴かせる演奏やから気合い入るのはわかるけども。ずっこけるような力み方とかしたら、何の意味もないで？」
「はい……」
「先月の、七吹の定演のときみたいに、いつもどおり吹いたらええねんから。力みすぎへんように」
「はい！」
「佐野～、そろそろ移動だぜ」
部活紹介実行メンバーが翔を呼びに来た。
「お、来た来た」
翔が笑顔で「オッケー！　すぐ移動するわ！」と答える。
「ほんじゃあ、男子はパーカスの移動よろしく！　同じパートの女子はなるべく、男子の楽器を持ってやってください。ほんで、待機場所はパートごとに異なるけど、確認したとおりな。チューバとか弦バスはこけんようにしてや」
「ういーす」
拓真、智志、亮平が低い声で答えた。
「あ！　宮部ちゃんと瀬戸っち」
「うん？」

「楽譜、パートごとに持つように指示してあるからスコアだけ持っていってな！」
「はーい！」
ゾロゾロと体育館へ移動する吹奏楽部員たち。心なしか、その表情が硬くなったような気がしなくもない。
演劇部の部活紹介は、体育館のど真ん中を使ってやっている。吹奏楽部はと言うと、舞台のすぐ下のスペースと舞台上、それに演劇部がいままさに使用している真ん中の通路、それから2階スペースも使用する。演奏する曲の特色を考慮しての使用部分だ。
演劇部の紹介が終わり、いよいよ吹奏楽部の時間となる。既に舞台上にはパーカッションが配置済み。ティンパニのみ、舞台下に配置してある。そして、並んでいる椅子。しかし、部員たちの姿はパーカッションしか見当たらない。
（遅刻……？）
綾音は首を傾げていた。と、そこへ一条の光が差し込んだ。その光は美里に当たっていた。
「新入生のみなさん！　ご入学、おめでとうございます！」
張りのある美里の声は、体育館中にマイクを通さずとも、響いていった。
「私たちは、吹奏楽部です。本日は、吹奏楽にどのような楽器が使用されているのかを紹介しつつ、吹奏楽部の活動も同時にご紹介します！　それでは……ナナコウ・ウインドオーケストラ！　部活紹介ステージ、スタート！」
恭一が「ワン、トゥ、スリー、フォ！」とリズムを刻む。そして初っ端に入ってきたのはスネアドラム、グロッケン、チャイム、ティンパニの4人。あずさのチャイムが印象的なメロディを奏で、優のティンパニがおなかに響くような強く芯のある音を響かせた。
体育館1階の入口が開いて入っていたのはフルート・ピッコロ、オーボエ、バスーンのメンバーだった。佳菜を先頭に沙希、由美子、健之佑、誠と続く。交互に顔を出して歩き、ちょうど中央でピタリ

と止まる歩き方（事前に歩幅を調べておいた）で体育館中央へと向かう。

そこで大きな拍手が既に沸いたが、すぐに観客の視線は2階へと注がれることになる。まず、2階席からヒョコッと顔を出したのは拓真と智志。チューバにしては珍しく、彼らだけのメロディがあった。そして次に加わるのは、ユーフォニウム。拓真の斜め左前から愛実が、新入生から向かって左側の奥には春樹がヒョコッと姿を現した。既に拍手が沸いているが、次にメロディを奏でたホルンと密かにスポットライトを浴びて現れた亮平にも視線が注がれる。

全員でメロディと伴奏を吹いた後、再びパーカッションの打ち込みが行われる。同時に1階の舞台側、左右の扉が開いた。生徒たちは舞台のほうへ向き直る。舞台向かって右手から出てくるのは絵美、優輝、駿。左側から出てくるのは梨子、みゆき、光瑠だった。この間に、拓真たちは2階から1階へ降り、外へいったん出て裏口から回って再び体育館内に戻っている。

中央で合流する絵美たち。合流した後はグルグルと回りながらたまに、膝をやわらかく下ろして（マーチングでのクッションと呼ばれる作法）かわいらしい動きを作っている。最後にベルを上げてクラリネットが吹き終えると、舞台上向かって右手から麻綾とはるかが、左手から翔とさゆりが演奏しながら歩いてきた。

クラリネットの可愛らしいメロディと異なり、大人っぽい艶のある音がサックス族の特徴。しかも、経験者の翔、さゆり、麻綾に色っぽさでは群を抜くはるかの音色だ。図らずとも館内がどよめくほどに色っぽい音の集まりとなってしまい、これには部員たちも思わず笑ってしまった。

サックスが揃うと同時に舞台にライトが灯り、トロンボーンが姿を見せた。慎也、亜紀、徹の順で並んだトロンボーン。続いてその間を埋めるように後ろから陽乃、勇、彩香が顔を出し、サックス、チューバ、トロンボーン、トランペットで盛大な合奏を響かせる。そして間髪いれずにパーカッションだけのメロディが始まった。

初めはティンパニ、ドラムセット、チャイム、グロッケン、シロフォンの5人。それぞれ優、美里、あずさ、恵梨、洋之が担当している。ティンパニが休みになり、あずさと恵梨だけでメロディを奏で、パーカッションにしては珍しくメロディが長く続いた。

ドラムマーチの後に転調し、普段どおりチューバや弦バス、エレキベース、バスクラリネットは伴奏へ、他の楽器も副旋律や主旋律を奏でていく。いつの間にか手拍子が起こっていて、恭一も指揮を止めてチューバと美里に任せきりで手拍子をして盛り上げていた。

無事に演奏が終わり、恭一のお辞儀と共に拍手が起こる。演奏し終わった直後で少し息切れした翔がマイクを手にし、挨拶を始めた。

「皆さん、こんにちはー！」

1年生は聞きなれない関西弁にザワザワと騒ぎ始める。

「はいはいはーい！　はい！　関西弁やからって騒がない！　えっと、吹奏楽部の紹介は演奏を聴いてもらったほうが早いと思い、このような形を取りました。いかがでしたでしょうか？」

その質問に応えるように、拍手が再度起きる。

「おおき……ありがとうございます！」

陽乃は翔が思わず「おおきに！」と言いそうになったのをギリギリで止めたとわかり、笑いそうになってしまった。

「えぇ、時間もないので最後に。吹奏楽部は現在、俺たち2年生が」

「佐野。3年生」

恭一のツッコミに翔が顔を赤くした。ドッと笑いが館内に広がる。あまりの兄の緊張振りに綾音も笑ってしまった。

「俺たち3年生が10名、2年生が23名の合計33名で活動しています」

由美子はきちんと翔が雪子のこともカウントに入れたことを、素直に嬉しく思っていた。

「活動場所は音楽室になります！　初心者でも関係ありません。事実、俺たち3年生の中で経験者はサックスのオレとフルートのそこのお嬢様っぽい子だけでした。後の8人はまったく楽器経験ナシの

初心者でした！」
　ザワザワと一部でざわめきが起きた。おそらく、吹奏楽経験のある１年生の声であろう。
「仮入部期間よりも前ですが、今日から部活見学可能です！　初心者の方も経験者の方も、興味を持たれたら音楽室まで気軽に来てください！　関西弁でオレが陽気に部活の案内するか、関西弁うっとおしい人は標準語……オレ、標準語って言葉嫌いなんですが、標準語の部員が案内します！」
　ドッと笑いが起きた。
「それでは時間のようですので、これにて吹奏楽部の部活紹介を終わらせていただきます！　本日はありがとうございました！」
　恭一が合図すると全員が立ち、一同に礼をした。
　拍手に押され、体育館を出る部員たち。
「やったな！　春やん！」
　出るなりすぐに拓真が春樹の横に駆け寄ってきた。
「うん！　俺たち印象強かったよね？」
　春樹と拓真が慎也に聞く。
「おう。確実に俺たちより印象強かったぜ」
「良かったー！」
　バスパートはできる限り、１年生を入れたいと思っているだけに、印象のある演出をしたかった。その結果が出るかどうかは別として、自分たちの考えた演出を１００％出し切ることができた。春樹と拓真はそう感じていた。
「陽乃」
　翔が陽乃を呼ぶ。
「ん？」
「夏樹くん、今日から見学来るん？」
「あぁ、そうみたいよ。っていうか、もう入部届け出すとか言ってたよ」
「仮入部期間まだやのに」

翔は思わず笑ってしまった。
「真剣すぎるよね」
「確かにな」
「まぁなんにせよ、今日の紹介で1年生が興味持ってくれるといいね！」
「せやな！」
二人が笑い合っていると恭一が「じゃあ、各自楽器をしまった後は教室へすぐに戻るように！」と言ったので、翔と陽乃はとりあえず楽器を片付けに音楽室へと小走りで戻った。
楽器を片付け終えた後、陽乃と翔は並んで廊下を歩いていた。
「今日の放課後、楽しみだね！」
「おう！　今からソワソワするわぁ」
いつもどおりの二人。しかし、4月から教室は別々になった。F組の前で陽乃が立ち止まる。
「お、そうやったな」
「うん……」
「ほな、また放課後」
「うん。また」
翔は笑顔で手を振る。陽乃も笑顔で振り返す。その表情を見て、翔はすぐにH組の教室へと向かって行った。
「……もう1回くらい向いてくれたっていいのになー」
今日から別の部屋で、別のことを勉強する。部活で一緒とは言え、少し寂しい気が陽乃にはしていたのだった。

第２８０話　新しい香り

部活紹介の終わった日の放課後から、実質的に1年生が部活へ見学ないし参加できる期間に入っていた。本来は週明け月曜日となる４月１６日から5月１１日までである。

吹奏楽部も見学者の受付を始めていた。

「こんにちはー！」

真っ先に音楽室に姿を現したのは、チューバ希望の飯岡　好美。後ろにはまだ顔を見たことのない少女が二人、立っていた。

「いらっしゃい、飯岡さん」

翔が笑顔で出迎える。好美も笑顔で「相変わらず爽やかですね、センパイ！」と答える。その後ろで翔の爽やかな笑顔に顔を赤くしている二人の少女を、翔はさらに笑顔で出迎えた。

「いらっしゃい。見学の方やんね？」

「はっ、はい……！」

二人ともいささか緊張しているようで、好美が先頭を切って彼女たちを紹介し始めた。

「えっと、こっちの髪の毛をオダンゴにしてるほうがクラリネット希望の添田（そえだ）　麻衣子（まいこ）で、こっちの髪の毛が長い方が、トロンボーン希望の佐々木（ささき）　雛乃（ひなの）です」

「クラリネットに、トロンボーンね！　よし、はしもっちゃんも慎也も喜ぶわ。二人とも、経験者？」

「はい」

「ほんなら話は早いな！　じゃ、早速やけどちょっと楽器吹いてみる？」

「いいんですか！？」

翔の言葉に、二人が目をキラキラ輝かせた。

「もちろんやん！　何のために見学に来たんかわからんやん、吹かへんかったら。行こう！　あ、飯岡さんはいつもどおり、拓あんた

ちのところで吹いててや」
「はい！」
好美は部室へ少し緊張した様子で入っていった。愛実の「きゃー！　好美ちゃーん！」という声を背に、３人は練習場所へと向かう。
コンコン、というノックの音が聞こえたので慎也が「はいよ？」とドアを開けた。
「ちっす！」
「うっす」
「早速、１年生を１名連れてきました」
翔のその言葉に、慎也はもちろん亜紀と徹の目もキラキラと輝いていた。
「マジでか？　どっち？」
「この、髪の毛の長い方の彼女です。では、お名前をどうぞ」
「さっ、佐々木雛乃と言います。よろしくお願いします……」
「佐々木さんだね！」
慎也がグイッと雛乃の手を引いた。
「楽器、２つ用意してあるんだ。早速だけど、吹いてみなよ」
「い、いいんですか？」
「遠慮なんていらねぇから。ほら、どうぞ！」
「はい！」
雛乃があまりに嬉しそうにするので、思わず慎也も顔がほころんだ。嬉しそうにしているトロンボーンの教室を後にし、翔は麻衣子をクラリネットの練習部屋へと連れて行った。
クラリネットの部屋のドアを１回ノックした瞬間、駿が勢い良くドアを開けたので思わず翔も麻衣子も目を丸くした。
「けっ、見学者ですか！？」
「せやで。鋭いなぁ」
「先輩！　１年生です！」
その言葉に絵美がビクッと体を震わせた。絵美はここのところ、１年生にどのように指導すればいいか悩む、困るとずっと呟いてい

た。その日がとうとうやってきたので、どうやら彼女は気が気でないようだ。
「ほな、後はそこの橋本さんって言う先輩や、2年生の先輩たちがいろいろしてくれるやろうから、オレはここで」
「あ……はい……」
翔はニコッと笑って言った。
「緊張せんでいいよ？　ここの部には、変に堅い人とか怖い人とかおらへんから、自然体でおってな」
「はい……！」
麻衣子の顔にようやく笑みが浮かんだ。
クラリネットの部屋を後にし、翔が音楽室へ戻ると音楽室前に4人の姿が見えた。
「ど、どうする？」
背の高い少年が少女に問い掛ける。
「やっぱり、ここは二人のどちらかが……」
少女が背のそれほど高くない少年の背中を押した。
「俺も改まると緊張する……。お前行けよ」
翔は次に喋り出した少女の声を聞いて、そのメンバーたちの出身校にすぐ気づいた。
「あたしだって同じやもん。ここは、何回か出入りしてるアンタが行きぃや」
綾音、夏樹の二人と同級生らしい姿だった。翔はそっと近づき、綾音の真後ろで「何をやっとんねん！」とわざと大声を出した。
綾音が「ひゃー！」と大声をあげ、すぐに「ビックリさせんといてぇよ！　あたし、心臓弱いねんから！」と怒り出した。
「ゴメンゴメン！　それより皆、せっかく音楽室来てんから、ドアの前におらんと早く見学に入りぃや」
夏樹が恥ずかしそうに笑い「やっぱり、改めて入るとなると緊張して……」と言った。
「まぁ、その気持ちはわからんでもないけどな！　時間もったいな

いやん。こんな楽しい場所ないで？」
その言葉に４人の表情が緩む。
「ほんで？　そちらのお二人は、綾音と夏樹くんの同級生？」
背の高い少年がペコリとお辞儀をした。
「中学から朝倉くん、佐野さんと親しくさせてもらってます、速水騎士（はやみないと）といいます」
「ナイト！？　ナイトって、騎士（きし）の？」
「はい」
「カッコえぇ名前やなぁ……！　それと、あなたは？」
騎士の隣にいる少女もペコリとお辞儀をする。
「私は片岡（かたおか）なぎさと申します」
「片岡さんと速水くんね！　楽器経験はある？　ない？」
「ないんですけど……マズいですか？」
騎士が心配そうに聞いた。
「そんなん全然心配せんでえぇよ？　なんせ、オレら3年も入部時点では１０人中８人が初心者やったからな！」
「え！？」
その言葉に騎士となぎさは驚きを隠せないようだった。
「それが2年経てば、みんな大体の曲は吹けるようになるねん。せやから、速水くんと片岡さんも未経験やからって気後れせんと、是非前向きに考えてみてな」
「はい！」
翔の後ろで「あのう……」という声がしたので振り返ると、スラッと背の高い少年と小柄な少年の二人が立っていた。
「はいよ！」
「見学に来ました……」
「いらっしゃい！　とりあえず、みんなこのノートに名前書いて！」
翔は入口右手すぐにある机のノートを指差した。このノートは見学に来た1年生の名前を記録しておくために今年から作ったのだった。

改めて綾音と夏樹もサインをし、騎士、なぎさと少年二人――小柄な進藤（しんどう）　雄飛（ゆうひ）と背の高い緒方（おがた）　賢治（けんじ）の二人も名前を記入した。

「ほんなら、17時半まで自由に練習してもらってるから。楽器経験ある人は……おーい、ひ……朝倉！」

翔が陽乃のことを下の名前で呼びそうになり、慌てて苗字に戻したことに気づいた綾音と夏樹は思わず笑いそうになった。

そんなことは露知らず、の陽乃が部室からヒョコッと顔を出す。

「はーい！」

「1年生！　とは言うても、楽器吹けるのは朝倉の弟さん、進藤くん、緒方くんの3人やから。彼らをサックスとクラリネット、ホルンの教室までそれぞれ案内してあげて」

「そんなの、翔が行けばいいじゃない」

陽乃の言葉を聞いて、騎士となぎさが顔を赤くした。

「アホ」

翔が顔を赤くして小声で呟く。陽乃も「あはは！　は、しまったなぁ！」と顔を赤くして呟いた。

陽乃が夏樹をサックスの練習部屋へ連れて行っている間に、翔は騎士、綾音、なぎさの3人を部室へと連れて行った。

「え～、そしたらまず3人には七海高校吹奏楽部の説明と紹介をさせてもらいます。ちなみに、経験者の人たちは各パートで説明とかしてますので。聞いてることは君らと変わりませんのでご心配なく」

3人は同じ中学出身ということもあり、変に堅くなることなく座っている。

「まず、吹奏楽部は今年で創部3年目の歴史的には浅い部活です。ですが、コンクール出場をはじめとして、地域の行事、学校内の行事に積極的に参加しています。部員はいま、3年生10名と2年生23名の合計33名で活動中です。あ、ちなみに3年生のホルンは大阪へ転校したのでいませんが、部活自体には在籍しています」

「すみません」

騎士がそっと手を上げた。

「はいよ？」
「初心者の方って、どれくらいいるんですか？」
「あぁ。部活紹介の時に言うたけど、３年はオレとフルートの大谷さん以外は全員初心者です。２年生では、チューバの大岩くん、トロンボーンの富士原くん、楽器自体は初心者になる加藤さん、パーカッションには日高くんと秦野さん。合計で１３名が初心者になるかな」
「そんなにいたんですね」
騎士の顔が安堵したものになる。
「３人は……まぁ、１人は妹やからわかってるけど」
綾音がクスッと笑った。
「２人は、中学からの仲？」
「はい」
なぎさが柔らかい笑顔で答えた。
「みんな、朝倉くんに誘われて来たんです」
「そっかぁ」
翔も彼女の笑顔に思わずほころんでしまう。
「とりあえず……何か、吹いてみたい楽器はある？」
その言葉に３人はキラキラと目を輝かせた。
「も、もう吹かせてもらえるんですか？」
「やっぱり最初は説明グダグタ聞くより、楽器吹きたいやろ？　そのために見学に来たんやし」
「はい！」
３人は「やったぁ！」と小声で喜びを表現している。
「んじゃ、速水くんと片岡さん、佐野さんそれぞれ吹きたい楽器を言うてください」
「あたしは、絶対トランペットです！」
綾音が間髪いれず答えた。
「私、クラリネットを……」
「俺もクラリネットがいいです」

騎士となぎさが同時にクラリネットを希望した。
「ＯＫ。ほな、それぞれパートの部屋へ案内するから、ついてきて」
「はい！」
３人は満面の笑みを浮かべて、翔の後についていった。

夕方、午後６時３０分。
「ふ～……」
翔はため息を漏らして部室に置いてあるソファに座った。
「お疲れ様」
陽乃が隣に座った。
「どうだった？」
「今日はこんだけ」
翔は１年生が記入した名簿を陽乃に見せた。
「夏樹に綾音ちゃん。それから前田さん、速水くん、片岡さん、岩切くん、歌川さん、添田さん、飯岡さん、佐々木さん。進藤くん、緒方くん。全部で１２人か」
「初日にしては、人数多いほうちゃうか」
「そうだね」
陽乃がふと暗い顔になった気が翔にはしていた。
「どないしてん」
「あの子……毛利さん。来るかなぁ」
陽乃や翔とひと悶着起こした毛利　菘のことを陽乃は心配していた。彼女に悪気はまったくなかったのだが、自分たちのトラブルの火種になったと思っているかもしれないと考えると、陽乃は気が気でなかった。
「でも、なんていうか……解決したシーンはあの子も見てたやん」
その言葉に陽乃が真っ赤になる。
「それはそうだけど……」
翔がポンポンと陽乃の頭を撫でた。
「心配せんでいいよ。あの子の気持ち次第やろ、後は。オレらがヤ

イヤイ言うたって、しょうがない」
「うん……」
サワサワと風が吹き込んできた。４月にしては少し寒い日が続いていたが、この日はよく晴れて風も暖かい空気を運んでくれている。
「あのさ」
翔が急に真剣な顔つきになった。
「お前……無理して島根大学受けようなんて、思わんでいいで？」
「え？」
「お前にはやりたいこと……やってほしいし」
翔が顔を少し赤らめた。
「オレはその……遠距離になっても、やっていける自信あるもん」
「……。」
陽乃がギュッと翔の右腕にしがみついてきた。
「あたしも、自信はあるよ？　でも、あたしがしたいのは、翔の傍で毎日過ごすこと」
「……照れるな」
「島根に行くとなるとさ、七海にはそう頻繁に戻って来れないよね」
「そうやなぁ」
ＯＢ・ＯＧになる日もそう遠くはない。しかし、ＯＢ・ＯＧになっても頻繁に七海に顔を出せるとは思えない。そう考えると今いる２年生や、入ってくるであろう１年生たちにはできる限りのことを引き継いでいきたい。翔はそう強く思っていた。
「陽乃」
「うん？」
「頑張ろうな。部活も、受験も」
「うん！」
翔は立ち上がり大きく伸びをした。
「帰ろっか、今日は！」
「そだね。帰ろう」
陽乃と翔は手を繋いで音楽室を出た。

「失礼しまーす」
職員室に入ると、まだ春樹の姿がそこにはあった。ちょうど帰るところだったようだ。
「春やん。どないしたん？」
「うん……。受験、受けるんだ」
「鎌倉音大を？」
陽乃が音大の名前を口にすると、春樹は嬉しそうに「そう」とうなずいた。
「翔は？」
「オレ？」
「やっぱり、島根受けるの？」
「うん」
翔に迷いはなかった。即、答えた。
「そっか。ってことは、朝倉さんには聞くまでもないな」
陽乃が恥ずかしそうに笑う。
「お前とはしもっちゃんは？」
「絵美は進路が未定だからさ。でも、関東には残るみたい」
「そうか……」
恭一が印刷室から姿を現した。
「なんだ。まだいたのか。もう7時になるぞ。早く帰りなさい」
「はい。先生、鍵です」
「はい。お疲れさん」
「失礼します」
3人は恭一に挨拶をし、職員室を後にした。
電気が消えた階段を降り、昇降口に出る。
「あれ？」
昇降口にまだ、人の姿があった。沙希と、野球部の相田　雄平だった。
「雄ちゃんと大谷さんやん」
「知らないの？　二人、付き合ってるんだよ」

「ウソ！？」
陽乃と翔が春樹の言葉に驚きを隠せないでいた。
「静かに。そっとしておいてあげよう」
「う、うん……」
3人は靴を履き替え、裏口からそっと出た。
「いろいろ変わっていくなぁ……」
翔が感慨深そうに呟いた。
「確かにね。いつまでも同じ……ってわけにはいかないもんな」
春樹の言葉が陽乃の胸に響く。3年生になった。もう、この雰囲気が長く続くことはないのかもしれない。
「陽乃？」
裏口が暗くてよかった、と陽乃は思った。人知れず陽乃の目からこぼれ落ちた雫が、裏口のコンクリートにシミを作っていた。それを知っているのは、陽乃以外にいなかった。

第２８１話　やがて混ざる

「おはようございます！」
翌日土曜日。今日は１年生の部活参加はないため、これまでと変わらない雰囲気での部活となる。
駿が部室に入ると、既に３年生は揃っていて、２年生も半分程度が揃っていた。
「おはよ、逢沢くん」
「おはよ、河内」
みゆきがカバンを置いた駿の横に立ち、ボソッと呟いた。
「ねぇ、昨日の話の続きだけど」
「あぁ、いいのあった？」
「あったの。私が中学の時に使ってた、教則本」
みゆきが取り出したのは『クラリネット・ベーシック』を書かれた本。それほど分厚くはない本で、みゆきが使っていただけあって、少しくたびれている。
「いいじゃん、これ」
駿が笑顔になる。
「でもさ、いいのかなぁ。なんか、いやらしくない？」
「でも……先輩、すっごい心配そうだったし。いちおう、経験は俺たちのほうが長いから、いろいろと手助けしたほうがいいんじゃないかって思うんだけど」
「それよ。それって、先輩の立場としては微妙よ、やっぱり」
みゆきたちの心配するところ。それは絵美のことであった。
絵美はやはり、初心者を教えるのにまだ少しの不安があるという。実際のところは恭一も心配することはないと言っているし、音量や音程面でももう、経験者であるみゆきや光瑠、優輝たち２年生とも引けをとらなくなっていた。しかし、何かとネガティヴな思考にな

りがちな絵美には、1年生を教えるのが不安で仕方がないという。
「そうかなぁ……」
「難しいところだけどね」
すると後ろから誰かが急に覗き込んできた。
「何やってんのー!?」
美里だった。
「わ!」
駿は慌てて教則本を閉じた。美里は鋭くそれを見つけ「何? その本」と駿に貸してほしいとねだった。
「いいですけど、こっちで見ましょうよ」
「え? う、うん」
駿は無理やり美里を廊下に連れて出た。
「実は……これ、クラリネットの教則本なんです」
「あぁ! 基礎練習とかするのね。やっぱり、初心者向けの?」
「そうなんですけど……。これ、橋本先輩に渡そうかどうしようか微妙で……」
「どういうこと?」
駿とみゆきは美里に事細かに事情を説明した。
「なるほどねぇ……。でも、二人とも考えすぎじゃない?」
「そうですか?」
「うん。あたしだったら、喜んで受け取るけどなぁ。ぶっちゃけ、先輩後輩とかそんな堅苦しくしすぎたくないもん。変に堅くない。それがウチの売りでもない?」
「……。」
確かに、吹奏楽部は先輩後輩の関係がそこまで変に堅くない。大学の応援団吹奏楽部では、聞くところ異質な部分も稀にあるが、七海高校では挨拶や仕事分担の面では多少のメリハリがあるものの、自由に提案や意見はできる空気があった。
「エミリンに何か意見とか案とかあったら言ってって言われたんでしょう?」

「はい」
「だったら、何もナシのほうが寂しいと思うけどな」
「……。」
みゆきと駿は顔を見合わせた。
「気持ちはわかるけど、まずは言ってみないと。ほら、もうエミリン来てるしさ。それ持って、言っといで」
「……行くか」
「そだね」
二人は意を決して絵美のほうへ歩いていった。
「橋本先輩」
駿が絵美を呼ぶと、絵美はいつもどおりの笑顔で振り返った。
「はい？」
「あの……これ」
みゆきが教則本を手渡した。
「1年生の、速水くんと片岡さんにちょうどいいかなって思う教則本、持ってきたんですけど……」
絵美の顔があっという間に驚きのものへと変わった。
「本当!?　うわぁ～助かるなぁ！　なんだ、やっぱり初めから皆に相談すればよかったね！」
「……あの」
駿が恐る恐る聞く。
「迷惑じゃないですか？」
「何が？」
「こういう……こと……」
「やだ！　私から言ってるのに、迷惑とかありえないでしょ」
その言葉に、駿とみゆきの顔も一気に柔らかくなる。何事も考えすぎず、まずは行動してみること。それは美里自身が常に、心がけていることでもあった。
「本堂先輩」
いっぽうのバスパートに、現在は一人であるホルンの順平がやっ

て来た。
「おう？」
「ちょっとご相談が……」
「何？　珍しいじゃん」
「音色のことなんですけど……」
順平の相談はこうだった。今はまだ見学者が来ていないホルンであるが、今年、順平としては、最低3人はほしいと考えているそうだ。ファースト、セカンド、サード、フォースとパートが分かれるホルンには、4人は必要だからである。
けれども、そうなるとそれまで順平一人で創りあげてきた音色に別の音色が加わることになる。順平一人だけでできていた、いわゆる「七海のホルンのサウンド」に変化が出てくるわけである。
「先輩のパートでは……さとっぺが入ってきたとき、どうしました？」
パートの人数に変化があったのは、バスパートが最近になる。
「えっと……。まぁ、そこまで深刻には捉えてなかったけど。まずは、みーやんの提案でひたすら基礎練習したかな。さとっぺは初心者だったわけだし、最初に音を確立させるとこから始めて、音が安定して出せるようになったら、俺が隣で一緒になってロングトーンをしてたよ。なるべく、誰かの音があったほうがいいってみーやんが言うからね」
「なるほど……。経験者の場合は？」
「それは春やんと加藤さんに聞いたほうがいいよ」
「え？　あ、あたしですか？」
愛実が突然の展開に戸惑っていた。
「頼むよ、加藤」
「うーん……でも、あたしユーフォ初心者だけだってことで、楽器自体の経験はあったから」
「初心者の意見は聞けたから、経験者の意見も聞きたいわけ」
「うーん……。ぶっちゃけていい？」

「いいぜ」
「いずれ、あたしの音が自然と春くんや本堂先輩、三宅くんたちに混ざっていくだろうなって思ってた」
その発言に、順平は呆気に取られた。
「そ、それだけ？」
「それだけだけど……」
愛実が戸惑っていると、翔が話に加わってきた。
「そういうわけよ。わかる？　ジュンペー」
「いや……いまひとつ」
「例えば自分、どうやった？　去年七海に入ってきて、何か音色をオレらの色に染めようとか思った？」
「いえ……」
「そういうもんやねん！　考えてもみぃや。別に、オレら当時2年の10人が作った音色に1年生全員が、ピタッと音色（おんしょく）とか音質、他のものを合わせようとして合わせたもんでもないと思うねん」
確かにそうであった。吹いていく中でそれぞれの楽器の特徴、性質などに個人の技量が影響し、個人個人の音色が確立していく。そしてその確立した音が合奏で一緒になり、恭一たち指導者の指示や合奏で抱いた自分の音へのこだわりなどが、音を少しずつ変えていく。そうして今の2、3年生の音は創りあげられたのだった。
「つまり、リセットや」
翔の言葉が順平の胸に響いた。
「去年までのオレたちの音と、今年から始まるオレたちの音色は全然違うもの。しっかりと1年生を受け入れて、1年生がオレたちの中でしっかりと混ざって行く。それは意識してできるもんでもないから。焦る必要なんてないで。ジュンペーは今までどおり、基礎練習や曲の練習をしていけばいいねん。これはどのパートにも言えることちゃうかな」
いつの間にか部室にいた全員が翔の話に耳を傾けていた。最後に翔はまとめた。

「やがて、オレらの音は混ざっていく。そんで、新しい七海のサウンドができるんや」
「……。」
ホウッとため息がどこからか漏れた。
「せやから、変にオレらの音に1年生を引き込もうとせんと、1年生をうまく誘導していこう」
「はい！」
全員が改めて一致団結する。
「それじゃ、ひとまず今日は課題曲の合奏な。9時45分からチューニング、10時から基礎練習をして、10時半に先生来られるから合奏します。では、準備してください」
「はい！」
各パートで楽器を出し、音出しを始める。昨日、帰る前に全員で合奏の形態を準備しておいたので、このあたりは楽に進めることができた。
「おはようございます！」
「おはよう」
10時になって恭一がやってきたので、早速課題曲の練習が始まった。
「はい、課題曲を頭から」
「はい！」
去年の今頃も練習はしていたが、おそらくここまで上達はしていなかったと翔は感じていた。
「ストップ！　頭、全員でもっと揃えないと。特に低音楽器は頭の立ち上がりが相変わらず遅い。それから、木管特にクラリネット。間をつなぐ細かい音符が滑りがちになる。スネアの音をしっかり聞けば、揃うはずだ。シンバル、日高か？」
「はい」
「ぺしゃあ～んとした音じゃなくしっかりビシッと飛ぶ音を鳴らせ！」

「はい！」
マーチ・ブルースカイ。その名のとおり、青空を表現した曲なので、明るい印象を持ってもらえるように吹かなければ、そもそもの意味がない。
「チューバと弦バス、バスクラ。そこの伸ばしの音程、汚いなぁ」
恭一が苦笑いする。
「もうちょっと音程を揃えないと。大岩はちゃんと本堂の音を聴くこと。本堂は三宅の音をしっかりと聴くこと。逢沢は、バスパートが作ってくれる音をしっかりと聴いて。まぁ、基準が弦バスになるのは違いないから三宅、責任重大だぞ？」
「はい」
恭一が笑った。
「それに今年は自由曲も低音が目立つからな。しっかり頼むぞ」
「はい！」
「よし。それじゃもう1回頭から。何度も同じことを言わせるなよ？」
「はい！」
恭一の指揮にあわせて、ブルースカイの冒頭部分が再び始まった。しかし、やはりいつもと同じ場所で止まってしまう。
「音が一瞬弱くなるな？　クラリネット、サックス系統だけになるだろう？　そこのリズムがどうも乱れる。木管長、しっかりそこ、合わせておくように。次回の合奏でできてなかったら、合奏やめてでも合わせに行ってもらうからな」
「はい！」
「よし。今日はちょっと飛ばして、トリオから行こうか」
「げ！」
それに真っ先に反応したのが、恵梨だった。
「秦野～。女の子が『げ！』はないぞ」
恭一の言葉にドッと笑いが起きる。
「すいません」

恵梨も顔を真っ赤にしている。
「とりあえず、メロディラインは後で。チューバ、バスクラ、弦バス、タンバリンで行こうか」
「はい！」
恭一の指揮に合わせて、トリオから演奏が始まる。ちなみに、トリオとは複合三部形式の楽曲において、主部とその後に反復される主部との間に挿入される中間部のことを意味する。
チューバ、バスクラ、弦バスの前打ちと、珍しく恵梨の叩くタンバリンが後打ちを担当している。チューバなどの前打ちは音の上下があるものの、音が弱い、つまりピアノということもあり、何かと音が乱れがちになってしまう。
「本堂」
「はい」
「ここ、伴奏とメロディに共通点があるんだけども、何かわかるか？」
「え……っと……」
沈黙が続く。
「よし。三宅」
「え？　え～……えっと……」
「次。逢沢」
「え！？　え……う～……」
「ダメ。秦野は？」
「え？　えっと……すみません、わかりません」
「ダメだなぁお前ら。ちゃんと参考音源聴いたり、合奏中他のパートを聴いたりしてるか？　他のパートが合奏中に吹いていて自分たちは関係ないと思っていたら大間違いだからな」
智志と恭一の目がバチッと合った。
「大岩はどうだ？」
「え……ま、間違ってるかもしれないスけど……」
「間違ったって構わんぞ？　言ってみろ」

智志の顔が赤くなった。
「メ、メロディと……伴奏が、四分音符で合うところがあります」
その言葉にチューバ、弦バス、バスクラのメンバーはもちろん、サックスやクラリネットのメンバーもハッとした顔つきになった。
「そうだな！　大岩、よく勉強しているな」
「あ、ありがとうございます……！」
「大岩の言うとおり、Ｆから3拍目、４拍目が伴奏とメロディで一致するところが多い。それから、メロディがＧ（ゲー）やＡｓ（アス）、ＦＣＤＥｓ（エフシェーデーエス）といった動きなどで上昇する箇所があるな？　そのあたり、チューバなどの伴奏と見事に一致するんだ。聴いたほうが早いだろう。大岩と……中野、吹いてみなさい」
「はい！」
恭一の刻むリズムに合わせて、智志とさゆりがトリオの部分を演奏する。確かに、智志の音とさゆりの音が一致する部分があるのだ。
「聴いててわかっただろうけれど、このようにトリオではメロディと伴奏の音が合わさるところがある。他にもＧからはフルートやユーフォが加わるな。特にＧからは、全員が伴奏や裏メロとは思わずに……まぁ、音量のバランスには気をつけてもらいたいが、しっかりメロディを吹いているつもりぐらいで、意識して合わせて吹くように」
「はい！」
２時間ほど合奏をして、午後０時になった。
「よし。じゃあ今日はこのあたりで合奏はやめておこうか。部活紹介などでバタバタして疲れているのもあるだろうから、明日は休み。月曜日には、プチコンサートが控えているからしっかり休むように」
「はい！」
「午後の合奏は2時から1時間ほど、プチコンサートの曲を合わせるから、そのつもりで」
「はい！」
「では部長。号令！」

「起立！　礼！」
礼を終えるなり、バスパートはもちろん、トロンボーンやバスクラの駿も智志のところに駆け寄ってきた。
「ビックリするじゃん、さとっぺ！」
拓真が満面の笑みで智志の肩をバシバシと叩いた。
「いつの間にそんなに課題曲聴き通したの？　あたし、毎日聴いてるけどそこまで気づかなかった！」
麻綾は感動したのか、ずっと小さく飛び跳ねている。
「あれだな。これが佐野先輩の『いつか混ざる』って言う意味なんだな」
駿がニッコリ笑って言った。
「最初はさとっぺの音、ぶっちゃけ浮いてたけど、もう今は完全に混ざって、知識的にも俺たちより勝ってる部分があるじゃん」
「そういえばそうね……」
はるかがウンウンとうなずく。
「混ざって、こうやってひとつになっていくわけか」
徹も感慨深げにうなずいた。
「こりゃああたしたちも負けてらんないね！　がんばろ！」
オーッという声が音楽室に響いた。
「雰囲気、また変わるかもね」
陽乃が翔のところへ駆け寄り、そばで呟いた。
「いい感じやな」
翔も確実に雰囲気が好転しているのを感じ取っていた。

第２８２話　プチコンサート

「結構集まってるなぁ」
４月１６日月曜日。今日は吹奏楽部のプチコンサート・初日である。１６日と１７日の２回に分けて開催するプチコンサート。去年にはなかった企画で、初日の今日は海外の曲を集めて演奏する。明日は日本の曲を中心に演奏する予定だ。
「なんか、中学時代はモロ運動部でしたみたいな子もいるね」
隣から陽乃が呟く。確かに、坊主刈りが中途半端に伸びてタワシのようなイガイガ頭の子の姿も見えていた。
「今日が雨っていうのも原因のひとつやろうな」
今日からしばらく雨という天気予報。運動部にとっては初っ端から悲惨だが、吹奏楽部や屋内で活動する運動部には支障がない。他の部には悪いけれども、差をつけるチャンスでもあった。
「さてと！　みんな、準備ＯＫですか？」
「はい！」
「じゃあ、打ち合わせどおり入場してください」
「はい！」
音楽室に聞こえない程度の気合の入った返事をした後、部員たちは部室を出た。
「来たで」
夏樹と並んで座っていた綾音が、部室の戸が開く音を聞いて声を上げた。
「結構多いな。こうして見てると」
夏樹がその人数の多さに少し驚いていた。
「３３人やって言うてたで、兄ちゃん」
「３３でも結構多く感じるもんなんだな」
続々と入場する部員たち。そして、チューバの拓真が座ったのを

見計らって勇と亜紀が出てきた。
「新入生の皆さん、本日は吹奏楽部のプチコンサートにようこそ！」
亜紀が爽やかな笑顔で初めの挨拶をする。
「今日、司会をします、トランペットの松尾　勇と」
「トロンボーンの吉山　亜紀といいます。今日は、ごゆっくり聞いていってください！」
拍手が沸く。
「えっと、演奏会氏の前にちょっと質問です。この中で、吹奏楽なんてやったことないという人、手をあげてください！」
綾音が恥ずかしげに手を上げた。ほかに男子が４人、女子が５人手を上げた。
「結構いますね～。心配しなくても、ここにいる２、３年生のうち１２人が初心者でした。それが、今日演奏するぐらいのレベルにまで１年で上達できます。ぜひ、遠慮せずにコンサートが終わった後、楽器を試奏してみてください」
勇が続ける。
「それでは、本日は海外の音楽を中心にお送りします。１曲目は最近、自動車のＣＭで使われ一躍有名になった『キャラバンの到着』です。タイトルはわからなくても、聴けばわかるこの１曲。では、どうぞ！」
指揮者は、恭一ではない。この日のために、学生指揮者（七海では通称・学指揮）を立てたのだ。学指揮初日は、優輝が担当する。
「ワン、トゥ、スリー、フォ！」
金管楽器を中心に、突き抜けるようなファンファーレが鳴り響いた。初心者の何名かは、音の大きさに少しビクついていた。その後、すぐにあずさのドラムセットがリズムを刻む。やがて、トロンボーン、チューバ、エレキベースなどの低音楽器が基本となる音を吹き、トランペットやサックスが加わっていき、ＣＭで有名なメロディが流れ始めた。
メロディはサックスが担当する。翔、さゆり、麻綾、はるかの４

人が立奏。入れ替わるようにメロディを引き継ぐクラリネット、フルート、オーボエが立奏。そしてトランペットにメロディが引き継がれると彼らが立奏する。今回は演出にもそれなりにこだわりを見せている。あまり演奏会に触れる機会がない見学者たちは、目があちこちへ移っているのが翔には手に取るようにわかった。

再びサックスのメロディへ回帰する。トランペットの打ち込みが印象的な部分を経て、1回目のピークを終えてすぐに勇が立ち上がった。遠くへ飛んでいくような高音が音楽室内に響いた。トランペットソロだ。

「や～……！」

綾音は声にならなかった。小柄な勇から、あんな高音が出るとは思えなかったからだ。

勇のソロが終わるとはるかと麻綾のサックスソリ。クールにアドリブに近いソリを吹きこなす彼女たちに、男子が目を奪われている。サックスのソリの後は息つく間もなく陽乃のソロ。こちらも完全にアドリブソロ。こうしたジャズ形式の曲にはよく見られる演奏形態だ。

陽乃のソロが終わると管楽器の音が止み、ドラムセットの音だけになった。優輝も指揮を止める。完全にあずさだけの世界となるのだ。

彼女はグングンテンポを上げてタムタム、スネア、シンバル、バスドラムを巧みに使い分けて雰囲気を盛り上げる。自然と拍手が沸いた。そして、曲が元へ戻る手前でうまくテンポを戻す。器用な演奏手段であった。

そして3度目になるサックスのメロディ。後は同じ部分の繰り返しだが、何度聴いても飽きさせない演奏を、という恭一の言葉どおり部員たちは表情をしっかりと変化させて、最後の盛り上がりを目指して音量を上げていった。

エンディングに差し掛かる。ドラムセットが派手に鳴り響いた後、全員でトゥッティをして『キャラバンの到着』は見事に終わりを告

げた。
「はい！　『キャラバンの到着』、いかがでしたでしょうか？」
亜紀が笑顔で問うと、拍手で返事が来た。
「ありがとうございます！　えぇっと、指揮者はクラリネットの、瀬戸　優輝でした」
優輝が振り返りお辞儀をすると、彼の出身中の後輩が「瀬戸センパーイ！」と黄色い声を上げた。
「人気者ですね、瀬戸くん」
優輝が完全に照れて「そんなのいいから」と呟いて司会を進めるように亜紀に促した。
「えっと、照れ屋な瀬戸くんですが、引き続き次の曲も指揮者をしてもらいます」
「次の曲は皆さんきっとご存知かと思います。『聖者の行進』です」
「ただ、曲がずいぶんとアレンジされているので、どんな風になってくるか、ご期待ください」
「では、聖者の行進！」
勇の言葉をキッカケに翔、拓真、陽乃、慎也、絵美が前へ出てきた。そしてオープニング部分を終えると恵梨、あずさ、洋之、優が手拍子を始めた。つられて見学者たちも手拍子をする。始まったのは、５人によるディキシースタイルのソリだった。
それぞれが思い思いの旋律を吹くのだが、拓真の伴奏をベースにメロディを吹いていく。それぞれが完全に独立した演奏をしてはいるのだが、調が上手くあっているのでひとつの曲として成立している。
美里のドラムセットに合わせて５人のソリは最高潮へ達した。陽乃の高音が音楽室中に響いて、演奏が終わると同時に今までで一番大きな拍手が沸いた。
上昇系と下降系の音で演奏の雰囲気が変わるのを伝える。そしてクラリネット全員が立ち上がり、クラリネットソリが始まった。可愛らしい雰囲気の後ろで、優のボンゴがリズミカルに響き渡る。一

変して、サックスソリは大人っぽい雰囲気。時々入るトランペット・トロンボーンの打ち込みがまた味を引き立てていた。

再び上昇系と下降系の音が響き、美里のスネアソロ。その後はトロンボーンのメロディが響く。スライドを活かしたトロンボーンらしいメロディ。その後にトランペットのメロディ。それぞれが楽器の特性を活かした演奏をする編曲になっていた。

優輝が転調した部分で指揮を止め、手拍子を促した。それまでは堅苦しい感じで聞いていた見学者も、優輝の手拍子に煽られて一緒に手拍子を始める。トランペットの高音はやはりしんどいものがあるが、陽乃、勇、彩香の3人はそれを感じさせない演奏をする。そして音が途切れると、美里のソロが始まった。テンポが緩やかになり、サックスとホルン、エレキベースとチューバの音が響き渡り、全員でトゥッティをして、曲は盛大な終わりを見せた。

「やっぱすげぇな！」

綾音の右隣にいた男子生徒が呟いた。名札には「本堂」と書いてあった。

「はい！　聖者の行進、いかがでしたか？」

拍手が返って来る。

「ありがとうございます！　では、ここでちょっと息抜きです」

「皆さんにクイズを楽しんでもらおうかなと思っています」

勇が前に出た。

「今から、部員の名前を読み上げます。出てきた部員たちの中で、果たして入部当時、初心者だったのは誰でしょうか？　ついでに1曲、好きな曲を演奏してもらっちゃいましょう！」

初めに亜紀が名前を読み上げた。交互に読み上げるつもりだ。

「では、参ります！　エントリーナンバー1、大岩　智志」

重いチューバを軽々と持ち上げ、智志は前に立った。そして、ミッキーマウスマーチを吹く。

「この曲知ってる～」

何名か初心者の子たちの呟きが漏れた。拓真に選んでもらって正

解だったと智志は思わず頬が緩んだ。
勇が後方を向く。
「エントリーナンバー2番！　秦野　恵梨！」
恵梨はマーチング用のシロフォンを下げて前に出てきた。そして剣の舞を軽やかにワンフレーズ演奏。鮮やかな技術に、新入生からため息が漏れた。
「エントリーナンバー3番！　中野さゆり！」
さゆりが吹くのは、ちょっと世代が上になるが『ルビーの指環』だ。しかし、どこかで耳にしたことがあるようで、新入生から「なんとなく知ってるよね」という声が聞こえてくる。
「では、エントリーナンバー4番！　右川　順平！」
順平はあえて自分が好きな曲を選んだ。タイタニックメドレーの中から『海の賛歌』。ホルンの印象的なソロがあるので、順平自身、この曲は是非とも演奏してみたいと思っていた1曲だった。
「も、もう1回お願いします」
演奏を終えるなり、突然1年生からリクエストがかかったので、順平は目を丸くした。
「ジュンペー、もいっかい！」
勇に促され、順平は「おう」と答えて再度、海の賛歌を吹いた。
「ありがとうございます……！」
「いえいえ」
少年は嬉しそうに頬を赤くしていた。
「では、クイズです！　この中で果たして何人が、入部当初は初心者でしたでしょうか？」
「時間は1分！　では、考えてください！」
「誰やったっけ……。朝倉、覚えてる？」
「いや……微妙」
綾音と夏樹は少し首をかしげた。
「右川先輩は経験者だったハズ……」
「あたしもそれは覚えてるんやけど……。大岩先輩は最近入りはっ

てんよな」
「そうそう。でも、秦野先輩ってどうだったっけ？」
「わかれへん……」
「はい！　では、正解と思う人数で手を上げてくださーい！」
亜紀がストップをかけた。
「では、１人と思う人！」
何人か手が上がる。
「いやいや、半分の２人」
ここで夏樹が手を上げた。
「なんのなんの、ほとんどの３人！」
綾音が手を上げる。
「いや、全員！」
ここが一番多かった。
「いや、実は全員初心者だった！」
「はーい！」
ちょっと小太りな女の子が手を上げた。ドッと笑いが起きる。
「元気いいですねー！　あなた、お名前は？」
「はぁい！　バリトンサックス希望の、前田でーす！」
「おっ、入部する気マンマンですか！？」
「はぁーいっ！」
「おぉ～！　佐野先輩も嬉しい、バリトンサックス希望者です！
でも残念、クイズには外れていま～す！」
「やーん、残念！」
さらに笑いが起きた。
「では、正解の発表です。実は初心者でした！という部員は起立！」
恵梨と智志が立ち上がった。
「え？　そうなんだ！」
２人が初心者と思っていたのは４人だったのだ。
「正解は、２人でした！　手を上げていたのは４人でしたね？　その人たち、スタンドアーップ！」

立ったのは夏樹、好美、初心者の男の子、そして菘だった。
（あ……）
陽乃は菘と目が合った。菘は恥ずかしそうに小さくお辞儀をした。
陽乃は笑顔で小さく手を振り返した。
「はい！　あなた、お名前は？」
「えっ！　あ、朝倉　夏樹です」
「おぉ？　もしかして」
「はい……。そこの朝倉　陽乃の弟です」
見学者からもザワザワと声が起こる。
「うん！　そっかぁ。希望楽器は？」
「アルトサックスです」
「あたしと同じじゃーん！　よろしくね、朝倉くん！」
再び前田という女の子が元気よく声を上げた。
「よ、よろしく」
「うん、早速仲睦まじいですが、そちらのあなたは？」
「わ、私、アルトクラリネット希望の毛利　菘です」
「毛利さんね。それと、そちらの男の子！」
マイクを向けられた男の子はしばらく黙っていたが、そっと言った。
「えっと……塚口（つかぐち）　和志（かずし）です。初心者です」
（関西弁や）
翔は「塚口」の発音で彼が関西出身だとすぐに見抜いていた。
「塚口くんね！　それと、最後のあなたは？」
「チューバ希望の飯岡　好美です」
「本堂くんと大岩くん大喜びの、飯岡さんでした！　正解者には、ちょっとしたプレゼントがありま～す」
スッと亮平が立ち上がり、正解者にハイチュウをプレゼントして回った。
「わ！　いいなぁ～」
先ほどの前田という少女が羨ましそうに立ち上がって見ていた。

「個性的な子が多いようですね～」
勇はクスクスと笑いながらそう言う。
「えぇっと、では次の曲に参りましょうか」
「ちょっといいかな？」
その声に部員たちが振り向くと、なんと真野校長がいたのだ。
「校長先生！」
「いや、何。楽しそうな声が聞こえてきたんでね。体育館へ寄った帰りについつい、来てしまってね。いいかな？」
「は、はい！　どうぞ！」
光治は笑顔で「１年生、たくさんいるねぇ」と言いながら綾音と「本堂」という少年の間に腰掛けた。一気に綾音の顔が緊張する。
「君は、経験者かね？」
「いえ！　あたしは初心者です」
「そうか。是非、入部を前向きに考えてくれたまえ」
「は、はい！」
これには部員たちも少々緊張していたが、マイペースな亜紀だけは飄々（ひょうひょう）と司会を続ける。
「では、次にお送りしますのは、『ホール・ニュー・ワールド』です」
勇の声が微妙に震えていた。
「いろんなソロがあるので、お聞き逃しなく！　では、どうぞ！」
学指揮は変わって、恵梨が担当する。これにはずいぶん、モメにモメた選出があった。恵梨は１週間前のことを思い出していた。

第２８３話　先輩らしくない！

「おい、美奈」
常套中学校吹奏楽部では６日の日曜日も練習をしていた。美奈が昼休みを利用していったん家へ戻っていた間、泰徳の傍にある美奈のカバンから、ずっと携帯電話のバイブ音が響いていたのだ。
「なに～？」
「お前が家帰ってる間、ずっとケータイがブゥブゥ言ってたぞ」
「何よそのブゥブゥって。ブタさんみたいな鳴き声じゃない、それじゃ」
「うるさいなぁ。とりあえず、確認しろよ。せっかく教えてやったんだから」
泰徳が少し顔を赤くした。
「はいはーい」
美奈が形態を開くと、ディスプレイには「着信あり」の表示。しかし、その件数が異常だった。
「何？　２０件？」
傍にいた未来がビックリした声を上げた。
「２０件？　お前人気者だな！」
泰徳も未来の声に驚いてディスプレイを覗き込んだ。
「誰よ、２０回も電話してくるなんて……」
着信履歴をチェックすると、すべて同じ人物。
「うわ！　気持ち悪いな」
泰徳の遠慮ない物言いに美奈は少し笑ってしまったが、確かにこの着信履歴は異常だ。すべて、着信が七海市にある七海高校吹奏楽部の４つ上の先輩、秦野　恵梨からだったのだ。
「緊急の用事じゃないの？」
未来がサンドイッチを頬張りながら言う。

「そうだろうな……。２０件って、記録に残ってるだけだろ？　ひょっとしたら、それ以上かも」
「やだぁ。なんだろう」
心配になって美奈はすぐに恵梨へと電話を掛けた。発信音がプルッ、と１回鳴っただけで恵梨がすぐに出た。
「もしもし！　恵梨です！」
「あ、エリ先輩？　こんにちは～、美奈です」
「み、みなつん!?」
知り合ってもう長くなる恵梨と美奈は互いにエリ先輩、みなつんと呼び合う仲になっている。
「ちょ、ちょっと待ってね！　あたしからかけたから、すぐに掛け直す！」
「え！　あ、先輩！」
有無を言わさずに電話が切れてしまった。
「何？　切れたの？」
未来が今度はチョコパンを頬張りながら聞いた。
「うん……」
「あれじゃないか。自分からかけたのに、相手にかけてもらうと電話代がかかるから、とか思ってるんじゃないか」
泰徳が憶測だがそう言った。
「そんなこと考えるかなぁ」
恵梨は猪突猛進タイプだ。そんなことを考えるかどうか、美奈には少々疑問だった。
「少なくとも、俺ならそうだけどな」
「そうなんだ……」
１０秒もしないうちに、恵梨から電話が掛かってきた。
「はい！　中井です！」
「もしもし！　秦野です！」
泰徳はお互いかけている相手がわかっているのにそういうやり取りをする二人がおもしろく、つい笑ってしまった。

「どうされたんですか？　２０件も着信あって、ビックリしましたよ」
「相談があるの！」
「なんですか？」
「あたし……なんか、学生指揮者になっちゃって……」
「指揮者ですか？」
恵梨は経緯を説明した。
新入生向けのミニコンサートで、どうせなら学生指揮者を立てて演奏会を開こうという方向になった。しかし、今となってはファーストを吹くことの多い新３年生から指揮者を出すのは少々難点が多いという結論に至った。そこで、新２年生から選出することになったのだ。
もう一人の指揮者、瀬戸という男の子は中学時代に指揮の経験があるので問題なく選出が済んだ。しかし、残り１人が問題だった。クラリネットからは瀬戸という男の子を選出したので不可能。フルートはピッコロも兼任している子なので無理。ホルンは２年生のみなので不可能。トランペット・トロンボーンは当然無理であった。サックス、パーカッション、ユーフォニウム、チューバから選出せざるを得ない。そうした中で、チューバはまだ経験が浅いので指揮は無理だということに。残るサックス、ユーフォニウム、パーカッションのメンバーから結局、リズムを普段から刻んでいて一番正確だろうという推測の元、恵梨が結果として選出されたのだ。
（なんていうか……若干ムチャクチャだな）
泰徳はその方法を会話の部分部分から聞いていて苦笑いした。
（秦野さんもかわいそうに……）
しかし、泰徳の思いとは裏腹に、美奈が一喝した。
「そんな弱気、先輩らしくないです！」
泰徳と未来は美奈の大声に驚いて少し体を引かせた。
「先輩はそんな弱気な方でしたか！？」
「お、おいおい美奈～。先輩が相談されてるんだろ？　もうちょっ

と言い方が……」
「泰徳は静かに！」
珍しい美奈の勢いに、未来と泰徳は「すいません……」と気圧された。
「先輩、なんで指揮が嫌なんですか？」
「だって！　1年生の前で指揮だよ？　責任重大じゃない！　それに、一度も経験ないし、人前に立つの、あたし苦手なんだから」
「先輩！　言ってることとやってることが矛盾してます！」
その言葉に恵梨が珍しく言葉を荒くした。
「あたしの？　どこがどう違うのか説明してよ」
「だって先輩、ピティナのコンクールやナナコウの吹奏楽部で、ずっと人前で演奏してたじゃないですか！　ピティナのときの凛々しさや勢いはどこへ行ったんですか？　私、あの時の先輩の姿を見て感動して、それで声をかけたんですよ！」
泰徳もたまに、美奈が部活後に懐かしそうにピアノを弾いているのを何度か目にした。何曲か演奏した後、決まっていつも美奈は同じ曲を演奏していた。
「なぁ、美奈」
「なぁに？」
「いつも最後にその曲、練習するよな？　定番曲か、何かか？」
「ううん」
「じゃあ、何だよ？」
美奈はワンフレーズを引き終わってから手を止めた。
「憧れって言ったらおかしいけど。ほら、ナナコウの佐野さんの一つ下の、秦野さんっているでしょ？」
「あぁ、あのお喋りな人？」
泰徳は過去に未来や美奈とトラブルの発端を作った人、というあまり良くない印象しかない。
「もう。泰徳はいつまでも古いこと根に持ってるね」
「ゴメンって。で、その秦野さんがどうしたのさ？」

「ピティナコンクールで弾いてた曲。私もこんな曲を堂々と弾けるようになりたいなーって思って、ずっと練習してるの」
「へぇ……」
泰徳はあの秦野という人が、ここまで美奈に影響を与えているとは思っていなかっただけに、少し驚いた。
「ただ、演奏を人前でしていたのが指揮者になっただけじゃないですか」
(だけって……。ずいぶん違うけどな)
泰徳は苦笑いした。
「ずいぶん違うんだけど……立場的に……」
「とにかく！　やってみないとわからないじゃないですか。失敗してもいいですから、先輩！　学指揮チャレンジです！」
「……うん」
「また悩んだらいつでも電話ください！　その気になれば、セミプロ目指す泰徳が教えてくれます！」
「おま……！　そんな勝手に！」
「うぇ！？　いいの！？」
電話口から漏れんばかりの声が、泰徳にも聞こえた。
「はい！」
「やったぁ！　あたし、頑張ってみる」
「頑張ってください！」
「ねぇ、竹林くんにもヨロシク言っておいてよ」
「もちろんです！」
「ありがと！　じゃあ、ちょっと頑張ってみる！」
そう言って、電話は切れた。
「忙しい人ね～」
未来は午後の紅茶をすすりながら呟いた。
「まぁ、頑張るって言ってたんだからいいんじゃないか？　勝手に俺を頼りにされるのはゴメンだけどさ」
泰徳は笑顔でそう呟いた。

そして1週間後。
「今日だっけ？」
泰徳が美奈に聞いた。
「なんだ。泰徳、覚えてたの？」
「あれだけ濃い会話されちゃ、俺だって覚えるよ」
「ふぅん」
泰徳は美奈の素っ気ない態度に少し違和感を覚えた。
「お前、心配じゃないのかよ」
「うん」
「なんで？」
「あれから1回も電話もメールも来なかったの」
泰徳は恵梨と美奈の仲がよくわからなくなった。仲が良いなら、することに決めたなり、やめるなりその後の動向というものを連絡してきても良いものではないか。
「ってことは先輩、やる気になったんだ」
「なんでわかるんだよ？」
「だって先輩、夢中になったら周りが見えなくなるタイプだもん。ほら、佐野さんも似たようなところ、あるっていつか泰徳、言ってたじゃん」
「あぁ……まぁ」
泰徳は翔の影響がそこまで七海高校吹奏楽部に伝播しているとは思ってもみなかったようで、苦笑いした。
「先輩、頑張れ～！」
美奈がそう祈っているちょうどその時、恵梨が学指揮として初めての瞬間を迎えていた。

――とにかく！　やってみないとわからないじゃないですか。失敗してもいいですから、先輩！　学指揮チャレンジです！

（うん……！　頑張ろう！）

恵梨は一呼吸をいて、指揮棒を降ろした。

第２８４話　繋がる空間

「ひゃっ！」
美奈が大声を上げた。突然、祈りを捧げる（？）美奈の真後ろで、爆音のような楽器の音が発せられたのだ。
「うるせーな、おい！　音量下げろよ！」
泰徳も驚いて耳を塞ぐ。どうやら原因は未来がかけている音源のようだ。
「え？　うるさかった？」
「うるさいなんてもんじゃない！　早く下げろって！」
「も～。いい曲なのに」
未来がブツブツ言いながら音量を下げた。
「あ！　その曲……」
「美奈にはわかるよね～！　ディズニーの『ホール・ニュー・ワールド』！」
「うん……」
美奈は目を閉じた。一度しか行ったことのない、七海高校の音楽室。しかし、美奈にはありありとその光景が浮かんでくる。並べられた椅子には、新入生がいる。そして、部員たちが向かい側に楽器を構えて座っている。そして、ちょうどその間には恵梨の姿。指揮棒を構えた恵梨は、実に堂々としている。
「美奈？」
美奈は目を閉じて曲に聴き入っていた。
「ダメだよ。コイツ、こうなると周りの音が聞こえなくなるから」
泰徳がクスクスと笑った。
フルートの音が聞こえてくる。ここは、きっと翔と同級生の由美子か沙希が吹いているだろうと美奈は想像した。
一度だけ、七海市へ招待されたときに美奈は全部員の顔を覚えていた。名前と顔を一致させるのは、美奈は何の問題もなくできる。

泰徳は少し名前と顔を一致させるのが苦手だそうで、未だに拓真と慎也の区別がつかないそうだ（ちなみに、春樹は一際背が低いのですぐに覚えられたとのこと）。

きっと、恵梨ならソロ奏者のほうへ向かって指揮を振るだろう。奏者は恵梨の少し緊張した面持ちを和らげるため、実に柔らかな音色を奏でるに違いない。美奈はそう想像しながら、いつの間にか自分も指揮を振っていることに気づいた。

曲は木管楽器の優しいメロディへと変化していく。その前にホルンの音が響く。きっと、恵梨はそのホルンを――目立つように指示する。ドラムセットは、美奈としては洋之に叩いてもらいたいと思っていた。洋之の繊細なドラムセットの叩き方が、美奈にはツボだった。

転調する。その前のユーフォニウムとサックスの上昇系の音。恵梨はこうした音にこだわるだろうから、指揮にも感情がこもるに違いない。

七海高校のことだ。ここのユーフォニウムとトロンボーンは立奏させるだろうと美奈は思っていた。きっと2年生の亜紀、そして未来と仲の良い加藤　愛実あたりが吹きそうだ。続くアルトサキソフォンとトランペットの掛け合い。ここはやはり、翔と陽乃の出番だろう。

「ここなら、翔と朝倉さんの出番だな」

後ろで演奏を聴いていた泰徳がつぶやいた。

「確かに。あの二人ならラブラブで吹きそう」

未来が笑った。

「その前の、ユーフォはお前の知り合いの吉山さんだっけ？」

「違う。加藤さん」

「ゴメンゴメン。その加藤さんが吹いてそう」

翔と陽乃の部分が終わると、再び木管のメロディ。ユーフォやホルンが合いの手を入れる。そして、アルトサックスのソロ。

（ここは鈴木さん……）

美奈の想像で、ナナコウの演奏が進んでいく。再び元の調へ戻る。クラリネットの優しい旋律。そしてトランペットが加わり、ホルンとユーフォが合いの手を入れ、曲は最高潮へと移動していく。

静かになっていく部分。恵梨はきっと、口の前に人差し指を立てて静かに、という指示を出すに違いない。そして、エンディング部分。曲はフェードアウトするように、静けさを増して行く。金管で吹いているのは、チューバやユーフォ、トロンボーンのような伸ばしばかり。木管の優しい音色でリタルダンドをした後、ウインドチャイムで曲は終わりを告げた。

「……。」

「妄想もここまで来ると、すごいな」

泰徳も驚いていた。一瞬、未来の目の前には愛実が、泰徳の目の前には翔がいるような気配すらしていた。

「無事終わった頃かな」

美奈が呟いた。

「美奈」

泰徳が携帯電話を差し出した。

「秦野さんに、お疲れメール入れてみれば？」

「……うん」

泰徳から携帯電話を受け取ると、美奈はメールを打ち始めた。

その日の晩。泰徳は久しぶりに翔に電話を掛けた。

「もしもし」

「オーッス。どないしたん？」

「いや……ほら、そろそろ新入生来るだろ？　そっち、どうかなって思って」

「うーん……」

翔にしては言葉の歯切れが悪い。

「調子よくないのか？」

「まだ初日やからな」

「そっか……」
「常套(そっち)は？」
「俺たちもこれからって感じ」
「お互い様やな」
「そうだな」
「ところでさ、泰徳。５月の演奏会の話やけど」
泰徳の常套中学校は来(きた)る２００７年５月１日（火）～４日（金）に、第２回　Ｓｐｒｉｎｇ　ｊｏｉｎｅｄ　Ｃｏｎｃｅｒｔに出演するのだ。
「とりあえず、オレと拓あん、秦野ちゃん、加藤ちゃんの４人は絶対行くねん。後、今のところやけど１年生で、オレの妹の綾音、朝倉の弟の夏樹くん、それとどこで知ったか知らんけど、チューバの飯岡さんが死んでもお前のチューバソロを聴きたい言うてるから、合計７人で行くつもり」
「嬉しいな～。俺のチューバ目当てで来る人いるんだ」
「そうやで？　拓あんと飯岡さんのチューバ組がな」
「じゃあ、チケットは７人分用意しておいたらいいな？」
「頼むわ」
「了解」
それから事細かにいろんな打ち合わせをした。結局、遠征費は保護者会のほうで捻出してくれることとなった。前日の１日に新幹線で広島まで移動し、その後はバスでしまなみ海道を通過して愛媛県内に入る。そして常套中のある町へと移動するという手段を取っていた。
宿泊先はさすがに７人もいると泰徳の家や未来、美奈の家にはお邪魔できないという翔の判断でホテルを利用することになった。美奈や未来は来てほしいといったが、翔は丁重にお断りしておいた。彼らが七海市に来た時には七海(こちら)側の都合で来てもらったので、宿泊したもらったのだ。今度もこちらの都合で行くのだから、甘えることはできないと考えた末の結果だった。

「じゃあ、当日はヨロシクな」
「待ってる。じゃ、また」
泰徳は電話を切った。
「こうしちゃいられないな。俺も練習、練習！」
泰徳は自分の部屋へ戻ってチャルダッシュの音源に耳を傾けた。
同じ頃、美奈の携帯に着信が入った。
「はーい！　中井でっす！」
「もしもーし！　秦野です！」
相変わらずのやり取りは変わらない二人。
「先輩！　どうでしたか？　今日は」
「実は……」
一瞬、美奈の胸がドキッと鳴った。
「大成功よ～！」
「やったぁ！　やりましたね！　さっすがエリ先輩！」
「えへへ……。いやぁ、こないだのみなつんの一喝、あたしには効いたわぁ」
「それはよかったです！」
二人はその後しばらく、とりとめのない会話を続けた。
「そうそう！　そういえばね、ウチの弦バスのみーやんとフルートの宮部さんなんだけど……」
「いい雰囲気なんですか？」
「そう！　今日、こっち雨だったんだけど、傘を忘れた宮部さんをみーやんが傘に入れて、一緒に帰ってたの！」
「キャー！　ラブラブですね～！」
「あーあ。あたしも恋したーい！」
「じゃあ、泰徳なんかいかがです？」
恵梨は泰徳の顔を浮かべた。
「いや……多分、会話が続かないと思う」
「アハハハ！　それ、泰徳も言ってました」
「でしょー？」

電話越しに大笑いする二人。それから話は5月のコンサートの件へと移っていった。
「じゃあ、7人も来てくださるんですね？」
「うん！　だから、いい演奏よろしくね！」
「了解いたしました！」
「あ……もうこんな時間」
美奈が時計を見ると、8時半を指していた。
「明日もプチコンあるの」
「指揮するんですか？」
「うん！」
「今日ができたんですから、明日も余裕ですね。先輩、ファイトです！」
「ありがと！　じゃあ……またね！」
「はい！　おやすみなさーい！」
電話を切った後、美奈は大きく伸びをした。
「5月か～……。遠いようで、多分あっという間に来るんだろうな」
下から「美奈！　お風呂！」という声が聞こえたので美奈は「はーい！」と大声で返事をして下へ降りていった。

第２８５話　大阪の仲間

プチコンサートも無事に終え、仮入部の期間にも突入した４月１８日水曜日。トランペットパートには翔の妹・綾音ともう一人、男の子の見学者が来ていた。

彩香が委員会で遅れてくるため、陽乃が綾音を、勇がもう一人の男の子、藤咲（ふじさき）　流（りゅう）を指導していた。綾音は完全なる初心者だが、袴田中学校出身の流は楽器経験が既に４年目に入るため、そんなに指導も必要ではなかった。そのため、陽乃の考えもあって勇は既に七海高校が演奏する課題曲『マーチ・ブルースカイ』の練習を流にさせていた。

「そうそう。あ、吹く時にほっぺを膨らませたら絶対にダメよ」

「はい」

陽乃はマウスピースの吹き方から綾音を指導している。金管・木管問わず初心者は何かと頬を膨らませて吹くことが多いが、金管楽器では基本的に頬を膨らませるのは好ましくないとされている。

「そうそう。あんまり全体的に力んじゃダメ。最初はなるべくリラックスして吹くようにしないと、悪い癖がつくからね？」

「はい」

２年前までは、自分が翔に言われていたことを今度はその翔の妹へ教えている。陽乃はなんだか不思議な気分になりつつも、教えられるぐらいに自分がなったんだと思うと少し、嬉しかった。

「オッケィ。ちょっと疲れたでしょ？　休憩しない？　皆」

「しましょ、しましょ！」

勇が喜んでといわんばかりに大声を上げた。

「何～？　そんなに休みたかったの？」

「俺、藤咲くんにいろいろ質問とかしてみたかったんですよ！」

「あ、あたしも参加していいですか～？」

綾音も嬉しそうにイソイソと勇と流のほうへ駆け寄る。

「あたしはちょっと部室に戻ってるね」
陽乃は小さく手を振り、廊下へ出た。出ると同時に、携帯電話が震え始めた。
「ん？　電話？」
午後４時半。こんな時間に電話なんて今までほとんどないことだけに、陽乃は不審に思ってすぐに携帯を取り出した。しかし、ディスプレイに表示された名前を見ると、一気に顔がほころんだ。
「雪ちゃーん！」
「陽ちゃーん！」
大阪に転校したホルン奏者、永井　雪子からの電話だったのだ。
「どうしたの！？　急に！」
陽乃は足を止めて傍の窓を開け、外に向かって顔を出した。
「うん、ちょっと落ち着いたから電話してみようと思って……。いま、大丈夫？」
「うん！　ちょうど休憩中なの」
「そっかぁ。ねぇ、そっち新入生はどんな具合？」
陽乃はひとまず自分のパートの状況を伝えた。
「トランペットは、翔の妹の綾音ちゃんと男の子が１人の合計２人。サックスは夏樹がいて、テナーとバリトンが１人ずつ」
「バリトン来たの！？」
雪子は驚きの声を上げた。
「そう！　スゴくない！？　今までサックスアンサンブルは絶対に無理だったけど、これで可能性が出てきたよ～」
「すごいなぁ……。ねぇ、ホルンはどう？」
「うふふ……聞いて驚いちゃダメだよ？」
「何？」
雪子は胸がドキドキしていた。
「なんと、今日一気に３人も見学に来てるの！」
「ウソー！？」
「それも、２人経験者！」

「本当!?」
「もちろんじゃん!」
順平もビックリの展開で、ホルンには見学者が3人も来ているのだ。それもそのうち2名が経験者だというから、順平の喜びもひとしおだ。
「それでね、ずいぶん右川くん気合い入っちゃってて、まだ見学段階なのにもう課題曲のパート割り振ってるの」
「やだ！　早すぎるわ」
雪子が電話の向こうで笑う。
「あれ?」
陽乃はトランペットの音が聞こえたので教室を覗き込んだ。綾音と勇は流との話に夢中で、彩香はまだ来ていない。にも関わらず、トランペットの音が聞こえるのだ。
「どうしたの?」
「……。」
耳を澄ますと、電話の向こうからトランペットの音が聞こえてきたのだ。
「雪ちゃん！　トランペットの音が聞こえる」
「あぁ！　そうだ。それで電話したのよ」
陽乃は首を傾げたが、雪子の言葉に思わず声を上げた。
「私ね、実は大阪(こっち)でも吹奏楽部に入ったの！」
「えぇ!?　本当!?」
陽乃は驚きを隠せない。
「吹奏楽部、あったんだ!?」
「うん！　しかもね、転校前に佐野くんが教えてくれた彼の友達のうち、内山くんって子が吹奏楽部の部長だったの！　私が経験者だって言ったら、すぐに案内してくれて。周りが関西弁ばっかりでちょっとテンションについていけないけど、部活自体はすっごい楽しいの！」
「いいじゃん！　スゴいね〜。関西弁ばっかりってことは、翔みた

いなのがいっぱいいるんだ？」
「そうなの！　川島　海里ちゃんっていう、めちゃくちゃ可愛い女の子もいるのに、めっちゃくちゃ関西弁なの！　もう言葉の発音だけで私、笑っちゃって笑っちゃって」
「あんまり笑ったら失礼だよ？」
「そうなんだけどね～」
それからも話は尽きない。お互いの新入部員のこと、雪子の学校での様子、プチコンサートや部活紹介の報告。気づけば、２０分も話をしていた。
「先輩～！　そろそろ練習再開しましょうよ」
勇が声を掛けてきたので陽乃は「あ！　ゴメン！　すぐ戻る！」と返した。
「あ。そろそろ練習再開？　あぁ！　ゴメンね？　２０分も電話しちゃって」
雪子が電話の向こうでずいぶん慌てていた。
「平気平気！　パート練習だしね、今日は」
「ならよかった～」
「雪ちゃんも、元気そうでよかった。みんないい人ばっかりみたいだし」
「うん！」
馴染めるかどうか不安だと言っていた雪子の姿がウソのような元気な声に、陽乃も胸を撫で下ろした。
「また、七海にも帰ってきてよ？」
「もちろん！　陽ちゃんもさ、佐野くんと一緒に大阪に遊びに来てね！　待ってる！」
「わかった！　じゃ、また電話しようね！」
「うん！　ばいばい」
陽乃は雪子が電話を切ったのを確認すると、すぐにパート練習の部屋に戻った。
「永井ちゃんから電話？　あったん？」

部活終了後、楽器を片付けながら陽乃は翔に雪子との電話の件を伝えた。
「うん。内山くんだっけ？」
「あぁ！　大輔な」
「彼とか川島さんって女の子とか、ずいぶん優しくしてもらってるみたい。あたしも安心しちゃったよ」
「へぇ～。あの川島がなぁ」
翔は懐かしそうに呟いた。
「あーあ！　あたしって何か、損！」
陽乃は悔しそうに笑いながらそう言った。
「何がや？」
「だってあたし、中学までの翔を全然知らない」
「……。」
「雪ちゃんはその気になれば、内山くんや川島さんから中学時代の翔のこと、いろいろ聞けるじゃない。あたしは、定期演奏会のビデオでチラッとしか翔を見たことないし」
「……。」
「まぁ、仕方ないんだけどね」
すると突然翔がギュッと手を握ってきたので、陽乃は思わず赤くなってしまった。
「ほな、今日時間あるし、オレん家来るか？」
「えぇ！？　な、なんで！？」
「卒アル見るか？」
「……。」
翔がいたずらっ子っぽく笑った。
「その代わり、お前も卒アル持ってくること！　幼稚園からな！」
「よ、幼稚園！？　あたし、前髪パッツンパッツンだよ？」
「おもろいやんけ！　オレなんか丸坊主や」
「ほ、ほんとー！？」
「あぁ！　早く片付けてオレん家行くで！」

「うん！」

翔と陽乃は笑顔で片づけを再開した。

雪子が大阪でも元気でやっている。陽乃はそれを知ることができ、どこか胸に引っ掛かっていたことが、スゥッと溶けるように消えていくのを感じていた。

第２８６話　大きな第一歩

４月１９日木曜日。七海高校吹奏楽部の活動拠点である音楽室は、合奏の形態が作られていた。それもこれまでの形態と異なり、明らかに椅子の数が多い。

「どう？　椅子はそれで足りそう？」

陽乃が翔の持っているメモ用紙を覗き込んだ。

「そやな……。フルート１人、オーボエ１人、サックス３人、クラリネット４人、トランペット１人、トロンボーン２人、ホルン３人、チューバ１人、弦バス１人やから……。うん、これで大丈夫そや」

「じゃあ、あとはミサッチにパーカスの人数聞くだけね」

「おう。頼むわ」

七海高校ではたびたび、初見合奏を行っている。今回は１年生にもその感覚に馴染んでもらうために、全学年がまったく演奏の経験がない曲を恭一が用意してきた。そして、今からその楽譜が配られるのである。

「『丘の上のレイラ』……か」

楽譜を配られてすぐに、拓真が呟いた。

「ねぇ、レイラってやっぱり女の子だよな」

春樹が拓真に聞いた。

「そうだろうな」

「どこのレイラさんですか？」

亮平が不思議そうに聞いた。

「ど、どこだろう……？　ヨーロッパ？」

拓真が困惑した様子で春樹にバトンを渡す。

「俺も知らないよ！　ね、メグは何か知らないわけ？」

「ゴ、ゴメンなさい……私もよく知らないっていうか……」

バスパート全員が沈黙してしまう。智志に至っては、完全に妄想

の「レイラ」を思い浮かべているようで、鼻の下が伸びていた。
「あ、あの」
沈黙を破ったのは、弦バス1年生の常盤　貴志だった。
「どした？　貴ちゃん」
「この『レイラ』っていうのは、特定の女性を表してはいないんですよ」
「どういうこと？」
すぐに愛実が聞き返す。
「つまり、吹き手によってレイラさんの解釈は変わるってことです。ひょっとしたら、春樹先輩は……橋本先輩のような髪の綺麗な女性を想像するかもしれないですし」
「なっ！」
春樹が真っ赤になる。
「本堂先輩はホラ、愛媛県のお知り合いの姿を想像するかもしれないですし」
「！」
拓真も困惑した様子を浮かべる。
「大岩先輩は、め……」
「わあああああああ！　い、言うなよ！　貴ちゃんなんでそんなこと知ってんだよ！？」
「そうだ！」
「どこで聞いた！？」
智志、春樹、拓真の3人が貴志に詰め寄る。
「りょ」
「りょ！？」
「亮くん……」
ギロッと亮平を睨む3人。
「まぁ、あれだもんなー」
拓真が続けた。
「みーやんの場合はなぁ」

春樹がニヤニヤとそちらを見つめる。
「そうそう！　愛しの宮……」
「わー！　ゴメンなさい！　俺、貴志にこの曲をイメージさせるために皆さんを想像させてもらっただけなんですよー！」
ワイワイと騒ぐバスパートの話を聞いていた翔以外のサックスパートでも、その話が伝染し始めた。
「聞いた？」
さゆりがはるかに聞く。
「うん。ねぇ、マーヤ」
「もちろん！　ここのソロは佐野先輩にお願いするよ！」
妄想大好き女子3人組みが、翔と陽乃の姿を思い浮かべるや否や、
「やーん！　想像したらこっちが恥ずかしくなる！」と大声を上げた。
「丘の上のヒナノとか！？」
はるかが顔を赤くして具体例を出した。
「やーん！」
それを聞いてさゆりと麻綾が両手で目を覆った。
「おいコラ！」
騒ぎを聞いた翔が顔を赤くして3人に怒鳴った。
「しょうもないことやってんと、早くチューニング！」
「うわ！　はーい！」
「ったく……」
翔は初見合奏をするずっと前にこの丘の上のレイラを演奏したことがあった。中学1年生のときの定期演奏会だった。２００１年に作曲されたこの『丘の上のレイラ』がまだそれほど頻繁に演奏されていない頃に、翔は1年生だけの舞台でこの『丘の上のレイラ』を演奏した。つまり、翔にとって生まれて初めてのソロを吹いたのがこの曲という、思い出深い曲なのである。
そして、その演奏をするとき、翔はいつも初恋の少女のことを思い浮かべていた。今の翔からはとても想像できないほど、人見知り

が激しかった小学校の頃。あれは3年生のときだった。
家族総出で岩切家、修平の佐野家、翔の佐野家で関西国際空港に遊びに来た時のこと。神奈川から来たという少女が迷子になっていた。翔はその子に一目惚れしてしまったのだ。一瞬のことだった。その子から目が離せなかった。
「翔？」
陽乃の声に、我に帰る翔。
「おう？」
「どうしたの？　ボーッとして」
「ううん。なんでもない」
「そ？　ならいいけど。あ、そうだ」
陽乃は思い出したように胸ポケットから写真を取り出した。
「これ」
「何や？」
「雪ちゃんがロッカーに忘れてたのよ」
「写真か？」
「うん」
陽乃はその写真を翔に渡した。
「それ、雪ちゃんに渡しておいてくれない？」
翔は目を点にした。
「何でや。お前が渡すか、送るかすればえぇやんけ」
「ダメ。それはアンタでないと」
「はぁ！？」
「いいから！　よろしくね」
陽乃は手を振ると、部室へ戻って行った。正直言って、翔は雪子と2人きりになるのが気まずいと思っていた。2人だけで会うなどもってのほかで、電話やメールすら、正直言ってしづらいところだった。
割り切っているつもりが、翔の中では実際そうでもなかったのかもしれない。雪子をフッたという感覚が抜けきれずにいた。

翔は渋々写真を見てみた。
「あっ……！」
関西国際空港での、記憶の中の少女と雪子の顔がピッタリ一致したのだ。
「……うん」
翔はギュッと拳を握り締めた。そして急ぎ足で部室に戻ると、譜面を取り出し同時にｉＰｏｄで音源を聴き始めた。わずか１５分ほどで翔は譜面にすごい勢いでメモをしていく。
そして合奏の時間。
「起立！」
翔の掛け声に１年生が戸惑いながら立ち上がる。
「礼！」
「お願いします！」
「おお～。初々しい声が混ざると気分が違うな」
恭一がニコニコ笑いながら言った。ドッと笑いが起きる。
「はい。じゃあ、丘の上のレイラ」
「はい！」
恭一が指揮棒を下ろすと同時に、絵美のクラリネットと翔のアルトサックスの音色が響く。そして受け継ぐように春樹のユーフォと駿のバスクラの音色。やがて、主題であるメロディが健之佑のオーボエから発せられる。
翔はここに「出会い」と書いていた。オーボエソロというメモの後ろには「雪」の字。クラリネットからユーフォ、ホルンというメモの後ろには「陽」の字。
翔はこの曲への思いをこう決めていたのだ。「３年生との出会いを振り返る曲」と。見れば、楽譜には「由」、「沙」、「絵」、「春」、「慎」、「拓」、「美」、そして「翔」の字が至るところに書かれていた。
翔にとっての「レイラ」は、女性でも男性でもあったのだ。曲の明るい部分は１０人で過ごしてきた楽しい日々。少し短調になる部

分は、悩んで苦しんだ時のこと。そして、翔が最も感情を込めて吹く部分がやって来た。
「うわぁ……」
夏樹、茉莉紗、かのこが同時に声を上げた。
「すげぇ」
智志と拓真、亮平も驚いて声を上げる。気づけば、翔のソロ部分は伴奏も消えて本当に翔の音色だけになっていたのだ。
「え……？　えぇ！？　な、何！？」
恭一もポカンとした様子で翔を見つめていた。
「いや……ちょっとビックリしてな。佐野。お前、なんか特別な練習でもしたのか？」
「いえ……ま、まぁ、曲の雰囲気掴むために自分なりに曲に物語みたいなん作って……書き……ました……」
翔は消えそうな声でそう呟いた。するとそれを聞いた恭一が嬉しそうに笑った。
「いいコトじゃないか。自分なりに、曲を解釈しようとしたんだろう？」
「は、はい！」
「それでこれだけ、曲の雰囲気が変わるんだ。この際だ。ウチの部では今年、曲の雰囲気を掴むのに物語を作ってみるっていうのも、いいかもしれないな」
恭一は一人うなずくと、こう続けた。
「よし！　１年生に課題だ。今年、ウチでする課題曲『ブルースカイ』を先輩に渡してもらうようにするから、その曲の物語を書いてくること！」
ザワザワと音楽室内が騒がしくなる。
「それから、２・３年生は自由曲で同じコトをやってもらおうか！」
最初は戸惑う声が多かったが、やがて「おもしろそう」と言う声が上がり始めた。
「よし！　問題なさそうだな。では、初見合奏でしたこの『丘の上

のレイラ』なんだけれども」
恭一はパンパンと手を叩いて話を続けた。
「今年のサークル・部活動監査会で演奏する曲目とする。各自、コンクール曲と並んで練習をしっかりするように！」
「はい！」
「では、続けてサックスのソロから行こうか」
「はい！」
恭一が指揮棒を上げる。翔の音色が再び、音楽室から飛び出してグラウンドのほうまで、遠く響いていった。

第２８７話　残酷な宣告

「ふー……」

翌日４月２０日。恭一は職員室で大きなため息を漏らした。

「どうしたんです？　東先生。大きなため息で」

野球部顧問の宗平が恭一に声をかけた。

「あぁ、真鍋先生。いえ……実は新入部員が思ったより多くて」

「それはいいじゃないですか！　何か問題でも？」

宗平は恭一の隣に座っている。化学の教科書を置いてから、コーヒーをすすった後に、恭一に聞いた。

「実は……総部員数がこのままだと５０人を超えそうなんです」

「それはスゴいじゃないですか！」

「ですが……コンクールに出れる人数が５０人までなんですよ」

「……すると、溢れた生徒たちは？」

「出られないんですよ、もちろん」

沈黙が続いた。

「野球部はでも、８０名でしたっけ？」

恭一が聞いた。

「そうですね。なかなか苦労しております」

「いえいえ。あんな大人数で、それも男子ばかりの部を統率されるのは、大変でしょう」

恭一がお茶をすすってから続ける。

「選手９名、ベンチ９名でしたっけ？　高校野球は」

恭一も高校時代、野球部の応援にいったのでなんとなく覚えていた。スポーツがまったくダメな恭一だが、野球観戦だけは今も大好きだ。

「えぇ。そのとおりです」

「８０名いるうちの１８名ですものね。試合に出場できるのは」

「そうですねぇ……。かなり、酷ですね」
「どうされています？　出られない生徒のケアというのは」
宗平が困った顔をした。
「ウチは……もう、出られない人数のほうが多いので、努力していて、それなりに戦力になる者を監督と相談の上、決めていますからね」
宗平は副顧問かつ副監督である。顧問兼監督は体育科の教師が担当していた。
「今からとりあえず、人数の話はしなければならないと思うんです」
「そうですか……。辛いかもしれないですけれど……頑張ってください」
「はい」
「すみませんね、なんか……ありきたりなことしか言えなくて」
「いえいえ！　とんでもない。また愚痴とか言うかもしれないですけれど、よろしくお願いしますよ」
宗平は笑顔で「お互い様ですから！　いつでも！」と言ってくれた。恭一はそれだけで少し、気が晴れた。
「失礼しまーす！」
突然、大声が職員室に響いた。
「東先生！」
振り返ると綾音、騎士、なぎさの3人がいた。
「おぉ、佐野、速水、片岡。どうした？」
「入部届け！　持って来ました」
綾音はトコトコと恭一のところに駆け寄ると、封筒に入った入部届けを恭一に手渡した。
「これから、よろしくお願いします！」
「おっ、丁寧だな」
「高校生ですから！」
綾音はニッコリ笑って後ろに下がった。騎士が前へ出る。
「よろしくお願いいたします」

「こちらこそ」
なぎさはいささか緊張しているようだったが、それでも「よろしくお願いします！」と彼女なりに大きな声を出してくれた。恭一はそれだけでも嬉しかった。
「今日はパート練習をした後、部長にも言っているが5時半から大事な話がある」
「あたしたちもですか？」
綾音の口調は、初心者だから関係ないと思っているような素振りだった。
「あぁ。全員だ」
「わかりました！　練習してきます！」
「はい！　頑張るように」
「はい！　失礼します！」
「失礼します」
3人はペコリとお辞儀をして、職員室を後にした。
「3人とも、初心者で？」
宗平が聞く。
「えぇ……」
「そうですか……」
沈黙が降りた。それっきり、恭一も宗平も言葉をつなげなくなってしまった。

「聞こえたやんな？」
綾音が校長室の前に来てようやく、口を開いた。
「あぁ……」
騎士が続ける。
「50人超えたら出られないんだ……」
なぎさが複雑そうに呟く。
「やっぱり、ここは初心者は引くトコやろ？」
騎士が笑顔になった。

「やっぱ佐野もそう思う？　俺も」
「片岡さんは？」
綾音が騎士の隣にいたなぎさの顔を覗きこんだ。
「わ、私コンクールなんてまだ出られないよ！」
なぎさはブンブンと首を横に振る。肩まで降りた髪の毛が綺麗に揺れた。
「やっぱそうやんねぇ」
フウッと綾音がため息を漏らす。
「あっ！　ねぇ、もう４時半だよ！？」
「ウッソ！？　アカンアカン、急いで戻ろう！」
綾音たちは急いで音楽室へと戻った。
バタバタと綾音たちが音楽室に駆け込んでいく音を聞いた翔と陽乃が苦笑いする。
「元気だね、綾音ちゃんたち」
「元気すぎるわ。家帰ったら注意しとこ」
「でも……もう、確実だよね？」
「そうやなぁ……。こればっかりは、しゃあないわ」
翔は名簿をチラッと見た。

［入部届け提出済み］

＜フルート＞
安藤　稚沙希

＜オーボエ＞
歌川　まゆ

＜クラリネット＞
速水　騎士／片岡なぎさ／進藤　雄飛／毛利　菘

＜サキソフォン＞
朝倉　夏樹／工藤茉莉紗／前田かのこ

＜トランペット＞
藤咲　流／佐野　綾音

＜トロンボーン＞
江藤　沙知

＜ホルン＞
緒方　賢治／時任　裕子／保田　杏

＜チューバ＞
飯岡　好美

＜弦バス＞
常盤　貴志

＜パーカッション＞
岩切　裕也／本堂　晃

＜見学中＞
添田麻衣子／堀江歩由美／佐々木雛乃／塚口　和志

「入部届け出した人数で既に５２人か……」
見学中の者を除いても２人がコンクールに出られない。
「先生からの話って……多分、この人数の話よね」
「あと、留学生の話もするって言うてたわ」
翔は別の用紙を取り出した。留学生は４月から半年間、１０月末まで七海高校でいろんな勉強をすると共に、日本の文化などを学ぶ

そうだ。ちなみに、ホームステイもするようで、なんと驚きなのだが慎也は中国の人を、沙希はアメリカの人を泊めているそうだ。

［留学生　入部希望者］

＜フルート＞

崔（さい）　裕時（ゆうじ）／備考：男性。中国四川省出身。１７歳。楽器経験あり。川崎宅にてホームステイ中。

＜ホルン＞

マーガレット・メルヴィル／備考：女性。アメリカ合衆国ノースカロライナ州出身。１８歳。楽器経験あり。大谷宅にてホームステイ中。

＜パーカッション＞

パク・ソンス／備考：男性。大韓民国出身。１６歳。楽器経験なし。２年生・山崎　琴弥宅にてホームステイ中。

「留学生はコンクールには出られへんやろうけど……それでもなぁ」

翔がため息を漏らす。

「規制されてるんだもん……。仕方ないよ」

「うん……」

ガラガラと扉の開く音がしたので振り向くと、恭一が立っていた。

「佐野。朝倉」

「……はい」

２人は少し落ち込んだ様子で答えた。

「気持ちはわかるが……な？」

「はい」

翔と陽乃が音楽室に入ると、ほぼ全員が揃っていた。

「こんにちはー！」

「はい、こんにちは」

恭一が席に着く。
「えっとだな……まず、朗報だ。既に１８名の１年生が入部届けを出してくれている」
恭一の言葉に２、３年生が沸いた。
「それと、留学生も３名、入部してくれるそうだ。彼らは明日、改めて紹介する」
「おぉー！」
ザワザワと騒がしくなる音楽室内。
「はいはい！　それで、本題なんだが……」
恭一は重い口を開いた。既に入部届けが１８名提出されたことにより、七海高校吹奏楽部の部員数は現在、５２名に達していること。全日本吹奏楽コンクールの規定では、高校生は５０名までしかコンクール出場が認められていないこと。初心者のためにも、隅々まで丁寧に説明した。
「つまり……今年、現在見学中の４名も入部するとしたら、５６名になる。なので……コンクールのためには一部パートで……オーディションを行い、人数調整を行う」
静まり返る室内。
「オーディション対象パートは次に言うとおりだ」
翔はゴクリと唾を飲む音が自分の耳にハッキリと聞こえた。
「クラリネット、オーボエ、アルトサキソフォン、トランペット、チューバ、弦バス、パーカッション。以上、７パートは今日から１週間、パート練習の時間をしっかり取るので練習の上、来週の金曜日のクラブ活動中にオーディションを行う。そこで落選したものは、今年の夏のコンクールは……出場できない」
拓真と亮平の顔が完全に固まっていた。自分たちは関係ないと思っていたのだろう。それはオーボエのまゆと健之佑も同じ様子だった。
「３年生もオーディションの対象だ。あまりにヒドい状態だったら、３年生でも申し訳ないが、コンクールには出られないと思ってくれ」

絵美、春樹、慎也、美里の表情が一気に暗くなった。
「話は以上。わかったか？」
「……。」
「返事！」
「はい！」
「よし。以上。部長、号令」
「起立」
翔の声もいささかトーンダウンしていた。
「礼」
「ありがとうございました」
恭一は一礼すると音楽室を後にした。階段を降り、家庭科室の前に来てようやく足を止めた。
「やっぱり辛いな……」
恭一はペタリと座り込み、大きなため息を漏らした。まだ少し冷える学校の廊下。恭一の息が一瞬白くなって、すぐに消えていった。

第２８８話　沈黙の廊下

「……。」
絵美、由美子、沙希、美里は何も言わず黙々と部室で片づけをしていた。
「……はぁ」
春樹がため息を漏らす。
「不安？」
翔が拓真と絵美、美里に聞いた。
「……正直、すっごい不安」
拓真が本音を漏らした。
「なんで？」
翔は拓真の傍に座って聞いた。
「飯岡さん……普通に上手いし」
「うん」
「さとっぺ、最近音でかくなってきてるし」
「うん」
「俺……音あんまり綺麗じゃないし」
「そっか」
翔は聞くだけ聞いてすぐに立ち上がり、今度は絵美の隣に座った。
「不安？」
同じ始まり方だった。
「うん……」
「どこらへんが？」
絵美もポツリポツリと言い始めた。
「１年生も進藤くん、毛利さん、堀江さん、添田さんが経験者だし。瀬戸くん音大きいし、みゆちゃん音綺麗だし、梨子ちゃんは絶対い

なきゃいけないし、ヒカリンは音きれいで表現豊かだし」
「そっか」
同じだった。聞くだけ聞いて、今度は美里のところへ行く。
「不安？」
「……何？」
美里があからさまに苛立ちを見せた。
「なんなの？　ねぇ、佐野くん。なんなの？　あたしたちが不安なの見てて、楽しい？」
「……。」
翔は何も言わず無表情のまま、美里の前に鍵を差し出した。
「ん」
「何よ、これ」
「オレ、今日ちょっと用事あんねん。先に帰らんとアカン」
「はぁ？」
「田中ちゃんでもいいし、はしもっちゃんでも拓あんでもいいわ。鍵閉めて先生に返しといてくれへん？」
「何よそれ！」
「じゃ！」
翔は美里に鍵を渡してカバンを持ち、すぐに部室を出て行った。
「なんだよ……。人のこと不安にさせるだけさせといて」
美里が苛立った様子で陽乃に鍵を放り投げた。
「陽ちゃん。副部長じゃん。返しておいて」
「……うん」
陽乃は俯いた様子で答えた。
「じゃ、お先」
慎也がいたたまれなくなった様子で部室を後にする。
「お疲れ様」
「また明日」
由美子と沙希も先に帰ってしまった。
「……いいよね。関係ない人は」

美里は嫌味がこもった様子でそう呟く。
「ね、ねぇ。ミサッチ、エミリン、本堂くん」
陽乃が怯えた様子で3人を呼んだ。
「何？」
「鍵返すの、ついてきてくれない？」
「えぇ？」
拓真が困惑した表情になる。
「お願い！　暗くて怖いじゃん！」
「……しょうがないなぁ」
美里がため息を漏らして立ち上がった。絵美も静かに立つ。拓真が最後に立ち「春やんも来れば？　一人じゃ寂しいし」と彼を誘った。
結局、5人でゾロゾロと暗い廊下を歩くことになった。ペタペタとスリッパの擦れる音だけが暗い廊下に響いていく。そして、職員室の前に着くとそこだけ明るくなった。
「失礼します」
その声に恭一と宗平が振り向いた。
「ご苦労さん」
「3年E組の鍵を返しに来ました」
「なんだ？　全員帰ったのか？」
「はい？」
陽乃と絵美が首を傾げる。
「まだ練習しているヤツらがいただろう」
5人はこっそりE組の教室の前に行った。
「打楽器の音……？」
二つ、打楽器らしい音が聞こえる。タンバリンと、シンバルのようだ。そして少し間を空けてから、チューバの音が聞こえた。
「……チューバもいる」
拓真が呟いた。しばらくすると、男子の声が聞こえてきた。

「違う違う。ちょっと遅れ気味なんだってば。いい？　ちゃんとメトロノーム聞いて。もう1回。いくよ？　5、6、7、8！」

陽乃たちがコッソリ覗くと、そこには智志、優、恵梨、亮平、駿の姿があった。

「……。」

駿と亮平を除いて、楽器を持った当時は初心者だったメンバーばかりだった。

「遅いって！　特にさとっぺ。息の入れ方がマズいよ」

駿が苛立った様子で智志にそう言った。

「どんな感じにすればいい？」

「まだ頬が膨らむクセ抜けてないじゃん。俺が指摘してからもう1ヶ月経つんだから、いい加減直して」

「うっす！」

「……厳しい」

拓真が呟いた。妥協が一切ない。そんな練習だった。

「それと、トリオから秦野のタンバリン。めちゃくちゃズレてる。そこもいい加減、合わしてもらわなきゃ」

「はい！」

その後もブルースカイの前打ちと後打ちの音がひたすら廊下にも響き続けた。美里、絵美、拓真の3人がジッとその様子を見守っている。陽乃と春樹も無言のまま、彼らの後ろに立っていた。

「あたし」

美里が突然立ち上がった。

「もう1回、バチ出してくる。悪いけどみんな、先に……」

「待って」

絵美が遮った。

「私も行く」

「……行こう」

2人が走り出そうとしたとき、拓真が二人の手を握った。思わぬタイミングに二人は少し赤くなった。

「おっ」
拓真のほうが赤かった。それでもトーンはいつもどおり、落ち着いていた。
「俺も行く」
「……うん！」
3人が一斉に廊下を走り出した。
「最長9時までだよー！」
陽乃の声に「わかった！」と美里が答えた。
「暗いから気をつけてな！」
春樹の声に「おう！」と拓真の声が暗闇から響いてきた。ガラガラとE組のドアが開く。
「どうかしました？」
駿がヒョコッと顔を出した。
「あ。お願いがあってさ。今からミサッチ、本堂くん、エミリンが来るんだけど、練習に混ぜてあげてくれない？」
「え？　あ、先輩たちが指導してくださるんですね？」
「違う違う。逢沢くんにビシビシあの子たち指導してあげてほしいの」
「え！　俺がですか？」
駿がかなり戸惑っていたが、恵梨が「いいじゃん。ちょうど伴奏組み揃うし、メロディちょっとくらいいたほうがやりやすいし」と言った。
「……って秦野も言ってるので。了解です」
「よろしく！　じゃ、あたしと水谷くんはとりあえず退散します」
「ハイ！　お疲れ様です！」
駿たちと別れた後、春樹と2人で廊下を歩く。入れ違いで美里たちが音楽室を出て行った。
「あ。行くみたいだな」
「うん」
2人が音楽室に戻ると、ヒョコッと部室から翔が顔を出した。

「お疲れさん」
「上手くいったよ」
陽乃がＯＫサインを指で作った。
「ありがとうな」
春樹が部室に入りカバンを肩に提げた。
「２人は帰らないの？」
「あたしも、練習しないとオーディション落ちるから」
陽乃が片付けたフリをしていたトランペットを取り出した。
「オレは陽乃の指導者役で残ります」
「じゃあ俺も」
そう言った春樹の言葉を翔が遮った。
「春やんは今日は退散！」
「えー！？　なんでだよ？」
春樹は不満そうに頬を膨らませた。
「慎也と大谷ちゃん、宮部っちに言うといてほしいねん。心配かけてゴメンって。みんな、大丈夫やからって」
「……メッセンジャーですね。了解」
春樹はニッコリ笑ってカバンを提げなおした。
「じゃ、お先に」
「お疲れさん！」
「バイバイ、水谷くん」
「ばいばい」
春樹の階段を降りる音を聞いてから、陽乃と翔は練習を始めた。
音楽室からトランペット、３年Ｅ組からクラリネット、チューバ、パーカッションの音が聞こえる。春樹は彼らの音を背に、まずは慎也の家へと向かって走り始めた。

第２８９話　親に教われば

「どうすんの～……こんなの」
日曜日。美里がウンザリした声を上げた。ちなみに、金曜日のいさかいは3年生同士ですぐに解決できた。ケンカするのも早ければ、仲直りするのも早い学年。それが翔たちの学年だった。
拓真が楽譜に記載されている楽曲一覧を読み上げる。
「兄弟仁義、涙の連絡船、天城越え、与作、青い山脈、旅の夜風、リンゴの唄、あの娘たずねて、函館の女、いつでも夢を、津軽海峡冬景色、氷雨、霧の摩周湖、雪のふるまちを」
「つがるかいきょーう、ふぅゆげぇしきぃぃ」
突然由美子が歌いだしたので全員が爆笑する。
「下手！」
沙希がおなかを抱えて笑う。抱腹絶倒とはこの状態のことだろう。
「失礼だなぁ」
由美子はプゥッと頬を膨らませて座り込んだ。
「でも、あたしそれしか知らないや」
陽乃が困った顔で呟く。
「ねぇ、本堂くんは何か知らないの？」
絵美が拓真の肩をつついた。
「なんで俺？」
「なんか、顔が昭和っぽい」
「意味わかんないことで俺に話振るなよ」
拓真が困惑して首を横に振った。この曲たちは『ど演歌えきすぷれす』というメドレーに収録されている曲で、その名のとおり演歌を中心に、懐（なつ）メロと呼ばれる、昭和時代に流行した曲が収録されている。
ちなみに、翔の生年月日は１９８９年8月１3日。１９８９年を元号に直すと、平成元年である。つまり、ひとつ上で卒業したばか

りの安和や岳彦、めぐみたちでやっと昭和６３年から６４年生まれになる。しかし、偶然にも安和は１９８９年２月５日、岳彦は３月４日、めぐみは１月１９日と全員、元号が平成に変わってから生まれていた。

そうとなると、このような昭和時代の曲は陽乃たちにとって未知の曲なのである。知っていてせいぜい、先ほど由美子が口ずさんだフレーズぐらいのものである。

「どうする？　誰にどんな曲ですか？って聞く？」

絵美がニヤニヤ笑いながら分かりきった質問を全員にぶつけた。

「そりゃ決まってるやろ」

「何？　俺がか？」

職員室に３年生１０人が押し掛けたかと思えば、『ど演歌えきすぷれす』に収録されている曲がどんなものか教えてくれというものだったので、恭一も目を丸くした。

「はい！」

春樹が笑顔で答える。

「先生、この曲持ってきたってことは、知ってるってことですよね！？」

沙希が春樹に負けなくぐらいの明るい笑顔で恭一に詰め寄った。

「そ、そうだな！　教えてやらなくもないが、お前ら自分で調べようとしたか？」

「調べ方がわからないから、困ってるんですよ」

慎也が不機嫌そうに言い返す。

「おいおい。何も本とかだけ見ればいいってものでもないだろう。お前らの世代だったらほら、インターネットとかも十分使えるだろう？　そのあたりでも調べてみなさい」

恭一は由美子にパソコンルームの鍵を手渡し、翔たちを職員室から追い出した。

「あれ、絶対わからないからパソコンっていう手段に逃げさせたのよ」

由美子がプンプンしながら言った。
「まぁまぁ。もうちょっと調べてみよう。とりあえずオレと……そやな、ソロ吹くはしもっちゃん、拓あん、慎也で調べに行こうか」
「あたしも吹くけど？」
由美子と陽乃が手を上げた。
「全員言ったら部を仕切る人おれへんやん！　陽乃、頼むわ」
「もう！　じゃ、よろしくね」
「おう！　任せろ！」
そう言って陽乃たちと分かれた後、翔、慎也、絵美、拓真はパソコンルームに駆け込んだ。そして電源を入れ、翔のパスワードとＩＤを入力する。
「翔の壁紙、綺麗だな」
拓真が呟いた。
「大阪の夜景。ＪＲ大阪駅前や」
「けっこうビル多いんだ」
「なんや？　田舎と思ってた？」
翔が絵美の発言にクスクスと笑う。そしてインターネットを起動させてＧｏｏｇｌｅで「ＹｏｕＴｕｂｅ」と検索をかけた。そしてＹｏｕＴｕｂｅをクリックすると『Ｃａｎｎｏｔ　Ａｃｃｅｓｓ　Ｔｈｉｓ　Ｓｉｔｅ』という表示が出てきた。
「なんやこれ！」
「アクセスできませんってさ」
拓真がため息を漏らす。
「なんやと？　バカにしよって！」
翔はバシバシとパソコンを叩く。
「ちょっとぉ！　機械のせいじゃないんだからやめてよ！」
絵美が慌てて翔の手を止めた。
「どうだった？」
「全然調べ物にならん。インターネットが何か知らんけど、アクセスさせてくれへんねん」

「あー。そういえば授業中に関係ないサイト見る人とかいるから、対策打つとか言ってたね」
美里が陽乃と翔の会話を聞いて思い出したように言った。
「余計なことばーっかしてくれて。肝心なときに役に立たんねんから」
「でもいいじゃないスか」
智志がコソコソと耳打ちする。
「授業中、変なサイトとかに興味行かなくなって」
「へ!?」
翔の顔が真っ赤になる。
「ちょっと! エロネタ禁止!」
愛実が智志の耳を思い切り引っ張った。
「痛い痛い! 悪かったって、ゴメンゴメン!」
「先輩! こんなバカよりも、確実なアドバイザーいるじゃないですか!」
「え?」

「ただいまー!」
翔は家へ帰るなり、リビングに駆け込んだ。
「なぁなぁ、母さん!」
「何やの、帰るなり急に」
友美子が笑顔で翔を出迎えた。
「とりあえずお弁当箱と水筒出しなさい。そんで、手ぇ洗って。ご飯食べてるときに聞いてあげるから」
「うん!」
綾音は一足先に帰っていた。今はまだ、1年生は先に練習を終えるのだ。
「あ、多分曲の話やと思うよ?」
「曲? また何か新しいの吹くの?」
「うん。『ど演歌えきすぷれす』」

「す、すごい名前やね」
友美子が苦笑いする。
「名前のとおり、演歌ばっかりなんよ。でも、あたしもお兄ちゃんも全然わからへんの。曲名も歌詞も、曲の雰囲気も」
「へぇ～」
「お母さんって、昭和何年生まれ？」
「昭和３６年よ」
「そんじゃ、昭和時代の曲っていっぱい知ってる？」
綾音はチンジャーロースを食べる手を止めて聞いた。
「そうやね～。でも、お母さんよりおばあちゃんのほうが知ってるかもしれへんよ？」
「ホンマ？　おばあちゃん」
「うん？」
綾音は冨美枝に曲名を何曲か聞いてみた。すると、すべて見事に曲の一部を歌ってくれたのだ。
「すごいすごーい！　なぁなぁ、お兄ちゃーん！」
「なんや大声で。どないしてん？」
「あんな、おばあちゃんが『兄弟仁義』知ってるねん！」
「えぇ！？　おばあちゃん、ホンマ！？」
冨美枝は恥ずかしそうに笑ったが、すぐに歌詞を口ずさんでくれた。
「うわー！　すっごい！　なぁなぁ、その歌ってどんな気持ちを歌ってるん？」
「えぇ？　この歌はね……」
翔はご飯もそっちのけで冨美枝の話を聞いている。
「ただいま。どうしたんだ、珍しい。綾音も翔も母さんに付きっ切りじゃないか」
「今度の本番で、演歌を吹くらしいんやけどね。サッパリわからへんから、歌の内容とかをおばあちゃんに聞いてるんよ」
「へぇ……」

昭は嬉しそうに孫たちと話をする冨美枝の顔を見て、思わず笑顔になった。

「嬉しそうやね、お義母(かあ)さん」

「あぁ。兄妹揃って同じ部活やと、寂しくなりそうやって母さん言うてたけど、むしろ雰囲気よくなったな」

「そやね」

話に夢中になっている翔に友美子は「翔！　とりあえずご飯食べてからにしなさい！」と大声で呼びかけた。

同じ頃、陽乃の家では陽乃と夏樹が知恵子に付きっ切りだった。

「え？　え？　じゃあこの津軽海峡冬景色は？」

「あぁ、それはね……お父さんがちょうど17歳の青春時代の歌やから、お父さんのほうがよぉーく知ってるよ」

知恵子の思わぬフリに、祥夫が明らかに戸惑いを見せた。

「本当!?　お父さん！」

夏樹と陽乃がバタバタと祥夫のほうへ移動する。

「ま、まぁまったく知らないわけではないが……」

「ちょっとでもいいの！　教えて～！」

娘に久しぶりに頼りにされたことが嬉しいのか、祥夫の顔も緩んでしまう。

「し、しょうがないな。少しだけだぞ？」

「よく言うよ。祥夫、あんた石川さゆりの大ファンじゃないか」

「かっ、母さん！」

思わぬ知恵子の一言に、祥夫が真っ赤になる。

「えぇー!?　そうなの！　絶対教えてよ、お父さん！」

「わ、わかったから落ち着きなさい」

その後、陽乃は祥夫から詳しく歌の内容を聞いた。

祥夫によると、恋に破れて東京を去り、北海道へ帰郷するため真冬の津軽海峡を連絡船で渡って行く女の辛い心情を、哀調をこめて切々と歌った曲だそうだ。「上野発の夜行列車」を雪の青森駅で降り、連絡船へと乗り継いで行く描写がある。東京と北海道との間の

交通手段は１９７０年代初頭までは鉄道・連絡船の乗り継ぎと航空機利用が拮抗していたが、この頃から航空機転移が顕著になってきた。

「夜行列車って何？」

夏樹が疑問をぶつける。

「あたしも知らない」

「まぁ……寝台列車だな」

「あ！　トワイライトエクスプレスね！」

「そんないいものでもないが……まぁ、近いかな」

そして歌詞は函館への到着までは描写せず、船上での女の心情を吐露させて終わるということだった。

「中途半端ね」

「言いたい放題だな」

祥夫は苦笑いする。

「でもありがとう！　お父さん。すっごく助かっちゃった」

「またわからないことがあったら、いつでも聞きなさい」

「うん！」

陽乃は笑顔で楽譜を手にして自分の部屋に向かおうとして、足を止めた。

「お父さん」

「どうした？」

「数学も教えてほしい……な？」

祥夫は目を丸くしたがすぐに笑顔で答えた。

「ご飯を食べて、お風呂から上がってからにしなさい」

「はーい！」

陽乃は嬉しそうに返事をすると、すぐに自分の部屋に上がっていった。陽乃以上に嬉しそうにしている祥夫を、横で食事の準備をする由利が微笑ましそうに見つめていた。

第２８９話　親に教われば（後書き）

一般の読者の方からも感想・評価を書けるように設定を変更いたしました！　お待ちしておりますので、ドシドシください☆笑

コラム☆12　★なんでもランキング★

「皆さん、こんにちはー！　パーカッションの田中　美里でーす！」
美里が翔の撮影するビデオカメラに向かって大声で挨拶をする。
「そして、テナーサックスの西嶋はるかでーす！」
負けじとはるかが美里を押し退けてカメラの前に登場する。翔は苦笑いだ。
「テンションの高い2人が集計したもの！　それは！？」
美里の指示ではるかが模造紙を広げる。
「２００７年度七海高校吹奏楽部　なんでもランキングです！」
個性的な字で描かれたランキングがズラッと並んでいた。
「それでは、大々的に発表しちゃいます！　敬称略、有効票数は新入生も含めた５６票です！」
「ではでは！　発表します！」

※　美里とはるかの個性的すぎる字では判別不能のため、通常どおりの書体で発表します。

「お前らなぁ、やかましすぎるねん！」
翔がビデオカメラの録画モードを止めて美里とはるかに怒鳴った。
「何よ～！　せっかくのコラムなんだから、元気よく行かないと！」
「お前ら2人はちょっと元気ないぐらいがちょうどい……わっ！？」
「はいはい！　うるさい佐野先輩は放っておいて早速ランキングの発表です！」
はるかが翔を突き飛ばしてランキングの模造紙を黒板に貼り付けた。
「それではまず『リーダーシップのある人』を発表します！」
「ちなみに、投票数の多い人ベスト3でランキングをつけていますので」

「それではリーダーシップのある人はこの人たち！」

♪リーダーシップのある人♪
１☆佐野　翔：３１票
２☆朝倉　陽乃：１４票
３☆本堂　拓真：１１票

「……え！？　オ、オレ！？」
翔が赤くなる。
「はい！　佐野くんだよ！　一言、一言」
「あ……えっと、えっと」
「はい、ありがとうございましたー！」
はるかが無理やり翔を後ろへ追いやった。
「おい！」
「続きましては『イケメンな人』です！」

♪イケメンな人♪
１☆佐野　翔：１９票
２☆三宅　亮平：１８票
３☆冨岡　洋之：１４票

「ま、またオレ！？」
「これはでも票が均等に入りましたね～」
「でもまぁ、佐野先輩確かにイケメンですし」
「それはあたしも認める」
「ではイケメン佐野先輩。何か一言」
「え……あ……」
翔は真っ赤になったまま、俯いてしまった。
「初心（うぶ）ですね～」
「次に何か１位になったら、絶対何か言ってよ！」

「それでは、次です！」

♪可愛い人♪
１☆大谷　沙希：１５票
２☆朝倉　陽乃：１３票
３☆毛利　　菘：１１票

「来ました！　お嬢様系美少女、大谷先輩でーす！」
「わ、私！？」
沙希が驚きつつも菘に押されて前に出た。
「何か一言！」
「や……知ってる人たちに選ばれるって恥ずかしいけど……嬉しいです！」
「はい！　ありがとうございます！」
「……なぁ」
沙希が元いた場所へ戻った後、慎也が不機嫌そうに呟いた。
「いっせいにランキング発表しろよ。読者の皆さん、絶対お前らのトークうぜぇと思ってるよ」
「ひどーい！　聞きました！？　先輩！」
美里が怒りながら言った。
「わかったわよ！　その代わり、このランキングからいっせいに発表してやる！　ちなみに、１位の人は変わらずコメント残すこと！」

♪腹黒そうな人♪
１☆川崎　慎也：２９票
２☆前田かのこ：４票
３☆野村健之佑：３票

「……。」
慎也が床で「の」の字を書き始めた。

「あ、1位が凹んでる」
「せ、先輩は、本当は優しいんですよ？」
「？　君、誰？」
「あ、永瀬　信二っていいます。中学時代には川崎先輩にお世話になりました」
「えぇ！？　中学時代に！？」
美里が信二の頭を撫でた。
「かわいそうに～。怖かったでしょ？」
「おい！」

♪多才な人♪
1☆伊原　光瑠：１９票
2☆大谷　沙希：１２票
3☆戸口　誠：９票

「きゃー！　私、1位だぁ！」
ちなみに光瑠の成績は数学Aが5、数学1が4。古典が5、現代文が4、体育が4など本当に多才である。

♪体育会系だと思う人♪
1☆大岩　智志：２０票
2☆西嶋はるか：１５票
3☆田中　美里：１１票

「おっ！　俺の時代来たな！」
智志は昨年の球技大会でクラスを圧勝に導いているアスリートの一面もあり。ちなみに、得意スポーツは球技全般と水泳。その割に体格は華奢な感じである。

♪音感があると思う人♪

１☆水谷　春樹：２１票
２☆逢沢　駿：１５票
３☆井上　佳菜：１２票

「１位って何か照れるね」
キラースマイル所持者の春樹。絶対音感のようで、救急車の音や電車の警笛の音まで音階で言い当ててしまうほど。音大目指して勉強中。

♪リズム感があると思う人♪
同率１☆飯岡　好美＆本堂　拓真：各１２票
２☆乃木あずさ：１１票
３☆日高　優：１０票

「あっ！　先輩、やりました！　チューバ１位です！」
「うお！　やったな、飯岡さん！」
喜ぶ拓真と好美の後ろで智志が体育座りをして凹んでいる。
「……俺だけ置いてきぼり……」

♪家庭的な人♪
１☆橋本　絵美：１５票
２☆加藤　愛実：１４票
３☆歌川　まゆ：１３票

「あ……私」
絵美は２００７年のバレンタインデーで、春樹への本命チョコを作るために溶かしたチョコが大量に余りすぎたため、部員全員に義理チョコを配った。それがどうやら評価された模様。

♪明るい人♪

同率１☆佐野　翔＆田中　美里：各１５票
２☆西嶋はるか：１０票
３☆前田かのこ：９票

「なんでオレがお前と同率１位やねん！」
「それはこっちのセリフ！」
陽乃も結構明るそうですが、どちらかといえば波のある陽乃。常にポジティヴな２人が選ばれた様子。

♪クールな人♪
１☆瀬戸　優輝：１５票
２☆戸口　誠：１４票
３☆三宅　亮平：１３票

「いや……喋るときは喋ってるんだけど……」
顔立ちが端整なので、クールに見られがちな優輝。本当は優しいいい子なんです。

♪ギャップ萌えな人♪
１☆冨岡　洋之：１８票
２☆時任　裕子：１２票
３☆宮部由美子：１０票

「え？　俺？」
「そうだよ！　冨岡くん！　見た目クールなのに中身ギャグじゃん！」
はるかがニコニコ笑いながらそう言い放った。洋之は少し複雑そうな顔をしていた。
「こら！　お前ら！」
突然入口で大声がしたので全員が振り向くと、恭一がいた。

「わ！」
「もうすぐ完全下校時間だろう！　何やってんだ！？」
恭一が黒板に張られた模造紙を見て笑った。
「おもしろそうなことやってるじゃないか！」
「……先生も参加します！？」
「……ちょっとだけな！」
恭一が翔の隣に座った。

♪怖そうな人♪
１☆大岩　智志：２１票
２☆右川　順平：１８票
３☆秦野　恵梨：１１票

「つーかこれ、♪つけるようなランキングじゃねーだろ！」
智志が怒鳴り散らした。
「ほら、そういうとこ怖いんだってば」
美里がなんとかなだめてランキング発表は続く。

♪女装が似合いそうなランキング♪
１☆水谷　春樹：３３票
２☆藤咲　流：１０票
３☆日高　優：７票

「えぇ！？　俺！？　絶対みんな外見で選んだでしょ！？」
春樹が目を飛び出させそうな勢いで叫んだ。
「残念～！」
「何が！？」
「去年、水谷くんクラスの出し物で女装してたでしょ？」
「えー！？」
音楽室中が騒がしくなった。春樹は「終わった……」と呟いて机

に伏せたまま、ピクリとも動かなくなった。

♪お兄さんにしてみたい人♪
1☆本堂　拓真：２５票
2☆三宅　亮平：１９票
3☆瀬戸　優輝：１１票

「あ……これは嬉しいな、俺」
拓真がニコニコ笑いながら呟いた。
「ちなみに、2年生女子は全員、本堂くんに入れています。彼、最強です」

♪お姉さんにしてみたい人♪
1☆鈴木　麻綾：２５票
2☆河内みゆき：１３票
3☆橋本　絵美：１２票

「うえええええ!?　あ、あたしぃ!?」
麻綾は自分がランキングに入ると思っていなかったようで、叫び出した。
「それではー！　最後はやっぱりコレしかない！」
「なんだ?」
「コチラでーす！」
バン！と張り出したのは番外編と書かれた1枚の紙。

♪結婚が早そうなカップル♪
1☆佐野　翔★朝倉　陽乃：４５票
2☆川崎　慎也★田中　美里：１５票

「この2カップルに票が集中しましたー！」

「ちょっと待てー！　おかしいやろ、なんでこんな集中すんねん！」
翔が立ち上がって猛抗議する。陽乃も立ち上がった。
「だいたい、４５たす１５は６０になって部員数より４人多いじゃない！」
「ん！？」
翔が視線を感じて入口を見た。すると泰徳、未来、美奈、美並の４人の姿があった。
「おった！　陽乃、アイツらのせいや！」
「あっ！　なんで！？　愛媛にいるハズじゃないの！？」
「と、飛び入りで参加しました……」
泰徳が半笑いで呟く。
「許さん！　お前らのせいやな！？」
翔がものすごい勢いで泰徳たち目がけて走り始めた。
「に、逃げろ！」
泰徳の一言で未来たちが大慌てで走り始めた。陽乃もすかさず後を追う。
「えー……なんだかムチャクチャになりましたが、部員たちから見た部員の新たな一面がわかったのではないでしょうか？」
「またこういう機会がありましたら、よろしくお願いします！」
「以上、七海高校から中継でした！」

第２９０話　汚れた考え

キイイイッ！と耳障りな音が教室に響いた。
「う……」
それに顔をしかめるのは、その音を発した本人――朝倉　夏樹だった。翔は夏樹の傍に近寄り、肩に手を置く。
「力みすぎ。わからんでもないけど、そんなに力んでたら良い音も出ぇへんなるからな」
「はい」
「もっとリラックスして、変に力まんと吹くこと。オレの合図でしっかり深く息吸って。いくで？　５、６、７、８」
翔の合図に従って、夏樹が大きく息を吸う。音の出だしがボケたものの、均等に息が入って安定した音が響いた。
「変に力みすぎると音が硬くなったり、逆にオーバーフロウした息が漏れて耳障りな音がでてきたりするからな。リラックスして、自分の出したい理想の音を出そうと、頭の中で意識する。工藤さんと前田さんも同じやで？　朝倉くんは初心者やからなおさらやけど、二人も経験者やからって、基礎をいい加減にせんといてな？」
「はい！」
茉莉紗とかのこも元気よく返事をする。翔はその二人と夏樹を見て、優しく笑った。
「どうされたんですか？」
その笑みに気づいたさゆりが翔に聞いた。
「ううん。ちょっと、２年前のこと思い出してた」
「２年前？」
「うん。オレらが、サークルとして吹奏楽を始めようとした頃」
翔の脳裏には、２年前のまだ中学生の雰囲気が残った自分や陽乃の姿を思い出していた。

「その頃から先輩方、みんな上手だったんでしょうね～きっと……」
かのこが羨ましそうに呟いた。翔は首を大きく横に振った。
「いやいや。前田さん、知らんの？」
「何をですか？」
「オレら、大谷さんとオレを除いて全員初心者やで？」
「えぇー！？」
茉莉紗とかのこが同時に大声で叫んだ。
「うるっさー！　声デカすぎやろ、二人とも！」
驚いた翔が耳を塞ぐ。
「こ、この本堂先輩もですか！？」
かのこはソロコンテストのときに聴きにきていたようで、携帯電話に保存した拓真の写真を翔に見せた。
「そうやで？」
「じ、じゃああの橋本先輩や、水谷先輩も！？」
「うん」
「……。」
茉莉紗とかのこがポカンと口を開けている。
「やだぁ！」
茉莉紗が右手を小さく振った。
「先輩、ウソつくならもうちょっとマシなウソついてくださいよー」
「へ？　ウソ？」
「そうですよっ！」
かのこが身を乗り出して続ける。
「あたしたちを騙して脅かそうったって、そうはいきません」
「……。」
翔は苦笑いしている。確かに、いまの3年生の技術力を考えてみれば、彼らが全員初心者だったとはとても思えないだろう。
「ね？　鈴木先輩も中野先輩も、皆さんが初心者だったって、本当に思います？」
「うーん……」

麻綾が首をかしげた。
「確かにあたしも去年、入部するときにそういう話聞いたけど……。はっきりした証拠とかがあるわけじゃないしな～」
さゆりが続けた。
「でもさ！　昔は先輩たちが初心者だったこととか、関係ないでしょ？」
「中野さん……」
「今は皆さん、ナナコウ吹奏楽部のパートの要なんです。今さら初心者どうこうっていう話は、関係ないと思ってます、私は」
さゆりの言葉が、ひとつひとつ翔の胸に染み込んで行った。そしてそれを翔は心の中で反芻し、整理してから夏樹の傍へ行く。
「そういうわけやねん」
不安げな夏樹の肩に手を置く。
「佐野さん……」
「練習に練習や！」
「……はい！」
翔たちはこの後、曲の練習はあえてせずに基礎練習に打ち込んだ。翔の考えは、曲というのはすべて基礎練習の応用であるというものだった。基礎練習なくして曲の練習はないというもの。そして、その基礎練習でなるべく、全員の音色（おんしょく）や音質を揃えておきたいというものもあった。
特にアルトサックスは必死だった。なにせ、コンクールメンバーのオーディション対象パートであるからだ。夏樹も初心者というカテゴリに入ってはいるものの、騎士やなぎさたちの初心者とは少しニュアンスの違う初心者であった。それ故、麻綾とさゆりは夏樹に対して一種ライバル心のようなものも正直、抱いていた。
翔は翔で、彼女たちの必死さをよく理解していた。まさか、自分のパートがオーディション対象になるとは思っていなかったのだ。オーディションの件が伝えられて以来、麻綾とさゆりの練習に対する熱意はそれまで以上のものへとなっていた。逆にそれが、翔自身

をも焦らせていた。
　3年生もオーディションの対象である。翔は中学時代、退部するまで先輩たちの動向を見てきた。どの先輩も、最後の3年生の時のコンクールには無条件で出場させてもらっていたのだ。翔は七海高校でもその方式を恭一が取ってくれると信じていただけに、ショックは大きいものだった。
　麻綾はここ最近、音質が急激に良くなった。さゆりはビヴラートの効かせ方が以前よりもスムーズになり、安心して聴ける音へと変化している。そして夏樹はまだ荒削りだが、感情を込めて吹くことに関しては3人に引けを取らないほどになっていた。
（オレ……大丈夫やろか）
　一見良好そうに見えるサックスパート。しかし、見えない部分で葛藤が渦巻いている。そして、それが徐々に徐々に翔を疲弊させていたのだった。
「はぁ……」
　練習後、翔が大きなため息を漏らした。しかし、既に部室には誰もいない。陽乃たちトランペットパートはまだ練習しているようで、遠くから音が聞こえてきていた。
（陽乃はえぇな……。確実にコンクール出れるやろ）
　翔がそういうのも、陽乃は自由曲候補である『教会のステンドグラス』でピッコロトランペットを吹くことになっていた。これはソロでもあり、2月頃から陽乃はピッコロトランペットの練習をしてきていた。彩香も勇もピッコロトランペットの経験はまだなく、綾音は初心者、流は貴重なサードトランペッターである。翔は間違いなく、妹はオーディション落ちすると思っていた。それは綾音自身も既に覚悟できていることであった。そのため、陽乃がコンクールに出られるのはほぼ確実なのである。
（なんで……オレのパートまでオーディション対象になるねん）
　後輩たちの指導で正直、翔は練習時間が減っていた。それが彼を焦らせていたのだ。

（後輩がおらんかったら……オレ、もっと練習できるのに）

そう考えてからハッと気づいた。自分が言っていることの愚かさに、恐怖すら感じた。

「何を言うてんねん！　最低なこと言うな、オレ！」

それまで大切な存在であった後輩たち。自分に笑顔でいろいろ教えてほしいと慕ってくれる後輩たちを一瞬でも、邪魔な存在であるかのように扱った自分に、翔は腹を立てていた。

「クソッ！」

翔は乱暴にロッカーの扉を閉めた。

「……。」

翔は携帯電話を取り出し、陽乃に「ゴメン！　今日はちょっと先に帰らせて☆　練習頑張ってな。明日は津上橋の北で待ってるから、一緒に行こう」とメールを送ってすぐに音楽室を出た。今すぐにでも音楽室から離れなければ、自分がいつまでたっても醜い考え方をしてしまうようで、嫌気がさしてきたのだ。

翔は音楽室から逃げるように離れ、自転車置き場へ走った。自転車に跨り乱暴にカバンをカゴに詰め込み、校門を飛び出した。ガムシャラに自転車をこぎ続け、翔は学校からずいぶんと離れたつくし野川河川敷公園に自転車を停めた。

「はぁ……」

翔はブランコに座り、地面を見つめたままゆっくりとブランコをこぎ始めた。どれくらい時間が経ったのかもわからなくなった頃だった。

「あれ？　翔じゃん」

聞きなれた声がしたので振り向くと、土手の上に慎也と美里の姿があった。

第２９１話　等身大のオレたち

「よっと！」
慎也が自転車を降り、そのまま土手を滑るようにして降りてきた。
制服ではなく、私服だった。
「どうしたんだよ。もう8時半だぜ？」
「うん……」
翔の素っ気ない返事に、慎也は少し戸惑っていた。美里が慎重に土手を降り、慎也の横に立つ。
「どうしたの？　もう遅いじゃない。まだ制服姿だし」
「……。」
「陽ちゃんとケンカでもした？」
「そんなんちゃうけど……」
翔はブランコから立ち、芝生の上に座る。美里は追いかけて翔の隣に座った。少し露を含んだ芝生が、美里の足に触れる。
「わ。冷た～い！　まだちょっと温度差があるもんねぇ」
他愛無い話をすることで、美里は翔が自分から話してくれるのを待つことにした。
「あのさ」
美里が独り言を言い続けること１０分。ようやく翔が口を開いた。
「うん？」
「田中っちや慎也は……自己嫌悪することある？」
「自己嫌悪？」
美里が聞き返した。
「うん」
美里と慎也は顔を合わせる。慎也が翔の右隣に座って続けた。
「そんなの、しょっちゅうだぜ」
「そうなんか？」

「あぁ」
慎也は露を気にすることなく、芝生の上に寝転がった。
「美里とケンカした後。母さんとケンカした後。上手く吹けなかった合奏が終わった後。勉強もしてないのにテストに挑んでる自分。全部嫌い」
「そんなにあんのか」
翔がクスッと笑った。
「おうよ。美里は？」
「あたし？　あたしだって負けてないよ～！」
美里が続ける。
「慎也とケンカした後。お姉ちゃんとケンカした後。授業でうたた寝してノート取れなかった瞬間。塾で問題が解けない自分にイライラしてる自分。全部嫌い」
「田中っちも多いな」
翔は少し表情を明るくした。
「翔は？」
「……。」
慎也の問いに翔はすぐ答えを出すことができなかった。ブランコに再び戻り、翔は小さくこぎ始めた。古い鎖がギィギィと音を立てている。
「オレ、この瞬間の自分が一番嫌い」
「え？」
美里が意味を解せなかったようで、聞き返した。
「オレ……今日、後輩がおらんかったらえぇのにって思った」
「……。」
美里も慎也も何も言葉を返してこなかった。翔は自分が軽蔑されているのではないかという不安がよぎったが、ここまで言った以上、もう引き返せなかったので続けた。
「後輩が頼ってくれるのは嬉しい。でも、コンクールでは……サックスはオーディション対象になった。何人コンクールに出られるか

わからへん。鈴木ちゃんも中野っちも、夏樹くんも皆上手いねん。オレも自信あるつもりやったけど……あの子たち見てたら、ごっつ不安になる」

声が震え始めていた。翔は自分でも驚くほど、感情が高ぶっているのを感じていたが、もう抑えられなかった。

「オレばっかり頼りにしてんと、もっと自分らで練習して欲しい。オレにも練習する時間くれ！　でも、オレは部長でパートリーダーやから、そんなこと言うたら絶対……アカン……！　わかってんのに、頭ではわかってんのに心が追いついてけぇへんねん！　どないしたらいいかもうわかれへ……」

言い終わる前に、慎也がポン、と優しく翔の頭を撫でた。

「お前……頑張りすぎ」

「え……？」

美里が立ち上がり、ハンカチを差し出した。

「涙」

「え？」

「拭いて」

「……あ」

翔はそこで初めて、自分が泣いていることに気づいた。

5分ほどしても、翔はまだグズグズと鼻を啜っていた。

「落ち着いた？」

「ちょっどは……」

「やだ。すっごい鼻声！」

美里がケラケラと笑う。翔は顔を赤くしつつも、ティッシュで鼻を思い切りかんだ。

「イケメンが台無しよ～」

「うるさいなぁ。イケメンが鼻かんだらアカンのかい」

「うわ。自分で言ってる。うぜぇぞ、お前」

慎也が笑いながら翔を左肘でグイグイと押した。

「わかっとるわ、そんなこと」

翔は目を赤くしているものの、ようやく笑顔を見せてくれた。
「でもさぁ。翔がこんなに感情丸出しにしてくれたの、俺は初めてかも」
翔は目を丸くして「そうやっけ？」と聞き返した。
「うん。あたしも記憶にないや」
美里も同じ答えを返した。しかし、翔自身にはその言葉に驚きを隠せない。
「そうかぁ？　オレ……割と単純やから、ほら、陽乃とギャンギャン言うたりして、やかましくしとったから、結構目立ってやかましくしてたんちゃうかなって思ってたんやけど……」
「そういう意味では、感情丸出しよね」
美里がクスクスと笑う。
「田中っちには負けるけどな」
「失礼ね～。あたしは常に冷静沈着よ！」
「よぉ言うわ！」
3人がドッと笑った。
「お前さ」
慎也がひとしきり笑ったところで、真剣な表情で翔にこう言った。
「何でも一人で抱え込みすぎなんだよ。いつだったか、お前言ったじゃん。吹奏楽は一人で創るもんじゃないって。皆で創りあげるんだって。誰かの受け売りだったかなんだか、そんなこと言ってたけどさ」
翔は忘れていたかつての自分の言葉を思い出していた。慎也たちにそう言ったのは紛れもない、過去の自分だった。いつの間にか、後輩ができ、自分が部長としての自覚を持たなければならないと強く意識するようになったあたりから、次第にそんな余裕はなくなっていた。
自分がしっかりしなければならない。そういった責任感ばかりに駆られ、これまで自分が大事にしてきた想いをいつの間にか、なおざりにしていた。

「辛くなったらさ」
慎也が立ち上がり、つくし野川のギリギリにまで行って、いつの間にか手にしていた石をヒュッと投げた。水面を素早く飛び、何回か飛んでからボチャン、と音を立てて石は沈んでいった。
この暗さではどこに落ちたのかは正確にわからなかったが、翔はその音をハッキリと耳にしていた。
翔も立ち上がり、慎也の真似をして石を投げたが、あえなく一回でボチャン！と大きな音を立てて石は派手に沈んだ。
「あーあ……」
翔は苦笑いしながらしゃがんだ。
「なんかカッコ悪いなー！　オレ！」
翔が大声で突然そう叫んだので、美里と慎也は驚いて目を丸くする。
「泣いてさー！　叫んでさー！　愚痴ってさー！　サイテーやぁ！」
「……サイテー万歳！」
間髪入れず美里が突然隣で叫ぶので、今度は翔と慎也が驚いて目を丸くする。
「いいじゃん最低万歳！」
「なんでだよ！」
慎也がバシッと美里にツッコミを入れた。
「だってさ、ジェットコースターみたいに下まで行ったら後は上がるしかない！」
翔の表情が一気に変わったのを慎也は気づいていた。
「ギューンだぁ！　上がれ、佐野　翔！」
美里の言葉がストレートに翔の胸に響き渡る。
「いい？　明日、中野ちゃんたちにこう言いなよ！　みんなで練習しよう。みんなで上手くなろう！　それだけで十分！」
「……うん」
「あと、愚痴はすぐに言うこと！　あたしでもいい。陽ちゃんに言いにくかったらあたしにバーンと吐きに来い！」

翔は優しい笑顔を美里に向けた。
「男前やな」
美里はすぐにバシッと翔の背中を叩き「それ、女子に言う台詞じゃないから！」と笑って返した。

「もう遅いからいい加減帰りなよ？」
美里は自転車に跨ってから念を押すように翔に言った。
「うん。わかってる」
「着いたら一応連絡くれ」
慎也がさらに念を押すように言った。
「お前ら、オレの親父とオフクロか！」
「そうだよね～慎也。こんな手のかかる息子、いやしないわ」
「だな」
「言うてくれるやないかい！」
アハハハ！と3人の笑い声が河川敷公園に響いた。
「じゃ、あたしたちはこれで」
「うん……ありがとうな」
「じゃあな。また明日」
「うん！」
翔は大きく手を振りながら、美里と慎也を見送った。二人の姿が見えなくなってからも、翔はしばらく河川敷公園の真ん中で佇んでいた。遠くで、電車の走る音が聞こえてきた。その電車の音が遠ざかった頃、翔はようやく自転車に跨った。
「もう9時か……」
さすがに友美子たちが心配する時間になってきた。しかし、翔にはまだ行きたいところがあった。自宅とは逆の方向へ走り始める翔。10分ほど全力疾走して戻ってきたのは、七海高校の校門だった。
音楽室の方向を見つめ、翔は宙を掴むように手を握り締めた。
「また……明日な」
その時だった。暗闇で誰かが動いた。それに驚いた翔は「うああ

ああ！？」と悲鳴をあげた。
「きゃー！　ちょっと、なんなのよ！？」
「ひっ、陽乃！？」
なんと陽乃が校門にもたれるようにして座っていたのだ。
「何やっとんねん！」
「別に」
陽乃はスカートに付いた砂を払いながら言った。
「待ってたら絶対、翔は来るって思ってたから」
「……。」
それ以上、陽乃は何も言わなかった。自転車を押しながら「帰ろう。翔」と言ってくれた。それだけで、翔は十分だった。
「今日はあたしが送るよ」
「え？　もう遅いからえぇって」
「大丈夫。お父さんお母さんには言ってあるから」
「……。」
「ね！」
陽乃の笑顔に、翔は心のどこかで引っ掛かっていたわだかまりがスウッと溶けるように消えていった。
「うん」
素直な、優しい声が出た。
１５分ほどかけて、いつもよりゆっくりと二人は歩いて帰った。他愛のない話をし、それはやがて部活の話になっていった。いつの間にか、翔は陽乃に自分の気持ちを吐露していた。焦り。嫉妬のような、複雑な感情。言葉にできない、苛立ち。すべてを陽乃に吐き出した。陽乃は拒むことなくそれらを聞き続けてくれた。
翔はこれらの吐き出した言葉に、特に答えを求めていたわけではなかった。陽乃もそれに気づいていたのか、特に何も返さなかった。
「翔」
陽乃が翔の家の前に来たとき、声を上げた。
「なんや？」

自転車を入れるために門の中に入っていた翔が振り向いた瞬間、陽乃の唇が翔の左頬にそっと触れた。
「お疲れ様。明日からも、頑張ろうね」
「……うん」
「じゃ、また明日。おやすみ、翔」
「うん！」
翔は大きく陽乃に向かって手を振った。陽乃の姿が見えなくなってから、翔はさゆり、麻綾、夏樹、はるか、茉莉紗、かのこにメールを送った。
『明日は15時45分から全員でロングトーンするのでソッコー集合で！』
「よっしゃ！　頑張るで！」
翔は気合を入れてドアを開けた。そしてすぐに友美子の怒鳴り声が聞こえてきたので、思わず耳をふさいだ。

第292話　Hello, again

「ただいま」
翔との一軒が落ち着いて帰宅した慎也。塾用のカバンを玄関に置いて靴を脱ぐ。それからすぐに、自分の部屋へ向かって階段を上がり始めた。すると同時に、電話が鳴り響いた。
「母さーん！　電話～！」
しかし、食器洗いをしているのか美土里には聞こえていないようだ。
「しょーがねぇなぁ……」
慎也はため息を漏らしてカバンを階段のど真ん中に置いて、面倒そうに電話へ向かう。コール音が5回鳴ってから、慎也は受話器を取った。
「もしもし……」
塾で疲れている。それも、実を言うと今日は塾の日ではないのだが、美里の補習に無理やりつき合わされたのだ。幸い、翔の事情を知ることができたからこそよかったものの、行かなくていい日に塾へ行くというのはなかなか納得が行かない。
「こんばんは、ナガセです……」
慎也は一瞬考え込んだ。知り合いに永瀬という人物がいただろうかと考えた。
（ナガセ……長瀬？　永瀬！）
慎也の顔が一気に緩んだ。それまでの不機嫌さなど吹き飛んでしまうほどだった。
「えっ！　もしかして、信二か！？」
「そうですよ。お久しぶりです。俺が七海市を出てから一ヶ月経ちましたね……。今まで連絡出来なくてすみません、慎也先輩」
「うわー！　懐かしい感じがする。だってさ、俺がナナコウ行って

から会う機会なんてなかったもんなぁ」
　慎也は電話のコートを指でグルグル巻きながら信二と電話での再会を楽しんでいる。
「そうですね！　俺ももう高１ですよ～」
「へぇ！　あ、そうだ。お前引っ越したんだっけ？」
「一ヶ月前ですけどね」
「生活には慣れたか？」
「ちょっとまだ……」
「お前新しい環境に馴染むの、時間かかりそうだもんな」
　話は尽きない。気づけば既に１０分ほど経過していた。
「あ、そういえばさ～」
「なんですか？」
「お前のケータイのメルアド教えてくれよ」
「はい？」
　信二はしばらく考えた。しかし、どう考えても慎也にはメールアドレス変更のメールを送信しているのだ。
「なんで今さら教えないとダメなんですか？　だって……」
「いやぁ～、メール送られてきたけど登録メンドくって後回しにしてたら、メールが埋もれてどこ行ったかわかんなくなってさ！」
　慎也はあっけらかんと言い放ったが、信二はあまりの慎也のズボラさに呆気に取られていた。
「えっ……」
　信二はしばらく間を空けた。
「俺の連絡先がわかんなかった……？」
　信二は確認するように聞いてみた。すると慎也は同じように「いや！　マジで悪かった！」と返してきた。しかし、信二は今さら驚かない。
「まあ……別にいいですけど。後で新しいメルアドと携帯電話番号を送りますので、今度はちゃんと登録しといてください」
「わかった」

慎也は少し反省したのか、小声で呟く。
「そういえば、ずっと気になってたんだけどさぁ……お前は結局、どこに進学したんだ？」
引越ししたということもあるので、慎也は気になって疑問をぶつけた。会話の路線が急に変更されたので信二は少し戸惑ったが、信二はすぐに答える。
「横浜市神奈川区にある、虹西高校です……」
「虹西……？」
どこかで聞き覚えのある言葉だった。慎也はしばらく最近聞いた言葉を思い返してみた。
「あっ、そういえば！」
先日、翔たちが愛媛に行くと言ったときに、ほぼ同時期に演奏会が開催される高校の名前が、その高校だったのだ。
「何ですか？」
「俺、ナナコウの定演の参考にするために、虹西の定演に行くかもしんねぇ！」
「えっ……！？」
喜んでくれると思った慎也だが、答えは思いのほかテンションが低い。
「どうしたんだよ、すっかり黙ってさぁ。嬉しくないのかよ」
「え……と」
嬉しくないわけではないようだ。付き合いはそれなりに長い二人。お互いの気心は知れている。
（なんだよ……この沈黙）
慎也は長時間黙ってしまう信二に少し戸惑っていた。何かマズいことを言ったかと思い、今までの流れを回想してみるが、思い当たる節はない。
「俺……今はトロンボーン吹きじゃないんです」
（は……？）
慎也は驚きで言葉が出なかった。慎也がトロンボーンを吹き始め

た理由。それは、中学時代に信二が吹く姿を見て興味を持ったことがキッカケだった。そして新しく活動を始めた吹奏楽サークル。当然ながら、トロンボーン奏者はいない。さらに、周囲は初心者ばかりだというのも慎也の好奇心をくすぐった。皆、同じスタートラインに立っているのだ。いつか信二と一緒にトロンボーンを吹ければいいなと考えている自分がその時、いた。

「え……」

そんなことを言うつもりはなかったのに、言葉が出た。

「じゃ、じゃあ、何の楽器に？」

「俺、チューバに回されたんです。正直、やる気なんて出ません」

「……。」

チューバという言葉を聞いて、すぐに浮かんだのは拓真、智志、好美の顔。しかし、彼らがチューバを持っているときの顔は輝いている。やる気が出ないという信二の言葉と、彼らの表情が一致しなかった。

「そうか……」

沈黙が続いた。リビングから、バラエティ番組の陽気な笑い声が聞こえてくる。その笑い声と自分の電話が、まるで違う世界にいるような感覚を慎也に引き起こさせた。

「お前さぁ、風見台高校って、知ってるよな？」

「はい、知ってますけど……」

「俺の友達の幼なじみが今、風見台の吹部でサックスを吹いてるんだけど」

「はぁ」

「そいつ、一年生の時、打楽器に回ってたんだ。最初は嫌々叩いてたんだけど……叩いてるうちに、打楽器の楽しさに気付いたらしいぜ」

「はあ」

なんだか味気ない答えばかりしてくる信二。まるで、中学の頃の自分を見ているような気さえ、慎也にはしていた。

「それに、打楽器をやった事でリズム感やら何やらがついたみたいで。俺の友達……翔っていうんだけど、去年のコンクールであいつのサックスを聴いたとき、一年の時よりすごく上手くなってる！とか叫んでた。つまり、別の楽器を経験するのは、無駄にならねぇってこと！」

「……。」

珍しく熱くなっている自分に妙な恥ずかしさを感じたので、慎也はいたたまれなくなってこう続けた。

「お前さぁ、中学ん時は第一志望じゃなかったトロンボーン、一生懸命練習してたじゃん。あの時の根性、どうしたんだよ？」

そう言った瞬間、慎也にはあの時のシーンがまた蘇ってきていた。

――僕、すごい下手くそだけど……だからって、頑張る前に諦めるなんて、僕には出来ないんで。

――そうか。すげぇじゃん。そのやる気。頑張れよ、1年生。

――はい！

その頃を思い出すと、慎也はたとえ合奏でどれだけ恭一に怒鳴られようとも、頑張る気になれた。今度は、自分が信二を励ます番だと確信していた。

「中学ん時より今の方が、その楽器の魅力に気付いているわけだから、どうしてもこだわっちゃうよな、トロンボーンに。だから、トロンボーンを吹けないって解ったとき、つらかっただろうな。……でも、いつまでもその事でうじうじしていたら、前に進めねぇだろ」

マズいことを言っていないかどうか、内心慎也は気が気でなかった。まったく信二はうんともすんとも言わないからだ。

「自分への試練だと思って、チューバ頑張ってみろよ。……得られるものが必ずあるから」

素直な言葉だった。笑顔が自然と浮かんだ。

「はいっ……！」

「オッケ！　お互い、頑張ろうな。俺たち、もうライバルだな」
「ですね……」
グズッという音が聞こえた。しかし、慎也はそれを聞かないフリをしておいた。
「じゃ。もう遅いから、切ろうか」
「はい」
少し名残惜しそうな信二に、慎也はこう続けた。
「今度はメール送るからさ」
「はい！」
今度の返事は元気いっぱいだった。
「じゃ、またな」
「はい」
受話器を置かずに、慎也は信二が電話を切るのを待った。なんとなく慎也は相手が誰でも、先に相手が電話を切るのを待つようにしていた。と、その時だった。
「ありがとう、あの時の事を思い出させてくれて……」
「……！」
慎也はもう一度何を言ったか聞こうとしたが、すぐに電話は切れた。
「……。」
慎也は優しい微笑みを浮かべながら、階段に置いた自分のカバンを持って自室へ向かった。

数日後。
「……。」
トロンボーンのベルに映る自分の顔を見つめる慎也。
「どうしたんですか？　先輩！」
亜紀が人懐っこく慎也の傍にやって来た。
「いや……。明日の演奏、頑張っちゃおうかなって思って！」
「？」

亜紀が不思議そうに首をかしげた。
「なんか俺、変なこと言った？」
「いえ」
「じゃあなんでそんな微妙そうな表情（かお）をするんだよ」
「だって」
次の一言が慎也には非常に、嬉しく響いたのだ。
「先輩、いつでも頑張ってるじゃないですか」
「……。」
こういう自分になったのも、すべてあの日、信二にあったからだと慎也は今も思っている。
「うん」
慎也はハッキリと言った。
「俺の大事なヤツが、いつでもこういう自分でいろって、教えてくれたから」
暖かい風が教室に吹き込んできた。今日もこれからも、二人はずっと楽器を通じて関わりあうのだろうと、慎也は感じていた。

第２９３話　あたしのお店へようこそ！

「あーあ！　なんでもうちょっと吹かせてくれないんだろ～」
はるかは不満を口にしながら楽器を片付けている。隣では練習が早く終わりテンションを上げているさゆりや優輝がいるが、はるかとしてはもっと練習をしておきたいというのが本音だった。
「まぁまぁ、そう言いなや。東先生も、本番前にあんまり吹きすぎたらアカンっていう風に考えてくれてはるねんから」
翔がはるかの右肩をポンポンと叩きながらなだめる。
「佐野先輩。あたしも補佐で出ちゃだめですか？」
そう言って指差すのは、１年生が練習する音楽室。実は明日の「昭和の日　施行記念コンサート」では各学年で演奏をする舞台があるのだ。しかし、入部間もない１年生は出身中学ごとのクセや音色というものがある。それをいかにピッタリ合わせるかが、１年生の当分の課題となるのだ。
「いやぁ～。だって工藤さんは経験者やろ？　先生がそれは許さんと思う」
はるかの後輩である工藤（くどう）　茉莉紗（まりさ）は大海中学校出身。中学からテナーサックスを吹いているとなると、それなりにしっかりとした音を吹く。そのため、はるかが補佐に入るほど力量不足ではないのだ。
「ちぇー！　つまんないよぉ」
「ま！　これからコンクールの練習始まったら嫌っちゅーほど吹けるねんから、楽しみにして今日はおとなしく帰っときって！」
「はぁ～い」
はるかはそれでもなお不満げだった。

「いつまでふてくされてんのさ」
学校を出てからも不機嫌なはるかにそう言ったのは、はるかの彼氏でもある優だ。

「だあってさぁ」
　しかし、何が不満なのかはよくわからない。なんとなく、楽器をもっと吹きたいという気持ちだけがあった。
「ようはアレだろ？　はるかは、楽器をもっと吹きたいんだろ」
「ま！　簡単に言えばそうなんだけどね。あーあ、いいなぁ冨岡くんとエリリンは。補佐で出れて」
　1年生の補佐として出演するのは、原則2年生である。3年生は観客として1年生、2年生の演奏を聴くことになっているためだ。2年生から補佐として出るのは、クラリネットがみゆき、フルートが佳菜、アルトサックスが麻綾、トランペットが勇、トロンボーンが亜紀。ユーフォニウムは1年生が現在ゼロのため、愛実。ホルンは順平。パーカッションは洋之と恵梨だ。合計9名である。
「まぁ、お前ん家はサックス吹き放題だからいいじゃん」
「まあねー！」
　はるかの家はスナックを経営している。防音設備があるため、少々大きな音で楽器を吹いてもなんら迷惑にはならないのだ。
「んじゃ、この辺で」
「うん！　明日は8時半に商店街の入口で！」
「オッケ。じゃ、また夜メールするよ」
「バイバーイ！」
　はるかは優に大きく手を振ってから別れた。ななみ中央商店街の中ほどにはるかの両親が経営するスナック『永久（とわ）』はある。
「あら、はるかちゃん！　もう帰り？」
　八百屋のオバサンがはるかに声をかける。
「はい！　明日本番なんで吹きすぎ防止のために追い出されました！」
「あらそぉ！　頑張ってね！」
「はい！」
　はるかは通るたびにいろんな商店の店主から声をかけられる。中央商店街でも少し異質のスナックというはるかの家だが、はるかの

おかげで快く迎えられているのが現状だ。はるかの両親は彼女が商店街の潤滑油的存在になっていると感じている。もちろん、はるか自身にそんな自意識などはなく、彼女の天性がそうさせている。

「ん？」

しばらく行くと、見慣れない親子の姿があった。しかも、なぜか地図を持っている。

（地図？　商店街で……？）

はるかは少し不思議に思ったので声をかけようとしたが、すぐに母親らしき女性が「あ！　きっとこっちよ！」と走り出し、はるかより少し年下くらいの女の子が「待ってよぉ！」と慌てて追いかけていってしまい、声をかけられないままになってしまった。

「ま……いっか」

はるかは特に気にも留めず、そのまま帰宅した。

「ただいまー！」

「おかえり！　ずいぶん今日は早いのね」

はるかの母・登紀子（ときこ）がはるかを出迎える。

「うん！　吹きすぎ防止のために、今日は練習を早く切り上げたの。でも、もうちょっと吹きたいから楽器持って帰ってきちゃった！」

「あんたも好きねぇ」

登紀子はクスクス笑った。

「ねぇ、お母さん！　オープンまでまた使っていい？」

「しょうがないわねぇ。その代わり、１０分前には片付けるのよ？」

「はーい！」

はるかの言う部屋とは、スナックの２階部分（はるかの自宅は３階建て。商店街側がお店で、裏側と３階全体は住宅部分である）にあるカラオケルームのことだ。

「よいしょっと！」

はるかは楽器を抱え、すぐに音出しを始めた。

「あ、姉ちゃん。また吹くの？」

弟の西嶋（にしじま）　聖太（せいた）が顔を出した。

「聖太。あんた鋭いねぇ」
「姉ちゃんがこの部屋入るときって絶対楽器吹くときだもん！　ねぇ、俺もいい？」
「楽器に無茶するようなことしないなら、よし」
「サンキュー！」
聖太は小学3年生。まだ生意気盛りだが、はるかのことは大好きなようで、ヒマさえあれば彼女の後ろを追っている完全なるお姉ちゃんっ子。バスケットボールが大好きなのだが、音楽にも興味はあるようで、演奏会にも何回か来ていて、既に翔、麻綾、さゆりにはよく知られている。
はるかが楽器を出し終えロングトーンをしている頃、店の入口が開いていた。
「あ……すいませーん。当店はオープンが17時からなんですよ」
登紀子が突然の来客に驚きつつ、そう声をかけた。
「あ、いえ！　すいません……。ちょっと道をお尋ねしたいもので」
「道ですか？　あぁ、はいはいどうぞ！」
「こちらなんですが……」
女性が地図を差し出す。しかし、登紀子はあまり外出しない（せいぜい、お菓子などを買い物に行く程度）ので、さっぱりわからなかった。しかも、手書きの地図と来たものだ。まったくもってわからない。
「すみません、ちょっとお待ちくださいね」
登紀子は上にいるはるかを呼んだ。
「はるかー！」
けれども、音出しを始めたはるかにその声は届かない。鮮やかな動きでベー音階が吹き上げられる。パチパチと手の叩く音は、聖太の拍手だ。
「はるかー！」
今度は降下していく。これでは登紀子の声がいくらデカいとはいえ、まったく聞こえないだろう。

「しょうがないわね……」
登紀子は使いたくない手だったが、父の正秋（まさあき）がいないことを確認すると、大声でこう叫んだ。
「はるかー！　優くんよ！」
するとバタン！とドアの開閉音が聞こえて、それから間髪いれずに家が揺れそうなほどの音がする。はるかが階段を駆け下る音だ。
「ぎゃーっ！」
途中で足を滑らし、ドドドド！と転げ落ちながらはるか現れた。
「ウッソー！　優くんではありません！」
「ちょっとお母さ……あ、い、いらっしゃいませ！」
予想外の登場に、女性とその後ろにいた女の子が目を丸くしている。
「あ……さっきの」
はるかのその言葉に女性が「どこかでお会いしました？」と聞いた。
「いえ！　さっき、徳田薬局店の路地を通ってましたよね？」
「えぇ」
「やっぱりー！　どうなさったんですか？」
はるかはひざについたホコリを払い、女性に聞いた。
「あ、私、浜田と申します。横浜市からちょっと親類宅に遊びに来たんですが……。帰りにお土産を買って帰ろうと思って、ちょっと商店街をウロウロしていたら道に迷ったもんでして～」
後ろから恥ずかしそうに女の子が「だから無理やり行かないで、道を聞こうって言ったでしょ？　お母さんてば、方向音痴なのに無茶するんだから！」と少し怒り気味に言った。
「というわけなの。はるか、このお店どこにあるか知らない？」
「えぇ？　同じ中央商店街でしょ！　どうしてお母さんが場所知らないのよ！」
はるかは呆れつつ、女性の持っている地図を手にした。
「えーっと……？」

目的地の名前は『金の小麦』。
「あ！　なぁんだ。これ、ゆーこりんの店じゃん！」
「ゆーこりん？　小倉　優子？」
女性が真面目に返してきたのではるかは笑いながら「いえ！　後輩に時任（ときとう）　裕子（ゆうこ）ちゃんって子がいるんです。その子のあだ名です」と答えた。
「お母さん！　恥ずかしいこと言わないでよ！」
ギャーギャーと言い合いを始める親子をなだめつつ「はるか！　そこまでご案内してくれる？」と言ったので、はるかは「了解。ちょっと聖太に楽器をムチャクチャしないようにだけ言ってくる」と答えて2階へ上がった。
「すいませんねぇ」
「いえ。とんでもないです」
はるかと女性は他愛無い会話をしながら歩いていく。
「そういえば、自己紹介がまだですね」
女性が思いだしたように言った。はるかも笑いながら「しちゃいます？」と返す。
「そうですね！　私、横浜に住んでおります浜田（はまだ）　絵里子（えりこ）と申します」
「あたしは西嶋　はるかです。あの、そちらは？」
「あ、これは娘の……ちょっと、自己紹介くらい自分でしなさい」
「わかってるってば！」
女の子が頬を赤くしながら自己紹介を始める。
「浜田（はまだ）　望実（のぞみ）といいます！　今日はありがとうございます！」
「いえいえ！　ご丁寧にどうも！」
「あの！」
望実が大声で話を続ける。
「はい？」
「西嶋さんって、楽器されてるんですか？」
「あー、一応ね！」

望実の目がキラキラと輝く。
「あの、あたしも楽器やってるんです！」
「えー！？　そうなの？　何の楽器！？」
「ユーフォニウムです！」
「ユーフォか！　テナーと同じ旋律吹くことあるから、親近感あるなぁ」
「そうですね～。それにしても、西嶋さんってすごく綺麗な音吹かれるんですね！」
　はるかは面と向かって褒められたことがないので「いやぁ……どうもどうも」とオヤジ臭い反応をしてしまった。スナックに来る客がそもそもおじさんが多いので、たまにクセのようになってしまうのである。
「この子ったら、私を無理やりこの店で道聞けばいいって言って、押し込むんですよ！」
「え？　わざわざウチに？」
　はるかはそもそも不思議に思っていた。他に営業している店があるにも関わらず、望実たちはあえてはるかの自宅、スナックに道を尋ねにやってきたのだ。普通はまず来ないだろう。
「そ、それはだって……」
　望実の声が小さくなる。
「あたし中学時代にサックス吹いてたんで……綺麗なテナーの音が聴こえて……気になったから……その……」
「やーん！」
　はるかが突然望実の頭を撫でた。
「嬉しい！　可愛い！　ナナコウに来てほしい～！」
「あ……あたし、一応高校生なんで、無理です」
「そっかぁ～、西嶋、残念です」
　クスクスと笑い合う二人。そうこうしているうちに、目的地である裕子の自宅が経営するパン屋に到着した。
「ありがとうございました」

「いえいえ！　お安い御用です」
はるかはニコニコと笑いながら礼を言う絵里子に首を振りながらそう答えた。
「あの！」
望実がまだ少し緊張した様子ではるかを呼ぶ。
「どうかした？　望実ちゃん」
「じ、実は5月末にあたしたちの吹奏楽部が演奏会するんです！　西嶋さん、吹奏楽部に入られてますか？」
「うん！　七海高校の吹奏楽部よ」
「ホントですか!?　あの……よろしければ、来てくださいますか」
はるかの表情が一気に変わった。
「ホント!?　うわぁ～嬉しい！　実はあたしたちも定期演奏会しようかって思ってるんだけど、まぁなかなか定期演奏会を見たり聴いたりする機会なくってさ～。すっごく困ってたとこなの！　ねぇ、望実ちゃんの高校って？」
「虹西高校です！」
「あ、偶然！　あたしたち、その高校の演奏会のポスター見て、行こうかっていう話になってるの！」
「ホントですか!?」
今度は望実の表情が変わる。
「うん！　ねぇ、是非行きたい！　チケット、なんとか工面してもらえる？」
「もちろんです！　でも……３００円するんですが」
「そんなの、いくらでも払う払う！　えーと……５６名分くれます!?」
「ご、５６!?」
望実が驚いていたが、すぐに絵里子が「今は持ち合わせてないので、後日お送りしてよろしいですか？」と返した。
「はい！　あ、そうしたらナナコウの住所ですよね……。神奈川県七海市つくし野1丁目3番5号です。東　恭一宛でお願いします。

顧問なんです。話はあたしからしておきますので！」
「了解です。じゃ、今日はありがとうね」
「こちらこそ！」
望実と絵里子に深々とお辞儀をするはるか。彼女たちが裕子の店に入るのを確認してから、はるかは急いで自宅へと戻った。
「まさか虹西高校の子と出会うとはな～！」
はるかはスキップしながら自宅へ戻り「無事送ってきたよ！」と登紀子に報告してから2階へと上がってドアを開けた。
「あ……」
「あ……」
楽器を構え、ストラップがグチャグチャに体に絡んだ不恰好な姿をしている聖太と目が合った直後、はるかは「だから無茶しないでって言ったでしょうが！」と叫んだ。

第２９４話　ドキドキ初舞台

「きっ、緊張するね……」

オーボエの１年生、歌川（うたがわ）　まゆがフルートの１年生、安藤（あんどう）稚沙希（ちさき）に言った。稚沙希も小さくうなずく。それもそのはず、今日の昭和の日施行記念コンサートでは全体演奏以外に、各学年で演奏をする機会が設けられていた。つまり、１年生のみでの初舞台となるのである。

もちろん、パートに少々偏りがあったり、初心者が集中しているパートには２年生が補佐に入っているものの、あくまで主役は彼ら１年生。入部して間もない者や、まだ仮入部中である者もいる中での本番。緊張が１年生を支配していた。

「おーい！　そっちの楽器取ってくれないか？」

楽器の積み込みを指示するのは、亮平と徹だ。徹が指示を出して、亮平が要領よく楽器を運搬車に積んでいく。

「じゃあ１年生は、譜面と譜面台を忘れずに持って逢沢くんとあたしについてきてください」

「はい！」

陽乃の指示にテキパキと従う１年生。ガチガチに緊張しているのが稚沙希、綾音、夏樹、雄飛、貴志の５人だ。綾音と夏樹は本番に初めて出るのだから緊張するのは無理ないが、経験者である稚沙希、雄飛、貴志がそこまでなぜ緊張するのか、陽乃は不思議だった。

「ねぇ、進藤くん」

陽乃は雄飛に聞いてみることにした。

「は、はい！」

「今日、そんなに緊張する？」

「は、はい！」

はいとしか答えない雄飛。既に緊張は頂点に達しているような状態である。

「今日はコンクールとかじゃないんだから、そんなに緊張しなくても大丈夫だよ？」
「で、でも……」
「でも？」
「せっ、先輩方に見られる……聴かれてると思うと緊張しちゃって」
陽乃には予想もつかないことだった。まさか、自分たちが観客となることに彼はここまで緊張しているとは思ってもみなかったのだ。
「やだなー。そんなに緊張しなくていいじゃない！　怖い先輩なんていないよ？」
「そ、そうですか？」
「そうそう！　ナナコウはオープンな感じだから、緊張せずにリラックスして吹いたらいいよ」
「はい……」
少し雄飛の顔が緩んだ。しかし、そう言ってもなお顔色が冴えないのは稚沙希。
「安藤さんも、緊張してるの？」
「はい……」
しかし、雄飛と違って原因は別にあるようだ。
「安藤さんはどうして？」
「わ、私……ソロ、大の苦手なんです」
フルートには補佐として佳菜が出ることになっている。しかし、あくまで補佐。稚沙希は経験のために、フルートとピッコロを持ち替えするのだ。そして一瞬なのだが、稚沙希のピッコロだけになる部分というのが1年生の吹く曲の中にあった。ほんの一瞬、一小節程度なのだが、それが稚沙希にとってはプレッシャー以外の何物でもなかったのだ。
「そっかぁ……。でも、その一瞬は緊張するけど、安藤さんだけの時間なわけじゃない」
「はぁ……」
「それって、すっごいことだよ。お客さん皆が、安藤さんの音だけ

を聴いてるんだ」
「やめてくださいよー！　余計緊張しちゃう……」
「あたし、聞いたよ？　サキティと由美ちゃんから。安藤さんの音、すっごく透き通ってて綺麗なんだって？」
陽乃はニコッと笑って聞いた稚沙希は少し赤くなって「全然……そんなことないです」と首を横に振った。
「袴田中出身だもんね！　サキティも由美ちゃんも負けてられないって言ってた」
「そんな！　私、1年生だからそんな偉そうなこと……」
「おっ！　なんや？　安藤さん、オレの話聞いとったか？」
翔が突然会話に加わってきた。
「え？」
「オレが説明会みたいなんした時に言うたこと！」
「あ、あまり覚えてないです……」
陽乃がクスクスと隣で笑いをこらえている。翔は軽く陽乃の頭を叩いた後、もう一度それを言った。
「ウチの部は、1年生やからとか、3年生やからとか基本的にない部やから！」
「……。」
「ソロは3年生が優先するとか、雑用みたいなんは1年生がするとか、そういうの嫌いな人がおるわけよ」
稚沙希はそれが誰のことを指すのか、まだはっきりとはわからない。まだ部の先輩の名前もよく覚えていないからである。
「とにもかくにも、そういう誰かがおるから緊張するとか、誰かが見てる、聞いてるから緊張するとか一切気にせんこと！　まずはそっからやね」
稚沙希はしかめっ面をする。
「ほら！　可愛い顔がそんな顔しとったら台無しやで！」
「へ！？」
稚沙希の顔が真っ赤になった。

「ま、そういうわけ。気楽に吹いてちょうだいな！」
「は、はい……」
翔は「ほな、行くでー！」と全員に呼びかける。陽乃が「ね？部長があんなだから、変に固くなりすぎずにね」と付け足した。

会場到着後、2年生と3年生がテキパキと自分たちの演奏形態へと準備を整えていく。1年生はまだ慣れていないので、楽器を車から降ろすのを任された。
保田（やすだ）　杏（あんず）はホルンの初心者。マイペースな性格で、あまり緊張とかはしていないように見える。楽器を運ぶのにも積極的に参加していた。
「じゃ、これお願い」
「はい！」
受け取ったのは、テナーサックスのケース。ヒョイッとそれを受け取った杏は、バタバタと走りながら楽器を運ぶ。
「ストップ！」
そう言って杏を止めたのは、絵美だった。
「ダメよ」
「え？　あたしですか？」
「そう！　まず、楽器を持ってるときは走らない。転んで楽器にダメージがあってもいけないけど、そもそも奏者が転んで本番前に怪我をするなんて、もってのほかなんだから。気をつけて？」
「はい！」
「それと。楽器のケースにも持ち方があってね。幅の狭いほう、あるでしょ？　そっちを自分の体に近づけて。万が一、ケースが開くようなことがあっても、狭いほうは蓋の役割をしてるわけだから、ケースが開いて楽器がそのまま落ちるなんてことも、ある程度は防げるの」
「へぇ～……」
初心者の杏には何もかもが新鮮に響いてくる。

「そういうこと！　よろしくね……えっと……」
絵美が困惑した表情になった。杏は、まだ絵美が自分の名前を覚えていないんだとすぐに察知した。
「あ！　保田です！」
「ゴメンね！　よろしく、保田さん」
「はい！」
杏はニッコリ笑うとケースを持ち直し、歩いて楽器置き場へと向かった。

そして設営が完了し、音出しからチューニングまで完了。いよいよ本番が始まる。
「あ……」
1年生から演奏が始まる。トランペットの席に座ると、すぐに真正面に友美子と昭、陽乃と夏樹の両親の姿を綾音は発見した。
小さく手を振る友美子。綾音は少し照れながら、手を振り返した。
「なぁ」
隣の男子に綾音は呼びかけられた。
「は、はい！」
「本番前なんだから、気ぃ引き締めてよ」
「ご、ごめんなさい」
「頼むよ」
男子はそう言うとクールに楽器を構えた。綾音の右隣は藤咲（ふじさき）　流（りゅう）という1年生男子。左隣には先輩の松尾　勇がいる。初心者でしかも初舞台の綾音は、男子でそのうえ二人とも経験者という異様な組み合わせに挟まれる形で座っていた。
（緊張する……）
同じ頃、サックスの席に座っている夏樹も同じ気持ちだった。てっきり麻綾がファーストを吹くと思っていた夏樹。しかし、麻綾はセカンドでしかも内側の席に座った。最も客席に近い席に座らされ、さらにファーストの楽譜を渡された夏樹。緊張もマックスだったが、

今は曲をまともに吹けるかどうかで頭がいっぱいであった。
その後ろでは、緊張した貴志を少しでもリラックスさせるために、好美と愛実が彼に声をかけていた。
「大丈夫よ。よしりん、堂々として迫力あるから、常盤くんの緊張なんてすぐに吹き飛ばしてくれるよ。ね、よしりん？」
好美はニッコリ笑って「大船に乗ったつもりで！」と言う。シャイな貴志ははにかんだ笑顔を見せ「うん」と小さく答えた。
いよいよ本番が始まる。司会者は光瑠と順平だ。まず、七海高校吹奏楽部の説明が少しあって、それから1年生の紹介が始まった。ここに来て、いつもは落ち着いて本番を迎えられていた岩切（いわきり）　裕也（ゆうや）の心臓が激しい鼓動を打ち始めた。
（なんでこんなに俺、緊張してんだろ……）
なんとなく、理由はわかっていた。いきなりドラムセットを任されたからである。あまり得意でないドラムセット。しかし、他の1年生は二人とも初心者。本堂　晃と塚口　和志である。彼らにドラムセットというのは無理な相談であった。
裕也は困った挙句、補佐で出てくれる洋之か恵梨に代わってほしいと頼んだが、パート長の美里がそれを即却下した。そして、今に至るわけである。
（緊張したって……やるしかないじゃん）
裕也は周りにわからないように、パチパチと小さく頬を叩いた。
「それでは、1年生バンドによる演奏で、『ジャパニーズ・グラフィティII　～坂本九メモリアル～』、明日があるさ、素敵なタイミング、見上げてごらん夜の星を、上を向いて歩こうの4曲をメドレーでお聴きください。指揮は当吹奏楽部顧問、東　恭一です」
拍手が沸く。
（リラックスして）
恭一が優しくそう1年生に訴える。1年生全員と目が合ってから、恭一は指揮棒を上げた。
洋之のティンパニと裕也のシンバル、そしてクラリネットやフル

ートのトリルから華やかに幕を開けたメドレーは、ホルンによって『明日があるさ』の主題が奏でられる。もちろん、初心者である杏は完全に吹き真似をしているのだが、同じ1年生である時任　裕子や緒方　賢治、順平の音を聞いて鳥肌を立てていた。

そしてテンポアップする。このテンポへ誘導するのは、裕也の役割だ。裕也は恭一のほうをしっかりと見つめ、テンポを上げて1年生を引っ張っていく。美里は内心、ここは気が気でなかった。何度練習しても、裕也がテンポを逆に遅くしていくばかりだったのだ。

トロンボーンのジャズチックな打ち込み。経験者である江藤　沙知と佐々木　雛乃にはこれくらいのリズムはそれほど強敵ではない。しかし、恭一から雛乃は破裂音にならないよう注意されていた。それを考えすぎるあまり、雛乃の音が少し貧弱になっていた。

（要練習か……）

慎也は真剣な表情でその音を聞いていた。それが終わった後は、クラリネットのメロディ。進藤　雄飛、速水　騎士、片岡　なぎさ、堀江歩由美、添田麻衣子の1年生5人と補佐のみゆきが立奏する。実際に吹いているのは雄飛、歩由美、麻衣子、みゆきの4人である。なぎさと騎士は自分たちが吹き真似をしているだけだというのが、観客にバレるのではないかと気が気でなかった。

無事その部分を通過し、『明日があるさ』はどんどん過ぎていく。そして曲調が変わる。まず聞こえてきたのは、好美のチューバのたくましい音。それに呼応するように佳菜のフルートが聞こえ、再び好美の音。そして2回目の好美の音に呼応するように聞こえてきたのは稚沙希のピッコロの音だ。

（震えてる……。仕方ないよね）

沙希は稚沙希の音が震えているのをしっかりと感じ取っていた。それを通過すると、トロンボーンのメロディ。緊張がなくなったせいか息が通りやすくなったのか、今度は雛乃の音がバリバリ割れていた。

「間がないんだよな～……彼女」

春樹が呟く。どうやら、慎也と同じことを考えていたようだ。慎也も隣でうなずく。『素敵なタイミング』を終えると今度は『見上げてごらん夜の星を』が聞こえてきた。愛実の麗らかなソロが会場を包み込む。しかし、裏で聞こえてくるフルートやオーボエの音が少し大きすぎるようで、愛実の音と同等か、少しうるさいほどに聞こえていた。

そして夏樹が立ち上がり、ソロを吹く。

（あーあ……音、震えすぎ）

陽乃にもわかるほど、夏樹の音はガタガタに震えていた。恭一がよく言う「それではビヴラートではなく、ビビラートだ」という音、ビビッて震えている音だった。夏樹のビビラートのソロを終えた後、流が立ってトランペットのソロを吹く。しかし、一番の聴かせどころで彼は「プスーッ！」と派手に音を外してしまった。その瞬間、流の表情が歪んだのを陽乃はしっかりと見ていた。

そのまま曲はジャズの雰囲気を醸し出す雰囲気へと移行したのだが、何ともぎこちのないジャズ風の曲が流れてくる。おそらく、ほとんど全員がジャズに慣れていないのだろう。なんとなく、おっかなびっくりのまま終わってしまった。

そしていよいよ最後の曲『上を向いて歩こう』へと移る。ウッドブロックが鳴り響く。ここは重要なので、洋之と恵梨が担当した。そしてそのまま、サックスのソロ。再び夏樹だ。やはりビビラートのまま。おまけに、後ろで初心者の晃が叩くタンバリンの音がデカすぎた。

今度はクラリネットとオーボエのソリ。しかし、何かと音程が狂いやすいまゆのオーボエと高音を吹く麻衣子のソリは全然音程が合わず、素人が聞いても耳障りなほどの悪い音程だった。

サックスのメロディに切り替わる。麻綾のおかげで雰囲気はある程度出すことができた。打ち込みに近い形でメロディを奏でる部分。何度かつまずいて止まりそうになった。そしてジャズの形になると、ますますバラけてきて、翔や陽乃たちは止まりはしないかとヒヤヒ

ヤしながら聞いていた。
なんとか最後まで来たものの、最後のトランペットでまたしても流が派手に音を外してしまった。これには陽乃が見てられないとばかりに目を覆う。
恭一はそれでも笑顔だった。演奏が終わると全員に起立を促し、深々とお辞儀をした。
「続いては、2年生と3年生の合同バンドの演奏です」
1年生は急いで移動をするが、全員の表情が暗かった。
（先輩たちとどう違うのか、しっかり見ないと！）
そんな中で夏樹、好美、雛乃の3人だけは明るい表情を浮かべ、準備をする2年生に注目していた。

第２９５話　その先が、見えるか

準備が整ったところで、順平と光瑠が再び前に出てきた。
「続いては、２、３年生の合同バンドです。曲目は名前からしてユニークですが、『ど演歌えきすぷれす』です！　その名のとおり、演歌を中心に昭和時代に流行しました楽曲を、メドレーでお送りします」
順平が光瑠にマイクを手渡す。
「しかし、ビックリしないでいただきたいのですが、私たち吹奏楽部員、全員平成生まれなんです。そのため、吹いてはいるもののサッパリ曲をわかっていませんでした。そこで、部内では唯一昭和生まれである顧問の東先生や、両親にどんな曲なのかを詳しく教えてもらいました」
順平が「でも、東先生には『先生も若いから知らん！』と追い返されました」と付け足すと、笑いが起きた。
「それでは、東先生も知らない曲がたくさんの『ど演歌えきすぷれす』、お聴きください」
沸き起こる拍手。観客の後ろから見つめる１年生たちも、拍手をする。恭一が指揮棒を上げ、振り下ろすと同時に三連符の打ち込みが聞こえてきた。そして同時にティンパニも加わり、全員で同じリズムを奏でる。そして、キハーダとクラベスの音が鳴り響いた後に、いかにも昭和時代というような独特の演歌のメロディが流れてきた。
そして、陽乃がスッと立ち上がり、トランペットのソロを吹き始める。
「……。」
菘が呆然と陽乃を見つめた。何かが、決定的な何かが菘たちとは違うのを彼女は感じていた。しかし、それが何なのかがわからない。
続いて健之佑のソロだ。その頃になると、経験者の１年生は自分たちと上級生のどこかが違うことを漠然と感じていた。しかし、や

はり菘同様、それが何なのかがハッキリしないままだった。
テナーサックスとバスクラリネットの掛け合いの後、雰囲気が少し変わった。そして絵美が立ち上がる。『与作』に入ったと同時に、彼女のソロが始まった。
そこで、麻衣子が気づいた。
「表情……かな」
それにハッとした表情を浮かべる好美、流、裕也の3人。絵美の表情を見てみると、彼女は実に楽しそうにソロを吹いていた。そして、それに誘われるようにして、前列にいた観客から手拍子が起き始めた。そして盛り上がる部分になると、タッチ交替というように翔が立ち上がる。その手には、ソプラノサックスが握られていた。
翔も同じであった。満面の笑みで、そして時たま指揮者である恭一とアイコンタクトを取りながら、実に鮮やかなソロを吹き上げている。手拍子が大きくなる。そして、ドラムセットの洋之も楽しそうに叩いていて、その後ろでタンバリンを叩く美里は半分踊っているようにさえ見えていた。
夏樹は自分の演奏の時の表情を一所懸命思い出していた。夏樹自身、吹くのに必死で観客がどんな風に感じているか、どんな風に見て、聴いているかは全然意識していなかった。
練習の時は当然ながら、観客はいない。しかし、本番のとき観客は絶対にいるのだ。1年生はそんな当たり前のことを、すっかり忘れていた。自分たちがどれだけしっかり演奏できるかという点にばかりこだわり、聴き手のことをまったく意識していなかったのだ。1年生にはまだまだ難しいことかもしれなかったが、常に先を見据えて、上級生は演奏をしていたのだと知った。
そしてテンポが変わる。『青い山脈』が流れてきた。そうかと思うと急に曲が変わり、慎也のソロが始まった。彼もまた聴衆を意識しているようで楽器を上下に揺らして、聴衆の意識を変化させていた。
『リンゴの唄』になると、どこからともなく「リンゴの気持ちはよーくわーかーるー」と歌声が聞こえてきた。これには1年生全員が

驚いていた。
　再び一変する雰囲気。優の叩くカウベルがお祭のような雰囲気を出していた。曲によって、ここまで表情が変えられるとは、綾音には思ってもみないことだった。
　長調の曲がしばらく続き、一転してまた短調に。その後、クラリネットとサックスの強烈なソリがあり、勇の煌びやかなソロが始まる。流は思わず鳥肌が立った。
　そして『津軽海峡冬景色』が始まる。これはさゆりのソロだ。本当なら、ここも翔が吹くはずだったのだが、ソプラノサックスのソロがあるから吹くように翔からさゆりは直接言われたのだった。何度も何度も翔に吹き方を教えてもらい、ようやく「こぶし」を理解したさゆりは、実に色っぽい吹き方をしている。
「すごいわね、中野さん」
　これには由利と祥夫も驚いていた。
「渋い吹き方をさせると、すごい子かもしれんなぁ」
　祥夫はウンウンと小さくうなずいた。そして、沙希が立ち上がる。ＹｏｕＴｕｂｅで何度も聴いた曲。そのソロが始まった。ここのメロディは完全に沙希だけである。次の曲へと繋ぐ部分でもあるので、彼女は一際力を注いだ。
　終わると同時に大きな拍手が起きた。間髪入れず、春樹のソロが始まる。最後の仕上げといわんばかりに、思い切り「こぶし」を効かせたソロを吹ききる春樹。これには１年生全員が思わず鳥肌を立ててしまうような音色だった。
「すっげー！」
　その声を上げたのは観客ではなく、なんと雄飛だった。雄飛は慌てて口を覆うが、既に遅く、観客から笑い声が起きる。
　演奏を終えると、光瑠が笑いながら出てきた。
「えぇっと、部員から褒めてもらえるとは予想外でしたが、『ど演歌えきすぷれす』、いかがでしたでしょうか？」
　拍手が返ってくる。光瑠と順平は深々とお辞儀をした。

「ありがとうございました！　七海高校吹奏楽部の演奏は、以上となります。ですが、今後もこどもの日の行事を初めとして、地域の皆様と様々な行事を通じて交流をしていきたいと思っています。また、どこかでお会いしましたら、私たちの演奏を聴いてください。本日は、ありがとうございました！」

「はい、集合！」

楽器の積み込みが終わり、部員たちは恭一のところへ集まった。

「今日はお疲れ様でした。えっと、大海公園はちょっと七海高校と離れているので、男子を中心に楽器降ろしに学校へ戻ってもらうことにします。とりあえず、3年は全員学校へ戻ってください」

「はい！」

「後は先生で指名します。2年、瀬戸、戸口、富士原、大岩。1年、進藤、岩切、常盤。以上、よろしく」

「はい！」

「後の人は部長から連絡事項を聞いて、各自解散してください」

「はい！」

「じゃ、佐野。連絡事項よろしく」

「は、はい」

翔の表情が一瞬曇った。陽乃も複雑そうな表情を浮かべている。

「えっと……」

非常に言いづらそうな顔をしている。しかし、遅かれ早かれ言わなければならないのだと心の中で呟き、翔はハッキリと伝えた。

「明日、先週金曜日にありました、コンクール出場メンバーの……オーディション結果発表をします」

部員たちの顔が一瞬で緊張したものに変わった。

「時間は、午前9時から。場所は音楽室です。ですので、補習等で遅刻する人は必ず部長と副部長、パートリーダーに連絡をお願いします」

「はい」

なんとはなしに、全員の声が少し小さくなった。無理もないだろう。明日で、自分たちがコンクールに出られるか否かが決まるのだ。
「オレからの連絡事項は、以上です。他に何かある人？」
「……。」
沈黙が続いた。
「では、以上です。解散！」
翔は少し不自然な笑顔を浮かべて、大声でそう言った。

「……まぁ、わかってると思うが」
恭一は真剣な顔で言った。
「落ちた部員の、ケアを頼みたい」
その言葉に、３年生９名は小さくうなずいた。
「まだ、お前らにも現時点では誰が落ちているか言えないけれども。ただ、言っておこう。３年生は……まぁ、あんなこと言ったが、最後のコンクールになるから、初めから全員出てもらうつもりだった。実際、出てもらう」
しかし、それを聞いても９人の表情は暗いままだ。
「もちろん、メンバーは先生から言う。お前らに言ってもらうにはあまりにもちょっと……な……」
確かに、翔や陽乃たちからメンバーを発表するなど、とてもできそうになかった。
「複雑かもしれないが……しっかりと、落ちた子たちのケア、全員で頼むな。これはパートとか関係なく。最上級生として」
「はい」
「話は以上だ。楽器降ろしに来ている子たちにも、まだ何も言うなよ？」
「……はい」
パタン、と職員室の扉を閉めた後、翔たちはしばらく立ち尽くしていた。
「……。」

「……。」
誰も何も言えなかった。自分たちがコンクールに出られることを知っても、手放しで喜ぶことはできなかった。
「6人……よね」
由美子が呟く。
「6人……ね」
絵美が引き取った。
「多いな。意外と」
慎也が参ったような声を出し、座り込んだ。
「クラリネット、オーボエ、アルトサキソフォン、トランペット、チューバ、弦バス、パーカッション、だったよな」
春樹が確認するように言う。
「あぁ」
拓真が短く答えた。
「とりあえず、特に真剣に考えないといけないのはあたし、翔、エミリン、由美ちゃんサキティ、水谷くん、本堂くん、ミサッチ……って、ほぼ全員だね」
陽乃が苦笑いした。目にはうっすら、涙が溜まっているようにも見える。
「俺も低音楽器とよく関わるしな」
慎也が呟いた。
「誰一人として関係ない人なんて、いないもんね……」
静まり返る廊下。遠くから雄飛たちの笑い声が聞こえてきた。ひょっとすると、彼らの中から出られるメンバーと出られないメンバーが出るかもしれないのだ。これをキッカケに、まとまりつつあった部が乱れないであろうか。そんな不安が、徐々に3年生全員を包み込んでいた。
「帰ろうか」
翔がスッと立ち上がった。
「ここで、ウジウジしたって始まらん！　帰ってメシ食って寝て、

また明日や！」
突然何の脈絡もないことを言い出す翔に、全員が驚いていた。
「そ、そうかもしんないけどさ、急にどうしたんだ……」
そう言って慎也が翔の顔を覗きこんだとき、翔の頬に涙が伝っているのを全員が目にした。
「ど、どうしたんだ？」
慎也は思わず聞き返した。
「な、なんでもない！　ちょっと……明日のこと考えたら不安で……」
「……。」
陽乃が立ち上がった。
「大丈夫だよ」
「……。」
「ウチの部にいる子は、ちょっとやそっとのことじゃ、挫けない」
「……。」
「あたしは、そう、信じてる」
陽乃は一言一言、はっきりと言った。
「だから、翔も皆を信じてあげようよ」
「……そやな」
翔は涙を拭った。
「オレがこんなんで、どないすんねんって話やな」
「うん」
「っしゃ！」
翔はパンパンと頬を叩いた。
「ありがとう」
突然礼を言われ、８人はポケッとしている。
「オレ、皆がおること忘れてた」
「翔……」
拓真が笑顔になる。
「どんなことあっても、今まで皆で協力してきたんや」

「そうよ！」
美里が大声で答える。
「何があっても、絶対みんなで乗り越えるで！」
「よっしゃ！」
慎也が拳を上げた。
「ナナコウ３年、ファイトー！」
「おーっ！」
七海高校吹奏楽部、５６名の運命が明日、大きく動こうとしている。

第２９６話　５６分の６

翌３０日月曜日、午前９時半。七海高校の音楽室の扉が開く音がすると同時に、室内に集まっていた吹奏楽部員５６名の顔が一気に強ばった。

「おはようございます！」

全員が顧問の恭一に挨拶をする。恭一は笑顔で「おはよう」と答えた。そしてそのまま教卓へ向かい、椅子を引いて腰掛ける。

「では」

恭一の一言一言に、部員たちが反応する。

「これから……コンクールメンバーの、発表をします」

余計なことは一切言わず、恭一は続ける。

「なお、オーディション対象以外のパートももちろん、コンクールメンバーですので、順番に名前を読み上げます。順番はフルート、ダブルリード、クラリネット、サキソフォン、トランペット、ホルン、トロンボーン、ユーフォニウム、チューバ、ストリングベース、パーカッションの順です」

「はい！」

「なお、パート内は3年生、2年生、1年生の順でなおかつ、学年内では５０音順に読み上げます」

「はい！」

「では、発表します」

ゴクリと唾を飲む音が、翔自身にもよく聞こえていた。

「フルート」

由美子は自分がオーディション対象でないとわかっていても、緊張の色が隠せない。嫌な汗さえ出てきそうであった。

「大谷　沙希、宮部由美子、井上　佳菜、安藤稚沙希。以上、４名」

続くはオーボエ、バスーン。この中でオーボエは健之佑かまゆのどちらかに決まるのだ。

「野村健之佑、戸口　誠」
まゆの表情が一瞬、ハッとしたものに変わったが、すぐに健之佑と目を合わせると笑顔になった。どうやら、納得の行く結果だったようだ。
「エスクラリネット、小林　梨子」
梨子はわかっていても、なんとなくホッとした気持ちになっていた。
絵美がジッと恭一の顔を見つめている。絶対に視線を外さないつもりでいるようで、恭一もあまりの迫力に視線を逸らしそうになった。
「ベークラリネット、橋本　絵美」
それでもなお、絵美は視線を外さない。
「伊原　光瑠」
光瑠がホッとした表情を見せた。
「河内みゆき」
みゆきは「良かった……」と小さく呟いた。
「瀬戸　優輝」
「っしゃ！」という声は優輝のもの。それから間髪入れず1年生が次々と呼ばれた。
「片岡なぎさ」
「えっ！？」
これにはなぎさ本人が驚いたようで、大きな声が上がる。恭一はニッコリ笑った後、さらに名前を読み続ける。
「進藤　雄飛、添田麻衣子、堀江歩由美」
騎士が「仕方ないか……」という表情を浮かべているのが、遠くに座っている翔からでもわかった。それでもどこか、寂しそうに見えるのは翔の気のせいなのか、それとも騎士の本音なのかは、彼の位置からでは読み取れなかった。
「アルトクラリネット、毛利　菘」
「はい！」

思わず返事をする菘の様子に、少しだけ笑い声が起きた。菘は顔を赤くしつつ、喜びを噛み締めている。

「バスクラリネット、逢沢　駿」

駿の表情が一気にやわらかいものへと変わった。それだけ、このコンクールメンバーの発表は緊張をもたらすのだ。

そして、いよいよ翔のパートであるサキソフォンの順番が回ってきた。翔はギュッと手を握り締めている。その表情はどこか暗い。陽乃は翔の気持ちをよく分かっていた。自分以外の誰かが落ちる可能性が高い。全員が出られるという可能性のほうがずっと低いだけに、翔にしてみればこの瞬間は心苦しいものであった。

「アルトサキソフォン」

翔の心臓が破裂しそうなほど、鳴り響いている。

「佐野　翔」

自分の名前が呼ばれても、まったく安心感など沸いてこなかった。そして、2年生の名前が呼ばれる。

「鈴木　麻綾」

麻綾がホッと胸を撫で下ろした。隣ではさゆりが「良かったね！」と笑顔で麻綾の肩を叩いている。そして、次の名前が呼ばれた瞬間、翔は耳を疑った。

「朝倉　夏樹」

「……え？」

その瞬間、翔、陽乃、夏樹が声を上げた。

「アルトサックス、以上3名。続いて、テナーサックス」

翔はここから先のメンバー発表が、ほとんど耳に入ってこなかった。そんなこととは知らず、恭一は発表を続ける。

「西嶋はるか、工藤茉莉紗」

（なんて……？　え……？）

「バリトンサキソフォン、前田かのこ」

（オレと、まーやちゃんと、夏樹くん？）

「トランペット」

（中野ちんは？）
「朝倉　陽乃」
（え？　え？　先生？）
「久野　彩香、松尾　勇」
（ウソ……やろ……）
「藤咲　流」
「……。」
綾音は少し期待していたが、予想どおりの結果だったので特に落ち込みもしなかった。それよりも、兄である翔の様子が気になって仕方がなかった。呆然と前を見つめるだけの翔。俯いたままのさゆり。どうしていいかわからず、唇を噛み締めている麻綾。微妙に手が震えている夏樹。アルトサックスの誰もが、平常心を失っていた。
「ホルン。右川　順平、緒方　賢治、時任　裕子、保田　杏」
慎也もサックスパートの様子が気になって仕方がなかった。慎也は正直言うと、陽乃の弟である夏樹はメンバー入りしないだろうと思っていた。ところが蓋を開けてみれば、２年生のさゆりがメンバーから落ち、夏樹が入っていたのだ。
まったくもって、あの日のオーディションの選考基準がわからないでいた。そこういしているうちに、慎也たちのパートに移る。
「トロンボーン。川崎　慎也、富士原　徹、吉山　亜紀、江藤　沙知、佐々木雛乃」
そして自分たちの順番になった低音パートたちの表情がさらに固くなった。
「ユーフォニウム」
自分たちは関係ない。春樹はそう言い聞かせたが、それでも心臓はおとなしくならずにいた。
「水谷　春樹、加藤　愛実」
ホッと一安心。しかし、まだ心から落ち着けずにいる。
「チューバ」
拓真がハッと顔を上げた。

「本堂　拓真、大岩　智志、飯岡　好美」
「呼ばれた……」
拓真の心配していた点は、智志が無事コンクールメンバーになれるかどうかだった。この調子で行けば、バスパートは全員、コンクールに出られるのではないかという期待を拓真は抱いた。
しかし、次の瞬間、その気体はあえなく破壊される。
「ストリングベース、三宅　亮平。以上」
「……。」
貴志がとても寂しそうな表情をした。ズキン、と拓真の心臓が痛むような感覚に襲われた。
「パーカッション」
美里が「来た……」と呟いた。
「田中　美里」
ドクン、と心臓が鳴り響いている。音楽室中に聞こえるのではないかといわんばかりの音量だ。
「冨岡　洋之」
洋之が「っしゃ！」と小さくガッツポーズを取った。
「乃木あずさ」
「や、やったぁ……！」
あずさが小さく飛び跳ねる。
「秦野　恵梨」
「……良かったぁ」
恵梨も素直な気持ちが漏れる。
「日高　優」
「……。」
優は満面の笑みを浮かべているが、視線が泳いでいた。
「岩切　裕也」
「おぉ……」
裕也も思わず声が出る。やはり彼も気が気でなかったのだろう。
「本堂　晃」

和志が呼ばれることはなかった。晃と和志がなんとなく、お互い距離を置いているように美里には見えた。

「以上で、コンクールメンバーの発表を終わります。今日も合奏をしますが、今日から基本的にコンクールメンバーのみでの合奏とします。基礎練習等は、メンバー以外の者も入れてしますが、コンクール曲の合奏は今日発表したメンバーのみで行います。６名はその間、パート練習になる」

「はい……」

さゆりが小さく返事をする。その声は震えていた。

「コンクールメンバーは、選ばれなかった部員の分までしっかり頑張るように。いい加減な気持ちで練習に参加するような者がいれば、合奏の中止やメンバー入れ替えも十二分にありえるからな！」

「はい！」

「では、合奏の用意を。５時から合奏するからな」

「はい！」

恭一はそういうと、音楽室を出て行った。

「……。」

「……。」

気まずい沈黙が起きた。翔が教卓の前に立ち、指示を出し始める。

「えっと……いま、４時やから合奏の用意して。ほんで、４時半からチューニングをします」

「はい！」

「え……っと……ろ、６人は……」

翔はうまく言葉を出せずにいた。コンクールメンバーでない人は、などという言葉はとてもではないが、使えないと思っていたのでうまく言葉が出ないのだ。

「金管が３年Ｇ組の部屋、木管がその隣のＨ組の部屋で練習を……お願いします」

「……。」

さゆり、まゆ、騎士、綾音、貴志、和志。誰も返事をしない。

「お願いします！」
「はい！」
ようやく答えたのは、綾音だった。
「じゃあ部長！　鍵をください」
「……あ、うん」
翔は妹から部長と呼ばれるのに違和感を一瞬覚えた。しかし、部活では先輩と後輩なのだ。翔も「綾音」ではなく「佐野さん」と呼び、綾音は「兄ちゃん」や「かける」ではなく、「佐野先輩」もしくは「部長」と呼ぶことになるのだ。
「どうぞ」
「ありがとうございます！　ほな、行きましょ６人のメンバー！」
綾音が積極的に動き始めた。椅子を入れてすぐに部室に走る。気づいたように騎士があとを追いかけた。
「ま、待って私も！」
まゆも小走りで部室へ向かう。
「……。」
さゆりと和志、貴志が動けずにいた。
「せんぱーい！」
まゆがヒョコッと顔を出す。そして小走りでさゆりのところへ行くと、その小さな手でさゆりの手を掴んだ。
「行きましょう？」
「……うん」
さゆりはなおも呆然としたまま、ただまゆに手を引かれて半ば強引に音楽室から姿を消した。
「塚ちゃん、常（とき）ちゃん」
続いて騎士が顔を出した。
「早く行こう？」
「……あ、うん。常盤くん、行こう？」
「……ん」
貴志は小さくうなずき、和志の後をゆっくりと歩いていった。６

人がいなくなっても、しばらく部員たちはボーッとしていた。
「合奏の用意……しよっか」
翔が小さく言うと、部員たちは同じくらいの音量で「はい……」
とだけ答えるのだった。

第２９７話　出すか、破るか

「……。」

合奏の音が聞こえてきた頃、さゆりは３年Ｈ組の部屋で呆然と座り込んでいた。先ほどのコンクールメンバーの発表がウソのような、静かな時間が流れている。

耳に聞こえてくる『ブルー・スカイ』の音色がさゆりの心をズキズキと痛めた。昨日まで翔や麻綾と同じように練習してきた曲を、少なくともコンクールが終わるまで一緒に吹くことはもう、ないのだ。

正直なところ、さゆりはある程度覚悟していた。夏樹が入部してから、彼の音色を聴いたとき、鳥肌が立った。とても初心者とは思えないような音色が、さゆりの耳に響いてきたのだ。それからもう、必死だった。毎日ロングトーンをして、難しいパッセージは練習に練習を重ね、必要ならばビヴラートもかける練習をした。

けれども、今日の結果がコレだ。

さゆりは天井をジーッと見つめていた。何か目的があって、そうしているのではない。そうしていなければ、涙がこぼれそうで仕方がないからだった。

ブルー・スカイのメロディが聞こえてくるのが嫌で、さゆりは耳を塞いで机に伏せた。伏せた途端、涙がボロボロとこぼれ落ちて、もう止められなかった。

悔しさ、自分への苛立ち、もどかしさ。たくさんの感情がグルグルとさゆりの心の中を渦巻き、どうしようもない感情が爆発したように、涙がこぼれ落ちる。

「う……」

声にしれ泣けば、隣にいる金管の１年生に聞こえてしまうかもしれない。そうは思ったものの、もう止めることはできなかった。

「うわあああ……わあああああぁぁ……」
あんなに頑張ったにも関わらず、結果が出せなかったことも悔しかったが、彼女の中にはそれ以上に悔しいことがあった。それが一気に爆発して、声を上げてさゆりは泣き始めた。
「……。」
教室に入ろうとしたまゆ、騎士、貴志が足を止めた。
「隣、行こ」
まゆが呟いた。
「うん……」
貴志がうなずき、騎士も黙って隣の部屋へと向かって足を進めた。

「ん……」
さゆりが次に目を覚ますと、夕陽が窓から差し込んできて、さゆりの顔を照らしていた。
「や、やだ！　寝てた？」
バッと起き上がり、辺りを見渡すが教室には誰もいなかった。隣からはオーボエと弦バス、そしてぎこちないトランペット、クラリネット、スネアドラムの音がする。どうやら、気を遣った後輩たちがまとまって隣で練習しているようだった。
「あーぁ。気を遣わせちゃって……」
さゆりは苦笑いした。頬には涙の跡がついていて、さらに座っていた机には涙のこぼれた跡がついている。
「あーあ！　私ったら……恥ずかしいじゃん」
さゆりは立ち上がり、ティッシュを手にすると机をゴシゴシとそれで拭き始めた。グラグラと机が揺れて、バサバサと引き出しのノートが何冊か落ちてしまった。
「もう！　ついてないなぁ……」
ノートを拾おうとして書かれている名前を見て、ハッとした。
『3年H組　佐野　翔』と書かれていた。
「忘れてた……。ここ、佐野先輩の教室だ」

さゆりは自分の座っていた場所が、翔の席だったと初めて気づいた。ますます恥ずかしくなり、さゆりはひとまず涙の跡を懸命に磨いて消した。

「なんとかセーフね。これでバレないや」

まゆ、綾音、騎士、和志、貴志には泣いていたのがバレバレだが、彼らのことだから特に取り合っても来ないだろうと予想していた。

「落としちゃってゴメンなさい、先輩」

さゆりはそっとノートを戻そうとして手を止めた。

『ＳＡＸパート　勝手な日誌』

ノートのタイトルは、そうあった。

「……日誌？」

さゆりは悩んだ末、ノートを思い切って開いた。

２月１０日。

１年生が大岩くんの入部を許可するしないでモメてる。西嶋ちゃんはＯＫ。まーやちゃんもＯＫ。でも、中野ちゃんはＮＧ。確かに、大岩くんはそれまでの経緯がいろいろあるけど、あの子の眼差しはオレ的には、真剣なものやと思う。

ここは１年生の頑張りどころかな。もしも、反対してる子たちが、大岩くん入るなら辞めるとか言い出したら、厚かましいけどオレが出るつもり。自分たちも、やりたいことを周りに反対されてやらせてもらえんかったら、どんだけ悔しいかを伝えてやりたい。

２月１８日。

『エル・カミーノ・レアル』本番の日！　冒頭のメロディ、３人で頑張って合わせたよな！　自信持って行こう！

さゆりはしばらくページを進める。そして、今のところ最後の日誌はオーディションの日に書かれていた。それも、これまでと比べるとかなりの長文だ。

4月28日。
オーディションがあった。自信ない部分を吹けと言われてかなり焦ったけど、うん、とりあえずはやりきった。結果は月曜日やな。
中野ちゃん。ビックリしたな～。中学1年生からサックスを吹き始めた中野ちゃん。正直、オレは君に抜かれてしまいそうで怖い、怖い。ビヴラートが効くし、音の出だしも終わりもハッキリしてて、自信があっていい。アルトサックスはこれくらいやないとアカンと思う。
まーやちゃんは、音の芯が太い。特に低音域から中音域に関しては、オレたちアルトサックスメンバーの中では一番安定した音を吹くと思うわ。色っぽいソロを吹かせたら、西嶋ちゃんに負けへんくらいやと思うな！　なんとなく、2年生と同い年やったとしたら、オレは負けてた気がする。
夏樹くん。ホンマに初心者かお前!?笑　怪しすぎる……。オレたち3人を脅かす存在やな。なんでそんなに感情豊かに吹けるんや!?　オレに教えてくれぃ！
いずれにしても、アルトサックス全員がオレはコンクールに出られたら、これほど嬉しいことはない。でもきっと、このメンバーの中の誰かが、コンクールメンバーから外れることは避けられへんと思う。
でも逆に、考えてほしい。もしもコンクールメンバーから外れたら、これはかえってチャンスです。基礎練習をいっぱいしてください。メンバーたちは課題曲と自由曲をするしかないけど、外れたメンバーは、いろんな曲が練習できる。ジャズ、クラシック、オリジナル、マーチ、ポップス、演歌。何でも来いやと思うよ。
誰がメンバーになってもおかしくない。外れたからって、すぐに諦めずに、コンクールを終えたメンバーたちをビックリさせるような成長を見せるために、個別練習、ガンバロウな。
約束です。

「……。」

さゆりはまた、ポロポロと涙をこぼしていた。翔がこれを書いたとき、特定の誰かに向けて書いたのではないだろうとさゆりは予想できた。逆に、自分へ向けての手紙であるような雰囲気が出ている。おそらく翔は、この手紙のような日誌を、誰にも見せるつもりはなかったのかもしれない。

正直に言えば、さゆりは今回のオーディション、どこかで自信がなかった。そして、もしもコンクールメンバーから外れるようなことになれば、これを提出しようというほどに自分に追い込みをかけていた。

退部届け。

ある意味、さゆりのプライドも賭けていた。しかし、1年生のほぼ初心者である夏樹に、あっという間にコンクールメンバーの座を奪われた。その悔しさが先ほどまで、さゆりに本気でこの退部届けを出させようというところまで、彼女を追い込んでいた。

しかし、翔のこの日誌を読んだ途端、そんな気持ちは吹き飛んでいた。

さゆりは日誌を畳み、机の中にしまった後勢いよく立ち上がった。そして制服の胸ポケットに入れていた退部届けを引っ張り出す。封筒から薄い紙を取り出し、あっという間に紙飛行機にしてしまった。

「飛んでけー！」

さゆりは夕陽の眩しい校庭に向かって、紙飛行機を発射させた。まっすぐ勢いを失わず飛び始める紙飛行機。そして、風に乗って遠くへ遠くへ、紙飛行機は飛んでいった。

「……よし！」

さゆりは楽器を手にすると部屋を出て、隣の1年生がいる部屋に入っていった。

「私も練習に入れてください！」

綾音たちはしばらく呆然としていたが、貴志が「待ってましたよ」

と笑顔でさゆりを迎え入れた。
「……大丈夫そうやな」
翔はそれを確認すると、そっと音楽室へ戻った。
「遅い！　北海道のトイレに行ってたのか！？」
音楽室に戻るなり、恭一に怒鳴られた。
「いえ！　大阪です！」
ドッと笑いが起きる。
「バカ！　早く座れ」
恭一に促され、翔は「はい！」と短く答えて着席する。恭一もわかっていた。タイミングからみて、おそらくトイレではなかったのだろうと。翔のことだから、心配になり、1年生とさゆりの様子を見に行っていたのだと勘付いていた。
「そこのアフタクト、甘い！」
「はい！」
「それからだな……」
しばらくすると、恭一の耳に聴き慣れたサックスの音色が響いてきた。
「……。」
「先生？」
絵美の呼びかけにハッと気づき「すまんすまん。えっとだな、そこのクラリネットのメロディの伸びが……」とアドバイスを再度、始めるのだった。

第２９８話　広がる疑惑

「あー、練習終わった～！」
そう言って伸びをする慎也。今日の合奏は自由曲である『教会のステンドグラス』が中心であった。それゆえ、メロディの多いトロンボーン、ユーフォニウム、チューバ、木管低音、弦バスが集中攻撃を喰らった。慎也が思い切り伸びをしてしまうのも無理はない。
「ねぇ、佐野くんと陽ちゃんは？」
沙希がキョロキョロと首を振る。
「あぁ、なんか定期演奏会の話で、東先生とちょっと話するから、先に帰っててって言ってた」
春樹がどこから出してきたのか、あんぱんを頬張りながら言った。
「そうなんだ。ま、仕方ないよね。全員で帰りたかったけど……先に帰ろうか」
美里がカバンを手にする。
「そうだな。どうせ待ってたってアイツらのことだ、なんで先に帰って休んどかないんだ！？とか言いそうだもんな」
「それ言えてるね！　帰ろっか！」
拓真の言葉に由美子も同意し、３年生７名は帰宅準備を始めた。
「やっぱ、まだ外明るいね～。もう初夏だもんね」
絵美が空を見上げて言った。他の部活も日が長くなってきた分、活動時間が長くなってきていた。
「ねぇねぇ、サキティの彼氏はまだ部活？」
由美子が沙希をグイグイと校庭のほうに押しながら聞いた。
「ちょっとぉ、バカにしないでよね！」
「バカになんてしてないよ～。私は気になることを素直に聞いたまでじゃない」
「見ればわかるでしょ！　ほら、部活中です」

「待たないの？」
「彼、そういうベタベタしたの嫌いだって」
「なぁんだ、残念！」
由美子はクスクス笑いながら沙希のおなかをつついた。
「もう、いい加減にしてよね！」
沙希が怒って由美子を追いかけようとしたときだった。
「わ、珍しい」
沙希が声を上げた。
「何が？」
拓真が顔を出す。
「紙飛行機が落ちてる」
「紙飛行機？」
「うん」
沙希は紙飛行機を拾った。
「高校生が、紙飛行機折って飛ばすの？」
美里が首をかしげた。
「珍しいけど、いないこともないだろ」
慎也は特に気にも留めず、先を歩き出した。
「待って。何か書いてる……」
「え？　紙飛行機に？」
沙希の言葉に絵美と美里が反応する。
「なんだよ、そういうの聞くと、気になるじゃん」
「俺も」
「……俺も」
結局、７人全員が紙飛行機に書かれていることに注目してしまい、寄ってたかって沙希の持つ紙飛行機に顔を寄せた。
「何だよ、これ……」
慎也が表情を曇らせた。
「……。」
絵美は衝撃のあまり、言葉が出ない。

「なんかの、冗談でしょ？」
美里が苦笑いしている。
沙希が手にしている紙飛行機には、「退部届」の文字と、丁寧な字で名前が書かれていた。「中野さゆり」という、見慣れ、聞き慣れた名前が。
「ど、どういうこと！？」
由美子の声に全員が我に返る。
「退部って、部活やめるってことでしょ！？」
沙希が声を裏返して言った。
「当たり前だろ」
拓真も動揺して、それしか言えなかった。
「なんで？　だって、さゆちゃんそういう素振り全然見せてなかったし……」
美里が動揺して、完全にオロオロしている。
「落ち着けよ。とりあえず、翔に聞いてみないと真実（マジ）かどうか、わかんねぇだろ？」
「でも、佐野くん今日、合奏を途中で抜けて……さゆちゃんのトコに行ってったっぽいよね？」
由美子が思い出したように言った。
「え？　あれ、トイレじゃないの？」
「やだなぁ、春くん。真剣にトイレって思ってるの、多分この中じゃ春くんだけだよ……」
絵美が春樹の天然発言に苦笑いする。
「とにかく、翔はいま職員室だろ？　俺たち一旦、音楽室に引き返して翔と朝倉さんが戻ってくるの、待たないか？」
「……でも、翔が素直に言うかな」
慎也が首をかしげた。
「アイツ、大切なトコをはぐらかそうとするクセみたいなの、あるし」
「そんなの、襟掴みして引っぱたけば、白状するわ」

美里がビンタの素振りをする。
「美里、リアルに怖いからそれだけはやめとけ」
「とにもかくにも、一旦音楽室に引き返そう」
拓真に促され、7人は音楽室へと引き返した。

「ほな、とりあえず活動はOKなんですね？」
同じ頃、職員室では翔がワクワクした様子で恭一に何かを再度確認していた。
「あぁ、校長先生からも許可をもらってるからな。来週からだけれど、問題なく活動していいそうだ」
「良かったね、翔」
「おう！　早速明日、全員に報告やな」
翔もニッコリ笑って小さくガッツポーズを取った。
「んじゃ先生、ありがとうございました！」
翔と陽乃は恭一に礼を言ってから職員室を後にし、音楽室へと向かった。
「皆もビックリするだろうけど、これで安心して開催できるって説明すれば、大丈夫よね？」
陽乃が不安げに翔に聞いた。
「絶対大丈夫！　オレが保証するわ」
「翔がいうなら安心だね」
二人はその後もこれからのことを話しながら音楽室へと向かう。
すると、ちょうど音楽室前の前で慎也たち3年生7人と出くわしたのだ。
「よぉ！　お前ら帰ったんとちゃ……」
翔が意気揚々と声をかけようとしたのを遮るように、沙希がヨレヨレになった紙飛行機らしきものを翔に突きつけた。
「これ、どういうことよ！？」
翔は目を丸くしてその紙飛行機を受け取り、マジマジと見つめた。
「あ……！」

そこには、退部届の文字とさゆりの丁寧な字が、書かれていたのだった。

第２９９話　私はやっていける

「ん？」
さゆりが楽器を磨いていると、携帯電話が震えた。ディスプレイには「ゆい」の表示。
「はいはい、もしもーし」
『あ、さゆ姉？　私、唯～』
唯と名乗るこの少女は、さゆりの従姉妹にあたる中島（なかじま）　唯（ゆい）である。
唯は島根県は桜田市にある桜田中央高校の吹奏楽部に入っている、さゆりと同じアルトサキソフォン奏者だ。
「あぁ、唯～！　どう、元気でやってる？」
『それはこっちのセリフ。ねぇ、今日どうだったの？』
「私？」
さゆりは言葉を詰まらせた。
『そう。だって今日……オーディションでしょ？　結果は？』
「私は……ダメだった」
『……。』
唯が黙ってしまう。気まずい沈黙が流れたが、さゆりは気にせず続けた。
「仕方ないわ。完全なる、私の練習不足に力不足だもの」
『でも、あんなに頑張ってたじゃない』
「まぁね。でも、まだまだ努力が足りなかったっていう、ただ、それだけよ」
『そう……』
唯の声があからさまに暗くなった。
「やだなー！　唯がそんなに暗くなってどうすんの！」
『でも……さゆ姉、覚悟決めてるって』
そこでさゆりはハッと気づいた。唯に今回のオーディションがダメだった場合、退部するくらいの覚悟で挑むと言ったことに。

「あ、あれは……」
『嘘だよね？』
唯の声が震えていた。
同じ頃、部室のドア1枚を挟んで3年生9名が耳をそのドアに押し当てていた。
「ちょっとぉ、押さないでよ！」
美里が迫ってくる慎也と春樹を押し退けようとしている。
「しょうがねぇだろ！　聞こえねぇんだから」
「重いんだってば！　あっち行ってよ！」
「静かにしてよ！　聞こえちゃったらどうすんの！？」
絵美が美里たちに注意を促す。
「せやけど、おかしいなぁ……。あの雰囲気やと、辞めるなんて気配微塵もなかってんけど」
翔が首を傾げながらドアに耳を当てている。
「そうでしょ？　あたしもそんな話、初耳」
陽乃が不思議そうに呟く。
「わかんないわよ。だって、陽ちゃんはパートが違うんだもの。佐野くんにだって、本音は言ってないのかも」
沙希が鋭い指摘をする。
「そりゃそうかもしれへんけど……でも……」
翔の目が鋭くなった。ギョッとして全員がその表情を見つめる。
「オレは後輩を、信じてる」
「でもさ」
春樹がドアを指差した。
「あんまり展開は良くないみたい」
「なんやと！？」
翔が慌ててドアに耳を引っ付ける。そもそも、翔たちにはさゆりが誰と話をしているのかわからなかった。しかし、部屋の中からはさゆりの声しか聞こえないことから考えると、どうやら電話で話をしているようだった。

「やっぱり……辞めることにするよ」
「！」
翔の目が大きく見開かれた。
「ウソ！？」
由美子と陽乃が思わず声を上げた。
「ちょ……ダメだって、俺が止め……」
慎也が部屋に入ろうとした瞬間には既に立ち上がり、ドアを開けている人物がいた。
ガラガラ！と大きな音がしたのでさゆりが驚いて振り向くと、そこには拓真が立っていた。
「……。」
おまけに、拓真の後ろに翔、陽乃、沙希、由美子、絵美、春樹、慎也、美里と3年生が勢ぞろいしている。
「さゆ姉？　どうしたの？」
電話の向こう側では、突然声が聞こえなくなったので、唯が心配になって何度もさゆりを呼んでいた。その心配そうな唯の声に余計に心配そうな顔をしているのは、彼女の同級生である西掛（にしかけ）先斗（さきと）と、毛利　菘と親交の深い東（あずま）　茜（あかね）であった。
「どうしたんだよ、唯」
先斗が唯に声をかける。
「わかんない。急にさゆ姉の声が聞こえなくなって」
「マジ？」
先斗はついつい必死になって電話を唯から半ば奪い取るような形で耳に当てた。同時に、聞き慣れない男子の声が耳に入ってきた。
『そんな誰にも相談せずに、やめるなんて言うな！』
その声に唯も先斗も茜も、ハッとしたように息を呑んだ。
「……。」
陽乃や春樹が目を点にして突っ立っている。
「た、拓あん……？」
翔も驚くほどに、拓真が珍しく感情を高ぶらせていた。

「誰にも相談せずに、やめるとかそんな話……ヒドいじゃん！」
さゆりは慌てて「あの、先輩……違うんです」と言うが、拓真は既に感情が抑えきれないようで、どんどんまくし立てていく。
「翔に言いづらいなら、俺にでも言ってくれれば良かった！　俺、副部長だし、朝倉さんだって副部長だし！　木管セクションリーダーの橋本さんでもいいし！　なんで……誰にも相談なしで、自分で決めちゃうんだよ……」
「……！」
拓真の目から、涙がこぼれ落ちて全員がドキッとした。あれほど温厚な拓真から、こんな風に感情を高ぶらせて涙がこぼれてくるとは誰も予想もしないことだった。
「本堂先輩……違うんです」
さゆりが慌てて電話を置いて拓真に駆け寄る。唯と先斗は電話を途中で置かれたことも気にせず、受話器に必死に耳を当てて続きを聞いていた。できることならば、自分との会話で生まれた誤解を解きたいと唯は思っていた。
「私……部活、辞めようとは思っていません」
「でも……いま、電話で」
「あ……あの……そうだ。ちょっと待ってくださいね？」
しばらくすると、唯の耳に足音が近づいてきた。
「もしもし？　唯？」
『あ、さゆ姉……。なんか、スゴいことに』
「うん。それで、あなたのほうから説明してくれない？」
『え？　私！？』
「うん。私が説明するより、なんかほら、客観的で良くない？」
『わ、私でいいのかな……』
「お願い！」
唯はしばらく考えて『わかった』と答えた。隣で先斗が「責任重大だな」と笑っている。
「本堂先輩」

「うん？」
「私の……従姉妹なんですけど、一連の出来事を説明してくれます」
「……わかった」
拓真はズズッと鼻をすすりながら電話を受け取った。
『あっ。あの、私、島根県桜田中央高校吹奏楽部のっんっ！』
少女の声が詰まった。
『緊張しすぎ』
隣からは優しそうな少年の声が聞こえる。
『んんっ！　私、さゆね……じゃなくて、中野さんの従姉妹にあたる、中島　唯といいます！』
「七海高校でチューバ吹いてます、本堂です」
拓真はまだ声が暗い。心配そうに翔たちが後ろから様子を見守っている。
『あの……今回の件なんですが、さゆ姉は部活……辞めたりしないです』
「……でも、さっき」
『多分、本堂さんが聞かれたのは、さゆ姉が「部活、辞めるの辞める」っていう部分じゃないかと思うんです』
「……本当？」
拓真がペタンと床に座り込んだ。
『はい。私が、証明します』
「……良かった」
拓真がそこでようやく笑顔を見せた。
「先輩……なんか、すみません。心配させて」
「ううん……。安心した」
さゆりに優しい笑顔を向ける拓真の表情はいつもどおりのものになっていた。
さゆりは拓真から電話を受け取ると「もしもし？　唯？　ありがとね」と話を再開し出した。
「結局……あたしたちの一方的な誤解ってことかな」

美里が恥ずかしそうに笑う。
「せやから言うたやろ、オレは後輩を信じるって」
翔が胸を張って言った。
「よく言うよ。自分だってさっきは目が泳いでたクセに」
慎也が翔のわき腹をつついた。
「それは言いっこなしやろ!?」
「はいはい！　あたしたちの先走りすぎる妄想はもうおしまい！」
陽乃が上手く締める。
「お前、おいしいトコ持って行きよったな！」
翔の言葉に、全員が大笑いした。その笑い声が唯と先斗のところにも聞こえた。
『ゴメンね、なんだか慌しくて』
「いいよ。誤解、解けてよかったね」
『うん。ねぇ、なるべく頻繁に連絡取ろう?』
さゆりが唯にそう言った。唯は笑顔で「もちろん」と答えた。
電話を切ってから先斗が言う。
「俺たちも、あんな風に暖かい部活、作りたいな」
「そうだね。頑張ろうね、先斗」
唯の笑顔に思わず先斗は赤くなって「う、うん」と答えることしかできなかった。

帰り道。男子４人が一緒になって帰っている間もやはり、話題は拓真のことばかり。
「まさか拓あんがあんなに感情的になるとは思わなかった」
春樹が驚きを隠せないようで、大声で大きくリアクションを取りながら言う。
「恥ずかしいな……」
拓真は苦笑いした。
「昔、何かあったのか?」
慎也が核心を突くように聞く。

「ん……まぁ……」
「やめろや」
翔が制止した。
「言いたくないことかもしれへんやろ」
「あ……悪(わり)ぃ」
慎也がペコリとお辞儀をする。
「やだな！　そんな大げさな……。ただ、昔の自分が被りそうになっただけ」
「昔の自分？」
春樹が食いついてきた。
「どういうことだ？」
慎也も聞いてきたので、拓真は仕方なく話した。
「俺、中学2年までバスケやってた」
「へぇ！　どおりで背が高いわけや！」
翔が納得する。拓真は続けた。
「でも……まぁ、ケガしちゃってさ。それでレギュラー落ちして、なんとなく……やる気なくなって……辞めた」
「……。」
誰も何も返せなかった。拓真の、意外な過去だった。
「誰にも相談せず、自分で決めて、退部届け出した。それから仲間とも会いづらくて……。ナナコウ来てからも、なんとなく同じクラスにいる元バスケ部のメンバーともなかなか話せなかったけど」
赤信号になったところで足止めを喰らったので、拓真はガードレールに腰掛けた。
「こないだ、一番仲が良かったヤツに言われた。スイソーガクは、中途半端なコトして辞めるなよって」
「へぇ……アイツがねぇ……」
慎也が笑った。おそらく、慎也も知る相手なのだろう。
「もしも、お前がもう一回同じことしたら許さない。それに、同じことしそうな子がいたら、相談に乗ってやれって」

「ふぅん……。その子、きっと拓あんを止められなかったことと、拓あんの気持ちに気づかなかったこと、後悔してるんだね」
春樹が感慨深そうに呟いた。
「だから、中野さんがあんなこと言ったとき、もうどうにも止められなくなってさ……。なんか今考えると恥ずかしいけど……」
翔がニカッと笑って言った。
「恥ずかしいことあるかい」
「え？」
「オレも言えんかったことを、言うてくれた」
翔の言葉に、拓真は少し安心した。
「おおきに」
「……どういたしまして」
４人は顔を見合わせ、クスッと笑った。
信号が青になる。
「帰ろうや！」
翔が立ち上がる。
「うん！」
春樹も立ち上がった。
「よし！　横断歩道の向こう側まで競争！」
慎也が走り出した。拓真が慌てて続く。
「ずるいで！　ヨーイドンで同時にスタートやろが！」
翔が慌てて追いかけ、春樹が必死に後を追う。４人の笑い声が職員室にいる恭一のところにまで響いていた。

第３００話　七光りの噂

「……。」
夏樹は練習中にもかかわらず、ボーッと楽器を構えたまま黒板を見つめていた。
「……ん？」
誰かの声がするが、夏樹はそちらに意識を集中することができない。
「夏樹くん！」
「はっ、はい！」
翔が大声を出してようやく夏樹は彼のほうに顔を向けた。
「どないしたん？　さっきから何回も呼んでるのに……」
「すいません……」
「眠いん？　顔、洗ってくるか？」
翔は冗談っぽくニヤッと笑って夏樹に顔を洗うフリをして聞いてみた。しかし、夏樹はそれを真に受けてしまい「はい……。行ってきます……」と行って部屋を出てしまった。
「……どないしたんやろうなぁ」
翔は首を傾げながらフウッとため息を漏らした。
「朝倉くん、２、３日前からずっとあんな感じなんですよ」
はるかが心配そうに呟く。
「あ、やっぱり西嶋ちゃんもそう思う？」
「佐野先輩も……気づいてました？」
はるかは翔の座っている椅子に近づいてきて話を続ける。
「なんか、妙に元気がないんですよ。それに……まぁ、これは全然関係ない、どちらかっていうとあたしとマーヤの個人的嗜好のお話なんですが」
「どうせイケメン俳優の話やろ？」

翔がニヤニヤ笑いながら指摘する。
「よくおわかりですね！　でも、その話、ぶっちゃけ1年生に聞かれるのまだ恥ずかしいんでコソコソ話してたんですよ。そしたら、夏樹くんが異様に怯えたような目であたしとマーヤのこと見てて……。あたしの気にしすぎかな、とか思ったんですけど、次の日にジュンペーと優がヒソヒソ話してたら、また夏樹くんが異様に心配そうな目で二人のこと見てて……。何か、ヒソヒソ話に夏樹くん、異様に反応するんですよ」
「ヒソヒソ話……か」
翔は夏樹が何かを心配しているか、隠していると思い、本人に直接聞いてみることにした。
「こんにちは！」
夏樹が元気よく挨拶してサックスのパート練習の部屋に入ると、室内には翔とはるかしかいなかった。
「あれ？　工藤さんとか前田さんはまだですか？」
「あー、うん。二人、ちょっと用事で今、音楽室行ってるんよ」
翔はリードを選びながら答えた。
「そうなんですか～」
夏樹も翔の傍に来て楽器ケースを置き、楽器の準備を始める。
「あ、西嶋ちゃん。ちょっといい？」
翔ははるかを呼んで夏樹の傍から離れた。
「……やねんけど、でな……」
翔の声が微妙に夏樹の耳に届く。しかし、肝心な部分が聞こえていない。
「え！　そうなんですか？　やっぱり……。あたしも思ってたんですけど、あれって絶対……」
はるかの声も、肝心な部分が消えてしまい、うまく聞き取れないようで、夏樹はもどかしそうにしている。そして、翔とはるかのほうをジッと横目で見ていた。翔はそのタイミングを逃さず、夏樹に言った。

「どないしたん？」
ビクッと夏樹が体を震わせた。そしてすぐに「何でもないです！」と言って背中を向けた。
「絶対ウソやん。いま、オレと西嶋ちゃんの話、気になってこっち見てたよな？」
「……。」
夏樹は答えない。その顔色はどんどん悪くなる。
「あ、あのさ！　別にイジメようとかそんなん、思ってるんちゃうんやで？　ただ、なんか夏樹くんが心配そうにこっち見るのが気になって……」
「すみません」
夏樹がペコリとお辞儀をして謝った。
「別に謝らんでも……」
翔もどう答えていいかわからず、言葉に詰まった。
結局、なぜ夏樹がそんなにヒソヒソ話に怯えるような素振りを見せるのかはわからないまま、パート練習になった。わざわざ教室を出てもらったかのこと茉莉紗を呼び、ロングトーンを始める。
「やっぱり、１年生３人は低い音になるとベターッとした音になってしまうなぁ」
翔が前に座り、メトロノームを止めて問題点を指摘する。
「特に、夏樹くんは男子やから息の量とかこれから増えると思うねん。それに、元々サッカーやっとったやろ？」
すると、それにかのこが反応した。
「え！　朝倉くんって、元サッカー部とか！？」
「う、うん」
「キャー！　スポーツマンじゃん！　それなのに、どうして吹奏楽に！？」
夏樹の表情が一瞬暗くなった。かのこや茉莉紗は夏樹の事情を知らないので、何ともいえない表情をする夏樹に少し戸惑いを見せた。
「とりあえず、そういう話は後にしよ」

翔が会話の方向性を変える。茉莉紗とかのこも「はい！」と答えて、その場は流れた。

「んで、話の続きやけど。多分夏樹くんは今後、息の量がもっと増えると思うわ。そしたら、今度大事になってくるのは息のコントロール。今はいっぱいいっぱい息を入れるように言うてるけど、今月からはその量の調節も考えていこか」

「はい！」

夏樹がようやく元気な声を出した。

「そんじゃ、もう1回ベーの音階を8拍吹いて、4拍休んで上がって上のベーを2回吹いて、下がってきてください」

「はい！」

その後、30分ほどロングトーンを続けたサックスパート。委員会を終えた麻綾が来るまで、各自で練習をすることになった。

「先輩。ちょっとお手洗い行きたいです！」

かのこが元気よく手を上げる。

「しゃーないな。ちょっと暑いし、休憩しよか。10分間な！」

「やったー！　ね、マリちゃんジュース買いに行こう！」

「行こ、行こ！」

かのこの誘いに乗り、二人は財布を持って教室を飛び出した。

「俺もトイレ行こう」

夏樹は一人呟き、トイレに向かった。その後ろ姿を見て、はるかが「やっぱり元気ないですねぇ……」と心配そうに呟く。

「オレ、追いかけて様子見てくる」

「お願いします」

翔ははるかの言葉を背に受け、そっと夏樹の後を付けていった。しばらく歩くと、音楽室近くのトイレに夏樹が入っていく。その時だった。

「やっぱさぁ、お姉さんが副部長だもん。なんて言ったっけ、ほら、あれ！」

その声はクラリネットの新入生・堀江　歩由美だった。

「七光りってヤツ？」
続く声は、ホルン男子の緒方　賢治。
「あ、それそれ！　私、なんとなくそんな気がする。だって、彼まだ初心者でしょ？　なのに、いきなりレギュラー入りってどうなの？」
不服そうに言う歩由美。
「確かになぁ。ま、そうは言っても顧問の東先生が選んだんだし」
「それ自体がえいこひいきっぽい」
別の女子の声。これは歌川　まゆだった。
「わからなくもないかな。その気持ち」
「正直、これで私たちの音とか掻き乱されたら……」
歩由美が大げさに声を潜める。
「微妙！」
まゆが言い切った。
「わかるかも！」
賢治が言った。夏樹がクルッと踵を返した瞬間だった。翔と激突したのだ。
「あ……」
「……。」
夏樹はフイッと翔から目を逸らし、走り去ろうとした。
「待ち」
翔が夏樹の両肩を掴んで止めた。
「俺は、自分の力で頑張ってるんやって、なんで言わんねん？」
「だって……俺がそんなこと言ったって……信じてもらえそうにないから」
夏樹が寂しそうに俯いた。
「……。」
なぜ夏樹がここまで他人に対してネガティヴな感情を抱いているのかは翔にはわからなかった。しかし、ここでこの状況を放っておけば間違いなく、部としてよくない方向へ進む。翔はそんなことは

まっぴらゴメンだと思い、行動に出た。
「ほんなら、オレが言うといたる」
「え？」
夏樹が呆然としている間に、翔はトイレのほうへ向かった。
「ちょっとえぇか？」
翔の声に3人が驚いて振り向く。
「さ、佐野先輩……」
「今の、何の話？」
「……。」
3人は目を逸らし、合わせようとしない。
「あのさぁ、1年生」
翔が近づくとますます3人は小さくなって、顔を見ようとしない。
「これから、メンバー入りせんかった人も含めてこの56人で音を作っていくんちゃうの？」
「……。」
「どう思う？　歌川さん」
「……。」
「何か言わんと、わからへん」
「……そう思います」
まゆは小さい声で答えた。
「そうやろ？　せやのに、例えばこれから歌川さんがガンバロって思ってるのに、健之佑がたとえば、顧問のコネで歌川さんが入ってきたって噂してたら、どない思う？」
「そんなの、嫌です！」
まゆが間髪いれず大声で答えた。
「ほんなら、なんで自分らはそれと同じようなことをするんや！」
まゆの声を掻き消さんばかりの翔の大声に、ビクッと3人が全身を震わせた。それだけでなく、音楽室にいた絵美や美里、順平も驚いて出てきていた。
「せっかく、頑張ろうとしてる子がおるのにやな……！」

翔が続きを言おうとしたとき、夏樹が翔の制服を引っ張った。
「……どないしたん？」
「もう、いいです」
夏樹が泣きそうな顔を、わざわざ笑顔にしてそう言った。
「でも……」
「先輩が悪者にならなくてもいいです」
「……。」
夏樹がニコッと笑って3人に向かって言った。
「君たちの本音、わかった。俺、みんなの足引っ張らないように頑張るから」
「……。」
「先輩！　早く教室戻りましょう！　俺、いっぱい教えてほしいことあります」
「お、おう」
翔は半ば強引に夏樹に引っ張られ、歩由美たちの前から姿を消した。
「ねぇ」
呆然としている3人に声を掛けたのは、絵美、順平、健之佑だった。
「ちょっと、いい？」
「……はい」
3人は俯いたまま、絵美たちの後についていった。

コラム☆１３　夏樹たちのこと教えて！

※！！ネタバレ注意！！※

☆　第３００話現在　☆

♪朝倉（あさくら）　夏樹（なつき）
パート：アルトサクソフォン
生年月日：１９９１年４月５日　血液型：Ａ型　身長：１７１．４ｃｍ　体重：５９ｋｇ
好きな食べ物：ソフトクリーム　好きな飲み物：烏龍茶
苦手な食べ物：チョコレート　苦手な飲み物：炭酸系
好きな教科：現代国語　苦手な教科：数学
好きな俳優：堀北　真希さん　好きなタイプ：明るくて気遣いのできる子。

♪安藤（あんどう）稚沙希（ちさき）
パート：フルート
生年月日：１９９１年７月１日　血液型：Ｂ型　身長：１６０．２ｃｍ　体重：４３ｋｇ
好きな食べ物：卵焼き　好きな飲み物：オレンジジュース
苦手な食べ物：きゅうり　苦手な飲み物：ブラックコーヒー
好きな教科：技術家庭　苦手な教科：現代国語
好きな俳優：成宮　寛貴さん　好きなタイプ：スポーツマン！

♪飯岡（いいおか）　好美（よしみ）
パート：チューバ
生年月日：１９９２年３月３１日　血液型：Ｏ型　身長：１６７．９ｃｍ　体重：４８ｋｇ
好きな食べ物：筑前煮　好きな飲み物：ミックスジュース
苦手な食べ物：グレープフルーツ　苦手な飲み物：青汁（笑）
好きな教科：現代社会　苦手な教科：日本史
好きな俳優：角野　卓造さん　好きなタイプ：見た目とのギャップがある人

♪岩切（いわきり）　裕也（ゆうや）
パート：パーカッション
生年月日：１９９１年１１月２８日　血液型：Ｏ型　身長：１６９．３ｃｍ　体重：５８ｋｇ
好きな食べ物：カラムーチョ　好きな飲み物：アップルティー
苦手な食べ物：なすび　苦手な飲み物：緑茶
好きな教科：数学　苦手な教科：生物
好きな俳優：大塚　寧々さん　好きなタイプ：清楚で和風っぽい人

♪歌川（うたがわ）　まゆ
パート：オーボエ
生年月日：１９９２年１月１７日　血液型：ＡＢ型　身長：１６２．５ｃｍ　体重：４１ｋｇ
好きな食べ物：コアラのマーチ　好きな飲み物：ハーブティー
苦手な食べ物：梅干し　苦手な飲み物：低脂肪牛乳
好きな教科：化学　苦手な教科：古文
好きな俳優：天海　祐希さん　好きなタイプ：笑顔の素敵な人

♪江藤(えとう)　沙知(さち)
パート：トロンボーン
生年月日：１９９１年９月２日　血液型：Ａ型　身長：１６５．１ｃｍ　体重：４４ｋｇ
好きな食べ物：オムライス　好きな飲み物：午後の紅茶(ストレート)
苦手な食べ物：なまもの全般　苦手な飲み物：午後の紅茶(ミルクティー)
好きな教科：日本史　苦手な教科：世界史
好きな俳優：鎌刈　健太さん　好きなタイプ：爽やかな人

♪緒方(おがた)　賢治(けんじ)
パート：ホルン
生年月日：１９９１年１０月２６日　血液型：Ｂ型　身長：１７３．４ｃｍ　体重：６２ｋｇ
好きな食べ物：肉じゃが　好きな飲み物：なっちゃん（アップル）
苦手な食べ物：甘いもの全般　苦手な飲み物：コーヒー
好きな教科：英語　苦手な教科：美術
好きな俳優：上戸　彩さん　好きなタイプ：明るくて少し天然の入った人

♪片岡(かたおか)　なぎさ
パート：クラリネット
生年月日：１９９１年１１月８日　血液型：Ａ型　身長：１６０．５ｃｍ　体重：５０ｋｇ
好きな食べ物：八宝菜　好きな飲み物：三ツ矢サイダー
苦手な食べ物：苦いもの　苦手な飲み物：ブラックコーヒー
好きな教科：家庭科　苦手な教科：技術

好きな俳優：松本　明子さん　　好きなタイプ：芯のしっかりした人

♪工藤（くどう）　茉莉紗（まりさ）

パート：テナーサキソフォン

生年月日：１９９２年３月２６日　　血液型：Ｏ型　　身長：１６８．９ｃｍ　　体重：５１ｋｇ

好きな食べ物：ブリの照り焼き　　好きな飲み物：カルピス

苦手な食べ物：いくら　　苦手な飲み物：昆布茶

好きな教科：古文　　苦手な教科：現代文

好きな俳優：佐野　和真さん　　好きなタイプ：自分がぶれない人

♪佐々木（ささき）　雛乃（ひなの）

パート：トロンボーン

生年月日：１９９１年５月３１日　　血液型：ＡＢ型　　身長：１５９．３ｃｍ　　体重：４１ｋｇ

好きな食べ物：ほうれん草のおひたし　　好きな飲み物：味噌汁

苦手な食べ物：すいか　　苦手な飲み物：酸っぱいの全般

好きな教科：数学　　苦手な教科：国語系

好きな俳優：北乃　きいさん　　好きなタイプ：一緒にいて楽しい人

♪佐野（さの）　綾音（あやね）

パート：トランペット

生年月日：１９９２年２月１４日　　血液型：Ｂ型　　身長：１６０．２ｃｍ　　体重：４３ｋｇ

好きな食べ物：カルボナーラ　　好きな飲み物：ファンタグレープ

苦手な食べ物：脂っこいもの　　苦手な飲み物：ファンタオレンジ

好きな教科：日本史　　苦手な教科：世界史

好きな俳優：小池　徹平さん　　好きなタイプ：頼りになる人

♪進藤（しんどう）　雄飛（ゆうひ）

パート：クラリネット

生年月日：１９９１年６月１８日　　血液型：Ｏ型　　身長：１６９．９ｃｍ　　体重：５５ｋｇ

好きな食べ物：から揚げ　　好きな飲み物：緑茶

苦手な食べ物：エビ　　苦手な飲み物：玄米茶

好きな教科：世界史　　苦手な教科：日本史

好きな俳優：山下　リオさん　　好きなタイプ：髪のサラサラな笑顔の素敵な人

♪添田（そえだ）　麻衣子（まいこ）

パート：クラリネット

生年月日：１９９２年１月１７日　　血液型：Ａ型　　身長：１６５ｃｍ　　体重：４８ｋｇ

好きな食べ物：お寿司　　好きな飲み物：烏龍茶

苦手な食べ物：お刺身　　苦手な飲み物：特にありません

好きな教科：音楽　　苦手な教科：美術

好きな俳優：本郷　奏多さん　　好きなタイプ：リーダーシップのある人

♪塚口（つかぐち）　和志（かずし）

パート：パーカッション

生年月日：１９９１年４月３０日　　血液型：Ｂ型　　身長：１７６．７ｃｍ　　体重：６４ｋｇ

好きな食べ物：ハンバーガー　　好きな飲み物：オレンジジュース

苦手な食べ物：ピクルス　苦手な飲み物：アップルジュース
好きな教科：体育／音楽　苦手な教科：机に向かう授業
好きな俳優：大政　絢さん　好きなタイプ：真面目な人

♪時任（ときとう）　裕子（ゆうこ）
パート：ホルン
生年月日：１９９１年１０月７日　血液型：Ｏ型　身長：１５３．５ｃｍ　体重：４２ｋｇ
好きな食べ物：エビフライ　好きな飲み物；アップルティー
苦手な食べ物：ブロッコリー　苦手な飲み物：ストレートティー
好きな教科：生物　苦手な教科：体育
好きな俳優：木咲　直人さん　好きなタイプ：おもしろい人

♪速水（はやみ）　騎士（ないと）
パート：クラリネット
生年月日：１９９１年８月１５日　血液型：Ａ型　身長：１７８．７ｃｍ　体重：６６ｋｇ
好きな食べ物：ハンバーグ　好きな飲み物：ミックスジュース
苦手な食べ物：レタスの芯　苦手な飲み物：ミルクコーヒー
好きな教科：現代文　苦手な教科：日本史
好きな俳優：飛鳥　凛さん　好きなタイプ：スイッチのオンオフがハッキリする人

♪藤咲（ふじさき）　流（りゅう）
パート：トランペット
生年月日：１９９２年２月２９日　血液型：ＡＢ型　身長：１６５．２ｃｍ　体重：５４ｋｇ

好きな食べ物：ウインナー　好きな飲み物：お茶全般
苦手な食べ物：生ハム　苦手な飲み物：渋すぎるお茶
好きな教科：家庭科　苦手な教科：美術
好きな俳優：岡本　杏理さん　好きなタイプ：俺とは正反対の人

♪堀江（ほりえ）　歩由美（あゆみ）
パート：クラリネット
生年月日：１９９１年７月１日　血液型：Ｂ型　身長：１６７ｃｍ　体重：５３ｋｇ
好きな食べ物：アジのフライ　好きな飲み物：午後の紅茶
苦手な食べ物：魚の煮物　苦手な飲み物：ポカリスエット
好きな教科：化学／数学　苦手な教科：日本史／世界史
好きな俳優：山田　孝之さん　好きなタイプ：ユーモアのある人

♪本堂（ほんどう）　晃（あきら）
パート：パーカッション
生年月日：１９９１年１２月３１日　血液型：Ａ型　身長：１８２．７ｃｍ　体重：６５ｋｇ
好きな食べ物：カツカレー　好きな飲み物：ポカリスエット
苦手な食べ物：福神漬け　苦手な飲み物：特にないな
好きな教科：最近は音楽　苦手な教科：高校以降の数学
好きな俳優：星野　真理さん　好きなタイプ：一緒にいて楽しい人

♪前田（まえだ）　かのこ
パート：バリトンサキソフォン
生年月日：１９９２年３月３０日　血液型：Ｏ型　身長：１６０．７ｃｍ　体重：５９ｋｇ

好きな食べ物：チョコレートアイス　好きな飲み物：午後の紅茶のミルクティー
苦手な食べ物：いちご　苦手な飲み物：トマトジュース
好きな教科：物理　苦手な教科：生物
好きな俳優：市原　隼人さん　好きなタイプ：価値観の合う人

♪毛利（もうり）　菘（すずな）
パート：アルトクラリネット
生年月日：１９９１年９月１１日　血液型：ＡＢ型　身長：１５７．１ｃｍ　体重：４７ｋｇ
好きな食べ物：ビスケット　好きな飲み物：コーンポタージュスープ
苦手な食べ物：固いもの　苦手な飲み物：特にないよ
好きな教科：美術／音楽　苦手な教科：体育
好きな俳優：窪田　正孝さん　好きなタイプ：名前を間違えない人

♪保田（やすだ）　杏（あんず）
パート：ホルン
生年月日：１９９１年５月６日　血液型：Ｏ型　身長：１６４．３ｃｍ　体重：４３ｋｇ
好きな食べ物：カステラ　好きな飲み物：コーラ
苦手な食べ物：ガム　苦手な飲み物：ファンタ
好きな教科：日本史　苦手な教科：数学数学数学！
好きな俳優：兼子　舜さん　好きなタイプ：落ち着きのある人

第３０１話　嫉妬と切磋琢磨

「ねぇ……どうして、あんな話をしたの？」
絵美は部室でまゆ、歩由美、賢治に尋ねていた。しかし、３人とも俯いたまま答えようとしない。絵美はフゥッとため息を漏らした。
「黙ってちゃわからないわ。ねぇ、怒らないから教えて？　どうしてあんな話、したの？」
「……。」
３人ともそれでも、何も言わなかった。
「気に入らない、とか？」
ビクッとまゆが体を震わせた。
「わかるよ」
順平が呟いた。
「歌川さん……ひょっとして、メンバー落ちしたことに関して、朝倉くんに何か、嫉妬みたいな気持ちがある？」
「……。」
まゆは順平から目を逸らした。それはもう、そうだと認めるような感じになっていた。
「俺も中学の時、そんなことあった。同級生で、コンクールのメンバー入りしてさ。俺はメンバーから落ちた。中学２年のとき。どうしようもない、嫉妬なんだろうな、いま考えると。持って行きようのない気持ちが膨れて、なんとなく、そいつと関わり合いを持たないようになり始めたんだ」
「そんなことあったっけ？」
健之佑が順平に聞いた。
「ケンは知らないと思う。俺、あんまり皆にはその話、してなかったから」
それを聞いた健之佑は少し不服そうにしていた。

「そんなことがあって、結局どんどん関係は気まずくなるばかり。良くなることなんて全然なかった。俺も、そんな嫉妬の気持ちがバレるのが恥ずかしくて、ますます避けるようになってさ……。でも、ある日その子のほうから歩み寄ってきてくれたんだ。なんか、ギスギスしたの、嫌じゃん？なんて言ってさ」

「そんなこと……できたら、苦労しません」

歩由美が呟く。

「そうね」

絵美が今度は引き取った。

「でも、さっきの朝倉くんの様子見た？」

歩由美は首を傾げる。

「朝倉くん、こう言ってなかった？　『俺、みんなの足引っ張らないように頑張るから』って」

「はぁ……。そんなこと、言ってたような」

「普通、自分の悪口言ってた人に、そこまで言えるかな？」

「……。」

まゆと賢治がまた俯いた。

「言える人もいるんじゃないですか？　現に、朝倉くんは言ったんですし」

歩由美はまだ、自分の非を認めようとはしていなかった。絵美は誰に言うでもなく、呟いた。

「そうだね。朝倉くんは、自分から遠ざかっていくかもしれないことにも、歩み寄ろうとしてるのかもね」

「……遠ざかるって、私たちのことですか？」

「さぁ？　私、そんなことは言ってないけど」

絵美は核心の部分をあえて何も言わずに、そうやってはぐらかしておいた。

「さ。練習に戻ろうか！」

賢治が絵美に何か聞こうとしたのだが、それをあえて遮るように絵美は立ち上がり、楽器と楽譜を持って部室を出て行った。

「早く行こう」
健之佑がまゆに促す。順平も何も言わず、立ち上がり楽器を持って部室を出た。慌てて賢治が後を追う。
「……何よ」
歩由美だけがポツンと取り残された。彼女はブツブツと文句を言いつつ、楽器を用意してクラリネットのパート練習の部屋へ向かった。
トボトボと廊下を歩いていくと、サックスの部屋の前に差し掛かった。課題曲の練習をしているようで、既に歩由美の耳にも馴染みつつあるメロディが聞こえてきていた。
「ストップ！」
翔の声に思わず歩由美は足を止めた。
「そこの最初のメロディ、全然音程合ってへん！　誰や？　一人ずつ。マーヤから」
「はい！」
麻綾の音色が聞こえた。芯のある音だった。
「合うてる。次、夏樹くん」
「はい！」
夏樹の音が響く。出だしが不安定になった。
「出だしから合わせて！」
「はい！」
夏樹も、中学3年生の頃から楽器を吹き始めたと聞いていた。同じパートの片岡なぎさと速水　騎士から聞いたことだった。夏樹本人と歩由美はこれまで、まともに話したことすらなかった。
そんな夏樹が突然、コンクールメンバーに入れられたことは歩由美には理解しがたいことであった。なぜ、経験者で技術的にも上回っているさゆりが落ちて、未熟な夏樹がコンクールメンバー入りしたのか、歩由美にはまったく理解できずにいた。
クラリネットパートでは、ロングトーンをした後に３０分間、個人練習の時間を取った。その間、偶然歩由美となぎさが隣同士にな

った。しばらくすると、パートリーダーの絵美は一瞬、部室のほうへ戻ってしまった。どうやら、フルートと何か相談事があるらしい。残ったのは2年生と1年生。

「……。」

淡々と練習をする歩由美であったが、どうしても気になることがあった。やたらとなぎさが、体を動かして吹いているのだ。確かに、直立不動で吹くのもあまり好ましくないのだが（感情を多少なりとも込めて吹くならば、体が動くのも不思議ではない）、なぎさの場合は動きすぎであるようにも見受けられる。

我慢できなくなった歩由美は、先ほどの件で少し鬱憤（うっぷん）があったのも影響して、少し意地悪な口調で言った。

「ねぇ。あんまり動かないでよ」

「え？」

なぎさが驚いて目を丸くする。

「別に感情込めて吹くならいいけど、片岡さんの場合、リズムに合わせて動いてるだけ。みっともないから、やめて」

「ゴメンなさい……」

小声で言ったつもりだったが、それを優輝が聞いていたようで歩由美に近づき、言った。

「あのさぁ」

ドキッとして歩由美は優輝を見上げた。

「なんで、そんな言い方しかできないわけ？」

「だって……」

歩由美はそこから先の言葉をつなげなかった。

「頑張ってる証拠じゃん。堀江さん、経験者なのはわかるよ。でも、自分だって初心者だった頃のこと、忘れちゃマズいんじゃない？」

「……。」

そんなことは歩由美もわかっているつもりであった。しかし、面と向かって改めて言われると、自信はなかった。

「朝倉くんも片岡さんも、試行錯誤して頑張ってると思う。だから、

その頑張りを蹴散らすんじゃなくて、一緒に高めてあげるくらいの意識があってもいいんじゃない？　同級生なら」

優輝は表情一つ変えずにそう言った。こういうときの優輝は、みゆきや光瑠でも物怖じしてしまうほどの迫力がある。

「それだけ。邪魔してゴメン」

「……。」

歩由美はしばらくすると、ヒックヒックと泣き始めた。

「ふぅ……」

優輝が再び立ち上がる。そして、歩由美の頭を撫でた。

「泣くなよ」

「だって……」

歩由美の声はすっかり鼻声になってしまっていた。

「嫉妬してんだろ？　歌川さんも、緒方くんも、堀江さんも。嫉妬する暇あるなら、練習して練習して、メンバー入りしてるけど油断せずに、どんどん腕前上げていったほうが、いいんじゃないか？」

「……。」

歩由美が涙を拭う。傍にいたなぎさが、ハンカチを取り出した。

「ありがと……」

「どういたしまして」

なぎさはニッコリ笑い、すぐにまた楽器を構えて練習を始めた。

「嫉妬するより、切磋琢磨していく仲であってほしいなって、先輩たち思ってると思うよ」

「……。」

「ま。そういうわけで、よろしく」

優輝はそういうと自分の席に戻った。ほぼ同時に絵美が「よーし。あと１０分でパートセクションするよ～」と言いながら教室に入ってきた。

第３０２話　ゴメンのロングトーン

５月１日、火曜日。今日は恭一の担任である３学年の職員会議の関係でパート練習でとなっていた。さらに、２年生は連休明けから始まる修学旅行の説明会で５時半まで不在である。その上、３年生のうち所用で翔と拓真が不在であった。そのため、サックスパートとチューバは最高学年が不在となっていた。

仕方がないので、サックスパートはクラリネットパートと合同で、チューバはいつもと変わらずユーフォと弦バスで練習することになった。

「失礼しまーす！」

麻綾が元気よくクラリネットのいる教室のドアを開けた。

「私も失礼しちゃいまーす！」

続けてさゆりが入る。

「うわ！　やっぱお前いるわけ？」

駿がさゆりの姿を見るなり、顔をゆがめた。

「なによ～！　別にロングトーンはコンクールメンバーじゃなくても一緒にするもんでしょ？」

「はいはい。わかりましたよ！　どうぞ、女王様」

「誰が！　失礼しちゃう」

さゆりはプリプリしながら駿の横を通過して椅子の準備を始めた。

「ふぇーっくしょん！」

クシャミをしながら入ってきたのは、はるかだった。バサバサ！と音を立てて楽譜が菘や優輝のあたりに散らばっていく。

「何やってんだよ！　騒々しいなぁ」

優輝は呆れ顔で楽譜を拾い集める。菘は肩を揺らして笑いをこらえながら、同じように楽譜を集めていた。

「ゴメーンゴメンって！　あ、悪いね～」

親父臭さを出しながら、はるかも散らばった楽譜を集めていく。
「失礼しま……きゃー！」
続いて入ってきた茉莉紗が、はるかの置きっぱなしにしていた譜面台に激突した。さらに楽譜が散らばって、中には端にいる絵美のところにまで飛んでいったものもあった。
「練習始める前からこんなんじゃ、先が思いやられるわね」
絵美が苦笑いしながら楽譜を集めた。
ようやく落ち着いたので、いよいよロングトーンを始める。席順は前列が梨子、絵美、光瑠、なぎさ、優輝、歩由美、みゆき、雄飛、騎士、麻衣子。後列が菘、麻綾、さゆり、夏樹、はるか、茉莉紗、かのこ、駿となっている。
夏樹の右斜め前には、歩由美がいた。夏樹はなんとなく、気まずい気持ちが残ったままだった。歩由美は後ろを向くこともなく、クラリネットを構えてチューニングをしている。
「はい！　じゃあ、今日は佐野くんが不在なのでクラリネットとサックスの合同パー練です。木管セクション練習とかこれから増えていくと思うので、今日の練習でなるべく音を合わせるようにしましょう」
「はい！」
「じゃあ、ベーのロングトーンを、8拍吹いて4拍休むパターンで下から上がって、上のベーを2回吹いて下がってください」
「はい！」
「行きます」
絵美がメトロノームを鳴らしてから着席する。
「5、6、7、8の合図で入ってください」
「はい！」
「5、6、7、8！」
木管特有のやわらかい音色が室内に響き渡る。ところが、ロングトーンの8拍のうち6拍目くらいから音が不安定になってき始めていた。次第に夏樹、騎士、なぎさの顔が赤くなる。完全に息切れし

ていた。
　４拍休憩と勘違いしがちだが、この４拍でしっかりと息を吸わなければならない。それは夏樹、騎士、なぎさも承知していたのでしっかりと息を吸う。ところが、結局後半になると息切れしてしまい、ひどい場合には音が消えてしまうこともあった。
　下がるロングトーンが終わった頃には、３人はほとんど頭がボーッとしてしまう状態で、音程とかを気にする余裕もなくなっていた。
「朝倉くん、速水くん、片岡さん」
「はい！」
「疲れた？」
「……はい」
　騎士が恥ずかしそうにうなずく。
「それじゃあ、ちょっと全体ロングトーンはいったんやめて、個々人でロングトーンをしようか」
「はい！」
「えっとね……２年生は各自で。１年生は……」
　絵美が全員を見回した。
「初心者の子たちに、経験者が教えてあげようか。１ヶ月経ったけど、まだなんとなくよそよそしい感じもあるし、ここで仲良くなるって意味も兼ねて」
　絵美はさぞ良い提案だ！と言いたげに両手を合わせた。
「俺もそれ、いいと思います！」
　駿が同意する。
「確かにね～」
　はるかが自分たちの頃を思い出した。
「あたしたちも、なんとなくこの時期まだよそよそしさがあったもん。それ、いいと思います」
「それじゃ、決定ね」
　絵美はうんうんとうなずき、次々とメンバーを指定していった。
「まず、速水くんは進藤くんが教えてあげて」

「はい！」
「それから……片岡さんは、添田さんがお願い」
「はい」
「で、朝倉くんは堀江さんにお願いしようかな」
「え！」
歩由美が声を上げた。
「え！って。なんで？」
「いえ！　なんでは私のセリフです。朝倉くん、サックスじゃないですか。中野先輩か鈴木先輩が教えてあげたらいいと思います」
「堀江さん、私の話聞いてた？」
「え……」
「1年生同士でよそよそしさを解消する目的もあるから。2年生じゃ意味ないの」
「で、でも」
「はい！　それじゃあ、いま言った以外のメンバーは各自で練習お願いします」
絵美は有無を言わさず練習を再開させた。歩由美は渋々椅子を引きずって、夏樹のいる後列に入っていく。
「よろしくお願いします」
夏樹が敬語でそう言った。
「別に」
歩由美は顔を背けたまま言う。
「敬語じゃなくていいから」
「はい……」
「それも。はいもやめて」
「う、うん」
「とにかく、練習するよ。もう5時前なんだし」
「うん」
歩由美は椅子を近づけて座った。先ほどと同じロングトーンをするように夏樹に指示し、自分の電子メトロノームを出して夏樹の譜

面台の上に置いた。
「いい？　息はいっぱい吸えばいいってもんでもないの」
「うん」
「イメージではわかってるかもしれないけど。朝倉くんの場合、イメージと実際の動きが一致してないだけだと思う」
「そうかな……」
夏樹はしかめっ面をしながらいろいろ考えているようだ。歩由美はため息を漏らすと、楽器を置いた。
「ちょっと失礼」
そう言うなり、歩由美は夏樹の腰の辺りに手を当てた。
「うわ！　ちょ、堀江さん！？」
この光景に周りにいたみゆき、優輝、光瑠の3人も思わず楽器を置いて立ち上がった。騎士や雄飛も何か誤解をしているようで、顔を赤くしている。
「変な意味じゃないの！　はい、座って」
歩由美も少し顔を赤くしていた。
「わかった……」
夏樹はおとなしく座っておくことにした。
「とりあえず、私の最大の力で朝倉くんのおなか……ちょうど腰の骨の上辺り思い切り押すから」
「え？」
「行くよ！」
ギュウウウッ！と思い切り歩由美が夏樹の腹を押す。光瑠と優輝、みゆきの3人も経験者である雄飛たちも「あぁ、アレか！」と口々に言っていた。
「痛たたたたた！」
「これくらいどうってことないよ！　はい、この私の力を跳ね返すくらいの息吸って！」
「へ！？」
「おなかで息を吸うの！　これぐらい跳ね返す息を吸わなきゃダメ」

「わ、わかった」
夏樹はスーッと息を吸う。
「ダメだよ。肩が上がってる」
いつの間に来たのか、優輝が夏樹の右肩に手を置いた。
「無駄な力が入ってると、息もちゃんと吸えないからさ」
「はい」
「もう1回」
歩由美のカウントに合わせて夏樹が息を吸う。少しだけ、歩由美の手が跳ね返されるような感じになった。
「あ」
夏樹が呟く。
「なんとなくでも、わかった？」
「うん。なんとなくだけど」
歩由美が笑う。
「それだけでもいいの。感覚さえわかれば、後は練習だからね」
パッと歩由美が手を離した。
「じゃ、今の感覚忘れずに一緒にロングトーンしよう」
「うん」
二人が着席すると、周りも練習を再開した。音が鳴り出したのを確認するように、歩由美が呟いた。
「昨日は……ゴメンなさい」
「え？」
「私……も、歌川さんも、緒方くんも……最低なこと言ったと思う」
夏樹がニカッと笑った。
「いいよ」
「え？」
「今日のロングトーンと腹式呼吸教えてくれたので、チャラにする」
歩由美は目を丸くしながら尋ねる。
「歌川さんと緒方くんも？」
「うん」

「謝ってないのに？」
「もういいよ。俺、そんなグチグチ言うの嫌いだから。練習しよう」
夏樹はスッとサックスを構えた。
「ありがとう……」
歩由美のその呟きが夏樹に聞こえたのかどうかは、わからなかった。けれども、先ほどのロングトーンよりも確実に、二人の音は混ざり合っていた。

第３０３話　よっしゃ、来た！

「陽乃」
「ん……」
「着くで！　そろそろ着くで！」
「ホント！？」
陽乃が飛び起きると、そこから見える景色は見慣れた七海の市街地とはまったく違う景色だった。
翔たちは今日、愛媛県常套市立常套中学校が参加するスプリングコンサートを聴くために、はるばる神奈川県から愛媛県にやって来ていたのだ。メンバーは翔、陽乃、愛実、恵梨と常套中学の部員にゆかりのある生徒４人と、保護者である翔の母・友美子の合計５人だった。
「急ぐよ～！　バスの発車、９時２０分やからね！」
友美子に急かされて４人は急ぎ足で岡山駅構内を歩いていく。新幹線の到着が「のぞみ９９号」で岡山駅に９時６分に到着する。次のいよてつ高速バスが９時２０分に岡山駅を発車する。１４分しか乗り換えの時間がないのだ。
「なんとか間に合うたなぁ」
バスに乗車してから翔がホッと息をつく。
「なかなか時間的に厳しいものがありますね～」
恵梨も時計を見ながら安堵した表情を見せた。
「ま、とにかくバスに乗れば安心じゃないですか。先輩、演奏会は１４時からですよね？」
愛実が翔に聞く。
「うん」
「バスは松山駅前に何時に着くんですか？」
「１２時１５分や。会場までは市電に乗って行かなちょっと遠いからな。まぁ、昼ご飯食べる時間くらいは十分あるけど」

「やったー！　ね、エリリン、何食べる？」
「愛媛って何が名物だっけなぁ」
二人はガイドブックを引っ張り出してもう食べ物に夢中になっている。
「やっぱ、旅行に来たら食べ物とか気になるよね」
翔の隣で陽乃もガイドブックを開き始めた。
「なんやねん3人とも……。趣旨、変わってるやんけ」
翔が呆れた表情を見せた。
「気にならない？」
陽乃がガイドブックを翔にチラッと見せた。
「……なる」
「でしょー？　もう、素直じゃないんだから」
「やかましわ！」
翔は笑いながら一緒になってガイドブックを読み始めた。
出発から３０分もすると、あれだけ賑やかだった恵梨と愛実がスゥスゥと寝息を立て始めた。陽乃も隣で寝息を立てている。翔はというと、ｉＰｏｄで先ほどから真剣に音源を聴いていた。
（やっぱこの曲はやりたいなぁ）
翔が聴いているのはケネス・ヘスケス作曲の『Ｍａｓｑｕｅ』。仮面舞踏会を主題とした楽曲で、煌びやかでいてどこか怪しげな雰囲気を全体的に持った、２００１年の曲である。中間部で、陽乃が今も練習しているピッコロトランペット向けのソロがあった。トランペットでも演奏は可能だが、どうせならこの曲でも陽乃にピッコロトランペットを吹いて欲しいと思っていた。さらに、ほぼ全パートに一度はメロディがあるという点でも、翔はこの曲に関心を寄せていた。
（この曲もえぇんやけどな～）
続いて聴き始めたのは、マーク・キャンプハウス作曲の『ローザのための楽章』。冒頭でフルート、次にアルトサックスとバスーン、そして金管アンサンブルとソロやソリが目白押しである。ユーフォ

ニウムやホルンのソロもある。
（そうや。1部もいいけど3部の曲も候補挙げたいな～）
そうこうしているうちに、高速バスでの時間もあっという間に過ぎていった。
「着いたー！」
元気いっぱいな翔に引き換え、陽乃たちはまだ眠そうな目を擦っている。
「なんや～。あんだけバスで寝といて、まだ眠たいんか？」
「だって……。朝4時半起きなんだもーん……」
「しゃーないやっちゃな！　ほら、昼ご飯やで！」
「そ、そうだ！　あたしたち、食べたいのをいろいろ考えたのよ！」
陽乃がガイドブックを広げた。
「これよ、これ！」
「えぇ？　これはちょっと……」
翔が渋った顔を見せる。
「なんでよー？　美味しいのよ」
「いや……法律的に無理やろ」
「え？」
陽乃がガイドブックを見直すと、開かれていたのは地ビールのページ。
「アッハハ！　やだ、間違えた！　こっち、こっち！」
赤くなりつつ陽乃は次のページを開く。出てきたのは鯛めし、天ぷらうどん、そして母恵夢（ポエム）という3つの料理。母恵夢というのはお菓子である。
「おぉ！　美味そうやな！」
「でしょ？　今回はこれで決定よ！」
「よっしゃ！　ほな、この店近いし行こか！」
「おー！」
ガイドブックに書かれていた店に入ると、威勢の良いオバサンとおじさんが出迎えてくれた。早速料理を注文する。母恵夢こそ置い

ていないものの、鯛めしと天ぷらうどんは同時に食べることができた。

店を出てから隣にあった店で偶然母恵夢を発見したので購入し、今度は伊予鉄道の松山市内線と呼ばれる、路面電車に乗る。松山駅前で乗車し、南町で下車すると会場には一番近い。

「お」

翔が声を上げた。

「どうしたの？」

「南町からちょっと行ったら道後温泉近いやん」

「へぇ～！」

「混浴とかあんのかな？」

バシッと陽乃が翔の頭をガイドブックで叩いた。

「痛いなぁ！　何すんねん！」

「変なこと考えてんじゃないでしょうね？」

「考えてへんわ！　お前こそ、なんでそんな変なことに結びつけるねん！」

「あ、あたしは別にそんなねぇ！」

「はいはい！　やかましで二人とも！　いい加減にしなさい！」

友美子に制止される頃には、松山城の前をとっくに過ぎていた。

「着いたなー！」

ようやく到着した愛媛県県民文化会館。４０００人もの人数が収容可能なホールである。メインホールに３０００人、サブホールに１０００人である。

「でっけー！」

翔と陽乃は目の前のホールの大きさに目を丸くした。

「西日本最大級のホールだそうですよ」

恵梨が母恵夢を頬張りながら解説する。

「ほぇ～……」

「とりあえず、中に入りましょうか」

友美子に促されて、翔たちはホールの中に入る。

「広いしキレイし……。こんなところで演奏できるなんていいなぁ」
陽乃がホゥッとため息を漏らした。
「早く座っとこう！　座席なくなったら大変や」
「慌てんぼうなんやから」
友美子は苦笑いしながら翔を追っていく。
「どこから見るといいかな？」
「泰徳はチューバやから、舞台に向かってやと右手やけどな」
「でも、どうせなら全員見たい」
恵梨がワクワクした様子でキョロキョロと周囲を見渡す。
「じゃあ、真ん中の右寄りの辺りはどうですか？　竹林くんの顔も見えるし、他のみんなの表情も見えるし」
「それえぇな！　ほな、あそこらへんやな！」
「そうね。んじゃ、あそこにしましょ」
５人は着席して開演の時間を待つ。
「あっ！」
突然恵梨が声を上げた。
「どうしたん？」
「私、プレゼント持って来てたのに受付で出すの忘れた！」
「プレゼント？」
陽乃が首を傾げる。
「なんで？」
「お疲れ様っていう意味を込めて、渡すんです。私、ちょっと受付行ってきます！」
恵梨はバタバタと外へ出て行ってしまった。
「なるほどな～」
翔がメモ帳を取り出して何やらメモを取っている。
「何、そのメモ」
陽乃がチラッと覗き込むと、既にメモ帳にはビッシリいろんなことが書かれていた。
「わ！　すごーい！」

「定演の参考にするからな。いろいろメモさせてもらうねん」
「……あたしも何か書こうか？」
「お。そやな。見る人違ったら違う意見出てくるやろうし。頼むわ！」
「うん！」
陽乃もメモ帳を取り出し、いろいろとメモをし始める。間もなく恵梨が戻り、１０分ほどすると、開演５分前のブザーが鳴った。
「いよいよやな」
「うん。なんか、こっちまで緊張する」
「なんでやねん」
翔が笑って陽乃の頭をクシャクシャと撫でた。
「なんでだろうね」
クスッと笑い合うと、今度は照明が暗くなり、ブザーが鳴った。
「ただいまより、第２回　Ｓｐｒｉｎｇ　ｊｏｉｎｅｄ　Ｃｏｎｃｅｒｔ　第２部、愛媛県常套市立常套中学校吹奏楽部の部を開演いたします」
翔と陽乃、恵梨、愛実の表情がキラキラしたものへと変わっていく。いよいよ、舞台の幕開けだ。

第３０４話　『高度な技術への指標』

「いよいよ次やな～！」
常套中学校の演奏が始まって3曲目に差し掛かった。
「高度な技術への指標……これも知らないや」
陽乃はほとんどが初めて聞くようなタイトルの曲ばかりだったので、かなり新鮮なようだ。
「高度っていうくらいだし、難しいの？」
陽乃が愛実に聞く。
「そりゃあもう、バリバリですよ。先輩、最初から度肝抜かれると思います！」
「そんなになんだ！」
「シッ！　始まりますよ」
恵梨に注意されて陽乃と愛実は口を手で覆った。指揮棒が振り下ろされると同時に、陽乃の耳には鮮やかなハーモニーが響いてきた。
続いてトランペットのあまりに速すぎるメロディに、陽乃の目は点になっていた。
（トランペットってあんなに……指動くの？）
陽乃は自分の手を動かしてみた。この曲を吹かされれば、指が動く自信はほとんどない。それ以上に衝撃的だったのは、彼らが全員中学生であるという事実。雪子のお別れ会の時に、泰徳たちの技術を見てある程度はわかっていたものの、やはり面と向かって見せられると驚き以外の何物でもない。
しかも、立奏しているのだから、あれだけベルが上を向いていれば楽譜はほぼ暗譜ということになるのだろう。暗譜できるようになるには、相当前から練習していなければならない。
続いて、サックスとフルートが立ち上がった。サックスとフルートなどは木管なので指がスムーズに動くのは理解できるが、それにしてもスピードが半端なものではない。やがて、テンポが落ちてジ

ヤズのリズムに変わった。
　泰徳たちのチューバの音をベースに、ジャズスタイルのメロディが始まる。確かに「高度な」とタイトルにつけているだけあり、様々な演奏技法が凝縮されていた。トランペットのメロディを終えると、曲は雰囲気を変える。フルート、オーボエなど木管のメロディとホルンの対旋律が良いハーモニーを創りあげていた。時々聞こえるクラベスがまた、良い味を出していた。
　再度ジャズの雰囲気に変わる。そして音量が上がるとともに、奏者のテンションも上がっていく。そうしてドラムセットがテンポを上げて行き、冒頭のテンポに戻った。奏者に疲れの色があまり見られないのは、普段の練習の賜物であろう。
　木管楽器の指の動きがもう、目では追うことができないほどになった。そのままテンポが上がり続け、ティンパニの音でテンポが落ちた後、全員のロングトーンで曲は華やかに終わりを告げた。
「すっごーい！」
　拍手が起きる前に陽乃が立ち上がって拍手をし始めた。それに同調するように「ブラボー！」という声や周囲の人たちも陽乃と同じようにスタンディング・オーベーションをする人が出てきた。
「やめんかい！　恥ずかしいな！」
　翔はグイグイと陽乃の服を引っ張るが、彼女はまったく動こうとしない。
「いいじゃないの！　本当にすごかったんだもん！」
「ったく……」
　翔も諦めて陽乃の服を手放した。
　メモリーを終えると、次の曲が始まる。その前の司会者による曲紹介から既に、陽乃たち女子3人の目はキラキラ輝いていた。
「ど、どないしてん」
「だって～ディズニーだよ！？　あんなスゴい演奏聴かせてくれる団体のディズニー……楽しみじゃない人なんていないでしょ！」
「はぁ……そうでっか」

翔は3人のテンションの高さについていけないようで、フゥッとため息を漏らして背もたれにもたれた。
チャイムの音色が幻想的に響く。そして木管楽器のメロディが優しくホール内を包み込み始めた。
「ステキ……」
恵梨の目がもう打楽器に釘付けだ。意外と打楽器が活躍するのが、この曲であった。
「あ、誰か出てきた」
トロンボーン奏者だった。そして、ピンスポットが当たると同時に、ソロが始まった。
「……。」
タッチ交替というように、トランペットのソロが始まる。幻想的で、既に女子3人はディズニーの世界観を思い浮かべているのか、呆然としたような表情になっていた。
翔は泰徳のほうを一所懸命見ていた。幼なじみが演奏するのを見る機会というのは、今となってはもうずいぶん少なくなった。この機会は滅多にないことなので、泰徳の演奏している姿を目に焼き付けるつもりでいた。
曲が可愛らしいものへと変化する。この曲は小編成向けなので、少ない人数でも演奏が可能である。従って、人数が増えれば音は当然厚くなる。自由の利く曲といえるだろう。一気に短調に変わり、アップテンポになる。
「ミュートだ」
陽乃が呟いた。
「おもしろいですね！　ミュートひとつでも、あんな風に使えるんですね」
「メモしとこ！」
陽乃はメモ帳を取り出してそれからもいろんなことをメモしていく。
「あっ！」

愛実がそういうなり、前に釘付けになった。未来のユーフォニウムソロが始まるのだ。後ろでは泰徳と美奈がしっかりとした音で未来を支え、相打ちのようにビヴラフォンが鳴り響いていた。

「ステキ～……。ウチのバスパでもこんな風に演奏できたらなぁ～」

今の状態はまだちょっといっぱいいっぱいな感じが正直なところしていたので、このような音色は愛実の憧れでもあった。

調が変化し、トランペットソロが始まる。

「もう完全にディズニーランドに来た気分……」

陽乃はトランペットの音色にメロメロになっていた。

「確かにこのペットはヤバいな」

翔も認める、完全な音色だった。曲は次第に盛り上がりを見せ、ティンパニの打ち込みの後には綺麗なエスの調のロングトーンが響き渡った。

最後の曲である『エル・クンバンチェロ』が終わった頃には、盛り上がりすぎた陽乃、愛実、恵梨の3人はすっかりグッタリしていた。

「おぉい！　今からまだ帰らんとアカンねんぞ？」

「えぇ～……！　もう帰るの明日でいいんじゃないの？」

「アホ言うな！　ほれ、立った立った！」

「え？　もう帰るの？」

「そんなわけないやろ！　ほれ、行くで行くで！」

「行くってどこへ……あ、ちょっとぉ！」

「母さんは表で待っとって～」

「はいはい」

陽乃たちは翔の後を追って客席を駆け上がり、ロビーに出た。そのまま入口を出て、裏手のほうへと駆け込んでいく。

「どこ行くの!?　いま、関係者以外立入禁止って看板あったけど？」

「大丈夫。立派な関係者や！」

そのまま翔の後を追っていくと、楽屋入口という看板が陽乃の目

に映った。置いてきぼりを喰らわないよう、陽乃は必死で翔の後を追う。
「ここや」
「ここって……いいの？」
「アイツが来ていい言うたからな」
翔はドアをノックする。
「はい？」
アルトサックスを構えた女子が出てきた。
「あ！　え、す、すんません間違えました！　ここ女子ですよね？」
「そうですが……あの……」
「失礼しました！」
翔はペコリとお辞儀をすると、隣のドアをノックする。しばらくすると「ゲッ！　かける！」という泰徳の声が聞こえてきた。
「あの……」
陽乃は戸惑っている女の子の名札を見た。浜口と書かれている。
「すみません、突然。あたしたち、神奈川県の七海市立七海高校吹奏楽部の者です」
「あ……やっぱり」
愛が笑顔になった。
「どこかでお会いしましたか？」
「いえ。うちの竹林から、先ほどのサックスの方や皆さんのお話、少し聞いたことがあるので。ひょっとして……加藤さんですか？」
「いえ。加藤は彼女です」
「あ、ちょっと待ってくださいね。未来～！　加藤さんだよ！」
「え！　メグ！　来てくれたの！？」
未来が愛実に飛びついてきた。その後ろで恵梨がそっと中を覗く。
「じゃあ……どちらか、秦野さんですか？」
「あ、秦野はこっちです」
「なるほど。美奈～！　秦野さん、来られたよ！」
「ホント！？　わー！　エリリン～！」

今度は美奈が恵梨に飛びついてきた。陽乃は微笑ましそうに二人の様子を見守っている。

「あ……もしかして、朝倉さんですか？」

「あたしのことも知ってるの？」

「はい！　竹林くんが、佐野さんとラ・ブ・ラ・ブ！の人がいるって聞いてたんです！」

「やっ、やだ……！」

陽乃の顔が赤くなる。

「それに、ウチの部員で一度朝倉さんに会いたいって人がいたんで。会っていただけますか？」

「あたしに！？」

「はい！　ねぇ、里奈（りな）！　静香（しずか）！　白石（しらいし）くん！　朝倉さんも来られてるよ～！」

「ホント！？」

女子のダブッた声が聞こえてきた。

「すぐ行く！」

男子の声も聞こえ、ほどなくして陽乃を3人が取り囲んだ。陽乃は戸惑いつつも、自己紹介をしてからしばらくいろんな雑談をしていた。

「本当に今日はありがとう」

泰徳、未来、美奈の3人が見送りにホールの外へ出てきた。

「いやいや。立石先生にもお礼、言いたかったけど……お忙しそうやったし、ちょっと今日はやめとく。また、東先生によぉ言うといてもらうわ」

「うん。見送りここまでで、悪いけど」

泰徳が俯き加減で翔のほうを見た。

「何を言うとんねん！　オレらが勝手に演奏会聴きたい言うて無理やり来ただけ！　泰徳らは、オレらに立派な演奏聴かせてくれたから、もう十分やで」

翔はクシャクシャと泰徳の頭を撫でた。
「やめろよ、バカ！」
「バカとはなんや！　関西人はバカは一番傷つくんやぞ！」
「うっせ、バーカ！」
陽乃たちは二人のやり取りを見て大笑いする。
「ちょっと！　バスの時間ギリギリやで！」
友美子に急かされて、陽乃以外の3人は別れの時間を迎えていた。
「ほな……」
「明日も来いよ！　絶対」
「おう。愛媛、食いモン美味いの多いしな！」
「最後にそれかよ……」
泰徳は苦笑いしながら愛実と未来のほうを見た。
「！」
なんと抱き合っているではないか。
「お、おいおいちょっとちょっと！」
泰徳が慌てて二人を引き離そうとする。
「何よ～！　いま、ハグっていうの流行ってるっていうから、ちょっと試してみただけよ」
「あのなぁ！　公衆の面前でそういうことするなよ！」
「泰徳って相変わらずかったーい」
未来の言葉に泰徳がちょっとムッとした顔を向けた。
「こら」
翔が泰徳の体を小突いた。
「なんだよ」
「女の子にはもっと優しい表情（かお）せんかい」
「お前みたいに八方美人じゃないからな」
「なんやと！？」
恵梨と美奈はその様子を見て笑い合っていた。
「じゃーな！　またな～！」
バスに乗る直前まで翔は泰徳たちに手を振り続けた。やがて、バ

スが発車し、泰徳たちが次第に見えなくなっていった。
「なんていうか……あっという間だったね」
陽乃がバスの中で呟いた。
「せやな……」
「ね！」
陽乃が恵梨たちにも声をかけた。
「あたしたちが定期演奏会をすることになったら、今度は逆に神奈川に来てもらおうよ！」
「そりゃ絶対ですよ！　あたしも招待しちゃいます！」
恵梨が手を挙げて賛同する。
「私も～！」
「ほな、オレも！」
バスの中に４人の元気な声が響き渡る。愛媛が神奈川よりも少し遅い夕暮れに染まっていく中、バスは松山駅に向かって走っていった。

第３０５話　ぐらつく自信

「そういえば……」
泰徳が思い出したように言った。
「どうしたの？」
未来が聞く。
「今日の演奏会……本堂さんも来るって言ってたのに……来なかったな」
「そういえばそうね」
美奈も思い出したように呟いた。
「なんでだろ？　来ない理由なんてない気がするのに」
「それはこっちの勝手な主観で考えてるだけだろ。ひょっとしたら、体調崩したのかもしれないし」
「でも、佐野さん全然本堂さんの話しなかったね」
未来が鋭く指摘する。
「そういえば……そうだな」
「なんかあったのかなぁ……」
「それはそれで、七海（むこう）の問題だし、俺たちが首突っ込むことでもないんじゃないか」
「そう言ってしまえば簡単だけど……」
美奈が俯きながら呟く。
同じ頃、翔は携帯電話をジッと見つめていた。
「誰かとメールとかしてるの？」
陽乃が笑顔で聞く。
「あぁ。ちょっとな」
「ふーん……」
翔がハッと気づいたように顔を上げた。
「な、何？」
「言うとくけど、女の子ちゃうからな！」

「バッ、バカじゃないの？」
陽乃は赤くなってプイッと横を向いた。翔はクスッと笑った後、再び携帯電話に視線を戻した。
話は5月1日に戻る。
「かける」
翔がその日、部活へ行くと既に拓真が部室で待っていた。
「オーッス！　早いやんけ」
翔はカバンを置いて早速楽器を出そうとした。しかし、その手を拓真が止める。
「ちょっと話があるんだ」
「え？　話？　なんや？」
「ここじゃちょっと……」
拓真はチラッと視線を移した。特に二人のやり取りには気づいていないようだが、勇、洋之、佳菜など2年生数名と歩由美、綾音など1年生数名が既に部活へ来ていた。
「話しにくいんか？
翔も拓真に耳打ちすると、拓真は小さくうなずいた。
「ほな、移動しよう」
翔はそっと部室を出た。拓真も後を追って部室を出る。
「あれ？」
その声に二人はギクッと体を震わせた。
「どうしたの？　今日はずいぶん二人とも早いね」
振り向くと、美里がいた。
「何、その微妙な顔は。あたしに会って何かマズいわけ？」
「いや……」
拓真が表情を曇らせる。それを見て美里も何かを察知したようで、うん、とうなずいた。
「男同士の話ってわけね。了解」
「おい、田中っち」
「だーいじょうぶよ。もうすぐ陽ちゃん来るし、なんとかしとく。

行ってらっしゃい～」
美里はヒラヒラと手を振りながら部室へと入って行く。
「……ま、任せとこか」
「うん」
その後、翔たちは吹奏楽部が倉庫として使っている階段を上がって行き、屋上のドアを開けた。この階段と屋上を繋ぐ鍵は翔たちが部活を始めた頃から既にバカになっており、自由に出入りができる。このことを知っているのは吹奏楽部の部員だけなので、通常立ち入り禁止の屋上で時々、こうして話をしたり弁当を食べたりしている。もちろん、先生たちに見つからないよう、校庭側の柵に近づいたりはできない。
「ほんで？　話ってなんや？」
「うん……」
拓真はしばらく黙り込んでしまった。校庭からは運動部の元気な掛け声や号令が聞こえてくる。間もなくすると、トロンボーンの音出しの音や、スネアドラムの音が響き始めた。
「言いにくいことか？」
「ん……」
拓真がうなずいた。
「でもオレくらいにしか言われへんことやろ？」
「うん」
「ほな、言うてくれたらいい。気軽に、はい！」
「ありがとう……」
拓真はそれからボソッと呟いた。
「俺……副部長する自信がちょっと……無くなってきた」
「え？　なんで？」
拓真はフゥッとため息を漏らす。
「俺、後輩……特に1年生にあまり慕われてない気がしてさ」
「なんでそう思うわけ？」
「だって、朝倉さんとかカケルを見てたら、1年生も初対面に近い

のに、和気あいあいとしてるのに、俺にはなんか妙な壁を作ってるっていうか、よそよそしい感じがしてさ」

「……。」

これが相手が美里や陽乃なら冗談のひとつでも言って背中を叩くのだが、相手は拓真だ。何かといろんなことを深く考える傾向のある拓真に、冗談で言ってその後にアドバイスをするというのは不向きだと翔は考えた。

だからといって、その代わりに自分が何かできるかと聞かれると、こうして悩んでしまう。

「ゴメン……こんなこと、俺が自分で考えないとダメだよな」

「あ……で、でも」

「いいよ。貴重な練習時間割かせてゴメン」

「拓あん……」

「戻ろう」

翔は何も言えなかった自分にもどかしさを感じながら、バタンとドアが閉まる音だけを聞いていた。

「ただーいま」

拓真はいつものように帰宅した。

「おかえり、拓真」

「うん」

「ご飯？　それともお風呂？」

「先に風呂入るよ」

「沸いてるから、いつでもどうぞ」

「うん」

拓真は笑顔で応え、2階の自室へと上がった。着替える間にパソコンのスイッチを入れる。最近、拓真はブログを始めた。元々はそんなものに関心はなかったのだが、インターネット上の掲示板『ブラス吹きの掲示板』で知り合った年下のトランペッター、ハンドルネーム『爆音ペッター』という子に誘われてブログを開設したとい

うわけである。
　拓真自身は自覚していないが、彼は現代文の成績も基本的に5を取るほどなので、文章が上手い。そのため、ブログにも開設してまだ2週間弱というのに、爆音ペッター君以外に読者が7人もついていた。爆音ペッター君を含めると8人。拓真はそれだけで既に驚いていた。アメーバというブログサイトで拓真は「入道雲のつぶやき」というブログを開設している。入道雲は、大きな自分の体格を比比喩して名づけたものだった。
　拓真は翔に相談する前に、呟きのような感じで既にブログに悩みを投稿していたのだ。そして、思い切って翔に相談したのだが、やはり回答は得られなかった。そもそも、応えられる前に自分でそれを断ち切ってしまった感じもしていた。
　拓真は昨日投稿したブログの画面を開いてみる。

＝＝＝

俺、元々そんなに明るいほうではないし、背もデカいから威圧感とかがあるのかな～……。最近は親しみやすくなったって思ってたけど、勘違いか何かなのかもしれないな（涙）

あー！　こんなウジウジした自分が大嫌いだ！！

記事ＵＲＬ　コメント

（３）　ペタ

ーーー

黒部のトランペット　２００７－０４－３０　１９：１９
＜＜このコメントに返信
－－－

「……よし」
拓真は小さくうなずき、すぐにコメントを返した。

ーーー

自分で決めた。拓真の目は、しっかりと次の自分に向かっているような輝きを見せていた。

第３０６話　ぶち破れ！

『え！？　コンサート行くの、やめたんですか！？』

電話の相手である爆音ペッターこと、島根県桜田市立桜田中央高等学校吹奏楽部のトランペッター・三上（みかみ）　庄吾（しょうご）が大声を上げた。

ハンドルネーム・爆音ペッターは『ブラス吹きの掲示板』で拓真が知り合った、島根県のトランペット吹きである。副部長である点、背が高い点など共通点が多く、話が合い、いつの間にかブログを始め、そうこうしているうちに電話番号とメールアドレスを交換し、こうしてたまにやり取りをするまでの仲になっていた。

「やめた」

『な、なんでですか？　だって、すっごい楽しみにしてるってこないだブログに……』

庄吾の焦りようは並ではない。

「俺、決めたんだ」

拓真が語気を強めた。

『何をですか？』

「自分を変えるって」

その言葉を聞いた途端、庄吾の応答が途絶えた。

「俺、自分の殻を破る。今日、部長も、俺の代わりに演奏会に行くもう一人の副部長も、いないから……俺はこの日をチャンスって決めたんだ。俺は、もう逃げない」

『……。』

庄吾はまだ何も言わない。

「俺、自分を変えるって決めた。吹奏楽部に入って多少は変わったけど、俺、もっと変わりたい」

『……。』

「お前も」

庄吾がハッとする。
「変わりたくない？」
『……。』
「どう？」
庄吾はクスッと笑った。
『変わりたいです！』
「……じゃあ、今日中に自分がどれだけ変われるか競争だ！」
『おもしろいですね！』
「よーい……ドン！」
拓真と庄吾はそれを合図に電話を切った。
拓真は電話を切り終えると、気合いを入れて早速部室に向かった。
しかし、部室はまだ開いていない。
「俺が一番か……」
拓真は仕方がないので職員室に鍵を取りに行くことにした。廊下を歩き、階段を降りたところで流と騎士、雄飛に出くわした。
「あ」
騎士の表情が固まる。
「おはようございます」
雄飛と流が固い挨拶をする。ここでいつもの拓真なら「おはようございます」と丁寧に返すのだが、今日からそれはやめることに決めていた。
「おはよっ！」
「お、おはようございます……」
呆気に取られる流たち。
「あ、先輩。鍵開いてないんですか？」
雄飛がスッと職員室のほうへ向かった。
「鍵持って行くんで、先に音楽室に……うわぁ！？」
拓真が職員室のドアを塞ぐ。
「俺が鍵、持ってく！」
「いいですよ！　先輩にそんなことしていただかなくても……」

「いい！　俺が行く！」
「もう！　頑固なんですね先輩って意外と！」
その後5分ほど小競り合いを繰り広げながら、職員室の中に入る拓真と流。雄飛と騎士がハラハラした様子で2人を見守っていた。
職員室には偶然にも、まだ先生がいなかった。いたところで、必死になっている拓真と流は気づくこともなかったようにも思われたが、とにかく先生がいないことは雄飛たちにとって幸いだった。
「いーじゃないですか、鍵くらい！　なんでそんなにヤケになるんですか！？」
「なってないよ！　鍵、副部長だから持ってくって言ってるだけじゃん！」
相変わらず続く小競り合い。鍵を巡ってここまで争える高校生もそういないだろう。
「はーなーせー！」
「いーやーでーす……わあああ！？」
「おわ！？」
なんと鍵の紐がちぎれ、そのまま拓真は書類が山積みになった机に、流はお茶菓子などが乗った棚にそれぞれ少し頭をぶつけた。
「わあああ！」
拓真の上にバランスを崩した書類が降り注いできた。流の上には同じくバランスを崩し、倒れた湯のみからお茶が降り注いでいた。
「……プッ」
「あはははは！　先輩、顔しか出てないし！」
「お前こそ髪の毛ペッタンコ！」
雄飛と騎士も釣られて笑う。その直後、入ってきた恭一に怒鳴られたのは言うまでもない。

同じ頃、庄吾は庄吾で激しい争いを繰り広げていた。
「ちょっとー！　なんで今日はそんなに頑張ろうとするわけ！？意味わかんない！」

桜田中央高校吹奏楽部部長の中島（なかじま）　唯（ゆい）が大声を上げながらその人物――三上　庄吾を追いかけていた。
「だからー！　副部長だし男だし、俺が全部持ってってやるって言ってんの！」
「意味わかんない！　一人で持って行ける量じゃないでしょ！？」
唯が怒るのも無理はなかった。高さ６０センチほどに積み上げられた、新しい楽譜の山。吹奏楽部の顧問である西村先生から唯が預かった楽譜である。それを小分けにして持っていこうと考えていた矢先、こうして庄吾が入ってくるなり全部を持って出てしまったのだ。
「平気、平気！　もう少しで部室だし！」
庄吾は余裕をかましながら階段を上がっていく。
「あ……」
庄吾たちが部室に近づいた頃、同じ吹奏楽部でチューバ奏者の西（にし）掛（かけ）　先斗（さきと）が一人呟いていた。
「教室に楽譜忘れた」
真面目な先斗は休憩時間などに楽譜を見ながら、曲のイメージを作ることをよくやっていた。
「取ってこないと」
部室を出て扉を開けたときだった。
「うわ！？」
ただでさえ背の高い庄吾がさらに背の高い楽譜の入った封筒を持って目の前に立っていたのだ。そうとも知らずにドアが開いたのをいいことに入ってきた庄吾と先斗がぶつかって、バランスを崩した楽譜の入った封筒が床に見事に落ちていった。
「きゃー！」
それを見たアルトクラリネットの東（あずま）　茜（あかね）やバリトンサックスの進（しん）藤（どう）　慶太（けいた）、フルートの坂根（さかね）　美香（みか）が悲鳴を上げる。
「もぉ～！　バカァ！」
唯の怒鳴り声が部室に響き渡った。

「ったく～……お前のせいで怒られたじゃんかよ」
拓真がブツブツ言いながら流、雄飛、騎士と廊下を歩いていく。
「よく言いますよ、そんなこと。元はと言えば、先輩が変に意地っ張りだからダメなんですよ」
「え!?　俺意地っ張り!?」
拓真が目を丸くする。
「自覚ないんですか!?」
流はもっと目を丸くした。
「そんなの全然ない……」
「はぁ～……ビックリさせないでくださいよ」
流はため息をついた。
「でもま、意地っ張りじゃないと副部長なんて務まらないですよ!」
雄飛が笑いながら拓真の背中をトントンと押した。
「え?」
「どうしました?」
「いや……。俺、なんとなく自分で副部長向いてないかなぁとか思ってたから、ちょっと嬉しい」
「……。」
ポカンとした表情を浮かべる3人。
「どした?」
「いえ……。行きましょう」
流が先を歩き出す。慌てて雄飛と騎士が後を追った。
(俺……またマズいこと言ったかな～)
トボトボと歩き始める拓真。外では鳥の鳴き声が心地よく響いていた。

楽譜が散乱した桜田中央高校の吹奏楽部部室。
「もう!　楽譜ムチャクチャじゃない!」
唯がプリプリしながら楽譜を揃える。

「ゴメンって……」
「知らない！　早く拾ってよ」
庄吾は失敗した、と思いながら楽譜を拾い集めていた。
「おい、庄吾」
先斗が楽譜を拾いながら庄吾を呼ぶ。
「うん？」
「お前……まさか、副部長らしいこととしようとか思ってこんなことしてるのか？」
「バレた？」
苦笑いする庄吾。先斗はヤレヤレ、とでも言いたそうな表情を浮かべた。
「なんだよ先斗、その顔」
「別に」
先斗はフイッと顔を背け、楽譜を拾い続けた。
「やっと終わった……」
その時だった。放送が入り、京の声が聞こえてきた。
「吹奏楽部部長、中島さん。至急職員室まで」
「あ。呼ばれた。行ってこなきゃ」
唯は立ち上がり、部室を出ようとする。
（また部長だけか……）
「あ、そうだ」
唯が顔を覗かせる。
「ねぇ、副部長」
「え？」
庄吾はキョロキョロと辺りを見渡した。
「もう！」
唯がズカズカと部室に戻ってきて、目の前で言った。
「しっかりして、副部長の三上　庄吾くん！」
そのやり取りを見ていた全員が大笑いする。
「あ、はいはい。なんですか、部長さん」

「悪いんだけど、この新しい楽譜でどの曲を演奏したいかアンケート、取っておいてくれない？」
「お、俺が？」
「だって、副部長でしょ？」
先斗が笑う。
「部長と副部長が仕切らなくてどうするんだよ」
「うん……」
「そういうわけで、しっかり……」
突然、庄吾がポロポロと大粒の涙をこぼし始めた。
「えぇ！？　ちょ、ちょっと！」
唯が慌てて庄吾の顔を覗きこむ。
「なんで泣くの？」
美香が心配そうに聞くと、庄吾は笑顔で答えた。
「嬉し泣き」

その日、部活を終えた七海高校吹奏楽部の部室で拓真は一人、窓から夕焼けを見て一人感傷に浸っていた。
部長の翔と副部長の陽乃が不在だったこの日、思っていた以上に1年生と親しくなれたのだ。特に、それまで接点の少なかった1年生女子が昼休みに一緒にお弁当食べませんか？と来た時には目が点になった。稚沙希にまゆ、歩由美、麻衣子の４人が拓真を囲んで昼食を食べる光景。それを春樹や慎也がニヤニヤ笑いながら見ている状態が、拓真にはかなり違和感があった。
「先輩、前から話してみたかったんです」
稚沙希がニコニコ笑顔で言った。
「そうそう！　固そうに見えるけど、意外とおもしろいんですよね、先輩の言葉って要所要所で」
「俺は普通に喋って生きてるんだけど……」
「アハハ！　だから先輩、そういうトコが面白いんですよ～！」
「そ、そうかな」

拓真は照れ笑いを浮かべる。ふと、麻衣子が言った言葉が拓真の揺らいでいた自信を立て直した。
「やっぱり、副部長は朝倉さんみたいな明るく活動的でサバサバした人と、本堂さんみたいにシッカリしてるけど、普段はおもしろい人がピッタリだね」
「うん！」
まゆが同意する。
「私、前から本堂先輩に相談したいことがあって……」
突然稚沙希が告白する。
「えー！　あ、分かった！　アレでしょ、アレ！」
「アレって？」
「もう！　本堂先輩、そんなトコ食いつかなくていいです！」
ギャーギャーと大騒ぎする拓真たちを見て、美里が「何も悩むことなんてなかったのに」と言った。
そんな昼休みを思い返しながら拓真は携帯電話を取り出し、庄吾に発信する。
「もしもし」
『あ、本堂先輩！　お疲れ様です！』
元気な庄吾の声が返ってくる。
「その様子だと……殻、破れた？」
『いえ！』
拓真はずっこけそうになった。
「じゃあなんでそんなに明るいわけ？」
『殻破りじゃなくて、空回りでした』
「どういうことだよ？」
『俺……中島さんって子が部長やってるんですけど、彼女がいるから副部長の俺、正直いらないんじゃないかって思ってたんですよ』
それは拓真も同じ思いであった。リーダーシップのある翔、いろいろと気の利く陽乃。２人で十分ではないかと思っていたが、今日の後輩たちの話を聞いていると、自分の存在もそう捨てたものでは

ないと感じることができたのだ。
『でも、そうじゃないんですよね』
庄吾の声が、少し静かになった。でもそれは、決して暗いからではなかった。
「いる意味のない人なんていない」
拓真は小さく呟いた。
『……ですね』
庄吾もそっと返す。
「俺、頑張るよ」
拓真は言った。
『はい』
庄吾も短く応えた。しかし、その返事は何か強いものが秘められていた。
「……いつか」
拓真は笑顔で言った。
「逢いたいな」
『ですね。いつか』
「笑顔で」
『はい！』
「じゃ……これからお互い大変だろうけど、頑張ろう」
『はい！』
「じゃあな」
『失礼します！』
拓真は電話が切れたのを確認してから、再度発信する。相手先は「かける」。
「もしもし？」
陽気な関西弁が聞こえてきた。拓真は優しい表情で今日あった出来事を、翔にすべて伝えるつもりでいた。

第３０７話　パート間の温度差

５月４日。七海高校吹奏楽部は明日のこどもの日の本番に向けて合奏を午後から実施予定だった。恭一が来る前に、全員でロングトーンをする。

金管セクションリーダーである慎也が今日はロングトーンを仕切ることになった。

「それじゃあ、全員でベーの音階を８拍４拍でください」

「はい！」

「５、６、７、８」

伸びやかな音が音楽室に響き渡る。優のスネアドラムと洋之のバスドラムが前打ちと後打ちを担当し、そのリズムに合わせて全員がキッチリと音の始まりと終わりを吹きこなしていく。その音の始まりと終わりは綺麗であるものの、微妙な音程のずれが先ほどから慎也には気になっていた。

そのロングトーンを終えた後、慎也は言った。

「とりあえず、今度はパートごとにロングローンします」

「はい！」

「じゃあ、まずピッコロ、フルート、オーボエ、バスーンからお願いします」

「はい！」

佳菜、沙希、由美子、健之佑、まゆ、誠の６人でのロングトーン。ダブルリード楽器でも特にオーボエは音程が取りにくい楽器である。ギネスブックにも正式に載っている、世界で一番難しい木管楽器である。そのため、沙希は音程のズレを少しでもなくすために、合奏の有無を問わず必ず最低１５分はパートでロングトーンの時間を取っていた。

そのかいあってか、ほとんど音程のズレはなく、綺麗な音程で吹

き終えることができた。
「OK。じゃあ次はクラリネット」
「はい！」
クラリネットは絵美、みゆき、光瑠、優輝、麻衣子、歩由美、騎士、雄飛、なぎさのベークラリネットと菘のアルトクラリネット、そして駿のバスクラリネットで構成されている。
慎也の合図に合わせて、全員がロングトーンを始める。
「……。」
確かに音質こそ似通っているものの、どこか微妙な音程のズレがあった。吹いている側にはわからない、本当に微妙なズレだった。
「次、サックス」
「はい！」
アルトサックス４名、テナーサックス２名、バリトンサックス１名。サックスパートは平均３０分ロングトーンをしている。初心者の夏樹は少しまだ音程が揺れるようで、時々、出だしや終わりの音程が乱れはするものの、全体としては安定していた。
「ホルン」
「はい！」
ホルンはギネスブックにも載っている、世界一難しい金管楽器である。音程も取りにくいため、初心者である杏はロングトーンでもいっぱいいっぱいどころか、まだ１ヶ月少々では音もマトモに出せないようだった。
「保田さんは、ちょっと休んでて」
「は、はい……」
杏は首を傾げつつ、順平や賢治の様子を見守っていた。杏が抜けると、だいぶ音程が安定した。
その後、トランペット、トロンボーン、ユーフォ・チューバ・弦バスという順番でロングトーンが進んでいった。全パートがロングトーンを終えると、慎也が渋い顔をしていた。
「パートごとで、きっちり音程が合ってるパートとそうでないパー

トで、差があると思う」
　あまりにもハッキリと慎也が言ったので、薄々勘付いていた翔はドキッとした。夏樹がいる分、サックスパートではロングトーンに時間を割いてきたつもりだった。しかし、まだ音程が上手く合わないのが正直なところである。
「聞きたいんだけど。はしもっちゃん」
「え？」
「クラリネット、ロングトーンの時間はどれくらいかけてる？」
「ウチのパートは……まぁ、全体でするのは１０分くらいかな」
「次。サックス」
「あ、あぁ。ウチは最低３０分や」
「そ。次、ホルン」
　順平がビクッと体を震わせた。
「ビビらなくていいから。答えて」
「にっ、２０分から３０分くらいです」
「了解。チューバ・ユーフォ・弦バスは？」
「１時間……かな」
　拓真の言葉に全員がザワつく。
「１時間って……長すぎない？」
　由美子が独り言のように言う。
「フルートは？」
　沙希が答えた。
「ウチはムラがあるけど……短い時は個人で済ませて、全員ではしないこともあるわ」
「……そうか」
　慎也は不服そうに言う。
「あのさぁ～……パートごとでロングトーンしようって言う話は、前、全体会議で決めたよな？」
　全員がうなずく。
「でもさ。チューバみたいに１時間してるとこもあれば、パートで

ロングトーンすらしてないところもあるじゃん。こんなに、ムラがあっていいもん？」

「……。」

「コンクールってさ、全員で音合わせてナンボのもんじゃないの？　同じ曲を吹くのに、チューバみたいにロングトーンしっかりして、基礎しっかりさせてるパートもあれば、フルートみたいに個人練習で済ませるとこもあって……ムラできる気がする、このままじゃ」

「ちょっと待ってよ」

沙希が気に入らなさそうに立ち上がって言った。

「それじゃまるで、私たちが練習サボッてるみたいな言い方じゃない！」

「誰もそんな言い方してねぇじゃん」

「そんな風に聞こえた！」

「それは聞き取り方次第じゃねぇの？」

慎也もムスッとした様子で答える。それが絵美をも腹立たせた。

「そうよ。私もその言い方、気に入らない」

周りにいる1、2年生は気まずそうな顔をしている。

「言わせてもらうけど、私たちだって練習頑張ってるわよ。今度の自由曲、聴いたでしょ？　大天使ミカエルの楽章、最初聴いた？　あれね、私たち、バイオリンとかの代わりのパッセージ吹いてるの。あの細かい音符、どれだけ指回すの大変かわかる？　金管は音量いるけど、そんなにパッセージは難しくないじゃない。私たちは、パッセージの練習のほうが大事なの！」

「なんだよその言い方！　俺たちのほうがやってること単純って言いたいのか！？」

慎也がいきり立った様子で立ち上がった。

「チューバやユーフォ、どんだけ音デカいのがいると思ってるんだよ！　音程が合ってないと、あんだけデカい音出したって何にもならねぇんだよ。ロングトーンしなきゃ、話になんねぇんだよ！　ロングトーンあっての次の話だろ！」

「えぇ加減にせぇや！」
翔が大声で叫んだ。一気に音楽室が静まり返る。
「なんやねん、お前ら！　自分の主張ばっかりして。こんな状態で今から合奏やったって、しっちゃかめっちゃかに決まっとる！　えぇ加減にしてくれ！」
「……。」
「……。」
滅多に怒ることのない翔が怒鳴り散らしたので、慎也、絵美、沙希だけでなく陽乃や美里、1、2年生と全員が驚いて目を丸くしていた。
「まず、慎也の言い分はわかった。話したよな？　全員でこないだ。ロングトーン、最低でも15分は各パートでするってこと。それを守ってないフルートとかクラリネットは問題やったと思う。それは認めて」
「わかった……」
沙希が小さくうなずく。
「ただ、慎也だけやなくって、金管楽器全員にわかってほしい。クラリネットとかフルートは、金管の人たちとは比べ物にならんぐらい、速い指の動きして……めっちゃ速いパッセージ吹いとんねん。それは、わかって？」
金管のメンバーが小さくうなずいた。
「木管のメンバーは……パッセージとか大変なんわかるけど、やっぱり基礎練習はすべての基礎になるってこと、忘れんといてほしい。教会のステンドグラスでは、エジプトへの逃避もあるやろ？　あそこ、やっぱり音程が合ってないと木管楽器もヤバいからさ。そこらへん、注意せなアカンと思うわやっぱり」
「はい……」
稚沙希だけが小さく答えた。
「とにかく。人数の多い少ないもあって、必ずしもロングトーン時には全員が集まられへんかもしれへん。それでも、各パート15分

はロングトーンを揃ってる、揃ってない別にしてパート長は責任持ってやってください」

「はい！」

「それから。今日みたいに他人（ひと）のこと考えんと、自分の主張ばっかり押し通そうとするのはやめてください。部の雰囲気悪くなるし、何よりそんなことではいい演奏できへんなると思うから」

「はい！」

「んじゃ、慎也。続きヨロシク」

「ん……じゃあ、次はエフの音階８拍４拍で」

慎也は指揮台にある椅子に座りなおし、そう指示した。

第３０８話　小細工なんていらない

５月５日、こどもの日。この日は市内にある渡会（わたらい）幼稚園で、こども祭が行われていた。その幼稚園に一番近い七海高校は、おまつりの実行委員会から是非に演奏をしてほしいと要請されていたため、出演することになっていた。

他にも風見台高校、大海中学校など市内の中学・高校が出演していたものの、七海高校はなんとトリを任されていたのだ。

けれども、控え室として提供された部屋では、部員たちは比較的リラックスしていた。

「えらい気楽やんけ」

翔がお手洗いから帰ると、慎也と春樹が地べたに座って話し込んでいた。

「ん？」

慎也がようやく翔のほうを見た。春樹が引き取る。

「だってさ。小さい子相手だろ？　そこまで緊張することじゃないじゃん」

「そうそう～」

どこかの屋台で買って来た焼き鳥を頬張りながら、美里が近づいてくる。

「小さい子相手の曲目を選んできらんらしさー」

「モノ食いながら喋んなや！　汚いな！」

翔は露骨に嫌がりながら美里から離れる。

「だいたいな～、お前ら駿とか見習えや！」

「逢沢くん？」

美里が駿のほうを見る。

「おう」

「どういう風に？」

「見てみ。本番前でもあぁやって、音源聴いてイメージ膨らませとんやで！」
「どれどれ？」
慎也がパッと駿のはめていたイヤフォンを取ると、駿が恥ずかしそうに「あっ！」と声を上げた。
「カケル～、残念！」
慎也がニヤニヤ笑いながらそう言った。
「何がや？」
「駿が聴いてるの、いきものがかりだよ」
真っ赤になる駿の目の前で、翔はガックリと肩を落とした。
「まぁまぁ、いいじゃないの」
陽乃が笑いながら傍にやって来る。
「きっと、頑張ればこどもたちだって楽しんでくれるよ」
「アカンな～」
翔はフゥッとため息を漏らした。
「何がダメなのよ？」
「えぇか？」
翔がビッと人差し指を立てた。翔がこれをすると、薀蓄を垂れる前兆だと陽乃はもう覚えている。
「子供は純粋や」
その言葉に、部員たちが大笑いし始めた。
「何がおもろいねん！？」
「だ、だって当たり前のことを……あー！　おかしい！」
沙希がおなかを抱えて爆笑する。
「失礼なヤツらが揃っとんな、この部は！」
翔は真っ赤になりながら大声で続けた。
「とにかく！　俺たちみたいなもう子供の純粋な心なくしかけてる年のヤツらが、あぁいう純粋な子らに演奏を聴かせるときは、余計な小細工いらんねん！」
「小細工？」

好美が首を傾げる。
「そう。小細工。一般のお客さんでも、アフタクトとか言われてもわからへんやろ？」
「そりゃあそうですよね。アフタクトなんて、説明するのもヤだもん」
順平が笑いながら言う。
「そうやろ？　それがましてや子供相手なら、そんなこと別にいらんっちゅーこっちゃ」
「小細工……ねぇ」
「その代わりや」
翔はそういうと、何やら大きな袋を取り出してきた。
「？」
「耳に聞こえる小細工はいらんけど、目に見える小細工はいるねん」
「目ぇ？」
拓真が首を傾げる。
「はい！　前田さん！」
「はい！」
かのこがビシッと背筋を伸ばす。
「今日の演奏曲目を、順番に述べよ！」
「はい！　『風のとおり道　Ｒｅｍｉｘ』、『ＤＡＮＺＥＮ！　ふたりはプリキュア』、『ジャパニーズグラフィティ８　ウルトラ大行進！』、『ディズニーメドレー』です」
「はい！　よくできました。さて、では進藤くん」
「は、はい」
「風のとおり道でソロを吹くのは？」
「井上先輩です」
名前が出た佳菜はなおも呆然としたままである。
「はい！　では、ソロの井上さんにはこれをお渡しします」
佳菜は明るい茶色のやわらかい物体を手にした。
「何、これ……？」

佳菜が持ち上げて覗き込んでみるが、やはり何なのかがいまひとつわからないようだ。
「ちゃうちゃう。これはこないして被るねん。ほら！」
佳菜の頭にスッポリとはまる物体。それを見た絵美が声を上げた。
「あっ！　メイちゃんだ！」
「お、そう言われれば……」
拓真もうなずく佳菜の姿は、あの『となりのトトロ』に登場する草壁メイにそっくりだった。元々小柄な佳菜。その体型にあの特徴的なくくり髪のカツラを被れば、ほぼ草壁メイと言えるような容姿になっていた。
「えぇー！　せ、先輩！　あたしこれ被って演奏ですか！？」
「ん！？　あ、もしかして物足りん？　それやったら、衣装も用意してきてるんやけど……」
「いっ、いいですよ！　カツラで十分です！」
「そう？　ほないいけど……」
後に続くソリストたちの顔色があまり良くない。曲は『ＤＡＮＺＥＮ！　ふたりはプリキュア』、『ジャパニーズグラフィティ８　ウルトラ大行進！』、『ディズニーメドレー』と続くのだ。どれもこれも、翔が何もなしで演奏を済ませるとは思えないような曲ばかりが揃っていた。そして、案の定。翔は次々とどこから揃えたのかわからないような衣装を取り出し、次々とソリストに手渡していった。
はるかはプリキュアの衣装（ピンク色）。背が高いから似合うとごり押ししてはるかを納得させた。ウルトラマンでソロを吹く沙希と勇にはウルトラマンのお面が渡された。これはまだマシで、ディズニーメドレーでは各ソリストが演奏する曲の登場人物が着ているものに似せた衣装やカツラなどを準備していたのだ。
ブーイングが相次ぐが、翔は「大丈夫や！　終わった後、君たちは満足感に包まれている！」とわけのわからない理由を押し通し、そのまま本番の時間を迎えることとなった。

移動し、配置を終えると自分の席に座っていく部員たち。
（恥ずかし……）
佳菜は少し赤くなりながら俯いていた。やがて、司会者が七海高校吹奏楽部の紹介をし、演奏曲目を紹介した。そして、恭一がやって来る。いよいよ本番だ。
（どうにでもなれ！）
佳菜は半分やけくそに近い状態になっていた。
恭一が指揮台に立ち、指揮棒を上げる。そして、指揮棒が降りると同時に春樹、愛実、かのこ、駿の伴奏と裕也のシロフォンの音が鳴り響いた。『風のとおり道』の始まりだった。
それまで落ち着きのなかった子供たちが、徐々に自分たちの方へ視線を集中させる。やがて、洋之の叩くドラムセットがリズミカルな音色を立て始める。Ｒｅｍｉｘの名に相応しい、ロックな感じが漂う曲調。ボンゴが加わると、ますますその印象が強くなる。そして、洋之がバスドラムを叩き始める頃にはもう、原曲とはかなり印象の異なる曲風となっていた。ティンパニの音を合図に、メロディが始まる。
トランペットのメロディ。金管楽器でも、頑張り次第ではやわらかく甘い音を吹くことができる。２回目にはトロンボーンが加わり、やがてホルンの裏メロディが聞こえ始めた。
どこから沸いてきたのかわからなかったが、拍手のようなものが一瞬聞こえてきた。それは拍手ではなく、一人の男の子の手拍子だった。それがやがて観客全体に波及していった。
間奏部分では、主旋律をのぞくすべての楽器が音を奏でていた。そして、再びティンパニを合図にトランペットとトロンボーンのメロディが復活する。ホルンと、ユーフォニウムが独自の裏メロディを吹いて綺麗に混ざり合う中、再び間奏が始まった。
その直前、佳菜は堂々と指揮をしている恭一の横に、あのメイちゃんのカツラを被って登場した。佳菜も翔すらも予想しなかった声がすぐに飛んできた。

「あっ！　メイちゃん！」

何の説明もなしに、幼稚園児からその言葉が飛んできたのだ。その瞬間、佳菜は恥ずかしさなど吹き飛んでいた。

佳菜は小さく手を振った後、ピッコロを構えてやわらかいソロを吹き始めた。その頃には、お喋りをしている子供はいなくなっていた。周りにいた若いお母さんやお父さんも、佳菜の音色に惹かれているのは誰の目にも明らかだった。

サスペンドシンバルの後に、翔のサックスソロが観客をさらに優しく包み込んだ。洋之がバスドラムで曲の変化する部分を知らせる。そして、トランペット、トロンボーン、ホルンがメロディを奏で、ピッコロ、フルートが先ほどの佳菜のソロ部分を演奏し、クラリネットやシロフォンが八分音符で伴奏を演奏する。音の厚みがどんどん増して行き、和志が叩いたサスペンドシンバルが鳴るたびに、曲はどんどん静かになっていく。洋之のドラムセットが鳴り止み、木管楽器の伸ばしと裕也のシロフォンの音だけになる。

そして最後に、晃の奏でるウインドチャイムの音が決定打となった。幼稚園児たちはしばらく、ピクリとも動かなかった。そして、気づいたように周囲の母親たちが拍手をしてから、幼稚園児たちも大きく拍手をし始めた。

翔はその拍手の中で自信たっぷりの笑みを浮かべていた。

（これは……この子たちのハート、掴んだな）

演奏曲目はまだ3曲残っていた。しかし、翔はこの演奏会の間、子供たちを飽きさせずに楽しませることができると確信していたのだった。

第３０９話　ＤＡＮＺＥＮ！　ウルトラディズニー！

「渡会幼稚園の皆さん、こんにちはー！」
今日の司会は１年生の菘と雄飛が努めている。
「先ほどの曲は、みんな大好きな『となりのトトロ』の中で流れる、風のとおり道っていう曲でしたー！」
女の子が手を上げる。
「あたし知ってる～！　まっくろくろすけが森に行くところで流れるんだよー！」
雄飛がニコッと笑って女の子を撫でた。
「よく知ってるね～！　そうだよ。まっくろくろすけが森に帰るところで流れるんだよね～」
「うん！」
その様子を見ていた杏と裕子が「進藤くん、小さい子にあんな風に接するんだ……意外」などと話していた。実は雄飛には下に中学生の弟（１４歳）、小学生の妹（１１歳）に年の離れた弟（６歳）と妹（３歳）がいるので、小さい子への接し方は慣れているものがあった。
「さて！　それじゃあ進藤くん。次の曲だけど……あっ！　見て、みんなー！」
菘の声に園児たちの視線が入口のほうへ一斉に向く。
（うっ！）
はるかはあまりの素早さに一瞬、身じろぎしてしまった。しかし、すぐに深呼吸して気持ちを整理する。
「あそこにプリキュアがいるよー！」
「ぷりくあー！」
「プリキュアー！」
プリキュアと上手く発音できない園児もいたが、それはご愛嬌。

はるかは真っ赤になりそうな顔を気にせず、思い切り飛び出した。
「1、2、3、4！」
優の合図で全員が楽器を構えた。まず、トゥッティで全員が同じ旋律を奏でる。その後、チャイムの音が鳴り、トロンボーンがメロディを、クラリネットやトランペットが副旋律を奏でていく。そして、上昇系の音が吹ききられると、はるかがテナーサックスをしっかりと構えてソロを吹き始めた。
「色っぽいプリキュアね～！」
手拍子をしながら、先生が楽しそうに話をしていた。
サビの部分で、クラリネットとトランペットが立奏する。園児たちは嬉しそうに歌詞を口ずさみながら、中には踊っている子までいた。続いて、フルートとオーボエが降下系の音を吹き、再度オープニング部分に戻る。
チャイムは晃が担当していた。思い切りという指示どおり、響きの良い音を出せている。二番の歌詞にあたる部分では、慎也がトロンボーンでアドリブソロを吹いていた。園児たちは「男のプリキュアー！」と叫んでいたので、慎也はどこで覚えたのか、決めポーズを取っていた。サビは今度はホルンが吹いている。ホルンにはなかなか厳しいテンポではあるが、賢治たちも加わってパワーが増したホルンにはあまり苦ではなかった。
間奏部分ではフルートパートのソリが始まった。聞いたことのない細かい音に幼稚園児たちは大興奮というような状態。そして、再現部で再度衣装を纏ったはるかが出てきた。
「プリキュアー！」
終いには握手をしてほしそうに手を伸ばす幼稚園児たちに、はるかは丁寧に対応する。そして、曲は遂に終わりを迎えた。終わる頃には、はるかは汗ビッショリになっていた。
終わると同時に拍手が大きく起こった。はるかはピースサインを振りまきながら、いったん教室から出て行く。着替えのサポートに、美里と恵梨が一時退室した。

「はいっ！　プリキュア、カッコ良かったと思う人―！」
雄飛がそう質問すると、全員が手を挙げた。直後、男の子が「でも大きかった！　あのプリキュア！」と言うとドッと笑いが部員たちの間から起きた。
「ちょっとー！　誰よ大きいとか言ってるの！　プリキュア、怒るよ！」
隣室からはるかが怒鳴ったので、園児たちも一緒になって笑う。
菘が「はい！　プリキュアが怒っちゃったので、正義の味方を呼んで助けてもらいましょー！」と次へ繋いだ。雄飛がそれをうまく活かし、さらに繋いでいく。
「はい！　それじゃあ皆！　僕に続いて名前を呼んでね！　いっくよー！　助けて、ウルトラマーン！」
園児たちの「ウルトラマーン！」という声に応じて、一瞬照明が暗転する。その隙に美里、恵梨、はるかが自分たちの席に戻った。
あずさの叩くグロッケンの音が怪しげに響く。さらにトロンボーンの伸ばしが聞こえ、クラリネットのトリルも聞こえてきた。そして、ホルンの音色が聞こえてくる。そして短調の曲調から次第に転調し、明るい長調へと移調していく。
聞きなれたメロディ。『ウルトラマンのうた』である。サックスとクラリネットの優しい音色で奏でられるメロディに、ホルンやトランペットの相打ちが聞こえてくる。様々なパートが交互にメロディを吹く、奏者側も楽しめる編曲となっている。特にホルンにメロディが相次ぐため、順平や賢治は小さい頃よく歌った歌を楽しんでいる様子である。
『ウルトラセブンのうた』では、まずトランペットが立奏をする。息継ぎが少々辛い部分もあるが、勇や流が楽しんでいる様子だ。男子たちには幼少期の頃を思い出す部員が多いようで、吹きながらニヤけている部員（雄飛、騎士など）もいた。
繰り返しの部分では、ホルンが立奏する。ホルンの裏メロディがここは特にかっこいい部分で、ホルンはこの時のために何度もここ

を練習していた。狭い室内でも音響は十分で、園児たちはホルン特有の音色を驚いた目をしながら聴いていた。

そして徐々に転調し、雰囲気も厳かなものへと変わった。園児たちも曲の雰囲気に合わせて不思議と静かになっていく。チューバやトロンボーンのフォルテピアノの後、沙希のソロが始まった。沙希が被っているのはウルトラマンのお面。いくら顔が見えなくなっていて、口の部分だけ楽器が吹きやすいように細工されているとはいえ、沙希は恥ずかしさで真っ赤になっていた。

（珍しく音が震えてるなぁ……）

翔は少々やりすぎたか？と心配になったが、対照的にトランペットのソロを吹く勇は、いつも以上に感情のこもったソロを吹いていた。

（やるやん！）

そして、洋之のバスドラムを合図にテンポが上がる。サックスが今度は立奏する部分だ。そして、トランペットとトロンボーンの打ち込みに合わせて彼らがベルアップしていく。そしてトロンボーンの立奏。慎也や徹は本当に楽しそうにしていた。

ウルトラマンタロウを終えると、帰ってきたウルトラマンに変わる。トランペットの高音に驚いた園児たち数人が耳を塞いでいた。メロディがトロンボーン、サックス、クラリネットと何度も入れ替わる、まさに全員が活躍できる曲だった。最後に、和志の叩くティンパニに演じた知は視線が釘付けだった。

演奏が終わると、真っ先に拍手を始めたのは園児たち。楽器を置いて雄飛と菘が前に立ってもまだ拍手をしている園児たちが多くいた。

「はい！　ウルトラマン、カッコよかったかなー！？」

「はーい！」

菘の問いに元気よく答える園児たち。演奏に疲れるどころか、部員たちも不思議と演奏を重ねるごとに元気になっていた。

「でも残念！　次の曲で今日は終わりなんだ～」

雄飛がそう告げると園児たちからブーイングが飛んできた。これは翔も予想外であった。

「でも大丈夫！　１０月にね、私たち七海高校の文化祭っていうお祭があるの。そこで演奏をするから、また皆、来てね～！」

「はーい！」

園児たちの笑顔に、翔や陽乃も笑顔になってしまう。自分たちも小さい頃、こんな風に素直だったのかと思うと、その頃に戻りたいという気持ちも少なからずあった。

「それじゃあ、最後の曲です。最後はみんなも大好き、ディズニーのミッキーマウスや白雪姫が出てくるよ！」

菘がそういうと、園児たちのテンションがさらに上がった。

「わーい！」

「それでは、ディズニーランドへ行ってみよう！」

「わーい！」

その雄飛の合図と同時に、美里がティンパニを鳴らす。そして、星に願いをのメロディが流れ始めた。すぐにテンポが変わり、可愛らしいメロディを木管楽器が奏でる。春樹、愛実、駿がマーチらしい前打ちを刻んでいく。それが次第に増えて行き、そしてすぐに静まると同時に誠、沙希、由美子、駿のメロディが始まる。ミッキーマウスマーチだ。いろんな楽器が複雑に絡み合い、ひとつの曲を創りあげている。かなり初期のニューサウンズに収録されているが、この当時からニュー・サウンズ・イン・ブラスの編曲は質の良いものであったことが窺える。

トゥッティの降下音が始まると同時に、拓真と駿、かのこの低音組が前に立った。そして、ミッキーマウスマーチのメロディのソロを吹く。全員の頭にはミッキーとミニーの耳が付いていた。低音には滅多にないソロだったので、駿、かのこ、そして拓真は実に嬉しそうにソロを吹いていく。

続いて再度ミッキーマウスマーチのメロディが続き、一気にテンポが落ちた。そして、健之佑のソロが響き、ホルンのツェーの高音

が響く。『It's a small world』の始まりだった。そして、綾音がスッと前に移動して楽器を構える。

「キレイ……」

女の子がそのソロを聴いて綾音の吹く姿に釘付けになっていた。初めてのソロに綾音の心臓は爆発しそうなほど、大きく鳴っていた。ソロを吹きえおると、自然と笑顔になる綾音。拍手が大きく鳴ると、ペコリと綾音はお辞儀をした。移調し、あっという間にまた曲の雰囲気が変わる。グロッケンを叩くのは優。そしておちゃらけた感じのメロディが始まり、やがてそれは『ハイホー』へと変わった。

トランペットとユーフォニウムが立奏をする。手拍子が沸き起こった。二度目の部分ではステップを踏みながら吹く勇たちトランペットと春樹たちユーフォニウム。そしてジャズのリズムに変化する。曲の変化が激しい分、園児たちにはそれがかえって刺激的なようだった。そして曲は『口笛吹いて働こう』に移る。陽乃、慎也、絵美、拓真が立ってアドリブソロを繰り広げる。彼らの頭には、小人たちの被っている帽子がしっかりと被されていた。慎也はスライドを上手く活かして、陽乃はミュートをつけて、絵美は雄飛に教えてもらったジャズ特有の吹き方をして、拓真もアドリブに合う調で適度に伴奏を変化させて吹いていた。

そのソロが終わると、ウッドブロックの音をキッカケにテンポが落ちていく。そして、流が色っぽいソロを吹き終えると同時に、王子様の格好をした春樹が前に立った。始まったのは『いつか王子様が』。高音域にも関わらず、簡単にそのソロを吹く春樹。園児たちはすっかりとその春樹の姿に見とれていた。

「あの子、童顔だけどカッコいいわねぇ」

先生たちのコソコソ話が絵美に聞こえていた。少し嫉妬してしまったのは、内緒の話である。

やがて、白雪姫の衣装に身を包んだ茉莉紗が立ち上がった。春樹のソロに応える形での、アドリブソロ。あまりの色っぽさに休みのパートの部員たちは注視してしまった。終わりを告げる流のソロが、

春樹と茉莉紗の影響を受けて初めよりも印象が大人びているように感じた。

そして、続いてとぼけた感じの打楽器軍の音色が響く。『狼なんか怖くない』の始まりだ。ブタさんのお面をつけた亜紀が前に立ち、悠々とソロを吹く。トロンボーンにしては高めの音だが、亜紀は苦労している感じを見せず、完全に吹ききった。

そして怪しげな風のような音色の後に、星に願いをが流れ始める。この時には園児たちの視線がもう、いろんな楽器に向いていた。

曲が盛大に終わりの部分を吹ききると、音が鳴り止むと同時に園児たちが拍手を始めた。

「カッコいいー！」

「お兄ちゃんお姉ちゃん、すっごいね！」

「ねぇ、また来てよ！」

「明日、明日来て！」

翔たちは困惑顔をしつつ、雄飛たちに前に立つように促した。

「はい！　今日はもうオシマイだよ！」

「えー！」

雄飛の言葉にやはり、ブーイングが飛ぶ。

「じゃあ、みんな今日からまたいい子で頑張って。そしたら、きっと１０月のお祭で皆を誘ってあげるから。いいかな！？」

「はーい！」

菘は「うん！　いい子！」と前にいた男の子と女の子の頭を軽く撫でた。

「起立！」

翔の合図で全員が立つ。

「礼！」

「ありがとうございました！」

大きな拍手が沸く中、こうしてこども祭での演奏は無事、終了した。

楽器を片付け終え、翔たちは全員が退室したのを確認して施錠した。
「お疲れ様」
陽乃が階段で腰掛けて待っていた。
「なんやぁ。疲れたから先に帰っててよかったのに」
「毎日翔に鍵閉め任せるの、悪いじゃん」
「そりゃおおきに」
陽乃は鍵を受け取り、職員室に向かって歩き始めた。
「あのね！」
「ん？」
「あたし……将来の目標、ちょっと決めたかも！」
「なんや？　気になるやんけ」
陽乃は笑いながら「まだ内緒だけどね！」と言った。
「えぇ！？　ズルいぞお前！　オレは言うたったやんけ！」
「言える時が来たら言うから少々お待ちを！」
「ズルいやっちゃなぁ！」
２人は大笑いしながら、職員室に向かって走り始めた。
「失礼します」
「おっ、おぉ！　お疲れ様」
恭一が翔と陽乃の姿を見るなり、慌てて読んでいた雑誌らしいものを隠した。
「どないしたんですか？」
「いやいや！　なんでもない。鍵はいつもどおり、ここ置いて帰れ。お疲れ様」
「はい！　失礼します」
翔は鍵を恭一に預け、ペコリとお辞儀した。
「陽乃、ゴメン。ちょっとお手洗い行く」
「オッケ。あたしここで待ってるよ」
「ゴメンな！」
翔がバタバタと職員室から出たのを確認すると、陽乃は恭一の隣

の席に座った。
「ねー！　先生」
「んー？」
「結婚式はいつですか？」
ブーッ！と恭一が飲んでいたお茶を吐き出した。
「やだぁ！　プリント濡れちゃいますよ？」
「おまっ……どこでその話を！」
「残念ですが、さっきの雑誌、あたしが今朝部室の鍵取りに来た時に見ちゃいました」
恭一はフーッとため息を漏らした。
「まぁ……皆には遅かれ早かれ、そろそろ言おうと思っていたんだけどな」
「お相手、誰ですか？」
恭一は「絶対言うなよ」と念を押してから、陽乃の耳元で囁いた。
「……。」
「えー！　ホ、ホントですか！？」
「この期に及んでウソなんか言うか！」
「すごーい……」
陽乃は思わず赤くなった。
「そういうわけだ。心配しなくても、お前らには近々言うから、それまで内緒だぞ？」
「他の先生には？」
陽乃はワクワクした様子で恭一に聞く。
「校長と教頭には、もう報告してある。明日の職員会議で、言うつもり……だ……」
「エヘヘ～！　じゃ、あたしたちへの報告も待ってますね！」
陽乃は翔のカバンを持ってペコリとお辞儀をして「さようなら！」と挨拶をした後、職員室を出て行った。
「ふぅ……。朝倉は鋭いなぁ」
恭一は陽乃の背中を見送りつつ、半分ほどに減ったお茶をすすっ

た。

「俺がオッサンになる頃には、アイツらも結婚とか……するんだろうな」

そう思うとなんだか不思議な感じがする恭一は、再び隠した雑誌を開き、結婚式場の選択を始めるのだった。

第３１０話　ピッコロトランペット

プスーッ！

「ダメだぁ……」

陽乃はまた大きなため息を漏らした。陽乃がため息を漏らす原因を作っている楽器はピッコロトランペットと呼ばれる、若干高音域が吹きやすくなるトランペットにあった。ピッコロとフルートのように、実用音域がそれほど広がるわけではないが、今年の七海高校の自由曲『教会のステンドグラス』で、中盤に出てくるソロにはもってこいの楽器だった。

「やっぱり、吹き慣れてないと大変ですよね」

勇が心配そうに陽乃に声をかける。

「まぁ……それもあるんだろうけど。やっぱり、あたしの技量不足かなって思っちゃう」

「……。」

後輩たちはそれを肯定も否定もしない。少し気まずい空気になった。

「ま！　練習するしかないってことですよ」

陽乃はにこやかに笑ってそう言い放った。

「ピッコロはあたしだけの問題だし、皆でそろそろ一緒のトコとか合わせようか」

「そうですね！」

彩香が楽器を手にして着席する。

「んじゃ、まずは自由曲のミカエルの楽章の初め行こうか！」

「はい！」

この『教会のステンドグラス』で、七海高校は第１楽章の『エジプトへの逃避』と第２楽章の『大天使ミカエル』を演奏する。最初の部分ではトランペットやホルンが激しいスラーでの上昇を繰り広げる。そこだけでもかなりの音量を要するので、普段からここの練

習はまだ唇がバテていない練習開始直後と、課題曲を吹き終えてからという仮定の下で、ある程度吹き疲れてからの2回のみに練習を絞っていた。

5月15日火曜日。コンクールまで2ヶ月と少しを切ったので、コンクールメンバーはパート練習から合奏中心の練習へと少しずつ移ってきていた。今日も5時から2時間、合奏の予定が組まれている。始めの15分はロングトーン、その後、45分間で課題曲、そして1時間を自由曲に使う予定である。

綾音はコンクールメンバーではないが、パート練習の間、自由曲と課題曲を一緒に吹いていた。初心者のため、指導者が必要なのだが全員がコンクールメンバーのため、こうして結局一緒にパート練習に参加する形になった。

綾音は正直戸惑ったが、流や陽乃が熱心に指導してくれるので、次第に抵抗はなくなってきていた。

「よし！　あと10分で合奏だから、そろそろ移動しようか！」

「はい！」

陽乃の指示を受けて、後輩たちはキビキビと片づけを済ませて音楽室へと移動する。綾音は別室でさゆりや騎士たちと練習をすることになっている。

「先輩！　鍵はどうしますか？」

彩香の問いに陽乃は「あたし、もうちょっとピッコロ練習して行くから、あたしが閉めるよ」と答えた。

「了解です。無茶しないでくださいね！」

「オッケー」

陽乃は軽く手を振り、彩香たちがいなくなったのを確認して窓を開け、楽器を構えた。

（大天使ミカエル……教会……ステンドグラス……）

陽乃は中学の修学旅行で行った、長崎県にある大浦天主堂のことを思い出していた。あの時見たステンドグラスの荘厳さとあの輝きは、今でもはっきりと思い出すことができる。あんなイメージで、

あんな場所にいるつもりで吹くのが目標だった。
大きく息を吸い、楽器に暖かい息を送り込む。透き通った音が校庭に響き始めた。
「おっ……」
涼平がバスケットボールのゴール前でシュートの練習をしていた手を止めた。
「涼！」
すぐに菜緒が駆け寄ってきた。
「これって、陽乃の楽器の音だよね？」
「うん」
素人の涼平と菜緒にも、楽器の音色でどの楽器かというくらいまでは判別が付くようになってきていた。
「すっごいいい音……」
「楽器吹けないあたしたちにもわかる音だもんねぇ……」
しかし、しばらくするとその音が途絶えた。そして、また間を開けて同じメロディが聞こえてくる。
「なんで同じトコばっか吹くのかな」
菜緒が首を傾げる。
「それが練習ってなもんだろ」
涼平はわかったようにそう言って、転がって行ったボールを取りに走った。しかし、陽乃の思うところはまったく違っていた。陽乃には、このメロディの初めで既に音程が少し狂っていることに気づいていたのだ。そのため、納得の行かない彼女はそのたびに吹くのをやめて、チューナーを片手に音程を取りながら練習を重ねていた。
「あーあ……どうしよう。全然音程合わないや……」
そうこうしているうちに、5時直前になってしまった。
「いけない！　急がなきゃ」
陽乃は慌ててピッコロトランペットを片付け、戸締りをして音楽室に駆け込んだ。
「遅いよ陽ちゃん！　ギリギリ！」

絵美が少し怒りつつ、指揮台で陽乃に早く座るように促した。
「ゴメンゴメン！」
「気をつけてよ。はい、じゃあ次、サックス」
「……。」
「佐野くん！」
「あっ、あぁ！　ゴメンゴメン！」
「もう！　部長も副部長もどうしたの？　しっかり！」
「ウィッス！」
翔は首を2、3回振ってから楽器を構えた。
ロングトーンをする中で、陽乃はどうしようか迷っていたことを絵美に告げた。
「エミリン」
「何？」
「あたし……ピッコロでロングトーンしてもいい？」
絵美は一瞬、驚いた顔をしたが「いいよ！」とすぐに受け入れてくれた。
（よし……）
陽乃はスッと楽器を構え、絵美の指示に従って音を伸ばし始める。
やはり、周りとあまり音が混ざっていかない。ピッコロトランペットだけが浮いたような音になっている。
「ストップ～」
絵美がロングトーンを中断した。
「陽ちゃん、その楽器、音出すのキツい？」
「え？　あぁ、ううん。そうでもないよ」
「でしょ？　その割にちょっと息入れるの、キツすぎない？」
「そ、そうかな……」
「うん。楽器が小さい分、息入れる量とかスピードもコントロールしないと」
「わかった。気をつける」
「じゃ……あ！」

恭一の足音が聞こえてきたので、絵美はロングトーンを中断した。ドアが開くと同時に部員たちは立ち上がり「こんにちは！」と挨拶をする。

「こんにちは。あ、ほら、早く入って入って」

「失礼しま～す！」

そう言ってやって来たのはなんと安和、岳彦、めぐみの3人だった。

「センパーイ！」

思わず陽乃は大声を出してしまった。安和も小さく手を振ってくれる。

「1年生は知らないかもしれないが、今年の3月卒業した、君たちと入れ替わりに当たる先輩たちだ」

「こんにちはー！」

1年生のフレッシュな挨拶に、岳彦たちは恥ずかしそうに「こんにちは！」と返していた。

「とりあえず、3人には随時今日聴いて思ったことを注意してもらったり、アドバイスしてもらうからな」

「はい！」

「わからないトコも、遠慮なく質問するといいぞ。特にそこの男の先輩は音大行ってるからな～」

岳彦は恥ずかしそうに「そんなこと言わないでくださいよ！　プレッシャーじゃないっすか」と笑った。

「ま、気軽に話しかけるといいからな。それじゃ、課題曲から」

陽乃はあまりピッコロでロングトーンができなかったのを悔しく思いながら、トランペットを構えなおした。

「はい。リット（※1）の前から」

「はい！」

課題曲は1月頃から練習を重ねてきたため、特に問題なく吹きこなせるはずだった。しかし、最近ピッコロトランペットとトランペットを交互に吹いていると、稀にどっちだったかわからなくなるよ

うな錯覚に見舞われ、息遣いを間違えることがあった。
「朝倉！　あぁ、姉のほう！」
「は、はい！」
「そこ、もうちょっとしっかり吹かないと。ファーストだろう？　ター、タタター！　タタター！の動き。もっとしっかり」
「はい！」
そしてリットをかけてから、最後のメロディに移る。
「ホルン！　もっと吠えろ！」
「はい！」
「トランペットメロディ暗い！　トロンボーンも！」
「はい！」
打楽器が要所要所で打ち込みを入れる。
「コラ！　乃木！　そんなへっぴり腰なシンバルがあるか！」
「すみません！」
「日高もそこのグロッケン、もうちょっと華やかに！」
「はい！」
陽乃はなんとかトランペットの感覚を取り戻した。しかし、感覚を取り戻した頃には課題曲の合奏を終えてしまう。
「よし。じゃあ教会のステンドグラス」
「はい！」
「よし。今日はピッコロのトコから行こうか」
（え！？）
「いいか？　それまでの激しい部分とは違う表情を見せろよ。えっと……それじゃ、その前から行こうか……。よし、１２のテンポプリモ（※２）から」
「はい！」
恭一が指示した部分は、メロディの再現部に当たる。低音楽器の激しいメロディが奏でられ、やがて後を追うようにトランペットが同じメロディを奏でる。そして次第にフェードアウトし、静まり返ったところで陽乃のソロに入るのだ。

陽乃はピッコロトランペットを構えた。ここで演奏しているのはピッコロトランペットの陽乃。クラリネットは絵美、みゆき、雄飛。バスクラリネットの駿、テナーサックスのはるか、バスーンの誠。チューバは拓真。ピッコロの佳菜。フルートは由美子。銅鑼を裕也が叩く。ハープは沙希。チェレスタを稚沙希が奏でる。かなり少人数に絞っての演奏だった。

これだけの少人数にしてしまうと、音を間違えば一気にバレてしまう。それが陽乃にプレッシャーとなって圧(の)し掛かっていた。

冒頭部分から前半にかけてはいつも問題なく演奏できる。しかし、中間部分になるといつも音程が乱れるのだ。というのも、追いかけあう形で途中から佳菜や駿がメロディを吹き、さらにクラリネットやチューバも後を追う部分があるのだ。つまり、陽乃の音程がすべてとなるのである。

パスウッ……！

結局、この合奏でも陽乃は音を外してしまったのだった。

第３１０話　ピッコロトランペット（後書き）

※１……リット：リタルダンドの省略形。テンポを次第に落としていく表現方法。同義語としてラレダンドがある。また、対義語はアッチェレランド。

※２……テンポプリモ：通常、Ｔｅｍｐｏ？などと表記される。曲頭の速さで吹くという指示。

第３１１話　気楽にいこうよ

「はーあ……」
陽乃はため息を漏らしながらピッコロトランペットを磨いていた。
既に部員のほとんどは帰宅してしまい、部室にいるのは陽乃、翔、さゆり、夏樹の４人だけだった。
「お前さぁ……そんな考え込みすぎんなって」
翔が陽乃の傍に座って声をかける。
「それはわかってるんだけど……でも、もう５月１５日だよ？　去年の今頃も、合奏増えてさ。あんまりパート練習の時間なかったじゃない？　今年もだんだんそんな風になると思うんだけど……。今年はソロあるし、ピッコロトランペットもあるし……」
「でもセンパイ。センパイ、去年もソロあったじゃないですか？」
さゆりがヒョコッと顔を出して言った。
「あの時とはプレッシャーが比べ物にならないよ」
「うーん……そうかもしれないですけど」
「あたし……こんなヘタレだったっけなぁ」
陽乃は自分に嫌気が差して、またため息が出てしまった。翔もどう声をかけていいか困っていると、外からワイワイと賑やかな声が聞こえてきた。
「Ｏｈ、ソレ、ほんと！？」
「ホントだって！」
「どうなんやろねー？　怪しいトコがあるわぁ」
声は順番にマーガレット、貴志、綾音のものだった。マーガレットが元気いっぱい、部室のドアを開けた。
「Ｏｈ！　リーダーにサブリーダー！」
「オッス、マーガレット。お疲れさん」
翔が軽く手を振ると、マーガレットは嬉しそうに手を振り返した。

「お疲れサマァ！」
「マーガレットは元気やなぁ」
「ワタシ、ファインなのが特徴ね！」
マーガレットはそのまま陽乃の傍へ行くと、隣に座った。
「ヒナノ！　Ａｒｅ　Ｙｏｕ　Ｆｉｎｅ！？」
「んー……まぁまぁ？」
陽乃は苦笑しながらマーガレットに答える。
「マァマァ？」
「普通ってこっちゃ」
「Ｏｈ！　フツーね。Ｆｉｎｅじゃないの？」
マーガレットが陽乃のトランペットを手にする。
「うん……。ソロがね、全然うまく行かなくってさ……」
「Ｏｈ……。あれよね、えっと、オーディションじゃなくって」
「コンクールやで」
「Ｏｈ！　コンクール！　陽乃、それ、Ｂｕｓｙ？」
陽乃は「ベリービジー」と日本語の発音丸出しの英語で答えた。
「うーん……大変ね、日本のコウコウセイ」
マーガレットは楽譜を見て、深くため息を漏らした。
「スゴいね、コレ」
「楽譜？」
「とてもブラック！」
「先生の言ってるコト、しっかりメモして吹かないといけないからさぁ」
「Ｏｈ～……。読めるの、これ？」
その言葉に翔と夏樹が爆笑する。
「読めるよ～！　まぁ、多分あたしだけだけどね！」
陽乃が胸を張って答えるので、さゆりも笑い出した。後ろでは綾音と貴志もクスクスと笑っている。
「大丈夫よ、ヒナノ」
「何が？」

「アナタ、とってもトランペット上手ね！」
陽乃が少し赤くなる。
「ねぇ、アヤネ！」
「う、うん！　あたしはそう思います」
マーガレットが傍に座って陽乃の肩に腕を回す。
「このあいだ、キンダカートゥン行った時、陽乃のスマイルとっても良かった！　プレイするときも、スマイルスマイル！」
「うん……」
「……。」
それでもなお、陽乃の顔は緊張で曇ったままだった。
「カケル！　Ｗｈａｔ’ｓ　ｔｉｍｅ　ｉｓ　ｉｔ　ｎｏｗ！？」
「え！　お、おう！　えーと……シックスサーティ！」
「Ｏｈ！　まだ子供も遊べる時間ね！　ヒナノ！　カケル！　アヤネ！　皆さんも楽器片付けて遊び行きましょ！」
「えぇ！？」
陽乃の手を強引に引いて、マーガレットは音楽室を飛び出した。
「カケル！　ヒナノの楽器片付けておいてね～！」
「ムチャクチャやなぁ」
翔は笑いながら、陽乃の楽器を片付け始める。
「先輩、マジで行くんですか？」
貴志が心配そうに聞く。
「んー？」
「そうですよ。さすがにマズいんじゃ……」
さゆりも続ける。
「大丈夫やって。マーガレットのことやから抜かりないわ」
「そういえば……七海市は午後８時までなら高校生はゲーセンとか出入りできるんやんね？」
綾音が夏樹に確認する。
「うん」
「ってことは、時間的には問題ないんやろ」

翔はカバンを肩に掛けると出る準備をした。
「どないする？　皆はまっすぐ帰る？」
「……。」
貴志とさゆりが顔を見合わせる。
「あたし行きまーす！」
綾音が手を挙げる。
「んじゃ、俺も！」
夏樹が続ける。
「わ、私も」
さゆりが慌ててカバンを持って駆け出した。
「待ってください、俺も！」
貴志が大慌てでカバンを鷲掴みにして外へ出ようとする。
「ほな、全員やな！」
同じ頃、職員室に大声でマーガレットが登場していた。
「ティーチャー東！」
「おぉ！　なんだ、マーガレット。ビックリするじゃないか」
「お願いありまーす！」
「なんだ？」
「ヒナノとデートしていいですか！？」
「は？」
恭一は唖然としている。
「知ってます！　そこにゲームセンターあるね。８時まで使えるでしょう？」
「あ、あぁ」
「部活エンドの後はダメって聞いたけど、今日だけお願いね！」
「……。」
恭一は陽乃の合奏での様子を思い出し、小さくうなずいた。
「今日だけだぞ」
「Ｏｈ！　ティーチャー、オコトマエ！」
「マーガレット、それを言うならイケメンだぞ」

「イケメン？　Ｏｈ、イケメン！」
陽乃はクスクス笑いながらマーガレットの後ろに立っていた。
「先生！」
翔が職員室に飛び込んできた。
「女の子２人じゃマズいっしょ！　俺と夏樹くんと貴ちゃん、それに中野ちゃんと綾音も一緒でいいっすか？」
「しょうがないヤツらだな……。わかってると思うが、平日だぞ？」
「わかってます！　７時半には帰ります」
「気をつけるんだぞ」
「はーい！」
職員室を後にすると、翔と夏樹、貴志は争うように靴を履き替えて外へ出た。
「ねぇ、なんでそんなに急ぐのよ？」
「オレらめっちゃやりたいゲームあんねん！」
「もう……」
陽乃が呆れていると、マーガレットがさゆりと綾音、陽乃の手をまとめて引き出した。
「キャー！　もう！　マーガレットまで！」
「急がないとゲーム、取られるね！」
七海高校から実はゲームセンターのあるラウンドワン・七海中央店までそれほど距離はなく、歩いて行ける距離なのだ。小走りで到着した時間は、６時５０分。恭一と約束した７時半まで、４０分ほど遊べる。
「ねぇ、ゲームって？」
「コレ！」
マーガレットの指差す先には、太鼓の達人が置いてあった。
「太鼓の達人～？」
「これ、とってもドラムの練習にピッタリね！」
「……。」
「ヒナノ！　早く早く！」

陽乃は仕方なくバチを握る。隣に夏樹が来た。
「姉ちゃん、勝負！」
「な、何よ！　弟のクセに生意気な！」
「曲はどうしますー？」
貴志がお金を入れると、難易度選択の後に曲選択画面に移動した。
「あっ！　あたし、トゥルースがいい！」
「懐かしいな！　それにしぃや」
翔も同意する。曲を選択すると、ゲームが始まった。難易度は普通。それにも関わらず、普段やり慣れていない陽乃は夏樹に大差をつけられてしまった。
「やーだぁ！　悔しい！」
「次オレと綾音に代われや！」
「クー！　ねぇ、翔！　アンタこれ上手い！？」
「それなりにな！　綾音、勝負や！」
「よっしゃ来い！」
綾音がバチを握る前に、翔が勝手に難易度選択を難しいにしてしまった。
「ちょっとー！　なんで勝手に難しいにするんよ！」
「公平にいかんとな！」
「アホちゃうん！？」
「曲はラブ・マシーンや！」
「はぁ！？」
翔があまりに強引に次々と選択肢を決めてしまい、綾音は完全に振り回される形になってしまった。結局、難しいだけあり翔も綾音もボロボロの結果となってしまった。
「次、ミーとタカシね！」
「え？　俺？」
貴志は照れながらバチを握る。
「Ｏｈ！　マリオブラザーズあるのね！　タカシ、これでＯＫ？」
「オッケイオッケイ！」

難易度は簡単。貴志とマーガレットは実に息のあったバチ裁きで、見事満点を取った。
「すっごーい！」
綾音が拍手をする。
「ねぇ、次はあたしとさゆちゃんやろうよ！」
「望むところです！」
そうこうしているうちに、周りなど気にせず騒ぐ7人。いつの間にか7人の周りには人だかりができていた。
「曲はマリオブラザーズでいいんじゃない？」
「そうですね！　あ、その前に難易度決めましょ……。あっ、ねぇ先輩！　こんなの出てきてます」
陽乃が画面を見ると「鬼」の表示。
「鬼？　なんだろ……」
陽乃は鬼を選択した。
「えっ!?　それにするんですか!?」
「ドーンと行ってみよう！」
始まったゲームは、とんでもない難しさであった。
「やだぁ！　超難しい！」
陽乃は興奮気味にバチを振り上げながら必死で叩く。
「腕つるー！」
さゆりも爆笑しながら叩き続ける。
「アホかお前！　バチ振り上げすぎじゃ！」
翔が困惑顔で陽乃の腕を押さえつけようとした。その様子を見て、貴志や綾音ばかりでなく周囲の客も笑っている。
「はぁ～……参った参った、めちゃくちゃしんどいよぉ」
陽乃が肩で息をする頃には、周りに客がたくさん集まっていた。
「やだ！　あたしたちのバチ裁き見られてたの!?」
ドッと笑い声が起きる。その中には涼平と菜緒の姿もあった。
「アンコール！」
涼平が声をかけると、なぜかアンコールが掛かり始めた。

「しゃあないな！　陽乃、オレと一緒にアンコール応えるぞ！」
「えぇ！？」
「はよバチ握れ！」
「モードは鬼じゃ！」
「やめてよー！」
陽乃の答えを無視して、翔はゲームを開始した。
7時半。陽乃たちは何とか続きをしたいという衝動を抑えてゲームセンターを出た。
「参った参った。腕パンパンや」
翔が苦笑いする。
「でも、あんなに騒いだの久しぶり。周りに人がいることとか、忘れちゃってた」
陽乃が笑いながら言う。
「そうよ、ヒナノ。楽器を吹くときも同じね！」
「え？」
「あんまり、いぱいいぱーい考えすぎちゃ、Ｎｏ　Ｇｏｏｄ！　リラックス、リラックスね！」
「マーガレット……」
陽乃はニコッと笑いながら言った。
「Ｔｈａｎｋ　Ｙｏｕ！」
「Ｙｏｕ，ｒｅ　Ｗｅｌｃｏｍｅ！　それじゃ、また明日ね！　Ｂｙｅ－Ｂｙｅ！」
マーガレットは颯爽とスキップをしながら沙希の家のほうへと向かって行った。
「……なーんかスッとした！」
陽乃が伸びをする。
「あたし、明日ピッコロトランペット練習するの、やーめた！」
「え？　明日せっかくパー練やのに？」
翔が驚いて心配そうに聞く。
「うん！　ピッコロもあたしもお休み！　明後日から頑張ることに

するよ」
「……そっか」
それを聞いた翔やさゆり、貴志たちもニッコリ笑った。
「じゃーオレもサックス休もうかな！」
「兄ちゃんはそれ休んだら部活暇でしゃあないやろ！」
綾音のツッコミに全員が爆笑する。その笑い声をちょうど門から出てきた恭一が聞いていた。
「ま……一日くらい、問題ないだろう」
恭一はそっと門を閉め、自宅へと向かって自転車を漕いでいった。

第３１２話　リアル・マネー

「えぇ～、それでは２００７年度七海高校吹奏楽部第２回保護者会を開催いたします」
　友美子が仕切り、保護者会が始まる。今日の話題は「定期演奏会の実施に向けて」である。まず、恭一から報告が入る。
「えっと……。まず、定期演奏会の具体的な会場と、日時が決定いたしましたのでご報告いたします。会場は七海市中央ホールの大ホール。収容人数は１，０００人です」
「１，０００人……」
　智志の母親が驚いた様子で呟いた。
「日時は１１月２３日金曜日、勤労感謝の日に実施します。開場時間は午後５時半、開演は午後６時を予定しています。部員たちもいま現在、この定期演奏会の件に関して話をしていますが……」
　同じ頃、音楽室で翔が定期演奏会の概要を説明していた。
「会場、日時はいまオレが言うたとおりです。次に、定期演奏会の内容です。第１部は、クラシックやオリジナル曲のステージに、第２部はマーチング、第３部はポップスステージになる予定です。また、第１部と第２部の間では、まぁこれは２人だけなんやけど、ソロコンテストで優秀な成績を収めた人に演奏してもらう予定です」
「えっ！」
　拓真が大声を上げた。
「マジかよ？」
「マジです。ガンバロな、拓あん」
「う……うん」
　拓真は不安げに、でも少し嬉しそうにうなずいた。
「第３部の後に第４部を持ってくることも先生は考えはったんですが、まぁちょっとお客さんがしんどいかもしれへんってことで、ア

ンコールを2曲ほど演奏するつもりです」
翔はパラパラと資料を捲りながら続ける。
「まぁ、それはいいとして。問題があります」
「問題？」
沙希が呟いた。
「お金の話をします」
「率直だな」
慎也が苦笑いする。
「会場はさっきも言うたとおり、七海市中央ホールの大ホール使います。収容人数は１，０００人。まず……会場借用費だけで安くても５０万ほどかかります」
「そんなに！？」
翔の隣に座っていた陽乃が大声を上げた。
「お前、人の話全然聞いてへんな」
「ゴメン……」
翔は苦笑いしながら続ける。
「それから、まぁスポットライトとか当ててもらったり、打楽器の搬入搬出のサポート、こうしたホールの人たちに動いてもらってだいたいここで５０万、それからプログラム作ったり、オレらの軽食用意したりともろもろの費用を込めると、だいたい……えげつないけど、２００万前後かかります」
「２００万……」
魂が抜けたような表情を菘と雄飛が浮かべた。
「ちょ、先輩！」
賢治が手を挙げる。
「はい、緒方くん」
「部費、値上げですか！？」
「えー！？」
その言葉に亜紀や徹、亮平が大声を上げる。
「困るー！　ウチ赤字なるじゃん！」

かのこが悲鳴をあげた。
「ちょっとは食べる量減って痩せるんじゃない？」
茉莉紗が茶化すと、「その前に死んじゃう～！」とさらに冗談で返しドッと笑いが起きた。
「はいはい！　ちょっと静かに」
翔がそこで一冊の冊子を開いた。
「何、それ？」
「去年の風見台高校のプログラム。後ろ見てみ」
受け取った光瑠と順平がプログラムを捲ると、半分過ぎたあたりからいろんな広告が掲載されていることに気づいた。
「広告……か」
「もちろん、部費を月１万円に値上げしたら５６かける１万で一月５６万円、５ヶ月で２８０万円貯まりますが」
「ふざけんなよお前～！」
慎也が野次を飛ばすつもりでどこから取り出したのか、トイレットペーパーの芯を投げた。見事、翔の額にクリーンヒットし爆笑が起きる。
「とまぁ、部費値上げしたら確実に野次が慎也以外からも飛んでくるので。そこで広告に関して皆さんに協力してもらいます！」
「協力ですか？」
杏が首を傾げる。
「そう！　ま、オレら七海高校は言うてもまだ無名の吹奏楽部です。七海市の人でも知らん人多いと思います。でも、それじゃ逆に演奏会にも来てもらえん可能性があるってことやな」
「確かに……」
騎士が妙に納得する。
「そこで！　宣伝も兼ねて、オレらが協賛金をくださりそうなお店を回って、広告を集めて定期演奏会の資金集めをします！」
「おぉ……！」
全員からどよめきに近い声が上がる。

「ただし。今からパートごとに担当地区を決めます。じゃないと争いの元になるので」
そう言うと、陽乃が紙を配った。

ピッコロ・フルート：大海町
オーボエ・バスーン・エスクラリネット・バスクラリネット：関宮町
クラリネット・アルトクラリネット：市役所本町
サクソフォン：葉島町
トランペット：六車町
トロンボーン：葛和町
ホルン・ユーフォニウム：七海本町
チューバ・弦バス：西七海町
パーカッション：東汲町

「以上の地域で、できるだけ多くの協賛金を集めてきてください！」
「いつ行くの？」
美里がもっともな質問をぶつける。
「基本的に、土曜日の練習後……まぁ、コンクール直前は無理やけど、6月上旬までは3時ごろに終わります。そこから2時間程度、回ってください」
「結構大変だね」
麻衣子と梨子が顔を見合わせる。
「平日は？」
「平日は火曜日に1時間、部活前に時間取ります。これもひとまず、6月上旬のみです。1回ですぐ広告取れるとは思えんから、何回か時間置いて行くのも手ぇかな」
「はい！」
「じゃあ、とりあえず大変とは思いますがよろしくお願いします！」
「はい！」

「では、合奏を１１時からします。保護者の方に今日は課題曲と自由曲を聴いていただくので、すぐにロングトーン開始します。準備してください！」
「はい！」
バタバタと椅子を片付け、机の移動を始める部員たち。その合間を縫って沙希、はるか、裕子の３人が翔のところに駆け寄ってきた。
「佐野くん」
「ん？」
「相談なんだけど」
「どないしたん？」
「あたしたち……親が自営業でしょ？　まぁ、ウチはちょっとニュアンスずれるけど」
沙希が笑いながら言った。
「あぁ、まぁそうやな」
「とりあえず、親に相談しなきゃいけないけど……あたしたち、多分広告出せるよ」
「マジでか！？」
翔がパァッと笑顔になる。
「うん。ね、西嶋さん、時任さん」
「はい！　ウチの親はもう、多分今日お金出してますよ」
はるかがニコニコ笑いながら答える。
「ウチも多分、大丈夫なので」
裕子もグッと親指を立てた。
「やったぁ！　助かる！　ありがとうな！」
「いえ！　じゃあ、また正式に決まったら連絡しますね！」
「ヨロシク！」
翔は笑顔で３人の背中を見送る。
（定演がリアリティ増してきたな～！）
翔もウキウキ気分で合奏の準備のために、部室に向かって歩き始めた。

第３１３話　高校生が知る現実

「とりあえず、商店街だよな」
部活後に拓真、智志、亮平、貴志、好美のバスパート５人組は西七海町、ちょうど小田急電鉄七海駅西側に広がるナナニシ商店街に来ていた。七海中央商店街に次ぐ規模の商店街で、拓真たちもここへよく買い物へ来ることがある。
「そうそう！　それに、ここでしたらウチの高校からも近いし、知名度はちょっとはあるはずですよ」
智志が自信満々で先を行く。
「とりあえず、俺が小さい頃よく行ってた店、行きますか？」
「そんなのあるのか？」
「はい！　こっちです。来てください！」
智志が小走りで角を曲がる。４人も後についていく。
「わっ！」
曲がったところで智志が立ち尽くしていたので、貴志がぶつかってしまった。
「先輩！　曲がり角で立たないでくださいよ～」
「……。」
「大岩先輩！　聞いてます？」
「ない……」
「はい？」
「店が……ないんだ」
貴志、好美、拓真、亮平の順番で顔を出すと、一面に空き地が広がっていた。
「場所、間違えたんじゃないのか？」
亮平が聞く。
「間違いない……ここだったはずなんだ」

「引越ししたとか？」
拓真が首を傾げる。
「先月まで普通に営業してたんですよ……」
好美がそばを通りかかった女性に聞いた。
「すみません、ここにあったお店って……」
「あら、知らないの？　先月から店じまいセールやってたじゃない。確か……今月１０日で閉めちゃったんじゃなかったかしら」
女性は首を傾げながら言った。
「そうですか……ありがとうございます」
閉店という言葉の重みが少し、５人に圧し掛かった。
「ま、そういうこともあるかもな」
智志が笑う。
「おっちゃんおばちゃん、結構年だったし」
半ば無理やり納得させるような言葉だった。
「じゃあ、私の行きつけのお店行きますか？」
「おっ、どんな店？」
「コロッケの美味しいお店です！　こっちです」
好美の後をついていくと、先ほどの空き地からそう離れていない場所にお店はあった。
「おっ！　いい匂い」
「私、ここのおばさんおじさんと仲良いんです！　おばさーん！」
好美の声におばさんが大きく手を振る。
「好美ちゃん！　久しぶりだねぇ」
「今日、ちょっとお願いがあって来たんです……あれ？」
好美はすぐに声を上げた。
「おばさん……コロッケ、小さくなった？」
「ありゃ。わかるかい？　いやぁもうねぇ、コロッケ作るにしても原材料費がすっごく値上がりしててねぇ。正直、ウチも苦しいんだけど……値上げするわけにもいかないしね。そうすると、コロッケのサイズ小さくするしかないんだよねぇ」

「……そうなんですか」
好美が複雑そうな顔をする。拓真、貴志、智志、亮平は顔を見合わせることしかできなかった。
「それで？　話って？」
好美はハッと気づいたように顔を上げ「いえ！　急がないので……またゆっくり話します！」とごまかしてしまった。
一方のユーフォニウム・ホルン組は七海本町の商店街、七海中央商店街を訪れていた。
「ねぇ、あそこに確か銀行あったよね？」
杏が裕子に聞く。
「あったあった！　えっと……関東西銀行七海支店！」
「行ってみよう！」
春樹もその場所を知ってたようで、駆け足になる。
「着いたー……」
6人の目の前には、既に半分ほど崩された銀行の支店が広がっていた。
「うそ……何？　爆発？」
裕子が驚いて目を点にする。
「そんなわけねぇだろ」
賢治が苦笑いする。
「張り紙があるよ」
愛実が近くに貼られていた紙を見た。
「関東西銀行七海支店は5月1日を持って、小田原七海駅前支店と統合になりました。長年のご愛顧、誠にありがとうございました……」
「……。」
全員が言葉を失う。結局、その後愛実の知っている店、春樹の知っている店、賢治の知っている店と回ってみたが、休業中、店じまいセール中、とっくに空き地になっている店ばかりであった。
「こんなに」

春樹が寂しげに呟いた。
「店なくなってるって……思わなかった」
「……私も」
裕子が寂しげに呟く。
「でも最近、なんかウチの近所もちょっとシャッター閉まったままの店、増えたなって思ったんです」
「ゆうこりんの家、パン屋さんだもんね」
杏が呟いた。
「うん……」
「……仕方ない。もう5時だし、そろそろ今日は帰ろう」
「そうですね」
順平が立ち上がった。
「俺も知ってる店、何軒か当たってみます」
「うん。よろしく」
「失礼します！」
「さようなら～！」
順平が歩いていく商店街の方向を、春樹は見つめた。2年前の高校1年生のとき、3年10人で夏休みに一度ここで遊んだ時はもっと賑やかな印象があったのだが、今は少し、寂しげな雰囲気のほうが多くなったように感じていた。

「ただいま」
沙希は父・俊次の声が聞こえるなり立ち上がった。
「おかえりなさい！」
「おぉ……沙希か」
「今日は早かったね！」
俊次のカバンを持ち、沙希は顔を覗きこむ。
「あぁ……久しぶりに早く帰れたからな」
「そうだよね！　私と話すのも久しぶり……って、お父さん大丈夫？」

「うん？」
そう言って見上げた父の顔は、少し疲れているように見えた。
「顔色良くない気がするけど……」
「ハハハ！　ちょっと働きすぎだったからな。今日はゆっくり休むつもりさ」
「そう……」
沙希はとりあえずカバンを父の部屋に置いて、話す内容を復唱した。
「よし！　これでいけそうね！」
沙希は自信満々で階段を降り、その途中で聞こえてきた両親の会話に足を止めた。
「え？　そうなの？」
「あぁ……去年の3分の1程度にまで急落したよ」
「……そう」
（何の話だろう……？）
沙希は階段にしゃがみ込み、2人の話を聞き続けた。
「ボーナスは？」
「去年の冬の9割にまで落ちるが、社員の分は確保したよ」
「それはまだ良かった」
「ただ、役員の報酬はゼロだ。カットして、社員に回した」
「仕方がないわね。このご時勢だもの。倒産とかなったら、大変じゃない」
「そうだな……。ウチも苦しいが、いまが踏ん張り時だな」
「……。」
沙希は父母の会話を聞いた後、握っていたメモ用紙を小さく握り、そのまま丸めてしまった。
「沙希？」
ビクッと沙希が体を震わせた。振り返ると、俊次がいた。
「そんなところでどうしたんだ？」
「ううん！　なんでもないの。私、宿題あるから上がるね！」

「あぁ……」
俊次は少し呆気に取られつつも沙希の背中を見送る。
「ん……？」
沙希が落としていった紙を広げる俊次。そこには「定演の広告お願い♪」と可愛らしい文字が書かれていた。
「沙希……！」
呼びかけたのだが、バタン！という扉の閉まる音で俊次の声は掻き消され、うやむやになってしまった。

（このご時勢だもの。倒産とかなったら、大変じゃない）

智佐子の声がリフレインする。沙希は急に不安になって、涙がこぼれてきた。
「お父さんの会社……潰れたらどうしよう……」
まだ事態がよくわからないのだが、危機的な状況にあるのではないか。沙希は不安に駆られ、ベッドのシーツで涙を拭いながらいつの間にか、眠りに落ちてしまった。

第３１４話　諦めない気持ち

「おーたにちゃーん！」
後ろから大声で翔が沙希を呼んだ。沙希はビクッと肩を震わせて振り返る。
「おっはよう！」
「おはよ……」
翔がヒョコッと沙希の顔を覗きこむ。
「元気ない？」
「そ、そんなこと……」
「あるよな？」
翔がニカッと笑って沙希に聞く。沙希は小さくうなずいた。
「ウチの……会社から、協賛金してもらえるかどうか、わかんないの……」
翔は慌てて答えた。
「別に絶対ちゃうねんから！　大谷ちゃん、無理してへんやんな？」
「無理はしてない……まだ言ってないっていうか、言えなくて……」
「それぞれの事情あるんやから、気にせんといてや」
沙希が突然大粒の涙をこぼし始めた。翔はますます慌てたが、沙希の涙は止まらない。
「ゴッ……ゴメンね……私、なんかいっつも口先ばっかりで……」
「何を言うてんの！　全然、オレも皆もそんな風に思ってへんって！」
「でも……」
翔がハンカチを取り出した。
「ほら！　もう泣かんとさ。何も、無理してまで協賛金いただこうなんて思わんでいいんやで？　大谷ちゃんがそれで苦しんでたら、何にもならへんやろう？」
「うん……」

「よっしゃ！　まぁ、焦らずちょっとずつ、ちょっとずつや！」
沙希はあまりにもポジティヴな翔に少しだけ励まされ、先ほどよりもちょっと軽い足取りで部室へ向かった。
翔が部室で聞くと、やはり昨日いろんなお店を回ってみたが、協賛金に関しては結構厳しい見解が相次いだと言う。目的の店が既に閉店していたり、移動していて場所がわからなくなっていたりというようなケースが相次いだ。
翔たちもニュースや新聞で不景気だとか、企業の倒産だとか耳にすることはあるものの、そこまで身近な話題ではなかった。一時期、優が休部したのは不景気の影響もあったのだろうけれども、ここまで自分たちに深く関わってくるとは夢にも思っていなかった。
何かと落ち込み気味の部員たちだったが、翔は違った。
「何やってんの？」
陽乃が覗き込むと、翔は商店街の地図のようなものを持っていた。
「地図？」
「うん」
「そのバッテン、何？」
「これか？　オレが昨日行って拒否られた店」
陽乃がため息を漏らす。
「じゃあもうダメじゃない」
「諦めんのかいや。早すぎるやろ」
翔はムッとした様子で答えた。
「だって……1回で無理って言われたのに、その後何度も来られたって、お店の人も迷惑じゃない？」
「協賛金なんていきなりお金の話、持って行ったんがマズかったかなって、オレ個人的に反省したから。仕切りなおすねん」
「仕切りなおす……って、どうやって？」
美里が聞く。
「監査会、あるやろ？」
「あぁ……。えっと、6月8日の金曜日だな」

拓真がそばにあったカレンダーを捲り、日付を確認する。
「あれをひとつめのチャンスと思ってる」
「どうするの？」
絵美が聞いた。
「ＯＫされるかどうかわかれへんけど、できたら先生と生徒会の人だけやなくって、地域の人にももっとオレらの活動、知ってもらいたい」
「……参観日みたいな感じ？」
由美子が首を傾げる。
「そやな。そんな感じ」
「でも、ウチの部だけ？」
沙希がもっともなことを聞く。
「まさか。そりゃまぁ、ウチの体育会系の部活は盛んやから、有名どころは有名やけど。野球部とかサッカー部とか説明いらんやろとか思ったりするかもしれへんけど、それはちょっと間違いな気がする」
翔は地図を閉じてからも続けた。
「野球部もサッカー部も、オレらが知らん一面絶対あるハズや。余裕で勝ってるように見せて、絶対みんな努力してる。それはオレら文化系の部活でも一緒や。それを、先生とかだけじゃなくてさ。皆に知ってもらおうや」
「……。」
「話はそれから。オレはまず、校長先生と生徒会にそれ、お願いしてくる」
「え？　カケル一人で？」
春樹が驚いて目を丸くする。
「おう。ま、皆は練習しとってや。明日『丘の上のレイラ』の合奏やろ？　これ逃すと長いこと練習できへんなるから、しっかりやっとって」
翔が部室を出ようとすると、誰かに思い切り襟をつかまれた。

「ぐぇ！　な、何すんねん！？」
翔は驚いて後ろを振り返る。
「俺も行く！」
拓真が大声で叫んだ。
「やかましな！　耳元で叫ぶなや。おまけに話聞いとったか？　明日の合奏あるから、みんなは練習しとってって！」
すると今度は陽乃が翔の耳元で叫んだ。
「あたしと本堂くんは副部長なので、部長に同行させていただきまーす！」
翔は目を閉じ、さらに耳を両手で覆って顔をしかめた。
「何かご不満でも！？」
翔はフッと笑った後「わかった、わかった。よろしく、朝倉副部長、本堂副部長」と答えた。
「じゃあ悪いけど、ちょっと行ってくるわ」
「頑張って来い！」
美里がガッツポーズを取る。
「大げさやな」
「何言ってんの！　今後のあたしたちの運命を左右するかもしれないよ？　しっかり気ぃ抜かずに頼むよ！」
「へいへい！　任せとけ～」
翔はブイサインをしながら陽乃たちを連れて職員室に向かう。
「軽っ！」
美里が笑った。
「あれでいっつもサラリとすごいことやってのけるあたり、やっぱ部長よね～」
絵美も深くうなずく。
「さっ！　じゃあ俺たちは練習、練習！」
春樹が腕まくりをして部室に駆け込む。絵美たちも後を追った。
1時間ほどして、翔たちが帰ってきた。
「どうだった！？」

美里が状況を聞く。
「とりあえず、生徒会にはＯＫもろた。後は職員会議で先生たちがＯＫくれるかどうかによって、変わってくるな」
「そっかぁ……」
「ま！　後は先生たち次第やからな。結果待っとこう」
「そうだね」
「さ！　練習、練習！」
翔はグイグイと美里たちを押し込んで部室に入っていった。
「陽ちゃん？」
絵美が陽乃に声をかけた。
「ボーッとして、どうしたの？」
「うっ、ううん！　なんでもないの」
「そう……？」
「うん！　ほら、エミリンも練習行こうよ！」
「うん！」
陽乃は笑顔を作って部室に入っていった。拓真も、いまのところ違和感のない笑顔を浮かべていた。翔、陽乃、拓真の３人はウソをついていることに少なからず、胸を痛めていた。
生徒会の反応はマズマズだったが、先生たちの反応はいまひとつだった。監査会を地域の人たちに見てもらうという点を納得しない先生もいれば、そもそも協賛金を集めてまで演奏会をする必要があるのかという先生もいた。チケット代等で補えばいいのでは、という意見まで出されたのだ。
こういった話は本来、翔たち生徒の目の前でする話ではないのだろうが、いかんせん体育会系の部活が成績を残し、幅を利かせている七海高校では未だに、文化部の肩身は狭いものがあった。それが露骨に出た結果といえるだろう。
この様子では十中八九、職員会議で監査会を地域の人たちに見てもらう案は却下されるだろうと翔は予想していた。今まさに、その話し合いが行われているところなのだ。

結局、その日のうちに翔たちが願った案は呆気なく却下されてしまった。その報告を恭一から受けると、吹奏楽部は一気に雰囲気が暗くなってしまった。

協賛金がもらえない。自分たちの活動を理解してもらえない。入って間もない菘や茉莉紗、初心者の杏が泣いていた。体育会系の部活に負けないくらい頑張っている自分たちが評価されていない。茉莉紗はそうやって大声で泣いていた。

この日は結局、これ以上は部活にならないという恭一の判断で解散となった。3年生9名はトボトボと校門を一緒に出て行った。

「……また、明日」

絵美が無理やり笑顔で言うと、慎也と拓真が「おう」とまた無理やり笑顔で答える。

「うん！　明日は頑張るよ～！」

美里の声も空元気というような感じだった。陽乃と翔は複雑そうな表情を浮かべている。

「大丈夫だよ」

春樹が落ち着いた声で言った。

「必ず、なんとかなるんだよ。こういうことは」

「……超ポジティヴ！」

拓真が大笑いすると、全員がつられて大笑いした。

「ただいま～」

沙希が家のドアを開けると、既に俊次が帰宅していた。

「アレ？　今日はまたビックリするくらい早いね」

「あぁ。仕事が早く終わってな」

「そっか！　たまにはそういう日もないとね！　お疲れ様」

沙希はそう言って俊次をねぎらった後、自室へ向かおうと階段を上がり始めた。その時だった。

「沙希。こっちへ来なさい」

急に俊次が沙希を手招きした。

「？」
沙希はキョトンとしながら俊次に言われるがまま、リビングの食卓テーブルに向かった。
「座って」
「う、うん……」
そして、俊次と向かい合わせで座る。そのまま、俊次は一通の封筒を取り出した。
「何、これ？」
「顧問の、東先生に渡しなさい」
「え、それはいいんだけど……何、これ」
「それと、これもお願いしよう」
沙希は俊次が手渡した紙を読んだ。

株式会社サンドホープ
輸入肉から国産肉、新鮮な野菜・果物から甘いお菓子まで！　サンドホープは消費者の皆様の視点に立ったサービスをこれまで以上に確かな安心・安全と共にお届けします！

さらにその下には本社・関東一円に広がるサンドホープの支社名と電話番号、住所等が書かれていた。
沙希は驚いて封筒をそっと丁寧に開けた。なんと、５万円も入っていたのだ。
「お父さん……これ……」
「母さんから聞いたぞ」
俊次はニッコリ笑った。
「定期演奏会、するんだろう？」
「うん……」
俊次はポンポンと沙希の頭を撫でた。
「何を遠慮してたんだ？」
「だって……会社、大変だって……」

「ハハハ！　今すぐ潰れたりなんかしないさ。言葉の先っぽだけ捉えて、なんだかとんでもない想像をしていないか？」
俊次は大声で笑った。その声を聞き、表情を見ると、沙希はずいぶん安心できた。
「協賛金、まだまだこれから集めないといけないんだろう？」
「うん」
「大変かもしれないが、自分たちの演奏会を創りあげる第一歩だ。負けずに、みんなで協力して頑張りなさい」
沙希は目をウルウルさせながらうなずいた。それから、これは本当に心から、そして久しぶりに言った。
「ありがとう……お父さん」
俊次は少し照れながら「どういたしまして」と答えた。

第３１５話　重大発表！

「あー！　めっちゃしんどい！」

翔は椅子に思い切りもたれて叫んだ。５月１８日金曜日。夏に向けて、さらに夏以降も七海高校吹奏楽部では様々な行事を控えている。

５月２５日（金）　監査会　『丘の上のレイラ』
６月１０日（日）　ホール練習
６月１６日（土）　ホール練習
７月１６日（月）　七海市吹奏楽連盟第１４０回定期演奏会
７月２９日（日）　神奈川県吹奏楽コンクール第８回川崎地区大会
８月１日（水）　大海地区夏まつり
８月８日（水）　第５６回神奈川県吹奏楽コンクール
８月１１日（土）　七海市市民まつり
８月１５日（水）　終戦記念日式典
８月１６日～１９日　合宿
９月８日（土）　第１３回東関東吹奏楽コンクール
９月１７日（月）　敬老の日コンサート
９月２４日（月）　体育祭
１０月１０日～１２日　七海祭
１０月３０日（火）　留学生お別れ会
１１月３日（土）　高校生総合文化祭
１１月２３日（金）　第１回定期演奏会

既に予定がほぼ埋まりつつあった。さらに、既に恭一は七海祭までの楽曲をある程度絞ってきているようで、大海地区夏まつりまでは曲が配られていた。今週と来週は監査会に向けて『丘の上のレイ

ラ』を練習しつつ、コンクールの課題曲と自由曲にも注力することになっている。
「でもまぁ、暇よりはいいじゃないですか」
そろそろ気温が高くなってきているので、ちょっと太めのかのこは汗をかいている。これからコンクールが近づくに連れて、次第に暑くなってくる。練習もひとしおキツくなるだろうと、毎年のことながら翔は心配になっていた。
「あれ？」
配られた行事予定表を見るなり、麻綾が首を傾げた。
「どないしたん？」
「いや……6月24日に予定が入ってないって思って……」
麻綾の言葉を聞いてさゆりや夏樹、茉莉紗も首を傾げる。
「6月24日、何かありましたっけ？」
茉莉紗がさゆりに聞いた。
「ううん。私は何も聞いてない。茉莉ちゃんは？」
「私も何も聞いてません。マーヤ先輩、何を聞いてるんですか？」
その言葉を聞くよりも前に、麻綾は翔のもの凄い視線にかなり怯んでいた。
「あっ……いやぁ……えっとぉ、なんだっけなー？」
「怪しい……」
かのこがジッと麻綾と翔を交互に見つめる。二人とも冷や汗をたっぷりかいている。
「佐野先輩も、鈴木先輩も。あたしたちに何か隠してませんか？」
翔はフーッとため息を漏らした。
「しゃあないな。マーヤちゃんも漏らしてしもたし」
「すみません……」
麻綾は大きくため息を漏らした。
「いいか？　教えたるけど、絶対口外したらアカンで？」
「はい……」
夏樹、さゆり、茉莉紗、はるか、かのこが翔の言葉に耳をそばだ

てた。そして、その言葉に全員が大声を上げる。
「東先生、結婚するんやて！」
「えっ……」
夏樹が小さく声を上げた後に、女子全員が大声を上げた。
「えええええええええええええええ！？」
「い、いつの間にそんなことに！？」
はるかが目を丸くしている。
「お相手、誰なんですかー！？」
かのこが顔を赤くしてキャーキャーと騒ぎ始めた。
「けっ、結婚式とかしますよね！？」
夏樹も頬を赤くしている。
「やだー！　式っていつー！？」
茉莉紗とさゆりがキャアキャア甲高い声で叫びながら飛び跳ねている。
「はい！　ちょっと静かに！」
「はい！」
「そんで……まぁ、今日の合奏で皆に先生は発表するつもりやったみたい。ま、偶然にも先に皆は知っちゃったけど」
翔は苦笑いしながら頬をかいた。それから続ける。
「ほんで、東先生から直々にお名前が挙がった人たちがいます」
「名前が挙がった？」
「うん」
「誰ですか？」
「読み上げます。まぁ、これも合奏の時に先生から報告あるんやけどな」
翔はそう言って折り曲げた小さな紙を広げ、名前を読み上げていった。
名前を呼ばれたのは沙希、絵美、優輝、健之佑、翔、はるか、駿、順平、裕子、陽乃、流、慎也、亜紀、春樹、拓真、亮平、美里、優の合計１８名。

「このメンバーがどうしたんですか？」
この後の翔の言葉に、今日最大のサックスパートの大声が上がる。
「先生の結婚式に向けて、このメンバーで特別バンドを結成することになりました！」
「えええええー！？」
合奏で、恭一が正式に発表すると部員たちからは次々と黄色い声が上がった。顧問のまさかの展開に、部員たちは驚きと感動を隠せないようで、梨子や愛実、あずさは涙ぐんでまでいた。
「実はまぁ……今年の1月には式を挙げることは決まっていたが、あんまり早く言うと皆も驚くだろうから……遅めでギリギリに発表したんだ。まぁ……それは許してくれ」
恭一がはにかみながら言う。
「そんなの、全然かまいませーん！」
綾音が言うと、全員が大笑いした。
それから、恭一が本当に嬉しそうに言う。
「先生……まぁ、結婚するわけだが。できれば、今回先生が勝手に選んだメンバー以外の部員の皆にも……祝ってほしいんだよな。純粋に」
「……。」
杏がホゥッと息を漏らした。頬が赤くなっている。
「だから……その……」
次の恭一の言葉に、部員たちは今までで一番気合いの入った返事をする。
「皆に……式に、出席してもらいたい」
一瞬、間が空いた。
「や、その……なんとなく来づらいのはわかるが」
恭一のその言葉を遮るように、全員が答えた。
「絶対行きます！」
見事に揃った返答だった。恭一は目を丸くし、それから微笑んで「ありがとう」と答えるのだった。

第３１６話　翔の願い

「陽乃」
翔に声を掛けられて陽乃が振り向くと、翔は数枚の楽譜を手にしていた。
「何？　新しい曲？」
「そっ。６月２４日の、東先生の結婚式で吹く曲や」
「ほ、ほんと！？」
陽乃は笑顔になってその楽譜を受け取る。１枚目は安室奈美恵の『ＣＡＮ　ＹＯＵ　ＣＥＬＥＢＲＡＴＥ？』、２枚目はつい先日発売になったばかりのＧＲｅｅｅＮの『愛唄』、３枚目はＳＭＡＰの『夜空ノムコウ』、そして４枚目は浜崎あゆみの『Ｖｏｙａｇｅ』だった。
「この選曲、誰がしたの？」
「全部、東先生や」
「わぁ～……」
陽乃は目をキラキラさせながら、楽譜をジッと見つめた。どれもこれも、陽乃が好きな曲で頻繁に聴いたことがあるものの、いざ吹奏楽の楽譜になるとやはり新鮮だった。
「ねぇ、全然話は別なんだけど」
「うん？」
「なんで演奏メンバーから由美ちゃんだけ外れてるの？」
もっともな質問であった。由美子以外の３年生は全員、奏者として選定されているにもかかわらず、なぜか由美子だけ漏れていた。
「っと、その話の前に陽乃。東先生、誰と結婚するか知ってる？」
「知ってるよ？　新井田先生でしょ？」
そう。恭一の結婚する女性とは、３年Ｃ組の担任で社会科担当の新井田　彩だった。華道部顧問の可憐な雰囲気を持った先生である。
陽乃たちはまさか恭一と彩が交際しているとは夢にも思っていなか

ったようで、二人もまったくそのような雰囲気を出していなかった。なのでなおさら、わかりづらかったのだろう。
「実はな……新井田先生と宮部っち、従姉妹なんやって！」
「え！？　そうなの？」
これには陽乃も驚きだ。
「うん！　せやから、式には新婦側の親族ってことで参加するらしいねん。やから、今回は残念ながら演奏はパスってわけ」
「へぇ～……！　すごいね。人って、どこでどう繋がってるか、わかんないね！」
「やなぁ……」
翔と陽乃は顔を見合わせた。
「お二人さ～ん」
美里が間に割って入った。
「お暑いところ申し訳ないけど、今日の予定は～？」
「あっ……ごっ、ゴメン！　今日はな……えっと、5時から合奏や！　ほら、監査会今週の金曜日やろ？　それのために『丘の上のレイラ』合奏するから！　ってわけで、合奏の準備してください！」
「はい！」
部員たちは焦っている翔を見てクスクス笑いながら合奏の準備を始めた。
「……。」
翔は自分の言った言葉にふと、あることを思い出していた。
「……間に合うかなぁ」
「先輩？」
ハッと翔が気づくと、亜紀と徹が不思議そうな顔をして立っていた。
「おっ、おぉ！　オレこんなトコに立ってたらかなり邪魔やな！」
「いえ……。それより先輩、これ落ちました」
翔は徹が拾った手書きの楽譜を慌てて彼から受け取った。陽乃はそれが気になって、見てみるつもりで翔に声を掛けた。

「ね！　翔。その手書きの楽譜、何？」
「いや――！　なんでもないんやで！？」
翔のわざとらしい否定に陽乃は疑いのまなざしを向ける。
「べ、別にやましいことちゃうやん！　ただ……見られるのが恥ずかしくて……」
「ふーん……。ま、別にいいけどね！　いつか意地でも見てあげるから」
「ひ、陽乃～……」
「へへ！　じゃ、合奏始まるから早く準備しよう！」
「……うん」
翔は少し恥ずかしさを覚えつつも、手書きの楽譜をしまい込んで音楽室に向かった。

「え？　俺の店に……ですか？」
「うん……」
合奏終了後。まだ部員たちが各々でクールダウンや練習をしている音楽室で、翔は顔を赤くしながら優輝に聞いた。
「そうですね……。あぁ、最近入荷したの、ありますよ」
「ホ、ホンマ！？　いくらぐらい？」
「いや～、そんな高くないです。８００円もあれば買えます。高いのだと、１，５００円くらいするのもありますけどね」
「１，５００円かぁ……」
翔の一ヶ月のお小遣いは５，０００円である。買えなくもない金額だった。
「なぁ……それ、取っとくことって、できる？」
翔は恥ずかしそうに優輝に聞いた。優輝はニコッと笑って答える。
「もちろんです」
優輝の次は裕子のところへ行った。
「ゆーこりん」
「はい？」

裕子は楽器を磨く手を止めて翔のほうを見た。
「聞きたいことあるんやけど……」
「はい！　なんですか？」
顔が優輝のときよりも赤くなっていた。
「ゆっ、ゆーこりん家って……パン以外のものとか、オーダーメイドって……できるん？」
「……。」
裕子はふと音楽室に吊られているカレンダーに目をやった。それから思い出したようにうなずいた。
「残念ですけど、うち、オーダーメイドはやってないんですよ」
「そうなんや……」
翔はかなり肩を落としているようで、それを見た裕子がクスクスと笑った。
「ウチの店ではやってませんが」
「？」
翔が顔を上げる。
「私はオーダーメイド、受け付けていますよ」
「え……？」
「任せてください。ダテにパン屋の娘やってませんよ。ケーキならいろんなの、作れますから」
「ホンマに！？　うわぁー！　ありがとう！　おおきに！」
翔は満面の笑みで裕子に何度も礼を言った。
その日の帰り。
「やだ……。どうしよう」
陽乃は自転車置き場でかなり困惑していた。今日は塾なので、翔よりも先に帰ることになっていたものの、なんと自転車がパンクしていたのだ。
「歩いて帰れなくもないか……」
陽乃の自宅までは徒歩で２５分ほどかかる。自転車であれば１０分ほどで済むのだが、若干自宅までは上り道なので、徒歩になると

余分に時間が掛かるのだ。
「しょうがないか！」
陽乃が歩いて帰ろうとしたときだった。
「何しよん？　陽乃」
振り向くと翔がいた。
「あ、あぁ！　自転車パンクしちゃったから……歩いて帰ろうと思って」
「パンク？　どれ」
翔が陽乃の自転車を調べた。
「こりゃちょっと厳しいな……」
「でしょ？　ま、しょうがないや。歩いて帰るから、平気だよ」
「ちょい待ち。オレ、職員室で音楽室の鍵返したらすぐ帰るから。乗せてったる」
「いっ、いいよ？　あたし重いから」
「今日塾やろ？　急いでるんやろし。遠慮する仲でもないやん」
「でも……」
「決まり決まり！　ちょっと待っとけ」
翔は走って職員室へ行き、すぐに鍵を戻して陽乃のところへ戻ってきた。素早く自転車を自転車置き場から出し、陽乃のところで止める。
「はいよ！　座布団敷いてるから、乗ってもそんなに痛くないで？」
「ありがと……」
「ほな、漕ぐで～。しっかり捕まっとけや」
「うん……」
「よっ！」
翔が自転車を漕ぎ始める。結構体力のある翔は、軽々と自転車をスピードに乗せて行く。陽乃は意外と固い翔の腹部をギュッと握り締めながらドキドキしていた。
（やっぱり……男の子なんだ）
吹奏楽部の男子というと優しく、ちょっと頼りないイメージがあ

ると元クラスメイトの菜緒が言っていたことがあった。けれども、そんなことは俗説にすぎないなと陽乃は感じていた。

「なぁ！」

翔が大声で陽乃を呼んだ。

「なにー？」

「東先生の結婚式での曲、吹けそうかぁ？」

「なんとかねー！」

陽乃の髪が風でなびく。

「そうか～。なぁ、えぇ曲多いな」

「そうだね～！　いかにも愛です！みたいな曲、多いね～」

「オレもなぁ、考えてるコトあんねん！」

「何～！？」

陽乃は次に聞こえてきた翔の言葉に、胸が締め付けられた。

「オレらが引退する時の曲～！」

「え……？」

「引退する時に、１・２年生に吹いて……オレらの見送りのために吹いてほしい曲～！」

「……なんて曲？」

「一青窈さんの『ハナミズキ』って曲～」

「どうしてー？」

翔は笑顔で答える。

「まずは、七海の市の木と花がハナミズキやから～。オレを、ここまで育ててくれた七海に感謝する気持ちがいっぱいやから……それを表現したくてさぁ」

陽乃は純粋な翔の想いに胸がキュウッと苦しくなる気がしていた。

「それから、歌詞がいい」

「どんな歌詞だったっけ？」

翔は歌い始めた。

「『薄紅色の可愛い君のね　果てない夢がちゃんと終わりますように　君と好きな人が　百年続きますように　僕の我慢がいつか実を

結び　果てない波がちゃんと止まりますように　君と好きな人が百年続きますように』」

「……。」

翔の低い声で歌われる『ハナミズキ』。けれど、翔は決して音痴ではないので、その芯の太い声は陽乃の心に静かに響いていた。

「この場合の……オレの場合の好きな人は、もちろん陽乃もそうやし、3年生みんなも、部員みんなも、先生も、親も、友達もみんなかな。部活を引退しても、大学生になっても、就職しても、オッサンオバサンなっても、おじいちゃんおばあちゃんになっても……この今の吹奏楽部のメンバーと、ずっと、仲良しでいれますように。そう願ってる。それに、僕の我慢は……オレが、吹奏楽部を創ったときの気持ちを表してくれてる気がしてさ」

「そうなの？」

「正直、すっごい不安やったけど……いま、こうしてコンクールの練習したり、定期演奏会のこと考えたりできるやん？　我慢ってわけじゃないけど……オレの想いが実を結びつつあると思うねん」

信号で自転車が止まった。翔が振り向いて言う。

「定期演奏会でこの曲を吹いた瞬間……オレの想いが実を結ぶ瞬間やと、思うから」

陽乃は想像以上の翔の思いの強さに、涙が溢れそうになっていた。

「やからオレは……この曲吹きたい」

陽乃はギュッと翔に抱きついた。

「ちょ、ど、どないしたん？」

「あたしも」

陽乃が笑顔で応える。

「あたしも……その曲で引退……したい」

引退、という言葉が陽乃の胸を苦しめる。けれども、それは苦しいが「苦痛」ではなかった。

「なら、提案する価値ありやな！」

翔がニッと笑った。

「そうだね！」
「よっしゃー！　気合い入れていくでー！」
「おーっ！」
夜空に翔と陽乃の声が響く。
陽乃はふと考えていた。今日は5月19日。定期演奏会の予定日は11月23日。既に、この七海高校吹奏楽部で、翔たちと過ごす日々はもうまもなく半年を切るところなのだ。
「……。」
陽乃は翔にバレないように、涙を少しだけ流していた。

第３１６話　翔の願い（後書き）

『ハナミズキ』歌詞　ＪＡＳＲＡＣ　出１００８２５２－００１

第３１７話　懐かしい、あの日

いよいよ監査会を明日に控えた日。練習を終えた音楽室から少し離れた教室で、陽乃は今日もピッコロトランペットの練習に余念がない。別に監査会でピッコロトランペットを吹く箇所はないのだが、毎日少しずつでもこうして練習すると決めたのだ。

「先輩！　さようなら～！」

賢治と杏、裕子の３人が陽乃に元気よく挨拶して下校する。

「バイバイ！　また明日ね～」

陽乃はニコニコと笑いながら手を振る。しばらくすると、３人の笑い声が聞こえてきた。

「……もう、半年切ったのか」

今日は５月２４日。定期演奏会は１１月２３日。既に、この七海高校吹奏楽部で過ごす日々は半年を切ったことになる。

陽乃はピッコロトランペットを置いて、窓から外を覗きこんだ。

もしも、２年前の４月に翔が自分を吹奏楽に誘ってくれなければ、いま、自分は何をしているのだろうかと考えてみたのだ。しかし、５分以上考えてもまったく想像できなかった。どんな部活に入っていたのだろうか。そもそも、部活に入っていたであろうか。どんな友人ができていたのだろうか。後輩や先輩は、いたのだろうか。

翔とは、どんな関係になっていたのだろうか。沙希とは？　由美子とは？　絵美とは？　美里とは？　雪子とは？　慎也とは？　春樹とは？　拓真とは？

疑問符を並べてみたが、どれも明確な答えは浮かんでこなかった。しかし、言えることはひとつだった。

吹奏楽部に入ったおかげで、今の自分があるのだ。それだけではない。吹奏楽部に入っていなければ、いろんなことが変わっていたかもしれないのだ。

夏樹は、中2でサッカーができなくなった。そんな彼が、いまや吹奏楽部で期待のルーキーだ。陽乃が吹奏楽をしていたから、吹奏楽部に入ったというのも大きな要因のひとつだろう。

「スゴいよね……。どれかひとつでも欠けてたら、いまこの瞬間はないんだもん」

陽乃は珍しく感傷に浸っていた。もしも、翔が大阪から転校して来なければ、いまあるすべての事柄はなかったかもしれないのだ。陽乃がトランペットを吹くことも、恭一が吹奏楽部の顧問になることも。そもそも、翔がいないのだから、彼と付き合うことも、もしかすると一生出会わなかったかもしれないのだ。そう考えると、いま自分がこうしてこの教室でピッコロトランペットを背に教室の窓から外を覗いている光景が、とても愛おしく感じられた。

「よし！　この時間を無駄にしないように、あたしももっと頑張らないと！」

陽乃は気合いを入れなおした。

「お？　なんだ……まだいたのか」

ドアの開く音で振り返ると、恭一が覗き込んでいた。

「先生」

「どうした？　窓際でジッとして」

「いえ……。ちょっと感傷に浸ってました」

それを聞くと、恭一はクスッと笑った。

「まぁ、感傷に浸るのもいいが……もう7時半になるんだ。そろそろ片付けなさい」

「はい！」

「鍵は音楽室と一緒に返してくれればいいからな。なるべく早くしなさい」

「はい！」

恭一が職員室へ向かう足音を聞きながら、陽乃は楽器を片付け始めた。

楽器を片付けてから廊下に出ると、音楽室のほうから聞き覚えの

ある曲が流れてきていた。
「この曲……」
１年生の監査会で吹いた『ＴＲＵＴＨ』であった。
「懐かしい……」
陽乃は思わず駆け足で音楽室に向かっていた。音楽室から聞こえてくる音色。陽乃はソッとドアを開けて中を覗きこんだ。
「……。」
翔が１年生のときの監査会のビデオをつけたまま、机で居眠りをしていたのだ。
「まったくしょうがないなぁ」
陽乃はクスクス笑いながら翔のところへそっと近寄る。
「わっ……。監査会の後に撮った、部員の個人写真じゃない」
陽乃は思わず声を上げてしまった。

＞ｉ１１１０２―１５０＜

「みんな若～い……」
今でも十分若い年齢だが、２年も経てば仲間の雰囲気はガラリと変わってしまう。沙希はとても幼く見えている。由美子はこの時から既に人懐っこい、にこやかな笑顔を浮かべている。春樹や雪子はまだ表情が固い。美里と慎也はなぜか睨み気味の写真。拓真はリラックスしてピースサインまでしている。絵美もどことなく固い。
陽乃自身はあまり変わっていないような気がしていた。一番変わったのは、やはり翔だろう。何しろ、１年生当時は短髪だった。それに、今ほどまだ表情は豊かではない。陽乃に対していろんな感情を出してくれるようになるのは、もっと後のことだ。
「……。」
陽乃は居眠りをする翔の頬を人差し指で軽くつついてみた。プニッとした感触。意外と翔の頬は柔らかかった。
「う……ん……」

翔はムズムズと口を動かし、ゴソゴソと動いた。
「可愛いかも……」
陽乃は少し赤くなって、もう一度だけ翔の頬をつついた。
「うん……」
ニッコリ笑う翔。どんな夢を見ているのか、陽乃は気になってしまった。
「あたしね……翔が笑うと、あたしも嬉しくなっちゃうんだ……」
陽乃は翔の隣で机に寝そべりながら、気持ち良さそうに眠る翔にそう語りかけた。
「あたし、翔に感謝してる。翔が……吹奏楽を教えてくれなかったら、高校の3年間、こんなに楽しいことなかったと思うよ……」
陽乃はそっと目を閉じた。
「オレも、そう思ってる」
不意に翔の声が聞こえたので、陽乃は驚いて目を開けた。
「や……やだ！　ど、どこから聞いてたの!?」
翔はニコッと笑った。
「『あたしね……翔が笑うと、あたしも嬉しくなっちゃうんだ……』から」
「……恥ずかし」
陽乃は真っ赤になりながら顔を背けた。
「オレも」
翔は恥ずかしがらず、一言一句、はっきり言った。
「陽乃が笑ってくれてたら、それでいい」
「……。」
「明日の監査会、2年前と同じように……笑える結果を出そうな」
「うん」
陽乃と翔は机越しに手を繋いだ。
2年前。初めて全員で演奏したあの場所で、再び演奏をする機会がやってきた。そう考えるだけで、翔は胸がドキドキしていた。

第３１７話　懐かしい、あの日（後書き）

１年生当時のイメージ画像、載せてみました！　誰が誰かわかるでしょうか？笑　よろしければメッセ等で回答ください（笑）　正解者には何かが起きる……？

第３１８話　どこかで、見た人

「え？　審査員に知らん人？」
翔は春樹の言葉に驚いて大声を上げた。
「うん。この学校では見ない感じの人」
「性別は？」
「男性だったよ。でも、歳は俺たちと近い感じ」
「えぇ～？　オレらより近いのに、この学校では見ぃひん人なんか？」
「うん」
翔は考えれば考えるほど、意味がわからなくなった。
「先生じゃないわけ？」
絵美が聞く。
「そんな感じじゃない」
「水谷くんの言わんとしてることがあたしには見えないなぁ」
美里が苦笑いしながら言った。
「確かに」
慎也も続ける。
「でも、どう表現していいかわかんないんだもん」
春樹も困惑しているようだった。
「百聞は一見にしかず、だな」
拓真がもっともなことを言った。
「せやけど、名前もわからんのか？　その審査員」
「俺は知らないや……」
春樹はフゥッとため息を漏らした。
「あ、あたし今日のパンフ持ってるよ。ここに名前載ってるかも」
陽乃はカバンから若干折れ曲がったパンフレットを取り出した。
「さすがやな。もう曲がってるやんけ」

翔がクックッと笑うと、陽乃はブスッとした顔をした。
「見たくないの？　あっ、そう」
そのままカバンにパンフレットをしまう陽乃。
「あー！　ゴメンなさい！　ウソです陽乃サマ！」
「もう。ゲンキンなんだから」
陽乃はバシッ！とパンフレットで翔の頭をはたいた後、全員の前でパンフを広げた。
今回の監査会での審査員は６名。真野校長、体育科の飯田教頭、普通科の本村教頭、生徒会長の水口（みずぐち）　創平（そうへい）、ＰＴＡ会長、そして春樹が見たという人。名前は村峰（むらみね）　康治（こうじ）とあった。
「村峰……」
翔がその苗字を呟く。
「どこかで聞いた名前ね」
沙希がうーん……と思い返そうとしている。由美子もどこかで聞いたのだが、それがどこであったかが思い出せない。
「あー！　なんか、こう！　ここまで出掛かってるんだけど……！」
美里がイライラしながら喉を押さえている。
「思い出せない」
慎也がフゥッとため息を漏らした。
「なんだっけなぁ……」
拓真も春樹も思い出せないまま、時間だけが過ぎていった。すると、廊下から足音が聞こえ、やがて音楽室のドアが開いた。
「吹奏楽部さーん。次の次が出番なので、準備お願いします」
「あ、はい！　みんなー！　次の次やから、そろそろ移動するでぇ」
「はい！」
翔の言葉に管楽器の部員たちが楽器を準備する。美里たち打楽器は既に楽器の移動は済ませているので、バチと楽譜だけを持って移動する。
「あっ！」
２階の階段の踊り場でバランスを崩した茉莉紗が楽譜をバラバラ

と落としてしまった。
「あーあ！　大丈夫か？」
翔とはるかが慌てて茉莉紗のところに駆け寄る。
「あ、すいません！　大丈夫です」
「この譜面台だいぶガタ来とんな～……。監査会でえぇ評価もろたら、新しく買ってもらおか！」
「それいいですねー！」
乗り気になったはるか。譜面を整えて立ち上がった拍子に、今度ははるかが自分の譜面台を倒して見事階段を滑らせて落としてしまった。
「やだぁ！」
「もう！　なんでウチのテナー奏者はこうもそそっかしいのが揃ってんねやろなぁ」
翔は苦笑いしながら踊り場へと降りた。
「大丈夫？」
降りた拍子に、翔は校内では見覚えのない人と向き合ってしまった。
「あ、はい……」
「吹奏楽部の人？」
「はい！」
「今から監査会だね」
「そうなんですよ～。ちょっと緊張してます」
翔は頬をかきながら答えた。男性はニコッと笑い、優しく翔たちに言った。
「大丈夫。君たちの演奏、もう何回か聴いたけど、ちゃんと安定した演奏になってるからさ」
「そ、そうですか？」
翔は嬉しそうに男性に聞きなおした。
「あぁ。だから、今日もリラックスしていい演奏をね」
「はい！　ありがとうございます！」

「それじゃ」
男性ははるかの楽譜を整えて翔に渡すと、体育館のほうへと向かって歩いていった。
「今の方、お知り合いですか？」
はるかが楽譜を受け取りながら聞いた。
「全然知らん」
「知らないのにまるで昔から知り合いみたいな会話してましたよね」
茉莉紗が不思議そうに聞いた。
「そういえば……」
翔もその不自然さに今さら気づいたのだった。
「なんであの人……オレらの演奏を『何回か』聴いてんの？」
「佐野先輩、あの人のこと知らないんですか？」
「全然記憶にない」
翔は首を横に振った。
「変なの……。先輩が知らないのに、あの人はなんか知ってる感じでしたよね」
茉莉紗が不思議そうに男性が向かった体育館を見つめた。
「佐野くん！　何やってんの！？　もうすぐ始まるってば！」
「え！？　マジで！？　ごめん、すぐ行くわ！」
翔たちは沙希に呼ばれて大慌てで階段を駆け下りた。すぐに体育館の控え室に入る。さすがに５６人もいると、控え室の中は狭い。控え室の収容人数は６０人。運動部の大会開催時などに備えてそれなりのスペースは設けてあったが、それでもキツい人数になっていた。翔は正直、それが少し嬉しかった。
「吹奏楽部さん。休憩明け、２番目ですのでそろそろスタンバイお願いします」
生徒会副会長に促され、翔たちはいよいよ2年前に初めての舞台を踏んだ場所へと再び、舞い戻るのだった。

第３１９話　『丘の上のレイラ』

体育館への搬入とセッティングが完了したので、いよいよ吹奏楽部の監査会が始まった。まず、部活動の全体的な概要や昨年の活動報告をすることになっている。部長である翔と副部長の陽乃、拓真の３人は前に立ち、審査員である真野校長、体育科の飯田教頭、普通科の本村教頭、生徒会長の水口（みずぐち）　創平（そうへい）、ＰＴＡ会長、そしてあの村峰という人の前に立ち、３人は深々とお辞儀をした。

「私たちは、吹奏楽部です」

翔の落ち着いた声がマイクを通して体育館に響き渡る。

「吹奏楽部は現在、５６名で活動しています。現在練習中の夏の吹奏楽コンクールを中心に、マーチングコンテスト、学内では文化祭での演奏、体育祭での行進曲の演奏を行っています。また、学外では老人ホームへの慰問演奏、地域のおまつりへの参加など、活動の幅を広げています」

陽乃が引き取る。

「今年度の活動は、大きく目標を二つ掲げています。まず、吹奏楽コンクールで昨年は地区大会で金賞は受賞できたものの、県大会へは進むことができませんでした。今年は県大会への出場を目指し、現在練習に励んでいます。また、今年１１月２３日に第１回目となる定期演奏会を開催する運びになっています」

拓真が続ける。

「学内外を問わず、演奏をさせていただきたいとも考えています。昨年は文化祭で全校生徒の前で演奏させていただきましたが、今年はそれ以外に吹奏楽部の単独ステージを設けたいと部員で考えています。また、慰問演奏や地域のおまつりにもより積極的に参加したいです」

翔が最後にまとめた。

「本日は、吹奏楽オリジナル曲を1曲、お届けいたします。星出尚志作曲、『丘の上のレイラ』です。この曲は、レイラという名前の方を中心に曲を描いてはいますが、特定の女性を示しているわけではない、ということを念頭に曲を聞いていただけると幸いです。そのレイラは、少女かもしれませんし、老女かもしれません。はたまた、高校生、あるいは花の名前かもしれません。観客である、審査員の方それぞれが思い浮かべるレイラ像を想像しつつ、お聴きください。指揮は顧問の東　恭一先生です」

3人がお辞儀をして席に戻る。

（よっしゃ……。落ち着いていつもどおり演奏すればいい）

翔はマウスピースをグッと自分の方へ寄せ、大きく深呼吸をした。

恭一が指揮台に上がり、審査員に向かってお辞儀をする。その後、部員たちを一瞥した。全員と目が合ったところで、恭一は指揮棒を上げた。

指揮棒が降りると、クラリネットとサックスの綺麗な音色が響き渡る。それに合わせるように、まるで星が降り注ぐかのような晃のウインドチャイムが奏でられた。テナーサックス、アルトクラリネット、バスクラリネット、ユーフォニウムの音色が優しく響き、やがて健之佑のオーボエとみゆきのクラリネットが交互にメロディを奏でる。呼応するように、春樹のユーフォニウムも加わった。そして、健之佑のソロが終わると再びクラリネットのメロディと晃のウインドチャイムが鳴り響く。

そして、陽乃たちトランペットが第一主題の終わりを告げる。なぎさ、雄飛、麻衣子たち1年生のクラリネット族がメロディを吹き、受け継ぐように順平がホルンのメロディを吹く。そして、クレシェンドを効果的にかけるのは恵梨のサスペンドシンバルと洋之のティンパニだ。主題はトランペットとクラリネットの豊かなメロディで大きく締めくくられていく。再び健之佑のソロと順平のソロが響き、雰囲気は大きく変わる。

トロンボーンとチューバの怪しげな打ち込みが続き、クラリネッ

トのメロディ。そしてサックスの伴奏でまた雰囲気が変わり、クラリネットの明るいメロディ。要所要所で入るかのこの印象的な伴奏。サックスはここを合わせるために、何度もパート練習を重ねた。

裕也はここで一瞬だけ、グロッケンを叩くのだが、それが頻繁にメロディとズレていた。今回も一瞬危うかったが、なんとか乗り切ることができた。クラリネットやオーボエがメロディを吹き、裏メロディとしてユーフォニウムが複雑な動きをしている。ホルンのメロディとユーフォニウムの裏メロディが聴こえ、その後にトランペットとトロンボーン、そしてティンパニの伴奏がフォルテで鳴り響く。そしてフルートやクラリネットのメロディが聞こえ、誠のバスーンが下降系の音を吹いて、洋之が最後にピアノでティンパニを叩く。そして、遂に翔のソロがやってきた。

その部分は翔、順平、麻綾、はるか、かのこ、駿、春樹、拓真以外のメンバーは全員、恭一の指示で休みになっている。音量を最小に持って行くためだ。そのため、陽乃や沙希、由美子などほとんどの奏者が学年を問わず休みになっている。

翔の寂しげで憂いを秘めたソロが鳴り響いた瞬間、それまで忙しそうにペンを動かしていた審査員全員の手が止まった。

「……。」

「……。」

真野校長も生徒会長の水口も、あの村峰という男性も呆然と翔のソロに耳を澄ましていた。

（あ……い、いけない！）

沙希が慌てて楽器を構える。ついつい翔のソロに耳を澄ませてしまい、うっかり自分のメロディを吹き忘れるところだったのだ。

この部分は高音が続くのだが、キィキィ耳障りにならないようにという指示が入っていた。また、ユーフォニウムの八分音符での動きがマヌケにならないようにしなければならない。そして、クレシェンドの末にこの曲中盤での最高の盛り上がりを見せる部分が来る。その効果を最大限に引き出すのが、あずさのサスペンドシンバルと

洋之のティンパニ、ホルンの下降系の動きだ。
その最高潮の部分を終えると、すぐにユーフォニウムのソロが始まる。この部分は愛実が演奏していた。男性の春樹と違い、こういった部分を愛実に吹かせると実に甘いメロディが響き渡った。男性と女性の息遣いの違いだろう。
ティンパニをキッカケに曲調が変わる。テンポがアップし、美里の叩くチャイムの音やトロンボーンのメロディなど、それまで奏でられたほぼすべての形式のメロディが反復される。曲が終わりに近づいている証拠だった。
クラリネットとホルンの掛け合いが始まり、いろんな楽器が徐々に掛け合いをしていく。優のスネアドラムがリズミカルに響き、さらに美里のチャイムが加わる。そして慎也や亜紀たちトロンボーンのメロディが始まる。チューバとのハーモニーが実は重要な部分で、そこを綺麗に通過すると今度はホルンのメロディ。そして、リタルダンドがかかってテンポが落ちていく。主題がトランペットとクラリネットで奏でられ、美里のクラッシュシンバルと恵梨のサスペンドシンバルが曲を最高潮へと持ち上げ、曲は一気にフィニッシュした。
「素晴らしい！」
真っ先に声を上げたのは、なんと体育科の教頭である飯田先生であった。
「いやぁ！　私は音楽はサッパリだが、うん！　この演奏が素晴らしいのだけはわかるよ！」
飯田先生の顔は満足そうだった。翔は、この笑顔が本物であると感じ取ると素直に嬉しく、笑みがこぼれた。
演奏終了後、あの村峰という男性が駆け寄ってきた。
「佐野くん」
「あ……村峰さん、ですよね？」
「そうだよ。やっぱり、聞いてただけあるね！」

「ありがとうございます」
翔ははにかみつつ、気になっていたことを聞いた。
「あの……」
「ん？」
「村峰さんって……なんでオレたちの演奏のことやオレのことまで知ってはるんですか？」
康治はキョトンとした顔をした後、すぐに大声で笑い出した。
「そうだった、そうだった！　なんか何度も話聞いてたから、つい初対面ってことを忘れててね！」
「？」
康治はひとしきり笑った後、ようやく自己紹介をした。
「自己紹介が遅れました。僕は、去年までかな？　この七海高校で教頭をしていた、村峰塔子の息子です」
「え……えぇ！？」
それを聞いた翔は思わず大声を出してしまった。
「どしたの？」
声を聞きつけた陽乃と絵美がやって来る。
「いやいや、村峰さんな！　実は」
翔はそっと耳打ちをした。
「えっ！？　本当なんですか！？」
絵美が聞くと、康治は小さくうなずいた。
「なんでまた？　一緒に神戸に行かれたんじゃ？」
「いや。僕は教師になりたくてね。それに、小さい頃から育ってきた七海市を離れたくなくて。母方の祖父母に厄介になりながら、こうして教師の道を目指してるんだ」
「ってことは、村峰さんは教育実習生……とかですか？」
康治はニコッと笑い「そうだよ。大正解」と答えた。さらに続ける。
「母さんには、君たちの成長をちょっと見てきてほしいってのも頼まれてたから。今回は特別に、審査員として参加させてもらったん

だ」
翔たちは思いもよらない展開に少し驚いたが、しばらくしてから
「じゃ、今回の審査会の結果、村峰先生にぜひよろしくお伝えくださいね！」と笑顔で言っておいた。
「もちろん。お疲れ様だね！」
康治は翔に握手を求めた。翔もガッシリと握り返す。
「ありがとうございます！」
「良い結果が出るのを祈ってます」
翔と康治は笑顔でしばらく向き合った後、翔は楽器の片付けのために、康治は監査会の続きのために別れた。
「ビックリだね～」
陽乃が階段で翔に話しかけた。
「うん。オレもまさか、村峰先生の息子さんと会うなんて想像してへんかったもん」
「でも先生、ずっとあたしたちのこと気に掛けてくださってたんだね」
陽乃は嬉しくなり、階段を一段飛ばしで上がっていった。
「危ないで」
「大丈夫！　こう見えてもあたし、運動神経ソコソコなんだから」
陽乃はご機嫌でそのまま階段を上がっていく。
「ほな、オレも！」
翔も後を追って階段を駆け上がっていった。
当日中に出た監査会の結果はなんと驚くべきことに、すべてＡ評価だったのだ。
「ぜ、全部Ａ！？」
これにはさすがの翔も目が点になっている。さらに、慎也がもっと驚く講評を見つけた。
「おい！　見ろよコレ！」
３年生全員がおしくらまんじゅう状態で講評用紙を見る。それは普通科教頭の本村教頭のものだった。

「6月2日の土曜日にあるオープンハイスクールで、何か演奏してもらえないでしょうか？」
「えええええー！？　そ、そんないきなり！？」
由美子が驚きで叫び声を上げた。しかし、翔はやる気満々だ。
「おもろいやんけ！」
「えぇ！？　まさか、やる気なのか？」
拓真も春樹も驚いて少し引いている。
「えぇやんか！　これは中学生に吹奏楽部アピるチャンスやもん」
「……そっか」
絵美がうなずく。
「そうよね。これって、またとないチャンスよ」
「やろ？」
「あたしも思う！」
陽乃が手を上げた。
「んじゃ……出ますか！？」
3年生全員が顔を見合わせる。
「出まーす！」
「よっしゃあ、決まりや！」
全員が「ガンバロー！」と声を上げる。監査会をキッカケに早速、学内での演奏機会を得ることができた吹奏楽部。
「ほな、曲目は？」
「とりあえず3曲目安だって」
「じゃあ……何か手っ取り早くできるクラシック系1曲とポップス系2曲にしようか」
「あ、じゃああたし気になってるのがあるんだけど……」
「何々？」
監査会が終わったばかりにもかかわらず、次の演奏のために夢中になる3年生。2年前まではその日その日の演奏でいっぱいいっぱいだったことなど、まるでウソのような光景を目にした翔は、ただただ素直に嬉しくなり、胸が締め付けられるような思いになってい

た。もちろん、そんな気持ちは誰にも感じさせないよう、笑顔で話に参加していたのだった。

第３２０話　ライバルはすぐ近くに

監査会が終わり、次の大きな行事はやはりコンクールである。それまでにホール練習が２回、吹奏楽連盟の定期演奏会があり、さらに２回目のホール練習の翌日１７日日曜日には、オープンハイスクールが控えていた。

オープンハイスクールの楽曲は明日決定することになっていた。翔の手元にあるアンケード（部員５５人分）には、いろんな楽曲が書かれている。翔は恭一に願い出て、このアンケートの集計を取ることになった。

「ん？」

集計を取ろうとしたときに、携帯電話が震えた。ディスプレイを見ると「修平」の字。

「もしもし！」

『オッスー！　おひさやな』

佐野　修平。翔の幼なじみで、転校前の中学校では同じ吹奏楽部に在籍していた。いま現在、彼は風見台高校に通っている。

「おう！　どないしてん、急に」

『お前んとこ、６月にホール練習するんやろ？』

「風見台もか？」

『そうそう！　ほんで、日はいつなん？』

翔はアンケートを床に置き、布団の上に寝転んだ。

「ウチは１０日の日曜日と１６日の土曜日や」

『おっ！　ほんなら、ウチと１６日は一緒やな』

「ホンマか？」

『おう』

翔は一気にワクワク感が高まった。

「修平んとこは、課題曲と自由曲何するん？」
『課題曲は2番の光と風の通り道。自由曲はトゥーランドット。木村吉宏編曲のな』
「へぇ～！　難しいんちゃうの、あれ？」
『なかなか曲の表情がコロコロ変わるから、大変』
電話の向こう側で修平が苦笑いしているのが、翔にも容易に想像できた。
『せやけど、お前んとこも大変ちゃうん？　自由曲』
「まぁな～。結構苦労してる。低音えげつない音量いるし、木管は気ぃ狂ったみたいに音細かいし」
『元々管弦楽の曲やもんなぁ。そりゃ大変やわ』
「でも、オケに負けんくらいの演奏するつもりでは、いてるからな！」
翔の相変わらずの自信に、修平は少し安心した。
『ウチも負けてられへんな！』
「いや、それはこっちのセリフやろ」
翔はハハッ！と笑ったが、修平は『いやいや、それがちゃうんやなぁ』と返した。
「どういうこっちゃ？」
『ウチの兵藤先生、今年は七海がヤバいヤバい言うて、やたらライバル心剥き出しとんで』
「マ、マジで？」
翔はガバッと体を起こした。目が点になっている。
『ウソついてどないすんねん』
修平が真面目に返すが、翔はまたクックッと笑った。
「わかった！　わかったで～」
『何がや？』
「七海が下手すぎてヤバいってことやろ！？」
修平は本気で答えた。
『いやいや、マジで。お前んとこの低音、男子2人チューバやろ？

ほんで、女の子も経験者。そんでもってバリサク、バスクラ各1本、弦バス2本、ボーン5本、ユーフォ2本。低音系は充実しすぎなくらいや。ほんで、トランペットも1人は初心者やけど、後は全員経験者。パーカスも初心者おるけど人数的には文句なし。サックスはイチャモンのつけようがないし、フルート・オーボエ・バスーンも文句なし。クラリネットは初心者若干おるけど経験者がそれをカバーしてるし、アルトクラまでおるし。正直言うて、奏者の充実度は風見台は負けてる』

あまりにも冷静に修平が分析するので、翔は驚いて言葉が出なかった。

『その上、お前んとこの高校が他と決定的に違うことがあんねん』

「そんなんあるかぁ？」

翔は自分たちのことを思い返そうとするが、特に何も他の吹奏楽部とは差がないように感じていた。

『あるある』

「なんや？」

『本番に、異常に強い』

「……。」

確かに、そのような節はあるかもしれない。けれども、それをそんなに重視するようなものなのかどうかは、翔はいまひとつわからないでいた。

「それ、そんなに重要か？」

『少なくとも、兵藤先生は七海高校の怖い点を3つ言ってた』

「3つもあんのか！」

翔自身が驚かされた。自分たちの部にそんな怖い点など存在したこと自体驚きなのにも関わらず、その上3つもそれがあると聞かされた日には驚くことしかできない。

『その1。本番に強い』

修平は翔たちが1年の時の市吹連の定期演奏会の話を折り合いに出してきた。停電したにもかかわらず、舞台上で騒ぎ倒した挙句（

あの時は恭一がマイクで話し、それに部員たちが呼応した）、真っ暗闇で演奏をし切ったのだ。あの時の話はまことしやかに七海市の吹奏楽部の間で語り継がれているとかいないとか。修平はそんな話をした。

『その2。部員たちが仲良くなる速さが速すぎる』

修平の言葉を思い返してみた。確かに1年生が入部してからまだ1ヶ月弱しか経っていないのだが、既に1年生男子は翔のことを「佐野先輩」ではなく「かける先輩！」と呼んでいる。他の3年生に対しても、そんな感じで堅苦しい呼び方をしているのはほんの一握りだった。陽ちゃん先輩にサキティ先輩、由美先輩にエミリン先輩、シン先輩、拓あん先輩に春やん先輩、みさっち先輩とあだ名と先輩という名前が合わさっている。しかし、翔も陽乃も他の3年生も、それを嫌だと思ったことはなかった。

部によっては、先輩をあだ名で呼ぶなんてもってのほかだというところもあるが、恭一は特にそれについて指摘などはしない。

結果的に、そのようなフランクな部の雰囲気がプラスに作用している。先輩後輩関係なく、曲作りのためにいろんな指摘ができる。通常であれば先輩が後輩に注意し、指摘し、演奏を創りあげていくが、七海高校では全員がそれをする、というような雰囲気が根底にあるのだ。

『その3……』

修平の言葉がそこで止まった。

「その3は？」

『言うのや～めた！』

「はぁ！？　なんやそれ！　めっちゃ気になるやんけ！」

『ハハーン！　気になるんやったら、自分らの演奏した姿、ビデオでもいいから見てみれば？』

修平は茶化すような声で翔にそう言った。

「ビデオぉ？」

翔はそんなものを見てどうするのかと思ったが、ひとまず「ほな

しゃあなしで見といたるわ！」と答えた。
『あ、それとな。これはまぁ人づてに聞いた話やけど』
「ん？」
『伊豆半島にある伊豆南高校吹奏楽部が、１０日の日曜日にホール練習来るんやって』
「伊豆南が！？」
翔は驚きを隠せなかった。伊豆南高校には、昨年合宿の際に知り合った友人・若草　直幸が通っており、彼がそこの吹奏楽部に在籍している。
『そ！　せやから、俺たちはみんなライバル。そのライバルが、それぞれホール練習で交わるってこっちゃ』
翔は胸の高鳴りを抑えることができなかった。
「よっしゃー！　オレ、絶対風見台にも伊豆南にも負けんつもりで練習するで！」
『こっちこそ！　見てろよ！』
「よっしゃあ！　勝負やからな！」
翔と修平は電話越しに切磋琢磨することを誓い、電話を終えた。

第３２１話　Ｆｌｙ　ｔｏ　ｔｈｅ　Ｆｕｔｕｒｅ！

５月２６日土曜日。七海高校吹奏楽部では、来るオープンハイスクールで演奏する曲目の開票作業が行われていた。投票は一人３曲まで、今回のオープンハイスクールに適当と思われる曲１５曲の中から選ぶ形式で、まず１０曲選んでからさらに絞ることになっていた。

今回のオープンハイスクールでは、とりわけ日本の楽曲に票が集中していた。外国のポップスなどもチラホラ投票はあったものの、大多数が日本のポップスや演歌などになっていた。

３年生で考えていたクラシックとポップスという組み合わせは、恭一の意見で学祭のときにそういった形式を取ろうということになり、今回は見送る形となった。

今回の場合、特に人気があったのが、「桜」を曲のタイトルに持っていている３つの楽曲をメドレーにした『ＳＡＫＵＲＡ　ＴＬＩＲＯＧＹ』である。コブクロ、森山直太朗、河口恭吾の『桜』（ただし、森山直太朗の場合はひらがなである）がメドレーになっているこの曲が、最近の七海高校ではブームになっているようで、これが断トツでトップの票を獲得していた。やはり、いずれは中学を卒業してこの七海高校に来る後輩たちなのだから、旅立ちや別れといったものをウッスラとでも感じて、今のこの時間というものの大切さを感じてもらいたい、という部員たちの想いが見えない形で出てきているのかもしれない。

そういう意味では、他に出てきている曲も未来の後輩たちに、夢や希望を持ちつつ今の時間を大切にしてほしいというようなことを暗に意味する曲が混ざっていた。

翔は開票作業を進めていく。

「旅立ちの日に。ハナミズキ」

しかし、そんな切ない曲だけではやはりオープンハイスクールなのだから、あまり雰囲気にそぐわないという考えも一方であるようで、ガラリと雰囲気の異なる曲も挙がっている。

「となりのトトロメドレー。ピンクレディー・メガ・コレクション。ルパン3世のテーマ。名探偵コナンのテーマ」

そして、最終的に以下の10曲が候補として挙げられた。

♪SAKURA　TLIROGY
♪旅立ちの日に
♪となりのトトロメドレー
♪ピンクレディー・メガ・コレクション
♪ルパン3世のテーマ
♪名探偵コナンのテーマ
♪蕾
♪A列車で行こう
♪イン・ザ・ムード
♪トランペット吹きの休日

「ちなみに、東先生は既にこの投票結果をご存知です。先生としては、最初に印象を強く与えるノリの良い曲を吹いた後、しんみりさせる曲を吹き、後にまた楽しい曲を吹くと、中学生を飽きさせずにいけるんじゃないかって言うてはりました。以上の点を考えて、最終決定の投票を今から行います。各自、演奏したい思う曲を2曲選択して、投票してください」

稚沙希は自分の弟が七海高校を受験することになっていた。弟はバスケ部所属なのだが、稚沙希が「たまには音楽聴いてみたらどう？」と強引に誘ってミニコンサートを見に来させることになった。もちろん、弟が吹奏楽部に入ることなどありえないのだが、これも人数稼ぎのためである。

（アイツなら何聴きたがるかなぁ……）

稚沙希は自分よりはるかに背が高くなってしまった弟の顔を思い浮かべる。

（コブクロ好きだって言ってたっけ。んじゃ、ＳＡＫＵＲＡ　ＴＬＩＲＯＧＹは決定よね……。あと、コナンがまだ好きだったはず……。だったら、名探偵コナンのテーマね）

稚沙希はこの2曲に投票することを決めた。

一方の智志。智志には2つ下に妹がいる。つまり、稚沙希の弟と同い年なのだ。

（えっと……なんだっけ。ジャズ好きだからな～。名前が思い出せない）

智志は一人ウンウンうなりながら頭を抱えていた。

「何悩んでんの？」

隣からみゆきが話し掛けてきた。

「ジャズの曲名……がわかんなくって。どっちだったか思い出せないんだ」

「そうなの？　だったら進藤くんに聞けば？」

「雄飛に？」

「うん。彼、ジャズ大好きだから」

「でも……演奏してる楽器がちょっとしかわかんねぇ上に、ソロの楽器しかわかんないんだけど」

「このＡ列車かイン・ザ・ムードのどっちかなんでしょ？　すぐよ、すぐ。ねぇ、進藤くん」

みゆきに声を掛けられて、雄飛が振り向いた。

「はい？」

「ほら、大岩くん」

智志は恥ずかしそうに雄飛に聞いた。

「あの……さ。ジャズで、トランペットとトロンボーンと、サックスのソロがあるジャズの曲って、どっちかわかる？」

「編曲によっても変わりますから……。最初、どんな感じで始まります？」

「なんか、どんどん音階上がる感じ」
「あー。それならA列車で行こうじゃないですか？」
智志はあっさり答える雄飛を見て、驚きを隠せなかった。
「すっげぇな……。俺、まだ曲の感じとかでしか曲名わかんないヤツ多いし、そもそも曲自体知らないの多すぎる」
智志があまりに落胆するので、雄飛は困った顔をしている。
「ま、まぁまぁ！　先輩、これからどんどんイロイロ覚えれば、問題ないですよ」
「そうかなぁ……」
オープンハイスクールの曲を決めるだけでもこれだけいろいろ物議を醸すのだから、定期演奏会の時には思いやられそうだと翔は苦笑いしていた。
その翔を見て、夏樹は夏樹で悶々としていた。
（佐野先輩と一緒にソリやってみたいけど……あんまり自信ないしなぁ……）
名探偵コナンには、サックスのソリが数箇所あった。夏樹はできることなら、翔と一緒にソリを吹いてみたいと考えていたのだが、組み合わせは翔とさゆり、翔と麻綾、さゆりと麻綾など複数のパターンがあるため、曲を挙げたところで必ず自分が翔とソリを吹けるとは限らないのだった。
夏樹は翔にある種、憧れを抱いていた。誰にでも慕われるし、楽器の演奏も上手い。勉強もそれなりにでき、運動神経はちょっと良くない（陽乃談。特に球技）面はあるものの、全体的にバランスが取れた男子だったので、憧れを抱くのも無理はないことだった。
「！」
翔と目が合って、夏樹はなんとなく慌てて目を逸らしてしまった。
すると、翔が近づいてきたのだ。
「決まった？」
「あっ、あ、まだ後1曲が……」
夏樹はなぜか俯いてしまった。

「ほんなら、オレこれ入れたし、どう？　サックスパートでソリの取り合いせぇへん？」
「と、取り合いですか？」
「うん！　名探偵コナンのソリを取るのは誰や！？ってことで」
「……。」
「いいですねー！」
真っ先に反応したのはさゆりだった。
「私、やりますよー！　絶対、佐野先輩を負かせてみせます！」
「なっ！　じゃあ私だって負けてられません！」
麻綾が必死になって反論する。
「どないや？　夏樹くん」
「お、俺もやります！」
「そう来んとな！　よっしゃ、アルサクは全員コナンに1票入れや！」
「はい！」
こうして約30分かけて選曲を終えた。
「では！　発表します」
翔が投票数第4位、と黒板に書いて続いて曲名を書いた。
「第4位はA列車で行こう！」
「おー！」
智志が嬉しそうに声を上げた。
続く第3位は『SAKURA　TLIROGY』。稚沙希が「やった！」と小さく声を出す。他にも「やってみたかったんだ！」と騎士や綾音などが反応していた。
「第2位は、トランペット吹きの休日！」
途端に陽乃、勇、彩香の3人が悲鳴を上げた。
「なんでよー！　あたしたち、絶対やりたくないから票入れなかったのに！」
「せやけどお前、この曲32票も入ってる。大量や」
「そんなぁ……」

「ま！　頑張って練習せぇ」
翔はクスクス笑いながら陽乃たちにエールを送った。
「そして第1位は……名探偵コナンのテーマです！」
「やったー！」
そう言ったのは夏樹だった。
「あ……」
ドッと部員たちが笑い出す。
「やる気満々やな！」
翔の言葉に夏樹は恥ずかしそうに笑うことしかできなかった。
「そんじゃ、今日楽譜配って明日明後日でパート練習。それから合奏して仕上げることにします。コンクール練習もあるけど、皆さん頑張って良い演奏できるようにしましょう！」
「はい！」
「んじゃ、楽譜係は譜面配布、お願いします！」
恭一たち教師の中では着々と次の世代を意識した動きになっていることを、まだ翔本人ですら意識しないまま、オープンハイスクールの準備は進んでいくのだった。

第３２２話　手と唇

５月２８日月曜日。２時間目、智志のクラスである２年Ｇ組とＦ組は体育でバスケの試合をしていた。Ｇ組には他に健之佑と恵梨、Ｆ組には優輝と亜紀が在籍している。

「パス、こっちがら空きだぜ！」

元々運動神経の良い智志は、この日もバスケの試合では大活躍。いつもの調子を発揮して、要領よく動いていた。

「ケン！　こっちこっち！」

「おう！　行くぜ！」

健之佑から上手くパスを受け取ろうとした時だった。相手チームの一人が少しだけボールに触れ、智志が予想していた位置と少しズレてボールが飛んできたのだ。

「！」

智志は驚いて目を見開いてしまったが、既に遅かった。ボールはそのまま智志の右手小指を直撃したのだ。

「さとっぺ！」

「大岩くん！」

智志はそのまま右手を抱えて座り込んでしまった。

「大丈夫！？」

恵梨が慌てて智志の指を見た。

「……すぐ保健室行こう」

恵梨は智志に声を掛けた。

「ねぇ、ノムさん。お願いできる？」

「あぁ。行ってくる。ほら、さとっぺ。行こう？」

「うん……」

智志は辛そうな表情を浮かべたまま、保健室へと向かった。

智志が突き指をした頃、調理実習室では稚沙希の在籍する1年F組が調理実習を行っていた。同じ班には歩由美と綾音、雛乃、裕也がいる。5人一組だったので、吹奏楽部メンバーが自然と集まったのだ。ちなみに、男子一人の裕也だがかなり足手まといなのは言うまでもない。

「……。」

裕也が首を傾げる。

「どうしたの？」

稚沙希が裕也に聞いた。

「味がこれで美味いのかどうなのか、わかんない」

「あぁ……。そうよね。料理って普段からやってないと、わからないもんね」

そう言って稚沙希は裕也の持っていた小皿を受け取った。

「安藤は、料理得意？」

「偉そうに語れるほどじゃないけど、まぁ味見くらいならわかるかな」

そう言ってお玉からスープを掬い、ちょっと口に当てようとした時だった。

「マジかよー！　それ！」

フザけあっていた男子生徒が、なんと稚沙希にぶつかったのだ。ぶつかった拍子に、小皿に入っていたスープのほとんど全部が稚沙希の口に降りかかった。

「キャア！」

稚沙希の悲鳴が上がる。

「あんち！」

歩由美と雛乃が慌てて稚沙希に駆け寄る。

「ちょっとー！　アンタら、気ぃつけぇや！」

綾音が男子に向かって怒りの声をぶつけた。

「大丈夫か？　安藤」

裕也がそっと稚沙希に声をかける。家庭科教諭が慌てた様子で稚

沙希のところへ駆け寄った。
「唇を火傷してるかもしれないわ。佐々木さん、安藤さんを保健室へ連れて行ってくれる？」
「は、はい」
雛乃はゆっくりと稚沙希と一緒に保健室へ向かう。
「どうしよう……」
稚沙希が不安げな声を上げた。
「もうすぐ……オープンハイスクールなのに」
「大丈夫よ。最悪、出られないかもしれないけど、コンクールに支障はないわ」
雛乃が優しく声を掛けた。
「ダメなの。ウチ、弟が見に来るの……。私がかなり強引に演奏来てねって言ったのに……。私が出られなくなったら、あの子……絶対来ないわ」
「そうなんだ……」
雛乃は稚沙希と同じ袴田中学出身である。なので、彼女と弟の関係もよく知っていた。何かと気弱な稚沙希とは違い、彼女の弟はかなり気が強い性格で、常々そのことで二人はケンカをすることが多かった。特に二人が思春期と呼ばれる時期にさしかかってからは、ほとんど口を利くこともなくなったのだと聞いていた。
そんな状況をそろそろ打破したいと稚沙希は考えていたようで、偶然にも弟の志望校が七海高校であると知ったとき、一度お姉ちゃんの演奏を聴きに来て、ちょっとは見直してほしいと言ったそうだ。
それにも関わらず、このような事態に陥ってしまった。楽器奏者にとって、唇のコンディションというのは非常に重要である。切り傷はおろか、火傷などということになると致命傷に近い。
「先生～」
雛乃が保健室の戸を開けると、健之佑と智志の姿があった。
「あれ？　野村センパイ！」
「ん？　あぁ、佐々木さんに安藤さん」

「どうなさったんですか？」
雛乃は心配そうに健之佑の顔を覗きこんだ。
「いや、俺じゃなくて……さとっぺが」
智志はかなり落胆していた。なんと、小指が包帯でグルグル巻きにされていたのだ。
「大岩センパイ！　どうなさったんですか？」
智志は低い声で答えた。
「突き指……」
「バスケの試合でちょっとボールが飛んできた向きが悪くてさ。ところで、二人は？」
稚沙希がビクッと震えた。健之佑は同じフルート・ダブルリードパートの先輩である。本番前に唇に火傷をしたと知られるのが、稚沙希には怖くて仕方がなかったのだ。
しかし、雛乃はためらうことなくアッサリと言った。
「あんち、調理実習で味見しようとした時に男子にぶつかられて、スープが口に当たって火傷を……」
「火傷！？」
健之佑が慌てて稚沙希の様子を見た。
「……先生、吹奏楽の後輩なんですけど、彼女の火傷、どうですか？」
健之佑は咎めたりせず、すぐに保健の先生に状態を見せた。稚沙希は強引に智志の隣の積に着かされる。
「ふぅん……どれどれ」
保健の先生は稚沙希の具合をよく見て、すぐに薬を塗ってくれた。
「うん。心配ないわ。吹奏楽部って、土曜日に本番よね？」
「はい」
雛乃がうなずく。
「全治３日ってところね。木曜日には、完治するわ」
「ホ、ホントですか！？」
稚沙希が立ち上がる。

「あぁ、ほら薬塗ってるから動かないで」
「す、すみません」
「先生。さとっぺは？」
「大岩くんはちょっとね……」
保健の先生の言葉に智志の顔が青ざめる。
「全治２週間ってところかなぁ」
「２週間……」
全員が黙り込む。全治は本番に間に合わないのだ。
「とにかく、無茶はしないこと。いま無理に指を動かしたら、悪化するからね。わかった？」
「はい……」
智志は小さくうなずくことしかできなかった。

放課後、稚沙希と智志は部室へ行くのが怖くて仕方がなかった。稚沙希は今日からしばらく、練習できないのだ。唇のためにも、楽器を吹くのは避ける形になる。健之佑はそれを知っているものの、沙希や由美子、佳菜たちフルートの先輩はまったく知らないことになる。それを稚沙希から言うのはかなり勇気が必要だった。
一方の智志は智志で、本番に出られないと稚沙希よりも言いづらいことを拓真や春樹たちに言わなければならなかった。二人の足取りは重い。
「あ……」
稚沙希と智志は音楽室前の階段で偶然出くわした。
「こんにちは」
稚沙希が恥ずかしそうに挨拶をする。
「オッス」
智志も挨拶を返す。
「……先輩、先にどうぞ」
「いやいや。あんちから先にどうぞ」
「いえいえ、先輩が」

「いやいや」
「いえいえ」
「いやいや」
「何やってんの、二人とも」
驚いて振り返ると、沙希が立っていた。
「あっ……」
稚沙希は慌てて口を覆った。傷はそれほど目立つものではないが、見られたくはなかったからだ。智志は智志で慌てて手を隠す。
「どうしたの？　二人とも……変よ？」
「そっ、そんなこと」
「あー！　ちょうど良かった」
美里が笑顔で智志のところに駆け寄る。
「男手がいるの！　ちょっと来てくれない！？」
智志の左手を引いて音楽室に連れて行こうとした。それを見た稚沙希が慌てて止めようとする。
「ダッ、ダメですよ先輩！」
「え？　なんで？」
「そ、それは……」
「正直に言いなよ、二人とも」
健之佑が後ろに立っていた。
「正直にって……やっぱり、何か隠してるの？」
沙希が詰め寄る。
「じ……実は……」
稚沙希が言った。
「私……火傷しちゃったんです」
「火傷！？」
沙希の大声に確実に怒られると感じた稚沙希は体を縮ませる。
「大丈夫だった！？」
しかし、怒られることはなかった。
「よく見せて」

稚沙希は仕方がなく、沙希に唇を見せる。
「うん……目立たないね」
「え？」
「よかったね～。顔って、女の子には大事なものだもん。目立つような傷じゃ、困っちゃうもんね」
「でも……本番……」
「ね！　全治何日？」
「３日……です」
「じゃあ木曜日には治るんだね？」
「はい……」
「気にすることないよー！　まぁ、楽器吹けないとつまんないけど、しっかり指はさらっておいてね」
「は、はい……」
優しい先輩を持っていいな、というような表情を浮かべる智志。
「あれ？　さとっぺ」
ビクッと智志が肩を震わせる。そしてゆっくり振り向くと、春樹と拓真が立っていた。
「あーあー！」
春樹が包帯を見つけて、大声を上げる。
「あちゃあ！　やったなぁ派手に」
拓真も大げさに笑ってみせる。
「ま！　スポーツマンでもあるしね。仕方がないよ」
春樹がポンポンと肩を叩く。
「でも……楽器が」
「指のこと心配してんのか？」
拓真が聞く。
「はい……」
「もぉ～。お前、先輩の話聞いてた？」
拓真がグイグイと智志の頬を引っ張る。
「な、何をですか？」

「お前に運指教えたときのこと」
「？」
「変え指って、忘れたのか？」
「あっ！」
智志はすっかり忘れていた。楽器には、一般的に用いられる運指以外にも変え指と呼ばれる違う奏法がある。
「小指はツェーとハーしか使わないだろ？　ツェーは1番と3番、ハーは1、2、3を使えば問題ないな」
「そうだった……忘れてた！」
「ただし！」
拓真がビシッと智志に指を突きつける。
「音程はしっかり取らないとダメだからな！」
「はい！」
智志の顔がようやく、安堵したものへと変化した。

第３２３話　虹西高校

「よっしゃー！　ほな、いよいよこの日が来たなって感じやな！」
翔はアルトサックスを構え、気合を入れる。
「あたしも今度こそは負けませんから」
さゆりも気合十分だ。
「朝倉くん！　１年生だからって、遠慮はいらないんだからね」
麻綾が緊張で顔の引きつった夏樹の背中をバシバシと叩いて気合を入れる。
「はい！」
５月３０日水曜日。あいにくの雨だったが、今日は七海高校の吹奏楽部部員はかなりテンションが上がっている。というのも、２日土曜日にオープンハイスクールで演奏する『名探偵コナン　メインテーマ』のソリストを決定する日だからだ。
実は、サックスパート以外にも火花を散らすパートはあった。冒頭はアルトサックスがソリを演奏するのだが、その後にトロンボーン、フルート&オーボエ&バスーン、トランペットと火花を散らすパートは多岐に渡っていた。
「どう？　調子は」
慎也が亜紀に聞く。
「まずまずですよ、私は」
「マジでかー。俺もベスポジに持ってかないと」
ベスポジ＝ベストポジション。その状態へ持って行くには、なるべくロングトーンなどをこなしてよい状況へ持って行くことが最重要であった。
「あんち～！」
由美子が稚沙希の肩を叩く。
「ど？　火傷のほうは？」
「あ、おかげ様で昨日にはもう楽器吹いても痛くなくなりました！」

「ってことは、参戦だね？」
「はい！」
フルートパートも火花を散らすパートのひとつである。その背後では、オーボエの健之佑とまゆが必死に練習を繰り返していた。
トランペットの陽乃たちも練習に余念がない。今回のソリストを選ぶのは自分たちではもちろんない。すべては恭一が判断することになっている。いくらコンクールメンバーだからといっても安心はできない。コンクールのようなマーチや管弦楽アレンジのものと異なり、こうしたポップス演奏を得意とする部員もいれば、苦手とする部員もいる。必ずしもコンクールメンバーだから大丈夫、というわけではないのだ。
「おーい、そろそろチューニングしないとマズいんじゃないか？」
拓真がヒョコッと部室に顔を出す。翔が時計を見ると、既に午後3時45分だった。合奏は4時からだ。
「え？　あ、ホンマや！　音楽室行くで」
「わー！　マズいマズい！」
陽乃たちも慌てて音楽室に駆け込む。しかし、その目はこれからのコンクールやオープンハイスクールに対してとても意欲的な輝きを持っていた。
というのも、話は3日前の日曜日に戻る。

5月28日日曜日。以前、はるかが実家の経営するスナックで偶然出会った浜田　望実の在籍する、横浜市立虹西高等学校吹奏楽部の第28回定期演奏会に部員総出で聴きに行ったのだ。はるかが望実を伝ってチケットを手配してくれたのだ。1枚300円。高校生にはとても親切な金額になっている。
会場に着いてから、陽乃たちはそのホールの広さにまたしても感動していた。こんな広いホールで、自分たちの吹奏楽部の定期演奏会が開催できること自体、陽乃たちにとっては夢のようなことである。それが、この虹西高校では既に28回も定期演奏会を重ねてい

るのだから、驚きである。
「おーい！　はよ受付済ませるでー！　ウチ人数多いから、はよせんと迷惑や」
「あ、はーい！」
翔に促されて部員たちは次々と受付を済ませていく。
「よろしくお願いします」
翔は受付の少女にチケットを手渡した。
「……。」
少女が翔の制服の胸ポケットに描かれた校章を見て、それから翔の顔を見て、また校章を見ている。
「？」
翔は笑顔で首をかしげた。
「あの」
少女が声を初めて発した。
「はい？」
名札には浜田、と書かれている。
「七海高校の……方ですか？」
「あぁ、そうですよ」
「わぁ！」
すると少女はとても嬉しそうに笑い、翔の手を握った。
「へ？」
翔は驚いて少し赤くなってしまう。それから少女は元気いっぱいの声で言った。
「チケットをいっぱい買ってくれて、しかも、こんなにたくさん七海高校の人が来てくれるなんて、すごく嬉しいです！　ありがとうございます！」
「いっ、いえいえ！」
翔は首を大げさに横に振った。
「かえって迷惑ちゃうかな。アホみたいに５６人全員で来て……」
「え！？　皆さんで来てくださったんですか！？」

彼女はますます驚いて目を丸くする。
「えぇ。チケットせっかく送ってくださってんから、皆で行かんとアカンやろうってことになりましてね。幸い日曜日やし、みんな都合あってOKやったんで」
「ますます嬉しいです！　頑張りますから、是非何か感想とかもいただけると嬉しいです！」
翔はグッと親指を立て「オッケイ！」と答えた。真後ろに立っていた美里が「あぁいうことするからモテるの、わかんないのかなぁ、あの男は」と陽乃を気遣うように呟いた。
「大丈夫だよ。あたし、別にあぁいうこともう嫉妬しないって決めたから」
「およよ？　じゃあ、奪われたら？」
「そんなの奪い返せばいいじゃない」
美里が陽乃の頭をクシャクシャと撫でた。
「アンタ、強くなったねー！」
「もう！　バカにするようなことしないでよ！」
ワァワァと騒ぎながらも無事受付を済ませる。
「見てみ」
翔が陽乃たちを呼んだ。
「何？」
「これ、虹西高校の活動記録やって」
掲示板風に仕上げられた模造紙には、たくさんの写真とメッセージが書かれていた。
「わかりやす～い」
絵美が興味津々で由美子と内容をマジマジと見ている。
「ウチでこんなん作る時は、陽乃には任せられへんな」
「なんでよ？」
「お前の1年の時に作ったポスターは衝撃作やった」
慎也がクスクスと笑う。
「それ、俺も覚えてる。ピンク色のトランペット」

「個性的すぎるっちゅーねんな！」
翔がおなかを抱えて笑い出した。慎也と美里も耐え切れず、クスクス笑いから大笑いへと変わってしまった。陽乃が真っ赤になって翔の背中をバシバシと叩き始めた。
「なっ、何よ！　人のことバカにしてぇ！　ムカツくー！」
「痛い痛い！　やめんか、みんな見てるわ！」
その視線を集めている翔たちを見つめている中に、一人の少女がいた。少女は騒々しい翔＆陽乃と慎也＆美里のカップル二組を交互に見つめていた。
（なんだろあの人たち……。あのテンションは……うわぁ……ちょっとありえないかも）
少女は自分の雰囲気とは１８０度異なる翔たちに若干引け目を感じていた。
「！」
「！」
翔と少女の目がバッチリ合った。少女は気まずくなり、目を逸らしてしまう。すると、受付のほうから浜田　望実がバタバタと走ってやってきた。
「まっことー！」
「あぁ、うん……」
「あのね、そこにいる人たち、七海高校の人たちなの！」
「ふぅん……」
「前に話した、西嶋先輩がいらっしゃる高校！　今日、全員で聴きに来てくださったんだ」
「全員なんだ」
その後も望実はなんだかんだといろいろ話をしていたが、真琴は右から左で聞き流していた。
「わっ！」
真琴がふと気づくと、目の前にさっきの男子生徒が立っていた。
「あの～……虹西高校の人ですか？」

「はい……そうですけど」
「やっぱり！　いやぁ、彼女にはホンマ感謝してるんです！」
少女の隣にいる彼女――浜田　望実に部員たちは深々とお辞儀した。
「いやぁ、そんな大したことは……」
「もしかして……チケット５０枚の話？」
少女が望実に聞くと、望実は「うん！」と元気よく答えた。ふと、少年の隣にいる少女と望実は目が合った。
その目が合った本人、陽乃はパッと少女を見るとなんとなく、懐かしい気持ちになった。そして、特に聞かれてもいないのに陽乃は名前を名乗った。
「初めまして。あたし、七海高校トランペットの、朝倉　陽乃っていいます」
望実は「あたしは浜田って言います！　西嶋先輩にはお世話になりました！」と元気よく答えた。
「あ、そうだ。彼女なんですけど、ほら、名前！」
望実は真琴を陽乃の前に引っ張り出す。
「あ……相原（あいはら）　真琴（まこと）です……」
「相原さん……。楽器は何やってるの？」
陽乃が聞くと、真琴は恥ずかしそうに答えた。
「コントラバスを少々……」
「おぉー！　みーやんと貴ちゃんと同じやな」
翔が嬉しそうに答える。
「はぁ……」
真琴は真琴で陽乃とどこかで会ったような気がしていた。
「あ、真琴。そろそろ行かなきゃ」
「あ、ホントだ」
「それじゃあ皆さん！　是非楽しんで行って下さいね！」
「おう！　おおきに！」
「それじゃ、あたしたちは失礼します。行こう、真琴！」

「うん……」
真琴は陽乃が気になりつつも、ペコリと会釈をしてその場を立ち去ろうとした。
「あ！」
陽乃は思わず彼女に声を掛けずにはいられなかった。
「あの……頑張ってね！」
真琴も、答えずにはいられなかった。
「はい！　ありがとうございます！」
陽乃は真琴に手を大きく振る。
「知り合い？」
翔が聞いた。
「知らない。けど、知らないハズない気がして……」
「デジャヴってヤツか？」
「かなぁ……」
陽乃はなんとなく胸に何かが引っ掛かる思いを残しつつ、真琴たちと話していた場所を離れていった。

第３２４話　プログラムにいる彼ら

「あの！」
先を急ごうとする真琴たちを、慎也が呼び止めた。
「はい？」
真琴が答える。
「あのさ……ちょっと聞きたいんだけど、いいかな？」
「はい」
「そちらに……永瀬　信二って子、いる？」
「永瀬くんですか？　同じパートです」
真琴の顔がポカンとしたものになったが、すぐに彼女はハッキリと答えた。
「いますけど……お知り合いですか？」
「まぁ……」
慎也の顔がほころぶ。続けて聞いた。
「アイツ、元気にやってる？」
「えぇ。なんだかんだ言って、チューバ楽しそうに吹いてますよ」
「そっか……」
慎也はホッとした様子で微笑んだ。
「あの……」
「あっ！　急ぐのにゴメンな！　ちょっと、聞きたかっただけ！　それじゃ、頑張ってください！」
「はい」
慎也が手を振ってその場を後にすると、すぐにホールと楽屋を繋ぐドアが開いた。
「二人とも！　何やってんの？」
信二だった。
「あ……それがね永瀬」
望実が慎也の話をしようとしたが、信二が「パート点呼やってる

から！」と言うので伝えられないまま、真琴たちはバタバタと楽屋のほうへ駆け込んでいった。

一方、客席内に入った翔たちは綺麗に印刷されたプログラムをマジマジと見つめていた。

「やっぱ、２８回もやってるとプログラムも手慣れた感じで仕上げてるなぁ」

翔が羨ましそうに言う。

「それに、普通におもしろい」

沙希が３年生紹介の欄を読んでニヤけている。

「でもさぁ、この人たちもみーんな、あたしたちと同じように楽器演奏するのよね」

絵美が当たり前のことを言う。

「そりゃあな」

「なんか、ここに写ってる写真見ても、そんな風に見えない人いーっぱいいるけどね」

「特に、オレとしてはこの子なんか特にそう思う」

春樹が一人の少女を示した。

「どれ？」

陽乃が覗き込むと、先ほどの相原　真琴を春樹が示していた。

「弦バスだって！　なんか、クラリネットとか似合いそうなのに」

すると、後ろから亮平と貴志が身を乗り出してきた。

「わかってないですね！　春やん先輩は。同じバスパートだっていうのに」

亮平が春樹の弱点である首筋を人差し指でなぞった。

「そうですよ！」

貴志が耳たぶのあたりを撫でる。春樹は「ひゃめろー！」と情けない声を出しながら震えている。

「彼女は彼女で、弦バスと何か、フィーリングが合ったに違いありません！」

「わかった、わかったからマジで勘弁～！」

「静かに！　そろそろ始まるよ」
　第1部がいよいよ始まろうとしていた。第1部冒頭を飾る曲は『ヴィヴァ・ムジカ！』。
「知ってる？　この曲」
　陽乃が翔に聞くと「うん。小5のときにウチの中学の定演聴いたときに演奏しとった」と答えた。
「へぇ～」
「あのアルフレッド・リードが作曲してんぞ」
「リードが？」
　陽乃も吹奏楽経験3年目に突入し、それなりに作曲者のことを覚え始めていた。
「おう！　せやから、期待しとってえぇと思うで」
「おぉ～……」
　ビーッ、と開演5分前という合図のベルが鳴り響く。舞台袖では、今頃かなり緊張した様子で部員たちが控えているのだろうと思うと、陽乃まで緊張するような気がしていた。
　そして、いよいよ開演である。
（あれ？　相原さん……いない？）
　陽乃は真琴の姿を探そうとするが、まったくどこにいるかが見当もつかなかった。一方の慎也も信二の姿を探そうとするが、まったく見当たらない。
（おかしいな……）
　キョロキョロとしている慎也に隣に座っていた順平が声をかける。
「どしたんスか？　キョロキョロして」
「いや……知り合いがいるはずなんだけど見当たらなくて」
「この曲、3年生しか出てないみたいッスよ？」
「え？　そっか……」
　その会話を耳にしていた陽乃も、おそらく真琴の学年は3年生ではないのだろうと推察していた。それでも、演奏に関心が失せるわけではないので、慎也も陽乃も気を取り直して演奏を聴くことにし

た。

部員たちの姿がハッキリ見えるほどに照明が明るくなると同時に、指揮棒が振り下ろされた。トランペット・トロンボーンの印象的なメロディとティンパニの凛々しい打ち込み、軽やかな木管の上昇音系が繰り返され、少し落ち着いたところでクラリネットのメロディとチューバや弦バスの伴奏が響いてくる。

（いーなぁ……。チューバもあんな風に目立ちたい）

拓真はジーッとチューバの動きを見つめていた。それは亮平や貴志も同じ気持ちだったようで、バスパートの視線はチューバ方面へ向きっぱなしであった。

やがて、アルトサックスとオーボエのメロディが響いてきた。どちらかといえば短調のこの曲。オーボエやサックスにはもってこいの雰囲気なのかもしれない。激しい打ち込みと木管の細かい動きが交互に現れ、やがて転調してホルンのメロディが聴こえてきた。

（あたしもあんな風になりたいな～！）

杏はワクワクした様子でそのメロディを聴いていた。曲の表情がこれほど頻繁に変わる曲ともなると、相当な練習が必要だろうと翔は感じていた。

（音高いな、今の！）

智志は一瞬だったが、チューバの上昇音を聞き逃していなかった。

（すっげぇ速い動き）

春樹もユーフォニウムの一瞬の動きを見逃さなかった。音が細かくなれば、多少のゴマカシがきくものの、この虹西高校のユーフォ奏者はまったくごまかさず、完璧に音を吹ききっていた。

最も華やかと感じる部分に差し掛かった。おそらく、曲の終わりが近いのだろう。トランペットを筆頭に、鮮やかな動きがあちこちで聴こえてきて、パーカッションのテンションが上がり、一気に曲は終わりを告げる。最後の全員でのトゥッティの打ち込みが見事に決まり、曲は終わりを告げた。

こうした演奏を聴く時間というのは、異常に速く過ぎていくよう

に翔はいつも感じていた。実際、もう1部は終わりの曲に差し掛かろうとしていた。

最後を飾るのは『伝説のアイルランド』。こちらも残念ながら真琴たちは出演しないものの、十分聞き応えのある曲だった。

かつて風見台高校が演奏したのを聴いたことがある部員たち。しかし、同じ曲でも学校によって演奏の仕方は異なる。十人十色といったところだろうか。

冒頭の鎖を振り下ろす部分。やはり、高校生くらいになると単純な金属の塊を落とすだけでも不思議と立派な楽器に見えるものなのだ。美里はその様子を真剣な表情で見つめていた。

（響くな～……俺の音色もあんな風に響いてるかな？）

誠は、印象的に聴こえてくるバスーンの上昇音系の伴奏に耳を傾けていた。フルートやオーボエの音色を潰さないように、かつ目立たせる音色。これが一番難しい。伴奏なので目立たなさ過ぎては支えにならないし、目立ちすぎては話にならない。ある意味、難しいポジションでもあるが、虹西高校のバスーン奏者はそういう意味で、バランスの取れた奏者だった。

それからメロディラインが分厚くなり、再びテンポが落ちると今度はフルートのどこか優しげで、それでいて寂しげな音色が聴こえてきた。

（ステキ……）

稚沙希がその音色に惚れ惚れしていた。自分であれば、緊張で音が震えてビヴラート（音程を揺らす奏法）ならぬビビラート（ビビッて音が震える）になりそうな所だった。綺麗なソリで、沙希や由美子も自分たちが演奏するよりもずっと綺麗な音色に、夢中になっていた。

（来たな！）

翔、夏樹、さゆり、麻綾が突然前のめりになった。あまりにわかりやすいので、近くにいた雄飛、みゆき、光瑠の3人が笑いを必死にこらえていた。アルトサックスのソロ。あまりの反応のよさに、

本能的な何かがあるのではないかと思うほどだった。
そして、そのソロが終わると急にテンポが上がって行く。城での闘いを描写した部分なのだ。それを象徴するように、次第に調は単調へと移調していく。そしてタムタムのリズムカルな音が聞こえる。ティンパニのクレシェンドをきっかけにして、木管の動きが激しいものになり、トロンボーンとトランペットの勇ましいメロディが聞こえてきた。ココまで来ると、奏者以外にはどんなリズムが刻まれているのかよくわからなくなってきていた。そして、ティンパニとタムタムの音だけになり、銅鑼の音が響いた後、一瞬の沈黙を置いて冒頭部分が再現される。
もしも、さっき出会った真琴が奏者としてここにいたら、どうだっただろうか。
もしも、信二がここに立っていたら、もっと楽しかっただろうか。
陽乃と慎也は曲の最後を聞きながらふと、そんなことを考えていた。

コラム☆１４　奏って、ここがどうなってんの!?（１）

～奏って、ここがどうなってんの!?～

「というわけで、作者が何か勝手なこと言うとんねんわぁ」
翔が呆れた様子で揺り椅子をしながら呟いた。
「でもさぁ、確かにココがどうなってんだ?って言う部分はあるわけよ」
陽乃が答える。
「そうかぁ?　別に今さら……。コラムとかでぎょーさん暴露しとんちゃうの?」
「いやいや。それがまだまだ秘密がいっぱいあるのよ、あたしたちには」
陽乃がニヤリと笑う。
「気色悪いの～。何を企んどんねん?」
「まぁまぁ!　質問はね、１０人に寄せられてんのよ」
「１０人!?　なんや?　ほな、３年生１人ずつに質問があるってこと?」
「単純計算でそういうことだね」
「単純計算って……」
「まぁまぁ!　じゃあ、素朴な疑問をここで公開しちゃいまーす!」

☆　エントリーＮｏ．１　佐野　翔　☆

＞ｉ９６３０―１５０＜
さて、１番目に質問を受けるのはオレ、佐野　翔に寄せられたものです！
素朴な疑問ってことなんですけどね。オレに寄せられた素朴な疑問。それは！

【翔ってなんで転校してきたの？】
なるほどね～。確かにね。転校っていうか、引越しですけどね。まぁ、理由は単純明快です。父親の転勤なんですけどね。それが決まったのは中３の卒業直前、２月のこと。それはもうビックリやっちゅーの。
いちおうね、南大阪の市立高校にオレ、進学決まってたんですよ？　ただ、かなり悩みました。いちおう、佐野家のおばあちゃんはおじいちゃん亡くしてるんで、オレらと同居してたけど、オカンのほうのおじいちゃん、おばあちゃんは元気いっぱい。偶然、オトンとオカンの出身が南大阪同士やったから、二人の実家も南大阪ってわけ。
やから、オカンのおじいちゃん、おばあちゃん家でお世話になって合格してた高校に通うって手もありました。ただ、みんな知ってるとおり、オレ中学の吹奏楽部を退部してるから、なんとなく南大阪にいづらくてね。
それも手伝って、引越しの時に一緒に行くことを決意しました。
え？
仮に市立高校に行ってたら？
間違いなく、吹奏楽はやっていません。ビックリするでしょうけど。通う予定やった市立高校に通ってたら、中学時代の吹奏楽部のメンバーもいてるからね。中学で辞めたのに高校で再開ってどうなん？って思われるのが怖くて……。
ヘタレでごめんなさい。

【なんで七海に来て吹奏楽をまた始めたの？】

七海に来て吹奏楽しようとした理由？　なんやろう……。ただ、陽乃を見てたらこの子とやったら、吹奏楽、もう一度だけ演(や)ってみたいって思った……。

なんてなー！　なに恥ずかしいコト言うとんねん！って感じやな！

ただ、オレの心の中で吹奏楽に対する想いってのが消えてなかったのは事実かな。サックスとか、合奏とかハーモニーとかいろいろ。それにそこでできる友情とか。やから、結局ショー先輩に修平、森崎亜由美、松中　未梨、下田さやかとかいろんな友達、先輩ができたのも、嬉しかった。そういう絆をもう一度作りたいって。やっぱり、思っちゃったわけなんですよね。

吹奏楽大好き。これに限ります！

【養子のこと、気づいてなかったの？】

全然です。まぁ、綾音や智輝とオレの顔立ちはなんかちゃうなぁ……って思うことはあったけど。全然気づいてなかった。そりゃそうやんな。綾音が3歳の時にオレが養子になってさ～。そんなん、覚えてるわけもないし。智輝は産まれたときにはもうオレが兄貴ヅラしてたわけやし！

でも養子やからって、オレはなんかひいきされてるとか差別されてるとか思わんし、オカンとオトンはいつまでたってもオカンとオトンやって思ってます。

いいんちゃう？　オカンとオトン二人おってもえぇやん！

【陽乃ちゃんのどこが好きなんですか？】

それ、ここで聞く!?

……。

まぁ、意地っ張りやし？　感情の起伏激しいし？　ホンマ傍から見てたらどこがええねん！っちゅー女の子に見えるかもしれへんけど。

ただ、めちゃくちゃ女の子らしいところあるんやで？　料理上手いしな！　楽器上手いし、ちょっと気ぃ強いからガツーンと言いたい事言うことあるけど、ちゃんと後で気遣いできるええ子やもん。

まぁ、総括したらオレは陽乃の全部が好きってこっちゃ！

以上！　では、次はそんな陽乃にバトンを渡します！

☆　エントリーＮｏ．２　朝倉　陽乃　☆

＞ｉ９６３１―１５０＜

はい！　翔からバトンを受け継ぎました～、朝倉でございます！

あたしに対する素朴な質問、はい、公開でーす！

【どうして吹奏楽を始めたの？】

皆さんご存知かどうかはわかんないけど、あたし元はリコーダー部に在籍してました。中学の頃ですね。あたしはアルトリコーダー。ですので、楽譜がまったく読めないとかそういうわけではなかったです。それに、リコーダー部のおかげで音楽にも興味があったしね。

でも、高校にはリコーダー部がなくて。他にめぼしい部活もなかったところに、まぁ翔から誘われて。そのとき初めて吹奏楽に触れて、なんていうか……直感的にきっと、吹奏楽を演ったらこの高校３年間はきっといいものになるって確信したから、始めたってわけです。

【春樹と雪子とは、中学時代接点なかったの？】

それは……全然！

だって、あたしと雪ちゃん、あたしと春やんって全然当時はキャラもテンションも違ったから全然接点がなくって。二人とも帰宅部だったし。全然喋んないし。それなのに、高校で同じ部活に入って、今じゃあだ名で呼ぶ仲になってるんだもん。人生わかんないよね～。

なんて、おおげさ？

【トランペット以外に興味はなかったの？】

そういえば、女の子にはフルートとかクラリネット、人気だよね。でも、トランペットも人気あるでしょ？

あ……本堂くんが睨んでる。怖い！

まぁ、それはいいとして。あたしは雪ちゃんと一緒に翔ん家初めて連れて行かれて、そこでトランペットの口してるって、要するにトランペットに向いてるって言われたから。向いてるって言われて、それでも別の楽器したい！っていう気持ちはあたしにはなかったかな。

ちなみに、いま変われるとすればオーボエなんかやってみたいかも。ただ、繊細だからあたしには向いてなさそうだけどね……。

☆　エントリーＮｏ．３　大谷　沙希　☆

＞ｉ９６３２―１５０＜

はいっ！　次は私、大谷沙希でございます！　私に関する質問は、なんか似たようなのばかりなんですが……とりあえず、答えていきますね！

【お金持ちって、どの程度なんですか？】

ど、どの程度……？　まぁ、家の広さは家族５人とホームステイしてるマーガレットの合計６人が住めるくらいと思ってください。具体的な広さ？　えっと……何坪だろう？　私、知らないんですよ。お父さんは食品の卸売だっけ。とにかく、会社を経営しています。あと、うちには一応メイドさんが１人、来てくれてます。栗原さんっていうんですけどね。弟も妹もまだ小さいから、お世話をいろいろしてくださるんです。優しい方ですよ。

え？　普通はメイドさんなんていない？

そ、そうですよね……。

【フルートは中学生から経験してるんですか？】

はい！　これはそうです。中学生の頃からやっています。あと、ピアノも私、弾けるんですよ。これは小学生の頃からやっています。吹奏楽でもピアノを弾くことがあるそうなんで、私の出番がいつか来てくれることを祈っています！

【お嬢様っていうから、もっと嫌味なとこあると思ってました】

それって……ドラマや漫画の見すぎじゃない？　お嬢様って言うのは、多分周りの子たちがそういう風に言うもんだから、なんだか私のイメージがどんどん勝手に膨れ上がってるだけのような気がするのよね。

ちなみに、吹奏楽部で私を特別扱いするような人、いません。部長にいたっては大谷ちゃんとか呼んで来ますからね！

おっと。向こう側で私のちょっとホヨヨンとした相方が日向ぼっこしていますね。そんな彼女にバトンを渡しちゃいます！

☆　エントリーＮｏ．４　宮部由美子　☆

＞ｉ９６３９―１５０＜

やっ、やだ！　ちょっともう！　サキティったら私にバトン振るなら振るで、言ってくれなきゃ……。全然心の準備ができてないのに。

んんっ！　えっと、改めまして、宮部由美子です。では、私に寄せられたご質問に回答しますね。

【天然って、どの程度天然なの？】

私にはまったく自覚がないんですが、ミサッチにそれを言ったら天然の人は自覚症状がない、と言われました。となると、私はやっぱり天然なのかな……？

天然っていうより、単純にドジなんだと思うんですが。

今の１年生が入ってから既に３回、人の財布を持って帰ってます。色が似ていたというだけで持って帰ってる、迷惑はなはだしい女です。１回目はあんち、２回目は進藤くん、３回目は好美ちゃん。散々でしょ？

【楽譜係、大丈夫ですか？】

それは私が天然だから心配してくださってるって捉えちゃいますよ？

大丈夫です。後輩がみんなしっかりしてくれているので、楽譜の管理はバッチリです。で、私は何をしているかというと楽譜の整理整頓。実は私、こう見えて掃除とか整理がすっごく得意なんです。

私、意外と家庭的なんですよ～。フルートパートのサキティとかあんち、佳菜ちゃんに聞いてみてください。週１回、お休みがあれ

ばクッキーやチョコを作ってきて、皆にご馳走してるんです。

何？

なんか川崎くんがもらったことないとかわめいてますが、基本的に女の子にしか上げないので当然です。

【話は変わりますが、みーやんのどこが好きなんですか？】

えぇ！？　変わりすぎ……。なんだろう。クールに見えて熱いところを持ってるところがまず、好きかな。それに彼、笑顔がとても柔らかいの。みんな、彼の笑顔見たらきっと性別関係なく、キュンキュンしちゃうと思いますよ！

……。

おっとと。そろそろ恥ずかしいので、ここで私への質問はオシマイですね！　では、次にエミリンにバトン渡しちゃいま～す！　エミリン、はい！　どうぞ！

☆　エントリーＮｏ．５　橋本　絵美　☆

＞ｉ９６３６―１５０＜

っというわけで、やってまいりました橋本　絵美です！　若干由美ちゃんが逃げた感が残りますが、私に寄せられた質問、お答えしていきますね。

【どうしてそこまでクラリネットをしたかったの？】

そうですね～。私、中学から本当はクラリネットを吹きたかったんです。その理由なんですけど、小学校の時に風見台高校の定期演奏会と袴田中学校の定期演奏会に行ったことがあるんですね。そのときに風見台ではあの『プスタ』のクラリネットソロを、袴田では

『シング・シング・シング』のソロを聴いて完全にクラリネットに夢中になっちゃったってわけなんです。

ただ、私の出身中学はレベルが高かったので断念したってわけなんです。いま考えてみれば、やりもしないで諦めた自分がすっごくもったいないし、バカだって思うんですけどね……。

したいことがあるけど踏み出せていない貴方。できるうちにできることしないと、きっと私みたいに後悔しちゃうと思うので……ぜひチャレンジしてください！

【勉強、苦手なの？】

なんか顔で判断されるんですが、私、勉強できるみたいな風に思われてるみたい……。これ、すっごく困るんですよね。実は私、理系大嫌いです！　なんなのよ、微分積分って！　って感じです。あと、世界史も嫌い。自分の国の歴史でも覚えるのいっぱいいっぱいなのに、なんでこれ以上世界のことまで覚えなきゃなんないの？って感じです。

ただ、勉強すればそれなりに成績取れることに昨年、気づきました。つまり、今までやってなかった！ってことですね。テヘッ！

【意外と気が強いそうで】

よく意外って言われるんですが……私はまったく意外って思っていません。私には姉と兄がいて、昔からなんでも早い者勝ちでとか言われて食べ物は基本的に争奪戦。それに、いろいろと言われたりいらないことをされたりするんで、それに対処するために気が強くなってきちゃったのかも。

あ、でも吹奏楽部のみんなやクラスのみんなにはこんな気が強い性格、思い切り発揮したりしてないですよ？　だってみんなはお兄ちゃんやお姉ちゃんみたいに、ギラギラしていないからね。でも、

自分の信念はなるべく曲げたくないです。そのせいで一度、川崎くんと激論したことありましたけど……自分の意見は主張するべきですよ、皆さん！

さて！　残る5人……ほとんど男子だけど、残る5人はまたの機会に！

だってほら、ブザーが聞こえません？　そろそろ、虹西高校の定演の休憩時間が終わって、第2部が始まります。

皆さん、私たちと一緒に定期演奏会の続きを楽しみましょう！

では、スタート！

第３２５話　感情移入

第二部もいよいよ終盤に差し掛かった。虹西高校の部員たちも、1年生を加えて大所帯での演奏となっている。

信二や真琴など、見慣れた顔や見覚えのある顔が舞台の上に立っていると、なんとも言えない感じがしてくるものである。

（あたしたちも定演開いたりしたら……菜緒とかにはこういう風に見えるのかな）

陽乃はふとそんなことを考えた。

「なんか不思議」

つい、言葉になって出てしまった。

「何が？」

翔が笑顔で陽乃のほうを見る。

「う、ううん！　独り言よ、独り言！」

「ふーん……？」

翔は少し不思議そうな顔をしつつ、前へ向き直った。

始まった曲はＳＭＡＰの『オレンジ』。真琴や信二が吹く様子を、慎也や陽乃はジッと見つめている。そして、同時にこの曲は3年生の紹介の曲でもあった。

そして、3年生らしい姿が見え、続々と前に並んでいく。3年生の紹介が始まるのだろうと陽乃も気づいていた。

陽乃はその中でも一際背の高い少年に目をやった。部長の、石田（いしだ）和樹（かずき）であった。3年生だけでも３０人。陽乃たちの3倍もの人数だった。

3年生が全員揃ったところで、和樹が挨拶を始める。

「本日は、第２８回虹西高等学校定期演奏会へお越しいただき、そして最後までお付き合いいただきありがとうございました」

（２８回……か）

陽乃はふと考えた。２８年前からこの虹西高校の吹奏楽部は演奏会を開催しているということになる。第１回の定期演奏会時に１８歳だった人は、もう４６歳ということになる。

「今日という日を無事に迎える事が出来たのは、顧問の明仁（あきひと）先生を始めとする虹西高校の先生方や、協賛金を出してくださった方々、そして、帰りの遅い僕たちを暖かく出迎えてくれた家族のおかげです。感謝しています」

ふと、恭一の顔がよぎった。そして3年生の先生や、由利、祥夫の顔。陽乃が思いをめぐらせている間にも、和樹の挨拶は進んでいく。真琴たち1、2年生の演奏するオレンジが、さらに雰囲気を醸し出していた。

「僕が部長になったのは、ちょうど一年前、去年の定期演奏会が終わった次の日でした。その時は僕、まだまだ時間はたっぷりあると思っていました。でも……あっという間に一年は終わりました。今、自分がこの大きな舞台に立っているのが、いまだに信じられないです。吹奏楽コンクールや学園祭、クリスマス会……仲間たちと過ごした日々が昨日のように感じられます」

（あたしたち……も、定期演奏会の日、こんな風に思うんだろうか）

まったく想像できない。今まで袴田中学や風見台高校の定期演奏会で何度もこうしたシーンを見てきていたが、陽乃は自分たちに当てはめることができずにいた。

「僕が部長として今日までやってこられたのは、二年間共に歩んできた素晴らしい仲間たちがいたからです。今から、僕の大事な三十人の仲間を紹介したいと思います」

「……！」

陽乃の近くにいた亮平の視線が、真琴のほうに注がれた。

（泣いてる……）

亮平は、弦バス奏者の真琴が泣いていることに気づいたのだ。それも、泣いているせいで楽器の演奏がかなりし辛そうになっていた。

（あぁ……）

陽乃は気づいた。間違いなく、半年もしないうちに陽乃たちは和樹のように、亮平たちは真琴のように、あのような立場になっているのだ。

３年生の紹介が終わる頃には、陽乃の目は涙でいっぱいになり、真っ赤になっていた。

「大丈夫か？」

翔がハンカチを陽乃に手渡した。なんとなくバカにされそうな雰囲気が一瞬、漂ったのだが今回に限っては、それは一切なかった。

翔の顔を見た。涙は流れていないようだったが、いつもは滅多にしてこないことをしてきた。

手を繋いだのだ。

暗い客席の中だ。手を繋いでいることはわからない。ただ、その手が何を意味するのかは、なんとなく陽乃も察知できた。

（一日一日を後悔しなければ、きっと相原さんのように……涙流していても、最後は笑っていられるんだろうな）

陽乃は最後の『Ｂｅｓｔ　Ｆｒｉｅｎｄ』のシーンを思い出していた。涙でいっぱいだった真琴たちの表情はいつの間にか、笑顔で満たされていた。

（あたしもあんな風に笑って引退できるといいな……）

陽乃は楽器を構え、気持ちを新たに合奏へ挑もうとしていた。

第３２５話　感情移入（後書き）

やや短めですが、次話への繋ぎですのでご了承くださいm（＿＿）m

第３２６話　提案ではなく、お願い

６月１日金曜日。いよいよ明日にオープンハイスクールを控え、吹奏楽部も最後の合奏を無事に終えたところだった。最終的に、曲は『Ａ列車で行こう』、『ＳＡＫＵＲＡ　ＴＬＩＲＯＧＹ』、『トランペット吹きの休日』、『名探偵コナンのテーマ』の４曲に決定している。

「よし。じゃあ明日の本番は今日の合奏どおりに吹けば問題ないからな」

恭一がにこやかに部員たちに言う。

「はい！」

「よし……」

翔が起立、と言おうとしたのを恭一が制止した。

「ちょっとだけ、話いいか？」

「……？」

部員たちが不思議そうな顔で恭一を見つめる。恭一は軽く咳払いをしてから、話し始めた。

「えっとだな……提案が」

言いかけて、恭一は口を手で覆った。

「提案なんて、厚かましいな。お願いと言うべきだな」

「？」

部員たち全員が疑問を浮かべているのを、恭一は感じ取っていた。

「まぁ……今年、第１回の定期演奏会を開催することはもう、ほぼ決定しているな」

部員たちがうなずく。

「今のところ、第１部がクラシック及び吹奏楽オリジナル曲ステージ、第２部がマーチングステージ、第３部がポップスステージになっているな」

コクコクと何人かがうなずく。
「先生からお願いなんだが……」
言いづらそうにしている恭一。美里が「なんですか？」と続きを促す発言をした。
「第……4部は、無理か？」
「第4部？」
春樹が首を傾げる。
「ポップスステージの後に、もう1部……最後にオリジナル曲の大曲をするのは、無理か？」
「……。」
恭一の問いに全員が黙ってしまった。
「先生。いいですか？」
拓真が手を上げる。
「どうぞ」
「なぜ、先生は第4部をしたいと思われたんですか？」
受験を意識しているのか、推薦で面接を受けるかもしれないと先日言っていた拓真は、うまく敬語を使って恭一に聞いた。
恭一はそれももっともだな、という表情をしてから言った。
「先生はできるだけ、君たちにたくさんの曲を経験して、この吹奏楽部をいずれは巣立ってほしいと思っている」
「……。」
巣立つ、と言う言葉が陽乃たちに直接響いてきた。
「先生も中学、高校、大学とたくさんの曲を経験してきた。それで今はこうして顧問として、皆にたくさんの曲を演奏させてあげられる機会を手に入れることができた。だから、先生としてはできるだけ皆に、たくさんの曲を少しでも吹いてもらって、たくさんの経験をしてもらいたい」
麻綾とさゆりが嬉しそうに顔を見合わせた。
「だから、第4部では……滅多に演奏できない大曲をしたいと考えている」

しかし、一部の生徒（初心者であるなぎさや綾音、智志など）は不安そうな顔をしていた。
「先生は、君たちがどんだけ曲数が多くても演奏できると確信を持っている」
その言葉になぎさや綾音たちが反応した。
「やりもしないうちから諦めるような子が、ここにはいないって先生、信じてるからこそこんなことを今、言ってるんだ」
綾音がなんともいえない歯がゆそうな表情をしている。きっと照れているのだろう。
「先生のお気持ちは嬉しいです」
由美子が珍しく手を上げて発言した。
「でも……そうなると定期演奏会の時間、すっごく長くなりませんか？」
「それは承知の上だ」
「私……心配しているのが、お客さん……飽きたり、疲れたりしませんか？」
翔はハッとした。確かに過去、中学時代に何度もいろんな演奏会に行ったが、途中で疲れたりダレたりしていまい、うたた寝を失礼ながらしてしまったこともあった。
「……。」
その可能性を恭一も否定できないのか、黙り込んでしまった。
「いいですか？」
その空気を変えたのが慎也だった。
「お客さんが飽きるとか、疲れたりとか言うのを宮部は心配してんだよな？」
「うん……」
由美子は小さくうなずく。
「だったら、簡単じゃん」
「何が？」
慎也は真剣な表情でハッキリと言い切った。

「俺たちが、飽きさせない、疲れさせない演奏をすればいい」
その言葉に、由美子の顔がハッとした表情に変化した。
「俺たち奏者が頑張れば、お客さんは応えてくれる。こないだの虹西高校の定演が、まさにそんな感じだったんじゃないかって、俺は思ってる」
慎也は信二の姿を思い出しながら、自分に言い聞かせるように言った。
「あたしも」
陽乃が手を上げる。
「第4部があろうと、第5部があろうと、あたしたちの努力次第でいくらでもお客さんを楽しませることはできるんじゃないかって、思います」
部員たちの表情が変わった。明らかに不安の色から、期待や希望に満ちた色へと変わってきていた。
「ひとまず」
恭一が嬉しそうに言った。
「今すぐ答えは求めない。来週の……そうだな。水曜日くらいに答えをくれないか？　みんなの」
「……。」
「頼むよ」
恭一の最後の柔らかい言葉が、すんなりと部員たちの耳に入った。
「はい！」
まとまった返事が音楽室内に響く。
「では、今日の合奏を終わります。部長、号令」
「起立！　礼！」
「ありがとうございました！」
挨拶を終えると、すぐにクールダウンを始める者、恭一に合奏では聞ききれなかった部分を問う者など様々だ。
翔はサックスをそっと置き、慎也のところへ駆け寄った。
「ビックリしたで、慎也」

「何が？」
慎也は目を丸くして翔に聞く。
「オレもすっかり忘れてたこと、思い出させてくれた。ありがとうな」
飽きさせない、疲れさせない。お客さんを楽しませる。自分たちが楽しむだけでは、音楽にならない。
「そう？」
慎也が恥ずかしそうに笑う。
「俺は自分の思ったことを言っただけだし……。なんかハズい」
「そんなことあれへんよ」
翔はニカッと笑い、もう一度慎也に「ホンマ、ありがとうな」と礼を言った。その後、すぐに陽乃のところへトコトコと駆け寄る翔。
「ひーなの」
「んー？　なぁに？」
陽乃が呼ばれて振り返る。
「ありがとう！」
「？」
陽乃が首を傾げる。
「あたし、なんかお礼言われるようなことしたっけ？」
「うん！」
「えぇ～？　心当たりないけどなぁ……」
「ま！　えぇやないか！　礼を言わせてくれ！」
「何それ。変な翔」
陽乃はクスクスと笑った。
「なぁ」
不意に翔の声が低く、小さくなる。陽乃の胸がドキッと鳴った。
「来週の今日は……何の日か、覚えてるやろ？」
「……うん」
ニッと翔が笑う。
「ちょうど金曜やな。９日部活あるけど、夜、空ける？」

「どうだろ……。お父さんとお母さんに聞いてみないと」
「わかった。オレはＯＫもらってるから、陽乃もちゃんと聞いてＯＫ出たかどうか、また教えて」
「うん！」
「ほな、楽器片付けたらまた一緒に帰ろ！」
「うん！」
翔はヒラヒラと手を振りながら自分の席に帰っていく。帰るなり麻綾とはるかに「なぁんの話ですか～？」と質問攻めを受けて苦笑いする翔を見て、陽乃は思わず笑ってしまった。
（来週か……）
陽乃にとって、１年に１度の楽しみにしている記念日がやって来る。その瞬間を、翔と一緒に迎えることができる。そう思うだけで、陽乃は胸がいっぱいになるのだった。

第327話　まさかの出逢い

「おっはよー！」
午前8時ちょうど。津上橋の上を歩く翔に、陽乃が追いついていく。部活のだけの日でも普通の学校の日でも、登校時はあえて一緒に登校するようなことはしていない。自分の時間を持ちたいだろう、という翔の考えで一緒に行くことは滅多にない。こうして偶然出くわせば、一緒に登校するという感じだ。
「オッス！　おはよう！」
翔も元気よく答える。
「どないやった？　昨日は」
「うん！　お父さんにもお母さんにもOKもらえたよ」
「ホンマか！　ほなな、オレ個人的にはここに行きたいんやけど」
翔はパソコンで印刷した紙を見せる。
「登戸まで出るの？」
「一駅の話やもん。それに、この店そないに高くないし、なんとかなるって」
「そうなの？　高そうだけど……」
陽乃が心配そうな表情を浮かべる。
「心配ないって！　なんせな、この店実は……」
翔が耳打ちする。
「えっ？　本当？」
陽乃は信じられず、まだ半信半疑といった様子だった。
「ホンマホンマ！　うまいこーと説明してくれてな。オレらが先輩や言うて、そのうちの片方が誕生日や言うたら、なんとか安くでできることとしてくれるって言うてくれはってん」
「すごーい！　これはお礼言わなきゃね……」

陽乃は小さく拍手をして喜んでいる。
「ホンマにな～。おっ？　噂をすれば……おーい！　添田さん！」
添田麻衣子が翔に呼ばれて振り返った。麻衣子はニッコリ笑い「おはようございます、佐野先輩、朝倉先輩」と挨拶をした。
「おはよー！」
翔がニッと笑い、挨拶を返す。
「おはよう、添田さん」
陽乃も翔に続いて挨拶をする。
「ゴメンね、なんだか今回はワガママ言っちゃってご家族にご迷惑おかけして」
「いえ！　ウチの母も父も、一度佐野先輩と朝倉先輩にお世話になってますって言いたいって言ってましたので」
麻衣子の家は、両親でイタメシ屋を経営していた。翔は麻衣子に無理を言って、なんとか陽乃の誕生日をお祝いするために、６，０００円から８，０００円程度でなんとかならないか、と麻衣子に依頼していたのだった。麻衣子がその事情を両親に話すと、なんてことはない、任せなさいという返事が来たのだ。
「制服姿のままではマズいので、一度着替えてからいらしてくださいね」
「うん！　楽しみにしてる！」
「あんまりハードル上げると両親が焦るので、期待しすぎないでくださいね」
麻衣子が苦笑いして答えた。
「まったまたー！　よぉ言うわそんなこと！」
翔は大声で笑いながらふと前を見た。
「あれ……？」
ゴシゴシと目を擦って、もう一度校門のほうを見る。
「どうかしたの？」
「いや……。気のせいみたい」
「誰かいたの？」

「うん。見えた気がしただけ」
「お化けだったりして！」
「や、やめろや！　そういう話嫌いなん知ってるやろ！？」
翔はブルブルと身震いをした。陽乃と麻衣子は笑いながら翔の後を追った。
職員室で恭一から音楽室の鍵をもらい、職員室を出てから音楽室に向かう。体育館では、先生たちが忙しそうにオープンハイスクールの準備に追われていた。それは、2年生の一部のクラスも同じように準備に追われていた。
「あっ。おはようございます」
健之佑と廊下ですれ違った。2年G組の教室には健之佑、智志、恵梨に健之佑の親友で翔とも陽乃とも多少の面識がある志賀　慧太の姿があった。
「おはよー！　ノムさん！」
「模擬授業、大変だね」
健之佑のクラスは模擬授業の実施クラスとなっていた。そのため、土曜日でも授業を受けなければならなくなったのだ。しかも、教科は英語と来たものだ。かなり眠くなるだろうと翔は予想していた。
「早く楽器吹いて目立ちたいッスよ～」
健之佑がダレた様子を見せた。
「ハハハ！　まぁ、勉強頑張ってる姿も未来の後輩たちに頑張って見せなアカンやろう！」
「そんな面倒なこと言わないでくださいよ～」
健之佑が心底面倒そうな声を上げた。隣では、慧太がなんだかソワソワしている。陽乃の耳に、恵梨と慧太がコソコソ話をしている言葉が耳に入ってきた。
「早く言っちゃいなよ。こういうのは、タイミングだよ？」
「で、でもケンだって知らないのに……」
「やだ！　言ってないの？」
「お前にしか言ってないよ……」

「なんであたしだけなのよ」
「どうかしたの？」
陽乃は気を利かせて恵梨に聞いた。
「あっ……えっと、実は……」
慧太が俯いている。恵梨がドンドンと慧太のわき腹をつついた。
「わ、わかってるよ」
慧太はスーッと深呼吸をして、翔と陽乃に言った。
「あの！」
ビクッと健之佑と翔が体を震わせた。
「は、はい！」
翔は思わず返事をしてしまった。陽乃が隣でクスクスと笑う。
「吹奏楽部って、途中入部できますか！？」
「……へ？」
健之佑が目を丸くする。翔も一瞬呆気に取られ、すぐに「うん……できるけど」となんとも間の抜けた声で答えた。
「ホ、ホントですか！？」
「うん」
「あの……俺、入部したいんです！」
「……マジで？」
健之佑は信じられないという表情をしていたが、恵梨は満足気だった。
「よ、よっしゃ」
翔もすぐに笑顔になる。
「大歓迎やで！　な、みんな！」
「うん！」
陽乃がうなずく。恵梨も嬉しそうだ。
「や、やったー！」
慧太は一気に喜びが溢れてきたのか、大声を上げて両手を大きく上げた。
「ほんで！？　何かやりたい楽器とかあんの？」

翔は慧太に聞いた。慧太は頬を赤くして小さく飛び跳ねながら言う。
「とぐっちがやってる、バスーンっていうの演りたいです！」
「マ、マジかよ」
あまりの急展開にオロオロしているのは健之佑だけだった。翔たちは乗り気である。
「よっしゃ！　ほんじゃま、ひとまず仮入部って感じやな」
「はい！」
「んじゃ、とりあえず今日の本番も聴いてもろて……来週1週間で仮入部してもろて、ほんで本入部するかどうかを決めてもらおか」
「はい！」
嬉しそうに話をする慧太。その後ろをまたしても、翔が見覚えのある少年の姿が見えたのだ。
「……？」
再び目をこする翔。様子がおかしい翔に気づいたのか、陽乃がまた聞いた。
「どうしたの？　ホントに」
「いや……。なんか、見覚えのある子がさっきからオレの視界に入ったり消えたりするんや」
「知り合い？」
陽乃が聞く。翔は小さく首を横に振った。
「そこまで深い仲やったら、すぐ気づく」
「泰徳くんとかですか？」
「そうではなさそうやねんけど……」
恵梨がパタパタと階段のところまで走る。覗いてみたが、特に誰の姿も見当たらなかった。
「他人の空似とかっていうヤツじゃないんですか？」
「そうなんかなぁ……」
翔は首を傾げる。
「あっ。ねぇ、音楽室のほうからミサッチの文句言う声が聞こえる

よ？」
「えっ！？　ヤバいヤバい！　怒られるやん！」
翔は慌てて走り出した。
「あっ！　なぁ、君！」
翔は慧太のほうを振り返る。
「あ、志賀です！」
「志賀くん！　また月曜日にでも部室おいで！　皆に紹介するから！」
「はい！」
バタバタと走る翔たちを見送りながら、健之佑が慧太に聞いた。
「なぁ……。お前、真剣（マジ）？」
「当たり前じゃん。俺も、お前らの部活見てたらやってみたくなった」
「そっか……」
そう素直に言われると、健之佑としても悪い気はしない。
「じゃ、これからは同士だな！」
「おう！」
二人はガッチリ握手を交わした、その様子を見ていた智志が興味深そうに話に加わる。そして、慧太からの言葉を聞いて智志も嬉しそうに笑っていた。
「……。」
その健之佑たちの会話を、階段横で一人の少年がずっと聞いていた。
「拓ちゃん？」
名を呼ばれてハッと少年が振り返る。
「なんや。ともみか……」
関西弁を使う少年。
「なんやってことはないやん。それより、そこにいる人たち……」
少女も関西弁を使っている。少年がうなずく。
「吹奏楽部の人たちや」

「やっぱりそうやんねぇ！　ねぇ、ご挨拶せな！」
「待てよ」
少年が少女の手を引く。
「いきなり突っ込んでいったて、しょうがないやろ」
「えー？　相変わらず冷めてんねんから……」
「俺、名前と顔が一致すんの、部長さんと副部長さんの3人しかおらへんねんもん」
少女が不満そうな顔をする。
「なんやのそれぇ。当てにならへんなぁ」
「お前かて似たようなもんやろ」
「まぁーねー」
少女がニコニコ笑いながら返した。
「せやけど、今日の目的は高校見学っていうより、お礼やろ？」
「うん……」
「変に意識せんと行ったらええぇんちゃうの？」
「そう簡単に行けばいいけど……」
少年は写真を握り締める。
「とりあえず、開会式行っとこう。やないと、怪しまれる」
「悪いことしに来てるんちゃうのに」
「えぇから！　行くで！」
「あぁ……うん」
少年が階段を降り始めると同時に、ワイワイと女子の集団が階段を上がってきた。
「ねぇ、今日のソロは上手くいくかなぁ？」
「どうだろう？　でも、昨日の合奏では結構よかったよ」
「後はピッチの問題かなぁ」
ソロ。合奏。ピッチ。吹奏楽部関係の人だろうと少年はすぐに察知したが、少女たちが急に近づいてきたことは予想できず、思い切り曲がり角でぶつかってしまった。
「わっ！」

「キャッ！」
少女の1人と少年が衝突する。
「ゴ、ゴメンね！」
「こっちこそ、すいません……」
二人は尻餅をついたままお互いに謝る。
「……。」
少女が、少年をジッと見つめた。
「あの……何か？」
少年は少女の名札を見つめた。名札には河内とあった。後ろで心配そうに見つめている3人の名札には伊原、小林、吉山の文字が書かれていた。
「君……！」
河内という苗字の少女が口を手で覆った。
「え？」
「あの……間違いだったらごめんね？」
河内みゆきが聞く。
「石川県古氷町の中学校の……石尾くんだったりしない？」
「あ……そ、そうです」
「わぁー！　すっごおーい！　ねぇ、石尾くんと……あなた！」
少女のほうにみゆきが近づく。
「あなた、津嶋ともみさん！？」
「は、はい！」
そう。少年の名は石尾（いしお）　拓也（たくや）。そして少女の名は津嶋（つしま）ともみ。あの能登半島沖地震で被災した古氷中学校吹奏楽部の部長と副部長だったのだ。

第３２８話　どうも、おおきに！

「もう！　何やってたのよ、二人して！」
音楽室の前には美里、慎也、あずさ、雄飛、麻衣子が揃って待っていた。
「ゴメンゴメン！　ちょっと盛り上がっててな」
「何にだよ」
慎也がクスクスと笑う。
「まぁ、月曜日になったらわかるわ」
「意味深ですね～」
「楽しみにしとき」
翔はニコニコしながら鍵を開ける。
「ねぇ、出演時間は１４時半でしょ？　それまでどうするの？」
美里がカバンを下ろしてから翔に聞いた。
「とりあえず、午前中はコンクール曲の練習。まぁ、オープンハイスクール見学に来た子たちに公開練習って感じやけどな」
「うん、それはＯＫ。移動は何時から？」
「１０分前には完全に待機しておいてほしいって言われてるから、楽器の移動時間とかも考えて、４０分前には移動始めようか」
「了解。とにかく、音出ししなきゃ」
慎也がイソイソと楽器をしまってある場所へと向かう。それと同時に、キャイキャイと賑やかな声が聞こえてきた。
「さすがにみんな、集まるのが早いね」
美里も気合十分なようで、既にバチを持って基礎練習を始めている。
「来年、入ってくる子が今日見学に来る中におるかもしれへんからな」

「その頃にはあたしたち、いないけどね～」
「やだぁ～先輩！　寂しいコト言わないでください！」
美里にあずさが思い切り抱きついた。
「もぉ、ちょっとあず！　やめてってばー！」
翔は笑いながら二人のやり取りを見ていた。
「おはようございまーす！」
みゆきの声が聞こえてきた。
「おはようございます」
この落ち着いた声は亜紀のものだ。続いて「こんちはー！」とズレた挨拶で元気がいいのは梨子。それから「おはようございます～」と間延びした光瑠の声が聞こえてきた。
「おぅ、おはようさ……」
翔は４人の前に立っている少年と少女を見て動きを止めた。彼らも、翔を見つけるなり動きを止めた。
「あ――！」
「わっ！」
あまりの大声に陽乃が同時に小さく悲鳴を上げた。
「何よ翔！　ビックリするじゃ……あ――――！」
陽乃も思わず声を上げる。その少年と少女――石尾　拓也と津嶋ともみ――の姿を見た瞬間、つい３ヶ月ほど前に写真で見た少年と少女が目の前にいることに、かなりの衝撃を受けていた。
「えぇ！？　ちょ……えぇ！？」
拓也が恥ずかしそうに部室に入り、ペコリとお辞儀をした。
「えっと……３ヶ月前は、皆さんありがとうございました」
ともみが近寄り「その前に自己紹介やん！」と促す。
「あっ。あ、えと、僕、石川県古氷町立古氷中学校の吹奏楽部部長をしています、石尾拓也といいます」
翔がギュッと拓也の手を握り締めた。
「改めまして、はじめまして！　オレは七海高等学校吹奏楽部部長の、佐野　翔です！」

ともみが深々とお辞儀をする。
「私は、石尾くんと同じ吹奏楽部の副部長、津嶋ともみと申します！」
ともみは拓也に比べてリラックスした様子で挨拶をした。
「あ、あたしも！」
陽乃がバタバタと翔の隣にやってきた。
「あたしは津嶋さんと同じく副部長をやってます、朝倉です」
「よろしくお願いします」
挨拶を終えるなり、翔がいきなり質問をぶつけた。
「でも、なんで七海に！？　もしかしてオープンハイスクール見学にマジで来たん！？」
「あ、いえ。それを口実に一度、皆さんにお礼を言いたいって思って」
「でも、中学生でしょう？」
美里が聞く。
「二人で来たの？」
ともみが首を振って「いえ。私の母と石尾くんのお母さんに連れてきてもらいました」と答えた。
「よかったぁ。石川からじゃあ旅費、中学生では出せないもんねぇ」
美里が納得した様子でうなずく。
「それで、今年は古氷中学どうなの？」
亜紀が聞く。
「1年生が7人入って、地震からもみんな立ち直ってコンクールに向かってみんな頑張っています」
凛と答える拓也。まさに自分たちと同じ目標を持って頑張っているのだと感じさせられた。
「そっかぁ！　オレらも……まぁ、コンクールメンバーは選抜で決めたけど、コンクールに向けて頑張ってるトコやで！」
「選抜があるんですか！　スゴいなぁ……。僕らのとこは、そんなに人数いないんで羨ましいです」

拓也は部室を見渡した。
「綺麗ですね。すっごく」
「美化係が二人とも真面目が歩いてるような子たちだからね」
「噂をすれば……」
「おはようございま～す」
部室にさゆりと洋之が入ってくる。洋之がすぐに「おっ？　中学生？」と反応した。
「ほら、石川の古氷中学の部長さんと副部長さん」
「エッ！　本当ですか！？」
さゆりがすぐに食いついてきた。これにはるかと麻綾がいれば、すぐにイケメンに察知する彼女たちのこと。拓也をチヤホヤするに違いない。
「わー！　本当、イケメンだぁ！」
「え……」
拓也が真っ赤になる。しかし、その隣でともみがムッとした顔をしているのに美里が気づいた。
「あー、ほらほら！　石尾くんたちは3月のお礼言いに来てくれたの！　イケメンなのはわかるけど、あんまりイジりすぎないの！」
「えぇ～。先輩、つれないですね」
さゆりがプゥッと頬を膨らませた。美里の目配せで翔と陽乃もともみの様子に気づいた。
「そうそう！　それにオレら、今日本番やろ？　気ぃ引き締めていかな！　ほら、そろそろ練習開始！」
「はーい」
翔たちに促されて部員たちが楽器の準備を始める。
「ごめんなさいね。あの子、悪気はないのよ」
美里がともみに謝罪する。ともみは少し恥ずかしそうに俯いた。
「すみません。私も、嫉妬なんてしちゃいけないってわかってるんですけど……」
「ねぇ」

美里がともみに耳打ちした。
「彼のこと、好きなの？」
「……。」
ともみは答える代わりに、小さくうなずいた。
「そっかぁ！　うん、そうだと思った」
「バレバレですか？」
「少なくとも、あたしと陽ちゃん、佐野くんは勘付いちゃったけど大丈夫。周りはわかってないわ」
「そうですか……良かった」
「告白とかしないの？」
「ま、まだそんな！」
ともみはブンブンと首を横に振る。
「そっか！　でももう3年生。今年で部活も最後でしょ？　後悔だけは、しないようにね！」
「は、はい！」
「じゃ、ゆっくり見学して行って」
美里が小さく手を振る。その姿をともみはしばらく見送っていた。
「あの」
ともみが改めて翔を呼んだ。
「ん？」
「えっと……ねぇ、ちょっと拓ちゃん！」
ともみに呼ばれて拓也も慌てて翔のところへ駆け寄る。
「あの、3月はホンマにありがとうございました」
ともみが丁寧にお辞儀する。拓也が続けた。
「地震で校舎も壊れて、楽器もいくつかダメになったんですが……佐野先輩たち七海高校の皆さんのおかげで、すぐに練習再開できました。ホンマ、ありがとうございました」
「……ううん。オレも」
翔は少し抵抗を感じたが、言った。
「オレ、実は阪神淡路大震災の経験者やねん」

「そうなんですか？」
ともみが驚いて目を丸くする。
「やから、なんか他人事って思われへんかってな」
「……そうなんですか」
二人が深刻そうな表情をする。
「どないしたん？」
「実は、私も石尾くんも経験してるんですよ」
「え？」
翔は驚きを隠せなかった。
「もちろん、覚えてないですけど」
拓也が苦笑いする。
「それに、私は大阪市に住んでいたんで、被害なんてほとんどなかったですし」
ともみが大げさに首を横に振る。
「僕も、神崎市だったんで……家の中がちょっとグチャグチャになった程度だったんですけど」
「それでも、怖かったよな」
翔の目が優しくなる。
「やから……今回、助けてもらって、嬉しかったです」
拓也の口から、翔には耳慣れた言葉が出てきた。
「ホンマ、おおきに。ありがとうございました」
「……どういたしまして」
翔は二人とガッチリ握手を交わした。
「そうや！」
翔が名案を思いついたという風に手を合わせる。
「今から、コンクールの練習するねん！　部活練習の公開ってことでな。二人も、見ていかへんか？」
「いいんですか！？」
「もちろんや！　おいで、おいで！」
「やった！」

二人が嬉しそうに翔の後をついていく。その様子を見ていた陽乃と彩香が顔を見合わせて言った。
「どう思います？」
「うーん……。付き合ってはいないけど、きっと津嶋さんは石尾くんのこと、好きよね」
「やっぱり！　そう思いますよね」
二人はニッコリ笑った。
「お似合いだね」
「先輩と佐野先輩みたいですね」
「やだぁ！　もう！」
彩香が大笑いする。しばらくすると、翔が「おーい！　合奏の準備手伝ってやぁ！」と呼んできたので、二人は急いで準備をして音楽室に向かって行った。

第３２９話　天使の梯子

合奏のために音楽室に向かう恭一は、拓也とともみの母と共に廊下を歩いていた。
「このたびは遠いところまで本当、ありがとうございます」
恭一が恐縮した様子で礼を言う。
「いえいえ！　息子たちが本当に……お世話になりまして」
拓也の母・麗子が重ねて礼を言う。ともみの母・紗枝子も続ける。
「それにしても、見も知らぬ人のために楽器を送ろうなんて……普通、考えつきもしないし言えもしないですよ」
「ホンマに！　いい子たちがお揃いなんですね」
麗子は先ほどから感動しっぱなしである。恭一はなんだか恥ずかしいような、嬉しいような複雑な気持ちになっていた。
戸を開け、音楽室に入るとすぐに部員たちが起立し、「おはようございます！」と挨拶をする。それから麗子と紗枝子の姿を見て、また「おはようございます！」と挨拶をする。麗子は紗枝子に「人数、多いわねぇ」と呟いた。
拓也とともみの姿を見つけ、二人はそちらへ向かった。それに気づいた智志と貴志が椅子を用意し「どうぞ」と差し出す。
「あらあら、おおきにどうも」
「いえ」
貴志はニッコリ笑い、すぐに自分の席に戻る。
「起立！」
翔が合奏開始の挨拶を始める。
「礼！」
「よろしくお願いします！」
自分たちと変わらない合奏の開始に、拓也は少し安心した。高校

生で、これだけの人数で、自分たちよりもずっと上手そうに見える翔たちの様子に、なんとなく落ち着かない感じがしていたのだ。
「はい、教会のステンドグラスの調」
「はい！」
（教会のステンドグラス……）
交響楽の曲で、特に低音楽器が目立つことの多いこの楽曲。それの吹奏楽編曲版ということで、初めて耳にすることになる拓也とともみは、胸のドキドキを抑えることができずにいた。
七海高校では合奏前に必ず、ロングトーンをする。これは当然といえば当然なのだが、特に七海高校では普通のロングトーンの後に各曲の調のロングトーンも行うのだ。七海高校に限らず、これはどこの吹奏楽部や吹奏楽団でもよく用いられている練習方法だ。
『教会のステンドグラス』はDマイナー（ピアノで言うレの音）が基準となっている。通常、あまり使わない調なので、特に丁寧にロングトーンをする。あまり乱れのない音程に、拓也は驚いた。
（確か……まだ創部3年目くらいやんな、七海って……）
重厚のある音に、すっかり虜になる拓也とともみ。ロングトーンを終える頃に、何名かの中学生らしい子たちが引率の新井田　彩に連れられて音楽室にやってきた。彩の姿を見るなり、ニヤニヤする部員たち。恭一も明らかにその表情に気づき、恥ずかしそうにしている。彩のほうは冷静だ。
「先生。この子たち、吹奏楽部に関心のある子たちなので、見学させてあげてください」
「あ、あぁ。もちろん！　ちょっと、椅子用意してあげて」
「はい」
晃と優がクスクス笑いながら中学生に椅子を差し出す。7人、見学に来ていた。
「それじゃ、ロングトーンも終わったし曲に入るぞ」
「はい！」
「よし。今日は大天使ミカエルの１０番から」

「はい！」
この楽章の１０番は、それまでＤマイナーだった調が調合はそのままで、今度はＦメジャーに転調する部分である。
「調子よく行けば、そのままピッコロのソロ」
「はい！」
すると、トランペットの少女やクラリネット、弦バスの少年が何人か楽器を置いた。
（あぁ……。この人たち、コンクールメンバーじゃないんだ）
自分たちは全員コンクールに出られる古氷中学と違い、人数の多い七海高校では仕方のないことである。そうはわかっているものの、ともみはなんとなく切ない気持ちになってしまった。
（イングリッシュホルン！）
拓也は初めて本物を見つけたという感じで一気にテンションが上がった。名前と存在だけは知っていたが、その実物を見るのは初めてだった。ともみも同様で、明らかに目が輝いている。
闘いのつかの間の休息、というような雰囲気の柔らかいメロディーが流れてくる。ホルン全員とイングリッシュホルン、テナーサキソフォンのメロディだ。あまり目立ちすぎず、引っ込み思案になりすぎず、程よい響きが室内に広がっていく。チューバ、弦バス、ティパニなどの打ち込みが入った後、オーボエやクラリネットが先ほどのメロディを引き継いでいく。
「もっと静かに！　キィキィ言わずに！」
合奏の途中でもしっかりと指示を出す恭一。
「チューバ伴奏モゴモゴ言わない！　バスーンの音色イメージして！」
音が低いのでモゴモゴしがちになる部分であった。チューバの楽譜はそのあたりが真っ黒になっている。
「金管うまくそこ繋いでくれよー」
チューバからトロンボーン、トランペットにへと続いていくメロディ。恭一がさらに指示を出す。

「急に雰囲気変わって！　急転直下！」
一気にDマイナーに変わる。
「教会にあるパイプオルガンのイメージ持て！」
低音楽器がかなり目立つ。木管低音（バリトンサックス、バスクラリネット、バスーン）と金管低音（チューバ、ユーフォニウム、トロンボーン）と弦バスが大いに目立つ曲だ。それだけに、彼らの楽譜を見ると真っ黒な部分が多い。
「トランペット追いかける部分遅い！　チューバ下降部分滑る！」
曲の演奏中にこれだけ指示を出されてすぐに反応できる部員たちに、拓也は自分たちとの違いを感じさせられた。
見学に来ていた中学生たちも、創部間もない七海高校が去年、地区大会でいきなり金賞を取ったことはかなり驚かされていた。しかし、この練習を見ればそれも必然だったのかもしれないと思わされるほどであった。
曲が落ち着いていく。次第に楽器の数が減り、ピアノへと変わっていく。フルートの少女が移動した先は、ハープ。それから、パーカッションの少女が移動するのは見たことのない、オルガンのような楽器だった。
副部長の陽乃がピッコロトランペットを構える。
（すっげぇ！　吹けるんだ……）
高音の、煌びやかな音が音楽室を包み始めた。沙希の奏でるハープと、恵梨が弾くチェレスタの音が優しく陽乃のソロを支える。絵美、優輝、麻衣子のクラリネットの伴奏。誰か一人でも失敗してしまえば、台無しになるようなまさに「緊張」と言う言葉が似合うソロだった。
「拓ちゃん、見て……！」
少し曇りがちだった空から、太陽の光が降り注いでいた。
「天使の梯子……？」
部員たちは誰も気づいていないが、まさに曲のイメージに合致するような天使の梯子ができていたのだ。

「綺麗……」
曲に似合う光景に、拓也とともみはすっかり心奪われていた。
やがて、陽乃のソロを追うように駿のバスクラと佳菜のピッコロが同じメロディを吹く。さらに追うように、かのこのバリトンサックスが入る。所々で、晃が銅鑼を叩く。最後の最後で、拓真もバリトンサックスのメロディに加わった。
「よし、ストップ」
曲が止まるなり、思わずともみと拓也は拍手をしてしまった。
「おっ！」
それで二人はようやく恥ずかしそうに手を止めた。
「良かったなー！　拍手もらえたぞ」
嬉しそうに笑う部員たち。なんとなく恥ずかしかったが、拓也は嫌な気はしなかった。

合奏の合間の休憩で、中学生たちに楽器を試奏する機会を持つことにした。拓也はすぐに陽乃のところへ行く。
「朝倉先輩！」
「はい？」
「あの……」
なんとなく言い出しにくかったが、視線に気づいた陽乃がピッコロトランペットを差し出した。
「はい！」
「い、いいんですか？」
「もちろん。あ、ちょっと待って。マウスピースだけ変えようか」
「ありがとうございます」
陽乃は素早くマウスピースを入れ替え、ピッコロトランペットを拓也に手渡した。
思ったより音が出しづらく感じた。
「高音域だしね。吹き慣れていないと、ちょっと辛いかも」
「ですね」

拓也は苦笑いした。
陽乃は気になって、思い切って拓也に聞いてみた。
「ねぇ……変なこと聞くけど」
「はい？」
拓也の純粋な瞳に思わず怯んだが、陽乃は続けた。
「津嶋さんのこと、好きだったりする？」
「……はい」
拓也は恥ずかしそうにうなずいた。
「そっかぁ！」
「でも、アイツきっと俺なんか眼中にないから……」
「え？　そうなの？」
陽乃は驚いて素っ頓狂な声を出してしまった。
「はい。なんとなく、わかるんです」
「そっかぁ……。でも、頑張って振り向かせないと！」
「エヘヘ！　頑張ります！」
拓也は頬を赤く染めて元気よく答えた。同時に、綺麗な音がピッコロトランペットから放たれた。
「おぉ……」
拓也も陽乃も思わず動きを止めてしまう。それからすぐに陽乃が「すっごいよ！」と拓也に向かって拍手をするのだった。

第３３０話　『休日は列車で桜を観に行こう！』

１４時３０分。いよいよ、吹奏楽部の舞台の時間がやってきた。体育館には思いのほか多くの中学生と保護者がいる。プログラムにももちろん吹奏楽部の名前が書かれていたが、何を演奏するかという曲名は伏せていた。その代わりに、曲のタイトルほとんどを無理やり詰め込んだお題のようなものを書いていた。

その名も『休日は列車で桜を観に行こう！』。その１曲目、『Ａ列車で行こう』の演奏が近づいてきていた。前には、司会者に選ばれた誠と順平の二人が立っていた。しかし、テンションが上がっているのか順平はリハーサルとは違う文言で勝手な宣伝を始めてしまった。

「ぜひご期待ください！　我が部が誇る、最強カップルのトランペットソロとソプラノサックスソロが聴ける！　しかも無料（ただ）と来たもんですから、今日来られた中学生とお父さん、お母さん方はラッキーです！」

（またアイツムチャクチャ言うとんなぁ……）

翔はやれやれという表情を浮かべた。恭一も苦笑いしているが、見学生徒たちや保護者は大笑いしているので結果オーライというところである。

誠が落ち着いた声で引き取る。

「それでは、１曲目。Ａ列車で行こうの紹介をさせていただきます。この曲は、列車という言葉から汽車を連想させますが、実はニューヨーク市地下鉄の、ブルックリン東地区からハーレムを経てマンハッタン北部を結ぶ８番街急行を意味しています。Ａとはアメリカ合衆国での列車種別を示していますので、実は都市の地下鉄に乗っていこう！というようなニュアンスになってしまうんです」

詳しい説明に、名前だけを知っていた人たちもうなずいている。
「それでは、お聴きください。A列車で行こう」
同時に、アナウンスが入った。
「間もなく～、2番のりばに七海高校体育館発の環状線列車がまいりまーす！　危険ですので、黄色い線の内側にお下がりくださーい」
電車好きだという賢治のアナウンスにドッと笑いが起きる。すぐに恭一が指揮棒を下ろすと、木管楽器の怪しげな上昇系の旋律に、トロンボーンの打ち込みが始まる。すぐに明るい調へ移調し、特徴的なジャズビートが始まった。木管系の厚みのあるメロディが響き、その後ろでジャズ特有の打ち込みをトランペットが吹いている。
まず、勇がミュートをつけたトランペットを片手に恭一の横に立った。ちょっと伴奏とはズレたメロディでうまく雰囲気を作る勇。ソロの途中だが、既に拍手が沸き起こっている。そして、反対側には慎也が立つ。高音から始まるソロ。トロンボーンにしては素早い動きの続くソロだが、慎也には慣れたものだ。その慎也のソロを引き継ぎ、翔がソプラノサックスで実に軽やかなソロを吹き始めた。初めのトリルで大きな拍手が起きる。これは完全に翔のアドリブソロであった。その後、何回も上下を繰り返す素早い動きに、観客から何度も拍手が起きる。ともみも拓也もあまりの音色の響きに、鳥肌を立てていた。
再現部に差し掛かり、調が変化する。陽乃と翔が恭一を挟むようにして立ち、交互にソロを吹く。うまく息が合う二人だからこそ、できるソロであった。少しでもタイミングがズレると雰囲気が損なわれるのだが、二人にまったく問題などない。
トランペットの吹き伸ばしをキッカケに、再び元の調に戻る。そして終盤に向けて曲はどんどん盛り上がっていく。それと比例するように、流の心臓の鼓動が高鳴っていた。最後のシメのソロを担当するのが、彼なのだ。
曲の雰囲気が一瞬静かになり、上昇系のトゥッティの音が終わりを知らせる。流は思い切りベルを上げ、ソロを一気に吹き上げた。

最後に思わず、アドリブを入れてしまう自分に一瞬驚いたが、曲は見事に終わりを告げた。

「ブラボー！」

女の子の声だった。恭一は勇、慎也、翔、陽乃、流に起立の指示を出し、彼らにお辞儀をさせる。そして、再び司会に入る。

「えぇ～、終点・七海ヶ丘公園の桜広場にやってまいりました」

賢治が今度はテレビのアナウンサーのような口調で言い始めた。

「ここは桜が大変綺麗なんですが、スタジオの順平さん？」

「はいはい、順平です」

「こんな雰囲気にピッタリのＢＧＭ、流してもらえませんかね～？」

「はい、了解です！　では、まこっちゃん？」

誠が小さくうなずき、引き取る。

「はい！　では、次の曲を紹介します。次の曲はメドレーになっています、『ＳＡＫＵＲＡ　ＴＬＩＲＯＧＹ』です。この曲はコブクロの『桜』、森山直太朗の『さくら』、河口恭吾の『桜』をメドレーにしています。中学生の皆さんも、お父さんお母さんもどこかで聞いたことのある曲ばかりを集めてみました。来年、皆さんがこの桜の咲く頃にこの七海高校に入学してくれていたら、先輩として嬉しく思いますので、今日のオープンハイスクールで関心を持った人は是非、受験を考えてみてください！　それでは、『ＳＡＫＵＲＡ　ＴＬＩＲＯＧＹ』です」

クラリネットのトリルにトロンボーン・トランペットのメロディから華やかに始まった『ＳＡＫＵＲＡ　ＴＬＩＲＯＧＹ』。１曲目はコブクロの『桜』である。

フルートの旋律に、恵梨の奏でるウインドチャイムが響いていく。そして、立ち上がったのはさゆりだ。

さゆりの、透き通った音色（ソロ）が体育館中に響いていく。２回目の部分は夏樹がハモるメロディを吹いていた。さゆりのソロの後を、サックス系全員でメロディを吹く。ホルンの裏メロディがまた、雰囲気を醸し出す。

亜紀が立ち上がり、トロンボーンのメロディをソロに変えた旋律を吹く。去年よりもずっと音が大きくなり、綺麗な音を吹くようになった亜紀の音色が、さゆりに負けじと体育館に響いていく。

そしてトランペットの主旋律とトロンボーンのハーモニーによるサビ部分が始まる。いつの間にか、ゆっくりとした手拍子が始まっていた。ホルンの印象的な裏メロディが良い雰囲気をさらに盛り上げた。ドラムセットの裕也も楽しそうに叩いている。グロッケンの美里は、感情を込めてしっかりとメロディにさらに良い味付けを加えていた。

転調して始まったのは森山直太朗の『さくら』だ。冒頭からオーボエのソロ。今回はまゆがソロを吹く。恭一に何度も「それではビビラートだ」と言われたソロ。何度も部員たちの前で一人だけで吹く練習をしたかいもあり、ほとんどビビラートにならずに演奏することができた。

やがて、クラリネットがそれを引き継ぐ。ここも、恭一がソロにアレンジした。美里のグロッケンを合図に、上下に分かれてメロディを吹く。上はみゆき。下はバスクラリネットで、駿が吹く。滅多にないメロディでかつソロなので、駿も嬉しそうだ。さらにそれを引き取り、由美子がソロを吹く。ここの伴奏は誠だけ。実質のソロだと恭一は見なして、由美子と一緒に立奏させた。

恭一の頭には、その指示をした日の誠の言葉が蘇った。

「先生、ありがとう。すっげぇ、嬉しいです」

なかなかソロをもらえなかった誠が、本当に短い時間だがソロをもらえて嬉しく思っているという心情を、素直に吐露した瞬間だった。あまり自分の感情を表に出さない誠が、初めて自分に心を開いてくれた気が恭一にはしていた。

やがて、曲が静まっていく。そして裕也のドラムセットが、曲の変化を知らせる音を立て始める。トロンボーンの打ち込み、恵梨のウインドチャイムがさらにそれらを予期させる。和志が初めて叩くティンパニ。何度も練習を重ねたおかげで、さらに良い雰囲気が増

して行く。
　メロディをいろんな楽器が吹いて、最後に綾音が初めてのソロを吹いた。こちらも一瞬だったが、綾音にとっては一生の中で初めて味わう快感だった。
　そしてオーボエのソロ。本来なら、健之佑が吹くはずだったのだが、まゆに吹くように何度もしつこく健之佑が推すので、渋々まゆが担当することになった。吹き終えるとすぐに中学生のお父さんだろう、「ブラボー！」という声が聞こえてきたので、まゆは思わず泣きそうになってしまった。
　トランペットとスネアドラムのリズミカルな伴奏に従い、メロディが次第に音量を上げていく。そして、和志のティンパニをきっかけに曲の雰囲気が一変した。木管の全員でメロディを吹き、ホルンも加わって最終部分へと曲は差し掛かっていく。トランペットもメロディに加わり、ホルンが下降系の音を吹く。ホルンの音色に、観客たちは特に心惹かれたようで、視線がそちらへ集中していた。
　トロンボーンの強い音と共に、曲は終盤に突入。全員の伸ばしで、曲は見事に終わりを告げた。終わると同時に大きな拍手が起きる。
「はい！　『ＳＡＫＵＲＡ　ＴＬＩＲＯＧＹ』、いかがでしたでしょうか？」
　順平の問いに拍手で答える観客。順平と誠は深々とお辞儀した。
「さて。ここでちょっと雰囲気を変えていきましょうか」
　誠がそう言った。
「と、いいますと？」
「というのもですね、見てくださいこの子」
　誠は雄飛を起立させた。
「今の『ＳＡＫＵＲＡ　ＴＬＩＲＯＧＹ』ですっかり木管楽器の皆さんはお疲れです」
　クスクスと笑い声が起きる。
「ところがどっこい、金管楽器の皆さんはめちゃめちゃ元気！」
「なるほど～」

「っというわけで、今日は休日！　トランペット吹きの皆さんも休日を楽しんでいただきましょう。それでは次の曲は金管楽器のみによる『トランペット吹きの休日』です。演奏メンバーはトランペット・朝倉陽乃、松尾　勇、久野彩香、藤咲　流。トロンボーン・川崎慎也、吉山亜紀、江藤沙知。ホルン・時任裕子、チューバ・本堂拓真です」

呼ばれた8人が前に立つ。恭一もスッと指揮台から降り、9人を見つめていた。

（緊張……ハンパねぇな）

慎也はゴクリとツバを飲み込んだ。自分たちに視線が集中する。何をどう喘いでも、自分たちしか演奏する人はいないのだと気合いを入れなおした。

陽乃が楽器を構えると、全員が素早く反応する。そして、上から下へベルを軽く振ったのを合図に、曲が始まった。

陽乃、勇、彩香の順番でトランペットがメロディを吹いていく。チューバがしっかりと八分音符の伴奏で3人を支え、ホルンが裏メロディを吹く。トロンボーンもチューバの伴奏に加わり、しっかりと支えていく。ピッコロトランペットで高音域の、いわゆるフルートのような音色を吹くのは流だ。

時たま、トロンボーンとトランペットで交互にメロディを吹いていく。手拍子が体育館中から響いてくる。チューバとトロンボーンのメロディをきっかけに転調し、流もメロディに加わって楽しい休日のイメージを全員で創りあげていく。

（息継ぎの場所とか考えてらんないや）

流はあまりに忙しいペースに少し参りそうだったが、油断するとすぐに置いていかれそうになるので、ほとんど何も考えず夢中で吹いていた。ホルンの裕子は遠吠えのような相打ちを楽しそうに吹いている。裕子くらい、余裕があればいいのにと流は彼女を少し羨ましく思った。

再現部に戻り、いったんピアノに落としてから終盤部分へ。流か

ら陽乃、勇、彩香とメロディが加わり、裕子がメロディを引き継いでトロンボーンが上昇系を吹く。トランペットの高音の伸ばしがキーン！と響き、チューバとトロンボーンの重みがある音で見事に曲は終わることができた。

「すっごいな～金管！　木管楽器、しっかり休日楽しませてもらえました。ではここで、休日管理人の朝倉さんにお聞きします。休日、楽しく過ごせましたか？」

「息がこんなに荒くなるくらい、楽しませてもらいました～」

ドッと大笑いが起きる。

「それはそれはお疲れ様でした！　はい、金管９人にもう一度大きな拍手をお願いします！」

拍手喝采とは、まさにこのことを言うのだろうと陽乃は感じつつ、自分の席へと戻った。

「さて、今日は長い間お付き合いいただき、ありがとうございました。本日の吹奏楽部の演奏は、次で終了となります。残念ではありますが、七海高校に入学していただけましたら、この演奏は何度も聴く機会がありますし、もちろん、奏者となってこちら側に参加することだって可能です」

誠の司会を引き継いで、順平が定期演奏会の宣伝をする。

「また、今年１１月２３日の勤労感謝の日、金曜日ですが、とうとう僕たち七海高校吹奏楽部も、第１回定期演奏会をする運びとなりました」

拍手が思わず起きたので、恭一と一緒に順平たちもお辞儀をする。

「会場は現在、七海市中央ホールの大ホールを予定しております。会場は１７時３０分、開演は１８時ちょうどの予定です」

さすがに宣伝となるといてもたってもいられなくなったのか、翔が立ち上がった。

「みんな頑張ってるんで、是非聴きに来てくださーい！」

そこで大きな拍手が沸き起こった。翔はニコッと笑ってお辞儀をする。

「頑張ってるってよく言うよぉ。まだ曲なんて全然決まってないのに」

陽乃が苦笑いする。彩香が「先輩らしいじゃないですか」とクスクス笑っていた。

誠がマイクを握りなおし、最後の曲の紹介をする。

「では、最後にお送りしますのは、あの有名なアニメより『名探偵コナンのテーマ』です。各パートのソロがふんだんにありますので、ご期待ください」

恭一と一緒に順平、誠もお辞儀をする。そして、二人が席に戻ったのを確認してから恭一が指揮棒を上げた。

（こっ、こんなにドキドキするもんだっけ……）

夏樹は楽器を構えて前に立ってから心臓の音がドキドキと鳴っているのがわかっていた。たくさんの視線が夏樹と、一緒に立っている茉莉紗に集中する。

「緊張するね」

茉莉紗が声をかける。

「あぁ」

「でも、ガンバロウね」

茉莉紗の笑顔に少し安心した。

指揮棒が降りると、あずさのドラムセットをきっかけに演奏が始まる。前奏があっという間に終わり、茉莉紗と夏樹の時間がやってきた。

思い切り感情を込めて吹く夏樹と茉莉紗。裏メロディをバスーンとホルンが吹いている。特殊な組み合わせだ。そして音が高音域に差し掛かると同時に茉莉紗と夏樹の音がハーモニーとなって響き始める。再度、最初の部分に戻って間奏が始まる。その後にトロンボーンの徹と雛乃が立奏を始める。それが終わると梨子、絵美、佳菜、健之佑、誠が立奏をする。めくるめく変化するソリストに、観客は手拍子をしながら答える。トランペットは綾音と陽乃のソリ。

再びサックスの色っぽいメロディ。ドラムセットの打ち込みの後

に、もう一度メロディが奏でられ、曲はあっという間に終わりを告げた。

恭一が起立の指示を出す。拍手喝采の中、部員一同で礼をする。

こうして、オープンハイスクールでの初の試みは無事に完了したのだった。

第３３１話　無口っ子の悩み

６月４日月曜日。翔はソワソワした様子である人物を待っていた。その人物は今日、健之佑と一緒に部室へやって来ることになっている。

ガラガラ、とドアの開く音がしたので翔が振り返る。

「なぁんや、お前かい」

姿を見せたのは陽乃だった。

「なぁんやとは何よ、なぁんやとは！」

「別に～」

「何よ。新しく来る子が楽しみで楽しみでなりませんって素直に言いなさいよ！」

陽乃は翔の耳を思い切り引っ張った。

「イテテテテ！　痛い痛いって！」

「これぐらい当然よ。バカ！」

陽乃がすねた様子で部室のドアを開けると、ちょうど健之佑と出くわした。

「あぁ、ノムさん！」

「こんにちは～！　そうだ！　朝倉先輩。連れてきましたよ」

陽乃が健之佑の後ろを覗き込むと、彼――志賀　慧太が立っていた。

「キャー！　志賀くんいらっしゃい！」

「来たんか！？」

翔が立ち上がり、陽乃を押し退けて健之佑たちを出迎えた。

「ちょっとー！　何なのよ、この彼女に対するぞんざいな扱いは！」

「アホかお前！　見学に来てくれてんぞ！　お客様やろが」

「何よ、浮かれっぱなしで。バーカ！」

陽乃はブスッとした様子で翔の元を離れた。ふと気づくと、フル

ート・オーボエのロッカーのあたりから、誠がおっかなびっくりといった様子で慧太たちのやり取りを見守っている。
「どうしたの？　とぐ」
「あ……いえ」
誠はすぐに立ち上がり、陽乃のそばを離れた。
「……？」
陽乃は意味がわからず、そそくさと部室を後にする誠の後ろ姿を見送るしかできなかった。
「それじゃあ、今日はパート練習です。特に、今日は課題曲の練習を集中的にお願いします。明日は課題曲中心に合奏するので、以前指摘されたところもできるようにお願いします」
「はい！」
各パートが練習に分かれていく。どうしていいかわからない慧太に、沙希が声をかけた。
「志賀くん……だよね？」
「はい！」
「あのね、バスーンとオーボエ、フルートピッコロは基本的に同じ部屋で練習するの」
「そうなんですか！」
慧太はかなり安心したような表情を見せた。
「だけど、今日は相談して決めたんだけど」
「え？」
「バスーンはバスーンだけで練習したほうがいいんじゃないかなって思って。ほら、志賀くん今日初めて吹くでしょう？　だから、まこっちゃんからいろいろ教えてもらうには、やっぱり二人のほうがいいかなって思って」
「あ……は、はい」
慧太の少し元気のない返事にも、特に沙希は気づかず続ける。
「じゃあ、まこっちゃんに鍵渡してるから、一緒に多目的室３に行ってね。何かあったら、隣の部屋に私たちみんないるから、いつで

も呼んでください」
　そう言って沙希はフルートの由美子や稚沙希たちと一緒に練習部屋に向かってしまった。
「……。」
「行こうか」
「う、うん」
　誠に促されて、慧太は彼の後を追う。
「……。」
　しかし、足音だけが廊下に響き、まったく会話が生まれない。多目的室3の鍵が開き、二人は部屋の中に入った。
「まず、楽器の説明するよ」
　誠が突然喋り出したので、慧太は少し驚いた。戸口　誠＝無口誠というようなあだ名が勝手に広まっている。それくらい、誠はクラスや学年では寡黙な子だと思われているのだ。吹奏楽部ないでもまだ静かな生徒に入るほうで、実は顧問の恭一も彼の意思表示があまりないので不安なところがあるくらいなのだ。
「まず、楽器の全体の説明。別にすぐに覚えられなくてもじきに覚えるから大丈夫」
「うん」
「ここが、ベルジョイント。それからテナージョイント。ここはロングジョイントで、ここがダブルジョイント」
「うん」
　慧太は慧太なりに必死に覚えようとしている。
「他にボーカルとハンドレストっていうのがあって……で、このストラップをつけて、普通演奏する」
「うん」
「……わかんないトコあったら、聞いてくれよ?」
「うん」
「……じゃあ次」
　誠は淡々と説明を続けていく。

「これはリードっていう大事なものなんだ。これがないと、木管楽器は吹けない。基本的に」
「へぇ～」
慧太は興味津々と言った様子だ。
「このリードっていうのは、割れやすいから気をつけて。それから、これはもう慣れるまでは仕方がないんだけど……オーボエとかバスーンみたいなダブルリードの奏者は、舌が切れやすい」
「そうなの？」
誠は言葉で返さず、小さくうなずいた。
「だから、血が出た場合はすぐにリードを洗い流して。じゃないと、劣化が早くなるから」「うん」
「じゃあ……ひとまず、このリードをボーカルっていうこの部分だな、さっきの。これにつけてしばらく音出しの練習してみようか」
「わかった」
慧太はすぐにリードを受け取り、ボーカルに装着しようとする。しかし、うまく入れることができない。
「ここつまめばすぐ入るな」
そう言って少し力を入れると、本当に小さな音だがペキ、という音が聞こえた。
「あれ？」
慧太は明らかに焦った。先ほどまでよりも、リードが少しささくれた感じになっているのだ。
「どした？」
誠が近づいてきてリードの様子を見る。
「あぁ……。えっとな、これ、リードが割れたっていうんだ」
「割れた？」
「そう。リードって、ちょっと手が先っぽに触れただけで割れちゃうようなもんなんだ」
「割れるって？」
「使えなくなるってこと」

慧太が動揺した顔になる。
「まぁいいや。ちょうど替え時だったし。あ、リードはこんな風に脆いもんだから、扱い気をつけて」
「うん……ゴメンな？」
「いいよ。別に。それより、音出ししてみなよ」
「うん……」
その後もしばらく練習をしたものの、会話らしい会話もないまま終わってしまった。練習後、部室に戻ると慧太を待っていたのか、翔に慎也、春樹、洋之、駿、優輝、優、健之佑の姿があった。
「けーた！　お疲れぃ！」
洋之がバシバシと慧太の背中を叩く。
「どうだった？　バスーン！」
「うん。最初だから、失敗ばっかり」
誠はそんな彼らのやり取りを適当に聞き流し、楽器の片づけをする。
「まこっちゃーん！」
しばらくすると優が誠を呼んだ。
「うん？」
「俺たち帰るから、一緒に帰ろう？」
「あぁ……俺、まだ片付けあるからいいよ。先に帰ってて」
「そう？　じゃ、お疲れ」
翔たちがワイワイと大声で話しながら音楽室を後にすると、急に静かになった。誠は淡々と楽器と楽譜の片づけをしていく。
「……結構高いのに」
バスーンのリードは1本2，５００円前後する、高価なものだ。なので、なかなかリードを新調してもらえるようなことは少ない。それだけに、今日リードを割られたのはかなりショックだったのだ。しかも、先月買ってもらったばかりなのだから、もうしばらく買ってもらえない。かといって、月5，０００円の小遣いでは2本しか買えない。

「やってくれちゃうよ、ホント」
誠はため息を漏らしてロッカーの扉を閉めた。扉を閉めるとき、妙にいつもより扉が重く感じた。
「……しばらく、アイツ教えないといけないんだな」
そう考えると、気が重くなった。またリードを割られたりしないだろうか。コンクールの練習に支障は出ないだろうか。いろんなことが頭を巡っていく。かといって、バスーンを教えられるのは自分以外にいない。かなり複雑な心境だった。
「考えてても仕方ない。今日は帰ろう」
誠はため息をついて部室を出た。
「お先に失礼します」
音楽室に残っていたのは、拓真と智志だった。
「あれ……？　本堂先輩、今日は塾の日じゃ……」
「あ、あぁ！　まだ時間あるからさぁ。さとっぺ、どうしてもステンドグラスの音程がうまく取れないって言うからさ」
誠の言葉を聞いた智志が焦っている。
「せ、先輩今日塾なんスか！？　じゃあもう俺、今日ここまででいいッス！　マジで！」
「いーからいーから！　ほら、中途半端しないで続き、続き！　じゃあ、まこっちゃんお疲れ様！」
「お疲れ様です……」
誠はゆっくりと音楽室を後にする。
「本堂先輩みたいに……もっと大らかだったら良かったのに」
無口で神経質な自分の性格がほとほと嫌になった。大きくため息を漏らし、誠はゆっくりと帰路に着いた。

第３３２話　思いがけない遭遇

翌日。

「おはよう」

午前５時半に誠はいつもどおり、起床した。

「おはよう」

母がご機嫌な様子で誠にそう返す。自宅がお寺の戸口家は、いろいろとすることがあるので朝が少し早い。

父は朝から読経をしている。その間、母は朝食と誠と弟の弁当作りをする。誠と弟はというと、週交替で境内の掃除をする。

顔を洗い、歯を磨いて頭は坊主刈りなので特にセッティングが必要ないので洗面所を出る。そして、着替えてから外に出た。

「今日もいい天気だな～」

６月に入ったが、まったく今年は梅雨らしい天気にならなかった。ちょっとでも雨が降れば、その日の境内の掃除がなくなるのでなんとなく梅雨時は雨を期待してしまう。それでも、通学の時間帯に降っていれば嫌になる。難しいところだが、最近では晴れが続くので掃除をいつもどおり行っていた。

倉庫からチリトリと箒を取り出し、ひとまず社殿の前から掃き始めた。夏場はやはり落ち葉も少ないので、比較的簡単に掃除を済ませることができる。

しばらくすると、まだ６時前だというのに誰かが境内を歩く音がしてきた。砂利が敷き詰められているので、誰かが歩いてくればすぐにわかる。

誠は振り向いて誰なのかを確認した。

「あ……」

「あー！　やだぁ、まこっちゃんじゃない！」

美里が立っていた。

「あれぇ？　何？　箒持って……あ！　もしかしてボランティア！？」
誠は目を点にして答えた。
「いえ……。ここ、俺の家なんで」
「え？　へぇー！　知らなかった。お寺だって話は聞いてたけどあぁ～そうなんだ！　ここがまこっちゃん家のお寺かぁ」
美里はキョロキョロと辺りを見渡す。
「先輩……。こんな早くからウチにどうして来られたんです？」
最もな質問であった。ようやく日の出というような時間帯に、美里は現れたのだ。
「あー、うん。あたし、最近毎朝5時半に起きて、散歩がてらココにお参りに来てるの」
「お参りですか？　なんでまた」
誠は箒で掃除をしながら聞いた。
「まぁ、今年はいろいろあるじゃない？　コンクールでは県大会目指したいし、受験もあるしね」
「へぇ……」
誠はいわゆる神頼みのようなものかと解釈した。
「信心深いんですね、先輩って」
「まぁね。あれ？　まこっちゃんはこういうの、信じてないの？」
誠は両親がいないことを確認して、言った。
「あんまり」
「へぇ～」
美里は目を丸くした。それから聞く。
「なんで？」
「……昔、毎日お祈りしてたんですけど結局叶わなかった願い事があったんで」
「どんな願い事？」
美里が興味津々と言った様子で聞いてきた。誠は少し恥ずかしくなったが、続けた。

「友達とケンカしたんですよ。それも、すっげぇくだらないことで」
「いつ頃？」
「中学2年の時です。吹奏楽で、彼女はユーフォニウム吹いてました」
「ふぅん……」
美里は特に気にも留めず聞いたつもりだったが、誠は意外と語ってくれた。
「別に付き合ってたわけじゃないんですけど、なんか仲良くて。俺、大井戸中学出身なのは先輩、ご存知ですよね？」
「うん」
「俺ももちろん吹奏楽部で。でも彼女、途中で市の少年少女吹奏楽団に入るから、退部するって言い出したんです」
「……そう」
途中退部。幸い、七海高校の吹奏楽部では事例がなかったものの、他の学校では珍しいことではない。人間関係であったり、体調であったりと理由は様々だ。
「俺は止めたかったんですけど……周りの子は彼女のことをあんまり良く思ってなかったんで……。俺、なんとかしたくて毎日拝んでいたんですけど結局ダメで……」
「そりゃあダメに決まってるじゃない」
美里があまりにもバッサリ切り捨てるので誠は驚いた。
「なんでですか！？」
「だって、自分で努力してないじゃない」
誠はそこでハッと気づいた。
「あたしはこう見えても勉強、ちょっとはしてるし。コンクールに対しての練習も手は抜いてないつもりよ。もちろん、ひどい点数を取ったり極のイメージが違うって先生に怒られたりするけど……努力はしてるつもり」
誠はあの時のことを思い出していた。自分は彼女を止めるようなことはせず、ただ、拝んでいただけ。いわば他力本願だ。

「まぁ、あたしが偉そうに言えたことじゃないけど。自分でしっかり努力しなきゃね！　勉強したり、しっかりと自分なりに練習して自分で伝えたいコト表現したりしなきゃ。要は意思表示。これ、大事よね～」

美里の様子からすると、どうも誠にこれだけをわざわざ伝えに来たというわけではなさそうだった。部長の翔や陽乃なら心配してワザとらしくこういうことをしに来ることも考えられたが、美里からはそういう意志が微塵も感じられなかった。

「ま！　拝むならまずは自分で努力しないとね。精一杯努力して、それから拝む。それに限るわ！」

境内一面に植わっている木々の間から、日差しが漏れてきた。

「あ。もうこんな時間。そろそろ帰って学校の準備しないとね！」

「あ……そ、そうですね」

「それじゃまこっちゃん、また学校で！」

「はい。失礼します」

美里は大きく手を振りながら境内を後にした。誠はしばらく箒を持ったまま、美里の後ろ姿を見送っていた。

部活の時間になって、またしても慧太と誠だけでパート練習ということになった。慧太はどことなくぎこちない様子で楽器の組み立てをしている。

リードを挿入する時になると、異様に表情が強ばっていた。誠はスーッと深呼吸をして、慧太に近づく。

「そんなに初めから力んでたら、入るものも入らないし、楽器だって上手く鳴らせないぜ？」

「う、うん」

「こうやって軽くすればいいけるんだから」

リードはすんなりと楽器と一体化する。

「姿勢悪いな」

「そ、そう？」

「確かに斜めってる楽器だけど、自分の体まで斜めにしたらしんどいだろ？」
「うん」
「楽器を自分のところに持ってくるイメージ。楽器に自分を委ねるんじゃなくって、自分に楽器を委ねさせる。楽器に吹かれてたらダメだ」
「なるほど……」
慧太が深くうなずく。それから言った。
「さすがまこっちゃんだな」
ニカッと笑う慧太。誠はなんだか恥ずかしくなった。
「そんな大したことじゃないし」
しかし、思いのほかスムーズにこの言葉が出た。
「でも、嬉しい……。ありがと」
「ううん」
二人はしばらくなんとなく恥ずかしくなって、沈黙が続いた。
「あのさ」
誠が言った。
「来年は……慧太にとっては最初で最後だけど……コンクール、一緒に出ような」
「……うん」
慧太が笑った。
「出られるように、祈っとく」
誠は先ほど自分が美里から言われた言葉を言った。ある意味でそれは自分に言い聞かせるように。
「祈る前に、努力だな」
慧太がへへッと笑って「だな！」と言った。
しばらくすると、美里が廊下を通った時に音程こそ合っていないものの、バスーンの音が2つ、聞こえてきた。不安定な音と、安定した音。
「頑張るね～」

美里がそう呟き前を通過した途端、音程がピタッと合った。
「おっ。やるじゃん」
美里は小さくガッツポーズを取って、部室へ向かった。

第３３３話　移動だけで一大イベント

６月１０日日曜日。いよいよ、今年初となるホール練習の日がやって来た。気温は梅雨時にしては比較的低く、晴れてはいるが結構涼しい気候だ。

午前１０時。ロングトーンを終えて部員たちはチャーターしたトラックに楽器を積み込んでいく。打楽器を借りられるのは市吹奏楽連盟の定期演奏会のときのみなので、今回のようなホール練習の場合は自分たちで打楽器を運搬しなければならない。

どこの団体でも同じような傾向にあるのだが、自由曲では打楽器や特殊楽器を使用することが課題曲に比べて多くなる。七海高校も例に漏れず、ティンパニなどの打楽器はもちろんのこと、今年はハープとチェレスタを使うことになっている。ハープは重く大きい上に繊細な楽器なので、扱いには特に注意が必要だ。弦が切れてしまえば一大事である。また、チェレスタも大型でかつ繊細な楽器ときたものだから、扱いにはこちらも要注意。

「それじゃあいくぞ。１、２、３！」

拓真の合図で亮平と智志が一番大きなティンパニを持ち上げた。階段を使って慎重に降りる。七海高校にはエレベーターもあるのだが、職員室側にあるため、音楽室からエレベーターに運んで、またトラックのある場所に持って行く時間のほうがもったいないのだ。そのため、いつもこうして階段を使って上り下りしている。

いくら涼しいとはいえ、やはりもう季節は初夏。楽器運搬をしていれば自然と汗もかいてくる。続いて中型のティンパニを優輝、優、洋之が持って行く。小型を勇、流、夏樹が持って行く。

「ゴメーン！　誰か、銅鑼手伝って！」

美里の声に反応して徹と春樹が走る。

「すみませーん！　小物は手が空いてる女子お願いします！」

「はい！」
綾音と沙知が駆け寄る。
「ちょっと待って！　ねぇ、藤咲くんたち！　そのティンパニ、ペダルの向き逆！」
ティンパニには音程調節のためのペダルが付いているものがあるのだが、階段を使って降りるときにペダルは階段とは反対の向きにしておかなければ、ペダル破損の原因にもなってしまうことがある。流たちはその向きが反対になっていたのだ。
「よーし。次は大型はベードラかな。これはまぁ図体デカいだけだから……。右川くんいつもどおり主導して、後は女子適当に集めてお願い！」
「はい！」
順平が呼び集めた女子3人でベードラが降りていく。
「打楽器の大型終わったら次は金管低音と木管低音、弦バスで！」
「はい！」
運搬係である徹と亮平がテキパキと指示を出して要領よく楽器の搬出を行う。
「お、重い……」
恵梨が手が空いたのでチューバを運ぼうとしたのだが、ビクともしなかった。
「あぁ！　先輩ダメですよ。重いですから……」
好美が慌てて駆け寄り、恵梨が苦労して持っていたチューバをヒョイと持って音楽室を出て行った。
「はぁ～……」
恵梨がため息を漏らす。戻ってきた智志が声をかける。
「どうしたんだよ、秦野」
「いやぁ……さすが自分の楽器だと、扱いに慣れてるなぁって改めて思って」
「あ？　チューバのことか？」
「うん」

「まぁ結構俺も最初はビックリしたけど、今はフツーかな」
そういうと、入部直後は重そうに運んでいたチューバを智志も簡単に持ち上げて運び始めた。
「わぉ……」
恵梨は軽々とチューバを運ぶ智志の後ろ姿をしばらく見つめていた。
「入るかな～」
トラックの荷台で心配そうに腕を組んでいるのは拓真だった。
「どないしてん？　入りそうにないか？」
恭一に今日の流れを聞きに行っていた翔が戻ってきた。
「あぁ。思ったより打楽器多くて……」
「そうか～……。せやな。まずは打楽器詰めてしまわなアカンからな。とりあえず、デカい打楽器持ってきて～。ほんで、デカい打楽器の間にシンバルとかグロッケン詰めていくわ。そうでもせんと入らんからな」
「はい！」
翔は指示を出しつつ、時計を確認した。
「あ！　もう１０時２０分や。とりあえず受付が５０分からやから、そろそろ移動できる人移動しよか。運搬係と男子、打楽器の人だけ残って後は移動！　悪いけど、楽器降ろすほうを手伝ってくれる？」
「はい！」
「ほな、それでヨロシク！」
ここからホール練習をする七海市中央ホールまでは自転車で１０分ほどの距離である。しかし、部員数が多いため一度に移動するにしても時間がかかってしまうため、早めの移動をいつも心がけていた。
「木管楽器の人は段差とか通るとき十分気をつけてねー！」
陽乃が注意を促す。基本的にホールや会場への移動時は、七海高校ではピッコロ・フルート・オーボエ・クラリネットは手持ちで、アルトサックスとトランペットも余裕がない場合は手持ちで移動し

ていた。今回の場合、打楽器が多いため木管はアルトサックスまで、金管はトランペットのみ手持ちでの移動となっていた。
陽乃たちが出発して１０分ほどしてから、ようやく積み込みを終えたトラックが会場に向けて出発する。
「今日はどういう順で練習だっけ？」
慎也が翔に聞いた。
「えとな……午前１１時から風見台。ちょうどオレらが着いた頃に練習始めるやろうから、楽器降ろしの後それを午前中は見学することになるわ。ほんで、昼は午後１時から伊豆南高校。その後が北松高校。ほんで、オレら。だいたい１時間半を目安にしてるから、４時から５時半までやな」
「だいぶ遅くなりそうだな」
慎也は唇の感覚が鈍りそうで怖いと言った。
「まぁ、偶然やねんけどこういうパターンもえぇと思うよ」
「なんで？」
慎也が首を傾げる。
「去年はたまたまちょうどいい時間帯にコンクール出られたけど、１番とかやったら９時半過ぎが本番で、受付が８時半くらいやねんな。ギリギリに行ってたら何があるかわからんし、寝ぼけたまま演奏とか無理やから、いろいろ考えて１番に出るなら７時くらいには積み込み開始せなアカンやろ」
「ひえ～……」
後ろにいた春樹までもが声を上げた。
「あるいは、出番が夕方５時半って可能性も逆にあるから。今日みたいに朝練習して、後は無茶吹きしたらアカンから本番前まで吹かれへんってこともあり得るで」
「ひぇ～……」
「まぁ、それは先生のくじ運次第かな」
「へ？　くじで出番の順番決めてるの？」
慎也は更なる驚きの事実を知らされた。

「うん。少なくとも、地区大会と県大会はそうしてるみたい。ほら、地区ならまだしも、県やったら遠くから来るトコもあるやん？　代表枠ごとに公平になるように、最初のほう、中盤、終盤って具合に出演順が割り当てられてるみたいやで」
「まだまだ俺たちには計り知れないことがいろいろあるんだろうな～」
春樹が苦笑いする。
「あーあ！　翔みたいに中学から楽器やっとけば良かったー！」
慎也が心底残念そうに叫んだ。翔は笑いながら「ほんなら大学入っても続けろよー！」と返すと、慎也と春樹は「当たり前～！」と声を揃えた。
ホールの楽屋入口に翔たちが到着すると、既に管楽器の降ろしが始まっていた。
「おっ！　急ごう！」
「うん！」
翔たちはバタバタとトラックのところへ駆け寄る。
「陽乃！　田中っち！　サンキュー！」
「あ、佐野くん！　ねぇ陽ちゃん！　佐野くんたち来たよ。代わろう」
「そうだね～！　暑くてたまんない」
「ほい、タッチ！」
翔たちは陽乃たちと楽器の降ろしを交替した。降りてからテキパキと楽器を持ち運びする翔と慎也の姿を見て、陽乃と美里はヒソヒソ話を始めた。
「ねぇ。1年の頃に比べるとやっぱ男子、みんなカッコよくなったよね？」
「彼氏だからっていうひいき目を別にしてもね」
それは紛れもない事実だった。精神的にも身体的にも、やはり高1の時と比べると男子も女子も3年生はいろんな面で成長していた。
「おいコラ！　3年が喋っててどないすんねん！」

翔に怒鳴られて陽乃たちが首をすぼめる。
「はーい！　ゴメンなさい！」
「ほれ、これなら軽いからチャチャッと持って行って！」
翔はよっぽど暑いのか、ボタンを2個も外していた。美里、陽乃、そばにいた茉莉紗やみゆきたちにも、翔の胸がはだけて見えていた。
「ちょっと！」
陽乃は顔を真っ赤にして訴える。
「ボタンくらい閉めなさいよ！　みっともないじゃない！」
「あぁ？　暑いからしゃーないやろが」
「そういう問題じゃなくて……」
陽乃はもっともらしい理由をつけた。
「他の学校の人もいるんだからね！　きちんとして！」
「あぁ……そうやな。うん、わかった」
翔はスッと胸のボタンを閉めた。女子たちがホッと胸を撫で下ろす。陽乃は翔からトロンボーンを受け取ると、駆け足でその場を去っていった。
「あぁ～ビックリした……」
突然胸元を見せられたりしては、平常心でいられるはずがない。陽乃はドキドキを抑えるのに必死だった。追いついてきた茉莉紗がコッソリ陽乃に言う。
「佐野先輩って、意外と体格いいんですね？」
「う、うん。そうなの」
「もっと華奢に見えてました」
「着やせするタイプなのかも」
「いいですよね。佐野先輩、マジかっこいい！」
茉莉紗の言葉に陽乃が不安そうな表情を浮かべる。
「あっ！　心配しないでください！」
茉莉紗が右手を陽乃の前に差し出す。
「菘から聞いたんですけど、朝倉先輩と佐野先輩の間に割って入れるような女の子はもはや、いないと聞いていますので」

それを聞いて陽乃は思わず笑ってしまった。
「えぇ！？　ここ笑うトコじゃないですよ！」
「ううん！　ちょっとね、やっぱりおかしくって」
陽乃はクスクス笑いながら歩き始める。茉莉紗の表情にはハテナマークが浮かんだままだ。
「まぁ……正直ちょっと心配だったけどまさか1年生の間でそんな風にあたしたち思われてるとは考えてもみなかった」
茉莉紗が「アハ！」と笑った。
「みんなあたしたちに気ぃ遣うことなんてないよって、言っておいて」
「了解でーす」
陽乃と茉莉紗は笑い合いながら、楽器置き場に向かって行った.

第３３４話　恭一の秘技

午後３時５０分。七海高校のホール練習の時間が着々と迫っていた。既にホール練習を終えた風見台高校、伊豆南高校の部員たちはいま練習中の北松高校の演奏に聞き入っていた。北松高校は課題曲１、自由曲は『メリーウィドウ　セレクション』だった。

「さすがに北松も上手くなってきてるなぁ」

修平が参ったという様子で呟く。

「ここ１、２年でレベル上げてきてる学校だもん。今年は強力なライバルになるかもね」

優衣が冷静に分析した。そうこうしているうちに、北松高校のホール練習の時間も終わる。１０分程度で七海高校との入れ替えが行われるのだ。

「よし！　では、ここまで。次の七海高校さんがいらっしゃるから、速やかに片付けること」

「はい！」

部長の号令で挨拶を終えるとスムーズに入れ替えが始まった。同時に美里、恵梨、優など七海高校のパーカッションと男子生徒たちが打楽器の搬入を開始する。陽乃たち女子は椅子と譜面台の位置確認を行っている。恭一の指揮がどの位置からでも確認できるように配置し、なおかつ音が篭るなどということがないように、今のうちから本番を意識した配置にしておかなければならない。

例えば、チューバであれば音が出るベルが客席に向かいすぎていると音が露骨に飛んでしまうため、位置を考えておかなければならないし、各人でベルの位置も考えておかなければならない。これはトランペットなどにもいえることである。

スムーズに入れ替えが終了した。

「よし」

いよいよ七海高校の練習が始まるとあって、修平や優衣、それに直幸たちもライバル心が少し燃えてきていた。しかし、予想外の出来事が起きる。

「それじゃ、各自10分後に集合。先生も5分程度で来るからな」

「はい！」

そう返事するなり、部員たちはバラバラと散って行った。

「なんや？」

修平が驚いてキョロキョロと辺りを見渡す。そのうちに、舞台は空っぽになってしまった。

「何やってるんだろ……」

優衣もさすがに状況が飲み込めず、心配そうにしている。

「あ、すみません！」

恭一が何やら照明のスタッフに頼みごとをしている様子だった。しかし、軽く打ち合わせ程度といった様子ですぐにそれも終わってしまう。

「わ！」

直幸が驚いて声を上げるのも無理はなかった。突然、照明が落ちたのだ。

「なんや？」

「あ、来たよ」

優衣の声に反応して直幸と修平が舞台袖を見ると、ようやく部員たちが姿を現したのだ。

「いったい何のブランクやねん、今の10分くらいは……」

「さぁ……」

風見台、北松、伊豆南のいずれの部員たちも七海高校の行動を理解できずにいた。

しばらくすると、着席し楽器を準備し終えた部員たちの様子が暗がりの中で確認できた。そして、照明がパッと点く。

「お？」

修平は見慣れた七海高校の部員たちの姿を見て、思わず声を上げ

た。
　白いブレザー。黒の蝶ネクタイ。そして、黒のパンツ。まさしく、七海高校が昨年から着ている演奏会時での正装だった。
「わぁお。気合い入ってるねぇ」
　優衣がクスクスと笑う。他校の生徒も同様であった。しかし、恭一がお辞儀をしたあたりから、空気が変わったのだ。ピリッとしたような、それこそ本番直前の雰囲気に変わったのだ。
「な、なんか緊張するな」
　自分たちの番ではないにも関わらず、修平は思わず緊張してしまった。
「ホントだな……なんだろ、この雰囲気」
　直幸もデジャヴのように緊張感を抱いてしまった。そして、恭一が指揮棒を降ろすと同時に課題曲である『マーチ・ブルースカイ』が始まった。
　部員たちの顔は真剣そのものだ。だからといって、風見台高校や伊豆南高校が適当であったとか、そういう意味ではない。しかし、何かが決定的に違っていた。
　思わず静まり返る客席。何かが違うのだが、その何かが明確に分からないまま、修平たちは七海高校の演奏に聞き入っていた。
　まず、練習でいきなり通し練習をするのも他の高校とは違っていた。その上、普通の練習であれば（そして、今日練習をした七海高校以外はこのとおりであった）、指示が頻繁に飛ぶため、曲が停止するものである。しかし、恭一は課題曲を一度も止めずに完全に通しきってしまった。
（まだ荒いところがあるんだが……）
　風見台高校の兵藤　章義は不思議そうに首を傾げる。荒い部分があり、まだまだ修正するべき箇所があるにも関わらず、恭一は課題曲を通しきった。
　課題曲が終わると、何名かが移動していく。すぐに移動を終えると、恭一が再び指揮棒を上げた。

そして、自由曲が始まる。章義はもちろん、修平や直幸、優衣にもまったく経験のない練習方法であったため、七海高校の意図するものがまったく読めずにいた。

結局、自由曲である『教会のステンドグラス』も止めることなくすべてが終了した。それから、ようやく恭一が声を上げた。

「はい、お疲れ～」

「ありがとうございました！」

緊張の糸がそこでスッと切れたのが、修平たちにもわかった。

「ＯＫ。それじゃあ、とりあえず課題曲の位置に戻ろう」

「はい！」

部員たちが素早く課題曲の座席に戻る。

「えっと。まずトリオのＦから行こう。えっと、最初に言いたいのはやっぱりスネアとタンバリンのつなぎだ。そこは田中と秦野がしっかりと息を合わせること」

「はい」

恵梨と美里が顔を見合わせ、うなずく。

「それから秦野。お前は後打ちを田中から引き継ぐわけだから、リズムが乱れないようにな」

「はい！」

恵梨がササッと楽譜にメモをする。

「次に、Ｉから。そこはチューバやユーフォ、トロンボーンとかがメインだから。トランペット、テンション上がるのはわかるけど、うるさいわ」

「はい」

陽乃と勇がすぐにシャーペンでメモをする。

「音的には、パーンパカパーン！って透き通った音がほしいけど、お前らのはギャーンギャギャギャーン！ってすごく耳に突く音がしてる。これじゃあブルースカイのイメージが吹っ飛んじゃうから。もっとクリアに」

「はい！」

「そういう意味では、ユーフォ」
「はい」
愛実と春樹が返事をする。
「裏メロのようなものがトリオの途中で入るだろ？」
「はい」
「それさぁ、なんかやっぱり暗いんだよ。確かに下降系の音が目立つけど、下降系だからこそむしろ上昇するようなイメージでさ。曲はだんだんフィナーレに向かうわけだからな」
「はい！」
「それから……そうそう、最後の一番盛り上がる部分。スネア」
「はい！」
「そこの打ち込み部分あるだろ？」
「はい」
「確かにｆｆで指示は出ているけど、今のお前のそれは花火が突然爆発したみたいな音になってるから、もう少し上質な感じの音色がほしいな」
「はい！」
修平たちにはまったく理解できなかった。なぜ七海高校が正装でホール練習をしているのかがまったくもって解せないのだ。しかし、かつて大学で心理学を専攻していたという章義はふと昔のことを思い出していた。
スポーツでもそうなのだが、練習では成果が出せない生徒に本番で着用するユニフォームを着せて練習させたところ、明らかにそれまでを上回る記録が相次いで出たそうだ。本番で着用する衣装を着て練習すれば、気が引き締まり、結果として本番に近い、あるいはそれ以上の結果が出せるのだ。
今回の七海高校の場合も、恭一は完全にそれを意識しているものだろうと章義は察知した。
「なるほど……。手ごわい相手かもしれないな、ナナコウは」
章義は腕を組んでしばらく唸ることしかできなかった。

第３３５話　これからも、ずっと

ホール練習終了後。
楽器運搬を終え、終礼も終えたので部員たちは順次解散していった。金曜日は結局、夜遅くに会うことはさすがに陽乃の両親が許可してくれなかったため、会うことができなかったのだ。
「皆帰った？」
翔が部室に入ってきた陽乃に聞いた。
「うん」
陽乃は小さくうなずく。
「……。」
「……。」
不思議な沈黙が起きた。夕暮れ時の校内は静まり返っている。どこかで、カラスの鳴き声が聞こえた。
「こっちおいで」
翔が手招きする。陽乃は小さくうなずいて、翔が座っている本棚の横に立った。
「……。」
相変わらず、会話が生まれない。
「なぁ」
翔が言った。
「何？」
「……えっと」
顔が少し赤い翔。陽乃も自然と赤くなってきて、心臓がドクドクと音を立て始める。別に翔と二人きりになるのはこれが初めてではない。今まで何度も経験したことがあるはずの出来事なのに、異様にドキドキしてしまう。
翔が凛とした表情で言った。
「ハッピー、バースディ。陽乃」

陽乃の顔が真っ赤になった。
「せ、せんきゅーべりまっち」
「なんで英語やねん」
翔はぎこちない英語で答えた陽乃に思わず笑ってしまった。陽乃も「なんでだろうね」と言って笑う。
「あ。あのさ」
翔がゴソゴソとカバンから何かを取り出した。
「これ……マズいかもしれへんけど」
「何？」
陽乃は小さな箱を受け取った。マズい、という言葉が出てきたということは食べ物が入っているのだろうということまでは予想できた。
「開けていい？」
翔は小さくうなずく。それからすぐに、そっぽを向いてしまった。
「うわぁ……」
小さなケーキが入っていた。少し形はいびつだが、手作りであるというのは一目でわかる。そして陽乃は昨日の練習のことを思い出していた。
翔がしきりにアクビをしていたのだ。さゆりや麻綾が「パートリーダーなんですから、そんなアクビ連発しないでください！」と呆れ顔だったことや、慎也が「見ちゃいけないビデオとか見てたんじゃねぇだろうな？」と笑いながら茶化していた。翔はたいてい、夜は１１時ごろ寝ると聞いていた。その翔がアクビするほど夜更かしする理由など、陽乃には思い浮かばなかった。
その土曜日の帰り、陽乃は翔に聞いた。
「今日はなんでそんなにアクビしてたの？」
「え？」
翔は明らかにあの時、焦っていた。
「べ、別にちょっと眠れんかっただけや」
「ふぅん……」

翔は隠し事が下手くそだ。特に陽乃に何か隠し事をするときはかなりバレバレな素振りを取ってしまう。逆に、それだけ素直であるということでもあったのだが。

「コンクール近いんだし、まだ期末テストとかもあるんだから。あんまり夜更かしして体長崩さないようにね」

「へいへーい」

おそらく、あの時このケーキを作っていたのだろう。いま思い返せば、あの日の翔はなんだか甘い匂いも漂っていた。

同時に思い出したのは、あの日綾音も眠そうにしていたということであった。兄妹揃って夜更かしとは仲が良いことだと陽乃は気にも留めていなかったが、思い返せば彼女からも甘い匂いがしていた。おそらく、料理などほとんどしない翔に綾音が指導していたのだろう。容易に想像できる光景だった。

「……嬉しい」

陽乃は気づけば声が震えていた。翔がそれを見て驚いた表情になる。

「な、そ、そんな泣くほど嬉しいか？」

「うん……」

陽乃はそれ以上、声にならなかった。何度か咳払いをしてから翔に聞いた。

「食べていい？」

「ヒドい声やな」

翔がププッと笑った。

「お召し上がりください」

「いただきます」

陽乃はそっとケーキを右手で取る。形はいびつだが、味は思っていた以上にしっかりしていた。それ以上に驚いたのは、中にオレンジとイチゴが挟まれていたのだ。

「すっごい……。果物挟んである」

「綾音に、そうしたらごっつ美味しなるって聞いて……。完全に受

け売りで指導してもらったから、なんかオレの手作りなんかどうなんかも微妙なケーキになったけど」
陽乃は首を横に振った。
「これは、翔が作ってくれたんだよ」
「……。」
「ありがとう」
「……へへ」
翔は恥ずかしそうに頬を掻いた。
「あ」
翔が何かに気づいたらしく、陽乃の顔に手を近づけ、右手の人差し指で彼女の頬を摩った。
「！」
「クリーム付いてた」
陽乃がもうどうしようもないくらいに真っ赤になっていた。
「……。」
翔も赤くなる。
「可愛い」
翔の目が弓なりになる。優しい目つきだった。
「……なぁ」
陽乃の心臓も、翔の心臓も否が応でも高鳴ってくる。翔が低い声で言った。
「キス……していい？」
陽乃は小さくうなずいた。
翔の手がそっと陽乃の顔に触れる。ゴツゴツした手はやはり、翔が男の子だということを改めて知らされる瞬間だった。
翔の顔がどんどん近づいてくる。陽乃は思わず目を閉じた。その瞬間、翔の唇が陽乃の唇に触れた。
どのくらいの時間だったのかはわからなかった。それはもの凄く長い時間だったようにも感じたし、すごく短い時間だったようにも感じた。不思議な感覚だった。

「……へへ」
翔が笑う。
「……えへ」
陽乃も釣られて笑った。
「帰ろうか」
「うん」
翔が陽乃の手を握る。部室を出て鍵を掛け、音楽室をすぐに出た。
戸締りを確認し、施錠した後、職員室に向かって歩く二人。
「なぁ」
不意に翔が言った。
「これからも、ずーっと一緒やで？」
「どうしたの？　急に」
陽乃はおもわず笑ってしまった。
「いや、マジで。確認？」
「あはは！　翔、おもしろいこと言うね」
「へへ」
陽乃が笑顔で答えた。
「当たり前じゃない。あたしたち、決めたでしょ？　大学も同じところ目指す。ずーっと、一緒にいるって。翔があたしを嫌いになっても、あたしが翔を嫌いになっても、二人がもう絶対に会いたくないって思う日が来るまでは、絶対にずーっと、一緒だって」
その言葉ひとつひとつが、翔を安心させていた。あの阪神淡路大震災の前日の、兄の誕生日。綺麗サッパリ失われていた記憶が最近になってちらほら、蘇るようになっていた。翔は前日１６日の晩、こう言っていたのだ。
（オレら、ずっと仲良し家族やんな！）
そして、母が言ったのだ。
（当たり前やん）
しかし、その約束は呆気なく費えてしまった。翔にとってあまりにも幸せな日が続いていると、逆に不安になってしまうのだった。

「約束、な」
翔は陽乃の手をしっかりと握った。
「うん」
二人はしっかりと手を握り合った。
陽乃の自宅前で、翔がもう一度「ハッピー、バースデー」と言った。陽乃は「本当にありがとう」と答えた。
「んじゃ、今日はこれで！」
翔が手を振りながら自宅に向かって歩き始めた。
「うん！」
陽乃も大きく手を振る。その時だった。急に陽乃の胸が締め付けられるような感覚に陥ったのだ。
「か、翔！」
思わず陽乃は翔を呼び止めた。
「ん？　どないしたん？」
「……ううん。なんでもない」
「変な陽乃」
翔はクスッと笑って「ほな」ともう一度手を振って今度こそ、自宅へ向かって歩いていった。
幸せな瞬間を迎えられたにもかかわらず、陽乃はなんとなく寂しい気分のまま、翔の背中を見送ることしかできなかった。
そして、この時の胸が締め付けられるような感覚が何だったのかがわかるのは、まだまだしばらく先のことだった。

第３３６話　置いてけぼり

「ちわーっす！」
翔が部室に来るなり、上機嫌な声で挨拶をしたのはホール練習から3日後の１３日水曜日のことだった。
「どうしたんですかー？　超機嫌いいですね！」
あずさと恵梨が驚いて翔に問い掛ける。
「うんうん！　実はちょっと聞いてぇな！」
「なんですか？　なんですか？」
恵梨が興味深そうに近寄る。
「ジャーン！」
そう言って翔が開いたのは、５月上旬に行われた神奈川県統一模試の結果だった。
「模試ですか？」
「そ！　ここ見て、こ・こ！」
「んー？」
恵梨が翔の指差すところを見ると、進路希望：島根大学教育学部（学校教育？一音楽）と表記されている。そして、現時点での合格率の欄に「C」と書いてあった。恵梨はそのCランクがどの程度なのかすぐにピンと来ず、Cの意味合いを調べてみると少し横に合格率４０－６０％との表記があった。
「すっごーい！　先輩、ホントですか！？」
「マジマジ！　いやぁ～テンション上がるわぁ」
「ねぇねぇ、あず！　見てみてよこれ！」
「合格率、もう４０％以上あるってことですよね？」
あずさの問いに「そういうこと！」と翔が満面の笑みで答える。
その話を聞いて駿が隣にやって来る。
「スゴすぎません？　だって、先輩島根大学志望ですよね！」

「島根大って国立!?」
それを聞いた徹がそばにやってきて翔の模試結果を見つめている。
すると、ほぼ同時に美里が「こんにちはー!」とこれもまた嬉しそうに部室に入ってきたのだ。
「こんにちは!」
恵梨とあずさが機嫌よく挨拶するので、美里も嬉しそうに答える。
「どうしたの? 二人とも上機嫌ね!」
「先輩こそ! どうされたんですか……あっ! 佐野先輩と同じ紙持ってる!」
「ややっ! バレちゃったか~……なーんてね! ちょっと皆に見てほしくってさぁ」
そう言って美里が翔と同じ模試結果の紙を広げた。
「すごーい! 先輩もCだよ、合格率!」
あずさと恵梨がキャイキャイと興奮した様子で飛び跳ねていた。
「まぁ、あたしの場合、来年4月に新しくできる学科だから、佐野くんと違ってあくまで目安に過ぎないけどね」
「それでもスゴいです~!」
そんな彼らのやり取りを少し後ろめたそうに見ているのは、由美子だった。
「こんにちはー!」
続いてやってきたのは沙希だった。
「サキティー! ねぇ、模試の結果どうだった?」
美里が開口一番、沙希に尋ねる。すると、沙希はブイサインをすぐに差し出したのだ。
「良かったんか?」
「それなりにね!」
「ホンマか! 3年、みんな調子えぇなぁ!」
翔が嬉しそうに沙希と手をタッチさせる。由美子はそんな様子を見ていると、ますます出づらくなってしまった。
「ちょっと待ってね。いま、結果の紙出すから……わぁ!」

沙希がフルートのロッカー前でしゃがんでいる由美子の姿を見て、声を上げた。
「ビックリした！　由美ちゃん、そんなところでどうしたの！？」
「あ、ちょ、ちょっと休憩？」
「なぁにそれ！　そんなところじゃ狭いじゃん。皆のところ行こうよ」
「あ……わ、私もう練習行くね！」
「え？　あ、そ、そう？」
由美子は慌ててロッカーから譜面台と譜面、楽器を取り出すと逃げるように部室を飛び出した。
「あ……待って由美ちゃん」
沙希が由美子を呼び止めた。
「何！？」
由美子は半分鬱陶しそうに答えた。
「パー練の部屋の鍵、置いたままだけど」
「あ……あはは！　やだなぁ、私ったらマヌケなんだから～」
由美子は沙希の手から奪うように鍵を取ると、今度こそ部室を勢い良く飛び出して行った。
音楽室からしばらく離れると、由美子は後ろを振り返って今の自分の行動が変に思われていないか心配になり、そちらを振り返った。
特に心配はされていなかったようで、誰も表に出てきていたり後を追おうとしている人がいなかったので、ホッとため息をついた後で、なんとなく寂しさがこみ上げてきた。
右ポケットの中でクシャクシャになった模試結果の紙を取り出す。その紙には、あまりにも由美子にとって衝撃過ぎる内容が書かれていた。
由美子は法政大学の文学部心理学科志望である。しかし、この模試ではその学科以外にもひとまず、法政大学の文学部系統の学科を中心に志望ということでそれらを書いてみた。しかし、結果は散々なものだった。

すべてに「E」と記されていたのだ。そして、「E」の合格率は２０％未満。未満なので、それは１９％かもしれないし、１％かもしれない。いずれにしても、由美子にとっては絶望的な数字以外の何者でもなかった。

元来、天然で楽観的な性格の由美子。この結果を受け取った当初も、まだ5月上旬の頃であるし、まだまだ部活を引退してから勉強すれば何とかなる、という考えを持っていた。だから、あまり気にしていなかったのだ。しかし、先ほど部室に来た翔と美里、沙希の話を聞いていて、あまりにも自分と彼らの差があることに衝撃を受け、一気に焦燥感が出てきたのだ。

「どうしよう……」

しかし、焦ってはいるものの由美子に部活を休んだり辞めたりするというような選択肢はない。由美子の母も、勉強と部活を必ず両立させるように頑張れ、と背中を押してくれているような人だ。その期待を裏切りたくないという気持ちもあった。

「何とか……したいんだけど」

由美子はしばらく部屋の鍵も開けずに、ボーッと廊下で立ち尽くしていた。

「そうだ」

こういうときこそ、顧問であり先生である恭一に頼ってみるべきではないか。由美子はそう思い、ひとまず部屋を開けて楽器と譜面台を置くと、職員室に向かった。

「……。」

自分から進んでくることなどほとんどない職員室。由美子の心臓が高鳴っていた。ドアを開けようとしては手を引っ込め、開けようとしては引っ込めるの繰り返し。そんなことを繰り返していると、後ろから声がした。

「宮部さん？」

彩が立っていた。

「新井田先生……」

「どうしたの？　部活の時間じゃない。あっ、東先生に用事？」
「あ……」
「いま呼んであげるわね。会議とかはしていないはずだから」
「待ってください」
彩が驚いて手を止める。
「あの」
由美子は何と言えばいいかわからず、変な言葉になってしまった。
「成績って、どうやって上がりますか！？」
彩が目を丸くしている。
「あ……」
あっという間に由美子が真っ赤になった。
「勉強するしかないですよね……」
彩がすぐにニッコリ笑ってくれた。
「そうね。勉強するしかないんだけど。でも、宮部さんは部活の友達がいるでしょう？　佐野くんとか、朝倉さんとか」
「はい」
「それに先生知ってるわよ？　ステキな彼氏がいるじゃない」
「あ……」
彩がウフフ、と微笑む。
「勉強ってね。まぁ、受験もそうなんだけど最終的には自分との戦いよね。でも、ずーっと独りで戦ってたんじゃ疲れちゃうじゃない。何でもそうなんだけど、独りで何かをしていたら必ず参ってしまったり、嫌になったりするものなの。先生が顧問をしている華道でもそうね。吹奏楽部でも、宮部さん一人でフルート演奏していたって、たまにはいいけど、毎日はつまらないんじゃない？」
由美子は小さくうなずいた。
「誰か一人でもいいから、一緒に頑張れる人を見つけてごらんなさい。それでも辛くなったら、いつでも東先生や私のところへいらっしゃい」
「……はい」

「それから。模試の結果が悪くても、部活にそれは持ち込まないこと。でも、部活が終わったらしっかりとそれが何故なのか、見つめ返す時間を持つこと。なんでもメリハリね」
「はい」
「それじゃ、頑張って部活に行ってらっしゃい」
「はい」
由美子はペコリとお辞儀をし、すぐに練習部屋である多目的室に戻った。
多目的室の部屋に行くと、沙希、稚沙希、健之佑、慧太の４人がいた。
「あ、なーんだ！　いるじゃない」
沙希がバシッと慧太の肩を叩いた。
「だ、だってさっきすっごいテンション下がった顔で先輩が職員室前にいたから」
「志賀くんったらさぁ、由美子がなんか青ざめた顔してるっていうから。心配になっちゃって」
由美子は「えへへ」と答えを濁しながら笑う。
「まぁ、あれよね。由美ちゃんだって、そういう時あるよね」
沙希がフルートを出しながら言う。
「でも、そういう時はあたしたちにも言ってよ？　パート仲間なんだから、何でも相談に乗るし」
「うん」
由美子は何のためらいもなくそう言ってくれた沙希の顔を見つめる。
「どうかした？」
「じゃあ、早速なんだけど」
沙希が笑顔になる。
「何？」
「部活終わってから……３０分だけでいいから、勉強教えてほしいな」

沙希は「いいね！　それ！　ねぇ、どうせなら3年生みんなでしない！？」と提案してくれた。
「あ！　そのほうがいいかも」
由美子も名案と思い、同意する。
「じゃー、今日由美ちゃんから提案してよ」
「え？　私から？」
「だって、由美ちゃんがそう言ったんだもん。ね！　よろしく！」
沙希のとびきりの笑顔に、由美子も笑顔になる。
「うん！　わかった！」
そして由美子はポケットの中でグシャグシャになった模試の結果を、一度みんなに伝えてみようと思い、手を軽く握り締めた。

第337話　一枚、一枚

「頑張ってるか～？」
由美子の提案で始まった部活後の勉強会。3年生全員はもちろん、2年生や1年生も集まって勉強を一緒にするということにまで発展していた。
「東先生！　ちょうど良かった。ここの構文聞きたかったんです！」
恭一が部屋に入るなり、由美子が飛ぶように恭一のところへやって来た。
「落ち着け落ち着け。宮部はやる気満々だな」
「はい！　部活と勉強両立させる気でいますので！」
由美子の笑顔を見て恭一もやる気が出てくる。
「どれどれ……。あぁ、これはだな」
恭一がすぐに音楽室の黒板を使って説明を始める。すると、拓真が横にやってきて「俺も混ぜてもらっていい？」と由美子に聞いた。
「もちろん！」
「サンキュ」
二人が並んで勉強している姿を複雑そうな表情で亮平が見つめていた。それを見た春樹が「嫉妬？」と聞くと赤くなりながら「少し」と彼は答えた。
「ねぇ、ちょっとみーやん！」
そんな亮平の様子などまったく知らぬ存ぜぬといった様子で、光瑠が亮平の制服を引っ張る。
「なんだよ」
「ここの文章の意味がわかんない」
「あぁ……これは係り結びの法則ってあるだろ？　あれ使わないと意味不明だから」
亮平は要領よく光瑠に古文の説明をしている。黒板のほうでは、恭一が既に説明を終えて音楽室内を歩き回っていた。

「えーっと……Ｎｏｔ　ｏｎｌｙとｂｕｔ　ａｌｓｏがあるから、Ａだけではなくｂもの構文で……」
翔が少々難解な使い回しをされた構文に頭を抱えていると、突然フラッシュが光ったので目を細めた。
「眩しっ！」
恭一がデジカメで写真を撮影しているのだ。
「先生！　突然なんなんですか？」
「すまんすまん！　自然に頑張ってるお前らの様子をちょっと撮っておこうと思ってな」
「盗撮～！」
「はいはい、スマンかったな！　それじゃあ、撮影させてくれますか、部長さん？」
翔はニッと笑い「自然体がいいんでしょ？　今のん、目ぇ細くなったからもう1回お願いします！」と言った。
「ちゃっかりしてるなぁ」
恭一は笑いながらもう一度シャッターを押した。
午後7時半。恭一が「今日はこのあたりにしておこうか」と促した。
「待ってください！　あとこの1文が訳せたら……」
絵美が必死になっている。恭一は「あと5分だけだぞ」と言うと、絵美は「ありがとうございます！」と言いつつ問題を解いていた。
陽乃と美里は既に片付けて帰る気満々でいる。一方の由美子、拓真、翔もまだ机にへばりついていた。恭一はそれぞれの個性がこういうところでも出るものだな、と微笑みながら見ていた。
部員たちが全員帰ったのを確認してから施錠し、職員室に戻るとまだ彩が残っていた。
「なんだ。まだ残ってたのか？」
他の先生がいないので、二人は特に気も遣わず普段どおりの会話を始める。
「うん。恭一さんを待ってた」

「え？　そりゃ悪かった」
恭一は慌てて机に座り、荷物をまとめ始める。
「あ。あとちょっとだけいいか？」
「えぇ」
恭一はカメラをＵＳＢで接続し、今日撮影した写真をデスクトップにある「吹奏楽部　３年」というフォルダにコピーし始める。
「佐野くんたち？」
「あぁ」
「こんなに撮ってたんだ」
１年生の頃の少し幼い翔や陽乃。肝試しのあとだろうか、青ざめた様子の春樹。マーチングで重そうにスーザフォンを担いでいる拓真。文化祭で楽しそうにフルートを吹いている沙希と由美子。大胆な姿でドラムセットを叩く美里。真面目な絵美は放課後、一人で早速部室で練習している様子が写されていた。慎也はトロンボーンを持ちながら、教室でうたた寝している姿が写っていた。
「あらら。川崎くん、居眠りしてでも楽器を手放さないのね」
「みんな楽器が好きだからなぁ」
恭一は感慨深そうに呟いた。
「何月だった？　演奏会」
「１１月２３日」
「もう……半年ないのね」
「そうだな」
二人は黙ってフォルダに納められた写真を見ていた。
「正直」
恭一が言い出した。
「吹奏楽部に関わることなんて、もうないと思ってたんだけどな」
「そうなの？」
恭一はうなずく。
「もう、この高校の吹奏楽部は俺たちの代で伝統が費えた。そう思ってたんだ。だけど、佐野が来たことで一気に流れが変わった。最

初は、サークルでしかない部だったから、今の2年生もそんなに入らないだろうと思っていたし、まさかコンクールでいきなり金賞を取るとも思ってなかった」

それが恭一の正直な気持ちだった。だから、今も定期演奏会の話し合いをしていたり、コンクールの自由曲の指揮の振り方を考えたりしている自分が、何かウソのように感じる部分が少なからずあるのだ。

「感謝してるよ。彼らには」

恭一が笑いながら、目から何かがこぼれ落ちるのを感じていた。

「ハハ……参ったな。涙腺が緩くなってきた」

「やだ」

彩が笑いながらハンカチで恭一の頬を伝う涙を拭いた。

「何でも……永遠に続けばいいのにって思うことがたくさんある」

「そうね……」

「でも、それじゃあずっと同じことの繰り返しだもんな。佐野たちもいずれは卒業して、大学に入って就職して、結婚して子供を持つかもしれない。俺がそんなアイツらの成長に少しでも役立てたのなら……それはとても幸せなことなんだな」

恭一は胸が熱くなり、また涙しそうになったが何とか堪えた。

「これ、見てくれよ。佐野が去年のコンクールでみんな泣いてるのに、一人笑ってるシーン」

そう言って恭一が写真をクリックした瞬間だった。

「あ」

画面が固まった。そしてそのまま「このシステムは応答していません」の表示。

「参ったな」

恭一が彩と顔を合わせ苦笑いする。そして恭一は特に気にも留めず、システム処理をしてもう一度翔の写真を表示させた。

第３３８話　当たり前なんて、存在しない

（しっかし……マズいなぁ）

翔は今回の模試で「C」を取ったものの、以前島根大学を目指すと言った時に、友美子と「Bを取らんかったら受験せん！」と言ったことを反芻していた。今回、かなり頑張った上に今日からこうして部員たちと勉強会も開いている。なんとか、その努力を認めてほしいと思っていた。

不安は確かにあった。この結果を友美子に見せたら、喜ぶだろうか。それとも、怒るだろうか。どちらかといえば、後者のほうが可能性が高そうだと翔は感じていた。

「どうかしたの？」

陽乃が聞く。

「ううん！　なんでもない」

３年生９名は学校を出て、自転車を押しながら帰宅していた。家の方向はバラバラなのだが、今日は違う道で帰ってみるのもおもしろいという慎也の提案で、違う道をこうして通って帰っていた。当たり前のように毎日、同じ道を帰っていたが何も当たり前のことをずっと繰り返す必要もない。そう思い、こうして違う道を帰ってきていた。そして、今は普段通って帰る津上橋の２本南寄りの軍功橋を渡って帰っていた。交差点で信号に引っ掛かったので、他愛無い話をしながら信号が変わるのを待つ。

「そういえばさ。ココの角」

絵美が思い出したように言う。

「１２月に、ＴＳＵＴＡＹＡが来るらしいよ」

「ホント？」

由美子が嬉しそうな声を上げる。

「うん。大きなビルでしょ？　他にもいろんな店が来て、大型複合

ショッピングビルができるんだって」
「へぇ～」
春樹と拓真がビルを見上げる。まだ真っ暗だが、１２月になればきっと明るい照明がついて、人でいっぱいなんだろうと感じていた。
「工事現場って夜は不気味だねぇ」
沙希が不安そうに覗き込む。
「まぁ、誰か変なヤツが来ても翔と拓真がぶっ飛ばしてくれるよ」
「確かに、二人とも腕っ節強そう」
陽乃が笑う。
「なんやねん、みんなしてオレらがバカ力みたいな言い方してなぁ。気に入らん！」
「冗談じゃない！　そんなに怒らずに～」
「冗談なら許す！」
ドッと笑い声が起きた。
「ん？」
慎也がふと足元を見ると、砂がパラパラとこぼれてきていた。
「うわ～さすが工事現場だな。砂まみれ」
「ホント。靴汚れそう……」
陽乃が嫌そうに砂を避けて、鉄板の柵のほうへ近寄る。
「でも、どこから落ちてきてるんだろ」
絵美が辺りを見渡す。確かに、砂がこぼれているにしても少々、不自然な位置にこぼれていた。歩道の真ん中である。
「誰かドンくさいことしてこぼしたんとちゃうか……」
そう言って翔が上を見上げた時だった。工事に使用されるのだろう。作業小屋の隣に砂山がうず高く積み上げられていた。その砂が、サラサラと流れ始めていたのだ。
「……！」
翔の表情が強ばる。
「どうしたの？」
陽乃がその翔の様子を見て後ろを振り返ったときだった。一気に

砂が崩れ落ちてきたのだ。
「！」
慎也もそれに気づいて、美里と沙希の手を引いた。
「ヤバイ！　走れ！」
翔が絵美と由美子の背中を押して、すぐに陽乃の手を引いた。
「え！？」
「何！？」
春樹と拓真も振り返って異変に気づいて走り始めた。全員がほぼ状況を飲み込めず、ひたすらに走る。
「きゃあ！」
陽乃が拓真の自転車に引っ掛かって、転倒した。
「陽乃！」
「きゃあああああ！」
土砂がバランスを一気に失い、陽乃のほうへ向かって崩れ落ちてくる。
「陽ちゃん！」
「いやあああああ！」
女子の悲鳴を聞き流しながら、翔は陽乃のところへ駆け寄り、彼女を抱き起こした。
（アカン！）
咄嗟の判断だった。翔はそのまま陽乃の腕を掴み、遠心力の要領で彼女を拓真のほうへ飛ばしたのだ。それと同時に砂ぼこりが一気に陽乃たちの視界を遮った。
「ゲホッ！　ゲホゲホッ！」
「ひゃあ～！」
砂ぼこりと何かが崩れる音が収まってから、ようやく陽乃は拓真に支えられながら立ち上がった。
「ひっどーい……何よ、今の」
美里が制服や髪の毛に付いた砂を振り落とす。
「みんなケガないか？」

慎也の問いに沙希や由美子が「大丈夫」、「ちょっと口に砂が入っただけ」と答える。
「春やんは？」
拓真が心配そうに春樹の様子を確かめた。
「俺も平気」
「良かった」
「エミリンは？」
陽乃が心配そうに見渡すと、道路の真ん中で絵美が座り込んでいた。
「ちょ、ちょっと腰が抜けたけど……大丈夫」
へへ、と絵美が笑った。しかし、そこで陽乃は異変に気づいた。
真っ先に聞こえてきそうな、関西弁が聞こえてこない。
「翔……？」
砂ぼこりが晴れない中、陽乃は覚束ない足取りで周囲を歩き回る。
「翔？」
ハッと気づいたように慎也や拓真たちも辺りを見渡す。しばらくすると、砂ぼこりが晴れ、先ほどまで陽乃たちがいた場所は鉄板が崩れ、砂の山が完全に崩れ落ちていた。
「……。」
陽乃は恐る恐る、その場所へ近づく。拓真と美里の自転車が砂に埋もれ、少しひしゃげていた。
「……。」
何かが埋もれているようで、少しだけ膨らんでいた。陽乃の心臓が飛び跳ねんばかりに鳴り響く。
そして、陽乃はパッとその砂を振り払った。
砂の山から、人差し指が見えた。
「いやあああああああああ！」
陽乃が悲鳴をあげるころには、何が起きたのか察知した男子全員

が砂の山に飛び掛っていた。
「カケル！」
慎也が声を裏返しながら叫ぶ。
「翔！　どこだ！？」
拓真も必死になって砂を掻き分ける。
「かける！　答えろって、かける！」
春樹が涙で顔をグシャグシャにしながら砂を放り投げる。美里、沙希、由美子も飛びかかって翔の手が見えている辺りを掘り返す。絵美が震える陽乃に落ち着くよう、何度も声を掛けている。
「いた！」
叫んだのは、春樹だった。春樹の目には、右手がかすかに見えていた。その声を聞いて慎也と拓真が飛び掛かる。
「何？」
女子高生らしい姿が見えた。北松高校の服だった。
「事故？」
「え？　ヤバくない！？」
そう言ったときには二人の女子高生も砂山に飛び掛かっていた。
「ねぇ！　ちょっとどこに人がいるの！？」
「ちょうどこの下あたりだと思う！」
拓真が指示する。美里たちも集まって必死に砂を掻き分けた。しばらくすると、ようやく翔の顔が見えた。
「かける！」
春樹が声をかけるが、応答がない。
「……。」
拓真が翔の鼻辺りに耳を近づけた。そしてすぐに翔を抱きかかえ、制服のブレザーを地面に敷いた。
「ちょ、拓あん！」
状況が飲み込めない慎也は焦るばかりだ。拓真が叫んだ。
「慎也！　１１９番しろ！」
「え！？」

「カケル、息してねぇ！」
「ウソだろ！？」
「早く！」
拓真の勢いに慎也は震える手で１１９番をした。
「春やん！」
「な、何！？」
「カケルん家電話しろ！　おばさんでもおじさんでも、綾音ちゃんでもいい！」
「わ、わかった！」
美里と沙希、由美子は目の前の状況に立ち尽くすことしかできなかった。
「田中！」
「は、はい！」
「学校に電話しろ！　東先生いるかもしれない。いなければ、俺の携帯に先生個人の携帯番号があるから、とにかく先生に繋いでくれ！」
そう言って拓真は携帯電話を美里に手渡した。
「マジかよ！」
心臓も動いていないようだった。拓真はとにかく必死にまずは人工呼吸を始めた。それから、テンポよく心臓マッサージに移る。慎也が救急車を要請し終え、拓真の元に駆け寄った。
「覚えてるか？」
拓真は聞いた。
「覚えてる。まだ半年しか経ってねぇからな」
半年前、２年生の頃に慎也たちは心臓マッサージと人工呼吸を教わっていた。とにかく、うろ覚えでないことは確かだった。
「あたしも覚えてる！」
陽乃が飛び出してきた。
「朝倉さんは今の状態で翔の唇に触れるな！」
拓真の言葉に陽乃が立ち止まる。

「こんな状態で……唇に触れてほしくないと思う。コイツも」
陽乃はなんとなく、言葉の意味が理解できた。しかし、自分が傍観者になるのは嫌だと思い、陽乃は前に出た。
「あたし、翔を助ける」
「……わかった」
拓真は強くうなずいた。
拓真と慎也が人工呼吸と心臓マッサージを、陽乃が必死に人工呼吸を繰り返す。そうしているうちに、救急車のサイレンが聞こえてきた。
救急隊員が引き継ぐ。救急車内に搬送された翔。まるで、映画かドラマの世界のように、陽乃たちには遠い世界のような気さえしていた。
「どなたか、付いて行ってくださる方はいらっしゃいませんか！？」
「！」
その声に全員が反応する。
「お二人、お二人お願いします！」
状況を判断して、救急隊員が指示する。
「陽ちゃん、行って！　それからエミリンも！」
美里が素早く指示する。
「え！？　わ、私！？」
絵美がかなり戸惑っていた。
「今までパニクりかけの陽ちゃんを落ち着かせてくれてたエミリンが一番いいと思う！」
「……わかった！　行くよ、陽ちゃん！」
「うん」
陽乃と絵美が救急車に乗り込むと、すぐに救急車は発車した。
「……夢じゃないのよね」
美里が確かめる。
「あぁ……」
慎也がそっと美里を抱き寄せた。しばらくして、警察官が美里た

ちに近づいてくる。事情聴取だろう。美里たちは俯き加減で警察官の問いにゆっくりと、答え始めた。

第３３９話　予感と連絡

―　２０：１０　佐野　友美子　―

佐野家に電話の音が鳴り響いたのは、午後８時１０分のことだった。

「はいはいはーい！」

友美子が洗い物の手を止めて手を拭いてから、電話に出る。

「はぁい、佐野でございます」

「あっ、あの」

「あら？」

友美子はその声にすぐ反応した。

「水谷くんじゃない。こんばんは～。どないしたん？　部活、終わったん？」

「お、落ち着いて聞いてください！」

「え？」

友美子は春樹の言葉を受話器越しに聞いた後、突然座り込んだ。

ガシャン！と電話機の横に置いてあったペン立てがひっくり返ったので、テレビを見ていた智輝が慌てて立ち上がる。

「お母さん？　どうしたん？」

「……。」

音を聞いて冨美枝も和室から出てきた。

「どないしたん？」

「お義母さん……」

友美子の声が震えている。

「どないしたん？」

「翔が……」

「え？　翔がどうしたん？」

友美子の言葉に、冨美枝は耳を疑った。

「事故に遭って……意識ないって」

―　20：14　東　恭一　―

恭一が職員室を出ようと電気を消したときだった。暗闇で突然、電話が鳴り響いた。

「ビックリしたぁ～。なんだ、こんな時間に」

恭一はもう一度電気を点けて、電話を取った。

「はい。七海高等学校でございます」

「先生！」

開口一番、そう言ったのは美里だった。

「なんだ、田中か。どうした？　忘れ物か？」

「違うんです！　先生、先生～！」

「……落ち着け。どうしたんだ？」

半泣きになっている美里の顔が浮かんだ。おそらく、何か起きたのだろうと本能的に恭一は察知した。

「佐野くんが……佐野くんが！」

恭一は美里が口にした言葉を呆然と聴くことしかできなかった。

そして、受話器をそっと置く。

「どうしたの？」

彩が心配そうに聞く。

「佐野が……」

「佐野くん？　どうしたの？」

「事故で……病院に、運ばれた」

ドサッ、と彩が持っていたカバンを床に落としたのは、その言葉を聞くと同時だった。

―　15：39　若草　直幸　―

「たっだいまー！」

若草　直幸はいつもどおり帰宅した。後ろには、彼女の滝口（たきぐち）　夏海（なつみ）が立っている。

「母さーん！　夏海、連れてきた！」

「あらあら！　言ってくれたらお茶菓子準備しておいたのに」

母の恵美子がバタバタと玄関に出てくる。

「いつもの紅茶で十分だから。上にいるね！」

「お邪魔します」

夏海は恵美子に会釈して、靴を綺麗に揃えてから直幸の後ろをついていく。

「ささ、ま、ごゆっくりどーぞ」

「お邪魔します」

夏海はクスクス笑いながら、部屋に入る。

「……。」

一枚の写真が目に入った。写真盾に納まっているその写真には、直幸と快活そうな少年、少女らが写っている。

「直くん」

「ん？」

「これが、前に話してくれた七海高校の？」

「あ、そうそう」

直幸は写真を手に取る。

「俺の肩に腕を組んできてるのが、佐野　翔。その隣で笑ってるのが翔の彼女の、朝倉さん。その後ろに、本堂くん、水谷くん、田中さん、川崎くん、橋本さん……」

説明をしていると、ドアが開いてドアノブが直幸の左手に当たった。

「わっ！」

「きゃあ！　ちょっと直幸！　そんな入口に立ってちゃダメじゃない！」
恵美子が入ってきたのだ。直幸の手から落ちた写真盾が、床に落ちてガラスのフレームがカシャン！と音を立てて亀裂を走らせる。
「あ……」
「やだ！　ゴメン……割れちゃった？」
恵美子が心配そうに覗き込む。
「いや、まぁ写真は平気だからいいけど……」
直幸はしばらく写真を見つめていた。

―　15：46　竹林　泰徳　―

「泰徳～！　早くしないとチューニング始まるよ！」
「分かってる！　譜面がちょっと見つからなくて……」
愛媛県松山市立常套中学校の吹奏楽部部室では、翔の幼なじみである竹林　泰徳が合奏の準備に追われていた。
「おっかしいなぁ……確か昨日この辺に入れたのに」
入れたはずの楽譜が見つからない。泰徳は少し焦り気味にロッカーの中をゴソゴソと探っていた。
「あっ……た！」
見つけた楽譜に手を伸ばした拍子に、電子メトロノームに肘が当たった。
ガシャン！
派手に音を立てて、分裂して電池が飛び出す。
「あちゃあ～！」
泰徳が顔をしかめる。翔とお揃いのメトロノーム。一度、アンサンブルコンテストを聴きに来たときに、会場で販売されていた何の変哲もないメトロノームを、翔に言われるがまま半ば仕方なく買っ

た、それだった。
「大丈夫？」
浜口　愛が駆け寄り、電池を拾ってくれた。
「……。」
「ちょっと？」
「あ、あぁ、うん……」
ボケッとしている泰徳を心配そうにしつつ、愛は「急ごうよ。合奏、始まるから」と背中を軽く押して部室を出て行った。
「……。」
泰徳はしばらく、分裂したままの電子メトロノームを見つめていた。

―　19：58　佐野　修平　―

「あ」
修平は思い出したように携帯電話を取り出した。
「そうや……翔に今度の日曜、空いてるかどうか聞かんとアカンかったんや」
修平が翔の電話番号をクリックし、発信する。しかし、発信音が鳴り続けるだけで出なかった。
「なんや？　忙しいんかなぁ……。あんまりしつこいと悪いし、また後でいいか」
修平は携帯電話を置いて、お茶を飲みに階下へ降りていった。
ガタン！
「わっ！」
物音がしたので驚いて振り返ると、中学時代に市内アンサンブルコンテストで修平、翔、翔平たちで出場した際の表彰状（代表して修平がもらった）が落ちていた。

「おいおい～。大事なモンやねんから、落ちんといてくれよ」
修平は慌てて表彰状を立て直した。
「うわ～……ちょっと歪んだやんけ」
額が落ちた衝撃で、少し歪んでいた。
「まぁ、賞状は傷いってないからヨシとするか」
修平は笑って額を調節すると、部屋を出て行った。

―　19：47　石尾　拓也　―

「ふぃ～……疲れた！」
部活を終えて帰宅した拓也は、玄関に入るなり寝転がった。
「おかえり～」
リビングから母親の声がする。
「うーん」
拓也はしばらく床に寝転がって動かなかった。すると、目の前が暗くなった。
「ん？」
「バーン！」
なんと、弟の奏也（4歳）が水鉄砲を拓也の顔面目がけて発射したのだ。
「わっぷ！　そ、奏也～！」
拓也は怒って奏也を追いかけようとするが、水で濡れた床に滑って思い切り転んでしまった。
バキッ。
そのときに嫌な音がした。
「うわ……」
お気に入りのシャーペンをうっかり、ズボンのポケットに入れてしまったために衝撃で折れていたのだ。

「気に入ってたのに……」
拓也はショボンとしながら、リビングに向かって歩き始めた。
「……？」
誰かに呼ばれたような気がして振り返ったが、玄関には自分以外誰もいるはずがない。気のせいだと言い聞かせ、拓也はリビングに入っていった。

―　２０：４５　相原　真琴　―

「真琴～！　お風呂に入っちゃいなさい！」
「はぁい」
真琴は母親に促されて自室からリビングに出てきた。ちょうどテレビではニュースをやっている。神奈川県の地元のニュースだった。
「こんばんは。神奈川８４５です」
８４５とは、午後８時４５分という意味合いを持っている。真琴はお茶を飲みながらニュースを聞き流し、浴室へ向かおうとした。次の言葉で足を止めた。
「まず、神奈川県七海市で起きた工事現場での事故の速報です」
「七海市……」
その言葉に思わず反応してしまう。リビングに戻り、テレビを見る。
「午後７時５０分ごろ、神奈川県七海市津上町の軍功橋付近の工事現場で、積み上げられていた土砂が崩落し、男子高校生１名が土砂の下敷きになったとの情報が入っております。男子高校生はすぐにそばにいた友人や通行人に救助されましたが、心肺停止の重体ということです。年齢やお名前はまだ情報が入っておらず……」
そこでキャスターが手を止めた。
「たったいま、情報が入りました」

真琴の心臓が高鳴る。そして、テロップとキャスターの言葉を聞いた瞬間、真琴は頭が真っ白になった。

「高校生のお名前は、サノ　カケルさん。１７歳です」

第３４０話　祈り

医師がＩＣＵから出てきた。ＩＣＵの前には友美子、昭、冨美枝、智輝、綾音の佐野一家と祥夫、由利、夏樹、陽乃たち朝倉一家、後から駆けつけた拓真、慎也、春樹、美里、沙希、由美子、恭一、彩が待っていた。

「先生……どないなんですか？」

友美子が涙声で聞いた。

「危険な状態はひとまず、脱しました」

「あぁ……！」

友美子が膝を突いて泣き始めた。昭がそれを支える。

「また、脳の検査も暫定的ですが行いました。脳にもダメージは見られません」

「良かった……！」

慎也、拓真、春樹が笑顔で見合わせる。

「しかし」

医師の顔が深刻になる。

「呼吸停止が少々長かったため、意識不明に陥っています。一時危険な状況に陥ったため、この時に何らかの障害がどこかに発生した可能性があります」

「……。」

「意識は」

震える声で陽乃が聞いた。

「戻るんですか？」

「……。」

医師は小さく答えた。

「明確に何日後、戻るとは言えません。ただし、心配はいりませんよ。最近は事故で意識不明に陥りましても、救急措置が格段に進歩

しているため、回復例は確実に増えています」
陽乃に笑顔がようやく戻った。
「今回も搬送後的確な処置と、お友達の人工呼吸と心臓マッサージで危険を乗り越えましたから。後は、彼の体力と意思次第ですね」
冨美枝が大声を上げて泣き始めた。友美子が今度は冨美枝を抱き締める。
「皆さんで声をかけてあげてください。彼はまだ18歳。若いですから、すぐに回復してくると思われますので」
陽乃は小さくうなずいた。
落ち着いたところで、家族は面会という形を取れることになった。家族以外の部員たちはひとまず、恭一に帰宅を促されたので今日のところは帰ることになった。
「先生から、各部員に連絡しておくからな」
恭一が落ち着いた声で言った。
「先生一人じゃ大変です。私も、お手伝いします」
沙希が手を上げる。
「じゃ、俺も」
拓真が手を上げたが、美里がこう返した。
「拓あんは、愛媛の竹林くんに連絡してあげて。部員にはあたしから連絡する」
「え？　でも……」
「彼らと接点あるのは今のところ、拓あんだけなんだから」
拓真は納得した様子で「わかったよ。任せとけ」と答えた。
「あたし……雪ちゃんに連絡するよ」
由美子が呟いた。
「そうだな……」
慎也がうなずく。
「じゃ……俺は修平くんに」
「……そんじゃ、俺は竹林くんに」
拓真が携帯電話を取り出した。

「それじゃ……私は、相原さんに連絡しておこうか」
恭一がそれを制した。
「待ちなさい。修平くんにしても、愛媛や虹西高校の人たちにしても、急にそんなことを言われても困るだろう」
「……。」
全員が黙ってしまう。
「でも、黙ってるのは……」
春樹が俯く。
「だけれども、いま言うよりももう少し落ち着いてからにしよう」
「……はい」
拓真が悔しそうに携帯電話を見つめた。
（とりあえず、電源だけでも入れるか……）
病院内では全員、携帯電話の電源を落としていた。
（メールだ）
メール受信画面に入る。しかし、それより早くバイブが震えた。
拓真は画面を早速チェックした。すると、高橋　美並からメールが入っていた。

―――――――――――――――
＜０００１＞
６／１３（水）　２２：１８
差出人：高橋　美並
Ｓｂ：（ｎｏｎ　ｔｉｔｌｅ）
―――――――――――――――
テレビのニュースで、工事現場の事故のニュースを見て、驚きました。佐野先輩が、意識不明と流れていました。本当でしょうか？
竹林くんもすごく心配して

います。
一度、私まで連絡くれますか？

「美並……」

拓真が美並の名前を呟く。同じ頃、携帯の電源を入れた部員たちに続々とメールや着信の履歴データが送られていた。

拓真のところには美並以外に智志、亮平、愛実、貴志、徹など合計２０名分。美里には恵梨、あずさ、洋之、和志、裕也などパーカッションメンバーをはじめ、菜緒や涼平といった陽乃関係の友人たちも含めて約３０名。春樹には愛実、智志、貴志、亮平から順平、賢治といった金管メンバーほぼ全員。それから中学時代の友人たち。

工事現場の事故で、高校生１名が意識不明の重体。たったこれだけだが、地方ニュースの後に夜の全国ネットニュースで一気に流れたため、数多くの人々がそれを視聴していたのだ。

結果的に、修平や優衣、直幸、泰徳など翔の吹奏楽関係、樹、しおり、めぐみ、安和、岳彦、悠介、久美子などＯＢ関係、翔平、玲菜など七海高校メンバー、友、啓一などの大阪時代の友人、信二や真琴たち虹西高校メンバー、拓也やともみといった古氷中学メンバー、そして、雪子からも連絡が入っていた。

メンバーは帰宅するのも忘れて、彼らに病院の前で連絡を取った。そして、ありのままに伝えた。

翔は、意識不明のままだと。

「……。」

電話で拓真から事情を聞いた泰徳は、携帯電話を閉じた後そのまま寝転んだ。

「大丈夫だよな」

自分に言い聞かせるように呟く。

「お前は、このくらいじゃ……」

そこから先は言葉にならなかった。

「優衣！」

修平は市役所公園で優衣に会うなり、彼女に思い切り抱きついた。

「大丈夫やんな!?　アイツ……なぁ、大丈夫やんな!?」

「大丈夫……。佐野くんなら、絶対に大丈夫……！」

二人は祈るように、そして言い聞かせるように何度も大丈夫、大丈夫と繰り返していた。

「直幸……」

部屋の電気を消したまま、直幸は自室に篭っていた。母の恵美子が心配して様子を見に来たのだ。

「ゴ、ゴメン！　心配かけて」

直幸は涙を拭った。

「俺が凹んでたら、翔が怒りそうだよな」

彼は立ち上がり、部屋の電気を点けた。

「アイツが元気になる前に、俺が一丁元気付けに行ってやるか！」

直幸は七海市のほうに向かってそう叫び、ゆっくり伸びをした。

「雪子」

大輔に呼ばれて、雪子は振り返った。

「うん？」

「大丈夫……か？」

「うん！」

雪子は笑顔で返す。

「だって、佐野くんがこれくらいで何かなっちゃうような人とは思ってないし！」

「……。」

「それに」

これは心底、そう思っていた。

「佐野くんには、陽ちゃんがついてる」
「……そうか」
雪子はニコッと笑うと、再び窓の外へ視線を移した。流れ星が流れた瞬間、雪子は両手を握り締めて祈った。
（佐野くんの意識が戻りますように）

拓也とともみは、夜にも関わらず出かける準備をしていた。
「本当に気をつけるんよ？」
母親に促され、二人はうなずいた。
「大丈夫。神主さんにもお願いしたから」
拓也はニッコリ笑って返した。
「じゃあ、行ってきます」
二人は颯爽と、拓也の自宅を出て行った。

真琴と信二、望実は夜遅くにも関わらず街中のコンビニエンスストアを走り回っていた。
「どう！？」
近くの公園で落ち合う。
「今で２００枚」
信二が汗を拭って答える。
「あと８００枚いるよ……」
望実がため息を漏らした。
「諦めちゃダメ。先輩だって、いま頑張ってるんだから！」
真琴が勢いづく。それを聞いて望実と信二も気合いを入れなおした。
「よっし！　別の店、行くぞ！」
信二が叫ぶ。
「オーッ！」
望実と真琴も、拳を上げて叫んだ。

第３４１話　決断

「ん……」

翔が目を覚ますと、自室の布団に寝転んでいた。

「寝とったんか……」

翔は頭を摩りながら体を起こす。部屋を出て、階下に降りる最中で、異変に気づいた。妙に階段が高く感じるのだ。

「なんや……？」

翔は慌てて階段を降りて、玄関にある全身が映る鏡を覗き込んでみた。

「え……！？」

自分の体が、小さくなっていた。身長１７５センチだったはずの翔の体は、１４０センチ前後になっていたのだ。

「え！？　な、なんでや！？」

そこでさらに異変に気づく。声が異様に高い。慌てて喉仏を触ってみるが、まったく出っ張りがない。

「えぇ！？　ど、どういうこっちゃ！？」

「何騒いでんのぉ？　朝から……」

「それが母さ……」

翔は声をかけられたので振り向いて友美子に異常な状況を伝えようとして、体が凍りついた。

「お、お母さん……？」

「どないしたん？」

そう。目の前にいるのは亡くなったはずの母・大中美佐子だった。

「どないしてん。朝から騒いで」

階段から、兄の一志が降りてきた。

「え……えぇ？」

翔が戸惑っていると、玄関の戸を開けて男性が入ってきた。パジャマ姿のその男性は紛れもなく、父の康史であった。

「翔！　もうすぐ占い始まるで！」
リビングから姿を覗かせたのは、姉の璃緒。
「オ……オレ……」
翔が戸惑っていると、美佐子が言った。
「ん？　どないしたん？」
「うっ、嬉しいっていうか……」
美佐子が翔の頭を撫でた。
「なんか怖い夢でも見たんやね？　翔は意外と怖がりなところがあるから」
「……うん」
翔はニッコリ笑った。本当に目の前にいるのは、美佐子たちだという事実。不思議ではあるが、違和感はない。すぐに受け入れることができた。それどころか、これが現実なのだと翔は感じていた。
朝食を済ませ、翔はランドセルを背負って自宅を出た。自宅はなぜか七海市のままで、佐野家の家にそのまま美佐子たちが暮らしていることになっている。しかし、翔はそれに何ら疑問を抱かず、学校に向かった。
なんとなく見覚えのある高校の近くに来たとき、一人の背の高い少年にぶつかった。
「わっ！」
翔は驚いて声を上げる。
「！」
少年もその声に反応して振り返る。その顔を見て、翔はニカーッと笑った。
「拓あんやん！」
「……？」
しかし、声をかけられた拓真は怪訝な顔をしている。
「どないしたん？　オレやって、オレ！」
「僕。ここ、高校だよ？」
「へ？」

拓真の予想外の言葉に、翔は目が点になった。
「ほら。冨樫小学校ならこっちとは反対側。戻らなきゃ」
拓真の目の下に、クマのようなものができていることに翔は気づいた。
「あ……ちょ……」
そこで思い出した。自分はいま、小学生の容姿に戻っているのだと。
「……うん。ごめんなさい」
翔は子供のフリをして、その場を凌いだ。しかし、違和感を拭えない翔はそのまま身を潜め、高校生たちが（自分も本来、高校生ではあるが）ほとんど登校し、周囲が落ち着いたのを見計らって七海高校に忍び込んだ。
「こっちやな」
小学生の視点から見ると、七海高校はかなり広い。階段も高く感じるため、時間がいつもよりかかったような気さえしていた。
翔はひとまず、陽乃を探すことにした。陽乃なら、小さくなっていても自分を見分けてくれるだろうと信じていたのだ。
こっそり陽乃のクラスに近づく。戸を開けようとして、手を止めた。
「翔……」
陽乃が彼の名前を呼んでいたのだ。
「ひな……」
しかし、次の言葉を聞いて翔は愕然とする。
「なんで……死んじゃったのよぉ……！」
すぐに沙希が駆け寄ってきて、陽乃を抱き締める。
「しょうがないよ……。佐野くん、最期まで頑張ったじゃない！最期に、陽ちゃんの手、握ってくれたじゃない！」
「サキティ……。あたし、まだ信じられないよぉ……」
ドクン、と翔の心臓が鳴った。
（オレが……死んだ……？）

では、いまこの小学生の姿をした自分は一体何者なのか。翔は意味が理解できず、いろんな考えがグルグルと頭を巡る。
（オレが死んだ……？　ほな、これは誰なんや……？）
翔は理解を超えた出来事を打ち消そうとして、教室に飛び込んだ。戸を思い切り開け、陽乃に飛びつこうとした。
「陽乃！　オレならここにお……」
しかし、翔の体は見事に陽乃と沙希をすり抜けた。
「え……？」
すすり泣く陽乃。沙希。クラスの生徒たち。
「……。」
翔は恐る恐る教室を出て、自分のクラスの教室へと向かった。
「……！」
自分の席に、花瓶に活けられた綺麗な花が、置かれていた。
（なんや……？　何なんや、これ……！）
翔は理解できず、教室を飛び出した。学校を出て、走りに走って自宅へと戻ってきた。
（……。）
何かあるはずだ。自宅（ここ）に何かあるはずだと翔は確信し、自宅のドアを開けた。
「……！」
美佐子、康史、一志、璃緒が立っていた。
「……お母さん。お父さん。兄ちゃん。姉ちゃん」
翔は寂しそうな表情で彼らのことをゆっくり、呼んだ。
「……翔。お母さん、聞きたいことがある」
美佐子が優しい声で言った。翔も優しい声で「何？」と聞き返す。
「お母さんたちと……一生、この世界で暮らしたい？」
「この世界……？」
翔は一歩、踏み出して聞いた。
「ストップ」
一志が止めた。

「それ以上は、来るな」
「なんで……？」
璃緒が寂しそうに俯いている。
「翔」
康史が翔に近寄る。
「お父さんは来て平気なんか！？」
「問題ない」
康史は優しい表情で答えた。
「翔。お父さんたちと一緒に暮らしたいか？」
「……。」
翔はしばらく悩んだが、小さくうなずいた。
康史はそれを見ると、再び玄関から廊下に上がった。
「翔」
美佐子が手を伸ばす。
「翔が、お母さんの手を握ったら……お父さん、お母さん、一志、璃緒とずっと一緒に暮らせるんよ」
「……うん」
「どないする？」
翔は唇を噛み締め、そっと手を差し出した。
「でも、言うとくわ」
美佐子が寸前で言った。
「アンタがこの手を握った瞬間、アンタはもう……陽乃ちゃんや拓真くんたちは元より、佐野のお父さん、お母さん、綾音ちゃんたちにも会われへんようになるよ？」
「……なんで？」
翔は聞いた。
「どっちかなんや」
一志が言った。
「俺たちと暮らすか、陽乃ちゃんたちと暮らすか」
「……意味わからへん」

璃緒が笑う。
「決めた瞬間に、翔は意味がわかると思う」
「決めな、わからへんのか？」
全員がうなずいた。
「……。」
「カケル！」
「……あ」
後ろを振り返ると、拓真がいた。
「かける」
春樹もいる。
「かーける！」
いたずらっ子っぽい笑みを浮かべているのは、慎也だ。
「ビックリしたー！？」
美里がヒョコッと慎也の後ろから顔を出す。
「佐野くん、すっごく驚いた顔してる！　成功だね」
絵美がニコニコしていた。
「ねぇ、佐野くん。そろそろ合奏の時間じゃない？」
「え？」
翔はリビングの時計を見上げた。午後4時。確かに、いつも恭一が合奏を始める時間帯だ。
「あたしたち、先に戻ってるね」
由美子がそう言うと、ゾロゾロと3年生が歩き始めた。
「さぁ。もう、時間ないんよ」
美佐子が手を差し出した。それに続くように、康史、璃緒、一志も手を伸ばす。
「……。」
翔は唇を噛み締め、しばらく俯いたまま動かなかった。
どれくらい時間が経っただろうか。
美佐子のほうへ手を伸ばそうとしたときだった。
「翔！」

聞き覚えのある声に、翔がためらいもなく振り向いた。
「陽乃！」
その姿を見て、美佐子が一志たちと見つめあい、小さくうなずく。
「決めた」
翔が呟いた。美佐子はその声が低くなったことに気づいた。
翔はそのまま美佐子たちに背を向け、陽乃の手を握った。
「ゴメン……。オレ、今の生活が大事やねん」
翔は美佐子たちに深々とお辞儀をした。康史が笑う。
「翔なら、そう言うと思ってん」
「……ゴメン」
「謝ることちゃうで」
一志が言う。
「そうそう。自分で決めたコトやねんから」
璃緒が涙を拭いつつ、そう言った。
「しっかり、これからも頑張るんよ？」
美佐子が念を押すように言った。翔は小さくうなずく。不意に視界が悪くなった。いつの間にか、後ろにいたはずの陽乃の姿はない。
「お母さん！」
美佐子たちの姿も遠のいていた。翔はここに来てようやく、この数十分に満たない出来事が何を意味していたのか、理解した。
翔も何かの小説やドラマで見たことがある。この世とあの世の境目。いわゆる、三途の川のような場所。それがなぜか、翔の中では七海市の自宅だった。
「母さん！　父さん！　兄ちゃん！　姉ちゃん！」
４人は、大きく手を振っている。
「また……」
翔は大声で叫んだ。
「また、会えるやんなぁ！？」
美佐子の声が最後に聞こえた。

「会えるよ！」

翔の視界いっぱいに眩い光が差し込む。そのまま、翔は吸い込まれるように体が浮き、軽くなったようになった。

視界が変わる。雲を突き抜け、見覚えのある風景が飛び込んでくる。

（え……？）

見覚えのある町。泰徳のいる、愛媛県松山市だった。

泰徳の姿が見えた気がした。たくさんのＣＤが部屋中に並べられていた。大きな封筒。その宛先は、翔の自宅になっていた。

泰徳の姿が遠のくとすぐに視界が変わる。見たことのない町だった。しかし、二人の後ろ姿には見覚えがあった。石段を汗だくで登る少年と少女は、石尾　拓也と津嶋ともみだった。

声をかけようとしたが、すぐに離れていってしまう。今度はビルが林立する市街地に視点が変わった。

寄せ書きが見える。大輔、友也、勝明、啓一、海里、玲という、懐かしい名前。その色紙を抱き締めながら眠っているのは、雪子だったように見えた。

今度も、何度か来たことのある場所。アルトサックス片手に、何かを録音する少年の姿があった。朝焼けの中、サックスを演奏する彼は、間違いなく直幸だった。

そして、次第に見覚えのある風景に移り変わっていく。急に高度が低くなったかと思うと、見たことのない部屋に突っ込んだ。

（うわ！？）

屋根を突き抜けた瞬間に真琴、信二、望実がたくさんの折鶴に囲まれて爆睡している姿が一瞬だけ、見えた。

そして、見慣れた風景が飛び込んでくる。七海高校、津上橋、大海公園。やがて、病院らしい建物に近づいていく。

（もう少しで……）

翔は、懐かしい想いで胸が熱くなるのを感じていた。

（会える……）

意識が薄くなる寸前に、彼は呟いた。

「陽乃……」

辺りが眩い光に包まれ、翔はそのまま意識を失った。

第３４２話　ただいま

あの忌まわしい事故から既に2日が経っていた。曜日は金曜日。翔は特にこれといった大掛かりな人工呼吸器といった類の装置は点けておらず、周囲から見ればただ眠っているように見えている。事実、呼吸も心臓も正常に動いている。後は意識だけの問題なのだ。

病室では、友美子がいろんなことを翔に話しかけていた。

「ほら～、今日は虹西高校の人たちが、千羽鶴持ってきてくれはったんよ」

相原　真琴、永瀬　信二、浜田　望実と名前の入った手紙も置いてあった。

「それからねぇ、ＣＤにわざわざ若草くんがアンタの大好きな『Ｙｅｓｔｅｒｄａｙ』のサックスソロを吹いて録音してくれてるんよ。これ聴いて、元気になってほしいって送ってきてくれてるし」

友美子はカバンからＣＤを数枚取り出した。

「それからこれ！　竹林くんが、アンタの好きそうな吹奏楽の曲、全部録音してきてくれてんの。これも聴かせんとアカンねぇ」

翔はスゥスゥと寝息を立てているだけのように、友美子には見えていた。医師には心配せずともじきに意識が戻るとは聞かされていた。しかし、もう2日も経っているとさすがに友美子は不安になっていた。

「あ、そうそう！　何よりまず、聞いてほしいもんがあんのよ」

そう言って友美子はラジカセを取り出した。古いラジカセであるし、そもそもカセットテープというもの自体、ある意味新鮮だった。

彼女はすぐにテープをセットし、再生ボタンを押した。すると、真っ先に聞こえてきたのは女子の声だった。

「佐野先輩。お元気ですか？　中野さゆりです」

さゆりの声だった。

「やっぱり、先輩がいない部活は寂しいです。でも、先輩が戻ってきた時に驚くくらい、課題曲と自由曲を完璧にするため、マーヤやはるかと一緒に1年生の指導をしています。成長した私たちに、ご期待くださいね」

プツッ、と音が途切れた後すぐに録音が再開されたことのわかる音がまた響いた。そして、別の女子の声。

「センパイッ！　あたしでーす！」

「誰よ！」

隣から笑い声が響く。その人物もケラケラと笑った後、続けた。

「鈴木　麻綾です！　先輩、ご機嫌いかがですか？」

「隣にいるのは言わずと知れた、はるかちゃんでーす！」

「自分でちゃんって付けるんですか！？」

夏樹の笑い声が聞こえる。

「先輩！　まさかと思いますけど、1年生忘れてないですよね！？」

「キャー！　もうかのちゃんやっぱ声でかーい！」

「そんなことないですよ！？　マリだって負けてません！」

「ちょ、かのこぉ～。このテープ、ご家族も聞かれるかもしれないんだから、そんな恥ずかしいことバラさないでよ！」

相変わらず賑やかなサックスパートだが、友美子には彼らが寂しさや不安を紛らわすために、から元気な雰囲気を出しているのではないかと感じられる部分がちらほらあった。

「かーっける！」

続いて聞こえてきたのは、春樹の陽気な声だった。

「元気かぁ？」

慎也の声。

「お前がいねぇと、やっぱなんか3年生も物足りない感じがする」

拓真の真面目な言葉が優しく響いた。バスの声だ。落ち着いている。

「あたしたち、佐野くんとまた一緒に演奏できるの、首なが～くして待ってるんだからね！」

美里が甲高い声で拓真の声を掻き消す勢いで話し始めた。耐えかねた慎也が「お前、びっくりして翔がひっくり返ったらどうすんだよ」と苦笑しているような言葉を出した。
「これくらいで驚かれちゃ困るわ～。あたしとの付き合いも長いんだし！」
「付き合いで言えば、ここにいる副部長のほうが長いじゃない」
絵美の声。そばから「そうよね！」、「ほら、早く早く！」と沙希と由美子の声が聞こえてきた。
「あ……」
陽乃の声が、控えめに聞こえる。
「えっと……かける。聞こえるかな？」
陽乃の声が聞こえると同時だった。

パサッ――。

「？」
友美子は思わず振り返った。何かが落ちるような音がしたのだ。しかし、何かが落ちたような気配はなく、風に煽られたカーテンがサワサワと音を立てているだけだ。
「今ね、合奏を毎日やってるんだけど……やっぱり、サックスパートのみんな、なんとなく寂しそうなの。音もなんか寂しげで、ちょっと物足りない感じがするし……」
「陽ちゃん～、本音言いなよ！」
美里がどんな顔をして言っているのか容易に想像できるような声を出した。
「ん……」
次の言葉が決定打だった。
「かける……逢いたい……」

友美子は目を疑った。
その言葉を聞いた瞬間、翔がフッと目を開けたのだ。
「か……かける……？」
友美子はおそるおそる、声をかける。すると、彼はニッコリ笑い
「お母さん……」と呟いたのだ。
友美子の目から涙が溢れ、顔がグシャグシャになった。
「翔……！」
「お母さん……」
翔の表情がやわらかくなり、それから友美子の後を追うように涙がこぼれ落ちた。
「翔！」
友美子が翔を抱き締める。翔もまだ少し力が弱いものの、友美子をギュッと強く抱き締めた。

「あ」
陽乃の後ろでパート練習の教室に一緒に移動していた綾音が声を上げた。
「どうしたの？」
「すみません。母から電話が……」
陽乃の問いに申し訳なさそうに綾音が答える。陽乃は「いいよ。大事な用だろうから、出なきゃ」と促す。綾音はペコリとお辞儀をして壁際に駆け寄って話を始めた。
「先輩」
勇が心配そうに聞く。
「佐野先輩……具合、どうなんですか？」
「うん」
陽乃は不安な気持ちを押し隠しながら、落ち着き払って答えた。
「怪我とかはないんだけど……意識がまだ戻らなくて」
「……そうですか」
「でも、お医者さんの話では意識もじきに戻るっていうことだし！

あたしたちはしっかり毎日練習して、翔が帰ってきてビックリするくらいのレベルにまで持って行って……」

話の途中で、綾音がグイグイと陽乃の制服を引っ張って彼女を足を止めた。

「どうしたの、綾音ちゃん」

「あの……」

綾音はポカンとした表情で彼女の携帯電話を陽乃に手渡した。

「電話？　あたしに？」

「はい」

陽乃は友美子からまた何か翔の状況を聞かされるのだろうと、少し身構えて電話に出た。

「もしもし。お電話替わりました、朝倉です」

「……。」

「もしもし？」

受話器から聞こえてきた声。小さいけれど、聞くと安心する声だった。

「ひなの……」

「……へ？」

陽乃は目が点になってしまった。携帯電話を耳から離し、耳を何回かマッサージするように揉み解した後、もう一度受話器に耳を当てた。

「もしもし」

同じ言葉を投げかける。すると、今度こそ決定的な言葉が聞こえてきた。

「オレ……や」

「……うそ」

「ウソなことあるかい……」

「か」

陽乃は疑問系で彼の名前を呼んだ。
「翔……？」
「あぁ」
間違いようがない。毎日聴く声だ。時には落ち着いていて、時には部を盛り上げて、時には優しく陽乃に響いてくる、その声は――。
「ただいま……陽乃……」
「かける……！」
陽乃はそのまま崩れるように地面に膝をつけ、大声で泣き始めた。
綾音が陽乃を抱き締め、同時に泣き始めた。
跳ぶように部室に駆け込んできた勇を見て、部室にいた部員たちがギョッとした様子を浮かべた。
「どうしたんだよ、そんなに慌てて」
拓真が驚いて勇に聞くと、彼の口から驚きべき言葉が発された。
「さっ……佐野先輩の、意識が戻りました！」
「……。」
部室にいたのは拓真、春樹、慎也、好美、智志、絵美、由美子、沙希、美里、優輝、慧太、貴志、亮平、はるか、さゆり、麻綾、彩香、順平、賢治、裕子、亜紀、恵梨、あずさだった。
女子から悲鳴のような声が上がる。男子も女子も関係なく、飛び跳ねるように喜んでいた。慎也と美里は抱き合いながら飛び跳ね、春樹と拓真、智志は完全に男泣きの状態。あずさと恵梨がグルグル回転しながら大声で笑い、なぜかはるかがさゆりと麻綾に胴上げされている。
職員室にもすぐに一報が入った。恭一は椅子ごとひっくり返りそうになりながらも、陽乃が持ってきた綾音の携帯電話をすぐ手に取った。
「先生……」
紛れもなく、翔の声だった。

「佐野……佐野……良かった、良かった」
恭一の目から大粒の涙がこぼれ、そのまま膝を床につけてしまった。職員室から拍手が沸き起こる。
「ご心配、おかけしました」
「バカ……余計な心配しなくていい。お前が元気になっただけで先生……いいんだがら……」
恭一の鼻声に、翔は思わず笑いそうになった。その翔の目に、眩い日の光が差し込んでくる。まるで翔の意識回復を祝うかのように、鮮やかな夕陽が七海の街を包み込んでいた。

第３４３話　回復の足音

「かっけるー！」
翔が意識を取り戻してから2日が経った日曜日。退屈そうに病室のベッドに寝転んでいると、陽乃、慎也、美里、絵美の４人が姿を見せた。
「おぉ！　毎日ありがとうなぁ」
翔は持っていた雑誌を閉じて、嬉しそうに起き上がる。
「もう体調は平気なのか？」
「おかげさんで。明日には退院やしな！」
「クラスの皆も心配してるみたいよ。あたしのところに、メール頻繁に来るから」
陽乃が携帯電話を開いてメールボックスを見せる。
「そうやなぁ～。皆には元気な顔、見せてへんしなぁ」
「でも、学校には火曜日から来れそうなわけ？」
絵美が心配そうに聞く。
「あぁ！　外傷はないし、意識が戻ってなかっただけの話やから、先生の話ではもう学校にも普通に行ってくれていいって。ただ、体育は１週間、ちょっと見学するけどな」
「そっか！　なら、安心だね」
「それに良かったよね～。東先生の結婚式、無事できそうだし」
ちょうど１週間後の２４日には、恭一の結婚式が挙行される。今日はその関係で部活は午前中で終了。何でも、恭一は最後の打ち合わせのために彩と式場へ行っているのだそうだ。
「結婚かあ～。あたしたちにはあと１０年くらいまだ関係ないわね」
美里が差し入れのクッキーの箱を開けながら言った。
「そうかな？　私、陽ちゃんとミサッチは早そうな気がするんだけど」

絵美がクスクス笑いながら言う。
「それって、つまりは俺たちも早そうってことだよな？」
慎也の期待をこめた問いに、絵美は「さぁ？　それは彼女たちの反応見てみればわかるんじゃなーい？」と答えを避けた。慎也が美里を見ると、美里は「さぁねぇ。１０年後、あたしたちどうなってるかなんてわかんないし～」とケラケラ笑いながら言った。
「おい、慎也。言うたれや、俺は絶対お前を幸せにしてやるーって」
「何バカ言ってんだよ。病院でそんな恥ずかしいこと言えるか」
翔と陽乃がニヤニヤしながら顔を赤くしている慎也を見つめる。
「それにしてもさ」
美里が言った。
「ホントなの？　昨日の話」
「あぁ……」
翔が言った話は、阪神淡路大震災で亡くなった家族が出てきたこと、そして、その家族の元へ行こうとしたとき、陽乃はもちろん３年生が出てきたこと。この二つだった。
「まさか、佐野くんを……自分たちの元へ？」
絵美が不思議そうに言う。
「そりゃあ普通なんじゃないか？　だって、家族なんだし」
「あたしは違うと思うけどな」
陽乃が言った。
「なんでそう思うの？」
「だってさ、エミリン。もし、自分が先に死んで、自分の大事な人がそれこそ明らかに早すぎる年齢で、自分の後を追って死んでしまうかもしれないってときに、喜んで……死んでいる側のほうへ引き込もうとする？」
絵美は自分と春樹に置き換えてその光景を考えてみる。
「私はダメかな……。そんなこと、できないわ。とてもじゃないけど」
「きっと、翔のお父さんお母さんも、同じ気持ちだったんだよ」

「なーるほどねぇ」
美里がジュースを紙コップに注いで各人に配る。
「それにあれじゃない？　佐野くんも、結構揺れ動いたけどまだ…
…その、この世にいろんな想いが残っていたんじゃないかな」
あくまで想像に過ぎないが、翔が経験したことについて彼らはいろいろと思いをめぐらせていた。
「それで、その想いがあたしたちっていう形になった、とか」
「なるほどねぇ……。なんか、奥が深いね」
絵美がウンウンと感慨深そうにうなずいた。
「あら！　来てくれてたん？」
扉の開く音がして、姿を見せたのは友美子だった。
「こんにちは！」
「どうも～。毎日みんな交替でありがとうね、ホンマに」
昨日は春樹、拓真、由美子、沙希、陽乃の5人で見舞いにやって来た。3年生が交替でこうして見舞いに来ることは、翔が意識を取り戻したらしようと彼らの中で取り決めていたことだ。別に苦でもなんでもないと全員が感じていた。
正直なところ、8人全員で見舞いに行きたいと思うところだったが、病院側のことを考えると一度に病室に8人も来られると迷惑この上ないだろう。病室には他にも入院されている人々がたくさんいるのだ。
1時間ほどいろいろと喋っていると、あっという間に時間は過ぎていく。
「もう5時よ」
美里がスッと立った。
「そうだね。そろそろ帰らなきゃ」
「えぇ？　もう帰るん？」
翔が不満そうに口を尖らせた。
「大丈夫じゃない！　明日には退院して、明後日から学校来るんでしょ？」

「まぁ……そうやけど」
「だからワガママ言わない！　ね」
陽乃の笑顔を見ると、翔もうなずくしかなかった。
「じゃ、また……あさってかな！　明日一日だけは、我慢ね」
美里が小さく手を振る。
「はーい」
翔は渋々小声で返事をした。
「気をつけてな！」
「はいはーい！　またね」
「……。」
陽乃たちがワイワイと話しながら廊下を歩き、どんどん病室から遠ざかっていくのを聞いていると、翔はなんだか寂しくなってきてしまい、ゴソゴソと布団にもぐりこんだ。
「佐野くん」
もぐりこんですぐに、女性の声がしたので布団から顔を出すと翔の面倒をいろいろと見てくれている看護師がいた。
「あ。佐島さん」
「今の、お友達？」
佐島　流衣という看護師は、翔が意識を取り戻す前からいろいろと身の回りのことをしてくれている、と友美子から聞いていた。
「はい」
「いい子たちなんですよ」
友美子も嬉しそうに陽乃が持ってきた花を花瓶に生ける。
「そうだろうね～。見ててわかるもの。特に、あの肩くらいまでの髪の毛の目がパチッとした子。あの子と佐野くん、特に仲良しでしょう？」
翔の顔があっという間に真っ赤になった。流衣はクスクスと笑う。
「やっぱりね」
「エヘヘ……」
翔は頬を掻いて恥ずかしそうに流衣から視線を外した。

「部活のお友達？」
「はい」
「へぇ～。何部なの？」
「吹奏楽部です」
「吹奏楽？　じゃあ、楽器吹けるの？」
「はい！」
翔は途端に目をキラキラさせた。
「あら、すごーい！　何の楽器？」
「サックスです！」
「わー！　あんなオシャレな楽器、吹けるのね！」
流衣も興味津々だ。そこからしばらくいろんな話をしていると、流衣がこんな提案をしてきた。
「ねぇ！　病院でコンサートなんて、できないものかしら？」
「え？　病院（ここ）でですか？」
流衣はうなずく。
「でも、あんな大きい音立てて……」
「大丈夫よ。入院されている患者さんの中にはね、もう1年近くって言う人もいて……。なかなか、ナマの演奏みたいなの、聴く機会なんてないじゃない？　それこそ、君たちみたいに若い子……まぁ、あたしも２４歳だから君たちとメチャクチャ年齢が離れてるわけじゃないけど、若い子たちの演奏聴けば、少しでも元気になってくれるんじゃないかな、って思うわけで」
「……うーん。とりあえず、先生に取り合ってみんとなんとも……」
「無理は言わないからさ。できたら……そうね。今年の七夕は土曜日じゃない？　土曜日に、演奏会お願いできないかしら？」
翔は小さくうなずいた。
「土曜日なら、融通きくと思います」
「ホントに？　ありがとう！　あたしのほうからも、ちょっとそれが可能かどうかもう一度確認入れておくから」
「はい！」

「よろしくね！」
流衣は嬉しそうにパタパタとナースステーションのほうへ戻っていく。
「依頼演奏ってことかしらね？」
友美子が生けた花瓶を翔のベッドの横にある棚に置いた。
「そうやなぁ」
「こうして活躍の場が広がるといいねぇ」
「うん！」
翔は先ほどとは打って変わって上機嫌で布団にもぐりこむ。間もなくして、夕食のいい匂いが漂ってきた。
（明日退院や～！）
翔は日が傾き、赤く染まった空を見ながらワクワクした気持ちを抑えいれずにいた。

第３４４話　心からの秘密

「ホンマにお世話になりました」
翔と友美子は担当医師と看護師の佐島　流衣に深々とお辞儀した。
「いえいえ。本当に快復が早かったですね。若いからなぁ」
医師は快活に笑い、そばにいた流衣も思わずクスクスと笑ってしまう。
「ところで、佐島さん」
翔がひそひそ声で尋ねる。
「コンサートの件、どうなりそうですか？」
「なんとかなりそうよ。看護師長も乗り気だったし、他のスタッフもね」
「ホンマですか！　ほな、うちの先生にちょっと前向きに検討お願いしときますね」
「よろしくね」
翔は大きくうなずき、病室を出た。
病室を出てからはしばらく廊下を歩く。談話室の前を通り、エレベーターで1階に降りれば玄関はすぐそこだ。
「今日はゆっくりして、とりあえず明日から学校やね」
「うん！　楽しみやぁ」
「体育はしばらく見学やけど、しゃあないね」
「体調第一やもんな」
エレベーターホールに向かおうとしたときだった。翔の服がグイッと引っ張られた。
「？」
振り返ると、中学生くらいの女の子がいた。友美子はその子が誰なのかさっぱりわからなかったが、翔は彼女を見るなり満面の笑みを浮かべた。

「よぅ！　有里ちゃん」
「……。」
有里という少女は恥ずかしそうにうなずいた。
「ゴメンな。オレ、先に退院してしもて」
有里は首を横に振る。それから、消えそうな声で言った。
「退院、おめでとうございます」
「おおきに。ありがとう」
翔は軽く有里の頭を撫でた。それから翔は友美子とエレベーターホールに向かって歩いていくが、有里はずっとその背中を見送っている。
「知り合い？」
「うん。入院してる間に知り合った」
「陽乃ちゃんは知ってるの？」
「……知らん」
「あらあら」
友美子はクスクスと笑う。
「べっ、別に陽乃はあれくらいのことで嫉妬したりするような器の小さいヤツちゃうから大丈夫や！」
「別に何も言うてへんやないのぉ」
友美子は必死に弁解する翔がおかしくなり、大笑いしてしまった。しばらくすると、エレベーターが到着した。そして扉が開いたのだが、それでもなお言い合いを続けている二人。しばらくすると、視線を感じて言い合いをストップした。
「あ」
同時に声を上げる翔と、エレベーターの中にいる人物。
「そえちんやん！」
クラリネットの添田麻衣子がいた。
「佐野先輩！　今日、退院されるんですよね！？」
麻衣子は偶然にも翔と出会ったのを心から嬉しそうにしながら、そう聞いた。

「うん！　おかげさんでな」
「明日から、部活来られます？」
「もっちろんやん！」
「わー！　お待ちしてますね！」
麻衣子は嬉しそうにそう言いつつ、エレベーターを降りる。入れ違いで翔と友美子はエレベーターに乗った。
「そういえば」
友美子が思い出したように言う。
「添田さんやっけ？　病院に何の用事やろね」
「うーん……。そういえばそえちん、週1回、曜日は決まってないけど休んでるなぁ。最近やけど」
「理由は聞いてへんの？」
「家の事情って……」
「あぁ……。それやったら聞きづらいわなぁ」
エレベーターを降りて、翔は友美子から少しはなれて歩いていた。
「あ」
「ん？　どないしたん？」
「あぁ……いや、有里ちゃんの苗字知らんなぁ思って」
「あーあー。そんな馴れ馴れしく下の名前で呼んだら、陽乃ちゃん嫉妬すんで？」
「せやから！　陽乃はそんな心の狭いヤツちゃうって！」
翔は有里の苗字を結局知らないまま、病院を後にした。
その頃、麻衣子は先ほど翔が通過したばかりの談話室に姿を現していた。
「ゆーり！」
「お姉ちゃん！」
「どう？　調子は」
「うん！　まだちょっと足は痛むけど……」
「そっかぁ。日にち薬だもんね。焦らずゆっくり、ゆっくり」
「ありがとう」

先ほど翔が話したばかりの有里――彼女は麻衣子の妹であった。中学2年生の添田(そえだ)　有里(ゆり)。先週、有里は学校の階段から誤って転落し、右脚を骨折するという大怪我を負ったのだ。

しかし、単なる転落事故で済まされない目撃談があった。有里は、自分から階段を転げ落ちたのだという目撃者が複数いたのだ。そして、それと同時に麻衣子たち添田家に衝撃を与えたのが、この出来事だった。

有里がイジメを受けている。

それが事実なのかどうかは確かめようがない。ただ、最近麻衣子は有里の様子が少し変だということは気づいていた。朝、なかなか起きてこない。妙に麻衣子にいろいろと頼ってくるようになった。お姉ちゃん、お姉ちゃんと以前にも増してくっつくことが増えたのだ。その矢先のこの事故である。

「有里」

「なぁに？」

「……。」

有里の笑顔が、これが本物なのかどうかを確かめたい。麻衣子はそう思った。

「佐野先輩のこと……有里は、好き？」

「……わかる？」

有里は赤くなった。

「わかるわよ。お姉ちゃんだもん」

「でもね、お姉ちゃん。私、知ってるよ」

「何を？」

「佐野さん……彼女さん、いるよね」

「……うん」

麻衣子は小さくうなずいた。

「私ね。佐野さんと彼女さんの姿見てたら、私もこのままじゃダメだなぁって思った」

「そうなんだ……」

「今度、7月7日にコンサート、病院でするかもしれないんだよね？」
「予定、だけどね」
麻衣子は苦笑いした。
「楽しみだなぁ」
麻衣子は久しぶりに本当に楽しみにしている有里の顔を見た。しかし、麻衣子には少しの不安があった。
7月7日。コンクールまでそう時間が多くない中、果たして他の曲を今から練習する余裕が部にあるかどうか。それが心配で、有里の期待を裏切ることになるのではないか。そのような不安がグルグルグルグルと、麻衣子の心の中で渦巻いているのだった。

第３４５話　しまった、かぶった！

「きゃー！　佐野センパーイ！」
部室に黄色い声が上がった。６月１８日月曜日、とうとう翔が退院して久しぶりに部活に顔を出せる日がやってきたのだ。
「皆の衆！　長らくお待たせした！　佐野　翔、参上ー！」
「いえーい！」
春樹と拓真が嬉しそうに拳を上げて叫んだ。
「はぁい！　先輩、プレゼントでっす！」
さゆりと麻綾が手作りのクッキーを翔に手渡した。
「うぉ！　マジでかぁ！　泣ける！」
「それだけじゃないんですよ！　はるかにまりちゃん、かのちゃんからもプレゼントあるんですから！」
「うおー！　オレほんま泣きそうやねんけど！」
ワイワイと楽しそうに話をする部員たちをよそに、麻衣子は俯き加減で配られたばかりの譜面を見つめていた。この楽譜。来る７月７日、大海公園で開催されるたなばた祭の演奏曲なのだ。
サザンオールスターズ・メドレー。こちらは１０分近くになる長い曲だがいきなり１曲目に持ってくることになっている。それからパイレーツ・オブ・カリビアン。そして星に願いを。これを最後に持ってきた。たなばたを意識してのことだろう。
問題は、翔が引き受けようとしていた病院でのコンサートが、このたなばたコンサートと被っていることだった。当然、どちらかをキャンセルしなければならない。そうなると、やはり前々から出演の話が出ていたたなばた祭が優先されることは間違いないだろうと麻衣子は予想していた。
「ほんじゃ、今日の部活の指示聞いてくるわ」
「いいじゃんか。お前、久しぶりに来たんだから楽器の手入れとか

してろって」
　拓真が指示を聞きに行こうとするが、それを止めた。
「久しぶりやからこそ、オレが行きたいねん！　な！」
「しょうがねぇな。わかったよ。よろしくな」
「おうよ！　行ってきまぁーす」
　翔はヒラヒラと手を振りながら部室を出て行く。麻衣子はそれを見送ることしかできなかった。
「失礼します！」
　その声を聞くなり、3年生を担当している先生たちが一斉に「おっ！　佐野ぉ。早速部活か！？」と茶化すように聞いてきた。
「当たり前ですよ～。入院してた間、遅れたんですからそれを取り戻さんと！　ね、東先生」
　恭一は嬉しそうに笑う。
「ところで先生。ちょっと相談なんですけど」
「相談？」
　翔は病院で浮かんできた話を事細かに恭一に話し、さらにたなばた祭と被っていることも承知で出たい、と願い出たのだ。
「なるほどなぁ……。まぁ、断るのは簡単だけど、俺はそういう風にすぐ断るのは嫌いだ」
「さっすが先生！」
　翔が嬉しそうに小さくガッツポーズを取った。恭一はしばらく腕を組みながらいろいろと考えているようだった。
「よし」
　何かが浮かんだようで、恭一は大きくうなずく。
「半分くらいに分けて、やってみるか」

「半分？」
　恭一が合奏のために音楽室にやってきて、すぐに7日の話が出た。
「そう。いま話したように、7月7日に佐野が入院していた七海市総合病院でのコンサート依頼がかかってな。ところが、その日は大

海公園でのたなばた祭コンサートもある。被ってるんだ」
「それは困りましたね……」
由美子が深刻そうな表情を浮かべる。
「けどまぁ、そんなに深刻に捉える必要はない」
「え？　そうなんですか？」
絵美が意外とでも言いたそうな表情を浮かべた。
「あぁ。半分に分ければ、それで問題ないだろう。病院組と大海公園組。それでＯＫじゃないか」
「でも先生」
みゆきが手を上げる。
「それはすなわち、ひょっとしたら１、２年生だけでどちらかの本番に出る可能性があるってことですよね？」
その言葉に１、２年生からざわめきが起きた。
「あぁ、そうだな」
恭一はまったく否定せず、あっさりそれを認めた。
「どうしよ……。そんなの、めちゃ不安だよ俺」
智志が顔を青くしている。
「やだぁ。それじゃあ、あたしかアンチでソロってことも大いにありうるよね？」
「そんなぁ」
佳菜と稚沙希が本当に心配そうに顔を見合わせた。
「はいはい、静かに静かに！　とにかくだな。両方の本番に出るため、かつ公平にその出るメンバーを決めるために！」
恭一は大きな箱を教卓に置いた。
「くじ引きをします」
「えぇー！？」
今度こそ全員から大声が上がった。
「文句言わない！　ほら、決めるぞ～。クジには大海公園に出演するものは『大海』、病院のコンサートに出演する者は『七海』と書いてるからな」

渋々といった様子で部員たちは次々とクジを引いていく。そして、全員が引き終わり結果が出た。

【大海公園たなばた祭】

井上佳菜／大谷沙希／野村健之佑／橋本絵美／瀬戸優輝／伊原光瑠／片岡なぎさ

毛利　菘／速水騎士／逢沢　駿／戸口　誠／中野さゆり／朝倉夏樹／工藤茉莉紗

朝倉陽乃／松尾　勇／藤咲　流／右川順平／時任裕子／吉山亜紀／江藤沙知／加藤愛実

大岩智志／秦野恵梨／冨岡洋之／日高　優／岩切裕也／三宅亮平

【七海市総合病院たなばたコンサート】

宮部由美子／安藤稚沙希／歌川まゆ／志賀慧太／小林梨子／河内みゆき／進藤雄飛

堀江歩由美／添田麻衣子／佐野　翔／鈴木麻綾／西嶋はるか／前田かのこ／久野彩香

佐野綾音／川崎慎也／富士原徹／佐々木雛乃／緒方賢治／保田　杏／水谷春樹／本堂拓真

飯岡好美／常盤貴志／田中美里／乃木あずさ／塚口和志／本堂　晃

「えっ！？　ってことは、ひょっとしてあたしか夏樹くんがソプラノサックス吹かないとダメなの？」

突然、さゆりが大声を上げた。恭一がニヤニヤ笑いながら「そういうことになるな」と答える。

「きゃー！　ど、どうしよう、どうしよう！　ソプラノサックスだ、ソプラノ！」

夏樹の顔も紅潮している。それだけ、二人にとってソプラノサックスは憧れの高いものだった。

「夏樹くん、ジャンケンで決めよ！」

「望むところです！　いきますよ～……最初はグー！　じゃ・ん・け・ん・ほい！」
「あいこでしょ！　しょ！　しょ！」
「ショッ！　ショ！　ショ！」
「やったあああああ！」
さゆりが飛び跳ねて喜んでいる。勝者はさゆりだった。一方の七海市総合病院組は、恭一がササッと決めた曲の楽譜を手にしていた。
そして、恭一の驚くべき発言に1、2年生が目を点にしていた。
「基本的に、今回は良い練習にもなるから、どちらの組もソロは1、2年生に担当してもらおう」
その言葉に、飛び跳ねていたさゆりも動きを止める。
「全部ですか！？」
智志が興奮した様子で聞いた。
「全部です」
「うっそ……」
静まり返る室内。
「大丈夫。お前たちならやれるさ。よく練習しなさい」
恭一はウンウンとうなずき、「それじゃあ1時間後に大海公園組、その30分後に病院組の曲通しするからな」と言って音楽室を後にした。
七海市総合病院組の曲は以下の3曲。

♪笑点のテーマ
♪シング・シング・シング
♪ヘンリー・マンシーニの想い出

3曲とはいえ、なかなかの難易度の曲だった。練習時間もそれほどないので、部員たちは早速練習に取り掛かるのだった。
「良かった……。佐野先輩、こっち側で」
麻衣子は一人、ホッとため息を漏らしていた。

「そえちん、急ごうよ」
「あ、うん」
歩由美に声を掛けられ、麻衣子は楽譜と楽器片手にパート練習部屋へと走っていった。

第３４６話　歯抜けの影響

「はぁ～……」
麻衣子が大きなため息を漏らした。
「どうしたの？　そえちん」
歩由美が心配そうに麻衣子の顔を覗きこむ。麻衣子はへへ、と力なく笑いながら答えた。
「いやぁ……まさか、私がファースト吹くことになるとは思わなくて」
麻衣子は今回のたなばたコンサートで『シング・シング・シング』でソロを吹くことになったのだ。妹が入院している七海市総合病院でコンサートが開催され、そのコンサートで、妹の目の前でソロを吹くことになった麻衣子は、最初こそ意気込んでいたが次第に不安が大きくなってきていた。
絵美や翔たち3年生のように、堂々と吹けるか否か。そう考えると胸が妙にドキドキしてくるのだ。
「それはまぁ……くじで決まったことだしね」
メンバーもくじで決定し、さらに公平にするため、クラリネットパートはファースト、セカンド、サードのパート割り振りをくじで決定したのだ。そのため、麻衣子は『シング・シング・シング』と『笑点のテーマ』でファーストを担当することになった。もちろん、一人ではない。『シング・シング・シング』ではみゆきが、『笑点のテーマ』では雄飛がファーストを一緒に担当する。
コンサートまでまだ日はあるのだが、やはり不安は消えない。病院組の合奏まで１０分程度しか残っていなかった。
「病院組～」
健之佑がパート練習の部屋を回って招集をかけていた。
「集合して、１０分後に合奏開始だそうです」

「はい！」
麻衣子は背筋を正してすぐに譜面台を畳んだ。それを見て健之佑が「ずいぶん気合い入ってるね」と微笑んだ。
「はい！　頑張ります」
「頑張れ」
麻衣子はイソイソとした様子で廊下を歩いていく。すると、憔悴しきった様子の愛実と智志が覚束ない足取りで麻衣子の横を通った。よく見れば、智志の目には涙が浮かんでいるようにも見えた。
（どうしたのかな……）
あの気の強い印象がある智志と、いつも明るい愛実が落ち込んでいる。麻衣子は状況を飲み込めないまま、音楽室に入った。
恭一にひどく叱られたのかと思い不安げに麻衣子は音楽室に入ったが、恭一は決して機嫌が悪そうな顔はしていなかった。その代わり、心配そうな顔をしている。
「あ、本堂」
拓真の姿を見るなり、恭一は声をかけた。
「ビックリしましたよ、先生。大岩、どうしたんですか？」
「いや……それがだなぁ」
恭一の話によれば、演奏予定の『ど演歌えきすぷれす』で突然チューバの音が消えたという。どうしたのか、と恭一が聞いてみると何かわからないけれど、不安で音が出せないと智志が答えたそうなのだ。
「えぇ～？　あの大岩が、ですか？」
「先生もそれで驚いてるんだよ。いきなり、2年生だけってのはちょっと失敗したかなぁ」
恭一はウーン、と腕を組みながら首をかしげた。
「とにかく、病院組の人、合奏始めようか」
「はい！」
「よし。じゃあ河内を基準にしてチューニング」
「はい！」

チューニングは順調に進んでいく。
「よし。それじゃあ……『笑点のテーマ』は曲自体短いし、簡単だろうから後回しにして……。サッと『シング・シング・シング』、通そうか」
「はい！」
あずさのジャジーなドラムセットの音が響き、トロンボーン、ユーフォ、チューバ、バリトンサックスの低音が入る。そしてトランペットのメロディが入り、すぐにクラリネットとサックスのメロディが入る。
（あっ）
そのクラリネットとサックスのメロディは立奏の指示が入っていたのだが、クラリネットの1年生3人が立ち遅れたのだ。変に焦ってしまい、顔が一気に熱くなる麻衣子。それはどうやら雄飛、歩由美も同じだったようで妙に頬が3人とも紅潮してしまった。
そして、いよいよクラリネットのソロが始まる。1回目は雄飛、間にトランペットの音を挟んでから2回目は麻衣子だ。しかし、聞こえてくるはずの雄飛の音色が「キイッ！」というリードミスの音だけ響き、聞こえなかった。
それに動揺したトランペットの彩香と綾音もうまく打ち込みのような音が入れず、結局麻衣子のソロもうまく入れずに完全に伴奏だけの歯抜け演奏になってしまった。
「ストップ、ストップ！」
恭一が思わず曲を止める。
「おい！　ソロパートはしっかり吹かないと。ソロっていう自覚を持てよ？　自分が吹かないと誰が吹くんだ！くらいの気持ちがないと」
「はい……」
雄飛と麻衣子が小さな声で答える。
「それに、トランペットも数えておけば入れなくもないだろう。それに久野」

「はい」
「お前は経験者でしかも『シング・シング・シング』なんだから…
…吹いたことはないか？」
「あります」
「そうだろう？　佐野はまだ楽器を持って2ヶ月弱なんだから、そ
こは久野がカバーしてやらないと」
「はい！　すみません」
「よし。それじゃもう1回、進藤から。とりあえず、通すぞ」
「はい！」
雄飛は上手く入れたものの、やはり麻衣子は少しもたついてしま
った。その後、曲はどんどん進んでいく。進んでいくに連れて、麻
衣子の中でよくわからない焦燥感がどんどん大きくなっていた。そ
して、彩香のトランペットソロが終わり、今度はみゆきのクラリネ
ットソロが始まった。ここは、完全にあずさとみゆきの二人しか演
奏していない。しかし、みゆきは緊張の色などほとんど見せず、実
に楽しそうにソロを吹き切った。
「よーし。河内のソロは問題ないな」
恭一が笑顔でそう言った途端、麻衣子の不安が遂にあふれ出して
しまった。
「うっ……」
その声に真っ先に気づいた慧太が驚いて麻衣子のほうを見る。
「ウウッ……ヒック……」
「せ、先生」
慧太がゆっくり手を挙げた。
「うん？」
「添田さんが……」
涙をポロポロこぼす麻衣子を見て、今度こそ恭一は驚いた。
「おいおいおい、どうしたんだ今日は。大岩の次は添田か」
「すみません……すみません……」
麻衣子はひたすら「すみません」を繰り返すばかり。恭一は麻衣

子と智志が泣いている理由はわかっていた。しかし、恭一がそれを言ったところでかえって彼らを萎縮させてしまうかもしれないと考えていた。

「佐野」

恭一が翔を呼ぶ。

「はい」

「すまんが……ちょっと、頼むよ」

それだけで何を意味するのか理解した翔は「はい」と笑顔で答えた。

合奏終了後、部員たちが帰る準備をする中で麻衣子、智志、雄飛、歩由美や最近入部した慧太、初心者である晃、和志、杏、綾音も呼び出されていた。

「えーっと……」

翔が恥ずかしそうに前に立っている。

「まぁ、オレもビックリしたけどな。そえちんみたいな可愛い子が泣いたら絵になるけど、さとっぺに泣かれたらもうビックリするわぁ」

智志が泣きはらして赤くなった目をチラッと翔に向けた。

「ほんで？　そえちんとさとっぺは、なんで泣いたん？」

「……。」

麻衣子はその泣いた時の感情を上手く言葉にできる自信がなく、黙ったままだった。智志が、小さく言った。

「来年……先輩がいなくなった時に……自分、このままでいいのか不安になったら……なんか……」

そこで智志は言葉を切った。

「なるほどねぇ」

翔は大きくうなずいた。

「うん。ちょっと、寂しい話するけど」

そばには拓真、絵美、美里、順平、陽乃もいる。

「オレら3年は……今年の11月23日を最後に、おらへんなるわけで」
そこでまた麻衣子がボロボロと泣き始めた。
「やだぁそえちん。そんな泣かないでよ」
絵美がハンカチを取り出し、麻衣子の涙を拭った。
「すびまぜん……」
翔も寂しそうな笑顔で続ける。
「でも、オレらがおらへんなっても吹奏楽部の活動は続くわけで。そう言ったときに、今は1年生で、初心者で、2年生で。ファースト吹かんとアカン。ソロ吹かんとアカンってことが増えると思うねんな」
拓真が引き取る。
「チューバなら、ピアノの静かなところは自ずと学年が上のさとっぺが吹くことになると思う」
「それは、パーカッションにも言えることだけどね」
美里が付け足した。
「結局、どのパートもあたしたちがいなくなった時、皆がお互いに支えあっていくしかないんだよ」
陽乃が優しく言う。
「でも……その自信がなくって。先輩たちみたいに、上手くもないし、自信もないし」
翔が目を丸くした。
「さとっぺ、もっと堂々としてる子やと思ってたのにー！」
バシッ！と翔は気合いを入れる意味でも智志の背中を思い切り叩いた。
「しょうがないなぁ。あ、陽乃。あの時の音源ある？」
「あるよ」
陽乃はパタパタと部室の奥にある戸棚へと駆け寄った。ゴソゴソと中央あたりから引っ張り出してきたＭＤ。そこには「恥（笑）」と書かれていた。

「正直、聴きたくないよねぇ」
美里が苦笑いする。
「ホントホント。あの時は俺ら上手い！とか思ってたけど」
拓真が恥ずかしそうに頬を掻いた。
「それ……もしかしてあの時の？」
順平が思い出したように翔に聞いた。
「そう。特に、さとっぺやそえちんには聞いてほしい音源やから」
ようやく涙が止まった智志と麻衣子が顔を合わせる。
美里がＭＤをデッキに挿入する。そして、聴きなれたアナウンスが聞こえた。その直後だった。

バァン！

何かが落ちる音。そして聞こえてきたのはざわめきだった。
『うわっ！？』
『なに？』
『なにも見えない！』
『おい！　停電だ！』
観客とホールスタッフの声が飛び交う。しばらくすると、恭一の声が聞こえてきた。
『あのー、このまま演奏を続けても構わないでしょうか？』
『えっ！？』
恭一の言葉に首を傾げる智志たち。翔が付け足した。
「これな、オレらが２年生になる直前の３月の七海市吹奏楽連盟の定演のときの録音」
「そうなんだ」
「私、知ってます」
麻衣子が呟いた。
「これ、停電の中演奏したヤツですよね？」
「そうそう」

これには智志たちも度肝を抜かれた。
「マジっすか？」
「マジマジ。まぁ、それは別としてちょっと聴いて。この演奏」
翔たち3年生は懐かしそうに顔を合わせる。
「この時、真っ暗だったけど。俺たちは何度も合奏重ねてきてさ。お互いの息遣いとかなんとなく、下手くそなりにわかってたよな」
拓真が呟くように言う。美里がうなずき、続けた。
「そうよね。ホント、耳を覆いたくなるような音はしてるけど……。でも、みんな頑張ってた」
「うん」
絵美が引き取る。
「下手は下手。でも、聴いてほしいの。みんな、自分の音を責任持って、主張するところは主張して、目立たないでいいところは裏方に徹する」
陽乃が言った。
「この時、全員でひとつの演奏を作るんだって、みんな必死だった」
翔が再び語り始める。
「誰一人欠けることのできない演奏。そういうのをこの時のオレたちは目標にしてた」
ハッとした様子になる智志と麻衣子。
拓真が言う。
「下手なりに頑張る」
美里が続ける。
「自信を持つ」
絵美が引き取る。
「仲間を信じる」
陽乃が最後に言った。
「自分を信じる」
翔は、そっと手で耳を囲うような仕草を見せた。
「ほな、ちょっと聴いてみて」

約2年前の演奏会の音源――『大草原の歌』が智志たちの耳に優しく響き始めた。

第３４７話　遠く離れていても

「こんにちはー！」
部員たちの快活な挨拶が今日も七海高校の音楽室に響く。
「はい、こんにちは！」
そう挨拶を返したのは恭一ではなく、しおりだった。
「みんな、久しぶりね～！　とは言うものの、１年生は私のこと知らないか……」
しおりは見たことのない新入生の顔ぶれを確認しながら笑った。
「私は一応、七海高校に昨年マーチングの指導をさせていただきました、この七海高校初代吹奏楽部のＯＧでもあります、神崎しおりと申します。よろしくお願いします！」
「お願いします！」
そう言って答える生徒たち。しおりが知っている顔ぶれのうち、１０人の姿が見当たらない。
（そういえば永井さんは転校したって聞いてたわね。それにあの子達は今日から４日間いないのか……）
しおりは少し寂しそうに笑ったが、それをすぐに掻き消して「それじゃあ……代表の子、挨拶しようか！」と声をかけた。
「はい！」
駿が答える。
「起立！」
駿の号令に合わせ、全員が立つ。
「お願いします！」
「よろしくお願いします！」
３年生のいない合奏が始まろうとしていた。

「ねぇ」
陽乃が翔に声をかける。

「うん？」
ソフトクリームを頬の右にペチョッと付けた翔が振り返る。
「やだぁ！　もう！　食い意地張って見えるじゃない。やめてよ」
陽乃は翔の姿を見て思わず吹き出してしまった。
「そんなことより。２年生と１年生、大丈夫かなぁ？」
実は翔たち３年生は６月１９日から２２日までの３泊４日で修学旅行に来ているのだ。七海高校の修学旅行は毎年、西日本の近畿、中国、四国、九州のいずれかの地域から複数の県を巡る形式を取っている。海外へ行くことも珍しくなくなった修学旅行であえて日本国内を旅行先に選ぶのは、七海市の方針によりまずは自分たちの国の文化を知ることから始めると決まっているからだ。
翔と陽乃はクラスが違うが、今は自由時間のためにこうして二人で会っているのだ。
「それにしても、島根県ってあたしが思ってたより観光するとこ、あるんだね」
「そりゃお前が知らんだけ。どこの県にもこうして名勝はあるもんよ。美味しいもんもな！」
「そうだよね！　お昼ごはんの出雲そば、最高だったな～！」
陽乃は出雲そばのことを思い出し、思わずニヤけてしまった。
「お前もオレと大差ないやんけ」
「あ……そうかも！」
アハハハ！と大声を上げて笑う二人。
「ねぇ、他にこの辺で有名なところないのかな？」
「ちょっと待てよ～……？」
翔が突然立ち止まった。陽乃が翔の背中にぶつかって立ち止まる。
「どうしたの？　いいもの見つけた？」
「いや……ほら、聞いて」
陽乃が耳をそばだてると、聞き覚えのある音が聞こえてくる。
「あれは……」
翔と陽乃は顔を見合わせ、同時に叫んだ。

「サックス！」
翔たちはバタバタと音のするほうへ走っていく。
「どこや！？」
「あっ、きっとあそこよ！」
二人は必死になってその音のするほうへ走っていく。そして、目の前に少し古びた校舎と綺麗な校舎が見えてきた。
「島根県立桜田中央高等学校……」
翔が校名を呟く。
「どこかで聞いたことない？」
「あるような……ないような……」
二人が首をかしげていると、曲が聞こえてきた。
「あ、感謝と喜び」
「シェーファーの曲やな」
二人はしばらく耳を傾ける。
「いい曲～……」
陽乃が聞き惚れていると、せっかくの良い雰囲気を吹き飛ばさんばかりに翔が思い切りくしゃみをした。
「フェーックショイ！」
「ちょっとぉ！　バッカじゃないの！？　雰囲気ぶち壊さないでよね！」
「やかましな！　彼氏にバカバカ言うな！　それになぁ、関西人はバカに傷つくんやぞ！？」
「そんなの知らないわよ！　バカ！」
「なんやと！？　まだ言うか！？」
二人がギャーギャー言い合いをしていると、遠くから菜緒が「ちょっとー！　そろそろ集合だよ！」と声をかけてきた。
「あ、ヤバ！　行くで陽乃！」
翔が陽乃の手を引いて走り出す。陽乃も慌てて駆け出した。
「……？」
窓がカラカラ、と小さく音を立てて開く。それと同時に少年のい

る部屋のドアが開く。
「サキト～、そろそろ合奏……あれ？　どうしたの。窓なんて開けて」
「いや……」
サキトと呼ばれた少年は耳慣れない発音の日本語に思わず窓を開けたのだ。
「なんか、東京の人と大阪の人がいたっぽくって」
「えぇ？　珍しい！　どれどれ？」
彼女の幼なじみらしい少女が窓から外を覗く。
「誰もいないよ？　サキトの気のせいじゃないの？」
「えぇ～？　大阪弁を空耳で聞くようなこと、あるかなぁ……」
すると再びその部屋のドアが開き「西掛(にしかけ)くん！　唯(ゆい)！　早くしなきゃ！　西村先生の頭に角が見える！」と彼らの友人らしい少女が駆け込んできた。二人は大慌てで楽器――サックスとチューバ――を丁寧に抱えながら合奏の部屋へと急いだ。

「それにしてもさぁ」
桜田市を離れて今度は出雲市へ移動する。その電車内で翔は車内で一緒になった陽乃、拓真、絵美に話し始めた。
「あんな下手なオレらの曲聴いた途端、みんな表情(かお)変わったよなぁ」
「あぁ、それ俺も思った」
拓真が同意する。
「なんでだろうね。あんな下手な演奏なのに」
絵美も不思議そうにする。
「よく言うよ、みんな下手下手って」
陽乃が驚いた様子で言った。
「そうは言っても、実際あの時のあたしたちはあの演奏に満足してたんだし。楽器持ってまだ間もない人ばかりの演奏にしては、十分だったんじゃない？」
妙に説得力のある陽乃の言葉に、全員が笑顔でうなずいた。

「お前も言うようになったやんけ！」
「エへへ……」
陽乃が恥ずかしそうに笑っていると、車内放送が流れた。
「間もなく、出雲市、出雲市です」
「あ、そろそろ降りる準備しよか」
自由行動は出雲市へと舞台を移す。絵美が荷物をまとめながら言った。
「あ、そうだ」
「どうした？」
拓真が聞き返す。
「皆にお土産、買わないとね」
それを聞いて翔が満面の笑みで言った。
「よっしゃ！　パートリーダーが各パートの部員に買って行こうか！」
「負担額に差が出て不公平でーす！」
即座に絵美が文句を言う。
「わーかったわかった！　ほな、後で皆で集まってカンパちゃうけど、一人当たりの負担金額均等にしよ！」
「それいい！　賛成！」
「よっしゃ！　ほな、皆にメール回しとくからな！」
修学旅行の最中でも後輩たちのことを忘れることのない翔たち。
その思いが伝わっているのかどうかはわからないが、残された1、2年生たちもしおりを驚かせていた。
まず、自由曲『教会のステンドグラス』。3年生がいない間でも感覚が鈍らないように合奏を1、2年生だけでするのだが、いつの間に練習したのか3年生の代吹きをしているパートがほとんどだった。さすがに打楽器ではこの代吹きがしづらいのだが、それでもカバーをしている部分があり、それはしおりを驚かせていた。
「よーし！　みんなやるじゃない！」
全員が嬉しそうに笑う。

「それじゃ、3年生にサプライズ企画立てようか！」
「？」
予想外のしおりの言葉に全員が首を傾げる。
「大丈夫。簡単だから」
そう言ってしおりは新しい楽譜を1、2年生に配り始めるのだった。

第３４８話　伝えたかったキモチ

「おはよう～……」
陽乃があまりに眠そうな声で起きてくるので、夏樹が心配そうに聞く。
「おはよ。姉ちゃん、マジで今日部活行くわけ？」
夏樹が制服に身を包みつつ聞いた。
「当たり前じゃない。修学旅行の次の日だからって怠けてたら、コンクールに響くからね。早いことリズム戻さなきゃ」
「さっすが姉ちゃん。じゃ、俺は先に行くね」
「行ってらっしゃい……。あ、夏樹。楽譜置き忘れてるよ？」
その楽譜を陽乃が手にした瞬間、夏樹が血相を変えて走ってまるで横取りするかのように無理やり掴み取った。
「な、何よそんな必死になって」
「い、いや！　何でもない！　じゃあ行ってきます！」
廊下をバタバタと走って行き、夏樹は大慌てで家を出た。
「何よ……変な夏樹」
夏樹は自宅を出てからホッとため息を漏らした。
「ギリギリセーフ……！　今日が本番なのに、バレたらヤバいもんなぁ」
実は今日、３年生が一人も欠けずに部活へ参加することは１、２年生は予想していたのだ。恭一からあえて「明日の部活は自由参加でいい」と促してもらったのだ。恭一の予想どおり、真面目が歩いているような３年生。誰一人「じゃあ休みます」とは言わなかったのだ。しかし、これがかえって仇にならぬよう恭一は「来るなら午後から」と条件を付け加えておいた。これが１、２年生にとってはさらに好都合であった。
午前中の間に再確認でしおりからもらった曲を通し、それから音

楽室の準備を整える。夏樹はお菓子とジュースの準備係。これには麻衣子、智志、綾音の3人が一緒である。
「佐野！　おはよう！」
夏樹が自転車を快走させて綾音を呼ぶと、綾音も手を振る。
「おはよぉ！　どうやった？　朝倉さん、来そう？」
「来る気マンマンだった！　佐野さんは？」
「同じく！」
「やっぱさすがは3年生だよな～」
「ホンマにねぇ
二人は笑いながら智志たちとの待ち合わせ場所に急ぐ。
その頃、さゆりは唯からの電話を受けていた。
「え？　佐野先輩？　どうだったっけなぁ……。ちょっと待ってね」
さゆりは電話を挟んだまま、麻綾に聞く。
「ねぇ、マーヤ。佐野先輩たちって、島根県も回るんだったよね？」
「あー、うん。確かそうよ～」
麻綾は飾り付けをしながら答える。
「桜田市はどうだったっけ？」
「確か回る予定だったんじゃないかな。初日の自由行動のときに」
「もしもし？　唯。やっぱり、佐野先輩いちおう桜田市に顔出してるみたいよ」
「ってことは、佐野先輩だった可能性もあるってこと？」
「どうだろう……。でも佐野先輩も朝倉先輩も桜田中央の場所どころか名前も知らないハズだし……。人違いかもね？」
「やっぱりそうかなぁ……」
すると音楽室から優輝が「中野―！」と呼ぶ声が聞こえた。
「ゴメン！　呼ばれたから……また夜かけるよ！」
「あ、ううん！　私こそ忙しい時間にゴメンね。また！」
さゆりは唯との電話を終えると音楽室にバタバタと駆け込んでいった。
今日、吹奏楽部では3年生への普段の感謝を伝えることと、コン

クールへの壮行会を同時開催することにしたのだ。もちろん、恭一に事前に許可はもらい、しおりの協力の下こうして準備をしてきたのだ。

さらに、吹奏楽部らしい壮行会にするためにしおりが準備したサプライズを決行する。1、2年生はやる気に満ちた表情をしていた。

午後1時。

「あれ。気が合うね～」

沙希、由美子と陽乃、翔が学校手前の交差点で出会った。

「疲れは取れた？」

「ちょっとまだボーッとしてる」

陽乃の問いに由美子が苦笑いする。

「由美ちゃんはどっちかっていうといつもボーッとしてる感じがするけどね」

「サキティ、ひどーい！」

4人が大笑いしながら昇降口に行くと、ちょうど拓真、春樹、慎也の男子3人が上履きに履き替えていた。

「華のない3人やなぁ」

翔が茶化すように言うと春樹が「カケルは3つの華を潰してる感じがするね」と毒を吐いた。

「春やんも最近言うようになったなー！」

「痛い痛い！　やめろって！」

翔はプロレスの技を春樹に軽くかける。それを見て慎也たちがまた笑う。

「あれ？　なぁんだ。みんなほぼ同時だったんだ」

職員室から出てきた美里、絵美の二人が合流する。

「昼からって言われたらやっぱり昼一から出てくるよね」

陽乃が笑いながら言う。

「なんかもう、あたしの中では部活ナシではやってけない感じがする」

絵美が言うと、拓真と慎也が「激しく同意！」と返した。全員が修学旅行の思い出話を話しつつ音楽室へ向かう途中で、慎也が異変に気づいた。

「なぁ……。昼からって、合奏だったっけ？」

「あー、うん。確かそうやったで？」

「でも、音楽室から音、しなくないか？」

全員が耳をそばだてる。確かに何も音がしないのだ。

「ホンマや」

「まさか、昼から休みだったとか？」

沙希が心配そうに言う。

「えぇ！？　ウソ……。いやいや、コンクール前にそれはないって」

由美子が即座に否定する。

「じゃあこの静けさは何よ」

「それはわかんないけど……」

「案ずるより生むが安し！　行ってみよう！」

相変わらずノリの軽い翔に押されつつ、９人は音楽室に向かう。しかし、やはり音楽室の重い防音扉を開けるときは、翔も緊張した様子だった。

そして扉を開けた瞬間だった。

「２００７年度　ナナコウ吹奏楽部　コンクール壮行会～！」

陽気な駿の声がこだまする。３年生全員が呆然としている中、２年生は遠慮なく進める。

「はい！　まずは３年生の先輩方、修学旅行からお帰りなさい！」

「た、ただいまー！」

美里が元気よく答えると笑いが起きた。

「先輩！　お土産、ありますよねぇ？」

恵梨が茶化すように問うと、美里は「エリリン以外は準備してきた！」とさらに上回る冗談で答える。そこでまた笑いが起きた。

「壮行会ってことで！　まずは１、２年生とワイワイ楽しくお菓子食べたりジュース飲んだりしてください！」

「はーい！」
駿の言葉を合図に、ひとまず3年生は各パートのところへ戻っていく。
翔は桜田市で耳にしたサックスの話をしたのだ。
「え？　佐野先輩、本当に桜田中央高校に？」
さゆりが驚いてお菓子を食べる手を止めた。
「うん。せやけど、なんで？」
「そこ、私の親戚が通ってるんですよ！」
「マァジで！？　会ってこればよかったー！」
一方の拓真と春樹はすっかり元気になっている愛実と智志を見て胸を撫で下ろしていた。
「二人のテンション下がりっぱなしだったら、どうしようかと思って」
拓真が心底安心した様子を見せる。
「ご心配おかけしました」
智志が妙に礼儀正しく答えるので、拓真は「はい、ご心配おかけされました」と笑いを誘う返し方をする。
「真面目な拓あんが珍しい！」
「俺だって冗談くらい言うよ！」
ワイワイといろんな話をしていく中で、気づけば2時間が経っていた。
「1、2年生！」
駿の声に全員がハッとする。
「そろそろ準備！」
「はい！」
「え？　何の？」
「3年生はそこで待っててください！」
いつの間に準備されたのか、綺麗に並んだ椅子が9脚。
「あ、ジュンペー。よろしく」
「ほいほい」

順平は駿に促されて携帯電話を取り出した。
「もしもし？　あ、お久しぶりです、右川です。先輩、今日は確か大丈夫でしたよね？　えぇ、はい……」
陽乃は何が起きるのかまったく読めず、少しオドオドしながら指定された椅子に座る。
「ねぇ、ちょっと」
翔を呼ぶ。
「なんや？」
「翔は何も知らないの？」
「オレが知るかいな。お前は？」
「あたしだって全然知らないよ」
二人が動揺していると、楽器を持って1、2年生がちょうど陽乃たちの向かい側に座った。翔たちを除いた、なんら変哲のない合奏体型。
「本日の壮行会のシメとして、いつもお世話になっている先輩方に感謝の意味をこめて、1、2年生の拙い演奏ですが……1曲、演奏させていただきます」
これには3年生全員が驚いていた。
「さらに、特別ゲストです」
すると、順平が美里の隣にあった椅子に彼の携帯電話を置いた。
「何、これ」
「どうぞ」
美里が渡された電話を手にすると、驚くべき人物の声が聞こえてきた。
「ミサッチー！」
「……えぇ！？」
沙希と由美子が「誰？　誰？」と聞く。美里は目を丸くしたまま
「ゆ……雪ちゃん」と答えたのだ。
「ウソ！？　ホント！？」
陽乃が驚いて美里から電話を受け取る。

「陽ちゃーん！」
「キャー！　雪ちゃん！　えー！　わぁ～！」
３年生は既にこの時点でかなりヒートアップしていた。しばらくして落ち着きを取り戻したのを確認してから、駿が演奏開始の挨拶をした。
「まず……練習は、先輩方が修学旅行に行かれている間しかしていません。ですので、かなり下手である恐れがあります」
クスクスと笑う１、２年生。智志や麻衣子、雄飛の様子を窺う翔の目に、彼らから不安の色は微塵も感じられなかった。
「ですが、心をこめて演奏します。聴いてください。ＧＲｅｅｅＮの『愛唄』です」
そして、ドラムセットを叩いているのがなんと晃だったのだ。これには美里も拓真も驚きを隠せなかった。
「１、２、３、４」
晃の合図で始まったのは、稚沙希と佳菜のソロ。そしてメロディを継いだのは雄飛だった。さらにそれが勇へと繋がっていく。どうやらソロを万遍なく散らばせているようだった。サビの部分で、トランペットとフルート、ピッコロ、オーボエが立ち上がる。その次のメロディを引き継いだトロンボーン、テナーサックスが立つ。３年生が抜けても、なんら支障がないのではないかと思うほど、音は安定していた。
そして静かになって響いてきたのは、和志のグロッケン。完全なるソロだが、和志に緊張している様子は見られなかった。
続いて立ち上がったのは優輝とみゆき。柔らかい音色で、とても綺麗な音が音楽室を包み込んでいく。トランペットがまたそのメロディを引き継ぎ、再びサビへと突入した。ホルンとサックスのオブリガードがさらに味を引き立てる。そして、中間部分にやって来た。
木管楽器とユーフォニウムのオブリガードが綺麗にクロスし、さらにトランペットとユーフォニウムのオブリガードなど、曲は次々とメロディ担当を変えていく。そして、少し音量が下がったのと同

時に、滅多に見ない光景が見えたのだ。
いつの間にか素早く代わっていた洋之がグロッケンを叩き、普段はあれほど目立つことを嫌がる雛乃がソロを吹いていたのだ。
それを見た瞬間、慎也が呟いた。
「俺……堪えきれなくなってきだ……」
なんと、涙を流していたのだ。
「やっ……だなぁ。あだじも堪えてたのに……」
美里がボロボロと大粒の涙をこぼす。その涙は次々と3年生に連鎖していき、サビが一番盛り上がる部分に来る頃にはなんと、全員が泣いていたのだ。それでもなんとか堪えていたのが春樹だけだった。
しかし、その春樹にも追い討ちをかけたのが愛実の最後のソロだった。そこで一気に春樹の涙腺が崩壊した。
演奏が終わり、1、2年生が立ち上がると同時に翔たちは思い切り拍手をした。
「ありがとうございました！　そして、これからもよろしくお願いします！」
「お願いします！」
3年生は涙を拭いながら「こちらこそ、お願いします！」と全員大声で応えた。

「まったく。今日はビックリしたで」
帰り道。綾音と一緒に帰ることにした翔は開口一番、そう言った。
「エヘヘ。あたしらも正直、演奏ちゃんとできるか心配やったんやけどね」
綾音がペロッと舌を出して言った。
「そうか？　めっちゃ練習したんちゃうん？」
「えーっと……。でも、初日の2時間で楽譜さらって、2日目と3日目に合奏30分くらいして、後は今朝だけやで」
「マ、マジでか？」

「うん。マジで」
翔は驚きで胸がドクドクと高鳴っていた。まさか、ポップスとはいえあそこまで演奏を完成させてくるとは思っていなかったのだ。
（ひょっとしたら……今年のコンクール、行けるんちゃうか？）
翔は密かにそうした期待を抱かずにはいられなかった。

第３４９話　男？　女？

「なぁ。微妙だと思うだろ？」
貴志が１年生男子の体育科生徒の話し声に耳をそばだてた。
「あー！　俺もぶっちゃけ、そう思う」
「だろ？　なのにこれが意外なんだよな～。付き合ってる率、高いもん。あんな女々しいヤツらばっかのトコロでいいのかなぁ。俺には理解できない」
（なんの話だろ……）
貴志はシャーペンを走らせて勉強するフリをしながら、同じクラスの生徒と体育科の生徒２人の話をずっと聞いていた。
「ぶっちゃけさー。どうよ？　スイソーガクブ」
（俺たちの部じゃん……）
貴志は思わずペンを止めた。
「さぁねぇ。どうなんだろ。でもさ、実際問題スイソーガクブの男子なんて、女子みたいなもんじゃねーの？」
「あ！　それ言えてる！」
「ギャハハハ！　特にさ、あの太鼓のちっこい２年生とか、めちゃくちゃ女の子っぽい顔立ちじゃん？」
（日高先輩のこと……か……？）
貴志はギリッと唇を噛み締めた。遠くでは賢治もその話を聞いているようだったが、いかんせんその生徒というのが野球部とサッカー部で、明らかに貴志や賢治よりも体格の良い生徒だったので、文句を言いに行くのがなんとなくはばかられたのだ。
そんなときだった。
「ちょっと！」
ハッとして貴志が振り返ると、かのこがいた。同じクラスの女子に用事があって、たまたま来ていたようだった。

「取り消しなさいよ、今の」
「なんだよ前田。お前、このクラスじゃねーだろ。うっせーな」
「関係ないでしょ。取り消して」
「何ムキになってんだよ。あ、何？　お前もしかして、スイソーガクブの男子で好きなヤツでもいるわけぇ？」
かのこの顔が赤くなった。
「ハハハ！　ズバリそうでしょう！ってか！？」
「とにかく、取り消して！」
「嫌なこった！　だってさ、どうよ」
明らかに貴志と賢治に聞こえるように言った。
「こうやって同じ部の女子がイジられてんのに、同じ部の男子が構いもしないんだぜ？　むしろ、女子のほうが男っぽいっての？　ウケルじゃん！」
貴志がおそるおそるかのこのほうを見ると、かのこは目に涙をいっぱい溜めていた。震えているようにも見える。
「帰れよ、前田。しゃしゃり出てくんなっつーの」
「……取り消してくれなきゃ、あたし帰らないから！」
「しっつけー女だな！　出てけって言ってんだろ！？」
「きゃっ！？」
サッカー部の背が高いほうがかのこを突き飛ばした。それほど力を入れていないつもりだったのだろうけれど、運動部男子と文化部女子ではその力量には差がありすぎた。
かのこは突き飛ばされた拍子にそのままバランスを崩し、転倒した。これにはさすがの運動部の3人も気が引けたようだった。激しい物音の後に、思い切り尻餅をついたかのこが顔をしかめているのが、遠くにいる貴志と賢治からもわかった。
「……痛っ」
そう呟いたのが貴志にはわかった。周りにいた女子が駆け寄り「大丈夫？」と声をかけている。かのこは「うん。平気。すぐ教室戻るね」と立ち上がったのだが、そのときには貴志が駆け寄ってかの

この右手を握っていた。
「え？」
「前田。手、見せて」
「大丈夫よ。なんともないから……」
「いいから！」
貴志は強引にかのこの右手を見た。
「……突き指みたいになってんじゃね？」
「そんなこと……」
かのこは否定しなかった。
「保健室行くぞ」
「でも」
「いいから！　コンクールまで1ヶ月切ってんだぞ！？　早く治しておかないと、大会に響く！」
貴志は無理やりかのこの左手を握り、保健室へと走り出した。クラスメイトの冷めた視線に、居心地悪そうに怪我をさせたかもしれない運動部3人は肩を縮めていた。
「ん？」
保健室に駆け込む貴志のかのこの姿を見た翔が足を止めた。その翔の手には、7月から行われる高校野球の応援候補曲がたくさんあった。
翔はそっと保健室に近づき、ドアが少しだけ開いていたので覗き込んだ。
「軽い捻挫ね」
保健の先生が言う。
「ヒドくないですか？」
「大丈夫よ。それにしても、今の話は本当？」
「はい。サッカー部の高橋に突き飛ばされて……」
「見てる人も結構いたのね？」
保健の先生が問うと、かのこと貴志は大きくうなずいた。
「わかったわ。一応、野球部とサッカー部の顧問の先生にはこの旨、

伝えておくわね」
（え？　ちょ……）
次の瞬間、翔は思い切り扉を開けて叫んでいた。
「ちょっと待って！」
驚いた先生、貴志、かのこが入口を見つめる。
「佐野先輩……」
「ど、どういう経緯でそないなったんか、オレにも教えて！」
翔の必死な様子に、かのこが経緯を話し始めた。
「……なぁんや。そんなことかいな」
翔はフゥッとため息を漏らした。
「でも！　吹奏楽部の男子だって、運動部並みのことといろいろやるじゃないですか！　楽器運びに合奏の準備、マーチング。何より、演奏が肺活量も体力もいるものです。それなのに、まるで吹奏楽部どころか文化部をバカにするようなこと言って……。挙句、あたしを突き飛ばしたりして。信じられませんよ！」
かのこはかなり憤慨しているが、それを翔がなんとか宥める。
「まぁ、落ち着いて。確かに……いま、先生に文句言うてもらったら何らかの形で運動部にも罰があると思うけど……それは、あんまり良くない気がする」
「どこがですか？」
かのこの率直な問いに、翔も思わず詰まってしまう。
「どこが……って言われてもなぁ」
その時だった。
「佐野くん？　あ、やっぱりそうだ」
沙希の姿が見えた。そしてタイミングの悪いことに、沙希の彼氏である相田　雄平が立っていたのだ。おまけに、部活へ行く前なのか、野球部のユニフォームを着ていた。それを見たかのこの視線がキツくなる。しかし、翔が目配せをして一切何も言うな、という態度を示したのでかのこは黙ったままだ。
「あぁ。ちょっと前田ちゃんがな……」

「え？　怪我？」
保健の先生が言う。
「そんなに大したことないわ。2、3日すれば治るのよ」
「そうなんですか？　良かったねぇ、かのこちゃん」
「はい……」
かのこは不審そうに野球部の雄平を見つめる。その視線に気づいた雄平がニッコリ笑って言った。
「大丈夫？」
「は、はい……」
先ほどの野球部の生徒と同じ部活にいるとは思えない優しい物腰に、かのこは少し驚いていた。
「そうだよなぁ。吹奏楽部で指の怪我って、致命的なんだよな」
「指もそうやけど、口もな」
「なるほどなぁ……。俺、初めは吹奏楽のことサッパリだったけど……。でも、頑張ってるって言う意味ではどの部だって同じだもんな」
「そう……なんでしょうかね」
貴志が不服そうに呟いた。
「私はそうだと思うけどな」
沙希が雄平に同意する。それでもなお、かのこと貴志は気に入らない様子だった。それを見かねた翔が雄平に聞く。
「どうよ、野球部は」
「今年？　結構厳しいかも」
「そうなんか？」
「北松と風見台が結構強くなってて……。第一試合、北松となんだ」
「いきなりかいなぁ」
雄平が苦笑いする。
「でもさ！　あれだろ？　今年こそ吹奏楽部、応援に来てくれるんだろ？　俺たちも頑張るからさ。吹奏楽部も俺らの応援なんて適当でいいから、コンクール頑張れよ」

「おう！」
「そんじゃ沙希。俺はとりあえず部活行くよ」
「うん。またね」
雄平はそう言うと先に保健室を後にした。
「どう？　指の調子は」
「痛いです……」
「そっか……。今日は合奏は見学だね」
かのこが悔しそうに唇を噛み締める。
「先輩」
貴志が言った。
「さっきの……先輩の彼氏さんに、文句言ってください！」
貴志の言葉に沙希は戸惑いを隠せなかった。それから貴志は一連の出来事を沙希に話した。それを聞き終えてから、沙希は言った。
「わかった。その話、雄平に言って彼から後輩に言っておいてもらう」
「できますか？」
「大丈夫。彼、主将だから」
主将、という言葉がかなり重く響いた。
「まぁ。わからんでもないけどなー」
翔があっけらかんと言う。
「吹奏楽部の男子なんて、女子と変わらんって言う気持ち」
「なんでですか！？」
かのこが憤慨して言った。
「あたしには理解できません！」
「でもさぁ。実際問題、野球部とかサッカー部みたいに男臭いって言うたらなんか嫌やけど……。吹奏楽部って、こう中性的な男子、多くない？」
かのこはそう言われて吹奏楽部の男子を、なんとなく感じ取られる雰囲気別に大別してみた。
ガッシリした感じがする男の子だな、とかのこが思うのは智志、

翔、拓真、慎也、健之佑、順平、晃、誠、駿、裕也。それに対し、線が細くどちらかというと中性的と言えば語弊があるが、翔たちに比べると優しい柔和な雰囲気を持っているのは慧太、優輝、雄飛、騎士、夏樹、勇、流、徹、賢治、春樹、亮平、洋之、和志、優、そして貴志だった。

「でも、あれやろ？」

翔の言葉にかのこが真っ赤になる。

「前田ちゃん、吹奏楽部の男子で好きな子、おるんやろ？」

「……。」

かのこは言葉にする代わりに小さくうなずいた。

「それはやっぱり、その子だけじゃなくって部内の男子をきちんと男子って、意識してる証拠やん。誰が見てるとか、そんなんはあんまり気にせんでえぇんちゃう？」

「そうだね～」

沙希が同意する。

「それに、こんな小さなゴタゴタで他の部とモメて、せっかくどの部も向上心が高くなってるこの時期に、足の引っ張り合いは良くないと思うよ」

「……はい」

かのこと貴志は小さい声で答えた。

「わかればＯＫ」

沙希が笑顔になった。

「ほな、オレ東先生に指示聞きに行くついでに前田ちゃんの怪我、伝えとくわ。そんな重傷でもないってな」

「すみません……」

「いいよいいよ。ほな、大谷ちゃんとトキ。前田ちゃんよろしくな」

「はーい」

翔が保健室を出てからしばらくして、沙希と貴志、かのこも保健室を出た。そして、出てからしばらく歩いて昇降口のところで「前田。常盤」と呼ばれたので3人が振り返ると、例の野球部とサッカ

1部の3人組みがいた。

―それに、こんな小さなゴタゴタで他の部とモメて、せっかくどの部も向上心が高くなってるこの時期に、足の引っ張り合いは良くないと思うよ

沙希の言葉がかのこの脳裏をよぎる。そして、貴志の目の奥では先ほどの雄平の人懐っこい笑顔が蘇っていた。

もしもここでサッカー部や野球部との関係が悪化すれば、お互いのためにならないのかもしれない。二人はそう思っていた。そして2人が何かを言おうとした瞬間、野球部の生徒が言った。

「ごめんなさい！」

「え……？」

かのこも貴志も呆気に取られる。

「大事な時期に……怪我させた上に、吹奏楽部の人を傷つけるようなこと言って、ごめんなさい！」

「すんません！」

サッカー部も謝ってきたので、2人はなんとなく落ち着かない様子を見せた。すると、沙希が沈黙を破った。

「もういいじゃない。顔上げて」

「でも……」

「いいの。前田さんの怪我も大したことないし、それに皆さん謝ってくれたし。野球部もサッカー部も大事な時期でしょ？　早く部活に行かなきゃ」

「……あざっす！」

「どういたしまして」

沙希の笑顔に少し赤くなりながら、3人はそそくさと昇降口を後にする。

「あ、そうだ！」

沙希が思い出したように言う。

「ねぇ！　野球部応援行くからさー！　負けないでよ！」
「了解ッスー！」
陽気な部員の返事に沙希はクスクスと笑った。
音楽室に戻り、貴志は弓を手にして早速練習を始めていた。あれほどモヤモヤしていた気持ちがもう綺麗サッパリなくなり、なんだか新鮮な気分だった。
早速ピッチカートを奏でる。すると、亮平が「なんだか今日のトキちゃんの音、すっげぇクリアだな」と言った。
「そうですか？」
「うん。すごいよ」
亮平は心底驚いているようで、大きくうなずいた。
「ありがとうございます」
しばらくすると、野球部の号令が聞こえてきた。貴志が外を見ると、いつの間にか蝉が鳴いていた。
（もうすぐコンクールの夏だな～！）
コンクールまであと1ヶ月を切った。いよいよ、吹奏楽部正念場の日々が始まろうとしている。
「こんにちはー！」
恭一の姿を見た部員たちが一斉に挨拶をする。
「よし！　チューニングの後、ロングトーン。それからコンクールメンバーは課題曲の合奏、それ以外はこれを配布するから、よく練習しておいてくれ」
そう言って配られたのは、野球部応援候補曲のものだった。数はかなり多い。
「この中から、とりあえず雰囲気が合いそうなものと野球部の選手に聞いて吹いてほしいというものを選んでいくからな」
「はい！」
貴志が気合の入った返事をする。蝉の鳴き声に負けないほど、その声はクリアに音楽室に響き渡った。

第３５０話　純白

「ド、ドキドキするね……」
「おう……」
珍しく翔と陽乃が緊張した面持ちを浮かべていた。それも無理のないことだ。
６月２４日（日）。今日は吹奏楽部も休みの日だ。しかし、翔たちは楽器を手にそこにいた。
「先生、どうだった？」
帰ってきた美里に様子を聞く。
「すっごくカッコいいの。タキシードよね。ものすごいカッコよくて……なんかあたしも惚れちゃいそうで」
「おい」
慎也が不機嫌そうに美里をたしなめる。
「ゴメン！　冗談だって」
美里はペロッと舌を出して答えた。
「それにしても、かのちゃんの件は驚いたわね」
絵美がため息を漏らす。かのちゃんの件とは、陽乃たちが修学旅行から帰ってきたその日に起きていた。
「ひどい怪我じゃなくて良かったよね。それに、相手も謝ってきたんだし」
由美子が柔らかいトーンの声でそう言った。
「それは思う」
春樹が大きくうなずく。
「それにしても」
拓真がチラッと沙希と翔を見る。
「驚いたのは大谷とカケルだよ。まさか、修学旅行から帰ってきて

そのまま部活行くなんて思わないじゃん」
その拓真の言葉には、不服そうな調子も混ざっていた。
「ゴメンって～。だって、みんな疲れてるかなぁと思ってさ」
「それにしても、一声かけてくれよな」
「ほな、声かけたら拓あん、一緒に来てくれてた？」
「当たり前だろ」
冗談で聞いたつもりが真面目に返されたので、翔は面食らうと同時に、やはり拓真らしい答えだと感じていた。
午前１１時。いよいよ、式が始まる。部員たちも全員出席しての、結婚式だ。
「……わぁ」
ウェディングドレスに身を包んだ彩が、彼の父とゆっくり式場に入ってきた。
「ステキ……」
女子の憧れ。結婚式。それをこうして間近で見ることができる日が、こんなに早く来るとは思わなかった陽乃たち女子部員の目はキラキラと輝いている。男子たちもそれは同じようで、いつも学校で目にしている恭一や彩の姿とはまったく違う様子に、少し頬が赤くなっていたり、自然と笑顔になっていたりという具合である。
そして、指環交換が始まった。
「……。」
その瞬間、無意識なのか意識なのかはわからないが、隣にいた翔がそっと手を握ってきた。
「！」
陽乃が驚いて顔を上げると、彼はニッコリ笑っていた。陽乃も思わず笑い返す。
そして、誓いの言葉の後、恭一と彩がキスを交わした。
「……。」
ポロッと陽乃の目から大粒の涙がこぼれ落ちる。こうして、厳かな結婚式は静かな感動を生みながら進んでいった。

そしていよいよ披露宴。陽乃たちは気合を入れなおす。ある意味、コンクールとは違った緊張感がある。沙希、絵美、優輝、健之佑、翔、はるか、駿、順平、裕子、陽乃、流、慎也、亜紀、春樹、拓真、亮平、美里、優の合計１８名は緊張しつつもこれからの舞台に胸を膨らませていた。

披露宴会場に入ると、恭一の親族や関係者はもちろん、学校の先生方もたくさんいたので緊張がさらに増した。しかし、それに気づいた翔がすぐに言う。

「大丈夫。いつもの演奏会と何も変わらん気持ちで演奏すればＯＫや」

「……はい！」

全員が小声だが気合いのこもった返事をした。

「それでは、新郎新婦の入場です！」

司会者の合図が午後１時ちょうどにかかると同時に、沙希の合図で１曲目が始まる。１曲目は『ＣＡＮ　ＹＯＵ　ＣＥＬＥＢＲＡＴＥ？』だ。フルートの静かな伸ばしの音から這い出るように、絵美のクラリネットの音色が現れる。優のウインドチャイムが印象的だ。そして、健之佑のオーボエの音色が響き渡ると同時に扉が開き、彩と恭一が姿を見せた。２人が一歩目を踏み出すと同時に、陽乃のトランペットがメロディを華やかに奏でる。

美里のドラムセットをキッカケに、曲の雰囲気が賑やかになる。２人がゆっくりとキャンドルサービスをする中、部員たちは思い思いに曲を演奏する。２人を純粋に祝いたい。その気持ちだけで自然と、曲に感情がこもっていく。

いつもコンクールの曲の指導を厳しくする恭一。教室で冗談を交えつつ授業をする彩。いつもの２人がまるで別人に見えてしまうほど、今日の２人は輝いていた。

そして披露宴は順調に進んでいく。やがてやってきたのは、吹奏楽部からのお祝いのメッセージと言う意味合いを含ませたあの曲の演奏だった。

ここで演奏前に、翔が挨拶をする予定だったので翔がマイクの前に立つ。しかし、その後に言った言葉は全員を驚かせた。

「ここで……先生方に言う言葉はありません」

これには陽乃も驚いて目を丸くする。慌てて何かを言いそうになるが、翔がドンッ、と自信満々という様子で拳を胸に当てていった言葉を聞いて、彼女はその言葉を押さえ込んだ。

「その代わり、演奏を、言葉代わりにしたいと思います」

大きく沸き起こる拍手。鳴り止む前に演奏が始まった。ＧＲｅｅｎの『愛唄』だ。最近、部内でも一大ブームになっているこの曲。ソラで歌える部員も多いので、今回演奏する４曲中でも特に部員たちが練習せずとも楽に吹けてしまう曲だった。

恭一の目の前で、自分の指揮がなくても曲を演奏する部員たち。あれほど、音がスカスカで本当にコンクールに出られるような状態になるか疑わしかった陽乃が、華やかな音を奏でる。息のバランスが悪く、キィキィと固い音ばかり吹いていた絵美が、木の性質を活かした音を現前する。手と足が一緒に動いてしまっていた美里が、難なくドラムセットを演奏する。下の音になると音がいつも潰れていた春樹が、低音も高音も綺麗に吹き上げる。どこか自信なさそうに演奏していた沙希が、今となっては曲の演奏開始の合図をするほどになっている。吹奏楽の要になるにはもっと時間がかかると予想された拓真の音は、もう何も心配いらないような芯の太い、深みのある音になっている。翔と沙希を除いた部員の中では音こそしっかりしていたが、バランスも何もなかった慎也が、メロディ、裏メロディ、伴奏を完全に吹き分けている。そして、翔が以前よりもずっとしっかりしたリーダーシップで全員を確実に引っ張っている。

まだ2年ちょっとの付き合いである翔たち。その成長は間違いなく、進んでいた。

気づけば、恭一の目から涙がこぼれ落ちていた。

「はい」

彩が予想どおりというような笑みを浮かべ、ハンカチを差し出し

た。
「悪い……」
恭一が苦笑いする。翔たちの演奏する『愛唄』が、会場にいる招待客の心を掴んで離さなかった。
「それでは、少し遅くなりましたが……！」
司会者の言葉をキッカケに、彩が立ち上がる。その手にはブーケが握られていた。
「ブーケだ！」
真っ先に叫んだのは恵梨だった。
「きゃー！」
愛実と好美が飛び跳ねている。
「いきますよ～！」
彩が「それぇっ！」と大きくブーケを放り投げる。
「きゃー！」
「ほしい！」
女性招待客も女子部員たちも押し合いへし合いでブーケを受け取ろうとしている。
「こういうとき、女子って強いよなぁ」
翔が慎也、拓真、春樹と遠巻きに彼女たちの姿を見ていた。ブーケは彩が思いのほか強い力で投げたせいか、かなり高く勢いよく飛んでいた。
はるかの上を通過し、絵美と由美子の上を通過し、陽乃と美里もスルーして、さらには恵梨やあずさ、さゆりも通過していくブーケ。そのたびに悲鳴に近い声が聞こえてきた。そして、ブーケはある人物に向けて一直線に飛んで行き、その人物の手に収まった。
「へ！？」
「え？」
「は！？」
「お？」
４人が目を点にして声を上げる。一瞬、会場内が静まり返った。

ブーケを手にしていたのは他でもない――翔だった。
「なんでアンタなのよー！」
陽乃が大声を上げた。
「知るかい！」
翔が真っ赤になって反論する頃には大笑いの渦が会場を包み込んでいた。

「先生……きれかったなぁ」
帰り道。翔が呟くように言った。
「ホント。でも、明日から先生1週間いないんだよね」
恭一と彩は明日から1週間、新婚旅行に出かけるのだ。
「大丈夫。その間、神崎さんと三田嶋さんが指導に来てくださるし」
「そうだね。気にせず、楽しんできてほしいよね」
2人は嬉しそうに笑いながら、自転車に乗っていつものつくし野川沿いを走っていく。
「ほな」
翔はいつもどおり、陽乃を家の前まで送っていた。
「うん。また、明日」
「おう」
「ばいばい」
陽乃が翔に背を向けてすぐだった。
「陽乃！」
翔の声に陽乃が振り向くと、彼が彩から受け取ったブーケが陽乃に向かって飛んできていた。
「わっ！」
翔が真剣な表情でこちらを見ている。陽乃はドキッとして目を逸らしそうになった。
「おじさんに……話した？」
陽乃は首を横に振る。陽乃は、翔と同じ進路――島根大学の法文学部を希望していた。しかし、国立大学だ。陽乃はその希望を両親

に言えないまま、ズルズルと引きずっていたのだ。
「オレ……ホンマにお前と……ずっと、一緒におりたいから」
「……うん」
翔の真摯な想いがさらに陽乃の胸を締め付ける。
「……だから……」
翔の言葉が詰まった。
「うん……」
「……それだけ。言いたかった」
「……わかった」
「じゃあ……」
翔が恥ずかしそうに慌てて自転車に跨り、挨拶も早々に走り去って行った。
（いつまでもズルズル伸ばしてるわけにはいかないもんね……）
いつだったか、恭一に言われた言葉を思い出す。
迷いがあると、音にも迷いが出てくるようになる。

中途半端は嫌だ。そう思った陽乃は今日中にこの話に蹴りをつけようと決めたのだった。
「ただいま」
陽乃の声に気づいた由利が「おかえり～！　遅かったのね。夏樹はもう帰ってるわよ？」と心配そうに答えた。
「うん」
陽乃はアッサリと返事をし、すぐにリビングに入る。
「お父さん。お母さん」
「なぁに？」
真剣な陽乃の表情に驚く由利。
「どうした」
その様子に気づき、祥夫もやって来た。陽乃はゴクリとツバを飲み込んでから言った。

「あたし」
心臓が飛び出しそうなほど鳴っていた。しかし、ごまかしたくはなかったのでハッキリと言ったのだ。
「島根大学、受験する」
一瞬で、朝倉家のリビングが静まり返ってしまった。

第３５１話　夏が来た！

「そうなんだ！　良かったじゃん？」
美里がお弁当に入ったタコさんウインナーをつまんでから言った。
「でも、説得大変だったんじゃない？」
由美子が聞くと、陽乃はうなずいた。
「一度反対されたしね。特に意外とお母さんとおばあちゃんの反対がすごくて。なんで島根なんだって。翔と一緒にいたいだけなんじゃないかって」
そこで爆笑が起きる。
「そりゃあ普通、そう思われるよね」
絵美がウンウンとうなずく。
「でもお父さんは意外とアッサリしてて。あたしの人生なんだし大学受験だって一度きりなんだから、いいじゃないかって」
「へぇ～。あ、こんなこと言ったら悪いけど……私、陽ちゃんのお父さんもっと頑固だと思ってた」
沙希が小声で言う。陽乃も「あたしも」と笑いながら答えた。
「娘がそう思ってちゃダメじゃん！」
また笑いが起きる。一方の男子組みはと言うと、やはり陽乃の決断の話で盛り上がっていた。
「それにしても、お前らホント仲良いよなぁ」
慎也が感慨深げにうなずく。
「ホント。大学まで一緒って……しかも、国立だろ？　ありえなくね？」
拓真も驚きを隠せないようだ。
「これで二人揃って合格したら、全員でお祝いだな」
春樹が嬉しそうに言う。まるで既に合格が決まっているかのよう

な言い方に翔は苦笑いした。
「ちょっと気ぃ早いで。まだまだやもん。合格判定もオレはC、陽乃はギリギリDやからな」
「それはまだこれからだろ」
慎也の言葉に翔は小さくうなずいた。
「ところでさ」
拓真は一枚の紙を開いた。
「これ、どうする？」
それは夏休み中の補習について書かれた手紙だった。やはり受験を控えている3年生なので、補習のことなども考えながら部活に参加しなければならない。特に、吹奏楽部は引退がひとまずは11月23日の定期演奏会と決まっている以上、念入りに対策を打っておく必要がある。引退してからではかなり危険なのだ。
「それやねんけど……」
翔が言いかけたときに、恭一が姿を見せた。
「みんな、元気かー！？」
「先生～！」
優輝、みゆき、徹の3人が声を上げた。
「久しぶりだな！」
すっかり日に焼けた恭一。幾分、落ち着いた雰囲気にも見える。
「旅行、どうでした！？」
「海外久しぶりだけど、やっぱりいいな。いろいろと勉強にもなったし！」
「勉強って何のですか！」
ドッと笑いが起きる。
「まぁ、想い出話は後でいくらでもするとして。3年生！　ちょっと音楽室に昼ご飯食べ終わったら来てくれるか？」
「はい！」
そして10分後、3年生9名が音楽室に集まる。
「とりあえず、率直に言うとお前たちは受験生だ」

「はい」
「でも、吹奏楽部は他の部と違って夏が過ぎても引退していないな」
不安そうにうなずいたのは絵美と慎也だった。
「だからと言って、勉強しないままではマズい。そうは言っても、お前らももらってるこの手紙。部活の時間と補習の時間が被ってるだろ？」
拓真が心配していたのは、まさにそのことだった。部活開始時間は9時から、補習は8時半から12時までだった。午前中はバッチリ時間がぶつかっていた。
「そこでだな。ひとまず、どうしても受験に必須になってくる英語の補習がある日。この日は3年生全員、補習に出なさい」
それは強制だった。
「絶対ですか？」
美里が聞くと、恭一は大きくうなずき「学生の本分は勉強だからな」と言った。
「でも先生。英語の補習、コンクールがある29日の前々日にもあるんですけど……」
由美子は本当に心配そうだった。
「なぁに。前々日のたった3時間ちょっと抜けたくらいで急に演奏が下手になるわけでもないだろう？　しっかりと勉強して、午後から集中して練習してもらったほうが先生としても嬉しいけどな」
恭一の笑顔に、由美子は本当にそうして大丈夫なんだという気持ちになった。
「それから、各人で苦手だけれども受験に必須になる教科があるだろう？　確か……今年は全員文系だったな？　だったらまぁ、分野は似通ってくるだろうけど……。待てよ。佐野はちょっと特殊だな。それはまぁ後で話すとして……。ひとまず、自分の苦手な教科は把握しているだろうから、それも必ず補習を受けること。あと、通知表次第だけれども部活後1時間、先生と一緒に3以下だったものはとことん基礎を叩き込もう」

「はい！」
全員が大声で答える。
「とにかく、部活を理由にして勉強を疎(おろそ)かにしないこと！　それだけは頼むぞ」
「はい！」
「よーし！　じゃあ早速だが、1、2年生にも言ってくれ。2時から合奏するから、1時半から全員で基礎合奏を頼む」
「はい！」
3年生全員の意志の強さに恭一は自分が高校生のとき、そこまでできていたかと少しだけ反芻するのだった。

午後1時半。
「では、ベー（B♭）の音階を16拍4拍で上がって、上の音を2回吹いて下がってきてください」
「はい！」
慎也の指示に全員が反応する。この基礎合奏にはコンクールメンバーでない7名も参加している。常に全員の音がひとつになるように、という恭一の方針によるものだった。
「5、6、7、8」
出だしもキッチリ揃って、安定した音が伸びる。4月の1年生入部当初は出身中学によって音の出だしや伸ばし方などでそれぞれの特徴がどうしても出てしまっていたが、今は完全に七海高校としての音色というものが全員の中で定着していた。
「OK。では次に、その調の短調に当たるGのマイナー音階を同じ拍数でお願いします」
「はい！」
全員がひとつになって返事をする。
既に日にちは7月6日（金）。夏真っ盛りというような眩い日差しの中、どの部活も大会に向けて練習に励んでいる。音楽室にはもちろん、冷房はない。汗が滴り落ちる中、部員たちはロングトーン

に集中していた。少しでも気を抜けば音程がすぐに上がってしまう。夏場はそれが辛かった。ただ、今年は比較的曇りや雨の日が多いこともあり、いつもの年に比べればマシだというのが経験者の言うところであった。

午後2時ちょうどに恭一が姿を見せる。

「起立！　礼！」

「お願いします！」

恭一が深々とお辞儀をすると、部員たちもそれに呼応するように「お願いします！」と何倍も元気な声で返した。

「じゃあ……バテる前にまずは静かな部分から練習しようか」

その声に陽乃は自分の出番だということを察知してピッコロトランペットに持ち替える。恭一もウンウンとうなずいていた。

「よし。それじゃあ、教会のステンドグラスのピッコロソロからな」

「はい！」

恭一の指揮棒が降りる前に大きく息を吸い、陽乃はなんのためらいもなく楽器にタップリ息を吹き込んだ。まさにステンドグラスから日差しが降り注ぎ、それこそ天使が降りてくるような荘厳さと壮麗さを感じさせるソロ。

（迷いがなくなったな……）

恭一はそう感じていた。それは絵美たちも感じていたようで、陽乃のソロを追うように吹くパートも彼女の演奏に乗せられて実に安定した美しい音色を吹いていた。特にすぐに後を追う佳菜と駿の音色は澄んだものになっている。さらに緊張させるのが拓真たちの低音パートだ。まだ少しモゴモゴ言うことが稀にあるが、先月初めに比べればずっと音は安定していた。

そして、すべてを包み込むような沙希のハープと恵梨のチェレスタ。最後にそのソロの終わりを告げるような晃の銅鑼が鳴り響いた。絵美、優輝、麻衣子のクラリネットが最後のメロディを吹き終えると同時に、恭一が指揮を止めた。

「よぉし！　いいぞ、朝倉！　今の音色を本番までにさらに磨き上

げてくれ！」
「はいっ！」
陽乃は心の中で飛び跳ねたい気持ちが溢れ返るのを感じていた。
7月に入り、コンクールまで1ヶ月を切る。その中で部員たちの緊張感は日々、増して行くのだった。

第３５２話　文武両道

７月６日（土）。明日の病院と公園でのコンサート練習を終えてから、恭一が提案した。

「どうだ？　高校野球の応援曲、練習してみないか？」

「したいです！」

沙希が真っ先に同意する。２年生も大きくうなずく。１年生はどちらでも良いというような感じであったので、早速部員たちは野球部の応援曲の練習をすることにした。

「とりあえずだ……。選手と曲の順番はこういう具合だからな」

恭一が紙を手渡していく。受け取った沙希は、自分の彼氏である雄平の名前をしっかりと確認した。

1. 大塚　友吾　エンターテイナー
2. 宇都宮　融　アフリカン・シンフォニー
3. 兼崎　純也　サウスポー
4. 相田　雄平　必殺仕事人
5. 小森　遼太郎　Ｍｉｃｋｅｙ
6. 佐藤　圭佑　夏祭り
7. 旗本　一　サンバ・デ・ジャネイロ
8. 渡辺　和希　さくらんぼ
9. 樋口　聖夜　キューティーハニー

「他に、必要に応じて配った曲もできるようにな」

「はい！」

他に配られたのはどか～ん、狙いうち、ダッシュＫＥＩＯ、蒲田行進曲、タッチ、鉄腕アトム、負けないでといった具合である。

「それじゃ、エンターテイナーから演奏してみるか！」
「はい！」
しばらくすると休憩していた野球部員たちの耳に普段とは明らかに違う吹奏楽部の音色が聞こえてきたので、何人かが反応した。
「なんだ？　吹奏楽部らしくない曲が……」
雄平が笑いながら言う。
「バァカ。吹奏楽でも、Ｊ－ＰＯＰとか演奏するんだぞ」
「え？　マジで？」
「あぁ。あれは多分……おーい、友吾！」
大塚　友吾が振り返るといやにニコニコした顔をしていたので雄平は笑いそうになった。
「お前の曲だろ？　あれ」
友吾はウンウンと大きくうなずいた。
「お前の曲ってどういう意味ですか？」
後輩の質問に雄平が答える。
「今年から、吹奏楽部が俺たちの試合のとき、応援に来てくれるんだよ」
「え！　ホントっすか！？」
「あぁ、マジマジ」
「やったー！　ちょ、聞けよみんなー！」
後輩が嬉しそうに同級生たちの輪の中に突っ込んでいき、その話をすると彼らの中からまた歓声が沸き起こった。
実は、これまで七海高校の野球部は吹奏楽の応援というのがなかったため、少なからず寂しい雰囲気が試合のときには漂っていたのだ。しかし、今年からはそう言った雰囲気を味わわずに済む。そう思うと、雄平も嬉しくて仕方がなかった。
「よし！　練習再開！」
「ウッス！」
野球部員たちの気合いもさらに強くなる。校庭に男子特有の低い声が響き渡った。

一方の吹奏楽部員たち。いろいろと応援するに当たって考えなければならないことがあった。

まずは、全員が吹き続けないこと。各パートで奏者を調整し、全員が常に吹いているという状態は避ける方向にしていた。理由はまず、コンクールまでに自分たちの調子を狂わせないため。そして、暑さの中応援するのだから、体調を崩さないため。そのために、交替で演奏をすることにしたのだ。たとえそれはコンクールメンバーでなくとも、交替は厳守することになった。

次に、木管楽器はタオル等で楽器をしっかり保護すること。直射日光に木管楽器を長時間晒すのは不都合なためである。

それからチューバは原則こういった応援の際は、七海高校ではスーザフォンを用いることになっている。スーザフォンは肩に負担がかかるため、また、息遣いもクセがついてしまうためにできる限り、応援の時のみに使うようにしていた。それでも、しっかりと演奏すればスーザフォンであっても自分のものにすることができる。なので、今回はスーザフォンを吹きこなすチャンスだと拓真たちは考えていた。

1時間ほど、野球応援の曲を練習して合奏が終わった時には午後6時を過ぎていた。

「よし……。明日は本番が控えていることだし、そろそろ終わろうか。部長、号令」

「起立！　礼！」

「ありがとうございました！」

挨拶を終えるとすぐに部員たちはその日うまく吹けなかった箇所や自信のない箇所を練習し始める。一方の3年生たちは、すぐにクールダウンを始めた。

「先輩、もうお終いですか？」

「あ～、今日はちょっと東先生に補習してもらうつもりなの」

陽乃が勇の問いに苦笑いで答える。

「補習ですかぁ。大変そう……」

「来年は松尾くんがその番なんだから、覚悟しておいたほうがいいよ」
「はぁーい」
勇はまだそれほど真剣に捉えられない様子で笑いながら答えた。
それからすぐに陽乃は多目的室で補習を受け始めた。しかし、遠くからかすかに聞こえるトランペットの音色が耳について落ち着かない様子だった。恭一もそれに気づいているようで「朝倉。集中」と注意を促す。
「はい」
陽乃はそのたびに頬をパンパンと叩いて気合いを入れなおす。
(楽器が本当に好きなんだな、この子は……)
恭一はそう思うと嬉しかったが、自分の教え子が浪人してしまう、それも吹奏楽が少なからず影響したなどと言われるのは本望ではない。なので、こうして厳しく指導しているのだった。
「朝倉！　また集中力途切れてる！」
「あ、すみません！」
陽乃は気づけばすぐに右手が課題曲でのトランペットの動きをしていた。恭一は苦笑いしながら、しばらくして陽乃がわからないという古文の現代語訳を教え始めるのだった。
一方の沙希と慎也、美里は偶然帰りが一緒になった野球部の雄平と佐藤　圭佑と一緒に帰路についていた。
「すげぇよな、吹奏楽部」
圭佑が感嘆の息を漏らす。
「え？　どこらへんが？」
美里が不思議そうに聞き返す。
「全部だよ。俺、知らなかった。吹奏楽っててっきり、ほらなんだっけ……。あれだ！　白鳥の湖とか……なんたら割り人形ばっか演奏するのかと思ってた」
美里がブーッと吹き出す。
「確かにそれも演奏するけど、本当にジャンルは広いよね、慎也」

「あぁ」
慎也がうなずく。
「といっても、俺たちも中学の時は佐藤と同じこと考えてたけどな」
「そうなんだ！　意外！」
圭佑は驚いて目を丸くしていた。
「でも俺から言わせれば、野球部のほうがすごいと思うけどな」
慎也の言葉に美里がうなずく。
「あたしもそう思う～」
美里がうなずく。
「なんで？　どのあたりが？」
「暑い中、よく集中力切らさずに毎日練習して、体調崩さないし文句言わないし……。俺らの部ではやっぱり、暑さでブーブー文句言う女子とかいるもん」
今度は圭佑が吹き出した。
「それはお前らが俺らの活動を外からしか見てないからだよ」
「そうかなぁ？」
「そうだよ。影では監督の文句言ったりしてるし」
「主将への文句もあるだろ？」
雄平の言葉に圭佑が少し動揺した。
「しねぇってことは、あるんだ！　ショック！」
雄平の反応に美里、沙希、慎也が大笑いする。
「けどまぁ」
沙希が言った。
「ドコの部にも大なり小なりそういうイザコザ、あるよねぇ……」
「確かに。ウチの部も結構モメることあったしね」
美里がウンウンとうなずいた。
「でもま。2年前には考えられないコトいっぱいあるよな」
慎也が呟いた。美里も沙希もそう思っていた。2年後にはこうして野球部員とも親しい関係になっているとは思ってもみなかったことだったし、後輩や同級生との関係に悩んだりすることも考えたこ

とがなかった。
「あぁ。俺たちも引退が目に見えてきた年に、こうして応援してもらえる人たちが来てくれて、すっげぇ嬉しい」
雄平と圭佑の笑顔に、沙希たちは本当に応援すると決めてよかったと感じていた。
「そんじゃ、俺たちはここで」
圭佑と雄平が分かれる。
「うん！　またね」
「沙希。またな」
「うん。バイバイ」
２人と分かれて、やがて沙希も慎也と美里と分かれた。
「ただいまー！」
「Ｏｈ！　沙希、オカエリ！」
マーガレットが笑顔で迎える。マーガレットたち留学生は今テスト期間なので、部活は休みなのだ。
「どう？　野球部の応援は！」
「うん！　曲も決まったから、マーガレットも楽しみにしておいて」
「日本の野球の試合、とっても楽しみ！」
マーガレットは沙希のカバンを手にしてスキップをしながらリビングに駆け込む。
「マミー！　沙希が帰ったよ！」
「あら、おかえり！　今日は早かったのね」
「うん。明日、本番だから」
「そうなの？　暑さで体調崩さないようにしなさいよ」
「はぁーい」
沙希は返事をしてから自室へと上がる。
「……。」
よく日焼けした雄平とのツーショット。吹奏楽部と野球部のカップルなので、試合で応援に行ったりしたら茶化されないかどうか、少し沙希は心配していた。

「変な悩みよね」
沙希は笑いながら、服を着替え、下に降りていく。2年前には歪み合っていた運動部と文化部が、今はこうして連携し合っている。世の中どうなるかわからないな、と沙希は思いながらリビングへと向かうのだった。

第３５３話　音の割れ

７月９日（火）。無事に公園と病院での七夕コンサートを終えた吹奏楽部。次の行事は野球の応援と正念場である吹奏楽コンクールの川崎地区大会のみだった。

「先輩」

麻衣子が翔を呼ぶ。

「うん？　どないしたん？」

「あの……妹、こないだの演奏聴いて、すっかり元気になっちゃって」

「おっ！　ホンマかいな。そりゃあよかった」

翔はコンサート当日の朝に、有里と麻衣子が姉妹であることから彼女の事情まですべてを話していた。翔のことだから、と麻衣子は予想していたがやはり演奏だけに留まらず、有里に直接励ましの言葉をかけたようだ。

そしてこれはおそらく、麻衣子の予想であったが有里は翔に何らかの形で彼女の気持ちを伝えたのだろうと思われた。翔が少し赤くなりながら帰ってきたことに加え、その直後に有里の顔を見たとき、麻衣子は少し有里の目が潤んでいることに気づいた。

しかし、翌日月曜日にはケロッとしていたのだ。おそらく、吹っ切れたのであろう。そして、あれほど嫌がっていたにもかかわらず、退院したのだ。

「それで？　学校には行けそう？」

「はい。あの子、部活にも頑張って顔を出すって」

有里はバレーボール部に在籍している。

「ホンマに？」

「はい。友達や先輩が心配してるからって……」

翔はニカッと笑い、「ホンマに良かったなぁ」と嬉しそうに言った。

「本当にありがとうございました！」
「いえいえ！　んじゃ、オレらも頑張ろうな！」
「はい！」
午後5時ちょうどに、恭一が姿を見せる。
「こんにちは！」
「こんにちは。よし。じゃあ今日は……課題曲中心で行くぞ」
「はい！」
「頭から」
「はい！」
恭一の指揮に合わせてファンファーレが始まる。しかし、冒頭部分に入ってすぐに彼は指揮を止めた。
「ストップ！　金管、音が荒い！」
「はい！」
「昨日のパート練習でも音を聞いてたけど、どうも七夕コンサートのテンションを引きずってるようだな」
「すみません」
「特にヒドいのがトロンボーン、トランペット」
陽乃と慎也が顔をしかめる。昨日、音の割れを無くすためにロングトーンをかなり続けたのだが、やはりまだ抜け切っていないようだった。
「名指しするけどいいか？」
「……はい！」
トランペット・トロンボーンの面々の表情が強ばる。
「松尾、富士原、江藤の3人。音が最悪」
「すみません」
「まだ荒れ気味なのが藤咲、川崎、吉山」
「すみません！」
「しっかりしろよ！　コンクールまで時間ないぞ！」
「はい！」
「それからサックス！」

翔がビクッと体を震わせた。
「特にアルト！　お前ら、昨日のパー練で何をやってた!?　メロディの歌い方が先週と全然違うじゃないか」
「す、すみません！」
翔、麻綾、夏樹の３人が同時に返事をする。
「いいか？　全員に言っておくけど」
部員たちの表情が強ばる。
「コンクールメンバーから外れている中野、歌川、速水、佐野綾音、常盤、塚口にも課題曲と自由曲の練習をさせている。もしも、彼らのほうがメンバーとして適していると感じられることがあれば、学年は関係ナシ、時期も１日前だろうがなんだろうが変更するからな。気を抜くな！」
「はい！」
まさかの言葉に部員たちは驚きを隠せなかった。どこかでコンクールメンバーになった以上は安心だという気持ちが多かれ少なかれあったのだ。
「別に、５０人キッチリで出る必要はないから、コンクールメンバーから外れるパートだってありえるぞ」
それはフルートやテナーサックスなど外れることのなかった部員がいるパートへの警告とも取れる言葉だった。
「気持ち引き締めなおせ！」
「はい！」
「じゃあ課題曲頭からもう１回！」
「はい！」
その頃、外を翔の弟である智輝が友人宅から帰宅するために七海高校の前を通っていた。
「あ。楽器の音」
智輝にはまだどの楽器がどんな音をするかはわかっていないが、兄の吹く楽器の音はなんとか覚えることができていた。
なんだか難しそうに聞こえる曲が音楽室から漏れてくる。

「兄ちゃんの吹奏楽部、上手いじゃん」
機嫌よく進んでいく曲。しかし、それが突然途切れたと思うと怒声が飛んできた。
「スネアー！　ズレてる！」
智輝は外にまで聞こえてくる声に驚いて目をつむってしまった。
「スネアとホルンがズレてちゃ、誰が後打ちそろえるんだ！？　よく考えろ。基準をどっちにしたほうが合う！？」
「スネアです！」
複数の声が聞こえてきた。
「そうだろ！？　わかってるなら初めからそうしろ！」
「はい！」
「……。」
智輝はまさかここまで厳しい指導を兄たちが受けているとは思わなかったので、なぜか緊張してすぐにその場を離れてしまった。

合奏が終わったのは午後7時前だった。
「よし。明日は自由曲の……逃亡部分を合奏するからな。木管楽器、よろしく」
「はい！」
「部長、号令」
「起立！　礼！」
「ありがとうございましたー！」
そこで緊張の意図が緩むかというと、そうではない。おのおの、今日の合奏でできなかった部分などを復習するのだ。
「ごめん、本堂くん。いい？」
「おう」
美里の声に拓真が振り返る。
「前打ちと後打ち、やっぱりもう1回合わせとかない？　どうもズレるし……」
「そうだな。だったら、秦野さんも一緒にどう？」

「あ、そうね。あたしと一緒に後打ちの感覚掴んでみるのもいいかも。エリリーン！」
美里に呼ばれて恵梨が振り返る。
「前打ちと後打ちの練習するからさー！　ちょっとこっち来て！」
「はい！」
「先輩！」
あずさが美里を呼ぶ。
「なにー？」
「ベードラ、いりますよね？」
「もちろん！　そこからでいいよ！」
「はぁい！」
拓真、智志、好美、亮平もパーカッションのほうを向く。
「ねぇ。基準は誰？」
美里が拓真に問う。
「そうだな。前にも言ったけど、一番楽器と手の距離が近いのがみーやんだから、みーやん基準なんだけど……弦楽器でどうしても音がパーカスのほうまでは飛ばない。だから、みーやんに近い俺が彼の音聴くようにする。だから、それをうまくさとっぺとヨッシーが聴いて。んで、それをうまくホルンのジュンペーから緒方（おがっち）まで伝えて。それからさらにパーカスへ。こんな感じが理想かな」
「はい！」
翔はいつの間にか拓真がそこまでいろいろと曲想のことを考えて指示が出せるようになっていたことに、少しの驚きと嬉しさを感じていた。
「あー！」
陽乃が大声を上げるので、翔は驚いて今度はそちら側を見る。
「なんか違うのよ～。なんていうのかなぁ……ドカーン！って音は野球の応援の時使ってよ。松尾くんの音の使い方、まるで逆」
「すみません……」
勇の表情が曇る。

「いい？　元気ハツラツな音は野球の応援でヨロシク。これは課題曲で、ブルースカイだから確かに元気な音はいいけど、綺麗で透き通った音。ハツラツっていうのとは少し意味が違うからね」
　そういうと陽乃は楽器を構え、息をまっすぐに通してベーの音を吹いた。クリアな音が室内に響いた。
「わかる？」
「はい！」
「じゃあ、そういうイメージで、1、2、3！」
　勇の音が少し変わった。
「そう！　それ！　その音！　じゃあその音よく聴いて……藤咲くん」
「はい！」
（もう安心かなぁ）
　1年前であれば、翔がちょくちょく拓真や陽乃にアドバイスをしていたが、今年はどうやらその必要はないようであった。
　翔が部室に入ると、由美子たち楽譜係が楽譜棚からたくさんの茶封筒を出していた。
「おわ！　どないしたんや、また」
「あぁ、佐野くん。ゴメンね散らかしちゃって」
「楽譜探しか？」
「そうなの～。先生の指示でね」
「ふぅーん」
　翔は由美子のそばにあった紙を手に取る。
「これ、いつすんの？」
　翔の声が少し変わったので由美子が振り返る。
「あ。まだ皆には内緒だけど」
　由美子が翔に耳打ちする。
「……ホンマか！？」
「ホント。でも、今はコンクールにみんな夢中でしょ？　まぁ、佐野くんは部長だから先生言ってもいいって言ってたしね。よろしく

ね」
「おう！」
翔は満面の笑みを浮かべて答えた。由美子のそばにあった紙。そこには『Ｍａｓｑｕｅ』、『もののけ姫メドレー』という2曲のタイトルが書かれていた。
同じ頃、職員室では恭一が風見台高校に電話を掛けていた。
「あぁ、どうも兵藤先生！　いかがですか？　そちらのほうは」
「いやぁ～苦労しておりますよ。なかなか課題曲が思うように行かずに……」
「同じですね～。ウチもちょっと野球の応援とかが入ってきて、音が荒れ気味で」
「この時期はどこも同じですなぁ」
二人は同時に笑い出した。
「ところで、お電話させていただいたのは先日もお話させていただいた件なんですが……いかがですか？」
「えぇ。うちの楽譜係に探させましたら、ローザのほうはやはり3年前にやってましたので、ありましたよ」
「本当ですか！　いやぁ、助かります」
「また近々会合でお会いしますでしょ？　そのときにお渡しします」
「ありがとうございます。では、またよろしく」
恭一は挨拶を終えると受話器を置いた。
「後は……。そうだ。川崎と……佐野に……朝倉……中野あたりだな」
そう呟いた後に、彼は放送マイクで４人の名前を呼んだのだった。

第３５４話　はるばる遠くから

「あ、もしもーし。さゆりでーす」
さゆりが帰宅後、すぐに携帯電話をかけていた。
「さゆ姉？　どうしたのー！　急に電話なんてしてくるから、ビックリするじゃない！」
電話の相手は島根県桜田中央高校に通う彼女の従姉妹である、中島　唯だった。
「いやぁ～、最近どうかなっていうのとちょっとお願いがあってさぁ」
「さゆ姉から？　珍しいね。何？」
「実は２つお願いがあって」
さゆりは七海高校で第１回定期演奏会が１１月２３日にあることを伝えた。すると唯は大興奮した様子で、是非にでも聴きに行きたいと騒いでいた。しかし、実際のところを考えると前日は平日であるので少々難しい。なので、無理はしなくて良いと伝えるのだが、唯はなるべく行くようにすると言っていた。
そしてお願いというのは楽譜のことであった。
「うーん……。ウチ、まだ創部間もないからなぁ」
唯が首を捻る。
「やっぱり厳しい？」
「あ。でも待って……。ウチの中央が出きる前に西高校っていうのがあってね。確かそのときの楽譜があるはずなの」
「本当？」
「確か……あ、ちょっと待ってね。ねぇー、先斗（さきと）～」
電話口の向こうから「んー？」という少年の声が聞こえてきた。
それからしばらく複数の声が聞こえてきた後、ようやく唯の声が電話口から聞こえてきた。
「あったよ、さゆ姉」

「本当？」
「うん。ウチの部のバリサク吹きが見たって」
「わぁー！　助かる！　ねぇ、そのバリサク吹きさんにヨロシク言っておいて！」
「はぁい。あ、でも先生に聞いてみないとなんとも言えないよ？」
「うん！　あ、一度ウチの東先生から改めてお願いの電話を入れたいから、そっちの電話番号教えてくれない？」
「ウチの高校？　いいよ。えーっとね……」
さゆりは電話番号をメモした後、「そっちも練習頑張ってね！」と言ってから電話を切った。
一方の陽乃。
「あ。もしもし？　わかります？　神奈川県の七海高校の、朝倉です」
「あ！　朝倉さん！　お久しぶりですー！」
電話の相手は石川県古氷町立古氷中学の津嶋ともみであった。
「ゴメンねぇ、急に電話なんてしちゃって」
「いえ！　メールでの件ですけど、早速先生に聞いてみたんです！」
「もう！？　なんか悪いね……」
「いえ！　それで、楽譜は2つありました。明日、先生が送ってくださいますので！」
「あ、もちろん着払いでお願いね！」
「そうなんですか？」
「当たり前じゃない！　こちらから厚かましいお願いしてるんだから、そうじゃなきゃ」
「はぁーい。了解です！」
それから陽乃は最近の出来事などをしばらく話していき、話はともみたち古氷中学のメンバーが定期演奏会を聴きに行ければ行きたいということへ移っていた。
「えぇ！？　本当に？」
「はい！　部の東京観光も兼ねて。ちょうど3連休なので。私たち

はなかなか、東京とか出られないですから」
「わー！　嬉しい！　でも、無理だけはしないでね？」
「はい！　じゃあ、楽譜は届きましたらいちおう、私まで連絡くださいね」
「了解！　じゃあ、本当にありがとう。またね！」
陽乃はまさか定期演奏会にともみたち古氷中学のメンバーが来てくれるとは思わなかったため、さらにやる気に磨きがかかった。
そして、ほぼ同じ頃に慎也は中学時代の後輩である永瀬　信二に電話を掛けていた。
「はい！　永瀬です」
「家電かよ！」
携帯電話にもかかわらず苗字を名乗る信二に、思わずツッコミ体質が感染ってしまった慎也は真っ先にそう言ってしまった。
「どうされたんですか？　電話なんて」
「用事があるからに決まってるだろ」
「先輩……。そのつっけんどんな態度、いい加減治しましょうよ～」
「うるさいな！　話進まないだろ！」
慎也は赤くなりながらも、話を続けた。１１月２３日に定期演奏会を開催すること、それに当たって楽譜を貸してほしいものがあることを伝える。
「あ、そうなんですか！　すごいや……！　俺たちも聴きに行きますね！」
「お前は来なくて良い」
「ひどい……。この話はなかったことに」
信二が電話を切ろうとするので、慎也は慌てて「わー！　うそうそ！　大嘘！　ごめんなさい永瀬先輩！」とフォローを入れた。
「冗談ですよ！　えーっと……先生に聞いてみないと許可出るかわかりませんが、『Ｍａｓｑｕｅ』以外ならありますよ」
「本当か？　じゃあ、ウチの東先生から一度正式に電話させてもらうから、虹西の電話番号、教えてくれないか？」

「了解です」
慎也は電話番号を聞いて、信二に「コンクール頑張ろうぜ」と言ってから電話を終えた。
そして翔。
「もっしもーし！　カケルでーす！」
「うるさいやっちゃな！　ディスプレイにアホの佐野って出るからわかるわ！」
開口一番、大声で名前を名乗る翔の大声に、大阪時代の友人である内山（うちやま）　大輔（だいすけ）は顔をしかめていた。大輔は雪子が転校した光来高等学校吹奏楽部の部長を務めており、楽器はユーフォニウムを担当している。ちなみに、彼のユーフォニウム歴は小学校４年生からであり、その実力は吹奏楽ソロコンテスト全国大会で金賞を受賞するほどである。ソロコンテストで全国大会に行った拓真とも知り合いになっている。
「ほんで？　楽譜のことやろ」
「そうそう！　ありそう？」
「ウチにあるのはあれとこれだけや」
「マジで！　それだけあれば十分やぁ」
翔の顔がほころんだ。
「ほんで？　用事はそんだけか？」
「あぁ……せやけど。なんやつれへんなぁ～。久しぶりに電話してんねんから、もうちょっと話そうや」
「キモい」
翔は普段と様子の違う大輔の口調に気づき、問い詰めてみることにした。
「お前……なんか隠してへんか？」
「別に」
長年の付き合いなので、友人が隠し事をしているときはどのような態度になるか、翔も把握している。ちなみに、修平であれば目線が泳ぐ。翔平であれば貧乏ゆすりをする。翔自身であれば、手先が

落ち着かなくなるという具合であった。
　大輔の場合は態度が素っ気なくなるのだ。こういう場合、かなりの確率で隠し事をしているのだ。
「ウソやな」
「なんでそない思うねん？」
「お前の態度が素っ気ない」
「もうえぇやろ！　用事終わったなら切るで！」
　その直後だった。聞き覚えのある声が大輔を呼んだ。
「大ちゃん！　おばさんがクッキー食べろって言ってくれたよ！」
「！」
　その声に翔は即座に反応する。そしてニヤけてしまう。電話の向こうでは小声（本人はそのつもり）で大輔が「雪子！　静かに、静かに！」と促していた。もちろん、その名前を言ったことが決定打となったのだが。
「知らんかったわぁ～」
「何がやねん」
「末永くお・し・あ・わ・せ・に！　じゃあよろしゅうな！」
「……どうもおおきに！」
　大輔のヤケクソ気味な応答を聞いて、ククククッと笑いながら翔は電話を切った。それからすぐにメールが入る。ほぼ同時にさゆり、慎也、陽乃からだった。
「お！　おぉ～……だいたい揃うんやな！　よかった～」
　翔はそのメール内容を見て安心し、返信を始める。
「兄ちゃん。お風呂入りって……あれ？」
　綾音が翔に風呂に入るように部屋に来ると、彼はスゥスゥと寝息を立てていた。
「もー。風邪ひいても知らんで？」
　綾音はタオルケットを翔に被せてそのまま部屋をそっと出た。外からは、電車の走行音だけが翔の部屋に響いていた。

第３５５話　図書室での出来事

「ブェックシ！」
翔が音楽室に姿を現すなり、クシャミを発するので部員たちが彼に視線を集中させた。
「どうしたんですか？」
順平が心配そうに尋ねる。
「昨日、腹出して寝てたらちょっと風邪気味っぽくて」
「えー！　部長がそんなんでどうするんですか！」
駿が苦笑いしながら言う。
「スマンって。これからは気をつけるようにするから、今回は勘弁して！」
「それはいいんですけど……。先輩、来週からテストですよ？　大丈夫なんですか」
そう。七海高校では来週１７日から４日間の日程で１学期末の試験が行われるのだ。
「大丈夫やって！　気合い十分やから、任しとき！」
「ホントですかぁ？」
かのこや茉莉紗がケラケラと笑いながら言った。
あながち、翔の気合いというのは冗談ではない。前回の模試で残念なことにＣしか取ることのできなかった翔。今回の期末試験では８０点未満を一切採らないと友美子と約束したのだ。もしも、１教科でも１点でも８０点未満があれば、夏休みは部活を７時までに切り上げ、必ず塾に行くということになっていた。もしも、すべての教科で８０点以上採れれば、塾には遅刻しても良いという条件が与えられた。
しかしながら、島根大学を目指すためには８０点程度で妥協して

いるわけにはいかない。だからといって、部活のほうを手抜きするつもりなどさらさらなかった。

いま、七海高校吹奏楽部は試験1週間前であり、かつコンクール前でもあるので部活は完全休みではなかった。30分だけロングトーンと曲の練習をした上で帰宅し、残り時間は試験勉強に充てるように、という恭一の指示があった。もちろん、留学生もそれなりに試験があるため、同様の扱いである。

「お疲れさん！」

「お疲れ様です！」

翔は練習を終えるとすぐに帰路に着いた。音楽室ではいつも学年スリッパから専用のスリッパに履き替えている。その靴箱で、賢治と徹に会った。

「あ、お疲れ様です」

「お疲れ～！」

その翔の手には単語帳（ターゲット3000）が握られていた。

「単語帳ですか？」

「行き帰りに、覚えるようにしとんねん」

「へぇ～……」

「まぁ、ぶっちゃけなかなか覚えられへんけどな」

翔は苦笑いしながらスリッパを履き替えた。

「んじゃ、お先！」

「お疲れ様です」

翔はすぐに帰宅するわけではない。帰宅時間がこのくらいであれば、智輝と被ってしまう。特に火曜日と木曜日は智輝が彼の友達を自宅へ連れてくることが多いため、逆に集中できないパターンというのが多かった。

そのため、火曜日と木曜日は習慣のように図書室へ通っていた。静かで意外と人数も少ないので、勉強に集中できるのだ。

翔はそっと扉を開き、室内に入る。学習スペースが設けられているので、そこへ座っていつものように古文問題集とノートを開いた。

（えーっと……これは……係り結びの法則使ってるからこの部分だけは……）

２０分ほどしてから翔はふと辺りを見渡した。

「……。」

最近なのだが、図書室にかようになってから何故か時たま視線を感じるのだ。気のせいかと思うのだが、図書室に通うようになったのは7月に入ってから。そして、7日のコンサートを終えてから、図書室で視線を感じるようになったのだ。

「何やろ……」

あながち気のせいだけで済まされるような状態ではない。こうも連続していると、さすがに気味が悪くなってくる。

「翔」

陽乃が小声で翔を呼ぶ。

「お。お疲れ～」

「どう？　調子は」

陽乃がカバンを置いて隣に座る。

「うん。ボチボチや」

「そう。こないだ言ってたあの意味はわかった？」

「なんとかな。お前のおかげで訳せるようになった」

「そっかー！　よかった」

陽乃はカバンから英語の辞書とノートを取り出す。こうして、陽乃と一緒に図書室で勉強するようになったのも図書室に通うようになってからだった。そして、陽乃が来ると同時にいつも感じていた視線は感じなくなるのだ。

「……変なの」

「何が？」

「あ、いや！　何でもないよ」

「そう？」

陽乃は首を傾げつつも、英語の訳に意識を戻す。

（気のせいなんかなぁ……）

一方の陽乃も、翔に言えないことがあった。
こうして図書室で勉強を始めると必ず、直後に視線を感じるのだ。
それもあまり居心地の良い視線ではなかった。
（あたし……何か変なことしたかなぁ）
陽乃がそっと辺りを見渡す。しかし、陽乃を凝視しているような生徒は学習コーナーにはいない。いつもそうなのだ。
2時間ほど勉強し、午後6時になった。図書室は午後6時半閉館なので、翔たちはいつも6時に図書室を出るようにしている。
翔はさすがに毎日感じる視線に気味悪さを感じ、陽乃に相談することにした。
「なぁ……ちょっと相談乗ってもらってええかな？」
「翔が相談？　珍しい！　あたしから翔にってのはよくあるよね」
「ハハ！　確かにな！」
翔はそうやって笑ったが、なんとなく空元気であるように陽乃も感じていた。
「それで？　相談って？」
「なんかな……図書室おったら、視線を感じるねん」
陽乃がギョッとした様子になったので、翔は驚いてしまった。
「どないしてん」
「実はさ……あたしもなんだよね」
「そうなん！？」
翔が身を乗り出した。
「うん……なんだ、翔もなんだね」
「気色悪いやろ～。なんなんやろ……。オレら、なんかしたか？」
「覚えないけど……」
二人は沈黙してしまった。やはり、心当たりなどない。
「誰かもわかんないしね」
「どないしょーもないな」
どうしようもないので、翔たちは首を捻りながら学校を出た。
「しっかし暑いなー！」

校舎を出ると夕暮れが近い時間にも関わらず、まだきつい日差しが2人を照らし出した。
「ホントにねぇ」
「でも、この季節が来るとオレはコンクールの季節キターッ！てなるねん」
「なんでネット風！？」
陽乃はクスクスと笑う。
「まぁ、それはえぇとして。とりあえず勉強、頑張らんとアカンよな！」
「そうだね。成績がグダグダだと気持ちよく部活できないもんね」
そう言って陽乃が笑う。
「あれ？」
突然陽乃が声を上げた。
「どないしてん？」
「ヤッバーい……。英語の文法ワーク、忘れてきちゃった」
「アホやなぁ。早よ取って来い」
「うん！　ゴメンね！　すぐ行ってくる」
陽乃がバタバタと階段を上がる音を聞きながら、翔は暇つぶしにｉＰｏｄを取り出して課題曲を聴き始めた。すっかり耳なじみになった曲である。
「フンフーン♪　フ～ン♪」
不意に、傍に誰かが立っているような気がして翔は振り返ろうとした。
「ワーク、あったか？」
翔はイヤホンを外し、立ち上がった。
「え？」
しかし、そこにいたのは陽乃ではなかった。
「おう」
そこにいたのは陽乃と同じクラスの野口（のぐち）　麻由美（まゆみ）であった。
「どないしたん？　野口さん」

「あっ……あたし……」
「？」
不意打ちだった。
翔の体を、彼女の両手が包み込んでいたのだ。
「……ちょ！」
翔は慌てて彼女を突き飛ばしてしまった。衝撃で翔も尻餅をついてしまう。麻由美もペタリと尻餅をついた。
「何やっとん！？」
「……っ」
麻由美はそのままカバンを拾い上げ、走り去っていった。
「今の……下手したら……」
キスをされていたかもしれない。翔は顔を真っ赤にしていた。
「……。」
「！」
人の気配がしたので振り返ると、夏樹と綾音、萩が立っていた。
「違う……違うからな！　今のは……」
どうしていいかわからず、翔はふと気づけばその場から走り去っていた。綾音たちの間を走りぬけ、階段を駆け上がっていく。
「……。」
綾音は状況を飲み込めず、呆然と立ち尽くしていた。
「朝倉くん！」
萩がガッシリと夏樹の体を掴んだ。
「今の……絶対、お姉さんに言っちゃダメだからね！？」
「わ、わかってるよ俺だって……」
夏樹が呟いた。
「姉ちゃんをわざわざパニくらせるようなことなんてしないよ……」
「あれ？」
陽乃が教室を出ると、翔が肩で息をしながら立っていたのだ。
「どうしたのよ？　すぐに戻るって言ったじゃな……」

その言葉を遮るように、翔が陽乃を抱き締めてきたのだ。
「ちょ……！」
そして、そのままキスをしようとする。
「やめて……翔！」
陽乃が翔を思い切りつき飛ばした。
「何考えてんのよ！？」
彼女の甲高い声が廊下に響く。
「……ゴメン」
「何かあったの？」
「見られてた人が、わかった」
「え？　本当？　誰？」
「お前のクラスの……野口さん」
陽乃は静かな声で聞き返した。
「それと……いま抱きついてきたの、関係あんの？」
翔は小さくうなずいた。
「野口さんに、抱きつかれて……その……」
翔がブルブルと震え始めた。
「急に、不安になった」
「大丈夫だよ」
陽乃が翔の肩を摩った。
「何も不安になることないよ……」
陽乃はゆっくりと翔を抱き締める。
「……。」
翔の目から涙がポロッとこぼれ落ちた。陽乃は状況を飲み込めないまま、翔が落ち着くまでしばらくその場に座り込み続けるのだった。

第３５６話　メンズ・バス２ｎｄ（前書き）

メンズ・バスの１ｓｔは『愛を奏でて』にて掲載しております。

第３５６話　メンズ・バス２ｎｄ

「え？　翔を？」
慎也が美里の言葉に目を丸くした。
「うん。陽ちゃんから頼まれちゃって」
「なんで俺らが？」
「男子は男子だけでそういう話、したほうがいいんじゃないかって。素直になってくれるんじゃないかって言うのよ」
「裸の付き合いってヤツか？」
「そうなんじゃない？　ぶっちゃけどうなのよ、慎也。アンタだってあたしにはまだ言えないこと、あるでしょ？」
「そりゃあ……まぁ……」
慎也がスライドグリスを塗りながら答える。
「あたしだって同じだけどね。まぁ、彼氏彼女でも言えないことの一つや二つ、あるもんでしょ普通」
美里は楽譜を整理しながらアッサリ言った。
「それが、翔にはそうも行かないと」
「そうみたいよ。陽ちゃん自身はそんなこと、考えてもないみたいだけど。陽ちゃんにも佐野くんには言ってない秘密、あるみたいだし」
「そうなのか？」
美里は「あら？　知らない？」と驚いた様子で言った。
「知らねぇよ。俺らが知るわけないだろ」
「それもそっか」
美里はウンウンと一人うなずく。
「それで？　俺らにどうすりゃいいのさ」
「佐野くんと普通に話をしてくれればいいの」

「一番聞きたい部分は聞かなくていいのか？」
慎也の言う一番聞きたい部分。それは、翔の不安がどこから来ているのかということであった。
「それは大丈夫よ。あえて聞かなくても」
「そうか……」
「んじゃま、よろしくね。水谷くんと本堂くんには、エミリンと陽ちゃんが言ってくれてるから」
「おう」
慎也はそう言ったものの、安請け合いしたことを少しだけ後悔していた。
そしてその日の合奏が終わってからすぐに、慎也が翔を呼んだ。
「カケル」
「ん？」
翔が振り返る。
「今日の帰りさぁ」
「お。メシでも行く！？」
「いや、メシじゃなくて……風呂、行かね？」
「は？」
翔が目を点にする。小動物のように春樹がテクテクと駆けてきて慎也の背中にしがみつく。
「俺も俺も！」
拓真がニュッと顔を出した。
「俺もいい？」
「いいじゃん。汗かいたし」
慎也がニッと笑う。翔は戸惑いつつも「うん……」と小声で答えた。
合奏の片づけを終え、クールダウンを終えてから男子４人は部室を出る。
「陽乃」
翔は昨日のことがあるので少し気まずい感じで陽乃を呼んだ。

「なぁに？」
陽乃はいつもどおりだ。
「オレ……今日、慎ボーと春やんと拓あんで……銭湯、行ってくる」
「えー！　いいなぁ～。あ、わかった。はやぶさ冷蔵の跡地にできたスパ銭でしょ！」
「そうなんか？」
翔はどこまで行くかは聞いていなかったので、逆に陽乃に聞き返してしまった。
「銭湯でこの近所って言ったら、そこしかないよ。いいよ！　気をつけてね」
「うん……」
陽乃が笑顔で見送ってくれたので、翔はなんとなく少し気持ちが和らいで行くことができた。
スーパー銭湯は部活帰りの高校生もちらほらいるようだった。夏休み前なので、まだ比較的人は少ない。
翔たちは受付を済ませ、すぐに脱衣場に入った。
「ひろーっ！」
翔が入るなり大声で言う。
「新しい匂いするね」
春樹が鼻をフンフン言わせながら匂いをかいでいる。
「とにかく、入ろうぜ」
慎也が制服を脱ぎ始めたので、翔たちもつられて脱ぎ始める。それからすぐに浴場に入った。
体を洗い洗髪も済ませてから、いろんな浴槽があるのでまずは濁り湯から入ることにした。
「はぁ～……」
拓真が思い切りため息をついたので「オッサンだな」と慎也が笑った。
「うるせぇな。まだ１８歳だから若いんだよ」
赤くなりつつ拓真は垂れてきた汗を拭った。

「そういやぁさぁ」
慎也が話題を切り開いた。
「進路、決まった？」
「俺は決めたよ」
「マジでか？　どこ？」
翔が驚いて聞くと拓真はニッと笑って言った。
「国士舘大学」
「ふえー！　拓あん、頭いいもんなぁ」
慎也が心底驚いているようで、大声を上げる。
「そういうお前は？」
「俺は亜細亜大学」
「お前こそ俺と似たようなもんじゃん」
拓真がクックッと笑った。
「春やんは？」
「俺は皆もご存知、鎌倉音楽大学」
「決めたんだ？」
拓真の一言に、春樹は深くうなずいた。
「最後は翔だぜ。お前、どーすんの？」
「またまた、慎ちゃん。翔はもう決まってるじゃん。愛しの朝倉さんと島根大学……」
「わからへんなった」
翔が春樹の言葉を遮ってそう言ったので、全員が動きを止めた。
「わ、わからへんって？」
妙なイントネーションで春樹が聞き返す。
「どないしていいか……わからへんなった」
「……。」
沈黙がしばらく続いてから、拓真が切り出した。
「お母さんに反対された、とか？」
ブンブンと首を横に振る。
「じゃあ、親父さん？」

また首を振る翔。
「成績がヤバいとか」
慎也が心配そうに尋ねるが、翔は「それはなんとかする」と言いきった。
「じゃあなんで？」
「……昨日な」
突然昨日の話になるので3人は戸惑いつつも黙って翔の話を聞き始めた。
「陽乃のクラスの野口さんに、いきなり抱きつかれた」
「はぁー！？」
慎也が大声で叫ぶ。
「なぁんだそれ！　お前まさか、告られたんじゃねぇだろな？」
「告られてへんけど……あんなん、告られたようなもんやん」
「それで？　どうなったわけ？」
「キスまで……されそうになった」
「カーッ！　お前、抵抗したんだろうな？」
慎也がますます激昂してお湯をバシバシ叩きながら翔に聞く。
「当たり前やろ！　彼女おるのにやな！」
「なんでそんなことしたのか、意味わかんねぇしな」
拓真が首を傾げる。
「そんなもん、野口が翔を好きだからに決まってるだろ！？」
「それ以外にないね」
慎也と春樹が立腹した様子でうなずいた。
「なんか……あんな玄関で急にそんなことなるとは思わんかったから、パニックなって……。自分が自分じゃない気がして、悶々として……その……」
「……何した？」
拓真が何かを察したようで、そっと聞いた。
「ひっ」
真っ赤になる翔。照れと恥ずかしさと銭湯特有の熱さで真っ赤で

ある。
「陽乃に、いきなり抱きついてしもた……」
「お前……」
慎也が何かを言おうとするのを拓真が遮って聞き続ける。
「なんでまたそんなこと。翔らしくないじゃん」
「もしも野口さんがオレに抱きついてきたこと陽乃にバレたら、オレ絶対フラれるやん？　でもオレ、誰かがおらへんようになるん、めっちゃ怖いねん。ホンマは、この部活引退して新しい環境でやっていけるかどうかもめっちゃ不安やって。でも、陽乃がおるから何とか大丈夫かなって思って。ホンマ言うたら、七海（こっち）来た時も知り合い全然おらへんし、吹奏楽部があればまだ良かったけどなかったし、不安で不安で仕方なかった。自分、ホンマは一人ちゃうんかって……」
翔の素直な告白に、3人は神妙な顔つきで聴くことしかできなかった。
その頃、夕陽を背に由美子、美里、絵美、沙希、陽乃の5人が帰路についていた。
「翔、こんなこと言ったのよ……」
陽乃が話していたのは、翔が慎也たちに話していたことと同様の内容であった。
「なるほどね……」
由美子がうなずく。
「あれじゃない？　ほら……その……言いづらいけど、佐野くんって……震災でご家族みんな亡くしてるでしょ？」
「うん……」
陽乃が小さくうなずいた。
「人が急にいなくなったりすることを、極端に怖がってるんじゃないかな。それに、新しい人との関係を築くことも怖がってるとか……」
「えぇ？　そんな風に見えないけど！　だって、私たちと初めて会

ったときもすっごく明るくて人懐っこい感じで」
絵美が首を横に振りながら大げさに身振り手振りして話す。
「それよ。それが引っ掛かるの」
「どこが！？」
「それが、もしも自分から逢った人たちを放さないようにするために必死になってるとしたら？」
「あ……」
由美子の言葉に絵美も美里も黙り込んでしまう。
「ここはやっぱり、陽ちゃんが直接佐野くんの前で言うべきよ」
「なんて？」
「陽ちゃんは、ずっと佐野くんと一緒にいるっていうことを」
「……。」
陽乃が真っ赤になる。
「それって、事実上の結婚宣言？」
美里の言葉に由美子が噴き出す。
「やぁだ！　そんなんじゃないけど……」
「でもね！」
陽乃が大声で言った。
「あたし、翔は運命の人なんじゃないかなーって思ってるよ、真剣に！」
その言葉に絵美たちが呆然とする。
「え？　あ、あたし何か変なこと言った？」
「ううん」
美里がギュッと手を握る。
「それを佐野くんに直接言え！」
「えぇ！？」
「そうだね！」
絵美が陽乃の手を引く。
「今から言いに行くよ！」
「え！？　ちょっと……やだ、ホント！？」

陽乃は何の抵抗もできぬまま、翔たちの行ったスーパー銭湯に連れて行かれた。

「フーッ……スッとしたぁ」

翔がコーヒー牛乳を飲みながらため息をつく。

「スッキリした？　なんか、悶々とした思いも抜けた？」

「おかげさんでな」

春樹にニッと笑みを浮かべる翔。

「バカ」

慎也が雑誌で翔の後頭部を叩いた。

「なんでバカやねん！」

「そういう笑顔は彼女だけに向けるもんだよ」

「……そうか」

翔はちょっと自分が八方美人なのではないかと考えさせられた。

「俺は最高の笑顔は美里にしか見せないぜ」

「うわぁ。今の、鬱陶しいよ」

「うるせぇ！」

春樹の後頭部を先ほどと同じように雑誌で叩く慎也。

「で？　野口さんにはどうすんのさ」

「メールで聞いてみた。やっぱり……」

麻由美とは昨年、同じクラスだったのでメールアドレスも電話番号も知っている。翔の言葉が途切れる。

「好意持ってるんだろ？」

翔が拓真の言葉にうなずく。

「はっきりしないと、大切なものなくしちゃうぜ？」

「せやな……」

そういうと翔は携帯電話を片手に、少し人気の少ないところに立った。そして、麻由美に発信した。

「……大丈夫かな」

慎也が今頃になって心配そうな口調で言った。

「平気だよ。俺たちが思っている以上に、朝倉さんと翔の絆って、すげぇもん」
「そうなのか？」
「ブレがないんだよ。ケンカしても本気だし、喜び合うときも本気だし。手を抜くことなんてないんだよな。あいつ、隠し事もほっとんどしてないんじゃないか？　自分が養子だったって分かった時も、朝倉さん立ち合わせただろ？　普通しねぇよ」
「確かに……」
春樹と慎也がうなずく。電話は結局、３０分近くに及んだ。
「真っ暗じゃねーかよ」
翔が電話を終えて銭湯を出た頃には午後7時を過ぎていた。暗くなった空を見て慎也がブツブツ文句を言っている。
「まぁ、そう言うなよ。翔だって頑張ったんだし。後は朝倉さんへの報告だな」
「うん……ん？」
翔の目の前に見慣れた少女の姿があった。
「翔……」
「陽乃？」
美里たちの姿もあった。
「いやさぁ、やっぱり、迎えに来たくなったっていうか～」
美里が照れながら笑ってそう言っている最中に、陽乃が走り出した。そしてそのまま翔に抱きついて、思い切りキスをしたのだ。
「うぉ！」
「わー！」
拓真と春樹が真っ赤になる。慎也は見ていられないという様子で両手で目を覆い隠した。
「あっ、あたしは翔があたしを嫌いになってもずーっと好きなんだからね！」
「……。」
翔が真っ赤になって目を点にしたまま、何も言わない。

「翔？　聞いて……」
翔がそのままフラーッと後ろに倒れ始める。
「わー！　何やってんだよ、朝倉さん！」
「わー！　キャー！　ごめんね！　ゴメンほんとゴメン！」
銭湯の前でワァワァと騒ぐ９人。そのまま夏の夜が静かに更けていった。

第３５７話　ドンと来いや！

「よっしゃー！　今日は気合いもテンションも別で行くでー！」
「おーっ！」
７月１５日日曜日。今日は神奈川県高校野球大会の初日であった。翔たち七海高校の野球部はこの日の第三試合に出場し、北松高校と試合をすることになっている。
「集合！」
恭一の言葉に全員が素早く集合する。
「各パート、揃ってるか？」
「はい！」
既に点呼を終え、翔にパートリーダーから揃っている連絡が入っているので万全の体勢であった。
「それでは、指示したとおり各パートで交替ごうたいで吹くように。必ず、偶数回と奇数回で同じ人が吹いていることのないように」
「はい！」
「明日はいよいよ吹連の定期演奏会だぞ。コンクールのリハーサルなんだから、唇を潰すことのないように」
「はい！」
「では、あと１０分で入場できるからな。それまでは日差しのキツくないところで各自休んでおきなさい」
「はい！」
この日の七海市の気温は午後２時で２７度。まだそれほど暑さは厳しくないものの、日差しはかなりあったのでやはり熱中症には気をつけなければならない。
「暑っついわー！」
翔が団扇でせわしなく顔を仰いでいる。土曜日にショートにカットした翔。腕まくりをしていて、何だかますます男らしくなった感じがしていた。陽乃は先日の麻由美との一件で、翔の中で自分が予

想以上に大きな存在になれいるのだと知らされ、嬉しさ半分、不安半分という気持ちであった。
「水筒ちゃんと持ってきた？」
陽乃が隣に座って聞く。
「持ってきたけど、朝でなくなった」
「ちゃんと2本分くらい持ってこなきゃダメじゃん！　はい、これ」
陽乃はペットボトルで凍らせたお茶を取り出した。
「なんでや。お前のやんけ、これ」
「いいよ。あげる」
「マジで？　えぇんか？」
「いいよ。あたし、朝のがまだ余ってるから」
「おぉー！　おおきに」
翔は嬉しそうにペットボトルを受け取り、溶けてよく冷えたお茶をグイッと飲み干した。
「朝倉先輩は、おなか空かないんですか？」
麻綾が心配そうに聞く。
「なんやお前。昼飯食べて2時間ちょいしか経ってへんのに、もうおなか空いてるんか？」
「ま、まぁ……」
するとあずさが首を横に振る。
「違いますよ、佐野先輩。朝倉先輩、暑くて食欲ないってお昼、抜いたんですよ」
翔はそれを聞いて目を丸くした。
「アカンやんけ。夏場で暑くて食欲ないかもしれへんけど、倒れたりしたらどないしょうもないやろ？　ほれ」
それから翔があんぱんをカバンの中から取り出した。
「食べとけ」
「いいよ」
「お茶のお礼。もらってくれへんと、エッチなことすんぞ」
「バカ！」

陽乃は翔の頬を思い切り叩いた。乾いた音が球場周辺に響く。
「痛ってー！　お前、本気で叩くなや！」
「知らない！」
綾音と夏樹が遠くで見飽きた二人のやり取りを見ていた。
「どうなん？　あれ」
「さぁなぁ……。あれで来年本気で二人で島根行くつもりなんだって言うから、驚きだよな」
「ホンマになぁ」
二人が苦笑いしていると、開場のアナウンスが響いた。
「暑いわねぇ～」
ちょうど3塁側の応援席になった七海高校。夕暮れが近い時間帯なので、西日が強烈に当たっていた。美里は右手をかざしながら球場を見渡す。
「うん！　でも天気が突然夕立になるなんてことはなさそうね！　こりゃあ野球部にも頑張ってもらわなきゃ！」
そう言って気合を入れて美里が腕まくりをする。
「コラ！」
恭一がそれを見て声を上げた。美里が驚いてバチを落としそうになる。
「なんですか！　先生～。やめてくださいよ！　バチ落としそうになりました！」
「こんなに日差しきついのに腕まくりするな」
「なんでですか！　暑いじゃないですか？」
「日焼けして腕がジンジンして、明日になってスネア叩けませんなんて言いそうだろう、田中の場合」
傍で裕也と恵梨が「言いそう、言いそう」と笑いをこらえながら呟いている。
「日焼けぐらいなんてことないです！」
「バカ！　日焼けも怖いんだからな。日焼け止め塗った上で、絶対に腕まくりはするな」

「でも、野球部の人たちはずーっと太陽の下にいて日焼けしちゃうじゃないですか！」
「そ、それもそうだな……」
恭一も言葉に詰まる。
「ほら！　今日は野球部の応援なんですから。固いこと言いっこなしですよ」
「あの～……」
野球部の2年生が気まずそうに言った。
「すいません、一応顧問から俺たちも最低限の日焼けで済むよう、応援する者は長袖着用とかを義務付けられてるんですけど……」
チラッと恭一が美里を見つめる。
「あ、そ、そーなんだぁ！　時代の最先端をやっぱ運動部の人は行くんだね！　よしっ！　あたしも袖まくり中止！」
美里は笑いながら長袖のシャツを元へ戻していく。
「ヤ、ヤバい！」
拓真が今度は悲鳴に近い声を上げた。
「先輩！　こっちもッス！」
智志も悲鳴に近い声を上げる。
「何やってんスか？」
洋之と優輝が覗き込むと、必死になって智志と拓真がスーザフォンのピストンにオイルを差していた。
「去年のマーチング以来放置しちゃってた俺の楽器と、いつから放置してんのかわかんないスーザフォンのピストン、がっちがちで……」
恭一も目に手を当てた。
「しまったー！　手入れするように言うの、忘れてたな……」
恭一がすぐにスーザフォンのところへ駆け寄り、ゆっくりオイルを差す。
「あんまり強く押しすぎると急に動き出してダメージになるかもしれんからな……ゆっくり、ゆっくり……」

やがて、トン！と軽快な音がして二つともピストンが正常に動き始めた。
「とりあえずは大丈夫だろう」
「ありがとうございます！」
「いいか？　木管楽器の人は、リードはコンクール向けのものは使用厳禁。それから、外用の楽器を持ってきているとは思うが、絶対に日に当てないようにな」
「はい！」
試合開始時刻になる。アナウンスと共に試合が始まり、一気に会場内に熱が入った。七海高校は裏の攻撃である。北松高校が表の攻撃を終え、いよいよ攻撃が始まろうとしていた。
一番打者は大塚友吾。曲はエンターテイナーである。軽快なメロディが響き、恵梨の叩くシンバルがしっかりとリズムを刻む。時たまトロンボーンのスライドグリッサンドがおもしろおかしく響き渡った。
（ヤバい！　何これ、超楽しいんだけど！）
陽乃はついついテンションが上がってしまい、思い切り吹いてしまいそうになった。
「先輩先輩！　落ち着いてください！」
それを察した流が陽乃のテンションをなんとか上げすぎないように保ってくれた。
「ゴメンゴメン！　ついついテンション上がっちゃって……」
そのとき、カァン！と良い音がこだました。
「撃ったー！」
夏樹の声が響くと同時に、恭一が指揮棒を降ろすとヒットを撃ったときに演奏する「ヒット！」が流れ始めた。
友吾は一気に2塁まで走り抜けた。続いては宇都宮　融の打順。これで波に乗った七海高校野球部。融もアフリカン・シンフォニーでテンションが上がったのか、友吾に負けないくらい勢いのある打球を放った。

続く兼崎純也はサウスポーである。まさにサウスポーの純也は一瞬危うい展開になったものの、これも無事打球を放った。そして、同時に友吾がホームベースへ帰って来る。

「きゃー！」

「いよっしゃあああ！」

強豪・北松高校から先制点を取った七海高校。ここから火がついたらしく、1回裏にも関わらずテンションはかなり高い。

「ゆうへーい！」

沙希と翔が同時に叫んだ。雄平はブイサインを吹奏楽部や応援席に向ける。

「朝倉！」

恭一がメガホンを使って言った。

「思い切りいけぇ！」

（やったぁ！）

陽乃は深く息を吸って、一気に音を吹き出した。

パラパーン！

必殺仕事人のテーマが流れる。そして、メロディが流れるや否や、カァン！とこれまでで一番の爽快な音が響き渡った。

「おぉ！」

「！」

「……すっげ」

一瞬、すべての音がやんだ。そして、雄平の放った打球はかなり高く飛び上がり、そのまま綺麗な放物線を描いて外野を越え、そして外野席に一気に飛び込んだのだ。

「キャーーー！」

沙希と由美子、佳菜、稚沙希が飛び跳ねて抱き合いながら喜ぶ。

見事なホームランであった。

一気に4点先取した七海高校はその後も攻撃の手を緩めずに、か

つ見事な守備も見せてコールド勝ちしたのだ。
「ゆうへー！」
翔が試合後、応援席に挨拶に来た雄平の名前を呼ぶ。
「お疲れぃ！」
「翔こそ、サンキュな！」
よく日焼けした雄平がニカッと笑う。
「翔も、明日本番だろ？」
「リハの本番な！」
「頑張れよ！　リハでも本番だろ？」
「おう！」
フェンス越しであったが、二人は拳をつき合わせるフリをした。
夏はまだまだ始まったばかり。吹奏楽部の熱い夏も野球部の熱い夏もまだまだ続く。

第３５８話　気分は２９日

「おはよう」
津上橋で翔に陽乃が声を掛けた。
「おはようさん！　どうや？　寝れたか？」
「昨日の応援でテンション上がって、おまけに今日本番って考えるとなかなか寝つけなくて……」
眠そうな目を擦りながら陽乃が答える。
「予想どおりやな。オレの予想ではあと2人、そんな感じで部活に来そうな気がするねん」
「え？　誰と誰？」
「はしもっちゃんと、慎ボー」
「えー？　そうかなぁ？　あたしはなんとなく水谷くんとサキティがヤバそうな気がする」
陽乃は首を傾げながら言った。翔たちは自転車を押しながら話を続ける。
「いや。大谷ちゃんはあぁ見えて度胸据わってるからな。それに、春やんもソロとかいろいろ経験してるから、度胸据わってるで」
「あたしだって！」
「お前、未だにステンドグラスのソロ、音ぷるぷる震えてるやんけ！」
「それはそうかもしれないけど！　それと寝るのは別じゃない！」
「それはそうかもしれへんけどやな～……」
陽乃と翔がヤイヤイ言い合いをしながら学校へ向かっていると、向かい側から由美子が「おっはよー！」とテンション高く走ってきた。
「おはよ～」
「あれぇ？　陽ちゃんすっごく眠そう……」
陽乃は苦笑いしながら「緊張しちゃってさぁ～」と答えた。

「アハッ！　やっぱりね」
由美子が笑う。
「やっぱりって？」
「私の予想では、今日緊張して眠れなかった人は陽ちゃんとエミリンなの」
「ほれ見てみぃ。オレと同じ予想や」
翔がドヤ顔をしながら陽乃の背中を軽く叩いた。
「そんなはずないんだけどなぁ……」
そう呟きながら翔と由美子の後を追う陽乃。そして昇降口に着いたところで、翔と由美子が「うっ」と声を上げた。
「どうしたの～……わ！」
「おはよ……」
目の前にはいやにやつれた絵美がいた。
「ひどい顔じゃない！　どうしたの！？」
由美子の言葉もなかなか辛辣であるが、絵美はそんなことを気にしている場合ではなさそうであった。
「どうしたもこうしたもないわぁ……。今日のステンドグラスのソロが上手く行くかどうか心配したら、いてもたってもいられなくなって、音源聴いてたら夜が明けちゃって……ふあ～ぁ……」
「そうなんだぁ。そんなに気張らなくても、エミリン上手なのに」
「でも、ソロで失敗しちゃってコンクールに響くのはイヤでしょ？　だから復習に復習を重ねてたらこんなことになっちゃって……」
「頑張りすぎはよぉないで」
絵美の体調を心配して、翔がそう言った。
「ありがと～。今日はとりあえず早く寝るわ」
ふらふら覚束ない足取りで音楽室に向かう絵美を心配そうに見つめる3人。音楽室に着くと、さらに絵美よりヒドい顔つきをしている男子がいた。
「わ！　誰かと思った！」
予想外にもそれは慎也ではなく、駿だった。

「おはようございます……」
「おはよぉ。どうしたの？　エミリンみたいな顔しちゃって……」
「ステンドグラスの朝倉先輩のところのバスクラ考えてたら寝れなくて……」
「みんな重症やな」
翔はやはり、コンクールが近くなるとそれぞれの個性が極端に影響するなと感じていた。たとえば、麻綾と茉莉紗はいやに音程に神経質になっている。勇と彩香が出だしの音ばかり練習している。優は何度もグロッケンとシロフォンの行き来が上手く行くかどうかを確かめるために右往左往している。
そうかと思えば「あたしこれ以上ここ練習したら逆に下手になるからやめよー！」と言って昨日から駿と同じ動きをする場所がある佳菜は、その部分に合奏時以外はまったく手をつけていない放置っぷりである。また、美里は「下手に合わせようとするとダメね」と言ってこれもまた合奏時以外、課題曲のスネアは極力叩かないようにしている。
「なんかこう……間がおらんもんかねぇ」
翔は苦笑いしながらカバンを置いて楽器を取り出した。
「先輩っ！　先輩っ！」
由美子を見つけるなり、稚沙希が大慌てで駆け寄ってきた。
「どうしたの～？」
「合わせてほしいところがあるんです！　お願いできますか！？」
「あー、うん。いいよ！　どこ？」
「ここなんですけど……」
由美子は音出しをする暇もないうちに、稚沙希の手に引かれて音楽室へと消えていった。
「これでコンクール前やねんから、コンクール当日なったらどないなるこっちゃら」
「ホントですよね～」
隣にいま来たばかりのはるかが立っていた。

「お、おはよ！　どない？　調子」
「昨日、また店でジャズを吹かされちゃいましたけど大丈夫です。ジャズ癖は抜いてきましたから」
　はるかの店はスナックを経営している。時たま、常連のお客さんが来た時、何か演奏してほしいというお客さんの要望を受けると、はるかはいろんな曲を演奏する。それはジャズであったり、懐メロであったり、演歌であったりといろいろである。しかし、彼女は前日の晩にそれらを演奏しても、絶対にクラブ活動の演奏にその「癖」は持ち込まない。そのあたり、彼女の吹き分けが上手いということになるのだろう。
「ですけど」
　はるかが言った。
「ウチの部、意外とスイッチの切り替え上手いですね」
　翔がうなずく。
「やっぱそう思う？」
「はい」
　昨日の野球の応援でかなり音を大にして吹いた。恭一は音が荒れるのではないかとかなり心配していた。翔も同様の心配をしていたが、今朝来てみればほとんど、音の荒れは感じられない。
「去年もさ、地区大会でダメ金だったけどその後の切り替え早かったしなぁ」
「今年も……いえ、今年は県大会狙いたいですけど、上手くこうしてスイッチ切り替えていきたいですね」
「せやな！」
　七海高校の出演時間は午後４時。午前中は合奏をして、午後イチに移動。その後、２時には楽屋入りしてチューニング、直前合奏などを経て3時４５分には舞台裏集合である。１５分間の休憩が４５分から入るため、休憩明けトップの出番となる。
「おーい、座れ！　合奏始めるぞー！」
「はい！」

部員たちがすぐに着席し、それから間もなくチューニングの音が響き始めるのだった。

「ここかぁ……」

同じ頃、野球部の雄平たち5名が七海市中央ホールに集まっていた。

「すっげぇな……。なぁ、俺らここ入っていいのか？」

友吾が戸惑った様子で雄平に聞く。

「平気だよ。こうして全員がチケット買って来てるんだから……行くぞ」

そうは言うものの、やはり受付を通る時は緊張してしまった。

「おはようございま～す」

「ざいまっす！」

受付の同年代の女子高生に挨拶され、緊張のあまり野球部丸出しの挨拶をしてしまった純也が真っ赤になっている。

「ハズい……」

「俺ら、こんな女子ばっかの環境慣れてねぇもんな」

融も赤くなっている。

「川崎とかカケルとか本堂とか水谷って、すげぇのな」

「なんだそりゃ。入るぞ」

雄平が笑いながらホール内へと入っていく。

「ちょっと早く来すぎかしら？」

雄平たちとほぼ同時に安和、めぐみ、岳彦の3人も入ってきた。

「出番は4時らしいけど、まぁ他の高校の演奏聴く機会も俺たち減ってるし、ちょうどいいんじゃね？」

「そうね。たまには純粋に楽しませてもらいましょ！」

安和がご機嫌そうにホール内に入る。暗転する前になんとか3人分の席を確保してホッとした様子で安和が隣を見ると、見覚えのある女性が座っていた。

「あっ……神崎さん！」

「あら！　岡崎さんに豊田さん！　それに三河くんも！」
「おはようございます！」
「あなたたちも聴きに？」
「はい！」
「そうなの。今日は三田嶋も来るのよ、昼一からね」
「午前中は？」
岳彦が興味深そうに聞いた。
「市内の中学のレッスンに行ってるの。だから来れないって」
「ギリギリまでどこでも練習するのね～」
めぐみが懐かしそうに呟く。そして舞台が暗転し、中学生が入場してきた。
（今年はどんな演奏聴かせてくれるかなぁ）
しおりは楽しそうに笑いながら、その時間を待つのだった。

第３５９話　パキッ

「暑っついなぁ……」
翔は恨めしそうに空を見上げながら呟く。
「ホント。やっぱコンクールの季節って感じですよね」
麻綾がパタパタと左手で顔を仰ぎながらうなずく。
「全国の頃は秋っぽくなってるっちゅーのにな」
「そうですよね～」
「あっ！」
翔が思い出したように大声を上げた。
「木管の人！　いちおう替えのリードは持っといてな。もしもってことがあるかもしれへんから」
「はい！」
夏樹はもう一度ポケットを確認した。
「よし。ある」
安心した様子でうなずいてすぐに、雄飛が戻ってきた。
「悪ぃ、サンキュ」
「いいよ。はい」
お手洗いに行って来ていた雄飛。いつもならあまり緊張しないのだが、今日はなぜか緊してしまっていた。
「今度は涼しい～」
楽屋入りする部員たち。冷房の効いたホール全館では、汗をかくのも走り回るとき以外はほとんどない。走り回るのは定期演奏会の準備などをするときくらいのものである。こうした本番では他校の生徒との衝突等を防ぐため、走ることは禁止されていた。
「七海高等学校さんですね」
「はい！」

「では……6番楽屋になります」
「え。マジっすか？」
翔が声を上げる。
「申し訳ないです。この書類なんですけど、次の海屋敷高校さんと手違いで入れ替わるんですよ。このチューニングのときだけですので。よろしくお願いします」
「わかりました」
翔が嫌がるような雰囲気を見せるのも無理はなかった。この6番楽屋は別館にあるのだ。6から10番楽屋は別館にあるため、本館の楽屋を抜けて一旦外に出て行くのである。木管楽器にとって困ってしまう、温度差が問題となるのだ。
「みんなー。一旦外出るから、リード気をつけてな」
「はい！」
翔はそう促した後、ブツブツと文句を言っていた。
「ちょっとホールの中、寒すぎるんちゃうか。温度差ありすぎんで」
しばらく歩くと、扉があるのでそこから外に出る。通常、リードは極端な温度差などを嫌う。特に寒い場所から暑い場所へ行ったときは要注意なのだ。夏場なら問題ないかと思いきや、近年夏場の外気温は高温になる。それに対し、冷房の効いた室内。そこから外へ出たとき、いつの間にかリードが割れるということも十分に考えられるため、翔は警戒を重ねていた。
楽屋に到着すると、すぐに音出しを始める部員たち。
「ちょっと緊張するね……」
なぎさが雄飛に呟いた。
「片岡さん、ホールは初だっけ？」
「うん。だからちょっと緊張しちゃって……」
「大丈夫だよ。皆一緒に演奏するんだから、いつもどおりの片岡さんでいいんだ」
「ありがとう」
なぎさの笑顔に少しだけドクンと心臓が高鳴る雄飛。その照れを

隠すために雄飛は楽器を口にくわえた。
「……え？」
ドクン、と違う心臓の鼓動が雄飛の全身に伝わるほど強く響いた。
「……！」
リードが割れていたのだ。
（ヤ、ヤバい……）
雄飛は慌ててポケットに入れているであろう予備のリードを探す。
「あれ？　あれ！？　そんな……」
「どうしたの？」
異変に気づいたなぎさが声をかける。
「いや……その……ううん、大丈夫」
「そう？」
緊張しているであろうなぎさに、さらに心配をかけるようなことはしたくないと雄飛は思い、何とかしてこの事態を乗り切ろうと考えた。
（そうだ……。とりあえず、楽屋からまた本館に戻るからそのときに……楽器置き場に取りに行けばいい）
なんとかそう自分に言い聞かせ、雄飛はチューニングをひとまず乗り切ることにした。チューニングは再度、直前リハのときにできるので問題ないだろうというのが彼の考えだった。
チューニングが終わり、楽屋から本館へ戻る。ちなみに、コンクール当日は別館でチューニングすることはない。今回の演奏会は市内の中学・高校のほとんどが集まっているため、本館だけでは追いつかないための措置なのだ。
「なぁ、ゆう」
優輝が声をかける。
「はい？」
「お前、パートチューニング吹いてた？」
ドキッ、と心臓が飛び跳ねるように動いた気がした。
「は、はい！」

「そう？　なんか聴こえない気がして……」
「吹いてました！　いつもどおりです！」
「……ならいいけど」
雄飛は優輝の声を掻き消すように大声でそう答えた。
別館から本館へ戻る。雄飛は麻衣子に「ちょっとだけ戻ってくる」と言った。
「え？　どこに？」
「楽器置き場。すぐ戻る」
雄飛は小走りで楽器を置いてある場所に行く。ちょうど通り道であったのが幸いだった。
「えっと……どれがいいっけな……。あれ……？」
ガサガサとカバンを探すが、リードケースが見当たらない。
「ウソだろ」
雄飛はさらに焦ってカバンを強引に開き、リードケースを探すが見つからない。
「マジかよ」
今度は楽器ケースを開く。しかし、リードケースは見当たらないのだ。
「あっ……！」
昨日の練習後のことだった。今日の割れたリードを選ぶために、部室のロッカーで雄飛は丹念にリードの細かい部分まで見ていたのだ。その際、合奏の片付けをするように駿に言われ、そのままロッカーの扉を閉じたのだ。使うリードだけは楽器に装着して。
そして、そのリードだけを楽器ケースに入れ、リードケースはカバンに入れたつもりになっていたのだ。つまり、置きっぱなしで来てしまい、替えのリードが1枚もないことになる。
「……。」
雄飛の頭が真っ白になった。手が震え始める。
「進藤くーん」
絵美の声が雄飛の心臓を激しく鳴らした。

「何してるの？　急いでー」
「どうしよう……どうしよう……」
雄飛の中でいろんな考えがグルグルと渦巻く。自分ひとりくらい、吹かなくても平気なのではないか。そう考えてすぐに、騎士の顔がよぎった。騎士だけではない。さゆり、綾音、貴志、和志、まゆの顔も浮かんでくる。コンクールメンバーではない部員たちに対する冒涜（ぼうとく）ではないかと思ってしまうほどであった。
「……ゴメン、ちょっと先に行ってて」
すぐに絵美が走り始めた。
「どうしたの進藤くん」
「せ、先輩……ゴメンなさい……」
「何？」
「リード……割れちゃって」
「替えのリードは？」
「全部学校に忘れて……」
「……仕方ないね」
ズキッと雄飛は心臓が痛んだ気がしていた。今日は出るなと言われるのか。その覚悟もできていないわけではなかった。
「ちょっとー！　ベークラの人すぐ集合！」
「え」
すぐに優輝、みゆき、光瑠、麻衣子、歩由美、なぎさが駆け寄ってきた。
「すぐリードケース出して。緊急事態」
「はい！」
「進藤くん。リードすぐに受け取って。誰のでも何枚でもいいからすぐ！」
「は、はい！」
絵美も急いでリードケースを出した。
「私が吹いてていい状態と思うのは、これとこれ。吹いてみて」
「は、はい」

雄飛は急いでリードを装着する。
「ダメ。次」
「はい」
絵美が直感に近い形で音を判別する。
「ダメね。私のはダメだ。瀬戸くんお願い」
「はい！」
3枚あるリードを次々と試す雄飛。他の部員たちの姿はなかったが、絵美が焦っている様子はない。
「これいいね。一応取っておいて。次、光瑠ちゃんお願い」
「はい！」
2枚あるリードを試す。
「ダメね。次！　みゆちゃん！」
「はい！」
2分かけて他のクラリネット奏者のものも試し、結果的に雄飛にこの時点で最適なのは麻衣子のリードだった。
「ゴメン。これ、進藤くんに譲ってくれる？」
「もちろんです！」
麻衣子は意気込んだ様子でうなずいた。
「よし！　付けて！」
「はい！」
雄飛は冷静にリードを装着する。
「付けた？」
「はい！」
「走るよ！　全速力！」
「はい！」
雄飛たちは全力で走り、なんとかリハーサル室に到着した。
「遅い！」
恭一が一喝する。
「すみません！」
絵美が全員分に近い大声で謝罪する。

「早く座るよ！」
「はい！」
クラリネットが座ったのを見届け、恭一が指揮棒を上げた。
「チューニングベー。その後、課題曲頭から」
「はい！」
雄飛の心臓が少しずつ、いつもどおりの鼓動の速さに戻っていった。
（早く言えばよかった……）
少しだけの後悔を心に残したまま、本番までの時間が近づいていくのだった。

第３６０話　『夏空のように』

「緊張するね……」
彩香が傍にいる流に小声で言った。
「はい……。去年、中学のときよりもなんか緊張してます。なんでだろ」
流もへへッと少し不安そうに笑った。
「おい、集まれ」
恭一が正装に身を包んで現れてすぐに部員を呼んだ。
「コンクールではないけどな。大丈夫だ。落ち着いていけば普段の練習どおりの音が出せる。２、３年生は１月から練習してきたんだ。それに、１年生だって４月からだけど同じ練習をずっとしてきたんだから。何も心配することはない。現時点でできることを精一杯やって。それでダメだと思うところをこの後、２９日までに直せばいいんだ」
「はい！」
「頑張らなくていい。いつもどおりだ」
「はい！」
３時５５分。ブザーが鳴り、アナウンスが観客に着席を促す。
「最後に」
恭一が言った。
「今日、来る途中に見たあの青空みたいな演奏を、課題曲はしてくれればいい」
「はい！」
そして入場が始まる。亮平が先頭だ。
「し、深呼吸っと……」
スーッと息を吸う。

「七海高校さん、どうぞ」
亮平が小さくうなずき、一歩目を踏み出した。貴志が続く。
(やべぇ……心臓飛び出しそうだ)
智志は何度もツバを飲み込みながら、遅れないように拓真の後を追う。愛実は春樹の少し大きくなった背中を追いかけながら、課題曲のトリオの部分を何度も頭の中で反芻していた。
「進藤くん」
入場直前、絵美が雄飛の肩を叩いた。
「いつもどおり、ね」
「はい」
絵美の笑顔に安堵し、雄飛は先を行く菘の後をすぐに追った。
「来たぜ」
客席で一人の少年が呟く。
「ホントだ。カッコいいね」
隣に座る柳原玲菜が返した。
「宮部さんも」
「ホントだ。すごく真剣……」
「あれ、お前の彼女か?」
友吾が雄平に聞く。
「あぁ……」
「綺麗じゃん。可愛いっつーか、美人って感じだな」
雄平は普段見せる沙希の表情とは180度違う様子に、また少し惚れ直していた。
「ねぇ、あれ陽ちゃんだよね?」
客席で少し派手な服装をした矢崎菜緒が森本涼平に聞く。
「あぁ。暗くてわかりにくいけど……多分そうだろ」
「なんや、去年と全然表情が違うやんけ」
翔平が嬉しそうに言う。
「ホントですね」
「そりゃもう3年やもん。自信なさそうにしてたら後輩がついてこ

ぉへんで」
修平がバッサリ切った。
「容赦ないね」
「ライバルやもん。今年は、去年のアイツらとは違うからな」
修平の眼差しは普段の友人を見るような視線ではなかった。明らかに、翔たちをライバル視しているものだった。
「プログラム２８番　七海市立七海高等学校吹奏楽部　課題曲４、自由曲、レスピーギ作曲『教会のステンドグラス』より『エジプトからの逃避』、『大天使ミカエル』。指揮は、東　恭一です」
照明が点灯する。恭一は素早く客席に向き、深々とお辞儀をした。
（冷静に。いつもどおり）
恭一は口パクで全員にそう伝える。そして、笑顔を見せた。指揮台に上がり、指揮棒を上げると楽器を一斉に構える。
指揮棒が降りると同時に、全楽器によるファンファーレが響き渡った。恵梨が叩くクラッシュシンバルの威勢良い音色に乗せられ、良いスタートを切る。美里のスネアドラムとあずさのベードラが的確なリズムを刻み、クラリネットとアルトサックスのメロディが心地よく響く。そのＡの途中から、ユーフォニウムが合いの手を入れる。Ｂに入ると、合いの手にはホルンが加わる。こちらも安定していた。メロディに優のグロッケンが加わり、Ｃに向かってテンションを上げていく。
（まっすぐ、安定した息で！）
智志は音がぶれないよう、指揮をしっかりと見ながらＣのメロディを吹ききった。時間にすれば、わずか８秒ほどの出来事だ。この瞬間のために、智志は何度もここを拓真たちと練習し、最後にいつも駿とかのこを加えて練習したものだった。
前半部分で思い切り吹くような部分はどこにもない。いわば、優しいフォルテで進まなければならないのだ。メロディの再現部に入り、ホルンが少しテンションを上げるものの、決して安定した演奏、爽やかな演奏というイメージからは逸脱しなかった。

（へぇ～……やるじゃないの）

しおりは去年とはまったく違う演奏の出来に素直にそう思っていた。そしてスネアドラムが少し音量を上げたかと思うとあっという間に静かになる。そして、恵梨のタンバリンが軽快に鳴り響いた。

（低音部分は温かく、太い息を……）

翔と絵美はそれをひたすら意識する。裕也が叩くシロフォンと陽乃たちトランペットの打ち込みは鳥のさえずりというイメージだ。

途中からテナーサックスとユーフォニウムが合いの手を入れる。これは流れるのイメージ。対する翔たちは降り注ぐ陽射しのイメージだ。

一気に晴れ上がる部分。これは拓真たちの低音楽器が一気にイメージを覆す役割を持っていた。上昇音系がさらにその情景に興奮を加えていった。そして、最後の部分ではどの楽器も目だって良いという指示が出ていた。特にホルンの裏メロディはしっかり目だって良いという指示だった。

（息切れしてもいい！）

杏は順平に何度もそう言われたことを思い返し、自分の出る限りの音を吹き続けた。

（全員を鼓舞するように！）

美里は最後のスネアはそのような役割を持っているといわれ、自分自身がまずはノリに乗らなければならないと考えていた。気づけば、いつの間にか腕どころか体全体がリズムに乗っている。それに気づいているのかいないのか、そのイメージが晃のクラッシュシンバルから洋之のティンパニ、あずさのベードラに恵梨のグロッケンとパーカスメンバー全員に波及。終わる頃には部員全員を巻き込むことができていた。

（美里ちゃん……これに気づいたかしらね）

しおりはそこが気になって仕方がなかった。

課題曲が終わる。本来、ここで拍手は起きないのだが一部で拍手が起きた。

（やだ！　もう……）

雄平たち野球部の面々だった。沙希は少し顔を赤くしつつ、次の自由曲のために移動を開始するのだった。

第３６１話　あえて厳しく

「お疲れぃ！」
自由曲も演奏を終え、片付けのために楽器置き場に戻ってきた部員たちは真っ先にお互いそう声を掛け合った。
「進藤くん！」
絵美が雄飛に駆け寄る。
「お疲れ様。どうだった？」
「おかげ様で、すっごく吹きやすかったです。ご迷惑おかけしました」
雄飛は満面の笑みでそう言った後、深々とお辞儀をした。
「いいのいいの。ただ、これからはもうちょっと早く言ってね？」
「すみません……」
「あぁ、そんな深刻に受け取らないで。私はパートリーダーだし、他にも瀬戸くんにヒカルちゃんにみゆちゃん、信頼できる同期がいるわけなんだから。ね！」
「はい！」
「みんな～。お疲れ様～」
「こんにちは！」
樹としおりの姿を見た部員が挨拶をする。
「いやぁ～聴かせてもらってたけど。去年よりずっと良くなってたね」
しおりの言葉に翔や陽乃がはにかみながら顔を合わせた。
「でも。もっと良くなるよね」
しおりはハッキリと言った。
「まず、クラリネットさん」
絵美の表情が急に強ばった。

「まだ橋本さんのソロ、音が硬いね～。時間が経てばよくなるんだけど、その頃にはもうソロが終わっちゃってるの。もったいないなぁ。もっとリラックスして。課題曲では温かい息で芯のある音吹いてるでしょう？　あれをイメージして」
「はい！」
「それから1、2年生」
「はい！」
優輝が一際大きな声を上げた。
「大天使ミカエルの部分、奇声を上げてるみたい。うるさいわぁ」
「すみません！」
「いま謝らなくてもいいからさ。気をつけてよ」
「はい！」
次にしおりはホルンに目をやった。順平がギョッとした表情になる。
「ホルンさーん」
「は、はい」
しおりはニッコリ笑った。
「1、2年生しかいないのにあなたたち、よくやってる。初心者もいたわよね？」
杏がそっと手を上げた。
「はい、並んで並んで」
しおりはホルンの4人を順番に並ばせる。まずは、順平が先頭で賢治、裕子、杏という順番になった。
「この順番覚えておいて～。で、次はこう並ぶ」
入れ替わった順番は、裕子、杏、順平、賢治。
「あの……」
「最初の順番は音の大きさよ」
「じゃあ、その次は……？」
「音の繊細さ。小さな音量を吹いたときに人の心を動かすような音色がどれだけ出ていたか」

賢治が思い切り落胆してしまった。
「大天使ミカエルでFメイジャーに転調したところあったでしょ？　あそこの音色ね～。あたしは時任さんと保田さんの音色、好きよ。女の子らしい綺麗な音色ね」
「ありがとうございます……！」
杏が嬉しそうに頬を赤くしながら笑った。
「朝倉さん」
突然、視線が自分に向かってきたので陽乃は驚いて固まってしまった。さらにしおりは佳菜、拓真、駿、沙希にも視線を向ける。
「わかってる？　あなたたち、ソロだけどソロじゃないの。この5人でひとつの曲を作るのよ？」
「……。」
「まだあなたたちは個々の本当に独りでしか吹いてないの。わかる？　この場合の独りは孤独の意味の独り。寂しいじゃない。せっかくのソロなんだから、それぞれの音色を合流させて、まさにソロっていうのを作りましょう」
「はい！」
その後、全パートにしおりの容赦ないコメントが飛んでいった。傍では恭一と樹が相変わらずだな、というような表情を浮かべている。
しおりの指導は15分近くにわたって続いた。ようやく終わったかという表情を浮かべた恭一が、楽器を片付けてすぐに積み込みの場所へ向かうように指示する。部員たちは素早く楽器を片付け、すぐに積み込みの場所へと走っていった。
「ちょっと厳しすぎないか？」
樹が苦笑いしながら言った。
「まだまだ。あたしにしてみりゃ、甘いものよ」
しおりはシレッとした様子でサラリと言いきった。
「ハハッ！　確かにそうかもしれんけどな」
「それに、あの子達はまだまだ伸びるわ。去年と今年でこれだけ変

わるんだもの。もっとビシビシ行かなきゃ」
しおりはかなり翔たちに期待しているようだった。その目が、しっかりと走って行く翔たちの背中を捉えていた。
（相変わらず厳しいなぁ……神崎さん）
陽乃は去年よりもさらに厳しくなったのではないかと感じながら、楽器を片付けて積み込みに向かっていた。
積み込みを手早く終え、これから学校に片付けに向かう部員と残って演奏を聴く部員とに分かれる。終演後に再度集まり、終礼をして終わることになる。
「ほな、後はよろしくな拓あん、陽乃」
「オッケ」
拓真がニカッと笑う。
「任せといて。そっちもよろしくね」
陽乃は汗を拭いながら翔にそう伝えた。
「おうよ。ほな！」
翔たちも汗を拭いつつ、学校へと向かう。
蝉がたくさん鳴くつくし野川沿いの住宅街を抜け、最近建ったマンションを通過する。準工業地帯とされる場所を抜けて、１０分ほど走ると突然また住宅街に戻る。そして、そのすぐ近くでまたつくし野川が近寄ってくる。それを越えると七海高校だ。
「あ、もうトラック来てる！」
美里が校門の向こうに楽器屋のトラックが止まっていることに気づいて声を上げた。
「ちょっと急ごうかぁ！」
「はい！」
部員たちを促し、先に走ろうとする翔。その時だった。
「あの～……」
一人の女性に声をかけられた。年齢はちょうど彩くらいだった。
「はい？」
「七海高校の生徒さんですか？」

「そうですけど……」
あからさまに警戒する翔を見て、女性はハッとした様子で慌ててこう言った。
「ごめんなさい！　怪しいものではないの。私、こういう者です」
翔はまだ警戒心を解かないまま、名刺を受け取った。
「かながわ……ケーブル、テレビ？」
かながわケーブルテレビ七海支局・市来真里菜（いちきまりな）と書かれていた。
「テレビ局の方が、なんで七海高校に？」
翔は目を点にしている。
「あ、ちょっとね。この動画を見てウチの支局長が是非撮影をしたいって言ってて。やっと探し当てたからついつい声をかけちゃって……」
そういうと真里菜はｉＰｏｄで動画を翔に見せた。
（これ……！）
翔には見覚えのある映像であった。それ以前に、見覚えのある人物が映っていたのだ。
クラリネットを構えているのは、絵美とみゆき。少しすると洋之と優が映っている。すぐに視点は健之佑と梨子に変わった。それから間もなく陽乃、勇、彩香が映る。それからまたすぐに、優だ。
「この制服、七海高校よね？」
「はい……」
真里菜が笑顔になった。
「よかったー！　ねぇ、あなた吹奏楽部の活動場所知ってる？　よかったら、教えてもらいたいのよ。なんでもこの吹奏楽部、創部２年目でいきなり地区大会で金賞取ったり、こんな難しい動きのある曲を吹くからタダモノじゃない子ばっかり揃ってるって、支局長が息巻いちゃってね」
「……。」
呆然としている翔に真里菜は「あ、ゴメンね。いきなりいろいろ聞きすぎて迷惑よね！」と笑った。

「いえ……」
翔は信じてもらえそうにないと思いつつ、言った。
「オレが、その吹奏楽部の部長です」
真里菜の目が今度は点になった。
「え……えぇ！？　えぇー！？」
彼女の甲高い声が少しズレて、遠くにいる美里たちにも聞こえるほどに響き渡ったのはすぐ後のことだった。

第３６２話　困惑の中で

７月２０日金曜日。七海高校吹奏楽部の部室や音楽室では、部員たちがかながわケーブルテレビの件について大騒ぎしていた。

１６日月曜日に翔が話した市来真里菜との件は、その日のうちに恭一へと伝えられることとなった。地方のケーブルテレビ局とはいえ、マスコミであることに変わりはないという認識を持っている恭一も、初めは慎重に対応した。

真里菜の話はこうだ。

既に定期演奏会開催の話を、七海支局の局長は知っていたのだ。どこからその情報を仕入れてきたかはまだ恭一は耳にしていないものの、既に知っている市民がいてもおかしくはない状況だった。

そして、その定期演奏会までのこれからの３ヶ月間、密着取材を行いたいということであった。しかし、これからが正念場の吹奏楽部。部員たちに何らかの影響が出ることは必至だった。それ故、恭一もかなり慎重になっていた。こればかりは恭一一人で判断できる問題ではなかったので、まず学校長である光治に相談を持ちかけたのだ。

「いいんじゃないか？」

即答だった。光治の意外な言葉に、恭一は目を丸くする。

「よ、よろしいんでしょうか？」

「いいじゃないか。むしろ、七海高校のことが神奈川県内に知れて、良いことだと私は思うね」

嬉しそうにうなずく光治。しかし、まだ問題はある。

「しかし、おそらく授業中にも取材が入るかもしれないと……。部員の日常も撮影させてほしいというので」

「ははぁ……。それは少し問題だな。部活動ということだろう？

授業中まで撮影されてはちょっとね……」
光治は首を傾げる。
「失礼します」
すると、突然F組担任の園部麻衣子が校長室に入ってきた。
「どうされました？　園部先生」
「いえ……ちょっとどうしても謝っておきたいことがございまして」
「ほう？」
「実は……かながわケーブルテレビの七海支局の局長、私の父なんです」
恭一と光治は顔を見合わせた。
「申し訳ないです、東先生。私が先日、母と吹奏楽部の話をして盛り上がっていたら、偶然早くに帰宅した父の耳にそれが入りまして……。是が非でも撮影をすると無茶なことを言って意気込んで……こんなことに」
「そうですか……」
どこで人は繋がっているか分からないものだと二人は思っていた。
「ご迷惑でしたら、父には早急に撮影を含めて迷惑をおかけしないよう、やめさせますので」
「まぁまぁまぁ」
光治がそれを宥める。
「まだ迷惑って決まったわけじゃないだろう。ねぇ、東先生」
「そうですね」
麻衣子が「本当ですか？」と心配そうに聞いた。
「えぇ。だって……あぁ、来ましたね」
バタバタバタと複数の足音が聞こえてくる。
「先生！」
翔の声だった。
「おう！　どうだった？」
「全員で意見一致です！　むしろ映してくれって感じで皆ノリノリです！」

「……だそうですよ、園部先生」
麻衣子は駆けつけた翔たちの姿を見て、ようやく笑顔を見せた。
その後、音楽室で恭一は撮影の概要を説明し始めた。撮影は7月30日から開始。ひとまず、地区大会までは集中させてほしいということを要望しておいたのだ。また、撮影は原則部活動時間及び演奏活動のみ。学外での、つまり自宅等での撮影は各家庭に恭一が事前に説明を行い、さらに家族全員から了承を得た場合のみ可能。
「ボクたちも映りますか？」
裕時が興味深そうに聞く。
「もちろんだ。君らも部員なんだからな」
マーガレットやソンスも嬉しそうに笑った。
撮影は11月23日、定期演奏会終了まで。ただし、3年生10名に関しては卒業までスポットを当てるそうだ。
「10人ってことは、雪ちゃんも入ってるんですね！」
陽乃が嬉しそうに言う。
「あぁ。先生がちゃんと説明しておいた。撮影にも行ってくれるそうだ。もちろん、光来高校さんには先生と支局長のほうから説明は入れておく」
それから一連の説明が終わった後、恭一が彼らを諭した。
「わかっているとは思うが、撮影がある以上、放送もある。すなわち、この吹奏楽部はもちろん、七海高校が県内の各家庭でケーブルテレビを契約している人たちのところで映るというわけだ。くれぐれも、恥ずかしいことのないように」
「はい！」
「それじゃあ、話はここまで。今からパート練習をする。午後からはまた改めて指示するからな」
「はい！」
部員たちはすぐに楽器の準備を始める。
「佐野、朝倉、本堂」
3人が恭一に呼び止められて足を止めた。

「はい？」
「ちょっと職員室に来てくれるか？」
「え？　あ、はい」
３人は戸惑いつつ、２年生にパート練習の依頼をしてから恭一の後を追った。緊張した様子で職員室に入る３人。
「まぁ、座れ」
「はい」
恭一は自分の席に座り、しばらく何かを考えている様子だった。５分ほどしてから言った。
「進藤の件は、知ってるな？」
３人が小さくうなずく。
「あれを見ていてな。先生思ったんだ。１、２年生だけじゃなくて、お前らの中でも何か思うことはたくさんあるんじゃないかって」
３人は顔を見合わせた。
「ある？」
陽乃が聞く。
「少なくとも、オレはお前と拓あんにはない。結構言いたいこと言うてるし」
「あたしも」
「俺も別に。普段からぶっちゃけてるし」
恭一はハハハ！と大声で笑った。
「まぁ、なんだ？　永井も含めてお前ら３年は１０人でずっとやってきて、いろいろ意見もぶつけ合ってきたからな。そういうことが少ないのは稀かもしれない。けど、他の４７人はどうだと思う？例えば、これは俺が選出したから仕方がないけれども、中野なんかは表面上はコンクールメンバーから外れても納得しているように見えるが、実際はそうではないかもしれない」
翔が小さくうなずく。
「それに、佐野の妹や朝倉の弟は、初心者だ。朝倉の場合は少し経験があることに加え、まぁ今まで言ったことがないが、素質がある

から今回コンクールメンバーになった。けれど、初心者は初心者なりに思うことがあるかもしれない」

夏樹の顔を思い浮かべる陽乃。姉が副部長で、帰ってきたら普通の姉弟で。ころころ対応を変えている夏樹の気持ちはどうなのか、考えたこともなかった。

「そこでだ！」

恭一が目いっぱい袋詰めにしたお菓子を翔たちに押し付けた。

「えぇ！？」

翔が戸惑いを隠せない様子で大声を上げる。

「午後からは3年生主催、ぶっちゃけトークやって来い！」

「えー！？」

「ただし、自分のパートの先輩後輩とはグループを組まないこと！　学年は同じでも違っても良い！　あ、部員数が奇数だから一人常に余る算段になるが、まぁどこかひとつは3人1組になること！　以上！」

「えぇ～……」

陽乃たちの顔は戸惑い以外の何物でもなかった。

「ほら！　しっかりしろよ幹部3人！」

「はい……」

恭一は半ば強引に翔たちを職員室から出して扉を閉めた。

「ずいぶん思い切ったことしますね～」

麻衣子がお茶を片手に印刷室から出てきた。

「まぁ、ぶっちゃけないとストレス溜まるでしょ？　それで突然爆発して辞めるなんて言われたら、顧問としても情けないですし。かといって、我々教師に子供たちが素直に自分の気持ちを吐露してくれるような年齢でもないのはわかっていますし。年齢が近い者同士、ここは素直になってもらったほうがいいんです」

恭一は初代七海高校吹奏楽部のことを思い出していた。

（あんな風になってからでは遅いからな）

二度と同じ過ちは繰り返さない。恭一はそう心に決めていたのだ。

第３６３話　ぶっちゃけトーク！

＜本堂拓真　＋　秦野恵梨＞

「……。」

「……。」

なんとも異色のカップリング。恵梨と拓真は課題曲で共に前打ちを担当するパートである。何度もセクション練習をする機会はあり、接触もあったはずなのにまったく会話が生まれないのだ。

唐突に拓真が言った。

「困ってること、ある？」

「困ってること……ですか……」

再び沈黙。それから１０分程度、会話は生まれなかった。

唐突に恵梨が言った。

「あたし、初心者だったじゃないですか？」

「あぁ……。俺もだけど」

「あ、そっか」

恵梨が笑う。

「なんていうか……右も左もわからなくって。正直言うと、今もわからないことだらけで」

「そうなんだ？」

恵梨は小さくうなずく。

「アニマートとか急に言われても、わかんないです」

「アニマート、出てくるの？」

ちなみに、アニマートとは奏法の一種で意味は活気を持って、というような意味合いを持っている。

「はい。急に出てきて、あれです。最初テンポの指定か何かと勘違いしちゃって。全然知らずに思い切り派手に鳴らしたら先生に怒ら

れちゃって」
「そうなんだ……」
拓真も昔、同じような勘違いをしたことを思い出した。
「俺もやったよ」
「そうなんですか！？」
「ほら、シーミレってあるじゃん？」
「あぁ！　前の小節と同じようにってヤツですよね」
拓真が小さくうなずく。
「そうそう！　それを俺全然知らなくってさぁ。前の小節にスタッカートついてたけど、ガン無視して柔らかく吹いたら怒られた！」
「ですよねー！　あれですよね。初心者って先輩から何でも聞いてねって言われるけど、なぁんか聞きづらいんですよぉ」
恵梨はポテトチップスを口に運んだ。パリパリと心地よい感触が伝わる。拓真の手もポテトチップスに伸びた。
「わかる！　まぁ、俺の場合は翔と大谷ちゃんに聞くこと多かったけど、二人バリバリだから、邪魔しちゃ悪いかなって気になるよな！」
「そうなんですよ～！　なんででしょうね？　あれ、初心者の引け目ってヤツかなぁ」
「謎だよなぁ……」
パリパリとポテトチップスの噛む音が聞こえる。
「先輩」
恵梨が呟いた。
「うん？」
「塚ちゃんとか先輩の弟さんって……あたしたちと同じこと思ってるんですかね？」
「……そうかも」
拓真は思い返した。智志も同じことを言っていた。なんとなく、聞きづらいと。
「それマズいですね！　あぁ、そうだ。だったらあたしたちから言

ってあげればいいだけじゃん！」
聞いてくれればなんでも言える。拓真もそう思った。
「そうだな～。まずは、聞き出すことから始めるか！」
「ですね！」
「んじゃあ、どうよ秦野さん。なんか俺らに文句とかない？」
「文句ですかぁ！？」
恵梨が大笑いした。

＜田中美里　＋　志賀慧太＞
「どうよ！？　吹奏楽部！」
美里がバシバシと慧太の背中を叩く。
「あ、楽しいです」
「ホントー！？　だったらもっと楽しそうな返事してよね！」
美里が大声で笑う。
「でもさぁ。どうして今の時期に吹奏楽部？」
美里の遠慮のない質問に、何かと遠慮がちな慧太もゆっくりと喋り始めた。
「あ……の。去年の文化祭で見て……まこっちゃんがカッコよくって」
「惚れたんだ？」
慧太が顔を赤くして「別に変な意味合いじゃないッスよ！」と首を大げさに横に振る。
「嫌だぁ、もう！　あたしだってそれくらいわかってるってば！」
「エ、エヘヘ」
慧太が恥ずかしそうに笑う。
「でもさぁ～。まこっちゃん厳しいでしょ？」
「はい」
「あ、ぶっちゃけた！」
美里の言葉に慧太が慌てる。

「だーいじょうぶよ！　あたしとけーちゃんの秘密にしとくから！」
これだけ大声で言われて果たして本当に秘密になっているかどうか慧太は少し不安だったが、彼女の言葉を信用することにした。
「でも、まこっちゃんって無口なだけで熱いッス」
「あー。それは思う。だって彼、合奏の片付け終わってもしばらく練習してるもんねぇ」
美里がチョコレートの包み紙を二つ手にする。
「はい」
「あ、ありがとうございます」
慧太もその包みを受け取り、チョコレートを口に含んだ。ほろ苦いビターチョコだった。思わず顔が渋い表情になる。
「あ、苦いのダメ？」
「ひゃい」
「そうなんだー！　いいこと知っちゃった！」
美里が嬉しそうに笑う。
「しょんなに嬉しいですか？」
そう言いつつも慧太はまだ上手く口が回らない。おまけに、涙目になってきているようだった。
「やぁだもう！　そんなに嫌いなら吐き出せば！？」
美里は慌ててティッシュを取り出す。泣く泣く慧太はチョコを吐き出した。
「すみません……」
「言ってくれなきゃわかんないよ～？　あたしなんてさ、言いたい放題だからね。何でもかんでも」
それを聞いていた隣に座る慎也と麻衣子が笑う。
「ちょっとー！　アンタたち何笑ってんのよ！」
美里はプリプリしながらそう言って、すぐにまた慧太に向き直る。
「とまぁ、こんな具合に思ったことズバー！と言っちゃうの」
「すっごいですね……」
慧太は驚いて呆然としていた。

「まぁ、あれよね。もうあたしたち3年生なんて家族みたいなもんよ」
「そうなんですか？」
「そうよー」
そこから美里はマシンガンのように喋り始めた。まさにぶっちゃける状態である。
翔と陽乃は1年生のクラスで自己紹介のときから夫婦漫才のようなやり取りをしたこと。陽乃が入学式で椅子をひっくり返したこと。絵美が実は勉強が苦手で、それこそ退部問題にまで発展したこと。慎也が昔は不良だったこと。春樹と拓真が部室で夜な夜な密会さながらのコッソリ練習をしていたこと。由美子の天然ぶりはハンパなく、実は2年生に上がるまで新井田彩と園部麻衣子の区別がついておらず、いつも逆さまで彼女たちを呼んでいたこと。沙希はどの家にもメイドさんがいると思っていたこと。雪子のことを知らない慧太だが、彼女の口から語られる雪子の人物像で、おおよその雰囲気すらわかってしまったほどだ。
「ちょっとぉ！　言い過ぎじゃない！？」
さすがに聞き捨てならないという様子で絵美が非難した。
「アハハ！　ゴメンゴメン！　まぁさ、こんな具合に何でも言い合えるような関係にならなきゃ、音楽なんてできないよ！」
美里の言葉が慧太の心に静かに染みていった。

＜宮部由美子　＋　瀬戸優輝＞
「先輩！」
優輝が真剣な目つきで由美子に訴える。
「はぁい！　なんでしょう？」
「先輩は、なんでいっつもセカンドなんですか？」
由美子が首を傾げる。
「たまには、大谷先輩とファーストセカンド入れ替わろうとか、思

わないんですか！？」
「思わない」
由美子は即答した。
「どうしてですか！？」
「じゃあ反対に聞いていい？　どうして瀬戸くんはファースト吹きたいの？」
「え……っと」
優輝が言葉を止める。
「ほら、喋らなきゃ。ぶっちゃけトークだよ？」
由美子が強引にお菓子を優輝の口に持って行く。
「わ、わかりました！　言いますから！」
優輝はこっそり周りに聞こえないように本音を言った。
彼は中学の頃から常にセカンドかサードを担当していた。クラリネットのセカンド・サードといえばたいていファーストのハモリを担当するか、ヴァン＝デル＝ロースト の曲であれば細かい装飾音符（いわゆる言葉で表現すればピロピロピロピロ！というような音）などを担当するかというようなパートである。
ファーストはジャズやニューサウンズのポップスであればソロが用意されている。それが彼には羨ましくて仕方がないのだ。
「へぇー！　そうなんだぁ」
由美子はいま知った様子で、本当に驚いていた。
「し、知らなかったんですか？」
「全然！」
優輝は衝撃を受けた。由美子の天然ぶりがここまでとは思わなかったのだ。
「じゃあ先輩は、なんで常にセカンドなんですか？」
「フルートとクラリネットじゃ違うかもしれなけど。それに、聞きかじった話だけど」
由美子はそう前置きをした上でこう言った。
セカンドやサードは優輝の言ったとおり、ハモリがメインだ。ハ

ーモニーとは基準の音、たとえばドのハーモニーであれば5度上の音であるソと3度上のミの音がハーモニーの構成部分になる。ドは基準となるのでチューナーであればピッタリ真ん中に来なければならない。しかし、5度上と3度上の音はそれに合う音程を取らなければならない。つまり、基準音よりもさらに正確な音程が求められる。

「だから、きっと3年間ずっとセカンドかサードだった瀬戸くんは、音程がよかったんだよ」

「……そうなんですかね？」

「まだ気に入らない？　じゃあちょっと待ってて」

由美子が席を離れる。それから駿と雄飛を連れてきたのだ。

「はい」

由美子は優輝の楽器を手渡す。

「はい。逢沢くんはB♭の音。進藤くんはFの音。瀬戸くんはDの音」

ちなみに、B♭は先ほどのド、Fはソ、Dはミの音に当たる。綺麗なハーモニーが響き渡った。

「瀬戸くん。Dの音吹いて」

「はい」

チューナーが音に反応する。真ん中にくればちょうど音程が合っていることになる。優輝のDの音は、真ん中より少し左、つまり音程が少しだけ低かったのだ。

「知ってるよね？　3度目の音はハーモニーでは、このB♭の調では低めのほうがいいこと」

「はい……」

由美子はニッコリ笑う。

「つまり！　中学の時の同級生か先輩か先生か知らないけど、パートを決めてた人は瀬戸くんの特性を見抜いてたんだ。すごいすごい！」

優輝はハッとして中学時代のパートリーダーであった同級生を思

い出した。

（瀬戸はセカンドでいいの！）

なんと強引な性格なのかと何度も憤慨したが、今になって彼女のずば抜けた観察眼に感服した優輝だった。

第３６４話　兄弟戦争

帰り道。今日は珍しく翔と陽乃以外に彼らの妹弟である綾音と夏樹も一緒に帰っていた。
「せやけど、今日のぶっちゃけトークはよかったな」
翔は嬉しそうにそう言った。
「あたしもそう思う。まさか、話す相手があたしは夏樹になって、翔は綾音ちゃんになるなんてね」
夏樹と綾音が恥ずかしそうに笑っている。
「意外やったけどなー。綾音、オレを部活で何て呼んでいいかわからへんとか、ウケる！」
「だってさぁ！　お兄ちゃんじゃ変やし！　部長ってよそよそしない？　せやけど自分も佐野やのに佐野先輩なんて呼びたくないし……」
「俺も同意見」
夏樹が苦笑いする。
「それで？　綾音ちゃんはなんて決着がついたの？」
「あたしは……とりあえず先輩でいくことにしました」
「いいじゃない！　それが一番自然だよ」
綾音はそれでもまだ恥ずかしそうだった。
「夏樹くんは？」
「俺はもう開き直って朝倉先輩って言います」
綾音が驚いて「うあー！　あたしには無理！」と大げさに首を横に振った。
「それじゃ。コンクールまであと少し、よろしくね」
「こちらこそ。ほな」
「さようならー！」

陽乃たちと分かれて、久しぶりに翔と綾音は同時に帰宅することになった。
「せやけど、ホンマ今日はお兄ちゃんおってくれてよかったわぁ」
綾音がため息をつく。
「なんでやねん？」
「いやさぁ。お兄ちゃんいっつもあたしらが夕食終わってから帰るから知らんかもしれへんけど……。ホンマ、あたしとお母さんと智輝だけの食卓、嫌やでぇ」
「えぇ？　なんでぇ？」
翔はそれとなくわかってはいたが、まさか綾音がそこまで嫌がるほどに智輝との関係が悪化しているとは思ってもみなかった。
「だってぇ。お母さんが智輝に話しかけても智輝、全然返事せぇへんし。もちろん、あたしにもな」
「そんなにアイツ、反抗的になってるんや……」
自分の反抗期は中学生あたりであったことを思いだす翔。しかし、兄妹とは普通に会話をしていた記憶はある。どうやら智輝は翔や綾音のときよりもひどいようだった。
「ただいまぁ」
翔と綾音が帰るなり、大声が聞こえた。
「いい加減にしなさい！」
「うるさい！　オバハン！」
綾音が嫌そうな顔をする。
「ほらな。いっつもこの時間帯ケンカしてんねん」
「原因は？」
「あの子、最近全然宿題していってへんねんて」
綾音は呆れた様子で靴を脱ぎ、リビングに向かった。２階からは相変わらず友美子と智輝の口論が響いてくる。
１５分ほどすると、友美子が疲れ切った表情でリビングに戻ってきた。
「あぁ……おかえり、二人とも」

翔は心配になり、友美子に「大丈夫？」と聞いた。
「難しい時期やからね。まぁ、アンタらも普通に接したって」
友美子は力なく笑い、すぐに台所に向かって食事の準備を始めた。
翔はそっとリビングを出て、２階に上がり智輝の部屋のドアをノックした。
「誰？」
「オレ」
智輝がそっとドアを開ける。
「よう」
「何か用？」
「用事なかったら来たらアカンのか？」
まだ身長が１５０センチ弱の智輝。１７５センチを越えて比較的体格の良い翔に、智輝は少しだけ引け目を感じて小声で「別に」と返した。
「入るで」
翔はご機嫌で部屋に入る。ふと、ノートが置かれていることに気づいた。
「何しとん？　宿題？」
智輝が大慌てで翔を突き飛ばしてそのノートを隠した。
「どないしてん？　なんか見られたらマズいもんでも描いてんのか？」
「何でもえぇやろ。兄ちゃんには関係ない」
「そんな寂しいこと言うなや。ほれ、見せてみぃ」
「うるさいな！　だいたい、兄ちゃんホンマのオレの兄貴ちゃうんやろ！？　兄貴面すんな！」
そう言った後に、智輝が泣きそうな顔をした。
「……知ってたんか」
「……。」
智輝は小さくうなずいた。
「ま。ホンマのことやし別にいいけど」

翔は冷静にそう言い返し、掴みかけたノートを放した。
「こっちはえぇか？」
「いいよ。別に」
ランドセルから飛び出たノートを翔は手に取る。几帳面な智輝は、授業のノートにも右上に日付と曜日をいつも書いている。そのことを何度か宿題を教えたことのある翔は知っていた。
日付が、６月２９日で止まっていた。つまり、そこから先は算数の授業ではノートは取っていないことになる。
「授業のノート、取ってへんのか？」
「めんどくさいもん」
「宿題は？」
「全然やってへん」
「ふーん……」
翔はそれから国語、社会、理科と順番にノートを見ていく。計算ドリルに漢字ドリルも調べてみたが、だいたい６月中旬から下旬でどこも真っ白になっていた。ちょうど友美子が頻繁に学校に呼び出されるようになる時期と、重なっていた。
翔は立ち上がるなり、部屋を出て行った。
「……？」
智輝が不審そうに開けっ放しにしていったドアを見つめる。しばらくしても帰って来る様子がなかったので、ドアを閉めた。ところが、閉めて２０秒ほどで翔がまた戻ってきたのだ。その手には、七海市指定のゴミ収集袋（燃やせるごみ専用）が握られていた。
そして、智輝のランドセルをひっくり返してノートや教科書をゴミ袋に入れ始めたのだ。
「な、何してん！？」
「いらんやろ。勉強せぇへんもんな。漢字ドリルも計算ドリルももういらんわ」
教科書やノートが無造作にゴミ袋に放り込まれていく。
「やめろや！」

智輝が翔に食って掛かった。
「いらへんねんやろが！」
「誰もそんなこと言うてへん！」
智輝は翔を思い切り突き飛ばした。
ドスン！
「え？　何？」
真下の部屋にいた綾音がその音に驚いて上を見上げる。
「お母さーん！　なんか上でエラい音したで！」
「えぇ？　ホンマに？」
友美子と富美枝がリビングから出てくる。綾音も一緒になって階段を3人で上がっていく。すると、すぐに智輝と翔の怒声が聞こえ始めた。
「誰がそんなこと言うてん！」
「言うてへんけど、真っ白けのノートとか見たら勉強しません言うてるようなもんやろが！」
友美子が部屋を覗き込むと、ノートや筆記用具を散乱させながら翔と智輝が取っ組み合いのケンカをしているではないか。
「ちょ、何やってんの二人とも！」
慌てて仲裁しようとするが、あまりにケンカが激しすぎて止めることができない。
「あぁ～……どうしよう……あっ！」
綾音はあのことを思い出したので、急いで自室に戻りそれを袋から取り出した。
「痛ってぇ！　お前、本気で殴りやがったな！」
「兄ちゃんが悪いねん！　俺を先にしばいてきたから！」
「やめなさい！　いい加減に……！」
その直後だった。

バッシャアアアアーン！

耳を突き破らんばかりに、金属音が家中に響く。
「うるっせー！」
「うわ！？」
智輝、翔、友美子、冨美枝の４人が目を丸くする。綾音がクラッシュシンバルを両手に握って立っていた。

第３６５話　憧憬

「お前、そのシンバルどないしてん」
翔が筆記用具やノートが散乱した部屋で呟いた。
「一昨日の野球の応援で、またどうせ応援があるから球場に近いあたしに預かってほしいって、ミサッチ先輩に渡された」
「田中っち……勝手なことを」
そうは言いつつも、この収拾のしようがなくなりつつあった翔と智輝の兄弟ゲンカを見事に止めたのだ。さすが美里というべきか。何かを企んでいたとしか思えないタイミングだった。
「ック……ヒグッ……ウック……！」
部屋の中央で体育座りをして、智輝が泣いている。
「あーあぁ、もう……ノートも教科書もグチャグチャやないの」
友美子が呆れた様子で部屋を片付けようとする。
「あ。しかも翔。アンタほっぺた切れてるやん。血ぃ出てるで」
「え。あ、ホンマや」
どうやら智輝に引っ掻かれたときにできた傷のようだった。ツゥッと血が滴っている。
「後で消毒してバンソウコウ貼っときなさいよ」
「へぇい」
友美子はそっと翔に近づき、耳打ちした。
「アンタに頼んでもいい？　男の子の気持ちは、アンタかお父さんがよぉわかってるやろし」
「……えぇよ」
翔は小さくうなずいた。綾音と冨美枝は友美子に促されて部屋を出る。バタン、と音がして扉が閉められた。
沈黙が続く。

「西日がキツなってきたな。カーテン閉めるで」
「……。」
それっきり沈黙がまた始まってしまい、15分が過ぎた。外から自転車のベル音が聞こえたり、近所のおばさんの話し声が聞こえたりする。もすうぐ6時になろうとしていた。
「お母さんが」
不意に智輝が呟いた。
「うん？」
「お母さんが……」
「母さんがどないしてん？」
翔は智輝の隣に座って話の続きを促す。
「兄ちゃんの話、よぉすんねん」
「え。そうなんか？」
智輝は小さくうなずいた。
「兄ちゃんはこんだけ頑張ってるとか、こないだはこんな演奏会に出たとか」
友美子のことだ。自宅にいることの少ない兄の話を弟にしておいて、少しでも寂しさを紛らわせようとしているのかもしれないと翔は感じた。
「俺……1回、兄ちゃんが学校で練習してるときに、そば通って……めっちゃ先生に怒られてるん、聞いてん」
「そうなんか？」
「うん」
鼻声になっているので、よほど泣いたのだろう。智輝は顔を伏せたままだった。
「兄ちゃん頑張ってるって思った」
「ほんで、なんでこんなことなんねん」
「俺な」
智輝がようやく顔を上げた。
「兄ちゃんが憧れやねん」

「え？　オレ？」
智輝が今度は大きくうなずく。
「カッコいいし、背ぇ高いし、頭いいし、楽器吹けるし、体育できるし、彼女さんおるし」
智輝はあっという間にそれらを言い切った。
「俺、兄ちゃんに憧れてた。でも、どんだけ頑張っても兄ちゃんに追いつかれへん。お母さんは、いっつも兄ちゃん褒めてるし……演奏会にもずっと行ってあげてるし、なんかお母さんの集まりあるから言うて、休みの日でも学校行くし……」
兄への憧憬。翔にはまったくわからない感情でもあった。
「なんか、俺なんか何しても兄ちゃんにかなわへん気がしたら……急にやる気がなくなっ」
智輝の言葉を遮るように、翔が智輝を思い切り抱き締めた。
「……。」
「お前はお前やろ」
「……。」
「お前がオレを目指す必要なんてない。ゼロや」
「ほな、どないしたらえぇん？」
「……よっしゃ。来い」
翔は智輝を自分の部屋に誘った。
「入り」
「う、うん」
智輝は翔の部屋に出入りすることなどまったくなかった。未知の空間だ。
「……。」
佐渡　裕のポスターが貼ってある。
「兄ちゃん、こんなオジサン好きなん？」
「ホモちゃうからな」
翔はクックッと笑った。
「見てみ」

そう言って翔が取り出したのは、先日あった数学の小テストだ。
「うわ」
智輝が声を漏らすのも無理はない。なにせ、5点なのだから。
「何点満点？」
「50点。ウケるやろ！　ちょっとこの時期、部活忙しくってなぁ」
「ふぅーん……」
智輝は物珍しそうに翔の部屋を見渡す。
「なんか、甘いニオイする」
「あ！　しもた。ワックスの蓋開けっ放しやったわ。そうか。甘いニオイか」
翔はワックスを少し手に取った。
「おいで」
「？」
翔は智輝の頭にワックスをつけ、慣れた手つきで整髪する。
「おっ。イケメン」
「そ、そう？」
「おう」
「エヘヘ」
智輝はニコッと嬉しそうに笑う。
「なぁ、兄ちゃん」
「うん？」
「29日のコンクール、俺も応援行っていい？」
「来てくれんのか？」
「うん！」
「もちろん来てくれや！」
翔は嬉しそうに笑った。同時に、最近の智輝の様子がおかしいのは自分への憧憬（しょうけい）が強すぎたせいだったと気づかされたのだ。あまり近づきすぎるのもよくないが、距離を置きすぎるのも良くない。兄弟とはいえ、別の人間同士なのだから、気をつけなければいけないと感じる翔。

「あー！」
智輝の声に驚いてワックスを落としそうになった。
「兄ちゃん、エッチな本隠してる！」
智輝が机の下から取り出してきたのは、川島海荷（かわしまうみか）が表紙に載っている雑誌だった。
「ち、ちゃうぞ智輝！　それはエロくない！」
「エロー！　エロー！」
「アホ！　待てや智輝！　コラ！」
業を煮やした友美子が大声で一喝した。
「うるさいねんアンタら！」
「そう言いつつ嬉しそうな顔しちゃって」
綾音も安心した様子で、叫ぶ友美子を見てため息を漏らすのだった。

第３６６話　１０００÷４６は？

「ねぇ。２２枚ってとこかしら？」
　菘が沙知に聞く。
「そうね。１０００枚÷４６で２１．７３９１ってコトだったから……」
「２２枚にすれば１０１２。１２枚余るわね」
「いいじゃない。誰か失敗するかもしれないし、余分に買っておこう」
「誰かって誰よ」
　菘が笑う。
「ほら、例えばホルンの彼とか！」
「それは俺のことかよ」
　賢治が不機嫌そうに後ろから顔を覗かせた。
「やだぁ。聞いてた？」
「聞こえるように言ってたクセして！」
　３人が大声で笑うのを聞きつけた翔が彼らの中に入っていった。
「おー！　楽しそうやな！　何やっとん！？」
「！」
　一瞬で菘、沙知、賢治の顔が驚いたものに変わった。
「わぁお！　センパーイ！」
　突然かのこが突っ込んでくる。
「ちょおーっといいですかぁ！？」
「え？」
「教えてほしいコトがあるんですよー！」
「え、え、あ、うん！」
　翔は強引にかのこに手を引かれて、そのまま部室に行ってしまっ

た。
「危なかったなぁ……」
賢治がため息を漏らす。３人とも、かのこの機転の良さに感謝するばかりであった。
「ホンット。佐野先輩、なんかこういうタイミングで来るよね」
菘が冷や汗を流す。
「とりあえず、続きをやろっか」
沙知の言葉で再び菘は作業を開始した。
「教えてほしいことって？」
かのこに引かれるがままやって来た翔は、彼女に尋ねた。
「え！　アハ！　なんでしたっけねぇ！」
「ハァ？」
翔は意味不明なかのこの言動に戸惑ってしまう。かのこが戸惑っていると、またしてもタイミングの悪いことが起きる。
「かっのこー！　中央のデザイン、これでどうよー！」
飛び込んできたのは茉莉紗。その右手には色紙が握られていた。
「どぅわーお！　茉莉紗！　その話はあーとあと！」
茉莉紗の表情も一瞬で血相を変えたものになり「そうねぇ！」と踵を返して部室を飛び出した。
「……なぁんか」
「変だよね」
偶然居合わせた陽乃が呟く。
「お前もそう思うか？」
「うん」
陽乃が翔の傍にやって来た。
「どの辺が？」
「聞いてくれる？」
陽乃によると、午前中のパート練習中のことだそうだ。休憩を取った１０分ほどの間。陽乃がお手洗いに行っていて、その間は流、綾音、彩香、勇の４人になった。陽乃が出るまでは休憩中だという

のに熱心に練習をしていたそうだ。
　ところが、陽乃がお手洗いから帰る途中。彼らの音色がピッタリ止んでいることに気づいた。何かあったのかと恐る恐る覗くと、こんな会話が聞こえてきたそうだ。
「いいじゃない！　あたしはそれ好き！」
　彩香がずいぶんはしゃいでいたそうだ。
「俺はこっちですね」
　普段はクールな雰囲気のする流も、満面の笑み。
「佐野さん、イラスト上手いじゃん。そっくり」
　勇がウンウンとうなずいた。
「そうですかぁ？」
　綾音も恥ずかしそうだが、嬉しそうにもしていた。
　陽乃は気を取り直して少し戻り、いま戻ってきたばかりかのような態度でドアを開けたのだ。すると、４人はギョッとした様子で慌てて何かを隠す素振りを見せたのだ。
　陽乃はひとまず気づかないフリをして、その後綾音に聞いたそうだ。あの時何をしていたのか。普段なら「実はですね～」と教えてくれる綾音だが、この時は「え？　あー、あれですか？　大した話じゃないですよ！」とサラリと流されてしまったそうだ。
「え？　ホンマか」
「ホントよ～。なんか、仲間はずれっていうか……」
「せやけど、先輩を仲間はずれにするかぁ？」
「あたしもそれが不思議なのよ。コンクール前だから余計に……」
「なんなんやろなぁ……」
　翔たちは首をかしげながらも、後輩たちの行動は何を意味するのか解せないまま一日が過ぎていった。

「お疲れ様です～」
　茉莉紗は翔たちが帰ったのを見て、ようやく安心した表情でカバンから色紙を取り出した。

「危なかったわねぇ……さっきは」
かのこが色紙を受け取って答える。
「そうだよぉ。もう！　気をつけてくれないとダメじゃん」
「ゴメンて。そんなに怒らないで」
「まぁ、バレないようにするのはなかなか大変だけどな。毎日一緒にいる中で」
駿が姿を見せた。
「逢沢先輩～。やっぱりクラリネットも大変ですか？」
「橋本先輩、めちゃくちゃ鋭いからさぁ。もう話題も出せない」
苦笑いする駿。
「わかります～。それ、ウチもですよ」
好美が話に加わった。
「本堂先輩と水谷先輩、私たちが何か隠し事をしてるって言って、パート練習を中断して１５分くらい、問い詰められたんですよ～」
「マジ？　それすっげぇ怖い！」
駿が怯える。その大げさな身振りにドッと笑い声が起きた。
「ところでさ！　もう時間もそんなにないし。急いで折らないとヤバくない？」
盛り上がっている駿たちに光瑠が呼びかける。
「あぁ、そうだよなぁ。もう２２日であと１週間だし」
「時間ないけど、焦らず丁寧にお願いし・ま・す・ね！」
「へいへい」
光瑠の念押しに駿は苦笑いしながら答えるのだった。

第３６７話　見据えたバトル

「さて、だ」
恭一は３年生９名を前にして話を切り出した。
「以前渡した予定表なんだけれども。ちょっとこれを変更しようと思う」
「はい」
３年生は配られた予定表の案に目を通していた。それほど大きく変わっている箇所はない。というよりも、変更箇所は１ヶ所のみである。しかし、それが大きな影響を及ぼすであろうことは３年生には一目瞭然であった。
コンクールも４日後に迫った２５日水曜日。恭一はここにきて悩んでいることがあった。それは合宿の日取りである。これまでの予定では、８月１６日から１９日の３泊４日の行程を組んでいた。しかし、これは部員たちには一切言っていないのだが、恭一の予想よりも課題曲、自由曲ともに仕上がりの質が良くなっていた。彼の中では、ひょっとすると地区大会を突破し、県大会に行けるのではないかということすら、稀にだが頭に浮かぶこともあった。
そこで、合宿の日取りを２つ、考えたのだ。
ひとつは、地区大会直後の８月１日から４日の間。県大会が８日なので、それまでに集中的に練習するためである。そして、もうひとつが現行のままである８月１６日から１９日という手である。
それらを３年生に説明し、彼らに意見を求めたというわけである。
「はい！」
絵美が手を上げた。
「私は、８月１日から４日の間がいいと思います」
「その理由は？」

絵美は理由を3つ挙げた。まず、地区大会突破後により集中して質の高い練習をするため。次に、まだどこか遠慮がちな1年生との交流を図るため。そして、お盆時期なので混雑することで無駄に疲れるのを防ぐため。

「いいですか？」

それに対する美里の意見。

「あたしは、8月16日から19日です」

その理由はひとつだけである。県大会を突破できた、できなかったに関わらず良いスタートを切るタイミングになるということであった。つまり、県大会を突破できれば次の東関東大会に向けての練習ができる。突破できなければ、マーチングコンテストへの練習をすることもできる。臨機応変に対応可能というのが、彼女がこの日程を選んだ理由である。

「なるほどな。一度、ちょっと集計を取ってみよう。橋本のように、8月1日から4日がいいと思う者は？」

すると絵美、由美子、拓真、慎也、そして翔が手を上げた。

「それじゃあ、8月16日から19日は？」

こちらは美里、沙希、春樹、陽乃が手を上げる。

「なるほど……。一票差じゃ微妙だな」

恭一が困った表情を見せた。

「先生。1、2年生の意見は聞かないんですか？」

陽乃の言葉に恭一が苦笑いする。

「聞いてもいいが、なんせ48人もいるんだ。収拾がつかなくなりそうだろう」

確かにそうであった。現に、たった9人の3年生でもこうして意見が割れているのだ。

「とにかく、1、2年生には問わずにお前たちで一度、意見を戦わせなさい。それで、できれば明日明後日に結論を出してくれ。コンクール前に悪いけどな」

「はい！」

恭一はそう言って部室を出た。確かに、コンクール前にこうした時間を取るのは一見、無駄のように思えた。しかし、お互いの考えを伝え合う機会を持てるという意味では、恭一は良いのではないかと思ってそうさせたのだ。

「さて、と」

翔が切り出した。

「どないするか、やな」

「だね」

由美子が声を漏らした。

「ねぇ。やっぱり、陽ちゃんたちが考えてるのは県大会後のこと？」

「うん」

由美子の問いに陽乃がうなずく。そして陽乃は自分なりの考えを伝えた。

「やっぱり、県大会前に行くといいかなとも一瞬思った。でも、やっぱり練習ばっかりじゃなくっていろいろ遊びも入れたいじゃない？　肝試しとか、焼肉パーティーとかさ。県大会直前に、そんな風に浮つくのはどうかなぁと思って……」

拓真がうなずく。慎也が手を上げて言った。

「確かに、朝倉の言うことはわかる。浮つくかもしれないけど……でも、こないだぶっちゃけ大会しただろ？　あの時、いろんな意見が後輩から出たじゃん。合宿なら、3泊するわけだし……もっとこう、いろいろわかることがあるんじゃないかなって。そうすれば、もっと大会前に絆じゃないけど、なんか連帯感のようなものができて、俺はいいんじゃないかって思ったから」

「なるほど……」

慎也の意見も確かなものであった。そして、しばらく沈黙が起きてしまう。

「……。」

誰も口を開かない。時計の針の進む音と、隣の音楽室から1、2年生が楽器を吹く音がずっと9人の耳に響いていた。

コンコンコン、と音がしたのは１０分ほど経ってからだ。
「はい」
傍にいた春樹が対応する。
「すみません、ちょっとチューナーの電池が切れたので、替えのを取らせてもらいたいんです」
慧太だった。
「あぁ、どうぞどうぞ。ちょっと空気微妙だけど」
「失礼します」
慧太がそそくさと翔たちの後ろを通っていく。審議は続く。
「じゃあ、他にメリットを考えようよ」
陽乃が提案した。
「まず、行き先は変わらずだよね」
「すると、七海荘だな」
拓真がメモ用紙に意見をまとめ始める。
「で、８月１日派の利点をまとめると……」
・地区大会突破後、県大会を目指す意味で士気が高まる。
・質の高い練習が可能。
・お盆時期の実施と比べ、疲れが出ない。
「一方の８月１６日派は……」
・県大会の結果次第で、臨機応変に動ける。
・少々リラックスした雰囲気で合宿に挑める。
「ちょっと説得力に欠けるよな」
春樹が苦笑いした。
「なんか、あたしたち遊びたいって思われそう」
美里が首を横に小さく振った。
「別にそんなことは思ってへんから心配しぃなや」
翔が笑顔で言った。
「確かに、結果次第で臨機応変に動けるのはいいな」
翔が８月１６日派の意見を褒める。
「ひょっとしたら、文化祭とか定期演奏会のこととか決めてもいい

かもしれへん」
「それは1日派では無理かな？」
絵美が尋ねる。
「せやなぁ……。地区大会の結果次第やから、同じことは言えるかもしれへん」
「すみません、通ります」
慧太の存在を忘れて、9人はすっかり審議を進めていた。
「あ、ゴメンゴメン」
翔はちょっと前に移動し、慧太を通した。
「あ、そうだ志賀くん」
沙希が慧太を止める。
「はい」
「ちょっと意見聞かせてよ」
「サキティ！」
由美子が止めようとするが、彼女は「まぁ、第三者の視点も必要よ」と言って続けた。
「僕はコンクール出ないので……」
慧太は困った様子でそう言った。
「コンクール抜きにしても、志賀くんはどっちがいいと思う？」
「えと……」
慧太はしばらく俯いて考えたようで、小声で答えを出した。
「1日……です」
「理由は？」
美里が聞く。
「なんていうか……お盆は、僕……個人的に休んでリフレッシュしてもいいんじゃないかって」
「リフレッシュ？」
予想外の言葉に、陽乃は首を傾げる。
「あ。練習サボりたいとか、そんなじゃないですよ。ただ、お盆だから……田舎に帰ったり、先輩方でしたらちょっと受験勉強して、

お祭行って遊んだり。県大会突破して、今度えっと……東関東大会に進んでも、いったん気持ち切り替えるタイミングにしたいなって思うんで……俺は1日からがいいです」

「なるほどね～」

新鮮な考え方に、全員がうなずいた。

「そういうのも、アリか」

翔がニカッと笑った。

「ありがと、志賀くん」

「いえ……！　じゃあ、失礼します」

慧太がゆっくりと扉を閉めて部室を後にした。

「そんじゃ……意見、他にある人」

春樹が手を上げた。

「リフレッシュっていう意味考えると……俺、1日からのほうがいいかも」

「そうなんか？」

翔が尋ねる。

「うん。俺……黙ってたけど、まぁ、結果がどうなろうと行こうと思ってたトコがあって」

「どこに？」

慎也が尋ねる。

「鎌倉音大の、オープンキャンパス」

「あぁ」

絵美が思い出したようにうなずいた。

「そういえば、8月18日だっけ？」

「うん」

「ちょっと待ってよ」

美里が会話を止めた。

「じゃあ、合宿どうするつもりだったの？」

「途中で抜けるつもりで」

「ダメよ！　そんなの！」

大声を上げたのは沙希だった。
「許さないからね」
「な、なんで」
春樹は珍しく声を張り上げる沙希にタジタジだ。
「最後の合宿じゃない。私たちにすれば」
沙希の口調が強くなっていた。
「それなのに、抜けてしまうとか私、嫌だから！」
「……。」
春樹がポカンとしていた。
「俺も」
拓真が言う。
「やっぱ、全員で最後まで楽しみたいから……それはちょっと」
「……やな」
翔がうなずく。
「ほな……まぁ、実を言うとその頃、オレらの行く島根大学でもオープンキャンパスって聞いてるし……」
「ヒュー！　オレらだって！」
「やかましな！」
美里の茶化しに翔と陽乃が顔を赤くする。
「とにかく！　ほな、合宿は8月1日からでＯＫ！？」
「はぁーい！」
「ほな、そう先生に言うてくるな」
翔は嬉しそうに部室を出て、職員室に向かって行った。

「へぇ～！　合宿、1日から4日なんだ」
自宅に帰ってから、恭一は彩にそう話した。
「どうだ？　お前も一緒に」
「やだ！　冗談でしょ」
「いや……結構本気だったけど」
「バカねぇ。生徒たちの前で恥ずかしくって無理よ」

恭一が笑う。
「確かにな」
「それで」
彩はご飯を恭一に差し出した。
「今年はどう？」
「うーん……ひょっとしたらだけれど。それに、佐野たちにも一言も言ってないが」
「うん」
「県大会に進めるだけの、力はある」
「すごいじゃない！」
「あぁ。だから、あと数日しっかり頑張るよ」
そう言って恭一はご飯に手をつける。
（しかし……アイツらがどうなるかだな）
恭一は４人の顔を思い浮かべた。順平、杏、賢治、裕子の４人だった。

第３６８話　壊さないために

「ストップ、ストップ！」
恭一が指揮棒を叩いて曲を止めた。
「おいおい、もうちょっとペース配分考えて吹け。もうコンクールは明日なんだぞ？」
「……。」
しかし、誰も返事をしない。どうやら、恭一の言葉がどこに飛んでいるかわかっていないようだった。
「ホルン！」
「え？」
４人が顔を見合わせる。
「お前らだよ！　自由曲の、この『エジプトへの逃避』は前から言ったように確かに厚みのある演奏は必要だ。だけど、もう明日が本番だぞ？」
「はい。だから、本番の勢いで吹こうかと……」
「それもいいが、明日唇が壊れて吹けなかったら元も子もないだろう？」
「は、はい……すいません」
４人が首を傾げる。ペース配分と言われても、順平たちにしてみれば合奏と言えども手を抜かずに吹くべきではないか、というのが彼らなりの考えだった。
実際、この自由曲はホルンが重要な部分が多くなっている。そのため、自然と順平たちも気合いが入ってしまい、つい本番並みの勢いで吹いてしまうことがあるのだ。それを恭一は危惧していた。
ホルンは４人しかいない。その中の誰か一人でも唇を壊してしまえば、フォース（４ｔｈ）まであるホルンはパートが欠けてしまう

ことになるのだ。そうなれば、カバーできるパートと言うのもないに等しいので、大問題であった。
それを順平たちもいまひとつ理解していないというのが、さらに問題であった。
「ストーップ！」
再び恭一の声が飛ぶ。
「もういい！　ホルン吹くな！」
「え……」
恭一はポカンとしている順平たちの顔を見て、今の自分の言い方がまずかったことに気づく。
「す、すまん。別に悪い意味ではなくて……」
「ウッ……ウウッ……ウーッ……」
絞り出すような声で泣き始めたのは、杏だった。あれほどマイペースで、基本的にひょうひょうとしている杏が泣き始めたので、隣にいた賢治がオロオロしている。
「保田。先生な、別にホルンが下手で怒ってるわけじゃないんだぞ」
「わっ、わかって、るんですけど、すい、ま、せん」
恭一はため息を漏らした。
「ちょっと休憩。ホルンと……川崎。ちょっと部室来い」
「は、はい！」
順平たちホルンと４人は、恭一の後に連なるようにして部室に入って行く。
「ビックリしたぁ……」
彼らの姿がなくなるや否や、健之佑が呟いた。
「ホント。先生、あんな大声出すとは思わなかった」
佳菜も驚きを隠せないようだ。
「やっぱ……２年生だけじゃ不安なんだよね」
さゆりがボソッと呟く。
「そうだよね～。先輩がいるのといないのとじゃ、心理的に違うもん」

「……。」
はるかとさゆりの言葉が、翔の胸に少しわだかまりとして残っていた。

恭一はホルンの４人に、自分の気持ちをしっかりと伝えていた。
１年生３人と２年生１人でよく吹いていること。杏は初心者であるにもかかわらず、既にコンクールメンバーとして十分なレベルにまで達していること。
「だから、お前たち４人は七海（うち）にはとても重要な４人なんだ。わかるな？」
「はい」
「だからこそ、無理をしてほしくない。お前たちの誰か１人でも欠ければ、大事なんだから」
賢治が呟いた。
「でも、サックスとかでカバーできなくもないんじゃ……」
「確かに、同じような音色（おんしょく）しているからな。ただ、やっぱり金管と木管では決定的に違うんだよ」
「そうですかね……」
「あの、吠えるような音色（ねいろ）はホルンじゃなきゃ、出せない」
「……。」
「だから、今日は無茶吹きせずに、明日に備えてほしいんだ」
「はい」
「わかってくれたら、１年生は音楽室に戻って」
順平が目を丸くした。
「右川には、個別で話がある。川崎も残っておいて」
「は、はい」
「あんこー！」
杏たちが音楽室に戻るなり、雛乃が杏に抱きついた。
「ど、どうしたの？」
「それはこっちのセリフー！　あんこったら、急に泣くんだもん！

びっくりしちゃったよぉ」
「ゴメンね！　なんか急に不安になって……」
「賢ちゃん」
騒ぎを聞いて駆けつけた貴志が賢治の肩を叩く。
「賢ちゃん、永井先輩の代わりに頑張るんでしょ？」
「うん」
賢治が小さくうなずいた。
「でも、永井先輩だったらもっと気楽にやってるよ」
「……そうかなぁ」
「俺はなんとなく、そんな気がする」
貴志の笑みに、賢治も少しだけそう思えた気がしていた。
一方、部室では慎也と順平が恭一と向かい合って座っていた。
「なんていうか……まぁ、右川はホルンのパートリーダーだけど。お前、根っからの真面目だから、何か心配だったんだよなぁ」
恭一が頭を掻く。
「お前、何でもかんでも抱え込んでないか？」
「え……。そんなつもりはないんですけど」
「いやさぁ、川崎が」
「先生」
慎也が止めようとするが、ここで言っておかなければ状況は変わらないと思い、恭一は言った。
「川崎が、右川が全然自分に相談してくれないって、凹んでたぞ」
「え……」
慎也が恥ずかしそうに顔を背ける。
「金管セクリなんだから、もっとこう、いろいろ意見戦わせたいのにホルンだけ全然、中身がどうなってるか見えないって。声をかけても大丈夫ですの一点張りで、寄せ付けてくれないってな」
順平はなるべく先輩たちに迷惑をかけないようにと思い、あまり相談等を持ちかけずにすべて自分なりに考えて練習などをしていた。
しかし、それがかえって先輩たちを不安にさせていたのだとここに

来て初めて知ったのだ。
「部活は一人でやってるんじゃないし、ホルンパートだけでやってるんじゃないんだから。もっと、先輩を頼ってもいいんだぞ」
「……はい！」
順平の顔がようやく、笑顔になった。
「先生、キツいこと前日に言ったけど……」
「いえ」
順平が笑顔で返した。
「先生や先輩の本音、わかって嬉しいです」
そして立ち上がって言った。
「今日は、無茶吹きしません。明日に備えて、やんわり吹いておきます」
恭一と慎也が笑顔になる。
「うん。そうしてくれ」
「それじゃ、俺も戻りますね」
順平は立ち上がって嬉しそうに音楽室に戻った。
「一か八かだったけどな」
恭一の言葉に慎也が笑った。
「先生らしいです」
慎也が笑い、順平の後を追う。恭一もついて行き、課題曲を通して練習を終えようと思っていた。

第３６９話　幻のような日々

「ふー……」
誰もいなくなった音楽室で翔はため息を漏らした。
「いよいよ明日……かぁ……」
考えてみれば、とても２年前には想像できないような日々が今は続いている。まるで、２年前は初心者集団でサークルだった部とは思えないような情景だ。まるで、あの１年生の頃が幻だったかのようにすら思えてくるのだ。
そもそも、仕事の都合で引越ししたときはどうなるのか不安で不安で仕方がなかった。けれども、新天地で吹奏楽部があれば入部する気はあった。
ところが、その新天地に吹奏楽部はなかった。それで諦める翔ではもちろんない。なければ創ればいい。いま考えてみると、かなり無茶だったような気もしている。しかし、あの時無茶をしなければ、いまこの場所にこうして立っていることは、まずないのだ。
そんな無茶な行為をあっさり受け入れてくれた陽乃たち３年生９名。それから、恭一。そして、友美子たち保護者。誰か一人でも欠けてはいけない。翔はそう感じていた。
「明日どないなるかなぁ～……」
夜空を見上げると、一番星が見えた。
「おっ！　珍しい！」
ビルや住宅の明かりで滅多に一番星でも見えることのない七海市の空に、それはキラキラと輝いていた。
「えぇことありそうやんけ」
翔は嬉しそうに笑いながら、しばらく星を見つめていた。
「よっしゃ。鍵かけて帰ろうか」

今日は陽乃にも一人で考えたいことがあるからと言い、先に帰ってもらっていた。翔はカバンを背負い、音楽室を出て鍵を掛けた。

「……？」

不意に、フルートの音がしたのだ。

「あれ？　誰かまだ練習しとんか？」

練習熱心な由美子や沙希なら大いにありうる。翔はそう思い、もう一度扉を開けた。

「……え？」

そう思いドアを開けてから、翔は不審なことに気づいた。音色（ねいろ）が聞こえてくるのは、さっきまで翔がいた音楽室なのだ。

息を呑んで、翔は思い切りドアを開けた。

「誰かおるんか！？」

不意にサァッと暗闇が晴れる。すると、そこには合奏をしている部員たちの姿があった。

「……？」

座っているのはさゆり、麻綾、夏樹など見慣れた後輩たち。しかし、今年残念なことにコンクールメンバーにさゆりは入っていない。おまけに、アルトサックスに知らない生徒が座っていた。学年カラーは、翔たちの学年の黄色だ。

（誰や……あれ？）

言葉が出なくなっていることに翔は気づいた。

（ど、どうなって……え！？）

隣を見ると、なんと髪の毛を茶髪に染めている拓真がいた。

（たっ、拓あん！　どないしたん！？　えぇ……！？）

恭一の声が響く。

「いいか！　そんな演奏じゃ、去年引退した先輩たちが創りあげてくれたこの吹奏楽部の名に恥じることになるぞ！」

「はい！」

「もう1回、課題曲頭から！」

「はい！」

その直後に、聞いたことのない課題曲が流れてくる。
（これ……）
翔は驚いて後ろに掛けてあるカレンダーを見た。
（２００８年……！？）
翔は息を呑むことしかできなかった。しかし、先ほどからずっと聴こえているメロディは、自分たちのものよりずっと安定している。
ふと気づいた。カレンダーが、１０月になっていることに。そして、さゆりたちの着ている制服が、秋服であることに。
（もしかして……）
翔には予想が付いた。おそらく、そうなのだろう。そう思うと、嬉しくて仕方がなかった。涙が自然とこぼれ落ちてきていたのだ。
（良かった……。オレのやってたこと……）

「翔……」
「ん……」
「翔ってば！」
ハッと目を覚ますと、目の前に陽乃と慎也、拓真がいた。
「あれ……？」
音楽室の床で大の字になって寝転んでいる自分がいたのだ。
「あれ？　拓あん……髪の毛の色、戻したんか？」
「へ？」
拓真の目が点になる。
「何言ってんだ？　お前……」
慎也も不思議そうに首をかしげた。
「あ……いや。夢っぽい」
翔はへへと笑った。
「へへ、じゃないよ。何時と思ってるの？」
翔が時計を見ると、なんと9時半だったのだ。
「ゲ！」
「おばさんから、翔が帰ってないっていう連絡来て先生にも連絡取

って、皆で探したんだから」
「みんなって？」
「3年生全員。またオセンチになって、どっか行ってるんじゃないかって心配になったの」
それだけ言うと、陽乃は電話を掛け始めた。
「あ、もしもし？　ミサッチ。いたよ～。音楽室で寝てるの。バカだよね」
そうは言いつつも、陽乃の口調には安堵の色が窺えるのだった。
音楽室を出てから、陽乃と翔は慎也たちと別れ、津上橋を渡ってつくし野川沿いを歩いていた。
「明日やな」
翔が呟く。
「だね」
「あっという間やなぁ」
「だね」
陽乃の短い返事に、翔は彼女が緊張していることを感じ取った。
「陽乃」
「何？」
「コンクール終わった次の日とその次の日、休みやろ？」
「うん」
陽乃はその二日間はゆっくりできると思い、ある意味楽しみにしていた。しかし、その次の翔の言葉を聞いて、陽乃の思考回路が真っ白になってしまった。
「その……あの……大阪に、一緒に行かん？」
「……へ？」
翔の顔が真っ赤だ。
「あっ！　ち、ちが……わへんけど……別に変な意味はなくって……その……」
陽乃が大声で答えた。
「ダッ、ダメだよ！　だって……まだ……高校生だし二人で旅行な

んてお父さんが許すはずないし……」
「……やんなぁ」
翔が思い切り肩を落とした。陽乃はなんとかフォローを入れようと思い、続けた。
「でもさ！　日帰りならいいかも」
「日帰りで大阪なんて無理やて～」
「大阪じゃなくてもさ！　東京、翔はマトモに観光したことないんじゃない？」
「そういえば……」
陽乃はここぞとばかりに提案した。
「じゃあ！　明後日は東京&横浜観光ってことで、いいんじゃない？」
「ホンマに！？」
「それならお父さんも許してくれると思うから」
翔が満面の笑みを浮かべた。
「やったぁ！」
「たーだし！」
陽乃が条件を提示した。
「県大会に行けたらね！」
「えぇ！？」
顔を歪める翔。それを見た陽乃が不機嫌そうに言った。
「何よ～。自信ないわけ？」
「そっ、そんなわけあるかい！　自信あるわ！」
「よーし。その意気！」
そうこうしているうちに、翔の家に着いた。
「そんじゃ。まぁ、多分怒られるけど覚悟して入ってね」
「おう……」
翔が寂しそうに手を振る。
「じゃあね～」
陽乃はあえて何も気にしないフリをしてその場を去っていく。

（あーあ……。なんか、最近進展ないなぁ）
翔はため息を漏らした。ドアを開けようとノブを握ったときだった。
肩を突かれた。
「はい？」
振り返った瞬間、陽乃の唇が翔の頬に触れた。
「コンクール前だから、これだけだけど！」
「……。」
「じゃあねー！」
翔はヘナヘナとその場に座り込んだ後、頬を左手で触った。
「……小悪魔め」
翔はそう言いつつ、嬉しそうに笑った。

第３７０話　気合い入れるで！

「よっし……！　黒靴ＯＫ、蝶ネクタイＯＫ！」
「忘れ物ないね？」
「うん！　大丈夫」
翔は何度も指差し呼称をして、今日の持ち物を確認していた。友美子が最後の念押しをする。
「ほな、行ってくる」
「お母さんも１０時にはホールの楽屋入口におるからね」
「わかった！　よろしく～」
翔と綾音は同時に家を出て自転車に跨った。
「なぁんか、コンクール出ぇへんあたしまで緊張する」
「そりゃそやろ。綾音たちは綾音たちで、客観的にオレらの演奏聴くから、ミスッたりしたら一発でわかるもんなぁ。平常心いうのも無理やろ」
「やめてよ？　失敗とか」
翔はへへッと笑った。
「今年はオレよりもむしろ、陽乃とか駿とか拓あんとかがプレッシャーやろ。一人で吹くとこ多いからな」
「心配やわぁ……」
綾音が不安げに呟く。
「心配したって始まらんやろ！　ここは気合い入れていくで！」
翔が綾音の頭を軽く叩く。
「やめてよ！　セット乱れるやろ」
綾音は困った顔をしながら叩かれた部分のセットを直していた。

一方の朝倉家。

「なんなの、その暗い顔は」
「……。」
「夏樹！」
「え？　俺？」
由利の声に夏樹が驚く。
「アンタに決まってるじゃない。もうちょっといい顔できないの？」
「普通のつもりなんだけど……」
夏樹は玄関のすぐ横にかかっている鏡で自分の顔を見てみた。
「普通じゃん」
「お姉ちゃんとはずいぶん違うわね」
夏樹はチラッと陽乃の顔を見てみた。なんだか、自信に溢れているように見える。
「姉ちゃん、緊張しないわけ？」
「まだね。むしろ、楽しみ！」
「はぁ～……考えらんねぇ」
夏樹が大げさにため息をついて見せた。
「ま！　あたしはどうかわかんないけど。多分、夏樹がサッカーやってた頃の感覚と似てるんじゃない？」
「……ふーん」
その言葉を聞いた夏樹が途端に笑顔になった。どうやら、陽乃の言おうとしていることがわかったような雰囲気であった。
「じゃ、行ってきます！　お母さんも、気をつけてね」
「はいはい。１０時ごろには行ってるから」
「はーい！」
夏樹と陽乃がバタバタと家を出て行く。
「今日が本番か？」
祥夫が出ようとする二人にリビングの窓越しに聞いた。
「そー！　超がんばるから」
陽乃が自転車に颯爽と跨る。
「お父さん暇だったら、聴きに来てよ」

「あ、あぁ」
夏樹に誘われるとは思わなかった祥夫は少し嬉しそうに答えた。

「じゃあ、行くね俺」
水谷家のあるアパートでは、春樹が最低限の荷物だけを詰めたカバンを持って玄関にいた。
「気をつけてね。特に車にわね」
「わかってるよ。小学生や幼稚園児じゃないんだから」
春樹が幸恵子の言葉に苦笑いする。
「そうは言ってもね……」
「母さんは心配しすぎ。大丈夫だよ。多分、俺の守護霊は父さんだから」
「残念〜」
「え？」
「この子は何言ってるんだか」
幸恵子が笑った。
「母さん、パートだろ？　無理して来なくても大丈夫だから」
「お休み、もらっちゃったの」
春樹の顔がパァッと明るくなった。
「じゃあ、来てくれる！？」
「もちろん」
「よっしゃ！　余計気合い入った！」
春樹がパンパンと顔をはたく。
「行ってきます！」
「いってらっしゃい」
幸恵子は自信に溢れた息子の背中を見送ってから、自分が何を着ていくか、服のコーディネートに精を出し始めるのだった。

「今日は、２年くらい前に踊り狂って叩いてた楽器（タンバリン）叩くの？」
姉の美優の茶化しに美里が笑う。

「あれ、今日は後輩が叩くの。あたしはスネアよ」
「スネア？」
美優が首を傾げる。自分が一般の人には伝わりにくい言葉をサラリと言ったことに今さら気づいた。
「小太鼓叩くの」
「あー！」
やはり日本人。太鼓と言ったほうが伝わるようである。
「美里、あんなの叩けるようになったんだー」
「今でも結構苦労するけどね」
「へぇ～……。ねぇ」
「何？」
「演奏会って、いくらするの？」
「えーっと……７００円だったかな」
「あ、そんなもんなんだ？」
美里がニカッと笑う。
「何？　聴きに来てくれるの？　なんてね！」
美優が「あれ？　行くつもりだったけど」と真顔で答えるので美里は驚いて大声を上げてしまった。
「マジ！？　どうしたの、お姉ちゃん！」
「だってアンタが真面目な顔して楽器叩くとこ、間近で見てみたいから」
「……まぁ、なんだっていいや！　気が向いたら来てよ！」
「りょーかい。気をつけてね！」
「はーい」
美里は意気揚々と家を出る。それから美優がリビングに入ると、比較的背の高い少年と交差点で待ち合わせをして、ハニカミ笑顔で並んで走っていくのが見えた。
「ハハーン……あれが噂の彼氏か」
美優は彼の顔を確かめがてら、行くのもいいかもしれないと思い、準備を始めるのだった。

「おっはよー！」
翔は陽乃の姿を見つけるなり、声を掛けた。
「翔！　おはよー！」
「おはようございます！」
夏樹も大きな声で挨拶をする。
「二人とも、緊張してへんか！」
「平気よ！　ねっ、夏樹！」
「うん」
二人の笑顔を見て翔は安心して笑う。
「いやぁ、しっかし来ましたね～」
「なんか、今日コンクールって感じしないよね」
「ホンマそれですよ」
綾音がうなずく。
「あと数時間で、本番でしょう？」
「ホントだね……」
七海高校の出演時間は午後２時２０分ちょうど。今は午前８時２０分。ちょうど６時間後には舞台の上なのだ。
「信じられないけど……」
「大丈夫や」
翔が強くうなずく。
「オレらなりに頑張ってきたこと、そのまま出せばオールオッケー！」
翔のポジティヴな考えに、全員がうなずく。
「だね！」
「頑張りましょう！」
４人が顔を見合わせる。それから上履きに履き替える。
（いけるね？）
綾音が夏樹に目配せする。夏樹も陽乃と翔に気づかれないよう、うなずいた。その時だった。

「あ、電話」
陽乃がカバンから携帯電話を取り出した。
「あっ！　ねぇ、翔！　雪ちゃんだ！」
「マジでか！？」
グッドタイミングと言わんばかりに綾音が笑顔になる。
「じゃあ、あたしら先に行っててもいいですか？」
「おう！　行っといて」
「はーい！」
陽乃は綾音と夏樹のテンションの高さなど気にせず、電話に出る。
「もしもーし！」
『もしもし！　雪子でーす』
「雪ちゃーん！　今日、大阪（そっち）もコンクールよね！？」
『そうなの！　だから、どうかなって思って電話しちゃった』
雪子の表情が伝わってくるような電話である。
「出番、何時？」
『２時２０分！』
「うっそー！　あたしたちとまったく同じじゃん」
『えぇ！？　そんなことあるの！？』
恐ろしいまでの偶然に、陽乃は驚くほかなかった。その後、課題曲の話や自由曲の話でしばらく盛り上がる。途中、翔に代わりアレコレと話をしているうちに沙希、美里、慎也、拓真、春樹、由美子、絵美の順番で３年生が揃い、いつの間にか全員が交替で雪子と話をしてしまっていた。
「あっ！　ヤバい！　もう８時４５分や！」
「え！？」
翔の声に全員が驚きの声を上げる。
「ゴメン！　雪ちゃん、また今日コンクール終わってから結果の電話入れるね！」
『了解！　私こそ、ゴメンね！　また！』
「うん！」

陽乃は雪子との電話を切り、先を急ぐ8人の後を追った。階段を駆け上がり、音楽室を目指す。
「待って」
絵美が声を上げた。
「何？」
慎也が振り返る。
「なんで……音楽室から音、しないの？」
全員が足を止めた。確かに、音出しの音がまったく聴こえないのだ。
「ホンマや……」
翔は恐る恐る音楽室に近づく。
「あれ？」
「どうしたの？」
陽乃が声を上げた翔の元に走る。他の7人も駆け寄った。
「開けへん。鍵がかかってる？」
「え？」
「冗談よせよ」
慎也が笑ってドアに手を掛けるが、開かない。
「おーい！　誰か中にいるんだろ？　開けてくれ～」
拓真が軽くトントンとドアを叩く。しかし、応答がない。
「しゃーないな。職員室に行って鍵もらって……」
そのとき、ガチャッと鍵が開いてドアがゆっくりと開いた。
「すみませーん！　あたし、勘違いして閉めちゃいました」
恵梨がペロッと舌を出して顔を覗かせた。
「んもう！　ビックリさせないでよ～」
美里が軽く恵梨の頬を引っ張った。
「すみません！　ささ、どうぞどうぞ！」
恵梨に促され、翔たちは急いで部室に入りカバンを置く。
「ドアが閉まってて、音聴こえなかったんだね」
陽乃が音出しをしている後輩たちを見て胸を撫で下ろす。

「ホンマ、びっくりさせんといてほしいよな」
そう言って翔がロッカーを開けた時だった。
「……え」
一枚の色紙が、目に入ってきたのだ。

第３７１話　色紙

「何……これ……」
拓真が色紙片手に呆然としている。

＞ｉ１６８３２―１５０＜

「えへへ～！　驚きましたぁ？　もちろん、水谷先輩にもありますよ！」
「ホ、ホント！？」
春樹が嬉しそうにあまり高くない背でロッカーの中を探る。
「うわぁ！　ホントだ！　すっげぇ……」
春樹もその色紙を見て言葉を失う。
一方の美里は、まったく違う形で驚かされていた。
「まだ誰も来てないと思ったら……こんなメールくれちゃってさぁ」
携帯電話のメールに、恵梨が作ったデコレーションメールが送られてきていたのだ。それも、それぞれのメンバーからのメッセージが入ったものであった。
陽乃もロッカーを開けて、色紙を見て頬を赤く染めていた。

＞ｉ１６８３４―１５０＜

「いつから……これを？」
「１週間くらい前です」
勇が言った。
「元は、藤咲くんの提案なんですよ」
「そうなんだぁ……」

陽乃は嬉しそうに一人ひとりのメッセージを何度も読み返す。
「やだ……先輩、泣くの早いです！」
亜紀が困った声を上げた。陽乃が後ろを見ると、慎也が男泣きしている。
「だって……俺、こんなのもらったの……初めて……」

＞ｉ１６８３３―１５０＜

「感動屋なんですね、先輩って意外と」
「意外ってなんだよ！」
ドッとトロンボーンメンバーから笑いが起きる。
翔も同じように、涙をこぼしていた。
「まっさかなぁ……こないだから様子変やとは思ってたけど……こんなんしてる思わんやん……」
声が震えていた。
「ありがと……ホンマ、嬉しい」
翔はもう一度、色紙を見つめなおす。

＞ｉ１６８３５―１５０＜

「そして注目―！」
駿の声に３年全員が振り返る。
「いきます！」
バサァッ！という音と同時に被せてあった薄いタオルケットが剥がされた。
「……わぁ」
絵美が声を漏らす。それっきり、３年全員が黙り込んでしまった。

＞ｉ１６８３６―１５０＜

「これ……」
駿が言う。
「みんなで、まぁ2週間ちょいなんで荒い部分もありますけど、折りました！」
「これで気合い入れていきましょうね！」
翔が涙を拭って、大声を上げた。
「よっしゃー！　ナナコウ吹奏楽部、行くでー！」
「オーッ！」
「……。」
恭一が笑顔でドアの外からその光景を眺めていた。

吹奏楽部の熱い一日が、幕を開ける。

第372話　この日のために

午後1時20分。
七海市中央ホールの楽屋1で、七海高校のメンバーは最後の調整に入っていた。
「サックス。順番にB♭ちょうだい」
「はい！」
恭一の指示にあわせて翔、麻綾、夏樹、はるか、茉莉紗、かのこがB♭の音を吹く。
「OK。次、ホルン」
「はい！」
順平、賢治、杏、裕子の順番で入る。今日は安定した音を吹けている。恭一も満足そうな表情を浮かべた。
「次、トランペット」
「はい！」
「朝倉は、ピッコロも忘れずにな」
「はい！」
恭一の指示で順番に吹いていく。流まで行った後、陽乃はピッコロに持ち替えた。
「うん。OK」
その後、トロンボーンからユーフォ、チューバ、弦バスもチューニングを終える。そして全員でチューニングを合わせた後、恭一は指揮棒を置いた。
「この日のために」
恭一が神妙な面持ちで語り始める。
「先生は、君たちにそれなりに厳しく、指導してきた」
翔が真剣な眼差しで恭一を見つめる。

「よく、ついてきてくれたなとも思う」
陽乃は嬉しそうにしていた。
「今日、思う存分その力を発揮してくれればいい。ただし、ここではもちろん、これ以降は曲を合わせない」
それは誰もが十分に予想していたことだった。
「落ち着いて」
順平が目をつむる。
「温かい息を入れて」
沙知が大きく息を吸う。
「感情を込めて」
雄飛が右手を握り締める。
「自分に素直に」
麻綾が楽譜を見つめた。
「先生は、それだけで十分です」
「……。」
「がんばりましょう！」
「はいっ！」
大きな返事をしたと同時に、進行役員から時間を告げられる。翔たちは颯爽と楽譜をまとめ、立ち上がった。
楽屋を抜け、廊下を通って階段を上がるとそこはもう舞台裏だ。
「……修平」
翔は前にいる修平の姿を見つけて声を掛けた。風見台高校は、七海高校の前に出演する。
「おう」
「どないや？　調子」
「ボチボチ、やな」
修平が笑った。
「お前は？」
「ボチボチ、やな」
「同じやんけ」

フヘッ、と二人が同時に笑った。
「がんばれよ」
修平がニカッと笑った。
「お前こそ」
「……ほな」
前の団体が終わり、風見台高校が舞台へと上がっていく。翔は修平たちがいた場所に移動し、次の移動までそこで待機する。
「……。」
翔はそっと目を閉じ、静かに祈った。

オレたちの努力が、報われますように。

少しでも、たくさんの人の心を動かせる演奏が、できますように。

賞なんて、オレは正直いいんです。

賞なんて、ホンマにいい。

オレたちの演奏で、お客さんの心が、動きますように。

いつの間にか、時間は１０分程度過ぎていた。
「佐野先輩」
夏樹に呼ばれ、翔は目を開ける。
「出番です」
「……おう」
翔は腰を上げた。
そして初めて、翔はその人たちの名前を口にした。
「父さん。母さん。兄ちゃん。姉ちゃん」
ギュッと手を握る。
「オレ、がんばってきます……。見守っていて、ください」

そして照明が暗転する。先頭の亮平が歩き始めた。
「ベードラはこの位置でいいですか？」
「はい」
裕也が答える。
「スネアは？　ここで？」
「はい！」
美里がしっかりと位置を確かめ、うなずく。バタバタとざわめきも静かになり、いよいよ、その時間がやって来た。
パァッと照明が灯る。

ドクン、と心臓が鼓動を速める。

そして、アナウンスが掛かった。

「プログラム１７番。七海市立七海高等学校吹奏楽部。課題曲、４。自由曲、オットーリノ・レスピーギ作曲、教会のステンドグラスより、エジプトへの逃避、大天使ミカエル。指揮は、東　恭一です」
拍手が起きる。
恭一がお辞儀を深々とした後、部員たちのほうへ向く。全員を見渡した後、指揮棒をスッと上げた。そして、それを振り下ろす。同時に、翔たち５０人全員が大きく息を吸った。

第373話　『青い空とエジプト』

指揮棒が降りると同時に、金管楽器のファンファーレと木管楽器の上昇系トリルが響き渡る。上昇系のトリルの動きに合わせ、美里のスネアも音色を発する。そして、音が一瞬で引くと残るのは木管楽器の音色だけ。

翔、麻綾、夏樹たちサックスと絵美、優輝、光瑠たちクラリネットの軽やかなメロディ。思わず歩き出したくなるような拓真、智志、好美、駿、かのこたちの伴奏。それをさらにワクワクさせるような動きをしているのは春樹、愛実、はるか、茉莉紗の裏メロだ。メロディにグロッケンが加わる。そして慎也、亜紀たちトロンボーンとチューバ、ユーフォニウム、弦バス、バリサクなどの低音楽器がマーチならではのメロディを吹く。

音の伸びが、定期演奏会のときよりも格段に良くなっていた。アフタクトの動きがよくわかり、どこで曲が構成されているのかがわかる吹き方になっていた。

一瞬、音が弱くなるが次第にクレシェンドがかかる。それを促すのが、あずさのクラッシュシンバル。そして再現部に戻る。ここへ来てようやくトランペットが一瞬だけ活躍する。楽器が冷えてしまうことが多いので、音程が狂わないように陽乃たちは細心の注意を払う。

恵梨がゴクリとツバを飲んだ。不安で、何度も美奈に相談をしたこともあった。美奈の答えは簡単。

「しっかり、自分がリードするつもりでいればいいの」

それだけだった。ホルンやチューバは複数人数いるのに対し、恵梨のタンバリンは一人だけ。彼女がリードするつもりで行けば、絶対みんながついてくる。そう言われたのだ。

打ち込みの優のシロフォンと陽乃たちトランペットも息を合わせることが重要だ。優の位置からは陽乃たちは見えないが、陽乃たちからはハッキリと見える。なので、優の動きに陽乃たちが細心の注意を払う。そう決めていた。

ここのメロディと裏メロディは恭一の指示どおり。木管は優しく温かい音色を。ユーフォニウムやテナーサックス、フルートは第二旋律。これもサックスやクラリネットとはまた違ったメロディであるので、控えめに吹くのではなく、別個のものとしてしっかり自己主張すること。そう指示されていた。

稚沙希は低音があまり得意でない。そのため、一時は吹き真似も考えていた。しかし、それを由美子は決して許さなかった。コンクールに出るのであれば、必ず吹くようにと。自信は最後まで付かなかった。けれど、由美子たちと一緒ならば怖くない。稚沙希の心の中で、いつのまにかそんな自信が生まれていた。

そして、再びチューバやトロンボーンが旋律を奏でる場所がやって来た。ここで一気に、それこそ「華を咲かせる」イメージで吹くようにと恭一は言っていた。上昇系の低音の音と、トランペットの華やかなファンファーレがホールの隅々まで広がっていく。それに合わせて、全員の気持ちが上向きになる。あずさのベードラ、美里のスネア、優のグロッケン。裕也のシンバル。洋之のティンパニ。

クラリネット、フルート、オーボエ、バスーン、サックス、ホルン、トランペット、トロンボーン、ユーフォニウム、チューバ、弦バス、パーカッション。全員で奏でる、七海高校が創りあげた『マーチ・ブルースカイ』。最後に少しだけ調を変えて終わりを告げようとするその曲。最後は「夕暮れのイメージ」で。恭一はそう言っていた。

（よし……！）

晃の握るバチに力が入る。恭一の指示で晃は最後のシロフォンの上昇音系を一気に叩いた。そして、トゥッティでの音が響く。

「……。」

恭一が満足気に顔を上げた。同時に、素早く移動のある部員たちが席を移る。

（最初は……私の、思うままに……）

絵美はスゥッと深呼吸をする。それから、ほぼ向かいの席にいる雄飛を見つめた。雄飛はここで、コントラバスクラリネットを吹くのだ。絵美のほぼ真向かいにいる。出だしは彼と駿、かのこと一緒だった。

逃避、と言う言葉が入っているように、この楽章は実に重々しい雰囲気の楽章となっている。

恭一が胸に手を当てた。

（落ち着け）

絵美にそう語りかける。そうは言っても、やはり心臓は言うことを聞いてくれなかった。それでも、時間はやって来る。

恭一が指揮棒を上げる。絵美、雄飛、駿、かのこが大きく息を吸った。アラビアの異国情緒を匂わせる音色が、ホール内に広がっていく。光瑠、優輝の副旋律が絵美の後を追う。そして、ホルン、ユーフォニウム、アルトサックスによるメロディが始まる。

ここはホルンとユーフォニウムにはかなりの高音域となっていた。練習中、何度も音が裏返ったり外れたりした箇所だった。しかし、今回は実にスムーズに音が飛んでいく。

絵美のクラリネットソロが煌びやかな、夜空に流れる星のように響いた直後に健之佑のオーボエがホルンに合わせてメロディを奏でていく。

さらに、先ほどの絵美のソロの動きそのものをクラリネットと梨子のエスクラリネットが演奏する。そこでようやく、チューバが入る。ここは肺活量がありすぎる拓真と好美は雰囲気を潰す可能性があるため、比較的肺活量がまだおとなしい智志一人が吹いていた。しかし、智志でも十分響きのある低音がズッシリとした印象を与えていた。

そして再び、音が静まり返る。ホルンとクラリネットのメロディ

の合間を縫って、由美子のフルートソロが怪しげに響く。そして、下降系のオーボエの音が響き渡った。亮平の弦バス、雄飛のコントラバスクラリネット、駿のバスクラリネット、かのこのバリトンサックスによるDの音がズーン……と響く。

それと対照的な、沙希のチェレスタが次の大天使ミカエルを予兆させるような、一種威容な音を響かせた。

（来る！）

陽乃はこの瞬間を待ちわびていた。

（絶対、ハズさねぇ！）

順平の目つきが険しくなる。

（この瞬間が一番だ！）

杏も恭一を凝視する。

（指回しは、完璧なんだから）

なぎさが何度も自分に言い聞かせる。

（運命を感じさせるように）

恵梨が深く息を吸った。

（主役は低音だ……！）

拓真がグッと楽器を構えなおした。

（唯一の弦らしい重みを……）

亮平が弓を構える。

恭一が間髪いれず、指揮棒を降ろした。そして、遂に『大天使ミカエル』の演奏が始まった。

第３７４話　『昇天　降臨』

ホルンの勇ましい音色、そして木管楽器の激しい上昇音系。トランペットがホルンを追うように同じ形式の勇ましい音色を吹く。恵梨のサスペンドシンバルが一種、運命的なものを予兆させた。

一連の前奏が終わるとチューバ、ユーフォニウム、トロンボーン、バリトンサックス、バスクラリネット、バスーンによる主題の提示。３連符が遅れることのないよう、特にチューバの３人は演奏当初こそ必死だったが、今では余裕を持って恭一のほうをしっかり見て吹けるようになっていた。そして、一気に音が下る。恭一曰く「バベルの塔が崩れるような印象で」。これが拓真たちにはなかなか理解できず、何度も本やインターネットで調べた。こういう場合、一人でもイメージが異なると音色に差が出てくるためである。

直後、洋之のティンパニと裕也のクラッシュシンバルが響き渡る。ディクレシェンドがかかり、次第に音が静かになる中、残るのは誠のバスーンのみ。こういうとき、ダブルリードの楽器の音色というのはいやに残ってしまう。

次にかのこを中心とする木管がメロディを吹き始め、再び緊張感が増していく。クラリネットの旋律を打ち消すような、ホルンのメロディ。それがユーフォニウムとテナーサックスに引き継がれていく。連携が上手く行かなければ、バラバラの曲になってしまう。全員が息を合わせることが最重要であった。

再度ホルンが吠える。驚かすようなチューバたち低音の音色と美里のベードラ。ホルンと木管が上昇から下降の動きを繰り返して行き、やがてＤマイナーからＦメイジャーへと転調する。

健之佑がイングリッシュホルンに持ち替えた。そして始まる、明るめの音色。天使と悪魔の闘いの中で見える、つかの間の休息のよう

なイメージで。ここでの主役やホルン、テナーサックス、ユーフォニウム、そしてイングリッシュホルン。モゴモゴ言わない。泉が湧き出るような、癒しの音色。伸ばしの伴奏はやわらかい息遣いで、決してメロディの邪魔をしない。たった数小節の話だが、まずはここでどれだけ前半とのギャップを見せられるかが鍵となっていた。

（大丈夫、大丈夫……）

ティンパニとチューバの伸ばしが入る。これは、再び闘いが近づいていることを印象付ける音色だ。これが聴こえると健之佑は素早く楽器を持ち替える。ミスはできない。何度も練習したから大丈夫だと自分に言い聞かせた。

持ち替えが上手く行き、今度はオーボエ、エスクラリネット、フアーストクラリネットなど高音木管によるメロディ。チューバやティンパニの伴奏が、次第に安堵できる瞬間が終わっていることを告げる。そして、低音のメロディをきっかけに、再び曲がＤマイナーへ戻る。

再現部だ。

既に智志は息が途切れそうであったが、何度も深く吸い直して決して途切れぬように懸命だった。

初めの頃、麻衣子やなぎさは指が回らなかった。今でもなぎさはどちらかと言えば必死に指を回しているのだが、恭一の指揮を凝視することで遅れそうになる自分の指を懸命に回すことができた。

チューバなど低音のメロディを、トランペットが追いかける部分。はっきり言ってかなりの高音だった。恭一は絶対にここの音色を締め付けないようにと何度も口を酸っぱくして言っていた。

（……。）

彩香は少し悔しかったが、実はおとといくらいから唇の調子が良くなかったのだ。そのため、音を外すことを恐れてこの部分は吹かずに飛ばしてしまった。それが幸いだったのか、音が外れることはなく無事この部分を吹き切ることができた。

再び下降音。クラッシュシンバルの後に洋之のティンパニがＡ（アー）の

音を何度も叩く。晃がベードラを叩き、トロンボーンとホルンがメロディを交互に吹く。やがてテンポが落ち、メロディはかのこ、駿、誠だけになる。彼ら3人は心臓がそれこそ飛び出しそうだった。自分の音が心臓の音で消えてしまうのではないかと思うほどである。

それは陽乃も同じだった。しかし、周りの音を信じる。陽乃にはその気持ちがあれば何も怖くなかった。ピッコロトランペットを構え、ずっと遠く、ホールの入口のほうを見る。

煌びやかな音色。そんな言葉が相応しかった。

審査員が何か書く手を止めたのが、すぐそばにいた綾音やまゆ、さゆりの目に映った。もちろん、すぐに彼女たちも視線を舞台に戻す。チェレスタを弾くのは、沙希。そしてハープを弾くのは、菘だ。ハープを入れることになったのは、本当にギリギリの話だった。上手く借りることができ、急遽入れることになった。菘は1週間程度で見事にハープをものにして、いまこうして弾くことができている。

音の厚みが増した。というのも、それまで支えとなる伴奏を吹いていたのが絵美、優輝、みゆきだったのだが、ここで拓真、由美子と晃のドラが加わるからである。まさに、教会のステンドグラスを描写するような、煌びやかな音色が響いていく。

菘のハープの音が綺麗に響き、それをキッカケに由美子のフルート、駿のバスクラリネットが旋律を奏でる。それを追うように、陽乃が最後の音をゆっくりと吹き切った。絵美、優輝、みゆきと拓真が陽乃のメロディを追いかけていく。そして、菘のハープと沙希のチェレスタの音が、そして晃のドラが余韻を残しつつ、響いた。

かのこの伴奏が始まる。Dメイジャーによるメロディが流れてきた。オーボエ、アルトサックス、クラリネットとメロディが加わる。ホルンがさらに加わり、伴奏ではチューバとティンパニが加わって、次第に音が大きく鳴っていく。

ドラが響くと同時に木管の細かい動き。そして、低音のメロディが一気に響き渡る。それがやがてホルンとトロンボーンに引き継がれ、それがトランペットに渡っていく。洋之がティンパニのトリル

をここぞとばかりに思い切り叩く。
悪魔を倒す、天使の喜びを。そんなイメージでと言われた部員たち。ここで一気に曲はエンドロールへと突入する。
ティンパニが鳴り止むと同時に、トランペット、トロンボーン、ホルンはその喜びを爆発させるかのような音色を吹き始めた。高音で鳴り響く金管楽器。木管楽器は全員がその喜びをさらに興奮へと導くトリルを連続して吹き続ける。何度も違う場所で交互に息を吸っていく。
サスペンドシンバルはここだけ、恵梨と裕也の二人で叩いている。それぐらいしなければ、管楽器の音に負けてしまうのだ。優がグロッケンを木管のトリルの支えとして叩く。いろんな楽器が喜びを全面に出していく。
フェルマータで、チューバとティンパニ以外の全員が限界まで音を吹き伸ばす。恭一が力強く腕を真上に突き上げた。そして、最後の指示が通る。放り投げるように、悪魔を追放するような、力強い上昇のグリッサンドを、チューバを初めとする低音が吹き、ティンパニもそれに準ずる音を叩いた。
管楽器の音が余韻を残し、ホールに広がっていく。そして、本当に恭一の最後の指示が飛んだ。
美里のドラであった。
美里が大きく息を吸い、ドラを叩いた。これは悪魔が地面に叩きつけられた音だ。決して止めることなく、自然に音が消えていくのを恭一も待つと言っていた。時間には余裕があるとわかっているので、あえてそうすることにしたのだ。
自然消滅するドラの音。音が完全に消えるまで、１０秒ほど続いた。誰も楽器を降ろさず、微動だにしない。
そして、恭一がスッと指揮棒を降ろした。そして起立の指示が出されると同時に、５０名は一斉に立ち上がった。
恭一がお辞儀をして、そこで初めて拍手が沸いた。誰もが呆然としたまま、しばらく拍手もできなかったのだ。

舞台が暗転する。そして、退場を指示されたのですぐに動いていく。
そのまま舞台裏を通過し、楽屋前を通って楽屋入口に移動した。
「……っはぁ～」
陽乃はそこでようやく、緊張を一気に吐ききるようにため息を漏らした。どの部員も、同じタイミングでため息を漏らす。
「ねぇ」
陽乃が隣に来た慎也に声をかける。
「うん？」
「終わった……よね……」
「あぁ……」
呆然と立ち尽くす二人。
「なんか……5時間くらい吹いてた気がするよ」
「俺も」
慎也が笑った。
「おいっ！」
翔が二人の背中を叩く。
「どないしてん！？」
「ほ、本番終わった、んだよね！」
「おうよ！」
翔の満面の笑みを見て、陽乃はそこでようやく実感した。
「ねぇ、翔」
「なんや？」
「あたし……ソロ、失敗、しなかったよ」
「うん！」
「やったよ！」
「うん！」
「やったー！」
「おー！」
二人は周りに部員たちがいるのも忘れて、手を取り合って飛び跳ね、笑い合った。こうして、緊張の約１１分間に及ぶ舞台は、無事

終わることができたのだった。
「おーい」
同じく退場してきた恭一が部員たちを呼ぶ。
「写真撮影、あるから急げー！」
「はぁーい！」
去年と違って、笑顔が浮かぶ部員たち。恭一はそれを見て、ほっと一安心するのであった。

第375話　頼む……来い！

午後6時30分。
ブザーが鳴り響いた。
「キャー！」
悲鳴のような歓声が沸く。陽乃だけでなく、客席に座る七海高校56人の心臓がバクバクと音を立てていた。そして、幕が上がる。
「そういえばさ」
緊張を打ち破りたかったのか、拓真が呟いた。
「去年、翔のヤツ舞台に上がらないとダメなのに、客席（ここ）にいたよな」
美里がキョロキョロ辺りを見渡す。
「今年はいないみたいよ」
「さすがに2年連続はないでしょー」
絵美がプッと笑った。
「いるいる。大丈夫」
春樹が翔のいる場所を指差した。
そして、司会者が出てきて挨拶と軽い講評を終えた後、昨年同様の説明を始める。
「まず、毎年のことではありますが、プログラム順に発表してまいります。金賞、銀賞、銅賞の3種類ですが、金賞と銀賞の響きの違いがわかりにくいかもしれませんので、金賞の後にはゴールド、と付け足しますのでそちらで判断してください」
（本当に……来たんだ……）
昨年からもう1年も経過したのだと感じさせられる、この瞬間。
「銀賞で最も優れた演奏をした団体には、支部奨励賞が授与されます。また、金賞受賞団体の中で県大会に進むことのできる団体は、今年度は4団体とさせていただきます」

（去年より1団体少ない……）
陽乃の背中に嫌な汗が滴る。隣にいる拓真や前にいる菘の表情も曇った。今年の出場団体数は３４校。約８校に１校しか県大会に進めない。かなりの厳しい戦いである。
「それでは、発表いたします。プログラム１番、川崎市立橋詰高等学校」
昨年、金賞を受賞した高校であった。
「銀賞」
「……！」
陽乃の中で衝撃が走った。昨年、あの後聞いたところによると、この橋詰高校は毎年金賞を受賞し、全国大会にも出たことのある団体だったと。その橋詰高校が今年は銀賞だったのだ。
「プログラム２番、川崎市立戸倉高等学校、金賞、ゴールド！」
「キャアアアアアー！」
昨年、銀賞だった団体が金賞を受賞。毎年、どうなるかがわからないというリアルな雰囲気を味わってしまった。
その後、どんどん受賞団体が発表される。金賞を受賞したのは２番、８番、１１番、１３番。かなりシビアな結果である。
そして、いよいよ風見台高校の発表の瞬間がやって来た。翔の隣に座っている、部長の修平が震えていた。
（大丈夫や）
翔が囁いた。修平がうなずく。
（自信持って）
（……ありがとう）
「プログラム１６番。私立風見台高等学校吹奏楽部」
修平が目をつむった。
「金賞、ゴールド！」
「うわあああああ！」
「キャーッ！　キャーッ！」
七海高校の斜め右に座っていた風見台高校の部員たちの席から歓

声が沸く。これには陽乃も嬉しさを感じずにはいられなかった。
そして、風見台の歓声が落ち着く。すなわち、それは自分たちの発表の瞬間が来たということだった。
「プログラム１７番」
夏樹が目を閉じる。
「七海市立」
由美子の手が震えていた。その震えが沙希に伝わってくる。
「七海高等学校」
「大丈夫……大丈夫……」
美里が呪文のようにそう呟いている。慎也がその美里の手を握った。
「吹奏楽部」
拓真と春樹が大きく深呼吸する。
（来い……来い……っ！）
翔が息を呑んだ。
「金賞、ゴールド！」
「……。」
今までの高校と違い、一瞬の沈黙。
そして――。
「キャアアアア――――――！」
陽乃が真っ先に歓声を上げた。

「や、やった！　やったあああああ！」
拓真と春樹が抱き合って喜ぶ。
「うそ！　ね、いま金賞って言ったよね！？」
美里が慎也に確認する。
「間違いねぇよ！」
「やーったあああああ！」
歓声がしばらくやまなかった。陽乃の心臓が緊張のときとは異なり、興奮した鼓動を打っている。
その後、金賞は２０番、２２番、２９番、３４番の団体が受賞した。１０校中、４校が県大会に進めるのだ。
（お願いです……県大会に……行かせてください！）
翔が両手を合わせて目を閉じた。
「それでは、続きまして県大会へ進出できる高校の発表をさせていただきます」
ドクン、と全員の心臓が飛び跳ねそうなほどに鼓動を打つ。
七海高校吹奏楽部全部員が目を閉じ、両手を合わせる。
「プログラム」
陽乃は心の中で何度も、何度もお願いしますと祈り続ける。
「１６番、風見台高等学校吹奏楽部！」
「キャアアアアアア！」
「やったあああああ！」
斜め右で沸き起こる歓声。それが、次の瞬間には自分たちのものになるように。５７人全員が、祈り続ける。
「プログラム」
（お願い……！）
陽乃は全身が震えるほどに緊張していた。
（頼む！）
翔が最後の祈りを捧げた。

「１７番！　七海高等学校吹奏楽部！」

今度は間髪いれず、歓声が沸き起こった。

「キャアアアアアアアアア！」

由美子が沙希と抱き合い、その場で跳ね回る。その目からは涙がボロボロとこぼれ落ちていた。

「やったあああ！」

慎也が感情を爆発させるのは非常に珍しい。それだけに、彼らの喜びがかなりのものであるのは、誰の眼にも明らかであった。

その後、県大会出場が決まったのは２２番の海屋敷高校と３４番の井藤西高校であった。すっかり安堵した部員たちは、何度も「やったね」、「本当に出れたんだね」とヒソヒソ声で会話していた。

「それでは、続きまして各奨励賞の発表をさせていただきます」

司会者の言葉は、既に県大会出場を決めて安堵した七海高校吹奏楽部員たちには右から左の状態。それほどに、県大会出場決定という事実は部員たちを興奮の世界に誘っていた。事実、翔ですら県大会に出られるとずっと頭の中でグルグル考えていたので、その言葉は彼も同じく右から左状態。

「最後に、この川崎地区大会において最も優れた演奏をした団体に送られます、グランプリ受賞団体を発表します」

（ふーん。そんなのあるんだぁ）

陽乃は頬を赤くして完全に言葉を聞き流していた。司会者が、その校名を発表する。

「グランプリは、七海市立七海高等学校吹奏楽部です！」

「……。」

「……。」

かなり長い沈黙。

「……は？」

呟いたのは、慎也だった。

「何て言いました？　いま……」

貴志が拓真に尋ねた。

「わかんねぇ……」

拓真と春樹が同時に首を横に振る。

「グランプリ……？」

はるかが呆然としていた。

司会者が困惑した様子を浮かべる。

「や……」

その第一声は、舞台上から飛んできた。

「いやったあああああああ！　やったあああああ！」

翔が立ち上がり、両手を挙げて叫んだ。

「やったあああああああ！」

「キャー！」

呼応するように七海高校の部員たちから大歓声が沸く。それに同調するように、会場内から拍手が沸き起こった。

グランプリ。

それは、金賞を受賞した団体で最も優れた演奏をした団体に送られる、賞。

３４団体出場した川崎地区大会で、七海市立七海高等学校吹奏楽

部は頂点に立ったのだ。

２００７年７月２９日。

七海高等学校吹奏楽部の、新たな歴史が刻まれた瞬間であった。

第376話　ホップステップ！

「……。」
翌日7月30日。翔は午前8時ちょうどにパッチリ目が覚めた。
「……。」
起きるなり、すぐに頬を引っ張ってみる。確かに痛みがある。どうやら、夢ではないようだ。
「ホンマに……グランプリ取ったんや！」
そう感じると思わずパジャマのまま小さく飛び跳ねてしまう。
「県大会に……グランプリ……！　くはー！　夢ちゃう！　ホンマや、ホンマや！」
何度も県大会とグランプリという言葉を繰り返し口にする。
「よっしゃ！　とりあえず……今日は気分転換やな」
今日と明日は部活が一応休みである。2年生は今日、事情により集まることが決まっている。その事情というのは合宿に関すること。今年の合宿は企画からすべて、2年生に任せていた。日程が変わったものの、中身はそれほど変える必要がないとのこと。なので、詰めの話し合いをするということであった。
翔たち3年生は完全に休みである。そのため、今日は翔と陽乃の二人は出かける約束をしていた。すなわち、デートである。
「おはよう」
「おはよう。どう？　疲れは出てない？」
リビングに下りて顔を出すと、友美子が朝食を既に用意して待っていた。
「うん。いたって順調！」
「それはええこっちゃ」
目玉焼き、ハムサラダ、ご飯。翔の好きな朝食のメニューが並んでいる。
「ほんで？」

友美子が興味深そうに聞いてきた。
「今日はどこどこ行くん？」
翔が恥ずかしそうに笑う。
「え～？　言わなアカン？」
「いいやないのぉ！　教えてぇよ」
「しゃあなしやで」
翔は照れつつ、今日の行程を友美子にザッと説明した。
１０時に小田急七海駅で陽乃と待ち合わせ。その後、下北沢駅で京王に乗り換え、渋谷駅で下車。渋谷周辺を観光し、昼食。昼食後は山手線で原宿に出て、竹下通りで服を見る。それから山手線にしばらく揺られ、浜松町で下車。東京タワーを外から見て（翔いわく、外からだけで十分だそうだ）、そのまま東海道本線で横浜まで出る。みなとみらい周辺を観光し、夕食。それから帰宅するそうだ。
「なぁんや。泊まってけぇへんの？」
翔が顔を真っ赤にした。
「親が普通そんなこと言う！？」
「冗談やないの！　真に受けなや！」
友美子がケラケラと笑った。
「まぁ、気をつけて行ってきなさいよ」
「はーい！　あ、そろそろ準備しよっと」
翔が朝食を食べ終え、食器を片付けて立ち上がった。入れ違いで冨美枝がリビングにやって来る。
「あ、おばーちゃんおはよう！」
「おはよう。今日はデートやね？」
翔は赤くなりつつ大きくうなずいた。
「楽しんでおいでよ」
「はーい！」
元気よく返事をし、翔は自室へ上がっていく。
「あの子も彼女できてんねぇ」
友美子が寂しそうに言った。

「将来、優しい旦那になるとえぇけどね」
「いやですわぁ、お義母さん。まだ早いんちゃいます？」
二人は顔を合わせて大声で笑った。

翔がデートでウキウキしている頃、2年生は部室に集まって最後の詰めをしていた。合宿係は洋之、みゆき、亜紀、そして駿だった。
「ひとまず、大まかな予定はこれでいい？」
駿が最終確認を取る。全員がうなずいた。

日程：8月1日～8月4日（3泊4日）
宿泊先：七海（なつみ）荘

＜8月1日＞
朝：移動
昼：パート練習（2時間）／セクション練習（2時間半）
夜：文化祭での楽曲決め

＜8月2日＞
朝：セクション練習
昼：合奏
夜：肝試し

＜8月3日＞
朝：合奏
昼：合奏
夜：出し物・花火

＜8月4日＞
朝：合奏
昼：合奏（3時間）／帰校

一度、恭一に予定を提出したのだが、意外にも恭一は「もっと部員同士、先輩後輩関係ナシで交流できるように変更しなおすように」と言ったので、駿たちは思いきって夜は遊びを入れることにした。

「本当にこんなに遊んでいいのかな……」

さすがに心配になった麻綾が呟く。

「でも、先生が言ったし……いいんじゃね？」

智志が周りに同意を求める。しかし、誰も最後の一押しとなるような返事はしなかった。

「えぇい！」

突然、はるかが叫んだ。

「ここできっと、３年生なら田中先輩あたりが『あたしはこれで完璧と思う！』とか言うよ！？　みんな、自分たちの合宿なんだし、１年生と３年生に喜んでもらえるような合宿にしなきゃ！」

それに同意する優輝。

「よし。じゃあ、俺はこれでいいよ」

優輝が手を挙げた。

「いい？」

あずさが意見する。

「肝試しは３日にして、出し物と花火は２日にしない？」

「なんで～？　あたしはこのままがいいな」

光瑠が首を横に振った。

「だって、最後にみんなで楽しみたい！」

「……なるほど。そういう考えもあるのか」

光瑠が納得する。

「よし。じゃあそこだけ最後にちゃんと決めておこうぜ。肝試しと、出し物花火の日程は入れ替えます。ＯＫですか？」

「はい！」

「じゃあ、決定！」

駿が嬉しそうに黒板に書かれた日程に二重丸をつけた。

話し合いが終わってから、亮平とみゆきが廊下で立ち話をしていた。
「やっぱさぁ、来年は逢沢くんかな？」
「俺たちの中ではそういうイメージだけどな。３年生ではどうかは、わかんないし」
二人が話している内容。それは来年の幹部の話であった。２年生半ばになると、不思議と部活内で役職に就きそうな部員というのがなぜか雰囲気的に決まってしまう。現時点では、まだ冗談半分というような雰囲気もあるが、次のような感じになっていた。

部長：逢沢　駿
副部長：伊原　光瑠／瀬戸　優輝
金管セクションリーダー：松尾　勇
木管セクションリーダー：河内みゆき
コンサート・ミストレス：中野さゆり

もちろん、本当に次期幹部を決定するとなると３年生と恭一と話し合いを重ね、さらに投票など何らかの形式を持って決めるのが通常である。なので、これはあくまでも２年生内部での勝手な予想に過ぎない。
「誰がなるか、楽しみよね」
「そうだな……」
そう言ってから、二人は早くも何ともいえない寂しさに襲われるのだった。

「翔！」
七海駅前で待ち合わせをしていた陽乃と翔は同じ頃、合流していた。
「待った？」
「全然！」

「良かった！　じゃあ、行こうか」
「おう！」
翔と陽乃、久しぶりに二人でプライベートな外出をすることになった。翔は陽乃と二人で出かけられるだけで、満足だった。

第377話　ヨコハマ&トウキョウ

「どう!?　これ、オレに似合う!?」
翔がタイトめのTシャツを自分の上半身に重ねて陽乃に見せる。
二人はいま、竹下通りの店に来ていた。
「うーん……。翔はどっちかって言うと青より赤とか黄色が似合うんじゃない？　ほら、コレとか」
陽乃が思い切り派手なTシャツを翔に渡す。
「お前、これはちょっと派手すぎるやろ!」
「そんなことないよー！　ほら、着てみなよ。すみませーん!」
陽乃は強引に試着室を借りて、翔をその中に押し込んでしまう。
「強引なやっちゃなぁ……。まぁ、着てみるだけ着てみるか」
5分ほどして翔が「どないやぁ？　あんまり似合う気ぃせぇへんわ、やっぱり……」と言って姿を見せた。
「おぉ……」
陽乃だけでなく、周りにいた店員さんと兄妹とその両親らしい家族が翔を見つめる。
「な、何？　そんなに皆して見て……」
「や……普通にカッコいい、から？」
翔の顔が真っ赤になった。
「も、もうえぇやん！　とりあえず」
翔が試着室のドアを閉める間際に言った。
「これは買うから」
陽乃の顔が今度は赤くなった。
その店を出てから、今度は山手線に乗って浜松町へ向かう。
「東京タワー、登らなくていいわけ？　せっかく行くのに……」
「えぇねん！　だって、いま夏休みやから登るのに時間かかりそう

やろ？　時間もったいないわ～。それに、オレあの形が好きやねん。なんていうか、シンボルですよ～って感じしよるやろ？」
「そうなんだ？　あたし、言えば東京タワーは小さい頃から見てるものだから、あんまり改めて見ようとは思わないのよね」
「近くにあったらそういうもんやろ。当たり前すぎて気づかんっていうか。離れたらわかるもんよ」
「ふーん……」
陽乃が何気なく翔が言った言葉。それは翔自身が感じていることなのかもしれないと後になって気づいた。
「ねぇ」
陽乃が恐る恐る聞く。
「大阪……戻りたい？」
「どないしてん。急に」
「いや……なんか、今の翔の話だと、戻りたいのかなぁって思っちゃってさ」
「うーん……」
しばらく考える翔。
「オレは今は……」
そのときだった。アナウンスがかかる。
「まもなく、浜松町～、浜松町～」
「あ、降りんとアカンやん」
翔はそのまま言葉を遮ってしまった。それから陽乃の手を引く。ドアが開くと同時に翔は電車を飛び出した。
「あ、ちょっと待ってよ！」
「早く行こう！　なぁ、どっち？」
「あー、そっちじゃないってば！　待ってよ！」
陽乃が慌てて追いかける。まるで遊園地に初めて来た子供のようである。なんとか正しい方向へ翔を引っ張り、しばらく歩いて東京タワーのすぐ前にやって来た。
「デッカー！」

小さな子供のように大声を上げる翔。周りの人たちが注目しているのもまったく気にしていない様子だ。陽乃はさすがに少し恥ずかしくなってきた。

「ねぇ、ちょっと声のトーン落とそうよ」

「なんで？　あ、もしかして関西弁が嫌やとか？」

「そういうわけじゃないけど……」

「ほなええやん！」

陽乃は何度も東京タワーを見上げる翔を見て、まぁこれが彼らしいからいいかと思うのだった。

「陽乃！　アイス食べよう、アイス！」

「あ、いいね！　ちょうど暑かったし」

「オレがおごるわ！　お兄さん、アイスちょーだい」

翔たちより少し上のお兄さんがアイスを売っている。お兄さんは陽乃と翔を見るなり「美少女とイケメン君のカップルだね。本当にこんな子たちいるんだ」と笑った。

「へへ！　なぁ、褒められたで！」

「バカ！　恥ずかしい……」

お兄さんからアイスを受け取り、二人は木陰の下でアイスを舐め始めた。翔はチョコミント、陽乃はストロベリーである。

「美味！」

「あえてそんな言葉使わなくてもいいじゃない」

「言うてみたかったんです～」

翔はペロペロとアイスを舐めながら足をブラブラさせる。ジリジリとコンクリートを熱する太陽の光も、木陰に入ればずいぶんと柔らかくなる。やはり夏が来るとコンクール、というイメージを持ってしまう陽乃は、すっかり吹奏楽の世界に入り浸ってしまっているんだと感じていた。

「あっ」

突然翔の声が上がる。

「溶けてるやん！」

そう言って翔の顔が近づいてきたかと思うと、陽乃のアイスのコーンに滴っていたアイスを翔がペロリと舐めた。その拍子に、陽乃の右手小指にも翔の口が当たった。

「！」

「！」

陽乃がアイスから思わず手を放しそうになった。そのままアイスクリームがバランスを崩し、落ちそうになる。

「危ない！」

「……。」

翔がうまくアイスをキャッチした。

「……はい」

「ありがと……」

沈黙が続く。蝉の鳴き声が響いた。

「あのさ……」

翔が呟く。

「なに？」

「……いい？」

蝉の鳴き声に阻まれて、うまく聞こえなかったので聞き返す。

「何？　聞こえなかった」

「……スしていい？」

「え？　聞こえない。ここで言って」

耳を翔の近くに寄せる陽乃。翔は低い声で恥ずかしそうに言った。

「キスしていい？」

「え……」

陽乃が真っ赤になる。夏休みとはいえ、ここは浜松町。東京の街中だ。自分たちは夏休みでも、仕事で外回りをしているサラリーマンやＯＬ、買い物に来ているおばさんの姿などいろんな人が目の前を通っていく。

「ダ、ダメ……だよ。だって、人いっぱい通ってるのに……」
「こんな木陰の暗めの場所におるオレらを意識して見てる人なんて、おれへんって」
「……。」
「な？」
陽乃はコクンとうなずいた。
そのまま、翔は二人分のアイスを握ったまま陽乃の唇に自分の唇を重ねた。
「……。」
陽乃がプッと笑う。
「な、なんで笑うん！？」
「ミントの香りがした」
翔も一緒になって笑う。
「そりゃあな！　ミントのアイス、食べたんやもん」
二人は顔を見合わせ、そこで大笑いし始めた。それでも、二人を意識して見るような人たちはいなかった。
その後、横浜市へ移動してみなとみらい周辺を観光。夕食を食べてから二人は帰路に着いた。
「楽しかったね！」
「うん。サイコーやった」
「来年の夏は、どこでデートする？」
翔がしばらく考える。
「出雲大社、とか？」
「へ？　旅行？」
翔が首を横に振る。
「二人で島根大学行くから、島根で夏休み！」
「……うん！」
陽乃が嬉しそうに笑った。来年の夏も、仲良くいられますように。
陽乃はそう願いながら、帰りの電車に乗るために翔と手を繋ぎながら駅に向かって行った。

第378話　急転直下

翔たちがデートをしている頃。2年生が音楽室と部室で合宿の話し合いをしているので、1年生で自主練習しに来ていた部員数名は教室に散らばって練習をしていた。

「あのね、ナイト」

「うん？　どした？」

崔　裕時と騎士は二人同じ部屋で練習をしていた。

「ここの、動きよくわからない」

「あぁ、これはこうだよ」

騎士は親切に裕時にそのフレーズを吹いてみせる。まだ少し音はぎこちないものの、吹いていてそこまで変な感じはしなくなっていた。騎士自身、少し成長したなと思えるほどだ。

「あ、そうなの。じゃあ、これどうね？」

「それは……」

それは不意だった。一瞬、騎士が苦痛な表情を浮かべたのだ。

「ナイト？」

「あ、いや。何でもないよ。ゴメンね。うん、ここのフレーズだよな？」

「うん……」

裕時は違和感を覚えつつも、なんともないと言い張る騎士の言葉を信じることしかできなかった。

「ちょっと……休憩しようか」

騎士は時計を見てそう言った。裕時がうなずく。

「俺はお茶飲んでくる。休憩するときは、休憩だぞ？」

「わかってるね」

騎士の足音が遠のいたのを確認してから、裕時はそっと練習して

いる部屋から出てトコトコと別の部屋に向かって行く。
「……。」
その部屋にはまゆと綾音がいた。裕時はまだ騎士が戻ってくる気配がないことを確認し、そっと教室に近づいてドアを開けようとした。
グッと肩を引っ張られたので振り返ると、凄い形相をした騎士がいた。
「何やってんだよ」
フルフルと裕時は意味もなく首を左右に振る。
「言おうとしただろ」
「い、言わないね」
裕時は騎士の迫力に押されて必死に首を振る。
「なら……いいけど」
そう言って教室に戻る騎士。裕時も一緒に戻ろうとした時だった。
「ゲホッ……」
「ナイト？」
騎士が咳をし始めた。
「咳出るの？　風邪ね？」
「かもな……」
しかし、それは突然やって来た。
「痛……」
「ナイト？」
騎士の顔が真っ青になる。そのまま膝を折って崩れ、胸を押さえ始めたのだ。
「ナイト？　ナイト！　どうしたの？　ナイト！」
「痛い……痛い、痛いいいぃ～！」
そのまま床に寝転んで裕時の制服を引っ張る騎士。
「ナイト！　ナイト！」
おろおろした様子で裕時は騎士の名前を呼び続ける。
「ナイト！　放して！　誰か呼んでくる！」

「ゲホッ！　ゲホゲホゲホゲホ！　痛い！　痛いよぉ！」
のた打ち回る騎士を置いていくのは抵抗があったが、誰かを呼ばなければ自分だけではどうにもならないと思い、裕時は隣の部屋に駆け込んだ。
「まゆ！　あやね！」
「どうしたの？　裕時」
「ナイトが、大変！」
「え？」
「来て！」
裕時に言われるがまま隣の部屋にまゆと綾音が駆け込むと、大柄な騎士が床で倒れこんで胸を押さえているのだ。
「や、やだ……どうしたの！？　速水くん！」
まゆが慌てて騎士のそばに駆け寄る。しかし、大柄な騎士の体を小柄なまゆや綾音が抱きかかえることなどできない。
「ど、どないしよう！」
「ねぇ！　２年生の先輩！　話し合いしてたじゃない！」
「行こう！」
まゆと綾音が音楽室に駆け込んだ。しかし。
「ウソ！？　なんでおれへんの！？」
部屋はもぬけの殻。
「もしかして……打ち合わせ終わったから先生のとことか？」
「行こう！」
今日、２年生以外で学校にいるのは裕時、綾音、まゆ、騎士の４人だけ。２年生がいなければ、このような事態をどうすればいいのかなどとても対応できないと感じていた。
職員室に駆け込むと、そこには駿と恭一がいた。
「先生！」
綾音たちの言葉を聞いて、すぐに恭一たちが騎士の元へ駆けつけた。

「え？」
その日の晩。綾音から騎士のことを聞いた翔が玄関で立ち尽くしていた。
「びょ、病気て？」
「気胸（ききょう）ってお医者さん、言うてた……」
付き添いで行った綾音は、病院でそう言われたと説明したのだ。
「気胸って、それ……」
「大丈夫やで」
友美子が姿を現した。
「お母さん……」
「確かに、今すぐに楽器吹ける状態ではないけども、速水くん手術はしたんでしょ？」
綾音がうなずく。再発の可能性を少しでも低くするために、手術をしたのだと。
「今日手術して1日入院。ほんで、明日には退院できるんでしょ？」
「うん……。でも、2ヶ月は楽器吹いたらアカンって」
綾音が俯き加減で言った。
「それはしゃあないよ。病気をここできちんと治しとかんとやね、今後に響くんやから」
「うん……」
綾音はそれでもなお、不安そうな表情を浮かべていた。
「綾音」
翔が綾音の肩を軽く叩いた。
「明日、お見舞い行こうか。部活は休みやし」
「うん……」
騎士が倒れたという連絡は、絵美はもちろん、その日のうちに部内全員に連絡が行っていた。
「姉ちゃん」
夏樹が陽乃を呼ぶ。
「何？」

「明日……騎士のお見舞い行こうかと思ってる」
陽乃が笑った。
「いいじゃない。行ってあげなよ」
「明日退院なんだけどね」
夏樹は苦笑した。
「それでも、同じ初心者で頑張っている子同士、支え合うっていう意味では嬉しいと思うよ」
「やっぱ、そうかな？」
「当たり前じゃない！　そうだ。どうせならさ、初心者の子たちみんなで行けば？」
「そうか……そうだな！」
夏樹の頭に和志、綾音、なぎさ、杏、晃の顔が浮かんだ。彼らにすぐ連絡を取ると、全員から行くとの答えが返ってきた。
「よーし！　絶対ビックリするだろうなぁ」
夏樹は騎士の驚く顔を思い浮かべながら、持って行くお菓子を探しに台所へ向かっていった。

第３７９話　二度と来るな！

「騎士、元気かなぁ？」
和志がソワソワした様子で病院の玄関前をウロウロしている。
「ちょっと、落ち着きぃよ」
綾音がそれを制する。
「遅くない？　あんこ」
まだ姿が見えない杏を心配して、なぎさが辺りを見渡した。
「ホントだな……。もうそろそろ、時間なんだけど」
夏樹もソワソワしている。すると、綾音にメールが入った。
「ゴメーン！　お見舞いのお菓子買ってたらバス１本逃しちゃった！　先に入ってて！　Ｂｙあんこ、やって」
「……あんこらしいな」
全員が顔を合わせて笑う。
「それじゃ、しょうがないや。先に入ろう」
「うん！」
５人が連れ立って騎士のいる病室に向かう。
「そ、んじゃ、代表して俺が」
夏樹が軽く咳払いをして、ノックした。
「はい」
騎士の声が返ってくる。サプライズのつもりで返事をせず、夏樹は勢いよくドアを開けた。
「ナーイトっ！」
綾音が続ける。
「お見舞いに来たでー！」
和志がヒョコッとその横からさらに顔を出す。
「調子どう！？」

晃が続けた。
「手術、うまくいったからそろそろ元気出てきた？」
なぎさが合宿のしおりを取り出した。
「明日からの合宿、行けそうだね！」
しかし、騎士の言葉は予想外のものだった。
「……俺、合宿行かない」
「……え？」
全員が言葉を失った。
「なんで？　あ、もしかして体しんどいとか」
綾音が自問自答する。騎士は首を横に振った。
「別に体はしんどくない」
「じゃあなんでだよ～。初めての合宿だぜ？　全員で行こうぜ」
「行かない」
なぎさが困った表情を浮かべる。綾音がパッと笑顔になり言った。
「わかった！　急に倒れて先輩らに迷惑かけたかもぉとか思って、行きづらいんやろ！？」
「そんなんじゃないよ」
ブスッとした表情のままの騎士。さすがにイライラしてきたようで、夏樹が苛立ちの言葉を吐いた。
「じゃあなんなんだよ。理由、はっきり言ってくれないとわかんないじゃん」
途端に騎士の目つきがキツくなった。中学から同じである夏樹となぎさも初めて見る表情だった。
「うるせぇな！」
大声にビクッと全員が体を震わせた。
「聞いてねぇのかよ？　俺の状況！」
和志が呟いた。
「聞いてることは……聞いてる」
「だったら、わかるだろ？　俺は2ヶ月楽器吹けないんだ」
「……。」

「初心者で、ただでさえ皆と技術とかに差があるのに、ここで2ヶ月も休んだら余計に差がつく。もう、夏樹とか片岡とか保田はコンクールに出てるじゃないか。それだけで、俺はもう差がついてるんだ」

夏樹たち3人は一気に何も反論できなくなった。

「それに、和志と晃だって、合宿行ったらミッチリ練習するだろ？　俺はもう、今から2ヶ月も楽器吹けないんだぞ？　もう1回吹けるようになるの、10月頭だぜ？　その間にどれだけ1年生も皆上手くなるか……」

和志と晃も返す言葉がなくなってしまった。

「頑張ってるのに……俺、今まで頑張ってきたのに。全部パァじゃないか」

「2、2ヶ月やろ？　2ヶ月でまた練習できるようになるやん！　そっから頑張れば」

「3ヶ月近くかかってここまでなったけどさ！」

騎士の目からボロボロと涙がこぼれ落ちていく。

「上手くなるのは時間かかるけど、下手になるのに時間かからないぜ!?　肺活量とか指回しの速さとか、全部また振り出しに戻るんだ！　10月から……また4月みたいな状態に戻るんだぜ……？　そんな俺が、合宿行ったって何にもならないじゃん」

「……。」

夏樹が一歩前に出た。

「でもさ。これは仕方ないじゃん。騎士が悪いんじゃないんだから、なんかそんな投げやりにならなくても」

バシッと乾いた音がした。夏樹の右手が、騎士にはたかれたのだ。ジンとした痛みが夏樹の右手に伝わる。

「帰れよ……」

騎士の声が震えていた。

「帰れ！」

「騎士……」

「お前なんかに俺の気持ちがわかるか！　最初から楽器それなりに吹けて、いきなり2年生を差し置いてコンクールメンバーになれるようなヤツに、俺の気持ちなんかわかるか！」

夏樹の顔が苦痛に歪んだ。

「ちょ、ちょっと待って！　落ち着いてよ速水くん！」

「うるさい！　もう……もういい！　帰ってくれ！　頼むから帰れ！　帰れ！」

子供が駄々を捏ねるように泣き叫ぶ騎士。これ以上ここにいては逆に騎士に良くないとさすがに感じた5人は、慌てて病室を出た。

「……。」

扉を閉め、俯く5人。

「ゴメンなさいね」

騎士の母が近づいてきて、彼らに謝罪する。

「いえ……。あたしらも、無神経でした」

綾音が謝る。

「こんな時に、こんなもの渡したくないけど……私が持ってたらあの子、怒るから」

母親が取り出した、薄っぺらい紙。そこには――。

「退部届け……」

和志が震える声で呟いた。

「ウソや……」

綾音が泣きそうな声で呟いた。

「ゴメンなさい……でも……持って行ってくれる？　出さなくていいから……」

ここで受け取らなければ、きっと騎士は母親に怒り散らすに違いない。夏樹となぎさはそう思い、その紙を受け取ろうとした。

しかし、その紙がいきなり彼らの目の前から消えたのだ。

「え？」

振り返ると、拓真が真剣な表情をして立っていた。

「ほ、本堂先輩」

驚いて４人が目を丸くする。
「兄ちゃん」
それは弟の晃も同様だった。
「い、いつの間にここに？」
「絶対、こうなるって思ったからお前たちを追いかけてきた」
「……なんで」
綾音の質問に答える前に、拓真は騎士のいる病室に入っていた。
綾音たちも慌てて追いかける。
「！」
拓真の姿を見て、騎士が目を丸くした。拓真が病院中に響くのではないかと思うほど、大声で叫んだのだ。
「ちょっと凹んだからって、すぐに何でも諦めてんじゃねーぞ！」
それは、昔の拓真自身に向かっても言っているようなものであった。
晃は、兄の拓真が中３の時の夏休みの出来事を、その言葉を聞いて思い出していた。

第３８０話　断りきれなかった

「なぁ……」
病院の外に出るなり、綾音が晃に聞いた。
「何？」
「本堂先輩……お兄さん、中学の時になんかあったん？」
晃がボソッと言った。
「兄ちゃんさ……。中学までは、バスケ部だったんだ」
「そうだったのか？」
和志が驚いて晃に聞き返す。晃は小さくうなずいた。
「でも、それがなんで高校になったら吹奏楽なの？」
なぎさの疑問も最もであった。わざわざ、違う部活に入る人がいないわけではないが、確かに珍しい形ではある。
「膝が……悪くなって。バスケするにはちょっと……っていうのがやっぱ原因かも」
「膝……か……」
和志が呟く。
「内緒にしてたけど」
和志が言った。
「俺も中学時代、運動部だったんだぜ」
なぎさたちが目を丸くした。
「そうなの？」
「前から気になっててんけど」
綾音がツッコむ。
「塚口くん、兵庫出身やのになんで東京弁なん？」
「あぁ、俺、生まれは千葉県だから。多分、子供の頃は東京弁聴いてたから……かな」

「そうなんや」
「そんなことはどうでもよくって」
夏樹が本題に戻す。
「とりあえずさ。あれだよな。本堂先輩なら、今の騎士の気持ちを理解してくれるかもしれない」
全員がうなずく。
「結果、わかるまで待つよね？」
「当たり前だろ！」
なぎさの言葉にすぐ、和志が反応した。
待つこと３０分。拓真が出てきた。
「先輩！」
すぐに全員が駆け寄る。
「どうでしたか？」
拓真は暗い表情をして、首を左右に振った。
「え……」
綾音が不安げな表情を浮かべる。
「ダメだった」
「……そんな」
晃が悔しそうに唇を噛み、すぐに拓真の両腕を掴んだ。
「兄ちゃん！　もうちょっと、なんでもっと説得しなかったんだよ！？」
「ちょ、ちょっと本ちゃん！」
和志が慌てて晃を引き離そうとする。拓真は俯いたまま「ゴメン……。本当にゴメン……」と繰り返し呟くばかりだった。

帰り道。拓真はカバンに収められた退部届をそっと取り出した。
（先輩に、俺の気持ちなんかわかるわけないじゃないですか！）
そう言われたときに、バスケ部の話を出した。
しかし。すぐにこう言い返されたのだ。
（今はもう、吹奏楽で自分の居場所見つけてる人にそんなこと言わ

れたって、説得力も何もないです！）

もうどうしようもなかった。何を言っても聞いてもらえず、挙句に退部届を叩きつけられるように放り投げられ、追い出されるように病室の扉を閉められたのだ。それからすぐに嗚咽が漏れてきたのを、拓真は聞き逃さなかった。

夕陽が拓真の影を長くする。怒った晃は先に帰ってしまい、一人寂しく夕暮れの道を歩いていると、不意に声がした。

「拓じゃん。いま、帰り？」

顔を上げると、懐かしい姿がそこにあった。

「よぉ。トーマじゃん」

翔と陽乃の1年生のときの同級生・伊波（いなみ）　冬真（とうま）だった。彼は、中学時代の拓真の部活仲間である。そして、いま現在も普通科には数少ないバスケットボール部員として活躍している。

「聞いたぜ、吹奏楽部。すげぇじゃん。快挙だって聞いてる」

「はは……」

拓真の力のない笑いに、すぐ冬真が何かに勘付いて聞いてきた。

「何か、あった？」

「あー……うん。ちょっと」

「俺でよかったら聞くよ？」

拓真は小さくうなずいてから言った。

「後輩が……病気でさ」

「うん」

「それで……部活しばらく休まなきゃなんないんだけど」

「うん」

「その子、初心者でさ。休んでる間……2ヶ月なんだけど、その間にまた力量が開いて、自分は初心者に近い状態に戻るのが嫌だって。だから、辞めるって言われた……」

「……辛いな、それ」

冬真も黙り込んでしまう。

「初心者の子は、先輩とか同級生も最初は初心者だったってことな

んて、わかんないんだよな。自分でいっぱいいっぱいで」
冬真が体育座りのままで続ける。
「俺たちもさ、中学の時バスケ初心者なのに入って苦労したよな」
「あぁ」
拓真が苦笑いする。
「若気の至りってヤツじゃね？」
拓真の言葉に冬真が笑う。
「今も若いだろっつーの」
「じゃ、チビの至り？」
「なんだそれ！」
二人は大笑いした。声が静かな住宅街に響く。
「とにかくさ。1日くらいじゃ諦めるなよ」
「……ウザくねぇかな」
「ウザいもんかよ。そりゃあ、帰れとか言われるかもしれねぇけど。来なくなるほうがずっと寂しい……」
拓真の顔を覗き込む冬真。
「お前が……中2で膝ダメになったとき、俺たちがウザいほどお前の見舞いとか、退部した後も遊びに誘ったりしただろ？」
「そういえば……そうだな」
冬真が笑う。
「あの時、お前ウザそうにしてたけど、実際どうだった？」
拓真は恥ずかしそうに鼻を掻きながら言った。
「ホントは、嬉しかった」
「だろ？」
冬真がニカッと笑う。
「先輩はウザがられて当然の存在だと思う。諦めずに、何度でも行ってウザがられて来い」
「……そうだな」
拓真はようやく笑顔を見せた。
冬真と別れた後、すぐに拓真は携帯電話を取り出し絵美にかける。

「もしもし？」
「もしもし。本堂です」
「あ……ゴメンね、今日は。どうだった？」
「門前払い」
「やっぱそっかぁ……」
絵美のテンションが下がる。
「退部届突きつけられたけど、どうする？」
「……今から来れる？」
絵美の声が真剣になる。
「行けるけど……何するんだ？」
「その退部届、破る」
拓真は驚きの発言に目を丸くした。
「ちょ……橋本。それはヤバくね？」
「なんで？」
「なんでって……一応、騎士の意思表示だし」
「そんなの」
絵美の言葉に拓真はハッとさせられた。
「私は聞いてないけど」
「……。」
少し詰問的だったが、絵美はさらに続けた。
「拓あんは、速水くんから『辞めたい』って、直接聞いた？」
「いや……」
「そんな字だけの退部届なんて、私は許さないから。前にさ、陽ちゃんも退部届出そうとしたことあったじゃない？　あの時も私、同じように破ってやろうかって思ったもの」
拓真が笑う。
「何がおかしいの？」
「いや……。橋本、意外と過激だな」
「これくらいの気合いないと、退部しようとしてる人を思い留まらせることなんてできないじゃない」

鼻息が荒くなっている絵美の様子がなんとなく想像でき、拓真はまたおかしくなって笑ってしまった。
「また笑ってる！」
「ゴメン」
絵美は咳払いをしてから続けた。
「とにかく。その退部届は私が預かる。それで、明日の朝一に私、速水くんの家行って意思表示をこの耳で聞いてくる」
「明日の朝一って……橋本、明日合宿出発日だぞ？」
「そんなの、自転車で走ればすぐじゃない。出発は１０時でしょ？速水くんの家は学校からそう遠くないから、大丈夫」
「……しょうがないな」
拓真はため息を漏らした。
「俺も行くよ」
「本当？」
「あぁ」
絵美は嬉しそうに「ありがとう！　すっごく助かる！」と明るい声で言った。拓真自身、このままでは消化不良のまま合宿に行き、県大会にまでこの気持ちを引きずってしまいそうで怖かったのだ。
その気持ちにケリをつけるつもりだった。
電話を切った後、拓真は自信満々な様子で笑った。
「よし！　絶対、合宿連れて行くから覚悟してろよ、騎士！」
拓真はニッと笑い、駆け足で自宅へと向かって行った。

第３８１話　出発マイナス１

８月１日。今日から七海高校吹奏楽部５６名は合宿である。しかし、昨年同様そのバスの中では肝心の部長がバス酔いを起こしていた。

「もうさぁ、恒例って感じだね」

陽乃があきれ返って翔の背中を摩っている。

「酔い止め飲んでこれだもんね、今年は」

「ちょっとは成長したってことで……う！」

「はいはい。今年も後ろ行く？」

「う、うん……」

翔は覚束ない足取りで後ろに移動し、ワイワイと話をしている亜紀とさゆりのところへ行った。

「ご、ごめん……場所、変わってくれん？」

「やぁだ先輩！　また今年もですか？」

翔が力なくうなずく。

「大変ですね～。はい！　ここどうぞ！」

「おおきに、どうも……」

翔はすぐに亜紀たちのいた場所に着席し、ため息を漏らす。このため息にはホッとしたものと、少し残念な感情の二つが篭っていた。

少し残念だったこと。それは結局、騎士が合宿に来なかったことだ。行く直前の朝、ギリギリまで絵美と拓真が説得に当たったが、家から出てくることすらなかったという。このまま、本当に退部してしまうのではないかと思うと残念でならなかった。

けれども、部活に残れと強要する権限が翔はもちろん、恭一にもない。それは彼もよくわかっているようで、朝のミーティングで「

後は速水次第だ」と言っていた。
斜め前に座っている絵美も、ボーッと肘を突いて外の景色を見ているだけ。拓真はそっと目を閉じ、ｉＰｏｄで音楽を聴いているようだった。
１年生は１年生だけでバスに乗っている。ちょうど真後ろを走るバスで、何かを話したいからという理由で急遽、１年生だけで乗車したのだ。なので、翔たちのバスは２・３年生が集中している。
「話し合いって……何を話すんやろ？」
翔は気になってしまい、気分が悪いのを知らないフリをして、携帯電話を取り出して綾音に尋ねてみた。
しかし。１０分経っても２０分経っても返信は来なかった。そのうち、翔は眠気が催してきたのでいつの間にか眠ってしまっていた。
その頃、１年生はというと流が持ってきた音源――『シング・シング・シング』を必死に聴いていた。観光バスではＭＤはもちろん、ｉＰｏｄなどは聴けないためカセットテープにＣＤの音源を録音して、流が持参していた。
「間に合うかな？」
ヒソヒソ声で賢治が流に聞いた。
「わかんないけど……。でも、やってみないとどうしようもないし。いきなり楽譜見るよりも、音源聴いてイメージ膨らませるほうがいいかと思って」
「その前に、先生とか先輩の了承取れた？」
横から茉莉紗が心配そうに聞く。
「そうだよ。それが先決」
雄飛が続ける。流は首を左右に振りつつ答えた。
「でも、ウチの部ならＯＫになりそうじゃないか？」
「またそんな……。いくらなんでも、コンクール前だよ？」
これにはさすがの杏も否定的だ。
「ましてや……ねぇ、辞めようかどうしようか微妙なラインの……１年生のために先輩たちがそこまでしていいって言ってくれるかな

？」

稚沙希の意見も最もであった。特に3年生は言葉にこそしないものの、コンクールに対する熱意はかなり強いものがあった。

「言えない……かぁ」

貴志が肩を落とす。

「でも、このままじゃいずれにしてもナイト、辞める方向よね？」

菘が呟くと沈黙が広がった。

「やる」

低い声が響いた。驚いて振り返ると、一番奥の席に智志が座っているのだ。

「せ、先輩！？　いつの間に！？」

「さっきサービスエリアで乗り間違えちゃってさー」

ニカッと笑う智志。彼ならやりかねないと全員が笑った。

「やっちゃえば？」

「でも……嫌がられないでしょうか？」

「さっきまで俺、2・3年生のバスにいたけどホント、本堂先輩とか橋本先輩の顔、めちゃくちゃ暗いもん。あれ、放っておいたら病んじゃいそうだよ」

「そうなんですか？」

夏樹が前のめりになって前の様子を見ようとするが、当然見えない。

「とにかく。自分たちでやりたいっていう意思表示すれば？　やりもしないウチから諦めてたら、マジ何にも始まらないし」

「……。」

しかし、誰も何も言わない。

「俺は少なくとも、みんなの味方するぜ」

「ホントですか！？」

声を上げたのは雄飛だった。

「お願いします！」

「うん。だから、まずはみんなが頑張らないと。じゃなきゃ、ナイ

ト戻って来ないぜ」
「はい！　よぉし、やろうぜみんな！」
「……そうね」
意外にも動いたのは沙知だった。
「動かなきゃ、始まらないもんね！」
「そうだそうだ！」
「じゃあ、もう1回音源聴きなおそう！」
「よし！　みんな、集中！」
智志は1年生の様子を見て自分が入部した頃のことを思い出していた。なんだかんだ言って、仲間が少しでもいるというのは心強いものなのだ。
この仲間がいてよかった。騎士にもそう感じてほしいと思い、最後の一押しをしたのだった。

第３８２話　１年生からの願い

「お願いします！」
「……。」
翔たちは呆然としていた。１年生全員が９０度でお辞儀をしているのだから。
「ちょ、ちょっと待てよ」
慎也が声を上げても１年生は誰も顔を上げない。
「そうよ。そんな……ことされちゃ、私たちも困るじゃない」
由美子が戸惑っている。沙希もどうしていいかわからず、困惑した表情を浮かべている。雄飛が続けた。
「お願いします！　コンクール前で、非常識なことを言っているのはわかっているんです！　でも、俺たちこのまま騎士を……退部させたくないんです！」
和志が引き取る。
「お願いします！　俺たち、頑張って練習します！　騎士を元気付けたいんです！　そのために……合宿で、少しだけ、少しだけ時間をください！」
「……。」
陽乃と拓真が翔のほうを見つめる。翔は腕を組んで目を閉じたまま、しかめ面をしている。返事もしない。
「佐野先輩！　お願いします！」
綾音が翔をきちんと先輩と呼んだ。改まった雰囲気である。
「先生の許可、いただいてるんです。でも、先輩方の理解が必要だって。お願いします！」
茉莉紗が半泣きで言うが、それでもなお翔は何も言わないままである。

「ダメ……ですか」
陽乃がさすがに耐え切れなくなり、翔を呼んだ。
「ねぇ、翔……。なんとか言ってあげなよ」
「あ？　あぁ……」
翔がようやく反応した。
「とりあえず、言うていい？」
１年生全員の表情が固まる。しかし、期待も少し持っている、そんな雰囲気だった。しかし。
「時間の無駄やと思うねん」
拓真と陽乃だけではない。そばにいた慎也や美里、沙希も驚きの表情を見せた。さすがに傍にいた恭一も驚いて立ち上がりそうになった。
けれども、次に続いた翔の言葉は彼らしいものだった。
「こうして許可くれ言うてる時間が」
ニカッと笑う翔。１年生は呆然としている。
「ほれほれ！　ボーッとしてる暇あるかい！　楽器準備して！　楽譜も準備して！」
翔は綾音や夏樹の背中をグイグイ押した。
「おーい！　２・３年生！」
「あ、はい！」
「１年生の指導、頼むわ！　昼飯食べ終わって、１時からパー練やったやろ？　その間、パート１時間はパート練習、１時間は木管・金管とパーカスのセク練するわ」
要領よく練習時間を割り振る翔。
「急ぐで！」
「は、はい！」
「ほんで、セクション練習の時間の１時間で合奏！　ＯＫか！？」
「はい！」
「よっしゃ！　ほな、気合い入れていけよ！」
「はい！」

目の前の光景を見て、真里菜や他のテレビスタッフが呆然としている。ＡＤが真里菜に問う（ちなみに、真里菜は女性カメラマンである）。

「市来さん。彼ら、テレビ意識してこんなことしてるんでしょうか？」

「どうかしら……。だとしたら、この部には相当な役者ばっかり揃ってることになるけど……」

「高校生らしくはない……よな……」

「先生に確認してみる？」

ＡＤがうなずくので、真里菜は聞きづらいものの、恭一に尋ねた。

「あの……東先生」

「はい？」

「こんなこと言ってはなんなんですが……。彼ら、私たちが撮影していること意識したりは……してるんでしょうか？」

恭一は目を点にした後、すぐに笑った。

「ハハハ！　いやいや、アイツらに限ってそれはありませんよ！」

「そ、そうですか？」

「えぇ！　心配に及びません。しばらく、アイツらを撮影してやってください」

「はい……」

真里菜は本当かどうかまだ半信半疑であった。ひとまず、翔のいるサックスパートを撮影することにした。

そっと翔たちのいる部屋に入る。それからカメラを向けて撮影開始。翔たちはまったくカメラなど気にしている様子は見せない。

「アカンアカン！　ジャズやで、ジャーズー！　マーチと違うねん！　夏樹くんの、ズッタカターってマーチくさいメロディになってる！」

「は、はい！」

「もっとさ、こう……ほら！　西嶋ちゃんみたいなエロい音色！」

「せ、先輩！　やめてくださいよもぉ～！」

はるかが顔を真っ赤にして翔の背中を叩いた。
「痛ってぇ！」
翔がよろけてそのまま窓際に寄りかかる。すると、少し立て付けの悪くなっていた網戸がそのまま外れて翔ごと外に飛び出してしまった。
「きゃー！　ちょっと先輩！　ここ、若草さんの旅館ですよ!?　破壊しないでください！」
さゆりが慌ててひっくり返った翔を引っ張る。翔は頬を泥だらけにして「大丈夫！　修理しとくから！」と笑うばかりであった。
「とりあえず網戸はこうしといてっと」
網戸を戻してから翔は再び元の位置に座る。
「なんか……寒くないですか？」
かのこがブルブルと大げさに震えてみせる。
「そういえば……そうですね」
「せやな。マーヤちゃん、温度ちょっと上げといて」
「はーい」
麻綾が冷房を操作し、すぐに着席する。すると２０分ほどすると今度はウッスラ汗が出始めた。
「なんや……今度は暑いで？」
「ホント。極端よね」
真里菜もそれは感じていた。温度設定を見ると、まだ２２度。それほど暑い設定温度ではない。
「それにしても……」
翔が立ち上がり、冷房の吹き出し口に手を当てる。
「ゲッ！　なんか風熱いで!?」
「あ」
茉莉紗が声を上げる。
「暖房ですよ、これ」
「何ぃ!?」
翔たちがエアコンの操作部分を見ると、確かに「暖房」の表示。

「マーヤちゃん！」
「テヘッ！　すみませーん！」
「頼むでぇ！」
翔はすぐに冷房の設定に変える。それからすぐに、全員が笑い始めた。笑いでいっぱいになる部屋。真里菜たちも思わず笑ってしまった。
（なるほど……。これが彼らの素ってわけか）
真里菜は自然にアップで翔、さゆり、麻綾、はるか、夏樹、茉莉紗、かのこの順番で撮影する。
「この子たちなら、いい雰囲気で撮影、できそうですね」
「だね」
スタッフたちも顔を見合わせ、笑い合った。
いよいよ始まる合宿。幸先良い雰囲気で始まった合宿は、まだまだこれから面白みを増して行く。

第３８３話　１時間、１時間

「どうしよ……指がもつれて思うように動かないや」
好美が眉をひそめる。それはかのこと沙知、雛乃も同じであった。貴志も苦戦しているようである。
「どうする？　最後の手段はあるけど……」
雛乃の言葉に全員が「それは絶対したくない！」と声をそろえた。
「だよね……。じゃあ、もっと気合い入れていこうよ！　あと３０分あれば、なんとかできるよ」
「うん！」
好美たちが苦戦しているのは、中盤にある低音楽器の伴奏。初めはその低音楽器ばかりなので、メロディにメロディが重なっていくというイメージのほうが正しいかもしれなかった。
一方のパーカッション。裕也がドラムセットを叩いている。彼にしてみれば慣れたものであるが、他のパーカッションの１年生の和志と晃はやや苦戦している。初心者であるため、いきなり曲を渡されて合わすと言われてもなかなかすぐにできるものではない。
木管楽器は音量の小ささに苦労していた。フルートは稚沙希のみ、オーボエはまゆ、アルトサックスは夏樹、テナーサックスは茉莉紗、バリトンサックスはかのこ。クラリネットに雄飛、なぎさ、麻衣子、歩由美。アルトクラリネットに菘である。クラリネットはなぎさ以外は経験者なので、音量的に問題はない。しかし、他のパートは２・３年生が抜けると圧倒的に音量が低下した。
その上、金管が思いのほかパワフルだったのだ。中学時代は２年生の頃からトップを吹き続けている流がいるトランペットを筆頭に、音量が全員大きいホルン３名、音程が安定している分、響きのあるトロンボーン、そして女子ながらパワフルな音で全員を支える好美。

彼らがさらに木管を圧迫していた。
　このままでは、騎士を元気付けるために演奏するにも関わらず、むしろ木管楽器の弱さが丸見えになってしまうので、なぎさたちは焦っていた。
「ねぇ」
　歩由美が言う。
「やっぱり……2年生に1人ぐらい入ってもらわない？」
「ダメだよ！」
　なぎさが即座に反論する。
「あ、クラリネットは多分大丈夫よ。でも、アルトサックスが……」
　夏樹がどれだけ頑張っても、やはりアルトサックス1本というのは心細いものがある。
「ダメだって！」
　雄飛が反論に加わった。
「ナツくらいの音量がいいんだって。ここに中野先輩とか、ましてや佐野先輩が入ったら他の楽器が完全に埋もれる。音量が違うもん」
　麻衣子が続けた。
「それに、速水くんを励ますための演奏なんだから！　やっぱり1年生だけでやらないと」
「……そうね」
　歩由美が軽く頬を叩いて気合を入れなおす。
「よし！　合奏まであと何分？」
「10分！」
「じゃあ、最後にここ絶対心配ってとこ繰り返し続けよう！」
「うん！」
　どの部屋からも、まだ荒々しいけれども光るものがある音色が聞こえていた。その音色を聞いている恭一はというと、リラックスした様子である。
「先生」
　真里菜が恭一に尋ねた。

「はい？」
「1年生……いえ、皆はなんでコンクール前に突然、別の曲を練習し始めたんですか？」
「いえ……。実は今、一人退部しようとしている部員がいまして」
「え？　そうなんですか……」
聞いてはいけないことを尋ねてしまったと思い、真里菜は声を潜めた。
「あぁ、大丈夫ですよ。そんな恐縮しないでください」
「すみません……」
「いえいえ。まぁ……気胸っていう病気になって、2ヶ月吹けないって聞いたら辞めるって言い出してね」
「気胸……ですか」
恭一がうなずく。
「もちろん、私は部員たちに留まらせるまでの権利もありません。入部してくれれば嬉しいです。悲しいけれど、退部しなければいけない部員もいるでしょう。どうするかは、彼らが判断することなんです。高校生とはいえ、自分のことくらい自分で決められる年齢でしょうしね」
真里菜は思いのほか、恭一が生徒任せにしていることに気づいた。
「だけれども、同時に自分ひとりで生活してるわけではないってことにも、気づいてもらいたいんですよね」
必死に指回しを練習している好美、かのこ、沙知、雛乃、貴志の姿が見えた。
「残される側も去る側も、どこかに所属した以上は自分ひとりだけでどうこうできる範疇がある意味で限られてしまっているんですよね。それは家族でも、学校でも、クラスでも会社でも……一緒なのかもしれないですね」
恭一の言葉が静かに真里菜の心に響いていく。
真里菜の目に、冷房がかかっているにも関わらず汗だくになってソロの練習をする雄飛と流の姿が映った。目に汗が入って、しかめ

面になる流。それでも演奏の手は止めない。
「あの子たちは多かれ少なかれ、その辞める部員……速水っていうんですけど。彼の存在の大きさを感じ取っているんではないでしょうか」
「……。」
「どうでもいいなら、こんなことしてませんよ。多分、ここにいる55人全員が、彼を必要としているんです。後は、彼が……私を含めて、このナナコウ吹奏楽部を必要としているかどうか、ですよね」
真里菜はそう考えるとなんだか切なくなった。これほどに全員が、真里菜がまだ見たこともない騎士を欲しているのに、彼がそれを拒否した場合、彼らはどうなるのだろうか。そんなことを考えると、胸が苦しくなりそうだった。
「とにかく、私たちにはできることは限られてきますけれど。それをするだけです」
そう言って恭一は立ち上がった。
「よし！　合わすぞ～！」
「はい！」
恭一の声にその場にいた1年生が返事をする。2年生や3年生が各部屋に散っている1年生を呼びに走った。
すぐに全員が揃い、1年生だけで合奏体型になる。その表情はほぼ全員がガチガチに固まっていた。恭一がそれを見て笑う。
「はい、深呼吸～」
全員が息を揃える。
「いいか？　何もコンクールじゃないんだから、そんなに気張る必要はないぞ？」
それでも流や綾音の表情は堅い。
「何のための演奏か、それはわかってるな？」
稚沙希、茉莉紗がうなずいた。
「じゃあ、おのずと緊張は解けてくるだろう。じゃ、行くぞ」
「はい！」

指揮棒が降りると裕也がタムタムを叩き始める。少しリズムが遅れたが、恭一は何も言わない。雰囲気を感じ取った裕也はすぐにテンポを追いつかせる。

チューバ、トロンボーン、エレキベースが特徴的なビートを演奏すると同時にトランペットがメロディを吹く。そして、主題が始まった。アルトサックス、テナーサックス、クラリネットのメンバーが譜面にややかじりつきすぎな部分はあるものの、懸命に吹いている。

（あっ、置いていかれた！）

綾音がズレてメロディからはぐれてしまう。

（あ！　速すぎた）

和志のシロフォンが周りよりも早く入ってしまう。

（ゲ！）

雄飛がクラリネットのソロを吹くなり、リードミスしてしまう。何度も乱れそうになるが、それをセーブするのが裕也と好美、かのこだった。安定した技術を持った3人が、きちんと根底から1年生バンドを支える。

再び裕也だけになった後、例の低音だけの部分が始まる。トロンボーンの2人は結局、ポジションが追いつかなかったので好美とかのこ、貴志でカバーした。トランペットとホルンが吠えるようなメロディを吹き、木管楽器が細かい旋律を加える。しかし、指が追いつかず音がトランペットとホルンに埋もれてしまい、モゴモゴしていた。

トランペットのメロディが始まる。綾音は必死で置いていかれないように指を動かしている。茉莉紗と夏樹が先ほどのホルンの吠えるような音色を真似て必死に吹いている。

流のソロの手前で、恭一が指揮を止めた。

「よーし。うん。３０分足らずの練習にしては、上出来だと先生は思うぞ」

しかし、１年生はまだ不服そうな顔をしている。

「とりあえずだ。この曲の練習はここまで。後はしっかり1年生同士で合間を見て練習しておきなさい」
「はい！」
恭一の次の言葉に1年生が真っ青になった。
「とりあえず、市民祭でこの曲を発表するか！」
「え！？」
唖然とする1年生。すぐに賢治が言った。
「そうか。2・3年生もですよね」
「何言ってんだ。1年生だけでだろ」
「えぇ！？」
「はいはい！　文句言わない！　しっかり練習しておくように。以上！」
「……。」
「返事！」
「はい！」
その返事を聞くと、恭一は満足気に笑いながら指揮台を降りた。
「じゃあ、全員で合奏の体型に。コンクールの練習、するぞ！」
「はい！」
返事をするものの、やはり1年生は不安を隠しきれないまま、コンクールの練習へと移って行くのだった。

第３８４話　選曲会議

「そんじゃあ、今から選曲会議始めます」
慎也が落ち着いた声で言った。文化祭の選曲委員には慎也、恵梨、みゆきの３人が選ばれている。
「まずですが……先日取ったアンケートで皆さんから得票数が多かった曲を１０曲、挙げますね」
恵梨が黒板に曲名を次々と書いていく。

・千と千尋の神隠し　ハイライト
・ディスコパーティー？
・Ｆｌａｖｏｒ　ｏｆ　ｌｉｆｅ
・愛唄
・タイタニックメドレー
・ディズニークラシックスレビュー
・ジャパニーズグラフィティー　刑事ドラマ・テーマ集
・キャラバンの到着
・スパイスガールズのヒットナンバー
・もののけ姫

「得票数が多かった曲は、以上です」
慎也が引き取る。
「なんですが……どちらかというと、メドレーに偏り気味のように思います」
事実、そのとおりであった。ディスコパーティ、タイタニック、ディズニー、キャラバン、スパイスガールズ、千と千尋、ジャパグラの７曲がメドレーである。

「メドレーばっかりすると、奏者も聴いてる側もちょっとしんどいのではないかと……」
みゆきが顔をしかめる。
「確かに、それはあるかもしれへんなぁ……」
翔も首を傾ける。
「けど、皆がやりたいって思ってるわけだし。検討してもいいんじゃない？」
陽乃が反論する。
「いや、でもさぁ～。文化祭って、いつだった？」
「１０月の１０日から１２日までね」
美里の質問に素早く沙希が答える。
「でしょ？　で、定期演奏会は？」
「１１月２３日ね」
沙希がまたも答える。
「正味、１ヶ月ちょっとよね。それを考えると、メドレーばっかりにするとしんどいんじゃないかなとあたし、思うのよね」
美里の言うことは正論である。
「ねぇ、そういえば……あのアンケートはどうなったの？」
「一応集計結果は出てます」
恵梨が分厚い紙の束を出した。この集計とは、ランダムで各学年に配り、吹奏楽部に文化祭で演奏して欲しい曲を募集するアンケートのものである。
「一応、こちらのアンケートではやはりＪ－ＰＯＰがほぼすべてを占めています。一応、黒板に書いていきますね」
恵梨が吹奏楽部内で募った候補曲の隣に、曲名を書いていく。

・Ｆｌａｖｏｒ　ｏｆ　Ｌｉｆｅ
・Ｐａｓｓｉｏｎ
・光
・蕾

・愛唄
・千の風になって
・粉雪
・Ｙｏｕ　Ｒａｉｓｅ　Ｍｅ　Ｕｐ
・たらこ　たらこ　たらこ
・ウイスキーが、お好きでしょ

「こりゃまたＪ－ＰＯＰばっかり集まったなぁ」
拓真が笑う。
「っていうか、誰よウイスキーが、お好きでしょなんて入れたの！」
由美子が大声で笑う。周りも笑い始めた。
「でも、得票数が多いってことは、結構聴きたい人がいるってことよね」
「あー……なるほどねぇ」
絵美の指摘に春樹がうなずく。
「とりあえずさ、吹奏楽部内で挙がった曲以外の、この皆から挙がった曲を先に投票済ませてしまわない？」
「そうしよかぁ。ほな、前の曲で演奏してみたいと思う曲を……せやな。３曲選んでもらおっか！」
「はい！」
小さな紙が配られると同時に、シャーペンで曲名を書く部員もいれば、天井を見上げて何を吹きたいか、考えている部員もいる。
冷房がいらないくらいに涼しい夜。部員たちはそよ風に吹かれながら、各々吹きたい曲を考えている。
優輝の頭の中は、キングダムハーツのことでいっぱいだった。その主題歌である光とＰａｓｓｉｏｎを演奏したいと考えていたのだ。それも、オープニング時にオーケストラバージョンで流れるものがあるのだが、その今日を演奏したいと考えていたのだ。しかし、オーケストラなのだから当然、吹奏楽譜はない。それがネックだった。
（編曲なんて……できる人いねぇしなぁ）

右斜め前に座っている慧太も同じことを考えていた。慧太も、優輝に負けないぐらいにキングダムハーツのファンなのだ。特に、ロクサスというキャラクターへの熱意はハンパなものではない。

「あのぉ……」

低い声が響いたので、優輝と慧太が振り返る。声の主は、駿だった。

「オーケストラ原曲の曲って……編曲、無理ですか？」

翔はしばらく考える素振りを見せ、それからすぐに笑顔になった。

「うんにゃ！　いけるで」

優輝、慧太、駿の顔がパァッと明るくなる。

「ホントですか！？」

「おうよ。ほら、三河先輩。音大行っていまちょうど、編曲の勉強しとんや。せやから、先輩に頼めば何とかなるかもしれへんで」

「や、やったー！」

駿が翔の手を握り締める。

「是非お願いします！」

「おう！　任せとけ！」

翔の自信溢れる答えに、男子3人が飛び跳ねている。

「ずっるーい！　男子だけ妙に盛り上がっちゃってさぁ。ねぇ、女子も盛り上がろうよ！」

美里の言葉に絵美が笑う。

「どうやって盛り上がるのよ～？」

沙希も思わず笑ってしまう。

「うーん……そうだ！　恋愛してない3年女子いないから、全部ラヴソング推しで行くとかどーよ！？」

その声にまた笑い声が上がる。

「本当に曲選ぶ気、あるんですかね……」

真里菜が心配そうに呟く。

「大丈夫ですよ。あの子たち、いつもこんな調子ですからね」

恭一は笑いながら翔たちのやり取りを見ていた。そして、この調

子のままで夜に差し掛かっていく。
陽乃たちは部屋に戻り、お風呂の準備を始める。
「ねぇねぇ」
由美子が陽乃に声をかけた。陽乃たちの部屋は3年生女子が全員揃っている。
「何？」
「陽ちゃんって、佐野くんとドコまで行ったのー？」
「へ！？」
陽乃の顔が真っ赤になった。
「そうよ、そうよ。あたしもそれ、気になってたのよね～」
美里がニヤニヤしながら聴く。
「じゃあ……せっかくの夜ですし？」
絵美が笑う。
「恋バナ、しちゃいますかー！」
「えぇー！？」
陽乃が真っ赤になって声を上げた。合宿第一日目の夜は、さらに楽しみを増して行くのだった。

第３８５話　月明かりの下で

「なんか目が冴えちゃった……」
散々、イジられまくった陽乃を残して美里たち他の3年女子は眠りについてしまっていた。興奮してしまったのか、陽乃だけ目が冴えて眠れないのだ。
「ちょっと外の空気吸おう」
陽乃はそっと部屋を出て、廊下を歩いていく。七海荘はやや古めの宿舎なので、歩くとギシギシ音がする。真夜中の宿舎は、電灯は少しだけ点いてはいるものの、やはりちょっと暗い。
「こけないようにしなきゃ」
怖さは感じなかったが、一人だとなんとなく寂しさがある。陽乃は階段を降り、そっと玄関を出て行く。出てすぐ傍にベンチが置いてあるので、そこに腰掛けた。夏場とはいえ、少し涼しい風が吹くのは海沿いのせいだろう。
虫の鳴き声が響く。かなり遠いが、海のさざ波のような音も聞こえてくる。それを聞いていると、いつの間にか眠くなってきた。そのときだ。
「陽乃？」
上を見ると、屋根に座っている複数の男子の姿が見えた。一人は間違いなく、翔である。
「翔？　何やってんの」
「そっちこそ。寝たんちゃうん？」
「うーうん。ちょっと、目が冴えちゃって」
「ふーん……。こっち来るか？」
「いいの？」
「おう。ちょっと待ち。迎えに行く」

迎えに行く、と言う言葉を聞いて陽乃は少しドキッとした。なんだか、特別な言葉でもないのに意識してしまったのだ。

しばらくすると、翔が玄関の戸を開けた。

「ウス」

「やあ」

ジャージ姿の翔を見るのは別に初めてではないが、なんだか意識してしまいまともに見ることができない。

「行こ」

「うん」

翔は陽乃の手を引いて最上階にある男子の寝室に入った。部屋では慎也、拓真がスヤスヤと寝息を立てている。

「屋根に誰がいるの？」

「春やんと、直幸」

陽乃が寝室のベランダから通じる階段を上がり、そのまま屋根に上がる。

「朝倉さんも眠れない人？」

春樹が聞く。

「俺、枕が変わるとダメでさぁ」

「繊細なんだね」

春樹らしいと陽乃は思って思わず笑ってしまう。

「若草くんは？」

「直幸でいいよ、朝倉さん」

「じゃあ、あたしのことも陽乃で」

「そういう風に呼んだら、翔に怒られる」

「別に怒らへんがな」

翔はクックッと笑った。

「で、何の話してたの？」

「別に～。風に当たって涼んでただけ」

翔がそういうと、春樹と直幸が同時に吹き出した。陽乃もそれを見てすぐに察知する。

「ウソ～。絶対違う」
「違うコトあらへんよ！　なっ！？」
「うんうん」
そういう二人だが、あからさまに様子がおかしい。
「ね！　正直に言ってよ～。何の話してたの？」
我慢できなくなったのか、春樹が「それがさぁ～」と言いかける。
それを見て翔が慌てて春樹の口を塞ごうとする。
「何？　あたしに聞かれちゃマズいの？」
「も、もうメッチャクチャアカン！」
翔の声が裏返る。直幸が「しーっ！　拓あんとか慎ちゃん起きるだろ！」と翔の口を塞ぎこんだ。
「いいじゃない。ヒソヒソ声で教えて」
春樹と直幸はニヤニヤしながら翔のほうを見る。そして、春樹が言う。
「朝倉さんと、将来結婚したいな～って思ってるんだって」
「へ」
翔の顔が一瞬で真っ赤になる。陽乃も真っ赤になってしまった。
「ありゃ」
真っ赤になったきり喋らない二人を見て、直幸が声を上げた。
「刺激強すぎた？」
「かもね」
二人は俯いたまま、顔も上げようとしない。なんとなく気まずい時間が流れていく。ようやく、春樹が言葉を発した。
「そっか」
直幸が首を傾げる。
「それならそうと早く言えばいいのに」
ニッと笑う春樹。そして、そのまま直幸の背中を押して階段のほうへ向かう。
「お二人でどうぞごゆっくり」
「ちっ、ちが……」

翔が違うと言い終える前に、二人は屋根を後にした。
「……。」
沈黙が起きる。
「とりあえず、座らん？」
翔が優しい声で言った。
「う、うん」
再び沈黙。翔がその沈黙を破った。
「あの……まぁ、結婚ってのはまぁ……」
「冗談？」
翔が困った顔になる。
「冗談……ではない、かな」
「！」
陽乃が先ほどよりも赤くなる。翔の落ち着いた言葉に、余計心が掻き乱される感じである。
「本気の度合いから行けば、本気度合いは９９％くらいかな」
「そ、そうなんだ……」
涼しい風が吹く。
「知ってた？」
「何を？」
「オレ、もうすぐハッピーバースデー！」
「……それ、自分で言う？」
「１８歳！」
「わかってるわよ」
「日本って、男子は１８歳、女子は１６歳で結婚できるんやで？」
翔があっけらかんと言うので、陽乃はますます恥ずかしくなってしまう。
「でもまぁ、オレたち今から大学進んで、就職して……いろいろあるけど、でも、オレはずっとお前と一緒におりたいなーって思ってるんで」
「う、うん……」

「これからも、よろしゅう頼んます」
翔がそっと手を握り締める。
「こ、こちらこそ」
「なぁ！」
突然、雰囲気を変える翔。
「コンクール、どこまで行けると思う？」
「うーん……」
「オレはな！　全国！」
「ぜ、全国？」
陽乃は呆気に取られてしまう。
「無理かな？」
しかし、ここで陽乃は首を横に振ることはなかった。
「い、行きたいよあたしも！」
ニッと笑う翔。
「ほなな、この合宿が正念場やから、頑張ろうな絶対！」
「うん！」
陽乃が時計を見ると、時間が午前1時になっていた。
「ヤバいよ。そろそろ寝よう」
「おっ……と、せやな！」
翔がそっと陽乃の手を引いて階段を降りる。そして、そのまま寝室を通り抜けてドアを開ける。
「じゃあな」
「うん！　おやすみなさい」
翔は小さく手を振って陽乃が部屋に入るのを見届けてから、ドアを閉めた。
「……っ。なんか頭痛いなぁ……。寝不足かな」
翔は頭を抑えながら布団に入る。次の日になれば治っているだろうと考えていたが、それほど甘い状況でないことであると気づくのは、まだしばらく後のことだった。

第３８６話　厳しさ5倍

合宿２日目の午前９時。朝食を終えた部員たちはロングトーンのために、早々に合奏をするホールに集まっていた。
「起立！」
恭一の姿を見るなり、翔が号令をかける。部員たちは素早く立ち、恭一が指揮台に立ったのを見計らって翔が「礼！」と挨拶をする。
「おはようございます！」
「おはよう」
「着席！」
翔の号令に従い、部員たちが座ったのを見てから、恭一が話し始める。
「まず……合奏の前に、大事な話を３つ」
部員たちの顔は真剣なものになる。
「まず、速水のことだが。皆も知っているとおり、彼は退部届けを持ってきた」
１年生の表情が暗くなる。しかし、恭一はまだこれを受理していないと断言した。辞める理由がいまいち、恭一を納得させるものではないからだそうだ。３年間、治らないような病気であれば恭一も受理するのだが、治療次第で快復の可能性は大いにあるのだ。諦めず、根気良く治療すべきだと恭一も騎士を説得するつもりでいるとのことであった。
「続いて、定期演奏会の話だ。ひとまず、開催日はもう決定したから、教えておこう。１１月２３日、午後２時開演だ。先生が考えているのは４部制」
「４部？　多くないですか？」
驚いた駿が聞く。

「そう感じるかもしれないが、２部はマーチングにしようと思っている。ここは長くても１５分程度だろう。それから、４部も楽章で構成されている曲を演奏しようと思うから、これも長くても２０分程度だから、実際はそれほど時間は必要ないと思う」
「曲はどうするんですか？」
絵美が聞く。
「その話は、今日の夜、夕食後に１時間ほど時間を取ろうと思っているが、とりあえず１部と４部に関しては先生が決めて、２部に関しては神崎さんにお任せしようと思っている」
「じゃあ、３部は？」
「みんなで決めてくれればいい」
恭一の言葉に全員が笑顔になる。
「定期演奏会は、先生とみんな、保護者の方やお客さん、全員でいろんな方で作っていくものだと先生は思うからな」
「はい！」
それを言い終えると、恭一の表情が暗くなる。
「それで……これが本題なんだが」
部員たちもあまりの変わり様にツバを飲んでしまう。
「一昨日……県大会の出演順を決めるくじ引きがあってな」
「出場順、決まったんですか！？」
翔が待ってましたとばかりに声を上げる。
「あぁ」
「何番ですか？」
陽乃が聞く。美里が「地区大会くらいの順番だと楽だよね」と洋之と話している声が、恭一にも聞こえていた。
「順番だが……」
全員の目が恭一に集中する。
「い、言う前にいいか？」
恭一が不安そうに言った。
「はい」

全員が不思議そうに首を傾げながらうなずく。恭一はなぜか汗をかいているようで、額をハンカチで拭ってから続けた。
「出番だが……」
急に春樹と慎也の背筋がゾクッと冷たくなったような感覚に見舞われた。そして、恭一が出演順を口にした。
「１番だ」
「……。」
「……へ」
長い沈黙。恭一は不安で顔を上げることができなかった。
「い、１番、ですか？」
優輝が裏返りそうな声で尋ねる。
「１番だ」
「そ、それは昼一とかではなくて？」
佳菜が聞く。
「昼一じゃない。朝一だ」
智志が尋ねる。
「となると、出演時間は？」
「午前９時半開演だから、おそらく９時４０分頃だろう。初めは、挨拶とかがあるからな」
「９時４０分……」
由美子が手を上げる。
「それじゃあ、団体受付の時間は？」
「約１時間前の、８時２５分だ」
「えっと……県大会って、どこでしたっけ？」
動揺したのか、沙希が今さらながらそんなことを呟いた。
「神奈川県民ホールだ。最寄り駅はＪＲ関内駅で、そこから徒歩１０分程度を見ておいたほうがいいだろう。それから、到着後に楽器を運搬して、楽譜と楽器を準備して、移動することなどを考えておいて……まぁ、４０分程度は時間を取っておいたほうがいいだろう」
恭一の説明から考えると、８時２５分に受付をするにはその４０

分前、７時４５分には会場に着いておくのが安心だ。すると、徒歩１０分かかるとすると７時３０分には関内駅に着いておきたいことになる。

恭一はさらに、事前にこれらを想定した場合の電車時刻を調べたのだそうだ。それによると、７時２１分に関内駅に到着する電車に乗るのがベストだそうだ。そうすると、６時３３分の電車で登戸駅を出ないといけない。ＪＲ登戸駅まで行くためには、小田急七海駅を６時には集合して、電車に乗る必要がある。

６時に駅に集合するまでに、楽器を積まなければならない。しかし、そんなことを当日にやっていてはおそらく、５時くらいに学校に集合しなければならない。これでは、とても効率が悪すぎるだろう。そう考えると、前日に積んでおくほうが良いだろうと恭一は言った。

それでもなお、６時集合となると部員たちは５時には起きておかなければならない。いくら夏場とはいえ、まだ薄暗い時間帯であることには違いない。

「かなり……時間が早くなるのはもう避けられない」

「うわーお……強烈……」

美里が苦笑いする。

「そこでだ」

恭一が続ける。

「合宿終わって……そうだな。８月６日から、６日後の１２日の県大会に向けて、とりあえず早起きして早く集合して、午前９時の時点でベストの状態に持って行く練習をしよう」

「はい！」

全員が大声で返事をする。

「だから、６日以降は部室に午前６時集合。そこから眠気を覚まして、７時から音出し。実際には、８時頃からしかできないだろうけれど、まぁいいだろう。で、実際にチューニングやリハーサルのような動きをして、９時から通し練習をする。そして、午前中と午後

は……3時くらいまで練習をして、その後は絶対に帰宅して休養することにする。残って練習するのは厳禁」
「厳禁、ですか？」
はるかが不安げに言う。
「あぁ。もし練習を続けて、体調を崩したら何にもならないからな」
それもそうか、という表情になるはるか。
「厳しい状況になったことは間違いない。皆もそれを自覚して、これから練習に励んでくれ」
「はい！」
恭一は部員たちの返事を聞くと笑顔になった。
「では、今から正午までセクション練習だったな。金管木管セクリ、指導のほうよろしく」
「はい！」
「パーカスは田中が中心になって、パート練習な」
「はい！」
「では、開始！」
「はい！」
木管パート、金管パート、パーカッションパートで分かれて練習を開始する面々。一方、コンクールメンバーでない部員たちは主にさゆりの指導の下、基礎練習を行う。
「なぁ、春やん」
慎也が移動中、春樹を呼び止める。
「何？」
「なんか、とんでもねぇ時間に出番になっちゃったな」
「そうだなぁ……。先生、前にくじ運ないって言ってたけど、まさか朝一になるなんてね」
春樹もこればかりは驚くばかりだった。
「あら、でもこういう考え方もあるわよ？」
どこからともなく、絵美が現れる。
「一番手で、私たちがとっても印象的な演奏をすれば、それこそそ

の後の団体がいくらでも出ても、大丈夫だってね。前の団体のほうが良かったって、常に審査員に思わせることができれば、こっちのものよ」

「なるほど……そういう考え方もあるんだなぁ」

春樹と慎也がうなずく。すると、横から雄飛が心配そうに言った。

「でも、これ、あくまで噂ですけど……地区でグランプリ取ったトコって、県ではダメってよく聞きますよね」

その言葉に絵美たちが「本当？　そんな噂、あるの？」と驚いた様子で雄飛に問い詰める。

「う、噂ですけど、はい……」

そのとき、後ろから聞き慣れたテンションの高い声が４人を直撃した。

「ウリャー！　何を暗い話しとんねん！」

「き、聞こえてたんですか！？」

翔は堂々と言い切った。

「そんな噂、気にしてる暇あったら練習、練習！　練習して、そんな噂なんか吹っ飛ばしてしまえ！」

「先輩……恐ろしくポジティヴですね」

雄飛がクスッと笑う。

「明るく考えることなら任せとけ！」

つられて絵美たちも笑う。

「ほらほら！　早く行こう！」

「はーいよ！」

翔たちに促されて、４人はセクション練習の部屋に向かう。しばらくすると、恭一の耳に整った音が響き始めるのだった。

第３８７話　上を目指して

「行くぞ……」
恭一が指揮棒を降ろすと同時に、金管のファンファーレが奏でられる。うまく行ったようで、スムーズに事が運んでいく。しかし、メロディが始まるなり恭一は指揮棒を止めた。
「ストップ、ストップ！」
恭一の大声が飛ぶ。
「おい、伴奏！」
「はい！」
「チューバだけじゃないだろ！？　伴奏だ、伴奏！」
「はい！」
かのこと駿が返事をする。
「伴奏！　トロンボーンとホルン！」
「は、はい！」
慎也と順平が慌てて返事をする。
「お前たちも伴奏だろ！　寝ぼけてるのか！？」
「すいません！」
亜紀と徹も慌てて返事をし、楽器を構える。
「そこ、もうちょっとなんとかならないのか？　ただ伴奏を吹いていればいいっていうだけじゃない。いいか？　マーチなんだから、お前らが要になるんだよ。メロディは言わばこの場合は味付けに過ぎない。マーチの醍醐味は伴奏にあるんだから、この場合はむしろ伴奏と思わず、お前たちがメロディを作っていくと思っとけ」
「はい！」
「もう１回、頭から」
「はい！」

しかし、今度は頭から演奏したところで指揮棒が止まる。
「コラー！　クラリネット、アルトサックス！」
「はい！」
「お前ら、アフタクトの意味も知らないのか！？」
「知ってます！」
翔と麻綾が率先して答える。
「クラリネットは！？」
「知っています！」
絵美と優輝が即答する。
「知ってたらなんでそれができないんだ！？　もう１回！」
「はい！」
真里菜はあまりに普段と様子が違う恭一や部員たちの様子に戸惑いを覚えつつ、撮影を続けていた。なるべく、邪魔をしないように気遣ってしまう。それだけ、覇気のある練習なのだ。
（この子たち……本当に高校生？）
真剣な眼差しはむしろ、大人顔負けのものである。
「コラー！　ユーフォ、お前らバカか！？」
（バカ！？　今時……これ、大丈夫なのかしら）
小学校や中学校で教師がこんなことを言えば、暴言だどうだと苦情も言われかねない。この合宿には翔、陽乃、慎也の母、それから２年生では優輝、佳菜、恵梨の母、１年生ではかのこ、賢治、雄飛の母が保護者会代表として付き添っていたが、誰一人として文句を言うような様子はなかった。
「そこのオヴリガード！　もっと歌えって言っただろ！？　音痴すぎる！」
「はい！」
「テナーサックス！　西嶋！」
「はい！」
「演歌はいらん！　バカ！」
「すみません！」

次々と飛んでくる檄に、むしろ真里菜たちのほうが怯んでしまっていた。
（なかなか、厳しいですね）
ＡＤの牧田（まきた）　哲哉（てつや）が耳打ちする。
（そうね……。あたしも思っていた以上で）
「コラー！」
恭一の大声に二人は思わず口を塞いだ。
「トランペット！　そこのトリオからの打ち込み！　なんだその情けない音！」
「すみません！」
「ペペペッ、じゃない！　パパパッだろうが！　そんな捨てるような音吹くならコンクール出るな！」
「すいません！」
「もう１回、低音のメロディから」
「はい！」
指揮棒を振る。しかし、音が出ない。
「低音ー！　アフタクトからあるだろうが！　バカ！」
「すいません！」
「そこだけ、延々くり返す！」
「はい！」
アフタクトとは、弱起（じゃっき）と言って、小節の途中から次の小節へ向かうきっかけの音と言えば比較的理解しやすい。それを別物と捉え、小節で区切って吹くとかえって妙なことになることが多いのだ。
「甘い！　入り！」
「はい！」
そうこう繰り返すこと既に5分が経過した。そのうち、好美や雛乃が半泣きになってきたのだ。
「泣くな！　これくらいで泣いてどうする！？」
「す、すみません！」
「前田を見てみろ」

好美と雛乃が涙を拭ってかのこを見ると、睨みつけるような姿勢でバリサクを構えたままである。
「この強い視線！　さっきから先生、怖くて前田を見てられない」
そこでドッと笑いが起きた。かのこが真っ赤になって「先生、ひどーい！」とおちゃらけた声を出す。
「とにかくだな。泣くくらいなら吹け！　吹いて吹いて、自信つける！　いいな？」
「はい！」
（なるほど……叱るばかりじゃないのね）
横で哲哉がメモを取っている。彼も同じことを感じているようだ。
しばらくすると、音楽をあまり知らない真里菜や哲哉でも、曲の雰囲気が変わってきているのを感じ取ることができた。
「そこ、そうそう！　ユーフォは甘い感じで……女性的に。メロディは子供のように明るく！　そうそう！　そうだ～、いいぞ！」
転調した部分では、落ち着いた女性的なメロディが流れる。先ほど、下手くそと言われたトランペットの打ち込みもシロフォンと上手く合い、ユーフォニウムのオヴリガードが綺麗に響く。
そして低音のメロディが始まる前に、恭一が指揮棒を降ろした。
「オッケ。それじゃあ、暑いし一旦休憩しよう。１５分休憩！」
「はい！」
「起立！」
翔の号令に合わせ、全員が立つ。
「礼！」
「ありがとうございました！」
真里菜はこれをチャンスとばかりに、インタビューをすることにした。まずは、先ほど泣いていた好美と雛乃のところへ向かう。
「ごめんなさいね、休憩中に」
うまく二人でいるところに、真里菜はインタビューをすることができた。好美と雛乃が恥ずかしそうに笑う。
「さっきの……あの、泣いてた時なんだけど、なんで泣いてたの？」

「あ、あれですか……。あれはなんていうか……ね、よしりん」
好美が苦笑いして言った。
「情けなかったんです」
「情けなかった？」
「はい。だって、午前中のセクション練習で、あそこいっぱい練習したんですよ。でも、上手くできなくて。結局、何を練習してたんだろうって気持ちになっちゃって」
「なるほどねぇ……」
真里菜はカメラを構えながらインタビューを続ける。
「でも、失敗は誰にでもあるものじゃない？」
雛乃が困った様子で続ける。
「それはそうかもしれないですが……でも、この合奏が本番みたいな気持ちで私たち、いたんで。練習で上手くできたのに、合奏で失敗してたら、ダメじゃないですか？」
「そ、そうね」
真里菜はどう答えていいのかわからなかったので、とりあえず同意してしまった。
「だったら、休憩中に練習しなくていいの？」
哲哉が意地悪な質問をする。しかし、二人は即答した。
「しません」
「なんで？」
哲哉もあまりの速さに、さらに疑問をぶつけた。
「休憩中は、しっかり休憩しなきゃやる気出ませんので」
高校生らしい、素直な答えだと今さらながら気づいたのだ。仕事中でも休憩を入れずに作業を続けることがある二人にとって、少し新鮮味のある答えだった。
「ありがとうね。休憩中、ごめんなさい」
「いえ！」
真里菜と哲哉は笑顔で会釈する二人を背に、自分たちの席に少し複雑な気持ちを抱きながら戻って行ったのだった。

第３８８話　夢の第一部

「よし！　じゃあ、今日の合奏はここまで。６時から夕食だな。今日の配膳係は？」
「はい！」
慎也と由美子が声を上げた。
「トロンボーンとフルートだな。よろしく」
「はい！」
「起立！」
翔が号令をかけ、慎也たちが立ち上がる。
「ちょっと待った。その前に、大事な話がある。座りなさい」
「はい」
恭一がンンッ、と咳払いをする。
「定期演奏会をすることは決まっているが……とりあえず、演奏会の構成が決まったので報告しよう」
「おぉ～……」
部員たちからどよめきが起きる。
「まず、第一部はクラシック・吹奏楽オリジナルステージにする。これに関しては、既に曲は先生のほうで決めてあってな。楽譜も既に手筈を整えてあって、ここにもう持ってきてあるんだ」
「えー！　やりたいです！」
陽乃が声を上げる。
「まぁ、待て待て。それは最終日の朝のお楽しみにしておこうと思う」
「うわー！　めっちゃやりたいわぁ！」
翔もウズウズしている。
「落ち着け、落ち着け。とにかく、第一部は４曲するつもりだ。そ

のうち、2曲はいま練習を頑張ってる課題曲と自由曲。後の2曲は吹奏楽オリジナル曲を入れるからな」
「はい！」
「それで……第二部は、昨年同様神崎さんに指導していただいて、マーチングステージをする」
「おー！　ってことは、まこっちゃんと健之佑のドラメ（※）がまた見れるのか？」
智志が楽しそうな声を上げた。
「ちょっと待てって。ひょっとしたら、ケータかもしんねぇぞ？」
健之佑が白い歯を見せてニカッと笑う。慧太が「お、俺！？」と目を丸くしていた。
「そうだな。可能性はないぞ、志賀」
慧太はまだ、ドラムメジャーがどのようなものかは知らないので、仮に彼がドラメになればかなり練習が必要だろう。
「それから、第三部はポップスステージ。これに関しては、全曲を3年生に選んでもらおうと思う。なので、任せていいか？」
翔たちは目を丸くした。
「おーい、いいか？」
「ホ、ホンマにいいんですか？」
翔が不安げに聞く。
「やりたいようにやればいい」
「は、はい！」
3年生全員が笑みを浮かべる。
「それで、第四部はフィナーレとして、比較的大曲の吹奏楽オリジナル曲を演奏する。これに関しては、9月以降に発表しよう」
今度は全員がざわめく。
「いいか？　コンクールをまずはしっかり頑張って、それからさらに定期演奏会のことも考えていくように。どっちつかずにならないようにしような！」
「はい！」

「以上！　部長、号令！」
「起立！　礼！」
翔の声に、先ほどよりも気合いがこもっている。
「ありがとうございましたー！」

「ねぇ、陽ちゃん」
夕食時、隣同士になった絵美が陽乃に声をかける。
「なに？」
「定期演奏会なんだけど……」
絵美はそっと陽乃に耳打ちする。
「あ、そうだよね！　部員だもん……いけるんじゃない？」
「でも、距離的にどうなんだろ……」
絵美が顔を左右に傾ける。
「交替ごうたいで、みんなの家に泊まるとか？」
「女子の家よね」
「やぁだ！　当然じゃない」
陽乃が絵美の問いに大声で笑いながら答える。
「おぉーい、やかましいぞ副部長！」
翔が笑いながら陽乃に茶々を入れる。
「な、何よ！　夕食くらい楽しくやっていいでしょ！？」
「楽しくすんのとやかましくすんのは違(ちゃ)いますー！」
「何よ！　にくったらしぃ！」
絵美がクスクスと笑っている。
「やっぱり、二人って仲良いんだね」
「そう？　こんな感じの、ケンカ調子だよ常に」
「それがいいのよ、多分」
絵美が寂しげに笑った。
「……。」
陽乃はそこでふと思い出した。最近、春樹と絵美が一緒にいるシーンをあまり見なくなっているのだ。元々、クールな部分がある春

樹。拓真と同様で、問題があっても何かと一人で解決してしまおうというような素振りを見せることがある。

コンクールが近づいた先月下旬から、春樹が先に帰宅し、絵美が練習して遅くまで残っているということが頻繁に続くようになった。8月に入って、すぐ合宿になったが、合宿の時でもあまり二人が話している様子を見ることはなかった。

かといって、それを直接絵美に聞くのは憚(はばか)られた。もしも、間違いだったり勘違いだったりすれば絵美の気分を害するだけなのだから。それに、何かあるのならば絵美のほうから相談をしてくるものだ。これまでは常に、そのような感じだったのだから。

(考えすぎは良くないし)

陽乃はそう考え直し、お味噌汁をゆっくりとすすった。

「やっぱり、そう思うかお前も」

拓真が翔にそう言った。

「あぁ。拓あんも?」

「そうだよ。俺も感じてた。アイツ、最近橋本さんに冷たい」

「何か、心境の変化か?」

翔と拓真は春樹のほうを見た。和気あいあいと、雄飛や順平と話をしている春樹。その様子は普段とあまり変わりないように見える。

「そうは見えないけど……」

「受験で悩んでる様子はなさそうか?」

拓真が首を左右に振る。

「俺のほうがむしろ悩んでる度合いから言えば、深刻。アイツ、音楽知識バリバリ付けてるしな」

「そうかぁ……」

翔が箸を進める。拓真も豚カツを箸でうまく切り、口に運ぶ。

「でもさぁ、こういう場じゃないと、なんか聞きにくいことだってあるしな……」

「聞いてみるか?」

「そうだな……聞いてみよう」

翔と拓真は意を決して、春樹に絵美との最近の状況を聞いてみることにした。

一方、春樹たちのテーブルでは翔や陽乃の心配などよそに、かなりの盛り上がりを見せていた。

「えー！　マジっすか先輩！」

順平が大笑いする。

「マジだって！　だって俺、こないだ見たもん！」

「絶対ウソでしょ、それ！」

雄飛も大笑いする。すると、大げさに身振り手振りする春樹の手が菘に当たった。

「あ、ゴメン……」

春樹の威勢の良さが、途端に消えた。

「いえ！　大丈夫です」

菘は大して気にも留めず、すぐに好美たちの会話に戻っていく。

「……。」

春樹がどことなく寂しげな様子で菘のほうをしばらく見つめ、すぐに順平たちに視線を戻して会話を再開した。

「おい」

拓真が真剣な表情で翔に問う。

「まさか……春やんに限ってないよな？」

「……わからへん」

翔も不安そうな表情を見せる。陽乃と目が合った。その隣にいる絵美の表情が曇っているのは、誰の目にも明らかであった。

第３８９話　消えた恋花火

「それじゃあ！」
優輝の声が響き渡る。
「七海高校吹奏楽部第二回合宿、第二夜の……花火を開催しまーっす！」
「イェーイ！」
全員の歓喜に満ちた声が七海荘の周りに響き渡った。
「はい、エミリン！」
陽乃が大きな手持ち花火を絵美に手渡した。
「ありがとう」
絵美は優しい笑顔を浮かべるが、やはりどこか元気がない。
「……火、点ける？」
「うん」
「行こう」
陽乃と絵美は手を繋いで火種のところへ行った。
「！」
その火種のところに、春樹と何も知らない慎也がいた。
「おう、橋本さん、朝倉さん！」
「やぁ」
ぎこちない雰囲気を慎也もそれとなく感じ取ってはいるようで、なかなか目を合わせない春樹と絵美の間に割って入った。
「火！　いるだろ？」
「うん。ありがとう」
絵美は慎也から火をもらい、花火に火をつけた。シュバッ！という音と共に緑色をした鮮やかな花火が始まる。
「すごい！　綺麗じゃない！　ねぇ慎ちゃん、あたしにも火、ちょ

うだい！」
「はいよ、どうぞ」
陽乃の花火からはオレンジ色の花火が点いた。シュバーッ！と爽快な音を立てて花火はどんどんテンションを上げていく。
「陽ちゃん、あっち行こう」
「え？」
「いいから」
絵美は花火がまだ真っ最中というのに陽乃の手を引いて慎也と春樹の元から離れようとする。陽乃は無抵抗のまま、花火の火を派手に散らしながら絵美に引かれて慎也たちの元から離れていった。
「あっ」
陽乃が思わず花火を手から落としてしまう。地面に落ちた花火は、それでもしばらく綺麗な炎を放っていた。
「エミリン……どうしたの？」
「……。」
「春やんと、何かあった？」
絵美はしばらく、緑色からオレンジ色に炎の色を変えた花火を見つめていた。花火がフッと炎を消し、消えてしまう。途端に、周囲から音が消えてしまった。周りにいる部員たちの楽しそうな声と、虫の鳴き声が聞こえるだけだ。
「地区大会の後にね」
絵美の凛とした声が不意に聞こえた。
「うん……」
陽乃は緊張した面持ちで答える。しかし、暗闇で絵美の顔はよく見えない。しばらく沈黙が続いた後、先ほどの言葉の続きが聞こえてきた。
「別れてくれって、言われた」
「……なんで！？」
陽乃は思わず大声を出してしまった。近くにいた恵梨や洋之、茉莉紗が陽乃たちのほうを振り返る。

「なんで!?」
陽乃はそれでも気にせず、大声で絵美に理由を問うた。
「受験に……集中したいからって」
「受験？」
「うん。そう言われたら、もう言い返せないよ……」
「どうして？　一緒に頑張ろうとか、なんとでも言えるじゃない」
「そういう手もあるけど……それ以外にも、理由はなんとなくありそうで」
絵美が寂しげな様子で春樹のほうを見る。そして、陽乃は見てしまった。春樹が、菘と親しげに話している様子を。驚いて菘のほうを見るが、すぐに見てわかった。菘のほうは、決して春樹に恋愛感情を抱いている様子はなかったのだ。
かといって、陽乃や絵美に春樹を責めることもできなかった。それは、筋違いのような気もしていたからだ。
別れようって言われた以上、春樹には絵美に対する恋愛感情がないのかもしれない。そんな春樹を責めるのは、やはり筋違いなのだ。
「悲しいけど」
絵美が小声で言った。
「しょうがない、よね」
「……。」
「ね……」
自分に言い聞かせるように、絵美は何度もそう呟いていた。

一方、春樹は菘と楽しげに話をしていた。春樹の気持ちなど知る由もない菘は、明るく春樹に話しかける。
「先輩。こっちに線香花火、ありますよ」
「やったね！　くれる？　毛利さん」
「はい！　どうぞ！」
「ありがと！」
菘は春樹に花火を渡すと、すぐにまた好美たちとワイワイと話を

始める。春樹にはまったく関心を抱いていないようだった。
「……。」
春樹はそっと菘の手を握った。
「！」
驚いた菘が春樹の手を払い除けた。菘の持っていた花火と、春樹の持っていた線香花火が同時に地面に落ちて火花を散らし、消えてしまう。
「……。」
「……。」
周囲にいた好美や慎也がその異様さに気づき、呆然と二人を見つめていた。
「なんですか？」
菘が怒った口調で春樹に尋ねる。
「いや……ちょっと、手が当たっただけ」
「……そうですか」
菘はフイッと顔を背けると落ちた花火の殻を拾い、すぐに春樹の元から離れていった。好美と雛乃が慌てて後を追う。
「ちょい」
慎也が春樹を呼んだ。
「いい？」
「ん……」
二人はそっと、周りに気づかれないように部員の輪から離れる。
「どういうつもりなんだよ？」
「……。」
「お前、橋本さんと付き合ってんだろ？」
「もう別れたよ」
「は！？」
慎也が怒った表情を浮かべた。
「お前、自分で何言ってんのかわかってんのか！？」
「わかってるよ」

「わかってねぇよ！　バカやろ！」
慎也の大声に春樹は肩をすくめた。
「そうかよ！　お前、一方的にどうせ別れようとか言ったんだろ！？　橋本さん、納得したのか？」
「したんじゃない？　何も言ってこないし」
慎也がギリッと唇を噛み締めた。
「あのさぁ……言っていいか？」
「なんだよ」
「中学の頃の俺だったら、多分、春やんをボコボコにしてると思う」
春樹の心臓がドクン、と飛び跳ねるように鳴った。慎也の拳が握り締められ、腕の筋肉が少し緊張しているようにも見えた。
「どういうつもりか知らないけど、中途半端なことすんの、やめてくんね？」
「……。」
慎也が眉をひそめて春樹の耳元で囁いた。
「振るなら、ハッキリと振れよ」
「……！」
慎也はそれだけ言い捨てると、春樹の元を去っていった。
「う……っく……」
春樹はそのままその場にしゃがみ、人知れず涙を流したのだった。

第３９０話　強く、強く

スゥスゥと寝息を立てる翔と拓真。その横で横になる慎也と春樹は、眠れずにいた。
「慎ボー……？　起きてる？」
「……起きてるよ」
再び沈黙。月明かりが部屋に差し込み、翔の顔をうっすら照らし出していた。
「今日は……なんか、ゴメン」
「俺に謝るのは間違ってるんじゃね？」
「……そうかも」
春樹がため息を漏らした。慎也もため息をつく。
「お前さ。橋本さんのこと、大好きなんだろ？」
「……だった、かな」
「もう恋愛感情はないのか？」
「……うん」
虫の鳴き声が部屋にまで聞こえてくる。騒音がまったくないに等しい時間帯で、この伊豆地方である。虫の音しか聞こえないのだ。
「下手くそ」
「え？」
「下手なウソつくな」
「……。」
慎也が低い声で言った。
「翔もお前も、朝倉さんも橋本さんも、みんなウソつくの、下手すぎる。自分をすぐにごまかそうとする」
慎也のズバリの指摘に、春樹は言葉を失った。
「どうだよ」

「……そのとおりだよ。毛利さんには、すぐバレた」
春樹は慎也に叱られた後、そっとやって来た菘に思い切り頬を叩かれたのだ。その跡がまだ、残っている。痛みも若干ある。
「受験のために、本当は別れてほしいって絵美に言ったんだ。だけど、絵美は納得してくれなかった。一緒に乗り越えて行こうって。そう言ってくれた。でも、俺にはちょっと……それが重く感じて」
「ふぅん……」
慎也はハッキリとした答えを返さず、相槌だけを打つ。春樹は訥々と続けて言った。
「だったら、受験以外の理由を作ればいいって。浮気しちゃえばいいんじゃないかって。いま考えれば、すっごいバカだけど」
「ふーん」
「……絵美、どうやったら納得してくれると思う？」
「……それくらい、自分で考えろ。バカ春樹」
「うん」
「もう、俺寝るわ」
「おやすみ……」
慎也の口から言葉が発せられなくなり、しばらくして言葉が寝息に変わった。それでも、春樹はしばらく寝付けずにいた。

（春くん！）

「ん……」
絵美の声が聞こえた気がして、春樹はモゾモゾと布団の中で動く。
「春やん。起きれ」
「かける……？」
春樹が目を開けると、翔の顔があった。
「もう朝？」
「ううん。５時」
「早ぇよ……眠いし」

「えぇから。来い」
「んも〜……」
春樹は眠い目を擦りながら翔に手を引かれるがまま、廊下を歩いていく。薄暗い階段を降り、玄関を出る。
「どこ行くんだよぉ」
「えぇから」
しばらく草が生えた道を歩いていく春樹と翔。そのうち、春樹も目が覚めてきた。
「座ろうか」
「ここ？」
「うん」
春樹は翔に言われるがまま、草の上に設置されていたベンチに座った。翔もその隣に座る。
どれほど時間が経ったかわからない頃だった。山の向こうから、陽が昇り始めたのだ。
「うぉ〜……キレ〜……」
「やろ？　ここなぁ、直幸が教えてくれてん」
「すっげぇ……」
春樹が陽の光に目を奪われていた最中だった。機械的な音が周囲に響いた。
「おーい、翔ぅ……」
翔の携帯電話の発信音だった。
「悪ぃ！　ゴメン！　もしもし？　おう！」
翔はペコペコとお辞儀をしながら、春樹の座っているベンチから離れる。どれくらい時間が経ったのかはわからなかったが、しばらくして足音が近づいてきた。
「電話終わった？」
「うん」
「……え？」
絵美が立っていた。

「絵美……」
「あのさ……いいかな？」
「う、うん」
絵美が春樹に近づく。そして、一発。
乾いた音が七海荘の周りに響き渡った。
「え、絵美！？」
「バカ春樹！　自分の受験のために、私振るとかホントばか！」
絵美の目から涙がボロボロとこぼれ落ちる。
「絶対、私納得なんてしてないからね！　春くんが納得してないのに、私、別れるなんて絶対納得なんてしてないからね！」
「……絵美」
絵美が春樹を抱き締めた。
「受験、頑張りなさいよ……」
「……。」
「応援してる」
絵美の声が震える。春樹が今度はそっと、絵美を抱き締めた。
「約束、するよ」
春樹の凛とした声が絵美の耳に届いた。
「それまで……しばしの、お別れね」
「うん……」
絵美と春樹は朝陽の降り注ぐ草原でしばらく、お互いのぬくもりを確かめ合っていた。

「おかえり」
陽乃が、廊下で翔に声をかける。
「ただいま」
「エミリンと、春くんは？」
「アイツらなら、大丈夫や」
「そっか」
陽乃がホッとした様子を見せる。

「……オレらも、いつかは、あんな風になるかもしれへんのかな？」
翔が不安げな表情を見せた。
「仮に」
陽乃が続ける。
「そうなっても、あたし、エミリンと同じ考えだからね」
「……おう」
翔と陽乃は笑い合い、そのまま手を繋いで自分たちの部屋に向かって行った。

第３９１話　お先に失礼！

「おはようございます！」
綾音とまゆがコンクールメンバー以外の部員が練習する部屋に入ると、既にさゆりがいた。
「おはよう！　二人とも、早いね」
「先輩も早いですね」
「皆に後れを取らないように、しっかり練習しないとね」
さゆりはそう言ってリードを選び始める。綾音とまゆは椅子をセッティングして、さゆりを挟むように座った。
しばらくすると、ゆっくりゆっくりドアを開けて貴志が入ってきた。
「おはようございます！」
「あ、おはよう！」
「タカティー！　おっはよ！」
「おはよ、佐野、歌川。やっぱ早いと思ってたけど、予想どおりだな」
へへ、とまゆと綾音は笑い合う。間髪いれず、和志が部屋にやって来た。それから、少し恥ずかしそうに慧太がやって来る。
「まだ恥ずかしがってるの？　もう慣れなよ！」
「え、あ、う、うん」
慧太はそれでも少し恥ずかしそうにしながら、さゆりの後ろに椅子を置いて座った。
「Ｇｏｏｄ　Ｍｏｒｎｉｎｇ！」
マーガレットが意気揚々と部屋にやって来る。それに続いて裕時とソンスがやって来た。
「全員揃った？　それじゃあ改めまして、おはようございます！」

「おはようございまーす！」
「じゃあこのメンバーで今日も練習頑張ろう！」
「はい！」
「それじゃ、B♭のロングトーンを16拍4拍で上がって上を2回吹いて、下がってきてください」
「はい！」
さゆりがメトロノームをセッティングし、テンポ60で鳴らし始める。
「5、6、7、8」
少しまだ出だしにばらつきのある音が響き始める。しかし弦バス、バスーン、ユーフォニウム、アルトサックス、クラリネット2本、トランペット、オーボエ、パーカッションと意外とバランスよくパートは揃っていたので、練習も比較的やりやすいものがあった。
ロングトーンを終えると同時に、ノックの音が響く。
「はい」
貴志が楽器を構えたままドアを開けると、恭一が立っていた。
「先生！　おはようございます！」
「おはよう」
恭一の手には楽譜が入っていると思われる封筒が何束か持ってあった。
「お前たちだけどな、文化祭で演奏する曲の楽譜、持ってきた」
「本当ですか！？」
まゆと綾音が嬉しそうに声を上げた。
「あぁ。先に練習しておいてもらおうと思ってな」
「やったぁ！」
恭一は部屋に入り、封筒を合計5つ、畳の上に置いた。
「比較的、難しい曲を先に持ってきた。そのほうが練習のし甲斐があるだろう？」
「はい！」
さゆりが嬉しそうに封筒の傍に座る。釣られるように、他の部員

たちも周りに座り込んだ。
封筒には油性ペンで曲のタイトルが書かれている。
「スゴイね～。大曲多いな」
「あっ！　これ、アメリカの曲ね？」
マーガレットが嬉しそうに楽譜を指差した。
「コレはいつスルの？」
「これはしばらく先だけど、１０月末頃だな」
「ソウなのね」
それを聞いてマーガレットや裕時が少し残念そうに笑う。
「なんでそんな顔するんだ？」
「え？　でも」
「マーガレットたちも演奏するんだぞ？　もちろん？」
「Ｒｅａｌｌｙ？　センセイ」
マーガレットが目を丸くして尋ねた。恭一は笑顔で大きくうなずく。
「Ｏｈ！　それは嬉しいです！」
裕時、マーガレット、ソンスの３人は手を取り合って喜んだ。まだ意味がよくわかっていない貴志や和志。さゆりはなんとなく意味を汲んだようで、裕時たちに「良かったね！」と笑いかけている。
「それじゃあ、ちょっと大変なことを言っていいか？」
「？」
全員が首を傾げる。
「君らには、コンクールメンバーより早く文化祭の楽譜を配ったから、この中から最低２曲は、ファーストを担当すること」
「えぇ！？」
全員が大声を上げた。
「それは当然だろう。皆よりずいぶんフライングするんだから、頑張らないとな」
「……。」
「マーガレットは、ドラムセットな」

「Ｏｈ、Ｎｏ！」
首を左右に激しく振るマーガレット。
「そんなの、ムリね！」
「する前から無理って決めてどうするんだ。今からでもしっかり、練習すれば２ヶ月近くあるんだ。大丈夫、大丈夫！」
恭一はそう言って立ち上がって部屋を出ようとした。
「あ、そうだ。ファーストがどうしても自信ないなら、ソロだけでもいいからな！　心配しなくても、楽譜見て楽そうなファーストがあれば、それを取っておけばいい。昼には、どの曲をファースト吹くか、こっそり教えにきてくれ。じゃあ」
バタン、とドアの閉まる音が部屋に響く。しばらく、全員が呆然としていた。
「……。」
貴志がそっと楽譜を手に取る。
「俺の場合は……エレベ（※）ってことだな」
「そうなるんだろな」
和志がうなずく。
「とりあえず、全部の楽譜出してみる？」
「そうですね！」
さゆりや裕時、数人が手分けして楽譜を広げる。
「まゆちゃん！　これ、オーボエのソロあるよ」
「えぇ！？　やぁだぁ！　絶対したくないじゃん！」
「でもさ、なんとなくだけどソロ回されそうな気がしない？」
貴志が呟く。
「なんでそう思うん？」
綾音が聞き返す。
「どうせさ、先生とか佐野先輩あたりが『来年からは先輩になるから』とか言って、１年生ばっかりにソロ吹かせそうじゃないか？」
さゆりがうなずく。
「先生と先輩ならありえなくもないわね……」

「ひゃ！」
綾音が悲鳴を上げた。
「どしたの？」
「この曲、なんかトランペットソロがたくさん……」
「うわ！　えげつねぇ～」
横から楽譜を覗き込んだ慧太が顔をしかめる。
「はいはいはい！」
さゆりが手を叩いた。
「とにかくさ！　今から2ヶ月あるの！　バリバリ練習していけば、2ヵ月後にはきっと吹けるようになってるから。怖気づかずにさ、自分が吹きたいと思った曲を手にとっていこう！」
そう言うなり、さゆりは楽譜をひとつ手に取った。
「……じゃあ、俺これ！」
次に楽譜を手にしたのは慧太。
「じゃ、アタシコレね！」
マーガレットが遠慮せず楽譜を手に取る。
「あっ、ずりぃぞマーガレット！　それ、俺がするつもりだったのに！」
「早いものガチね！」
「あ！　そんな言葉覚えて……待てよ！　じゃんけん！」
「そんな日本語知らないネ！」
「ずりぃー！」
ドタバタと狭い部屋で追いかけっこをする和志とマーガレット。
見かねたさゆりが「コーラァ！　バタバタしないで！　下に響くじゃない！」と笑いながら二人を制した。
「なんや、えらいバタバタしとんなぁ」
真下の部屋でパート練習をしていた翔たちが上を見上げる。
「さゆたちですよ」
はるかも上を見上げている。
「あたしもあっち行きた～い。なんか楽しそう」

かのこが羨ましそうに言う。
「ほな、オレらもちょっとおもろいことしに行く？」
「ホントですか！？」
全員の目の色が変わった。
「おうよ。ほな、ちょっと外出よう」
「はーい！」
翔の後について、はるかたちも歩いていく。
「どこ行くんですか？」
「あそこ！」
翔が指差した先。そこは、七海荘から１００ｍほど離れた場所にある、小高い丘のような場所だった。

第３９２話　合戦開始！

「先輩！　こんなトコで何するんですかぁ？」
早くも息切れしているかのこが翔に聞く。
「そうですよぉ。９時半から合奏ですよ？」
「まだ８時半やん。時間たっぷりあるって」
そう言いながら翔は小高い丘にある休憩所にかのこたちを連れて行った。
「ほんじゃ、ここでちょっと待ってて」
「え？　先輩、どこに……」
「オレはあっち側おるから」
翔が指差した先には、ちょうど同じくらいの高さの丘があり、同じような休憩所がある。距離は５０ｍ程度離れている。
「あれ？」
翔が休憩所に向かい始めると同時に、賢治がかのこたちのいるところにやって来た。
「緒方くん！」
「前田。それに……サックスの皆さん？」
「あれ？　そっちもここに？」
「はい」
杏がうなずく。裕子も不思議そうにしている。
「こんな外で何させる気なんでしょうね……」
「あれ？　右川くんは？」
「先輩は、反対側にある休憩所に行きました」
「なんだ。先輩と同じ場所行ったんじゃない」
はるかがますます不思議そうな様子で首を傾げながら言った。
「佐野先輩もあっちに？」

ホルンとサックスの面々は何をするのかよくわからない、という表情を浮かべて反対側にある休憩所のほうを見ていた。
しばらくすると、翔と順平らしい姿がはるかたちから見えた。同時に、麻綾の携帯電話が震える。
「あ、佐野先輩だ」
麻綾は通話ボタンを押し、対応する。
「もしもし？」
「もしもし！　佐野です」
「今から私たち、どうすればいいんですか？」
麻綾は翔からの指示を聞き、うなずいている。
「はい。はい！　わかりました」
通話を終えると麻綾がしかめ面をしていた。
「どうしたの？　佐野先輩、なんて？」
「サックスとホルンで交互に、チューニングB♭を全力で佐野先輩と右川くんがいる休憩所に綺麗に聴こえるように、音吹けって」
賢治が目を丸くする。
「そんなの、簡単じゃないですか！　俺から行きます！」
賢治が意気揚々と楽器を構え、ベルを翔たちのほうに向けて思い切り音を吹いた。
「うわぁ！　さっすが男子！　音違うね！」
杏と裕子が驚きの表情を見せる。賢治はドヤ顔をしている。
「あ」
同時に賢治の携帯電話が震えた。
「右川先輩だ」
メールが順平から着信していた。賢治は携帯電話を取り、受信ボックスを開ける。

音が汚い！　出直し！

「げっ……マジで？」

「はいはい！　出直した、出直した！」
はるかがグイグイと賢治を押し出し、彼がいた場所に立つ。そして、息を深く吸い、はるかがＢ♭の音を吹いた。深みがあるが、決して荒くない音が周囲に響き渡る。すると、今度は携帯の着信はなかった。その代わりに、翔が両手で大きく丸印を描いたのだ。
「やったぁ！　あれ、合格って意味よね？」
はるかは嬉しそうにガッツポーズを取り、今度は杏と交替する。翔と順平のパートだけではない。各パートが同じような練習をしていたのだ。大きな音で、かつクリアで響きのある音を出すための練習であった。ちょうど、ホールの舞台から客席のやや遠い場所、審査員席のあたりまでの距離を想定しての練習だったのだ。
同じ練習は各パートで行っている。バスパートでは、宿舎の入口に智志、好美、愛実、春樹、亮平が立っている。そして、５０ｍほど離れた場所に、拓真が立っていた。
「行くぞー！」
春樹が息を吸い、Ｂ♭の音を奏でる。吹き終えると拓真が大声で指示を飛ばす。
「出だし、ボヤけてるー！」
「了解ー！」
音だけでなく、声まで大きいメンバーが揃いに揃っているバスパート。続く愛実も負けじと大声を出す。
「お願いしまーす！」
パーン！とクリアな出だしの音が響く。
「ちょっと荒ーい！　息を深く吸って出すまではいいから、もっと出だし丁寧に！」
「はい！」
智志が余裕を浮かべた表情で愛実と交代する。しかし、力みすぎるあまり音が一発で出なかった。
「出直し！」
「えぇ！？　マジっすかぁ」

智志が大げさに肩を落としながら愛実の後ろに戻る。愛実が「気合い入りすぎなんじゃない？」と智志にアドバイスをしているようだった。

「お願いします！」

好美がビシッと拓真に挨拶をする。そして、遠くで練習している由美子や沙希たちフルートパートのいる場所にまで、好美の音が響いてきたのだ。

「何？　あれ！　誰の音？」

由美子が驚いて楽器を吹く手を止めた。

「チューバなのは間違いないわね……」

沙希もあなどれないな、という表情を浮かべる。

「よし！　ノムさん。ノムさんもバスパートに聴こえるようなクリアな音、よろしく！」

「はい！」

健之佑が深く息を吸い、実にクリアな音を吹き上げる。

「お」

スコアとにらめっこをしていた恭一の耳に、健之佑の音が届いたのだ。

「音の調子がずいぶん変わってきたな……」

恭一は嬉しそうにうなずき、スコアに再び視線を戻した。

午前9時半。部員たちは合奏をするホールに戻り、楽器を構えて待っていた。恭一が入ると同時に、翔が号令をかける。そして挨拶を終えると、すぐにチューニングが始まった。

「えーっと……よし、チューバ。B♭の音全員で」

「はい！」

「3、4」

ボーン！とクリアな音がまとめて3人分、綺麗に飛んできた。

「よし！　その音に合わせてユーフォ」

「はい！」

「3、4」

ユーフォ、トロンボーンの順番で次々と綺麗な音でチューニングが進んでいく。初めて止まったのは、意外にも流だった。
「すみません」
「珍しいな、藤咲か」
「ちょっと皆が急に音綺麗になったんで、ビビりました」
その言葉に全員が大笑いする。
「正直だな、藤咲は」
恭一も思わず笑みがこぼれてしまった。
「よし。それじゃあ、もう1回藤咲の手前まで全員で入って、それから藤咲が入ってくれ」
「はい！」
整った音が、窓が開かれた七海荘から少し離れた市街地までクリアに響いていった。

第３９３話　悲鳴と恐怖

「それじゃあ……何の話からしようかな」
あずさと恵梨が二人で顔を見合わせる。目の前には明かりが消え、懐中電灯片手になんとなく落ち着かない様子で座っている部員たちがいる。
そう。今夜は合宿最後のイチオシ行事、肝試しなのだ。恵梨とあずさは怖い話をする担当になっている。さらに、変装して部員たちを驚かすのは智志、裕子、沙知（彼女はこれをかなり嫌がったが、慎也がごり押しでメンバーに加えた）、さゆり、拓真、雄飛、歩由美である。
「あ、あの話は？」
あずさが思い出したように言う。
「あ、いいね！　ウチの部室にもあるし」
「なんだよ……部室にもあんのか？」
慎也が嫌そうな表情を浮かべる。
「はい……実はですね。七海高校の特別教室にある内線電話なんですが……壊れて鳴らないのがあるじゃないですか？」
恵梨が不気味なヒソヒソ声で話し始めた。
「そういえば、被服室のは壊れてるね」
はるかが言う。隣にいる菘が続けた。
「調理室の、こないだ壊れましたよ？」
「こないだかよ！」
順平がケラケラと笑う。しかし、どことなく落ち着かない様子である。
「そういやぁ、ウチの部室にあるの、音だけ鳴らないよな」
ギクッと肩を震わせて全員が亮平のほうを見る。
「な、何」
「なんでそんな気味悪いコト言うのよ！　バカ！」

バシッと音がして亜紀が亮平の背中を思い切り叩いた。
「痛ってぇな！　吉山、怖い話好きなんじゃねぇのかよ？」
「最近急速に嫌いになったの！」
「なんだそれ」
亮平が叩かれた箇所を撫でながらブツブツ文句を言う。恵梨が続けた。
「それで、あたしね、壊れた内線電話の写真撮って、場所調べて来たんだけど」
壊れた内線電話の写真を見て、春樹が呟いた。
「これ……なんだっけほら、昔の」
沙希が引き取った。
「黒電話っていう感じの、古い内線電話ね」
「……。」
長い沈黙が起きる。それを恵梨が静かに破った。
「それで、その内線電話の位置を調べたんですよ……そしたら、ほら！」
全員がギョッと目を見開く。翔が呟いた。
「六芒星やんけ！」
「すっごーい！」
由美子が拍手をする。
「ですよね～。これって、何か関係があるように思い」
その時だった。
ジリリリリン！
「！」
「！」
ホールの隅に設置されている電話が鳴り響いた。偶然にも、七海荘の電話機も黒電話だったのだ。
「……。」
誰も身動きひとつ取らない。そのうち、電話は切れてしまった。
「それじゃあ！」

「ぎゃあああああああああ！」
恵梨の大声に優輝と駿が大声で返した。
「何よ！　ビックリするじゃない！」
恵梨も驚いたようで、椅子からひっくり返りそうになっていた。
「それはこっちのセリフだよ……」
優輝が汗を拭う。すぐ傍にいた直幸とマーガレットがクスクスと笑っていた。
「それじゃあ、組み合わせは決まっていますよね。その組み合わせで順次、５分ずつ時差を設けて肝試しに出発していただきまーす……」
恵梨がニッコリ笑って出発宣言をした。
先頭グループが出てから１０分後。
「い、行くぜ」
「うん」
慎也と美里のカップルが手を繋いで出て行く。階段を上がり、玄関のある２階（七海荘は１階がホールになっていて、ちょうど１階と２階は断崖になっている）に到着した。
「わっ！」
「キャッ！」
同時に、慎也が誰かと衝突したのだ。
「悪い、美里。大丈夫か？」
「あたしは平気よ。それより、相手は？」
「あ、そうだ！　悪い、大丈夫か？」
相手は何も言わず、小さくうなずくだけ。
「平気そうだな。良かった」
「じゃ、あたしたち行くね」
相手はまたうなずき、すぐに慎也たちの傍から離れていく。慎也と美里は再び手を繋ぎ、今度は指定されている浴室の方へ向かった。
「……。」
ギシギシと床のきしむ音がする。ふと、美里が呟いた。

「ねぇ。さっきの、誰？」
「えー？　さぁ。身長から考えれば、先に行ってるみーやんか、翔だろ」
「あ、そっか」
美里も慎也も特に何も考えず、浴室の戸を開けた。開けるなり、目の前に大柄な人物が立っているので、今度こそ驚いた二人は悲鳴を上げた。
「きゃー！」
「うわあああ！？」
「わぁお！？」
「ひゃー！」
驚いた声を同時に上げたのは、亮平と佳菜だった。
「か、川崎先輩！　ビックリするじゃないですか！」
「悪い！　だって、急に大きな影出てきたら誰でもビックリするだろ～」
「まぁ……そうですけど」
「まぁまぁ落ち着いて」
美里と佳菜が２人を宥める。
「じゃ、お気をつけて」
亮平たちと別れ、今度は浴室に入る。まだ乾ききっていない床の感触がかえって不気味さを演出する。
浴室のドアを開けるなり、「うわー！」と男子の叫び声が聞こえた。その後に聞こえるイントネーションは完全に関西。
「お前ら、まだいたのかよ」
慎也が呆れた様子で言った相手は、陽乃と翔。
「いやさぁ、なんか隠れてる人とかおらんか捜査しとってん」
「もう！　だから後から人来るからやめとこうって言ったのに！」
陽乃がプリプリ怒っている。
「とりあえず、あんまりにも人がいすぎたらマズいだろ？　早く出れば？」

「そうしよっか。お先です～」
翔たちが浴室を出て行く。その後、浴室を見て回るが特に変わった様子はない。
「俺たちも出るか」
その時だった。
「待って」
美里が驚いた様子で立ち尽くしている。
「なんだよ」
「さっき……あたしたちがぶつかったの、誰？」
「え？」
「だって、佐野くんが浴室いて、三宅くんが脱衣場いて」
「驚かす役の男子は？」
「背丈がかなりあったのよ？　身長はあるけどガッチリしてるさとっぺはないわ。本堂くんはさとっぺ以上に大柄で、体格あるし。進藤くんはスラッとしてるけど、あそこまで身長ないもの」
「……。」
「……。」
美里と慎也は顔を合わせ、静まり返った浴室から慌てて出ようとした。そのとき。
蛇口を捻る音がして、水が出始めたのだ。
「……！」
慎也が意を決してもう一度浴室を開ける。すると、確かに蛇口からは水が出ていた。
「もったいねーだろ」
慎也はため息を漏らして蛇口を閉める。
「何？」
「たまたま緩んでただけだろ。行こうぜ」
「……うん」
美里はいまひとつ納得が行かないまま、浴室を後にした。
浴室を出るなり、青ざめた様子で洋之と優の男子カップルが廊下

を慌てて走ってきたのだ。
「うわ！」
「ぎゃ！」
驚いた慎也と優が叫び声を上げる。
「走ってくんなよ！」
慎也がフゥッとため息を漏らして言った。
「だって、だって！」
「落ち着けって、優っち」
洋之が優を落ち着かせ、事情を慎也に説明する。
「は？　手ぇ繋いだ相手がヒロポンじゃない？」
「はい！　ヒロポンだと思って手ぇ引いてたら、目の前にヒロポン出てきて！　そのすぐ後に手ぇ放されたんです！」
「支離滅裂でしょ？　優っちの話」
「ホントなんだってばぁぁぁ～」
優が震える声で洋之に訴える。
「気にしすぎだろ？　肝試しだから、雰囲気に飲まれてるんだって！」
慎也がポンポンと優の肩を叩く。
「行こうぜ、美里！」
「うん……」
すべてを気のせいと思い込むことにした慎也。しかし、ホールに帰ってからさらに異様な光景を目にするとはこの時、思ってもみなかったのだ。

第３９４話　ゴメンなさい

「え？　翔たちも？」
陽乃と翔が大きくうなずいた。
「あたし、翔だと思って後ろにいる人に話し掛けてたら、前からヒョコッと翔出てきて……あの人、誰だったんだろ？」
「先輩もですか？」
裕也が驚いた様子で陽乃に聞いた。
「も、ってことは、岩切くんも？」
「俺もです。毛利がその誰かを俺と勘違いして、声かけたらしくって」
萩も戸惑っていた。
「私が声かけたら、すごい勢いで走って行っちゃったんですけど……」
「本当に気味悪いね。誰なのかなぁ……」
翔がキョロキョロと辺りを見渡している。そして、周囲に気づかれないようにそっとホールを出た。
「おらへんな……こっちか？」
しばらく辺りを見渡し、食堂に誰かがいるのを翔は感じ取った。
そっと食堂に近づき、ひとまず戸に耳を当ててみる。
「もしもし？　あぁ……思ったより大変な騒ぎになっちゃって。なんか、出づらくなったよな……うん、ゴメンほんと……。とりあえず、俺が今から皆に本当のこと言うから、君はとりあえず食堂に」
翔はそっと戸を開け、彼――直幸の肩を叩いた。
「っ！」
驚いた直幸が振り返ると、ニッと笑った翔が立っていた。そして、携帯電話を取り上げる。

「……やっぱな」
ディスプレイを見て、翔は呆れた様子でそう言った。
「悪い。俺が、全部仕組んだんだけど……なんか、思った以上に騒ぎになって」
「そない心配せんでいいって。ウチの部やもん。笑って流すようなヤツばっかやし」
翔はへへッと笑って言った。そして、電話の相手にも言う。
「もしもし？　いま、どこにおんの？　うん。うん。ほな、玄関来てくれる？　迎えに行くわ、直幸とオレで」
そう言って翔は電話を切った。
「悪いな。本当なら、お前にも言うのが筋だろうけど……」
「えぇよ。形はどうであれ、直幸もアイツの意志、しっかり汲んでくれたし。おおきに」
「……なんか、礼言われるとかえってハズいな」
直幸は照れながら翔にペロッと舌を出して笑った。
「あっ！　翔！　もう。急にどっか行かないでよ」
陽乃が慌てた様子で駆け寄ってくる。
「みんなー！　注目！」
翔の声に全員が反応する。
「とりあえず……この肝試しの騒動に収拾つけます！」
「え？」
「まず、騒動の犯人Ａの入場です」
ばつが悪そうに直幸が入ってきた。
「若草先輩が？」
サックスの全員が目を丸くしている。
「そう。でも、決して悪気があったわけ違うから、そこら辺わかってあげて」
直幸が恥ずかしそうに笑っている。
「それから、犯人Ｂの入場です」
しかし、促されたにもかかわらずまだ彼は入ってこない。翔が階

段を上がり、その相手と何やらやり取りをしている。
「ダメですよ。絶対、なんか言われるし、大岩先輩あたりが殴ってきそう」
それを聞いた智志が「俺をなんだと思ってんだよぉ」と情けない声を出した。周囲がドッと笑う。
「ほら、あんな雰囲気やろ？　ウチの部は元々。元気出して出て来い！」
「は……い……」
そして、出てきた人物を見たその瞬間だった。
雄飛が飛び出していた。そしてそのまま、思い切りその人物に飛びついた。
「マージかよ！」
雄飛が今までで一番嬉しそうな声を上げた。駿と優輝が後を追い、絵美や菘、みゆきたちも後を追う。
その人物とは、騎士だった。
「速水くん！」
沙希と由美子が黄色い声を上げる。
「おぉー！」
拓真、慎也、春樹も歓喜の声を上げた。
「す、すみません……なんか、驚かせちゃって……」
「おい！」
亮平が大声を上げた。
「謝るトコ、違うだろ！」
「え？」
「驚かしてゴメンなさい、じゃなくって、来るの遅くなってゴメンなさい、だろ！」
「……。」
「ほら！」
翔が促す。
「はい」

騎士が小さくうなずいた。
「来るのが遅くなって、ゴメンなさい」
ワッと歓声が沸くホール。玄関では、恭一が騎士の母から彼の一泊分の荷物を受け取っていた。
「申し訳ないです。本当にご迷惑ばかりおかけして」
「いえ。彼も立派な部員の一員ですから。やはり、こうして全員が揃わないと寂しいですからね」
恭一は部員たちの嬉しそうな声を聞きながらそう言った。
「楽器はやはり？」
「そうですね。１０月から吹いても良いって医師からは言われています」
「そうですか。でしたら、定期演奏会や文化祭には間に合いそうですね」
「本当にご迷惑おかけしますが、よろしくお願いいたします」
「いえ。それはこちらこそ。遠いところまで、ありがとうございました。速水くんも、残り少ないですが合宿を楽しんでくれればと思います」
騎士の母が嬉しそうに笑ったのを見て、恭一もホッと一安心するのだった。

「部屋割り、決まってたんですか？」
騎士が案内された部屋の前に貼られた紙を見て、騎士が驚きの表情を見せた。紙には雄飛、裕也、夏樹、そして騎士の名前があったのだ。
「雄飛が言うこと聞かないんだもん。騎士の名前も書くってさ」
「いいだろ！　恥ずかしいからやめろよ」
雄飛が顔を赤くする。
「それにしてもさぁ」
夏樹がグイグイと騎士の体を押す。
「騎士も演技が凝ってるよな！　浴室の蛇口なんか、どうやって捻

ったんだよ？」
「え？　何それ？」
騎士があっけらかんとした様子で言った。
「え？」
夏樹たちも唖然となる。
「俺、２階と３階の廊下しかウロウロしてないもん！　浴室、どこにあんの？　俺も風呂入りたいなぁ～」
「……。」
騎士は嬉しそうに部屋に入り、洗面道具を用意している。夏樹たちの青ざめた表情など、気にも留めていないようだった。
「じゃあ……あれは？」
夏樹が裕也に問う。
「さぁ……」
夏樹たちの部屋は、浴室の斜め向かい。
キュッ……。
蛇口の捻る音が、夏樹たちの耳に聞こえた――ような気がした。

第３９５話　やってみなきゃ、わからない

「おはよー！」
翔が夏樹たちの背中を叩くと、若干眠そうな夏樹、雄飛、裕也の姿があった。一人だけ気分爽快といった様子の騎士がいる。
「どないしたん？　エラい眠そうやけど……」
「ちょっと、悪夢見て……」
夏樹が苦笑いする。
「へぇ？　まぁ、帰りのバスで寝たらえぇやん。なっ！」
「はい……」
合宿最終日の朝。騎士も無事合流し、部員たちは最後の合奏に向けて気合いを入れていた。
「ごちそうさまでした！」
由美子の号令が終わり、片づけを終えると部員たちはすぐにホールに行き、楽器を出す。各々、音出しからロングトーン、チューニングへと移る。
そして午前９時。恭一がやって来た。
「起立！　礼！」
「お願いします！」
「お願いします！」
恭一が着席するなり、楽譜係を呼んだ。由美子、優輝、恵梨、佳菜、勇の５人が前に集まる。
「はい。この楽譜とこの楽譜、手分けして配って」
「はい」
部員たちもよくわかっていない。楽譜係もこの話は聞かされていなかったようで、少し戸惑っている。
翔は勇から受け取った楽譜をすぐにパートに配っていく。

（ローザのための楽章……？）
初めて聞くタイトルだった。初めの部分は休みばかり。しかし、途中からアルトサックスのファーストにはメロディがある。テンポはかなりゆっくりだ。
続いて配られた楽譜を見て、翔が胸が躍る思いになった。
（Ｍａｓｑｕｅや！）
翔が以前、やってみたいと言っていた曲であった。そのＭａｓｑｕｅを見て、しかめ面を浮かべているのは沙希、梨子、絵美、健之佑、まゆであった。今日の合奏がコンクールメンバー以外も呼ばれた理由は、ここにあったのだ。
「今日の午前中の合奏は、まずウォーミングアップにこの2曲を初見合奏してみます」
ざわめき立つ室内。
「今から1時間、時間を取るからしっかり練習して、１０時１５分から初見合奏をやってみよう！」
部員たちは時計を見る。今の時刻は9時5分。
「返事！」
「はい！」
そして急遽パート練習ということで、部屋に分かれていく部員たち。
「どうする……？　これ、多分ホルンとアルサクくらいしかメロディないぜ」
順平が不安そうに楽譜を見つめた。
「とりあえず、ファーストは俺。サードは賢ちゃんでいい？」
「はい」
「時任さんがセカンド、保田さんフォースで」
「はい！」
「とりあえず、冒頭合わせてみよう」
順平の合図で合わせてはみるものの、タンギングが上手くいかず、いつの間にか音が消えてしまった。

「も、もう1回！」
「はい！」
しかし、何度やっても息が持たずに消えてしまう。ホルンのメンバーは、かなり焦っていた。
それはトランペット、トロンボーンも同じであった。ホルンとアルトサックスから受け継いだメロディは、タンギングが命と言えるようなものだった。それも、コルネットとトランペットでやっていることが違うのだ。
「とりあえず、あれだね。トランペットはあたし、松尾くん、綾音ちゃん。それから、コルネットは久野ちゃんと藤咲くんで」
「はい！」
合わせてはみるものの、タンギングのタイミングがバラバラで、まったく合わないのだ。
（こりゃあ……大問題？）
陽乃はこれが定期演奏会の候補曲と聞いて、少し焦りの色が出てきていた。
（ウソ……全然指回ってないの、私だけ？）
由美子も冒頭をフルート・ピッコロ・オーボエ・バスーンで合わせていてかなり焦っていた。バスーンは伸ばしなので指使いに問題はない。フルート・オーボエ・ピッコロの伴奏がとんでもなく音が細かい。まずはその音を確認し、その後に指使いを確認してのパート練習での合わせを行った。まだたどたどしい部分はあるものの、沙希、佳菜、健之佑、まゆ、稚沙希の全員がそれなりに上手く吹くことができたのだ。
（どうしよう……私だけだ）
同じ頃、バスパートではメロディがほとんどいないために、大混乱をきたしていた。まず、陽乃たちのメロディが終わってからはテナーサックス、ユーフォニウム、アルトクラリネットでメロディがあるのだが、これが既にメチャクチャになっていた。途中で4分の5拍子などというやや複雑な拍子が入るせいで、春樹も愛実も落ち

てしまうのだ。そして、それを聞いて頼りにしている拓真たちが結果として入れないまま、曲が止まってしまうのだ。
パーカッションはパーカッションで、自分たちの大まかな担当楽器を決めたが、その移動が上手く行かない。
「ちょっとぉ！　そこ、あたしが通るの！」
恵梨が困惑した様子で裕也に言う。
「え！　あ、ホントだ、すいません！」
あれほど手慣れている裕也でも、少し混乱気味なのである。
「アルトサックスは……まぁ、頑張れば行けんことはない楽譜やな」
意外にも、アルトサックスはそれほど譜面がややこしくなかったのだ。
そうこうしているうちに、合奏の時刻は迫ってきていた。時間になればなるほど、部員たちの焦りの色が濃くなっていく。
「はぁ……」
合奏の時間になって再び集まった時には、部員のほとんどの表情が憂鬱といった様子だった。
「暗いな……。まぁ、アレだ！　初見だから、そんなに気にするな」
「はい」
「じゃあ、Ｍａｓｑｕｅから」
「はい！」
指揮棒が降り、冒頭のホルンとアルトサックスのメロディが始まる。しかし、恭一の予想どおりホルンが途中で落ちてしまった。トランペット、トロンボーンも慎也と勇くらいの音しか聞こえてこない。コルネットの打ち込みはまったく聞き取れなかった。
音量が落ちてクラリネットやオーボエの伴奏も、おっかなびっくりな様子のまま。
「ふぇ！？」
はるかの素っ頓狂な声が聞こえるばかりで、ユーフォニウム、アルトクラリネット、テナーサックスのメロディはほとんど聞こえない。

場面が一気に変わり、フルートなど高音木管楽器のメロディが始まる。ほとんど吹けない部員ばかりの中、佳菜と梨子が抜ける部分こそあるものの、しっかりとメロディを奏でていた。

（ほう……）

これには恭一も驚いていた。

そして、前半部分ももうすぐ終わりというところでユーフォニウムのソロがある。ここだけは、春樹がしっかりと入ったのだ。それだけで、曲想を掴んだのか拓真と亮平、絵美、みゆきが入ってきた。アルトサックスのさゆりと翔が上手くそれを繋いでいく。なんとか、再現部分まで通すことはできた。

「よし、ストップ」

「っはぁ～……」

部員からため息が漏れた。

「どうだ？」

「難しいです」

珍しく、そんな声を漏らしたのは駿だった。袴田中学ではかなりレベルの高い曲を吹いた経験がある彼でも、この曲をそう感じるのだ。

「そうか！　だったら、練習をたくさんしないとな」

「はい！」

「もうひとつの『ローザのための楽章』は、またコンクール後に合奏しよう。よし、じゃあ2、3年生。あれ、いいか？」

「はい！」

そして恭一は真里菜たちに合図をする。真里菜たちが定位置に撮影機材などをセットする。

「1年生は、2、3年生の演奏しっかり聴いて見て、盗めるところはしっかり盗みなさい」

「はい！」

「それじゃ、行くぞ。久しぶりだな」

そう言って嬉しそうに恭一はその曲――『タンツィ～3つのロシ

ア舞曲』のスコアを開いた。今日は、撮影用のために真里菜がこの七海高校に着目するキッカケとなった曲を演奏するのだ。

そして、ゆっくりと指揮棒が降りた。

第３９６話　素直が一番

指揮棒が上がると同時に、翔はもちろん、全部員の表情が一気に引き締まった。昨日の肝試しのときのイタズラっぽい笑顔を浮かべていた洋之や、女の子らしい可愛らしさを浮かべていた沙希。全員の表情が急激に大人びたものに変わる。真里菜はあまりの変化の大きさに驚きを隠せずにいた。

以前から、真里菜は市の吹奏楽団や一般バンドの撮影をしては、放送をしてきた。もちろん、高校生の撮影というのは今回が初めてではない。風見台高校や北松高校なども撮影をしてきたことはある。しかし、彼らとは何かが決定的に違っていた。

（何が違うのかしら……）

真里菜は必死に恭一や部員たちの様子を見つめ、その違いを見つけようと必死になっている。

健之佑のイングリッシュホルンが煌びやかな音色を奏で始めた。カメラがそちらへ向けられる。と同時に、健之佑の視線に真里菜は気づいた。しばらく吹いていないと聞いている、この曲。しかし、健之佑の視線は完全に恭一に向いていた。

恭一のほうを映す。すると、恭一は完全に視線を健之佑に向けているのだ。

さらに、メロディがフルート系統へ移る。今度は由美子を映す真里菜。恭一を映すと視線は順番にフルートのメンバーを見つめる。グロッケンを叩く恵梨にも視線を向けている。そして、ピッコロが入ると佳菜に視線を向ける。もちろん、視線を向けられた佳菜たちも恭一をしっかりと見ている。

木管のメロディが終わると、ホルンがシンコペーションの形を演奏する。ホルンは順平だけだが、順平ももちろん恭一から視線を逸

らさない。チューバとバスクラリネット、弦バスがメロディらしい形を吹く。智志や拓真、駿、亮平と視線を合わせる。

（なるほど……）

かなり固い信頼関係が既に彼らの中では出来上がっているようであった。これをどう上手く視聴者に伝えようか、それを真里菜は真剣に考えながらカメラを回していた。

一方の1年生は、2・3年生の演奏技術に驚くことしかできなかった。普段、いろいろと指導してくれる先輩の真剣な表情から指回しやタンギングなど、すべてが自分たちとは比べ物にならない。

まゆと稚沙希は、テンポが上がってからの沙希や由美子、佳菜、健之佑の指回しの上手さに目を点にしていた。バスーンも時たま、彼らと同じ動きをする。まだ指がたどたどしい慧太にとっては、もはや未知の領域であった。

トランペットの流と綾音も、木管楽器と変わらないパッセージを平気で演奏する彩香、勇、そして陽乃の指使いをポカンとした様子で見つめている。

和志は傍で、もの凄い勢いでシロフォンを叩く優を羨望の眼差しで見つめている。さらにパワフルにシンバルを叩くあずさにも視線を移す。

低音楽器が細かいパッセージを奏でる。好美と貴志が顔を真っ赤にしている。どうやら興奮しているようだった。ホルンは順平一人きり。それでも三人分くらいの音量で難しい動きを吹きこなしてしまう。傍にいた賢治、杏、裕子が信じられないと言いたそうな表情を浮かべていた。

上昇系の音が始まる。クラリネットからオーボエ、アルトサックスが加わる。全然指の動きの速さを苦としない先輩たちの姿を見て、1年生はただひたすら呆気に取られるばかりであった。

演奏が終わる。

「はい、お疲れ様」

同時に恭一が満面の笑みを浮かべた。部員たちが笑顔で「ありが

とうございます！」と答える。
（信頼関係がしっかりできてるんだな……）
真里菜はそっとメモ帳を取り出し、ペンを走らせた。
「それじゃあ……おっと、もうこんな時間か」
いつの間にか時刻は１１時４５分を過ぎていた。
「それじゃあ各自、昼食の準備。昼からは最後のコンクール向け合奏するからな。１時半から合奏！」
「はい！」
「では部長、号令！」
「起立！　礼！」
「ありがとうございましたー！」
挨拶を終えると、部員たちは各自移動を始める。
「佐野くん」
真里菜が声をかける。
「はい！」
「悪いけど、ちょっとお話いいかな？」
「はい！」
ニカッと人懐っこい笑顔を向ける翔。思わず真里菜もドキリとしてしまった。
（こりゃあこの子、人気あるだろうな……）
「まず……佐野くんは吹奏楽、好き？」
「嫌いやったらやってませんよ」
翔は丁寧にサックスを磨きながらサラリと答えた。
「そうよね！　えーっと……次に聞くけど、この七海高校吹奏楽部の魅力は何かな？」
「うーん……」
翔はしばらく悩んだ後にハッキリこう言い切った。
「変な意地の張り合いとか、妙な先輩後輩関係とかがないところ！」
「へぇ？　そうなの？」
「はい！」

「でも、珍しくない？」
「珍しいですかね？」
翔が逆に真里菜に返した。真里菜は高校生時代、女子バスケットボール部に在籍していた。その当時は先輩の命令は絶対で、後輩は先輩に意見などできたものではなかった。
「珍しいと思うけどね」
「そうなんですか～。オレらは普通ですわ。この感覚が。見てくださいよ、あれ」
ふと視線を移すと、クラリネットパートが全員勢ぞろいしている。
「行くよ～……最初はグー、いんじゃんほい！」
絵美の号令で謎のジャンケンが始まる。
「うあー！　俺が最後かよぉ！」
雄飛が頭を抱えた。
「アハハハ！　じゃあ続き！　行くよ！　いんじゃんほい！」
「きゃー！　いやぁんもう！　エミリン先輩、後出しです！」
みゆきが言いがかりをつける。
「何言ってんの!?　そんな言いがかりする子は～……うりゃー！」
絵美がみゆきの両脇をくすぐり始めた。
「あはは、ちょ、エミリン先輩あたしマジそこだ……アハ、アハハハハハ！」
笑い声が室内に響き渡る。
「他の学校は知りませんけど」
翔の声に真里菜が振り返る。
「オレたちには、変な意地の張り合いとかなくて、こうやって皆、自分に素直に生きてるんですよ」
「……。」
「子供丸出しですけどね！」
翔がへへッと笑った。
「でも、音楽って感情を込めて演奏しないと……無機質なものにもなりかねないでしょ？　やから、オレらみたいな直情的な部員ばっ

かの部って、ある意味いい気がしません？」
真里菜の口から自然に、言葉が漏れた。
「そう……ね」
「やったー！　わかってもらえた」
翔が本当に嬉しそうに笑った。
「オレらに別に秘密なんてないですよ！　自分丸出しの部員が揃ってるだけです」
翔はそう言って立ち上がった。
「行きませんか？」
「え？　どこに」
「昼ご飯！　市来さんも一緒に食べましょ！」
翔は真里菜に有無を言わさず、手を引いて食堂に連れて行った。
（市来さん、こっち行こうぜ！）
翔の顔が、初恋の人とダブッたのは真里菜だけの秘密であった。

第３９７話　ありがとう

昼食が始まろうとしていた時だった。
一番入口に近い席に座っていた翔の右肩を、直幸がポンポンと軽く叩いた。
「ん？」
翔が振り返ると、直幸は口の前に人差し指を立て、静かに、という素振りを見せた。
「ちょっと、上行かないか？」
「上？」
「屋上」
「えぇけど……」
「じゃあ、行こう」
直幸はニッコリ笑い、翔を屋上へと案内する。階段を上がり、普段から誰も通った形跡のない非常口と書かれた扉を開き、少しホコリが被った階段を上がっていく。そして、重い扉を開くと強い風が翔の顔にぶつかった。同時に、潮の香りが鼻に届く。
「うぉ～……めっちゃ綺麗」
海岸から少し離れた小高い丘の部分にある七海荘。そのおかげか、水平線まで見えるくらいに透き通った景色が翔の目に届いた。
「ここ、座ろうぜ」
直幸は柵の間に足を投げ出し、座った。翔も同じように隣に座る。
潮風が二人の顔を撫でていく。
直幸は座ってから何も言わない。翔も特に何も言わず、足を投げ出してずっと座っていた。
「翔さぁ」
１０分ほどして、ようやく直幸が口を開いた。

「ん？」
「進路、どうするつもり？」
「あぁ……オレな。島根大学受ける」
「し、島根？」
素っ頓狂な声を出す直幸。やはり、驚きは隠せないようだ。
「うん、島根」
「なんでまたそんな遠く……」
直幸はしばらく目を丸くしていた。
「お前、島根出身？」
「いいや。大阪」
「だろ？　なんで島根？」
「将来、小学校の先生なりたいねんやん。そんでな、島根県の桜田市って町あるんやけど、合併して出来立ての町でな。これから人口増えるから、きっと先生も必要になるやろって思って」
「へぇ～……」
直幸は納得したようにうなずく。
「遠距離？」
その言葉だけで、直幸が何を心配しているのかすぐに翔も悟った。
「ううん」
「え。まさか別れるのか？」
「アホか！」
翔は笑いながら直幸に軽く肘鉄を喰らわせた。
「一緒に島根大学、受けるって。陽乃（あいつ）」
「へぇー！」
今度は感嘆のような声を漏らす直幸。
「お前も朝倉さんも、頭良いんだな」
「ううん。正直言うて、いっぱいいっぱい」
「そうなのか？」
翔は苦笑いしながらうなずいた。
「でも、夢があるから大丈夫。頑張れる」

「……。」
「オレな。東先生見てて、すっごいなぁって思うねん」
翔が遠くを見つめる。直幸も視線を水平線のほうに移した。
「先生と出会って、もう2年半近く経つけど、未だに先生の言葉に心が動いたり、うずいたりするねん。先生の言葉って、めっちゃ偉大。めっちゃすごい。先生の言葉で、こんなにオレらの気持ちって、動くんやなぁって思う。笑うこともあるし、泣きたくなることもあるし。正直言うて、カチンと来ることも言われるけど……多分やで？　中学の時の先生にも言われて、その時はめっちゃムカついたことあったけど、今考えたら、めっちゃタメになること、言うてくれてはった」
「……うん。わかる、それ」
直幸もうなずく。
「やろ？　オレも、将来、そんな風に子供たちの人生に響く、何かを残せるような大人になりたいなって思って」
「……お前、すごいな」
直幸が優しい目ではっきり、そう言った。
「直幸は……どないすんの？」
「俺……初めて言うけど」
しばらく間を取ってから、直幸は言った。
「音楽大学、進もうと思うんだ」
「音大？　サックスで？」
直幸は小さくうなずく。
「親にも、先生にも言ってない。なんか、反対されそうでさ」
「お前は？」
翔が笑顔で聞き返す。
「お前は、どないしたいん？」
「俺は音大受けたい」
「じゃあ答えは簡単。俺は音大受けたい。その意思表示だけすれば？」

翔は再び水平線のほうを見つめる。
「……それができれば苦労しないって」
直幸はため息を漏らす。
「でもさぁ。何を高校生が生意気をって思われるかもしれへんけど……。オレらの人生って、オレらのもんでしょ？」
翔が大人びた表情を浮かべる。直幸は、なぜ翔が時たまこのような大人びた表情を浮かべるのか、よくわからないでいた。もちろん、翔が阪神淡路大震災で家族を亡くしていることなど、直幸は知る由もないから無理もないことである。
「自分の人生、他人（ひと）に左右されてたら損ですぜ」
翔はニッと笑って言った。
「……そうだな。今日の夜にでも、父さんと母さんに言ってみる。ありがとう。翔」
「どういたしまして」
直幸が手を差し伸べた。
「コンクール、頑張ろうな。お互い」
「おう！」
翔と直幸はガッチリと握手を交わした後、食堂へそっと戻っていった。
昼からの合奏を終え、いよいよ合宿も最終局面を迎える。合奏を終え、楽器の片付けに入る部員たち。3泊4日の七海荘での合宿もいよいよ終わりである。
楽器を片付け終え、部屋も片付けた頃には時刻は午後4時になっていた。
翔、陽乃、拓真の順番で直幸と彼の母に挨拶をし終え、遂に最後の時間がやって来る。
「よし！　それじゃあ……最後に、写真撮影するぞ。まず、パートごとに」
フルート・オーボエ・バスーンパートが揃い、撮影。誠と慧太のよそよそしさが以前よりも少し、解消されたように見えた。慧太の

表情にも笑顔が浮かぶ。誠も普段、あまり笑わないが珍しく笑顔を見せた。

クラリネットパートが揃う。

「ほら！　男子前、前！」

絵美が騎士、雄飛、駿、優輝の４人を押し出した。照れ笑いを浮かべつつ、４人が並ぶ。人数が最多のパートなので、もみくちゃになって半分将棋倒しになった状態でシャッターが下りた。

続くサックスパート。

「ちょお待て。イケメンをよりイケメンにするために髪型決めるで」

翔がワックスで気合を入れて整髪する。付き合っていられないという顔でさゆりがため息を漏らした。

「あーっ！　シャッターが下りる！」

突然、はるかが大声を上げた。

「ウソやろ！？」

翔が驚いて振り向いた瞬間にシャッターが下りた。

「あぁ！　だ、騙したな！？」

「知りませーん」

はるかがクスクス笑いながら翔を適当にあしらった。その後、順調にパート写真が撮影されていく。そして、最後のグループになった。

「３年生、集合！」

その声がかかると、９人が寄り添いあう。

「待って」

陽乃が声を上げた。

「雪ちゃんも入れて～」

陽乃が雪子の写真を取り出した。

「おっ。せやな！　入れよう入れよう！」

翔が嬉しそうに声を上げる。

「じゃ、あたしの前にっと」

「いいか？　撮るぞ～……はい、チーズ！」

翔たち全員が満面の笑みを浮かべてピースサインをする。それと同時に、シャッターが下りる音が響き渡った。

それからバスに乗り込む。

「ほんじゃ、またコンクールでな」

翔は最後にもう一度、直幸と向かい合う。

「おう！　頑張れよ？　負けんな」

「お前こそ」

陽乃が翔を呼ぶ。

「ほんじゃ……行くな」

「うん！」

翔は踵を返して行く。最後にもう一度だけ、直幸のほうを振り返るとまだ彼は翔たちのほうをしっかりと見ていてくれた。

「また来年待ってまーす！」

直幸が最後に大声を上げた。

「はーい！　よろしくでーす！」

かのこが大声を上げて手を大きく振る。ドッと笑い声が起きると同時にバスのエンジンがかかり、ゆっくりと七海荘から離れていった。

「……淋しい？」

直幸の母が聞く。

「ちょっと。でも……うん。大丈夫」

直幸は小声で呟いた。

翔の声が蘇る。

――自分の人生、他人（ひと）に左右されてたら損ですぜ。

「母さん」

直幸は言った。

「俺……俺……」

返事の代わりだろうか。直幸がすべてを言う前に母が言った。

「進路くらい、自分で決めなさいよ。後悔しないように」
「……うん」
自分の悩みを察知してくれていたのだろうか。たとえそうでなくても、直幸には今の言葉だけで十分であった。

第３９８話　悔いはない

「よし……それじゃあ、今日の練習はここまで！」
「はい！」
「部長。号令」
「起立！　礼！」
「ありがとうございましたー！」
８月７日。いよいよ、吹奏楽コンクール県大会が明日に迫っているこの日、七海高校吹奏楽部は午後３時ちょうどに練習を切り上げた。
もちろん、コンクール前日に吹きすぎ防止のために早く部活を終えたのであるが、それ以外にももうひとつ理由があった。今日から４日間、１１日土曜日まで七海市民祭が開催されるのである。気持ちを切り替えるために、恭一が目いっぱい楽しめるようにと部員たちのことを考えて、早めに切り上げたのだ。
「ねぇ、陽ちゃん！」
ご機嫌な様子で絵美が話し掛けてくる。
「なにー？」
「浴衣、着るでしょもちろん！」
陽乃は笑顔で「もちろんじゃない！」と返した。
「エミリンは？」
「私も着るよ！　昨日帰ってからすぐ準備した」
「はやーい！」
陽乃と絵美の会話に耳をそばだてているのは、慎也である。
「聞いたか、翔。浴衣だって、ゆ・か・た」
「お前にイチイチ言われんでも聞こえとるわ」
翔が頬を赤くしながらすねた声で返す。慎也はヤレヤレという表

情を浮かべ、すぐに自分の席に戻った。
（浴衣……か。髪の毛、下ろしたままやろか。なんかこう、かんざしみたいなん、するんやろか……？）
不毛な妄想を繰り広げる翔。そのうち、沸点に達したのかパタパタと手のひらで顔を仰ぎ始めている。
「どしたの？　顔、真っ赤じゃない。大丈夫？」
近くにいた沙希が心配そうに顔を覗かせる。
「ちょ、ちょっといろいろあってね」
「ふぅーん……。いろいろ大変ね」
沙希はクスクス笑いながら、翔の傍を離れた。
翔の頭の中では、いろんなことがグルグル頭を巡っていた。陽乃と出会い、付き合うようになって1年以上が経過している。今さら、浴衣くらいで顔を真っ赤にしていたのでは今後、一緒にいることすら覚束なくなってしまう。
「アカンアカン！」
「何がダメなの？」
陽乃が目の前に立っていた。心臓が飛び出そうな感覚になる翔。
「な、なんでもない！」
「そう？　なら、お祭の話なんだけどさぁ。あたしね、家先に帰って浴衣に着替えてくるよ。翔はどうする？　もちろん、私服でしょ？」
「それはもちろん！」
「なら、4時半に七海市役所前の駐車場で待ち合わせしようよ。そうだな～……あ、あのイチョウの木の下あたりでどう？」
「おう！　えぇで！」
「じゃ、後でね。あたしエミリンと先に帰ってるから。またね！」
「おう！」
陽乃の背中を見送りつつ、翔はすぐ傍にいた春樹に声をかける。
「なぁ、春やんはどないすんの？　祭」
「んー……。翔は朝倉さんと行くんでしょ？」

「まぁ」
春樹は周りを見渡す。
「どうせ慎ボーは田中さんと行くし、拓あんは……あれでしょ？」
翔が見ると、拓真は光瑠と何やら楽しそうに話をしている。
「何、あれ？」
「翔、知らないの？　拓あん……愛媛の子とはダメだったんだって」
「そうなんか！？」
春樹に口を塞がれてしまう。
「声デカいよ！　とにかく、そういうわけだから」
「お、おう……」
そう言うだけ言って、春樹は背を向けた。結局、来るのかどうなのか答えはもらえないまま、流されてしまった。
「お疲れ様でーす」
気づけば、翔と春樹しか残っていなかった。はるかがみゆきと一緒に部室を後にする。
「お疲れさぁん」
翔が2人を見送ってから、カバンを背負う。
「春やん。そろそろ出よ？」
「あ、いいよ。俺、鍵かけて行くから」
「そうか？　ほな……」
「気をつけてな」
そう言って笑顔を向ける春樹。しかし、翔にはわかっていた。あの顔はまだ、絵美に未練が残っている顔である。けれども、春樹から振ったのだから、自分が未練を残しているというのも変な話だと思い、意固地になっているのだろう。
「素直になんのって、難しいもんなぁ……」
翔は校門を出て、しばらく一人でトボトボと歩道を歩き続ける。
横の市役所公園では、お祭で賑わっていた。コンクール前に別れを選んだ絵美と春樹。なんとか、彼らを元気付けたいのが3年生の本音であったが、彼らはお互い近寄ろうとしない。今日のお祭でなん

とかくっつけようとしたが、見事作戦は失敗であった。
「ただいまー」
帰宅すると、綾音が浴衣で玄関に立っていた。
「おう。どないしてん。可愛いやんけ」
「せやろー？　お祭行くねん」
綾音は珍しくウキウキしている。翔は隣に座り、靴を脱ぐ。
「誰と行くんや？　クラスの子？」
「ううん～。朝倉」
翔はあっけらかんと言う綾音の言葉に吹き出しそうになった。
「朝倉って、どこの？」
「もー！　何言うてん。アルトサックスの朝倉に決まってるやん！」
綾音はバシバシと翔の背中を叩いてから「行ってきまーす！」と元気よく玄関から飛び出した。
そんなことになっているとは夢にも思わなかった翔は、お祭に行ってから陽乃に聞いた。
「あれ？　知らなかった？」
「お前は知っとったんか！？」
「あんな仲良い二人見てて気づいてないの、アンタくらいのもんじゃない？」
「は……そうでっか……」
陽乃はクスクスと笑う。
「でも心配だな～」
陽乃は絵美と並んで歩きながら言った。
「何が？」
「翔、鈍感だから島根行ってからも好意を寄せる女の子にフツーに優しくしそう」
絵美が笑いながら「その可能性は高いね」と言う。
「二人してヒドいこと言うやんけ」
「でも、前科が多すぎるよね。雪ちゃんに安和先輩に菘（すず）ちんに……」
絵美の言葉に耳を塞ぐ翔。

「知らん、知らん！」
陽乃と絵美は大笑いしながら翔のその様子を見ていた。
「ところでさ、エミリン」
「なぁに？」
「その……水谷くんとのことは、どうなった？」
遠まわしに聞いても仕方がないと思い、陽乃は率直に聞いた。絵美は「さすが陽ちゃん。単刀直入ね」と笑いながら言った。
「とりあえず。私と春くんの試験が終わって、全部落ち着いてから冷静に決めるつもり。今は完全に別れたんじゃなくて、距離を置いてるくらいよ。メールや電話はしてない」
「そうなんだ……」
言葉を失う陽乃と翔。
「やだなぁ！　二人がそんなに暗くなるコトないよ」
絵美は笑顔で先を歩く。
「悔いはないからね！　私。もちろん、これくらいのことでせっかく県大会進んだのに、それを棒に振るようなコトはしないつもり」
「……うん」
陽乃がうなずく。
「せやな。県大会やもん。皆で掴んだ」
翔が強くうなずく。
「しっかり頑張って、結果残そう！」
「おー！」
そう言って飛び跳ねる陽乃の視線の先に、リンゴ飴の屋台が見えた。
「エミリン！　リンゴ飴売ってる！」
「うそ！　行こう、行こう！」
急に元気を取り戻す絵美と陽乃。翔はその二人に苦笑いしながら、彼女たちの後を追った。

第３９９話　心に決めた朝

午前４時５５分。翔の部屋にある目覚まし時計が鳴り始めた。
「ん……っと」
翔は眠い目を擦りながら、目覚まし時計を止める。モゾモゾとタオルケットの中でしばらく身動きした後、ゆっくりと布団から起き上がった。
「まだ暗いなぁ……さすがに」
午前５時前。いくら８月とはいえ、やはり日の出前である。スズメのさえずりは少し聞こえるものの、まだ人の気配は少ない。特に七海市でも住宅街にあたる地域なので、なおさらである。
部屋を出て廊下の電気を点ける。階下へ行く前に、綾音の部屋をノックした。
「綾音？」
応答がない。まだ寝ているのかと思い、翔はもう一度ノックした。
「もう起きてるよ」
綾音が下から静かに声をかけた。
「すっごい早いやん」
「遅刻したらエラいことやもん」
そう言いながら、綾音は既に着替えを終えていた。
「気合い入ってるな」
「初めてのコンクールで、まぁメンバーではないけどしっかり皆を見ときたいし。あたしもメンバーのつもりでいてるもん」
「せやな。それくらいの気合い、なかったらアカンわな」
翔はリボンをしっかり締める綾音を背に、洗面所へ向かった。洗面所へ行く途中、起きてきた昭に会った。
「おはよ、お父さん」

「おはよう。今日だったな」
「うん」
「まぁ、父さん仕事やから見に行けんけど、ガンバレや」
「うん！　ありがとう！」
昭はトイレに入り、しばらくすると再び寝室に戻った。入れ違いで友美子が起きてくる。
「もう二人とも起きてるんやね」
友美子はそれだけ確認すると、すぐに台所へ向かった。
翔は顔を洗ってタオルで拭いた後、鏡を見つめる。
県大会は、翔には実に４年ぶりの出場であった。中学時代は地区大会前に退部してしまい、高校時代は１年生ではコンクールには出ず、２年生では地区大会どまり。なので、本当にこのワクワクした感じが久しぶりなのだ。
むしろ、未だに現実味を帯びていない。本当にこのメンバーで神奈川県大会に出場したのだと思うと、夢のような気さえしてくるのだ。
軽く頬を引っ張る翔。そこに痛みが走り、夢ではないことを実感する。
頬をパチパチと軽く叩いてから、翔は歯ブラシに歯磨き粉をつけて歯磨きを始めた。

午前５時５５分。
「おはようございます！」
「おはようございまーす！」
翔の挨拶で全員が元気よく返す。
「素晴らしいことに、全員５分前に集合完了しました！」
「イェーイ！」
「今日は、念願の県大会ですが、気張りすぎずオレたちらしい演奏ができるよう、頑張りましょう！」
「はい！」

「じゃあ、全員で移動するから大丈夫やけど、迷子ならんように注意してくださいー！」
「はい！」
「特に朝倉さん、よろしくお願いします！」
「え？　あたしだけ？」
ドッと笑いが起きる。もちろん、撮影に同行している真里菜たちも一緒に笑った。
電車の切符を各自で購入し、やって来た各駅電車に乗り込む。さすがに早朝の時間帯なので、まだ乗客の姿もまばらだ。
数人で固まって話をする者、車窓から景色を眺める者、楽譜を取り出して指さらいをしている者。それぞれが思い思いで行動しているが、やはりその胸中は不安が多かれ少なかれ存在していた。
特に、自由曲でソロを演奏する絵美、健之佑、陽乃は緊張の色が濃い。偶然にも3人並んで座席で楽譜を広げ、目を閉じて演奏を想像したり指をさらったりしている。
ＪＲ線に乗り換えて、関内駅に着いたのは7時２１分。予定どおりである。そこからしばらく歩くと、今日の会場である神奈川県民ホールが見えてきた。
「でっけぇ……！」
ホールの前に到着するなり、拓真が呆然とした様子で立ち尽くす。
「はぁ～……マジすげぇっす」
隣で智志がポカンとしている。
「やべ。なんか緊張してきた」
「深呼吸しろ、深呼吸」
智志の隣で亮平がスーッと深く息を吸う。
「ねぇ、あず」
恵梨があずさに話しかける。
「どうしたの？　緊張してきた？」
「ううん。あたし、すっごい楽しみ！」
「本当？」

恵梨は大きくうなずいた。
「だってさ、あたしのタンバリンがこのホールに響くんでしょ？それって、すっごいよね～」
恵梨はそれを考えると緊張よりもむしろ、ワクワクする気持ちがグングン高くなっていた。
「あたし、中学の時は人前に出るの嫌いでさ。部活とか全然やらなかったけど……いま考えたら、もったいなかったかなぁって思うの」
しかし、あずさはこう言った。
「でも、それが無駄だったってことは、ないでしょ？」
「……うん！」
「そのときが楽しかったり、有意義だったら私はそれでいいと思う」
「うん！」
「今日は頑張ろうね」
恵梨とあずさはギュッと握手を交わした。
「緊張してるな」
誠が慧太に話しかける。
「うん……。戸口くん、落ち着いてるよね」
「また。名前」
「あ、うん……まだ慣れなくて」
慧太はいつまでたっても誠を苗字で呼んでいる。とっくの昔に誠は彼を「けーちゃん」と呼ぶようになったにもかかわらず、彼はまだ誠のことを名前で呼んだり、あだ名で呼んだりしていないのだ。
「大丈夫だよ。けーちゃんが思ってるほど、みんな緊張してないから」
「そう？」
「そうだよ。安心して、ドンと構えて舞台裏だけど、演奏聴いててよ」
「……わかった」
楽器が到着したので、トラックから降ろして指定の楽器置き場に移動する。次第に、部員たちの表情が固くなっているのが陽乃の目

には明らかであった。
「みーんな！」
陽乃が大声で全員を呼ぶ。
「ジャーン！」
いつの間に準備したのか、貴志と綾音が地区大会前に作った千羽鶴を広げた。
「自分を信じて、今日も頑張りましょーう！」
少し間を開けて、全員が笑顔で「がんばりましょーう！」と大声で返す。
陽乃は雰囲気が一気に変わったのを感じ取った。
「ありがとね、タカティー、綾音ちゃん」
「いえ」
貴志がはにかみ笑顔で答える。
「先輩、ファイトです！」
綾音がガッツポーズを取る。
「任せて！」
陽乃は満面の笑みで答え、すぐに楽器の準備に取り掛かった。
（決めたんだから。不安は絶対、見せない）
不安ならおそらく、部内で1、2を争うレベルの高さであった。
あの教会のステンドグラスのソロは、陽乃のまだそう長くない吹奏楽生活でも最高潮の緊張をもたらすものであった。しかし、副部長である自分が緊張でオドオドしていては、他の部員や後輩に良くないと思い、決して不安の色を見せないようにしていたのだ。
楽器の準備でざわめく部員の合間を縫って、翔が陽乃のところへやって来た。
「陽乃」
「何？」
翔はすっと陽乃の前に手を差し伸べる。
「ありがとう」
「やだ。急にどうしたの？」

翔の一言が、陽乃の体にスウッと入り込んだ。
「わかってる。でも、お前ならできる。いつもどおりな」
頑張れとは言わなかった。けれども、陽乃にはこの言葉だけで十分であった。
楽器の準備が整い、いよいよ音出しの部屋へ移動する。音出しを各自行い、その後、拓真の指示でチューニングを行う。それから恭一が前に立ち、全員でロングトーンを行う。さらにチューニングをして、リハーサル室へ移動となった。
この頃にはいったん、緊張がある程度ほどけた部員たちは周りの部員と会話をしながらリハーサル室に向かった。
「七海高校さん、どうぞ」
「はい！」
吹奏楽連盟委員の人に案内され、部員たちは素早く部屋に入る。
「時間は15分です」
「はい！」
すぐに音出しを始める部員たち。梨子もすぐに音出しを始める。
「……。」
梨子のクラリネットから響き渡る綺麗なB♭の音。しかし、隣にいる絵美から楽器の音が聞こえずにいた。
「……？」
心配してチラッと目を横にやると、絵美がポロポロと涙をこぼしていたのだ。
「先輩？」
梨子の様子に気づいた恭一が絵美のところに駆け寄る。
「橋本？　どうした？」
「私……」
その様子に気づいたのか、次第に絵美の回りから順次、楽器の音が消えていく。いつの間にか室内は静まり返り、絵美の嗚咽だけが聞こえていた。
「私……決めてたのに……不安でも、絶対泣いたり、それを口にし

たりしないって……ごめんなさい」
　全員が驚きの表情で絵美のほうを見る。この場にいないのはコンクールメンバーでない部員と、パーカッションだけである。他の部員はみな、この場に揃っていた。
「私、１週間くらい前からずっと心配だったんです」
　恭一が優しく続ける。
「何が心配だったんだ？」
「私がソロ失敗したら、どうしようって。私、自由曲のド頭じゃないですか？　ソロ。もしもリードミスして失敗して、曲がぐちゃぐちゃになったらどうしようって」
「……。」
　グスッ、と絵美が鼻をすする音だけが響く。連盟の委員３名も、様子をジッと見守っていた。この１５分間は七海高校に与えられたものなので、彼らが指図するようなことは決してない。
「橋本」
　恭一が優しく呼びかける。
「はい」
「失敗したって、いい」
「でも……」
「見てみろ。周り。橋本が失敗したら、罵るようなヤツ、この部屋にいるか？」
　絵美は涙でボヤけている目を左手で拭い、周りを見つめる。すぐに梨子とみゆき、優輝と目が合った。それから遠くを見ると、愛実と春樹が絵美のほうを見ていた。
「いるか？」
　恭一がもう一度聞く。絵美は大きく首を左右に振った。
「だろう？」
「はい……」
「きっと、上に残っている田中たちパーカッションや、常盤たちメンバーでない部員たちもそんなことをするようなヤツらじゃないは

ずだ」
「はい……」
恭一が優しく絵美の頭を撫でる。
「審査員は、自由曲の楽譜なんて持ってないんだ。失敗したって、そういう曲なんだって思わせるくらいの気持ちでいればいい」
絵美がハッとしたように恭一のほうを見つめる。
「な？」
「……はい！」
恭一は大きくうなずく。
「あと5分です」
委員が時間を知らせる。
「よし……。ロングトーンして、楽器を温めよう」
「はい！」
ここで曲をするよりも、楽器を少しでも温めておくほうが良いと考え、恭一は5分を使ってB♭の音階を通した。
「ありがとうございました！」
時間になり、委員たちに挨拶をしながらリハーサル室を後にする翔たち。
舞台裏に移動すると、既に打楽器は配置済みであった。
「ミサッチ」
陽乃が美里を呼ぶ。
「陽ちゃん」
美里が安堵の表情を浮かべる。
「どう？　調子」
「バッチリ！」
美里の問いに陽乃は自信満々の笑顔で答えた。
「頑張ろうね！」
「うん！」
そして、奏者の椅子も配置が完了する。順次着席し、いよいよ開演の時刻となった。大会役員の挨拶が、陽乃たちのいる場所とは反

対側で行われている。そして、いよいよ開幕である。
陽乃の目の前に、いったい何人収容できるのかわからないほどの客席が設置されたホールが広がった。中央ホールの比ではない。
そして、アナウンスが入る。
「プログラム１番。川崎地区代表」
自分たちは代表なのだ、という気持ちが全員の胸中にこみ上げる。
「課題曲、４。自由曲、オットーリノ・レスピーギ作曲、教会のステンドグラスより、エジプトへの逃避、大天使ミカエル。指揮は、東　恭一です」
恭一が深々とお辞儀をする。朝一にもかかわらず、満席に近い状態の客席から拍手が沸き起こる。
恭一が全員を見渡す。
そして、指揮棒が降ろされた。

第４００話　思いはひとつ

恭一の指揮棒が降りると同時に、金管楽器のファンファーレが翔の耳を通り抜けていく。それが落ち着くと、木管のメロディ。そして再び全楽器でファンファーレを吹くと、第一旋律が始まる。

翔はちょうど、今の時期のような透き通った空をイメージし、風はちょうど5月頃の爽やかそのもののというような風をイメージして音色を出す。斜め後ろにいるはるか、茉莉紗、愛実、春樹たちのオヴリガードが気持ちよく響いてくる。クラリネットの絵美や優輝、みゆきたちも翔の考えているメロディと同じ感覚でいるのは間違いなかった。体の動き方がまったく同じだったからである。

チューバ、弦バス、トロンボーン、ユーフォニウム、バスクラリネット、バリトンサックス、バスーンによるメロディが雰囲気を一気に変える。姿が見えなくても亮平、智志、好美、拓真がどんな表情で演奏をしているのか、翔にはすぐに感じ取れた。

音量が下がると、再び木管のメロディ。時たま、それに合わせてグロッケンが響く。優の繊細な音色だった。彼の姿は見えなくても、十分にどんな様子かは想像できた。そして、トリオに入ると同時に美里が叩いていたスネアの動きが恵梨に引き継がれる。ここで、翔は恭一から彼女へ視線を移した。

体を小さくして、静かすぎず、うるさすぎない音量で後打ちを先導する恵梨。辛うじて見えるホルンの順平、賢治、裕子、杏は完全に恵梨のリズムに乗って後打ちを吹いている。ここからは姿の見えない慎也、亜紀、徹、沙知、雛乃たちも同様であるのは、翔の右耳から入る音色を聴いていれば十分わかるものだった。

途中から入るユーフォニウムとテナーサックス、そしてフルートの音色もそれまで翔たちが創りあげてきた音色を決して壊さないも

のであった。
　そして、再び低音楽器によるメロディが始まる。リタルダンドが掛かっていき、いよいよ曲は最終局面を迎える。
　トランペットとトロンボーンによる勇壮なメロディに乗って、ホルンとサックスのオヴリガードが勇ましく響く。軽やかな風に吹かれてなびく花のようなイメージで、フルートたち木管高音楽器が味付けの伴奏を吹く。美里のスネアが最後に近づくに連れてテンションを上げていく。あずさのベードラも負けじとテンションを上げ、伴奏を支える。
　そして、最終部分。ホルンとアルトサックスがグリッサンドを思い切り吹き上げる。晃のシロフォンの音がクリアに響き渡り、課題曲は一気に終わりを告げた。
　恭一が指揮棒を降ろす。ここで、数名が席の移動をする。その間に楽譜を自由曲へと差し替える。
「……。」
　翔はフッと何かに気づいた。そして、トランペットのほうを振り返る。
　同じ頃、陽乃は予想外の出来事に直面していた。手がガクガクに震えて、楽譜を捲ることができないのだ。
（お、落ち着け……大丈夫。いっぱい練習したじゃない）
　隣にいる慎也と勇が心配そうに陽乃を見つめる。頑張って楽譜を捲ろうにも、手が震えすぎて手を上げることもできないのだ。
（どうしよう……どうしよう……！）
　演奏時間１２分のうち、七海高校の演奏は約１０分。時間には余裕があるので、恭一もさほど焦っているようには見えなかった。しかし、恭一から見る陽乃の姿は明らかに狼狽している。このままでは、まともな演奏ができないかもしれない。
　そう危惧した恭一は、翔に目配せした。翔もその視線に気づく。
（行ってあげなさい）
　そう訴える視線であった。しかし、翔も思い切ることができない。

すると、今度は絵美と目が合った。
（お願い。行って）
そう言っている。翔は確信した。
翔はそのままスッと立ち上がり、アルトサックスを座席に置いた。
予想外の出来事に、客席から少しざわめきが起きる。
かのこと目が合った。
（行ってください）
そう言っている目であった。続いて、拓真と目が合う。
（頼むぞ）
春樹と愛実。
（お願いします）
（翔しかいないからな）
慎也が翔を確認すると、安堵した表情を浮かべた。そして、ようやく陽乃が近づいてくる翔に気づく。
まっすぐ、陽乃を見つめる翔。そして、彼女の手に翔は自分の手を重ね合わせた。低い声で翔が話しかける。
「落ち着いて。深呼吸して……。大丈夫や。お前一人違う。自分を信じて、皆を信じて。演奏してない休みの部分でも、みんな演奏してる気持ちでおるから」
「……。」
「気ぃ張らんでいい。頑張らんでいい。いつもどおり」
翔は最後に優しく笑顔を向けた。
「な！」
「……うん」
気づけば震えは止まっていた。翔は小さくうなずくと、自分の席に戻る。恭一がそれを確認すると、指揮棒を上げた。
大きく息を吸う音が聞こえ、絵美がこれまでで最高の音色でソロを吹き始めた。いよいよ、自由曲が幕を開けたのだ。雄飛、駿、かのこが彼女を完全に支える体制でしっかりと脇を固める。
絵美のソロが終わると、ユーフォニウムとホルン、アルトサック

スのメロディが分厚い温かみのある音を奏で始めた。そして再び、絵美のソロが響き渡る。完全にリハーサル室での緊張が吹き飛んだ彼女は、息がスパッと通る煌びやかな音を吹き上げる。合間を縫うように、皆を包み込むような健之佑の音色。そして、木管楽器がこの『エジプトへの逃避』で最もテンションが上がる部分を勇壮に、どこか淋しげに吹く。智志のチューバが、全体をしっかりと支える。

静まり返ると、由美子の怪しげなソロが響き渡り、健之佑のオーボエがそれを引き継ぐ。亮平は、最後のDの音にこの楽章で最大の神経を使って演奏した。

ボーン……と響く低音。そして、次を予感させる沙希のハープの音が響いた。

「……。」

昭がふと、目の前にある時計を見た。

「部長」

部下の声にハッと我に帰る昭。

「今度の加藤水産への見積書なんですが……」

「あぁ、どれ。できたか？」

今頃、翔たちの七海高校が演奏する時間であるとわかっているので、なんとなく時計を見つめてしまった昭。それでもすぐに、現実へと引き戻されてしまった。

同じ頃、島根県桜田市にある桜田中央高校の吹奏楽部が練習している部屋のひとつ。その窓際に東側をずっと見つめている少年がいた。

「……9時45分。そろそろ、自由曲だったりして」

三上　庄吾。遠く神奈川にいる友人、本堂　拓真のことを思いながら窓の外を見つめている。

聴きにいけるものなら行きたい。庄吾はそう思いながら、ただひたすら東の方角を見つめていた。

「あれ？　ちょっと。チューバとか弦バスは？」

愛媛県常套市にある常套中学の音楽室で、姿の見当たらない部員たちを見た女子が声を上げる。
「なんか、県大会突破できるかどうかが懸かってるからとか何とか言って、練習するような状態じゃないとか」
「はぁ？」
首を傾げる女子の視線の先で、真剣な様子で話しているのは美奈、未来、泰徳の3人であった。
「音楽的な技術とかは、まぁ良い方だからな」
泰徳が言う。
「後はメンタル面って、前に言ってたよね」
未来が言う。
「特に3年生の人たちって、県大会経験者いないもんね。佐野さん以外」
「でも……あの人たちなら大丈夫そう」
美奈の言葉に泰徳がため息を漏らす。
「安易だな、相変わらず」
「あたしはそう思うの」
美奈はやわらかい笑顔でそう言った。

――あたし、頑張るから！

そう言った恵梨の姿を、美奈は思い浮かべていた。

演奏はいよいよ最終段階。陽乃のソロは、見事な音色を響かせて無事に終わった。
木管楽器の降下系の音が響き、低音楽器の豪快なメロディが始まる。それをトランペットが引き継ぎ、金管楽器による勇ましいメロディと木管楽器の細やかな音色が響く。ホルンのグリッサンドが悠々とホールに響く。そして、チューバたち低音楽器のグリッサンドが響き渡って、それを打ち破るように美里が銅鑼を思い切り叩いた。

銅鑼の音が静まるまで、誰一人動かない。そして、完全に音が消えたところで恭一が指揮棒を降ろす。

同時に拍手が沸いた。堂々と立ち上がる部員たちに、惜しみない拍手が送られる。そして、翔たちは次の団体のためにスッと舞台から移動していった。

コラム☆１５　楽曲データ＆部内データ

ここでは、第３２５話から第４００話までの楽曲データと現在の七海高校吹奏楽部の恋愛関係および友人関係について整理しておきたいと思います。

【楽曲データ】

※Ｍ８＝ミュージックエイト／Ｏ＝オリジナル／Ｃ＝クラシックアレンジ／ＮＳ２０００＝ニューサウンズ。数字は西暦。この場合、ニューサウンズインブラス２０００／ＷＳ＝ウィンズスコア

第３２５話　Ｂｅｓｔ　Ｆｒｉｅｎｄ（Ｍ８）
第３２６話　Ａ列車で行こう（ベスト吹奏楽１００／Ｄｉｓｃ１）
ＳＡＫＵＲＡ　ＴＬＩＲＯＧＹ（ＷＳ）
トランペット吹きの休日（Ｏ）
名探偵コナンのテーマ（ＷＳ）
第３３４話　メリーウィドウ・セレクション（Ｃ）
第３４６話　シング・シング・シング（ベスト吹奏楽１００／Ｄｉｓｃ１）
笑点のテーマ（ＷＳ）
第３４８話　愛唄（ＷＳ）
第３５２話　各野球部員の応援歌（ブラバン甲子園）
第３８４話　千と千尋の神隠し　ハイライト
ディスコパーティー？（ベスト吹奏楽１００／Ｄｉｓｃ１）
Ｆｌａｖｏｒ　ｏｆ　ｌｉｆｅ（ＷＳ）
タイタニックメドレー（ＮＳ１９９９）
ディズニークラシックスレビュー（ＮＳ２００７）

ジャパニーズグラフィティー　刑事ドラマ・テーマ集（ＮＳ２００６）
キャラバンの到着（ＮＳ２００３）
スパイスガールズのヒットナンバー（ＮＳ１９９８）
もののけ姫（Ｍ８）
Ｐａｓｓｉｏｎ（Ｃ）
光（Ｃ）
蕾（ＷＳ）
千の風になって（Ｍ８）
粉雪（Ｍ８）
Ｙｏｕ　Ｒａｉｓｅ　Ｍｅ　Ｕｐ（Ｍ８）
たらこ　たらこ　たらこ（ＷＳ）
ウイスキーが、お好きでしょ（ＷＳ）

【恋愛関係】
♪＝両想い（付き合っている）／Ａ→Ｂ（ＡからＢの人物に片思い中）／Ａ☆Ｂ（ＡがＢを昔は好きだったが、もう振り切っている）

佐野　翔　♪　朝倉　陽乃
川崎　慎也　♪　田中　美里
本堂　拓真　♪　伊原　光瑠
宮部由美子　♪　三宅　亮平
大谷　沙希　♪　相田　雄平（野球部）
中野さゆり　♪　冨岡　洋之
右川　順平　☆　伊原　光瑠
橋本　絵美　↓　水谷　春樹
佐野　綾音　↓　朝倉　夏樹
瀬戸　優輝　♪　吉山　亜紀
加藤　愛実　☆　水谷　春樹

久野　彩香　♪　松尾　勇
逢沢　駿　♪　小林　梨子
西嶋はるか　♪　日高　優

【友人関係】
よく一緒に行動するグループ単位で分けています。

＜3年生＞
1：佐野　翔／川崎　慎也／水谷　春樹／本堂　拓真
2：朝倉　陽乃／大谷　沙希／宮部由美子／橋本　絵美／田中　美里

＜2年生＞
1：逢沢　駿／野村健之佑／日高　優
2：冨岡　洋之／大岩　智志／三宅　亮平／瀬戸　優輝／右川　順平
3：戸口　誠／志賀　慧太／松尾　勇／富士原　徹
4：小林　梨子／河内みゆき／伊原　光瑠／久野　彩香
5：加藤　愛実／吉山　亜紀／西嶋はるか／中野さゆり／鈴木　麻綾
6：井上　佳菜／秦野　恵梨／乃木あずさ

＜1年生＞
1：常盤　貴志／進藤　雄飛／速水　騎士／朝倉　夏樹
2：岩切　裕也／本堂　晃／塚口　和志
3：緒方　賢治／藤咲　流
4：安藤稚沙希／歌川　まゆ／片岡なぎさ／添田麻衣子
5：工藤茉莉紗／佐野　綾音／毛利　菘／堀江歩由美／前田かのこ／江藤　沙知（ただ、よく話をするのは茉莉紗と菘だけ）
6：時任　裕子／保田　杏／飯岡　好美／佐々木雛乃

第４０１話　私を変えてくれる

「それじゃあ……結果発表は夕方だから、それまで演奏をホールで聴くか、あまり遠くならないようにすれば、この辺りを観光してきてもいいぞ」
「やったー！」
恭一の声に部員たちが湧く。
「迷子になったり周りに迷惑かけたりするなよー！」
「はい！」
元気よく返事を終えると、部員たちは散っていく。
「サッチー！」
茉莉紗が沙知に声をかける。
「茉莉紗……」
「サッチー、どうする？　あたしたち、ちょっと駅前にある店とか覗きに行こうと思ってるんだけど」
茉莉紗のほかに菘、綾音、かのこ、歩由美がいる。
「私は……いいよ。ホールで、演奏聴いておく」
「そう？　何か買ってきてほしいものある？」
「ううん。特にいいよ」
「そっかー。ま、いい物あれば買ってくるね！」
「ありがとう」
沙知は微笑みながら茉莉紗に礼を言う。茉莉紗たちは意気揚々とホールを出て行った。行くところが特にない沙知はしばらく手持ち無沙汰になり、ひとまずホールで演奏を聴こうと思い、集まった場所から歩き始めた。
「そういえば……私、楽譜どうしたんだろう」
沙知はふと、集合前まで手にしていた楽譜ファイルを探した。
「どこかに置き忘れたっけ……。いけない。探さなきゃ」
沙知はひとまず、自分が来た道を辿ってみた。しかし、どこを探

しても楽譜ファイルは見当たらない。本番が終わった後でよかったと少し胸を撫で下ろすが、今後のことを考えるとやはり不安であった。

１０分ほど広い館内を探し回ったが、見当たらなかった。

「そうだ……。受付行って聞いてみればいいんじゃない」

沙知はトコトコと受付のほうへ行ってみる。

「すみま……」

沙知の言葉を遮るように、大柄な少年が受付の女性に話しかける。

「すみません。落し物って、ここでいいんですか？」

「あ、はい。結構ですよ」

そう言って少年が差し出したのは、沙知の楽譜ファイルだった。

「あ……」

しかし、受け渡しが進んでいる最中にそれを突然「私のです」と言うのもなんだかはばかられて、沙知は黙ってその様子を見つめていることしかできなかった。

（なんで私……これくらいのことも言えないんだろう）

「！」

気づくと、少年が沙知を見ている。

（なんだろ……）

思わず目をそらす沙知。少年は「すみません、大丈夫ですやっぱり」と言って受付の女性からファイルを再び受け取る。

「すみません」

「は、はい！」

少年に話しかけられて、沙知は飛び上がる思いがした。

「七海高校の、方ですよね？」

「はい」

少年はニッコリ優しい笑顔を浮かべる。

「良かった～。ちょうど、七海高校のトロンボーンさんの楽譜を拾ったんで！　これなんですけど」

少年が差し出した楽譜ファイルを受け取る沙知。

「ありがとうございます」
「いえ。良かったです。それじゃ、それだけなんで」
そう言って立ち去ろうとする少年。沙知は自分でも驚くほど、スムーズに声が出た。
「あの」
少年が振り返る。
「お礼に、ジュースを……」
沙知は少年の返事を待たず、自動販売機に走ってお金を入れる。１５０円で、ペットボトルのりんごジュースを買った。
「ありがとうございました」
少年にジュースを手渡す。先ほどよりももっとキラキラした笑顔を沙知に向け、少年は「ありがとう～！」と答えた。
いつの間にか、二人はロビーの席に座って話し込んでいた。
「なんだ～。それじゃあ、僕が拾った楽譜、君のだったんだね」
「なんとなく……言いづらくて」
「そうなんだ。ちゃんと言ってくれたら、すぐ渡せたのに」
「ごめんなさい……」
少年は慌てて「そんな謝られてばかりじゃ困るよ～」と言った。
「ご、ごめんなさい！」
「ほら、また」
少年は笑う。沙知もおかしくなって笑ってしまった。
「あ、そうだ。自己紹介、まだでしたよね。僕、横浜の虹西高校の吹奏楽部でチューバ吹いてます、鈴木（すずき）悠輔（ゆうすけ）って言います」
その少年の笑顔を見た瞬間、沙知の心臓がドクン、と大きく鳴った。あっという間に顔を真っ赤にする沙知。
「わ、私、七海高校でトロンボーン吹いてます、江藤　沙知です……」
「よろしくね」
「はい……」
それからしばらく、会話のないまま時間だけが流れていく。ふと、

悠輔が思い出したように言った。
「そういえば、今日は部長さんとかはどうされてるんですか？」
「あ……どこ行ったのかな。結果発表までは、自由行動なので」
「そうなんだ……」
そこで沙知もふと思い出した。
「そういえば……あの、変なこと聞いてもいいですか？」
「何？　っていうかさ、江藤さん。敬語やめない？」
「え？」
「僕たち同い年なのに。おかしいよ～」
「……はい」
「そのはいっていうのも変。うんでいいじゃん？」
「は……う、うん」
沙知がウンというと、少年はまた笑顔になる。
「で、聞きたいことって？」
「あの、うちの部長が以前……」
その時だった。
「あー！　こぉんな所にいた！」
肩にかかるライトブラウンの髪の毛が、外側にはねている。大きなつり目の女の子が大声を上げてこちらに向かってくる。
「何やってんの！？　勝手にどっか行っちゃ困るじゃない！」
「そんな大声出さないでよ～。大したことじゃないんだから」
「もー！　迷惑かかるのは周りなんだから……ん？」
少女と沙知の目が合う。すると、少女は沙知の制服を見て声を上げた。
「ひょっとして、七海高校の方ですか？」
「あ、はい……」
沙知がオドオドしていると、その背後から聞き慣れた声が響いてきた。
「ハーックション！」
このクシャミ。これは翔に間違いないと沙知は確信した。

「やぁだ先輩！　ロビー中に響いてますよ！」
大声で笑うのは、さゆりとはるか、そして陽乃だ。
「しゃーないやん！　ホールと外の温度差が……おー！　江藤さん！　どないしとん？」
見慣れない制服の人物が複数、固まっているのを見て翔が少し怪訝な表情を浮かべる。すると、後ろにいたはるかが声を上げた。
「の、望実ちゃん！」
「はるか先輩！」
「きゃー！　やっと会えたぁ！」
飛び跳ねる二人。望実と呼ばれた少女の印象が、沙知の中で一気に変わった。
「あ、そうだ！　佐野先輩。この子たちですよ、先輩が入院していた時に千羽鶴くれたの！」
それを聞くと、翔の表情が一気に緩んだ。
「そうなん？　浜田さんらが？」
「はい！　あれ？　佐野先輩、名前知ってましたっけ？」
「演奏会で会ったやんなぁ！」
翔が一歩前に出る。望実は元気な翔の顔を見ることができて、本当に嬉しそうだ。陽乃は陽乃で、真琴と楽しそうに話をしている。
「そうだ」
悠輔が思い出したように言った。
「江藤さん」
「何？」
「あっ、やった～！　敬語じゃなくなってる」
これには沙知が一番驚いた。
「あのさ。僕たちの演奏も聞いてよ。今日、時間あるでしょ？」
沙知は大きくうなずいた。
「よろしく！」
「うん！」
沙知も気づかないくらいだが、心の中で少しずつ彼女は変化して

きていた。

第４０２話　常連校の演奏

「昼一、風見台だな」
昼休憩の時間。喫茶店に入った3年生9名は慎也の言葉にうなずいた。
「今年、自由曲はトゥーランドットだったっけ？」
由美子がオレンジジュースを置いて、沙希に聞く。
「そうそう。あぁいう曲は、物語があるからかえって難しいのよね」
「そういうもんなの？」
美里が沙希に不思議そうに聞き返した。沙希はサンドイッチを頬張ってうなずく。
「私、ピアノやってるけどさ。例えば、ベートーベンの曲なんかは、いわばベートーベンが意図した演奏方法を……まぁ、言い方は悪いかもしれないけど、忠実に演奏すればそれはもう、だいたい曲として伝わるのよね」
「それはわかる」
美里がうなずく。
「でも。例えば……そうだな。となりのトトロの『風のとおり道』を演奏するとしてね」
「あ！　ほら、あれでしょ？　まっくろくろすけが森へ引越しするところのシーン」
美里が懐かしいと言わんばかりにそのシーンの説明をした。
「あれ？　違うじゃない？　ほら、庭に植えた楠だったっけ？　あれを大トトロ、中トトロ、小トトロと一緒にグングン伸ばすシーンの曲なんじゃないの？」
絵美が驚いて聞き返した。
「えー？　違うよ！」

「ほらね！」
危うくもめる寸前で、沙希が止めた。
「エミリンとミサッチだけでも、あれだけ曲の解釈が違うのよ」
拓真が引き継ぐ。
「まぁ、根本的には『木』だから、橋本の考えてるコトも田中の考えてるコトも根っこは一緒なんだけど、そこから派生してる考え方が違うんだよな」
「ふーん……」
美里がうなずく。
「どうでもいいけど、拓あんの喋り方、難しい言い方するね」
美里の何気ない一言に少しだけ、拓真が落ち込んでいるのが陽乃にはわかった。
「だから、こういう風に物語がある曲は、審査員の物語とかの解釈の仕方によって評価が分かれる危険性もあるのよ。こういう曲は、かえって難しい」
フォークを置いて翔が言った。
「これを、風見台はどうクリアしてくるか、やな」
「でもさ。風見台って県大会常連校だろ？　余裕で突破できるんじゃない？」
春樹が事も無げに言った。
「どうだろうね」
沙希はあっさり否定してみせる。
「なんで大谷さんはそう思わないわけ？」
「だってさ春やん。今年、私たちが県大会に出場したよ？」
それに春樹がハッと気づく。
「それでいて、去年の出場校でも落ちたところがある」
「せやから、どないなるかなんて誰にも全然わからへんってこっちゃな」
「奥が深い……なぁ」
春樹はフゥッとため息を漏らした。

昼食を終えると、半券を見せて再入場する。昼一の風見台高校は、既にセッティングに入っていた。

「……。」

客席をぐるりと見渡し、翔はすぐに歩き始めた。

「え？　翔？」

「一番前行ってくるわ」

「えぇ～？」

「風見台終わったらすぐ戻る」

陽乃の言うことも適当に聞き流し、翔は一番前の右手の席に座った。

「！」

すぐに翔に気づいた修平がチラッと翔を見やる。

「おっす」

修平と周囲の数人にしか聞こえない程度に翔は声をかけた。

（おっす）

修平は誰にも気づかれないように、そっと手を挙げた。

（調子、どないや）

（ぼちぼちでんなぁ）

目配せだけで会話ができる。中学時代からの仲間で、毎日同じ部活で同じ楽器を同じ部屋で練習していた仲間である。たかが1年程度、一緒にいなかった程度では絆は薄れない。

（上、目指せそう？）

翔は人差し指をクイッと上にやった。

（微妙）

（なんで？）

（トランペットトップが、バテてる）

翔がチラッと見ると、優衣が少し不安そうな表情で俯いていた。

（でも、全体的なレベルから言えば、上のほうのはずやで。風見台）

（ありがとう）

修平はニカッと笑った。ブザーがホール内に鳴り響く。

（頑張れ！）
（おうよ）
しばらくすると、再びブザーが鳴り響く。照明が客席は暗転し、逆に舞台にキラキラと眩しすぎるほどの照明が灯された。
「プログラム２１番、川崎地区代表。私立風見台高等学校吹奏楽部。課題曲、２。自由曲、プッチーニ作曲、木村吉宏編曲、歌劇、トゥーランドットより。指揮は、兵藤章義です」
章義が入場すると同時に拍手が沸く。
（なんや、こっちまで緊張してまうやん）
しかし、そんな不安などあっという間に吹き飛ばしてくれるような音が一気に飛んできた。
金管楽器のファンファーレと同時に木管のトリルが始まり、すぐにクラリネットやサックスのメロディーに入る。あれだけ不安そうにしていた優衣も、いざ演奏が始まるとなんてことはない。調子が悪いことなどまったくなさそうであった。
抑揚も上手く掛かっている。何より、あの厳しそうな表情の多い章義が、笑顔で指揮棒を振っているのが翔には印象的であった。
途中、トリオの部分でこの曲は打楽器が一切合財無くなってしまう。後打ちはトロンボーンやホルンに委ねられるわけである。途中から入ってくるものの、それまでは完全に管楽器奏者にリズム感が委ねられる。
翔たち七海高校はこれとピッコロのソロに近い状況になるところを毛嫌いして、この課題曲は早々に候補から外してしまった。
（さっすが常連校は違うなぁ）
最終部分。同じメロディの繰り返しではあるが、最後の最後で一気に音量もテンションも上げなければならない。メリハリがつかなければ命取りの曲となってしまうのだ。それを難なくこなす風見台高校は、やはり毎年県大会を突破するだけのものがあった。
素早く移動を終えると、すぐに自由曲が始まった。不気味な始まりを告げる曲。すぐにテンポが上がり、激しい表情を見せる曲。

（カットはしてるみたいやな……）

ティンパニ、チューバ、バストロンボーンの打ち込みが聞こえ、すぐにテンポが下がって勇壮ではあるが、どこか悲しげなメロディが始まった。

（シャープ系か……。難しいけど、ハーモニーはズレてへん）

打楽器、特にスネアの打ち込みが上手くスパイスを効かせている。ホルンの上昇音系もまた、味のある動きだ。

次第に音が小さくなっていき、バリトンサックスからトランペットと幅広い楽器が下降音を吹く。

フルートのメロディ、それがサックスに移動し、いつの間にかGマイナーへと転調していた。先ほどよりも愁いを帯びた調に変化する。これだけ曲の色が変わると、練習にはかなりの時間を要するだろうと翔は想像した。

突然、雰囲気が変わる。テナーサックスとアルトサックスの交互の動きが、どことなくおもしろおかしく見える。サスペンドシンバルの後に、中国的なメロディが出てきた。翔はトゥーランドットのことを少し調べた。そのときわかったのは、プッチーニは中国へ行ったことがないということである。

つまり、彼が作曲したこの中国的なメロディは、完全に彼の音楽知識だけを使って想像で描いたものなのである。

（ホルンがやっぱ、ごっついなぁ……。6人か）

七海高校より2人多いだけで、ずいぶんと迫力が変わるものである。

同じ雰囲気ではあるものの、三連符のメロディへと変化する。一歩間違えればズレまくってしまう危険のある箇所だ。しかし、それを難なく通過し、E♭のゆったりとしたメロディが始まる。

それが落ち着いたと同時に、雰囲気が一気に怪しげなものへ変化した。優衣とテナーサックスのメロディが嫌な雰囲気を醸し出している。そして、次第に楽器が加わっていく。珍しく、チューバまで加わってのトゥッティのメロディが始まった。音量が大きくなり、

突然雰囲気が変わった。
何拍子か聴いている側にはすぐわからない拍子になる。そして、スネアが激しく鳴り響く中、銅鑼が荘厳な音を響かせる。そして、ほとんどすべての楽器がメロディを奏で始めた。チャイムまで鳴っている。銅鑼が鳴り響き、再びマイナー調へと移調する。すべての楽器がメロディを奏で、いよいよ最終局面。
スネアだけが異なる動きをする。そして、最後の最後で銅鑼が思い切り鳴らされた、そして、全員で音を吹き切る。
一瞬、静まり返る客席。章義の指示で立ち上がると、部員たちは颯爽と立った。修平と目が合うと、翔は目配せしてこう言った。
（文句ナシやな！）
修平は複雑な表情を浮かべた。
移動の合間に、翔は客席を出て正面玄関に行った。しばらくすると、風見台高校のメンバーがやって来た。
「お疲れ！」
修平を見つけるなり、翔は声をかけた。
「俺はえぇから、コイツなんとかしたって」
すると、後ろにグスグスと泣いている優衣がいた。
「え？　ど、どないしたん？」
「あ、あだじ……全然音飛ばなかった。ごめんなざい、みんなあぁ～」
「大丈夫やぁ言うてんのに、あたじ全然ダメだっだぁぁ～言うて、ずうっとこんなんや」
修平もかなり困惑しているようであった。すると、バタバタと陽乃たちが出てきた。
「ゆーいちゃん！」
「陽ぢゃあぁ～ん」
あまりの優衣の泣き具合に、陽乃も驚いていた。
「どうしたの！？　なんでそんな泣くの！？」
「今日、あだじ調子最低でざ～……」

「えー？　全然そんなことなかったのに！　自信持ちなよ！」
「うえええ～……えええ～……」
陽乃が優衣の頭を撫でる。
「ほらほら！　もうすぐ写真撮影だよ？　あんまり泣いてたら、一生の記念なのに。ダメじゃん！」
「う、うん……」
陽乃はハンカチを取り出して優衣の涙を拭った。
『風見台高校さーん！　撮影します！　まずはパートごとです！』
「ほら、呼ばれたよ！」
「う、うん。ありがど……」
陽乃はようやく落ち着いた優衣を見送る。そして、翔の隣に立って言った。
「あたしも……あんなに泣けるくらい練習もっとしなきゃダメかな～」
「え～？　別に今のままで良くない？」
「そう？」
「まぁ……今日みたいな舞台の上であんなガチガチならられたら、かなわんけど……」
思わず赤くなる二人。
「つ、次の大会行ったら、今度は完璧に演奏してみせる！」
「おっ！　ほな、期待しときまっせ」
「任せなさい！」
陽乃は胸を張って答えた。
（次行けるといいなぁ……）
陽乃はようやく笑顔になった優衣たちを見ながら、少しだけそう思った。

第４０３話　正直な話

「……。」
「……き、緊張するね」
ガチガチに固まっている３年生８人の中で、陽乃が呟いた。それに対し、翔は実にのびのびとしていた。１、２年生も緊張でガチガチに固まっているにも関わらず。
はるかが呆れた様子で言った。
「どうして先輩はそんなにノホホンとしていられるんですか！？」
「え～？」
間延びした声を上げる翔。
「どうしてそんなにノホホンとできるんですかー！」
「うっわ！　でっかい声！」
翔は驚いて耳を塞いだ。はるかが落ち着いたのを見てから、翔は言った。
「だってオレ、もう嬉しすぎるもん。十分嬉しい」
「え？」
はるかや陽乃、後ろにいた亜紀も首を傾げる。
「そりゃあ上の大会行けたら文句ないけど、それでもまぁ……。創部３年目でこうして県大会で演奏できただけでもオレ、幸せ」
「……。」
「っとと。ほな、そろそろ時間やからオレ、行ってくるわな」
結果発表の時間。各学校の代表者は、その３０分前に舞台裏に集合することになっていた。
「……なんていうか、肝が据わってるのかな。佐野先輩」
「そうなのかなぁ……」
はるかと亜紀が不思議そうにしている横にいた陽乃が、スッと立

ち上がった。
「陽ちゃん？　どこ行くの？」
絵美が聞く。
「お手洗い。すぐ戻るよ」
陽乃は笑顔でそう答えるとすぐに客席を離れ、外に出た。しかし、もう翔の姿はそこにはなかった。
（行くとしたら……あそこかな）
陽乃は知っていた。集合時間にはまだ少し、早すぎることを。ロビーに出て左右を見るが、翔の姿はやはりない。
（やっぱりあそこ……？）
陽乃はホールを出て、山下公園へ出た。赤い靴はいてた女の子の像の前を通り過ぎると、やはり翔の姿があった。
「……。」
半円形になった、海に面している場所がある。そこに翔は立っていた。目を細めて遠くを見つめている翔。陽乃は声もかけず、その様子をジッと見守っていた。
（多分……あと１０分、あそこでそうしてるつもりだ）
陽乃はそう思っていた。地区大会のときも、同じことをしていたことを陽乃は思い出したのだ。あの時は楽器を片付け終えたすぐのことだった。
（ちょっと忘れ物したから取ってくる）
そう言って、部員たちの前から姿を消した。陽乃は特に気にも留めず、しかし少し戻るのが遅い翔を心配して様子を見に行ったのだ。そのとき、今と同じ姿の翔を見つけたのだ。
そのとき、陽乃は声をかけた。翔は驚いていたが、すぐに陽乃だと気づくと話してくれたのだ。
お守りだという。それに、結果発表前にもう一度、お願いをしているというのだ。
（それ、どこで買ったの？）
（１月に……オレの元々住んでいた家があった西宮の近所の、小さ

な神社）
（ふぅん……）
（オレのお守り。実はな。事故に遭ったときもこのお守り、持ってて
てん。せやから、きっと効果抜群！）
（……。）
そう言って笑う翔が、陽乃には愛おしくて仕方がなかった。そして、もちろん今日の本番の時も見たのだ。Ｙシャツの左胸ポケットの中に、そのお守りがしっかりと入っているのを。
翔が立ち上がった。そして、そのままっすぐ陽乃のほうへ向かってくる。陽乃もそれに気づくと彼の前に立った。
「おう」
少し驚いている表情を見せる翔。しかし、すぐにそのまま笑顔になった。
「行く？」
「うん」
陽乃と翔は手を繋いで道を歩き始めた。会話のないまま、時間が過ぎていく。
「あのさ」
陽乃が呟いた。
「何や？」
「あたし、信じてるよ」
「何を？」
「……あたしたち、きっと……」
陽乃の素直な気持ちだった。
「東関東大会、行ける気がする」
翔はグッと左拳を握り締めた。
「翔？」
「正直な話」
翔が強い口調で言った。
「微妙や」

「……。」
陽乃も思い当たる節はあった。やはり県大会は強豪校が多い。初出場の自分たちには到底追いつけないほどのレベルを持った学校も多数ある。
「でも、諦めるつもりはない。オレは、オレたちのやって来たことを信じてる。そんで、それを今日は全部発揮できた。思い残すことはない」
「うん！」
「せやから、今日が銀賞でもダメ金でも、銅賞でもオレは笑ってそれを受け入れるつもりや」
「……うん！」
翔はそう言うと優しく笑った。
そのままロビーに戻ると、ちょうど集合時間の少し前であった。
「ほな……行ってくる」
「うん！」
手を振る翔を見送っていると、思わず陽乃は泣きそうになってしまった。それをなんとか堪え、客席に戻る。
「おかえり」
絵美と美里が何かを察した様子で陽乃に声をかける。
「ただいま」
陽乃は少し恥ずかしさを覚えつつ、着席した。
そして、午後7時30分。ブザーが鳴り響く。
「キャー！」
歓声とも悲鳴とも取れる声がホール中に響いた。
翔の耳にもその声はハッキリ届いていた。
（1番……やから、一番初めに呼ばれる）
スゥッと深呼吸する翔。
（大丈夫。どんな結果でも受け入れる）
そうは考えているものの、心が追いついてこない。心臓がバクバクと激しく鼓動する。そして始まった吹奏楽連盟役員の挨拶も、翔

はあまり耳に入ってこなかった。
「それでは、結果発表を行います。なお、金賞と銀賞の区別がつきづらいといけないため、金賞の団体には金賞の後にゴールド、とつけて区別することにします」
「……！」
翔は思わず両手を顔の前で合わせた。
綾音も、夏樹も。
陽乃も、美里も。
由利も、友美子も。
祈る思いでその瞬間を待ち構えた。
どんな結果で言いと思っていても、やはり、望みは捨てきれないでいた。
「それでは、発表します」
拓真がツバを飲み込む。
「プログラム」
春樹が思わず前のめりになった。
「1番」
絵美がつられるように、前に身を乗り出す。
「七海市立」
（お願い……！）
沙希は俯いて目をつむった。
「七海」
由美子はブルブルと両手が震えていた。
「高等学校」
慎也が目を閉じる。大丈夫だと、言い聞かせている。
「吹奏楽部」
（お願いします……！）
一瞬、場内が静まり返った。

翔がハッと顔を上げる。

そして次の瞬間、その言葉はハッキリと場内にいる全員に聞こえた。

「金賞、ゴールド！」

間髪いれずに、大声が上がった。

「いよっしゃあああああああ！」

真っ先に声を上げたのは、拓真だった。

「いやったあああああああ！」

春樹と慎也がそれに続く。女子の甲高い声が聞こえた。

「あ……や、や……った……」

翔が力なく座っていた椅子の背もたれにもたれかかる。

「おめでとうございます」

隣に座っていた女子が、にこやかに笑ってそう言った。

「あ……ありがとう」

そして、順次結果発表が行われていく。金賞だったのはその隣に座っていた西海大学付属相馬高等学校、県立厚本高等学校、県立座子高等学校、県立柏木高等学校、川崎市立立花高等学校などである。もちろん、風見台高校も入っていた。

「それでは、続きまして……9月8日土曜日に行われます、吹奏楽コンクール東関東大会に出場する団体を、発表いたします」

翔はここまで来たのなら、東関東へ行きたいという希望を抱いていた。諦めきれない自分がやはりいるのである。

「それでは、プログラムナンバーの後に、校名を読み上げます」

翔が思わず前のめりになる。部員たちの姿が目に入った。全員が両手を合わせ、祈っているように見えた。

一瞬、卒倒しそうなほどに自分の感情が高まっていることに翔は気づいた。

首を左右に振る。

「大丈夫ですか？」
先ほどの女の子が翔に話しかけてきた。
「す、すみません」
「緊張しますよね」
翔は驚いて目を丸くした。
「どうかしました？」
「いや……だって、西海付属相馬高校って、毎年行ってるやないですか。東関東」
「それでも、緊張はしますよ」
「……そうなんですか」
「はい」
女の子は優しく笑った。
「あ。始まりますね」
「そうですね……」
「また、東関東でお会いできるといいですね」
「……はい」
そして、その瞬間がやって来た。
「それでは、読み上げます」
（……！）
「プログラム」
やはり雰囲気に圧倒され、翔は思わず息を深く吸い込んだ。
そのまま目の焦点が合わなくなる。どこを見ていいか、わからなくなったのだ。

「1番！」

その声に翔はハッと息を呑んだ。
自分の出演順番が、何番だったか一瞬だけわからなくなったのだ。
しかし。すぐにその後校名が呼ばれる。

「七海市立、七海高等学校吹奏楽部！」

地区大会と違い、今度は間髪いれずに歓声が上がった。

「やったあああああ！」

真っ先に聞こえた声。それは、陽乃のものだった。

「あ……やった……！」

「おめでとう！」

隣にいた女子が今度こそ嬉しそうにそう、言ってくれた。

「ありがとう！」

そして、表彰状とトロフィーを授与される。翔は胸を張り、満面の笑みでそれらを受け取った。

前を向いてお辞儀をすると同時だった。

「カケル――――！」

サックスのさゆり、麻綾、はるか、茉莉紗、かのこの女子5人であることに翔はすぐに気づいた。

思わず感情が高ぶり、翔は涙をこぼしてしまった。それを拭い、大きく手を振って自分の席に戻る。

（よっしゃ……よっしゃああ！）

まだ自分の高校が東関東大会に進んだことに、現実味は感じられない。それでも、このトロフィーの重さは本物だった。

修平と目が合う。

（おめでとさん！）

（ありがとう！）

翔は半泣きでウルウルになりながら修平にそう、目配せで伝えた。

第４０４話　先輩、がんばって！

「おはようございます！」
恭一が満面の笑みで挨拶をすると、翔たち部員も笑顔で答える。
「おはようございまーす！」
８月９日木曜日。県大会の翌日にも関わらず、七海高校吹奏楽部は今日も練習がある。というのも、１１日にある市民祭での演奏を練習するためである。その代わり、今日練習すると明日は休み。一日、間を取って調子を整えるのだ。
「それじゃあ曲は、いま配った分な。とりあえず、文化祭で演奏するのを練習する意味も兼ねてるから、手を抜くなよ？」
「はい！」
「じゃあ、まず『Ｆｌａｖｏｒ　ｏｆ　ｌｉｆｅ』から」
「はい！」
恭一がスコアを捲る。
「えーっと……。冒頭のサックス３重奏、どうするんだ？　誰が吹く？」
すると、翔がすぐに返した。
「朝倉くん、工藤さん、前田さんです」
「へ！？」
その言葉に驚いたのは夏樹と茉莉紗だった。
「へ！？じゃないで。自分らやで？」
「いや、でも……」
さゆりがポンポンと夏樹の背中を叩く。
「いいじゃない！　ほら、やってみて。失敗したって全然構わないから」
茉莉紗も不安げにはるかを見るが、はるかも同じように茉莉紗に

「頑張ってみなよ～」と言うばかりであった。
恭一がそっと指揮棒を降ろすと、夏樹のまだ少しおっかなビックリなメロディが始まった。それに合わせて、茉莉紗がオブリガードを演奏する。かのこは慣れた様子で伴奏を吹き、二人を支えている。
スネアドラムは、和志が叩いていた。時々音量の調節が上手く行かないので、洋之が横であれこれと注意している。
小節番号Ａに入ってからはすぐ、トランペットのメロディがある。ファーストは綾音と流が担当している。
「佐野～。もっと音飛ばして～」
恭一の指示に、息を少しだけ多めに吸って綾音が要望に応える。
「そうそう！　いいぞ～」
恭一も安定してきた１年生たちの音を聞いて満足気だ。続くＢからは、ホルンのメロディ。賢治と杏がメロディを吹き、順平たちがそのハーモニーを吹いている。
サビ部分に入ると、クラリネットによるメロディが聞こえてくる。オブリガードを吹くホルン。歌詞を知っている部員も多いためか、普通の曲に比べるとかなり感情移入されていた。
「ん……？」
そのうち、ふと恭一はアルトサックスの音が少し薄くなったことに気づいた。サックスのほうを見ると、翔が俯いている。恭一が指揮を止めた。
「佐野？」
「……あ、はい」
翔がゴシゴシと目を擦って顔を上げる。
「どうした？　目、赤いぞ？」
「……。」
「やだー！　先輩、なんで泣いてるんですか？」
はるかとかのこが大笑いした。部員たちもどよめいている。
「いや……その……」
「確かにこの曲、歌詞やべぇけどな」

拓真がウンウンとうなずく。
「……佐野」
「はい」
「言うか？」
恭一の言葉に3年生以外の部員が首をかしげている。
「言い……ます」
翔はまだ早いかと思ったが、もうこれ以上延ばしていると自分がしんどくなるばかりだろうと思い、うなずいた。
翔が楽器を置き、その場に立つ。さゆりと麻綾が目を丸くしている。
「あの……ちょっと、用事で……8月19日と20日に、島根県行ってきます」
「……はぁ」
賢治が間の抜けた返事をする。
「い、行ってくるのはいいんですけど……何の用事で？」
貴志が聞き返す。
「……えっと……」
翔が言葉を失った。全員の視線が彼に集中する。
「言い辛いか？　言い辛いなら、また後でもいいぞ？」
「待ってください、先生」
あずさが遮る。
「そんな中途半端で聞かされると、気になります」
「……だそうだ、佐野」
恭一の言葉にゆっくり、翔はうなずいた。翔は震えそうになる声を何とか振り絞って言った。
「オレ……島根県の、島根大学に進学することを、決めました」
部員たちが一気に静まり返る。音楽室は物音ひとつしなくなった。
「……待って」
彩香が呟く。
「佐野先輩が行くってことは……」

陽乃がうなずく。
「あたしも、目指します……」
その言葉に勇と流が驚く。
「……。」
はるかはただ、呆然とするしかなかった。
「待ってください！」
さゆりが立つ。
「私……今年、コンクール出られなかったんです！　来年、絶対頑張って出るから、佐野先輩に指導に来ていただこうって思ってたのに……そんなの……こんなの……」
それっきり、さゆりは何も言わずに力なく座り込んだ。
「ま、お、落ち着こうよ」
優輝が弱々しく声を上げる。
「ま、まだ決まったわけじゃないじゃん！　先輩たち、合格するかどうかってわかんないし」
「バカ瀬戸！」
みゆきが慌てて優輝を無理やり座らせ、口を塞いだ。翔がその様子に思わず笑ってしまう。
「ゴメン……。みんな、普通に進路、この辺って思ってた？」
まゆがうなずく。
「……どうしても、島根県に行きたくって」
「理由、教えてください」
「……。」
翔は懇切丁寧に、一言ひと言を大切にしながら後輩たちに説明した。合併した市が、島根県にはあること。先生不足が懸念されること。自分が教師として役立てる場所が、あること。
それをすべて聞いてから、麻綾が呟いた。
「先輩らしいですね」
愛実が続ける。
「先輩の進路ですもん。私たちがどうのこうの言える立場でもない

ですし……」
「そうそう！」
梨子が急に大声を出した。
「１１月２３日が、定期演奏会でしょ？　それに、その後も卒業式のある来年の２月２９日までは、先輩たちと一緒にいられるんだから、それまで毎日悔いのないように過ごそうよ！」
全員が笑顔になる。
「そうだな」
徹が笑った。
「先輩！」
さゆりが満面の笑みで言う。
「受験、頑張ってくださいね！」
「……うん！」
翔の中で少しだけ、わだかまりが溶け始めていた。
（これで……スッキリして行けそうやな）
島根大学のオープンキャンパスは１９日と２０日。翔は次第にワクワクしてきていた。
「よし、合奏の続き、やるぞ」
「はい！」
外で蝉の鳴き声が響き渡る中、再び音楽室から楽器の音が鳴り始めるのだった。

第４０５話　秘密裏に、秘密裏に

「あー！」
突然、翔が大声を上げた。
「何よ！　ビックリするじゃない」
小田急七海駅北側にあるショッピングモールで、島根大学のオープンキャンパスのために宿泊する時の荷物やお菓子を買いに来た翔と陽乃。とあるお店の前で翔の大声が響いて、陽乃が飛び上がるような素振りを見せたのだ。
「しもたぁ！　大失敗や！」
「何が？　どうしたのよ」
「買い物リスト持ってくるん忘れてん」
「あーあぁ、もう。バカなんだから」
「バカ言うな！　アホ言え！」
「それってどっちも微妙じゃない？」
相変わらずのやり取りをしながら歩く二人。
「それで？　リストには何書いてたの？」
「買う予定のお菓子リスト」
「……。」
陽乃が呆れた表情を見せる。
「あっ！　そんなんどうでもいいやんけって顔しとる！」
「まぁね……。それよりあたしが気になってるのは、宿泊先のアメニティグッズの充実具合よね。櫛とかはあるだろうけど……ドライヤーとかどうかなぁ。あんまり風がキツいのは、髪の毛傷むから嫌だし……」
それぞれの好みが異なる二人。
「ほな、ちょっと別々の店行って欲しいもん、調達してくるか？」
「そうね！　そうしよっか」
「じゃあ……３階の噴水広場に４時に集まろ」

「集まるっていうほどの人数じゃないじゃない」
「えぇやんけ！　ほな、後ほど」
翔がバタバタと目的の店に移動したのを確認した陽乃は、こっそりとカバンから1枚の紙を取り出した。
「よし……ちょうどお店とは反対方向。バッチリね」
同時に携帯電話を取り出す陽乃。発信先は美里だ。
「もしもし？　ミサッチ？　翔、雰囲気的に3階の店が中心みたい。うん。うん。だから多分大丈夫。うん。移動したらまた連絡する。今日、他の子たちはどう？　え？　うん。そっか！　じゃあ大丈夫ね」
ひとしきり話を終えると携帯電話をしまい、陽乃も目的の店へと移動する。
同じ頃、目的の店に到着する前に目移りの激しい翔は、お気に入りの服のショップに寄り道していた。
「へぇ～。もう秋物出てるんやな……」
翔は適当に服を手に取り、自分に合わせてみる。
「うーん……赤は微妙やな」
別の色を手に取って、鏡の前に立ったときだった。
「ん？」
見覚えのある人物が通ったような気がして翔は振り返った。
ちょうどショップがあり、吹き抜けの反対側の店。そこにいたのは、萩と歩由美、なぎさ、麻衣子のクラリネットガールズだった。
翔は驚かすためにそっと彼女たちのいる店に近づき、そして急に声をかけた。
「コゴロー！」
「きゃあああああああ！」
予想以上に大声を上げて驚きの表情を見せる4人。これには翔も驚いてひっくり返りそうになった。
「そ、そないに大声出さんでもえぇやんか！」
「す、すみませんすみません！　もうホント、驚きすぎですよねぇ

！」

萩が慌てて取り繕う。他の3人も苦笑いしていた。

「ホンマやで。せやけど、4人で買い物？」

「えぇ、まぁ」

なぎさがうなずきながら答える。

「そっかぁ。仲良しやな！　ほな、邪魔してごめん！」

「いえ！　失礼します」

翔は先ほどのショップへと戻っていく。

「……バレてないみたいだね。よかったぁ」

歩由美が安堵の声を漏らす。

「ここ、思い切りメンズの店だけど。先輩、気づいてないね」

萩がクスクスと笑う。

「むしろこの場合は、気づかれないほうが好都合じゃない」

「そうそう。ほら、早く選んじゃおう」

麻衣子の言葉に同意しつつ、なぎさが先ほどまで手にしていた品物をもう一度手に取った。

「うーん……」

先ほどのショップでグリーンの服とブルーの服を手に取り、見比べる翔。

「こんな時、陽乃がおれば気軽に聞けるんやけど……。アイツ、今どこにおるんやろ」

翔は電話を手にして陽乃に発信した。

「……もしもし？」

まるで何か様子を窺うかのようなトーンで答える陽乃。

「もしもし？」

「どしたの？」

「いやぁ、ちょっとお前に見てほしいもんがあってさぁ」

「そうなの？　じゃあちょっと待ってて……あ、すみません。リボンの色、青色か水色でお願いできます？」

「は？　何言うとん？」

翔は答えがいまいち噛み合わないので、思わず聞き返した。
「あー！　なんでもないよ。コッチの話」
「ふぅん？　ほなまぁ、いま3階のライトオンにおるから、来てな」
「了解」
そう言って電話が切れる。陽乃が来るまでの間、再び服を選ぼうとしていると、今度は春樹の姿が見えた。
「あっ、おーい！　春やん！」
翔の声にすぐ反応する春樹。しかし、翔の位置を正確に把握できていないようで、キョロキョロと辺りを見渡している。
「おーい！　こっちこっち！」
それでもなお、居場所がわからないようでキョロキョロしている。翔はしばらく気づいてくれるまで手を振り、そして気づいた。
どちらかといえば、春樹の様子は見つかると何かマズいことをしているかのような動きをしているのだ。
「……？」
先ほどの菘たちの姿が目に浮かぶ。彼女たちもなんとなく、様子がおかしかったのだ。翔はなんとなく不審に思い、春樹のほうへ近づいていく。
「はーるやん」
翔の姿を見て、春樹がソワソワしているのはあからさまに翔にもわかった。
「どないしたん？　買い物？」
「うん。そんなとこ。翔は？」
「オレは島根大学のオープンキャンパス行くにあたり、お菓子を買いに来た」
「遠足じゃん、それじゃ」
春樹はクスクスと笑う。
「それぐらいの気合いが入ってるってことよ。春やん、それは？」
翔は春樹が右手に持っていた紙袋を興味深そうに覗き込んだ。春樹が恥ずかしそうにそれを隠す。

「あっ。なんやぁ？　怪しいな」
「ほら、あれだよ。絵美へのプレゼント」
「へぇ？　何でまた急に」
「いや、ちょっとほら……いま、俺たち気まずい感じじゃん？　でも、距離を遠ざけすぎないためにこう……ね……」
苦しい言い訳であるような気もしていたが、翔はあまり猜疑心を持たない性格であることは春樹も知っていたので、これで十分だろうと感じていた。
しかし。
「ふぅん……」
さすがに怪しかったようで、翔は少し淋しそうな表情を浮かべた。
「喜んでくれるとええぇな」
「う、うん」
「ま、うまく行ったら教えて」
「わかった」
「ほな」
翔は小さく手を振ると、その場をすぐ去った。

「翔？」
「……。」
「おーい、聞いてる？」
「え？」
陽乃の言葉にようやく翔が反応する。
「大丈夫？　なんかボーッとしてるけど」
「うん。大丈夫！」
「そう？　ならいいけど……」
夕暮れの時間帯になり、日が傾いてきているのがわかるような色合いになる空。
「ごめん」
翔が彼の家の近くに来たと同時に声を上げた。

「どしたの？」
「オレ……今日ちょっと、このまま帰っていい？」
「いいけど……体調、悪い？」
「そんなことあらへん。大丈夫」
そう言って笑う翔。しかし、笑顔にあまり覇気はなかった。
「じゃあ、また……明日から部活だね。また明日。朝、迎えに」
「ごめん。ちょっと、明日ひとりで行きたい」
「え？」
陽乃が驚いて目を丸くする。
「ごめん。頼む……」
声が震えそうになった。
「わかった。了解」
陽乃は何も聞かずに、優しく笑って答えてくれた。
「じゃ、また明日」
陽乃と別れ、土手を降りて走りながら翔は家のドアを勢いよく開けて玄関に駆け込んだ。
バタン！と大きな音を立ててドアを閉める。幸い、冷房を入れているのでリビングのドアは閉められていた。ドアを勢いよく閉めた音は友美子には聞こえていなかったようだった。
「……。」
ため息をつき、翔はドアにもたれたまましゃがみ込む。
翔は進路を決める時、なるべく皆に早くから心配を掛けたくないと思い、島根大学を志望したことはなるべく言わずに来た。そのため、進路を知っているのは部内では3年生の一部と綾音くらいのものだった。
それが原因なのか、何故か今日出会った部員たちはどこかよそよそしいものがあった。
「……でもそんなん、急にすぎるやん」
キュウッと翔の胸が締め付けられる。
「泣きそう」

翔はブルブルと首を左右に振り、なるべく普通を装って「ただいま！」と大きな声でいま帰ったような素振りを見せながら、靴を脱いで廊下を歩いていった。

第４０６話　引きずらずに

「っしゃ！」

８月１１日（土）。翔は自宅の洗面所で顔を洗ったあと、気合いを入れ直していた。昨日の１年生や春樹の様子がおかしかった件で、少し落ち込んだものの、今日は市民祭の本番である。いつまでも暗い気分を引きずるわけにはいかなかった。

インターフォンが鳴り響く。友美子が「カケルー！　陽乃ちゃんやで！」と呼ぶので、「すぐ行く！」と大声で返した。

「忘れ物ないね？」

友美子が聞き返す。

「大丈夫！　ない！　綾音は？」

「あの子はもう行ったで。練習せなアカンからって」

「頑張るなぁ。ほな、行ってきます！」

ドアを開けると陽乃が「おはよ！」と元気よく声を掛けてきた。

「おはよう！」

「どう？　体調、戻った？」

「バッチリや！　めちゃ寝たからな」

「良かった。じゃ、行こう！」

自転車に跨り、いつもどおりつくし野川の土手沿いを走っていく。それから津上橋を渡り、信号を越えると七海高校はすぐそこだ。

「おっ」

校門の前で菘たちの姿を見つけた。翔はいつもどおり「おっはよう！」と明るく声を掛けて傍を通り抜ける。

「おはようございます」

菘たちは目を丸くしたが、すぐにいつもどおり挨拶をする。

（よっしゃ。この調子、この調子！）

自分を奮い立たせて、翔はなるべく笑顔を保とうとする。

陽乃と他愛のない会話をし、部室に入る。
「おはようございまーす！」
「おーう！　おっはよ」
部室に入ると、いつもは翔よりも来るのが遅い慎也、美里、由美子までもがいた。
「お？　どないしてん！　えらい3人とも速いやん」
「まぁな！　あんまり来るの遅いと、暑くなって疲れるから」
「へー！　慎也でもそんなこと、考えるんや」
翔はクスクス笑いながらカバンを置く。すると、足元に油性ペンが何色か落ちていた。
「おーい！　誰やねん、ペン使いっぱなしなん。片付けて～」
「あっ、すみません！　あたしです！」
梨子が慌ててペンを拾う。
「ちょっと、逢沢くんも使ったでしょ？　手伝ってよ」
「へいへい」
駿が面倒そうにペンを拾い集める。特に変わった様子はないので、翔は昨日の菘や春樹たちのことも気に掛けすぎだったのかと思うようになっていた。
楽器積み込みの時間になった。とはいえ、市民祭は津上橋を越えた市役所の横にある市役所公園を中心に、周囲の道路や野球場などを使用して行われる。移動距離も少ないので、楽器の積み込みは打楽器、チューバ、バリトンサックス、弦バスだけにすることとなっていた。
運搬係の慧太、亮平、徹が張り切って大型楽器を積み込んでいく。その間に部員たちは徒歩で移動することになっていた。
「せーんぱい！」
移動中、はるかと茉莉紗が翔の隣にやって来た。
「うん？」
「島根県って、何か美味しいものあります～？」
はるかがニコニコしながら聞く。

「え～？　どないやろぉ。行ったことあらへんからな～」
「絶対、お土産買ってきてくださいよ」
茉莉紗が嬉しそうに言った。
「任せといて！　お土産は陽乃がしっかり買ってくれるから」
「ちょっとぉ！　何でもあたし任せにしないで！」
ドッと笑い声が沸き起こる。
「逆に、先輩だったらお土産ってどんなのがいいですか？」
「なんでそんなん聞くん？」
茉莉紗が一瞬答えに詰まるが、すぐにはるかが答えた。
「ほら、自分が欲しいものをお土産にするっていうのもアリじゃないですか！」
「あー！　なるほど！　そういう考え方もあんねんな……せやなぁ～」
翔はいろいろと思いをめぐらせる。
「そやな！」
「何ですか？」
「そこの街のなんかほら、特色がわかるイラストとか描いてある写真盾！」
「なるほど～。意外なとこ、来ましたね」
「ほな、お土産そういうのんがいい？」
「是非その方向で！」
「オッケー！」
そんな会話をしている間に、市役所公園に着く。時刻は午前１０時ちょうど。出番は午前１０時３０分と、午後２時の２回である。
テンポよく大型楽器を搬出し、そのまま椅子や譜面台のセッティングに入る。そして音出しやチューニングをし始めると、お客さんが公園中央にある舞台に集まり始めた。
「かける！」
涼平が翔を呼ぶ。隣には菜緒もいた。
「おう！　来てくれたんや」

ニッと笑う二人。設置された客席の真ん中あたりに二人は座った。
「裕時くん、緊張する？」
絵美が聞いた。
「はい。少し」
裕時にとって、本格的な本番はこれが初めてである。
「一番前の列だけど、普段どおりにすれば大丈夫だからね」
「はい」
「マーガレットは、ジャズ大好きだから1曲目はいつもどおりいけるよね？」
あずさがマーガレットに聞いた。
「Ｎｏ　Ｐｒｏｂｌｅｍ！　私にお任せを」
「頼もしい～！」
マーガレットは自分の身長に合うように、ドラムセットを準備していく。
「ソンスくんは大丈夫？」
愛実と春樹の間に座ったソンスが不安そうに楽譜を見つめている。
「大丈夫。昨日までしっかり練習したんだからさ」
「ハイ……」
チューニングを合わせる。総勢５９名の比較的大人数のバンドである。恭一が指揮棒を持って指揮台の前に立った。
「それでは、ただいまより七海市民祭、ミニ舞台を開演いたします！　今日のトップバッターを飾ってくださるのは、七海市立七海高等学校吹奏楽部の皆さんです！」
司会者の女性の言葉に、マーガレットたち留学生は少し驚いていた。自分たちも、立派に吹奏楽部という枠組みの中に入れられていたことに。
「本日は４曲、演奏してくださるとのことです！　また、午前中と午後の２回、出演してくださいますが、そのすべてで演奏曲目が違うとのこと。是非、ご期待ください！　それでは、顧問の東先生、よろしくお願いします」

恭一が司会者の女性からマイクを受け取る。
「おはようございます。七海高校吹奏楽部です」
早速拍手が沸く。
「地域の皆様方には、夜遅くまで楽器を演奏する日が続いており、ご迷惑をおかけして申し訳ございません。ですが、皆様のご理解とご支援もありまして、今年、神奈川県吹奏楽コンクールを突破することができました」
大きな拍手が沸いた。
「本日は、そのお礼も込めまして午前と午後の2回、演奏させていただきます。どうぞ、短い時間ではありますがお楽しみいただけたら、幸いです。それでは早速、1曲目を演奏させていただきます。1曲目は、自動車のCMで使用されたことでも有名な曲『キャラバンの到着』をお聴きいただきます。原曲は3拍子ですが、今回は4拍子に編曲されたものをお聴きいただきます」
マイクを置くと、拍手が起きる。
（あっ！）
陽乃は右端に塾の先生がいるのを見つけた。さらには、塾に通う同級生数名も発見したのだ。
さすが市民祭だけあって、知り合いが多くいる。それは他の部員たちにとっても例外ではなかった。
（うわ！　なんだよ、アイツら……）
夏樹は夏樹で、中学時代のサッカー部同級生4人を見つけていた。何やら茶化すような目で夏樹のほうを見ながらニヤニヤしている。
（マジで来たのかよ……）
智志は智志で、稲岡啓二と中学時代の友人3人がいるのを見つけた。しかし、楽器を構えれば彼らは見えなくなる。
（チューバで良かったかも）
へへっ、と笑いながらも、指揮棒が上がったので楽器を構える。
そして、1曲目の『キャラバンの到着』が始まった。

第４０７話　吹き飛んだ固定観念

金管楽器のファンファーレの後に、マーガレットのジャズのリズムが鳴り響く。チューバや弦バスとエレキベースの打ち込みが入り、後を追うようにトロンボーンがそれを繰り返す。そして、トランペットが入り、やがてサックスが入る。そして有名なメロディが始まると同時にアルトサックスとテナーサックスの全員が立奏を始めた。

「おい……夏樹、カッコいいな。なんか」

「あぁ……」

サッカー部の友人たちが、夏樹を見てそう言った。すぐ前にははるかの同級生２人がいる。

「いつも思うけど、はるちゃんって演奏の時はなんか、違うよね～」

しばらくすると、リズムに乗り始めたのか陽乃が自発的に手拍子を始めた。それに促され、トランペットが全員手拍子をする。打ち込みがある部分だけ、楽器をすぐに構えて演奏する。

手拍子が観客全員に広がった。メロディがクラリネットとオーボエやフルートに引き継がれる。

ソフトクリームを舐めながら歩いてきた女子２人がまゆの姿に気づく。

「ちょっとぉ。あれ、まゆじゃない？」

「マジ？　あ、ホントだぁ～。えー？　まゆってスイソーだったの？　てか、何？　あの楽器かっこいい！」

メロディがトランペットに引き継がれる。陽乃の塾での同級生たちはまったく見たことのない陽乃の姿に驚いていた。

そして、曲の雰囲気が少し変わり始めたところで流が前に移動する。そして始まったのは、高音からのソロだった。アドリブソロなので、調さえ狂わなければ自由に吹いていい。自由気ままな性格の

流にはもってこいのソロだ。
「おぉー！」
見ていた観客からどよめきが起きる。そのソロから息をつく間もなく、さゆりと茉莉紗のサックスソリが始まる。
「あんなに指動くかなぁ」
啓二が指をぎこちなく動かす。
「慣れればどうってことねーのかな」
楽器など触ったことのない彼らには、まさに未知との遭遇であった。そのさゆりたちのソリが終わると、彩香がまたアドリブソロを吹く。
「あーやかー！」
声援に片手でピストンを押しながらブイサインを作る彩香。「かっこいー！」と黄色い声が飛んできた。
そのソロが終わるとマーガレットのドラムソロだ。テンションが上がっているのか、テンポをどんどん上げる彼女。しかし、曲が戻る前にテンポを戻していく。
（ドラムセットならまかせて！）
そう言った彼女を正直洋之は心配していたが、杞憂だったなと思っていた。マーガレットのソロに一際大きな拍手が沸く。
そして再現部に入り、曲は一大の盛り上がりを見せて終わりを告げた。
「はい！　キャラバンの到着でした。ありがとうございます！」
大きな拍手が沸く。
「さて！　次の曲の説明をさせていただきます。次の曲はガラッと雰囲気を変えて、宇多田ヒカルの『Ｆｌａｖｏｒ　ｏｆ　Ｌｉｆｅ』を演奏いたします」
高校生や中学生らしい男女から「吹奏楽でもあるんだ」と言う声が沸き、すぐに拍手に変わった。
「ですが！　ちょっと私、先ほどのキャラバンの到着で張り切りすぎて疲れてしまいました」

「えー？　またそんなこと言ってる先生～」
まゆのクラスメイト二人が笑う。
「そこでですね。どなたか私の代わりに指揮をしてはくれないでしょうか？」
ザワザワと観客が騒ぎ始める。
「大丈夫です。簡単は４拍子ですから。テンポもゆっくりですしね。それから……曲を考えると、高校生か中学生くらいがいいですね」
しかし、お互いに「私いいよ」や「俺は恥ずかしい」というような言葉ばかりが聞こえてくる。
「先生！」
夏樹が立ち上がった。
「どうした？　朝倉」
「俺から指名してもいいですか！？」
「おっ！　知り合いがいるのか？」
「はい！」
夏樹は嬉しそうに立ち、客席にいた一人の男子生徒を引っ張り出した。
「な、なんで俺が！」
「いーじゃん！　ほら！」
中学時代のサッカー部の同級生・瀬田（せた）　拓哉（たくや）だ。
「ハズいからマジ勘弁！」
「いーからいーから！」
夏樹はかなり強引に拓哉を前へ引きずり出し、そのまま指揮棒を差し出した。
「こうやって、こうして振れば大丈夫ですので」
「は、はい」
拓哉が緊張した面持ちで恭一から指揮の振り方を教わる。
「そ、それじゃあいきます。１、２、３、４」
拓哉のおっかなびっくりな指揮でも、冒頭のサックスアンサンブルが綺麗に響き始めた。夏樹、茉莉紗、かのこの３重奏だ。

トランペットがそのままメロディを受け継ぎ、木管楽器全員が加わって柔らかいメロディを奏でる。初めのメロディ部分は、トランペットが吹いている。拓哉は視線が泳いでいた。全員が拓哉に視線を向けるせいで、どこを向いていいのかわからなくなったのだ。

クラリネットがメロディを奏でる。ユーフォニウムも加わって、そしてサビへと移った。ホルンのオブリガードが拓哉の耳に入ってきた。

（こっち向いてほしい感じ……？）

順平と杏の視線を感じて、拓哉がホルンのほうへ体を向ける。すると、賢治も嬉しそうに笑ったのが吹いている状態でもわかった。

そして、2回目のサビに入る。サックスとホルンの分厚いメロディだ。ユーフォニウムがオブリガードを吹く。クラリネットとフルートが飾りの伴奏を吹いている。ホルンがメロディから抜けオブリガードを吹き、ユーフォニウムがメロディを吹き始める。

ドラムセットの恵梨が常に安定したビートを叩いているのもあり、拓哉はひたすら4拍子を振り続けていたが、なんとか曲を演奏し終えることができたのだ。

演奏が終わるなり、部員たちが「ありがとうございましたー！」と笑顔で言った。拓哉はオドオドしつつ、指揮台を降りた。

「はい！　貴重な経験でしたね。いかがでしたか？」

拓哉は大きくため息を漏らし、小声で言った。

「緊張して、倒れそう」

拍手と笑い声が起きる。拓哉は汗を拭いながらチラッと夏樹のほうを見た。

（サンキュ）

そう言っているように見え、拓哉はなんとか笑顔を浮かべた。

「夏樹」

本番終了後、楽器を片付けていると陽乃が夏樹を呼んだ。

「なんですか？」

部活時間中なので敬語を使う夏樹。
「拓哉くんに成海くん。来てくれてる」
夏樹が見ると、拓哉と岸本（きしもと）　成海（なるみ）の二人の同級生が立っていた。
「おう！　あ、拓哉。今日は無茶振りゴメンな」
「別にいいけどさ」
そう言ってみせる拓哉。しかし、その表情はあまり良さそうには見えない。
「怒ってる？」
「も、元からこんな顔だって」
顔を赤くする拓哉。すると、成海が割り込んできた。
「コイツさぁ、夏樹のことずーっと気にしてたんだよ」
「え？　俺？」
夏樹は目を丸くする。
「あぁ！　ほら、ヘルニアなっちゃったし……彼女の件もあったしで」
「あぁ……」
夏樹はふと、かつての想い人を想起した。
「大丈夫。まぁ……時々、なんとなく淋しくなるけど、今はもう、吹奏楽あるし」
「そっか！」
成海が笑った。
「成海と拓哉は？　頑張ってる？」
「俺は北松。拓哉は風見台。進路は違うけど、時々こうして会うんだ」
「そうなんだ！　じゃあ、今度からは俺も入れてくんね？」
「だってさ。どうする？　拓哉」
「考えてやらなくもねぇけどな」
２人は素直でない拓哉の言葉に思わず吹き出した。
「朝倉くーん！　そろそろ、行くよ！」
「あ、うーん！」

茉莉紗の声に大声で答える夏樹。
「じゃ、俺行くな」
「おう！」
夏樹が走り始めると、最後に拓哉が彼を呼び止めた。
「夏樹！」
「んー？」
拓哉の中で、吹奏楽部は文化部、大したことないという印象があったが、今日でそれは完全に払拭されていた。
「また、演奏会あんの？」
「いっぱいあるぜ！」
「じゃあ……俺のメルアド、赤外線で送るから、連絡くれない？」
夏樹はパッと笑顔を浮かべる。
「もちろん！」
「それじゃ……よいしょっと」
携帯電話を向かい合わせる二人。無事、送受信が完了した。
「小まめに連絡するな」
「おう。よろしく」
「じゃーな！」
二人は笑顔で手を振って別れた。
夏樹が遅れて茉莉紗たちの元へ駆け込む。
「友達？」
夏樹はしばらく間を置いて、こう答えた。
「ううん！　親友」
夕暮れになり、少しだけ暑さが引いた祭の午後のことだった。

第４０８話　少しでも勉強

「遅いわ！　もう１０時になるじゃない！」
絵美がプリプリしている。春樹が「ゴメン。ちょっと寝坊しちゃって」と謝る。
「まぁまぁ、そないにプリプリせんでもえぇやん……ふあーあぁ～」
「コラ！　緊張感ないわね、そっちはそっちで」
陽乃がペシッと翔の後頭部を叩いた。
「痛っ！　すぐ叩くねんから……」
翔は不服そうにブツブツ言いながら頭を撫でる。
「それにしても、図書館なんて俺、小学生以来かも」
「ウソだろ？　本気で言ってんの？」
慎也の発言に拓真が目を丸くする。
「まぁ……俺、中学時代は不良でしたから。図書館とか図書室とかとは無縁な生活を」
「アッハハ！　慎也らしいじゃない！」
美里がバシバシと慎也の背中を叩いた。
「とりあえず、中では静かにね」
沙希が全員に注意を促した。
翔が自動ドアを開けて図書館の中に入ると、涼しい風が頬を撫でた。思わずため息が出てしまう。
今日の翔たち3年生の目的は、１５日に出演する終戦記念日式典での演奏をするにあたり、戦争というものがどのようなものだったのかを知ろうということで、図書館で調べ物をするためにやって来たのだ。
翔はひとまず、歴史書を中心に捜すことにした。すると、思いのほか戦争の本と言ってもたくさんあることがわかった。

（空襲……これとか、かな）
翔は本を開く。すると、空襲を受けた都市名がズラリと並んでいた。
（３月１０日……東京大空襲。これはオレも知ってる）
本を開くと、次々知っている地名が出てきた。名古屋、大阪、神戸、浜松、福岡、四日市、静岡、岡山、鹿児島。そして。
（横浜……川崎……七海……）
自分の知っている、いま住んでいる地名が出てきたときには思わず目を逸らしそうになった。怯みそうになったが、本を開く。
「ひで……」
言葉が出なくなった。当時はまだ、町であった七海でも４００人近い死者が出たそうだ。横浜大空襲の残りの爆弾をどうやら落とされたというような記述であった。
（気持ち悪くなってきた……）
翔は少し気分転換のために本を閉じ、外へ出ようと静かに歩いていく。すると、前から涙をボロボロ流しながら由美子が歩いてきた。
「ど、どないしたん？」
「こっ……このっ……マンガ……」
由美子の手には『赤い靴はいた』と書かれたマンガがあった。
「マンガ？」
「戦争のっ……原子爆弾と……沖縄のっ……」
それだけで十分であった。気分的に滅入った翔と由美子は外に出てジュースを買う。
「はい。宮部ちゃん」
「ありがと。あっ、お金お金」
「えぇよ。おごる」
「そんなのダメ。はいっ」
由美子はきちんと１２０円を翔に手渡した。プシュッと爽快な音がして、プルタブが引かれる。
翔がグイッとオレンジジュースを飲んだ。蝉の声が聞こえる。

「幸せだよね……」
由美子が呟いた。
「何が？」
翔が聞き返す。由美子はしばらく間を開けてから言った。
「こうして冷房効いた図書館で調べ物できて、嫌になったらジュース飲めるって」
「……うん」
翔も改めてそう感じる。不意に言葉が出た。
「生きたくても……生きられへん人もおんのにな」
「……。」
由美子はそれが、翔の本当の父母ときょうだいに向けられた言葉であるとすぐに悟った。
「とにかくさ。私たちは毎日を一所懸命生きるしかないんだよね」
「ん……」
「難しいことかも、しれないけれど」
「うん……」
蝉の鳴き声が止んだ。すると、自動ドアが開いて陽乃が出てきた。
「あーっ、もう！　二人だけそんなことしてぇ。ズルいよ。早く中に入って何か本、探してよね！」
陽乃の声に思わず笑みがこぼれる二人。
「何笑ってんの！　ほら、戻って戻って！」
「へいへい」
翔は笑いながら図書館の中に戻っていった。

図書館で山ほど本を借りた陽乃。
「お前、そんだけ今日で読むつもりか？」
「もちろん！」
「よぉやるなぁ……」
今日の日付は１２日。本番は１５日である。しかし、それ以前に翔は気になっていることがあった。

「なぁ……陽乃」
「何？」
「明日……やねんけど」
「あっ！　そうだ。言い忘れてた！」
「え！？　何！？」
翔が笑顔になってしまう。自分の誕生日のことを期待してしまうのだ。
「あたしね、明日はエミリンとミサッチと出かけるの！　それでね、なんかお土産ほしいものない？」
「え……ど、どこ行くん？」
「横浜っ！」
翔はポカンとした表情を浮かべた。それから、首を小さく左右に振る。
「えぇよ。別に。横浜なんていつでも行けるし……」
「え？　何、そのつまんない反応」
「べっつにー！」
翔は半分ヤケクソになって大声を上げた。そのまま先に走って自転車置き場にまで行ってしまう。それを見送る８人。
「ちょっと……かわいそうじゃない？」
沙希が苦笑いする。
「ダメよ！　サプライズなんだから。それにちょうど明日は部活、休みでしょ？　この調子ならカケル、きっと一人で音楽室にでもこもって楽器吹くと思うの」
陽乃が鋭い指摘をした。
「じゃあ、最後の打ち合わせだけど……」
今日の集まりは、その意味合いも兼ねているのだった。

「兄ちゃ～ん！　母さんがご飯、冷めるって言うてるで」
「うーん……」
智輝の呼びかけにも素っ気ない翔。

「どないしたん？　元気ないね」
「そりゃあ凹みもするで……忘れ去られてるんやからな」
「何を？」
智輝の言葉にますますテンションが下がる翔。
「なんでもあらへんよ……」
そのまま翔はベッドに横になり、いつの間にか眠ってしまっていた。ふと目を覚ますと、日付が変わる寸前。
「ヤバ！　寝てたんかオレ！　うわ……ご飯……」
ソロリと下に降りるが、既に真っ暗であった。しかし、電気を点けるとテーブルの上にはまだ、食事が並べてあった。それから、友美子のメモが置いてある。

疲れてるんやね。
チンして食べなさいよ。

「……。」
それだけで十分であった。
「お母さんは覚えてくれてるやろ……」
翔はそう思うだけで安心だった。そして、ご飯とおかずをレンジに入れると同時だった。携帯電話が派手に鳴り始めたのだ。
「うぉ！」
驚いてお皿を落としそうになった。しかし、なんとか持ちこたえて皿を置き、電話を手に取った。
「おっ？　珍しい……。泰徳？」
翔が通話ボタンを押す。
「もしもし」
「よっ」
「おう」
久しぶりに聴く声である。
「どないしてん？」

「どないしてんってお前……今日何の日か覚えてないのかよ」
翔はそんなつもりではなかったのだが、やはり幼なじみは幼なじみであった。
「誕生日だろ？　お前の」
「うん……」
「５歳の」
「は？」
「冗談だよ」
泰徳がククッと電話の向こうで笑った。
「本当におめでとう。まぁ……これからも、元気で頑張れ」
「ありがと」
「なんか、つまんないことしか言えないけど」
「それだけで十分や」
翔は心底嬉しそうな声を出した。
それから他愛のない会話をしばらくしていく。ふと、泰徳に定期演奏会の日程が決まったことをまだ伝えていなかったことを思い出した。
「あ、そうや。オレらの定演、１１月２３日になった」
「ホントか？」
「まぁ……愛媛からじゃあ遠いやろから、無理強い全然せぇへんし。日付だけでも覚えててほしいなぁ～って」
「わかった。覚えとくだけ覚えとく」
泰徳がそう答えたときはたいてい、行動を起こすことが多いので念のため釘を刺した。
「言うとくけど、わざわざ聴きに来たりせんでえぇで？　ホンマ」
「わかってるよ。大丈夫」
そうは言うものの、泰徳のことを知っている翔はやはりまだ、不安が拭えない。もう一度、演奏会が近づいてきたら母親づてに何とか無理してまで来ないように伝えてもらうべきだな、と感じていた。
「ほな。わざわざありがとうな」

翔が嬉しそうに礼を言う。
「いやいや。こっちこそ、夜遅くにゴメンな」
「じゃ、また」
泰徳はそう言って電話を置いた。
「あんま元気なかったな……。朝倉さんに忘れられてる、とか」
泰徳は陽乃の顔を思い浮かべた。
「あの人……そんな風には感じなかったけどな」
首を傾げる泰徳。ひとまず、眠気がキツくなってきたので今日は寝ようと思い、寝室に向かうのだった。

第４０９話　平々凡々な朝

「おはよ～……」
夜寝るのが遅かったため、翔が起きてきたのは１０時前だった。
眠そうな目を擦りながらリビングに入ると同時に、突然クラッカーの音がしたので翔はそれで一気に目が覚めた。
「おにーちゃん、ハッピーバースディ！」
智輝がクラッカーを手にしながら、笑顔で叫ぶ。
「翔、１８歳の誕生日おめでとう！」
友美子が大きな箱を両手に持っている。
「どない？　目ぇ覚めたでしょ！」
冨美枝が笑顔で聞く。翔は「一気に目ぇ覚めた！」と満面の笑みで答える。
「はい！　これねぇ、智輝とお母さんとおばあちゃん、お父さんから誕生日プレゼント！」
「マジでぇ！　でも、一気にまとめたなぁ」
翔は笑いながらパジャマ姿のまま、誕生日プレゼントを友美子から受け取る。
「でっかい箱！　めちゃ重いし」
翔は笑いながら包装紙を丁寧に剥がし、箱を取り出した。そしてゆっくり箱の蓋を開ける。
「うおおおぉ……」
それっきり、翔は言葉を失った。
「どない？　ビックリした？」
それは、一眼レフのカメラであった。
「すっげぇ！　え！？　マジで！？　何これ、ホンマに！？」
「ホンマよ。翔、前から欲しがってたでしょ？」
翔は目を点にしたまま、頬を引っ張った。
「痛い……マジや！」

「マジやで！」
「やったああ！　え！　ホンマにえぇん！？　お母さん！」
友美子はうなずく。
「やったー！　いや、マジめちゃ嬉しい！　やったー！　ありがとう、ありがとう！」
翔はカメラを胸元でギュッと抱き締めながら、しばらく部屋の中を飛び跳ねていた。
それから着替え、歯磨きなどを終えて朝食を摂ってから、翔は制服に着替えた。
「あれ？　今日、部活は休みなんちゃうの？」
「うん。せやけど、気晴らしに吹きに行ってくる」
翔は水筒にお茶を入れながら答える。
「そうなん？　せやけどアンタ、今日誕生日やろ？　陽乃ちゃんとか、他の3年生と会ったりせぇへんの？」
「あー……うん」
翔の声のトーンが下がった。
「陽乃は、女子と出かけるんやって。横浜に」
「そうなん？　男の子は？」
「さぁ」
翔はたいして興味なさそうに答えた。
「とりあえず、オレは夕方まで楽器吹いてそのまま帰ってくるわ」
「昼ご飯は？」
「コンビニで適当に買うわ」
「そう……。あ、晩はアンタの好きなハンバーグと、それからチョコレートケーキ買っとくからね」
「マァジで！　めっちゃ嬉しい！　楽しみにしとく～！」
「楽しみにしといてよ！　ほな、気をつけてね」
「うん！」
翔はご機嫌で靴を履き、家を出た。
「うわぁ……暑い……！」

外へ出ると、蝉の大きな鳴き声が聞こえ、眩しすぎる夏の日差しが翔に降り注ぐ。陽射しで暑くなったサドルに跨り、翔は軽快に自転車をこいでいく。

つくし野川の土手沿いを、サッカー部らしい集団が走っている。日傘を差しながら、プードルと散歩しているおばあさんがいる。川では、子供たちが水の掛け合いをしていた。時たま、歓声が聞こえる。

いつもと変わらない、少しだけ遅い朝だった。

「閉まってるやんけ」

校門はお盆の時期でほとんどの部活が休みということもあり、閉められていた。しかし、昨日のうちに翔は恭一に確認して、彼が出勤していることを知っていたのでインターホンを鳴らした。

「はい」

「あ、先生！　おはようございます！　佐野です」

「おぉ、おはよう！　いま開けるからちょっと待っててくれ」

「はーい」

翔は恭一が来るまで塀にもたれてしばらく待っていた。日陰とはいえ、やはり暑い。

「島根行くときも、お茶とか忘れんようにせんとなぁ……。でも、日本海側って涼しいんやろか。いや……なんか、フェーン現象で暑くなるとか聞くなぁ」

そんなことを考えているうちに、門が開いた。

「それにしても、佐野」

校舎内に入ると少し涼しくなった。入ると同時に、恭一が口を開いたのだ。

「はい？」

「今日、お前誕生日だろう？　練習なんてしてていいのか？　ほら、3年生で揃ってお祝いとか、しそうじゃないか。お前らなら」

翔があからさまに落ち込んだ。

「いやいや、先生ね。完全にアイツらオレの誕生日なんて忘れてる

んですよ……。誰一人、そんな雰囲気見せへんかったんですよ？昨日会ったのに」

「そうなのか？」

恭一は驚いた表情を隠せないようだった。

「ホンマですよ～。先生ですら覚えてるのに」

「先生ですら、とはなんだ！　すら、とは」

恭一が笑いながら小さな拳で翔の頭を小突いた。

それから職員室に入る。冷房が効いた職員室は、生徒にとっては天国のような場所である。翔も冷たい空気を思い切り楽しんでいた。

「ほら。音楽室と部室の鍵」

「ありがとうございます！」

翔は鍵を受け取る。

「あれ？」

翔が素っ頓狂な声を上げた。

「どうした？」

「いや……。音楽室のキーホルダーって、こんな赤色でしたっけ？」

「あぁ。あれだろ？　前のブルーのやつ。ちょっと昨日、傷んでたせいかちぎれちゃってさ。新しく替えたんだ」

「へ～。そうなんや」

翔が少し名残惜しそうに言う。

「前のほうが良かったか？」

「オレらが1年の頃からのんでしょ。ちょっと愛着があって」

翔がフヘッと笑った。

「へぇ～。お前も意外とカワイイところあるんだな」

「意外ってなんスか。オレは常にカワイイんですよ！」

「自分で言うな」

恭一と2人で笑い合う翔。

「先生、夕方まで練習してて大丈夫ですか？」

「先生は大丈夫だけど、お前が無茶してバテないようにしろよ」

「はーい！　ありがとうございまぁす」

そう言って翔は元気よく職員室を出て行った。
「暑っつー！　やっぱ外は地獄やな……」
翔は汗を拭いながら階段を上がり、音楽室の前に立った。
「ったく……。彼女が彼氏の誕生日忘れることなんてあんのかい。オレは陽乃の誕生日覚えとったのに……」
ぶつくさ文句を言いながら鍵を開ける翔。
「あれ？」
しかし、開けたはずにも関わらず、なぜか逆に鍵が掛かってしまった。
「なんでやねん。おとといちゃんと鍵かけたし……。あれ？　勘違いやったんやろか」
ひとまず、もう一度鍵を差し込み、扉を開く。
「相変わらず重たいなぁ……」
ガラガラと防音扉を開く。これといって変わった様子はない。
「閉め忘れか……。今日来てよかったぁ」
部室の鍵を今度は開ける。しかし。
「あれ？」
開けたはずの鍵がまた掛かっていた。
「おっかしいなぁ……。オレ、誕生日忘れられたショックでボケてる？」
翔は自虐気味に笑いながら部室の戸を開けた。それから部室に入り、カバンを置いて楽器の準備を始める。
リードを選び、楽器を組み立てて譜面台を準備する。楽譜はコンクール用の課題曲と自由曲を準備した。
「？」
音楽室に移動しようとしたとき、ちょうど部室の反対側、音楽室の黒板に何かが当たるような音がしたのだ。
「……なんか、おかしいな」
翔は不安になり、恭一に内線電話を掛けようか迷った。しかし、何かの勘違いで何もないのに恭一を呼ぶのもはばかられたので、ひ

とまず自分で状況を確認することにした。
ソロリと廊下を歩き、緊張した面持ちでドアに近づく。そして、ドアを引こうとすると突然、勝手にドアが開いたのだ。
「うわ！？」
驚いて尻餅をつきそうになる翔。そして、よろめいて少し後ろに下がると同時に、何度も翔が聞いたことのあるメロディが流れてきたのだった。

第４１０話　Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ！

翔の耳に届いてきた音色はチューバ、ユーフォニウム、トロンボーン、そしてトランペット。吹いているのはもちろん拓真、春樹、慎也、そして陽乃である。

バックコーラスで美里、絵美、由美子、沙希が歌っている。

「ハッピバースディ、かーけるー！」

聞き慣れたバースディソングの歌である。翔はポカンとした表情で歌を聞いていた。そして、演奏と歌が終わると左右から麻綾、さゆり、夏樹、はるか、茉莉紗、かのこが飛び出してきた。同時にクラッカーが鳴り響く。

「佐野先輩！」

「お誕生日！」

「おめでとうございまーす！」

そこまで言われても、翔はまだポカンとしたまま。

「あれ？　反応薄くないですか？　センパーイ」

茉莉紗が心配になって翔の前で手を振る。

「なんで……」

ようやく翔が口を開いた。

「なんで……？」

「なんでって、先輩のバースディですよ今日は！　だからお祝いです！」

さゆりが笑顔で答える。

「せやけど……なんで？　３年生……女子で、今日出かけるんちゃうかったん？」

由美子が「わ！　真に受けたんだね！」と驚いている。

「やだなぁ、佐野くん。そんなの、これをするための口実っていう

か、ウソに決まってるじゃない！」
「……。」
美里の言葉にも、まだ半信半疑のようでポカンとした表情のままの翔。突然、頬を引っ張り始めた。
「痛い……」
翔はそれからようやく笑顔になった。陽乃が楽器を置いて翔の前に立つ。
「１８歳のお誕生日、おめでとう！　翔！」
「……おおきに！　ありがとう！」
はるかが翔の背中を押す。
「さぁさぁ！　主役はこの席に座ってください！」
「ちょお！　押さんでも行く行く！」
笑いながら席に案内される翔。
「さぁさぁ！　みんなも座って、座ってー」
麻綾が促す。３年生全員と、サックスパートのメンバーが揃って翔を囲むように座る。そして、正面には音楽の授業でビデオ学習をするときに使うテレビがあった。もちろん、テレビの電源は入っている。
「？」
翔が首を傾げる。
「綾音ちゃーん！　お願い！」
陽乃の言葉で「はぁーい！　了解です！」と綾音が部室から顔を出してビデオをセッティングした。
「何！？　綾音！？　アイツ、家におらん思ったらこんなトコおったんかい！」
翔が立ち上がろうとする。
「まぁまぁ！　座って座って」
翔を何とか慎也が抑え、そのまますぐにビデオが始まった。
ビデオに映っているのは、七海高校ではない音楽室らしき場所であった。

「ねぇ、映ってる？」
聞き覚えのある声。
「映ってるんちゃうか？　どないや？」
「赤いランプ点いてる。大丈夫ね」
それからすぐに、二人の男女が姿を見せた。
「よぉ！　誕生日おめでとう！」
姿を見せたのは、優衣と修平だった。
「なんや！　何やっとんこの二人！」
驚いてのけぞる翔。
「あれやで、これ、ビデオレターっていうヤツやで」
修平が笑う。
「本当は、一緒にお祝いしたいんだけど。風見台、ちょうど佐野くんの誕生日の前日から合宿なんだよね」
優衣が残念そうに首を左右に振った。
「せやから、朝倉さんと綾音ちゃんに無茶言うて、こないしてビデオ撮るから当日、再生してくれへんかって頼んでん。どないや～、ビックリしたやろ！」
「ビックリさせすぎや」
翔はクックッと笑った。
「お前、あれやで。こうしてる間に俺ら、バリバリ練習してるからな！　東関東、お前らもしっかり頑張って全国狙え！」
「えらっそうなコト言いよるわ！」
そう言いつつ、嬉しそうな顔をする翔。
「まぁ、修平こんなこと言ってるけど。正直言って、ウチもギリギリだからね～。七海高校も頑張ってね！」
「濱口さんは優しいなぁ」
修平とはまったく違う口ぶりで言う優衣の言葉に、翔はまた違う笑顔を浮かべた。その後、改めて誕生日のことを話す二人。それからしばらくすると、シメの挨拶のようなものをして、ビデオが一旦終わる。

「まだ何かあんのか？」
「あるよね！　ねっ」
絵美がニコニコしながら言う。３年生全員が楽しそうな表情をしていた。
「映ってる？」
ビデオが突然、再生された。画面が映ったという言い方のほうが正しいのかもしれない。
「あぁ、映ってるっぽい。赤いランプが録画ってトコに点いてるから」
「ＯＫやな」
関西弁であった。翔も、その声にどこかで聞いたことがあるというような表情を浮かべている。
「よし！　じゃ、いっせーのーでで全員カメラの前出るでぇ」
「ほーい！」
「いっせーのーで！」
そして飛び出してきたのは男子４人、女子３人であった。
「うわぁ！　え!?　いつの間にこんなん撮ったん!?」
翔が驚いて陽乃に聞く。
「ウフフー！　それはまぁ後で！　とりあえず、皆からのメッセージ聴いて！」
画面に映ったのは、翔の中学時代の親友たちであった。稲元　友也、鈴広　勝明、福崎　啓一、そして内山　大輔。女子は岡原　玲、川島　海里。そして、雪子であった。
それぞれのメッセージを懐かしそうに聞いている翔。
「ヤバいなぁ……皆に会いたくなってきた」
翔がふと呟いた。すると、今度は大輔が前に立つ。
「えっと……とりあえず、翔に報告しとかんとアカンことが……」
しかし、何か戸惑っている様子が翔にもヒシヒシと伝わってきた。なんだか周りもムズがゆそうな表情をしている。
「えーと……」

大輔がモジモジしていると、横から体育会系の啓一と友也が「おぉい！　しっかりせぇや！」と茶化してきた。大輔がすぐに「やかましな！　わかっとるわ！」と反論する。
「えーと……ビックリせんと聞いてください！」
そして、大輔は言った。
「おれ……永井さんと付き合ってます！」
「……。」
一瞬の沈黙。これには、3年生全員が声を上げた。
「マァジでか!?」
「やー！　ゆ、雪ちゃんいつの間に!?」
沙希と由美子が真っ赤になっている。すると、画面の端から雪子がヒョコッと顔を出した。
「ゴメンね！　隠すつもりはなくて……。ただ、なかなか言う機会もなくて」
そう言っている雪子が、本当に嬉しそうだった。
「どないやー?」
友也が顔を出す。
「お前も、美人な彼女いとんやろ?　かける！」
勝明がニヤニヤしながらビデオ越しに翔に聞いた。陽乃と翔があっという間に真っ赤になる。
「こんな風にお前らも幸せになー」
啓一がニコニコしながら言った。
「ねぇ、知ってる?」
玲が飛び出してきた。
「女の子は、16歳にはもう結婚できんねんで！」
海里が言った。そして、友也が引き取る。
「そんでもって、男は18歳で結婚できんねんぞ～」
それを最後に、イヒヒヒ！と男子のいやらしい笑い声が聞こえてきた。
「……。」

「……。」
陽乃と翔が顔を合わせる。
「やぁだ！　何意識してんのよー！」
美里が思い切り翔の背中を叩いた。
「痛いなぁ！　バカ力女！」
「なんですってー！？」
「まぁまぁ、ストップストップ！　さて、ビデオレターも終わったし、そろそろお菓子とかケーキ、食べよう！」
ケンカ腰になっている翔と美里を無理やり引き離し、陽乃がケーキやお菓子を準備しているテーブルに向かった。
「それじゃあ！　改めて」
拓真が音頭を取る。
「かけるの１８歳の誕生日を祝って、カンパーイ！」
「カンパーイ！」
カァン！と軽快な缶同士がぶつかる音が響いた。
それから、他愛のない話などをする３年生やサックスパートの面々。すると、翔の隣に慎也がやって来た。
「おい、翔」
「うん？」
「お前、ホントに朝倉さんと島根大学、目指すわけ？」
「うん。そりゃもちろん」
「そっか……」
慎也がクイッとグレープジュースを飲む。
「同棲とかすんのか？」
ブッ！と翔がジュースを吹き出した。絵美が「やだぁ！　何！？」と顔をしかめている。
「ごっ、ゴメンなんでもない！　大丈夫！」
翔は急いでティッシュを取り出し、吹きこぼしたジュースを拭き取る。
「ったく！　いきなり何言いよんねん！」

「だって、男女が同じ大学行くんだから……」
「そんなことするかい！　陽乃は女子寮、オレは単身者マンションみたいなトコ入るねん！」
翔はプリプリしながらジュースを拭き取り、ティッシュをゴミ箱に放ってからお菓子を口に運ぶ。
「でも、お前向こうで先生なるんだろ？」
「うん」
「朝倉さんは？　就職とか」
「……島根でするって」
「え？　ホントか？　だったら……」
「そっから先はオレに言わせて」
翔が恥ずかしそうに、しかし嬉しそうに続けた。
「まぁ……あれよ」
翔は顔が真っ赤である。聞いている慎也も赤くなり始める。
「ゆくゆくは……け……結婚とか……したいなぁって……思ってる」
慎也がクイッとジュースをあおった。
「そっか」
翔の鼓動がドクドクと鳴っている。
「いいと思う」
慎也がはっきりそう言った。
「冗談とかじゃなくて……だからな」
「……ありがとう」
翔は心の底から嬉しそうに言った。
「いつ、それを考えてるって言うつもりなんだ？」
「とりあえずは……入試終わって、二人とも合格が決まったらやな」
慎也はそれもそうか、と思いうなずいた。
「頑張れよ」
慎也は何も特別な言葉を使わず、端的にそう言った。
「ありがとう」
翔はそれに応えるように、満面の笑みでそう答えた。

第４１１話　楽譜調べ

蝉の鳴き声がする中、恭一は一人部室で楽譜棚の前に立ち、いろんな楽譜を広げていた。彼の目的はただひとつ。定期演奏会での演奏曲目を決めることだ。

とはいうものの、第1部は既に選曲済みであった。課題曲と自由曲、それから合宿中に配布した楽譜の4曲構成でいくつもりである。第2部に関しては、しおりに依頼してマーチングを行うことになっている。ただし、練習時間はほとんどないに等しい。今年は東関東大会に進んだ兼ね合いもあり、マーチングコンテストへの出場は見送ったためである。

さらに、他の行事もまだまだある。敬老の日コンサート、体育祭、七海祭、留学生お別れ会、高校生総合文化祭である。おまけに、今年の七海祭は3年に一度回ってくる音楽祭である。毎年演劇祭、美術祭、音楽祭が順々で巡ってくる。今年は音楽祭であったので、コーラス部、ジャズ研究会、管弦楽団、吹奏楽部がメインとなって舞台を構成するのだ。この音楽祭には市の教育委員会の人たちも招待する。近隣住民ももちろん無料で入場・観覧可能である。

昨日、光治に会った時にはずいぶんと期待しているような素振りを見せられた。七海高校の東関東大会出場は近所でも話題に上っているそうである。

それほど大事になっているとは思わなかった恭一は、頭を掻きながら色々と思いをめぐらせていた。

既に楽譜の入った封筒は２０冊ほどが出されていた。どの曲も良い曲ばかりなのだが、必然と大曲ばかりになってくる。部員たちの負担を考えると、あまり大曲ばかりを選んでしまうとどっちつかずで中途半端な仕上がりになりそうだと思うと、思い切ることができ

なかった。
　かといって、ゆっくり選曲しているような時間もあまりない。
「どうしたもんか……」
　すると、扉をノックする音が聞こえた。
「はい？」
　ガラガラと扉を開けて入ってきたのは、しおりだった。
「こんにちは～。東先生、ご無沙汰してます」
「あぁ、神崎さん！」
　恭一は持っていた楽譜を机に置いてしおりのほうへ近づく。
「このたびはおめでとうございます」
「いえいえ」
　しおりと樹は、９月の最初の日曜日に結婚することになっている。
もちろん、恭一も彩と一緒に招待されている。
「私ももういい年だから」
「よく言いますよ」
　二人は笑いながら自然と楽譜のほうへと向かっていた。
「すごい量。この中から、何曲選ぶんですか？」
「ひとまず、クラシックもしくは吹奏楽オリジナル曲を……そうだなぁ。文化祭の時の音楽祭と、高校生総合文化祭、留学生お別れ会のことを考えて３曲は入れたいんですよ」
「それに加えて、先生のことですから……ニューサウンズの曲を入れたいとか、お考えでしょう？」
「わかりました？」
　恭一が笑う。しおりも「もう、長い付き合いですからね」と笑った。それからしおりがいろんな楽譜を手に取る。
「あの子たち……特に、３年生はもう心配しなくても、ちょっとしたソロとかならアッサリ吹きこなしてしまうと思うんですよね」
　しおりの右手が『仲間たちへ』と書かれた封筒に伸びる。恭一の手が『クラウド・バースト』と書かれたものへ伸びた。
　恭一もそれは同じ意見であった。特に翔、陽乃、沙希、春樹の４

人に関しては少々難しいソロを持ってきても問題ないのである。その中でも春樹の実力はずば抜けて伸びてきていた。さすがに音大を受験するとなると、普段から練習やコンディションなどいろんな状況に気を配るようになっていた。

「音楽祭は、あれですよね。ご近隣の方から市教育委員会の方もいらっしゃるんですよね？」

「えぇ」

「となると……」

「オリジナルやクラシックというような少し固い曲でも、なるべく皆が楽しめるような曲にしたいんです」

恭一のコンセプトは、みんなで楽しい音楽をすること、である。難しい曲を聞いて、眠気を誘うようでは子守唄のようなイメージの曲でない限りいけない。彼はそう考えていた。

「となると……音楽祭は、これなんていかがです？」

しおりが封筒を差し出した。

「いいですね！　これ……確か、観客にコレを求めるんですよね」

しおりが笑う。

「おもしろそうだ。それじゃあ、音楽祭はこれっと……」

そこで恭一が別の封筒に目をやった。

「そういえば神崎さん」

「はい？」

「マーチングの曲は、どうなさるんですか？」

「それはもう決まってるんですよ」

そう言ってしおりはカバンから封筒を取り出した。

「ほほう！　なるほど……」

恭一も興味深そうであった。

「ね！　３年生には、各自みんなにソロを上げるつもりです。チョチョッと楽譜をイジれば、１０人分くらいすぐですね」

「１０人ということは、永井も入ってます？」

「もちろん！」

しおりがニッコリ笑って答えた。
「そりゃ良かった。3年生にはまだ言ってないんですけど、永井は定期演奏会の2部から加えるつもりなんです。彼女も部員ですからね」
恭一はそう言って別の楽譜をまた手に取る。
「そういえば先生」
「なんです？」
「あの子たちの引退するときの曲とか、何か考えてるんですか？」
「何にも」
「え？」
しおりは驚いていた。一瞬、それほど惜しみなどがないのかと思ってしまったのだ。しかし、そうではなかった。
「どうせ、アイツらのことです。自分たちの吹きたい曲を言ってくるか、持ってくるでしょう。私が選んでもいいんですけど、アイツらの引退ですからね。自分たちの選んだ曲ややりたい曲を持ってきてくれればいい。1週間前になって何も反応がなければ、こちらから促すようにするんです」
「へぇ～……。先生らしいですね」
そう言われると、恭一が恥ずかしそうに笑った。
30分ほど色々と二人は楽譜を見て、なんとか音楽祭で演奏する曲目は決定した。
「よし。それじゃあ、これを……そうだな。朝倉と佐野が、19日と20日に島根にちょっとオープンキャンパスへ行くんで、帰って来る21日の日にでも配りますか」
「あら？　二人、七海（ここ）を出るんですか？」
しおりが淋しそうに言った。
「えぇ。淋しいですけどね。特にこの二人賑やかなんで」
「きっと皆、そう思いますよ」
恭一は楽譜の入った封筒をまとめながら淋しそうに呟いた。

「フェックション！」
翔がクシャミをする。
「あれ？　風邪？」
陽乃が心配そうに尋ねた。
「いや……。風邪のクシャミはもうちょっとなんかこう、イヤらしい感じがすると思う」
「何それ」
陽乃はクスクスと笑った。
「それより、準備はできた？」
「おうよ！　バッチリ」
「切符も買ったしね」
「まぁ、盆の時期はズレとるから新幹線が混むこともないやろし、そもそも混むとしても時期的には逆方面行くから問題ナシやな」
翔がグーンと伸びをしながら言った。
「来年の今頃は、二人で島根かなぁ」
「せやなぁ。合格して、島根やなぁ！」
翔のニカッとした笑顔に陽乃は不安が少し消えた。というのも、先日返却された塾の模試での結果は見事「E」だったからである。
「なぁ！」
「何？」
「オレな、ミーハーなこと言うけどちょっと島根行ったら付き合うてほしいことあんねん！」
「えー？　何？　変なことじゃないでしょうね」
翔はコソコソと耳打ちした。
「わ！　それ、あたしも行きたかったの！」
「やろ！　絶対行こうな！」
「約束ね！」
二人はニコニコ笑いながら指切りを交わした。
日が暮れなずんでいく。
「……こないして、七海を歩くんも半年くらいしかないんか～」

「寂しい？」
「ちょっとな」
そう言って翔はつくし野川を見つめた。
「時間あるし、夕陽沈むまで座ってよっか」
「そうしよっか！」
二人は土手に座って、夕陽が沈んでいくのをしばらく見守っていた。

第412話　会いたかった

「そういえば。重たいのに持って帰ってきたの？」
陽乃が別れ際に、翔の右手にあるサックスを見て聞いた。
「うん！」
「なんでまた。明日は練習、一応あるんだよ？」
「最近コンクールの曲の練習してへんから、指さらいのために」
「そっかぁ！　さすが翔だね」
陽乃も驚いていた。翔はへへッと笑いながら楽器を大切そうに握り締める。
「ほな、明日は……8時過ぎにオレ、行くからお前ん家」
「了解！　また明日ね」
「バイバイ！」
そう言って二人は津上橋のところで分かれた。翔は自転車に跨り、楽器ケースを慎重にカゴに入れてからゆっくりと自転車を漕いで行く。
「うわわ！　ブレーキブレーキ！」
いつもの坂道で思いのほか速度が出たのでブレーキを掛ける。それから道路を横断すると、翔の家はすぐそこだ。
「よいしょっと」
自転車を停め、楽器ケースをゆっくりと置く。
「あ、おかえり」
智輝が2階の自分の部屋から顔を出して声をかけた。
「おう。ただいま」
「姉ちゃん、おったやろ？」
ニヒヒッと笑う智輝。どうやら、彼もサプライズパーティーのことを知っていたようだ。
「智輝も知っとったんか。グルやな」

「へへ！　姉ちゃんがめちゃ怖い顔で絶対内緒やで！って言うから」
「誰が怖い顔やて！？」
綾音の声が奥から聞こえてきた。
「おぉ、怖！　兄ちゃん、そろそろご飯やから早く早く！」
「おう。すぐ行く」
その時だった。
「あの……」
翔を呼ぶ声がした。
「はい？」
翔が振り返ると、７０歳前後のおじいさんとおばあさんが立っている。そして、おばあさんのほうが翔を見るなり持っていたカバンを落として両手で口を覆った。
「……あぁ！」
そのまま泣き崩れてしまうおばあさん。
「え？　え？　あの……」
翔が戸惑っていると、友美子が窓を開けた。雨戸を閉めるつもりでいるらしい。
「かける！　何やってん……」
友美子の声がすぐにしぼんだ。そして、おじいさんが深々とお辞儀をする。
翔はわけのわからないまま、間に挟まれてボーッとしていた。

「どうぞ」
綾音がお茶をおじいさんとおばあさんに差し出す。
「おおきにね」
自分たちと同じ関西弁を話す老夫婦。綾音はそっと翔と二人の顔を見比べた。よく見れば、おじいさんのほうと翔の目元がよく似ている。
「綾音、智輝」
「うん。智輝、上にあがろ。宿題見たるわ」

空気を察したのか、智輝も黙ってうなずいて席をはずした。
「……。」
「……。」
会話が生まれない。沈黙ばかりが続いた。
「あの……」
友美子が耐え切れなくなり、言葉を発したと同時だった。
「突然、申し訳ありません」
おばあさんがうなだれた様子でそう言ったのだ。
「いえ……」
状況がまだ飲み込めない翔が、友美子に聞いた。
「お母さん……この人たちは？」
お母さん、と言う言葉におばあさんが寂しそうな表情を浮かべた。
「うん……あのね」
すると、おじいさんのほうが友美子の言葉を遮った。
「それは、わしたちのほうから」
「そうですか？　でも……」
「させてください」
友美子は小さくうなずいた。
「初めまして……っていうのも、変やねんけどな」
おじいさんが自己紹介を始める。
「私の名前は、大中　道雄と申します」
翔がハッと表情を変えた。
「ばあさん」
おばあさんがうなずき、言った。
「私は、大中　房枝と申します」
「大中……それじゃあ」
翔がおそるおそる聞いた。
「君の……こんな言い方はマズいかもしれないけれど……実のお父さんお母さんの……父方のおじいちゃんに当た」
そう言い掛けたときだった。翔が、思い切り道雄と房枝を抱き締

めたのだ。
「会いたかってん……！」
翔が震えながら二人を抱き締める。ようやく、房枝と道雄も涙を流して翔を思い切り抱き締めた。
「突然、来てしまってごめんなさい」
友美子は房江の言葉に首を横に振る。
「今日が……この子のお誕生日ってご存知で、来られたんでしょう？」
友美子が聞くと、二人はうなずいた。
「オレの誕生日、覚えてんの？」
翔が驚いて目を丸くする。友美子が続けた。
「せやで。翔、毎年お母さんから年齢に合わせたロウソク、バースデーケーキに差してたん、覚えてる？」
翔は大きくうなずいた。
「あれねぇ。おじいちゃんおばあちゃんが毎年、手作りで送ってきてくれはってんよ」
「え？」
「おじいちゃんとおばあちゃん、ロウソク工場を昔営んではってね。それで」
「そうやったんや……」
毎年、バースデーケーキにはロウソクが付いていた。翔は特に意識していなかったが、いま思い返してみれば綾音と智輝にはロウソクが付いていることはほとんどなかった。付いていても、たまにであり、しかも1本か2本ほどだった。二人がそれについてどうこう言うこともなかったが、翔のは毎年1本1本、増えていった。それを不思議に思ったことはまったくなかったのだが。
「今年はね……まぁ、お母さんが連絡してんけど。翔、来年から島根やっていうこと伝えたんよ。それもあってですか……ね？」
友美子の言葉に二人がうなずく。
「ロウソク……手渡したかったんです」

房枝が震える手でロウソクを差し出した。
「嫌がられるかもしれへんし、友美子さんたちに不快な思いさせるかもしれへんと思ったけど、どうしても……」
「いえ！」
翔が笑った。
「会いに来てくれて、めっちゃ嬉しいです！　正直、父さん母さんの話知ってから、ずーっと気にしとったから」
房枝が涙を流し始める。
「ね、ばーちゃん。じーちゃん！」
翔が覗き込むように言う。
「母方のじーちゃん、ばーちゃんは？」
「神戸で元気にしてはるよ」
「ホンマ！？　うわぁ～、オレ二人にも会いたい！　なぁ、受験終わって島根行く前に、行ってもえぇ！？」
友美子が「当たり前やろ！」と答えた。
「よっしゃー！」
翔が嬉しそうに声を上げる。
「なぁ、じーちゃんばーちゃん！　今日、こっち泊まるんやろ！？」
「え？　あぁ、うん……」
「明日な！　終戦記念日の式典でオレら、演奏すんねん！　聴いて帰って！」
「え？　でも……」
「えぇやん！　なっ！」
「……ほな、お言葉に甘えて」
「やりー！　絶対やで！」
翔は満面の笑みでそう言った。
そのうち、綾音や智輝も下に降りてきて、帰ってきた昭も加わって佐野家と房枝、道雄の7人で夜遅くまで賑やかな声が響いていた。

第４１３話　『平和への行列』

「きっ……緊張するなぁさすがに」

慎也がソワソワしながらチラッと座席のほうを見た。参加者の席は５００人分ほど用意されている。そして、今回は終戦記念日の式典ということもあり、市長や副市長、各方面の重要関係者などが多く参加しているのだ。

中でも緊張の色が隠せないのは美里、洋之、佳菜の３人だ。美里と洋之はホルンとサックスのメロディが終わってすぐにソロがある。さらに、佳菜は２人の音量が落ちてすぐにソロがある。完全に目立つ部分なのだ。

午後０時。

サイレンが鳴り響くとともに「黙祷」という声が響いた。

翔たちも目を閉じ、１分間の黙祷をする。はるか昔、という印象さえ抱くような戦争という無惨な出来事があった時代。しかし、それは紛れもなく日本でも起きていた出来事なのだ。

そして市長の挨拶が終わり、いよいよ翔たちの出演時間となった。

平和への行列。

全体として、短調で構成されるこの曲。タイトルの「平和」とは、何も戦争がない時代、という意味だけではない。内紛、環境破壊、あるいは自然災害。こういったものがない、安寧な生活が送れる、平和とは各個人あるいは地域、人種、国家によって捉え方が大きく異なるものだろう。

翔たちの中で記憶のある「戦争」といえば、２００１年のアメリカ・ニューヨークで起きたアメリカ同時多発テロである。特に、世界貿易センタービルに旅客機が激突、その後ビル自体が崩壊するシーンは翔たちが１１歳、駿たちは１０歳、夏樹たちは９歳の時に起

きている。夏樹たちはあまり記憶がないそうだが、駿たち以上はそれなりに記憶にとどめている。

それだけではない。それ以降、関東地方でも揺れを観測した新潟県中越地震、新潟県中越沖地震、偶然とはいえ中学生と交流を育むキッカケとなった能登半島沖地震など、自然災害だけでも翔たちの日常を揺るがしかねない災害も多発した。

自然災害を防ぐことはできない。しかし、未然に予想される被害を最低限に抑えることはできる。戦争などは、自明のことだがそうした方向へ持って行かないようにすれば良いのだ。

それができれば苦労はしないというところだけれども。

それを訴える。曲で、何かを感じ取ってほしい。翔たちはそう願っていた。

指揮台に上がる恭一。スッと指揮棒を上げ、一気に振り下ろした。

金管楽器の打ち込みと同時に、アルトサックスとホルンによる勇ましいメロディが始まる。恭一は特にホルンの音色を目立たせるようにと要求していた。順平、賢治、杏、裕子の４人が冒頭から全力で演奏をした。

翔、麻綾、さゆり、夏樹の４人は順平たちの音色をしっかりと支えるつもりで吹いている。位置的に、ホルンの面々の姿は見えないが、しっかりと耳を彼らのほうへと集中させ、邪魔をしないように、むしろしっかりと調和するように心がけて演奏する。

房枝と道雄は、長い間目にしていなかった孫の姿をしっかりと目に焼き付けていた。隣で友美子が説明する。

「翔の吹いてる楽器、一志くんのんですよ」

「ホンマに？」

房枝が嬉しそうな声を上げた。

「えぇ。あの子は最初、知りませんでしたけどね。あたしたちが渡したんです」

「ホンマにぃ……」

房枝が目を細める。

メロディがトランペットとトロンボーンに引き継がれ、いったん音量が下がった。美里のスネアドラムがどこか荘厳で、しかし慎重な雰囲気を醸し出す。洋之のティンパニがそれを受け継ぎ、交互に彼らがメロディを奏でていく。恵梨のシンバルが時たま、彼らの演奏をどこか制御するように優しく、しかし強く入る。

恭一の指揮が止まったように見えた。実際には非常に小さく振っている。そして同時に始まったのは佳菜のソロだ。佳菜はここで民衆を率いる先導者の役割を果たしている。緊張で顔は強ばっているが、音色はいつもの佳菜のものだったので、恭一も安心していた。そのメロディ形式をクラリネットやフルートが引き継ぐ。そして、再びトランペットとトロンボーンのメロディ。

基本的には同じメロディを繰り返すこの曲。だからこそ、マンネリしないようにメリハリをつけるように恭一は求めていた。

アルトサックスとホルンのメロディが再び始まる。しかし、冒頭とは異なりどこか軽やかな印象を与える。そして再びトランペットとトロンボーンのメロディ。裏ではホルンとアルトサックスがグリッサンド形式の裏メロを吹く。

陽乃、彩香、勇、綾音、流。

慎也、亜紀、沙知、雛乃、徹。

１０人のベルが一斉に綺麗に上を向く。そして、ファンファーレ調のメロディが始まり、同時に長調へと転調する。

一気に音量が下がり、始まったのはユーフォニウム、バスーン、バスクラリネットなど木管低音と金管中低音によるメロディだ。この部分は戦争と戦争の合間、つまりこの部分こそまさに「平和」な部分を表現する箇所なのだ。

ホルンのグリッサンドやクラリネットの優しいメロディ、そしてそれらを引き継ぎトランペットが勇ましいメロディを吹き上げる。平和な時代の到来を歓喜する。しかし、それも長くは続かず、スネアドラムの打ち込みをキッカケにＦマイナーに転調した。

冒頭のＤマイナーとメロディ形式は同じだが、まったく与える印

象が違う。どこか寂しげで、憂いを持ったメロディだ。
ユーフォニウムのメロディが終わると、曲はフィナーレに向かう。ホルンとアルトサックスの裏メロ、トランペット・トロンボーンのメロディが再び始まる。八分音符でメロディが掛け合いになる。
そして、恭一が高音楽器と低音楽器に交互に指揮を出した。交互で打ち込みが入る。音量が下がり、再び八分音符による掛け合い。クラリネットなどが伸ばし音を吹き、音量が次第にクレシェンドされていく。
木管楽器によるメロディの後、全員でFの音を吹く。ここは、長調なのか短調なのかは定かでない。つまり、戦争・平和・戦争という形式で来たこの曲の最後は、聴いている者に委ねられている。平和なイメージを抱かせる長調であるのか、あるいは陰鬱な時代イメージを抱かせる短調なのか。それは、聴いている者次第なのだ。
演奏が終わると、しばらくの間沈黙が起きた。そして、恭一の指示で起立すると同時に拍手が沸き起こった。

「お疲れさん！」
翔が佳菜、美里、洋之に順次声を掛けていく。
「ありがと！　めっちゃくちゃ緊張したよぉ」
美里が汗を拭う。洋之は爽やかな笑顔で嬉しそうにしている。佳菜がヘナヘナと座り込んだ。
「あんなに緊張したにょ、久しぶりです」
「にょって何！？」
ドッと笑い声が起こった。
「翔」
声がしたので振り返ると、友美子たちの姿があった。
「ホンマに来てくれたんやぁ！」
翔が嬉しそうに房枝たちのほうへトトトッと駆け寄った。
「おおきにな！」
「こちらこそ……翔の演奏、聴けてよかったわぁ」

房枝が大粒の涙を流し始めた。翔は慌ててポケットからハンカチを取り出し、涙を拭う。「わぁお、紳士じゃん。アンタのダンナ。よくできてるねぇ」
「ダンナじゃないよ」
美里の冷やかしに陽乃が歯がゆそうに言い返す。
「あっ！　紹介するわ！　あんな、オレの彼女の朝倉　陽乃さん！」
「ほう！」
道雄がメガネをかけてしげしげと陽乃の顔を見る。
「こりゃあベッピンさんやな！　驚いたわぁ」
「こ、こんにちは！　朝倉と申します」
「えぇねぇ。若い子はお肌がツヤツヤ」
房枝が羨ましそうに笑った。陽乃はどことなく恥ずかしそうにしている。
「あんな、陽乃。こちら、大中のおじいちゃん、おばあちゃん」
陽乃の顔が「なるほど」というものになった。房枝が「ご存知なの？」と聞き返す。陽乃はやわらかい笑顔で「はい」と返した。
「そう……。翔のすべてをもう、知ってるんやね？」
ボッと2人の顔が真っ赤になる。
「あら！　そんな変な意味ちゃうんよ！」
「わ、わかってるって！　なぁ！？」
「う、うん！」
ドッとそこでまた笑いが起きた。

「じゃあ……えーっと。明日だけど」
房枝と道雄を見送った帰り道。友美子たちの少し後ろを歩きながら、翔と陽乃は明日からの島根行きの最終確認を行っている。
「8時55分、登戸出発。OK？」
「OK、OK。忘れ物さえアンタがしなきゃね」
「電車は特急『やくも』を松江駅で降りて、そこから各駅でJR桜田駅やな」

「うん」
「オッケ！　ほな……明日から楽しみやな！」
「うん！」
目的はオープンキャンパスだが、若干2人で旅行という遊び気分も抜け切れずにいた。
「じゃ、また明日！」
「またね！」
翔は別れを告げた後、陽乃の背中をもう一度振り返って見つめる。
「……。」
正直、もしかしたら……という妄想が頭を巡る。しかし、翔はそれを打ち消すように頭を大きく振って、すぐに自宅へと向かうのだった。

第４１４話　さぁ、行こう！

「めっちゃえぇ天気やないかーい！」
翔が家を飛び出し、思い切り伸びをしてそう叫んだ。しかし、あいにく曇り空である。
「どこがいい天気なのよ。雲ってジメジメしてて最悪～」
陽乃は旅行カバン片手に手をバタバタ仰ぎながら恨めしそうな表情を浮かべている。
「えぇやないか。どっちにしたって、電車の中はずーっと涼しいんやしな」
「まぁ……そうだけど。でもさぁ、島根っていま天気どうなの？」
「えーっと……知らん！」
翔があっけらかんと言い放った。陽乃がしかめ面になる。
「はぁ！？　そこらへんちゃんと調べるところでしょ？」
「あー！　そんな西日本の天気なんか普通知らんやろ！」
「なにその屁理屈！」
２人がギャアギャア言い合いをしているのを見かねて、友美子が「アンタら、早よせな新幹線乗り遅れるでぇ！」と一喝した。
七海駅から普通電車で登戸駅に行き、そこからＪＲに乗り換え。そして、新横浜駅で新幹線に乗車。
乗車して間もなくであった。陽乃がスゥスゥと寝息を立てているのだ。
「早起きしたんかな……」
クスッと翔は笑って、自分のパーカーをカバンから引っ張り出して陽乃に掛けた。
「うん……」
陽乃が寝返りを打つ。それがまた、微笑ましく見えた。

翔はそれからiＰｏｄを取り出し、ニューサウンズインブラス２００７の曲を聴き始めた。停車駅は静岡、浜松、名古屋、京都、新大阪、新神戸、西明石、姫路、相生、そして岡山駅。そこから特急「やくも」号に乗車。特急「やくも」は岡山を出発し倉敷、備中高梁、新見、米子、松江である。そこから各駅停車に乗り換え、桜田まで行くことになる。

「えーっと……とりあえず今日着いたら１６時１０分っと……思ったより時間ないなぁ。どないしょ……。あ、でもそうか……明日でもええぇんか？」

翔はいろいろと予定を思い巡らせる。

翔と陽乃がどうしても行きたいと思っていた場所。それは、今年２００７年の昼の時間帯に放送された、少女マンガが原作の『砂時計』の撮影場所巡りであった。出雲大社、八重垣神社、仁摩サンドミュージアムなどである。しかし、仁摩サンドミュージアムは少し距離があるので難しいのではないかと翔は考えていた。

「そうなると……出雲大社行きたいけど、ここって……」

美里にそこへ行きたいと言ったら、彼女はこう言ったのだ。

「そこってさぁ、恋人同士で行ったらなんか別れるとか聞くよ？」

翔はとりあえず、出雲大社は一番後の候補になると思っていた。そうなるとやはりまずは八重垣神社あたりだろうかと思っていた。

いつの間にか翔も居眠りしていて、気づけば新神戸駅を出発したところであった。

「陽乃、陽乃」

「う～ん……」

「う～んちゃうわ！　新神戸過ぎたで。あと３駅で岡山や」

「はぁ～い」

陽乃も眠い目を擦りながら起きる。

「昼ご飯、どないする？　やくもで食う？」

「うん！　のどかな風景見ながら食べたいかも」

陽乃は笑顔でそう答えた。

岡山駅で新幹線から下り、今度は在来線ホームへ向かう。無事、乗車予定の特急「やくも」に乗り、出発することができた。
「オープンキャンパス自体は、明日だよね？」
「今日は着いたらもう夕方やからな」
「でも、七海と違ってちょっと日が沈むの遅いよね。西だから」
翔はそれでピンと来た。
「せやな！　それやったら、ちょっとホテルの周辺観光できたりするんちゃう！？」
「あー。でもどうだろう？　明日オープンキャンパスなのに、今日疲れたらマズいしさ。やっぱり、明日の午後くらいに見て回らない？」
「結構ギリになるけどな～」
２人はおにぎりを頬張りながら、予定をいろいろと考えていた。
ふと、陽乃が思い出したように言う。
「そういえばさぁ」
「ん？」
「今朝、行く途中に会ったあの二人。どっかで見たことあるんだけどなぁ……」
陽乃と翔が七海駅へ向かう途中、２年生らしい男女が学校へ向かうところに会ったのだ。しかも、気のせいかもしれないが陽乃と翔のほうを見ていたような気がしなくもないのだ。
「なんであの子たち、あたしたち見たんだろ？」
「自意識過剰ちゃうか、お前。たまたま目ぇ合うただけやろ」
翔はプッと笑いながら大して気にも留めず、島根大学の資料に目を通す。陽乃は「そんなことないと思うけど……」とまだ不服そうであった。
そうこうしているうちに、特急列車も松江駅に到着する。駅に着き、時刻表を見るなり陽乃が驚きの声を上げた。
「ひゃー！　見て、翔！　電車の数少ない！」
これには翔も興味津々である。やはり、七海市や大阪、神戸とい

うような市街地と、のどかな町という雰囲気が一部残る松江市とでは、電車の利用頻度も違うのだろう。その代わり、特急列車が頻繁に停車しているようにも思えた。

普通電車に乗り換え、2駅目が桜田駅である。松江市からそれほど離れていないが、住宅地として開発が進んだ地域だそうだ。

駅から出ると、目の前に5階建てのビジネスホテルらしきものが見えた。

「あそこ？　泊まるとこって」

「せやで」

「同じ部屋？」

翔が予想外の言葉に真っ赤になった。

「アホちゃうかお前！　別々に決まってるやろが！」

「え？　そうなの？　なぁんだ」

翔は陽乃のあまりの天然ボケに、一瞬本気なのか試されているのかがわからなくなりそうであった。

ホテルに入り、受付を済ませて5階へと上がる。陽乃の部屋と翔の部屋は向かいあわせだ。

「向かい合わせかいな」

「そうみたいね」

しばらく沈黙する二人。

「べ」

「別にそんな意識することじゃないよね！」

陽乃と翔は同時にそう言った。

部屋に入ってすぐ、陽乃はカバンを置いてガイドブックを広げた。

「えーっと……。明日はとりあえず、松江のほうが近いから……八重垣神社のほうがいいかなぁ。あ、でも待って。島根大学……あぁ、やっぱり松江だもんね。八重垣神社のほうがいいに決まってる。でもなぁ……出雲大社も惜しいし……」

もはや目的が島根大学なのか、八重垣神社なのかがわからなくなっている。

一方の翔はというと、陽乃とは違い島根大学のパンフレットを開いてベッドで寝転んでいた。
パンフレットを読み、それからすぐに周辺の不動産情報を見る。最初は単身者マンションを考えていたが、よくよく考えるとそんなマンションに陽乃を呼べば何かと問題になるのではないかと考え始めたのだ。
「オートロックマンションとかのほうがええかもしれへんなぁ……。物件あるかな？」
何冊か駅から取ってきた情報誌を見る。
そうこうしているうちに、次第に夜になっていくのだった。

第４１５話　小学校の頃

翌日。残念ながら雨であったが、翔たちは島根大学へと向かっていた。
「あっ！　ファミマや！」
翔が大声を出す。
「ちょっと！　恥ずかしいじゃない。そんな大声出さないでよ」
陽乃があまりにも周囲から視線を集めてしまっている翔に注意を促す。
「せやかてお前、貧乏学生になった場合はコンビニで昼食調達すんのに大切やで」
「そうかもしれないけど、何もそんなに大声で言わなくても……」
「あっ！　見て、あそこ！　なんかロマンキャンドルとかステキなこと書いてる家があるー！」
陽乃が今度は大声を上げてそちらのほうへ走っていく。
「おい！　オレら目的そっちのけやないか！　早く島根大学行こうや！」
翔の言葉に陽乃が顔を赤くする。
何かと注目を集めてしまう二人。そもそも、この島根県で東京弁の言葉が珍しい上に、大阪弁まで聞こえてくる始末である。注目を集めないはずがない。おまけにこの二人。
「ねぇ……あの子、カッコよくない？」
女子学生の声が聞こえる。翔は自分のこととは露知らず、飄々とした感じで島根大学の様子をキョロキョロと見ていた。
「おい。珍しく高校生でも都会っぽい子、おるぞ」
「そうかぁ？　ありゃ派手やけん、苦手やな俺」
（派手……）

陽乃は男子学生の自分の評価を聞いて少し落ち込んだ。派手なつもりはなかったのだが、どうやら見方によってはそう見えてしまうらしい。

「何落ち込んどん？」

翔が陽乃の肩を叩いた。

「えっ！」

「島根大学のレベル考えたら、不安になったんか？」

「そ、そんなんじゃあ……」

「そんな先のこと考えてる暇あったら、いまこの場を楽しもう！」

翔は陽乃に有無を言わさず、手を引いて教育学部の校舎へと走っていった。

「島根大学の教育学部は……自ら学ぶ意欲と考える力を持った教師、子どもに対する深い愛情と、理解力に富む教師……」

さらに、翔は学科のことも詳しく調べていった。

「音楽教育、美術教育、自然環境教育……ぎょうさんあるなぁ」

「でも、翔なら音楽教育なんじゃないの？」

陽乃が笑顔でそう言った。

「そ、そうか？」

「そりゃあ……吹奏楽やってんだし」

翔はウンウンとうなずく。しかし。

「でもちょっと待って。音楽の先生って、担任持てるんか？」

「あ。どうなんだろ」

「うわ！　しかもそもそも、音楽教育行ったら小学校の先生なられへん！」

小学校の先生になるならば、初等教育開発へ入らなければならないのだ。

「ねぇ」

陽乃が不思議そうに聞く。

「なんや？」

「なんで……小学校の先生？」

翔はへへッと笑って若干、ごまかすような素振りを見せた。陽乃も答えを無理強いはしない。

「オレ」

突然、翔が言った。

「阪神淡路大震災で……家族、全員おらへんなって。今の佐野の家に引き取られた後……南大阪の小学校に入って……まぁ、転校に近い感じ、やな」

「うん……」

翔の表情が不意に寂しげになった。

「震災のせいで大阪に来たってだけで、クラスのみんなの扱いが何か、変やった」

「変？」

「なんか……どういうたらえぇんやろ。同情めいた感じ？　想像で、家なくなったとか、家族死んだとか……いろいろ小学生なりに考えたんちゃう？」

翔の言葉に、陽乃は何も返せなかった。

「でもな。そのときの担任の先生が、毎日オレと放課後にいろいろ話してくれて。まだ、震災のことをよく把握してないオレが……言うたら、佐野の家族で被災してそのまま転校、引越ししてきたって思い込んでたオレの話を、よく聞いてくれてな……。それだけでホッとしたん、覚えてる」

「そう……なんだ……」

陽乃は小さくそれだけ、呟いた。

「ゴメン！　暗くしたよな。ちょっと、気分転換に外出よか！」

翔はブンブンと首を左右に振り、外へ向かった。

「おっ！　雨止んでるやん」

嬉しそうに空を見上げる翔。陽乃も隣に来て「ホントだー！　これなら、昼から八重垣神社、傘なしで行けるかもね！

「ゲッ。ホンマに行くんか？」

翔が驚いた顔をする。

「当たり前じゃない。島根大学見学終えたら11時でしょ？　で、住む家2時間ほど見て、1時からご飯食べてその足で八重垣神社」
「ちょっと待てよ。その前にホテル帰って荷物まとめんとアカンやろが」
「えー！？　そんなことしてたら時間なくなるじゃない！」
突然、大学の敷地のど真ん中でケンカを始める二人。
「せやかてお前、今回の目的はオープンキャンパスであって八重垣神社違うねんぞ！」
「そんなことわかってるよ。でも、せっかく島根県に来たんだし、少しくらい観光気分だって持ちたいじゃない」
「悪いけどオレはそんな気分にならられへんわ」
「……。」
陽乃がプゥッと頬を膨らませた。
「……。」
翔が少し言い過ぎたというような表情を浮かべる。
「ゴメン。言い過ぎた」
「ううん。ゴメン。あたしもわがままだったかも」
沈黙する二人。
「ほんなら、こうしよう！　オレが大急ぎで荷物取ってくるからさ！　陽乃は先に八重垣神社へ向かう！」
「え！？　でも、間に合うの？」
「間に合わせる！　任せとけ！」
翔は白い歯を出してニカッと笑った。
その後、単身者マンションとオートロック式のマンションを見比べ、翔たちはひとまず同居はもちろんしないが、お互いオートロック式のマンションに住むことにした。
「ほな、お前は今から八重垣神社な。ほんで、オレはホテルから荷物持ってくる」
「了解！」
そしてＪＲ松江駅で二人は一旦別れた。各駅停車で桜田駅まで向

かい、ホテルに着くと翔は急いで荷物をまとめた。
「あ……。ヤバいな。飲み物あれへんやんけ」
空っぽのペットボトルを見て少ししかめ面をする翔。チェックアウトまで時間はないが、お茶を買う余裕くらいはあった。急いで財布からお金を出そうとする。
「うわ！　１万円札しかあれへん！」
ホテルの自販機は１０００円札しか受け付けてくれない。ホテルの外にはどこに自販機があるのかも知らない翔。かといって、両替をフロントでしてもらうのには引け目を感じた。
「駅で買えばええか！」
そう言って翔は、財布をカバンにねじ込んで急いでフロントへ向かった。

第４１６話　どこかで見た人

「あっ！　すいません！」
翔はたまたま通りかかった女性に声をかけた。
「はい？」
「この辺、自販機ってありますか？」
「えぇ。ありますよ。そこに浦田自転車っていう看板、見えるでしょう？」
「はい」
「そこを右に曲がったら今度はＴ字路があるから、そこを左へ行ってすぐのところにポストがあるんで、そこを今度は右に曲がって、それから十字路をまっすぐ行って、それからまたＴ字路を左へ行けば、コンビニがあるんでそこで買うのもいいですし、自販機もあるので」
「おおきに！　ありがとうございます！」
翔は言われたとおりの道を通る。
「よっしゃ！　まだ走れば電車の時間、間に合うわ」
しかし。行けども行けどもコンビニが見えてこないのだ。
「おかしいな……」
心の中で道順を反芻する。
（Ｔ字路があるから、そこを左へ行ってポストを……右。十字路をまっすぐでＴ字路を……あっ！）
左へ行くべきところを、右へ行ってしまったのだ。そこからさらに何度も右、左へ曲がるのを繰り返し、翔はいま自分がどこにいるのか全然わからなくなっていた。
「しもた……！　引き返さんとアカンけど……場所わからへん」
焦る翔。時間はなくなる一方だ。

「携帯！」
慌てて携帯電話を取り出す翔。しかし、開いたときには既に充電残量が3分の2になっていた。
「ゲッ！　最悪！　と、とりあえず陽乃に連絡だけ……」
陽乃になんとか発信する翔。しかし、発信音の後すぐに留守番電話サービスに接続されてしまう。そうこうしているうちに、使い古している翔の携帯電話はあえなく充電切れになってしまった。ホテルは出てしまったため、充電できるような場所もない。
「……。」
真っ青になる翔。心臓がドクドクと鳴り、急激に不安がこみ上げてきた。知らない町で独りきり。不安がどんどん心を埋め尽くしていく。
結局、３０分近く歩き回ったが駅はおろか、ホテルにすらたどり着けないでいた。雨も上がったことで日が降り注ぎ始め、次第に汗をかき水分が失われていく。お茶もジュースもまだ買えていない状況で、翔は脱水症状を起こし始めていた。
「ウエ……ッ……」
吐き気が催し、思わず座り込む翔。日陰も見つからない、照り返しのきつい路上で翔は息を荒くしていた。
「暑い……」
ゼェゼェと息を荒くしているうちに、翔の意識はどこか遠くへ行ってしまっていた。

「マジで言ってんの？」
「マジマジ。だって、電車の中ですっげー美人見たって」
「えー？　信じらんない。だって、こないだまでドラマ撮影してて、小林涼子とか来てたけどさぁ。そんくらい綺麗ってことだろ？」
「そうそう！」
二人の男子が照り返しのきつい道路でも元気よく話をしている。
「おい」

片方の男子――竹原（たけはら）　優樹（ゆうき）（桜田市立桜田中央高校）が渡辺　和志（同）に声をかけた。
「何」
「あそこ」
優樹が指差した方向に、誰かが座り込んでいる。
「なんだあれ。日向ぼっこ？」
「えぇ？　こんな暑い時期にそんなわけないだろ」
優樹がパシッと軽く和志の背中を叩いた。不審そうな表情をしながら二人が少年に近づく。
「おい……ヤバくないか？」
「これ……ヤバいよな」
息を荒くしていて、顔が赤いにも関わらずほとんど汗をかいていない。元・野球部の優樹は特によく理解していた。脱水症状のことを。
「ここから一番近い家って？」
「サキトん家だろ」
そう言った頃には、優樹はサキトと呼ばれた人物に電話を掛けていた。しかし、応答がない。
「待ってる時間ねぇよ。運ぼう」
優樹がクラクラになっている少年を背負おうとする。
「重い……！　なんだこの人。軽そうに見えるのにガタイいいじゃん。おい、手伝ってくれ」
「お、おう」
優樹に促され、和志が少年の体を支える。
「……。」
もうすぐでそのサキトという少年の家に着くというところで、和志が息を荒くしている少年の顔を見た。
「どした？」
「いや……。この辺で見ない人だよな」
「そりゃあ、道端で倒れてるような人だからな。大方、観光に来て

迷子になったとか」
「迷惑な話だぜ」
そういう話をしているうちに、彼らはサキトという少年の家に着いたのだった。

「……。」
翔がウッスラ目を開けると、友美子の姿があった。
「か……さん……」
「脱水症状みたいね。お茶とか水をしっかり飲んで、今日はここでしばらく休みなさい」
フラフラな思考回路で何とか回想していく翔。しかし、どう考えても自宅へ帰ってきた覚えはない。
ボンヤリとした視界で、翔は周囲にいる人物を確認した。
「春やん……と、拓あん……か？」
春樹と拓真らしき人物が顔を見合わせる。
「ゴメン……。自販機でお茶買おう思ったら迷子なって……」
大丈夫だ、とでも言いたげに二人がうなずく。
「なぁ……陽乃は？」
二人が顔を見合わせた。
「連絡、ついた？」
すると、拓真が答える。
「大丈夫。俺たちのほうから連絡取るから」
「ホンマか……。ゴメンな、迷惑かけるけど」
「いいよ。気にしないで、休んで」
「うん……」
そのまま再び、翔は眠りについた。
「お前、演技上手いな」
優樹が和志の演技（？）に驚いて目を丸くしている。
「今のこの人の体調じゃあ、ホントもウソもこんがらがってる感じだから、俺みたいな演技でも十分だってことだよ」

和志は恥ずかしそうに笑いながら言った。
「それより、この人の携帯電話は？」
「こっちで充電してる」
「ヒナノって……多分、女の人だよな」
失礼を承知で優樹が携帯電話を開いた。すると、優樹たちの同級生にしてこの家の子であるサキト――西掛（にしかけ）先斗（さきと）が部屋に入ってきた。
「あ、おいおい。ひと様のケータイ勝手にイジってんなよ」
先斗は慌てて携帯電話を優樹から奪うようにして没収した。
「そんなんじゃないよ。ただ、この人が『ヒナノに連絡ついた？』っていうから……。そのヒナノって人に、連絡したほうがいいと思ってさ」
「彼女さんか、いずれにしても一緒に来てる人っぽかったからさ」
和志が続ける。
「そうだ。先斗がかけろよ。ほら、多分この人だからさ」
「なんで俺！？」
先斗が慌てる。
「女の子慣れしとかないとダメだろ！」
「意味わかんないし！　え、ちょっとマジかよー！」
先斗は半ば強制的に、陽乃への電話担当となってしまったのだった。

第４１７話　テンションアップ！

「ん……？」
翔が目を覚ますと、明らかに自分の部屋ではない天井と電気が見えた。
「あれ？」
体を起こすと、目の前には見知らぬ男子が３人いる。その横には、心配そうにしている陽乃と女子が１人。
「えーっと……」
状況が飲み込めず、ポカンとしている翔に陽乃が声をかけた。
「翔、覚えてない？　ジュースとかを買いに行ってくれて、そのまま迷子になって熱中症みたいなのになって、道端で倒れてたんだよ」
「あ……」
翔もどことなく思い出した。とはいうものの、記憶があるのは倒れる直前までで、倒れてから今まではまったく記憶にない。
「でもお前……八重垣神社おったのに、どないして……っていうか、ここどこ？」
「ここはほら、アンタの目の前にいる西掛くんのご自宅」
翔が目を見開いた。
「マジで！？　オレら何やっとん！　めっちゃ迷惑！」
「あーあー、ほら、いいから病人はおとなしくしてなさい！」
突然ドアが開いて女性が入ってきた。
「え？　あ、いや、でも」
「いいから。ほら、先斗。お茶お渡しして」
「はい」
先斗と呼ばれた少年はお盆を受け取り、まず翔にお茶を手渡した。
それから陽乃、少女、少年２人の順で渡していく。

「あ、ありがとう……」
「いえ」
先斗が笑顔で答える。
「それより、自己紹介しとかないと」
陽乃が翔に促した。
「あ、ホンマや。ゴメンなさい、かなり挨拶遅れて……。オレ、神奈川県の七海市から来ました、佐野　翔と言います」
「七海市？」
少女が声を上げた。
「えぇ。あたしは朝倉　陽乃と言います」
「あの……ゴメンなさい、人違いだったら。私、中島（なかじま）　唯（ゆい）と言います」
「よろしく」
翔の笑顔に唯も笑顔で返す。
「あの……佐野さんって、吹奏楽部だったりしますか？」
翔が驚きの表情をしながら「そうやけど、なんでわかったん？」と聞き返した。
「やっぱり！　あの、私……名前でわかるかなぁ。中野さゆりの親戚なんです」
陽乃と翔が顔を合わせ、同時に「マジで！」、「本当に！？」と大声を上げた。
「わー！　やっぱり！　すごい偶然！」
唯がはじけるように嬉しそうな顔を見せた。
「あれ？　それじゃあ……」
翔が聞く。
「もしかして、ちょいちょいオレらの話聞いてた、とか？」
「ちょいちょいどころか、よくです！」
翔と陽乃が恥ずかしそうにする。
「恥ずかしいなぁ、なんか」
「ホント。あたしたち、バカなことしかやってないしね」

「しかってなんや、しかって！　んなことあれへん！」
「ウソ。だって今日だってバカだし」
翔が黙り込んでしまう。優樹が「まぁまぁ。大事に至らなかったからいいじゃないですか」と2人を宥めた。
「ちょっと待って！　いま、何時！？」
翔が慌てて時計を見ると、既に5時半を回っていた。
「うわぁ！　な、なぁ！　今から特急乗ったら新幹線間に合う！？」
「え……」
ガクガク体を揺さぶられる先斗。すると、彼の母の小百合が再び部屋にやって来る。
「もう、今からじゃちょっと厳しいんじゃないかしら」
「マジで……」
どうする？という様子で目を合わせる二人。ホテルも取っておらず、かといって帰宅もできないこの状況。
すると、唯が言った。
「じゃあ、朝倉さんは今日、私の家に泊まられたらどうですか？」
「え！　ダ、ダメよそんな。迷惑すぎるし、急すぎるわ」
「大丈夫です！　さゆ姉のお友達で、事情を説明すれば親もわかってくれます。待っててください。電話で事情説明しますから」
そういうと唯は部屋を出て電話を掛け始める。小百合が翔に言った。
「それじゃ、佐野くんも今日は大事を取ってうちに泊まったら？」
「でも……」
「どっちにしても、今日はもう電車がないし。いいじゃないですか」
先斗がむしろ引き止めたいとでもいうような様子で翔にそう促した。
「ほな……めっちゃご迷惑おかけしますけど」
「ＯＫ。決まりね。それじゃ、ご実家に電話だけ入れておいてね」
「はい」
翔は布団の横にあった充電中の携帯電話を手に取り、自宅へ電話

を掛け始める。その横で、翔には聞こえないほどの声量で優樹が言った。
「なぁ……七海高校ってさ」
先斗がうなずく。
「間違いないよ。あの動画の人たちだ」
「マジで！」
和志が大声を上げる。
「バカ！　声でかいよ」
先斗が和志の口を覆うよりも前に、陽乃がクスッと笑っていた。
「どうしたの？」
「いえ……あの！」
先斗が陽乃に聞いた。
「先輩たち、ＹｏｕＴｕｂｅでえっと……タンツィ吹いてる姿、映ってたりしますか！？」
陽乃が驚きの表情を見せる。
「やだ！　見たの？」
「はい！　うわ、すげぇ！　本物だ！」
和志と優樹が興奮気味に手を取り合っている。
「いや、中島から何回か話聞いてたんです。佐野さんや朝倉さんたちのお話を、中野さんから聞いたのをさらに俺たちに」
「そんな大げさなことじゃないよ。ね、翔！」
電話を終えた翔に陽乃が聞く。
「あー、でもあの動画、誰が撮ってたんやろなぁ？」
翔は不思議そうに首をかしげた。
「それより、おばさんどうだった？」
「アホやねんから！って言われたけど、どうしようもないからそうさせていただきなさいって」
「ケータイは？」
「先斗くんのお母さんに渡した。オカンが話しとかなアカン言うから」

「翔のおばさんらしいね」
陽乃が笑うと、翔も笑顔になった。
夜。翔は先斗と並んで寝転んでいた。
「佐野さん」
「うん？」
「明日ね。俺たち休みなんで、八重垣神社に一緒に行きませんか？」
「マジで！？　えぇの！？」
先斗がうなずく。
「せっかくなんで、観光少しだけでもして帰ってください」
「うわー！　嬉しい！　ありがとう！」
「それじゃ、今日は寝ましょうか」
「うん！　おやすみ！」
「おやすみなさい」
枕もとの電気を消すとすぐに翔の寝息が聞こえ始めた。
「寝るの早ぇ……」
先斗はそう思い、クスッと笑ってから目を閉じた。

第４１８話　晩婚？　早婚？

翌日。

今日に帰宅を延ばした翔と陽乃はまず、松江駅で特急券の購入を済ませた。新幹線に関しては、自由席で乗車するしかないと考えている。

切符の購入を終えてから、翔と陽乃は先斗の所属する吹奏楽部の同級生らと合流した。先斗、唯、優樹、和志のほかにアルトクラリネットの菘と交流のある東茜、拓真と交流のある三上庄吾、進藤慶太、坂根美香の総勢８名が揃った。

「え！　こんなにおんの？」

翔が驚いて声を上げる。

「はい。なんか、いつの間にか参加者増えちゃって。えへへ」

先斗が恥ずかしそうに笑う。

「まぁいいじゃない。人数多いほうが楽しいし。ねっ！」

慶太に同意を求める陽乃。慶太は恥ずかしそうにうなずいた。

「それよりほら！　時間もったいない！　行こう、行こう！」

陽乃は翔の手を引っ張ってバタバタと駆け出した。思わず翔は転びそうになりながら「わかったから、手ぇ放せ！　こける、こける！」と叫んでいた。

「ねぇ、唯」

茜が唯を呼んだ。

「何？」

「佐野さんって、私、スズから聞いてたから結構イケメンとは思ってたけど、実物見るとヤバいね」

「そう？　私はそんなにタイプじゃないかも……」

「あ、そっかぁ。そうだよね～。唯はねぇ」

ニヤニヤと笑う茜。
「何よ。そういうアンタだって実際のとこどうなのよ！」
「私はべっつに～」
「あっ、ちょっと待ちなさいよ！」
先を行く茜を追う唯。その後ろ姿を先斗と優樹が見つめている。
「んで？　いつ言うの？」
「は？　何を？」
先斗が優樹の言葉に目を丸くした。
「……そっか。いや、別に気にしてないならいい」
「？」
優樹の言葉が理解できないまま、先斗は唯たちを追いかけていく。
「ここだよね！」
陽乃がその場所の前に立った。
「……マジでやんの？」
翔がまだしかめ面をしている。
「当たり前じゃない！　あたしたちの運命が懸かってるのよ！　いい？　砂時計とパンフ見てる限りでは、１円玉では沈まないからダメよ。１０円玉か、１００円玉ね！」
「へいへい……」
後ろでは先斗たちがワクワクした様子でそれを見守っている。
この八重垣神社の「鏡の池恋占い」では、下記の要領でその人の恋愛模様が判断できるという。
早く沈めば早婚。遅く沈めば晩婚。そして、近くで動きが止まれば近くに縁のある人がいる、遠くへ行って動きが止まれば遠くに縁のある人がいるのだという。
「よ、よぉし……あ、あたしから行くよ？」
「へいへい」
翔は半ばどうでもよさそうな雰囲気である。
「何やってんの！」
「え？」

陽乃が紙を翔に差し出した。
「アンタもすんの！」
「マジで！？」
「ほらほら、１００円玉サッサと出す、出す！」
「へいへい」
そんな二人のやり取りを全員が後ろで見ている。唯が先斗に耳打ちした。
「二人って……付き合ってる、んだよね？」
「じゃないの？　雰囲気的に……」
「なんかもう……既に夫婦っぽくない？　あのやり取りというか……」
「ノリが、だよね」
茜が引き取った。
「菘からは聞いてたけど、ホント聞いてたとおりだわ」
そして、そんな彼らのやり取りなどまったく知らずに翔と陽乃が同時に１００円玉を載せた紙を池に放った。
「……。」
「……。」
いつの間にか翔も真剣になっている。そして。
「あっ！」
「おわ！」
同時だった。距離もほぼ同じで、放ってからたった４０秒近くで見事に二人とも沈んで行ったのだ。
「早ぇ……」
そう呟いたのは庄吾だった。
「早いの？」
陽乃が嬉しそうに聞く。
「はい……。俺は沈むまでになんか2分近くかかったんですよ」
「きゃー！　ホント！？」
陽乃が嬉しそうに飛び跳ねる。

「でもさ、それってオレと結ばれるってわけじゃないんやろ？」
「なんでアンタはそういう夢のないこと言うの！？」
陽乃が思い切り翔の背中を叩いた。そこでドッと笑いが起きる。
「あ……そうだ。朝倉さん、佐野さん。そろそろ、お昼ご飯食べなきゃ電車、間に合いませんよ」
先斗が促した。
「マジで？　もうそんな時間かぁ……」
「もうちょっとやっぱり、一緒にいたいね」
二人が名残惜しそうに言う。すると、唯が言った。
「だったら！　お二人とも島根大学バチーッと合格して、私たちともっと楽しくやりましょう！」
「……せやな！　今回のお礼、何もできてへんし！」
「じゃあ！」
先斗が言った。
「お礼っていうのは、合格してから俺たちにレッスンに来ていただくなんてのは、どうですか！？」
全員が目を丸くする。
「あ、やっぱダメっすかね？」
「それえぇなぁ！」
翔が真っ先に同意した。
「あたしもそれ、いいと思う！　大賛成～！」
陽乃が同じく手を挙げて同意した。
「やったぁ！　ホントですか！？」
唯が陽乃の手を握る。
「もちろん！　ねっ、翔！」
「おうよ！　約束な！」
翔が先斗の手を握り締めた。
そして、面々はＪＲ松江駅へと向かった。１３時１分発のやくも岡山行きに乗る。これに乗れば、１５時前には岡山駅に着くことができる。

「もうちょっと長くいたかったな～」
陽乃がベンチに腰掛けながら言った。入場券を買って入ってきた美香が言う。
「でも、佐野さんのおかげで一日長くいれたじゃないですか」
「ホント。アイツのバカのおかげでね」
拓真のブログの話で庄吾と盛り上がっている翔の姿を見ながら、陽乃が笑う。
「ねぇ、朝倉さん」
唯が聞く。
「佐野さんとは、どれくらいのお付き合いなんですか？」
「やぁだ！　どうしたの、急に」
「いや……。ちょっと気になって」
「えーっと……でも第一印象最悪だったからなぁ」
「そうなんですか！？」
「うん！　もう最低！」
キャハハッと笑って言いのける陽乃。唯や茜たちにはにわかに信じがたかった。
そして、いよいよ別れの時間がやって来た。やくも号がホームに滑り込んでくる。
「そんじゃあ、どうもお世話になりました！」
翔がビシッと挨拶をする。
「佐野さん、朝倉さん、受験頑張ってくださいね！」
「もっちろん！　絶対合格して、みんなにもう1回会いに来るからね」
「期待してます！」
発車の案内がされる。陽乃と翔は列車に乗り込んで、窓を開けた。
「じゃあねー！」
「さよならー！」
やがて電車が発車し、先斗たちの姿が見えなくなった。
「まさかの出会いだったね」

陽乃がシートにもたれて言った。
「ホンマやな」
翔も同じくシートにもたれて懐かしそうに呟く翔。
「せやけど、目標できたな！」
「え？」
翔はニカッと笑って言った。
「あの子らにもう1回、会うっていう目標！」
「……うん！」
列車の走行音が印象的に耳に響く中、翔と陽乃は神奈川への帰路へとついていった。

第４１９話　あなた、どなた？

「おはよーっす！」
８月２２日（水）。ようやく七海市に戻ってきた翔が元気よく部室に飛び込んできた。
「おはようございまーす！」
それに気づいた優輝や駿が大声で挨拶を返す。
「おはよー！　これ、島根のお土産！」
「マジっすか！　ありがとうございます！」
すると、後ろからさゆりとはるか、麻綾が続けて入ってきた。
「センパァーイ！　おかえりなさーい！」
「よう！　マーヤちゃん、中野ちゃん！」
さゆりが驚いた表情で聞く。
「聞きましたよ、先輩！　唯と会ったんですか！？」
「せやねーん！　オレが熱中症なったときに、たまったま助けてもろて！　ホンマ助かってんでぇ！」
その後もワイワイと島根の思い出を語る翔。陽乃も早々に音楽室で美里や沙希たち３年生と楽しげに話をしていた。
「それで？　そういう雰囲気にはなった？」
美里が興味津々といった様子で聞く。陽乃は「やぁだ！　もうそんなの全然よ～」と即答する。
「なにしろ、部屋は別々だし熱中症にはなるしでメチャクチャなんだもん」
由美子が吹き出す。
「なぁんか、陽ちゃんと佐野くんらしーい」
そうこうしているうちに、やがて練習開始の時間になった。翔たちも楽器を持って教室へと移動する。

「よしっと。忘れ物はなし！」
陽乃はトランペットと譜面、譜面台を持って3年E組へ移動する。
「先輩！」
彩香が隣に駆け寄ってくる。陽乃は笑顔で島根県であったことなどを語りながら教室へと向かう。
「おはよー！」
陽乃が元気よく教室に入る。
「おはようございます！」
勇が楽器を吹くのを中断して挨拶をする。
「はよざいます！」
流が続ける。
「おはよ！　暑いね～今日も。あっ、調子どう？」
「ウチは抜群でーす！」
綾音が汗を拭いながら答えた。
「あっ、そうだ。ロングトーン久々に全員でしたいよね。9時15分から全員でやろうか！」
「はい！」
「じゃ、よろしくー！」
陽乃はそう言って基礎ロングトーンの教則本を開き、譜面台を立ててそれを載せる。
「……ん？」
そこでようやく陽乃は異変に気づいた。
「あたし……久野ちゃん……松尾くん……あやねちん……藤咲くん……」
そしてもう一人。女子が座っている。
「……えーっと」
思わず言葉を失う陽乃。
「おはようございます！」
女子が挨拶をした。陽乃はオロオロしながら、ひとまず「お、おはよう！」と答えた。それから息を整え、聞いたのだ。

「ゴメンね……。あの……あなた、どなたですか？」
「へ！？」
彩香が血相を変えた。
「いやいやいや！　先輩！　何言ってんですか？」
流も慌てる。
「そ、そうですよ！　本堂先輩から何も聞いてないんですか？」
陽乃はポカンとした表情で「まったく……何も……」と返した。
「アチャー……そっか。先輩、本当はおとといには帰るハズで」
勇が顔を手で覆う。
「本堂先輩は、昨日から明日まで塾の合宿で」
「見事にすれ違って全然連絡できてなかったってわけですかぁ」
綾音が仕方ないという表情でため息を漏らした。
「あのぉ……すみません」
女子が気まずそうに手を上げた。
「とりあえず、私、自己紹介させてもらっていいですか？」
陽乃がビシッとした様子で「はい！　お願いします！」と答えると彼女はクスッと笑って自己紹介を始めた。
「えっと……1年D組の谷村（たにむら）　美咲（みさき）と申します。トランペットは、初心者なんですが……。実は、こないだの終戦記念日式典を見て、もう我慢できなくなって、部活に入ろうと思いまして」
「そうなの！？　あの演奏で！？」
陽乃が驚いて美咲に聞き返した。
「はい！」
「キャー！　やだぁ、本当なんだ！　信じられない！」
陽乃と美咲がワイワイやっている頃、ふと綾音が呟いた。
「ちょっと待ってください……？　朝倉先輩が知らんってことは」
勇と彩香が顔を見合わせる。そして、同時に隣から悲鳴が聞こえてきた。
「ウギャー！」
その声を聞いてトランペットの全員が肩をすぼめた。

「な、なぁに今の！？」
陽乃が驚いて声を上げる。
「実は……サックスと、あとホルンにも途中入部の1年生が来たんですよ」
流がそう言ったので、陽乃にはもう寝耳に水のような状態だった。
そしてお昼休み。
途中入部の部員たちが3人顔を揃えた。
トランペットの谷村　美咲は初心者。そして、バリトンサックスで来た真鍋（まなべ）　友美（ともみ）は経験者。それから、ホルンで来た野村（のむら）　周磨（しゅうま）も経験者。偶然、健之佑と苗字が同じであった。
「えーっと……まず、3人には申し訳ないけど。今年のコンクールはもうメンバーが決まってるので出ることはできません。ごめんな？」
翔の言葉に3人は「大丈夫です！　わかってます」とにこやかに答えた。
「それから。3人が舞台乗るのはとりあえず、9月以降から。8月の夏休み中は、東先生もおっしゃってたとおり、仮入部でお願いします」
「はい！」
「それじゃあ、午後からも練習頑張ってください」
「はい！」
3人は翔の言葉に嬉しそうな表情を浮かべる。3人が1年生の輪に戻ったのを確認して、翔も春樹と慎也のところへ戻る。
「悪い」
慎也が開口一番言った。
「いやいや。別に慎也や春やん、拓あんが悪いわけではないで。たまたま、タイミング合ってなかっただけでな」
「カケルならなんとなく、そう言いそうな気がしてた」
春樹が笑って言った。
「そうか？」

「うん」
3人はへへッと笑い合った。
「それにしても……部員、増えたなぁ。まとめるん、大変や」
翔はさり気なくそう呟いた。これがこのすぐ後、現実になるとはこの時、誰も予想していないことであった。

主な登場人物（新1年生入学後／吹奏楽部員　最終版）

※！！ネタバレ注意！！※

♪　第４２０話現在　♪

＜※注※＞

［２０］＝年齢を示しています。

＜主要人物＞

☆朝倉（あさくら）　陽乃（ひなの）

＞ｉ９６３１―１５０＜

七海市立七海高等学校３年Ｆ組。吹奏楽部に所属。トランペット担当。明るく活動的な性格で何でも興味関心を抱く。翔と現在交際中。翔は彼女の中では欠かせない存在になっており、翔の過去もすべて受け入れた上で、交際をしている。直情的な性格でもあるので、それがプラスにもマイナスにも作用する。

一人称：あたし　あだ名：朝ちゃん♪朝倉♪陽ちゃん♪朝倉さん

進路希望：島根大学法文学部

☆佐野（さの）　翔（かける）

＞ｉ９６３０―１５０＜

七海市立七海高等学校３年Ｈ組。大阪から高校進学時に引っ越してきた。小学校４年生からアルトサクソフォンを吹いている。現在は

吹奏楽部の部長として日々活動に励んでいる。明るく正義感の強い性格。陽乃と交際中。幼少期、阪神淡路大震災において家族を亡くしている。そのため、佐野家には養子として引き取られた。
一人称：オレ　あだ名：佐野♪佐野くん♪翔♪カケぼー（一人だけ）
進路希望：島根大学教育学部（学校教育？一音楽）

＜七海市立七海高校吹奏楽部＞
♪＝３年生　☆＝２年生　★＝１年生

【Ｆｌｕｔｅ（フルート）】
♪大谷（おおたに）　沙希（さき）　クラス：３年Ｆ組
＞ｉ９６３２―１５０＜
実はお嬢様。ハワイに旅行に行ったりマイフルートを持っていたりする。おとなしく冷静な性格で分析力に長けている。英語が得意で、現在留学生のマーガレットをホームステイさせている。野球部の相田　雄平と交際中。
一人称：私　あだ名：沙希ちゃん♪大谷さん♪サキティ　家族構成：父＝大谷俊次（おおたにしゅんじ）・母＝大谷智佐子（おおたにちさこ）・弟＝大谷洋輔（おおたにようすけ）・妹＝大谷稚依（おおたにちい）
進路希望：中央大学商学部

♪宮部由美子（みやべゆみこ）　クラス：３年Ｆ組
＞ｉ９６３９―１５０＜
沙希に憧れてフルートを吹き始める。純粋な性格で、誰とでもすぐに仲良くなれる。少々天然ボケなところあり。現在、亮平と交際中。
一人称：あたし　あだ名：由美子♪由美ちゃん♪宮部さん　家族構成：父・母
進路希望：法政大学文学部心理学科

☆井上（いのうえ）　佳菜（かな）　クラス：２年Ｄ組
＞ｉ９６４２―１５０＜
葉島中学校出身。中学時代は楽器は市の少年少女吹奏楽団で吹いていた。小柄でおとなしい女の子。ピッコロも兼任。
あだ名：佳菜ちゃん♪かな

★安藤（あんどう）　稚沙希（ちさき）　クラス：１年Ｆ組
＞ｉ９６６６―１５０＜
袴田中学校出身。温厚な性格で、テンション高めの３年生にややついていけていない。フルートの技術は高いが、ソロになると緊張して音が震えてしまう。
あだ名：ちーちゃん♪あんち

【Ｏｂｏｅ（オーボエ）】
☆野村健之佑（のむらけんのすけ）　クラス：２年Ｇ組
＞ｉ９６５７―１５０＜
袴田中学校出身。なで肩が特徴の背が高い男の子。笑うと歯が綺麗。ビヴラートがとても綺麗にかけられる。
あだ名：ノム♪ノムさん♪ケン

★歌川（うたがわ）　まゆ　クラス：１年Ｅ組
＞ｉ９６６８―１５０＜
袴田中学校出身。健之佑のことを中学校当時から尊敬しており、七海高校に進学したのはある意味、健之佑を追いかけたと言っても過言ではない。
あだ名：歌ちん♪まゆ

【Ｂａｓｓｏｏｎ（バスーン）】
☆戸口（とぐち）　誠（まこと）　クラス：２年Ｅ組
＞ｉ２８８６２＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞１５０＜
大＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞おお＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞井戸（いど）中学校出身。お寺の息子。クラリネットの優輝以上に喋らない子だが、内に秘める熱さは誰にも負けない。
あだ名：まこっちゃん♪とぐ

☆志賀（しが）　慧太（けいた）　クラス：２年Ｇ組
＞ｉ１４８６９＝１５０＜
大海中学校出身。バスーンは完全なる初心者だが、以前から吹奏楽には関心を持っていたようで、翔たちが３年生に進級してから正式入部。なかなか喋らない誠との関係性に少し戸惑いつつも、日々練習に励んでいる。
あだ名：けーた♪けーちゃん

【Ｅ♭（エス）Ｃｌａｒｉｎｅｔ（クラリネット）】
☆小林（こばやし）　梨子（りこ）　クラス：２年Ａ組
＞ｉ９６４９＝１５０＜
袴田中学校出身。エスクラリネット一筋で中学を過ごしてきた。そのため、ベークラリネットは少し苦手。
あだ名：梨子♪りーちゃん

【Ｂ♭（ベー）Ｃｌａｒｉｎｅｔ（クラリネット）】

♪橋本（はしもと）　絵美（えみ）　クラス：３年Ｅ組
＞ｉ９６３６―１５０＜
クラリネットを中学生から吹きたかったので念願の楽器を吹けて嬉しく思っている。日々練習に励む真面目な女の子。気が強い一面もあり、慎也と口論をすることも。部のお母さん的存在でもある。現在、春樹と交際中。
一人称：私　あだ名：絵美ちゃん♪エミリン♪橋本さん　家族構成：父・母＝橋本清美（はしもときよみ）・兄＝橋本航太郎（はしもとこうたろう）・姉＝橋本真咲（はしもとまさき）
進路希望：昭和女子大学生活科学部管理栄養学科

☆伊原（いはら）　光瑠（ひかる）　クラス：２年Ｂ組
＞ｉ９６４３―１５０＜
袴田中学校出身。長髪のキレイな大和撫子のような女の子。雰囲気が絵美に似ている。現在は拓真のことが好きな様子。いま現在、副部長に推薦されており、彼女もそれを受け入れている。
あだ名：ヒカル♪

☆河内（こうち）　みゆき　クラス：２年Ｃ組
＞ｉ９６４８―１５０＜
南葉島中学校出身。シッカリ者でテキパキと動く頼れる後輩。ソロを吹くのは基本的にあまり好きではない。
あだ名：みゆ♪みゆちゃん

☆瀬戸（せと）　優輝（ゆうき）　クラス：２年Ｆ組
＞ｉ９６５１―１５０＜
大井戸中学校出身。小学校からクラリネットを吹いている。クールで寡黙な少年。セカンドばかり吹かされることに疑問を抱いていた

が、最近はそれに楽しみを見出している。
あだ名：優輝♪瀬戸っち

★片岡（かたおか）　なぎさ　クラス：１年Ｂ組
＞ｉ９６７１―１５０＜
葉島中学校出身。中学時代から親交のある夏樹に誘われる形で入部。クラリネットは完全な初心者だが、練習熱心で同じパートでかつ同じ中学出身、さらに同じ初心者である速水騎士と時間があれば練習する。
あだ名：なぎ♪なぎさ

★進藤（しんどう）　雄飛（ゆうひ）　クラス：１年Ｇ組
＞ｉ９６７５―１５０＜
南葉島中学校出身。経験は中学校から。ジャズの曲が得意で、ジャズの時にソロを吹かせるとプロ並に吹ける（絵美談）。少しそそっかしいところがあり、それを気にしている。
あだ名：雄飛♪ゆう

★添田（そえだ）　麻衣子（まいこ）　クラス：１年Ａ組
＞ｉ９６７７―１５０＜
袴田中学校出身。引っ込み思案な女の子で、個性的キャラが多すぎるクラリネットパートである意味、目立つ存在。
あだ名：そえちん♪まいまい

★速水（はやみ）　騎士（ないと）　クラス：１年Ａ組
＞ｉ９６８２―１５０＜

葉島中学校出身。なぎさと同じく、中学時代から親交のある夏樹に誘われる形で入部。初心者だが、優輝曰く光るものがあるそう。なぎさと時間があれば練習している。
あだ名：ナイト

★堀江（ほりえ）　歩由美（あゆみ）　クラス：１年Ｆ組
＞ｉ９６８４―１５０＜
南葉島中学校出身。経験は中学校からで、ベークラリネットとエスクラリネットの経験がある。アンサンブルが大好きで、このクラリネットメンバーでアンサンブルをしたいとしきりに言っている。少し言葉のキツいところがあるのが、玉に瑕（きず）。
あだ名：あゆみん

【Ａｌｔｏ（アルト）　Ｃｌａｒｉｎｅｔ（クラリネット）】
★毛利（もうり）　菘（すずな）　クラス：１年Ｄ組
＞ｉ９６８７―１５０＜
大海中学校出身。翔に一度だけ、好意を抱いたことがある純粋な女の子。それが音色にも反映されるのか、音程の取りにくいアルトクラリネットを軽やかに吹きこなす。アルトクラがない場合、ベークラリネットを吹く。島根県桜田市に知り合いがいる。
あだ名：すず♪小五郎（名探偵コナンの毛利小五郎が由来）

【Ｂａｓｓ（バス）　Ｃｌａｒｉｎｅｔ（クラリネット）】
☆逢沢（あいざわ）　駿（しゅん）　クラス：２年Ｈ組
＞ｉ９６４１―１５０＜
袴田中学校出身。リーダーシップを取るのがうまく、勤勉な典型的日本人タイプ。いま現在、次期副部長に推薦されており、彼もそれ

を受け入れている。
あだ名：逢沢くん♪逢沢♪駿

【Ａｌｔｏ（アルト）　Ｓａｘｏｐｈｏｎｅ（サキソフォン）】
☆鈴木（すずき）　麻綾（まあや）　クラス：２年Ｉ組
＞ｉ９６５０―１５０＜
葉島中学校出身。小学校からサックスを吹いていて、中学は佳菜と同じ市の少年少女吹奏楽団に所属していた。温厚で滅多に怒ったりスネたりしない。
あだ名：まーや♪すず

☆中野（なかの）　さゆり　クラス：２年Ｂ組
＞ｉ９６５４―１５０＜
袴田中学校出身。中学３年になって急激に上手くなった期待のルーキーとして入部。何にでも熱くなる性格。島根県に同じ吹奏楽部に在籍する親戚がいる。
あだ名：さゆ♪サユリン

★朝倉（あさくら）　夏樹（なつき）　クラス：１年Ｄ組
＞ｉ９６６５―１５０＜
葉島中学校出身。陽乃の弟。サッカーをケガで中断し、アルトサックスを始め、今では２年生の二人に追いつきそうなほどにまで成長している。
あだ名：ナツ

【Ｔｅｎｏｒ（テナー）　Ｓａｘｏｐｈｏｎｅ（サキソフォン）】

☆西嶋（にしじま）はるか　クラス：２年Ｃ組
＞ｉ９６５５―１５０＜
袴田中学校出身。家がスナックをやっているので毎日と言っていいほどテナーサックスを吹いている。バスクラリネットの駿とは良いコンビ。虹西高校の浜田　望実とは偶然から知り合いになり、親交がある。いま現在、部長に推薦されているが抵抗がある模様。
あだ名：はるか♪にっし～♪デカ女（１人だけ）

★工藤（くどう）　茉莉紗（まりさ）　クラス：１年Ｅ組
＞ｉ９６７２―１５０＜
大海中学校出身。はるかに劣らぬくらい背が高く、一見クールビューティー。しかし、実はお笑い大好き吉本少女である。そのため、関西出身の翔は何かとツボになることが多いらしい。
あだ名：まりさ♪まり

【Ｂａｒｉｔｏｎｅ（バリトン）　Ｓａｘｏｐｈｏｎｅ（サキソフォン）】
★前田（まえだ）　かのこ　クラス：１年？組
＞ｉ９６８６―１５０＜
袴田中学校出身。食べ歩きが趣味の、ちょっと太めの女の子。けれどもサックスのセンスは抜群で、一応サックスはすべての種類が吹ける。ただ、伴奏系が好きなのでバリトン以外ほとんど手にしない。
あだ名：前ちゃん♪かのこ

★真鍋（まなべ）　友美（ともみ）　クラス：１年Ｇ組
＞ｉ２３３０８―１５０＜
大海中学校出身。快活な性格で非常に好奇心旺盛。バリトンサックスに関してはまったく妥協がなく、チューニングひとつ取ってもか

なり神経を注いでいる、ストイックな少女。
あだ名：なべ♪ともみ

【Ｔｒｕｍｐｅｔ（トランペット）】
☆久野（くの）　彩香（あやか）　クラス：２年Ｃ組
＞ｉ９６４７―１５０＜
袴田中学校出身。お人形さんのようにかわいらしいと陽乃のお気に入りの後輩。実際、温厚で常に親切心を持って人と接することができる。
あだ名：彩香♪久野ちゃん♪あや

☆松尾（まつお）　勇（いさむ）　クラス：２年Ｄ組
＞ｉ２８８６３―１５０＜
南葉島中学校出身の小柄な少年。吹奏楽に対するこだわりが強く、陽乃とも当初は衝突しがちだった。根は良い子。
あだ名：松尾くん♪イサム

★佐野（さの）　綾音（あやね）　クラス：１年Ｆ組
＞ｉ９６７４―１５０＜
葉島中学校出身。翔の弟。完全なる初心者で、経験者である藤咲流に何かと迷惑をかけていないか、心配する日々を過ごしている。
あだ名：綾音ちゃん♪あやねちん

★藤咲（ふじさき）　流（りゅう）　クラス：１年Ｄ組
＞ｉ９６８３―１５０＜
袴田中学校出身。かなり口下手なのだが、端正な顔立ちが災いして冷たい人という第一印象を抱かれることが多い。本当は心優しく、

常に気遣いのできる少年。
あだ名：りゅ～♪ふじくん

★谷村（たにむら）　美咲（みさき）　クラス：１年Ｄ組
＞ｉ２３３０７―１５０＜
北松中学校出身。トランペットは初心者だが、終戦記念日式典で見た七海高校の演奏に感銘を受け、堪えきれずに入部した。明るく前向きな性格で、綾音とよく気が合う。
あだ名：美咲♪たにむ

【Ｈｏｒｎ（ホルン）】
♪永井（ながい）　雪子（ゆきこ）　クラス：（大阪へ転校）
＞ｉ１９６３５―１５０＜
初対面ではなかなか自分を出せないタイプ。しかし、仲良くなるととても親しみやすい子。陽乃とは今では親友。何に対しても一途な性格。残念なことに、父親の転勤により大阪府南大阪市への転校。しかし、退部届けは出していないため、現在も吹奏楽部員扱いである。
一人称：私　あだ名：雪子♪雪ちゃん♪永井さん♪永井　家族構成：父＝永井（ながい）　融（とおる）　母＝永井（ながい）ひとみ　妹＝永井（ながい）真沙美（まさみ）
進路希望：甲南大学文学部英語英文学科

☆右川（うがわ）　順平（じゅんぺい）　クラス：２年Ｂ組
＞ｉ１９６４４―１５０＜
袴田中学校出身。目が細いので怖い印象を与えがちのおっちょこちょい少年。ホルンは小学校４年生から６年生の間も吹いていて音の芯がしっかりしている。

あだ名：ジュンペー♪うーちゃん

★緒方（おがた）　賢治（けんじ）　クラス：１年Ｃ組
＞ｉ９６７０―１５０＜
袴田中学校出身。順平の弟分のような存在で、雪子と順平を尊敬していたので七海高校に進学を決めた。雪子の転校に少なからずショックを受けていたが、彼女の代わりに頑張るという目標を見つけた。
あだ名：賢ちゃん♪賢治

★時任（ときとう）　裕子（ゆうこ）　クラス：１年Ｂ組
＞ｉ９６８０―１５０＜
南葉島中学校出身。自宅では今時珍しいボストンタイプのメガネをかけた、クールな少女。何かと賑やかなナナコウ吹奏楽部に戸惑いを覚えている。ちなみに、勉強の時以外はコンタクトをしているのでボストンタイプのメガネを見た人は皆無に等しい。
あだ名：ゆーこりん♪

★保田（やすだ）　杏（あんず）　クラス：１年？組
＞ｉ９６８８―１５０＜
北松中学校出身。初心者で、特に難しいホルンを選んだ。人数が必要なパートなので、特に期待をされているのだが、本人は至ってマイペース。
あだ名：あんこ♪あんず

★野村（のむら）　周磨（しゅうま）　クラス：１年Ｈ組
＞ｉ２３３０９―１５０＜

南葉島中学校出身。ホルンのレベルは順平に次いで高く、賢治とは切磋琢磨している。が、特別プライドが高いわけではない。非常に親しみやすい性格で、人気が上がってきている。ちなみに、大阪府出身なのでめちゃめちゃ関西弁。
あだ名：しゅーま♪しゅう

【Ｔｒｏｍｂｏｎｅ（トロンボーン）】
♪川崎（かわさき）　慎也（しんや）　クラス：３年Ｅ組
＞ｉ９６３３―１５０＜
スライドが前後するのに心惹かれてトロンボーンを吹き始める。基本的にあまり喋らない子ではあったが、翔と仲良くなってからはずいぶんと口達者になった。向上心が強く、それが時として部員同士の口論の火種になることもしばしばある。しかし、基本的には部の雰囲気をプラスへ持って行くことが多く、３年生になってからはその傾向が特に顕著である。現在は美里と交際中。中国語が非常に堪能で、現在留学生の崔裕時をホームステイさせている。
一人称：俺　あだ名：慎ボー♪慎ちゃん♪川崎くん　家族構成：父・母・兄・弟
進路希望：亜細亜大学国際関係学部国際関係学科

☆吉山（よしやま）　亜紀（あき）　クラス：２年Ｆ組
＞ｉ９６６３―１５０＜
南葉島中学校出身。中学時代はチューバ、ユーフォニウム、トロンボーンと楽器を３つも吹いていた。トロンボーン歴は一番短いが、肺活量の多さでは男の子にも負けない。性格は明朗快活。
あだ名：亜紀ちゃん♪ヨッシ～

☆富士原（ふじわら）　徹（とおる）　クラス：２年Ｉ組
＞ｉ１９６６０―１５０＜
南葉島中学校出身。完全な初心者なので亜紀に付きっ切りで教えてもらっていたが、現在はバストロンボーンを任されている。基本的にのんきなのでマイペースで進行中。
あだ名：富士くん♪徹

★江藤（えとう）　沙知（さち）　クラス：１年？組
＞ｉ１９６６９―１５０＜
大海中学校出身。中学時代からトロンボーン一筋。同じ出身中学の子が少ないことに加えて人見知りをするため、今のところ話をするのがトロンボーンメンバーと菘、茉莉紗しかいない。
あだ名：さっちー♪

★佐々木（さき）　雛乃（ひなの）　クラス：１年Ｆ組
＞ｉ１９６７３―１５０＜
袴田中学校出身。線が細いのだが、音は太い。その上音感も良いので、スライドでしっくり来る音をすぐに探すことができる。
あだ名：ひなの♪

【Ｅｕｐｈｏｎｉｕｍ（ユーフォニウム）】
♪水谷（みずたに）　春樹（はるき）　クラス：３年Ｇ組
＞ｉ１９６３８―１５０＜
最初は雪子と似たような雰囲気が漂っていたが、実は優しい子。楽器を吹く前から自宅にユーフォニウムは持っていたようで、一所懸命抱えて部室までやってきた。最近、拓真と楽器を持っている姿が

似通ってきている。キラースマイル所持者。
一人称：俺　あだ名：春やん♪水谷くん♪水っち　家族構成：母＝水谷幸恵子（みずたにさえこ）
進路希望：鎌倉音楽大学音楽学部吹奏楽学科

☆加藤（かとう）　愛実（めぐみ）　クラス：２年Ｈ組
＞ｉ９６４６―１５０＜
葉島中学校出身。中学までは市の少年少女吹奏楽団に所属していて、トロンボーンを吹いていた。春樹とは実は幼なじみで、彼のことが好き。同じパートを吹いていて心底嬉しく思っている。なお、ユーフォニウムは初心者であった。愛媛県に知り合いがいる。
あだ名：めぐみ♪カトちゃん

【Ｔｕｂａ（チューバ）】
♪本堂（ほんどう）　拓真（たくま）　クラス：３年Ｇ組
＞ｉ９６３７―１５０＜
大柄な体格でチューバと相性ピッタリ。生真面目な性格で空気を読めるので精神年齢はメンバーの中でも上のほう。島根県桜田市に知り合いがいる。
一人称：俺　あだ名：拓あん♪本堂くん♪本ちゃん　家族構成：父・母
進路希望：国士舘大学文学部文学科（日本文学・文化専攻）

☆大岩（おおいわ）　智志（さとし）　クラス：２年Ｇ組
＞ｉ９６４５―１５０＜
七海高校内でも有名な不良（ワル）。にもかかわらず、拓真の音色や部員の楽しそうに活動する様子に惹かれて入部を決めたという、実はウブ

な一面がある少年。文化部在籍だが、運動神経が良いので体育大会等ではヒーロー的存在になる。
あだ名：さとっぺ♪さと

★飯岡（いいおか）　好美（よしみ）　クラス：１年Ａ組
＞ｉ９６６７―１５０＜
袴田中学校出身。ふっくらした感じの女の子で、体型からにじみ出る雰囲気どおり、温和な女の子。真面目な拓真とヤンチャ系の智志にも一目置かれている。
あだ名：よしりん♪好美

【Ｓｔｒｉｎｇ　Ｂａｓｓ】
☆三宅（みやけ）　亮平（りょうへい）　クラス：２年Ｃ組
＞ｉ９６６２―１５０＜
かなりイケメンの少年。ジブリ映画が大好きで、暇さえあれば弦バスで久石譲の曲を弾いている。ピッチカートが一番上手い。実は貴志と従兄弟。
あだ名：みーやん♪

★常盤（ときわ）　貴志（たかし）　クラス：１年Ｃ組
＞ｉ９６９１―１５０＜
亮平に負けないくらいのイケメン少年。亮平とは従兄弟なので、当然といえば当然か。彼の影響をモロに受けているため、好みが似ている。似ていないのは身長くらいで、貴志のほうが１０ｃｍ低い。
あだ名：トキ♪貴ちゃん

【Ｐｅｒｃｕｓｓｉｏｎ（パーカッション）】
♪田中（たなか）　美里（みさと）　クラス：３年Ｇ組
＞ｉ１９６３４―１５０＜
大胆なことが大好きなので動きのあるパーカッションへ。明るく活発な性格で男女の壁なく誰とでも平等に接するタイプ。少々おせっかいなところがある。現在は慎也と交際中。
一人称：あたし　あだ名：ミサッチ♪みさりん♪美里ちゃん♪田中さん　家族構成：父・母・姉＝田中（たなか）　美優（みゆ）
進路希望：青山学院大学経済学部（現代経済デザイン学科－２００８年４月開設予定）

☆冨岡（とみおか）　洋之（ひろゆき）　クラス：２年Ｉ組
＞ｉ１９６５３―１５０＜
袴田中学校出身。端正な顔立ちでクールに見えるが中身は結構おもしろい子。ティンパニが特に得意。
あだ名：トミ♪とみぃ♪ヒロ♪ひろぽん

☆日高（ひだか）　優（ゆたか）　クラス：２年Ｅ組
＞ｉ１９６５９―１５０＜
大井戸中学校出身。運動神経も鈍く勉強も中の下という冴えない自分を変えたくて入部した初心者。背が低いので基本的にタンバリンやトライアングルが好き。一時期休部していた時期もあるが、現在は復帰。
あだ名：ひーくん♪優っち♪チビ（１人だけ）

☆秦野（はたの）　恵梨（えり）　クラス：２年Ｇ組
＞ｉ１９６５８―１５０＜

東京から高校進学時に引越し。目立ちたがりなので美里と同じ目立ちそうという理由で打楽器を選んだ初心者だった。今はバリバリ。
特に小物楽器が好き。
あだ名：エリリン♪はたっち♪はたやん

☆乃木（のぎ）　あずさ　クラス：２年Ａ組
＞ｉ１９６５６―１５０＜
栃木から高校進学時に引越し。打楽器は小学校１年生からずっとしているので打楽器は全般的に扱える。
あだ名：のぎぎ♪あず

★岩切（いわきり）　裕也（ゆうや）　クラス：１年Ｆ組
＞ｉ１９６９３―１５０＜
葉島中学校出身。翔平の弟で、風見台を受験して落ちた後、七海に来た。素直ではない性格のため、何かとトラブルを起こすことがある。
あだ名：岩切くん♪ゆーやん

★塚口（つかぐち）　和志（かずし）　クラス：１年Ａ組
＞ｉ１９６７９―１５０＜
兵庫から高校進学時に引越し。そのため、ローカルネタの通じる翔や綾音と初めは交流を積極的にしている。
あだ名：塚ちゃん♪和志

★本堂（ほんどう）　晃（あきら）　クラス：１年Ｂ組
＞ｉ１９６８５―１５０＜

北松中学校出身。拓真の弟。しかし性格はずいぶん違い、やることが何でも大雑把。そのため、意外と繊細さを求められる打楽器に入ったことを若干後悔している。
あだ名：本ちゃん♪晃

＜パート人数＞
・フルート&ピッコロ：４名
・オーボエ：２名
・バスーン：２名
・エスクラリネット：１名
・ベークラリネット：最大１０名
・アルトクラリネット：１名
・バスクラリネット：１名
・ソプラノサキソフォン：１名
・アルトサキソフォン：４名
・テナーサキソフォン：２名
・バリトンサキソフォン：２名
・トランペット：６名
・トロンボーン：５名
・ホルン：５名（６名）
・ユーフォニウム：２名
・チューバ：３名
・弦バス：２名
・パーカッション：８名

以上、全部員６０名

＜２００７年度　七海市立七海高等学校吹奏楽部　役職表＞

役職名	氏　名
部　長	佐野　翔
副部長	朝倉　陽乃
	本堂　拓真
会　計	大谷　沙希
金管長	川崎　慎也
木管長	橋本　絵美

係　名	氏　名
楽　譜	宮部由美子
	瀬戸　優輝
	井上　佳菜
	松尾　勇
	秦野　恵梨
チケット	水谷　春樹
	加藤　愛実
音　源	田中　美里
	河内みゆき
ユニフォーム	永井　雪子
	西嶋はるか
	右川　順平
美　化	冨岡　洋之
	中野さゆり
楽　器	小林　梨子
	鈴木　麻綾
教室管理	久野　彩香
	吉山　亜紀
運　搬	三宅　亮平
	富士原　徹

演　出　志賀　慧太

日高　優

乃木あずさ

2年生代表　逢沢　駿

ドラムメジャー　野村健之佑

戸口　誠

主な登場人物（新1年生入学後／吹奏楽部員　最終版）（後書き）

なお、登場人物イメージを掲載しました（２０１０年7月２５日～）。一部を除き（※）、スターダストプロモーションの俳優さん・女優さんの画像を拝借しております。

（※）一部：ドラマ『ハンマーセッション』の生徒一覧／ジュノン・スーパーボーイ・コンテスト公式サイトを指します。

主な登場人物（新1年生入学後／教職員・保護者・友人　最終版）

※！！ネタバレ注意！！※

♪　第４２０話現在　♪

＜※注※＞［２０］＝年齢を示しています。

【Ｃｏｎｄｕｔｅｒ（コンダクター）】

♪東　恭一（あずま　きょういち）　［３３］

＞ｉ２２５９９―１５０＜

七海高等学校吹奏楽部顧問。担当教科は英語で翔の在籍する３年Ｈ組の担任。身長１８７センチでけっこうイケメンなので彼に担任を持ってほしい女子生徒は多いとの噂。七海高等学校吹奏楽部（初代）のＯＢでもある。そのときのパートはパーカッション。浜崎あゆみの熱狂的ファン。最近、彼女がいるという噂がにわかに立っているのだが、その真相は……？

【吹奏楽部指導者】

★三田嶋（みたじま）　樹（いつき）　［３１］

＞ｉ１１７１８―１５０＜

有名なアルトサックス奏者。全国各地の演奏会に客演として招かれたり演奏会を開いたりと精力的に活動している。七海高等学校吹奏

楽部（初代）のＯＢでもある。実は、神崎しおりと結婚を前提に付き合っている。

★神崎（かんざき）しおり　［３１］
＞ｉ１１７１７―１５０＜
樹のマネージャーにして吹奏楽部時代の同級生。オーボエ奏者である。樹とは結婚を前提に付き合っている。

★村峰（むらみね）　塔子（とうこ）　［５１］
＞ｉ２２６００―１５０＜
前七海高校普通科教頭。分厚い眼鏡が特徴で文化部に対する扱いはかなりぞんざいだった。家族の事情により、現在は神戸市に転居して教職からは離れているが……？

【七海高校吹奏楽部ＯＢ】
□豊田（とよた）めぐみ　［１９］
＞ｉ１１７０７―１５０＜
途中入部をした生徒で、高校生活最初で最後のコンクールに出場したく、入部を決めた。青山学院大学に進学。
あだ名：めぐ先輩♪めぐ

□岡崎（おかざき）　安和（あんな）　［１９］
＞ｉ１１７０５―１５０＜
途中入部をした生徒。初めは陽乃と対立したが、その後和解して陽乃と一緒にトランペットを支えた。立教大学に進学。
あだ名：岡崎先輩♪安和先輩

□三河（みかわ）　岳彦（たけひこ）　［１９］
＞ｉ１１７０６―１５０＜

途中入部をした生徒。最初で最後のコンクールに、大人数で参加したかったので入部を決めた。音楽大学に進学。
あだ名：三河先輩♪岳ちゃん先輩

【七海高等学校関係者】

☆真野（まの）　光治（こうじ）　［５６］
＞ｉ１１７２６－１５０＜
学校長。温厚で生徒の自主性を尊重する主義を貫いている。吹奏楽部の生徒に校長室でのライブ演奏と引き換えにストーブを提供してくれたりもするユニークな男性。

☆東（あずま）　彩（あや）　［２８］
＞ｉ１１７２８－１５０＜
社会科教師。３年Ｃ組担任。小柄で花のように可憐な先生。華道部顧問。６月に恭一と結婚した。旧姓・新井田。

☆亘理（わたり）　健太（けんた）　［３２］
＞ｉ１１７３１－１５０＜
国語科教師。３年Ｄ組担任。体育会系の熱血先生で陸上部顧問。

☆真鍋（まなべ）　宗平（そうへい）　［３３］
＞ｉ１１７２９－１５０＜
野球部顧問。理科教師。トラブルが起こるとパニックを起こしやすいが、ようやくそれも落ち着いてきて野球部のレベルを上げつつある。

☆園部（そのべ）麻衣子（まいこ）　［２８］
＞ｉ１１７３０－１５０＜

数学教師。３年Ｆ組担任。

【佐野家】

☆佐野（さの）　昭（あきら）　［４８］

＞ｉ１１７０９―１５０＜

翔の父。食品会社勤務。あまり喋らない照れ屋な性格だが子供たちのことはきちんと把握している。

☆佐野（さの）友美子（ゆみこ）　［４６］

＞ｉ１１７０８―１５０＜

翔の母。かなり賑やかな性格で初対面の人でも遠慮なく質問攻めにしたりしてよく翔や綾音に怒られている。かなりの料理好きなので腕は良い。

☆佐野（さの）　智輝（ともき）　［１１］

＞ｉ１１７１０―１５０＜

翔の弟。葉島小学校５年生。最近反抗期なのか、翔や綾音、友美子に口答えをすることが増えてきた。ただ、心の中では全員のことが好きである様子が言葉に表れている。

☆佐野冨美枝（ふみえ）　［７３］

＞ｉ２２６０１―１５０＜

翔の父方祖母。夫は６年前に亡くしている。かなりの老眼。

☆佐野（さの）　高志（たかし）（享年７０歳）

＞ｉ１１７１２―１５０＜

翔の祖父。６年前に脳卒中により亡くなっている。厳格な祖父であったが、翔は彼のことが大好きで、日曜日になるといつも梅田へ一緒に出かけていた。

【朝倉家】

☆朝倉（あさくら）　祥夫（さちお）　［４７］

＞ｉ１１７１４―１５０＜

陽乃の父。証券会社勤務。今どき珍しいタイプの父親で子供たちのことに関しては度が過ぎるほど干渉することもあり、今まで陽乃とも夏樹ともケンカをしたことが何度かある。普段は仕事人間。

☆朝倉（あさくら）　由利（ゆり）　［４５］

＞ｉ１１７１３―１５０＜

陽乃の母。スーパーでパートをしている。祥夫とは違い、おっとりして子供たちを優しく見守るタイプ。しかし言うべきときにはしっかりと諭す。

☆朝倉知恵子（あさくらちえこ）　［７１］

＞ｉ１１７１５―１５０＜

陽乃の父方祖母。どんな時でも冷静に何事にも対処できるしっかりした女性。夫は7年前に亡くしている。

【大中家】

１９９５年の阪神・淡路大震災で翔を除く全員が亡くなっている。

☆大中（おおなか）　康史（こうじ）（享年３５歳）

翔の実父。子煩悩な父親であったが、１９９５年1月17日に発生した阪神淡路大震災により亡くなる。翔は震災時の記憶喪失により康史たちのことは記憶していない。

☆大中（おおなか）　美佐子（みさこ）（享年３４歳）

翔の実母。優しい母親で、翔たち子供3人には愛情を十分注いで

いた。しかし、阪神淡路大震災により亡くなる。

☆大中　一志（享年１２歳）

翔の実兄。阪神淡路大震災で翔をかばうようにして亡くなる。吹奏楽部でアルトサックスを吹いていた。現在、翔は彼のサックスを吹いている。

☆大中　璃緒（享年１０歳）

翔の実姉。阪神淡路大震災で翔をかばうようにして亡くなる。吹奏楽部でオーボエを吹いていた。マイ楽器であったオーボエは佐野家の押入れにしまってあるが、翔はそのことを知らない。

【私立　風見台高等学校吹奏楽部】

★佐野　修平　［１８］

＞ｉ１１７２０＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞１５０＜私立・風＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞かざ＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞見台高等学校吹奏楽部員。翔とは中学時代の同級生かつ吹奏楽部員だった。当時の中学校部員たちの間では「ダブル佐野」の名前で結構知られていた。一時期、人数の関係でパーカッションも経験したが、現在はアルトサックス奏者として活動中。優衣と交際中。

★濱口　優衣　［１８］

＞ｉ１１７１９―１５０＜私立・風見台高等学校吹奏楽部員。修平と仲がよく、誰にでも思いやりを持って接するタイプ。陽乃とも合同練習で仲良くなった。トランペット担当。修平と交際中。

★岩切　翔平　［１９］

＞ｉ１１７２１―１５０＜
大阪から七海市へ引っ越してきた淀南（よどみなみ）中学校時代の翔の先輩。名前が翔とかぶっていたので「ダブル翔」と修平とのカップル名（？）を文字って呼ばれていたことがある。現在は風見台高校を卒業し、青山学院大学に通っている。

【吹奏楽関係者／クラスメイト／友人】
☆若草（わかくさ）　直幸（なおゆき）　［１７］
＞ｉ１１７００―１５０＜
伊豆半島で翔たちが合宿をした際に出会った高校生。翔とは同い年になる。楽器はアルトサックス。登校拒否をしていたが、陽乃や翔との出会いを通して自分を見つめなおし、現在は登校するようになっている。初出場のマーチングコンテストも見に来てくれた。ちなみに、彼女がいる。

☆相田（あいだ）　雄平（ゆうへい）　［１７］
＞ｉ１１７０３―１５０＜
七海高校野球部。沙希の想い人であるが、彼自身それは自覚していない。沙希には何度もアドバイスをするなど、親身な存在になりつつある。ちなみに、吹奏楽部が野球部の応援に来てくれる日を心待ちにしている。一度話は出たが、春休みの段階では立ち消えになり、夏はコンクールが重なったためまだ叶っていない。３年Ｅ組。

☆矢崎（やざき）　菜緒（なお）　［１７］
＞ｉ１１７０２―１５０＜
陽乃の元クラスメイト。現在は専門学校を目指す３年Ｄ組。快活な少女で、陽乃とはよく気が合う。ちなみに、森本涼平のことが好き。

☆森本（もりもと）　涼平（りょうへい）　［１７］
＞ｉ１１７０１―１５０＜
陽乃の元クラスメイト。現在は就職を目指す３年Ｃ組。若干間の抜けた感じが拭えない少年。菜緒のことが好きだが、ハッキリ言えない自分にもどかしさを感じている。

☆柳原（やなぎはら）　玲菜（れな）　［１６］
美術部所属で、由美子の友人でもある。吹奏楽部の勧誘ポスターの製作を担当。

☆内山（うちやま）　大輔（だいすけ）　［１８］
翔の中学時代の親友。雪子が転校した光来高等学校に通っており、吹奏楽部に在籍中。部長を務めている。

☆稲元（いなもと）　友也（ゆうや）　［１８］
翔の中学時代の親友。光来高等学校に通っており、軽音楽部に在籍。

☆鈴広（すずひろ）　勝明（かつあき）　［１８］
翔の中学時代の親友。光来高等学校に通っており、生徒会執行部に在籍。生徒会長を務めている。

☆福崎（ふくざき）　啓一（けいいち）　［１８］
翔の中学時代の親友。光来高等学校に通っており、空手道部主将を努めている。

☆川島（かわしま）　海里（みり）　［１８］
翔の中学時代の友人。光来高等学校に通っており、吹奏楽部に在籍。

☆岡原（おかはら）　怜（れい）［１８］
翔の中学時代の友人。光来高等学校に通っており、演劇部に在籍。

☆崔（さい）　裕時（ゆうじ）［１７］
＞ｉ１１７０４―１５０＜
留学生で吹奏楽部に体験入部中。中国四川省出身。日本語はある程度話すことができる。現在、慎也の家にホームステイ中。楽器経験はありで、パートはクラリネット。

☆マーガレット・メルヴィル［１８］
＞ｉ１１６９８―１５０＜
留学生で吹奏楽部に体験入部中。アメリカ合衆国ノースカロライナ州出身。日本語は助詞などが飛んでしまうものの、ある程度は話すことができる。現在、沙希の家に留学中。楽器経験ありで、パートはパーカッション。

☆パク・ソンス［１６］
＞ｉ２２６０２―１５０＜
留学生で吹奏楽部に体験入部中。大韓民国出身。日本語はまだたどたどしい状態。２年生の生徒宅にホームステイ中。パートはユーフォニウムで、楽器経験はなし。容姿が翔に瓜二つである。

【愛媛県　常套（じょうとう）中学校】
◎竹林（たけばやし）　泰徳（やすのり）［１５］
愛媛県　常套（じょうとう）中学校吹奏楽部在籍中。パートはチューバ。翔とは大阪にいた頃、よく遊んだ。オーケストラや吹奏楽のような大編成が苦手というコンプレックスはあるが、翔には「音楽才能抜群！」と言われている。ただし、泰徳本人はなぜか否定している。

◎中井　美奈　［１５］
愛媛県常套中学校吹奏楽部在籍中。パートは弦バス。『ピティナ国際ピアノコンクール』にてパーカッションの秦野恵梨と知り合って以来の仲である。

◎谷　未来　［１５］
愛媛県常套中学校吹奏楽部在籍中。パートはユーフォニウム。加藤愛実とは知り合いで、愛実が運営するブログで友達としてメールアドレスを交換したのが始まり。常套中学校のサマーコンサトにて初めて出会った。

◎高橋　美並　［１６］
泰徳たちの１年先輩。翔たちや金管メンバー数名は２００５年度のアンサンブルコンテストにおいて、彼女と知り合いになっている（翔が半ば強引に彼女たちの会話に加わっただけであるが）。ちなみに、七海高校の中で彼女を好きなメンバーがいる。

◎佐々木　香織　［１５］
愛媛県常套中学校吹奏楽部在籍中。泰徳、美奈、美並とアンサンブルに出場した。彼女も美並同様、２００５年度のアンサンブルコンテストにおいて半ば強制的に翔たちと知り合いになっている。

【横浜市立　虹西高等学校】
◆永瀬　信二　［１６］
慎也の中学時代の後輩。中学時代はトロンボーンを吹いていたが、七海市を引っ越して入学した虹西高等学校では、チューバを現在吹いている。辛うじて控えていた慎也の自宅電話番号を頼りに、彼との親交を再開できた。

◆浜田　望実　［１６］

つり目が特徴的な、明るい女の子。後ろ髪が外にハネている。偶然立ち寄ったはるかの店で、定期演奏会の話で意気投合し、彼女に定期演奏会に来て欲しい旨を伝えたことから交流が始まる。

◆相原（あいはら）　真琴（まこと）　［１６］

虹西高校の弦バス奏者。陽乃とは初めて会った気がしないと感じており、それは陽乃も同じように感じている。果たして過去にどこかで出会っているのか……？

【島根県　桜田（さくらだ）中央高校】

＊西掛（にしかけ）　先斗（さきと）　［１６］

桜田中央高校吹奏楽部のチューバ奏者。真面目な性格で、教室でも楽譜を手にするような男の子。中島唯とは幼なじみである。

＊中島（なかじま）　唯（ゆい）　［１６］

桜田中央高校吹奏楽部部長。おしゃべり大好き、スイーツ大好きで活動的な女の子。西掛　先斗とは幼馴染で、クラスが幼稚園から１２年間一緒である。楽器はアルトサックス。中野さゆりとは親戚関係である。

＊三上（みかみ）　庄吾（しょうご）　［１６］

ハンドルネーム・爆音ペッターとして七海高校の拓真と交流のある桜田中央高校のトランペッター。大柄で食欲旺盛な育ち盛りの少年。

＊東（あずま）　茜（あかね）　［１６］

七海高校の新入生・毛利　菘と親交がある、島根県桜田市の高校１年生。生徒会を中学時代はずっと頑張っていたようである。ベークラリネット奏者。

＊進藤（しんどう）　慶太（けいた）［１６］
桜田中央高校バリトンサックス奏者。高校から始めた初心者ということになる。ちなみに、七海高校の進藤　雄飛とは親戚関係などではない様子。

＊坂根（さかね）　美香（みか）　［１６］
桜田中央高校フルート奏者。おとなしく、引込み思案である自分を変えたくて吹奏楽部に入部した読書家。

＊竹原（たけはら）　優樹（ゆうき）　［１６］
桜田中央高校パーカッション奏者。ポジティブな性格で落ち込んでもすぐ浮き上がってくる。

＊渡辺（わたなべ）　和志（かずし）　「１６」
桜田中央高校パーカッション奏者。中学時代は合唱部で、高校からは優樹の姿に引かれて吹奏楽部に入部した。

【石川県古氷町立古氷中学校吹奏楽部】
○石尾（いしお）　拓也（たくや）［１５］
＞ｉ１２４３３―１５０＜
石川県古氷町立古氷中学校吹奏楽部部長。能登半島沖地震で被害を受けた際、七海高校から楽器の支援を受けて以来、交流がある。ちなみに、関西弁を話すのは兵庫県神崎市出身のため。

○津嶋（つしま）　ともみ［１５］
＞ｉ１２４３４―１５０＜
石川県古氷町立古氷中学校吹奏楽部副部長。能登半島沖地震で被害を受けた際、七海高校から楽器の支援を受けて以来、交流がある。ちなみに、関西弁を話すのは大阪府大阪市出身のため。

第４２０話　思わぬ来訪者

周磨たちが入部してから3日が経過した8月２５日（土）。この土日は部活が休みとなっている。というのも、夏休みの宿題をここで溜め込んでいる部員はしっかりと消化するようにと恭一に言われていた。

翔が溜め込んでいる宿題は古文。何かと訳するのが苦手な翔は、意図的に古文だけを残していた。古文をやっているととんでもなく時間がかかるため、最後に回そうと初めから考えていたのだ。

最後に回したからといって、進むわけではない。翔は頭を抱えてウンウン言いながら辞書を片手に必死に宿題を進めていた。あと残っているワークは半分程度。とてもあと５日程度で終わる量とは思えなかった。

陽乃は陽乃で、日本史の宿題が残っているという。調べれば埋まる宿題だということで、後回しでも何とかなると彼女は言っていたので、今頃教科書や資料集片手に必死に調べ物をしているところだろうと翔は想像した。そういうことを考えると、陽乃に電話を掛けたいと思っていたが、電話を発信できずにいた。

「電話したいねんけどなぁ～」

ゆり椅子をしていると、階下でインターフォンが鳴った。それがキッカケですぐに宿題のほうへと意識を戻す。しかし、再びインターフォンが鳴り、集中力が削がれる。

「かぁさーん！　誰か来た～」

けれども、応答がない。そして再びインターフォンの音。

「誰もおれへんのかいな……」

翔は下へ降りる。どうやら友美子は買い物へ出ているようだ。まだそれほど宿題の量が多くない綾音は既に宿題をすべて終え（そも

そも、翔より要領が良いというのもあるが）、遊びに出かけている。智輝は所属しているサッカークラブの友達と遊びに出ている。そうしたことを思い出し、結局、いま自宅には翔しかいない。

「はぁい」

翔が表へ出ると、周磨がいた。

「おう、野村くん」

「こんにちは！」

快活な挨拶をする周磨。

「どないしたん？」

「あの……お時間、大丈夫ですか？」

翔たち3年生の会話を聞いていたようで、気遣いを見せる周磨。

翔はニカッと笑い、「大丈夫やで。入って、入って！」と彼を案内した。

周磨にスリッパを差し出し、それほど散らかっていない和室に案内した。

「え！？　こんなトコいいんですか？」

慣れ親しんだ関西弁で驚く周磨。

「大丈夫、大丈夫！　すぐ飲み物持ってくるから、座ってて」

翔はすぐに冷蔵庫からカルピスウォーターを取り出し、氷を入れてコップにそれを注ぐ。慣れない手つきでお盆にコップを二つ載せ、和室へ向かう。

「お待たせー！」

翔がふすまを開けて入ると同時に、周磨が驚いた様子で振り返った。

「ん？　どないしたん？」

「いえ！　別に……」

「そーお？　ほい！　どうぞぉ」

翔はコップを周磨の前に置いた。

「おおきに。いただきます」

「どうぞ、どうぞ」

周磨がコクコクと控えめにカルピスを飲んでいく。
「どないしたん？　ほんで」
「……。」
周磨は何も答えない。翔はなんとなく居心地が悪くなり、何か話題を提供しようとするが、周磨の表情を見ているとそういう雰囲気でないような気がしてしまい、言葉が出なかった。
周磨がノートを取り出した。
「あの……僕が入部した理由を聞いても、怒らないでいてくれますか？」
「怒る？　理由聞いたら？」
翔が驚いて聞き返す。周磨がうなずいた。
「怒られるような理由で、吹奏楽部に入ったん？」
周磨がうなずき「少なくとも、僕はそう思ってます」と答えた。
翔はため息を漏らした後に「えぇよ。素直に言うて」と答えた。
周磨が取り出したノートを開いた。
「……！」
そのノートを見て翔が言葉を失う。
学校来るな。臭い。帰れ。顔キモい。辛辣な言葉が並んだ、悪質な落書き。
「これ……」
「今やないですよ？　中学のときの話です……。まぁ、僕、中2から七海来たんですけどね」
周磨が今は大丈夫、とでも言いたそうな口調で答える。周磨の出身中学は南葉島中学校。1年生で南葉島出身は雄飛、歩由美、裕子、貴志の4人。
「なぁ……まさかと思うけど」
翔は心配になって、出身の4人とのかかわりを聞いた。
「大丈夫です。常盤くんも進藤くんも、堀江さんも時任さんも直接イジメには関わっていません」
直接、という言葉に少し翔は引っ掛かったが、それでも直接関わ

っていないことを知って少しだけホッとした。
「ただ」
周磨の表情が暗くなる。
「中３の時……一番イジメがひどかった頃のクラスで、僕が不登校になったときは、４人とも同じクラスでした」
「そっ……か……」
周磨の表情が少しだけ明るくなった。
「わかりませんでした？　４人の表情」
「いやぁ……だってオレ、自分が入ってきたときホルン増えてめっちゃテンション上がってて……そこまで、気ぃつけへんかった」
翔が申し訳なさそうに言う。周磨は「先輩のせいじゃないんですから、気にしやんといてください！」と明るく言い放った。しかし、実際問題として貴志たちは周磨がイジメられていたとき、彼を助けようとはしなかった。そんな貴志たちと周磨が果たして、今後うまくやっていけるのか。翔はそれが少し心配であった。
「あっ。先輩、いま心配してますね？」
翔は自分の心を見抜かれていて、驚きの表情を見せる。
「違うんです。先輩に、お願いがあって今日は来たんです」
「お願い？」
「重いこと言いますけど……僕が、部活でへこたれへんように、励ましてくれますか？」
翔はポカンとした表情を浮かべる。周磨は続けた。
「常盤くんとか、堀江さんと、部活の皆みたいに違和感なく過ごせるようになるまで、見守ってくれますか？」
そう言いながら声が震える周磨。翔は言葉を遮るように言った。
「当たり前やん！　オレ、部長やぞ！」
周磨がハッと顔を見上げる。翔は続けた。
「今はイジメられてへんねやろ！？」
「はい」
「中学ん時、部活ではどないやった！？」

「いえ……部活では普通に先輩と楽しくやってましたし、まぁ……同級生とは微妙でしたけど、仲良い人も数人いましたし、後輩ともめちゃ仲良く……」
「せやろ！」
翔は満面の笑みで続けた。
「ここは、七海高校吹奏楽部！　中学校とは全然違うねん！」
「……。」
周磨は呆然としている。
「ほら！　わかったら返事！」
「は、はい！」
「いいかぁ！？　中学のテンション引きずってこれから部活来たら、オレが地獄のロングトーン毎日吹かせちゃうぞ！」
「へ！？　じ、地獄！？」
「おうよ！」
翔は最後に手を差し伸べた。
「ナナコウスイソー入ったからには、絶対に変わってもらうからな！」
「……はい！」
周磨がようやく、心からの笑顔を見せた。
「さて……と……」
周磨が帰ってから、残った宿題の量にウンザリしながらも翔は笑っていた。
「よっしゃ！　月曜日から、またガンバロか！」
日が傾き始めた頃、翔は大きく伸びをして再び机に向かった。
こうして少しずつ、部員たちに新たな風を吹き込む機会が増えてくれればいい。翔は心底、そう願っていた。

第４２１話　夏休みが明けて

「かっける！」
背中を思い切り叩いて翔の後ろから声を掛けてきたのは、涼平だった。
「おう！　りょうへい！」
「おっはよ！　久しぶりだな。元気そうじゃん？」
「そういうお前、真っ黒けやんけ」
涼平はへへッと笑った。どうやら夏休み中、海やら花火やらあちこち外出した結果らしい。
「お前は部活頑張ってたんだろ？」
「まぁなー」
「市内でも結構評判みたいだぜ？」
翔はグッと体を引き寄せた。
「ホンマか？」
「ウソついてどうすんだよ。マジだよ、マージー」
ニヤける翔。本当に嬉しいようで、ニヤニヤが止まらない状態だった。涼平曰く、終戦記念日式典を筆頭に市民祭や地域の祭、七海高校野球部（今年はあと一歩で甲子園まで届くところだった。決勝戦敗退）の応援など、精力的に活動した部員たちの評価は上々のだそうだ。
「そんで？　吹奏楽部の東関東大会だっけ？　いつあんの？」
「今週の土曜日」
「マジ？　じゃあ、正念場ってこと？　今週が」
翔は大きくうなずいた。
「今日から、またミッチリ練習するはずやねん」
「はずってどういう意味だよ」

涼平の質問ももっともであった。翔は答える。
「いや、今年の秋は結構行事多くてさ。17日が敬老の日コンサート、24日に体育祭、10月10日から12日まで七海祭、30日に留学生お別れ会っていう感じで、行事目白押しやねん。せやから、他の曲もやってかなアカン」
「へぇ……。あ、そうだ。今年、音楽祭だったっけ？」
翔はうなずく。
「ますます大変じゃん……。吹奏楽部、意外とハードだよなホント」
「でも、それがかえってやり甲斐があんねんけどな！」
涼平は心底翔の言葉に感心していた。
「俺ならそんなに頑張れるかなぁ」
不安げに呟く涼平。
「なんや！　お前就職すんねやろ？　そんなマイナス思考やったらアカンで！」
「ほーい」
涼平とは昇降口で別れ、そのまま翔は音楽室へと向かう。もはや恒例行事となっているが、始業式では校歌を演奏する。それから、夏休み中の大会で優れた成績を収めた部に表彰する場では、得賞歌を演奏することになっていた。
翔はまさか、自分が現役の間にこの表彰状をもらう側になるとは夢にも思っていなかった。昨年は、地区大会止まりだったので恭一のほうが表彰式に関しては固辞したのだ。しかし、今年は地区大会及び県大会で金賞という結果だったので、普通に表彰されるべきレベルのものであった。
そのため、校歌演奏後に翔は抜けることになっていた。得賞歌は自然とさゆりがファースト、夏樹と麻綾がセカンドとなった。得賞歌くらいでは、1・2年生も緊張しなくなっていた。
「それでは、次に表彰式へと移ります」
翔の心臓が少し鼓動を速めた。演奏する時よりもある意味緊張する。水泳部、陸上競技部、野球部などが呼ばれ、いよいよ吹奏楽部

の番になった。
光治が翔のほうを見る。そして、教頭が「吹奏楽部」と呼んだ。
「はい！」
大声で返事をし、光治の前に立つ翔。ニッコリ光治が微笑んだあと、賞状の内容を読み上げた。
「七海市立七海高等学校吹奏楽部殿。貴殿は、全日本吹奏楽コンクール川崎地区大会において優秀な成績を収められました。よって、この栄誉を讃え、表彰状を送ります。平成１９年7月……」
この後の言葉は緊張のあまり、翔はあまり耳に入ってこなかった。
（緊張してるな……かける）
陽乃は翔の後ろ姿だけで彼が緊張しているのがヒシヒシと伝わってきていた。ひょっとすると、冷や汗で背中がびしょ濡れになっているのではないかと思うほどであった。翔はソロや音が目立つメロディなどを吹くときは堂々としているのに、こういう場面にはなぜか弱いことがある。
そして、自分の部の演奏で表彰状を受け取る翔。この瞬間だけは何とも言えない達成感のようなものがあった。
笑顔で部員たちのほうを見やる翔。体育館の前のほうと後ろのほうでは顔もはっきり見えないが、翔が笑っているのは部員たちにはハッキリと見えていた。

「じゃーん！」
演奏を終えて先に戻っていた部員たちに、翔が改めて表彰状を全員に掲げる。
「いぇーい！」
由美子と沙希が拍手をしながら翔を出迎えた。拍手が音楽室に広がっていく。
「改めて全校生徒の前で賞をもらえると、頑張ったなぁって思いまーす！」
翔の言葉に全員が「思いまーす！」と返した。

「そんじゃあ部長！」
慎也が賞状を入れる額を手渡す。
「部長の手で、その賞状をこちらへどうぞ！」
「了解！」
翔が額を受け取り、教卓の上にそれらを置いて一枚ずつ（地区大会と県大会それぞれ）額へと収めていく。
「おぉ！　それっぽい！」
翔が入れ終わった額を掲げた。
「ぽいぽい！」
絵美が満面の笑みで拍手をする。
「よっしゃー！　次の東関東も頑張るでー！」
「おーう！」
全員が右手や左手を空へ挙げる。
「ほんじゃ！　今日はホームルームとかで簡単に終わるから、午後から合奏予定です。宿題は終わってますか！？」
「それは部長、あなたが一番心配です！」
「やかましわ！」
綾音のツッコミに翔がさらにツッコんで返す。見慣れた構図だが、やはり笑いが起きる。特に、その光景を初めて見る周磨、友美、美咲は大声で笑っていた。
解散後、周磨に話し掛けてきたのは雄飛だった。
「の……む君」
周磨は驚いて振り返った。まさか、雄飛のほうから話し掛けてくれるとは思ってもみなかったからだ。
「な、なに？」
周磨もおっかなびっくり答える。
「あ、あのさ。今日の帰り、一緒に帰らない？」
「へ？」
「嫌……じゃなければ、なんだけど」
周磨はしばらくポカンとした様子になったが、すぐに「マジで！

？　えぇん？」と嬉しそうに答えた。
「うん」
「やったー！　ほな、一緒に帰ろ！」
雄飛もその言葉を聞いて笑顔になる。
「あ、っていうかさ。俺のこと野村くんっていうの、やめへん？　なんか、堅苦しい！」
「え？」
「シューマでえぇわ！　俺、自分のこと雄飛って呼ぶからさ」
「う、うん。わかった」
「ほな雄飛！　帰りヨロシク！」
「うん！」
翔は二人のやり取りをなんとなく聞いていて、少し胸を撫で下ろした。
「かける？」
陽乃が翔を呼ぶ。
「ん？」
「どしたの。あの二人。ケンカでもしてたの？」
翔はフヘッと笑ってから「そうなんちゃう？　オレもよぉ知らんわぁ」と答えた。
「ふーん……。野村くん……ややこしいな。周磨くん、関西弁なんだ」
「あぁ。大阪出身らしいからな」
「意外と多いよね、この高校。塚口くん兵庫県だし」
「ホンマやな。オレとしては肩身狭くなくってえぇけどな」
翔は二人仲良く音楽室を後にする周磨と雄飛の背中を見送っていた。

翔たちがホームルームをしている間に、音楽室には岳彦がやって来ていた。恭一に許可を得て、こうして部員たちが来るのを待っている。

「どうだろ……。これで喜んでくれるといいけどなぁ」
その岳彦の手には「光」と「Ｐａｓｓｉｏｎ」と書かれた分厚めの封筒が握られていた。それらをピアノの上に広げる。
「あっ」
ホームルームを終えて音楽室に真っ先に来たのは、健之佑だった。
「三河先輩！　こんちは！」
「おー！　ノムさん。久しぶり！」
「お久しぶりです！　もしかして？」
「そのも・し・か・し・て！」
「よっしゃあ！　マジすか！　嬉しい！　演奏、今日できるかなぁ？」
岳彦が笑いながら「それは皆のコンクールの曲の出来次第だって、東先生言ってたぜ」と答えた。
「おーっしゃ！　俺、今日めちゃ頑張る！」
健之佑は一際大きな声で気合を入れると、早速合奏の用意を始めるのであった。

第４２２話　感覚を戻せ！

９月３日月曜日の午後、音楽室に恭一の怒声が響いた。
「ストップ、ストップ！」
「こら！　チューバとパーカッション！」
「はい！」
拓真、智志、好美、美里が返事をする。
「違う！　田中じゃなくて、ベードラ！」
「は、はい！」
自分が注意されるとは思っていなかったのか、あずさが驚きの表情を見せる。
「重たいんだよ！　なんでそんな重くなってる？　合宿の頃や県大会に比べたら、それこそ雲泥の差のようなマーチの伴奏だぞ？　重すぎる！　もっと軽く！」
「はい！」
「後打ちも後打ちだ！　軽すぎる！　なんだそのテッテケテーって音は？　もっとタッタカターッ！と発音しっかり！　音ボケするな！」
「はい！」
「もう１回、頭から。しっかりしろ？　本番まで１週間切ってる。地区大会以下のレベルにまで戻ってるぞ！　意識が足りない！」
「はい！」
岳彦は去年までとはまるで違う厳しい練習に、少し驚いていた。しかし、それにしっかりとついてきている部員たちにも、感心していた。
「バカ！」
恭一の口からバカが出るのは、岳彦も初めて見る姿であった。
「トランペット！　揃いも揃ってなんだその情けない音は！？」

「すみません！」
「いいか？　コンクールメンバーになったからって怠けてたら、文化祭や音楽祭は載せないからな。全員が載れると思って安心してるなよ？　谷村や、佐野に演奏してもらって、２年生や３年生だって、舞台袖で聞いてるだけっていう可能性もあるからな！　意識、高く持て！」
「はい！」
（これくらいやらないと……県なんて突破しないか）
岳彦は合奏の見学も早々に、今度は個人練習をしている教室に様子を見に行った。友美たちの入部により人数が増えたこともあり、木管と金管で分かれ、打楽器は毎日交替でそれぞれの部屋に入って練習している。弦バスは金管と一緒に練習をしていた。
「ちょっと待って」
木管の部屋でサックスのさゆりが指導をしていた。どうやら、岳彦が書いた「光」を練習しているようだった。
「そこのタラリラリーがさ、ちょっと音がフニャフニャしてるのよ。もうちょっと、初めの印象を与える部分なんだから、クラリネットさんはハッキリしっかり吹いて」
「はい！」
「もう１回！」
「はい！」
そしてメロディが主題部分を演奏する。
「ちょっと待って！」
さゆりが再び演奏を止める。木管の部屋にはさゆり、今はまだ吹けないが楽譜を片手にした騎士、まゆ、慧太、友美、今日は木管に加わっている晃がいた。
「そこ、誰？　メロディ。オーボエでしょ？」
「え？」
まゆが声を上げた。
「しっかり吹いて」

「で、でも……ここ、ソロなんで野村先輩が」
「そりゃ本番はノムさんが吹くかもしれないけど、今はオーボエ、まゆちゃんしかいないでしょ？　しっかり！」
まゆの表情が厳しくなる。
「はい！」
「じゃあ、もう1回そのメロディから。志賀くん、そのまゆちゃんに呼応するメロディ、しっかり吹いてね」
「はい！」
「速水くんも、そこ、クラリネットのメロディあるからしっかり吹くって書いておいて」
「はい！」
岳彦は的確な指示を飛ばすさゆりなら大丈夫と感じ、隣の金管の部屋に移った。金管の部屋には綾音、美咲、周磨、貴志の４人がいた。こちらは美咲のために、全員で基礎ロングトーンをしているようだった。
前に立っていたのは、入って間もない周磨だった。
（へぇ？）
なぜ周磨が指導する立場になったのか、岳彦は少し考えた。翔に新入部員がまた入ったと聞いた際には、周磨のことを特によく聞いていた。彼がこの４人の中であればレベルは突出している。おそらく、それを踏まえた綾音が指導を依頼したのだろう。
（ま、任せといて大丈夫そうだな）
岳彦は再び聞こえてきたベーのロングトーンを聞きながら音楽室に戻った。
「バカ！　またそこもたついてる！」
戻るなり、恭一の怒声が聞こえたので岳彦は少し音楽室に入るのがはばかられた。そっとドアを開け入ると、恭一がサックスのメンバーを怒鳴りつけていた。
「なんでそんなにメロディも裏メロも吹き方が乱雑になってる？」
「……。」

「西嶋！　なんでだ？」
はるかが困惑の表情を浮かべる。
「工藤！　なんでだ？」
茉莉紗も周りの顔色を窺うような素振りを見せ、明らかに視線が泳いでいた。恭一はため息をついてから麻綾に聞く。
「鈴木！」
「えっと……」
翔が「頼むで！」と言いたそうな表情をするが、言葉を失ってしまった麻綾もスルーされてしまった。
「朝倉！」
陽乃は自分の名前を呼ばれて反応しそうになったが、それが夏樹であることに気づき口をつぐんだ。
「……すみません！　わかりません」
「バカ！　わかって吹け！」
「すみません！」
面と向かってバカと言われた夏樹があからさまに落ち込む。
「前田！」
「へ？」
自分は伴奏なので正直関係ないと考えていたかのこは面を喰らった顔をする。
「なんでメロディがこんなに荒れてる？　吹きにくい？」
「……ハズレてるかもしれませんが」
かのこが冷静に言った。
「いいぞ？　言ってみなさい」
「伴奏がちょっと……不安定になってるから、ですか？」
その言葉に拓真たちチューバと亮平、駿、誠が驚いてかのこのほうを見た。
「じゃあ、なんで伴奏が不安定になってると思う？」
「そこまではちょっと……」
恭一が岳彦のほうを見た。バチッと目が合う二人。

「それじゃあちょうど先輩がいらしてるから、聞いてみなさい」
「えぇ!?　せんせぇ……」
岳彦は苦笑いするが、原因はわかっている彼はうなずいて前に立った。
「とりあえず。前田さんがなんでわかったのか。それは多分、前田さんたち木管の伴奏が思いのほか、チューバに頼った伴奏を吹いてるから」
駿と誠が「そんなはずはない」と言いたげな顔をしている。
「もちろん、3人はそんなはずないと思ってるだろうけど、これはある意味仕方ない流れでもあるんだよね。チューバの音が3人の耳にはきっちり飛んでくる。もちろん、これはみーやんにも言えることだけどね。それがちょっと難しい言葉で言うと、依存心が4人……みーやんも含めちゃうけど、依存心があるんだよ、チューバに」
4人がそうか、という表情をする。
「マーチだから、前へ前へ。そのキッカケを作るのはもちろん伴奏なんだよね。歩くリズムを作るのに、その作る側が遅れてるんじゃあ、どうしようもないと思わない？」
「はい……」
駿がうなずいた。岳彦が笑う。
「そう思ってるなら、なんとかしないと。な！」
「はい！」
恭一がうなずいて指揮台に再び立つ。
「それじゃあ時間ないから。伴奏だけで。前打ち後打ち一緒に。前へ前へ行くようにな」
「はい！」
指揮棒が上がる。軽快なリズムが響き始めた。
「バリサク！　ほら、遅い遅い！　バスクラ！　ベェベェ言うな！　バスーン、もっとハッキリ！」
駿が横目でチューバのほうを見る。好美と目が合った。
「チューバを聞いてたら遅くなるぞ！　逢沢！」

頭の中でチューバとバスクラの音の出だしの違いを想像する。リードを振動させるバスクラと、唇の振動が直接楽器に伝わるチューバでは音の出だしはもちろん異なる。音がボケやすいバスクラは、よりハッキリ吹く必要があるだろう。

そう意識していると、次第に駿の音が変わり始めた。時間はかかったものの、それがやがてかのこに波及し、少し遠い位置にいた誠にも到達する。そして、ようやく前へ前へ行くようなリズムが生まれたのだった。

第４２３話　次を見据えて

「起立！　礼！」
「ありがとうございました！」
午後５時。早めに合奏を切り上げた吹奏楽部。しかし、これで今日の活動は終わりではない。この後も気持ちをしっかり保っていかなければならないことが控えていた。
「それじゃ、拓あんと陽乃」
部活でも遠慮なく陽乃と呼び捨てにできる雰囲気は、しっかりと作られていた。部内恋愛禁止だとか、あだ名や呼び捨てで呼ぶななどということを恭一は一切言わない。何もそういったことをがんじがらめにしなくても良いというのが、彼の方針だからだ。
「各教室におる子ぉら、呼んできてくれへん？」
「了解」
二人が出てすぐに翔は次に由美子を呼んだ。
「宮部ちゃん」
「はぁい」
「楽譜、よろしゅう頼むわ」
「はぁーい。じゃ、瀬戸くん、佳菜ちゃん、松尾くん、エリリン。お手伝いよろしく～」
「はい！」
５人が揃って部室に向かう。翔が教卓に立った。それを確認すると同時に恭一が職員室へと帰っていく。
そして、譜面係以外の全員が揃ったのを確認して翔は話を始めた。
「えーっと。とりあえず、先生との話し合いも終わりまして。無事、七海祭での全体で演奏する曲目は決定しました」
今回、七海祭では全員がいつでも見られる舞台で演奏する場と、喫茶店形式にした吹奏楽部の出し物としての演奏の場、そして音楽祭での演奏の場と３つの形式に分けて出演することになった。出し

物としての演奏の際は、ポップスとディズニー系統の曲を中心に演奏することにしている。岳彦の編曲した「光」と「Ｐａｓｓｉｏｎ」は、ここで演奏する予定である。

「それでは、楽譜を配ってしまう前に、それぞれの日程で決まった演奏曲を発表します。曲順も既に先生がうまくバランスを取って決めてくれましたので、これで決定です。メモ、お願いします」

「はい！」

そして翔は黒板に曲名と演奏する日を書いていく。

＜１０月１０日（水）　午前１０時～＞

♪千と千尋の神隠し　ハイライト

♪デサフィナード

♪愛唄

♪ディスコ・パーティＩＩ

☆蕾

＜１０月１１日（木）　午後１時～＞

♪タイタニック・メドレー

♪Ｈａｐｐｉｎｅｓｓ

♪青春の輝き

♪ジャパニーズ・グラフィティ～刑事ドラマメドレー

☆聖者の行進

「曲名及び演奏順は以上です」

部員たちがそれからワイワイと楽しそうに話を始める。

「はいはい！　ちょっと静かに！」

それから翔が優しげな微笑みを浮かべた。

「えーっと……。ちょっと、リアルなお話します」

翔のその表情に１・２年生が不思議そうな表情を浮かべた。

「今は、９月３日です。実は、七海高校の記念すべき定期演奏会ま

で3ヶ月を切りました。これはつまり……オレたち3年生が引退するまで3ヶ月を切った、ということを意味します」

その言葉に室内が静まり返る。翔は続けた。

「そこで、この七海祭をソロの引継ぎ式のようなものにしたいと、思います」

今度はざわめきが起きた。

「これは東先生の方針です。まぁ、元から3年生がおらへんパートあるいは一時的に欠けてるパートがおりますけれども。その場合は、1年生が優先的にソロを吹くと考えてください」

ホルン、オーボエ、バスーン、弦バスやテナーサックスが当てはまる。

「それで。そのソロを1・2年生が優先的に吹く曲を言います。まず、千と千尋の神隠しハイライト。それから、ディスコ・パーティーII、タイタニック・メドレー。以上、メドレー3曲です」

「マジで大曲ばっかじゃないですか！」

順平が焦りに近い声を上げた。

「そのとおり。大曲ばっかりというか、むしろ大曲をこうして選んだみたいです、先生は」

「困ります！　本当に全員、3年生はこの3曲は全部ソロを吹かないんですか！？」

亜紀が苦情を申し立てるような勢いで声を上げて立ち上がった。しかし、翔は怯むことなく「はい！　そのとおりです！」とバチッと答えた。

「そんなぁ……」

裕子がしょげた声で呟く。

「これは練習です！　オレたち3年生がおらへんなって、急にソロを吹くようになっても君らが怯むことなく、バチッとカッコよーくソロを決めるための練習！」

それから拓真が引き継いだ。

「あくまで、先生は演奏する側のみんなのことと、お客さんのこと

を考えた上での結論を出したと思うので」
「そんな風に思えませ～ん」
恵梨の言葉に笑い声が起きた。拓真と翔も笑っている。
「例えば」
翔が続ける。
「はい。秦野さんがグロッケンでソロがあります」
「いやん！　嬉しい！」
ドッと笑い声がまた起きる。
「しかーし！　鍵盤叩く位置ミスってはい失敗！　目の前には秦野さんの愛しの彼が」
「やだぁ！　今はそんな人いないけどいたら恥ずかしい！」
今度は爆笑に変わった。
「やろ？　ソロは、カッコよく仕上げてお客さんに感動してもらってナンボのもんです。それを、急にオレらがおらへんなっても君らが堂々と仕上げられるようになって、オレたちは安心して引退したいわけですよ」
翔の言葉に3年生全員がうなずいた。
「永井ちゃんおるやろ？　転校する時……うーちゃん一人にするの、めちゃ心配してた。彼女なぁ、自分より明らかにうーちゃんのほうが経験値は上やけど、それでも急にソロを押し付けるような形でおらへんようになること、ホンマ心配してたみたい」
順平が「そうだったんだ……」と一人驚いている。
「そういった心配をなくすためのことやと、しっかりわかってくださいよ。よろしく！」
「はい！」
翔が言い終えると同時に由美子が「はぁーい！　じゃあ、楽譜配布しまーす！」と音楽室に元気よく戻ってきた。
「はい！　オーボエさんどうぞ！」
まゆと健之佑はそれぞれ、楽譜を興味深そうに見ていく。
「これ……ソロ、2ヶ所あるな」

「はい……」
健之佑はしばらく楽譜を見て、言った。
「じゃあ、初めは俺。再現部が歌川さんでどう？」
「は、はい！　頑張ります！」
「うん！」
一方のホルンは５人が揃っている。
「ここ、めっちゃくちゃカッコいいソロ！　はい！　吹きたい人！」
しかし、手が挙がらない。
「うーん……消極的だな。長いから、二人に分けるか！」
順平は裕子、杏、賢治、周磨の順で顔を見ていく。
「よし！」
順平が意を決したように言う。
「オーディションすることにしようか」
「オーディション……！」
その言葉に４人の表情が変わった。
「４人のうち、２人がこのソロを吹く。ひょっとしたら、ソロをカッコよく吹けば佐野先輩と朝倉先輩みたいなカップルができるキッカケできるかもよ？」
ブッと翔が吹き出した。
「お、おい、テキトーなこと言……」
「マジですかー！　あ、あたしめっちゃ頑張ります！」
翔の声を掻き消すように、杏が立ち上がる。
「ま、負けてらんない！　私だって！」
裕子が意気揚々と声を上げた。
「男子二人！　女子に負けてるぞ？」
「俺だって！」
周磨が裕子を押し退けた。
「何すんのよ！」
「俺も入れろい！」
ホルンの４人が珍しくお互いの主張をしている。順平にとっては

それだけで既に嬉しいことであった。
それとは別に、翔は3名、2年生を呼び出していた。話し合いの場所は多目的室。音楽室からは比較的、離れている。呼び出されたのは駿、はるか、光瑠であった。
「ゴメンな、急に呼び出して」
「いえ……」
そうは言うものの、あからさまに3人とも緊張していた。
「そないビビらんとリラックスして」
「はい」
翔はしばらく間を開けてから言った。
「自分らに、次期役員やってもらいたいねん」
翔の言葉に今度は3人の表情が、明らかに狼狽したものに変わったのだった。

第４２４話　伊原・逢沢

「ただいまぁ」
伊原　光瑠（１７）。袴田中学校出身の彼女は、２年生のときからファーストクラリネットを吹く、着実な力を持っている奏者である。
「おかえりなさい、光瑠」
姉の紗雪（２０）が光瑠を出迎えた。
「ただいまぁ、お姉ちゃん」
昔から仲の良い姉妹は、共働きの両親を持っている。そのため、交替で家事をすることも昔は多かった。しかし、光瑠が吹奏楽を始めてからは、紗雪に何かと負担をかけることが増えてしまった。
もちろん、紗雪はそれについて文句を言うどころか、むしろ部活は楽しいか、楽器を吹ける光瑠が羨ましい、と常に彼女に気遣いを見せてくれる。そんな優しい姉が紗雪である。
「今日は早かったのね。やっぱり、始業式だから？」
光瑠が制服から私服へ着替えている最中、紗雪は夕食を用意しながら他愛のない会話をいつもしてくれる。この気遣いも、光瑠を落ち着かせてくれるひとつだ。
「うん。それに、本番前だから吹き過ぎないようにっていう東先生の気遣いもあってさ」
「へぇ～。あの先生、カッコいいだけじゃないんだね」
プッと光瑠が笑う。
「なぁにそれ。私、知ってるよ？　お姉ちゃん、東先生みたいな人タイプでしょ？」
「やだ、バレた？」
「バレバレ！」

二人の笑い声がリビングに響いた。
「あぁ、でも残念よねぇ。先生、結婚されたんだっけ？」
「そうそう。これがまた、美人な先生でさぁ」
「職場恋愛で職場結婚とか、憧れるわよね」
そう言いながら、紗雪はコロッケを机の上に置く。それからポテトサラダ、コーンスープとおかずをどんどん並べていった。
「できたわよ。食べよう」
「はぁーい」
光瑠と紗雪は向かい合わせで机に座った。
「いただきます」
「いただきまーす」
カチャカチャとお箸とお皿のあたる音が響く。しばらく沈黙が続き、それを先に破ったのは紗雪だった。
「光瑠」
「んー？」
「部活か学校で、何かあった？」
光瑠は箸を止めた。それからすぐにポテトサラダを突つき、続けた。
「なんでわかったの？」
「アンタの『ただいま』が『ただいまぁ』って語尾が伸びてる時は、何かあった証拠だから」
光瑠は「へへッ」と小さく笑った。
「お姉ちゃんにはすぐそういうこと、バレちゃうなぁ」
「光瑠は昔から顔じゃなくて、言葉に出るからね」
それから再び沈黙。お箸とお皿の当たるカチャカチャという音ばかりが聞こえる。こういうとき、いつも紗雪は光瑠から放してくれるのを待っているのだ。
「お姉ちゃん」
「んー？」
「……。」

紗雪が笑う。
「なぁに？　言いづらいこと？」
「……。」
「その様子じゃ、勉強のことではなさそうね」
「うん……」
それから5分。ようやく光瑠は話題を切り出した。
「私ね……佐野先輩から、副部長やってほしいって言われたんだ」
「え！？」
紗雪が思わずコーンスープをこぼしそうになった。
「きゃあ！　危ない！」
「ご、ごめんごめん！　びっくりしちゃって」
少し飛び散ったコーンスープを拭き取り、光瑠は続ける。
「副部長って、光瑠が？」
「そーなの。ガラじゃないと思わない？」
スープをすする光瑠。紗雪がコロッケを箸でサクッと切り分けてから言った。
「お姉ちゃんは思わないけどなぁ」
「え？　私が副部長でもいいんじゃないってこと？」
「うん」
「どーしてそう思うの？」
紗雪はコロッケを頬張ってしばらくしてから言った。
「まず、光瑠の演奏ってさ、こう、感情をしっかりと込めるわよね」
突然何の話なのか、光瑠は一瞬わからなくなった。紗雪は続ける。
「そう。光瑠は、感情を汲み取るのが上手い」
光瑠自身、そんな風に考えたことはなかった。
「私、別に……そんなことできてないと思うけど」
「そう？　まぁ、自分のことは自分が一番わかるんじゃない？　考えてみなさいよ」
光瑠は箸を止めてしばらく考えた。ふと、今日の楽譜分担のことが思い出された。クラリネットには幸いといってよいのか、ソロは

なかったのだ。しかし、それが逆に不安だったのか、あるいは不満だったのか、クラリネットのメンバーはどことなく表情が暗かった。

そんな時、光瑠はまず絵美に掛け合った。木管セクションリーダーである彼女に、クラリネットのソロもしくはソリを作っていいかどうか、聞いたのだ。絵美は最初、驚いた顔をしたがすぐに「いいよ。その代わり、責任持って中途半端なことにならないようにね」と答えた。

「OKだって！」

その言葉を聞いた瞬間、全員の表情が明るくなった。それからすぐに、みゆきと優輝が駆け寄り言ったのだ。

「さっすが光瑠！　頼りになる！」

「ありがとな、伊原！」

どことなく歯がゆい感じはしたが、光瑠は嬉しさが心の中ににじんでいった。

「多分、光瑠は人に気遣いがしっかりできる子なんだってお姉ちゃん思うのよ。だから……それを佐野先輩が知ってるんじゃないかな？　光瑠が、部長じゃなくて副部長にしたのも、部長になる子のことを気遣って、支えられるって思ってるから。だから、そうしたんだと思うよ」

「……。」

「光瑠は気づいていないだけでね」

「そっか……」

光瑠はしばらく箸を止めて考えた。

「どうするかは光瑠次第よ。断るにしても、佐野くんに納得してもらえるような理由、考えなさいね」

「うん」

光瑠は微笑み、再び箸を動かし始めた。

「おかえり、駿！」

光瑠が帰宅した頃、駿も自宅へ帰っていた。母親がバタバタとど

こかへ行く仕度をしていた。
「ただいま！　聞いてよ母さん！」
「あ、ゴメンね～。今からお母さん、爽を迎えに行かないとダメだから後で話聞くね」
「え……あ、そうなんだ。わかった」
いってきます、と慌しく出て行った母親がいなくなった玄関は、どことなく寂しげだった。
駿は俯いたままカバンを肩に提げ、そのままリビングに向かう。電気を点けると、ラップに包まれた料理が並べられていた。
弟の爽はいま、受験生の中学3年生だ。頭が良いので、私立高校を受験すると意気込んでいる。そのため、自宅からずいぶん離れた塾に通っている。行きはいつも電車で通っているが、帰りは母親が車で迎えに行っている。事件などが増えてきている世の中だから、仕方がないと駿も割り切っているつもりだった。
しかし、最近はもう毎晩のように母親は留守にする機会が増えた。そして、こうして駿が独りになる機会も増えた。
反抗期はとっくに過ぎている駿。しかし、満たされない思いはどんどん募っていくばかりであった。
「あーあ……。頑張ってやってたって、なぁんか全然報われねぇし」
心の中でたまに沸き起こる思いが、遂に言葉になって出た。
「辞めよっかなぁ……部活……」
正直、東関東大会に出られたことは駿としても、嬉しかった。しかし、今日のように恭一に激しく叱られることがだんだん増えてきている。それを誠や優輝にボヤくものの、彼らは「俺たちのことを思ってなんだからさ」というばかり。少しでもいいから、グチのようなものを言い合えるような雰囲気というのも、あまりなかった。
極め付けが、今日の翔の話だった。
役員をして欲しい。
一瞬、駿のやる気はそこでなんとか再燃した。しかし、すぐに一人ずつの話し合いになったときに、自分は副部長のポジションが適

当だと翔、陽乃、拓真に思われているという事実を知った途端、やる気が萎えたのだ。

2年生代表をやっているから、そのままひょっとすると部長になれるのではないか。リーダーシップを取るのには自信があった駿だったが、その自信もいつの間にかどこかへ行ってしまった。

「……メシ、いいや」

駿はラップに包まれたままの食事を横目に、そのままカバンを持ち自室へと入った。部屋に入っても電気を点けず、寝転がるばかりの駿。外を電車が走る音が響く。

「……。」

癒されたい。そう思ったとき、駿の手はCDデッキに伸びていた。中学時代は部長を務めた駿。もう一度、あの時の感覚を味わうことができる。そう思っていただけに、今回の推薦は彼にショックを与えていた。

CDから流れてきたのは、駿たちが最高学年となった年の春の市吹連で吹いた曲だった。七海高校でも吹いたことのある『たなばた』。駿のパートはそれでなくても地味というか、目立たないパートである。しかし『たなばた』にはチューバにまでソロがある曲だというので、ひょっとすると駿のバスクラリネットにもソロがあるのではないか。そう期待したのだ。

けれども、あえなくその期待は破られた。しかし、あの頃の駿はそんな事実がわかっても、懸命に練習を続けた。自分の音がたとえ埋もれて聞こえなくても、自分は演奏を構成する立派な一人だ。そう考えると、やる気が湧いてきたのだ。

下から支える人がいるから、結局メロディとかが引き立つのよね。

当時、同級生で部員だった安藤（あんどう）　奈美（なみ）という女子生徒の声が蘇った。そして、その時。急に自分にやる気が出てきたのも同時に思い出した。

「そっか……」

部長がいる。そして、副部長がいる。それを考えた瞬間、翔・拓真・陽乃の姿が思い浮かんできた。いつだったか、翔が自分の想いが受け入れられないと言って失踪（？）したことがあった。その時には、陽乃が探しに出かけ、拓真が自分たちを動揺させないように、残っていろいろと考えてくれた。

今度は、自分が支える番だと駿は確信を持った。翔はそれを見越して自分に副部長の話を持ちかけたのだ。そう考えれば、自然と気持ちは前向きになった。

「今頃……西嶋が多分一番、悩んでるだろうな」

駿は起き上がり、制服を脱いで私服に着替えた。きちんと食事を済ませ、宿題を済ませ、今日恭一に指摘された箇所をもう一度、県大会のＭＤを聴いてから寝よう。そう考え、駿は自室を出たのだった。

第４２５話　西嶋はるか

「どうだった？」
９月４日の部活終了後。陽乃と拓真が翔にそう尋ねた。
「逢沢っちと伊原さんは前向きな返事っていうか、ＯＫで返事が来た」
二人の顔が翔の言葉にパァッと明るくなる。
「じゃあ、西嶋さんは？」
陽乃の言葉に翔は静かに首を左右に振った。
「え？　ダメだったのか？」
「アカンって言われたわけではない。ただ、あたしにはできないですって言われてな」
「そっか……」
「でも、もう１回よく考えてくれへんか？とは言うといた。別に、期限ってわけではないけども、今年中に結論出してくれればいいって思ってるとは伝えといたからさ」
拓真は、もしもはるかが部長推薦を正式に断った場合、誰を推薦するのか翔に尋ねた。翔の頭の中では、立候補があればそれを優先するという考えはあったが、まず普通に考えて部長に立候補するというのは相当な勇気が必要である。そう考えれば、立候補はないに等しいと考えておいたほうが良いというのが翔の意見であった。
そうなると、やはりはるか以外にも部長に推薦する２年生を挙げておいたほうがよいのだろう。恭一に相談をその日のうちに翔は持ちかけた。陽乃と拓真も含めて４人で話し合いを持つ。
「逢沢と伊原は、副部長という形で考えていていいんだな？」
「はい。それは大丈夫です」
恭一の言葉に翔がうなずく。

「もし、もし最悪の場合だが、これから考える部長候補に全員拒否……された場合は、伊原か逢沢に部長になってもらうことも考えておいてくれと伝えてくれるか？」
「わかりました」
職員室で翔たちが話し合いをしている頃、外をはるかと麻綾、さゆりのサックス2年生3人組が歩いていた。はるかは、自分が部長に推薦されたことを二人に告白した。
「え？　マジで!?　すごいじゃん、はるか！」
さゆりが素直に喜ぶ。
「で？　受けたの？　佐野先輩の推薦」
はるかは大げさに首を左右に振った。
「まさか！　あたし、そんな器じゃないし！」
「え？　じゃあ、断ったの？」
はるかはまた左右に首を振る。
「どっちなのよ、じゃあ」
麻綾が不思議そうに聞き返した。
「保留。また、考えて返事くれって先輩に言われた」
「そっかぁ」
さゆりが残念そうに言う。
「まだ、断るって完全に決まったわけじゃないんでしょ？」
「うん……」
「私、気になってたんだけど。なんではるかは、自分が部長の器じゃないって思うわけ？」
さゆりにそう言われて、はるかはいろいろと理由を考えた。
やはり、最も大きな理由は翔という存在が大きすぎることだ。1年生の頃から、つまりサークルの頃から代表を務め、部長をそのまま2年生の頃からして、いわば3年間ずっとトップに立ってやってきた彼と、自分をどうしても比べてしまう。
次に、自分の性格。賑やかにして人を盛り上げることは確かに好きなのだが、それと人を引っ張っていくということは根本的に違う

と彼女は考えていた。もしも、翔たちが引退した後に何か役員もしくはそれに近い立場になるのであれば、木管セクションリーダーがしたいと彼女は考えているのだ。

はるかはそれを簡単に二人に説明した。

「なるほどね～。確かに、佐野先輩は私たちの中じゃ偉大っていうか、スゴいよね」

「マーヤ」

さゆりに注意されて麻綾は自分がまたマズいことを言ったのに気づいたのか、思わず手で口を覆った。

「さゆ。別にいいわ。あたし、そんな気にしてないし」

「ゴメン……なんか」

「やだ！　マーヤもそんな凹まないで！　あたし、もうちょっとゆっくり考えるし」

はるかは笑顔を作ってそう答えた。しかし、断る理由が翔の存在が大きすぎるではいまひとつ説得力がないことは彼女自身がよくわかっている。それに、そんな理由で翔が納得するとも彼女には思えなかった。

「そういえば、これってまだ基本的に誰にも言っちゃいけない話なんだよね？」

さゆりが念押しで確認する。はるかがうなずいた。

「気になっちゃったんだけど……副部長って、誰が推薦されてるの？」

はるかは言っていいのか迷ったが、さゆりと麻綾なら口が堅いと確信を持っていたのでそっと言った。

「へー！　そっかぁ」

さゆりと麻綾が駿と光瑠の顔を思い浮かべる。

「確かに。逢沢くんは中学時代部長やってるし、ヒカルンも副部長向きだよね」

「あたしはそこが不思議なの」

はるかが声を大にして言った。

「なんで？」
「逢沢、部長経験あるでしょ？　なのに、なんで逢沢に振らないであたしに話振ってきたのか、そこが意味わかんない」
「でも、副部長には推薦されてるじゃない」
さゆりが最もな答えを言ってきたので、はるかもそれ以上言い返せなかった。
「ま！　１２月くらいまで猶予あるんだっけ？」
「うん……」
「ゆっくり考えなよ。佐野先輩も焦らなくていいって言ってくれたんでしょ？」
「うん」
「とりあえず、今日はもう帰ろう！」
さゆりに手を握られ、はるかはスッキリした気分にはなれないまま自宅へ向かった。
はるかたちが学校を出てから３０分後、翔たちはようやく結論を出した。
はるかが部長推薦を正式に断った場合、金管セクションリーダーに推薦予定だった順平を部長推薦。その場合、金管セクションリーダーには愛実を推薦する。木管セクションリーダーは佳菜を推薦する予定となった。
「とりあえず、今は東関東大会が近いから、西嶋にはこれ以上話を進めないようにしよう」
「はい」
恭一が時計を見ると、もう7時半になっていた。
「遅くなってしまって、悪いな。気をつけて帰りなさい」
「はい！　失礼します」
「さようなら！」
「はい。さようなら」
翔たちが職員室を後にし、ほぼ入れ替わりに近い形で光治がやって来た。

「おぉ、東先生。お疲れ様です」
「校長。お疲れ様です」
恭一は光治に挨拶をした後、自分も帰宅準備を始める。
「どうかな？　東関東大会は」
「かなり厳しい状況ではありますが、気合い入れてますんでね部員たちも。しっかりやってまいります」
「うんうん。どんな結果にしろ、何しろ吹奏楽部が復活して3年目の快挙だからね。あまり力まずに演奏できるといいねぇ」
正直、恭一も少し力んでいるところがあった。しかし、こうして光治にそう言ってもらえるだけでも気分が和らいだ。
そして、光治は思い出したようにこう言ったのだ。
「そうだ、東先生」
「はい？」
「今年はどうかね？」
「どうかね、と申しますと？」
光治の言葉に恭一は頭が真っ白になった。
「体育祭でほら……例のマーチングはできそうかな？」
恭一が光治にマーチングの話題を振られているのとほぼ同時刻。絵美がクラスメイトと電話で話をしていた。
「ねぇ絵美」
クラスメイトが電話口の向こうでワクワクしたような声で彼女の名前を呼んだ。
「なぁにー？」
「今年も、体育祭でほら、名前忘れたけど」
「何よ？」
「動きながら演奏するあれ、するの？」
絵美の中だけでなく、吹奏楽部全体でもうマーチング出場はかなり厳しいという結論が出ていた。そのため、体育祭でも行進曲と校歌の演奏のみで済ませるつもりでいたのだ。
「今年はどうだろ……」

「ないの？」
「なさそうかも」
絵美はハッキリとそう言った。クラスメイトが続ける。
「そうなの！？　そうなんだぁ……」
「なんでそんなこと聞くの？」
クラスメイトの話によると、体育祭実行委員である彼女が先日プログラムを見たところ、昼休みに『吹奏楽部　マーチング』の印刷がされていたのだという。
「え！？　私たち、先生から全然そんな話聞いてないよ？　それに練習も全然……」
「そうなの！？」
クラスメイトもかなり驚いていた。しかし、彼女の話によれば意外とそれを楽しみにしている者が実行委員の中でもいたのだそうだ。
電話を終えてから絵美は明日、きっと何か恭一から話があるだろうと直感した。そしてそれはすぐ、現実のものとなるのである。

第４２６話　優先順位

翌日、９月５日。東関東大会まであと３日に迫り、コンクールメンバーは猛練習に励んでいた。特に課題曲の劣化が激しく、マーチの基礎となる低音の前打ちと後打ちを中心に何度も合奏では指導された。また、自由曲でも低音のメロディを中心に恭一はミッチリ指導をしている。そのため、低音パートの疲労感が濃くなってきていた。

「よし、１０分休憩」

恭一はそう言っていったん指揮台から離れ、音楽室を後にした。

「ぐっはぁ……」

智志が楽器を置いて派手なため息を漏らした。

「もう私無理～……」

愛実も同じようにグッタリしている。かのこが「ここへ来て先生、一気に攻めてきますよね……」と苦笑いしている。

拓真が休憩にもかかわらず、楽器を構えているので翔がそれを止めた。

「やめとき。休憩のときは、休憩や」

拓真が不満げな顔をする。

「だけど、気になるところがある」

「わかるけど、１０分やそこらで何とでもなるもんでもないやろ？」

「でもなんとなく気分的に落ち着かなくて……」

「それはわかるけどな。でも、いま吹いてこの後また合奏で吹いて、ほんでバテて当日吹かれへんなったら大変やって思わん？　地区大会とか県大会のときそれ言うとったん、自分やん」

拓真が小さくうなずいて楽器を置いた。他の部員たちで楽器を構えていた者も、その言葉を聞いて楽器を置いた。

「陽ちゃん」

沙希が陽乃を呼ぶ。

「下に、ジュース買いに行かない？　ちょっと時間あるし」
「いいね！　行こうか」
陽乃と沙希は由美子と美里、絵美も誘って5人で階段を降り自販機コーナーへ向かう。
「そろそろ暑さもマシになってきた感じかなぁ」
美里が外を見て言った。野球部の掛け声が聞こえてくる。
「蒸し暑さがちょっとなくなったよね」
由美子がお気に入りの小岩井コーヒー牛乳を買って蓋を開けながら引き取った。
「それよりエミリン。例の話、ホントなの？」
陽乃が気になって絵美に聞く。例の話とは、マーチングを体育大会でするという話である。
「ホントみたい。ちょっと気になって東先生に私、今朝聞いてみたんだけどさ。校長先生も今年はどうですか？みたいなこと聞かれたみたいよ」
「え！？　校長先生が！？」
5人が顔を見合わせる。
「これは……やらないとマズい雰囲気って感じ？」
美里が困惑した表情を見せる。
「でも、8日に東関東終わるでしょ？　24日体育祭で……間に合う？」
「コンクールメンバーはキツいでしょ、正直……」
それ以上、5人からは何の言葉も出てこなかった。
その頃、恭一はコンクールメンバーでない部員と留学生3人を集めていた。
「そういうわけで、体育祭でマーチングをしなければならなくなった」
恭一の話の要旨はこうだ。
体育祭で、実行委員も校長も既に吹奏楽部のマーチングを期待しているのだという。断ることもできるのだが、校長の話を聞けば地

域の人たちも今年の吹奏楽部の活動を知り、一度どのようなものかを見てみたい、聞いてみたいという関心があるのだそうだ。

しかし、コンクールメンバーに8日の練習が終わってから楽譜を配布し、コンテをしおりに作ってもらって覚えるのは無理ではないが、キツいものがあるという。そこで、コンクールメンバーでない部員と留学生に恭一は率先してマーチングに取り組んでほしいと促したのだ。

この時点でメンバーはまゆ、さゆり、騎士、友美、和志、周磨、美咲、貴志、マーガレット、裕時、ソンスの１０名である。恭一はこの１１人は絶対に２４日には出演してもらいたいと言い切った。

しかし、その中で初心者である美咲は演奏ができない。さらに、騎士はまだ完治していないため、演奏どころか正直言うと医師の判断が必要で、マーチングの動きのみもできるかどうか、怪しい部分があった。それを考えると最低９名ということになる。

１年生はマーチング経験がある袴田中学と北松中学出身の部員のみの出演にする。２・３年生は昨年の経験があるので全員出演。これでなんとか間に合わせられるのではないかというのが、恭一の考えであった。

休憩を終える間際に恭一は１１人に言った。

「今から、他の部員にもこの話してくる。ただ、絶対動揺するだろうとは思うんだよな。皆に負担かけるようで悪いけど、率先してやってくれると助かる」

「任せてください」

ハッキリそう答えたのは、騎士だった。

「先生に止められることは多分、ないと思います。普通に俺、体育はやっていいって言われましたし。過激な運動でなければ」

「あたしもやる気マンマンね！」

マーガレットも答えた。

「僕も！」

「僕だって」

ソンスと裕時も答える。全員が「大丈夫です！　やれるだけやります！」という意思表示を見せたのだ。
「ありがとう」
恭一は笑顔で答え、音楽室へ向かった。そして指揮台に上がり、着席する。
「えーっと。合奏再開前に話があります」
陽乃たち5人が「来た」という表情になった。
「実は、来る２４日の体育祭でマーチングをする方向で考えています」
一気に音楽室内がざわめきに包まれた。これにはさすがの翔も驚きを隠せていない。
「どういうことですか！？　それ！」
驚いて翔が立ち上がって恭一に聞いた。恭一は校長や体育祭実行委員が既に吹奏楽部がマーチングをしてくれるものだと思っていること、地域の期待が大きいことを理由に挙げた。
「せやけど、東関東終わってからやったら全然時間が……。６０人もおって、そこへ留学生3人も加わったら、2週間ちょいで完成させられるとは思われへんのですけど」
「もちろん、人数は最低限に絞る」
「最低限って、どの程度ですか？」
慎也が詰め寄るように聞いた。
「2・3年生と袴田・北松出身の1年生、それからメンバーでない部員１１名だ」
それだけに絞ると４５人。ずいぶん減るが、それでも４０人を越える規模だ。
「コンテは？　どうなるんですか？」
沙希が聞く。
「心配ない。勝手だけど、先生のほうから神崎さんに依頼してある」
「演奏曲は？　暗譜しないといけないんで、難しすぎるのはちょっと困ります」

かのこがハキハキと聞く。
「心配いらない。今年のニューサウンズインブラスの『ディズニー・クラシックス・レビュー』にしてほしいと先生から神崎さんにこれも依頼してある」
「練習開始はいつですか？」
愛実が今度は真剣な様子で尋ねる。
「皆の体調も考えて、１０日の月曜日からにする。楽譜は３日で暗譜してほしい。コンテは難しすぎないようにしてもらうから、本番前日までに覚えてくれたら、それで十分だ」
それを言い終えると今度は不気味な沈黙が起きる。
「すみません」
誠が手を上げた。
「はい、戸口」
「ドラメは俺たちでいいんですよね？」
ドラメとは、ドラムメジャーのこと。普通の合奏で言う指揮者で、全体の曲のテンポ指示や開始及び終了時に合図をする、重要な役割を果たす。昨年、マーチングコンテスト出場の際は、健之佑と誠が担当した。
「今回も戸口と野村にしてもらう。役員や係を決めた時に決まったことだからな」
「はい！」
それから恭一がしょげた声で言った。
「すまないな。今回は」
部員たちが全員顔をかしげる。
「大人の勝手な都合みたいな感じもあって、皆に苦労かけて」
歯がゆそうに笑う部員たち。恭一はこの子達は怒りもしていない、ただ、目の前の目標がひとつ増えたとむしろ良い方向で考えているとすぐに察知した。
「けど、優先順位をちゃんと見て、どの本番もいい加減にならないようにだけは、しような」

「はい！」
「よし、合奏の続き行くぞ！」
「はい！」
部員たちの威勢の良い返事の後、音楽室からは再び５０名の音が響き始めた。

第４２７話　目標は１１月２３日

「お忙しいところ、お集まりいただきましてありがとうございます」
友美子が全員の前で挨拶をする。
「それでは、本日の保護者会の議題ですが、３点あります」
友美子仕切る吹奏楽部保護者会は、９月５日の午後４時から行われていた。議題は３つ。まずは８日開催の東関東大会で引率する保護者を決定するものであった。夏休み中に部員が新たに入り、総勢６０名。高校生とはいえ多人数なので、引率する保護者も増やすほうが良いという意見で一致していた。
副会長を務める由利が、まずは立候補という形で引率をしてくれる保護者がいないか求めた。
「私、土曜日は基本的に空いてますので行きますよ」
そう言って手を上げたのは、順平の母であった。
「ありがとうございます」
「すみません」
好美の母が手を上げる。
「はい、飯岡さん」
「最低何名引率者はいれば大丈夫なんでしょうか？」
「そうですね……。東先生、いかがでしょう？」
恭一は「４名はほしいところです」とすぐに答えた。
「多いに越したことはありませんよね？」
好美の母の言葉に恭一は「まぁ、全員で来られたら困りますけども」と言うとドッと笑いが起きた。
「それじゃあ、３年生のお母さん方は２名、他の学年はそろそろ引継ぎということも考えて、３名ずつの合計８名にしませんか？　私、言った以上は責任持って行きますので」

好美の母の提案に加え、引継ぎという言葉がそれぞれの親の胸に響いた。恭一がちょうど良いとばかりに、部長や副部長の話を始めた。

「実は、まだ水面下で知っている生徒は少なく、保護者さんでも当人から聞いていない限りはご存じない可能性はありますが、現在来年の部長及び副部長候補の子どもさんに、その話を現部長のほうからしてもらっています」

「もうですか？」

驚いた流の母が尋ねる。

「もう、とはいえ9月に入りました。定期演奏会が11月23日。今年の3年生は全員、一般試験で受験予定ですので、引退後は受験勉強にいま以上に励んでもらわなければなりません。そう考えると、今からでもしっかりと引継ぎをしておく必要があるためです」

「早いのねぇ」

流の母はやはり驚きを隠せないようだ。

「つきましては、部員のほうでもそのように動いております。もちろん、保護者会では会長や副会長などといった役職を現職の方から今の時点で指名するといったことはいたしません。ただ、誰にでもその可能性はあるとお考えください。それを踏まえて、今回は1・2年生の保護者の皆さんになるべく多く、行っていただきたいというわけなんです」

そこでようやく静かになった。恭一は続ける。

「では、飯岡さんと右川さん以外で当日、引率してくださる方。まずは立候補からでお願いします」

その頃、音楽室では今日の合奏を終え、終礼も終えたので部員たちは帰宅する者や残って練習をする者などに分かれていった。

「楽譜係、集合」

由美子が楽譜係に招集をかけた。優輝、佳菜、勇、恵梨が駆け寄ってくる。

「あまり大きい声で言えないけどね。これ、定期演奏会の第3部で

演奏する曲なの」
「マジですか？」
優輝が小声で嬉しそうに声を上げた。
「マジマジ。それでね、ちょっと練習のために2年生4人で楽譜に原譜用の印鑑を押して、パートごとに整えてほしいの」
「はい」
「エリリン、原譜用の判子、持ってきてくれる？」
「え、あ、はい」
恵梨は楽譜係用の棚のほうへ駆け寄る。しかし、5分ほど経ってもまだ戻ってこない。
「すみません、先輩。どこにあるか知らないです……」
「知らないなら知らないでその時言ってくれなきゃ困るわ」
「すみません」
「ほら、下から2番目の引出しの右手奥。覚えておいてね」
「はい」
恵梨と由美子が戻ってきた時には、優輝が既に楽譜を封筒から出して並べていた。それを見た由美子が慌てて駆け寄る。
「戻して、戻して！」
「え？」
「早く！」
すると、後ろから慧太と徹がやって来た。
「あ、何それ？　せとっち、新しい楽譜？」
優輝の脳裏に先ほどの由美子の言葉が蘇った。
（あまり大きい声で言えないけどね。これ、定期演奏会の第3部で演奏する曲なの）
あまり大きい声で言えないということはすなわち、まだ部員たちには言っていないもしくは言える段階ではないということである。
「いやいやいや！　ほら、ちょっと古い楽譜探してなんかこう、吹奏楽喫茶でできる曲ねぇかなって探してたんだよー」
「なぁんだ。そっかぁ」

慧太が残念そうに引き返して行く。徹も後を追った。
「でも、封筒綺麗ですよね。先輩、さすがキッチリされてます」
徹の言葉に由美子は引きつりながら「ありがと～」とやんわり答えた。彼らがいなくなったのを見て、由美子が「危ないとこだったねぇ」と呟く。
「すみません。もしかしてまだ……」
「うん。知ってるのは私たち楽譜係と先生と、この曲したいって言った本人だけ」
「チョー秘密事項ですね」
恵梨が嬉しそうに言った。
「これ、誰が演奏したいって言ったんですか？　なんか頭から木管、エゲつないですけど」
佳菜がウンザリした様子で言う。
「誰だっけな……。3部の曲は、3年生が選んだりやりたい曲を持ってきたりしたんだけど」
すると、楽器を片付けて部室にやって来た翔が譜面を覗き込むなり、優輝と佳菜の間に座り込んだ。
「きゃーちょっと先輩！　ここ狭いんですよぉ!?」
「こっ、これ決まったんか!?」
その言葉を聞いて全員がこの曲は翔がやりたいと言ったに違いないと確信した。
「そうよ。決定」
「よっしゃあ！」
小声で喜ぶ翔。
「まだ、皆には内緒なんやろ？」
「さすが佐野くん。わかってるぅ」
「ゴメン！　でも先にオレだけコピーさせてぇな」
すると由美子が翔の額を思い切り右手中指で弾いた。ギョッとして4人がそれを見ている。
「痛ってぇ！　ヒドいわ、宮部ちゃん！」

「いくら部長でもそれはダーメー！　職権濫用よ！」
「ちぇ！　ケチやねんから～」
「ブーブー言わないで。ほら、楽譜係は多忙なんだから邪魔しないで」
「ちぇ～！」
翔は渋々そこから退散していった。
「気をつけてね。来年もあぁいうテンションで自分だけ先取りしようなんて子、いそうだから」
「例えば、ジュンペーとか？」
優輝の言葉に全員が笑う。
「ぽいぽい！」
佳菜が膝を叩いて大笑いした。
「だろ？」
「ヒックシュン！」
隣の音楽室で順平がクシャミをした。
「先輩、風邪ですか？」
裕子が心配そうに聞く。
「いやぁ……。おなか丸出しで寝た覚えもないし……おっかしいなぁ」
「風邪引いたらあたしが看病しまーす！」
杏が手を上げていった。
「それはマジ勘弁。あんちゃんに看病頼んだら、なんか額に雑巾とか当てられそう」
「ヒドーい！　あたし、そこまでバカじゃないですよ！？」
杏がプンプンしながら口を尖らせている。
「はいはい！　まぁそれはいいとして。もう1回、Aから俺とあんちゃんが前打ち、賢ちゃんとゆーこりんが後打ちで。行くよ？　5、6、7、8」
パチパチパチパチ。手拍子で前打ちと後打ちの感覚を掴む練習をしている。

「わかってるとは思うけど、佐野先輩も言ってたように定期演奏会でこの課題曲と自由曲、演奏するんだ。でも、定期演奏会前はもう、この2曲を練習してる時間はないと思う。だからこそ、今しっかり練習、しておいてくれな」
「はい！」
「それじゃ、次は交替で」
「はい！」
　すると、放送が掛かった。
「吹奏楽部部長、演出係、職員室まで」
「あ」
　優とあずさが声を上げた。
「珍しい。俺たちにお声が掛かった」
「行こうか？」
「うん。先輩も一緒に行きましょ」
「おう！」
　優とあずさ、翔は駆け足で職員室に向かった。
「失礼します！」
　翔の声が一番職員室によく響いた。恭一はそれにすぐ振り向いて笑顔を向ける。
「おう！　お疲れさん。どうだ？　そろそろ皆帰りそうか？」
「だいたい片付けは終わりましたけど、ホルンがまだ練習やってます」
「そうか。まぁ、早めに切り上げるように言っといてくれ。それとは別件でな。もう、七海祭の全体演奏の曲目は決まったろ？　それに合わせて、演出を考えておいてほしい」
「は、はい！」
　優とあずさの目が輝く。
「もちろん、定期演奏会の際にバチッと決めるためのいわば予行演習のようなものだけれども手を抜かずに頼むぞ。期限は今月中旬までに大枠を決めて、今月末にはある程度完成したものにすること。

よろしくな？」
「はい！」
「じゃあ、日高と乃木は以上。お疲れさん」
「失礼します！」
一人だけ残された翔。なぜ残されたのか、まったく心当たりはない。
「佐野」
「はい？」
「折り入って相談があるんだが……」
「はい……」
翔は次の言葉を聞いて、パァッと笑顔を咲かせるのだった。

第４２８話　もう一度会えるね

９月６日（木）。あと二日で東関東大会本番である。しかし、翔はその日が近づいているのとは別の理由でずっとソワソワしていた。

明らかにソワソワしている翔の姿を見ておかしいと察知したのは、やはり陽乃であった。そしてそれを隣にいる美里に伝える。

（ねぇ、カケル。昨日あたりからソワソワ変じゃない？）

（やっぱり？　陽ちゃんも思ってた？　あぁいう時の佐野くん、絶対何か隠してるよね）

ジーッと視線を送る二人。翔がそれに気づき、チラッと二人のほうを見るが、すぐに視線を逸らした。

（ますます怪しい……）

しかし、何かやましいことをしているのかと思い、１０分休憩の時間や昼休み、放課後などしっかりと見張りまがいのことをしたのだが、これといって妙な点はなかった。むしろ、部活へ来るとソワソワ落ち着きのなさが目立つようになったのだ。

翔が職員室に指示を聞きに行っている間、陽乃と美里は緊急調査と称してサックスパートのメンバーに聞いて回った。

「ちょいと、そこのお嬢さん」

さゆりが振り返ると、メモ帳片手にペンを持った美里がいた。

「田中先輩。どうしたんですか？」

「最近、佐野くんの様子が変なんだけど、何かパー練中に気づいたこととかない？」

「え？　様子、変なんですか？」

さゆりのほうが美里の質問に驚いているようだった。

「そうなのよ。明らかにソワソワしてて。だから、サックスパートでの様子はどうかと思ってね」

「私たちの前では普通ですけど……。そうなんだ。何かあったんですかね？」
「ねぇ。わかった、ありがとう」
一方の陽乃は友美とかのこに当たっていた。
「先輩の変なとこ、ですか？」
友美が首を傾げる。
「これと言って私はないんですけど……。かのこちゃん、どう？」
かのこも首を左右に振る。
「あたしも心当たりないです。いつもどおりのおっちょこちょいな感じと、真剣な感じのギャップがあるだけで」
「そうかぁ……。なんでだろ。あたしたちの前だけでソワソワしてんのかなぁ」
すると、後ろを通りかかった順平が会話に加わる。
「佐野先輩の話ッスか？」
「そうそう。最近、あたしたちの前だとなんかソワソワ落ち着かないの」
「マジすか？　それ、俺たちホルンメンバーの前でもそうなんですけど」
「え？　そうなの？　詳しく聞かせて」
陽乃は順平と窓際で話しこみ始める。その様子が変だと順平がまず気づいたのは、朝校門であった時だったそうだ。
いつもどおり「おはよう！」と挨拶をしてきた翔に普通に挨拶を返した直後、「あんなぁ、うーちゃん実は……」と何かを言いかけたのだが、すぐに「ゴメン！　よぉ考えたら気のせいや」などと訳のわからない話の交わし方をされたのだそうだ。
「何、その謎な交わし方」
「でしょう？　かなり意味不明ですよね。しかも、それだけじゃないんです」
先ほど、翔が指示を聴きに行く前に部室からお手洗いに向かった賢治が目撃したとのことだった。お手洗いの目の前で、コソコソと

携帯電話で誰かと話をしている姿が見えたのだ。そして、賢治の姿を見るなり「あ、アカン！　また後でかけるわ」と言って電話を切ったのだそうだ。

「怪しすぎる……」

陽乃が顔をしかめる。

「翔、１年生の頃からそうなんだけどさ。顔に出るのよ」

「そうなんですか？」

「そうなの。だからわかりやすいようで、なんかひょうひょうと上手く交わしていくから、なかなかシッポつかめなくて……」

「意外と秘密主義者なんですかね？」

すると、音楽室にバタバタと翔が戻っていく姿が見えた。

「はーい！　今日も合奏で……どわぁい！」

慌てたのか、つまずいた翔が派手に転んで部室と音楽室を結ぶ廊下に生徒手帳やペン、メモ帳を思い切りぶちまけた。

「ちょっとぉ……何やってんの。どんくさいなぁ」

陽乃がため息をついて翔の元に駆け寄る。

「ご、ごめんごめん」

翔が慌てて手帳やメモ帳を拾い集めていく。陽乃は開いたメモ帳に書かれていた言葉に視線を注いだ。

「新大阪、新横浜間はいくら？　で、新横浜から七海まではいくら？　宿泊先はどうする？　滞在期間は？　何これ。どこか行くの？」

それを聞いた亜紀とみゆきが「先輩、またオープンキャンパス行くんですか！？」と悲鳴のような声を上げた。

「ち、ちゃうよ！　もう行けへんよ！」

「じゃあ、このメモの内容はなによ？」

陽乃は我慢できないとばかりに翔に詰め寄る。

「あーあぁ。やっぱり佐野に言ったのは失敗か……」

振り返ると恭一が立っていた。

「先生！」

「心配になって見に来たら案の定、これだ」

陽乃と翔が気まずそうに目を合わせる。
「でも、なんであたしたちが揉めてるんじゃないかってわかったんですか？　やっぱり、３年間毎日いたらわかります？」
「いや、田中が俺の所に調査とか言って事情聞きに来たからな」
ペロッと舌を出す美里。陽乃は美里に「なんで先生に聞くのよ！」とコソコソ声で諭した。
「まぁまぁ。いずれはわかる話なんだからな。佐野、もう先生から話していいか？」
「あ、はい」
「全員、音楽室に集まって座りなさい」
ほとんどの部員が集合している。いないのは補習組みの３年生と、環境委員会に出席している生徒だけだった。
「えーと……。簡潔に言うか！」
恭一が笑顔で言った言葉に、陽乃たちは耳を疑った。
「永井が、１０月１日から約１ヵ月半、七海市へ戻ってきます！」
「……。」
しかし、誰も何も言わない。
「どうした？　反応薄いな……特に３年せ」
恭一の言葉を掻き消すように３年女子５人が甲高い声で「キャー！」と叫んだ。予想以上の反応と声量に、周りの部員や恭一は耳を塞いだ。
「せ、先生ホントですか！？」
「ウソついてどうする、橋本」
「先生！　ってことは！？」
「定期演奏会も、七海祭にも出演してもらいます！」
「キャー！」
陽乃たちが飛び跳ねて喜んでいる。すると、春樹が手を上げた。
「先生」
「どうした？　水谷」
「でも、永井さん学校はどうするんですか？」

「永井の在籍する大阪の高校は、2月下旬に卒業式をするそうだ。3年生はそれより1ヶ月前には授業を終えるけど、その分永井はその後も授業を受ける。それを条件に、まぁうちの校長にも掛け合ってもらってな。本当に特別な事例だが、許可が出た」

「すっげぇ！」

慎也と拓真がそんなこともできるんだ、と興奮気味に話している。

「そういうわけで、右川！」

「はい！」

「七海祭、月末の例の演奏会、高校総文、それから定期演奏会は永井も舞台に乗るものという前提で、パート割り振りをしておいてくれ」

「はい！　わかりました！」

ワイワイと嬉しそうに話す部員たち。

「よし。じゃあ1年生は永井のことを知らないかもしれないけども。すごく人当たりのいい優しい先輩だからな。朝倉や佐野のようなノリではいきなり接するのはマズいが、慣れればとても親切にしてくれる子だ。楽しみにしておきなさい」

「はい！」

「それじゃ、合奏の用意！」

「はい！」

合奏の用意をしながら、陽乃はポチポチと携帯メールを作成していた。

「朝倉先輩！　これ、お願いします」

「あ、はーい！」

陽乃は携帯電話を閉じ、呼ばれた亮平のほうへ駆け寄る。作成中の雪子宛のメールにはまだ完成していない本文に、こう書かれていた。

「また逢えるね！　すっごい、楽しみ！」

最後に会ったのはずいぶん前に感じられていた3年生に、こうして思わぬ形で雪子と再会する日がやってきたのだった。

第４２９話　黙っていましたが

９月７日（金）。いよいよ、明日に東関東大会を控えている翔は、徐々に集中力を高めていた。今までに味わったことのない高揚感や興奮がどうしても抑えきれず、ソワソワしてしまうからだ。

しかし、それとは別に翔は何か周囲の視線のようなものを感じながら、今朝は登校していた。

「……。」

しかし、翔は何も悪いことをした覚えがない。それにもかかわらず、近所のオバサンから出勤途中のサラリーマン、さらには小学生にまで注目される始末である。

（何かしたか？　オレ……）

昨日の記憶を手繰り寄せてみるが、何をどう考えても何かしてしまったような記憶はない。ウンウンうなりながら道を歩き、学校近くの交差点に差し掛かった。赤信号にも気づかず、渡りそうになった翔を春樹が呼び止めた。

「危ないなぁ！　何やってんの、かける」

「お、おぉ！　おはよう、春やん」

「おはよ」

それから急に春樹が声のトーンを落とした。

「あのさ。ちょっと相談っていうか、聞きたいんだけど」

「なんや？」

「なんか、今日異様に俺、注目浴びながら登校してきたんだけど……。かけるはどうだった？」

翔は驚いて「オレも、オレも！」と答えた。

「何かやったの？」

「なぁんも。春やんは？」

「俺も全然心当たりないのに……なんだろ」
「わからへんなぁ……」
二人は首を傾げながら、学校へ向かう。校門には、彩と宗平が立っていた。
「おはようございまーす」
「おはよう！」
宗平が快活な挨拶を返してきた。そして、言ったのだ。
「昨日、見たぞぉ！　二人とも、カッコよく映ってたじゃないか！」
「昨日？」
顔を見合わせる二人。
「映ってたって、なにがですか？」
春樹が聞き返した。
「何？　お前たち、自分たちの話なのに見なかったのか？　昨日、帰るのが遅かったか？」
二人は首を振る。昨日は6時に合奏を終え、7時には全員学校を出た。なので、特段帰るのが遅かったというわけではない。
「おかしいな……。まぁ、知らないならいいんだが」
「気になるやないですか！」
翔が宗平に詰め寄った。
「いやぁ、てっきり東先生に聞いてるもんだと思って。親御さんからも、聞いてないのか？」
「何にも」
「そうか。それも妙な話だな」
宗平にもっと話を聞きだそうと翔はしたのだが、予鈴が鳴ったのでそのまま適当に流されてしまった。
「気になるよな」
春樹が言う。
「めっちゃな。でも、映ってるって何にや？　鏡？」
「鏡に映った俺たちの顔見て、何が楽しいんだよ。っていうか、それで近所の人が俺たちに注目することとかありえない」

「確かに……」
結局、謎は何も解けないまま二人は教室へと向かうのだった。
「あ。しもた」
春樹と分かれてから翔は気づいたのだ。昨日から携帯電話をほったらかしにしていたことを。翔は合奏中、演奏に集中したいが故に電源を切っている。そのため、メールや着信の確認はいつも後になるのだ。
昨日は電源を落としてカバンに入れてから、そのままにしていた。おそらく、メールが数件入っているだろうと思い、授業が始まる前に電源を入れた。しばらくすると、案の定バイブ音が伝わってきた。
「どれどれ」
そのメール件数を見て翔は驚いた。
「はぁ!?　23件!?」
開くと、半数がクラスメイト、残りは1年生や2年生のとき同じクラスだった子たちばかりだった。しかも、全部「見たぜ」、「やっぱ地がカッコいいと映りもいいよね」、「次も楽しみ!」といった内容ばかり。
「なんのこっちゃ……」
翔が教室に入ると同時に全員の視線が翔に集中した。
「!?」
「よぉ!　イケメン!」
男子生徒が一斉に声を上げる。
「は!?」
翔は驚いて一歩下がった。
「見たよ!　あたし、吹奏楽って全然知らないんだけど、あんな厳しい練習してるんだ」
副委員長の女子が駆け寄ってくるなりそう言うのだ。しかし、翔はまったく理解が追いつかない。
「え、あぁ、うん、そうなん?　でも何?　このテンション」
「なんだよ〜、実はイジッてほしくてしょーがねぇんだろ!」

「んなわけあるかい！　ホンマになんやねん！」
「もう！　佐野くん天然。ほら、昨日放送だったでしょ、こーれ！」
副委員長が開いたのは、携帯電話の動画。そして、テレビ画面を撮影しているシーンが映った。

［一音入魂～新生吹奏楽部・絆で結ばれた１０人～］

「……何、これ？」
翔は見たこともない番組に首をかしげた。しかし、そのタイトルバックにはどこかで撮影した覚えのある風景と、見慣れた人物が１０人――１年生当時の、翔たちが映っているのだ。
バスケ部の男子がバシバシと翔の背中を叩きながら言った。
「カーッ！　お前！　ケーブルテレビでお前ら取材されてんじゃん！　それが昨日、初放送だったんだよ！」
「……えぇ！？　オレ、全然聞いてへんでー！」
翔の雄叫びが教室中に響き渡った。

「すまん！」
部活が始まる前に詰め寄られた恭一は、職員室に押し掛けてきた３年生に両手を合わせて謝罪した。
「騙したり、隠したりするつもりはなかったんだ！　ただ……」
翔が言った。
「オレらが東関東大会近いから！　でしょ？」
恭一が目を丸くする。慎也が言った。
「大丈夫ですよ、先生。教えてくれたって」
「けど」
「あたしたちのメンタル面を気にして隠してくれてたんですよね！」
美里が笑う。
「もう！　私、先生のそういう気遣いしてくださるところ、だーいすきなんですよ」

沙希がニッコリ笑いながら言う。
「これからは、なるべくいろいろ教えてくださいね、先生！」
陽乃がニコッと笑って言った。
「あぁ……」
「それで先生。昨日のその放送は？」
拓真が見たくて仕方がないという様子で恭一に聞いた。
「もちろん、先生が録画してる」
「後で見せてください！　お願いします！」
「よぉし！　それじゃ、やっぱり東関東大会の後だ！」
その言葉に3年生全員からブーイングが飛ぶ。しかし、その3年生の表情は全員、明るいものだった。

第４３０話　その日の前に

ドキュメンタリー番組放映の問題も終わり、合奏も終わった七海高校吹奏楽部。いよいよ、明日は東関東大会の本番である。

「明日は出番が……午後４時頃だから、午前８時半に部室集合。遅刻厳禁！」

「はい！」

「きり」

翔が起立、と言おうとしたのを恭一が「もうちょっといいか？」と遮った。

「あ、はい」

翔は困惑しながらもうなずく。他の部員たちも思わぬ恭一の言葉にポカンとした。

「えーっと……明日、東関東大会を迎えるにあたり、先生は皆に、伝えておきたいことがあります」

全員を見つめる恭一。音楽室には、コンクールの演奏を直に落ち着いて聴けるのは今日くらいのものだということで、メンバー以外の部員も全員集まっていた。

恭一はコホン、と小さく咳払いをしてから言い始めた。

「まず。３年生の皆さん。永井は今まだこの場にはいませんが。先生は、君たちに最も感謝しています」

陽乃が不思議そうな顔をする。それは、あたしたちのセリフですとでも言いたそうな顔をしている。しかし、恭一は続けた。

「部長の佐野くん」

恭一にはいつも呼び捨てにされている翔。なんとなく歯がゆさを感じた。

「君が、吹奏楽部を立ち上げたいと考えてくれなければ、いま、先生がこうしてみんなの前で、お客さんの前で、指揮棒を振ることはなかったと思います。そして、３年生のみんんな。大谷さんと佐野

くんを除けば全員初心者という、いま考えてみればとんでもない事態にも関わらず、興味を持って当時サークルだったこの部に入ってくれて、本当にありがとう」

慎也と拓真が恥ずかしそうに笑う。

「橋本さん。君は、中学時代は吹奏楽をしたかったけど、レベルが高い君の出身中学では、入るのがためらわれたって言ってたね」

絵美は「いま考えてみれば、もったいないお話ですよね」と苦笑する。

「でも、考えてみれば何もない状態の七海高校でクラリネットを始めるほうが、勇気が必要だったと思うよ」

「エヘヘ……」

絵美がはにかんだ。

「田中さんは」

美里が遂に自分に話題が振られたと感じると、急にオドオドし始めた。それを見た恵梨や洋之がクスクスと笑っている。

「君は、中学時代はバスケットボール部に入っていたそうだね」

「やだぁ！　誰から聞いたんですか！？」

美里の見た目をそのまま映したような中学時代の印象に、部員の誰もが納得していた。

「中学の先生から、君らが入学前にいつも情報もらえるんだよ」

「もう！　そんなの知らないし！」

美里が頬を赤くしてプリプリしている。恭一はクスッと笑いながら続けた。

「そんな風に、既に自分を活かせる場があるにもかかわらず、こうして未知の世界に飛び込んできてくれたこと、感謝しています」

恭一の言葉が少し震えたことには、誰も気づかなかった。

「そして、まだまだ不安定な部に昇格した直後に、入ってきてくれた2年生のみんな。3年生と、あるいはそれ以上に、先生は君たちの入部にとても感謝しています」

恭一の近くにいた優輝やみゆきが恥ずかしそうに笑っている。

「そして、1年生。留学生。途中入部のみんな」
自分たちにもスポットが当たるとは思っていなかったのか、油断していた稚沙希やまゆがビクッとなぜか体を震わせた。
「もっと楽しい部があるはずだったのに。もっとレベルの高い吹奏楽部があったはずなのに。こうして七海高校に、そして、吹奏楽部に入ってくれて、本当にありがとう」
そこで全員が恭一の目に涙が溜まっていることに気づいた。けれども、それを誰も指摘はしない。翔も、3年目にして初めて見る恭一の涙であった。
「おかしいな……」
恭一が右袖で涙を拭う。
「泣くつもりなんてなかったのに……ハハ」
いつの間にかその涙が伝染し、由美子やさゆりが涙を流している。
「先生、正直言ってな。今年、県大会で銀賞くらいが妥当なレベルかなぁとか思ってた。少なくとも、5月末時点では」
恭一の正直な気持ちを吐露し始める。
「でもな。6月中旬くらいからかな。佐野が、去年より良い結果を残したい。せめて、県大会で金賞を取りたいって、最初は本当に独り言みたいに同じことをずっと繰り返してた」
翔がへへッと笑って「もうあの頃は病気みたいに言うてましたね」と答えた。
「それが次第に3年生へ、2年生へ、それから1年生へとどんどん広がっていって。最終的にこうして、全員がひとつの目標に向かって行ってくれるのは……先生として、これ以上嬉しいことはないよ」
全員をもう一度、しっかりと見つめる恭一。そして、ゆっくりと言った。
「明日は、頑張ろうな！」
「はい！」
全部員が一丸となって、しっかりと返事をした。音楽室にその声が、これでもかと言わんばかりに響いていった。

「かーける！」
陽乃がチョコチョコっと可愛らしく歩いてきて、翔の傍に立った。
「なんや？」
「帰ろ！」
翔はキョトンとした表情を浮かべてから「どないしてん。急に」と笑った。
「いいから！　ねっ、帰ろう！」
「へいへい！　あ、ちょっと待って。拓あんに鍵閉めだけ頼んでくる」
「うん！」
翔はバタバタと音楽室のほうへ走って行った。陽乃はしばらく部室で彼が戻ってくるのを待つ。しばらくすると、翔が戻ってきて「帰るで！」と駆け込んできた。
「うん！」
陽乃はすぐに翔の隣に寄り添う。
「どないしたん？　今日はえらいベッタリやんけ」
「べっつに～」
スリッパを履き替え、廊下を歩いていく。少しだけ、ほんの少しだけ涼しい風が廊下に吹き込んできた。
「正直な」
突然、翔が喋り始めた。
「どうしたの？」
「正直、吹奏楽サークル調子こいて創る！とか言うてたけど」
「調子こいてって」
陽乃がクスクスと笑う。
「めーっちゃ不安やってん」
翔は一気に喋り始めた。陽乃は驚いたが、次第に彼の言葉を聞いているうちにわかったのだ。
「大阪から来て、周り誰も知らん中で、ホンマのホンマにイチから

全部創りあげていかなアカン。ゼロからの出発って、オレみたいな状態を言うんやんな。やったら、変に、中途半端に過ごさんと、思い切り全部を楽しもうって。オレ、七海高校に来てからそう決めてた。たとえ、初めは部員が一人でもいい。吹奏楽部、創ったろ思った」

陽乃は思わず聞いた。

「どうして？　なんで、もう吹奏楽部がある……風見台高校とかに進まなかったの？」

「進みたくなかったからな」

翔は即答した。

「変に伝統のある学校やったら、オレの殻は破られへん。そう思った」

「そうなんだ……。翔でも、そんな風に思うことあるんだ？」

翔がフフッと笑う。

「オレ、万能人間ちゃうぞ？　オレだって悩んで、考えて、苦しんでるんやからな」

陽乃は先に歩く翔に聞こえないように「知ってるよ。あたし」と呟いた。

「え？　何て？」

陽乃は笑顔で「ううん！　なんでもないよ」と答える。

「なぁ！」

翔がとびっきりの笑顔で聞いた。

「もしも、普門館行けたらどうする！？」

陽乃はしばらく考えて答えた。

「もしも！なんていうのはやめよ！」

「え？」

翔がずっこけるような素振りを見せる。

「絶対行く！」

その言葉を聞いて翔がパァッと笑む。

「せやな！　それっくらいの気合いでなかったら、アカンな！」

「頑張ろうね！」
「おう！」
二人はガッシリと握手を交わす。
いよいよ明日は東関東大会。七海高校吹奏楽部６０名は、それぞれの想いを胸に抱きながら、明日を迎えるのだった。

第４３１話　祈りの朝

【ピッコロ／井上　佳菜】

（大丈夫……。自分は、一人じゃない）

佳菜は自分にそう言い聞かせて、もう一度深呼吸をする。佳菜の演奏するピッコロは、基本的に常に「独奏（ソロ）」状態だ。それが不安で不安で仕方がない時期もあったが、最近はこう思うようにしている。

自分が、頂点。先導者のような印象でいけばいいんじゃない？

そう言ったのは、信頼できる先輩の一人である沙希だった。それを聞いたとき、佳菜は急に肩の荷が下りた。

気楽にいこう。

佳菜はスゥッと呼吸を整え、出発する準備を始めた。

【クラリネット／瀬戸　優輝】

優輝は結局、今回のコンクールでも課題曲・自由曲ともにセカンドを担当する。一時はそれにふて腐れた時期もあった。しかし、今はハッキリこう言える。

「俺が、中間を支える」

そう思わせるようになったのは同級生の言葉を思い返したときだ。そして、県大会前に絵美のプレッシャーを知ったとき。その彼女を支えたい。この二つの思いが優輝を動かし、そして支えている。

【ホルン／右川　順平】

はっきり言って、順平は雪子が転校して以来、常に不安との闘いを繰り広げていた。２年生で唯一のパートリーダー。突然増えた後輩。自分がしっかりしなければ。常にそう思っていた。

さらに、自由曲の頭で激しさを象徴するホルンの音色。これがさ

らに彼を焦らせた。しかし、3年生を見ていると焦りはない。むしろ、演奏を楽しんでいる。そう思うと、もっと自分の音色を聴いてほしい。そう思えるようになっていた。

「がんばるぞー！」

朝日の差し込む中、順平は太陽に向かって伸びをしながらそう声を上げた。

【トロンボーン／江藤　沙知】

トロンボーン一筋だった。一目惚れから始まったこの楽器。内気な彼女ではあるが、楽器に対する情熱は誰よりも熱かった。スライドの動きひとつにも、彼女にはこだわりがある。

今回は運よく、コンクールに出場できた。オーディションもなく、それほどレベルの高くない（と彼女は自分で思っている）自分より、もっと適当な人が出るべきだったのではないか、そんな風に考えることもあった。けれども、慎也が言ったのだ。

「選ばれた以上は責任持ってやってほしい。でないと、メンバーでない部員に失礼だと思ってほしい」

それ以来、彼女は悔いのないように日々練習に励んだ。そしてこの日を迎えた。

靴を磨く。まずはここからスタートすると、決めていたのだ。

【テナーサキソフォン／西嶋はるか】

それは突然だった。

次期部長の話が舞い込んできたのは、この東関東大会の直前のことだった。返事は先延ばしをしている。それでもやはり、動揺は隠せなかった。

そんな本番直前を過ごしたはるか。しかし、昨日。翔は言った。

「部長の話は忘れて！」

はるかは驚いた。さらに翔は言う。
「水にザザーッと流して！」
「で、でも」
「明日考えるべきは、いかに５０人がまとまって演奏するか！　邪念は、追い払った追い払った！」
翔は笑顔でそう言ったのだ。そして彼女は今、その「邪念」を追い払って自転車に跨っている。
「よし！」
彼女は気合を入れて、学校に向けて自転車を発車させた。

【副部長・トランペット／朝倉　陽乃】
「おはよう！」
陽乃は起きてすぐに着替え、髪の毛を整えてからリビングに入ってきた。
「おはよう、陽乃。機嫌、良さそうね」
「うん！　昨日の練習でもソロはバッチリだったしね」
陽乃は先に起きてパンを頬張る夏樹の隣に座った。
「夏樹は、調子どう？」
彼はニッコリ笑って「なんとか、今日をピークに持って来れそう」と言った。
「頑張ろうね」
「うん！」
姉弟は互いに笑みを交わし、さらに上を目指すことを誓った。

【部長・アルトサキソフォン／佐野　翔】
「……。」
９月８日土曜日、午前６時。翔は既に起きて着替えを終えて、リビングに立っていた。そして、自宅から血の繋がりがある父母や兄

姉の眠る兵庫県のほうへ向かって、そっと両手を合わせた。
「お父さん……お母さん……兄ちゃん……姉ちゃん。オレ、今日頑張ってきます。遠く離れてるけど、オレを、オレたち吹奏楽部を支えてください。お願いします……」
翔は目をそっと閉じ、そう祈りを込める。同時に、いろんな人の顔が思い浮かんできた。
同じサックスのさゆり、麻綾、夏樹、はるか、茉莉紗、かのこ、友美。
指導に来てくれたしおり、樹、岳彦。
出ることができない分、裏方でしっかりと支えてくれたまゆ、騎士、和志、貴志、周磨、美咲、マーガレット、裕時、ソンス。
そして、かけがえのない日々を過ごしてきた仲間たち。
自分の無茶な提案に真っ先に興味を示してくれた、陽乃。
わけもわからず陽乃についてきて、すぐにマウスピースを鳴らした雪子。
バスケ部に入って活躍できる道もあったが、まだ見ぬ世界に飛び込んでくれた美里。
無口だが、人一倍吹奏楽に熱い想いを注ぐ慎也。
上に立つことの苦労を理解し、常に翔や陽乃たちに気配りをしてくれる絵美。
天然ながらも、その空気が全員の潤滑油になっており、演奏にもそれを自由に表現する由美子。
貴重な経験者として、常に翔とは一歩距離を置いて第三者的な立場でアドバイスをくれた沙希。
普通は初心者が関心を示さないものにすぐ飛びついた、好奇心旺盛な拓真。
父の想い、母の想いを胸に秘め、その貴重な想いを活かす場として、未熟な吹奏楽部を選んでくれた、春樹。
これまでに出会ったすべての人に捧げるつもりで、この東関東大会を翔は迎えていた。

「……よし！」

翔は目を開け、空を見上げた。突き抜けるほどに青い空が広がる。

「頑張るで！」

翔の表情と声は、希望と期待に満ちて輝いていた。

東関東大会・七海高校吹奏楽部本番まであと１０時間３０分。

第４３２話　一人じゃない

「うわぁぁ～……！」

会場の千葉県文化会館に着いた部員たちは、バスを降りるなり歓声を上げた。

「でっけぇー！」

健之佑と誠が同時に声を上げる。

「なぁ、中すっげぇ広いらしいぜ。ホームページで見た！」

「マジで！？」

拓真が印刷してきた千葉県文化会館の画像を見て、翔もテンションを上げた。恭一が呆れた様子でバスから降りてくる。

「こーら！　お前ら、早く楽器降ろすぞ～」

「キャー！」

その恭一の声を掻き消すように、美里と陽乃が声を上げた。恭一も驚いて彼女たちのほうを見る。

「見てよ、千葉城よ！」

「写メしなきゃ！　写メ！」

陽乃と美里が携帯電話を取り出して写真撮影を始める始末である。もはや、大会前とは思えない雰囲気になってしまった。

「よいしょっと」

そんなテンション高い3年生から一人離れているのは、春樹だった。黙々と楽器を降ろしている。

「あ……」

それに気づいた翔が恥ずかしそうに春樹のところに駆け寄った。

「ゴメン」

「何が？」

春樹はキョトンとした様子で聞き返す。

「いや、オレ部長やのに……」
春樹がようやく意味合いに気づいたのか、顔を赤くする。
「俺、そんないい子じゃないよ」
「なんでぇ。いま楽器率先して降ろしとったし」
「俺もハシャぎたくてさ。その気持ちを隠すために見ないフリして楽器降ろしてた」
翔が驚いて春樹の顔を見る。春樹も翔の顔を見て、同時に吹き出した。
ようやく落ち着いた部員たちは、それぞれ楽器を降ろし始める。そして、楽器置き場に指定されたホールのピロティに入るなり、今度は言葉を失う。その広さと豪華絢爛な雰囲気は、七海市中央ホールやクリエイトホールとは一線を画すものがあった。
ピロティの時点でこの雰囲気、この広さである。客席はどのくらいの広さなのか、舞台はどの程度の大きさなのか。音響はどんなものなのか。部員たちは遂に未知の領域に踏み込んだのだと感じていた。
本番まではまだまだ時間がある。楽器を見張るために、部長である翔と陽乃、楽器係である梨子と麻綾が残ることとなった。他の部員たちは客席内で演奏を聴くこととなっていたので、残っているのは4人だけだ。
「先輩」
梨子が翔に声をかける。
「うん？」
「先輩でも、やっぱり緊張されますか？」
「どないしたん、急に」
翔は心配そうに梨子の顔を見ながら言う。
「ほら……もうすぐ本番で。そ、その、ふっ……普門館の一歩手前にいることになるじゃないですか。あたしたち」
「うん……せやな」
そう考えると翔もやはり緊張してしまう。どちらかといえば、翔

もそれを気にしないようにしてきたのだが、梨子に改めて言われると妙に意識してしまう。

「周りの人全員が、もうあたしたちより上手そうに見えたり、自信満々に見えたりするんですよ」

梨子がハァッとため息を漏らしながら言う。今しがた本番を終えたのだろう、ホールの外にある千葉城を背景に写真を撮る場所では、パリッと演奏用の衣装に身を包んだ、自分たちと年齢が同じ高校生の姿が目に入る。

確かに、翔の目にも彼らの姿は自分たちよりもずっとレベルが上なのではないかと思わせるほどに、自信に満ち溢れていた。

「あたしたち……ここにいていいのかなぁっていう気持ちになりますね」

梨子の言葉に陽乃がプッと笑った。

「なぁんだ。あたしだけじゃないんだ、そういう風に思うの。安心した」

今まで黙って聞いていた陽乃の本音なのだろう。翔も思わず笑ってしまう。すると、先ほどの団体が移動し、入れ替わりで次の団体がやって来た。

「あ……泣いてる」

陽乃の言葉にその団体を見てみると、アルトサックスを下げた少女が、ボロボロと大粒の涙を流している。

「あの感じ……多分、演奏ミスッたんだと思います」

麻綾の言葉に陽乃は思わず不安になった。もしも『教会のステンドグラス』のソロを失敗したら、自分もあんな風に泣いてしまうだろう。そんなことを想像しただけで、なんだか泣きそうな気分になった。

「おい」

翔が陽乃を呼ぶ。

「またお前、自分があの子みたいになったらどうなるやろう？みたいなこと、考えてるやろ」

翔の言葉に陽乃は動揺を隠せずにいた。
「やっぱな」
翔が笑う。そして、梨子たちにも言い聞かせるように彼は言った。
「えぇか？　オレらは、一人やない」
翔の言葉に３人がハッとする。
「舞台に上がる５０人と、留学生３人と今回はたまたま舞台に上がらへん１０人の６３人、オカンやオトン、先生、友達。みーんな、オレらを支えてくれてるんや。せやから、何の心配もせんでいい。オレらは、オレららしい演奏をすればいい」
３人がうなずく。
「よしっ！　もうちょいしたら、みんな出てくるやろ。音出しは２時１５分からやったな？」
「うん」
「オレはそろそろ、楽器出すわ！」
「あたしも！」
陽乃と翔は一緒に立ち上がり、自分の楽器ケースを取り出した。
翔は真剣にリードを選んでいる。その姿を横目で見つめる陽乃。
もう、３年近く一緒にいる彼とこうして、同じ舞台で全国大会の一歩手前にいることなど、入部当初は想像していないことだった。

（オレが思うに、朝倉はトランペット、永井さんはホルンが向いてると思う）

翔は自分の唇を見るなり、すぐにそう言ったのだ。出会って間もないにもかかわらず、平気で呼び捨てにし（しかも、陽乃だけ）、ズケズケと物を言う翔のことはあまり好きではなかった。
しかし、今はこうして下の名前で呼び合い、毎日一緒に帰り、いつの間にか同じ大学を目指すまでになっていた。世の中わからないものだ、と陽乃はクスクス笑いながら考える。
「なに笑（わろ）とん？」

「なんでもない」
陽乃は笑顔でそう答えた。
そして。
いよいよ音出しの部屋に移動する時間となった。
「ヒナノ！　しっかり、頑張ってね」
マーガレットがガッシリ陽乃の手を握る。
「うん！　マーガレットも、客席からしっかり聴いててよ？」
「もちろんね！　耳、ダンボね！」
二人はキャハハ！と楽しそうに笑う。同じように、ソンスが春樹に「がんばれ、しっかり見てる、聴いてる」とようやくスムーズに話せるようになってきた日本語でそう言っていた。慎也には裕時があれこれといろいろ話しているようだった。
「そろそろ、移動すんでー」
翔の一声で４９人が「はい！」と元気よく答えた。そして、揃って音出しの部屋へ移動する。
しばらく行くと、萩がおなかを抱え始めた。
「どした？　すず」
心配そうに杏が萩に声をかけた。
「き、緊張したらなんかこう、おなかがキリキリと……」
「やだ？　ホント？　大丈夫なの？」
萩の顔が明らかに強ばっていた。
「うん……」
「そうだよね～。すず、アルトクラリネット一人だもんね。あたしとは、緊張のレベルが全然違うものね」
杏が眉をひそめてそう言う。萩は少し驚いていた。
「やだ。私、むしろ杏のほうが大変と思ってるよ？」
「え？　あたしが？」
萩がうなずく。萩曰く、ホルンは各パートが分かれており、それもバランスに気を配らねばならない。トップを追い越してはいけないし、かといって埋もれてはいけない。アルトクラリネットも出て

いい場所とそうでない場所があるので、同じほどに難しいのだが二人は違う楽器はすべて難しく見えているのだ。

「ほら！」

それを聞いていた拓真が二人の背中を押す。

「二人とも、大丈夫ってことだ。しっかり、自分の役割を把握してんだから。緊張はするだろうけど、心配しすぎることはないよ」

「……はい！」

「七海高校吹奏楽部さん、どうぞ！」

会場係員の生徒に呼ばれ、部員たちが続々と室内に入っていく。翔は全員が入ったのを見届けて最後に部屋に入り、そっと扉を閉めた。

七海高校吹奏楽部本番まで、あと１時間５９分。

第４３３話　大きくなったな

舞台裏。いよいよ、本番目前というところであった。舞台袖には５０人全員が揃っている。恭一は指揮棒とスコアを片手に彼らを見つめていた。

正直言うとやはり、恭一は未だにこの会場に来ていること自体が夢ではないかと思っているのだ。何度か、誰もいないところで頬を引っ張ってしまった。けれども、やはり痛みが感じられる。すなわち、これは現実だということであるのを認識していた。

恭一の視界には、特に輝いて映る９人がいた。

スネアの前で真剣な様子で後打ちをイメージしているのは、田中美里。１年生のときに、美里をよく知る彼女と同じ学校出身の友人たちは、口々にこう言っていた。

「美里に文化系の部活って、似合わなくない？」

「しかも、小太鼓とかでしょ？　なんか、壊しそう！」

そう言われていた彼女。おそらく、友人から直接そう言われたこともあったのだろう。しかし、彼女は自分を貫き通した。まずは練習台での地道な練習から始まった。そして、次第にスネア、ベードラ、シンバル、鍵盤楽器と順番に幅を広げていった。最終的に一番苦手であった、ドラムセットを彼女は立派に物にしたのだ。

続いて、頭がひとつ飛び出ている男子が目に入ってきた。彼は陽乃の奇抜な絵を見てやってきた男子生徒。そして、そんな彼――本堂拓真は、初心者では積極的に選ばれることはほとんどない、大型で伴奏楽器のチューバを選んだのだ。

マウスピースが大きく、息も必要で、さらに吹いたときの顔への刺激も他の楽器よりもずっと大きい。それでも彼はまったく嫌がる素振りを見せず、むしろ積極的に練習していた。一時期、伴奏ばか

りの楽器の存在意義に悩んだこともあったようだが、今となってはその役割をしっかりと認識し、むしろ楽しんでいるようにも見えていた。

その横で、相変わらず背が低い少年がいる。その彼はいま、音楽大学を目指すまでに成長していた。

その少年――水谷春樹は、父の背中を追ってユーフォニウムを吹き始めたのだ。初めは無口で、恭一ですら彼が考えていることを読むのは難しいものがあった。同い年の部員たちとの意思疎通も初めは厄介だったようだが、次第に本来の彼の性格を取り戻したのは、この部活に入ってからと言っても過言ではない様子だった。

その向こう側で、一番人数の多いパートのリーダーを務める少女が一人ひとりと握手を交わしていた。中学時代はそこにある吹奏楽部の厳しさに抵抗を感じ、入部を躊躇った彼女――橋本絵美はソロを控えているにも関わらず、にこやかに笑っていた。その笑顔に、緊張の色が濃かった後輩たちも、笑顔を取り戻していく。

その絵美の真横で、真剣な表情で楽器を見つめている少年。入学した頃は、まだ微妙に髪の毛を染めたような不自然な黒髪に違和感を覚えさせた彼――川崎慎也は、中学時代の後輩の影響を受けて吹奏楽を始めた、と言っていた。スライドに興味があったというのもトロンボーンを始めた理由のひとつだが、最大の理由はその後輩にあったという。

気になって中学時代の担任の先生に窺ったところ、どうしようもない不良生徒だったという慎也。その彼が、吹奏楽部に入っていると知ったその先生はただひたすら、驚きの声を上げていた。

可憐な雰囲気が一際目立つ少女が、天然丸出しの少女と楽しそうに話をしている。唯一、3年生が二人いるこのフルートパートは、しっかり者の彼女――大谷沙希と天然丸出しのほんわかタイプの彼女――宮部由美子の二人でうまくバランスが取られている。沙希が入部したことで、彼女の音色に惹かれて由美子がやって来た。まさに会うべくして会った二人だと恭一は考えていた。

お互いに足りない部分を補完しあう二人。完璧な絆が彼女たちには存在している。

そして、創部のきっかけを作ることとなった一人が、弟に声をかけている。部活の中では確かに先輩と後輩であるが、それ以前に姉弟である二人。その姉――朝倉陽乃は初舞台の連続で緊張する弟の夏樹に気を掛けていた。

最初はトランペットらしい音色などまるで出なかった陽乃。しかし、次第に表現することを覚え、技術を高め、時に感情をむき出しにする音色も出して恭一たちを驚かせた。今では、高校生から始めたとは思えないレベルにまで達している。もちろん、翔と沙希を除く陽乃以外の部員たちにもそれは言えることではあったが、陽乃はそれが突出していた。

そして、次第に創部の直接的きっかけとなった少年と交際を重ね、今となっては部だけでなく学年や学内でも公認かつ憧れのカップルとまで称されるようになっていた。

その直接的きっかけを作った少年――佐野　翔は、残り時間を使ってメンバー全員に声をかけていた。彼に声をかけてもらった瞬間、緊張している表情の部員たちもその表情が緩やかなものに変わる。それだけ、彼の影響は多大であった。

最後に、恭一のところへやって来る翔。彼は手を差し出した。

「先生」

「ん？」

「……。」

翔は無言で恭一の手を握り締める。そこから、はっきりとその気持ちは伝わってきていた。

先生、ありがとう。

オレ、先生を信じてるから。

恭一はしっかりとうなずいた。不意に、まだ幼さが残っていた頃

の翔の顔が蘇った。それがすぐに、目の前にいる今は大人びた表情をしている翔の顔に戻った。

（大きくなったな……）

高校生にそう言うのもおかしな話のように感じたが、恭一はただ素直にそう思った。

舞台が暗転する。そして、にわかに舞台裏が騒がしくなった。いよいよ、七海高校の出番だ。

亮平を先頭に入場していく。美里たち打楽器は搬入に追われている。恭一と翔は最後にもう一度顔を見合わせ、うなずき合った。

バタバタと慌しく係員たちが椅子をセットしていく。一人の女性が違和感に気づいた。

「ここの団体、譜面台は？」

「ゼロだ」

男性がそう答えた。

「ゼロ？」

「暗譜というか、とにかく譜面台は不要らしい」

それは客席にいる友美子たち保護者にも不安や違和感を与えていた。

「まさか……譜面なしで？」

彼女たちが不安に思うのも無理はない。しかし、翔たち５０人と恭一は決めていたのだ。東関東大会では、譜面を絶対に持って舞台には上がらないと。恭一もスコアは持っていたが、それは形だけ。開くつもりなど一切なかった。

その代わり、部員たちの表情を絶対に見て、読み取るつもりでいたのだ。翔たちは、決して恭一から視線を外さない。彼の要求から指示、訴えをすべて飲み込むつもりでいたのだ。

「プログラム１５番。神奈川県代表。七海市立七海高等学校吹奏楽部。課題曲、４。自由曲、レスピーギ作曲『教会のステンドグラス』より『エジプトへの逃避』、『大天使ミカエル』。指揮は、東　恭一です」

照明が灯ると同時に恭一が客席に向かってお辞儀をする。
（広い……）
恭一は瞬間的にそう思った。そう思うと同時に柄にもなく緊張している自分がいることに気づいたのだ。
「……。」
指揮棒が震えている。指揮棒を構えると部員たちがサッと楽器を構える。しかし、指揮を降ろすことができずにいた。時間が過ぎていく。明らかに動揺していく自分に、ますます動揺してしまう。
ふと、翔と目が合った。
オレ、先生を信じてるから。
そう訴える視線だった。翔だけではない。麻綾、夏樹、はるか、茉莉紗、かのこ。絵美、優輝、みゆき、光瑠、なぎさ、麻衣子、雄飛、菘、駿。沙希、由美子、佳菜、稚沙希。健之佑、誠。
視線を移す。順平、賢治、裕子、杏。陽乃、勇、彩香、流。慎也、亜紀、沙知、雛乃、徹。春樹、愛実。拓真、智志、好美、亮平。美里、恵梨、あずさ、洋之、優、和志、裕也。全員が、完全に恭一を信用していることがヒシヒシと感じられた。
（そうだよな……。何も怯えることなんてない。変に緊張することなんてない……）
恭一は笑顔で指揮棒を降ろした。同時にスウッと息を吸う音が響き渡った。
始まったのは、透き通った空を思わせるファンファーレが響き渡る『マーチ・ブルースカイ』だ。夏の盛りは越えたものの、やはりまだ夏らしい空気が残る9月。その雰囲気を全面に押し出す仕上がりとなっていた。
客席では友美子や由利をはじめとする保護者とマーガレット、裕

時、ソンスの留学生3名とメンバーでない部員たちも、祈るような気持ちで演奏に耳を傾けていた。

譜面台も譜面もない舞台上にあるのは、恭一と５０人の信頼関係。そして、安定した音と気持ちのこもった演奏であった。創部3年目。東関東大会や全国大会常連校に混ざって、創部間もない七海高校の演奏は確かに、どこか荒削りなものも見えた。しかし、それがかえって無垢な状態となって客席にいる観客たちや審査員の耳に伝わっていた。

わずか3分弱の課題曲。今年の初めから曲を選び、練習を重ねてきて、たった3分足らずで終わってしまう。スポーツの世界の本番よりも長いかもしれないが、それでも一人ひとりの、まったく異なる音色を重ね合わせ、ひとつの曲を創りあげるのだ。その3分足らずの世界にも、いろんな気持ちから思い出、感情などが織り交ぜられている。

課題曲が終わる。一瞬の出来事のように翔には感じられた。しかし、演奏が終わっても恭一の指揮が下りるまでは決して部員たちは微動だにしなかった。

指揮棒が下りると同時に、部員たちはすぐに自由曲の席へと移動する。そして全員を一瞥し、さらに絵美と陽乃を見てから恭一はうなずき、指揮棒を構えた。

そして、指揮棒が上がる。絵美が楽器にしっかりと息を注ぎ、『エジプトへの逃避』がいよいよ始まろうとしていた。

第４３４話　１ミリの悔いもない

緩やかに、しかし確実に絵美の音がホール内に響き渡った。木管低音楽器の重々しい音と、チェレスタの音色が響き渡る。それを引き継ぐユーフォニウムとホルンの音色。

恭一は指揮を振りながら、この『教会のステンドグラス』を配った初日の初見合奏のことを思い出していた。絵美のソロはどことなくぎこちなく、ホルンやユーフォニウムの高音もかすれてほとんど聞こえないような状態だった。

恭一の記憶が、４月頃に戻る。まだ、１年生が仮入部で合奏には参加していない頃だ。順平が合奏でその部分を止められるなり、彼はこう言ったのだ。

「俺たちにこんな高音、吹けねぇよ～」

しかし、恭一はすかさずこう言った。

「右川、課題曲のときにも同じこと言ってたな」

順平はへへへ、と恥ずかしそうに笑いながら答えた。

「バレてた？　先生、鋭いもんなぁ」

順平がそう言ったとおり、恭一はいろんなことをしっかりと分析して今年の自由曲を選んでいた。絵美の努力家な性格。拓真、智志、好美のパワフルな音。陽乃に最近目立ち始めた、自己主張すべき場とそうでない場のわきまえ。まだまだ成長途中の少年少女たちではあるが、その輝きは確かに日々、増していた。

そして、自由曲としてこの『教会のステンドグラス』を選んだとき、恭一の中で何か、漠然としたものだったが今年はある程度の大会までは進むのではないか、という期待が生まれた。

初見合奏から二日後、再び合奏をした際には低音楽器のメロディが荒々しさはあったものの、しっかりと恭一の耳に響き渡ってきた。

さらに、クラリネットやフルートの細かい伴奏が彩りを飾る。
そして、曲が安定してきたところで恭一お得意の課題を出した。
「この曲に、自分たちなりの物語（ストーリー）を描いて、各パートで発表しよう」
様々な物語が生まれていた。まず、クラリネットではなかなかシリアスな内容であった。それは神聖な教会で、悪魔と天使の激しい攻防戦が行われている、というものだった。ところが、散々それを語りつくしたところで、駿が最後にこう言ったのだ。
「という、絵が天井部分に描かれている。最後のドラは、それに気づいて現実に引き戻される音なんです」
その意外な展開に全員が笑った。フルートパートでは天然の由美子の意見が強く反映されているのか、なかなかフワフワとした不思議な内容になっていた。どちらかといえば、ファンタジー要素の強い内容だった。
最後に近い部分の展開は、まさに由美子らしいものだった。祈りを捧げる青年。これが翔で、その祈りに答える天使が陽乃なのだという。二人はまさかの出演（？）に赤くなっていたが、恭一はこの部分に関してはなかなか好みの部類に入る展開だった。
そして、この自由曲を吹き始めて既に5ヶ月近くが経過した。部員たちはいつの間にか楽譜をすべて覚え、一秒たりとも恭一から目を離さなくなっていた。
一心同体。まさに、そんな言葉がピッタリの仕上がりだった。5分近くの自由曲であるが、翔たちはこの5分程度の曲のために半年近く、毎日練習をしてきたのだ。そのため、その気持ちも半端なものではない。
曲の雰囲気が一転する。いよいよ、陽乃のソロがやってきた。
「……。」
マーガレット、ソンス、裕時が呆然とした様子で陽乃のほうを見ていた。まるで、演出などないにも関わらず、陽乃のいる場所にスポットライトが当たっているかのような錯覚に一瞬、3人は見舞われた。

それは3人だけではなかった。舞台袖で見守っているメンバーでない10人にも、同じように感じられていた。やがて、その陽乃を追いかけるように駿と由美子のメロディが響き始める。それが聞こえ始めると、駿と由美子にもスポットライトが当たるような感覚がし始めるから不思議なものだ。

茲のハープが、さらに幻想的な雰囲気を濃くしていく。そして、まさに「天使」を思わせるような陽乃のソロが終わりを告げた。

曲が次第に音量を増して行く。悔いの残らぬよう、全員がそれぞれの役割を真剣に意識しながら演奏を全力でする。手抜きなどありえない。裕也と恵梨がこれでもかと言わんばかりにサスペンドシンバルを叩く。そして、遂に美里のドラがホール内に荘厳な響きをもたらした。

「……。」

誰も声を発さなかった。誰も拍手すらしなかった。

恭一が満面の笑みで起立を指示する。部員50名が颯爽と立ち上がると、大きな拍手が沸き起こった。

そして舞台が暗転すると、すぐに部員たちが移動を開始する。翔は真っ先に舞台袖へ繋がる出入り口の前に立った。

まず、拓真がやって来る。翔はニカッと笑い、手をタッチさせ小声で言った。

「お疲れ！」

「おう！」

翔はその後、順番に部員一人ひとりと手をタッチさせていく。もちろん、移動を急がなければならないのだが、翔は絶対にこうしたいと考えていたのだ。

パーカッションの部員たちとは少し離れていたため、翔はすぐに駆け寄り全員と手をタッチさせる。美里は嬉しそうにパチン！と音を立てて手をタッチさせた。

そして最後に陽乃の元へ駆け寄り、手をタッチさせてから翔は聞いた。

「後悔はないか？」
陽乃は満面の笑みでこう、はっきりと答えた。
「そんなの、１ミリもない！」
「よっしゃ！　最高や！」
二人は笑顔で顔を合わせ、それからそっと手を繋いで舞台を後にした。翔が立ち去る寸前、もう一度舞台を見た。それから深々とお辞儀をする。
「……。」
陽乃も一緒にお辞儀をし、そして静かに舞台袖へ二人は去っていった。

「陽ちゃーん！　早く、早く！」
美里がピョンピョン飛び跳ねながら陽乃を呼んでいる。
「あ、すぐ行く～！　翔も、早く！」
「おいおい！　そない引っ張らんでも行くって！」
陽乃がテンションを上げるのも無理はない。今から演奏終了後の恒例行事、写真撮影なのだ。
まずはパートごとに撮影をする。
「うりゃあ！　サックス集合！」
「はぁーい！」
翔の声に麻綾、さゆり、夏樹、はるか、茉莉紗、かのこが集まってくる。
「あれ？」
翔は友美の姿がないことにすぐ気づき、キョロキョロと辺りを見渡して彼女の姿を探す。そして、七海高校の集団から少し遠い、保護者の場所に一緒に紛れている友美の姿があった。
「真鍋ちゃん！　何やっとん！？」
「へ？」
友美が驚いて妙な声を上げていた。
「自分も、ここ来てぇや！」

「え。でも私、コンクールメンバーじゃないですよ？」
「そんなん関係あらへん！　自分、七海高校吹奏楽部やろ！？　ほれ、来た来た！」
「は、はい！」
翔の言葉に友美はパァッと笑みながら翔たちの輪に加わる。
「はい！　ＯＫかい？」
「はーい！」
カメラマンの掛け声に元気いっぱい答える翔。
「はい、いきまーす。１、２の３！」
カシャ――ッ！
カメラのシャッター音が響き渡る。やがて、他のパートでも次々と撮影が終わっていく。そして、いよいよ3年生での写真撮影の時間がやって来た。
「３年生、集合～！」
「はぁーい！」
「前から並ぼうか……。そうだな、前は女子で後ろ、２段目が男子で」
「はーい！」
用意された場所で前列には美里、絵美、陽乃、沙希、由美子の順で並ぶ。そして２段目には拓真、春樹、翔、慎也が並んだ。
「何かポーズ考えてね！　１枚目は真面目に行きます。はい、１、２、３！」
キリッとした表情で写る全員。
「はい！　２枚目行きます～。ポーズ考えたかな？」
「なぁ！」
翔が聞いた。
「決まってるやろ！？」
「うん！」
陽乃が答える。
「当たり前じゃん！」

慎也も満面の笑みだ。
「この様子だと、問題なさそうね」
絵美が嬉しそうに笑った。
「それじゃ！」
春樹が音頭を取る。
「いいかな？」
「はーい！」
「いきます、1、2、3！」
同時にポーズを取る9人。左手はパー、そして左手にピースをした右手を重ねて「7」を示す。七海高校の「7」だ。
「あ……」
そのポーズを見て声を上げたのは徹だった。
「何か知ってるの？」
亜紀が聞く。徹はウンウンと大きくうなずき答えた。
「部室に先輩たちが1年生のときの写真があるんだけど、その写真のポーズが、あれと同じ」
「ほんと？」
亜紀は驚いていた。恭一が懐かしそうに言い始める。
「そうだそうだ。思い出した。先生が皆を撮影したんだ。そのときにアイツら、今と同じ感じで話し合って、まったく同じポーズを取ってたなぁ……」
「へぇ～……」
感慨深そうに想い出に浸る恭一。
「はい！　じゃあ、最後の写真行くぞ～。はい、寄って、寄って～！」
カメラマンが脚立の上に上がり、真上からカメラを向ける。陽乃を中心に女子4人がグッと寄ってきた。
「もっと、もっと！　ほら、男子もっと寄って～！」
おしくらまんじゅうのようにして慎也、春樹、拓真が翔を陽乃のところへ押す。バランスを崩しそうになりながら、翔がなんとか耐

えていた。しかし、最後の最後でバランスを崩して翔が陽乃にもたれかかるようにして倒れこんだ。
「きゃー！　危ない、危ない！」
笑いながらモミクチャになる3年生。翔も笑いながら「ほれ見てみぃ！　お前らが押すからアカンねんぞ！」と慎也を押し返していた。
「……。」
恭一が遠くを見つめるように翔たちを見ているのに、恵梨が気づいた。
「先生？」
恵梨の目には、恭一の目に涙がいっぱい溜まっているように見えたのだ。
「ん？」
しかし、振り返った恭一の目にはそのような痕跡はなかった。
「いえ……なんでもないです」
「変な秦野だな」
恭一がクックッと笑うと同時だった。カシャッ！とシャッターが下りる音が響いた。その音を聞いていた恵梨たちの頬を、少し爽やかな風が撫でた。
「もうすぐ秋ね～……」
あずさが隣でそう呟いた。その言葉がパーカッションパートのメンバーに、寂しげな印象を与えて響いていた。

第４３５話　１１分の３

午後６時４５分。七海高校吹奏楽部の翔を除く５９名は、客席でその瞬間を迎えていた。これまでの地区大会、県大会同様にブザーが鳴り響くと同時に女子の黄色い声が響き渡る。いよいよ、結果発表の時間だ。

東関東大会の司会進行を努めている役員の先生が、前に立って今年のコンクールの概要を説明する。この東関東大会では今年、七海高校や風見台高校を含めて２６団体が出場している。その中から、あの普門館へと、つまり全国大会へと出場できるのはわずか３団体という狭き門であった。

「ねぇ」

絵美が由美子を呼ぶ。

「なぁに？」

「どうだろう……。私たち、全国大会へ行けるかな？」

由美子が首を横に振り「私もわかんない」と答えた。

「でもさ、仮に行けなかったとしても、私たちまだ創部３年目でしょ？　それで東関東大会に来れたこと自体、すごいと思うのよね。だから、結果がどうであれ、喜んでいいと思うよ」

その沙希の言葉に、絵美と由美子だけでなく周りの部員たちもうなずいていた。

「それでは、プログラム順に結果発表を行います。なお、金賞と銀賞の区別が聞き取りにくい恐れがありますので、金賞の際には金賞、ゴールドと読み上げます」

これはどうやらどの大会でも同じ仕組みになっているようで、これまで経験はしてきていることである。しかし、そうとはわかっていても毎度のことながら緊張してしまう。

翔は舞台上で期待半分、不安半分で座っていた。演奏に関しては、今回の大会は非常に満足の行く仕上がりであった。なので、ひょっとすれば全国大会も夢ではない位置にいるように彼自身、思っていた。

しかし、どこかでそれは自分たちに都合の良い解釈をしているだけで、まったくもって周囲の高校と比べればレベル差が歴然としているかもしれないという懸念もあった。まったくもって、自分たちの演奏と周りの演奏が比較しがたい状況なのだ。そう考えると、不安がこみ上げてくる。

翔の心境をよそに、いよいよ結果発表が始まった。

「プログラム１番。神奈川県代表。横浜市立戸崎高等学校。銀賞」

拍手が沸き起こる。銀賞であれば、歓声が上がることは少ない。それが逆に何ともいえない悔しさをにじませる。

「プログラム２番。茨城県代表。茨城県立佐野山高等学校。銅賞」

やはり東関東大会となると、審査もかなり厳しくなるのかなかなか金賞、ゴールドと言う声が上がらない。銀賞と銅賞という言葉が響くと、空気が冷え切るような感覚になってしまう。

（司会者の人も、なんか嫌やろなぁ……）

翔はチラッと司会者の顔を見る。その人の顔もいささか緊張気味であった。

「プログラム３番。千葉県代表。千葉県立冴山北高等学校。銅賞」

先ほどから既に３団体。しかし、現時点で金賞はまだ出ていない。陽乃はまさかここまで厳しい審査が行われているとは思ってもみなかった。地区大会や県大会のときは、しょっぱなから金賞が出ることもあると聞いていたが、どうやら東関東大会のような全国大会一歩前では、かなりの厳しい審査が行われているようだった。

「プログラム４番。千葉県代表。千葉県立銚子本町高等学校。銀賞」

次第に部員たちの顔色が悪くなっていくのが、保護者たちからも明らかに見えていた。特にソロを吹いた陽乃、駿、佳菜の顔色が良くない。相当のプレッシャーだったのだろう。演奏後の開放感はす

ごいものがあったが、今はそれがまったく感じられない状況であった。

やがて、その後のプログラムも結果発表がなされていく。５番、６番ともに銅賞だったのだ。地区大会で銅賞を受賞する団体はほとんどなかっただけに、不安感が煽られていく。そして、それは突然やって来た。

「プログラム７番。神奈川県代表。東城大学付属座間高等学校。金賞、ゴールド」

陽乃たちの真後ろから歓声とも悲鳴とも取れる声が沸きあがった。同時に場内から割れんばかりの拍手が起きる。しばらくそれが続き、すぐにやんだ。陽乃たちはこの座間高校の演奏を聴いていなかっただけに、どれくらいのレベルであれば金賞を受賞できるのか、未知の領域であった。

陽乃はふと前を見た。翔が座っている。しかし、俯いたままで県大会のときのような自信に満ちた表情がまったく見えなかった。

自分たちのやれる演奏はやった。陽乃は心の中で何度もそう繰り返す。そうやって自分を落ち着かせている。

「プログラム９番。神奈川県代表。三嶋高等学校吹奏楽部。金賞、ゴールド」

再び歓声と拍手が起こる。そこで陽乃はハッと我に帰った。考え事をしていて、８番の結果を聞き逃してしまっていた。チラッと沙希のプログラムを見ると「銅」の文字。まだ可能性は費えていない。

そして、次第にそのときは近づいていた。陽乃は視線を優衣のほうへ移す。祈るような姿勢で両手を合わせ、目を閉じている彼女の姿が見えた。

「プログラム１０番」

七海市内の吹奏楽部のよきライバルである風見台高等学校。初めこそ演奏レベルは彼らが突出していたが、今では七海高校も張り合えるだけのレベルになった。切磋琢磨しあう関係を持つ、両校。

「私立風見台高等学校」

しかし、ライバルとはいえいまこの時ばかりは祈らずにはいられなかった。

陽乃。優衣。翔。修平。４人が顔を上げると同時だった。

「金賞、ゴールド」

風見台高校の部員たちから先ほどの団体と同様に、歓声が上がる。優衣が隣にいる部員と抱き合って喜んでいる。陽乃も他人事とは思えず、沙希と「すごいね！　金賞だよ、金賞！」と笑い合っていた。

そして、いよいよ自分たちの「その瞬間」を翔たちが迎えるときがやって来た。部員たちの間に様々な感情が芽生える。銀でもいい。でも、できれば金がほしい。あわよくば、全国大会に行きたい。いろんな願いが生まれ、交錯していく。

その期待を裏切るかのように七海高校の前の２団体、プログラム１３番と１４番の団体が連続で金賞を受賞した。それを聞いた瞬間、それまで期待を抱いていた部員たちの顔がにわかに曇っていく。さすがの美里も不安顔だ。

翔は余計に孤独で不安を抱いていた。仮に銀賞や銅賞であっても、互いに讃えあったり励ましあったりができない。部長であることをこの瞬間だけ後悔してしまった。

「プログラム１５番」

ドクン、と翔の心臓が激しく鳴り始める。そんなことをよそに、司会者はスラスラと校名を読み上げた。

「七海市立」

恭一が舞台裏で両手を握り締める。その手には汗が少しだけ出ていた。

（お願い……！）

陽乃が沙希、美里と寄り添って目を閉じて祈っている。

「……。」

夏樹と騎士はまっすぐと前を見つめている。マーガレットやソンス、裕時も独特の空気に飲み込まれそうになりつつ、前を見ていた。

綾音と茉莉紗が手を合わせて祈る表情を見せる。慎也は微動だに

せず、ただギュッと手を握り締めて俯いていた。春樹と拓真は今にも前に倒れそうなほどに身を乗り出している。由美子はブルブル震えながら何度も手をさすっていた。

駿は何度も自分はやれることはやった、そう心の中で繰り返していた。佳菜も同じように、悔いることはないから、それに見合う結果が来るようにとばかり祈っていた。

「七海高等学校」

友美子と由利が思わず前に乗り出す。

一瞬、時間が止まったような感覚に全員が見舞われた。すぐにそれは終わり、遂に結果が読み上げられた。

「金賞、ゴールド」

同時にどよめきが起きた。確かに、東関東大会では無名に近い七海高校。そのどよめきを掻き消すように、部員たちの歓声が沸き起こった。

「きゃあああああああああああー！」

「よっしゃあああ！」

「やだ、ねぇちょっと夢じゃないよね！？」

「現実（マジ）だよ、現実（マジ）！」

翔は舞台上で思わずそのまま倒れこみそうになった。一気に緊張が解けたのだ。その後のことはしばらく、記憶にないほどの衝撃であった。

その後も結果発表が続く。結局、金賞を受賞したのは以下の１１団体であった。

東城大学付属座間高等学校
三嶋高等学校吹奏楽部
私立風見台高等学校
成城国際高等学校

幕張商業高等学校
七海高等学校
創造高等学校
作紳学院高等学校
銚子中央高等学校
立花高等学校
船岡高等学校

この中からわずか3団体が、普門館へと進むことができるのだ。
26団体から11団体に減ったが、それでもやはり狭き門であることに変わりはなかった。
「それでは、10月21日日曜日、普門館にて行われます、全日本吹奏楽コンクール全国大会に推薦する団体を3団体、発表いたします」
緊張に続く緊張で翔はもう心臓が持たなさそうであった。しかし、精神を強く持ちその瞬間を迎え撃つつもりでいた。
「プログラム」
震える。手が言うことをきかず、ブルブルと痙攣するように震えているのが翔は不思議で仕方がなかった。
「じゅう」
その言葉が聞こえた瞬間、座間高校と三嶋高校の部員たちが悲しげな表情を浮かべたのが翔にはハッキリと見えた。
(もしかしたら……もしかしたら……!)
翔は目を閉じ、祈りに祈った。
そして。

「七番! 創造高等学校吹奏楽部!」
陽乃、美里、絵美、由美子、沙希の5人が顔を上げる。
「あぁ……」
綾音と茉莉紗の顔が一気に落胆したものに変わった。夏樹と騎士

が何とも言い難い表情をしている。寂しさとも、悲しさとも取れない表情であった。

恵梨の座っている位置からは、3年生8名の表情が読み取れなかった。もちろん、客席から遠い舞台上の翔の表情もよく見えない。

その後、駿は結果発表があまり耳に入ってこなかった。覚えているのは全国大会出場が創造高校、作紳学院高校、船岡高校の3校であったということだけである。いつの間にか大会役員の話も終わり、なんとなく拍手をして幕が下りていくのを見送っていた。

そして閉会の言葉とともに、周りの団体が移動し始める。その中には歓喜の表情を浮かべる者、泣きじゃくっている者などいろんな姿、表情があった。

七海高校の部員たちはしばらく座ったままであった。しかし、そんな空気を陽乃が一気に変えた。

「さー！　外出るよ！」

その声に驚いて亮平と智志が顔を上げる。

「ほらほら！　起立―！　翔がもうすぐ帰って来るよ！　みんな、外出て迎えてあげなきゃ！」

「……。」

しかし、誰も動こうとしない。陽乃はさらにハッパをかける。

「ほーら！　立った立った！　行くよ！」

強制的にはるかや光瑠たちを立たせてグイグイと押していく。それを見ていた他の3年生が、座り込んだままの部員たちを無理やり立たせてロビーへと押し出していく。

「ほら！　逢沢く……」

駿の目から大粒の涙がボロボロとこぼれていた。

「……。」

陽乃は洋之が移動して空いた席に座る。

「なんで泣くの？」

駿は首を左右に振る。それから小声で言った。

「なんでかわからないんですけど……勝手に……」

陽乃は言葉をかける前に駿の頭を撫でた。
「来年は、頑張って全国目指してよ」
コクリとうなずく駿。それからさらに続ける。
「でも、今年行きたかったです……」
「その気持ちはわかるし、嬉しいよ。でも、あたしとしては初めての東関東大会で、いきなり金賞取れただけでも、十分なの」
「……。」
「だから、来年頑張って！　ねっ！？」
駿は大きくうなずいた。
「ほら！　外出よう！　翔がすぐに来るから」
「はい……」
陽乃は駿を立たせて客席を後にする。それから陽乃はロビーへ出る前に深々と舞台に向かってお辞儀をした。
同じ頃、舞台から退出した翔は笑顔でその場所を見つめていた。
中学の時には経験できなかった、支部大会での演奏。それを、ひょっとすると最初で最後かもしれないが、経験できたことに深く感謝していた。
「ありがとうございました」
翔は誰もいなくなり、ホールスタッフが片づけを始めた舞台に向かってそう言いながら深々とお辞儀をし、そして部員たちが待つホール玄関へと向かってゆっくりと歩いていった。

第４３６話　８人の言葉

ホールの外へ出ると、たくさんの高校生やその保護者たちでごった返していた。

「うわー！　さすがにすごいね、これは」

美里がいつもどおりの様子であたりを見渡して驚きの声を上げた。しかし、相変わらず後ろにいる恵梨やあずさたちの表情は暗いままだ。

「ねぇねぇ、佳菜ちゃんは賞状、どんなだと思う？」

「え……。いえ、ちょっと想像つかないです……」

由美子が明るく佳菜に話しかけるが、彼女もあまり元気がない。健之佑と誠にも同じ質問をぶつけてみたが、さすがの健之佑もその表情は冴えず、いつも無口な誠に至っては「わかりません」とアッサリ話題を断ち切られてしまった。

絵美はひょうひょうとした様子でクラリネットの後輩たちと話をしている。しかし、その表情は誰一人明るい者はいなかった。絵美くらいのものである。

陽乃はなんとかおさまってきた駿を絵美に預け、自分のパートに戻った。ひょっとすると、自分のパートもクラリネットやフルート・オーボエのように暗い表情をしているメンバーばかりではないのかと心配になって、急いでその姿を探す。しかし、それは杞憂だとすぐにわかった。

「きゃー！　センパーイ！」

一際明るい声で陽乃を呼んですぐに抱きついてきたのは、彩香だった。

「お疲れ様ですー！」

「お疲れ、彩香ちゃん！　どう？　結果、納得いった？」

彩香は大きくうなずく。それを見ていた亮平と愛実が驚いている

のが遠目でも陽乃にはわかった。
「もう納得どころか、想像以上でした！　私、課題曲で音外しちゃったじゃないですか？　でも、なんていうか……もう金賞ですよー！　初出場で金ですよ!?　私たち、やっちゃいましたねー！」
彩香がジタバタしながら喜びを全身で表現している。すると、その彩香の隣にこらえ切れない様子で流が駆け込んできた。
「朝倉先輩！」
「ふじくん！　お疲れさま！」
流は陽乃の手を握りながら言った。
「先輩、教会のあのピッコロトランペットソロ、ヤバすぎました！　俺、ついつい聞き惚れちゃってその後楽器構えるの遅れちゃったんですよー！」
「やだぁ！　ホント!?　それ！」
キャッキャッと楽しげに話をしているトランペットパートを見ていた愛実が呟いた。
「そうだよ……」
その言葉に亮平と智志、好美が振り返る。
「そうだよ！　ねぇ、考えたら私たちスゴいよ!?」
智志が不思議そうに聞き返す。
「どこが？」
「全部！　だって、東関東大会どころか県大会初出場の創部3年目の部活がさぁ、いきなりもうすぐで全国大会出場ってところまで行ったんだよ!?　これって、スゴいことじゃない!?」
亮平がポカンとしている。しかし、智志が呟いた。
「そう……だよな。俺、まだチューバ吹き始めて1年半くらいだっけな……。そんな俺がいるような部活が、全国目前まで行ったんだよな!?」
「そうだよ！　ねっ、もっと喜んでいいんだよー！」
「よっしゃー！　おら、みーやんもヨッシーも暗い暗い！　もっと笑え！」

そう言って智志は亮平に飛び掛った。智志の思わぬ行動に、亮平が驚いてよろけた。それを見て好美がクスクスと笑う。
「よーし！　そんじゃ、皆で春樹胴上げするか！」
ようやく拓真が快活な声を上げた。
「しましょ、しましょ！」
好美と愛実が一緒になって春樹を拓真の近くまで引き寄せる。
「ちょ、なんで俺！？」
「いいじゃない！　一番軽いんだもん！　ほら、さとっぺもみーやんも！」
いつの間にかバスパートの輪に慎也と徹も加わり、さらにトロンボーンの女子も加わって春樹の胴上げが始まった。
それを見ていたホルンパートも、次第にテンションを上げ始めた。
「よし！」
順平がカバンからデジタルカメラを取り出した。
「ホルンパート笑顔で集合―！」
「はい！」
真っ先に裕子がやって来た。
「記念写真の撮影するぞー！」
「いまこのタイミングでですか！？」
杏が笑う。
「結果出た後と出る前じゃまたテンション違うだろ！？　それに、このメンバーで東関東出るのは今回だけだぞ？　後悔しねぇように、写真で思い出残す！　ＯＫか！？」
「了解いたしましたぁ！」
順平は自分の母親にカメラを預け、何枚も写真を撮影した。そして、順平たちが写真を撮り終えると同時にはるか、麻綾、さゆりが声を上げた。
「佐野先輩のご帰還～！」
その声がかかると同時に、部員たちが集まってきた。
翔が満面の笑みで賞状を掲げ、叫んだ。

「七海高校吹奏楽部、金賞――っ！」
「いぇ――――い！」
部員全員が呼応する。そして、後を追うように恭一が帰ってきた。
そして部員たちを見るなり、叫ぶ。
「七海高校、ばんざーい！」
「ばんざーい！」
いつの間にかあんなに表情が暗かったフルートやオーボエも笑顔になり、涙の跡がまだ少しだけ残っている駿も笑顔になっていた。
「皆さん、お疲れ様でした」
恭一が落ち着いた声で言う。
「正直言って、先生はまさか金賞まで取れるとは思ってもみませんでした。というよりも、東関東大会に出られたこと自体、先生は未だに驚いています。でも、夢じゃないんですね」
全員の顔を見つめる。感情がこみ上げそうになるのを何とか抑え、恭一は続けた。
「長かったコンクールも……今年は。いいか？　今年はこれで終わりました」
「……。」
翔と陽乃が笑顔で顔を見合わせる。
「でも、これで終わりではありません。むしろ、今からがスタートです」
慎也がうなずく。
「体育祭でマーチングをしてほしいとの依頼も受けています。それに、七海祭や高校総合文化祭、そして君たちが主役の定期演奏会など、これからもたくさんの行事が控えています。さらには、来年のコンクールに向けて、より練習に励んでもらわなければなりません」
駿と光瑠の表情が厳しくなる。そして、はるかは少し不安げであった。
「そのためにも、今後も気を抜かずに頑張ってください！」
「はい！」

部員全員が揃って返事をする。
「それでは……続いて、3年生からちょっとお言葉もらおうか！」
「おぉー！」
恭一の思わぬフリに、3年生全員が動揺しているのがわかり笑いが生まれる。
「それでは……宮部！　一番手だ」
「えぇ！？　な、何言おう……」
由美子は恐る恐る立ち上がり、しばらく悩んでから言い始めた。
「まずは……えっと、恥ずかしいけど……ありがとうございました」
由美子が言いたかったこと。それはありがとうであった。もちろん、それを一番向けているのは気づいているのか気づいていないのかは知らないが、キッカケを与えてくれた沙希と翔であった。
翔が吹奏楽サークルを創設しなければ、沙希が吹奏楽部にいまこうしていることはなかったであろう。その沙希が吹奏楽サークルでフルートを吹いているのをみて、由美子は彼女に、そしてフルートに憧れて吹奏楽サークルに入ったのだ。
その後、初心者である彼女は練習に大変な苦労を強いられた。しかし、沙希の熱心な指導もあり次第に技量を上げ、腕を磨いていった。そして今では、このような大舞台でも堂々と演奏できるまでになったのだ。
そうしたことを言っているうちに、次第に内容がまとまらなくなってきていた。それに気づいた沙希が途中参加する。
「こんな感じの由美子を、私は教えるのがなかなか大変でした」
そこで笑いが起きる。沙希が引き継いで話し始めた。
沙希がやはり感謝しているのは間違いなく翔であった。なぜ沙希でなければいけなかったのか。実を言えば、中学時代からフルートを吹いている同級生というのは沙希以外にも5人もいたのだ。それも、明らかに沙希よりレベルが高い人は3人いた。残りの2人に限ってみても、沙希と同等である。しかし、翔はなぜか沙希にこだわっていた。

今でもその理由はわかっていない沙希。けれども、こうして由美子と毎日楽器を吹けることは楽しくて仕方がない。

「つまり……私は由美ちゃんがいないと今では考えられません。それに佳菜ちゃん、ノムさん、まこっちゃん、けーちゃん、あんち、まゆちゃん。皆がいないフルートとオーボエ、バスーンパートは考えられません」

恥ずかしそうな表情をする後輩たち。それでもそれが、沙希の素直な気持ちであった。

「それでは、次は部内のお母さんである橋本さんにタッチします」

絵美が「やめてよ、それ！」と笑いながら前に立つ。

「えーっと。まずは皆さん、ばんざーい！」

「ばんざーい！」

それからしばらくその万歳の余韻を楽しみ、絵美は言い始めた。

「次に、木管の皆さん。私のわかりにくい割にうるさい木管セクション練習にお付き合いくださって、ありがとうございました」

絵美は木管セクションリーダーを務めている。木管楽器は特に自由曲で金管楽器に比べて細かいパッセージが多く、少しでもズレてしまえば一発でわかってしまうような場所が多数あった。また、陽乃のソロのように静かな場所ではチューバが休みになり、木管楽器で伴奏をするという場面は数多くあった。そのたびに絵美は何度も音程やリズム、発音のタイミングなどを厳しく指導してきた。

ひょっとしたら、嫌われてしまうのではないか。

そういった不安がなかったかと言われれば、それはウソになる。むしろ、不安のほうが大きかった。しかし、自分が不安がっていては後輩たちもついてこない。そう気持ちを切り替えて、たとえ嫌われてでもこのセクションリーダーをやり続けよう。そう彼女は思っていたのだ。

「その結果が今日、こうして出せて嬉しいです。皆さん、本当にありがとうございました！」

拍手が起きる。

「それじゃ橋本。次に金管は誰から行くか指名してくれ。ただ、佐野部長、朝倉副部長、本堂副部長は後回しだからな」
　すると慎也と春樹が同時に「じゃあ俺たちのどっちかじゃん！」と声を上げて笑いを誘う。そして絵美は迷わず「じゃあ、春くん」と春樹を呼んだ。
　春樹は少し恥ずかしそうにしながら前に立つ。
「えーと……」
　それから春樹はいろんなことを思い返していた。初めは塞ぎこんでいて翔たちとも意思疎通が難しく、なかなか自分を出せなかったこと。楽器もうまくならず、拓真とコソコソ隠れて練習したこと。そんな話を知らない後輩たちは驚いたり、笑ったりしていた。
　しかし、そんな春樹も進路を目指すに当たり、一生ユーフォニウムと付き合っていたいと思い、音楽大学への進学を決めたのだ。
　もちろん、不合格という可能性もある。しかし、春樹は一般の私立大学を受けるつもりはないと全員の前で宣言した。これにはさすがに部員たちが驚く。
「もちろん、浪人するわけにはいきません。なので、現役で一発合格してみせます。皆さんは、この宣言の証人です！　よろしく！」
　拍手が起きる。春樹は頬を赤くしながらチラッと絵美を見た。絵美も笑顔で答える。
「頑張って」
　そう言っているのがヒシヒシと春樹には伝わってきた。
「それじゃあ次は、吹奏楽部唯一の不良・川崎くんです」
「元、ってつけろよ！」
　慎也が春樹のわき腹を軽く突いてから前に立った。
「えーっと……」
　何から言おうか、春樹の後なので恥ずかしいことは言えないなどといろんなことを考えているうちに、緊張してきて顔が赤くなる慎也。
「やべぇ！　本番より緊張してる！」

「なんでやねん！」
今までで一番大きな笑い声が上がった。
それから慎也は深呼吸をして、いろんなことを思い返した。まず、感謝するべきはやはり中学時代にトロンボーンとの出会いをくれた同級生と、その後輩のことだ。特に後輩に関しては感謝してもしきれない。その彼――永瀬　信二のことを思い返し、慎也は話し始めた。
自分は中学時代、本当に荒れていてどうしようもなかったこと。しかし、楽器に出会うキッカケをくれた後輩のこと。そして、翔が決定打だった。吹奏楽サークルという言葉を聞き、慎也は真っ先にそこへ向かった。
トロンボーンはそこにあった。特有の形状をしているそれを真っ先に彼は選び、すぐ病みつきになった。
そしていつの間にか翌年には亜紀と徹が、今年には沙知と雛乃が入り後輩４人を指導するような立場になっていたのだ。
「俺は中学時代、生徒指導されるばっかの立場でしたけど、こうして部活で後輩を指導するような立場になって、俺が一番驚いています」
亜紀たちが爆笑する。
「こんな俺ですが……これからもヨロシク！」
そう言って爽やかに元の場所へ戻る慎也。そして、美里が立つ。
「はいはいはーい！　どうも～、田中です！」
いつもと変わりないテンションで前に立つ美里。美里は興味本位で打楽器を選んだ。しかし、それは苦労の連続であったと今になっても思うのだ。
スネアドラム、バスドラム、グロッケン、シロフォン、マリンバ、カスタネット、タンバリン、鈴、ティンパニ。挙げればきりがない打楽器を初めは彼女一人でまかなえるだけまかなっていた。
翌年になって後輩が入ってきたものの、初心者もいた。彼女自身初めてコンクールに出場するため、初心者への指導まで手が出せず

に経験者に任せてしまうこともあった。
「こんなあたしですが、まぁ一応苦労してんだなぁってことはわかっていただけると、助かっちゃうかも！」
そうやって笑いを誘う美里。しかし、洋之や恵梨たちパーカスメンバーは知っているのだ。美里はいま、パーカッション内では誰よりもこだわりが強く、妥協を見せない部員だということを。
そして、美里と入れ替わりで拓真が先に立った。
「え！？　あたしは！？」
「朝倉さんは後で。後になれば後になるほどいいこと言わなきゃなんなくなるから、俺先で」
「やーだー！」
笑いが起きる。周りの団体までもが笑っていた。
「えっと……そうだな」
拓真は中学時代、バスケットボールをしていた。しかし、怪我の影響で高校では部活をするのは困難。そんな時、吹奏楽に出会った。そして、チューバに出会ったのだ。
体の大きな彼にとって、この大型楽器を吹けるようになるのはそう時間がかからないと正直思っていた。しかし、楽器は体の大きさ云々ではないとすぐに思い知った。それが悔しくて練習を繰り返し、拓真は今のレベルにまでのし上がってきたのだ。
翌年にできた後輩。そんな彼も初心者であった。自分が感じたことはおそらく、彼も感じるだろう。そう思い、親身なアドバイスを智志には行ってきた。
その結果が今年のコンクールでは、チューバがフルでコンクール出場という結果を出せた。貴志が出られなかったのが唯一の心残りであった。
「これからも妥協はしないつもりですので、よろしくです」
拍手が起きる。そして遂に陽乃の番がやって来た。
「えー……」
前に立つなり顔を赤くする陽乃。

「おっかしいよね～！　慎ちゃんじゃないけど、前に立つほうがソロ吹くより緊張する」

翔が「お前ら絶対感覚変やぞ！」と茶化すと慎也がまた赤くなった。陽乃が「もう！　邪魔しないで！」とプリプリしながら言う内容を何とかまとめていた。

陽乃が吹奏楽と出逢ったのは、やはり翔との出会いがきっかけであった。それはもちろんそうだが、いまこの吹奏楽部に在籍する５９人の誰か一人が欠けていても、陽乃は今の結果が出せていないように思っていた。それにマーガレットやソンス、裕時の３人に、常に活動を支えてくれる保護者、そして指導をしてくれる恭一やしおりたち。ライバルである風見台高校をはじめとする、市内の高校吹奏楽部。

「どれかが欠けていたら、きっといまあたしたちはここでこうして結果を喜んでいることはできないと思います」

陽乃の言葉が全部員の胸に響いていく。

「そして、これからもよろしくお願いします！」

その言葉をキッカケに拍手が起きる。

「そんじゃ、次は部長でーす！」

その言葉に誘われて翔が出てきた。

「えー！　では！」

翔がニカッと笑う。

「部長はイイコト言わんとアカンやろうから、定期演奏会までイイコト言うのを延期しまぁーす！」

「えー！？」

思わぬボケに、全員がブーイングを飛ばした。

「このヤロ！　調子乗ってんじゃねーぞ！」

慎也が翔のわき腹をくすぐり始めた。

「アハハハ！　お、おいやめろや……アハハハハハハ！」

「よーし！　男子全員集合！　部長を胴上げすんぞー！」

男子が集まり、翔を胴上げし始める。

「きゃー！　高―い！」
「すっごいすごい！」
翔が胴上げされるのを見ていて、陽乃はなんとなく感じていた。
定期演奏会まであと2ヶ月弱。いまここで何か言えば翔のことである。泣いてしまうから、あぁやってごまかしたのだろうと。
正直、陽乃も言っていて泣きそうになるところがあった。しかし、何とか堪えたのだ。
「……。」
定期演奏会で挨拶とかをすることになった場合、翔はちゃんと言い切ることができるのだろうか。そんな心配をしながら、陽乃は宙に舞う翔を見つめていた。
こうして七海高校の9ヶ月近くにわたるコンクールの日々は無事、東関東大会金賞という栄誉を残して、幕を降ろしていった。

第４３７話　文化部会議

９月１１日月曜日。東関東大会で金賞を納めた吹奏楽部のメンバーたちも今日からひとまずはいつもどおりの生活が始まる。

放課後、部員たちは２４日の体育祭に向けてしおりの指導の元、マーチングの基礎練習を行っていた。翔は１０月に開催される七海祭に向けて、文化部全体での部長会議があるため、そちらに出席していた。

ちなみに、七海高校には以下の文化部がある。

・吹奏楽部
・コーラス部（男女混声）
・調理部
・囲碁将棋部
・美術部
・漫画研究部
・ジャズ研究会
・化学研究部
・情報パソコン部
・演劇部
・放送部
・管弦楽団

文化部全体を仕切る生徒会執行部の文化役員が今年のテーマを話している。今年は音楽祭があるため、音楽関係の団体には特に頑張ってもらいたいとのことであった。とはいうものの、音楽に携わる部活はコーラス部、ジャズ研究会、そして吹奏楽部の３団体だけ。それに加えて、合唱コンクールで優勝した３学年の合唱が入るのが

通例であった。
「それでは、まず音楽祭のほうから話を進めていきたいと思います。何か、これまでの流れとは異なる提案などがありましたら、挙手をお願いします」
「はい！」
翔が真っ先に手を挙げた。
「では、吹奏楽部佐野くん」
翔が嬉しそうに立ち上がる。
「まず、ウチの部とジャズ研さんの内容が被らんように、ウチの部は、ジャズは七海祭では演奏しないようにします」
するとジャズ研の部長が「マジ？　助かるな～それ」と安堵した様子で言った。ジャズ研究会内部では、今年吹奏楽部が東関東大会に出場したことを考えると、もしもジャズを演奏された場合には、自分たちの演奏が劣るのではないかなどと考えていたのだ。
「っていうか、ウチジャズめっちゃ下手やねん！　やから、本場のジャズはジャズ研さんにお願いしまーす！」
そこで笑いが起きる。ジャズ研部長も「よし！　任された！」と笑った。
「それから、これは別の提案なんですけど」
「なんですか？」
「もしですけど、コーラス部さんと良かったら、一緒に演奏する機会いただけませんか？」
この言葉にはコーラス部の部長が驚いていた。
実は今年、コーラス部は全日本合唱コンクール関東支部大会に出場が決定している。いわば、吹奏楽部と同じような快挙を収めており、さらに合唱部には全国大会出場の切符がまだ残っているのだ。本番は今月最後の日曜日である２４日であるので、その結果がどのようであれ、記念すべきことであるのは間違いない。そのため、翔はできれば支部大会出場団体同士で一度、演奏をしたいと考えていたのだ。

その理由を説明すると、文化役員が「それいいなぁ……」とうなずく。

「どないですか？　コーラス部さん！」

コーラス部部長の森下（もりした）　芽実（めみ）が「おもしろいお話ですよね！　一度、部で話し合ってみます！」と前向きな返事をした。

音楽祭の話し合いはその後も３０分ほど続き、それから各部での催し物の話へと移行する。

幸い、今年は内容が被ることはなく、スムーズに決まるように見えた。しかし、吹奏楽部の「吹奏楽喫茶」には文化役員が難色を示した。

「誰が調理をするんですか？」

翔たち吹奏楽部が考えていたのは、保護者に調理をしてもらうというものであった。しかし、あくまで「生徒が主役」である七海祭に、保護者が直接的に関与するのは好ましくないのではないか、という意見であった。これには翔の表情も困惑したものになる。吹奏楽喫茶の方向で考えていたため、却下となれば再び話し合いをしなければならない。

「あのー」

すると、調理部部長・中村（なかむら）　幸一（こういち）が手を挙げた。

「はい。中村くん」

「うちの部と、共同で運営するのはどうですか？」

「共同、と言うと？」

幸一が嬉しそうに説明をする。

「まず、調理はウチの部員が担当します。ですので、これで生徒が主役という考えはＯＫですよね？」

文化役員がうなずく。

「それに、ウチの部は部員が少ないのでなんかこう、吹奏楽部さんとの活動を一緒にすれば、ウチの部も吹奏楽部も有名に……あ、まぁ吹奏楽部さんは十分有名ですけど」

ドッと笑いが起きる。翔はなんだか恥ずかしくなり、苦笑いした。

「まぁつまり、コラボレーションですよね。ウチの部も吹奏楽部さんも楽しめる場ができて、お客さんにも楽しんでもらえる場ができる。これ、どうでしょう？」
「いいですね！　それなら、執行部側としてもＯＫできる」
「じゃあ、吹奏楽喫茶は吹奏楽部と調理部の共同運営で！」
「よろしくお願いします！」
会議終了後、翔は真っ先に幸一の元に走った。
「幸ちゃん！」
翔に呼ばれ、幸一が振り返る。
「おぉ！　お疲れ～」
「お疲れ！　っていうか、ホンマありがとうな！　めっちゃ助かった」
翔の言葉に幸一は「うちの部も、もっと積極的にアピールできる場がほしいって思ってたから、すっごい助かるよ」と答えた。
「ウチの文化系団体ってさ、持ちつ持たれつで行こうっていう考えの部、多いよな」
「うん。これ、すっごい大事だと思うよ俺も」
二人は廊下を歩きながら、ひとまず吹奏楽部では演奏曲目を、調理部ではメニューを考えることにひとまず3日間程度で決定することを話した。
「正味、ちょうど1ヶ月やもんな。クラスの出し物とかは夏前から決めてたけど、どうしても部活系のんは遅くなるなぁ」
「毎年のこととはいえ、仕方ないよね。夏場はコンクールとか大会、多いし」
「せやけど、逆に切羽詰ったほうがやる気出るわ！　お互い、頑張ろうな！」
「うん！」
幸一と別れてから、翔は部室へと急いだ。すると、中からは何か音楽が流れている。どうやら基礎練習は終わったようで、合奏をしているようである。

「せやけど、ウチの部にしては何かこう、綺麗すぎるな」
しかも、流れている曲は今年のニューサウンズ・イン・ブラスにあった『ディズニー・クラシックス・レビュー』である。初見の楽譜をこれだけ立派に演奏できるほど、七海高校はまだ安定していない。
扉を開くと、やはりCD音源であった。翔の姿を見て何人かが軽くお辞儀する。翔はそのままでえぇで、と指示を出して自分もすぐに空いている場所に座った。
しおりの姿が見えたので、ひとまずお辞儀を軽くしておく。それから流れている音源に耳を澄ませた。このタイミングでこの曲を流しているということは、やはりこれを体育祭ではマーチング用の曲として使うのだろうと翔は想像した。
「はい！　この曲は以上です。とりあえず、今回は時間もないのでこの曲でマーチングを体育祭用に仕上げていきたいと思います」
「はい！」
一部、不安げな表情の部員がいる。それは綾音や夏樹、美咲といった初心者やマーチングの経験がない南葉島中学の部員たちであった。
「えーっとね」
それを察したのか、しおりは続けた。
「とりあえず、もうみんなも楽器経験が4月から考えるともうすぐ半年ね。安定してきているとは思うのよ。実際、1年生でもコンクールメンバーだった部員はたくさんいるんだから」
夏樹は自分がコンクールメンバーであるということを認められ、少し嬉しく思っていた。
「だからね、私としてはマーチングも同じようにみんなで頑張ってほしい。今年は、みんながコンクール頑張ってくれたから私も嬉しいんだけど、それと同じくらいにマーチングも頑張ってくれたら、もっと嬉しいわ」
美咲と杏が顔を上げた。

「いい？　周りはみんなライバルよ。自分が頑張らないと、どんどん置いていかれるからね～？」
「はい！」
「いい返事！　じゃあ、早速だけどこの曲の楽譜配るわね。それで、今から合奏！」
「え！　パー練なしですか！？」
これは困ったという表情になる洋之。
「そうよ～！　バンバン練習していかなきゃね！」
しおりは笑顔で答える。そして、騎士に聞いた。
「ねぇ、あなた速水くんだっけ？」
「あ、はい」
「今はまだ楽器吹けないんだよね？」
「はい。１０月には吹けるようになると思います。だいぶ、回復したんで」
「そっかそっか！　うん、でもマーチングは出てね！」
「え！？」
その言葉に驚いたのは騎士だけではない。優輝や麻衣子、もちろん絵美も驚いていた。
「大丈夫。君の位置はコンテでは基本的にそう激しい動きをしない場所に持って行くから。せっかくなんだから、全員で演奏しましょ！」
「は、はい！」
そしてしおりは「いーい！？　そこの３人もよ！」と大声で彼ら――ソンス、マーガレット、裕時に声を掛けた。
「え？　アタシたちもですか？」
「そうよ！　部員でしょ！」
「……。」
驚いてポカンとした表情になる３人。
「部員でしょー！？」
「イ、イエス！」

マーガレットが大声で答えた。その声を聞いてしおりは笑みを浮かべる。
「よーし、じゃあ音出ししてチューニングの後、初見合奏するよー！」
「はい！」
２４日の本番に向け、そして七海祭に向けて七海高校吹奏楽部は新たに動き始めるのであった。

第４３８話　おちゃらけがない

初見合奏はしおりが想像していたよりも上手く部員たちが演奏するので、これならばマーチングで演奏してもそれほど乱れる部分はないだろうと思っていた。しかし、想像しなかった場所で部員たちがつまづいたのだ。

まず、冒頭であった。全員が「ｆｒｅｅ」と指示されている。自由に吹け、という意味合いのようで、音源を聴く限りでは、本当に適当に音出しをしているという様子がうかがえる。いわば、楽団が演奏前に自由気ままに吹いている様子が示されているのだ。

そのため、しおりも特に指示を出さずに適当に吹くように指示した。すると、その「適当」というのが部員たちには思いのほか難しかったようで、駿はひたすらチューニングのベーを吹いていた。周磨はいまひとつ意味がわからず、楽器を構えては見るものの周りの様子を窺って吹こうとしない。適当に吹くの意味を履き違えているのか、まったく違う曲を吹くのはさゆり。彩香に至っては、マウスピースの練習を始めてしまった。

「ストップ、ストップ！」

しおりは見かねて思わず止めてしまった。

「自由に吹いてっていったけど、全然違う曲吹いたりマッピ練習したりしないて」

その言葉に部員たちが小難しそうな表情を浮かべる。

「そんな難しく考えなくていいの。ほら、交響楽団とかが本番前に自由に音出しするような、あぁいう感覚。ちょっと曲をさらってみるとか、音階をサーッと吹くとか。もちろん、この場合の曲はこの曲に入っているどれかにしてね」

「はい！」

「じゃ、もう1回」
　すると今度は意味を理解したようで、3年生と2年生の半数、1年生の一部が曲に準じたフレーズの練習や音階を吹いていた。しかし、中にはまだ真面目なコンクールの練習の印象が抜け切らない部員もいた。
　こういう曲の場合は、良い意味でふざけなければならない。ところが、元来真面目な性格の子にはこういったことが極めて難しいのである。
　結局、その日の合奏でその良い意味でふざけることができない部員は10人ほど、しおりが見ただけでもいた。
　2年生では優輝と誠。真面目な性格がこういうときは祟ってしまうようで、難しい顔をして考えているものの、結局それが何か形になって現れることはなかった。1年生では沙知、裕也、周磨、杏、菘、なぎさ、まゆ、稚沙希。
　さゆりは合奏が終わって職員室に戻ってからその話をした。話を聞いた恭一はその部員の顔を思い浮かべ「確かに誰も彼も真面目な子ばっかりだ」と妙に納得してしまった。
「納得してる場合じゃありませんよ、先生。こういう場合、ふざけないとかえって曲の雰囲気を壊しちゃいます」
「それはわかってるけどなぁ……。性格もあるしな。いま神崎さんが言ったのは……あ、失礼。もう三田嶋さんだっけ？」
「そうですよ！　といっても、8月からですけどね」
　しおりと樹は8月に結婚式を挙げたのだ。そのため、今はもう三田嶋という苗字である。
「それでね、三田嶋さん。とにかく今言っていた10人は、全員そりゃもう真面目な子ばっかりですから……何かこう、遊ばせるような気持ちに持っていけたらいいんですが」
「遊ばせる……ですか」
　しおりはしばらく考え、こう結論を出した。
「それじゃあ、動きで強制的に遊ばせちゃいましょうか！」

その頃、帰宅途中の菘は携帯電話で島根県にいる友人・東　茜と話をしていた。
「こんなこと言われちゃって……。でもさぁ、遊んでとか言われても全然わからなくない？」
菘は若干憤慨しながら茜にそう訴える。
「珍しく息巻いてるよね、菘が」
茜は心配そうにそう答えた。おとなしい菘がこれほど文句を言うのだから、よほどその言葉がショックだったのだろうというのは容易に想像できた。
「そりゃ息巻きもするよ！　演奏するのにふざけるとか、どういうつもりなんだか」
菘は理解できない、というような口調で一気にまくし立てる。
「でもさぁ、菘」
「何？」
茜が続ける。
「今回のマーチングって、どういうとこでやるんだっけ？」
「え？　マーチング？　体育祭だよ？」
「でしょ？　それなのに、なんていうかコンクールと同じような真面目一本調子な感じで演奏しても、楽しくないと思わない？」
「えー？　茜までそんなこと言うの？」
菘は心底不服そうにそう言った。
「あ、ちょっと勘違いしないでね。きっと真面目な菘のことだから、ふざけるっていうのを適当に力抜いてナァナァな演奏することとか思ってない？」
「そうよ。そう思ってる」
電話の向こうで茜が笑うのが聞こえた。
「もう！　何がおかしいの！？」
「だって……全然、菘が思ってるのと本当の意味でのふざけるっていうのが意味が違うんだもん」

菘にはもう全然理解ができなかった。ふざけるの意味が違うと言われても、ふざけるというのは意味がひとつしかないと思っている菘には、茜の笑う理由がまったく見当もつかなかった。

「もー！　意味わかんなぁーい！」

「ちょっとやだぁ！　大声出さないで。落ち着いて考えようよ。じゃあさ、たとえば菘がアドリブのソロを吹くとします」

「え？　アドリブソロ？」

菘が顔をしかめる。

「そんなの、アルトクラにないんだけど」

「ほらもう！　すぐそういう風な真面目臭い考え方するんだから」

菘はそういうところも真面目臭いと思われるのか、と少し驚いた。自分にとっては普通の考え方なのだが、少なくとも茜にはそうは映っていないようだった。

「でね！　そのアドリブソロには一応、楽譜は書いてあります。小譜でね。でも、なんだかそのソロは全然楽しくありません」

「ソロなのに楽しくないの！？　何それ、嫌なんだけど」

「で、アドリブソロでお客さんをなんとか楽しませるように、と先生から菘は言われてしまいました。さて、どうします？」

「えーっと……」

菘はしばらく考えた。とりあえず、曲の調に合うような音の範囲で無理のない指使いをした上でできるソロを考える。それを一度、絵美に聴いてもらって不自然ではないかを確かめる。それから、みんなの前で披露して恭一の反応を聞く。それからさらに、改善できるところは改善していく。

「まずは、自分で演奏して先輩や先生の指導や意見を聞いて、お客さんが楽しめる演奏をするようにする」

「そう！　それだよ。いま菘が言ってるさ、そのマーチング教える人がフリーってところはふざけてって言ったんでしょ？　だったら、菘なりに考えて、アルトクラリネットとしてどうやってその１０秒間くらいだったっけ？　それをどうやってお客さんに楽しんでもら

えるか。それを考えればいいんじゃない？」
「そっか……」
目からうろこのような話であった。
「そんな風に考えたこともなかった」
「えへへ。私もたまにはいいこと言うでしょ？」
茜が電話の向こうで嬉しそうに笑う。
「明日、島根県だけ局地的に雨だね」
「もう！　失礼ね！」
アハハ！と二人は笑い合った。
「とにかくさ。菘は何でも真面目すぎるところがあるから、気をつけたほうがいいよ？」
「そうかなぁ……」
「遠く離れた島根県の友達が言ってるんだから、信用しなさい」
菘はクスッと笑い「はぁーい」と答えて笑った。
「あっ、そうだ」
菘が思い出したように言う。
「何？」
「あのさ。１１月２３日に定期演奏会があるんだ」
「あっ！　言ってたよね！　日にち決まったんだ！」
茜が「おめでとう！　もっと頑張らないとね！」と明るく言う。
「うん！」
「でも、ゴメンね？」
「何が？」
「その頃、ちょうどテストで……行けそうにないの」
菘は思わず笑ってしまう。
「もー！　わかってるよ。距離的にも、やっぱりちょっと大変な部分があるじゃない？　だから、まぁなんていうか、当日に『今頃頑張ってるんだな』っていうくらいでいいから、思い出してくれれば、私はそれでいいから」
「本当？　ありがとー」

茜は嬉しそうに答える。
「でも、一度会ってみたかったんだよね」
「誰に？」
「イケメンの部長さんと可愛い副部長さん！」
萩は再び笑った。
「いやぁ～、確かにイケメンだし可愛いけど、あまりにも中身とギャップありすぎてビックリすると思うよ？」
「そう？　それでもいいじゃない」
アハハ！と笑う二人。萩はこうして時々、何でも話せる友人といろんなことを話すことで、凝り固まった自分の考えなどをほぐして行っていた。
「じゃ、また電話するね。長いことありがとう」
「こちらこそ。じゃ、マーチングがんばってね」
「うん！　またね～」
「ばいばい！」
そう言って萩は電話を終える。
「そっか……よし、ちょっと頑張ってふざけてみるか！」
日本語としてはちょっと妙な意味になるが、とにかく頑張ってみようと萩は気持ちを入れ替えて自宅へ向かって走っていった。

第４３９話　問題提起

「三田嶋さん……」
マーチングの動きの概要が完成していたので、早速練習していた翌日火曜日のことだった。練習の休憩中に、翔たちと定期演奏会でのマーチングについて話し合いをしていたしおりの元にやってきたのはまゆ、誠、慧太だった。
「あら、どうしたの？　ダブルリーダーズ」
その言葉にまゆが思わず笑ってしまう。
「そうそう、その笑顔でいいの。別にそんな恐る恐る話しかけなくてもいいじゃない」
「は、はい」
そうは言うものの、やはりまだまゆの表情は堅かった。
「歌川さん。俺が言うよ」
誠が前に立つ。
「どうしたの？　深刻な表情ね」
「あの……俺たち、どうしてもマーチング出ないといけないですか？」
「え？」
しおりが驚いて目を点にする。
「あ、あの出たくないわけではないんです。ただ……」
しおりは先ほどダブルリーダーズといってすぐに思い出した。
「しまったぁ……そうよね、そうよね。出たくないわよね……」
しおりの表情を見て翔もすぐに思い出した。ダブルリードの楽器は、マーチングはできなくもないのだが、リードの破損の可能性が大きいのだ。慣れていればなんら問題はないのだが、実は七海高校のダブルリードパートは全員がマーチングの経験がない。

健之佑と誠は昨年、ドラムメジャーをしていたので未経験。慧太は初心者。そして袴田中学出身のまゆも、マーチングの際は打楽器に移動していた。そのため、誰もが不安を抱えていたのだ。

「そうね……。下手に出て、リードが割れたりすればそれこそ一大事だし……」

「あ、あの！」

まゆが前に出て言い始めた。

「マーチングがしたくないわけではないんです！　それだけは、その……」

しおりが笑顔で答える。

「いい子ね、みんな。すっごい優しい子だわ」

その言葉に胸を撫で下ろす3人。

「でも、こういう問題はしっかり考えないとね。とりあえず、時間をちょっとくれるかな？　もちろん、練習はあなたたちも出る前提でしっかりやってね」

「はい！」

まゆたちはすぐに部員たちの輪の中に戻る。

「まぁ、いろいろとみんな考えてるのね」

しおりが翔と陽乃に言った。

「そうなんですよ。それで、西嶋さんの件なんですけど……やっぱり彼女、部長は無理だって言うてきて」

翔が残念そうに言う。

「確かに、私が西嶋さんの立場だったら私もやらないかも」

「何でですか！？」

翔が食い入るような姿勢でしおりに尋ねた。

「だって、佐野くんみたいな熱血漢的部長の後を継ぐ部長でしょ？　あっさり次は君ね、なんて言われたって心の準備が全然できてないのに、そんなの無理だと思わない？」

「そんなことありませんよ！　なぁ！」

翔は陽乃に同意を求めるように話しかけるが、陽乃は「確かにそ

うかも……」と妙に納得してしまった。
「えぇー!?　ちょ、お前もそういうスタンス?」
「考えてもみなよ。部をさ、サークルって言う状態から立ち上げて、3年目で部員60人揃えて、東関東大会で金賞納めるような部活にまで育てた人の後、継ぐんでしょ?　プレッシャーも相当だよね」
翔にはなかなか理解できないようなことであった。それほどにはるかにとって、部長を継ぐというのはプレッシャーのあることだったのか。翔にはそれが不思議で仕方がなかった。
チラッとマーチングの動きの練習をしている、はるかを見やる。笑顔でさゆりたちと話をしている様子をみても、あまり深刻そうには見えなかった。
「とにかく、今日にでも一緒に帰って、ちょっと話し合うべきだよ」
陽乃が力強く言った。
「今日か?」
「まだ、間に合うかもしれないじゃない。アンタが提案したんだし、やりませんであぁそうですか、って引き下がるの?」
「……。」
「カケルらしくないよ」
その言葉が翔を突き動かした。
「せやな……せやな!　よっしゃ!　まだ諦めへんで、西嶋ちゃん!」
「頑張れ!」
陽乃がトン!と翔の背中を押した。
「よーし!　それじゃ、もう1回頭の動きからするよー!」
しおりも気合いを入れ直して全員に呼びかける。気合の入った返事が部員たちから返って来て、その声が校庭中に響き渡った。
マーチングの練習が終わり、着替えも終わって終礼の時間。
「それでは、明日は楽譜アリでのクラシックス・レビューの最終合奏です。一応楽譜はあるけど、暗譜するつもりでおってください」

「はい！」
「他、連絡事項ある人」
「はぁい」
由美子が手を挙げる。
「はい、どうぞ」
「楽譜係からです。まず、七海祭において全体発表で演奏する曲の楽譜は先ほど配布したとおりのものです。各パートの責任者は、今週土曜日までにコピーしてきてください。合奏は土曜日の午後、する予定です」
「はい！」
「他に、連絡事項は？」
「はい」
はるかが手を挙げた。
「ユニフォーム係です。そろそろ、採寸をまた行います。特に1年生と留学生、途中入部の人はあたしか右川くんのところまでユニフォームの上下サイズを連絡に来てください」
「はい！」
「他には？」
「はい！」
優が手を挙げた。
「どうぞ」
「演出係です！　七海祭での演出として、今は全体演奏の際の演出を考えています。各曲の音源は既に音源係さんが揃えてくださっているので、よく音源を聞いて、ソロパートを中心にどんな演出をしたいか、意見や希望があれば俺かノギギのとこまで連絡ください！」
「はい！」
「他には？　なければ、起立！」
全員が立ち上がる。それから、翔が思い出したように言った。
「あ、ゴメン！」
全員がずっこけるような素振りを見せた。

「西嶋ちゃん、ちょっと残ってくれへん？」
「え……」
はるかはその言葉でだいたいの内容を察したようで、曇った表情になる。翔は「なっ！　すぐ終わるから！」と両手を合わせて頼み込んだ。
「わかりました」
はるかは渋々、そう答えるしかできなかった。

結局、話はやはり予想どおり、部長の話であった。翔曰く、もう一度考え直してほしいということであった。
しかし、はるかとしては他にも部長に向いている人は部内でもたくさんいると考えていたのだ。それは駿であったり、光瑠であったり、健之佑であったりとリーダーシップの取れる人である。はるかは賑やかに盛り上げる役割のほうが好きなので、あまり人の前に立ってどうこうするというのは正直、苦手であった。
落ち込んだ足取りで学校のすぐ傍の歩道を歩いていると、携帯電話が震えた。ディスプレイには「浜田さん」の表示。虹西高校の、浜田　望実であった。
「もしもし？」
「もしもし！　西嶋先輩ですか？　こんばんは～。昨日電話もらってたのに、出れない上に返事遅くなってすみません」
「ううん。いいの。あたしがちょっと相談に乗ってほしくって勝手に電話しただけだから」
「相談ですか？」
はるかは望実に部長関連の話と、その経緯を詳しく話した。望実はしばらくはるかの話にひたすら耳を傾け、話し終えたときにようやく答え始めた。
「あたし、思うんですけど」
「うん……」
「部長さんって、何もリーダーシップだけじゃないと思うんです」

「そうかな……」
翔のことをもう一度考えてみる。やはりリーダーシップがあってしっかりしている。そんな翔と自分を比べると、まるでレベルが違うような気がしてくるのだ。
「それに」
望実が言った言葉が、はるかの固まり始めていた決意を少しだけ動かした。
「あたしとしては、西嶋先輩くらい楽しい人が部長のほうが、楽しいと思いますよ？　部活」
「楽しい人がぁ？」
はるかはとても信じられないというような声を出した。しかし、望実はいたって真面目である。
「はい。もしも、何か問題が起きても全力で取り組んで、前に突き進んで行きそうじゃないですか。あたし、そういう人が部長のほうがいいです」
「……そっか」
望実のような考え方を一度もしたことがないはるかにとって、彼女の考え方はとても新鮮であった。
「最後に決めるのは先輩ですから！　後は、お任せします」
「うん……ありがと、望実ちゃん」
「いえ！　また何かあったら、いつでも連絡くださいね」
「うん。それじゃ」
「失礼します」
そう言って望実との電話を終えたはるかは、すぐさま翔に電話を掛けた。プルッ、と発信音がしてすぐに「もしもし！」と翔が出てきた。
「先輩。西嶋です」
「うん！」
もう逃げないよ、あたし。
望実にそう誓って、はるかはハッキリと言った。

「あたし、部長します」
電話口の向こうで翔が「ホンマに！？　マジで！」と歓声を上げるのを聞きながら、はるかは少しだけ、自分が変わったような気分になるのだった。

第４４０話　ブレない演奏

「それじゃ、楽譜なしで一度通しします」
「はい！」
しおりが来るまでの間、部員たちは自主的に合奏をしていた。以前であれば、自由気ままに個人練習をしていたのだが、県大会以降は雰囲気が一変していた。少しでも時間があれば、全員の音を合わせるために合奏をするという方針が、自然と決まっていた。
「5、6、7、8」
このクラシックス・レビューは冒頭がフリーと指示されているため、部員たちのみで合わせるときはその部分はいつもカットしていた。
木管楽器の可愛らしいメロディの後に、トランペットのマウスピースだけを使って音程を合わせてメロディを吹き始める。しかし、慣れていない奏法なので綾音と美咲に意外と勇が苦労していた。そのため、まったく音程が合わず綺麗に響かない。しかし、指揮をしている翔も金管楽器のマウスピースまでどのように音程を取ればいいのかわからず、スルーしてしまった。
木管楽器のメロディの後にトロンボーンのメロディがあるが、どうも音がボケてしまい響かない。調が変わった途端、音程が乱れてしまった。
「ちょ、ちょお待って！」
翔が曲を止めた。翔が苛立っているのがあからさまに全員に伝わり、緊張が走る。しかし、翔はなるべくそれを表に出さないよう、抑えながら言った。
「音程、グチャグチャ。ホンマにこれ、東関東大会出た部が演奏する曲なん？」

「……。」
「どないなん!?」
驚いて優輝とみゆきが顔を上げた。
「気ぃ緩んでんのんと違うか？　そりゃその気持ち、わからへんでもないけど、ホンマにこれで全校生徒の前で演奏する気!?」
しかし、誰も反応しなかった。
「どないなんって聞いてるねんけど」
いつまでたっても誰も答えない。遂に翔の苛立ちが爆発した。
「どないやねんって聞いてるんや!」
「んだよ、その言い方!」
翔の苛立ちに逆に感情を爆発させたのは、意外にも拓真だった。
「お前と違って、こっちはまだ経験3年目の甘ちゃんなんだよ!」
「自分で甘ちゃん言うとったら、そらこんな演奏になってまうわなぁ!」
「なんだと!?」
「聞いてるこっちがイライラしよんねん!　客観的に聴いてて、こんな気だるい演奏されたら、聴いてる側が嫌になる!　眠なる!」
「じゃあなんだよ、お前が入ったら演奏バリッと変わるんだ？　へー!　そりゃすげぇ!　プロになれんじゃねーの?」
「なんやと!?　お前オレをバカにしとんか!?」
関西出身の翔が「バカ」という言葉を使うとき、それは屈辱的な気持ちになっているのではないかと陽乃はすぐに察知した。関西人であれば「アホ」を使うのが日常的なので、バカと言われれば腹が立つと翔も修平も言っていた。
「そうなんじゃねぇの？　お前がそう思うならさ」
「皆どない思ってるん?」
翔が聞いた。亜紀が少し気まずそうに、けれどもハッキリ聞こえる声で言った。
「私……初めての曲で、そう時間ないのに暗譜で、まだ覚えられていないので、音程までちょっと気が配れなくて……」

それに続くように、賢治が呟いた。
「俺もまだ、ちょっと音程安定しないんで……勘弁してほしいです」
「……。」
「ちょっといい？」
沙希が手を挙げた。
「何？」
翔が少し期待するような視線を向ける。しかし、彼女の口から出た言葉は彼が期待するものとは裏腹の内容であった。
「佐野くんの気持ちはわかるけど……これはコンクールじゃないんだし」
「せやけど、そんな緩い気持ちでやってたら」
「でも、三田嶋さんも言ってたけど、ちょっとはふざける要素もいるんじゃないの？　何でもかんでも、バカみたいに真面目にやりすぎてると、かえってつまんなくなると思うんだけど……」
「……。」
沙希の言葉を聞き終えてから、翔は指揮棒を置いた。
「え？」
そのまま指揮台から下りる翔。
「え？　先輩、合奏……」
「オレ、指揮振んのやめる」
「え？　ちょ、先輩でも……」
「オレが指揮振ったら、どない頑張っても固い指示しかでけへんからね。もうしばらく、振らへん」
翔はそう言い切ると、楽器を構えて『星に願いを』の部分を練習し始める。翔の楽器の音だけが音楽室に空しく響き渡る。
「こんにちはー！　あれ？　ずいぶん静かね。合奏、休憩中？」
しおりが笑顔で顔を出すと、部員たちが咄嗟に笑顔を繕い「こんにちは！」と挨拶を返す。しかし、すぐにしおりは違和感を覚えた。
「部長～、号令お願いしまーす」
「起立」

あまり抑揚のない声に、部員たちはあからさまに怒っている翔の様子がヒシヒシと伝わってきていた。
「あれ？　部長、ご機嫌ナナメ？」
ハッとして翔はすぐに笑顔で「いえ！　ちょっと考え事してたんで！」と返す。
「そう？　なら、いいんだけど。じゃあ、ディズニー初めから！」
「はい！」
冒頭から始まり、曲が進んでいく。ハイホーの後に口笛吹いて働こうへ変わっていく。口笛吹いて働こうではピッコロ、サックス、バリトンサックス、ホルン、クラリネット、ユーフォニウムが入れ替わりでメロディを奏でる。
「いいわぁ！　その音の遊び感覚！　いい？　この曲ではそういうのが大切なの。ちょっとした遊び心ね」
「はい！」
「じゃあ、続き。そうね……星に願いをから！」
「はい！」
翔たちサックスパートのソリがある部分。翔は張り切って演奏をした。しかし、あっさり吹いてすぐに止められてしまう。
「なんだろ……。なんか、あたしが思い描いてるのと違うのよね」
その言葉に翔が動揺する。そして、もう一度そこをサックスだけで吹くように指示された。この時はまだ誰がソリを担当するか決めていなかったので、全員で吹いていた。１５分ほど時間を取り、いろんな組み合わせでどのソリが最適かを判断しているように見えた。
「あっ、この組み合わせいいわね！　あまり音量がキツすぎず、かといって弱すぎず。それに、ちょっとやっぱりディズニーだもの。ポップス系の音がほしいんだ」
そう言って組み合わされたソリのメンバーはさゆり、夏樹、はるか、友美の４人であった。翔の表情がポカンとしたものになる。
「ん？　どうかした？」
「あの……」

翔が手を挙げる。
「オレの音、あきませんか？」
「あきません？　え、どういうこと？」
関西弁があまりわからないしおりが聞き返す。
「ダメですか？　オレの音」
しおりがしばらく考えてから言った。その言葉がかえって翔にダメージを与えるとも思わずに。
「ダメではないんだけど、佐野くんの音ってね、クラシック的なの。だから、コンクールとかでは結構評価いいだろうけど、こういうポップス系には、あんまり向いてない音ね。正直言って」
「……そうなんですか」
「うん！　まぁ、これから精進してね。はい、じゃあソロはいま言ったメンバーでよろしく！」
「……。」
「返事―！」
「は、はい！」
翔が落胆しているのも気づかずに、しおりは合奏を続けていった。

合奏が終わり、なんとなく気まずい空気のまま吹奏楽喫茶で演奏する曲を選ぶ時間になった。５時半に合奏が終わり、夏場の活動時間である午後７時までは１時間半。今日中に曲を決めて明日には調理部の幸一とメニュー及び曲の公開をすることになっていた。
「それでは、最終的に曲を絞っていきたいと思います」
「はい」
突然、翔が立ち上がった。部員たちが驚いて全員、彼に視線を注ぐ。
「ゴメン！　ちょっと……用事あるから、抜けていい？　一瞬！」
「うん……いいけど、部長いないといろいろ決めにくいから、早く戻ってきてね」
「うん！」

そう言って翔は音楽室を出て行く。翔が出て行った後、部員たちがザワザワと話を始める。
「やっぱり、ショックだよね」
そういったのは恵梨。
「そりゃそうよ。結構、佐野先輩上手だからさ。あんな風に音否定されちゃ、普通凹むよ」
あずさも出て行った翔の背中を見て、心配そうに言う。
「でも、あぁいう風にちょっとは自分の音の向き不向きを知らしめるっていう意味では、いい薬なんじゃないかって思うけど」
拓真がまたキツめの言葉を吐いた。しかし、慎也が言う。
「そうかなぁ」
その言葉に全員が慎也に視線を注いだ。
「どういうこと？」
陽乃が慎也に聞く。
「アイツのことだから、あんまりウジウジしてるようなタマじゃないって、俺は思うんだけど」
「……。」
確かに考えてみればそう思える節はたくさんあった。怒る時もあれば悲しむときもある翔だが、生来の性格なのか落ち込みを引きずることは少なかった。早ければ３０分程度で立ち直ることもあるのだ。
「ちょっと様子見てみない？」
一番廊下に近い席に座っていた沙知に、麻衣子が呼びかける。二人はそっと音楽室を出て、部室に向かった。
ちょっとだけ開いたドアから、翔の背中が見える。どうやらイヤフォンをしているようで、音はほとんど聞こえていないようだった。何の曲を聞いているのかはわからないものの、翔はずっと独り言を言っていた。
「なるほどなぁ……。遊びか……。なんや、オレえらい勘違いしとったな」

「勘違いだって……何を勘違いしてんだろうね、先輩」
「さぁ……」
麻衣子と沙知が不思議そうに翔の背中を見ていると、さらに彼は言った。
「アカンな！　オレも頭ガッチガチなっとるわ。気持ち切り替えんとアカン！」
そう言って翔は気分を一気に切り替えた。この吹奏楽喫茶と七海祭をキッカケに、これまで自分に足りなかったポップス的な要素をより強化しようと考えたのだ。
「わ！　戻ってくる！　行こう！」
「う、うん！」
沙知と麻衣子が戻った直後に部室の扉が開く音がした。
「セーフ」
その言葉のすぐ後に、翔が戻ってきた。
「ゴメン！　よっしゃ、続きしよ！」
部員たちはあまり翔の雰囲気が変わっていないように思えたが陽乃と美里はすぐに勘付いた。きっと、また彼は練習を重ねて自分を変えてくるに違いないと。
「！」
翔と拓真の目が合う。しかし、翔はパッと拓真から視線を逸らした。
「……。」
拓真が少し寂しそうな表情をしているのを、春樹と絵美は見逃さなかった。

第４４１話　らしくない

翔と拓真が珍しく口論をした日の部活後、絵美は拓真に声をかけた。

「本堂くん」

「ん？　何、橋本さん」

「なんで、今日あんなキツいこと、佐野くんに言ったの？」

拓真は目を丸くした後、すぐに答えた。

「いやぁ、だってあんなの翔らしくないじゃん？」

拓真は楽器を磨きながら答えた。幸い、翔たち3年生の姿はその周りにはなかった。

「佐野くんらしくない？」

「うん」

絵美は翔らしい、ということの意味がいまひとつわからず、さらに拓真に聞いていく。

「佐野くんらしいって、例えば？」

「うん。例えばさ、アイツ今までだったらちゃんと人のこと考えて行動して、話して、楽器の練習のときでも先生に思い切り怒鳴られた後にフォロー入れてたじゃん？　それなのに、今日はなんかアイツらしくない感じで変に熱くなっちゃってさ。別に熱くなるのは悪くないけど、なんていうか、今日のはマズい気がする」

絵美はふと、翔が怒鳴った時の優輝とみゆきの顔を思い出した。彼の怒鳴り声で二人は萎縮気味だったようにも、いま思い返せばそう思えてくる。

「部長でさ、しかも前に立って指揮振るんなら、まぁ先生も怒る時あるけど、あんな言い方はないと思うからさ……」

絵美は拓真の気持ちはよく理解できた。しかし、納得できないこ

ともいくつかある。
「本堂くんの気持ちはよくわかったよ。でもさ、あんな風に売り言葉に買い言葉みたいな口調でお互い罵り合ってたら、部活の雰囲気悪くなるじゃない？　私、あれはちょっと勘弁してほしいかな……」
　拓真が少し俯き加減で「ゴメン。それは、俺も悪かった」と素直に謝った。絵美も笑顔で「よかった！　これで反論されたら、もうどうしようかと思ってた」と笑う。
「まぁ……その後、意識してないだろうけど俺よりキツいダメージ与えた人いたし」
　絵美がプッと笑った。
「それにしても、あれは意図してなのかな～。さすがにちょっとキツいよね。３年生に対してあれは」
　二人は顔を合わせて同時に笑い出した。
「どうするの？　本堂くん、謝る？」
「いや……なんかハズいし。ちょっと時間置くよ」
「気まずいことないの？」
「大丈夫。３年間ほぼ毎日一緒にいた仲だし。これくらいじゃ、翔も俺のこと多分、嫌いにならないって信じてるし」
　拓真はへへッとそう言って笑った。
「そっか。なら、後は本堂くんと佐野くん次第だね」
「あぁ。ほどほどに頑張ることにするよ」
「うん！　じゃ、私も片付けに戻るね」
「ありがと」
　その後、拓真はチューバのベルを磨いてケースに直してから、打楽器の片づけを手伝い始めた。
「ねぇ、本堂くん」
　美里が拓真に声をかける。ティンパニを運んでいるので、向かい合わせの状態だ。
「ん？」
「佐野くんと、仲直りできそう？」

またその話かと思い、拓真は思わず笑ってしまった。その顔を見て美里が「もう仲直りしたの!?」と笑顔を咲かせる。
「まさか。まだだよ、まーだ」
「まだってことは、仲直りする予定あるのよね?」
美里の問いに、拓真は笑わずにはいられなかった。それを見て美里が「なぁんで笑うのよ!?」と憤慨する。
「いやいや、ゴメンゴメン。大丈夫だよ。俺もカケルもそんな意地っ張りじゃないから……そうだな。多分、明日には仲直りしてる」
「早っ! それはそれでつまんないなぁ」
「なんだよ! 結局田中はどっちがいいんだよ?」
「ちょっとはコジれたほうが、おもしろいじゃん? ドラマチックで!」
アハハ!と大声で笑う二人。
「しかし、ホントそうだよな。こうして毎日みんなで楽器吹いて楽しく話できるって、幸せだよな~」
拓真がティンパニを置いて呟く。
「おや? ちょっとおセンチですか?」
「ちょっとな」
拓真はクスクスと笑いながら先に階段を降りていった。
すべての片づけを終えると部員たちは帰路についていく。夜になると少し涼しくなってきたことを考えると、やはり夏は確実に過ぎ去っているのだと感じさせられた。
「失礼しまーす」
「おー。また明日~」
優輝と駿、雄飛、騎士が部室を後にする。残っているのは拓真、翔、陽乃、光瑠、亜紀の5人だけ。特に会話もなく、それぞれが黙々と楽器を磨いたり楽譜の整理をしたりしている。
「あの!」
突然、光瑠が沈黙を破った。
「どした?」

拓真と陽乃が驚いて光瑠に問う。
「佐野先輩と本堂先輩、仲直りしてくださいませんか！？」
それを聞いた翔と拓真が目を合わせる。
「なんていうか……あ、あの、後輩の私がこんなこと言うのも図々しいですけど、逢沢くんとか瀬戸くん、野村くんも心配してて……」
翔が低い声で呟く。
「別にオレは……なんていうか……」
拓真も低い声でモゴモゴと答える。
「俺も……別に……」
「あー！」
突然陽乃が大声を上げる。
「二人とも男でしょ！？　そんな小声でボソボソ何か言ってたって、ぜーんぜんわかんない！　はい！　もっと大声で！　謝るの！？　それともずっとこんな状態でいるつもり！？」
陽乃の突然の言葉に拓真も翔も、光瑠も亜紀も呆然としている。しばらくすると、陽乃はフルフルと震えながら言い始めた。
「わかるよ？　翔の言うことはわかる。あたしたち、まだひよっ子な吹奏楽部だけどさ、東関東大会行けるくらいになったから、プライドとかできるよね？　東関東大会行ったから、それに恥じない演奏したいとか！」
自分の言い分をズバリ言い当てられ、翔はウンウンとうなずくことしかできない。
「でもさ！　あたし、本堂くんの気持ちもすっごいわかる。だって、いくらコンクールでいい成績出しても、聴いてくれる人が楽しんでくれないと、あたしたちの演奏って意味なさないんだもん！」
やがて、感極まった陽乃が涙を流し始める。
「いいじゃん！　妥協っていうわけじゃないけど、二人が納得行けるところで折り合い見つけなきゃ、ダメじゃん……だって……」
陽乃は一瞬ためらったが、それを言った。
「あたしたち……一緒に演奏できるの、もうあと2ヶ月ちょっとな

んだよ……？」
その陽乃の言葉の後、しばらく沈黙が続いた。時計の針の音だけが響いていく。
「だっ、だから……ケンカなんて、いつまでもしてないで……さ……」
翔がそっと陽乃の頭を撫でた。
「ゴメン」
翔が笑う。
「オレ……意地っ張りすぎた」
その後、拓真に向き合い、翔は深々とお辞儀をして言った。
「ゴメン、拓あん。オレ……熱くなりすぎて、自分のことしか考えてへんかった」
「……いや。俺のほうこそ、翔の気持ち考えなくて、ゴメン」
二人はようやくいつもの様子でお互いに謝罪をする。それを見ていた光瑠と亜紀もホッと胸を撫で下ろした。
「陽乃。もう泣くな」
翔が困った様子で嗚咽を漏らす陽乃の頭を撫でる。
「ゴメンな、朝倉さん。心配させちゃって」
フルフルと小さく頭を左右に振る陽乃。半べその顔を上げ、彼女は言った。
「もう、引退するまでケンカ、しないでね？」
拓真と翔は顔を見合わせ、笑い合ってうなずく。それだけで陽乃は彼らが引退までケンカすることはもうないだろうと確信できるのだった。

第４４２話　第１回？　第２１回？

「……あ！」

それは９月１２日水曜日のことだった。定期演奏会での３年生の自己紹介文を９人（雪子は後ほど書いてもらう予定だ）で考えてきた時に、翔が突然声を上げたのだ。

「何？　突然。ビックリするじゃない」

陽乃が驚いて顔を上げる。他の７人も顔を上げて翔を見つめている。

「いや……ちょっと気になることが。これ」

そう言って翔が差し出したのは、少し色褪せた冊子。初代の七海高校吹奏楽部定期演奏会のプログラムであった。

「それがどうかした？」

「いや。回数や、回数」

翔がプログラムを指差す。そこには『第２０回定期演奏会』の文字が書かれていた。拓真がそれを手にとって「いや～、２０回って歴史長いよな」とうなずいた。

「それはそうやけど、オレが気にしてんのはそこちゃうねん」

「あ、色が褪せてるってとこか？」

慎也がもっともらしいことを言う。翔は「せやねん。この色褪せ具合がなんかこう、切なくなって……ってそんなんちゃうわ！」とノリツッコミを入れる。思わず笑ってしまう８人。

「そうやなくって！　回数や、回数！」

「２０回でしょ？　それがどうかした？」

「オレらの定演の回数、どないする！？」

「は？」

意味がわからないようで、全員が首をかしげた。

「あー！　こう、なんていうか……要は、オレらの定演を第1回にするか、第21回にするか、どないするっちゅー話や」
「……第1回、じゃないの？」
由美子が当然のようにそう言った。
「そうよ。あたしたちが始めた定期演奏会としては、第1回になるんだから」
美里が同意する。しかし、絵美は違う意見だった。
「なるほど。佐野くんの言うこと、わかる気がする。たとえば、東先生だったら第21回ってしたら、なんかこう、自分たちの世代が受け継がれた、みたいな感じで少し嬉しく感じちゃうかも」
「あ……そういう考え方もあるよね」
美里が思い出したようにうなずく。
「やろ？　これ、簡単なようで難しい問題やで。どないするよ」
「うーん……」
沈黙が起きる部室。既に後輩たちはほとんど帰宅したため、時計の針の音と隣に少しだけ残っている後輩たちの笑い声だけが響いた。
「……。」
「結論、出ないな」
春樹がため息を漏らした。
「第1回……っていうのは、まぁ……ウソじゃないけど。なんていうか、微妙だよね」
絵美が苦笑いする。
「でも、たとえばそんな事情を知らないあたしたちの友達とか、下の子たちの友達とか、下の子たちでもそんなこと、知らない子がたくさんいるかもしれないしね」
沙希のひと言でさらに3年生たちは悩み始めて各々、頭を抱え始める。
「うー……」
「あぁ～……どうしよぉ」
そんなうめき声に近い3年生の声を聞いて心配そうにその3人が

姿を見せた。
「あのぉ……」
翔たちが振り返ると、部室のドアから顔を覗かせているのは梨子、亜紀、愛実の3人だった。
「おぉ！　お疲れさん」
「お疲れ様です」
亜紀が笑顔で室内に入ってきた。
「何をされてるんですか？」
「あ！　見たらアカーン。秘密やからな！」
「えぇ～！　気になります！　それに今、先輩たちウーンってうなってたじゃないですか。何にお悩みなんですか？　私たちでよければ協力しますよ！」
それをキッカケに梨子と愛実も入ってくる。
「そうですよ～。先輩たちだけで悩むなんて、水臭いです」
梨子のその言葉に思わず笑ってしまう9人。翔は一連の内容を梨子たちに相談してみた。やはり三者三様、答えはそれぞれ違っていた。
梨子は第1回がいいという。やはり、新しく歴史を刻み始めた吹奏楽部なのだから、新生吹奏楽部ということで再び第1回から歩み始めるのが良いというのが、彼女の言い分。
それに対し、愛実は少し違う。彼女の場合は確かに第1回でいいというが、どこかでこれまでの歴史を触れておくべきではないかというものであった。それまでの吹奏楽部の、つまり恭一たちの世代の吹奏楽部の記憶をまったくなかったものにしてしまうのは、なんだか残念だというのが彼女の言い分であった。
それを聞いた上で、亜紀はこう言った。やはり、そういう歴史があるのだから一時的に吹奏楽部としての歴史は途切れたが、再始動したのだから第21回定期演奏会という捉え方もできるのではないか、ということであった。
それを言い終えた途端、愛実が肩を落とした。

「なんか……私たちが入ったらかえって混乱しちゃいましたね」
「だね……」
亜紀と梨子も苦笑いする。翔はとびきりの笑顔で答えた。
「そんなことあれへんよ。オレら、いっこも答え出せてへんかってんもん。答え、ハッキリ出せる3人がおってくれて良かった。助かった」
「そ、そうですか？」
パッと3人の顔が明るくなる。
「うん！　マジで。おおきに、ありがとう」
「いえ！　じゃあ、お邪魔しちゃ悪いんで、私たちお先に失礼します！」
梨子がペコリとお辞儀をした。後の2人もそれに続き、バタバタと音楽室を出て行く。
「……それにしても、マジどうする？」
拓真が深刻そうな表情を浮かべる。
「オレらの頭じゃ煮詰まってしもとんな……」
ガタン、と椅子を引いて陽乃が立ち上がった。
「どこ行くねん？」
「職員室。東先生に、直接聞いてみよう？」
全員の顔が不安そうなものになった。
「そんな心配しなくても、先生なら絶対答え出してくれると思うよ。行こうよ」
慎也が立ち上がった。
「そうだな……。ここでこんな風に悩んでたって、進まねぇしな。行こうぜ、みんな」
慎也に促され、9人が揃って歩いていく。
暗くなった廊下に足音がたくさん響く。
「なんかさ。悪いことして叱られに行くみたいだよね」
由美子の言葉に男子全員が吹き出した。
「なんでそんな不吉なこと言うんだよ～。中間テストあるのに」

１０月初めから中間テストの予定だ。拓真と春樹がしかめ面をする。
「まぁ、いいじゃないの。今から気をつけて勉強しておけば」
「正直、文化祭とか定演のこと考えて勉強どころ違うけどな！」
「バカ！　島根大受けるのにそんなでどうすんのよ！」
陽乃が怒って翔の耳を思い切り引っ張った。
「痛い痛い！　ちょ、ゴメンなさい、ホンマごめんなさいー！」
「素直でよろしい！」
そしてそんなことをしているうちに、職員室に到着した。しかし、なかなか入る勇気が出てこない。
「拓あん、先に入って」
美里がグイグイと拓真を押す。
「何で俺が」
「副部長でしょ！　ほらぁ」
「だったら、朝倉さんが」
「え！　じゃあ、そこは部長の翔でしょ」
「え！　いやいや、ほな金管セクリの慎也が」
「何言ってんだ。じゃあ、木管セクリの橋本が」
「やだ。私、そんな身分じゃないわよ」
そんなことをしていると突然、目の前のドアが開いた。
「！」
翔の目の前に恭一が立っていた。
「何やってんだ、お前ら……。職員室の中まで声、丸聞こえだぞ？」
「え、えへへ……」
翔は苦笑いしながらも、なかなか話が切り出せずにいた。その手には過去のプログラムが握られている。
「なんだ？　そんな古い定演のプログラムなんて引っ張り出してきて」
「いや、あの……そのぉ……」
困り顔をする翔たち。よほど言い出しづらいことがあるのかと思

い、恭一は翔たちを応接室にひとまず通した。
しかし、応接室など滅多に入ることのない翔たちはますます萎縮してしまう。
「おい、早く話切り出せよ」
慎也が翔のわき腹をグイグイと押す。
「アホ！　何でもタイミング言うのがあってやな」
「そのタイミングをさっきから逃しまくってるのはお前だろ！」
「何をコソコソやってんだ」
恭一がお盆片手に戻ってきた。そして、翔たちの前に順番に紅茶を置いていく。ホカホカと湯気を上げるストレートの紅茶。
「すみません、いただきます」
陽乃が嬉しそうにそう言って紅茶をすする。
「美味しい」
「ホント？」
絵美と由美子、沙希も紅茶をすすった。
「ホントだ。ミサッチもいただきなよ」
「う、うん」
美里は慣れない空間のせいか、ガチガチに緊張していた。
「それで？　何か話があるんだろう？」
恭一のほうからいきなり、そう聞いてきた。翔たちはもう言い逃れることはできないと思い、素直に自分たちの悩んでいることを恭一に伝えた。それを言い終えたと同時だった。恭一が「アハハハハハ！」と大笑いし始めたのだ。
「笑い事と違(ちゃ)いますよ！」
「いや、悪い悪い。そういうつもりじゃなくて……」
その恭一の目から涙が少しこぼれ落ちた。笑いすぎてそうなったのか、それとも原因がそれ以外なのかは翔たちには判別がつかなかった。
「なんていうか……お前らはそんなの、気にするな」
「ってことは……」

「第1回でいいじゃないか。お前らが創っていく、演奏会だ。確かに、この七海高校には俺たちが在籍していた吹奏楽部があった。全国大会に行ったことがあるのも、事実だ。だけれども、一度その吹奏楽部はなくなった。それを佐野がサークルとして立ち上げ、朝倉、永井、橋本、大谷、宮部、本堂、水谷、川崎、田中が基礎を作って支え、ここまで大きくしたんだぞ？」

少し恥ずかしそうに笑う9人。しかし、その笑みは自信に満ちているようにも見えていた。

「確かに過去のことを見つめ返すのも必要だけどな。お前らは基本的に、前を向いて歩いていくように。いいな？」

「……はい！」

「よし。じゃあ今日はもう帰る用意しなさい。紹介文は今週中に、先生のところに各自持ってきてくれ」

「はい！」

翔たちは嬉しそうに話をしながら音楽室へと戻っていく。

「さてと……続きやるか」

恭一は古いノートを取り出し、住所と電話番号、氏名を転記していく。そこには恭一の卒業した年度に在籍していた元吹奏楽部員たちの名前が記されていた。彼らに手紙を書き、今年再び定期演奏会が開催される運びになったのを伝えるつもりでいるのだ。

どれだけの反応があるかはわからなかったが、ひとまずそれをするのも自分の仕事である。恭一はそう考え、淡々と作業を続けるのだった。

第４４３話　いろんな色を

「えーっと……まず、皆さんにまた報告事項があります」
９月１３日木曜日。マーチングも次第に仕上がりが近くなってきた。毎日午後７時過ぎまでマーチングを練習している部員たちは、少し疲労の色が濃くなってきている。やはり毎日演奏して動きまで加わっているのが影響しているようだ。
「学祭で演奏する曲目が決定しました。スタイルとしては、奏者も観客の方々も楽しめる演奏を、です。なので、奏者だけが楽しいのではなく聴いているお客さんも楽しめる。そんな曲を先生は取り揃えてくれました。それを発表します！」
部員たちの表情がときめいたものになる。
「まず、１曲は真面目～な曲ということで『クラウド・バースト』という曲を演奏します。これは相当難しい曲です。一人ひとりの演奏技術はかなり高いものが要求されます。頑張りましょう！」
「はい！」
「同時に、普段しない楽器を触ってもらいます。それは、これです」
そう言って翔が取り出したのはハンドベルだった。
「おぉ……！」
物珍しそうな視線で和志や裕也がそれを見つめる。
「ゆーやんや和志が物欲しそうに見てるけど、実はこの楽器はもう東先生のほうからご指名が来てますので。これは先生からの発表を楽しみにしててくださいね。そっれっと……その後、別の曲をこれもまたしますが、こっちは楽しく行きます！　こっちをしょっぱなでやりますが……これも覚悟するようにとのことです。その名も『列車でいこう』です！」
そのタイトルを聞いた瞬間、中学時代から吹奏楽をやっている部員たちから「えぇー！？」という悲鳴のような声が上がった。
「オレも正直『えー！？』です！　みんな、がんばろう！」

ドッと笑いが起きる。陽乃は翔が驚くほどの曲とはどんなものなのか、不安と期待が同時にこみ上げてきていた。

「それからっと……。コーラス部さんとのコラボレーションが正式に決定しました。演奏曲目は2曲。『旅立ちの日に』と『大地讃称』です」

「おぉー！　両方とも皆知ってるヤツっすね」

智志が驚きの表情を見せる。どうやら、合唱曲を演奏できるのが新鮮に写っているようだ。

「それから、音楽祭のシメが日本人なら皆知ってるであろう、あの歌手のメドレーをします！　『ジャパニーズグラフィティ』の山口百恵メドレーです！」

「きゃー！　やったぁ！　ホントですかぁ！？」

真っ先に喜んだのははるか。翔の予想どおりの反応だった。というのも、この曲にはテナーサックスのソロがあるのだ。はるかは以前から、音源を耳コピしてやたらビヴラートを効かせながら勝手に吹いていた。それが今回、正式に吹けるというのだから喜びもひとしおなのだろう。

「続いて、吹奏楽喫茶での演奏内容や演奏グループも勝手ながら3年生や金管・木管セクリ、パートリーダーで話し合って編成を組みました。基本的に同じ学年や同じパート、セクションや違和感のないアンサンブル形式で組んでいます。詳しくはこの紙を見てください」

陽乃と拓真が列ごとに紙を配っていく。部員たちは興味深そうにその紙を見つめている。

【１０月１０日　午後1時~午後４時】

＜メインテーマ　↓　飛び出せ！　テレビと映画！＞

・銀河鉄道９９９（２年生）

・世にも奇妙な物語　（パーカッション）

・勇気１００％（選抜１）

・海の賛歌【映画タイタニックより】（3年生）
・マイナースイング【映画ショコラより】
・アララの呪文（選抜2）
・ローズ【映画タイタニックより】（1年生）
・宇宙戦艦ヤマト（金管アンサンブル）
・ホーマーズ・レッスン【映画サイダーハウス・ルールより】（木管アンサンブル）
・キューティーハニー（クラリネットアンサンブル）
・渡る世間は鬼ばかり（サックスアンサンブル）
・いいもんだな故郷は～明治カールの歌～（3年生）
・笑点のテーマ（2年生）
・残酷な天使のテーゼ（1年生）
・創聖のアクエリオン（選抜3）

【10月11日　午前10時～午後0時】
＜メインテーマ　→　J－POP　1990！＞
・春よ、来い
・出逢った頃のように
・未来予想図？
・負けないで
・White　Love
・世界中の誰よりきっと
・FACE
・輪舞曲［ロンド］
・ルージュの伝言
・ウイスキーが、お好きでしょ
・TRUTH～A　Great　Detective　of　Love～
・未来へ

※１０月１１日午前中に関しては上から順番に選抜１、２、３で演奏していきます。

【選抜メンバー】

＜選抜１＞

大谷沙希／野村健之佑／志賀慧太／毛利　菘／橋本絵美／速水騎士／堀江歩由美／逢沢　駿／中野さゆり／工藤茉莉紗／松尾　勇／佐野綾音／吉山亜紀／江藤沙知／右川順平／保田　杏／加藤愛実／本堂拓真／常盤貴志／乃木あずさ／岩切裕也

＜選抜２＞

井上佳菜／歌川まゆ／戸口　誠／崔　裕時／河内みゆき／進藤雄飛／小林梨子／鈴木麻綾／西嶋はるか／真鍋友美／藤咲　流／谷村美咲／富士原　徹／佐々木雛乃／緒方賢治／時任裕子／ソンス／大岩智志／マーガレット／日高　優／塚口和志

＜選抜３＞

宮部由美子／伊原光瑠／片岡なぎさ／朝倉夏樹／工藤茉莉紗／前田かのこ／松尾　勇／久野彩香／吉山亜紀／佐々木雛乃／保田　杏／時任裕子／加藤愛実／飯岡好美／田中美里／秦野恵梨／本堂　晃

「あれ？」

春樹が声を上げた。

「選抜メンバーに俺の名前がない」

「あ、ホントだな。俺の名前はあるのに」

拓真が不思議そうに呟く。

「ちょっと待ってください！　俺の名前もない！」

優輝が悲鳴に近い声を上げた。同時に周磨も「あ！　俺もです！」と声を上げた。

「はい！　そこでこれでーす！」

陽乃が嬉しそうに紙を差し出す。
「？」
周磨、春樹、優輝の3人が顔を寄せてその紙を見た。

＜特別選抜／ウェイター&ウェイトレス＞
3年：佐野　翔／川崎慎也／水谷春樹／朝倉陽乃
2年：瀬戸優輝／冨岡洋之／三宅亮平
1年：野村周磨

「なんですか！　この特別選抜って！」
周磨と優輝がかなり息巻いている。
「ま、まぁまぁ落ち着いて。とりあえずさ、この選抜にはそれなりの理由がありまして」
陽乃が苦笑いしながら言う。
「なんですか？　その理由って！」
優輝が必死になって詰め寄る。周磨も必死だ。
「そもそも、なんで女子が朝倉先輩ひとりで、あと全員男子なんですか！？」
「それはその、えー……」
「そんなの、決まってるじゃない！」
美里が割り込んできた。
「いーい！？　今回選ばれたアンタたちはね、この衣装が超ピッタリだったからよ！」
「ちょ、ミサッチそれは……」
しかし、美里は何のためらいもなくその衣装を出してしまった。
「んだよこれー！　あん時の執事の衣装じゃねーか！」
慎也が言うあの時とは、2年生のときのバレンタインデーで美里のところへ行ったとき、半ば強制的に着させられた執事の衣装だった。
「そう！　悪いんだけど、勝手ながらアンタたちの写真を現像してこの衣装を重ね合わせて一番似合う男子を選抜しました！　でーす

ので、あなたたちはホールスタッフとして、吹奏楽喫茶の際に勤務してもらいまーす！」

「えぇぇぇ……」

選ばれた翔を除く男子からは、ため息だけが漏れるのだった。

部活後。最後に部室を出た翔、慎也、陽乃、美里の４人は鍵を掛けて職員室に向かう。その途中、慎也がいまだに不服そうな様子で言った。

「なんで相談もナシに勝手に決めるんだよ」

「あれ？　相談したよ？」

美里が目を丸くする。慎也が「誰に？」と聞き返すと美里は「佐野くん」と答えた。それを聞いた慎也が不機嫌そうな顔をする。

「カケルに言ったって、俺たち本人に言わなきゃどうしようもねぇじゃん！」

「だって、慎也に直接言ったらゼーッタイあんた、嫌がってやらないでしょ？」

「当たり前だろ！」

「だから半強制的に決めたんじゃない！」

「うわぁ～もう最低だな、お前！」

慎也が髪の毛をグシャグシャと掻き回すので、翔が「落ち着けや。そない怒らんでもえぇやろ！」と笑ってなだめる。

「えぇやないか。この衣装が似合うヤツなんて、なかなかおれへんで」

「俺はそれが嫌なんだよ」

「そうかぁ？　オレは慎也、よぉ似合ってる思うで」

「お世辞じゃなくても嬉しくねぇ」

不機嫌そうな慎也。これにはさすがの美里や陽乃も困った様子だ。しかし、翔は意識的なのか無意識なのかがわからないが、飄々とした様子で続ける。

「えぇやないかー。オレたちが普段見せへん色で活躍できる場ぁやねんから！　喜んで着ようや！」

「……考えとく」
慎也もあまり悪い気はしていなかったのか、少し恥ずかしそうに答えた。
「感触、意外と悪くないかもね！」
美里が嬉しそうに陽乃にそう言う。陽乃も「うん！　あんなこと言っちゃって実際問題、悪くはないのかもしれないね」と嬉しそうにうなずいた。
「俺、まだするって言ってねーからな！」
慎也が顔を真っ赤にして反論する。陽乃たちはそれを見てクスクスと笑い合うのだった。

第４４４話　恐れていたこと

９月１４日金曜日。校庭では2年生が学年演技である組体操を練習している。２４日の体育祭本番まで約1週間。次第に統率も取れてきている様子が自分たちでも手に取るようにわかってきていた。

見せ場であるピラミッド。身長の高い男子や体格の良い男子は土台部分になることが多く、逆に小柄な男子は頂点部分に位置することが多い。例に漏れず、吹奏楽部内でも土台に位置する者と頂点部分に位置する者で分かれていた。前者は亮平、健之佑、順平など。後者は優、徹など。

笛の音と同時にピラミッドの山を崩すことになっている。しかし、そのピラミッドの山のうち、中央のピラミッドの土台部分に位置する男子がバランスを崩し、崩壊してしまったのだ。

「うわぁー！」

男子の低い声の叫び声とバタバタと地面に人が転がる音が響き渡った。

「大丈夫か！？」

「怪我は？」

先生たちが駆け寄り、生徒たちの様子を見て回る。幸い、崩れ方が良かったために擦り剥いた程度の怪我をした生徒が数名いるくらいであった。

のだが。

「痛っ……！」

苦痛に表情を歪める生徒が一人いた。左手の中指と薬指を押さえているのは、順平だった。

「右川？　どうした？」

順平の担任が心配そうに彼のそばに駆け寄ってくる。順平は脂汗

をかきながら担任に訴えた。
「指が痛くて……」
「突き指でもしたか？　ちょっと保健室念のため行ってくるか？」
「はい……」
順平は痛みを感じながら、それ以上にいま自分が陥った状況に焦りを感じていた。
保健室に行ってからすぐに順平は先生に尋ねた。指が大丈夫かどうか、気が気でなかったのだが、それを聞くのはなんだか怖く、先延ばしにしてしまいそうな自分がいた。それが嫌で、思い切って聞いたのだ。
「あの……来週月曜には治りますか？」
「そうね～……」
心臓が飛び跳ねるほどに激しく鳴っている。順平は自分の中でしっかりと「大丈夫、大丈夫」と繰り返し言い聞かせた。
「大丈夫そうね」
その言葉に安どの表情を浮かべる順平。しかし、次の言葉を聞いて頭が真っ白になった。
「薬指は」
「……え？」
順平は顔を上げる。
「じゃ、じゃあ中指はどうなるんですか！？」
「そうねぇ。この状況じゃ来週いっぱいはかかりそうね」
「ら……来週？」
頭が真っ白になる順平。
「そんな！　困ります！　俺、１７日本番なんですよ！」
「その気持ちはわかるけど、無理に指を動かせば治るのが遅くなるばっかりよ。ここは１７日の本番はちょっと控えておきなさい」
「……。」
「わかった？」
「はい……」

順平は唇を噛み締めて、爆発しそうな気持ちを抑えながらなんとかそう答えた。

湿布を貼ってもらって保健室を後にして、しばらくしてから湿布をそっとめくってみた。少し腫れが目立つものの、自分の利き手は右手なのでそうそう見られることもないと思い、そのまま湿布を中指から外した。

薬指に関しては、日曜日にはほぼ治ることがわかっているので、このまま湿布を貼って治療を続けるつもりでいた。中指に関しては、このまま黙りとおすつもりでいる。

「じゅーんぺ！」

その声にビクッと全身を震わせた。

「ビックリしたかぁ？」

振り返ると優輝、亮平、智志、洋之の４人がいた。

「お、おぉ～！　マジびっくりすんじゃん」

「どうだったんだよ、怪我の具合」

優輝が順平の左手を掴み上げ、様子を見る。

「おっ。湿布貼れば治るんだな？」

「あ、あぁ」

あまり左手を長時間見られたくないのでサッと手を隠すように優輝から放す。その様子が変だと思われることもないようで、４人は「そんなに大したことないなら、良かったよな」と口々に喜んでいた。

その後の授業もお弁当でも右手ばかりを使うのでまったく問題はなかった。しかし、部活になるとその問題と直面する。

「んじゃあ次！　えーっと……」

翔が前に立って総譜を捲りながら頭を指揮棒で掻いている。

「ちょっと～、指揮棒で頭掻くのやめてよ！」

陽乃があからさまに嫌そうな顔で翔に注意する。

「わ、ゴメンゴメン」

翔はへへッと笑いながら指揮棒を頭から離す。

「んじゃ、タイタニック・メドレー」
「はい！」
その曲名を聞いて順平は気まずそうな表情を浮かべる。しかし周磨、賢治、杏、裕子の４人とも誰もその表情には気づいていない。順平は中指の痛みを知らないフリをして、楽譜を準備する。
しかし。
ゲーの音を吹くために中指を使った瞬間だった。激痛が順平を襲い、思わず吹くのをやめてしまった。
同時に翔が指揮を止める。周磨や賢治たちも驚いて順平のほうを見ている。ホルンのメンバーだけではない。部員全員が順平のほうを見ていた。
「どないしたん？　うーちゃん。珍しいやん」
「あ、す、すいません！」
「ほな、もう１回頭から」
「はい！」
そして再び冒頭から演奏が始まる。しかし、結局同じ指を使うところで痛みに耐え切れず、演奏をやめてしまった。
「どないしたん？　ホンマに……」
「いえ……」
しかし、その表情には明らかに無理な様子が浮かび上がっていた。すると、杏が“それ”に気づいたのだ。
「先輩……中指……」
「！」
ハッと気づいて順平は指を隠した。
「中指？　中指、なんかあったん？」
ざわつく音楽室内。優輝が「おい、ジュンペー……まさか、今日の体育で……」と顔色を変えてそう言ったのを翔は聞き逃さなかった。
「体育？　怪我したん？」
順平の顔が青ざめていく。翔は指揮台から降りて順平のほうへ近

づく。
「見せてみて」
「……。」
翔は思った以上に腫れている彼の中指を見て「これはアカン。無茶しぃなや、自分」と注意を促した。しかし、順平は強行に首を横に振る。
「俺、17日はどうしても出ないとダメなんです！」
「せやけど、24日体育祭やで？　そっちのほうが抜けてしもたら大変やから……」
翔が心配そうに呟く。杏がフォローに出た。
「そうですよ、先輩。あたしはまだ頼んないですけど、他の3人がしっかりカバーしますから、17日は休んでください」
「嫌だ。絶対嫌だ！」
困惑する表情を浮かべる部員たち。
「なんでそこまで17日にこだわってるんだよ？」
優輝がもっともな疑問をぶつけた。順平は小声で言った。
「結縁寮に……うちのおばあちゃんいるから」
「うーちゃんのおばあちゃん？」
コクリと順平がうなずく。
「俺の本番、すっげぇ楽しみにしてくれてて。ずっと車椅子の生活だから、中学の時の引退の演奏会も聴きにこれなくてすっげぇ残念がってて。でも去年から、ナナコウが結縁寮に慰問演奏行くようになって、俺ホント嬉しかったんです。今年もばあちゃん、楽しみにしてるっていうから……」
そうした理由を聞いてしまうと、誰も強行に順平を欠席させるわけにはいかなくなってしまった。
翔も部長としての立場上は彼を休ませなければならないが、ひとりの孫としての立場で考えると、そうさせるのはあまりにも心苦しかった。
しばらく沈黙が続く。今回の結縁寮での演奏曲目は以下のとおり

だった。

♪高校三年生
♪カーペンターズ・フォーエヴァー
♪青い山脈
♪ジャパニーズ・グラフィティー～弾厚作　作品集～
♪憧れのハワイ航路
♪ジャパニーズ・グラフィティー～時代劇絵巻～

もちろん、順平のソロも恭一が設定している。２年生を中心にソロの練習をすることにしているからだ。しかし、彼の左手中指の状況を考えるとどうも厳しいものがある。

しばらくすると、恭一が扉を開ける音がした。

「マズい！　みんな、座れ！」

翔が慌てて部員たちを座らせる。スリッパを履き替える時間などがあるので、すぐに部員たちは自分の席に着く。翔は順平に「なるべく普通にしてて！」と言ってすぐに指揮台に戻った。

翔が戻ると同時にドアが開いた。

「こんにちはー！」

「はい、こんにちは」

恭一は何も気づかずに指揮台のほうへ移動する。

「はい、チューニング。チューバから」

「はい！」

恭一の顔を見ていると、順平はいつ指のことを言われるか不安でたまらなかった。無事チューニングを終え、ロングトーンを終える。やはり中指を動かすと激痛が走り、思わず顔をしかめてしまった。

「そういえば」

恭一がロングトーンを終えてから思い出したように言ったひと言に、順平は激しく動揺した。

「２年生、大丈夫だったか？　瀬戸とか、三宅とか」

「え？」
優輝と亮平が目だけを順平のほうへ動かす。順平は恭一となるべく目を合わさないつもりなのか、俯いていた。
「ほら、ピラミッド派手に崩れてただろ？　怪我とかなかったか？」
「はい。俺は大丈夫です」
優輝がしっかりと答える。
「俺もなんともありません」
亮平が続けて答えた。順平は次に自分が聞かれるのではないかと思い、落ち着かなくなっている。しかし、恭一はまったく気づいていないのか、順平には何も聞かずに続けた。
「先生も現役のとき、体育祭の練習で思い切り怪我してな～」
懐かしそうに話す恭一。その様子から見ると、何か探りを入れているような雰囲気ではなかった。
「けど、顧問の……ほら、もう神戸に引っ越されたけど村峰先生には黙ってた。体育祭の本番で、当時はあまり体が強くなかった弟が見に来るっていうもんだから、無理して出た」
恭一はウンウンとうなずく。
「人間あれだよなぁ。無茶したくなる時もあるし、そういう時って意外とパワーが出てなんとかなるもんなんだよ」
「そういうもんなんですか？」
絵美が聞き返す。
「あぁ。少なくとも先生が経験してるんだから。あ！　だからって怪我すんなよ？　慎重に頼むぞ～」
「……。」
「いいな！」
「はい！」
順平は返事をしながら、やはり少々無茶ではあるがなるべく本番に出る方向でいるつもりでいた。練習では極力中指を使わず、湿布を貼ってできるだけいつもどおりの調子に戻して本番に挑むことを決めた。

本番直前になって、どうしても無理であるという最悪の事態に備え、ソロは賢治や裕子にも練習してもらっておくことにした。

合奏後、翔が順平を呼んだ。

「先生のあれは多分、素やわ。うーちゃんが怪我したこと、何も気づいてへん」

「そうですかね？」

「間違いないわ。せやから、自分でできることやって、本番頑張って出よう？」

「……はい！」

順平はそこでようやく笑顔を浮かべた。翔も優しい笑みを浮かべ、順平に「がんばろな！」と励ましの声をかけた。

第４４５話　完成したので宣伝です！

９月１５日土曜日。朝から翔と演出係の優、あずさがバタバタと部室に駆け込んできた。あまりの勢いに全員が唖然としている。
「どうしたの？　朝からそんな慌てて……」
陽乃が時計を見る。別に遅刻しそうだとか、そういうわけでもない。時間は午前8時３０分で、十分にある。
「でっ、でっ」
「で？　どうしたの？」
「できた！」
翔がゼェゼェと息を荒くしながら開口一番叫んだ。
「何が？」
「これが！」
そう言って翔が差し出したのは、分厚い封筒。陽乃たちはいきなりそんなものを差し出されてもさっぱりわからないので、封筒を開けて中身を確認する。
「おぉ！」
横から覗いていた慎也が大声を上げる。
「何？　何？」
その声に興味深そうに美里、沙希の二人も加わる。直後に「きゃー！」と歓声を上げる。そして陽乃の手にそれは目の前に現れた。

＞ｉ２５２１６―１５０＜

「ポスターだぁ！」
それは定期演奏会告知のポスターだった。
「できたの！？」

「先生、昨日刷り上ったって！　今日から、あちこち貼るでって！」
翔も大興奮で前のめりになりながら大声で言った。
「ねぇ！　ディズニーメドレー？とぐるりよざってあるけど、楽譜まだもらってないよ！？」
絵美がもっともな疑問をぶつける。このポスターに書いてあるからには、おそらく目玉の曲と恭一は考えているのだろう。
「心配無用よ！　もう私の手元に来てるから！」
由美子がポスターの入っている封筒より分厚い封筒を取り出した。
「きゃー！　ステキすぎる！」
「実は！　先生から今日、定期演奏会の楽譜をすべて解禁していい！と言われました！　ので、今から配布しまーす！」
「やったあー！」
全員が飛び上がって喜ぶ。
「結構早くから配るんですね」
亮平が不思議そうに言った。隣にいた春樹が「そう？　もう2ヶ月だし、配ってもいい時期なんじゃない？」と返す。
「俺らが中学のときは、1ヵ月半くらい前にポップスとかは配られましたけど……」
「いやぁ～、でも今から学祭に高校総文、定演と練習する曲目たくさんあるから、今からでもちょうどいいかギリギリってとこじゃね？」
智志の発言にバスパート全員が「それもそうかも……」と呟いて楽譜を手にする。
「よし！　頑張る！」
突然愛実が大声を上げた。
「俺も負けね～ぞ！」
「あたしもー！」
好美と拓真が同時に声を上げた。
「よっしゃあ！　ほなな、全員楽譜とポスター見て、気合い入った思います！　そこで！　定期演奏会のこのポスターを貼る依頼と、

招待状の葉書の送付先を考えます！」
「送付先……かぁ」
陽乃がいろいろと思い巡らせる。まず浮かぶのはやはり、市内の高校であった。市内の高校吹奏楽部とはコンクールや市の吹奏楽連盟の演奏会はもちろん、市内での催し物などで頻繁に顔を合わせる仲だ。今までも、彼らの演奏会に足を運んだことは数知れず。今度は自分たちの演奏を楽しんでもらいたいと思う。
そう考えると北松高校、風見台高校、南初島高校、冨樫高校、向ヶ丘高校など市内の高校８校は外せない。さらに袴田中学、大井戸中学、南葉島中学、大海中学、北松中学などの吹奏楽部がある中学にも葉書を送り、ポスターを貼りたいと考えていた。
「部長！」
真っ先に手を挙げたのは菘。
「はい、毛利さん」
「県外の高校でも送れますか！？」
「県外……？」
翔が首を傾げる。
「はい！　知り合いがいるんで」
「それは学校の吹奏楽部宛として？」
「もちろんです！」
「あぁ！　それなら全然問題ないよ。どんどん送っちゃって」
「やったー！」
菘が嬉しそうに両手を合わせる。陽乃はそうすると、他の県外の高校にも招待状を送ることが可能になると考えていた。すると、さらに範囲は広がっていく。
虹西高校、常套中学、古氷中学。団体以外でも考えれば大阪にいるであろう、雪子の知り合い。それに塔子も招待したい。どんどん期待が湧き上がり、次第にどの部員も興奮が抑えられなくなっていた。
結局、陽乃たちが考えて葉書を自筆で送ることに決めた。陽乃が

担当するのは県外は古氷中学。市内は大海中学になった。
「えーと……石川県古氷町氷雨町９－１０－２、古氷中学校吹奏楽部御中っと」
うまくバランスを取って住所と宛名を書き、無事葉書を完成させた。一方、２年生の男子部員は学内でポスターを貼れる場所を探していた。基本的に学内にこうしたポスターを貼るときは、生徒指導部と生徒会執行部に許可を得ることが必要なので、こちらに関しては週明けということになった。
すると、放送が鳴る。
「吹奏楽部３年生。吹奏楽部３年生。至急、職員室まで。１年生、２年生はマーチングの練習に入っておいてください」
「なんで３年だけ？」
美里が首を傾げる。
「とりあえず、行こうか」
翔が部屋を出ようとする。
「待って。着替えていく？」
陽乃が戸惑いながら翔に聞いた。
「あ、どうなんやろ。先生に内線で聞いてみる」
翔はすぐに部室にある内線電話で恭一に電話した。
「着替えんと、制服のままで来いって。行こか」
翔たちが職員室に行くと、恭一と写真部顧問の田岡が親しげに話しをしていた。
「おっ。来ましたね、主役たちが」
田岡がカメラを構える。
「おっ！　早かったな。とりあえずだな、外出るか」
翔たちはよく意味が理解できないまま、恭一たちの後を追う。
「どうです？　この辺とか。七海高校らしいじゃないですか」
田岡の提案に恭一も納得した様子でうなずく。しかし、翔たちは意味がさっぱりわからない。
「それか、部員の皆さんの希望の場所で撮るとかいうのもいいです

ね」

「そうか……。田岡先生、そっちのほうがいいかもしれないですね」

翔たちはやはり意味が理解できず、お互いに顔を見合わせている。

「みんな。今からな、君たちが引退する定期演奏会でのプログラムに載せる、君たちの写真、撮影しようと思う」

「引退……」

翔が呟いた。その寂しげな表情を見て、恭一が「おいおい。今からそんなしんみりしないでくれ」と笑った。

「そうだぞ！　俺、そういう雰囲気苦手だから、盛り上がって行こう！」

慎也が先立ってカメラの前に立つ。そして「じゃ、俺一番でお願いします！」と言って撮影を始めてもらう。その様子に美里や絵美も思わず笑ってしまった。

しかし、翔は気づいていた。明らかにいつもより慎也の笑みに明るさがないことに。その目が少し潤んでいることに。そして、その寂しさを紛らわせるために真っ先にこうした行動に出たことに。

そう思うと、急に胸が締め付けられるような思いがしていまい、翔は思わず上を向いた。

「翔？」

「……。」

「翔？　どーしたの？　おーい？」

陽乃が心配そうに翔に尋ねる。翔は「大丈夫。ちょっとだけ……な……」とだけ言った。そう言って見上げた空はいつの間にか、夏の雲から秋の雲へと様相を変えていることに翔は気づいたのだった。

第４４６話　見えない真意

「おはようございます……」

９月１６日日曜日。順平があまりに暗い表情で部室に入ってきたので全員が何を意味するか、すぐに悟った。

「アカンかったんか？」

翔が真っ先に順平に声をかける。順平は力なくうなずいた。無理もない話で、やはり薬指よりも重傷であった中指の突き指は治らずじまいのまま、明日の本番を迎えようとしていた。

「だけど、出ないなんてちょっと……ねぇ。なんていうか」

沙希が困った表情を浮かべる。

「とりあえず、先生に相談してみるか？」

「でも……相談しても、先生もどうしようもなくないですか？　怪我だし……」

「まぁ、それでも一応。な！　行くだけ行ってみよ！」

あまり順平は乗り気ではない様子だったが、翔は順平と一緒に職員室へと向かった。

「そういえば、先輩」

「んー？」

「伊原と駿に副部長、西嶋に部長をしてくれって言ったって、本当ですか？」

「おぉ。言うたけど……なんで？」

「いや……伊原と駿はわかるんですけど、なんで西嶋なんだろうって思って」

「それ、本人も言うとったわ」

それを聞くと順平が「え？　本人がですか？」と驚いて返した。

翔は小さくうなずく。しかし、きちんと説得した上で今はほぼ、彼

らで部長と副部長は決定しそうだということは伝えておいた。
職員室の前に来ると、順平が立ち止まった。
「どないしたん？　入ろ？」
「……いま思ったんですけど、別に先生に言わなくてもいい気がして」
「何でぇな？」
「ほら、なんていうか……見学とか、そういう方法あるじゃないですか」
「奏者が見学なんて聞いたことあれへん」
翔が不服そうに言う。順平はその表情を見て困惑するばかりだ。
そうこうしていると、職員室の扉が開いて恭一が顔を覗かせた。
「やっぱり。関西弁が聞こえるから出てきてみたら」
クスクスと笑う恭一。
「おっ？　なんだ。お嫁さんじゃないのか、隣は」
「もー！　何言うてんですか、先生！」
翔が真っ赤になって恭一の肩を軽く叩く。完全に関西人のツッコミ体勢である。
職員室に入ってから翔は一連の出来事を恭一に話した。すると、恭一がすぐに不機嫌そうな顔になる。
「なんでもっとそれを早く言わないんだ。右川も、佐野も」
「……すみません」
順平がますます落ち込む。
「だいたい、佐野も佐野だ。気づいたならそこで止めて、先生に言うべきだろう」
「あ……すいません。本人がどうしても出たいって言うから……。まぁ、さっき話させてもらったとおりの事情なんで」
「それはわかるが、悪化してしばらく楽器吹けないなんてことになったら、もっと大変だろう」
「はい……」
恭一はフゥッとため息をついてからいったん机に向かった。それ

から、こう言ったのだ。
「とにかく、17日は右川、演奏するな」
「……。」
順平が俯いたまま唇を噛み締めている。翔はその表情を見て、あの異変に気づいた時に恭一に言っておくべきだったと後悔してしまった。翔の一番嫌いな「後悔」だった。
けれども、その後の恭一の行動に二人は目を点にする。
「ほら」
そう言って手渡されたもの。それは指揮棒だった。
「え……」
「え、じゃない。受け取りなさい」
「だけど先生……」
「いいか？　時間は今日の午後からの合奏だけだ。午前中は先生の傍について、しっかりと指揮の振り方を大まかでいいから覚えなさい」
「……。」
「本番で、おばあちゃんにカッコいいところ、見せるんだろう？」
「はい！」
順平が頬を紅潮させて大声で返事をした。
「佐野」
「あ、はい」
「そういうわけだから。まぁ、メドレーは指揮が難しいから先生が振るようにする。高校三年生と青い山脈、憧れのハワイ航路に関しては右川が指揮を振るって、部員に伝えておいてくれないか？」
「はい！」
翔も同じように頬を紅潮させ、大声で返事をした。
順平はそのまま職員室でしばらく、指揮の練習をすることになった。一夜漬けとまではいかないが、もうほとんど時間がない。おそらく振っているだけのような指揮になるだろうとは順平本人も含めて思っていた。しかし、反対する者は誰もいなかった。

翔は音楽室に帰ってから緊張した様子でその旨を部員たちに伝えた。反対も出てきそうな気がしていたが、それは杞憂でむしろ全員が「良かった～！」と安堵していたのだ。

「そういうわけで……いまうーちゃん、頑張ってるから。指揮、ぎこちないかもしれへんけど、できるだけしっかり見て、演奏してあげてください」

「はい！」

「じゃあ、午前中は……宮部っち。３０分ほど時間取ってるから、使う？」

「いいの？　助かる～」

そういうと由美子は他の楽譜係と一緒にパタパタと部室のほうへ駆け込んでいった。

「今から、定期演奏会の楽譜の配布をしてもらいます。パート分けがあると思うんで、今週中には各曲で誰がファーストからサードなどを担当するか、決めてください。それと、第一部に関しては原則、ソロは3年生にしてもらうと東先生が決めてますので、3年生は覚悟をよろしく」

「はーい！」

慎也と春樹が嬉しそうに答えた。

「それと……後は演出係を中心になって、第三部ではソリもある予定なんで。それはまた演出係や金管、木管セクリと先生とで話し合って決めて報告しますんで。まずは曲をしっかりさらっておいてください」

「はい！」

それからしばらく、翔たち3年生が顔を見合わせた。

「どうする？」

「えー……？　なんか、切なくなりそうで嫌だ」

真っ先に拒否したのは美里だった。

「でも、私は早くに配って最高の演奏でこう……さぁ」

絵美が苦笑いでそう続ける。

「よしゃ！　ほな今日はやめとこーう！」
翔が気になるところで発表をやめたので、2年生や1年生からブーイングが飛び交った。しかし、翔たちは断固としてその内容を言おうとはしなかった。
「ねぇ」
楽譜を配布している最中に、亜紀が徹に言った。
「何？」
「さっきの佐野先輩たちの話って、なんだったと思う？」
「さぁ……。でも、切なくなる感じだろ？　なんだろなぁ……」
『ぐるりよざ』の楽譜を手にしながら二人は気になる様子で思案する。
「何か、切なくなるような曲が定期演奏会の曲目であるとか」
徹がもっともらしいことを言う。
「けどさぁ、だったら何でいま一緒に配っちゃわないの？」
「……だよなぁ」
二人は首を傾げるばかり。3年生の顔を見ていても真意はわからないままであった。

第４４７話　七海高校吹奏楽部　御中

「失礼しまーす！」
翔が元気良く職員室に入ってくるなり、恭一がそちらのほうを見た。
「おぉ、佐野。ちょうどいいところに。ちょっと来い」
「はい」
翔はトコトコと恭一のところに駆け寄る。
「座って」
「はい」
それから恭一は一通の封筒を差し出した。
「七海高校吹奏楽部　御中……ですか？　オレら宛ですか？」
「そうだ」
翔は差出人が誰なのかがいまひとつピンと来なかった。団体宛に来るということは、相手も団体である可能性があることくらいはわかった。翔はひとまず封筒の裏を見てみることにした。
「石川県古氷町……あっ！」
すぐに浮かんできたのは、ともみと拓也の顔だった。
「先生！　もしかして……古氷中学！？」
「そうだ」
翔は嬉しそうに封筒を丁寧に開封した。一枚の手紙と、十枚程度のチケットらしきものが入っていた。翔はまず、手紙を開いた。
丁寧な字で文章が書かれている。几帳面な拓也らしい字だった。

七海高等学校吹奏楽部　御中

ご無沙汰しています。古氷中学吹奏楽部、部長の石尾　拓也です。
今年の能登半島沖地震の際には、大切な楽器をたくさん譲ってくださってありがとうございました。おかげさまで今年、古氷中学としては１３年ぶりとなるコンクールの全国大会出場を決めることができました。本当に、皆さんのおかげだと感謝しています。
また、来る１０月７日日曜日、第２０回記念定期演奏会を開催することになりました。石川県と非常に遠いところではありますが、チケットを少しばかり送らせていただきます。お時間と距離が許せば、お越しください。
最後になりましたが、皆さんにもよろしくお願いします。

石尾　拓也

「おぉ～……１０月７日かぁ……」
１０月１０日から七海祭がある。その直前の日曜日なので、翔は遠慮気味に恭一のほうを見た。恭一は予想どおりだな、と言いたそうな表情で笑う。
「わかった、わかった。とりあえず１０名分あるんだろう？　お前と朝倉、本堂は部長と副部長だから、必ず行くようにしよう。残りの７名分は、七海祭の練習にはもう自信があって参加しなくてもいい、という自信をしっかり持っている人に行ってもらおうか」
「自信のある人……」
翔が真剣な表情で悩む。恭一は笑いながら「まぁ、決まったら教えてくれ」と言ってすぐに別の仕事にかかり始めた。
翔は封筒片手に全員にこのことを伝えるかどうするか迷っていた。もちろん、黙っていれば部員たちは怒るのは目に見えていた。しかし、言ったら言ったで誰が行くかでモメるのも目に見えていた。
いつの間にか翔は廊下に立ち尽くしていた。どうするかを考えているうちに立ち止まってしまったのだ。

「佐野くん？」
その声にハッと我に帰ると、美里と絵美がいた。
「どうしたの？　封筒持ってボーッとして」
「い、いや……なんでもない」
「そ？　じゃあ早く部活行こうよ。今日、合奏だっけ？」
「あー、うん。昼から……合奏……やねんけど、その前に話したいことあるんやけど」
「話したいこと？　あたしたちに？」
美里と絵美が不思議そうな顔をする。
「いや……全員や」
翔はきちんと包み隠さず話そうと決めた。
「おっはよーございます！」
音楽室に一際大きな声が響き渡った。部員たちは「おはようございます！」と一斉に挨拶を返す。
「はい！　では、いきなりですが……演奏会のお知らせが、来ました」
「おぉ……」
部員たちもいよいよその季節が来たか、と感じていた。吹奏楽部の定期演奏会というのはだいたい、二つの時期に集中する傾向がある。ひとつは3月から5月にかけての時期。卒業を間近に控えた部員たちを送るための演奏会は3月頃に、新入部員を迎えての演奏会は4月から5月に開催される。
一方は、受験勉強を控えている3年生のために10月から11月に開催される。つまり、七海高校のようなパターンだ。周辺では北松高校や今年は風見台高校もこの形式を取っている。そして、紛れもなく古氷中学もこの形式を取っているのだ。
翔も演奏会に招待された経緯をきちんと説明する。1年生はそれを知らないからだ。そして、最大の難点を伝える。
それはまず、物理的な距離があること。人数が残り7名であること。そして何より、七海祭がすぐ控えていることだった。それが部

員たちを戸惑わせる原因だった。恭一の掲げた条件――七海祭の練習にはもう自信があって参加しなくてもいいと思える人だという条件が、部員たちを踏みとどまらせていた。

「幸い、今日は9月16日。まだ半月ほどあります。今からしっかり練習して、みんなが手を挙げられるくらいにまで、練習して！せっかく古氷中学の方たちがご招待してくれたんやから、10名きっちりで行けるように、頑張りましょう！」

「はい！」

「じゃあ、午前中はパー練。明日の曲はもうパー練できてるやろうから、それらは合奏でしっかり合わせてください。なので、午前中のパー練は七海祭の曲を中心に練習してください！」

「はい！」

なんとか隠さずに話せたこと、そしてそれをキッカケに部員たちの意識を高めることができたので、むしろ話してよかったと思いながら、翔はパー練の部屋へと移動し始めるのだった。

第４４８話　おばあちゃんの声

９月１７日月曜日。いよいよ「結縁寮」での敬老の日コンサートの当日になった。今日、順平は学生指揮者としてのデビューを飾ることとなった。天気は快晴で、部員たちは朝８時半に集合し、楽器の積み込みをしていた。

順平はというと、衣装合わせをしている。学生指揮者とはいえ、それなりの衣装に身を包んだほうが良いという沙希と由美子の意見によるものだ。

その衣装選びはユニフォーム係である順平本人とはるかが二人で行った。昨日のうちに悩みに悩んで、制服のズボンとマーチングユニフォームの上（白色）、蝶ネクタイに身を包むこととした。

「変じゃねぇよな？」

順平は未だに心配そうにしている。

「大丈夫よ！　だって昨日、あたしとうーちゃんで選んだじゃない。自信持ちなよ？　指揮だって自信持てって佐野先輩、言ってたし」

「うん……」

順平はそれでも少し不安そうに自分の手を見つめている。

「おばあちゃん、いるんでしょ？　頑張りなよ！」

順平の表情がたくましいものになった。

「うん」

「二人とも～？　準備いい？　そろそろ皆集まってるよ」

梨子がヒョコッと顔を出して二人を呼んだ。はるかと順平は急いで部室を閉めて昇降口へと向かった。

自転車で１５分ほど走ると結縁寮はある。玄関前で楽器を降ろしていると、おじいさんやおばあさんが食堂へと続々移動しているのが順平の目にも入っていた。

ピロティに入ると、涼しい空気が部員たちを包み込んだ。9月とはいえ、今日の予想気温は３０℃。室内との気温差もあるので、こういった涼しさは部員たちの気持ちを和らげる。

そこから控え室で譜面台と譜面の準備をし、チューニングを終えて午前１０時半から本番を開始する。２０分過ぎに移動を始めた。その頃には順平の心臓がドクドクと激しく鼓動していて、妙な汗もかき始めている。

「右川。大丈夫か？」

恭一が笑顔で順平に聞いた。

「緊張、ハンパないっす。先生、いつもこんな緊張するんですか？」

「ハハハ！　まぁ、コンクールのときはもの凄く緊張するけど、他のこういった本番ではなるべく楽しむようにしているんだ」

「楽しむって……難しいですよ。緊張で顔ガッチガチです」

「指揮者が緊張で怖い顔してたら、奏者もいい演奏できないだろう？　もちろん、お客さんにお尻向けてることも多い指揮者だけど、それはきっとお客さんにも伝わってしまうと思う。だから、笑顔、笑顔」

「できればいいですけどね～」

順平は苦笑いのままだ。恭一はポンポンと肩を叩き、そのまま控え室へと向かって行った。

結局、不安が何ら解消されないまま本番を迎えることになった。曲順は高校三年生、カーペンターズフォーエヴァー、青い山脈、ジャパニーズ・グラフィティー～弾厚作　作品集～、憧れのハワイ航路、ジャパニーズ・グラフィティー～時代劇絵巻～のまま。つまり、しょっぱなが順平の指揮ということになるのだ。しかし、それで終わりではない。その後の青い山脈、憧れのハワイ航路と順平の出番は続く。そう考えるとますます汗が流れてきて、どうすることもできないような気持ちになってきていた。

その順平の様子を察した2年生数名が駆け寄ってきた。カーペンターズ・フォーエヴァーや弾厚作、時代劇メドレーでソロのある2

年生たちだった。
「うーちゃん！」
真っ先に声をかけてきたのは亜紀だった。
「吉山……」
「どーしたの。ポジティヴなうーちゃんが今回はいやに不安がってるね」
「いや……。ばーちゃん見てる前で指揮とか、失敗しねぇかなぁって思っちゃうと、なんかどんどん不安が大きくなっちゃってさ～」
「うわぁ、それわかるわ～」
亜紀が隣でうなずく。
「私もさぁ、今回のこの本番で急にソロ振られちゃって。もう必死に練習したよ。なんかもう、吐きそうなくらい今緊張してるから」
「あ。何、何？　ソロの話で盛り上がっちゃってる？」
割り込んできたのは優輝とみゆきだ。彼らもそれぞれソリを任されているのだ。
「あー、そうだよねぇ。でもうーちゃんの場合、あたしたちと違って全体任されてるもん。プレッシャー違うわぁ」
みゆきが順平の気持ちに共感する。しかし、順平は彼らの言葉を聞いて考えを直していた。緊張していたのは、何も自分だけではないと知らされたのだ。
「うん……。でも、緊張してるの、俺だけじゃないんだよな」
その言葉に三人が表情を変える。
「そうだよな！　何、俺自分ひとりで凹んでんだか！」
三人の顔があっという間に笑顔になった。
「よし！　それじゃあ！」
優輝が声を上げた。
「2年、ガンバロー！」
「いぇーい！」
彼らの声を聞きながら翔が嬉しそうに笑っている。
「嬉しそうね」

陽乃が声をかけた。
「うん。素直に、嬉しい」
「あたしも」
二人は顔を見合わせ、笑い合った。
そして入場と準備が整い、司会である女子部員二人が出てきた。
しかし、その司会というのもいろいろと問題があった。というのも、司会が2年生は愛実でテンションが高いのだが、1年生は沙知なのだ。部員たちでも沙知と会話するのはほんの一握り。そんな沙知が司会を任されていること自体、部員たちには驚き以外の何物でもなかった。
「おじいちゃん、おばあちゃん、こんにちは～！」
愛実が元気良く挨拶をすると、おじいさんおばあさんからも「こんにちはぁ」と優しい声で返ってくる。しかし、沙知はマイクを握ったままカチンカチンに固まっていて、動こうとしない。
「あれ？　司会の江藤さーん」
愛実が応答のない沙知に声をかける。
「はっ、は、はい」
沙知がようやく反応する。
「おじいさん、おばあさんにご挨拶願いまーす！」
「はっ、はい！　えと、えと、トロンボォーンの江藤沙知です」
「トロンボォーンって……伸ばしすぎ！　おじいちゃん、おばあちゃん、ホントはトロンボーンっていう楽器、彼女吹いてるんですよ。ちょっと緊張で伸ばしすぎたみたいで」
おじいさんおばあさんから笑い声が上がる。
「はい、じゃあ江藤さん。曲の紹介お願いします」
愛実のフォローもあってか、愛実は幾分リラックスした様子で続きを始める。
「えっと……1曲目は『高校三年生』です。私たちの大事な先輩10人も、高校三年生。現役高校三年生も演奏するこの曲、お楽しみください」

そして彼女たちと入れ替わりで順平が入ってきた。やはり、緊張の色は隠せないようだ。部員たちにもそれは伝わってきている。そのせいで、指揮棒をなかなか降ろすことができないでいた。

（お、落ち着けば……大丈夫。緊張してるのは、俺だけじゃない）

心ではわかっていても、体が追いついてこなかった。緊張で指揮棒が震え、なかなか降ろせない。

そのときだった。

「ジュン」

順平の祖母の声が聞こえた。順平は信じられない気持ちでいっぱいだった。最近は認知賞の影響もあり、順平自身のことも誰なのかわからないことが増えてきていた祖母が、彼の名前を呼んだのだ。

その事情を知る袴田中学出身の部員たちも思わず、彼女のほうへと顔を向ける。

「ジュン。頑張りなさいよ。力抜いてやれば、できるよ」

ニコニコと笑う祖母の顔を見ていると、順平の心の中に溢れていた緊張がスゥッと消えていった。

（うん……うん……！）

順平の顔が上がった。その瞳には、自信が満ちている。

指揮棒が上がった。部員たちも安堵した様子で楽器を構えた。そして、初めて本格的な本番で学生が指揮をする瞬間が始まるのだった。

第４４９話　自然と、口が

順平の指揮棒が降りると、いつもどおりの七海高校の演奏が始まった。一日漬けの指揮は、やはりまだ安定しないものがある。若干テンポが初めは走ってしまったが、すぐになんとか落ち着いていく。

そして、歌の部分が始まるなり、順平の祖母が歌い始めたのだ。

１９６３年、昭和３８年に発売されたこの曲は、舟木一夫のデビューシングルで累計２３０万枚を売り上げた記録を持っている。現在でも学園ソングとして親しまれ、特に翔たちの親世代から上の世代には根強い人気がある。さらに今年、日本の歌１００選に入ったこともあり、再度注目されている。

順平の祖母たちの世代には、印象強い曲となっている。認知症で家族ですら認識できないような状況である彼女が、ソラで歌い始めた。その歌声は特に透き通って順平の耳に響いていくる。家族びいきかもしれないが、少なくとも彼にはそのように聞こえていた。

「……。」

涙がこみ上げてきて、思わず指揮が止まりそうになった。しかし、ここで止めるわけには行かないと涙を堪える。

まだ認知症を発症していない頃でも、祖母は暇さえあればカセットテープでこの『高校三年生』を初めとしていろんな曲を聞いていた。後に、順平が吹奏楽をするようになってからこれらの曲は「懐(なつ)メロ」と呼ばれるジャンルに入ることを知る。

正直言って、大きな音量で順平にとっては「古く」感じる曲を自宅で流されるのは少々迷惑というか、不満であった。友人が来た時にも「何、この曲？」と不思議そうな表情をされた。何より、それが大音量で、お世辞にも上手いとは言えない祖母の歌声が時として家の外にまで聞こえてくるのが、順平にとっては恥ずかしいことで

もあった。

思春期だったから、と言えば簡単かもしれない。順平はある日、我慢できずにこう言ったのだ。

「やめてよ、その歌。上手くもないのに大声で歌われたら、俺たちが恥ずかしい」

そのときの「俺たち」というのは誰だったのか。いま考えてみればそれは順平一人のことだった。姉も妹も、両親もそんなことは口にしなかった。むしろ、妹は祖母の歌が大好きだと言っていたくらいである。

その順平の言葉を境に、祖母は歌わなくなった。それ以来なんとなく気まずいのか、祖母と順平が会話する機会は極端に減った。どちらともなく、お互いよそよそしくなり、同じ屋根の下にいるのに、まるで赤の他人のような状態。

それでも、順平が演奏会に出るとなれば祖母は常に聴きに来てくれていた。それが逆にまた恥ずかしく、いつも気づかないフリをしていた。

こうした状況が続き、気づけば中学3年生になっていた順平。しかし、それは突然やって来る。

祖母と顔を合わせたときだった。

「どなたですか？」

衝撃以外の何物でもなかった。順平も妹も姉も、実の娘である母も父も、大切なパートナーであるはずの祖父のこともまったく、赤の他人のように扱うことが増えていた。突然怒ることもあれば、泣き喚くこともあった。

ただでさえ、関係が微妙な状況になっていた順平にこの出来事はかなりのショックを与えた。かなりナーバスになっていた時期も正直言ってあったのだ。

しかし、そんな祖母が必ず笑顔になるときがあった。それが、順平が出演する数々の演奏会のときだった。特に演歌や懐メロを演奏した時には、鮮明に家族のことも過去のことも含めて、すべてを思

い出すのだ。

自分が頑張れば、祖母の認知症を遅らせることができるかもしれない。

順平の中にそのような意識が芽生えた。同時に後悔した。なぜ、祖母にあんなことを言ったのか。

今まで可愛がってくれた祖母に、少しでも自分を、家族を、過去の思い出を思い出してほしい。その一心で順平は楽器の練習に今まで以上に励み、演奏会があれば必ず両親と祖父母を誘った。

そのかいあってか、祖母の認知症の進行が目に見えて遅くなった。改善させることはできないが、進行は確実に遅くなっていると医師が両親に告げていたのだ。

最近になって、順平のことを含めて家族のことをあだ名のように親しみを込めて呼ばれることが増えた。それが今度は嬉しく感じている。しかし、共働きである両親やまだ学生であるきょうだいのことなどの状況を考えると、どうしても祖父に負担がかかる。苦渋の決断であったが、こうして結縁寮へと入所させてもらっているのだ。

おばあちゃんのためだけではない。

自分が指揮の経験などないのに、こうして本番に出演するために指揮をするように言ってくれた恭一のこと、文句ひとつ言わずにメチャクチャな指揮にしっかりとついてきてくれる部員たち。

そうしたことを考えていると、また涙が溢れてきた。それでも何とか感情を堪え、自分の中での完璧な状態で、指揮を振り終えた。

演奏が終わると同時に真っ先に拍手をしたのは、順平の祖母だった。振り返り、順平は深々とお辞儀をする。

「おや？　もう終わりかい？」

祖母が不満そうにそういうので、順平は「あと2曲、指揮振るから」とにこやかに笑って答えた。

恭一とバトンタッチのために控え室に移動した。恭一は「お疲れさん」と笑って順平の肩を叩く。

「疲れたか？　できるか？」

あと2曲。指揮というのは意外と疲れるもので、順平は慣れていない分余計な力が入ってしまい、さらに疲れてしまうのだ。
「大丈夫です。俺、できます」
順平の力強い返事に、恭一は小さくうなずいて次の曲の指揮のために控え室を後にした。
その頃、ソロを控えている2年生たちも自分に言い聞かせていた。順平が頑張っている分、自分たちも頑張らなければならないと。
「おーい！」
翔が突然、声を上げた。
「顔、暗ーい！」
翔の大声に全員がキョトンとしている。一方の観客席からは笑い声が上がった。
「お客さんのおじいちゃん、おばあちゃんが笑顔やのに演奏するオレらが暗くてどうすんねん！　ほれ、元気出して行くでー！」
「……。」
「返事―！」
「はい！」
そして恭一が入場してくる。お辞儀をし、司会の愛実と沙知が曲紹介を終えるとサッと恭一が指揮棒を構える。
カーペンターズといえば１９７０年代に人気を博したアメリカの兄妹ポップスデュオである。代表曲は『トップ・オブ・ザ・ワールド』などがあり、今でもテレビＣＭで使用される曲が多い。それを真島俊夫がメドレーにしたこの『カーペンターズ・フォーエヴァー』はシング、愛のプレリュード、トップ・オブ・ザ・ワールド、遥かなる影、スーパースター、ふたりの誓いをメドレーにしている。
指揮棒が降りるとすぐに木管楽器の上昇音とチューバの伸ばしが響き渡る。ホルンのグリッサンドの後にトランペットとトロンボーン、ユーフォニウムやホルンなどがメロディを吹いて『シング』から華やかに曲が幕を開けた。
そしてテンポが落ち、さゆりが立ち上がる。『愛のプレリュード』

はアルトサックスの色艶美しいソロから始まるのだ。久しぶりにドラムセットを担当するあずさ。普段はドラムセットを叩く機会が多い洋之が今回はグロッケンなどを担当する。さゆりのソロが終わるとすぐに拍手が沸き起こった。ホルンがそのメロディを引き継ぐ。順平が抜けた分を補助するために、周磨がいつもよりも張り切っていた。クラリネットとサックスがメロディを吹くと、すぐに転調した。

トランペットとトロンボーンの打ち込みが印象的な部分を終えると、また転調。そしてトロンボーンのメロディが終わると再びさゆりのソロのときの調へと戻った。

（いけるかなぁ……）

貴志が緊張した様子で、エレキベースを構える亮平の隣でギターを構えていた。あずさのタムタムの音が響き、テンポが上がる。そしておじいちゃん、おばあちゃんたちのほうを向いてギターのソロを弾き始めた。『トップ・オブ・ザ・ワールド』の始まりだ。思った以上に音が響き、軽やかに曲が進んでいく。弾いている貴志本人は必死なのだが、いつの間にか手拍子が起きていた。それに乗ってきた貴志が最後にツェーの音を軽やかに響かせた。拍手がそこで一際大きくなる。

私、ソロは基本的にいらないから。

そう言い続けていたみゆき。しかし、光瑠がそれではダメだと言い続け、折れるような形で今回、彼女はソロを吹くことになった。元々はソロではない部分を意図的にソロに組み替えたのだ。しかし、それでは音が薄いのでソリという形で光瑠も加わる。

クラリネットのやわらかいメロディが響き渡り、みゆきも次第に曲に乗ってきた。

（やだ……ちょっと……ううん、かなり楽しいかも……！）

この時間が終わるのが惜しいほどにソリを吹くのが楽しい。みゆきは今までの自分の考えをすべて捨てても良いと思えるほどに快感な瞬間であった。

トランペットのメロディとホルン&アルトサックスの裏メロディが響き渡る。翔はこのグリッサンド形式の裏メロディが大好きで、特に詰まるわけでもないのに何度も練習をしていた。楽しくて楽しくて仕方がないのだ。

しかし、この部分が聞こえると憂鬱かつ緊張の色を濃くする部員が一人だけいた。それが彩香だ。この後に始まる『遥かなる影』でフリューゲルホルンのソロを任された彼女。普通のトランペットよりも音質が異なるので、息を優しく入れなければ雰囲気が出ないのだ。しかも、周りのパートはすべてメゾピアノからピアノ。トロンボーンに至っては人数を削っている。それだけ、音が露骨に聞こえるのだ。

そしてソロが始まる。音が震えているのがわかった。さらに、どこに視線を持って行けばいいのかわからず、走り気味になったのだ。視線が泳いだ先にいたのは、智志だった。座る位置から見ると、ちょうど彩香の見える位置。そしてチューバは四分音符で伴奏をしている。その四分音符の動きに合わせて、智志が体を静かに動かしていた。

これに合わせろ。

そう訴えているように見えた。間違いなく、そう訴えている。彩香はそれを感じ取ってなんとかテンポを元へ戻した。

無事ソロを終える彩香。

（良かったよ！）

陽乃が小声でそう言う。彩香はこれで今日の仕事がすべて終わったような気分になってしまうほどだった。

転調して、トロンボーンの亜紀とフルートに持ち替えた佳菜が立ち上がる。『スーパースター』ではトロンボーンのソロとそれを追いかけるクラリネット&フルートの部分を、佳菜のソロにしたのだ。

少し音域が高めのトロンボーンのソロと、ピッコロの時とは違った緊張感がある佳菜のソロ。しかし、亜紀が思いのほか自信満々のソロを吹くので、佳菜は緊張などいつの間にか吹き飛んでいた。亜

紀の音が昨年とは比べ物にならないほど太くなっているのには、慎也も驚きを隠せない。

そして全パートがこの曲の中でも最大に近い盛り上がりを見せる。やがてテンポが上がり、転調していく。最後の『ふたりの誓い』が始まった。サックスやクラリネットのメロディ、そしてトランペット&トロンボーンのメロディの合間を木管やシロフォンの伴奏が駆け抜けていく。

低音が鋭い音を吹いて、最後のトランペットソロを勇が彼の名前どおりの勇ましいメロディを、部屋を貫いていくように吹き切った。

そして曲は見事に終わりを告げる。6分弱のこの曲だが、聴き応えは十分だったようで、曲が終わるなりおじいちゃん、おばあちゃん、職員から拍手が沸き起こった。

それを聞いていた順平。再び自分の出番が来たことを感じ取る。しかし、先ほどのような不安はなかった。

「よっしゃ！　行くぞ！」

気合を入れ、再び順平が食堂へと向かっていく。その足取りは軽やかだった。

第４５０話　先陣を切って

「先輩！」
結縁寮での本番を終え、片付けも終えてから帰路についていた翔たち３年生の後を順平が追ってきた。
「うーちゃん！　お疲れ！」
「ありがとうございました！　ばーちゃんがあんなに嬉しそうにしてるの、本当に久しぶりで」
順平の肩をバシバシと叩く翔。
「痛いッスよぉ」
「何言うてんねん！　うーちゃんが頑張ったから、おばあちゃんも元気ならはったんやろ？　うーちゃんのおかげやで！」
順平は嬉しそうに笑った。
「ありがとうございました！　今度からは突き指しないように気をつけます」
「おー！　ほななぁ！」
「お疲れ様です！」
そう言って順平はそのまま優輝たちの輪の中に走って戻って行った。
「それにしても、予想以上にみんなテンション上がったし、盛り上がったね～」
陽乃が嬉しそうに言った。
「せやな。うーちゃんも指揮頑張ったし、それに刺激されて２年生もみんなソロとかソリとか吹き切ったし」
「完全燃焼ね！　いやぁ～あたしたちも負けてらんないなぁ！」
美里が大きく伸びをする。
「そうだな。次はマーチングだな！　来週の」

拓真もテンションが上がっているようだ。それは3年生全員に言えることであった。
「それだけじゃないしな。定期演奏会の楽譜も配られたし」
「あっ！」
由美子が慎也の言葉を聞いて別のことを思い出したようで、それを口にした。
「あのね、実は七海祭で吹く曲の楽譜も今朝、先生のところに届いたみたい！」
「本当！？」
絵美が目を丸くして叫んだ。
「本当、本当！　早くコピーしてみんなに配るようにするね」
「わぁーい！　楽しみね！」
沙希が由美子と笑い合った。
「それじゃ、あたしたちここで」
美里、沙希、絵美、由美子の４人が津上橋のところで分かれていく。
「おう！　お疲れさん！」
「またね～」
津上橋からは陽乃、拓真、春樹、慎也、翔の5人になる。
「春やん？」
慎也が浮かない顔をしている春樹を覗き込んだ。
「どした？　今日、帰りの間全然喋ってないじゃん」
「ん……そう？」
「そう？じゃねーし。ホント喋ってないぜ」
拓真も心配そうにしている。
「どうしちゃったの？」
「ん……あのさ……黙っててごめんなんだけど」
春樹はきちんと伝えておこうと思い、事実をそのまま告げた。
「１０月１０日と１１日に、入試あるんだ……」
「入試！？」

全員が大声を上げた。
「え!?　早くないか?」
翔が全員の顔をキョロキョロと見て慌てふためいている。それは陽乃たちも同じであった。
「そうよ!　え?　一般入試じゃないでしょ?　推薦?　それにしても１０月初めって……あ、鎌倉音大とか音大って、そんなものなの?」
春樹は「いや。推薦でもないし一般でもない」と返した。
「えー?　一般でも推薦でもないのに入試って……」
慎也が首を傾げる。
「あ」
拓真が声を上げた。
「わかった。ＡＯか?」
通称ＡＯ入試、アドミッション・オフィスという入試形態がある。自分の得意分野を試験に活かして発表する形式と言えばわかりやすいかもしれない。そういった入試が近年、増えている。芸能人やスポーツ選手などはこうした入試であれば突破する可能性が高くなるのだ。
「へぇ〜!　じゃ、音大のＡＯだし、やっぱ楽器演奏入ってるんだろ?」
「うん。それに音大だからピアノも必須」
そのため、春樹は受験を決めた頃からピアノを沙希に教わっている。一人だけ先陣を切って入試の色を濃くしているのだ。
「ちょっと待った!」
翔が大声で会話を止めた。
「何?　いきなり」
陽乃が戸惑っている。翔は確認をした。
「いつ、入試って?」
「１０月１０日と１１日……」
全員がその日付を聞いて動きを止めた。さらに翔が確認を取る。

「何時から？」
「朝１０時から正午まで」
「そんな……。それじゃあ、音楽祭の日以外は七海祭、出られないの？」
「多分……ほぼ……」
沈黙が起きる。翔は心配そうに確認した。
「それ、かとちゃんには言うた？」
春樹は首を左右に振る。
「マズいだろ、それ」
慎也が顔をしかめる。
「なんで言ってないんだよ？」
「だって……なんか、変に心配させちゃいそうだし」
「あのさぁ……」
拓真もあきれ返って言葉が出ないようだった。
「どうすんだよ。だって七海祭の曲って結構ムズいの多いんだろ？　ユーフォのソロもある曲絶対あるし」
「うん……」
春樹はうなだれたままだ。なかなか言い出せないまま、今日まで引きずってしまったらしく、我慢できずに翔たちに言ったのだった。
その頃、由美子たちは由美子たちで、絵美から春樹の受験のことを聞いていた。
「本当なの！？　それ！」
美里が大声を上げる。やはり反応は翔たちと同じであった。由美子が珍しく怒っている。
「エミリンもエミリンだよ？　どうしてそういう大事なこと、言ってくれないの？」
「春くんに口止めされてるっていうか……春くんが自分で言うからって」
「自分で言うように見える？　あの水谷くんが。エミリン、付き合っててそんな風に彼が自分から言うと思う？」

絵美は首を小さく左右に振った。
「友達が付き合ってる人のことを悪くは言いたくないし、言わないけどさ」
沙希も不機嫌そうだった。
「これ、部員全体に影響することでしょ？　それに特にかとちゃんには負担かけるよ？　だってあの子、基本ソロは七海祭では3年生、っていうつもりでいるみたいだから」
「……。」
絵美は泣きたい気分になっていた。それに気づいた美里がフォローを入れる。
「あのさ。これは仕方ないと思うよ？　入試だもん。それが家族旅行とかだったら、延期でもしてもらえればいいし。でも、水谷くんの人生を決める大事～な日なんだから。でも、後輩のことを考えると早くから負担や不安かけるのも嫌だっていう、水谷くんの気持ちもあたし、わかるかな」
由美子が反論する。
「でも！　私はもっと早く言うべきだったと思う！」
「今言っても先週言ってても、状況はそんなに変わらなかったと思うけど」
「夏休みくらいに言ってくれれば大丈夫だった！」
「でも、曲を決めて配ったりするのはだいたい今ぐらいのものじゃないのかな？」
しだいに由美子が反論できなくなってきていた。
「ねぇ。今日、水谷くんが佐野くんたちに言うって決めたんでしょ？」
絵美が小さくうなずいた。
「じゃー大丈夫よ」
美里がのん気にそう言った。
「なんでそう思うの？」
由美子と沙希が不機嫌そうに聞き返す。

「なんだかんだ言って、ウチの男子部員って結局は自分の決断を迷わずに突っ走ってやっちゃうタイプだもん。それにあたしたちは振り回されるかもしれないけど、なんだかんだでうまくやってるし」
いろいろと思い返してみる。確かに男子部員たちは時たまトラブルを起こし、女子部員たちを振り回すこともあるが、結果的にそれが何らかの形でいつも解決している。
「それに何より。あの二人」
「春くんとかとちゃんのこと？」
絵美が美里に聞き返す。
「そうそう。あの二人、幼なじみでしょ？　案外、以心伝心みたいな感じでかとちゃんは何か勘付いてるか、もう知ってるかもしれないわよ？」
幼なじみとはほとんど接点がない沙希や由美子は、それがあまり理解できずにいた。
「とにかく、こういうのは本人たちに任せておいて。部外者は口を挟まないこと」
「……うん」
由美子と沙希はどこか不服そうだったが、美里の言葉になんとなく納得せざるを得ないような感じでうなずくのだった。

第４５１話　背中を押す言葉

「ただいまー」
春樹は重い気分を引きずったまま帰宅する。呆れ帰った拓真の表情やどこか不満げな翔の表情が消えないままだった。
「おかえりー！」
いつもの落ち着いた声の幸恵子とは別の声が春樹を出迎えた。
「は！？」
目の前にいるのは愛実だったのだ。
「な！　え、ちょ、何やってんだよ！？」
春樹はドアにもたれかかって状況を確認する。どう見ても愛実が私服にエプロンをつけて目の前に立っているのだ。
「おばさんから電話があってさぁ！　おばさん、今日お仕事忙しくて遅くなるんだって！　だから、私が代わりに春くんの夕食作ってあげる！」
「はぁ！？　意味わかんないし！　っていうか鍵どうして持ってるんだよ！？」
「忘れちゃった？　小さい頃、私も春くんも親が留守のときにお互いの家を行き来できるように、鍵を親同士が交換してたんだよ～」
それを今さらになって思い出す春樹。
「ほらほら！　早く上がってカバンを置いて着替えておいでよー」
まるで自分の母のように言いながら、愛実は台所へ戻っていく。
自室で服を着替えながら、春樹は心配していることをずっと考えていた。絵美と距離を置いている今、チャンスとばかりに愛実がまた近づいてきているのではないかということだった。
もちろん、絵美とは距離こそ置いているが、ＡＯ入試が終わり、無事合格すれば再び彼女とは言葉はおかしいかもしれないが、付き

合うつもりでいるのだ。完全に別れたわけではない。しかし、愛実がそれを勘違いしている可能性もおおいにあった。
「あぁぁ～、どうしよう！　この状況、絵美にバレたりしたら……」
ドアをノックする音が聞こえた。
「春くん！　どしたの？　料理冷める！」
「あ、わ、わかった行くから、行くから！」
春樹は慌てて長袖のTシャツを着てから部屋を出た。
リビングのテーブルにはコロッケ、マカロニサラダ、コーンスープとご飯が並んでいた。
「ゴメンなさい！」
入るなり愛実が手を合わせて謝る。
「何が」
春樹は不思議そうな顔をして聞いた。
「ご飯炊いた以外、全部スーパーで買ってきた！」
「なんだ……別にいいよ」
春樹はため息をついてから椅子に座り、食事を始める。
「いただきます」
「はい、どうぞ」
愛実の顔をチラッと見てから春樹はコーンスープをまずはすすり始めた。
「春くん」
「ん？」
スープをすすっていると愛実がとんでもない言葉を口にした。
「春くん、私に何か隠してるでしょ？」
途端にブッ！と音を立てて春樹が口にしたスープを吐き出した。
「きゃーちょっとやだぁ！　吐かないでよ！」
ゲホゲホとむせ返りながら春樹は「な、隠してるって何を！」と答えた。
「その何を、を私は聞きたいのに。あーあぁ……」
愛実は慌てて台拭きを持ってきて吐き出してしまったスープを綺

麗に拭き取った。
「食べながらでいいから、話してよ」
「……。」
「ね？」
春樹は観念した様子で「わかった」と答えた。食事を再開してから5分ほど経って、ようやく春樹が喋り始めた。
「１０月の１０日と１１日だけど……」
「七海祭の日だね」
「うん……」
しばらく続く沈黙。愛実のほうから話を切り出した。
「受験、あるんでしょ？」
春樹の顔が驚いたものに変化する。愛実が笑った。
「知らないとでも思った？」
「思った……」
「幼なじみ、侮っちゃダメだよ」
愛実がクスクス笑う。
「なんでもっと早く言ってくれないの？」
「言いづらくて……なんとなく、延ばし延ばしにしてたらこんなになった」
「春くんって昔っからそうだよね～」
昔から、というのは幼なじみや家族くらいしか使うことのない言葉だろう。それが春樹にはなんとなく嬉しい反面、むずがゆい感じもした。愛実は春樹のいろんなことを知っている。もちろん、父が亡くなった際も含めて。
「ねぇ」
愛実が顔を思い切り近づけて春樹に聞いた。
「何？」
「橋本先輩と、仲直りするの？」
まだ受験の気分が抜けない以上、正確な返事ではなかったが、ひとまず春樹はこう答えた。

「するよ」
端的な言葉だったが、単純明快だ。愛実は「そっかぁ」とうなずく。
「私にもちょっとは可能性残ってるかなぁ？とか思ったけど、ダメみたいだね！」
春樹が恥ずかしそうな表情を浮かべる。
「なんか……ゴメン」
「やだぁ！　冗談なのに！　私、春くんのことはもう諦めついてるから、心配しないでよ」
愛実は笑顔でそう答える。その表情を見ると、春樹は安心できた。
「そういう顔は、橋本先輩に向けなきゃ」
「う、うん」
愛実はすぐに立ち「スープ、お代わりいる？」と聞く。春樹は「うん、頼む」と答えた。まるで恋人同士の会話のようだが、幼なじみなのでこういう会話も特段恥ずかしくはなかった。
愛実は立ちながらも時計を気にしている。
「どした？」
「え？」
「時計、やたら気にするから」
「ううん！　なんでもない」
愛実はすぐにスープをよそって席に着く。
「なぁ」
今度は春樹が愛実に聞いた。
「何？」
「めぐは好きなヤツとか、いないの？」
「いないよ～！」
即答だった。一人の男子の顔が浮かぶ。ちょっとかわいそうな気がしつつ、頑張れよと心の中で笑った。いないならいないで、告白の成功率は上がるかもしれないからだ。
「あ！」

愛実が突然声を上げた。
「どした？」
「ヤバーい！　もう８時半じゃん！」
「え？　でも隣だし、問題なくね？」
「春くんは大丈夫でも、私は大丈夫じゃないの！　宿題あるからさ」
愛実はそう言ってカバンを手にとって立ち上がる。
「じゃあ、私はこれで」
「うん。ありがと」
玄関のところで愛実が振り返った。
「春くん」
「ん？」
とびきりの笑顔で愛実は言った。
「私ね！　今は春くんと橋本先輩が笑顔になってくれるのが一番嬉しい」
「……。」
「幼なじみが嬉しい顔をしてるのって、嬉しいんだよね。だから、受験頑張って、もう１回橋本先輩とぜーったい仲良くなって！　私を喜ばせてね！」
「……うん！」
春樹は力強く答えた。
「じゃあ！　また明日ね！」
「ばいばい！」
先輩、後輩ではなく幼なじみとして挨拶を交わす二人。扉が閉まった後、春樹は愛実がよそってくれたスープを口にする。
「俺って幸せだなぁ……」
愛実の言葉を噛み締めながら、春樹は受験に向かってラストスパートをかけようと、改めて意識を強く持つのだった。

第４５２話　第三者視点

９月１９日水曜日。今日は5限までしかない3年生は、授業を終えて一足先に部室へと到着していた。
「なんだかんだで忙しくて、なかなか見る機会なかったよね」
絵美がウキウキした様子で言う。
「ホントにね～。先生も伸ばし伸ばしにしちゃうし」
美里が若干不機嫌そうに言いながら、ＤＶＤデッキにディスクを挿入する。そして始まったのは、まだ1ヶ月ほど前でしかない、合宿での演奏シーンだった。

［一音入魂～新生吹奏楽部・絆で結ばれた１０人～」

未だになんだか恥ずかしく感じてしまうようなタイトルから始まったこのＤＶＤ。紛れもなくケーブルテレビ放映されたもので、合宿の際に演奏した『タンツィ～3つのロシア舞曲』が流れていた。
自分たちの演奏を客観的に見る機会など、ほとんどない。特に、タンツィのような激しい曲のときは自分たちがどんな表情をして演奏しているのか、不安になるくらいである。
第一楽章の「トレパック」はどのパートもかなり動きが激しい。今見ても、よくあの時1年生もいない状態でこんな大曲が演奏できたものだと思ってしまうほどである。
「陽乃の指の速さ、ハンパないやん！」
翔がトランペットの動きを見て目を丸くする。
「いやぁ、それ言うなら水谷くんでしょ！」
「でも、拓あんも負けてない」
全員がよってたかってお互いの良いところを褒めあっているよう

な状態で、それに気づいて全員が笑う。
「でもさぁ、みんなえぇ表情(かお)してるよな。1年も2年も、3年も」
「うん……」
「知らなかったな～。見て、ほら」
由美子が突然、誠と健之佑を指差した。全員が彼らに注目する。
「笑ってる」
「ホントだ！」
沙希が驚いて、すぐに笑い出した。
「マジでか！　よぉこの曲で笑う余裕あるなぁ、この二人！」
全員が笑う。
「でも見て。人のこと言えない人がいる」
画面がそのまま横に移っていき、やがて翔とさゆり、麻綾が映った。
「やーだ！　アルサクも全員変わらないじゃない！」
「うわぁ！　めーっちゃハズい！」
その後、ひととおり全員が映ったところで3年生は感じていることがあった。必ず、どこかで2、3年生のみの姿ではあるが、嬉しそうにしているのだ。
「意外だね。もっと、演奏の時ってしんどそうな顔とか、変な顔なってるかと思ったけど、そうでもないんだ」
絵美が妙に安心したような表情になる。
「変な顔ってどないやねん」
「なんかこう、しんどそうとかさ。正直、私たちの1年のときの演奏での表情とか、しんどそうとか余裕がないとか。そんな表情ばっかじゃん」
絵美の言葉に全員が納得してしまった。
「でも、この映像見てる限りは皆嬉しそう。心底楽しんでるって感じだね」
「うん……」
それからしばらくは、全員が黙ったままＤＶＤを見続ける。いつ

撮影されたのか、ごくごく自然な部員たちの様子も映されていた。
それに、さすがプロと言ったところか、それぞれが可愛い、あるいはカッコいいように映る角度で撮影されていた。
「翔、アンタこんなかっこよかったっけ？」
陽乃が突然言った。翔はキョトンとした表情をしている。
「何、急に！」
美里が大笑いする。
「いや、だってさぁ。毎日一緒にいたら、別にフツーの顔に見えるじゃん？　たとえどんなイケメンでもさぁ」
「あー、それわかるかも」
絵美が妙に納得した。
「わかるのかよ」
慎也がおかしそうに笑う。
「なぁんか、みんな別人に見えるよね」
「ホント、不思議。自分の顔とか、客観的に見るもんじゃないよね」
沙希が恥ずかしそうに笑うと、全員がそれに同意した。
そのときだった。
部室の扉をノックする音が聞こえたのは。
「はい」
翔が反応する。すぐに扉を開けようとするその瞬間に、しばらく考えていた。扉をノックするということは、部員ではない。恭一でもないであろうし、しおりとも考えにくい。すると、ＯＢＯＧである岳彦、安和、めぐみあたりが妥当なのかもしれない。しかし、それにしても返事をすればすぐに彼らは戸を開けて入ってくるだろう。そうなると、彼らである可能性も低い。
戸を開くと同時に、翔はギョッとしてしまった。なぜなら、目の前には真野校長が立っていたからだ。
「こ、校長先生」
「こんにちは」
「こんにちは！」

部員たちは緊張した様子で立ち上がり、挨拶をする。
「おや。それはこの間の……」
「あ、そうです。3年生全員、タイミング逃して見られへんかったんで……」
光治はしばらく興味深そうにそのDVDを見ていた。部員たちはどうしていいかわからず、その場で立っているばかり。
5分ほどして、光治が聞いた。
「確か、この曲はロシアの曲だったかな?」
話を振られた陽乃が緊張しつつ「はい。タンツィと言いまして、3つのロシア舞曲という副題がついています」と答える。
「ふむ……」
再び沈黙。そして、光治が次に翔へ質問する。
「演奏は、できるのかね?」
「基本的に2、3年生は経験あるのでできますけど……」
「ふむ……」
美里が由美子に耳打ちする。
「ねぇ、なんだろ?」
由美子も首を左右に振るばかり。
「わかんない。けど、あるとしたら音楽祭で吹いてほしい、とか」
「ありそうね」
さらに5分ほど経過して、光治が言った。
「君たちは、七海市の友好都市がどこか、知っているかね?」
翔が拓真のほうを見る。さすがの拓真も知らないようで、首を左右に振った。
「すみません……」
「いやいや、謝ることではないぞ。これを機会に覚えてくれ。まずは岩手県大越町の大越町立大越高等学校。それから、ロシアのアンドレスク市だ」
「ロシア……。そりゃまた、スゴいですね」
翔は七海市がそんな遠くの市と姉妹都市（友好都市）を提携して

いるとは夢にも思わなかった。
「それでね。実は七海高校もこの１０月に、アンドレスク市の南アンドレスク高校と姉妹高校提携を結ぶことになったんだ」
翔たちはそのことは知っていた。２学期の始業式で聞かされていたからだ。
「その式典でね、現地の高校生や先生方、市の方々もお見えになるんだ」
「ほほ～……」
男子４人が呆けている。そして、次の光治の言葉で全員が絶叫する。
「そこで、君たち吹奏楽部にこのタンツィだったかな？　その演奏をお願いしようと思っていてね」
「ほほ～……」
男子４人が先ほどと同じように答えた。
「へ？」
春樹が間の抜けた声を上げる。それを追うように、全員が大声を上げた。
「えええええええええええ！？」
部室中にＤＶＤの音を掻き消すほどの大声が響き渡った瞬間であった。

第４５３話　未来を意識した瞬間

光治からの依頼が入った翌日、２０日木曜日。マーチングの練習を終えてから部室と音楽室で着替えを終え、終礼のときに翔は昨日の件を話した。

光治の話では、音楽祭がある１２日の午前中にこの式典を行うそうだ。音楽祭はや演劇祭、美術祭はいつも午後からになっているので、午前中に前の二日間で行われた文化祭での出し物や模擬店などで各学年から優秀賞、特別賞などの授賞式を行っていた。今年はその授賞式に姉妹校締結式典も行うことになったのだ。

その締結式典で、翔たちが『タンツィ』を演奏することになるのである。出席者は学校関係者及び全校生徒はもちろんのこと、市の教育委員会、県の教育委員会、市長、市役所関係者など挙げればキリがないほどの関係者が集まる予定になっている。

「部長」

まゆが手を挙げる。

「はい、歌川さん」

「それは……１年生も出なければいけないですか？」

まゆが心配するのも無理はなかった。何しろ、タンツィは非常に指の動きが速い部分が多く、未経験の１年生が今から練習するには負担が大きいものがあった。もちろん、タンツィだけなら支障はないのだが、文化祭、音楽祭、体育祭、定期演奏会など多数の曲を練習しなければならない中で、さらにタンツィのような大曲を練習する余裕も時間もないというのが、１年生の大多数の見解であった。

もちろん、それを口にすることはない。しかし、心の中ではそのように感じている１年生が多数いるのも事実であった。

「そこらへんは、先生と話し合いました。もちろん、この式典で演奏するタンツィは基本的に演奏経験のある２・３年生のみで出演します」

「基本ってことは、例外もありですか？」
「ありです」
翔の言葉にどよめきが起きる。不安そうな顔をしているのは菘やかのこ、友美である。何しろ、先輩のいないパートなのだからでなければならないのではないか、という風に考えてしまうからである。
「でも、こちらから指名とか、そんな風にはしません」
「え？　よかったぁ」
素直な気持ちが友美の口からこぼれると笑いが起きた。友美は恥ずかしそうに俯いている。
「つまり、有志で出たい1年生に出てもらおうと思います」
「有志……」
好美が反芻するように言葉を繰り返す。
「そう！　有志です。なので、今週土曜日までに出演したい1年生は、オレまで口頭でいいので連絡に来て下さい！」
「はい！」
解散後、部員たちは次々と帰宅していく。戸締りをするために陽乃と翔はここ最近、毎日最後まで残っている。その間、二人は音楽室で教科書や参考書を広げて勉強している。後輩たちの楽しそうな声を背に、二人は黙々と勉強を続けている。
「……。」
カリカリとシャーペンの走る音と、たまに間違って消しゴムを使うときに机が軋む音が聞こえるくらい。いつの間にか後輩も同級生も帰宅していて、二人だけになっていた。それにも気づかず二人は勉強し続ける。
「あ」
翔がそれに気づいたのは午後7時半過ぎだった。
「アカン、アカン！　もう8時なるやんけ。陽乃、帰ろ」
「え？　やだ。ホントだ！　急ごう！」
二人はバタバタと勉強道具をカバンに詰め込み、急いで鍵を閉めて職員室に走る。

「失礼します！」
「おっ。お疲れさん」
恭一が笑顔で二人を迎えた。
「勉強、してたんだろ？」
「はい」
「あんまり無理すんなよ。まだちょっと暑さも微妙に残ってるけど朝晩は涼しくなってきてるし」
「大丈夫です。オレも陽乃も元気が取り得なんで」
「ちょっと！　アンタと一緒にしないで」
陽乃が翔の言葉に肘を突いてツッコミを入れる。
「へいへい。悪うございました！」
翔が笑いながら先に職員室を出て行く。陽乃がペコリとお辞儀をして慌てて翔の後を追っていった。
「ちょっと！　待ってよ翔……」
階段を降りていき、昇降口の手前で急に翔に止められた。思わず転びそうになったが、なんとか陽乃は堪えた。
「何……？」
「シューマと堀江ちゃんがおる」
「うそ」
陽乃がそっと覗き込むと、確かに靴箱の前に周磨と歩由美が座り込んでいた。なぜかその場所が翔のクラスの靴箱なのだ。よりによってなぜ、という気持ちもしたが、それ以前に今まで接点がなかった周磨と歩由美が一緒にいるのだ。それが二人にはまず不思議で仕方がない。
（なんで二人が一緒にいるの？）
（さぁ……）
そのときだった。遠目でもわかる出来事が起きた。
周磨と歩由美の唇が、触れた。

触れたというより、重なったというほうが適切なのかもしれなかった。

「……！」

それを見た瞬間、翔も陽乃も真っ赤になってしまう。

「帰ろうぜ」

「うん」

周磨に手をつながれ、歩由美が嬉しそうに彼の隣を歩いていった。

「ほへぇ……」

翔は彼らがいなくなったのを確認してからため息を漏らした。

「知らなかったね」

「ホンマやで。ビックリしたわ」

微妙な沈黙が続く。

「帰るか」

「うん」

翔と陽乃は靴を履き替え、ようやく学校を出た。

校門を出て津上橋のほうへ向かう途中、翔が言った。

「なぁ」

「何？」

「島根行っても、吹奏楽、続ける？」

翔が心配そうな表情で陽乃にそう聞いた。

「どうしたの？　急に」

陽乃は笑ってすぐに答えた。

「続けるよ。大学の部活……はちょっと、ほら、応援団？だっけ。あぁいう雰囲気は苦手だから避けたいかな」

翔が笑った。

「オレも」

「一緒だね」

二人はクスクスと笑った。

「市の楽団とか……一般の楽団とかかなぁ」

「そうだね～。バイトとかもしたいし」
「先斗くんたちのところにも行かんとアカンしな」
「あー！　そうそう。さゆちゃんとすずちゃんに念押しされてるのよね」
二人はそう遠くない将来のことを色々と考える。大学入学後のこと。入りたい楽団のこと。したいアルバイトのこと。考えれば考えるほど、不安が消えて楽しみばかりが浮かんでくる。一方で、寂しさも込み上げて来ていた。
家族のこと。残していく後輩たちのこと。たくさんの同級生。想い出がたくさんできた七海の町。
本当なら、引退しても七海高校でＯＢとしてレッスンをできればいいなどという風にも考えていた。しかし、島根県へ行くということはそれも叶わない。
しかし、自分たちで選んだ道。後悔はしていない。
「そろそろ……いろいろ、整理していかんとアカンな」
「うん……」
「寂しいけど、な」
「うん……」
それから二人は陽乃の家まで無言で歩き続けた。そして、陽乃の家に到着したと同時に翔がようやく口を開いた。
「陽乃」
「何？」
「あの……さ」
「何よ」
翔の顔が今まで見た中で一番赤くなっていた。
「こっ、今度の土曜日の、夜」
「うん」
「オレん家、けーへん？」
「いいよ」
「へ！？」

翔は目が点になった。
「翔の家でしょ。夜でしょ？」
「う、うん」
「いいよ。行く」
陽乃が笑顔で答えた。
「ホンマか？」
「しつこいな～。行くってば！」
「っしゃあ！」
「変な翔」
陽乃はクスクスと笑う。
「ほな！　また明日な！」
「うん！」
しかし、翔は次の陽乃の言葉を聞いて一瞬、思考回路が停止してしまった。
「土曜日、おばさんおじさんにお邪魔しますってよろしく伝えておいてね」
「え？」
「じゃあね～」
バタン、と陽乃の家のドアが閉まる音が響き渡る。
「……。」
翔は右手を中途半端に挙げたまま、呆然としていた。
「……言わんとマズいやろか」
翔は右手をゆっくりと下ろした。
土曜日。友美子と昭、智輝、冨美枝は1泊2日で温泉旅行へ。綾音は菘の家に泊まりに行くことになっている。つまり、家には翔しかいないのだ。
「……えぇやろ。うん。大丈夫や」
翔は顔を赤くしながらそう呟きつつ、自宅へと向かって歩き始めた。
その頃、陽乃はそうとも知らずに早速、翔の家に行く準備を整え

ていた。
「やっぱ、いろいろと吹奏楽のこともっと教えてもらわなきゃ！」
二人の思うところがまったく違う中、土曜日が徐々に迫りつつあるのだった。

第４５４話　ぼくらの、意思表示

「え！？　本気で言ってんの！？」
翔の言葉を聞いた春樹、慎也、拓真の３人が大声を上げた。
「しーっ、しぃーっ！　本気や、本気！　ウソでそんなこと言うかい！」
翔が慌てて人差し指を口の前で立てる。３人は驚きのあまり言葉が出ない。沈黙が続いた後、慎也がそれを破った。
「すんのか？」
拓真と春樹が爆弾発言したな、というような顔をする。翔がたちまち真っ赤になった。
「ん、んなわけあるかい！」
「じゃあなんでご両親が留守中にわざわざ誘うんだよ」
「それは……」
翔が黙り込んでしまう。拓真がニヤニヤ笑いながら翔と肩を組んだ。
「まーまー！　男なら一度は誰でも考えることだ！　せいぜい、変な方向に持っていかないようにしろよ」
「どないやねん、それ！」
翔がどうしようもないほどに赤くなっている。一方の陽乃は陽乃で、彼女自身の発言が美里や絵美たちを驚かせていた。
「えぇ！？　本気なの、陽ちゃん！？」
絵美が驚いて両手で口を覆った。
「うん……何かマズいかなぁ」
「マズいも何も……ねぇ、ミサッチ」
美里がうなずく。
「さすがにあたしも……そこまでする勇気ないわ」

「ど、どういうこと？　なんか不安になるじゃない」
美里が絵美と苦笑いする。そして仕方がないなという表情を浮かべて、美里が陽乃に耳打ちした。途端に陽乃の顔が真っ赤になる。
「ど、どういうことよそれ！　あたしたち別にそんなつもりじゃ！」
「あたしたちじゃないよ、多分。それ、陽ちゃんだけだよ」
「えぇ！？」
「男子って、そんなもんよね。エミリン」
絵美が黙ってうなずく。
「そ、そんなぁ……」
陽乃は呆然としつつ、翔のほうを見る。背中しか見えていない翔だが、拓真たちと何やら話して慌てているようだった。比較的体格のしっかりした翔の背中を見ていると、急激に不安とも期待とも言えない感覚が陽乃を包み込む。
やっぱり、行かない。
突然そんなことを言えば、翔も不審がるだろう。陽乃はどうしていいかわからず、オロオロしてしまっていた。
そんな陽乃には気づかず、翔はしばらく男子に茶化された後、練習の準備に入っていた。
「あのぉ……」
後ろから声がしたので翔が振り返ると裕時、ソンス、マーガレットの3人が立っていた。3人とも楽器を持っている。
「おっ？　どないしたん。あ、練習の部屋の鍵か？」
「いえ！　そーじゃなくて……あの」
裕時が思うように言葉が出ないようで、マーガレットが引き継いだ。
「あの、佐野クン。あたしたちも、タンツィ吹きたいの」
「えっ！」
翔はポカンとした様子で3人を見つめた。3人の眼差しは真剣そのものだ。その視線を見ただけで、翔は十分だった。
「よっしゃ！　わかった！　ほな、楽譜渡してもらわんとアカンか

らな……。ちょっと待って。パーリー呼ぶから。おーい！　はしもっちゃん、春やん、田中っち！」

翔に呼ばれて3人が振り返る。

「実はな、留学生3人が例の式典でタンツィ吹きたい言うてくれてんねん。ほんで、今日はパー練やろ？　タンツィ吹きたい言うてくれた子ら混ぜて、曲の練習時間もらってるから、一緒に練習したってくれへん？」

「マジ？　難しいよ、タンツィ」

春樹が心配そうにソンスに聞いた。

「大丈夫。ハルキとメグミ見てたら、吹きたくなったから。練習、頑張るから」

「……そっか！　よし。じゃあ、今日は3人で練習させてもらおう。俺、拓あんに言ってくる」

春樹はそう言うと、すぐに拓真のところへ走っていった。

「よし！　じゃあ、こうはしてらんないね。私たちも行こう。今日はバスクラ、アルトクラも混ざって練習だからね！」

「うん！」

裕時が絵美と一緒に走っていく。そして、美里がマーガレットを呼んだ。

「それじゃあ、マーガレットは楽器をまずは決めようか。とりあえず、タンバリンか鈴がいいかなぁって思うんだけど……」

「うん！　アタシ、タンバリンならできそう！」

そう言って美里とマーガレットも練習場所へと移動していく。

結果的に、1年生では夏樹、綾音、裕也、貴志、かのこ、菘、雄飛が、留学生は3人がタンツィの演奏に出たいと意思表示をしてきていた。他の部員も、タンツィこそ出ないが学祭でのソロは1・2年生にも分担することがはっきりわかると、練習にしっかりと注力するようになっていた。高音があったり、難しいパッセージがあったりするが妥協せず、個人個人が練習している。その雰囲気だけでも翔は十分に嬉しく感じていた。

ユーフォニウムの練習部屋では、あまりのパッセージの難度に既にソンスが辟易していた。
「ムズカシイ……急に吹けない、こんなの」
春樹が苦笑いする。
「さっきはあんなに頑張るって張り切ってたのに」
「こんなにムズカシイと思わない。メグミやハルキと違うよ、僕」
ソンスはうんざりした様子で楽器を置いた。
「んー。でもさ、俺もメグもいきなり吹けたわけじゃないんだから。それに、まだ時間はある」
「そう？」
ソンスはパッと部屋にあったカレンダーを見た。今日は２１日金曜日。本番まで１ヶ月は切ったものの、時間的にはまだまだ余裕がある。
「ソンスならできるよ。俺もメグも、翔もそう思ってるから、楽譜渡したし、任せたんだ」
「……うん」
「諦めないで頑張りましょー！」
愛実も優しく笑って言った。少しだけソンスの顔が赤くなったのに気づいたのは、春樹だけだった。
一方のクラリネットの部屋では、早くも２楽章の凄まじいまでのパッセージを裕時が練習していた。いくら経験者とはいえ、やはりこのパッセージには参ってしまうようだった。雄飛もそれは同様という様子で、二人で必死になっている。
「うーん……二人とも、ちょっと肩に力、入りすぎじゃない？」
みゆきが二人の前にやって来る。それだけで、裕時の表情が一気に強ばった。とはいうものの、みゆきは決して厳しい先輩というわけではない。顔が強ばる理由が雄飛にはわからなかった。
「ほら、進藤くんボーッとしてないで。もうちょっと肩の力抜く」
「あ、はい」
「ほら。うわぁ、裕時も固いよ～。なんでもっとガチガチになっち

ゃうわけ？」
「い、あ、はい。力、抜く」
「どうしたのー？　ガチガチじゃない！」
みゆきは笑いながら二人に力を抜いて吹く方法をしばらく指導してくれた。そしてみゆきがその場を離れてから、そっと雄飛が裕時に耳打ちする。
「好き？　なの？」
裕時が顔を赤くし、小さくうなずいた。
「そっか！　うん……伝えるの？」
裕時は首を左右に振る。
「あと、１ヶ月しかないし……離れるし、遠いし……」
「そっか……」
「練習、しよ」
裕時はすぐに楽器を構えなおした。幾分、力が抜けたように雄飛には見えていた。
それに引き換え、マーガレットは実にわかりやすかったのでかえって鈍感すぎる和志に全員が笑いをこらえていた。
「わかんないよ！　直接、教えてカズシ！」
「えー？　だからさっきから何回も言うてるやん！　こうやってば」
和志の手が触れるたびに嬉しそうな顔をするマーガレット。一方の和志は必死なようで、ついつい関西弁を喋りながらも指導している。
「塚ちゃんのこと、すっかり好きになっちゃってるね、マーガレット」
美里が笑いながら優と恵梨に言った。
「そうですね～。それに気づいてない塚ちゃんがまたおもしろい」
優が笑いをこらえる。
「でも、この光景ももうあと１ヶ月ちょっとなんですね～」
恵梨が寂しそうに呟いた。
そう。留学生は１０月末で留学期間が終わり、母国へと帰国して

いくのである。
「寂しくなるねぇ……」
美里が物惜しげに呟く。考えないようにしようとすればするほど、そういった事柄が脳裏をよぎる。季節が秋に向かうということもあってか、ついついそうした寂しいことを考えてしまう部員たちであった。

第４５５話　リコーダーカルテット！

「タンツィ、やっぱり難しいね」
苦労した様子が十分伝わるほど、音楽室に入るなりソンスがため息を漏らした。
「おっ。まだ初日やろ？　諦めんと、練習しっかり頑張ってや！」
「はいっ！」
ソンスが翔に言われて、背筋を正して返事をする。
「超マジメ！　オレも見習おうっと。ところで～……よし！　全員揃った！　ほな、先生呼んでくるんで座って待っててください！」
「はい！」
翔と陽乃は音楽室を後にして、職員室に向かう。しかし、練習前のあのやり取りがお互いに聞こえていたようで、どことなくよそよそしい感じがしていた。
「……。」
会話のないまま、二人は職員室に着いた。
「失礼します」
「おっ。全員揃ったか」
「はい」
「じゃあ、３人で行くか。ちょうど、話もあったし」
「はい」
職員室を出て、恭一の後をついていく翔と陽乃。
「とりあえず。明日合奏する。そこで、古氷中学の演奏会行ける１０人を決めたいと思う」
「！」
来たか、という表情をする２人。
「お前ら、自信はあるか？」
「曲によります」

翔と陽乃があまりにもハッキリ言ってしまうので、恭一は思わず笑ってしまった。
「ハハハ！　二人ともハッキリしてる。よし、こうなったら何の曲をするかは直前まで内緒にしておこう！」
「えぇ～……」
恭一はイタズラっぽい笑みを浮かべながら先を歩いていく。
「話は別だけど、朝倉。お前、確か中学時代はリコーダー部に入ってたよな？」
「え？　あ、そうですけど……どうしたんですか？　急に」
「いや、実は音楽祭でするつもりでいる曲でな、リコーダーが出てくるんだ」
「そうなんですか！？　そんなのあるんですか？　吹奏楽でですか！？」
「あぁ。だけどな、タイミング的に朝倉がそこでリコーダー吹くのは難しいと思ってな。だから、指導に回ってほしいんだけど、できるか？」
「一応、３年間やってましたから……そんな大した指導はできないかもしれないですけど」
「そうか！　じゃあ、この曲も配布して練習するようにしていいか？」
「はい！」
恭一は陽乃の声に笑顔を浮かべる。
「こんにちは！」
「はい、こんにちは～」
恭一の姿を見て挨拶をする部員たち。恭一は挨拶をしながら、譜面係が座る席に楽譜の封筒を４つ置いた。
「はい！　ではでは。音楽祭で演奏する曲目、決定しましたので発表します！」
「おぉ～！」
どよめきが起きる音楽室内。恭一は丁寧な字で黒板に曲名を書い

ていった。

1．交響詩『モンタニャールの詩』
2．大地讃頌
3．ルパン3世のテーマ
4．山口百恵メドレー

「1番以外は全員、聴いたことあるだろう」
うんうんとうなずく部員たち。
「で、だな。まず、2番の大地讃頌に関しては現在、男子コーラス部と女子コーラス部でコラボレーションとして、合奏と合唱を同時に行うことを考えている」
「マジですか！」
翔が嬉しそうに声を上げた。
「ああ。コーラス部さんは既に練習しているからな。ウチの部も恥かかないように、これから仕上げていくぞ」
「はい！」
「それと。3番と4番は基本的に3年生にソロ吹いてもらうけれども。1・2年生しかいないパートはオーディションして、上手な部員にソロを吹いてもらうことにするからな。各自、気合い入れて練習するように！」
「はい！」
「それと……1番なんだけどな。ちょっと、名前呼ぶぞ？」
「え？」
部員たちが突然の恭一の言葉に目を点にする。
「佐野　翔」
「あ、はい！」
「川崎」
「え？　俺？　はい！」
「水谷」

「俺も？」
「それから、本堂」
「え？　は、はい！」
男子４人が呼ばれ、３年生ばかりという組み合わせに部員たち全員が何が起きるのか、ワクワクした様子で見守っている。
「とりあえず、この曲の音源の一部、ここでいいから聴いてくれ」
そういうと、恭一は音楽室にあるステレオでＣＤを再生し始めた。
そして聞こえてきたのは、グロッケンの音色。
「グロッケン……？」
美里が呟く。そして、タンバリンの音色。その直後聴こえてきたのは、誰もが演奏経験のある楽器――リコーダーだった。
「リコーダー……？」
翔が呆気に取られたように呟く。
リコーダーというと、イメージとしてはどうしても音楽の授業でお世辞にも綺麗とは言えない音程や音色で中学生や小学生が吹いているイメージ。しかし、この曲はまったく違った。
幻想的な雰囲気を醸し出す音色。正真正銘の『楽器』としての音色であった。
「綺麗……すぎるだろ」
慎也がため息を漏らして優しい笑顔で言った。
「低音……のリコーダーか？」
拓真が音の低いリコーダーの音色をばっちり聞き分けた。このあたり、バスパートとしての習性が出たのだろう。
「すげぇ……綺麗だな」
春樹がもはやため息しか出せないような表情でそう言った。
１分近く経っただろうか。タンバリンが加わり、弦バスが加わってリコーダーカルテットは見事に演奏を終えた。それを引き継ぐように管楽器がメロディを吹き始めたところで、恭一はＣＤを止めた。
「と、いう具合なんだが。このリコーダーカルテットを、先ほど呼んだ４人に演奏してもらう」

「え！？」
男子４人が驚いて同時に声を上げた。
「パートもこちらで指名する」
「え、ちょ、先生そんな急になんでオレら！？」
「先生が個人的にお前らの演奏するリコーダーカルテットの民族音楽を聴きたいから！　悪いか！？」
「えー！？」
恭一は小悪魔のような笑みを浮かべながら、パート割り振りを発表した。
「ソプラノリコーダー、佐野」
「ソプラノぉ！？　そんなん、運指忘れたわ！」
頭を抱える翔。恭一は気にせず続ける。
「アルトリコーダー、川崎」
「やべぇ！　ちゃんと練習しとけばよかった音楽の時間～！」
慎也は座り込んで頭を抱える。
「テナーリコーダー、水谷」
「うわぁ～……俺、いつでもこのポジション？」
笑いが起きる。
「じゃあ俺決まりじゃん！」
拓真が嬉しそうに笑う。
「そのとおり！　バスリコーダー、本堂」
「よし来たぁ！　俺、頑張りますよ先生！」
拓真の言葉に３人が反応する。
「ほな、オレかて負けてられん！」
「俺だって負けねぇ！」
「俺も！」
３人が一気に闘志をみなぎらせた。
「よし！　じゃあ、そんなお前らを指導する先生を発表する！」
翔が目を丸くした。それと同時に、その人物の名前が呼ばれた。
「朝倉先生です！」

陽乃が「えへへ……」と恥ずかしそうに笑った。
「えぇー!?」
翔も含めて、４人どころか全部員が大声を上げた。
「はい！　なんと朝倉先生、中学時代はバリバリのリコーダー奏者です！　この先生にばっちり指導してもらうこと。いいな！」
「……。」
不満げな４人。
「あれ？　不満そうだな……。しょうがない。そうしたらこの話はなかったことに」
「あー！　わ、わかりました！　頑張ります、マジなんでもしますー！」
４人があまりに必死になるので恭一は笑いつつ「よし。じゃ、頑張れよメンズカルテット！」と最後の一押しをする。４人の目が、先ほどとは異なりしっかりと前を見ているのを確認すると、恭一はそれだけで大丈夫だと確信するのだった。

第４５６話　オレのはじまり

９月２２日土曜日。いよいよ、翔と陽乃にとって緊張と期待が入り混じる二日間が訪れる。

「……もうちょいやな」

翔は自宅の誰もいなくなったリビングルームで掛け時計を見上げていた。陽乃が来る予定の時刻は午後２時ちょうど。現在、午後１時４５分。

一応、部屋の掃除は自室も含めてすべて完璧にしておいた。綾音たちは午前中には全員、出発してしまっている。完全に全員が出た午前１０時半からみっちりと掃除をした。塵ひとつ落ちていない自信は十分にある。

「……。」

部室での慎也たちとの会話が思い出される。特にそういうつもりがあったわけではない。完全にそんなことは考えていなかった、のほうが正しいのかもしれなかった。しかし、慎也たちに陽乃を泊めることを伝えると、すぐにそういう風に解釈されてしまったのだ。

陽乃は陽乃で、翔の家に泊まる、とは伝えていないそうだ。美里の家で女子会をする話になっているそうだ。それもそうだろう。あの陽乃の父親が年頃の娘を思春期の男子の家に泊めることを許すはずなどない。

バレたときのことを考えると恐怖はあるものの、もう既に後戻りはできない状況には差し掛かっていた。

翔はブルブルと首を左右に振る。自信を持て、と心の中で呟いてそのままソファに座った。しかし、落ち着けるはずなどない。時計の秒針音がいやに大きく聞こえた。

ピンポン、とインターフォンの音がしたのはソファに座ってすぐ

であった。
「！」
翔の表情が一瞬で固まる。思わずインターフォンを見ると、受話器の明かり部分が点滅していた。
「……。」
動くことができない翔。しばらくすると再びピンポン、と音が響いた。
「あれ？」
陽乃は翔の自宅前でインターフォンを押して呆然としていた。９月下旬とはいえ、まだ残暑の季節。蝉こそ鳴かなくなったものの、まだまだ暑さは厳しい。
「いないのかな」
陽乃は首を傾げながらもう一度インターフォンを押そうとした。すると、ゆっくり扉が開いた。
「お……おっす」
「なぁんだ！　いるんじゃない。留守かと思っちゃった」
陽乃の姿を見て翔の心臓が激しく鳴り始めた。顔が真っ赤になっているのがわかる。Ｔシャツだがまだまだ暑さが厳しいのでタイトなものを着ている。さらに、半パンを穿いているのだ。スラッとした足が綺麗に出ていた。思わず翔は目のやり場に困ってしまう。
「どうしたの？」
「あぁ、いや！　うん！　なんでもあれへんよ。どうぞ、どうぞ」
「お邪魔しまーす」
陽乃が笑顔で翔の家に入る。
「スリッパ。履いて」
「ありがとー」
廊下を歩く陽乃。何度か翔の家には遊びに来たことがあるので、特に緊張などはしていなかった。それに対し、翔の緊張度合いは尋常ではなかった。
（陽乃とオレ二人……二人……）

グルグルと訳のわからない言葉が頭を巡っていく。
「ねぇ！　ちょっと聞いてる!?」
「！」
翔の目の前に陽乃の顔があった。
「うわーあ！」
「ちょっとぉ！　何よ、急に！」
翔は驚いてそのまま尻餅をついてしまった。
「何よ！　大声出して」
「アホかぁ！　お前は！　いきなりそないに顔近づけてくるヤツがどこにおんねん！」
「アホって……何よ。別にいいじゃない。あたしたち、付き合ってるんだし」
陽乃はサラリとそんなことを言いのけた。恥ずかしさで翔は顔を上げることもできない。
「それより、聞いてた？　今夜、ご飯どうするのって」
「え……っと」
翔が考えていたのは近所のガストへ行くか、何か料理を宅配してもらうことぐらいであった。それを陽乃に伝えると「多分そんなことだろなぁって思ってた」と笑われてしまった。
「ほな、どないすんの？」
「あたしが作るんじゃないの」
「へ？」
「ほら、買い物行くよ～」
あまりにもマイペースすぎる陽乃に翔は早くも振り回され気味であった。
「翔の家からスーパーって結構近くて便利だね」
スーパーマーケットに着いて、買い物籠片手に陽乃が嬉しそうに言う。手際よく材料らしき肉や野菜を籠に入れていった。
陽乃から少し距離を置いた翔はまだ悶々としているようで、考え事をしていてキャベツの山にそのままぶつかってしまった。ゴロゴ

ロといくつかのキャベツがバランスを崩して床に転げ落ちる。
「うわあー！」
「ちょっと！　何やってんの翔！　しっかりしてよ！」
「すんません、すんません！」
結局、落としたキャベツ二玉を陽乃は購入した。翔はうな垂れた様子で陽乃の少し後ろを歩いている。陽乃は特に気にも留めず、購入したキャベツでロールキャベツを作ろうと張り切っている。
（なんで陽乃はあんなに余裕なんやろ……）
翔は大きくため息をついた。
「ただいまー！」
「ただいま……」
あまりのテンションの違いにも陽乃は気づかず、そのままスリッパを履いて台所へ駆け込んでいった。翔はその後をため息をつきながら追う。
「あたし、料理するから翔は食器の準備とか手伝ってくれる？」
「え？　あぁ、うん……」
「お願いね！」
要領よく料理を勧め始める陽乃。翔はその姿に改めて惹かれつつ、食器を用意する。料理の仕度を始めて１０分ほどした時だった。
「翔ってさぁ」
「んー？」
「なんで、吹奏楽始めたの？」
翔のいわば、原点を知りたいというような質問であった。
「音楽の……あぁ、小学校の音楽の先生な。その先生に、佐野くん、音楽好きなら吹奏楽やってみぃひん？って言われたのが、始まり」
翔はお味噌汁を入れるお椀を並べながら言った。
「へぇ～……。音楽の授業、好きだったの？」
お味噌汁をかき混ぜながら陽乃が聞く。
「わからへんよ。小学校の頃やもん。覚えてへん」
翔は恥ずかしそうに答えた。それもそうか、と思いつつ陽乃はお

玉でお味噌汁をかき混ぜ続ける。
「でもな」
翔が話を続ける。
「なんとなく感覚として覚えてるんは、リコーダーの時間が楽しかった」
「リコーダー？」
リコーダーという言葉には親しみのある陽乃は思わず反応してしまう。
「うん。多分、楽器を吹くのがオレには楽しく感じたんやろうと思うねん」
「なるほどね～……」
陽乃はここから聞き役に徹しようと考えた。こうなると、翔は訥々とではあるが話をしてくれることを知っているからだ。
「その音楽の先生に誘われるがまま、オレ、ようわからんと吹奏楽部に入った。しかもな、なんとなく直感でアルトサックス選んでさぁ。無謀やんなぁ」
翔はおかしそうにクスッと笑った。翔が無謀と言ったのには理由がちゃんとある。サックスは、楽器の中でもすぐに鳴らせることができる楽器なのだ。極端な話、走行中の電車の窓からサックスを出せば、音が鳴るというような話すらあるくらいである。しかし、それほどに鳴らすのが簡単な楽器は、上達するのが非常に難しい楽器でもあった。
「思うように上手くならへん。小学生くらいなら、それが嫌になって辞めそうなもんやけど、オレは逆。負けず嫌いやったんやろな。絶対上手くなって、自分のモンにしたる。そう思って、毎日練習してた。吹き方荒くて、一日でリードぱぁにすることもあって、先生に怒られたこともあったわ」
「ホントー？」
陽乃は思わずおかしくなって笑ってしまった。
「せやから……んー、なんていうんかな。サックスはもう、オレの

一部やねん。オレからサックスを取り上げることは誰にもできへんと思う。たとえ、お前でもな」

「……。」

完全に、翔はサックスに対して愛情以上のものを抱いている。そんな気が陽乃にはしていた。

「じゃあさ、もしもあたしかサックスどっちかしか選べない状況がきたら、どうする？」

「へ？」

翔がキョトンとした顔をする。

「……。」

「……。」

一瞬の沈黙が起きた。陽乃はそれをごまかすように続けた。

「ウッソー！　ちょっと困らせてみたかっただけ！」

「え……あ、あのさ」

「ほら！　見て～、お味噌汁超いい匂い！　そろそろできるからさ、食べようよ！」

「あ、あぁ、うん……」

すぐに「お前に決まってるやん」と言えなかった自分に翔はもどかしさを覚えつつ、陽乃が並べる食事を見つめることしかできずにいた。

第４５７話　楽器購入

夕食後、風呂は近所にあるスーパー銭湯へ行くことにした。さすがに、翔の家の風呂を使うのは陽乃には抵抗があり、翔もさすがにそれはマズいと言ったのでこういう形になった。銭湯までは徒歩で１５分ほど。二人はつくし野川沿いをゆっくりと歩いていった。

「ねぇ……」

陽乃が突然呟いた。

「ん？　どないしたん？」

「楽器って……いくらくらいするのかなぁ？」

「いくらって……値段のこと？」

陽乃は小さくうなずいた。

「せやなぁ……ピンきりあるからな。学生が使うなら、トランペットならヤマハのＹＴＲ－４３３５Ｇとかえぇかもな」

「それって、いくらくらい？」

「確か……１１万くらいちゃうか？」

「じゅ、１１……」

陽乃の顔が青ざめる。翔ももっともな反応だと思い、特にツッコミは入れなかった。

「せやけど、そんなもんやで？　まだこれなんかまぁ、お手ごろ価格な方や」

「そうだろなぁ……。あたしもある程度覚悟はしてたけど……」

それからしばらく無言で歩く二人。

「買うん？」

翔が唐突に聞いた。

「うん……。島根でも、続けたいし。続けるとなると、楽器欲しいし……」

「そっかぁ」
「でも、今のあたしたちじゃ親の援助ナシじゃ絶対無理じゃない？」
「うん……」
「だけど言いにくいのよね。そう易々と楽器買って、なんて言えないじゃない」
「そやなぁ……」
ハァッと陽乃はため息を漏らした。
「仕方ない。大学入ってからアルバイトして、貯金して買おうっかな！　そのほうが堅実だろうし」
「うん……せやな」
そして銭湯に到着した。
「ほな、後でな」
「うん」
それぞれの浴場に分かれる二人。翔は脱衣場でいろいろと思いを巡らせていた。自分の場合は亡くなった兄の楽器を譲ってもらえたからこそ、Ｍｙ楽器を持っているわけだが、他の部員でＭｙ楽器を持っている部員など限られている。
沙希の家は元々、お金持ちなほうに入るので楽器を初めから所有していた。翔と沙希以外でＭｙ楽器を所有しているのは今のところ、はるか、健之佑の二人だけ。それ以外は全員、学校の楽器を演奏している。
他校で全国大会常連校などはチューバや弦バス、打楽器以外は基本的にＭｙ楽器を持っている部員が多い。しかし、七海高校は今年東関東大会こそ行ったものの、常連校などではないうえに公立高校（公立でもＭｙ楽器を持っている部員の多い学校はあるが）なので、楽器を所有することを義務付けるようなこともない。
ちなみに、翔の楽器はセルマーのＳＥＲＩＥ？。調べてみたところ、５３万円近くしていた。とてもじゃないが、譲られていない限りは手を出せるような金額ではない。それをわかっているだけに、陽乃が両親に楽器購入のことを言い出せないのも理解できた。

「おばさんはまだ理解してくれるかもしれへんけど……おじさんがなぁ」

祥夫のことがやはり陽乃もネックなようであった。何しろ、陽乃が当時サークルだった吹奏楽部に入ったことだけでも随分とモメた経緯があるのだ。楽器購入などとなると、大学では続けても社会人になってから続ける、という保証もできない。

「難しいこっちゃ」

翔はため息をつきながらTシャツを脱いで風呂に入る仕度を始めた。

「はぁ～……」

陽乃は女湯で露天風呂につかっていた。

「幸せ～」

しばらくすると、陽乃と年が変わらないくらいの女子3人が露天風呂にやって来た。そして、その姿を見るなり陽乃も相手も声を上げた。

「優衣ちゃん！」

「あー！　陽乃ちゃん！」

風見台高校の濱口　優衣だった。

「どーしたの？　珍しいね！」

優衣たちは風見台高校の帰り道に寄ることがある、と言っていたのを陽乃は思い出した。

「うん！　ちょっと近くまで来たし、汗かいてたから入ろうと思って」

翔と来たことは言わないでいた。

「そうなんだ！　あ、二人とも。こちら、七海高校吹奏楽部のトランペットで副部長の、朝倉さん」

二人の女子がニッコリ笑って会釈する。陽乃も笑顔で会釈した。

「陽乃ちゃん。この二人、風見台吹奏楽部の一人は3年生でユーフォニウムの魚住（うおずみ）　舞花（まいか）ちゃんで、こっちが2年生でバスクラリネットの西口（にしぐち）　春奈（はるな）ちゃん」

「初めまして！　七海高校の朝倉です。よろしくお願いします」
挨拶もそこそこに、４人は露天風呂に一緒に入り始める。
「そういえばさぁ、聞いてくれる？」
優衣が嬉しそうに話し始める。
「どうしたの？」
「あっ。そうなの。あのね、朝倉さん」
舞花が思い出したように話し始めた。
「陽乃でいいよ！」
「あっ、ホント？　じゃーあたしのことマイカで」
「うん！　よろしくね、舞花ちゃん」
「よろしく！　陽乃ちゃん。あ、それでね。優衣ったらなんと……」
優衣が満面の笑みになる。そして舞花が言った。
「Ｍｙ楽器買ったのよー！」
「えー！？」
陽乃が大声を上げるのも無理はない。あまりにタイムリーな話だからだ。
「いいなぁ、いいなぁ！」
「でもね～、だいぶ無茶したんだよ」
優衣が苦笑いする。
「とりあえず、当面お小遣いはナシってことになってるの」
「え。ホント？」
「うん。それにね、来年と再来年……あ、もうまぁ来年だけか。とりあえず来年最後になるはずのお年玉もナシ。結構悲しいんだけど、お父さんがそれくらいしないと買わないって言うもんだから……」
「そっかぁ。やっぱり、それくらいしないとダメなのかなぁ」
優衣が複雑そうな陽乃の表情を見て気づいた。
「もしかして、陽乃ちゃんも楽器考えてるの？」
「うん……」
「そうなんだ！　あっ、じゃーウチのは気にしないほうがいいよ。そんなの、みんなの家によっていろいろなんだからさー」

優衣はそう言って額から垂れてきた汗をタオルで拭った。陽乃もタオルで汗を拭いつつ答える。
「でも多分、ウチのお父さんも似たようなコト言いそうなんだよね。結構厳しいし……」
「そっかぁ～。やっぱどこの家もそんなもんなんだねぇ」
陽乃と優衣は揃ってため息を漏らすのだった。

「それじゃ、私たち先に帰るね。またね！」
「うん！　バイバイ」
優衣たちは一足先に帰宅していった。陽乃は待ち合わせる人がいると伝えたのだ。すると優衣たちはそれが女子ではないことをすぐに察知したようで、笑顔ですぐに帰っていった。気遣いが嬉しいけれども恥ずかしいと思いつつ、陽乃は翔を待つことにした。
それからしばらく考えていたのだが、陽乃はやはり今の時点では楽器を買うのはやめることにしていた。大学に入り、自立でき、アルバイトなどで貯金がある程度できてから買おうと決めたのだ。
「お待たせ！　意外と早いねんな、お前って」
「お風呂のこと？」
「うん。女子ってもっとかかる思てたから、ついついゆっくり入ってしもたわ」
そう言って翔は長めの髪の毛をバスタオルでまだ拭いていた。
「いいじゃない。ゆっくりして帰ろ」
「せやな。なんも急ぐことないし」
陽乃は翔がまた楽器の話題を振ってくるのではないかと気になったが、彼はそんな素振りも見せなかったので、それ以上話には触れなかった。

第４５８話　君の隣で

「……。」

午前2時。陽乃はいろんなことが原因で眠れずにいた。まず、自分の寝かされている位置が原因だ。その場所と言うのも、翔のベッド。お客なのだから床の上で寝てもらうわけにはいかないと翔は言った。しかし、綾音のベッドや友美子のベッドでは後々いろいろ問題が出てくる上に、そもそも泊まりに来たのに別々の部屋で寝ていては意味がないということで、こうなったのだ。

次に、その位置から見える翔の寝顔。合宿で同じ部屋に泊められたこともあるのだから、寝顔は見慣れているはずであった。しかし、自宅ということもあってか、無防備な姿がかえって陽乃を緊張させていた。

「寝れないや……」

陽乃は布団の中でずっとゴソゴソと動いていた。そして、眠れない最大の原因は、やはりトランペットのこと。買わないと決めたはずだったのに、モヤモヤとした気持ちが晴れないのだ。

「自分で決めたことなのに……」

気持ちが抑えきれなくなったのは、翔の中学生の頃の写真を見たときだ。初めて兄の楽器を譲られた日に撮った写真だという。そこには満面の笑みの翔がいた。

「オレ覚えてるねん。この日、楽器と一緒にそこのベッドで寝てな」

そう話す翔もまた笑顔だった。Ｍｙ楽器というのは、やはり大きな存在のようだと彼女は感じ取っていた。

「……。」

結局、陽乃が眠りについたのは午前４時頃のこと。既に薄明るくなっていた頃だった。日曜日も部活はあるので、寝不足のまま向か

うのはマズいと意識したときには眠りに落ちていた。
「陽乃」
「……うん」
「陽乃って。起きんかい」
「え！？」
陽乃が起きると時刻は午前8時になっていた。
「きゃ！　あ、ゴ、ゴメンね！　朝ごはん！」
「大丈夫や。下手クソやけど、オレがパン焼いて軽く目玉焼き作ったから。早よ着替え」
「う、うん」
翔が部屋から出たのを確認してから、陽乃は着替え始める。
「まっずいなぁ……完全寝不足」
そう言って大あくびをする陽乃。と、そのときだ。
「おーい。お前コーヒーと紅茶どっちがええ？」
着替えの最中にもかかわらず、翔がノックもなしに部屋に入ってきたのだ。
「きゃー！　きゃー！　きゃー！　バカ、バカバカバカ！」
「うわあああああ！　忘れてた！　マジごめん！」
「ノックくらいしなさいよー！」
陽乃はすぐ傍にあった本を放り投げた。バン！とドアの閉まる音と本のぶつかる音で二重に物音が響き渡る。
「なんで自分の部屋入るのにノックせなアカンねん！」
もっともな反論をしながら、翔はドア越しに叫んでから降りて行った。
「だからって女子が着替えてる部屋に堂々と入り込んでこないでよ！　もう！」
陽乃はプリプリしながら着替えを終え、下に降りていく。顔を洗い、歯磨きを済ませてからリビングに向かった。
「……。」
その陽乃の顔を見た途端真っ赤になる翔。

「何よ」
「さっき見たことは全部忘れる！　なかったことにしよ！」
「……。」
「な！」
「……わかった」
「さすが陽乃！　さ、ごはん食べよ、ごはん！」
こんがり焼けたトーストの上に乗せられたバターが溶け始めている。
「おいしそう！　意外だね、翔。料理できるんだ？」
「料理言うほどのモンちゃうやろ。焼いて卵割って目玉にしただけや」
そうは言いつつ、褒められるのが嬉しいのか翔ははにかんでいる。
「いただきまーす」
陽乃は両手を合わせて早速目玉焼きから食べた。
「……どないや？」
「ちょっと、しょっぱい？」
「塩入れすぎたか……」
翔が極端に落ち込むので、陽乃は「大丈夫よ！　あたし塩味好きだし」と上手くフォローを入れる。
「ひょっとして、あたしが塩味好きなの知ってた？」
「そうなんか？」
「知らないんだ～。覚えといてよ？」
「はーいよ」
朝食を終えると時刻は午前8時半。
「ギリギリやな。急ごか」
「うん！」
二人は急いで家を出る。一足先に陽乃は走り始めた。
「おい！」
翔が陽乃を呼び止める。
「え？」

「何しとん！　自転車乗って行くで！」
「え？　でも二人乗りはマズいんじゃ」
「そんなん言うとる場合か！　こんな住宅街に朝早よからポリさんもおらへんわ！　ほれ、乗った乗った！」
「う、うん」
陽乃は翔の後ろに跨った。フラフラと覚束ない具合で発車する自転車。
「ちょっと、大丈夫？　転ばないでよ」
「お前がもうちょい軽かったらなぁ」
「なによ！　バカ！　いい、降りる！」
「冗談やがな！　この自転車がボロいから安定性ないだけ！　そない怒るなよ」
翔は笑いながら自転車を漕ぎ始めた。津上橋を目指して土手を上がり、川沿いを走っていく。
「そういえばさぁ」
陽乃が翔に聞いた。
「んー？」
「今日、学祭と留学生お別れ会のときに演奏する曲、配られるんだよね？」
「せやでー。ほんでもって、吹奏楽喫茶の曲もな」
「うわぁ～。いっぱい練習しないと間に合わないねぇ」
「せやでー。頑張るでぇ！」
今日の練習は午前中にマーチング、昼からは学祭の曲の初見合奏になっている。自分たちが演奏したい曲をすべて選ばせてくれた恭一に陽乃たちは感謝しているが、後々考えてみるとそれらの曲はどれもハードルが高い。初見合奏ではおそらくグチャグチャになって曲としての体(てい)をなさないものがほとんどだろうと二人は考えていた。
「あー、夫婦で登校っすかぁ？」
男子の声がするので振り返ると、智志と順平がいた。
「なんやねん！　文句あるかー？」

翔がいたずらっぽく笑うと二人からブーイングが飛ぶ。陽乃も笑いながら自転車を置きに行く翔の後を追った。
「失礼します」
陽乃と翔が恭一に指示を聞きに来ると、由美子と優輝、佳菜の３人がいっぱいの楽譜の封筒を抱えていた。
「うわ！　すっげぇやん！　それ、学祭の？」
「そうよ～。昼休みに配るから、パート分けとかあるところは頑張ってね」
由美子たちは重そうに楽譜を抱えながら職員室を後にする。
「おはようございます！」
「おぉ、おはよう」
そして恭一は陽乃の顔を見るなり思い出したような表情になった。
「朝倉」
「はい」
「実はな。先生の知り合いで一人、トランペットを新しく買った人がいてな」
「そうなんですか？　いいなぁ……」
忘れかけていたのにそうした話をされると、陽乃はどうしても落ち込んでしまう。
「それでだな。今まで使っていたトランペットがもういらなくなったから、吹いてくれる人に譲りたいって言ってるんだ」
「え！？」
陽乃が思わず前のめりの姿勢になる。
「それで、お前島根行っても佐野と一緒に楽団とか入るつもりだろ？」
「は、はい！」
「もちろん、タダってわけには行かないが、安い値段で譲ってくれるって話だし、どうだ？　損はないと思うぞ」
「はい！　一回、家で相談してみます！」
「そうか！　それじゃ、なるべく早く返事をくれ。よし、それじゃ

今日の練習だけども……」
恭一の指示がほとんど右から左状態の陽乃。翔はその陽乃の表情を見て同じように嬉しそうにしていた。
職員室を出るなり翔が第一声、言った。
「良かったな！」
「うん……！」
「また、島根行ってもすぐに一緒に楽器吹けるな！」
「うん！」
君の隣で演奏したい。
それが翔も陽乃も思うこと。それが少しずつ実現へ近づいてきているので、二人とも期待を抑えられずにいるのだった。

第４５９話　ワンランク上で目立とう！

「おはようございます！」
「おはようございます！」
翔の号令と同時にしおりと部員たちが大声で挨拶をした。
「今日も暑いわねー！　みんな、体調大丈夫？」
「はい！」
「午前中３時間は、体育大会向けのマーチング練習最後だからね。でも、部活の友達とかに見られたら意味ないから、なんとか借りられた体育館で練習……。暑いかもしれないけど、集中して行こう！」
「はい！」
「それじゃ、頭の形！」
「はい！」
「ドラメ、しっかりね！」
「はい！」
結局、ダブルリードのメンバーたちはドラムメジャーとパーカッションとして本番に出演することになった。正ドラムメジャーは誠、副ドラムメジャーは健之佑になった。
初めのフリーの部分は思い思いに演奏する。一見バラバラに見える位置だが、誠が指示をする１５秒間で自分たちの位置に移動しているのだ。
カンカンカン！と音がして誠の指示が入る。
「ワン、トゥ、スリ、フォ！」
フルート・ピッコロの軽やかな音色が響き、トランペットのマウスピースによる可愛らしいけど少しマヌケな音が響き渡る。続いてスーザ・ユーフォニウム・バリサク・バスクラによるメロディ。ここでは低音８人が前列に出てきてステップを踏みながら演奏をする。慣れない動きもあるので、スーザの音が若干揺れるものの、気にな

るほどではない。トロンボーンの音色が聞こえると、同じステップをトロンボーンが踏む。
　全員で演奏する箇所になると、一斉に前に出る。
「揃ってなーい！　こらー！　フルート、エスクラー！　揃える、揃える！」
　続いてトランペットの列、美咲と流が遅れ始めた。
「ちょっとー！　トランペットとかが遅れると目立つの！　しっかりカウントして、外側回る人は大股って言ったでしょ！」
　曲が変わって口笛吹いて働こう。ここでは佳菜、かのこ、菘、愛実がソロを交代で吹く。
「井上さーん！　あなた、小柄だからもっと大き〜く回って！　しっかり着地すれば音揺れないから！　前田さん動くの遅い！　毛利さんもっと大げさにー！　こら、加藤さん！　動くの忘れない！」
　厳しい指示が次々と飛んでくる。演奏中でも遠慮なく指示を飛ばすのがしおりのやり方だ。
　ホルンのメロディの後に、トランペットとトロンボーンのメロディで円形になってサックスのさゆり、夏樹、はるか、友美の４人が中央に行く。次の星に願いをの時のソリのためだ。
「ちょっとー！　ここは全員ベルアップ！　誰からも見える位置なんだから、ベル下げないで！　こらー！　富士原徹―！　聞こえてる！？　ベルー！」
　名指しで呼ばれた徹が慌ててベルを上げる。
「ピットのティンパニ誰！？　冨岡くんでしょ？　慣れてるんだからもっとしっかり鳴らして！」
「はい！」
「タンバリーン！　志賀くんもっと派手に！」
「はい！」
　そして曲が静まり、星に願いをに入る。夏樹が先導するソリだ。
しかし、既に緊張のあまり夏樹の音色が震えていた。
「ビビラートはいりません！　ビヴラートちょうだーい！」

続く勇のソロは実に勇壮だった。夏樹との音色のギャップが明らかにわかった。
「ちょっとー！　音がバテてるのわかる！　そんなんじゃあ、定演のマーチングできないわよ！　もっと長いんだからねー！」
『星に願いを』を終えたところでしおりが一旦止める。
「ちょっとえーと……どうしよっかな。いっか。休憩！」
「え？」
全員が突然の休憩宣言に唖然とする。
「その休憩の間にチューバ３人、パーカスのスネア、タムタム、ベードラ、バスクラ、バリサク来てくれる～？　あたしのとこまで！」
「は、はい！」
拓真たちは楽器を置いて小走りでしおりのところに向かう。
「他の人たちは休憩ね～！」
「はい！」
それぞれが窓際など涼しい場所に移動する。
「なぁ」
慎也が呟く。
「何？」
春樹がポカリスエットを飲み干してから答えた。
「拓あんたち、何呼ばれたんだろ。まさか、怒られてるとか？」
「いや。それはないんじゃない？　だって、メロディとかで怒られるなら演奏中に怒るだろうし。それに誰かやる気ないとかそういう態度してるときって、三田嶋さん全員に怒るじゃん。そんな感じじゃないし」
「だったら呼ばれた理由が今ひとつわかんねぇ……」
慎也たちは不安そうに拓真たちが呼ばれて行った二階席を見つめていた。しばらくすると、駿や智志、拓真の「おぉー！」という低いけれども嬉しそうな驚きの声が上がった。
「これ、あたしたちだけですか！？」
恵梨の歓声。

「そうよ！　まぁ、こんな言い方はあれだけどあなたたち……」
肝心の部分で翔がバカ笑いをしたので慎也たちには聞こえなかった。
「ぶちょー！　うるせー！」
「あー!?　なんやと!?」
「声のトーン落とせ！　バァーカ！」
「うるさいわアーホ！」
くだらない言い合いをしている間に、拓真たちが戻ってくる足音がした。
「おっ、戻って……」
慎也たちの言葉がそこで途切れる。
「ど、どう？」
拓真が恥ずかしそうに慎也に聞いた。
「え！　な、なんだよソレ！　え！　いや、どうって……」
慎也が驚いて拓真の後ろに回り、それをマジマジと見つめる。
「すげぇ……！　カッコいい！　俺も欲しいし、それ！」
春樹が慎也の隣で同じく羨ましそうに見つめる。時間は少し戻って拓真たちが上へ上がった直後のことだ。
拓真たちが上がると、そこには亜紀と沙知の母がいた。
「こんにちは！」
「こんにちは～」
二人の母たちはそういうと拓真に手招きした。
「話には聞いてたけど、本堂くんってホント、大柄ねぇ。これでも小さいかも」
そう言って亜紀の母が取り出したもの。それは、七海高校のマーチングユニフォームに色を合わせた燕尾服だった。
「す、すげぇ！」
拓真が歓声を上げる。他の部員たちも目の色が輝いていた。
「低音とパーカッションは、まぁ目立つ部分が他のパートより少ないじゃない？　だから、前に出たりしたときに少しでもカッコ良く

見えるように、この衣装をお母さん方に準備していただいたの！」
「すげぇ！　すげーえ！」
駿や智志、好美、美里、恵梨、あずさ。全員が頬を赤らめ、どのサイズが合うかを試着し始めていた。そして各々サイズを合わせ終えるとお披露目のために全員の場所に戻ってきたのだ。
「いいなぁ～。あたしも低音っぽいところあるのに」
菘がかのこと友美の衣装を見て羨ましそうにその燕尾服を見つめていた。
「エへへ！　嬉しいね、友美」
「うん！　なんかやる気出てきた！」
それは拓真たちも同じようで、早く練習したくて仕方がないようだ。
「よーし！　それじゃ休憩して衣装合わせしてやる気出てきただろうから、もう1回頭から行くよ！」
「はい！」
それぞれが初めの位置に戻り、再びクラシックスレビューの音が体育館から響き始める。どれだけ暑くても、新しい衣装をまとった拓真たち低音パートと美里たちパーカッションパートのやる気がそがれることはなかった。

第４６０話　意外な問題

「それでは、学祭の演奏曲順は黒板に書いてあるとおりです。間違いのないように注意してください」

黒板に書かれている内容を部員たちはしっかりとメモしていく。

既に吹奏楽喫茶の曲順は決まっていたので、この学祭の曲順が決まればもうすべて決まったことになる。

【１０月１０日　午前１０時１５分～１１時】

１：クラウド・バースト

２：千と千尋の神隠し　ハイライト

３：青春の輝き

４：Ｈａｐｐｉｎｅｓｓ

５：ディスコパーティー？

アンコール：テキーラ

【１０月１１日　午後２時～２時４５分】

１：をどり唄

２：タイタニック・メドレー

３：愛唄

４：聖者の行進

５：ジャパニーズグラフィティ１１～刑事ドラマメドレー～

アンコール：蕾

【１０月１２日　姉妹校締結式　午前１０時３０分】

・タンツィ～３つのロシア舞曲～

【１０月１２日　音楽祭】
１：交響曲「モンタニャールの詩」
２：『大地讃称』、『旅立ちの日に』
３：ルパン３世のテーマ
４：山口百恵メドレー

「ほぇ～……思ってたけど、こりゃ大変だわぁ」
由美子が自分で黒板に書いた内容を見てため息を漏らした。
「それに、吹奏楽喫茶の練習もしなきゃいけないし」
沙希がフルフルと首を左右に振る。
「こりゃ気ぃ抜いてらんないですね」
佳菜がやる気マンマンという様子でうなずいている。
「あの……」
すると静かな声が聞こえた。意外にもその声は駿だった。
「どないしたん！　えらい控えめな声やん」
翔が笑いながら駿のほうを見る。おのずと部員の視線は駿に集中した。
「したいって手ぇ挙げたクセにすみませんって感じなんですけど……」
「どないしたん？　何でも言いや」
「俺、タイタニックの映画見たことないんです……」
それっきり、沈黙が起きて誰も何も言わなくなってしまった。
「えーと……マジで！？」
翔が驚いて前のめりになる。
「ちょお待って！　タイタニックって……１９９７年の映画やろ！？　えー、オレが今１８歳なってるから、え～いま２００７年でそっから１８引いたら……あぁ～西暦で言うたら何年や！？」
「落ち着きなさいよ～。１９８９年でしょ？」
陽乃が呆れながらツッコミを入れる。
「あぁ！　せや！　ほんでやな、１９９７年やったらオレは８歳な

わけで！　駿たちは7歳で、夏樹くんたち6歳やろ……。あぁ、せやなぁ。オレも映画館で観た覚えはないわ。せやけど、テレビで何回もやってたやん！」

「すんません、俺洋画興味ないんで……」

「なんでも興味持とうやぁ！」

翔が頭を抱えた。

「いいじゃないの、別に見てないくらい。あたしもちゃんとした話知らないし」

「お前！　演奏するのにその曲のシーンとか知らんかったらどないすんねん！」

「どないすんねんって……想像？」

「アホ！　想像で実際にある映画の曲演奏しよったらとんでもないことになる！　あぁ～そうやったんか……。ん？　ちょっと待って。タイタニック見たことない人、どんくらいおるん？」

すると驚くべきことに3年は美里、絵美、翔以外の全員。2年生ではるか、光瑠、誠、勇、亜紀、智志以外の全員、1年生は綾音、周磨、晃以外の全員であった。

「ちょお待てやぁ……これこそ沈没やろ。こんなんで演奏するつもりやったんか……」

ガクリと肩を落とす翔。

「それじゃあ逆に聞くけど、かける」

陽乃が手を挙げて言った。

「何や？」

「翔は山口百恵さんの歌、どれくらい知ってるの？」

「え！？」

翔はしばらく空を見つめ、突然言った。

「アホにしなーいでよぉ～」

「それだけかよ！　しかもアホじゃねーし！」

ドッと笑いが起きる。

「ちゃうちゃう！　笑てる場合ちゃうねん！　ヤバいねんて！　映

画も知らん、歌も知らんでどないして演奏できんねん！　ヤバないか！？」

「そうかなぁ？　あたしそんな深刻に考えてなかったけど……」

由美子が首を傾げる。

「なんて言うんかなぁ……。やっぱり、ちゃんとバックボーンがある感じ？　ちゃんと、この曲のこの部分はこういうシーンで……とかいうのがわかってないと、もう６０人の部活やねんから、バラバラの演奏になってまうで？」

翔の言葉に全員が納得し始める。しかし、美里が問題を指摘した。

「だけど、タイタニック観る時間なんてないわよ？」

「そう？　だって映画でしょ？」

陽乃が事も無げに言った。たいてい、洋画でも邦画でも２時間程度で映画というものはクライマックスを迎え、終わるようになっている。最近こそ続編などがあるので、実質は２時間を超える映画もあるのだが、それを別にするとやはり２時間程度がメジャーだ。

「いやいや、違うのよ陽ちゃん。タイタニックはね、４時間くらいあるの」

「４時間！？」

複数の声が上がった。まさか、４時間もあるとは思っていなかったのだ。

「だってさぁ、メドレーは１０分くらいでしょ？」

「そう。４時間あるうちの重要な部分を抜粋したのが、メドレーや」

「じゃあ、その曲が流れる部分だけ観れば？」

沙希がこれは良い提案だ、とでも言いたげに両手を合わせて言った。

「そんなん、めちゃブツ切れになるで」

「そうなの？　それちょっとマズいなぁ……」

そして沈黙が起きてしまう。と、その時。恭一の足音が聞こえてきたのだ。

「あ、先生来るよ」

「頼んでみませんか？　映画観る時間ください って」
駿が翔に言う。しかし、４時間も時間を取っていたのでは初見練習などとてもではないが、できるものではない。翔も困惑の表情を浮かべる。
「お？　どうした？」
恭一が全員の気難しい表情を見て驚いた声を上げる。
「あ……すいません。ちょっと、問題が」
「問題？　どうした」
翔の言葉に恭一は指揮台に用意された椅子に座る。部員たちも各自の席に着いた。それから、翔が丁寧に事の経緯を説明する。恭一は小さくうなずきながらすべてを聞き終えると、嬉しそうに笑った。
「良かった。ちょうど、先生も君らにタイタニックと千と千尋の神隠し、観てほしくてＤＶＤ持ってきたところだったんだよ」
「ホンマですかぁ！？」
「飛ばし飛ばしになるかもしれないが、どうだ？　今から１時間弱でなんとか大まかな流れ掴んでみないか？」
「掴みたいです！」
全員が声を上げる。
「よし！　それじゃあ佐野、ＤＶＤセッティングしてくれ」
「はい！」
翔がまずセッティングしたのは『タイタニック』のＤＶＤだ。
「へぇ～……」
春樹が目を輝かせる。
「１９００年代の初めだろ？　これ」
慎也が立派な船を見て驚きの声を上げた。
「不沈の船とまで言われてたそうよ」
美里が興味深そうに映像を見つめながら慎也にそう言った。豪華絢爛とはこのようなことを言うのだろう。
「いいなぁ～……あたしもこんな船で旅してみたい」
みゆきと光瑠が羨望の眼差しで映画の中の船を見つめる。そして、

主人公とヒロインの恋愛シーンに差し掛かった。
「……身分の差とか関係ないのね」
絵美が改めて見直してから、そう感じた。ふと、春樹と目が合う。
そこからしばらく映画に夢中になる部員たち。そして氷山に衝突し、船が次第に緊迫した状況へ陥っていく。さらに、航海士が乗客に向かって発砲するシーンが映った。
「きゃ！」
女子数人が悲鳴を上げる。混乱を極めるタイタニック号。やがて停電し、船が真っ二つに折れて沈没していった。
「……。」
そして、訪れる主人公とヒロインとの別れ。
「……。」
いつの間にか部員の大多数が涙を浮かべていた。映画が終わる頃には男子部員も女子部員も鼻をすすったり、ハンカチで涙を拭っていた。
「やべーな、この映画やっぱ」
智志が鼻を真っ赤にしている。
「やだぁ、さとっぺ鼻がトナカイみたい！」
愛実が大笑いする。つられて沙知や雛乃たちも笑う。
「はいはい！　とりあえず、今日はタイタニック観たことだし、タイタニックから初見合奏するか？」
「はい！」
恭一が感慨深そうに言った。
「この映画を観て先生が感じたのはな。当たり前に思えることでも、次の日にはその当たり前が保証されるとは限らないってことだ」
「？」
いまいち意味がわからなかったようで、部員たちの頭の上にはクエスチョンマークが浮かんでいる。
「とりあえず、いまできること……勉強にしろ、部活にしろ、遊びにしろ……それに君らなら、恋愛とかもかな？」

翔がプッと笑った。
「なんで笑う?」
恭一もそう言いつつ笑った。
「いえ。なんか、なんでやろ。笑ってしまいました」
そう言いながらも、翔の目が少し寂しげに見えたのは恭一と陽乃だけではなかった。当たり前と思えることが、次の日には当たり前でなくなったことをこの中で一番知っているのは、翔なのだから。
「とにかく、一日一日を、大切に」
「……。」
「今日できることは、全力で」
「……。」
「後悔のない日を、過ごしてください」
「はい!」
「よーし! それじゃ、合奏!」
「はい!」
楽器の準備を始める部員たち。春樹が一瞬、その手を止めた。そして、絵美を見やる。
「あ……」
ほぼ同時に絵美も春樹のほうを見ていた。

今日、一緒に帰れる?

絵美の目がそう訴えていることに春樹はすぐに気づいた。

もちろん。

そう、答えておいた。

第４６１話　思って吹けばいい

「くそっ……」

初見合奏が終わってからしばらく経っているにも関わらず、音楽室からは部員たちの喧騒に混じって複数の楽器の音が響いていた。そのうちのひとつが、ホルンだ。

「あ～……高音出ねぇ」

順平が悔しそうに右脚を動かしている。『タイタニックメドレー』の冒頭は、ホルンにソロがあるのだが、途中で高音が出てくる。その部分がスムーズに音を出せないのだ。そのため、必死になって練習するものの、音がかすれるか外れるかのどっちかで、参考音源のような綺麗な音がまったく出ないのである。

もう一度、ｉＰｏｄを再生して集中してその音源に合わせて演奏するものの、結局高音部分になると「スカァッ」と情けない音がして息だけが抜けていく。

「あぁ～……もう！」

次第にイライラが募り、順平は思わず楽譜を乱暴に閉じてしまった。見ているだけで失敗しそうで、楽譜を見るのも嫌になってきたのだ。

そもそも、今回の文化祭の選曲自体、順平にとってプレッシャーが非常に掛かっていた。他のパートはいずれも3年生がおり、ダブルリードには3年生がいないものの、沙希と由美子がフォローしてくれている。クラリネットには絵美が、サックスには翔が、トランペットには陽乃が、トロンボーンには慎也が。そしてユーフォニウムには春樹、チューバには拓真。パーカッションには美里。直接的な先輩がいない弦バスとダブルリードも、間接的であれ指導をしてくれる先輩がいる。

しかし、ホルンにはいない。それが順平にとってやはりプレッシャーであった。ソロも今回、割り振るつもりでいたのだが、1年生たちは皆、遠慮してしまっているようで、基本的に順平に吹いて欲しいというスタンスだった。

「……もう1回だ」

先輩がいないからできない。そんな風には思われたくなかった。2年生で一人だけパートリーダーを任されている以上、それを放棄するわけにはいかない。一応はリーダーであり、先輩である。1年生を幻滅させるようなことはできなかった。それだけ、順平は責任感の強い子でもある。

目を閉じ、イメージを膨らませる。しかし、どれだけイメージを膨らませても結果は同じだった。ジレンマのような状態。音が外れ、意識するがそれがかえって緊張をもたらし、音を外す。ある意味、行き詰まりのような状況だった。

ふと気づけば、音楽室に残っているのは夏樹、順平、由美子、絵美、優輝、春樹、翔、光瑠だけになっていた。

「……。」

皆それぞれが自分のパートの練習で必死になっており、他の人のことは気に掛けていられないようだ。

「続きするか」

15分ほど同じ場所を練習するが、やはり高音が外れてしまう。順平はため息を漏らし、楽器を置いて休憩を取ることにした。

七海高校では完全下校時間などは特に設定されていない。基本的に市内から通う子たちばかりなので、市外から通うのは体育科の子たちくらいのもの。実際、吹奏楽部では通学時間は最長でも25分である。

「……。」

ボケッと外を眺めていると、両方から声が聞こえた。

「おっ！　どないしてん。元気ないやんけ！」

「うーちゃんらしくない！」

春樹と翔だった。
「先輩……」
「練習、飽きたか？」
フルフルと首を左右に振る順平。
「じゃあ、なんでそんな浮かない顔してんだよ」
春樹が心配そうに尋ねた。順平は口をしばらくモゴモゴさせていたが、小声で言った。
「上手く吹けないから、自信なくなりました……」
「……。」
スランプというヤツなのか、と春樹は考えた。自分はあまりそういう風に深刻に考えないタイプなので、順平くらい繊細だとそれだけで練習する気が削がれるのだと思うと、複雑な気持ちになった。
「時に、春やん」
突然翔が話し始めた。
「なんだよ」
「今日の帰り、はしもっちゃんとイチャつくつもりやろ」
「バ、バカ！」
「あ～？　否定せぇへんねや。ってことは、マジやな」
二人のよくわからない話に、順平は苦笑いしている。
「どうせ、あれだろ？　翔だってタイタニックの例のソロ吹くとこでヤラスィ～こと考えてるんだろ？」
春樹がニヤニヤしながら言うと、翔がへへッと笑った。
「なんでわかんねん？」
「もう3年の付き合いになるからね～」
順平はいまひとつ意味が解せず、遠慮気味に翔に聞いた。
「あの……どういうこと考えてるんですか？」
目を丸くし、それから二人が同時に笑い出した。何がおかしいのかわからない順平は戸惑っている。
「アハハ！　あ、ゴメンゴメン。あんな、そない大したことちゃうねん」

それから翔はそっと順平に耳打ちした。それを聞いて順平が少し赤くなったが、納得の行く内容だったからか、嬉しそうにうなずいていた。

再び音楽室に戻る順平。その頃には夏樹たちも片づけを始めていた。

「ねぇ」

光瑠が順平の横に可愛らしく駆け寄ってきて聞いた。

「まだ練習する？」

その愛くるしさにドキドキしつつ、順平は小さくうなずいた。

「最後にもう1回だけ、海の賛歌練習するよ。それ終わったら、帰ろう」

「うん！」

そう言うと光瑠はまた愛くるしい感じで自分の座っていた席に戻る。その背中を見つめ、順平は想像を膨らませる。

タイタニックで有名なシーンのひとつ。船の先端部分で、ジャックとローズが手を取り合い、まるで飛行しているかのような姿で風を受けるあのシーン。自分がジャックで、光瑠がローズ。彼女の艶やかな黒髪が潮風になびき、夕陽に照らされながらお互い、少し恥ずかしそうに、けれどそれ以上に嬉しそうに笑う。

そんなシーンを想像しながら、ｉＰｏｄで再生した音源に合わせて、ソロを吹き始めた。

「……！」

優輝が真っ先に振り返った。もちろん、壁に向かって演奏し、ｉＰｏｄまでつけている順平はそのことに気づいていない。

深みのある音。思わず夏樹、由美子、絵美も片付けの手を止めた。

「……おい」

春樹がドア越しにその音を翔と聞いていた。

「スゲェ……やんな」

鳥肌の立つ音というのを間近で聴くことは少ない。しかし、いま

まさに順平が吹いている音は、「その音」だった。
順平自身、自分の体を伝って聞こえてくる音が自分のものではないような気さえしていた。海の賛歌はどこか儚げで優しく、それでいて寂しげで。いろんな感情が混ざっているこの曲は、そう簡単に演奏できるものではない。しかし、今の順平はそれらの感情すべてを体現するように完全に身を任せて演奏していた。
高音部分に差し掛かると同時に、音楽室内にいた全員が身を震わせた。音楽室が一瞬で演奏会場に変わったような感覚になり、順平はスポットライトを浴びてソロを吹いている。誰一人音を出さず、声を出さず彼の演奏を聴いていた。
そして、渾身の演奏を終えると同時に順平は大きくため息を漏らした。
「ふぅ……」
イヤホンを外すと同時に拍手が聞こえてきたので順平が驚いて振り返ると、残っていた全員が拍手をしていたのだ。
「え！？」
顔を真っ赤にする順平。絵美が絶賛した。
「スゴーい！　どうしたの！？　急に！　ビックリしちゃった！」
「え？　え……いや……」
「ほんとですよ！　俺、なんか泣きそうになりました！」
夏樹が興奮した様子で話してる。順平は戸惑いつつ「ま、まぐれです」とハニかみながら言った。
「まぐれぇ？　絶対そんなワケないと思うけどなぁ……」
優輝が不思議そうに言ったが、順平は偶然の一点張り。
「どない思う？」
翔が笑いながら聞く。
「言うまでもないんじゃない？」
春樹がクスクス笑いながら答えた。
「後で尋問の刑やな」
翔が小悪魔のような笑みを浮かべた。

「その前に」
翔のその小悪魔のような笑みが春樹に向けられた。
「お前も頑張れよ」
「……うん」
春樹は恥ずかしそうに小さくうなずいてから、絵美の方を見るのだった。

第４６２話　買い物帰りの目撃

「どうする？　コーンクリームかカニクリーム、どっちにする？」
家の近所のスーパーで陽乃は買い物カゴ片手に夏樹にそう聞いた。
しかし、既にお菓子売り場に移動していてまったく夏樹は話を聞いていない。
「ちょっと！　夏樹！　どっちがいい！？」
「俺どっちでもいいよ～。姉ちゃんの好きなほうにして」
「ったくもう」
陽乃はブツブツ文句を言いながら、とりあえず両方１パックずつ購入した。この２日間、由利が珍しく体調を崩したので、食事などはスーパーで調理済みのものを購入して帰宅している。もうすぐ熱も下がりそうなので、あと１日ほどの辛抱だろう。
その後、惣菜コーナーでマカロニサラダを取り、てきとうな果物を選んでからレジに並ぶ陽乃。
「ちょっと、夏樹。買うなら早くしてよ？　もうレジ並んでるから」
「うーん」
そう返事はするものの、なかなか選びきれない様子の夏樹。意外と優柔不断なのかもしれない、と陽乃はため息を漏らした。
午後７時３０分。会社帰りの一人暮らしらしいサラリーマンや、パート帰りのおばさんなどでレジはだいぶ混雑していた。
陽乃がふと目の前を見ると、由利とさほど年齢の変わらない女性と、夏樹より少し背が高いくらいのＴシャツに短パン姿の少年が並んでいた。
「お願い！　俺、絶対合格したいんだ」
合格、というのだからおそらく受験の話だろう。雰囲気から察すると、高校受験である可能性が高い。

「だけど、塾って……今までそんな環境で勉強したことないじゃない。アンタにそんなの、続けられる？」

何やら深刻そうな話になってきたので、陽乃は聞こえないフリをしようと思っていた。すると、ちょうど良いタイミングで夏樹が戻ってきた。

「姉ちゃん、決めた！　２つ買っていい？」

「ふたつ～？　なんで１つにできないのよ」

陽乃は呆れてしまったが、夏樹にこれらのどちらかを選べと言えばあと１５分はかかることが目に見えていたので、２つ買わせることにした。

レジに並ぶ列に夏樹が合流すると同時だった。

「俺、吹奏楽部にどうしても入りたいんだもん！」

吹奏楽部、という言葉に思わず反応する夏樹と陽乃。いけないとわかっているものの、女性と少年の会話に耳をそばだててしまう。

「そうは言っても……最近、倍率高いじゃないの。落ちたら別の高校よ？　そのときはどうするの？　吹奏楽部、入るの？」

すると、少年は真剣な眼差しで言った。

「俺、落ちるつもりはない」

陽乃と夏樹は驚いて顔を合わせる。彼はかなり強気な性格のようだ。

「じゃあ、今からかなり頑張らないと無理よ？　それはわかってる？」

「わかってる。俺、頑張るから」

「……わかった。しっかりやるのよ」

「うん！」

陽乃と夏樹は微笑ましい会話に思わず笑顔になった。どこであれ、吹奏楽部に入りたいと言ってくれる人を見つけると嬉しくなるものだ。

レジが女性と少年の番になる。女性が言った。

「そういえば、何の楽器を吹きたいの？」

「俺がやりたいのは、吹く楽器じゃないんだ。叩く楽器。打楽器！」
少年が途端に笑顔になる。女性も驚いていた。
「へぇ～！　吹奏楽って吹くだけじゃないのね」
「うん！　俺、ティンパニやってみたい。こないだの、終戦記念日式典のとき！　あの時、ティンパニ叩いてた人、めちゃくちゃカッコ良かったから……」
そこで陽乃と夏樹は再び顔を見合わせた。終戦記念日式典に出た吹奏楽部は、もちろんひとつしかない。そして、ティンパニを叩いていたのは一人だけだ。
さらにテンションが上がってきた少年は続ける。
「それに、ピッコロの人もめちゃくちゃカッコ良かった」
おそらく、この吹奏楽部とは七海高校のことだ。そして、ティンパニは洋之、ピッコロは佳菜である。
「じゃあ、頑張って勉強しないとね」
「うん！」
２人はその後も何かを話しているようだったが、陽乃たちからは離れたので内容は聞き取れなかった。いずれにしても、七海高校吹奏楽部の知名度などが上がっていることを、夏樹と陽乃はヒシヒシと感じることとなった。
「そっか～、もう来年のこと考えないといけない時期なんだね」
陽乃がビニール袋片手に呟いた。
「姉ちゃんも、もう大学考えてるんでしょ？」
「一応ね」
「佐野先輩と島根大学かぁ。俺、夏休みとか遊びに行っていい？」
「別にいいけど、多分コンクールの練習とかで夏休みはそれどころじゃないんじゃない？」
「あ～……じゃあ、姉ちゃんと佐野先輩が帰ってきて、俺たちにレッスンしてくれればいいんだ！」
「それもありかもね」
陽乃と夏樹はいろんなことを話しながらつくし野川沿いを歩いて

いく。
「待って」
陽乃が夏樹を止めた。
「何？」
「エミリンと春やんがいる」
「ホント？」
二人でおそるおそる土手の下を覗き込むと、ちょうど陽乃と夏樹の家に向かうために降りる階段に、絵美と春樹が座っているのだ。この状態では、遠回りするしか帰宅の方法がない。
「どうする？」
「遠回りするっていう方法しかないけど……ちょっと、気になるよねあの二人」
春樹の受験のために距離を置くと決めた二人。しかし、今日の合奏での恭一の話などを聞いて、どうも気持ちが揺らいでいるように見えた。
「見とく？」
夏樹が聞く。
「そうね。悪い気はするけど……」
そう言って陽乃は階段の一番土手に近い場所に座り込んだ。夏樹が隣に座る。
「……。」
「……。」
まったく会話をしない絵美と春樹。気まずい沈黙が続く。次第に陽乃と夏樹も緊張してきていた。日が傾き始めた頃、ようやく春樹が喋り始めた。
「……俺たち、別れては、ない、よな？」
緊張で声が上ずっている。絵美が間髪いれずにうなずいた。その答えに春樹が笑みを浮かべる。
「良かった……」
春樹が大きくため息を漏らした。

「私……春くんが私を嫌いになっても、私が春くんを嫌いになるまでは……別れるつもりなんてないよ」
「うん……」
春樹が優しい笑顔でうなずく。
「俺さ。余裕なかったよな」
「え？」
「確かに、受験は大事だと思うけど……。なんていうか、えと……」
言葉に詰まる春樹。春樹の中でいろんなことが頭を巡る。最終的に、なんとか考えがまとまったので、言った。
「ウチ、父さん……いないじゃん？」
「うん……」
「当たり前だったんだよな。いないのが。記憶にないし」
「うん……」
「でも、うちの母さんにしてみりゃ、いるのが当たり前だった好きな人が突然姿消すなんて、思わないじゃん。その日、笑顔で見送った人がさ」
「……そうだね」
春樹は続ける。次に浮かんだのは翔のことだった。
「翔もそうだと思う。前日まで……あの地震があるまでは、お兄さんやお姉さん、お母さん、お父さんと食事に行ってたんだろ。それなのに……」
「うん……」
それっきり、5分ほど二人ともしゃべらなくなってしまった。次に喋り始めたのはやはり春樹だった。
「受験が大事ってのはわかってるけど……それ以上に、大切な人と一緒にいられるっていうことのほうが、ずっと大事って……わかった気がして」
絵美がハッと顔を上げる。
「俺さ。受験で余裕とかなくなるかも。そん時でも、俺をこう……支えてくれたりするかな？」

絵美が満面の笑みでうなずいて言った。
「当たり前じゃない！」
「……やった」
春樹がそう言って笑顔を浮かべる。
「よし！　そろそろ暗くなるし、帰ろう」
「うん」
「送ってく」
「ありがとー！」
二人はそう言って手を繋いで土手を離れていった。
「解決、かな」
夏樹が少し顔を赤らめながら言った。
「そうね。いやぁ、しかし良かった良かった」
「姉ちゃん、オバサンくせぇ」
「何よ！　うるさいわね。それよりアンタはどうなの？」
「何が」
「好きな人の一人くらい、いるんじゃないの？」
「いないよ」
そう言って先に走り出す夏樹。
「何よ～、怪しいわね！　ホントはいるんでしょ？」
「いねーって言ってるじゃん！　姉ちゃんしつこい！」
きょうだいは大声を上げて走りながら、自宅へと向かって行った。
「ねぇ」
絵美が春樹を呼び止めた。
「何？」
「もしも……私たちがさ、タイタニックみたいな船とかに乗って、事故にあったら、春樹ならどうする？」
春樹が即答した。
「二人とも助かる方法考えて、絶対生きて帰る！」
その答えに、絵美は真っ赤になりながら嬉しそうに春樹にしがみつくのだった。

第463話　父への交渉

「どう？　熱はだいぶ楽になった？」
陽乃は由利の隣で新しい冷えピタを用意しながら聞く。
「ありがと。今は37度5分で、微熱になったわ」
今朝の時点ではまだ38度台だったことを考えると、随分体調も落ち着いてきたのだろう。
「ゴメンね。迷惑かけちゃって」
「何言ってんの。たまにはゆっくり寝るのもいいじゃない。それに夏樹もおばあちゃんのお手伝い、よくしてくれるし」
由利がふと目をやると、夏樹が食器を拭くのを知恵子の隣で手伝っていた。数年前までは手のかかる息子だった夏樹が、あんな風に積極的に家事を手伝ってくれること自体、由利にとっては感動できるものであった。
「それより、陽乃」
「ん？」
「今日、話すんでしょう？」
「……うん」
陽乃は緊張した様子でうなずいた。
「大丈夫。お父さんだって、真剣な思いを伝えれば、きっと納得してくれるから」
「うん。妥協はしないつもり」
陽乃は笑顔でそう言った。

2時間後。
「ただいま」
祥夫が帰宅すると、リビングには陽乃だけがいた。
「おかえりなさい、お父さん」

「なんだ。陽乃だけか？」
祥夫はキョロキョロとリビングを見渡す。
「夏樹は上で宿題やってる。お母さんはまだ微熱あるから寝てて、おばあちゃんはお風呂」
「そうか……」
「おばあちゃんお風呂入ってるし、先にご飯食べるでしょ？」
「あぁ。頼む」
陽乃はすぐに立ち上がると、テキパキと夕食のコロッケを温めてサラダなどを並べていく。
「どうぞ」
「ありがとう」
食卓には惣菜ではあるものの、美味しそうな夕食が並んでいる。
祥夫はカニクリームコロッケから食べ始めた。
陽乃はその向かいで楽譜を広げて何やら一所懸命書いている。
「それは、いつ演奏する楽譜なんだ？」
「今度の音楽祭。結構長い曲だから、いろいろと指示も多くて」
「ほう……。音楽祭は、確か」
「１０月の１２日、金曜日。平日だけどね」
「そうか……」
祥夫はカレンダーに目をやった。それからまたすぐに、食事に戻る。
「ごちそうさま」
祥夫はそう言って静かに箸をおいた。それから陽乃はすぐ手際よく食器を片付けていく。その間、祥夫は新聞を読みながら、たまに陽乃のほうをチラチラと見る。陽乃はその視線に気づくこともなく、淡々と食器を洗っていく。
食器洗いを終えてから、陽乃が静かに祥夫の向かいの席に座った。
「お父さん」
「ん？」
新聞を読むのをやめ、陽乃のほうを見ると彼女は真剣な眼差しで

祥夫を見ていた。
「どうした」
「……。」
「言いにくいことか？」
「……ううん」
「なら、言えばいい」
そうは言うものの、やはり緊張はしてしまう。何度か深呼吸をしてから、陽乃は静かに言った。
「お願いがあるの」
「お願い？」
祥夫は娘に面と向かってお願い事をされるのは、本当に久しぶりであることを思い出した。最後は確か、この吹奏楽部に入りたいと真剣に思いをぶつけてきた時くらいだったように、彼は記憶していた。
「楽器を……買ってください」
「……。」
突然、陽乃が立ち上がった。
「お願いします！　楽器買ってくださいなんて……こんな簡単に言うことじゃないのはわかってます！　でもあたし、高校を卒業して大学生になっても、大学を卒業して社会人になっても、楽器を、吹奏楽を続けたいんです！　だから、お願いします！」
祥夫は呆然としたまま、陽乃を見つめている。陽乃は続けた。
「お小遣い、今月からいりません！　お年玉もいいです！　だから、楽器を買ってください！」
「……いくら、するんだ？」
ハッと陽乃が顔を上げた。恭一から聞いた、譲ってもらえる楽器の値段。
「……１０万円です」
「……。」
「東先生のお知り合いから、使わなくなった楽器だけど、まだ綺麗

で、元は２４万円した楽器を、１０万円で譲っていただけるから…
…」
「……。」
陽乃はそれを言ってからさらに慌てるように続けた。
「もちろん、将来仕事始めたら、きちんと返すから！　だからお願
いします！」
「陽乃」
陽乃は名前を呼ばれてもお辞儀したまま、顔を上げようとしない。
「陽乃。顔を上げなさい」
「……はい」
陽乃がそっと顔を上げると同時に祥夫が言った。
「買いなさい」
陽乃が呆然とした様子で祥夫を見つめる。彼は続けた。
「返さなくていい。だから、トランペット、買いなさい」
「……。」
陽乃は目の前にいる父の言葉が本当にいま、自分に聞こえている
ものなのかすら、違和感を覚えて信じられなかった。
「それより、いいのか？」
「え？」
「人からの譲られたものでもいいのか？　自分の、本当の意味での
自分の楽器を買わなくていいのか？」
その言葉を聞いた瞬間、陽乃の目から大粒の涙がボロボロとこぼ
れ始めた。
「お、おい！　どうした？」
「いいの……」
陽乃は繰り返し言った。
「いいの……あたし、どんな楽器でも、自分のなら、いいの……」
「……そうか」
祥夫が微笑みながら言う。
「陽乃は、遠慮してたんじゃないか？」

「え？」
それから祥夫は続ける。昔から陽乃は何かと遠慮がちな子で、自分の欲求の前にすぐ人のことを考えて、自分のことは言い出せないままであることが多かったという。弟の夏樹のことを考えたり、両親のことを考えたり。
「……そんなことないと思うけど」
「お父さんはわかってるんだからな」
祥夫はそう言っておかしそうに笑った。陽乃もつられて笑う。
「お父さん」
「ん？」
「ありがとう」
「……どういたしまして」

お風呂から上がり、陽乃はすぐに翔に電話した。
「もしもし？　翔」
「おう！　どないやった？」
「それがね……」
「うん……」
「買ってもらえるの！」
「……。」
翔が黙り込んでしまった。
「もしもし？　聞こえてる？」
「ホ、ホンマかぁ！？」
「うん！」
「よっしゃー！　やったな、頑張ったなぁ！」
陽乃は嬉しくなり今になって涙がこぼれてきた。
「あたし、島根行っても翔と一緒に楽器絶対吹くから！」
「おう！　約束やで！」
それから陽乃はベッドに横になり、２０分ほど翔と電話で他愛のない話をした。明日の体育大会のこと、文化祭のこと。そして、そ

ろそろ決めなければならない、ひとつの区切りの日のこと。
「ほな……とりあえず、この話は明日終わってからやな」
「そだね」
「んじゃ！　明日は頑張ろうな！」
「うん！　おやすみ！」
そう言って電話を切ってから、陽乃は電気を消して歯磨きをするために下へ降りていった。

第４６４話　体育祭

９月２４日月曜日。七海高校では年１回の体育祭が開催されていた。朝一から入場曲のためのマーチと校歌を演奏した吹奏楽部員たちも、この日は体育会系に少しだけシフトする。

「プログラム７番は、学年クラス対抗によるスウェーデンリレーです」

アナウンスが掛かると同時に美里、拓真、智志、恵梨、友美、雄飛の６人が勇ましく立ち上がった。女子と男子に分かれて走るものの、この競技は各学年で同じクラスの生徒たちが協力して走るというリレーである。そして、偶然にもＧ組グループの男子は拓真、智志、雄飛、女子は美里、恵梨、友美という組み合わせになったのだ。

「ミサッチー！　エリリーン！　トモー！　頑張れ～！」

陽乃と由美子、絵美が美里たちに声援を送る。

「まっかせちゃってー！　元ハンドボール部、頑張ります！」

美里は中学時代、根っからのスポーツ少女であった。ハンドボール部に所属し、夏は日焼けで真っ黒ということが当たり前であった。吹奏楽部に入ってから多少、走るスピードは落ちたものの、それでも体育会系の部活に所属している生徒と同等である。

美里はいつもどおり調子を整え、様子を見守った。まずは前半、体育科を除くＣ組からＦ組までのグループが先行だ。暑い声援を送る生徒たち。

「センパイ。緊張しませんか？」

恵梨がそういいつつも嬉しそうな声を上げる。

「緊張もしてるけど、それ以上に楽しみ！」

「さっすがセンパイ！　頑張りましょうね！」

そして後半の組が始まる。まずは男子組。スタートと同時に雄飛

がトップに躍り出た。
「きゃー！　ちょっと、進藤くんめちゃ速いんだけど！？」
「すごい、すごい！」
友美と恵梨と美里は3人でダンゴになって飛び跳ねる。雄飛が断トツで走り抜けてくるので、予想以上に友美も早い段階でスタート位置につく。そして、とてもスムーズにバトンが友美に渡された。
「そういうトモも速―い！」
美里と恵梨は友美の俊敏さに驚きを隠せない。余裕の友美は1年生のG組の前でピースしている。歓声が飛び交う中、断トツ1番のG組は早くも次の走者、智志が入っていた。
「頑張れ、元不良！」
「うっせぇ！」
級友にからかわれつつ、智志が友美からバトンを受け継ぐ。いつの間にか最後尾のクラスを智志が抜いていた。そしてそのまま、恵梨がバトンを受け継いだ。
「ちょっとー！　余裕すぎるじゃん！　なんなの、この吹奏楽部！」
陽乃の隣で元クラスメイトの矢崎菜緒が甲高い声を上げた。
「元体育会系の子らがほとんどだから……なんだけど、これはあたしもビックリした」
中学生の頃から吹奏楽部だったのは雄飛、友美だけ。拓真はバスケ部、美里はハンドボール部、智志は部活にこそ入っていなかったが水泳をやっていて、恵梨もバスケ部だったのだ。
「頑張れ！　次、ミサッチだよ！」
「まっかせといてー！」
美里はピースサインを陽乃たちに堂々と向けた。そして、恵梨が戻ってくる。そして美里の番になった。もちろん、1周速いからといって手を抜くようなことをしないのが美里である。
F組の2年女子とD組、C組の女子がほぼ同じ場所を走っていたので、美里は外周から彼女たちを抜かそうとする。そのときだった。
「きゃ！」

D組の女子がF組の女子に足を取られ、転倒した。
「きゃー！」
そのままC組の女子に倒れ込み、C組の女子が運悪く隣を抜けようとした美里に倒れこんできたのだ。
「え！？　え！？」
そのまま美里をも巻き込んで派手に4人が転倒した。
「！」
驚いて周囲の生徒たちが前のめりになる。
「ミサッチ！」
「田中っち！」
吹奏楽部の3年生からも彼女を案ずる声が上がった。けれども、それは杞憂であった。
「負けてらんないわよー！」
すぐに立ち上がり、1番であるにも関わらず全力疾走する美里。さすがにこれには笑いすら上がった。
そして美里は見事に拓真にバトンを明け渡し、そのままG組は見事グループ内で優勝したのだ。さらに、タイムから算出すると全クラスでもトップとなった。
「やったわね～！　G組、最強！」
「ホントですね！」
友美と恵梨、美里の3人は退場してからもしばらく盛り上がっていた。
「ところでセンパイ、怪我とかないですか？」
恵梨が心配そうにする。
「だーいじょうぶ、大丈夫！　ハンド部のときなんかこれくらいのことしょっちゅうだったし、平気平気！」
「それなら良かったです！　じゃあ、今度はお昼休みに部室で！」
「うん！　それじゃあね！」
そう言って美里は恵梨と友美と別れて自分の席のほうへ戻り始めた。

「……？」
　すると、右足に違和感を覚えたのだ。ちょうど、足首のあたりである。
「……一応行っとこう」
　美里は不安になり、保健室へと念のため行ったのだ。
「ん？」
　その姿を、慎也に見られているとも気づかずに。
　そして、保健室で診察してもらってからとんでもないことを美里は聞かされた。
「あ～……これは捻挫だね」
「え！？」
　美里のあまりの大声に保健室の先生は驚いて付け足した。
「大丈夫よ。そんな大したことない捻挫だから……ただ、２、３日は安静にね」
「２、３日ですか！？」
「あ～……今日の体育祭は残念だけど、あとは見学になるわね」
「……。」
　美里が出場するのはスウェーデンリレーのみだったから問題はない。しかし、昼休み後にはマーチングが控えている。美里はスネアドラムを叩くのだから、出ないわけにはいかなかった。
「とにかく、今日はもう激しく動いちゃダメ。わかった？」
　美里は自然な笑顔で答えた。
「はい。今日はもう、さっきのリレーで出番終わりですから、大丈夫です」
　そして保健室を出てから、静かに反芻する。
「大丈夫。マーチングはそんな激しい運動とかじゃないから、大丈夫。それに、あまり痛くないから、大丈夫」
　自分に言い聞かせるために、何度も何度もその言葉を繰り返した。
　そして、何事もなかったように自分の席に戻るため、平静を装って保健室から少し離れた西玄関へ向かう。そして、渡り廊下に出たと

きだった。
「美里」
聞き慣れた声が背後からしたので、思わず振り返ってしまう。
(痛っ！)
その振り返った拍子に右足で体を支えてしまったため、痛みが走った。それをなんとか堪え、美里はいつもどおりの様子で彼の名前を呼んだ。
「なぁんだ、慎也じゃない！」
「なんだとはなんだ」
慎也は不機嫌そうにそう答えた。
「それよりお前、大丈夫なのか？」
美里は一瞬、捻挫のことがバレたのかと思い、覚悟を決めた。しかし、慎也はそこまでは聞いていなかったようで、こう言ったのだ。
「保健室なんか行くから、てっきり怪我したのかと思ってさ」
この様子なら隠し通せる。美里はそう思い、こう答えた。
「そーなの！　さっき派手にこけたから、心配なって診てもらったけど、なーんともなかった！」
その美里の答えを聞いて、慎也も安堵の表情を浮かべる。
「よかった～。お前、無茶するとこあるからな。気をつけろよ？」
「う、うん！」
その慎也の笑顔を見て少し心が疼いたが、マーチングをするためには仕方がないことだと自分を言い聞かせて、痛みを堪えながら慎也と応援席へと戻っていくのだった。
そして昼休み。
なんとか痛みを堪えながら音楽室に美里が行くと、既に3年生が輪になって弁当を食べていた。
「遅いよ、ミサッチー！」
沙希が嬉しそうに立ち上がって美里の手を引いた。
(痛っ！)
痛みが走って思わず沙希の手を払い除ける美里。

「ど、どしたの？」
「あ、ゴメーン！　あたしいまチョー汗臭いから、綺麗なサキティにニオイうつしたくなくて」
「やだ！　そんなの皆汗だくなんだから、平気よね～」
ドッと笑う3年生。その顔を見ていると、黙っていることがなんだか悪い気さえしてきていた。しかし、今さらになってマーチングに出られないというほうが迷惑に決まっている、と美里は決め付けて黙り通すことにした。
そして、美里も加わって弁当を食べ始めてしばらくしたときだった。絵美がとんでもない言葉を言った。
「なんか、湿布のにおいしない？」
その言葉を聞いて、美里の心臓が飛び出しそうになった。痛みを和らげるために、右足首には湿布を貼っているのだ。
「えー？」
部内でも比較的鼻の良い春樹がクンクンと辺りのにおいを嗅ぐ。
「あ～……確かに」
「誰やねん、高校生やのにオバハンくさいなぁ」
思わず翔の言葉にグーで殴りたくなる美里だったが、それをなんとか堪えた。しかし、まだ美里の緊張は解けない。
「だけど、この辺だけだよな」
拓真が部室から戻ってきて言った。
「え？　そうなの？」
陽乃が目をぱちくりさせながら聞いた。
「あぁ。部室は弁当の美味しそうな匂いしかしてない」
「へ～？　ほな陽乃、お前ちゃうか？」
「何バカなこと言ってんのよ！　だいたい、湿布するような状態になるってことは、体育祭なんかに出られるわけないじゃない！　怪我してるってことなんだから」
陽乃の言葉一つ一つが、自分に向けられているような気がして美里は気が気でなかった。美里はなんとなくいづらくなり、一旦その

話から抜けようとした。
「あ、あたしちょっとお手洗い行ってくる！」
「え？　あ、うん……」
全員が突然そう言う美里に呆気に取られた。
「……。」
そして、移動しようとする美里の右手を慎也が掴んだ。
「え？」
「……お前」
美里と慎也が見つめあう。
「お、おい。なんやねんな急に～！　オアツイシーンですか？」
しかし、翔の言葉のすぐ後に出てきた言葉に、全員が言葉を失った。
「怪我……してんじゃねぇのか？」
美里が目を見開いた。明らかに動揺しているのは誰の目にも明らかだった。けれども、美里は知らん振りを決め込む。
「なんでそう思うの？　あたし、バリバリ元気だしね！」
「……じゃあ、フォワードマーチ」
「え？」
「1、2、3、4！」
そのままつられるようにして美里はフォワードマーチを始める。
歩くたびに鈍い痛みが脚に伝わり、美里は顔をゆがめた。
「もういい」
「……。」
慎也が怒ったように声を抑えながら言った。
「黙って無茶すんな」
「……。」
本番直前に起きたアクシデントに、3年生全員が声を失った。

第４６５話　アタシが、するよ

「……そんな」

優がそう呟いた。恵梨とあずさは、言葉すら出ない。

「待ってください……。じゃあ、どうするんですか？　今日……」

洋之が震える声で聞いた。翔は首を左右に振る。

「わからへん。それを今、東先生としおりさんで話し合ってて……」

美里は部室に閉じこもったままで、静かに泣いていた。傍には慎也と絵美の二人がなんとか宥めている。

「泣くな、美里。お前が悪いわけじゃない」

「だって……あたじが調子乗って、あんな外回りで抜かそうとしだりずるがら……」

もはや鼻声で完全に美里とは思えない声になっていた。

「あぁいうのは誰が悪いとか、そんなのないよ。それに、ミサッチが頑張ったから、Ｇ組優勝じゃない。スウェーデンリレー」

絵美が上手いフォローを入れるが、それでも美里はまだ納得しない。

「でもぞれで、吹奏楽部のみんなに迷惑かげでだら、意味ない……」

それっきり美里は顔を上げず、ただひたすら泣き続けた。

マーチング開始予定時間まで、あと３０分ほどになった。そろそろ、中止か否かを決めなければならない。美里がいなければ、話にならないからだ。

「……。」

「どうなるんだろ……」

優輝が不安げに呟いた。優輝のクラスでも、マーチングを楽しみにしているというクラスメイトが何人かいた。

「……でも実際問題、無理じゃない？　田中先輩ナシじゃ」

光瑠が悔しそうに言う。しかし、美里を責めているような言い方ではなかった。

「あのぅ」

そのときだった。少しイントネーションが違う「あのぅ」という声が聞こえてきたので、翔が顔を上げた。

マーガレットだった。

「どないしたん？」

「アタシ、できます」

「……え？」

全員が同じ言葉を口に出した。マーガレットは続ける。

「アタシ、ディズニークラシックスレビューのスネア、できます」

「……ホンマに！？」

翔は驚きのあまり、大声でそう聞き返した。

「アタシ、ミサトの打楽器叩く姿カッコいいから、マネッコしてて……何度か、ミサトにも教えてもらって。ミサトほどウマクないけど、できるんだけど……」

「……せやけど、今まで合わせた事もないのに」

「だけど、練習する時間がないわけではないわ」

声がしたので入口を見ると、しおりが立っていた。

「三田嶋さん」

「マーガレットさん……だっけ？」

「ハイ」

「うん……。いい目してる！　よし！　ちょっと、部長くん」

「は、はい」

「田中さんを説得してきて。マーガレットさんに、スネアドラム代わっていいかって」

「え？　でも、それは三田嶋さんから言うたほうが……」

「私から言ったんじゃ、強制力が強すぎるの。あなたくらいの子が、ちょうどいいの」

「……。」

「早く！　時間ないの！」
「は、はい！」
翔は急いで部室のほうへ走った。
「マーガレットさん」
「ハイ」
「動きは急にはできないと思う。あなた、ピットでシロフォンだったから」
「ハイ……」
「だから、あなたは今日ピットでいいわ。そのまま、ピットで。その代わり、楽譜見てでもいいから、ちょっとくらい間違ってもいいから、スネア、お願いできる？」
マーガレットの眼差しが凛としたものになる。そして、彼女は力強く「ハイ！」と答えたのだった。
「田中っち」
一方、翔が部室に入ると、美里は慎也と絵美に宥められつつも顔が涙でグシャグシャになっていた。
「あんな。マーガレットが、スネア叩けるって」
「……え？」
「せやから、田中っちはその……」
心配せずに見てくれていればいい、と言うつもりだったのだがそれはとても残酷なようで翔にはなかなか言えなかった。
「見てれば、いいの？」
「……っ」
翔もそれ以上どう言葉をかけていいのかわからず、黙り込んでしまう。すると、部室のドアが開いて大きな声が聞こえた。
「誰が見てるだけなんて甘いこと言いました～？」
しおりが立っていた。
「三田嶋さん……」
「田中さん、足を痛めたのよね？」
「はい……」

「ちょっとー！　秦野さん！」
「あ、はい！」
「ここのシロフォンって、足の高さ変えれるんだっけ？」
「えと……た、多少は」
「そう！　じゃあ田中さん。シロフォンの足の高さ調節するから、あなた座ってシロフォン叩ける？」
「え……で、でも」
「あー楽譜ね！　それは心配いらないわ。見てもらって大丈夫」
「……。」
美里が唖然としていると、しおりは大声で言った。
「いい！？　田中さん！　あなた、今年でこの部活でみんなとマーチングするのは最後よ！？　体育祭でするマーチングは、コレで最後！　それなのに、あなただけ怪我したから出ませんで、済ませるつもり！？」
「……。」
「どうなの！？」
「そんなこと、したくないです！」
「よし！　だったら、すぐ移動するよ！　男子は打楽器運んで！　女子は先に着替えてすぐに校庭に移動！」
「はい！」
しおりの指示にテキパキと動く部員たち。
「あの！」
美里がしおりを呼んだ。
「何？」
美里は黙って、深々と礼をした。
「……間違ってもいいから、思い切り演奏してね！」
「はい！」
そして、手際よく楽器の移動などを進めていき、なんとか時間どおりにセッティングも終えて、吹奏楽部は体育祭でのマーチングの時間を迎えていた。

「……。」
美里は椅子に座りながら、シロフォンの前にいた。隣にはマーガレットがいる。
「ミサト」
美里が顔を上げると、自信満々のマーガレットの顔があった。
「アタシ、間違えるかもしれないけど。頑張って叩くよ」
「うん」
「だから、ミサトもいっしょけんめい、叩いてね」
「もちろん！」
そして、誠が楽器を構える合図を出す。
「ワン、トゥ、スリ、フォ！」
いよいよ体育祭ステージマーチングショー『ディズニー・クラシックス・レビュー』が幕を開ける。

第４６６話　ひとつの区切り

演奏が始まると同時に、全員がキビキビとした動きでマーチングを始める。マーガレットもたどたどしいなりに、スネアを叩いている。

「……。」

しかし、基本的にドラム、タムタムなどの打楽器も本隊と一緒になって動いている。それに対し、美里たちピットはその言葉どおり、動くことはない。とはいうものの、ベードラは洋之、タムタムは恵梨。その二人はもちろんのこと、優や和志たちも立って演奏している。それにも関わらず、美里だけが座っている。

「……待って」

美里は気づけば呟いていた。

「あたしだけ……とか、嫌なんだけど」

美里がそう言ってゆっくり立ち上がった。隣に立っていた優が「せ、先輩！」と慌てて制しようとする。しかし、美里は目で訴えた。

「止めないで」

そして足の痛みを無視しながら、美里は立ち上がった。

「ちょっ……アイツ！」

恭一が慌てて止めようとするが、しおりがそれを制した。

「神崎さん！」

「いいの。こうなるのわかってて、あぁしたんだから」

「え？」

しおり同様、美里も気の強い女子だ。こうなることを知りながら、しおりはあえて座らせて演奏をさせたのだと言う。そうでもしなければ、美里は余計に無茶をして痛みを堪えてでもスネアドラムを本隊で叩こうとしていたに違いない。しおりはそう言った。

「こりゃ参ったな……」

恭一は苦笑いでそう言った。
（ゲ！）
コンテの関係で振り返ったときに翔は度肝を抜かれる思いがした。何しろ、座って演奏しているはずの美里が立っているからだ。本番真っ最中なので、大声を上げることもできない。
もちろん、指揮をしている誠にもその姿は目に入っていた。しかし、彼にも止めることはできない。
（ったく……アイツ）
慎也は半笑いでその美里の姿を見ていた。結局、誰も美里を止めることなどないまま、マーチングは終わってしまったのだ。
「終わった……」
終わるなり、美里は汗を拭った。
「爽快感マックスじゃん」
慎也が終わって退場してからすぐに駆け寄ってきた。
「そう？」
美里はそのまま痛そうに表情を歪めつつも、昇降口まで戻っていく。楽器は後輩たちに任せてきておいた。
「だってさ。後悔したくないじゃん？　最後の部活だもん。もう、来年はできないんだもん」
「そーだなー……」
慎也も伸びをする。ふと見上げると、いつの間にか夏空が秋空に変わってきていた。

「皆さん、今日はお疲れ様でした」
「ありがとうございました！」
しおりの言葉に全員がお辞儀をする。
「まぁ……1名、無茶をした人がいましたが」
美里が顔を赤くして笑っている。
「でも、私としてはそれくらいの意気込みで、体育祭だけとはいえマーチングに挑んでくれたこと、嬉しく思います」

美里は今度こそ嬉しそうに笑った。
「今度は……定期演奏会で、是非頑張ってもらえればと思います。本当に、お疲れ様でした！」
「ありがとうございましたー！」
「はい！　じゃあ音楽室にすぐ戻って、片付けしてください！」
翔の言葉に全員が元気良く返事をして音楽室に戻り始める。
「マーガレット！」
「ミサト！」
「スネア、チョー上手かったじゃん！　どうよ？　今度の文化祭、スネアどれかやんない？」
「えぇ？　そんなの、とんでもないよー」
「おっ？　とんでもないなんて日本語、覚えたのね！」
沙希がクスッと笑った。マーガレットは恥ずかしそうに笑う。その姿を見て、翔が少し寂しそうな表情を浮かべる。
「佐野」
恭一の声に振り返る。
「やっぱり……先生から説明したほうがいいんじゃないか？」
翔が首を左右に振る。
「オレらが、みんなを迎えたから……そしたら、みんなで区切りをつけたいわけで」
「そうか。それじゃ、任せた」
「はい」
翔は重い足取りで音楽室に向かう。
「……。」
そう遠い昔ではないにも関わらず、まるで遠い昔の記憶のようにそれらの出来事が蘇ってきた。
『あの……入りたい、です』
一番に来たのは、裕時だった。遠慮がちに、しかし、視線はしっかりと意志を持っていた。
『オッケイ！　楽器経験はある？』

『くらりねっと、吹いてたことあります』
『クラリネットね！　ＯＫ！』
裕時は真面目でおとなしく、少し控えめ。常に練習に熱心で、それこそ部員たちよりも早く来て練習していることもあった。
それから2日後に、マーガレットが来た。
『Ｏｈ！　ここ、ブラスバンド！？』
『！？』
真っ先に対応したのが慎也と拓真だった。少し対応に戸惑ったものの、見事なドラムさばきで一気にパーカッションパート全員に見初められ、すぐに入部した。弾けるような笑顔と積極的な性格。留学生の中でも彼女はヒロインのような存在だった。
『ぼく、はいりたい』
最後に来たのはソンスだった。対応したのは陽乃。
『やっだー！　翔、変なメガネかけてあたしたち騙そうったってそうはいかないんだから～！』
陽乃にそう言わしめるほど、翔と容姿が瓜二つの彼は、初心者だった。しかし、経験者の愛実と今では3年生の中でもずば抜けた実力を持っている春樹に教えられ、すぐにレベルを上げていった。
それを本人に言うと『そんなことないネ』と恥ずかしそうにやんわりと否定した。
そんな彼らが、１０月末を持って七海高校を去ることになった。正確に言えば、４月に彼らがやって来た時点でわかっていたはずのことであったのだが、翔たちはすっかりそんなことを忘れていたのだ。
「……。」
『かける！』
『カケル！』
『かける』
わかっていても、人と人との別れというのは形容しがたいものがある。

「……。」
翔は意を決して音楽室の扉を開けた。
「あ、遅いよ翔～！」
陽乃が満面の笑みで翔を出迎える。
「おう」
「ほら、早く終礼しよ！　今日は疲れちゃったから早めにね」
「ん……」
翔はそう言って音楽室に向かう。戸を開けた瞬間だった。マーガレット、ソンス、裕時の３人が翔を見た。
（話は行ってる……みたいやな）
翔は儚げに笑い、前に立った。同時に部員たちが話すのをやめた。
スウッと息を深く吸い、翔は感情を押し殺しながら言った。
「大事な話が、あります」
「え？」
陽乃も聞かされていなかったので、思わず聞き返してしまった。
「……留学生の」
駿が裕時を見る。
「３人が」
愛実がソンスを見る。
「１０月末を持って」
和志とあずさが同時にマーガレットを見た。
「留学期間を終えて、帰国します」
「……。」
音楽室が一気に静まり返った。

第467話　たとえ、遠く離れても

「……カケル」
誰もいなくなった音楽室から出て、施錠していた翔に声をかけたのは裕時だった。
「おう！　どないしたん？　帰ったんとちゃうかったん？」
「うん。カケル、待ってた」
「へー？　どないしたん？　話あんの？」
裕時は小さくうなずく。翔は鍵を掛けてから裕時と一緒に歩き始めた。二人分の足音が既に電気が消えた廊下に響き渡る。
「話って？」
裕時が少し赤くなった。
「変なコト、聞いていい？」
「へ、変なことか？　なんやろなぁ」
翔は苦笑いしながら聞き返す。裕時はますます赤くなって言った。
「カケルは、ヒナノに気持ち伝えようと思ったの、なぜ？」
「……えらい恥ずかしい話すんねんなぁ」
翔は苦笑いしながら考える。その前に、聞いた。
「裕時、好きな人おんの？」
裕時は小さくうなずく。
「へぇ！　それ、吹奏楽部内？」
さらに裕時は小さくうなずいた。もう顔全体が真っ赤になっていた。
「そうかぁ……」
「なぜ、伝えようと思ったの？」
とても真剣な表情に気圧されそうになりつつ、翔は答えた。
「いや～……ほら。伝えんと、気持ちなんてなかなか相手に伝わる

もんでもないやん？」
「……？」
少々難しかったようで、裕時は首をかしげた。翔はしばらく考えて、噛み砕いた言い方をした。
「陽乃に、オレの気持ちを知ってほしかったから！」
「それだけ？」
「あぁ。それだけや」
「失敗したとき、怖いと思わない？」
「怖がってたら、何にもできへんやろ」
「……。」
「楽器でも一緒ちゃう？　ソロとか、ビビッて怖がってたら、全然上手いことでけへん。自分はできる。大丈夫や。そうやってまずは自信を持つこと。せやないと、できることもできへんなるやん？　そう思わんか？」
「カケルはすごくポジティヴだね」
裕時が羨ましそうに呟いた。
「そんなことあれへんよ！　オレも悩んでるでぇ、こう見えても」
「うん……」
翔は裕時の肩をバシバシと叩いた。
「1ヶ月！　心残りのないように、過ごしてや！」
「うん」
裕時はそこでようやく笑顔を見せてくれた。

校門のところで裕時と別れる。
「はぁ～……」
夜になると少し、過ごしやすくなった。それだけ、季節は確実に進んでいるということを示している。体育祭が終わった今、吹奏楽部として残されている活動は年内で言えば、七海祭、留学生お別れ会、高校生総合文化祭、そして定期演奏会である。アンサンブルコンテストもあるのだが、既にその時点では翔たちは引退しているこ

とになる。
「引退……か」
吹奏楽部自体がなかった2年前にサークルを創ったときは、こんなことは考えてもいなかった。もちろん、こんな楽しい時間が永遠に続くことなどないことはわかっていたのだが、そこまで実感を持っていなかった、ということになる。
陽乃、沙希、由美子、絵美、雪子、慎也、春樹、拓真、美里という同志ができ、恭一やしおりといった指導者に恵まれ、麻綾、さゆり、はるか、夏樹、茉莉紗、かのこ、友美といった後輩たちに囲まれ。
1年生当時、これほど幸せな環境に立つことになるとは夢にも思っていなかった。
「オレって幸せ者やなぁ」
夜空を見上げながら翔は大きく伸びをして呟いた。
最近、翔は後輩たちからこう言われることが増えていた。

本当に先輩、島根行くんですか？

第一志望だけなんですか？

神奈川（こっち）で受験はしないんですか？

はるか、麻綾、さゆりがそう言った。いずれも少し、寂しそうに。また、かのこがつとめて明るく言った。
「みんな佐野先輩のこと大好きだから、神奈川から離れてほしくないんですよ～！」
後輩たちは、自分に神奈川に残り、卒業してからも七海高校にレッスンなどに来てほしいと強く望んでいるのだった。それはヒシヒシと感じられていた。
しかし、翔は自分で選んだ道を変えるつもりはなかった。頑固と

言われても構わなかった。
さゆりたちにはこう、伝えていた。

「どんだけ遠く離れても、オレが君らのことを忘れることなんて、絶対ありえへんから」

真摯な思いを、率直に伝える。それが翔のポリシーでもある。
「……決めた」
翔はあることを、心に決めた。
次の世代に、この部を引き継いでいく。その意志を、強く持った瞬間だった。

第４６８話　君たちと奏でる最後の音色

９月３０日日曜日。今日の前中はパート練習、昼からは学祭の合奏をすることになっている。

「おはようさん！」

翔がご機嫌で部室に入ると、既に留学生の３人が楽器を出していた。

「おっはよー」

裕時が笑顔で挨拶する。

「おはよ！　あ、せやせや。３人とも、ちょいといい？」

翔はマーガレット、ソンス、裕時の３人を呼んだ。それから廊下で３人に留学生お別れ会の際に、吹奏楽部で曲を演奏することを伝えた。

「それは、ボクラも出られる？」

ソンスが聞く。

「有志やけどな。出たい人が、出るって感じ」

「それなら、アタシ出るよ！　もちろん！」

マーガレットが真っ先に答えた。翔は彼女ならそういうだろうと予想していたが、予想的中で思わず笑ってしまった。

「ＯＫ、了解。マーガレットは出る……と。ソンスと裕時はどうする？」

「うーん……」

「出る人次第で、曲を考えへんとアカンからな。もちろん、無理強いするもんではないから、全然出たくないなら出ぇへんでＯＫやで」

「うん……」

翔はしばらく考える二人をジッと見ていた。

「ま！　ま！　全然焦る必要ないから。今日明日で決めてくれたら

OKな」
「わかった」
ソンスが答える。同時に裕時が答えた。
「ボク、出る！」
「お！　早いやん！」
それに驚いたソンスが反射的に言った。
「裕時出るなら、ボクも出る！」
「おっ！　なーんや！　ほな、全員出るんやな。じゃあ話は早いわ。ちょっと3人とも、来てくれる？」
「……？」
3人は言われるがまま、翔について行った。
「みーやべちゃーん」
「はぁーい！」
翔に呼ばれて由美子が振り返る。彼女は封筒を一冊、手にしていた。
「準備しといたよ～。結構くたびれてる。何回か吹いたんだろうね」
そう言って由美子はソンスたちの前に封筒を置いた。そこには『ディズニー・メドレー』の文字が書かれている。
「読めない……」
カタカナを読めない3人は首をかしげている。翔は笑顔で「ディズニーメドレーっていうんやで」と答えた。
「Ｄｉｓｎｅｙ！　わぉ！　ワンダフォ！」
マーガレットの喜び方が半端ではない。他の二人も目がキラキラと輝いていた。
「どないや？　これなら皆知ってるしな！　ソンスも裕時も、知ってるやろ？」
コクコクとうなずく二人。
「ほな、これで決定やな！　みんなに連絡してえぇか？」
「うん！」
「よーし！　ほな、練習頑張ってな！」

「はい！」
それから全員が集合したのを確認して、翔が言った。
「えー、先ほどですが、留学生お別れ会で演奏する曲が決まりました」
「おー！」
すぐにざわめく部室。
「はいはい！　ほんで、今回は『ディズニーメドレー』を演奏することになりました！　ちなみに、1番です」
ディズニー・メドレーは3までである。そのため、区別するために翔はそう言ったのだ。
「ほんで！　ソンス、裕時、マーガレットの3人も出演してくれます」
「おぉー！」
嬉しそうにしているのはユーフォ、クラリネット、パーカッションのメンバーに集中していた。
「そこでクラリネット、ユーフォニウムにはソロがあった場合、ソンスと裕時を優先的にソリストにしてください。また、マーガレットはドラムセットでお願いします」
「はい！」
ひとまず、今日の午前中はこのディズニー・メドレーを中心にパート練習することとなった。この曲も例に漏れず、ソロは基本的に1・2年生が担当することとなった。
大変なのがトランペットだ。曲中にソロが4ヶ所もあるのだから、譲り合い合戦がいつも以上に壮絶に繰り広げられていた。陽乃はなるべく介入せず、彼らで決めてもらうつもりでいた。
ひとまず、『星に願いを』のソロは美咲で確定しそうであった。音域が初心者である美咲でもそれほどキツい音域ではないためだ。
『口笛吹いて働こう』のソロは勇になりそうである。『いつか王子様が』の始まる前のソロは、雰囲気というだけで流になりそうであった。終わった後は彩香。今回難を逃れたのは綾音ということにな

る。
　トロンボーンは『口笛吹いて働こう』を、普段はバストロンボーンばかりでソロの機会が少ない徹が演奏することとなった。『狼なんか怖くない』は高音域が続くので、雛乃が担当することになった。このパートは基本的に温和にソロが決まることが多い。
　一方、毎回激しいジャンケンが繰り広げられるのがサックスパートである。しかも今回は、はるかと茉莉紗のテナーサックス組なので、その勢いは通常の倍はある。
「最初はグー、いんじゃんほい！　あいこでしょ！　しょ！　しょ、しょ、しょ！」
　はるかと茉莉紗の激しい息遣いまで聞こえてきそうな状態。翔たちがあきれ返った様子で見つめていた。
「あいこでしょ！」
　そしてはるかがパー、茉莉紗がグーを出した。
「きゃあああ！　いやあああ！」
　茉莉紗が悲鳴を上げる。一方のはるかは女の子らしくないガッツポーズを取って言った。
「よっしゃー！　あたしセーフ！」
　さゆりが翔の隣に座って言った。
「相変わらずですね～、あの二人は」
「ホンマになぁ」
　ジャンケンで決まったにも関わらず、茉莉紗が文句をつけたようでまだモメている二人。なんとか麻綾が間に入って事なきを得ようとしているようだ。
「それにしても、珍しいですよね」
　さゆりが言った。
「何が？」
「3年生が引退する前から、1・2年生にソロを吹かせるなんて。袴田じゃ、ありえないことでしたよ？」
「あ～……。でも、急にはい、先輩おらんからアンタ今日からソロ

ね、って言われたらビビらん？」
「そりゃあビビりますよ。特に佐野先輩の後じゃ」
「またまた、上手いこと言うて」
翔は恥ずかしそうに笑った。さゆりが「真剣なんですよ～」と笑って答える。
「いやさぁ、ほんでもこれは東先生の方針やしな」
「そうなんですか？」
翔はうなずく。
「オレらも言われてるねん。特に、綾音とか夏樹くん、ケータ、あんこみたいな初心者やった子ぉらは、なるべくオレらがおる間に場慣れさせてくれって」
「へ～……。先生、そんな先のこと考えてるんですね」
さゆりはかなり驚いたようで、感嘆の息を漏らした。
「せやで。せやから、まぁ形は何であれ、こういう風にソロを頑張る空気ができればえぇなぁ思ってるねん」
「なるほど……了解です」
さゆりが納得したのか、立ち上がって楽器を準備しに行った。
「あ、いたいた」
陽乃が翔を見つけて駆け寄ってくる。
「おう！　どないやった？」
「昼一には新横浜駅に着くって。それで、とりあえずあたしの家に荷物は置いて、その後直接学校に来るって」
「ホンマか！　どないする？　みんなに言う？」
陽乃がしばらく黙り込んで、コッソリ言った。
「内緒にしよ！」
「でも、ジュンペーとか鋭そうやからパート割で気づきそうやで？」
「大丈夫よ。右川くんにはディズニー、ファースト渡しておいたし。それに、仮に練習してても、来たら一回で譲りそうよ」
翔はしばらく目を泳がせて考えてから「せやな」と笑うのだった。
パート練習に取り掛かった部員たち。バスパートではソンスのソ

ロの部分を愛実と春樹が付きっ切りで教えていた。このソロは非常に音が高く、愛実でも苦労するほどの音域である。それを当初は初心者であったソンスが吹いているのだ。

「息をもっと深く吸って……そう。そういう感じで。で、一気に息を吐き出すんじゃなくて、暖かい息をゆっくり吹き込む……。そう！　そういう優しい感じで。いい、いい！」

春樹の笑顔を見てソンスもすぐに笑顔になる。

「じゃあ、もう1回やろう、もう1回！」

「うん！」

その様子を見ていて、拓真と智志が微笑ましそうに見ている。

「春樹先輩って、一人っ子ですよね？」

「あぁ」

「ソンスが、弟みたいな感じになってるんでしょうね～……」

音を外して思わず笑う春樹たち3人。その光景が当たり前になっているだけに、別れの時が来た時、春樹や愛実の反応が少々心配になってしまう拓真。

「まぁ、春樹先輩や加藤なら、大丈夫だと思いますよ」

智志があっけらかんと言った。

「そうか？　俺はそう思わないけど……」

「人それぞれですね～」

智志はイタズラっぽく笑ってそう言った。その顔にも少しだけ、寂しさが滲み出ているように拓真には見えていた。

第４６９話　おかえり、Ｍｙ　Ｆｒｉｅｎｄ！

午後１時３０分。ナナコウ吹奏楽部は学祭の曲の練習をしていた。昼一からは曲の中でも最も複雑な動きをする『タイタニックメドレー』のトラブル発生から沈没までの部分を描写した場所を練習している。

木管楽器と打楽器の複雑な動きが入り乱れ、危機に瀕したタイタニック号の様子を描写する部分なのだが、４分の３拍子と４分の４拍子が入り乱れてかなり大変な状態となる。打楽器もまともに叩けるよう、必死にリズムを取るので精一杯。一方のクラリネット、アルトサックス、テナーサックス、バスーンなどの木管楽器はまだ指が覚束ない部員が大多数である。

チューバやユーフォニウム、バリサク、バスクラなどでも低音の伴奏の打ち込みがたまに違うところで聞こえてくる。

「あ、ズレたな」

階段を上がる一人の少女が、チューバの音がズレたことに気づいた。

「難しいもんなぁ、この曲……」

そう言いながらそっとスリッパを脱ぎ、重い防音扉を開く。すると、懐かしい匂いが彼女の鼻に届いてきた。部室と音楽室の匂い。ナナコウらしい、少し古ぼけた匂いだ。

トランペットとトロンボーン、ホルンの旋律が終わり、彼女の吹く楽器が最も大変な箇所に差し掛かった。複数の音は聞こえるものの、なんとか吹くので必死な状態であるのは伝わってきた。

そっと音楽室の扉を開く。楽器がたくさん鳴っていることに加え、吹くのに必死な部員たち。その中で彼女が入ってきたことに気づいたのは綾音、流、美咲と洋之、恵梨だけだった。

さらにそっとホルンのところへ近づく。そして、賢治の真後ろに来たところで合奏が止まった。
「よし、ＯＫ。今のところから上昇系の……ホルン、吹いてみろ」
恭一も彼女の存在に気づき、一瞬間が開いたがなんとか不自然にならないようにすぐに言葉を繋いだ。
ホルンのメンバーが必死でその部分を吹くが、綺麗に音が聞こえるのは順平だけ。後は本当に頼りない感じの音がしていた。
悶々とするのが嫌いな彼女は、率先して口を開いた。
「そこはもっと、息をたっぷり吹き込んで一気に音を上昇させないと」
「はい！」
賢治と周磨、杏が何の疑問も抱かずに返事をする。
「……。」
「ん？」
ようやく違和感を覚え、ホルン全員が振り返ると。
「あ……」
順平が大声を上げた。
「永井センパイ！？」
「えへっ！　こんにちは～！」
１年生は誰かがわかっていない。２年生は嬉しそうに「こんにちはー！」と返事をする。１年生もその後に「こんにちは」ととりあえず挨拶をした。
「永井、こっちに来て挨拶」
「えぇ？　先生、何も今さらそんな改まって……」
「いいから！　１年生はお前のこと、知らないんだぞ？」
雪子は渋々、前に立つ。グルリと全員を見渡すと、確かに半分程度は知らないメンツだった。相変わらずなのは3年生くらいのもので、当時１年生だった順平や勇、亜紀たちもグッと大人っぽくなっていて彼女は驚きを隠せなかった。
「えー……今年ですね。１年生の皆さんが入部する前に、大阪に転

校してしまいました、元吹奏楽部員の」
「そーやないやろ！　今も部員は部員や！」
雪子は特別措置（と勝手に吹奏楽部で位置づけ）で今もナナコウ吹奏楽部に籍を置いている。彼女も立派な部員の一人だ。
「えへ！　そうでした！　部員でホルンの、永井雪子といいます」
ヒューッ！と慎也が口笛を吹いた。
「待ってましたー！」
順平が嬉しそうに拍手をすると、連鎖するように全員が拍手をした。
「それじゃ永井。とりあえず右川の横に座りなさい」
「はい」
雪子が順平の隣に座ると、いきなり分厚い楽譜の山を渡された。
「何、これ！」
雪子が驚いていると、恭一が説明した。
「あー、そうだ。みんなにも説明しておこう」
そして恭一は簡単に説明した。雪子が11月23日の定期演奏会に出演すること。それだけに留まらず、せっかくなのだから学祭にも特別出演という形で出てもらうつもりでいること。
その内容に喜んだのは順平だけではなく、3年生の喜びもひとしおだった。
雪子は学祭で演奏する曲をパラパラと捲ってみた。難しい曲が結構並んでいる。
（これ、みんなで選んだのかなぁ）
雪子はグルリと再び全員を見渡した。この七海高校のことだ。それはほぼ間違いないだろうと雪子は確信した。それにしても、タイタニックメドレー、ジャパグラの刑事ドラマ、千と千尋など、とても一度に演奏するものではないような曲が揃っている。ここに定演の楽譜まで配布されるというのだから、相当な練習量が必要だろう。
「永井」
「あ、はい」

恭一に声を掛けられて雪子は顔を上げる。
「楽器、持ってきたか？」
「え、あ、一応……」
「じゃあ、合奏に参加しなさい」
「え！？　い、いいんですか？」
「いいも何も、部員なんだから当たり前だろう？」
「は、はい！」
雪子はすぐに立ち上がり、急いで部室に楽器を取りに戻った。
「じゃー俺、譜面台と雑巾出してきます！」
真っ先に立ち上がったのは賢治。彼の目標と尊敬する人物は、意外にも身近にいるはずだった雪子だったのだ。入れ違いで転校と入学をしたということを知り、少なからず賢治はショックを受けていた。なので、たった1ヵ月半とはいえ、彼女と一緒に演奏できるということは、賢治にとってこの上ない喜びなのだ。
雪子はもっと疎外感を感じるのではないか、と思っていたが予想以上の歓迎っぷりに、かえって申し訳ないような感じすらしていた。

「へー！　ほな、勉強もこっちでできるん？」
翔は雪子に七海市にいる間の勉強をどうするのか、聞いて返ってきた答えに驚いて目を丸くした。
「うん。だいぶと光来高校と七海高校で協議してくれたみたいで。かなりの異例措置みたい」
「そりゃそうだろ。そんなの、全然聞いたことねぇしな」
慎也も驚いて目を丸くしながらうなずいた。
「ねぇ！　内山くんだっけ？　雪子のカ・レ・シ！」
沙希が嬉しそうに尋ねると、雪子は顔を赤くしながらうなずいた。
「彼氏と1ヵ月半も離れて寂しくない？」
絵美が尋ねる。すると由美子が「私なら無理だけど～」と付け足した。
「それは大丈夫。私とダイ……えっと、内山くん、パソコン持って

てスカイプお互いやってるからいつでも連絡取れるし」
　すると、美里がグイグイと雪子の肩を押した。
「な、なによミサッチ～」
「下の名前で呼んでるんでしょお？　いまダイ……って言いかけたじゃない！　なんて呼んでるの～？」
　雪子は真っ赤になりながら小声で答えた。
「ダイちゃん……」
「きゃー！　いいなぁ！　すっごい新鮮！」
　美里がまるで自分のことのように飛び跳ねて喜んでいる。
「あたしらなんてさぁ～、彼氏呼び捨てだもんね！　慎也にカケル！って」
　陽乃と美里がケラケラ笑う。
「いーじゃんか。俺もカケルもお前らのこと呼び捨てなんだし」
「それとも何や？　ほな、オレこれから陽乃のこと、ヒナちゃんとか呼んだろか？」
「キッモーい！　やめてよ！」
「何やねん！　そんな即否定せんでいいやろが！」
「変わらないねぇ、二人とも」
　雪子はクスクスと笑いながら、変わらない翔と陽乃を見つめていた。その後もいろんなつもり積もった話をする3年生たち。いつの間にか、部室には3年生だけになっていた。彼氏や彼女のこと。進路のこと。定期演奏会のことが一番盛り上がっていた。
　その中でも、引退するときに吹く曲をどうするか、ということで盛り上がる彼ら。
「とりあえずなぁ、いま候補が上がってるのはこんだけやねん」
　全員が1曲ずつ挙げるということとしている。すると、見事に票はバラバラ。
「こりゃ～ちょっと見切りつけないとね」
　美里が困った様子でそう言った。
「そうよね……。どうしよっか。明るい感じでまた来年！って雰囲

気？　それか、しんみり？　華やか？」
絵美が意見を求める。
「あんまり辛気臭いの、ヤだな」
由美子らしい答えが返ってくる。それには春樹と慎也も同意した。
「じゃー、この辺は却下だな」
「あたしさぁ、これ好き！　前にカラオケ行った時、陽ちゃん歌ってたでしょ？　あの歌詞、なぁんか響いたのよね～」
そう言って沙希が指差したのは『ハナミズキ』であった。
「あっ！　それオレのチョイス！」
翔が嬉しそうに立ち上がる。
「え！？　じゃあやめよっかな」
「どういう意味やねん！」
「はいはいはーい！　じゃあさ、とりあえずこの3曲に絞って、とりあえず今週中には決めようよ。もうすぐ定演の楽譜も配られるし」
うまく絵美がまとめる。
「せやな！　ほな、この3曲で決選投票するから、ヨロシク！」
「はーい！」
「では、解散！」
時刻は既に8時15分。さすがに遅くなったという感じがしているので、3年生たちは急いで片付け始める。
「あ、ちょっと待って」
部室を出ようとした拓真が転ぶそぶりを見せた。
「終わりじゃねぇのかよ！」
「すんまっせーん！　あんな、ちょっとこっち来て」
10人が小さな輪になってコソコソと話をする。特に聞いている人もいないのだが、なんとなく秘密にしたいのだ。
「え？　それホント？」
陽乃が驚いて聞き返す。
「うん」
「嬉しい！　じゃあ、そんなの決まってるじゃない！　ねっ！」

絵美の言葉に全員がうなずいた。
「ほな、これに関してはあの曲でＯＫな？」
「はーい！」
満場一致という感じで、トントン拍子で決まる。翔は皆の想いが一致していてよかったと胸を撫で下ろすのだった。
「ほな、気ぃつけてな」
陽乃の家の前まで雪子と陽乃を送り届ける。
「ありがと、翔」
「佐野くんも気をつけて帰ってね」
「おーきに！　ほな！」
翔の姿が見えなくなってから、雪子と陽乃は家へと入って行く。
「ただいまー！」
「お邪魔しまぁす」
「雪ちゃん！　今日から1ヵ月半ウチの娘になるんだから、ただいまーじゃなきゃ！」
「えぇ？　そんな厚かましいこと言えなーい！」
二人の笑い声が玄関からこだまする。
「あんたたち、いつまでも玄関で立ってないで手ぇ洗っていらっしゃーい！」
「はーい！」
陽乃と雪子は笑い合いながら靴を脱ぎ、洗面所へと向かって行った。

第４７０話　リコーダーレッスン！

１０月１日月曜日。少しずつ季節は秋へと移ろっていく。そんな中、七海高校の制服は今日から冬服へと切り替えになった。まだ少し暑いという苦情らしきものは生徒たちの間から出るものの、これも毎年のこと。もう少しすれば、冬服でないとやっていられない季節になる。

「おはよ！　どう？　ちょっとは吹けるようになった？」

陽乃は自転車に乗っている翔に追いつき、隣で速度を緩めて尋ねた。

「おー！　おはよ！　まぁ、なんとか指は追いつくようになってきたわぁ」

「やっぱり、サックスと感覚違うから難しいでしょ？」

「せやねん。音程がめっちゃ取りにくいわぁ」

翔たちが話しているのは、リコーダーの話だ。リコーダーといえば、小学校でソプラノ、中学校でアルトを習うのが通例で、誰もが通る道である。しかしながら、その合奏とは言っても音程などを取ることも求められず、楽譜どおりにひとまず吹ければ良いという程度。感情を混めて吹くというような、吹奏楽などに求められることをすることはほとんどない。それゆえ、音楽室から聞こえてくるリコーダーの音色は一歩間違えれば単なる雑音と化すこともありえなくはない。

そのリコーダーが今回、学祭の音楽祭にて演奏する『モンタニャールの詩』の中間部分で出てくるのだ。ソプラノリコーダは翔、アルトリコーダーは慎也、テナーリコーダーは春樹、バスリコーダーは拓真。メンズ・リコーダー・カルテットである。

陽乃は雪子にその話をするとかなり驚いていた。雪子が一番心配

していたのはマイペースな４人が果たしてほとんど音のない状態で、リコーダーアンサンブルなどできるのか、ということだった。
「余計な心配せんでいいって永井ちゃんに伝えんとアカンな！　そのために朝練しよんねんから」
翔は意気揚々とした様子だった。一方の陽乃は、いまひとつ不安が隠せない。
「おっはよー！」
部室に入ると、既に３人は揃っていた。
「遅ぇよ」
「えー！　これでも頑張って来たんやで！？」
時刻は７時半。拓真は７時１５分、慎也と春樹は２０分に来たという。
「１０分しか変わらんやないか」
「朝の１０分は大きいんだぜ」
「エラそうなこと言いよって」
翔はグイグイと慎也の背中を押しながらソプラノリコーダーを取り出す。
「えーっと……それじゃあ朝倉先生、お願いしまーす」
「お願いしまーす！」
「もう！　恥ずかしいな、やめてよ！」
陽乃は顔を赤くしながら椅子に座る。
「それじゃ……ツェーの音でチューニングしよっか。つまり、ドだね」
「はーい！」
「１、２、３、４」
ビヤアァァァ～！というヒドい音が部室中に響く。思わず４人とも吹くのをやめた。
「……何や、今の」
４人が唖然としている。
「だ、大丈夫大丈夫！　最初はそんなもんよ」

しかし、吹奏楽部ではすぐに音程を合わせられる立場にいる自分たちのあまりの音程のひどさに、４人は辟易していた。

その後も結局、音程は合わなかったのでひとまず、ゆっくりのテンポから合わせよう、と陽乃が指示する。

けれども、翔が一度インテンポでやってほしい、と何度も言うので仕方なく陽乃はインテンポでその部分を練習することにした。陽乃の予想どおり、あっという間に全員が落ちてしまい、指揮だけが空しく振られ続けた。

「……最悪」

慎也がますます辟易してしまう。

「俺たち、リコーダーこんな下手だったなんて……」

春樹と拓真も自己嫌悪のような状態になっていた。

「よ、よし！　じゃあやっぱりゆっくり演奏してみよう」

「はい！」

結局、その日の午前中は冒頭部分の出だしなどを揃えるだけで精一杯のような状態であった。

翔たちが朝練をしてまでリコーダーを合わせるのには理由がたくさんある。まずは、通常の練習ではリコーダーを練習する時間まで取れないということ。そして、学祭までにほとんど時間がないということである。

この１０月からは、午後７時半まで練習することになっている。学祭までの期間は本当に学祭の曲しか練習しない。定期演奏会の曲はその後、ということになる。詰めて詰めての練習というのが現状だ。

それも、４人だけの音になるのだから、誰か一人でも失敗すれば演奏どころではなくなってしまう。途中から支えになるタンバリンや弦バスが入ってくるものの、それまでは完全に翔たち４人のアンサンブル。指揮者もここは休みになっている。タンバリンが入ってから指揮が始まるので、それまでは完全に４人の世界となるのだ。

それだけに、彼らのプレッシャーはすごいものであった。

そうは言うものの、やはり練習時間は1時間程度しか取れない。それが4人にいろいろな弊害を出し始めていた。

コクリ、コクリと1時間目からうたた寝をしているのは、他でもない翔である。しかも、顧問の恭一の授業であり、最前列に座っているにもかかわらず、居眠りをする始末。

「……Ｗａｋｅ　Ｕｐ!」

恭一の流暢な英語が飛ぶと同時に教科書がバシッ!と翔の頭にかぶさった。

同じ頃、慎也はというと。

(あーあぁ……もうすぐ当てられる順番なのに)

絵美がヤキモキするのも無理はない。もうすぐ指名される順番にも関わらず、慎也は机の引出しに楽譜を隠して指さらいをするのに必死でまったく気づいていないのだ。

「それじゃあ、川崎くん」

彩の声が響く。しかし、慎也は自分の世界に没頭していてその声に気づかない。

「川崎くーん」

「……。」

「川崎くん!」

「は、はい!」

「ここの答えは!?」

「はい!　Ｄの音です!」

その突拍子のない答えに教室中が笑い声に包まれた。

さらに、春樹と拓真はというと、既に二人仲良く廊下に立たされていた。数学のプリントの下に、楽譜を置いて演奏の表情のつけ方などをメモしていたのを見つかったからだ。

結局、1時間目が終わってすぐに4人とも恭一に呼び出しを喰らった。

「まったく……これじゃあ本末転倒なの、わかってるか!?」

「……すみません」

「とにかく！　佐野は英語のプリント2枚仕上げる。川崎は古文の単語5ページ暗記、水谷と本堂は数学の1枚半プリント仕上げる。わかったな！？」
「はい……」
4人はうな垂れながら職員室を後にした。
「先輩、派手に怒られてましたね」
偶然職員室前にいた亜紀と恵梨が心配そうに翔たちに聞く。
「あぁ……まぁ、自分たちが悪いしな」
翔は苦笑いしながら職員室を後にした。慎也たちも何も言わず、教室へと戻っていく。
そして昼休みになった。
「かっけるー！」
陽乃がH組の教室に顔を出す。しかし、いつものクラスメイトの輪の中に翔の姿はなかった。
「あれ？　かける、知らない？」
「えー？　佐野ならメシも食わずに教室出てったけど？」
「あ、そうなんだ……ありがとう」
昼休みの昼食は学校生活には欠かせない存在だと言っていた翔が、食事も取らずに教室から姿を消すこと自体、陽乃には驚きだった。
すると、正面から美里が歩いてきた。
「あ、陽ちゃん！　慎也見なかった？」
「川崎くんもいないの？」
「のってことは……佐野くんも？」
絵美に聞くと、春樹の姿も見えないという。春樹とほとんどペアの拓真もいない。不思議に思い、3人は音楽室や部室など、心当たりの場所を探してみるものの、結局翔たちの姿を見つけることはできなかった。
美里によると、昼休み終了5分前になると春樹と拓真が戻ってきたという。それまで、どこにいたのかはわからないままであった。
授業が終わってから、陽乃がすぐ部室に向かうと既に3年生女子

は揃っていた。
「男子は？」
「わかんないの。カバンはあるんだけど……」
「どこに消えるんだろうね～……」
すると、屋上のほうから何か音がする、と雪子が言った。
「ホント？」
全員が窓から身を乗り出す。すると、確かに楽器のような音がしていた。しかし、吹奏楽の楽器ではない。
「４つくらい音ある……」
沙希がすぐに察知する。
「ってことはさ。男子じゃない？　あのモンタニャールの部分、きっと練習してるんだ」
陽乃たちは打楽器倉庫からそのまま階段を上がり、屋上に向かう。すると、普段は施錠しているドアが開いていた。
「やっぱりー！　ここにいた」
陽乃の大声に振り返る４人。
「なんでこんなところで隠れて練習するのよ～」
「いやぁ……まだ下手くそやから、みんなに聞かれるのハズいし」
慎也が顔を赤らめる。
「そうそう。だから、ここでコッソリ練習してたんだ」
拓真が笑った。
「……でもさ、やっぱり聞いて指摘してくれる人もいなきゃ、やりにくくない？」
美里の言葉に４人がうなずく。
「しょうがないなぁ！　どう？　みんな。練習終わってから、８時半までなら学校開いてるじゃない。ギリギリまで、一緒に練習しない？」
絵美が提案する。
「それ、いいね！」
「いや、ちょお待てや！　女子、遅くなったら危ないやろ」

翔がすぐに止めようとする。
「だーいじょうぶ！　彼氏が家まで送ってくれたら、問題なし！」
陽乃の言葉に全員が笑う。
「ほな、お願いしまーす！」
「任されました！」
学際まであとわずか。１年生の頃のように、全員で練習する気持ちを思い出しながら、翔は右手に握っているリコーダーを見つめていた。

コラム☆１６　ナナコウ吹奏楽部のリアルな風景

はいっ！　どもー！　佐野　翔でございまーす。
えっとですね、今回は珍しくオレ一人でのコラム担当となります！　ですので、はい！　全部関西弁です！　よろしくね～。
あっ、でも大丈夫。皆さんにわかりやす～い関西弁を心がけるので！
それでですね、今回はナナコウ吹奏楽部のリアルな事情と題しまして、表舞台では見えづらい、ナナコウ吹奏楽部のことからナナコウ全般、あるいは個人的なコトをちょちょいっと皆さんに教えちゃいます！
そうすれば、オレらが引退するまでの期間も一緒に楽しめるコト間違いなし！
では、さっそく！

［Ｎｏ．１　吹奏楽部の合奏時の隊形］
これはわかるようでわかりづらい、演奏している時の席順ですね。例えば、オレが座ってる位置やと、片岡さん、ナイト、ゆーひ、そえちんの後ろ姿が見えてます。ほんで、もちろん先生が見えて、反対側にはしもっちゃん、リーちゃん、いはらっち、大谷ちゃん、宮部っち、アンチが見えます。
陽乃から言えば、かなり広い範囲が見えるわな。前の部員ほぼ全員が見える感じ。座る位置によって全然見える風景が違うから、想像してもらえれば楽しいんちゃうか思います！

＞ｉ３０３０５―１５０＜

［Ｎｏ．２　各パートの担当］
おっと。来ましたね。
まぁ、担当言うてもチューバやユーフォみたいに滅多にパート分かれへんトコとかもあるけど、こんな具合でだいたいパートを担当してるんやなぁって思っていただければ。

【ピッコロ】
井上　佳菜

【フルート】
ファースト：大谷　沙希／井上　佳菜
セカンド：宮部由美子／安藤稚沙希

【オーボエ】
ファースト：野村健之佑
セカンド：歌川　まゆ

【イングリッシュホルン】
野村健之佑

【バスーン】
戸口　誠／志賀　慧太

【エスクラリネット】
小林　梨子

【ベークラリネット】

ファースト：橋本　絵美／小林　梨子／伊原　光瑠
セカンド：瀬戸　優輝／堀江歩由美／河内みゆき／添田麻衣子
サード：進藤　雄飛／速水　騎士／片岡なぎさ／毛利　菘

【アルトクラリネット】
毛利　菘

【バスクラリネット】
逢沢　駿

【ソプラノサキソフォン】
佐野　翔

【アルトサキソフォン】
ファースト：佐野　翔／中野さゆり
セカンド：鈴木　麻綾／朝倉　夏樹

【テナーサキソフォン】
西嶋はるか／工藤茉莉紗

【バリトンサキソフォン】
前田かのこ／真鍋　友美

【トランペット】
ファースト：朝倉　陽乃／久野　彩香
セカンド：松尾　勇／藤咲　流
サード：佐野　綾音／谷村　美咲

【トロンボーン】
ファースト：川崎　慎也／吉山　亜紀

セカンド：江藤　沙知／佐々木雛乃
サード（バストロ）：富士原　徹

【ホルン】
ファースト：永井　雪子／右川　順平
セカンド：時任　裕子／野村　周磨
サード：緒方　賢治
フォース：保田　杏

【ユーフォニウム】
水谷　春樹／加藤　愛実

【チューバ】
本堂　拓真／大岩　智志／飯岡　好美

【弦バス】
三宅　亮平／常盤　貴志

【パーカッション】
スネアドラム：田中　美里／乃木あずさ／岩切　裕也
バスドラム：秦野　恵梨／冨岡　洋之／日高　優
シンバル：乃木あずさ／本堂　晃
鍵盤系：日高　優／岩切　裕也／塚口　和志
小物打楽器：塚口　和志／秦野　恵梨
ティンパニ：冨岡　洋之／田中　美里

パーカッションに関しては、ひとり2つは担当できる楽器がある感じやね。ほんで、大谷ちゃんはハープとピアノも弾けるというスゴい人！

［Ｎｏ．３　ナナコウの制服］
そういえば、１０月なって冬服になったけど、ナナコウの制服ってみんな知らんよね？　実はこんな感じでーす！

＜男子＞

＞ｉ３０３００－１５０＜

＜女子＞

＞ｉ３０３０１－１５０＜

まぁ、よくあるブレザーですよね！　別に目新しいものでもない感じ……。

［Ｎｏ．４　七海市内の高校吹奏楽部ランキング］
なんてリアルな！　てか、露骨すぎるやろ……。見るのが怖いけど、えぇい！

１：私立風見台高等学校

２：七海高等学校
３：北松高等学校
４：県立大海高等学校
５：高見が原高等学校
６：つくし野川学園高等学校
７：鉢ヶ伏高等学校

おぉ！　ナナコウ２番！　しっかしさすがは風見台……やりよるな。ちなみに、市内の高校にはすべて吹奏楽部があります。結構盛んでしょ？

［Ｎｏ．５　後輩たちに聞いた、ナナコウで演奏したい曲ベスト５！］

ん？　何やこの先輩泣かせなアンケート……。オレらもうすぐさぁ……あー！　なんでもない！　寂しくなるから言わん！

……。

気になるから、結果だけ見とこか。

第１位：Ｔｈｅ　７ｔｈ　Ｎｉｇｈｔ　ｏｆ　Ｊｕｌｙ～たなばた～
第２位：マーチ・ベスト・フレンド
第３位：第六の幸福をもたらす宿
第４位：ＧＲ
第５位：ディズニーメドレー３

へぇ～！　結構大曲ばっかり選んでくれちゃってるじゃないの！

んー、でもさ。
他の吹奏楽部で聴けるかもしれへんで？　ほら、泰徳んトコとか先斗くんトコとか真琴ちゃんトコとか！
ウチの吹奏楽部だけやなくて、たくさんの吹奏楽部の演奏を聴くのをオススメします！　では、佐野　翔。練習に戻ってまいります。
定期演奏会、ご期待ください！

第４７１話　私の宝物

１０月２日火曜日。いつものように部室で楽器の準備をしていると、校内放送が掛かった。
「吹奏楽部、朝倉さん。吹奏楽部、朝倉さん。職員室まで」
「あたし？」
陽乃がキョトンとしていると、翔が隣から「アレちゃうか？」と言った。陽乃も思い出したようにうなずき、途端に笑顔になって部室を出て行った。
「あれって……なんですか？」
流が興味深そうに翔に尋ねる。
「あぁ。アイツな、楽器買うてんで」
「マジですか！？」
流だけでなく、勇も一緒になって反応した。
「なんや！　自分ら、聞かされてへんかったんか？」
「全然ですよ！　いま初めて聞きました！」
「それで？　楽器の種類は」
「ゼノ？らしいで」
「マジすかー！　うわぁ、超羨ましい！」
流と勇は興奮を抑えきれないようで、まるで自分のことのように飛び跳ねていた。
「朝倉先輩、まだ帰ってこないんですか！？」
「いま行ったばっかりなのにそんなすぐ帰って来るわけないじゃないの」
美里が傍で聞きながら笑っている。
「あー！　早く見てみたい！　先輩、早く帰ってこないかなぁ」
同感、と思いながら翔はサックスをケースから取り出した。

その頃、職員室では恭一の同級生だという女性が来ていて、早速陽乃に譲る楽器をケースから取り出した。
少し光は鈍くなっているものの、それがかえって重厚さを引き出していて陽乃にはとても輝いて見えた。
「少し年数が経ってて、古いのにお金なんか取っちゃって申し訳ないんだけど」
女性は苦笑いしながらそう言った。陽乃は首を左右に振りながら
「いえ！　とっても嬉しいです！　大切に使わせていただきます！」
と満面の笑みで答える。
「で、どうする？　学祭や定演も、その楽器で出るか？」
その恭一の問いに陽乃は目を点にする。
「どうした？」
「いや、だって……無理じゃないですか？　もっと吹き込んでからじゃないと」
「なに、心配いらないよ。何せ、今までこの人がずーっと吹いてきてる楽器なんだ。新品とはまた、ワケが違うからな。１ヶ月もあれば、自分のものにできるさ」
「……。」
「どうする？」
陽乃はニコッと笑って答えた。
「これで、吹きます！」
「よし！　じゃあ、頑張れよ！」
「はい！」
「お金はまた、指定された振込先によろしくな」
「はい！　ありがとうございました！　失礼します！」
陽乃は何度も礼をして、職員室を後にした。
職員室横すぐの階段を上がりながら、陽乃は少しくたびれたケースを見てホゥッ、とため息を漏らした。本当にＭｙ楽器を手に入れたのだという、なんともいえない達成感や高揚感などが体中を巡り、言葉にならないものが沸々とこみ上げてくる。

階段を登りきり、音楽室のある階に着くと、音楽室の前に何人かの部員の姿が見えた。わかる範囲でも流、勇、彩香、美咲、綾音のトランペッターズがいる。他に美里、翔、夏樹、順平、愛実など金管メンバーと3年生の姿もある。

陽乃は自分の楽器購入がここまで部員たちの関心を引くとは正直思っていなかったので、戸惑いながら部室に戻った。

「や、やぁ」

なんとも妙な感じで部室に戻る。

「先輩！　見せてください！　早く、早く！」

流が頬を赤くしながら小さく飛び跳ねる。

「う、うん。とりあえずさ、中に入ろうよ」

陽乃はなんとか音楽室前に出てきていた部員たちを部室に移動させ、早速楽器を披露した。

「おぉ～……」

そう言ったきり、誰も何も言わなくなった。

「ゼ、ゼノ？。先生の同級生の方から譲っていただいたの」

「……すげぇ。重厚な感じがすっげぇする」

勇が触りたそうにしている。しかし、それがなかなかできないようだ。

「吹いてみる？」

陽乃がヒョイッと勇に手渡した。

「うーわー！　いやいやいや！　だって先輩、まだ吹いてないんでしょ！？」

「うん」

「うんじゃないッスよ！　先輩がまず吹かないでどうするんですか！？」

「えー？　そういうもん？」

「そういうもんです！　さ、先輩！　初めの第一歩です！」

陽乃は楽器を改めて手にする。それからいつもの楽器ケースからマウスピースを取り出し、楽器に装着する。

「マッピは？　そっちのん使わへんの？」
「とりあえずは、吹き慣れてるほうでと思ってさ」
そう言いながら陽乃は楽器を構えた。そして、スウッと軽めに息を吸って、いつものように吐いた。

パアアアーッ……！

「……！」
「おぉ……」
誰もが、陽乃ですら言葉を失うほどにクリアな音が部室中に響き渡った。
「誰の楽器の音？　すっごい綺麗な音したよ」
音楽室にいた沙希と絵美までもが部室にやってきた。
「すうっげぇ！」
第一声を上げたのは翔だった。
「すっげー！　何、その楽器！　音、めちゃくちゃクリアやん！　ビックリするわー！」
「あ、あたしもビックリした」
陽乃のその言葉に笑いが起きる。
「ですけど先輩、マジすごいですよ！　それで学祭と定演、出るんですか？」
「一応、そのつもり」
「おぉー！　楽しみですね～！」
トランペットの面々がそれぞれ嬉しそうに話をしている。陽乃はそこで、思い出したように言った。
「あのさ。あたしが今まで使ってた、学校の楽器……どうする？」
彩香、勇、流、綾音、美咲がそれぞれ顔を見合わせる。そして、謙遜しながら流が言った。
「1年はそんなの、恐れ多くて……なぁ？」
綾音と美咲がウンウンと大きく首を上下させた。

「それじゃあ、久野ちゃんか松尾くん……どう？」
彩香と勇が同時に顔を見合わせる。そのままの状態でしばらく見つめあい、同時に言った。
「松尾くんが」
「久野が」
陽乃は同時に言ったのに驚き、しばらくしてから笑った。
「二人とも、おもしろい！　何、なんでそんな遠慮するの？　二人とも遠慮なんていらないのに」
しかし、結局は話は平行線で決着がつかない様相を呈していた。
「しょーがないな。とりあえず、今日は保留にしよっか。何も無理して楽器替える必要もないし」
ホッと二人が同時にため息をついた。

その日の合奏終了後。
「ねぇ」
彩香が勇に言った。
「んー？」
「朝倉先輩の楽器なんだけどさ」
「おう」
「1年生に、吹いてもらわない？」
勇がゴソゴソと楽譜ファイルを仕舞いながら答える。
「なんだ。久野も同じこと考えてたのか」
「なぁんだ。松尾くんも？」
二人は見つめ合って笑う。
「やっぱアレ？　俺らももう1年ちょいだし、ちょっとでも先のある1年生に吹いてもらったほうが、いいって思った感じ？」
「そうそう。松尾くんもそう思うんだ？」
「考えることは同じだな」
しばらく会話が途切れる。彩香は楽器を磨きながら続けた。
「ホントなら、私たちのどっちかが吹いたら一番丸く収まるんだろ

うけど」
　勇が引き取った。
「それじゃ、俺たちが納得しないんだよな」
「そう。そういう感じ」
　彩香が笑う。
「朝倉先輩に、そう言ってみようか？　先輩なら、きっと納得してくれると思う」
「そうだね。でも、１年生がねぇ……」
　３人とも謙遜し、下手をすれば押し付け合いのようなことにもなりかねない。そのあたりを二人は心配していたのだ。
「だったら、朝倉先輩の楽器を３人に吹いてもらって、先輩にその音を聞いてもらって、一番吹いてほしい人に吹いてもらうっていうのは？」
「ん～……それもいいけど。俺としてはやっぱり、楽器に選ばれるんじゃなくって、楽器を選んでほしいかなぁ」
「あー……そうね。それも一理あるなぁ」
　二人の話し合いでは折り合いがつきそうにないので、結局陽乃に二人は相談した。
「へー！　二人とも、そこまで考えてるの！？」
　陽乃はかなり驚いているようだった。翔や拓真も驚いている。
「オレなら喜んで吹いて、その先のことなんて全然考えへんけどなぁ」
「そりゃいつもだろ」
　拓真の厳しいツッコミに勇や彩香も思わず笑ってしまう。陽乃もひとしきり笑ってから二人に言った。
「わかった。二人の気持ち、確かに受け取りました」
「ありがとうございます」
　二人はペコリとお辞儀をする。
「とりあえず、楽器の件はあたしから１年生に話してみて。何も今すぐ交換する必要なんて全然ないから、ゆっくり考えてもらうね」

「はい！　お願いします」
「任されました」
ひとまずは、話が落ち着いたので陽乃も一安心だ。
「さてっと」
陽乃は買った楽器を早々に仕舞い、今まで使っていた学校の楽器を取り出した。それから思い立ったように内線電話の前に立ち、職員室の番号を押す。
「あ、東先生。朝倉です」
陽乃はしばらく恭一とやり取りをし、それを終えると楽器をカバンの近くに持って行った。
「どないすんの？」
翔が楽器を見ながら陽乃に聞く。
「持って帰る」
「持って帰って、練習？」
陽乃はフルフルと首を左右に振った。
「持って帰って、磨いて、洗うの」
「丸洗い？」
陽乃はうなずいた。
「一応……今日でさ、この楽器とはお別れじゃん？　1年生から、下手くそなあたしに付き合ってくれた、大事な仲間と」
「せやなぁ……」
翔もしんみりした様子で答える。
「だから、今までの感謝を込めてしっかり洗って、次に吹いてくれる人に渡したいの。私のクセとか全部、落とした感じで次の人に渡したい」
「うん……」
翔が切なそうな表情でうなずいた。
「よし！　帰ろう、翔」
「おう！」
陽乃は今まで使っていた楽器を大切そうに右手で握り締め、颯爽

と部室を出るのだった。

第472話　名前をつけよう

「ねぇ」
帰り道の途中で、陽乃は翔に聞いた。
「なんや？」
「翔は、楽器に名前とか付けてるの？」
「な、なんや急に」
翔の様子が急にモジモジしたものになる。
「いや、この間さぁ」
陽乃が優衣と電話で先日、話をした際に『楽器に名前をつけているか否か』という話題になったそうだ。そのとき、陽乃はまだ学校の楽器を吹いていたが特に名前を付けるなどは考えてもいなかった。
「ほんで？　濱口さんは？」
「名前つけてたよ」
「マジでか！　なんて名前？」
「エリックだって」
まるで外人のような名前だと思いつつ、翔はふと思い出した。
「ははぁ……」
「どうしたの？」
「いや、由来がわかった」
「ホント!?　何？　どんな由来？」
翔はトランペット奏者で有名なエリック宮城という人がいることを陽乃に説明した。
「へぇー！　すごーい、なんか優衣ちゃん渋―い！」
陽乃はキャッキャッと笑う。
「ねぇ！　それじゃ、翔も何か考えてるの？」
「まーなー」

翔は飄々とした様子で陽乃の質問をなんとか交わそうといている。
それを陽乃もすぐに察知した。もちろん、そんなことですぐに逃すような陽乃ではない。
「えー？　気になるじゃん。教えてよ～」
「どーないしよっかな～。お前、すぐに人に言いふらすしなぁ」
「ずるいよ～。なんで教えてくれないの？」
「さて、なんででしょう？」
翔はクスッと笑いながら先を歩いていく。陽乃はずっと教えて、教えてと言いながら翔を追いかける。
「お前も諦めの悪いやっちゃなぁ」
「当たり前じゃん。自分が知りたいことはどこまでも追い求めるよ、あたし」
ブッと翔が吹き出した。
「しつこい性格やねんな」
「こだわりがあるって言って！」
「へいへい」
翔は笑いをこらえながら先を行く。
「あっ、ズルい！　そうやって交わしながら家へ帰るつもりなんだ！」
「バレたか」
翔は笑いながらペロッと舌を出した。思わずキュンとなる陽乃。しかし、その気持ちを何とか押さえ込んで、翔に詰問する。ギャアギャアと言い合いをしながら、なんとか折れた翔が津上橋のところで足を止めた。
「お前も諦めの悪いヤツやな、マジで」
「だって翔の彼女だもん」
「なんやそれ」
翔は笑いながら津上橋の欄干の上に腰掛けた。陽乃はその様子を見ながら、翔と会って間もない頃、一緒に登校することがあれば必ず、彼は欄干の上を歩いていったので危なっかしいと何度も思った

ことがあったのを思い出していた。
「1，000円」
「は？　唐突に何？」
「名前聞きたかったら、1，000円お支払い願います」
「バッカじゃないの！？」
陽乃は思い切り翔にデコピンを喰らわせた。
「痛ってー！　お前、アホか！」
「アホはアンタでしょ。なんで名前聞くのに1，000円払わないとダメなのよ！　バカみたいじゃない」
陽乃はプイッと翔に背中を向けて今度は先を行き始める。翔が慌てて追いかけた。
「ゴメンって。そない怒るなや」
「じゃあ素直に教えてよ」
「……ん。わかった」
翔はそっと陽乃の耳に口を近づける。
「あんな……」
「ちょ、ちょっと待って！」
陽乃は顔を赤くしながら翔のアゴを思い切り両手で跳ね除けた。
「アホかお前！　めちゃ痛いやろが！」
「だって！　息が耳にかかってくすぐったいんだもん！」
「はぁ！？　すぐ終わるやろが！　我慢せぇ！」
「やだぁ！　あたし、耳弱いんだから！」
「えぇから！　ホレ！」
翔は無理やり陽乃の体を自分の方に引き寄せる。
「……。」
「……。」
フゥッと翔が陽乃の耳に息を吹きかけた。直後、乾いた音が津上橋周辺に響き渡る。
「アンタ、マジでバッカじゃないの！？」
「いくらなんでも平手打ちすることあれへんやろー！？　あぁ～、

めっちゃ痛い！」
左頬を押さえながら翔が涙目になっている。
「もういい！　あたし帰る！」
「わかった！　マジで言う！　怒らんといてくれ」
陽乃が疑いの眼差しで翔を見つめる。
「このとおり！」
「……最後のチャンスだからね！」
「了解です！」
それから翔はそっと陽乃に、今度こそ耳打ちした。
「……ソーヤ」
「ソーヤ？」
陽乃は言われた言葉を反芻した。ソーヤ、と聞いて陽乃がすぐに思い浮かべたのはトム・ソーヤーの冒険だった。しかし、翔はそんな風なキャラクターではない。おそらく、それは関係がないだろうと考えた。
「由来は？」
「……。」
それを聞くと翔は黙り込んでしまった。
「何？　そんな恥ずかしい理由なの？」
陽乃が笑いそうになりながら翔に聞くと、翔はそっと言った。
「漢字で……奏でるに、えっと……弥はほら、弓にカタカナのホみたいなん、書いて……」
「あぁ……うん、なんとなくわかる」
「奏でるに弥で、奏弥（そうや）」
陽乃はその字体と響きを聞いて、素直な気持ちを答えた。
「カッコいいじゃん」
「エへへ……」
翔が恥ずかしそうに笑う。
「で、由来は？」
翔は今度こそ真っ赤になりながら、小声で答えた。

「けっ……結婚して、子供ができて、男の子やったら、つけたい……名前」
「え……」
陽乃も赤くなって黙り込んでしまう。
「……。」
「……。」
妙な沈黙がしばらく続き、それを破るように翔が言った。
「エヘヘ！　ま、まぁそういう感じ！？　何にせよアレや！　楽器に名前つけると、ごっつ愛着湧くでぇ！」
それだけ言うと、翔は先を歩き始めた。陽乃はしばらく立ち尽くし、それから翔を呼び止めた。
「あたしも！」
「ん？」
陽乃はこれでもかと自分でも真っ赤になっていることがわかった。それからハッキリと言った。
「あたしも名前、考えてたの！」
「楽器の？」
フルフルと首を横に振り、陽乃はすぐに答えた。
「しょ、将来の、子供の名前……」
「……へ、へぇ。そうなん？」
これ以上ないほどに二人とも体温が上がっていた。
「だから、それを楽器の名前にする。あたし、翔と……将来、一緒になるって約束の意味も込めて、名前、つけるよ」
「……うん」
陽乃はさっきの翔と同じように、彼の耳にそっと囁いた。
「コトネ」
「ことね……」
「琴はお琴の琴。で、ネは音。それで、琴音」
「うん……」
翔は優しい笑みを浮かべてこう言った。

「えぇ名前やな」
「……えへへ」
翔はそう言うと、ギュッと陽乃の手を握った。
「帰ろう」
「うん」
二人は手を互いに強く握り締め、橋を渡っていく。
「あっ！　おい、上！」
「え？」
陽乃と翔が同時に空を見上げると、流れ星がなんと2つも流れたのだ。
「わー！　お願い事、お願い事！」
陽乃はそう言っているうちにあっという間に星は流れていった。
その陽乃の言葉を遮るように、翔は大声で叫んだ。
「ひなのと一緒にずっとおれますように！」
「！」
あまりの大声で周りの人々の視線が集中する。
「やだぁ……ちょっと、さすがに恥ずかしいよ」
「えぇやんけ！」
翔がニカッと笑った。
「ホンマのことやもん！」
「……。」
「さ！　帰ろ！」
陽乃は温かく、少しだけ大きな翔の手に自分の手を委ねて、引かれながら自宅へと歩き始めるのだった。

第４７３話　配られた楽譜たち

１０月５日金曜日、午後４時。七海高校吹奏楽部の部員たちの目がキラキラに輝いていた。というのも、第１回定期演奏会で演奏する曲の楽譜が遂に配布されたからである。

「とりあえず、第１部と第３部の曲はこれですべてだ。第４部に関しても、明日には配布できると思う。それから、アンコール２曲。これは来週月曜か火曜には配れると思うぞ」

翔はずっとソワソワしている。どうやら、実際に自分が選んだ曲が本当に採用されるとは思ってもみなかったようで、随分とご機嫌な様子だった。陽乃から見ていても、その嬉しさはヒシヒシと伝わってきていた。

それにしても、やはり演奏会というだけあってレベルの高い曲が揃っていた。特に、今まであまり接したことのない拍子まである。４分の５拍子など、陽乃は今まで吹いたことがない。陽乃どころか、ほとんどの部員が経験の少ない拍子であった。

ちなみに、第３部な基本的に部員たちの推薦曲が候補として上がり、それを恭一が定期演奏会でソロの振り分けや演出のしやすいものをさらに選別した結果になっている。それに対し、第１部は恭一が部員たちの技術などを総合的に考え、演奏可能なレベルのものを選んでいた。

第１部のうち、２曲は今年のコンクールで演奏した課題曲と自由曲である。演奏しなくなったとはいえ、まだ１ヶ月少々しか経っていないので、ほとんど練習はしないと恭一は断言した。

さらに恭一は踏み込んで色々と聞いていく。１部の曲の残り２曲を演奏したことがある部員はゼロ。聞いたことのある部員もゼロという状態であった。この２曲は完全に手探りな状態でいかなければ

ならない。
　それに対し、3部になると演奏を聞いたことがある、もしくは原曲を知っているという部員はグンと増えた。自動車のCMで流れていた、ジブリの映画、深夜のラジオ番組で流れていたなどなど。やはりポップスというのは普段から親しむ機会が多いという証拠でもあった。
「それでな。ソロの話なんだけど」
　部員たちのざわめきが静まり返った。何かを予感しているのか、複雑な表情をしている部員も数名いた。
「基本的に3年生優先で、先生が決めていってもいいか？」
「はい！」
　間髪いれずに全員がそう答えたので、かえって恭一は拍子抜けしていた。
「ただまぁ、みんなの定期演奏会なんだから、3年生以外でもバンバンソロ吹かせるぞ？　それはわかっておけよ？」
「はい！」
　それを聞き終えると、再び部員たちは楽譜を楽しそうに見て、各々パート決めなどをしなければならない、などと盛り上がっていた。
「あの」
　手を上げたのは駿だった。
「はい、逢沢」
　駿がゆっくりと立つ。
「えと……」
「言いにくいことか？」
「少し」
　駿は苦笑いをして、何度か咳払いをしてから言った。
「佐野先輩たちが引退するときの……曲は、決まってないんですか？」
「……。」
　音楽室中が静まり返る。恭一が翔に聞いた。

「だってさ、佐野。どうも逢沢はお前らにサッサと引退してほしいらしい」
「マァジでー！　超ショックやねんけど！」
駿が真っ赤になって「そ、そんなわけないじゃないですか！」と困惑していた。恭一と翔が意地悪そうに笑っている。
「まぁまぁ、冗談は置いて。佐野、どうだ？　決まりそうか？」
「多分、あさってには結論出ると思います。まだちょっと、2曲でどうするかを全員で決めかねてるんで」
「だそうだ。逢沢、もうちょっと待ってくれるか？　佐野たち、君らに演奏してほしい曲がなかなか決まらないらしい」
「せっかくみんなに演奏してもらえるんだから、妥協したくないの。ねっ！」
美里が3年生に同意を求めると全員がうなずいた。
「わかりました！　俺、待ってますんでバリバリ意見ぶつけて決めちゃってくださいね！」
駿がようやく笑顔を見せた。

「さてっと！」
楽譜の配布も終わり、アルトサックスパートではパート割が始まっていた。
「基本的にファースト2人、セカンド2人でいけるな」
「そうですね～。あ、でも課題曲と自由曲はどうします？　さゆも入りますし」
「えーっと、パート割どないなってたっけ？」
「私と佐野先輩がファースト、朝倉くんがセカンドです」
麻綾がスッと答える。
「それじゃあ私は両方ともセカンドで」
さゆりが嬉しそうに言った。
「朝倉くん、楽譜またコピーさせてね」
「はい！」

それを決め終えると今度は3部の楽譜を広げた。
「3部のパート割が難しいな。どないする？」
「基本的に、アルトサックスのソロはもう全部佐野先輩でいいと思います」
夏樹がサラリと言った。それに麻綾とさゆりも同意する。
「うほーい！　さりげにハードル上げてくれるやんけ！」
「いやぁ、だって主役は先輩方の学年じゃないですか？」
「いやいや、せやけど先生はみんなの定演やって言うとったやろ？　オレ一人で全部ソロってどないやねんって感じせぇへん？」
「いいじゃないですか！　先輩、ずっと頑張ってこられたんですから晴れの舞台では目立たなきゃ！」
さゆりがそう言ってアルトサックスのファーストの楽譜をすべて翔に手渡した。
「おぉーい！　全部オレに押し付けよんちゃうやろな！？」
「そんなわけないじゃないですか！」
さゆりが必死になって言うので、おかしくなって翔は思わず笑ってしまった。
「ウソウソ！　じょーだん！　わかってるよ。ありがとう」
「もー！　先輩も意地悪ですよね～」
サックスの部屋から大笑いの声が響き渡る。
そして午後5時。今日は特別に部活を早めに切り上げた。
「忘れ物ない？」
陽乃が絵美に確認する。
「大丈夫。ポスターにチケット、とりあえずは入ってる」
「よし！　じゃあ後は道に迷わないようにするだけだね。よろしくね、川崎くん」
「任せとけって。それより、俺が心配なのはあっちだよ」
慎也がチラッとその3人――美里、由美子、春樹のほうを見た。
「あ、あたしたちのこと！？」
美里がわざとらしい感じで動揺する素振りを見せる。

「なんであたしたちが。ねぇ、由美ちゃん！」
「そうよー！　私たちほど安心して見守れるグループ、ないよね！」
それを聞いた途端、陽乃や絵美、慎也、そばにいた賢治や杏たちまで笑い出した。
「なぁによ！　超失礼！　行こう、２人とも！」
美里が先陣を切って音楽室を出る。彼らが行く先は、北松高校と大海中学校だ。そして、陽乃たちは葉島中学校と袴田中学校へ行く。目的は他でもない。定期演奏会の宣伝だ。
七海高校の定演は入場無料にしている。七海高校に限らず、市内の中学・高校はすべて演奏会を入場無料にしている。市民にも音楽に慣れ親しんでもらうという教育委員会の方針もあるのだ。
「それじゃ、あたしたちも行ってくるね」
陽乃と絵美、拓真の３人が部室を出ようとする。
「おう！　気ぃつけてな。よろしく！」
「はーい！」
翔は陽乃たちを見送ってから、すぐに部室へ入る。
「お待たせ！　選抜隊員の皆さん！」
そこにいるのは稚沙希、菘、徹、あずさ、恵梨の５人。彼らの共通点。それはずばり、書道の有段者であった。
「何校くらい送るんですか～？」
恵梨が興味深そうに翔に聞く。
「いまわかってる範囲で、１０校はあるから、１人２枚書いてもらったら十分」
「なぁんだ！　余裕です。任せてください！」
恵梨がやる気マンマンで筆ペンを手にした。あずさたちも葉書と筆ペンを手に取り、真剣な表情で住所と宛名を書いていく。
この葉書。それはずばり、第１回定期演奏会の招待状であった。市内の高校には部員たちが直接赴き、定期演奏会のお知らせをしていく。それは陽乃たちのようなグループが担当。それに対し、市外もしくは県外の高校や関係団体には葉書で演奏会のお知らせをする

ことになっている。
そして、今日のこの時間はその宣伝のために費やされることになっていた。
今回、葉書を送付する先は下記のように決定している。

神奈川県横浜市立虹西高等学校吹奏楽部
石川県古氷町立古氷中学校吹奏楽部
愛媛県常套市立常套中学校吹奏楽部
大阪府南大阪市立光来高等学校吹奏楽部
大阪府東富田市立北坂部中学校吹奏楽部
島根県桜田市立桜田中央高等学校吹奏楽部
兵庫県神戸市立みなと中学校吹奏楽部
千葉県湊居市立湊居東高等学校吹奏楽部
栃木県定鐘市立成願寺中学校吹奏楽部
東京都港区立千条浜中学校吹奏楽部

虹西高校は真琴の高校。古氷中学は拓也とともみの中学校。常套中学校は泰徳の中学校。光来高校は雪子と大輔の高校。北坂部中学は周磨の出身中学。桜田中央高校は先斗の高校。みなと中学校は和志の出身中学。湊居東高校はしおりが指導に行っている高校。成願寺中学はあずさの出身中学。そして、千条浜中学は恵梨の出身中学である。
遠いところでは四国地方や中国地方もあるのだが、部員たちが少しでも関わりのある地域の学校には招待状を出そうという恭一の意向で、こうなったのだ。
「どれくらいの人、来てくれますかね？」
あずさと恵梨がワクワクした様子で翔に聞く。
「まぁ、実際難しいやろうけど……少しでもたくさんの人が来てくれるように、気持ち込めてお願いします！」
「了解です！」

５人は懇切丁寧に一文字一文字に思いを込めて書く。
（誰が来てくれるやろ……返事楽しみにしとこ！）
翔は笑顔で窓の外を見つめた。日が暮れるのが本当に早くなったと感じながら。

第４７４話　１・２年生の温度差

１０月６日土曜日。午前中はパート練習で、今日は午後から学祭の集中通し練習を行う。というのも、明日翔たちは不在になるからである。実際には、今日の夕方までに翔たちは七海高校を出発してしまう。

明日は石川県にある古氷中学の定期演奏会。最終的にメンバーは翔、陽乃、沙希、優輝、麻綾、徹、まゆ、和志、美咲、沙知の１０人になった。そのため、集中的に練習できるのは今日が最後ということになる。

しかし、１・２年生たちはかなり焦りの色を濃くしていた。特に１年生の焦りようは半端なものではなく、サックスパートの夏樹もトランペットパートの綾音、流、美咲も今朝からロングトーンそっちのけでソロを吹こうとしていた。

「ちょっと、ちょっと待って！」

陽乃が見かねて３人を止める。

「なんでロングトーンもなしでいきなりソロの練習しちゃうの？」

「時間がないからです！」

流が即答した。

「その気持ちはわからないでもないけどさ、やっぱりロングトーンあっての曲の練習だよ？　先生もいつも言ってるじゃない。曲はロングトーンとかの基礎練習の延長線上だって。そこから、感情を込めるとかそういうことが出てくるって」

「……はい」

しかし、相変わらず不服そうな流。何も流に限ったことではない。美咲と綾音も同じような状態で、特に綾音は形相があまりにもスゴいので、陽乃も彩香も勇も声すらかけられないほどだ。

それは他のパートでも同じであった。サックスでは夏樹が今回、ソロを担当しているために必死になっている。力んでいるせいか、先ほどからキィキィとリードミスが目立っている。稚沙希もタイタニックでソロがあるために、そこばかり練習している。

それに対し、余裕で構えている2年生もいる。愛実がその一人である。愛唄でソロがあるのだが、愛実自身特にプレッシャーを感じてはいないようで、愛唄はサラリと練習している程度だ。同じく優輝もほとんど吹いていない。しかし、ソリで優輝と同じ箇所を吹く麻衣子は必死で同じ場所ばかり練習している。あまりにも部内で温度差があるので、3年生も戸惑いを隠せない状況だ。

「先輩、マジで明日いないんですか？」

夏樹が不安そうに翔に聞いた。

「あー、うん。ほいでも、自分らやったらキチンと練習できるし、大丈夫やって」

「そうですかね……」

夏樹はいまひとつ不安が拭いきれないようで、ため息を漏らした。

「ほーれ！　いつまでもウジウジしとったらアカンで！　わかってる？　自分。もう言うてる間にオレら引退すんねん。その後、部活引っ張って行かなアカンようになるんは、自分らもそうやねんからな。いつまでも後輩気分でおってもらったら困る！」

「はい……」

そうはいうものの、やはり初心者から始めた部員にとっては不安のほうが大きいものだ。部内でも温度差があるのだが、特に目立っているのは最高学年が2年生のパート。ホルンとオーボエ、バスーンがそれだ。

オーボエとバスーンには『千と千尋の神隠し　ハイライト』で結構緊張するソロがある。しかし、健之佑と誠はほとんど気にしていないようで、マイペースに練習をしている。順平もタイタニックのソロで一時期悩んだものの、今となってはほとんどそんな素振りは見せていない。

それからパーカッション。このパートはいわば一人ひとりがソロのようなもの。なので、緊張することなどしょっちゅう。そのためか、今回も特に変に緊張せずに各自練習に取り組んでいた。

「とりあえずさ、吹けばいいってもんでもないぜ」

健之佑がまゆに言う。まゆも『千と千尋の神隠し　ハイライト』でソロがあるのだ。彼女がなぜ緊張しているかというと、ただのソロではなく、沙希のピアノと合わせる必要があるのだ。

「言えるのは、私のピアノはあくまで伴奏だってこと。まゆちゃんのオーボエがメロディなんだから、目立ってむしろ私を引っ張ってくれなきゃ」

「そ、そんな！　私、そんな上手くないし」

「上手いとかそういう問題じゃなくて。自分でリードしていかなきゃ！　ここは私の見せ場なんだって。せっかく、ソロ吹くんだよ？　もったいないじゃない」

「そーそー」

由美子が笑う。

「それに知ってた？　吹奏楽に限らず、楽器やってる人ってね、多かれ少なかれ目立たがりな部分があるらしいよ」

「え？　それ本当？」

沙希が由美子に聞く。

「うん。そうらしいよ」

「なるほど……」

沙希が妙に納得する。健之佑も納得してしまった。３年生の顔が思い浮かぶのだ。翔に陽乃、美里の３人は思い切り目立ちたがり。密かに目立ちたがりな慎也、春樹、絵美、由美子。さり気なく目立つ拓真、雪子、沙希。１０人全員がキッチリ当てはまるからだ。

「そうなんですね……目立つことか」

まゆが意外だという感じでうなずく。

「そうだよ～！　目立てる部分があるっていうのは、幸せなんだから」

声がしたので振り返ると好美、智志、亮平、貴志の４人がいた。
「おっ。バスパ１・２年生。休憩？」
「はい」
沙希の問いに笑顔で答える好美。
「ねぇ。ソロがあるって羨ましいよね」
好美が貴志に聞くと、貴志はウンウンとうなずいた。
「今回もチューバ、弦バスにソロらしいソロはないからな」
「そうなの？」
「そーなの」
好美が残念そうに答える。
「特にコレとか見ろよ」
そう言って智志が見せたのは『ディスコパーティー？』の楽譜だ。
特に終盤は音符がたくさん書かれているが、誰の目にも明らかな伴奏であった。
「真っ黒な割りに、これ全部伴奏だから」
「えー！？　そうなんですか！？」
まゆが驚いて大声を上げる。
「残念だよ、マジでな」
亮平が苦笑いした。
「ま！　ソロって緊張すっけどさ。そんな力みすぎてガチガチで吹いたら、せっかくの見せ場がパァじゃん？　もっとリラックスで行こうぜ」
智志のあっけらかんとした言い様にまゆは思わず笑ってしまった。
「はい！　頑張り過ぎない程度に頑張ります」
「そーそー！　そういう感じ！」
笑い声が響き渡る中、頭を抱えているのは亜紀だ。
「どした？　珍しい。ヨッシーがそんな頭抱えるって」
慎也が心配そうに亜紀の顔を覗きこむ。
「私……アドリブソロってほとんど経験がないんです」
アドリブとは、自由に吹くということ。しかし、てんでムチャク

チャを吹けばいいというものでもなく、曲の調に合った範囲内で自由に吹かなければ、曲として成立しにくい部分がある。
「そうなのか？　意外だなぁ。ま、俺も経験ないけど」
「ズルい。先輩、それわかってて私にソロ渡したんですか？」
「そんなことすると思う？」
亜紀が慎也の顔を見つめる。
「いえ。先輩、そんな人じゃないですもんね」
「よくおわかりで」
慎也がニカッと笑った。
「とりあえずさ。ここにコード書いてくれてるし。その範囲内でヨッシーができるだけのことをすればいいと思う」
「はい」
「それでどうしても無理なら……そうだな。あ、聴こえてきた」
「？」
「聴いてみな」
しばらくすると、強烈なトランペットの音色が響き渡ってきた。
「おぉ……」
これには亜紀もため息を漏らしてしまう。
「勇っち、アドリブソロ得意らしいぜ。指導してもらえば？」
「知らなかった。そうします！　まずは自分で頑張ってみてっと」
亜紀はコードを調べて手探りながら、ソロを作り始めた。
「わかんないことあったら、言ってよ？」
「はい！」
亜紀はとびきりの笑顔で慎也の問いに答えた。こうして少しずつ自分たちが手を出さずとも、後輩たちは成長するんだな、と慎也は考えていた。少しだけ寂しさを感じながら。

第４７５話　ぼくらのさいご

「それじゃあ、今日の合奏はここまで」
「え？」
時刻は午後３時。まだ翔たちが出発するまでには時間があるのにも関わらず、恭一が手を止めたので数人の１・２年生たちが声を上げた。
「それじゃあ……宮部か？」
「あ、いえ。３年生全員でお願いします」
「ＯＫ。じゃあどうぞ」
「はい」
恭一とバトンタッチという具合で、３年生１０人がゾロゾロと前に並ぶ。
「えーっと……ねぇ、佐野くんが言ったほうがいいんじゃない？」
「え？　オレかいな」
翔がなぜか照れている。
「なんで照れるのよ」
陽乃が的確なツッコミを入れた。
「なんとなくや、なんとなく」
翔がへへッと笑ってから１回咳払いをし、ようやく言った。
「えーっと……」
翔が言葉に詰まる。その様子に真っ先に異様さに気づいたはるかが甲高い声を上げた。
「きゃー！　きゃー！」
隣にいた茉莉紗や夏樹、前にいた駿、後ろにいた智志が半分飛び跳ねるように驚いた表情を見せた。
「んだよ、西嶋！　急に大声上げやがって！」

智志が負けじと大声を上げる。しかし、はるかだって負けてはいない。
「きゃー！　先輩！　あたし絶対聞きません！　見ません！　知りません！」
はるかはそういうと楽器を外して床にそっと置き、目をつむって耳を塞いでしまった。突然のはるかの奇行に笑いさえ起きている。
翔も笑っていたが、陽乃はその目に少しだけ寂しさが宿っていることにすぐ気づいた。そして、ひとしきり笑ったところで翔がそっと言った。

「オレらが引退するときの曲を、決めました」

「……。」
駿や麻衣子、菘がポカンとしている。
「……へ」
素っ頓狂な声を上げたのは沙知だった。
「オレらが引退するときに、君らに見送ってもらいたいから、この曲を選びました」
陽乃が引き取る。
「なんで今このタイミングでって思うかもしれないけど。でも、なるべく早くにみんなに楽譜は配っておきたかったの」
はるかはすべてを察知していたのか、未だに耳を塞いで目をつむってまったく話を聞いていない。
「ほらさ。みんなも、なんか……。えーと」
微妙な空気になって拓真が言葉に詰まる。翔が引き取った。
「ほれ！　絶対オレらが引退するとき、みんな泣くやろー！？」
全員がクスッと笑った。
「なぁ！？　絶対泣いてくれる思てんねん、オレ！」
「俺は泣きませんけどね～」
徹がイタズラっぽく笑いながら言った。

「何おぅ！？　薄情やなぁ」
翔が殴りこみそうな雰囲気を醸し出した。笑いが起きる。
「とにかく。なんでこのタイミングで楽譜を配ったかというと、暗譜をしてほしいからです」
翔の声が急に真面目になったので、ざわめきが静まる。
「泣いても、顔がグシャグシャになっても、暗譜してたら何とか吹けるやろ？」
「……そうですね」
駿が納得した。
「わかりました。楽譜、ください」
駿が立ち上がる。
「はしもっちゃん」
絵美が前に進み、駿にバスクラリネットの楽譜を手渡した。
「やだぁ。なんか、卒業式みたい！」
みゆきが笑った。しかし、声が震えている。
「ホント！　なんかもうシンミリしちゃってますよ！　なんかやだぁ！」
そう言って麻綾が笑う。けれども、その表情は堅かった。
「ウッ……」
突然、嗚咽が漏れ始めた。はるかだった。
「に、西嶋ちゃん？」
「ウー……」
「お、おいおい！　何も今泣かんでもえぇやろ！」
翔が慌ててはるかの傍に駆け寄る。麻綾やさゆりもはるかの傍に駆け寄った。
「ほら！　な。一応、オレらの気持ちはわかってほしいわけよ！　なんていうか、こういう雰囲気にしたのは悪かったけど」
「す、すびばせん！　先輩はじぇんじぇん悪くないでず」
はるかが泣き顔でグシャグシャになりながらも気丈にそう答えた。
「で、でも……急にそんなこど言わないでください。あだじ、こう

いうの弱いんで」
「わかった、わかった！　ほいでも、オレらの気持ちはわかってくれる？」
　はるかが小さくうなずいた。
「ありがとう！　ほな、みんなも楽譜受け取ってな」
　３年生が丁寧に部員たちに楽譜を配る。曲は『ハナミズキ』だった。
「……。」
　春樹が愛実に楽譜を手渡す。
「しっかり、練習よろしく！」
「はーい」
　ニッコリと笑って愛実は楽譜をしっかりと受け取る。
「先輩！　俺ドラムセットしたいっす！」
　楽譜を渡しに来た美里に真っ先に駆け寄ったのは洋之だった。
「あー！　ズルいー！　ドラムセットはあたし！」
　そこへ割り込むように恵梨がやってくる。
「えー！　じゃあ私どうしよぉ」
　あずさが困っている。
「あーもー！　ほら、ジャンケンで公平に決めるよ！」
　美里が困り果てて洋之から楽譜を取り上げた。
「せーんぱいっ」
　さゆりが可愛らしく翔に駆け寄った。
「おっ。楽譜やんな！」
「……。」
「どないしたん？」
「いえ！　なんでもないでーす」
　さゆりはすぐに楽譜をもらって自分の席に戻る。そして、翔が発した先ほどの言葉を思い起こす。
　おっ。楽譜やんな。

その声が少し震えていた。気のせいかもしれないが、瞳も少し潤んでいるように見えた。もう一度、翔の表情を見るさゆり。しかし、その表情にもう先ほどの潤んだ瞳はなかった。

「気のせいか」

さゆりはそう呟き、もらったばかりの楽譜に目を通し始めるのだった。

第４７６話　夜行バスの中で

「ねぇ」
陽乃が翔に声を掛けた。
「ん？　どないしたん？」
「さゆちゃんから聴いたんだけど……翔、今日泣いてたってホント？」
翔が目を丸くする。
「中野っちが言うてたん？」
「うん。見たって」
「ふーん……」
翔は泣いたとも泣いていないとも答えない。
「ねぇ。どうだったの？」
「さぁ」
翔はそう笑ってごまかした。陽乃は少し納得が行かないものの、それ以上追及しようとはしなかった。
いま、翔たち１０名は夜行バスの中にいる。翔、陽乃、沙希、優輝、麻綾、徹、まゆ、和志、美咲、沙知の１０名に加え、引率として由利と友美子がついていきていた。目的はもちろん、明日開催される古氷中学校吹奏楽部の定期演奏会だ。
拓也たちから招待状を受けた翔たち。選抜の結果、この１０名が選ばれた形になったのだ。
「石尾くんたちも引退なんだね」
陽乃がシンミリとした口調で言う。
「せやなぁ。あの子らも中３やしな」
「あたしたちも、もうすぐしたらその立場なんだね」
「なんやお前！　そない寂しいこと言うなや」

翔がニカッと笑う。横から沙希が顔を出した。
「そうよ～。私たちの引退までまだまだ行事もあるのよ？　今からそんなテンション下げてちゃ、1ヶ月もたないわよ」
沙希もニコニコ笑っている。
「そうよね……。でも……」
そこまで言って陽乃が言葉を切った。
「でも？」
翔が聞き返す。
「ううん。なんでもない」
陽乃はそう言って会話を切った。
ふと陽乃が気づくと、バスの中の照明は消えていた。そっと腕時計を見ると、午前1時すぎを指していた。
「いつの間にかあたし、寝てたんだ」
陽乃は目を擦りながら手探りで飲み物を探す。バスの中は結構乾燥しており、いつの間にか眠りに落ちていた陽乃はお茶などを飲まずに寝てしまっていた。そのため、喉が渇いていたのだ。
コクッとお茶を飲み、再び眠りに着こうとした時だった。
「ん……」
翔がモゾモゾと動く。陽乃は起こしてしまったのかと慌ててしまったが、どうやら寝返りを打っただけのようだった。
「ビックリした……」
スゥスゥと寝息を立てる翔。
「寝顔見るのなんて久しぶり……」
その顔を見ていると彼女は次第にイタズラをしたくなってきた。ツン、と翔の意外と柔らかい頬を人差し指でつついてみると、翔はモゴモゴと口を動かして反応する。
（おもしろい……！）
陽乃はついつい調子に乗り、何度か頬をつつく。
「うぅん！」
さすがに嫌気が差したのか、翔が陽乃の手を払う。

「おっと……ゴメンゴメン」
陽乃はペロッと舌を出して、再び眠る体勢に入った。と、そのときだ。
「……ん」
隣に寝ていた翔が寝返りを打ち、陽乃の目の前に翔の顔が来たのだ。
「！」
さすがにこの至近距離を陽乃が保てるはずもなく、顔を真っ赤にして背けてしまった。いくら毎日一緒にいて、付き合っていてもこの距離だけは無理だったのだ。
（寝れない……）
今の衝撃で眠気が吹き飛んだ陽乃。しばらく火照った顔を覚まそうとしていると、翔の声が聞こえた。
「……とう」
「え？」
思わず聞き返してしまう。すると、翔は間違いなくこう言ったのだ。
「ありがとう」
「……。」
誰に対してのありがとうなのかはハッキリしない。しかし、翔は間違いなくそう言ったのだ。陽乃は試しに聞き返してみた。
「誰に対して？」
「……。」
再びスゥスゥと寝息を立てる翔。
「寝言か……」
陽乃はそう思い、ようやく眠る体勢に入る。そして陽乃が眠りに落ちた頃に再び翔が言った。
「ありがと、３年生……」
誰もが聞こえる状態で、誰も聞かなかった、翔本人ですら聞こえていない彼の言葉がバスの中に静かに響き渡った。

「……乃」
「ん……」
「陽乃！　起きろって！」
「あ……おはよ」
陽乃が目を覚ますと、既に外は明るくなっていた。
「どこ？」
「もうすぐ金沢。ここから電車に乗り換えるで」
「あ、う、うん。荷物まとめなきゃね！」
陽乃はそう言って少し寝癖のついた髪をほぐす。
「おい」
翔が陽乃のほうへ顔を近づける。
「綿くずついとる」
「あ……ありがと」
「……。」
翔がジッと陽乃のほうを見る。
「何？」
「オレ……昨日の晩、なんか……同じことみんなに言うた気がする」
「同じこと？」
「ありがとうって」
「そうなの？」
「うん」
翔がうなずく。
「陽乃にはしもっちゃん、おーたにちゃん、宮部っち、拓あん、春やん、慎也、田中っち、永井ちゃんに」
「へー。何のお礼？」
「なんやっけ。わからへんけど」
「変な翔」
陽乃はそう笑って再び荷物の整理を始める。
翔はわかっていた。この９人の仲間がいなければ、今の自分も今

の部活もなかったということは。そして、昨日の晩のことは夢であっても、発した言葉にウソはないことを。

ありがとうと言うのはまだ早い。翔はそう思い、寸前まで出てきた言葉を飲み込むのだった。

第４７７話　初めてですね！

「おぉ～……！」

ホールに入るなり、全員が感嘆のため息を漏らした。やはりどこのホールでも入った瞬間に感じることは同じだ。吸い込まれそうな不思議な感覚。翔と陽乃はどこのホールも変わらないものだと感じていた。それがたとえ、大きかろうと小さかろうと関係のないことだ。

「どうします？　やっぱり、中央のほうに座りますよね？」

まゆがワクワクを抑えきれない様子で翔に聞いた。

「せやな！　そこがベスポジやろ！　行こう、行こう！」

七海高校の部員１０名は並んで中央の席に陣取った。開演までまだ２０分近くあるので、部員たちはすぐにプログラムを開いた。

部員名簿が目に入る。やはり、七海高校に比べればずっと部員は少ない。しかしながら、今年のコンクールでは北陸大会で銀賞を取ったほどの実力を持った楽団だ。人数が揃えば、全国大会も夢ではない。

翔はプログラムにまず目を通した。

「第１部が吹奏楽＆クラシック曲……。道祖神の詩、仮面舞踏会、課題曲がブルースカイ。自由曲は……おぉ！　大草原の歌か！」

翔は懐かしい曲に思わず目を輝かせた。

「ね、ね。見て。前よりずーっと部員増えてない？」

陽乃が顔を覗かせる。翔はパラパラとプログラムを部員紹介のページにすると、確かに部員は２８名になっていた。１年生入部前の人数が１５名だったので、１３名も一気に入部したことになる。状況としては、七海高校に通じるものがあった。

今回引退する3年生の紹介ページがあった。各人の写真にひと言

や、おもしろおかしい質問に答えている。
引退するのは拓也、ともみに加えてフルートの相葉　美咲、クラリネットの本田　未砂子、ホルンの久堀　茜、トロンボーンの岩脇　由貴、チューバの森田　佑介、パーカッションの清藤　実梨。合計8人。翔たちの学年よりも少ないが、しっかりと吹奏楽部を支えてきたメンバーだ。
「……ゴメン。あたし、ちょっとお手洗い行ってくる」
「おう。迷子なんなよ？」
「バカ」
陽乃はクスッと笑うと席をはずした。翔はしばらくプログラムを見ていた。すると、翔の右肩を叩く誰かがいるので、翔は陽乃だと思いこう言った。
「なんや？　ハンカチ忘れたんか？　そそっかしいなー」
しかし、応答は特にない。
「？」
翔が振り返ると、そこには見覚えのある顔があった。
「お、おぉー！」
そこにいたのは拓也とともみだった。
「こんにちは！」
ともみがにこやかに笑う。
「遠いところをありがとうございます！　嬉しいです！」
拓也が本当に嬉しそうに言った。翔たちと拓也たちが会うこと自体、今日が初めてなのだが、翔も拓也も固い挨拶はヌキのつもりでいた。
「いんやぁ！　ホンマやったら全員で演奏会来たかったけど、ウチも本番あるせいでさぁ。来られへんかって」
「そんな！　俺、佐野さんと朝倉さんだけでも十分だったのに、こんなたくさん……」
「何、何～？　あっ！　石尾くん！」
沙希が横から顔を出す。

「あ、えと……」
拓也が戸惑っている。沙希はいちおう、写真で拓也とともみの顔を知っているので既に会ったことがあるような感覚になっていたが、拓也もともみも沙希や他の部員たちと会うのは初めてなのだ。
「あ、ゴメンなさい。私とは初めてよね。私、佐野くんと同級生で、フルートの大谷と言います。よろしく」
「あ、はい……」
沙希の笑顔に呆然とする拓也。ともみが気に入らなさそうにギュッと拓也の足を踏むのを、翔は見逃さなかった。
「いっ……！」
拓也が顔を歪め、すぐにともみのをほうを振り返る。しかし、ともみはそ知らぬ顔だ。
翔はその様子を見てすぐに察知した。この二人、きっと付き合っていると。目配せでそれを沙希に言うと、鋭い沙希はすぐにうなずいた。
「やだなぁ！　ちょっとえーっと……ともみちゃん？」
「あっ！　は、はい！」
ともみも緊張した面持ちになる。
「心配しなくても彼氏さん、取ったりしないよー」
火がついたように二人の顔が真っ赤になった。
「そーそー。おーたにちゃん、彼氏おるもんなー」
「ちょっとぉ、それそこで言う！？」
沙希と翔がワァワァと言い合いをしていると、陽乃が戻ってきた。
「こーら！　3年生がホールで騒ぐな！」
「うわ！　副部長ヅラしよる！」
「何よ！？　何か文句ある！？」
しまいには陽乃まで一緒になって言い合いをする始末。結局、麻綾が翔たちを宥めてなんとかその状況は収集がついた。
「あ、ねぇ。そろそろ楽屋戻らないと」
「あ、そんな時間か……。それじゃあ、佐野さん。皆さん。ヘタっ

ぴな演奏ですけど、楽しんでいってくださいね！」
拓也が笑顔でそう言った。
「うん！　ありがとう！」
拓也たちは笑顔で手を振りながら客席を後にした。
ふと陽乃が舞台のほうを見ると、見覚えのある楽器があることに気づいた。
「ねぇ……あれ」
陽乃は打楽器が並んでいる場所を指差す。
「ん？」
翔もそっちのほうへ視線を移した。置かれているのはスネアドラムとグロッケン。
「見覚えない？」
翔はジッと楽器を見る。そして、優がぎこちない手つきでその楽器を持っているシーンが急に蘇ってきた。
「グロッケン！　ウチのお古！？」
「だよね！　あのスネアも！」
優輝と沙希が気づいたように言う。
「あの楽器ですか？　あの時の？」
優輝が言う『あの時』とは、能登半島沖地震のときのことだ。まだ半年程度しか経っていないが、今年の3月末に地震が起きたときに壊れた楽器を、翔たちの七海高校が譲ったのだ。
「今でも現役なのね」
沙希が嬉しそうに言う。
「そうですね～。きっと、これからもずっと使ってくれると嬉しいですね。なんていうか、俺たちと古氷中学の絆？　なんてね」
優輝が恥ずかしそうに笑いながら言った。
「うん……。絆……か」
翔が感慨深そうに呟いた。
それと同時にブザーが鳴る。いよいよ開演5分前だ。
「タクーッ！」

「ともちーん！」

拓也たちが入場してくると同時に歓声が飛んだ。いよいよ、演奏会の幕が開けようとしている。

第４７８話　人数の話じゃない

指揮者であり、顧問でもある岩居（いわい）　遥子（ようこ）は部員たちが着席したのを確認すると、颯爽と入ってきた。未砂子の肩を叩くと、全員が起立する。そして、深々とお辞儀をすると拍手が大きく沸き起こった。

全員を一瞥し、遥子が指揮棒を上げると全員が楽器を構えた。１曲目の道祖神の詩は２０００年度全日本吹奏楽コンクールの課題曲で、福島弘和氏の作曲である。木管に複雑なパッセージが多く、途中で音色の美しさも要求される難しい曲だ。

クラリネットの音色とシロフォンの音色が響き渡る。そして低音楽器の上昇系の音が聞こえた。再び始まるクラリネットのメロディ。ホルンの伴奏がまた絶妙だ。アルトサックスのメロディが怪しげな雰囲気を少し醸し出し、冒頭のメロディを今度はシロフォンやフルートも加わって演奏する。そして、オーボエの村越（むらこし）　典子（のりこ）がソロをし、エスクラリネットがそれを引き継ぐ。そして始まったのは金管低音とトランペットや木管の掛け合いのメロディだ。

（いいなぁ……こんな楽しい曲、初めて知った）

陽乃は演奏を聴きながら、もう少し早く吹奏楽に出会いたかったと思っていた。ふと見ると、沙希の指が細やかに動いている。ひょっとしたら、沙希はこの曲を知っているのかもしれないとそれを見て陽乃は感じていた。

やがてテンポが次第に落ちて、ミュートトランペットのメロディと共にトロンボーンの音が聞こえる。チューバも同じ動きをして、さらにテンポが落ちていく。雰囲気としては、次第に夕闇に包まれるような、そんな感じであった。

（♭系の調になってるな。最初は♭そんなに多くなかったのに）

やがて、再び典子の音色が聞こえる。完全なるソロだ。それを支

えるように未砂子たちクラリネットの音色。それが終わると、ともみのアルトサックスの音色が聞こえてきた。

（綺麗～……）

美咲のフルートが後を追うようにさらに美しい音色を響かせた。

そして、音が一旦止まってから、ユーフォニウムとチューバの音のみが響いてきた。ユーフォニウムは2年生の長嶺（ながみね）　大（まさる）だけ。相当なプレッシャーがあるだろうけれども、大は完璧にソロを吹ききった。

大のメロディを木管が引き継ぎ、次第に音量が増して行く。音程が取りにくい調なのだが、それを確実に合わせてくるあたりはやはり、上位大会に進出する中学だけあると全員が感じていた。

雄大なクレシェンドの後にティンパニとサスペンドシンバルが響き渡り、曲の中盤で最大の盛り上がりを見せる部分に突入。翔は思わず鳥肌が立った。

そして、ホルンのソリ。本来なら4人必要だが、古氷中学は3人しかいないのでトロンボーンを代吹きさせているようだった。それでも、茜を中心に美しいハーモニーが響いてくる。翔は思わずここで拍手をしそうになった。

そして冒頭の再現部。しかし、少しずつ作りの違うところが見られ、ティンパニの特徴的な音が響き渡ると同時にいよいよ曲はフィナーレだ。ウッドブロックの音が楽しく響き、やがて全パートが個別でメロディの形に近い音を奏でる。誰もが主役といったところだ。そして高音楽器から低音楽器へと音が移り、全員で音を吹き切って一気に道祖神の詩が終わりを告げる。

同時に拍手が沸き起こった。深々とお辞儀をする遥子。照明が落ちて、司会者が入ってきた。

「皆さん、こんにちは」

「こんちはー！」

翔があまりに大声で返事をするので笑いが起こる。

「もう！　恥ずかしいなぁ」

「なんで？　挨拶せな！」
「知らない！」
「はい！　元気なご挨拶どうもありがとうございます」
「ほれ、見てみぃ。してよかったやん」
翔は満足そうに笑った。司会者が道祖神の詩の解説をし、古氷中学吹奏楽部の紹介をする。今年は北陸大会で金賞を収め、全国大会まであと一歩というところだったようだ。
そして、今年はなんと石川県の文化クラブで石川県の文化行事の発展に貢献した団体の一つとして表彰されたのだという。自分たちとはまた違う形で有名になっていることが、まるでナナコウの部員たちには自分たちのことのように嬉しかった。
そして、次の曲に移る。次は『仮面舞踏会』。ハチャトゥリアンの有名な曲で、全体を持って怪しげな雰囲気が続く曲だ。特にワルツはいろんなところで演奏されることがある。
曲が始まると同時に重々しい雰囲気のメロディが聞こえてきた。ここまで暗いとは予想していなかったようで、本当にこれで音が合っているのかと陽乃は思ってしまうほどであった。この曲の調はどちらかといえば♯系の曲なので、音が吹奏楽楽器の場合は合わせにくい。特にチューバやユーフォニウムは上ずる音が多く、音程を確実に合わせてこなければならない。
また、3拍子なのでこれもまたチューバやバリサク、古氷中学にはいないがバスクラリネットなどの前打ちをする低音楽器とホルンやトロンボーンの後打ちをする楽器で息が合わなければ大変なことになってしまう。
しかし、それらも古氷中学の手に掛かれば何も苦労することはなかった。
（やっぱ、人数の話じゃないんだな……）
美咲がチラッと翔、陽乃、沙希の3人を一瞥する。美咲は入部前からナナコウ吹奏楽部の話は聞いていた。特に停電した時の演奏会の話は何度も耳にしていたが、たかだが１０名でそんなに立派な演

奏ができるのかは疑問であった。話に背びれや尾ひれまでついているのではないか。そんな風に考えていたのだ。

しかし、その考えは今日の古氷中学の演奏を聴いて一気に吹き飛んだ。七海高校よりも明らかに少ない、3分の1程度の人数でも、ここまで厚みのある演奏ができるのだ。それでいて、静かさが要求される場所ではその人数の少なさを活かし、確実に音程を合わせてきている。遥子の指導と、部員たちの努力が実った形なのだろう。

特にロマンスの楽章は秀逸であった。木管楽器が奏でるメロディがこれ以上ないほどに美しく響いていたのだ。翔はこれが中学生の演奏している音なのか、本当に不思議に感じるほどであった。

最後のギャロップは、本来の仮面舞踏会（劇音楽としての）には入っていない楽章とされている。曲を聞けば一目瞭然。怪しげな雰囲気などどこ吹く風。ノリノリの曲なのだ。トランペットのタンギングやウッドブロックの響きなど、まったく違う様相を呈しているが、これもまた観客を楽しませることのひとつなのかもしれない。

ホルンやユーフォの音色が美しく響き、盛大な音と共に曲は一気に終わりを告げた。

「ブラボー！」

どこからともなくそんな声が、まだ一部にも関わらず沸き起こる。

（一部でこれやねんから、二部とかどないなるんやろ……！）

翔はこみ上げるワクワク感を何とか抑えながら、次の課題曲と自由曲を心待ちにするのだった。

第４７９話　『原石の未来』

古氷中学校吹奏楽部定期演奏会の第２部ポップスステージも終わり、いよいよフィナーレの第３部へと差し掛かった。

第３部は清水　大輔氏作曲の『原石の未来』である。

作曲者の清水氏によると、この曲は昭和音楽大学ウインドオーケストラの委嘱により作曲されたのだそうだ。タイトルの『原石』とは夢を持ちそれに対して惜しみない努力をしている人たちのことを指すのだそうだ。

緊張感漂う中、遥子が指揮棒を上げる。一発目で全員の音が響き渡る。その後、まったりとした木管の動きと印象的なボンゴの音。自由な動きを見せるピッコロとクラリネットの伴奏。そして、ホルンの旋律が始まった。不穏な雰囲気を隠さない調である。

ホルンの動きを受け取るようにクラリネットが旋律を奏でる。打楽器の民族的な動きは相変わらずだが、ウインドチャイムの後に突然雰囲気が変わり、美咲のソロが入った。そしてそのソロを覆い隠すような、トランペットたち金管楽器の音色。雄大な音色がホール中に響き渡る。ウインドチャイムが効果的に使用され、木管楽器中心のメロディへと移っていく。

ボンゴとクラベスの音色が途絶えると、クラリネットのソロだ。未砂子がリードして部員たちが次第に演奏に加わっていく。人数が少ない分、確実に音を合わせてきている。こういった部分は何度も練習して、ブレスの位置などを合わせておかなければ、なかなか合うことはない。

再び曲に緊張感が走る。チューバの動きがメロディックになる中、シロフォンの動きが複雑化していき、トロンボーンのメロディとトランペットの打ち込みが入る。そして、突然転調して明るさが垣間

見える。打楽器が激しく鳴り響き渡り、一瞬だけ音が止んだ。
そして、始まったのが拓也のソロだった。希望を思い起こさせるような、快活で爽快なソロ。陽乃はその音色に鳥肌を立てた。フルートがメロディを引き継ぎ、やがて元の調へと戻っていく。緊張感が再び走る。
トランペットの音色、チューバの音色。効果的に高音と低音楽器が使用され、それをカバーするように今度は中音楽器がメロディを奏でる。やがて、すべての楽器がそれぞれの特性を活かした旋律や伴奏を吹き、一気に曲が転調して荘厳な雰囲気へと変化する。タムタムの勇ましい音色が響く中、まったりとした優しげな音色が響く。
シンバルの音の後にホルンの副旋律が響き渡る。ベードラとタムタム、ティンパニなど打楽器が入り乱れ、曲は最高潮に達するかに見えた。
その直後だった。
ベードラの音とウインドチャイムの音色。そして、美咲のソロが始まる。一転して静まり返り、今度こそ盛り上がりを見せる曲。いろんな楽器が鳴り響く中、トロンボーンの力強いメロディにホルンが加わり、全員が音を伸ばす。そして、ユーフォニウムとホルンの旋律が高らかに響き、銅鑼が鳴り響いて一気に曲は終わりを見せた。
「……。」
「……。」
曲が終わってもしばらく指揮棒を降ろさない遥子。そして、ようやく指揮棒が降りたところで拍手が沸き起こった。
「……。」
陽乃はしばらくあまりの感動に、拍手すらできずにいた。
「おい！　大丈夫か？」
翔が冗談っぽく陽乃を揺すった。
「う、うん。ちょっとなんていうか、あたし異世界に行ってた」
「何やそれ」
翔がおかしそうに笑う。やがて、拍手がまとまってアンコールを

要求する形になった。遥子が再び出てくる。そして部員たちに起立の指示をし、深々と一礼した。
「おっ。見てみ。恒例のパターンや」
「？」
陽乃が目をやると、花束を抱えた女性が遥子のほうへとやって来る。そして、花束を遥子に手渡した。再び拍手が沸き起こる。そして、再度深々とお辞儀をする。
花束を指揮台の横に置いて、遥子は指揮台に上がった。
「ワン、トゥ、スリ、フォ！」
遥子の掛け声を合図にアンコールの曲が始まった。
低音楽器の打ち込みと同時にトランペットの高音メロディとホルンの雄叫びのような音色が響き渡った。
「黒い炎だ」
沙希が驚いたような声を上げた。アメリカのロックバンド『Ｃｈａｓｅ』の『Ｇｅｔ　ｉｔ　Ｏｎ』、邦題にすると『黒い炎』になるこの曲は、和田アキ子のカヴァーでも知られている。木管のメロディと意外と激しい低音の伴奏。何度か繰り返されるトランペットとホルンの動き。手拍子がすぐに起き、ホール全体が一体となって演奏を楽しむ。
「ピアノ、誰や？」
翔が夢中になってピアノのほうに視線を移す。どうやら1年生のようだ。
「スゴいなぁ。オレも早く弾けるようにならなアカン」
そうこうしていると、突然ともみが立ち上がった。そして始まったのはともみのソロだった。
「うぉー！　すげぇ！」
翔はあまりの技術の高さに感嘆の声を上げる。クラリネットも負けていない。ソロが終わった後に激しいタンギングをついていく。どの楽器もほどほどの「あそび」を知っているようで、全員が余裕を見せているように見えた。

ドラムセットにスポットライトが当たる。実梨のソロのような場所だ。曲が最高潮に達し、全員で伸ばしを奏でる。

しかし、一旦終わったように見せかけるのがこの曲だ。実梨の合図の後に正真正銘の最後の音色がホール内に響き渡った。

誤って陽乃は拍手をしそうになった。

「やーい。間違えてやんの！」

翔が意地悪く笑った。

「しょうがないじゃない！　初めて聴いたんだから」

「演奏側としては大成功や。してやったり」

陽乃は騙されたという気分よりも、むしろ楽しめたという気持ちになれた。

再び全員が起立し、沸き起こる拍手。遥子がいったん舞台裏に引いていき、部員たちが着席する。それでも鳴り止まない拍手。

「……ねぇ」

陽乃が翔の袖を引っ張った。

「ん？」

「ハンカチ出しとくほうがいい？」

「ん。いいかもしれんで」

翔がクスッと笑った。陽乃は言われたとおり、ハンカチを取り出した。それと同時に照明が落ちる。

いよいよだ。

グロッケンとビヴラフォンの音色が響き渡る。

「未来予想図？か……」

和志が呟いた。そして、木管の音色の後に金管が加わり、グロッケンの音色が響く。そしてアルトサックスのソロが始まると同時に、照明が完全に落ちてスポットライトが遥子に当たる。

「それでは……本日の演奏会で吹奏楽部を引退します、３年生８名を紹介します」

先ほどとは違う、拍手が沸き起こった。

「今年の３年生は、入部当初から８名と例年に比べ、部員数が少な

い学年でした。3年生に上がった当初は、今年入部した1年生の多さに戸惑いも隠せず、部長や副部長と私とのいさかいも正直言って、絶えませんでした。しかし、全員の真摯な思いが次第に部員たちの間に浸透して行き、私もいつの間にか彼らのペースに引っ張られていく。そんな状態になっていました。彼ら一人ひとりの、力の大きさに驚かされるばかりです」

照明が落ちて暗くなっているが、未砂子が涙を手で拭っているのが沙希には見えていた。

「また、今年3月に起きた能登半島沖地震で当校も被害を受けましたが、皆様の温かいご支援のおかげで、今年も吹奏楽コンクールで北陸大会に出場でき、金賞を受賞することができました。ありがとうございました」

ここで盛大な拍手が起きる。遥子が深々とお辞儀をした。

「それでは、ここまで頑張ってきた3年生を紹介します。フルート、相葉　美咲」

美咲が立ち上がる。既に、涙で顔はグシャグシャだ。そして、遥子のところへ行くと抱きつくようにして思い切り泣き始めた。

そして、一輪の小さな花を胸に差してもらっている。その後、客席に向かって一礼した。

「みさきー！」

彼女の友人だろう。複数の声が飛んできた。

「クラリネット、本田　未砂子」

未砂子も涙を流しているが、この時は笑顔でいたいと思っていたのか、無理やりに笑顔を作っていた。それがかえってナナコウの部員たちの涙を誘った。

「ホルン、久堀　茜」

茜がスッと立ち上がり、吹いていた自分の楽器を最後に抱き締めた。そして遥子のところへ行き、大声で「先生！　3年間ありがとうございました！」と礼をした。

「こちらこそ、ありがとう」

遥子は涙を堪えきれず、声を震わせながらそう答えた。
「トロンボーン、岩脇　由貴」
「はぁい！」
由貴は一番の笑顔で前に颯爽とやって来る。そして、元気いっぱい遥子と握手をする。
「ゆっきー！」
「いえーい！」
おそらく彼女は部のムードメーカーに違いない。翔はそんなことを考えていた。
「チューバ、森田　佑介」
それと同時に偶然なのか、メロディがユーフォニウムの大へと移った。
「頑張れよ」
佑介はバスパートの一人ずつに、そう声を掛けていく。それに呼応するように、大のメロディが一瞬途切れた。
深々とお辞儀をする佑介。そして、花を差してもらう。
「パーカッション、清藤　実梨」
実梨はパーカッションの後輩たちとハイタッチをしていき、最後に遥子とハイタッチをした。
そして、いよいよ彼らの番になる。
「副部長、アルトサキソフォン。津嶋ともみ」
ともみが立ち上がり、客席に向かってお辞儀をした。
「ともー！」
ともみが満面の笑みで手を振る。そして、遥子と固い握手を交わし、花を差してもらってから指定の場所へと移動した。
「部長、トランペット。石尾　拓也」
「はい！」
拓也が颯爽と立ち上がる。そして、前へ行く前に後輩の前に立った。
「握手」

「……。」
「頑張れよ」
２年生の女子と、１年生の女子。残るのは２人だけ。彼はその２人にこれからの古氷中学のトランペットのすべてを任せたのだ。
そして、前に立つ。
「岩居先生。ありがとうございました」
「こちらこそ。３年間、とっても楽しかったわ」
花を差してもらう拓也。そして、いよいよ最後のときがやって来た。
「本日は、石川県古氷町立古氷中学校第２０回記念定期演奏会にご来場くださいまして、ありがとうございました」
そう言う拓也の顔は涼しげで、自信に溢れていた。周りの３年生はともみを含めて全員泣きじゃくっているが、拓也だけはまっすぐ客席を見つめている。
「私たち、３年生は入部当初から人数が少なく、お互いに協力しなければならない場面が多々ありました。小学校から上がったばかりのころは、自由すぎる男子に少々ワガママな女子が揃い、岩居先生を大変困らせてしまいました。しかし、後輩ができ、やがてこの古氷中学の伝統をヒシヒシと感じるようになり、責任ある行動を取るようになれたと、思っています」
これには遥子も耐え切れず、そっとハンカチを取り出して涙を拭う。
「僕たちは、今日でこの吹奏楽部をひとまず、引退します。まだ、今月末にある吹奏楽コンクール全国大会が控えておりますが、それを終えると本当に、この楽しい思い出を作った吹奏楽部と、お別れしなければなりません」
ともみが大泣きして隣にいる実梨と抱き合った。
「しかし、これからも古氷中学吹奏楽部は、きっと様々な方面で活躍してくれる。僕たち３年生はそう、信じております」
そこで拍手が沸き起こった。

「最後になりましたが、本日の演奏会を開催するに当たり、ご協力賜りましたすべての皆様に感謝を申し上げます。本日は誠に、ありがとうございました。平成１９年１０月7日。古氷中学校吹奏楽部第２０代部長。石尾　拓也」

そして最大級の拍手が沸き起こる。部員が揃ってお辞儀をし、客席の通路に下りてくる。やがて、ともみが陽乃たちの近くにやって来た。

「津嶋さん！　おめでとう！」

「ありがとうございます！」

ともみがニコニコ笑いながら通路を通っていく。そして、最後に拓也がやって来た。

「石尾くん！」

「佐野先輩！　ありがとうございました」

そして、拓也が立ち止まった。

「先輩！」

「ん？」

そして、そっと拓也が耳打ちする。

「俺とともみ、七海高校受験します」

「……へ！？」

そう言い終えると、拓也はニカッと笑顔を浮かべて通路を歩いて外へ出て行った。

「……マジでか」

翔は唖然としながら、陽乃の「ねぇ。石尾くん、なんだって？」という声を聞き流すのだった。

第４８０話　２人しかいないでしょ！

１０月８日（月）。今日の練習はマーチングである。１０月頭から定期演奏会に向けてのマーチングのコンテがしおりから配られ、今日の時点で既に部員たちは譜面に関してはほぼ暗譜していた。コンテの動きについても、半分程度は把握できている。１０月末にはほぼ完成の形に持っていけるだろうとしおりは踏んでいた。

部員たちも同様の考えで、後は通し練習ばかりでも問題ないだろうと考えていた。その部員たちの様子を見て、しおりが３年生に声をかける。

「３年生、ちょっと集合！」

「はい！」

素早くしおりの下に集まる１０人。

「うんうん！　元気だね。いい、いい。そんな元気な君たちにはいっ、プレゼント」

そう言ってしおりは新しい楽譜を手渡した。

「え？　か、神崎さん」

「永井さん！　残念ながらね、私、もう神崎じゃないの」

「へ？」

雪子が目を点にする。慎也が耳打ちした。

「え！　そうなんですか！？　わー！　私、全然知りませんでした。おめでとうございます！」

「うん、ありがと！　それで？　永井さん。何か質問？」

「はい。この楽譜はどのタイミングで演奏するんですか？」

「んふふー。それよね。実はね、マーチングの曲で、ちょうどココとココで間が空くでしょう？　そこでね、３年生だけのマーチングをしてみたらどう？」

「え！？」

全員が今度は目を点にする。
「ほ、本当ですか？」
春樹が聞き返した。しおりは思わず笑ってしまう。
「楽譜まで配ってるのに、ウソついてどうするのよ！」
「うわぁ……！　嬉しい！」
由美子と絵美が顔を見合わせて声を上げる。慎也の頬も紅潮していた。
「それでね。実はトランペットとアルトサックスにソロがあるの。もちろんこれは朝倉さんと佐野くんでいいわよね？」
「はーい！　異議なしです！」
「え！？」
陽乃と翔が同時に声を上げた。
「ちょ、ちょっと待ってよ！　これ、３年生のマーチングでしょ？」
「そうよ？　さっき言ったじゃない」
しおりがキョトンとした様子で答える。
「ほな、なんでオレらだけソロなんですか？」
「え？　だってそんなの当たり前じゃない？」
美里が当然のようにそう返した。
「なんで当たり前なん？」
翔が驚いて聞き返す。
「だって……ねぇ」
沙希が笑う。
「えー？　なんで？　なんで！？　意味わかんないんだけど」
陽乃も慌てている。翔と陽乃の慌てぶりに思わずその場にいた全員が笑った。
「わかってないなー。まぁ、そういうところが二人ともいいんだけど」
拓真も嬉しそうにそう言った。
「教えてくれやぁ。オレらだけなんか置き去りやん」
「だってさ。ほら、男子副部長教えてやれよ」

慎也がグイグイと拓真を押した。拓真は「しょうがないな」と笑いながら答える。
「そんなの、二人が吹奏楽部を再生させたからに決まってるじゃん」
「……さ、再生？」
陽乃が戸惑っている。
「そうそう。そもそも、佐野くんが陽ちゃんに吹奏楽部に興味ないかどうかを聞かなきゃ、いまこの場にこの部員たちがいるかどうかも怪しいところだよ？」
絵美の言葉に翔が首を左右に振った。
「そない大げさな。なぁ、陽乃」
「そうだよ。だいたい、みんなだってすぐに部に来てくれたじゃん」
陽乃が自分を納得させるようにそう返した。
「それは朝倉さんとカケルっていう二人がいたから。俺は少なくとも、そうだったけど？　俺、覚えてるよ。ユーフォ抱えてきたら、朝倉さんがせっかく楽器持ってるなら、吹こうよって言ってくれたこと。あれで俺、決心したもん。この部に入ろうって」
春樹が懐かしそうに語る。陽乃はそのシーンがまるでここ最近のことのように思い出された。確かに、音楽室前に佇む春樹にそのようなことを話しかけた記憶はあった。
「とにかく。少なくともここにいる８人はあなたたちがいなけりゃ、楽器をやってなかったかもしれない８人なのよ？　彼らは、あなたたちに感謝したいからってことで、この曲であなたたちにソロを吹いてほしいって思ってるの」
「……。」
翔がチラッと陽乃を見た。陽乃も翔を見つめる。
「どう？　これで吹かないなんていう理由、ないでしょ？」
陽乃と翔が観念したように笑った。
「そうですね」
「わかりました。練習、しときます！」
「さっすが翔と朝倉さん！　そう来なきゃ！」

拓真が嬉しそうに笑った。陽乃と翔も思わず笑顔になる。時間はそれほどないけれども、8人の思いをしっかり受け止め、必ずソロは成功させよう。そう二人は強く思うのだった。

「え？　模試ですか？　明日ですか？」

呼び出されたはるかと駿が目を丸くする。

「そうそう。せやから、3年生全員おらへんねん。永井ちゃんも含めて」

「何時から何時までですか？」

はるかが心配そうに聞く。

「16時半から19時半まで」

「えー！　じゃあ明日、3年生は全員部活欠席ですか！？」

駿が困った素振りを見せる。翔が「ゴメンな！　時間ない中全員抜けてもて」と両手を合わせた。

「でも……仕方ないですよね。模試ですもん」

「悪いな！　そういうわけで、明日はとりあえず西嶋ちゃんと駿で部活、仕切ってもらっていい？」

「はい……」

不安げなはるか。そのはるかの背中を陽乃がバンバンと叩いた。

「自信持ってよ、次期部長！」

「まだ決まったわけじゃないですよ、先輩！」

はるかが謙遜の表情を浮かべる。

「まぁまぁ。とりあえず、頼むわな。明日は合奏やけど、東先生は模試担当やから、いちおう自分らで合奏してみてくれる？」

「え！？　そこまでするんですか！？　じゃあパー練でよくないですか！？」

「まぁまぁ！　来年の練習やと思って。ほんでな……これはまだ本人と自分らにしか言うてへんねんけど……明日、とりあえず発表してもらっていい？」

翔はそっとはるかと駿に耳打ちした。

同じ頃、慎也は一人の男子部員を呼び出していた。
「そ、それマジで言ってるんですか？」
「うん。マジで」
「……。」
その男子部員は黙り込んでいる。
「無理かな？　うん、急なのはわかってるんだけど……いちおう、3年生全員一致で、二人を推薦してるんだ」
「……マジすか」
男子部員は俯いていた。
「不安なのはわかるけど。でも、翔や大谷さんも同意する二人なんだ。間違いとか、そんなことは絶対ないと思うな」
「……ありがとうございます」
慎也が肩を軽く叩く。
「ま、焦ることなんてないからさ。西嶋さんや駿も協力してくれるだろうし。そんな難しいことはいきなり要求しないから。頑張ってみてくれねぇ？」
「わかりました。俺にできる範囲のことは、します」
「おっ！　男前！　よろしくな」
男子部員の不安げな顔が少しだけ和らいだように慎也には見えていた。
その頃、絵美はひとりの女子部員と座り込んで話をしていた。女子部員はフルフルと首を左右に振り続けている。
「でもさ。佐野くんとサキティのなんていうか……お墨付きなんだよ？　だから、頑張ってみない？」
「あたし、そんな器じゃないと思うんですよ個人的に……」
「んー！　それはまだ自分の可能性に気づいてないだけかもね。とりあえず、明日一日体験っていう感じでやってみない？」
「……。」
絵美が彼女の手を握った。
「だーいじょうぶ。自信持って。ね！」

「……はい」
話し合いを終えて戻ってきた慎也と絵美の姿を見るなり、翔が聞いた。
「どないやった？」
「こっちはそこそこいい感触」
「はしもっちゃんは？」
「こっちは微妙。でも、明日はとりあえず引き受けてくれた」
「そっか……よかった」
翔はひとまず安堵の表情を浮かべた。
「問題はオレら自身やな。あんまり酷い点数取ってられへんし」
翔の表情が引き締まる。
「そうだね。頑張らなきゃ」
「忙しくなるでー！　マジでみんな、ファイトや！」
「おーっ！」
３年生はそうやって気合いを入れ合った後、お互いを見て笑った。

第４８１話　集中できない

「それじゃ、合奏始めます！　起立！　礼！」
「お願いします！」
１０月９日（火）。今日は３年生が全員、模試のため部活は欠席である。そこで、次期部長候補のはるかと副部長候補の駿、光瑠が中心となって今日の合奏を進めることにした。とはいうものの、指揮者の恭一も不在のため、指揮をひとまず駿が振ることになった。
はるかは今日合奏する予定の『ディスコパーティー？』でソロがあるため、その合奏ではるかは演奏面に集中するため、気になる箇所などの指摘はできない。光瑠も隣で同じパートを吹く騎士のために、できれば合奏に参加したいと言っていた。
結局、駿がこうして指揮を振ることになったが、こうなってしまうと指揮を振るのに精一杯の駿は曲を聴いて気になる場所を指摘することもできなくなってしまう。
そのために、彼らが駿の左右両隣にいるのだ。
「そういう事情のため……えっと。ここで俺から発表させてもらいます。なお、３年生の推薦で、ひとまず現時点ではあくまでも『候補だ』ということを理解しておいてください。では、紹介します。来年度金管セクションリーダー候補の松尾くんと、木管セクションリーダー候補の、中野さんです」
勇とさゆりが緊張した面持ちで全員の前でお辞儀をする。
「よろしくお願いします」
二人は丁寧にそう言った。駿が続ける。
「ひとまず、今日の合奏で気になる部分などは松尾くんと中野さんにいろいろと言ってもらいます。客観的にいろいろ言ってくれると思うので、よろしくです」
「はい！」

「では、今日は『ディスコパーティー?』と『タイタニック・メドレー』を合奏します」

タイタニック・メドレーとディスコパーティー?。いずれもソロは大多数が1・2年生に振られているため、かなりの練習が必要であった。

まずはディスコパーティー?の合奏に取り掛かる。

「1、2、3、4」

初めは低音楽器の伸ばし。拓真ひとりが抜けただけでも、なんとなく不安定な感じがしてしまう。トランペットのソリ。今日は陽乃と勇が抜けてしまい、音が飛んでくるのは流と彩香の2人分。綾音と美咲の音はあまり飛んでこない。特にハーモニー形式で動くようになった途端、下の音が極端に弱くなった。

アルトサックスのソロも、伴奏が弱いせいなのかモタついて聞こえてしまう。そして、トロンボーンのアドリブソロ。しかし、まだアドリブの動きが確定していないので途中で伴奏だけになってしまった。

逆にテナーサックスソロでは、はるかの音が突出してしまいバランスが極端に悪くなる。そして、次の曲に入った。次の曲では♯系の曲になるため、一気に音程が悪くなり全体的にザワザワとした感じがし始める。

「ゴ、ゴメン！　ストップ！」

駿がたまりかねて指揮を止めた。

「ゴメン。もう1回、頭からもらっていい?」

「はい！」

駿は季節外れの汗を拭い、再び指揮棒を構えた。

「……。」

翔が時計を見上げる。時刻は午後4時45分。まだ模試が始まって15分しか経っていない。初めの1時間は日本史。しかし、既に翔は上の空のような状態だった。

遠くからかすかに楽器の音が聞こえるのだ。それが翔には気になって仕方がなかった。合奏はうまくいっているのか。駿や光瑠は変に気負わずにいるのか。そんなことを考えると、大事な模試にも関わらずに集中できずにいた。

「こーら」

試験監督の彩が小声で翔の頭を突いた。

「……すんません」

「集中しなさいよ」

「はい」

翔はもう一度だけ時計を見て、すぐに問題用紙に視線を移した。

午後5時半。なんとか『ディスコパーティー?』の合奏を終えることができ、その頃には駿がやや疲弊している感じが漂っていた。

「逢沢くん。タイタニックはあたしがするよ」

光瑠が立ち上がった。駿は「サンキュ。助かる」と言って安堵した様子で指揮棒を光瑠に手渡す。

「……。」

しかし、指揮棒を構えたまま光瑠は固まってしまった。

「?」

「……ヒカル?　大丈夫?」

見かねたみゆきや優輝が心配そうに声をかける。

「ご、ごめんごめん!　ちょっと柄にもなく緊張しちゃってさぁ」

光瑠はそう言ってなんとか笑顔を浮かべ、再び指揮棒を構えた。

そして、なんとか3拍子を振って曲の演奏が始まる。しかし、冒頭のフルートソロが緊張からか、音が震えてうまく出なかった。

「ごめん!　もう1回やらせて」

「はい!」

フルートソロが終わると始まるのは順平のソロ。ここは彼が何度も練習した場所なので、問題なく進んでいく。サウサンプトンの華やかな部分を過ぎ、いったんそこで光瑠は指揮を止めた。

「ゴメン！　ここから先はちょっと自信ないから、飛ばさせてください」
「はい！」
これは無理もないと思い、部員たちもすぐに答える。そして、マイハート・ウィル・ゴー・オンを演奏して合奏は無事終えることができた。
しかし。
終わってからも部員たちはいまひとつ腑に落ちない表情をしていた。合奏で、どことなく曲は演奏できたものの、なんとなく全体がザワついて浮ついた演奏になったような雰囲気は拭えなかった。
「なぁ」
誠が慧太に声をかける。
「何？」
「今日の合奏……ケータ、聞いててどうだった？」
「んー……。俺、まだそんな偉そうなこと言えないけど……なんとなく、なんていうかな。フワフワした演奏だった気がする」
「やっぱそう思うよな。何が原因なんだろ？」
誠と慧太が首を傾げる。同じ頃、智志と好美も同様の会話をしていた。しかし、二人の間では結論が出ている。
「やっぱさぁ、俺たち本堂先輩に結構頼ってたんだなぁ」
「ですね～。まぁ、なんとなく感じてましたけど、ここまでとは思っていませんでした」
二人が拓真に頼っているというのを感じたのは、ブレスの位置でのことだった。今日の合奏で、智志と好美のブレス位置はことごとく被っていたのだ。しかし、普段の合奏でここまでブレスが被っていたのを感じたことはなかった。
となると、原因は何なのか。それはただひとつ。
「本堂先輩、俺たちとブレス被らないように、あえて違う場所でブレスしてくれてたんだなぁ……」
そのとおりだった。それをさり気なくやっていたあたりが拓真ら

しいところであった。
稚沙希が慌てたのはマイハート・ウィル・ゴー・オンの入ってすぐの場所。ここは沙希と由美子のソリなので、稚沙希は練習をしていなかった。しかし、今日は二人ともいないので代吹きをして、と光瑠に言われたのだ。稚沙希は慌てて音を読み、フワフワした感じだったがなんとか吹くことはできた。
けれども、稚沙希はまったく納得していない。自分の音の不安定さが露呈したので、少々落ち込んでいた。

一方。
19時半でようやく模試を終えた3年生はすっかり疲れていた。
「お疲れ……」
翔が慎也を見つけて声を掛けた。
「マジで疲れた……」
ゲンナリした様子で慎也がため息を漏らす。
「帰るやろ？　今日は」
「うん……。美里や朝倉さんは？」
「もうとっくに帰ってもうた。めちゃ疲れてたし」
「そうか……翔は？」
「オレ、やっぱちょっと部活気になるから、顔出してみるわ」
「でも、もう7時半だぜ？　みんな帰ってんじゃないの？」
「それならそれで構わんし。とりあえず、行ってみる」
「そっか……」
「ほな、気をつけてな！　お疲れさん」
「おう。またな」
翔は慎也に手を振りながら、姿が見えなくなってから音楽室のほうに走り出した。既に音はもう聞こえなくなっているあたり、合奏などは終わっているのだろう。
そっと音楽室のドアを開けると、複数の声が聞こえてきた。声の主は駿、光瑠、勇、さゆり、そしてはるかだった。

「どうだった？　今日一日やってみて」
はるかが聞く。
「そーだなー。なんていうか、３年生偉大！って感じした！」
駿が答える。勇が同意した。
「あー、すっげぇわかる。３年生、神！っていう感じ？」
翔は勇の言葉に思わず吹き出しそうになったのを堪えて話を聞く。
「それわかるかなぁ。でも……あたし、思うんだけどさ」
さゆりが続けた。
「なんていうか、あんまり３年生のこと意識しなくてもいいんじゃないかなぁって思うの」
「どういうこと？」
光瑠が聞き返す。
「まぁ、簡単に言えばあたしたちの学年は、あたしたちの色っていうの？　そういうのを出していけばいいんじゃないかなぁって。まぁ……今はまだ、それ見つけるの難しいけど」
「なるほどね～……。俺たちの色か。何色だろ？」
勇が考え込んでいるのがドア越しでも翔はわかった。
「そもそも、３年生の色って何色？」
駿がもっともなことを聞いた。全員がしばらく考え、はるかが言った。
「虹色じゃない？」
「え！　めちゃ派手じゃん！」
勇とさゆりが同時に笑い出した。翔もこれには驚いてしまう。
「いやいや、真面目な話よ。川崎先輩はこう、意外と情熱的だから赤。橋本先輩はみんなを見守る感じでオレンジ。元気いっぱいなミサッチ先輩は黄色。落ち着いてる本堂先輩は青。ほんわかゆったりな水谷先輩は緑。天然系の不思議な宮部先輩は紫。しっかり者の大谷先輩は黒。控えめだけど人のこと考えて行動する永井先輩は桃色。はっきりしたタイプだけど、支える役割が上手い朝倉先輩は水色。それで、何事にもすぐ対応できる佐野先輩は、何色にも染まれる白

かなぁ」
「……。」
翔は自分を表す色が白だと言われ、なんとなく嬉しかった。好きな色が白だからだ。
「とにかく、あたしたちはあたしたちの学年の色っていうのを見つけられるといいね」
「そうだなぁ！　そのためにも、頑張るか！」
翔は駿たちの話を聞きながら、彼らに気づかれないうちにそっと帰宅するのだった。

第４８２話　思い切り楽しもう！

１０月１０日（水）。いよいよ、七海祭の幕開けとなった。開会式を終えいよいよ、全校生徒の前での演奏だ。まだソロに不安のある１・２年生は多くいるが、本番となるともうどれだけ足掻いても意味がない。そのためか、むしろ開き直ったといえば語弊があるかもしれないが、明るい表情をしている部員ばかりだ。

「考えてみれば、同級生の前で演奏する機会なんて……始業式と終業式、体育祭くらいだったもんね、私たち」

沙知が菘に言う。菘も「そういえば、そうだね。なんかそれ考えると緊張しちゃうねぇ」と思わずため息を漏らす。

「ちょっとちょっと～。暗いわね、１年生！」

恵梨が会話に割り込んでくる。

「緊張なんかするよりも、むしろ私たちを見なさいよ！っていう感じでドンと構えていればいいと思うよ」

「それができたら苦労しませんよー」

茉莉紗がまたため息。そこへあずさもやって来る。

「そうよ、そうよ～。去年のね、学祭でも活躍して目立った人、いるのよ。ねっ、日高くん！」

「え？　俺？」

優が目を丸くして振り返った。

「去年さぁ、ユーロビートディズニーでスネアのソロやって、歓声もらってたじゃーん」

「そうなんですか！？　うわぁ～、そうなんだぁ」

羨望の眼差しで見つめる菘と茉莉紗。というのも、優は初心者で入部したからだ。入部後半年で、そのようなソロをかっさらって行く優の存在は、かなり大きいようだ。

「そんな大げさなもんじゃないよ。でも、精一杯頑張れば絶対誰かは聴いてくれるから、緊張しても一所懸命やればＯＫって思うよ」

「はぁーい！　頑張ります！」
茉莉紗の元気な声が廊下へ飛んできたが、そんな声がほとんど耳に入らない人物が一人。その人物は先ほどから手のひらにずっと「人」の字を書いては飲み込んでいる。
「ちょっと、大丈夫？」
あまりの顔色の悪さにみゆきが心配して彼に声を掛けた。
「大丈夫だったらこんなことしてないよ。あぁ……ヤバい。音絶対震える」
顔色の一際悪い人物。それは健之佑であった。第一印象を決定付ける曲で、その初っ端にソロが控えている彼のプレッシャーはかなりのものだ。静まり返っている中、彼の音色だけが体育館に響き渡る。考えただけで吐き気がしそうだと健之佑はずっと言っていた。
それは順平も同様であった。まだ明日なので、今日は気分がマシなのだが、明日はおそらく順平も同じような気分になっているだろうと容易に予想できた。
「大丈夫よ～！　野村くんが緊張しないように、私がまず雰囲気作ってあげるから！」
沙希が意気揚々と健之佑に声をかける。実は、冒頭はピアノのソロがあり、一番初めに演奏を開始するのは沙希のみなのだ。
「それが余計にプレッシャーなんですよ！　大谷先輩のせっかくのいい雰囲気ぶっつぶしたらどうしようって感じで……あぁ～」
声にならない声を上げる健之佑。
「情けないなぁ。ほら、なんとか言ってあげてよ戸口くん、志賀くん」
「え。俺たちがですか」
誠が戸惑っている。慧太と顔を見合わせ、誠が言った。
「ご愁傷様」
「なんか違うだろ、それ！」
ドッと笑いが起きた。それと同時に翔が音楽室のドアを開ける。
「おーい！　全員、体育館前に移動～。そろそろやで」

「あ、はーい」
返事をして、管楽器の部員たちは楽器と楽譜を手にして体育館へ移動していく。そして、体育館前に来たときだった。
「いやー！　今から本番なん!?　なんとか間に合うたねぇ！」
翔の表情が歪む。
「この声は……」
恐る恐る振り返ると、やはり友美子の姿があった。それだけではない。由利、知恵子、冨美枝の姿まであるのだ。
「うわぁ！　なんやねん、朝っぱらから父親以外全員集合かい！」
「なんやの、その嫌そうな声は。最後の学祭やねんから、ほら見てみ！」
なんと出てきたのはデジカメ。由利も知恵子も、冨美枝もカメラを手にしている。
「なんで皆してカメラ持ってるの!?」
陽乃が驚いて聞き返す。
「そりゃあ決まってるじゃない。みんなの晴れ舞台をこれで撮影するの」
「わーい！　いっぱい撮ってくださいね！」
「西嶋ちゃん！　そんなん言うたら調子乗るからアカンて！」
翔が慌ててはるかを止めようとするが、今のはるかの発言でさらに友美子の気合いが入ったことは、言うまでもなかった。
客席に座ってから、友美子がプログラムを開く。吹奏楽部はトップバッターで、演奏曲目は4曲。『千と千尋の神隠し　ハイライト』、『デサフィナード』、『愛唄』、『ディスコパーティー?』とある。タイトルだけではどんな曲があるのか、いまひとつわからない。
「そういえば……去年は綾音がなんかクイズに答えて、一人だけ勝ち残ってたんやっけなぁ。今年は何かおもしろいことあんのかしら」
友美子は早くもそういったイベントのようなものを期待していた。もちろん、楽しいこと好きの息子・翔が部長をする吹奏楽部だ。そんなイベントがないはずがない。

「ねぇ。景品は準備できてる？」
美里が確認を取る。洋之が「大丈夫です。俺のすぐ横に置いてます」と答えた。
「よし！　じゃあ準備万端！　Ｇｏサイン出すよ～！　エリリン、お願い」
「はぁい！」
ヒソヒソ声でやり取りをする美里と恵梨。しばらくすると、友美子たちの耳に「キーンコーンカーンコーン」というグロッケンの音が響いてきた。これは演奏開始前の合図を示しているようであった。
「皆様、おはようございます！」
パッとスポットライトが灯り、姿を見せたのは杏と周磨だった。
「本日はようこそ、七海祭へ！　まず、七海祭の演目トップバッターを担当させていただきますのは、私、保田　杏と」
「俺、野村周磨が所属する、吹奏楽部です！」
二人が同時に「よろしくお願いします！」と挨拶をすると拍手が沸き起こる。杏が続けた。
「本日の吹奏楽部は、部員５９名と留学生３名の、合計６２名での演奏をお届けします！」
「実はですね、保田さん」
「はいはい」
「ホンマはウチの吹奏楽部、６０人おるんですよ」
「えっ。あぁ、そうでしたね。じゃああと一人は？　遅刻？」
「どうやらそうみたい……ってなんでやねん！」
関西弁の鋭いツッコミ。ドッと笑いが起きる。
「違うでしょ、違う！　真面目な話せな！　今日はほら、ユーフォニウムの水谷先輩が、なんと受験なんですよ！」
「えー！　学祭の期間中に受験するとか、空気の読めない先輩ですね！」
杏の自由すぎるコメント（ちなみに、台本はなくアドリブ）に、また笑いが起きる。

「ちょい待ち！　先輩は頑張ってるの！　そんなん言わん！　ほんで、今日はその先輩の分も俺たち、頑張って演奏します！　ですので、ゆっくり聴いていっていただければと思います！」

そこで拍手が起きる。愛実が、チラッと本来春樹がいるであろう場所を見た。春樹の分の席は、今日は用意されていない。ユーフォは愛実ひとりだ。

（そうだよ。約束したんだよ。春くんと）

愛実がギュッと両手拳を握り締めた。昨日、愛実は春樹とこう約束したのだ。ユーフォは愛実ひとりだけになるが、ずっと春樹と一緒に練習してきたことを忘れず、常にふたりで演奏しているつもりでいると。音を合わせ、入りを確実にする。今日はある意味ソロだが、決して力みすぎず、普段どおりの演奏をすると。

「それでは、こんな自由すぎるホルン吹きふたりの司会もそろそろ終わりにしておきまして。早速1曲目の演奏に入りたいと思います。野村くん、曲紹介お願いします」

「はい！」

そこで健之佑が返事をする。

「先輩、違います、違います！　俺です、おーれ！」

「あ、悪い悪い」

また一部から笑いが起きた。周磨が言う。

「ややこしいんですよ、ウチの部活。苗字がダブッてるのが多くて。部長の佐野さんと、副部長の朝倉さんと、本堂さん。全員、弟さんか妹さんが後輩で入ってるんですよね～。だから、苗字だけでは識別できへんという。大問題ですね」

「アンタもその問題の一部ってこと自覚してくださいね！　では、曲紹介です！」

あまりにも自由すぎる司会者ふたり。演出の優とあずさはその自由さを見込んで彼らに司会を依頼した。それは結果的に成功だったといえるだろう。

「1曲目は、２００１年に公開されたスタジオジブリの映画『千と

千尋の神隠し』、その劇中で流れる曲をメドレーにしました、『千と千尋の神隠し　ハイライト』です」

杏が引き取る。

「この曲のみならず、ソロはたくさんあります。この『千と千尋の神隠し　ハイライト』でもピアノ、オーボエ、クラリネット、フルートのソロがあります。そちらにも是非、ご注目ください！」

周磨がチラッと恭一のほうを見る。そして、恭一がうなずいたのを確認してから言った。

「それでは、『千と千尋の神隠し　ハイライト』、お聴きください！」

照明が落ちる。そして、恭一が前に出たのを追うようにライトが灯った。そして、指揮台の前でお辞儀をすると拍手が沸き起こる。

（あれ……！？）

健之佑は自分の様子がおかしいことに初めて、恐怖に近いような感覚を覚えた。手が震えて、このままでは音も震えてしまいそうな状態であった。

それに恭一が気づき、小さく指揮棒で音を立てた。健之佑がハッと顔を上げる。

（息、深く吸って）

スウッと息を吸う健之佑。

（そう。いつもどおりで。いいな？）

（はい）

それと同時に健之佑は、座り位置からは微妙に見えない翔の言葉を思い出した。

――緊張するのはいいことやけど、まずは自分が演奏楽しむことを忘れたらアカンで。自分が楽しまれへんかったら、聴いてる人はもっとおもんないからさ！

（そうだ。音楽って、楽しいっていう字を書くじゃないか。まずは

……俺が楽しめばいい）

スッと恭一が指揮棒を構える。

そして、指揮棒が降りた。いよいよ、吹奏楽部の演奏の幕が開ける。

第４８３話　『千と千尋の神隠し』

静まり返った体育館内に、沙希の弾くピアノが響き渡る。客席で聴いている菜緒や涼平もなぜか緊張してしまうほどの静寂さである。菜緒も一時期、ピアノを習っていたので多少のことはわかるが、ここまで静かな空間で静かな音を弾くのはかなり緊張するのではないか、と考えていた。

『千と千尋の神隠し』は２００１年に公開されたスタジオジブリの有名な映画である。作品の季節は夏。そのため、恭一は常に「夏」を意識して吹くように、と部員たちに指示してきていた。夏とひと言で言っても、いろんな形がある。お祭などで盛り上がるのも夏の代表的な行事のひとつ。その一方で、小説や映画で描かれる、どこか寂しげな表情を持っている部分もある。

恭一としては、その寂しげな部分を前面に出したいと言っていた。特にいま始まった冒頭の『あの夏へ』は曲中、最もその色が濃くなる部分である。

そこでソロやメロディを担当する楽器は、音色や音程に特に注意するよう何度も合奏で言われてきていた。

「野村なら、どんな夏を想像する？」

健之佑は合奏初日にそう恭一に聞かれ、言葉に詰まった。初めに「寂しげな」という言葉を聞いたせいで妙に先入観を抱いてしまい、すぐには言葉にできなかったのだ。

（どんな夏……ねぇ）

健之佑がこの吹奏楽部で過ごしてきた2年間の夏は、とても賑やかで明るく、スピード感のあるものだった。寂しげな、と言われても経験がない健之佑にとっては、かえってそれが大きな障害になっていた。

「そんなに考え込むこともないんじゃない？」
佳菜があまりに真剣に捉えすぎる健之佑を見ながらそう言った。
「そうは言うけどさぁ。やっぱり、イメージとか大事じゃん？　棒吹きするのは嫌だな」
「ふーん……。難しいなぁ。どういうのがいいんだろね」
「井上は？　なんかこう、切ないコト経験した夏とか、ある？」
「うーん……。あれば教えてあげたいんだけど、これがないんだよね」
「16年や17年そこそこ生きたくらいじゃ、そんな経験少ないよな」
結局、具体的に何かを想像できることはないまま、こうして本番を迎えていた。自分に具体的な経験がないのであれば、もう作品の中からイメージを膨らませていくしかなかった。
健之佑は本番直前に中古CDショップで主題歌『いつも何度でも』のCDを見つけた。そのケースに描かれていたのは、青空と草原、そしてひとつの大きな岩であった。
「……。」
爽やかな青空で、涼しげな草原。なのに、どこか寂しげなように見えたのだ。それは岩がひとつだけあるからなのか、理由は定かでない。しかし、健之佑はこう思った。
「これだ……」
そこから演奏が肉付けされるまでに時間はかからなかった。そして今、健之佑が考える『寂しげな夏』が体現された演奏が始まる。
沙希のピアノのメロディの後に、健之佑の煌びやかなオーボエの音色が響き渡った。それを支える、沙希のピアノや亮平と貴志の弦バスのピッチカート。この部分のソロは、曲の特性上、立奏はしていない。スポットライトも当たっていない。しかし、健之佑のソロが終わると同時に拍手が沸き起こった。
「……！」
驚きと同時に何かこみ上げるものがあり、健之佑の顔が熱くなっ

た。

沙希のピアノを挟んで、今度は絵美のクラリネットソロだ。それがまた、秀逸なものであった。絵美は健之佑と異なり、曲への肉付けはあっという間にできたのだ。春樹が受験を終えるまで、距離を置きたいと言われたときのことを思い出す。そうすると、切なさと寂しさがこみ上げ、どうしようもない感じになるのだ。その結果、体育館中に響くような繊細でいて華麗な音色が絵美のクラリネットから飛び出した。

そして、絵美のソロが終わると同時に健之佑の時と同様、拍手が起きる。そして和志のサスペンドシンバルをきっかけにテンポが上がって行く。誠と慧太のバスーン、絵美や光瑠のクラリネット、健之佑のオーボエ、誠のバスーン。折り重なるようにいろんな楽器が次々と加わる。ここは千尋の父が車の速度を上げて山道を走るシーン。金管楽器の打ち込みをキッカケにホルン、トランペット、トロンボーンなどが交互にメロディを吹いていく。

突然、雰囲気が変わる。一気に曲の雰囲気が暗くなった。ここは湯婆婆の子供（？）である坊という巨大な赤ん坊が暴れ回るシーンだ。

実は今回の曲で一番難しかったのはこの部分である。誰もがフォルテを意識しすぎるあまり、誰が主役なのかがわからなくなり、音が分裂状態になったのだ。

初っ端はトロンボーンとティンパニが主役。そしてトランペットとトロンボーンが目立ちつつ、優の叩く銅鑼や晃の叩くウィップも重要となる。

坊のシーンが終わり、今度はハクが竜となったシーンで流れる曲。クラリネット、フルート、オーボエ、アルトサックスなどがそれぞれ異なる動きで伴奏をする。するとその伴奏を打ち破るようにチューバと弦バス、バスクラ、バリサクなどの下降系の音が入る。

（勇ましく、壮大な感じで）

翔はスゥッと息を吸い、ソプラノサックスにたっぷりと温かい息

を入れる。ユーフォの愛実との、実質的なソリである。
翔は愛実にこう言った。
「春やんも一緒に演奏してる感覚で、しっかり温かい音を出そうな」
愛実は「はい！」と元気良く返事をした。その返事どおり、これまでにないほど一体感ができ、二人の音色がはるか遠くまで飛ぶような感覚がしていた。
そして、ホルンのまさに竜が吠えるような音が飛んできて、一瞬で音が掻き消える。残ったのはフルートの伸ばしの音だけ。
始まったのは打楽器を中心とする動き。美里がタンバリン、優がタムタム、恵梨がシロフォン、晃がウィップ、和志がサスペンドシンバル、洋之がティンパニ。
立ち上がったのは稚沙希と佳菜のふたり。ここはあえてフルートソリにしたのだ。音程が上ずらないように意識しながら、稚沙希は自分の心臓が飛び出しそうなほど緊張しながらも、どこか冷静な自分がいた。佳菜と確実に音程を合わせ、なんとかソリを吹き切ることができた。
ここは立奏をしていた。終わると同時にお辞儀をすると、盛大な拍手が沸いた。
「ちさーっ！」
「かなー！」
ふたりの友人から歓声が飛ぶ。
「やったね」
口パクで佳菜がそう言ったのに稚沙希は気づき、満面の笑みでうなずいた。雰囲気が少し変わり、打楽器の様子も変わる。コンガを和志、ボンゴを優が叩く。そして時々響く金属音。それを発するのは晃。サックスのメロディが不可思議な雰囲気を醸しだしている。
再び元へ戻る。少しずつ楽器が減り、最終的に残ったのは打楽器だけ。全員でバチッと音を決め、一瞬音楽に間が生まれた。
音楽に生まれる間というのは、何も休憩する場所ではない。この間も、立派な音楽の一部なのだ。

沙希のピアノが『ふたたび』という曲のキッカケを作る。その直後にまゆにはオーボエソロが少しだけだが控えている。

しかし、ほぼ間髪いれずに始まるが故に、まゆの音が少しだけかすれた。それに動揺してしまうまゆであったが、うまくそのかすれを支えるように、本来は休みである健之佑が音を吹いたのだ。

「……！」

突然のトラブルにも関わらず、すぐにサポートに入ってくれた先輩のあまりのレベルに、まゆはそこで涙を流しそうになっていた。

『ふたたび』がメドレーの中でも最高潮に達する部分。トランペット、ホルン、ユーフォなどあらゆる楽器が華やかな音を奏でる。

晃のクラッシュシンバルが鳴り響くと同時に、音があっという間に音量を下げ、恵梨とあずさのグロッケンとビヴラフォンがまた不思議な印象を与えていく。

一瞬の、本当に一瞬の間が空いて再び健之佑のオーボエソロが始まった。映画でいえば、不思議な世界に迷い込む寸前――トンネルのシーンに戻ったところだ。

同じようなメロディの繰り返しだが、ここで主人公である千尋は大きく成長している。今度は寂しげな夏を演出するのではなく、前向きな意志を持った曲であると恭一は言っていた。

全員がメロディに加わり、次第に音量を増して行く。

（これや……こういう感じが好きで、楽器やってたんや）

翔は自分自身の顔が熱くなっているのを感じた。同時に、心臓の鼓動が速くなっている。間違いなく、興奮しているのだ。

全員が同じ気持ちで吹き上げる。フィナーレがやって来た。恭一の指揮も最高潮に達し、曲は一気に終わりを告げた。

音が体育館中に飛んだ。余韻というのか、音の跳ね返りというのか、何度も音が反射するように響き、静かになっていく。音響の悪い体育館でこれほどの音色が出せるとは、１年間には予想すらしていなかった。

パラパラと拍手が起きる。あまりの盛大な終わりっぷりに、誰も

が拍手するのも忘れるほどだったのだ。
「……。」
「……。」
由利と友美子は拍手をするのも忘れていた。自分の娘や息子が、これほどの演奏をするとは正直、思っていなかったのだ。コンクールの時には引率に追われ、マトモに演奏を聞けたのは久しぶりだったのだ。
「なんか……すごいよね、なんていうか」
言葉にならないのか、友美子がそう言った。
「ホント……。まぁ、今日は私たちも楽しませてもらいましょっか！」
由利が笑った。恭一の指示で部員たちが立ち上がる。まだまだ学祭は始まったばかりだ。吹奏楽部の熱い3日間が始まる。

第４８４話　『君たちと唄う、あいのうた』

七海高校で吹奏楽部が2曲目の『デサフィナード』を演奏し終えた頃。春樹はひとり、鎌倉音楽大学の講堂前で楽器を抱えながら俯いていた。

今日と明日、春樹は鎌倉音楽大学の推薦入試を受験する。今日の試験は音楽関連の試験が続く。午前中はピアノと専攻希望の楽器の試験。春樹の場合はもちろん、ユーフォニウムだ。しかし、ユーフォニウムニ限らず、どの楽器も狭き門である。

フルート2名、クラリネット3名、オーボエとバスーン各1名、サックス各パート1名、ホルン2名、トランペット3名、トロンボーン2名、チューバ1名、パーカッション1名、そしてユーフォニウム1名。

今回、ユーフォニウムの受験者がどの程度いるか、春樹は知らない。しかし、わかっているだけで前後にユーフォニウムを抱えた女子3名、男子1名を彼は見ていた。少なくとも、春樹を含めて5名。既に倍率がかなり高いことになる。

不安で嫌な汗がずっと背中を流れていた。季節は秋になっているにもかかわらず、顔が火照り、汗が流れ出る。

前日。つまり、昨日だ。最後の練習として沙希にピアノを見てもらったときだ。いきなり初見の楽譜を渡されたが、何とか弾くことができた。試験でも、初見の楽譜を渡されるだろうからということで、完全なる抜き打ちの最後の練習であった。そして弾き終えた後、沙希は言った。

「もう、水谷くんなら大丈夫だよ」

今まで自信のなかった自分の心に、自信を植え付けてくれる言葉

「……。」

であった。自分の力を信じてみよう。春樹はピアノに関して初めてそう思った。

そして、課題曲がピアノなら自分が専攻希望する楽器で演奏するのは自由曲だ。その曲を、後輩たちが帰り3年生だけになったときに披露したことがあった。

「え!?　そんなんするん?」

翔が驚いて目を丸くした。陽乃が聞く。

「普通って言っていいのかな……。あの、普通はこうさ、クラシックとか……」

春樹は首を振った。

「俺はこれがいいんだ」

「……うーん」

由美子が心配そうにする。

「試験官はどう思うかなぁ」

「宮部っち、これ見てよ。ほら」

春樹は試験要綱を見せる。その紙には確かに「自由曲1曲。ジャンルは問わない」と書かれていた。

慎也が引き取る。

「いや、春やん。こういうのって、建前っていうか……。やっぱり、本音を言えば試験官はクラシックかこう、難しい曲を持ってくるもんだって思ってるんじゃ……」

「それじゃあ自由じゃないじゃん」

そう言われてしまうと、誰も言い返すことができなくなってしまった。拓真はこうなると、春樹が譲らないことをよく知っていたので黙っている。

「いいんじゃない?」

言ったのは雪子だった。

「水谷くんらしくって」

その言葉に春樹の顔がパァッと明るくなった。

「だよな!」

「うん！」
決心がついた瞬間でもあった。
そして今、彼は試験会場にいる。暗譜は完璧である。しかし、緊張を抑えることなどはできなかった。
ガチャ、とドアの開く音がする。春樹はハッと顔を上げた。
「受験番号１１０７番。水谷　春樹さん」
「はい！」
「どうぞ」
「失礼します」
入室すると初老の男性、優しそうな若い女性、中年の太り気味の男性の３人がいた。教えられていたとおり、自己紹介から始める。
「七海市立七海高等学校３年、水谷春樹と申します。専攻希望楽器は、ユーフォニウムです」
カリカリとシャーペンやボールペンの走る音が響き渡る。初老の男性試験官が言った。
「どうぞ、お掛けください」
「ありがとうございます」
春樹はゆっくりと着席する。
「それでは……演奏する曲名とその曲を選んだ理由を、教えていただけますか」
「はい」
春樹は一瞬、目を閉じた。

明日、適度に頑張ってね。
帰る直前、沙希が笑顔でそう言った。
「はい」

緊張したら、ちょっとでも私たちのこと思い出して、一緒に演奏してるって思えば大丈夫だよ。
由美子がいつものやわらかい調子で、言った。

頑張ってね！　私もその時間、ちょうど春くんと同じ曲吹いてるかもだから！
絵美がにこやかに言う。
水谷くん、頑張れって言ったらガチガチになりそうだから、私はあえてホドホドにねって言っとくね。
自分と似たような雰囲気をかつては持っていた雪子に、すべてを見透かされるように言われた。
一人だけ抜け駆けして先に受験しちゃってさー。いいか？　抜け駆けすんなら落ちるんじゃなくて、受かれよ！
慎也は相変わらず辛辣に聞こえる言葉で自分を励ましてくれた。
ほら、なんていうかさ。一人じゃないんだから。みんなと一緒に吹いてるって思えば、怖くも何ともない。
拓真がいつもどおりの落ち着いた口調で言った。
がんばんなさいよー！　合格した暁にはパーティーだからね！
ノリとテンションは部内一。美里の明るさに一気にテンションが上がった。
水谷くんらしい音色が出せると思うよ。誰かのことを考えて吹いたりするんだろうな。落ち着いて、頑張ってね。
入学当時より随分大人びた陽乃が言う。
落ち着いて、マイペースに、そんで、自分の音楽を試験官じゃなくて、その人たちもお客さんやって思って、吹いて。試験時間は春やんの演奏会の時間や思たらえぇからな。
翔の、背中を押す言葉が再び蘇る。

そして。
あたし、春くんなら絶対できるって信じてるよ！
愛実のにこやかな表情が最後に映った。

「自由曲は、ＧｒｅｅｅＮの『愛唄』です」
試験官が突然出てきたＪ－ＰＯＰのタイトルに驚きの表情を見せる。興味深そうに女性試験官が尋ねた。
「その曲を選択した理由は？」
春樹はその理由を言っている間にも、いろんなことを次々と想起していた。こっそり拓真と練習したこと、愛実や絵美とギクシャクしたこと、音がうまく出せずに悩んだこと……。まるで昨日のことのように思い出される、すべての始まりのシーン。

「恥ずかしがらないで。せっかく楽器あるんだし、みんなで楽器吹いて音楽しようよ」

この言葉がすべての始まりだった。あの時の言葉がなければ、今の自分はないだろう。そして、部員や先生たち皆が一人でも欠けていれば、今の自分を形成するものはないだろう。大げさなどではなく、春樹はそう感じていた。
「私が在籍する……吹奏楽部の同級生、後輩、先輩。そしてその活動を支えてくださる地域の方々、保護者の方々……。そのすべての皆さんに、感謝の思いを伝えたい。そう思い、この曲を選択しました」

「部員同士の絆、保護者の方々や地域の方々の絆。そうしたものに恵まれている私たちの感謝の意を伝えたい。そういう意味で今回、この曲を選びました」
周磨が落ち着いた声で言う。
「それでは、聴いてください。『愛唄』」

照明が落ちる。
絵美と愛実が顔を見合わせた。
（そろそろかなぁ？）
絵美が目配せする。
（きっと、そうですよ）
愛実が大きくうなずいた。
恭一が指揮台に上がり、全員に目配せする。そして、指揮棒が降りた。
フルートの優しい音色とバスーンやバスクラの伴奏から始まり、アルトサックスとクラリネットのメロディ。高校生たちには聞き慣れた旋律が、いろんな楽器を通じて飛んでくる。
雰囲気が少し変わり、トランペットがメロディを奏でる。様々な楽器が加わり、ティンパニの打ち込みが入る。そして、ホルンの合いの手が入ってから、サビに突入する。メロディであるトランペットの合いの手でアルトサックスやチューバの特徴的な音色が飛び入りで入ってくる。
サビのメロディを受け継ぐトロンボーン。再びメロディがトランペットなどに返ってから、一瞬で音が引いた。残ったのは優のドラムセット、誠と慧太、駿の伴奏、そして美里のグロッケンだけである。美里の可愛らしくどこか美しいソロが体育館内に響いていく。
騎士と麻衣子が立ち上がり、ソリを吹く。１年生にも万遍なく与えられたソロ。騎士にとっては初体験となるソロであった。麻衣子と、ちょっとだけであったが必死に練習してきたのだ。しかし、練習時間に対して本番での瞬間は本当に一瞬であった。
吹き終えた瞬間、騎士は何ともいえない感情に包まれた。
（終わった……。こんなに……なんか……言葉になんないや）
その瞬間だった。大きな拍手が沸いたのだ。
「！」
驚いて思わず立ちすくんでしまう騎士。麻衣子がトントンと右腕で騎士の左腕をつついた。

（お・じ・ぎ！）
そう麻衣子に言われ、深々とお辞儀をする麻衣子と騎士。一時は部活を辞めようとも考えたが、なんとか思い留まったのだ。
「……。」
曲の効果も相まってか、騎士が密かに涙を流していたのを知るのは誰もいなかった。
曲の雰囲気が変わる。間奏に近い部分だ。
ユーフォニウムの複雑な合いの手。アルトサックスとクラリネット、トランペットとフルート。いろんな組み合わせでメロディが繰り広げられる。
恵梨のサスペンドシンバルが鳴り響いたと同時に、照明が慎也と美里だけを照らした。二人のソリだ。
自然と慎也の視線が、春樹が普段座っている位置に向いた。何かを訴えるような、そんな雰囲気であった。
再び恵梨のサスペンドシンバルと裕也のティンパニをキッカケに、メロディが再現される。途中、アルトサックスの上昇系の音色が印象的に響き、いよいよ曲がフィナーレに向かう。アルトサックス、チューバ、トランペット。あらゆる楽器がメロディのような演奏をして、最後の一発と言わんばかりに恵梨のサスペンドシンバルが再び鳴った。
人数が一気に減り、吹いているのはクラリネットとバスクラリネット。そして、愛実だけになった。次第に落ちるテンポに合わせ、愛実もビヴラートをかけながらリットをかけていく。
そして、テンポが落ちると共に最後を印象付ける転調が始まった。愛実は伴奏と合わせて、温かい息を吹き込んで伸びやかに音を吹き切った。
「ありがとうございました」
春樹は満足そうに演奏を終え、深々とお辞儀をした。
「お疲れ様でした」

試験官に言われ、再度お辞儀をする春樹。そのまま案内され、控え室に移動する。

「ふー……」

春樹は大きくため息を漏らし、空を見上げた。

同じ頃、愛実も照明が落ちた体育館で周磨たちの司会を聞きながら、天井を仰いでいた。すると、ソンスが楽器を構えて戻ってくる。

「よかったよ、めぐ」

「ありがとう。ゴメンね、ワガママ言っちゃって」

ソンスがフルフルと首を左右に振る。

「いいよ。めぐの頼みなら、なんでも聞ける」

「嬉しいこと言ってくれちゃうじゃん！　もう大好きだよ、ソンス！」

「……えへへ」

ソンスは少しだけ顔を赤らめた。そして、もう一度愛実を見た。

（キレイだな……）

誰にも言えないことくらい、誰にでもある。

ソンスはそう考えながら、今日一番の盛り上がりを見せる曲の楽譜を用意し始めるのだった。

第４８５話　『ディスコパーティー！』（前編）

ディスコといえば、１９７０年代をはじめ、長期間にわたり日本でブームになった。当然ながら、翔たちはその頃のことなど知るよしもないので、楽譜を渡されて練習した際にはリズムがうまく取れなかったり、演奏技法が恭一の想像していたものとは異なっていたりと、今回苦労した曲のひとつである。

さらに、問題なのはソリストのことだ。全員が１・２年生のソリストで、場慣れしていない部員も多く、暗譜しきれなかったり、本番のことを考えて吹くと緊張からか頭が真っ白になってしまうこともあった。不安を抱えたままの本番となっている部員もいるくらいである。

「それでは、本日皆様の前で全員で演奏する曲は最後となります」

周磨が残念そうに言う。杏が引き取った。

「しかし！　お昼からは吹奏楽喫茶と題しまして、音楽室で皆様にここでは届け切れなかった吹奏楽の魅力を存分にお届けいたします。お時間がありましたら是非、音楽室にいらしてくださいね！」

ここで拍手が沸き起こる。

「それでは、本日最後の曲です。『ディスコパーティ・？』！」

照明が落ちると同時に洋之がバチを鳴らす。

「１、２、３！」

チューバやトロンボーンの打ち込みが入る。規則的な洋之の刻みと、裕也のボンゴが耳に届く中、夏樹は一人緊張していた。

（大丈夫、大丈夫。練習してきた。落ち着け。吹ける）

トランペットのソリが高らかに響く。そして、ハモリでのソリが合図だ。夏樹はゴクリとツバを飲み込み、そっと恭一の横に立った。

「すごい怖い顔してるわ、あの子」

さすがの由利も心配そうにしている。しかし、その夏樹の緊張を

吹き飛ばす出来事が起きた。
夏樹のクラスのあたりから、口笛が飛んできたのだ。
「！」
夏樹がハッと顔を上げる。
「がんばれー！」
夏樹の表情が変わる。そして、グッと親指を突き上げた。
色っぽい大人の音色で、夏樹がソロを吹く。大人数の前で吹く、ソロデビューだ。洋之のドラムセット、裕也のボンゴ、拓真たちチューバと亮平、貴志のベースがしっかりとそのソロを支える。
吹き終えると同時に拍手が沸き起こる。夏樹は嬉しそうにお辞儀をして、すぐに自分の席に戻った。
（最っ高に目立つ！）
さゆりの楽譜にはそうデカデカと書かれていた。さゆりが七海高校に入部してから初めて、ソプラノサックスを手にしたのだ。
それを親戚の中島　唯に何気なく言ったところ、彼女の反応はもの凄いものだった。
「えー！？　佐野先輩の吹いてる楽器、さゆ姉が吹くの！？」
「そうなのー！　もうどうしようって感じだよ！」
さゆりにとって、もちろん麻綾や夏樹にとっても翔の存在はかなり大きいもので、それでいて遠い存在でもある。ソプラノサックス、アルトサックス、バリトンサックスを平気で吹きこなす翔は、憧れのような存在なのだ。
その翔が吹く楽器を、さゆりがいま吹いているのだ。その音色が特に際立っていて、キレイに体育館に響いていく。はるかのテナーサックスや菘のアルトクラリネット、駿のバスクラリネットとしっかりハーモニーを合わせ、しっかりと響かせる。
「ソプラノサックスは意図せんでもオーボエと似たような感じで音は飛ぶから。中野ちゃんくらいやったら、そない力まんでもしっかり音出るよ。頑張って！」
翔にそう言われ、リラックスしながら吹くさゆり。翔は隣でその

彼女の音を聴きながら密かに考えていた。やはり、来年はさゆりにソプラノサックスを委ねようと。

私には無理です！

この曲が配られ、ソロを彼女に任せた瞬間、彼女はブルブルと首を激しく横に振り、珍しく大声で断ってきたのだ。

しかし、パートリーダーの慎也がそれを認めるはずなどなかった。

「ダメ！　今回のソロは自分に吹いてもらうってもう俺が決めてるから」

その言葉を聞くとみるみるうちに彼女の瞳に涙が溢れ出したのだ。

隣から亜紀が茶々を入れる。

「あぁ～。川崎先輩、いけないんだ。後輩イジメですよ」

「ちょ、お、俺そんなつもりじゃ……」

彼女――江藤　沙知は目にいっぱい涙を溜めて「私には無理です」とばかり繰り返していた。

「えー!?　じゃあ、ソロ断るの!?」

茉莉紗が驚いて声を上げた。

「そうなの？　もったいないなぁ……」

菘が本当に残念そうに呟いた。

「もったいないっていう意味が私にはわかんない……」

沙知は信じられないと言いたげにしながら、ため息を漏らした。

「そう？　じゃあ、ソロをもらって喜んでる人がいるから見てみなよ。ほら、すぐそこ」

パッとそちら――藤咲　流のほうを見ると、本当に嬉しそうにしながら同じフレーズばかり練習している。２番目の曲『ヴィーナス』の２回目のソロの部分だ。

「あんなに練習しなくても藤咲くん、十分上手なのにねぇ」

茉莉紗がおかしそうに笑った。菘も笑っているが、沙知だけは気分が憂鬱だった。なぜ沙知がそこまでソロを嫌がったのか。それにはきちんとした理由がある。

彼女には初体験にしてハードルが高すぎる、アドリブソロだった

のだ。
　一応、楽譜にはそれらしき音符が書かれているものの、それどおりに吹いたら恭一に言われてしまったのだ。
「江藤、それじゃあ単調すぎてつまんないぞ」
「え……」
　楽譜どおりに吹いているのにつまらないと言われたのは心外であった。
「アドリブって意味、わかるか？」
「はい……。自由に、です」
「だろ？　なのに、今の江藤は完全に譜面に縛られて自由のカケラもないぞ」
「はい……」
　結局、沙知は合奏のたびに同じことを言われてしまった。見かねた慎也がつきっきりで練習をし、３日前になってようやくそれらしいアドリブソロができるようになっていた。けれども、そのような状態なので本番を迎えた今日、沙知の緊張は尋常ではないものになっていた。
（どうしよう……失敗したら、どうしよう……）
　考えれば考えるほど、頭が真っ白になって行く。手が震え、周りで鳴っている音すべてが消えそうになった。
「大丈夫だって」
　突然、慎也が昨日言った言葉が蘇った。
「意外とさ、観客って奏者が失敗した部分ってわかんないもんなんだよ」
「そうなんですか？」
　沙知が聞き返す。
「そうそう。いちいち今の小節のベーの音間違えた、なんて聞いてる観客、いないいない。特に今回、アドリブなんだから少々音ミスッたって、誰も絶対気づかないからさ。だから」
　沙知がグッと楽器を構え、ベルを上げた。

（私の世界にしちゃえばいいんだ！）
何かが沙知の中で吹っ切れた瞬間だった。
「！」
あまりの音の勢いに周りにいた慎也、亜紀、雛乃、徹の４人の視線が一気に沙知に集中する。もちろん、それは４人だけではなく観客の多数も同じような状態であった。
音を微妙に揺らし、洋之が保っているテンポと微妙にズラす。
（へぇ！　やるじゃん）
洋之は驚きつつも彼女のソロを支える。
（おっと、これは予想外。でもやりがいあるな）
亮平と貴志が顔を合わせる。思わず彼らも少しアドリブを入れて伴奏を変えていた。音程が微妙に揺れて、それがまた心地よい響きになる。
上のエフの音がスパーン！と遠くへ飛んだ。これには沙知本人も驚いていた。まさか、これほど高音が出るとは思っていなかったのだ。そしてそのままの勢いに乗り、沙知は一気にソロを吹き終えた。
「ブラボー！」
沙知のクラスあたりからそんな声が飛んできた。これによって勢いづいた部員たちが再現部をさらにノリよく吹いていく。
（よし！　あたしの出番よー！）
はるかが手拍子をしながら前に出る。目立ちたがりの彼女は、恭一が指定した場所よりも前に出て、１年Ｆ組とＧ組の間に割り込むように入った。
（やりたい放題やな！）
翔が思わず笑ってしまう。そしてはるかのソロが始まった。
とんでもない勢いで音を上昇させ、それと同時にベルアップをするはるか。デーの音まで上げてからまた下がり、それからまた上がってを繰り返していく。音があまりに細かくて指が激しく動くので、すぐ近くで見ていた１年生たちが笑ったり驚いたりといろんな表情を浮かべていた。

「よっ！　スナックはるか！」
クラスメイトの歓声が飛んできた。はるかは嬉しそうにソロを吹き切り、ブイサインをしながら自分の席へ戻っていく。
突然静かになり、バスドラムの音だけが響く。そしてスネアの音をキッカケに、トランペットの高音が鳴り響いた。『ホットスタッフ』から『ヴィーナス』へ変わったのだ。すぐに彩香が立ち、色っぽいソロを吹く。最後の音を微妙に音程を揺らす。同じことの繰り返しのソロなのだが、そういう風に感じさせないように音程を少しずつズラしていく。
再びソプラノサックス、アルトクラリネット、バスクラリネットのメロディが始まる。そして、スネアの音をキッカケに再び伴奏系が同じリズムに戻る。しかし、ソロはまったく雰囲気を変える。
「きゃー！」
一部の女子から黄色い声が飛んできた。
（モテてる……）
陽乃は笑いながらソリスト――藤咲　流の背中を見ていた。こちらもアドリブソロ。手慣れた感じで軽々とアドリブを吹いてしまう流には陽乃も脱帽してしまう。綺麗な音程で徐々に音を上昇させ、細やかな音符を吹き切っていくあたり、技術力の高さがうかがえた。
ソプラノサックス、アルトクラ、バスクラのメロディにテナーサックスも加わり、音が静まり返る。『ヴィーナス』の基礎を決定付ける動きをトランペットとホルンで交互に吹き、次第に盛り上がるメロディをフルートやサックスなどが吹いていく。
恭一が徐々にテンポを上げ始めた。洋之のドラムセットと美里のマラカスがそのテンポアップを先導していく。そして、トランペットの伸ばしが入り、サックス全員が激しい上昇系の音符を吹いた。
遂に『ディスコパーティ？』で最もノリがよく激しい曲――『ジンギスカン』が始まるのだった。

第４８６話　『ディスコパーティー！』（後編）

テナーサックスとトロンボーンの快活なメロディ。かなりテンポが速く、フルートなどの木管楽器もかなり細かい動きで合いの手を入れる。すぐに１年生あたりの席から手拍子が起き始めた。

メロディが始まると、トロンボーンとユーフォニウムが立奏をする。間の合いの手はトランペットが２拍目、サックスなどが１拍目で入れている。その合いの手に合わせてトロンボーンとユーフォニウムでベルを上げ下げする。その動きに歓声のようなものも沸いていた。

「あれ？」

友美子が変化に気づいた。

「ウチの子……翔がおれへんわ」

「え？」

由利もそれに気づき、陽乃の姿を探す。

「あれ？　ウチの子も……」

「見て。大谷さんも宮部さんも……３年生、皆おれへんわ」

「どこに行ったんでしょうね……」

３年生の姿を探すが、やはり見当たらない。よくよく見れば、トロンボーンの慎也もソリには混ざっていなかった。

と、そのときだ。トロンボーンとユーフォニウムのメロディが終わる頃になって、見覚えのある顔――翔や陽乃たち３年生１０名が指揮台のあたりに並んで出てきたのだ。それも、全員タンバリンを片手に持って。

ジン、ジン、ジンギスカーン！というメロディの動きに合わせて翔たちが始めたのはタンバリンダンスだった。タンバリンダンスとはその名のとおり、タンバリンを用いて様々な踊りをすること。これはしおりに教えてもらった動きであった。

全員が笑顔でタンバリンダンスを踊っている。３年生の席から笑

い声や翔たちの名前を呼ぶ声が飛んでくる。
「拓あん一人だけデッケーから目立つぞー！」
拓真が何か口をパクパクさせているが、踊りについていかなければならないのですぐに笑いながら流してしまう。
そしてふと由利が気づいた。
「1、2年生……」
「え？」
「1、2年生。3年生が演奏に参加してなくても、こんなに安定した音吹けるようになってるんですよ、佐野さん」
「ホンマや……」
これには友美子や由利も驚きを隠せなった。以前は拓真や陽乃が抜けたパートは不安定な感じがして安心できなかったが、今日のこの演奏を聴いている限り、何らそう言った不安は感じられなかった。
サビ部分が終わり、いろんな楽器がそれぞれメロディを奏でる。お互いのパートが少しでも欠けてしまえばバランスが崩れる恐れがある、難しい曲である。1、2年生は練習を重ね、なんとか3年生がいなくとも安定した演奏をできるようになっていたのだ。
3年生たちタンバリンダンス組が恭一のあたりにスペースを空ける。そして手拍子を要求しながら出てきたのは、勇だった。
サックスの上昇系の音とドラムセットの勇ましい音色の後に、爽快すぎるほどにクリアな勇のアドリブソロが始まった。あまりの強烈な音に、どよめきのようなものも起きる。普段から比較的冷静な勇が、これほどに熱いソロを吹くとは同級生は元より、2年生の先生たちも予想していなかったようだ。
細かい指使い、安定した高音域、器用なアドリブソロ。そして強烈な上昇系の音の後は、Eの高音を平然と彼は吹ききってしまった。
吹ききった瞬間、勇は思わず小声で「おっしゃ！」と言ってしまった。そばにいた陽乃が「最高だよ！」と言うと勇が笑う。
再現部が始まると同時にタンバリンダンスの3年生10名が再び踊り始める。後ろのパーカッションの小物楽器を叩いている恵梨や

優、裕也たちが左右に揺れながら思い思いに楽器を叩いている。洋之のテンションも最高潮に達しているのか、汗をかきながらでもアドリブを入れて全員のテンションを引っ張っている。

恭一も雰囲気を察知して、指揮もほどほどに手拍子をしながら観客たちと楽しんでいる。奏者と観客が一体になっている状態だった。トランペットの高音域のメロディが響き渡り、洋之が強烈なドラムソロを一瞬入れて、見事に『ディスコパーティ?』は終わりを告げた。

「ブラボー!」

「かけるー!」

「陽ちゃーん!」

歓声や口笛などが響き、午前中から既に舞台はかなり熱い状態になっていた。撤収しようかと部員たちが準備を始めようとした時だ。

どこからともなく手拍子が起き、それがひとつにまとまっていく。

「あ……」

翔と陽乃が同時に言った。

「アンコールや」

「アンコールだ」

恭一のほうをパッと見る部員たち。実を言うと、まさかアンコールが来るとは思っていなかったので、曲を用意はしていなかったのだ。

しかし。

「あれ、出して」

「え!?」

戸惑う3年生たちをよそに、1・2年生がスッと楽譜の用意を始める。焦りながら由美子や沙希がフルートの席に戻っていく。翔と陽乃も慌てて戻るが、話を聞いていないので焦りばかり募っていた。

気づくと、司会の周磨と杏が前に立っていた。

「アンコール、ありがとうございます!」

周磨の嬉しそうな表情が横から見ている翔には非常に印象的に映

っていた。
「実はここで、衝撃の発表をさせていただきます」
杏が言った言葉を聞いて、少しだけ安心する。
「3年生は、今から演奏する楽譜を持っていません」
「……。」
ポカンとしている拓真や慎也。
「本当のことを言うと、アンコールがなければ今日の本番終了後、3年生に感謝の意味を込めて私たちでこれをサプライズで演奏する予定でした」
美里が既に泣きそうな顔になっている。
「なんだかシンミリした感じになっちゃいましたが、1・2年生で内緒で東先生指導の下、一所懸命練習しました」
周磨が誇らしげに言う。そして、息をそろえて杏と周磨が言った。
「それでは、お聴きください。『蕾』」
クラリネットのやわらかい旋律。それに続くような、フルートの音色。和志がウィンドチャイムをとても綺麗に響かせる。フルートやテナーサックスのメロディが響き始める。翔は自分の席で目を閉じて、演奏に耳を澄ませた。
あれほど自信なさげに演奏していた稚沙希のいるフルートが、しっかりと胸の奥に響くほどに音が飛んでいる。さっきまで色っぽい音色だったはるかの音色が、やわらかく染み渡る音になっている。
ソンスと愛実のユーフォニウムの音色。今になって気づいたのだが、彼らの構え方が春樹ソックリであることに慎也は気づいた。先輩である自分たちの姿をやはり、後輩たちは追っているのだと気づいた瞬間だった。
ほぼ全員でメロディか伴奏を奏でる。ホルンの高らかな裏メロディがさらに曲を盛り上げていく。サビの部分が終わると、さゆりと麻綾が立ち上がった。間に挟まれるようにして座っていた翔の耳に、入学当初よりずっと美しい音色になった彼女たちの音が響いてくる。
「……。」

翔は思わず涙を流しそうになった。
（マジでもう……なんか、一足早い引退みたいやんか）
さらに追い討ちをかけるソロが始まった。
オーボエの健之佑と優のグロッケンソロ。そして、それに続いたのが夏樹のソロだった。ほぼ一人きりの、無伴奏に近いソロだった。
ティンパニの音色がキッカケで再び全員がメロディを吹く。ホルンの高らかな裏メロディが流れ、曲は最高潮に達した。
次第に曲がリットしていき、和志のウィンドチャイムが流れるように奏でられて『蕾』は終わりを告げた。
恭一が指揮棒を置き、全員に起立を促す。
「！」
陽乃が慌てて立ち上がり、ガターン！と大きな音を立てて椅子をひっくり返してしまった。
「あの子……！」
由利が顔を真っ赤にする。
「あ、あはは！　ゴメンなさい！　どうも失礼しましたー！」
シンミリした雰囲気が一瞬で変わり、ドッと笑いが起きる。恭一や光治、彩。そして勇や彩香も笑っている。
翔も笑いながら、あの日のことを思い出していた。
２年前の入学式。陽乃は今とまったく同じことをしていたことを。
「お前、１年のときと何も変わってへんなー！」
翔の大きな声にさらに笑いが起きる。
「うるさいなぁ！　いーじゃん別に！」
そう言いつつも、陽乃は嬉しそうに笑っていた。まるで、あの始まりの日に戻ったような感覚がしたからだったのは、言うまでもないことであった。

第４８７話　予想以上

「それでは！　七海祭初日、お疲れさまでしたぁ！　カンパーイ！」
「カンパーイ！」
翔の音頭をキッカケに、３年生９人が紙コップのジュースを手にして歓声を上げる。後輩たちは一足先に帰して、３年生だけで会議があると言って残ったのだ。もちろん、恭一に許可は得ている。
「ところで春やん。入試はどないやった？」
「そりゃあ……緊張したよ～。でも、自分にできることは全部やってこれたんじゃないかなって思ってる」
「ホント？　じゃあ合格？」
美里が目を見開いて春樹に聞く。
「早ぇよ、お前」
慎也が苦笑いした。春樹も「さすがにそこまでは早いよ」と笑っている。
「そう？　ねぇ、合格発表はいつ？」
「ちょうど１週間後」
「なぁんか、私たちまでドキドキしちゃうね」
由美子と沙希が顔を合わせる。陽乃も翔も、他人事ではないだけにやはり春樹の結果というのは気になるところだ。
「とにかく、結果がよかろうと悪かろうと、みんなに一番に報告するからさ。気長に待っててよ」
「そうだね。どんなに急いでも結果が出るのは１週間後だし」
絵美が落ち着いた様子でそう答えた。全員が一同に納得し、そこで受験の話は終わる。
「ところで、結構枚数あるんじゃない？」
由美子が陽乃に聞く。

「そうだね～。多分だけど、２００枚近くはあると思う」
「それって、在校生除いて？」
翔が嬉しそうに聞いた。
「そう。在校生入れたら、４００枚くらいになるよ」
彼らが話しているのは、アンケート用紙の枚数のことだ。プログラムに配布しておいた、吹奏楽部のステージのアンケートのことだ。プログラムは５００部用意して、４５０部ほど配布したとのことだった。そのうちの４００枚以上は回収できたので、かなり回収率はよかったことになる。
「何か書いてある？」
美里は落ち着かない様子で陽乃の隣に座った。拓真と翔、慎也も一緒になって陽乃の周りを囲む。そして、１０枚ずつほど手にとってそれぞれ、読み始めた。

デサフィナード、ノリの良い曲でしたね。選曲も飽きさせず、いろんな世代を楽しませる選曲だったと思います。

愛唄、トロンボーンとグロッケンのソロが俺は好きでした。もう一度聴きたい。

フルートの音色がここまで身近に聴こえたことはなかったです。どちらかといえば、高級な楽器というイメージがあったので。

ジンギスカンの3年生のダンス、結構よかった。ダンス部部長より。

最後のアンコール、泣かせる持っていき方ですね。憎いです（笑）

本当は早く来すぎたのでたまたま入っただけでしたが、来てよかったです。明日の午後からも楽しみにしております。

11月に定期演奏会があるんですね。今日の演奏でも十分でしたが、今度はそれ以上のボリュームがありそうです。楽しみにしています。

初めて伴奏がカッコいいと感じました。

高校生にしては高いクオリティです。市内でも誇れるバンドではないでしょうか。

「スゴい……。なんか、予想以上に好評じゃない？」

陽乃が全員に聞く。

「うん……。結構、ビックリした」

「ビックリすることではないとオレは思うけどな」

翔が誇らしげに言う。

「しっかりみんな練習してきたんや。それぞれが、思い思いに。ソロをかっこよくしたい。全員で音色やリズムを合わせたい。そうやろ？　ほんで、その結果がこれ。オレにとっては予想以上ではないよ」

「……。」

翔の言葉に、3年生全員が恥ずかしそうな表情を浮かべた。

「どないしたん？　黙り込んでしもて」

「いや……なんか、ね」

絵美が笑う。

「不思議だなぁって思って」

「不思議？　何が？」

翔は首を傾げる。慎也が続けた。

「もしも。もしもだけどさ。翔が……神奈川（こっち）来てなかったら、俺たちは今頃何をしてたんだろうって思う」

「そんなこと考えるん？」

拓真がうなずいた。
「俺……バスケ部だったけど、足ダメになって……今、吹奏楽部がなかったら、ホント何してるか想像もできない。こんな風に、笑ってたかなぁって思う」
春樹が続けた。
「俺だって。引っ込み思案だったけど、今じゃ音楽大学の受験で吹きたい曲を感情込めて吹けるくらいになった。吹奏楽やってなかったら、絶対……自分を変えることなんてできなかったと思う」
美里が引き取る。
「あたしも。運動部だったけど、１８０度違う部活入ってさ。最初は正直、迷ったけどね。荒っぽいあたしだし、こんな繊細なことが必要な部活……できるかなって。でも、今はもう、なんでもやって、限界まで練習してから判断しなきゃねって思うよ」
沙希が言う。
「私、ホント言うと。一度部を辞めようって思ったこともあった。でも、それを思い留まったのはやっぱり……みんながいたからだろうな」
由美子がうなずき、続ける。
「全部キッカケくれたのは、佐野くんだもんね。私、佐野くんにはすっごく感謝してるよ。フルートと出逢って、みんなと出逢って、貴重な3年間にしてくれたこと」
雪子が言った。
「そうそう。私だって、吹奏楽やって随分変わったって思う。積極的になったし、人のことを考えて行動できるようになった。大阪に転校してもすぐ友達ができたのは、この吹奏楽部に入ったからだって、思うの」
慎也が続けた。
「そーだよ。全部、何がキッカケって……お前だよ、翔」
陽乃が引き取った。
「だから。あたしたちだけじゃない。きっと、先生も2年生も1年

生も、翔にどこかで感謝してるんだよ」
「……。」
「ね！」
全員がうなずく。翔が俯いた。顔が真っ赤になっている。
「ど、どしたの？」
「いや……面と向かってそんなん言われたら……ハハ！　なんか熱い！　恥ずかしいやん！」
その言葉にまた、全員が笑った。
「ん！」
翔が手を差し伸べる。
「ん？」
「残り、1ヶ月ちょい。もう少し、オレのワガママで始めた吹奏楽部の活動に、ついてきてください」
慎也が手を差し伸べた。
「バーカ。ワガママなんて思ってねーよ」
拓真が手を差し伸べる。
「嫌ならとっくに辞めてるっての」
美里が手を差し出した。
「ワガママってわかってるなら、責任持って最後までワガママでいなよ？」
雪子が手を出す。
「これが最後なんて思ってないけどね」
絵美が手を差し出した。
「頼むよ、部長さん」
沙希が手を出す。
「期待してるからね、もっとワガママになってくれるの」
由美子が手を差し伸べる。
「なんだかんだで、私たちも佐野くんのワガママに期待してるんだから」
春樹が続けた。

「今さら、どんなワガママ言われたってもうビックリしないし」
陽乃が言った。
「ほら。どんだけワガママ言っても、この9人はアンタについてくるよ。むしろ、翔がついてくるなって言ったってきっと、ね」
「……うん」
全員が全員を見つめあう。
「ナナコウ3年、残り1ヶ月ファイトー！」
「おーっ！」
佐野　翔。
朝倉陽乃。
大谷沙希。
宮部由美子。
橋本絵美。
永井雪子。
川崎慎也。
水谷春樹。
本堂拓真。
田中美里。

引退まであと、４４日。

第４８８話　輝いた１冊

「おっはよーさん！」
翔が部室に少し遅れてやってきた。部員たちが「おはようございます！」と即座に挨拶を返す。翔の腕には重そうな段ボール箱が抱えられていた。
「大丈夫かよ」
すぐに拓真が手伝いに行く。
「おぉ、サンキュー。えっとな。これな、実は……ジャーン！」
翔が嬉しそうに段ボール箱から一冊の冊子を取り出した。それを目にした途端、全員が一様に「おおおおー！」と歓声を上げた。
その冊子には「七海市立七海高等学校吹奏楽部　第１回定期演奏会」という文字が高らかに躍っていた。そう、定期演奏会のプログラムの暫定版が完成したということであった。
「あくまで暫定版なんで、まだ完成じゃないけどな！　先生が、こんな感じで仕上がるっていうのをオレらに事前に見せてくれることになってん！」
「すっげぇ！　見たい、見たい！」
勇と彩香が小刻みに飛び跳ねている。
「はいはいはい！　とりあえず、今日の本番が終わってから！　せやから、今日の午前中の吹奏楽喫茶と午後の全体発表、よろしく頼むで！」
「はい！」
部員たちは満面の笑みで返事をした。
「へー！　どれどれ？　あたし先に見ても構わない？」
「あ、かんざ……違うわ、三田嶋さん！　はい、どうぞ！」
「ありがと」

翔から冊子を受け取ると、早速しおりは楽しそうに読み始める。学校長、ＰＴＡ会長、そして恭一の挨拶。その後に部長の挨拶とこの3年間の歩みが記されている。次のページにはプログラム、そしてその次を開くと曲の解説があった。

そして、それ以降は今年1年間の活動の写真が載っている。一部空白の部分は、今日昨日の文化祭の写真や定演の練習風景を載せるとしおりは恭一から聞いていた。

さらに、その次を捲る。

「あら？　真っ白じゃない……」

しおりは不思議に思いつつ、次のページを捲る。するとまたしても白紙。さらに、その次のページまで白紙と来たのだ。

「こんなに真っ白けで後はどうするのかしら」

そう思って次を捲ると、今度の演奏会で協賛金をくださった商店などの広告が載っていた。印刷ミスというわけでもないほどのページ数なので、しおりにはますます不思議な感じが募っていた。

部員たちに気づかれないように一冊冊子を抜き取り、しおりはロングトーンする部員たちの音色を背に、そっと職員室に向かった。

「失礼いたします」

しおりの声にすぐに気づいた恭一が「あ、おはようございます」とにこやかに挨拶をする。

「おはようございます。東先生、早速ですけどプログラム、拝見しました」

「あ、どうですか？　構成とか、結構部員任せにしてしまったんで、これで大丈夫かなぁという部分が大きいんですが」

「えぇ。全体的にはもう問題ないと思います。ただ、なぜか白紙の部分が異様に多いんですけど、これは……？」

「あぁ、それはですね」

恭一は笑いながら引出しからすぐにそのページを埋める予定のものを取り出した。

「まず、これですね。これは3年生に既に書いてもらってるんで、

後は俺が埋めれば済む話なんだけど……これがなかなかまとまらなくて」

「へぇ～……。こんなことまでするんですか？」

「いや、やってあげたいと俺が思ったんで。今週中には終わらせなきゃ、怒られそうだけどね」

恭一はそう言って笑った。

「文章が思い浮かばないとか？」

「その逆。思い浮かびすぎて、まとまらないんだ。お礼じゃないけど、言ってあげたいことがたくさんありすぎて……なんだか、自分の中でまとまらなくて。なるべく、今は量を抑えて削ろうとしてるところ」

恭一は惜しそうにそう言った。

「じゃあ、このページは？」

「そこは今、1・2年生に渡してるんで。これもアイツら、かなり困ってるみたいで。意見が分散してて。俺と同じような状態。まぁ、これも今週中に頼むぞって言ってはあるんだけどね」

「へぇ……。じゃあ、最後のここは？」

「これは逆に3年生に任せてて。これがまた、一番早くに持ってきてくれちゃって」

しおりはそれを手に取った。

「たくさんあるんですね～……」

「全員がいるそうだ。小さいのもあるけどな」

そう言って恭一がこれもまた惜しそうにしばらく見つめながら引出しにしまっていく。

「失礼します！」

翔の大きな声が聞こえたので、恭一は慌ててそれらを一気に引出しに仕舞いこんだ。

「お、おぉ！　どうした、佐野」

「例のプログラムに載せるアレなんですけど……今日と昨日の文化祭のん、ちょっと入れたいんです！　変えてもいいですか？」

「あぁ。それくらいなら構わないぞ。後で先生が持って行ってあげるから、佐野も早く持ち場につきなさい」
「はーい！　お願いします！」
翔は嬉しそうに答え、先に職員室を後にした。
「持ち場？」
しおりが首を傾げる。
「あぁ、そうだ。先にデモンストレーションとして、三田嶋さんにお願いしようかな？」
「へ？」

しおりは言われたまま、指定の教室の前に立っていた。教室の入口には看板が立っており、そこには「吹奏楽喫茶～ｋａｎａｄｅ～」と描かれている。
「おはようございます！」
そう言って受付の席に座っていたのは、亜紀だった。
「あら、吉山さん。お店番？」
「はい。ひとまずオープンから１０時半までは私とくのちゃん、にっしーで担当する予定です。料理は心配なさらなくても調理部の人たちがしています。演奏はもちろん、吹奏楽部です」
「へぇ～。あら、でもウェイターさんは？　調理部の人？」
「いえ！　吹奏楽部有志です！」
「あら！　それは楽しみ……どれどれ？」
しおりは本当にワクワクした様子で店内に入る。すると背後から妙に色っぽい声が聞こえてきた。
「いらっしゃいませ、ご主人様」
「ご、ご主人！？」
振り返ると、さっきの制服姿とはまったく違う翔の姿があったのだ。
「ご注文は？」
「えーっと……やだ、なんか恥ずかしいわね！」

「ご遠慮なく。何でもご注文ください」
普段の翔らしからぬ発言に真っ赤になったしおりは、思わず翔を突き飛ばしてしまった。
「うわー！　痛ってー！」
「きゃー！　ごめん、ごめんね佐野くん！」
しおりが慌てて立ち上がって尻餅をついた翔を起こした。
「何やってんだろ、あの二人……」
陽乃が笑いながら覗き込んだ。
「どうせアンタの旦那が変なこと言ったんでしょ」
「旦那なんかじゃないよ！」
美里の言葉に笑いながら陽乃が答える。
こうして、七海祭2日目の幕が開けようとしているのだった。

第４８９話　『タイタニック号へようこそ』

「どう？　うーちゃん。調子は」
雪子が順平に声をかける。
「はい。なんとか平常心保ってるし、口もそれほど荒れてないから、きっちり吹けると思います」
「そっかぁ！　よかった！　私、うーちゃんの音聴くのホント久しぶり。楽しみにしてるね」
「そんなこと言われたら、緊張しちゃうじゃないですか！」
「まぁまぁ！　リラックスしてね」
「はい！」
順平は雪子に励まされ、俄然やる気を出していた。
「いいなぁ……右川先輩。あぁいう風に永井先輩と普通に話できて」
賢治が羨ましそうに和気あいあいと話をする順平と雪子を見て、ため息を漏らした。隣で楽譜の準備をしていた杏が言う。
「そういえば、緒方くんって永井さんと右川さんに憧れて七海（ここ）に来たんだっけ？」
「そうそう。それなのに、俺と入れ違いで永井先輩、転校しちゃうんだもんなぁ。全然、話もしたことないから今さら何か接しにくいし」
「緒方くんっていつもそうじゃない？」
そう言って顔を出すのは、裕子だ。
「勝手な先入観で人のこと決め付けちゃって、自分からこう、話しかけたりしないし、この人はこうだって決めちゃうの」
「う……」
実際、そうなので賢治は言い返すことができない。夏樹のことも、姉の陽乃がいるので七光りのような感じで入ってきたのではないか

と決め付け、態度も冷たいものを取っていたことがあった。もちろん今はそんなことはない。

賢治はもう一度雪子のほうを見る。いつの間にか杏が順平の傍に移動し、雪子と話をしているのだ。それも、楽しそうに。

「ほら。あんこくらいすんなり入ればいいのに。永井先輩、優しいから大丈夫だよ」

「そういう時任は話したのか？」

「当たり前じゃん。だから言ってるのに」

「……。」

賢治は雪子のほうを見つめる。パッと雪子と視線があった途端、逸らしてしまった。

「あーあ。あれじゃあ印象も悪いよ？」

「うるさいな。俺には俺のやり方があんの」

そういうと賢治はフイッと音楽室に戻ってしまった。

「あの子……緒方くんだっけ？」

雪子が順平に聞く。

「あぁ、賢ちゃんですよ。俺の弟分みたいな存在です」

「へぇ～。で、この子が保田さんで、緒方くんの傍で話してたのが時任さん。それであっちで音出ししてるのが野村くん？」

「そうです。みんな結構マイペースで。統率大変です」

雪子が笑う。それでも、この１年生４人を統率できているので、順平の頑張りは相当なものだろうと雪子は感じていた。

午後１時３０分から吹奏楽部の本番である。部員たちは譜面台を準備し、譜面の不足がないかを確認してゆっくりと移動し始める。

「俺、かなり頑張りますから。永井先輩、聴いててくださいね」

「もちろん！」

移動し、待機場所に到着する。その際にやっと、雪子と賢治が近くなる場面になった。雪子は賢治にニッコリ笑いかける。

「緒方くんだよね？」

「あっ、は、はい」

賢治は緊張のあまり声が詰まってしまった。
「そんなに緊張しないで。うーちゃんから聞いてる。ナナコウに入ろうって随分前から思っててくれたんだって？」
「は、はい」
「それ聞いて、嬉しかったよ。私、転校さえなければ皆ともっといっぱい合奏できたのにって思うもん」
賢治の顔が真っ赤になる。雪子はその様子を見て、少なからず賢治が自分に好意を抱いているのではないかと感じていた。しかし、それをあえて問う必要もないので、雪子は気づかないフリをした。
「今日の本番も、頑張ろうね」
雪子はそっと賢治と握手を交わす。賢治は小さくうなずき「はい」とはにかみながら答えた。
扉が開き、前の団体と交替で中に入る吹奏楽部。振り分けていたとおり、椅子を並べる部員、譜面台のセッティングをする部員、打楽器の搬入を行う部員。３年生の指示の元、全員が素早く準備を整える。５分もすればほぼ全員が着席していた。
司会は昨日同様、杏と周磨が担当する。陽気な挨拶の後に、周磨が『タイタニックメドレー』を演奏するにあたり、解説を始める。
タイタニック号は２０世紀初頭に建造された豪華客船である。１９１２年４月１０日、イギリスのサウサンプトン港よりアメリカ・ニューヨークに向けて処女航海に出発する。しかし、わずか４日後の４月１４日に氷山と衝突、衝突から２時間４０分後には完全に沈没してしまった。この事故では１，５１３人とも、１，４９０人とも、１，５１７人とも言われる人々が亡くなり、当時としては最悪の海難事故となった。
そのタイタニック号にまつわる映画が１９９７年に製作された。今回演奏するのは、その映画『タイタニック』の劇中に流れる曲をメドレーにしたものである。４時間を越える映画の曲をわずか８分弱に収めているが、それでも十分に映画の醍醐味を味わえるようなアレンジになっている。

曲の解説で、これだけは周磨が言いたいと固執したところがあった。その解説部分に差し掛かる。

「実は、この映画では一等航海士であった、ウィリアム・マクマスター・マードック氏が乗船客を銃殺するという衝撃的なシーンがあります。さらに、その後自殺をしてしまうという、とても不名誉な人物として描かれてしまっています。ですが、生還した航海士や乗客から、彼は最期の瞬間まで職務を執行し、亡くなったという証言が出ています。それを、今日来ていただいたお客様にも、わかっていただければ、幸いです」

そう言い切って周磨は満足気に前を見た。

「それでは『タイタニックメドレー』、お聴きください」

拍手が起きる。そして、照明が薄暗くなる。ちょうどトランペットトロンボーンが並んでいる後ろには、雰囲気に応じて照明が変えられるセットも置いてある。

順平がスッと移動して、恭一の真後ろに立った。順平のクラスメイトたちはすぐ傍に座っている。

恭一が指揮棒を構え、しばらくしてから降ろした。沙希のフルートが冷涼な音を奏でる。クラリネットの三連符の音色が水中を思わせるような、みずみずしい音を奏でる。沙希の音が、波が引くように消えると同時に、順平のホルンの音色が響き渡った。

順平にピンスポットが当たる。普段、おちゃらけたことをクラスではよく言っている順平。クラスメイトの抱いている順平のイメージとはかけ離れた表情、そしてその音色にクラスメイトたちは言葉を失っていた。

高らかに体育館中に響いていく順平の音色。邪魔をしないように、拓真たち低音の伴奏とクラリネット、ビヴラフォンの音が響く。やがてフルートがＭｙ　Ｈｅａｒｔ　Ｗｉｌｌ　Ｇｏ　Ｏｎを想起させる裏メロディを吹くと同時に順平のソロが最高潮を迎えた。

そして、最後に細かい音色を吹いて、順平のソロが終わる。サッと楽器を降ろし、一礼をすると拍手が沸き起こった。

サックス、ユーフォニウムが次なるメロディを奏でる。和志のサスペンドシンバルがクレシェンドをかけ、一気に場面転換した。

チューバ、弦バス、バリサク、バスクラなどの低音と後打ちの楽器がワクワクとした感じを引き出す。時たま入るスネアドラムの打ち込みが高揚感を表していた。アルトサックスとホルンが奏でるメロディは、タイタニックの華やかさや楽しさを全面に出す部分だ。さらにクラリネットが加わり、ホルンのメロディが副旋律となってさらに華やかさを増して行く。元気いっぱいという様子のスネアドラムに、チャイムやティンパニなどの打楽器、トランペットやトロンボーンの打ち込みなど、タイタニック号の華やかな様子が曲だけでも十分に伝わってきていた。

陽乃の元クラスメイトである菜緒は、両肘を膝に乗せながらウットリした様子で曲を聴いている。

スネアドラムが鳴り止むと同時に、トランペットとユーフォ、ホルンのメロディが始まった。優の奏でるウインドチャイムが、潮風を受けて進むタイタニックの甲板をイメージさせる。

クラリネットやフルートがメロディを引き継ぐ。上昇系の音色をオーボエやビヴラフォンが奏で、次第にテンポが落ちていく。やがて、少しずつ不安げなイメージの音色に変わっていく。

間髪いれず、それまで楽しげなイメージだった曲が一変する。トラブル発生と名づけられたこの部分。低音やホルンの打ち込みと晃のベードラ、恵梨のクラッシュシンバルなどが緊迫した様子を伝える。

恵梨と晃、拓真や智志、好美はリズムがずれないように確実にカウントしながら打ち込みを吹く。

絵美のクラリネットや翔たちアルトサックス、はるかと茉莉紗のテナーサックスがこれでもかと言わんばかりに複雑な旋律を吹く。この旋律はパニックの象徴だ。

恭一が言っていた。

「もしも、大事な人とこうした事故に巻き込まれたとき。それを想

像するのは嫌かもしれないが、それくらいの気持ちで演奏すれば、きっと君らならできる」

　３年生はそれぞれ、主人公・ジャックとヒロイン・ローズを自分たちに置き換えて想像してみた。

（オレなら、絶対に二人とも助かる方法考える）

　翔はそう思い、この部分は二人で必死になって助かる方法を考えて走駆する場面だと考えていた。

（まずは……まずは美里を救助用のボートに乗せる。自分はその後だ）

　慎也はそう考えていた。対する春樹。

（絵美は絶対俺と一緒じゃないとボートには乗らないだろうな……。そうするとどうするか……。船の甲板？　先頭に行くか）

　そして拓真。

（有無を言わせず、とりあえずボートに乗せる……。それから、できるだけ……そうだ。俺たちだけとは限らない。知っているメンバーは全員、できるだけボートに乗せる）

　これを特に全員の前で発表などはしなかったが、ほぼ全員が自己犠牲の思いが強いのだった。

　練習のときは驚くほど乱れていたこの部分。恭一がそのように指示すると、みるみるうちに表情が変わったのには恭一自身が驚かされた。

　再びＭｙ　Ｈｅａｒｔ　Ｗｉｌｌ　Ｇｏ　Ｏｎを思わせるクラリネットの旋律が聞こえてきた。その雰囲気を掻き消すように、ホルンの上昇系の音色が焦燥感を露わにする。

　やがて、不穏な空気が増して行く。晃のベードラと恵梨のシンバルが否応にもその雰囲気を掻きたてて行った。

「――っ！」

　菜緒は思わず前のめりになってしまった。あずさのサスペンドシンバルが鳴り響くと同時に、洋之のティンパニが沈没の衝撃を表現した。

次第にディクレシェンドして、何も残らないような、絶望的な音色が聞こえた。

「……。」

フェルマータの後に、しばらくの沈黙。そして、照明が暗転すると同時にフルートの稚沙希と佳菜にピンスポットが当たる。

Ｍｙ　Ｈｅａｒｔ　Ｗｉｌｌ　Ｇｏ　Ｏｎの始まりだ。綺麗な５度のハーモニーが響いていく。誠のバスーンの下降系の音が聞こえ、優のウインドチャイムが響くと同時にクラリネットやサックスがメロディを奏でた。その後ろで、健之佑のオーボエが独立したメロディを奏でる。

さゆりが恭一の右側に立ち、ソロの準備をする。

「さゆーっ！」

さゆりはニッコリと笑い、それから深く息を吸った。

「中野なら、ここは誰を思い浮かべる？」

「えっ？」

合奏中にそう聞かれ、さゆりは答えに詰まった。本当なら、洋之と答えたいところであったが、それでは恥ずかしすぎるので冗談っぽく、こう答えた。

「じゃあ、佐野先輩で」

そういうと翔は「マジでー！　照れるねんけど！」と大笑いした。しかし、あながち冗談でもない。翔のおかげで、今年コンクールに出られなかったが、挫けずにここまで頑張ってこれたのだと、さゆりは感じていた。

さゆりなりに『Ｍｙ　Ｈｅａｒｔ　Ｗｉｌｌ　Ｇｏ　Ｏｎ』を訳せば「私の心はこの程度では挫けません」。翔に対する、密かな感謝を伝えたかったのだ。

さゆりのソロに重なるように、アルトサックス全員のメロディが２回目には重なった。さゆりとしての解釈は、この部分で自分の想いが翔に伝わった。ということにしておいた。その部分が終わると、由美子が恭一の左側でソロを吹く。転調する寸前。由美子が思い切

り盛り上げ、一瞬で転調する。
トランペットやトロンボーンがここぞとばかりにメロディを吹く。ホルンの上昇系の音色が、トラブル発生の時とは形こそ同じだが、希望を持つような音で響く。
そして、木管楽器の波が押しては引くような音に乗り、ペット&ボーンのメロディが最高潮に達する。チューバの伴奏も、最後にフィス（ソ♯）を加えて盛り上がりを象徴し、ドラムセットのタムタムの音とチャイムの音がこだまする。曲が静かになり、さゆりのソロに呼応するように、翔のソロが奏でられた。
そして、翔のソロに呼応するように沙希のソロが、優の奏でるウインドチャイムに乗って響く。そしてホルン、トロンボーン、ユーフォニウム、チューバのハーモニーが響き、最後に木管がそれらを引き継いでいく。クラリネットからフルートにメロディは引き継がれ、最後に残ったのは亮平の弦バス、フルート、クラリネットの音色だけだった。
指揮棒が静かに降りる。
「ブラボーッ！」
恭一が振り返り、お辞儀をすると同時に歓声と拍手が起きた。恭一が順平、沙希、由美子、さゆり、翔、稚沙希、佳菜に起立の指示をする。それぞれに惜しみない拍手が送られた。
七海祭2日目のステージは、こうして華やかに幕を開けたのだった。

第４９０話　『Ｈａｐｐｉｎｅｓｓ』

「さて！　タイタニックメドレーはいかがでしたでしょうか？　ここで、ソリストの紹介をいたします。ホルン２年生、右川順平」

順平のあだ名を呼ぶ声が２年生のあたりから多く飛ぶ。拍手も大きかった。順平ははにかみながら立ち上がり、深々とお辞儀をする。

「フルート、井上佳菜、安藤稚沙希」

「あんち。立つよ」

稚沙希は佳菜に促され、慌てて立ち上がった。顔が真っ赤になって火照っているのがわかったが、稚沙希はたくさん起きる拍手にこれまでにない達成感を味わっていた。

「アルトサキソフォン、中野さゆり」

さゆりは両手を挙げて立ち上がる。拍手や口笛まで聞こえてきた。

「以上で、ソリストの紹介は終わります。ですが、この後の曲でもまだまだ、ソロはありますのでご期待ください！　それでは野村くん、次の曲紹介をお願いします」

「はい！　次は雰囲気をガラリと変えて、Ｊ－ＰＯＰを演奏します！　そして、この曲のテンポを皆さん、よーく覚えておいてください。それでは、曲の紹介です。次に演奏しますのは、ジャニーズでも人気グループのひとつ、嵐が今年９月５日、つい１ヶ月ほど前に発売されたばかりの『Ｈａｐｐｉｎｅｓｓ』です」

タイトルを言うと、女子を中心に大きな拍手が起きた。

「ここではソロはもちろん、ソリもあります。めくるめく変わる奏者に、ぜひご注目ください。それでは、Ｈａｐｐｉｎｅｓｓ！」

すぐに照明が暗転する。同時に洋之のシロフォンや木管楽器の音色が聞こえてきた。サックスとトランペットの音色が交互にメロディを奏で、前奏が終わると同時にホルンとアルトサックスが立奏を始める。それに呼応するように手拍子が起き始めた。恵梨のタンバ

リンに合わせて、手拍子が綺麗に揃っていく。
　貴志は初めてベースを演奏していた。今までは弦バスが一番だと思っていたので、亮平に何度「ベースも慣れなきゃ」と言われても断固として弾かなかった。頑固な性格は親譲りだ。慣れるのに少々時間はかかったが、今となってはお手の物だ。
「ねぇねぇ、なんかさぁ」
　1年生の女子が話すのが友美子の耳に届いた。
「塚口くんってあんなにカッコよく見えるっけ？」
　ドラムセットを楽しげに叩く和志を見ての話のようであった。
「だよね～。教室じゃもっと気だるそうにしてるのに」
「変わるね～」
　ふたりはずっと和志を見ていた。その和志のドラムセットがリズムを変えると、次にクラリネットとテナーサックスが立ち上がる。立奏はまさに代わる代わるの状態だ。再びドラムセットがきっかけになり、今度はトランペットとトロンボーン、ユーフォニウムが立奏し始める。貴志のベースが遊び心を持ちながら高らかな音を奏でた。
　そしてサビの部分。フルート、ピッコロ、オーボエ、エスクラリネットが立奏だ。チューバやトランペットの伴奏が遊びの伴奏を吹きながら、曲にスパイスを加える。マラカスのあずさとタンバリンの恵梨が曲にノリ始めて左右に揺れ始める。手が空いている美里と裕也がそれぞれギロとカスタネットを手にして適当に演奏に参加し始める。サビが終わり、転調すると同時に照明が青色に変わる。そして立ち上がったのは、さゆりと麻綾だ。綺麗なハーモニーのソリ。満面の笑みを浮かべながら、ふたりはソリを満喫している。
　そして、バトンタッチするように入れ替わって今度はサビの部分を翔と夏樹がソリを吹く。入部した当初から翔とこうして並んでソリを吹くことが夏樹の憧れでもあった。それが今、現実のものとなって夏樹には何かこみ上げるものがあった。
　ソリを終え、お辞儀をしようとすると翔が打ち合わせにもなかっ

たことを要求した。ハイタッチだった。
　夏樹は嬉しそうに翔とハイタッチをしてから、ふたりで手を繋いでお辞儀をする。拍手がさゆりたちにも向けて、大きく送られる。そして、再びメロディがそれぞれの楽器で奏でられ、エンディング部分に差し掛かり、全員でＢｂ（ベー）の音を高らかに吹き伸ばして曲は華やかに終わりを告げた。
「はい！　Ｈａｐｐｉｎｅｓｓ、いかがでしたでしょうか？」
　再び大きな拍手。周磨と杏は「ありがとうございます！」と仲良くお辞儀をする。
「ところで、野村くん」
「はいはい？」
「いかがですか。今の曲のテンポは」
「いやぁ、ノリやすいテンポとちゃいますか？」
「ですよね～。それじゃあ、ここでちょっとお客さんにも、演奏の楽しさっていうのを味わってもらいますか？」
「いいですね～！　それじゃあ……そうやな。まずは保田さんからどうです？」
「えー？　あたしですか？　しょうがないなぁ……」
　観客からどよめきが起きる中、恭一が杏に指揮棒を手渡す。そして杏が咳払いをひとつし、指揮棒を構えた。部員たちの顔が既に半笑いになっている。
　指揮棒が降りると、先ほどとはまったく雰囲気の異なる、異常に速い『Ｈａｐｐｉｎｅｓｓ』が始まったのだ。とんでもない速さに観客から笑いが起きる。恭一と周磨も笑っているが、演出とは思えないノリノリの杏に観客から大笑いが続いた。
　次第にテンポについていけなくなった部員たちが次々と落ちて行く。そして、サビに差し掛かる前に全滅してしまった。
「吹けるかぁ！」
　翔の苦情に全員が笑い始める。
「はいはいはい！　保田さん、とんでもない指揮をありがとう！」

「いえいえー！」
「はい！　ではですね、保田さんの見本にならない見本をご覧頂きましたが……次はですね、ご覧になっているお客様にも、指揮を振っていただこうということで」
杏と周磨が同時に声を上げた。
「指揮者体験会の、はじまり、はじまり～！」
そういうと恭一から指揮棒を受け取り、友美が立ち上がってトコトコと来賓・主賓席のところへ走って行く。そして、七海市教育委員会の委員長のところへ行ったのだ。
「委員長さん！　お願いします！」
教育委員長の林（はやし）巌夫（いわお）が困惑した様子になる。
「えぇ？　私かね？」
「はい！」
拍手が起きた。巌夫は照れながらも友美に手を引かれ、指揮台に立ち上がった。
「それでは！　七海市教育委員会委員長の林先生に、お願いします！」
「お願いしまーす！」
巌夫の表情が極度に緊張しているのが部員から見れば明らかであった。あれほどの人数がいても落ち着いた顔で挨拶をする教育長の様子が、ここまで困惑しているのは滅多にないことだ。
指揮棒を上げ、実にゆっくりしたテンポで『Ｈａｐｐｉｎｅｓｓ』が始まった。杏とは１８０度異なる様相を呈する曲。言うなれば演歌調の状態だ。
はるかがお遊びで演歌のコブシが効いた奏法をすると、それにノリ始めた巌夫がますます味を占めてテンポを遅くする。
「これじゃあ全然違う曲やねぇ」
客席で友美子と由利が笑い合う。しかし、指揮者の指示には絶対と考えている部員たちはまったく動揺せずに演奏していく。
ようやくサビまで差し掛かり、ちょうどキリが良いと感じた場所

で巌夫が演奏を止めた。
「いやぁ、楽しいねぇ！」
巌夫は心底そう思い、素直な感想を述べる。
「ありがとうございました！」
「皆様、大きな拍手をお願いします！」
拍手を受けながら嬉しそうに席に戻って行く巌夫。
「では、次は立候補を募りましょうか？」
「ですね！　はい！　じゃあ次にやってみたい人―！」
ザワザワと声は上がるが、やはり大勢の前だと遠慮してしまうのか、なかなか声が上がらない。
「それでは～……私がテキトーに指名しちゃいます！」
えー！という声が上がるが、こうなってしまうとマイペースな杏を止めることは誰にもできない。颯爽とスキップをしながら、杏は一人の男子高校生らしき人の手を引っ張った。
「はい！　では、あなたお願いしまーす！」
困惑しながら遠慮する彼だが、無理やり杏に引っ張り出され、結局指揮台の横にまで連れてこられた。
（あれ……？）
その少年の姿を見て、沙知が真っ先に反応を示した。
（ヤバい……！　僕、今日学校サボッて来てるのに！）
その少年――鈴木（すずき）　悠輔（ゆうすけ）は焦りの色を隠せない。そして、無理やり指揮棒を持たされて悠輔は困惑した様子でそのまま指揮台に上がった。
「！」
「！」
翔、陽乃、沙知、はるか、さゆりの5人が何かに気づいたように悠輔を見て、すぐに視線を逸らした。間違いなく、彼らと悠輔には面識があるのだから。
少なくとも、今日は七海高校以外の高校では市内はもちろん、ほぼ日本全国区で高校では「通常」の授業があるのだ。

それにもかかわらず悠輔がこの七海高校の文化祭にいる。その理由は考えられなかったが、少なくともこれだけは明確であった。

（鈴木くん……学校、サボッてる……？）

不信感を抱かれないように悠輔は何かを振り切ったように指揮棒を上げる。そして、何のためらいもなく見事に曲を演奏しきった。

「すごーい！　ありがとうございます！　ひょっとして、何か音楽されてます？」

杏の意図せずドキリとさせる質問に、沙知や翔も驚いてしまう。

「えぇ……少し」

そう言って悠輔はなんとかその場を凌いだ。杏に促され、悠輔は元いた場所へと戻って座る。なんとか教職員にも違和感を抱かれずに済んだようだ。おそらく、背が高いので私服を着ていれば大学生くらいに見えなくもないのだろう。

「……。」

翔はジッと悠輔の位置をしばらく見つめていた。

「佐野先輩」

麻綾に呼ばれ、ハッとする翔。

「次、頑張ってくださいね！」

「……うん！　ありがとう」

翔は気を取り直し、次の楽譜――『青春の輝き』を取り出すのだった。

コラム☆17　奏って、ここがどうなってんの!?（2）

「うわぁ……ねぇねぇ、来たよ、来た！」
美里が大騒ぎしている横で、慎也が嫌そうな表情を浮かべる。
「なんでそんな嫌そうな表情するのよー!?」
「お前、いちいちうるせぇんだもん。ちょっとは普通の反応できねぇの？」
「できないわよー！　だって、今から一人ずつインタビューだよ！　あー！　あたし髪の毛超乱れてる！　セットしなおしておこ！」
美里はそう言うとドタバタと部室に駆け込んでいった。
「……アイツからの予定なのに。しょうがないな。俺からいくか」

☆　エントリーＮｏ．６　川崎　慎也　☆
＞ｉ９６３３―１５０＜

はい、どうも。騒がしい田中美里の世話係、川崎慎也です。俺、正直こういうのめんどくせーから、チャチャッと行くぜ。

【不良だったってホント？】
いきなりなんつー質問だ……。っていうか、あれだろ？　そういうのって、ほら、アイツ！　永瀬に聞いてこいよ。
あぁ？　そーだよ。髪染めてたよ！　茶髪、茶髪！　もーいーだろ、そんな過去どうだって！　今は普通の高校生やってんだから。
何？　目つき怖い!?　生まれつき！　ほっとけ！
へ？　タバコ!?　吸うわけないだろ！　あんなクセーもん！
は？　酒!?　めちゃくちゃ弱いっつーの！　なんでわかるかって？　注射の前にアルコール？塗るだろ？　あれで赤く腫れるのに

呑めるわけない……。
つまりですね。見掛け倒しってこと。目つき悪くて茶髪だったらそれだけで怖いじゃん？本当はいい子……なんて俺が言ったって気持ち悪いだけか。

【ひょっとして、ツンデレですか？】
ばっ、ばかじゃねーの！？　誰だよ、こんな質問よこしてくんの！　もうちょっとマシな質問あんだろ！
ツンデレなわけねーじゃん。そもそも、俺のどこにデレの要素があんだよ。デレデレなんか、朝倉さんと翔でみんな十分見てんだろ。これ以上デレの需要なんて絶対ないね、絶対。
は？　じゃあツンツンだって？
とんがりっぱなしじゃん……。

【一部の噂では、真っ先に3年生の中では辞めそうだというイメージが】
え？　途中退部するとしたら？
あ～……それは俺も思うね。よく3年間、嫌にならずに続けられたと思うよ、吹奏楽部。まぁ、それは正直思うことがあるわけで。
最初、吹奏楽に興味持ったのは、中学時代の同級生と後輩……まぁ、あの永瀬なわけだけど、そいつらの演奏見て、俺も楽器吹きたいって……思ったのがキッカケ。
それに意地になってたわけじゃないけど、家族にも絶対途中で辞めるって思われてたみたいで。俺、悔しいけど確かに今まで習い事とか長続きしなくて。ただ、これだけは絶対にやめたくないってだんだん思い出した。
一番の理由は仲間かな。翔や朝倉さんたち3年生に、よっしーや徹っち、江藤さん、佐々木さんたちがいるから。だから部活だけは

続けられたんだと思う。

うわぁ！　俺、何語ってんだ!?

ハズい、ハズい！

次、バトンタッチするわ！　よろしくな！

☆　エントリーＮｏ．７　田中　美里　☆

＞ｉ９６３４―１５０＜

んふふー！　どう？　可愛いでしょ！　バッチリ髪型決めたから、張り切って答えちゃうよーん！　え？　見えない!?　そんなはずは……。

と、とりあえずあたしに寄せられた質問でーす！

【運動部とどっちが楽しいですか?】

ちょっとー。愚問ね！

いい？　どっちがっていうのが間違い。たとえば、卓球部と野球部ってどっちが楽しい?なんて聞いたってね、それぞれよさがあるの。どっちも奥が深いスポーツなの。どっちが楽しいとか、どっちが優れてるとか、どっちがいいとかそんなのないよ。

それと一緒でね、まぁあたし、ハンド部だったけど、ハンド部はハンド部で楽しかった。それとはまったく次元が違うでしょ？　吹奏楽部って。

どっちにしても、卓球でもバスケでもサッカーでもハンドでも、吹奏楽でも放送部でも美術部でも、みんなひとつの目標を持ってその場に集まってるわけじゃない？　だから、比較するなんておかしいってこと。

あれ!?　あたしいまチョーカッコいいこと言った!?

【なんでそんな騒がしいの？】

うるさいわねー！　考えてもみなさいよ。みんながみんな、雪ちゃんみたいなおとなしい人ばっかりだったら、刺激がなくない？　あたしみたいにね～、ドッカーンと賑やかな子だって必要なの。

え？　３年生、うるさい子多くないかって？

んー。でもさぁ、基本的にうるさいのってあたしと陽ちゃんと佐野くんくらいじゃない？　３人なのに全員がうるさいみたいに思われるってことは……あたしたち３人、相当だね！

【慎也ってツンデレ？】

いやぁ～ツンデレだね！　慎也ってね～、あたしと２人でいるときめーっちゃデレデレなの！　信じられないでしょ！？　でもね、そうなのよこれが～。

昨日の学祭のときに一緒に回ったんだけどさ！　そのときなんかね、あたしが屋台で焼きそば買ったときに、慎也は慎也でお好み焼き買ったの！　そんで、一緒に食べるときに、なんか「アーン」とか言ってきて！　あの慎也がだよ！？　信じられるみんな！？

それでね、あたしもさぁそういう風に慎也に甘えられるってことなかなかないから、ついつい甘やかしちゃって～（以下、延々と続くので省略）

☆　エントリーＮｏ．８　永井　雪子　☆

＞ｉ９６３５―１５０＜

あれ？　いいんですか？　ミサッチのインタビュー、まだ途中なんじゃ……。え？　あ、そうなんですか。川崎くんから放っておく

とずっと喋るので次に行っていいと……。まぁ、確かにそうかもしれませんね。

それでは、私に寄せられた質問にお答えします。

【ホルン、世界一難しい金管楽器なんだそうですね】

そうなんです。何でもギネスブックに載っているとか。本当かなぁ。私、自分で確かめたことはないので、よく知らないんですよ。

ちなみに、私より野村周磨くんや緒方くん、うーちゃんのほうがずっと経験年数は長いので、彼らに音色のコツとかは聞いたほうが確実だと思います。

難しい理由？　うーん……楽器の大きさの割に、管の長さが長いことかな。チューバよりは短いんだっけ。忘れちゃいましたが、少なくともトランペットやトロンボーンよりは長いので、その分空気抵抗があることは間違いないですよ。

そういう意味では、難しい楽器なのかもしれないですね。でも、他の楽器のほうがずーっと難しいと私は思います！

【佐野くんのこと、どこが好きだったんですか？】

えっ……。そんな古いこと今聞きますか……？

なんていうか……。憧れだったんです。まぁ、今となっては陽ちゃんとお似合いカップルだから、私も見ていて嬉しいんですけどね。

なんていうか、見た瞬間にすっごく眩しかったんで。キラキラしてて、笑顔で、かっこよくて。まぁ、こんなこと私に聞かなくても、陽ちゃんに聞けばこの1億倍は佐野くんのいいところ、出してくれると思いますよ。

今は私もまぁ……好きな人、いますし！　結局、佐野くんって男女問わずに人を惹きつける力があるんです。なので、石川県でも島根県でも愛媛県でも大阪府でも知り合いがいますよね。こんな高校生、普通いませんよ？

【転校後、七海高校が懐かしくなりませんか？】

最初はホームシック……じゃないですね。えーと。スクールシック？になりました。最初は関西弁ばっかりの環境ですし、知らない人ばっかりですし、私、人見知りですし……。でもよく考えれば、私の正反対の状態だったのが、佐野くんだったんですよね。

あっ！　また私、佐野くんの話しちゃってる……。特に意味はないですよ。本当に。

でも、大阪でも佐野くんのお友達が私にとってもよくしてくれてますし、吹奏楽部でもホント、引退直前なのにみんな温かく迎え入れてくれたので、今はもう、大丈夫です。

だけどこうして七海高校でも引退させてくれるなんて、感激で感謝しています。残り１ヶ月ちょっと、頑張ります！

☆　エントリーＮｏ．９　水谷　春樹　☆

＞ｉ９６３８―１５０＜

はい。永井さんと昔はキャラが被っていた水谷です！　今はもう全然違うでしょ？　それでは、俺に寄せられた質問にお答えします。

【幼なじみの加藤さんとは、いつから一緒なんですか？】

えっとね。これ、ビックリしないでね？

生まれた病院まで一緒というね。しかもご近所だからなぁ。初めて俺とめぐが会ったのは、めぐが公園デビューした日。その日のうちに俺がめぐのほっぺ引っ張って泣かせたことから始まったらしい。俺、覚えてないしめぐも覚えてないけど、それでお互いの親が仲良

くなったみたいで。
ちなみに、幼稚園も小学校も中学校も高校も一緒。学年が違うからクラスが一緒なんてことはありえなかったけど、もういっつも俺たち一緒だったし。中学の時なんか、付き合ってるって思われたこともあるみたい。俺、全然知らなかったしめぐも知らなかったから、噂が一人歩きしてた感じだね。
大学では……さすがに一緒にはならないと思うけど、俺としてはこれからもめぐと幼なじみとして仲良くしたいなぁって思うよ。

【音楽大学を志望した理由は?】
これはもう単純です。父の見ていた世界を見たかったから。父は事故で他界しているのは皆さんご存知だと思うんですけど。その父が見ていた世界を俺も見てみたいって思ったんです。偶然にも、父が吹奏楽を始めたのは高校生のとき。俺もスタートラインは一緒で、目指す進路も同じ。俺はもう確実に父の後を追っています。
父が見ていた世界を、そして父が見ていなかった世界を見て行きたい。そう思っています。

【3年生の中では大人びていませんか?】
そんなことないですよ。俺にだってまだまだ幼い部分はあります。大人びてるっていう意味では、大谷さんなんかのことを言うんじゃないかなぁと。冷静だし、ものすごく客観視できるんだよね。
部内で一番大人だと思うのは、やっぱり拓あん。1年生のときから落ち着いてて、ちょっとでも慣れないことがあっても、すごい冷静に周りをフォローしてくれるし。これは翔も助かるって言ってました。
俺もいろいろ勉強して、もっと大人になりたいですね。それ以前に、背が伸びてほしい!

☆　エントリーＮｏ．９　本堂　拓真　☆
＞ｉ９６３７―１５０＜

えっ！　俺が最後！？　なんでよりによって……。あぁ、うん、でも仕方がない。腹くくります。

【どうしてチューバを選んだんですか？】

あぁ、来たかこの質問……。

まず、チューバって吹いていない人や中学校くらいだといろんなこと言われるみたいですね。楽譜は四分音符が多いから楽そうだとか、デカいだけじゃんとか、静かになったら休みで羨ましいとか。

でも、デカいだけじゃないんだよな。肺活量はいるし、四分音符ひとつにしても、たとえばマーチなら、どの部分が強くてどの部分が弱くて、アフタクトを大事にして……とか、ホントいろいろあるんですよ。

チューバを選んだ一番の理由は、そういう支えになる楽器っていうのを知ったから。俺、前に立つより補佐的な役割が自分に向いてるって思ってる。だから、今の副部長って役職もちょうどいいと思います。

【副部長をやってよかったと思います？】

これは思いますね。ここ１年で、随分自分が変わったと思います。前に立つ難しさと楽しさを知れました。翔はもっと苦労してたと思うし、実際しんどい部分で結構朝倉さんに助けてもらったんで……。俺がやったことなんて、ホント小さいことですよ。

【ソロがほしいって思うことありませんか？】

なんか、定演では先生が必ず3年生にソロくれるとか言ってくださってるけど、俺はぶっちゃけた話、ソロはなくてもいいかなぁって思ってます。

だって、チューバって伴奏楽器でしょ？　それなのにメロディ吹くのも、なんかオレとしては違和感があるから。それぞれに向いてることってあるじゃん。人と同じで。俺はチューバはバンドを支えることが一番だと思う。なので、ソロをほしいとは思いません。

おっと。

ソロの話をしているうちにほら……。翔が『青春の輝き』の楽譜を取り出してますよ。翔ワールドの始まる予感。

そろそろ、俺たちも演奏モードに戻ります。

皆さん。残りのお時間も楽しんでいってくださいね！

第４９１話　『青春の輝き』

青春の輝き、原題はＩ　Ｎｅｅｄ　Ｔｏ　Ｂｅ　Ｉｎ　Ｌｏｖｅである。カーペンターズが１９７６年に発表したシングル曲である。日本で発売された当初はオリコン最高６２位と振るわなかったが、１９９５年にテレビドラマでエンディングで取り上げられたのをきっかけに、大ヒットとなった曲である。

（よし……）

今回演奏するのは、『アルトサキソフォンと吹奏楽のための青春の輝き』と銘打たれた曲である。そして、もちろんアルトサックスソロを吹くのは他でもない、翔だ。

そして、この曲の演奏中に、部員と恭一、そしてコラボレーションした写真部以外は誰も知らないとっておきのサプライズが用意されている。

恭一が指揮棒を構え、翔と目を合わせてからすっと指揮棒を降ろした。フルート、ピッコロ、オーボエの音色とビヴラフォンの音色が響き、次第に楽器が重なっていく。スウッと翔が大きく息を吸い、暖かな音色を奏で始める。冒頭部分はサックスアンサンブルになっている。翔の音色に呼応するように、はるかやさゆりの音色が追いかける。

「あっ……」

１年生が声を上げた。ちょうどトランペットとトロンボーンの列の後ろにスライドがあり、そこに何かが映ったのだ。

「俺だ」

「あっ、あっちにいるの、あたし……」

これは３月末のこと。今の１年生の入試合格発表の際の写真だった。写真部はこうした校内での１年間の出来事を撮影しているのだが、それを知った翔は、ちょうどこの曲と雰囲気がマッチするので

はないかと思い、写真部の部員たちに提案したのだ。演奏中、曲にピッタリだと思う写真を選んでスライド形式で流してくれないかと。

そして、部員たちはすぐに同意してくれたのだ。たくさんの写真を選び、曲を聴きながら写真を選んでもらう。写真については、翔たちよりずっと詳しい写真部に完全に任せることにした。

「やだ！　私だ～」

映ったのは華道部の稽古の様子。和服を着た部員たちが映っている。その横顔は真剣そのもの。

「あっ……」

玲菜が声を上げた。

「私だ……」

美術室でキャンパスに向かって笑顔で絵を描いている少女。それは紛れもなく玲菜本人であった。いつの間にそんな写真を撮られたか記憶にはないが、基本的に写真部は断りナシに写真を撮ることは人相手の場合はない。なので、承知の上で撮られたのだろう。しかし、絵に夢中だった場合は聞き流している可能性が非常に高かった。

「うぉ！　俺だー！」

体操部員がいるあたりから声が上がる。男子の笑い声が上がった。

「あ……」

今度は野球部にシーンが変わる。雄平が映ったのだ。それも、いつの試合か本人も覚えていないが、ホームランを打った瞬間の、爽快な笑顔だった。どこでこんな決定的瞬間を捉えたのか。雄平は嬉しくなり、感情が高ぶっていた。

「ウソだろ……！　マジかよ」

目を点にしているのは、調理部部長の中村幸一。調理室でちょうど炒飯を炒めているところ、うまく鍋で炒飯をかき混ぜ、持ち上げた瞬間の映像だった。狙っていなければこのシーンは撮ることができない。しかも、一番驚いたのは幸一自身がそれを笑ってやっていることだった。

曲に合わせて、次々と写真が映る。私だ、俺だ、と言う声が上が

る中、感傷に浸りながら生徒たちは翔の奏でるサックスの音色に耳を傾け始める。次第にざわめきが落ち着いてきた。

「……。」

菜緒の目に涙が溢れてきていた。当たり前だと思っていた生活が、こんな風に曲に乗せ、切り取られたワンシーンとなって現れるだけで、とても愛おしく感じるのだ。

再びフルートのメロディ。クラリネットにメロディが引き継がれ、第二部分のメロディを翔が吹き始める。少しメロディに変化が生まれ、また違う雰囲気を奏でる。先日の体育大会でのシーン。つい先週の、文化祭での展示作成の風景。

そして、教職員たちですら予想外の写真が出てきた。

「え……？　私？」

一体、いつ撮ったのか本当にわからないのだが、彩が黒板に立って授業をしているところだった。彩だけではない。健太、宗平、麻衣子。あらゆる教職員の授業中の様子が映されていたのだ。

思い出したように彩が光治のほうを見た。１ヶ月ほど前、光治がカメラを片手に授業の様子を撮影していたことがあったのだ。そのとき、彼はこう言っていた。

「学校紹介のパンフレットに載せようかと思っていてね」

実に自然な言い方だったので、すぐに納得したのだが、実はこういうことだったのだ。

この曲では、トランペットやトロンボーンはほとんど休みである。陽乃は翔の背中を見ながら、曲を聴いていていろんなことを思い出していた。夏のコンクール、マーチング、合宿。写真のスライドにこそ吹奏楽部はほとんど出てこないが、陽乃の脳裏にスライドのようにいろんなことが思い出される。

（構えなきゃ……吹かなきゃ……）

わかっていても、陽乃は楽器を構えることができなかった。楽器を構えても、涙で楽譜が滲んでまったく見えないのだ。

腕でゴシゴシと顔を擦りながら、なんとか音を出す。そして、翔

の音色が再びメロディを引き継ぐ。そして再度トランペットのメロディ。その間を駆け抜けるように、翔のアルトサックスソロが高らかに響き始めた。

「……。」

雄平が口を開けてポカンとしている。

「うわぁ……」

菜緒は涙を拭うのも忘れ、笑顔で翔のほうを見ていた。

（やるじゃん。さすがだな）

慎也は吹きながらそっと笑った。

（そうでなくっちゃね）

美里はこの曲では休みであるので、舞台袖にはけていた。それでも、曲に参加しているつもりでいた。翔がソロを吹くのだから、これくらいの雰囲気は覚悟していたが、やはりその雰囲気に飲まれそうになる。

音がグングン上昇し、A（アー）の音から次第に上の音へ駆け上がっていく。そして、C（ツェー）の音を最高点に、高校生が吹く物とは思えないほどにビヴラートのかかった音色が体育館中を包み込んだ。

「……すげぇ」

音楽のわからない涼平でも、翔の音色の迫力だけは感じ取っていた。いつも仲良く、他愛無い話をしている翔が、とても遠い存在に見えた瞬間でもあった。

さゆりと夏樹の位置から見える、翔の楽譜にはひと言だけ、青いサインペンでこう書かれていた。

オレの3年間を、全部伝えるつもりで。

（どれだけ伝わったかなぁ……）

次第に音量が下がり、木管楽器だけになっていく。翔は目を閉じ、響いてくるフルートの音色に耳を傾けた。そして、最後のソロだ。

低音から、次第に音が上がって行く。そして、全員が伸ばしをし

ているところへD（デー）の音を伸ばし、ビヴラートをかけて完璧に吹き切った。
「……ハァッ！」
自分でも驚くほどに、息が出た。恭一が指揮棒を降ろす。しかし、しばらく観客席からは声も拍手も起きなかった。
「……？」
翔は驚いて少しキョロキョロとしてしまう。そして、不意打ちだった。
「ブラボー！」
声を上げたのは、巌夫だった。
「佐野くん！　すっごいよかったよ！」
彩が声を上げる。
「すっげー！　何、お前！　カッコよすぎ！」
雄平だった。
「佐野くーん！　もう1回吹いてよー！」
菜緒の声が聞こえる。
「よっ！　吹奏楽部のイケメン！　もう1回今の吹いてくれよー！」
涼平の声。ふと翔が悠輔のほうを見ると、さっきはあれほど顔が強ばっていた彼もいくらか表情がやわらかくなっていた。
恭一からマイクを手渡され、戸惑う翔。
「いいから」
恭一がうなずいた。翔ははにかみながらもマイクを受け取り、一言だけ言った。
「ありがとうございました」
そこで再び大きな拍手が沸く。部員たちが足で音を立てる。拍手の代わりだ。
翔は再度深々とお辞儀をし、自分の席に戻っていく。そして、戻ってすぐに楽譜に目をやった。
オレの3年間を、全部伝えるつもりで。

翔は笑みを浮かべ、答えるように横にこう書いた。

伝わったで。いっぱい。きっと。

そして、楽譜を次のページへと捲る。

七海祭ステージは最終章へと入ろうとしていた。

第４９２話　『事件は体育館で起きている！』

「早いもので、七海祭での吹奏楽部の演奏も、次の曲で最後となりました」

杏が落ち着いた口調で言う。

「ですが、実は皆さんに大事なお知らせがあります！　ここはですね、代表である部長にひと言、お願いしたいと思います」

翔は楽器を置いてそっと立ち、周磨からマイクを受け取る。

「私たち吹奏楽部は来月２３日に、第１回定期演奏会を……開催する運びになりました！」

翔が満面の笑みでそう言うと、体育館中から目いっぱいの拍手が起きる。

「ありがとうございます。私たち部員一同、今も一所懸命練習しています。まだまだ拙い演奏ではありますが、是非皆様お越しください。よろしくお願いします！」

「お願いします！」

部員全員で挨拶をすると、また拍手が起きる。

「それでは……最後の曲の紹介に移らせていただきます。最後にお送りしますのは、ジャパニーズグラフィティⅩⅠ～刑事ドラマ・テーマ集です」

周磨が引き取る。

「このメドレーはその名のとおり、日本を代表する刑事ドラマの有名なテーマ曲などをメドレーにしています。太陽にほえろ！のメインテーマ、Ｇメン?７５のテーマ、はぐれ刑事純情派メインタイトル、西部警察Ｐａｒｔ?よりワンダフル・ガイズの４曲が集められた、熱いメドレーです」

「文化祭らしからぬ、大人な雰囲気と熱さが同居する、フィナーレ

に相応しい一曲となっております。また、いろんな場所でソロが出てまいります。お客様にも絶対、楽しんでいただけるものです！ご期待ください」

周磨がチラリと後ろを見る。ほのかな灯りが見えた。あれはＯＫサインである。

「それでは……Ａｒｅ　Ｙｏｕ　Ｒｅａｄｙ!?」

部員が一斉に声を上げた。

「Ｙｅｓ！」

恭一が指揮棒を降ろすと同時に、木管のトリルがこだまする。同時にトランペットの高音が体育館中に響き渡った。晃のサスペンドシンバルがさらに雰囲気を作り出す。フルート、オーボエがゆっくりとした主題を吹いて、それを掻き消すように美里のドラムセットが激しくタムタムを奏でる。

サックスの音色の後に、恵梨のシロフォンとクラリネットなどの音色が響く。そして、繰り返し部分はサックスなどの下降系の音が聞こえ始めた。

それを合図に、体育館の入口がスタッフによって開放された。トレンチコートを着た誰かが楽器を片手に生徒たちの間を駆け抜けて行く。

「えー！　ちょっと、誰!?」

「暗くてわかんねぇ」

「顔見えないし！」

どよめきに近い声があちこちから沸いた。そしてその人物はちょうど菜緒と玲菜の目の前あたりで立ち止まる。そして被っていたフードを脱いだ。

「さ、佐野くんじゃん！」

菜緒はいつの間にか移動した翔の姿を見て声を上げた。

「きゃー！」

さすがの玲菜も黄色い声を上げてしまう。そして始まった、アルトサックスの『太陽にほえろ！』メインテーマ。いきなりビヴラー

トを利かせた色っぽいソロだ。余裕の表情で難しいソロを吹く翔。遠くから聞こえる優のボンゴ、亮平のエレキベース、美里のドラムセットにしっかりとテンポを合わせ、自分なりの時間を演出する。

今度は少し移動して3年生のあたりへ行く。雄平の前で高らかにソロをいったん吹ききると、翔は走って別の場所に移動した。今度は悠輔の前だ。

「！」

悠輔は驚いて少し後ろに引いてしまった。しかし、翔は気にせずブイサインをして笑顔を浮かべた。

「今日はありがとー！」

「いっ、いえ……！」

同性なのにあまりの笑顔に思わずキュンとしてしまう悠輔。今まであった嫌なことを一瞬忘れられた。

フルートやクラリネット、ユーフォニウムのメロディが間を繋ぐ。翔のクラスメイトとタッチしたり、「オレかっこえぇやろ！」と冗談っぽく話をした後、来賓席の前に移動してから再びソロを吹き始める。

一気にオクターヴ上昇した後、再現部を吹いてからは完全なるアドリブだ。激しい指使いと上昇、下降を繰り返す。あまりの迫力にその場ですぐに拍手が起きた。部員たちも気になってついつい視線が翔のほうへ行ってしまう。こうなると誰も翔を止められず、完全に彼に主導権を握られてしまう。

フェルマータの伸ばしでこれでもか、と言わんばかりに高音を吹いてビヴラートをかける。その後、ゆっくりと低音へと移動し、完全に大人の吹き方で観客を魅了する翔。誰もが言葉を失うほどに完璧なソロであった。

そしてすぐに雰囲気を変え、ティンパニの音色が印象的な入りで始まるGメン'75。翔を追いかけていたピンスポットが消え、全体の照明も落ちる。クラリネットやサックスのメロディ。後ろでトロンボーンが勇ましい三連符を吹く中、ひとりの少女が立つ。

（大丈夫。兄ちゃんも先輩も、いける言うてくれた）
綾音はスッと息を吸い、下手なりにビヴラートをかけた。
「いやぁ……兄妹揃ってソロいきなり吹いて……」
友美子はあまりの展開に思わず涙してしまう。
切なさと静かな熱さを持って。
恭一に曲のイメージを細かく教えてもらい、陽乃や流に吹き方を教わる。そして、最後に彼が言った。
「俺の音色聴いて。そうすれば、雰囲気がつかめるはずだから」
裕也が言った。彼が叩くのはカスタネット。カスタネットとはいえ、叩き方ひとつでその音色は大きく変わる。大人な雰囲気を演出するには、もってこいの楽器ともいえる。綾音がイメージする大人の雰囲気を裕也とカチリと合わせ、数小節だがその雰囲気を全面に押し出すことができた。
美里のドラムセットがキッカケになり、クラリネットのメロディとホルンやトランペットの打ち込みが曲を盛り上げる。そして、再び曲のはじめが再現される。
恭一が曲を止めた。同時に静まり返る館内。そして恭一の背後に移動したのは健之佑、麻綾、愛実、光瑠の４人。あずさのウィンドチャイムに乗せられ、魅惑的なソリが始まった。それぞれがメロディだと思って吹くこのソリ。もちろん、先導者は健之佑。しかし、ソリとして演奏するので、どの奏者も思い思いに感情を込めて吹いている。
オーボエの感情が高ぶるにつれ、それに刺激されたユーフォニウムとサックスにますますビヴラートがかかっていく。そして、４人の楽器のベル位置が次第に上がり始めた。何かを訴えるような視線。その直後だった。
ドラムセットの激しいシンバルの音の後にバスドラムの音が響き渡る。
（来た！）
陽乃はスッと楽器を構え、一気に息を吸う。恭一が振り返ると同

時にピンスポットが2階席のど真ん中に当たった。
とんでもない高音が一気に体育館中に飛んだ。
「！」
誰もが声を失い、それが陽乃だと気づいても声すら上がらなかった。菜緒や涼平、雄平たちは見慣れた陽乃の姿であるにもかかわらず、それがまるで別人のようにすら見えたのだ。
明らかに楽器を持って3年程度の女子が吹く音色とは思えない迫力である。それを支えるのは美里のドラムセットと和志のボンゴ、優のコンガだ。
部員たちも休みの奏者たちは陽乃に視線を注いでいた。音を外さないか、気が気でないのだ。しかし、それは杞憂であった。
陽乃は完全にこの高音のソロを楽しんでい吹いている。音を外したらどうしようなどというような余計な心配は一切していなかった。そして、ソロがピークを迎えてC（ツェー）の音を伸ばし続ける。サックスやクラリネットの上昇系の音が終わると同時に、陽乃はソロを吹き切った。
「ブラボー！」
教育長が声を上げて立ち上がった。陽乃はバッチリ挨拶を決め、深々とお辞儀をする。大きな拍手が沸き起こった。
「なんか……娘とは思えないですよ」
由利はあまりの感動と衝撃に涙を流してしまっていた。トランペットがワンダフル・ガイズのメロディを吹く。続いてやってくるのはあの場面であった。
話は楽譜が配られたばかりの頃に戻る。
「私、いいって。ここはやっぱり由美ちゃんがさぁ……」
沙希がその部分を由美子に譲る。しかし、由美子は逆だ。
「ダメよ。こここそ、サキティに吹いてほしいの。私、ここはサキティが吹いたほうが雰囲気に合うと思うのよ」
「えぇ～？　そうかなぁ……」
「今まで熱い感情をみんな、ソリストがぶつけるでしょ？　ここで

あえて、サキティが冷静と情熱の間、みたいな感じの落ち着いてるけど熱いソロを吹く。私、その雰囲気を出せるのは私とサキティのどっちかって考えた時、それはサキティだと思うの」

「……。」

しかし、沙希はまだ納得が行かないようだった。それもそのはず、今までのことを考えると、ソロを吹いたのは沙希のほうがずっと多いからだ。最後の学年で、最後の文化祭。由美子にも華の場を持たせたい。それが沙希の考えであった。しかし、由美子は頑としてそれを許さなかった。

そしていま。こうして沙希は恭一の横で楽器を構えていた。

照明が落ち、背景が暗い青色になる。ピンスポットが沙希を照らした。

「おぉ……」

自分の思い人である沙希が、涼しげな表情で熱いソロを吹く。それを目にした雄平は、毎日一緒に行き帰りをともにする彼女の、新しい一面が見えたような気がした。

それほど高い音域でなく、指使いも複雑ではない。そう思わせておいて、中盤で突然高音が出るこのソロ。そのギャップをいかに見せるか。沙希はそこに集中した。

「すっげ……」

目の前に座っていた1年生男子がそう呟いた瞬間、彼女は思わず笑みを浮かべた。ソロを吹き切ったと同時に、最高の笑顔が沙希の顔に浮かんだ。

拍手に包まれながら、元の位置に戻る沙希。再びトランペットがメロディを吹き、曲はいよいよフィナーレだ。

ティンパニの打ち込みを追うように、すべての楽器が強く熱い音を奏でる。細かい音色を木管が吹き、トランペットが硬い音を全力で遠くへ飛ばす。そして最後にティンパニ、チューバ、エレキベース、弦バス、ユーフォニウム、バリサク、バスクラ、トロンボーンが打ち込みをして、曲は見事に終わりを告げた。

「ブラボー！」
「最高―！」
惜しみない拍手が起き、来賓の一部はスタンディングオーベーションまでしている。恭一は部員たちに起立を促し、深々とお辞儀をした。
けれども、それで終わるはずもない。たちまち拍手がひとつになり、アンコールが要求されたのだ。
昨日は予想外の展開であったが、この日の分についてはアンコールも想定していた。恭一はマイクを手に取り、挨拶と曲紹介を軽く始めた。
「本日と昨日、このような貴重な演奏の場をいただき、大変感謝しております。ありがとうございます」
拍手が起きる。
「ありがたいことに、アンコールまで頂戴しました。アンコールにお応えし、こちら関東方面では直接、聴く機会の少ないのではないかと思う曲を1曲、ご用意しました。当吹奏楽部部長の出身地である関西地区で、夕方に放送されるニュース番組『ＡＮＣＨＯＲ（アンカー）』で、テーマソングとして流れております、葉加瀬太郎氏作曲の『Ｂｅｙｏｎｄ　ｔｈｅ　Ｓｕｎｓｅｔ』をお送りします。どうぞ、お聴きください」
盛大な拍手を受けつつ、恭一は部員たちを一瞥した。全員がうなずく。
そして、恭一は勢いよく指揮棒を降ろした。

第４９３話　『Ｂｅｙｏｎｄ　ｔｈｅ　Ｓｕｎｓｅｔ』

スネアドラムの音と全員の打ち込みが響き渡る。恵梨のクラッシュシンバルの音が高らかに響き、木管楽器とトランペットのメロディが勇壮に奏でられる。そして突然音量が落ちると同時に、翔がソプラノサックスを手に立ち上がった。

ビヴラートの利いた綺麗な音色がまっすぐに観客の耳に響いていく。菜緒や涼平は目を閉じてその音色に耳を澄ませた。

裕也のウインドチャイムが響いた後に、翔のソプラノサックスに合わせて佳菜のピッコロが加わる。貴志と亮平の弦バスがしとやかな伴奏を奏で、雰囲気を盛り上げる。雰囲気が変わったのは、由美子のメロディだった。由美子を追いかけるように、絵美のクラリネットが合いの手を吹く。美里の叩くグロッケンがさりげなく由美子のやわらかい音色にスパイスを加える。優のタンバリンが邪魔をしないよう、うまく音を奏でる。

そして、再びサビ部分。トランペットの硬質な音色が雰囲気を一瞬で変えた。しかし、ホルンの吠えるような音色が終わった次の瞬間には、美里のシロフォンがまた違った雰囲気を見せる。今度は沙希と由美子のフルートがメロディを奏でる。追いかけっこをするようにメロディを交互に吹き、アイコンタクトを取りながらうまくメロディを掛け合わせて行く。

それが終わると麻綾とさゆりのアルトサックスが同じように追いかけっこをする。イメージとしては、妖精が踊りを踊っているような、そんな優雅な曲であった。

関東では耳にする機会が少ない曲。通な人の中には、関西に旅行に行った際、恭一が紹介したニュース番組『ＡＮＣＨＯＲ』をあえて見る人もいるのだとか。

（こんな曲があるんだ……）

関東での生活が長いため、この曲を初めて聞く悠輔も、一気にこの曲にほれ込んでしまった。それは菜緒、涼平、雄平、玲菜たちにもいえることであった。

麻綾とさゆりの掛け合いに、鳥のさえずりのような音色を奏でるのは佳菜。その華やか部分が終わり、再現部になると今度ははるかが立ち上がった。演歌ともジャズとも違う、表現力の求められる演奏。はるかにしてみれば、何の苦労もしないものだった。優のタンバリンに加え、和志の鈴が清涼な雰囲気をさらに盛り上げる。

すると、3年生がスッと楽器を置いた。そして手を楽器にして見事な前打ちと後打ちを交互にして見せたのだ。その間のメロディは、なんとバスーンであった。バスーンソロというもの自体、曲ではあまり見られない。それもこういったポップス系には珍しいことであった。

実は、この『Ｂｅｙｏｎｄ　ｔｈｅ　Ｓｕｎｓｅｔ』自体、吹奏楽譜がない。この曲を吹奏楽版にアレンジしたのは、音大に進んだ岳彦であった。恭一が曲に惚れこみ、彼に編曲を依頼したのだ。そして、元々チューバ吹きの岳彦はこうして低音を目立たせる編曲をしたのだった。

誠はこの高校に入って初めてのソロであった。あまりの嬉しさに、何度もここを練習した。嬉しかったのだ、純粋に。

「すごーい！　バスーンって、やっぱりカッコいいよね！」

佳菜がそのソロを聴いたとき、目を輝かせた。

「それだけじゃないよ。まこっちゃんが吹くから、やっぱいいんだよ」

由美子の言葉が素直に嬉しかった。沙希が言う。

「普段から真面目なまこっちゃんに、きっと三河先輩も何かしたかったんだよ」

慧太が言う。

「俺もまこっちゃんに負けないように頑張るよ」

いろんなことを思い出すうちに、感極まった誠の目に涙が浮かん

でいた。
「……。」
隣にいたまゆや慧太がその涙に気づいた。もちろん、恭一も気づく。しかし、ソロはまだ終わらない。
（がんばれ。戸口）
恭一は口パクでそう伝えた。
誠のソロが終わると、沙希が再びメロディを奏でる。誠がそれを追い、さらに誠の音色を翔が追う。
（嬉しい……。大谷先輩と、佐野先輩と俺……一緒にメロディ吹いてるんだ……）
誠にとって、夢にまで見た翔とのソリ。感動のあまり、涙が溢れて止まらなかった。そして、そのソロも見事に終わりを告げる。惜しみなく誠に送られる拍手。誠は深々とお辞儀をした。
再現部。全楽器がメロディや伴奏を奏で、次第にテンションを上げて行く。そして、突然調が変わった。
洋之のタムタムが聞こえると同時に、あずさがバスドラムを盛大に叩く。ホルンの副旋律が響き、トランペットの高らかな音色、チューバの安定した伸ばし。それを支えに翔のソプラノサックスが独立したメロディを吹き、高音を何度も吹く。そして、サックスやトランペットの高らかな音色が響く中、次第に曲がフェードアウトしていく。
最後に、ゆっくりとチューバや弦バス、バスクラ、バリサクがＣ（ツェー）の音を吹き伸ばし、アンコール曲『Ｂｅｙｏｎｄ　ｔｈｅ　Ｓｕｎｓｅｔ』は終わりを告げた。
恭一が全員に起立を促す。
「ありがとうございました」
それを合図に、今までで一番の拍手が部員たち全員に送られる。
翔は嬉しそうにはるかや茉莉紗、麻綾、さゆり、夏樹、かのこ、友美と目を合わせる。
「ありがとうございましたー！」

翔が大きな声でそういうと、つられるように部員全員が「ありがとうございましたー！」と挨拶をする。さらに拍手が大きくなった。

文化祭のメイン行事を終えた七海高校吹奏楽部。しかし、明日にはまだ姉妹校提携式典、そして音楽祭が控えている。

（よっしゃ！　やったるでぇ！）

翔はますますやる気を募らせ、興奮を抑えきれずにいるのだった。

第４９４話　個性を大事に

悠輔は吹奏楽部の演奏が終わった後もいろんな部の発表を見て聞いて、すべて終わってから帰路についていた。もちろん、サボリなので心配した友人や部内の生徒たちからメールなどが入っているが、返信する気にもなれず、そのままにしておいた。

日が傾き始め、夕陽を反射し始める校舎を見ながらゆっくり悠輔が歩いていると、突然視界が遮られた。

悠輔が慌てていると、後ろから聞いたことのある声が聞こえてきた。

「だーれや？」

誰だ、ではなく誰や、と言っているので一発でわかってしまう。

「佐野さん……ですか？」

「当ったり～！　今日はありがとうな！」

「いえ……僕も楽しかったです」

悠輔は内心ドキドキしていた。なぜ学校をサボッて来たのか、などと聞かれるのではないかとヒヤヒヤしていたのだ。しかし、翔はまったくそんな素振りなど見せない。

「なぁ！　あっち行かへん？　ちょっと座って話しよ」

「え？」

「な！　ジュースおごるから」

「あ、いや、でも……」

翔は悠輔が戸惑うのもよそに、先に歩いていってしまう。仕方なく悠輔は後を追った。

「どないする？　オレンジ？　アップル？　コーラ？　カルピス？」

「あ……水で」

「水ぅ？　んー、まぁええぇか」

翔は驚きつつも自販機にお金を入れてボタンを押す。ゴトン、と音がしてペットボトルが出てくる。
「ほい」
「ありがとうございます」
翔はアップルジュースを買い、悠輔の隣に座った。
「美味し～！　リンゴ美味いで？　飲む？」
「いえ！　ホント水で十分です！」
「そう？　まぁまたリンゴも飲んでみて。マジ美味しいから」
「はい……」
翔の意図が読めず、悠輔は買ってもらった水も飲めないで座るばかり。
「そういえばさぁ、今日、学校じゃないん？」
突然の質問に悠輔の心臓が飛び跳ねそうになった。言葉が思うように出ない。
「……。」
「あっ。黙るってことは……悪いことしてココ来たな？」
責められるのではないかと思い、ビクビクして顔を上げられなかった。
「まーまー！　えぇやん。大丈夫？　部の友達とか、心配してへんの？」
「……メールは来てました」
「えー？　返事した？」
悠輔はそっと首を振る。
「ハハハ！　そっかぁ。まぁ、落ち着いたら返信したげたほうがええで。オレもそういう経験あるねん。そういうときってな、返事せんかったらみんなめちゃ怒るで。ホンマ怖い怖い」
悠輔は深くは聞き返さなかったが、おそらく望実あたりは本当にメールを返さなければ真剣に怒ってきそうな気もしていた。
しばらく無言になる二人。悠輔は翔のほうをチラッと見た。
意外とガッシリしている体格の翔。楽器運びでもしていて暑かっ

たのか、カッターシャツ1枚に下に柄シャツを着ているが、そこからでも胸板が厚めなのは少しわかる。腕の血管もよく出ていて、夏場に日焼けしたのか元からなのか、肌の色も黒め。

そんなことを考えていると、秋風らしい冷たい風が吹きぬけた。

「クシュンッ」

悠輔が控えめにクシャミをすると同時だった。

「ハーックショイ！」

翔が悠輔の3倍はあろうかという大きなクシャミをする。周辺にこだまして、響き渡った。

「ふぇ～！　寒なってきた」

「……。」

男らしいって、こういうことを言うのだろうか。悠輔はそんなことを考える。同時に、先日聞いたクラスメイトの声が蘇る。

――鈴木ってさ～、ガタイいいのになんか女っぽくて気持ち悪くね？

――あー！　それ俺も思う！

――ねぇねぇ、鈴木くんって背ぇ高いのになんか声高いから引かない？

――それ私も同意だわ～。恋愛対象にならないみたいな！

それを考えるだけで涙が出そうになってきたのを堪える。

「どないしたん？」

翔が心配そうに悠輔を覗き込む。小声で悠輔は言った。

「男らしくなるって……どうしたらいいですか？」

「へ？」

悠輔の目が潤んでいるのが明らかだった。彼は続ける。

「筋トレしたらいいですか？　声、大きくして喋ったらいいですか？」

「ちょ、急にどないしたん？」

「僕、男らしくなりたいんです。あ、僕って言わないほうがいいのかな。俺とか……」
「……。」
翔は急に立ち上がる。
「ちょっと待ってて。絶対戻ってくるから」
そういうと、彼は校舎の中に入っていった。
「……。」
寂しさと不安で悠輔は必要以上にキョロキョロとしてしまう。遠くに、野球部の生徒が見えた。日焼けしていて体格も良い彼らを見ていると、どうしても自分が劣っているように見える。
「お待たせ」
翔が戻ってきたので、そちらに意識を戻す。
「見て、これ。実は内緒やけど、これな、今度の定演で演奏するねん。第1部で」
「へぇ～……。いいですか？　見せてもらって」
「もちろん。そのために持ってきた」
悠輔はその楽譜を見る。難しそうという第一印象しかない。
「これな。アメリカで有名な人の人生を、1曲にしたヤツやねん」
「人ひとりの人生を、ですか？」
そのような曲があることにまず、悠輔は驚かされた。
「うん。この人、スゴいんやで。アメリカって、昔は……ほら、白人と黒人の差別、すごかったみたいで。この人も……まぁ、差別される側やったけど。それに毅然と立ち向かってな。スゴいと思わん？」
「怖くなかったんでしょうか？」
悠輔なら真っ先にいろんなことを考え、そういう風にも思ってしまう。
「怖いとか、そんなんちゃうやろな。自分は自分、人は人。自分が正しいと思ったことは、まず信じてみる。んで、個性は個性。そう思わん？」

「……。」
悠輔は特に返事をしなかった。
「たとえば、さっきの話やけど。別に自分のことを自分でどう呼ぼうと、そんなん勝手ちゃうん？　なんでそんなん人に決められなアカンの？　オレはオレって自分のこと言うてるし、妹はあたし言うてるし。弟も最近こそ俺って言うようになってきたけど、昔は僕言うてたしな」
「でも……俺って言い始めてるじゃないですか」
「あー！　ホンマやな。説得力ゼロか」
翔は笑って言う。
「あ。ほいでもな、ほれ、チューバの本堂知ってる？」
悠輔はコクリとうなずいた。
「あれの弟がパーカスにおるんやけど、あの子は僕や。僕言うてるわ」
「そうなんですか……」
「あれちゃう？　オレ言うてるより、僕言うてるほうがちょっと上品な感じせーへん？」
悠輔はあまりそういう風に思わなかった。
「とにかく。何があったかまでは聞かへんけど」
翔がニカッと笑って言った。
「自分殺して騙し騙しで生きるのなんて、しんどいでー！　自分をドカーンと前に出してさ。素直に生きようや！　楽器演奏するときかて一緒！　ウジウジビビリビビリ吹いてたら、えぇもんできへん。なっ！　がんばろーや」
悠輔はまだ納得行かない。
「ほれ、立ってみ！」
「……。」
「背ぇ高い！　スラッとしてる！　肌綺麗やしな！　日焼けして真っ黒けのオレからしたら、羨ましい限りやで」
悠輔は思わず笑ってしまった。

「そう！　何より笑顔！　笑顔が一番！　なっ！」
「……はい」
翔もニッともう一度笑った。

「ほな、もう大丈夫？」
「少しずつですけど、自分は自分でいいんだって思うようにします」
悠輔がようやく落ち着いた笑顔を見せた。
「よーし！」
翔が嬉しそうに笑う。そして、耳打ちした。
「そんなこと気にするってことは、アレやろ。ちょっと好きな子とかできて、自分変えたいとか、思ったんやろ？」
「！」
悠輔の顔がたちまち真っ赤になる。
「へへーん！　図星！　ま！　それが誰かは知らんけど、自分やったら今のままでも十分女の子落とせるで！」
「落とせるって……」
「ほな！　気ぃつけて帰りや！　よかったら、また明日も来てくれてえぇし！」
「いえ……明日は学校にも部活にも行きます」
「ん！　了解！　じゃ、また！」
「ありがとうございました！」
「おーう！　ばいばーい！」
悠輔は翔の背中を見送り、その姿が見えなくなってから買ってもらった水を開ける。
「……おいしい」
美味い、とは言わずにおいしい、と言った。
これが自分だ。
自分は自分のままでいい。
「よし。がんばろう」
悠輔は拳を握りなおしてから、そっと歩き出した。

第４９５話　そのままの君でいい

「ただーいま」
翔は悠輔と分かれてから楽器を片付け、そうこうしているうちに帰宅時間が午後8時を過ぎてしまった。綾音は6時前に帰ってきていたので、友美子は少し心配しているようであった。
「おかえり。随分遅かったね？」
「うん。ちょっと知り合いに会って、話してたら盛り上がってしもて」
翔はカバンを置いて制服のネクタイを緩める。
「ん！　今日、オムレツ？」
「せやで。アンタ好きやろ？　早く顔洗っておいで」
「うん！」
いそいそと洗面所へ向かい、うがいと手洗いを済ませてから翔は再びリビングに入った。
すぐにいつもの位置に座り、箸を手に取るとご機嫌で「いただきまーす！」と言ってからオムレツを真っ先に頬張った。
「うんまぁ～！」
友美子がサラダを置いてから翔の真ん前に座る。
「おいしい？」
「うん！」
翔はしばらくサラダやらオムレツやらを食べる。不意に友美子が言った。
「翔」
「んー？」
「今度の土曜日と日曜日、部活は？」
「そりゃあるで。もう定演まで時間あらへんしな」

「ふーん……」
翔が食事の手を止めた。
「なんかあんの？」
「……演奏会の報告とか……その、西宮に……」
友美子が言いづらそうに小声でボソボソと言う。翔は箸を置いてニッコリ笑いながら言った。
「せやな！　にーちゃんやねーちゃん、父さん、母さんに言いに行かなアカンな、1回」
その翔の表情を見て友美子はホッと胸を撫で下ろす。
「どうすんの？　お母さんは、行ける？」
「もちろんやん。そのために予定空けてるんやから」
「オッケー。ほな、オレ明日先生に話して許可もろてくるわ。多分、大丈夫やと思う」
「うん。頼むわね」
翔は再び箸を持つと、食事を再開した。
食事を終えてから、少し食休みのために翔は自室へと戻った。それからすぐに陽乃へ電話を入れる。
「もしもし？」
「もしもし。あ、陽乃？」
「あぁ、翔。もう家なの？」
「うん！　ご飯食べてゆっくりしてるとこ」
翔はそれから悠輔の件を陽乃に話した。陽乃もかなり心配していたからである。なんとか元気を出してもらったことを説明すると、陽乃も随分安心したようだった。
それから、土曜日と日曜日の話をした。陽乃は最初、少し驚いていたがすぐに納得してくれた様子だった。部活に関しては拓真と陽乃で仕切るので、翔は気にせず言ってきて、という答えであった。
それを聞くと、安心することができるのはもう3年生で、副部長という自覚がしっかりと2人とも持っているからである。
「そういえば、土曜日と日曜日の練習内容、聞いてる？」

「土曜日は定演の曲のパート練習がメイン。最後の2時間で第1部の曲の試奏してみるの。日曜日は、留学生お別れ会の曲の練習と、マーチング」
「マーチングかぁ！　うわぁ～……それ遅れ取るのん痛いなぁ」
「まぁまぁ。それより、最近は翔も文化祭とかでいろいろあって疲れてるでしょ？　リフレッシュも兼ねて行っておいでよ」
「うん……せやな。ありがとう。そうするわ」
それからしばらく他愛のない話をし、陽乃との電話を終えた。
「……風呂入ろ！」
翔は携帯電話を置いてから、ウキウキ気分で階下に降りて行く。
「おか……」
すると、友美子と昭の声が聞こえてきた。
「せやけど、来年の3月くらいかなぁ。寂しなるわねぇ」
友美子は洗い場で食器をすすぎながら昭にそう言った。
「そうやなぁ。まぁ、翔も来年19歳、もう言うてる間に20歳。成人や。自立っていう意味では、えぇんちゃうか」
昭がお茶をすすりながら言う。
「せやけどねぇ……。曲がりなりにも、長男坊で育ててきたから、急に自分の目の行き届かんところに行ったら、なんかあるんちゃうか思って心配になるわ」
「それは母さんが心配しすぎとちゃうか」
昭が笑った。友美子が洗い物の手を止めて昭の向かいに座る。
「せやけど、心配なもんは心配よ。そりゃあ、陽乃ちゃんが一緒に行ってくれるやろうけど、島根大学って難しいやろ？　陽乃ちゃんがもしも、アカンかったりしたら」
「お？　なんや。母さんは翔が島根大学通る思ってんの？」
「そりゃあ自分の息子やもん！」
その言葉に翔は胸が締め付けられそうになった。そして、不意にいろんな考えが頭を巡った。
まず、島根大学に通っている間の食費などはなるべくバイトで稼

ごうと考えているが、やはり仕送りをしてもらわなければ生活が苦しいので、仕送りをしてもらう方向で調整がついていた。

帰省するのも夏休み、冬休み、春休みに限られてくる。後はせいぜい、ゴールデンウィークくらいのものだろう。なかなか帰省できず、親孝行なんてものからは程遠いような状態になる。

ひょっとして、自分は親不孝者ではないだろうか。

翔はふとそんなことを考えた。養子としてこの佐野家に迎えられた自分が、今までずっと友美子や昭たちに支えられ、育てられてきたにも関わらず、自分は何も恩返しができていない。

「……。」

そんなことを考えていると、急に胸が苦しくなり、切なくなり、言いようのない感情が一気に溢れてきた。

「……っく……」

「？」

友美子が顔を上げる。

「どしたんや」

「なんか……声が聞こえるんよ」

「声って……」

昭が後ろを見ると、綾音と智輝が楽しそうにテレビを見ている。冨美枝はその隣で雑誌を読んでいる。そして、他でもない友美子と昭はリビングでこうして話をしている。すなわち、残っているのは翔だけということになる。

友美子がリビングと廊下を繋ぐドアを開けると、翔が体育座りをして俯いているのだ。

「嫌やわぁ！　何やってんの、翔！　そんなとこで！　あんた、早くお風呂に……」

「……。」

そこで友美子は翔が泣いていることに気づいたのだ。

「ど、どないしたん？　翔？」

フルフルと首を振る翔。

「どうもないことないやろ。言うてみ？」
「ゴメン……なさい……」
友美子と昭は顔を合わせる。幸い、綾音たちは気づいていないので2人はそっと廊下に出た。
「ゴメンなさいて……あんた、何かしたん？」
翔はコクリとうなずいた。
「何したん？」
「……オレ、お父さんとお母さんに何も恩返しできてへんのに……島根大学行く言うたり、いろいろワガママ言うて……」
昭と友美子が驚いた顔をした。
「ゴメンなさい……」
友美子がそっと翔を抱き締める。
「何を言うてんの」
「……。」
「お父さんもね、お母さんもね、そりゃあ翔が島根行っちゃったら、寂しいよ。でもね、それ以上にあんたが吹奏楽やって、嬉しそうに笑って、楽しそうに楽器吹いて、時々勉強で悩んでしかめ面して、陽乃ちゃんとそりゃもう幸せそうに笑ってる。そんなあんたが、一番好きなんよ」
「……。」
昭が翔の頭を撫でた。
「子供が親に遠慮することなんてない。一番の親孝行は、お前が真っ当な人生を歩んで、幸せな人生を謳歌してくれること。それが一番やねんから」
「……。」
「親孝行なんて二の次でいいの。まずは、自分のことをしっかりやんなさい」
「……。」
翔がギュッと友美子の腕を握る。思いのほか、力が強くなっていたので友美子は驚かされた。

「返事は？」
「……ハイ」
翔は涙目で赤くなっている目を擦りながらようやく笑顔を浮かべた。

「……。」
午後１１時。佐野家はこの時間になると全員が寝静まる。翔は布団の中で月明かりに照らされ、ボンヤリと見える天井を見つめていた。
友美子と昭の笑顔が思い出される。
「ありがとう。オレ、何があっても頑張るから」
翔はそう言って目を閉じた。

第４９６話　予想以上の期待

１０月１２日（金）。翔は少し寝不足気味の顔をしながら、津上橋を歩いていた。今朝は事情があって男子４人は早めに集合することにしていたのだ。他でもない、その理由はリコーダーカルテットの最終合わせにある。

そうはいうものの、他にも理由はある。展示物などの片付けもあり、他の生徒も早めに登校する者がいる。翔たちのように部活に入っていれば、特に文化部であれば文化祭期間中はクラスの展示などの手伝いがなかなかできないという現状があった。なので、片づけくらいは手伝いたいと考えていたのだ。

「あ、翔。おはよ」

交差点を曲がったところで、春樹に会った。春樹も少し眠そうにしているが、彼の場合は昨日おとといの入試疲れだろうというのは察しできた。

「おはよーさん。昨日の学科試験はどないやった？」

「学科試験はそこそこできたと思う。後は……まぁ、来週の合格発表待ちだね……ふあ～ぁ……」

そう言ってすぐに春樹はアクビをした。少しは緊張しなければいけないのだが、いささか緊張感が欠けてしまう。

「オーッス」

拓真がすぐ後ろから小走りでやって来た。その表情はやはり少し眠そうだ。

「おはよ」

「おはよーさん」

「うわぁ……ふたりとも、顔すげぇ。眠いの？」

「眠いよ……。試験終わってしっかり寝たつもりだったけど……や

っぱ、俺ぶっつけ本番みたいな形だし」
春樹はまたアクビをする。
「翔は？」
「オレもなぁ。リコーダーのことが心配で、なかなか寝付けんかった」
「へー。春やんはともかく、翔も意外と繊細なんだ」
「意外は余計や、意外は」
3人はキョロキョロと辺りを見渡しながら、ひとり足りないことに気づく。
「慎也は？」
「わかんない。俺は来る途中まで会ってないけど」
「アイツも寝坊かなぁ……」
拓真と翔は顔を合わせて笑いながら靴箱に向かった。
「どないする？　荷物、音楽室に置いていく？」
「そうだな……それで、教室に行って片付け手伝って……部活の全員集合、9時だっけ？」
「うん」
翔たちは時計を見る。まだ午前7時半だ。時間には余裕がある。
「よっしゃ。1時間ちょいは片付けに参加できるし、行こか」
まずは音楽室の鍵をもらうために職員室に行き、恭一に会いに行く。
「失礼します」
「おっ。なんだ。3人遅れて登場か？」
翔たちが顔を合わせる。
「遅れて？」
恭一に聞いたとおり、音楽室へ行くと既に鍵が開いていた。防音扉を開けると、中からリコーダーの音色が聞こえてくる。
そっとドア越しに覗くと、アルトリコーダーを手にした慎也がいた。
「なんやアイツ……エラい張り切ってる」

ふと視線に気づいた慎也が驚いた様子で翔たちのほうを見た。
「な、なんだよ！　来てるなら来てるって言えよ！　ビックリするだろ」
「なんやねんなぁ、お前こそ。朝からコソコソしよって。どうせならオレらと一緒に練習すればええぇのに」
翔は笑って中に入り、慎也の肩に腕を載せた。
「そういうわけにもいかねーの」
「へぇ？　なんか理由あるんだ？」
「別にそんな大した理由じゃないけど」
それから慎也は事情を説明した。昨日、おとといのステージ発表では家族誰もが仕事や学校で当然ながら聴きに来ることはできなかった。しかし、父は夏期休暇の消化のために、母は仕事が休みのために、兄は午後から大学の講義が休講になったために、弟は病み上がりだが、家族揃って出かけるので置いてきぼりもかわいそうだ、ということでそれぞれ理由は違えど、今日の午後の音楽祭に来ることになったのだそうだ。
慎也の家は他の部員たちに比べ、家族がこれまで吹奏楽部の演奏を聴きに来るということは少なかった。それだけに、まさか急に家族全員が演奏を聴きに来ることになるとは慎也自身、予想していなかったのだ。
そのため、リコーダーで目立つ部分があるので失敗したくないという思いから今朝、こうして誰よりも早く来て練習していたのだ。
「お前らも、練習だろ？」
「うん。やけど、その前にクラス行って教室片付けようかって話してた」
「あー。そっか。俺たち、部活に忙しくてクラスのことほったらかしだもんな。俺も行かなきゃ」
慎也はそう言ってリコーダーを置いた。
「じゃ、鍵閉めて行こか」
男子４人はしばらく和気あいあいと話をした後、それぞれの教室

に戻った。春樹と拓真が教室に戻るなり、全員の視線がふたりに集中した。
「ん？」
「え……」
ふたりはあまりの異様さに驚いて後ろへ2、3歩退いてしまった。
「おっはよー！」
「水谷くん、入試お疲れ！」
「あ、ありがと」
男子3人が拓真に聞く。
「なぁ、本堂！　今日の吹奏楽部の演奏って、何すんの？　どういう系？」
「ど、どういう系って……。まぁ、いろいろだけど」
「そこを教えてほしいんだって」
「いやぁ……それは教えらんないかな。気になると思うけど、本番まで楽しみにしててよ」
拓真と春樹はなんとかクラスメイトの要求を交わしながら、その場を乗り切ることができた。しかし、クラスメイトたちの予想以上の期待や反応に、正直戸惑いを覚えているのも本音であった。
それは慎也や翔たちも同じであった。どんな演奏をするのか、どんな演出をするのか。昨日おとといでの演奏がかなり印象的であったのは間違いないことだった。
これまで、七海高校の生徒の前であれほど大々的な演奏をすることは少なかった。昨年の文化祭では吹奏楽部はまだ知名度がそれほど高かったわけではなかった上に、音楽祭もなかったので今年も同じ程度だろうと油断していたのだ。
しかし、今年は決定的に違うところがあった。それがテレビの放送だ。いくら神奈川県内のみとはいえ、その効果は絶大なものであった。次の日のクラスメイトたちの反応はただ事ではないことを感じさせるものだった。それ以来、吹奏楽部は校内でも注目の部活のひとつにまでなっていたのだ。

それはそれでもちろん嬉しいことなのだが、不安要素もあった。昨日おととといの演奏は、いわばポップス系が中心である。それに比べ、今日の姉妹校締結式典ではタンツィ、音楽祭ではモンタニャールの詩という具合に、難解でそれでいて長時間演奏する曲があるのだ。もちろん、音楽祭ではジャパグラの山口百恵メドレーとルパン3世を演奏するものの、タンツィとモンタニャールは一般の高校生には少々、内容が濃すぎるのではないか。翔たちの心配はそこにあったのだ。

（期待されるのは嬉しいけど……オレら、それにちゃんと答えられるんかなぁ）

ハァッと翔はため息を漏らす。もしも、今日の演奏がズッコけてしまえば、来月の定演にも響いてしまうのではないか。

そう考えるだけでゾッとする翔。だが、そんなことを考えていれば余計に萎縮して、それこそ中学生の頃のような失敗に結びついてしまう。

翔はブルブルと首を左右に振り、それまで考えていたことをすべて振り払った。

「大丈夫や！　自信持とう」

グッと拳を握り、気合いを入れなおしてから翔は再び片付けに集中するのだった。

第４９７話　『タンツィ～３つのロシア舞曲～』

「見てみ……めちゃ背ぇ高い」
翔が来賓席に座っている外国人の男性を見て言った。
「鼻も高いし」
拓真が目ざとく指摘する。
「外国人～って感じだね！」
美里もウキウキしているようであった。
いよいよ、姉妹校締結式典での演奏の場がやってきたのだ。部員たちでも２・３年生を中心に留学生３名と数名の１年生で今回、演奏することになった。曲が曲だけに、できるだけ経験者のみで構成したのだ。１年生では夏樹、綾音、裕也、貴志、かのこ、菘、雄飛が参加している。
「いよいよね。私、吹奏楽部がこういうクラシックみたいな曲の演奏をするの、初めて聞くから楽しみにしてるわ」
彩が優しく笑いながら言った。
「ビックリしたらあきませんよ？」
翔がニカッと笑って言う。
「了解。あ、時間ね。頑張って」
その頃、体育館の２階席では参加している生徒たちが座っていた。茉莉紗が「あ、入ってきたよ」と小声で言うと、部員たちの視線がそちらに集中した。当然ながら、演奏会とはまた違った雰囲気のある体育館。部員たちも一様に緊張しているようであった。
司会者が吹奏楽部の概要を説明する。通訳の人が、ロシア側の代表者にすぐさま曲や吹奏楽部の説明を通訳する。代表者の男女４名と生徒らしき男女６人が、興味深そうにうなずいた。
恭一が前に立ち、お辞儀をすると拍手が沸いた。それからすぐに

指揮台に上がり、部員たちを一瞥する。そして小さくうなずき、指揮棒を上げた。

バスクラリネット、バリトンサックス、弦バスとチューバの音色がズシンとした重量感ある音を奏でる。バックではティンパニの音も響く。その中で絵美、優輝、光瑠、みゆき、雄飛のクラリネットの音色が響いてきた。すぐにそれを翔、さゆり、麻綾、夏樹のサックスが引き継ぐ。それから雪子と順平のホルンがメロディを引き継ぐ。同じように沙希のハープもメロディを奏でた。

スウッ、と息を吸う音がすると同時に健之佑のイングリッシュホルンが響いてくる。フルートがそれに加わり、やがてメロディの音量も上がっていく。クラリネットなどが加わり、さらにあずさのグロッケン。

そして再び冒頭と同じ動きになり、今度は吹いている楽器すべてが同じ動きをして、音をクリアに伸ばす。およそ1年前に吹いた頃とはレベルが違う、より上質な演奏になっていた。

テンポが急に上がる。優の勇ましいタムタムが聞こえると同時に由美子、健之佑、梨子の高音木管楽器が煌びやかなメロディを吹き始めた。ユーフォニウムが後を追い、それを引き継ぐようにトランペットがミュートをつけてメロディを奏でる。優がグロッケンからシロフォンに移動し、ピッコロなどと同じ旋律を叩いている。

あずさのタンバリンがまさにダンスを想起させる。同じメロディが聞こえてくるが、今度はユーフォニウムの違う動きがスパイスになっている。めくるめく変わるメロディに、後輩たちは元より、昨日の演奏を聴いていた生徒たちもあまりに違う雰囲気に飲み込まれそうになっていた。あずさがクラッシュシンバル、洋之がベードラを叩き、1楽章でかなり盛り上がる部分に差し掛かった。調がマイナーからメジャーへと転調する。途端に静かになると拓真、智志、駿、誠、かのこの低音楽器が非常に細かい動きをサラリと吹きこなしてしまった。

この様子を見ていた1年生が、このままではいられないという気

持ちを掻きたてられていた。
　人数の少ないユーフォとホルンが低音の動きを引き継ぎ、それをさらにオーボエなどが受け継ぐ。そしてさらにテンポが上がっていく。木管が交替でメロディを奏で、途中からあずさのタンバリンが印象的に響く。また雰囲気が変わったと思えば今度は恵梨がトライアングルでタンバリンの伴奏を引き継いでいた。
　再びタンバリンが動き始め、次第にメロディの音階が上昇していく。再び転調したと同時に金管の華やかなファンファーレのような音色が響き渡った。そしてメロディが初めの部分に戻る。しかし、テンポはかなり上がっていた。次第にアッチェルしていき、全員で打ち込みを吹いて、１楽章が華やかに終わった。
　２楽章に入ると木管楽器やホルンが前半部分は中心になるので、金管楽器は前半が休みになる。慎也は一息つくために楽器を降ろし、しかし視線はまっすぐ恭一に注いでいた。その視線の先に、慎也は驚くべき人物を見つけてしまう。
（え……！？）
　わからないようにそっと目を擦り、凝らして見る。やはり、彼女だった。
　その彼女とは、永瀬　信二と中学か同じであった井岡　保美だった。なぜ突然、彼女がこの場に姿を現したのか、慎也にはまったく理解ができなかった。
（やべ！）
　雰囲気が変わり、次第にアッチェルしていく部分の手前、フェルマータの指示が出たので慎也は慌てて楽器を構える。すると、保美がクスッと笑っているのがハッキリと見て取れた。
　八分音符の伴奏を初めはトロンボーンが吹く。恵梨のタンバリンが印象的に響き、ホルンやユーフォニウムのメロディとしっかりトロンボーンが合わせていく。繰り返し部分になれば、チューバが加わるので少し安定した。
　速度が上がっていく曲に合わせて、保美は手で密かにポジション

を作っていた。懐かしい感覚が彼女には蘇ってきていた。
それだけではない。慎也の同級生や後輩たちの演奏を聴いていると無性に楽器が吹きたくなってきていたのだ。
3楽章が始まる。恵梨のタンバリンとあずさの鈴がクリスマスの雰囲気を思い出させるような音を立てていた。金管の重奏が響き渡り、それが木管に引き継がれる。そしてトランペットやユーフォのメロディと木管が交互にメロディを奏で、アルトサックスとホルンの上昇音系が高らかに鳴り響いた。
（いいなぁ……）
保美は中3のコンクールを思い出していた。風のうわさでは、信二は今も吹奏楽を続けていると聞いていた。それだけでなく、慎也も吹奏楽を始めたと聞いたときには感動すら覚えたものであった。
木管楽器の複雑なパッセージと金管のメロディが鳴り響く。そして突然曲がストップしたかと思わせるような雰囲気の後、ホルンの荘厳な音がゆっくりと重厚な雰囲気を醸し出した。そして、金管楽器の美しいアンサンブルが聴こえ、曲がいったん静まり返る。
フルートなどの楽器が再び鳴り始め、鈴やタンバリンも響く中テンポが上がっていく。そして、たくさんの楽器が加わり、曲が加速していく。それを感じ取るだけで、保美は鳥肌が立っていた。
とんでもないフルートやピッコロのトリルの後に、すべての楽器が素早い上昇音系を吹き、曲が一気に終わりを告げた。
恭一が指揮棒を降ろし、お辞儀をすると同時に拍手が沸いた。ロシアの人たちも何を喋っているのか翔たちにはわからなかったが、惜しみない拍手を送ってくれていた。もちろん言うまでもなく、それは保美も同じであった。
無事に演奏を終え、退場してから片づけを始める部員たち。体育館からゾロゾロと来賓の人たちが出てくるのを見かけた慎也はいても立ってもいられず、翔に少しだけ外に出ていいかと頼み込んだ。
翔はすんなりと「えぇで。どないしたん？　誰か知り合いおるん

？」と言った。
「中学の同級生いたから……」
「そっか！　そりゃ久々やもんな。えぇよ！　いってらっしゃい」
「ありがと！」
慎也はバタバタと階段を1段飛ばしで降りて、すぐに集団の後を追いかけた。そしてすぐに、彼女の姿を見つけたので声をかけた。
「井岡！」
その声に反応して彼女が振り返った。
「あ……」
なんで、というような表情を浮かべていた。
「井岡……だろ？」
彼女は小さくうなずいた。
「久しぶり」
「なんで……ここにいんだよ。今日平日だろ？」
「うん……。まぁ、大したわけじゃなくて。私、去年の夏休みにロシアに留学して。その留学先がたまたま、七海高校と今日姉妹校締結した、この学校だったから。その縁あってちょっと通訳で……」
慎也は目を丸くして言った。
「すっげぇ……何、それ」
「えへへ……」
お互い久しぶりなので、何を話していいかわからずモジモジしてしまう。保美からその沈黙を破った。
「川崎……楽器、吹いてたんだね」
「あぁ……。お前と同じ、トロンボーン」
「そっか。いつから？」
「高1」
「よく辞めずに続いてるね」
「俺はそれも自分で思う」
「やだ！」
クスクスと笑い合うふたり。

「井岡は？　学校で吹いてるのか？」
保美は首を左右に振った。
「え？」
「吹いてないの」
「なんで……」
慎也が悲しそうな顔をする。
「腱鞘炎が……その、ひどくて……」
腱鞘炎。それは奏者にとって痛手の病気であった。
「そんなの、安静にしてたら治るもんじゃ」
「そう思ってたけど……。私の場合、なかなか治らなくて。治ったかと思ったら再発して……。その繰り返しだから、とにかく高校行ってからは吹いてないの」
慎也はそれ以上、何も言えなくなってしまった。
「もー！　暗ーい！　何もさぁ、一生吹けなくなったわけじゃないんだし！　私、腱鞘炎治ったらまた吹くよ！」
「……。」
「だから、治ったらさ、どっかでまた一緒に吹けるといいね！　やったぁ、私、また楽しみができたじゃん」
そう言って保美は嬉しそうに笑った。本人が笑っているのだから、慎也が落ち込んでいるわけにもいかなかった。
「そうだな……。頑張ってお前、絶対治せよ！」
「もちろん！　楽しみにしててよね」
ふたりはようやく笑顔になった。
「そうだ」
慎也は思い出したように制服の胸の内ポケットに手を入れた。常に誰にでも渡せるようにとここに入れてあったのだ。
「これ」
そこには1枚のチケットがあった。
「何？」
「11月……23日に、中央ホールで俺たち、定演するんだ」

「すごぉい！　定演！？」
保美は嬉しそうにチケットを手にする。
「なんていうか……俺たち、そこで引退するんだ。もしよかったら……」
「絶対行くよ！」
「ホントか？」
「うん！　うわぁ～、ねぇ、川崎ソロとか吹くの？」
「まだそこまでわかんねぇけど……」
音楽室の窓から美里と陽乃が慎也と保美の様子を見ていた。
「ねぇ……親しげだけど大丈夫？」
陽乃が心配そうに美里に聞いた。
「だーいじょうぶ。私、あの子知ってるもん」
「そうなの？」
「さっき、井岡って呼んでたでしょ？　アイツ。多分、慎也が楽器吹くキッカケになったっていう人のひとりだと思う。確か、井岡さんって言ってた」
「へぇ～……」
美里は嬉しそうにふたりの様子を見ていた。きっと、彼女とその後輩である永瀬　信二がいなければ、慎也はトロンボーンを吹くことも吹奏楽部に入ることもなかっただろうと美里は思っていたのだ。
フワッと秋の風が美里と陽乃の頬を撫でた。
（あの子に感謝しなきゃね）
美里は笑いながら、下で懐かしそうに話をする慎也と保美を見つめるのだった。

第４９８話　『モンタニャールの詩』

『モンタニャールの詩』は、『プスタ～４つのジプシー舞曲』や午前中に演奏した『タンツィ～３つのロシア舞曲～』などで知られる作曲家、ヤン・ヴァン＝デル＝ロースト氏の作曲である。

氏の曲は教育的な作品が多い中、この『モンタニャールの詩』は実に幻想的な部分が多く出てくる曲である。この作品が初めて演奏されたのは１９９７年1月２６日のこと。イタリア北部にあるヴァル・ダオスト州都アオスタにある市民バンド「ヴァル・ダオスト吹奏楽団」による演奏が初演であった。その前年の１９９６年にこの曲は作曲されている。

そのモチーフはかつて、曲の舞台となっている上記の市民バンドがある地域を統治した女性の名前がつけられている一枚の歴史的絵画『カトリーン・ドゥ・シャラン』の気高き印象から得られたとされている。

翔たちは演奏前に恭一からこの曲についてしっかり学んだ上で演奏するように言われていた。楽譜はもちろん、参考音源をよく聴き、様々な解説なども読んでしっかりと曲を理解していった。

まず、モンタニャールという言葉の意味であった。モンブランという山脈があるが、響きは似ているものの、やはり何かが違うという印象を与えてしまう。翔や陽乃、拓真たちが調べ倒したところ、ようやくその意味は明確になった。フランス語で「山岳地方の人々」という意味だったのだ。

曲の解釈が進んでいっても、難題はまだまだ待ち受けていた。まず、その演奏する楽器の多さである。打楽器はバスドラム、スネア、ティンパニはもちろんのことタムタム、グロッケン、シロフォン、タンバリン、鈴、ボンゴ、サスペンドシンバルなど数を上げればキリがない。さらに特殊楽器も多かった。チェレスタ、ハープ、ウイ

ンドマシーン、特殊ではないがピアノやリコーダーまであるのだ。その担当をどうするか。

それだけではない。ソロの多さもあった。ホルン、ユーフォニウム、リコーダーなどソロ楽器も豊富。そして極めつけはその演奏時間で、なんと18分近くにも及ぶのだ。このような曲を長時間、聴衆に飽きさせずに聴かせるにはどうするか。何度も話し合いを重ね、そしていよいよ今日を迎えたのだ。

「よし」

翔が入場前に部員たちに言う。

「今日の、この音楽祭。定演のリハのようなもんやと思って、演奏に取り組んでください」

「はい！」

「モンタニャールは第一部、そんで、他のポップスは第三部と思って。どれも気を抜かず、そして」

笑顔で言った。

「自分が楽しみ、そしてお客さんを楽しませること。これを必ず意識して吹いてください」

「はい！」

「それでは！　行くでぇ、ナナコウ！」

「おーっ！」

照明が暗転し、前の団体が出ると同時に楽器の搬入が始まる。ウインドマシーン、ベードラ、スネア、ティンパニ。打楽器を中心にハープ、チェレスタ。一般の人々にしてみれば親しみのない楽器も多い。

「入ってきたな」

慎也の父が母・美土里に声をかけた。

「あの子の演奏なんて私も久しぶりだわ」

兄や弟も真剣な表情をしている慎也を見て「あいつ、あんな顔するんだ」と驚いていた。準備が整った合図を恭一がすると同時に、照明が灯った。そして、放送部の司会者が吹奏楽部の紹介をする。

恭一はフルート、オーボエ、クラリネット、バスーン、サックス、ホルン、パーカッション、トランペット、トロンボーン、ユーフォニウム、チューバの順番で全員を見て、大きくうなずいた。

「それでは、１曲目。ヤン・ヴァン＝デル＝ロースト作曲、『モンタニャールの詩』です」

恭一はすっと客席のほうを向き、深々とお辞儀をした。同時に盛大な拍手が沸く。七海高校の体育館はおよそ１，５００人を収容できるが、そのほとんどが埋まっている。

（聴かせどころやな）

翔はニッと笑い、恭一のほうを見た。

恭一が指揮棒を構え、スッと降ろした。初めに鳴り始めるのは、あずさのグロッケンと優のサスペンドシンバル、そして時たま聴こえる和志の銅鑼の音。その合間を縫うように流と彩香が吹くトランペットの音色が怪しげに飛んでくる。その下で冷涼な雰囲気を醸し出す由美子と稚沙希のフルートの音。

美土里は聴いているだけで既にドキドキしていた。沙希のハープが堅い音を体育館に響かせる。バスーンの音や、雄飛の吹いているコントラバスクラリネットの音がズシン、と音を響かせる。トランペットの音が再び聴こえたところで、沙希のハープと沙知の弾くピアノの音が冷たい雰囲気をさらに強くしていく。トランペットの音が聴こえ、そのうちに佳菜のピッコロが芯の通った音を吹き伸ばしていく。次第に楽器が増え始め、怪しげであるが荘厳な雰囲気が増して行く。チューバが加わり、恵梨の奏でるウインドマシーンの音が風の吹きぬける音を出した。

（冷静に……淡々と……）

稚沙希は由美子とふたりだけで演奏するこの部分が最も緊張していた。ただでさえ神経質な彼女は、この部分を特に注意していた。

恵梨のウインドマシーンが鳴り響くと、ホルンとトロンボーンが少し音を強めて雰囲気を変えた。何かが始まる予感。そんなことを感じさせる。

再び由美子と稚沙希の冷たいフルートの音色が聴こえ始める。ここは完全にふたりのソリである。稚沙希の緊張はマックスに達していたが、どこかで冷静な自分がいた。

（クールに。クールに）

稚沙希はその言葉を胸に、この部分を見事に吹ききった。

今度はホルンのメロディ。この曲で初めて、七海高校に入学以来賢治はファーストを担当することになった。それはすなわち、ソロが多いということを示していた。下では順平がしっかりとオクターヴ下の音を吹いてくれてはいるが、それでも上の音というのは賢治にとってプレッシャーであった。

（ここは、フルートと違って勇ましさがある感じで吹いたほうがいいよ。だから、曲のテンションがここで上がり始めるでしょ？　それと同時に、少しずつベルアップしようか）

雪子に言われたとおり、テンションが上がるに従って賢治は順平とタイミングを合わせながらベルを上げて行く。

そのテンションを上げるために重要なのは、晃のチャイムであった。

（一人しかいないんだから……失敗できない）

初めはそんな風に思い込んでいた彼であったが、そう考えると逆に緊張して上手く叩くことができなかった。それに悩んでいると、美里が言ったのだ。

「打楽器なんて叩いてナンボでしょ！　思い切らなきゃ！」

その言葉で晃の中で何かが弾けた。そして、外しても構わないのでしっかり叩き始めると、それまで何度も「聴こえない！」と恭一に怒鳴られていたのだが、それがピタリとなくなったのだ。

次第にテンポが上がり、曲が突然雰囲気を変えた。

（ここは俺たちの世界だ！）

愛実と春樹はここぞとばかりにフォルティシモで音を飛ばした。特徴的なユーフォニウムの裏メロディである。それを終えて再び盛り上がる部分で、今度はチューバが似たような動きをする。

（やべー！　何、低音楽しい！）

智志は今までこうした動きが出てくると嫌気が差していたが、最近ではこのような動きも楽しんで吹けるまでになっていた。

前半部分が最高潮に達する。木管の上下の音系にホルンの高らかな音が客席にまでまっすぐに飛ぶ。そして、裕也のボンゴや美里のタムタム、洋之のティンパニの音がしばらく繰り返され、直後に徹のバストロンボーンやチューバ３人の強烈な低音がズシリと響き渡った。そして、和志の銅鑼が激しく鳴り響き、再び洋之のティンパニが響いていく。しばらく音を伸ばした後だった。

健之佑とまゆのオーボエが響き渡った。何かを告げるような、そんな音色。隣同士のふたりは目を合わせ、恭一の指示どおりの感情を込めて演奏する。その動きが今度はアルトサックスへと引き継がれる。翔がしっかりと先頭に立ち、麻綾とさゆり、夏樹を引っ張っていく。

直後、洋之のティンパニの音が高らかに響き、それを覆うように美里のスネアドラムが重なる。ホルンの６人がベルアップをして、勇壮なメロディを奏でてすぐだった。トランペットの打ち込みの後にトロンボーンやチューバの低音が聴こえ、さらにホルンの遠吠えのような音が体育館を突き抜けていった。

その激しい音色を聴きながら、まゆが健之佑のほうを見る。健之佑はしっかりとうなずいた。

（大丈夫。君ならできる）

そういう視線だった。それは絵美から光瑠へ、はるかから茉莉紗へと送られる視線も同様であった。

３人のメロディが水の流れるような、軽やかで落ち着いたメロディを奏でる。それを支えるのは亮平と貴志の弦バス。少し雰囲気が変わるとクラリネットのメロディが聞こえ、今度は佳菜と慧太にメロディが引き継がれる。トランペットの打ち込みとティンパニ、トロンボーンの旋律が雰囲気をまた少し変えていく。チューバの激しい動きのあと、ティンパニの音が聴こえ、再びメロディはまゆ、光

瑠、茉莉紗の3人が奏でる。同じようにクラリネットの後に、佳菜と慧太。世代交代を思わせるメロディの担当であった。そしてトランペットの打ち込みが聞こえ、高らかに音を伸ばしていくと同時に、低音楽器の怪しげなハーモニーが聞こえる。

（ん？）

美土里はそのとき、気づいた。翔、慎也、春樹、拓真の4人が楽器を降ろしたことに。

（どこに行くのかしら……）

そして、恭一の真後ろに立ったときだった。

あずさのグロッケンが鳴り響き、そのまま優がタンバリンを奏でる。そして翔はソプラノリコーダーを、慎也はアルトリコーダーを、春樹はテナーリコーダーを、拓真はバスリコーダーを構えた。

「……。」

どこか民族的な音色が体育館をやさしく包み込んだ。笑顔で視線を合わせながら、4人は息の合ったリコーダーアンサンブルを軽やかに吹きこなす。途中で優がタンバリンでの伴奏を加えると、さらに涼やかな踊りの雰囲気が増した。そして、再現部になると亮平の弦バスの音色が加わった。

（綺麗……）

陽乃は自分が多少なりと指導に加わったものの、基本的に男子4人にこの部分は任せていた。果たしてそれでよかったのか心配になる部分もあったが、今の翔たちの表情を見ていればその答えは明確であった。

これで正解だったのだと。

リコーダーアンサンブルが終わると、裕也のタムタムが鳴り響いた。それと同時だった。「ブラボー！」

どこからともなく複数、そんな声が上がった。翔たちは視線を合わせとびきりの笑顔を浮かべ、手を繋いで深々とお辞儀をした。

拍手が沸く中、曲は先ほどのリコーダーアンサンブルを木管楽器が繋いでいく。クラリネットからサックス、そしてオーボエやピッ

コロ。木管楽器がメインだったメロディにグロッケンが加わり、やがてトランペットが少し形を変えて吹き始める。トロンボーンやホルンがそれを引き継ぎ、再び木管がメロディを吹く。

そして、裕也のタムタムと優のタンバリン、洋之のティンパニがリットをかけながら打ち込みを叩き、スウッと息を吸う音が聴こえ、中盤部分の最高点がやって来た。

金管楽器のトゥッティの動きと木管楽器の細やかな動き。そして全員で綺麗なハーモニーを吹き切った。

それが終わると、チャイムや銅鑼の音が響く中、重々しい雰囲気が増して行く。重々しく、怪しげな雰囲気が終わらない。サックスのアンサンブルではますます音が不気味さを醸しだして行く。雄飛のコントラバスクラがズシン……と響く中、その霧を晴らすように彼――春樹のユーフォニウムの音が聴こえてきた。それを邪魔しないように、恵梨のグロッケンなどの細やかな伴奏が雰囲気を強調する。佳菜は佳菜で、また独立するような伸ばしの音を吹いている。グロッケンとはまた違った硬質な音をチェレスタで出すのは菘だ。

その部分が終わると曲が突然雰囲気を変えて徐々に勢いを増して行く。トランペットがCの音を遠くまで飛ばしていく。落ち着いていくように見えたが、冒頭部分を思い出させる動きでチューバが再び複雑な動きをする。トランペットが高音の音を飛ばし、それをホルンが受け継ぐ。静まり返るが、トロンボーンの音が重厚さを残す。

絵美が憂鬱な雰囲気の音を奏で、フルートがそれを引き継ぐ。そして先ほどの春樹の動きを繰り返すが、どこか儚げな音を出しているのは賢治であった。ビヴラートを効かせた音はしっとりと体育館を包み込む。やがて、希望が差し込むようなハーモニーの後に、フルート、ホルンのメロディが流れる。トロンボーンの繊細な伸ばしの後、チャイムをきっかけにテンポが変わる。フルートから始まったメロディをクラリネット、そしてサックスが追いかけていく。

置いていかれないようにと言わんばかりに金管が加わり、突然曲のテンションが上がり始める。ちょうどリコーダーソリの前のよう

な雰囲気に戻ったが、明るさから言えば比べ物にならないほど、この部分のほうが明るかった。

ホルンのメロディがどこまでもクリアに響き、トランペットがそこに加わっていく。銅鑼の音の後に再び怪しげな雰囲気が戻り、トランペットが凄まじいメロディと高音をどこまでも飛ばしていく。打楽器や木管が高潮していき、ホルンの遠吠えのようなメロディの後だった。銅鑼が鳴り止んだと同時に、全員がトゥッティで音を吹き、最後に銅鑼などが盛大に鳴り響く。

そして、恭一がスッと指揮を止め、しばらくしてから降ろした。

「ブラボー！」

それと同時に盛大な拍手が沸く。恭一が深々とお辞儀をし、部員たちもその盛大な拍手などにつられるように、全員でお辞儀をした。

しばらく拍手が鳴り止まない。

「……。」

マーガレットが美里の横で涙を流していた。

「大丈夫？」

美里が聞くと、彼女は小さくうなずいた。

「ワタシ、この部入れて本当に嬉しい……」

「……うん。あたしも、マーガレットと演奏できて、嬉しいよ」

拍手を受けながら、美里とマーガレットはそっと手を繋いだ。

「……。」

翔は約1ヵ月後のことを考えていた。今でこの達成感なのだから、定演の最後の瞬間には、どのような気持ちでいるのだろうかと。

しかし、いくら想像してもまったく具体的には思い浮かばなかった。

（よっしゃ！　絶対……がんばる！）

翔はたくさんの拍手を受けながら、再び決意を固めるのだった。

第499話　For Everyone

音楽祭も終了し、これで今年の七海祭はすべての行事が完了した。吹奏楽部も残す行事は留学生お別れ会、高校総合文化祭、そして定期演奏会だけになる。

部員たちはまだ文化祭の余韻に浸っており、各々部室や音楽室で喋っている。しかし、ただそれだけで残っているわけではない。実は、翔からまだ大事な話があるので部員全員、残っているように指示されたのだ。

「ねぇ、本堂くん」

陽乃が拓真に話しかける。

「ん？」

「大事な話ってことだけど……何か聞いてる？」

「いや。俺は特に何も聞いてないんだ。朝倉さんは？」

「あたしも聞いてないの。だから、なんだろうってさっきから考えてて……」

「だよなぁ。俺も心当たりない」

しかも、当の翔はさっきから姿が見えない。一体どこで何をしているのか、部員の誰も知らない状態だった。

陽乃は携帯電話を取り出し、翔に掛けてみるがしばらくすると留守番サービスに繋がれてしまい、連絡が取れないままだ。

日も傾き始めた頃になって、ようやく翔が重い防音扉を開けて姿を見せた。

「ちょっとぉ！　どこ行ってたの!?　みんな待ちくたびれちゃってるんだから！」

「ゴメン、ゴメン！　ちょっと手こずったことあって……大丈夫。ここまで来たらもう後は早いから」

そう言って部室に入る翔。やや大きめの紙袋が彼の右手には握られていた。
「ゴメーン！　遅くなった。悪いけど全員部室集合！」
「はい！」
音楽室で話し込んでいた部員たちもバタバタと部室に駆け込んでくる。
「じゃあ、パートごとに点呼してください」
ザワザワとする中、パートリーダーの3年生たちが点呼を取る。
全パートが確認できてから、翔が話し始めた。
「えー、文化祭と音楽祭、お疲れ様でした！」
「お疲れ様でした！」
「残るは留学生お別れ会、高校総合文化祭、そしてオレたちの目玉行事の定期演奏会となっています。特に、これからは定期演奏会に向けて集中的に練習していかんとアカンようになります。皆さん、体調には十分気をつけて、遅れを取らないように練習に励んでください」
「はい！」
「では、本来ならここで解散と行きたいのですが」
翔がそこで先ほど持ってきた紙袋を持ち出してきた。
「実は、ここで」
翔がとびきりの笑顔で言った。
「オレから部員みんなに、手紙があります」
「手紙……？」
さゆりが驚いてポカンとしている。智志が手を上げて「全員にですか！？」と聞く。
「全員です！」
翔はニッと笑って余裕の表情で答える。
「留学生も、1年生も2年生も、もちろん3年生にも書いてまーす」
「いつの間にそんなこと……」
春樹が驚いていた。それは他の部員たちも同意見であった。人一

倍練習熱心で、最近はいつも部室を最後に出る翔に、６２人に手紙を書く時間が一体どこにあったのか。それが不思議で仕方がなかった。

「へへへ～！　ビックリしたでしょ？　とりあえず、今から配らせてもらいます。みんなで部活するのももうあと少し。部長として、これからの定期演奏会に向けて、みんな一人ひとりに言葉をかけたいと思ったので、勝手ながらこういうこと、させてもらいました。よかったら受け取って、ほんで家帰ってから読んでください」

「ここで読んじゃダメなんですかー！？」

はるかがワクワクした様子で聞く。

「ここではアカン！　オレが恥ずかしいから！」

ブーイングが一部から飛んできたが、翔はスルーしておいた。

「それでは……まず、留学生の皆さんから配ります。まず、マーガレット」

「Ｈｉ！」

マーガレットは一番に呼ばれ、ますますご機嫌で翔のほうへ駆け寄っていく。

「はい！　どうぞ！」

「Ｔｈａｎｋ　Ｙｏｕ！」

そういうとマーガレットは突然、翔の頬にキスをした。

「きゃー！」

「ちょ、ちょっとマーガレット！」

さすがの陽乃も大声を上げてしまう。沙希が「落ち着いて、陽ちゃん。外国じゃキスも挨拶のうちなの」となんとか陽乃を宥めた。

「で、では続いて、パク・ソンス」

「ハイ！」

「春やんがおらん文化祭で、かとちゃんと協力してユーフォ支えてくれて、ありがとう」

「どういたしまして」

片言の日本語がいつの間にかスムーズに話せるようになっていた。

「崔　裕時」
「はい！」
「経験者として、人数が多いパートでも常に練習熱心で、みんなの尊敬集めてるね！」
「えへへ……」
裕時は恥ずかしそうにはにかんでいる。
その様子を見ていて、なんだか少し早い卒業式のようだと陽乃は感じていた。それをかのこが「なんか卒業式みたーい！」と笑いながら言う。
「おっ！　鋭いなぁ！　でもまぁ、あながち間違いではないな！　あと1ヶ月もしたらオレら吹奏楽部引退やから、今のうちから心づもりしといてもら」
「キャーもーそういうの嫌―！」
はるかが翔の言葉を遮るように叫ぶと同時に笑いが起きた。
「まぁまぁ、そう言わずに気楽に手紙、受け取って！　ほな、次はフルートパートから順番に行きます！　安藤稚沙希！」
それから佳菜、沙希、由美子が呼ばれる。続いてオーボエの健之佑、まゆ。そしてバスーンの誠、慧太。それからクラリネットへ移り、まずは絵美。続いて2年生の優輝、みゆき、光瑠。1年生は雄飛、騎士、麻衣子、なぎさ、歩由美。アルトクラリネットの菘。バスクラリネットの駿。
「続いてサックスパート！　中野さゆり！」
「はーい！」
さゆりが意気揚々と翔のほうへ駆け寄り、手紙を受け取る。それから麻綾、夏樹が受け取り、半分泣き顔ではるかが受け取る。それから茉莉紗、かのこ、友美が受け取った。
「続いてはトランペット！　朝倉　陽乃！」
「しゃあなしだからね！」
「ツンデレか！」
笑いながら陽乃は手紙を受け取る。そのときに翔がコソッと言っ

た。
「明日から2日間、悪いけど頼むわな」
「任せといて」
続いて勇、彩香、綾音（かなり嫌々であった）、流、美咲が受け取る。それからホルンに移り雪子、順平、裕子、賢治、周磨、杏が受け取る。その後にトロンボーンの慎也、亜紀、徹、沙知、雛乃が受け取った。
やがてユーフォニウムの春樹、愛実が受け取り、その後に拓真、智志、好美、亮平、貴志と続く。最後に美里、洋之、優、恵梨、あずさ、晃、裕也、和志が受け取って全員に手紙が行き渡った。
「全員に行き渡りましたかー？」
「はーい！」
嬉しそうに答える部員たち。
「ちょうど……もう2年半前になるんかな。オレが勢いで副部長の朝倉さんに吹奏楽に興味ないか？と聞いたところから、この部活が始まりました。その後、永井さんが来てくれて、大谷さんが入り、本堂くんが来て、水谷くんが来て、大谷さんに惹かれるように宮部さんが来ました。そして後を追うように橋本さん、川崎くん、田中さんが来ました。気づけば１０人という少ない人数ながら、吹奏楽として一応演奏は成立する人数が揃っていました。ホンマに、オレのノリと勢いで始まったこの部活が、2年ちょいでこうして定演を開催できる人数、レベルにまでなったことは素直に嬉しく思います」
「……。」
翔の本音を、全員が黙って聞いている。
「実はオレ、明日から2日間、ちょっと部活を休ませてもらいます」
「……。」
「でも、オレがおらんでもきっとみんななら大丈夫やと思います。帰ってきたら定演の曲、ちょいとは通しできるくらいになっててほしいなー！」
「……。」

「返事はー！？」
「はい！」
「それでは、明日から2日間、よろしくお願いします！」
翔は涼やかな顔でそう言い終えると、最後に深々とお辞儀をした。
陽乃は男の子らしい、ちょっと荒っぽい書き方をされた宛名を見て、もう一度翔の顔を見た。
陽乃の視線に気づき、翔はニカッと笑った。その表情に少しだけキュンとしながら、陽乃は書かれた内容に胸を膨らませるのだった。

第５００話　是非、来てください

「おぉ～……久しぶりやな！」

翔はＪＲ大阪駅の大阪環状線ホームに立つなり、感慨深そうに声を上げた。翔はいま、南大阪の祖父母・大中道雄と房枝の家に向かうためにこのホームに立っている。南大阪の二人の家までは大阪環状線の内回りに乗り、天王寺駅で近鉄南大阪線に乗り換える。そして、南大阪駅で降りてからさらにバスで１０分ほど行くと、二人の家はある。

朝９時の新幹線で七海を出発し、正午前に新大阪駅に到着。南大阪へは午後１時すぎに到着予定である。今日はひとまず二人の家で過ごし、明日は母方の祖父母の家がある兵庫県神戸市東灘区を訪問する予定である。もちろん、そこへ行く前に大中家のお墓がある西宮市内の墓地へも行く予定にしている。

環状線に乗ってから、翔はキョロキョロとあたりの風景を見渡す。行きたいところはもちろんたくさんある。心斎橋、難波、通天閣に大阪城。梅田ももっとゆっくり回りたいところではあるが、本来の目的から逸れるために今日は景色だけを楽しむことにしていた。

翔が３年間七海市で過ごしてきて、やはり関東の生活に馴染んできていると感じたことがあった。もちろん関西弁は完全に染み付いていてほとんど影響を受けなかったのだが、エスカレーターを乗る際に翔はうっかり左側に立ってしまった。関西では右側に立ち、左側を空けるのが慣習になっているのだ。なぜそのようなことになったのか経緯は諸説あるが、とにかく関東では左側に立ち、右側を空ける慣習がある。

慌てて右側に立ちなおし、近鉄のホームへと向かう。翔が小さい頃から好きだったのはＪＲのカラフルな電車と近鉄だった。しかし、

しばらく見ない間に近鉄でも知らない新型車両ができている。南大阪駅は各駅停車しか停まらないため、今日は特急に乗れないのだが、特急も新型車両ができているので彼の好奇心をかなり動かした。

その好奇心を押さえ、各駅停車に揺られること２５分。ようやく南大阪に到着した。元々、兵庫県西宮市に住んでいた二人であるが、震災後に南大阪に越してきたのだそうだ。もちろん、翔がそこへ引き取られたことを知らずにである。

「なつかしー！　うわぁ、変わらんなぁ！」

翔はホームに降り立つなり声を上げた。どこもかしこも、このあたりの風景は変わっていないのである。

バタバタと走りながら改札を出る。南口のロータリーは相変わらずで、そこを出て右手には一口ポストがある。そのポストの横には昔ながらの駄菓子屋がある。しかし、ちょっと変わっているのはその反対側。コンビニができていた。それでも駄菓子屋は相変わらずの風情を出している。

バス停に停まっているバスに乗車し、翔は時計を見た。時刻は１２時５０分。バスの発車はあと５分ほどなので、ほぼ予定どおりの時刻に到着しそうであった。

発車間際になって高校生であろうか、４人ほどの制服姿の男女が翔の乗るバスに向かって走ってきていた。

「待ってー！　そのバス待ってー！」

息を切らしながらバスに滑り込む彼ら。なんとかバスに間に合い安堵しているようである。

「しっかしなぁ！　今日の練習、なんでよりによって箕輪台ホールやねん。学校でもできるのに」

男子が恨めしそうに言う。ホールという言葉を聞いて翔がそちらを見ると、男子の背にはユーフォニウムが背負われていた。

「やっぱり響きがちゃうんやって！　あのホール、この辺では珍しく音響がいいし」

音響というような言葉を使うのはやはり、音楽関係か放送関係な

ど、音に関わることをしている者でなければ出ない言葉である。音響と言った少女の手にはクラリネットらしきケースが握られていた。
ふと少年が翔のほうを見た。
「……。」
翔も思わず彼を見つめてしまう。そして、同時に言った。
「翔？」
「大輔？」
その声に少女も振り返る。
「川島？」
「佐野くん？」
そして同時に3人が大声を上げた。
「うわー！　偶然～！　えっ、ていうかなんで翔お前、大阪(こっち)におんねん！」
「ちょっと用事あって1泊2日で来てるねん！　うわぁ、マジでかぁ！」
嬉しそうに戯れる翔、大輔、海里の3人を残る二人の男女が訝しげに見ている。大輔がそれに気づき、すぐに翔の紹介をした。それに納得した二人が挨拶をする。
「初めまして！　大輔と川島さんと同じ吹奏楽部3年の、山崎(やまざき)　大河(たい)(が)です！　楽器はパーカスやってます！）
大輔に負けず劣らず賑やかな男子のようで、翔もすぐに気が合いそうなタイプであった。一方の女子のほうはかなりおとなしいのか、あまり表情を変えなかった。
「ほら、宮代も」
そう言われて少女がようやく前に出た。
「同じく三人と同じ吹奏楽部で、フルート吹いてます宮代(みやしろ)　奈那(なな)です……」
「よろしくお願いします！」
翔は二人にもにこやかに挨拶をする。
「それにしてもやなぁ。ホンマ偶然ってスゴいで。なぁなぁ、二人

とも！」
　大輔が奈那と大河に言う。
「雪子なぁ、この翔が転校した七海の七海高校出身やねん！」
「え！　マジで！？　そんなことあるん！？」
　大河が面白いほどに期待どおりの反応をするので翔は思わず笑ってしまった。
「ホンマに！　なっ、翔」
　翔はうなずく。
「せやけど、その後まさかお前とお付き合いするとは思ってなかったけども」
　そこで大笑いが起きた。
「せやけどウチの高校、ホンマなんていうか、特殊やなぁ。神奈川出身やろ、永井ちゃん。ほいで、宮代さんは福井県出身やねん。お父さんの都合で兵庫県、滋賀県と来て今は大阪。ほいで、他にも岡山とか奈良出身のヤツ結構おるねん。出身地がみんなバラバラや。こんだけバラバラなんも珍しいでな！」
　大輔は相変わらず間髪いれずにずっと話をしている。どれだけ大きくなっても基本は変わらないのが翔には嬉しかった。
「佐野くんも、こっち出身なん？」
「うん！　初めは兵庫県の西宮おって。ほんで……まぁ、いろいろあって震災の後に南大阪来て、ほんでさらにオトンの転勤で神奈川行ってん！」
　いきなり養子の話などを初対面の人もいる中でする必要もないと思い、翔は思い切り端折って説明をした。すると、奈那がさらに食いついてきた。
「西宮のどのあたりだったの？」
「え？」
「私も……兵庫県にいた頃、西宮に住んでたから」
　翔はその言葉に一気に親近感を覚えた。
「へー！　仁川、仁川のほう！」

「そうなんだ……」
「宮代さんは!?」
「私は夙川のほう」
「そうかぁ。ちょっと離れてるねんな!」
そんなこんなで話をしている間に、翔が降りるバス停に到着した。
「あ、降りんとアカンわ」
「そうかぁ……。残念」
大輔があからさまに落ち込む。
「まぁまぁ! なぁ、大輔たちの定演はいつ?」
「俺たちは3日の文化の日。そこで引退」
「そっかぁ! お互いガンバロな!」
「うん! ほな、またな!」
「またな!」
バスを下車しても、大輔たちの姿が見えなくなるまで翔は手を振り続けた。
彼らの姿が見えなくなってから、翔は地図を頼りに道雄たちの家に向かって歩いていく。徒歩5分ほどで家に到着した。
インターフォンを押すと、房枝の声がした。
「こんにちは! 翔です!」
「あらあら! お父さん、お父さーん!」
しばらくすると、道雄と房枝が嬉しそうに玄関の戸を開けた。
「いらっしゃい!」
「やっほー! 来ちゃった!」
「早く中に入りなさい! さぁさぁ」
「お邪魔しまーす」
翔がウキウキ気分で家の中に入る。それからお茶とお菓子を食べ、落ち着いてから翔は二人に11月の定期演奏会の案内をした。
「もちろん、母さんのおじいちゃん、おばあちゃんにも案内するよ。行ってから。皆に来てほしいねん! マジでオレら頑張ってるから!」

気合を入れて説明する翔に、道雄と房枝は嬉しそうにうなずきながら「せやねぇ。翔が頑張ってるとこ、観たいねぇ」と目を細める。
「ほな、来てくれる!?」
「もちろんやないの。ね、お父さん」
「あぁ」
「よっしゃー！　ほな、オレもっと頑張る！　約束やで！」
翔は嬉しそうにカバンからチラシと整理券を渡す。房枝たちもそれを嬉しそうに手に取った。
「難しそうな曲もするんやねぇ」
「うん。やから正直ヤバいけど、マジ気合い入れて頑張るから！　あっ、ソロもあるねん、ソロ！」
「ホンマにぃ！　そりゃもっと楽しみやわぁ」
房枝は目を輝かせて「東京行くのも久しぶりやから、オシャレせなアカンねぇ」と笑う。
「せや！　なぁなぁ、お仏壇どこにある？　とりあえずの報告ってことで、お父さんやお母さん、兄ちゃんに姉ちゃんにも伝えときたい」
「和室にあるよ。ついておいで」
房枝の後について翔は和室に案内された。
「ほら」
「ありがとう！」
翔はすぐに仏壇の前に座り、鈴(りん)を鳴らしてから両手を合わせた。
「……。」
しばらく両手を合わせ、翔は祈りを込める。
「よし」
翔が晴れやかな表情で目を開ける。
「済んだ？」
「うん！」
「ほな、もうちょっといろいろあっちで話聴かせて」
「うん！」

房枝と翔は笑顔で並んで廊下を歩いてリビングへと向かって行った。

その頃、七海高校の教室では沙希と由美子が頭を抱えていた。

「ねぇ、ちょっと二人とも。いつまでもそんなことしてちゃあ、話進まないよ？」

沙希が困惑した声を上げる。しかし、二人はそっぽを向いたままだ。

「そうだよ。気持ちはわからないでもないけど、でも絶対どっちかが吹かなきゃいけないんだから」

「……。」

しかし、二人とも顔を合わせようとしない。予想外の衝突に健之佑や佳菜、1年生たちも困り果てていた。

その二人とは、バスーンの誠と慧太であった。

第５０１話　バスーン吹きの本音

誠と慧太が吹いているバスーンという楽器。オーケストラでは必ず用いられる楽器なのだ。しかし実は吹奏楽においては同じ音域のテナーサックス、ユーフォニウムがあること、それらの楽器に比べ音量が小さいこと、バスクラやバリサクのように類似楽器がないため指導者が少ないこと、何より楽器自体が高価であることなど様々な要因が重なり合い、中学や高校の吹奏楽部では比較的大きなバンドでも楽器すら所有していないところがあるいうな楽器なのだ。

けれどもかつて全国大会に出場したことのある七海高校においては、バスーンが３本もあったのだ。他にも特殊楽器は数多く揃っており、楽器に関しては苦労をしない。だが、前述のとおり指導者がそれほど多くないのが実情なのだ。

誠も慧太を指導するのには苦労した。中学時代、やはり指導者がおらず、本やインターネットを駆使して独学で調べ、いろいろと苦労を重ねながらここまで上達してきたのだ。高校生にもなれば多かれ少なかれ、それなりのプライドというものも持ち合わせている。それは慧太にも言えることであった。高校の途中から始めたこともあり、誠のレベルの高さに劣等感を抱いたこともあったが、ほぼ同じタイミングで始めた智志や、３年生のほぼ全員が初心者であったということを知り、どれだけ苦労をしてでも上達してみせると誓い、ここまでやってきたのだ。

そのバスーンという楽器。その貴重さから吹奏楽ではソロを任される部分というのが多い。そもそも、音色が非常に特徴的でＣＭ、ドラマ、アニメなどジャンルを問わずＢＧＭや伴奏として出てくることが多々あるのだ。

そして今回、定期演奏会の第１部で演奏するその曲にも、冒頭に

バスーンのソロがあるのだ。それに関して慧太と誠が衝突しているのである。

それは何気ない沙希の一言であった。

「ここのソロはどっちが吹くの？」

顔を合わせる誠と慧太。誠は経験などから考えると自分がするほうが妥当だと考えていた。

「一応……俺かな、と」

「え」

それに慧太がすぐに反応した。

「そうなの？」

「え……」

誠が逆に驚いた様子を見せる。

「ちょっと待ってよ。俺だって……吹きたい」

慧太が初めて自分の意志を表に出した瞬間だった。しかし、誠が即座に反論する。

「まぁ、待てよ。気持ちはわかるけど……今回、ソロっていうかまぁ、ソリだけど……ココの部分、俺らともう1本しか楽器ないぜ？結構プレッシャーだと思うし、大事だと思うから……」

その言葉に慧太が嫌悪感を剥き出しにした。その表情に隣にいたまゆが困惑している。慧太のそんな表情を見るのはまゆはもちろん、沙希たちも初めてであった。

「何、それ。じゃあまこっちゃん、俺がそういうのできないって思ってるわけ？」

「何もそういう言い方してないじゃん」

「けど、俺にはそういう風に聞こえた」

「それなら謝るけど……」

誠も困惑している。慧太がここまで必死に何かをしようとしているのは初めてであった。なので、誠もできるだけのことはしようと思い、その意志を口にしようとした時だった。

「別にいいじゃん。まこっちゃん、文化祭でＢｅｙｏｎｄ　ｔｈｅ

Ｓｕｎｓｅｔのソロやって目立ったんだから、今回は目立たなくなって。案外目立ちたがりなんだ」

その言葉に今度は誠が嫌悪感を露わにする。

「なんだよ、その言い方」

「別に。本音言っただけだし」

「……言わせてもらうけど、俺結構今年苦労させられたんだよね。お前が入ってからさ」

「……。」

少し意地悪な口調であった。普段はそんなことを言わない誠であったが、言いたいことが溢れ出してきて止まらなくなったという感じがしていた。その雰囲気を察知して、由美子も沙希も止めようとする。

「ちょっと。やめなさいよ。そういう挑発的な言い方しちゃダメ」

「そうよ。とにかく落ち着いて。そうだ、それならまたコンクールじゃないけど、オーディションみたいな形でどっちがいいかを決めてもいいし」

「それじゃ絶対まこっちゃんじゃないですか！」

沙希のオーディションと言う言葉に慧太が異常に反応した。

「落ち着けよ、けーた。とにかくさ、一回話し合ってみなきゃわかんねぇだろ？　それに仮にオーディションになったって、今のお前なら大丈夫だって」

「んだよ！」

慧太が健之佑を突き飛ばした。予想外の展開に健之佑は反応できず、よろけて尻餅をついてしまう。佳菜とまゆが慌てて健之佑の傍に駆け寄る。

「ちょっと！　やめて！」

由美子が慧太の肩を掴む。

「放してください！」

慧太は乱暴に由美子の手を振り払った。そのままそっぽを向いて、誠はおろか、由美子たちのことも見ようとしない。

「なんで……急にそんなこと、言い出したの？」
佳菜がそっと聞いた。
「……。」
しかし、慧太は何も答えない。
「ねぇ、言ってくれなきゃわかんないよ」
「……いし」
「え？」
「まこっちゃんばっか目立って、ズルいし」
「……。」
慧太の本音が沸々と出始めた。
「いいよね。健之佑は上手いからソロ任されるし。歌川さんは来年に備えてソロの練習兼ねて吹かせてもらえるし。安藤さんだってそうだし、井上さんは元々ピッコロで目立つし。宮部先輩と大谷先輩だって3年生でソロたくさんあるし。まこっちゃんなんか、当然のようにソロ任されてるし」
「……。」
事実であったので誰も反論できないままであった。
「別に俺、ソロが欲しいとかそういうわけじゃないけど。でもさ、一緒に頑張ってるのになんか空しいし……」
誠がそっと声をかけた。
「でもさ、何もソロを吹くのがいいってわけじゃないじゃん」
「ソロ吹くこと多いヤツにそんなこと言われたくない！」
慧太の大声に全員が目を丸くした。
「クラスのヤツになんて言われたか教えてやろうか？　あのパートで目立ってないの、お前だけじゃんって言われたし！　家でも慧太地味だから、しょうがないんじゃないとか言われるし！　なんなんだよ、俺だって頑張ってるのに！　頑張ってるのに、頑張ってるイコールソロで目立つとか、そういうわけ？」
「そんなこと……」
「もういい！」

慧太はそれだけ言うと立ち上がって教室の入口のほうへ向かう。
「もうやってらんない！　どんだけ頑張ったって、全然みんな評価してくれないじゃん！」
その目には涙が溜まっていた。握られている拳が震えている。そして、誰もが恐れていた言葉が彼の口から発された。
「辞める！」
その言葉を直接聞かされただけで、沙希と由美子に鳥肌が立った。
「もう辞める！　やってらんない！」
「待って！　志賀くん、待って！」
勢いよく飛び出した慧太を慌てて由美子が追う。健之佑と佳菜も慌てて後を追った。
「……。」
ペタリと誠がその場に座り込んだ。沙希がすぐ傍に駆け寄る。
「大丈夫？」
「……知らなかったんです」
「え？」
誠が小さく震えていた。
「けーた、いつも俺にいろいろ聞いてくれるし、上手いって言ってくれるし……。いつもなんか、控えめだし。だから、俺が引っ張ってやんなきゃって思ってたのに……俺、間違ってたのかな……」
沙希はそこで気づいた。誠は誠なりに考えての発言だったのだと。慧太にあまりプレッシャーを与えすぎず、なるべくスムーズに上達させようと。そのためにはいきなりソロなどを任せすぎずにしようと考えていたのだろうと。しかし、それは慧太にとってかえって逆効果だったのだ。
「間違ってないよ。戸口くんのやり方は全然間違ってない」
その言葉を聞いて、誠はようやく嬉しそうに笑った。
その頃、階段を駆け下りてきた慧太は部室へ行く途中の菘と思い切りぶつかっていた。
「きゃ！」

「！」
お互いに尻餅をつく二人。
「あ、先輩。どうされたんですか……？」
そこで菘は慧太の目に溜まった涙に気づいた。すぐに袖で涙を拭い、慧太はその場を走り去っていく。直後、菘に気づかずに由美子と健之佑、佳菜が走っていった。
「なんなのよぉ」
菘は置いてきぼりになり、尻餅をついたままそう呟くのだった。

第５０２話　簡単に言われたくない

慧太が部活を辞めると言って飛び出したその日の夜。菘はその事実を知って動揺してしまい、落ち着かないので信頼できる友人に電話で話をしていた。

「えー！？　辞めるって、この時期に！？」

電話口の向こうで驚きの声を上げたのは島根県桜田市に住む菘の友人・東　茜であった。

「そうなの……。先輩同士で派手にケンカしちゃったみたいで」

「原因は？」

菘は原因を簡単に説明した。初心者で始めた同期のことを思う誠と、それに劣等感を抱いていた慧太。それぞれの思いの行き違いが最たる原因であった。

「あちゃあ～……。でもそうよね。その志賀先輩だっけ？　その人の気持ち……あぁ、うん。簡単にこんなこと言われたくないだろうけど、わかる……かなぁ」

菘は電話口の向こうで真剣に悩む茜の表情を思い浮かべる。他人（ひと）のことも自分のことのように真剣に考える。それが彼女、東　茜。

「けどさぁ。１年生でパートも違う私が、その先輩になんか頑張ってとか、そんなの言うのもおかしいよねぇ」

菘はハァッとため息を漏らした。茜が聞く。

「どうなの？　他に接点、何かないの？」

「他に接点……。なくはないけど」

菘と慧太は同じ大海中学校出身。校区が同じなので、もちろん家も近い。それどころか、入部後に知ったのだが、菘の家と慧太の家は斜向（はす）かい。菘の部屋の窓を開ければ、慧太の部屋の窓が見える。

もちろん、カーテンをしているので中が丸見えということはないが。

「どんな接点？」
「家が近い」
「……それだけ？」
茜が間を開けて聞き返す。
「それだけ……」
「微妙……」
正直な反応だったが、菘もそう思っていた。
「部活が一緒だったわけでもないし、クラスなんてもちろん学年違うから一緒になるわけないし。そもそも、家が近所だったってことも入部後に知ったくらいだし……」
「うーん……」
茜も黙り込んでしまった。しばらくすると、彼女のほうから最もなことを聞き返してきた。
「ねぇ」
「何？」
「なんでスズは、その先輩のことそんなに気にするの？　ぶつかったから？」
「え！？」
的を射た質問に、菘は黙り込んでしまう。その様子に電話なので表情も見えないはずの茜が鋭く指摘した。
「ハハーン……さては菘、志賀先輩のことがアレだね？」
「ん……」
真っ赤になってしまう菘。茜が「キャハハハ！　私、鋭―い！」と明るく言った。
「もう！　それじゃあ接点とか理由とか関係ないじゃん！　言っちゃいなよ」
「何を？」
「何をって……私、志賀先輩のことが好きなんで辞められたら困るって」
「う、うーん……それ、どうなんだろう？　なんか、部活辞めない

でって言うのにはちょっと変じゃない？」
「そーお？　あ、じゃあ原点に帰ろう。なんでスズは志賀先輩を好きになったの？」
「えっ！　そこまで聞いちゃう？」
「じゃなきゃ、理由が思い浮かばないじゃない」
　萩はしばらく思い返してみる。そして、思い出したのだ。初めて綺麗な音が出たときの彼の嬉しそうな表情を。
「表情」
「表情？」
「うん」
　萩はハッキリと思い出した。思い出すと同時に、胸が高鳴り始める。その表情に胸がときめいたことを思い出し、心臓の鼓動が速くなっていた。
「先輩の、あの音が出たときの笑顔……。私、いろんな人の笑顔見てきたけど、あんなに嬉しそうな綺麗な笑顔、見たことないから」
「へぇ～！　でもあれだね、恋愛音痴な萩を動かすくらいの人なんだから、よっぽどだね。あぁ、会ってみたいなぁ」
　茜が羨ましそうにそう言う。
「ねぇ、茜は……あぁ、無理かなぁ。ウチの定演」
「行きたいんだけどさぁ。お母さんがやっぱりダメだって。そりゃそうよね。島根と神奈川じゃ距離ありすぎるし……」
「一応、ご案内の葉書は送ってるよ」
「うん！　それ見た。だからね、全員は無理だけど、ウチの部からは西掛くんと唯……あぁ、中島さんが行くから」
「ホント！？　嬉しいなぁ！」
「ま！　そのときに二人に志賀先輩の写真撮ってきてもらうように頼んどくか！」
「ちょっとぉ！」
　二人は笑い声を上げる。
「とにかくさ。萩は萩の気持ちをきちんと伝えれば、それはそれで

いいと思うよ。まずは伝えなきゃ、始まんないしね」
「うん！」
　菘はパッと慧太の部屋を見てみる。電気は点いているので、自室にいるのは間違いなさそうだった。
「今からでも行ってくるよ！」
「今から！？　家が近いけど、随分張り切るね」
　茜が驚いて、それからすぐに笑った。
「まぁね！　こういうのは急がなきゃ。ありがと、茜。また電話するね！」
「うん！　またね」
　茜との電話を終えてから、菘は少しだけ出かけてくると言って家を出た。菘の父は心配そうにしている。
「菘はこんな時間にどこへ行くんだ？」
「目と鼻の先の志賀さんのお宅。なんかあったみたいよ」
「……あそこのお宅は息子さんがいらっしゃったな？」
「えぇ」
　父がしかめ面をしている。
「菘だってもう１６になるんですから、好きな子くらいできますよ」
「そうとは限らんだろう！」
　そう言って拗ねる父を見て母はクスクスと笑っていた。
　父が拗ねているとも知らず、菘は慧太の家の前に来ていた。気合を入れなおしてインターフォンを押そうとしたときだった。
「毛利さん？」
　声がしたので振り返ると、誠がそこにいた。
「戸口先輩。どうされたんですか？」
「いや、俺は同じパートだしさ。毛利さんこそ、どした？」
「私……も、その、心配で……」
「そっか」
　誠が少し嬉しそうに笑った。
「俺さ。中学のときにも同じような失敗してんだよな」

「同じ？」
「うん。ユーフォの同期が辞めるって言って……結局、止められなくて。今回も同じ。それどころか、俺が原因作ってるし」
そう言って誠は寂しそうに俯いた。しかし、すぐに首を左右に振って大声で言った。
「けど！　今回は絶対そんなことさせない！」
「そうですよ！　がんばりましょう！」
そのときだった。いきなり慧太の部屋の窓が開いたのだ。
「！」
「志賀先輩」
「……何？　なんか用？」
「あ……」
いざ本人を目の前にすると、二人とも言葉が出なくなった。
「何？　部活辞めんなとか、そういう話？」
「そ、そうです」
菘が言った。
「嫌なんです！　今の時期、そんな……こと、言ってほしくないです！」
「今じゃなかったらいいわけ？　あ、そ。じゃあ……定演までは頑張るよ。それなりに。大谷先輩とか、宮部先輩とか、佐野先輩とかに迷惑かけらんないし。ただ、どっちにしても3年生引退したら辞めるから」
「そんな……」
「いいからもう帰ってくんない？　迷惑だし」
それだけ言うと、慧太はピシャリと窓を閉め、さらにカーテンまで閉めてしまった。
「……。」
「しょうがない。今日は帰ろう？　毛利さん」
「……はい」
誠は「気をつけて」と言って背中を向けた。その背中は菘が思っ

ている以上に悲しそうに映っていた。
慧太はそっとカーテンをちょっとだけ開けてその誠の姿を見ていた。しかし、すぐに首を振って自分に言い聞かせる。
「何も辛い思いしてまで部活することなんて……ないし」
そう言って慧太は誠の背中を忘れるようにもう一度首を振り、階下へ降りていった。

第５０３話　交替訪問

慧太と誠が揉め事を起こした翌日。由美子はひょっとしたら既に仲直りして慧太が来ているのではないかと期待して部室へやってきたが、そんなものは儚い期待だった。

「おはよう！」

部室にいたのは美里、絵美、優輝、恵梨。たいていこのメンバーに慧太がいる。登校の早いメンバーは必ずこの５人で、きっちり揃っていたのだが、今日は慧太が欠けている。

「由美ちゃん。昨日はあれからどうだった？」

「うん……。私たちも追いかけたんだけど、コンクールでメンバーになって大会余裕で出られるような人たちに何も言われたくないとか言われて……。かえって、私たちが行くと逆効果かなぁって」

「そっかぁ……。それじゃあ、私たちが行っても……微妙かもね」

美里がため息を漏らす。絵美も同様だ。

「そうだろうね。ましてや、違うパートなんだし……」

「うん……」

「おはよ！」

そんな話をしていると、沙希が陽乃とやって来た。

「おはよう」

「どう？　由美ちゃん。あれから志賀くんのほうは……」

由美子は首を小さく左右に振った。

「そっか……」

「佐野くんには言った？」

陽乃は「まだ」と答えた。

「今は大阪にいるんだし、余計な心配させたくないからね。帰ってきてから状況、伝える」

「うん……」
　すると、校内放送が鳴った。
「吹奏楽部、大谷さん、宮部さん、戸口くん。吹奏楽部、大谷さん、宮部さん、戸口くん。職員室まで」
　ちょうど登校してきた誠の表情がその放送を聞いて強ばった。
「呼ばれた。ちょっと行ってくる。行こう？　由美ちゃん」
「うん……」
「ほら、戸口くんも行くよ！」
「あ、はい……」
　うな垂れている誠の背中を押しながら、沙希は部室を出て行く。スリッパを履き替え、廊下を歩く3人。ヒタヒタと足音だけが廊下に響く。
「怒られる……んでしょうか」
　誠が不安げに言った。
「さぁね。でも、あの様子だと先生は機嫌悪いだろうね」
　沙希は半ば諦めたような口調でそう言った。
「でも、どっちにしても結論としては先生も志賀くんに辞めてほしくはないと思うわ。だから、私たちを怒ってでもなんとかしようとしてるんじゃない？」
「……。」
　由美子が笑顔で言った。
「とにかく、私たちは志賀くんを元気付けてもう1回、部活に来てもらうようにしなきゃ」
「……。」
「ねっ！」
「はい……」
　誠はそれでもやはり、少し不安そうだった。
「失礼します」
　沙希の声がするなり、恭一が3人のほうを見た。
「おはようございます」

「おはよう。まぁ、そこに座りなさい」
「はい」
沙希、由美子、誠の順に並んで椅子に座る。教職員用の椅子は少しフワフワしていて、沙希たちには座り心地がかえって悪かった。
「まぁ、話は他でもない。志賀のことだが」
「はい」
「とりあえず、もう少し落ち着いてから話をしようと思ってる。ただ、それまでほったらかすわけにも行かないから、交替で志賀の家に行って、少しでもアイツと接してもらおうと思ってる」
「はい」
「だから、交替で行くメンバーを決めた」
「はい！」
沙希と由美子、誠の目がそこで輝いた。しかし、恭一の言ったメンバーは彼女たちの予想していたメンバーとはまったく異なるものだった。6人が選ばれていて、拓真、恵梨、裕也、梨子、亜紀、そして亮平であった。
「なんで……」
誠が珍しく感情を露わにした。
「なんでフルートオーボエや俺が入ってないんですか！？」
「当たり前だろう。いま同じパートの人が来たって、そんなもの、先生だったら会いたくない」
ハッキリと言い切られたのと同時に、昨夜の慧太のあの蔑むような視線がすぐに思い出された。それを思い出すと同時に誠は頭を抱えて、そのうちに泣き出してしまった。
「泣くな！」
ビクッと体を震わせて誠が顔を上げる。
「まったく！　バスーンがいかに難しい楽器かは、戸口！　他でもないお前が一番知ってるだろう！　それなのに……なんでもっと気遣ってあげられないんだ！　まだ半年ちょっとしか経ってないぞ？」
「……すみません」

「大谷と宮部も。３年生で最上級生なんだ。なんでもっと後輩たちに目を配ってやれない？　クラリネットと違って、二人もいるのに」
「すみません……」
恭一は相変わらず不機嫌そうな表情で続ける。
「とにかく。志賀が自発的に部活に来るようになるまで、フルート・オーボエ・バスーンのメンバーは一切志賀に会うな」
「……。」
「返事！」
「はい……」
「よし。じゃあ戻って」
うな垂れた様子で３人が戻っていく。その様子を見てから彩が戻ってきた。
「厳しいわね」
「当たり前だろう。自分たちの責任もあるんだってことを自覚させないと」
「でも……あのくらいの年齢って、するなって言われるとかえってやりたくなっちゃうんじゃない？」
「まぁ……それも承知の上で言ったんだけどな」
恭一は苦笑いしながらそう言った。
「どうせ、戸口や野村、宮部はそんなことを言われたところで止められるとも思っていない。ただ、今回は直接的な原因がパート内にあるから。ちょっとキツく言った。後はあの子たち次第だな」
そう言って恭一は窓の外を見た。１０月にしては珍しく、重々しい雲が広がっていた。

その頃、翔はというと西宮市内にある墓地で大中家の墓の前で掃除をしていた。そうはいってもさほど汚れていないことを考えると、房枝たちや母方の祖父母が丁寧に掃除をしてくれているのだろうということは察しがついた。
「ゴメンな。あんまり来られへんくて」

翔はお墓に水をかけ、花を生ける。七海と同じような、重々しい雲が空に広がっていた。

「……。」

手を合わせて祈る翔。すると、後ろからジャリ……と石を踏む音がした。驚いて振り返るけれども、そこには誰もいなかった。

「気のせいか……」

すると、携帯電話がポケットの中で震えた。翔はそっとポケットから携帯電話を取り出す。慧太からのメールだった。

「おっ？　珍しいな」

慧太からメールが来ることは稀であった。あっても、今まで事務的な連絡しかしたことがなかったのだ。

メールを開くと、ただ「ごめんなさい」とだけ書いてあった。

「は？　何を急に言うてんねんやろ」

翔は意味がわからず、とりあえず「どないしたん？」と返信を打って神戸市の祖父母の家へと歩みを進め始めた。

一方の慧太の家でも、彼の携帯電話が震えていた。そして、メールを開くとやはりそれは翔であった。

「どないしたん？（、・ω・´）？？」

翔にしては妙に可愛らしい顔文字だった。それがかえって、慧太の気持ちを揺るがす。まだ彼の中で、完全に退部を決められたわけではなかった。自分でも聞き分けのないことを言ってゴネているような気もしていた。しかし、今さらそれを認めるのも辛かったのだ。

「もうマジで嫌だ……」

慧太は声を震わせながら、布団にくるまっていつの間にか寝息を立ててしまっていた。

第５０４話　元・初心者の会

ふと気づくと、既に夜は明けていた。薄明るくなっていたので、慧太はゴソゴソと布団から少しだけ体を出して、セットしていない目覚まし時計を探す。

堅い感触がしたので触って時刻を見ると、６時５５分。いつもなら起きて身なりを整えている時間だが、今日も起きる気にはなれなかった。そのまま布団に再びもぐりこみ、眠ろうと決め込む慧太。しかし、よく考えれば今日は平日で、学校が普通にある日であった。このままサボるわけにはいかず、憂鬱な気分であったが慧太は布団から出る。

「あら、おはよ。今日はちょっと遅かったのね」

「うん……」

昨日のやり取りに気づいていないのか、単純に鈍いのかわからない母を尻目に、慧太は気だるそうに食卓の椅子に腰掛けた。今日の朝食のメニューは食パン、目玉焼き、トマトサラダ。いつもと変わらない朝であった。外もよく晴れていて、小鳥の鳴き声もしている。もうすぐすれば、弟と妹が起きてきて騒々しくなる時間であった。

その時。

インターフォンの音が鳴った。ちょうどＮＨＫのニュースが始まったばかり。午前7時である。慧太と母は顔を合わせる。その表情は同じことを考えている表情であった。

怪訝な様子で母がインターフォンを取る。すると、インターフォンどころか窓からでも十分聞こえる大きさの声が響き渡ったのだ。

「七海高校吹奏楽部で、志賀くんと同級生の秦野と言います！」

思い切りパジャマ姿で慧太は外へ出る。すると、そこには恵梨、智志、徹、愛実、優とちょっと変な組み合わせの５人がいた。しい

て言うならば、打楽器と低音の2年生。しかし、それ以外に共通点は見つからない。
「やっほー」
徹がニカッと笑って手を振った。
「なんだ、思ったより元気そうじゃねぇか」
智志がへへッと笑い、八重歯を出す。
「ね！　あと何分くらいで準備できそう！？」
「え……まぁ、３０分くらい？」
「そっか！　じゃあ待ってるね！」
「は？」
「早く身支度するする！」
恵梨に言われるがまま家に押し戻され、慧太はわけのわからないまま、ひとまず朝食を食べ始めた。食べ終えてすぐに着替え、急いで家を出る。相変わらず恵梨たちは雑談をして慧太を待っていた。
「あ！　準備オッケー？」
「あ、うん……」
「じゃあ行こっか！」
「あぁ……」
恵梨たちの意図することが読めず、慧太はよくわからないまま彼女たちの後をついて行く。高校に入ってからこれほど多人数で登校するのは久しぶりであった。せいぜい、多くても3人くらいだったので、小学校の頃を思い出すような光景である。
相変わらずマシンガントークを繰り広げる恵梨。恵梨の大げさな身振り手振りや話を聞いて愛実が大笑いしている。智志がツッコミを入れ、徹が愛実と同じように大笑いする。優が時々恵梨のボケに乗っかり、さらに笑いが大きくなる。慧太はそれを右から左で聞き流し、ボケッと見つめていた。
「ねー！　志賀くんはどうだった？」
愛実の声で我に帰る慧太。
「え？」

「聞いてなかったのかよ」
智志が不満げな顔をする。
「ゴメン。なんだっけ？」
「初めて楽器吹いたときの印象！」
「印象……」
恵梨がまず言い出した。
「私はね、初めて触らせてもらった楽器がグロッケンだったなぁ～。ほら、楽器とかやってないとさ、ビヴラフォンもグロッケンも鉄琴って大きくひとくくりにしちゃうじゃん？　でも、響きが全然違うんだなぁ～って感動したの、今でも覚えてる」
「俺はやっぱ楽器のデカさだな。結構俺、パワーには自信あったけどさ。あのチューバの重さと来たら。慣れるのに時間くったよ」
智志が感慨深そうにそう繋げる。
「私はいちおう金管楽器経験者だけど、やっぱりボーンとユーフォじゃ勝手が違うんだもん。音色の違いをつけるのに苦労したなぁ」
慧太は彼らがなぜこのタイミングでこのような話を持ってきたのか、まったく意図がつかめずにいた。しばらく彼らの話を聞き流していてふと、慧太は気づいた。
慧太は途中入部なのだが、それを除いても全員高校から吹奏楽を始めたか、楽器が変わったかのどちらかであった。後者は愛実だけ、他のメンバー全員が前者に該当する。もちろん、今ではそれを微塵も感じさせないレベルにまで上達している。
彼らの中にも苦労はあったのだろうか。慧太はそれを聞きたくなった。
「あのさ」
「んー？」
恵梨が振り返る。
「秦野や、大岩や、加藤や、日高や、富士原は……部活辞めたいとか、思ったことある？」
恵梨が真っ先に答えた。

「何回あったか忘れちゃった！」
「そうなのか？」
「そうだよねぇ。ね！　優っち。二人で何回そんな話したかわかんないわよねー！」
優が苦笑いしながらうなずく。
「それなら俺たちだって。なぁ、加藤」
愛実が智志の問いにうなずく。徹も同じだった。
「俺の場合なんか、みーんな経験者だし、初心者だっていう川崎先輩だってもう吹けるから説得力ないし。孤立って感じ、勝手にひとりでしてた」
「へぇ～……」
慧太にはそれが意外であった。
「どぉ？　だからさ、まぁアレだよ。どうしても経験が長いまこっちゃんがソロとか担当させられるのは仕方ないけどさ。何もすぐにヘソ曲げて部活辞める！なんて寂しいこと言うの、やめない？」
慧太はやはりそれが狙いだったかと思い、少しだけため息を漏らした。
「悪いけど……俺、部活行く気ないから」
愛実が寂しそうな表情をする。恵梨と徹も顔を見合わせ、優は俯いたままだ。
「どうせ、みんな思ってんだ。そうだろ？　先生に行けとか言われて、様子見に来てるだけだろ？　別にいいよ。朝早くから遠い俺の家来てそんなことしてもらわなくたって」
「別に」
こういうとき、真っ先に怒鳴り散らしそうな智志が冷静に言った。
「お前がそれでいいなら、俺たちだって別に……こんなとこもう来ねぇし」
そう言っている彼の表情は、慧太はもちろん恵梨たちも初めて見る表情であった。
「行こうぜ。みんな」

先を行く智志を慌てて他のメンバーが追いかける。最後に智志が振り向きざまに言った。

「こっちから来てるのに……心配してるのに、拒否するのは……お互い辛いって気づくの、いつかな」

「……。」

「その時にはもう、遅いかもしれないけどな」

そう言われ、慧太は立ち尽くすしかできなかった。冷たい風が不意に頬を撫でる。

「別に……いいし。俺だってもう……戻る気、ないし」

慧太は溢れそうになる涙を堪え、誰もいなくなった路地を静かに歩いていくのだった。

第５０５話　誰だって、不安を抱いてる

翔は部活へ行ってから、慧太の件を初めて聞かされて少なからずショックを受けた。この時期に部活を辞めると言われたこともちろんであるが、それ以上に自分に何の相談もなかったことがショックであった。

翔自身は、後輩たちにも同級生にも気を配り、少しでも異変があれば声をかけて相談しやすい空気を作ってあげているつもりだった。実際、初心者で入部した智志や騎士たちのときも、多少のイザコザがあったものだった。しかし、翔がすぐにそれに気づき、拓真や絵美たちにも伝えたものだった。

今回の慧太のときのことは、まったくその異変が察知できなかった。突然、何の前触れもなく「ごめんなさい」という言葉だけのメールが来たときも、すぐにでも電話してあげるべきだったのではないか。そういった類の後悔が頭をよぎる。

ため息を漏らし、制服のネクタイを緩めてハンガーに掛け、上着も脱がないまま敷きっぱなしの布団に寝転がった。無言のまま、蛍光灯の光を見つめる。時計の秒針の音だけが耳に届いてくる。

志賀くん……部活辞めるって言うの。

陽乃から「辞める」という言葉を聞いたとき、全身を冷たい何かが貫くような、そんな感覚であった。過去に、自分がしたことを今度はされている。そう感じると同時に、形容しがたい感情が沸々とこみ上げてきていた。

翔も中学時代、同じことをしたのだ。それも、今の慧太よりもずっとくだらない理由で。もちろん、その時の翔にとってそれはくだ

らなくはなかったのだ。けれども、今は別の視点でも考えることができる。

あの時、誰か止めてくれる人はいなかったのか。しかし止められても結果として、翔はあの時、部活を辞めただろうと今でも思うのだ。

翔が吹奏楽部をサークルとして創設し、さゆりたち2年生が入部し、夏樹たち1年生が入部し、今まで部活を辞めた部員はいない。これはある意味、奇跡のようなものだった。他の部活では必ずと言ってよいほど、衝突する問題であるのだから。それだけに、今回の慧太の件は、ショックが大きかった。特に3年生、沙希と由美子のショックの大きさはハンパではないようで、練習も今日はほとんど手についていなかった。

「翔〜！　ご飯できてるから、早よ降りておいでー！」

「うーん……」

翔は重い体を起こし、制服をハンガーに掛けて私服に着替えてから階下へ行く。リビングに入ると同時だった。

「翔。同級生の子、来てるよ」

「え？」

「大谷さん」

翔が慌てて外へ出ると、目に涙をいっぱい溜め込んだ沙希が佇んでいた。

「どないしたん……」

その瞳を見ていると、なんだか吸い込まれそうな感覚に陥ってしまった。

「私……私……何もできない自分が、悔しくて……」

それだけ言うと俯いて小刻みに震えながら、沙希は泣きだしてしまう。翔はまだ置いてあったビーチサンダルを履いて沙希のところまで駆け寄る。

「落ち着いて。どないしたん、ホンマ」

「志賀くん……ホントに部活、辞めちゃうのかなぁ……」

しっかり者で、いつも前向きに物事を考える沙希が、今回は珍しく後ろ向きな考えをしているようだった。凛とした表情で、何が起きても冷静に対処する沙希が、いっぱいいっぱいなのがヒシヒシと伝わってきていた。

「とりあえず……もう、外寒いから……。玄関入って話せん？」

沙希はフルフルと小さく首を左右に振った。

「オレん家のことなんて気にせんでいいから。な？」

「……。」

それでも動こうとしない沙希の手を翔は強引に引いて、家の中に入る。

「母さん。ゴメン。ちょっと……大谷ちゃんと大事な話あるねん」

「そうなん？　まぁ、遅くならんようにしなさいよ」

「うん」

翔の表情を見れば、それがウソではないことくらいは友美子もすぐわかった。綾音は「大丈夫なん？　浮気とかやったりして」とイタズラっぽく笑っていてが、友美子は「アホなこと言うてんとサッサとご飯食べ！」とだけ言った。

沙希は部屋に入るのをためらったが、翔が「全然気にせんでいいから」と強く言うのでようやく部屋に足を踏み入れた。

部屋に入ってまず目に入ったのが、これでもかと言わんばかりに取り揃えられた吹奏楽のＣＤであった。その枚数は２００枚を優に越えている。それだけではない。吹奏楽に関する雑誌や情報誌、コンクール関連の情報誌など枚挙がないほどに揃っている。

「陽ちゃんに怒られない？」

沙希の一番の心配はそこであったようだ。

「大丈夫。アイツなんか大谷ちゃんの１０倍はここ来て遊んでる。大谷ちゃんを部屋入れたくらいで怒らんよ」

翔はそう言って笑った。

ノックの音がすると同時に、綾音が「失礼します」と入ってきた。

「こんばんは、大谷先輩」

「こんばんは。ゴメンね、こんな時間に」
「いえ。どうぞ」
温かい紅茶を差し出す綾音。
「すまんな」
「いいよ。はい、お兄ちゃんも」
「ありがと」
紅茶を差し出してすぐに綾音は部屋を出て行った。しばらく紅茶をすすり、落ち着いたところで沙希が言った。
「私も……由美ちゃんも、ホントだめだねって……言ってたの」
「ダメって……そんなことないやろ。今回の件のこと、そないに気にしてんの？　二人とも」
沙希はうなずく。翔はそれをすぐに否定した。
「オレはそないな風に思わんで。大谷ちゃんも宮部っちも、精一杯普段から練習にしてもなんにしても、一所懸命やってくれてるやん。せやけど、今回の件は仕方がない部分も大きいで。けーたの気持ちとか、まこっちゃんの気持ちにしても、１００％大谷ちゃんや宮部っちが理解っとくってのは不可能ちゃう？　そういう気持ち丸出しにして人間、生きてるわけちゃうし」
「でも……佐野くんは、そういう人の感情を引き出すの、とっても上手じゃん。今回の件だって、佐野くんが大阪へ行ってて、いないときに起きて……。
結局、私たちって何でも佐野くんに頼りきりの頼りっぱなしにしてるから、佐野くんがいないときにこういうことが起きたら、もう全然ダメ。どうしようもない状態になっちゃうくらいまで、持って行っちゃうから……」
沙希はそれだけ言うと、再び紅茶をすすった。少しだけ冷めている。
「そんなことあれへんよ」
翔がハッキリと言った。
「誰だって、そうちゃうかな。自分に１００％自信のある人なんて

おれへんと思うよ。オレだって、陽乃だって、大谷ちゃんだってどこかに不安を抱えてるはずやって。絶対。オレだって人間やもん。いーっぱい、不安なことあるで」

「本当？」

沙希はまだ半信半疑のようであった。翔はいったい自分という人物像が沙希たちの中ではどうなっているのか、不思議で仕方がなかった。

「ホンマやって。オレの言うことが１００％正しいなんて、絶対ありえへん。オレだって気持ちが揺らぐことだってある。ほら、覚えてる？　ちょうど1年前の今頃。教育長が来るから、コンクールの曲をするって先生が言うたときのこと」

沙希はそのときの記憶を引っ張り出してくる。あの時の翔の感情が抑えきれずに爆発した感覚は、ちょうど今の慧太と似通っているものがあった。

「ねぇ……。佐野くんから、志賀くんに説得に行ってくれない？」

「行かへんから」

翔は即答した。

「どうして！？」

「オレはな、結構単純やから皆にガーッと言い寄られたらすぐに気持ちグラつくヤツやけど、けーたは違うと思う。アイツはなんていうか……しばらく、放っておいてほしいタイプやと思う」

「でも……」

「大丈夫。けーたを信じてみよう。それしかできへん。それに、けーたはきっと……」

「きっと？」

翔は言葉をそこで切った。

「なんでもない」

沙希はまだ納得していなかったが、時間が遅いからという理由をこじつけて彼女を帰宅させた。

「ねぇ」

翔の家を出る前に、沙希が言った。
「私……信じていい？」
「何を？」
「佐野くんと……志賀くんのこと」
「信用できへん？」
フルフルと首を振る沙希。
「オレやけーたを信じる前に」
翔が親指を胸に当てた。
「自分を信じてみよ」
「……うん」
沙希は翔と分かれてから、すぐにメールを打った。もちろん、宛先は慧太だ。
『志賀くんへ。
私たちは、いつでも部室で待っています。あなたの出した結論を、私にだけでもいい。直接、聞かせてください。
待っています』
パタン、と携帯電話を閉じる音が住宅街に響き渡る。
見上げた夜空には少しだけ星が見えていた。

第５０６話　お世話になりました

翌日、１０月１６日火曜日。沙希が登校の準備をしていると、母が彼女の名前を呼んだ。
「沙希～！」
「なぁにー？」
「部活の後輩さん、来てるわよ」
「え？」
急いで制服に着替え、カバンを抱えて外へ出ると予想どおり慧太の姿が門の前にあった。沙希は思わず笑顔になり、明るい声で言う。
「おはよう！　志賀くん！」
「おはようございます」
しかし、その慧太の表情を見るなり沙希の表情も曇った。彼の表情を見ていると、その考えがすべて伝わってくるような、そんな陰鬱なものだった。
「……行こう」
沙希が学校のほうへ歩き出す。慧太が後を追うようにゆっくりと歩き出した。沈黙のまま、秋めいてきた通学路を歩いていく。慧太の家から七海高校までは距離があるので、彼は自転車で来ているが、沙希は徒歩で通学できる距離でもあるので、慧太は自転車を押しながら学校へ向かう。
しばらく歩いてからようやく、慧太が口を開いた。
「大谷先輩」
「……なぁに？」
「申し訳ありません……」
ドクン、と沙希の心臓が鳴り響いた。
「……それって」

「俺……決めました」
「……。」
「部活……辞めます」
沙希はそこから先は頭が真っ白になり、自分がいったい何を言って、どうしたのか、どうやって学校へ行ったのかすら覚えていなかった。
気がつけば、涙で顔をグシャグシャにしたまま、翔の教室前に立っていた。翔だけでなく、同じクラスの由美子と陽乃も傍に立って困惑した表情を浮かべている。由美子のほうが少し涙目になっていた。
ひとまず3人を連れて翔は人気の少ない音楽室のほうへ移動した。音楽室前の廊下で沙希に話を聞く。沙希は一連の状況を涙ながらに翔に話した。すると、翔から驚くべき言葉が飛び出した。
「オレ、昨日けーたから部活辞めるって聞いてた」
「え……」
由美子と沙希が呆然としている。真っ先に陽乃が反応した。
「それで、黙ってたの!?」
「……そうやけど」
「そうやけど、じゃないじゃない！　翔、あんた部長でしょ!?　ちょっとは説得するとか、そういうことしなかったの？」
「オレが止めて、無理強いして部活続けさせるん!?　それって、しんどない!?　それでかえってけーたが苦しい思いしてたら、何にもなれへん！」
「じゃあ、志賀くんが辞めるって言ってホイホイそれを認めて、こうやってサキティや由美ちゃんが悲しいとか辛い思いしても、いいの!?」
「それとこれとはまた話が別やろが！」
「何も別じゃない！　なんで……あたし、翔はもっと人のこと気遣って、いろいろ考えてくれる人だって思ってたのに！　なんでもっと気遣いできないのよ！」

「辞めたい気持ちになる人間の気持ちは、オレが一番わかってるつもりや！」

そこで陽乃は翔がかつて部活を辞めた経験があることを思い出した。相手の立場を理解している翔だからこそ、慧太に無理強いさせず、彼の思いを尊重した結果なのだろうということは、陽乃にもすぐ理解できた。

しかし、それでは残る側――沙希や由美子、翔が部活を辞めた当時であれば修平やその当時の後輩たちの気持ちは、翔には理解できないだろう。すぐに陽乃はそう考えた。

「部長なら、どっちの立場も理解して、中立的な立場でいるべきだとあたしは思う！」

「それくらいわかってる！　せやけど……オレかて人間や！　そんな……機械的な判断なんかできへん！」

そう大声で答える翔の声が、廊下中に響き渡った。その後、しばし沈黙が続き、予鈴が響き渡る。

「……私、信じられないよ」

由美子が震える声で言った。

「私は佐野くんが志賀くんを説得して……部活辞めるの、防いでくれるって思ってたのに」

翔が不機嫌そうに、しかし少しだけ悔しそうに答えた。

「そんなん……オレが一番そうしたかったもん」

「……。」

廊下のざわめきが次第に静まり始める。教室に入っていく足音が聞こえ始めると、陽乃がフイッと背を向けた。

「行こう、由美ちゃん。サキティ。予鈴鳴ったし……もう、覆しようのない結論出たし」

「陽ちゃん……」

「……。」

ひとり佇む翔を置いて、3人は歩いていく。

「なんか……オレが悪者みたいやんけ」

翔は唇を噛み締めながら、そっと歩き出した。そして教室とは反対にある階段を降り、2年生の教室がある3階へと降りた。

「あれ？　佐野先輩？」

2年H組から見えた翔の姿を見て、駿が立ち上がる。紛れもなくそれは翔であった。そのままスッと姿が見えなくなったので、駿は窓から顔を出して廊下を見る。すると、ちょうどG組の教室へ入っていくところであった。

G組でも吹奏楽部員以外のクラスメイトがいる中、翔が突然教室に入ってきたので全員が驚きを隠せずにいた。健之佑、恵梨、智志、そして慧太も目を点にしていた。

翔は堂々としたまま、慧太の座っている席の前に立った。

「せ、先輩……？」

「お願いします！」

「！？」

全員が驚いて目を見開く。しかし、翔は構わず続ける。

「お願いします！　部活、辞めないでください！」

「……。」

「お願いします！　今の吹奏楽部には、誰か一人でも欠けることができへん！　けーたも、大事な仲間のひとりなんです！　オレらが引退する演奏会で、いまおる部員が誰かひとりでも欠けてしまうなんて、アカン！　アカン！　お願いします！　部活……辞めないで……」

最後のほうは声がかすれて消えていた。G組の教室にいた誰もが一歩も動かず、ひと言も発さずジッと立ち尽くしていた。

翔の大声は3年生のいる階はもちろん、1年生たちのところまで聞こえていた。陽乃や沙希、由美子はもちろん拓真や春樹、美里、絵美、慎也も駆けつけてきた。

「か、かける！」

「お願いします！　辞めないで……ください！」

いつの間にか土下座をしながら翔は何度もそう慧太に訴え続ける。

「かける！　ダメだって！　もうすぐ先生来るし、ここ2年生の教室だよ!?　こんなとこでダメだって！」
「放せや！　オレはいまここから離れるわけにいけへん！　放せ！」
拓真や春樹、慎也が必死になって翔を教室から出そうとするが、意地になっても離れようとしない翔。そうこうしているうちに騒ぎを聞きつけた先生たちが教室に入り、強引に翔の腕を掴んでそのまま部屋から出て行った。
「……。」
その場に残された慧太や、陽乃たちは呆然と立ち尽くすことしかできなかった。

第５０７話　沈み込んだ部室

慧太の教室での一件があった日の部活後。後輩たちが次々と翔に気を遣いつつ帰宅していく。なるべくいつもどおりの様子を装ってさゆりやはるかたちも出て行くが、かえって気遣いしているのが伝わってきていた。

「翔。まだ帰んないの？」

春樹と拓真が部室にヒョコッと顔を出す。

「あー……うん。まだちょっとおりたい気分」

「そっか」

そういうと春樹と拓真も部室にやってくる。

「え？　何、二人とも。帰るんちゃうん？」

「別に焦って帰る用事ないし。それに、ちょっとだけだけど定演の楽譜も配られてるじゃん？　それ、さらっていこうかなぁと思ってさ」

拓真がそう言ってカバンを置いて楽譜を広げる。

「春やんは？」

「俺は明日、合格発表で落ち着かないからさ。なるべく皆と一緒にいて、落ち着いてたい」

春樹は苦笑いしながらそう言う。

「女子は？」

「朝倉さんと田中っちなら、音楽室で練習中。大谷さんと宮部さんはやっぱ元気なさそうだった。もう帰るって」

「ふーん……」

翔は軽く返事をして、再び楽器に目をやる。愛おしそうに楽器を磨く翔。しばらくすると突然立ち上がり、誠と慧太のバスーンが収納されている棚の前に立った。そして、慧太の吹いているバスーン

のケースを取り出して、そっと開いた。
慧太の楽器は彼の几帳面な性格を表すかのように、綺麗に磨かれていた。それを見て翔がクスッと笑う。
「何笑ってんだよ」
拓真がそれを見て笑った。
「ううん。ただ、この楽器の磨き方とか手入れ道具の残し方とか見てたら、絶対けーた、部活辞めるつもりないやろって思ってさ」
「どれどれ？」
春樹が覗き込む。確かに綺麗に収納された手入れ道具の数々。辞めるつもりでいるならば、ここまできっちりと片付ける必要もない。楽器を磨く必要もない。しかし、慧太はきっちりと楽器を片付け、またいつでも演奏ができるようにしているのだ。
「へぇ～……。けーたらしいや」
拓真と春樹が妙に納得する。しばらくすると、陽乃と美里が部室にやって来た。
「あれ？　３人だけ？　慎也は？」
美里がキョロキョロと辺りを見渡す。
「慎也？　帰ったんじゃないの？」
「部室には来てへんで」
「えー？　だってまだカバンあるし……」
「ここだよ、ここ」
音楽室の入口を見ると、慎也がいた。
「もー！　どこ行ってたの！？」
「別にいいだろ、どこでも。それより、みんなそろそろ帰ろうぜ。俺、腹減った」
「もう……。大事な仲間が辞めるかどうかの瀬戸際なのにのん気なんだから」
美里はあきれ返ったようにため息を漏らした。
「なるようにしかならねぇんだから。後は慧太の意思次第だろ？俺たちがどうこうできる問題じゃない。俺たち……っていうか、気

持ちは今日、そこにいる部長がぶつけてくれたろ？」
翔が驚いたように顔を上げた。
「どうよ、部長？　自信、ない？」
「……わからへん」
「まっ！　自信持てよ。な、部長」
「……おおきに」
それからすぐ、美里と慎也は帰宅していった。ほどなくして、拓真と春樹も帰っていき、部室には陽乃と翔のみが残っていた。時刻は午後7時を過ぎていたが、陽乃は翔が帰るというまでいるつもりであった。
時計の秒針の音だけが響き、密かに二人の息遣いが聞こえるくらい。何の音もしないまま、時間だけが過ぎていった。
「正直」
突然、翔が口を開いた。
「奇跡やったと思う」
「何が？」
陽乃が翔の言葉を誘導するように聞き返した。
「部員が一人も辞めずに……ここまで来れたこと」
「ふーん……。奇跡か……」
「オレら3年も、誰が辞めてもおかしくないと思わん？」
「例えば、どういうタイミングで誰がいつ辞めそうだった？」
陽乃にはあまり心当たりがなかったので、あえて聞いてみた。
「お前が親父さんとケンカしたとき。永井ちゃんとお前がモメたとき」
「あたし絡みばっかりじゃん！」
「そういうわけちゃうで！　他にもある。春やんにも拓あんにも、慎也にも田中っちにも、陽乃たちが気づいてないだけでオレ個人的にはヤバいと思うこと、ぎょーさんあった」
「そっか……」
そう言って再び窓の外に目を移す翔。陽乃はその寂しげな背中を

見つめることしかできなかった。
「ウジウジしとっても始まらんのはわかってるけど……気持ちの切り替えって、難しいなぁ……」
こんな時にどんな声を掛ければいいのか。これほど長い時間一緒にいても、どんな言葉を掛ければいいのかわからず、陽乃は翔の背中を見つめることしかできずにいた。

第５０８話　捧げる

１０月１７日水曜日。慧太は今日から部活へ行く必要がないと思うと、ホッとするようでいてどこか心もとない気持ちがあった。特に意識したわけでもなく、気づけば音楽室へと足が向かっていた。

「ねー！　ちょっと待ってよー！」

「待てねぇっつの！　俺、練習しねぇと定演間に合わない！」

聞き慣れた声――秦野　恵梨と大岩　智志の声が聞こえたので慧太は慌てて柱の陰に隠れて様子をうかがった。ふたりは慧太に気づくことなく、そばを駆けていく。相変わらずの大声で話すので、話し声は筒抜けであった。

「そういえばさぁ、どうだって？」

恵梨が智志に聞く。

「なぁにが？」

「のむさんよ！　志賀くんの席、用意したままにしてるって言ってたでしょー？」

その言葉に慧太は思わず柱から顔を出した。ふたりは気づく様子もなく、会話を続ける。

「あー、言ってた言ってた。マジみたいだぜ。っていうか、あれ言いだしっぺはのむさんじゃないらしいし」

「そうなの？　あたしてっきりのむさんだと思ってた」

「まこっちゃんだってさ」

その名前を聞いて慧太は一瞬、耳を疑った。

「え？　まこっちゃん、そんな……なんかこう、シャレたことするような人だっけ？」

「俺もそんな風には思ってなかったけど、そうらしいぜ」

「へ～……意外ね」

慧太は恵梨と智志の会話を聞くのもそこそこに、慌ててフルートとダブルリードが練習する部屋に走って行った。2階の多目的室3の教室。そこがフルートとダブルリードの最近のお決まりのパー練部屋だ。

そっと中を覗きこむと、まだ誰もいなかった。部活は始まっていないので、当然かと思いながら慧太はその場を後にしようとして階段へ向かう。すると、上から誰かが降りてくる気配がしたので慧太はすぐに多目的室の前に戻り、柱の陰に隠れる。

階段を降りてやって来たのは、誠と健之佑だった。定演を前にしているので、指示がなくとも部員たちはパートメンバーがある程度揃えば、パー練に行くことになっている。

ドアの鍵を開け、二人が部屋に入る。

「大谷先輩たちは？」

健之佑が譜面台を組み立てながら誠に聞く。

「あれだよ。進路ガイダンス」

「あー、めんどくさそう。俺たちも来年はその立場なんだなぁ。なんか嫌だ！」

健之佑の投げやりな言葉に誠が笑った。

「よく言うよ！　今から志望校必死になって考えてるお前が」

「バレてたか」

そう言って笑い合う二人。慧太といたときには見せない笑顔を誠は見せていた。それが少なからずショックな慧太であったが、次の誠の行動を見て動きを止めた。

椅子を用意する誠。位置的に見ても、バスーンの席だった。いっぽうの健之佑は沙希、由美子、佳菜、稚沙希、健之佑、まゆ、という順番で椅子を用意していく。そして、誠は自分の席を端に用意した。

その隣。どう考えても慧太を含めた人数分の椅子であった。しかし、確証が持てずにいたので慧太は様子を見守っている。すると、決定打とも言える光景が目に入った。

健之佑と誠の間に空席が生まれたのだ。そして、その位置はいつも慧太がいる場所だった。

「……。」

慧太は呆然としながらその様子を見つめている。すると、健之佑が言った。

「なぁ。けーたのやつ、今日も休み？」

「そうみたい」

休み。その言葉が胸に響いた。まだ、彼らの中では自分が辞めたことにはなっていないのだ。

突然、背中に存在感のようなものを感じた。その背中に背負われているカバンには、教科書やノートのほかに一枚の薄っぺらい紙が封筒に入っている。そして、封筒の中には「退部届」と書かれた紙がある。

「なんか遅い夏休みかなんかみたいだよな」

健之佑が笑った。

「長期休暇をいまいただいております、みたいな」

誠もつられて笑う。

「俺らもけーたのこと、もっとなんていうか……考えてあげなきゃマズかったよな」

「……後の祭りかもしれないけど」

誠が寂しげな表情を浮かべた。その表情を見て心が揺らぐ慧太。

「……けーた？」

ハッと振り返ると、カバン片手に慧太の後ろに立っている翔がいた。

「泣いてる……ん？」

翔に言われて初めて気づいたのだ。涙を流していることに。

「俺……泣いて……」

「どうする？」

翔に言われて顔を上げる慧太。翔の表情は真剣だった。

「部活、辞める？　辞めるなら……このまますぐに職員室行って、

退部届を東先生に渡してきて」
「辞めないなら……？」
「退部届、オレが破り捨てたる」
翔の言葉に立ち尽くす慧太。しばらく二人は対峙した。そして、何か思いついたかのように慧太はおもむろにカバンを下ろし、中から退部届の入った封筒を取り出した。
「ホントは……ホントのホントは、このまま辞めるつもりでした」
慧太の率直な言葉に、翔は何も言わずに耳を傾ける。
「だけど、俺は賭けてたんです。初心者でもなんでもいい、この部活に……残りの高校生活、捧げてもいいって」
「……。」
「そうですよね……。先輩はもう……引退間近で……」
「うん」
「先輩」
凛とした表情で慧太が聞く。
「3年間、吹奏楽に高校生活の半分……もっとかもしれないですね。捧げてきて、どうでしたか？」
翔はニカッと笑って言った。
「幸せやったに決まってるやろ」
「……。」
そして、その言葉を聞いてから慧太は手にしていた封筒を二つに裂いた。
「！」
慧太が震える声で言った。
「俺……やっぱり、辞めるの、やめます」
「……。」
「残りの高校生活、どんだけ下手でも吹奏楽とバスーンに全部捧げて……1年後、先輩のように、胸を張って吹奏楽部に入っていて良かったって、言ってみせます」
その慧太の表情を見て、翔は確信した。彼ならもう大丈夫だと。

「ほれ、部室行くで！」
翔が慧太の背中を押す。
「え、で、でも」
「捧げるって決めたんやろ！？　善は急げ！」
「……はい！」
翔と慧太は並んで走り出す。そして、部室に翔がまず飛び込んだ。
「こんちゃー！」
そして、慧太が後に続く。
「こっ……んにちは……」
部室には沙希と由美子もいた。目を点にする彼女たち。
「けーたは、部活を辞めるのやめました！」
部室にいた部員たちはしばらく黙ったままだったが、沈黙はすぐに歓声に変わった。
「……マジで？」
騒ぎを聞きつけて戻ってきた誠と健之佑が部室の入口に立っている。慧太は誠の前に立ち、言った。
「俺のワガママで……迷惑かけてごめん」
「……。」
「だけど、俺、もう決めたんだ」
「……何を？」
「もう、まこっちゃんには負けないって」
その言葉を聞いて、涙目になりつつも誠が笑った。
「やっと正直になりやがった、コイツ」
慧太が恥ずかしそうに笑う。それからすぐに部室中が笑い声に包まれたのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3867c/

奏～Kanade～

2011年12月1日22時54分発行